
機動戦艦ナデシコ 平凡男の改変日記

ハインツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦艦ナデシコ 平凡男の改変日記

【Nコード】

N1075K

【作者名】

ハインツ

【あらすじ】

突然、飛ばされてやってきた世界。

与えられた四つの異常な能力。

それでも告げる主人公。

平穏に生きようよ。

戦争なんて俺には関係ないよ。

そう思いながらも結局巻き込まれてしまうのが主人公なんだって。

平穏で幸せな生活を求め、それなりに介入する男の子のお話。

感想随時募集中です。一言でも構いません。

感想は創作の糧になるので、是非とも御願います。

また、軽い感じで意見交換なんか出来たら嬉しいかなと思います。なにか思う事があったら、何でも書いてみてください。

色々な方の意見を訊くと良いアイデアなども浮かびそうなので。

参考資料を最初にもっていききました。

展開と同時に更新していきますので先に読む方はネタバレにご注意ください。

設定資料 地球編（前書き）

今作品のオリジナル設定、オリジナル解釈についての解説、説明。
オリジナル要素が多過ぎて、作者も混乱し始めたので、
情報の整理に役立てればなと考えています。

今回は地球側。

ネタバレに注意。

設定資料 地球編

オリジナルキャラクターについて。

名前、渾名的な何か、性格、関係性を簡単に。

マエヤマ・コウキ 異常を抱える一般人（笑）

これといった特徴はない。男気を見せる時もある、へたれる時もある。

だが、やる時はやる男。責任感が強く、独自の価値観から優しくあろうと努力する。

四つの異常

MC並（もしくは超える）ナノマシン親和性。ハッキング、機体制御で効果を発揮。

他種多様なナノマシンの複数体内所持。身体能力・五感などなど強化。異常の大きな要因。

S級ジャンパー（遺跡へのアクセス権）。CCを介さずとも意思を伝えられる。DFは不要とされる。

遺跡の知識。過去、未来、平行世界。それら全ての知識を取り出す事が出来る。検索機能付き。

関係性

ハルカ・ミナト 恋人。姉であり母のような包容力で基本甘えてばかりいる（精神的に）

セレス・タイト 娘。癒し。日々の活力は彼女から生み出されているといっても過言ではない。

セレス・タイト コンプレックスを乗り越えた強く優しい白銀の妖精
内気で大人しく無口気味。その分、スキンシップを求める傾向あり。
実験体として作り出された不幸な背景を持つマシンチャイルド。
コウキのリークにより助けられ、ナデシコにはサブオペレーターと
して乗艦。

コウキによつて助けられた事は知らない。知つたら・・・やばい事
態になりそう。恋心的な意味で。

何も知らない状況から多くの事を学んでいき、

コンプレックスであった自身がマシンチャイルドである事を受け入
れた心の強い女の子。

コウキのお手伝いを嬉々として務め、コウキの役に立てる事を喜ん
でいる。

関係性

マエヤマ・コウキ お父さん？ 一番心を開いており、淡い恋心を
抱いているかも(?)。

ハルカ・ミナト お母さん。自身を大事にしてくれる頼もしい女
性。困った時の助言役。

キリシマ・カエデ

火星で救出された火星の生き残り。和食のコックとしての腕前は一
流。

現在、パイロットに転向。日々確実に技量を向上させている。
ツンデレキャラの筈がおバカキャラになりつつある女の子。

関係性

マエヤマ・コウキ 悪友？ 全てを失つてからの初めての友達。一
時期、依存していた。

カグラ・ケイゴ 恋人？ 木連の人間と知りながらも恋心を貫い

た。まだまだツン期？

ムネタケ・サダアキ キノコより生まれ変わったマツタケ提督
オリキャラではないが、生まれ変わり方が半端ないので参考までに。
過去の挫折から立ち直り、地球の為、懸命に駆け回る頼れる策謀役。
取引や交渉、策略に優れる裏の実力者。将来は外交官あたりに就任
しそうだ。

イツキ・カザマ 生き残りし凜々しい女パイロット
原作にて一話のみ登場し、ボソンジャンプに巻き込まれて死亡扱い
されるパイロット。

なんでも、それ以降に販売されたゲームでは主役級の働きだとか・
。。
未プレイ故、分かりません。・・・コホン。
アキト、コウキによりボソンジャンプに巻き込まれる事なく、ナデ
シコの合流。
パイロット三人娘に加わり、今では四人娘として活躍中。
ナデシコパイロット唯一のCAS制御パイロット。

関係性

マエヤマ・コウキ 教官と教え子。コウキによってCAS操作の基
本を学んだ。

その他、教え子役のヒラノなどなど登場回数一、二回のオリキャラ
もあり。

オリジナル戦艦

ナデシコ改修型 それでもやっぱり名称はナデシコ
カグラヅキの登場により、戦力不足を痛感したナデシコが明日香に
よって生まれ変わった姿。

性能はナデシコを大きく上回る。

キクザクラ

改革和平派の旗艦。ナデシコ改修型に匹敵する性能を誇る。

オリジナル兵器

エステバリス高機動戦フレーム

ネルガルがアキトの機動力を引き出す為に作製した新型フレーム。

武装 デイストーションブレード フィールドガンランス 大型レ
ールキャノンなど

アドニス 木連の新型機に対抗する為に揃えられたナデシコの新た
な矛。

計九種類。 随時追記。 搭乗パイロットも随時追記。

アドニス特殊隠密仕様。 a d - S S (S p e c i a l S e c r e
t)

特殊な武装と高い隠密性が特徴の機体。

武装 ガントレットアーム ジャマー 閃光弾 隠し腕 スパイク
クロー DB レールカノン

アドニス物量射撃仕様。 a d - M S (M a t e r i a l s S h o
o t i n g)

圧倒的な物量を誇る射撃が特徴の機体。

武装 機関銃 ミサイル ラピットライフル レールカノン レールキャノン

アドニススーパー仕様。 ad - SR (Super Robot)

強固な装甲と高い攻撃力が特徴の機体。

武装 ギガントアーム ドリルアーム ロケットパンチ グラビティブラスト 対艦ミサイル 対艦刀

アドニスリアル仕様。 ad - RR (Real Robot)

バランスが整っているのが特徴の機体。

武装 ガントレットアーム レールキャノン DB ラピットライフル フィールドガンランス

アドニス後方狙撃仕様。 ad - BS (Backs Sniping)

射程外から放つ精密射撃が特徴の機体。

武装 スコープ グラビティスナイパー レールカノン イミディエツトナイフ

アドニス殲滅射撃仕様。 ad - AS (Annihilation Shooting)

圧倒的火力とシンプル性が特徴の機体。

武装 グラビティライフル デイストーションブレード ツイングラビティライフル

アドニス接近格闘仕様。 ad - AG (Approach Grapple)。

格闘戦専用武装の豊富さが特徴の機体。

武装 DB x 2 パイルバンカー ミサイル シールド

アドニス機動殲滅仕様 ad - MA (Mobility Annihilation)

ihillation)。

圧倒的機動力と圧倒的火力が特徴の怪物機。

武装 大型ディストーションブレード グラビティウイング グラビティライフル クラッシュパーム

アドニス突撃強襲仕様 ad - C A (Charge Assault)。

グライダーユニット特有の独特の機動が特徴の機体。

武装 六連ミサイル グラビティライフル フィールドガンランス

ヒナギク

ナデシコ改修と同時に改修、というより、作り直された強襲揚陸艦。最早巨大な戦闘機という言葉が相応しい。

ドッキング機構となっており、上部にドッキングした機体にエネルギーを配給できる。

武装 グラビティバスター レールカノン 大型スピア ワイヤアンカー 爆導策

タンポポ

量産型ヒナギク。戦闘機パイロット用の最新戦闘機。

武装 グラビティバスター レールカノン グラビティアタック ワイヤアンカー

特殊なAI

シタテル

オモイカネの恋人役。登場回数はそれほどでもない。

ベイビィAI アザレア 花言葉『愛される事を知った喜び』

パートナーと共に歩む事でそれぞれの方向性に成長していくAI。
愛せば愛する程、期待に応えてくれる可愛い子達。
性格、能力などなど、パイロット次第。
それぞれの名称は随時追記。

オプション兵器

アドニス援護兵器 フェザンツ

球状の本体にDF展開装置とレールカノンを備え付けた援護兵器。
基本的にナデシコからオペレーターが操作する。

重力波アンテナ中継装置 ニバリス 『希望・慰め・逆境の中の希
望・貴方の死を望みます』

重力波による限界稼動距離を延ばす為に製作されたもの。
これを中心に円を描く形で距離を延ばす事が出来る。

オリジナル制御法

CAS 複合アクションシステム

基本モードとその他四つのモードを持つIFSに代わる制御機構。
基本モードはパイロットによってカスタムが可能であり、使い勝手が良くなっている。

四つのモードもナデシコパイロットを基準としているので、使い易い……等。

地球に普及させる為、コウキが製作した。

オリジナル組織、オリジナルプロジェクト。

アイリス・プロジェクト 花言葉『和解・私は貴方に全てを賭ける』
地球と木連が和平を結ぶ為の計画をナデシコ内ではこう呼んでいる。

改革和平派

ミスマル・コウイチロウが提唱し、賛同者が集った派閥。

木連との和平を訴え、徹底抗戦派と対立している。

テンカワ・アキトも構成員の一人。

明日香インダクトリー

漫画？から参照。ただしほぼ、というか、名前以外はオリジナル設定。

デルフィニウムを始めとした機動兵器開発に定評のあった会社。

ネルガルのエステバリス登場により若干落ち気味だが、その技術力は随一。

量産型として『飛燕（デルフィニウムの和名）』を開発し、納品し
だした。

火星再生機構

コウキ提案、アキト、ルリ、ラピスが計画を進める火星を再生する
為の機関。

後々、火星にて遺跡を管理する一角となるよう勢力を強めている。

ミルキーウェイ 天の川

火星再生機構のダミー的な組織。

終戦前に備品などを揃える為に動き出している。

多くの企業から出資してもらい、火星再生への意欲も日々上昇。

設定資料 地球編（後書き）

書き忘れないでしょうか？

ありましたら、感想の方でご連絡下さい。

紹介する欄を作りたいと思います。

また、質問に対してもこちらで回答したいと思います。
ビシバシ質問しちゃってください。

是非とも情報整理の為に活用してくださいませ。

設定資料 木連編（前書き）

今作品のオリジナル設定、オリジナル解釈について解説、説明。
オリジナル要素が多過ぎて、作者も混乱し始めたので、
情報の整理に役立てればなと考えています。

今回は木連側。

ネタバレに注意。

設定資料 木連編

オリジナルキャラクターについて。

名前、渾名的な何か、性格、関係性を簡単に。

カグラ・ケイゴ 悲劇の軍神、あ、実は生きてます。

木連和平派神楽派の代表の息子。その求心力は父と同等。

木連式武術の腕前は木連五指。容姿も整っており、完璧人間と言える。

殺されたとされるが、起死回生の一手を打つ為に裏で暗躍中。

関係性

マエヤマ・コウキ 教官。和平の鍵になると確信し、信頼を寄せる。

キリシマ・カエデ 恋人？ 憎まれる立場ながら愛してしまった複雑な関係、だった筈。

ツバキ・マリア 主従関係？ 幼馴染。遠慮のない関係。

ツバキ・マリア 戦うメイドさん

ケイゴさんのメイド兼秘書。木連式武術を修めている。

ケイゴに恋心を抱き、カエデの参入でキャラが変わった。

関係性

カグラ・ケイゴ 主。恋心を抱いており、結ばれたい。

キリシマ・カエデ ライバル。犬猿の仲。でも、意外と相性は良い？

神楽大将 神楽派を引っ張る木連一の武人

優人部隊神楽派を率いる木連武人憧れの男。

軍人よりは武人としての精神を持つ。

関係性

カグラ・ケイゴ 親子。愛する息子であり、将来的に全てを託したい。

ツバキ・マリア 息子の事を任せられると信頼を寄せている。

マエヤマ・コウキ 才能ある若者として期待している。本人は違うと否定しているが。

その他、スズキ・ジロウサブロウやキシモト少将、キノシタなどいる。

オリジナル戦艦

ナデシコC 改修 カグラヅキ

神楽派の旗艦。ナデシコCを改修した。オモイカネはあるもののオペレーターは複数人。

コーチャリス 改修・改造 カグラヅキ

大破したカグラヅキの代わりとして期待される戦艦。最後の決戦時に乱入する予定らしい。

オリジナル兵器

夜天 ブラックサレナ

ケイゴの愛機。ブラックサレナと殆ど同じ。

福寿 エステバリス改造機。

エステバリスの情報から独自の方法で生産した機体。
重力波アンテナではなく、無人兵器のジェネレーターを改修したものが動力源。

武装 フィールドガンランスなど

福寿改

福寿の発展機。

オリジナル組織

神楽派

神楽大将が率いる組織。地球との和平を訴え、草壁派と対立している。

設定資料 木連編（後書き）

書き忘れないでしょうか？

ありましたら、感想の方でご連絡下さい。

紹介する欄を作りたいと思います。

また、質問に対してもこちらで回答したいと思います。
ビシバシ質問しちゃってください。

是非とも情報整理の為に活用してくださいませ。

最終決戦へ向けての軌跡（前書き）

作者なのに時間経過を完璧に把握していない事ではないか。ちよつとあいまいな所があるぞ。

そんな事に気付いてしまい、整理しました。

参考にしてくれたら嬉しく思います。

間違っではない筈です。

一応、確認しつつ話は書いていたので。

・・・章管理を用いる事を決定。それにより設定を最初に移動しました。

最終決戦へ向けての軌跡

ナデシコの歩み カグラヅキ遭遇からの原作変更点

二月中旬 月奪還作戦後、カグラヅキと遭遇。

白鳥ユキナを保護し、コスモスにてナデシコを修理。

二月下旬 ナデシコ、地球に帰還。ミスマルパパの極東方面軍総司令官の就任を知る。

三月上旬 コウキのナデシコ戦力充実の為の新型機集めが始まる。

三月中旬 エックスエステバリス改修案が実行され始める。一、二ヶ月で完成予定。

和平派からの通信。カエデ合流。アキト離脱。ミルキーウェイ設立

三月下旬 ミスマル総司令官及びカグラ・ケイゴの暗殺事件。

ミスマル司令主導によるアイリスプロジェクト始動。神楽派決戦を決意。木連訪問により神楽大将と接触。決戦を長引かせる事を約束。鎮圧までに半年と予想。ナデシコ明日香インダクトリーにて改修工事に入る。

四月上旬 ミナト、コウキの専属秘書に。接近格闘仕様の開発を依頼。

カエデ、パイロット養成コースを受講。命名大会実施。

四月中旬 三羽鳥の説得。ベイビィAエアザレアの開発開始。

四月下旬 アザレア完成。カエデとの決闘。カグラツキ製造開始。
半年予定。

誘拐。
太平洋戦争勃発。草壁派の工作により白鳥ユキナ木連へ

表就任。
△ネタケ総参謀長解任。ミスマル・ユリカ改革和平派代

五月上旬 三羽烏決別。秋山源八郎のみ神楽派へ。エクスバリス改
修型完成。

頼。
コウキ考案、相転移エンジンを積み込んだ機体を開発依

五月中旬 反改革和平派に不穏な動き。

五月下旬 フクベ提督が軍復帰。ナデシコ、ヒナギク改修終了。チ
ューリップ破壊の任務へ。

六月上旬 木連にゲキ・ガンガーを始めとするアニメやビデオを贈
呈。

六月中旬 チューリップ撃破任務

六月下旬 / /

七月上旬 / /

七月中旬 / /

七月下旬 ナデシコ地球上のチューリップをある程度破壊。

次の作戦ポイントである地球周辺を掃除する為に月へと

向かう。

八月上旬 秋山率いるカンナヅキと戦闘。覚悟を見せる。
木連、地球に対して宣戦。最終決戦を十月とした。

八月中旬 コロニー落としの情報を得る。

コロニー落下阻止の為にコウキ達が出撃。

八月下旬 コロニー落下阻止作戦。

コウキ行方不明に。ナデシコは拘束。

謎のメッセンジャー登場。ナデシコ解放の為に動き出す。

九月上旬 連合軍徹底抗戦派によるクーデターが勃発。

九月中旬 ミスマル親子によってクーデター収束。

コウキナデシコに帰艦、及び、ナデシコ地球に帰還。

ナデシコ、教導の任務へ。タンポポ登場。

九月下旬 ナデシコ教導任務を終え、宇宙へと飛び立つ。

十月上旬 国民総選挙により和平と決まる。

最終決戦第五次月面戦争勃発。 今ここ

最終決戦へ向けての軌跡（後書き）

原作から大きく乖離した時点から整理しました。
今後も展開次第、更新していこうと思います。

プロローグ（前書き）

初めまして。

それなりに頑張っていくのでよろしく御願います。

今更感がありますが、ナデシコは良い作品ですよ。

面白かったらこれからもよろしく御願います。

プロローグ

朝？眼が覚めると真っ白な空間にいました。

「・・・なんでさ？」

突如、視界に映る眩い光。光が止むとそこには可愛らしい少女がいました。

「・・・なんでさ？」

「いらっしゃい」

・・・いらっしゃいって。

「どこ何処？」

俺、昨日、普通に寝たよね。ってか、本当にここどこだよ？

「ここは遺跡の空間」

「遺跡の空間？」

「ボソソジャンプ。そういえば分かる？」

ボソソジャンプって！

「ここはあれか。あの世界か？」

「そう。あの世界。貴方は迷い子。偶然に偶然が重なって、

そこに更に偶然が重なるくらいの確率の低さでやってきてしまった哀れな子羊」

子羊っておい。別に何も信仰してないけど？

「冗談」

「って冗談かよ」

どこがだ！？ どこまでが冗談なんだ！？

「詳しく事情を説明する」

.....

「要するにだ。ボソソジャンプは時空間移動。

だから、平行世界であるこの世界にもやってこれるって訳だな」

「そう。過去、未来、平行世界。その全てから情報を摂取しているのが遺跡。

でも、平行世界で私にアクセスしてきたのは貴方が始めて」

「アクセスってのは？」

「ナノマシンを介して。何の因果か、貴方に遺跡アクセス用のナノマシンが注入されていた。

普通は在り得ない。だから、偶然の三乗。奇跡」

「奇跡・・・ねえ」

正直、俺には分からんよ。

「私の存在を知った以上、元の世界に戻す事は無理」

「え？ ちょ、ちょっと待てよ。それなら、俺はどうなるんだよ」

「選択肢は三つ。1、記憶を消して元の世界に戻る。2、私がいる世界に移る。そして・・・」

「そして？」

ゴクリッ。

「3、死ぬ」

や、やっぱり！ ちょっと待とうよ。

まだ俺ってば十八歳。死ぬには少し、いやいや、かなり早いんじゃないかな。

「普通に1でいいんじゃないか？」

「分かった。ただし記憶の消去は繊細な作業。もしかすると全ての記憶が」

「ちょっと待とうか」

記憶を消すつてもつとこつ簡単は今から二時間前とか、そんな感じで消そうよ。

何だよ？ 全ての記憶って。

人間の記憶能力ってそんなに複雑なの？

俺なんて昨日の晩飯も思い出せないぞ。

「なら、3？」

「何で3なんだよ！？ 何故、死を要求する！」
「簡単」

そ、そつだよね。

殺すのが一番楽だよね。

でもさ、僕としてはもつと長生きしたんだよね。
とりあえず、六十八歳ぐらい？

「なら、2？」

2、遺跡の世界に移る。

・・・どうしよう？

記憶を消されるのも断固として拒否。

死ぬのなんてもっと拒否。

でも、あの世界って死亡確率高過ぎだよな？

ま、戦争だからしょうがないんだと思うけど。

あれ？ ちょっと待とうか。

あの世界って一般市民にはそんなに危険はなかったけか？

そうだよな。何か、ノンノンと生きてたし。

戦争の自覚がないから両者とも反省しないで次の悲劇に繋がったとか誰かが言ってたし。

うん。もしか、安全か？

俺みたいな一般市民には戦争をどうする事も出来ないだろうし。

無難に安全に平和に過ごそうよ。

そうしよう。

「分かつ

」

・・・ちよつと待とうか。

それって家族とお別れ？友人とお別れ？

恋人と・・・はいないからいいとして。

結構、シビアじゃない？

あつちいったら知り合い皆無だなんて。

ああ・・・。俺はどうすればいいんだ？

「決まった？」

「うん、まあ、一応は」

「それで？ どうするの？」

「2、かな」

シビアだけど。記憶消去とか死亡とかよりは良いかなって。

「でも、家族とか友人とかにさよならって伝えたいんだよね。急にいなくなったら心配すると思うし」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

え？ 無言ですか？

「終わった」

「え？ 終わったって？」

「貴方の世界の過去にアクセスして、ナノマシンの侵入を防止した」

・・・万事解決じゃん。

「それじゃあ、俺はもう帰れるって事か？」

そっだよな。

原因が失くなったんだ。

俺はもう。。。

「無理」

「そっだよな。無理だよな・・・って無理!？」

「そっ。無理」

「ど、どうしてだよ!？」

「貴方にナノマシンが注入された時点で時間軸はズレている。

私が干渉したのは貴方の世界であって、貴方の世界ではない」

「タイムパラドックス効果って奴？ 良く分かんが」

俺が過去に戻って親を殺したら俺は生まれてないからそもそも親を殺す事が出来ないとか、

そんな変な矛盾が生じちまう奴だよな。

「そう、つまり貴方はパラレルワールドの住民。
貴方自身の存在は貴方の世界から消えるけど。違う世界で普通に
過ごしている貴方がいる」

そっか。それなら・・・。

「って、それじゃあ意味ないじゃん。俺は自分の両親にお別れを」
平行世界の俺とか知らんがな。
それって現行世界じゃ俺ってば行方不明って事だろう？

「管理者権限を行使した」

管理者権限って、おい、まさか。

「貴方が消える瞬間に平行世界と貴方の現行世界とを融合させた。
今、貴方が元の世界に戻ったら貴方という存在が二人いる事にな
る」

「・・・要するに俺が消えたなんて事にはならず周りは平穏な生
活を送っている訳だな」

「そうなる」

そっか。それなら、安心だな。

・・・理不尽だけど。

「要求は達成した。準備は・・・良い？」

「良・・・ちょっと待とうか。いきなりそっちの世界に飛んで俺は
どうなる？」

知人も衣食住も何もかもないんだろ？」

「ない」

「……断言するぐらいなら何かしらの温情を与えてくれ」

せめて最低限生活できる程度には。

「分かった」

すると突然俺の体が光り出す。

……おい。俺の身体に何をした？

「貴方に管理者権限を行使した」

「ええつと？ 何をしたんだ？」

冷や汗が止まらない。

嫌な予感が止まらない。

「1、遺跡へのアクセス権。今の貴方なら前提条件を覆せる。

チューリップクリスタル（CC）がなくても跳べるし、

ディストーションフィールド（DF）がなくても問題なく跳べる」

「人体実験とかされちゃうじゃん！？ ……あ。素直に逃げればいいのか」

「2、ナノマシンとの親和性の向上。今の貴方ならIFS強化體質の処理能力をも超える」

「無視！？ ってか、余計だよ、その効果。ナノマシンとか怖すぎるし！」

IFS強化體質って所謂マシンチャイルドだろ？ あれ以上とか絶対頭がパンクしますから！」

「3、ナノマシンの注入。向上効果のあるナノマシンを全て注入した。」

今の貴方ならナノマシンの複数注入も耐えられる。危険なのも調整して注入したから大丈夫」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

もう駄目だ。

俺の身体は人外になっちまった。

平穏な生活さようなら。

危険な生活いらっしやい。

ああ。涙が止まらない。

「4」

「まだあるのかよ!？」

もう勘弁してあげてください。

もとい、勘弁してください。

「遺跡の知識。必要な時、必要な知識を取り出せる」

ん？

それなら・・・。

「もしや、過去も未来も」

「過去も未来も平行世界も」

おお。

それなら・・・。

「楽が出来る。何か困ったら特許を取ろう。」

後はそのライセンスとかで金が儲かる。おお。ニート街道まっしぐらか？」

「・・・・・・・・」

無表情。

でも、あれって呆れられてる？

「・・・・・・・・」

無言が痛いっす。

「それと貴方という要因が存在する以上、私の世界も平行世界になる。」

「パラレルな世界に歴史の修正力は存在しない」

「大丈夫。大丈夫。俺は歴史に関与するような事はしないから。平穩にノンノンと過ごすんだ！」

「蜥蜴戦争？ 火星の後継者？ 俺には関係ないさ。」

「あ、でも、人体実験は容認できないな。」

「必要悪だなんて納得できないし。」

「俺にはあの人達の思想も理解出来ないし。」

「会社を興しても良い。軍人になっても良い。平穩に生きてても良い。じゃあ。送る」

「分かった。何だか色々とおマケしてもらったみたいで悪かったな」

「いい。こちら悪かった」

「そうして、俺はこの世界から追い出された。」

「マエヤマ・コウキ。」

「十八歳の旅立ちだった。」

「最後に。絶対貴方は巻き込まれる。それが運命。貴方の決して逃

れられない運命」

「つて、おい!?!」

不吉な言葉をありがとう。

それでも、俺は平穩に生きてみせる!

第一話

「……ここは？」

うん。隣には黒髪の青年。

今をときめくアキト少年ではないですか。

って事はここはサセボシテイって奴か。

それで、アキト少年、いや、アキト青年か、の最初のボソソジャンプで降り立った時って事だ。

「ん？ 何かちよっと視線が高いような……」

おお。背が伸びてる。

ええつとアキト青年って何センチだ？

多分170は超えてるだろう。

って事はそれよりチョイ高いから……。

もしや俺が理想とする178センチぐらいか。

うん。これからはそう主張しよう。

それにしても背が伸びるだなんて。

長年の夢が叶った。

なんて素晴らしいアフターサービス。

モチ顔じゃない事は諦めていたが、背は諦め切れなかったんだ。

何度牛乳を飲み、薬にまで手を出したのに、俺の身体は俺の要望に応えてくれなかった。

もしやあの薬が悪かったのか？

やはり広告を無条件で信じてはいけないのか？
まあ、個人差がありますと書いてあるから俺には効果がなかっただけかも知れんが……。

「……まあいいや。結果オーライ？」

と、落ち着いた所で……。

「……」

アキト青年と知り合うとほぼ無条件で物語に参入だな。
すまないが、アキト青年。

サイゾウ氏が現れるまで耐え切ってくれ。
僕には出来る事がないんですよ。

「フフーン。ンンンンン」

お、この鼻歌。
サイゾウ氏の登場ですか。
分かります。

「……」

服は……大丈夫だろ。ただの寝巻きだし。

いや。普通じゃないけど寝巻きで出掛けるのとか別におかしくない筈。夜だし、時間帯的に。

顔は……調べる必要ないよな。

あ、でも、MCを超えたってか、MC化したって事は瞳が金色になつたりとかは……。

ほっ。なつてなかった。遺跡の仕事は素晴らしいな。ってか、湖で

顔確認とか初めてしたし。

金は・・・やばい。この世界の金じゃない。

・・・とりあえず、日雇いバイトして、金を得よう。

んで、その金でどこかに泊まって、IFS対応の端末を探す。

その後は・・・。

「・・・俺は遂に犯罪行為に？」

どこかしらの裏金を取っちゃおうと思ったけど、それって普通に犯罪だよな。

バレなつきゃいいんじゃない？ とか開き直れないよ。

でも、衣食住全てが不足している現状、どうしようもないんだよな。MC以上のナノマシン親和性があるっていつてもハッキングなんて慣れが必要だろうし。

体の中にあるナノマシンとかどれくらい恩恵があるんだろう？

色々試さないといけないよな。

ん〜。どうするか？

「おい。兄ちゃん」

とりあえず普通のナノマシンとかよりは高性能だろうな。

本来は禁忌な複数注入もされてるみたいだし、色々効果はあるだろうし。

「お〜〜い」

身体は特に異常は・・・。

ま、強いて言うなら眼が良くなったのか？

俺って意外と眼悪かったしな。

って事は五感が強まっ。

「おい！」

「ッ！」

な、何だ！？

いきなり襲われたのか！？

「あ」

気付けば眼の前に鼻息の荒い中年がいました。
もとい、料理人、サイゾウ氏が。

「やっと気付いたな。まったく」

「すみません」

まったく気付きませんでした。

「んで、こいつは誰なんだ？ 行き倒れか？」

「さあ・・・」

「さあっておいおい」

実際知らないしな。

設定以外は。

「俺も偶然彼を見付けたんですよ。それでどうしたのかなって近付いてみたんですが」

「この通り、倒れてたって事か。息はあるみたいだし、生きてんだろ」

「はい。助けようと思ったんですが、俺も一人旅みたいな事してるんで」

とりあえずでつち上げだ。
物語には介入したくないしな。

「そうか。んなら、俺が面倒見るよ」

「ええつと？ 良いんですか？」

「ああ。どうせ俺も一人暮らしたしな。ガキが一人増えた所で変わんねえよ。

それに、お前が気にする事でもないだろう？」

優し過ぎです。

サイゾウ氏。

「すみません。御願います」

「だから、お前に御願いされるような事でもないっての」

苦笑されてしまった。

ちよっと人任せという事に罪悪感を感じるが、今の俺にはどうしようもないしな。

「んじゃあな。お前も一人旅だった、か。気を付けるよ」

「はい。ありがとうございます」

アキト青年を抱えて、店へと帰っていくサイゾウ氏。

「カツコイイな。俺もあんな大人になろう」

そう俺は心に誓った。

サイゾウ氏の器は半端なく広い。

「さて、とりあえず日雇いのバイトを・・・あ

忘れていた。

日雇いの仕事だからって俺自身だと証明できなければ働けないのでは？

そういう所で働いた事ないから分からん。

そもそも俺って戸籍とかないよな？

や、やばい。

捏造しなければ！

・・・この時点で犯罪だよな。

ああ。俺も遂に犯罪者か。

とりあえず、バレないように頑張ろう。

・・・さて、その前に・・・。

「すいませええん！ 御願いがあああ！」

サイゾウ氏にお金を借りよう。

「・・・ここでいいかな？」

どうにか、お金を借りられました。

すぐに返します。

本当です。

「この世界ってか、二百年ぐらい後の時代にもネットカフェってのはあるんだな」

眼の前のネットカフェに入って、早速戸籍の捏造だ。

「会員証を御願います」

・・・そうだよ。まずは会員証だよ。

つて、自分を証明できるものなんて何一つ持ってないぞ！
か、会員証が作れない！

「如何しました？」

どうする？ どうする？

・・・どうしようもねえええ！

「いや。ちよつと会員証を忘れてしまいました。また来ます」

「お、お客様？」

とりあえず店から出る。

「はあ・・・」

前途多難だな。

甘く見ていた。

現実とはこれ程に厳しいのか・・・。

「ネットカフェも駄目か。どうすれば俺は電腦世界へと辿り着けるんだ？」

戸籍を作るにしろ、金を作るにしろ、まずはネットが繋げる環境がなければならん。

どうするべきか……。

「ねえ」

ん？ 声掛けられてる？

「はい。何でしょう？」

振り返る。

その先には……

「どうかしたの？」

若き日のハルカ・ミナトさんがいました。

うん。やばいね。巻き込まれるね。

「い、いえ。何でもありませんよ」

「そう？ こんな所で立ち尽くしているから何かあったのかなって」

こんな所？

ああ。そっか。ネットカフェの前で立ち尽くすとか意味わかんないもんな。

「ネットカフェで一夜を過ごそうと思ったんですけど、

金も失くて、会員証も作れなくてですね。どうしようかかって途方に暮れてました」

これで通じるでしょ。真実っぱい嘘。

「あら。そんな事しちゃ駄目よ。ちゃんとした所で寝なっきゃ。

そうね……。いいわ。私の家に来なさい」

・・・ちよつと待とうか。
いくらなんでも無防備過ぎでしょ。

「いえいえ。女性が住んでいる家に行くなんて」

「あら。襲うつもりなの？」

「そ、そんな事」

あんまり免疫ないんだからからかわないでくれえ。

「あら。真つ赤になっちゃって。ウフフ」

ウフフだなんて。

御姉様。余裕あり過ぎです。

「いいですよ。ご迷惑をおかけする訳にはいきませんから」

「いいのよ。私、こつ見えても社長の秘書をやつて儲かっているの。

少年一人ぐらいの面倒は見るぐらいの甲斐性はあるつもりよ」

甲斐性つて。

俺つてばヒモですか？

「いえいえ。僕は」

「いいから。いらっしやい。すぐ近くだから。ほら、あのマンションよ」

・・・強引に連れて行かれました。

女性はどんな世界でも、どんな時代でも強過ぎる生き物です。

僕は一生敵わないでしょう。

「へえ。一人旅してたの？」

「ええ。と言つても、始めたばかりですけどね」

はい。一生懸命、誤魔化し続けています。

でも、バレルのも時間の問題でしょう。

だつて……。

「ふうん」

ニヤニヤ笑顔が止まらないんですもの。

無論、ミナトさんの。

「信じてませんね？」

「あら。そんな事ないわよ」

この人、鋭そうだな。

「学校はどうしたの？」

「中退です。やりたい事が出来たので」

「それが一人旅？」

「ええ、まあ。そんな所です」

「ふうん」

妖しい笑顔です。

いえ、怪しんでいる笑顔です。

眼が笑ってない。

「そう。これからはどうするの?」

「とりあえず旅を」

「お金もないのに?」

「そ、それは・・・」

それは言わないお約束って奴ですよ。

「そうね。じゃあ。バイト、してみない?」

「バイト・・・ですか?」

「ええ。うちの会社でちよつとさ」

「ええつと。職権乱用ですか?」

「コラッ」

「イタッ」

拳骨なんて何年ぶりだろ。

頭が痛い。

「折角気を遣ってあげたんだから。年上のお姉さんの言葉には従うものよ」

「ええつと。それじゃあ、御願いしてもいいですか? でも、俺って何の取り得もありませんよ」

「あら。その手は飾り物?」

手?

あ。忘れてた。

「・・・IFS」

「そうよ。地球ではパイロットの人ぐらいしか持ってないけど、

火星では殆どの事をIFSでやってるんですよ。それって便利だからよね？」

「そうですね、良いんですか？ 地球の人はIFSに拒絶反応を起こすって聞きましたか・・・」

「って事はやっぱり貴方は火星出身なのね」
「あ」

別に隠してたわけじゃないけど、やっぱり鋭いな。

地球出身で通すつもりだったのに。

ま、火星出身という訳でもないけど。

「え〜っつとですね。地球生まれの火星育ちです。最近、また地球に帰ってきたんですが」

「そうなんだ。それでIFSを持つてるのね。事務処理とかは出来るのかしら？」

「IFS用の端子さえあれば可能だと思いますよ。書類を整理するぐらいだと思いますけど」

・・・別に無いわけじゃないよな？ IFS用の端末。
パイロットのみって聞いてたけど、社会で利用できない訳じゃないんだし。

「そう。書類整理か・・・。うん。じゃあ、御願いしようかしら」

「良いんですか？ 機密事項とかあるのでは？」

「大丈夫よ。そういうのは除外するから」

「そうですね。それなら、御願いしますね」

「はい。お任せあれ」

ニッコリ笑うミナトさん。

やっぱり年上の女性って素敵だな。

「それじゃあ、もう遅いから寝ようか？」

「はい。ええっと、ソファを貸してもらえますか？」

「え？ 何言ってるのよ。いらっしやい」

「え？ え？」

「一緒に寝ましょう」

「ええ？ ちょ、ちょっと待ってくださいよ。」

そんな一緒になんて。無理です。絶対に無理です。・・・あ

気付いたよ。

気付いちやったよ。

笑ってますよ、この人。

「・・・またからかったんですか」

「ほら、コウキ君ってからかい甲斐があるじゃない」

「あるじゃない？ って俺に聞かないでくださいよ」

「ウフフ。面白い子ね。大丈夫よ。布団。出してあげるから」

「すみません。何から何まで」

「いいのよ。コウキ君って良い子だし」

え〜と、良い子って言われてもな。

「ありがとうございます」

「本当におかしい子」

その後、ミナトさんから布団を借りて、リビングの方で寝させてもらった。

同室でどう？ なんてからかわれたけど、俺だっていじられよりいじりを得意としていた男。

見事、迎撃・・・出来ませんでした。

真っ赤になつて一発KOです。
やっぱり免疫のないのつて辛いな。
だって、すぐ近くでミナトさんが寝てると思うだけで動悸が……。

「ふう……」

リラックスだ。

うん。これからの事を考えよう。

「どうすつかな？」

アキト青年から逃げたのはいいが、見事なまでに原作キャラに関わつちまった。

ハルカ・ミナトさん。

ナデシコの操舵手。数多の資格を持つ才女。ルリ嬢の姉貴分。などなどメイン中のメインキャラ。

このままだと確実に巻き込まれるだろうな。

でも、都合良くIFS対応の端末を手に入れられそうだし、

恩を仇に返すような真似はしたくないしな。

それはもう莫大な恩を感じていますとも。

食事を用意してもらつて、寢床を用意してもらつて、拳句の果てには仕事まで。

本当にもつとお世話になりつぱなしで、頭が上がりません。

せめて、この恩を返してから去らないとな。

とりあえず、明日からの行動方針。

まずは戸籍を手に入れる。捏造？ 構いやしないつての。死活問題だ。

次に裏金を入手。これはまあ、最終手段だな。まずは自分の手で金を稼ぐ。

楽しちゃ良い大人になれんよ。……ニート志望ですが、何か？

うくん。特許でも手に入れるか？ 一つぐらいあった方が後々も動きやすいよな。

その金で衣食住を確保しよう。まずはそこからだ。いつまでもミナトさんにお世話になる訳にはいけないしな。よし。この方針でいこう。頑張れ。俺。

S I D E M I N A T O

「ふう」

ベットに横たわって一息つく。

「面白い子」

偶然、見つけた若い男の子。

まだまだ大人の魅力とかは感じないけど、とっても良い子みたい。IFS付けてたから軍人かなとも思ったけど、そんな雰囲気でもなかったし。

「それにしても・・・」

一人旅なんて嘘ついて何してるのかしら？

悪い子じゃないと思うから、変な事ではないと思うけど。

それに、どこことなく戸惑ってるみたいな、そんな感じもあったわ。家電とかちゃんと使えてなかったし。

間違いなく生活レベルが違ったのよね。

「本当に不思議な子」

何か黄昏ている姿が捨て猫みたいに見えたから拾ってきちやっただけ。

「楽しみね」

これからの生活がちよっと楽しみでもあるの。

男の子って日々成長するって感じて見ていて楽しいのよ。

それにいじり甲斐もあるし。

ウフフ。こんなに楽しいのはいつ振りかしら。

「おやすみなさい。」「ウキ君」

S I D E O U T

「それじゃあ、行きましょつか」

ミナトさん先導のもと、ミナトさんが社長秘書を務める会社へと出向く。

「おはようございます」

「うん。おはよう」

「え〜と、その方は？」

受け付けの人が訝しげに見詰めてくる。
ま、当然だよな。私服だし。
ちなみにミナトさんの持ち物です。
何故、貴方が男物を持っているのですか？
・・・訊いてもはぐらかされるんだろっなあ。

「アルバイトよ」

「アルバイト・・・ですか？」

「ええ。私が身元保証人になるから、あれ、頂戴」

あれと言われて持ってきたのは社員証。
そうだよな。これがなっきや会社に入れないし。

「はい。これ。失くしちゃ駄目よ」

「ありがとう」

「ほらほら。しゃがんで」

お礼を遮って告げられる言葉。

「ええっと。ミナトさん」

「ん？ 何よ。早くしゃがんで」

「あのですね。自分で付けますから」

「駄目よ。しゃがみなさい」

「クスッ」

笑ってないで助けてくださいよ。
受け付け嬢さん。

「ほら。早くしなさい」

「・・・」

とりあえず、無言でしゃがんでみました。

「ん〜。ちょうど良いわね。この身長差」

「……………」

「あら。真っ赤」

駄目だ。本当に敵わない。

「ハルカさん。苛め過ぎですよ」

「笑って言っただって説得力ないわよ」

その通りです。受け付け嬢さん。

「クスツ。すいません」

だから、笑わないで下さいよ。ああ。背中に嫌な汗が…………。

「じゃあ、いきましようか」

「はい。分かりました」

とりあえず、付いていく。

「それじゃあ、コウキ君。これを使って」

連れてこられた秘書課。やっぱり周りは女性社員ばかりかし。

……苛めですか。ミナトさん。

「ハルカさん。彼は？」

「アルバイトよ。遊んであげて」

「はあ〜い」

ミナトさん！

分かりますか？

この女性に囲まれた環境が如何に肩身が狭いか。

「ウフフ。ハーレムね」

いじられハーレムなんて嫌じゃ！

「じゃ、後で仕事を持ってくるから、それまでは扱いに慣れておいて」

立ち去っていくミナトさん。

一人にされるなんて。心細い。

「とりあえず」

コンソールに両手を置く。

あ、やばい。忘れていた。

MC以上のナノマシン親和性で、数倍のナノマシン濃度を持つ俺だ。ルリ嬢やラピス嬢がコンソールに触れただけでかなり輝くのだ。当然、俺が触れたら……。

「……全身が光ってる」

こうなるわな。

もう眩しいぐらいに輝いています。

でも、俺はルリ嬢やラピス嬢みたいに容姿は整ってないからな。綺麗とは言われないさ。

「えっと……」

恐る恐る後ろを見る。
すると……。

「……………」

あ、良かった。呆然としていらっしやる。
避難、避難つと。

「ちよつとトイレに行つて来ます」

サツと逃げ出す。後ろから呼ばれたような気もするが気にしてはいけない。

「どうするか？」

ナノマシンの扱いに慣れれば光らないようになるだろう。きっと。
というか、それ以外に考え付かない。

「じゃあ、戻りますか」

そつと。そつと。

「あ、帰つて来ましたよ」

「行くわよ」

「はい！」

……速攻でバレました。

現在、尋問中です。

「さっきのは一体何なの？」

「嫌がらないでくださいね。コンソールを見れば分かると思います
が、俺はIFSを持っていきます」

「うんうん。それで？」

「あれ？ 嫌がらないんですか？」

「そんな事はどうでもいいの。さっきの説明をしてちょうだい」

「あれはIFSの制御ミスとも思ってください。久しぶりだった
ので」

実際、俺には何でか分からん。

制御に慣れれば、抑えられるようになると思うけど。

「へえ。IFSってあんな反応するんだ」

「知らなかったわね」

「そうよね」

・・・冷や汗が止まらない。

気付けば女性に囲まれていました。

こんなに女性に囲まれたのは生まれて初めてです。

「あら。いつの間にこんなハーレムを築いていたの？ コウキ君」

「あ。ミナトさん」

正直、助かりました。

これで解放されます。

「どう？ 扱えそう？」

あ。試してなかった。

「ちょっと待ってくださいね」

コンソールに手を置く。

今度は輝かないように注意して……。

「あら。綺麗ね」

無理でした。初めてだからしょうがないさ。

「……これは……」

手が端末となつてまるで映像化のように脳へと伝わってくる情報。

それが補助脳で整理され、欲しい情報として確立される。

今までに味わった事のない感触、というか、イメージがフィードバックするってこういう事なのか。

是非ともIFS対応の車とか乗ってみたいな。

「……え」と

頭の中に映像として残る情報をそのまま頭の中で整理する。

ファイルとして残るデータを右にずらすと意識すれば右にずれるし、

フォルダに保存したい時はそうやってイメージすれば良い。

プログラミングだってイメージすれば勝手に構築されていく。

何て、何て素晴らしいんだ。IFS。これがあれば現代社会も苦勞せずに生きていけるぞ。

「どう？ 大丈夫そう」

「ええ。何とか出来そうです」

「無理しちゃ駄目よ」

「はい。ありがとうございます」

初心者なりに頑張れそうだな。

今は慣れる事を優先しよう。

その後に戸籍を捏造してやる。

「じゃあ、これ御願いできる」

渡されたのは山のように積まれた書類。

何だろう？　これ。

「数値とか内容とかで間違いがないか確認して。」

それと内容別とか、種類別とかで分別できるようにまとめて整理してもらえるかしら」

以前だったら面倒だと思っていた仕事。

でも、今なら、そういう事も体験してみたいと思った。

「分かりました。お任せ下さい」

「はい。お任せしちゃうわ。休憩は自由に取っていいから。御願いね」

また立ち去っていくミナトさん。

きつと忙しいんだろうな。

「さて、やりますか」

パツと済ませて、目的を果たさなければ。

「はい。お茶」

「あ、ありがとうございます」

「頑張ってるね」

美人の微笑みは癒されるねえ。

頑張ろうって気にさせるよ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

駄目だ。

効率が悪い。

っていうか、俺の反応に付いて来れないみたいだ。

「どうかしたの？ 難しい顔して」

「あ。ミナトさん。お疲れ様です」

「ありがと。それで、どうかした？」

結構顔出してもらってるけど、社長の方は大丈夫なのかな？

・・・きつと気を遣ってもらってるんだろな。

「いえ。効率が悪くてですね」

「効率が悪い？ えっと、全然終わらないの？」

「あ、いえ。そんな事はないです。もう終わりますよ」

「ええ！？ もう！？」

驚いて顔を近づけてくるミナトさん。

「近いです。近いですってば」

「あ、ごめんなさい。ちょっと興奮しちゃって」

「どうかしたんですか？」

興奮って。ドキッとしちゃったじゃん。

「普通は半日ぐらい掛けて終わらせる仕事だもの。数人掛かりで」

・・・やばい。あんまり仕事とかした事ないから一般基準を知らなかった。

これってそんなに大変な仕事だったのか？

「あんまり急ぎじゃなかったから慣れるつもりでやってもらったのに。」

僅か一時間足らずで終わらせてしまうなんて。社長にIFSを提案しようかしら

「ええっと。俺のが特別性なだけですよ。普通のだったら・・・」

どれくらいだろう？ 基準が分からん。

「へえ。コウキ君のは特別性なんだ。凄いのね」

「俺じゃなく俺のナノマシンがです」

ん〜とかニヤニヤしながら近付かないで下さい。

「アルバイト君は正式採用ね。仕事がかどって助かるわ」

「あ、そうですね。お世話になります」

とりあえず稼げるだけ稼ぐか。
IFSの取り扱いの練習にもなるし。

「あ、そうだ。こいついじくってもいいですか？」

俺が現在扱っている端末に手を置きながら訊いてみた。
これじゃあ効率が悪過ぎて使い物にならない。

「いじくるって？ どういう事？」

「効率が悪いんでね。ちよっと使いやすいように改良しようかと」

「そ、そう。壊さないでね」

「大丈夫ですよ。ま、任せてください」

「わ、分かったわ。じゃ、またね」

冷や汗を掻きながら去っていくミナトさん。
どうかしたのかな？

「・・・あれって最近入荷したばかりの最新OSなのに。それを改良するって・・・」

との呟きを残されていきました。

し、しまったあああ！

う、疑われる。

「・・・ま、いいか。むしろ、最新OSを特許に・・・」

ニヤリと笑う。

意外と良い手かもしれん。

「じゃあ、早速」

残った仕事を片付けて、OSの改良に移る。

「うーん。どうすっかな」

OSの改良案が思い浮かばない。

とりあえず、分かっている事は一つ。

俺のナノマシンの機能に対してこいつじゃ対応し切れない。

まあ、オモイカネ級の機能がなければMCも必要ないとかいう話も聞いた事あるし、

オモイカネ級の簡易版でも開発しましょうか。

つてな訳で……。

「……アクセス」

遺跡へのアクセス権を行使。

既存の情報を入手。必要な設定をインストール。補助脳を介して手先の端末へ。

パラーッと全身を光らせ、莫大な量の情報を補助脳で整理し、コンソールを通して具現化させる。

映像を文字化。文字をプログラム化。情報を整理し、情報を具現化し、情報を形にする。

「ふう……」

な、何だ？ こりゃ。

頭が潰れるっつての。

遺跡へのアクセスとか今後覚悟がいるぞ。

「……でも、ま、後はこれをチヨチヨイといじくって」

現状では高機能過ぎる。十年後ぐらいのOSを参考にしまったかな。

これをかなり劣化させて一、二年後ぐらいには実現出来そうなOSにしよう。

今更ながら、何でもありだな。俺の身体ってか、遺跡。過去、未来、平行世界の知識とか。半端じゃないっす。

「今度は何をしたの？ はい。お茶の御代わり」

「あ、どうも。すみません。ちょっと改良しました」

さっきお茶をくれた人がまたお茶を持ってきてくれた。

あ。前からお茶は好きだったが、更に好きになりそうだな。

「改良って？」

「OSのです。趣味なんですよね。プログラミングとか情報関係とか」

嘘です。

そんな趣味ありません。

遺跡の恩恵です。

「へえ。凄いのね。このOSって最近発売されたばかりよ」

「そうみたいです。でも、発売されてないだけでもっと高度なOSは幾らでもありますよ。」

実用化が難しく調整しているのとか」

実際は知らないけど、それぐらいありそうだな。

表に出てないけど高度な技術とか。

「そうなんだ。じゃあさ、今のより凄いのが出来たら私の方にもインストールしてみよう」

「はい。いいですよ。是非とも試してみてください。感想を聞いてみたいですし」

多分大丈夫だとは思いつけど、実際に意見を聞いてみたいしな。

「言ったなあ。私って辛口よ。このOSだってイマイチだって思ってた所だもの」

「大丈夫です。任せてください」

・・・もうちょっとだけ高度にしようかな。

「どれくらいで出来そう？」

「色々調整したいですから。結構時間掛かりますよ」

「大丈夫よ。開発なんて年単位でしょ。気にしてないわ」

「ええっと。後一週間程で大丈夫なんですが・・・」

だって、面倒だから遺跡からそのままデータ貰っちゃったし。

「.....」

呆然とするお茶のお姉さん。

そうだよな。普通じゃないもんな。一応、言い訳しておこうか。

「前々から研究してましたから」

「そ、そうよね。そうじゃないと」

な、何だ・・・と呟く。

・・・ちよっと罪悪感が。

「ま、まあ、完成したらすぐにお知らせしますよ」
「そっか。うん。よろしくね」

ニツコリ笑って去っていくお茶のお姉さん。
さて、少しだけ高度にして、汎用性を高めて、一般向けにしまし
うか。

「お疲れ様」

「お疲れ様です。ミナトさん」

ん。。。。

随分と入れ込んだな。

まさか、この作業がこんなに楽しいとは。

「今何時ですか？」

「・・・呆れた。時間も確認してないの？ もう定時過ぎてるのよ」

「げ！？ もう七時じゃないですか!？」

「そうよ。周りだってちらほらと帰ってるでしょ?」

「あ。本当だ」

辺りを見回すと何人かいなかった。

何人かの残っている人達は今でも真剣に作業している。

「じゃあ、帰りましょう。何が食べたい？」

「ええっと。そうですね。お任せします」

「もお。お任せが一番困るのよ。そうね。じゃあ」

「ハ、ハルカさん。ど、同棲してるんですか!？」

声が聞こえてたんだろうな。騒ぎ出す秘書課の皆さん。

・・・俺は見ましたよ。今、貴方の顔がニヤリと笑ったのを。

「・・・ミナトさん。またからかうつもりですか？ 他の人まで巻き込んで」

「さあね。あ、ちょっと用があつたわ。先に玄関に行つてて」

「あ、ちょ、ちよつと待つてくださいよ。ミナトさん。ミナトさん。ミナトさん
ああん」

それから質問攻めを受けました。

終わった頃にはもう精神的にボロボロでした。

ああ。やっぱり女性は強いです。僕では一生敵いそうにありません。

「あら。女性に囲まれてたのに元気ないわね。

貴方ぐらいの年頃の男の子だったら飛び上がらんばかりに喜ぶんじゃないの？」

「・・・誰かさんが爆弾を落としていきましたから。その処理で大変だったんですよ」

「へえ。大変だったのね」

貴方ですよ。ミナトさん。

「それじゃあ、買い物に行きましょうか。貴方のスーツとかも買わないとね」

「え？ い、いいですよ。そんな」

「いいの。いいの。いつまでも私服で会社なんてまずいでしょ？
スーツでバツチリ決めちゃいなさい」

決めちゃなさいって。

「でも、もう時間も遅いですし」

「大丈夫。昼頃に知り合いに電話しておいてから。今からでも充分間に合うわ」

「そ、そうですね」

準備がよろしい事で。

「じゃあ、御願いしてもいいですか？ 稼いだら返しますんで」

「ふむふむ。君も男の子だね」

「もちろん。男の子です」

顔を見合わせて笑う。

本当に頼りになる、というか、心強い姉貴分だな。
ルリ嬢が慕ったのが良く分かる。

「ほら。ボくっとしてないで。行くわよ」

「あ、はい。今行きます」

それから、スーツとか買って、食材を買って、家に帰宅した。
また悶々とした夜を過ごしたのは俺だけの秘密だ。

翌朝、買ってもらったスーツに身を包む。

「昨日も見ただけど、結構似合ってるじゃない。男前よ」

「あ、ありがとうございます」

美人さんに男前だなんて言われると照れるな。

「ほら。照れてないで行くわよ。今日も忙しいんだから」

「あ、はい」

昨日と同じ道を通って、昨日と同じように会社へと出社した。

「おはようございます」

「あ、おはようございます。ハルカさん。マエヤマ君」

挨拶してくれる秘書課の皆さん。

嬉しいんだけど、女性ばかりでやっぱり肩身が狭い。

「じゃあ、また仕事持ってくるから、ちょっと待っててね」

さてっと、今日はIFSの扱いにも慣れてきたし、ちょっとしたハッキングの練習でもしようかな。

まだ、戸籍の捏造とかは無理でしょ。技量的に。

「ふう……」

深呼吸して、コンソールに手を置く。

今日も忙しい一日が始まるぞ。

第一話（後書き）

まさかあのお方と出会うとは。

勝手にキャラが動き出す怖さを実感しました。

これからもキャラは勝手に動き出すと思います。

第二話

あれから一週間が経った。

ハッキングも練習を重ねて大分出来るようになってきたし、そろそろ捏造作業に移ろうかと思う。

OSの開発も特許取得の為に戸籍が必要だし、これが最優先事項だな。

「ええっと・・・これをああして、これがこうなって・・・」

・・・意外と簡単に出来ました。

「やっぱり凄いな」

遺跡からハッキングの方法を習得し、その通りやればあつという間。今までの練習って何だったんだろう？

「とりあえずは地球生まれだろ。それで、幼少の頃に火星へ引越して数年を過ごす。」

その後、両親が交通事故で共に死去してしまい、それを機に地球に戻ったって事にしよう。

それで、現在は親の遺産で一人暮らし。・・・うん。まあ、こんなもんでいけるでしょ」

おし。後は穴ができないように細かい設定を考えないと。

S I D E M I N A T O

「あ、コウキ君。ちょっといいかな」

一生懸命作業中のコウキ君には悪いけど、そろそろコウキ君の身の上を知っておかなくちゃ。

一週間経って、変だけど良い子だって改めて実感したし、何かあるのなら助けてあげたいしね。

「はい。何ですか？」

振り返って私を見詰めてくる瞳と朗らかな顔。

絶世の美男とか、そんな風には思えない顔だけど良く見れば割とカッコいいんじゃないかしら。

まあ、中の上とか上の下とか、そんなぐらいのレベル。

スーツ着て、真剣に仕事をしている姿は大人っぽくて素敵だと思うわよ。

まだまだ子供だけだね。

「舌だして」

「え？ ええ!？」

あ、動揺してる。

これはいじくりのチャンス。

「ほぐら。いいから。舌を出して。ほぐら」

「ええ〜っと。その。あのですね」

良いわね。このギャップ。
可愛い反応よ。
グイッと顔を近付けて。

「眼を閉じて。私に任せて」
「あ、はい」

グユツと眼を瞑って舌を少しだけ出してくる。
もう既に顔を真っ赤。割とモテると思うんだけど、女の子への耐性がないのかしら？
ま、私としては初心な方がいじくり甲斐があって楽しいけど。

「はい。チクツと」
「え？ チクツ？ イテツ」
「うん。ありがとね」

呆然と私を見詰めてくるコウキ君。
そして、すぐに落ち込む。

「ま、またからかわれた」

そついう反応がまたからかってやろつと思わせるのよ。

「何をしたんですか？」
「あ。これよ。DNAチエック」
「げ！？・・・大丈夫だよな」

冷や汗を掻いて呟くコウキ君。
どうかしたのかしら？

ま、いいわ。

「ええっと。マエヤマ・コウキ。十八才。父は」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・」

「・・・両親がいない・・・か。
悪い事しちゃったかな。」

「どうかしました？」

「えっと。ごめんなさいね。こんな事しちゃって」

罪悪感が浮かんできたわ。

他人のプライベートに勝手に踏み込んで。

「あ、気にしないで下さい。本当だったら会った日にやられていてもおかしくなかったんです。」

それをずっと甘えさせてもらっていて

「ええっと。怒ってないの？」

「え？ 怒るだなんて。ミナトさんにはお世話になりっぱなしですし。」

「こんな怪しい奴の面倒を見てくれていたんです。感謝してますよ」

そう言って満面の笑みを浮かべるコウキ君。

「・・・不覚だわ。年下の笑顔にドキツとするなんて。」

「そ、そう。何か困ったらいつでも言いなさいね。」

「コウキ君は私にとって弟みたいなものなんだから」

「ありがとうございます。ミナトさんみたいなお姉さんがいたら弟は幸せでしょうね」

「も、もう。褒めたって何も出ないぞ」

「ハハハ。初めて勝った気がしますよ」

もう。まいったわね。私のペースが崩されたわ。

「でも、本音ですからね。ミナトさんみたいに包容力がある人は中々いませんから。」

頼りにさせてくださいね。姉さん」

「任せました。弟君」

あ、眼が点。

弟君つてのが予想外だったのかしら？

これはからかいのチャンス。

「ほら。お姉さんに甘えていいのよ」

手を広げてそう言ってみる。
すると……。

「……………」

案の定、真っ赤になってる。

うん。まだまだコウキ君には負けないわね。

「じゃあ、姉さんは行くから。頑張るのよ。弟君」

ウフフ。本当に楽しい。

ちょっと悪い事したけど、コウキ君の素敵な一面も見れたし。

良かったかな？

S I D E O U T

「・・・ふう」

去っていくミナトさんを見送る。

ミナトさんが部屋から出て行って、漸く俺は安堵の息が吐けた。

「ギリギリだった。後少し遅れてたらノーデータとか表示されてたかもしれない」

戸籍の捏造。

ミナトさんに声を掛けられると同時に終了した。

良かった。穴はなかったみたいだ。

正直、焦ったぜ。

バレたらどうなるか分からないし。

「それにしても・・・姉さん・・・か」

あんまり原作キャラと関わらないようにしようと思ってたけど、駄目みたいだ。

ミナトさんだけナデシコに乗せるのが許せない気がする。

何だろう？　これが男の甲斐性って奴かな？

仮にも姉さんって思った人だ。役に立てるならミナトさんを助けようかな。

ああ。でも、ナデシコと関わると俺の平穏な生活が……。何て、何て究極な選択なんだ。俺はノンノンとのんびり過ごす事を目的としていたのに。これが遺跡の言う逃れられない運命って奴なのかな。……ま、一年後の話だ。ゆっくり考えよう。

「どうですか？」

「いいわ。とっても良い。使いやすいし、機能性も抜群だし。貴方って天才？」

まあ、俺が組み立てた訳じゃないので何とも。

「どうでしょう？ これの特許とか取れますかね？」

「いけるんじゃないかしら。特許とかに詳しくないけど。こんなに高機能ならバカ売れよ」

テンション高いなあ。お茶のお姉さん。

でも、お茶のお姉さんから高評価も得たし、自分自身も中々に使いやすかったし、こんなもんかな。

「んじゃ、これで特許を取りにいけます。登録とかってネットから出来ましたっけ？」

「ええ。それぐらいは知ってるわ。教えてあげる」

お世話になります。お茶のお姉さん。

こうして、俺はこの世界で漸く生きていけるだけの道を拓いた。
後で……。

「有名になつたら駄目駄目じゃん。バカか俺は」

と落ち込んだのは俺だけの秘密だ。

あ、後、慰めてくれたミナトさんだけの秘密だ。

「天才プログラマー……ね」

こんな渾名が付いてしまった。

俺はデータをロードして貼り付けただけなのに。

何だか、色々と申し訳ないっす。

「お陰で助かってるわ。コウキ君のOSってかなり高価なのよ？」

それを私達だけ無料でインストールさせてもらっちゃってさ」

「お世話になりましたからね。ミナトさんには。それに皆さんにも」

当然の事をしたままですよ。

まだまだ恩を返すには足りないくらいですから。

「それにしても儲かってるみたいね」

「ええ。俺みたいな一般市民には扱い方に困る大金ですよ。どうしましょっ？」

特許料とかライセンス料とか、そんなんで気付けば僕も億万長者。僕、改め、俺にはどう使ってもいいか分からんぐらいの金だ。

パ〜〜と使ってもいいけど、そういう高級な店は恐れ多いし、緊張して楽しめなさそうだしね。

一人暮らししてもいいけど、ミナトさんに迷惑じゃなければ、あそこに居付きたいな。

あそこってかなり居心地が良くて。もちろん、ミナトさんが迷惑しなくてもいいけど。

「ウフフ。宝くじでも当たった気分かしら？」

「そうですね。特に欲しいものありませんし。」

あ、そうだ。皆さんでお食事なんてどうですか？　・・・な〜んて

流石に女性を誘うのは緊張するな。

思わず誤魔化してしまった。

「あら。エスコートしてくれるの？」

「そ、そんな事は無理ですよ。軽いお食事でもどうですかっていう話です。」

俺にはそんな甲斐性ないですから」

「・・・自分で言ってる悲しくない？」

「・・・少し」

しょうがないよな。俺って一般人だし。

「皆さんにはお世話になりっぱなしですから。どうですか？」

秘書課の皆さんに提案してみる。

「嬉しいけど、いいのかしら?」

「そうよね。コウキ君に奢らせるってのはちょっと」

うん。乗り気じゃないのか?

残念だな。

「コウキ君」

「あ、はい」

口を近づけてくるので多分コソコソ話って奴だな。

「皆貴方が年下だからって気を遣ってるのよ。嫌がってる訳じゃないわ」

「あ。そういう事ですか」

納得。でも、日頃のお礼を返すだけだし。

「大丈夫ですよ。特別ボーナスが出たと思ってください。

皆さんに意見を聞いて完成したようなものですから」

お茶のお姉さんだけじゃなくて色々な人に評価してもらった結果、
出来上がったんだ。

むしろ、奢らせて欲しい。

「そう。それなら御願いしようかしら」

「じゃあ、私も」

次々と承知してくれる秘書課の皆さん。

うん。良かった。これで恩が返せる。

「それにしても、大胆ね。コウキ君」

「ええつと、何がですか？」

「一对多数よ？ 男性対女性で」

「……………」

「ん？」

「……………ああ！」

お、俺は調子に乗って何を言っているんだ。

一对一でも緊張するのに、俺だけ男の一对多数なんて緊張で溺死する。

「ミ、ミナトさん。フォロー御願いします」

「ん」。どうしようかしら

ニヤニヤ。ニヤニヤ。

くうくうくう。ニヤニヤしないで、助けてくださいよ。御願いしますから。

「……………今度、何か奢りますから」

「ふん。何を奢ってくれるの？」

「ええ」と

バック……………はもう持つてるよな。

口紅……………俺のセンスじゃ無理。

アクセサリ……………無難か？

ピアスとかネックレスとか。

あ、腕時計もいいな。

「イヤリングとかネックレスとか、腕時計とか何でも」

「へえ。その中で何を贈ってくれるの？」

まだ苛めますか!?

「・・・そうですね。イヤリング・・・とか、どうですか?」

「そうね。私に似合うのは選んできてね」

「え? 一緒に来てくれないんですか?」

「コウキ君。男の甲斐性はプレゼントにあるのよ。自分で選んで私を喜ばしてごらんなさい」

「わ、わかりました」

「期待してるわね」

「む、無論です。期待しててください」

「ウフフ。じゃあ、契約成立ね。フォローは任せなさい」

笑いながら自分の席へと戻っていくミナトさん。

うん。ミナトさんに任せれば万事解決だ。

・・・お店とかどうしよう。

うん。ミナトさんに相談しよう。女性の感性は女性に聞けて奴だな。

よし。それじゃあ、その法則でイヤリングも他の秘書課の皆さんにこっそり訊いてみようかな。

それで万事解決だ。うん。そうしよう。

後日、きちんと贈らせて頂きました。

毎日のように付けてもらってプレゼントした側としては喜ばしい限りです。

「明日は休みだから。偶には遊んできなさい」

という事で街へとやって来た。

アルバイトと言えど社会人。色々と忙しかった訳ですよ。

いや。社会人。甘く見てました。

「ふう。遊ぶぞお！」

漸く、漸く心の底から楽しめる。

余計な事は全て棚に上げて、今日はひたすら遊び尽くしてやる。

・・・そう思っていた時期が僕にもありました。

「私、こういう者です」

「プロスペクター氏ですか」

事の始まりは至極単純。

ネルガルプロデュースのシューティングアクションゲーム。

エステバリスVS地球連合軍。

・・・この時期からエステバリスってあったんだね。知らなかったよ。

原作を知る身としては、興味を惹かれて思わずやってしまった訳だ。それで一般用とIFS用があったから、まあ原作を味わうならという訳でIFS用を選択した。

・・・それがミスだったんだよね。

これってゴキブリホイ？みたいなものだったらしくて、

テストパイロットを確保する為、常に監視されていたらしい。

この時ほど、この身体を恨んだ時はない。

高性能IFSだし、昔からこういうゲームに眼がなかった俺は相当に力を発揮した訳だ。

それで一位のスコアを抜いてトップスコアを叩き出した。

いやあ。中々楽しかったなあ、とゲームのカプセルから抜け出すと・・・。

「お待ちしておりました」

既に囲まれてました。

ちよつと待とうよ。在り得ないでしょ。

そして、現在に到るといふ訳です。

「どうでしょう。我がネルガルで働いてみませんか？ 今なら・・・」

・・・この人、高速でソロバンを取り出して、高速で弾き始めましたよ。

俺は一応、ナノマシンで視力強化されてるから見えるっちゃあ見える。

でも、他の人からは見えないだろうから・・・唯の危ないオジサンとしか映らないんだろうな。

だって、パツと見、ひたすらソロバンを弾いているようにしか見えないし。

つてか、電卓でいいじゃん。

「これぐらいの給与は出しますよ」

あ、見せるのは電卓なんだ。不思議な人だね。プロスさんって。

ええっと、金額は・・・0が1、2、3、4、5、6・・・。

「これって……」

「貴方にはそれ程の価値があるという訳です。はい」

在り得ないでしょ。この金額。

プロスペクターさん。

いや。ここはプロスさんと呼ばせていただきますしょう。

「プロスさん。貴方はアルバイト人を馬鹿にしています」

「は？」

「俺程度にこんなに払うのならもつと社員を雇ってあげてください」

就職難の時代を生きてきた僕ですよ。

俺としては大学生が不憫で不憫で。

「あの……」

「あ。すみません」

まさか、汗も掻いてないのにハンカチというプロスさんの特技？を見る事が出来るとは。

「すみませんが、俺、いえ、僕は既に雇われの身でして。残念ですが……」

「この金額では満足できませんか？」

それはもちろん魅力的ですよ。

でも、エステバリスのパイロット、まあ、テストパイロットでもいいよ、かなりの死亡率でしょ。

俺は平穏な生活を送りたいのよ。戦争とか無理！

それに、現状ではお金に困ってないしね。ボーナスっていうか、定期的に大金が入ってくるし。

「すみません。今の会社にいたいので」

親切な人ばかりだし、裏切れないよ。

「・・・そうですか。分かりました」

ほっ。どうにか納得してくれたみたい。これで諦めてくれたら・・・。

「先程お渡しした名刺には連絡先が書いてありますので心変わり致しましたらご連絡下さい」

うう。諦めてなかったよ。プロスさん。

「はぁ・・・。分かりました」

「では、失礼します。行きますよ」

去っていくプロスさんと黒服の人。

ああ。今日は厄日だ。嫌な邂逅をしちまった。

「どうすっかな」

ミナトさんが操舵手として乗り込む以上、俺もナデシコに乗るかもしれない。

あくまで予定だ。まあ、千分の、いや、万分の、いや、億分の一もないだろうが。

その時、俺はどんな役職で乗り込むべきだろうか？

パイロット・・・いや。勘弁して下さい。

整備班・・・知識は遺跡から取り出せばいいけど、技術的に厳しい

かもな。

オペレーター・・・不可能じゃない。むしろ、俺に一番合ってる。でもなあ、俺の存在が公になるのはまずいでしょ。いや。俺がまずいだけなんだけどさ。

コック・・・アキト青年と被るでしょうが。

料理は嫌いじゃないけど、プロになりたいって訳でもないし。

あれ？ 俺ってば何にも出来ない駄目な子？

「はぁ・・・」

やめよう。落ち込むから。

っていうか、俺だってその気になれば何でも出来る。

パイロットだって高機能ナノマシンの恩恵がある。

艦長だって参謀だって遺跡の知識から最善の戦術を導ける。

オペレーターなんて下手すると世界最高だ。もちろん、性能的にはだけど。

でも、それじゃあ駄目。

アキト青年を始めとして、この物語はあのメンバーだったからこそ成り立っただ。

劇場的にはハッピーエンドとは言い辛いけど、物語としては成立していた。

そこに俺が介入してより良いハッピーエンドにしたいとは思っていない。

でも、俺が介入する事でメンバー間に何か誤差が生じるかもしれない。

それは駄目だ。俺の介入が最悪の展開に繋がるかもしれない。

俺はあくまでオマケ程度。補佐の補佐の補佐ぐらいが丁度良いんだ。

「ふう。どうしようかな・・・」

「あら。溜息なんてついてどうしたの？ 折角の休みなのに」

「あ。ミナトさん」

振り返るとお洒落な格好に身を包んだミナトさんがいた。
あれ。凄く着飾っている。これは……。

「もしかして……」

「ん？」

「デート……ですか？」

「あら。妬いてくれるの？」

早速からかいに来ましたか。

「まあ。俺の存在が邪魔にならなければと思いついて」

ほら。俺なんかと同棲しているなんて相手方が知ったら怒るでしょうが。

「まあ。素直に妬いてくれれば良いのに」

「ええつと？」

どう応えろと？

「大丈夫よ。ただのお買い物だから」

「買い物なのにそんなお洒落に着飾ったんですか？」

「仕方ないのよ。今度、企業間での立食パーティーがあるの。」

そこで着るドレスとか買わないといけなくて。流石にいつもの格好じゃ入りづらいじゃない？」

ああ。納得。

「秘書も大変ですね」

「そうなのよ。大変なの」

でも、それ程にミナトさんが優秀って事だろう。

それにさ……。

「ミナトさんは美人ですからね。着飾ったら注目の的ですよ。きつと」

「あら。嬉しい事言ってくれるじゃない。冗談でも嬉しいわ」

「冗談なんて言ってますよ。ミナトさんなら望めば望むだけ」

「ウフフ。いいのよ。今の私は仕事女。彼氏なんていいの」

勿体無いなあと思う。

ミナトさんを恋人に出来る人は絶対幸せだと思う。

ちよつと露出とか激しいけど、包容力はあるし、美人だし、気遣いとか完璧だしさ。

理想のお嫁さんランキングとか取ったらダントツで一位でしょ。

「それじゃあね。折角の休日なんだもの。楽しんでいらっしやい」

「あ、はい。ミナトさんも」

「そうね。他の買い物もしちゃいましょう。またね」

そう言っ立ち去っていくミナトさん。

「……あ」

あんなに着飾ってるのに俺が贈ったイヤリングを付けてくれる。何か嬉しいな。もしかしてミナトさんの好みに合ってたのかな。そうだと嬉しいけど。

「さてつと。自宅用のIFS専用端末でも購入しようかな。そうすれば色々出来るし」

という事で俺は電気機器のあるショップへ向かった。

IFS専用端末はIFSの使用頻度が低いからか全然なかった。

三つぐらい回って漸く見つけたぐらいだからな。

でも、三つ目で見つかったのはかなり運が良いのかもしれない。

早速、買いつてね。

こうして俺はいつでも画策できるよう環境を整えた。

よし。色々と計画を練ろうかな。

まずはMCの救出からだ。

ラピス嬢の生い立ちとか詳しく知らないけど違法だったらしいし。

もしかしたら、他にもそんな犠牲者がいるかもしれない。

違法とか、人体実験とか、流石に見逃せない。

解決策があるならそれを実行するまでだ。

・・・匿名で企業に連絡すれば俺ってバレないよね？

「エリナ君。まただよ」

「またですか？」

「うん。社長派のMC計画。禁止にしたのにね。違法だからやめろつて」

「仕方ないかと。社長派は何かしらの手柄が欲しいのでしょうか」

「ごめんなんだよね。人体実験とか。エリナ君もそう思わないかい？」

「・・・そうね（甘ちゃんが。結果が全てなのよ）」

「ま、いいや。プロス君呼んで来て。いつもの謎の匿名君からの連

絡だつて」

「分かりました」

「……………」

何度見ても胸糞悪いな。

もしかと思って調べてみたけどまさかこんなにいたとは……。
ルリ嬢、ラピス嬢、ハリ少年だけがMCだと思っていた。

でも、彼女達が表に出るまでにこれだけの犠牲が出ていたなんて。
何だよ！？　これが人間のする事かよ！？　クソツ！

「……………どうしたの？　難しい顔して」

あつと。ミナトさんに見つかる訳にはいかないな。

きつとミナトさんが見たら暴走するに違いない。ミナトさんって子供好きそうだし。

これは俺がするべき事だ。

「……………いえ。何でもありませんよ」

閲覧画像を消去して、ミナトさんにそう告げる。

笑顔を浮かべているが、内心では苛立ちとか絶望とか、そんな負の感情がぐるぐる回っている。

人間に対して俺は今、恐怖を感じていた。

俺の周りには変だけど良い奴らしかいなかった。

……………でも、少し外へ視線を向ければ、こんな人間もいる。

俺の人間像が根底から崩れ去った気がした。

「コウキ君」

「え？」

視界が一色に染まる。

全身に伝わってくる優しい温もり。

ああ。俺は今……。

「いいのよ。何があつたかは知らないけど。辛いなら辛いって言えばいいじゃない。」

悲しいなら悲しいって言えばいいじゃない。怖いなら怖いって。そう言えばいいじゃない」

……抱き締められているんだ。

ミナトさんに。

「ミナト……さん？」

「コウキ君。私は頼りないお姉さんかな？」

「そんな事……ありません。頼り甲斐のある優しいお姉さんです」

「ウフフ。ありがとう。だから、ね？ 頼っちゃいなさい。」

無理に事情は聞かないわ。でも、胸を貸してあげる事ぐらいは出来る」

「……」

「泣いて楽になるなら泣いちゃいなさい。温もりが欲しいなら私が温もりをあげる。」

「いいのよ。何の遠慮もいらないわ」

「ミナト……さん」

強く。

強く抱き締めた。

人間不信に陥りそう。

でも、やっぱり人間は暖かくて。

優しくて。

抱き締められているだけで癒されて。

心が落ち着いて。

ああ。何でこんなに色々な人間がいるんだろう。

ああ。何でこんなに暖かいんだろう。

ああ。何でこんなに罪深いんだろう。

ああ………。

S I D E M I N A T O

「……コウキ君ってば、こんなに重たかったんだ。やっぱり男の子なんだな」

私の胸の中、まるで子供のように安らかに眠るコウキ君。

邪気のない笑顔を浮かべて、変な子で、ちょっと頼り甲斐がなくて、いじり甲斐があつて……。

でも、何事にも一生懸命な明るい男の子。

一体、コウキ君に何があつたんだろう？

あんな表情は今まで見た事がない。

久しぶりの休日でも、雨だったから、コウキ君と二人でのんびりしていた今日。

ふとコウキ君を見ると一生懸命画面を眺めていた。

どうしたんだろうって思って観察していたんだけど。

眉を顰めて、ずっと苦々しい表情をしていたわ。どうかしたの？ って声をかけると慌てて画面を操作して誤魔化して。

身体を震わせながら、なんでもないと無理して笑って。瞳に涙を浮かばせて、それでもなんでもないと。

弱々しい笑みで私を気遣うコウキ君が迷子の子供のように見えた。知らない道で親からはぐれちゃった幼い男の子。

お母さん、お母さんって一生懸命に呼びかけて、それでも見つからなくて。

寂しくて、悲しくて、泣き喚きたいけど、必死に堪えて母親を探している健気な男の子。

強くて、弱くて、必死で、諦めかけていて。

そんなコウキ君を私の身体は無意識に抱き締めていた。

おかしい事だけど、その時、やっぱり男の子なんだなって思った。

男特有の固くて逞しい身体。抱き締め返される力強さは不思議と私にも温もりを与えてくれた。

泣きたいのを必死に我慢して、

顔を見られないようにって顔を隠すのもどこか意地っ張りな男の子で。

私に微笑を与えてくれた。

護ってあげなくちゃ。

眠るコウキ君を見て、私はそう思ったの。

あの弱々しい姿を見せるコウキ君を私が支えてあげよう。

なんでもない。何の特別でもない今日この日。

この日が私の誓いの日となった。

S I D E O U T

第三話

「ほら。コウキ君。行くわよ」

ミナトさんに抱き付いて泣いてしまう。

そんな俺にとって人生トップ3に入る程に恥ずかしい思いをした日から数日が経った。

あれから、どうもミナトさんが過保護な気がする。

嬉しいような恥ずかしいような情けないような、まあ、そんな感じだ。

決して嫌じゃないんだけどね。いや、やっぱりちょっと恥ずかしいかな。

「それにしても、いつの間にかハッキングが上手くなってたな」

非公式研究所をハッキングをしている内にかかなりのレベルのハッカーになっていった。

今ならビックバリアの解除パスワードとか入手できそう。

いや、試してないけどさ。バレた時に怖いし。

それにIFSの扱いにも慣れてきた。

イメージとかも明確に出来るようになってきたし。

随分と成長したものだ。うんうん。

そうそう、あれから色々試したんだけど・・・。

俺の身体ってオリンピックも夢じゃないっていうか、オリンピック選手を侮辱しているんだよね。

オリンピックがこの時代にあるかどうかは分からないけどさ。

俺のいた世界ではって話。

信じられない事に百メートル走とか五秒とかそんなんだよ。

握力とかも百キロ軽く超えてるし、背筋とか三百キロ超とかだし、跳躍力は・・・訊かないでくれ。

人外になっちまったと思っただけど、本当に人外でした。

ってか、生きていく力が欲しいって言っただけなのにやり過ぎですよ。

日常生活にこんな逞しい身体能力は必要ないよ。

そりゃあないよりはあった方が良くいけどさ。

無駄だって。俺は平穏な生活を望んでるの。

それにさ、努力しているスポーツ選手に申し訳ないよ。

努力もなしにこの能力って・・・。確実に侮辱してるよね。

自分が怖いです。やり過ぎです。

「はぁ・・・」

「どうしたの？ 溜息なんかついて」

「いえ。何でもありませんよ」

「そう？ 無理しないでね」

自分が怖いなんて言ったら変な子だって思われるよね。

流石のミナトさんにだってこんな事は言えない。

「それにしても、コウキ君って運動神経良かったのね。そうは見えなかったのに」

「ハハハ。そうですね」

苦笑いしか出ませんよ。ミナトさん。

ミナトさんが知っている理由はとても単純。

だって、この異常に確信したのってこの前の体力測定の時だし。

前々から変だな？ 異常だな？ って思ってたんだけど、

あの時ほどそれを実感した時はなかった。

会社の身体測定の一環で行われた体力測定。

そこで俺は化け物ぶりを発揮してしまった。

ほら。日常生活で全力を發揮する事なんてないから。

それで久しぶりの運動だなんて全力で走ったりしたんだけど。

・・・前々から制御できるようにしておけば良かったと激しく後悔したさ。

下手すると会社単位で活動する駅伝部とかに参加させられる所だった。

あれから、よく色々な所からスカウトされるよ。

サッカー部とか野球部とか。

楽しいよ。球技って。経験者だし。

でもアルバイトだしさ。ミナトさんに迷惑かけられないし。

とりあえず保留です。

「どうして参加しなかったの？ コウキ君なら活躍できたでしょうに」

「ま、まあ、いいじゃないですか。今の仕事を楽しんでいるんですから」

「そう？ それなら良いけど」

ミナトさんから勧められてるんだけど。

いや。あれだよ。

汚れた服とかミナトさんに任せるの嫌だし。

自分で洗うのとかもなんか嫌だし。

俺は遊びの範囲で球技とかスポーツとかが出来たらなって思う。

「ま、コウキ君は他にも才能あるからね。あれから結構特許取ったでしょ？」

「ええ。まあ」

才能って言うか、反則技だけだな。

使えそうだなって思うアプリケーションソフトとかを遺跡からダウンロード。

その後、それを少し細工して表の世界に公表。

たったそれだけだ。それが評価されているに過ぎない。

決して俺が作っている訳じゃないんだ。

「仕事がやりやすく助かってるわ」

「それは光栄です」

でも、プログラムって結構楽しいんだよな。

最近の遺跡に頼らないで自分の力だけで作ってみたりしている。

ま、勿論、駄目駄目だけどさ。

それでも、自分の力だけで達成するのって楽しいんだよ。

「資格とか興味持ち出したし。充実してるのね」

「ミナトさんが資格持ち過ぎなんですよ。何となく負けたくないっていうか」

「ウフフ。男の子ね」

笑われてしまった。

でも、本当にミナトさんは凄いなと思う。

俺はずっと疑問に思ってたさ。

何で社長秘書が戦艦の操舵手が務められるんだよって。

気になって訊いてみた所……。

「うん。いつか使えるかなって思って」

……普通はそう思いませんから。

実際にそんな日がやって来る訳ですが……。

「とりあえず目標はミナトさんが持つ資格を全部手に入れる事ですかね」

「そう。それなら、私は追いつかれないように頑張ろうかしら」

頑張りますね。ミナトさん。

変な資格は取らないでくださいよ。

「でも、意外だったわ。何で最初に操舵手の資格を？」

「え？ いいじゃないですか。ミナトさんに追いつく為ですよ」

あれから、俺は考えたんだ。

どの役職で乗り込もうかって。

そして、俺はこう決めた。

何でも屋になろうと。

ま、詳しく言えば、副操舵手、副通信士、サブオペレーターとか兼任してみようかって。

その為のこの資格です。

ブリッジクルーって何かあった時に困る役職ばかりだろ。

だから、俺が常に補佐して、代わりになれれば役に立てるんじゃないかなと思って。

とりあえず……。

「戦艦の通信士って何の資格が必要なんだ？」

「急にどうしたの？ コウキ君」

「あ。ええっと。何でもないですよ？」

「何で私に訊くのよ」

「とにかくなんでもないですよ。色々と俺にも考えがありましたね」

「そっ？」

心配そうに見詰めてくるミナトさん。

・・・そんなに眼を合わせられると照れるんですけど。

「ま、いいわ。何かあったら相談なさい。いつでもいいから」

「ありがとうございます」

やっぱり優しいな。

相談相手がいるってだけでとても心強い。

「さあ、今日も一日が始まるわ」

出社。

うん。この世界に来て、もう半年か。

月日が経つのが早いな。

後半年で遂に始まる。

スキヤパレリプロジェクトが。

アキト青年を中心に動くドタバタラブコメディSFロボットアニメ。

・・・こう訊くと設定盛り込みすぎだよな。

良く成立したと思うよ。

製作者って凄いな。

「何をボクとしてるの？ 行くわよ」

「あ、はい」

ミナトさんに腕を引かれての出社。

別にそんなに珍しい訳じゃない。受け付け嬢も苦笑して済ませてるし。

無論、男性社員の視線は物凄く鋭いけど。

・・・いつか刺されるんじゃないか？ 俺。

ま、そうならないように後半年。頑張りましょうか。

「本日は貴方をスカウトに来ました。ハルカ・ミナトさん」

もうスカウトの日か。あつという間だったな。
スキャパレリプロジェクト始動・・・か。

「あ、申し遅れました。私、プロスペクターと申します。以後、お見知りおきを」

秘書課にいたミナトさんのもとへ大男ゴート・ホーリーを連れてたプロスさんがやって来た。

・・・本当にゴートさんって仏頂面なんだな。

「ええつと。何のスカウトですか？」

そうだよな。突然過ぎて分からないよな。

「少しお時間を頂けますか？」

「はあ。構いませんが・・・」

困惑気味でこちらを眺めてくるミナトさん。

俺はそんなミナトさんに頷いてみせた。

大丈夫ですよって。

それが伝わったのか、ミナトさんも笑顔で頷いてみせてくれた。

「あ。マエヤマさんも良いですか？」

・・・ずっとこけさせてくれますね。プロスさん。
あのミナトさんですら、呆気に取られてますよ。

「コウキ君？」

「あ、はい。分かりました。行きましよう。ミナトさん」

とりあえず付いていくとしますか。

「それでは、私が戦艦の操舵手、コウキ君がパイロットですか？」

・・・まいったな。パイロットかよ。

俺の計画では副操舵手だったんだけどな。

「はい。以前、マエヤマさんには断られてしまったのですが。やはり諦め切れず」

「え？ 本当なの？ コウキ君」

驚いた顔でこちらを見てくるミナトさん。
ま、そりゃあ驚くよな。

「ええ。結構前ですけどね。俺のどこにパイロットの適正があるんだか・・・」

「御戯れを。貴方は出したじゃないですか。トップスコアを」

「トップスコア？ どういう事？ コウキ君」

「何ていうんですか。ちょっと幼心に刺激されますてね・・・」

何かゲームセンターで遊んでたって言うの恥ずかしいよな。って、俺がもたついていると……。

「もう、ハッキリなさい！」

一喝。

「は、はい！ 以前、休日にゲームセンターでシューティングアクションゲームを致しました所、

トップスコアを出してしまいました！」

ミナトさん。怖いです。抗えません。

「シューティングアクションゲーム？ ゲームでパイロット適正を計ったんですか？」

それはちよつと……。」

呆れるミナトさん。そうですね。呆れますよね。たかがシューティングゲームで……。

「いえいえ。あれは唯のゲームじゃないんですよ。

我が社が開発したシミュレーションの技術を存分に注ぎ込んだ特別製なのです」

「えっと。あれですか？ G設定とか。確かに本格的でしたけど」

「その通りです。あれは実際にかかるGとほぼ同等のGをパイロットに負荷させます」

それって下手すると失神するんじゃない……。

「あの状態でのスコアは本番でのスコアと同等。いえ、それ以上か
もれません。」

「当時は機体の方に問題がありましたから」

良くそんな状態のゲームを普通のゲームセンターに導入しましたね。

「あそこは我が社が経営しているゲームセンターです」

「ええっと。顔に出てました？」

「ええ。顔が引き攣ってました」

「そうね。引き攣ってるわ」

ミナトさん。貴方も少し引き攣ってますよ。

ミナトさんは聡明だし、操舵手の資格を持つてるから分かりますよ
ね。

本番のGの凄まじさとか。

「その上で貴方は我々が連合軍トップクラスとして想定したスコア
を抜いたので。」

「それが何よりの証拠になりませんか？」

「コウキ君。貴方、どれくらいのスコアだったのよ」

「・・・覚えていませんよ。普通に楽しんでいましたから」

「軽く超えていますよ。倍とまではいきませんが」

「コウキ君。貴方って意外と多才よね」

「いえいえ。ミナトさんこそ。・・・あの、現実逃避して良いです
か？」

在り得ない。

普通にゲームを楽しんでただけなのに。

それがこんな結果だなんて。

そうか。これこそが逃れられない運命という奴だったのか？

・・・いや。これに関しては自業自得だよな？
ああ。俺の万全な計画が・・・。

「ええつとさ。コウキ君。何で落ち込んでるのか知らないけどさ。
とりあえず落ち込むのはやめて話の続きをしましよつよ」

「・・・そうですね。ミナトさん」

内心はもうボロボロです。

「ハルカさんはどうでしょうか？ 操舵手なんですが」

「うう〜ん。どうしようかしら」

悩むミナトさん。

あれ？ おかしいな。

確かここはやっぱり充実感かなとか言って即刻引き受けてなかった
っけ？

「あ、給料はこれくらいです」

「ん〜〜。ええ!？」

きつと俺の時と同じくらいなんだろつな。

あれはマジで少しでもいいから社員を雇ってあげてくださいと思っ
てしまう金額だ。

「あ、でも、私って別に給料で職場を選んてるわけじゃないですし。
やっぱり充実感かな」

あ、やっぱり理由は充実感なんだ。

「充実感・・・ですか。それなら、ここ以上に得られる所はないと

思いますよ」

ま、基準は分らんが、退屈はしないだろうな。
ドタバタラブコメディだし。

「う〜〜ん」

とか言いながら俺を見てくるミナトさん。

「ええっと。どうかしました？」

「うん。別になんでもないわよ」

ええっと。それじゃあ何で眼を逸らしてくれないんですか？
何で俺を見詰めてくるんですか？

「そうですか。分かりました。それでは、マエヤマさん。こうしま
しょう」

・・・今、プロスさんの瞳がピカンって光った気がします。怖えよ。

「予備パイロットはどうですか？ メインは副操舵手。もしくはサ
ブオペレーターで」

ん？ これは願ってもない展開では？
無論、予備パイロットは拒否するが。

「貴方のプログラマーとしての名は有名ですからね。天才プログラ
マー、マエヤマ・コウキ。

是非ともスカウトして来いと上もつるさいのです」

へえ。アカツキ青年がね。青年っていつても俺より年上だけど。

「副操舵手。サブオペレーター。そこまではいいでしょう。ですが、予備パイロットは勘弁して頂けませんか？」

パイロットなんてやるつもりはありません。

俺は補佐の補佐の補佐を目指しているんです！

「困りましたな。何としてもパイロットとしての貴方が欲しいのですが」

「困られても困ります。俺はパイロットをするつもりはありません」

こればかりは妥協できない。俺は平穏なノンノンとした生活が良いんだ。

パイロットなんかになったら連合軍から眼を付けられる。最悪、隠れ住まなければならぬようになる。

そもそも死と隣り合わせの戦場になんて出向きたくない。

いつ死ぬか分からない戦場なんか。

己惚れじゃないけど、ミナトさんも嫌がってくれと思う。だって、俺が死んだら悲しんでくれ。

「いいじゃない。コウキ君。予備パイロットぐらいなら」

・・・泣きたくなる程にショックだった。

「いいじゃない。コウキ君。予備パイロットぐらいなら」

軽い気持ちで告げた。

たった一言。たった一言が私に激しい後悔を残した。

私がそう言った瞬間。

コウキ君の顔が見た事もない程の驚きで染まり、次いで悲しみで染まったのだから。

その表情を見た瞬間、私は心が苦しくなった。とても、とても痛く
なった。

「……ミナトさんは……」

俯きながら、呟くように話すコウキ君。

その言葉一つ一つが何故か胸に突き刺さる。

「……ミナトさんは……俺に死ねって……死んでもいい
て。そう思ってたんですか？」

ッ！？

そ、そんな事は思っていない。

「そんな事は」

「戦艦のパイロットですよ？ 戦場は常に死と隣り合わせです。

たかがゲームで高得点を出したからって訓練も受けてない俺が生
き残れると思いますか？」

「そ、それは……。で、でも、予備パイロットよ。名前だけじゃ
」

「戦艦のパイロットは全部で何人なのか？ 機体のスペックはどう
なのか？」

脱出機構は備わっているのか？ 戦艦自体の武装は何なのか？」

「・・・コウキ・・・君？」

「プロスさんは何も言っていないよ。」

予備パイロットの役目なんてない？ ・・・どうしてそう言い切れるんですか？」

「・・・」

「戦場ですよ。貴方は予備パイロット。パイロットがいなくなったので命を賭して護ってください。」

ないと言い切れますか？ 訓練なんて碌にした事がないのに。死なないかと？」

「そ、それは・・・」

何も言い返せなかった。

コウキ君は間違った事を何一つ言っていないのだから。

「軽い気持ちでパイロットになりますなんて言える訳がないじゃないですか。」

「そんな俺をミナトさんは臆病者だって、そう言いますか？」

「そ、そんな事」

思っていない。思っていないのに。

俯くコウキ君を前にして口が開かなかった。

「・・・そもそもがおかしいですよ。」

パイロットとしての俺を欲しているプロスさんが予備パイロットとか提案してくる時点で」

「そうですかな？」

「ええ。とりあえず予備パイロットとして登録しておけば、どうにかなると思っていたのでは？」

何かあった時は予備とか正規とか関係なしに都合良く出撃させら

れますからね。

それに、予備だからってパイロットがない時のみとは限らないですし」

「歳の割りに鋭いのですね」

「企業の裏つてのは痛い程、実感してますから。」

組織の利益の為なら何だってする。それが組織でしょう?」

何でだろう?

すぐく身近に感じていたコウキ君が。

今は・・・遠い。

知らない人に見える。

「そもそも企業が戦艦を保持する。目的地を告げない。その二つだけ不自然です。」

ネルガルは何が目的なんですか?」

鋭い眼光で睨みつけるコウキ君。

ああ。私の軽い一言がコウキ君をここまで追い詰めてしまったんだ。朗らかで怒った事なんてないコウキ君がこんなにもむき出しの敵意を見せるなんて。

「はて。目的なんて」

「・・・仮にパイロットになったとしましょう。」

俺が戦うのは誰ですか?木星蜥蜴? それとも連合軍ですか?」

それって・・・。

「連合軍と何故戦うのですか?」

「企業が戦艦を保持していて連合軍が何も言わないと思ってるんですか?」

「事前に許可を得てますが？」

「その戦艦は軍用の兵器でシェアを確立するネルガルが自慢として
いる戦艦なんですよね？」

「無論です。地球最新鋭の技術で造り上げました」

「恐らく苦戦続きの木星蜥蜴だって打倒してしまえるのでしょうか
？」

「ええ。もちろん」

「そんな戦艦を連合軍が見逃すと思っっているんですか？」

「先程も述べましたが、許可を」

「許可を得たぐらいで安心しているのですか？ 貴方は、いえ、貴
方達は軍を甘く見過ぎだ。」

木星蜥蜴を打倒できると知れば強引に徴収しようとしていますよ。そ
れが今の軍の実態ですから」

「お詳しいのですね。軍の事も」

「少し調べれば分かります」

本当に別人みたい。

あのコウキ君がこんな……。

「貴方は何の訓練も受けていない一般人に人を殺せと。そう言っ
ているのですね？」

「はて。それはマエヤマさんの想定でしょう？ それが現実になる
とは限りません」

「……どちらにしろ。俺は予備であろうと正規であろうとパイロ
ットをするつもりはありません。」

パイロットを望むなら連合軍から引き込めば良い。失礼します！」

激情を抑えきれないまま部屋から飛び出していくコウキ君。

それを私は見送る事しか出来なかった。

「いやはや。まいりました。あそこまで拒絶されるとは。想定外です」

「あの・・・コウキ君が言った事は本当なんですか？」

「どの事ですか？」

「予備でも都合良くとか。連合軍がそういう組織だとか。その辺りです」

ふうっと大きな深呼吸をしてプロスペクターさんが話し出す。

「無論、予備パイロットは予備でしかありません」

「それなら、戦場に出るなんて事はないんですよ？」

それならきつとコウキ君だつて。

「いやはや。戦場に絶対なんてありえませんか」

もしかすると予備パイロットの方にも出撃を要請するなんて事もあるかもしれせん。

無論、可能性でしかありませんが」

「でも、正規のパイロットだつていますよ」

「それは勿論です。素人だけに任せる訳にはいかないでしょう？」

「それなら、予備パイロットなんて必要ないじゃないですか」

「いえいえ。万が一という事がありますから。」

準備を怠る訳にはいかないのですよ。念には念をいれてという奴です」

まるで予備ですら戦場に出るのが当然と言わんばかりの言葉だった。

「連合軍に関するのですが、あれはあくまでマエヤマさんの想定でしかありませんよ。」

連合軍とて一度許可を出したら引つ込めないでしょう。軍にも面

子があるでしょうから」

「そ、そうですね」

そう。普通はそうよね。

それなのに、何でコウキ君はああまで軍を警戒していたのかしら？

「……今日はもう交渉は難しいでしょう。また後日伺わせて頂きます」

「あ、はい。分かりました」

「それでは、失礼しますね」

去っていくプロスペクターさんを私はまた見送る事しか出来なかった。

「……コウキ君」

軽い一言で追い詰めてしまった私の大事な同居人。

護ってあげようって誓った大事な弟分。

今、コウキ君はどんな気持ちなんだろう？

「うん。コウキ君の所へ行こう」

謝りに行かないと。軽々しくパイロットになれなんて言った事を。

「コウキ君ですか？ コウキ君なら気分が優れないって早退しましたけど……」

「ッ!？」

コウキ君が……いない？

もうここには……帰ってこないの？

「ハルカさん？ どうかしました？」

「いえ。なんでもないわ」

「顔色が優れませんか？」

「な、なんでもないのでよ」

「ハルカさんも早退しますか？ 少し休んだ方が良いでしょう」

「大丈夫よ」

・・・探しに行きたい。

コウキ君がいなくなる前に、ちゃんと話したい。

「・・・そうね。ごめんなさい。ちょっと体調が優れないから早退するわ」

「分かりました。社長にはそう伝えておきます」

「ええ。御願いするわね。あ、コウキ君から何か聞いてる？」

「えっと。特には」

「そう。ありがとうございます」

荷物を纏める。この時間ですら惜しい。

早く、早く行かないと。

私はいつになく急いで部屋から飛び出した。

時間は午後二時。

まだまだ暖かい昼下がりがだった。

S I D E O U T

「ふう……。やつちまったな」

会社とミナトさんのマンションとの間にある公園。
そのベンチで俺はボーっとしていた。

「はぁ……。予定が崩れちまったよ」

予定としては副操舵手、副通信士、サブオペレーターの兼任だった
んだけど。

予備パイロットなんて名前だけだからな。

アキト青年も予備予備って言われながら結局最後までパイロットや
らされたし。

つてか、そんな事よりも……。

「ああ！ もう！ ミナトさんにもう顔を合わせられねえよ」

ちよつと興奮してミナトさんを傷つけちまった。

ミナトさんだつて悪意があつて言った訳じゃないのにな。

カッかすると周りが見えなくなるのは俺の悪い癖だよ、まったく。

「俺は予備パイロットを務めるべきなんだろうか？」

歴史をより良くするならパイロットの方が都合が良いよな。

でも、なんていうか、俺みたいな一般人には到底不可能な気がする。
それにだ。もし、仮に、パイロットを引き受けたとしよう。

そつなつたら戦後が問題なんだよな。

戦争中の活躍が戦後に危険分子として危険視されるとかいう話は良
くあるし。

かの有名なパイロットも戦後、軍に監禁されてたしさ。

俺はああなるのが嫌なんだよ。名前が売れて許せるのはプログラマ

ーとしてだけ。

パイロットとか、ジャンパーとか、そんなんで有名になったら色々
とまずい。

ほぼ間違いなく俺は平穏な生活を諦めなくちゃいけない。

巻き込まれただけの俺が何で？ とか、そんな事を思っている訳じ
やない。

どんな未来であれ、歴史通り進めばいいとか、そう思っている訳じ
やない。

でも、歴史を変えるとか、そんな大それた事、俺には無理だよ。

その為の能力だって言われても、そんなの俺が望んだわけじゃない
し。

「はあ〜」。平穏な生活は俺には望めないのかね？」

「そんな事・・・はあはあ・・・ない・・・はあ・・・わ・・・」

空を見上げる俺に影が差し込む。

その影は・・・ミナトさんだった。

「・・・ミナトさん」

「・・・はあ・・・はあ・・・コウキ君」

やばい。気まずい。

「と、とりあえず、座ったらどうですか？ それとこれ」

ハンカチを手渡す。

走ってきたみたいで汗だくだ。

秋だけどまだまだ暖かいからな。

「はあ・・・はあ・・・そうさせて・・・もらうわ。ありがとう」

ドサツと崩れるようにベンチに座り込むミナトさん。
慌てて支える。

「ハハハ。駄目ね。運動不足だわ」

苦笑いのミナトさん。

「ちょっと待っててください」

ベンチにミナトさんをしっかりと座らせて、俺は近くの自動販売機へと向かう。

ええっと・・・お茶・・・でいいよな？

とりあえず、二本買ってベンチへと戻った。

「あの、どうぞ」

「あ、うん、ありがとう」

お茶を渡して隣に座る。

・・・それからは無言だ。

やはり気まずいな。

「ええっと。ミナトさん。先程はすいま

「ごめんなさい！」「ウキ君！」

突如、下げられる頭。

無論、混乱したさ。

何で謝られるの？俺。

「ええっと。謝られるような事しましたっけ？」

「私が、私が軽々しくパイロットになれなんて言うから。コウキ君を追い込んでしまった。」

危ないって分かっているのに。それなのに軽々しく戦場に行けなんて」

不意に涙を浮かべるミナトさん。

「ちょ、ちょっと待ってください」

「私が悪いの。あんな事言ったら死んでも構わないって言うてるのと同じ。」

ううん。もっと性質が悪いわ。私は平気でコウキ君を切り捨てたんだもの」

ポロツと涙を流すミナトさん。

「ごめんなさい。本当にごめんなさい」

やばい。本格的に泣き出してしまった。

「私は・・・私は・・・」

・・・ああ。俺は・・・勘違いしてたんだな。

ミナトさんってこんなにも小さかったんだ。

いつも包み込んでくれるような暖かさですつと頼っていたから、

俺はいつの間にかミナトさんは何でも出来る人だって思い込んでた。

何でも受け止めてくれる強い人だって思い込んでた。

でも・・・ミナトさんも・・・一人の女性だったんだな。

ちっぽけで矛盾だらけな、一人の人間だったんだ。

「ミナトさん」

「・・・コウキ・・・君？」

「ありがとうございます。こんな俺の為の泣いてくれて」

弱々しく俯くミナトさんの手を取る。

こんなにも震えている。

・・・俺のせいだ。

「・・・正直、ミナトさんにパイロットを勧められた時はショックでした」

「ッ！」

息を呑むミナトさん。でも、きちんと伝えなっきゃな。

「分かっています。ミナトさんだって悪意があって言った訳じゃないって。」

予備パイロットに出番なんてないって。そう思ったから言ったんだって」

「でも・・・」

「ミナトさんは悪くないんです。俺がちょっと熱くなって暴走したからいけないんですから。」

ミナトさんは何も悪くないですよ」

「私が軽々しくあんな事を言わなければコウキ君だって・・・」

「ミナトさん。聞いて下さい。俺の、ちっぽけで臆病な男の話を」

悩んだけど、ミナトさんには伝えよう。

俺の存在を。俺の真実を。

俺が一番に信頼している人だから。

「俺は違う世界からやってきたんです」

S I D E M I N A T O

「俺は違う世界からやってきたんです」

真剣な表情で、でも、どこか寂しそうな顔で告げるコウキ君。
私はその言葉に耳を疑った。

「御伽噺みたいで、二流、三流の小説みたいな話なんですけど、今から言う事は全て事実です。」

俺はこの世界とは別の世界からやって来ました」

零れてくる涙を必死に拭いて、コウキ君を見詰める。

この眼は嘘をつくような眼ではない。

一年の付き合いだもの。それぐらいは分かる。

「ミナトさんは過去、未来、そのどちらかを好きに移動できたらどう思いますか？」

それって・・・タイムマシンよね？

「タイム・・・マシン？」

「まあ、そんな感じですよ」

それなら、コウキ君。

貴方は未来からやって来たというの？

「俺は未来の事を知っています。厳密に言えば、経験したのではなく、知っているだけです」

「・・・ごめんなさい。良く分からないわ」

嘘は言っていないけど、真実味に欠ける。

だから、私は必死でコウキ君を見詰める。

そうすれば、コウキ君の想いが伝わってくると思ったから。

「未来という概念がもし実際に存在するのなら、未来は人の行動一つで幾重にも枝分かれします」

「私の両親が結婚しなかったらとか、コウキ君と出会わなかったらとか、そういう事よね？」

「そうですね。そういう事です。それを平行世界と呼ぶとしましよ
う」

平行世界。時間軸のズレた世界。

ありえたかもしれない可能性が実現した、近過ぎて、近過ぎるが故に見る事の出来ない世界。

「俺はこの世界を観測する事の出来た世界にいた人間です」

「・・・観・・・測？」

「俺は見ています。この世界が今後どうなっていくのか？」

その結末がどうなのか？ そんな、この世界の未来を」

この世界の未来を知っている。

それは私の運命すらも知っているって事？

「私の未来も知っているの？」

「ええ。ある程度でしかないですけどね」

何て事だろっ。

他人に己の運命を知られている事がこんなにも怖いだなんて。

私が誰を好きになって、どうやって死ぬのか。

それをコウキ君は知っている。

まるで神様のように。

私はコウキ君の掌で踊らされているの？

身体が恐怖で震えた。

「でも、それもちょっと違うんです」

「違う？ どういう事よ？」

怖い・・・けど、ちゃんと聞かなくちゃ。

コウキ君の想いを受け止めなくちゃ。

「俺っていうこの世界に存在する筈のない存在が介入した。」

それだけでこの世界は俺の知る世界とは別の世界なんですよ」

・・・そうか。そうよね。

「コウキ君が介入した時点であるべき未来から枝分かれしている。

言わば、コウキ君の知る世界とは既に別の世界なのね？」

「そうなります。この世界は既に俺の知る世界じゃない。ここは平行世界なんです」

・・・少し安心した。

私の全てをコウキ君は知っている訳じゃないんだ。

あれ？ でも、ちょっと待って。

「それなら、何でコウキ君には戸籍があったの？ そもそもタイム

マシンなんてどこにあるのよ？」

戸籍は私がちゃんと調べた。
タイムマシンなんてあの時のコウキ君の傍になかった。
あれは本当に途方に暮れていたみたいだったし。
あれが演技ではない事は一年間の付き合いで分かってる。
今まで全てが演技って可能性もあるけど……。

「……そんな事、ありえないわよね」

うん。ありえない。

あの初心で恥ずかしがり屋でいじり甲斐のあるコウキ君が偽りだったなんてありえないわ。

もし、あれが演技だったら、どんな優秀な俳優より優秀なもの。

「そうですね。順を追って説明しましょうか」

神妙な顔付きで話し出すコウキ君。

今日は本当に今まで見た事のない一面をコウキ君は見せるわ。

「まずはタイムマシンですね。これはボソソジャンプといいます」
「ボソソジャンプ？」

聞いた事ないわね。どういう装置なのかしら。

「じゃあ、見せますから、ずっと俺を見ていてくださいね」
「ええ。分かったわ」

ベンチから立ち上がり私の前に立つコウキ君。

「じゃあ、行きますね。……ジャンプ」

ジャンプ。たったその一言でコウキ君の姿が消えた。
え？ ええ！？

「コ、コウキ君！？ どこに行ったの！？ コウキ君！？」

「後ろですよ」

「キャッ！」

急いで退避。

び、びっくりするじゃない。

「あ、すいません。驚かせましたね」

「い、いつの間に後ろにいったのよ」

「これがボソソジャンプです。パツと見は瞬間移動ですが、これは
時空間移動でもあります。」

信じられないかもしれませんが、信じてください」

「いいわよ。コウキ君だもの。信じてあげる」

コウキ君は冗談ばかりだけどあんまり嘘はつかないわ。

あんまり・・・だけど。でも、眼が嘘じゃないって何よりも主張し
てる。

「それじゃあ、タイムマシンっていうのは装置じゃなくて、そのボ
ソソジャンプって事なのね」

「はい。普通なら唯の瞬間移動なんですが、偶然に偶然を重ねて、

それこそ三つ程に偶然を重ねたぐらいの確率で時空間移動する事
があります」

「それがタイムマシンって事ね」

タイムマシンではあるけど、自由に時空間移動は出来ないって事か。

夢があるようでないタイムマシンなのね。

「俺はその偶然の三乗、まあ、奇跡みたいなものです。それがきつかけでこの世界に飛ばされました。今からずっと昔。

二十一世紀から」

「二十一世紀！？ それって、私の御爺ちゃんの御爺ちゃんぐらいの世代よね」

「え、ええ。でも、御爺ちゃんて例えるのはちょっと」

「あ、そうね。ごめんなさい。嫌よね」

そうよね。まだ若いのに老人扱いだなんて。

嫌に決まってるわ。私だったら我慢できない。

「ちなみに二十一世紀の最初の方ですからもつと前ですよ」

「ええ？ そのまた更に御爺ちゃんの御爺ちゃん？」

「ミナトさん。流石に怒りますよ？」

「あ、ごめんなさい」

私も混乱してるみたいね。

ちよつと、落ち着きましょう。

「ふう……」

「大丈夫ですか？ 休みます？」

「ううん。ありがとう。大丈夫よ」

頭は混乱してるし、涙でメイクは落ちてるけど、大丈夫。

……直したいけど、今はこっちの方が大切よね。

「さっき観測できる世界って言いましたよね。あれは事実で、俺はこの世界を知っています」

「未来を知っているって事よね」

「具体的にいえば、この世界は物語として語られているんです。結末もその後も」

背中に嫌な汗が流れる。

それって……。

「既に決まっている運命を辿っているって訳？ 私は物語の人物で

私の想いや考えは全て定められたものだって、物語のストーリー通りだって。そういう事なの？」

そんなの！ そんなの認められない！

私の想いは私だけの物。私の記憶は私だけの物よ。

「ミナトさん。ここには俺がいます」

「あ」

急速に熱が冷めていった。

……そうだったわ。ここにはコウキ君がいる。

「既に物語からは外れているのよね？」

「はい。物語と言っても、実際に俺達はこの世界に生きているんです。

運命なんて俺は信じないんで。自分の道は自分で見つけるものですよ。違いますか？」

「そうね。私もそう思うわ」

作られた世界だとか、物語だとかはもう気にしないわ。

私はここにいる。人間として感情を持ち、記憶を持ち、誰かを想う気持ちがある。

それでいいじゃない。誰にだって思い通りにはさせないわ。

「やっぱり強いですね。ミナトさんは」

「え？ 何で？」

「今、ミナトさんは俺から過酷な現実を突きつけられたんですよ。

それなのに、それを受け止めて打ち返す強さがある。本当に、尊敬します」

「尊敬だなんて。当たり前前の事よ。私だって運命なんて信じないもの」

「アハハ。やっぱり敵わないな」

苦笑するコウキ君。やっぱり敵わないってどういう意味よ？

「ミナトさんは未来を知りたいですか？」

愚問ね。

「知りたくないわ。というより、そんなの既に別世界の私よ。

この世界の私の決定権は私にあるんだもの」

「それでこそ、ミナトさんです」

ニッコリって笑うコウキ君。

何だろう？ 凄く久しぶりに見た気がしたわ。

「タイムマシンに関しては以上です。

詳しくはまた後で質問してください。いつでもお答えしますんで「
そうね。他にも色々聞きたいし、後にするわ」

戸籍の事とか、色々聞かないと。

「俺の戸籍ですが・・・」
「・・・」

困ったように笑うコウキ君。

「怒らないでくださいね」

「内容によるわね」

「ええっと・・・」

またもたついている。はっきりしないわね。

ま、コウキ君らしいっていえばらしいから許してあげる。

「はっきりなさい!」

「は、はい! ハ、ハッキングして捏造しました!」

・・・捏造って。

捏造!??

「じゃ、じゃあ、あの戸籍は嘘って事?」

「はい。出来る限り、違和感のないように考えたデタラメです」

デタラメ・・・。

デタラメねえ・・・。

「・・・とりあえず、その握り締められた拳はやめましょうよ。

殴られる方も痛いですが、殴る方も痛いんですよ」

「問答無用よ!」

「ちよ、ちよっと落ち着いてください」

ゴソッ!

「イッター！」

まったく、犯罪だって分かってるのかしら。

「一応、言い訳させてもらえますか？」

「いいわよ。聞かせてみなさい」

言い訳ぐらい聞いてあげるわ。

「この世界に飛ばされた身としては戸籍がないのは色々とまずかったんですよ。

ネットカフェに入ろうとも会員証は作れないし、働くにも働けないし」

「そっか。それであんな所で立ち往生してたのね」

「はい。ミナトさんに拾われたのは本当に幸運でした」

そっか。あの時がコウキ君がこの世界にやって来た時だったんだ。

「それで色々と困惑してたのね。家電とかその他にも」

「はい。流石に二世紀近く時代が進んでいると何にも分かりませんよ。」

状況的には生まれたての赤ん坊と同じです」

「ま、それは仕方ないわよね」

そっよね。知らなかったんだもの。

「飛ばされたので、頼れる知人もいませんし」

あ、そっよね。

コウキ君はこつちの世界に飛ばされた。
つて事は家族とか友人とかともお別れしたのか。
ずっと昔の人だからいる訳ないし。

「両親がいないのも事実でしたしね。辻褄を合わせるにはあんな設定にするしかなかったんです」

・・・そうね。

じゃあ、仕方ないか。

でも・・・。

「今回だけよ。犯罪行為なんて許さないんだから」

「はい。分かっています」

シユンとなるコウキ君。

この分なら大丈夫そうね。

「最後にですが、ミナトさんにはきちんとお伝えしておきます。失望されるかもしれませんが」

そう告げるコウキ君の顔は酷く物憂げだった。

S I D E O U T

伝えなくちゃ。

俺の四つの異常と俺の目的を。

怖がられるかもしれない。
失望されるかもしれない。
でも、ミナトさんだから。
誰よりも信頼するミナトさんだから。
きちんと伝えておきたいんだ。

「俺は飛ばされる際にボソソジャンプを司る存在、まあ、管理者とでも思っして下さい。」

その者にある事を頼みました。俺にとっては本当に大切な事です」
遺跡の事は追々話す事になるだろうな。
とりあえず、今は続きを話そう。

「本当に大切な事？」

真剣な表情でこちらを見詰めてくるミナトさん。

「はい。衣食住とか知人とかいない状態じゃ生きていけないから何かしらの温情をくれと」

「そ、そうよね。当たり前よね」

慌てるミナトさん。

まあ、確かに飛ばされる身としては軽い希望だったかもしれないかな。

「そうしたら、俺には四つの異常が備わったんです」

「四つの異常？」

「はい。一つは管理者へのアクセス権。

本来、ボソソジャンプには色々な条件と制約があるんです。でも、俺はそれを全て無視出来ます」

如何なる時でも自由にボソンジャンプできる。
常に瞬間移動できる俺は誰にも捕まえられない。

「二つ目はナノマシンとの親和性の向上。」

知ってますか？ 普通の人間の身体にはナノマシンは一種類しか
注入できないんです」

「え、ええ。知ってるわ。確か、ナノマシン同士が喧嘩しちゃうの
よね」

「はい。拒絶反応を起こして激痛を与えるとされています。」

ですが、俺の身体は特別で何種類ナノマシンを注入しても適合し
てしまうんです」

「それって・・・」

「化け物って事ですよ。俺の身体はナノマシンの塊です」

怖がられるかな？

いいさ。怖がられるのを覚悟で明かしたんだから。

「三つ目は複数のナノマシンの注入。」

親和性が高まっている中に管理者が選別した数種類の高機能ナノ
マシンを注入されたんです」

実際にどれくらいなのかは知らないけど。

きつとかなりの量なんだろう。じゃなければ、俺の能力に釣りあわ
ない。

「その恩恵で俺の身体能力は異常になりました。」

見たでしょう？ 俺の体力測定。あれでも一生懸命抑えた方なん
ですよ」

息を呑む音が聞こえる。震える身体が見える。
ああ、やっぱり怖がられるよな。でも、最後まで伝えよう。

「・・・四つ目は知識の習得。俺が開発したOSは既存の情報を使
ったものです。」

ずっとズルしていたんですよ。俺は「

元々あったデータをロードして書き換えただけ。
それだけで天才プログラマーとか持て囃されて。
本当にどうしようもない人間だな。俺は。

「そんな四つの異常を抱える俺です。そんな俺の目的。教えてあげ
ます。」

震えて、怯えて、きつと、それでも、ミナトさんは俺を真っ直ぐ見
詰めている。

眼を逸らし、恐怖される事に恐怖している俺の事を。

「ただ・・・ただ平穩に過ごしたいんですよ。」

普通の暮らしをして、普通の人間と同じように過ごしたい」

「・・・え？ それ・・・だけ？」

「はい。歴史を変えられるだけの大それた能力を持ちながら・・・。
俺は何もせずに人任せにして幸せになりたいんですよ。身勝手です
よね。失望しますよね」

異常者が正常を求める。

なんて滑稽、なんて無様。

それでも、俺は・・・。

「こんな能力望んでいなかった。俺はただ普通に生きられれば良か

った。

それでも運命は俺を逃がしてくれない。歴史を変えろと俺に囁き続ける」

それでも、俺はただ当たり前前の幸せが欲しいんだ。

「俺は身勝手なんです。物語に介入したくないからと主人公と距離を取ろうとしました。

巻き込まれたくないからと主人公を取り巻く者達とも距離を取ろうとしました。

でも・・・それでも・・・」

貴方が優しさをくれたから。

貴方が温もりをくれたから。

「俺は始め、ミナトさんとも距離を取ろうと思いました。

でも、ミナトさんは本当に優しく、本当に暖かくて・・・本当に居心地が良くて。

・・・だから、俺はミナトさんの傍にいたくて」

だから、身勝手で傲慢な俺は・・・。

「最善の方法を取らず、自己保身に走り、その上で最低限介入しよう。

そんな俗物みたいな考えで主役達の舞台、機動戦艦ナデシコに乗ろうとしていたんです」

「・・・機動戦艦・・・ナデシコ。それが・・・私の乗る戦艦・・・」

「俺がパイロットになって根本から解決するのがベストなんでしよう」

俺にはそれだけの能力が与えられたのだから。

「でも、俺は戦後、パイロットとして活躍した事がデメリットにしかない。

そんな自分勝手な考えでパイロットを拒否しました。救える命があるかもしれないのに」

失望しますよね。ミナトさん。

「主役達の傍で少しずつ物語を好転へと修正していく。

そんな神様みたいなポジションになろうだなんて考えていたんですよ」

「……」

「傲慢で自分勝手……ですよね」

「……」

無言……か。

そうだよな。呆れられたかな？

いや。そんなもんじゃないだろう。

失望、恐怖、軽蔑。

そんな感情全てを俺に向けているんだろう。

そうされるだけの罪が俺にはある。

「……何で？」

「え？」

「何で貴方はそんなに自分を追い詰めてるの？」

いいじゃない。幸せを望めば。いいじゃない。平穏を望めば」

「ミナト……さん？」

「何がいけないの？ いいのよ。望みなさい！ いくらでも望みな

「さい！」

必死に言葉を紡いでくれるミナトさん。

その声が心に響く。不思議と自然に逸らしていた瞳はミナトさんへと向かった。

正面から俺を覗き込んでくるミナトさん。

その顔は涙で一杯だった。

「貴方は貴方を何よりも優先していいの。

能力？ そんなもの関係ない。あつたとしてもそれは貴方の幸せの為にあるのよ」

「俺の・・・幸せの為？ この異常な能力が？」

「貴方は言っただわ。運命なんて信じないって。」

それなのに何が運命から逃れられないよ。自分の発言に責任を持ちなさい！」

「でも、俺は・・・」

「一人で抱え込まないで。一人が持てる荷物なんて限られてるの。

まずは貴方だけの荷物を持ちなさい。それでもまだ持てるなら他の人の荷物も持ってあげなさい」

俺は・・・俺を優先させていいのか？

俺の幸せを望んでいいのか？

「まずは貴方が幸せになるの。そうすれば必ず貴方の周りは幸せになるから。」

自分を幸せに出来ないような人が他人を幸せに出来る筈がない」

「ミナト・・・さん」

「ずっと、ずっとそんな恐怖を抱えていたのね。」

「ごめんなさい。気付いてあげられなくて。ごめんなさい。支えてあげられなくて」

俺の為に泣いてくれているミナトさん。
どうして……どうしてそんなに優しいんですか？

「俺が……怖くないんですか？ 化け物ですよ？ 異常者ですよ」
「化け物？ 異常者？ ううん。貴方は当然の事を望んだだけ。
きっと管理人さんは貴方の幸せを望んでとっておきの能力を与えてくれたのよ」

とっておきの能力？ この異常が？
幸せの為の能力なのか？

「自分勝手？ 傲慢？ 一人で何でも出来るって考えている今のコウキ君こそが傲慢で自分勝手よ」

「でも、俺にはそれだけの能力が……」
「どんなに凄い能力を持っていようと人には限界があるの。
神様だって全てを救う事なんて出来ないわ。」

「そんな事が出来れば世の中に不幸なんてなくなるもの」
「……」
「貴方は普通の子よ。ただちょっと人にはない特別な能力があるだけ。」

「気負わなくていいの。誰かを救わなければいけないなんて自分を追い詰めなくていいのよ」

「……平穏な生活を望んでいたその裏で、俺は何かしなければと思っていた。」

「この世界は俺にとって物語の世界だった。」

「でも、俺は現に生きている。この世界の住人と触れ合っている。」

「ただ生きていくだけなら今のままで充分な筈。でも、遺跡は言った。必ず巻き込まれると。」

それが俺には貴方の能力はその為に与えたものだって言われている
としか思えなかった。

その力で救えるものを救いなさいって言われているとしか思えな
かった。

「好きに生きなさい。貴方が望むように生きなさい。

義務感とか責任感とか、そんなんで己の行動を縛らないで。貴方
の事は貴方が決めるのよ」

救わなければという義務感。

未来を知っているという責任感。

それが俺を縛っていた？

平穩に生きると主張しておいて、俺の知らない自分でも気付かない
所で俺を縛っていたのか？

「普通に生きなさい。貴方が望む普通の生活を。貴方にはその権利
があるの。」

誰の為でもない。自分の為に行動できる権利があるのよ」

「・・・いいんでしょうか？ 未来を知り、その解決策すら知って
いる俺が何もしなくて」

「当事者の問題は当事者が担う。どれが最善かなんか分からないで
しよ。」

未来を知っている人が助言したからって事態が好転するとも限ら
ないわ」

「でも、それじゃあ、俺は何でこの世界にいるんですか？

俺が、俺がここに居るのは何か理由が

「理由なんてないわ」

・・・理由がない？ 俺がここに居るのに、意味なんてない・・・
のか？

「人が生きる事に理由なんてない。存在する事に理由なんてない。生きるってそんな複雑な事じゃないもの。ただ幸せを望み、幸せを与える。それが生きるって事」

「・・・俺はいてもいなくてもいい存在なんですか？」

「そうじゃないわ。貴方がここにいる事に意味はある。」

でも、理由がなくちゃ存在しちやいけないなんて事はないの」

「・・・良く分かりません」

「コウキ君。この世界は居心地が悪い？ 辛い？」

「・・・そんな事ありません。居心地が良過ぎて。だから・・・」

どうにかしないとって余計に思っ

「それでいいじゃない。存在する事に理由を求める必要なんてないわ。

貴方はここにいる。ただそれだけよ」

全てを理解できた訳ではない。でも、ミナトさんの想いはきちんと伝わってきた。

俺は、俺のしたいようにしていいんだ。義務感？ 責任感？ そんなものに囚われる必要はない。

未来を変えなければならぬ？ 俺一人の力で変わるような未来じゃない。

俺に出来る事は己とその周りの幸せを考え、その為に行動する事くらいだ。

「・・・ミナトさん」

「何かな？ コウキ君」

「幸せって何でしょう？ その為に俺は何が出来るんでしょう？」

何の気負いもなくして、平穏な生活を望んでいいって思うと気持ち
が楽になった。

でも、今度はどうすればいいか、分からなくなった。

無意識に俺はナデシコに乗る事だけしか考えてなかったみたいだ。

始めはナデシコに乗らなければ良いって考えて、

次はパイロットにならなければ良いって考えて、最後はどうか無
難な役職を求めて。

この世界に来てからナデシコの事以外考えてなかったんだ。今、そ
れに気付いた。

「幸せは人それぞれじゃないかしら。コウキ君にはコウキ君の幸せ
がある。」

コウキ君が幸せを求めるなら、コウキ君にしか出来ない事がある
んじゃない？」

「・・・ハハハ。優しくないですよ。ミナトさん。こんなに困って
るのに」

「存分に困りなさい。幸せを求めるならいくらでも苦しみなさい。

それが後々の幸せに繋がるの。幸せを実感できるの」

ニッコリ笑うミナトさん。

何だろう？ 何か、久しぶりに見た気がする、ミナトさんの笑顔。

「そっか・・・」

はぁ・・・って息を吐く。

ベンチにもたれかかる俺をミナトさんが優しげな笑顔で見守ってい
た。

・・・ちよつと照れるかな。

「ミナトさん。俺は副操舵手と副通信士とサブオペレーターを兼任

しよう」と計画していたんです」

「そっか。それで色んな資格を取ろうとしたのね。」

操舵手の資格を一番最初に取ったのもその計画に沿って？」

「まあ、そんな所です。ナデシコクルーの中で混ざっても違和感のない役職は何かなあって思ってた。」

結局、俺は補佐役に回るのがベストだなって考えた訳ですよ」

あのナデシコクルーだからこそあの結末を導けた。

俺の存在が誰かしらの欠員を出したら本末転倒だ。

「それじゃあ、コウキ君は元々乗るつもりだったって事？」

「そう・・・みたいですね。おかしい話です。」

ナデシコに乗らずにしようと考えていた筈なのに、いつの間にか乗る事を前提にしていました」

不思議だよな。最初は乗らないつもり満々だったのに。

なし崩し的に乗る事になっちゃいそう。断るうにも・・・。

「ん？　どうかしたの？」

「いえ。なんでもありませんよ」

・・・ミナトさんもいるしな。

あれだけお世話になったミナトさんだけを危険な所に行かせるってのも・・・。

ま、無事だった事は確かなんだけど、何かあるか分からないだろう？俺の知っている通りに物語が進むかなんて分からないし。

「私はね、悩んでいる、というか、コウキ君がいる方にしようと思

うの」

「え？」

俺が・・・いる方？
それって・・・。

「私って楽しい仕事じゃないと嫌なのよ。
給料とか、そんなんじゃないくて、充実感が得られる仕事に就きた
いの」

うん。確か、それこそがミナトさんのナデシコ乗艦理由だったと思
う。

「一年前かな。コウキ君と出会う前はちょっと物足りなかったのよ
ね。」

つまらない訳じゃないけど、もっと何かあるんじゃないかなって
「俺を拾ってから何か変わったんですか？」

「拾うって・・・。まあ、そんな感じよ。ほら。コウキ君って見て
て退屈しないじゃない？」

だから、その物足りなさも埋まったっていうか・・・」

「・・・期待して損した。」

好かれてるとか思っちゃったじゃん。

ああ・・・退屈しないからですか。そうですか。

「どうしたのよ？ 何で落ち込んだの？」

「いえ。己惚れ屋の自分に呆れてただけです」

「ええっと。よく分からないけど元気出して」

はい。そうします。

「だからかな。コウキ君といれば充実感が得られると思って」

ま、まあ、必要にされてるって思ったらそんなに嫌じゃないかな。

「でも、コウキ君は自分で決めなさい。私がナデシコだったかしら？
それに乗らなければいけないから自分も乗ろうとかそんな風に決
めたら駄目よ」

・・・凶星です。そう考えている自分もいました。

「私は・・・そうね、乗ろうと思うわ」

「え？ 何ですか？」

本当は何かしらの理由があったのか？
充実感って嘘？

「面白そうじゃない。せつかく資格も持ってるんだし、使わないの
は損だもの」

・・・それで良いんですか？ ミナトさん。

「何よ？ その呆れた表情」

「・・・いえ。何だか拍子抜けしたというか・・・」

ミナトさんらしいと思ったというか、まあ、そんな感じですよ

でも、そっか。ミナトさんはナデシコに乗るのか。
それなら、俺も決まったな。

「そうですね。それなら、俺もナデシコに乗ろうと思います」

S I D E M I N A T O

「そうですね。それなら、俺もナデシコに乗ろうと思います」

色々な悩みを抱えていたのね。コウキ君って。

望まぬ力に望まぬ境遇。それでも、生真面目だから、何かしないと
いけないって自分に責任を課す。

もっと肩の力を抜いて、好きに生きればいいのに。
気遣いとか、思いやりとか、過度は自分に毒よ。

「それは何で？ 無理に乗らなくてもいいのよ」

コウキ君が乗りたくないなら乗らなければ良い。

元々乗らないつもりだったんなら尚更。

「ミナトさんもいますし。ミナトさんだけ危ない所に送り出す訳には
いけないじゃないですか」

・・・私が・・・いるから？

ええっと。それって・・・。

「ミナトさんにはお世話になりましたし。まだ恩を返しきれてない
ですから」

・・・そうよね。

恩返しとか、そんな理由よね。

なぐんだ。期待して損しちゃった。

好きだから傍にいたいとか、そんな事を言ってくれるのかと思ったのに。

・・・そうね。そんな甲斐性。コウキ君にはないものね。

「ええつと。何ですか？ その呆れた眼」

「なんでもないわよ」

本当に、子供なんだから。

「歴史を変えたいとか、未来を変えたいとか、俺が何でも解決してやるとか。」

俺は別にそんな風に思った訳じゃないんです」

真面目な顔のコウキ君。

葛藤もあつただろうに。

覚悟を決めた男の子って素敵ね。

「どうしても逃れられない運命だつていうんなら・・・。」

俺は逃げないで正面から立ち向かう事で打破してやります。

その上で、幸せを見つけてみようかなって。そう思いました」

正面から・・・か。

何だかんだ言つて、コウキ君なら出来る気がするわ。

「でも、それじゃあコウキ君の望む平穩って奴が得られないんじゃないの？

コウキ君の能力が知られたら・・・」

パイロットとして有名になれば軍が逃がしてくれない。

ボソソジャンプ・・・だったかしら？　それが知られば、瞬間移動だもの。誰だって欲しがるわ。

それがタイムマシンかもしれないと知られたら余計に。身体能力だって、ナノマシンだってそう。

コウキ君はそういう科学者みたいな人達からしてみれば宝の宝庫よね。

知られたら・・・ただじゃ済まないわ。

「そうなんですけどね。ま、俺も男ですから。

ミナトさんを護るぐらいの甲斐性はあるつもりですよ」

「ちよ、な、何言ってるのよ」

私を護る？　私が、コウキ君に護られる？

ああ。もう。顔が熱いわ。コウキ君のバカ。

そういうのはプロポーズの時に添える言葉なの。

「それに、いざとなったら逃げますから」

「・・・・・・・・・・」

・・・呆れた。カッコイイって思ったのに。たった数秒しかもたなかったわ。

やっぱり、そんな甲斐性、コウキ君にはないわよね。

護るっていうのなら逃げないで最後まで護りなさいよね。

って、私っては何考えてるの！？　コウキ君に護ってもらおうだななんて・・・。

「どうかしました？　悶えちゃって」

「え・・・う、ううん。なんでもないわ。気にしないで」

「はあ・・・」

は、恥ずかしい。ペースが崩されまくりだわ。

「そ、それで、どんな役職で乗るの？」

計画通りに行くのかしら？

「色々考えたんですが、予備パイロットも引き受けようかなくて」

「え？ いいの？ それで」

「ええ。ガキみたいな考えですが、多分、ずっと反発していたんだと思います。」

パイロットになれる力があるからこそ、パイロットになるって事に対して」

運命だとか、そんな筋書きに反発していたって事かしら？

パイロットになる事が運命に従うみたいで嫌だって。

「でも、拒否し続けて危険な眼にあつたら本末転倒だなと思うんです。」

死んだら何の意味もないですからね」

「まあ、そうなんだけど。私としては・・・乗って欲しくないかな」

「あれ？ 心配してくれるんですか？」

心配してくれるのかって？

そんなの・・・。

「そんなの、当たり前じゃない！ 誰が好き好んで危険な眼にあつて欲しいなんて思うのよ！」

大事な子に死んで欲しいなんて思う訳がない！

そりゃあさつき軽くパイロットなればいいなんて言っちゃったけど、

あれは出撃とかしないで、大丈夫だと思ったからで本心じゃない。正規のパイロットだったら断固反対してた。

「・・・そっか。嫌がってくれるんだ・・・」

「コウキ君？」

俯くコウキ君。呟いてるけど何も聞こえなかった。何て言ってたの？

「護れる力があるなら護りますよ。ミナトさんも乗っていますから」

そう言っただけで笑うコウキ君。

今までで一番男らしくてカッコイイ笑顔だった。

S I D E O U T

「そうですか。引き受けて頂けますか」

「ええ。ですが、あくまで予備ですからね。危険な時だけですよ」

「分かっております。いざという時に御願いするだけです」

結局、予備パイロットを引き受ける事になったな。

どうなるか分からないけど、出来るだけの事をしよう。

それにしても、何で今までみたいな抵抗感がないんだろう？

やっぱりミナトさんのお陰かな？

気が楽になったし、護る為にはなった方が良いつて思えるようになったし。

「それでは、ハルカさんには操舵手を。」

マエヤマさんには副操舵手、副通信士、予備パイロットを御願いますね」

「分かりました」

「はい。分かり」

あれ？ サブオペレーターはどうなったんだ？

「ええっと。サブオペレーターはどうになりました？」

「新しく候補者が現れまして。その方にお任せする事にしました」

新しい候補者？

ルリ嬢以外にもオペレーターが……。

あ！ そうか！ 盲点だった！

「……マシン……チャイルド……」

俺が匿名で送ったMCの情報。

それを頼りに救出されたMCは何人かいる筈。

ルリ嬢の他にオペレーターを務められるMCがいてもおかしくない
いや、むしろ、ネルガルがMCを利用しない筈がない。

「おや？ ご存知なのですか？」

あ、や、やばっ。ど、どうにかして誤魔化さないと。

「僕もIFSを持っていますからね。噂程度には……」

「私はメインオペレーターの事もお話していませんが……」

うわっ！ 墓穴掘った。
どうする？ どうする？

「マエヤマさん。貴方・・・」

や、止むを得まい。

「ホシノさんがメインオペレーターなのでしょう？

MCや彼女の事は両親から聞いていましたし、先日、彼女がネルガルに雇われたと知りまして」

「ほお。ご存知で。そういえば、マエヤマさんの両親も研究者でしたかな？

それならば、MCにお詳しいと」

おお！ 両親の設定が役に立ったか！？

「はい。わざわざホシノさんレベルのオペレーターを雇ったのです。

同等とまでは行きませんが、それに近い人をサブとして雇う筈。

それならば・・・」

「MCである可能性が高いと。そう考えた訳ですね」

「その通りです」

「・・・まあ、いいでしょう」

納得してくれたか？ いや、多分、疑っているんだろうな。

でも、匿名で送ってきたのが俺だとはバレてないだろう。

疑われても確証はないのだから。

「しかし、よくお調べになりましたな。

ルリさんの事はネルガルが全身全霊をかけて隠していた筈ですが・

・・・」

まだだった！？　まだ疑いは晴れてない！　甘かった！

「こう見えても天才プログラマーと呼ばれている俺です。少し調べればチヨチヨイのチヨイです」

「ほお。ハッキング・・・という奴ですか？」

キラんと光るプロスさんの眼。

おいしい！　怖いよ！

「いえいえ。そんな事はしていませんよ。研究所の方をちょっとね」

実際に調べてないんだから、跡はついてない筈。意地でも誤魔化し通す。

「おや。それは盲点でしたな。研究所の方でしたか。

それならば、注意が甘くなっているもおおかしくありません」

「そうなんですよ。ハハハハハ」

「素晴らしいハッキング技術ですな。ハッハッハ」

・・・早速追い込まれました。どうしよう？

「コウキ君？　そんな事してたの？」

三三三ミナトさんまでそんな白い眼で・・・。

やばい。信用と立場を失い兼ねない。

「後で色々教えてね」

「・・・了解しました」

耳元でそう言われたら断れませんよ。
トホホ……。

「それでは、お引き受けして頂けるといふ事で。こちらが契約書になります」

ズバツと。

「……………」

「……………」

懐から出すの早過ぎです。
ミナトさんなんて眼が点。
ま、俺は見えてたけど。

「読み終えたらこちらの方にサインを」

といつてすぐにサイン蘭を指差すプロスさん。
フッフッフ。契約書とはきちんと読むものですよ。
後々、あんな事態にならないようにあらかじめ手を打っておきます。

「うーん。大丈夫そうね」

「おっと。ミナトさん。ちょっと待ってください」

「え?」

サインしかけたミナトさんを止める。

そういえば、何でミナトさん、あの項目を見逃してたんだろっ。

……あ。読めないよな。こんなちっちゃくちゃ。それも、見えづ
らいように工夫してある。

「幾つか確認したいのですが、よろしいですか？」

「何なりと」

フフフ。プロスさん。後悔しても知りませんよ。

「まずは一つ目。俺って予備パイロットとして登録されているんですよね？」

「ええ。そうっております。ここに役職が書かれていますでしょう？」

ま、確かに名前の下に役職名が書いてある。

「それなら、何故、保険について何も書かれていないんですか？」

予備パイロットとてパイロット。

何かしらの破損で弁償とか勘弁して欲しい。

「おおっと。忘れておりました。いやはや。申し訳ありません」

このうっかりオジサンめ。

意図的だったら性格悪いぞ。

俺はアキト青年のように苦労したくないの。

借金地獄とか勘弁して欲しい。

「二つ目ですが、俺の部屋はどこになります？」

契約書を見るとブリッジクルーと一般クルーとで部屋が違うみたいですが……。

役職的に俺はどちらに所属する事になるんでしょうか？」

俺って予備パイロットだし、副通信士だし、副操舵手だろ。全部、副とか予備とかだから、実は一番立場がないのでは？

「マエヤマさんはブリッジクルーと同様一人部屋とさせて頂きます。OSなどでお世話になるつもりですから。ブリッジの方に席も御用意させて頂くつもりです」

「OS・・・ですか？ プログラミングとかはオペレーターの方にお任せした方が良いのでは？」

「御戯れを。天才プログラマーのマエヤマさんには敵いませんよ」

俺なんてすぐに抜かれると思うけどな。

俺の利点なんてナノマシンぐらいだけだし。

っていうか、既に抜かれてるんじゃないか？

ま、いいや。それなら・・・。

「それなら、オペレーター補佐とか、そんな役職もつけてくださいよ。」

何もしないのにブリッジにいるのは申し訳ないですから」

「そうですか。いやはや。助かります。マエヤマさんは働き者ですな」

「いえいえ。そうすれば給料もアップでしょ？ メリットもあるんですよ。」

無料でプログラミングとか嫌ですし」

どうせならねえ、きちんとした仕事という形で引き受けたいものです。」

「・・・中々に抜け目がないですな」

「ないよりあった方が良く。お金なんていくらあっても困りませんから」

もう使い切れないくらいあるんだけどね。
ないよりはあった方が良いでしょう。何かあるか分からないだし。

「ま、いいでしょう。了解致しました。給料の方もそれに見合うだけの金額をお出します」

「助かります」

「コウキ君。あんまりがめついちゃ駄目よ」

「え、ええ。分かりました」

呆れないでくださいよ。
正当な権利なんですから。

「それで最後ですが・・・」

あの騒動に巻き込まれたくないし、気軽にミナトさんとお茶とか出来なくなっちゃう。

何としても説得だな。

「この項目をどうにか出来ませんか？」

噂の手を繋ぐまでって奴だよ。

別に如何わしい事をしたくない訳じゃないけど、艦内恋愛なんて自由でいいんじゃない？

恋は理屈じゃないんですって言わせて頂く。

ついでに異性間の部屋の行き来の禁止つてのもいただけないね。

食堂でのお茶会もいいけど、部屋でのんびりしたいとも思うし。

あれ？ ユリ力嬢。即刻アキト青年の部屋に訪ねてなかったっけか？
つてか、これって事実上、無視扱いか？

何度も行き来してた気がするが。

緊急事態は構わないのか？

「あら？ そんなのあったかしら？」

「ほら。ありますよ。物凄く小さいですけど」

「あ。本当だわ。これは酷いわね」

そうですね。呆れますよね。

「いやはや。困りますな。私達からしてみますと、艦内恋愛はちょっと」

「恋愛は自由だと思いますよ。ただでさえ閉じ込められた空間です。何かあつてからでは遅いのです」

あつち方面つて爆発しちゃうと危険でしょ？ 何を仕出かすか分からないし。

あ。もちろん、俺は大丈夫だよ？ 何ていつてもこの一年間耐え切ったんだから。

むしろ、褒めて欲しいね。夜は悶々でしたよ。うん。本当に。

「大人なのですね。マエヤマさん」

「いえいえ。少し考えれば分かりますよ」

「・・・エッチ」

グハッ！ ボソツと告げるのはやめて下さい。
心にグサツと刺さりますから。

「そ、そんなつもりはないですよ。ただ、部屋でお茶会と開きたいじゃないですか。飲み会とか」

「まあ、分からなくもないけど・・・」

ミナトさんって見た目と違って結構堅いからなあ。

あ、別に見た目を貶している訳じゃないよ。本当だよ。美人さんだけど、清楚っていうよりは大胆とか、引っ張っていくとか、そんな感じだからさ。

「食堂とかでもいいんですけどね。部屋の方がのんびり出来るかとなるほど。そういう意味ですか。ですが、それでは相手方が契約違反になりますよ」

「あ、だから、俺と相手も対象にしてください。俺だけじゃ意味がないですから」

「しかしですね・・・」

「給料5%でどうですか？」

「・・・致し方ありませんな。」

部屋の行き来に関しては許可しましょう。ただし、如何わしい行為は」

「し、しませんよ」

だから、睨まないで下さい。ミナトさん。

「しかし、それでは手を繋ぐ方の理由としては不適合ですな。」

お茶会ぐらいなら接触もないでしょうし」

むう。確かに。でもさ、手を繋ぐ以上なんていくらでもあるんじゃないかな？

「たとえば足を挫いてしまったとか、そんな時には背負ってあげべきでしょう？」

接触する事態なんて幾らでもあると思いますよ」

「それらは例外ですよ。見逃します」

「社内恋愛は禁止にしない方がいいですよ。」

抑えつけられる事で逆に燃え上がっちゃう事もありますから」

「……大人なのですね。マエヤマさん」

「……エッチ」

しまったあ。いらぬ一言だった。

「と、とにかくですね。手を繋ぐ以上の接触なんて幾らでもあると思っんですよ」

時と場合によるけどさ。恋愛関連以外にもありえるでしょ。

「それに、落ち込んでたり、悩んでたりする時って無性に人の温もりが欲しくなったりするんです。

温もりって大切だと思いますよ。心の支えになってくれますからね」

俺はミナトさんのお陰で心が軽くなった。

ミナトさんの優しさと温もりが俺を元気付けてくれたんだ。

「……コウキ君」

「……マエヤマさん」

暖かな視線で見詰めてくるプロスさんとミナトさん。

……って、俺は何を恥ずかしい事を言っちゃってるんだ。

これじゃあ温もりを欲しているみたいじゃないか！

いや、ま、欲しいんだけどさ。こんな事、他人に言う事じゃないだろ！

しかも、経験がありますみたいな言い方だったし、恥ずかし過ぎる……。

いや、あるんだけどね。

「・・・そうね。私もこの項目は消して欲しいわ」

こちらを見ながら言わないで下さい。恥ずかしがってるんだからスルーの方向で。

「マエヤマさんのおっしゃる事はよく分かります。

ですが、これを失くしてしまうとそれこそ際限がなくなってしまうでしょう？

私達と致しましてもそう易々とは・・・」

仕方がない。元々多過ぎるくらいの給料だ。多少減つても・・・まあ、構わないだろう。

「更に5%で・・・」

「・・・10%」

「・・・7%」

「・・・」

首を横に振るプロスさん。
クソツ。譲れないってか。
致し方あるまい。

「分かりました。10%で御願います」

「それでは、マエヤマさんは合計15%のカットとなります」

15%か。・・・結構あるな。

ま、それでもかなりの量だから良いけど。

「あ、もちろん、相手方も対象ですからね」

「・・・もちろんです」

誤魔化すつもりだったな？

流石はプロスペクター氏。抜け目がない。

「それじゃあ、私も15%カットでどっちも消してもらおうかしら」

そうだよな。ミナトさんにだって自由に恋愛する権利があるんだ。

・・・ちよつと寂しいっていうか、こう・・・そう、胸が痛む。

お姉さんを取られる弟の気持ちって奴なのかな？

「・・・分かりました」

渋々って感じでした承するプロスさん。

ま、文字通り渋々なんだろうな。

「それでは、こちらの方にサインを」

パツと見で不備はない。

きちんと全部に眼を通したし、矛盾とかもなかったし、こちらが不利になる項目も特にない。

よし。いいか。

・・・あ。その前に。

「一応、減らされた後の給料を確認させて頂けますか」

「あ。私も御願います」

「はい。分かりました」

・・・出たよ。

神速のソロバン弾き。

ミナトさんなんて口開いちゃってる。

「まずはマエヤマさん。こちらになります」

ソロバンで弾いた数字を一々電卓に打ってから見せる。

二度手間だよな。あいも変わらず。

んで、電卓に映る数字。

全役職分の給料とそこからカットされた分を引いて……。

「うん。やっぱり多いですね」

「ネルガルは気前が良いのですよ」

うん。本当にそう。

気前良過ぎ。この世界って就職難とかじゃないのかな？
そう願いたい。だって、申し訳ないもの。

「そして、こちらがハルカさんですね」

高速弾き。そして、提示。

「あら。本当に気前が良い」

ですよねぇ。

「よろしいですか？」

「はい」

「ありがとうございました」

うん。大丈夫。サイン、サインっと。

「はい。確かに。契約成立です」

サインした契約書を懐に入れて、プロスさんが立ち上がる。

「出航は一カ月後。合流は出航の一週間程前には済ませておいて下さい。」

場所はサセボシティの軍用ドックです」

「分かりました」

こうして、俺の物語が始まった訳だ。

いる筈のない、存在する筈のないイレギュラーの物語が。

それから会社の方へ退社届けを出した。

俺はアルバイトだから、そんなに重々しくなかったけど。

もちろん、ミナトさんは残念がられたよ。

個人の問題だから、納得してくれたみたいだけど。

それと意外に俺も残念がられた。

ま、便利君だったしな。食事とかも結構したし、割と気に入られてたのか？

・・・うん。そうだったら嬉しいかな。

「それじゃあ、行きましようか」

「はい」

マンションも引き払い、いらぬ荷物はミナトさんの実家に送った。あ、俺に私物なんてないから、何の心配もいらぬ。

何で男物が送られて来たの？ とかいう問題も起きていない筈だ。

残りの私服とスーツはナデシコに持っていくしな。もうとっくに郵送済みだぜ。

ちなみに、ミナトさんも郵送済み。だから、今持っているのは手荷物程度。
さてと、早速ドックへ行きますか。

第四話

「ようこそいらっしやいました。ハルカさん。マエヤマさん」

軍用のドックに出向くとプロスさんがお出迎え。

そして、眼の前にあるのは……。

「変な形ね」

「そうですね」

「この艦こそが我が社の開発した地球最新鋭の機動戦艦、ナデシコです」

そう、主役達の舞台、機動戦艦ナデシコだ。

ディストーションフィールドを発生させる為のディストーションブレード。

そののせいで変な形になっちゃってるけど、性能は確かに最新鋭。これから長い間、お世話になります。

「それでは、ご案内しましょう。まずは格納庫です」

危険物の探知をして、消毒。

消毒しないと余計な菌を艦内に持っていつっちゃうからな。

風邪とか菌がなければひかないだろうし。

体調には充分気を遣わなくちゃね。寝込みたくないし、仕事のシフト的にも迷惑がかかるし。

「こちらが本艦搭載のエステバリスです。マエヤマさんはご存知でしたな」

「え、ええ。まあ。完成した機体は初めてですが……」

人型機動兵器エステバリス。

全高が六メートル前後の高い運用性と汎用性を持つネルガル開発の機体だ。

ジエネレーターをオミット。

エネルギーを重力波ビームにて外部供給する事で小型軽量化しつつ、高機能化にも成功している。

ただし、その性質上、供給源、今ならナデシコだな、から離れると幾つか支障が出る。

すぐにバッテリーが切れるとか、移動に制限があるとか。結構嫌なデメリットも多い。

ま、攻めには向かないけど守りには適していると思う。

アサルトピットのフレーム換装システムとか画期的過ぎ。

どんな地形でも換装次第で対応できるとか、無駄がなくて素晴らしい。

まあ、余計にフレームを置いておかないといけないってデメリットもあるみたいだけど。

ま、サイズ的に小さいから問題ないだろう。何だよ、六メートルって。

俺の知っている機動兵器ではこれの三倍でも小さい方だったの。やはりエネルギー源を外部に依存するってのは効果的な訳だな。

「マエヤマさん専用のアサルトピットもご用意してあります。アサルトピットはご存知で？」

「ええ。一応は。ゲームの時に簡単に説明を受けましたから。

簡単にいえば、コアファ・・・ではなく、まあ、コクピットですよね。

他フレームと接続できるモジュール的な」

「そう捉えていただければ結構です。マエヤマさんには各機体の〇

Sをお任せしたいのですが・・・」

「え？ でも、万全なんですよね？ 俺がいじくる必要はないのでは？」

「無論です。ですが、これ以上の性能は我が社の開発班では無理でしてな。」

マエヤマさんならより高度なものを作れるのではないかと思いついて

どうなんだろう？ ウリバタケ氏と相談してみようかな。

プログラム関連で目立つ分には問題ないし。

改良できる部分があるかもしれない。

「分かりました。出来るか分かりませんが、やってみましょう」

「そうですか。ありがとうございます。試験は我が社の凄腕のパイロットが務めますので」

凄腕のパイロット？ 誰だろう？

ダイゴウジ・ガイ、改め、ヤマダ・ジロウかな？

でも、近接バカとして有名な彼が凄腕のパイロットって呼べるのかな。

「あ、あそこにいますね。紹介します。テンカワさん！」

テンカワ！？

ええ！？ テンカワってアキト青年の事か！？

ど、どういう事だ！？ 一体、どうなってる！？

「コウキ君。どうしたの？」

アキト青年を呼んでいて後ろを向いているプロスさんを気にしながら

らミナトさんが声を掛けてくる。

ミナトさんにはある程度の事を教えてある。もちろん、ミナトさん関連については話していない。

話したら怒るし。でも、ルリ嬢の事とか、ヤマダ・ジロウの事とかは簡単に話してある。

助けてあげたいって事も話したし、協力してくれるとも言ってくれていた。

アキト青年が主役でコックで予備パイロットって事も話してあるけど、いきなり予想外だ。

「テンカワってというのはアキト青年の苗字で、本来ならまだ艦内にいないんですよ。」

「そもそもパイロットとしては素人でとてもじゃないですが凄腕ななんて……」

「……って事は早速物語からズレているって訳ね。やっぱり平行世界なのよ」

「……そうですね。これで先が分からなくなってしまいました。でも、やれるだけやってみますね」

「ええ。協力するわ。頑張りましょうね」

笑顔のミナトさん。

うん。やっぱりミナトさんの笑顔は勇気付けられる。

「……………」

こちらへとやって来るアキト青年。

ミナトさんを見た時は穏やかな顔をしていたのに、俺を見た瞬間、驚きで顔を染めた。

ええっと。何でだ？

「紹介します。こちらナデシコのリーダーパイロットを務めてくださるテンカワ・アキトさんです」

「・・・テンカワ・アキトだ。よろしく頼む」

・・・マジかよ？

あの童顔で騒がしいアキト青年がこんな鋭い顔付きでクールに自己紹介だなんて・・・。

どういう事だ？ 俺の存在がそんなにこの世界を変えたのか？

「こちらは操舵手を務めてくださるハルカ・ミナトさん。

こちらは副操舵手、副通信士など、多くの役職を兼任してくださるマエヤマ・コウキさんです」

「ハルカ・ミナトよ。よろしくね。アキト君」

「マエヤマ・コウキです。よろしく御願います」

ええっと。何でこんなに睨まれているんでしょうか。

「マエヤマさんは予備パイロットでもありますので、テンカワさん、面倒を見てあげてください」

「・・・ああ。分かった」

射ぬかんばかりの鋭い視線で俺を見てくるアキト青年。睨まれるような事はした覚えがないんだが・・・。

「どうか致しましたか？ テンカワさん」

「・・・いや。なんでもないさ」

こ、怖いんですけど・・・。

「では、テンカワさん。ありがとうございました」

「・・・ああ。それではな」

去っていくアキト青年。

これは・・・とてもじゃないが、アキト青年なんて呼べないな。
アキトさん？ テンカワさん？ うん。テンカワさんって呼ぼう。

「それとですね、整備班の主任にも紹介しましょう。

マエヤマさんとはよく会う事になるでしょうから」

ウリバタケ氏の事だな。

ピコンッ。

おお。コミュニケ。正式名称は・・・知らない。コミュニケでいいか。

「ウリバタケさん。格納庫の入り口の方へ御願いできますか？

紹介したい方がいらっしやいますので」

「ん？ おお。すぐ行くよ」

ピコンッ。

凄いよな。コミュニケ。

便利だよな。コミュニケ。

カツコイイよな。コミュニケ。

あれ？

「ええっと。今のは何ですか？」

あ、そっか。ミナトさんは知らないのか。

「あ、お渡ししていませんでしたな」

プロスさんからコミュニケーションを手渡してもらおう。
ありがとうございます。

「これはコミュニケーションと言いましてな。我が社で開発した特別製です。
ナデシコ艦内であれば誰とでもいつでも自由に連絡が取り合えます。
す。

もちろん、拒否も可能です。基本的には誰もなさいませんが」

「へえ。凄いのね」

「便利ですな」

使ってみたかったんだよな。これ。

ってか、拒否も可能って。着信拒否って事？
もうちょっと違う言い方しようよ。

「詳しくはこちらのマニュアルで確認下さい」

マニュアルを手渡される。

よし。覚えよう。そして、すぐ使おう。

「おう。来たぞ」

マニュアルを確認中にウリバタケ氏登場。

おお。これがマッドとかいう奴ですか。

「こちらは操舵手のハルカ・ミナトさんです」

「おお。別嬪だな」

「は、はあ・・・」

いきなりナンパですか。貴方奥さんいるでしょう？

「そして、こちらがマエヤマ・コウキさんです。」

これから何度も顔を合わせると思いますが、紹介させて頂きました」

「ん？ ってことはパイロットか？ こいつ」

意外そうな顔で見ないで下さい。

確かに見た目的に信じられないかもしれませんが。

「正式には予備パイロットですね。でも、本職は違います」

「んじゃあ、何だってんだ？」

「おや。御存知ありませんか？ マエヤマ・コウキの名を」

「んん！？ マエヤマ・コウキ。マエヤマ・コウキ。聞いた事あるな」

怪訝な表情でどんどん近付いてくるウリバタケ氏。

あの・・・怖いんですが・・・。

「天才プログラマーのマエヤマ・コウキさんですよ」

「おお！ あの噂のか！？ 随分と若いんだな」

「あ、はあ・・・ありがとうございます」

肩をバンバンしないで欲しい。

「こちらは整備班主任のウリバタケ・セイヤさんです」

「おう。よろしく頼むな。マエヤマ」

「あ、はい。こちらこそ。よろしく御願います。ウリバタケさん」

握手。

ゴツゴツしてる職人の手だなあと感心してしまう。

「それで、その天才プログラマーがどうして？」

「ええ。OSとかの改良をしてもらおうと思ひまして。やはり専門家の方に任せようと思ひましてな」

「ふう〜ん。でもよお、兵器関連と民事関連とじゃちょっと違うんじゃないのか？」

「そうかもしれませんが、知識は凄まじいと思ひますよ。指導して上げて下さい」

「そういう事か。ま、いいけどよ。ま、暇な時にでも来な。色々教えてやつから」

「はい。御願ひします」

最近は遺跡に頼らずに割りといけるようになってきた。これでウリバタケさんから習えるのなら嬉しい限りだ。

「それでは、次の場所へ。次は食堂です」

食堂。

凄腕料理人のホウメイ主任と五人の少女のテリトリー。テンカワさんはいるのかな？ どうなんだろう？

「こちらはホウメイシェフです。得意料理は中華ですが、何でもこなせる凄腕の料理人ですよ」

「ハツハツハ。褒めても何もでないよ」

豪快な人だな。ホウメイ主任。

「わあああ。私って美味しいものには眼がないのよね」

嬉しそうだな。ミナトさん。

戦艦って事で食事の心配してたもんな。

美味しい筈ですよって言ったのに信じてくれなかったぐらいだし。でも、美味しそうないだし、手際も良い。

食事している人を見れば、絶対に美味しいって分かる程だ。

「マエヤマ・コウキです。よろしく御願います」

「ハルカ・ミナトです。お食事、楽しみにしています」

美味しそうだもんなあ。

ミナトさんなんて眼が輝いてるし。

・・・残念ながら、僕の料理スキルはあまりよろしくないのです。まずくはないけどさ。褒められる程に美味しい訳でもないって、そんな感じ。

「そうかい。楽しみにしてな。そっちの坊やも」

ええっと。坊やって俺の事だよな？

「あ、はい。でも、坊やはちょっと」

「お。悪かったね。マエヤマだったかな？」

「はい。俺も楽しみにしてます。ホウメイ主任」

「主任は良いよ。ホウメイって呼んでくれ」

「分かりました。ホウメイさん」

楽しみだな。火星井。

今まで食った事ないし。

「それでは、最後ですね。ブリッジへ向かいます」

ブリッジ。

俺の勤務場所になる所か。

「皆さん。よろしいですか？」

一斉にこちらへと向かれる好奇の視線。
そうだね。ブリッジに人なんてあまり来ないし。

「ブリッジクルーの一員となる方を紹介いたします」

プロスさん先導のもとに自己紹介が始まった。

「戦闘指揮を担当していただきますゴート・ホーリーさんです」

「ゴート・ホーリーだ。よろしく頼む」

お世話になります。ゴートさん。

でも、貴方が活躍した描写が皆無だった気がするのは私だけでしょうか？

「この艦の提督を務めていただきますフクベ・ジン提督です」

「……よろしく頼むよ。若いの」

こちらこそよろしく御願います。

……やっぱり暗いオーラを纏ってるよな。

ギャグ志向のナデシコでは肩身が狭そうだ。

「この艦の副提　　」

「ムネタケ・サダアキよ。この私がいる艦に来れた事に感謝するの
ね」

おお。キノコが来た。

マジでキノコじゃん。無論、食す気など毛頭ありませんが。

「え〜。気を取り直しまして」

キノコさんがすいません。

「通信士を務めてくださるメグミ・レイナードさんです」

「メグミ・レイナードです。メグミって呼んでください。」

「ここに来る前は声優をやっていたんですが・・・知りませんか？」

「あ、いえ。ちょっと・・・」

困ってますね。ミナトさん。

もちろん、僕も知りません。ええ。知りませんとも。

魔法とか、少女とか、そんな事は全然知りません。

「オペレーターを務めていただくホシノ・ルリさんです」

「・・・」

「ん？ どうかしました？」

ミナトさんを見て微笑んで、俺を見て眼を見開いて。

あれ？ テンカワさんと同じ反応だな。どっという事だろう？

「あ、いえ。オペレーターのホシノ・ルリです。よろしく御願います」

それにしても、かなりの少女だよな。

周りが大人ばかりで大変だったと思う。

ミナトさんがいて本当に良かったと思うよ。

「こちらの御二人はサブオペレーターのラピス・ラズリさんとセレス・タイトさんです」

「ラピス。ラピス・ラズリ」

「・・・セレス・タイト・・・です」

・・・なるほど。

この二人は確実に俺の介入が原因だろう。
人体実験から救い出せたのか。

・・・良かった。本当に良かった。

「どうか致しましたか？ マエヤマさん」

「え、あ、いえ。なんでもありません」

プロスさんに注意された。

気を付けないと。怪しまれる。

でも、こんな小さい子を戦艦に乗せなくちゃいけないのか。
それを容認している俺を含めて罪だよな、大人って。

「最後になりますが、会計、監査役のプロスペクターです。改めて
よろしく御願いますぞ」

謎の男、プロスペクター。

うん。凄く似合ってます。このフレーズ。

「それでは、次は御二人の紹介をしましょう」

あ、俺とミナトさんの番ですか。

うん。自己紹介って緊張するよね。

「こちらは操舵手を務めてくださるハルカ・ミナトさんです」
「よろしくう〜〜」

あ、もうはっちゃんけちゃいますか。
凄いですね。ミナトさん。

「そして、こちらの方が副通信士」
「あ。あの人がそうなんだ」

はい。あの人は僕です。

「副操舵手」
「コウキ君に任せれば安心ね」

サボっちゃ駄目ですよ。ミナトさん。
あくまでメインは貴方ですから。

「予備パイロット」
「・・・予備パイロット？・・・そんな人はアキトさん以外に
なかった」

何を呟いているんでしょうか？ ルリ嬢。

「オペレーター補佐」
「・・・補佐？」
「・・・」

無言で見上げないで下さい。
どうしていいか分かりませんから。

「以上の役職を兼任していただくマエヤマ・コウキさんです」
「ええっと。マエヤマ・コウキです。よろしく御願います」

とりあえず、頭を下げる。

んで、少し経って、顔をあげると・・・。

「・・・・・・・・」

皆さん固まっただけじゃなかった。

え？ 何で？

ミナトさんなんて笑ってるし。

「・・・た、多才なんですわね」

呆然と呟くメグミさん。

やっと反応が返ってきましたか。

無視されたかと思ったじゃん。

「いえいえ。色々と資格に手を出した結果です。趣味なんですよね。資格取得って」

これは事実。ミナトさんに勝とうと頑張る内にかなりの資格を取得していた。

俺の学習能力って半端ないよ。だってナノマシンの恩恵があるもの。記憶能力も抜群です。

「それにしても凄いですよ」

あ、笑ってくれた。可愛い笑顔な事だ。

俺の身近にそばかすがある女の人はいなかったからな。

なんか新鮮。

「マエヤマ・コウキ。昨年高機能OSを開発して一躍有名に。その後も数多のソフトを開発した凄腕のプログラマー」

あのさ。勝手に経歴見ないで欲しいんだけど。ルリ嬢。いや。公開されているから仕方ないんだけどさ。

「え？ あのマエヤマ・コウキ？ こんなに若かったのね」

貴方は年齢不詳ですよ。副提督。

「……オペレーター補佐？」

「……私達の……補佐さん……ですか？」

桃色と銀色の髪が揺れる。

ラピス嬢とセレス嬢か。

流石は妖精の末裔。……末裔じゃないけど。

つてか、MCつて容姿整ってる奴ばかりだよな。

クソ。それじゃあ、何で俺は整ってないんだよ！

……ま、諦めようか。整形する程には拘ってないから。

「それなりに経験積んでるからね。

少しでも教えられる事があれば教えてあげようって思ってたさ。よろしくね」

あれだけの境遇だ。対人恐怖症があってもおかしくない。

ゆっくり、ゆっくり。怖がられないように話そう。

「……よろしく」

「・・・よろしく御願います」
「うん。頑張ろう」

頭とか撫でてあげたくなる可愛らしさだけでも自重。
怯えちゃうかもしれないからね。
ゆっくり慣れていってもらおう。

「あの・・・予備パイロットって。マエヤマさんはプログラマーなんですよね？」

そうだよね。気になるよね。

・・・今更だけどちょっと欲張りすぎたか？

「パイロットとしての適正も高くてですね。

IFSもお持ちのようですからいざという時に頼ろうと思いついて」

プロスさん。俺はいざという時が来ない事を祈りますよ。
本当にいざという時だけしか頼られないかは不明だけど。

「しかし、訓練もなしの素人で現場が務まるのか？」

ゴートさん。的確な意見をありがとう。

「リーダーパイロットのテンカワさんに御願ひ致しました。訓練義務も課しましたから大丈夫かと」

この訓練義務が割りと時間を取るんだよ。
ま、こちららも命が懸かっているので頑張りますが。

「・・・本当に多才なんですね」

呆れた眼で見ないでください。メグミさん。

ってか、いつまで笑ってるんですか！ ミナトさん！

「それでは、あちらの席が御二人の席になりますので。そちらの方へ。」

マエヤマさんは兼任されるのでそれぞれの役職の方と話し合っておいてください」

そう言つてプロスさんはどこかへ去つていった。

忙しいんだろ。出航の時期つて納入とかあるだろうし。

「行きましょうか。コウキ君」

「はい」

ブリッジの入り口付近から自分の席へと向かう。

階段らしき段差を下つて、通信席、操舵席、オペレーター席のある所までやってきたんだけど。

「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」

見詰めてくる五対の眼。

何か聞きたい事でもあるのかな？
ってか・・・。

「何でミナトさんまで俺を見てくるんですか!？」

「え? いいじゃない。ノリよ。ノリ。ね、メグミちゃん」

「え、あ、はい。ノリだと思います」

何だよ? ノリって。

「はあ……」

「あら。溜息なんて良くないわよ。幸せが逃げるもの」

誰のせいですか。誰の。

「操舵席が二個ありますね。正面がミナトさんで隣が俺って所ですか?」

「うん。そうね。じゃあ、そうしましょう」

はい。僕は気付いてしまいました。

ここってさ……。

「……」

気まずいよね。

本来の順番がブリッジ入り口から見て、左からメグミさん、ルリ嬢、ミナトさんだったでしょう。

現状では、左からメグミさん、ラピス嬢、ルリ嬢、セレス嬢、俺、ミナトさんの順。

問題は二つ。

一つは左から見詰めてくる金色の瞳。

セレス嬢。俺はそんな珍しい人間じゃないぞ。

ただの平凡な男さ。特別な事なんて何一つ……結構あるけど、それでも一般人だよ。

二つ目は対比。

どう考えてもおかしいでしょ。

副長、ゴートさん、プロスさんの苦勞が今なら分かる気がします。でも、俺はもつと肩身が狭いよ。

だって、男性と女性の比率が一对五だけ。その集團の真っ只中にいるんだぜ。

やばい。無理です。

秘書課の皆さんのおかげで多少は慣れましたが、まだまだ駄目です。少女だらうと何だらうと女性は女性。苦手なんです。

・・・あ。そうだった。

「ええっと。これ、食べる?」

ポケットから飴を取り出してセレス嬢に見せる。

「・・・何味ですか?」

「ええっと。イチゴ味・・・だね」

「・・・頂きます」

「ええっと。どうぞ」

困った時のお菓子。

うん。何個か潜ませておいて助かったね。

餌付け・・・じゃなくて、間を取る為にはお菓子が一番ぞ。

子供は喜んでくれるからね。

しかも、飴だからなお良い。実は僕自身も緊張を紛らす為に先程まで食べていました。

「ええっと。美味しい・・・かな?」

「・・・(コクツ)」

「そっか。まだまだたくさんあるから、食べ終わったら言ってね」

「……(コクッ)」

恐る恐るは僕も同じです。

はい。そこ。笑わない。

聞こえてますよ。ミナトさん。

「何をビクビクしてるのよ？ コウキ君ってば本当に初心なんだから」

「う、初心なんかじゃないですよ。初対面なんですから緊張して当然です。」

ましてや、女性……なんですから」

「もう。これくらいの歳の女の子に緊張してどうするのよ」

苦笑して、俺の隣までやって来るミナトさん。

「私はミナトっていうの。よろしくね。セレスちゃん」

「……(コクッ)」

飴食べてるから返事できないよね。

「ああ。可愛いらしいわぁ」

それは同意です。でも、即刻抱き締められるのは凄いと思います。

ま、ミナトさんだもんな。母性がくすぐられたか？

「……痛いです。……舌、噛んじゃいました」

「あ。ミナトさん。飴を食べてるんですから抱き付いちゃ駄目ですよ」

「え、あ。ごめんなさい」

パツと離れてシユンとするミナトさん。
ま、母性の暴走だな。よくある事だ。ミナトさんなら。

「・・・でも、とっても暖かいです」

「そっか。じゃあ、もう一回」

今度はゆっくりと優しく抱き締める。

あ。なんか凄く安らいでるな。セレス嬢。

母は強いつてか？ これ・・・口にしたら拳骨喰らうよな。
ミナトさんってまだ。

「何かしら？ コウキ君」

「いえ！ 何でもありません！」

やっぱり鋭いよ。ミナトさん。

「うん。また抱き締めさせてね。セレスちゃん」

「・・・はい」

ゆっくり離れて微笑みかけるミナトさん。

セレス嬢もちよっと笑ったかな？ 無表情の顔を緩ませるなんて本当に凄い。

「よろしくね。ルリちゃん」

その後はルリ嬢とラピス嬢へと向かっていった。

きつとミナトさんなら二人も甘えさせてあげられるだろう。

ルリ嬢は年齢的に照れて抱き締めさせてはくれなさそうだが・・・。

ラピス嬢とセレス嬢はまだ四、五歳ぐらいかな？ 大人として護つてあげなくちゃ。

「……………」

ん？ 服の裾が引つ張られてる。
ええつと。セレス嬢か？

「……飴」

「あ、うん。いいよ。はい」

気に入ってくれたのかな？

「……三つ」

「三つも食べるの？ 虫歯になっちゃっよ」

「……（フルフル）」

首を横に振る。

ええつと。何を否定したんだろう。

ま、いいか。きちんと歯を磨かせれば。

「はい。嚙んじゃ駄目だよ」

「……（コクッ）」

……俺はいつも嚙むけどさ。

「……ありがとうございます」

「うん。どういたしまして」

きちんとお礼が言えるなんて偉いな。

昔の俺はどうだったんだろう？

「・・・どうぞ」

小さな手に掴まれた三つの飴。

一つをラピス嬢に、もう一つをルリ嬢に手渡した。

そっか。皆にあげようと思ったのか。

ハハハ。優しい女の子だな。

「ああ。セレスちゃん。可愛過ぎよ」

それを眼の前で見せられてまたもや暴走してしまいましたとさ。

「・・・」

暖かい眼差しで少女三人衆を見詰めるメグミさん。

ふと眼があつた。

「・・・食べます?」

「私はいいですよ。この子達にあげてください」

「そうですね。そうします」

ただの飴だったけど持ってきて良かったな。

セレス嬢、ラピス嬢はちょっとだけ微笑んでくれたし。

ルリ嬢は・・・もしかして、睨まれますかあ!?

な、何かしたのか? 俺。

テンカワさんといいルリ嬢といい何か怒らせるような事したかな?

睨まれるような事をした覚えはないんだけど・・・。

「・・・ルリ」

「何ですか? ラピス」

「・・・悪い人じゃないと思う」

「そんなのまだ分かりません」

コソコソと何かを話しているルリ嬢とラピス嬢。
「ってか、あの二人って知り合いなのか？」

「うん。何かさつきから違和感ばっかりだな。」

「テンカワさんはパイロットなんかしてるし。」

「ルリ嬢はあの他人を遠ざけるような感じじゃないし。」

「ルリ嬢とラピス嬢が知り合いみたいだし。」

「何よりも二人に睨まれる理由が分からん。」

「何なんだ？ 一体。」

「アキトさん」

「……ああ。イレギュラーだ。本来いない筈の人間がいる」

「マエヤマ・コウキさん。ミナトさんと知り合いみたいです」

「ミナトさんと？ 確かに一緒にいたからな。どんな知り合いなんだ？」

「分かりません。でも、かなり親しいみたいです」

「……ミナトさんにはツクモさんと幸せになってもらわないとな」

「はい。ミナトさんはツクモさんと幸せになる筈だったんです。」

「それを今回の歴史では叶えてあげましょう」

「そうだな。それがミナトさんにとって一番の幸せだ」

第五話

「ええつと。これをこうして・・・」

現在、俺専用のアサルトピットからOSとかを改良中。
想像通り好きに動かせるといっても戦闘経験不足は否めないしな。
それを補うべく、俺は秘策を使った。

調整してシミュレーションで試してまた調整。

これをひたすら繰り返す。

・・・ま、それだけなんだけどさ。

とにかく、俺に最適な調整を見つかるまでやり続けるつもりだ。

そうしないと足手纏いだろう。

ま、ヤマダ・ジロウみたいに突っ込んで自ら窮地にいくような事はしない。

そもそも俺の出番があるか分からんけど。

それでも、ま、やらないよりはやった方が良いだろう？

いざって時に困るし。

「おお〜い！ マエヤマア！」

「ん？ この声はウリバタケ氏か。はあい！ 何ですかあ！」

振り返るとウリバタケ氏が手招きしていた。

格納庫はうるさくて堪らん。

仕方ないけどさ。

「テンカワが用があるってよ！ ちょい降りて来い」

用って何だろう？

ま、いいや。どっちにしろ、ちょっと待って欲しい。

「ちょっとだけ待って下さい！ もう少しなんでえ！」

「急げよお！ テンカワも忙しいんだからなあ！」

出来るだけ急ぎますから待ってくださいって。

「ええっと。補正値はこれくらい。リミッターは俺の身体なら耐えられるからちよっと緩めるか。」

伝達速度は最高値で。あれ？ あんまいじくると怪しまれるか？

基準が分からん。

あんま変な設定にすると変な眼で見られる。

「ま、まあ、試していたって言えばいいか。おし。とりあえずこんなもんかな。」

ウリバタケさあん！ 今、行きまあす！」

降りる時に使うワイヤー？ みたいなのに捕まって降りる。

飛び降りられるんだけどね。六メートルぐらいなら問題ないよ。

でもさ、普通じゃないじゃん、それって。

あくまで僕は一般人を目指しているの。

「・・・来たか。ついて来い」

あの・・・怖いんですけど・・・。

「ええっと。どこに行くんですか？」

「付いて来れば分かる」

「あ、そうですか」

強引だよ。拒否できないし。

「……………」

「……………」

ああ。無言。間が保たない。

「…………お前は……………」

話しかけてくるテンカワさん。

何だ？ 何を言われるんだ？

「はい。何でしょう？」

「…………ミナトさんと…………いや、なんでもない」

「はあ……………」

ミナトさんがどうかしたのかな？

「着いたぞ」

「ここは…………シミュレーション室ですか？」

「ああ。予備といってもパイロットだからな。実力を把握しておきたい」

あ、リーダーとしての責任感ですね。分かります。

ああ。良かった。何されるのかってヒヤヒヤしてたんだよ。

「シミュレーターに入れ。一対一だ」

一対一ね。ま、やれるだけやりますか。

「場所は火星。フレームは0G戦フレーム。何か質問は？」

何でわざわざ火星なんだ？

ってか、ネルガルもネルガルだよな。

何故あえて火星フィールドをシミュレーターに導入した。

知っている人には分かるが、知らない者には謎以外の何ものでもないぞ。

「……」

ジーンと見られているんですけど？

「いいのか？ 悪いのか？」

「あ。すいません。大丈夫です」

待っていてくれたのか？ 悪い事したな。

「それじゃあ、始めるぞ」

その声を合図に手をコンソールに置く。

切り替わる正面モニターの映像。

まるで本当に戦っているかと思う程の臨場感だ。

以前体験したゲームとはまったくの別物。

まあ、あっちは遊び用だったから仕方ないか。

「……行くぞ」

イミディエットナイフを片手に接近してくるテンカワ機。

「・・・未来予想。誤差は？」

視覚からの情報だけじゃない。

俺はナノマシンの恩恵でフィードバックレベルを限界以上に高められる。

・・・あんまり高めすぎると痛みとかも感じるみたいだから、これも後で調整だな。

フィードバックレベルの向上は結果として、イメージだけの機動を超えて、

ほぼ無意識な反応にまで対応するようになった。

そして、俺が急遽開発したソフトの・・・見得はいけないな。

遺跡からロードしたソフトの機動予想というソフトを機体のハードにインストール。

これは相手方の運動性能、武装、体勢などから敵機体の能力を把握し、

現状からどう動いてくるかを予想するといつもの。

俺が持つナノマシンとこのソフトのお陰で・・・。

「ほっと」

見える。見えるぞお。

「何！？ 避けられた」

俺、いや、私にも未来が見える。

「チー！ これなら！」

「あ、やばっ」

ラピットライフルが火を吹きました。

とりあえず避難です。

「右手にナイフ、左手にライフル。・・・よし」

機体に持たせ、的確にイメージする。

自らの身体と機体とを融合させ、己の身体とする。

・・・次は俺のターンだ。

「オオオッオ」

隠れていた建物から身体を乗り出し、対象物にラピッドライフルをぶちまける。

機動予想で先を読み、そこへライフルを放てば命中する筈。

「・・・・・・・・」

・・・凄まじい旋回で避けられました。

ま、理論上なので確実ではないのですが・・・。

何でしょうか？ あの機動は？

あんな事したら内蔵傷めるっての。

横も縦も凄まじいGが掛かってる筈。

俺は耐えられるかもしれないけど、普通の人にはまず無理。

良く耐えられたな。もしや、テンカワさんも普通じゃないのか？

「まだまだあ！」

おいおい。

回避能力が凄まじ過ぎるでしょ？

あれだけ連射して一発も当たらないなんて。

ん？ 弾切れが近い？

とりあえず止めだ。当たらない射撃に意味はない。
意味ある射撃なら無駄弾でもいいが。

「・・・次はこちらから行くぞ」

俺がライフルをしまった途端、テンカワ機は再度突っ込んできた。
得物はイミディエットナイフか。
ならッ！

「ハアアア！」

俺もナイフで応戦だ。

飛び込んでくるテンカワ機に俺も突っ込む。

「・・・考えもなく飛び込んでくるな」

「嘘だろ！？」

そのまま鏢迫り合い？
なんて事を思ってたらいつの間にか空いてた方の手にライフルを持
ってましたよ。

「終わりだ」

共に接近している状態での乱撃。
普通なら確かに終わりだろう？
でも、俺は残念ながら普通じゃないんでね。

「オオオオオオ」

機体を回転。

一発一発を的確に避けていく。
最小限の動きで。

「何!？」

それが俺には可能だ。

この恐ろしい程の動体視力ならな。

・・・回転のGがありえない程に凄いけど。

「ハアアア！」

ガキンツ。

嘘お！ あの一瞬でライフルを捨ててナイフに持ち替えただつて？
ありえないでしょ。どれだけ高機動戦に慣れてるの？ って話だし。
わざわざライフル側から攻撃したのに意味ないじゃん。

「やるな。まさか、避けられるとは思わなかったぞ」

「もう一杯一杯ですよ」

実際、そんな感じですよ。

ありえない機動にありえない反応速度。

俺はいいよ。色々と人間離れしてるから。

でもさ、貴方ってただの人間だよな？

激しく疑問に思っんですけど・・・。

「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」

鏢迫り合い。

テンカワ機は両手にナイフを持ち俺の攻撃を受け止めていた。俺は片手で押し続ける。

駄目だ。片手対両手じゃいつか跳ね返される。

その為に・・・離脱だ！

「ほっと」

機動兵器でキック。

ついでにディストーションフィールドも纏わせて頂きました。ゲキガンキックってか？

「グッ・・・」

蹴り飛ばして、同時に後ろへと跳ぶ。

これで距離は取れただろう。

経験が浅い俺としては近接距離は避けたい。

出来るだけ遠くから攻撃しないと絶対に勝てない。

間違いなく、相手は相当に経験を積んでいるだろうから。

・・・テンカワさんってコック志望だったよな。

何があつたらこんな場慣れしたパイロットになれるんだ？

もしかして・・・今のテンカワさんって未来から来たテンカワさん？

いや、でも、だったらもつと歳取ってるよな。

それにこっちの世界のテンカワさんがいないのもおかしいし。

まあ、何かしらの細工をすればナデシコに来させない事も出来かないけど。

とにかく、今のテンカワさんは成人前のテンカワさんで間違いはない筈だ。

何があつたか知らないけど、それでも間違いはない筈だ。

でも、それにしちゃあ経験豊富そうだよな？

やばい。頭が混乱してきた。

・・・あ。・・・今、気付いたんだけどさ。
俺ってもう十九歳だよな。じゃあテンカワさんより年上じゃない？
何で敬語で話してるんだ？ ま、いいけど。

「戦闘中に考え事はいけないな」
「おわつと！」

いつの間にか接近を許していました。
ナイフで斬りかかられました。
ギリギリで避けられました。

「あ、危ねえ・・・」

どうにか助かったって感じ。
下手するとさっきので負けてたな。

「・・・あれも避けるか。充分に間合いは詰めた筈なのだが・・・」
フッフッフ。動体視力と反応速度なら負けないぜ。
経験不足を補うにはそれしかないからな。

「・・・」
「・・・」

ナイフでの接近戦を終えた後はライフルでの射撃戦。
互いにライフルを構えて、機動しながらの戦闘を行う。
上下左右斜め。

状況を的確に判断し、最善の位置へと移動する。
スラスタ―全てを駆使して、自分の出せる最高速度で移動し続ける。
そうしなければ当たるとお互いが分かっているからこそ。

止まらない。妥協できない。勝つ為にはそれしかないから。だが、何故だろう？ まったく勝てる気がしないのだが……。

「グッ！」

「ン！？」

クソッ。フィードバックが強すぎた。右腕が焼けるように痛え。下げよう。

必死にライフルを避けながら、俺はOSを書き換えた。

……ふう。

痛みが引いたな。

反応が良いのは助かるけど痛みまで来るのはいただけない。何かしらの対策があるまでこの状態は禁止だな。

「良く当てたな。右足が使い物にならない」

俺が右腕を犠牲にしたようにテンカワさんも右足を犠牲にしていたらしい。

つて事はまだ勝機はある。

「オラアアア」

全身にフィールドを纏いながらテンカワ機に突っ込む。

……足から。

「……………」

対するテンカワさんは助走をつけて飛び込んできた。

……ライフルを出す素振りはない。

なら……。

「イメージ。イメージだ。全てのディストーションフィールドを右足に集中。蹴り倒す」

全てのDFを右足に回し、その足から突っ込む。

現在の俺が出せる攻撃の中で最大級の攻撃力を持つ攻撃だ。これで終わらなければ負けたようなもんだと思ってくれ。

ガンッ。

金属同士が衝突した音。

俺の機体の右足とテンカワ機の右手が正面から衝突していた。ディストーションフィールド同士の真っ向勝負か。

面白い。やってやろうじゃないか。

DF同士の衝突は凄まじい衝撃らしく、俺の機体もテンカワ機も吹き飛ばされた。

俺がその衝撃で眼を回している時にテンカワ機が強襲。コクピットに拳を叩き込まれて負けてしまいました。

「クソ……。負けちゃった」

やばい。かなり悔しい。

「いや。良くやったと思う」

クソッ。それは勝者の余裕か。

「そう悔しがらな。俺はエステのテストパイロットを一年間やって

いたんだ。負ける方がおかしい」

「・・・一年？　すると、サイゾウさんに拾われてからすぐにテストパイロットになったって事か？」

「どういう事だ？　アキト青年に何があったんだ？」

「・・・お前は どうして 予備パイロットに？」

「俺が 予備パイロットになった理由ですか？」

「・・・ああ。お前から頼み込んだのか？」

俺から頼み込んだ訳ではない。

そりゃあ最終的には自らの意思だけど、きっかけは別にある。

「なんかネルガルがプロデューズしてたゲームで最高記録を出してしまいました。」

それでパイロットに適正があるとかでスカウトされました」

「すると、お前はパイロットとしてナデシコに来たという訳か？」

「いえ。パイロットといっても予備ですし、パイロットはおまけに過ぎませんよ。」

ゲーム機でパイロットとしての実力が計れる訳ないじゃないですか」

ゲームは所詮ゲームだ。

確かに今のシミュレーションに近いものはあったけど、ゲームで適正を計るのは間違っていると思う。」

「では、何故、ナデシコに？　お前の目的は何だ？」

鋭い眼光で睨みつけてくる。

こ、怖いって。

それにしても……。

「理由……ですか。そうですね。放っておけないからですかね」
「放っておけない？ 何がだ？」

……視線が鋭くなった気がする。

「俺が途方に暮れている時にミナトさんが助けてくれたんです。
だから、ミナトさん一人を戦艦に行かせる訳にはいかないかなっ
て」

「……ミナト……さん？」

「ええ。お世話になりっぱなしでしたから。少しでも恩返しできればな
って思ってる」

これは本当。ナデシコにいる間にミナトさんには多くの選ぶ時がある
と思う。

もちろん、決定権はミナトさんにあるんだけど、
悩んだり、苦しんでいたりに助けてあげればなってる。
てる。

だから、白鳥九十九とか、ミナトさん関連の話は一切してないんだ
から。

「予備になったのも本当に危機に陥った時に何も出来ないのが嫌だ
からです。」

本当は嫌だったんですけど、嫌がってて死んじゃったら本末転倒
かなって」

生きなければ幸せは望めない。

まずは生き抜く事。それが大前提。

「俺のちっぽけな力で誰かを護れるのならそれでもいいかと思っています。」

ミナトさんに言われたんですよ。一人で出来る事なんて限られてるって」

「……………」

「だから、とにかく身近な人を護ろうと思います。」

地球全体とか、木星蜥蜴でしたっけ？ そんなのを一人で背負いきれる訳ないんで」

「ッ！」

「まずは自分。その次に大切な人。それで、もし、まだ余裕があるのなら他の人の事も考える。」

そうやって幸せを求めるものだって俺は習いましたから」

自分を犠牲にして誰かを救う。

それじゃあ幸せになれないんだな。

自分の犠牲が救われた誰かを苦しめるかもしれないし。

幸せになるって簡単そうに見えて本当に難しい。

特にこんな戦争の時代なんてね。

「理由は放っておけないから。」

目的は……そうだなあ、無事に生き抜いて、幸せを求める為ですかね。」

俺は生き抜きますよ。ナデシコクルーも護りきつてね」

どれだけ異常な力を持っていても所詮は人間。神じゃない。

出来る事と出来ない事があるんだ。

出来ない事を出来ると突っ走る事も時には大切かもしれない。

もしかしたら、本当に実現させてしまえるかもしれない。

でも、俺にはそんな事は無理だと思う。

なら、出来る事を全力でやるしかないだろう？

きつと、それが俺の生きる道なんだよ。

「・・・一人じゃ限界がある・・・か」

何か思い当たる事でもあったのかな？

「これは俺の人生観ですよ。テンカワさんに押し付けるつもりはありません。」

テンカワさんにはテンカワさんの考えがあるでしょうから」

「いや。参考になった。そうだな。一人が背負うのに世界は重過ぎるな」

世界を背負う？

話が大きいな。

でも、世界を舞台に戦う人間もいる。

たとえば、そう・・・。

「それでも、足掻いて、足掻いて、無理だと理解しても足掻き続けて。」

いつか無理だった事すら乗り越えてしまっ、どんな困難も打ち破ってしまう。

そんな不可能を可能にしてしまう人もいますけどね」

物語の主人公ってそんな感じ。

どれだけ逆境に立たされても諦めない心で打ち勝ってしまう。

眼の前にいるテンカワさんになら、あるいは・・・。

「足掻く・・・か。今の俺にピッタリの言葉だ」

足掻く事がピッタリ？

どういう事だろう？

「良い言葉だ。足掻く。決められた運命にも足掻き、非情な現実にも足掻き……。」

「そして、いつか、俺が望んだ光景を見る。それが俺の目的か……。」

神妙な顔付きで話すテンカワさん。

その表情から全てを理解する事は出来ない。

でも、テンカワさんが隠し切れない苦悩と責任という重圧に押し潰されていく事は分かる。

完全に原作のアキト青年とは別人なんだってこの時に理解した。

本質的にアキト青年とテンカワさんは違うみたいだから。

あの時のアキト青年は逃げの構えだったからな。

このテンカワさんは必死に足掻き続ける攻めの姿勢。

いや、根本的には同じなのかな？

劇場版のアキト青年こそ今のテンカワさんと　　。

「……同じだ。同じなんだ。どうして気付かなかったんだろう。」

いや。ありえないって否定していたのか」

「……どうかしたのか？」

「い、いえ。何でもないです」

間違いない。

このテンカワさんは本来の時間軸の未来からやって来たアキト青年だ。

身体は原作開始時と同じ。でも、経験とか、考え方とか、そういうのは劇場版のアキト青年。

実体のないボソソジャンプ？ いや、でも、そんな事ってありえるのか？

「あの、機体の調整とかしたいんで、もういいですか？」

今は考える時間が欲しい。

「ん？ ああ。時間を取らせてすまなかったな」

「あ、いえ。良い経験でしたから。また御願います」

一礼して、急いで格納庫へ向かう。

今は自分のアサルトピットに閉じ籠りたい。

考えても無駄かもしれないけど、自分の考えは纏めておきたいからな。

・・・今度、ミナトさんに相談しようかな？

「悪い人間ではない。腕も確かだった。彼ならナデシコを護ってくれるだろう」

「そうですね。アキトさんが言うのならそうなんでしょうね」

「だから、悪い人じゃないって言った」

「そうでしたね。ラピス」

「・・・ルリちゃん。俺達は足掻くんだ。無理かもしれないが、それでも足掻き続けよう」

「はい。あんな未来はもうたくさんです。足掻いて、足掻いて、足掻き続けましょう」

「ああ。不可能を可能にしてやる。足掻き続けて、諦めなければ、いつか、いつか・・・」

「・・・アキトさん」

「・・・アキト」

「協力してくれるか？ ルリちゃん。ラピス」

「何度も言ってるじゃないですか。私はアキトさんを支え、助ける為にここにいるんだって。」

貴方が望まぬ限り私はいつまでも貴方を助け続けます」

「アキト。私はアキトの眼、アキトの耳、アキトの手、アキトの足、アキトが望めば私も望む」

「・・・そうか。頼むな。二人とも。一人で背負いきれなくても皆となら背負いきれるんだ。」

俺だけじゃ無理でも皆がいれば・・・」

「それじゃあアキト君は未来からやって来たって事？」

「・・・かもしれないんです」

ミナトさんの部屋にお邪魔してお茶を頂いています。

ミナトさんとは同棲・・・コホン、一緒に暮らしていたので、あんまり緊張とかはありません。

うん。一年間だしね。流石に慣れるよ。

んで、相談に乗ってもらっています。

ミナトさんも分からない事ばかりだと思いますが、聞いてくれるだけで考えが纏まるから不思議。

やっぱり凄くなって改めて実感します。

「でもさ、ボソソジャンプってそういうものなの？ 身体ごと飛ぶんじゃないの？」

「ええ。その筈なんですけどね。でも、ボソソジャンプってレトロ

スペクトだっけ？

とにかく、身体を一度分解して過去へ戻って未来へ具現化されるってシステムなんです」

「ええっと。もうちょっと分かりやすく説明してくれるかな？」

分かりやすくか。俺もそんなに詳しくないんだよなあ。

「間違っているかもしれませんが、それでも良いですか？」

「ええ。コウキ君が考えている通りでいいわ。」

「難しい事は分からないし、大まかな形だけ捉えられればいいもの」
「そうですね。分かりました」

「かいつまんで話す技量が俺にあるかな？ ま、やれるだけやってみよう。」

「ボソソジャンプはある演算器によって管理されています。それがまあ、遺跡って奴なんですけど」

「演算器が管理？ という事は自由に何もかも出来るわけじゃないって事ね」

「はい。だから、時間軸移動も任意には出来ませんし、誰にだって使える訳じゃないんです」

「私には無理って事よね？」

「ええ。例外を除けば無理ですね」

「例外って？」

「いくつかあります。たとえば遺伝子手術を受ける。

でも、これは危険性が高いのでお薦めできませんね」

MCは大丈夫みただけど、一般人には厳しいらしい。

「もう一つはとても簡単です。今でも可能ですよ」

「え？ そうなの？」

「はい。高出力のDFで囲めばいいんです」

「DFって何かしら？」

あ、そっか。まだ知らないのか。

「ナデシコに搭載されている空間を捻じ曲げる事で攻撃を防ぐ特別な障壁です。

いずれ見る事が出来ると思いますよ」

「ふ〜ん。ま、その時まで待つわ」

「ハハハ。そうしてください。」

それで、その高出力のDFに囲まれつつ、導き手が導けばボソソジャンプは可能です」

戦艦でも機体でも、DFと一緒に運べば良い。
ただし、A級ジャンパーがいる事が条件だけど。

「その導き手ってというのがボソソジャンプが普通に出来る人なのよね？」

「流石に鋭いですね。そうなります」

曖昧な情報でここまでの確に理解できてるのは凄いと思う。

「ボソソジャンプが出来る人、ジャンパーって呼びますね、そのジャンパーは三つに分類されます」

「三つ？」

「はい。一つはA級ジャンパー。CCという特別な石？があればDFすら必要とせず飛べる人間。

これがミナトさんのいう普通に飛べる人って認識です」

「CCって何なの？」

「ん〜。そうですね。使い捨ての「ミニケ」って感じですよ。演算器にイメージを伝える為の」
「なるほど。一度しか使えない訳ね」

本当に鋭い。

一度のジャンプで使用されたCCが失くなるって理解している。

「次はB級ジャンパー。これは遺伝子改造を受けた人の事で、CCだけでは飛べません。」

確か、機械の補助があれば可能な筈です」

「そもそもさ、どうやって目的地とか決めるの？」

「イメージです。ここに飛びたいという思いがCCを介して演算器に伝わり目的地へ運びます」

「イメージか。なんだかIFSみたいね。もしかしてさ、ジャンパーの条件って特別なナノマシン？」

「核心突き過ぎです。ミナトさん」

「え？ 当たってるの？」

「ええ。でも、もう無理ですよ。条件はある所で生まれて、ある程度過ごす事ですから」

「何だ。じゃあ、私には無理なのね」

「まあ、そうなりますね」

実は俺がいれば飛べるんだけど、これはまだちょっと秘密かな。

確か遺跡がDFなくても飛べるっていつてたし。

試すの怖いし、しょうがないよね。

あ、俺だけは何度か試したけど、無事に飛べました。

ま、普通に生きるだけなら瞬間移動なんて特に必要ないけど。

時間掛かっても出来る事ばかりだし。

「最後にC級ジャンパー。これはDFに囲まれ、かつ、A級ジャン

パーの先導が必要な人間です。

先導役は機械の補助付きのB級ジャンパーでも大丈夫ですね」

「へえ。でもさ、それなら少なくともAとBは分ける必要がないんじゃないかしら？」

機械の補助があれば大丈夫なんでしょう？」

「それが、ちよつと違うんですよ」

「どう違うの？」

「A級ジャンパーは長距離間の移動が可能。それこそここから月にだって一瞬で行けます」

「へえ。それって凄いじゃない。じゃあ、B級は短距離って事？」

「はい。距離はあまり分かりませんが、少なくともここから月までは無理でしょうね」

理論上、A級ジャンパーは演算ユニットが把握している所ならどこへでも行ける筈。

平行世界という観点を除けばだけど。

「ただし、例外もあります。B級ジャンパーでも長距離移動が出来る例外が」

「遺伝子調整だけで長距離瞬間移動か。実現したら色々と便利そうですね。問題も多いと思うけど」

ええ。火星の後継者の騒乱はそれが原因でしたから。

便利なもの全てが人間にとって良い事とは限らないんですよ。ヒサゴプラン自体はそんなに悪くなかったと思うけど。

「その方法はあらかじめ飛ぶ場所を設定しておく事です。

簡単に言えば、ワープホールを作るって事ですかね」

「ワープホールを作る？ そんな事可能なの？」

「トンネルみたいな概念です。トンネルの中はワープホール。そこ

を抜ければ違う場所みたいな」

「トンネルねえ。それって作れるものなの？」

「正しく言えば、あらかじめ作られているトンネルを飛びたい場所まで運ぶって事ですかね」

確か木連はプラントでチューリップを作っていたよな？

ってことは設計図と材料さえあれば作れるかもしれない。気になるから後で遺跡で調べておこう。

「そつか。それならどこへでも行けるわね。運ぶのが面倒かもしれないけど」

きちんと制御して管理すれば便利だと思いますよ。

大航海時代がやってくるかもしれない。

「それじゃあ俺なりですが、ボソンジャンプについて説明しますね」

「ええ。御願いな」

ウインクありがとうございます。

「んもう。つまんないわね」

最初の方は照れてましたが、流石にもう照れませんよ。

一年間ですから。同棲・・・コホン、同居生活。

「端的に言いますと、

ジャンパーが演算器にアクセスするとまずは身体が粒子として分解されます」

「分解されて弊害はないの？ 構築されないとか」

「それがジャンプミスですよ。」

ジャンパーじゃない者が無理に飛ばうとすると分解されてお終いです」

「こ、怖いシステムね」

下手するもつていうか、簡単に死にますからね。

「その分解された粒子はある特別な波に乗って過去へ向かうんです。直接現地へ向かう訳じゃないんですね」

「直接向かってたら分解、構築がすぐに出来ないじゃない。それじゃ瞬間移動にならないわ。」

それに、時間軸移動についても説明できないもの」

「おお。鋭い」

「ふふん。まあねえん」

過去へ向かってそこで演算器に現在という未来へ送られる。

その時に何かしらの干渉があつて時間軸移動が可能になっちゃうって事か。

「過去へ向かい、演算器によつて再び未来へ送られるそうです。」

その際にイメージしていた目的地で具現化されるそうです・・・」

「ふ〜ん。それじゃあさ、もし演算器に何かしらの不備があったら、ボソンジャンプは何があるのか分からないって事よね？」

「ええ。そうなります」

そう思うと怖いよな。

分解されて違う形に再構築されるなんて事になったら・・・え？
違う形で再構築？　もしかすると・・・。

「お、何か思いついた顔ね。話して御覧なさい」

「ええ。割と現実味があると思うので聞いてください」

「ま、タイムマシンとか言っている時点で現実味なんてないんだけどね」

・・・それは言わないお約束ですよ。

「テンカワさんはこの世界で始めてボソソジャンプした存在なんです」

「へえ。偉大な人って事じゃない」

「ちなみに理論を確立したのはテンカワさんのお父さんらしいです」

「あら？ アキト君の家って優秀な人の集まり？」

「あ。もう一つ補足ですが、物語の主人公だったアキト青年。

彼は単純でおっちょこちょいで直情で熱血漢という典型的な方でしたよ」

「そ、そう。でも、ま、それは物語の話なのよ。こことは違う世界の事なの」

「そうですね。そうしましょう」

もし、今のテンカワさんが未来のアキト青年ならまったく同じ道筋を辿っていると思うんだけどな。

あのクールを地でいくテンカワさんにもあんな頃がありました。

なんて事を周囲が知ったら、皆ビックリするかも。

「悪戯っ子の顔はやめなさい。貴方は顔に出るから分かりやすいのよ」

「・・・そんなに顔に出てました？」

「ええ。やっぱり悪戯っつてのは何食わぬ顔でしなっきゃ」

「よっぽど性質が悪いですよ」

「あら？ 最近悪戯してなかったものね。欲求不満？」

「い、いえいえ。そんな事ありませんよ」

悪戯されなくて欲求不満とかやばいでしょ。

危ない人の末期ですよ。それって。

あ。前の世界の友達にそんな奴がいた気がする。

・・・いや。うん。ま、世の中には色んな人がいるんだよ。

「で、話を戻しますけど」

「ええ。いいわよ」

「初めてとか、そういう事に意味がある訳じゃないんです。

アキト青年がボソソジャンプを過去に行っているという事実だけ覚えておいてください」

「既にボソソジャンプは経験済みって事ね。初めてはとっくの昔に捨てていたと」

な、何か、違う響きに聞こえました。

「ボソソジャンプが過去に戻ってから未来に再度送られるというシステムならば、

一度粒子とされた存在はどこかに隔離され保管されているとも考えられませんか？」

「未来に送るのではなく、その時間軸になるまでどこかに保管されているという事ね」

「はい。それで、きちんとした手順でボソソジャンプをすれば正確に保管されるけど、

何かしらの不備で保管に失敗したとしましょう」

「イメージが伝わり切らなかつたとか、分解し切れなかつたとか？」

「まあ、どんな理由かは分かりませんが、そんな事があつたという仮定です」

「ええ。分かつたわ。その仮定で話を進みましょう」

「はい。もし、保管に失敗して、そこに似たようなものがあつたらどうしますか？」

たとえば、作りかけの書類があつたとします。その未完成品と完成品があつて

「完成品のどこかが何故か消えていたら、未完成品から補完するって話よね。」

もしくは未完成品を完成品を参考にして完成させるとか」

「そういう事です。過去のアキト青年と未来のアキト青年がいて、未来のアキト青年の粒子が不完全なら過去のアキト青年を使って完全にしたいと思います」

「ま、穴はありそうだけど、そこまでおかしな話じゃないわね」
「多少の穴は見逃してください」

そもそも思い付きですし。

きちんとした理論展開した訳じゃないんだからさ。

「補完し終わって同じような完成品が二つ出来上がってしまった。そんな時、ミナトさんなら二つある完成品の内、一つをどうしますか？」

「ま、あえてとっておくか、いらないつて捨てちゃうわよね」

「ええ。ま、それはどっちでもいいんです。」

とっておいたのなら、未来のアキト青年が望んだ場所、望んだ時期に具現化されるだけです」

「捨てられたなら何も起きないだけって事ね。でも、どうでもいいってどういう意味よ？」

「大切なのはどちらも同じような完成品だという事です。」

「遺跡は過去のアキト青年を未来のアキト青年になるように作り変えてしまつたんですよ」

「あ。そっか。未完成品を完成品にしちゃつたんだものね」

「はい。物凄く簡単に言うて過去と未来が混ざつちやつたんです。」

過去と未来の二人のアキト青年が今のテンカワさんという一人の人間として」

「なるほど。うん。割といけてるんじゃないかしら」

「ですよ。過去と未来とが入り混じった人間。知識や記憶や身体能力なんかもです。」

「そうならば、身体は過去で意識は未来でみたい不思議な事態も成り立ってしまう訳ですよ」

割と良い案だったと思う。

「じゃあさ、次は私の考えを聞いてみてよ」

「お、流石はミナトさん。考え付いたんですね」

「ええ。でも、私のはコウキ君のより穴があるわ」

「いえいえ。是非とも聞かせてください」

「そうね。でも、その前にお茶の御代わりを用意しましょう。すっかり冷めてるわ」

「・・・あ」

話に夢中で忘れてた。

ああ。一つの事に熱くなっちゃうのは悪い癖だよな。

.....。

「それでね」

はい。お茶を飲みながらの再スタートです。

ズズツと美味しいお茶を頂きます。

「私も不備の状態での保管という点では一緒なの。そこからがちょっと違うのよ」

「ほお。お聞かせ下さい」

ちょっと違っつてどんな違いだろう？

「私は現実世界で補完されるんじゃないかと思うの」

「げ、現実世界って何ですか？」

何です？ その魔法の世界みたいな響きは。もしくは夢の世界とかですか？

「現実世界っていうか、本人としての身体がある世界の事。」

粒子の状態で補完されている世界を保管世界とでも呼びましようか」

「それじゃあ、現存している人間に情報としての粒子が混ざり合っ
て一つの個体になると？」

「あら。少ないキーワードでそこまで分かるだなんてコウキ君って結構頭いいじゃない」

「ハハハ。どうもです」

褒められるのはちょっと照れるかな。

「ふふふ。詳しくは分からないから結構適当なんだけどね。」

粒子になったって根本的には同じ身体じゃない？

それなら、自分と同じ存在なんだって認識するんじゃないかしら
？」

「むう。なるほど。既に具現化されていてもそれは足りない状態と
して認識。」

だから、粒子として身体に混ざりあう事で補完する訳ですね」

「ええ。遺跡が完成品としての形を認識していれば、その形で具現
化しようと思つて頑張ると思うのよ。」

だから、不完全な状態にいるのが嫌で補完させたみたいなの」

なるほど。そんな考え方もあるのか。

「でも、それでは矛盾が生じませんか？

それじゃあボソソジャンプする度に過去の自分を補完する事になつちやいますよ。」

常に完成品に近づけようとしちやいますもん」

「不備の状態での保管という事が前提よ」

「不備の状態つて事は欠陥している何があるつて事ですよね。」

現実世界での補完では欠陥している所を補えないんじゃないですか？」

「だから、何かしらの不備があるんじゃない。」

たとえば、成長する以前の身体とか。現にアキト君は過去のアキト君の身体なんでしょう？」

おお。なんだかそれらしい。

「それらしい理由です」

「でしょ？」

笑顔でウィンク。

ミナトさんつて結構可愛らしい所もあるんだよな。綺麗なだけじゃないんだ。

「あ、でもですね、それが正しいとして、いつ補完されるんですか？保管世界での補完は別にいつでもいいですが、現実世界での補完はタイミングが掴めませんよ」

どれくらい過去に戻るのかは知らないけど、下手すると幼少の時とかに補完してしまう可能性もある。だつて身体はあるんだから。」

「それがミソよ。これは予想でしかないけど……。
そのタイミングこそジャンパーが望んだタイミングなんじゃない
のかしら」

「ジャンパーが望んだタイミング？」

「経験ないから分からないけど、もし走馬灯という形で記憶を思い
返していたら？」

「あんな幸せがあつた。あの頃に戻りたい。そんなのがイメージと
して伝わっていたら？」

時期の指定か。

普通なら出来る筈がない。

けど、逆にイメージに不備があるからこそ可能になったとも考えら
れるか……。

「ジャンパーが望んだ時期に具現化したい演算器。でも、そこには
既に具現化している対象が。」

あれ？ あれは具現化の途中なのでは？ それじゃあ完成させな
いとして」

「具現化したい対象が既に存在していて、しかもその存在が完成品
に比べて不完全だから、

その対象を演算器が責任を持っていじくるって訳ですね」

「ええ。いじくるっていうか、まあ、そうよ。完成させようと頑張
るのよ」

ふむふむ。何か色々と分かってきた気がする。
もし間違つていても、俺はこれで納得しよう。

「要するに、粒子としての不備を補う為に演算器が頑張っちゃった
結果、こうなっちゃったって事」

「なるほど。演算器の責任感ある行動が記憶や能力のみを逆行させる。」

そんな不思議な事態を作りあげてしまった訳ですね」

ああ。謎が解けたらスッキリした。

ま、完全に解けた訳じゃないけどさ。モヤモヤが消えたんだからいいだろ。これで。」

「納得できたみたいね。安心して疲れちゃったかしら」

「ハハハ。そうですね。今日一日ずっと考えてた気がします」

「そっか。はい」

ええっと。はいつて？

「ええっと。あの・・・」

「いいじゃない。偶には。サービスしてあげるわ」

「あ、えっと、その・・・ですね・・・」

「ほら。早く来なさいよ」

女の子特有の正座に似た座り方で、太腿の上を手でポンポンと叩いている。

これって、あの、その、噂の・・・。

「嫌かしら？」

「え、あ、いえ、むしろ、嬉しい限りというか、でも、その緊張するというか」

「いらっしやい。コウキ君って眼を離すとすぐ抱え込んだじゃうから心配で」

あれ？ 何の魔力だろう。

身体が勝手にミナトさんの方へ向かっている。

「はい。素直でよろしい」

ミナトさんの隣に座り込む俺。

ミナトさんは優しい笑顔で見詰めてきて、気付いたら頭がミナトさんの太腿の上になりました。

後頭部に幸せの感触が……。

「ふふふ。何だかコウキ君が幼く見えるわ」

僕は恥ずかしくて何も見えません。

「もう。眼なんか瞑っちゃって。可愛らしい」

これは完全に遊ばれているね。

うん。なら、いいや。存分にこの感触を味わおう。

ああ。柔らかくて安心する。

「ふふふ」

何ですか。その笑みは。

「何かね、子供が出来たらこんな感じかなって思ってた」

こ、子供……。

そっか。ミナトさんもいつか結婚して子供を持つようになるんだよな。

俺もいつまでも甘えていられないか。

……。ん。ちよっと胸が痛い。

「でもさ、良かったの。そういう事を話して」
「・・・そういう事って何ですか？」

痛みを堪えて平然を装った。
変な心配掛けたくないし。

「未来の話とかボソソジャンプの話とか。誰かに聞かれてたら困るんじゃない？」

ま、確かにね。

特にボソソジャンプの件とかネルガル所属の戦艦で言うもんじゃないよ。

でも、大丈夫。

「大丈夫ですよ。解決済みです。」

オモイカネ、あ、オモイカネっていうのはこの戦艦を管理するスーパーAIなんですけどね。

そのオモイカネに頼んで、偽造映像を流してあります」

「ええっと。偽造映像を流す必要があったって事は常に監視されているって事？」

「いえ。そうじゃないです。オモイカネは全艦内を管理していて防犯とかも担当しているんです。」

だから、その気になればオモイカネを介して監視できる訳です」

「や、やっぱり監視できるんじゃない。嫌よ。そんなの」

「ただし、オモイカネを介する事が出来るのはオペレーターだけですよ。」

それ以外だったらオモイカネが許す訳ありませんから」

「そ、そっか。それなら安心・・・って。コウキ君もでしょ!?!? 全然安心できないじゃない!」

「え？ ちょっと待とうよ。俺はそんな事しないよ。あ、えっと。しませんよ」

「でも、ほら、コウキ君も男の子じゃない。そういう事に興味あつたりするんじゃないかなって」

「え。そりゃありますよ。でも、ですね、そういう事はきちんと守ります」

当たり前じゃないか。それぐらい耐えられない男だったらとくにミナトさん自身を襲ってましたよ。

「ええ・・・？ 人の寝顔を勝手に見たりとか、人の着替えを勝手に覗いたりとか。」

そういう事するんじゃないの？」

し、しないって。

した事ないでしょ？ 俺。

「あの・・・俺って信用されてません？」

「ううん。信用してなつきや部屋に入れてあげないわよ」

「ですよ。良かった。・・・ん。なら、何であんな事を言ったんですか？」

あ。そうですね。そういう事ですか。またからかったんですね」

「さあ。どつでしよう」

ニッコリと笑うミナトさん。

ミナトさん。その笑顔は悪戯が成功した時に見せる笑顔ですよ。

「・・・ま、いつか」

「ん？ 観念したの？」

「ええ。ミナトさんと一緒にいられるのなら、からかわれてもいい

かなって思いまして」

「・・・・・・・・」

え？ 無言？

何か反応して欲しいんだけど。

でもねえ、眼を開けたらさ、見てはいけないものを見てしまっただよ。

詳しく言うなら視界の右側に。

・・・状況によっては左側だけど。

一発KOされる自信があるね。この角度からなら。

「ミナトさん？」

「え、う、うん、なんでもないわよ。もう。コウキ君が変な事を言うからいけないのよ」

めっとか言いながら額を叩くのはやめてください。

もう子供じゃないんですから。

「それとナデシコって完全防音らしいですよ。

だから、廊下に声も漏れないですし、偽造映像を流している以上、誰かに聞かれたりバレたりする事はありません」

「そっか。それなら、色々と安心なのね」

色々？ 色々って何だろう？

「あ。そっだ。なら、今日は泊まってく？ 折角だし」

「え？ ええ！？」

い、いや。いいですよ。

「え？ そんなに・・・嫌・・・なの？」

ちよ、ちよっと悲しいトーンで言わないで下さい。

からかわれていると分かっているだけでも罪悪感を覚えますから。

「だ、駄目ですよ。部屋の行き来でさえあんなにうるさいのに泊まったりなんかしたら」

「大丈夫よ。だって、偽造映像流してるんでしょ？ 明日の朝だけ気をつければ問題ないって」

ク、クソツ。これは駄目か。なら・・・。

「ほ、ほら、ベット一個しかないし」

「一緒に寝ればいいじゃない」

「む、無理です」

「嫌？」

グハツ。良心の呵責が・・・。
でも、駄目だって。

「眠れませんか」

「え？ それって」

何を赤くなってるんですか？ ミナトさん。

「俺が眠れません。緊張で溺死します」

「・・・バカ」

え？ 何でバカって言われるの？

「緊張して損したわ」

「緊張するなら誘わないで下さい」

「そっちじゃないわよ！ もう・・・発言に責任を持ちなさいよね」

「えっと、すいません」

「何かも分からずに謝らない！」

「は、はい！ すいません！」

たとえ怒られようと律儀に眼を瞑り続ける俺なのさ。
赤い血で溺死したくないから。

「そ、それにですね。よく考えてみてください。」

今までは別室だったから大丈夫でしたが、同室となると、ねえ、
同じベットともなると、ねえ「

ねえ。分かってくれますよね？

「え？ どうなっちゃうの？」

ニヤニヤニヤニヤと。

分かかって聞いてやる。

「と、とにかく駄目です。そういう事はもっと進んだカップルがするものです」

「・・・年頃の男の子にしては強情ね。これは考えが甘かったかしら」

見えない。聞こえない。何を言っているのかわからない。

「何自分で言っただけで恥ずかしがって悶えて耳を塞いでるのよ。」

カップルって言うのがそんなに恥ずかしかった？

それとも、もつと先の事を想像しちゃった？」

既に緊張＋羞恥心で溺死しそうですが、何か？

「あ。もしかしてそうやって眼を瞑って耳を塞ぐ事で私の太腿の感触を覚えようとしてるのね。

このこの。照れ屋さんのくせに抜け目ないなあ」

や、やめてください。つんつんとかしないで下さい。

既にこの柔らかな感触と芳しい匂いで俺の精神は陥落寸前なんですから。

「じゃ、じゃあ、そろそろ俺は帰りますから」

「あら。早速、如何わしいものを盗み見ようとしてるのね」

「ち、違いますよ。自分の部屋で寝るだけです」

「うん。信用できないな。やっぱりこの部屋でコウキ君を監視してようかしら」

や、やばい。もう駄目！

「え？ コウキ君？」

「し、失礼します。明日、また来ますから」

回避。回避だあ。

俺の理性がなくなる前に。

次の朝、いつも以上に悶々として寝不足になったのは言うまでもありません。

だってさ、夢にまで太腿の感触とか心地良い匂いとか出てくるん

だよ！

耐えられる訳ないじゃん。

ミナトさん。やっぱり俺で遊ばないで下さい。寝不足で死んじゃいますから。

あ。でも、膝枕はして欲しいかな・・・って駄目駄目。

気持ちよさと恥ずかしさとで理性を失いかねん。

あれはそう・・・何かのご褒美としてやってもらおう。

そうすれば、やる気もでる・・・コホン、そんなにされなくて済むだろう。

・・・名残惜しいが致し方あるまい。

って、名残惜しいのか！？ いや。ま、正直名残惜しいけどさ。

・・・今日もしてもらおうかな？

「あ。おはよう。コウキ君」

「ハッ！ お、おはようございます！ ミナトさん」

「何？ どうしたのよ？ そんなに慌てちゃって。」

あ。そっか。昨日の事を思い出して変な事考えてたんでしょう？

「このこの」

朝っぱらからする話題じゃないですよ。ミナトさん。

それとつんつんするのはやめて下さい。

「さ、今日も一日頑張るわよ。コウキ君」

「はい。ミナトさん」

さて、今日も頑張るとしますか。

第六話

「ここはこうして・・・」

「・・・はい」

現在、オペレーター補佐としての仕事を行っています。

といっても、俺に出来る事はセレス嬢に簡単な事を教える事だ。

何でしか知らないけど、ルリ嬢もラピス嬢も殆ど完璧なんだよな。

俺の出る幕がないって感じで。

それなら、二人は自身に任せてセレス嬢を出航前まである程度出来るようにさせておくべきだ。

セレス嬢も優秀なオペレーターみたいだからな。すぐに覚えるだろ。ある程度は習ってきてたみたいだし。

「ある程度の事はオモイカネがやってくれるから。

俺達オペレーターがする事は意思を伝える事だけだよ」

「・・・意思を？」

「そう。だから、オモイカネとは仲良くな。ま、心配ないと思うけど」

『大丈夫』 『セレス良い子』 『仲良し』

ま、オモイカネがこう言うんだから大丈夫だろ。

「ふあ~~~~」

・・・隣で欠伸はやめましょうか。ミナトさん。

「・・・ミナトさん」

「呆れられても困るわ。だって、やる事ないもの」

まあ、言いたい事は分かる。

艦が動いてないのに操舵手なんて必要ないよな。

「あれはどうなんですか？ ええっと、そう、起動手順」

「完璧よ。コウキ君とおさらいしたじゃない」

そういえば、一日に何回かやってるもんな。

「じゃあ、停止手順とか停泊とか」

「完璧。シミュレーションは何度もやってるわ。実際に動かせない以上、仕方ないでしょ？」

・・・うん。駄目だ。やる事なさそう。

「コウキ君こそ、副操舵手と副通信士としてはどうなの？」

「副操舵手の方はミナトさんと練習してるじゃないですか。」

副通信士もメグミさんから色々習って勉強中です」

「あ。マエヤマさん、飲み込み早いですから、もう殆ど大丈夫です

よ」

「だ、そうです」

俺とてやる事はやってる。

欲張り過ぎの兼任役職だが、全てカバーしてやるぜ。

「予備パイロットはどうなの？」

「まあ、それなりです。毎日シミュレーションしてますし、テンカワさんから色々教わってるんで」

闇の王子の名は伊達じゃない。

テンカワさんが未来のアキト青年だって確信してから、積極的に操縦を教わってる。

あれ程の凄腕パイロットは他にいないだろうからな。

間違いなく地球最高のパイロットだよ。テンカワさんは。

「へえ。アキト君ってどれくらい強いのか？」

「そうですね。以前、俺のゲームの話したじゃないですか？」

「ええ。あのトップスコアがどうとかって奴ね？」

「はい。多分、テンカワさんなら更に倍ぐらいのスコアは取れるんじゃないですか？」

初心者の俺があれだけ取れたんだ。

場慣れしているテンカワさんならもっと取れるだろう。

特に一対多数とか慣れまくりだろうし。

あのゲームは殆ど一人で大軍に立ち向かうって形式のミッションばかりだったし。

テンカワさんの十八番だと思う。そういうの。

連合軍のトップクラスを想定してみたいけど、テンカワさんは軽く上回ってるって訳だ。

「あら。コウキ君だってかなりのスコアだったんでしょ？」

「俺は所詮お遊びのレベルだったんですよ。テンカワさんは間違いなくプロです」

俺はナノマシンの恩恵と卑怯なソフトを多用してようやくテンカワさんと同じ土俵に立てる。

ただのIFSであそこまで出来るのはテンカワさん個人の単純な操縦技能。

とてもじゃないけど、俺では敵わない。
良い動きだけど全体的な動きが経験不足だったってテンカワさんに言われたし。

・・・そうだよな。どんな戦場だったって経験豊富な人が強いんだよね。うん。今の俺に出来る事はひたすら経験を積む事か。

「そっか。それなら、コウキ君が戦場に出る事はなさそうね」

そうニツコリ笑うミナトさん。

「ま、そうなんですけどね。頑張ろうって決めた身としてはちょっと拍子抜けかなって」

そりゃあ戦場に出なくて済むのは嬉しい限りだ。

わざわざ死に行きたくないし、有名になりたくはない。
でも、護りたいって誓った身としてはさ。気合が空回りしてたみたいでちよっと情けないかなって。

「コウキ君も男の子だからね。でも、私としては安心よ。

コウキ君が危険な眼にあわなくて済むのは
「そう・・・ですか」

特別な意味なんてないのかもしれないけど、心配してくれてるって思うと嬉しいかな。

「テンカワさんだけに負担をかけるのは心苦しいですが、

その分、俺は戦場でパイロットのフォローが出来ればいいかなって思います」

「うん。責任感があるのは良い事よ。でも、フォローって？」

「情報解析は得意なんですよ。」

ま、オペレーターの補佐が最終的にパイロットの補佐に繋がると
思うんで」

いざ戦闘となるとオペレーターにかかる負担は相当のものがある。
ルリ嬢、ラピス嬢、セレス嬢はかなりのレベルのオペレーターだ。
ルリ嬢は実際に一人で全戦闘をこなしたという実績がある。

でも、だからって辛くないとは限らないだろう？

俺に出来る事があるのなら、三人を補佐して、少しでも負担を減ら
してあげるべきだ。

それが最終的にパイロット、そして、ナデシコを助ける事に繋がる
んだから。

「あ。ルリちゃん。ナデシコの武装を教えてもらえるかな？」

確か俺の知る限りではGBと連合軍への反乱時に使ったミサイルぐ
らいだったと思う。

でも、流石にそれだけじゃないと思うんだ。気がつかない所で違
うのも使ってたりとかしてた筈。

だってさ、二つしかない武装とか恐怖じゃん。後ろから攻められ
らどうするのって感じ。

グラビティブラストなんて前しか撃てないし。

「主砲としてグラビティブラスト、その他に誘導型ミサイルとレ
ザー砲が二門あります」

へえ。レーザー砲なんてあったんだ。知らなかった。

「また、レールガンに至る所に配置し、全方位に対応できるように
しました」

あ。そうなんだ。全方位対応できたんだ。そいつは知らなかった。何だ。後方対応とか出来ないのかと思ってたぜ。杞憂か。

「そっか。配置図とか見せてもらえるかな。艦の全体図とか」「こちらです」

パツとモニターに出して頂く。

正面モニター全体に映してもらったから他のブリッジクルーも何事だってモニターを見ていた。

「相変わらず変な形よねえ」

ミナトさんも相変わらず暢気ですよね。

「ブレードのせいですよ。ディストーションフィールドを発生させる為の」

「そうなんだ。そもそもそのDFってどれくらいの衝撃まで耐えられるのかしら」

「ええ〜と。そうですね」

ルリ嬢の映し出したモニターにDFの説明を載せる。

「DFって空間を歪ませて攻撃を防ぐ訳です。」

だから、ビーム兵器とかグラビティブラストとかそういう光学兵器にはとても有効なんですよ」

「波が伝わりにくいからって事？」

「ま、そんな感じですよ。防ぐっていうか逸らすっていうんですか？ そんな感じですから。だから、実弾兵器には効果はあっても薄いみたいですね」

まあ、高出力になれば耐えられるだろうけど、油断はいけないよな。

「へえ。じゃあ無敵って訳じゃないのね」

「ええ。特に地上じゃ駄目駄目です。油断してちゃいけませんよ。

ま、そこはミナトさんがカバーするという事で」

「そう。お姉さんに任せておきなさい」

同じ資格持ちでも俺とミナトさんじゃ月とスッポン。天と地ほど違う。

俺も一応平均よりは優れていると思うけど、ミナトさんはもうトックラスではって思う程に凄い。

こんな巨大なナデシコをセンチ単位、いや、ミリ単位で修正するとか半端ないと思う。

どっだけ空間認識に長けてるんだよって話。

「あの〜、マエヤマさん」

「ん？ 何かな。メグミさん」

メグミさんもモニターを見ていたみたい。

何か質問でもあるのかな？

「何で地上じゃ駄目駄目なんですか？ 地上と他とで何か変わっちゃ

やうんですか？」

おお。鋭い質問だ。

これを把握してないから後々の悲劇に繋がったんだもんな。

丁度いいから話しておこう。

「メグミさんはこの艦がどんなエンジンで動いているか知ってますか？」

「ええつと。ここには、メインエンジンは相転移エンジンって書いてありますね。」

「どんなエンジンなんですか？」

あ。モニターに出てたか。

・・・何か間抜けだな。俺。

「相転移って分かる？」

「ええつと、実はあんまり・・・」

頭垂れるメグミさん。ま、別に知らなくても日常生活には問題なしね。

「ま、俺もあんまり詳しくないんだけどさ。」

そうだなあ・・・。ほら、水って冷やすと氷になって、火にかけると水蒸気になるじゃん」

「あ、はい。なりますね」

「その変化が相転移っていうのかな。熱っていう外的要因で相が変わってるみたいな」

「うーんと」

「ごめんね。説明下手で」

もつと頭良くなりたいな。

あの難しい事を簡単に説明できるっていう特殊技能が欲しい。

「あ、いえ、何となく分かればいいですから」

「そう？ じゃあ、分かりづらいかもしれないけど、我慢してね。」

相が変わるにはエネルギーが必要になる訳。さっきの例えなら熱みたいなの」

「はい。エネルギーが必要な訳ですね。何もなくて変化する訳ない

ですから」

「そうそう。それで、相の変化にエネルギーが必要なら、

逆に相の変化で何かしらのエネルギーが消費されている訳」

「え〜と、車のブレーキとかで熱が発生するみたいにですか？」

「お。良い例えだね。俺より説明のセンスがあるよ」

「あ、ありがとうございます」

俺ってば説明下手だからな。

難しい言葉を並べて誤魔化すとか良くやってたよ。

だから、逆に質問されると答えられない事が多かった。

「今回の相転移エンジンっていうのはね。

真空の空間をエネルギー準位の高い状態から低い状態に相転移させて、

それによってエネルギーを取り出しているんだよ」

「それなら、真空に近ければ近い程にエネルギーが確保できるって事？」

「お。流石ミナトさん。鋭いですね」

「まあねん」

良く俺の下手な説明で理解できるよ。

俺としては助かるけどさ。

「凄く簡単にいえば、宇宙みたいな真空で一番の出力を得られて、地上みみたいな真空じゃない所ではあまり出力が得られないって事だよ」

簡単に言えばそうなるよな。

火星でピンチだったのも宇宙に比べて出力が足りなかったからだし。

「出力が得られないならDFとかいう奴も低出力になっちゃう訳よね？」

「はい。だから、宇宙空間で耐えられるものが地上では耐えられないなんて事もあるんですよ。」

「グラビティブラストの威力も弱まっちゃうし」

「攻撃力も防御力も下がるとかまずいよな。」

「出来るだけ宇宙空間にいるべきだと思う。」

「何か聞く限りだと結構欠点があるみたいね」

「でも、便利ですよ。半永久的にエネルギーが得られる訳ですから。他のエネルギーは消費したら終わりじゃないですか」

「それもそうね。戦艦として働く分には丁度良いつて訳か」

「ま、そうなります。エンジンの稼働率で色々調整できますから。使い勝手も良いんじゃないですか？」

「スピード調整とか簡単そうだし。」

「ま、整備班は常に点検しないといけないから大変そうだけど。」

「御詳しいのですね。マエヤマさんは」

「ん？ 知ってるのって変かな？」

「おかしいかな？」

「え、いえ。そうではありませんが」

「元々知ってたけどさ。やっぱり乗る側としては把握しておきたいじゃない。」

「もちろん、何度も資料を見直しましたよ。」

「何が目的か分からないけど、機動戦艦なんて名付けてあるんだから、戦う為にあると思うんだ。」

俺はパイロットとかも兼任してるし、生き残る為には把握しておきたい」

「.....」

何だろう？ この尊敬の眼差しは。

普通の事を言っただけです。皆さん。

「少なくとも艦長とか副艦長とか、戦闘指揮のゴートさんは把握している筈です。」

俺は全体的に補佐役ですから、補佐役としては色々な事を把握しておく必要があるかなって」

「あ、ああ。もちろんだ」

ゴートさん。狼狽していると疑われますよ。

いつもの仏頂面で誤魔化すのがベストです。

「パイロットの方々も把握しておくべきですね。」

多分、リーダーパイロットのテンカワさんは知ってるんじゃないですか？」

「.....知ってる」

「ラ、ラピス？」

何を慌ててるんだ？ ルリ嬢。

テンカワさんが知ってるのは当然じゃないか。

未来のアキト青年だし。

「ブリッジは特に戦闘に携わると思っているので把握しておいて損はありませんよ。」

俺はまだ死にたくありませんし」

「そうよね。私もちよっと勉強しておこうかしら」

お勧めします。ミナトさん。

「何だか怖くなってきました。私達って戦艦にいるんですよね」

まあ、戦艦なんて現実味ないもんな。軽い気持ちで乗艦してもおかしくないか。

「落とされない為にリーダーパイロットのテンカワさんを始めとするパイロットがいて、

整備班や艦長、副艦長がいるんです。彼らを信じてあげてください」

「・・・はい。怖いですけど、私も頑張ろうと思います」

「そうだね。メグミさんの通信士って役目も戦闘では大切だと思うから、

メグミさんの頑張りが皆を護る事に繋がると思うよ」

「私の頑張りが皆の・・・」

「うん。それにね、メグミさんだけじゃないんだ。

操舵手のミナトさんだってそう。

オペレーターのルリちゃん、ラピスちゃん、セレスちゃんだって大切な役目」

操舵手にはナデシコの命運が懸かってるし、オペレーターはいつだって大変だ。

「戦闘指揮のゴートさんだって、今はいない艦長、副艦長だって必要不可欠。

提督の経験は俺達みたいな経験不足の集まりにとっては何より大

切なんじゃないかな」

戦闘経験なんて誰もないんだし、戦場で一番大切なのは経験だろうしね。

「あれ？ 副提督は？」

「ええっと」

後ろを見て、いない事を確認。

「どちらかという情操教育に悪い・・・かな？」

「・・・」

「・・・」

何だ？ 何故に沈黙？

「・・・ふふふ」

「ハハハハハハ」

え？ だ、大爆笑？ そんな変な事言ったか？

「ハハハハハハ。コ、コウキ君、笑わせないで」

「マ、マエヤマさん。クスッ。酷いですよ」

笑いながら言っただって説得力ないってば。

「いや。だってさ、ヒステリックである顔はトラウマになりかねないし」

「アッハハハ。もう駄目。お腹痛い」

半端なく笑ってますね。ミナトさん。

「クスッ」

お。ルリ嬢が笑った。

「・・・何ですか？」

と、思ったら睨まれた。

何かしたかな？

「いや。なんでもないよ。ルリちゃんは一番大変だと思うけど、よろしくね」

「・・・それが仕事ですから」

子供に仕事を課するのは心苦しいけどしょうがないか。
出来るだけフォローしようと。

「最後に、ここにいるのはあのプロスさんが選んだメンバーなんだから、間違いないですって」

「コウキ君はプロスさんを信用してるのね」

「俺は色々と兼任してますからね。一応は少しずつかじってる訳じゃないですか。」

だから、一人一人が優秀なんだなって分かりますよ」

ミナトさんの隠れざる技術を発掘したぐらいだ。

プロスさんの眼は凄まじいと思う。

「もちろんです。私が至る所から見つけ出した最高の人材ですから」

おお。プロスさん。いつの間に。

「無論、マエヤマさんも最高の人材ですよ」

いや。そう言われると照れるかな。

「マエヤマさんには色々な役職を兼任して頂いてますから。

大変だと思いますが、改めて御願いますね」

「ええ。任せてくれとは言えませんが、出来る限りの事をやるつもりです」

生き抜かない事には始まらないしな。

やれるだけはやるつもりだ。

「そういえば、プロスさんはどうしてここに？」

うん。俺も気になった。

プロスさんがブリッジに来る必要は今の所なかったはずだし。

「そろそろお昼時ですからな。交代で食事をお願いします」

あ。そっか。忘れてた。

「それでは、始めにハルカさん、レイナードさん、ラピスさん、セレスさん、休憩にお入りください」

ま、妥当かな。

とりあえず俺がいれば通信と操舵に問題ないし。

技量的に一番のルリ嬢がいれば、二人でも回せそつだ。

「じゃ、お先にね」

ミナトさんを始めとしてそろそろ出て行く。

「……………」

「……………」

結果としてルリ嬢と二人つきりになりました。
……ああ。気まずい。

「ええつとき。ルリちゃん」

「……………何でしょう?」

何でそんなに拒まれる?

「俺って何かしたかな?」

「いえ。何も」

じゃ、じゃあ何故に?

ま、まあいいよ。

「ちよつと相談事があるんだけどいいかな?」

「……………何でしょう?」

おお? 今度は真剣な顔付きに。

「武装兵器の事なんだけど……………」

「……………」

何? その呆れというか、予想外というか、そんな感じの反応。

「……………」

「……………何でしょう?」

やっぱり気まずいよ。

「それぞれの武装を誰が担当してるのか聞いておきたくてさ」

「全てオモイカネが制御してくれますが?」

え? オモイカネ任せなの?

あ、そういえば、ミサイルとかもオモイカネ任せだから連合軍に向かったのか。

「レールガンとかもそうなの?」

「ええ。戦艦の攻撃は精密射撃ではなく弾幕を張る事にありますから」

「……………詳しいね。なんか経験があるみたい」

「ッ!?!?」

普通は気付かないよね。

対象が自分達に比べて小さすぎるから弾幕を張る事で退けるのが戦艦のスタイルだって。

「……………シミュレーションの結果です」

「そっか。ルリちゃんも色々想定してるんだ。頼りになるね」

まだ十一歳なのに偉いよな。

……………偉いつていうか、子供に負担かけてる時点で大人失格なんだけどな。

「じゃあさ、もし後方から攻められたらどう対処する？」

「グラビティブラストって前方だけじゃん？ ナデシコを旋回させるのは手間がかかるし」

「・・・そうですね。レーザー砲とレールガンに任せるしかないかと。」

「その為にわざわざレールガンを導入してどの方向にも対応できるようにした訳ですし」

「その為に導入した？」

「まるでルリ嬢が意見を出したみたいだな。」

「ま、そんな権限はルリ嬢にはないか。」

「それだけで大丈夫かな？」

「アキトさんがいるから大丈夫です」

「そりゃあ、テンカワさんぐらいの凄腕なら大丈夫かもしれないけど、」

「最悪の状況を想定するのが大事だと思うんだ」

「テンカワさんだけを頼りにしちゃいけないよな。」

「テンカワさんにだって限界があるんだし？」

「・・・あれ？ ルリ嬢ってこの時期からアキトさんって呼んでたっけ？」

「何かきっかけがあったような・・・。」

「それなら、マエヤマさんならどうしますか？」

「あ、ま、いいか。後で思い出そう。」

「そうだねえ。じゃあさ、レールガンの方を俺に任せてくれないかな？」

「・・・レールガンですか？」

「うん。一応予備パイロットだからさ、射撃とかは苦手じゃないんだ。」

だから、レールガンを任せてもらえばそれなりの命中率があると思うよ」「

ふふふ。射撃向上ソフトを用いれば精密射撃も不可能ではない。

エステバリスと違って射撃に集中できるし、絶対に外さない自信があるぜ。」

「しかし、弾幕としてレールガンを」

「せっかく木星蜥蜴に有効なレールガンを弾幕に使うのはもったいないよ。」

レーザー砲で敵のミサイルとかを防いでレールガンで仕留めるってどう？」

「悪くないですね。でも、マエヤマさんがいない時はどうするんですか？」

む。それは考えてなかった。

「その時は弾幕として使ってくれればいいよ。俺がいる時にだけ操作を任せてくれれば」

「・・・そうですね。分かりました。プロスさんに訊いてみます」

「ごめんね。御願いますよ」

納得してもらえたみたいだ。

良かった。良かった。

「ま、基本的にDFで戦艦を囲っちゃうと思うから必要ないかもしれないけどね」

グラビティブラストを放つ時にもいちいち解除しなつきゃいけないのって面倒だよな。

ま、仕方ないんだけどさ。砲台だけ外に出す訳にはいかないし。

「色々詳しいんですね。マエヤマさんは」

「そうかな？ 普通だと思うけど」

「DFの特性、DFの弊害、武装の事など普通の人では考えない事ばかりです。」

「それに後方から攻められた場合なんて考える人はいません」

「いや。だって、死にたくないしさ」

戦艦に乗るんだぜ。

把握しとかないと怖いじゃんか。

未来知ってるからって危険がない訳じゃないんだし。

「それに、ルリちゃんだって考えてたでしょ？ 皆お気楽だからね。

「考えている人の一人や二人いないと墜ちちゃうよ？」

「お気楽がナデシコの良い所ですから」

「そっか。子供が少ないからさ。お姉ちゃんとしてルリちゃんが面倒見てあげてね」

「・・・子供じゃありません。・・・ですが、任せました」

少女です。が聞けると思ったけど、聞けなかったな。ちょっと残念。

「うん。頼りにしてるよ。お姉ちゃん」

お姉ちゃんとしての自覚がルリ嬢に良い影響を与えるかもしれないな。

うんうん。結構、良い事したみたいだな。俺。

改めて助け出せて良かったって思うよ。

「あの、聞いてもいいですか？」

「ん？ 何だい？」

おお。少しは距離が縮んだか。

ルリ嬢から話し掛けてくれるなんてな。

「マエヤマさんはどうしてナデシコに乗ったんですか？」

ん？ 前にも似たような事をテンカワさんに聞かれたな。

「それは理由とか目的とかって話？」

「はい。天才プログラマーのマエヤマさんが何故戦艦に乗っているのかと」

「ルリちゃんもテンカワさんと同じ事を訊くんだね」

「ッ！？」

何だかんだいって気が合うんだろうな。

一緒に暮らしてた時期があったみたいだし。

合わなかったら一緒に暮らさないだろ？

思考展開とか似てるのかも。

「そうだなあ。お世話になった人を死なせたくないってのと、生き抜く為にとって所かな」

「お世話になった人とは、ミナトさんの事ですか？」

「え？ 良く知ってるね」

「ミナトさんと共に紹介されましたので、接点があるのかと」

「鋭いね。ルリちゃん」

ま、一緒に回ってたんだからそう思われるか。
偶然、同じタイミングで合流したとか思うよりそれらしいし。

「ミナトさんにはお世話になりっぱなしなんだ。

恩人を一人危険な所に向かわせるのは薄情だしさ、役に立てる事があるかもしれないじゃん？」

「・・・ええ。まあ」

納得してもらえなかったかな？

「それでは生き抜く為ってどういう事ですか？」

うん。ナデシコに乗るのが当たり前になってたつて言うのはおかしいよな。

とりあえず、誤魔化しておくか。

「木星蜥蜴が襲ってきてるでしょ？」

「はい。それとマエヤマさんに何か関係があるんですか？」

スーツと眼が鋭くなるルリ嬢。

いやいや。襲撃と俺に関連性はないですから。

「そうじゃなくてさ。どうせ巻き込まれるなら、中心になりそうな所で頑張りたいと思って」

「・・・何故、ナデシコが中心になると？」

うわ！？ 余計に鋭くなった。

「ちょっと考えれば分かるって。軍の情報を見ると他の戦艦じゃまったく相手にならない。」

ナデシコは地球最新鋭。なら、ナデシコは対処可能。違う?」

「・・・理論上は対処可能です」

「それなら、ナデシコが中心になってもおかしくないでしょ？」

まあ、すぐに同系統の戦艦が出来上がってもおかしくないけど」

それでも、施工に時間がかかる事に変わりはない。

コスモスとか後一年ぐらいかかるみたいだし。」

「・・・そうですか。マエヤマさんにはそんな理由が」

「うん。それじゃあさ、ルリちゃんの原因と目的を聞かせてもらっていいかな」

「・・・」

あ。無言。

・・・まづかつたかな？

ルリ嬢ってネルガルに買われて強制だった訳だし。

特に理由はありません、買われただけです、とか言われたら俺も嫌だしルリ嬢も傷付くと思う。

ああ。俺ってばバカ！ 無神経すぎる！

「・・・そうですね。私がここにいるのはここが私のいるべき所だからです」

いるべき所って・・・買われたからって意味？

・・・やばい。罪悪感で胸が痛い・・・。

「目的は幸せになる事です。私が望む幸せに」

あれ？ 予想と違った答え。

「幸せになる・・・か。難しいけど、素敵な目的だね」

「・・・馬鹿にしてます？」

「まさか。俺も似たようなもんだよ」

そう白い眼で見ないでくれよ。

馬鹿になんかしてないんだから。

「笑われるから秘密にしてね」

口元に指を立ててしゃべらないでと忠告。

ま、ルリ嬢は秘密にしてって言った事を誰かに話すような人じゃないだろ。きつと。

「俺の最終目的は幸せになって平穏な生活を送る事なんだ」

「・・・幸せと平穏・・・ですか？」

「男の夢にしては小さいかな？」

「い、いえ。素敵な目的だと思いますよ」

「ハハハ。ルリちゃんもそんな感じでしょ？」

今は戦艦なんかに乗ってるけど、誰だって幸せになりたいと思う。

それなら、こんな戦争なんて早く終わらせなくちゃ」

戦争なんて百害あつて一利なし。俺みたいな庶民にはね。

それに、そもそも戦争の理由がくだらないと思う。

どっちが悪いつて訊かれたらどちらかという地球だと思うし。

いや。どっちも悪いんだけどさ。

どっちかっていうと地球側だね。独立派に核を撃ち込むとかありえないと思う。

「・・・戦争・・・ですか？」

あ。まずったか？

戦争って人間対人間を表す言葉だもんな。

未確認物体からの襲撃は侵略というのが正しいかもしれん。

ま、どうにかして誤魔化そう。

「侵略ってのが正しいのかもしれないけど、いまいち相手側の目的が分からないんだよね」

「相手側って。向こうは知性のない」

「知性がなかったらもつと被害を受けてるって」

知性がないからこの程度で済んでるってのもおかしいでしょ。

知性がないなら野生の獣みたいなものだよ。見境なく破壊するって知性があるからこそこれだけの被害で済んでると思うんだよね。

「それにさ、機械で攻めてくるって事は誰かしらがどこかで制御してるって事じゃないかな？」

「じゃあ、何故接触してこないんですか？」

知性があるのなら、誰かしらに接触すると思うのですが？」

「うん。そうだな。言葉が通じないとか？」

「・・・はあ・・・」

呆れられちゃった。ミスったかな？

「言葉が通じなくても意志の疎通は可能だと思います。」

そうでなければ、地球連合が発足する訳がないではないですか？」

ま、そうだよな。

言葉が通じなくても意志疎通が出来たから国際間で手を取り合う事が出来たんだ。

そりゃあ誰かが通訳としていたのかもしれないけど、

その通訳自体が意思疎通できなければ始まらないし。

「マエヤマさんは鋭いようでどこか抜けてるんですね」

呆れられた果てに嫌な印象を与えてしまった。

抜けてるとか。十一歳の子供に言われるのは情けなくないか？

「ルリちゃんが鋭いんだよ。ルリちゃんは大人だね」

背伸びしてる感じ？ 子供扱いされるのが嫌いって早く大人になりたい証拠でしょ？

「大人にならないければならない環境にいましたから」

ええっと。とても十一歳の子がする表情じゃないんですけど。

憂いとか陰りがある表情とか。本当に十一歳？

「そっか。でもさ、ナデシコなら子供でもいいんじゃないかな？
優しい人ばっかしだし」

ミナトさんがいればルリ嬢は甘えられると思う。

今までは研究所で機械みたいに育てられたみたいだけど、

これからミナトさんが優しく暖かく育ててくれる筈だから。

「私、子供じゃありません。少女です」

おお。ここにきてこの台詞が聞けるとは。

「そっか。それなら、少女として大人の女性に色々と教えてもらいなよ。」

将来立派な女性になる為にもね」

少女も子供だよって言い聞かせるのもいいけど、こつこつ説得方法も悪くないんじゃない？

こつこつ言えば、もっと早くミナトさんとかに心を開くかもしれないし。

「・・・そうですね。そうします」

・・・納得してくれました。

何だろう？　こんなに物分りの良い子だったっけ？

他人を遠ざけるような態度も取らないし。

・・・俺は敵視されてるけどさ。

・・・自分で言ってるってなんか悲しくなってきた。

シュンツ。

「コウキ君。ルリちゃん。交代しましょ」

ブリッジの扉が開いて、ミナトさんの声が聞こえた。
食事を取り終えたみたいだ。

「分かりました。ルリちゃん。一緒に行く？」

「・・・いえ。用があるので」

・・・断られてしまいました。

やっぱり俺には心を開いてくれないか。

「そっか。分かった。じゃ、また後でね」

一人寂しく食堂へ向かいます。

ああ。早く友達作らないと。
ずっと一人で食事とかになったら嫌だしな。
ま、早く食って来て、さっさと戻ってきますか。
今日はカツ丼にしよう。

S I D E M I N A T O

「ええ！？ 同棲してたんですかあ！？」

食堂でご飯を食べてると自然とコウキ君の話題になった。
メグミちゃん曰く……。

「大人って感じですよ。何かお兄さんみたいでした」

ふふふ。それは日常生活のコウキ君を知らないからよ。

「コウキ君って結構子供っぽいよ。初心だし。変な所で負けず嫌
いだし」

「……ミナトさんってマエヤマさんの事に詳しいんですね」

「そりゃあ一年間ぐらい一緒に住んだもの」

「へえ。一年間も……って。ええ！？ 同棲してたんですかあ！
？」

となった訳。ま、同棲してたなんて普通じゃないものね。

「同棲じゃないわよ。同居してただけ」

「で、でも、同じ部屋に男女でいたんですよね」「嫌ねえ。姉弟みたいなものよ」

初めて部屋に入った時なんてカチコチだったし。ふふふ。思い出すだけで可笑しいわ。

「それじゃあミナトさんとは何もありませんか？」

「え？ 特には・・・」

何だろう？ 認めたくない。

それでも、私のペースは崩さない。

「どうしたの？ 惚れちゃった？」

「そういう訳じゃないんですけど、何か頼りになるし。若くして成功してますしね」

・・・何だ。

憧れか。

・・・良かった。

「あら。玉の輿って奴を狙ってるの？」

「そんなんじゃないやありませんよ。でも、成功してて悪い事なんかないじゃないですか」

ま、若い子には魅力的よね。

・・・私もまだ若いけど。

何だろう？ やっぱ私は結婚とかにも充実感が欲しいかな。

「ミナトさんはマエヤマさんの事をどう思ってるんですか？ 姉弟とかじゃなくて、個人として」

「そうね。優しく可愛いわな子って感じね」

優しいし、いじり甲斐があって可愛いし、変な子だし。

「……とっても穏やかな顔してますよ。ミナトさん」

「そうかしら？」

コウキ君といると落ち着くしね。

「セレスちゃんとラピスちゃんはマエヤマさんの事をどう思ったかな？」

メグミちゃん。

小さい子に何を聞いているのよ。

でも、ま、女に年齢なんて関係ないか。

「……悪い人じゃない」

「……優しい人だと思えます」

ふふつ。良かったじゃない。コウキ君。

高評価よ。

飴が効いたかしら。

「そっか。じゃあ、色々とかウキ君を頼るといいわよ。コウキ君って結構世話焼きだから」

子供好きなのかしら？

セレスちゃん達を相手にしている時、とっても優しい眼をしている。

「……分かった」

「・・・はい」

頑張ってるね。コウキ君。

「そうそう。ミナトさん」

ここからは女の子だけの姦しい話みたいね。
メグミちゃんもそうだし、皆良い子みたいだから、これからが楽しみね。

S I D E O U T

「ええっと、プロスさん、艦長とかって・・・」

食事を終えて、再度ブリッジで活動中。

オペレーター、操舵手、通信士の仕事を再度確認して、
ミナトさんの隣の席で一息ついた時、ミナトさんがプロスさんにそ
う問いかけた。

「・・・ええ~~~~」

そうですね。困りますよね。

いえ。プロスさんが悪い訳ではないですよ。

ただですね。ええっと。そう。艦長が悪いんです。

ミスマル・ユリカ嬢が悪いんですよ。

・・・胃薬準備しておこうかな？ プロスさんの為に、まだ外に出ても大丈夫そうだし。

「本来であれば一週間前に着任の予定です」

ルリ嬢、プロスさんを気遣ってあげようよ。

「あれ？ じゃあとつくにいる筈なんだ」

「・・・え、ええ」

・・・今回はマジで冷や汗を掻いてますね。

ハンカチがびしょ濡れにならない事を祈ります。

「大丈夫なんですか？ 遅刻するような人が艦長で」

「・・・」

メグミさんまで。

「副長はどうなのよ？」

「・・・」

ミナトさん。トドメですよ。それ。

「ま、まあ、落ち着きましょうよ。ミナトさん。メグミさん」

き、きつと優秀だった筈。

だ、だって、あんな激戦を生き抜けたんだから。

「コウキ君。遅刻なんかする艦長を庇うの？」

「私、マエヤマさんに言われてこれが戦艦なんだって自覚しました。」

遅刻するような艦長は信じられません」

や、やばい。余計な事を言ったか？ 俺。

ブリッジクルーのお気楽さと団結力こそがナデシコの強さだろ？
それがなくなったらやばいって。

「と、とりあえず、艦長がどんな人かを吟味してみましようよ。ル
リちゃん。御願いでできるかな？」

「分かりました」

モニターに映るユリカ嬢の経歴とピースしている写真。

うん。ピース姿なのはちょっといただけないかな。不真面目に見える。

ま、美人なのは認めるけどさ。

「ほお。戦略シミュレーションで無敗か。凄いな」

ゴート氏が唸る。

まあ、確かに凄いやね。

でもさ、それって参謀とかの役目だと思っただよ。

だって、ゴートさんが戦闘指揮としているんだし、参謀がいてもお
かしくないでしょ。

つてか、原作見た限り、ユリカ嬢の独断で全て行ってた気がする。

副長のジュン君とか書類整理ってイメージしかないし。

あれ？ ある意味、圧倒的カリスマ性と見て良いのか？

ま、プロスさんがスカウトしたんだから、間違いはないんだろうけ
ど。

「いやあ。彼女を引き抜くのは苦労しましたよ」

あ。プロスさん。復活。
意気揚々としていらっしやる。

「へえ。凄いじゃない」

うん。単純に凄いと思うよ。

「……ねえねえ、コウキ君」

ん？

「何ですか？」

「ちよっと耳貸して」

ああ。内緒話ですか。

「……何です？」

「……優秀なのよね？」

「……優秀ですよ。性格はともかく能力に関しては」

「……遅刻するのに？」

「……性格はともかく能力に関しては」

「……そう」

何だろう？ そのやるせない感じ。

「……いざとなったら護ってくれるのよね？」

「……ええ。その為に俺がいるんですから」

「……頼むわよ。コウキ君」

「……ええ」

内緒話を終えて、離れていくミナトさん。

「……………」

「……………」

何だろう？ こっち見てるんですけど。

「どうしたの？ メグミちゃん。ルリちゃん」

「な、なんでもないですよ。ミナトさん」

「いえ。特には……………」

じゃあ、何でだろう？

「……………」

ん？ 裾が引つ張られてる。

ええっと、セレスちゃん？

「どうかした？」

「……………教えて欲しい事があります」

あ、そっか。補佐だもんな。俺。

「うん。何だい？」

「……………ここです」

頼られるのは嬉しい限りだな。

教えられる事なんて少ないけど。

「マエヤマさん、レールガンの件ですが」

「あ、うん。何だい？」

「プロスさんの許可が下りました」

「そっか。ありがとう」

「いえ。優先順位の第一位をマエヤマさんに設定してあります。

操作や調整は御手元のコンソールからどうぞ」

「分かった。後でちよつと調整に付き合ってくれるかな」

「いいですよ。仕事ですから」

おし。これでレールガンが撃てる。

「レールガンって？」

「操作権をもらったんですよ。戦闘中に何も出来ないのは嫌ですからね」

「そっか。コウキ君って誰か欠員が出なければ役目なしなんだ」

「……」

いらぬ存在と言われたようで胸にグサつとききました。

「ごめんごめん。ほら。コウキ君は色んな補佐をしてくれるから頼りにしてるのよ」

「そ、そうですよ。マエヤマさん。そう落ち込まないで下さい」

フォローありがとうございます。

……一応、立ち直りましたから。

「どうしてレールガンなの？ 他にもあつたじゃない」

「レールガンが一番木星蜥蜴に有効ですからね」

「え？ そうなの？」

まだ相手側の戦艦って出てなかったな。

どう説明しよう。

・・・あれ？ それなら、何でルリ嬢、さっき肯定したんだ？

「コウキ君？」

火星大戦から情報を得てたのかな？

ま、相手方がグラビティブラストを持ってたら、

ディストーションフィールドを持っているって気付いてもおかしくないもんな。

あ。チューリップがあつたか。いや。チューリップはDFとか張ってなかつたな。

・・・どうしてだろう？

「コウキ君！」

「は、はい？ な、何ですか？」

な、何だ！？

「無視なんて酷いじゃない」

「え、あ、すいません。ちょっと考え事をしてまして」

「許さないわ」

「ええ！？」

「そうね。今度、ご飯を奢りなさい」

「ええっと」

お金あるからいいけどさ。

何か理不尽じゃない？

「わ、分かりました。ハウメイさんの料理、美味しいですもんね」

「そうなのよお。和洋中全部揃ってて、つついっ食べ過ぎぢやうの

よね」

「・・・食べ過ぎると太」

「その話題は禁止!」

ゴンツ!

「イタツ!・・・久しぶりに拳骨を喰らいましたよ」

ああ。頭が割れるううう。

「女性に失礼よ」

「私もそう思います」

「す、すみませんでした」

理不尽だよ。

「それで? どうして、レールガンなの?」

「火星大戦の映像を調べててですね。」

向こうが重力波、要するにグラビティブラストを放ってきたんですよ」

「あ。じゃあ、DFもあるかもしれないって事?」

「予想でしかないんですけどね」

ま、実際に後々バツタですらDFを纏うし。

レールガンがあると便利だろ。

というか、ミナトさんも良くやってくれるよ。

俺が未来知っているって分かっているのに誤魔化しに付き合ってくれて。

本当に感謝です。頼りになります。

「・・・次はどうするんですか？」

「あ、うん。ごめんごめん。次はね」

セレスちゃんをスルーしていた。

気をつけないと。

「・・・コウキ」

「ん？ ラピスちゃん。どうしたの？」

次はラピス嬢か。

何か色々忙しいな。

「・・・アクトが言ってた。コウキのパイロットとしての腕は確かだっただって」

おお。俺ってば褒められてたのか。

「・・・どうやってアクトが認める技量を身に付けた？」

どうやって訓練したかって事？

俺がそれなりに戦えるのはナノマシンの恩恵と卑怯ソフトを使ってるからなんだけど。

「俺自身はそんなに強くないよ。色々と使い勝手の良いソフトをインストールしてるだけ」

「・・・そんな事したら容量が不足する」

「必要な分を的確に最小限に」

「ん？」

首を傾げるラピス嬢。

うん。可愛らしいね。

「それが基本だよ。無駄を減らして最小容量にして更に圧縮すれば結構大丈夫」

かなりの量が俺の自作で埋まってるもんな。俺のアサルトピットの中。

ま、遺跡からのパクリだけど。

「・・・でも、それと戦闘は違う」

「元々エステバリスのコンセプトはIFSさえあれば子供でも乗れる、だしね。」

多少、銃器とかそういうのが使えれば・・・」

「・・・普通、銃器は使えない」

・・・あ。しまった。

「・・・どうして銃器が使える？」

「そうね。私も気になるわ」

「私事です」

「私も気になります」

嘘！？ 四面楚歌？ 孤立無援？

ゴートさん達まで睨んでる？

「ええつとさ。笑わないでね」

「・・・笑わない」

「銃器が使える笑える理由って何よ？」

いや。だってさ。恥ずかしいじゃん。

「俺ってさ、子供の頃から結構ゲームとかにはまってさ。
シューティングアクションゲームとかやりこんでたんだよ」

「……………」

「……………」

「……………それだけですか？」

「そういえば、コウキ君がスカウトされたのもゲーム機だったもの
ね」

やめて。その呆れた眼。

本気で恥ずかしいから。

「IFSなら撃つってイメージと標準だけ合わせれば撃てるからさ。
だから、ゲームをやりこんでたおかげでイメージは割と簡単に出
来る」

まさかゲームがこうまで役に立つなんて俺も思わなかった。

「それじゃあ普通には使えないって事？」

「俺の経験はエアガンぐらいです」

エアガンと普通の銃と違って全然違うでしょ？

IFSって凄いよね。

イメージだけで万事解決なんだから。

「……………そう」

うん。周りも苦笑とか呆れとかだよ。

「あ。ゴートさん」

「ん？ 何だ？」

「今度、銃の扱い方を教えてくれませんか？ きちんとしたイメージも持ちたいんで」

「一応ね。使えないよりはマシでしょ？」

「これからの為にもさ。」

「いいだろう。時間を取っておけ」

「ありがとうございます」

「これでもうちよつと強くなれるかな？」

「・・・次はどうしますか？」

「おお。またもやスルーしていた。まずいまずい。」

「お。大分出来てきた。後はもうちよつとだね」

「・・・はい」

成長が早くて楽しいな。

・・・教えるのって結構楽しいかも。将来、教師とかやってみようかな？ 知識量だけは半端ないし。」

「うんうん。ちゃんとお兄ちゃんやってるじゃない」

何を暖かな眼で眺めていらっしやるのですか？ ミナトさん。ってか、お兄ちゃんって。」

「……………」

「……全然似てないから無理でしょ。
妖精の兄は凡人。
ハハハ。ないない。」

「……ああ。今日の晩飯は特別なものにしよう。
自分を慰めるのって大切だと思うんだ。」

「……終わりました」

「うん。良く出来たね。偉い偉い」

「……………」

皆して暖かい視線を送らないで下さい。
注目されるの慣れてないんで。」

「今日、ナデシコの危険性について話していました。どうやらかなり詳しいみたいです」

「ナデシコについて詳しい……か。一体何者なんだ？」

「分かりません。それと、何だか木連についても知っているような気がします」

「ナデシコを知り、木連を知る存在。まるで分からんな」

「レールガンの操作権を譲るよう言われました。木星蜥蜴に有効だからと」

「何？ それを認めたのか？」

「害はなさそうでしたので。少なくとも私達よりは使えると思います」

「・・・そうか。武装が足りないと説得して無理矢理導入させたレールガンだからな。」

使えた方がいいのは確かだが、危険ではないか？」

「先日の結論通り、悪い人ではありません。ナデシコに危害を加えるような事はしないかと」

「・・・果たして信じていいのかどうか」

「幸せと平穩を望むと。そう言っていました。」

断言できる訳ではないですが、その言葉に嘘はないと思います」

「・・・頼りになる味方か、それとも、狡猾な敵か。どっちなんだろうな・・・」

「味方であって欲しいですね」

「・・・そうだな」

第七話

「ミナトさん。物語が始まります」

遂に今日、物語が始まる。

合図はヤマダ・ジロウだ。

「え？ 出航はまだ先よ」

「予定が先送りになるんですよ。木星蜥蜴の襲撃で」

原作ではアキト青年が必死になって囷を務めていた。

でも、今回は凄腕パイロットのテンカワさんがいるから問題ないだろう。

囷作戦にそもそも数なんて必要ないし。

「そう。危なくなったら護ってくれるのよね」

「もちろんです」

大丈夫ですよ。当分の間はずっと優位ですから。

「じゃ、いきましょう」

「ええ」

それと今日の艦長不在の危険を訴えて、

マスターキーがなくてもある程度動かせるようにしておかないと。せめてDFとGBぐらいはね。

あれ？ それじゃあ殆どか。

ま、その場で臨機応変に対応しましょうか。

「また考え事？ 私に相談してくれればいいのに」

ん？ 何か言ってるな。

「あ。すみません。何ですか？」

「なんでもないわよ！」

ゴンッ！

「イタッ！ な、何するんですか！？」

「なんでもないわよ！」

なんでもないのに拳骨されるのか？

何て理不尽。

「もう。早くいくわよ」

「あ、はい」

怒っていらっしやるミナトさんの後を追う。

うん。ナデシコに来てもミナトさんと一緒に入社するのは変わらないんだな。

何か不思議だ。

ま、嬉しいけど。

ガタンッ！ ゴトンッ！

「な、何だ？ この振動は？」

慌ててますね、ゴートさん。分かります。こんなに振動するとは思いませんでした。

「ルリちゃん。原因は？」

『おい、プロスのダンナ。格納庫で誰かが暴れてやがるぞ』
「……との事です。映像、出します」

はい。見事にエステバリスが暴れましたね。流石はダイゴウジ・ガイ。やる事が大胆だ。

「ああああ。誰ですか！？ そんな事をしているのは」

「ヤマダ・ジロウさん。出航時に合流予定の正規パイロットみたいですね」

「ヤマダさんですか？ まったく。一体何を……」

額に手を置いて頂垂れるプロスさん。

残念ですが、この程度で嘆いていては身体が持ちませんよ。これからはもっと大変ですから。

あ。胃薬買ってきたんで後で渡します。

「私はヤマダさんの所へ行きますので」

そう言つて、プロスさんは出て行った。

「……ねえねえ、コウキ君」

ん？ また内緒話ですか？

「……はい。何ですか？ ミナトさん」

「……艦長と副艦長が来てないけど、大丈夫なの？」

「……襲撃が始まってから到着するんですよ？」

「……ええつと。本当？」

「……マジです」

「……あらま。良く生き残れたわね。私」

「……ま、それがナデシコクオリティですから」

呆れるしかないよな。

まさか襲撃中に艦長が着任だなんて。

前代未聞だろ？

ま、それがナデシコがナデシコたる所以か。

ガタンッ！ ゴトンッ！

「今度は何だ！？」

落ち着いてください。ゴートさん。

気持ちは分かりますから。

「機影反応。周辺に木星蜥蜴の機動兵器が現れました」

「敵機。上空より接近。接触まで時間がない」

「……連合軍地上部隊と交戦中です。ですが、全滅は時間の問題です」

うん。オペレーター三人娘は流れるような作業だ。

安心して見ていられる。

「キーッ！ 迎撃よ。迎撃しなさいー！」

うん。安心して見てられない。
うるさいです。キノコ副提督。

「マスターキーがない為、本艦は何も出来ません」

マスターキーがないと生活する事ぐらいしか出来ないもんな。
コミュニケーションとかは出来るけど、オモイカネのスペックの半分
も発揮できないし。

「何でないのよ!?!」

「艦長か本社会長がマスターキーを持っています」

「キーッ! 艦長はどこよ! 早く呼びなさいよ!」

「艦長は未だに着任していません!」

「キーッ! キーッ! 何なのよ!?!」

うるさいなあ。

「お前が何なんだよ……」

「コウキ君。素が出てるわよ」

おっと。すいません。ミナトさん。

「って、いつもが偽りみたいじゃないですか」

「あら。違った?」

違いますよ。違うよ。違うよね? もしかして違うのか?
いや。口調が違うただけだよな。いつもこんなだし。

「迎撃よ。主砲を上空に放つの」

「ええ？ それって地上部隊の人に当たりませんか？ 人間として間違ってます」

「そうよね。人間として間違ってるわよね」

「キーツ！ もうとっくに全滅してるわよ」

「そもそもマスターキーがないので主砲も撃てません」

「……………」

お。黙り込んだぞ。

「キーツ！」

うるさいから黙ったままでいてくれ。

「緊急発進よ。急いでドックから出なさい」

お。逃げの姿勢かもしれないけど、状況的には間違ってるでもない。……………」

「何度も申しますが、マスターキーがない為、現状では動く事も出来ません」

……………本当に何も出来ないんだよ。

「キーツ！ このままじゃ一方的じゃない！ 生き埋めじゃない！ 死んじゃうじゃない！」

きちんと現状を把握しておられる。

敵の目標がナデシコだって理解しているみたいだな。

「艦長はどうしてるんだ！？」

「むう。困りましたねえ。遅刻されて沈んでは私の査定が」

あ。プロスさん。いつの間に。

とりあえず、おかえりなさい。

後、お金の問題じゃないと思います。

「プロスさん。暴れてたパイロットはどうなりました？」

「機体を壊して飛び降りて足を骨折して医務室で治療中です」

・・・相当鬱憤が溜まってますね。息継ぎなしですか。

「ねえ・・・コウキ君」

「大丈夫ですよ。そろそろ」

『こちらパイロットのテンカワ・アキトだ。発進許可を求む』

頼りになるパイロットが動き出しますから。

「プロスさん。艦長、副艦長がいませんので、提督権限で許可するべきです。」

このままでは墜ちてしまいます。指揮系統を気にして墜ちたら本末転倒でしょ」

「そうですね。提督。御願いできますか？」

「一機で大丈夫なのか？」

テンカワさんに問うフクベ提督。

ま、テンカワさん一人で大丈夫だと思っけど。

『時間を稼ぐだけだ。困になる』

「・・・許可しよう」

おし。テンカワさん。任せましたよ。

「マエヤマさん。早速で申し訳ありませんが、待機を御願いできますか？」

あ。マジ？

「いや。囿になるのは俺一人で充分だ。マエヤマにはブリッジにいらして欲しい」

「はあ。リーダーパイロットがそう言うのでしたらそうしましょう」

助かりました。テンカワさん。一応、色々とする事があるので。

「皆さん。艦長が来るまでに出来るだけの事をやっておきましょう」

マスターキーがない状態でも出来る事はある筈。

最低でも発進準備にかかる時間を減らす事ぐらいは可能だろ。

「でも、何をすればいいのかわかりません」

そうだよな。実戦なんて初めてだもんな。

でも、いつもやってる事なら出来る。

「艦長も恐らく発進を急がせる。発進の準備を。」

もし出来なくても迅速に出来るよう最終チェックを御願い」

「あ、はい。分かりました」

「それが最善ね。コウキ君」

動き出してくれるメグミさんとミナトさん。

「ルリちゃん、テンカワさんは？」

「もうそろそろ地上に出ます」

「地上部隊はどうなってる？」

「・・・ほぼ壊滅です」

・・・原作通りか。

テンカワさんに期待するとして。

「・・・」

早く来いよ。ユリカ嬢。

物語が始まらないぞ。

タッタッタツ！

強化された聴覚が拾った足音。

やっと来たな。物語のもう一人の主演が。

「おっくれちゃいましたあ！ 艦長のミスマル・ユリカでえゝす。

ブイッ！」

「『『『『ぶいつ！？』『』『』』」

「エステバリス。地上に出ます」

・・・締まらないな。おい。

それと冷静な報告をありがとう。ルリ嬢。
多分、誰も聞いてないけど。

「艦長。指示を」

冷静ですね。フクベ提督。年の功ですか？

「・・・バカ・・・ですか？」

お。ルリ嬢の代わりはセレス嬢か。

何となく今のルリ嬢は言わなさそうだもんな。

「艦長。貴方は」

「プロスさん。叱る前にこの状況から脱出しましょうよ」

死にたいんですか？

「む。それもそうですね。ですが」

「プロスさん」

「・・・はい。艦長。マスターキーと指示を」

「はあ〜い」

いつまでも能天気にいるなんての。

「コウキ君。苦労しそうですね」

「・・・俺がですか？」

「ええ。何か、そんな気がする」

「・・・やめてくださいよ。ミナトさん」

プロスさんの為の胃薬が俺用になったりしたら嫌だな。

ストレスとかには流石に俺の身体も耐えられないだろうし。

「えい！」

マスターキーを入れるのに掛け声は必要ないと思うんだけどなあ。

「マスターキーの挿入を確認しました」

「相転移エンジン起動。核パルスエンジン起動」

「・・・発進準備に入ります」

オペレーター三人娘の合図でそれぞれが作業に移る。

一度、作業に入れば、それぞれがプロミたいなもんだ。無駄なく、最短で準備を終える。

「え〜つと。ユリカに状況を教えて」

そんな中、お気楽そうに後ろから掛かる声。

ま、まあ、このお気楽さがユリカ嬢の強さなのだろう。

そう思わないとこっちは懸命に作業してるんだって思わずイラついてしまう。

「現在、地上部隊が木星蜥蜴と交戦中。ですが、ほぼ壊滅状態にあります」

「ふむふむ」

「ナデシコ周辺を囲むように敵の機影反応。ナデシコからはエステバリスが一機発進しています」

「・・・」

黙り込むユリカ嬢。

考えを纏めてるんだろ。

「ユリカ？」

あ。いたんだ。ジュン君。

「直ちにドックに注水。本艦は海中ゲートを抜け、地上に出ます。
その後、グラビティブラストで背後より殲滅。エステバリスには
敵を引き付ける囮役を」

ま、作戦はかなり有効的なんだよね。いつも。

「うむ。妥当だな」

「良かるう。やってみなさい」

戦闘指揮と提督が許可したのなら、それが実行される。

「発進しているエステバリスのパイロットに通信を」

「はい。通信。開きます」

メグミさんがテンカワさんとの回線を開く。

『こちらテンカワ。どうした？』

「・・・テンカワ？ テンカワ？」

これは爆撃の前だな。

「ミナトさん。耳、塞いだ方が良いでしょう」

「え？ 何ですよ？」

「いいから」

俺はポケットから耳栓を取り出して耳に装着する。
ミナトさんは怪訝としながらも耳を塞いでくれた。
後は・・・。

「・・・え？」

すまない。護れるのは一人だけなんだ。

「アキト！ アキトでしょおおお！ ねえ！ アキト！ アキトっ
てば！ アキトオオオ！」

あ、頭痛い。

耳栓しててこの威力かよ。

「そういう事ね」

「……ありがとうございます」

どうにかミナトさんとセレス嬢は救えた。

「……」

「……え？ 何も聞こえない？」

「……耳が痛いですな」

すいません。救えませんでした。

「……アキトさん」

「……アキト」

耳を押さえる連中を他所にルリ嬢とラピス嬢は心配そうにモニター
を見ている。

え！？ まさか、今の爆撃で被弾でもしたのか？
それはやばいぞ。

『作戦を』

ん？ 大丈夫そうだな。
しっかし、久しぶりの再会だろ。
未来のアキト青年としては元気なユリカ嬢に会えて嬉しい筈なんだけどな。
ま、劇場版の後にどうなったのか知らないからなんとも言えないけど。

「ねえ。アキト。どうしてここにいるの？」
『パイロットとしてだ。作戦を』
「・・・パイロット。そっか。私を護る為に！」

ああ。早く解決しようよ。
命の危機だよ？ 下手すると死んじゃうよ？

「ルリちゃん。音を消しちゃって、映像で作戦を教えてあげて」
「あ、はい。そうですね。そうしましょう」

ユリカ嬢の声は悪いけど邪魔ではない。
話すなら後で存分に話せと言いたい。

「へへへ。アキトオ」

ご機嫌な艦長は置いておこう。
作戦は聞いたんだ。後はこっちの仕事。

「ミナトさん」

「OKよ」

「メグミさんは？」

「大丈夫です」

「ルリちゃん達は？」

「発進準備完了です」

「いつでも行ける」

「・・・大丈夫です」

よし。準備完了。後は指示待ち。

「へへへ。いやん。アキト。早いつて」

いつまでも妄想に浸ってるんじゃないかねえ！

收拾がつかなくなるだろうが！

「艦長。発進準備完了です」

・・・大人だね。ルリ嬢。

俺、今、多分、青筋浮いてる。

「え？ 本当？ うん。了解しましたあ！ 機動戦艦ナデシコ！
発進！」

ピシッと指を前に出すユリ力嬢。

きつと気合のポーズなんだろうな。

「ナデシコ。発進します」

あいつも変わらざるの冷静ぶり。

心から尊敬します。ルリ嬢。

「大丈夫なのよね？」

「心配ですか？」

「それはまあ、ね」

「大丈夫ですよ。ほら」

モニターを指し示す。

そこには一切無駄のない機械的であり、美しい舞いかのように華麗に踊る黒いエステバリスが映っていた。つて、黒かよ!? ピンクちゃうの!?

「へえ。凄いのね」

「無駄のない射撃。無駄のない機動。あれ程の腕を持つパイロットはいませんよ」

本当に一対多数のテンカワさんって凄まじい。これを見ると、到底敵わないって実感するね。

「コウキ君の目標かな？」

「そうですね。俺にあれ程の力が必要なら、必ず」

護る為に必要なら、必ずその領域まで到達してみせる。

「まったく。男の子なんだから」

呆れるの何回目ですか？

「海上に出ます」

さ、終演だ。

「お前の知っているテンカワ・アキトは死んだ」

「・・・アキ・・・ト？」

・・・何？ この展開？

でも、一つだけ確信した事がある。

やっぱりあれは未来のアキト青年なんだ。

それで、ユリカ嬢を拒絶している。

一体、アキト青年に何があつたんだろう？

「失礼する」

「あ。アキトさん」

「・・・アキト」

ブリッジから立ち去るテンカワさんを追うルリ嬢とラピス嬢。

・・・これは二人もテンカワさんの事情を知っていると見るべきだな。

それなら色々と納得ができる。

何故、今のルリ嬢がテンカワさんをアキトさんと呼んでいるのか？

何故、ルリ嬢とラピス嬢が知り合ってたのか？

何故、ルリ嬢が他人を遠ざけようとしていなかったのか？

何故、ラピス嬢がテンカワさんを慕っていたのか？

それは全て、三人が未来の記憶を持っているからだ。

道理でルリ嬢とラピス嬢に何も教える必要がなかったんだな。

既に知っているんだ。あの二人は。

ナデシコの動かし方だって、戦艦運営の知識だって。

ルリ嬢は艦長の経験もあつたし。

それにナデシコがルリ嬢にとって大切な思い出の場所だと知っている。

そっか。それで私のいるべき所って言ったのか。

なるほどね。やっと全てが繋がったよ。

「ミナトさん。またお邪魔していいですか？」

「え？ ええ。いいわよ」

「相談したい事がありました」

「はいはい。お茶用意して待ってるわ」

助かります。

「・・・アキ・・・ト？」

呆然とテンカワさんを見送るユリカ嬢。

そくだよな。初恋の人に逃げられた挙句、死んだなんて言われたら。

そりゃあもう凄いシヨツ。

「・・・カッコイイ」

つて、おいおい。

なにポワッってなつて眼を潤ませているんだよ。

それってあれか？ 憧れの人を見る眼か？

「ユリカ？ 知り合いかい？」

ジュン君。哀れな子。

「アキトは私の王子様。私を大、大、大好きな王子様なのよお！」

「ユリカア~~~~」

・・・君はもうずっとそんな役だよ。ジュン君。

「……………」

あ。般若が近付いてきてますよ。
僕は退避をお勧めします。無理だと思っけど。

「艦長！ 副長！ 遅刻とはどういう事ですかあ！」

「は、はいいいいい！」

「す、すみませんでしたあ！」

南無。

「……………あの……………」

「あ。セレスちゃん」

そうだった。ルリ嬢もラピス嬢もいなくなっちゃったしな。
セレス嬢だけじゃちょっと無理か。

「うん。手伝うよ」

ルリ嬢とラピス嬢の席じゃちょっと小さいから、自分の席のコンソールからアクセス。

実はオモイカネとの接触はこれが初めてだ。

優先順位的にも最下位だし、俺がオペレーターの仕事をする必要はなかったしな。

でも、ま、セレス嬢一人にやらせるのはちょっと心苦しいし、まだまだ経験不足は否めない。

フォローするのが俺の役目だし、頑張りますか。

「……………凄いです」

そうかな？ いつも通りだけど。

「・・・私なんか伝達も遅いですし、分からない事ばかりです」
「ん〜。そんなに自分を卑下しなくてもいいんじゃないかな」
「セレスちゃんはこれから色々覚えていけばいいんだから」
「・・・でも、私だけ役立たずで・・・」

そっか。ルリ嬢、ラピス嬢はほぼ完璧。
それに比べて自分はずて余計に気になっちゃうんだろうな。
あの二人は特別だったのに。

「そんな事ないよ。セレスちゃんだって頑張ってる」
「・・・そんな事ありません」

む。落ち込ませちゃったかな。
でも、競争心を持つなんて心が成長してる証拠かな。
これも彼女にとって良い機会になりそうだな。

「じゃあさ、これから毎日一緒に特訓しようか」
「・・・特訓・・・ですか？」
「そうそう。ルリちゃんやラピスちゃんに負けないように。俺も付き合っからな」

ついでに言えば、仲良くなれる良い機会だし。
少しは慣れてくれると嬉しいんだけど。

「・・・それってデートのお誘いですか？」
「・・・え？」
「・・・え？」
「・・・」

・・・良くそのような言葉をご存知で。
幼くても女って事ですか？ セレス嬢。

「アツハハハ。コウキ君。甲斐性見せなきゃね」
「・・・ミナトさん」

なに大爆笑しているんですか？
ま、まあ、デートとしてなら付き合ってくれるのかな？

「・・・ええっと、うん、そんな感じ」
「・・・ポツ」

ええ！？ 赤くなつた！？
つてか、擬音付きですか？

「もう。コウキ君ったら、女たらし」

ええ！？ 何ですか？ その不名誉な勲章は。
つてか、いつまでもニヤニヤしてないで下さい。

「ええっと、それで、どうかな？」
「・・・襲いません？」

襲わねえよ！ そんな首傾げて可愛らしく変な事を訊くんじゃねえ！

「駄目よ。コウキ君」

もう勘弁してください。ミナトさん。
襲う筈ないじゃないですか。

「だ、大丈夫だから。一緒にオペレーターの練習するだけ」
「・・・残念です」

ええ！？ 何故にシユンとなる！？

「罪な男ね。コウキ君」

楽しんでるしょ？ ミナトさん。

「・・・御願います」

「コチヨンと頭を下げるセレス嬢。
うむ。任されました。」

「うん。頑張ろう」

あ。いつの間にか手がセレス嬢の頭を撫でていた。
む。これが魔力か。

「ちゃんと寝かせてあげなさいよ。幼いんだから」
「・・・ミナトさん。楽しまないでくださいよ」

「ニヤニヤと変な事を言わない！
ミナトさん。自重。」

「とりあえず今は予定コースに軌道に乗せようか」
「・・・はい。方向を修正します」

基本的にこういう移動はオモイカネがやってくれる。

ミナトさんには戦闘とか、緊急事態の時に役目が回ってくる訳だ。後は繊細な移動とか？ 機械以上に正確とか本当に尊敬しますよ。

「うん。こつちとしては指示が欲しいんだけど」

チラツと後方確認。

うん。まだ説教中だね。

いつ終わるのやら。

「そうですね。何をしたらいいかわかりませんもん」

「そうだよな。あ、じゃあさ、メグミさん、さっきの戦闘で何か異変がないかとか。

各部署に訊いてみてもらっていいかな？」

戦闘だし、緊急発進だし、かなりの振動が生じたに違いない。突然の揺れで誰かが怪我したら困るだろ？

「あ、はい。分かりました」

やる事が見つかったからか、颯爽と作業を始めるメグミさん。うん。退屈だったんだね。分かります。

「コウキ君。私は？」

「・・・そうですね。じゃあ、ミナトさんは進路方向に何もなければ確認してください。

ないと思いますが、何か障害物があったら困るので」

「りょくかい」

海の上だから何もないと思うけどさ。

何かしらの島とかあったら避けないといけないし。

ま、オモイカネがそんなコースは取らないと思うけど。

「・・・予定コースに乗りました。あの・・・次は・・・」

「あ。乗った？ それじゃあもう大丈夫。」

次は特にやる事もないから・・・うーん、そうだなあ、オモイカネとお話してるといいよ」

「・・・分かりました」

オペレーターとオモイカネの仲が良ければ良い程、伝達速度も増す。やっぱり相性つてのがあるんだろうな。

それにオモイカネにしたってまだ経験がないから子供みたいなもんだ。

子供同士、仲良くしてくれた方がこっちも安らぐ。

「ふふふ」

「何ですか？ ミナトさん」

突然笑い出したりして。

「艦長より艦長みたいよ」

「そんな事ないですって」

責任者とか無理無理。そんな器じゃないから。俺。

「俺は補佐してるだけですよ。説教さえされてなければ艦長だって同じ指示を出してた筈です」

多分だけど。

「それでもよ。おかげでこっちも冷静でいられるわ」

「そうですね？ ま、それなら、俺にも意味があったって事ですね」
全部サブ的ポジションだから、実は何にもやってないんだよね。俺。
実は一番の怠け者では？

「コウキさん。各部署、特に異変はないようです」

「そっか。それは良かった」

「ただ整備班の方で一人転んだ方がいて。」

腕を打撲してしまったようですが、軽症なので問題はないと」

「うん。一応医務室に行くように言っという。何があるか分からないし」

「分かりました」

これから長い旅を共に過ごすんだ。

ちよつとした怪我でもきちんと治してもらわないと。
焦る必要もないし。

「やっぱり艦長らしいわよね」

だから、無理ですって。

「・・・アキトさん」

「・・・すまない。心配かけたな」

「いえ」

「・・・アキト。苦しそう」

「大丈夫だ。少し取り乱したただけだから」

「アキトさん。やっぱり、まだ・・・」

「さっきのユリカがあユリカと違う存在なんだって事は分かっている。心配はいらぬ」

「・・・アキトさん」

「・・・アキト」

「・・・」

「それで？ 相談事って何？」

「ほぼ毎日お邪魔してるミナトさんの部屋。」

「やばいな。普通に当たり前になってる。」

「本来なら違反行為だから、自重しないといけないんだけど。」

「・・・やっぱり落ち着くんだからしょうがない。」

「テンカワさんが未来のアキト青年かもしれないという話はしましたよね？」

「ええ。確証は持てないけどって話ね」

「今日、確信しました。間違いなくテンカワさんは未来のアキト青年です」

「テンカワ・アキトは死んだ。」

「これは劇場版でルリ嬢に言った言葉だ。」

「もうお前の知っているテンカワ・アキトではない。」

「だから、もう俺の事は忘れて、幸せを見つけてくれ。」

「俺はそう解釈している。」

「アキト青年は何よりルリ嬢の幸せを望んでいたんだと思う。」

そして、ユリカ嬢にも。

「艦長と対面した時の無表情な顔。あえて突き放す言葉。

艦長が来る前から囿を提案するという行動。間違いなくテンカワさんは未来を経験しています」

スムーズに行き過ぎだ。

確実に知っているとしか思えない。

「そうね。違和感がないようであったもの。

時間を稼ぐつてもマスターキーがないけどすぐに着くって前提だし。対応が的確過ぎだわ」

「はい。それに普通幼馴染を突き放しますか？

久しぶりの再会だから何かしらあってもいいと思うし。

そもそも再会した途端に死んだなんておかしいと思います」

「俺はお前の知っている俺とは違うんだ。

これも相手が自分を知っていて何かしらの思い入れがある事を前提にしてるわよね。

久しぶりに再会した幼馴染に言う台詞ではないわ」

「変わったね、とか言われたら分かりませんが、会って唐突に告げる台詞じゃないですよね」

「私もそう思うわ」

対応がお粗末過ぎた。

あれじゃあ、二人の間に何かあったとしか思えない。

しかも、艦長は分かってなかったみたいだからテンカワさんの方が一方的に。

今頃、プロスさんあたりが艦長とテンカワさんの関係性を疑ってるんじゃないか？

あ。でも、原作は突然の参入だったけど、

今は前からのテストパイロットって形での参入だからプロスさん達と信頼関係が築けてるのかも。どうなんだろう？ そのあたり。

「アキト君が未来のアキト君だった。相談事はそれだけ？」

何をそわそわしているんだろう？

「いえ。それは、まあ、大事なんですけど、もっと大事な事があります」

「もつと？ 未来のアキト君だって確信した以上に大事な事があるの？」

「ええ。想定外中の想定外が」

漸く繋がった点と点が。

「・・・それは？」

「未来の記憶を持つのはテンカワさんだけじゃないかもしれません。ルリ嬢、ラピス嬢も、もしかしたらボソソジャンプで補完された可能性が」

あの電子の妖精と闇の王子を支えた妖精の二人が記憶を持って帰ってきたんだ。

闇の王子と共に。おそらく、未来を変える為に。

「・・・ルリちゃんとラピスちゃんか？」

「ずっと違和感があったんです。ルリ嬢の周りに対する対応とか、ラピス嬢のルリ嬢とテンカワさんに対する行動とか、ルリ嬢のテンカワさんの呼び方とか」

「呼び方って？」

「ルリ嬢は基本的に苗字呼びです。名前を呼ぶのは心を開いている証拠。」

この時期にテンカワさんに心を開いている訳がありません。会って間もないんですから」

きっかけは確か、ピースランド。

テンカワさんがアキトさんに変わるには長い月日ときっかけが必要だった。

今回、その過程が全て省かれている。

「・・・そうよね。それに、アキト君を見詰めるルリちゃんの視線には何か特別なものがあつたわ」

それはどんな感情だろう？

アキト青年を大切な人と公言したルリ嬢の想い。

それをテンカワさんは理解しているのだろうか？

ルリ嬢の視線にはどこか悲しみが含まれていた気がする。

「それじゃあ、アキト君、ルリちゃん、ラピスちゃんの三人は未来の記憶を持っていて、

多分、悲劇を回避する為に活動しているって事？」

「そうだと思います。ミナトさんには説明しましたよね。結末を」

簡単にだが、ミナトさんにはボソソジャンプの危険性と物語の結末を説明した。

原作も劇場版も。

「ええ。ボソソジャンプの独占に走った組織との決戦でしょ？」

それに、そこまでの間に多くの人が犠牲になった」

ヤマダ・ジロウの死。

サツキミドリコロニーの住民の死。

火星に残っていた民達の死

合流した女性パイロットの死

白鳥・九十九の死。

そして、拉致された火星出身の人達の死。

きっと未来を知るテンカワさん達はそれを回避する為に動くと思う。

「もし悲劇を知っていて過去に戻れたらどうにかして回避するのは当然だと思います。」

俺も過去に戻ってやり直したいと思った事がありますし」

「・・・それって、この世界に来た事を後悔してるって事？」

「え？」

悲しそうに見詰めてくるミナトさん。

・・・あ。誤解を解かないと。

「ち、違いますよ。後悔なんてしてません」

「・・・でも、前の世界にはコウキ君の友達とか家族が・・・」

「そ、そりゃあ、会いたいと思う事もありますよ、俺はもうこの世界の住民ですよ」

俺がいた世界に戻りたいと思う事もない訳ではない。

でも、こっちの世界の居心地も悪くないさ。

「・・・後悔はしてないって事？」

「ええ。充実してますから。後悔なんてしてませんよ」

後悔はない。

俺が選んだんだ。

そして、居心地の良い所を見つけられた。
俺のあるべき所を。

「単純に恥ずかしい事とか後悔した事とかをやり直せたらって意味
です。」

あの時ああしていればって思う事結構ありません？」

俺は結構あるけどね。

テストが後一点足りなくて落ちたとかマジで泣ける。
後悔してもしようがないんだけどさ。」

「ええ。まあなくはないわね」

良かった。納得してもらえたか。

「そんな感じですよ。きっと俺が過去に戻ったら最善を目指して頑張
ると思うんですよ。」

それが最善なのは分かりませんが」

「でも、運命は変えられないと言っじゃない？」

あれ？ ミナトさんらしくないな。

「運命は変える為にあるんですよ。というか、運命なんて信じませ
ん」

そう教えてくれたのはミナトさんじゃないですか。

「うふふ。そうだったわね」

うん。やっと笑ってくれた。

「人間の一生ってたくさんの選択肢を迫られると思うんです。学校の選択とか、結婚とかだって選択です」

二択、三択、四択。

何択かは分からないけど、必ず突きつけられる選択の時間。生きるって選択じゃないかなって思う。

選ぶ時をやめた時が死なんじゃないかなって。

「俺はその選択全てに道があるんだと思います」

どの道を選ぼうと決められた道がある。

どれを選ぶとか、必ずそれを選ぶっていう事が運命という訳ではない。

ただ選択しただけ。

そこに運命なんてものは関与しない。

「運命とかじゃありません。運命だったら決められた道は一つしかないでしょう？」

俺は全ての選択肢に道があるって思っています」

「それじゃあ、本当に運命なんてないのね」

「はい。運命を変える、というより自身の行動一つで、

世界なんて簡単に変わってしまうのではないのでしょうか？」

「平行世界の概念ね」

「そうです。違う選択をした自分が平行世界に存在している。

自分はその一つの存在に過ぎないんだと思います」

医者になっている俺がいたり、サラリーマンをやっている俺がいたり、

こうやって違う世界に飛ばされる俺がいたり。

己という個が一つの選択をただけで、世界は枝分かれする。それが人間一人一人に与えられる世界を選択するという特別な能力。だから、世界は無限大なんだ。可能性は無限大なんだ。

「難しい事を言うのね。コウキ君は」

「ま、これは俺なりに運命と選択の関連性を考えただけであって、本当はどうなのかなんて分かりませんよ」

ま、難しい話は放っておいて。

「それで、話を戻しますけど」

「えっと。何だっけ？」

「テンカワさん達の話ですよ。悲劇を回避するって奴」

「あ、ああ。そうだったわよね」

・・・頼みますよ。ミナトさん。

「だから、平行世界という概念がある限り、運命を変えられないなんて事はありません」

そういえば、遺跡も歴史の修正力なんてないって言ってたな。

「そっか。それじゃあアキト君達は」

「ええ。テンカワさんが言っていました。決められた運命に足掻くって。」

きつとそれを表していたんだと思います」

運命に足掻く。現実に足掻く。

あれが、テンカワさんの決意の言葉だったんだ。

「それで？ コウキ君はどうするの？」
「え？」

真剣な表情でミナトさんが見詰めてくる。
俺はどうする？

・・・そんな事、考えてもいなかった。

「彼らに全部話して協力する？ 知らない顔して傍観する？ 補佐に徹して影から支える？」

「え？」

・・・狼狽するしかなかった。

息つく暇もなく、考えが纏まらない。

「私はどれでも良いと思う。だって、コウキ君の人生だもの」

俺は・・・どうするべきなんだろう？

「私はコウキ君の出した結論に従うわ。コウキ君を助けるって決めたもの」

「・・・ミナトさん」

「悩みなさい。必死に悩んで悩み抜いて、それで得た答えなら、きっとそれが正しい答えだから」

全て話して協力する・・・まだ信頼し切れていない相手に俺の秘密は話したくない。

俺が知っているのは所詮物語中の人格。内面までは理解していないのだから。

知らぬ顔で傍観する・・・傍観するつもりはない。回避できる悲劇なら回避したいし。

でも、もしかすると俺が何もしなくてもテンカワさん達の力で回避してしまつかもしれない。

裏から補佐に徹する・・・この方法が今の状況では一番適していると思う。

でも、いつまでもそれでいけるとは限らない。いずれボロを出して誰かしらに疑われかねない。

どうする？ どうするのがベストなんだ？

どの方法にもメリットとデメリットがある。

とてもじゃないが、最善なんて。

「ほら。おいで」

・・・え？

「焦らなくていいわ。時間はまだたっぷりあるもの」

気付けば下からミナトさんを見上げていた。

後頭部に柔らかい感触があつて、鼻腔に心地良い匂いが広がって。

ああ・・・。凄く落ち着く。

「・・・」

「・・・」

無言だった。

でも、嫌な沈黙じゃない。

心が落ち着いて、頭から靄が晴れる。

「・・・ミナトさん」

「ん？ なぁに？」

優しく暖かい心地の良い声。

何だろう？ ミナトさんの全てが俺を癒してくれる。

「・・・どれが最善かなんて分かりません」

「うん」

「・・・でも、ミナトさんは、俺を助けてくれますか？」

「ええ。私がコウキ君を支えてあげる」

・・・それなら、何だって出来そうだな。

「・・・あの、ですね」

「なあに？」

「・・・眠ってもいいですか？」

「ふふふ。いいわよ」

凄く気持ち良くて。

心が落ち着いて。

俺の瞼はいつの間にか閉じられていた。

「おやすみなさい。コウキ君」

次の日、眼が覚めてから俺が混乱したのは言うまでもない。
何で同じベットで寝てるんですか・・・？ ミナトさん。

第八話

「そうはいかないわ！ ナデシコは私の物よ！」

出航の日から何日か経った。

随分と長い間、ふらふらと飛び回っていたけど何だったのかな？

デモンストレーションって奴？

ま、ナデシコの性能をアピールしなきゃ企業としてはやっていけないか。

「ん〜。ホウメイさんの料理は相変わらず美味しいわね」

「そうですね。あ。セレスちゃん。溢してるよ」

「・・・ポツ」

現在、お昼の休憩中。

ミナトさんとセレス嬢と食事中です。

俺はAランチ、ミナトさんはBランチ、セレス嬢はお子様ランチ。

俺的にはBランチの方が良かったかな。好物が多い。

お子様ランチは子供が多いから急遽考えたらしい。

小さな事でも変化があるんだなって実感した。

「それにしてもですね。ホウメイさんって一人で大丈夫なんですかね？」

テンカワさんがコックを担当していないという事実。

完全にパイロットのみらしい。

すると、だ。ホウメイガールズを除けばホウメイさんが一人でキッ

チンを回している事になる。

ハウメイガールズとて料理は出来るのだろう。だが、彼女達は接待係であつてコックではない。

本質的に料理を作るのはハウメイさんのみだ。今更だが、ナデシコクルーは軽く百人を超す。

まあ、通常の戦艦ならもつと多いみたいだけだ。

ナデシコは、ほら、オモイカネのおかげでかなりの人数を減らせるから。

スーパーAI恐るべしつて所。

で、ま、とにかく、百人を超す全クルーの朝昼晩の食事を一人で受け持つてる訳だろ？

それつてさ。

・・・凄まじいと思うわ。

「そうよねえ。美味しいのは嬉しいんだけど、大変そうよねえ」

チラッとキッチンを見ながらミナトさんはそう告げた。

・・・忙しなく動き回っています。ハウメイさん。

俊敏過ぎるぜ。スプリットが半端ない。

「キッチンに後何人か入れてもいいと思うんですけどね」

経費削減か？

それにしたつて厳しいと思う。

「ハウメイさんレベルの人が見つからなかったのかしら？」

「ま、確かに美味しいですもんね」

和洋中全てに対応できてこの味は流石だと思う。

「でも、補佐する人ぐらいいは入れてもいいんじゃないですか？

他の方達は接待がメインみたいですし」

「そうよねえ。コウキ君って料理できたかしら？」

「出来ますけど趣味程度ですよ。素人ですもん」

アキト青年は、参入時には既に料理人として活動していた。

そんなアキト青年でもまだまだだね。レベルだ。

到底、俺が力になれる訳がない。

「そっか。私もそんなに上手じゃないからなあ」

「ミナトさんの手料理美味しいですよ。俺は好きです」

「うふふ。ありがと。でも、やっぱり、ホウメイさんと比べるとね」

ま、それは否めない。相手はプロだもの。

でも、家庭料理ってホツとするじゃん。

ミナトさんの料理はそんな感じで落ち着く。

「セレスちゃん。美味しい？」

「・・・はい。美味しいです」

つたない手付きで箸を握るセレス嬢。

当然、ミナトさんは構いたくなるよな。

「可愛らしいわあ」

可愛いもの好きは相変わらずですね。

ピコンッ。

『マエヤマさん。ブリッジの方へ御願いできますかな。お知らせし

たい事がありますので』

あ。プロスさんからの通信だ。
遂に目的地の発表か？

「食事を終えてからでも構いませんか？ 急ぎますので」

『ええ。構いません。』

それとハルカさんとセレスさんもそちらへいらっしやいますよね？
連れて来て頂けますか？』

「了解しました。すぐに向かいます」

ピコンッ。

コミュニケの通信が切れる。

「何だつて？」

「ええ。何でもお知らせがあるとかで、急いでブリッジに来て欲しいとの事です」

「そう。じゃあ、急ぎましょう」

「そうですね」

俺とミナトさんはペースを速める。

でも、セレス嬢はそんな事は出来ない。

今でも一生懸命に食べてるのだから。

そして、そんな姿が微笑ましさを誘う。

「もう。この至福の時間が……。勿体無い」

「まあまあこれからいくらでも見れますよ」

ミナトさんを宥めつつ、セレス嬢をちよつと急がせる。

「ごめんね。ちょっと急げるかな？ ブリッジに来て欲しいって」
「・・・はい。頑張ります」

ここでスプーンとかに変えたりはしない。
箸で頑張ろうとしているんだから、応援してあげないと。
甘やかしちゃ覚ええないしな。

「父親みたいよ。コウキ君」

グサツ！

十九歳にして父親扱いされるとは・・・。
ま、まあ、それぐらい若いパパさんもいるとは思っけどさ。
ぼ、僕は違いますよ。

・・・。。。。。。。。。

「じゃ、行きましょ」

「はい」

「・・・はい」

食事を終えて、片付けて、急いでブリッジへと向かう。
だが、しかし、廊下を走ったりはしない。

女の子はエレガントに、だ。
・・・俺は女の子じゃないけどさ。

「お待ちしております。マエヤマさん。セレスさん。ハルカさん」

お出迎えありがとうございます。プロスさん。

「お知らせとは何ですか？」

「ブリッジクルーの皆さんが勢揃い致しましたらお知らせしますので、席でお待ち頂けますか？」

「分かりました」

そう言われたら仕方ない。

「何なのかしらね？」

「目的って奴じゃないですか？ ナデシコの」

「あ。そういう事」

「ずっと知らされてませんでしたから」

ミナトさんにはナデシコの目的を話してある。

でも、どのタイミングで知らされるかは教えてない。

だから、こういう形で説明した。

これなら、憶測って感じで疑われない。

相変わらず綺麗に合わせてくれるから流石だ。ミナトさん。

「お待たせしましたあ！ あ。アキトだあ！」

パイロット席に座るテンカワさんを見て、入った来て艦長が騒ぎ出す。

正直に言つと、うるさいです。

「うる……。ユリカあ……」

相変わらず綺麗にスルーされてるから流石だ。ジュン君。

「皆さんお集まりのようすな」

あ。最後が艦長と副長だったんですか。

「本日お知らせ致しますのは我がナデシコの目的地です」

おお。プロスさんがいつもより輝いている。

演出流石だね。オモイカネ。

「これまで隠してきたのは妨害者の眼を欺く為なのです」
「妨害者？ 妨害者なんているんですか？」

ま、誰かしら妨害するよね。

火星に行きたいなんて言えば。

心配からの妨害もあれば、利益からの妨害もあると思う。

・・・というか、デモンストレーションなんかしてるから連合軍に眼を付けられるんじゃないの？
さっさと向かっちゃえばいいのに。

「ええ。目的地が目的地ですから」

プロスさんの言葉に首を捻るブリッジクルー一同。
俺もハテナ顔をしておこつ。

「その目的地とは？」

「目的地は」

「火星だ」

プロスさんの言葉を提督が引き継ぐ。

「・・・」

「・・・」

そりゃあ黙り込むよな。

今の火星はもう壊滅状態だって情報だし。

「な、か、火星ですか!？」

「はい。火星です」

慌てるジユン君と済ました顔のプロスさん。
対照的な表情だ。

「そ、それでは、地球の事は放っておくというのですか？ これ程の戦力があれば・・・」

「しかし、火星で生き残っている方がいらっしやるかもしれません」

「火星は壊滅だって。そう軍が」

「軍の情報が全て正しいとは限らないでしょう？」

「生きているか死んでいるかは私達には分かりません。」

「それならば、生きていると。そう信じ、救出にいく事こそが」

「

「ですが！ 生きているか、死んでいるか分からない人を助けるよ
り地球に残り、

「生きている人を助ける方が遥かに意味が」

あ。その発言はまずい。

「ほお。それは火星人は護るべき対象ではないと。そういう事だな
？」

ほら。テンカワさん大激怒。

ブリッジ内の温度が何度か下がったような気がします。

とてもじゃないですが、一般人が出せる雰囲気ではありません。

「そ、そうじゃない。でも
「それならば、何故そのような事を？ どうでもいいと考えている
からの発言ではないのか？」

射抜かんばかりにジユン君を睨みつけるテンカワさん。
初めて感じたよ。これが殺気って奴？
身体が勝手に震えてしまう。

「火星大戦から一年。我々は火星の壊滅を対岸の火事のように気に
する事なく過ごしてきた。
それは、木星蜥蜴が市民を襲わないという事が大きく影響してい
るのかもしれない」

対岸の火事・・・か。
耳が痛いな。

俺は彼らの現状を知っていて彼らの事を無視してきたのだから。

「だが、当事者である彼らはどうだろう？

地球から救出に来てくれるという希望に縋り、毎日在必死に生き
ているのかもしれない。

絶望し、生きる事を諦めているのかもしれない」

現状では後者。

どうせ死ぬなら故郷に骨を埋めたいという者ばかりだった。

・・・そもそも彼らは裏切られたんだ。
護ってくれる筈の軍に。

ここに当時、指揮を執っていたフクベ・ジンとムネタケ・サダアキ
がいる事がその証明だ。

軍人は滅びる火星を余所目に逃げ出した。

そうでなければ、火星に駐在していた軍人がここにいる訳がない。もちろん、彼らには彼らの都合があったのかもしれない。

火星大戦の情報を地球に送り届けるなどといった。

でも、火星の民が誰一人として救出されていないのはおかしいと思う。

上流階級の人間は分からないが、一般市民は確実に無視されている。火星の民を護ろうと思うのなら、脱出の際に無理してでも保護するべきではないだろうか？

少しでも犠牲を減らそうと市民の脱出まで時間を稼ごうとするべきではないだろうか？

今までに軍によって助けられたという火星の民は誰一人としていない。

もしいれば、軍が支持を得ようと誇大表現しながら公表するだろうし。

それなのに、そのような事を一切しないで、フクベ・ジンをチュールリップを初めて撃沈した英雄、

所謂、プロパカンダ、広告塔として掲げたのはその失態を隠したいからだ。

要するに、火星の民を見捨てた事を誤魔化しているんだと俺は思う。火星の民が軍を信じていなかったのもそれを理解していたからではないだろうか？

自分達は軍に見捨てられた。そして、救出に來ないという事が地球にすら見捨てられたのだと。

「漸く、だ。漸く、火星に救出にいけるだけの環境が整ったんだ。

今こそ火星に救出に行くべきではないか？ いや、行かなければならないのではないか？」

機動戦艦ナデシコ。

地球で初めて木星蜥蜴に対抗できる力を示した地球最新鋭の戦艦。

火星が木星蜥蜴に占拠されている現状、救出を成功させるにはそれに打ち勝つだけの力がなければならぬ。その力をナデシコは持っている。

「・・・・・・・・」

流石のジユン君もあれだけ言われれば納得するしかないか。テンカワさんがどれだけ火星の事を思っているか、それが痛い程に伝わってきたもんな。

「・・・・そうね。どうせやるなら人命救助の方が良いわよね」

「はい。火星に向かうのは怖くもありませんが、

苦しんでいる人がいるのなら、助けてあげたいと思います」

ミナトさんとメグミさんはテンカワさんの言葉に胸が響いたのだから。

覚悟を決めた表情をしていた。

「・・・・どうやら、納得して頂けたようですな」

周りの雰囲気を感じ取り、プロスさんがそう告げる。

ジユン君は俯き、何かを考えているようだった。

きつと、彼の中で葛藤があるんだろうな。

ジユン君だって間違った事を言っている訳じゃない。

地球だって危機に陥っているんだ。

それを解決できるだけの力があるナデシコを意味があるのかどうか分からない事に、

使用するのとは勿体無いと感じているのだろう。

地球を愛する心から発せられたんだ。

決して、これは彼のエゴではない。

軍人として市民を護りたいという誇りある考えなんだと俺は思う。ま、影が薄くて印象が弱いジュン君が言ってもあんまり心に響かないかもしれないけど。

・・・あれ？ 結構失礼な事を考えてないか？ 俺。

「それでは、艦長」

「はい！ では、機動戦艦ナデシコ発し」

「そうはいかないわ！ ナデシコは私の物よ！」

突如、雪崩れ込む連合兵士。

「・・・あ。副提督の事を忘れていました」

・・・プロスさん忘れていたんですね。

そういえば、ブリッジクルー全員集まったって確認してましたもんね。

その時、気付かなかったんですか？

・・・かくいう俺も忘れていたので、こんな事言えないんですけど・・・。

何故だ？ 何故あんなインパクトの強い副提督の事を誰もが忘れていたんだ？

・・・あ。どうでもいって認識だったのか。

それが裏目に出たって訳ね。分かります。

「何事だ!？」

ゴートさんが叫ぶ。

・・・落ち着きましょう？

銃が突きつけられているんですから。

「ムネタケ！ 血迷ったか！？」

寡黙なフクベ提督の叫び。

それだけ、提督の火星行きに懸ける思いは強いつて事か。

「あら？ 血迷ったのはどちらですか？ 提督」

「何い？」

「これだけの戦力を火星なんか送ってどうなるんです？ 墜とされるだけだわ」

「これだけの人数で何が出来る！？」

だから、落ち着いてくださいゴートさん。
銃を突きつけられているんですから。

「・・・コウキ君」

震えているミナトさん。

他の皆だって震えている。

銃を突きつけられて震えるのは人間として当然の事だ。
死を実感するのだから。

でも・・・。

「大丈夫です。彼らは撃てませんから」

「あら？ 状況次第では撃つ事もありえるわ。私達軍人は市民を護る為ならなんだってするの」

「・・・市民を護る為に市民を撃つとは本末転倒だな」

「ふん。強がっちゃって。どうにも出来ないのに随分と余裕ね」

テンカワさんをニヤニヤしながら眺める副提督。

「どうにも出来ない？ そんな事はないさ」

そんな副提督に対しても表情を崩さないテンカワさん。

「録ってるんでしょ？ ルリちゃん」

「ッ！？ 何で・・・それを？」

狼狽するルリ嬢。

だって、オモイカネにアクセスしたの見えだし。

後は自分のコンソールから確認するだけだよ？

「え？ 録ってるって？」

「ムネタケ・サダアキ。出世と名誉の為なら何でもやる狡猾な軍人
それが俺の得た情報です」

「な、それが何よ！？ 当たり前じゃない！」

「そんな男が自らを追い詰めるような事はしないという事ですよ。

自己保身には長けているでしょうから」

「へえ。貴方も余裕そうね。」

でも、死人に口なしって言うじゃない？ 覚悟は出来ているんで
しょうね？」

多数の軍人から突きつけられる銃。

「コウキ君！」

大丈夫ですって。ミナトさん。

「その為の映像ですよ。現在、このブリッジの光景は全て録画されて
います。」

無力な市民に銃を突きつけている傲慢な軍人という絵柄で映って

いるんじゃないですか？」

「う、嘘よ！」

「殺します？ そうなると映像がきちんと記録されていますから、貴方の責任問題になるでしょうね。」

「って事は、今まで貴方が築き上げてきた経歴は全てパーです」

正直言えば、今の俺は強がってるだけ。

銃を突きつけられて怯えるのは俺だってそうだ。

でも、毅然としてなっきゃ示しがない。

「それに本当は弾なんて入ってないんじゃないですか？」

威嚇射撃の跳弾で殺してしまったなんて事になったら本末転倒ですし。

「貴方は危険な橋は渡らない人でしょ？」

「……」

これはカマかけ。

ムネタケ・サダアキの臆病さならそう思うと思っただけだ。

「そ、そんな事な」

「機影反応。所属は連合軍です」

副提督の言葉を遮るように告げられたルリ嬢の言葉。

来たか。第二の爆撃が。

「ミナトさん。セレスちゃん。耳塞いで」

「え、ええ」

「……分かりました」

どうにか耳を塞いでもらえた。

俺達が耳を塞いだとほぼ同時にモニターに現れるカイゼル髭のオジサン。
来るぞ！

「ユリカアアアア！」

「お、お父様！？」

連続爆撃で不協和音で頭が痛い。

「ぐお！」

「・・・また聞こえませんか」

すみません。また救えませんでした。

「お、お父様！？」

ま、驚くよね。

遺伝子的繋がりがどこにも見えないし。

「これは一体どういう事ですか！？」

「ユリカア。私も辛いのだよ」

「ミスマル提督。どのようなご用件でしょうか？」

「コホン。私は連合宇宙軍第三艦隊提督ミスマル・コウイチロウである。

機動戦艦ナデシコ。武装を解除し、停船せよ」

「・・・・・・・・」

色々と台無しですよ。

「困りますなあ。提督。ネルガルはきちんと軍に許可を得ている筈

ですが？」

「このような戦力を民間企業に運営させる訳にはいかんのだよ」

「そついう事よ！」

この狐が！

後ろ盾が来たからって強く出やがって。

「はあ。困りましたなあ。我々にも目的があるのですが」
「そちらの言い分は後で聞こう。まずは停泊させたまえ」

毅然と告げるカイゼルオジサン。

こう見ると軍人らしいんだよな。

「それでは、交渉といきましょう」

「よかるう。但し、そちらのマスターキーは預からせてもらう」

有効的だな。

マスターキーがなければ何にも出来ないんだから。

だが、しかし、俺が擬似マスターキーを作った今、その策は無意味だ。

「艦長！ 抜くな！ これは敵の策略だ！」

結構、鋭いんだな。ヤマダ・ジロウ。

きちんとマスターキーについて理解している。

「いや。ユリカ。提督にマスターキーをお渡しするんだ！」

「・・・ジュン君」

この状況でよくそんな事が言えるな。

ほら。ブリッジクルー全員が白い眼で見てるぞ。

「こんな戦力をむざむざと無駄にする必要はない。これは地球を護る為に必要な艦なんだ」

「・・・・・・・・」

悩んでいるみたいだな。ユリカ嬢。でも、すぐに抜くんじゃなかったか？カイゼルさんに用があるからって。

「ちよつといいか？」

え？ テンカワさん？

「ん？ 何だね？ 君は」

「テンカワ・アキト。この艦でパイロットを務めている」

「うむ。パイロットが何だね？」

「貴方はこちらの状況を理解しているだろうか？」

「ふむ。ナデシコが木星蜥蜴に有効であると」

「そうではない。連合軍の兵士達が今、俺達に何をしているのか理解しているかという事だ」

「致し方ないのだよ。我々はなんとしてもナデシコを確保しなければならぬ」

「市民を脅してでもか？」

「・・・市民を護る為に強い力を求めるのは当然の事だ」

苦々しい表情をしているな。

やはり市民を脅すという行為は嫌いらしい。

「だが、市民に銃を突きつけたという事実をどうするつもりだ？」

我々はこの映像を記録している」

「何！？ ムネタケ君！」

「え、あ、その、それは……」

失態に狼狽しているつとといった所か？

「我々がこの映像を公開したらどうなるか分からない訳ではあるまい」

「……何が要求だ？」

「話が早くて助かる。我々の要求はナデシコを見逃す事。

あくまでナデシコの運営権はネルガルにある」

「それは出来ない相談だ。我々は市民の為に何としてもナデシコを確保しなければならぬ」

「……なら、マスターキーはこちらで預かった上で交渉としてくれ。」

いざという時に動けないのは困る」

「木星蜥蜴の事かね？」

「ああ。何かあるか分からないからな」

「その時は我々が諸君らを護ろう」

「ただの戦艦で対処できないからナデシコを求めているのだろうか？

そちらが我々を護れるとは到底思えない」

「……仕方あるまい。その要求を呑もう」

「感謝する」

……そうか。始めからそれが狙いだっただのか。

チューリップに襲われた時、ナデシコが動ければクロツカスとパンジーを助けられるもんな。

テンカワさん達はそうやって護ろうとしたか。

俺の擬似マスターキー、無駄になっちゃったな。

「但し、諸君らには一箇所に纏まっけてもらおう。何かされたら困るのでな」

「……致し方ない」

食堂に監禁って訳か。

ま、すぐに取り戻すんだらうけど。

「それでは、参りましょう。艦長」

「はあゝい。お父様。待っていてください」

「うんうん。ユリカ。早くおいで」

「あ、ちよっと待って。僕も行くよ」

プロスさん、艦長、副長が出て行く。

あのさ、艦長がいんだから副長が指示ださなくちゃ駄目でしょ。副長ってそういうもんじゃないの？

「……他のクルーはどこに拘束されているんだ？」

テンカワさんが副提督に訊ねる。

「ふ、ふん。食堂よ。連れて行きなさい！」

……調子取り戻しやがった。

むかつく野郎だな。

「マエヤマ・コウキ。残念だったわね」

ニヤニヤした顔で、この野郎。

お前の手柄じゃないだろうが。

「結局は権力なのよ。これでナデシコは私の物」

言ってるの。

・・・こうして、俺達は食堂で監禁された。

「あああ。夢の旅路もここで終わりか。また女房のケツに敷かれんのかよ」

ウリバタケさん。

駄目男に見えますよ。

「私達、これからどうなるんでしょうか？」

皆が皆、暗い顔をしている。

そうだよな。軍人にブリッジ占拠されて、監禁されているんだ。不安になるのも当然か。

「おいおいおい。何を暗くなってるんだよ！」

「当たり前じゃないか。希望が絶たれたんだからよ」

そんなに家から逃げたいんですか？

「そんな時はこれだ！」

ビデオテープを掲げるヤマダ・ジロウ。

噂のゲキ・ガンガーか。

「お？ 何だ何だ？」

「元気が出る熱い奴だよ！」

「ほおほおほお。お前も男だな」

「おうよ！ 熱く燃えるのさ！」

残念ですが、ウリバタケさんが考えているのとは違うと思いますよ。というか、こんな公衆の面前でいかがわしいものはありえないかと。

「何だこりゃ？ アニメかよ」

「なにい！？ ゲキ・ガンガーを馬鹿にするな！」

わいわいと騒がしいな。

ま、元気が出て良いか。

暗くなくなったし。

「マエヤマさん」

「マエヤマ」

「.....」

ん？ ルリ嬢とテンカワさんか。あ。ラピス嬢もいるな。どうしたんだろう？

「お前は」

「コウキ君」

「ん？ あ。ミナトさん」

テンカワさんの言葉を遮って俺に近付いてくるミナトさん。何だろう？ どうかしたのかな？

「何です？　どうかし」

バチンッ！

「・・・え？」

殴ら・・・れた？

頬が焼けるように痛い。

でも、そんな事より、何で？

「・・・」

無言で俯くミナトさん。

俺からはどんな表情をしているのかわからなかった。

「・・・どうして？」

「え？」

「どうしてあんな危険な真似したの!？」

「危険な真似？」

「銃を持っている相手に挑発するなんて何を考えているのよ!？」

「ちょ、挑発だなんて。俺は」

「バカ!」

叫びと共に抱き締めてくるミナトさん。

その顔には涙が浮かんでいた。

顔を真っ赤にして、怒りながら・・・泣いていた。

「私、コウキ君が殺されちゃうんじゃないかと思った」
「・・・ミナトさん」

そっか。俺の為に・・・泣いてくれているんだ。

「撃たれないって自信があったのかもしれない。

でも、相手は人間なの。逆上したら何を仕出かすかわからないわ」

「・・・」

「ずっと怖かった。いつかコウキ君が撃たれるんじゃないかって。

・・・無茶しないで。貴方に死んで欲しくない！」

必死に縋りつくミナトさんが小さな子供みたいに見えた。

俺なんかの為に泣いてくれるミナトさんを愛おしく思った。

「・・・すいません。ミナトさん」

だから、俺には謝る事しか出来なかった。

弱々しく震えるミナトさんを力強く抱き締め、心の底から。

「心配・・・かけましたね」

「・・・」

「本当にごめんなさい」

原作で誰も撃たれなかったから大丈夫だと思ってたんだ。

もう原作とは違っつて理解していたのに。

殺される訳がないって過信して。

「・・・許さないわ」

「え？」

「絶対に許してあげない」

「ええつと」

困ったな・・・。

「どうすれば許してくれるんですか？」

「……して」

「え？」

「……キス……して？」

「……ミナト……さん？」

「……キス。貴方がここにいるって私に教えて。私に貴方の存在を感じさせて」

……いつからだろう。

ミナトさんの事を想い始めたのは。

始めは単純だった。

ミナトさんが俺に温もりと暖かさをくれたから。

きっかけはたくさん。

死んだら悲しんでくれるかなって思いを否定されたと誤解して勝手に心を痛めて。

悲しんでくれるんだって分かった瞬間、喜びが込み上げてきて。

想ってくれているんだと実感して、嬉しくなって。

近くにいてくれるだけで心が落ち着いて。

……傍にいてくれるだけで幸せで。

ああ。やっと気付いた。

俺はミナトさんが……。

「……ミナトさん」

「……コウキ君」

……大好きだったんだ。

S I D E M I N A T O

コウキ君が殺される。

そう思っただけで心が引き裂かれるように痛かった。

失いたくない。傍にいて欲しい。

そんな想いが胸の中で膨らんできて……。
堪らなくなった。

暗闇の中を歩いているように、心が、身体が、恐怖で震えた。

怖くて怖くて堪らなくて。

気付けば、頬を叩いていた。

どうしてそんな事をするのか？

何故、私の想いに気付いてくれないのか？

やり場のない怒りと悲しみで心がぐるぐると渦を巻いて。

そして、無意識に彼を求め、温もりを求めた。

視界は涙で滲み、足は恐怖で震え、腕は探し物を探すように彷徨う。

少しでも早く、少しでも強く、少しでも……。

私は必死に彼に縋りつく。

そこにいるんだって実感したくて。

死んでないんだって実感したくて。

でも、全然足りなかった。

温もりが、優しさが、私には全然伝わってこなかった。

存在を感じたい。

温もりを感じたい。

優しさで包まれない。

だから、私は……。

「……ミナトさん」

「……コウキ君」

・・・唇で貴方を感じた。

S I D E O U T

「・・・コウキ君。好きよ」

「・・・ミナトさん。大好きです」

暖かくて、ずっと抱き締めていたかった。

唇の感触が心地良くて、ずっと触れていたかった。

見上げるように見てくる彼女が愛おしくて、俺は・・・。

パチパチパチパチパチ。

「え？」

「え？」

・・・あ。

「キヤーーーーーー！！」

「・・・グウウウ・・・ギイイイ・・・おのれえええ！」

こちらを見る数多の視線。

女性陣の叫びと男性陣の血走った眼。

「・・・ミナトさん。これって」

「・・・え、ええ」

胸の中に収まるミナトさんと顔を見合わせる。
顔に赤みを帯びているミナトさんを可愛らしく思いながら、近くにいた女性に訊いてみた。

「あの、見えました？」

すると・・・。

「うん。もう。バッチリ」

・・・素敵な返答をありがとうございます。お姉さん。

「・・・」

興味やら歓喜やら憤怒やらの視線を向けてくる周囲を見渡した後、俺は見詰めてくるミナトさんを見詰め返して・・・。

「・・・とりあえず」

「とりあえず？」

「もう一回御願います」

「もう。バカ」

見せ付けるようにキスしてやった。

「マーエーヤーマーコーウーキー！」

「テメエ！ この野郎！」

「呪い殺すぞ！ クソガキが！」

ふっ。ミナトさんは俺の物だ。

「開き直ると凄いのね。コウキ君って」

お褒めに預かり至極光栄。

「クウ~~~~！ 熱いぜ。燃えるぜ。敵の策略に嵌り閉じ込められたクルー。」

助けを求める子供達。愛し合う男と女。一致団結し、基地を取り戻す主人公」

おおおお。盛り上がってるじゃないか。ダイゴウジ・ガイ。

「自由を勝ち取れえ！ 基地奪還だあ！」

「うるせえ！」

ウリバタケさんの鉄拳がガイ、改め、ヤマダ・ジロウの後頭部へ飛んだ。

「グハッ！」

・・・痛そお・・・。

「おい！ コラッ！ マエヤマ！」

「何ですか？」

「テメエ！ ミナトちゃんを俺に寄越せ！」

「馬鹿言わないで下さい。ミナトさんは俺の物です」

「コ、コウキ君」

誰にも渡さない。

掴んだ物は放さない主義ですから。

「クソオオオ！ チツ！ 野郎共お！」

「ヘイツ！ 主任！」

・・・お前ら、どこの賊だよ？

「桃色の幸せを求め、こんな所抜け出してやるうじやないか！

自由を奪え！ 愛を掴み取れ！ 次は俺達の番だ！」

「オオオオオオオオ！」

凄まじい咆哮だな。

やる気が漲り過ぎだろ。

「な、何だ？ 今の叫び声は」

叫び声が聞こえたんだろうな。

見張り番の兵士が扉を開けてこちらを覗き込んで来た。

「いくぞおおお！ 続けえええ！」

「オオオオオオオオ！」

「お？ お？ な、何だ？ 何なんだ？ うわあああ！」

哀れ。名も無き兵士は人の波によって押し潰されてしまいましたとさ。

「おい。マエヤマ」

「・・・テンカワさん」

怒涛の勢いで走っていく男性陣を見送る俺にテンカワさんが話しか

けてきた。

「お前は食堂を護れ。時期が来たら連絡する。その後、ブリッジクルーをブリッジまで連れて来い」

「了解しました」

フツと笑って男達の方へ走り出すテンカワさん。

そして、男達の波の先頭に立って。

「ナデシコを取り戻す。ゴートさんと何人かは俺とブリッジへ。残りは格納庫だ」

「おう！」

「よし。行け！」

「うおっしやあああああ！」

凄まじい勢いだな。おい。

「……コウキ君」

未だに胸の中にいるミナトさん。

どうしよう。放したくないけど……。

「……」

「……」

「……」

女性達の好奇の視線に耐えられません。

「大胆ですね。マエヤマさん」

今更ですが、恥ずかしいので言わないで下さい。メグミさん。

「おいおい。熱過ぎて火加減間違えるだろ？ 他所でやっておくれ
「よ」

茶化さないでくださいよ。ホウメイさん。
ニヤニヤしてて丸分かりです。

「・・・ポツ」

子供にはちよつと早かったかな？

「・・・いいなあ・・・」

すぐに恋人できますよ。ホウメイガールズの皆さんなら。

「・・・私もアキトさんと・・・」

「・・・アキトと・・・」

口に出したらまずいんじゃない？ その台詞。

「あの、さ、恥ずかしいんだけど」

背の関係で見上げるように俺を見てくるミナトさん。
潤んだ瞳と頬を赤く染めた顔が愛し過ぎる。

「嫌・・・ですか？」

「え？ い、嫌じゃないのよ。ただ」

「じゃあ、いいじゃないですか」

ふつ。恥ずかしさも限界を超えれば問題ないのさ。
今の俺に羞恥心という言葉は存在しない。

「もお。人が違うみたいに大胆になって。普通逆でしょ？」

「偶にはいいじゃないですか。いじられるミナトさんって可愛いですよ」

「ッ！」

息を吞んで、もつと赤くなる顔。

ああ。もう駄目だ。末期だな。

「まだ放したくあ」

『こちらテンカワだ。ブリッジを取り戻した。至急、な、何だ？』

良い所なのに邪魔するからです。

「睨まないの。アキト君。分かったわ。すぐに向かうわね」

『りよ、了解した』

ちえつ。他の男と話しちゃってさ。

「あら？ ヤキモチ？」

「そ、そんなんじゃないやありませんよ」

何で分かるんだ？

「顔に出てるわよ」

「ふ、ふん。他の男と話すミナトさんがいけないんです」

「ふふふ。拗ねちゃって。可愛い。続きはまた後でね」

「し、仕方ないですね。それなら」

渋々、本当に渋々ミナトさんを放す。

「ほら。行くわよ」

「はい」

手を引かれながら、俺とミナトさんはブリッジへ向かった。

どうやら、これからもミナトさんに引つ張られる事の方が多そうだ。

「ねえ？ 私達の事、忘れられてないかな？」

「・・・仕方ありませんよ」

「・・・いく」

「・・・ポッ」

「ようやく来たな」

ブリッジに辿り着いた俺達の視界に映るのは縛られた兵士達と気絶したキノコ副提督。

あ。提督はここで監禁されてたんですか。

「アキト君は？」

「格納庫へ向かった。艦長とミスターを迎えに行くらしい」

テンカワさんは時間稼ぎか。

クロツカスとパンジーはどうなったんだ？

間に合ったのか？

「遅れました」

「すみません」

あ。忘れてた。

「・・・マエヤマさん」

ジト眼で見られてしまいました。
すみません。

「ごめんごめん。ルリちゃん。状況を」

「はぁ・・・」

呆れられちゃった。

「チューリップ、こちらに接近中。」

途中、連合軍所属クロツカス、パンジーの両艦が襲われたようだが・・・」

・・・クソッ。間に合わなかったか。

「乗組員は脱出済みです。怪我を負った方もいるようですが、全員、命は無事です」

「そう。アキト君の時間稼ぎが功を奏したのね」

ほっ。良かった。

流石です。テンカワさん。

「アキトさんが足止めしているので接近といっても微速です。今の

うちに対策を」

・・・確か、原作だとチューリップに突っ込みつつグラビティブラストだったよな。

あれは相転移エンジンの出力が低くて、普通に撃つだけじゃ力が足りなかったからだろ？
今回はどうなんだろう？

『こちらダイゴウジ・ガイ。いっくぜえ！』

って、おい。ちょっと待て。

勝手に出撃するな。

「メグミさん。ウリバタケさんに」

『もう遅え！』

あ。前方にヤマダ機確認。

苦労をおかけます。ウリバタケさん。

「……………」

「……………」

……………どうしようか？

「アキトさん。そちらにヤマダさんが向かいました。対処の方、お願いします」

『骨折しているのに無茶をするな、ガイの奴。了解した』

面倒をおかけします。テンカワさん。

「艦長の乗ったヘリコプターを確認。アキトさん。ヤマダさ

『ダイコウジ・ガイだあ！ ガイ！ ガイ！ ガイイ！』

「・・・両名はチューリップを引き付けつつ、艦長の防衛を」

どうやら、今回も同じ作戦になりそうだな。

「ルリちゃん。レールガンで援護に入る。良いかな？」

「現在の指揮権は提督にあります。提督に許可を」

今まで結構、自由にやってたよね？ 俺達。

今更感が漂っているんですが。

「提督。よろしいですか？」

「うむ。じゃが、どうするつもりじゃ？」

「本体に当たるところこちらに注意が向く可能性がありますので、
両パイロットを狙う触手を蹴散らします」

「む、無理です。この距離であんな細いものに当たるなんて」

ふっふっふ。ルリ嬢。

俺を甘く見てもらっては困る。

「オモイカネ。レールガンセット」

『セット開始』

コンソールに手を置いて、オモイカネに指示。

その後、懐からサングラスのようなものを取り出す。

「コウキ君。それは？」

「ウリバタケさんの力を借りて作った精密射撃専用のシューティン
グレーダーです」

このサングラスみたいなのはイメージ次第でズームインやズームアウトを行え、かつ、レールガン一つ一つの標準を合わせられる射撃モニターを映し出す。

また、逐一情報も送られてくるからまるでエステバリスから射撃するように精密な射撃が行える。

手元の端末と同期しており、コンソールからの指令にこいつは従ってくれる訳だ。

名付けて精密君。ごめん。嘘。

『セット完了』

誤差修正ソフト、未来予想ソフト、空間把握ソフト。

これらスナイパーにとって涎ものの精密射撃ソフトを導入しているんだ。

俺が外す訳がない。

『う、うわっと』

早速出番だ。

ダンッ！

「す、凄い。この距離を・・・」

驚くのはまだ早いぜ。ルリ嬢。

『ナデシコ。助かったぜって、うおー！』

ダンッ！

世話が焼ける。

『よっしゃあ。このダイゴウジ・ガイ様の勇姿。見てやがれって、
ダハッ』

ダンッ！

「ねえ、ルリちゃん。ヤマダ・ジロウ。下げてくれない？」

「言う事を素直に聞いてくれるとは思えません？」

「……それもそうだね」

まさか、触手に翻弄されているヤマダ・ジロウを助ける為だけに、
レールガンを使う破目になるとは思わなかったよ。
ま、テンカワさんに援護なんて必要ないだろうけど。

「艦長。着艦しました。すぐに来るか？」

「了解した。援護を続ける」

メグミさんもミナトさんも自分の仕事をしている。

ラピス嬢もセレス嬢もルリ嬢のフォロー。

うん。艦長がいなくてもやっぱりプロだな。

誰もが何をすべきか把握して、きちんと動いている。

「ナデシコで対処致しますので退避してください」

『しかし……』

「再度申します。ナデシコ以外で対処できませんので、退避を御願
いします」

『……了解した』

これで連合艦隊が巻き込まれる事はなくなったな。
ナイスです。メグミさん。

「コウキ君。射線上に何も無い位置へ移動したわ。これでGBを撃つても被害は皆無よ」

かなり細かい微調整だったでしょうに。
助かります。ミナトさん。

「グラビティブラスト装填完了」

「……いつでも撃てます」

よし。後は艦長を待つだけだ。

「ルリちゃん。チューリップの様子は？」

「ほぼ停止状態です。アキトさんとヤマダさんに引き付けられています」

対処可能な環境を整った。

後は艦長の裁量によるな。

「お待たせしましたあ！」

帰ってきたみたいだ。

「いやはや。大変でしたぞ」

「……」

やっぱりジユン君は忘れてきたんですね。

「状況を」

「チューリップは両パイロットによって停止状態。グラビティブラスト発射準備完了」

「ミナトさん。射線上にチューリップを」

「とつくに終わってるわよ」

「メグミちゃん。連合軍に退避するよう連絡入れて」

「完了済みです」

「わお。皆、早いですね」

「感心しないで指示を御願います。艦長」

「ここまで周りが優秀だと艦長も楽だろうな。」

「それではチューリップに気付かれないよう微速前進。チューリップの口にナデシコを接近させます」

「え？ チューリップにくつつけるの？ どうなっても知らないわよ」

「ま、まあ、普通はそうですよ。」

「御願います」

「はあ〜い」

「説明してないんだけどな。」

「結構、お気楽ですね。ミナトさん。」

「「こちらの合図でいつでもグラビティブラスを撃てるようにしておいてください」

「了解」

徐々に迫るチューリップの姿。

触手を使ってエステバリスを払う姿はチューリップというよりはハ
エトリグサ？

いや。違うか。

「もっとです。もっと、もっと、近付いてください」

「食べられちゃうわよ？」

「構いません」

「あ、そう」

いやいや。構おうよ。

「……………」

暗い空間の中に入っていくのって結構怖いよね。
気味が悪い。

「…………食べられちゃった」

呆れるように告げるミナトさん。

貴方も大概余裕ですよね。

「グラビティブラスト。放てえええ！」

「グラビティブラスト。発射します」

艦長の感情の籠もった叫びにルリ嬢はクールに告げる。

ま、対照的な二人だけど、それが良いバランスなのかな？ ナデシ
コでは。

「チューリップの撃破に成功。エステバリスは帰還してください」

「やったあ！」
「やはり逸材だな」

高評価を得て満足そうなユリカ嬢。
周りも一安心って所かな。

「無茶するわね。艦長って」
「ま、結果よければ全て良しって奴ですよ」
「それもそうね」

顔を見合わせてミナトさんと笑い合う。

「……………」
「……………」

な、なんか、照れるな。

「見詰め合っちゃってるよ。ルリちゃん」
「構いません。作戦は終了してますから」
「…………ルリ。興味あるのバレバレ」
「なっ!?!」
「…………ポツ」

…………聞こえてますよお。

「うふふ」
「ははは」

もう笑うしかないよな。

「どついつ事ですか？」

「私も気になりますな」

「後で教えてあげますよ。艦長。プロスさん」

・・・結局、テンカワさん達パイロット組が帰ってくるまで照れ隠しをしていましたとさ。

「あ。副長はどうしました？」

「ジユン君？ そういえば、どこに行つたんだろ？」

「・・・忘れてきましたな。いやはや。歳を取るとは怖いものです。ハツハツハ」

「・・・可哀想に」

というお約束があつたのも忘れちゃいけませんよね。

・・・はあ。次はビックバリア突破か。大変だな。

ご愁傷様です。ジユン君。

「マエヤマ・コウキ。一人の介入者の影響がここまでとは」

「ミナトさんと結ばれてしまうなんて」

「ツクモさんと結ばれるべきだと思つていたんだが・・・」

「それもありますが、どことなく違和感があります。

私がおモイカネに秘密で御願ひしてたのを知っていましたし」

「ルリちゃんが本気で隠したのをあいつは簡単に見つけてしまったという訳か。」

「電脳世界で最強を誇るルリちゃんの」

「ええ。彼の影響がどれ程になるかまるで検討が付きません。もしかすると・・・」

「俺達の計画に支障をきたすかもしれないな」

「あの精密射撃もそうです。あんな事、普通の人には出来ません」

「射撃には慣れていたつもりだが、あそこまでの精密射撃は俺にも無理だな」

「能力を隠している。何故かは知りませんが、私はそう思います」

「隠さなければならぬ理由がある。そう考えるべきか？」

「はい。彼の本当の目的が何なのか。それを見極める必要があります。そうですね」

「仲間を疑わなければならぬとはな」

「仕方ありません。私達の計画を邪魔される訳にはいきませんから」

「あの状況でバラされるとは思わなかったからな。どうにか交渉に利用できたが・・・」

「もともとオジサンとの交渉に使うつもりでしたからね。キノコさんはどうでも良かったんです。意味がなくなるかと心配になりました」

「これからもそんな事をされたらいずれ邪魔になるな」

「・・・どうしましょうか？」

「・・・そうだな」

「・・・コウキ。良い人だと思う」

「・・・それでも、計画の為なら仕方ありません」

「・・・分かってくれるよな？ ラピス」

「・・・分かった」

「あれ？ ミナトさん。胸元。どうしたんです？ いつも開けてた

「じゃないですか」

「……あれ？ いつの間に食堂に？
あれ？ 俺っていつの間に着替えてたの？ あれ？
何で眼の前に朝食が？ ま、いつか。食べよう。」

「当たり前じゃない。あそこはコウキ君専用なの。もう誰にも見せてあげないわ」
「ゴホッ」

グッ！ 気管に詰まった！

「な、何を言ってるんですか!？」
「あら？ 誰かに見せてもいいの？ 私の胸元」
「胸元と言わず何でも見せたくありません。視界に入れる事すら嫌です」

「うふふ。独占欲が強いよね」
「……ご馳走様です」

何か昨夜からの記憶がないんだよな。朝とかどうなってたんだっけ？
制服を着た覚えもないんだけど……。ま、いつか。食べよう。

「マエヤマさん。ボーっとしてますね。どうかしたんですか？」
「泊まっていったもの。コウキ君」
「……それって」

「ええ。昨夜は大変だったわ。コウキ君ってば初心だし。
朝だって私が着替えさせてあげたのよ。ずっとボくっとしてて」
「ゴホッ」
「……ご馳走様です」

グツ！ 気管に詰まった！

「ええっと、その、あの・・・」

お、思い出したあ！

お、俺って・・・。

「あら。真っ赤」

「分かりやすいんですね。マエヤマさんって」

微笑ましいみたいいな眼で見ないで下さい。

「ああゝあ。せつかく狙ってたのに」

「ごめんなさいね。我慢できなくなっちゃって」

「いいですよ。お似合いですもん。ミナトさんとマエヤマさん」
「・・・」

「思考停止中みたいね」

「結構、手馴れてそうに見えたんですけどね」

「女性経験が少ないんでしょう？ ま、私としては私色に染められる
みたいで嬉しいけど」

「姉さん女房って奴ですか？」

「そうね。コウキ君ってまだまだ頼りないし。私が引っ張ってあげ
なくちゃ」

「じゃあ、これからマエヤマさんをミナトさん色に染めちゃう訳で
すね」

「そうよん。うふふ。楽しみ」

「・・・」

「まだ思考停止中ですよ」

「まったく。コウキ君ったら」

「・・・」

「フウウウ」
「ひゃっ」

ゾ、ゾクつときた。

「な、何ですか？ って、近い近い」

「耳が弱いよねえ。コウキ君って」

「耳に息ですか。典型的ながら有効的な訳ですね」

「何を真面目に解説してるんですか。メグミさん」

「あら。いいじゃない。ゾクつてきたでしょ？」

「そ、そりゃあきましたけど」

「フウウウ」

「や、やめてください」

ゾ、ゾクつときた。

「朝からお腹一杯です」

「とめてくださいよ。メグミさん」

「フフツ。嬉しそうですよ。マエヤマさん。私は馬に蹴られたくないので失礼しますね」

「メ、メグミさん。待ってください」

・・・行ってしまった。

「恋人の前で違う女性を呼び止めようとするなんて、いけない子ね。

「コウキ君」

「ミ、ミナトさん」

「罰ゲームよ。フウウウ」

「ひ、ひゃっ」

・・・周囲の視線が気にならなくなった日の事でした。

第九話

「現在、地球側では木星蜥蜴に対する備えとして七つの防衛ラインを築いています」

連合軍と仲が悪いまま、宇宙に飛び出そうっていうんだから凄いな。

喧嘩を売られるに決まってるじゃん。あえて言わせて貰おう。バカばっか？

「我々は宇宙に飛び出そうとしているので、防衛ラインを逆走する訳ですな」

「はいはい。その防衛ラインってどんなのがあるんですか？」

・・・艦長。貴方は士官学校卒業じゃないのですか？
それぐらいは把握しておきましょうよ。

「ルリさん。御願ひできますか？」

「はい。オモイカネ。地球防衛ラインの情報を」

『はあ〜い』『了解』『任せて』

ハハハ。元気だな。オモイカネ。

「衛星軌道上から順に説明します。」

第一次防衛ラインは核融合動力のバリアシステム、通称ビツクバリアです」

高出力の障壁で侵入を妨げるビックバリア。

・・・にしては、チューリップの侵入を許し過ぎじゃないか？

「第二次防衛ラインは衛星からのミサイル迎撃です」

衛星ミサイル。

・・・あれか。ジュン君がデルフィニウムの手を広げてナデシコを守るとか言った時の奴か。

でも、あれって何の意味もなかったよね。

「第三次防衛ラインは宇宙ステーションの有人機動兵器デルフィニウムの迎撃です」

一言だけ・・・ジュン君、ファイト。

しかし、好きな人の為にIFSを体内に注入させるとは健気だねえ。士官を始め、地球の軍人ってIFSを嫌う節があるんだったな。

出世の道を困難にしてまで愛する女の為に・・・か。

「・・・」

「ん？ 何かな？ コウキ君」

「い、いえ。なんでもありません」

俺にもそんな事が出来るかな？

いや。しなければならんだ。

ううん。するんだ。

愛する女の為に命懸けるのが男なんだから。

「第四次防衛ラインは地上迎撃システムからのミサイル迎撃です」

移動中、最もお世話になる奴だな。
でも、ま、DFで全部防げちゃうけど。
DFを舐めるなつての。

「第五次防衛ラインは空中艦隊による防衛線です」

あ、無効化される奴か。

「第六次防衛ラインはスクラムジェット機による防衛線です」

これもこれも。

「最終防衛ラインは通常兵器による迎撃です」

思うんだけどさ。

最終防衛ラインまで来れる時点で通常兵器とか意味ないでしょ？
なんか、最終防衛ラインってあんまり意味がない気がしてきた。
つていうか、そもそも防衛ライン配置順とか色々とお粗末じゃない？
ビクバリアで止められるとか過信してるからかな？
せめてビクバリアの前に防衛部隊とか配置しようよ。
相手戦力を少しでも減らせれば、阻止できる確立も上がるでしょ？
ビクバリアは完璧じゃないの。実際に突破されてるんだから、も
っと対策考えようよ。

「ご説明ありがとうございます。ルリさん」

「……いえ。仕事ですから」

再確認できて助かりました。

ま、第五次から最終までは役立たずになるからどうでもいいんだけ
ぐわ。

「そして、現在、我々は第四次防衛ラインを突破中という訳です」「連合軍も頑張るわよね。こっちは一切ダメージを受けてないってのに」

一応、地球最新鋭ですから。
そう簡単に墜ちませんよ。

「第五次以降はどうなっているんですか？」

「一斉に動き出した事で木星蜥蜴を刺激してしまったみたいですね。その対応に追われ、私達の事にまで手が回らないようです」

「静かに眠っている子を刺激したら癇癢を起こすに決まってるじゃない」

そんな感じですよ。ミナトさん。

「それじゃあ、私達は第四次から第一次を突破すればいいんですね？」

「はい。そうなりますね」

地上からのミサイルは大した威力もないから無効化が可能。

デルファイニウム部隊はテンカワさんがいるから余裕でしょ。

衛星ミサイルは・・・DFの強度次第だな。

発動される前にある程度の高出力を得られるようにしないと。

問題はビツクバリア。強引に突破可能だけど、突破しちゃっていいのかな？

あれでも一応は木星蜥蜴の侵入を妨げている訳だし、

修理が終わるまでの連合軍の負担を考えると申し訳ないよ。

それにかかりのエネルギーとか使ってそうだし。

衝突して強引に突破って事はあっちがオーバーヒートとかしちゃう

訳じゃん。

エネルギー過剰でどこかしらが爆発するんじゃない？

人的被害も馬鹿に出来ないでしょ？ 地上に損害がないかも分からないし。

これってかなりの問題だと思っただよね。

「ビックバリアは突破できるんですか？」

「理論上は可能です」

メグミさんの問いにルリ嬢が答える。

おし。ここで話に入るか。

「しかし、ビックバリアを突破してしまってもいいんですか？」

「ほお。それはどのような意味で？」

睨まないでくださいよ。プロスさん。

「まがりなりにもビックバリアは地球防衛に一役買っています。

それを破壊してはネルガルも立場が悪いですし、

地球の人達に不安を与えしまうのではないのでしょうか？」

「・・・それもそうよねえ」

企業イメージも大事でしょうに。

軍との亀裂はアカツキ青年が修復するみたいだけど、民間からの恨みはどうしようもないし。

「むう。困りましたな。正論ゆえ反論できません。

ですが、それでは、諦めなければなりません。どうしまし
ようか？」

その眼は批判したんだから代わりの案を出せって事ですね。ビックバリアに被害を与えずにナデシコが脱出する方法か。再度、交渉・・・無理だよな。ユリカ嬢の御願いは余計向こう側を本気にさせちまった訳だし。

「利をもって交渉するとか？」

「ほお。その利とは？」

「ナデシコは木星蜥蜴に唯一対抗できる戦艦ですが、たった一艦ではどうしようもないと軍も理解していると思うんです」

「ふむふむ。何人かは理解しているでしょうな」

・・・何人かですか？ 相当に少ないんですね。

大丈夫ですか？ 連合軍。

「今回の火星行きはその能力を証明する為であり、稼動データを収集する為でもあると告げれば向こう側も納得してくれるんじゃないですか？」

それも一応は目的の一部でしょう？

本当の目的は火星にある遺跡の確保だろうけど。

「無論、それはもう説明してあります。ですが、納得して頂けないのです」

あ。そっか。一度は許可を貰っているんだから、その時にこの理由はとっくに使ってるか。

ってかさ、一度許可したなら追わなければいいのに。軍の面子以前に人として間違ってるでしょ。

「それなら、ビックバリアを突破できるという証明を向こうに

」
「無駄だと思います。彼らは止められると確信しているからこそ追ってくるんですから。」

「たとえ証明できても信じてくれませんよ」

「バツサリ切られました。ルリ嬢に。」

「やはり強引に突破するしか方法はないようですね」

むく。どうにか方法はないのだろうか？

「あの・・・」

「ん？ ルリさん。何でしょうか？」

「ハッキングしてみましようか？」

「ハッキング!?」

「連合軍にハッキングしてビックバリアの解除パスワードを得ると？」

「・・・ま、考えてたけどさ。バレたらまずいかなって。」

「連合軍の情報網をハッキングするのは容易ではありませんぞ。」

「幾重にも防衛線が引かれておりますから」

「・・・まるでやってみたかのような言い草ですね。」

「ですが、被害なく突破するには有効かと」

「ルリさんはハッキングを成功させる自信があるのですか？」

ルリ嬢って現実主義だからね。出来ない事はしないでしょ。

劇場版でもハッキング普通にしていたし。基地情報の取得とか簡単じ

やない筈。

「私一人では無理かもしれません」

そう告げた後、ラピス嬢を見詰めるルリ嬢。なるほど。妖精二人なら可能という訳だな。

「ですが、マエヤマさんの力を借りれば」
「・・・え？ 俺？」

え？ だって、ラピス嬢と頷きあってたじゃん。何で俺なの？

「マエヤマさん。よろしいですか？」

「え、ええ。構いませんが・・・」

正直、混乱しています。

「落ち着きなさい。コウキ君」

「あ。はい」

ふう〜つと深呼吸。

おし。大丈夫。

「では、私とマエヤマさんがハッキングを仕掛けますので、ナデシコの制御はラピスとセレスに任せるといふ事で良いですか？」

「構いません。ラピスさん。セレスさん。御願いできますか？」

「・・・分かった」

「・・・分かりました」

「セレスはラピスのフォローに回ってください」
「・・・はい。分かりました」

ルリ嬢としてはまだセレス嬢だけには任せられないらしい。
セレス嬢も結構、良いレベルいつてると思うんだけど。
艦長とかやってたし、そういう所は厳しいのかな？

「それでは、ハッキングを仕掛けます。マエヤマさん。御願いします」

「うん。分かったよ。俺もフォローに回るから」

経験的な問題で多分敵わないし。

「・・・了解しました」

今の間は何さ？

「・・・」

深呼吸して、心を落ち着かせた後、コンソールに手を置く。
ハッキングとか失敗してバレたらかなりやばい。
で、でも、きつと、失敗してもネルガルが責任持ってくれるよね？

「改めてよろしく御願いします。マエヤマさん」
「うん。こちらこそよろしく」

電脳世界にやってまいりました。
この感覚は久しぶりです。こんなに集中しなつきゃいけないの
中々ないしね。

現在は分かりやすく映像化してあります。

たとえて言うなら、オモイカネの反乱の時に潜り込んだ図書館みたいな奴。

それが今回はどこかの基地？みたいな感じの建物になってる。俺とルリ嬢はその門の所で隠れているって感じ。かなり嚴重である事は間違いないね。

「まずは管制室を占拠しましょう」

未来のルリ嬢の格好をしたルリ嬢が俺にそう言うてくる。

・・・何で未来の姿なの？

「その前にいいかな？」

「はい。何でしょう？」

「その格好って成長したルリちゃん？」

「ええ。それが何か？」

いや。何故わざわざ未来の姿をしたのかが訊きたかっただけなんだけども。

「い、いや。なんでもないよ」

そう睨まなくても・・・。

やっぱりまだ嫌われているみたいだ。

「イメージ次第で武器が具現化されます。敵兵士がいるので用心してください。

出来れば、見つからないで管制室に到着したいですね」

「うん。了解」

要するに、だ。

敵兵士が向こうの異常発見ソフトみたいもので、
敵兵士の武器が迎撃ソフトみたいなもので、俺達がウイルスみたい
なもんな訳だ。

見つからないように向かうっていうのは、
巧妙にハッキングして相手方がハッキングに気付かないようにしろ
って事だし。

敵兵士を倒して進むってのは力尽くで相手方の防衛線を強引にハッ
キングしろって事な訳ね。

おし。やってやろうじゃないか。

「この世界でなら、私も戦えますので」

むしろ、最強でしょ。

「まずは門を突破しましょう」

そう言うとルリ嬢の姿が消える。

おお。それがルリ嬢のハッキングスタイルか。

バレない為に己の姿を消しちゃう訳か。

俺のスタイルとは違うな。

俺はどちらかというと・・・。

「なるほど。偽装ですか」

そうです。偽装です。

あたかも相手方のように振舞う事で違和感なくハッキングするん
です。

一応、今まで無敗ですけどね。

ちなみに、俺は敵兵士とまったく同じ顔、同じ格好、同じ仕草にし
てなっています。

俺の偽装スキルを舐めるなよ。現実世界じゃ芝居なんて到底出来ないけど。

「・・・・・・・・」

無言で門を潜る。

バレてない。バレてない。

それにしても、見えないな。ルリ嬢の姿。うん。俺にだけ見えるようにしよう。

「なっ!?!」

「どうかした?」

「な、何かし・・・いえ。何でもありません」

「そう?」

慌てちゃって。どうかしたのかな?

「管制室はこちらですね。案内します」

「うん。ありがとう」

堂々と歩くルリ嬢に付いて行く。

ま、周りはルリ嬢の姿なんて見えてないんだけど。

「・・・・・・・・」

敵の兵士とすれ違ってスルーさ。

再度、言おう。俺の偽装スキルを舐めるなよ。

擬態だろつが、偽装だろつが、何だっやってやっやるっの。

「っっです」

うん。確かに管制室って看板があるね。
ってか、親切じゃね？

「流石にここは隠れていても仕方ありませんので、敵兵士は蹴散らせましょう」

「了解。ルリちゃんは下がってて」

「いえ。私も戦えます」

「いいから。いいから」

久しぶりだしね。肩慣らしだよ。

大事なのは向こうのデータバンクをハッキングする時なんだから。

「分かりました。お願いします」

「任せました」

左手に銃を具現化し、右手に手榴弾を具現化する。

もちろん、無音で無力なものです。簡単に言っと閃光弾。

「ほっと」

扉を少し開けて、閃光弾を投げ入れる。

んで、すぐに扉を閉めて、三秒後に・・・突撃。

ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！

管制室を守る敵兵士を蹴散らす。

撃ち損なっただのは・・・いないな。

「もついいよ」

「お見事です」

「いえいえ。ルリちゃんはここから色々調べておいて。俺はやる事あるから」

「分かりました」

管制室の椅子にルリちゃんを座らせて、俺は銃を撃ち込んだ敵兵士のもとへ向かう。

「偽装は完璧にしなっきゃね」

兵士の頭に手を添える。

これは向こうの記憶、即ち、設定を変更する為。はい。完了。

これで俺とルリ嬢はそちら側の人間だよって認識された。この状態なら何をしようが問題にされないのさ。

「次つと」

一人変更すれば周りも感化するんだけど、一応ね。

俺は管制室のコンソールに手を置いて、先程と同じ作業を行った。

「……よし。もういいや」

俺は偽装していた姿を元に戻す。

ま、いつもの俺って奴だからどうでもいいでしょ。

「……凄いですね」

「そうかな？ ルリちゃんだって凄いと思うよ。誰にも気付かれなかったでしょ？」

「え、ええ。まあ」

ハッキングのスタイルが違うだけ。
むしろ、俺はルリ嬢の方が凄いと思うけどね。
俺がやっても完全な透明にならないと思うよ。
多分、どっかが欠けるか、半透明になる。
俺には到底真似できないね。

「解除パスワード。判明しました」

「へえ。流石はルリちゃん」

「いえ。後はこれを制御室の方で直接打ち込むだけです」

素っ気無いな。

どうにかして仲良くなりたいたいんだけど……。

「……何か？」

前途多難だよお。

「それでは、制御室の方へ向かいますよ」

「分かった。俺が護衛するよ」

「そうですね。御願います」

もう制御室の場所は把握してるだろうから、俺はルリちゃんが制御室に行くまで守るだけ。

偽装は完璧だと思うけど、万が一の為にね。

「……マエヤマさんはこれ程のハッキングをどのように身に付けたのですか？」

ギクツとなる質問だね。

どう答えるかな。

「秘密ですか？」

「ん〜。秘密にしておきたいかな。ミナトさんに怒られちゃうし」

ハッキングはいけませんと言われてから実は何度もやっている。

これがバレたら怒られるかもしれないし、何より嫌われるかもしれない。

絶対にバレる訳にはいかないんだ。

「・・・マエヤマさんはミナトさんが大事なんですね」

ミナトさんが大事だって？

「そんなの当たり前じゃん。お世話になったし、今は恋人だしね。恋人を護らない人なんていないでしょ？」

今の俺にとって何よりも大切な存在。

それがミナトさんだ。

何を犠牲にしても、それこそ、俺自身を犠牲にしても護らなくちゃ。

いや。それじゃ駄目か。

ミナトさんがまず自分って言うてたし。

自分を犠牲にしちゃ駄目だよな。

それでも、いざって時は己を犠牲にしても護ってみせる。

それが人を愛する責任って奴だと俺は思っているから。

「そう・・・ですか」

納得してくれたかな？

っていうか、何か疑われてたのかな？

「じゃあさ、ルリちゃんにも大切な人っている？」

こんな事、暢気に訊いている暇はないんだけど、折角の機会だから。

「私の大切な人・・・ですか？」

「うん。大切な人。友達だって家族だっていい。好きな人だってもちろんいいよ」

ルリ嬢を変えてくれたアキト青年。

ルリ嬢を支えてくれたミナトさん。

ルリ嬢のお姉さんだったユリカ嬢。

きっとルリ嬢には多くの大切な人がいるんだろうな。

「・・・アキトさんです」

そっか。その中でも一番はアキト青年って事か。

「テンカワさんか。ルリちゃんにとってテンカワさんってどんな人なの？」

「そうですね。自分を犠牲にしても大切な人を取り戻そうとする優しい人で・・・」

ユリカ嬢の事か。劇場版でのアキト青年の想いは確かに伝わってきた。

「その優しさのせいで罪の意識に苛まれてしまう弱い人で・・・。それでも、罪に苛まれようと、前へと進もうとする強い人です」

罪の意識に苛まれる？

それは劇場版の事だろうか？

確かに幽霊ロボットが多くのコロニーを沈めたって言ってたけど。

「マエヤマさんだったらどうしますか？

愛する人の為に多くの犠牲を出してしまった自分を責めますか？」

「.....」

愛しているから。

それが全ての免罪符になる訳ではない。

意味も分からず、一方的に犠牲になった人は一生許さないだろう。

その者達の中にも愛する人はいるのだから。

恨みは理性で制しきれないものだから。

「自分は罪人だからって取り戻した愛する人のもとに戻る事もせず、愛する人を傷つけた者達を罰しようと限界に近い身体を酷使しますか？」

火星の後継者。

アキト青年の味覚、いや、多分、五感全てを奪った存在。

パイロットである事よりも料理人である事を主張し続けたアキト青年。
年。

彼にとって何よりもどんな事よりも辛い事だと思う。

ユリカ嬢の身体を遺跡の翻訳機として用いた存在。

インターフェイスとして用いられて負担がない訳がない。

きっと身体はボロボロで精神的にも辛い事があったと思う。

ユリカ嬢だけじゃなく、アキト青年とて傷付けられた。

それなのに、アキト青年はユリカ嬢を思って、自分の恨みではなく、ユリカ嬢を傷つけた事に憤怒して行動したというのか。

「自分の身体を痛め付けて、限界を超えても酷使し続け、私達がどれだけ帰ってきてと訴えてもあの人は……」

遂にルリ嬢の目元から涙が溢れる。

胸の中に必死に押さえつけていた感情が溢れ出してしまったかのよう。

抑圧された感情が爆発したかのように。

とめどめのない涙がルリ嬢の顔を濡らしていた。

「必死に追いついても逃げるんです。罪人の俺にその資格はないつて。」

俺の事なんて忘れてくれつて。私達の想いなんて気付いてもくれず……」

相手の幸せを望むからこそ引き離す。

それがアキト青年の選んだ道だったんだ。

己の想いを封印して、心が痛んでも、相手の幸せを求めた。

「拳句の果てに……」

「……」

「愛する人に裏切られて」

「……え？」

……愛する人に裏切られた？

ユリカ嬢がアキト青年を裏切ったていつのか？

「……裏切られたつて？」

「艦隊で襲われたんです。私がアキトさんを追い詰めた時に」

「な、何で、襲われたの？ だって、テンカワさんは必死に愛する人の為に……」

「全てを知っている訳ではありません。」

真相を、裏で何があったかを知っている訳ではありません。

でも、一つだけ、一つだけ分かった事がありました」

「・・・それは？」

「アキトさんが愛する人はある組織によって記憶処理を受け、

アキトさんこそが愛する人を奪った張本人だと誤認していたという事です」

「そ、そんな事って・・・」

「傷付いたでしょうね。立ち直れないくらい、壊れてしまうぐらい心が傷付いたと思います」

痛いなんてもんじゃない。

想像を絶する激痛が心を襲うと思う。

「私達は襲ってくる艦隊から必死に逃げました。傷付いたアキトさんを護ろうと。」

でも、結局、アキトさんを護る事は出来ず、護られたのは私の方でした」

「ルリちゃんが護られた？」

「はい。私の方を先に攻撃してきたんです。それで、アキトさんが私を護ろうと前に出て」

「・・・ルリちゃんを護る為に犠牲になったって事か」

「傷付いていたと思います。自棄になっただけでもおかしくなかったと思います。」

でも、私なんかを護る為に身体を張ってくれた。結局、アキトさんは優しいままだった」

アキト青年はどんな気持ちだったんだろうか？
愛する人に裏切られて。

でも、護るべき人がいたから、身体を張って。

・・・必死に護って。
身体を痛め付けて、心を傷つけて、それでも、前を向けるテンカワ・アキト。

・・・敵わないなっと思っ。

「・・・そっか。それがテンカワさんの強さか」

弱くて強い。

一見、矛盾した言葉。

でも、弱くて強いから、俺は強いのだと思っ。

『そろそろ第一次防衛ラインに着きますぞ。そちらの準備はよろしいですか？』

あ。そうだったな。

「ルリちゃん」

「ええ。行きましよう」

随分と長い間、話に集中していたみたいだ。

気付けば制御室が目の前にあった。

扉を開けて、制御室に入る。

「後はこれにパスワードを打ち込めば解除できます」

制御盤らしきものが置かれており、それを前にしてルリ嬢が告げる。

「分かった。こっちは準備完了です。プロスさん」

『了解いたしました。いやはや。凄いですな。』

まさか軍の中央部に対してハッキングを成功させるとは』

「・・・そんな事ないですよ」

・・・褒められてもな。
喜べるような状況じゃないよ。

『それでは、御願います』

了解です。プロスさん。

「ルリちゃん」

「はい。・・・パスワード入力。緑の地球を護る盾」

ピピピとパスワードを入力していくルリ嬢。

『ビックバリア。解除されました』

告げられるアナウンス。

どうやら解除は成功したらしい。

「帰りましょう」

門が電腦世界からの出口。

ルリ嬢は背を向けて先に出口へと向かう。

その背中がとても小さく見えて・・・。

「ルリちゃん！」

・・・気付けば俺の口は勝手に開いていた。

「もし、俺が犠牲者だったら、テンカワさんの事は絶対に許さない

と思う」

「……………」

「でも、俺はテンカワさんの行動を否定しない。

愛する者の為に壮絶な生き方をしたテンカワさんを俺は尊敬する」

「……………」

無言のルリ嬢。

今、ルリ嬢は何を思い、何を考えているのだろうか？

「罪に苛まれ、愛する人に裏切られ、それでも前に進めるテンカワさんを俺は尊敬する」

「……………」

「だから！ ルリちゃん。君がテンカワさんを癒してあげて欲しい。罪に苛まれる心を癒し、共に罪を背負って欲しい」

「……………」

「今は何か目的があつて、それに向かってガムシヤラになっているから大丈夫かもしれない」

「……………」

「でも、ふとした時や目的を終えた時、テンカワさんは再度己を責めると思う。」

そんな時、ルリちゃん、君がいるだけでテンカワさんは救われると思う」

誰かが傍にいただけでいい。

それだけで心はずっと楽になる。

「ルリちゃん。君はどうしたい？」

「……私はアキトさんを支えたい。罪を背負えというのなら一緒に背負う。」

助けて欲しいというのなら全力で助ける」

その眼は覚悟を決めた眼。
復讐鬼を支えようとする妖精の誓い。

「……たとえその為に私が犠牲になろうとも、私はアキトさんが叶えたい夢を叶えます」

決意。覚悟。

それをルリ嬢は決めている。

「……障害があるのなら、私が壊します。何を犠牲にしても、何があっても、私は……」

これは……依存だろうか？
妄信的なまでにテンカワさんを……。

「マエヤマさん。もし、貴方が障害であるのなら、私は自分の手を血で染める事も厭いません」

狂信。盲信。依存。

ルリ嬢が抱える闇の一端を垣間見た気がする。

殺すと宣言されたのに、俺はそれを怖いと思わず、ただただ……。

「……お先に失礼します」

……悲しく感じたんだ。

第十話

「ヤマダ・ジロウは生存。ビックバリアは両者無被害で突破。キノ
コ副提督は原作通り脱出。」

テンカワさんは着実に未来を変えつつある・・・か」

「・・・何か言いました？」

「え、ううん。なんでもないよ。セレスちゃん」

おっと。思わず口に出てたか。

「・・・あの、ここはどうすれば？」

「ああ。ここはね・・・」

セレス嬢に心配かけちゃ駄目だよな。

せつかくの訓練中なのに。

「それにしても、子供に夜勤を強要するとはねえ」

何が起こるか分からないからブリッジには誰かしらが待機してなくてはならない。

それは分かる。でも、大人達だけで回しても支障はないと思うんだよなあ。

「・・・私、子供じゃありません」

「そっか。ごめんごめん」

原作のルリ嬢を思い出すな。

女の子って子供扱いされるのが嫌なのかな？

大人っぽくありたいって思うのにはまだ早いと思うけど。

「眠くない？」

「・・・大丈夫です。寝なくても問題ないように調整されていますか」

軽い口調の割りに過酷な現実。

改めて、彼女達が遺伝子を弄くって造られた存在なんだって実感した。

「そっか。でもさ、寝る子は育つっていうよ？」

「・・・寝ないと育ちませんか？」

「どうだろう？ でも、寝た方が育つんじゃないかな？」

「・・・それは、困りました」

調整なんて言うな。君達は普通の人間なんだから。

・・・そう言うのは簡単だ。俺だってちよっと特別な人間ぐらいにしか彼女達の事を思っていない。

でも、自分は人形なんだと思っ込んでいる彼女達にその言葉は響くのだろうか？

唯のIFSですら拒絶する者達がいるのに、それに特化するよう生まれた頃から、

いや、生まれる前から宿命付けられた彼女達を周りはどう思うだろうか？

ナデシコは優しい所だ。だから、皆が受け入れてくれる。ちよっと特別な人間程度にしか思わないでいてくれる。

でも、世の中はそんなに優しくない。きっと彼女達を拒絶する人間はたくさんいる。

自分と違うだけで、国籍や肌の色の違いだけで差別されるような世の中なのだから。

そんな彼女の事を分かってあげられるのは同じ境遇の者だけ。
傷の舐めあいかもしれないけど、理解してあげられるのは同じ境遇
の者だけだ。

それなら、俺に何が出来る？

君は人間なんだと何度も繰り返して告げる事で認識を改めさせれば
いいのか？

・・・いや。そんなのその場凌ぎでしかない。

いずれ、彼女達は他人と違うんだと実感する場面が必ずやって来る。
他人と違う能力を持っているという事。それは確固たる事実なんだ。
自分は周りと違わないと。自分は唯の人間なんだと。
そういくら訴えようと周りの認識が変わる事はない。

それなら、彼女達は周りと違うと自覚し、

その上で強く生きていけるようにならなければならぬと俺は思う。
その為に、俺は何が出来るのか？

悩んだ。何をしてあげるべきなのか悩んだ。

何もしない事も一つの選択肢だったが、俺は何かしてあげたいと思
った。

何かしてあげようなんて傲慢な考え方かもしれない。

それでも、自分という存在が彼女達の為に何か出来るのなら、俺は
してあげたいと思う。

その上で、俺は彼女達に何をしてあげられるのか？

幾つもの選択肢の中で俺が選んだのは簡単な答え。

マシンチャイルドという存在に眼を逸らす事なく、唯の人間として
接してあげよう。

矛盾している答えかもしれない。唯の人間として扱おうとするのだ
から。

でも、たとえ君達が周りと違っていても、それを受け入れてくれる
人だっているんだよって。

そう伝えてあげたい。

「お腹すいたなあ。出前でも頼んじゃおうか？」

「・・・夜、何か食べると太ると聞いた事があります」

「大丈夫。大丈夫。子供は食べて大きくなるの」

「・・・私、子供じゃないです」

マシンチャイルドである事は変わりようのない事実。

どれだけ叫ぼうが、どれだけ訴えようが、その境遇は変わらない。

君達は特別でもなんでもない。唯の人間なんだ。

俺はそう説く事はしない。

君達は特別だよ。でも、唯の人間なんだ。

俺はそう説く。

逸らしたって変わらないなら、真正面から受けて立って欲しい。

厳しい道かもしれない。

報われない道かもしれない。

でも、それが何よりの彼女達の幸せの為だと思うから。

せっかく特別な能力を持って生まれてきたんだから、引け目じゃな

くて、誇りを持って欲しい。

ま、行き過ぎも困るけどさ。

「それじゃあさ、どっちが長く徹夜できるか勝負しようか？」

「・・・考えさせてください」

「え？ 嫌かな？」

「・・・育たないのは困ります」

「そっか。そっだね」

無表情ながらも少し困ったように眉を顰めるセレス嬢。

彼女達が人形じゃないなんて誰もが分かってる。

無表情に見えて、実はそうじゃないなんて誰もが分かってる。

いつか大袈裟なぐらい感情表現する普通の、

ちよっと特別だけど、普通の女の子になって欲しいなって思った。

「セレスちゃんは将来美人になるよ。絶対」

「・・・そうですか？」

「うん。今でさえこんなにも可愛いんだもん。将来はやばいくらい可愛いと思うね」

ま、今の可愛いと大人の可愛いはちよつと違うけど。

「・・・初めて言われました。可愛いなんて」

「周りの眼が節穴なんだよ。何で気付かないんだか」

「・・・気味悪がってました。金色の眼とか」

「そんな事気にする必要ないじゃん。周りは周り。セレスちゃんはセレスちゃんでしょ。」

俺は綺麗だと思うけどね。金色の瞳」

吸い込まれるような綺麗な瞳。

たかが色が違う程度でその綺麗さは失われないさ。

むしろ、白と金のコントラストが魅力的だと思う。

「セレスちゃんはさ。MCって事を気にしてるの？」

「・・・はい」

「何でか教えてくれるかな？」

「・・・研究所では酷い目に遭いました。助けられてからもMCだつて気味悪がられました」

そうか。ネルガルの職員め。呪つてやろうか？

「・・・マシンチャイルドで、得した事なんて・・・一度もありません」

悲しそうに俯くセレス嬢。

マシンチャイルドである事が彼女の負い目になっている。
そんな状況は打破してやらないとな。

「セレスちゃん。そんな君にとっておきの言葉を教えてあげよう」

「……とっておきの言葉？」

「そうだよ。セレスちゃん」

人は違うからこそ美しい。

そんな意味が込められた言葉だ。

「皆違って皆良い」

「……皆違って皆良い？」

「そう。人間は誰しもが違うからこそ仲良くなれる、好きになれる、
幸せになれる。」

皆が同じ人間だったら何も面白くないでしょ？」

自分ばかりの世界なんて想像もしたくないぜ。

「他人と違うなんて当たり前前の事なんだ。」

だからさ、他人と違う事に引け目なんて感じる必要はないよ。

違う事に意味なんてない。だって、それが当たり前なんだから」

マシンチャイルド？

良いじゃん。別に。だから何？

それぐらいに考えていいと思う。

「違う事に意味なんてない。なら、マシンチャイルドである事とそ
うでない事に意味なんてない。」

少なくとも普通に生活する限りはね」

「・・・それでも、マシンチャイルドだから、私は嫌われる」

嫌われる事に恐怖する。

ハハ。何だ。考え方だつて唯の子供じゃん。

マシンチャイルドも普通の子供も大して変わらんないんだ。

「マシンチャイルドだからって俺は嫌つたかい？」

「・・・え？」

「ミナトさんは？ メグミさんは？ 他の皆だつてそうだ。

セレスちゃんがマシンチャイルドだからって嫌う人がいたかい？」

「・・・いません」

「セレスちゃんがマシンチャイルドだつて事は一生変わらない」

「・・・」

小さく息を呑むセレス嬢。

まだ、マシンチャイルドである事に開き直れていない。

ま、そんな簡単にうまくいくなんて思つてないけど。

「でも、マシンチャイルドでも嫌わない人はいる。

嫌う人もいるかもしれないけど、嫌わない人だっているんだ」

絶対にそうとは言い切れない。

でも、少なくとも、ナデシコクルーは嫌わないでくれる。

「マシンチャイルドは他の人と違う。それは仕方のない事。

でも、違う事に意味なんてないんだから、周りが違つていうんなら言い返しちやいなよ。

同じ人なんていないって。私が他の人と違つたつておかしな事じゃないって」

「・・・」

無言のセレス嬢。

まだ結論は出ないって所かな。

ま、それもそうか。

コンプレックスがすぐに解消される訳ないもんな。

俺だってコンプレックスの一つや二つぐらいある。

誰だって一つぐらいは必ず持っているもんだ。

マシンチャイルドであろうとそうでなかりうと老若男女問わず必ずな。

セレス嬢がコンプレックスを抱えるのも生きている上では必然って訳だ。

解消方法は色々あるけど、やっぱり一番は時間かな。

時間がいつの間にかコンプレックスを解消してたなんて良くある話だ。

セレス嬢のコンプレックスも時間が解決してくれるかもしれない。

セレス嬢の一生はまだまだ長いんだから。

「急に变な事を言っでごめんね。でも、覚えておいて。

セレスちゃんがマシンチャイルドだからって他人と比べる必要はないんだって事。

他人は他人。自分は自分だよ」

「・・・はい」

少しでもセレス嬢のコンプレックスが薄まったらいいなと思う夜の事でした。

「そっか。特別扱いしつつ唯の人間だつて自覚させたいのか」
「はい。普通の人間だよつて諭してあげるのも良いと思います。
でも、いずれ他人と違ふと気付く事態に直面すると思うんです。
その時、そっちだと受け止められるかなつて」

毎晩恒例の膝枕。

すっかり癖になつてしまいました。

多少、遅くなつてもミナトさんの部屋を訪ねるぐらいですから。
だ、だつて、仕方がないでしょ。

あんなに気持ち良くて心地良くてゆっくり出来て癒される状態なん
てないよ！

一度やつたらやめられない。

あれはもう、あれだね、麻薬みたいなものだね。

常習性が高過ぎます。

膝枕依存症です。僕。

「そうね。私はそこまで考えてなかつたわ。ただ普通の子供のよう
に扱つてあげようつて」

「それでいいと思いますよ。」

ただ、マシンチャイルドである事に眼を逸らさせないように接す
れば良いんです」

「可哀想、つて思つちゃいけないのね。そう思う事自体が差別して
るつて事だもの」

「ええ。違ふのは当たり前なんです。」

ちよつと特別な生まれをしたつてだけで可哀想だなんて思つちゃ
駄目ですよ」

「それもそうね。ふふふ。まさかコウキ君に諭される日が来るなん
て」

「ば、馬鹿にしないでくださいよ。俺だつて色々考えているんです」
「拗ねない。拗ねない」

優しく微笑んでくれるミナトさん。

ああ。癒される。

弄られているのに癒されるとはこれ如何に。

今なら、前の世界の友達の気持ち分かるような気がする。

「それにしても、ルリちゃんがそんなにアキト君の事をね」

ルリ嬢から聞いた事をミナトさんにも話した。

劇場版の時のルリ嬢とアキト青年の思いと共に。

「大切な人って断言してたぐらいですから。きっと長い間、追いかけていたんでしょうね」

「愛するが故に引き離す。愛するが故に私情を捨てる。

方法は間違っているけど、アキト君の想いは本物ね」

「やっぱり間違ってますか？」

「ええ。だって、アキト君はルリちゃんの思いを無視して独り善がりな態度だったんだもの。」

正面から一度話し合った方がお互いに幸せになれたと思うわ」

「俺もそう思います」

言葉にしなくちゃ伝わらない。

話さなくても伝わる事はあるけど、話さなくちゃ伝わらない事の方がずっと多い。

「俺は尊敬しますよ。愛する人の為に修羅になりきれぬテンカワさんを」

俺にそんな事は出来るのだろうか？

五感を失って、夢を失っても、絶望せず、生きる事を諦めず、戦い

続ける事が。

「修羅・・・か。コウキ君にはなあって欲しくないかな」

「ミナトさん？」

「愛する人を取り戻す為に修羅になった人を見るのは辛いもの。きっとコウキ君も同じように距離を置こうとするでしょう？」

そんな事になった時、俺が取る行動。

「俺の事は忘れて違う人と幸せになあって欲しいと。そう思うと思います」

俺は相応しくないからって。きっと距離を置く。

「誰だってそう思うものよ。私だってきっとそう思う」

「ミナトさんも？」

「ええ。・・・別に私はアキト君を軽蔑してる訳じゃないわ。

むしろ、立派な事だと思う。そこまで愛される人は幸せだと思う」

「幸せ・・・ですか」

「でも、私は傍で愛して欲しい。遠くからじゃなく、近くで」

傍で・・・か。

テンカワさんも葛藤があったんだろうな。

俺にその資格はないって。

帰りたいけど帰れない、いや、帰らない。

罪の意識はテンカワさんにとってそれだけ重たかったんだ。

「どうしようもなかったんだと思います。巻き込まれたのはアキト青年のせいじゃないですから。」

不幸の始まりは・・・」

「分かってるわ。アキト君を攫った組織が悪いって事は。

そうでなければアキト君は素直に傍で愛していられたって事も」

どうしようもなかった。

攫われたアキト青年が悪いだなんて思える筈がない。

アキト青年はあくまで被害者なのだから。

「理不尽なのね。世界って」

「・・・ええ」

強くなりたい。

理不尽に抗える力が欲しい。

テンカワさんはきつとそう強く思ってる。

経験したらこそ余計に。

「コウキ君は力が欲しい？ 理不尽に抗える」

「分かりません。経験のない俺には」

その時にならないまで力を求める事はない。

人間ってそういうもんだと思う。

変な所で楽天的で、いざという時に楽天的だった己を恨む。

実際に経験しないと分からないんだ。

経験した人の話を聞いても、どこか他人事のように思ってる。

「そうね。それじゃあ、私が死んだら、コウキ君はそう思ってくれるのかな」

「・・・死なせませんよ。絶対に」

絶対になんて断言できる訳がない。

それでも、俺は断言する。
これは俺の誓いだから。

「俺も生き抜いて、ミナトさんも生き抜いてもらいます。
俺の目指す平穏な生活にミナトさんは欠かせませんから」
「そっか。それじゃあ死ねないわね」

死なせない。
戦争が何だっつてんだ。

「俺、色々と考えているんですよ。ナデシコを降りた後とか」
「あら。気が早いのね」

夢を考えるのに早い遅いはありませんよ。

「プログラマーとしてきちんと仕事に就くつても良いですが、
教員免許を取って教師なんてやってみるのも良いかなって」
「へえ。教師か。コウキ君は面倒見がいいから向いてるかもね」
「ミナトさんもどうです？ 教員免許、持ってましたよね」
「うふふ。それもいいかもね。一緒に教師か」
「あ。でも、色々と心配だから専業主婦にしません？ ガキ共が色
目を使いそうなので」
「あら？ 養つてくれるの？」
「それぐらいの甲斐性はみせますよ」
「ま、考えとくわ」

きつと楽しい生活に違いない。
未来に思いを馳せるのは生きる者の特権だ。
誰だっつて幸せになりたいのだから。

「それじゃあ、そろそろ・・・」

「え、ええっと、その、ですね・・・」

「いいから、いいから、いらっしやいな」

今日の夜も長そうです。

「すみません。アキトさんの事を話してしまいました」

「構わないさ。事情を知らなければ混乱するだけだろうからな。それより、どうだった？」

「結論から言いますと、彼は唯の人間ではありません。私と同等のハッキング能力があります」

「ルリちゃんと同等か。確かに普通の人間ではないな。IFS強化体質か？」

「あの年齢のMCは記録上では存在しません。それに、彼の経歴に怪しい点はありませんでした」

「両親が研究者か。もしかナノマシン工学を？」

「経歴ではそうでした。ですが、マエヤマという研究者の名前は聞いた事ありません」

「知らなかっただけという考えもあるが・・・ありえないか」

「はい。もし、通常の人間がMC並のオペレート能力を得られるようなナノマシンを開発したら、

今頃知らない人はいない程に有名になっている筈です」

「もしか・・・」

「どうかしました？」

「あいつの両親も殺されたのではないか？ 俺の両親のように」

「・・・確かに二年程前に両親共に死去していますね。交通事故で」

「危機を察知したあいつの両親は息子のあいつにそのナノマシンを託して地球に戻らせた。」

そのナノマシンの恩恵で天才プログラマーとして名を馳せている「しかし、それが事実だとしたら、有名になった彼を見逃す訳がありません。」

必ずナノマシンを確保しようと

「だから、ナデシコに乗ったとは考えられないか？ 危険を察知して。」

ナデシコならば、とりあえずは周りと隔離される」

「・・・なるほど。可能性はありそうです」

「真相は分らんが、何となくあいつの正体は掴めてきたな。頭が回るのも両親の影響か」

「かもしれないね。得られた情報は僅かですが、試してよかったです」

「ビックバリアの解除とあいつの調査を同時に行う。悪くなったな。ルリちゃん」

「色々ありましたから。艦長の経験は役に立っています」

「そうか。何はともあれ注意は必要だな」

「・・・はい」

「これより相転移エンジンの全力稼動テストを行います」

急遽告げられる稼動テスト。

サクキミドリに到着する時間を早める為って所か。

じゃあ、要求したのはテンカワさんかルリ嬢だな。

「どうして、そんな事を？」

おお。ジュン君。

頑張って目立ってくれ。

ビックバリアの時、戻ってきた事にすら俺は気が付かなかったから。

「リーダーパイロットのテンカワさんの希望でしてな。

宇宙空間においてどれだけの出力を得られるのか。

全力で稼働させたらどれだけの出力になるのか。把握しておきた
いと」

「流星はリーダーパイロットだ」

絶賛する前に気付きましたよ。戦闘指揮係さん。

でも、理由としては最もらしい。考えたな。テンカワさん。

「万が一、エンジンの稼働に問題があっても、サツキミドリコロニーで改修できますからな。

いやはや、提案して頂いて助かりましたよ」

そっか。一度もテストしてないから、どうなるか分からないのか。

開発途中で稼働テストをしたって話も聞かないし。実験艦って事？

まさかね。

「そもそもどうしてサツキミドリコロニーに向かうんですか？」

「サツキミドリコロニーではパイロットが合流する予定なのです。

また、物資を確保しておきたいと思ひましてな」

パイロット三人娘か。

全員、キャラが濃いんだよなあ。

「慌てて軍ドックから脱出したので、全ての物資を載せる事が出来なかったのですよ。」

現状でも火星までの往復は出来ませんが、念の為です」

三日前に強引に出航だもんな。

予定通りに行かなかつた訳だから、載せる予定の物資も載せられなかつたと。

「合流するパイロットはどんな奴なんだ？」

気になりますか？ ヤマダ・ジロウ。

原作では合流する前に脱落だもんな。

せつかく死なずに済んだんだ。生き抜いてくれよ。

「全員女性ですね。」

長くチームを組んでいた三人組ですので、連携も素晴らしく、各々の腕も高いです」

近距離担当のスバル・リョーコ。

中距離担当のアmano・ヒカル。

遠距離担当のマキ・イズミ。

そこに近距離担当、というか、近接馬鹿のヤマダ・ジロウと万能のテンカワさんが加わる訳だ。

もし、俺がパイロットとして戦場に出るなら、中・遠距離を担当すべきだな。

ま、格闘技も何も身に付けてない俺だ。射撃の方がまだ頑張れるだろ。

ゴートさんから筋が良いって褒められたし。

必須技能の視力の良さは誰にも負けないぜ。

「そうか。そうか。所でよお。マエヤマ・コウキ!」

お、俺!? 俺、何かしたか?

「な、何だ?」

「てめえは何なんだ!? パイロットなのか、そうじゃないのか!? ハッキリしやがれ!」

ハッキリしろと言われても。

「俺は予備パイロットですから。緊急事態や絶対数が足りない時のみ出撃します」

「それが中途半端だって言ってるんだよ! どっちかにしやがれ! パイロットなのか、そうでないのかを」

・・・困ったな。

今となつてはパイロットになる事にそこまで拒否感はない。

でも、人数的に十分な気もするし、俺の役目はない気がするのだが。

「マエヤマさんには万が一の為に控えてもらっているのです」

「秘密兵器ってか? それ程の腕がそいつにあるのかよ?」

俺って舐められる?

ねえ? 舐められてる?

「良いですよ。そこまで言うのなら、相手になります。

サツキミドリコロニーでパイロットが合流したらシミュレーションで模擬戦をしましょう」

「・・・コウキ君。子供みたいよ」

呆れないで下さい。ミナトさん。

男は舐められたら見返してやらないといけないんです。

「よっしゃ。いいだろ。このガイ様が相手をしてやるぜ」

ふふふ。調子に乗っていられるのも今の内だぞ。この野郎。

「蜂の巣にしてやる」

「お、お手柔らかにね。コウキ君」

負けられない戦いがそこにある。

やってやるぜ！

「こちらネルガル所属機動戦艦ナデシコ。着艦許可を御願います」

「こちらサツキミドリコロニー。了解しました。

それよりも、君、可愛い声してるねえ。どう？ この後なんて

「うーん。どうしようかなあ」

声だけで判断しない方が良くないかな。お互いにさ。

まあ、ちよつとした挨拶みたいなもんだと思うけど。

「……サツキミドリコロニーって襲われるのよね？」

「……今回は予定より早く着きましたからね。襲撃前に間に合ったのかと……」

でも、この後、どうするつもりなんだろ。

早く着いたからって対処できる訳でもないし。
住民を逃がそうにも、どうやって説得するのか。

いきなり襲われるから逃げろっていつても相手は納得しないよ。多分。

会長命令とかならいけそうだけど、アカツキ会長はテンカワさんと繋がっているのかな？

その辺りがイマイチ分からん。

どうするんだらう？ テンカワさん達。

「それでは、これより休憩と致しましょう。

明日出航する為、今日中に戻ってきて頂ければ結構です。

メグミさん。艦内放送を御願います」

「はい」

ほお。休憩ですか。プロスさん。

ま、ブリッジクルーは交代でとか言っただらうけどね。

食堂とか整備班とかはどうなるんだろ？

ま、どっちも班長がその辺りをきちんと仕切ってくれるか。

ウリバタケさんもハウメイさんもリーダーシップがあるし。

「ブリッジクルーは交代で休憩としたいのですが、よろしいですか？」

ま、当然だよな。いざという時に困るし。

襲撃はいつなんだろう？ 詳しい日時が分からん。

「アキトオ！ 私と一緒に」

「俺はやる事があるのでな。失礼する」

ユリカ嬢がデートに誘う前にテンカワさんはブリッジから抜け出す。

あ。ユリカ嬢が灰になってる。

「ユリカ。それなら、僕と一緒に」

「ええええん。アキトが私を置いてったあ。あ、違うわ。

きつと私のプレゼントを買う為の別行動なのよ。もう、アキトっ
たら、照れ屋なんだから」

「ユ、ユリカ？」

「もうもうもう。アキトったら・・・」

そこまで妄想できる貴方が凄いと思います。

ついでに隣で灰になっている人に気付いてあげてください。

「ブリッジクルーは交代で休憩としたいのですが、よろ」

「よし、俺は街でゲキ・ガンガーグッズの掘り出し物を探すぜ。
レッツ・ゲキガイン！」

元気だね。ヤマダ君。

「ブリッジクルーは交代で休憩とし」

「コウキ君。どこか行く？」

「ミナトさん。話を聞いてあげましょうよ」

プロスさんが可哀想ですから。

「.....」

ほら。頭抱えてる。

「プロスさん。私が残りますので皆さんで休憩するのがよろしいか
と」

「残るといのですか？ ルリさん」

「はい。私はブリッジに用がありますので休憩の必要はありません」

「いえ。そんな訳には」

「・・・私も残る」

「ラピスさんですか？ しかしですね」

ルリ嬢とラピス嬢が残ると言い出す。

用心の為に残っていたいという訳か。

つまり、テンカワさんも待機してらって事だな。

「ワシも残ろう。出歩くのは疲れるのでな」

フクベ提督もか？

「俺も残る。特にやる事もないのでな」

ゴートさんまで。

「私が言いたいの誰が残るではなく、順に休憩して欲しいという事で」

「私は休憩扱いで構いませんよ。どうせ、外に出る事もないでしょうし」

「・・・私も」

「ワシは自室で茶を飲むくらいじゃ」

「特にやる事もないのでな」

プロスさん。胃薬あげましょうか？

とても痛そうに胃を摩ってますし。

「そうですか。それでは、皆様方はお休み下さい。」

残るのは構いませんが、必ず二人はブリッジにいるように御願いますぞ」

そう言つて、胃に手を当てながら去っていくプロスさん。心中、お察しします。

「ねえねえ、折角だから遊びにいきましょうよ」

「そうですね。折角の休憩ですから」

休憩していいなら休憩しますよ。

但し、すぐに動けるようナデシコが停泊している港周辺だけのつもりですが。

「どうしよっかなあ。誘われちゃったし、お茶してこようかな」

メグミさん。マジですか？

「ユリカはどうするの？」

「うん。折角だし私も外に」

「あ。艦長は書類整理を御願います。

溜め込まれたら各部署に支障が出ますので急いで処理するようにでは」

「.....」

再度、灰になるユリカ嬢。

というか、プロスさん、何てナイスなタイミング。これ以上ないってタイミングで戻ってきましたね。すぐ行っちゃったけど。

「ユ、ユリカ。元気出して。僕も手伝うから」

「うううう。ありがとう。ジュン君。やっぱりジュン君は最高の友達だね」

「う、うん。友達の為なら何だってするよ」

「流石ジュン君」

・・・心の涙に気付いてあげてください。艦長。

というか、実際に心ではなく眼から涙を流してますから。見えませんか？ その悲しみの涙が。

「可哀想にね。あのままじゃ気付いてくれそうにないわよ。艦長」

「副長の押しが弱いのかと。友達宣言に噛み付くぐらいの事はしないと駄目ですよ」

「うふふ。これからは楽しみね」

恋愛観察が趣味みたいなものですからね。ミナトさんは。

「・・・・・・・・」

ん？ セレス嬢。

「・・・・・・・・」

どうかしたのかな。ボーっとしてるけど。

「セレスちゃん。どうかした？」

「・・・いえ。休憩と言われても何をしたらいいのか知りませんが、どうしようかと考えていました」

ま、また軽くへビーな話を。

「ミナトさん。駄目ですか？」

「も。しょうがないわね。今回だけよ」

一言だけで分かってくれるミナトさんは素敵な女性だと思う。

「セレスちゃん」

「・・・何ですか？」

「一緒にお出掛けしない？ きっと楽しいよ」

「・・・お出掛け・・・ですか？」

「そうそう。買い物したり、映画見たり、食事したり。とにかくきつと楽しいから、一緒においでよ」

「・・・良いんですか？」

何を不安そうに。

聞き返す必要なんてないっての。

「当たり前じゃん。こっちから誘ってるんだからさ」

「・・・じゃあ、御願います」

「任せました」

頭を下げてくるセレス嬢の頭を撫でながら了承。

ハッ！ いつの間に掌が頭に。これが魔力か。

「それじゃあ、出掛けるから着替えておいで」

「・・・私、着替えありません」

「え？」

「・・・制服しか持ってませんから」

おいおい。ネルガル。そりゃあないだろ。

もっと女の子として扱ってやれよ。

「ミナトさん」

「ええ。決まりね。まずは洋服を買いに行くわ」

相変わらず素敵です。ミナトさん。

何も言わなくても理解してくれるんですから。

「その前に私の部屋にいらっしやい。服あげるから」

「え？ ミナトさんの服をですか？」

「念の為に子供の時の服を持ってきておいたのよ。やっぱり正解だったわ」

準備が良いですね。最早、流石という他ありません。

「ほら。セレスちゃん。行くわよ」

「・・・はい」

セレス嬢の手を握って去っていくミナトさん。
ま、集合場所と時間は後で連絡すればいいか。
コミュニケーションで通信したら着替え中でしたなんていうベタな事にはならないようにしないと。

「とりあえず、俺も着替えてくるとしますか。それじゃあ、留守番の方、御願いますね」

待ってもらおう四人に頭を下げた後、俺もブリッジから抜け出した。
さて、着替えて先に待ってますか。女性の着替えは長いですからね。

案の定、三十分程待たされました。

ま、覚悟してたから気にしないけどね。
むしろ、良くぞ三十分で済んでくれた。
俺の友達は何のくせに一時間遅刻してきやがったからな。
思いつき蹴ってやった記憶がある。
元サッカー部のキック力を嘗めんなって感じた。

「ごめんごめん。待った？」

「いえいえ。今来たところですよ」

と、ベタな会話をこなしつつ、デート？プランを決める。

「まずはセレスちゃんの服を買いにいきましょう」

「無論です」

「その後はコウキ君のエスコートって事で」

ええ？ 投げ出すの早くない？

まず、って言ったから結構計画してくれてるのかと思ってたのに。

「女の子をエスコートするのは男の義務よ。これも勉強、勉強」

「き、緊張するんですけど・・・」

俺としてはミナトさんに任せられた。

そっちの方が気が楽だし。

俺が決めるとなると、間違ってるのかなとか不安になるし。
ぐああああ。どうしよう。

「そんなに深く考えなくていいわよ。軽い感じですよ。

別に高級レストランにエスコートしなさいって言ってる訳じゃないんだから」

それでも緊張するものは緊張するんです。
・・・相変わらず情けないな。俺。

「こ、ここは恒例のウィンドウショッピングですね。雑貨店って回るだけで楽しくありませんか？」

「ま、合格ね。そうしましょう。もちろん、コースはコウキ君が決めるのよ」

「え、ええ。任せてください」

ま、まあ、その場凌ぎで何とかなるだろ。

「さて、コウキ君、出掛ける前に何か言う事ない？」

ええっと、何だろう？

「いえ。特には」

「・・・」

無言で睨むのはやめて下さい。
非情に居心地が悪いです。

「もお。減点。失格。退場」

「ええ！？ 始まる前から失敗！？」

な、何だ？ 何なんだ？

「せっかく気合入れてきたんだから、気付きなさいよね」
「気合？」

あ。そういう事でしたか。

不慣れなもので。

「ええっとですね・・・」

でもさ、こういうのって眼の前で言うのかなり恥ずかしいよね。クウ。世の軟派男の勇気を少しでいいから分けて欲しい。

オラに勇気を分けてくれと叫びたいが恥ずかしいからやらない。

「に、似合ってて、えっと、素敵だと思います」

真っ赤だろ？ そうだろ？ 真っ赤です。

それぐらい自覚しています。恥ずかしいものは恥ずかしいのです。

「ズバツと言わないと男らしくないぞ」

頬をつんつんしないで下さい。これでも頑張った方です。

「はい。次」

「次？」

ミナトさんの次？

あ。セレス嬢。

「セレスちゃん」

「・・・はい」

「とっても可愛いね。良く似合ってるよ」

セレス嬢の銀色の髪と純白のワンピースが眩しいくらいに映える。妖精って言われても違和感ない。むしろ、俺が妖精と讚えたい。

「・・・あ、ありがとうございます」

「何でセレスちゃんの時はズバツと言えるのよ」

照れる顔も可愛らしい。

ミナトさん。それは仕様です。

「セレスちゃんは何を着せても可愛くてね。悩んで悩んでこれにしたの」

そうですね。それで時間がかかったんですね。

というか、何着持ってきたんですか？ 子供服。

「じゃあ、離れ離れにならないように手を繋いでいきましょうか」

「そうですね。じゃ、俺がセレスちゃんの左手を」

「私がセレスちゃんの右手ね」

「・・・御願います」

颯爽と飛び出す俺達。

繋がれた右手からはどこか楽しそうな雰囲気伝わってくる。

ミナトさんも笑顔だし、セレス嬢もちょっと頬が緩んでいる気がする。

楽しんでくれたら嬉しいな。

「・・・」

右手からに感じるセレス嬢の小さな手の感触。

なんか、昔の事を思い出すなあ。

俺が小さくて、周りも小さい頃、従妹の手をこつやって繋いでたっけ。

今は成長してそんな事させてくれないと思うけど。

・・・皆、元気にやってるかな？

あの世界にはちゃんと俺がいるから、心配はないと思っけどぞ。
やっぱり少し寂しいかな。

「ほら。行きましょ。コウキ君」

「・・・いきましょ」

でも、今の俺にもこうやって一緒に歩いてくれる人がいるんだ。

寂しいけど、俺の世界はもう既にこっちの世界だもんな。

俺はこっちの世界で幸せに暮らすんだ。

俺の手を引く張る小さな手の感触と二つの暖かな笑顔を前に俺はそ
う再度誓った。

第十一話

『パイロットのスバル・リョーコだ』

『アマノ・ヒカルでえ〜す』

『マキ・イズミ』

予定より早く着艦したお陰で普通にパイロットと合流出来た。

うんうん。やっぱり濃い三人組だなあ。

プロスさん。司会の方、御願いしますね。

『それでは、恒例の質問タイムに移りましょう。皆さん、挙手を御願い』

『はい!』

元気ですな。整備班。

『俺達にも漸く春がやってきた!』

『マエヤマの野郎のせいで鬱憤が溜まってたんだ。これで、俺達にもチャンスが』

『な、何だつてやってやるぞ。か、彼女達の為なら』

今までパイロットは男だけだったもんな。

整備班って役職的に女性とかいなさそうだし。

あ、でも、技術士官って大抵女性のイメージがあるんだけど、どうなんだろう？

やっぱり、連合軍とかはそうなのかな？

ま、こっちは開発主体じゃないもんな。

あくまで整備班だし。

「元気ねえ」

「あ。ミナトさんも、そう思います?」

「叫び声が聞こえるじゃない。画面越しだけど」

呆れた表情を見せるミナトさん。

ま、男達のおあいう叫びは呆れるか。

「コウキ君は行かなくてよかったの?」

「ええ。艦長を始め多くのブリッジクルーが格納庫に行っちゃったじゃないですか。」

流石にブリッジを空には出来ませんよ」

艦長も副長もどっちか一人は残ろうよ。

つてかさ、残ってるのが提督と俺達とセレス嬢だけってどうなの? まあさ、俺が通信士をやればとりあえずは何があってもある程度は運営できるけど、

自己紹介の為にいちいち格納庫に行かなくても。

いずれブリッジまでやって来るんでしょ? その時でいいじゃん。

「ルリちゃん達まで行ったのは意外ね。あの子、性格的にこっちに残りそうなのに」

「そうですね。俺も残ると思ってました」

確かに意外だ。

ルリ嬢もラピス嬢もわざわざ格納庫まで出向くなんて。

どうしてだろ?

「何か気になる事でもあったのかしら?」

「さあ？ 何を気にするんでしょうか？」

格納庫に向かった理由ね。

まさか、このタイミングで襲撃！？

い、いや、それなら、ルリ嬢が持ち場を離れる訳ないし。多分、違う。

それなら、どうしてだろう？

「ま、私達が考えても分からないものは分からないわ。後で訊いてみましょう」

「そうですね」

考えても仕方ないか。

逆に考えて、ルリ嬢がいないって事はまだ襲撃もないって事だ。

「・・・前方より機影反応。木星蜥蜴です」

「ま、マジで？ セレスちゃん」

「・・・マジです」

か、艦内放送。

エマーゼンシーだよ。おい。

「艦内全クルーに告げる。前方より木星蜥蜴迫る。前方より木星蜥蜴迫る。」

直ちに持ち場に付き、戦闘準備を。木星蜥蜴迫る。直ちに持ち場に付き、戦闘準備を」

いつもはメグミさんがいる所に飛び移り、急いで通信。

緊急事態だから急いでくれ。エマーゼンシーコールもそろそろ鳴

るから。

『な、何々?』

「艦長。急ぎブリッジまで戻って来てください！ 木星蜥蜴が現れました！ 指揮を御願います」

『は、はい。とりあえず、出港準備を始めておいてください。急いで戻ります』

「了解しました」

ユリカ嬢からの通信を受け、俺達も準備に移る。

「セレスちゃん。俺も手伝うから発進シークエンスを」

「・・・はい」

「ミナトさん。いつも通りに」

「はいはい」

気楽な返事ながらその行動は的確かつ素早い。

セレス嬢とて一緒に訓練してきたんだ。多少覚束なくとも仕事は早い。

この分なら・・・。

「お、お待たせしましたあ！」

準備中、急いだ様子のユリカ嬢の到着。

その後ろからは・・・。

「・・・む」

「遅れました」

「・・・遅れた」

ゴート氏に肩車された少女二人もご到着。
うん。ゴートさん。少女でも女性ですからね。
分かります。顔真っ赤です。

「す、すいません」

「申し訳ありません。はい」

メグミさん、プロスさんも到着つと。

「メグミさん」

「はい。変わります」

パツと席を立ち、自分の席に戻る。

さて、念の為にレールカノンの準備をしておくかな。

「パイロットは先行出撃。守護隊と共に迎撃に当たってください。

メグミちゃん。サツキミドリ側の対応を訊いて」

「はい」

懐からサングラス的なものを取り出し、装着。

「オモイカネ。レールカノンセット」

『レールカノンセット開始』

まるで自分の身体から新しい腕が生えたかのような感覚。

俺のナノマシンでなければ、こんな感覚は味わえないだろう。

普通のだったら、ただ両手でそれぞれ銃を持っている程度だと思っ
だが、俺の場合は何百に近い腕の感覚がある。

俺とて怠けていた訳ではない。

一番最初にこれをした時は頭痛で二時間ほど苦しんだが、今では大

分慣れてきた。

日頃のシミュレーションも馬鹿に出来ないぜ。

「・・・発進準備。完了しました」

良くやったぞ。セレス嬢。

「機動戦艦ナデシコ。発進！」

「機動戦艦ナデシコ。発進します」

まずは襲ってくる蜥蜴野郎共を蹴散らさないと。俺のレールカノンが火を吹くぜ。

「グラビティブラスト発射準備」

「グラビティブラスト発射準備開始します」

『レールカノン。セット完了』

「DFを張りつつ前進。敵をナデシコで食い止めます」

サツキミドリを優先って事か。

目的を最優先する艦長なら物資の積み込みも終わったし、とっとと逃げるんだろうけど。

ま、ナデシコでそんな事は考えられないか。

「グラビティブラスト発射直前にDFを解除します。

マエヤマさん。その際に敵を絶対に近づけないで下さい」

「了解」

絶対とは断言できないが、やれるだけやってやる。

「発射後からDFを発動するまでの間は無防備になります。」

ルリちゃんはその間に弾幕を。マエヤマさんは絶対に敵を近づけないで下さい」

「了解」

「りよ、了解」

注文が多いっての。

ってか、同じ事を二度も言つなよ。

理解してるから。

「グラビティブラスト発射準備完了。いつでも撃てます」

「メグミちゃん。投射線上から退避するようパイロットに通信を御願います」

「はい」

戦闘時の通信士の役目ってかなり大きいかもしれないな。

「退避完了です」

「DF解除」

「DF解除します」

さて、俺の出番か。

コンソールに手を置き、意識を集中させる。

眼を閉じ、眼を開くと画面に映るのは多くのカメラ映像と敵の情報。

その一つ一つを解析し、瞬時に標準をつけて発射。

ロックオン機能搭載かつ多重ロックオンだ。

外してたまるか。

前方はグラビティブラストに任せるとして、俺はそれ以外と接近中の敵を殲滅だ。

「グラビティブラスト発射あ！」

「グラビティブラスト発射します」

駆け巡る黒い波動。

重力波が敵を押し潰し、前方の敵を踏み躪っていく。
つて、見惚れている暇はない。

後ろ！

「グラビティブラストチャージと同時にDFの発動準備」

「グラビティブラストチャージ開始」

「・・・DF発動まで一分かかる」

「マエヤマさん。一分間、敵の攻撃に耐えてください」

「はいよお」

クソオ。いくら撃つても敵が減らない。

前、横、後ろ、上、下。

全方位から迫る敵を対処するのは脳に負担がかかりすぎる。

俺の脳がオーバーヒートしちゃうっての。

「エステバリス隊はどうなってますか？」

「サツキミドリコロニーより重力波を支給してもらい、サツキミドリの防衛に当たっています」

「・・・マエヤマさんを信じます。サツキミドリを絶対に護り切るよう伝えてください」

え？ エステバリスのフォローはなし？

マジかよ！？

「ルリちゃん。弾幕は？」

「現状でナデシコの出せる弾幕は限界です。後はマエヤマさんにお任せするしかないかと」

嘘だろ！？　こんなんでナデシコを守り通すつもりだったのか？
弾幕薄いぞって。何やってんのって。

「後方のバツタよりミサイル一斉発射。弾幕。間に合いません！」
「マエヤマさん！」

ひ、引き受けなっきゃ良かった。

何だ？　これ。何の拷問！？

クソッ！　やってやるぜ！

ナデシコの後ろ側に配置されている全レールカノンを一斉に操作。
全ての標準を後ろに回してロックオン。

「発射あ！」

絶える事なく撃ち続ける。

数が数だから仕方ない。

視界一面ミサイルってかなりの恐怖感ですから。
って、あ、やばっ！

「ミサイルが一発弾幕を潜り抜けました」

解説どうも。ルリ嬢。

振れるけど、許してくれ！

それと整備班さん。苦勞をおかけしてごめんなさい！

「ほっとお」

って、あら？

振動しない。

「回避成功ってね」

さ、流石、ミナトさん。

俺には見えないけど、きつといつもの頼もしい笑顔を浮かべているに違いない！

「私がフォローするから頑張りなさい。コウキ君」

そこまで言われたらやるしかないだろ。

「……DF発動する」

……さいですか。

「お疲れ様です。マエヤマさん。次の発射まで休んでいてください」

後、何回グラビティする機会があるんだろう？
その度にこれだと頭がぶっ壊れちまうって。

『こちらテンカワ。ブリッジ応答願う』

「あ、はい。こちらブリ」

「ああ！ アキト。どうしたの？ 私になんか用？」

……はあ。

どうしてテンカワさんが絡むところなっちゃうかな。
戦闘中はかなり頼りになる艦長なのに。

『サッキミドリの守備が足りない。マエヤマを出して欲しい』

「……え？」

俺っすか？

え？ マジ？

「マエヤマさん。御願います」

「ええっと」

そう御願いされてもな。

いきなり過ぎてちよっと心の準備が。

「サツキミドリが危険です。急いでください！」

ああ。もう！

分かったよ！

「了解しました」

コンソールから手を放してレールカノンの操作をオモイカネに返す。

「ルリちゃん。後は任せた」

「任せました」

オペレーターのリリーダであるルリ嬢に連絡を終えた後、急いで俺は格納庫へ向かう。

「無理しないでね。コウキ君」

「・・・頑張ってください」

背中にかかる応援の声でやる気を漲らせながら。

「おう。話は聞いてるぞ。知っているとかがお前のはあれだ！」

メタリックシルバーの俺専用エステバリス。

OG戦フレームの武装は……。

「武装はどうなってます？」

「腰の所にイミディエットナイフが二本。ラピッドライフルはすぐ持ってこさせる」

ナイフとライフルだけか。

やっぱり貧弱だな。もうちょっとバリエーションが欲しい。
レールカノンの予備パーツとかで武器を作ってもらおう。

「了解しました」

タラップを利用してアサルトピット内に乗り込む。

俺の為の俺による俺だけの改造アサルトピット。

自慢じゃないが、俺以外が動かそうとしても無理だと思う。

多分、すぐに頭が痛くなるから。

制御も容易じゃないよ。俺のナノマシン以外だと。

ウリバタケさんからはお前馬鹿だろ？ 使いこなせる訳がねえよって言われた。

それからは使っていない時には普通の状態にして、俺が使う時だけ特別仕様にする事にした。

そうじゃなきゃ変に思われるでしょ？ ありえない程に高性能だし。

だから、ウリバタケさんからは普通のアサルトピットにしか思われ
てない。

だが、しかし、俺の手がコンソールに触れると……。

『搭乗者確認。マエヤマ・コウキ。カスタム状態に移行します』

命名、カスタム。

普通の名前でしょ？ でも、この性能は半端ない。

きつとさるお方もナデシコのエステバリスは化け物か！？ っと言
つてくれる筈さ。

「準備完了です」

ブリッジに連絡。

腰のナイフも確認。

両手にライフルを持ち、発射台に立つ。

『発進御願いします』

「エステバリス0G戦フレーム。行きます！」

動き出す発射台。

「ク、クソっ。何てGだ。これでも緩和してるのに」

簡易的だけど、重力緩和装置を搭載したのに。

それでもこれだけのGってどゆこと？

ジェットコースターは苦手な部類に入ります。

自分で動かす分には大丈夫なだけだね。

ってな訳で、現在、結構やばい。

「艦外に出ます。御気をつけて」
「了解」

頑張りますよ。通信どうもね。メグミさん。
しかし、今更だが、俺ってこれが初陣じゃん。
やっば。心臓がバクバクいつてきた。

『マエヤマ。重力波はサツキミドリからもらえる。まずは急いでこ
つちに来い』

「了解しました」

全速で飛ばす。

全身に纏わり付く恐怖の感情を忘れるように無我夢中で。
だが……。

「……はあ……はあ……はあ……はあ」

……そんな事は無駄だった。

怖い。怖すぎる。

全身が恐怖で震える。

唇は乾燥し、頭の奥が痛み出す。

想像するのは死。

ありえる、いや、失敗すればいとも簡単に死ねる。

これはゲームなんかじゃないんだ。

死んだらお金を入れてコンティニューなんて事は絶対に出来ない。

死んだらそれでおしまいなんだ。無情に無慈悲に死は訪れる。

何を俺は気楽に考えていたんだ。

俺は凄いつて？ そんなのシミュレーションの中の話だ。

ナノマシンが凄いつか身体能力が凄いつか、そんなの今の俺には全
然関係ない。

身体は思い通りに動かないし、イメージする余裕なんて一切ない。
無理。無理だよ。絶対に無理。俺には戦えない。

「……はあ……はあ……はあ……はあ……」

意識が朦朧とする。

視界がぼやけて息苦しい。

こんな事してたらやられるって分かっているのに、身体は動いちゃ
くれない。

イメージ？ 機体を動かすイメージをしろって？ そんなの無理だ。

自分が死ぬイメージしか湧いてこない。

ああ。俺はこのまま……。

『コウキ君。落ち着きなさい』

ミナト……さん？

『ゆっくり息を吐いて』

「ハ——」

『そう。次はゆっくり吸って』

「ス——」

『そうよ。その調子。ゆっくり深呼吸して』

「ス——ハ——」

『落ち着いて。大丈夫だから。コウキ君なら出来る』

「ス——ハ——」

『緊張するのも怖いのも分かるわ。私だってコウキ君が危ない眼に
遭うと思うと怖いし胸が痛い』

「ス——ハ——」

『活躍しようなんて考えなくていいわ。』

ゆっくり、自分の出来る事やってらっしゃい。無理だけはしち

や駄目よ』

「・・・行ってきました。ミナトさん」

『ええ。行ってらっしゃい』

怖くなくなった訳じゃない。

今だって指先は震えてるし、頭の奥で甲高い音は聞こえる。

でも、少し心が軽くなったのも事実。

こんなんじゃない到底活躍なんて出来そうにないけど、やれるだけやってみよう。

落ち着け。俺。いつものようにやればいいだけだ。

『来たか。マエヤマ』

「はい。遅くなりました」

『構わんよ。急だったからな』

「いえ。それで、状況は？」

『現在、サツキミドリの連中はシャトルで脱出中だ。』

合流した新パイロットの三人にその援護を任せてある』

シャトルで脱出か。

その分なら被害は減るな。

『ガイ、俺、お前の三人は敵を引き付けつつ各機撃破だ。』

離れすぎると孤立するからな。常にレーダーで確認しろ』

引き付けつつ撃破。

初っ端にしては厳しいミッションだな。

だが、やるしかないんだ。

俺の頑張りが脱出に繋がるのなら。

「了解しました。ヤマダ機が近接距離で戦闘しているので、俺は後

るから援護します」
『了解した。頼むぞ』

レーダーを確認。

ヤマダ機が引き付けた敵をテンカワ機が殲滅していく。

時にラピッドライフル、時にイミディエットナイフで容赦なく敵を潰していくその姿。

俺にはその姿がまるで死神が死を運んできたかのように……。
……テンカワさんに戦慄を覚えた。

「……あ。ボーっとしてちゃいけない」

思考停止状態からすぐに抜け出し、俺はライフルを両手に持つ。

気分は二丁拳銃のガンマン。

絶え間なく打ち続けられるスタイルな気がする。

命中率だけは自慢できるしな。

弾に限りがあるから調子に乗れないけど、外さないから許して欲しい。

「並列思考なんて立派なもんじゃないけど、

シューティングゲームで培った同時射撃を見せてやる」

標準補正ソフトが勝手にロックオンしてくれるから、

後は俺が把握できるだけの敵を全てロックオンして右と左とで撃ちまくる。

同時に左右で撃つからちよっと頭を使う。でも、それでも、俺はやり切ってみせる。

ダンッダンッダンッダンッダンッダンッ！

撃つ度に衝撃が走るが、そんな事は百も承知。
宇宙だとそれで勝手に移動しちゃうからより複雑な操縦技術が必要
だけど……。

「シミュレーションだけは欠かしてない！」

飛び込んでくるバツタをスラスターを吹かして避ける。
その後、振り向き様に蹴り上げ、ライフルで貫いた。

「まだまだあ！」

格闘戦をこなす為に取り付けられた反重力推進機関。
その推進力を利用して向かってくるバツタを踏み台にする。
そして、そのバツタを蹴ると同時に自らも飛び上がり、距離を置き、
ライフルを放つ。

『マエヤマ。離れ過ぎだ。孤立するぞ』

いつの間にか遠くに来過ぎていたみたい。
道理で遠距離から援護のつもりが囲まれてた訳だ。

「離脱し、すぐに戻ります」

『応援は？』

「いいません」

この程度にテンカワさんの手を煩わせる訳にはいかない。

「何の為の二丁拳銃だって話だろ」

反重力機構によって足場を作り、そこにドッシリと降り立つ。

ここから動くつもりはないという事だ。

「ダアアア！」

乱射。とにかく乱射。

両腕をあらゆる方向に動かしながらとにかく撃ち続ける。

但し、確実にロックオンはしている。

命中率は下がるが、それ程ではない筈。

「無駄弾もあつたけど・・・殲滅完了だ」

周囲のバツタは全て残骸へと成り果てていた。

一応はきちんと狙ってたが、周りからは子供の癩癩みたくに見えた
だろつな。

泣き叫び、喚き出し、手をバタバタさせて敵を屠る子供。

・・・ある意味、怖いな。

幼女が巨大化してドラゴンと戦うゲームを思い出したよ。

「さて、急いで戻らないとな」

こういう所が経験不足だと思つ。

きちんとリーダーを見て確認しろって言われてたのに、戦闘に入っ
たらすぐに忘れちゃうし。

まだまだ修練が必要だな。

テンカワさんに鍛えてもらうか。

あ、後、ゴートさんにも射撃の練習を見てもらおう。

照準補正ソフトがあるから別に俺自身の技能はそんなに必要ないん
だけど、

まあ、ほら、イメージの問題だし。

ああ。誰か俺に剣術とか格闘技とか教えてくれないかな。

俺の経験なんて体育の授業の柔道とチャンバラごっこぐらいしかないぞ。

はつきり言っつて、使えん。

ま、はつきり言わなくてもそうなんだけどさ。

「すみません。戻りました」

『了解した』

「サツキミドリの方はどうですか？」

『現在もシャトルが脱出している。後少しと言っていたな』

「無事、脱出できたんでしょうか？」

『そうだな。脱出したシャトルの内、七割は生存、二割は撃沈、一割は行方不明といった所だな』

「そう……ですか」

助かった人もいた。でも、助からなかった人もいたんだ。

これが死。選択する事をやめ、抗う事をやめ、唯の物になってしまふという事か。

……やっぱり、死ぬのって怖いな。

『死ぬのが怖いか？』

問われる。

多くの者を殺してきた者から。

「……もちろんです。誰だって死ぬのは嫌ですし、怖いものです」

『……俺は何度も死にたいと思ったがな。死んで楽になりたいと思っただ』

「それは例外ですよ。聞きました。ルリちゃんから。貴方は多くの犠牲を出してここに居るって」

『……』

「犠牲になった者の怨念を感じましたか？」

『・・・ああ。いつだって感じてるさ。悪夢として每晚見るからな』
「なら、それが貴方の罰です。死にたいと願うのは逃げだと思いません。」

怨念を感じる？ 当たり前です。誰が殺されて喜びますか？」

『・・・厳しい事ばかり言う』

「ルリちゃんは言っていました。貴方の罪を一緒に背負うって。」

貴方が楽になりたいからといって死んだ所で悲しみは消えないし、余計悲しむ者も出てきます」

『死ぬまで生き続ける事。それが俺への罰か』

「そうですね。それで赦される訳ではありませんが、罪を犯して何もならないなんて事は絶対にはないですから。等価交換って奴です」

『罪を犯せば罰が下る。当たり前的事だな』

「ええ。貴方自身以外に裁く者がいない以上、貴方が貴方自身を裁くしかないんですから」

罪を犯してしまった。

刑務所に入れば罪が赦されるのか？

釈放金を払えば罪が赦されるのか？

どっちも違う。罪を犯したという事実は何も変わらない。

人を殺したという事実はその後に如何に人命を救おうと消える事はない。

一生、背負わなければならない業なんだ。

罪を犯したから自殺する。

そんなものは何の贖罪にもならない。

自分が殺した命と自分の命が同価値だなんて思い上がりでしかない。一生罪に苛まれ、心に傷を抱えて、ようやく楽になれても及ばないと思う。

それでも、自殺という逃げ道に走るよりはずっと良い。

「休んでいる暇はありませんでしたね」

『・・・ああ。ガイの援護を頼む。俺は突撃する』

「テンカワさんなら大丈夫だと思いますが、気をつけてくださいね。貴方が死んで、悲しむ者はたくさんいるのですから。もちろん、俺も」

『ああ。分かっている。死にはしないさ。逃げたくないからな』

どこかテンカワさんには自殺願望があったのではないかと思う。

だから、俺は改めて思う。ルリ嬢やラピス嬢に彼を支えてあげて欲しいと。

押し潰されないように、隣で支えてあげて欲しいと。

「調子はどうですか？」

『ヘンツ。この程度で敗れる俺じゃねえ！』

「そうですか。援護に入ります。無茶してください」

『おうよ！ 予備パイロットは俺の華麗な機動を眼に焼き付けてな』

スルーされましたよ。

俺のボケってレベル低いのかな？

それとも、あっちが気付いてないのか？

ま、多分そうだろう。あっちが悪い。

さて、弾の残量は・・・。

うん。一段落したら補給に戻ろう。

『ガイ・スーパー・アッパー！』

激しい攻撃だな。

でも、向こうってそんなに強くないし、攻撃後の隙が大き過ぎると思うんだよ。

ダンッダンッ！

ま、それをフォローするのが俺の役目なんだけどさ。

『お。やるじゃねえか。予備』

「予備言うな。射撃に関しては負けねえよ」

『お、それがお前の素か。敬語なんてやめとけよ』

「善処するよ」

何か、熱くなければ本当に男前でカッコイイんだよね。この人。原作でも兄貴肌って感じでアキト青年と仲良くしてたし。パイロット技能も実はテンカワさんに負けてない？性格が災いしてるって所か。

近接格闘技能だけを見るなら、かなりのレベルだもんな。よし。模擬戦の時は挑発しつつ、遠距離から攻めよう。それなら、勝てる。

「ヤマダ・ジ」

『ガアイイ！ ダイゴウジ・ガイだあ！』

これになつきゃカッコイイんだよな。

減点。大きく減点。

「ダイコウジ・ゲキ」

『ガイだ！・・・だが、うん、悪くねえ。ゲキ・ガンガーをリスケットしてやがる』

この人、単純だな。

でも、結構、面白い。

「ゲキガン野郎」

『クウウウ！ 貶されているようで褒められているとこの矛盾クソツッ！ どうすればいい？』

ククツ。おもしろ。

「ガイ！ ゲキガン・ファイヤーだ！」

『おし。ゲキガン・ファイヤー！ ってどうやるんだよ！？』

「こつ。両手を突き出して飛び込めばいいんじゃないか？」

『なるほど。ゲキガン・フレアが合わさってゲキガン・ファイヤーになる訳だな。』

よし。やってやろうじゃねえか！ ゲキガン・ファイヤー！』

威力は分らんが、ポーズは正直・・・かつこ悪いな。

両手を突き出して飛び込むっていうのは、

そつだな、某パンのヒーローが空を飛ぶポーズで敵に飛び込むようなものだ。

再度言つと、威力は分らんが、ポーズ的にはヒーローじゃない。どちらかという間抜けだ。

あれはパンのヒーローだから良いのであって、

エステバリスみたいなロボットがやるのはあまり推奨しない。

「ガイ！ そのままゲキガン・トルネードだ！」

『ゲキガン・トルネード！？ 何だ！？ そのカッコイイ技名は！？』

そつかな？ カッコイイかな？

「そのポーズのまま回転して敵に突っ込むという究極奥義だ。」

間違いなく、ゲキガン・フレアを上回るぞ」
『おつしやあああ！ ゲキガン・トルネード！』

回転しながら敵に突っ込むダイコウジ・ガイ、改め、ヤマダ・ジロウ。

欠点は眼が回る事だな。恐らくフィギュアスケートの人でも眼を回すと思う。

あれで頭部だけ回っていないという不思議現象すらも可能に出来たら、

中の人的に繋がるんだけど……。男前な声の中の人繋がりがりつて奴ま、狸君のタケでコプターな道具と同じで首がひん曲がるか。実際にやったら。

『ぜ、全滅したぜ。眼、眼があああ。あ。ついでに気持ち悪い』

案の定って奴だな。

「一旦帰艦する。付いてきてくれ」

『お、おつよ！』

フラフラのヤマダ機をフォローしつつ、ナデシコに帰艦する。

「ウリバタケさん。ラピッドライフルを」

『おつ。ちよっと待ってな』

コミュニケ越しに武器を要求する。

流星は整備班。すぐに準備された。

「ヤマダ機は格闘戦が多く、損傷している箇所が多いと思います。少し休ませてから再出撃させてください」

『おう。了解した。気をつけるよ』
「はい」

俺は基本的に遠距離ばかりだったからそれ程は損傷していない。
ヤマダ機は、ほら、機体以上にパイロットがやばいと思うから。

「急がないと」

戦線をテンカワさんだけでもたせるのはきついと思うので、急いで
向かう。

「……やっぱりダントツで凄いな」

戦場に戻ると凄まじい機動で動き続けるテンカワ機が見えた。

一つ一つの射撃が的確、武器の持ち替えタイミングも的確だし、接
近戦では無類の強さを誇る。

あれに対抗できるのはヤマダ・ジロウぐらいだな。
対抗できるだけ凄いと思うが。

「俺も頑張らないと」

再度、両手にライフルを持つ。

「……俺も回転しながらライフルでも撃ってみるか？」

「……いや。無理だろ。」

眼が回るのがオチだ。やめておこう。

「シンプル・イズ・ベスト。無茶はしないで、普通の動きをしよう」

普通を極めるものこそが最強と聞いた事があるけど、どうなんだろう？

基本は大事って伝えたいんだと思うけど。

ダンッダンッダンッダンッダンッ！

近付いてくる敵を優先にライフルを撃ちまくる。

その場で止まりながら撃つスタイルだ。ほぼ外さなくて済む。

『シャトルの全機脱出を確認。各機、帰艦してください』

・・・やっと終わったか。

とりあえず、こっちに来る奴らを攻撃しながら下がるとしよう。

ああ。汗でびっしょりだ。早く湯船に浸かりたい。

「マエヤマ・コウキ。帰艦します」

それから、どうにか無事に帰還する事が出来ました。

パイロットは予想以上に辛い。よくアキト青年はやり遂げたな。

そう深く感心してしまう。俺だったら、途中でリタイアしててもおかしくないな。

いきなり戦場に出されるとか、俺には耐えられる気がしない。

帰艦後、疲れからか、その場で寝てしまったのは勘弁して欲しい。

つてか、何故、眼が覚めたらミナトさんの部屋にいるの？

あ。先にお風呂に入らせてください。汗臭いので。

一緒に入る？ む、無理ですから！ か、勘弁してください！

コウキ君が戦場に出る。

・・・そっか。これが怖いって事か。

今までどこか遠い眼で戦鬪を眺めていた私。

でも、今は怖くて仕方がない。

以前、とても昔の戦争の事が描かれた文献を読んだ事がある。

それから日本は戦争をしなくなったらしく、日本という国における最後の戦争を示した文献だ。

その文献で、戦場に出向く夫を沈痛な表情で見送る妻という描写を見た。

今なら、その人の気持ちが判る気がする。

きつと、今の私と同じ気持ちだと思っから。

どうか無事にいて。その為だったら私の命だって惜しくない。

そう思いながら祈る自分がいた事に言われて初めて気がついた。

愛する人が戦場に行く事がこれ程怖くて、心細い事だなんて・・・。

改めて、気安く予備パイロットになればいいなんて言った自分を責めたくなった。

そう言われて泣きそうだったコウキ君の顔は二度と忘れないと思う。戦場がこんなにも怖いものだなんて。

私は現実を甘く見ていた。

「マエヤマ機。帰艦しました」

その言葉を聞いただけで、心から安堵した。

そして、すぐにでも迎えに行きたくなった。

生きているという事を全身で感じなくなった。

でも、持ち場を離れる訳にはいかない。

きつと、そんな無責任な事したら後でコウキ君に怒られるから。

ふふっ。変な所で堅いんだから。でも、それがまたとっても良い子

だって思わせてくれる。

ああいう、無責任な事を嫌う責任感のある人は将来的に優しい夫でいてくれると思うしね。

「パイロットの方はブリッジまで御願ひします」

ああ。コウキ君に会えるんだ。

何だか、久しぶりに会う気がする。

さっきまで一緒にいたのに。

たった数時間が数日にも、数年にも感じられた。

ふふつ。何だか思春期の女の子みたいね。

私がこんな風になるなんて思いもしなかったわ。

でも、それでもいいかなって思える自分もいるから恋って本当に不思議よね。

「・・・はあ。疲れた、疲れた。風呂ぐらい入らせてくれてもいいだろ」

「まあまあ。急いで入るよりゆっくり入った方が気持ち良いよお」

「ふっふっふ」

あ。彼女達が合流した新しいパイロットか。

皆、若いわね。コウキ君もそうだけど、パイロットが皆若すぎると思う。

一人ぐらい、ベテランを入れてもいいと思うんだけどなあ。

「・・・」

「あ。アキトオ！ お疲れ様あ！」

「・・・ユリカ」

「ふう。ゲキ・ガンガー見たいから早くしてくれよな。ああ。気持ち悪」

アキト君とジロウ君。

アキト君達は相変わらずね。

ジロウ君は・・・どうかしたのかな？

気分が優れなそう。顔色も悪いし。」

「む。マエヤマはどうした？」

コウキ君が遅い。

何かあったのかな？

背中に嫌な汗が流れる。」

「メグミちゃん。マエヤマさんに連絡取れる？」

「先程から試みているのですが・・・」

反応が・・・返ってこない？

え？ どうして？ だって・・・。

「まさか・・・怪我してるんじゃない？」

ユリカちゃんの一言にドキッとなった。

意識不明になる程の怪我をもし負ってたとしたら・・・。

「いや。目立った被弾はなかった筈だ」

アキト君がそう告げる。

でも・・・信じられない訳じゃないけど、安心は出来なかった。

不安が胸を締め付け、焦燥に駆られて、気付けば、私は走り出していた。

「ハルカさん？ どこへ？」

そう問われても答えられるだけの余裕はなかった。
いや、問われた事にすら気が付かなかったんだ。

周りの声を声として認識せずに、私は無我夢中でブリッジから抜け出し、格納庫へ足を向けた。

恐怖が身を包み、全身が震え出す。

叫びたい気持ちを必死に抑えて、震える身体を必死に動かし、私は駆けた。

こんなに早く走れたっけ、とどこか他人事のように考える自分もいて、

それでも足が止まる事はなかった。

「コウキ君！」

肩で息をしながら、必死に叫ぶ。

汗だくで、化粧も崩れていると思う。

足もガクガクで今にも倒れそう。

私が思う可愛い女性には程遠い姿だけど、今の私にはそんな事を気にする余裕はなかった。

ただ無事な姿を見たい。ただ私に笑いかけて欲しい。

ただそれだけを願ってコウキ君の傍へ駆けた。

「お、おい。ミナトちゃん」

制止の言葉も振り切って、コウキ君が乗っていた銀色のエステバリ
スに駆け寄った。

「コウキ君！」

ひたすら名前を呼ぶ。
早く出て来てと願いを込めて。

「コウキ君!」

「おい。ミナトちゃん」

「放して! コウキ君!」

「ミナトちゃん! マエヤマの野郎ならあそこにいる!」

「・・・え?」

「まったく。恋は盲目ってか? 大人っぽいミナトちゃんもまだまだ女の子だったんだな」

「・・・そっか。良かった」

ハハハ。安心したら腰が抜けた。

地べたに座るなんて女性として恥ずかしい事なのに。
でも・・・良かった。本当に良かった

「羨ましいいぜ。こんなに愛されてるあいつがよ」

「・・・すいません」

ウリバタケさんに手を差し出され、その手を借りて立ち上がる。
思い返すと・・・私って恥ずかしい事してたのね。

「ほら。真っ赤になってないで早くあいつん所に行っちゃんな」

「ありがとうございます」

格納庫から少し離れたベンチで穏やかな寝息をたてる彼。
もお。私の気も知らないで。

「心配させないでよね。バカ」

「う、うん」

頬をつんつんすると眉を顰めるコウキ君。

それが楽しくて時間も忘れてつんつんしてたのは仕方がないわよね。

『あの〜ハルカさん』

「・・・あ」

忘れてた。

「す、すぐに戻ります」

『いえいえ。今、そちらにテンカワさんが向かいましたので、彼からお話をお聞き下さい。』

今日はそのままお休みになって下さって構いません。マエヤマさんもハルカさんも』

「分かりました」

申し訳ない事しちゃったな。

まさか、私が暴走するなんて。

ウリバタケさんの言う通り、私もまだまだ大人じゃなかったみたい。

「ミナトさん」

「あ。アキト君。ごめんなさいね」

「いえ。マエヤマは疲れているだけみたいですので、俺が運びます」

「そう。あ、じゃあ、私の部屋に運んで、案内するから」

「・・・分かりました」

コウキ君を軽々と担ぐアキト君。

そんなに筋肉質には見えないのに。

かなり鍛えこんだのね。きつと、夢の為に。

「ブリッジの話は何だったの？」

「サツキミドリコロニーの被害状況とこれからについてです」

「サツキミドリはどうなった？」

「半分以上は脱出に成功しました。ですが、残り半分は……」

「そう」

コウキ君は全滅だって言ってた。パイロットを除いて。

それなら、半分以上は救えた事になる。

それでも、アキト君の顔は晴れない。

きつともっと力があればとか、何の為に戻ってきたんだとか、思い詰めているんだと思う。

「半分しか救えなかったって後悔しているの？」

「……いえ」

「嘘ね。顔が何よりも物語っているわ。悔しいって。救える筈だったのに救えなかったって」

「ッ!？」

「でもね、全てを救えるなんて思い上がりよ。」

誰にだって限界がある。全てを救う事なんて誰にもできない」

似たような事をコウキ君にも言った気がするわ。

どこか似てるのかもね。この二人。

「それにね、いつまでも悔やんでたって何も変わらないの。」

それを糧にして前に進みなさい。こんな所で歩みを止めるような夢じゃないでしょ？」

「……敵いませんね。ミナトさんには。貴方は何も変わらない」

未来の私なんて知らないもの。

それに、私は私。貴方の知るミナトとは違うのよ。

「そうですね。救えなかったと嘆くのではなく、何が足りなかったのか？

それを考える事にします」

「そうしなさい。そうやって強くなっていくのよ」

泣きそうな顔をしているアキト君。

でも、少し晴れたかになって思う。

無理に無表情に徹しようとするアキト君だけど、それを变えるのは私の役目じゃない。

私はほんの少し晴らしてあげただけ。

ちゃんとした意味で、本当に晴らしてあげるのは、ルリちゃん、貴方の役目よ。

「これからですが。物資の積み込みも終わったのでそのまま火星に向かうそうです。

道中、今回被害に遭った方の葬式を行うとも言っていました」

「分かったわ。ありがとね」

「いえ」

火星・・・か。

コウキ君曰く、全ての始まりの場所、そして、全てが終わる場所。眼に焼き付けておきましょう。火星という場所を。

これから、幾度となく眼にする機会があるのなら、尚更。

「あ。ここよ。ごめんなさいね。わざわざ」

「いえ。それでは」

やっと到着の私の部屋。

最近は何となくこの部屋ね。

偶にコウキ君の部屋にお邪魔するけど。

「あ。ベットまで運んでくれると助かるんだけど。寝かせてあげたいし」

「・・・しかし」

あ。アキト君もコウキ君と同じみたいね。

「あら？ 襲うつもりなの？」

「そ、そんな事」

対応まで同じ。

やっぱりどこか似てるわね。この二人。

「うふふ。冗談よ。私じゃそこまで運べないから御願いしてるだけ」
「・・・分かりました」

女性の部屋に入るなんて、って奴ね。
意外と可愛らしい所あるじゃない。

「・・・」

「女性の部屋をジロジロ見るのは失礼よ」

「そ、そんな事はしていません」

弄り甲斐もありそうだし。

もっと周りに心を開けばいいのに。

「・・・それでは」

「ありがとね」

一礼して去っていくアキト君を見送る。
扉から出ようという時、不意にアキト君が振り返った。
どうしたんだろうと思うと同時に口が開いていた。

「何？ まだ見足りない？」

「いえ。最後に、ミナトさんに聞きたい事がありました」

弄りに反応しないなんて。

・・・真剣な話みたいね。

「ミナトさんはマエヤマの事を愛してますか？」

「・・・そんなの当たり前じゃない。私はコウキ君を愛してるわ」

予想外の事に返答が遅れたけど、これは紛れもない真実。

誰がなんと言おうと、私はコウキ君を愛しているの。

それは何があっても変わらない。

「・・・そうですか」

未来で何があったのかを私は知らない。

もしかしたら、私はコウキ君ではなく、違う人と恋に落ちたのかも
しれない。

もしかしたら、私は誰とも結ばれる事なく、死んでしまったのかも
しれない。

でも、そんなの所詮はIFの話。

未来の私を知っていようと、それは私であって私じゃない。

この世界における私の事は全て私が決める。

これは誰にだって干渉できない私だけの事だわ。

「それでは、失礼します。マエヤマにお疲れ様と伝えておいてくだ

さい」

「ええ。分かったわ」

今度こそ、アキト君は去っていった。

アキト君が何故あんな事を訊いてきたのか。

それは私にも分からないけど、きっと何か意味があったんだと思う。今度は胸を張って即刻断言してあげよう。

私はコウキ君が大好きなんだって。

私の気持ちに嘘偽りはなく、この気持ちは変わらないんだって。

「ね。コウキ君」

スヤスヤと眠るコウキ君を見詰めながら私は改めてそう思った。

「生きてて良かった」

早く貴方の存在を感じたい。

我慢できずに唇に唇を落としてから、漸く私も一息つく事が出来た。

S I D E O U T

第十一話（後書き）

一つだけ宣言させて頂きます。

イズミ先生の寒いギャグが僕にはレベルが高過ぎでした。

どうしようもない時はギャグなしでいきます。

イズミ先生が大好きな方には大変申し訳ないです。

あまり台詞なさそうなので。

第十二話（前書き）

皆さん、感想ありがとうございます。

楽しんで頂けている様でとても嬉しく思います。

これからもよろしく御願いたしますね。

第十二話

「よっしゃあ！ このダイゴウジ・ガイ様の力を見せてやらあ！」

約束通りの模擬戦。

三人娘の合流も済んだし、早速やりましょうか。

「ガイー！ ガイー！ ガアアアイ！」

「うるせえ！ てめえなんてどうでもいいんだよ！ おい。こら。」

「テンカワ！ 俺と勝負しろ！」

スバル・リョーコ。

熱い戦闘狂。

ボーイッシュな美人なんだけど、男勝りすぎてちょっとな。

「よろしくね。コウキ君だっけ？」

「あ。はい。コウキであってます。よろしく御願いますね。ヒカルさん」

「うんうん。コウキ君は爽やかだねえ。お姉さん。感心しちゃう」

「ええ〜っと、どうもです」

アマノ・ヒカル。

独特なテンポの持ち主。

明るい可愛い系で、同級生とかだったら楽しそうだな。

「……………」

「あ。よろしくです。イズミさん」

「……………」

「ええっと、はい」

マキ・イズミ。

まるでキャラが掴めない人。

シリアスなの？ ギャグなの？ これから大変そつだ。

「模擬戦を行うというが、どのような組み合わせにするんだ？」

テンカワさんもリーダーパイロットとして参加。

戦力把握にもなるんだし、当然かな。

「やいやい。テンカワ。俺と勝負しろ！」

断固としてテンカワさんを狙うスバル嬢。

じゃあさ、こつしよう。

「それじゃあ、テンカワさんとリョーコさん、俺とヤマダ」

「ガイだ！ ダイゴウジ・ガイ！」

「俺とゲキが戦うつてのはどうでしょう！？」

「クソツ！ そう呼ばれたい俺もいる。どうすればいいんだ！？」

さっきからうるさいよ。ゲキガン野郎。

「てめえ、誰が名前で呼んでいって言った？」

「あ。すいません。名前の方が呼びやすく。スバルさんの方が良いですか？」

「別に呼ぶなって言ってる訳じゃねえ。好きに呼べよ」

「そうですか。それなら、リョーコさんで
「ふんっ。勝手にしろって言ったろ」

じゃあ、何でいちゃもんつけるんですか……。

「照れ隠しだよ。あれ」

あ。そういう事ですか。

「俺とスバルがか？」

「はい。戦いたいそうなので、俺もゲキガン野郎と決着をね」

「ふんっ！ 予備なんかにゃあ負けねえよ」

既に勝った気でいますね。

でも、思った通りにはいかせない。

蜂の巣にしてやるから、覚悟しろよ。

「予備ってどゆこと？ コウキ君」

「俺は色々と兼任してましてね。パイロット一筋という訳にはい
かないんです。」

それで、予備扱いとして緊急事態だけにパイロットを引き受ける
事になったんですよ」

「ふう〜ん。そうなんだ」

そうなんです。

「はあ！？ 予備かよ？ そんなの相手にならねえな」

カチンッ！

そうですか。そういう事を言っちゃいますか。

「コ、コウキ君。落ち着こうよ」

ヒカルさん。そうは行かないんです。

「テンカワさんが終わったら俺とやりましょうよ。蜂の巣にしてやります」

「へっ。いいだろ。やってやるよ」

ほくそ笑むとはこういう事だろうか。
ためえは俺を怒らせた。

「じゃあさ、私達は見学って事で良いのかな？」

「そうだな。現状では待機してもらっていた構わない。

ただ、後でチーム単位での模擬戦をするつもりだから、準備はしておいてくれ」

「了解」と

さて、早速。

「ガイ。フィールドは宇宙空間。フレームはOG戦フレーム。

武器はイミディエツトナイフ、ラピッドライフル。それでいいか？」

「おうよ。かかってこい」

後悔させてやるからな。

近接馬鹿め。

ついでに、近接最強の認識を改めてやる。

「それじゃあ、お先に失礼しますね」

「ああ。いいぞ」

シミュレーターの中へ飛び移る。
テンカワさん達も勝手に違うシミュレーターでやるでしょ。
俺は俺の模擬戦に集中だ。

「行くぞ！ ゲキ！」

『おうよ！』

ゲキって言葉に反応しなくなってきたな。

受け入れたって事か？

それじゃあ、ちよつと弄くってG・G・ダイゴウジとかどう？
あ。なんか、どっかのライオンの人みたい。

「レッツ！」

『ゲキガイン！ って、お前、分かってるじゃないか！』

変なスタートの合図。

色々と弄くりながら戦おう。

笑える。

『よっしゃあ！ 行くぜえ！』

モニターに映る宇宙空間。

深く暗いくせにどこか優しい。

宇宙に初めて出た時の感動を俺は忘れないと思う。

「ほお。いきなり必殺技とはな。ヒーローの風上にも置けない」
『な、何イ！？』

突っ込んでくる体勢から突如停止するヤマダ機。
やはりヒーローという言葉には敏感なんだな。

「俺は断言しよう。最後の最後に必殺技を出してこそそのヒーローである」と

『そ、そうだったのか・・・』

俺としては何故最後にしか必殺技をしないのかが疑問だけどね。

あれか？ 弱らせないと捕まえられないポケットなモンスターみたいな感じで、

必殺技も相手を弱らせてからじゃないといけないとか。

速攻で決められそうな奴にもいちいち格闘戦に付き合っただけあげてるとかさ。

ヒーローは空気に優しいね。空気をきちんと読んであげてる。凍りつかせるような事はしない。

「必殺技は確実に決めてこそ必殺技だ。避けられてしまうような必殺技は・・・必殺技にあらず！」

『グ、グオツ！』

精神的なダメージを負わせて勝利する。

それもまたヒーロー。外道なヒーローさ。

「お前の武器は何だ！？ そう。拳だ！ お前はただ拳のみで敵を打倒する拳闘士なんだ！」

『拳闘士！？ 何てカッコイイ響きだ！』

「男になれ！ 肉体こそが男の武器だ！ さあさあ。男として俺に立ち向かって来い！」

『よっしやあああ！』

ラピッドライフル、イミディエツトナイフ。
それら武装全てを投げ捨てて、肉体、即ち、機体のみで迫ってくる
ヤマダ君。

『うわあゝ。コウキ君って爽やかに見えて腹黒だね。』

散々男を主張しておいて自分はちゃっかりライフル構えてるし』

ふっふっふ。勝てば官軍という言葉を知りませんか？ ヒカルさん。

ダンッ！ ダンッ！

『な、何イ！？ てめえ男じゃねえぞ！』

『お前の武器は拳かもしれない。だが、俺の武器はこいつだ。』

男にはそれぞれ心の武器がある。ただ得物が違っただけさ』

『そ、そうか。それもまた男の武器か。それなら仕方ないな』

『うわっ。それで納得しちゃうの？』

納得しちゃうのがゲキガンクオリティです。

『お前が本当のヒーローならば拳のみで倒せる筈。』

さあ！ お前はヒーローなのか！？ そうでないのか！？ 俺に

示してみろ！』

『言われるまでもねえ！ 俺こそがヒーローだ！』

近接されたらおしまいなのでバーニアを吹かして後退します。

『うわっ。示してみると言いつつ後退。コウキ君ってかなりの腹黒
だね』

ダンッダンッダンッ！

後退しつつラピッドライフルを放つ。

『ふっふっふ。無駄無駄！ 俺のスペースガンガーにはゲキガンバリアがある』

デイスティオンフィールドだね。きちんと覚えようよ。

しかし、自分で張るとしたら頼もしい盾だけど敵に張られると厄介だよな。

よし。言葉攻めだ。責めじゃないよ。攻めだよ。

「ほお。拳が武器と言い放つお前が己の肉体ではないバリアなどに頼るとは……。ふう……」

『な、何だ？ その溜息は！？ いいだろう！ バリアなんか張らん！』

自分の言葉でここまで自分を追い詰める人って中々いないよね。

ダンッダンッダンッダンッ！

『うおっと！ ダア！ タア！ オラ！』

流石に反応が早いな。

あれだけ際どい所に撃つても全部避けるなんて。

『今度はこっちの番だぜ』

拳を突き上げて迫ってくるガイ。

接近戦で来られる以上、DFは意味がない。

それなら……。

「イメージ。イメージ」

右足に全DFを纏わせる。

向こうはDFを応用しようとも思わっていない筈。

ゲキガンフレアは封じたも同然だな。

拳のみが武器って言ってたし。

『よっしゃああ！ ゲキガン・パンチ！』

唯のパンチに技名付けるなっこの。

「その程度か！？ ガイ！」

ゲキガン・キックなどと変な名前は付けない。

俺のは蹴りで充分だ。余計な技名なんていらん。

ガンッ！

『グオ！？』

迫ってくる右手を軽く避けながら、右足でローキック。

ただの蹴りでも充分ダメージを喰らうが、DFを纏わせているんだ。小破では済まないだろ。

『ク、クソッ。まさかキックとは』

「全身が武器という事だ」

というより、反射的に俺は手ではなく足が出る。

多分、喧嘩とかしたら足での攻撃ばかりになる筈。

サッカー部だった事が原因なんだろうなあ。

「左足が潰れたかな？」

『ふんっ。左足の一つや二つ。俺には関係ねえ！』

関係あるよ。たとえ宇宙でもね。

右足がある限り、バランスが悪いでしょ？

両足がなければ、偉い人にはそれが分かるんですって断言してもいいけどさ。

『オラツアアア！』

「考えもなしに飛び込んだじゃ駄目だって」

ガンツ！

「ダハツ！」

動体視力は自慢です。

ガムシヤラに飛び込んでくる程度の攻撃は容易に避けられます。

「次は左腕だな。どうする？」

「ふんっ。腕の一本や二本。俺には関係ねえ！」

左腕と左足を失うという状況に追い詰められてまだいきり立つか。勇氣と言えいいのか、無謀と言えいいのか。いや。無謀だな。

「ギブアップをお勧めするが？」

『ヒーローは諦めない！ 何度も何度も立ち上がり、そして、勝利を得るんだ！』

ヒーロー、ヒーローとうるさいな。
ヒーローなら何でも出来ると思ってたんじゃないぞ。

「理想に溺れて溺死しやがれ！」

迫る右手を左手で掴み、向こうの攻撃手段を失くす。
その後、瞬時に右手にライフルを持ち、零距离射撃。
文字通り、蜂の巣にしてやった。

『ま、負けた』

気が抜けてるジロウ君は放っておこう。
すぐに復活するでしょ。

「お疲れ様。コウキ君」

「あ。ども。ヒカルさん」

シミュレーターから出るとヒカルさんが労ってくれる。
やっぱり同級生に欲しいな。こういう人。

「さっきのはさ。コウキ君が強いのか、ガイ君が弱いのか。どう捉えればいいんだろう？」

「ガイは強いですよ。ただ精神的にムラがあるだけです」

ガイ自身は強いと思う。

反応も優れてるし、格闘技能も冷静でいられれば強い筈。
元々軍人なんだし、射撃技能もあるのではないかと俺は思う。
精神的に安定すれば俺なんて相手にもならないんじゃないかな。
ま、それに関してはテンカワさんに丸投げするけど。

頑張ってください。精神修行。

「それにしても、コウキ君って見かけによらずあくどいね」

笑いながら告げるヒカルさん。

そうかな？ あくどいつもりはないけど。

「ガイが単純なだけです。あれだけ断言しちやえば、自分を縛り付けているようなものだし」

「いやいや。思考誘導も流れるようだったし、ガイ君じゃなくても引つ掛かるよお」

「少なくともリョーコはね」

あ。イズミさんが話しかけてきてくれた。

無言だったから、どうしようかと思っただんだよ。

「あ。ノーマルモード」

え？ まさか、シリアスモード、ギャグモードの他にノーマルモードがあつたのか？

・・・知らなかった。俺はてっきりどっちか一方かと。

でも、ま、あれだ。日常生活が極端だとやりづらいもんな。

「あ。そうそう。敬語なんていらさないよ。同い年ぐらいでしょ？」

「え、そう？ 分かった。ヒカルさん」

「さん付けもいらなんて。その代わり、私も呼び捨てにしちゃって良い？」

「いいよ。ヒカル」

「うんうん。そっちの方が親しくなった気がして良いよ」

友人モード突入。

実は同じぐらいの歳の友人って初めてじゃない？
男性はミナトさんの事で眼の敵にしてるし。俺の事。
女性はこっちから話しかけるのとか緊張して無理だし。
やっぱり友達感覚で話せるのって嬉しいかな。

「ダア！ チクシヨウ！ 勝てねえ！」

「まだまだだな。スバル」

お。テンカワさん達も終わったみたいだ。

でも、テンカワさんレベルならもっと早く終わったと思うが・・・。

「あ。二回目だよ。あれ。一回目速攻で終わったから」

「テンカワさんどうだった？」

「もうビュってズバってドカンって感じ」

「ええっと、接近してナイフで突き刺して終わりって事？」

「おお。ご明察。そこまで分かってくれるとは流石だね。コウキ」

「ま、まあね」

擬音ばかりでも何となくは掴めますよ。はい。

「リョーコさんだって凄いんでしょ？」

「もちろん。私達だけでやったらどうなるかな？ イズミ」

「状況次第で私達が勝てる。真っ向勝負なら負ける」

「だってさ。そんなリョーコが瞬殺だもん。凄いよ」

やっぱり凄いんだな。スバル嬢。

「コウキ君なら勝負できるかもね」

「いやいや。無理でしょ」

近付かれたら終わりだし。

ガイに勝てたのは単純な動きだったから。きちんと考えられた上での攻撃はどれだけ反射神経と動体視力が良くても避けられないよ。

「ダア！ 悩んでても仕方ねえ！ おい。次だ！ 予備、来い」

怒りの矛先が俺に向かいましたか。八つ当たりですね。分かります。

「どうせなので、男性陣対女性陣で模擬戦しながら決着つけましょ
うよ」

「ほお。一対一で負けるのが怖いからテンカワに頼ろうって事だな？ 予備は腰抜けだな」

カチンッ！

い、いや。落ち着こうか。

怒りは模擬戦中にぶつければいいし。

「むしろ、チャンスじゃないですか？ 俺とガイを倒せば三人でテンカワさんに挑めるんですから。」

チーム単位ですから卑怯でも何でもないですよ」

「ケツ。いいじゃねえか。それでやってやる」

納得して頂けた様で。

「おーい。ガイ」

模擬戦の事を教えてやろうとガイのいるシミュレーターに向かうが・
・。

「……………」

見事に固まっていますね。

「ガイ。予備に負けた気分はどうだ？」

「……負けたのか？ ヒーローが」

「ヒーローなら誰にでも勝てるという訳ではないだろ？」

それよりも、ガイ、男の武器は拳だけじゃないぞ」

「な、何イ！？ 俺の武器は拳だと……」

「お前が信仰するゲキ・ガンガーは拳で戦うか？」

違うだろ？ 剣や銃。多くの武器が搭載されている」

「た、確かに。じゃあ、俺の武器は何だというんだ……。何故、

俺は拳だけで」

「ガイ。俺はお前に知って欲しかった。拳を含めて接近戦だけじゃ勝てないという事を」

「男は格闘戦だろ！」

「違うぞ。ガイ。お前はライフルの悲鳴が聞こえないのか！？」

「ラ、ライフルの悲鳴だと？」

「そうだ。武器の一つ一つに魂が込められている。お前は魂の音が聞こえないのか！？」

俺にはライフルの悲鳴が聞こえたぞ！」

「ラ、ライフルは何て言っていたんだ？」

「何故、自分を使ってくれないのかと。そう嘆いていた。武器は使われてこそ本望。」

ヒーローを目指すのなら多くの武器と触れ合い、語り合え。そして、使いこなしてみろ」

「そ、そうか。そうだったのか。格闘戦こそがロボットの醍醐味だと思っていた」

「ああ。それも一つの醍醐味だろう。だが、格闘戦だけと己を縛る事が正しいとは思えん。」

射撃で敵を撃つ事もロボットの醍醐味だと俺は思っている」

「ああ。今の俺なら、その気持ちも分かるぜ。俺はライフルの喜びの音が聞きてえ！」

「そうだ！ ガイ！ 格闘、射撃、その全てを極めてこそ、

お前はヒーローと呼ばれるに相応しくなるんだ。もっと大きな男になれ！」

「オオオオ！ やってやるぜ！ 俺はもう格闘だけに拘らない。

射撃も極め、一流のヒーローになってやる。本当のヒーローになつてやる」

「それでこそ、ダイゴウジ・ガイだ！ スーパー・ダイゴウジ・ガイだ！」

「オオ！ 俺の魂の名がより一層光輝いてやがる！」

「ああ！ 輝ける。お前なら出来るんだ！ 輝け！ ダイゴウジ・ガイ！」

「オオオオオオオ！」

ふっふっふ。計画通り。

「・・・コウキ。黒いよ。黒過ぎるよ」

「俺のキャラじゃないからな。勘違いするなよ」

呆れるヒカルを前にほくそ笑む俺。

乗せる為とはいえ、らしくない事をしちまったぜ。

「いや。多分、コウキもそんな所が」

「ない。断じてない」

テニスの人じゃないんだから。俺はそんなに熱くない。

熱くなれと激励する事はあるが。

「でも、流石の腹黒さだったね。単純だから、ガイ君、まっしぐらじゃない？」

「腹黒と言われたくないな。でも、ま、ガイはこれですぐに突っ込むような事はしなくなるだろ？・・・うん、多分、きっと・・・そうなつてて欲しいなあ」

ちよつと自信ない。実は。

「ガイのパイロット技能はかなり良いんだよ。性格でかなり低く見られるけど」

「ふ〜ん。ま、それは模擬戦で見せてもらおうかな」

「今はまだ突っ込む癖が直ってないから分からないけど。」

ま、これから変わっていくでしょ。テンカワさんが指導すると思
うし」

「そつか。それじゃあ、コウキ、いざ尋常に勝負だ」

「はいよ。お手柔らかに」

「あら？何か気が抜けたよ」

「作戦」

「うっそだあ」

「おら！さつさと来いよ。ヒカル、イズミ」

せつかちだねえ。スバル嬢。

「テンカワさん。ガイの戦闘思考修正案を考えておいてください」

「そうだな。あいつは腕が良いのに勿体無い」

ほら。テンカワさんも認めてる。

「火星に到着するまでには修正しておきたいな」

「お任せします。あ、修行には付き合ってくださいね」

「無論だ。リーダーとして全員の底上げをしなければならんからな」
責任感が強い事だ。頼りにしてます。テンカワさん。

「おら！ 始めんぞ！」

スバル嬢の言葉をきっかけに模擬戦が始まった。
結果？

テンカワさん無双でしたよ。

あ、スバル嬢は提言通りに蜂の巣にしてやりました。
ガイと格闘戦してる所を強襲です。

卑怯じゃないですよ？ チーム戦ですから。
油断するのがいけないんです。

ほっ。スッキリした。

第十二話（後書き）

理解しました。

僕にイズミ先生印のダジャレは描く事が出来ません。

何度も、何度も頭を捻りましたが、思い浮かびませんでした。
助けて欲しいぐらいです。

閃いたら載せるぐらいに考えておいてください。

本当に申し訳ないです。

第十三話

「あれ？ メグミさんはどうしました？」

昼食を終えて、一人でブリッジへ。

そうさ。まだ一緒に飯を食べてくれる人はいないのさ。

はぁ……。男友達出来ないかな？

と、鬱になっているとある事に気付く。

通信士の席だけ空いているのだ。

要するにメグミさんが留守。

昼前までいて、俺より先に食事に行ったからもうとっくに帰ってきてると思ったのに。

「あら？ 知らないの？」

「え？ 何の事ですか？」

予想外と言わんばかりに眼を見開くミナトさん。

ええっど？ 知らないのって俺だけ？

「じゃあ秘密ね。こういう事は他人に言うものじゃないから」

「……気になるんですけど」

「それでも、秘密よ」

優しくない。

グレてやるっか。

「それにしても、暇ねえ」

「ま、後は予定コースを通るだけですから」

緻密な操縦が必要な時以外はミナトさんの仕事はないもんな。
原作だと寝まくってたし。

「とりあえずはオモイカネに任せておけば大丈夫です。もし、木星
蜥蜴が攻めてきても・・・」

「木星蜥蜴、接近」

現れるバツタ達。

「DF正常発動」

攻撃するもDFに全て弾かれる。

「撤退しました」

つて事で、あつちもすぐに諦める訳だ。

DFは常時発動ですから。

「と、こうなる訳ですから」

「そうねえ。緊張感なんてないに等しいわね」

「一応、緊急事態に対応する為にいるんですから。気を抜いてちゃ
駄目ですよ」

「もお。真面目ねえ。抜ける時に抜いておきなさいよ」

「は、はあ・・・」

・・・そうですね。

「それでは、失礼します」

「・・・失礼する」

「うん。お疲れ様」

俺が来た事でルリ嬢、ラピス嬢は交代だ。

現在は時間帯毎にシフトを定めていて、

俺が昼休憩から上がると彼女達は今日のシフトを終える訳だ。

朝からブリッジにいらしてもらったから、疲れている事だろう。お疲れ様です。

「メグミさんって違いましたっけ？」

これはシフトが違うかって事。

「交代してあげたのよ。私がここにいるでしょ」

「あ。そういえば、ミナトさんも午後は休みでしたよね」

「ええ。駄目よ。コウキ君。恋人のシフトを忘れるなんて」

「す、すいません」

シフトじゃなくても暇な時、ブリッジに顔出してたからなあ。

あんまり気にしてなかったんだよね。

「何で代わってあげたんですか？ 何か用があるとか？」

「何でもパイロット組の休みにあわせたらしいわ。健気ね。メグミちゃん」

「あ。そういえば、今日は休みだって言われてました」

「そこじゃないでしょ。本当に知らないの？」

「え？ 何がです？」

健気ってどゆこと？

「はぁ……。本当に知らないんだ。まあ、コウキ君は色々忙しいものね」

「ええっと、そろそろ教えて欲しいんですけど」

「耳貸して」

内緒にしまっきゃいけないような事なんですか？
何だろう？

「メグミちゃんね。ヤマダ君と付き合ってるんだって」

「……………」

「コウキ君？」

「え、ええ！？ マ、マジですか！？」

「え、ええ。そんなに予想外？」

「い、いえ。そうではありませんが……………」

ま、まさかガイとメグミさんが付き合うとは。

……でも、ま、せつかく生き残ったんだからな。
幸せになつて欲しいもんだ。

「良かったわね。コウキ君」

「ええ。こういう事を聞くと俺の存在も無駄じゃなかったんだなつて思います。」

まあ、ガイに関してはまったく関与していませんが……………」

ガイを助けたのはテンカワさんだ。

ムネタケ達が逃げる時にガイとシミュレーション室にいたらしい。

ムネタケが逃げたのを確認してから、ゲキ・ガンガーシールを張つて良いと許可した。

勝てなければシールを張る資格はないぞと挑発したらしいが、見事にガイを操ってるな。

流石は元親友。俺以上にガイを操るのが上手い。

「いいじゃない。もしかしたら、何か関与してるかもしれないし。

それに、コウキ君の存在が無駄だなんて誰も思っていないわよ」

「そうなら良いんですけどね。俺ってば補佐ばかりだし」

「補佐だって大事な役職。コウキ君流に言えば、ブリッジで欠かせない役職なのよ」

「ハハツ。やる気出ました」

「貴方も単純よね」

そう笑うミナトさん。

別に単純じゃないですよ。

素直なだけです。

「それにしても、どういう経緯で？」

「サツキミドリコロニーの時にね、メグミちゃん、人が死んだって事で塞ぎ込んだじゃったのよ」

ああ。アキト青年が慰めた時と同じか。その代わりをガイが務めた訳ね。

「一応覚悟してたみたいだから、戦闘の途中で仕事を投げ出すような事はしなかったんだけど、

その後に色々と考え込んだじゃったらしくて」

原作では戦闘中もショックで動けなくなってたよな。

戦艦だって事を少し自覚させてたからかな？

「でも、ヤマダ君の元気な姿を見たら少し気が晴れて、思い切って話しかけてみたらいいの。」

そうしたら、ヤマダ君はヤマダ君で死について考えていたみたいで」

「ガイは何て？」

「それは秘密だってさ。メグミちゃんが大切にしたいって言った」
メグミさんって一途だね。

というか、それら全てメグミさんが話したんですか？

「それで、メグミちゃんはきちんと死を受け入れられるようになって、今に至るって訳。」

一緒にいて楽しいって惚気ちゃってくれたわ」

「もしかして、今までの話って」

「そうよ。全部惚気で聞かされた事よ。でも、良かったじゃない。メグミちゃんも幸せそうだし」

原作ではアキト青年と恋に落ちながらも、結ばれずにナデシコを降りた筈。

それからアイドルになって、きつと充実していたんだろうけど、生涯の伴侶はいなかった。

ガイも折角生き残ったんだ。二人で幸せになってくれたら本当に嬉しい。

「何だか嬉しい事ばかりですね」

「そうね。きつとアキト君達はもっと喜んでるんじゃないかしら」

「はい。でも、俺はテンカワさん達も幸せになって欲しいです」

「私もそう思うわ。アキト君達だって幸せになる権利はあるもの。幸せになって欲しいわ」

うん。何か今日は気分が良い。

「ミナトさん。今日の晩飯一緒に食べましょう。奢りますから」
「あら？ 気前が良い。どうして？」
「気分が良いので。贅沢したい気分です」
「そう？ じゃあ、御呼ばれになるわ」

偶の贅沢。

「一人じゃ寂しいでしょ？」
「一人でやるくらいなら、奢った方がマシだ。
ミナトさんなら特に。」

「さて、これからずっと暇ですが、何してましようか？」
「コウキ君は何かやる事ないの？」
「最近は読書ですかね。オモイカネが色んなデータを持っているんですよ」

「へえ。小説みたいなもの？」

「ええ。時代は進んでも内容はあまり変わらないんですね。
でも、やっぱり感動する本は感動します」

「感受性豊かだもんね。コウキ君」

「そうですか？ そんなつもりはないですが」

「あら？ この前、映画のワンシーンで泣いてたじゃない」

「え？ 見てたんですか？」

「もちろんじゃない。コウキ君の泣き顔なんて中々見れないし。
写真に撮っておけばよかったかしら」

「それで弄るつもりだったんですか？ 悪女」

「悪女だなんて人聞きの悪い。コウキ君は弄られるの好きでしょ？」

「いやいや。それじゃあ変な人ですって」

「あら？ 変な人って自覚はないのね」

「え？ 変ですか？ 俺」

「さあね。あ、そんな事よりさ・・・」

それから、結局会話だけで時間を潰しました。いやあ。時間なんてあっという間ですね。楽しい時間はすぐに去ってしまいます。

もちろん、晩飯はとことん贅沢してやりました。ナデシコ食堂の中でも最高級に当たる料理を頼んでやりましたよ。あまりにも高過ぎて誰も手をつけなかったネタだけど伝説の料理という奴を。

しかも、一度に二つ。

ふふふ。英雄だったさ。正に。

犠牲は大きかったが、それだけの価値がありました。

・・・多分、二度とやりませんが。

あれは高過ぎです。

と、まあ、こんな事ばかりやっていました。日常のちよつとした一ページです。

「へえ。航海日誌書いてるんだ」

「・・・はい。書くよう頼まれました」

休日で、特にやる事がなかったから、ブリッジに顔を出してみた。すると、セレス嬢が一生懸命にコンソールの前で何かやっているではないか。

これは気になる、と声をかけてみたら・・・。

「・・・航海日誌です」

・・・という言葉が返ってきた。

航海日誌ってあれでしょ？ 艦長が書くべきなのを悟りを啓くとかでルリ嬢が押し付けられた奴。

なるほど。今回はセレス嬢という訳ですね。

艦長。迷惑かけてますよ。いいんですか？

「そっか。どんなの書いてるの？」

「・・・何を書いていいのか分からず、ルリさんに聞いてみた所、

その日にあつた事を好きに書いたらいって言われました」

「そうなんだ。まあ、ナデシコは毎日のように何かあるからね。退屈しないでしょ」

「・・・はい」

ドタバタコメディだもんな。

騒がしいくらい毎日何かあるぜ。

「少し読ませてもらってもいいかな」

「・・・はい。構いません」

「ええつと。何々・・・」

月××日

オペレートの練習をしました。コウキさんに褒められました。嬉しかったです。

月××日

オペレートの練習をしました。課題が終わりました。

コウキさんに頭を撫でられて気持ち良かったです。

月××日

オペレートの練習をしました。課題を与えられました。頑張ります。

月××日

オペレーターの練習をしました。いつもより早く終わった気がします。そうコウキさんに言ったら成長したんだよって褒められました。嬉しかったです。

.....

「ええつとき。これって」

「.....何ですか？」

コテンツて首を傾けられてもね。

「オペレーターの事ばかりだね」

「.....はい。駄目でしょうか？」

「え、ううん。駄目じゃないよ。でもさ、他にも色々あったじゃん」

「.....好きな事を書いて良いつて言われました」

な、涙目!?

「そ、そつか。ウン。大丈夫。よく書けてるよ」

「.....ありがとうございます」

「うん。偉い偉い」

「.....ポツ」

あ。また勝手に手が頭を撫でてた。

それにしても.....これはどう解釈すれば良いんだろう？

幾つか考えてみると.....

1、まだオペレーター以外に興味がないのか。

2、興味がないのではなく、ナデシコ艦内のドタバタを知らないのか。

3、己惚れじゃなければ、俺との特訓を大切にしてくれているのか。

うん。三番目だったら嬉しいけど、他だったらちよつと問題かな。もっと周りに眼を向けるようになって欲しいし、ドタバタを見て笑って欲しい。

いや、マジで笑えるから。下手なお笑いより全然。

原作を知っている身としては、こういうドタバタも見せて欲しかった。

メインキャラクター以外にも至る所でドタバタコメディが起きるといふこの喜劇。

これがナデシコかと深く感心してしまったものだ。

笑うって事は感受性を成長させる事になるから良い経験なのだ。

見るだけでも触れ合っている事になるし、色々な経験を積んで欲しい。

たとえばそれがコメディ一色であろうとも。

「それじゃあさ、今度はナデシコの事を書いてみようよ」

「・・・ナデシコの事ですか？」

「うん。今日、ナデシコで何々がありました。きっと何々が原因でしょう。」

結末は何々です。私だったら何々すると思います。そんな感じの文章」

「・・・私のじゃ駄目ですか？」

ハッ！？ また涙目！

「違う違う。しっかり書けてるよ。セレスちゃんが何をしてたのかわかる。」

でも、オペレーターの事だけじゃその日に何があったのかわからないと思うんだ。

ナデシコは色々な事があるからさ。それを皆にも教えてあげよう」

「・・・分かりました」

ほっ。何とか理解してもらえた。

折角書くんだからな。色々な事に眼を向ける良い機会にして欲しい。

「セレスちゃんの書いた日誌を誰かが見て、

へえ。こんな事があったんだ。って思わせる日誌がいいかな」

「・・・頑張ってみます」

ハッ！ また撫でていた。

ハニカミ笑顔が止まらないんですもの。

無論、セレス嬢の。

というか、微笑ましさは抜群です。

僕の顔も勝手に緩みますから。

「それじゃあ、また今度見せてね」

「・・・はい。楽しみに待っています」

それは俺に会心の出来を見せるという自信から来る言葉だな。

それじゃあ、俺も楽しみに待ってるでしょう。

後日、日誌を見せて頂きました。

「読んでも良い？」

「・・・どうぞ」

「ありがとう。ええっと。どれどれ・・・」

月××日

今日、ナデシコの格納庫で騒動がありました。きっと男の人が暴れ

だしたのが原因でしょう。
結末は減俸です。私だったら良く分からないので何も思いません。

「ああ。格納庫の騒ぎね。あれは大変だった」

「・・・何があつたんですか？」

「ちよつと分かりづらいかもしれないけど・・・」

格納庫騒動。

これは整備班の一人がある一言を発してしまつたが故に始まつた騒動である。

・・・と格好付けても実際はしょうもない事なんだよ。
その一言は・・・。

「結局、誰が一番可愛いんだ？」

はい。来ました。整備班といつたら騒動。整備班といつたら女の子。整備班といつたらスパナ。

あれ？何か違うような・・・コホン。何でもありません。

と、とにかく、数多のファンクラブが存在する整備班の中でその一言は禁句ですよ。

「俺はやつぱりヒカルちゃんかな。可愛いし、明るいし」

「馬鹿言え。リョーコちゃんだろ。ボーイッシュとか堪らんね。男勝りであればある程良い」

「極端だな。俺はミステリアスなイズミちゃんがいいけどね。あの人、スタイルいいよ、かなり」

というパイロット三人娘の話から、話が発展していった訳だよ。
ま、次々と妄想が出てきたけど。

「罵りたい・・・」
「お兄ちゃんって呼ばれたい・・・」
「見下して欲しい・・・」
「ツンデレって欲しい・・・」

数多の煩惱を引き連れた整備班が熱狂するのは時間の問題。
それぞれのファンクラブの代表が机を並べ、誰が一番かの討論会が始まる。

「てめえらが分かんねえのが分かんねえ。いいじゃねえか。コスプレしてくれるんだぞ。」

「一緒にコスプレを楽しめばいいじゃないか」

「素が男勝りな女の子が女の子っぽい格好してる所とか見たくないのかよ。」

「いいぞお。恥らしいの笑みは」

「謎の雰囲気があるから支えなくなるんだろうが。」

満面の笑みを向けてくれたら、あれだね、倒れるね」

「姉御肌の女性に勝る者なし。包容力に勝る女性のステータスはない。」

「それが何故分からないんだ!」

「理性がもたん時が来ているのだよ!」

「年下に勝る強さはない。いいじゃないか。微笑ましい笑顔。可愛いらしい笑顔。」

小動物のような放っておけない保護欲を湧かせる仕草。最高だね!」

「は、反論出来ん。だ、だが、年上こそ最強。俺はあの身体に溺れたい。溺死したって構わない」

「天然娘を忘れてはならんな。問われた疑問に少しズレた答えで返す天然さ。」

そのちよつとしたズレがまた良い。微笑ましい！」

・・・妄想って怖いな。

「てめえ！ この野郎！」

「何お！」

いつしか、掴み合いの喧嘩になるのは自然の理。
それもまた愛故か。

「何を暴れているんですか！ ああ。そこにある機材が幾らするか・・・。

減俸です！ 言語道断、減俸です！」

それを収めるは百戦錬磨の交渉人。
頂垂れる者達に愛故の説教が飛んだ。

「・・・聞かなかつた事にしてくれる？」

「・・・良く分かりません」

「そっか。それなら、大丈夫。気にしなくていいよ」

月××日

今日、食堂で非常事態がありました。きつと人手不足が原因でしょう。

結末は無事に終わるです。私だったらお手伝いすると思います。

「そういえば、セレスちゃんもお手伝いしてくれたね」

「・・・はい。頑張りました」

「偉い偉い」

ちよつと文章が変だけど問題ないでしょ。
正しくは私もお手伝いしましたとかかな？
ま、後でちよつとずつ教えていくとしよう。

これは葬式料理の時の奴だな。
料理の数が多すぎて人手が足りない時があつて、暇だった俺が連れ
出されたんだよ。

それを見て、セレス嬢が手伝わせてくださいって。

忙しい中、大丈夫かなって思ったけど、トコトコ歩く姿に癒され仕
事効率アップみたいな感じで。

無事に、乗り切る事が出来ました。

いや、それにしても、ホウメイさん大変だなと実感した。

葬式料理ですら全て自分一人なんだから。

皿洗いや野菜切りしか出来なかつた自分でも終わった時は達成感が
ありました。

ホウメイさんとその後、お茶会をしました。ホウメイさんは良い
人です。

サイゾウ氏に並ぶ尊敬する大人にランクインしました。

「また御手伝いする機会があつたら来てくれるかな？」

「・・・はい。頑張ります」

「ありがとう。セレスちゃん。それと最後の文をちよつと変えようか」

「・・・どうやってですか？」

「私だったら御手伝いすると思います。」

「これだとセレスちゃんがせつかく手伝ってくれたのに何もしてな
いみたいでしょ？」

「だから、お手伝いしましたにしよう」

「・・・コウキさんに教えてもらった文と変わっちゃいます」

「え？ あ、別にそのままじゃなくても・・・」

「・・・嫌です。このままが良いです」

「う、うん。このままでいいよ」

月××日

今日、ナデシコのブリッジでルリさんがアイゲームをするという事がありました。

きつと退屈が原因でしょう。結末はハイスコアです。私だったら高得点は取れないと思います。

「ああ。あのゲームやってたんだ」

「・・・難しかったです」

「ま、ゲームは慣れだから。セレスちゃんだっていつか高得点が取れると思うよ」

「・・・頑張ります」

「うん。頑張つて」

月××日

今日、ナデシコの食堂で辛い物を食べるという事がありました。きつと好奇心が原因でしょう。

結末は辛かったです。私だったら二度と食べません。

「へえ。辛いもの食べたんだ。舌とか痛かった？」

「・・・痛かったです。今でもちよつとヒリヒリします」

「セレスちゃんにはちよつと早かったかな。大人になればきつと食べれるよ」

「・・・む。私、子供じゃありません」

「じゃあ、もう一回食べてみる？」

「・・・シュン。・・・子供のままでいいです」

「すぐに食べられるようになるよ（だから、何故、擬音を言葉に出す？）」

とりあえず、今日の所はここまでか。

「うん。何かあったのか伝わってくる良い日誌だね」

「・・・ありがとうございます」

「また見に来るから、その時を楽しみに待ってるね」

偉いぞって子供を褒める時は頭を撫でてしまいますよね？

あれは不可抗力です。自然の理です。

「・・・楽しみに待ってます」

「うん。頑張って」

色々な経験を積んで子供は成長するんだ。

日誌じゃなくて絵日記風にするよう提案してみようかな。

え？ 日誌じゃなくなるって？

子供に描かせている艦長が悪い。

俺はセレス嬢の成長の為ならプロスさんにだって立ち向かってやるぜ。

後日、絵日記にさせる事に成功。

絵心はそれ程でもありませんでしたが、一生懸命絵を描く姿は和みました。

セレス嬢の航海絵日記を読む事が一日の楽しみになっている僕でした。

第十三話（後書き）

好きなタイプって人それぞれですよね。

第十四話

「そろそろ火星。ともなれば・・・あれだな」
「あれって？」

珍しくブリッジの全クルーが揃った今日。
きつとその珍しい事態はこれから起こるイベントの為だろう。
でも、現時点でそういう関係にある人がブリッジクルーで少なくとも
も二組はある訳でしょ。

ああ。俺達へのバッシングが凄まじい事になりそうだ。
まさかミナトさんとこういう関係になれるなんて予想してなかった
からな。

嬉しい事なのは確かだけど、また血走った眼で見られるのはちょっと
怖くて嫌かな。

「ミナトさんには話してなかったですね。ちょっとした事が起こる
んですよ。多分、今日ですね」

「ちょっとした事？ それって」

「反乱ダア！ 我々は正当な権利を持ってこの項目の改善を訴える
！ 賛同者は俺に続けえ！」

「オオオオッオ！」

ブリッジに雪崩れ込む兵士とパイロット。

その顔は真剣以外の何ものでもなく、手には銃を持っていた。
真剣の度合いを示す良い基準にもなるけど、仲間に銃を突きつける
のはちょっと頂けない。

「・・・という事です」

「ちょっと待って。何がどうなってることになるの？」

混乱するミナトさん。

ま、当然そうなるよな。

いきなり雪崩れ込んできて銃を突きつけられれば。

あ。ガイがいる。そりゃあ改善しないと誰かさんと熱くなれないからな。

意外と律儀そうだし。そういう所。

「ガイさん。これは？」

「おお。メグミ。これを見てくれ」

通信士の席に座っていたメグミさんが困惑で固まっていると、多分、ガイの姿に気付いたんだろう、すぐに硬直が解けてガイに付いていった。

銃を突きつけられているという恐怖でさえ乗り越え無邪気にガイに近付くとは。

恐るべし。愛。

「え？　こんな項目があつたんですか？」

「おお。こんなのあつたら、これから困るだろ？　俺達はこれからもっと」

バキッ！

「てめえ！　このゲキガンオタクが！　打ち殺すぞ！」

「い、痛いっすう」

当たり前だよ。ガイ。

彼らは女性と接近したいからこういう事をやってるのさ。

そんな彼らの前で桃色吐息なピンクオーラを出したら当然やられる

よ。

自重。自重。

「ウリバタケさん。これはどういう事ですか!?!」

銃を突きつけられながらも毅然とした態度を取れるユリカ嬢。

このあたりは流石だなと思う。

「これを見る!」

「・・・これは・・・」

ウリバタケ氏から契約書を受け取り、上からゆっくりと読んでいくユリカ嬢。

その後、呆然。

その後、絶叫!

「え、え、ええ!?! な、何ですか!?! これは!

これじゃあアキトと何にも出来ないじゃないですか!」

「そうだろ。そうだろ。許せないよな! 横暴だよな!」

「はい。許せません。横暴です」

「よし。レッツ反乱!」

「レッツ反乱!」

ああ・・・。艦長まで乗せられちゃまったよ。

原作で見てて、分かったけどさ。もっと責任持った行動を取ろうよ。騒動を収めるのが艦長の仕事でしょ?

便乗して余計騒がしくしちゃ駄目だって。

「結局どういう事なの?」

「あれですよ。異性とは手を繋ぐまでって奴。あれが許せないらし

いです」

「あ。あれか。まあ、確かに許せないでしょうね」

余裕の笑みを浮かべるミナトさん。

これもまた、変更済みだからこそ浮かべられる笑みか。

「おい！ マエヤマ！ お前はとうなんだ？」

「え？ 何がです？」

「こつちに来ねえのかって聞いてんだよ！ てめえだってこんな
許せねえだろ！

ミナトちゃんと良い関係のてめえはよお」

どこか私怨が含まれたかのような言葉ですな。

「そうだぜえ！ コウキ！ お前もこつち来て俺と愛の為に戦お

」

バキッ！

「てめえは黙ってやがれ。ぶちのめすぞ」

「す、すいませんっした」

あらあら。可哀想に。ガイ君。

ま、自業自得だから。フォーローはしないよ。

今のは獣の群れん中でいきなり肉を食いだすような事だから。

「あ。ウリバタケさん。俺はその項目変更済みですから」

「な、何？」

何ですか？ その大好きな子にいきなり告白されたかのような驚き

ようは。

「プロスさんには言ったんですけどね。絶対問題になるから恋愛は自由にさせて方が良いつて。」

でも、駄目だったんですよ」

「そ、そんな事は関係・・・なくはねえが、その前にだ。」

「てめえはこの項目を変更してなしにしてやがるんだな？」

「ええ。給料15%カットですけどね。気付けて幸いでした」

ま、知ってたんだけどね。

「ク、クソツ。裏切り者が！・・・だが、これは改善できる可能性も出てきたという事か。」

・・・だが、しかし・・・」

「困りますなあ。何の騒ぎですか？　これは」

ぶつぶつ危なく呟くウリバタケさん。

それを中断するようにプロスさんが現れる。

凄腕交渉人の仕事が始まったな。

銃を向けるウリバタケさんと契約書で立ち向かうプロスさん。

何故だろう？　契約書が凶悪な銃にすら見えてくる。

ま、あの二人の議論は平行線だろうから、無視して。

「何やってんの？　ヒカル」

「え？　だって面白そうじゃん」

「面白そうって理由なの？」

「ま、ちよつと許せないかなって気持ちもあるかな。束縛とか嫌だし」

「まあ、そうだろうけどさ、銃はやりすぎじゃない？」

「てめえは変更してるからそんな余裕なんだよ！」

「あれ？ リョーコさん。そんなに恋愛したい人がいるの？」

「ええ！？ そうだったんだ。リョーコ。いやいや。隅に置けないね」

「ち、ちげえよ！ そ、そんなんじゃないでな！ 自分の事を誰かに決められるのが」

「いや。青春だね。リョーコさん」

「うんうん。リョーコにも漸く春が・・・」

「違っって言ってるだろ！」

リョーコさんも面白い人だよな。

ヒカルが合わせてくれるから楽でいいし。

「見事なまでのかわし方。腹黒ね。コウキ君」

なんか最近の評価が腹黒ばかりな気がする。

「ん？」

そういえば、テンカワさんの姿が見えないな。

「テンカワさんは参加してないの？」

「うん。誘ったんだけど、用があるって」

「ああ。そうなんだ」

議論中に襲撃に遭うんだっけ？

テンカワさんには取るに足らない反乱って事？

そもそもテンカワさんは変更したのかな？

「困りますなあ。契約は絶対なのですよ」

「ふんっ。聞いたぞ。マエヤマは変更しているそうじゃないか」

「ええ。マエヤマさん、ハルカさん、テンカワさん、ルリさん、ラピスさんは変更済みです」

「何！？ 他にもいたのか！？」

ギロツとこちらを見てくるウリバタケさん。
少なくともテンカワさん達は俺と関係ないぞ。

「何であいつらは良くて俺達は駄目なんだよ！？」

「彼らは契約の前に自ら申し出ています。」

貴方達は契約を結んでから申し出ています。その違いです」

「ああん！？」

睨み合いが続く。

あ。艦長が動き出した。

「プロスさん。私も納得できません！ 変更してください！」

つて、やっぱりそつちかよ！？

「艦長。貴方はこちら側の人間でしょう？」

「私とアキトの恋路を邪魔するものは何であろうと許しません！」

「艦長が何と言おうと契約は絶対です！」

ジュン君。早く止めて。

「ユ、ユリカ。艦長なんだから率先して止めにはいらないと」

「ジュン君！ 邪魔しないで！ 私の将来が懸かっているの！」

「ユ、ユリカア……」

もつとだ。もつと押せよ。

熱くなれよ！

「コ、コウキ君」

「え？・・・あ」

気付けば整備班の皆さんに囲まれてました。

「お前は良いよなあ。綺麗な彼女もいて、ちゃっかり契約内容も変更してて」

「女性ばかりのブリッジ勤務ですよ。俺達なんて男臭くて堪らないつてのに」

「その上、予備パイロットだと！？ 男女比一対一ですら羨ましいわ！」

「この野郎、セレスちゃんにまで手を出しやがって。」

「ミナトちゃんだけじゃ満足できないつてのか！？ ああん！？」

「どっちか寄越しやがれ！」

最初はタジタジしてましょ。

セレス嬢に手を出したという不名誉にも反発は覚えました。が、何より最後の言葉は許せません。

ええ。絶対に許す事は出来ません。

「寄越せとは何ですか！ 二人は俺の大切な人です！ それをまる

で物のように」

「え、え」と

「反乱！？ 抗議！？ そんなの勝手にやっってください！

ブリッジを占拠しようと状況は変わらないでしょ！ プロスさんに直接抗議してください！」

「あ、あのな・・・俺達も」

「子供に銃を突きつけるのが大人ですか！？」

己の目的の為に手段を選ばないのが大人ですか！？ 見てください！」

隣の席で俯き震えるセレス嬢に視線を落とす。

「こんなに怖がってるでしょうが！ 俺は貴方達が形だけで銃を突きつけていると知っています。」

仲間を撃つような事は絶対にしないと！」

「……………」

「ですが、突きつけられれば怖いんですよ！

どれだけ信じようとも、銃を突きつけられれば怖い。

ナイフを突きつけられれば怖い。なんであるうと怖いものは怖いです！」

たとえ冗談でも危ないものは危ない。

何があるか分からないのだ。誤って傷つけてしまったら悔やんでも悔やみきれない。

「契約書を見なかったのが悪いとは言いません。

こんなに巧妙に隠すネルガルが俺も悪いと思います。性質が悪いです。」

でも、他にやりようがあったのではないですか！？」

「……………そ、そうだな」

血走った眼で迫ってくる整備班の内の一人がそう告げる。

「子供に、いや、子供だけじゃない。

仲間であるナデシコクルーに銃を突きつけてまでやる事じゃねえよ」

「……………ああ。こんなに怖がらせて、俺達は何をしてたんだろうな」

「ごめんな。セレスちゃん」

・・・分かってもらえたみたいだ。
仲間を怖がらせてまでやる事じゃない。

気に喰わないのは分かる。変更している俺に当たるのも分かる。
でも、それにもルールがあるだろ。

銃は何があっても反則だ。

「・・・コウキって怒ると怖いんだね」

「・・・ちよつとやりすぎだったな」

「・・・ええ」

「ガイさん。正義のヒーローがやる事じゃないです」

「・・・すまん。反省している。俺は間違っていた」

「分かれば良いんです。ガイさん」

「・・・ああ。メグミ」

「・・・」

「・・・」

抱き締めあうガイとメグミさん。顔が近いです。

・・・それよりも、よくこのシリアスモードの中でピンクになれま
すね。

何か、呆れて怒る気にもなれません。

「おい。てめえら。銃なんか捨てる。俺達に武器はこの肉体だ！

今こそ
」

ゴキッ！

「てめえは黙ってる！ このピンク野郎！」

「グハッ！」

自業自得。でも、音が音なだけにちょっと心配。

「だが、確かにゲキガンオタクが言ってる事も間違ってるねえ。

俺達の武器は銃なんかじゃねえな。ああ！俺達の魂は……こいつだ！」

そう言っただけ取り出すはスパナ。

流石。それでこそウリバタケさんです。

「プロスのダンナ。俺達は抗議が受け入れられないならストライキを起す事すらも辞さない」

「はぁ……。困りましたな。どうしましょうか？」

「艦長命令です！変えちゃいなさい！」

「あ。艦長。貴方はどちらにする駄目ですからね」

「ほえ？」

「艦長はクルーの鑑たれ。艦長が風紀を乱すような事が許される訳ありません」

「そ、そんな……」

壮絶に落ち込むユリカ嬢。

ま、まあ、どうにかなるよ。ユリカ嬢。

「どうなんだ！？プロスのダンナ！」

今更だけど俺だけってのもちょっと罪悪感があるな。

俺の意見なんかで変わるか分かんないけど、少し試してみよう。

「プロスさん。やっぱり問題起きたじゃないですか」

「率先して風紀を乱した方に言われたくありませんな」

グサツ！

そ、それを言われると反論できないのですが……。

「もしかして、怒ってます？」

「如何わしい行為はしないと誓っていただけだと思いますが？」

もしかして、藪蛇ですかあああ!？

「おい。こら。如何わしいってどういう事だよ？」

「あん!？ てめえはもうミナトちゃんと大人の関係って事か？
そうなのか？」

「まだ成人もしてねえような奴が生意気してるんじゃないやねえ」

もしかして、またもや囲まれてますかあああ!？

「あら？ 当たり前じゃない。もう大人だもの」

「ゴリアアア！ マーエーヤーマー！」

火に油を注がないでください！ ミナトさん！

「ス、スパナで殴られたら僕死んじゃうかなって思うんですけど」

「いや。お前は既にあの身体に溺れてるんだ。死ぬタイミングが早
まるだけ」

「で、溺死はしませんよ」

「そうそう。溺れても人工呼吸してあげるもの」

「マーエーヤーマー！ 死ねえええ！」

ミナトさん！ 火薬庫に火を投げ入れないで下さい！

というか、皆さん、怖い！ 怖過ぎます！ 眼が赤く染まっています！

「プロスさん！」

「こちらの変更を許してしまった以上、眼を瞑るしかありませんでした。」

「私がどれだけ気を揉んだか・・・」

胃に手を当てるプロスさん。

「すいません。ですが、理性で抑えきれないのが恋の病なのです！練習だってサボってしまうのが恋の病なのです！」

「と、とにかくですね。ストライキを起こされて生じる損害と艦内恋愛を認めて生じる損害。」

「それらと比較すればすぐに決まると思いますが？」

「しかしですね。恋とは恐ろしいものなのです。この私も・・・」
「ホーン、色々あったのです」

「な、何があったんですか！？」

「も、もちろん、仕事をサボったりする事はありませんよ。」

「むしろ、やる気が漲ると思います！　ね！　ウリバタケさん」

「お、おう。当たり前だろ！」

突然、振ってすいません。

慌てても返事するのが流石です。

「心配されるかもしれませんが、彼らはプロです。」

「プロが恋に惑わされる事なんてありませんよ。確実に成果を残します」

「しかしですな。私は心配で」

「御自分で選んだクルーが信じられないのですか！？」

あ。火星の名言を言っちゃった。

ユリ力嬢。すまんが、二番煎じになっちゃまう。

「む。そう言われてしまつと反論できませんね」

やはりこの台詞は効果的みたいだな。

交渉人の心理を突く一言。やるな。ユリ力嬢。

「きちんと成果を残す。必ず時間を守る。人前でしない。それで妥協しませんか？」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

眼は逸らせない。

俺の背中には何人も人の期待が乗っかっているんだ。きっと。

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・。分かりました。妥協すると致しましょう」
「ありがとうございます」

ほっ。良かった。

「マエヤマ！ お前はむかつくが、良くやってくれた！」

「おお。むかつくが、お前のおかげだ」

「ああ。死んで欲しいくらいむかつくが、胴上げしてやる」

全員、むかついてるんですね。分かります。

結局、僕は涙を流しながら胴上げされる破目に。

そして、こんな時に・・・・。

ドンドンツドンドンツドンドンツ！

「な、何事だ!?!」

「木星蜥蜴が接近中。この数は……迎撃が必要です!」

こういう事が起こるんだから、世の中って不思議だよな。というか、いたんですね? ゴートさん。最近、驚き役が板についてきてます。

「オラア! 野郎共! クーデター成功だ!

後は結果を残すぞ! 勝利は己の手でもぎ取れえ!」

「オオオオオオオオ!」

凄まじい勢いで去っていく整備班。

呆然と立つ艦長に眼も向けずに走っていった。

それはまあ、いいよ。たださ、これだけは言わせて。

いくら揺れたからって空中の俺はスルーするのは酷くない?

めちゃくちゃ腰が痛いんですけど。あ。床にぶつけたからだからね。

「……ガイさん」

「心配するな。必ず帰ってくるから」

「はい!」

ああ……。ガイ。自重。

「早く来い!」

ゴンツ!

「グハツ!」

ああ。リョーコさんに引き摺られていく哀れなガイ。ドナドナが聞こえてくるよ。

「じゃ、行ってくるね」

「気を付けるよ。ヒカル。イズミさんもお気を付けて」

「うん。じゃあね」

去っていくパイロット達。

彼らの腕なら大丈夫だろう。

今回はガイもいる。心配はいらない。

ギョっ！

「イタッ！」

だ、誰だ？ 俺の脇腹を抓ったのは。

「……………」

「……………どうしました？」

ミナトさんでした。珍しく口を尖らせています。

「随分と仲良さそうだったじゃない？ ヒカルちゃんと」

「え？ そうですかね？」

ギョっ！

「イタッ！」

「早く準備なさい！」

「は、はい！」

こゝ、怖いですよ。ミナトさん。

「・・・バカ」

ま、ヤキモチだって分かれればそんなに悪い気分じゃないかな。
腰と脇腹はまだ痛いけど・・・。

「・・・」

あれ？　ここですぐに指示が出される筈なのに・・・。

「艦長。指示を！」

「・・・」

「あれ？　艦長？」

あ。固まっかけていらつしやる。

硬直時間が長すぎですな。誰か硬直を解いてあげて。

「・・・ユリカ。テンカワの勇姿を見なくて良いの？」

「ああ！　そうだった！　教えてくれてありがとね、ジュン君」
「・・・ううん。いいんだ」

涙を流しながら、良くぞ告げてくれた。

恋敵の名を使うのがどれ程、悔しく、悲しい事か。
ジュン君。大人になったね。・・・情けないけど。

「エステバリス隊はどうですか？」

「現状で発進できるのはテンカワ機だけです」

あ。テンカワさんはこれに備えてたんだ。
準備が早い。

「テンカワ機は先行発進。他のエステバリスも準備が終わり次第、
発進してください」

「了解」

どれだけ早く発進させてもDFがある限り、エステバリスも迎撃活
動に移れないからな。

発進の手間を考えるとさっさと発進させてDF近くで待機してた方
がいいって訳か。

「グラビティブラスト発射と同時に迎撃活動に移ってください」

その時はDFを解除するからな。
タイミングとしては丁度良い。

「マエヤマさん！ 御願います！」

「オモイカネ。レールカノンセット」

『レールカノンセット開始』

俺の役目はDFを纏わせるまでの迎撃活動。

基本的にナデシコはDF纏って、時間稼いでGBをチャージして、
GB発射して大量破壊してDF纏って・・・という行為を繰り返す
事が戦術となる。

その合間、合間にある隙を埋める事が俺の役目だ。

現状でGBに勝る攻撃方法はないからな。

最高戦力のお膳立ても大切な役目だ。

『レールカノンセット完了』

『レールカノン準備完了』

『エステバリス。全機発進しました』

さあ、舞台は整った。始めようか。

火星降下前の最後の戦いを。

再び火星の地を踏む為に！

平穩生活を成就する為に！

火星よ！ 私は還ってきた！

・・・落ち着こう。俺。

そもそも俺は経歴では火星育ちになってるが、実際に来たのは初めてなんだから。

冷静に。冷静に。

「グラビティブラスト発射！」

「グラビティブラスト発射します」

DF解除と同時にGBを放つ。

さて、やりますか。

.....

どれくらい繰り返したかな？

グラビティブラストを放った回数なんてもう覚えてないよ。

一発撃つ度にフォローに入るとか。

心身共に疲労が溜まります。

ま、弱音なんか吐いてちゃパイロットの皆さんに申し訳ないか。

『こちらスバル・リョーコ。残弾が残り少ない。一度補給に戻る』

『こちらダイゴウジ・ガイ。発進準備完了だ。いつでも出れるぜ』

スバル嬢が補給に戻り、ガイが再び戦場に。
機体も万全でまだまだ元気なガイだ。

テンカワさんと協力すれば、敵の艦隊に大損害を与えられるかもしれん。

流石に原作のアキト青年みたいに一人で突っ込ませるのは危険過ぎる。

「ゴートさん。これを」

あたかも解析したかのようなデータを戦闘指揮のゴートさんに送る。
ゴートさんなら指揮を執っても問題ないだろう。

「これは？」

「敵艦隊を現状の武装で倒す為に必要な戦術を考えてみました。
成功する確率が高いようでしたら参考にしてください」

「む。これは・・・いけるか？」

前回の戦闘からウリバタケさんに協力してもらって作り上げたエステバリス専用のレールカノン。

これと原作のアキト青年が無茶したイミディエットナイフでの特攻を組み合わせれば・・・。

「敵のDFは少なくともナデシコよりは軟いです。

レールカノンでDFの出力は低下させつつ、ナイフのような先端が尖っているものなら・・・」

「敵のDFを突破できるかもしれん。データでは正面から無理だとなっているが？」

「角度的な問題です。真正面から立ち向かっては面と面。

DFを突破するのなら、まずは斜めから突っ込む事でDF全体を

消滅させます」

アキト青年はナイフだけで成功させた。それなら、レールカノンとの複合はより成功率も安全性も高い。

「恐らく接近するナイフの役は発進したばかりのガイに、レールカノンでフォーロー及び突破後の射撃にはテンカワさんが良いかと」

「お前のデータを信じよう。テンカワ。ダイゴウジ。作戦を告げる」

無茶な作戦かもしれんが、成功させてくれよ。

提案しておいて言うのも何だが、まだお前には死んで欲しくないからな。

メグミさんに睨まれるのも嫌だぞ。ガイ。

「ガイ。聞こえてるか！」

『おう。コウキか。どうだ？ 俺の戦いは』

「ああ。出航したばかりのお前が嘘のようだ。ガイ。ヒーローに近付いたな」

『ハツハツハ。まあな！』

「作戦は聞いたか？」

『おう。まずはDFの突破。んで、ナイフで装甲を剥ぎ取ればいいんだろ？』

それをアキトが破壊してくれる』

「そつだ。すまない。お前に負担が大きい作戦で。恨むなら提案した俺を恨んでくれ」

『フツ。誰が恨むかよ。死んだら腕のない俺の責任だ。てめえのせいなんかにしねえよ』

「・・・ガイ。何だかカツコイイぞ」

『当たり前だろ！ ヒーローはカツコイイものさ』

「絶対に死ぬなよ。ヒーローに憧れて死ぬなんて事は」
『馬鹿野郎。恋人を残して死ねるかよ！ 帰って来るって誓ったんだよ！』

「・・・ガイ。お前こそ男だ！ 行って来い！」
『おうよ！ 後は任せろ！ おっしやああああ！』

誰かの犠牲になって死ぬみたいな事にガイは憧れを抱いていた節がある。

それは美しい死に方なのかもしれない。

だが、少なくとも守られた方の心に一生傷を残す。

俺はガイにそんな死に方をして欲しくなかった。

だから、忠告しようとしたけど・・・。

心配はいらなかったみたいだな。

恋が人を強くする・・・か。

本当にヒーローみたいだ。

「ガイは精神的に強くなった。なら、俺も・・・」

ガイに負けずにやってやる。

全力でガイを援護してみせる。

「ガイとテンカワさんを援護します。DFを解除してください」

「・・・信じていいんですね？」

「ええ。一切近付けず、見事に援護をやり通してみせましょう」

「私も協力するわ。多少のミスはカバーしてあげる」

「心強いですよ。ミナトさん」

「・・・頑張ってください。コウキさん」

「ありがとう。セレスちゃん」

フーッと深呼吸。

眼を閉じ、心を落ち着かせて……。

「フィードバックレベルを最高値に。情報伝達速度を最高値に。全
レールカノンを制御下に」

弾幕として幾つかオモイカネの制御下にあつたレールカノンを完全
に俺の制御下に置く。

視覚データの伝達、命令の伝達を反射のレベルに近い最高速度に。
導入したソフトを最高スペックで発揮、得られた敵情報を一瞬で解
析、全てを同時に把握。

……終わつたら寝込むかもしれないな。
だが、俺も男をみせてやる。

「……す、凄い」

「ル、ルリちゃん。レールカノンの命中率は？」

「……信じられない事に80%台をキープしています。

距離には関係なく、外すのは爆風など想定外の要因が絡む時のみ
「敵の攻撃は？」

「……全てシャットアウトです。

他の弾幕として使われている武装の射撃コースすら一瞬で予想し
ていて無駄弾がありません」

「……恐ろしいですな。全てのレールカノンを自由自在に操り、
かつ、外す事がない」

「あれ程の射撃をこなせる奴が世界に何人いるか……」

「……皆無じやる。これ程の者をワシは見た事がない」

「……コウキ君。頑張つて」

頭が割れるように痛い。

痛くて熱くて、少しでも早く気を失いたいとさえ思う。

指先は震え、心が凍りつく。

まるで自分が人間じゃないかのように。

俺は人間なのか？ ただ眼の前にいる標的を撃ち尽くすだけの機械ではないのか？

人間としての感情を失い、心を失くし、ただ条件反射のように敵が映れば腕を動かす。

考える事すら億劫。思う事すら億劫。何も考えず、何をしているかも分からず。

・・・気付けば、俺は意識を失っていた。

ひたすらに標的を撃ち続ける機械の腕を残して。

S I D E M I N A T O

コウキ君の様子がおかしい。

その事に気付いたのはヤマダ君とアキト君が敵艦隊を撃破した時。

敵は全滅に近くて、後はナデシコがグラビティブラストを撃てば終わりだというのに、

コウキ君が戻ってくる事はなかった。

いつものコウキ君なら、終わってすぐに頼もしい笑顔を浮かべてくれる筈。

まだやり残した事があるのかな？

そうやって軽く考えていた時、それは起こった。

「え!？」

「ルリちゃん。どうしたの?」

「レールカノンがエステバリスにロックオンされています！ マ、マエヤマさん！」
「……………」

ダンッ！

何の戸惑いもなく放たれるレールカノン。
その弾丸はスバル機のDFを容易に貫き、エステバリスの右腕を損傷させた。

『おい！ どういうつもりだ！？』

激昂するリョーコちゃん。

当たり前だと思う。いきなり、しかも、味方から撃たれたんだから。

『ブリッジ！ どうなってる！？』

「わ、分かりません。マエヤマさんが。調べてみます」

『マエヤマが！？ チッ！ 何が目的だ』

リーダーパイロットのアキト君が怒気で顔を染める。
待って。きっと何か理由が。そうじゃなければコウキ君がこんな事をする筈がない！

「ゴートさん！ マエヤマさんをコンソールから引き離してくださいー！」

「了解した」

艦長の指示でゴートさんが動く。

あんな巨体だ。コウキ君は簡単に引き剥がされる筈。
これで安心できる。

そう考えた私が愚かだった。

私は失念していたの。コウキ君の異常な身体能力を。

「う、動かん！」

「え？ 嘘・・・ですよね？」

「嘘などついてはいない！ 事実、動かんのだ！」

どれだけ巨体で力持ちであろうと、所詮は人間。

コウキ君が全力で抵抗すれば力勝負で勝てる筈がない。

「クソッ！」

青筋が立つ程に全力でコウキ君を持ち上げようとするゴートさん。

でも、それでも、まるで動く様子がない。

その間にも、コウキ君の動かすレールカノンが止まる事はなかった。

『な、何だ？ 何だ？』

『ど、どうなってるの？』

『包まれる暗黒の海。ああ。私は墜ちるのね』

『え、縁起でもねえ！ どうなってるんだよ！？ 答える！ ブリッ

ジ！』

エステバリスのパイロットの腕がいいからどうにかなっている状態。きつと他の人だったらとつくに墜ちてる。

・・・コウキ君が人殺しの罪を背負う事になる。

そんなの・・・いや！

「コウキ君！ しっかりして！」

肩を懸命に揺らす。

コンソールに置かれた手を必死に引き離そうと腕を引つ張る。それでも、非力な私の力では引き離す事が出来なかった。

「ジユン君！」

「うん。やってみる」

「私も手伝いましょう」

副長やプロスさんも加わり、コウキ君を囲む。

それぞれが全力でコウキ君を動かそうとするが、それでも動く事はなかった。

「な、何なんだ！？ 一体！ この力は！」

「普通じゃない！ こんな力は普通じゃない！」

「まいりましたな。被害が増える一方です」

どうして？

どうしてこんな事をするの？

幸せで平穩を望むといってコウキ君は嘘なの？

貴方は、本当はこうやって

「私の馬鹿！ 何考えてるのよ！」

誰よりも私がコウキ君を信じてあげなくちゃ駄目でしょ！

コウキ君を疑うなんて馬鹿げてるわ！

「コウキ君！ コウキ君！ 返事をして！ コウキ君！ しっかりして！」

・・・遠かった。

私の声なんて聞こえてない。

遠くて、遠くて、必死に追いかけても追いつかない。

その遠さが、その距離が、堪らなく悲しくて。

・・・堪らなく悔しかった。

こういう時に救ってあげるのが恋人でしょ!?

何ですよ!? 何でこういう時に何もしてあげられないのよ!

・・・自分の存在が本当に嫌になった。

何も出来ない自分が本当に嫌になった。

「艦長! 原因が分かりました! 無理に引き離してはいけません

!」

「説明して! ルリちゃん!」

「現在、マエヤマさんは心を失っています」

「え?」

心を失ってる?

「おそらくフィードバックの暴走が原因です。

必要以上の情報を脳が受け止め切れずにマエヤマさんの脳は意識を失わせる事に対応」

フィードバック?

さつきフィードバックレベルを最高値に言ってたわ!

「失った意識の代わりに、暴走したシステムは彼の脳を標的を撃つ為だけに使用しています。

言わば、システムによって意思のない高速処理演算装置として扱われているようなもの。

今のマエヤマさんは機械のように目の前の標的を撃つ事だけしか考えていません。

いえ。考える事が出来ないようにされているのです」

「それなら急いで離れさせないと！」

「駄目です！ 今、引き離すと良くて植物状態、下手すると死に至る事もあります」

死ぬ？

コウキ君が死ぬの？

そ、そんな事って・・・。

「脳の活動を補助脳が上回れば本来の脳としての活動を停止してしまします」

「どうにか！ どうにかできないの!？」

どうにかして！

コウキ君を死なせないで！

「ラピス。セレス。マエヤマさんの制御下にあるシステムをハッキングして停止させます。」

オモイカネすらも受け付けられない強固な守りです。協力してください
「い」

「・・・分かった」

「・・・やります。絶対にコウキさんを」

・・・御願い。

神様・・・御願いします。

「ミナトさん。気を強く持つてください」

「・・・メグミちゃん」

「恋人なら支えてあげてください。信じて待っていてあげてください。
い。」

私も戦場に出るガイさんを見るのは怖い。でも、逃げたりしま

せん」

「・・・私には何も出来ないの。何もしてあげられないのよ!」

「だから! 気を強く持って、マエヤマさんを信じてあげてください!
い!

ルリちゃん達を信じてあげてください!」

「・・・ルリちゃん・・・?」

「見てください。彼女達だって必死です。全力でマエヤマさんの為に力を尽くしています」

額に凄い汗を浮かべて、必死な顔で作業するルリちゃん。

ラピスちゃんもセレスちゃんも辛そうに表情を歪めているのに、諦める事なく頑張ってる。

「私達には祈る事しか出来ません。でも、絶対に帰って来るって。

そう信じれば、必ず帰ってきてくれるって。そう信じるしかないんです!」

諦めてたの?

私はもう無理だって・・・。

「辛いのも苦しいのも分かります。でも、必死に頑張る仲間を信じてあげてください。それに・・・」

穏やかに笑うメグミちゃん。

「恋人を残して勝手に死ぬような人じゃないですよ。マエヤマさんは」

・・・そう。

そうよ。今の私にだって出来る事はある。

泣き崩れる事が今すべき事じゃない。

コウキ君の死を拒んで自暴自棄になる事じゃない。
混乱して、泣き叫ぶ事が私のすべき事じゃない！

「コウキ君！　しっかりなさい！　戻ってきなさい！」

必死に訴える。

システムに乗っ取られた？

その程度でへこたれるような男じゃないでしょ！
取り戻しなさい！　貴方にはそれが出来る筈よ！

「エステバリス隊！　聞こえますか！」

「ああ。どうなってるんだ？　状況を教えてくれ」

「こちらの管制システムが暴走しただけです。」

早急に立て直しますので、申し訳ありませんが、回避に専念して
ください」

「・・・後で事情を聞かせてもらう。が、了解した」

「チツ！　システムの暴走ならしょうがなねえな。避け続けてやる
よ」

「ねえねえ、当たった人は奢りにしない？」

「ふっふっふ。闇の底で賭け事に走るなんて。甘美ね」

「おいおい。遊んでいる場合じゃ　　」

「へえ〜。逃げるんだ？」

「へっ。この俺が逃げるだと？　そんな馬鹿な事がある訳　　」

「真面目にやってくれださあい！　ガイさん！　怒りますよ！」

「お、おう。すまねえな。だがよ。何があつたかしらねえが、気に
する必要なんてねえぞ。」

「この程度の狙撃に当たる奴が悪いんだ」

そう笑うガイ君。

きつとそれがガイ君の優しさなんだって思った。

誰がレールカノンを操ってるかなんて誰だって知っている事なのに。お前に責任はないぞって。

そう伝えてくれる。

素敵な彼氏ね。メグミちゃん。

『そうそう。狙うならもっと狙えってな』

『速攻で当たった人が言う台詞じゃないよお』

『ば、馬鹿。あれは、そう、油断って奴だ』

『戦場で油断するなんて愚かね』

『おい。こら。イズミ。てめえはどっちの味方なんだ』

『戦場で散る方の味方』

『死ねってか！？ 死んだ方の味方だったのか！？』

『うるさいよ。リョーコ』

『俺か？ 俺が悪いのか！？』

ほら。コウキ君。

皆、こつやって貴方を支えようとしてくれるのよ。

それを、貴方は裏切るの？

そんな子じゃないでしょ？

「……はあ……はあ……ハッキング成功……」

「……はあ……システムと……意識を……切り離れた……」

はあ……」

「……はあ……もう……はあ……大丈夫です……」

……良かった。

助かったのね。コウキ君。

「ありがとう。本当にありがとう」

「ゴートさん。申し訳ありませんが、マエヤマさんを医務室まで運んで頂けますか？」

「了解した」

「問題行為に対する厳罰は追って連絡すると。」

「そうマエヤマさんに伝えるよう担当の方に伝えておいてください」

「そ、そんな！？ コウキ君は」

「・・・了解した」

「ゴートさん！」

そんな事って・・・。

コウキ君はナデシコの為に無茶をした筈なのに。

「何があつたかは分かりませんが、味方を撃つたという事は抗いようのない事実。」

「こちらと致しましても罰を与えない訳にはいきません」

「そ、それは・・・」

反論出来なかった。

たとえパイロットが気にしてないって言ってくれても事実は事実。罰を与えないと示しが見つからない。

「・・・」

私は背負われ気絶したままブリッジから去っていくコウキ君を見送る事しか出来なかった。

S I D E O U T

第十四話（後書き）

イズミさんのキャラが難しい！

コウキ君の暴走。

どうなる事やら。

第十五話（前書き）

シリアスです。

第十五話

「・・・ここは？」

眼が覚めたら知らない天井でした。
つて、ここは・・・医務室？
何がどうなっただんだっけ？

「あ。眼が覚めましたか？」

医務室の女医さん。

クルーに女性が多いから、そういうのを気にしたのかな？
ま、男としても女性の方が嬉しいか。

「あ、はい。あの・・・どうしてここに？」

「それは、何故医務室に運ばれたのかですか？ それとも、医務室
にいるのは何故かですか？」

「ええっと」

同じような気がしますが・・・。

「と、とりあえず、どちらも御願ひします」
「分かりました」

良く分からない人だ。

だけど、美人。

ナデシコってさ。

能力があれば、性格は問わない。
でも、容姿が整っていれば尚良いとか。
そんな感じで集めたんじゃない？ もしかして。
メインクルーの殆どが容姿端麗だったではないですか。
戦艦らしからぬオーラを放つのはそれが原因かもしれん。

「色々考えている所悪いけど、お話させてね」

「あ。すいません」

「ふふふ。いいのよ。少年が考えている事なんてお見通し」

妖艶に笑うお姉さん。

・・・美人に笑顔を向けられて嬉しい筈が、寒気を感じます。

それと、きつとお姉さんが考えているのと僕が考えているのは違いますよ。

ついでに、一瞬で性格変わりませんでしたか？

「貴方が運ばれてきたのは今から三、四時間前ですね。あれはそう、私が」

「とりあえず、僕の事を御願います。後でお話は聞きますので」

「言いましたね。最後まで聞いてもらいますよ」

「・・・はい」

焦って変な約束をしてしまった。

・・・すいません。色々と。

「私も詳しくは分かりませんが、戦闘中に貴方は気絶してしまっただけみたいですよ」

「気絶・・・ですか？」

「分かってるわ。若い男の子が気絶するなんてアレしかないよね。

・・・妄想。どれだけ激しい妄想をしたら気絶するの？」

「それで、俺の身体に異常はありました？」

「あら。スルーなんて。悲しいわ」

「どうなんでしょう？」

「・・・コホン。特に異常は感じられませんでした。ちょっとした疲労でしょう。」

但し当分は頭痛が続くかもしれないけど我慢してください」

「あ、はい。分かりました」

そういえば、何か自分の頭じゃないかのような違和感が。ま、勘違いだろ。俺の。

「異常なしなので帰らせても良いと思いますが、上からの命令でここに寝てもらいますね」

「ええっと、俺つてもしかしたら何かやらかしたんでしょうか？」

「私にもちよっと。覚えてないんですか？」

「ええ。何にも」

「ふふふ。それは若さゆえの過ちを犯したのを認めたくないからよ、きつと。認めちゃいなさい」

「変わり過ぎです。ついでに若者の認識を改めて頂きたい」

どうしてそうそっち方面に持っていくのかな。この人は。

「何でも貴方には追って連絡があるそうで、それまで待機してなさ
いって事だと思えますよ」

「なるほど。それなら、少し休ませてもらってもいいですか？ ち
よっと頭が痛いので」

「はい。構いませんよ。ゆっくりお休み下さい」

「ありがとうございます」

「あ。添い寝しようか？ 寝かせないわよ？」

「おやすみなさい」

「あらら。またスルーされたのね。お姉さん。悲しい」

深い眠りに落ちた。

医務室の神秘に出会った気がする。

それから数時間後。

ま、俺は寝てたからな。

正確な時間は分らないのよ。

「マエヤマさん。体調の方はどうですか？」

やって来たのはゴートさんを連れだプロスさん。

何かゴートさんから睨まれてるんだよなあ。

ホントに俺は何をやらかしてしまったのだろうか？

「ええ。ちよつと頭が痛いですが、他は正常です。

少し休ませて頂ければすぐにでも復帰し」

「残念ですが、マエヤマさん、貴方にはこれから五日間程、独房に入ってもらいます」

「・・・え？」

・・・独房？

・・・俺が？

・・・何で？

「その様子では報告通り何も覚えていないようですね」

はあ・・・と溜息を吐くプロスさん。

正直な話、俺には意味がまったく分からない。

「あの・・・俺って何か仕出かしたんですか？」

「・・・ええ。意識を失っていた貴方に言うのは大変申し訳ないのですが、真実をお話します」

そこで聞かされた俺の罪。

頭を抱えたくなった。

とにかく、謝りたかった。

許してもらえないまで、何をしても、俺は謝りたい。

それ程の罪を俺は犯してしまった。

「・・・俺が・・・エステバリスを？」

「ええ。嘘偽りのない事実です。貴方はレールカノンを操り、味方に被害を与えたのです」

呆然とした。

視界が揺らいだ。

手先の感覚がなくなつて、でも、俺は必死にベットの毛布を掴む。

それは独房に送られるのを拒んでいたからだろう。

認めたくない自分が必死に何かに縋っていた。

でも・・・。

「貴方に何があつたのか？ それは私共にも分かりません。

・・・ですが、事実は事実。厳しく罰しさせて頂きます」

「・・・ええ。分かりました」

・・・抗う事の出来ない事実と突きつけられ。

俺は首を縦に振る事しか出来なかった。

独房で五日間の監視。

火星にいる間、俺は何も出来ないんだと悟った。

「謝りたいんです」

「コウキ君。貴方の責任じゃ」

「俺の責任です。何が理由であろうと俺が意識を失っていようと俺の責任なんです」

「・・・分かったわ」

火星降下までの僅かな時間。

独房にいる俺に会いに来てくれたミナトさんに頼んだ。

俺に謝らせて欲しいと。

弁解がしたい訳じゃない。

言い訳がしたい訳じゃない。

ただ頭を下げて、謝りたい。

ブリッジで散々銃を突きつけるのはいけない事だと言いつけた俺。

そんな俺が銃を突きつけ、更には実際に撃ってしまったという取り

返しのつかない過失。

軽蔑されてもいい。嫌われてもいい。

それだけの事を俺はやったのだから。

でも、それでも、謝りたかった。

「・・・連れて来たわよ」

わざわざナデシコでも一番に利用しない所に来てもらった。

俺なんかの為にこんな所まで来てもらった。

それなのに、俺は顔をあげる事が出来なかった。

冷たい眼で見られるのが怖かった。

罵られて、睨まれるのが怖かった。

どんな表情であるかと、どんな言葉であるかと、俺にとっては恐怖でしかなかった。

・・・謝りたい。ただ一言謝りたい。

でも、その一言が酷く遠い。

「おい。顔をあげやがれ」

ビクッ！

言葉が胸を貫いた。

続きの言葉が怖くて仕方なかった。

「顔をあげるって言ってんだろっが！」

・・・そうだよな。

激怒してて当然だ。

俺は撃つたのだから。

・・・味方を・・・この手で。

やり場のない怒りと悲しみ。

何故あんな事をしたんだという己に対する怒り。

何故意識を失ったんだという己に対する怒り。

何故こんな能力を身に付けさせたんだという遺跡に対する怒り。

何故俺はこんな世界にいるんだという己と遺跡に対する嘆き。

そんな感情が己の胸の中で渦を巻いて。

・・・涙が出てきた。

胸の痛み。頭の痛み。

・・・心の痛み。

全身が痛くて堪らない。

死んじまえと言われた方がむしろ楽なのかもしれない。

・・・無責任にこの世を去れるから。

散々、殺したのだから苦しむのが罰だと能書きをたれながら、俺自身は簡単に死を選んだ。

死ぬという選択肢以上に楽な事なんてない。

俺はテンカワさんの気持ちを分かったつもりでいて、まったく分かっていなかった。

生き地獄だ。俺なんて誤射しただけで生き地獄だ。

テンカワさんのように人の命を背負うなんて事になったら間違いく発狂する。

「殴らせる！ てめえが気絶するまで殴らせる！」

「リョーコ！ やめな！」

「言い過ぎだよ。リョーコ」

「うるせえ！ 俺は撃たれたんだよ。こいつに。俺には正当な権利がある」

殺しかけたんだ。

殴られるだけで済むのなら軽い方だと思う。

・・・殺されてもいいぐらいだった。

「俺にも殴らせる。味方を攻撃なんてヒーローにあるまじき行為だ。断じて許せん」

「ガイ君！」

「こいつは俺に男というものを教えた。その教えた人物が男として許せない事をした。」

俺は男をこいつに教えられた者としてこいつを殴らなければならぬ

ああ。殴ってくれ。

気が済むまで殴ってくれ。

そして・・・俺を許してくれ。
償い方が分からない。
・・・俺はどうしたらいい？

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

黙ってないで怒れよ。

ああ。良いんだ。殴って良い。

罵って良い。もう・・・何でも良いから・・・。

「・・・・・・・・許して・・・下さい・・・・・・・・ごめん・・・・・・・・なさい・・・・・・・・許して・・・下さい・・・・・・・・」

身体が震えた。

口はまるで極寒の中に身を置いたかのようにカチカチとうるさい。
耳は全ての音をシャットアウトしたかのように全ての音を拒んだ。
縛られた両手。

こんな腕、折ってしまいたかった。

仲間を傷つけるような腕なんて折ってしまいたかった。

誰でも良い。縛りを解いてくれ。

俺が、自分で、折るから。

「・・・・・・・・ごめんなさい・・・・・・・・ごめんなさい・・・・・・・・ごめんなさい・・・・・・・・」

ひたすら呟く。

まるで壊れた機械のように。

ただ一言を繰り返す。

ごめんなさい。ただ繰り返す。

「……許してください……許してください……許してください……許してください……」

言葉とは裏腹に俺は許して欲しくなかったのかもしれない。

懺悔のように紡がれる言葉は他者の言葉を聞きたくないから。

許して欲しい。でも、許して欲しくない。

裁かれない。裁かれない。

何も聞きたくない。何か聞きたい。

誰かに触れたい。温かみを感じたい。

でも、その資格はもう……裏切り者の俺にはない。

「……許して……許して……許して……許して……」

視界が揺らぐ。

涙で滲んだ視界が更に暗転する。

そのまま、意識はブラックアウトした。

S I D E H A R U K A

「……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

これが……コウキ君？

明るくて優しい朗らかな青年のコウキ君。

私の大切な恋人のコウキ君。

これが、まるで人形のように呟き続ける彼が本当に私の知っている
コウキ君なの？

「……許してください……許してください……許してください……
い……い」

全身を震わせ、カチカチと歯を鳴らせ、血が出る程に拳を握り込ん
で。

「もうやめて！ コウキ君！」

「……許してください……許してください……許してください……
い……い」

私の言葉は届かない。

ここにいる誰の言葉も届かない。

そして、彼の言葉も私達の中の誰にも向けられていない。

「……許してください……許してください……許してください……
い……い」

心が痛い。

彼をここまで追い詰めてしまった自分が許せなかった。
何をどう、私は間違えてしまったの？

「……許して……許して……許して……
「コウキ君！」」

倒れる彼の身体。

すぐに抱き締めてあげたかった。

彼の為なら何だってしてあげたかった。

でも、邪魔をする。
鉄の棒が私の邪魔をした。
少し歩けば触れる距離。
それが、こんなにも遠い。
手を伸ばしあえば触れ合える距離。
それが、あんなにも遠い。
私は・・・無力だ。

「・・・コウキ」

「チツ！ 軟なヤツ」

「リョーコ！」

「味方の誤射ぐらいが何だってんだ！？ それぐらい当たり前だろうが！」

味方の誤射で死ぬ方が多いぐらいなんだぞ！ それを！ コイツは！」

「それは貴方の考え方よ。彼に押し付けるのはよくない」

「そうだよ。それに、どうしてわざわざあんな追い詰めるような事を言ったの！？」

「一発だ！ 俺は一発殴ればそれでよかった！ それで全部チャラにするつもりだった」

「それなら、そう言えばいいじゃない。気絶するまで殴らせるだなんて」

「俺は・・・そんなつもりで・・・。クソツ！」

「リョーコ！ どこ行くの！？」

「シャワーでも浴びつてスッキリしてくる！」

「リョーコ！」

「フンツ！・・・誤射ぐらいで怒る訳ないだろうが・・・」

去っていくリョーコちゃん。

「・・・そうね。私も帰るわ」

「イズミ！」

「私がいてもどうしようもないもの。後は彼が立ち直るだけ。立ち直ろうという意思を見せるだけ」

「・・・イズミ」

「人を殺すという罪の重さ。私達のようなパイロットは神経が麻痺するのかもね。」

彼こそが普通の反応なのかもしれない」

去っていくイズミちゃん。

「・・・拳で眼を覚ましてやろうと思ったんだけどな。空回りしちまったか」

「・・・ガイ君」

「俺は信じてるぜ。コウキならすぐに立ち直って戻ってくるってな。コイツはそんな軟な男じゃねえよ」

去っていくヤマダ君。

「・・・」

「・・・アキト君」

「俺は人を殺し過ぎた。今の俺にコイツの気持ちは分からん」

「・・・アキト君は・・・」

「俺は罪人だ。コイツはその寸前まで行って戻ってこれた。それが少し羨ましくもあるな」

去っていくアキト君。

結局、ここには私とヒカルちゃんだけが残った。

「・・・ごめんなさいね。ヒカルちゃん」

「ミナトさん。どうしてミナトさんが謝るんですか？」

「皆の心が離れ離れになっちゃって。私が無理に頼んだから」

「・・・皆、悪気があった訳じゃないんです。」

味方の誤射で死ぬ事なんて戦争中にはいくらでもあったと言われてましたし」

「・・・でも・・・」

「パイロットは誰も気にしてないんです。コウキが誤射した事なんて。」

だから、一発殴らせれば許してやるよって笑って言っていました」
「それなのに・・・って事？」

「コウキが悪いんじゃないやありません。・・・こっちの言い方が悪かったです。」

何よりこっちの考え方を押し付けてしまったのが悪いんです。

コウキはパイロット志望じゃないんですよね？」

「ええ。何でもシューティングアクションゲームのスコアでスカウトされたって」

「それなら、きつと、今までもゲーム感覚だったんだと思います。」

向こうはパイロットのいない唯の虫型ロボットだったんですから」
「ゲーム感覚だったのが、現実感覚になったって事ね。しかも味方の死という形で」

「覚悟がないならパイロットになるな。そう言われた事もあります。それは味方を殺す可能性もあるという意味だったのかもしれないかもしれません」

「覚悟。コウキ君には覚悟が足りなかったのかな？」

「分かりません。でも、いきなり味方の死。しかも、自分が知らない所で。」

自分の身体に恐怖を覚えてもおかしくないと思っています」

「自分の身体に恐怖・・・か。」

もし知らない間に友人を殺していたなんて事になったら考えるだけで怖いわね」

「コウキはその痛みを味わってるんだと思います。仲間を殺してしまったかもしれないという罪悪感。」

自分の身体が自分じゃないかのような恐怖感。その二つに苛まれて」

仲間を殺してしまったかもしれないという罪悪感。

コウキ君が友達を大切にする子だという事を私は知っている。

知り合いになれば、誕生日や記念日などを覚えていて必ずプレゼントを贈っていた。

仲が良い子ならもつと大切にしていた。

コウキ君にとってパイロットの皆は同じ戦場を共にする友人以上の関係だったのかもしれない。

そんな友人をいつの間にか殺していた。しかも、異常を抱える自分の身体で。

コウキ君は自分の身体を嫌がっていた筈。こんな能力はいらなかったって。

異常を抱え、親しい友人を殺す自分。そうよね。

とてもじゃないけど、普通の人には耐えられるような事じゃないわよね。

対人恐怖症になってもおかしくないわ。

親しい人を自分は殺してしまうなんて考えたら誰とも知り合いになりたくないもの。

「そっか。ありがとね。ヒカルちゃん」

「いえ。友達ですから。コウキは。後は恋人のミナトさんに任せます」

「ええ。本当にありがと」

去っていくヒカルちゃん。

これで残されたのは私一人。

コウキ君と私だけ。

「どうしてこうなっちゃったの？ コウキ君」

いつもなら穏やかな寝顔。

それが今は恐怖で引き攣って、涙で濡れた酷い寝顔だった。

「抱き締めれば安心してくれるの？」

でも、それも出来ない。

「口付けしたら私を感じてくれるの？」

たったそれだけの事も私は出来ない。

「どうすれば・・・いいのよ・・・」

泣きたかった。

どうしていいのかわからない。

コウキ君の為に何が出来るのかわからない。

コウキ君の為に何をしてあげられるのかわからない。

分からない事ばかりで、己の無力さを呪う事しか出来なかった。

「・・・また、来るわね。その時はいつもの元気な姿を見せてね。コウキ君」

ひとしきり泣いて、私もその場を後にした。

私にはもうコウキ君の強さに懸けるしかなかったから。

SIDE OUT

暗かった。

ただ暗い道を何も持たずに歩いていった。

光が現れては消え。消えては現れて。

この闇はいつまで続くのだろう。

光を追う。

・・・俺は光を掴むまでただ黙々と歩き続けた。

「アキトさん。私は決めました」

「・・・マエヤマか？」

「はい。彼は危険です。私達の計画の邪魔になります」

「どうしてもか？」

「はい。アキトさんも見たでしょう？ マシンチャイルドを上回る情報処理能力を。」

あれだけの数のレールカノンを同時制御する事なんて私にも出来ません」

「・・・」

「それだけじゃありません。私に匹敵するオペレート能力もありません。」

いざという時、立ち向かわれたら一番の障害になります」

「障害になる。それだけで消すのか？」

「先日の件をお忘れですか？ 同じような事があれば大切なナデシ

「コクルーを失いかねません」

「システムの暴走。あれはマエヤマのミスなのか？」

「フィードバックレベルを上げ過ぎです。あれではシステムと己を一体化させているようなもの。」

「あれ程の情報量を人間の脳が支えきれぬ訳ありません」

「良く無事で済んだな」

「それがおかしいのです。あの状態になれば瞬時に廃人化するのが普通です。」

「マエヤマさんの持つナノマシンの異常さで助かったようなものです」

「ルリちゃんでも無理か？」

「絶対に無理です。私ではもって数秒でしょう。」

「あれだけの情報量が一気に押し寄せれば確実にパンクします」

「それはあれだけの時間もたせた。ルリちゃんが警戒するのも分かる。だが・・・」

「ミナトさんですか？」

「・・・ああ。マエヤマを殺して悲しむ者もいる。それを忘れてはならない」

「ミナトさんにはシラトリさんがいます。何の問題もありません」

「・・・」

「今から行きます。良いですね？」

「・・・ああ。分かった」

「・・・ルリ・・・」

「・・・たとえ仲間だとしても、計画の為なら・・・殺します」

SIDE MINATO

億劫だった。コウキ君が独房入りしてからずっと落ち着かない。

火星に降下する時間になつても、気分が晴れる事はない。
火星が赤くない？ そんなのどうでもいいの。
ネルガルの研究所を回る？ そんなのもどうでもいい。
許されるのならコウキ君の傍にいたかった。
許されるのなら、一緒に独房入りしたかった。
それなら、コウキ君に触れられる。温もりを感じられる。

「あの・・・このまま火星に降りちゃっても良いんですか？」
「どういう事？ メグミちゃん」

「以前、マエヤマさんにナデシコについて教えてもらったんですが、火星に降り立つとナデシコの性能はガタ落ちするじゃないですか。それでもいいのかと」

「大丈夫、大丈夫。ナデシコは今まで多くの敵を退けてきた最強の戦艦だよ。問題ないって」

「ええ？ 本当ですか？ ミナトさんはどう思い・・・」

「・・・大丈夫ですか？ 顔色悪いですよ」
「・・・」
「・・・」

一人で独房にいるコウキ君に私は何をしてあげられるの？
どうすればコウキ君の心を救う事が出来るの？

「休ませてやれよ。プロスさん。何も聞こえてねえって」
「むう。ですが、ここから細かい移動が多いですからな」
「んなもん、今の状態じゃ無理に決まってるだろ？ なあ。ヒカル」
「え？ う、うん。ちよつと無理かなあゝって。あ、あはは」
「・・・そうですね。仕方ありませんが、セレスさん、お任せしますね」

「・・・はい。分かりました」

考えが纏まらない。
何も思い浮かばない。

「そういえば、ルリとラピス、あ、テンカワもいねえな。あいつらはどうしたんだ？」

「何でも用があるとかで」

「まったく。あいつらは何してるんだか。せつかく火星が見れんのによお」

「テンカワさんも火星出身でしたな。・・・マエヤマさんも火星育ちでした」

「重いんじゃないのか？ 五日間って？」

「いえ。妥当かと。それに、彼には休む時間が必要です」

「・・・それもそうか。俺達パイロットには何にも出来ないからな」
「笑って迎えてあげる事ぐらいかな？」

「・・・そうね」

・・・コウキ君。

「ハルカさん」

ッ！？

「あ、はい。何でしょう？」

「マエヤマさんの様子を見てきてもらえますか？ そろそろ眼を覚ますと思うので」

「・・・はい」

あれから、コウキ君は眠り続けている。
非情な現実を認めるのを拒むように。

安楽な夢の中から抜け出すのを拒むように。

「……はあ」

ブリッジを抜け出した所で深い溜息が出た。
私、何やってるんだろう？

こんな事してたらコウキ君に怒られるのに。
無責任は絶対に許せんて。

今の貴方は無責任にも私を放っているのにね。

……御願いだから。早く元のコウキ君に戻って。コウキ君

「せつかく気を遣ってくれたんだもの。コウキ君の所へ行こう」

ブリッジクルーの皆に迷惑をかけて。

本当にもう。私は何をやってるんだろう。

「……です」

ブリッジから独房までの最短コースを走る。
廊下を走ってたら、女の子はエレガントに、ですよ、とかコウキ君
が変な事を言ってたわね。

思い出すだけで笑みが零れちゃうわ。

……本当に面白い子で、楽しい子で。

だから、笑顔が見れないのが本当に悲しい。

「……さん」

「……わかってる」

独房の入り口差し向かう所で声が聞こえてきた。

「誰？　こんな時間に、コウキ君に用がある人なんて・・・」

食事を運んでくれる人でもない。

様子を見に来る医療班の人でもない。

どっちも時間帯が決まってるから。

今の時間帯は誰もいない筈。

じゃあ、今いるのは？

そ〜っと、壁に隠れながら様子を窺う。

あれは・・・。

「ルリちゃんとアキト君？　あ。ラピスちゃんもいる」

ブリッジにいる筈の主要クルーの三人。

その三人がわざわざ抜け出してコウキ君の所に？

何で？

「・・・」

「・・・」

距離は遠いし、小声だしで何も聞こえない。

こんな所で何をしているんだろう？

「・・・ですが！」

「・・・やはり駄目だ！」

「・・・ルリ！」

いきなり騒ぎ出す三人。

ルリちゃんの手には・・・銃！？

「や、やめて！」

いつの間にか飛び出していった。

何故、ルリちゃんがコウキ君を殺すのか？

そんな疑問を思い浮かべる前に、止めに入ろうと身体が勝手に動く。

「……だ、誰です！？ ……え？ ミナトさん？」

「……」

ルリちゃんに銃を向けられて驚く。

でも、身体が止まる事はなかった。

コウキ君とルリちゃんの間、身体を入れて、両手を広げた。

「どういう事？」

「ミナトさん！ どいてください！」

「どかないわ！ どうしてコウキ君が殺されなければならないの？」

「マエヤマさんが危険だからです。彼はナデシコクルーを殺しかねません」

「今回、暴走してしまっただけじゃない。殺されそうだから殺すの？」

「もう暴走しないとは限らないじゃないですか。それなら、殺される前に殺します」

「間違ってる！ それは間違ってるわ！」

「間違っています。大事なナデシコクルーを殺しかねないんです。放っておく訳には」

「それは変よ。コウキ君だって大切なナデシコクルーの一員だわ。」

ルリちゃんにとってコウキ君はナデシコクルーじゃなかったって事？

貴方も仲間だから助けて当然って言うてたわよね。あの言葉は嘘だったの？」

「そ、それは……。……マエヤマさんは別です！」

仲間を犠牲にするような方は仲間でもなければ、ナデシコクルーでもありません！」

「・・・ルリ！」

「ルリちゃん！ それは違う！」

「どいてください。ミナトさん。貴方を殺したくありません」

「どかないわ。絶対にどかない」

「どうして分かってくれないんですか！？ マエヤマさんは危険な存在なんですよ？」

「彼は私の大切な人なの！ 誰が大切な人に死んで欲しいなんて思うのよ」

「大丈夫です。すぐに良い人が見つかります。私が保証します」

すぐに良い人が見つかる？

未来の記憶を持つ貴方達がそういうのなら間違いなんでしょうね。でも・・・。

「未来がどうであろうと今の私にはコウキ君が一番大切なの！

すぐに見つかるから納得しろって？ そんなの無理に決まってるわ」

この世界で私が愛しているのはコウキ君だけ。

愛し続けるのはコウキ君だけよ。

「ミナトさんの運命の人はマエヤマさんじゃありません。別の人です」

「運命？ そんなの誰が決めたのよ？ 私の好きな人は私が決める」

「ミナトさんは絶対にこれから出会う人の方を好きに」

「もうやめて！ いい加減にして！」

「ミナト・・・さん？」

「未来を知ってるからって何でも貴方達を選んだ道が正しいだなん

て思わないで！」

「なっ！？」

「何が運命の人よ。何がこれから出会う人の方を好きになるよ。そんな余計なお世話！」

愛する人は私が決める。貴方達が望んだ人と結ばれるなんて事は絶対にない！」

「……………」

「貴方達のエゴを人に押し付けて！ 何でも自分が正しいと思ってるの！？

思い上がりもいい加減にしなさい！」

運命？ 未来ではこうだった？

そんなの私には関係ない！

私はこうするべきだなんてエゴを押し付けて。

私は貴方達が操る人形劇の人形じゃないの！

「何でも貴方達の思い通りになるなんて大間違いよ！

私は貴方達が描く物語の登場人物じゃない！ 何もかもを勝手に決めないで！

私が愛してるのはコウキ君だけよ！ 私の想いは私だけのもの！」

「わ、私はそんな事」

「出て行って！ 出て行きなさいよ！ いいから出て行って！二度と来ないで！」

「…………ルリちゃん」

「……………」

「…………アクト。ルリ」

「…………俺達が間違ってたんだ。行こう」

「…………はい」

「…………うん」

「…………はあ…………はあ…………」

去っていくアキト君達を息を切らしながら見送る。
休む事なく叫び続けたから、息が切れても仕方ないわね。

「・・・コウキ君」

振り返って最愛の人を眺める。
苦しそうに表情を歪めて眠る彼の手を取って上げたい。
暗闇の中を光を求めて彷徨い歩く彼を導いてあげたい。
でも、それが私には出来ない。
本当に私は何にも出来ない女だ。

「・・・ミナト・・・さん」

ッ!?

コウキ君の声!?

「コウキ君!」

頂垂れていた顔を上げ、コウキ君を見詰める。
その眼は、確かに開いていた。

「・・・コウキ君。良かった。眼を覚まして」

もしかしたら、一生、覚まさないんじゃないかって。
ずっと不安に思ってた。

胸の奥に必死に押し込めて気にしないようにしてたけど、時折不安
に襲われてた。

・・・安心したら涙が出てきちゃった。

「……ミナトさん。また、俺のせいで泣いてますか？」

「ううん。コウキ君のせいじゃないわ。安心したら涙が出てきただけよ」

「……ハハハ。やっぱり俺のせいじゃないですか。俺ってミナトさんを泣かせてばかりですね」

「ふふふ。女泣かせの達人ね。コウキ君は」

「……ミナトさん限定ですよ」

「もお。バカな事ばっか言っつて」

少し元気が出てきたのかな？

いや。私に合わせてくれてるだけか。

本当にそういう所は変わらず優しい。

「……ミナトさんの声。聞こえました」

「え？」

「……愛してるって。こんな俺でも愛してくれているんだって。

そう聞こえたから、ここにいらっしゃるだと思います」

こんな私でも貴方を導く事が出来たの？

こんな無力な私でも。

「……俺は自分の身体が怖いです。自分の身体が恨めしいです。

どうしてこんな身体なんでしょう？」

「……コウキ君」

「……いえ。本当は俺が悪いんだって分かっています。調子に乗って無茶な事をした俺が。」

でも、どうしても、この身体を恨んでしまっんですよ」

俯いて話すコウキ君。

その姿は自身が持つ異常な力とは大きくかけ離れて弱々しい存在に

私には見えた。

ううん。もともとコウキ君は異常な力を持つのに相応しい人じゃない。

考え方だつて本当に普通の人。そこら中にいる普通の男の子だわ。

「……知らない間に味方を撃つて。知らない間に味方を傷付けて。知らない間に多くの人の心を傷付けた。俺が。俺のせいで」

「コウキ君はナデシコの為に一生懸命だつたんでしょ。誰も責めないわ」

「一生懸命にやれば許されるんですか？ ううん。そんなに世の中は優しくありません。」

「事实は事实。俺は味方を撃つた危険因子なんですよ」
「……コウキ君」

自らを危険と言うコウキ君はどれ程に自分の心を傷つけているんだろう？

私にその傷付いた心は癒して上げられるのだろうか？

「コウキ君は反省している。そうよね？」

「……ええ。あんな無茶な事はもうしませんよ」

「それなら、糧にすればいいのよ。きちんと皆に謝って、それで己の糧にしません？」

「……皆許してくれますかね？」

「許してくれるわ。誠心誠意謝りなさい。私が傍にいてあげる」

「……それは心強いですね」

弱々しく笑うコウキ君。

たった一日で、ここまでコウキ君を消耗させた。

コウキ君の自分に対する罪の意識は相当に重いみたいね。

「一人一人、丁寧に謝りなさい。ゆっくりでいいから。自分の想いをぶつけない」

「……お母さんみたいです。ミナトさん」

「男の子はお母さんを求めるらしいわ。きっとコウキ君もそうなのよ」

「……ミナトさんみたいなお母さんなら友達に自慢できますね」

「ふふっ。ありがとう」

「……もう少し眠ってもいいですか？」

「ええ。ゆっくりお休み」

「……はい」

そう言っただけで寝息を立てるコウキ君。

さっきの苦しそうな顔が少しだけ穏やかになってる。

私も少しはコウキ君を癒せたって事かしら？

そうならいいわね。

「おやすみなさい。コウキ君」

母のように抱き締めながら寝てあげたけど、今は無理みたい。貴方が独房から出てきたら、いくらでも抱き締めてあげるから。早く元気になるのよ。コウキ君。

SIDE OUT

「……アキトさん。私は……」

「運命に足搔こうとしていた俺達がミナトさんを運命で縛っていた。

「・・・皮肉な事だ」

「・・・私は間違っていたのでしょうか？ マエヤマさんを殺そうなんて」

「マエヤマも大切なナデシコクルー。どうしてそれが俺達には分かんかったんだろうな」

「・・・私は仲間を殺そうとしていたんですね。大切なナデシコクルーを」

「いいんだ。ルリちゃんは俺の為に思ってやってくれた。その罪は俺が背負う」

「・・・私は自分が怖くなってきました。

何の話し合いもせずに、殺される前に殺せなんて考える自分が「震えなくていい。ルリちゃんが間違ってたら俺が正すから」

「・・・はい」

「・・・アキト。ミナト。私達が未来から来た事を知ってた」

「・・・ああ。知ってたな」

「ありえません。ボソソジャンプだって今のミナトさんは知らない筈ですし」

「・・・コウキが教えたかもしれない」

「その線が妥当だな。もしかするとマエヤマもボソソジャンプで帰ってきたのかもしれない。

俺達と同じように。あの未来からこの時代へ」

「・・・それでは、私は、もしかして協力者を殺す所だったのですか？ 頼りになる協力者を」

「ルリちゃん。犯した過ちは何があっても失くならない。俺達は背負っていくしかないんだ」

「・・・はい」

「この言葉はマエヤマから言われた。

もしかすると俺の罪を知ってて、俺にそう言ったのかもしれない」「それでは、火星の後継者を知っている可能性も」

「ああ。もしかすると俺が壊したコロニーにいたのかもな」

「・・・それはないと思う。コウキはアクトを恨んでない」

「辛い事をお聞きしますが・・・」

攫われた火星人の中にマエヤマ・コウキという名はありませんでしたか？」

「・・・すまんが、記憶にない。俺も全ての火星人を把握している訳ではないからな」

「そうですか。いえ。一つの可能性を考えてみただけです」

「犠牲になった火星人の一人か」

「・・・でも、そんな経歴はなかった」

「あれ程のオペレート技術を持っています。捏造するぐらい簡単ですよ」

「・・・一つ、気になるのだが、良いか？」

「・・・はい。何でしょう？」

「・・・うん。何？」

「アカツキが言った匿名のメールとはマエヤマが送っていたのではないか？」

「・・・可能性は高いですね。研究所をハッキングするにはかなりの技術が必要ですから。」

マエヤマさんレベルなら調査も容易かと」

「・・・ハッキングしてバレないにはもっと技術が必要。コウキなら多分できる」

「あれに関しては俺はお手上げだった。場所が分からなかったからな。」

あの匿名メールがなければ何も出来なかったよ」

「あの時の私は絶望してましたから。アクトさんも救えず、ラピスも救えずで。」

調べる気力もありませんでした」

「・・・私は保護されるまで実験の繰り返しだったから何も」

「ラピスのデータも匿名メールからだ。更に言えば、セレスもそうだった」

「・・・それでは、ラピスやセレスを始めとした多くのマシンチャイルドを救ってくれた恩人に、

私は銃を向けてしまったという・・・。そういう・・・事ですか・

」

「・・・もしそれが本当だったら俺達は感謝こそすれ疑うなんて愚かな事だったな」

「・・・私はどうすればいいでしょうか？

殺そうとしたマエヤマさんに私はもう合わせる顔がありません」

「俺達が取るべき道は一つ。マエヤマとじっくり話す事だ。

マエヤマが何を考え、何をしようとしているのかを知っておくべきだと思う」

「・・・私はミナトさんにも銃を向けてしまいました。私はもう・

」

「ルリちゃん。ミナトさんにもマエヤマにもまずは謝ろう。

俺達は仲間に銃を向けるという最低の事をしたんだ。

謝らなければならない。許してもらえるかどうかは別としてな」

「・・・はい。私は愚かな事をしました。きちんと謝りたいです」

「ああ。俺も同罪だ。一緒に謝らせて貰う」

「・・・私も謝りたい」

「きちんと謝って。話を聞かせてもらおう。まずはそれからだ」

第十五話（後書き）

仲間を助けたいから仲間を殺す。
ルリ嬢の暴走でした。

第十六話（前書き）

今回も割りとしリアスなのかな？

第十六話

「すみませんでした！」

「まったく。独房から出たら一発殴らせるよ。誤射ぐらいで狼狽えてんじゃねえ」

スバル嬢の愛のムチ。

予約入りました。

「すまん！ ガイ！」

「おう。やつちまったもんは仕方ねえ。きちんと反省しろや。あ。俺も殴るかな。

男として一発お前を目覚めさせる必要がある」

「お、お手柔らかに」

ガイの熱血パンチ。

予約入りました。

「ごめん。ヒカル」

「私は大丈夫だよお。もう。心配させないでよね」

「ああ。ありがとう」

優しい声をかけて頂きました。

「すみませんでした」

「暗黒空間が襲ってきたわ」

「え？」

怒っていらつしやらないようで。

「テンカワさん！ 本当にご迷惑おかけしました」

「ああ。システムの異常と聞いた。心配はいらない。

俺も独房は経験した事がある。ま、ゆっくり休め」

「あ、ありがとうございます」

い、今は笑う所？ 突っ込む所？

「それと、時間が空いてたら色々と話聞きたい。いいか？」

「え？ あ、いいですけど」

「助かる。それじゃあな」

よ、良かった。

皆許してくれた。

「ミナトさん！」

「ええ。皆はもう許してくれてるのよ。コウキ君が必要以上に悪く考えちゃっただけ」

「はい！」

仲間を裏切った俺がまた迎え入れてもらえる。

こんなにも嬉しい事はない。

「ミナトさんにも本当にご心配をおかけしました」

「私はいいのよ。当然なもの」

「それでもです。ありがとうございます」

こうやって忙しい合間を縫って様子を見に来てくれたり。パイロットを一人一人呼んでくれたり。

ミナトさんには本当にお世話になりっぱなしだ。
何より、俺を元気にしてくれた。

「俺はもう大丈夫です。ミナトさんはミナトさんの仕事をしてきてください」

「あら？ 私がいちや駄目なの？」

「ミナトさん。正直に言えば、ずっとここにいて欲しいです」

「しょ、正直に言われると照れるわね」

「でも、火星の人が救えるか、救えないのかの瀬戸際なんです。

ミナトさんの力を貸してあげてください」

「ええ。私だつて助けたい命は助けたいもの」

「俺はここから動けないので何も出来ませんが、テンカワさん達もいます。」

「だから、きつと・・・えつと、どうか・・・しました？」

「・・・え？ ううん。なんでもないわよ」

俺、何か変な事、言ったかな？

何か複雑そうな顔してたけど。

「テンカワさん達なら必ず火星の人達を救おうとする筈です。その為の考えもある筈。」

テンカワさん達の指示に従っていれば間違いないですよ」

「・・・そうね。そうするわ」

ええつと。

やっぱり変な事、言ったのかな？

「俺、変な事、言いました？」

「う、ううん。なんでもないわ。頑張ってくる」

「はい。頑張ってきて下さい」

複雑な表情をしながら去っていくミナトさん。

・・・何かおかしいな。

後できちんと訊いてみよう。心配事なら相談に乗れるかもしれないし。

・・・うん。とりあえず、これからの事を考えてみよう。

ミナトさんには後で訊くとして。

「そもそも火星に降りたんだろうか？」

確かヒナギクみたいな名前の大きな飛行機がなかったか？

あれはシャトル代わりに使えるのだろうか？

実はイマイチ大きさが分からないんだよな。

でも、あれを利用すれば多少性能が落ちる程度の高度で保っていられそうだし。

「・・・俺だったらどうするか」

とりあえず、ナデシコを降下させないという前提で考えよう。

以前、相転移エンジンについて説明したし、誰か止めるだろ。

テンカワさんやルリ嬢も止めると思うし。

1、ヒナギクで飛び回り、生き残りを探す。

その後、全てを回れるコースを考え、ナデシコでさっさと回収して逃げる。

2、火星にいる木連の兵器全てを破壊する。

その後、悠々自適に人命を救出して、研究データを回収する。

3、一直線にユートピアコロニーに向かう。その後、最速で救出して、即行で帰る。

ふむ。俺的には1かな。

2はちよっと無理がある。

流星のナデシコとテンカワさん達優秀なパイロットでも、火星にいる全ての木星蜥蜴を倒すのは不可能だ。

下手すると停止状態の機体も起動させてしまいかもしれないし。全方位に囲まれた一瞬で撃沈されちまうだろうしな。

3は・・・理由がないな。いきなりユートピアコロニーだなんて誰も納得しないだろうし。

やはり1か？

手間が掛かるが、ほぼ宇宙空間と言える高度にナデシコを保ちつつ、ヒナギクを降下させる。

ヒナギクで様々なコロニー、研究所を回って、各々を調査する。

こうすれば、データも生き残りも見つかる筈。

但し、難点としてはヒナギクに対する負担が大きい事かな。危険も大きいだろうし。

あまり俺としてはお勧めしたくないけど、

ミナトさんがヒナギクを操縦してくれると成功の可能性が高いと思うんだ。

あれ？ でも、ヒナギクってIFS対応だったっけ？ それだと困る。

でも、まあ、ウリバタケさんとかがすぐに操縦桿を備え付けてくれるだろう。

原作との違いはナデシコ自体が地上に降下しない事。

ユートピアコロニーにアキト青年が単機で向かわない事。

恐らくだけど、木星蜥蜴はナデシコに向かってくる習性があるんだと思う。

原作を見る限りはだけど。絶対っていう保証はもちろんないよ。うん。

多分、あれだ。相轉移エンジン。もしくは高出力のエネルギー反応。まあ、どちらにしろ、ナデシコがユートピアコロニーに向かえば原作と同じになる事は間違いない。

いちいち大型のナデシコで回るよりヒナギクの方が小回りも利くだ

ろっしな。

俺だったらヒナギク降下作戦で行く。

艦長はどうするつもりだろうか？

テンカワさんはどうするつもりだろうか？

・・・気になる。

独房にいる自分が恨めしい。

皆のおかげで心は楽になったが、ナデシコがどうなったか心配で胸が痛くなる。

はぁ・・・。今更ながら後悔が。

何にも出来ないってのがこんなに不安で辛い事だとは思ってなかったよ。

・・・ボソンジャンプで逃げる？ 無理無理。バレた時の事を考えると到底無理です。

・・・檻を壊す？ それも後々を考えるとまずい。今は大人しくしてるのがベストだ。

はぁ・・・。誰か俺に情報を伝えてくれないかなあ・・・。

「マエヤマ」

「・・・え？」

何もする事がなく、ひたすらボーっとしていた。

今が何時か？ あれから、何日経ったのか？

残る頭痛が意識を朦朧とさせ、細かい日時を把握できてなかった。大体という予想すら付けられない。

そんな時、仏頂面の大男、ゴートさんがやってきた。

何て嬉しい来客だ！

ゴートさんの姿を視界に入れた時、頭の靄が晴れた気がした。何としても、今の状況を知っておきたい。

「ゴ、ゴートさん！ 今、ナデシコはどうなってますか!？」

「あ、ああ。落ち着け」

思わず檻の鉄の棒に身体を乗り出してしまった。

「あ。すみません」

「いや。お前のナデシコを思う気持ちが伝わってきた」

そう言い微笑むゴートさん。

何だろう？ いつもより優しい気がする。

「一応だが、俺とお前は射撃の師弟だからな。お前の事を知っておきたかった」

「俺の事……ですか？」

「ああ。お前がナデシコにとって危険かどうかを判断したいと思つたが……」

ふふつと笑うゴートさん。

……申し訳ないですが、初めて見た気がします。

そして……その笑みがちよつと怖いです。

「愚問だったな。お前はナデシコの為に身体を張った。

それが結果として裏目に出ってしまったただけだ。誰もお前を責めるつもりはない」

「……あ」

……涙が出てきた。

ゴートさんから優しい言葉がもらえるなんて。
ナデシコの皆が俺を許してくれているんだってグツと心が軽くなっ
た。

慰めから出た嘘かもしれない。それでも、胸の奥にあった重たい何
かが軽くなつた気がする。

「・・・ありがとうございます」

きちんと言えなかったけど、ゴートさんは笑みで返してくれた。
怖かった笑みがとても優しい笑みに見えて・・・。
許してもらえたという安堵で胸が満たされた。

「何があるうともお前はナデシコのクルーの一人だ。早く戻って来
い」

「・・・はい」

ナデシコのクルーでいて良いんだ。
裏切り者の俺を皆はまた迎え入れてくれるんだ。
嬉しさで更に涙が増した。

「まったく。男が泣くな。まあ、俺以外見てないがな」

ただでさえ大きいゴートさんが更に大きく見えた。

ゴートさんもまた立派な大人なんだなって。

口下手で無表情だけど、自分という個を持った男なんだなって。
頼り甲斐のある大人なんだなって。

そう心強く思った。

「マエヤマ。これを渡しておく」

「・・・え？ コミュニケ？ 俺の？」

独房入りの際に没収されていたコミュニケーション。
それをゴートさんに投げ渡される。

「お前に反抗の意思はないからな。大人しくしてるだろ？」

「え、ええ。反省してますから。そもそも暴れる意味もありませんし」

「それなら、お前にもナデシコの情報が伝わるようにしておいた方が良いでしょう。」

「好きに使っていいぞ。もちろん、艦長やミスターの許可は得てある」

「え？ い、いいんですか？」

「暇だろうしな。それに、お前は物事をきちんと考えているし、知識量も多い。」

「意見を訊く事もあるだろうから、逐一情報を把握していて欲しい」「ええっと、はい。分かりました」

「・・・そんなに考えているつもりはないんだけどな。」

でも、期待されてるなら、その思いに応えたいと思う。

「じゃあ、早速ですが、今の状況を教えてくれませんか」

「ああ。もともとそのつもりで来たようなものだからな」

わざわざ申し訳ないです。

でも、ゴートさんが来たって事は今の所、戦闘はないって事だよな。更に言えば、ミナトさんもない。

「現在、ナデシコは火星に降下し」

「こ、降下しちゃったんですか!？」

・・・嘘だろ？

ナデシコを火星に降下させた？

何て事を！

「な、何故、降下させたんですか！？」

「火星の民を救出するのならナデシコで迎えに行くべき。

という意見が挙がってな。艦長が降下を指示した」

「そ、そんな・・・。誰も止めなかったんですか！？」

「ああ。一応、大丈夫なのか？ という意見は出たが、艦長が大丈夫だと判断してな」

「て、テンカワさんは！ テンカワさんは止めなかったんですか！？」

「火星降下の際にテンカワは用があつたらしく席を外していた。ホシノ、ラズリの両名もだ」

テンカワさんは何をしていたんだ！？

火星に降下する事が危険だと俺よりも知っている筈なのに！

「止められないんですか？」

「一度、降下の体勢になつてしまつたら不可能だ。

テンカワも慌てていたが、ナデシコは危険なのか？」

「火星の大气では十分な出力は得られません。

それに、木星蜥蜴がナデシコに反応したらナデシコは沈んでしま
います」

「・・・現状では木星蜥蜴を打倒できないという事か？」

「正確には分かりませんが、あえて危険な方法を取る必要は
なかったと思います。

少しでも危険の可能性があれば避けるべきです」

「む。耳が痛いな。俺にも止めなかった責任がある」

「艦長はどんな指示を？」

「テンカワの提案でな。現在、ナデシコは谷の間で身を隠している状況だ。」

ナデシコ自体はその場にて待機し、ヒナギクでコロニーを回る事になった」

・・・ナデシコで移動しないのが唯一の救いか。

ナデシコで移動すれば、囲まれるのがオチだからな。

「相転移エンジンはどうなってますか？」

「反応を消す為に落としている。現在は地上に着陸している状態だな」

相転移エンジンは落とされているか。

すぐに移動できないという欠点もあるけど、反応を消すには仕方ないな。

「ヒナギクには誰が？」

「テンカワ、ヤマダの両名はナデシコで待機。」

残りのパイロットとミスター、整備班少数がヒナギク担当だ。パイロットは護衛としてだな」

「エステバリスで囲んでいるんですか？」

「ヒナギクに搭載しているだけだ。出来る限りバッテリーの消費を防がねばならんからな」

外付けのバッテリーを搭載してもエステバリスの稼働時間は短い。

時間的観点からも戦略的観点からも妥当だな。

エステバリスの反応を敵が把握している可能性も高いし。

出来る限り、敵にこちらの事を知らせたくない。

「ナデシコは火星から脱出できるんですか？」

「空域さえ確保できればな。木星蜥蜴に襲われれば……俺は何故気付かなかった？」

「……襲われたら脱出は不可能ではないか」

「……思わず頭を抱えてしまった。」

明らかに降下はミスじゃないか。

木星蜥蜴が占拠しているって分かっているんだから、火星からの脱出まで考えないと。

いくら火星の重力が地球より軽いからって油断しちゃ駄目だろ。

「……すまない。今更、ミスに気付いた」

ゴートさんとして少し考えれば分かった筈。

いや。マジで。頼みますよ。ゴートさん。

「いえ。艦長の指示ですし。仕方ありませんとは言えませんが、それは後です。」

そんな事より、どうするべきかを考えましょう」

「……ああ。そうだな。ブリッジのクルーにも意見を訊きたい。」

俺はブリッジに戻るから、コミュニケで話に参加してくれ」

「分かりました」

「……想定外だ。」

ナデシコが火星に降下するだなんて。

クソッ！ ユリカ嬢にも相転移エンジンの説明をしておくべきだった。

ユリカ嬢程に優秀な頭脳があれば、危険だって分かった筈。

補佐に回ると決めただから、きちんと説明しておかなければならなかったんだ。

艦長なら把握している筈だなんて、原作の事を知りながら甘く考え

ていた。

・・・いや。そんな事を考えている暇はない。

さっき自分がゴートさんに言った通り、これからの事を考えるべきだ。

誰を責めたって現状は変わらない。

『マエヤマさん』

「プロスさんですか？ あの・・・」

突然映ったのがゴートさんではなくユリ力嬢で困惑してしまった。謝るべきなんだろうけど、言葉が出てこない。

『どうかしました？』

「あ、いえ、何でもありません」

『ええっと、ゴートさんから聞きました。何でもお話があるとか』

「ええ。ブリッジの皆さんに意見を聞かせて欲しいのですが」

『分かりました。それでは、モニターにマエヤマさんを映しますね』

「あ。はい。御願います」

プツンと画面が消えて、すぐに違う映像が映し出された。

これは・・・ブリッジの全体図だな。

『コウキ君。大丈夫なの？』

「ええ。大丈夫です。・・・皆さん。ご迷惑をおかけしました」

頭を下げる。

ブリッジクルーの皆には本当に迷惑をかけた。

『大丈夫ですよ。マエヤマさんを責める人なんていません』

『私の指示が厳し過ぎて無理をさせてしまいました。こちらこそごめんなさい』

『誰もてめえを責めたりなんかしねえよ』

『若い者の過ちを背負うのが年寄りの仕事。気にする必要はないんじゃないぞ』

『……コウキさんは悪くありません。頑張ってくださいました』

『……マエヤマさん。貴方は何も悪くありません』

『……コウキは悪くない』

『マエヤマ。君は悪くないよ』

『先程も言ったが、心配する必要はない。お前に責任はないからな』

……ブリッジクルーの誰もが俺を許してくれた。

俺なんかを。裏切り者の俺なんかを。

「ありがとうございます。皆さん」

『……』

泣いてる情けない俺を皆は優しい笑みで迎えてくれた。

仲間を撃った裏切り者の俺を皆は仲間だと認めてくれた。

それが嬉しくて堪らない。涙が出る程に歓喜で胸が溢れる。

だからこそ、絶対に彼らが無事に火星から脱出させなければと心に強く誓う。

俺に出来る事なんて現状では皆無かもしれない。

でも、それでも、俺の考えが少しでも役に立つのなら、俺は伝えたい。

俺なんかを笑顔で迎えてくれる大切なナデシコクルーを護る為に。

「ナデシコが火星に降下している以上、

俺達は火星からの脱出方法を考えなければならぬと思うんです」

木星蜥蜴が占拠している火星。
襲われない事の方がおかしい。

『大丈夫ですよ。ナデシコなら襲われても返り討ちですから』

ユリカ嬢。冷静に状況を見極めてください。

「確かにナデシコなら返り討ちに出来るかもしれませんが。
ですが、もし万が一があった時の事を考えるのも生き残る為には
必要です」

『確かに。マエヤマの言う事も間違っていないよ。ユリカ。
僕達是最悪の事態を想定しなければならぬんだから』

ジユン君。ナイスフォロー。それでこそ副長だ。

「火星が木星蜥蜴に占拠されている以上、敵戦力は予想できません。
人海戦術で来られたら流石のナデシコも厳しいと思います。クル
ーの精神的にも」

『・・・そうですね。気付かせてくれてありがとうございます。マ
エヤマさん』

「いえ。俺が臆病なだけです。心配性なんです」

ナデシコが無事に脱出する事は無理かもしれない。

チューリップに飛び込むという案も今提示する事はおかしい。
今、俺に出来る事は何かあっても冷静に対処できるような心に余裕を
持たせる事だけなんだ。

「現状で、火星から脱出する方法はどんな案がありますか？」

『単純に地球と同じようにナデシコ単体で』

「加速する前に叩かれたら厳しいですよ。少なくとも脱出する為の

空域を確保しなければ」

戦艦は最大速度は凄まじいが、加速に時間がかかる。だからこそ、エステバリスのような小回りが利く機体が必要になるのだ。

その加速の隙を突かれたら厳しいものがある。

「どちらにしろ、安全空域の確保は必須です。

ヒナギクとの合流地点にもなりますし、危険性を低める為にも」

『はい。私も賛成です。ですが、どのように確保しましょうか？』

「俺の稚拙な案で良いですか？」

『稚拙だなんて。御願います。参考にさせてください』

空域の確保だなんて素人の俺には難しい。

でも、俺の意見は参考程度だ。後は専門職である士官組が答えを出してくれる筈。

遺跡の知識は所詮知識であって応用は利かない。ここは天才艦長の頭脳に任せよう。

「まずは安全空域となる、いえ、安全空域とする場所を決めましょう。」

どこに敵が潜んでいるか分からない以上、自分達の力で確保すべきです」

どこが危険なのか分からないんだ。

それなら、運に任せないで自分達で確保した方が良い。

「ナデシコの高出力のエネルギーでは敵方が反応してしまう可能性があります。ありますので、

エステバリスで先行して地道に敵を片付けるのが良いと思います」

エステバリスで反応しないとは限らないが、ナデシコで移動するよりは可能性が低いと思う。

「その後、エステバリスで警戒作業に入ってもらいます。リーダーで敵反応を常に調べておいた方が対処しやすいと思うので」

稼働状態でなければ反応が出ないかもしれないが、警戒してれば反応は出る。

安全なのか、危険なのかもすぐに知らせられる筈だ。

「エステバリスなら小回りも利きます。囲まれる前に脱出する事も不可能ではないでしょう」

ナデシコは囲まれたら終わりだ。

だが、エステバリスなら大丈夫だと思う。

テンカワさんもガイも頼れる腕前だ。

「この程度ですが、どうでしょう?」

一応、形としては成り立つと思う。

参考までに、という事だから、これで満足してくれると助かる。

『助かりました。後はこちらで考案してみます』

「はい。俺はあまり詳しくないので、後は艦長にお任せします」

任せました。ユリカ嬢。

「俺からは以上です。後は任せました」

『はい。任されました』

プツンっと通信を切る。

「ふう……」

これで少なくとも万が一があるとは意識してもらえた筈だ。予想外の事態に直面した時、冷静でいられるかどうかは大切だからな。

後は皆に任せるしかない。

御願います。皆さん。

S I D E M I N A T O

艦長、副長、提督、ゴートさん。

四人が地図を見ながら頭を悩ませていた。

私達には詳しい事なんて何も分からないもの。

後は艦長達に任せるしかないわね。

それにしても、コウキ君。泣いてたわね。

でも、あれは喜びの涙。やっと本当のコウキ君の笑顔が見れたわ。

正直、ホツとした。

ナデシコクルーがコウキ君を責める訳がないって分かってたけど、それでも心配だったもの。

「……ふう」

安堵したら溜息が零れちゃった。

何だかんだ言って、私も気を張ってたんでしょね。

何だか、解放された気分だわ。胸が軽い。あ、心って意味よ。早くコウキ君と楽しく話したいなあ。

もう大丈夫だつて思ったなら、ウキウキしてきちゃった。

コウキ君の傍に行きた。

「・・・ミナトさん。少し良いですか？」

「・・・アキト君。ルリちゃん。ラピスちゃん」

・・・カッとなった。

込み上げてくる怒りを必死に抑えて三人を見る。

さっきまでのウキウキ気分はとっくに消え失せた。

・・・私の大切な人を殺そうとした三人。

コウキ君は御人好しだから、きつと簡単に許すと思う。

でも、私は当分許せそうにない。

「・・・何か用かしら？」

邪険に扱ってしまうのは仕方がないと思う。

彼らにどんな事情があるかどうかは分からないけど、私も理性だけで生きてる訳じゃないの。

我慢できない事はいくらでもある。

「・・・お話があります。貴方とマエヤマと二人に」

「事情を話してどうするの？ 納得してもらって殺すの？」

「違います！ 私は・・・」

「・・・ルリちゃん？」

叫ぶルリちゃん。

とてもじゃないが、あの時の冷酷な眼をしたルリちゃんには見えなかった。

「・・・私は・・・愚かな事をしました。・・・何度謝ろうとも許されない程に愚かな事を」

「・・・」

「・・・私はミナトさんとマエヤマさんに謝りたいんです」

・・・ルリちゃんが泣いている。

大人びたルリちゃんが子供のように顔を歪めて、溢れる涙を拭おうともしないで。

・・・必死に頭を下げていた。

「・・・ごめんなさい・・・」

消え去るような弱々しい声。

心から謝っている事が嫌でも伝わってきた。
でも、それでも・・・。

「・・・私は貴方達が描く台本通りに動く人形じゃないわ。

もちろん、コウキ君だって貴方達が都合良く利用できるような存在じゃない」

「・・・分かっています」

「分かっている。邪魔だから、危険だから。

そんな理由で簡単に人を殺せる貴方達が分かっている筈がない」

「・・・ごめんなさい・・・」

「・・・席を替えましょう」

涙を流すルリちゃんとその後ろに立つ二人。

ブリッジでこんな事を話すのは間違っていたわ。

メグミちゃんもセレスちゃんもこちらを心配そつに眺めているもの。
・・・心配かけちゃ悪いから。

「・・・艦長。少し席を離れてもいい？」

「ええつと、はい、少しぐらいなら」

「ありがとう。・・・私の部屋でいい？」

「・・・すいませんが、マエヤマの所にしてもらえますか？」

・・・何か企んでいるのかとも思ったけど、話があるとも言っていた。
た。

本当なら許したくない。

コウキ君がやつと元気になってくれたのにまた銃なんか突きつけられたら悲しむに決まってる。

「・・・いいわ」

でも、必死に謝ってくるルリちゃんを信じたいと思った。

・・・私も何だかんだ言ってお人好しよね。

「・・・行くわよ」

S I D E O U T

「・・・ボソソジャンプか。クロツカスとイネス先生がいればスムーズに話を持っていけるかな？」

火星からの脱出が不可能であるならば、やはりボソソジャンプによる脱出しかない。

その為に欠かせないのはクロツカスの存在とイネス先生の存在だ。クロツカスがあるからこそ、ボソソジャンプが瞬間移動かもしれないと疑惑を持てる。

イネス先生の存在と理論があるからこそ、ボソソジャンプに希望を見出す事が出来る。

俺がいくら証拠を並び立てて説得しても、皆納得してくれないと思う。

そんな危険な真似は出来ないって。もつと安全な方法がある筈だつて。

それでも、やっぱりボソソジャンプが唯一の脱出方法なんだよなあ。

・・・どうするか？

「コウキ君」

「あ。ミナトさん」

現れたのはミナトさん。

俺の元気の源。

今回の件で益々好きになった気がする。

・・・俺も結構単純だな。

「良いんですか？ ブリッジ空けて。俺は嬉しいですけど」

「ええつとさ。そう言ってくれるのは嬉しいんだけど、真面目な話
がしたいの」

真面目な話？

「な、何でしょうか？」

そのあまりにも真剣な表情に言葉が震える。

「・・・俺は何か仕出かしてしまったのだろうか？」

それとも・・・愛想尽かれた？」

「・・・そうだったら死にたい。」

「・・・アキト君、ルリちゃん、ラピスちゃん。いいわよ」

「え？ テンカワさん達？」

「・・・はつきり言って事態がまったく呑み込めません。

何故、テンカワ一味が？」

「・・・マエヤマ。お前と話がしたくてな」

「ええつと。はい」

俺に話？

え？ もしかして、テンカワさんは許してくれてないって事？

「・・・胸が痛くなってきた。」

「・・・ルリちゃん」

「・・・はい」

テンカワさんに促されて前に出るルリ嬢。

え？ 俺に用があるのってルリ嬢？

テンカワさんじゃないの？

「・・・ごめんなさい・・・」

顔全体を涙で濡らしながら必死に謝ってくるルリ嬢。

何故、謝られているのか？ まず、それが分からない。

そして、俺のせい？でこんなにも涙を流させているという罪悪感が

胸を襲う。

正直、小さい子に泣かれるのは物凄く辛い。
と、とりあえず、意味を知りたい。

「どうして謝るの？ 俺って何かされたっけ？」

「……え？ 知らないん……ですか？」

「いや。身に覚えがないんだけど」

実際、俺にはまったく意味が分からない。

謝らなければならぬ自覚はあるが、謝られる自覚はない。

頼むから、泣き止んで欲しい。

胸がズキズキ痛むから。

「……ミナトさん。話してないんですか？」

「……コウキ君に話したら傷付くと思ったから、話してないわ」

え？ 俺ってば傷付くの？

……今でも充分、胸が痛いんですけど。

「……私が自分で話します」

「ええっと、とりあえず、涙を拭いて。ルリちゃん。泣き顔で話されても困っちゃうからさ」

「……はい。すみません」

制服のポケットからハンカチを取り出し、涙を拭くルリ嬢。

まったく場違いだけど、きちんとハンカチを制服のポケットにしまっているルリ嬢に感心した。

「……お話します」

「……うん」

真剣で、それでいて、怖がるように話すルリ嬢。

本当に、一体、何があったんだろう？

俺は何をしてしまったのだろう？

「……許して頂けるとは思っていません。私はそれだけの罪を犯しました」

「……」

「……マエヤマさん。私は貴方の命を奪おうとしたんです」

「……え？」

俺の命を奪う？

それって……。

「……はい。貴方を私は殺そうとした。そういう事です」

え？ 何で？

何で俺がルリ嬢に殺されるの？

……俺がテンカワさんを誤射したから？

「……な、何で？」

……答えを聞くのが怖い。

ルリ嬢の大切な人を奪おうとしてしまったのは事実。

それを理由に殺されるというのなら、俺は反論する事も許されずに殺されるべきなのだ。

大切な人を失うというのは何よりも辛い筈だから。

「……私達の計画に邪魔だから。そんな理由で私は仲間を殺そうとしたんです」

・・・計画。

きつとテンカワさん達が目標としている事の達成だと思う。

俺は・・・邪魔をしていたのか。

思ってたのと違う理由だったけど、下手するともっとショックだな。俺は空回りしていたんだから。必死にやって邪魔になってたなんて馬鹿みたいだ。

「・・・邪魔だったかな？ 俺」

きちんと真実を伝えて手伝った訳じゃない。

でも、影ながら助けようと必死になっていたつもりはある。

でも、ルリ嬢達にとっては、邪魔でしかなかったんだな。

「・・・ごめん。邪魔するつもりはなかったんだ。少しでも助けられたらって」

「・・・え？」

・・・やはり、俺みたいな存在しない筈の人間はいるべきじゃなかったんだ。

介入者なんて、いるべきじゃなかった。

当事者に・・・任せるべきだったんだ。

「・・・ごめんね。ルリちゃん。・・・うん。分かったよ。すいません。ミナトさん」

「・・・え？」

「俺、地球に帰ったらナデシコを降ります。俺はここにいるべきではありませんでした」

余計な事だったんだ。

俺がしてきた事は全部余計な事。
俺はテンカワさん達の計画を阻害する邪魔な存在だったんだ。

「コウキ君！ そんな事」

「いえ。いいんです。結果として俺は邪魔をしていたんですから。」

俺はここにいても邪魔になるだ

「ちよつと待つてください！」

「え？」

ルリちゃん？

「少しでも助けられたらってどういう意味ですか？」

マエヤマさんは私達を助けようとしていてくれたんですか？」

驚いているルリ嬢。

テンカワさんもラピス嬢も眼を見開いている。

「・・・そうだな。ここまで来たのなら、俺もきちんと話しておこう。
ナデシコから退艦する前に、俺がどういう存在なのかを。きちんと。」

「テンカワさん。確認してもいいですか？」

「あ、ああ。何だ？」

「貴方は、いえ、貴方達三人はボソソジャンプの事故で過去へ戻ってきた。」

それは間違いないですか」

「な、何故それを・・・」

「・・・やはり、マエヤマさんもボソソジャンプで還って来たのですか？」

「・・・正しくは、ちよつと違うかな」

ボソソジャンプでこの世界に来た事は事実だ。

でも、過去に戻ってきた訳ではない。

「テンカワさん達は平行世界をご存知ですか？」

「平行世界？」

「・・・何かの要因で時間軸がズレた世界の事ですよね？」

「うん。そう。その平行世界。俺はその平行世界からボソソジャンプでこの世界にやってきた」

二十一世紀初期の日本から。

「俺は三人の事を知っています。俺の世界はこの世界を観測できる世界でしたから」

「・・・観測？」

「テンカワ・アキト。ナデシコでの本来の役職はコック兼予備パイロット。得意料理は中華」

「なッ!？」

「ホシノ・ルリ。ナデシコでの本来の役職は現在と同じオペレーター。出身はピースランド」

「そ、そんな事まで・・・」

「ラピス・ラズリ。そもそもナデシコに乗っていない俺と同じイレギュラー。」

テンカワ・アキトを支えた桃色の妖精」

「ッ!？」

「俺は殆どの事を知っています。」

ナデシコ、木連、熱血クーデター、戦争の終結。

その後起きたテンカワ夫妻のシャトル墜落事故、そして、火星の後継者の事も」

悲劇の原因も。その結末も。

「最初、俺も疑問に思いました。テンカワさんはコックじゃないし、ルリちゃんは既にナデシコクルーに心を開いているし、ラピスちゃんもテンカワさんを慕ってるしで。そのあまりにも違い過ぎる状況に」

原作とあまりにも違う現実に正直戸惑った。

「ですが、ルリちゃんの話聞いて、ようやく分かったんです。三人はボソソジャンプで精神、きつと記憶を持って戻ってきたのだと」

あまりにも原作とかけ離れた人格、能力。あたかも先を知っているかのような行動。あまりにも違和感があり過ぎた。

「それから、俺は考えました。テンカワさん達はどんな行動を取るのだろうか。きつと犠牲になったガイや火星の民を救う為に動くのではないかと」

誰だってやり直したい過去はある。そんな機会に恵まれたのだ。誰だって必死に取り組む。

「俺だって知っている悲劇なら避けたい。それなら、俺も協力しようと思ったんです。影ながらですけどね」「何故、俺達にそれを教えてくれなかったんだ？」「正直な話、俺は三人を完全に信用していた訳ではありませんでした。本当に信頼できる人にしか教えるつもりはなかったですからね。」

実際、知っているのはミナトさんぐらいですし」

誰よりも信じているのはミナトさん。

そして、ミナトさんは全てを知った上で俺を支えてくれている。

「俺達は信じるに値しなかったか？」

「それって本気で言ってます？」

「……どういう意味だ？」

「出航からずっと敵意を示してましたから、俺に。避けられているんだと自覚してました」

「そ、それは……」

「いえ。別にそれは気にしてないんです。

当たり前ですから。存在する筈のない存在がいれば警戒するのは」

「……」

「でも、俺とテンカワさん達の間には溝があつた事は事実です。

俺にとって徹底的に隠さなければならぬ秘密を話すにはあまりにも距離が遠過ぎました」

ミナトさん以外に教えようとも思わなかつた俺の秘密。

敵意を持つ相手に教えられる筈がない。

「事実を話す訳にはいかない。それなら、影から支えればいいと。そう思いました」

話せなくても、出来る事はある。

そうやって、俺は活動してきた。

「レールカノンも後々に木星蜥蜴、いえ、木連ですね。

彼らに有効であるから、鍛えておこうと思いましたし」

テンカワさん達の事を知ってからでもない。
その前から、俺なりに活動してきたつもりだ。

「ナデシコに乗ると決めてから、助けられる人は助けたいと思って
ました。」

擬似マスターキーとかも作ったんですよ？ 無駄になりましたが」

ナデシコが動けない時困ると思って作った擬似マスターキー。
今では机の奥底で眠ってる。

「火星に降りる危険性を訴える為にも相転移エンジンの話をしまし
た。」

結局、無駄になってしまいましたか……」

……何だか、俺のしてきた事って無駄な事ばかりだな。
邪魔扱いされても不思議じゃないか……。

「……マシンチャイルドの匿名メールもお前か？」

「え？ 何でテンカワさんが知ってるんですか？」

「……やはりマエヤマだったか……」

「ええ。まあ。ラピスちゃん境遇は何となく知ってましたから、
似たような子がいるかもしれないと思って調べたんです」

火星の後継者に攫われる前から試験管のようなカプセルの中にいた
ラピス嬢。

きつと酷い扱いを受けていたに違いないと思って調べてみたんだ。
そしたら、案の定……。

「酷いものでした。人を人と思わない人体実験。泣き叫ぶ小さな子
供はトラウマになりましたよ。」

人は醜いつて。心底思いました」

「・・・コウキ君。私はそんな事知らされてないわよ」

「ミナトさんに見せるようなものじゃありませんでしたから。」

「ミナトさんは優しい人です。きつと心を痛めていたと思います」

「それはコウキ君も同じでしょ！ 何で教えてくれなかったの！？ 私にだつて出来る事はあつたと思うわ！」

「ミナトさんには抱き締めて頂きました。あの時、俺は救われたんですよ。ミナトさんに」

「・・・あの時の事ね。・・・コウキ君はその時から人の闇に触れてた。」

私、何にも知らないで、何にも出来なかった」

「ミナトさんは俺を癒してくれました。何にも出来なかったなんて言わないでください。」

「ミナトさんがいなかったら俺はここにはいませんでしたよ」

きつと潰れてたと思う。

人の醜さを知り、人の闇に触れ。

人間不信にならなかつたのもミナトさんのおかげだ。

「・・・知っているか？ ラピスもセレスもお前のおかげで助かつたんだぞ」

「はい。知ってますよ。セレスちゃんとラピスちゃんが助かった事で、

ルリちゃんにお姉ちゃんとしての自覚が出来たら嬉しいなあとか一人で思っていました」

「ッ！？」

「自己満足でしたが、救えて良かったと思います。」

「セレスちゃんが笑ってくれた時には思わず涙が出ましたよ」

「・・・そう。それでコウキ君はセレスちゃんやラピスちゃんと話す時に穏やかな顔をしていたのね」

「・・・コウキ。ありがとう。コウキのおかげで私は酷い眼に遭わずに済んだ」

「うっん。俺が自己満足でやったただだよ。」

それにね。君達を酷い眼に遭わせていたのは俺と同じ大人。

同じ大人として俺は謝りたいぐらいなんだ」

「・・・それでも、コウキのおかげで助かった」

「そっか。そう言ってくれれば俺がこの世界に来た事に意味があったって思えるね」

俺がこの世界に来た意味。

何の意味もないかと思っただけ、少なくとも彼女達を救えた事は俺の存在価値になる。」

「・・・わ・・・私はなんて事を・・・」

「ルリちゃん？」

「・・・私は・・・私達の為に必死になってくれていたマエヤマさんを殺そうとした・・・」

せつかく拭いた涙がまた零れる。

倒れるように地面に座り込み、涙で床を濡らした。

「・・・私達の為を思って行動してくれたマエヤマさんを裏切り。」

「・・・こんな私の事すら案じてくれたマエヤマさんを敵視した」

「仕方ないと思うよ。イレギュラーだったんでしょ？俺の存在が」

「それでも！私は許されない事をしました。」

私達を助けようとしてくれていたマエヤマさんをあまつさえ邪魔な存在だなんて。

なんて恥知らず。なんて恩知らず。私は・・・」

「・・・ルリちゃん。俺も同罪だ。君一人で背負う必要は」

「違うんです！」

ルリ嬢の叫び声が独房内に木霊した。

「私は・・・私は、碌に話を聞こうともせず、

一方的に邪魔にしかならないと決め付け、殺そうとしたんです。

味方を敵として！」

「・・・」

「何が大切なナデシコクルーですか！？ 何が犠牲になった人を救いたいですか！？」

私は私の勝手なエゴで人を陥れ、殺そうとする最悪な人間なんです！」

「・・・ルリちゃん」

「自分の都合を人に押し付け、自分が正しいと思い込み、恩人に恩ではなく仇を返したんです！

私と同じマシンチャイルドを救ってくれた大恩人を。最悪な形で・

・・・」

「・・・」

「ミナトさんがどれだけマエヤマさんを愛しているか知っていて、セレスがどれだけマエヤマさんを慕っているか知っていて、私は・

・・・私」

泣き崩れるルリ嬢。

彼女が何を思い、何を考えて俺を殺そうとしたのかは分からない。

感情の吐露。今のは抑えきれない想いが溢れて出た言葉だと思う。

「ルリちゃん。そんなに自分を追い詰めなくていいんだよ。俺はき

つと邪魔ばかり」

「違います！ マエヤマさんが邪魔をした事なんて一度もありません。

いつだってナデシコの為に動いてくれました。私達を助けてくれ

ました」

「・・・え？ でも、さつき・・・」

「私はナデシコの為に頑張っている貴方を危険だと。

自分の知らない所で勝手に動いていて、計画が思い通りにいかな
い要因になると」

「・・・・・・」

「全て思い通りに運べないと満足できなかったんです。

人の意思を無視して。人の思いを無視して。自分本位な考え方で
貴方は邪魔だと」

思い通りにいかない要因。

全ての人の意思を操ろうとする自分勝手な考え。
まるで出航前の俺みたいなお考え方だなお思った。

「決められた未来を変える為に私は人に決められた道を強要したん
です。

自分勝手に傲慢で・・・私は自分が嫌になります」

・・・鉄の棒が恨めしい。

檻なんか閉じ込められていなければ、気にしなくていいと伝えら
れる。

言葉という全てを伝えきれない方法ではなく、全身で伝えたかった。
でも、今の俺には言葉しかなくて・・・。

「ルリちゃん。顔をあげて」

「・・・はい」

涙を拭こうともせず、くちやくちやの顔でこちらを見てくるルリ嬢。
・・・とてもじゃないけど、怒る気になんかなれなかった。

「ルリちゃん。確かに君に殺されかけたと聞いて少し胸が痛かった」
「・・・ごめん・・・なさい」

「でも、俺は君の思いが伝わってきたとも思った」

「・・・え？」

「どんな事をしてでも未来を変えたい。」

その思いの強さ、覚悟の強さがルリちゃんにそんな行動を取らせ
たんだと思うよ」

「ち、違います！ 私は勝手なエゴで」

「人間だもの。エゴを人にぶつけるのは当然だよ。誰だってエゴを
持つて生きてるんだから」

人を好きになるという事。人を愛するという事。

自分が人を想う気持ちは利己的なものだ。愛されたいから尽くす。
愛したいから尽くす。

全て自分本位。でも、それこそが人間の真理だと想う。

「俺を殺そうとしてまで成し遂げたかった。その気持ちは痛い程に
伝わってきた」

「・・・マエヤマさん。私は・・・」

「謝ってくれたでしょ？ もうルリちゃんは俺を殺そうとしないで
しょっ？」

「・・・は、はい・・・はい」

「なら、もう気にしなくていいよ。ま、俺としてはもうちょっと冷
静になって欲しいけどね」

そうやって笑ってみせる。

俺が気にしてないんだから、君も気にしなくていいよと伝える為に。
・・・殺されかけたのに甘いのかな？ 俺。

「・・・マエヤマ。お前はそれでいいのか？ そんな簡単に許して

いいのか？」

「俺は当事者ではないので分かりません。

でも、テンカワさんがどれだけの苦悩を背負って今を生きてるか、ルリちゃんとラピスちゃんがテンカワさんをどれだけ想っているか」

復讐を支えた桃色の妖精。

去り行く復讐鬼をただの大切な人として追い求め続けた蒼銀の妖精。その想いは俺なんかには計り知れない程に、深く、重い。

「それを少しは理解しているつもりです。

その想いが故の暴走であれば、許せる、という訳ではないですが、理解してあげられます」

「・・・マエヤマ。お前はお人好しだな。馬鹿な程に」

「ハハハ。よく言われますよ。それに、ですね」

「それに？」

「可愛い女の子を泣かせてたらこっちが悪いみたいじゃないですか。俺は楽しくて平穏な生活が好きなんですよ。

泣かれるのはこちらにも心が痛みますし。笑ってて欲しいですね」

「・・・」

「コウキ君。シリアスが台無し」

あれ？ 皆さん呆れていらっしやる？

「ほら。ルリちゃん。泣き止んで。

俺が気にしてないって言ってるんだから、君がいつまでも気にしてたら俺も気が重いじゃない」

「・・・マエヤマさんはそれで良いんですか？ 私は貴方を」

「良いつて言ってるじゃん。いつまでもそんな事言っていると本当に怒るよ」

「・・・はい。すみませんでした」

そう言つて泣きながら笑うルリ嬢を見て、やっと心が楽になった。女の子に泣かれるとありえない程に胸が痛くなる。きっとそれは皆同じだよな。

うん。何はともわれ、和解できたと思うと嬉しいかな。

第十六話（後書き）

テンカワー味との和解でした。
楽しみにして頂いていた話し合いは次回となりそうです。

第十七話（前書き）

いつもより更新が遅れてしまい申し訳ないです。
ちよっと行き詰ってしまいました・・・。
シリアス続行中です。

第十七話

S I D E M I N A T O

・・・本当に御人好し。

殺されかけたのに、まるで何もなかったかのように・・・。
実際に銃を突きつけられた所を見た訳じゃないから、気にしてないのかもしれないけど。

「コウキ君。私の怒りはどこにぶつければいいのよ」

思わず溜息を吐いてしまう。

コウキ君が殺されると思って湧き出た憤りをどこにぶつければいいんだろう。

ルリちゃんをコウキ君が許しちゃった以上、この三人にも当たれないし。

ここはやっぱりコウキ君にぶつけましょう。

理不尽？ そんな事ないわよ。正当な権利。

「それじゃあ、俺は邪魔はしてないって事だよな？」

「はい。マエヤマさんが何を考えているか分からず、警戒していた内に感情的になってしまった」

「・・・まあ、暴走しちゃったからね。仲間を殺しかねないって思われても仕方ないよ」

「・・・すいません・・・」

「あ。いや。怒ってる訳じゃなくてさ。

そりゃあ、仲間を殺すかもしれないと思ったら警戒したくなるって」

そう気楽に話すコウキ君。
意外と楽家なのかもしれない。
普通、殺されかけた相手に気楽に話してられるかしら？

「はぁ……」

いつまでもこんなじゃ一人だけ子供みたいじゃない。
まったく。変な所で男を見せなくて良いのに。

「コウキ君。貴方ってお気楽ね。私がどんなに心配したか」
「ええっと、すみません」

謝られても困るんですけど。

「あの……ミナトさん！」

「……ルリちゃん？」

「すみませんでした！ 私はミナトさんの想いを踏み躪って、勝手な事ばかり言って……」

「あゝ。いいのよ。ルリちゃん。コウキ君が許してるのに私が怒ってても馬鹿みたいじゃない」

「え、ええっと……それで良いんですか？」

「ええ。でも、一つだけ言っておくわね。私は運命なんて信じないの。私の事は私が決めるわ。」

今、私が愛しているのはコウキ君だけ。分かった？」

「はい。私が間違っていました」

「そう。それなら、別にいいわよ」

「一つだけじゃない気がするんだけど……」

「うるさいわよ。コウキ君」

「は、はい……」

失礼ね。最近の憤りの全てをコウキ君にぶつけるから覚悟してなさい。

「ええつと、今、黒いオーラ出してましたよ。ミナトさん」

「あら？ 何の事かしら。この鬱憤をコウキ君にぶつけようだなんて思っていないわよ」

「言ってる！ 言ってますよ！ ミナトさん。俺にぶつけないでください！」

「嫌よ」

「グオ！ 理不尽だ！」

「理不尽で結構。私を心配させた罰」

「あの・・・お手柔らかに御願います」

「嫌よ」

「マ、マジですか？」

「マジ」

「テ、テンカワさん！ どうかしてください」

「・・・すまないが、俺に出来る事は何もない」

「ル、ルリちゃん！」

「・・・すみません。私には何も」

「ラ、ラピスちゃんは味方だよね」

「・・・コウキ。諦めた方が良い」

「ク、クソオ。四面楚歌。孤立無援。俺に味方はいないのか!？」

嘆くコウキ君。

ふふふ。こんな形だけいつものコウキ君が見れたのは嬉しいわね。さっきまでの重い空気もどこかにいっちゃったし。

「・・・ま、いいか。ミナトさん。お手柔らかに」

「だから、嫌だって。誤魔化そうとたってそうはいかないわ」

「分かってます。ええ。分かってますとも。本当は
「嘘じゃないわよ」

「・・・勘弁してください」

「もっと嫌」

「・・・」

「・・・」

こんなやり取りが面白い。

本当にコウキ君は楽しい子だ。

これでこそコウキ君だと思っ。

「はあ・・・。まあ、その話は後です。いや、永遠に忘れててくだ
さい」

「嫌だけど、話の展開には付き合ってあげるわ」

「・・・ええっつと、テンカワさん」

「何だ？」

私とコウキ君のやり取りを後ろで聞いていたアキト君達。

どこか呆れてたのかしら？ やるせない表情をしているわ。

「どうしてナデシコを火星に降下させてしまったんですか？ 何か
考えでも？」

「・・・いや。気付いたら降下準備に入っった」

「ゴートさんから聞いたんですが、降下の時に用があっったとかでブ
リッジにいなかったそうですね。」

その時、テンカワさん達は何をしていたんです？ もっと優先す
るべき事があっったとか？」

「そ、それはだな・・・」

慌てるアキト君。

あ。そつか。コウキ君はナデシコが降下した後に降下した事を知ったんだものね。

「……私がマエヤマさんを殺そうとした時です。アキトさんとラピスは私に付いてきてくれて」

「……ちよつと待とうか」

呆れ？ 怒り？

今のコウキ君は複雑な顔をしている。

「三人とも！ 俺を殺そうとしてる暇なんてないでしょうが！

そんな事よりもっと大事な事を優先してください」

「……すまない」

「……面目ありません」

「……ごめん」

あのさ。そんな事扱いするのもどうかと思うんだけど。

「まったく。俺なんかに気を取られて計画が失敗したら本末転倒じゃないですか」

俺なんかって。ここは呆れるべきなの？ 怒るべきなの？

「やはりボソンジャンプですか？」

「脱出方法の事か？」

「はい。ナデシコが普通に火星から脱出するのは厳しいと思いますから。」

どう考えても火星に降下してしまった以上、ボソンジャンプしかありません」

「……ああ。そつだな。俺もそれしかないと思う」

ボソソジャンプでの火星脱出。

DFを張れば問題ないって聞いたけど……。

「八ヶ月飛ぶんだっけ？」

「ええ。無茶なジャンプは時空を超える。

八ヶ月を無駄にしてしまうのはもったいないですが、仕方ないかと」

八ヶ月かぁ……。

長いわよね。まあ、無事に脱出できるならいいけどさ。

「マエヤマ。お前はどこまで知ってるんだ？」

アキト君達が真剣な表情でコウキ君を見詰める。

敵意なんて感じられないから、きつと協力体制を築く為にもって事だと思う。

「細々とした事は分かりませんが、大まかな流れは把握しているつもりです」

「大まかな流れ？」

「はい。蜥蜴戦争においてナデシコが辿った道筋。

ルリちゃんがヒサゴプランの事を調べ始めた所から火星での決着まで。

俺が知っているのはそれぐらいですね」

「随分と限定的な知識なんだな」

それは仕方のない事。

だって、コウキ君は物語という形でしか知らないんだもの。

どうするの？ 全部話すの？

「テンカワさん。バレてしまった以上、きちんとした形で協力したいと思います。良いですか？」

「ああ。お前がいてくれると心強い」

クルーの心を引き締め、かつ、余裕を持たせた。

レールカノンで敵の侵攻を食い止め、見事に援護してみせた。

コウキ君はそうやって周りの信頼を得てきたのね。

「それでは、俺の正体を話します。信じられない事ばかりだと思いますが、話を聞いてください」

「・・・了解した」

「・・・分かりました」

「・・・分かった」

それから、コウキ君は三人に語った。

遺跡に出会い、この世界に飛ばされた事。

遺跡によって与えられた四つの異常の事。

この世界が平行世界である事。

そして、私達の世界が物語の世界であった事。

アキト君達三人は最後まで黙って話を聞いていた。

信じられない事ばかりだろう。啞然としたり、驚きで顔を染めたり。

でも、物語であったと知った時、三人は怒りで顔を染めた。

「運命だったとでもいうのか!？」

あんな眼に遭ったのも、俺がそうなる運命だったと言うのか!？」

激昂するアキト君。

私だって信じられなかった。運命が決まってて、私の選択も物語のストーリー通りで。

まるで自分が自分じゃないような。意思を他人任せにしているような。そんな錯覚を感じた。

「ガイが死に、火星の民を押し潰し、多くの人を犠牲にし、火星の民の全てを惨殺された。

それすらも、物語であり、運命であったというのか!？」

「既にこの世界は平行世界で」

「そんな事は関係ない! 俺の全てが運命であったなど! 信じられるか!」

「・・・テンカワさん」

「・・・俺は・・・」

項垂れるアキト君。

コウキ君が語ったアキト君の生涯は不幸な事ばかりだった。

幼い時に両親を殺され、ようやく幸せを掴んだと思った途端に拉致され、復讐する立場となった。

これがあらかじめ決められていた事だなんて信じたくないに決まってる。

やり場のない怒りを抱えるに決まってる。

「・・・マエヤマさんはマシンチャイルドという事ですか?」

「俺は違っつて思ってる。でも、遺跡によって強化体質にされた事は事実かな」

「・・・マエヤマさんのナノマシンも」

「うん。遺跡が勝手に入れた奴。

俺の身体にどんな種類のナノマシンがどれくらい入ってるか分からないんだ」

「・・・怖くないんですか? 自分の身体が」

「・・・怖いよ。怖いに決まってる。異常な身体能力、異常なナノマシン。」

俺は何より自分の身体が怖い」

異常な力を持つが故に背負わされる責任。

暴走するかもしれないという恐怖。

コウキ君が抱える闇も相当に根深く重いものだ。

「こんな能力が欲しいなんて言っていない。俺は普通に生きたかった」

「・・・コウキは能力が欲しくなかったの？」

「初めは良かったよ。楽が出来るって思ったから。でも、次第に苦しくなるんだ。

それだけの能力を持っているのにお前は何もしないのかって誰かが囁くんだ」

強迫観念からの幻聴。

どうにかしなければならないと自分を追い込んでいるからこそその苦しみ。

「お前に与えた能力はその為にある。そうふとした時に聞こえてきて。

俺はどうすればいいのかって悩んで」

「・・・コウキも苦しんだ。その上で私を助けてくれた」

「普通の暮らしを望んだ俺でも出来る事はしたかったんだ。

匿名にすればバレないと思っただし、知っていて無視する事なんて出来なかった」

「・・・ありがとう。コウキ」

あの時、コウキ君が苦しんでいた理由を今更知った。

支えたい。助けたい。そう誓ったあの日、私はもつと踏み込むべきだったのかもしれない。

そうすれば、私もコウキ君の苦しみを共有できたかもしれないのに。

一緒に背負えたかもしれないのに。

「テンカワさん。貴方達が未来を変えたいというのなら、俺も手伝うつもりです。」

でも、その前に確認しなければなりません」

そう言つて真剣な表情になるコウキ君。

その顔は迷いを捨てた確固たる決意を持った顔だった。影から悟らせないように振舞うのではなく、自ら表舞台に立つ決意を。

S I D E O U T

「テンカワさん。貴方達が未来を変えたいというのなら、俺も手伝うつもりです。」

でも、その前に確認しなければなりません」

俺が隠してきた全てを話した。

今まで散々距離を置いてきた俺達だ。

協力体制を取るのなら、隠し事は無しにしたい。

俺の目的、向こうの目的。

その全てをきちんと共有しておきたい。

俺の目的を聞いて呆れられようが、怒鳴れようが、二度と疑われな
い為にも。

「・・・何だ？」

テンカワさん、ルリ嬢、ラピス嬢。

それぞれが真剣な顔付きでこちらを見ている。

その少し離れた所でミナトさんもこちらを見ていた。

「貴方達が目指すものとは何ですか？」

「俺達の目指すもの？」

「はい。ナデシコをどうしたい、火星の為に何かしたいなどそんな事ではありません。

もつと個人的なものです」

大きな夢を叶える。

その夢に隠れる個人だけが持つ大きな希望。

「俺はナデシコに最善の結末を迎えさせ、

その上で、普通の暮らしをする事こそが俺の目指すものです」

「・・・普通の暮らし？」

「ええ。戦争を終わらせたという名誉。多くの戦績を残したという名誉。

英雄？ そんな称号はまったく欲しくありません。俺は平穩な生活だけを望んでいます」

個人的、本当に個人的な目的。

結局の所、俺の目的はここに辿り着く。

「それでは、何故ナデシコに？」

「怒るかもしれませんが、俺はこの世界に来た当初、ナデシコに関わろうとしませんでした。

むしろ、避けようと思っていました」

「ナデシコを避ける？」

「はい。未来を知りつつ、俺は人任せにしようとしていました。俺が望む平穏な生活を得る為に」

「・・・あれだけの悲劇を知りながら、お前は無視しようとしていたのか？」

怒りの表情を浮かべるテンカワさん。

そうだろう。当事者であればそう思うに決まってる。

「ええ。未来を知り、それを改善できるだけの能力があるのに、

俺は介入しようと思っただけでいいんです」

「何故だ！？ 何故、そんな事が出来る！？」

力があり、悲劇を知り、何故、改めようとしなさい！？」

「能力があつたら必ずしなければならぬんですか？」

未来を知っていたら、必ずしなければならぬんですか？」

「何？」

「自分の目的を諦め、自分を犠牲にしてまで、何故他人を助けなければならぬんですか？」

「マエヤマ！ 貴様！」

激昂し、憤怒の表情で迫ってくるテンカワさん。

檻という鉄の棒に阻まれてなければ、掴みかかっていたらどうな

「テンカワさん。貴方は罪の意識で動いていませんか？」

贖罪というくだらない理由で動いているのではないですか？」

「ッ！？ 貴様に何が分かる！？」

「分かりません。俺は実際に経験した事がある訳ではありませんから」

「なら、黙ってる！ 俺は！ 俺は、あんな未来など認められない！
その為ならたとえ何を犠牲にしても」

「それが間違ってるって言ってんだよ！」

気付けば叫んでいた。

そのあまりにも無責任な自己犠牲が一瞬で頭が沸騰するぐらいに怒りを湧かせた。

「……コウキ君？」

いきなりの大声と素の口調で誰もが驚いていた。
対象のテンカワさんでさえ。

「……」

……落ち着け。俺。

感情的になっただって、仕方ない。

「テンカワさん。貴方には、自分の念願を達成した先に何が待っているんでしょね」

「……どういう意味だ？」

「俺には目的があります。蜥蜴戦争を生き抜いて平穏な暮らしをするという。」

でも、貴方は目的自体が歴史の改変。終わった後、貴方は死を選ぶのではないですか？」

「ッ！？」

「ア、アキトさん！？ そ、それは、本当ですか！？」

「……アキト」

「……」

罪の意識。贖罪。

そんな最終目的であれば、何の意味もない。

確かに明確とした目的だ。力を発揮できるだろう。だが、そのあまりにも分かりやすい目的だからこそ達成した時、満足感と共に生きようとする意志を失くしてしまうかもしれない。俺にはそれが心配だった。

「俺は戦争終了後に目的があるからこそ頑張れます。

戦争終了後、テンカワさん、貴方は何をしますか？ どうしたいですか？」

「・・・俺は・・・そんな事・・・考えた事がなかった」

「悲劇を食い止めたい。その思いは立派です。

ですが、俺は何よりも自分の幸せの為に頑張つて欲しい。

テンカワさんは戦争に死を求めているような気がしてなりません」

「・・・」

「目先の事を全力で行う事も大切です。

ですが、テンカワさんはもっと先の事を考える必要があると思います。

生き急いでいると感じるのは俺だけではない筈です」

「・・・そうね。私もそう思うわ。アキト君」

「・・・ミナトさん」

遠くから会話を聞いていたミナトさんが近付いてくる。

「昔、コウキ君にも同じ事を言った覚えがあるわ。

義務感や責任感、貴方は罪の意識ね。

そんなもので己を縛らないで、自分の幸せを求めなさいと」

「・・・ですが、俺は多くの罪を犯しました。そんな俺が幸せになんて」

「馬鹿ね。アキト君。貴方は本当に馬鹿よ」

「・・・え？」

「自分すら幸せに出来ない人間が他人を幸せにする事なんて絶対に

出来ない。

自分の事すら救えない人間が他人を救おうだなんて、思い上がりもいい加減にしなさい」

「・・・・・・・・・・」

ミナトさんの言葉は深く胸に響く。

ミナトさんの言葉が俺の道標となってくれる。

だから、きつとテンカワさんの胸にも響いている筈だ。

「貴方の幸せを見つけなさい。贖罪なんて自己満足でしかないわ。

なら、同じ自己満足でも幸せになる道を探しなさい」

「・・・・・・・・俺の・・・・幸せ？」

「貴方が罪を背負いきれないのなら背負ってくれる伴侶を見つけなさい。」

そして、二人で幸せになりなさい」

テンカワさんが心に抱く自殺願望と重い罪の意識。

その二つを受け入れてくれる心の強い女性がテンカワさんには必要だと思う。

「アキト君とコウキ君の絶対的に違う所。

それは、貴方は死を求め、コウキ君は生を求めているという事」

「・・・・・・・・俺が死を？」

「もし完全に追い詰められた時、

きつとアキト君は今までの成果で満足し、抗う事なく、死を迎え入れると。私はそう思うわ」

「・・・・・・・・・・」

「でも、コウキ君は必死に抗うでしょうね。生きたいから。その後
に目的があるから。」

それが先を見ている人間と見ていない人間の違いよ」

「・・・俺は先を見ていないのか？」

「第一の目的なんか利己的であればある程いいわ。その方が必死になれる。生き抜こうと思える」

自分本位の目的。その何が悪い？

人は己の幸せを求めてなんぼだ。

自分ひとりすら幸せに出来なければ、恋人だって幸せに出来ない。友人だって幸せに出来ない。

「副次的に多くの人を救えばいいのよ。

己の身を犠牲にして何かを成し遂げる事を誰が喜んでくれるの？
そんなのただの独り善がりな自己満足よ」

「・・・」

「貴方が今、一番しなければならぬのは貴方の幸せを見つける事だと思っわ。」

もっと簡単に言えば、生きる意味を見つけないさ」

「・・・生きる意味」

「生きる意味が死に場所を探す為だなんて悲し過ぎるわ。
貴方が戦争終了後に何をしたいのか、どうしたいのか、それをゆ
っくり考えてみなさい」

生きる意味・・・か。

平穏な生活を求めるなんていう素朴な夢だけど、俺はこの夢を絶対に叶えたいと思っ。

それを何としても成し遂げる。それが、俺の生きる意味かな。

「・・・はい。探してみます。俺の生きる意味を」

俺の言葉の何倍もミナトさんの言葉はテンカワさんに届いた事だろう。

言いたい事を全部言われてしまった気がするけど、俺より説得力があるんだからきつと良かったんだろう。

「ルリちゃんやラピスちゃんはどうなのかな？」

テンカワさんだけじゃない。

俺は二人の思いもきちんと知っておきたかった。

「私は以前、マエヤマさんに話した通りです。

幸せになる。私達を縛る多くの柵から解放され、私の幸せを見つめる事です」

「・・・色々な事をしてみたい。色々な所に行ってみたい。自分の足で、自分の意思で」

強い意思を込めた力強い表情でそう告げる二人。

ああ。彼女達ならテンカワさんを救える。

そう、眼の前の二人を見て実感した。

「・・・三人の考えは分かりました。微力ながら、俺も御手伝いさせて頂きます」

「私も協力するわ。私にだって出来る事はある筈だもの」

「・・・ありがとうございます。ミナトさん。マエヤマ」

「・・・御願います。ミナトさん。マエヤマさん」

「・・・よろしく。ミナト。コウキ」

俺は俺の出来る事をする。

そんなに多い訳じゃない。

むしろ、少なすぎて、力不足を嘆く事の方が多いだろう。

それでも、出来る限りの事をしようと誓った。

「・・・細かい話を色々としようと思ったが、そろそろブリッジに戻らないとまずいのでな」

「そうですね。まずは火星の民を救出しなければ。」

今の俺には何も出来ませんが、何かあったら連絡下さい。少しは役に立てると思います」

「ああ。頼りにさせてもらう」

「あ。それと、出来れば、逐一情報を教えてくれると助かります。

俺としてはきちんと把握しておきたいので」

「それは私がやります。常にブリッジにいますから」

「うん。よろしくね。ルリちゃん」

「・・・コウキの分はきちんとフォローする」

「ありがとう。ラピスちゃん」

「それじゃあな。色々とすまなかった」

「・・・またお話ししましょう。私はまだ貴方の事をきちんと理解していません。」

「貴方の事がもっと知りたいです」

「・・・また来る」

去っていくテンカワさん達。

今までは交わる事なく別に道を歩いてきた。

でも、これからは協力して同じ道を歩くのだ。

なんとも心強い背中だった。

「・・・これで良かったの？ コウキ君」

残されたのは俺とミナトさん。

ミナトさんが心配そうに訊いてくる。

「何が心配ですか？」

「貴方は殺されかけてるし。それに、ずっと秘密にしていたかった事

なんじゃないの？」

「ルリちゃんは一途なんですよ。テンカワさんの為を想って行動したに過ぎません。」

きちんと話し合っていれば、防げた事でもあります」

「・・・秘密はバラしてよかったの？」

「同じ目的を共にする同志です。秘密事はなしにしたいじゃないですか。」

それに、俺だけ一方的にテンカワさん達の事を知ってるのは申し訳ないですよ」

「もお。甘いんだから」

「ミナトさんだって心にもない事を言ってます。」

秘密の事は心配してくれたんでしようが、ルリちゃん達の事はもう許してるでしょ？」

「あ。分かる？」

「ええ。ミナトさんの事ですから」

もちろんです。

それぐらいは分かりますよ。」

「心配はいりません。きちんとコミュニケーションを取れば、うまくやっっていけると思えます」

「そう。それじゃあ心配はいらないわね」

「はい。大丈夫です」

「そっか。じゃあ、私もブリッジに戻るから、大人しくしてるんだぞ」

「どっちにしる何にも出来ませんよ」

「それもそっか。またね」

去っていくミナトさん。

ありがとうございました。

やはり貴方にはお世話になりっぱなしです。

「・・・おし」

今回、きちんとテンカワさん達と向き合った事で、俺の原作介入は本格的なものになる。

後悔しないよう、きちんと考えて動かないとな。

あくまで俺は平穩を目指すんだ！

S I D E M I N A T O

「それでは、作戦を発表します」

独房でのこれからに対する重大な話を終え、ブリッジまで戻ってきた。

コウキ君の心は大分落ち着いていたみたいだし、アキト君達とも歩み寄れた。

始まりはあまり良くなかったけど、結果的に良かった事の方が多いのかな？

何はともあれ、仲良き事は良き事哉。

「私達ナデシコが火星から脱出する方法は二つ。

ナデシコ単体での加速で脱出するか、マスドライバーによる加速で脱出する事です」

「しかし、マスドライバーが火星にある確率は極めて低い」

「大部分が破壊されてしまっているからね」

「そこで、私達はナデシコ単体での加速で脱出するしかないという結論になりました」

うん。ボソソジャンプ以外ではその方法しかないと思う。

マストライバーを探している余裕もないだろうし。

でも、本題はそこから。ここまでは前提に過ぎないんだもの。

「その為にはマエヤマさんがおっしゃっていたような安全空域の確保は必須となります」

合流するにしろ、脱出するにしろ、安全空域は大事。

でも、コウキ君もアキト君達も普通に脱出する事は不可能だって言ってた。

それなら、あくまで合流を円滑に進める為に安全空域が必要だって言ったんだわ。

「エステバリスに外付けのバッテリーを搭載させ、

一機を掃討担当、一機を防衛担当として配置します」

ガイ君とアキト君。

どっちがいいのかしらね。

「担当はテンカワが掃討、ヤマダが防衛だ。

テンカワは連絡があり次第、すぐに戻れるようにしておいてくれ。

但し、引き付けないよう慎重にな」

「・・・了解した」

「基地を守る為に一人残る俺。

おっしやあ！ この俺がナデシコを護ってやる！

アキト！ 後方の心配はしなくていいぞお！」

「ああ。頼りにしてるぞ。ガイ」

「・・・ガイさん。無茶はしないでくださいね」

「おう。必ず帰ってくるから安心して待ってる」

「でも、心配で・・・」

「大丈夫だつて。お前を残した先には逝かねえよ」

「ガイさん・・・」

「メグミ・・・」

・・・見せ付けてくれるわね。

ラブラブしちゃって。私だつて・・・。

そもそもアキト君がそうやって送られる立場じゃないかな。

ガイ君つて攻められなくちゃ危険じゃないんでしょ？

「ナデシコを核パルスエンジンで起動させます。最低出力でエステバリスの援護に入ります」

相転移エンジンに引き付けられるとしたらかなり有効。

でも、単純にエネルギーだったとしたら、場所を知らせてしまう事にもなる。

ちよつとした賭けね。エステバリスだけに任せるよりは良いかもしれないけど。

「全ての行動を慎重に御願います。」

こちらから敵に接近しますが、こちらの位置がバレてしまったら何の意味もありませんので」

よし。頑張らしましょう。

私も協力するつて決めたんだし。

火星の人達を助けたいしね。

S I D E O U T

「そっか。イネスさんがね」

『火星の方々は何度も拒否されたそうですが、粘り強く交渉された結果、

イネスさんが説得を引き受けてくださり、火星の方々を説得してくれましたよ』

「やっぱりプロスさんは流石って所かな」

『ええ。そうですね』

良かった、とただ一言。

せつかく助けられる命なんだ。

火星の人達も良くぞ決断してくれたよ。

「ヒナギクでイネスさんが合流して、ナデシコで最速で救出するんだっけ？」

『ええ。イネスさんにどのように救出するのが効率が良いか、訊こうという事になりました。』

私達はユートピアコロニーに詳しくありませんから』

「確かに。よく知っている人に協力してもらった方が成功するだろうね。」

そもそもイネスさんは才媛だし」

あの頭脳こそイネス女史最大の武器。

これから何度もお世話になるナデシコの知恵袋だ。

「ま、後は説明好きさえどうにか出来れば」

『……諦めるしかないかと』
『……そうだね』

ま、説明があの人趣味だ。
どうにかして回避する方向で頑張ろう。

『やはりマエヤマさんは私達の事を知っているんですね』
『あれ？信じられてなかった？』
『い、いえ。そうではありませんが、』

突然、貴方達は物語の登場人物ですよと言われても意識できない
というか』

『まあ、信じられないと思うけどね。俺自身もこの世界に来た時は
驚いたんだよ』

『そうですね。物語の中に自分自身が入ってしまう。・・・少し憧
れますね』

『ルリちゃんも女の子だね。ファンシーな可愛い世界とかを経験し
たいのかな？』

『ええ。電子の妖精と呼ばれた私ですが、
本当の妖精や天使などに会ってみたいかなと思います』

『きつと電子の妖精の方が可愛いよ』
『そ、そうですね。ありがとうございます』

そうやって少し照れるルリ嬢。

何だかこんな変な話が出来るってのも感慨深いな。

今まで敵意だったけど、心を開いてくれたって感じで嬉しい。

「真面目な話、ナデシコがユートピアコロニーに辿り着いて、
救出し終わる前に襲われる可能性はどれくらいある？」

『間違いなく100%でしょう。最大速度で行っても、全ての救出
が成功する前に襲われます』

「それに対してナデシコはどう対応する？」

『エステバリスで周囲を囲みつつ、敵の迎撃に当たってもらいます。要するに時間稼ぎです』

「時間を稼いで、全員救出できたでしょう。その後、その状況から離脱できるのかな？」

『ナデシコを最大出力で退かせれば可能です。前回はDFを発動させながら後退に成功しました』

「なるほど。上手く退いて、クロツカスのいる方に行かないとね」

『ええ。私達では説得力がありませんから。イネスさんにクロツカスを目撃させて、ボソンジャンプの説明をして頂かないといけません』

「理論は完成してるんだろうけどね。やっぱり証拠がなっきゃ駄目か」

『そうですね。それに、そもそもチューリップがなければ意味がないので』

「うーん。そこは前の時と同じでいいでしょ。たださ、今回はどうするの？ フクベ提督」

『・・・犠牲になって頂くしかありません。前回、助かったという事が唯一の救いですね』

「でも、今回も同じようになるかは分からないからなあ」

「・・・ええ」

フクベ提督の犠牲。

クロツカスによってナデシコが抜けた後のチューリップを沈めないといけない。

原作では捕虜になってたっぽいけど、今回もそうなるとは限らないし。

・・・あ。そうだ。

「ルリちゃん。ソフト組めない？」

『え？ ソフトですか？』

「うん。たとえば、ナデシコを追尾するようにして、ナデシコの反応が消えたら自爆みたいな」

『なるほど。それぐらいなら、出来そうです』

「それなら、ラピスちゃんと協力して組んでおいて欲しい。」

「どうなるかは分からないけど、準備しておいて損はないからね」

『はい。．．．やはり頼りになりますね。マエヤマさんは。それなのに、私は．．．』

「いつまでも気にしてちゃ駄目だって言ったでしょ。」

「そうだな．．．。今度、何か奢って．．．いや、年下に奢らせちゃ駄目ですよ。」

「．．．うん。今度から俺の事をコウキって呼んでくれたら許してあげる」

『え？ それだけ、ですか？』

「ほら。ルリちゃんが名前を呼ぶのって心を開いてくれた証拠かなって。」

「ごめんね。こんな事知ってて。プライバシーの侵害みたいなものだよね」

『いえ。構いません。．．．そうですね。それでは、コウキさんと呼びせていただきます』

「うん。それで完璧。いつまでも気にしてちゃ俺も困る。分かった？」

『はい。ありがとうございます』

うん。流石は妖精。可愛い笑顔だ。

ミナトさんの落ち着く笑顔とは方向性の違う癒される笑顔だな。

「出来るだけ被害を失くしたいから、迅速に救出できるといいね」

『ええ。DFを発動させながら救出は出来ませんから、』

「迅速な行動とエステバリスの防衛に全てがかかっています』

「ごめんね。俺がいればせめてレールカノンで援護できたのに」

『いえ。マエヤマさん』

「ルリちゃん。失格」

『・・・あ。コホン。コウキさんに負担ばかりかけられません。私達に任せてください』

「そっか。うん。任せる」

『はい。私、ラピス、セレスの三人できちんと対処してみせます。』

コウキさんは安心して待っていてください』

「うん。分かったよ」

『では、ソフトを組まなければなりませんので』

「了解。何かあったら連絡よろしく」

『分かりました』

コミュニケでの通信が切れる。

ルリちゃんが任せると言うんだ。

仲間だもんな。信じて待ってしよう。

そもそも俺に出来る事なんて何も無いんだから。

『はあ〜い、コウキ君。元気？』

「あ。ミナトさん。特に問題なしです」

再び、コミュニケが動く。

今度はミナトさんみたいだ。

「良いんですか？ 俺と通信してて」

『今の所、私にはやる事ないもの。ヒナギクと合流してからよ』

「ミナトさんなら心配いらなと思います、気をつけてください
ね」

『ええ。ユートピアコロニーの人達を助けて、更に被害を少なくする。』

私の頑張りにかかっているのよね？」

「そうですね。ミナトさんの頑張り次第ですよ。緊張しますか？」

『もちろん。でも、それで潰される程、私は軟じゃないわ』

『それでこそミナトさんです。頼りにしてます』

『まったく。戦闘中にコウキ君が隣にいないのなんて初めてだから、力が出ないじゃない。』

早く戻ってきなさい。墜ちちゃっても知らないわよ』

『それは怖いですね。俺も出来るならすぐさま戻りたいですが、』

こればかりは俺にはどうする事も出来ないですから』

『うふふ。まあ、それもそうね。でも、ちょっと心細いわ』

『ちよつとですか？』

『ふふつ。凄く心細いわよ』

『・・・自分で言っておいて照れますよね。これ』

『相変わらずね。ま、私としてはからかい甲斐があっというけど』

『大好きですもんね。からかいとか弄くりとか』

『ええ。生きていく為の糧みたいなものよ』

『大袈裟ですよ。まあ、構いませんが』

『早く弄られに帰ってきなさい』

『弄られるの前提ですか？ どうしよう。檻に避難してようかな』

『駄目よ。貴方は私に弄られる運命なの。弄りつくされる運命なの』

『よ』

『運命なんて信じません！』

『はい。シリアスぶつても駄目。貴方は私に弄られる。それは必然なのよ』

『うう。ミナトさんが黒い』

『黒くもなんともないでしょうに』

『ま、俺も早くミナトさんの隣に戻りたいですからね。待っていてください』

『ええ。待っててあげるわ』

ニコリと笑うミナトさん。

ああ。やっぱりこの笑顔が一番好きかな。

『じゃ、元気そうだから、そろそろ切るわね』

「ええ。作戦に集中してください。頼みましたよ。ミナトさん」

『任せなさい。振動の一つも感じさせないであげるわよ』

心強い一言で。

「じゃ、また連絡するわ」

『はい』

コミュニケが切れる。

本当に気を遣ってもらっちゃってる。

わざわざ連絡くれるなんてな。

やっぱりミナトさんを好きになって良かった。

ガタンッ！ ゴトンッ！

「な、何だ!？」

する事がなくて寝ていると、突然ナデシコが振動で揺れた。
これは・・・木星蜥蜴に襲われているのか？

「クソッ。状況が掴めない」

きちんとした状況は分からないが、少し考えてみよう。

多分、ナデシコがユートピアコロニーに辿り着いたんだろう。

それで、救出中にナデシコのエネルギーに反応した木星蜥蜴が襲い掛かってきた。

予想が当たってれば、現状でも救出中で、エステバリスでナデシコを護っている所。

クソッ！ 何にも出来ない自分が恨めしい。

こういう時に何も出来ないなんて俺がここにいる意味がないじゃないか。

『マエヤマさん！』

「か、艦長？ 何ですか？」

『艦長命令で貴方を釈放としました。急いでブリッジまで来てください』

緊急事態発生って事か！？

独房にいる俺を釈放にしているかは分からんが、俺としては何にも出来ないよりは全然良い。

感謝します。艦長。

「分かりました！ すぐに向かいます！」

『今、そちらに鍵を開けにクルーの一人が行きましたから！』

「了解です！ 艦長は指揮を！」

『はい！』

早く、早く来てくれ。

俺の行動が無意味になる前に！

早く！ 早く！

「お、お待たせしました！」

「すみませんが、早く開けてください」
「は、はい！」

慌てた様子でガチャガチャする男性。
その音が俺を更に焦らせる。
早く！ 早く！

「あ、開きました」
「ありがとうございます！」

感謝もおさなりに、俺は独房から飛び出した。
ナデシコが危険に陥ってるんだ。勘弁してくれ。

「・・・・・・・・」

ただ走る。ブリッジに向かった無我夢中に。
途中、何度も揺れて体勢を崩したが、転んでいる暇なんてないと無理矢理立て直した。
人間、しよつと思えば無理な事でも出来るものだ。
とにかくブリッジへ！

「艦長！」
「マエヤマさん。待ってました。レールカノンで援護を御願いします」
「はい！」

ユリカ嬢にそう言われ、俺は段差を下がる事も面倒だと上から飛び降りた。
もちろん、下の様子を確認してから。

「コウキ君！」

俺が現れて驚いたのだろう。
ミナトさんが声を荒げた。

「コウキさん。すみません。私達だけでは」

さっきの会話を気にしてるのかな？

「大丈夫。よくやってくれたよ。ルリちゃんは。後は俺に任せて」

「はい。御願います」

ルリちゃんに一言告げて、俺は自分の席に飛び乗った。

そして、コンソールに手を置き。

・・・そこで俺の身体は石のように固まってしまったんだ。

SIDE MINATO

「コウキ君？」

コンソールに手を置いてまま動かないコウキ君。
いつもなら、サングラスみたいなものを取り出して、レールカノンを準備するのに。

「コウキさん、どうしました？」

「・・・コウキ？」

「マエヤマさん？ どうしたんですか？」

周りの皆も怪訝な顔付きでコウキ君を見ている。
今が戦闘中だなんて忘れるくらい、まるで時が止まったかのように、
コウキ君は微動だにしない。

「マエヤマさん！ 援護を！」

艦長が必死に叫んでもコウキ君が動く事はない。

「マエヤマさん！ 何をしてるんですか！ 早く！」

副長が危機に陥っているのに何もしない事を責める。
でも、ちょっと待つて欲しい。様子がおかしい。

「コウキ君？ どうしたの？」

動かない身体。動かない表情。
どうしたんだろうと近付いてみると……。

「……落ち着け。落ち着け。落ち着け」

必死にそう呟いていた。

その呟きが聞こえるようになると、次はある事に気付く。
全身が微妙に揺れているのだ。

「……震えるな。震えないでくれよ。頼むから」

額に汗を浮かべ、必死な表情でコンソールを見詰める。

「・・・クソツ。オモイカネ。レールカノンセット」
『精神状態からお勧めできません』 『休んで方が良いよ』 『無理し
ちゃ駄目』

モニターに浮かぶ文字。

直接リンクするからこそ分かるコウキ君の様子。

精神状態が悪い？ それって・・・。

「・・・いいから。頼むよ。瀬戸際なんだ。頼むから」

『・・・分かりました。レールカノンセット開始』

顔を蒼白にして、全身を震わせるコウキ君。

『レールカノンセット完了』

「・・・頼むぞ。俺」

そう呟いてから、サングラスを取り出す。

いつものようにそれを装着して、ここからコウキ君の凄まじい射撃
が始まる。

きつと、誰もがそう思っただろう。

でも、そうはいかなかった。

コンソールに置かれた手が異様に震えだし、その震えが全身へと回
る。

遠くから見ても震えてると分かる程にコウキ君の身体は震えていた。

「・・・クソツ！・・・震えるな！・・・ちゃんと動けよ！」

それでも、必死にコンソールに手を置く。

呼吸も不自然になり、顔は汗で濡れ、歪む。

「・・・心的外傷ね」

ポツンと呟かれた一言。

小さな声だけど、その声はブリッジ中に響き渡った。バツと誰もが振り返り、イネスさんを見る。

「・・・心的外傷？」

「ええ。分かりやすく言えば、トラウマって奴ね」

・・・トラウマ。

心の傷。癒えぬ事なき心の傷。

「私には彼に何があったかは知らないけれども、あれはトラウマに触れた時の反応よ。」

トラウマに関する物を回避しようとする無意識下の行動」

トラウマに関する物を回避する。

じゃあ、コウキ君のトラウマって・・・。

「見た限り、IFSを使用する事ではなく、何かを攻撃するという事を拒んでいるようね」

・・・また味方を撃つかもしれないという恐怖。

ただそれだけで、コウキ君は震えている。

また、意識を失い、味方を撃ってしまうのではないか。

今度は誰かを殺してしまうのではないか。

この救出作戦を自分の存在が邪魔してしまうのではないか。

きつと、コウキ君はそんな事を無意識に考えている。

それが、コウキ君を震わせている。

「ど、どうすれば？ マエヤマさんじゃなければこの局面は・・・」
「無理にさせても心の傷は広がるだけね。まあ、それでもいいのなら、強引にやらせなさい」

シビアな一言だと思う。

コウキ君の心の傷を広げて、火星の人達の命を救うか。

コウキ君の心を優先して、火星の人達を危険な眼に合わせるか。

その二択。艦長にとって決断しなければならぬ重い選択。

「・・・・・・・・」

悩む艦長。

御願。コウキ君の心を傷つけないで。

・・・そう言えたらなんて楽なんだろう。

でも、今のコウキ君は震えながらも必死に成し遂げようと頑張っている。

・・・その気持ちを裏切るなんて出来ない！

「コウキ君！ やりなさい！」

「ミナトさん！ 何を！？」

「後悔したくないでしょ！ 出来る限りの事でいいから、全力でやり抜きなさい！」

残酷な事を言っている自覚はある。

私はコウキ君の心の傷を広げようとする悪い女だ。

でも、きつと、コウキ君は救えなかった方が傷付く。

今、心の傷を広げるよりも、救えなかったと知った時の方が何倍も傷付く。

もしかしたら、そう思っているのは私だけかもしれない。

コウキ君はそんな事を思っなくて、独り善がりな考えなのかもし

れない。

でも、私はこれが最善だと思う。
恨まれたっていい。憎まれたっていい。
それでも、私はコウキ君に訴え続ける。

「今やらないでいつやるの!? 今こそ踏ん張る時でしょ! コウキ君!」

「ミナトさん! マエヤマさんが可哀想です! やめて下さい!」

メグミちゃん。貴方に何が分かるの?

コウキ君の事を一番知ってるのは私なの!

私しかコウキ君の想いは理解してあげられないの!

「コウキ君!」

「・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「コウキ君!」

「・・・はあ・・・はあ・・・うあ・・・うあ・・・うわああ!」

叫び出すコウキ君。

同時にレールカノンが放たれる。

近づく敵を蹴散らし、遠くにいる敵を蹴散らし・・・己の心を傷付けていく。

「うわあああああ!」

悲しい叫びだった。

堪らなく悔しかった。

コウキ君にここまで負担を与えてしまう事が。

何にも出来ない事が。

堪らなく悔しかったんだ。

「……」めんなさい。コウキ君」

……小さくそう謝る事しか私には出来なかった。

……。

どれくらい経ったんだろう。

トラウマで身体を震わせるコウキ君に無理をさせて。

必死に叫ぶ事で己を奮え立たせるコウキ君を傷付けて。

さつきから、ブリッジではコウキ君の痛みを訴える叫び声しか聞こえていない。

誰もが痛々しい視線でコウキ君を眺めていた。

『全員搭乗しました！』

その時、漸く待ち望んでいた一報が入った。

安堵でもなく、喜びでもなく、ただコウキ君に対する罪悪感が湧き出た。

「艦長！」

「はい！ エステバリス隊！ 全機帰艦して下さい！ 戻り次第D Fを発動させます！」

早く、早く戻ってきて！

コウキ君を早く楽にさせて。

「全機帰艦しました！」

「ルリちゃん。ディストーションフィールド発動」

「ディストーションフィールド。発動します」

「マエヤマさん！ もういいです。もうやめて下さい」
「・・・あ」

スツと崩れ落ちるコウキ君の身体。

「コウキ君！」

慌てて抱き止める。

ありがとうございます。ごめんなさい。

眼を覚ました時、なんて言えばいいのか分からなかった。

「ミナトさん。最大速度で後退してください」

「・・・」

涙が溢れてきた。

私は、違う、私がコウキ君を傷付けた。

愛する人をここまで追い詰めた。

「ミナトさん！ マエヤマさんの頑張りを無駄にしないで下さい！」

「・・・了解」

歪む視界で必死にナデシコを動かす。

身体は重く、心も重い。

・・・それでも、私に出来る事はこれだけだから。

「・・・私」

「・・・」

胸が痛い。心が痛い。

コウキ君を傷つけた自分が嫌になる

コウキ君を無理させた自分が嫌になる。

でも、こうしなければ、コウキ君は後悔したと思う。

きっと一番傷付いたと思う。

そうやって理論武装する自分がいて。

そんな自分がまた嫌になった。

そして、そんな私の気持ちがあつてもらえる筈もなく……。

「私、ミナトさんの事、見損ないました」

・・・その一言が私の胸を貫いた。

S I D E O U T

第十七話（後書き）

心的外傷。

トラウマのお話です。

怖いですよね。自分の身体が自分じゃない気がするのって。知らぬ間に人を殺すと考えると怖くて仕方ありません。

第十八話（前書き）

半ほのぼの半シリアス。

どうしてもシリアスから抜け出せない・・・。

第十八話

「……ここは」

知ってる天井でした。

「眼を覚ましたのね」

「ええっと、お久しぶりです」

「ええ。久しぶりね。といってもあれから一週間も経ってないけど」

気付けば、医務室。

また記憶がこんがらがってる。

どうしてここにいるのだろうか？

「覚えてない？」

「ええっと……」

「紹介が遅れたわね。私はイネス・フレサンジュ。貴方は？」

「あ。はい。マエヤマ・コウキです」

ボーっとしているとイネス女史がやってくる。

あ。いつの間にか怪しい女医さんの姿がない。

……可哀想に。これから医務室はイネス女史の魔窟ですよ。
貴方の出番は最早ありません。御勞しい。

「随分と余裕ね」

「ええつと、何がです？」

「ここに貴方がいるのは何故？」

「すいませんが、覚えてないんですよ」

「ちよつとした記憶の混乱かしら。それとも自我が喪失を恐れて記憶を失くさせたか・・・」

「あ、あの・・・」

自分の世界に入っちゃったよ。

イネス女史。戻ってきてえ。

「コホン。貴方の事は色々と聞いてるわ。ナデシコの降下の危険性を訴えたとか」

「相転移エンジンの特性を知っていれば、誰もが疑問に思う事ですよ。」

敵の占拠下にある火星に出力低下状態で大丈夫なのかと」

「艦長は知らなかったようだけど？」

「それをフォローするのが周りの役目です。」

艦長はどちらかというと情報を集めるタイプではなく、与えられて動くタイプですから」

「なるほど。よく分かってるのね」

「足りない所を補う。そんな役目がブリッジに一人ぐらいいても良いと思いませんか？」

「それが貴方という事？」

「まだまだですけどね。艦長に降下の危険性を訴えなかったのは俺のミスです。」

ところで、ナデシコはどうなりました？」

「貴方の活躍でどうにか退けたけど、損傷がない訳ではないわ。単体での脱出は無理そうね」

「え？ 俺が何かしたんですか？」

駄目だ。何も覚えてない。

「本当に覚えてないようね。貴方、半狂乱になりながら、レールカノンを撃ちまくったのよ」

「・・・え？」

俺がまたレールカノンを？

俺はまた記憶がない。

それって・・・俺がまた暴走したって事か！？

「あ、あの！俺はまた暴走してしまっただんですか！？ 味方を撃つてしまっただんですか！？」

「そう。貴方は過去にそんな経験があるのね。それがトラウマになっているのか」

「答えてください！俺は！また・・・」

「大丈夫よ。暴走はしてないわ。きちんと敵だけを狙って撃ってたわ。味方に損傷はない」

「・・・はあ。良かった」

本当に良かった。

誰だって二度もやられれば許してくれないだろう。

また味方を撃つたなんて事になったら、俺にはもっここにいる資格はない。

・・・怖いな。自分の身体が。

「貴方はトラウマを抱えてるの」

「・・・トラウマ？」

トラウマ。

確か心的外傷だっけか？

幼い時とかの虐待がフラッシュバックしたりする奴。

身近なので言えば、うーん、そうだな。

夜にホラー映画を見た時に、トイレに行くのが怖くなったり、夢に出てきたりとかそんな感じの。

でも、トラウマっていきなり言われてもよく分かんないんだけど。

「そうよ。・・・そうね。これを持ってみて。もちろん、弾は入ってないわ」

そう言って渡されたのは銃。

俺がよくゴートさんと練習する時に使う奴だ。

「これがどうかしましたか？」

「構えてみて」

「はあ・・・。構いませんが」

言われた通りに構えてみる。

なかなか様になったよな。俺。

「・・・なるほど。やっぱりIFSでの攻撃に意味があるのね。すると・・・」

「あの・・・もういいですか？」

また自分の世界に入ってしまった。

難儀なお方だ。

「あ。・・・コホン。ありがと。もういいわ」

「あ、はい」

銃を手渡す。

一体、何だっって言っただろう。

「ちょっと待ってて」

「分かりました」

イネス女史つてマイペースなんだな。
振り回されっぱなしだ。

「・・・コウキ君」

「あ。ミナトさん」

イネス女史に連れられて来たのはミナトさん。
物凄く暗い表情をしているけど、何かあったのかな？

「大丈夫ですか？ ミナトさん。顔色悪いですよ」

「え？ コウキ君こそ、大丈夫なの？」

「俺って何か心配されるような事しました？」

「・・・イネスさん。これは？」

「恐らく防衛本能が働いたのね。さっきの事が完全に記憶から消えているわ。」

結構、根強いわよ。このトラウマ」

「・・・そうですか」

深刻そうな表情の二人。
まるで意味が分からないんだけど。

「とりあえず、何があったのか知りたいんですけど」

気になって仕方がない。

「そうね。話しておきましょう」

「イネスさん。話して大丈夫なんですか？」

「私は一応カウンセラーの資格も持つてるのよ。こういうのはきちんと自分と向き合わないかね。」

まずは自覚する事からスタートよ。治療もそこから」

「・・・分かりました。それなら、私が話します」

「そうね。詳しい事情を知らない私より貴方の方がいいかもしれな
いわ」

・・・凄く酷な現実を突きつけられそうだ。

あんなにも真面目というか、深刻な顔は初めて見た。

俺はまた、何かしてしまったのだろうか？

「コウキ君。良く聞いて」

「はい」

「前回、貴方は無意識の内に暴走して、味方を狙撃してしまった。
そこまではいい？」

「もちろんです。反省しています」

「そう。貴方はもう二度と味方は撃たない。意識は失わない。そう
やって反省したのね？」

「え、ええ。大まかにはそんな感じですよ」

自分の身体が怖い。

でも、きちんと制御しなければと思う。
もっと練習しなければって思った。

「コウキ君。貴方は無意識下でまた味方を撃ってしまうのではない
かと怖がっているのよ」

「・・・無意識下・・・ですか？」

「自分の事を信じていないんじゃない？ また暴走してしまうかも

しれないって」

「・・・それはあります」

知らない間に味方を狙撃していたんだ。

今度もそんな事があるかもしれないと思うと怖くて仕方ない。

「コウキ君。貴方はその恐怖に縛られているの。」

また味方を撃つかもしいれないという考えに貴方は苛まれている」

「・・・俺はどうなったんですか？」

「レールカノンを撃とうという時、貴方は恐怖で全身を震わせた。」

意識を失う程に錯乱して、漸く貴方はレールカノンを撃てたのよ」

「・・・それでは、俺はまた暴走を？」

「今回はフィードバックの値を弄くってないから、システムに乗っ取られるような事はなかったわ。」

きちんと敵だけを狙って撃っていたもの」

「・・・なら、その時の記憶がないというのは？」

「トラウマを抱えながら無理をしたから本能が護ろうとしてくれたんだって」

「本来ならトラウマをきちんと克服してから行つべきだったんだろうけど、」

緊急事態だったから仕方なかったのよ」

ミナトさんの言葉をイネス女史が引き継ぐ。

要するに、俺はトラウマを抱えちまったって事が。

すぐには解放されないあくどいトラウマを。

はあ・・・。何だかな・・・。

「その、緊急事態というのは？」

「コートピアコロニーの民をナデシコへ移動させている時よ」

「その事に関しては私もお礼を言わないとね。ありがとう」

「あ、いえ。お礼なんか言わないで下さい。下手すると被害を与えていたのは俺ですし」

「それでもよ。素直に礼は受け取っておきなさい」

「え、あ、はい。どういたしまして」

イネス女史に礼を言われるとはなあ。

この人って原作では全然気にしてないみたいなきな感じだったから、結構冷めてる所があると思ってたけど……。

そうでもなかつたって事か。

そうだよな。誰が一緒にいた人達が押し潰されて喜ぶんだって話だ。

「コウキ君。体調は？」

「あ、いえ。特に問題はありません」

「それなら、ブリッジに行きましょう。色々と意見を訊きたいって艦長が」

俺も状況を把握したいしな。

「分かりました。でも、俺ってここにいらなくても大丈夫なんですか？」

「いいですよ。特に問題ありませんから。」

あ。それともお、ここで私と休んでいく？ 心身ともに癒してあげるわよ」

わ。怪しい女医さん再登場。

粘り強いね。魔窟の中でも生き残れるかもしれん。

「ちよつと、どついう意味ですか？」

「あら？ 若者を導くのが女医の仕事よ」

「違つてしょ！ 人の恋人に何を言つてるんですか!?!」

「まあ。冗談よ。冗談。本気にしないで。彼氏だっていつもスルーなんだから」

「え？ あ。すみません」

シユンとなるミナトさん。

あ。何だか可愛らしい。

「そういう訳で、マエヤマさんの退室を許可します。

また来てくださいというのは縁起が悪いですが、お休みになられたい時はいつでもどうぞ」

「ありがとうございます。じゃあ、行きましようか」

女医さんに向かって一礼してから、医務室を去る。

向かう場所はブリッジ。後ろにはイネス女史とミナトさんが続いている。

「変な女医さんね」

「ハハハ。そうですね」

「私、初めて医務室来たから驚いたわ」

うん。最初は俺も驚いた。

何もしてない時は普通に癒し系の美人女医なのに。

どうしてあんな妖艶な危ない人になっちゃうんだろう。

「これから私も医務室にいると思うから、いつでもいらっしやい。

貴方はお話相手として楽しそうなもの」

「俺はイネスさんみたいに博識じゃないですから。きっとご期待に沿えないと思いますよ」

「大丈夫よ。何だかんだ言って付いてきそうなもの」

「そうならいいんですけどね」

イネス女史は話のレベルが高そうだ。
お茶目な所もあるから、楽しくはなると思っけど。

「コウキ君。私の事を放っておき過ぎじゃないかしら？」

ジト眼で見詰めてくるミナトさん。

「……そういえば、ずっと独房にいたし、出たら気絶だしで、ミナトさんと触れ合ってない。」

「……すみません」

「謝られても困っちゃうんだけどなあ」

「こ、困るといわれても困る！」

「じ、時間が出来たら必ず行きますから」

「……」

「御願いですから、そう白い眼で見ないで下さい。俺にも色々と事情が」

「ふふふ。分かってるわよ。」冗談「

冗談には見えないんだけど。

まだ眼が笑ってないし。

「私の前で見せ付けてくれるわね」

「……あ」

そうだよ。イネス女史もいたんだよ。

ああ……。恥ずかしい。

「あら。初心なのね。これは弄くれって事かしら？」

「コウキ君を弄くれるのは私だけですよ」

「ウフフ。弄られっ子は誰もが弄っていいのよ。そういう星の下に生まれてきたの」

「いえ。私だけです。私こそがコウキ君をもっとも弄れる存在なんです」

あの、俺の前でそんな話はするもんじゃないと思います。というか、俺の意思は無視ですか？

「と、とりあえずですね。弄らないという方向で話を進めれば」

「あ、それはなしね」

「ええ。駄目よ」

な、何故ですかあ!？

「イネスさんの言葉を借りるみたいだけど、貴方は弄られる為に生まれてきたのよ」

「ええ。貴方に弄って面白い人はいないと思うわ」

「お、俺としては弄りこそが我が生き甲斐と思っているのですが・・」

「あら。どっちも対応なんて凄いわね」

「ニユートラル？ ハイブリット？ どちらにしろ、それもコウキ君の個性よ」

ああ。駄目だ。

久しぶりに思ったよ。

年上の女性は敵に回しても絶対に勝てない。

というか、この二人が組んだら誰も勝てない気がする。

彼女達に弄られる人を不幸に思います。ってか俺じゃん!？
俺って不幸……。

「何だかんだいって楽しんでるしょ？」

「え、まあ。楽しいですから」

実際はそう。弄られるのも悪くない。

楽しいし。むろん、弄るのも好きだけど。

「じゃあいいじゃない」

「自覚はあっても認めちゃいけないんです。認めたら負けですから」

「変な所で男の子なのよね。相変わらず」

「ま、意地っ張りという事でいいじゃない。余計弄りたくなってきたわ」

藪蛇？ ミス？ 余計な事を言った？

標的にされちまうの？ 俺。

「元気出てきたわね」

「……え？ もしかして、元気付けてくれたんですか？」

そうだよな。

ここ最近色々な事があり過ぎて落ち込んでたからな。

久しぶりに楽しい気分を味わってる気がする。

「え？ 違っわよ」

「え？ 違っんですか？」

「ええ。私が楽しんでただけ」

ええ。ええ。分かってますよ。

まずは自分が楽しもうという事ですね。ミナトさん。でも、それも違うつて分かってます。

ミナトさんは優しいですから、俺の為を想ってくれたんですね。・・・そうであってください。

「お似合いじゃない。二人とも」

「え？ 本当ですか？」

ミナトさんなら俺なんかよりもっと良い男をゲット出来そうだけど。それでも、お似合いって言われるのは嬉しいな。

ミナトさんは本当に良い女ですから。

「ええ。弄り役と弄られ役。丁度いい配役よ」

・・・あ。そういう意味でしたか。若干、落ち込む。

「ウフフ。本当に楽しい」

楽しまないで下さい。イネス女史。

そして、ミナトさん、貴方まで何をニヤニヤしてるんですか。

「そうそう。コウキ君」

「あ、はい。何ですか？」

「無精ヒゲも中々似合うわよ」

無精ヒゲ？

あ。そうか。俺ってずっと独房だったから・・・。

「ああ！」

「ど、どうしたのよ？ 突然！」

よ、良く考えろよ。

ずっと独房にいたって事は風呂に入っていない。
って事は……。

「は、離れて下さい！ ミナトさんも！ イネスさんも！」

「ど、どういう事よ？」

「あ。お年頃だものね」

「え？ イネスさん。それって……」

……はあ。最悪。

「体臭を気にしてるのよ。男の子だって気にするわ」

「あら。そうなの？ コウキ君」

「あ、当たり前じゃないですか！ ずっと風呂入ってないんですよ」

汗臭いのとか嫌われるじゃん。

誰だって好きな人に臭いなんて思われたくない。

「私は大丈夫よ」

って、言った傍から近付こうとするし。

「ミナトさん。自分がもし汗臭かったら誰にも近付かないでしょ？」

「ええ。でも、コウキ君は迎え入れてくれるでしょ？」

「え？ そりゃあミナトさんですから、拒みませんよ。汗臭いぐら
いじゃ」

「じゃあ、私もそういう事よ。気にしないわ」

「俺が気にしますー！」

受け入れてくれるっていうのは嬉しいけど。
それでも、やっぱりわざわざ臭いと思われるのはヤダ。

「初心ねえ。人によっては汗臭いのが好きって人もいるのに」

「それは特殊な人です！」

「あら？ いいじゃない。男の汗ってそそられるものよ」

「え？ ミナトさんも特殊な人ですか？」

「あ。私は違うけど」

「じゃあ、駄目です！」

ああ。風呂に入りたい。

でも、状況が許さないだろうな。

ま、駄目もとで。

「あの・・・風呂入ってもいいですか？」

「駄目よ。そんな余裕はないわ。今でも緊急事態は脱してないもの」

「コウキ君。一人だけお風呂に入ったら怒られるわよ」

ですよねえ〜。

「じゃあ、これ使う？」

そう言っただけ渡されるのは香水。

ないよりはあった方がいい。

「ええつと」

腕にちよつとだけ吹きかけて、匂いを嗅ぐ。

「へえ。甘い匂いですね」

「この匂いが好きなのよね。コウキ君は爽やか路線だから丁度いいんじゃない？」

「じゃあ、お借りしますね」

目立たない程度に吹きかける。

腕やって、耳の後ろやって、最後にちょっと服にかけて、おし、完璧。

「こうやって貴方色に染めるのね」

「香水を恋人にプレゼントする気持ちが分かりました」

「あら。惚気てくれちゃって」

へえ。香水をプレゼントか。

今度考えてみようかな。

「でも、あれね、臭いのを香水で誤魔化すっていうのは歴史を感じるわね」

「え？ どういう意味ですか？」

「ああ。あれですよ。平安時代とか、某革命の国とか」

「あら。知ってるの？」

「ええ。それなりに」

服装の手間からお風呂に入らないで、匂いを香水で誤魔化したりとか。

肉食で体臭が気になるから香水産業が発達したりとか。

確かにそう言われてみれば、歴史を感じるかもしれない。

「私だけ置いてけぼりじゃない」

「ほら。やっぱり何だかんだいって付いて来てる」

「偶然ですよ。偶然知ってただけです」

うん。偶然だよ。

イネス女史には通常状態では絶対に敵わない。遺跡にアクセスすれば別だけど。

「ウフフ。興味が湧いてきたわ。貴方に」

やばい。チエックされた。

「イネスさん。駄目ですよ」

「大丈夫よ。そういう意味じゃないから」

そ、それはそれで悲しいような・・・。

イネスさんも美人だしな。変わってる、うん、凄く変わってるけど。

「コウキ君もデレツとしないの」

「し、してませんよ」

「あら？ 私って魅力ないかしら？」

「あ、いえ、そんな事ないですよ。魅力的です」

「ウフツ。ありがとう」

「コウキ君！ 恋人の前で口説くなんて何を考えてるの!？」

「す、すいません!」

ぐわあ！

どうすればいいんだあ!？

「っと。着いたわね」

あ。いつの間に。

「時間が忘れられたでしょう？」

「え、あ、まあ。楽しめました」

「そう。それが弄られ役の利点よ。何もしなくても楽しめられる」

「・・・さいですか」

・・・嬉しくないですよ。その利点。

俺は弄って笑いを取るタイプなのに。

「いるのよね。弄られキャラなのに弄りキャラだって勘違いしてる子」

あ。俺の事ですか。

「い、行きましょう！」

「誤魔化しちゃって」

「さあ、私の説明の時間ね」

説明大好きですよ。イネス女史。

「あ。マエヤマさん」

ブリッジに入った途端向けられる視線。つてか、皆して俺の方を見なくても。

「あの・・・大丈夫なんですか？」

心配そうに訊いてくるユリ力嬢。

何か、落ち込んでる？

「大丈夫ですけど、どうかしました？」

「ええっと、私のせいでマエヤマさんに辛い思いを」

あ。艦長命令だったんだ。

「ええっとですね、謝ってもらっても、覚えてないので」

「え？ 覚えてない？」

「心的外傷を抱える人にとっては珍しい事じゃないわよ。トラウマから心を守る為にね」

「そ、そうですね」

ええっと、とりあえず、俺の席に戻るか。

「あ。マエヤマさんはあちらの席に座ってください」

「あちら？」

あれって、今は亡きキノコ副提督の席じゃないですか？
フクベ提督の隣の。

「ええっと、何ですか？」

「え、あ、いやあ。ここならすぐに相談できるかなって」

「え〜と、なら、いいですけど」

何かしらの理由があるんだろう。

艦長命令みたいなもんだし、素直に座るか。

「じゃあ、ミナトさん、俺はあっちみたいなので」

「ええ。分かったわ」

「それなら、私はコウキ君に付いていこうかしら。情報交換したいし」

「イネスさん。くれぐれも」

「ウフフ。貴方こそ可愛らしいわね。嫉妬だなんて」

「そ、そんな事ありません」

「ま、いいわ。心配しないで。ただのお話相手よ。お話相手」

えっと、嫉妬してもらってるんだ。

何だか嬉しいな。

「貴方も単純ね」

「・・・ええっと、顔に出てます?」

「頬を緩めてれば分かるわ」

そんな呆れた眼で見ないで下さい。

嬉しいんだから仕方ないです。

「それじゃあ、マエヤマさんは元気という訳ですか?」

「そうですね。トラウマって突然言われてもよく分からないですし」

「そ、そうですね。安心しました」

「ご心配をおかけしました。皆さんも本当にすいません」

コリカ嬢だけではあく、全ブリッジクルー、パイロット組にも頭を下げる。

何だか、最近は迷惑をかけてばかりだ。それに、謝ってばかりだと思っ。

「おうおう。今回は素直に助かったからな。褒める事はあっても責める事はねえよ」

「助かったよお。コウキ。結構あの状況は辛かったからね」

「そう? でも、俺何も覚えてないから」

「ま、それでもさ。ありがとうはありがとうだよ」

「蟻が十……なんでもないわ」

「あ、はあ……」

「おう。コウキ。元気そうぞ何よりだ」

「ああ。ガイ。相変わらず熱いな」

「ハツハツハ。まあな」

「別に褒めてないけど」

「マエヤマ。平気か？」

「今の所は大丈夫です。トラウマと言われても何があったか覚えてないので」

「そうか。しばらくはコンソールに触れずに艦長の相談役になってやれ」

「はあ……。テンカワさんがそう言うのなら」

「頼むぞ」

パイロット組は相変わらず元気だなと何故か感心してしまう。
結構、今の状況って厳しいんじゃないの？

「体調はどうだ？ マエヤマ」

「元気そのものですよ。異常は感じません」

「そうか。それは良かった」

「所で、俺の謹慎期間はどうなりました？ しばらくしたらまた独房ですか？」

「いやはや。マエヤマさんにはご迷惑をおかけしましたからな。先程の件で放免と致します」

「そうですか。助かりました。独房は辛いので」

「そうですね。私も二度と入りたくありません」

あ、貴方は一体何をしたんですか？ プロスさん。

「マエヤマ。元気そうぞ良かったよ」

「ええつと……」

「ジュンだよ！ アオイ・ジュン！ 副長の！ 一緒にブリッジ当番したたる！？」

「えつと、知ってますよ」

「……え？」

「何て答えようか迷ってただけです」

「そ、そんな、僕の勘違いというのか！？」

「副長。影が薄いって自覚あったんですね」

「クソオー……！」

クツクツク。オモシロ。

「なるほど。貴方の弄りスキルも中々ね」

「ナデシコは面白い人ばかりですね。俺の弄り心をくすぐるんです」

「私もコウキ君を見てると弄り心がくすぐられるわ」

「イネスさん。勘弁してください」

「ウフフ。冗談よ」

絶対に冗談じゃねえ。

「マエヤマさん。大丈夫ですか？」

「あ。メグミさん。心配かけてごめんね」

「いえ。大丈夫ですよ。あの……」

「ん？ 何？」

「ミナトさんに気を付けてください。では」

一方的に言って去っていくメグミさん。
気を付けるって何をさ？

「……」
「コウキ」

「・・・コウキさん」

「あ。ルリちゃんにラピスちゃん。ごめんね。大事な時に」

「いえ。私が情けないからコウキさんに辛い思いを」

「・・・ごめん。コウキ」

「えっと、何があつたかは覚えてないけど、これだけは言える。

二人は全然悪くない。悪いのは俺」

「・・・でも・・・」

「二人は頑張ってるよ。俺がいなくてもいいぐらい」

「コウキさんは必要な方です。ブリッジクルーの中でも欠かす事のできない重要な方です」

「・・・コウキ。いなくてもいいなんて言っちゃ駄目。悲しくなる」

「うん。そうだね。ありがとう。ルリちゃん。ラピスちゃん」

「はい」

「・・・うん」

本当に和解できて良かったと思う。

こうやって可愛い笑顔を見ただけで満足してしまう自分がいるのは何故だろう？

・・・うん。やっぱり女の子には勝てないね。

「・・・コウキさん」

「・・・セレスちゃん。心配かけ」

「・・・コウキさん！」

・・・抱き付かれた。

席に座ってる俺を脇から。

「・・・ずっと、ずっと心配でした。コウキさんがいなくなっちゃうんじゃないかって」

「・・・セレスちゃん」

「・・・やつとコウキさんの姿を見れたと思ったら今度はあんな事になっちゃって。」

どうしたらいいか分からなくて」

必死に言葉を紡いでくれるセレス嬢。

頬を涙で濡らして、身体を震わせながら必死に・・・。

俺はこんなに小さな子にも心配かけてんだな。

俺って、馬鹿野郎だよ、本当に。

「ありがとう。セレスちゃん」

「・・・え？」

抱きついてくるセレス嬢を抱き上げて、膝に座らせる。

正面に見えるセレス嬢の顔は涙で濡れながらも驚いた顔で、場違いながらも微笑ましさを誘った。

「心配してくれてありがとう。ごめんね。心配かけて」

「・・・いえ。無事に帰ってきてくれました。それだけで充分です」
「そっか。本当にありがとう」

涙を拭こうと目元を手でこするセレス嬢。

俺は頭に手を置いて、ゆっくり頭を撫でつつ、目元から涙を払う。

「・・・あの」

「嫌かな？」

「・・・いえ。気持ち良いです」

そう言って恥ずかしそうに笑うセレス嬢。

それが本当に可愛らしくてゴシゴシと強めに頭を撫でてしまっ。

「・・・痛いです」

上目遣いで睨んでくるセレス嬢。
怒っても可愛らしさしか感じられないから不思議だ。

「ごめん。ごめん」

ちよつと失敗したな。
優しく。優しくつと。

「・・・あ。気持ちいいです」

「それは良かった」

「・・・え？」

セレスちゃんをもう一度抱きかかえて、セレスちゃんの向きを変える。

小さな背中を胸で支えるような形だ。

「・・・安心します。それに、とっても暖かいです」

「そっか。じゃあ、いつでもおいで。またしてあげるから」

「・・・はい。じゃあ、あの、その・・・今から御願いできますか？」

「うん。いいよ」

可愛らしくて、微笑ましくて。

俺の気持ちも癒された。

「・・・女誑しね」

「イネスさん。失礼ですね。誰だってこの可愛らしさには勝てません」

「その言葉は否定しないけど、貴方は女誑し決定よ」

何故女誑しなんだか。

ああ。昔を思い出すなあ。

こうやって従妹を膝に乗せてた気がする。

「凄く癒されてるね。コウキ」

「でも、微笑ましいじゃない」

「そうだね。うん。良い絵だよ」

「いい事じゃねえか。どっちも嬉しそうなんだしよ」

「セレス。良かったな。お前の恩人は優しい奴だぞ」

「良かったですね。セレス」

「・・・セレス。嬉しそう」

「羨ましいいゝ。私もアキトにああされたい」

「サ、サイズの無理だよ。ユリカ」

「ああ！ ジュン君！ それは太ったって言いたいの？」

「ち、違うよ。そうじゃなくて」

「ええ〜ん。そんな事ないのにいゝ。ジュン君なんて嫌い！」

「ユ、ユリカア〜。ごめんよお」

「なるほど。あれがマエヤマさんの言う温もりという奴ですか。

確かに癒されますな。いやはや。勉強になります」

「・・・む」

「・・・良かったわね。コウキ君。セレスちゃん」

「ガイさん！ 私達も！」

「おう！ メグミ！」

ガツンッ！

「イテッ！」

「てめえはこんな状況で何しようとしてんだよ!？」

「な、何故だ！？ 何故、コウキが許されて俺達は許されない」
「当たり前だろうが！」

ガツンッ！

「グハッ！」

「てめえらとあいつらじゃ全然違えんだよ！」

「り、理不尽だあ！」

「うつせえ！」

ガツンッ！

「さ、三連続は辛いつすう」

ご愁傷様。ガイ。

「マエヤマと言ったな」

ブリッジの至る所で起こるドタバタな雰囲気を楽しんでいると、横から提督に話しかけられた。
そういえば、提督ときちんと話すのは初めてかな。

「はい。提督」

膝の上にセレスちゃんがいるけど、このままでいいのかな。
ま、まあ、大丈夫だろう。

「君は火星育ちだと聞いた」

「ええ。地球で生まれましたが、親の都合で火星へやってきました」

経歴の設定ではだけど。

「それならば、さぞワシを恨んでるじゃろつな」

「フクベ提督を？」

「ワシはユートピアコロニーを滅ぼし、火星を見捨てて逃げた」

フクベ提督の自責の念。

きつとフクベ提督もテンカワさんと同じように何度も悪夢を見たんだろつな。

罪を背負いたいと思つて地球に帰れば、

初めてチューリップを落とした英雄として祀り上げられて。

罪人であるのに英雄扱いされる。それが、どれだけ心を傷つけたかわからない。

もしかしたら、フクベ提督は断罪されに火星にやってきたのかもな。

「護るべき火星の民を見捨てて逃げたんじゃ。軽蔑するじゃろ？」

俺は何て答えればいいんだろつ。

火星にいた訳でもない。火星に思い入れがある訳でもない。

何て答えるべきなのか、俺には分かる訳がなかった。

「フクベ提督」

「・・・何じゃ？」

「俺は火星大戦の時には地球にいました。」

実際に被害にあった訳ではない俺には何も言えません」

「・・・そうか。じゃが、友がいたり、両親の墓があったのではないか？」

友達も両親の墓もありませんよ。

「え？ マエヤマさんって両親いないんですか？」

「ユ、ユリカ！ 話の邪魔しちゃ駄目だよ」

「で、でも・・・」

ユリカ嬢。 気楽ですね。

でも、今回は助かりました。

「俺は貴方の事をどうも思っていないせん。

ナデシコを見てれば当時に対処のしようがなかった事は分かりますから」

「・・・そうか」

「それと、謝りたいのなら、俺なんかではなく、実際に火星で苦しんだ方々に謝ってください」

原作では救出に失敗した火星の民が実際にいるんだ。

自分の思いを伝えたいのなら、彼らにすべきだと思う。

「フレサンジユ博士はワシを恨んでいるか？」

「もちろんよ。 断じて許せない」

「・・・そうか」

・・・容赦ないですね。 イネス女史。

「私はナデシコを設計した。 だから、DFやGBの事については熟知しているつもり。

でも、それとこれとはまったく関係ないわ」

戦力差と見捨てて逃げた事に関係はないという事だろう。

「軍が火星を見捨ててからの一年間・・・」

私の周りでも多くの者が死んでいった。それを私は間近で見ているの」

死を眼の前で実感する。

なんて辛い事だろう。なんて悲しい事だろう。

「そのファクターである貴方を私は絶対に許さない」

「・・・そうか」

全ての要因が軍にある訳ではない。

無論、一番悪いのは木連なのだ。

だが、その存在が知られない以上、全ての矛先が軍に向かうのも仕方がない事だと思う。

その中でも司令だったフクベ提督は尚更。

「と、言えば、満足してもらえるのかしら？」

「・・・え？」

先程までの睨んだような視線は緩まり、いつものイネス女史に戻った。

え？ 何だったんだ？ 今の。

「私は人とはここが違うの」

そう言って自分の胸を指差すイネス女史。

「あ。胸って意味じゃないわよ。心って意味」

「何で俺に向かって言うんですか？」

「面白そうだから」

いちいち俺で遊ばないで下さい。

「・・・私の胸は違いますか？」

「セ、セレスちゃん。気にしないでいいから」

「・・・あ、はい」

ほら。セレスちゃんまで反応しちゃう。

イネス女史。自重してください。

「イネスさん。教育に悪いですから」

「あら？ 別に私は悪くないじゃない」

「・・・分かりましたから、続きをどうぞ」

「じゃあ、そうさせてもらっわね」

勘弁してください。疲れますから。

ああ。セレス嬢に癒される。

「自分の周りで誰が死のうと何とも思わないわ。

何故か分からないけど、いつも心がすっぽりと空いてるのよ。何であつても埋まらない」

幼少時の記憶を失った事による弊害。

イネス女史は過去を探している。

見つけるまで心が満たされる事はない。

「だから、何があつても何とも思わない。おかしいでしょう？ で

も、それが私の平常」

そう告げるイネス女史はどこか寂しそうに見える。

原作ではアキト青年がイネス女史の心を満たしてあげていた。

それなら、今回はどうなんだろう？

また、テンカワさんがイネス女史の心を満たしてあげるのはだろうか？

「……………」

「……………」

テンカワさんに視線を向ける。

テンカワさんは苦々しい顔をしてイネス女子を見ていた。

今、テンカワさんは何を考え、何を思いあのような顔をしているんだろうか。

「それならば、何故、先程のような事を？」

「そう言っただけで欲しかったのではないですか？ 提督」

「ッ！？」

イネス女史の鋭い一言にフクベ提督が息を呑む。

「そうやって、火星の人間から罵声を浴びる事で自己満足してるの
でしょう？」

断罪された気になっているのでしょうか？」

「……………」

「私は貴方に恨み言を言う為に生きてるんじゃないの。」

正直言っただけで貴方なんてどうでもいいわ。ましてや、貴方の自己満
足に付き合うなんて論外ね」

「……………ああ。そうじゃ。ワシは断罪されたい。罵声を浴び、罪の
意識を和らげたいだけじゃ」

疲れた老人。

今のフクベ提督を見て、誰もがそう思うだろう。

それ程に彼の顔は苦悩に満ちていた。

「それを私に言っただけでどうして欲しいの？ 今度は慰めて欲しいの？ 貴方は悪くないですよって」

「フレサンジュ博士。言い過ぎですよ！」

「プロスさん。私には彼にそう言えるだけの権利があるの。黙っててもらえるかしら」

「・・・そ、それは・・・分かりました」

「勝手にやっただけで欲しいわ。私達は今を生きるだけで精一杯だった。今更、貴方が何と言おうと貴方に対する憎しみが失くなる訳じゃない」

「・・・」

「以上よ。後は助けられた火星の人達に訊いてきなさい。」

彼らなら貴方の自己満足に付き合ってくれるかもしれないわよ」

それだけ言っただけで興味なさそうに視線を逸らすイネス女史。

どうでもいいと言いつつ、イネス女史にフクベ提督を恨む気持ちがない訳ではない。

事実、イネス女史も苦しい一年間を味あわされたのだから。

「イネスさん」

「あら？ 弄くって欲しいの？」

「違います」

この人は・・・。

心配してるのに。

「大丈夫よ。心配しなくて」

「え？」

「顔に出てるわよ。だから、弄くられるの」

ハア・・・と呆れた眼で見えてくるイネス女史。
ええっと、俺にどうしろと？

「機影反応。・・・これは、地球連合軍所属クロツカスです」

何ともいえない空気の中、突然のルリ嬢からの報告。

その声に気付いて、誰もが迅速な対応を取る。

・・・ようやく火星脱出の時がやってくるんだな。

地球人にとって初めての戦艦でのボソンジャンプでの。

S I D E M I N A T O

・・・コウキ君の記憶が失われている。

それが切なくもあり、嬉しかった。

トラウマを抉るといふ行為。

とても許される事じゃない。

私は目的の為なら手段を選ばない酷い女だ。

きつと、記憶があればコウキ君もそう思ったに違いない。

コウキ君に嫌われる。

それが堪らなく怖かった。

だから、コウキ君が何も覚えていないという事に心から安堵した。

少なくとも、嫌われる事はないのだから。

・・・同時に愛する人が記憶を失うという事を喜ぶ自分に失望した。

なんて自分勝手な考え方なんだろうと思った。

コウキ君の思いを勝手に決め付けて、トラウマを抉って傷付けて、

拳句の果てにその行為をなかつた事にしようとしている。

なんて罪深い人間だろう。
それを隠す為にわざと明るく振舞ったりして。
私は・・・本当に嫌な女だ。

「ミナトさん。マエヤマさんにきちんと話したんですか？」

コウキ君があ那时的記憶を失っている。
それを聞いたメグミちゃんが私にそう訊いてくる。

「・・・話してないわ」

メグミちゃんに私の気持ち分かる訳ない！
私だって苦しんで、悩んで、それで出した答えなのに！

・・・そう言いたかった。
でも、コウキ君を傷つけた事は事実だから。
そんな事、言っても仕方なかった。

「きちんと話すべきだと思います。本当に愛しているのならば
ど」

愛してる。
愛してるからこそその苦渋の選択だった。
でも、コウキ君に嫌われたくないから。
本当の事を話す勇氣は持てなかった。
愛してるからやった事なのよ、なんてとてもじゃないけど言えない。

「マエヤマさんを傷付けて。私にはミナトさんの行動が理解できま
せん」

・・・理解できなくても構わない。

私が勝手にやった事だから。

でも、コウキ君には理解して欲しいと思った。
理解して、許して欲しい。

トラウマを決った事を許して欲しいと心から思った。

「・・・あ」

気付けば、メグミちゃんがコウキ君の所へ行っていた。
小声で何か言っている。

もしかして、あの事を話しているのだろうか。

・・・不安で仕方なかった。

「・・・」

メグミちゃんが戻ってくる。

私に視線を送る事なく、席へと座り、こちらを見る気はまるでなさ
そうだった。

「・・・コウキ君」

不安になってコウキ君を見詰める。

コウキ君はルリちゃんとラピスちゃんと話していて、こちらを見て
いない。

・・・それが余計に不安にさせた。
睨むように見てきているのなら、私に怒りという感情を浮かべている
という事。

白い眼で見てきているのなら、私に呆れという感情を浮かべている事。
笑顔で見てきているのなら、私に怒っていないという事を伝えてきて
いる。

怒られてもいい、呆れられてもいい。

それはまだ私に興味があり、私という存在を認めている証拠だから。でも、私を見ていないという事はどういう事か分からない。もしかしたら、メグミちゃんがあの手を話してなくて、単純に知らないから私を見ていないのかもしれない。

でも、あそこまで怒っているメグミちゃんがコウキ君に告げないなんて事があるのだろうか？

もし、告げていて、私に視線の一つも送ってくれないのなら……。それは……。興味を失ったという事。存在を否定しているという事。もし、そうだったのなら、なんて怖く、悲しい事だろう。

それなら、いつそ嫌って欲しい。嫌ってでもいいから、私という存在を認めていて欲しい。

興味を失われるというのは嫌われるよりずっと辛い。

コウキ君が今、私にどんな感情を浮かべているのか。

それが知りたくて堪らなかつた。

怖くて、でも、安心したくて、心のざわめきを抑えて、コウキ君の方へ一歩踏み出す。

でも……。

「……あ」

コウキ君がセレスちゃんを抱き上げていた。

抱き上げて、膝に座らせて、頭を撫でていた。

……。そこは私の居場所なのに……。

セレスちゃんに嫉妬する気持ちより、己の居場所の喪失感が胸に溢れた。

ああ。もうあそこは私の居場所じゃない。

それが何よりも悲しくて……。

気付けば自分の席に戻っていた。

「……良かったわね。コウキ君。セレスちゃん」

良かったわね。セレスちゃん。

居心地の良い居場所を手に入れられて。

良かったわね。コウキ君。

癒してくれる大切な子が傍にいてくれて。

・・・私は失ってばかりよ。

「・・・痛い」

胸が痛い。心が痛い。

今まで経験した事のないぐらいの痛みが胸を襲う。

・・・泣きたい。全力で泣いて、コウキ君に慰めて欲しい。

何があっただんですか？ って聞いて欲しい。

そうすれば、全てを打ち明かして、許しを請えた。

でも、幸せそうにしているセレスちゃんを見ると、そんな事は出来ない。

嫌われるのを恐れ、何にも出来ない私。

なんて臆病なんだろう。

・・・視界が潤んで仕方なかった。

・・・それを必死に隠す私が堪らなく惨めだった。

S I D E O U T

第十九話

「何故、クロツカスがここに？」

クロツカス。イネス女史の説得の説得力を与える証拠となるもの。さて、どうボソソジャンプまで話を持っていこうか。

「・・・照合終了。あれは間違いなく私達の目の前でチューリップに吸い込まれたクロツカスです」

「え？ だって、そんな事って・・・」

普通は信じられない。瞬間移動なんてSFの世界だからな。ま、この世界もSFの世界なんだけど。

「私達が火星までやってくるまでの掛かった時間。」

それより短い時間でクロツカスは火星に来た事になります」

「あの氷付き具合から言うと少なくとも一日二日じゃないわね」

ルリ嬢が上手く誘導している。このままイネスさんからボソソジャンプという言葉が出れば・・・。

「恐らく瞬間移動という奴だな」

「アツハツハ。アキト。こんな時にくだらない事を言ってるんじゃないかねえよ」

「ほお。ガイ。お前は不可能というものを信じるのか？」

「ナニイ!？」

「不可能を可能にするのがヒーローではなかったのか？」

「おお！ 俺はヒーローの心を忘れていた！ すまない！ アキト」

あのさ、ガイを説得したからって何にもなんないですよ。テンカワさん。

まあ、からかいたくなる気持ちは分かりますが。

「そう。クロツカスは瞬間移動したのよ。チューリップを通過して」

「瞬間移動だなんて、まさかぁ・・・」

「チューリップで移動するとボース粒子の増減が見られる」

「ええつと？」

「そこで私はこの瞬間移動をボソソジャンプと命名した」

「あの・・・イネスさん」

また自分の世界に入っちゃった。

誘導ミスか？ まあ、ボソソジャンプという言葉を導けたからいいか。

後は、こちらで上手く・・・。

「イネスさん」

「ん？ あら？ 何かしら？」

「ボソソジャンプという瞬間移動ですが、イネスさんはチューリップが媒介であると？」

「ええ。チューリップを通ると別のチューリップに移動すると考えているわ」

「それならば、あのチューリップを通れば別のチューリップに出れる訳ですね」

「まあ、結論からするとそうなるわね」

「それだと、気になる事があるんです」

「あら？ 何かしら？」

「俺達の眼の前でチューリップに吸い込まれたのはクロツカスとパングー、二つの戦艦です。」

それが、何故、一つしかないのですか？」

「・・・そうね。考えられる事は必ずしも同じチュールリップに繋がっている訳ではないという事ね」

「1、2、3という三つのチュールリップがあつて、1から必ず2に行くとは限らないという事です」

3、もしくはそれら二つでもなく、新しい4のチュールリップに行く可能性もあると」

「ええ。少なくともそちらの方が可能性が高いわ。どうしてそんな事を気にするの？」

「クロツカスとパンジーを飛ばしたチュールリップはナデシコが破壊してしまいましたからね」

同じだったら、困るじゃないですか」

「そうね。片方が破壊されたら飛べなくなるなんて事はない筈。恐らくそういう事でしょう」

「それなら、チュールリップを脱出方法として使える可能性もある訳ですね」

「可能性としてはね」

これで周りにボソソジャンプとチュールリップの関係性を覚えさせた。チュールリップによる脱出方法があるという事も。

「でも、どこに出るかは分からないのよ」

もし、あのチュールリップが敵の本拠地にあるチュールリップに繋がつてたらどうするのよ？」

「それはまた後で考えてみましょう」

万が一にはその脱出方法があるという事だけ分かればいいです」

「ま、本当に最終手段ね。分の悪い賭けは嫌いじゃないけど、死にたくないもの」

「もちろんです」

死ぬ為にチューリップに行くのではない。
生きる為にチューリップに行くのだ。

「それでは、万が一に備えて、クロツカス进行操作できるようにしておきませんか？」

「へえ。クロツカスを何に使うの？」

何ですか？ そのニヤニヤした笑みは。

「もし、俺達がチューリップを通るという選択をした時、俺達は無防備になります。

そこでクロツカスを囷に使用すれば危険を逸らせるのではないかと「クロツカスをねえ。でも、どうやって操作するの？」

「ワシが残る」

「その必要はありません。提督」

残ろうだなんて言わせないっての。

わざわざ犠牲を出すのは目覚めが悪いですからね。

「ナデシコ程に高性能なPCを搭載している訳ではないですが、クロツカスとしてPCで制御している筈。違いますか？ 提督」

「・・・ああ。その通りじゃ」

「それならば、俺達オペレーター組の出番ですよ。

複雑な事は出来ませんが、ナデシコの後を追って、壁にする事ぐらいは出来ます。

ね？ ルリちゃん」

「ッ！・・・ええ。可能です」

俺の意図に気付いて笑みを浮かべるルリちゃん。

こうやって前もって言うっておけば、そういうソフトを組んでおいて

も怪しまれない。
いきなりクロツカスを動かしたら変に思われるからね。

「イネスさん。俺達が瞬間移動できない可能性とかはありますか？」
「ボソンジャンプよ。ちゃんと覚えなさい。そうね。絶対に出来る
という保証はないわ」

「何故ですか？」
「そういうものには何かしらのキーとなるものが必要だと思っから
よ。」

木星蜥蜴の持ち物であるチューリップ。それなら、木星蜥蜴のみ
が使えるのかもしれない」

「地球になくて木星蜥蜴にあるものですか・・・」
「それはディストーションフィールドではないでしょうか？」

お。ルリちゃん。素晴らしい介入の仕方だ。

「ディストーションフィールド。時空歪曲場の事ね」

「火星降下前に戦った敵の艦隊はどの艦隊もDFを纏っていました。
これは木星蜥蜴の戦艦がDFを標準装備としているからではない
でしょうか？」

「それなら、確かに地球になくて木星蜥蜴にあるものね」

「え？ だって、ナデシコは地球の」
「違えんだよ」

「え？」

メグミさんの疑問にまさかのスバル嬢が答えた。

確かにパイロット組はナデシコの始まりを知ってるからなあ。
でも、スバル嬢とは思わなかった。

「ナデシコは木星蜥蜴の戦艦を基に作ってたんだ。だから、地球唯一

のDFを纏える戦艦なんだよ」

「その通りよ。ナデシコは私が設計した戦艦。そして、その基としたのは木星蜥蜴の戦艦。」

DFやGBは元々木星蜥蜴の技術なのよ。私達地球側の技術じゃないの」

実際は遺跡の技術なんだけどね。」

「それじゃあ、私達もボソソジャンプでしたっけ？　が出来るって事ですか？」

「可能性としてはね。艦長」

ユリカ嬢。ボソソジャンプだけが俺達の取れる脱出方法ですよ。

「なあ、言ってる事理解したか？」

「全然だよお。いやあ。コウキって頭良いよね」

「・・・私達は戦う事しか出来ない生き物なのよ」

「最近、ギャグモードのイズミ出てこないよね」

「忙しいんだろう？」

「いや。意味わかんないから」

ええつと、周りにはあんまり内容を理解してないみたいだ。

ま、まあ、後でなぜなにナデシコが始まるだろう。イネス女史は説明大好きだし。

それで理解してもらえればいいや。

ホワイトボードは・・・自分で用意するでしょ。

「どちらにしろ、クロツカスを調べてみるべきでしょう。」

我々の知りえない情報を得られるかもしれません」

結局、プロスさんのこの一言でクロツカスの調査に向かう事となった。

調査員はイネスさん、テンカワさん、そして、俺。

何故、俺なのは分からないが、イネスさんの要望らしい。

テンカワさんにはエステバリスを操縦してもらおうだ。

俺でも良いと思うんだけど、艦長を始めとした多くの人間から拒否された。

まあ、心配されてるんだろうという事で納得しよう。

ちなみに、俺はルリ嬢から組み込まれたソフトが保存されてメモリを渡されてある。

流石はルリ嬢。まったく不備がない。俺より凄いかもしれないな。やっぱり。

「さて、コウキ君、アキト君、聞きたい事があるんだけど、いいかしら?」

「何ですか?」

イネス女史が聞きたい事? 何だろう?

「貴方達、何を知ってるの?」

「・・・え?」

鋭い目付きで見ってくるイネス女史。

俺は良く分からなかったが、テンカワさんの目付きも鋭くなる。分かってないのは俺だけだ。

「どつという意味だろうか?」

「そのままよ。私が気付かないとでも思ってるの?」

気付かない？

「貴方達はナデシコをチューリップを使って脱出させるつもり。そうなるよう私にボソソジャンプを説明させた。違う？」

・・・言葉が出なかった。

うまく誘導してやろうなんて思ってた自分はなんて馬鹿なんだろうって思い知った。

イネス女史はこちらの意図を理解した上でこちらに乗ってきたのだ。その真意を確かめる為に俺をこの調査団の一員にして。

「・・・何故、俺に訊く？」

「貴方はコウキ君やホシノ・ルリが私に問いかけている時、当たり前のような顔をしていたわ。」

「周りは話に付いて来れずに困惑気味だったのに」

「・・・表情に出していないだけかもしれないぞ？」

「まさか。無表情だからこそちよつとした違いに気付きやすいのよ。残念だけど、周りは誤魔化せても私は誤魔化されないわ」

「・・・・・・・・」

・・・完全敗北だな。

イネス女史を利用しようなんて事が間違ってた。

「イネスさん」

「あら？ コウキ君。白状する気になった？」

「その前に、俺達が知っている事を知ってどうしたいんですか？」

イネス女史の目的。

それを知らずに情報を明かすのは危険過ぎる。

「別になんともしないわ」

「・・・え？」

「私は知的好奇心を満たしたいだけ。」

人の考えに意を唱えるつもりもなければ、賛同するつもりもないもの」

あまりにもイネス女史らしい言葉に拍子抜けした。

はあ・・・と思わず溜息が吐いてしまったのも仕方ないだろう。

「・・・テンカワさん」

「ああ。そうだな。知的好奇心を満たしてやるぐらいの情報は渡すべきだ。」

何より火星からの脱出はイネスさんの力を借りないと出来ない」

正論だった。

ナデシコの設計者であり、

科学者としての優秀さを持つイネス女史だからこそ言葉に説得力が付く。

俺達が何を言おうと推測でしかないと切り捨てられるだろう。

「何をコソコソと話してるのよ。質問に答えなさい」

「ええっと、それなりに誤魔化せばいいですか？」

「ああ。俺は誤魔化しは得意ではないのでな。お前に任せよう」

「分かりました。あ・・・テンカワさんの両親の話を出しても構いませんか？」

「仕方あるまい。それに俺にとっては過去の話だ」

「ありがとうございます」

テンカワさんとの内緒の相談を終え、イネス女史の方へ振り返る。

イネス女史はそれを見て、ニヤツと笑った。

「イネスさん。貴方はテンカワ博士をご存知ですか？」

「もちろんよ。ボソソジャンプの第一人者。」

確かクーデターが何かに巻き込まれてお亡くなりになられたのよね」

「ええ。テンカワという苗字で気付くでしょう？」

「アキト君はテンカワ博士の息子さんって事？」

「その通りです。テンカワさんの両親はボソソジャンプについての資料を纏めており、

テンカワさんは両親からそのファイルを預けられたそうです」

「へえ。それで？」

「今まで嚴重なロックが掛かってましてね。」

ナデシコに搭乗してから、俺やルリちゃんて協力してロックを解除したんですよ」

「そうしたら、ボソソジャンプについて書かれていたと」

「ええ。始めは冗談だと思っていたんです。まさか瞬間移動なんてつて。」

でも、さつきクロツカスを見たじゃないですか。

あれでボソソジャンプに現実味が増してきましたね。脱出するにはこれしかないと」

「へえ。穴ありまくりだけど、信じてあげるわ。それで？」

・・・言葉に棘がありますね。

むしろ、そこまで言うておいて信じるなんて言うのはおかしいと思います。

「ナデシコの設計者であるイネスさん。」

貴方ならもしかしたらボソソジャンプに携わっていたかもしれないと思ひまして」

「あら？ どうして、そういう繋がりが出てくるの？」

「ナデシコは木星蜥蜴の戦艦からのフィードバックじゃないんでしょ？」

「どういう意味？」

「正しくは極冠遺跡からのフィードバック。貴方程に聡明ならば気付いている筈です。」

木星蜥蜴の連中も遺跡の知識を活用しているに過ぎないと

「・・・そこまで貴方達は分かってるのね。正直、驚いたわ」

「ありがとうございます。そして、彼らがボソソジャンプを利用できると確信したイネスさん。」

貴方がナデシコを設計する時にボソソジャンプを調べない訳がないと思いました」

「へえ。やはり貴方は興味深いわ。私の心理を読もうとするなんて」

「ま、まあ、俺の事は良いんですよ。」

イネスさんだつてとつくに気付いていたでしょう？ DFが鍵だつて」

ま、本当は遺跡にアクセスできる人間がいないと駄目なだけけど。まさかイネスさんも自分がその鍵の一人だとは思いませんだろっな。

「当たり前じゃない。私はそこまで馬鹿じゃないわ。」

DFを高出力できちんと安定させる事が出来れば、理論上は可能よ」

「それを聞いて安心しました。イネスさん。」

その上で、この危機的状況から脱出するにはどうすればいいか分かりますよね？」

「チューリップを利用したボソソジャンプでの脱出。」

でも、危険から脱出できるとは限らないわよ。より危険になる事もありえる」

「ですが、他に方法はありませんよ。じきに再度木星蜥蜴が襲撃してくるでしょう」

「ま、そうでしょうね」

呆れるように溜息を吐くイネス女史。

うん。どうにか話の矛先を逸らせたか？

「そう。とりあえず、納得してあげるわ。その代わり……」
「その代わり？」

な、何だ？ 嫌な予感がするぞ。

「そのテンカワ博士が残したっていうファイルを私にも見せなさい」

「……」

「あら？ どうかしたの？」

「……やばい。ミスった。まずい。」

そんなファイル元々ないのに……。

やはりイネスさんの方が何枚も上手だ。

「ま、まあ、気が向いたらですね。こちらの切り札ですから」

「ふふっ。ま、そういう事にしておきましょう」

ああ。更に怪しまれた。

……テンカワさん。申し訳ない。

「どうにか誤魔化せたようだな？」

「どちらかというと追い込まれましたが……」

「ま、どうにか誤魔化せ」

「……もしかして、また俺の仕事ですか？」

「ああ。俺は専門外だな。俺の仕事は・・・」

バンツ！

「こつこついう荒事だ」

一瞬で懐から銃を取り出し、天井に張り付くバツタを破壊するテンカワさん。

ハハハ。俺ってば何にも気付かなかつたし。

「助かりました。テンカワさん」

「なに。持ちつ持たれつだ。これぐらいの事は任せてもらおう」

「は、はあ・・・」

出来ればこちらの方も少し手伝って欲しいんですけど。

「素晴らしい腕前ね」

「・・・鍛えてましたから」

「あら？ おかしいわね。」

貴方の経歴は見せてもらったけど、今の貴方とはかけ離れすぎてるわよ」

「・・・昔は昔。今は今ですよ」

「ふん。突如として頭角を現した凄腕パイロット。貴方は誰なんでしょうね？」

・・・鋭過ぎです。イネス女史。

まあ、怪しまない方が変なんですけどね。

とてもじゃないけど、テンカワさんがこれだけのパイロットになるには経歴が不資格すぎる。

軍学校にいた訳でもないし、特別な役職にいた訳でもない。

たかがテストパイロットの人間がこうまで凄腕になれるのもおかしい。

そもそも何もしていなかった人間がいきなりテストパイロットになったのもおかしい。

矛盾しまくりの人間なのだ。テンカワさんは。

ナデシコが陽気な人間の集まりだから訝しい眼で見られないが、第三者からしてみれば怪しい事この上ないだろう。

「・・・俺は俺だ。それ以外の何ものでもない」

「ま、いいでしょう。それで？ ナデシコにレールカノンを付けたのは貴方達の要望？」

「え？ レールカノンって元から・・・」

「違うわよ。私が設計した時点ではレールカノンなんて付いてなかったもの」

え？ それじゃあ・・・。

「あら？ アキト君なの？」

あ。俺の視線が答えになっちまったのか？

・・・しまった。すいません。テンカワさん。

「その他が設計からまるで変わってないのにレールカノンだけ後付されている。」

これは明らかに第三者からの要望で取り付けられたものよね」

どこまで鋭いんですか？ イネス女史。

それぐらいなら気付かなくてもおかしくないのに。

「イネスさんの言う通りだ。俺がテストパイロット時代に責任者に

要望した」

「へえ。それはナデシコが前方にしか対応できない出来損ないの実験艦だったから？」

や、やっぱり実験艦だったのか！？

ど、道理で穴が目立つ訳だよ。

「現状ではナデシコ以上の戦艦はないがな。戦場では全方位から対応する必要がある。」

前方特化した戦艦では成す術がない」

「へえ。それをただの一般人であった貴方が言うんだ」

「・・・気付いたから忠告した。ただそれだけだ」

「ふん。そう」

ニヤニヤ笑顔が止まらないイネス女史。

この人絶対に虐めるのが好きだよ。

あ。弄るのが大好きって自分で言ってたな。

「はあ・・・」

「あら？ 溜息なんて付いちや駄目よ。幸せが逃げるもの」

昔にもそう言われた気がするな。

「ミナトさんと同じ事を言っただすね」

「あら？ そうだったの。そういえば、彼女、泣いてたわね」

「・・・え？」

「・・・ミナトさんが泣いてた？」

「・・・どうして？」

「後ろからだから正確には分からないけど。肩を震わせてたわ」
「・・・そ、そんな」

俺はそんな事にも気付いてあげられなかった。
こんなんじゃないか！

「ま、戻ったらすぐに彼女の所に行ってあげるのね」
「え、ええ」

力が抜けて呆然としてしまった。
・・・早く戻りたいと思った。

「あら。着いたみたいよ。ここがクロツカスのブリッジね」

ブリッジの扉を開いて、それぞれが目的の場所へ移動する。
イネスさんはクロツカスのログデータを確認に。
テンカワさんは周囲を警戒する為にあちらこちらに。
そして、俺はクロツカスを制御するPCの場所へ。

「へえ。チューリップに飲み込まれてからすぐに今と同じ景色にな
った。やはり瞬間移動なのね」

正しくは時空間移動ですが。

「マエヤマ」

「ええ。既にクロツカスのソフトは書き換えました。襲撃後に戻っ
てきたら時間が足りませんから」

「ああ。そうだな。そろそろ」

ドンッ！ ガタンッ！

「キヤツ！」

クロツカスが揺れる。

木星蜥蜴の襲撃だろつ。

それにしても、イネスさん。

意外と可愛い悲鳴ですね。

「テンカワさん！」

「ああ。ナデシコと連絡を取る」

クロツカスからナデシコのブリッジへと通信を送る。

「こちらクロツカスだ。状況を」

『ア、アクト！ 木星蜥蜴が襲ってきたの！ 迎撃中だけど、どうすればいい！？』

「これよりクロツカスでナデシコを援護する。チューリップへと進路を取れ」

『で、でも！』

「・・・俺を信じる。ユリカ」

『ツ！？ ユリカって・・・初めて呼ばれた』

「いいから。行け！ すぐに戻る」

『わ、分かったわ！ ナデシコ。チューリップに進路を取ります！』

『艦長！ それは認められません。』

貴方はネルガル重工の利益に反しないように、

最大限努力するという契約に違反しようとしています』

『プロスさん！』

お。出るか。あの名言が。

「俺達も行くぞ。後はルリちゃんが組んだソフトがやってくれる」
「え、ええ」

そ、そんな事より……。

『御自分が』

プツンッ！

「き、聞かせるよお！」

「ん？ 何の話だ？」

「……なんでもないですよ」

「何を拗ねている。行くぞ！」

急いでブリッジから飛び出す俺達。

ああ……。あれを見逃すとか在り得ないでしょ。

まさか、クロツカスのブリッジで聞く事になるとは思ってなかったけど。

「これも想定内という事かしら？」

少し辛そうに走るイネスさん。

時間がないとの事で俺がおんぶする事にした。

俺の異常な身体能力もこういう時は役に立つ訳だ。

テンカワさんも知ってたから任せてくれたが、

あまり背の変わらないイネスさんをおんぶしているのは変な光景だろっ。

イネスさんも最初は啞然としてたし。

でも、すぐに平常心になってこんな質問してくるから流石としか言いようがない。

「ええ。木星蜥蜴が襲ってくる事は分かってた事でしょう?」

「違うわよ。貴方達がクロツカスにいる時に敵が襲ってくる事がよ」

「さあ? 偶然でしょう」

「ふふつ。そういう事にしておいてあげるわ」

絶対に何か感付いてるよ。この人。

「急げ!」

先にエステバリスのコクピットに乗ったテンカワさんがそう急かす。こっちは人一人をおんぶしてるのに!

そう悪態を付きたくても別に重く感じないから唯の言い訳に過ぎない。

テンカワさんもそれを承知しているのだ。言い訳は見苦しいよな。

「はい!」

エステバリスの開かれた手の平に飛び乗る。

サツとイネスさんを降ろして、胸の中に収めた。

「ちよ、ちよっと、コウキ君!」

「時間がないので急ぐと思います。」

かなりのGが身体を襲いますので、しっかりと掴まっててください
い

「・・・はあ。怒られても知らないわよ」

「き、緊急事態だから仕方ありませんよ」

テンカワさんが乗るエステバリスのメインカメラがこちらを向く。

大丈夫という意味を込めて頷くとエステバリスが勢い良く空を舞っ

た。

「……………う、うお……………」

「……………き、きついわね……………」

話せる貴方が凄いです。

俺は一杯一杯。

如何にいままで重力緩和に依存してたか思い知らされた。

……………もうちよつと慣れるべきだよな。

「着いたぞ！」

パツと開ける視界。

今までは一応エステバリスの手で覆ってもらったから、状況に気付けなかった。

ま、ギョツと眼を瞑ってたからどつちにしろ無理なんだろうけど。

「……………はあ。窒息するかと思ったわ。強く抱き締めすぎよ」

「あ。すみません」

無意識にイネス女史を強く抱き締めていたみたいだ。

……………良かったな。下手すると身体を潰していたかもしれん。

無意識だと加減があまり出来ないから心配だったんだ。

……………助かったという所かな。

「急いでブリッジに行くぞ」

テンカワさんも意外とマイペース。

颯爽とブリッジへ向かうテンカワさんを俺はまたイネス女史をおんぶした状態で追いかけた。

「すいませんが、ブリッジの前で降ろしますからね」
「え？ いいじゃない。別に」
「恋人の前にこんな格好で出れる訳ないでしょうが」
「ふふっ。それもそうね」

背中から伝わる揺れ。

これは笑ってやがるな。

「急ぎますからしゃべっていると舌噛みますよ」
「じゃ、黙ってるわ」

そうしてください。

それから、しばらく走って、ブリッジへと辿り着いた。

「降ろしますからね」
「分かってるわよ」

イネス女史を降ろして、ブリッジへ入る。

「どうなりました？」

先に入っていたテンカワさんに訊ねる。

「問題ない。無事にチューリップへ突入できそうだ」
「何の犠牲もなく突入できましたね」
「ああ。後は・・・」

俺達のイメージ次第だな。

ジャンパーは俺、テンカワさん、ユリカ嬢、イネスさんの四人。

実は火星からの救民の中にもジャンパーがいるかもしれないけど、気にしてもどうしようもないから省略する。

・・・どうにかしてイメージを誘導したいけど、どうしようかな。

「・・・祈りましょう。地球へ帰還できる事を」

現実主義のルリ嬢からの言葉。

でも、この言葉を聞いた誰もが祈る。

地球へ帰れるようにと。

もちろん、ユリカ嬢も。

「祈ってもどうしようもないものはどうしようもないのよ」

「ま、イネスさん。神に祈らず、俺達を信じてください。必ず地球へ辿り着くと」

「・・・そうね。偶には他人を信じてみようかしら」

後は、俺がイメージするだけだ。

八カ月後の月軌道上を。

・・・明確なイメージは出来ないけど。

とりあえず、月を思い浮かべればいいよな。

こうして、ナデシコはボソソジャンプに成功した。

辿り着くのは月軌道上。

火星の民の救出。

ガイの生存。

サツキミドリコロニーの全滅の回避。

歴史は大きく改変されている。

もう原作知識も役に立たないかもな。

慎重に行動しないと。

協力者と共に・・・。

第十九話（後書き）

第一部完。

といった所でしょうか。

ま、一区切りかなといった感じですが。

火星到達までで一段落としたい気持ちの問題ですね。
ここまで駆け足でしたから。

結構、大変でした。

色々と問題を抱えたままの主人公。

うまく解決できるようにしたいですね。

PS・すこし更新ペースが下がるかもしれません。

第二十話（前書き）

第二部開始。

これからも応援御願ひします。

第二十話

「・・・ああ。なるほど」

展望室にて、状況を確認。

俺がここにいるって事は無事に飛べた訳か。

ん？・・・テンカワさん。流石はラブコメ主人公ですね。

ああまで性格変わってもこういう所は変わらない。

原作通りテンカワさんにイネス女史とユリカ嬢が抱き付きながら眠っていらつしやいます。

あれですね。両手に花ですね。

ま、ユリカ嬢とイネス女史は貴方に任せるとしましょう。

俺は、っと。

「ブリッジ。ルリちゃん」

『はい。コウキさん。無事ですか？』

「うん。自分もジャンパーなんだなって自覚した」

『そうですね』

「とりあえず俺もブリッジ向かうわ」

『了解しました』

おし。ブリッジに・・・。

「・・・誰？」

隣に寝ている知らない女性。

ナデシコクルーにはいなかったよね。

って事は火星の救民の中にいたジャンパーという訳か。

ま、この人もテンカワさんに任せよう。

貴方なら出来ます。

ひとまず俺はブリッジへと向かうとしましょうか。

あれかな？ またGBぶっ放すのかな？

「おはようございます」

「あ。うん。おはよう？でいいのかな？」

「恐らく」

「……コウキ。おはよう」

「……コウキさん。おはようございます」

うん。オペレーター三人娘は起きてたね。

でも、何で正式なジャンパーより先に眼を覚ましてるんだろう？

そのあたりが謎だ。

「他の皆はまだ起きない？」

「起こしますか？」

「じゃあ、あの変な顔が見れるのかな？」

笑いながら言ってみる。

「な、そ、そんな事はしません」

照れながら拗ねるルリ嬢。

こつこつ所を見るとやっぱりまだ子供だなと思う。

背伸びしなくていいんだぞって思った。

「ところで、気付いた？」

「ええ。・・・セレス。周囲の映像を。・・・ジャンパーが他にもいましたね」

セレス嬢に誤魔化しの為の指示を出しつつ、内緒話。

「うん。もしかしたら彼女以外にもいるかもしれない。

必ずしもあそこに出るとは限らないと思うから」

「そうですね。可能性としては低くないです。ですが、現状ではどうしようも」

「どうするの？ ネルガル側から眼を付けられなくなければ映像を消すしかないし、

あえて眼を付けられるならそのままにするし」

「・・・そうですね。ここはそのままにしておきましょう」

「やっぱりボソソジャンプの事は隠さないんだ？」

「隠した所でいつかは知る事ですから。あ、映像ですが、彼女抜き
の映像に差し替えておきます」

「そうだね。艦長、博士、リーダーパイロット、事情を知らない少女。

これだったら確実に彼女が選ばれるよね」

「ええ。今回はアキトさんの位置が位置ですから。ですが、コウキ
さん、貴方もいたんですよ？」

「・・・あ」

「コウキさんも抜いておきます。火星生まれじゃない貴方がいたら
理論が崩れますから」

「ええっと、御願ひします」

「意外と抜けてるんですよね。コウキさんは」

二度も言われました。ルリ嬢に。

前回は呆れ、今回は笑顔付きで。

いや。こうまで変わるのなら始めから事情を話せば良かった。ま、実際にはそういう訳にはいかなかったんだけど、そう思っただけでも仕方ないでしょ。

「私達としてはアキトさんが呼ばれるようにしたいんですよ」

「そうだね。そっちの方が都合が良い」

「・・・あの、ルリさん、全方位で囲まれています」

ルリ嬢と話しているとセレス嬢の声が聞こえてくる。

あ。しっかりと仕事してましたね。偉い。

「ひとまずDFを発動して下さい」

「・・・はい」

ルリ嬢もラピス嬢もこっちにいて、今はセレス嬢だけオペレーター席。

「あれかい？ セレスちゃんもようやくルリちゃんから合格がもらえたよ」

「ええ。きちんと訓練の成果が出てましたよ」

「そっか。それは良かった」

成果が出ていたのは嬉しいかな。

俺がこの世界にやって来た意味が増えたって感じ。

「今回はどうするの？ GB」

「撃ちましようか？」

「ええっと、人的被害がないコースで」

「了解しました。ユリカさんには怒られてもらいましょう」

ニヤツとした笑み。
怖いよ、ルリ嬢。小悪魔的笑みだったよ。

「とりあえず、じゃ、エマーゼンシーコールかなんかで眼を覚ましてもらおうか。」

ブリッジは俺が起こすから」

「はい。それじゃあ、後はユリカさんの指揮に従います」

「・・・あんまり手荒な事は駄目だよ」

「心得てます」

オペレーター席に向かうルリ嬢とラピス嬢。

さてっと、俺は起こしに回ろうか。

「提督。提督。起きてください」

揺すってみる・・・動かない。

肩を叩いてみる・・・動かない。

老体に鞭打つのはやめよう。スルーだ。

「ゴートさん」

「・・・む。どうなった？」

「無事に抜けました。月軌道上ですよ」

「・・・そうか。了解した」

ゴートさんは冷静ですね。

寝起きでよくぞそこまで。

「プロスさん」

「・・・」

この人は俺の力では起こせない気がする。
うん。スルーだ。

「起きろお」

「……ん。んん。もう朝あ？」

「寝ぼけてんじゃねえ」

「うわ！ ヒドッ。扱いヒドッ」

「とりあえず他のパイロット起こしてくれるか？」

「え？ あ、うん。分かったよ」

ヒカルを起こして……次は。

「グラビティブラスト発射します」

ご愁傷様です。艦長。

「ミナトさん。ミナトさん」

メグミさんはガイが起こすだろう。

そこまで無粋じゃないさ。

……あ。副長忘れてた。

ま、まあ、ゴートさんあたりが起こしてくれるでしょ。

「……」

なかなか起きないな。

「ミナトさん。起きてください」

「……」

・・・そういえば、イネス女史が泣いてたつて。

「・・・コウキ・・・君？」

「何で俺に訊くんですか？」

「え？ う、ううん。なんでもないわよ」

ミナトさんも寝起きは弱いと。

「大丈夫ですか？」

「え、ええ。コウキ君は？」

「ま、それなりつて所です。後で時間を頂けますか？」

「・・・ええ」

最後にボソツと返事をもらえた。

本当にどうしちゃったんだろう？ ミナトさん。

「ああ。何をしているんですか!？」

「艦長の指示です」

「か、艦長おおお！」

プロスさん。

苦労をおかけします。

ですが、これは必要な事なのです。

こうしてユリカ嬢に周囲を確認しないで主砲をぶちかましては駄目ですよと教えて・・・。

「何を考えているか大体分かりますが、ユリカさんは気にもしませんよ」

・・・さいですか。

さてつと、俺は俺の席に付いて。
いつものようにレールカノンで……。

「あれ？ おかしいな？ 身体が震える」

コンソールに置かれた手が勝手に震えだした。

「……コウキさん。現在、貴方のレールカノンの操作権はこちらにあります。」

「こちらは私達に任せて、コウキさんは下がっててください」

「……え？」

「現状でも充分に対応できますので。コウキさんは副提督の席へ」

「……分かった」

「……役立たず扱いされた気がした。」

いや、事実、役立たずなんだろう。

二回も暴走しちゃったし。

「……大丈夫かね？」

あ。起きてましたか。提督。

「……ちよつと堪えましたね。俺じゃ何にも出来ないって」

「まだ君には先がある。諦めずに立ち上がる事が出来る」

「……そうですか。提督はこれからどうするんですか？」

「……そうじゃな。おそらく、ナデシコからは降ろされるだろう」

「勇退といった所ですか？ 今度こそ真正正銘の」

「……うむ。ナデシコは確かに火星の民を救出しているからのお。」

ワシの名をまた利用する筈じゃ」

「……それでフクベ提督は？」

「さて、ワシには分からん。だが、これから、火星の民の所へ行ってこようと思う」

「それは殺されても構わないという意味ですか？」

「どうじゃろうな。殺されて楽になりたいのかもしれない」

「俺には彼らの気持ちは分かりませんから。提督になさりたいようになさってください」

「・・・うむ。そうさせてもらおう」

どこか表情が和らいでる気がする。

少しは気持ちが楽になったのかな？

仕方ないといえど、逃げた事は事実だからなあ。

罪悪感は凄まじいか。

「お、遅れましたあ・・・」

「艦長！」

「す、すみません・・・」

「貴方は何をしたのか分かっているのですか！？ 連合軍に向けて主砲を放つなんて」

「すみません。すみません」

「艦長！ いいですか、貴方は」

「あの、プロスさん、取りあえず、この状況から脱出してからにしましょう」

「・・・む。そうですね。艦長、減俸は覚悟しててください」

「ふえくん。ユリカは悪くないのに」

「艦長！」

「は、はい！」

二人のやり取りもほぼ漫才化してるよな。

プロスさんは最早身体を張っているよ。

身と胃をボロボロにしての全力の突っ込み。

いやはや。お笑い人として尊敬しますな。

「パ、パイロットの皆さんは出撃してください！」

未だにちよつとボーっとしているパイロットに指示が入る。

彼女達もプロだ。指示さえ入れれば、すぐさま顔付きが変わる。

「……ちよつと席を外します」

俺はここにいっても意味ないしな。

ちよつと気になる事もあるし、あの少女の様子を見に行こうか。

「……わかった。ワシが言っておこう」

「すみません。御願います」

提督の許可を貰って、騒がしいブリッジからそそくさと抜け出す。

はぁ……。さっき実感したよ。本当にトラウマ抱えてるんだな。

勝手に手が震えるとか。初めての経験だからどうすればいいかわからん。

「いらつしゃい」

展望室にいくとイネス女史が余裕そうに出迎えてくれました。

「何でこんな所にいるんですか？」

「あら？ それはこっちの台詞よ」

白々しい質問に普通に返された。

ああ。やっぱりイネス女史の方が上手だ。

「いや。ここに艦長やイネスさんがいたので気になって」
「心配してくれたのかしら？」

「いえ。あ、まあ、心配したのはもちろんですが」

「いきなり否定されると悲しいわね」

「ええっと、すみません」

「で？ どうして？」

「艦長もイネスさんもブリッジにいたじゃないですか。」

「いつの間ここに移動したのかなと思ひまして」

「さあ？」

「さあつて。珍しいですね。イネスさんなら説明してくれるんじゃないですか？」

「知らない間にここにいたんだもの。私にだって分からないわ」

ま、流石に分からないよな。

「それで、わざわざ説明しに来てくれたの？」

「俺だって知りませんよ」

「あら？ そうなの？」

その視線は疑ってるな？

ニヤニヤしながらよくもまあ。

「ええ。あれですか？ 遺跡の神秘に触れてイネスさんまで瞬間移動を覚えたんですか？」

「質の悪い小説じゃないんだから。人間が瞬間移動なんて出来る訳ないでしょ？」

出来るんですよ。キーアイテムさえあれば。

「イネスさんはとりあえずブリッジにいらしてください」

「分かったわ。もう少しここでゆっくりしてたかったんだけど」

「色々といネスさんの説明を待っている人がいますよ」

「そう？　じゃ、行ってきましょう」

「はい。行ってらっしゃい」

イネス女史が展望室から出て行く。

ま、そのままブリッジへ行ってくれるだろう。

さて……。

「……寝てんな」

あれだけの大きな音でも起きないとは。

ある意味、ユリカ嬢以上に図太いな。ユリカ嬢ですら飛び起きたのに。

「……可愛いんだらうけど、頬とか細いな。彼女も苦しい生活を送ってたって事か」

こういう姿を見ていると胸が痛む。

その気になれば、俺がボソソジャンプを繰り返す事で彼女達を地球へと連れてこれた。

でも、俺は保身を考えてそれをしなかった。

知っていて、どうにかする手段があるのに……。

本当に最近は鬱になる事が多い。

……このネガティブ思考どうにかなんないかな？

ま、どうにかなんないのは分かってたけど。

「お〜い」

「……ん」

肩を揺すってみる・・・起きないな。
でも、反応はあった。

「おい」

「何よお。うるさいわね。静かに寝かせて」
「・・・・・・・・」

・・・呆然としちまった。
おい。それはないんじゃないの？

「・・・・・・・・え？」「どこだよ？」

・・・とりあえずきちんと起こした。
眠ってて気付かなかったけど、目付き鋭いね。この子。

「ここはナデシコの展望室」

「はあ？　ってか、貴方誰よ？」

「ナデシコ補佐役のマエヤマ・コウキ。君は？」

「私の名前を何で貴方なんかには教えなくちゃいけないよ」

・・・酷い我が儘。ユリカ嬢を凌ぐかもしれん。

「ええつと、君は火星にいた人だよな？」

「そうよ。それがなんなのよ？」

敵意むき出し、ああ、なんか慣れたよ。
主にテンカワさんとルリちゃんです。

「どうしてこんな所にいるの？」

「わ、私が聞きたいわよお！」

ど、怒鳴るな。耳が痛い。

「ま、いいや。とりあえず、案内するよ。火星の人達ってどこにいるの?」

「色んな部屋に押し込まれてるわ。私はリラクゼーションルーム」

「あ。あそこか。付いてきなよ」

「嫌」

嫌っておい。

「場所分かるの?」

「わかんない。でも、嫌」

「はぁ……」

我が仮女王ここに来たり。

「それでいいならいいけど。誰も案内してくれないよ?」

「……」

わ。黙り込んだ。ベタなお方だ。

「まだナデシコの事わかんないでしょ? 意地張ってないでさ」

「ふ、ふんつ。意地なんか張ってないわよ」

「ほら。案内するから」

「し、仕方ないわね。案内されてあげるわ」

はぁ……。前途多難。

「……」

「……………」

そして、無言。どうにかして。

「……ねえ」

「ん？ 何？」

お。声掛けられた。

「今、この船ってどこにいるの？」

「ああ。月まで来たよ。いやあ。皆して寝過ぎだよね」

「ええ！？」

くつくつく。意外と楽しめるか？

「う、嘔吐かないですよ！ だって、まだ火星から……」

火星の人達に状況を説明している暇なんてなかったしな。誰もボソソジャンプの事は知らないか。

「いいかね？ 世の中は便利になったのだよ」

「便利になった？ どういう事よ？」

「画期的な航海方法が出来てね。それはコールドスリープという」

「コールドスリープってあのカプセルで寝る奴？」

「そうそう。火星からの旅路は長い。」

物資的な余裕もなく、最低限の人数を残して皆コールドスリープ
してもらったのだよ」

「勝手にそんな事をしたの！？」

「緊急処置でね。許してくれたまえ」

「……………」

難しい顔して。眉顰めてますね。

「納得できないようだね？」

「当たり前じゃない。人の許しも得ないでそんな事！」

「うむ。そうだな。だって嘘だもん」

「し、仕方ないからって・・・え？　嘘？」

「うん。嘘」

「嘘？」

「うん。だから、嘘」

「あ、貴方ねえええ！」

襟を持たれて迫ってくる少女A。

いや。こんなシーンに出くわすの初めて。

しかも、俺が当事者とか。びっくりだ。

「まあまあ。女の子はエレガントにいろいろよ」

「意味わかんないわよ！」

「笑って許すぐらいの寛容さも大事だと思わない？」

「時と場合によるわよ！」

「ま、そうだね」

「うん。分かってるじゃない。・・・って、違う！　私はねえ！」

おお。ノリツッコミ。素晴らしい素質だ。

「実際はね、瞬間移動してきたんだな。これが」

「また私を騙そうっていうの？　そうはいかないわよ」

「こればっかしは嘘じゃない。イマイチ理屈は分からないんだけどね」

「意味がわかんないけど」

「ええつと・・・」

外が見れるような所・・・ないな。

「あとちよつとしたら説明されると思っから待ってて」

「ふんつ。私を騙そうなんて百年早いわ」

「さっき騙されたじゃん」

「うっさい!」

「もう御婆ちゃんだね」

「うっさいつたらうっさい!」

面白い子だ。クラスメイトだったら絶対弄られキャラ。

「あ。ここだ。着いたよ」

「ふんつ。ご苦労様」

「あ。違った」

「嘘!?!」

「嘘」

「貴方ねえええ!」

再度、掴み迫られる。

貴重な体験を短時間に二回も経験するとは・・・。

「じゃ、地球に着くまでゆっくりしてなよ。すぐに帰れると思っから」

「・・・」

あれ? 元気ないな。

大丈夫か?

「お〜い」

「な、なんでもないわよ！」

・・・それなら、いいけど。

「キリシマ・カエデ」

「え？」

「私の名前よ！ キリシマ・カエデ。覚えておきなさい！」

「え？ 嫌」

「嫌ですつてえええ！」

オーバーアクションが楽しい。

「嘘、嘘。キリシマさんでいい？」

「貴方何歳？」

「今は十九歳だね。もう少しで二十歳」

「じゃあ、カエデでいいわよ。一つ年下だし」

「あ。カエデって十八歳なんだ」

「何歳だと思つたのよ？ ま、まあ、私程に美人ならもつと大人に

」

「いや。ないない。良くて十六歳でしょ」

「な、な、何ですつてえ！？」

「まだまだ君は若いんだ。これから、これから」

「馬鹿にしてるのね！？ 馬鹿にしてるんですよ！？」

「うん」

「うんつて何よおおお！」

涙目になっちゃって。

結構、気にしてるのかな。

「大丈夫。充分、美人だから」

「え？ あ、そう？」

「うんうん。自慢していいと思うよ」

「ま、まあね。分かっているじゃない」

意外と単純なんですね。

「それじゃあね、カエデ」

「ええ。あ、ありがとう」

「どういたしまして」

素直じゃないなあ。

照れながらお礼とか、ベタやねえ。

んで、すぐにパツと逃げ出して、リラクセーションルームに入っちゃう訳だ。

照れ屋もここに極めりって感じ。

「そろそろ戦闘終わったかな？」

はあ……。思い出したら鬱になってきた。

勝手に身体が震えてさ。何にもできないのがこんなに辛いなんて。

「はあ……。ブリッジ行くか」

溜息が出るのは仕方ない事だと思うんだ。

「・・・予想通り」

ブリッジへ戻るとユリカ嬢がプロスさんに説教されてました。ま、予想通りだよ。予想通り。とりあえず自分の席に行こう。

「どこに行つてたのかね？」

「迷子を救いに」

「・・・そうか」

どう捉えたのかな？ そのまんまなんだけど。

「・・・提督。付いていつてもいいですか」

「・・・構わん。じゃが、辛いぞ」

「・・・構いませんよ。俺は火星の人達の本音が訊きたいんです」

「・・・そうか」

どこか遠い眼で前を見詰める提督。

今、提督が何を考えているのか、俺には分からなかった。

「・・・」

「・・・」

・・・嫌な沈黙。

それに耐えられないのと、気になる事があつて、俺は席を離れた。

「プロスさん」

「あ。はい。何でしょう？」

「火星の方達は地球に着いたらどうなるんです？」

すごく気になった。

地球に戻っても居場所がある人はいい。

でも、居場所がない人はどうすればいいんだろう？

助けただけで後は放っておくってのも酷いと思うし。

せつかく助けられた命が餓死とか救われない理由で失われたら気分が悪い。

「交渉の際にきちんと説明させて頂きました。

保護され、職がない方はネルガルの方で職を斡旋させていただき
ます」

「ええつと、いいんですか？」

「いいもなにも、それぐらいいは承知での救助活動ですよ？」

「でも、ネルガルは利益主義では？」

「おっしゃる通りです。では、これも利益という事でお分かりいただけませんか？」

「・・・軍の評判を落とすと脅しに使えるという事ですか？」

「それとも、民間からの支持率狙いですか？」

「やはり賢いお方ですね。こちらの意図に気付くとは」

「本当に救助だけを目的とするようなお人好しでは企業もやっていけないと思います。

むしろ、きちんとこういう理由があった方が納得できます」

「いやはや。まいりましたな。どうです？ ナデシコ退艦後にネルガルに来ませんか？」

「ええつと、残念ですが・・・」

「無理にとは言いません。気が向いたら連絡してください」

「ど、どちらにしる、結構後の事かと」

「そうですね」

でも、実際に救助してるんだから、何かと理由をつけて避ける軍よりはマシか。

火星の民を救助する事で損失以上の利益があるんだもん。

生き残りがいて、軍が逃げたという事実が公表されれば軍の評判が落ちる。

それをネルガルが抑えたともなれば、ネルガルに軍は従うしかない。暴露するとチラつかせれば軍も強きに出れないな。

そして、火星の生き残りを救出したなんて名誉すぎる。

ナデシコはもちろん、ネルガルは一気に有名になるだろうな。

木星蜥蜴に何の抵抗もできない軍を差し置いて、

ナデシコが木星蜥蜴を打倒しつつ、火星の生き残りを助け出した。

映画とかになってもおかしくない程、歴史に残る偉業だ。

あ、これでも軍の評判が下がって、ネルガルの評判が上がるのか。

それじゃあ、評判が下がった軍の抑止力にさっきの脅しを使うのか。なるほど。二重の意味でネルガルあくどい。

ま、これぐらいしないと他企業の優位に立てないって事だろうけど。

「あ。コウキ君」

「えっと、何ですか？ イネスさん」

「お風呂には入ったの？」

「ッ!？」

わ、忘れていたあ！

って、事はあれか？

カエデの前にもあんな汗臭い状態で……。

う、鬱だ。死のう……。

「……………」

「あら。生きる屍？」

「……落ち込んでるだけですよ」

「諦めなさい。また戦いが始まるわ」

「ああ……………」

コスモス早く来おおおい！

「願いつて叶わないから夢見るのよね」

・・・現実に突き落としてくれてありがとう。

コスモスとドッキング。

今回は、テンカワさんは未熟じゃないし、他のパイロットも凄腕だから問題なく終わった。

んで、俺は念願の風呂に入れて大満足。

やっと落ち着いたかな。

さて、時間もあるし、ミナトさんの所へ行こう。

「ミナトさん」

ミナトさんの自室の前まで来て、コミュニケーションで通信。

あれ？ サウンドオンリー？

『・・・あ』

「ミナトさん。どうしたんですか？ 大丈夫ですか？」

不安になった。

わざわざサウンドオンリーにするなんておかしい。

何があったんだ？ 胸が締め付けられる。

『・・・しめんなさい』

「え？」

『・・・私、コウキ君に・・・ううん、なんでもないわ』

「ミナトさん？」

『ちよつと体調が悪くて。顔見られたくなくないの』

「そんなのおかしいですよ。体調が悪いのなら俺が看病を

『独りにして！』

突然の大声に驚く。

「・・・え？」

『・・・ごめんね。ちよつと独りになりたい気分なの』

「・・・分かりました」

それしか言えなかった。

・・・泣いているような気がして気が気じゃなかった。
でも、俺にはなにもできない。

拒まれたら、俺にはどうする事も・・・。

ただその場で立ち尽くす事しか俺には出来なかった。

『コウキさん。お話したい事があるのですが』

「・・・」

『コウキさん？』

あれ？ 誰か呼んでる？

『コウキさん！』

「わ！ あ、え〜つと」

あ。ルリ嬢か。

「大丈夫ですか？ ボーつとしてましたが」

「あ。うん。大丈夫。何かな？」

「今までの事とこれからの事を話し合っておきたいと思ひまして」

「あ、そっか。分かった」

「ミナトさんも参加して頂きたいんですが・・・」

「・・・何か体調悪いつてさ。後で俺が伝えるから休ませてあげて」

「・・・そうですか。分かりました。それでは、どこがいいですか？」

「じゃあさ、俺の部屋でいい？ 一応、準備できてるから」

「それでは、今までののは偽造映像だったという事ですか？」

「あ、うん。聞かれたくない事を話してたから」

「・・・そうですね。私もそうしている訳ですし。」

分かりました。それでは、後ほどアキトさん達とそちらへ向かいます」

「分かったよ」

ルリ嬢と話しながらも意識は全部ミナトに向いてた。

どうしても気になって仕方がない。

もう一度通信を・・・。

・・・やめよう。無理させちゃ駄目だ。

・・・戻るか。

S I D E M I N A T O

怖かった。

コウキ君の顔を見るのが。

もしかしたら、怒ってるかもしれない。
もしかしたら、軽蔑しているのかもしれない。
もしかしたら、冷たい眼で見てるのかもしれない。
どんな表情なのか、確認するのが怖かった。
だから、サウンドオンリーにして逃げた。
でも、声色がいつもの穏やかなコウキ君で。
思わず自ら打ち明けようとしてしまった。
・・・でも、やっぱり怖くて、体調が悪いだなんて嘔吐いて。
本当に駄目だ。自分が嫌になる。
ねえ、コウキ君。
私、どうしたらいいの？

S I D E O U T

「お邪魔します」

「邪魔するぞ」

「・・・お邪魔する」

部屋で悩んでいた。

ミナトさんはどうしてしまったのだろうか、と。

俺は嫌われてしまったのだろうか、と。

頭の中がぐるぐるして考えが纏まらない。

どうすればいいんだろう？

そんな永久に解決しそうにない悩みに頭を抱えている時に三人はやってきた。

「どうしました？ 顔色悪いですよ」

「あ。大丈夫、大丈夫。とりあえずお茶でも入れますんで座っててください」

逃げかもしれないけど、何かしてた方が気がまぎれて良い。

「どうぞ」

三人にお茶を渡す。

それぞれ三人は礼を言っ、お茶を飲む。

落ち着いてお話するのにお茶は欠かせません。

「それでは、早速ですが本題に入りましょう」

司会はルリ嬢。

堂に入ってるし、任せよう。

流石は元艦長って所かな。

「コウキさん、貴方がナデシコに乗る前、乗ってから今まで、双方で行った事を確認します」

「うん」

俺がした事か。

あんまり意識した事ないな。

「まず、MCの救出。救われない命もありましたが、救われた命もあります。」

本当にありがとございました」

「あ、いや。礼を言われても。実際にやったのは俺じゃないし」

「いや。情報がなければ助けられなかったら。俺からも礼を言っ」

「ええつと、それじゃあアキトさんが？」

「ああ。詳しく言えば俺とネルガルのシークレットサービスがやった」

ネルガルシークレットサービス。

確か月臣さんとゴートさんが所属していた奴だな。

「次にナデシコクルーの意識改革。

戦艦だという意識を持たせ、状況に対し冷静に臨機応変に対応していただきました」

「そんな事を言われても困っちゃうんだけど、俺は色々知ってた訳だし」

「いえ。知っていようが、コウキさんが補佐として働いてくれたおかげで何度も救われました」

「ま、まあ、役に立てたならいいけど」

意識してやった訳じゃないから褒められても困る。

俺は死にたくなかっただけだしさ。

「次はセレスの教育。私とラピスは搭乗当時から経験があり、ある程度の力を発揮できました。

ですが、セレスは別です。本来なら私がすべき事をコウキさんに代わって頂きました」

「代わった訳じゃないよ。元々オペレーター補佐の俺はそういう仕事メインだから。

俺がした事は当然の事だよ。それに関しては特に、うん、なにも「そうですか。ですが、助かった事は事実です」

「ま、俺としてはセレスちゃんが一人前になれたのは嬉しいね」

うん。残って訓練した甲斐があった。

「次に、クロッカスの件です。とても助かりました。

あらかじめプログラムを組むという考えは私にはなくて・・・」

「ま、偶然思いついたただけだから。あれが成功したのはルリちゃんのおかげだよ」

「そういえば、擬似マスターキーを作ったと言っていたな」

「ええ。見事、テンカワさん達が無意味にしてくれましたが」

「む。それは悪かった」

「あ、いえ。きっとテンカワさん達の方が最善でした。俺は下手すると越権行為でしたから」

擬似マスターキーは許可されて作ったものじゃないからな。バレれば罰もあったと思う。

「マエヤマはプログラミングが得意なようだが、それは前に言っていた遺跡の知識か？」

「始めはそうでしたが、最近は自分でも作ってます。擬似マスターキーは自作ですよ」

「ほお。ナデシコの制御プログラムをコントロールできるだけのプログラムを自作でな」

「まあ、一年以上プログラムを組んでましたからね。慣れますよ」

最初にOSを作ってから、色々なソフトを作って、その度に俺のプログラミング技能も向上した。

俺自身、中々のレベルだと自負している。

「最後にですが、エステバリス用のレールカノンの開発。

私達も考えなかった訳ではないですが、実用できるかどうかというレベルです」

「ウリバタケさんに協力してもらって、後は適当にやっただけです

よ。

レールカノンとはテンカワさん達が導入したんでしょう?」

「ああ。開発途中の時にな。危険だと訴えたら急遽付けてくれたさ」
「助かります。正直、ナデシコは武装のバリエーションが少な過ぎますから。」

レールカノンがなかったらもつと酷い眼にあっっていたと思います」
「そうだな。レールカノンは正解だった」

「そこから派生したものです。手柄はテンカワさん達ですよ」

ナデシコはGBに依存しすぎだからな。

まあ、DFがあるから、武装はいらないうつても分かるけど。

「よくよく考えると俺ってあんまり貢献してないんですよ。結構、空回りしていた気が・・・」

「・・・そんな事ない」

「そうかな?」

「・・・そう」

「ま、ラピスちゃんがそう言うならいいけど」

ラピス嬢のお墨付きという訳だ。

ま、これからは足並み揃えるんだから役に立てるだろう。

「それじゃあ、次はテンカワさん側が何をしてきたか御願ひします」
「分かりました」

現実に経験してるからこそ違う観点から物事が見れる筈。
きつと俺に考えも付かなかった事をしているに違いない。

「レールカノンの件はいいですね。」

私達はナデシコで初めて互いが無事だと知ったので、その前は特

に何もしていないんです」

「あ。そうなんだ。それじゃあれールカノンはテンカワさんの独断？」

「ああ。ナデシコに足りないものを考えた時にこれが浮かんだ。

俺はもともとナデシコに乗るつもりでネルガルに接近したからな」

「ええっと、覚えてないと思いますが、俺はナデシコに乗る前にテンカワさんと会ってるんですよ」

「何？ そうなのか？」

「はい。俺がこちらの世界にやってきたタイミングはテンカワさんが地球に来た時と同じですから。

先に眼を覚まして、サイゾウさんにテンカワさんを任せたんです」

「・・・そうだったのか。それでサイゾウさんが坊主がどうだこうだと」

「だから、テンカワさんがテストパイロットと聞いた時は驚きましたよ。」

てっきりサイゾウさんの所にいると思ってましたから」

「サイゾウさんに礼を言った後に即刻ネルガルに向かったんだ。

パイロットの腕を証明してテストパイロットとして入社した」

「そういえば、テンカワさんはネルガル社員として乗っているんですね」

「ああ。状況が状況だったからな」

ふむ。なるほど。

「出航の時はどうするつもりだったんですか？」

「ユリカが来る事は分かってたからな。函をしていけば大丈夫だと思っていた」

「不確定要素であるコウキさんの事は疑ってましたが、害にはならない放っておいたんです」

「・・・意味は分かるけどさ、本人の前で放っておくって言うのは

「どうなの？」

「あ。す、すいません」

「いいよ。いいよ。まあ、仕方がない事だと思う。」

あの時の俺は未来を知るテンカワさん達からしてみれば怪しい事
この上ないでしょうから」

「・・・すいません」

シユンとなるルリ嬢。

大方、昔の事を思い出しているんだろう。

「過ぎた事は忘れようよ。こうして和解できたんだし」

「そうですね」

うんうん。ルリ嬢には笑顔が似合うよ。

「ムネタケ副提督の反乱の時はご迷惑をおかけしました。作戦を台
無しにする所でしたよね？」

「まあ、そうなるが、お前もお前で考えて行動していたのだろう？」

それを否定する事は出来んよ」

「そう言ってもらえると助かります」

俺がルリ嬢の行為をばらさなければ、

カイゼルオジサンとの交渉の時、普通に優位に立てた筈なんだ。

それをギリギリな状態にしたのは俺だし、立て直したのはテンカワ
さん達。迷惑しかかけてない。

「だが、まさか擬似マスターキーとはな」

「ああなる事は分かってましたからね」

結局使わなかったけど。

「無事にクロツカスとパンジーを救えたのは良かったですね」

「ああ。間一髪だったがな。あれは歴史の改変の初めての成功だ。正直、嬉しかったな」

そう話すテンカワさんの顔は本当に嬉しそうで。

どうにかして未来を変えたいという気持ちが伝わってきた。

「ビックバリアですが、解除パスワードは元々するつもりだったんですか？」

「ああ。ルリちゃん一人でも解除できたと思うが、ルリちゃんの悪知恵でな」

「悪知恵ではないですよ。ただあの時はコウキさんを試すつもりでした」

「試す？ 俺を？」

「ええ。どれだけのハッキング能力を有しているのか。それがナデシコに危害を与えるか」

「な、なるほど。そこまで疑ってたのね」

「・・・すいません」

流石にそこまで警戒されると頬も引き攣る。

「その後、経歴とあわせてお前の正体を突き詰めようとした」

「ああ。あの経歴は捏造したもので、正体も何も無いと思いましたが。」

「ええっと、俺ってどんな人になってました？」

「俺の両親がネルガルに殺されたのは知っているな？」

「ええ。確かボソソジャンプを公表しようとしたのを防ぐ為にネルガルがやったとか」

「ああ。その通りだ。そこで俺は能ある研究者は都合が悪くなると

消されると理解した」

「・・・ああ、そういえば、俺の両親も研究者にしてみましたね」

「そうだ。そこで、お前の両親は偉大なナノマシンを開発した優秀な研究者。」

そして、俺の両親同様、会社の利益の為に殺されたと考えた。交通事故と見かけてな」

「コウキさんの両親はそれを見越してコウキさんを地球に逃がした。ナノマシンを託して」

「そして、ナノマシンを狙う者達から逃れる為にナデシコに身を寄せた。そんな感じだな」

「ええっと、物凄く苦労してますね、俺」

「そうだな。頭が回るのもその苦労のおかげだと思っていた」

「俺はそんなに凄い人間じゃないですよ。色々考えるのが好きなだけです」

ポーンと何かを考えるのって意外と楽しいし。

「ま、予想は見事に外れた訳だが」

「むしろ、俺の正体をあれだけの情報で見破るほうが凄いなと思えますよ?」

「確かにな」

普通の思考じゃ絶対に考え付かない。

たとえばボソンジャンプを知っていたいようと。

次はサツキミドリ的事だな・・・あ。

「訊いてもいいですか?」

「ん? 何だ?」

「何でサツキミドリが襲われると分かかって、リョーコさん達を迎えに行っただんですか?」

テンカワさんはパイロットですから分かりますが、ルリちゃんとラピスちゃんは」

あの時、ルリ嬢とラピス嬢がない事が逆に安全だと思わせてくれたんだけど。

「俺達はその時、マエヤマの存在に焦っていたからな」

「マエヤマさんのようなイレギュラーが発生しないか確認しにいったんです。」

あの時は焦って周りが見えてませんでしたね」

「・・・いなくて安堵してたら襲われた」

ああね。そんな事情があったんだ。

「それからは御存知の通りです」

振り返ると色々な事があったんだな。

「ある程度は把握しました。結構、理解のすれ違いがあったみたいですね」

「ああ。俺達は思い通りに事を運ぶ為にお前を危険視していたからな。」

どうも好意的に受け取れなかった。すまなかったな」

「あ、いえ。いいですよ。きちんと話を聞くと止むを得ないかなと思いました。」

俺だって過去に戻って知らない人がいたら驚きますから」

たとえば今から中学校に戻ったとしよう。

そこになんでもないように知らない人が同級生としていたら、何者だと怪しむに決まってる。

それが悲劇の回避という大きな目標がある人間なら余計に。

「それでは、次の議題ですね。これからどうするか、です」
ルリ嬢が話を進める。

「テンカワさん達は戦争をどう終わらせようとしていますか？」

戦争は何よりも終わらせ方が大事だと思う。

どちらかが滅びるまで戦争なんて事はないと思うが、戦争中は相手を気遣う余裕はない。

やはり手頃な所で条約を締結する必要があるのだ。

だが、その条約の項目次第でまた争いになる。

原作の木連のように一方的な要求では更に争いを呼ぶだけだ。

「模索中だ。だが、まずは地球連合軍をどうにかする必要があると俺は思っている」

「地球連合軍をですか？」

「ああ。過去の謝罪もせず、情報を操作した。

それだけでも許されぬのに木連の交渉役までも殺した連合軍だ。このままでは駄目だな」

「ええっと、交渉役を殺したというのは？」

そんな話、原作に出てたっけ。

細部までは覚えてないからなあ。

「木連は火星や地球に襲撃をかける前に交渉役を送っている。

こちらの存在を認め、移住を許してくれば、水に流してもいい」と

「そ、それじゃあ・・・」

「ああ。連合軍の首脳陣が原因で始まったようなものだ。この蜥蜴戦争はな」

・・・戦争の発端。

なるほどね。そういう事か。

そんな地球連合では泥沼になる。

「・・・大切なのは地球連合の意識改革という事ですか。理想的な戦争の終結を迎える為に」

「そうなるな。都合良く、俺達はこれから地球連合軍海軍極東方面軍に編入される。

そこでミスマル提督に接触する事が出来れば、あるいは・・・」

確かミスマル提督、改め、カイゼルさんは劇場版で連合軍の総司令官をやっていた。

器としては申し分ないし、その時期が少し早まるだけだ。

「ミスマル提督に協力を求める。その他にも私達は切り札がありません」

ミスマル提督以外に軍に伝手があるのか？

「お忘れですか？ フクベ提督です」

「あ！ そうか！」

ただでさえ、チューリップを落とした英雄として名高いんだ。

そこに無事に火星の民を救出したという栄誉も加わり、

以前より更にフクベ提督の求心力は凄まじいものになる。

「既に退役の身ですが、その影響力は計り知れないでしょう」

「それに、フクベ提督は火星の民に対する罪の意識がある。
火星の民の為に地球連合を変えて欲しいと言えばフクベ提督も断
れないだろう」

「・・・テンカワさんって黒いですね」

「色々経験すれば黒くなるさ。仕方あるまい」

ま、黒いのが善い事に向かっているからいいんだけどさ。
ちよつと寒気がしたぞ。

「ミスマル提督とフクベ提督の二人に協力を求めつつ、俺達は極東
方面軍の名声を高める。」

これが今後の方針だな」

「はい。俺もそれで良いと思います」

まずは軍の意識改革か。

ナデシコの事だけでも精一杯の俺にそんな事が出来るかな？
・・・まあ、なるようになるか。

「とりあえずこんな所だな」

「はい。他に何か議題がありますか？」

ルリ嬢が俺達を見回す。

俺が気になる事・・・。

あ、あるじゃないか。

「はい」

「はい。コウキさん」

何の会議だ？ これは。

ってか、ノリいいね。ルリ嬢。

「最終確認ですが、遺跡はどのようにするつもりですか？」

俺の質問に顔を強張らせる三人。

そうだよな。三人とも遺跡に良い思いは抱いてないだろう。

でも、これはきちんと確認しておきたい。

「遺跡の存在が世界を構築している以上、破壊する事は無理だと判断している。」

それは今も同じですか？」

「ああ」

「その通りです。思い出を消したくありません」

「・・・私モイヤ」

破壊しない事が前提で、遺跡をどうにかしなければいけない。

原作では宇宙に放つたらしいけど・・・。

「失礼を承知で伺います。俺は遺跡をきちんと処理しなかった事。

それこそが火星の後継者事件に繋がったと思いますが、どう思いますか？」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

黙り込む三人。

実際に体験していない第三者からの視点だから導けた結論だ。

実体験した彼らが同じ結論を導くとは限らない。

仲間意識が強い彼らの事だから、ナデシコは間違っていないという思いもある筈だしな。

「もつと簡単に訊きます。遺跡の処置があれで正しかったと思えますか？」

「・・・それでは、コウキさんは遺跡を破壊してしまえばよかったです。そうおっしゃるのですか？」

ルリ嬢って思い込み激しいよね。

いきなり敵意を向けられても困るんだけど。

・・・テンカワさんも。

ラピス嬢だけが俺の味方だよ。

「違うよ。遺跡を破壊する事は俺も反対。

でも、ナデシコのコアブロックと一緒に遺跡を放置した事が間違いだと思っただ」

「え？」

「遺跡を宇宙空間に放置する。一見、誰にも渡らないように思えるけど、絶対じゃない。

人の執念は奇跡すら起こせるんだ」

「・・・人の執念。・・・そうだな。人の執念は奇跡すら起こす」

感慨深く呟くテンカワさん。

そうだな。執念という意味ではテンカワさんがもつとも馴染み深い。

「俺はきちんとした制御が出来るよう全ての企業で管理する必要があると思っ」

「・・・全ての企業で管理。聞こえはいいですが、絶対に無理です。誰かしらが主権を握ります」

「もしくは、どのように対処しようとするにいけない所に放置するかですね」

「どうしても取りにいけない場所。それは？」

「遺跡の耐久度次第です。俺は太陽の表面でも良いかなと思ってま

す

「太陽だと？」

「ええ。どれだけ文明が進もうと太陽の表面にある遺跡を回収できるでしょうか？」

「少なくとも数百年単位では無理でしょう」

「・・・そんな事、思いもしなかった」

どうしても対処のしようがなければ太陽に放置する。
それもまた、一つの対処法だと思う。

「どちらにしろ、すぐに放り出すのは間違いだと思います。

遺跡がどのようなものをきちんと調べた上で放置する必要があると俺は思っています」

「・・・そうだな。俺達は焦りすぎていたのかもしれない」

「・・・アキトさん」

「もちろん、原因であって悪いのは火星の後継者です。ですが、防げたのかもしれない」

言い過ぎかもしれないが、

それ程に対処の問題は慎重にならなければならぬんだと思って欲しい。

「当時のナデシコは遺跡さえなければ戦争は終わるとそう思っていたんですよね？」

「・・・はい。誰もがそう思っていました」

「酷な事を言いますが、それが地球連合軍と統合軍との間に軋みを入れた原因だと思います」

「・・・どういう意味ですか？」

「戦争というのは終わり方が大切です。

ナデシコが地球を勝手に背負い勝手に和議交渉をした事で、

地球人と木星人との間で意識の統一が出来なかったんだと思います」

「……………」

「その上で争いの原因を取り除いてしまった。

結果、両軍の首脳陣はどこに着陸地点を設ければいいのか分からなくなってしまうんです。

地球、木連。両者の関係上における最善の戦争の終結の為の着陸地点を」

両方の国民が何故争ったのかさえ理解していない。

どうして戦争に発展したのか分かってない。

所詮は木星人。憎き地球人。

両者が憎しみ、蔑む、疎んじている状態で和平を結んだ所で平和的解決になるとは到底思えない。

「両者が両陣営で管理するという方向性で纏まった可能性もある。

それを失くしてしまった事で一つの終結を潰してしまった事は紛れもなく事実です」

「……………」

「少なくとも草壁は遺跡に固執しています。

遺跡の喪失は遺跡さえあれば全てを支配できるという考えの草壁を暴走させました」

「……………」
「少なくともきちんとした形で遺跡を管理か放置していれば、

あれ程までに草壁を暴走させずに済んだかもしれん。憶測でしかないが……………」

「はい。熱血クーデターの突然の政権交代。軍人は付いてきたかもしれませんが、

国民にとってはどうだったのでしょうか？ きちんと理解していたんでしょうか？」

「・・・あちらの和平派はあくまで軍内での和平派でした。

国民全てを和平へ導いた訳ではありません。草壁のカリスマ性は凄まじかったですし」

「そう。草壁が徹底抗戦を訴えている状態で突然の政権交代。

徹底抗戦を支持していた国民はどう思うでしょうね？

間違いなく、憎しみを抱えたままの和平です」

「憎しみを抱えたままでは両者が争うには必然。地球の国民の意識改革をしつつ、

木連の国民の意識改革もしなければきちんとした和平は出来ないという訳だな」

「どうして争っているか。それを両国民は知る必要があるということです。

憎しみの根本を知り、互いの苦しみを理解しなければ、両者が歩み寄る事はありません」

「・・・厳しいな。これが歴史を変えようという責任の重さか」

「・・・そうですね。とても重たいです」

悲劇の回避を目的とするのならば、戦争の終結すらも考えないといけない。

本当に俺のような凡人には荷が重い。

「その為にも多くの協力者が必要でしょうね。地球側はもちろん、木連側にも」

ただ草壁から政権を奪い、和平を結べばいいという訳ではない。

きちんと国民の意思を統一させ、それでいて和平へと導く力強い意思がなければならぬ。

多くの統合軍兵士が火星の後継者に参じたのは未だに草壁の影響力が強かったからだ。

草壁に真っ向からぶつかって和平を結べる人間が木連側に必ず必要

になる。

いないかもしれない。でも、いるかもしれない。

俺達地球人が木連に介入できない以上、

木連人の誰かが同じ理想を追ってくれなければならないのだ。

目先の事だけではなく、大局的に、ずっと先の事を考えられる影響力の強い人物が。

「俺のような若造が政治を語っても仕方ないので、遺跡の事はその時に考えましょう」

「・・・ああ。遺跡の事は俺達では判断できない」

「どうするのがベストか。両陣営が吟味する必要があるからね」

「どちらにしろ、ナデシコが遺跡を確保する必要があります」

地球側でもなく、木連側でもない俺達が」

「地球側では拙いのか？」

「地球側が遺跡を確保すれば、草壁の暴走は激化します」

木連側が確保しても、草壁の独裁政治が激化するだけです」

「ナデシコが確保して、時間を稼ぐ必要があるという事だな」

「はい。ナデシコが確保し、中立の位置にいる事で、両陣営の考えを整理する時間を与えます」

木連側での和平派の勢力を強くさせる為にも時間は必要でしょう」

鷹派の草壁の権力が強い状況下だ。

鳩派の人間の権力なんてあってないようなものだろう」

その勢力を逆転させる為に必要なのは長い時間と確実な援助

利を説き、損を説き、真理を説き、虚偽を説く」

そうして、生まれ持った意識を改革する必要がある」

地球人の戦争への意識と木連人のゲキガン魂という意識を。

「我々が出来る事は遺跡を確保し、傍観する事」

もしくは協力者と力をあわせて状況を的確に読み、的確な行動を

する事でしょう」

それしか、ナデシコに出来る事はない。

所詮、突出した性能を持つだけの戦艦に過ぎないのだから。

「・・・マエヤマ」

「あ。はい。以上で俺の考えは終わりですが・・・どうかしました？」

「・・・お前は俺達より何倍も考えているんだな」

「え？」

「はい。私達はナデシコの悲劇を回避する事だけしか考えていませんでした。

ですが、本当に悲劇を回避するのならそこまで考える必要があったんですね」

「・・・コウキ。凄い」

あの・・・そんなに尊敬の眼で見られると困るんですけど。

「俺は政治も戦争も詳しくないですから、俺の勝手な考えですよ」

「いや。それでも、それだけの認識が出来るのは凄いなと思うが」

「ええ。地球人でそれだけの事を考える人がどれだけいるか」

そうまで褒められても、俺はどうしていいか分からん。

・・・照れるだけ。

「と、とにかく、まずはミスマル提督とフクベ提督に接触しましょう。それが全ての始まりです」

「そうだな。これでとりあえずの方針は決まった」

「今の私達に出来る事はとにかく与えられた任務をこなす事ですね」

「そうだね。まだ木連側に伝手が無い以上、俺達に出来る事はない。」

「そもそも地球側も提督達に任せるしかないし」

「要するに俺達の役目は両陣営の橋渡し役という事か」

「ええ。それが何の権限もない俺達の限界でしょう」

一人で世界は変えられない。

でも、一人の要因で世界は変えられる。

きつとそれが未来を変えろという意味なんだと俺は思う。

第二十話（後書き）

オ、オリキャラが出てしまった。

セレスと主人公だけにするつもりが・・・。

まあ、ナデシコのキャラに埋もれないように頑張ろうと思います。
はい。

PS あくまで僕なりの戦争に対する考え方なので、

あまり責めないでやってください。

第二十一話

「本日よりナデシコは地球連合海軍極東方面軍へと編入されます」
プロスさんの一言から始まった軍への編入。

「はあ！？ 俺達に軍人になれつつのうかよ？」

当然、反発するわな。

つてかアカツキ会長の参入イベントを思いっきりスルーしてた。
キラランツて奴を見たかったんだけどなあ。

「ええ。ナデシコは今のナデシコクルーでなければ運営できない事。
偉業を成し遂げた艦として更に活躍を期待されている事。それら
の理由からなんです。はい」

だが、プロスさんも強か。

困ったように笑いながらも契約書突きつける。

退職しても構いません。斡旋もします。ですが・・・。

その先が怖いです、プロスのダンナ。

「ま、俺達の居場所はどうなったってナデシコだって事だろ？」

誰かが発したその一言がそのままナデシコクルーの総意となった。
新たに参入した十数名もまたナデシコと共に進む。

ま、殆どが誰とも知らない役職なんだけど……。

「あら？ いたの？」

「……相変わらずだな。カエデ」

「ふんっ。貴方に私の何が分かるのよ」

「……こいつもいた。」

何でも不足気味だったコックとしてらしい。

「……とても料理できるようには見えないんだけど。」

「お前、料理出来んの？」

「あ、当たり前じゃない。私はあの」

「ま、期待しないで待っとく」

「期待しないさいよおおお！」

でもま、ホウメイさんの負担が減るのは良い事だ。

「……逆に負担にならなければいいが。」

「……食べたら意外と美味かった。」

あの時のしてやったり顔は忘れる事はないだろう。

あれ程に感情を剥き出しにして笑われたのは始めてだった。

むかつく笑顔だったけど、何故か心地良いという矛盾。

ま、これからの長い付き合いだ。自ずと分かるだろう。

「それにしても、スッキリしてるじゃない」

「ああ。ちよっと色々あってね。缶詰だったんだよ」

「へえ。どうせ変な事でもしたんでしょ」

「何？ して欲しいの？」

「んな訳ないでしょうが！」

「お前もお前で見違えたけどね。こう見れば意外と……」

「何？ 惚れた？」

「・・・十七歳には見えるかな」
「十八！ 私は十八よ！」
「あ。そうなの？ 初めて知った」
「前にも話したでしょうが！」

反応が面白くてついね。

「髪の色って染めてんの？」
「ええ。綺麗でしょ？ この色」
「性格と真反対でびっくりだ」
「貴方ねえ。素直に綺麗って言えばいいじゃない」
「あ。まあ、綺麗だと思うぞ」
「え？ あ、そう。分かってるじゃない」
「心も綺麗だとなお良いがな」
「充分、綺麗よ！」

亜麻色？ クリーム色？
似合つつちゃあ似合うけど、イメージが違う。
何も喋らなければ割りと上流階級のお嬢様に見えなくもないけど。

「それって料理人だから？」
「あ。ポニーテールの事？ 似合うでしょ？」
「ん。ああ。似合う。似合う」
「・・・なんかおざなりね」

白い眼で見られました。

「ポニーテール解くとどのくらいの長さなんだ？」
「前まで伸ばしたけど、荒れちゃったから切ったのよ。今は肩位かしら」

「へえ。道理で・・・」

「何よ？ 何か文句あるの？」

「俺の友達にポニーテールが大好きという奴がいるんだ」

「それで？」

「そいつが言うにはポニーテールは長ければ長い程、揺れて可愛いらしい」

「それじゃあ私のは可愛くないって事？」

拗ねてんのか？ こいつ。

「いや。俺は何事も程良くだと思っている」

「あ。なら」

「だから、駄目だな」

「駄目なの！？」

流れのおかしいでしょとかぶつぶつ言ってるが、完全に無視だ。

「もう少し長い方がいいな」

「ふんっ。なんで貴方の要望に答えなくちゃいけないのよ」

ま、そりゃあそうだな。

「それで？ 得意料理は？」

「え？ 随分と話が飛ぶのね」

「いいから。いいから」

「和食ね。他も一通りは出来るけど、和食が一番」

「得意料理は肉じゃがですってか」

「え？ 何で分かるのよ？」

マジかよ？ 冗談なんだが・・・。

「ま、いずれその得意料理とやらを食べさせてもらおうかな」

「ふんっ。美味し過ぎて驚いたって知らないんだから」

「いや、ないない」

「見てないさいよお！」

そう言っつてプンスカツという擬音が付きそうな去り方をしていくカエデ。

む。あれは俺の口ぐらいだから163センチって所か？

俺の時代だと丁度女性の平均って奴だな。

長い難民生活のせいか、全体的に細い。顔は誰もが可愛いというだろう。

俺の評価が甘いだけかもしれないが。

奴も美人。なるべくしてなったナデシコクルーという奴だな。

髪と性格のギャップさえどうにかしてくれれば。

亜麻色というのはもうちょっと癒し系のイメージが……。

俺の勘違いなら謝る。いや。勘違いな気もしてきたが……。

ああいう系は金髪、桃髪、赤髪と相場が決まっているのでは？

……いや、そんな事もないのか。

「変な奴」

カエデに不思議な微笑ましさを与えられながらも、同時に鬱。

その理由は……。

「ホーツホツホツ！ 残念だったわね。マエヤマ・コウキ。

私がこの艦の提督。そして、名誉ある元副提督よ。ホーツホツホツ」

……キノコさんがいらっしやるからですよ。

はあ……。分かってた。分かってたさ。
でも、やっぱり嫌なもんは嫌なんだよ。

「……お久しぶりです。提督」

「敬いなさい。ホーツホツホ」

何よりも気分を害するのが元副提督という身分。

俺達の笑いあり、涙あり、まあ、4対1ぐらいの割合だけど、の大冒険に参加してたとなってる事。

大方、地上でのんびりしてただろうに。これが噂の上司の横取り？

ちよつと違うか。

何もしないのに、名誉だけ頂く。典型的な嫌な上司って奴だな。

「ホーツホツホ」

不思議な笑い方をして去っていくキノコ提督。

笑いすぎて頭から引っくり返らないかな。

「マエヤマさん。丁度良い所に」

「あ。プロスさん」

呼ばれて振り向けばプロスさん。

その横には……。

「エリナ・キンジョウ・ウオンよ。貴方の代わりに副操舵手を務めるわ」

……美人の敏腕秘書がいらっしやいました。

目付き鋭いですね。劇場版の彼女がとも女らしかったのは今でも覚えてます。

思い込んだら一直線って感じですね。はい。

「マエヤマ・コウキです。それなら、俺はお払い箱という事ですか？」

「いやはや。マエヤマさんには他の役職で活躍してもらったつもりです。はい」

勝ち誇った顔している秘書さん。

でもさ、俺ってば、あんまり貴方が操舵手として仕事してた所を見た事がないのですが……。

多分、都合の良い役職で乗り込もうとしているだけで、運転技術はそうでもないを見た。

「なるほど。それならば、俺とどちらが優れているか勝負しましよ
う」

「は？」

「え？」

驚いていますね。

「俺という副操舵手がいるのにあえて副操舵手を用意する。その意図が掴めません」

「いえ。それはマエヤマさんの負担を軽くする為に」

「ありえないですね。俺が副操舵手として働いた事は……一度もありませんから！」

そう、何を隠そう副操舵手の仕事だけはやった事がない。

他の仕事は全部やりました。通信士の仕事もサクキミドリの際にやりました。

でも、操舵手だけはやっていない。

ある程度はオモイカネがやってくれるし。いざという時はミナトさんが引つ張ってくれる。とてもじゃないが、俺の役目はなかった。それはプロスさんと知っている筈。それならば、あえて副操舵手を雇う必要はない。即ち、彼女は操舵手としての仕事をまったくしないつもりで、別の用件で搭乗してきたという事。ま、知ってるんだけどね。

「へえ。意外と賢いのね」

その上から視線をやめて頂きたい。

「貴方がナデシコに乗る意図が掴めませんから。ま、大方、ネルガル側の意向なんでしょう？」

「よく分かりましたな」

「ま、プロスさんと親しいようですし」

「なるほど。それは一本取られましたな。まさか、私でバレましたか」

「ネルガル社員と知り合いである人間はネルガル社員の確率が高い。要するに貴方もですよ。アカツキ・ナガレさん」

バツと後ろを振り向く。

「へえ。僕の事も気付いてたんだ」

「俺は男なので。女性ならあちらでお待ちですよ」

「嫌よ。そんな男」

秘書さんを指し示してみる。

「それと、人の彼女に手を出さないで下さい」

ミナトさんにぶたれた頬が赤く染まっている。
原作通りだが、むかつくものはむかつく。

「え？ 彼女の恋人って君なのかい？ そりゃあ笑えるね」

「笑える？ どういう意味ですか？」

ムカツと来た。

「彼女は君には勿体無い程に良い女だって事だよ」

「ええ。それは認めましょう。ですが、貴方に言われる筋合いはな
いかと」

「少なくとも、ビジュアルの面では君より相応しいと思うけど？」

「なるほど。パイロットとして搭乗しておいて、顔で勝負ですか。
腕を疑われますよ」

「言うねえ。パイロットとしても碌に動けない男が」

「ッ!？」

正論だから、反論は出来ない。

だが、これは怒りじゃない。情けなさだ。

「ま、そんな話は置いておこう。君と喧嘩しに来た訳じゃないんだ
から」

「・・・何ですか？」

怒りや情けなさがぐるぐるして眼の前の人物を睨んでしまう。

仕方ない事だと思って欲しい。

「エステバリスの新型フレーム。高機動戦フレームを持ってきたん

だ。その調整をして欲しい」

「高機動戦フレーム？」

そんなの知らないぞ。俺。

原作にもなかった。

「テンカワ君の稼動データを基にして造り上げられた新しい機体だよ。」

名前通り、機動性を高めてある。それに全体的な底上げもね」

「その意図は？」

「現状のスピードでテンカワ君は満足してくれなくてね。急いで造り上げたんだよ」

「それらの技術のフィードバックは他パイロットにもですか？」

「もちろん。僕も、君もだ」

どちらにしる、死ぬ確率が低くなるならやるつもりだ。味方を殺したくないと思うのは誰だって一緒だからな。

「分かりました。引き受けましょう」

「助かるよ。天才プログラマー君」

「その前に一つ」

「何かな？」

「あたかも自分が造り上げたように言ってますが、貴方はネルガルの社長ですか？」

「違う違う。僕みたいな若い奴がそんな役職に着いている訳ないでしょ」

「そうですね。変な事を言いましたね」

「いいよ。いいよ。じゃあ、よろしく頼むよ」

「ええ。やっっておきますよ」

ネルガル会長アカツキ・ナガレ。
若くとも会長職としての矜持があるといった所かな。
あれが企業のトップか。

ああいう奴らをこれから相手にしていくと思うとやっぱり鬱だなあ。

「彼。結構鋭いね。社長だつてさ」

「貴方の不用意な発言が原因だと思っわよ」

「マエヤマさんは常に鋭いですよ。あまり油断されない事ですな」

「気を付けておくよ。プロス君。それで？ 彼女との接触は？」

「エリナさんがやってくれると聞いてますが？」

「ええ。私が接触するわ。ボソソジャンプの大事な手がかりだもの」

「上手い具合に映像から外れてたみたいだけど、

ミスマル・ユリカから証言を得られたから信じられるね」

「ええ。必ず実験に付き合ってもらっわよ。キリシマ・カエデ」

「それでは、御願います。提督」

「うむ。君達の証言は信じるに値する。それならば、ワシも全力を
尽くそう」

「ありがとうございます」

本日付けで退艦するフクベ提督を見送る為、クルーが集まった。
花束の贈呈など、儀式らしい儀式が終われば、静かなもの。

火星の民達からあらん限りの罵声を浴びせられたフクベ提督。彼らを刺激するのはまずいとささやかな送迎しかできなかったのが残念極まりない。

彼らも理性では納得しているんだ。仕方のない事だったと。でも、そんなに簡単に割り切れるものではない。あの力エデすらも怒りで顔を染めて叫んでいた。

何故、私達を置いて逃げたの！？

何故、私達だけこんなに辛い思いをしなくてはならないの！？
あれは、正直、見ていたくなかった。それ程、胸が痛んだ。

「マエヤマ君。ワシは感謝している」

「え？」

「ワシは贖罪の為に火星にやってきた。そして、火星にこの老骨を埋めようと考えていた」

「・・・やはりそうでしたか」

「若いのに悟られるとはまだまだじゃな」

そう言つて笑うフクベ提督。

今の彼はナデシコの提督席に座っていた無口で生きる事に疲れたような老人などではなかった。

どこか歴戦の勇士を感じさせる威厳のある老獪な将校。これこそが彼の本来の姿だと俺は思う。

やはり、目的が人を変えるんだな。

「ワシはこれこそが贖罪と考えている。無論、それだけで許されるとは思つたらん。じゃが・・・」

チューリップをユートピアコロニーに落とす、それを悔やむ自分がいた。

それなのに、英雄として祀り上げられ、更に心の傷は広がった。

もう、その心の傷は塞がらない。
もしかしたら、これからも傷は増え続けるかもしれない。
それでも……。

「ワシがここにいた。それを証明しよう。そして、長き平和の為に
……この老骨を削っていこう」

……そう呟く飾りではない本物の英雄の姿が俺には眩しかった。

「……ミナトさん」

「……コウキ君」

長い事、ミナトさんと会話らしき会話をしていない。

ずっと体調不良と部屋に籠もり続けるミナトさん。

何度も足を運ぶが、独りにして欲しいと言われ続ける。

何度も何度も足を運んでもその言葉に変わりはなかった。

いくらなんでもおかしい。

最早、心配、不安だなんて言っているレベルではなかった。

強行突破してでも扉の向こうにいるミナトさんに会うべきだ。

心はそう決めた。だが、悩む自分がまだいた。

本当にこうしていいのだろうか？

もしかしたら、俺が入ったら余計にこじれるのではないだろうか？

やはり不安は隠せなかった。

自分の感情なんか今はもう関係ないと思いつつ、臆病な自分は行動に移す事が出来なかった。

もちろん、そう思ってから何度も足を運んだ。自分の感情なんてっ

て。

でも、結局、俺が行動に移す事はなかった。

部屋の前まで行って、結局行動に移せず戻る。

そんないつも通りの状況にようやく？ いや、遂に事態が動いた、

いや、動いてしまった。

・・・呼びかけても声が聞こえないのだ。

何度ミナトさんの名前を呼んでも反応は返ってこない。

サウンドオンリーの無粋な文字は俺に何も教えてくれない。

この扉の向こうでミナトさんは何を思い、何を考えているのか。

どれだけ悲しみ、苦しんでいるのか、俺に何も伝えてくれなかった。

サウンドオンリーの画面。それを前にして、カツと頭が晴れる。

何を躊躇していたんだ、と。

悩む必要なんてなかった、と。

苦しい時に、悲しい時に、寂しい時に。

傍にるのが恋人なんだって、そう気付いたから。

「艦長！ マスターキーを貸してください！」

「え？ 何に使うんですか？」

「ミナトさんに会いに行きます。今、俺が行かなければならないんです」

「・・・はい！ わっかりましたあ！ マエヤマさん！ ミナトさんを御願います！」

そう言っ手渡しされるマスターキー。

これで無骨な扉を、全ての視覚を塞ぐ扉を、会話を妨げる扉を開ける事が出来る。

「ありがとうございます」

返事を待つ事なく走り出す。

身体よりも先に心が走り出している。
俺は異常な身体よりも速く走る心に追いつこうと必死に走った。

「ミナトさん！」

扉を叩く。

返事はない。

「ミナトさん」

扉を叩く。

これまで幾度となくしてきた事だ。
結果は変わらない。

「開けますからね」

マスターキーを通す。

開けた扉。

部屋は・・・真っ黒だった。

「ミナトさん？」

暗闇は全てを隠す。

まるで誰もいないかのように、姿も気配も隠し通す。
でも、俺の異常な視力は暗闇すらも克服した。

「・・・ミナトさん」

ベットに縋りつくようにして寝るミナトさんの姿。
ゆっくりと近付く。

「……らしくないですよ。ミナトさん」

ベットに寝るミナトさんは酷い格好だった。

いつも優しく、暖かく見守ってくれる眼はくすみ。

パツチリと大きな眼を演出する目元は隈が覆う。

手入れを欠かす事のない髪は荒れ、欠かす事のない化粧もされていない。

まるで本当に病人のようで、胸が痛んだ。

こんなになるまで恋人を放っておく奴がいるか。

自分を思いつきり殴りたくなった。

「……ミナトさん」

いつの間にか口に使っていた最愛の人の名前。

いつもならプツクリとしている妖艶で魅力的な唇。

今ではカサカサに乾燥していた。それが痛々しくて堪らなかった。

……思わず俯く。

「……コウキ君」

でも、すぐにバツと顔をあげた。

ミナトさんは確かに自分の名前を呼んだ。呼んでくれた。

「ミナトさん！」

何故か涙を流すミナトさんを必死に抱き締める。

久しぶりに味わう温もりに俺も自然に涙が流れていた。

「そう……ですか。そんな事が」

腕の中で意識を失うミナトさん。

それが俺に焦りと不安を呼び、胸を激痛が襲った。

何に構う事もなく、急いで医務室にミナトさんを運ぶ。

病状は疲労とストレス、そして、栄養失調。

最近ではまず起きないらしい病状でミナトさんは倒れた。

部屋に籠もりつつも何か食べているだろうと過信していた自分を全力で殴りたくなる。

何故、もつと早くこうしなかったんだと嘆きたくなる。

でも、辛いのは俺じゃなくてミナトさんだから。

……気丈に振舞った。

説教してくる女医さんの話なんて耳に入らない。

俺の意識は全てミナトさんに向いていたから。

それに気付いたんだろう。女医さんは無言で去っていった。

きつと、それは彼女の傍にいてあげなさいという意味で、

頭を下げるのも忘れてミナトさんが眠るベットへ飛んだ。

後で御礼を言おう。

そう決めて、眠るミナトさんの手を握って、俺はそのままミナトさんが起きるまで握り続けた。

「……ここ……は？」

待ち望んだ声。

飛び上がりたくなるような喜びを必死に抑え、出来る限りの優しい声で告げた。

「医務室ですよ。ミナトさん」

「・・・コウキ・・・君？」

「・・・はい。ミナトさん」

俺の顔を見て、呆然として、その後、周囲を見渡す。

「倒れ・・・ちゃったんだ」

「はい。栄養失調らしいです」

「アハハ。何だか間抜けね。それ」

そう力なく笑うミナトさん。

その様子が堪らなく悲しかった。

「ミナトさん。教えてください。何があったんですか？」

どうしても、俺はこうなった理由が聞きたかった。

きちんと説明を受け、その上で俺に怒鳴り散らしてくれてよかった。

どうして気付いてくれないのか！？

私がこんなに苦しんだのに！と。

そうやって少しでも心を軽くして欲しかった。

ストレスで傷付いた心を。

「・・・メグミちゃんから聞いてないの？」

「え？ 何も」

突然出たメグミさんという名前に驚いた。

「・・・そう。早とちりだったのか」

「・・・何の話です？」

「・・・ううん。でも、いつか言わないといけない事だから」

真剣な顔付きに変わるミナトさんに俺も自ずと表情を改めて、言葉の続きを待った。

「私はね……」

そこで聞いた俺のトラウマの件。
苦しむ俺に強要させて心を傷付けた。
激痛を与えるトラウマを決った。

そんな自分がどうしても許せなくて、自分が嫌われるんじゃないかって怯えて。
ずっと暗闇にいたらしい。

「……ミナトさん。貴方は優し過ぎます。」

こんな臆病で弱い人間の代わりに傷付かないでいいんです」
心からの本心だった。

トラウマになったのは自分の心が弱いから。
覚悟が、意思が、全てにおいて足りなかったから。
そんな苦しみをミナトさんが背負ってくれていた。
本当に良い女だと思う。本当に俺には勿体無い。
片手で握るミナトさんの手にもう一つの手を重ねる。

「貴方は本当に馬鹿だ。背負わなくていい事まで背負って」
弱々しい力で握り返してくる手が無性に悲しい。

「ミナトさんが俺の為を思ってた。それだ。
その事に善意があっても悪意はないという事は俺が一番知っています」

どんな事であつても俺を想つての事。

俺の為を想つて、ミナトさんなりに覚悟を決めてやつてくれた事。

「そんなミナトさんを俺が嫌う筈ないじゃありませんか。俺はずっとミナトさんを愛し続けます」

「・・・コウキ君。コウキ君」

頬を伝う涙。

全ての闇を切り離すかのように流れ続ける涙は歡喜の涙だった。

・・・ようやく、俺はミナトさんの笑顔を取り戻したんだな。

背負う事なきものまでをも背負う強く優しい彼女を俺は愛し続けよう。

俺を想い、信念を持って傷を抉る事も厭わない彼女を俺は愛し続けよう。

その溢れんばかりの愛に俺も溢れんばかりの愛で応えよう。

涙を流しながら、力弱く、

それでも、全ての闇を払うかのような真っ直ぐで綺麗な笑みを浮かべる彼女にそう誓った。

破る事ない生涯の誓いを。

第二十一話（後書き）

THE HAPPY END

と言っても過言ではない終わり方。

あれ？ おかしいな？ と書きながら思いました。

ちゃんと続きますのでご安心を。

ミナトさんをいつまでも放っておく事に耐えられずにこうなりました。

本来なら、

もうちょっとカエデと絡めてミナトさんを更に追い込むつもりですが、

方向性を変える事にします。シリアスは胸が痛いので。

これからはほのぼのが続くのかな？ 早くトラウマをどうにかしたいと。

第二十二話（前書き）

無事に関係が修復できて一安心ですね。

今回の話から特別なフレームが出てきます。

何か違和感がありましたら、ご連絡お願いしますね。

第二十二話

「それじゃあ、ちょっと失礼しますね」

ブリッジから抜け出す。

「健気ですねえ」

「ちょっとした休みでも必ず医務室に行きますからね」

「私、ミナトさんに謝らないと。ミナトさんはマエヤマさんの事を想ってやったのに。私、酷い事を」

「一緒について行ってやるから」

「・・・ガイさん」

「・・・メグミ」

「あ。間に合ってるからいらねえぞ」

「いいじゃねえか。別によお」

何かブリッジが騒がしいけど、無視だ。

あともうちょっとで退院できるらしいし、何より少しでもミナトさんと一緒にいたい。

「ミナトさん！」

「・・・コウキ君。別にいなくならないわよ」

そう言って苦笑するミナトさん。

あれから大分顔色も良くなったし、いつもの魅力的なミナトさんになりつつあった。

ま、今でも充分に魅力的だけどさ。

「仕事は？」

「休憩です。ま、後少ししたら戻らなっきゃいけないんですけどね」

「いちいち来なくていいのに」

「まあ、いいじゃないですか」

「まったく。仕方ないわねえ」

「いいの。いいの。」

「来たくて来てるんだから。」

「そろそろ北極かしら？」

「ええ。後数日で作戦開始ですよ」

「ええっと、北極熊だっけ？」

「そんな所です。あそこは微妙な操作が必要ですからね。ミナトさんはいつ頃？」

「明日には退院できるそうよ。心配かけてごめんなさいね」

「明日退院できるらしい。」

「いや。良かった。良かった」

「操舵の腕は大丈夫ですか？」

「甘く見ないですよ。私に任せなさいっての」

「力瘤を見せつけようとするミナトさん。」

「大人の魅力と少女の魅力を同時に味わった気がする。」

『マエヤマさん。そろそろ』

「あ。休憩時間が終わる。」

「それじゃあ、また来ますから」

「ええ。ありがとう」

「いえいえ。それじゃあ」

もう殆ど健康体と言ってもいいミナトさん。

本当に良かったと心から思う。

俺のせいで苦しませてしまったんだ。

ちゃんとその償いをしないと。

ま、償いと言いつつ、俺が一番楽しんでるけど。

「あ。コウキ」

「ん？ 何でお前がここにいんの？」

医務室から出ると何故かカエデと出くわした。

「私がここにいちや悪いの？」

「いやそうでもない。怪我でもしたのか？」

「ま、まあね。包丁で指切っちゃって。消毒だけでもって」

「おいおい。血の味がするの嫌だぜ」

「ちよ、ば、バツカじゃない！？ そこは大丈夫かって心配する

「大丈夫か？ ちょっと見せてみる」

「え？ え？ も、もお、いつも唐突なのよ。貴方は」

うわ。パツクリ切れてやがる。

でも、ま、変に切るよりは治りも早いつていうし。

「ちょっと待ってる」

「え？ 何？ 何なのよ」

出てきた医務室に再度突入。

「あら？　どうかしたの？　コウキ君」

「今、誰かいましたっけ？」

「ええつと、何か会議中とか何とか」

誰もいないのか。

ま、消毒ぐらいなら俺でも出来るだろ。

「来いよ。やってやるから」

「え？　いいの？　勝手に」

「いいだろ。消毒ぐらい」

ええつと、棚の中に消毒液があつて。

「コウキ君。彼女は？」

「あ、はい。カエデ。自己紹介してこい」

「はあ！？　何で？」

「人間関係を円滑にする為に自己紹介は必須だぞ」

「ふんつ。分かったわよ」

あ。あつた。あつた。

水絆創膏。料理できなくても皿洗いとはするんだろうし。

これがベストだろ。

「キリシマ・カエデ。コックよ。貴方は？」

「ふふつ。私はハルカ・ミナトよ。今はこんなんだけど、操舵手を務めてるわ」

「へえ。そうは見えないのに」

「ま、よく言われるわ」

意外と仲良くやってけそうか？

「おい。カエデ。ちょっとこっち来いよ」

「嫌よ。貴方が来なさいよ」

「はぁ……」

我が侘な奴だ。

薬品が置いてあった部屋の隣にあるベツトルーム。

消毒液、消毒液を浸す為のガーゼ、水絆創膏を持ってそこまで移動する。

ごみとかで面倒だから、こっちでやるうと思ってたのに。

「ほら。そこ座れよ」

ミナトさんのベツトの脇にある椅子を指し示す。

その間に、違う所から椅子を持ってきて、その前に座る。

「そういえば、どうしてカエデちゃんは医務室に？」

「ふんっ。なんでもな」

「こいつ指切ったんですよ。包丁で」

「あら？ 大丈夫なの？」

「ちよ、何で言うのよ!？」

「事実だろ。パツクリ切れてるから逆にいいですよ。傷跡も残らずスーッと治るか」と

「良かったじゃない」

「……別に言わなくたっていいのに」

消毒液を浸して……。

「ほら。手」

「何よ？」

「消毒してやるから手をだせ」

「嫌」

「嫌、じゃない。ばい菌が入ったら困るだろうが」

「貴方に触られるのが嫌」

「はあ……。こっちは親切でやってやってるのに」

「ここまで来てやらないのも何だかなって感じだし。」

「ほっと」

「キヤツ！ 何触ってんのよー！」

「いいから。黙ってるって」

強引に膝の上に置かれた手を掴む。

「こっちも時間ないんだから、手間取らせんなと思う。」

「綺麗な髪ね」

「あ、当たり前じゃない」

「お。ミナトさん、そのまま、気を引き付けておいてくれ。」

「さっさと終わらせちゃうから。」

「私も髪の毛切ろうかしら。ちょっと荒れちゃったのよね」

「それは困る。」

「いやいや。ミナトさんはそのままが良いですよ」

「あら？ そういえば、コウキ君の好きな髪型聞いてなかったわよね」

俺の好きな髪形ねえ……。とりあえずどちらかというロングの方が良いかな。色はその人に合ってれば良い。ストレートにも惹かれるけど、ちょっとカールしてても可愛く見える。

うーん。やっぱり、本人に合ってるのがいいって結論かな。

「俺としてはその人に合ってる髪型が素敵かと」

「じゃあ、カエデちゃんは？」

「な、何で私に振るのよ！ 貴方の意見なんてどうでもいいわ！」

「まあまあ、カエデちゃん。男の人の意見を聞くのも大事よ」

「私は私の好きにやるの！」

「可愛いと思うぞ」

「え？ ええ！？」

「あら。コウキ君ったら大胆」

可愛いのは事実。

イメージとちょっとズレてるけど。

「ま、もうちょっと長ければ完璧だな」

「だってさ」

「だ、だから関係ないって言ってるじゃない！」

クスツと笑うミナトさん。

何か不思議と微笑ましいんだよな。

カエデの態度って。

普通ならイラッとするんだけど。

本当に不思議だ。

「ちょっと沁みるぞ」

「え？ あっ・・・」

水絆創膏って便利だけど沁みるんだよなあ。

ま、後の事を考えたら今は我慢するべきだろ。」

「何だか兄妹みたいね」

「妹を欲しいという時期もありましたが、もっと静かな方がいいです
すね」

「何ですってえ！？ 充分、静かじゃない！」

「大きな勘違いだろ。でも、ま、静かになれば可愛い妹なんじゃない
なっ！？」

「飛ばすわねえ。初心なコウキ君とは思えないわ」

「こいつには何か遠慮いらなかなって」

「遠慮しなさいよ！」

「嫌」

「嫌って何よ！」

「俺は俺の信念を貫く！」

「はあ！？ 意味わかんないわよ！」

「カツコイイ事言ってるように聞こえるけど、実態はそんなんじゃないわよね」

「もちろんっす」

「その実態は？」

「散々弄り尽くす」

からかうと楽しくて仕方がない。

「弄る？ 私を弄ろうなんて百年」

「じゃあもう御婆ちゃんだね」

「違っわよおおお！」

相変わらずづるさいのお。婆さんや。

「はい。完了つと。これで皿洗いぐらいはできるだろ」

「あ、ありがとう」

「んじゃ、俺は行くからな。ミナトさん。また」

「ええ。頑張つて」

「どうも」

ああ。下手すると怒られんぞ。

・・・時間結構過ぎてるからな。
許してもらえるかどうか・・・。

S I D E M I N A T O

「相変わらずね」

慌てて去っていくコウキ君を見送りつつ思う。

きちんと話せば良かったなって。

勝手に勘違いして、勝手に悲しんで、勝手に引き籠もった。

それがどれだけ心配かけているかも気付かずに。

コウキ君は私の話を真剣に聞いて、全部聞いた上で、私を許してくれた。

酷い事をしたのに、ありがとうつて。

本当にお人好しだと思う。

嫌われて当然だと思ったのに、ずっと愛してくれるって言うてくれ

た。

本当に嬉しかった。

今回の件で、私が独り善がりだったって気付いた。

これからはきちんと話そうって。

どんな事でも臆せず話そうって。

そう思った。

コウキ君ならきちんと向き合ってくれるから。

「あいつ、忙しいの？」

コウキ君が去ったって事はここに残るのは私と彼女。

キリシマ・カエデちゃん。

亜麻色の髪の毛をポニーテールにした可愛い少女。

あと数年したら、誰もが振り返る美女になるでしょうね。

でも、今はまだ背伸びしたがるお年頃って感じかしら。

プンスカって口を尖らせてるのは歳相応の可愛らしさ。

ふふっ。仲良くなれそうだわ。

「コウキ君は色んな役職を兼任してるから忙しいのよ」

「ふんっ。中途半端って事じゃない」

ハハハ。言われてるぞ。コウキ君。

「ああ見えて頑張ってるんだから。応援してあげて欲しいな」

「べ、別に貶してる訳じゃないわ」

そういえば、どうしてコウキ君と知り合いなのかしら。

「コウキ君といつ知り合ったの？」

「.....」

考え中？ あれ？ 今度は真つ赤。
何したのよ？ コウキ君。

「言えないような出会い？」

「ち、違っわ」

慌てちゃって。

余計気になるじゃない。

「教えてよ」

「・・・迷子になったのよ。そこをあいつが・・・」

「え？」

「だから！ 迷子になった所を助けてもらったって言ってるじゃない！
い！

一回で聞き取りなさいよ！ もう！」

あ。そういう意味で真つ赤になったのね。

迷子が恥ずかしいって事が。

「へえ。コウキ君らしいかな。迷子の子を救出なんて」

「ま、迷子なんかじゃないわよ！」

「自分で言ってたじゃない」

「ば、場所が分からなかったから仕方なかったの！」

「それを迷子って言うのよ」

「ふ、ふんっ。勘違いはいい加減にして欲しいわね」

なるほど。

コウキ君の気持ちがあったわ。

この子・・・楽しい。

「貴方、コックなのよね」

「そうよ。それが何なのよ?」

「得意分野は?」

「和食ね」

「へえ。ホウメイさんの得意料理が中華だから、丁度いいじゃない」

「残念ながら、シェフには敵わないわ」

「あら? 素直ね」

「ふんつ。私はいつでも素直よ」

「そう。得意料理は? 肉じゃが?」

「・・・なんで分かるのよ。貴方もあいつも」

「コウキ君の口癖だったもの。得意料理は肉じゃがですって」

「はあ!? 意味わかんないわよ」

「ええ。私もわかんないわ」

「変な奴」

「そうね。変な子よ。コウキ君は」

どうせまた変な事を言って困らせたんでしょ。コウキ君。

「貴方はどうしてナデシコに乗ったの?」

火星からの救民は殆ど地球に降りた。

何人かは残ったけど、それも殆ど少数よね。

・・・やっぱり地球に居場所がなかったのかしら。

「地球に伝手なんか無いもの」

・・・両親はやっぱり。

「私は火星大戦で全てを失ったわ。両親も。お店も。妹も。居場所

なんてないわよ」

・・・強がってる。

きつと、この態度も強がりなんだわ。

必死に心を強く保とうとしている。

「ま、ナデシコが私を必要としているからここにいてあげてるって
のもあるけどね」

「そっか」

誰かがカエデちゃんを支えてくれると嬉しいんだけど・・・。

その第一候補がコウキ君ってのが複雑ね。

あれだけ遠慮なく話せる友達ってなかなかいないだろうし。

コウキ君はコウキ君で楽しそうだしなあ。

一難去ってまた一難って感じかしら。

「私は食堂に戻るわ」

「ええ。お大事に」

「ふんっ。大袈裟よ」

新たな仲間を引き連れて、花咲くナデシコ今日も行く。

・・・なんてね。

さてつと、早く復帰しないとコウキ君を取られちゃうじゃない。

つてな訳で寝よ。寝るのは嫌いじゃないしね。むしろ、好き。

S I D E O U T

「復帰。おめでと〜ございます。ミナトさん」
「ありがとう。艦長」

翌日、ミナトさんの姿がブリッジへ帰ってきた。
いや。やっぱりここはミナトさんの席って感じがする。
決して秘書さんの席ではないのだ。

「いやはや。これでようやくブリッジクルーが揃いましたな」

プロスさんもお満悦。

「あの・・・ミナトさん、私・・・」

「いいのよ。メグミちゃん。貴方はコウキ君の事を思ってたんでく
れたんでしょ？」

それなのに、怒るだなんて筋違いだもの。ありがとうね。メグミち
ゃん」

「でも、ミナトさんを傷付けて・・・」

「うっん。そうねえ。いつも通りに接してくれるのが一番嬉しいか
な」

「・・・そうですか。分かりました。これからよろしく御願いま
しますね。ミナトさん」

「ええ。こちらこそ」

ええっと、二人の間に何があったかは知らないけど、仲直りしても
らえてよかったかな。

「おかえりなさい。ミナトさん」

「・・・おかえり」

「・・・ミナトさん。おかえりなさいです」

オペレーター三人娘も笑顔でお出迎え。
うん。癒されるね。

隣に……。

「何よ。この名副提督と名高い私の時はあんな御出迎えしなかった
くせに」

・・・キノコさんがいなければなお良いのに。

耳は痛いし、ストレス溜まるし、元の席に戻っていいかな？

「艦長。元の席に戻ってもいいですか？」

「え？ でも……」

「大丈夫ですよ。トラウマを克服するまではレールカノンはルリち
やんに任せますから」

「……大丈夫ですか？」

「ええ。それに、俺がそちらの席に戻らないと新しく入った方の席
がなくなるじゃないですか？」

「え？」

「とにかく、オペレーター補佐などの仕事もありますから。前の方
が都合が良いんですよ」

「そうですね。分かりました」

おし。艦長の許可をもらいました。

さっそく、移動しましょう。

「……貴方」

「あ。どうぞ。席が空きましたので」

「……覚えてなさい」

ふつつふ。一名様、山菜狩りにご案内。

「可哀想よ。彼女」

「ちよつと因縁つけられたので。これぐらいの嫌がらせは軽いもんですよ」

「・・・はあ。あの席は神経使いそつだものね。色んな意味で」

エリナ秘書は副操舵手としてブリッジにいる義務がある。

だが、彼女の席はない。候補としては俺の席か、副提督の席か。その状況下で俺は元の席に戻つた。そうなれば、答えは判るでしょ？

「いや。そもそも俺の席はこっちですから」

「ま、それもそつね。私の隣はコウキ君」

「そついう事です」

顔を見合わせて笑う。

うん。色々とホツとした。

「・・・あの、コウキさん」

「ん？ 何かな？ セレスちゃん」

席に着くと隣のオペレーター席にいるセレス嬢から声がかかる。

「・・・あの・・・その・・・」

ん？ 俯いてどうしたんだろう？

俺、何か泣かせるような事しちゃつたかな？

「もあ。鈍感ね」

「え？」

ミナトさんが無言で自分の腿を叩く。
ああ。そういう事ですか。

「ホイっと」

セレス嬢の脇の下に手を入れて、持ち上げる。
そのまま、抱きかかえて……。

「これでいいかな？」

「……はい。ありがとうございます」

腿の上に乗せて、セレス嬢の背中からの重みを胸で支える。
いや。セレス嬢って軽いから全然気にならないけどね。

「ふふつ。可愛い」

隣の席のミナトさんを始めブリッジの誰もが微笑ましいといった笑
みを浮かべる。

それはあの秘書さんも同じで、ちょっと悪い事したかなって思っ
てしまう。

山菜狩りは酷すぎたかも。あれは隣にいるだけで胃に来そうだ。い
や。来る。

「この状態でセレスはオペレートした方が良くないんじゃないですか？」

「おいおい。ルリちゃん」

うつすらと微笑みながらルリ嬢らしくない事を言うルリ嬢。

ルリ嬢にまでからかわれたらブリッジでも四面楚歌になっちゃう。

「・・・そっちの方がいいかもしれません」

・・・同意しちゃ駄目だよ。セレス嬢。
体勢的に難しいでしょうが。

「駄目ですよ。戦闘中の緊張感がなくなっちゃうじゃないですか」
癒されすぎて戦闘に集中できない可能性が非常に高い。

「もともとあってないようなものよ。緊張感なんて」

「あ。酷いですよ。ミナトさん。ユリカは一生懸命頑張ってます」

「艦長もお気楽じゃない。それに、ナデシコはお気楽な方が強いと思っわよ」

「あ、それもそうですね」

「つて、おい。同意すんのかよ!？」

「・・・む」

「いやはや。反論できないのが不思議です」

「大丈夫なの？ この艦」

ゴートさんとプロスさんは半ば諦めているといった感じ。
エリナ秘書。大丈夫なんですよ。これで。

「そういえば、パイロットの方々は何してるんですか？」

パイロットの席には誰もいないし。

「貴方に調整してもらった高機動戦フレームをシミュレーションしてるのよ」

秘書さんも大概ですよ。

秘書って隠してるならそういう発言は避けるべきですよ。貴方がネルガルの要職だってバレますから。あれ？ 秘書は隠してなかったっけか？

「高機動戦フレーム？」

「ユ、ユリカ。報告書にあっただでしょ」

「ええっと、よく見てないからわかんない」

「まずいよ。ユリカ。ちゃんと見ないと」

「だってえ、書類ばっかじゃ疲れちゃうもん」

「疲れちゃうって。それが艦長の義務だよ。義務」

「ええ〜。あ。じゃあさ、ジュン君が色んな事を把握しておいてよ。」

ユリカはジュン君から聞くから

「駄目だって。そんなんじゃ」

「・・・駄目なの？ ジュン君」

「うっ！ だ、駄目。きちんと艦長は把握して」

「ジュン君。御願い」

「・・・ま、任せてよ。僕が全部把握しておくからいつでも聞いてね」

「うん。流石はジュン君。最高のお友達だね」

「・・・まあね。最高のお友達に任せておいてよ」

「やったあ。ありがとう。ジュン君」

カーツ。押しが弱い。意見を貫け。

艦長。いくらなんでもそれはまずい。

「・・・呆れちゃうわね」

全クルー呆れモード。

それなのに、まったく気付かない艦長は本当に凄くと思う。
ジュン君の気持ちを少しでいいから理解してあげて欲しい。

「……これが惚れ込んだ弱味って奴？」

「ちよつと違うと思いますよ」

「……そうね。私もそう思うわ」

ジュン君。しつかりしろ。

ちゃんと艦長の手綱を握ってくれ。

「……高機動戦フレームって何ですか？」

見上げるように訊いて来るセレス嬢。

あ。この角度。この姿勢。何を御願いされても応えてしまいそうだ。
ジュン君もきつとユリ力嬢の上目遣いに負けたんだな。

ちよつと気持ちが分かった。

「空戦フレームっていう空中戦の為のフレームがエステバリスにあるのを知ってる？」

「……はい。情報収集に優れていて、隊長機として用いられるフレームですね」

「お。詳しいね。セレスちゃん」

「……勉強、しました」

「そっか。偉い。偉い」

撫で易い位置にあるから思わず撫でてしまう。

ま、仕方のない事だ。きつと誰だっぺこうする。

「武装はミサイルポッド、イミディエットナイフ、ラピッドライフの三つで、まあ標準装備って奴」

「・・・はい。特に他のフレームと変わりはありません」

「ここにレールカノンを足したのが現在の空戦フレームの武装」

「そういえば、聞いたわよ。コウキ君」

い、いつの間に俺の後ろに。

ま、まさかボソソジャンプを使いこなしているのか!?

イネス女史!

・・・そんな訳ないけどさ。

流石は神出鬼没の説明お姉さん。

「な、何がです?」

「レールカノンをエステバリス用に実用化したのは貴方なんですつてね」

「いえいえ。ウリバタケさんメインの俺補助つて」

「そのウリバタケ技師から聞いたのよ。実用化にはマエヤマの力がなければ無理だった」

ウリバタケさん。

余計な事を言わないでくれ!

「まず、サイズの小型化。」

戦艦級に備え付けるので限界だったレールカノンをエステバリスでも持てるよう小型化した」

「ま、まあ、参考程度に思い付く事を言ってみただけですよ」

「無理な言い訳ね。物を小型化するという事がどれだけ大変か分からない貴方ではないでしょう?」

それに、エネルギーコストの問題も解決しているわね」

「・・・追い込まれていく。」

イネス女史。そろそろ抑えて欲しい。

「貴方の学歴は見させてもらったわ。

どうして高校中退の貴方がそれだけの知識を持ち合わせているの？」

うわ。ここに来て捏造経歴の穴が発覚。

確かに高校中退にしては調子に乗り過ぎた。

しかも、普通高校だし。工学関係者には怪しまれる事この上ない。

「ええつとですね・・・」

困った。本当に困った。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

黙り込むしかないという状況。

テンカワ一味とミナトさんという状況を知っている人達は心配そうにこつちを見ている。

プロスさん、エリナさん、ゴートさんなどのネルガル関係者は鋭い眼でこちらを見ている。

イネスさんはニヤニヤして助けてくれる様子はないし。ってか困らせてる張本人だし。

ああ。ピンチ。今までで一番のピンチ。

「・・・コウキさん。高機動戦フレームの説明をしてください」

「え？」

「・・・私が先に質問しました。後からの質問に先に答えるなんて酷いです」

涙目で見上げてくるセレス嬢。
ああ。罪悪感が溢れてくる。

「そうね。私が悪かったわ」

「・・・イネスさん？」

「セレスちゃんの言う通りだったわ」

「ちょ、ちよつと、きちんと答えてからに」

「貴方は幼い女の子を虐める趣味でもあるの？」

「な、ないわよ」

「それなら、後にする事ね。まずはセレスちゃんの質問に答えさせてあげなさい」

「・・・」

不満顔のエリナ秘書。

他の皆さんは呆れ顔やら安堵の顔やらで・・・。

とにもかくにも・・・。

「助かったよ。セレスちゃん」

「・・・何もしてませんよ？」

いや。マジで助かりました。

貴方のおかげです。この質問に答えたら即行で逃げよう。

「いいから。いいから」

感謝の気持ちを含めて頭を撫でる。

もう何かある度に撫でるのはもう癖だね、基本だね。

「高機動戦フレームっていいのはね、うん、簡単に言えば、

空戦フレームと0G戦フレームの良い所を合わせて、その上で強化したフレームなんだよ」

「・・・空戦と0G戦をですか？」

「うん。重力波推進で機動を行うのが0G戦フレーム。」

そこにラムジェットを組み合わせたのが空戦フレーム。」

そこに大量の高出力スラスタを加えたのが高機動戦フレーム」

重力波推進、別名、反重力推進機関。

これのおかげで大気圏内でも空が飛べる。

空戦フレームはこの推進機関で浮遊して、ラムジェットで方向を決めるらしい。

0G戦フレームは逆に宇宙空間で足場を作る為にこの推進機関を利用しているらしい。

格闘戦とか足場ないと力が逃げちゃうって。

そこに機動力を高める為のスラスタ、バーニア、スラスタを装着する訳だ。

「・・・大量の高出力スラスタっていうのはどういう事ですか？」

「八ヶ月って結構大きくてね。エネルギーコストの低いスラスタが開発されたんだよ。」

それを大量に付け、更にバーニア、スラスタを備え付ける事で高い加速度を得られる」

「・・・でも、バランスが悪くなりませんか？」

「まあね。でも、他の機能もそれを補えるだけ進歩してるんだ。」

重力波受信アンテナの効率も良くなったしね。その分だけ出力も上げられたって訳」

スラスタ技術の向上がブースターやバーニアの付加に貢献した。

スラスタで姿勢制御能力を強めて、その上で抜群の加速力を誇る。

「姿勢制御用のスラスタを強化して、全体的にスラスタを追加。背部に二基のバーニアユニットを接続して更に強化。驚異的な加速力だね」

「・・・スラスタばかりで不恰好になりませんか？」

「そのあたりは大丈夫みたいだね。見た限りカッコイイよ。設計者のセンスがいいみたい。」

ま、ゴツイ事は否めないけど」

ま、あれ、イメージで言えば、突貫大好きな某少尉の改修後宇宙仕様になった奴。

きつと某蜉蝣中佐もバツタか！？ と驚いてくれる事だろうね。

「加速力、運動性などなど、元のエステバリスとはまるで違つよ」

まあ、加速力、運動性、推力やアクロバット飛行とかその他諸々では、

到底ブラックサレナに敵わないんだけどね。あれは数年後の技術だし。仕方ない。

「重力波推進は本当に便利。重力下でも浮遊できるんだから。」

重力波推進技術の発達は重力を忘れさせてくれそうだよ」

大気圏を強引に突破した時は重力制御に本当に感謝したものだ。

俺の時代じゃあ、一般人では到底宇宙には行けないからな。Gが半端ないらしい。

「全体的な出力も上がったからDFの強度も上がったんだ。まあ、微々たるものだけだね」

微々たるものでも十分な強度。

その分を機動面と攻撃面に使えるんだから満足しなつきゃ。

「ま、要するに、従来のエステバリスより素早く動けて、攻撃が強くなって、守りが堅くなった。」

そして、特に素早さには気を遣いましたって事」

八ヶ月後だ。自分達が使ってたエステバリスより高性能になるのは当たり前。

その上で機動面に力を注いだ事で誕生した機体ってな訳だ。

それに、加速に対するG緩和の技術も進歩してるし。

ま、鍛えてなつきゃ辛い事に変わりはないけどね。

加速力とか半端ないし。

「距離が限定されてるのに高機動にする意味があつたんですか？」

お。意外と鋭い質問。このあたりは流石艦長って感じ。

「距離制限も伸びましたよ。重力波アンテナの技術も日々進化して
ますから」

「ほえ〜。凄いですね」

ええ。凄いです。

「いざという時は十分程ですが単独行動も出来ます。行動範囲が広がるのは良い事でしょう？」

バッテリーの最大稼動時間も伸びた。

ま、性能の向上で以前までとあんまり変わらなくなっちゃったけど。

「そうですね。十分は意外と長いですから。色々な事が出来ます」

今回はサツキミドリの単独行動がなかったよな。
テンカワさんに頼んでパイロット達に単独行動を一通り経験しておいてもらおうかな。
時間とかに気を遣いながら行動するのって大変そうだし。

「・・・コウキさんは何を調整したんですか？」

「俺が調整した所は各部の制御の所かな。」

姿勢制御とかバーニアの出力とか色々調整が必要だったんだ。

ま、シミュレーションだけでしか試してないから稼働データが欲しいけど」

ソフトを組める事が結構役に立ててる。

偶に遺跡の知識を活用させてもらってるのは秘密だ。

「何だか、コウキ君ってばいつの間にかそっち系の人間になってたわね」

「え？ どういう事ですか？」

「元々は副操舵手、副通信士、オペレーター補佐でしょ？」

今では武器の開発とか制御盤の調整とかじゃない」

・・・否定できない。

というよりもオペレーター三人娘は教える事も殆どないし。

通信士と操舵手は優秀で俺の手なんか必要ないし。

こういう事をしないと知らない子なんだよな、俺。

「結構楽しいんですよ。こういう事。昔はよく色々な物を拾ってきては工作してましたよ」

幼少の頃、一番はまったのはダンボールで秘密基地作りです。

いや。今思えば無駄な物ばかり作ってましたが、当時は楽しくて仕方なかったですね。はい。

「どうです？ ネルガルに雇われませんか？ 高給でお迎えしますよ」

「え？ いやいや。仕事はやっぱり充実感ですよ」

「あらま」

ミナトさんの台詞を真似させてもらいました。

「ま、そんな所かな」

さて、高機動戦フレームの説明は終わった。

・・・どうやってこの場から離脱するか。

「それじゃあ、次は私の質問に答えてもらおうかしら」

げ！？ 来たよ。会長秘書からの性悪質問。

「どうして貴方はそれ程の」

あ！ この手だ！

「あ！ パイロットはシミュレーションしてるんですよね？」

「ちょ、ちよっと、話の途中で」

「いやあ、パイロットの意見を聞きたかったんですよ。

ちよっとシミュレーション室に行ってきますね」

強引にでも突破する。

「帰ってきたらまたしてあげるから、ちょっと待っていてね」
「・・・はい。分かりました」

悲しそうな表情で俯くセレス嬢。

ああ。胸が痛む。

けど、緊急事態なんだ。分かってくれ。

「ほら。セレスちゃん。今度は私の所において」

悲しそうに席に戻るセレス嬢をミナトさんが抱きかかえて俺と同じようにする。

お。セレス嬢も喜んでるじゃないか。むしろ、俺より全然絵になってるから素敵だ。

「じゃ、じゃあ、後はよろしく御願います」

逃亡~~~~。

「・・・逃げたわね。いいわ。後できちんと話してもらいます」

聞こえない。

これからも誤魔化し続けてやるぜ。

手加減してくれよ。特にプロスさん。

黙秘権を行使しましょう。いざという時は。

・・・あるかどうか知らないけど。

「す、凄い加速力だな。これ」
「うう。意識が飛びそう」

やって来たのはシミュレーション室。

出入り禁止を言渡されてたけど、目的が目的だから大丈夫でしょ。

「どう？ シミュレーションは」

「おお。コウキじゃねえか。こいつは凄いな」

「まあね。それでどう？ 振り回されてない？」

「いや。今まで全然違ってな。加速も停止も反応が早くて戸惑う」

「ま、急加速、急停止には気を遣ったからね。機敏な動きとかしてみたいでしょ？」

「まあな。これなら俺のゲキガンパンチの命中率が上がるぜ」

嬉しそうだね。ガイ。

「コウキ。これは厳しいよ。頭がぐらぐらする」

「まあ、高機動は接近戦とかメインだからあんまりヒカルには必要ないかもしれないけどさ。

慣れといてよ。いざっていつ時に使えると思うから」

「ううん。まあ頑張ってみる」

中距離というか、スバル嬢の位置とイズミさんの位置からの確な位置取りするのがヒカル。

空間把握能力とでもいうのかな。そういうのが上手い。
サッカーだったらボランチあたりに欲しいね。

「くはあ！ こいつはキツイな」

「リョーコさん。調子どう？」

豪快にシミュレーターから出てくるスバル嬢。

こういふ事言うのもなんだけど、ガイ並に男らしいよね。

「振り回されちまうぜ。でもよお、使いこなせばかなりの戦力だ」

「そうでしようね。でも、リョーコさんなら使いこなしてくれるんでしょ？」

「上等じゃねえか。やってやる」

再びシミュレーターに入るスバル嬢。

いや。頑張るね。凄いよ。

「……………」

「大丈夫ですか？」

「……………」

ダウンしましたか。

後方支援はあまり動きませんからね。

「ん？ マエヤマか」

「あ。テンカワさん。満足してくれました？」

「ああ。以前より大分マシになったな。ただ、急旋回する時に違和感がある」

む。急旋回か。

姿勢制御の所かな。

バランスが若干崩れるのはシミュレーションで分かってたけど、許容範囲だからいいやと思ってただけだな……。

流石はテンカワさん。

バレると思わなかった。

「分かりました。作戦終了後にも修正しときます」
「ああ。頼む」

むう。とりあえず作戦終了後に再調整だ。
稼働データもあるし、調整しやすいだろう。
あのあたりは凄く細かく調整しないといけないからな。
それに、今、変えたら逆に違和感になっちゃうだろうし。

「自分で乗って試したのか？」

「いえ。シミュレーション室は出入り禁止だったので、仮想ソフトを使つてのシミュレーションです」

素晴らしいんだよ、このソフト。
瞬時に欠点とか教えてくれるし。
遺跡から久しぶりにダウンロードしたソフトでとても便利。
やはり未来の知識は凄まじいね。

「・・・まだ駄目なのか？」

「コンソールに触れる事は出来ませぬ。でも、攻撃しようと思つと手が震えて」

本当に治らない。

やっぱりイネス女史あたりにきちんと相談すべきなのかな。

「・・・そうか。まあ、あまり無理はしない事だ。焦る必要はないからな」

「・・・はい。そうします」

・・・ちよつと暗くなつちやつたな。

「それじゃあ、俺はそろそろ行きますね」

「ああ。参考になったか？」

「ま、それなりです。後は慣れてもらってからです」

「慣れるまでは以前の空戦フレームを使う事になってる」

「テンカワさんはもちろん」

「無論、高機動戦フレームを使うつもりだ。稼動データが収集できるよ色々試してみよう」

「御願います」

ふむ。ブリッジに戻るか。

・・・どうする？ 無視し続けるか？

それとも、色々と伝手があったとか言い訳するか？

・・・うん。その方向でいこう。どっちもだ。

何を訊かれてもしゃべりません！

親が研究者という言い訳で必ず誤魔化し通します！
ハッハッハ。・・・頑張ろう。精一杯。

第二十二話（後書き）

誰か！ 俺にツンデレのアヴァロンを！

カエデの容姿がきちんと決まりません。

誰かこれこそがツンデレだという意見を頂けないでしょうか。

また、絵とか得意な人。カエデを描いてもらえませんか？

こうしてくれというリクエストみたいな形でも構いません。

絵とかがあった方がイメージも浮かびやすいと思うので。

また、最新話とかも気にせず、色々とお話をお聞かせ下さい。

参考意見として糧にしたいので、軽く意見交換みたいな感じで。

よろしく御願います。

最後に、原作でフィールドランサーが登場したのっていつでしたっけ？

知っている方は情報提供を御願います。

第二十三話

「確かにナデシコは軍と共同戦線を張っていますが、私達に理不尽な命令に対する拒否権が与えられている事を忘れて下さい！」

「ま、一応はね」

「本艦クルーの総意に反する時、私は艦長として「お生憎様。今回の任務は敵の目を掻い潜つての親善大使を救出する事よ」

「救出？」

ブリッジの上部から話すキノコ提督。

親善大使が誰か訊いて焦らせてやろうかな。

「親善大使がですか？ 何で北極なんか？」

「寒さに強い方なのよ。好奇心旺盛だし」

凄い言い訳。意味わかんないし。

「人助けよ。地球の平和を護るナデシコに相応しい任務じゃない。もちろん、拒否なんかしないわよね？」

人じゃないけどね。

「人助けですか。・・・それなら」

「ま、いいんじゃないの」

人助けと言われれば人が良いナデシコクルー。
やる気が漲ってます。

「それじゃあ、作戦を立てます」

ユリカ嬢の提案。

でも、ま、ただの救出作戦なんだから、行って帰りますで済む筈。
本来なら、けどね。

視界を遮るかのようなブリザードがうまくレーダーを誤魔化してく
れる。

でも、艦長がなあ……。グラビティブラストぶっ放しちゃうし。
今回は対策練ってあるのかな？

「……という訳です」

要するに、そ〜っで行って、そ〜っと帰りましょ〜って事だよね。
パイロットの仕事は回収作業と護衛と。
俺の仕事は……。特になさそ〜だ。

「交代で休憩を取ってしましましょう。移動中は特にやる事もない
ですし」

ごもっともです。艦長。

「ミナトさん。セレスちゃん。昼食、食べにいきましょう」

交代での休憩時間。

やっと俺の番が回ってきた。

腹減って仕方なかったんだよ。

「そうね。行きましょう」

「・・・はい」

さて、今日は何を食べるかな。

「それじゃあ、失礼しますね」

「はい。ごゆっくりどうぞ」

ブリッジクルーに挨拶をして、ブリッジから抜け出す。

何だか、最近はこの組み合わせが多い。

俺の役職から副操縦士が減ったからだろうな、多分。

俺がブリッジにいるの意味は副通信士ぐらいだし。

オペレーター補佐も最早必要ないと僕は思います。

いらぬ子過ぎるな。俺。

「今日は何を食べるの？ コウキ君」

「そうですね。和食でも食べようかと」

「あ。カエデちゃんの奴？」

「ええ。あいつの意外と美味いんですよ」

肉じゃがはマジで美味かった。

「そうね。煮物とか思わず感動する美味しさだったわ」

俺は生粋の煮物好きである。

そして、カエデの煮物はかなりのレベルだった。たとえ洋食を食べようとも必ず一品料理として煮物を並べてしまう程に。

ミナトさんの絶賛に賛同してしまう俺がいる。

「素敵よね。料理が出来る奥さんって」

「カエデですか？」

まあ、和食好きの俺としてはカエデ程に料理が出来る奥さんだったら嬉しいですけどね」

「あら？　じゃあ、私よりカエデちゃんがいい？」

「いえいえ。ミナトさんの料理も美味しいじゃないですか」

「・・・ミナトさんのお料理、食べてみたいです」

「機会があったらね。セレスちゃん」

「・・・はい」

と、話していると食堂に到着。

「ええつと・・・」

おお。筑前煮。あれはやばいくらい美味い。

ついでにきんぴらごぼうも付けよう。

メインは・・・天井かな。天ぷらが食べたい気分だ。

「決まった？　コウキ君」

「ええ。天井に筑前煮ときんぴらを付けます」

「また筑前煮？　好きね」

「病み付きですね。思わずカエデを褒めたくくなります」

「褒めた事なんてないじゃない」

少女Aが現れた。

戦う。逃げる。道具。呪文。
・・・隠された選択肢、弄くる。

「ん？ 少女Aじゃないか。何でここにいるの？」

「当たり前じゃない。私はコックよ？ ってか、少女Aって何よ？」

「え？ コック！？ お前がか！？ 少女A」

「何驚いてんのよ！ 前からいるじゃない！」

何回食堂で会ってると思ってるの！？ ・・・それと少女Aはやめなさい」

「まあまあ。落ち着けよ。美少女A」

「ちよ、わ、私が悪いの？ ねえ？ 私が悪いの！？ あ。ちなみに美少女なら許してあげるわ」

あ。許してくれるんだ。

「何の話だっけ？」

「私がコックって話よ！」

「当たり前じゃん。俺はお前の和食を楽しみに来てるんだから」

「ふ、ふんっ。そうならそう言えばいいじゃない」

「おう。早くお前のハンバーグが食べたいな」

「ええ。任せなさい。最高のハンバーグを、って洋食じゃない！」

「あ。そっか」

「そっかじゃなあああい！」

隠しコマンドは常時選択できるようにしておこう。

呪文なんかより全然使える。

「ふふっ。相変わらず仲がいいわね」

「良くなんかないわよ！」

「え？ そうなのか？ 俺は・・・てつきり・・・」

「な、何落ち込んだのよ！？ そ、そうね。仲は悪くないわよね」

「いや。仲、悪いだろ」

「早！ 立ち直り早！」

「いやあ。お前のように遠慮なく弄れる奴はそうはいないって」

「遠慮しなさい！ というか、そもそも弄くのはやめなさい！」

「あ。それは無理」

「無理ですつてえええ！」

「ほら。あれだよ。米洗つてつて言つて洗剤で洗われるぐらい無理」

「何それ？ そんなの当たり前じゃない」

「そ。だから、お前が弄くられるのも当たり前」

「何？ 当然つて事？ 私は弄られる為にここに居るつて事？」

「うん」

「否定しなさいよおお！」

「だから、蒸し器なのに水分がないくらい無理」

「焦げちゃうじゃない。台無しじゃない。そもそも蒸せないじゃない

い

「そついつ事だよ」

「どついつ事よ！？ 意味わかんないわよ！ もあ・・・」

ああ。不貞腐れちゃった。

そつやつて、口を尖らせるからからかわれるんだつての。

「あ。そつだ。また筑前煮頼むからよろしく。後、キンピラも」

「またあ？ 飽きないのね」

「ま、お前の料理の腕は認めている。正直言つて美味しい」

「あ、ありがと」

「まあ、和の心は足りないがな」

「髪の毛はこんなんだけど生粋の日本人よ。両親はどつちも日本からの移住だもの」

「カエデ」

「な、何よ？ 真剣な顔して」

「和の心は文字通り心に宿るものだ！ 容姿や国籍ではない！」

「・・・力説されても困るんだけど・・・」

そいつはすまん。

「ま、楽しみにしてなさい。いつも通りの美味しさを味わわせてあげるから」

「お。そいつは楽しみだ。包丁には気を付けるよ」

「あ、あの日は偶然よ。いつもはミスなんかしないわ」

「そっか。ま、気を付けるに越した事はないからな」

「そうね。ありがとう」

「んじゃ、また」

「ええ。また」

去っていくカエデ。

逃げられても回り込むつもりはないぞ。

「本当に仲がいいわね」

「面白いですから。あいつ」

「ま、女の子を二人も待たせるのは感心しないけど」

「あ。すいません」

つい夢中になっちゃって。

「じゃあ、お詫びに奢りますよ」

「あ。そういえば、コウキ君はこの八ヶ月で」

「そっなんですよ。いつの間にか溢れんばかりに増えてて」

何もしないのに金が入ってくる。
ふむ。楽だな。素晴らしい人生だ。

「気分は浦島太郎って感じですね。知らない間に金が増えたんだから」

「もしコウキ君が浦島太郎なら幸せな浦島太郎ね」

ま、童話も説話も浦島太郎はあまりよろしくない結末だしな。確かに幸せな浦島太郎だ。

「セレスちゃんは何を食べる？」

「・・・お蕎麦を食べます」

「蕎麦か。美味しいもんね」

「・・・はい」

「ミナトさんは？」

「ハンバーグ定食にしようかしら」

「分かりました」

食券を買って・・・。

「席を取っていただけます」

「りょくかい」

いざ、キッチンへ。

「御願います」

「はい」

キッチン内にいるハウメイガールズに渡して、取っておいてもらった席に付く。

ここはハウメイガールズが配膳してくれるから楽でいい。学校の学食は出来るまで待つてないといけないから大変でさ。混んでる時の後ろからのプレッシャーは凄まじいね。仕方ないんだけど。

「ホツと」

ミナトさんの正面、セレス嬢の隣に座る。こついつ時つてどこに座ればいいのか分からないよね。ま、前からこの配置だったから、今はもう迷わないけど。

「あ。パイロット組がいますね」

原作通り、パイロット達が食堂で話してる。暇だねえとかグテ〜ってなってるのはまずいと思うよ。

「移動中は暇なものね。彼ら」

「ま、そろそろ模擬戦でもするんじゃない」

「やあテンカワ君。暇ならちよつと付き合ってくれないかな」

バサッ！

一斉に身を引く一同。

「そ、そういう意味じゃないよ」

誤解を招くよ、その言い方は。

「君の腕前を見ておきたくてね。凄腕パイロットと名高い君を」

不敵に笑う会長。

負ける気はないって所かな。

ま、惨敗だと思っけど。

「お。いいじゃねえか。俺としても新入りの力を見ておきたいからな」

「おお！ やれやれ、アキト。ライバルからの挑戦は受けるもんだぜ」

「そうだねえ。新しいフレームにも慣れておきたいし」

乗り気な他メンバー。

「あのさ、僕はテンカワ君と」

「そうだな。きちんと実力を把握しておきたいし、連携も取っておきたい。ちようどいいな」

「はあ……。空回り」

意気揚々、一部肩を落として去っていった。

「元気ね」

「まあ、パイロットは元気が命ですよ」

「そうね」

パイロットは皆でワイワイとやって結局戦争を乗り切った。きつと、あの状態が彼らが一番力を発揮できる環境なのだろう。

「お待たせしましたあ」

お。ご苦労様です。

「ありがとうございます」

天井、筑前煮、きんぴらごぼう。
いいね。いいね。美味しそうだね。

「それでは、いただきます」

「いただきます」

「・・・いただきます」

挨拶は大事だよ。

「そうそう。コウキ君はパイロットの仕事はどうなの？」

パイロットか。

トラウマがある以前にメンバーの質、数共に俺の必要性を感じないんだよね。

820

「ま、状況次第って奴ですね。一応アサルトピットもありますが、数的に充分だと思えます」

「そうよねえ。もう六人もいるものね」

「ええ。多過ぎて困りますし。どうなるんでしょう？」

正直、今の俺は正式な役職がない状態に等しい。

何かしないとクビになっちまうよ。

「ま、私としては安心なんだけど」

「・・・私もそちらの方が嬉しいです」

「ハハ。ありがと。でも、ま、出番があるかもしれないから」

そう、どうなるか分からないんだ。

トラウマは一刻も早く払拭しておく必要がある。
やっぱりイネス女史に相談しよう。

「あれ？」

「ん？ どうかしました？」

「え、ええ。あまり見かけない組み合わせだなあって」

「ええっと・・・」

ミナトさんの視線の先には・・・カエデと秘書さん？
どういう関係だ？

「何か深刻な話みたいね」

「ええ。妙に真剣な顔してます」

・・・気になるな。

後で訊いてみよう。

「あ。終わったみたい」

眉を顰めながらキッチンへと入っていくカエデ。
包丁を握るけど、心ここにあらずって感じた。

「・・・もしかして・・・」

カエデが展望室にいた事がバレた？
でも、映像は加工しておいたし。

「どうかしたの？」

「ちよっと。カエデに話を訊いて、内容次第ではテンカワさんと要
相談ですね」

もし、エリナ秘書がカエデをジャンパーとして眼を付けてたら……。

「阻止するべきだろうな。あいつの為にも」

ジャンパーという存在がカエデからバレると彼女が将来危険になる可能性が高い。

せつかく生き残った命。俺の勝手な思いだけど、平和に生きて欲しい。

「あいつに話を訊いてきます」

「え？ ご飯は？」

「後にも。ちよつと気になって仕方ないので」

「コ、コウキ君。……行っちゃった」

ええつと、キッチン、キッチンつと。

「お〜い。カエデ」

「何よお。私は貴方と違って忙しいのよ」

悪いね。

「さつき、エリナさんと何を話してたの？」

「はあ？ 貴方には関係ないでしょ？」

「まあまあ、珍しい組み合わせだったからさ」

「ま、いいけどさ。何でも、貴方は特別な、だって」

「ッ！？」

……やはり。

どこかでミスったみたいだな。
明らかにカエデが疑われている。

「・・・どう特別だつて？」

「特に何も言つてなかつたわ。ただ木星蜥蜴を見返せるって
木星蜥蜴を見返せる・・・ね」

火星大戦で恨みがあるのを利用しようとしてるのか・・・。

「・・・もし、本当に木星蜥蜴を見返せるなら、私は・・・」

こいつは相当に木星蜥蜴に恨みがあるみたいだな。
注意しとかないと、簡単に利用される。

「カエデ」

「何よ？ いつになく真剣な顔して。またからか

「気を付ける」

「え？」

「誰それを信用するなどは俺からは言えない。でも、きちんと考え
てから返事をしろ」

「ど、どういう意味よ？」

「お前が木星蜥蜴に恨みがあるのは分かる」

「・・・」

「でも、その恨みに踊らされて、

誰かに利用されるような事がないようにしっかりと考えてから動
いて欲しい」

「・・・貴方には分からないわ。私がどれだけ苦しんだかなんて

「・・・カエデ」

俯くカエデ。

今まで見た事がない弱々しい姿だった。

「でも、忠告は受け取っておくわ。よくわかんないけど、気を付ければいいのね」

「ああ。俺はお前に辛い思いをして欲しくない」

「・・・まったく。いつでもそれくらい真剣でいなさいよ」

「え？」

「な、なんでもないわよ。とりあえず、分かったわ。ありがと」

「礼を言われても困るけどな。ま、何かあったら何でも相談に乗るからな。気軽に言ってくれ」

「熱でもあるの？」

「馬鹿。真面目だ。カエデ。いつでも力になるからな」

「はいはい。分かったわよ」

「分かったならいい。それじゃあな」

「・・・何よ。らしくないじゃない」

・・・間違いなくネルガルはボソソジャンプの実験にカエデを利用しようとするだろう。

テンカワさん達と相談して対策を練らないと。

「おかえりなさい」

「ええ」

食べかけの天井。

何だか食欲が失せちまったなあ。

もちろん、全部食べるけど。

「どうだった？」

「テンカワさん達に相談する必要があります」

「分かった」

ミナトさんも協力者だ。
ちゃんと事情も話してある。
そうだな。これから……。

「……チユルチユル」

……ああ。和むな。

俺の荒んだ心が癒されるよ。

一瞬にして気持ち切り替わった。

「……チユルチユル」

「ミナトさん。楽しんでたでしょ？」

「ええ。とつても」

正面から見るミナトさんは本当に微笑ましそうに笑ってる。
まあ、脇からでも微笑ましいんだけどね。

「なんて言うの？ こう、一生懸命な所とか」

「でも、以前より使い方が様になってますよね。箸の」

「ええ。ちゃんと成長してるのよ」

つたない箸捌きで、蕎麦を一生懸命に掴み。

小さな口でチユルチユルと吸い込む姿は微笑ましい事この上ない。
しかも、ちゃんと周りに飛ばさないよう食べてるから思わず偉い偉
いと撫でたくなる。

「……気持ちいいです」

実際にしちゃってるけど。

食事中はまずいよな。

「・・・あ」

そんな悲しそうな顔をしないでくれ。

「食事中に我慢できないコウキ君が悪いわね」

ニヤニヤしながら責めるとは・・・。
ミナトさん。悪女め。

「食べ終わったらね」

「・・・はい」

やばいなあ。気付けば手が頭の上にある。
魔力だな。呪いだな。神の意思だな。

だが、掛かって来いと言いたい。

それぐらいセレス嬢の頭を撫でる行為には魅力がある。

「・・・食べ終わっちゃいましたか？」

セレス嬢はゆっくりだからな。

どうしても、俺やミナトさんが先に食べ終わってしまう。

「大丈夫だよ。急がなくて。ゆっくり食べな」

「そうね。ゆっくり、ちゃんと噛んで食べなさい」

「・・・はい。分かりました」

気にしないでいいぞ。セレス嬢。

こっちも充分和ませてもらってるから。

「びつくりしたあ
「何でしょうか？」

突然の振動。
何だ？ 何だ？

「うお
「キャッ！」
「・・・あ

ゴドンッ！

ああ。

「・・・
「・・・
「・・・

ああ・・・。癒される。

「・・・
「・・・
「・・・

ああ・・・。和む。

「・・・
「・・・
「・・・

「・・・あ」

ん？ セレス嬢。
どうかしたのか？

「・・・零しちゃいました」

・・・振動が原因だろう。

蕎麦の中身が机やら服やらに掛かっちゃってる。

「・・・すいません」

意気消沈のセレス嬢。

・・・おい。誰が原因だ？ これは。

「あ。大丈夫ですか？」

布巾を片手にハウメイガールズがやってきて、机を拭いてくれる。

「・・・これは着替えた方がいいわね」

カチンツと来たな。

和みの時間を潰し、癒しの時間を潰し、

セレス嬢の食事の時間を潰し、あまつさえセレス嬢を悲しませた。
断じて許せん。

『マエヤマさん。ミナトさんとセレスさんを連れてブリッジへ御願
いします』

「何があっただんですか？ プロスさん」

『あ。え〜とですね。艦長が・・・』

艦長か。少し説教に混ざらせて欲しいぐらいだ。

「なんとなくですが、了解しました。

でも、セレスちゃんが食事中でして、さっきの揺れで服を汚してしまっただんです」

『そう・・・ですか。それでは、セレスさんは着替えを致してから御出でくださいなれば』

「分かりました。ミナトさん。俺がセレスちゃんを連れてきますので、先にブリッジに」

「ええ。分かったわ」

ミナトさんは操舵手だからブリッジにいるべき。

俺は特に重要な役職という訳ではないから、こつちを担当する。

「という訳で、俺とセレスちゃんは少し遅れます」

『かしこまりました。出来るだけお急ぎ下さい』

「はい。すみませんが、御願いできますか？」

「大丈夫ですよ。頑張ってくださいね」

「ありがとうございます」

ホウメイガールズの一人に後始末を任せてしまった。

心苦しいが、緊急事態だ。申し訳ない。御願います。

「じゃあ、先に行くわね」

ミナトさんが去る。

「それじゃあ、行くよ。セレスちゃん」

「・・・はい」

セレスちゃんの手を握って、出来るだけ早く。
うん。意外と部屋とブリッジが遠い。

「ごめんね」

ひょいっとセレス嬢を抱きかかえて、ダッシュ。

「・・・あ、あの・・・」

「ごめんね。ちょっと我慢してて」

「・・・あ・・・はい」

セレス嬢の部屋は俺の部屋の近くにある。

ブリッジクルーは一箇所に集められてるからな。

ある程度の場所は分かるから、あとの細かい所は本人に訊こう。

「セレスちゃんの部屋はどれ？」

「・・・あれです」

指差す方に向かう。

お。これだな。名前が書いてある。

「ほい」

セレス嬢を降ろす。

「ごめんね。待ってるから、ちょっと急いで着替えてきて」

「・・・はい。すぐに着替えます」

部屋に消えるセレス嬢。

.....

「終わりました」

お。意外と早かったな。

急かしちゃったみたいだ。

「さ、急ごうか」

パツと抱き上げて再びダツシユ。

時間がないから、許してくれよ。セレス嬢。

「お、遅れましたあ」

かなりの時間を走ってブリッジに到着。

一斉に集まる視線にちよつと動揺。

「随分と余裕ね。遅刻した拳句……」

「何ですか？ きちんと理由は話した筈ですが」

プロスさんに伝えたんだ。

怒られる筋合いはない。

「……とりあえず、降ろしたら？」

……あ。

セレス嬢を抱きかかえたままだ。

ブリッジに入る前に降ろそうとしてたのに。

すっかり忘れてた。

「ごめん。ごめん」

「……え、あ、いえ」

セレス嬢は俺から降りると、トコトコとすぐさま自分の席へ戻ってしまっただ。

「……嫌だったのかな？ 申し訳ない。」

「それで、これは？」

「え〜とですね……」

「艦長がグラビティブラスト撃っちゃったらしいです」

「メ、メグミちゃん」

「私は正しい事を報告する義務があります」

熱血記者じゃないんだから。

「何故かお聞きしても？」

「え〜と……」

「暇過ぎて寝かけてしまい、寝ぼけて発射スイッチを押してしまっただけです」

「メ、メグミちゃん」

「私は正しい事を報告する義務がありますから」

「厳しいね、メグミちゃん。」

「フォローのしようがないわ。」

「何か機嫌悪いね」

「いえ。折角ガイさんと……」

「ああ。そういう事」

ガイと何か予定があったんだろっね。
作戦活動が長引いたらその分の時間も少なくなるって訳か。
それじゃあ、しょうがないよ。

「もう散々説教されてます？」

「・・・はい」

「ここで俺が説教したら？」

「・・・ええええん。もう許してくださいあああい」

なんか怒る気も失せた。

ユリ力嬢はポワポワとお気楽にやってもらうのが一番だな。

「ま、失敗は失敗で艦長には糧にしていたくださましよう」

「お！」

「過失を責めても仕方ありませんので、これからを考えましようよ」

「おお！ その通りです。流石はマエヤマさん。良い事」

「調子に乗っちゃ駄目ですよ。艦長」

「・・・はあ〜い」

ま、俺としては戦闘があった方が稼動データが取れるからいいんだけどね。

彼らが墜ちないって分かってるし。負担かかるけど。

「それでは、後は艦長に」

艦長にその場を任せ、自分の席に着く。

「現状で私達が取れる作戦は二つ。木星蜥蜴を全滅させてから救出するか、

木星蜥蜴を引き付け、一機のエステバリスで救出して逃げるか。

そのどちらかです」

全滅か、陽動か。

まるでスーパードリルなロボットが入り乱れるシミュレーションゲームみたいだ。

どっちを選択するかで初期位置が変わるんだよな。こつこつと。結局、全滅させる事になる気がするけど……。とんずらはしない。

「今の戦力で全滅は可能なのか？」

「パイロットは六人、ナデシコも損傷なし。不可能ではありません」

強化されたバツタでさえ貫けるよう強化されたラピッドライフル。単純に殆どの敵を貫けるレールガン。

デイストーションアタックならある程度の奴でも攻略可能だし。

今回はテンカワさんが高機動戦フレームだからな。時間掛ければ出来そう。

「但し、敵戦力が把握できていません。レーダー反応も薄いですしブリザードで視覚が潰されているし、そういう面では辛いかも。」

「一機のエステバリスでの救出は可能なのか？」

「陽動さえうまくいけば容易ですね。稼働時間も伸びているので、ある程度の余裕もあります」

原作ではアキト青年が苦労してたけど、

今回はテンカワさんが敵を思いつき引き付けてくれそうだから難易度は下がるかな。

やっぱり、こつこつの方がいい気がしてきた。

「……………」

「ユリカ。どうするの？」

「陽動作戦で行きます」

賛成です。艦長。

「救出に行くのはアキト」

「いや。俺は高機動戦フレームでの稼働データを集めたいからな。万能タイプのアカツキがベストだと思う」

「アキトがそう言うなら、そうするね」

テンカワさんに弱え。即行で作戦変更しましたよ。まあ、僕としては都合が良いですが。

「アカツキさん。御願いできますか？」

「いいよ。僕が適任だろうし」

そうだよな。ガイには怖くて頼めないし。

三人娘は連携が強みだから、誰か一人というのも勿体無いし。テンカワさんは稼働データと敵の引き付け役だし。

適任というか、彼しかないという理由もありますね。

「それでは、作戦を開始します」

救出作戦。

北極熊はアカツキ会長に任せて。

俺は高機動戦フレームに集中するのでしょうか。

「バツタとかジヨロとかカトンボ級相手なら充分の攻撃力だよな」

武装の攻撃力という面で不安があったんだけど、現状でも充分なんだよな。

遺跡の知識からもっと強い武器も開発できるけど、無理に開発する必要もなさそう。

あまり強力なの作っても情報漏洩が怖いし。あっちの戦力が強化されたら泣くに泣けないよ。

戦略的観点から見ても安易に強力な兵器を開発するのは避けるべきだ。

生産力の問題とか、色々と絡んでくるし。

現状で対応できるのなら、現状のままなのがベストって訳。

革新的技術の登場は一気に技術レベルを向上させるから危険だ。

戦争中の技術力がシーソーゲームである以上、

必ず相手にも追いつかれ、追い抜かれるという事を忘れちゃいけない。

そのあたりは慎重にいかないとな。

状況を考えてイネス女史あたりに相談しよう。武装兵器についてはとりあえず、ウリバタケさんのフィールドランサーがあれば、ある程度の敵は蹴散らせる筈だ。

そろそろロールアウトでしょ。あれ。

他にも新兵器とかいって凄まじいのを用意してそう怖い。

まあ、頼りになるけどさ。

「機動力は・・・充分。つてか、突貫しちゃってくださいと言いたくなる」

テンカワさんに高機動戦フレーム。

鬼に金棒より性質が悪いね。鬼にチェインソーみたいな感じ。いや、もつとだな。鬼にエスカリボルグって感じた。・・・不思議な曲が聞こえてきた。幻聴って怖い。

「DFの強度を上げれば、体当たりだけでも十分な攻撃力になりそう」

ブラックサレナの高機動ユニット装着型のディストーションアタックが理想。

でも、あれだけの強度を得るには相当なエネルギーが必要になるんだよね。

小型相転移エンジンとかあれば簡単に出来そうだけど、そんなの開発したらやばそうだよなあ。

夢の六メートル級で二基の相転移エンジン。やばい、十年ぐらい先の技術になりそう。

可能だからこそ怖い。戦略級の機体とか出来たら余計に平穩から遠のきそうだよ。

いずれ、エステバリスが相転移砲・・・やばすぎるな。戦力バランスが崩壊しちまう。

つてか、仮に開発して、向こうにその技術が渡ったら終わりだな。相転移エンジンの生産力はあっちの方が上だし。

「現状で実現できる技術レベルの最高を目指すのがベスト・・・か」

現時点での技術レベルで実現可能な限界。

それを目指すのが理想かな。

いきなりの技術レベルの革新は危険すぎるし。

ひとまず俺は開発ではなく調整で活躍するか。

「お疲れ様です。テンカワさん。稼働データはしっかりと活かさせ

てもらいますよ」

テンカワさんを始めとするパイロット陣の活躍と、アカツキ会長の見事なコソ泥テクニクで無事に救出完了。

まさか救出対象が白熊だとは誰も思わなかったんだろっな。驚く顔が傑作でした。

その中でもラピス嬢やセレス嬢の眼が輝いてたのは癒されたね。もふもふしてましたし。

後でオモイカネからデータをもらおう。きっと録ってるから。永久保存版ですね。

第二十三話（後書き）

最強系の機体を出すのなら木連側にオリキャラを出す必要がありますね。

あまり出しすぎると混乱するので、極力抑えたいです。はい。

第二十四話

「……そうですか。懸念していた事が……」

救出作戦を終え、その日の夜。

テンカワさん達とミナトさんを俺の部屋に招集した。

議題はもちろんカエデの事だ。

「映像は加工したけど、あの場には艦長とイネスさんがいた。

イネスさんはそういう事を他言しないと思うけど」

「……そうですね。ユリカさんなら訊かれたら素直に答えてしま
いそうです」

「……否定できない」

「もしかしたら、他にも目撃者がいたのかもしれない。

でも、問題なのは誰かじゃなくて、知られてしまったという事」

「アカツキさん達を監視しましょうか？」

少なくともエリナさんとアカツキさんの会話を聞ければ意図は掴
めるかと」

「そうは甘くないでしょ。彼らだって監視の死角くらい知っていると
思う。」

聞かれたらまずいって分かってて平気で話すような事は……」

流石にないと思う。

「ですが、しないよりはマシでしょう。おそらく目的はボンンジャ
ンプの実験でしょうが」

「そうだろうな。まさか予定が崩れてしまつとは……」

悔やむように告げるテンカワさん。

「テンカワさんはどうするつもりだったんですか？　自分が誘われていたら」

「知らない振りをして誘われたな。月に飛ばなければ月臣の破壊活動を阻止できない」

「……そうか。カエデはパイロットじゃない。つて事は飛ばされたら……」

「ああ。何の対処も出来ずに月が破壊されるだろうな」

……それはやばい。

今まではどうにか犠牲になる人を少なくしてこれた。

でも、もしカエデが月に飛ばされるようになったら、原作以上の犠牲が出る。

しかも、カエデ自身が危ない。

「しかし、カエデさんをナデシコから降ろす理由がないのでは？

アキトさんの時はパイロットとしての問題行為という理由付けが出来ましたが」

「確かにそうだな。一コックが降ろされるような事態はないと思う」

「いや。可能性としてはありえますね。たとえ問題を起こさなくても」

「それってどういう意味？　コウキ君」

「自主的にって意味ですよ」

「どうして自主的に実験に参加しようとするんだ？」

「カエデは木星蜥蜴に恨みがあるみたいなんです。木星蜥蜴を見返せるならって」

「……そういえば、彼女、言ってたわ。」

火星大戦で全てを失ったって。両親、妹、お店も居場所もって」

両親が死に、妹も死んだ。

お店というのはきつと家で和食レストランでもやってたって事だろ
う。

だからこそそのあれだけの和食の腕前。

居場所。色んな意味だろうな。

家族という居場所、町という居場所、お店という居場所。

そして、火星という居場所。

全ての居場所を同時に失ったんだ。

その喪失感はどれ程か。

・・・俺にはとても分らないな。

「木星蜥蜴への恨みを利用されるかもしれないという事が」

「彼女は本当に思いやりがある子なのよ。きつと両親も妹も愛して
たと思うわ。」

それを奪った相手なら・・・きつと・・・」

思い出す。

フクベ提督に対するカエデの態度を。

あれは日頃の彼女を忘れる程に憎悪に満ちた顔だった。

「復讐。・・・俺には批判できないものだな」

「・・・アキトさん」

「・・・アキト」

そう、カエデは復讐という名目で実験に参加しかねない。

復讐は簡単に理性を失わせる。憎しみ、恨み程に強い感情はない。

「君の力で木星蜥蜴を滅ぼせるんだ。そう言われたら自主的に参加

しかねません」

「・・・そうだな。少なくとも俺もそう思っていた節がある。

こんな俺でも木星蜥蜴を倒す為に何か出来るんだと煽てられて調子に乗った事もあったな」

「ボソソジャンプが出来たぐらいで何も変わらないんですけどね」

「国や軍単位ではな。だが、暗殺やテロ活動ではこの上なく便利だ」

「瞬間移動。どうして争い事ではなく、民事的に利用しないのでしょうか」

「それが人間の性なのだろう。人の歴史は全て戦争から始まっている」

「聞いた事があります。民事的に使われている物は全て戦争で進歩した技術であると」

「ヒサゴプラン・・・か。軍が管理するようだから駄目だったのかもしれないな。

軍である限り、戦力として扱われる。便利であればある程に・・・な」

「ヒサゴプラン自体は民事的だったのかもしれませんが、

結局、戦争の準備の衰として使われてしまいました」

「平和は次の戦争の準備期間。そんな悲しい言葉を俺は知っています」

「フツ。そうなのかもしれないな」

自嘲するように笑うテンカワさん。

短期間で二度の戦争に中心人物として巻き込まれれば、その思いも深いだろう。

「今はそういう話は置いておきましょう。問題はカエデちゃんをどうするかよ」

そうでしたね。ミナトさん。

「ネルガル関係者を近付けないようにしたいんですけど、流石に厳しいですよね？」

「厳しいだろうな。一人にならなければ近付かないと思うが、ずっと近くににいるのも変だろう？」

「そうよね。勤務場所も違うし、常に誰かを食堂にいさせる訳にもいかないもの」

「そうですね。そもそもこれじゃあ根本的な解決にはならないですから」

その場凌ぎでしかない。

いずれカエデはきちんとした形で話を受ける事になるだろう。俺達が知らぬ間に。

「カエデちゃんから憎しみの念を取り除ければいいんだけど・・・」
「無理だな。何かを失うという事はそう簡単なものではない。

・・・憎しみ、恨み、喪失感が、常に心を苛む」

「・・・そうよね。彼女を支えてくれる人が現ればいいんだけど・・・」

どうして俺を見るんですか？ ミナトさん。

「ごめんなさい。なんでもないわ」

だから、どうして、俺を見てるんですか？

「どうにかして対象をカエデから逸らさせるしかないですよね」

「ああ。俺なら対処可能だが、彼女だったらどうしようもない」

「こちらからボソソジャンプの情報を提供しますか？

それならば、喰い付いて来るかもしれない」

「喰い付いてはくるだろう。」

だが、それと平行して彼女を誘うのは間違いない。エリナはそういう女だ」

一つだけで満足せずあらゆる観点から物事を観察し、試す。

流星は弱冠二十歳で敏腕秘書と呼ばれる訳だ。

慎重さ、大胆さ、計算高さを兼ね揃えている。

「そうならば、たとえ対象を逸らさせてもカエデは狙われ続けますね」

「・・・そうなるな。やはり本人を説得するしかないようだ」

「コウキさん。カエデさんをどうにか説得できませんか？」

「一応、よく考えてから動けとは言っておいたけど、感情的に動きそうだ」

「それならば、カエデさんにボソソジャンプを教えますか？ そうすれば、彼女も危険性が・・・」

「・・・そうだよ。でも、出来れば知らずにいて欲しいんだよ。」

ジャンパーである人間がボソソジャンプの事を知るのは危険だと思っから」

「・・・そうですね。ボソソジャンプが出来る事で自分が何でも出ると勘違いされても困りますし。」

周囲からの視線にも敏感にならざるを得なくなりますから」

「・・・む。耳が痛いな」

そういえば、そんなキャラでした。 テンカワさん。

「でも、逆に知らない事も怖い事なんじゃないかしら？」

何の理由も知らないでいきなり攫われるなんて事になったら・・・

」

火星の後継者によって攫われた火星の人達はそんな感じだったのかもな。

「ボソソジャンプを教えるとしたら、俺が見せればいいんですかね？」

「現状でジャンプできるのはお前だけだからな。俺はここがなければ無理だ」

「私達は単純に無理ですね」

ルリ嬢とラピス嬢は遺伝子改造してようやく機会補助付きで飛べるようになったらしい。

要するに、それ以前の身体になっているから……。

「飛べないの？ 本当に？」

「え？ だって、まだ遺伝子改造をしてませんから」

……俺とミナトさんの理論が正しければ飛べる可能性はなくはない。

ま、今言っても混乱するだけだから、言わないけど。

……でもな、やっぱり……。

「……俺としてはカエデは巻き込みたくないですよね」

「ボソソジャンプを知るという事は木連との争いに巻き込まれるという事だからな。否が応にも」

そう、必ず巻き込まれる。

あいつは食堂で平穩にコックをしていて欲しい。
戦争なんかに関われないで。

……こういうのはどうだろう。

「現状では、木連は火星人がジャンパーという事は知らないんですよね？」

「ん？ ああ。知っていたら火星人を殺そうとはしないだろう」

「それなら、ボソソジャンプの使用を抑えれば、

火星人がジャンパーという事実を隠せるんじゃないですか？」

「・・・俺の存在が木連に火星人こそがジャンパーと教えていたからな。」

これから先、ボソソジャンプを使わないように物事を運ばば・・・

「

「・・・可能かもしれません。あくまで可能性ですが」

ジャンパーの特定。

アキト青年の存在がなければ気付かなかったという可能性もある。

向こう側はアキト青年が人類で初めて生身のボソソジャンプを成功させた知らない訳だし。

それに、ネルガルが火星人がジャンパーという結論を出したから、周囲にも伝わったと言う可能性もある。

どちらにしろ、この時点であれば、

火星人≠ジャンパーという事実を周囲に知られる事を回避できるかもしれない。

「・・・その為にもカエデさんの実験参加は避けたいですね。

飛べてしまえば、条件付けが出来てしまいますから」

「やはりボソソジャンプを教えない方向でどうか説得するしかないですね」

ボソソジャンプをどう扱うにしろ、カエデは巻き込めない。

そもそも火星人がジャンパーだと知らなければ、

これからの火星人の被害を失くす事も可能かもしれない。

ジャンパーの条件をあやふやにするのもいいか？

「マエヤマ。頼めるか？」

「・・・はい。出来る限りはやってみます」

なんとしても、カエデの実験参加は避けないと。

そうしなければカエデがアキト青年のような悲惨な目にあう可能性がある。

ネルガルのにとって都合の良いジャンパーとして。

それからしばらくは今後の方針などの確認。

互いの考え、主張を話し合った。毎度の事だけど、世界を変えろという事の大変さを思い知る。

こんな行動を取ったら、未来はこうなるのではないか。

そんな水掛け論みたいな答えのない問いを解き続けるのだ。

結局、いくつもの可能性を考えて、臨機応変に対応するという結論に達する。

数学のように必ず計算の果てに同じ答えがある訳ではない。

それが怖くもあり、同時に改変者として期待する事でもあった。

「ねえねえ、ルリルリ」

「あ、はい。・・・え？」

唐突に告げられるルリルリという言葉。

この平行世界では初めてではないだろうか。

「あ・・・ミナトさん」

「ルリルリか。流星は私。良い渾名だわ」

なんか自己完結されていて話が見えてこないんですが。

「ルリルリって・・・」

「コウキ君からルリルリってのは聞かされてただけ、ほら、自分で納得するまで呼びたくなかったのよ」

同意を求められても困ると思いますよ。

でも、何となくその気持ちは分かる。

平行世界の自分が名付けた渾名をまるで自分が考えたかのように振舞う。

ルリ嬢に記憶があると分かった後なら更に呼びづらい。

それは仲良くなるまでの過程を無視したかのようで。

「ルリルリとはやっと仲良くなれたじゃない？ だから、これからルリルリって呼ばせてね」

「はい！」

笑顔のルリルリ、って、俺まで影響されてどうするよ。

でも、やっぱりルリ嬢はルリルリって呼ばれるのが似合ってるよ。

嬉しそうに笑う所を見ると流石はミナトさんだと思っ。

今よりもっと前から呼んでたらこんな笑顔は見れなかったと思うし。

「ついでだが、その敬語はどうにかならないのか？ マエヤマ」

え？ 俺？

「いや。何かテンカワさんって年上オーラがありました」

「まあ、精神的に上なのは認めるが、年齢的にはむしろ下だぞ」

「ま、まあ、そうなんですけどね」

「そうね。丁度いいわ。私にも敬語をやめましょう」

「ええ！？」

それは流石に無理ですよ。
ミナトさんは無条件で敬語です。

「ま、突然には無理よね」

流石ミナトさん。わかってらっしゃる。

「だから、少しずつ慣れなさい。まずはさん付けをやめる所から
「い、いや、いきなり難易度高くないですか？」

「最初に大きな壁を乗り越えれば後は楽なものよ」
「ええ〜と・・・」

無理。心臓バクバク。

「ほら。思い切って」

「・・・ミナト」

「聞こえないわよ」

「・・・ミナト！」

ふわあああ。真っ赤。絶対真っ赤だよ、俺。

「ふふつ。意外と私も照れるものね」

それでも余裕そうだからズルイ。

俺はこんなにも余裕がないのに。

「まったく。俺達の前という事を忘れてないか？」

「・・・本当です」

「・・・コウキ、真っ赤」

呆れた眼で見ってくるテンカワ一味。
それがまた羞恥心を……。

「そうだな。ひとまず敬語と俺の事はアキトと呼んでくれ。

同じ目的を持つ仲間だからな。堅苦しいのはやめにしよう」

「……そうですね。それなら、俺はコウキと呼んでください」

「さっそく、敬語なんだが？」

「ええっと、癖みたいなものなんで。意識はしますから」

「ま、ミナトさんの言う通り、突然は無理だろうかなら。少しずつ慣れていってくれ」

「はい。あ、いや、おう」

「おうってのも変よね？」

突っ込みはいりません。

「それじゃあ、これで解散としようか」

「そうです……、そうだな」

「ま、早く慣れる」

そう言いながら去っていくテンカワ一味。

残されたのは要するに俺とミナトさん、いえ、ミナト。

うん。無理だ。ミナトさんの方がビシッとくる。

「コウキ君」

「ミナトさん。やっぱり敬語の方がビシッと来るんですけど」

「いいわよ。別に」

「え？ だって……」

「あれはアキト君に便乗してみただけ。久しぶりにコウキ君をからかいたくなっただけよ」

「はぁ・・・」

何だ。そういう事か。
緊張して損した。

「ま、呼び捨ての方が嬉しいのは事実だけだね」

「気が向いたらで」

「はいはい。そうするわ」

そう言いながらちよつとずつ近付いてくるミナトさん。
ええつと？ その？ あの？

「なに緊張してるの？」

「え？ いつだって緊張しますよ」

「もう可愛いんだから」

落とされる唇と視界一杯に広がるミナトさん。

パツと眼を閉じると唇に感触。

なんどやっても慣れない。

でも、なんどもやりたくなる。

ボーっとして、でも、心はうるさいくらいバクバク言って。
心地良くて、恥ずかしくて、でも、やっぱり気持ち良くて。

「・・・ん・・・はぁ」

ドキッとするぐらい妖艶な溜息。

覗き込むように見詰めてくる瞳。

少しトロツとして、目尻が下がってて。

・・・気付けばまた唇を落とされていた。

「・・・好きよ」

「・・・はい。俺も・・・です」

長い夜は始まったばかりです。

「夏だ！ 海だ！ 温泉だ！」

え？ 温泉？ 何故？ ってか、夏でもないよ。

「ルリルリ。日焼け止め塗ってあげる」

「海。二回目です」

「ラピラピもおいで」

「・・・海、初めて」

「セレセレ」

「・・・海、初めてです」

何だかお母さんみたいですよ。ミナトさん。

とても絵になってますが。

・・・ 凄く雰囲気にくわないんだけど、

その二文字を重ねるという行為がキラキラなパンサーを思い出させてくれます。

確かゲレ???

・・・ 一緒にするなって話ですよ。分かります。

すいません。反省してます。

「それで、私はコウキ君がもちろん塗ってくれるのよね？」

「え？」

海辺でパラソルやら何やらを並べての息抜きタイム。
遊びとなればナデシコクルーは凄まじい。あっという間に夏場の海
辺が再現されてしまった。

赤道直下、熱帯雨林、真つ赤な太陽、でっかい海。
海なんて久しぶりだな。なんか楽しくなってきた。
でも、ミナトさん……。

「ほら」

き、際どいですから。その水着。
ってか、既に半裸。背中に塗れですと!?

「早く塗って。コウキ君」

「……」

太陽がサンサンと照らす心地の良い青空の下。

……無言で塗り続ける情けない僕の姿があったとか。

「お、終わりました」

「あら。そう？　ありがとう」

笑顔でウインクするミナトさん。
当然、俺は固まっているんだろ。

「……もつと凄いの見てるくせに」
「ブフォッ！」

ボソツとなんて事を！

バツとミナトさんを見ると……。

「ふふっ」

ニヤニヤしてましたよ。この人。
あれですね。からかいモードですね。

「次は前も塗る？」

「なッ!？」

「あら？ 嫌なの？」

「い、嫌じゃないですけど」

「じゃあいいじゃない。ほ・ら」

「し、失礼します」

ぜ、全力で逃げ出す。む、無理。心臓が破裂する。

「もぉ。初心ねえ」

聞こえな〜い。

「何してんの？」

はぁ……はぁ……と全力でダッシュしたが故の弊害である息切れ。
れ。

それをどうにかして抑えようとしている時、こいつはやってきた。

「お前こそ。海で遊んで来いよ」

隠しコマンド、弄くる。

・・・はちよつと余裕がない。

胸の動悸が激しくて必死に抑えようとしているからだ。
まったく。ミナトさんは・・・。

「私、海って初めてなのよね」

「ああ。火星って海ないもんな」

「良く知ってるじゃない」

「一応、火星育ちだから」

設定ではね。

「え？ 貴方って火星育ちななの？」

「あれ？ 言ってなかったっけ？」

「へえ。同郷なんだ。じゃあ」

「そうなるな」

何か普通の会話。

おかしいな。何だこの穏やかな空気は。

「ねえ、コウキはさ」

「ん？」

「木星蜥蜴を恨んだりしてないの？」

木星蜥蜴を恨む。

火星人なら当たり前か。

「そりゃあ火星が被害にあったんだ。嫌いだよ」

「私ね。火星大戦で家族みんな死んじゃったの。友達も」

「・・・そうか。家はとうだったんだ？」

「家も潰れちゃったわ。私の家って火星でも話題の和食レストランだったのよ。知らない？」

「知らん」

「貴方ねえ・・・。はあ。まあいいわ」

呆れられてしまった。

「生き残りの中に知り合いはいなかったのか？」

「始めはいたんだけど、すぐに死んじゃったわ」

「そっか。それじゃあ・・・」

「ええ。ナデシコに保護されてからも気軽に話せる人はいなくて」

ナデシコで保護する前の火星の民達。

絶望して、周りとのコミュニケーション取るうとかも考えないだろうしな。

こいつはずっと一人ぼっちだったのか。

「ま、貴方みたいな馬鹿のおかげでナデシコでは楽しくやらせてもらってるわ」

「馬鹿は酷いぞ。でも、ま、お前が寂しい思いをしてないってのは嬉しいな」

「ホント、貴方って真面目な時と普段でギャップが激しいわね」

「そつでもないだろ」

友達になれたって事だよな。

部屋に送り届けた時、寂しそうだったのは居場所がなかったからか。ナデシコがこいつの新しい居場所になってくれると嬉しいな。

「ねえ、話、変わるんだけど」

「ん？ 何だ？」

「貴方つてあのミナトとかいう人と付き合ってるの？」

「あれ？ 話してなかったか？」

「・・・そう・・・なんだ」

何だ？

何故、俯く？

「・・・」

「・・・」

・・・しんみりとした空気だな。

重いのは嫌だ。

「ほら！ 行くぞ！」

「い、行ってくてどこによ！」

「海だよ。海！」

「え、ちよ、嫌よ！」

「ハハ〜ン。分かったぞ。お前、泳げないんだろ？」

「そ、そんな事ないわよ！」

「それじゃあ、泳げるんだな？」

「ふ、ふんつ。当たり前じゃない！」

「おし。それなら、見せてみる。平クロールを」

「な、何よ、その変な泳ぎ方」

「なッ！？ お前、知らないのか！？ あの有名な」

「え？ ま、まさか、知ってるに決まってるじゃない」

「そうだよな。まさか平クロールを知らない奴なんていないよな」

「ええ。常識よ。常識」

平クロールって何？
俺が知りたいし。クックック。

「おし。行くぞ！」

海の中に突入。

港町生まれの俺を甘く見るなよ。
海なんて慣れっこだぜ。

「ちょ、ちよつと！ 待ちなさいよおおお！」

やっぱり泳げないみたいだな。
必死に海の中を走ってやがる。

「このあたりでいいな」

高さが俺の腹くらいの所で停止。
深過ぎたら可哀想だしな。
溺れられても俺が困る。

「おし。平クロールだ」

「え、ええ。見てなさいよ」

スーハーと深呼吸して・・・ダイビング。
足と手をバタバタさせて必死に進む。

・・・何だ？ その泳法。
つてか、息継ぎも出来ないとは。

「ふ、ふんっ。どうよっ？」

十メートルくらいしか進んでないのに何故そんなに胸を張れる？

「お前、あれが平クロールだと思ってるのか？」

「え？ ち、違うわよ。あれは練習用」

「なるほどな。まずはアップって奴か」

「ええ。アスリートとしてアップは欠かせないわ」

お前、いつアスリートになったんだよ。

「はい。じゃ、本番」

・・・碌にクロールも出来てなければ、平泳ぎも出来てない。

「なるほど。お前の平クロール。見せて貰った」

「ええ。完璧だったでしょ？」

そもそも泳げてなかったけどね。

「ああ。そうだな。完璧だった」

「当たり前じゃない。私を誰だと思ってるの？」

「カエデ」

「ま、間違ってるわ」

「そんなカエデに質問がある」

「何？ なんでも答えてやるわよ」

「平クロールって何だ？」

「え？ それって・・・」

「ああ。俺は平クロールという泳法を聞いた事も見た事もない」

「そ、そんな・・・。騙したのね！？ 騙して私で遊んだのね！？」

「うん」

「うん、じゃない！ いつもいつも騙して！ 何なのよ！？」

「いや。つい」

「つい、じゃないわよ！ もぉ・・・信じらんない・・・」

やばっ。泣きそう。

ミスった。

「ええっと、ほら・・・ごめん」

「・・・」

「反応が面白くて・・・。ごめん。調子に乗った」

「・・・」

「カエデ？」

「・・・知らない！ もう知らない！」

「お、おい！」

陸に上ろうと去っていくカエデ。

「馬鹿！ コウキの馬鹿！ 死んじゃえ！」

追いつこうにもその声が拒絶を表してて。

追うに追えなかった。

「・・・はぁ。やっちゃまった」

調子に乗り過ぎてたかな。

「まったく。何やってんだか」

傷つけちゃ駄目だろ。女の子を。

「・・・はぁ。太陽が眩しいぜ。太陽の馬鹿野郎」

八つ当たりでもしなっきゃ、やってらんない。
ああ。本当馬鹿だな。俺。

「あら？ コウキ君。元気ないわね」

パラソルの下で日光浴を楽しむミナトさん。
その真似してセレス嬢も日光浴を楽しんで？いた。

「ええ。ちよつと」

「ま、それなら。セレスちゃんと遊んできなさいな」

セレス嬢とか。

そうだな。気晴らしにもなるだろうし。

「おし。セレスちゃん。砂の御城を作ろう」

「砂の御城って何ですか？」

「ま、とりあえずおいで」

セレス嬢と手を繋いで、浜辺に向かう。

「このさ、少し濡れてる砂があるでしょ？」

「・・・はい」

「まずはそれを山みたいに盛るんだ」

「・・・山みたいにですか？ 分かりました」

手じゃ辛いか。おし。ウリバタケさんあたりなら持つてるだろ。むしろ、砂の城作りも手伝ってもらおうかな。

「手じゃ大変だから、シャベルとか持ってこようか」

「・・・はい」

「じゃ、おいで」

手を繋いでウリバタケ氏の所へ向かう。

一人で山を作っても言えただけ、まだ心配だしな。

「ウリバタケさあん！」

「おう！ 何だ。マエヤマ」

出た。海の家。

「ヤキソバか？ ラーメンか？ カキ氷か？」

「いえ。ウリバタケさん。ウリバタケさんはセレスちゃんに夢を与えたいと思いませんか？」

「夢だと？」

「ええ。そう、砂の御城という夢を」

「何！？ 砂の城だと！？」

「そうです。ウリバタケさん。セレスちゃんと共に城を作りませんか？」

「おう！ 任せろ！ こんな店、撤収じゃあ！」

パパパとあつという間に崩される海の家。

凄まじいバイタリテイ？だ。

「おっしやあ！ この海の男と呼ばれたウリバタケ・セイヤが砂の城作りをレクチャーしてやるぜ」

「あ。班長。ズルいつすよ。一人だけセレスちゃんと遊ぼうだなんて」

「そうつすよ。俺達も参加させてください」

整備班が合流。

「楽しそうな事やってるじゃねえか」

「私達も作ろうよお」

「・・・・・・・・」

パイロット三人娘も合流。

「ガイさん。私達の愛が一番だつて証明しないと」

「よっしゃあ！ 誰よりも高くカツコイイゲキガン城を作ってやるぜ！」

「それでこそガイさんです！」

またまた合流。

「いいですな。偶には童心に帰るのも」

「ミスター。続きは？」

「また後でいいじゃないですか。ゴートさんも参加です」

「・・・む。構わないが」

「僕もやるのかな」

「会ちよ」

「おいおい、プロス君、何を言ってるのかな？」

あれれ？ いつの間にか大所帯に。

「コウキ君。そんなに人を引き連れて何やってんの？」

「えっと。城を作ろうと思ったたらこうなっちゃって」
「そう。じゃ、私も参加しましょう」

ミナトさんが近付いてくる。

周りの整備班の眼が垂れ下がっててむかつく。

「あ。じゃあカエデちゃんも誘ってきなさいよ」

「ええっと、喧嘩してて」

「喧嘩あ？ 珍しいじゃない」

「ちよつとからかい過ぎて」

「まったく。コウキ君。気を付けなさい」

「はい。反省してます」

「仲直りのきつかけになるじゃない。ほら」

「で、でも・・・」

「セレスちゃんは私に任せて」

「はあ・・・。分かりました」

話しかけづらいつてのに。

カエデ。どこにいるんだろっ？

「・・・あれは・・・」

カエデ・・・とエリナ秘書。

そうか。ここで接触か。流れを断ち切るか。

「カエデ」

「・・・ん？ フンッ」

ん！？ 眼を逸らされた。

やばいな。マジで怒ってる。

「今、私が話してるのよ」

「あ。すいません。何の話ですか？」

「クツ。覚えてなさい」

何だよ。その悪役の去り方。

「なあ、カエデ」

「……………」

ツンと顔を背けてます。

意地でもこっちをみないつもりでしょう。

「さつきは悪かった。調子に乗ってたな」

「……………」

「…………すまなかった。……許してくれないか」

「…………はあ……。分かったわよ。私が悪者みたいじゃない」

ほっ。良かった。

「それで？ 何か用？」

「あつちで砂の城を作るう大会をするんだが、来ないか？」

「砂の城？ 何それ？」

「プールでは絶対に無理な事だな。浜辺の砂を積み重ねて城を作るんだ」

「へえ。楽しそうじゃない」

「難しいから城になるかは分からないが、お前もやってみないか？」

「いいわよ。暇だし」

よし。了承を得られた。

「じゃあ、行こうぜ」

「ええ。仕方ないわね」

肩を並べて、浜辺へと向かう。

大会の会場はちよつと遠い。

今の内にエリナ秘書の話聞いておくか。

「さっきのエリナさんは何て？」

「今度、実験に参加してくれないかって。ボソソジャンプがどうたらこうたらって」

「・・・参加するの？」

「貴方、言ってたじゃない。よく考えてから行動しろって。だから、まだ返事してないわ」

「そうか。カエデ。俺としてはそんな事に参加して欲しくない」

「何で貴方にそういう事を決められなくちゃならないの？」

「何の実験かは知らないが、わざわざ危険な目にあう事はないだろう？」

「でも、私は」

「カエデ。お前の木星蜥蜴を見返したいという気持ちは分かる」

「でも、本当にその実験が木星蜥蜴を見返せるものなのか分からないだろう？」

「え？・・・そういえばそうね」

「それに、もし、そうだったとしても、お前が犠牲になる必要はない」

「それでも！」

「ネルガルに利用されて欲しくないんだよ！」

「・・・コウキ」

「家族を失ったのは辛い。友達を失ったのも辛い。でも、お前は生

きてるんだ」

「・・・私は・・・」

「恨むな、憎むな。そんな事は言わない。俺だってそんな事になればそう思うだろうから」

「・・・」

「でも、そんな感情で一生を無駄にする必要はない。

自分がどうしたいか、しっかりと考えて欲しい」

「・・・自分がどうしたいか・・・ねえ」

「ああ。俺ならいつだって相談に乗るからな。ゆっくりと考えてみてくれ」

「・・・分かったわ。考えてみる」

「ありがとう。カエデ」

「べ、別に貴方に礼を言われる筋合いなんてないわよ」

流されるのではなく、自分で考えて動いて欲しい。

それが、きっとカエデの為になるから。

「さて、着いたぞ」

「・・・何？ これ？」

「ああ。これがナデシコクオリティなんだ」

気付けば、司会者用のステージが作り上げられており、審査員席なんてのもあった。

司会としてプロスさんがマイクを握り、審査員席には艦長、

ホウメイさん、何故？ ウリバタケさん、作るんじゃないの？ の

三人がいた。

艦長はそわそわしてるな。きっとアクトさんの姿を探してるんだろう。

そういえば、アクトさん達は何を？ アクアさんと接触してるのか？
あえて。

あ。補足ですが、副長は一人ナデシコでお留守番だとかなんとか。可哀想に。

「お〜い。コウキ君」

「あ。あそこか」

手を振って場所を示してくるミナトさん。
隣ではセレス嬢が黙々と砂を積み上げてる。

「ほら。行くぞ。カエデ」

「・・・ええ」

何だろう？

あまり乗り気じゃない？

「えっと、嫌だったか？」

「え、違うわよ。ほら。作り方わかんないし」

「何だ。俺が教えてやるって」

「ふんっ。貴方なんか教わらなくても作れるわよ！」

「・・・どっちなんだよ」

ま、いいや。

とりあえず、移動っど。

「お待ちせしました」

「・・・」

「いらっしやい。カエデちゃん」

「・・・ふんっ。私の力がどうしても借りた如果说言つから来てや
ったのよ」

んな事、言っていないっての。

「じゃ、さっそく、御願いしようかしら」

「ま、任せなさいよ」

強がりだよねえ。ま、ミナトさんならうまくリードしてくれるだろう。じゃあ、俺はセレス嬢を手伝うか。

「セレスちゃん。頑張ってるね」

「・・・はい。これがトンネルです」

ミナトさんに教わったんだろう。

砂の山の真ん中あたりが空洞になってる。

懐かしいな。トンネル。

「おお。やるねえ。崩れないように気を付けて」

「・・・はい。でも、もう一回崩しちゃいました」

シユンとなるセレス嬢。

ま、難しいもんな。城作りとかいいながら、俺もトンネルで満足してた覚えがある。

「いいの、いいの。崩れたらまた作ればいい。楽しければいいんだから」

「・・・はい」

別に城じゃなくても楽しめるし。

俺は良く穴を掘って、堀だとかいって楽しんでた事もある。

「おし。それじゃあ、綺麗な城を作りますか」

シャベルを片手にこの時間を楽しむ事にしました。

S I D E M I N A T O

セレセレとコウキ君がちょっと離れた所で楽しんでいる頃。
私はカエデちゃんとおしゃべりをしていた。

「へえ。プールも中々入れないんだ」

「水は大事な資源だもの。プールみたいに水を溜めるのは勿体無いわよ」

地球と火星の生活環境の違いはかなりのものがあるみたい。

「突然だけど・・・」

「・・・何よ？」

「初恋つてどんな感じだった？」

「ええ！？」

素っ頓狂な悲鳴をあげるカエデちゃん。

この子もコウキ君と同じで初心なのかしら。

「ほら。お姉さんに教えなさいな」

「お姉さんつて何よ？」

「年上だし。ほら。そんな事はいいから」

「初恋なんてまだよ」

「あら？ そうなの？」

「ま、私に見合うだけの男が見つからなかったって所ね」

「クスッ」

「何よ！？ 何笑ってるの！？」

「カエデちゃん、可愛いからね。カエデちゃんのお眼鏡にかなうカ

ッコイイ男の子はいなかったか」

「ま、まあね」

可愛いって言われて照れる所を見るとやっぱり初心なのね。

私に言われてこれだけ反応するんだもの。コウキ君の時はもっと凄
いのか。

「ねえ、カエデちゃん」

「何よ？」

「コウキ君の事・・・どう思う？」

「ッ！？」

とっでも知りたい。

コウキ君が彼女を救える存在になれるのか。

彼女がコウキ君をどう思ってるのか。

・・・嫉妬しない訳じゃないけど。

「べ、別になんとも思っていないわよ」

「カエデちゃん。真面目な話よ」

「真面目な話？ 貴方、あいつと付き合ってるんでしょ？」

「え、ええ」

「意味わかんないわ。どうして彼女がそんな事を訊くのよ」

正論。

でも、気になってしまっ。

「たとえば、私が好きって言ったらどうなるのよ？ 身を引くとでも」

「そ、それは・・・」

それはない。

私はコウキ君が好きだから。

私自身でも整理できない矛盾した感情なの。これは。

カエデちゃんを救って欲しい。コウキ君に。

でも、コウキ君は取られたくない。

「あいつは火星大戦後に初めて出来た友達。ただそれだけよ。・・・ええ。それだけなの」

火星大戦で全てを失った少女の初めての友達。それがどれだけ心の隙間を埋めてくれる事が。

「・・・そう」

「何？ 心配してるの？」

はあ・・・。

これ以上は訊けないか。

またの機会にしましょう。

「ほら。コウキ君って良い男だし」

「はあ！？ ないない。変なだけよ」

「そうかなあ？」

「ええ。おかしいわ。彼女になると眼が曇るのものなのね」

「あら？ 失礼ね。ツーっと」

「や、やめなさいよ。くすぐったいでしょ！」

背中を爪でツーツと搔いてやる。
その反応がまた可愛い。
身を仰け反らせる所とか、男性陣が見たらやばいわね。

「ほらほら」

「や、やめなさいっての。仕返しよ」

「ちょ、キヤツ！」

「ふんっ。私だって・・・キヤツ！」

負けじとくすぐる。

「・・・おい。あれ」

「ああ。いいよなあ。海って」

「おお。美女の戯れは絵になる」

「・・・なあ、やっぱりマエヤマを殺すべきだと思っただが」

「・・・ああ。今なら全力で肯定してやる」

「行くか？」

「おう！」

「「マーエーヤーマー！」」

「え？ え？ ええ！？」

「死ねえええい！」

「人誅だあああ！」

「ちょ、クソツ！ セレスちゃん。帰ってくるから大人しくしてて
ね」

「・・・はい。頑張ってください」

「応援されても困るんだけど・・・」

「マアエエヤアマア！」

「クソツ！」

「海に逃げたぞ！ 追え！」

「「「「おう！」「」」」」

「増えてる！ 増えてるよ！」

「「「「「死ねええい」「」」」」」

「また増えてるううう！」

楽しそうね。コウキ君。

「ふふっ」

「クスッ」

その光景があまりにも可笑しくて。

「「ハハハハハハ」」

二人して顔を見合わせて大笑いしてしまったのは仕方のない事よね。

S I D E O U T

ドタンツ！ ガタンツ！

「え？ 何だ？ 何だ？」

大量の男共に追われているという意味の分からない展開。
突如の轟音と振動で誰もが啞然とした。

『休憩は終了です！ 破壊対象のチューリップが動き出しました！』

ナデシコからの音声報告。
ジユン君の久しぶりの仕事だ。

「・・・おい」

「・・・うん」

「・・・潰す」

え？

「・・・ガイさん。私・・・」

「大丈夫だ。あんな奴すぐにぶっ潰してまた作れば良い」

「・・・はい」

え？ え？

「ぐおおお！ ここまで作ったのに！」

「潰せ！ やつちまえ！」

・・・ああ。そういう事ですか。

お城が崩れてしまわれたんですね。

「おら！ 行くぞ！ 野郎共！」

「おおおおっおお！」

スバル嬢が男になってます。

というか、城作りに参加していたメンバー全員が血走ってる。

これは・・・ご愁傷様だな。

案の定、というか、うん、どうしようもないと思うんだ。殆どのクルーの怒りを乗せたエステバリスの問答無用の攻撃にすぐさま破壊されるという結末。敵ながら、可哀想な気も……。

「……グスツ。ここまで頑張ったのに……」

全然しねえ！ セレス嬢を泣かせたんだ！ 当然だろ！
むしろ、俺が潰したかった！ トラウマ？ 関係ねえ！ ippその事、今からでも潰しに行くか！？

「コ、コウキ君。落ち着きなさい」

……宥められてしまいました。

それから、大会は再び開催された。優勝は整備班の見事な洋風のお城。これは仕方ない。

大泥棒の三代目が心を盗んだ場所のような豪華さだったから。でも、セレス嬢だって受賞したんだぜ。

その頑張り、充分に入賞に値する。賞は審査員特別賞。景品の浮き輪で非常に楽しく遊ばせていただきました。

あ。そうそう。メグミさんの特別ジュース。賞を貰えずに嘆くガイに笑顔で渡したらしいです。

これから愛を育むのかという程にピンクオーラを発していたのですが、

一瞬にしてカオスになりましたよ。ご愁傷様とでも言えばいいのか。頑張れ。ガイ。

アキトさんはユリカ嬢から夜食を送られたそうですが、見事にジュン君へ受け流しました。

あの幸せそうな顔して気絶するジュン君は二度と忘れられないですよ。

あ、僕は触発されたミナトさんとセレス嬢からクッキーを頂きました。

普通に美味しかったですよ。はい。一人勝ちですね。はい。

第二十四話（後書き）

えっと、今回、水着の描写はあえてしません。

皆様の脳内で補完しちゃってください。

僕があまり水着に詳しくないというのがありますが……。

第二十五話（前書き）

読者の皆さんからの意見を参考に武器を開発しました。
ありがとうございます。これからもどうぞご意見を。

第二十五話

次はクルスク工業地帯のナナフシ。
マイクロブ拉克ホールキャノン。

ナデシコを撃沈させるだけの威力を持つ強力な武器。
DFすら容易に突破した威力は注意するべきだ。
あれを回避するのは不可能に近いしな。

ま、それは後で考えるとして、色々と動いてみよつと思つ。

「ウリバタケさん」

「おう。マエヤマ。どうした？」

「DFがある敵専用の武器とか考えてくれませんか？」

「ふっふっふ。良くぞ聞いてくれた。一応だが、構想はあるぞ」

フィールドランサーだな、きつと。

「どんな奴です？」

「槍の先端にDFを中和する装置をつける訳だ。」

槍の先端って事は一点集中し、なおかつ、全重量をそこに込められる」

「なるほど。それなら、DFを容易に突破できる訳ですね」

「ああ。見た所、敵の戦艦の装甲は薄いからな。DFさえ突破できれば余裕だろう」

ジンシリーズの対策にもなるから素晴らしい武器だ。

これはDF対DFでは必須のアイテムだな。

「ま、形状や性能的にチームを組んで対応する事になるだろうな。」

突破した瞬間を狙われると隙だらけだから」

チームを組む・・・か。

単機じゃフィールドランサーを活かしきれないのかな？

一機で一つの戦艦を攻略できた方が効率もいいし、無駄なエネルギーを消費しなくて済む。

・・・要するにフィールドランサーで突破すると同時に攻撃できればいい訳だ。

右手にフィールドランサーを持って、左手にラピッドライフルを持って突撃するか？

でも、そうするとフィールドランサーを両手で持てないから威力が弱まっちゃうな。

どうすれば、いいんだろう？

「名前はフィールドランサー。ふっふっふ。素晴らしい考案だろう」

「流石はウリバタケさんですね。DFを無効化できればこちらが断然有利です」

「だろ、だろ。あ。マエヤマには開発の途中で協力してもらったかもしれん」

「全然問題ないですよ。任せてください」

「流石は天才プログラマーだな。俺はいつもプログラミングで苦勞するんだよ」

「いえいえ。プログラミングなんてパズルみたいなもんですよ。

決まった形を組み合わせるだけ」

・・・組み合わせる？

「どうかしたのか？ マエヤマ」

決められた二つの事柄を組み合わせる事で一つの事柄としてしまう。

別の物と別の物とを組み合わせると一つの物体としてしまう。
銃と槍とそれぞれの機能が欲しいのなら、一つでどちらの機能も賄
つてしまえばいい。

「マエヤマ。どうかした」

「そうか！ その手があつたんだ！」

「うお！？ な、何だ？ いきなり」

「ウリバタケさん。もし、フィールドランサーでDFを突破したと
同時に攻撃できたらどう思います？」

「そりゃあ理想だがな。そう簡単にはいかんだろうが。」

両手にそれぞれ武器を持ちつちまったら威力は半減だしな」

「違つんですよ。ウリバタケさん。一つの武器で二つの機能を満た
してしまえばいいんです？」

「あん？ 近距離と遠距離を同時にこなすつてか？」

何だ？ 蛇腹剣でも作れつてののか？ ありゃあ夢だが現実には無
理だぞ」

「もっと簡単なのがありませんか！」

技術の進歩で廃れてしまいましたが、日本の戦争時代では標準装
備だった奴が」

「日本の戦争時代だと？ お前、若いのによくそんな事知ってんな」

「え？ だって、戦争の事は色々・・・」

「んな昔の事は誰も知らないんじゃないのか？」

地球連合が発足して戦争なんて起きなくなつたしな」

そうか。地球連合の存在があつたのか。

俺の時代は下手したら祖父ぐらいでも戦争を体験してた時代だもん
な。

俺なんかは割と身近な事で話とかも聞けたけど、この世界じゃずつ
と遠い昔の話なんだ。

この時代じゃ三百年近く昔の事だし、興味ないのは当たり前か。

しかも、地球連合の存在が戦争を抑止してたから、戦争なんて一般人には縁の遠い話。

誰も戦争の事なんか考えないよな。道理で一般人が木星蜥蜴に対して気楽な訳だ。

今の軍なんて反乱やら何やらの抑止力でしかないし。軍活動なんてやってなかったんだろ。

ま、そのツケが木星蜥蜴が来て何にも出来ないっていう現状なんだろうけど。

「銃剣つて知りませんか？」

「おお。あれだろ。銃の先端に刃をつける奴。すつげえ昔の事、知ってんだな」

「ま、まあ、何で知ってるかはいいいじゃないですか。

銃剣は近距離も遠距離も対応できる特別な仕様になっているんです」

「ほお。すると、お前はフィールドランサーにライフルとしての付加価値をつけようってんだな」

「ええ。命名、フィールドガンランス。どうです？ いけそうですか？」

「・・・フィールドガンランス。おめえ、やるじゃねえか。その案はすげえぞ」

「おし。どうです？ 作ってみませんか？」

「おつしや。任せとけ。作ってやるよ」

「俺も協力しますよ。言いだしっぺですし」

「ふっふっふ。こんなこともあるつかと、と言える日がやってくるな」

「ええ。技術職なら一度は言ってみたい台詞ですね」

「おお！ 分かってんじゃねえか！ おめえ、ナデシコ終わったら俺ん所、来るか？」

「おめえがいればプログラミングも任せられて助かるしな」

「ハハハ。考えておきますよ。いつ頃出来そうですか？」

「試験的に軽く作るだけならすぐにも出来んぞ。本格採用は割り
と先になりそうだが」

「そうですか。それじゃあ、何かあったら呼んでください。力にな
りますから」

「おう！ いや、良いアイデアをもらうと気分がいいな。いつでも
きやがれ！」

「はい。それでは・・・」

フィールドガンランス。

ナデシコの新しい力になりそうだ。

これは楽しみだな。

おし。次は・・・。

「コウキ」

「あ。何っすか？ アキトさん」

「微妙に口調が変わってるな」

「うす。後輩風っす」

「ま、まあ、いい。ちょっと相談があつてな」

アキトさんが相談？

何だろ？

「俺がミスマル提督と接触したのは知っているよな？」

「ええ。皆で考えた計画ですからね」

フクベ提督とミスマル提督の両名をリーダーとした新しい派閥。

二人には木連の事、遺跡の事など、この戦争に関する事を説明して
ある。

ま、それとなく気付かせるようにで、完全な説明をしている訳では

ないが。

あまりにも詳しすぎると逆に怪しまれる可能性が高いしね。

「フクベ提督とミスマル提督の協力を得られた。彼らを核に勢力は広まっていくと思う」

「軍内部での新しい派閥ですか。さしずめカイゼル派ですか？」

「い、いや、意味が分からんだろ。トップの特徴を伝えても掲げる意図が掴めん」

「冗談です。協力を得られた事は分かりましたが、何故そこで俺が出てくるのかが分かりません」

「ああ。徐々に勢力は強まってるが、如何せん発言力が低い。

影響力、求心力は高くとも軍内での身分はそれ程高くないのでな」

「確かにそうですね。フクベ提督は既に退役してますし、

ミスマル提督も数ある提督の中の一人ですから」

「そうだ。そこで、彼らの発言力を高めたいんだ。カイゼル派の発言力をな」

「カイゼル派でいいのかよ！？・・・えっと、発言力を高める為にはどうすれば？」

「意外とカイゼル派でも良い気がしてきた。

・・・そうだな。木星蜥蜴を倒したという事で評価を得たい」

「要するに、現状で成す術がない彼らに対する術を授けてくれと」

「ああ。そうなるな」

「何故に俺なのか、って感じです。俺には何も出来ませんよ」

「武器や機体を開発しろって言ってる訳ではない。

IFSがなくても戦えるようにしてくれないかという事だ」

IFS？

ああ。未だに嫌がってるんだっけ。

地球人は危機感が足りないねえ。

「あれですか？IFSに代わる操作システムというと・・・。
あの統合軍が標準配備してたステルンクーゲルのEasy Op
eration Systemみたいなのですか？」
「そうだな。もちろん、コウキならより高度なものを用意してくれ
るんだろっ？」

何？ そのニヤツとした笑みは。

お前なら当然だよな。黒い笑みだね。
急な技術進歩はまずいんだけどなあ。

「ま、ご期待に沿えれば」

「ほお。楽しみにしよう」

いえいえ。楽しみにしないでください。

「あ。それとも、トレースシステムがいいですか？」

「何だ？ そのトレースシステムというのは」

「簡単に言えば、身体の至る所にセンサやらを付けて、
身体を動かした通りにエステバリスを動かすというものです」

「ほお。面白いな」

「ですが、中の人間が超人じゃなきゃ無理ですね。

たとえば生身の身体と腰布だけでエステバリスを破壊するぐらい
には」

「何だ？ その空想上の人物は」

「いえ。まあ、気にしないで下さい」

貴方も一応空想上の人物なんですけどね・・・。

「とりあえず、EOSのようなIFSを必要としないソフトを組ん
で置いて貰えるか？」

「組むのは構いませんが、どこ製の機体に搭載するつもりですか？」
「む。そこまで考えてなかったな」

「生産ラインを整えなければなりませんからね。いつそ技術士官でも派遣してもらいます？」

「軍自体が生産するという事か？」

「ええ。でも、それだけの資金があるかが問題ですけどね」

「・・・そうか。その辺りは提督と相談してみるから、

とりあえずコウキはソフトを開発しておいてくれないか」

「分かりました。あれですよね？」

「シューティングアクションゲームみたいな感じでいいんですよ？」

「ん？ どういう事だ？」

「幾つもの動作をルーチン化して、コンボとかで動作を変えるようにしたり、にしたり、

決められた動作を瞬時に出せるようにしたりとか」

「ま、まあ、その辺りは任せる」

「それでは、アキトさんの機動データを参考にしたりして、パターンを幾つか作ろうと思いますが、構いませんか？」

「構わないが、俺は癖が強いぞ？」

「それじゃあ、誰がいいですかね？」

「そうだな。癖がないといえばアカツキかヒカルだな」

会長かヒカルのどっちかか。

うん。ここはヒカルに頼もう。

会長にはあまり借りを作りたくない。

それじゃあ、ヒカルを基準にして・・・。

「分かりました。では、アキトさんの動きは上級者用にしておきましよう」

「じよ、上級者用？」

「扱いが難しいけど、慣れると強いみたいだな、味がある設定です」
「そ、そうか・・・」

「幾つかパターンを製作してパイロット毎にパターンを選べるように出来たら楽しそうですね」

やばっ。なんか燃えてきた。

俺の知るシューティングアクションゲームを全て参考にしてやる。
ゲームの画面上に映像として行っている事を実機でやらせればいい
って事だろ？

うん。なんかやる気が出てきた。

「ま、まあ、任せる」

「分かりました」

「それではな」

仮想ソフトを多用して幾つもの動きを検証しよう。

まずはナデシコパイロットの機動データを参考にして、仮想キャラ
を作ってみるかな。

コンピューターが基本動作を行うステルンクーゲルよりは、
むしろ決められたパターンの複合だから簡単だと思う。

ま、パターン読まれたら厳しくなるかもしれないけど、
それは、あれだ、必殺コンボでも編み出して欲しい。

「ガンアクションシステム。略してGAS。ガスか？」

それとも、リアルアクションシステム。略してRAS。ラスか？」

・・・名称は後で考えよう。

とりあえず、何パターンも動作パターンを用意して、それぞれの動
きをコマンド入力する形で。

おし。誤差補正のソフトを組み込めば、正にシューティングアクシ

ヨンのような事が出来そうだ。

色々と試してみよう。やる気が漲ってきたあ！

・・・ん？ あれ？ ちよっと待とうか。

「・・・トレースシステムも面白いかも」

機体に乗ってリアルタイムで直接動かすのは無理だけど、

自分の動きをパターンとしてあらかじめ覚えさせて同じように動かす事は出来る。

スポーツゲームとかでプロ選手にセンサを付けて実際に動いてもらって、

それをPCで解析して実現させるみたいな感じ。

これはある意味、イメージのIFSよりも自分の動きを忠実に再現してるからやりやすいかも。

要するに基本動作だけ登録しておき、後は自分の身体を使ってカスタマイズできるみたいな。

うん。これはこれで面白い。EOSみただけど、それよりちょっと趣がある感じ。

カスタマイズ出来なければ、パターンがあらかじめ登録されているGASかRASを使えばいいし。

GASかRASはサンプルとして提供して、自分でカスタマイズしてもらおうというのも面白いかな？

パイロット一人一人が独自で機体を成長させる事が出来る。

また、一人一人が独自にカスタマイズ出来るんだから、個性も出てくる。

軍としては決まってる方が分かりやすいかもしれない。

だが、俺は個性こそを推奨する。皆違って皆良いんだよ。うん。

「さしずめトレースアクションシステム。略してTAS。タスだな」

おし。

方針としてはナデシコパイロットを参考にサンプルを作り、ヒカルの機動データを基本動作として登録。

後はトレースアクションシステムを開発して、

ヒカルの機動データをカスタマイズできるよう設計。

サンプルは格闘重視、援護重視、機動重視あたりで手を打つか。

アクトさんの機動は隠しキャラとして登録しておこう。

まるで格ゲーのような扱いだ。まあ、リアルアクションシステムは格ゲーとあまり変わらんしな。

「複合アクションシステム。略してCAS。・・・カス。なんか嫌
キヤスだな」

うん。そうだな。俺はCASを製作しよう。

「フィールドガンランスと複合アクションシステムの二つ。

とりあえず俺が現状で出来るのはこれくらいかな」

知識があっても実現できるだけの技術力はまだこの時代にはない。

現状で取り組める事といたら、これくらいだ。

ふむ。出来るだけ早く完成させたいな。フィールドガンランスは特に。

「おし。やるか」

明確な目標が定まりやる気が漲った日の事でした。

「・・・そうですか」

「ええ。正面から立ち向かう事か、時間が解決してくれるかを待つか。そのどちらかね」

「正面から逃げずに・・・という事ですな」

「そうね。逃げてたらいつまで経っても直らないわよ」

「・・・分かりました。ありがとうございます。イネスさん」

「頑張りなさい。コウキ君」

「ナナフシ!？」

ついにこの時が来ました。

一、二度しかなかったナデシコ撃沈の危機の内の一つ。

もう一つはボソン砲かな。デイストーションブロックは正にこんな事もあるうかとだった。

・・・マイクロブラックホールキャノン。

ナデシコを沈めたといっても過言ではない重力波レールガン。

DFを貫く威力も当然だけど発射後に大気に与える影響も軽視できない。

チャージまでに莫大な時間が掛かるといっても、その戦略性は凄まじいものがあると思う。

下手すれば、連合本部なんて一瞬な訳だし。

戦略級の武器の一つだと思うね。俺は。

相転移砲も凄まじいものがあったけど、それに等しいぐらい。

もしナナフシが大量に配備されたらと思うとぞっとする。

って事はきつとこのナナフシは実験機でしかなかったんだろうな。

大量生産の見込みはなかった訳だ。
これで実験機かよ！？　とも思っけどさ。

「そうよ。木星蜥蜴がクルスク工場地帯を占拠し、新たに配置した
新兵器。」

その形状から司令部ではナナフシと呼ばれているわ」

「それでは、今回の任務はそのナナフシの破壊という訳ですね。提
督」

「ええ。でも、油断しない事ね。今までに連合軍の特殊部隊が三度
破壊に向かったわ。でも・・・」

「・・・でも？」

「全滅よ。全滅。何をやってるのかしらね」

キノコ提督。

仕方ないと思いますよ。

それ程にマイクロブラックホールキャノンは恐ろしいのです。

「な、何と不経済な。いやはや。その分をネルガルで・・・」

どうしようと言つのですか？　プロスさん。

あと、その高速演算は何の計算でしょうか？

「そこでナデシコの登場という訳ですね！　グラビティブラストで
一撃必殺！」

ピースつと笑顔でアピール。

ナデシコの性能なら敵うかもしねませんが、そうはいかないんだ
よなあ。

「そうか！　遠距離射撃だね！　ユリカ」

「その通りだよ！ ジュン君」

おお。艦長と副艦長が分かり合ってる。

これはこのまま実行という形になりそうだけど・・・いいのかな？

「これ以上、地球経済に負担をかけないよう、我々ナデシコが頑張るべきですな」

プロスさんは地球の経済を背負っている方なのですか！？

「エステバリスが危険に晒されなくて済みますね」

「あら。それを言うならガイ君が、でしょ？」

「そ、そそそ、そうですね」

ガイ。大切にしていられよ。健気な彼女を。

「それでは、直ちに作戦を

」

「ちよつと待ってくれ」

「え？ アキト？ そつ。遂に私に告白する決意を

」

「艦長。我々は

「ユリカ！ ユリカって呼びなさい！ 艦長命令です」

凄い職権乱用。

「艦長。真面目な話だ」

「・・・ぶう」

不貞腐れた！？ やはり子供だな。

ユリカ嬢。大人になれよ。甘えた分だけ大人になれよ。

「我々がナナフシの攻略に適している事は分かる。射程距離にしても、その攻撃力にしても、地球ではナデシコがトツプだろうからな」

うん。それは確かに。

「だが、かといって、安心するのは気が早い。俺達はもっと情報を集めるべきではないのか？」

「テンカワ。それはどういう意味だい？」

「ジュン。三度も特殊部隊が攻め込んでどうして攻略できなかったのか。」

それを知らずして攻め込むのは愚かな事だと思う」

「そ、それは・・・」

正論です。

正論過ぎてジュン君も言葉がありません。

「提督。その辺りはどうなんだ？」

「ナナフシとその一帯が持つ対空迎撃システムが原因ね」

「それに全滅させられているのだな？」

「そうよ。それがどうしたのよ？ ナデシコが遠距離射撃したら御終いじゃない」

成功すればですけどね。

「コウキ」

え？ 俺？ 何故？

「な、何すか？」

「火星においてお前は言ったな。万が一を考える事こそが生き残る為には必要だと」

「ええ。最悪の事態を常に想定する。そうする事で気持ちに余裕が生まれますから。」

想定外の事程、焦るものはないでしょうか?」

「その通りだ。焦りは人に死を運ぶ。」

常に冷静である事が戦場で大事な以上、あらゆる想定をしておくべきだと思うがな」

「・・・そうだった。士官学校でも僕はそう習ったじゃないか。慢心していたよ」

「ナデシコの性能が圧倒的で油断するのは分かる。」

だが、指揮官たるもの、常に客観的に物事を眺めるべきだ」

「ああ。その通りだ。すまなかった」

ジユン君が頭を下げる。

ええっと、これで一応は最悪の事態を想定するという展開に持ち込めたのかな?

「艦長。敵の射程がこちらより長かったと想定しよう。どうする?」

「・・・グラビティブラストによる遠距離射撃が不可能である以上、エステバリスによる破壊になるでしょう」

「しかし、グラビティブラストの射程に敵う武器が」

「最悪の事態を想定するのに固定概念は不要ですよ。ゴートさん。」

何があってもおかしくないよう想定しておくんですから」

「・・・む。すまない。そうであったな」

グラビティブラストが最強。

そんな事を言っていられるのも今の内だけだ。

これから相転移砲という破壊力抜群の兵器も出てくるんだし。

「対空迎撃システムが充実されている以上、陸移動になりますよね」
「そうだな。地上戦のフレームは陸戦フレームと砲戦フレームの二つ。」

攻撃力的には優れているが、いかんせん移動力がない」

陸戦フレームは本当に唯のエステバリスって感じ。

あえて言うならワイヤードフィストがあるぐらい。

でも、あれって、そんなに必要性を感じないんだよね。

どうせやるなら、もっと高出力のロケット積んで、巨大な拳とかドリルのロケットパンチとかウリバタケ技師には鼻血もんだろくに。

「移動するなら陸戦フレームに外付けのバッテリーを大量に積ませる必要があるな」

お。ウリバタケさん参加。やっぱり本職に意見を聞かないとね。

「それだけで解決できますかね？」

「下手すると敵陣のど真ん中に取り残される可能性があるな。」

あれだろ？ ナデシコは近付けない前提だろ？」

「ええ。対空迎撃がある以上、格好の的ですから」

流石にDFでも無理だろ。

マイクロブラックホールキャノンをもし初弾で避けられたとしても、近付くのは困難だと思われる。

結局、攻略法はグラビティプラスの射程外距離からの遠距離射撃か、

エステバリスによる単独破壊しかない。

「分かりました。それでは、考えを纏めましょう」

御願います。艦長。

「現状で取れる策はナデシコの遠距離射撃かエステバリスによる破壊工作かのどちらかです」

ふむふむ。

「エステバリスによる破壊工作のリスクが高い以上、遠距離射撃で仕留めてしまいたいというのが私の考えです」

誰もがうんうんと首を縦に振る。

誰だって危険な目にあつて欲しくはない。

「確実に仕留めるにはまず向こう方の射程距離を確認する必要があります。あります。」

その辺りはどうなのですか？ 提督

「残念ながら分からないわよ。詳しい射程距離なんて。グラビティブラストとどちらが長いかなんてもっと分からないわ」

・・・それで良いのか？ 連合軍。

「それを確かめる為に他の艦隊から援軍を頼みたいのですが」「無理よ。この独立愚連隊のナデシコに助けなんて来るもんですか」「・・・ですよねえ。ユリカ、困っちゃうなあ」

独立愚連隊って自覚あつたんだね。提督。

「どつしよつ？ アキト」

「・・・危険だが、ナデシコのDFを前方に集中させて、敵の攻撃

をあえて受けるしかあるまい」

「でも、それって、かなり危険ですよ」

「ああ。だが、策としてはこれしかないだろうな」

あえてナデシコで受けるか。

でも、そんな危険な橋を渡るのは嫌だな。

そもそもDFを前方に集中とか出来るのか？

「やはりここはナデシコによる遠距離射撃に賭けるしかないな」

そうなんだよね。

でも、失敗するって分かっているのに何にも出来ないってのも……。

「……そうだな」

どうなるか知っている組も手詰まり。

ここでエステバリスでの作戦を提案しても周囲の賛同は得られないだろうし。

「どちらにしろ、DFを即座に張れる準備を御願いします。

ミナトさんはいつでも回避できるようにしておいてください」

「分かりました。DF発動シーケンスを進めておきます」

「緊急回避ね。やってみるわ」

少しでも直撃から免れれば、ナデシコの被害も減るか。

「それでは、作戦を開始します。直ちに配置についてください」

「了解」

それぞれのクルーが配置に付く。

パイロット組はブリッジで待機。

出番がなければ嬉しかったけど、そうもいかない。すいません。そして、御願います。

「グラビティブラストチャージ開始」

「グラビティブラストチャージします」

果たしてグラビティブラストをチャージして意味があるのか。

「チャージ完了と共に山陰から抜け出し発射します。

ルリちゃん。念の為、DFの発動も意識しておいてください」

「グラビティブラストの発射はラピスに任せます」

「・・・わかった」

山陰を隠れ蓑に。

出てきた所を狙われるとはもぐら叩きされている気分だ。

「相転移エンジン異常なし」

グングンと上昇するナデシコ。

「・・・」

「・・・」

何があるか分からない。

それがクルーに緊張感を与える。

「作戦ポイントに到達」

「ラピスちゃん。グラビティブラス

」

「敵弾発射しました！」

「ルリちゃんDF発動。ミナトさん！ 緊急回避！」
「デイストーションフィールド発動します」
「揺れるわよ〜」

ドダアアアアアアアアアア！！

「デイストーションフィールド消失！」

「直撃は避けられましたが、エンジン機関部に命中」
「相転移エンジン停止します」

「え？ 嘘？ ミナトさん！ 緊急着陸を」

「いいわ。きちんと掴まってなさい」

「艦内の全クルーに連絡します。本艦は敵兵器の攻撃を受け、墜落します。」

近くにある物にすぐさま御掴まりください！」

『あれは重力波レールガンね。私の見解では』

「イネスさん。後で説明の機会を設けるので静かにしててくださいい！」

「補助エンジンを起動！」

『仕方ないわね。でも』

「聞いている余裕なんてありません！」

「不時着するわ！ 振動に気を付けて！」

ズツシャアアアアアアアン！！

『マイクロブラックホールの生成に時間がかかるから、しばらくの間は安全よ』

「き、貴重なご意見ありがとうございます」

『ええ。詳しくはまた後で』

「……相変わらずマイペースな人だ」

「……カオスだな」

うん。酷い有様だ。

正に混沌。收拾がつかない。

やっぱりエステバリス作戦か。

また、俺は何にも出来ないのかな？

「私の見解では、ナナフシのマイクロブラックホールの生成は十二時間。ほぼ半日ね。

攻撃を受けたのが・・・」

現在、イネス印のホワイトボードを前に説明を受けています。

余裕は後十一時間とちよいしかないという現状。

しかも、相転移エンジンに被害が及んでいる為に、ナデシコの脱出は不可能。

とにもかくにもナナフシを潰すしかないという結論に達した。

不幸中の幸いは人的被害がなかった事かな。

軽傷を負った人はもちろんいたけど、重傷患者はいなかった。安心したよ。

整備班は今から相転移エンジンの突貫作業に入るらしい。

少しでも修理しておいた方が良いのは確かだしな。

「これが想定していたという事なのか。冷静に物事を考えられる」

ジュン君がなにやら感心したように呟きます。

「緊急事態になっても冷静でいられるのは良い事よ。誰の差し金か

は知らないけど・・・」

げっ？　そこで何故俺を見る？　俺じゃないし。アキトさんだし。

「ま、いいわ。それでは、以上で説明を終わります。起立。礼」

「ありがとうございます」

「って、違う！　ここは学校じゃないっての！」

ナデシコクルーはノリが良過ぎます。

「後は艦長に任せましょう」

そう言つて颯爽と去っていくイネス女史。

その途中、俺とすれ違いながら・・・。

「挨拶も碌に出来ない生徒は補習よ。覚悟してなさい」

・・・とかおっしやってみました。

いや。勘弁してください。身も心も疲れ果ててしまいますから。

その後、しばらく時間を置いて、作戦が発表された。

どうやら作戦会議をしていたらしい。艦長、副長、ゴートさん、アキトさんの四人で。

「それでは、作戦を発表します」

ナデシコによる破壊が失敗した以上、エステバリスで叩くしかない。

「エステバリスで地上よりナナフシに接近し破壊します」

「作戦開始は一時間後とする。砲戦を三機、陸戦を三機の構成で作戦を実行してもらう」

原作と違ってガイが生きている。

その分、砲戦が一機増えるから、攻略は楽になりそうだ。

あ、それと、多分、外付けバッテリーはガイが持つんだろうな。

アキトさんに持たせるとかまずないだろうし、エースパイロットだしね。

頑張れ、ガイ。それも愛の試練だと思って。

「作戦指揮はテンカワ。任せたぞ」

「ああ。了解した」

心強い返事。

不思議な事に不安や恐怖はまったくくない。

きっとアキトさんを始めとする優秀なパイロット達に対する信頼がそうさせるんだろうな。

だから、ブリッジの皆にも負の感情はない。

彼らなら絶対に何とかしてくれる。

そんな強い信頼関係がナデシコクルーにはある。

ああ。これがナデシコなんだな。

クルー達の団結力こそがナデシコが強い所以。

性能や武装ではない。クルー一人一人の強さがナデシコの強さなんだ。

「コウキ。留守は任せたぞ」

「はい。アキトさん」

俺に何が出来るか分かりませんが、任せられました。

「ま、お前の出番はねえけどな」
「うるさいよ。荷物番」
「て、てめえ、それは言わない約束だろ」
「・・・信じてるぞ。ガイ」
「おう！ きちんと成功させて無事に帰ってきてやるよ」
「ああ。メグミさんを悲しませんなよ」
「あつたりめえだ！」

まったく。頼り甲斐のある男になりやがって。

「コウキは気楽に待っててよ」
「おう。俺達がミスる訳ないしな」
「クツクツク」
「頼むよ。皆」

パイロット三人娘。

彼女達の腕なら大丈夫だ。

「ねえねえ、君はどうするのかな？」
「・・・アカツキ・ナガレ」
「もし、ナデシコが危機に面したら、何もしないで震えてるの？」
「何!？」
「恋人が乗ってるんでしょ？ それなら、きちんと男を見せないとね。僕のように」
「軟派野郎は男らしくないと思うけど？」
「ま、この作戦で彼女達は僕に惚れるよ。男らしい背中を見てね」
「ないない。ま、精々頑張れよ」
「ふふっ。負け犬の応援はやる気が出るねえ」
「クツ」

・・・ふう。落ち着け。怒った所で何も変わらない。
俺だって、いつまでもトラウマなんて言ってられないんだ。
いつまでも震えてられない。

「頼むぞ。皆」

次々とブリッジを去っていくパイロット達。
その心強い背中に作戦の成功を祈った。
作戦開始まで後一時間弱。

「ええっと、何ですか？ これ」

「無論、お前が着る奴だ」

パイロット達が出撃し、ブリッジには何とも言えない空気が漂っていた。
そんな時だ。

まるでネルガル陣がブリッジにいない時を狙ったかのようにウリバ
タケさんがやって来て・・・。

「さあ、これに着替えるんだ！ 作戦司令部ならば当然の事だぞ」

・・・などと言い出して、ウリバタケ秘蔵コレクションから色々
と持ってきた。

いいよ。普通に軍服な人は。

でもさ、ルリ嬢は・・・原作通りだから、覚悟はしてただろうけど、
ラピス嬢とセレス嬢は何？

ラピス嬢は西欧の甲冑姿で凄く重そう。
セレス嬢は騎士甲冑っていうの？ 物凄く派手なんですけど。
地面に付きそうなくらい長いマントっぱいがあるのはどうかと思
うんだ。うん。
それでさ、何で俺はこれなの？

「いいじゃねえか。エリートのみが着る事を許された白服だぜ」
「あれですか？ 仮面はデフォですか？」
「無論だ。あのシリーズの敵キャラは仮面と決まっているんだよ」
「……さいですか」

クソツ。こんなものを着なくてはならないとは。
認めたくないものだな……自分自身の若さゆえの

「つて、仮面違いだし！」
「あん？ 何だ？」
「い、いえ。なんでも……」

はぁ……。素直に着るか。

「えっと、なかなか、似合ってるの、かな？」
「……フォローになってませんよ。ミナトさん」
「……仮面……ですか？」
「そうだよ。私の正体を隠す為には仕方なかったのだよ」
「成り切ってるように見えて首が真っ赤よ」
「ク、クソツ。俺だつて……。俺だつてえ……」
「使い方間違つてんぞ。マエヤマ」
「グハッ！」

完璧に負けました。ガクツ……。

「さて、俺は帰るぜ。またな」

ウリバタケ氏は満足して帰っていった。

「あら？」

「パイロット達は！？・・・ん？」

「貴方達は何を・・・」

入れ替わるように現れるネルガル陣。

どこか嬉しそうな笑みを浮かべるエリナ秘書。

もはや諦めの境地に達したのか表情を変えないゴートさん。
絶賛胃腸炎中のプロスさん。

「ビシッ！」

ビシッ！

「・・・コスプレかね？」

「はい。司令部はこういふものだと聞きました。ビシッ！」

ビシッ！

「・・・作戦遂行中である。諸君、警戒を怠るな」

「了解！ ビシッ！」

ビシッ！

「・・・良いな」

つてか、嬉しそうにしないでください。
それと、隠れてませんから、ガッツポーズ。
・・・ああ。ゴートさんのイメージが。

「パイロットの方々の様子はどうなのでしょう?」

「順調に進んで」

「・・・き、機影反応です・・・」

え? 機影反応!? 敵!?

「ル、ルリちゃん!」

「・・・やられました。周囲、全方位囲まれています」

「な、何で? いつの間に・・・」

「畏だつたようですね。ナナフシは」

う、嘘だろ? こんな原作にはなかった。

エステバリスが留守の間に襲われるだなんて事はなかった筈だ。

「ナデシコは見事に餌に引っ掛かってしまったようです」

無情にも告げられる報告。

背筋が凍った。

「ル、ルリちゃん! 相轉移エンジンの調子は?」

「整備班が頑張ってくれています。現状では半分程の出力しか」

「そんな・・・」

・・・完全に狙われた。

周囲を囲むように飛んでいるバツタ。

周囲を囲むように迫ってくる旧兵器。

戦車やら戦闘型飛行機やら装甲車やら。
どうやら制御が奪われてしまっているようだ。
現在、あれらは完全に木星蜥蜴の支配下にある。
敵戦力はエステバリスがない今、圧倒的だ。
ただでさえ相転移エンジンが本調子ではないというのに……。

「敵反応、徐々に近付いてきています」

「DFを張ってください。攻撃を耐え抜きます」

「……駄目です。DFだけではとても……」

周囲を囲み徐々に近付いてくる敵。

攻撃されるのも時間の問題だ。

ガタンッ！ ゴドンッ！

攻撃を喰らってナデシコが揺れる。

ドダンッ！ ガガガ！

こうしている間にもナデシコは次々と傷付いていくんだ。

「相転移エンジン出力低下。DF弱まります」

「グラビティブラストは撃てますか？」

「不可能です。DFに回すだけのエネルギーしか得られません」

「……………」

このままだと危険だという事は誰にだって分かる。

でも、その対処法が何もないければ、俺達にはどうする事もできない。

ドドンッ！ ガタンッ！

「キャツ！」

「……今、動けるエステバリスパイロットはいない。
ナデシコには迎撃できるだけの力がない。」

「……俺には……何が出来る……いや。」

「……コウキ君」

「……俺がやるしかないんだ。」

「……艦長。俺がエステバリスで出ます」

「……え？ でも、マエヤマさんは……」

「正面から逃げずに立ち向かう」

「え？」

「そうやってトラウマを克服する事が」

「コウキ君。震えてるの分かってる？」

「……嫌だなあ。そんなの……分かってるに決まってるじゃないですか」

「言われなくたって分かってる。」

「指先だけじゃない。全身が震えてるさ。」

「でも……」

「俺がやらずに誰がやるんです？ 今、この状況を打破できるのは俺だけでしょ？」

「……俺しかいないんだ。」

「エステバリスで出撃できるパイロットは。」

「だから、俺が」
「貴方は背負い込んでばかりね」
「え？」

突然抱き締められた。

身体の震えは、不思議と収まっている。

「義務感で動いて欲しくないわ」

「でも、俺しか・・・」

「義務感や責任感に囚われてちゃ駄目よ。」

どうしてエステバリスに乗ろうと考えたのか良く考えなさい」

「俺は・・・」

俺しかいないという義務感。

ナデシコを護らないとという責任感。

その二つで動いていた。

でも、その根本にあるのは・・・。

「ナデシコを護りたいからです。ミナトさんに、ナデシコクルーに死んで欲しくありません」

護りたいという思い。

思い上がりでも、己惚れでも。

俺に護れる力があるのなら、俺は皆を護りたい。

「そう。それじゃあ、その気持ちで行動しなさい。助けたいという思いで動きなさい」

「・・・変わりますかね？」

「ええ。自分が何故その行動を取ったのか。それをしっかりと自覚して、思いを乗せなさい。」

そうすれば、コウキ君、貴方なら出来るわ」

「・・・はい。分かりました。ミナトさん」

「私達はコウキ君に辛い思いをさせようとしている。ごめんなさいね」

「謝られても困りますよ。謝られるぐらいならありがとつと言われたいですね」

「それじゃあ、無事に帰ってきて。帰ってきてきちんとありがとつて言わせて」

「・・・ええ。必ず帰って」

唇に優しい感触。

「・・・おまじないよ。無事に帰ってくるようにつて」

潤んだ瞳で見詰めてくるミナトさん。

彼女を死なせたくない。悲しませたくない。

その為にはナデシコを護り、その上できちんと帰ってこなくちゃ。

「それじゃあ、行ってきます」

「ええ。行ってらっしゃい」

ミナトさんが身体から離れる。

それだけで、再び身体が震え始めた。

それ程にミナトさんの存在は俺にとって偉大だという事だろう。

エステバリスの乗る為にブリッジから抜け出して、格納庫へ向かう。

そう席を立ち上がるつとする瞬間・・・。

「・・・コウキさん」

・・・掛けられた声に俺の動きは止まった。

「・・・セレスちゃん」

声の主はセレス嬢。泣きそうな顔で俺を見上げている。

「・・・大丈夫なんですか？」

「怖いし、身体は震えてるよ。でも、皆を護りたいんだ」

「・・・でも、コウキさんは・・・」

「護れる力がある。それにね、俺はパイロットの皆に任せれたんだ。ナデシコを。」

彼らが作戦を成功して帰ってきた時に帰るべき家がなかったら悲しむだろ？」

「・・・コウキさんがいなくなるんじゃないかって心配です・・・」

「大丈夫。絶対に戻ってくるから」

「・・・」

無言で俺の身体をよじ登ろうとするセレス嬢。

いつもの体勢だろうと思って、抱きかかえると・・・。

「・・・え？」

視界一面に映るセレス嬢の顔。

小さな唇の感触が俺の唇に暖かさを伝えてくれた。

「・・・私からもおまじないです。必ず帰ってきてください」

照れもせず、涙目になりながらも真剣な表情で俺を見詰めてくるセレス嬢。

・・・そんな顔された約束破れないな。

「うん。セレスちゃんからおまじないしてもらったんだ。絶対に帰ってくるよ」

「・・・はい。気を付けて下さい」
「任せて」

腿の上に座る小さく軽いセレス嬢をゆつくりと床に降ろす。
こんなに小さな子に激励されて、情けないな、俺。
でも、その期待に応えなくちゃもっと情けない。

「それじゃあ、行ってくるね」

「・・・いつてらっしゃい。コウキさん」

今度こそ、ブリッジから抜け出し、格納庫へ向かう。
あれからコンソール越しの戦闘なんて練習してなくて、
絶対に反応速度とか落ちてる自信がある。
でも、俺に出来る精一杯を、やるだけだ。

「ウリバタケさん」

「おう。聞いてんぞ。お前がナデシコを護るんだ。いいな!？」

「はい!」

身体の震えを懸命に抑え、エステバリスに飛び乗る。

「・・・はあ・・・ふう・・・」

落ち着け。落ち着け。

自分の思っ通りにやればいい。

気負うな。我を失うな。気を強く持て。

「……はあ……おし」

エステバリスのコンソールに手を置く。

戦闘の為にコンソールに手を置くのはどれくらいぶりだろう。

『搭乗者確認。マエヤマ・コウキ。カスタム状態に移行します』

大丈夫。大丈夫だ。落ち着いてやれば大丈夫だ。

「マエヤマ。オプション武器はどうする!？」

搭乗フレームは高機動戦フレーム。

現在の場所是对空迎撃が発動しないギリギリの位置らしい。

それなら、高機動戦フレームの方がやりやすい。

「レールカノンとラピッドライフルを片手ずつ持って」

「フィールドガンランス試作型。出来てるぜ。試してみるか？」

「本当ですか？」

長期戦になる。

フィールドガンランスなら時折近接攻撃に移る事で戦闘続行可能時間を延ばす事が出来る。

近距離と遠距離をどちらもこなせるのはかなり有効的だ。

「それなら、フィールドガンランスを持っています。

腰にラピッドライフルを二丁備え付けて置いてください」

「了解した。フィールドガンランスは背中に収められるように作られている。

イミディエットナイフは装着パツクの所だ。行って来い」

次々と運び込まれてくる武装。

「・・・ふう。冷静にな」

震える腕を抑えつけ、エステバリスを動かす。
武装装着を確認。・・・よし。行こう。

「マエヤマ・コウキ。高機動戦フレーム。行きます」

カタパルトに移動し、発進。

凄まじいGに襲われながら、開けた視界には数多の敵。

『コウキ君。私がおりにいるわ』

『・・・頑張ってください。コウキさん』

ミナトさん。セレス嬢。

・・・こりゃあ気張るしかないな。

・・・震えが止まった。

「うし」

すれ違う戦闘型飛行機をフィールドガンランスで突き刺し、
地面からこちらを狙ってくる戦車を貫く。

ラピッドライフルでは装甲が厚くて効果的なダメージを与えられな
いが、

レールカノンを素体としているフィールドガンランスなら・・・。

「貫ける！」

地上にいる戦車を優先的に潰し、時折襲ってくる戦闘機は射撃では

なく近接攻撃で倒す。

戦闘機なんて高機動戦フレームの機動力にしてみれば的に等しい。機関銃の攻撃はDFが弾く。

「次！」

フィールドガンランスを背中に収め、腰からラピッドライフを取り出す。

「やはり二丁拳銃が俺の武器か」

威力強化されたラピッドライフルならDFを纏う新型バツタとて貫ける。

戦車の攻撃は回避し、戦闘型飛行機とバツタをこれで潰す。

「・・・高速で移動しながら標準をつける。いけるのか？ 俺」

・・・違う！ やるんだ！

「フィードバックレベルを上昇させる。意識を奪われるな。己に打ち克て」

フィードバックレベルの上昇はより鮮明なイメージを実現させる。システムに意識を奪われるな。機械的になっても、敵だけを狙え。

「・・・」

・・・意識が切り替わった。

何の感情もなく、機械のように身体を動かす。

「……………」

効率的に、効果的に、無駄を失くし、迷いを捨て、常に先を想定する。

『コウキ君！ しつかり』

「……大丈夫です」

『……そうみたいね。安心したわ』

「……必ず守り抜きます。ミナトさんは」

『分かったわ。私は貴方を信じて、自分に出来る事をする』

「御願います」

意識を奪われかけても引き戻してくれる人がいる。

恐れるな。立ち向かえ。逃げるな。真正面から打ち破れ。

「ハアアア！」

雄叫びをあげ、視界を埋める程の敵へ突っ込んでいった。

S I D E M I N A T O

意識を保ちながら、必死に戦うコウキ君。

身体を震わせていたのも最初だけ。

ナデシコを護るといふ意思がコウキ君を強くさせる。

「ルリちゃん。グラビティブラストをチャージしてください」

「しかし、DFにエネルギーを」

「時間をかけてしまっても構いません。DFの出力を少しだけ落とす、GBをチャージしてください」

「・・・分かりました」

たとえコウキ君といえど、一人でこの量全てを倒せる訳じゃない。大量に撃破するにはやはりGBが一番よ。

「・・・せめて回避行動が取れば」

移動も出来ないナデシコ。

私には何も出来ないの？

ううん。何かある筈。

「ミナトさんはいつでもマエヤマさんが補給できるように」

デッキの位置をマエヤマさんがいる方向に合わせておいてくださ

い

「ッ！ 分かったわ」

コウキ君の補給を迅速に行えるように回頭する。

今の私に出来る精一杯。

「頑張れ。コウキ君」

めまぐるしく動き回り、敵を引き付け、撃破していくその姿は他のパイロットにも見劣りはしない。

射撃をすれば高確率で敵を貫き、敵が近付けば槍のようなもので貫く。

ライフルを片手に一つずつ持って両手で敵を倒していく姿は、正にガンマンというのに相応しかった。

この戦闘を後どれくらい続けられればいいのだろうか？

「・・・コウキ君」

戦闘終了の合図が来たのはそれから数時間後だった。

コウキ君はそれまで五回もの補給を繰り返し、休む事なく戦い続けた。

戦闘が終了した途端、コウキ君はバタリと倒れてしまう。

もしや、また・・・と不安で潰されそうになったが、

気を失う彼の顔を見ればそんな感情は吹っ飛んだ。

コウキ君は・・・満足したかのように穏やかな顔だったのだから。

・・・お疲れ様。コウキ君。

S I D E O U T

第二十五話（後書き）

トラウマ克服の話。

ちよっとトラウマにしては軽いかもしれませんね……。

これでパイロットとしてもコウキ君が活躍できると周囲は知りました。

パイロットとしての出番も増えるかもしれません。

第二十六話（前書き）

ちよつと投稿が遅れました。
やばい。余裕がなくなってきた・・・。

第二十六話

「すまなかった。まさか、俺達がない間に敵が攻めてくるとは・・・」

「・・・油断してました。未来を知っているからといってその通りになる筈がないのに」

いつもの秘密会議。

最近は定例会議と化してる。

「いえ。万が一の時の予備パイロットですから。俺は当然の事をしたままですよ」

「・・・だが、お前は・・・」

トラウマの事で心配されてるみたい。

ま、仕方ないか。毎回震えてれば。

「今でも多分、操縦しようと思えば震えるかもしれませんが。」

ですが、いつまでもこのままではいられないので

「・・・そうか」

いざという時に何も出来ないままではいけない。

今度いつあのような事になるか分からないんだ。

きちんと正面から受け止めて克服しないと。

「シミュレーション。明日から俺も参加します」

「了解した。びっしり扱いてやるから覚悟してろ」

「お、お手柔らかに」

ひ、久しぶりでも手加減とかしてくれなさそう。

あれだな。筋肉痛やら神経痛やらになりそうだ。

「それにしても、あれは何ですか？ フィールドガンランスとは」

「ああ。あれ？ ほら、フィールド破つてすぐに攻撃できたら効率がいいなあと思って」

「あんな方法は思いつきませんでした。まさか槍と銃を組み合わせるなんて」

そんなに凄い発想なのかな？

「ああ。正直、あれには俺も驚いた。

まさかあんな方法でチームで行うものを単機で可能にしてしまうとは」

「そんなに珍しいですかね？」

「そうだな。とても近距離武装と遠距離武装を組み合わせるなんて発想は思い付かない」

「どうしてそんな発想が？」

「銃剣つて知ってる？」

「銃剣？ 何だ？ それは」

「ルリちゃんは？」

「私も知りません」

そうか。やっぱり昔の戦争の事なんて誰も知らないのか。

なんか、ここにきてこの世界がまったく別の世界だって再認識した。パツと見は俺の世界にもいそうなアキトさんだけど、育ってきた環

境は全然違っんだな。

何でウリバタケさんとかが思い付かないのかなあって思ってたけど、あれか、生活の環境が違い過ぎるからか。

「銃剣とは、銃の精度があまり良くない時代に生まれたものです」

「銃の精度が良くないから？」

「ええ。精度が悪いという事は確実に敵を狙えないという事です。

即ち、接近を許してしまうかもしれないという事です」

「なるほど。今でこそ銃のみで確実に命を脅かせるが、その時は無理だった。

接近を許してしまえば逆に銃だけでは危ない」

「そうですね。それを解決する為に銃でありながら接近戦でも使用できるように先端に刃を付けた。

それが銃剣です」

「遠距離主体の武器に近距離武器としての機能を備え付けさせたのか」

「ええ。当時は銃の先端に刃を取り付ける程度でしたが、

それでは機動兵器同士では強度が足りないでしょう？ だから、ガンランスとしたんです」

「・・・なるほどな。お前はその銃剣の存在を知っていたから、その案件を考えられたのか」

「はい。その通りです」

フィールドガンランスは対DF用では最高の武器と言える。

ランスの先端で強力なDFを解除できるし、

弱いDFならそもそもレールカノンだけで充分攻略できる。

レールカノンの威力は凄まじいので、強力なDFでも、解除さえしてしまえば後は撃つだけだ。

「フィールドガンランスはまだ試作型ですが、

正式に採用できるだけの性能を持つようになれば大分戦闘は楽になると思います」

「そうだな。フィールドランサーでも充分過ぎる程に強力だったのに、それ以上だもんな」

「レールカノンといい、フィールドガンランスといい、コウキさんにはお世話になりっぱなしです」

「いやいや。俺も生き残りたいしね。当然の事だよ」

生き残る為に出来る事をするのは当然だ。

俺が求める平穏で幸せな生活もまずは生き残ってから。

その為なら全力を尽くそう。

「それで、次はオモイカネの反乱ですけど、どう対処するんですか？」

クルスクが終われば、次はオモイカネの暴走事件だ。

原作では記憶の枝？を切って解決したが、今回は暴走事件を知っている。

どうにかして前もって暴走を抑えられれば……。

「前もって対処したいのですが、オモイカネの反抗心は根深くて・

」

「どうしようもないって事？」

「……はい」

確かに原作でもルリ嬢がやめてって言ったのにオモイカネは言う事を聞かなかった。

今回もそれは同じって事か。成す術はないと……。

「連合軍が敵。その認識を改める事は出来ないのかな？」

「・・・厳しいですね。認識を改めるのでしたら、
記憶を消去した方がオモイカネの負担も小さいです」

本当は記憶消去なんてしたくないんですけどね、と弱々しい笑みを
浮かべながら告げるルリ嬢。

そつだよな。ルリ嬢にとって思い出は大切に何としても守りたい物
だもんな。

たとえそれがオモイカネのデータとしての記憶でもルリ嬢は絶対に
消したくない筈だ。

それでも、それ以外に成す術がないから、

仕方がなく、本当に悔しく思いながらも実行するんだろう。

・・・ナデシコを護りたいから。本当に、優しい良い子だなんて思
う。

「あの反抗心はオモイカネのストレスによるものです。

連合君からはまるで敵のような扱いですし。敵ばかりの環境は精
神的に辛いですから」

「ビックバリアでの事も影響してるだろうな。散々攻撃されている
んだ」

「そつよね。そんな事されてたら味方だなんて思える方がおかしい
わ」

そつだよなあ。どう考えても敵扱いしか出来ないだろ。

気分はそつ、あれだ。転校先がライバル校みたいな。

前のチームを愛してたのに、

どうしようもない理由で敵チームに移籍しなければならなかったみ
たいな。

どちらにしろ、精神的に辛い事に変わりはないだろう。

「それでは、やはり記憶消去をするんですか？」

方法がないのなら、原作と同じ事をするしかない。

「・・・そうですね。どうしようもないのですから」

・・・諦めるしかないのだろうか？

オモイカネは連合軍を敵だと認識し、溜めに溜めたストレスが爆発してあんな事をしてしまった。

・・・ストレス。ストレスかあ・・・。

「ねえ、ルリちゃん、オモイカネのストレスを発散させてやる事は出来ないの？」

「え？ オモイカネのストレスを？」

「うん。無理に認識を改めないで、記憶も消去しないで、ストレスを発散させて我慢してもらおう」

誰だってストレスを溜めれば爆発する。

人間はうまくストレスを発散してるから爆発せずに済むけど、

オモイカネはそれが出来ないから爆発してしまった。

たかが一度爆発した程度で処理してしまうというのはあまりにも可哀想だ。

オモイカネ単体で発散できないなら、俺達がどうにかして発散してやればいい。

「それに、記憶の消去をした所でその場凌ぎでしょ？」

また、何かあって敵愾心を持ってしまったらまた消すの？ そんなの負の連鎖じゃないか」

記憶消去は一時的な処理でしかない。

幸運な事にあれからオモイカネが暴走する事はなかったが、また大

丈夫とは限らないだろ？

それに、何度も消去を繰り返しては、オモイカネにとっても、消去するルリ嬢にとっても負担が大きいきつとその度に心を痛めるだろうしな。

「誰にだって嫌なものはある。嫌な所にいればストレスも溜まる。でも、その嫌な事を飲み込んで、オモイカネも成長するんだと思う」

嫌だ嫌だと暴れるのも時にはいいかもしれない。でも、生きていけば必ず嫌いなものとは出くわすし、いたくないのにいなくちゃいけない環境に身を置く事だつてある。その度に暴走しては、オモイカネはただの子供だ。ストレスが溜まるのなら発散させてやる。その上で、きちんと説得すればいいと思う。

「・・・コウキさんは不思議な方ですね」

「・・・ああ。俺もそう思う」

「・・・私も」

「ええつと・・・」

「さあ・・・」

三人して不思議と言われた。

思わず、ミナトさんと顔を見合わせてしまう。

「オモイカネはAIです。それなのに、貴方は人間と同じような成長をオモイカネに求めている」

「いや。オモイカネはオモイカネで人格があるんでしょ？

それなら、人間だってAIだって変わんないと思うよ」

いや。そんなにおかしい事は言っていないと思う。

俺の言う成長は精神的な成長の事だ。

オモイカネが今、子供のように短絡的に物事を考えているなら、それを正してやるのが大人の義務だろうに。

「そこが不思議なんだ。人間は人間。AIはAI。そう割り切るんだ。普通はな」

「・・・まるで俺が変な人みたいですね」

「え？ 自覚なかったの？」

このタイミングでミナトさんが何でそういう事を訊くかな？

つてか、俺は普通の人間です。変な人では決してございません。

「ま、俺がどういう人間かは置いておきましょう。」

それより、オモイカネです。どうなの？ ルリちゃん」

「・・・そうですね。ストレスの発散ですか。考えた事ありません」

むぐと悩むように手を顎に触れさせるルリ嬢。

様になりますね。流石はルリ嬢。

「オモイカネとオペレーターは密接な関係があります」

「うん。それで？」

「ですが、前回、私はオモイカネにストレスが溜まっていた事に気が付きませんでした」

「それは、少なくとも表面化には出ていなかったって事？」

「はい。不満だったり、悲しかったりという感情は伝わってこなかったです。」

きつと、相当に奥深い所でストレスを溜めていたのでしょうか」

「・・・オペレーターでも気付かなかった根深いストレスか・・・。」

「どうするかな？」

人間にもそういう事はある。

自分の知らない間にストレスを溜めているという事が。

まるでストレスを表面に出さないのに、その実、しっかりとストレスを溜めている。

自分で気付かないから発散しようとしないうし、誰も発散させようと動いてくれない。

そして、突然、爆発させる。溜まるに溜まったストレスを抑圧されていた分、過剰に。

だからこそ、大人しかつたあの人があんな事を、という事件が起こるのかもしれない。

「私のような人間には無理でした。

でも、同じような存在であれば、オモイカネを理解してあげられるかもしれない」

「オモイカネと同じような存在？　って事はAIを作製すればいいって事かな？」

「可能性としては高いかと。私達のような別種の友達ではなく、同種の友達であれば」

別種の友達。

人間とAI。されど友達。

使役する側と使役される側ではない。

ルリ嬢はしっかりと友達と告げた。

ふふっ。ルリ嬢だってオモイカネを人間として扱ってるじゃん。

AIと区別しても精神的に人間として扱ってる。それはまったく俺と同じだよ。

「そっか。それなら、オモイカネに友達を紹介してあげよう。」

名称はシタテル。オモイカネの妻の名前だよ」

こうして、オモイカネの友達でストレス解消作戦が始まった。

『・・・』

『問おう。貴方が、私の創造主か？』

完成。

『・・・声が出なかった。突然の・・・』

『・・・嫌いだ』

運命の出会い。

『・・・』

『・・・』

お知り合い期間。

『愛している』

『好きだ』

イチヤイチャカップル誕生。

ストレス解消。

「・・・案外簡単だったな」

「・・・ええ。ま、まあ、オモイカネも幸せそうなので良いではないですか？」

「そうなんだが、何だろう？ このやりきれない感じは」

「そういうもんなんですよ」

「そうか」

「ええ」

・・・作戦完了。ミッションコンプリート。

「後は愚痴でもなんでもシタテルが受け止めてくれますよ」

「そうだな。オモイカネに友達・・・いや、もはや恋人だな、が出来たんだ。祝福してやろう」

「・・・そうですね」

確かにあれだけ危惧していた事がこんなにも簡単に解決してしまうと・・・。

「やりきれないというか、やるせないというか・・・」

・・・ま、そんな感じ。

「これでオモイカネの反乱を防止できましたね」

「ああ。そうだな」

それでいいのか？ ま、結果的には万々歳だが。

「反乱がない以上、特にこれといって・・・」

「いや。その日は別の用件が出来た」

「別の用件ですか？」

「ああ。あの作戦は連合軍との共同作戦である事は知っているな？」

「もちろんです。そうでなければ、連合軍に攻撃を仕掛ける事自体がなかったでしょうから」

「その時、カイゼル派とコンタクトを取る事になった」

カイゼル派。・・・認めてしまったんですね。アキトさん。

「ミスマル提督に相談し、本作戦に参加する艦隊をカイゼル派で纏めてもらった。

作戦終了後、会談する予定になっている」

「・・・遂に動き出すんですね」

「ああ。その時だが、お前にも参加して欲しい」

「え？ 俺もですか？」

「そうだ。頼めるか？」

「いいですが、何で俺が？」

「コウキに開発を依頼していたソフトがあっただろう？ あれの説明をしてもらいたいんだ」

CASの事かな？

つて事は連合軍側に生産する環境が出来ている、

もしくは、整えようという意味があるという事になる。

「そうですね。分かりました」

「頼むな」

ふむ。

ある程度は完成しているから、最終確認といこうかな。

いや。楽しくて時間を忘れてたんだよ。つい。
気付いたら何日か経っていたという恐怖。
うん。本当に不思議だ。おし。じゃ、行くか。

「・・・ねえ、コウキ」

「ん？ どうした？ 深刻そうな顔して」

食堂で飯を食っている時、不意にカエデに話しかけられる。
なんかいつもと違って元気がない。

「・・・相談があるんだけど」

「相談？」

どうしたんだろう？

あれか？ エリナ秘書の強引さが発揮されたか。

「おう。いいぞ。そうだな。俺の部屋に来るか？」

「え？ コウキの部屋？」

「ああ。相談事なら二人つきりの方がいいだろ？」

「変な事しないでしょうね？」

「何だ？ して欲しいのか？」

「バ、バツカじゃない！ そんな訳ないでしょ！」

うん。こっちの方がしっくり来る。

「嘘だよ。嘘。で、大丈夫か？」

「もう。嘘ばかり。分かったわ。シフトが終わったら連絡する」
「あいよ。んじゃあ、また後でな」
「・・・あ、ありがとう」

バツと去っていつちまった。
何だっただ？

「ま、いいか。ブリッジ行こっ」

相談に乗るにしても、まずは俺の仕事を終わらせないと。

「コウキ君。おかえり」

「どもども。ただいまです」

自分の席に座るとミナトさんが迎えてくれる。
ちょうどミナトさんしかいないし、言っとくかな。

「今日の夜なんです」

「あら？ 珍しい。コウキ君から誘われるだなんて」

「え、い、いや。そうじゃなくてです」

・・・ふう。落ち着け。

「じゃあ何なの？」

「カエデから相談を受けまして。夜にでも、と思ってるんです」

「あ。そういう事。へえ。部屋に連れ込もうっていうんだ」

「か、勘違いしないでくださいよ。相談に乗るだけなんです」

「はいはい。ま、自制心が強いコウキ君なら大丈夫だと思うけど」

「信用してませんか？」

「さあ？」

「はぁ・・・」

遊ばれてんな。

「了解、了解。じゃあ、ちゃんと相談に乗ってあげなさいよ」

「はい。俺に出来る限り」

「そ。分かったわ」

うむ。ミナトさんの許可も得たし・・・。

許可を得る必要あったのか？

ま、別の女性を部屋に呼ぶんだから許可を得るべきだよな。
けじめとしてさ。恋人に対する。

「・・・」

「黙り込んでちゃ分かんねえぞ」

数時間後、どちらの仕事も終え、連絡を取り合った。

とりあえず俺の部屋に来てもらったんだけど、だんまり。

「お〜い」

「・・・聞いたわ」

「え？ 何を？」

「貴方、この前の作戦で無理をしたらしいわね」

無理って、あれか？ クルスクの時か？

「まあ、俺に出来る事をしたってただだよ」

「・・・それでもよ。トラウマ抱えながら逃げなかったんでしょ？」

「何？ そこまで知ってんの？」

「艦内じゃ有名な話よ。良くも悪くもね」

良くも悪くもっておい。
ってか、何で俺が有名？

「ミナトさん・・・だっけ？ 男性クルーの嫉妬は凄かったわ」

「・・・ああ。納得」

あれね？ 俺個人じゃなくて、ミナトさんの事で俺に注目される訳
ね。

「ま、俺の話は置いていて、お前の話を聞かせてくれ」

「・・・ええ」

かなり深刻だな。

あの猪突猛進のカエデがこんなにしおらしいなんて。

「私、また言われたの。貴方の力が必要だって」

やっぱりエリナ秘書だな。

「うん。それで？」

「復讐したくないのかって。貴方の力があれば復讐が出来るって」

・・・復讐ね。

こいつは全てを奪われた。

その言葉程に胸に響く言葉はないだろう。

「私は復讐がしたい。でも、私にだって分かる。私一人で復讐なん
て出来ないって」

「一人じゃなければ復讐するって事か？」
「当たり前じゃない！ 私は全てを奪われたのよ！」
「復讐をして、お前の家族は帰って来るのか？」
「帰ってこないわよ！ でも！ でも、こうするしかないの！ 他にどうしろって言うのよ！？」

復讐をするな。

その言葉にするのは簡単だ。

でも、カエデの気持ちを考えるとそんな簡単に告げていい言葉ではない。

「復讐をして、お前の心は救われるのか？」

「分かんないわよ！ そんなの分かんない！」

でも、それ以外に私の感情をどこにぶつけなければいいの！？」

「それは・・・」

「・・・ごめんなさい。感情的になったわ」

「・・・いや。いいよ」

憎しみや恨み。

癒える事のない心の傷。

その感情をどこにぶつけなければいい？

どうすれば、救われる？

・・・復讐という思いを抱いた事がない俺には分からなかった。

「・・・それで、お前はどうしよう？」

「復讐はしたい。でも、その実験に参加して復讐が出来るとは思えない」

「・・・そうか」

暴走はしていないみたいだな。

生体ボソソジャンプの実験になんか参加させちゃ駄目だ。
絶対に巻き込まれる。」

「お前の復讐ってのは何なんだ？」

「木星蜥蜴を滅ぼしたい。私に力があれば、そうしている」

木星蜥蜴が人間である。

それを知った時、カエデはどうなるんだろう？

「……でも、現実、そんな事は出来ない。私にはそんな力はない」

嘆くようにそう呟くカエデ。

俺に、彼女の苦しみを取り除いてあげる事は出来ないのだろうか？

俺には……。

「カエデ。俺はお前を救いたい」

「……え？」

救いたい。

苦しみから解放してあげたい。

心の傷を癒してあげたい。

……俺がカエデにしてやれる事は……何だ？

「お前の為に、俺は何が出来る？」

……教えてくれ。

何だって、何だって叶えてやるから。

「何で貴方が私を救うのよ。そんなの変じゃない」

「変じゃない。俺はお前を救いたいんだ」

「意味わかんないわ。貴方が私を救って何の得があるの？」
「得や損なんか関係ない。ただそう思っただけだ」

得や損。そんな考えなんて元々ない。

この全てを失った少女を救ってあげたい。

同情かもしれない。憐れみかもしれない。

どんな感情で自分がそう思ったのか自分にも分からない。
でも、確かな思いだった。

「それなら、貴方が木星蜥蜴を滅ぼしてきてよ」

「・・・それは・・・」

「無理でしょ？ 貴方に私を救う事なんて無理なのよ」

・・・根深かった。

カエデの木星蜥蜴に対する憎悪は俺の予想以上に強かった。

・・・俺にはどうする事も出来ないのだろうか？

「・・・ごめん。自分でも無茶な事を言ってるって分かってるわ。
でも・・・」

ポロポロと涙が溢れる。

「寂しいの！・・・辛いのおお！ 家族も、友達もいない。それを奪ったのは全て木星蜥蜴」

いつもは強気でお転婆なカエデ。

そんな彼女も鎧を外せばこんなにも弱々しい。

・・・とてもか弱い少女なんだ。

「胸が痛い。ぽっかりと穴が開いていて、何をしても埋まらない」

溢れる涙を拭こうともせず、机に置かれた拳を震わせるカエデ。

「返して！ 私の家族を返してよお！」

必死に抑えていた感情が溢れ出したかのような叫び。
家族を失ってからずっと溜め込んでいたんだろ。誰にも聞いてもらえず、誰にも相談できず。
吐露する事なく、必死に押し込んで。

「・・・カエデ」

・・・俺に出来る事は何もない。

どれだけエステバリスをうまく操れようと。

どれだけボソソジャンプが出来ようと。

如何に身体能力が優れていようと。

如何に莫大な知識を持っていようと。

四つの異常を抱えようと・・・一人の人間の心すら救う事は出来ないんだ。

・・・こんな力より、今、カエデの心を救える力が欲しかった。

「コウキイ・・・」

ただ、こんな俺でも・・・。

「・・・」

「グスツ。うううう・・・うわああああん」

・・・こいつの涙を受け止める事だけは出来る。
胸を貸す事は俺にだって出来る。

いや、違うな。ただ・・・それだけしか出来ないんだ。

「・・・今はただ泣いてくれ」

必死に縋りつくカエデをただただ抱き締める。

それしか、俺には出来なくて・・・。

「・・・俺はなんて無力なんだ・・・」

何も出来ない自分が情けなかった・・・。

・・・。。

「・・・」

「・・・」

静かだった。

ひとしきり泣くと部屋は静寂に包まれる。

「・・・」

「・・・」

俯き、縋りつくカエデを無言で抱き締める。

俺にはこれだけしか出来ないけど、せめて伝えたい。

泣きたい時は泣けばいい。胸ぐらい貸してやるからと。

我慢しないでいいから、悲しみをぶつけてくれていいと。

「・・・コウキ」

呟かれる俺の名前。

今、カエデは何を思ってるのだろうか？
少しでも、悲しみを吐き出せたのだろうか？
少しは、楽になって　。

ダンッ！

「ゴフッ！」

・・・え？　ええ！？

「いつまで抱き締めてんのよ！　この、馬鹿！」

み、鳩尾・・・。カッチーン。

「おい！　こら！　何してくれちゃってんの！？　お前！」

「ふんっ。　変な事しないって言ってたくせに！　この、不潔！」

ふ、不潔だと・・・！？

「この野郎。　どうしてくれようか」

「ふんっ。　野郎じゃなくて女よ」

「いちいち訂正してんじゃねえ！」

痛みを堪えて見上げるとどこか得意顔のカエデ。
ない胸張って腰に手なんか当ててやがる。
どこの生意気女だ。　お前は。

「ふんっ。　鳩尾に喰らったぐらいで蹲ってんじゃないわよ」

り、理不尽だあ！

「お前！ いい加減に」
「ふんつ。頼りない胸だったけど気持ちは楽になったわ。ありがとう」
「・・・はあ」

そんな事を言われたら怒るに怒れないし。ずるいな、女は。
ま、ここは寛大に照れ隠しだったと思って許してやるよ。

「ふう。何でかしら？ 貴方といると楽だわ」

「知らないつての。ま、お前のツツコミレベルに付いて来れるのが俺ぐらいなんだろうな」

「私ってツツコミキャラだったの？」

「え？ 自覚なし？」

「ええ。私は普通なもの」

「断固として拒否。お前が普通なら俺は更に普通だ」

「普通より普通って意味わかんないわよ」

「・・・確かに。やるな。カエデ」

「褒められた気がしないわ」

「だって褒めてないもの」

「・・・はあ。変な奴」

溜息を吐かれてしまった。

・・・元気になったみたいだな。

俺でも少しは力になれたって事が。

「カエデ」

「何よ？」

「辛けりゃ辛いって言え。受け止めてやるから」

「・・・コウキ」

「いつまでも溜め込んでんじゃねえよ。時折、きちんと吐き出せ。」

馬鹿

「ば、馬鹿って何よ」

「ってかさ、お前、友達作れよな。いないだろ？」

「はあ！？ いるわよ！」

「はいはい。ムキにならないの。友達がいると楽しいぞ。気持ちも楽になるし」

「ふんつ。充分、間に合ってるわ」

「え？ 間に合ってるって？」

「な、なんでもないわよ！ 別に貴方だけで充分だなんて言っていないわ！」

・・・どうコメントすればいいのか分かりません。

「ま、とにかく、友達をだな。・・・あ」

「何？ 今度は何？」

「・・・俺にも碌な友達がいなかった」

男性陣は俺を目の敵にするし。

友達パイロット勢ぐらいだし。

・・・友達らしき友達なんてそんなにいないじゃん。

うう。癒してくれ。ミナトさん。セレス嬢。

「へえ。貴方も実は友達いないのね」

「う、うるせえ！ 元祖友達なしに言われたくないわ！」

「が、元祖って何よ！ 私にだって友達の一人や二人

「いないんだろ？」

「いるわよ！ ってか、言葉を遮らないで！」

「いや。つい」

「ついじゃないわよおお！」

お。吠えた。

「し、仕方ないわね。私が友達になってあげる」

「はあ？ 何言ってるの？」

「な、何よ？ 嫌なの？」

こいつ、俺の事を馬鹿にしてやがるな。

何を寂しそうな顔してるんだか。

「馬鹿だな。お前」

「な、何がよ？」

勘違い馬鹿。

「とつくに友達だったの。今更だろ」

そうじゃなければ相談になんか乗らないっての。

「え？ 友達？」

「何？ 友達じゃなかったの？ うわあ。傷付いたあ」

「ち、違うわよ。あ、当たり前じゃない。とつくに友達よ」

分かってんならいいけどさ。

「ま、その唯一の友達から」

「唯一じゃないっての！」

「はいはい。お前こそ言葉を遮るな」

「うっ」

「友達からありがたい言葉を贈ってやるっ」

「・・・なんか偉そう」

「はい。そこ黙る。今、いい所」

「はいはい。で？」

「お前の胸にぽっかりと空いた穴は俺が埋めてやる」

「え？」

「それが友達つてもんだ」

「・・・コウキ」

寂しいなら楽しい思いをさせてやる。

辛いなら楽にしてやる。

ボケるならツッコミを入れてやる。

そうやって充実した環境を作ってやるのが友達つてもんだ。

あれ？ 何か一つ変なものが・・・。

「そ、そこまで言うのなら、頼りにしてやるわよ」

「おう。ま、報酬として・・・」

「な、何よ？ 報酬を取るなんて。それでも友達」

「美味しい飯を食わせてくれればいいぜ。いや。お前の和食は病み付きでな」

「ふ、ふんつ。当たり前じゃない。・・・何だ。そんな事か・・・」

「そんな事だと！ お前、和食を馬鹿にしてんのか！？」

「え？ 何で私が責められる？」

「お前の料理はビツクリする程に美味いんだぞ！

報酬として充分じゃねえか！ 甘く見んじゃねえ！」

「ねえ？ 私つて褒められてるの？ 貶されてるの？」

「さあな」

「さあなつて何よ！？ つてか、褒めるならちゃんと褒めなさいよ！」

「知らん！」

「知れえええい！」

やっぱりこづじゃなくちゃな。こいつは。

「ま、とにかく、何だ。ガツンと断ってやれ」

「ええ。そのつもりよ」

ほっ。一安心。

「ねえ」

「ん？ 何だ？」

「どうしてそんなに否定的なの？ どんな実験が知ってるの？」

「・・・む」

困った。どうするか？

「ネルガルに利用されたくないとかさ。妙なよね」

有耶無耶にして誤魔化すか。

「ほお。意外と考えてるんだな」

「貴方、私の事、嘗めてんの？」

「あん？ 舐めて欲しいのか？」

「違う！」

「俺はこう見えてもかなりの有名人だぞ。多分」

「多分って・・・。自信ないなら言わなつきゃいいのに」

「そんな俺は色々と裏の業界を知ってるんだよ」

「へえ。そうなの」

「ええ。そうなのよ。分かって頂けたかしら？ カエデさん」

「キモいわ」

「容赦ないね。お前」

ツッコミが心に突き刺さるよ。
言葉の暴力って怖いよね。

「それで？ ネルガルは信用できないって事？」

「ネルガル全体って訳じゃないけどね。企業は裏で色んな事をしてる訳よ」

「なんか怖いわね」

「そうそう。犯罪ギリギリだったり、モロ犯罪をしてる会社もある訳」

「それじゃあネルガルもそうって事？」

「ま、そんな所。別に力エデがどんな実験を受けるかは知らないけど、ほら、心配だから」

「・・・そっか。心配してくれてるんだ」

「あん？」

「な、何でもないわ」

「ま、とにかく、碌な説明もしないで参加して欲しいとか言ってる内は信用できないって事」

「・・・そうね。ま、大丈夫よ。受けないから」

「ふむふむ。安心したら、腹減ったな。何か作れ」

「作ってください、でしょ？」

「作れ」

「偉そうに言うのはやめなさい」

「ふむ。作りたまえ」

「もっと悪いわ！」

ひとまず、安心って所かな。

いや。良かった、良かった。

あ。ご飯は美味しく頂きました。

それからは無駄話ばかり。

ま、楽しい時間でしたよ。

「連合軍提督ミスマル・コウイチロウである。久しぶりだね。アキト君」

「お久しぶりです。提督」

特に問題なく無事に戦闘を終えたナデシコ。

戦闘後、アキトさんは連合軍からの呼び出しにナデシコ代表として連合艦隊へとやってきた。

ま、実際はナデシコ代表でもないし、呼び出しを喰らった訳でもないんだけどね。

付き添いは俺だけ。いやあ。発表用の資料とか久しぶりに作ったよ。

「ブリーフィングルームに私達に賛同してくれた将校達が集まってくれている」

「分かりました。顔合わせとしましょう」

「そちらの青年は？」

あ。俺ですか。場違いですよね。分かります。

「彼の名前はマエヤマ・コウキ。機体のOSの開発を依頼していました」

「おお。あの有名な天才プログラマーの」

「ええ。ある程度OSの開発が進んだようですので、説明をしてもらおうかと思っていました」

「そうか。約束していた生産ラインはある程度確保できた。後で詳しく話そう」

「はい。分かりました」

・・・俺の知らない間にかなり話が進んでいたようだ。
アキトさんの行動力って凄まじい？

「こちらだ」

カイゼル提督に案内されて、ブリーフィングルームに辿り着く。
うわ。何か、緊張してきた。

「行こうか」

「はい」

扉が開く。

ギロツと視線がこちらを向く。

多分、俺の勘違いで普通に振り向いただけだと思うけど・・・。
こ、怖え・・・。

「久しぶりじゃのう」

「あ。フクベ提督。お久しぶりです」

「もう提督ではないんじゃないが」

「いえいえ。僕の中ではずっと提督ですよ」

「そうか」

隣席がフクベ提督でした。

それだけで、大分気持ちが楽になった。
知り合いが隣とか安心できるよね。

「それでは、会談を始めよう」

カイゼル派の会談。

徹底抗戦を訴える鷹派でも、戦争に消極的な鳩派でもなく、平和的解決を掲げるカイゼル派。

幸せな未来を得る為には絶対に必要な派閥である。

「まず、始めに彼らを紹介する。

ナデシコのリーダーパイロットであり、

この派閥に多大な貢献をしてきているテンカワ・アキト君だ」

「ご挨拶に上がりましたテンカワ・アキトです」

「ほお。彼がそうか」

「若いのにたいしたものだ」

「派閥の立ち上げに貢献したと聞いた」

そつなくこなすね、アキトさん。

その勇気を俺に分けて欲しいよ。

「それで、こちらはマエヤマ・コウキ君。我々に足りない新規のOSを組み立ててくれている」

「え、マエヤマ・コウキです」

「噂の天才プログラマーか」

「我々に足りないのはIFSに代わる制御機構」

「彼ならばIFSに代わる制御機構を開発できるという訳か」

き、緊張した。

立つだけで緊張とか、ありあえないでしょ。

「今日の議題は・・・」

それから、長い間、派閥の方針とか、今後の事とかを話していた。

俺にはちょっと分からない事ばかりで混乱したけど、分かった事も何個がある。

政権交代が必要な事。連合軍、連合政府共に意識改革が必要な事。軍というものを見直す必要がある事などなど。

カイゼル派がやる事は非常に多く、大変そうなものばかりだった。

「それでは、マエヤマ君、説明を」

「はい」

そして、最後に俺のOSの説明。

「私が開発したのは複合アクションシステム。略してCASです」

資料をモニターに映しながらの説明。

一応、紙媒体で全員分資料は配布してあるから詳しい事は説明しなくていいと思う。

とりあえず、目的と大まかな機能だけ説明すればいいよな。

「CASの目的はIFSを必要とせず、同等の機動を可能とする事にあります」

IFSの代わりという前提のもとに作られている。

「まず、IFSとCASの違いについて説明します。IFSとはイメージ・フィードバック・システム。

要するに人のイメージした通りに機体を動かすものです」

ナノマシンによって補助脳を作り、人間自体を一つの端末、インターフェースとして用いる。

想像通りに動くという一見、凄いシステムだが、もちろん、欠点は

ある。

「しかし、想像力というものは人によって差があり、明確にイメージするには己の身体にその動きを覚えさせる必要があります」

いきなり己の格闘シーンを想像してみると言われても普通は出来ない。

多くの修練を積んだ武芸者が瞑想という形で勝利をイメージし、その過程で戦闘シーンを思い浮かべる事はある。

I F Sとはそれぐらいのイメージがなければきちんとした形で反映されないのだ。

それはイメージの具体性に依存しているからである。

「地球ではI F Sがあまり普及されておらず、慣れていないばかりか、忌避している感があります。

たとえI F Sを全兵士に普及させても実戦投入するまでに時間が掛かるでしょう」

火星の人間は日常からI F Sを利用していた。

その為、扱いに慣れているのだ。

アキト青年がいきなりエステバリスを操縦できたのもこの点が大きい。

もし、あの時、アキト青年ではなく、地球の民間人であれば、動く事すら俣ならなかったであろう。

「以上の点から連合軍にI F Sは合わないという事が分かります。

そこで、それらを考慮して開発したのが複合アクションシステム略称C A Sです」

もつと早くIFSに慣れさせておけば、充分に対応できたのにな。だってさ、何だかんだ言って操縦にIFS以上に便利なものってないし。

コンソールに手を置いて、イメージするだけで操縦できちゃうんだよ？

ま、混乱したり、錯乱したら、その動きも反映されちゃうけど。

他の操縦機構ならレバーを引いたり、ボタンを押すだけで銃を撃てるけど、

IFSは明確に撃つというイメージがないと撃てないからね。

完全に精神に依存しちゃう訳。だから、トラウマがあったりするとどうしても撃てない。

・・・恥ずかしながら、僕の事なんですけどね。

「CASは基本の動きをあらかじめ登録し、その後、各パイロットで調整していく形になっています」

基本形はヒカルの動きを参考にしてる。

本当に癖がなくて扱いやすかった。

「調整にはトレースアクションシステムを利用します。」

これはパイロットの身体にセンサを取り付ける事で動きを解析し、登録するシステムです」

簡単なボックスみたいなのを用意したから、その中でセンサを付けて実際に動いてもらう。

そうすれば、勝手に解析して登録してくれるから、後はそれを組み合わせてくれればいい訳だ。

ボックスはウリバタケさんに協力してもらいました。

簡単だから、これを参考に連合軍の方で大量生産してください。

あ。これも資料に書かれてるから説明はしません。

「しかし、誰もが自分で調整できるとは限りません。違う方に代わってやってもらうのもいいかもしれませんが、それではトレースアクションシステムの意味がありません」

トレースアクションシステムの利点は自らの動きを機体にさせる事が出来るという事である。

IFSのように自らの身体の動きで機体を動かせるから、トレースアクションシステムの意味があるのだ。

そうでなければ、自らの動きを機体に反映させるトレースアクションシステムの意味がない。

「そこで基本形から発展させた四つのパターン。

近接格闘モード、後方支援モード、指示調節モード、機動攪乱モード。

それら四つのモードをサンプルとして配布します」

ガイヤスバル嬢の動きを参考にして、出来るだけ癖をなくして汎用性を高めたのが近接格闘モード。

イズミさんや俺、そこに軍の射撃フォームなどを参考にして瞬時に高火力を引き出せ、

なおかつ精密射撃が出来るようにした後方支援モード。

ヒカルやアカツキ、そこにジュン君の指揮官としての動きや軍の戦術指導を参考にして、

指揮官用として中距離を担当する指示調整モード。

アキトさんを参考にしして、エースパイロットぐらいにしか扱えない急旋回、急加速、急停止など、

癖のある機動を行う機動攪乱モード。

以上の四つだ。

色々と検討して、多少劣化したが、ある程度は扱えるようにしてあ

る。機動攪乱重視以外は。機動攪乱重視は本当にエースパイロットぐらいにしか無理だと思う。つてか、軽く意識が飛ぶ。

「トレースアクションシステムでカスタマイズできない方はこれらの四つのパターンから選択して、

決められたパターン内で戦闘を行ってもらいます」

欠点としてはカスタマイズできない事。ま、それでも十分な性能になると思う。

嫌な人はトレースアクションシステムを利用して、酷似した動きまでカスタマイズした上で更にカスタマイズして欲しい。

「これらは十分な戦闘経験を持つパイロットの動きを参考にしたものです。

その事からリアルアクションシステムと名付けました」

リアル。実際に戦闘を経験した者からの動きだからこそ現実的な動きが出来るだろうという事。

「基本形をカスタマイズした独自のパターンに四つのパターンを組み合わせて、

五つのパターンを常に変更可能としました」

自分のパターンでは状況に適合しないとすれば、あらかじめ設定されていたリアルアクションシステムのパターンに変更して戦えばいい。

「なお、独自パターンは初期設定に戻せるようになっていきますので、

再調整は容易に可能です」

気に入らなければ全て無にしてからやり直せばいい。
これは俺の価値観から生まれたもの。

間違った所を見つけては直すという作業を繰り返すよりは、
最初からやり直してしまった方がいいんじゃないかという俺の考え
方。

もしかして、俺ってズレてる？

「トレースアクションシステムとリアルアクションシステムを組み
合わせ作り上げた為、

複合アクションシステム、CASと名付けさせて頂きました。以
上で説明を終わりとします」

後はお手元の資料で確認してくださいって感じ。

「質疑応答に移ります」

それから、様々な質問をされた。

うまく答えられたと思うけど、ちょっと心配。

でも、誰もが率先して手を挙げてたって事はそれ程に派閥としての
活動に積極的という事だろう。

それに、自分が開発したシステムに興味を持ってくれたのなら嬉し
い限りだと思う。

こうして、俺の発表を最後に会談は終了した。

会談終了後、しばらくして、俺は意外な展開を迎える事になる。
うん。本当に予想外だった。

第二十六話（後書き）

第一部完了ですね。

第三部はちよつちオリジナル展開になりそうです。

カエデに対する場面が少ないのに説得を完了としてしまった。
・・・どうしようかな。今後の展開・・・って感じですよ。

第二十七話(前書き)

今回は短いです。

第二十七話

「えつとお、出向・・・ですか？」

「ええ。連合軍から要望されましてですね。はい」

今日も流れに流れる日々。

ま、また、戦闘ですか！？ の日々に罅が入った。

・・・あ。偶然にも寒い事に・・・。

「後日、正式にナデシコは軍に徴兵されます。」

元々はネルガル出向の軍属扱いだったのですが・・・」

軍属扱いから軍扱いにされる訳ね。

ま、原作知ってるから特に驚きはない。

「マエヤマさんには先行徴兵という形で軍に行ってもらった事になったのです」

「ええつと、これですか？」

首元に手を持ってきて、横に引く。

「いえいえ。ネルガルの意向ではなく、連合軍の意向です」

クビではないらしい。

「何故か聞いても？」

「いえ。理由は聞いておりません。ただ技術士官として迎え入れた

いと」

「・・・技術士官？」

ええっと、もしかして、あれの事か？ CAS。
導入してみたけど開発者がいた方が便利だから来いのな。

「ええっと、いつからいつまでですか」

「返事の連絡次第で向こう側から迎えが来るそうです。終わりは見
当が付かないとか」

実戦配備できるまでといった所かな？

ええっと、それまで、ナデシコとはお別れ？

うーん、ミナトさんやセレス嬢と一緒にいたいんだけどな。

「えっと、断つたりは出来ますか？」

「構いませんが、是非と言われている現状、私共と致しましては拒
否したくないと・・・」

うがぁ。

どうしろと？

「それと補佐役を一人任命してナデシコから連れて来ていいとおっ
しゃっていました」

補佐役？

正直な話、俺の仕事って調整だよな？

補佐役って必要なのかなぁ。

つてか、そもそもシステムは完成してるんだから、後はパイロット
次第でしょ？

俺なんか役に立つんかねえ。

「とにかく三日以内まで返事が欲しいと」

「分かりました。考えてみます。ありがとございました。プロスさん」

「いえ。それでは・・・」

・・・どうしようかな？

そりゃあ、計画通り進めたいなら俺は出向するべきなんだろうけど・・・。

「置いてけないっしょ」

恋人のミナトさんは勿論の事、妹分？ 娘分？ のセレス嬢も放っておけない。

それに、まだネルガルが何を企んでるか分からないし、カエデも置いていけない。

・・・やっぱり、断るかな。

「どっちにしても要相談だな」

「という訳で集まってもらったのですが」

いつもの定例会議のお時間です。

「ああ。ミスマル提督から話は聞いていた。最終調整という形でコウキを預けて欲しいらしい」

「最終調整ですか。所でもう機体は出来てるんですか？」

「そういえば、言ってなかったか。連合軍はエステバリスの有効性を認めてな。」

俺達がない八ヶ月の間に大量に購入していたらしい」

あ。既に機体はあるって事か。

じゃあ、あれか、IFSが嫌で埃を被らせていたって訳？
うわっ。なんて愚かな。

「そのエステバリスには既にコウキの開発したOSを搭載してある」
「大量と言っても、カイゼル派にしてみれば少数でしょ？ 配備するのに足りるんですか？」

「どの方面軍でもエステバリスは買ったものの持て余していたらしくてな。」

だから、廃品処理のような形で大量に安価で引き取る事に成功したんだそうだ」

「・・・なんか詐欺ですね。それ」
「まあな」

そう苦笑するアキトさん。

既に配備できる事が分かってるのに廃品扱いですか。
カイゼル派も黒いなあ。

まあ、権力を上げる為には仕方ないんだろうけど。

「俺は行かないとまずいですかね？」

「・・・俺としては行って貰いたいんだがな」

・・・む。

俺としては残りたいんだが・・・。

「無論、強制するつもりはない」

強制するつもりはない。

そう言われても状況的に断りづらいだろ。

「……………」

……悩む。

「コウキ君は私とかカエデちゃんの事とか考えてるの？」

「え？」

唐突にミナトさんが訊いて来る。

「私を放っておけないとか、カエデちゃんを放っておけないとか、
そう思ってるのかなって」

「……ええ。正直に言えば、俺が離れたくないっていうのもあり
ますが」

「……ふう。ここまで愛されて嬉しいんだけど、良いことなのか、
悪い事なのか」

「ええっと？ それはどいう……」

「行きなさい。コウキ君」

「え？」

行けつて。

それは、離れても平気って事か？

「傍にいない方が良いですか？」

「そんな事は言っていないわ」

「え？」

もう、何を言ってるか分かりませんよ。

「何を焦ってるのよ。コウキ君。深呼吸、深呼吸」

「スーハー スーハー」

焦るな。落ち着け。

きつと何か違う意味があるんだ。

「私がセレスちゃんもカエデちゃんも見てるから行って来なさい」

「何故、ミナトさんはそれを推奨するんですか？」

「私達の存在でやるべき事を見失わないで。」

やるべき事がハツキリしてるのに私達のせいで行動に移せないのは駄目よ」

「……」

「私としては嬉しいんだけど、女の為に道を見失うのは男として情けないでしょ？」

「……そんな事を言われたら断れないじゃないですか」

引き止めて欲しかったという気持ちがあった。

でも、それを本人から否定されちゃうんだもんなあ。

あれか？ ミナトさんからしても、自分のせいで行動できないっていうのが嫌なのか？

「……分かりました。行ってきます」

「ええ。行ってらっしゃい」

こうして、俺は皆に先駆けて軍へと出向する事になった。

カエデとセレス嬢にこの事を話した時、一悶着あった事は言うまでもないだろう。

「よく来てくれたね。マエヤマ君」

「いえ。マエヤマ・コウキ特務中尉、着任しました」

士官学校を卒業した訳じゃないけど、無理矢理捻じ込んだらしい。いいのか？ それで？ まあ、俺としては助かるけどさ。

「最終調整という項目で来てもらった訳だが、その他にもパイロットへの指導を御願いしたい」

「ええ。分かっています」

製作者だし、実戦経験者だし、そうなるとは思ってた。

「補佐役は連れて来ていないのかね？」

「とりあえずは大丈夫なので。必要でしたらナデシコから呼びます」

「そうか。了解した」

ミスマル提督。

カイゼル派のトップにして、うちの艦長の父親。

ずっと親馬鹿なイメージしかなかったけど、こうしてみると威厳のある立派な軍人だ。

親馬鹿な一面はまったく感じられない。

「それでは、こちらから副官を付けよう」

「えっと、それは補佐役がないからですか？」

「いや。もともと付けるつもりだった。軍の施設の案内もあるので。入ってくれ」

カイゼル提督に促されて入ってくるのは紫のロングヘアの女性。

ん？ どこかで見た覚えが・・・。

「イツキ・カザマ少尉です。よろしく御願います」

イツキ・カザマ。

・・・名前を聞いても思い出せないな。
でも、微かに見覚えがある。

「マエヤマ・コウキ特務中尉です。こちらこそ、よろしく御願います」

どこで見たのかな？

「彼女は後日、ナデシコが正式に徴兵される際にパイロットとして
出向する事になっている」

・・・ナデシコ新パイロット・・・。

「ナデシコのパイロットに劣らないぐらいに鍛えてあげて欲しい。
彼女はIFS持ちだが、CASで操縦してもらっ事になっている」
「よろしく御願います。マエヤマ特務中尉」

・・・ああ！ 思い出した。

あれか。確か、ナデシコに来てすぐにジンのボソソジャンプに巻き
込まれて死んでしまった人。

ああ、ああ。思い出したよ。なるほど。彼女か。

「こちらこそ」

「では、さっそく、調整作業に入って欲しい。カザマ君。案内を」
「ハッ！」

おお。生敬礼。

艦長と副長のはどこか緊張感が足りなかったから、あんまりグツとこなかったけど、今回はグツときた。俺も敬礼の方法とか学ぶべきなんだろうな。普通。

「失礼致します」

「失礼します」

イツキ？だっけか、彼女と共に部屋から退室する。

「えっと、カザマ少尉」

「イツキで構いませんよ」

「あ、それじゃあ、僕もコウキで構いません」

「分かりました。コウキさんと呼ばせて頂きます」

やっぱりちょっと固いね。

軍人って感じがするよ。

「CASの扱いにはもう慣れましたか？」

「そうですね。IFSと平行して行っているのですが、IFSと同等の性能を発揮してくれます」

ほっ。それを聞いて安心した。

「自らカスタマイズを？」

「いえ。私は指示調整モードで訓練を行っています。

私はどちらかというとフォロー役の方が向いてますので」

へえ。イツキさんは指示調整か。

俺が使うとしたら後方支援重視かな。

一応、機動攪乱重視も使えない事もないけど。

「使いやすいですかね？」

「ええ。IFSを使わずともあれだけの性能が出せれば士気も上がるでしょう」

そっか。今までは散々負けてたらしいしね。
勝てると思えば、士気もあがるか。

「いや。製作者としてはそのような感想が頂けて嬉しいですね」

「正直、助かっています。これを機に戦況を立て直せればと」

イツキさんも戦争を憂う人か。

ここににいるという事はカイゼル派の人間なのかな？

「ナデシコのパイロットはどれ程の腕前なのですか？」

ナデシコのパイロットね。

・・・個性溢れすぎたパイロット達かな。

「CASの動きは全部彼らの動きを参考にしていますからね。

汎用性を高める為にちょっと劣化させてるから、

それぞれの機動のワンランク上ぐらいをイメージしてもらえれば」

「あれのワンランク上ですか・・・。凄まじいんですね」

「ま、腕は凄いですよ。ナデシコのパイロットは」

腕は、ね。

「イツキさん。ナデシコに出向するんですかね？」

「はい。正確にはマエヤマさんの代わりにパイロットとして出向く形です」

「え？ 俺の代わりですか？」

「名目上はそうですね。実際は軍とナデシコとの連絡係です」

「その軍というのは？」

「はい。お考えの通りです。」

ミスマル提督を代表とした派閥とナデシコ内にいる賛同者との橋渡し役ですね」

なるほどね。今までも連絡は取れてたけど、これでしっかりとしたパイプが出来た訳だ。

あれ？ でも、軍人いるよな？

「ムネタケ提督とはどうなります？」

「あの方はこちらの派閥に属していませんので、連絡を取るつもりもありません。」

軍といっても別個の存在であると認識してください」

「分かりました。それでは、彼の指揮下に入る訳ではないのですかね？」

「はい。あくまで私は提督の副官ではなく、パイロットとして出向するので」

そっか。それならいい。キノコ提督の副官とか息が詰まりそうだし。

「こちらがシミュレーション室になります。さっそく調整業務をお願いします」

到着後、パイロット達と挨拶をして、さっそく仕事に入った。

まずはパイロット達の対木星蜥蜴シミュレーションを見て、ソフトに異常がないかの確認。

念入りに何度も試験したから問題はない筈。

・・・と思っていたら幾つか欠陥を発見して焦りました。即行で直したので、バテてないでしょう。きっと。

その後、俺もシミュレーションに参加。CASの製作者として恥ない戦いが出来た。

所詮は製作者と舐められてたらしく、カチンと来てやってしまった。反省はしてる。だが、後悔はしてない。

俺のシューティングアクションゲームの経験値を舐めるなつての。しかも、どこことなく俺がやりやすいように作ってあるんだぜ。負けないよ。

んで、ちゃっかり自分用にカスタマイズしたパターンで蹴散らしてあげました。

あれは快感だったな。バンバンと撃てば墜ちる。もう一度やりたいと強く思った。

クルスク後に徹底的にアキトさんに苛められてトラウマも発症しなくなってきたし。

俺自身の戦闘経験はあんまりないけど、最強のパイロットと言っても過言ではないアキトさんと毎日のように訓練したんだ。

俺もそれなりに強い。まだまだ不慣れな連中には負けませぬよ。

徹底的に打ちのめしてやったら教官呼ばわりされた。教官・・・甘美な響きだ。

そついう経緯で、俺の仕事は調整業務と教官という事になつちまつた。

まずはイツキさん。彼女はナデシコに出向するのでそれなりの腕が必要になる。

今でもそれなりだけど、ナデシコでは少し見劣りしてしまうだろう。彼女がナデシコに合流する前に出来るだけの事はしてみようと思う。その他のパイロットはここでの研修期間を終えたら、

その後は各地の基地に配属されエステバリスで戦うらしい。

少しでも戦死の確率を減らせるように徹底的に苛め、「ホン、鍛えてあげようと思う。」
それぐらいしか俺には出来ないしな。

「ミスマル提督」

「うむ。なんだね？」

基地内での行動にも慣れ、軍服もそれなりに着こなせるようになってきた今日。

ミスマル提督に確認しなければならぬ事に気付いた。

「CASの事ですが、まだ正式には配備されていないんですよ」

「うむ。正式にはまだとなっている」

「そのの製作者名とかどうなってます？」

「無論、君の名前を書いてあるが？」

「そこなんです、技術士官達の共同開発にしておいてくれませんか？」

「何故だね？」

そりゃあ、僕の最終目的が平穩人生ですから。

今まで敗戦続きだった連合軍を立て直すきっかけとなったOSを作り上げた。

なんて事が知られたら、俺の命が危ない。

嫌だぞ？ 常に狙われる人生なんて。まったく平穩じゃない。

「私は名譽なんていりません。」

それに、将来はどこかで教師でもやってみようかなと考えています」

「なっ！？ それだけの能力をもってして教師かね？」

「私は戦争が終了したら即刻軍を辞めて、新しい人生を始めるつもりですから。」

軍のOSを作ったなんて情報は百害あって一利なしです」

「むう。私としては軍に残り、技術士官として働いて欲しいのだが」
「残念ですが、こればかりは譲れません。お誘い頂き光栄なのですが」

「いや。君の言う事は最もだ。分かった。手配しておこう」

「ありがとうございます」

いや。良かった。良かった。

軍に残るだなんて事は絶対にはないです。

「して、調子はどうかね？」

「ええ。順調です。誰もが訓練に集中していますし。」

きちんと成果を残すパイロットになってくれますよ」

「そうかね。それは安心したよ」

ハッキリ言って、頑張り過ぎです。皆さん。

俺が帰ってから居残りで訓練してたり。

今はまだ大丈夫だけど、このままじゃ製作者としての尊厳が……。

「三日後にイツキ君はナデシコに合流する事になっている」

「そうですね。私はいつ頃に復帰になりそうですね？」

「すまないが、まだ当分は無理そうだ」

「・・・そうですね」

まだ帰れないか。

毎日のように連絡入れてるけど、やっぱり寂しいものは寂しいな。

ああ。ミナトさんが誰かに色目使われてないか心配だ。

ああ。セレス嬢が寂しい思いをしてないか心配だ。

ああ。カエデがネルガルに何かされてないか心配だ。

・・・うん。ここは・・・。

「厚かましいとは思いますが、お願いがあります」

「三日後、イツキ君と共に合流したいのかね？」

「いえ。私は私の役目をしっかりとこなしてからナデシコに戻るつもりです」

仕事放棄して戻ったら怒られちゃうじゃん。

「それは心強いな。それで、お願いとは？」

「イツキ少尉の付き添いとして、ナデシコの様子を見てきたいのです」

「なるほど。それならば許可しよう。但し、数日のみだぞ」

「了解しました。感謝します」

おし。これでナデシコの状況を確認できる。

ああ。ちょっとした期間留守にただけで、浦島太郎のような気分だよ。

「ナデシコと合流する事でイツキ君が副官から外れる訳だが、どうするかね？」

「どうするとは？」

「またこちらから副官を用意してもいいし、君がナデシコから副官を招いてもいい。」

副官には少尉の階級を用意しよう」

ええっと、随分と優遇してくれているな。

「良いのですか？」

「何。君が開発してくれたOSの手柄に比べたら、微々たるものだ。あの功績ならば君にはもっと高い階級を与えていてもおかしくない」

「あ。でも、遠慮します。開発者じゃなくなった訳ですし」

「本当に君は変わった男だ。誰もが求める名誉を自ら破棄するなどと。」

君は英雄と言っても過言ではないのだぞ」

ハハハ。大袈裟です。カイゼル提督。

たかがOSを製作した程度で英雄なんて。

「英雄はなるべき者がなるものです。私みたいな平凡な人間には荷が重い」

「・・・そうか。どちらにしろ、君には副官を付ける。

ナデシコから戻ってくる際には誰か一人連れて来て欲しい」

副官ねえ？

誰か付いてきてくれるかな？

でもなあ、皆、ナデシコを愛しちゃってるし。

離れたくないか思ってるんじゃないかな？

「もし、私が誰も連れてこなかったら？」

「その時はこちらが副官を用意しよう」

「分かりました。それでは、失礼します」

一礼して、部屋から去る。

ふむ。副官ね。どうするか？

「どうしました？ コウキさん」

「あ。イツキさん。お疲れ様です」

「お疲れ様です」

部屋から出ると丁度イツキさんがいた。

ふむ。報告しておこうかな。

「イツキさんは三日後にナデシコと合流だそうで」

「ええ。今までお世話になりました」

教官というにはお粗末過ぎだけど、最初の教え子といえばイツキさん。

きつと、今ならナデシコでもやっていけるだろう。

「三日後、イツキさんの付き添いという形でナデシコに付いて行く事になりました」

「え？ コウキさんも合流ですか？」

「いえ。あくまで付き添いですよ。数日滞在したら帰ります」

「そうでしたか。分かりました」

ニツコリと笑ってくれるイツキさん。

いや。割と仲良くなれたかな。

そりゃあ、ずっと副官としてお世話になりましたからね。

それでも、仲良くなれなければ、俺とイツキさんの相性が悪いか、俺の性格が悪いかだな。

イツキさんの性格は好感が持てるし。

「ナデシコとはどういう所でしょうか？」

ナデシコはどんな所かだつて？
そんなの決まってるじゃん。

「ドタバタコメディな場所ですね」

「え？ え？」

ちよつと分かりづらかつたかな？

「皆個人的でしてね。毎日、色んな事があつて退屈しません」

「ええつと、軍艦ですよね？」

「イツキさん。あそこは一般的な軍艦とは対極な場所です。」

固定概念は捨て去つた方がいいですね。本当に

「……………」

固まっちゃつた。

ま、イツキさんは良くも悪くも軍人だからな。

ナデシコの空気に慣れるまで時間がかかりそうだ。

「ナデシコのクルーは能力が一流なら性格は問わないという前提で
集められています。」

いや。もう、本当に個人的過ぎる変人達が集まっていますから」

「…………私、やってけるでしょうか？」

不安そうな顔してる。

脅かしすぎたかな？

ま、嘘は言っていない。

「個人的ですが皆良い人ですからね。慣れればやっていけるかと」
「…………慣れられそうにないです」

ま、頑張れ。

としか俺には言えない。

「それでは、俺は格納庫に行きますので、何かありましたら連絡下さい」

「あ、はい。分かりました」

シミュレーションでの調整を終えたから、その結果を実機にも反映させないといけない。

俺にもやる事は色々あるのだ。

さて、今日も頑張りますか。

第二十七話（後書き）

色々と行き詰った結果、こんなにも短く、かつ、遅くなりました。大変申し訳ないです。

第三部、連合軍暗躍編。

ナデシコが蚊帳の外になってしまいかねない。

まあ、また、ナデシコに合流するので、それまでの準備期間ですね。ご了承下さい。

第二十八話

SIDE MINATO

「・・・はあ」

おっと、いけない、いけない。

こっちから発破掛けといて溜息吐くなんておかしいわよね。

「・・・ミナトさん」

「ん？ 何かな？ セレスちゃん」

「・・・コウキさんは今頃、どうしてるんでしょうか？」

コウキ君がナデシコを去ってから、セレスちゃんはずっとこんな感じ。

コウキ君の代わりにセレスちゃんの面倒は私が見てるんだけど、いっつも話題はコウキ君の事。

愛されるなあ、コウキ君と思うと同時に、セレスちゃんには申し訳ない事をしたかなあとも思う。

でも、多分、こうするのがベストだったんだ。私にもコウキ君にも。

「そうね。元気にやってると思うわ」

「・・・コウキさんがいなくなってから随分と経ちました。・・・寂しいです」

コウキ君と離れ、コウキ君が何をしてきたかがよく分かった。眼の前のセレスちゃんもそうだし、何だかんだでブリッジも落ち着かない。

整備班の人達も追いかけてこの相手がいなくて寂しそうだし、カエデちゃんなんて……。

「……はあ」

……目に見えて沈んでる。

うーん。カエデちゃんはコウキ君の事をどう想ってるんだろう？

表情に出やすいからなんとなくは分かるんだけど、意地っ張りだからなあ。

素直に認めてくれなそう。

「今頃どうしてるかねえ。あいつ」

「コウキは元気にやってるよ。きつと」

「大丈夫だろう。あいつならすぐに慣れるさ」

「おお。去っていく仲間。見送る主人公。去った友は頼もしくなつて帰ってくる」

「典型的な展開だね。僕はやだかな。そういう展開」

「何だよお。いいじゃねえか」

パイロット勢も話題はコウキ君。

彼、意外と慕われてるのね。

「……戻りましょうか」

「……はい」

ブリッジに戻る。

自分の席に座るんだけど……。

「どうしても空席が気になっちゃったよね」

いつもなら隣にはコウキ君がいる。

でも、今は空席。どこか違和感があって、やっぱり集中できない。

「……………」

セレスちゃんは寂しい時、コウキ君の席に座る。

何を思い、どういう気持ちで座ってるんだろう？

やっぱり、あの膝の上に座っている時の事でも思い出してるのかな？

「皆さん。お集まりのようですね」

ん？ 何かしら？

「後数日で我々ナデシコはヨコスカベイに入港となります」

ああ。そんな事も言ってたわね。

「入港次第、休暇と致しますので、せつかくのクリスマスシーズンです。お楽しみ下さい」

・・・あ。クリスマスっていう大事なイベントがあったじゃない。

・・・今年は一人かあ。セレスちゃんと祝おうかな。

「以上です」

去っていくプロスさん。忙しそうそうね。

「・・・ミナトさん。クリスマスって何ですか？」

そっか。昨年は色々とゴタゴタしてたから、それらしい事はしてないのか。

それじゃあ、今回がセレスちゃんにとって初めてのクリスマスって事ね。

「サンタクロースっていう優しい御爺ちゃんがいてね。

その御爺ちゃんが一年間良い子だった子供にプレゼントをくれる日の事よ」

「・・・サンタクロース？ プレゼント？」

「そうよ。セレスちゃんは良い子だった？」

「・・・分かりません。でも、楽しい一年間でした」

そっか。それなら、良かったわ。

「それじゃあきつとプレゼントがもらえるわね」

「・・・本当ですか？」

「ええ。本当よ」

「・・・嬉しいです」

ヨコスカに着いたらプレゼントを買いに行かなくちゃ。

セレスちゃんと一緒に買いに行くのもいいけど、サンタさんにならなくちゃね。

枕元に置いておけるかしら？ それとも、泊まりに来てもらう？
うん。そうしましょう。

それから、数日経って、ヨコスカベイ入港の日となった。

「あら？ あれは……」

モニターに映るナデシコ歓迎の文字。

ええっと、歓迎されてるの？

「……ミナトさん」

「ルリちゃん？」

ルリちゃんが近付いてきて耳打ちする。

「以前はナデシコ反対というデモ活動でした」

「それじゃあ……」

「はい。火星民の救出がナデシコの好感度を上げてくれたようですね」

嬉しそうに微笑むルリちゃん。

そうだね。自分達がやってきた事が認められたようなものだもの。きつとアキト君も喜んでるでしょう。火星の民を救えて良かったって。

「それでは、入港します」

艦長の言葉を合図に、入港シークエンスに入る。

こつこつ細かい動作は私の担当。

パツと成功させちゃいましょう。

クリスマスだし、という理由で、進められていたクリスマスパーティーの準備。

久しぶりに大イベントに誰もが胸を躍らせながら準備をしていたんだけれど……。

「すいませんが、皆さん、格納庫の方へ集まっていただけですか？」

突然の召集命令。何だろう？　と思いつつも格納庫へ向かった。格納庫へ付くとクルーの大半が集まっていて、しばらくすると全員が揃う。

そして、提督が前に出て来て……。

「ナデシコは正式に徴兵される事になったわ」

……と告げた。当然、皆驚くわよね。

軍人になるなんて予想外だったもの。今までは軍属扱いだし。

「ええ！？　どういう意味ですか!？」

「そのままの意味よ。今までは軍属という形で出向扱いだったでしょ？」

「そんなんじゃないよ。信用できないのよ。だから、正式に軍が徴兵するのよでも、それって……」

「ええ。軍に入るって事。貴方達は軍人になれるって事よ」

「そ、そんな!？　私達は軍に入る為にナデシコに……」

「あら？　別に降りたければ降りていいわよ。」

むしろ、全員降りてくれちゃった方がスッキリしていいわ」

その発言にクルー全員が眉を顰める。
ナデシコは私達の家なんだから当然よね。
提督の物じゃないの。

「み、皆さん。落ち着いてください。提督。変な事を言わないで下さい」

「あら？ 別に変な事は言ってないわよ。私は思ったままを言っただけだもの」

「はぁ……。ええ、皆さん。正式に徴兵される以上、私達は軍人となつてしまいます」

軍人……。か。

コウキ君から話は聞いてたけど、実感が沸かないわ。
軍人になるつてのがどういう事が分かつてないし。

「もちろん、今回を機に降りたいという方もいらっしゃるでしょう。

その方は私までご連絡下さい」

「そうなたら契約とかはどうなるんですか？」

「私共の契約違反という形になりますので心配ありません。

もちろん、退職金と合わせて違約金も払わせて頂きます」

破格の待遇。退職金も支払われ、更には違約金も支払われる。

「おい。どうするよ？」

「違約金に退職金だつてさ。辞めても当分は食ってけるぜ」

「でもよお、こんなに居心地がいい職場なんてないんじゃないの？」

「そつだよなあ……。どうするか？」

「俺は残ろうと思う。他の職場じゃ楽しめないしな」

「まあ、そつなだけどさ」

でも、私達にとってナデシコはもう家だし、クルーはもう家族。誰もナデシコから離れようとは思っていない。という事は、誰もが了承するという事になる。

「ああ。そうそう」

もう解散かな？ と格納庫から出ようとすると、その背中に声がかかる。

発言者は、提督だ。まだ何かあるのだろうか？

「ナデシコには火星の救民が乗ってたわよね？」

・・・何が言いたいんだろう？

嫌な予感がする。

「ナデシコは地球における最高戦力だわ。

そんな艦に反乱の危険性が高いクルーを乗せておけないのよ。

だから、火星の救民達には全員、ナデシコから降りてもらわなッ！？」

ザワザワザワザワ。

その予想外の言葉に周囲が騒ぎ出す。

「横暴です！」

火星の人だろうか？ 男の人が叫んだ。

「うるさいわね。何でかは知らないけど、謂れのない理由で火星の人は軍を敵視しているのよ。」

危険扱いされても仕方ないでしょ？」

「謂れのないだと！ お前達が俺達を置いて逃げたんじゃねえか！」
「そつだ！ 連合軍を憎むのは当然だろうが！」

提督の言葉に火星の人達が怒りを露にした。

やばいわ。このままじゃ、暴動が起こる。

「お、落ち着いてください。提督はお静かに御願ひします」
「私は静かよ」

プロスさんが必死に宥めて、どうにか火星の人達は収まった。
でも、まだ怒りは隠せていない。

「もちろん、火星の方達にも違約金と退職金を支払います。
もし、それでも生活に困るのでしたら、こちらからお仕事を斡旋
しましょう」

軍人でもないプロスさんには当たれない。
火星の人達は黙り込むしかなかった。

「火星の方達以外で降りる方にも当然、仕事の方を斡旋させていた
できます」

結局、プロスさんのこの一言でこの場は解散という事になった。
火星の人達が降りちゃうなんて。やっぱり寂しいわね。

・・・あ。って事はカエデちゃんも降りるって事？

「カエデちゃん！」

「ん？ 何よ？ 何か用？」

格納庫を抜け、食堂に向かう途中にある廊下でどうにかカエデちゃんを見つげられた。

その顔は不機嫌そのものであり、先程の提督の言葉に怒りを覚えていたようだった。

そうよね。カエデちゃんも被害者の一人で軍を嫌ってた。

あれだけの事を言われたら怒って当然か。

「これからどうするの?」

「さあ。何も考えてないわ」

「大丈夫なの?」

「突然言われたって何の準備も出来てないわよ」

それはそうよね。

いきなりクビって言われるようなものだし。

「それじゃあ、私に付いてきてもらおうかしら」

カツンツカツンツと音を鳴らしてやってくる女性。

「エリナさん」

ネルガル会長秘書、エリナ・フォン・キンジヨウ。

彼女はカエデちゃんに実験の参加を求めている。

もしかして……。

「何か用?」

不機嫌丸出し。

お、落ち着きなさい。カエデちゃん。

「貴方はナデシコから降りるんでしょ？」

「正確には降ろされるんだけど」

「降りるといふ事実の前には些細な問題よ」

「それで？ 何よ？」

「これから生活するのも大変でしょ？ だから、私が仕事を斡旋してあげようと思って」

「余計なお世話よ。別に貴方の力を借りなくなつて」

「残念。貴方はネルガルのお世話になるしかないのよ」

「え？ 何ですよ？」

どこか勝ち誇つたような笑み。

何だろう？ あの笑みは。

「どうして火星の救民達がネルガルで働いてると思う？」

「ネルガルが助けたからでしょ？」

「そうね。でも、もっと大人の話があるのよ」

「大人の話？」

「ええ。火星の人達は連合軍に悪い情報を持っている。それが何か分かる？」

火星の人達が持っている連合軍に都合の悪い情報？

「それは火星を見捨てて逃げたつて事？」

「そうよ。流星は元社長秘書。鋭いわね」

「それはどうも」

それぐらいしか見当たらないし。

「軍としてはその情報を握り潰したい訳よ。民間人の信用を失うから」

「握り潰すですって？ そんな事、無理に決まってるじゃない！」

「そうね。誰だって普通はそう思うわ」

「普通は・・・ですって？」

「ええ。でも、何かしらの大きな組織が動けばその問題も解決される」

「・・・それが、ネルガルって訳？」

「ええ。その通り。ネルガルが軍と交渉したのよ。火星の人達はこちらが管理しますって」

「はあ！？ 何よ？ それ」

「管理の見返りに色々と良くしてもらってる訳。善意だけじゃ企業なんてやってけないのよ」

「それで、火星の人達は全てネルガルの社員になっているという訳ね？」

「ええ。その通りよ。だから、ネルガルとしても連合軍としても、

火星の人達の動向には注意しなければならないのよ。万が一がなないようにって」

「それは何？ 脅しているつもりなの？」

「あら？ 私はそんな事は言っていないわよ。ハルカ・ミナト」

この女狐め。

「とりあえず私から言える事は、

火星の人間は私達ネルガルにお世話になる以外に生きていく道はないという事よ」

「他会社に入社するのを邪魔する訳ね」

「さあ。でも、ネルガルの影響力があれば、それぐらいは出来るかもね？」

確実に出来る。

大企業としてのネルガルの影響力は凄い。

少し睨みを利かせれば、一般の会社なんて成す術がない。

「そして、ナデシコから退艦する者の人事権は私が持つてるのよ」「何で貴方がそんな権利を持つてるの？」

「あら？ 当然じゃない。私ってネルガル会長秘書よ。それぐらいの権力は持つてるわ」

「え？ 秘書？ 貴方が？」

「ええ。驚いてくれたかしら？」

会長秘書と知り、絶句してるカエデちゃん。

私は知ってたから特に驚きはないけど……。

「いいのかしら？ そんな強引に事を進めて」

「あら？ どこに不安があるの？」

「そんなに強引に事を進めていたらいつか反発されてネルガルの信用を失うわよ」

「ふふっ。甘いわね」

「何がよ？」

「人は生きていく事を第一としているの。」

せつかく生活できる環境があるのに、それを失ってまで反発するかしら？」

「……………」

「ま、反発したなら反発したでいいわ。すぐに鎮めてあげるから」

「鎮めるですって？」

「あ。口が滑ったわね」

笑みを浮かべながらわざとらしくしまったという顔をするエリナ秘書。

伊達に会長秘書なんてやってないわね。嫌らしい交渉の仕方。

「本来なら幾つか候補を挙げるんだけど、貴方はこちらで決めさせてもらったわ。」

貴方の再就職先はネルガル傘下のアトモ社よ」

「何、勝手に決めてるのよ！」

「自主的に参加してくれたら助かったのだけれど、もう手段を選んでられないよ」

「どつという意味よ？」

「一人や二人犠牲にしても理論を完成させないといけないのよ。木星蜥蜴に勝利する為には」

正確には火星の知識を独占する為には、よね。

カエデちゃんが木星蜥蜴に恨みがあるからってこんな言い方をするなんて……。

なんて汚い。

「既にこの実験では多くの犠牲者を出しているわ。」

今更貴方一人を犠牲にしても、それを揉み消す事なんて、

あ。でも、彼らは木星蜥蜴の犠牲者って事になっているわね。あら怖い」

「……………」

実験で犠牲者を出しても木星蜥蜴のせいにしてしまえば会社イメージが下がる事はない。

そう、そうやって、貴方達は実験を正当化しているのね。全て木星蜥蜴のせいにして。

「クスツ。分かってもらえたかしら？」

貴方が実験でどうなるかと、私達から逃げてどうなるかと、

それを揉み消すのなんて私達にとっては赤子の手を捻るようなものよ」

「・・・・・・・・」

「反対する人なんていないわ。貴方一人の命と木星蜥蜴に勝利。ふふつ。誰がどう考えても結論は一緒でしょ？ 天秤に乗せるまでもなく」

齒向かうならどうにでも手段はある。

ネルガルも軍も助けてくれない。

そう脅してるんだわ。

「ま、大人しくしている事ね。木星蜥蜴の新しい犠牲者になりたくなければ」

そう言っ去っていくエリナ秘書。

・・・カエデちゃん。

「・・・・・・・・どうしてよ？ どうして、私がこんな目に」

そう俯きながら嘆くカエデちゃん。

どうして、この子ばかり酷い眼に合わないといけないんだろう。私には、どうする事も。。。

「お。いたいた。ミナトさん。あれ？ カエデもいたのか」

え？ この声は・・・。

「ええっと、どうかしたんですか？」

どうしてここにいるの？

・・・コウキ君。

いやあ。懐かしいね。ナデシコ。

「あれがナデシコですか？」

「そうですね。イツキさんの新しい職場です」

輸送機に乗せられ、ここカワサキシティまでやって来た。

後は車で移動して、ヨコスカベイの軍用港まで行くだけだ。

というより、もう着いたんだけどね。

「久しぶりの帰艦はどうですか？」

「あそこはもう家みたいなものですからね。気分は単身赴任から帰ってきたサラリーマンです」

「ふふふ。そうなんですか。素敵な所みたいですね」

「ええ。イツキさんも慣れれば居心地が良いと思いますよ。慣れるのが大変だと思いますが」

「そう脅かさないでください。こう見えても緊張しているんですよ？」

「ハハツ。ま、楽しい所ですから。緊張して損したって思う事になりますよ」

「それならいいんですけどね」

軍用ドックでナデシコを見上げながらの会話。

そろそろ迎えの軍人が来る頃なんだけど・・・。

「少尉。特務中尉。お迎えに上がりました」

「ご苦労様です」

「ハッ」

この特務中尉つてのが未だに慣れない。

つてか、殆どの兵が皆してパツと挨拶してくるから逆に緊張する。俺なんか相手にしなくて良いよあって感じで。

「そういえば、私の機体つてもう運ばれてるんでしょうか？」

「ええっと、多分。もしかしたら、俺のお古になっちゃっかも」

「コウキさんのですか？ 私は構いませんが・・・」

・・・まあ、カスタムじゃなくて、普通の設定にも出来るから心配はいらないと思うけど。

でも、一応は俺の機体で愛着があるからなあ。

「お話を遮るようで申し訳ありませんが、既に運んであるとの事です」

「それは以前まで使っていたあの基地の機体つて事ですか？」

「そう聞いております」

おお。いつの間に運んでたんだ。

というか、案内役の兵士さん、やるねえ。

出来て当たり前かもしれないけどさ。僕は感心するよ。

「だ、そうです」

「了解しました。コウキさんには悪いですが、やはり私も自分の機体の方がやりやすいです」

「いえいえ。当然です。愛着も湧きますし」

「ふふっ。そうですね」

「あ。って事はあの機体は俺が持ち帰ってもいいって事かな？」

「そう聞いております」

「おわッ！ あ、ありがとうございます」

「いえ」

案内役の兵士さん。独特の空気というか、絶妙の入り方というか。ビックリしてしまった。コホン。

「所で、イツキさんはCASで訓練を積んでましたが、ナデシコでは？」

「ナデシコでもCASを用いるつもりです。CASでの戦闘データが取りたいそうなので」

「あ。そうですね。実機での戦闘データは集まっていなかったんですね」

所詮はシミュレーション。きちんと実戦でのデータがなきゃ安心は出来ない。

「はい。恐らく提督達はコウキさんに、

私や既に配備された兵達の戦闘データの解析を御願ひするんだと思います」

「ああ。実戦ですね」

最終調整というか、フィードバックデータの応用を担当する訳だ。ま、そっちの方が大切だもんな。実戦でのデータを活かして更に高度なOSにしらって。

・・・うわあ。俺っていつナデシコに帰れるんだろう。

「着きました。それでは」

ビシツと敬礼してくる兵士さん。

「ありがとうございます」

そして、俺達もビシツと敬礼で応える。

うう。未だに慣れず、どこか恥ずかしさを覚えます。

「様になってきましたね」

「まだまだですよ」

褒められてもねえ……。

恥ずかしいものは恥ずかしいんだよ。

「ムネタケ提督」

「来たわね。あら？ 何で貴方までいるのかしら？」

「少尉の付き添いであります。提督」

「あら？ 軍人らしくなっちゃって」

「ハッ」

ああ。やってらんねえ。

階級って面倒だよなあ。

キノコさんって中佐だったけ？

うわ、うわ。遠慮しなくちゃいけなくなる。

もう山菜狩りとは言えなくなってしまう。

だ、大損失だ。

「パイロット達に紹介しましょう」

うう。キノコ提督の後ろを歩く時が来るなんて……。

「おお！ コウキじゃねえか！」

「あれね。軍服なんか着ちゃってるよ。似合わない」
「久しぶり。ガイ。ヒカル」

パイロット勢が集合している場所へ向かう。

いや。本当に久しぶり。もう一年ぐらい会ってない気がするよ。
それぐらい彼らのインパクトが強いつて事だろうな。

「んお。新しいパイロットってのはそいつか？」

「ええ。自己紹介をしなさい」

「はい」

もう帰ってもいいですよ、提督。

ああ。こう言えたらどんなに幸せか。

「イツキ・カザマです。よろしく御願います」

「よろしく〜」

なんとも気の抜けた返事。

あ。さっそくイツキさん、啞然。

「後は勝手に親交を深めなさい」

よっしゃあ。キノコが山に帰っていった。

「コウキ。調子はどうだ？」

「コウキ。元気にやってるみてえじゃねえか」

イツキさんが女性パイロットやアカツキに囲まれる中、アキトさんとガイがこちらにやってくる。

おおおお。流石はガイ。女性はメグミさん一筋。好奇心より友情を取るなんて。熱いぜ。ガイ。

「ぼちぼちですね」

調子はぼちぼち。これから忙しくなりそう。

「しばらく滞在するの？」

「はい。数日だけ許可を貰いました。いや。大変ですよ」
「そうか」

そうか、っておい。それだけですか？

「ま、俺達の事は放っておいて早くミナトさんの所に行ってあげんだな」

「セレスちゃんも忘れんなよ。寂しそうにしてたぞ」

素晴らしい助言をありがとう。アキトさん。ガイ。
まずは……。

「セレスちゃん」

トコトコ歩く後姿を発見。

「……え？」

「久しぶりだね。セレスちゃん」

「……コウキさん！」

おお。花が咲いたかのような笑み。
和みます。癒されます。

最近は癒しがなくてストレスが溜まっててさ。
いつその事、セレス嬢を補佐として連れて帰ってしまおうか。

「元気だったかい？」

「・・・はい。でも、コウキさんがいなくて寂しかったです」

寂しい思いをさせちゃったか。

ちよつと罪悪感。よし。

「これからブリッジに行くの？」

「・・・はい」

「じゃ、一緒に行こっか」

「・・・はい！」

笑顔で頷いてくれるセレス嬢。

まずい。マジで補佐候補になりそう。

「はい」

手を差し出す。

無論、手を繋ごうという意味さ。

「・・・ポツ」

照れながらも握り返してくれる小さな手。

何だろう？ 改めて帰ってきたって実感。

「俺がいない間に何かあった？」

「・・・特には。あ。今ですが、クリスマスパーティーの準備をしています」

あ。原作でもやってたな。クリスマスパーティー！
・・・む。プレゼントを忘れていた。ちょっと抜け出して準備しなくちゃ。

それぐらいの余裕はあるだろう。きっと

「・・・サンタクロースがプレゼントをくれるってミナトさんが言っていました」

なるほど。ミナトさんもプレゼントを用意するつもりだな。
うん。ここは便乗するか。

「そうだね。セレスちゃんは良い子にしていたからきつとももらえるだろうね」

「・・・本当ですか？」

「うん。セレスちゃんならもらえるって」

「・・・嬉しいです」

本当に良い子でした。

貴方は私の心のオアシスです。

「シタテルは元気にしてる？」

「・・・オモイカネといつも一緒にいます」

ま、お話機能以外の機能は付けてないからな。
あんまり容量取っちゃうと怒られるし。

「そっか」

それからはブリッジに着くまで楽しくおしゃべりしてました。

珍しくセレス嬢がどんどん話すからずつと聞き手。でも、それはそれで楽しい。

一生懸命に伝えようと話す姿は可愛らしさ抜群です。

「お久しぶりです。皆さん」

ブリッジに入るとギョツと驚いた眼でこちらを見てくるクルー一同。
あれ？ 連絡されてなかった？
そういえば、セレス嬢も驚いてたな。

「お久しぶりです。コウキさん」

「・・・コウキ。久しぶり」

「久しぶり。ルリちゃん。ラピスちゃん」

ブリッジクルーそれぞれと挨拶しながら、自分の席に座る。
あれ？ ミナトさんはまだいないのか。

「・・・コウキさん」

「ほつと」

言われる前に抱き上げる。

いや。僕としても役得なので。

「・・・」

太腿の上でご機嫌そうに笑うセレス嬢。
思わず頭を撫でていた。この感触も久しぶりだな。

「どう？ 何か変わった事あった？」

さっきのセレス嬢に聞いたのは別の意味。
ルリ嬢に聞いたのは原作と変わった事。

「いえ。特には。・・・あ。一つだけ」
「え？ 何々？」

原作と違った所があったってのは意外と一大事だと思っただ。
でも、ルリ嬢はそんなに慌ててないし。杞憂かな？

「入港する際に市民の方から歓迎して頂きました」

「え？ 歓迎してもらえたの？」

「はい」

原作ではナデシコ反対とか過酷な現実を叩きつけられてたけど、今
回は歓迎ですか。

あれですね。火星の民達の救出。あれが、きっと好感度を上げてた
んでしょう。

「良かったじゃん」

「はい」

嬉しそうだね、ルリ嬢。この分ならアキトさんも喜んでたんだろう
な。

未来を変える。その結果がこうなったんだから。

「・・・・・・・・・・」

それから結構な時間、ブリッジクルーと楽しくおしゃべりしてたん
だけど・・・・・・・・。

中々ミナトさんはやって来ない。

うん。おかしいなあ・・・。

「ねえ、ルリちゃん」

「はい。何でしょう?」

「ミナトさんは何してるの?」

「ええ。どうやらここにいるみたいです」

そう言ってコミュニケに居場所を教えてくれるルリ嬢。

「ええっと・・・廊下? 格納庫寄りの」

「そしてみたいですね」

あっちゃあ。別ルートから来ちゃったからなあ。

道理で会えない訳だ。来るのを待つより会いに行くか。

「じゃあ、ちょっと、俺はミナトさんの所に言ってくるね」

「分かりました。セレス」

「・・・嫌です」

おお。セレス嬢がルリ嬢に反抗した。

「セレス。コウキさんに迷惑をかけちゃいけません」

「・・・迷惑ですか?」

そ、そんな顔された迷惑だなんてとても言えない。

「う、ううん。そんな事ないんじゃないかな」

「コウキさん! ミナトさんに会いに行くんじゃないかなかったですか
!?!」

おお。ルリ嬢、落ち着いてくれ。
不可抗力というか、仕方のない事なんだ。

「すぐに戻ってくるからさ。ごめんね。セレスちゃん」
「……………」

う、俯いてしまった!?!?
え? ええ? どうしよう?!

「パツと行ってパツと帰ってくるから」
「……すぐに帰ってきてください」
「う、うん。絶対にすぐ帰ってくる」
「……約束です」
「うん。約束」

ど、どうにか説得成功。セレス嬢は自主的に降りてくれた。
どうしてだろう? いつもならもっと聞き分けが良いというか……。

ま、まあ、いいや。とりあえず、ミナトさんの所へ行ってくるかな。
「ええっと、ここか」

コミュニケに表示される地図を頼りにミナトさんの所へ向かう。
それにしても、何でこんな所にいるんだろう?
何にもないし、特別な部屋って訳でもないのに。

「お。いたいた。ミナトさん」

あの後姿はミナトさんだな。
ん? 一緒にいるのはカエデみたいだな。

「あれ？ カエデもいるのか」

バツと振り向くミナトさんと眼を見開いてこっちを見てくるカエデ。

「ええっと、どうかしました？」

珍しいツーショットという訳でもないけど、二人してなんでここに
いるかが分からない。

「な、何で、ここにいるの？」

「え？ いちゃ駄目ですか？」

「そ、そんな事は言っていないわ」

やっぱり聞かされてないか。

誰の陰謀だ？ これは。

「帰ってきたの？」

「いえ。違いますよ。ちょっと用事がありました」

「・・・そう」

なんか二人とも様子が変だ。

深刻そうな表情。なんというか、落ち込んでるといっつか、ショック
を受けているといっつか。

「何かあったんですか？」

俺が力になれるか分からないけど、相談ぐらいなら受けられる。

「ええっとね」

「はい」

「実は」

「ごめん。コウキ」

ええっと、何故、謝られるのかが知りたい。

「何で謝るの？」

「貴方から散々注意されてたのに、結局、実験を受ける事になっちやいそう」

「はあ！？」

え？ だって、断るって言ってたじゃん。

「え？ どういう事？ 何？ やっぱり復讐したいって事？」

「ち、違うの。私としても意味が分かんないけど」

「俺の方が分かんないっての」

意味分からん。どういう事？

「私が説明するわ」

御願います。

「ナデシコが正式に軍に徴兵されたのは知ってるわよね」

「はい。もちろんです」

なんと言っても俺が先行徴兵ですから。

今だって、軍の制服を着てるんだぜ。

「その際に火星の人達全員が降ろされる事になったの？」

「え？ 何ですか？」

何故、火星の人達を降ろす必要がある？
意図がまったく掴めない。

「火星の人達は軍に歯向かう可能性があるからって」

「・・・歯向かう？ そんな事件が起きたんですか？」

「ううん。いきなりよ。いきなり退艦しろって」

そんな事件も起きてないのに、いきなりなんて酷いな。

何が目的だろう？

「それで、その後はどうになりました？」

「会社を斡旋するからって言って誤魔化してたわ。でも、その後、カエデちゃんに接触してきて」

「まさか、秘書さんがですか？」

「ええ。そのまさかよ」

うわっ。もしかしてそれが狙い？

どうしてもクビにする理由が見つからなかったから、火星の人達全員を一斉に退艦させたとか。

ネルガルならやりそうだ。というより、エリナ秘書ならやりそうだ。

「何て言ったの？」

「本来なら会社を選ばせてあげるけど、貴方のは勝手に決めさせてもらったって」

な、なんて横暴。

随分と強引な手段できたな。

「何て会社？」

「確か・・・」

「アトモ社って言うってたわね」

「アトモ社？」

うわ。確信深まりって感じ。

「アトモ社はボソソジャンプ研究施設です。間違いなく実験に参加させられますね」

おいおい。どうするよ？

「脅されたもの。今更一人ぐらい殺した所で揉み消すのは簡単だつて」

「・・・エリナ秘書が？」

「そう。エリナ秘書が」

か、かなり本気だな。おい。

「カエデ。断って別の会社に行け」

「無理よ。行けたら苦労しないわ」

「え？ 何でだよ？」

「ネルガルが圧力をかけるって。他会社に就職できないように」

「ネルガルの影響力なら可能でしょ？ 間違いなくやってくるわよ？」

・・・思わず頭を抱えちゃった。

そ、そこまでするのか、ネルガルは。

「れ、連合軍に保護を求めればいい」

「

「無駄よ。断言は出来ないけど、連合軍も協力してるみたい。反対する人なんていないって言ってたもの」

「ま、マジですか？」

「マジです」

ネルガルも連合軍も助けしてくれない。

おい。アキトさんの時より状況悪くないか？

「えっと、カエデは参加したくないんだよな？」

「当たり前じゃない。なんか死にそうな事言ってたし」

下手すると死にますからね。カエデなら大丈夫だと思うけど。

「分かった。ちよつと提督に相談してみる」

「提督つてムネタケ提督？ コウキ君。何を考えてるの？」

信頼性皆無ですね。キノコ提督。

「違いますよ。俺が今、お世話になっている所の偉い人です。キノコさんじゃありません」

「あ。そっか。そうよね。ムネタケ提督に頼るなんて事はないわよね」

本気で安心してますね。ミナトさん。

カエデは良く分からないって感じだけど。

「待ってる。カエデ。絶対に阻止してやるから」

「・・・コウキ」

何？ その不安そうな顔。

「信じられない？ 俺の事」

「そんな事ないわ！ 信じてる！」

お、おお。そうまで大声じゃなくても聞こえてるぞ。

「そうまで信じられたら応えるしかないな。ま、任せとけ」

「・・・うん」

しおらしいカエデは変な感じだな。

「んじゃあ、俺はこのまま提督に連絡してくるから、仕事に戻って待ってるよ」

「分かったわ。待ってるわね」

「おう」

去っていくカエデ。

阻止してやるって誓ったしな。

頑張りますか。

「コウキ君。おかえりなさい」

「ただいまです。ミナトさん」

そして、ようやくミナトさんと二人きりになれた。

「お元気そうで何よりです」

「ええ。コウキ君も頑張ってるみたいね」

「それなりにですけどね」

なんだか本当に久しぶりだ。

「助かったわ。私じゃどうしようもなかったから」

「カエデの事ですか？ 俺だってどうしようもなかったですよ」

「でも、コウキ君のおかげで解決策が見つかりそうじゃない。それもコウキ君の力よ」

「他力本願ですけどね」

でも、ミスマル提督の力をお借りすればそれぐらい出来る筈。極東方面では幅を利かせてるからな。カイゼル提督は。

「……………」

「……………」

何だろう？ 色々と話す事を考えてきたんだけど、全部吹っ飛ばした。やった。

ええっと……あ。そうだ。

「ええっと、ミナトさん」

「何かな？」

「セレスちゃんにサンタクロースの話をしたそうですね」

「ええ。したわよ」

「もうプレゼントは買いました？」

「ちよつと時間なくてね。まだ買ってないわ」

「なら、時間が空いたら一緒に買いに行きましょうよ」

「いいわよ。私も買いに行きたかったし」

うん。さり気なくデート作戦、成功。

久しぶりだしね。二人つきりで過ごしたい。

「…………カエデちゃんやセレスちゃんの事ばかりなのね」

「え？ 何か言いました？」

「え、ううん。なんでもないわ。もちろん、私にもサンタさんは現れるのよね？」

「随分と若いサンタでよろしければ」

「ふふつ。楽しみにしてるわ」

「あんまり期待しないでくださいよ。こういうの選ぶの苦手なんですから」

「あら？ 私はサンタさんに頼んでるのよ。コウキ君は何を言うてるの？」

「・・・参りました」

うまく切り返されましたね。ニヤニヤと笑ってます。ミナトさん。

「それじゃあ、私はブリッジに行ってるから、連絡してきちゃいなさい」

「分かりました。すぐにブリッジに行きますので待っていてください」

「ま、いつまでも待たせてたらどうなるか分からないけどね」

「勘弁してくださいよ。すぐに戻りますから」

「はいはい。それじゃあね」

パツと手を振りながら去っていくミナトさん。

相変わらずの人だなんて思った。

「さてっと」

ナデシコから連絡取ってもいいけど、内緒話だし。

このドッグの通信室を借りようかな。

ふっふっふ。こういう時に軍人だと楽だぜ。

「という訳なんです。提督」

『ふむ。私の知らない所でネルガルと軍がそのような事を』

通信室を借りて秘密の相談。

盗聴器の類はないと信じたい。

「どうにか保護して頂けないでしょうか？」

マジで御願います。提督。

『ふむ。私はネルガルとあまりパイプを持っていなくてな。私には
どうする事も出来ない』

「.....」

マ、マジですか？

やばい。どうしよう？

啖呵を切ったとかそういう事ではない。

どうしてもカエデを巻き込みたくないんだ。

他に何か俺に取れる手段は.....

『だが、手段がない訳ではない』

「え？ 本当ですか？ 教えてください！」

『そう慌てるな。分からないのかね？』

分からない？ 分かりませんよ！

「分かりません！」

『はぁ……。君は賢いのか賢くないのか分からない人だね』

ええっと、馬鹿にされてるのだろうか？

『君はナデシコに何をしに行ったのかね？』

俺がナデシコに来た理由？

イツキさんの付き添いとナデシコの様子を見ておきたかったからかな。

「イツキさんの付き添いですが？」

『それ以外にもあるだろう。言ったではないか。イツキ君の代わりになる副官を連れて来いと』

……。あ。そんな事も言ってた気がする。

ナデシコに行けるって舞い上がってからな。すっかり忘れてたよ。

「それでは？」

『うむ。まだナデシコに所属している状態なのだろうか？』

「はい。正式にはまだナデシコ所属です」

まだクビ切りはされてないと思う。

『ならば、君の権限で彼女を徴兵したらいい。』

「保護して頂けるので？」

『君には返せない程の恩があるのでな。それぐらいならば力になる』

「ありがとうございます！」

流石はミスマル提督。
本当に助かります。

『それでは、こちらからも副官を出すとしよう。彼女は補佐役でいいかな?』

「ええ。副官は務まりそうにないので」

あれだな。食堂で働いてもらうか。
ま、色々と相談した上で決めよう。

「彼女と話してみて、詳細が決まりましたら再度連絡致します。

出来れば辞令だけでも作っておいてもらえないでしょうか」

『ふむ。了解した。早急に通達しよう。久しぶりのナデシコを楽しんでくるといい』

「ありがとうございます。では」

『うむ』

通信が切れる。

「おっしやあああ!」

飛び上がらんばかりに喜んでしまった。

・・・ふう。落ち着け。落ち着け。冷静にな。

「・・・あ」

正式に退艦が決まる前に俺の権限で徴兵しないといけないんだ。
急がないと・・・。

食堂に駆け込む。

「おい。カエデ！」

・・・あれ？ 反応がない。

「ホウメイさん。カエデの奴、どこ行きました」

「ん？ プロスさんに連れられてどっか行ったよ」

やばっ。急がないと。

「寂しくなるねえ。あの和食は私にも学ぶ所が・・・」

「し、失礼しました」

「何だい？ 騒がしいねえ」

食堂にいない？ なら、どこにいるんだ？

プロスさんはカエデをどこに連れていったんだ？
ええい。ブリッジで探してもらおう。

「ルリちゃん！」

「え？ あ、はい。何ですか？」

ブリッジに駆け込むと同時にルリ嬢の名を叫ぶ。

「今すぐカエデの場所を調べてくれ」

「キリシマさんの事ですか？」

「ああ。すぐに。頼む」

「わ、分かりました」

コンソールに手を置いて調べるルリ嬢を焦りながら見守る。

「方法が見付かったの？」

「はい。でも、ナデシコ所属である事が条件なので、時間がないんです」

「分かったわ。後で詳しく教えてね」

「ええ。分かっています」

後でお話します。ミナトさん。

「・・・コウキさん。あの・・・」

「ごめんね。もうちよつと、もうちよつとだけ待っていて」

「・・・でも・・・はい、分かりました」

寂しそうな眼をしないでくれえ。

罪悪感が湧く。これは即刻戻ってくるしかないな。

「分かりました。ここです」

コミュニケに居場所を示してもらおう。

クソッ。ブリッジからじゃ遠いな。急げ。

「ありがと。ルリちゃん。今度お礼する」

「い、いえ。良く分かりませんが、頑張ってください」

エールどうも。急げ。俺。

とりあえず、連絡を取ってみるか。

プロスさんと一緒だっていうし、厳しいかもしれんが。

「・・・・・・・・」

うん。着信拒否ですね。わかります。
結局、ダッシュしかない！

「カエデ！」

バンッ！

カエデの反応がある部屋を強引に開ける。

「コウキ？」

椅子に座るカエデ。

対面してるのはプロスさんとエリナ秘書。

・・・もしかして、間に合わなかったのか？

「困りますなあ。マエヤマさん。今は交渉中でして
「出て行きなさい！ これは個人の問題よ！」

ネルガル勢は困ってますね。

特にエリナ秘書の焦りようは半端じゃない。

ま、散々邪魔しましたしね、僕。

でも、最後まで邪魔させてもらいますよ。

「カエデ。まだ契約は打ち切ってないか？」

「ええ。コウキを信じて粘ってたわ」

素晴らしい。ギリギリで間に合ったみたいだな。

「出て行きなさい！」

「まあまあ、落ち着いてください。エリナさん。マエヤマさん。何のご用件でしょうか？」

突然来て申し訳ないです。プロスさん。

でも、仕方なかったんです。許してください。

「マエヤマ・コウキ特務中尉の権限でキリシマ・カエデを徴兵します」

俺の用件はただこれだけ。

俺の補佐役として、カエデを徴兵する。

「え？」

呆然とするカエデ。

すまん。後で説明するから。

「ど、どどういう意味よ!？」

慌てるエリナ秘書。

今まで狙い通りにいったみたいだからな。

どんでん返しといった所だろうか。

「そのままの意味です。私はナデシコから任意で一名を副官として徴兵する権利があります。」

これはミスマル提督より正式に与えられた権利であり、私はそれを実行したまでです」

「な、そんな事聞いてないわよ！ 嘘を言うのはやめなさい！」

「後日、正式に辞令が来るでしょう。」

形としてはナデシコが軍属状態の時に別方面から徴兵され、私の下に配属、となります」

「そ、そんなのネルガルは認めてないわ」

「ナデシコが軍属であり、完全に軍に徴兵される以上、ネルガルの意向より軍の意向の方に重みがあります。」

ネルガルが認めていなくとも、状況は変わりません」

「ネルガルに反抗するというの!?! こっちは軍の弱味を握ってるのよ?」

「はて? 一人の女性を徴兵する程度に何故そこまで意固地になれるかが分かりませんね」

「クツ! 貴方いつもは私の邪魔ばかりして!」

カエデを護る為ですから。邪魔させてもらいますよ。

「マエヤマさん。軍の意向により、火星の方達の徴兵は拒否するとなつていますが?」

「そ、そうよ。それはどうするのよ?」

「先程も言いましたが、彼女はナデシコとは別に徴兵される訳です。火星の方達をナデシコのクルーとして徴兵する事はできませんが、彼女は別系統ですので心配ありません」

「まだ正式な辞令が来ていない以上、彼女に対する権限は私達にありますか?」

「そ、そうよ。ナデシコ所属である今は私達の勝手でしょう?」

さつきからプロスさんに乗っかる事しかしてませんよ。

焦り過ぎではないですか? エリナ秘書。

「キリシマの契約はいつまでですか?」

「今日の夜十二時までですな」

「それでは、それまでに正式な辞令を通達致しましょう。それでよろしいですか？」

「む。むう。そうですね。異論はありません」

「ちよ、ちよっと、納得しないでよ。い、いいわ。今すぐにも契約を破棄」

「契約は絶対です。一方的な契約破棄は会社の信用を失いますよ」

「その通りです。エリナさん。契約は絶対ですぞ」

「ど、どっちの味方なのよ!? 貴方は!」

「無論、契約の味方です」

「・・・クウ・・・」

エリナ秘書、敗れたり。

いや。プロスさんのおかげです。ありがとうございます。

「コウキ。ちよっと説明しなさいよ」

「はいはい。とりあえず、後でな」

状況が分かってないみたいだな。

ま、助かったとだけ認識してりゃあ大丈夫だ。

「それでは、失礼します。カエデ。来い」

「ちよ、ちよっと、気安く私に触れないでよね」

相変わらずだな。おい。

ま、しおらしいカエデよりは全然マシか。

何はともあれ、阻止成功って事だな。

はあ・・・。良かった。

第二十八話（後書き）

いや。結局こうなりました。

違和感あつたら直します。

ちよつと阻止の件に自信がありませんので。

第二十九話

「嫌よ！ 連合軍なんて信じられないもの！」
「……はあ。分かったから、ちよつと落ち着いてくれ」

前途多難とはこの事を言うのでしょうか？

「でも、な、ここ以外に頼れる所がなかったんだよ」
「嫌！ 絶対に嫌！ 何だって連合軍なんか頼らなくちゃいけないの!？」

火星の人達の連合軍に対する感情は相当のものがあるみたいだな。

「そうは言っても、ナデシコにいても連合軍に所属する事になつてたんだぞ？」

「それはそれよ。でも、少なくとも周りの環境はあまり変わらないでしょ？」

「ま、それはそうだけど……」

ナデシコと共に連合軍入りするのはいいけど、別の場所で連合軍入りするのは嫌って事か。

「俺が復帰するまでの期間だけだから、我慢できないか？」

「それっていつまでよ？」

「そうだな……。その内って所かな」

「はあ！？ そんな不確かなの？ 余計嫌になっただわ」

「はぁ……。どうしよう？」

「頼むから我慢してくれ」

「……嫌」

「どうすればいいかな？」

「と、とりあえず、コウキ君もカエデちゃんも落ち着いて」

「……ミナトさん。助けてください」

「え、ええっとさ、カエデちゃん」

「何よ？」

「連合軍を嫌うのも仕方ないと思うけど、コウキ君は信じられないの？」

「え？」

「コウキ君はカエデちゃんの為に走り回ってくれた。

そんなコウキ君の補佐役として軍に行くのよ？」

もちろん、コウキ君がカエデちゃんを護ってくれるわよ。ねえ？」

「え？ も、もちろんですよ。責任を持ってカエデを護ります」

「……コウキ」

「だ、そうよ。連合軍は信じなくていいから、コウキ君を信じて少し我慢してちょうだい」

「……少し考えさせて」

ま、割り切るのに時間が掛かるのも分かった。

フクベ提督に対するカエデの態度を見ればそれぐらいは分かるさ。

でも、ボソソジャンプの実験に参加させない為には仕方なかったんだ。

「……………」

考え込むカエデ。

少し、一人にさせてあげよう。

「カエデ。ゆっくり考えてくれ」

「…………ええ」

ゆっくり考えると言っても、結局は我慢してもらわないといけないんだよな。

酷い奴だな。俺は…………。

「行きましよう。ミナトさん」

「…………そうね」

ミナトさんと共に部屋から抜け出す。

「…………コウキ君」

「…………ええ。強引でしたね。俺」

カエデを救うと言っておきながら、カエデにとって辛い道を強要した。

ボソソジャンプの実験参加を阻止しようという事に意識が集中し過ぎたかな？

もっとカエデの気持ちを考えてあげれば良かったかもしれない。

「でも、貴方のお陰で助かった事も事実よ」

「…………そうですかね？ もっとカエデにとって良い方法があったのかもなっつて」

あそこまで拒否されると、そう考えてしまう。

「私達にはそれ以外の方法が見付からなかったんだもの。コウキ君がした事に間違いはないわ」

「・・・ミナトさん」

「ほら！　しっかりしなさい！　コウキ君。貴方がカエデちゃんを支えてあげるのよ」

「・・・そう・・・ですね。俺が強要した道です。俺が責任を持ってあいつを支えてあげないと」

あれ以上の方法がもしかしたらあったのかもしれない。

でも、もう決めてしまったんだ。なら、後悔しないよう頑張るしかない。

「ありがとうございます。ミナトさん。お陰で元気が出ました」
「そう。それは良かったわ。貴方が落ち込んでたら、カエデちゃんだって安心できないわよ。」

自信を持って。貴方がしっかり彼女を護ってあげなくちゃいけないんだから」

うん。そうだな。

俺がしっかりしないと。

「おし。そうですね。ミナトさんの言う通りです」

「うん。元気出たわね。それでこそコウキ君よ」

本当にいつもこういう時に支えてもらって、ミナトさんには感謝の心で一杯です。

「それじゃあ、私はブリッジに戻るわね。コウキ君もやる事がある

でしょ？」

「……そうですね」

やる事はたくさんある。

イツキさんのCASの調整とか、自分の機体の調整とか。

イツキさんにナデシコパイロットとシミュレーションしてもらって性能評価するとか。

……でも、それ以上に……。

「いえ。ブリッジに俺も行きます」

「いいの？ 仕事が忙しいんじゃないの？」

「ええつとですね、セレスちゃんが早く戻って来てって」

「あら？ 呆れた。仕事をサボっていいの？」

いや。そんなジト眼で見なくても……。

「今の俺って凄い立場なんですよ。誰にも命令権はありませんし、勝手に動いていいんです」

「ふうん。それにしたって、セレスちゃんの言いなりだなんて」

「ええつと、ミナトさんの為にも時間を取れますよ」

「変なフォローはいらぬわよ。ま、コウキ君がそういう子なんだなって事は分かったから」

ええ？ どうして拗ねてるんですか？

つてか、そういう子ってどういう意味ですか？

「……最近私を蔑ろにしてるわよね。コウキ君って」

ええつと、反論できない。

「す、すいません」

「謝るぐらいなら何かして欲しいなあ」

「うう。俺にどうしろと？」

「せっかくのクリスマスなんだし」

「え、ええ。ま、任せてください」

これは相当に頑張らないと見損なわれちゃうな。

「ふふっ」

おお？ 急接近？

「ミ、ミナトさん？」

「いいじゃない？ 最近触れ合ってたんだから」

「でも、恥ずかしいですよ」

「恥ずかしがる必要なんてないでしょ？ 皆知ってるんだから」

で、でもですね、腕組みされると、その……。

「あら？ 良い感触でしょ？」

「いや。もちろん、良い感触なんです……」

「ぶにぶに？」

「グハッ！」

ちよ、ちよつと、頼みますよ。ミナトさん。

鼻の頭に血が……。

「顔真っ赤よ？ コウキ君」

貴方は大丈夫そうですね。ミナトさん。

「もう。もっと凄い事してるのにどうしてそんなに初心なのかな？」

「い、いえですね。ミナトさんのは、その、いつでも新鮮というか、えつと……。」

「ふふつ。可愛い」

「おお？」

更に接近。こ、この距離はやばいですよ。

う、腕にモロ感触が……。

つてか、足にも感触が……。

「殆ど抱きついてるようなものよね？」

「わ、分かっているのなら……。」

「あら？ 嫌なの？ 離れて欲しいの？」

嫌？ 嫌な訳ない。

離れて欲しい？ いえ。むしろ、もっと……って。

おい。何を考えてるんだ。俺。

「……悲しいわ。いつの間にか、私って嫌われてたのね」

離れていくミナトさん。

えええい。俣よ。

バツと離れていく腕を引き止めて強引に引っ張る。

「あら？」

そうすれば、自ずとミナトさんは俺の胸の中。

「嫌うだなんて。そんな事はありえませんか」

「そう？ 最近はずっとセレスちゃんや力エデちゃんの事ばかりだったじゃない」

「あれ？ ヤキモチですか？」

「ヤキモチって正当な権利だと思うの。その想いがあるから好きだつて再確認できる」

「確かに。ヤキモチを焼かれているって事は俺はまだミナトさんに愛されてるって事ですもんね」

「ふふっ。まだ何も。ずっと愛するわよ」

「そうですね。俺もずっとミナトさんを愛します」

「……ウキ君」

「……ミナトさん」

徐々に近づく二人の距離。

眼を閉じていても、頬に掛かる息が二人の距離を教えてくれる。

胸の中にあるミナトさんが愛らしくて、その魅力的な唇に唇を落とそうとして……。

「てめえ、帰ってきて早々それが！？ おい！」

後ろから掛かる声。

邪魔。まったくもって邪魔。

「何ですか？ ウリバタケさん」

「もお。良い所だったのに」

胸の中にあるミナトさんと共に白い眼を向けてやる。

「へっ！ てめえを探して走り回ってた俺には邪魔する権利がある

んだよ」

ありません。

「ミナトさん。俺って、中途半端は嫌いなんですよね」

「ええ。私も嫌い」

「じゃ、観客がいますが・・・」

「仕方ないわよね」

今度こそちゃんと唇を落とす。

生身で触れ合っつてのは唇だけ。

それでも、その温もりは全身に広がる。

抱き締めると女性らしい華奢な身体で、それがまた愛おしい。

胸の中にすっぽりと収まる程に小さな身体なのに・・・。

与えてくれる温もりは全身に伝わり、更には包み込んでくれる。

こうしているだけで、途轍もない幸福感が身を包む。

「・・・ミナトさん」

「・・・コウキ君」

一度離れて見詰め合う。

ちよつと潤んだ瞳が可愛らしくてギョツと抱き締めた。

「・・・おい。忘れてないか？ 俺の事」

観客は黙っててください。

「痛いわ」

「すいません。でも、放しませんよ」

「そう。それじゃあ、この痛みもコウキ君の愛なのね」

「ええ。俺がミナトさんを欲する気持ちの表れです」
「それじゃあ、私も・・・」

ギュッと抱き締められる。

そのちよつとした痛みが逆に嬉しくて。

欲してくれているんだなと幸せを感じる。

「いい加減にしやがれ！」

「・・・」

「・・・」

「な、何だよ!? こちとら忙しい中、お前を探してたんだぞ」

「・・・」

「・・・」

「分かった。分かったから、その眼で見んな！」

はぁ・・・。そろそろかな。

「また後で」

「ええ。分かったわ」

渋々といった感じで離れる俺とミナトさん。

・・・ああ。久しぶりの再開に水を差しやがって。

「それで、俺に何か用ですか？」

「お前の開発したCASの性能試験をしようと思ってな。お前がいた方が何かと便利だろ？」

ふむ。どうするか。

セレス嬢が待つてるんだよなあ。

「・・・そうですね。分かりました。少ししたらそちらへ向かいま
す」

「おつよ。先行って待ってんぜ」

お手数おかけします。

「あ。それとな、さっきの連中に報告しとくから」

「連中って？」

「てめえを撲滅する連盟だよ。ミナトちゃんファンクラブー同だ」

「あら？ 私にファンクラブなんてあるの？」

「当たり前じゃねえか。ミナトちゃんは魅力的な女だからな」

「人の女を口説かないで下さい」

「へっ。眼の前で見せ付けてくれた借りは必ず返すぜ。じゃあな」

あ。行っちゃった。

「さ、ブリッジに行きましょうか？」

「はい。そうですね」

気にしない方向でいこう。

いつものように逃げ切ってしまうえば良い。

「・・・あ」

ブリッジに着いた途端、眼を輝かせてこちらを見てくるセレス嬢。
う。性能試験でまた席を外すなんてとても言えない。

「・・・コウキさん」

「ごめん。遅くなったね」

「・・・いえ。・・・その・・・」

恥ずかしそうに伝えてくるセレス嬢。

流石の俺でも理解してるぜ。

「ほいっと」

パツと俯いているセレス嬢を抱っこしてそのまま自分の席に座る。

「お待たせ」

「・・・はい」

ゆっくりと膝の上に降ろして、後ろから身体を支える。

こうすれば姿勢が安定するしね。

「本当に好きですね。セレス」

隣にいるルリ嬢が苦笑しながらセレス嬢に話しかけた。

「・・・居心地が良いんです」

それは光栄。気に入ってもらえて何よりだ。

でも、どうしよう？ このままじゃウリバタケさんの拳骨が。

「いいの？ コウキ君」

「まずいです」

心配そうに見詰めてくるミナトさん。
うん。どうしようか？

「・・・私、邪魔してますか？」

そ、そんな寂しそうな眼をしないで。

邪魔なんかじゃないから。この時間は俺にとっても至福の時間で。

「それなら、一緒に連れて行っちゃいなさいよ」

「え？」

一緒に連れて行く？

「休暇みたいなもんだから、私が代わりにいれば大丈夫よ。」

セレスちゃんを連れて行っても問題なし」

「ええっと、いいんですか？」

「ここで引き離れたらセレスちゃんに可哀想じゃない」

そう苦笑するミナトさんが女神に見えました。

女神のお導きには従うべきだよな。うん。

「ありがとうございます。ミナトさん」

「・・・あの・・・」

困惑気味のセレス嬢。

ふむ。どうやって連れていこう。

「セレスちゃん。これから一緒にシミュレーション室に行こう」

「・・・え？ どうしてですか？」

「ちょっと仕事があるんだけど、一緒に来ない？」

「・・・あの・・・良いんですか？」
「いいの。いいの」

席を立ちつつ、セレスちゃんを床に降ろす。

「はい」

「・・・はい」

手を差し出す。

なんかもう移動中は常に手を繋いでますね。

「それじゃあ、行ってきます」

「いつてらっしゃい。ふふっ。パパさんみたい」

「・・・」

ノーコメントで。

「お疲れ様です。調子はどうですか？」

シミュレーション室に入る。

「おお。すげえな。CASってのは」

お。意外と高評価？

「ああ。俺達と遜色ねえもんな」

ガイとリョーコさんがそう言ってくれ。
—安心かな。

「付いていくだけで精一杯です」

「お疲れ様。イツキさん。どうでした？」

「最初の方はどうにか健闘できたのですが、最後の方はパターンが読まれてしまつて」

まあ、そうだよな。

それがCASの弱点。

TASで独自カスタマイズすれば別だけど、確かイツキさんは指示調整を使つてる。

読まれたら終わりだよなあ。

「でも、付いていく事は出来ました。IFSには若干劣りますが、それでもほぼ同等の性能かと」

お。そうまで言われれば大丈夫か。

ナデシコパイロットに付いていけるなら、他の場所でも活躍できるだろうし。

ま、イツキさんが優秀つてのもあるんだけどね。

「ねえ、真面目な話をしてる所で悪いんだけど、どうしてセレスちやんがいるの？ コウキ」

「ん？ ヒカルか。何か変か？」

「ええつと、そう訊かれたら何も言い返せないんだけど・・・」

変かつて？ ああ。変だろうな。

それぐらいは自覚してる。

「助手だよ。助手」

「・・・そ、そう」

納得してもらえたかな？

「・・・あの、コウキさん、私何も御手伝いできませんよ」

「大丈夫。ちよっとお手伝いしてくれば」

「・・・分かりました。頑張ってみます」

頑張るといつて両手を握り締めるセレス嬢。

うん。この癒しこそ最高の御手伝いだと僕は思うんだ。

「ウリバタケさんは？」

「おう。ここに」

あ。そこにいたんですか。

シミュレーターで隠れて見えませんでした。

「どうです？ 性能評価」

「おお。やっぱりお前ナデシコとの契約切れたら俺ん所に来ないか？」

「えっと、それはどういう？」

「こんだけのソフトが組める奴はそうはいねえ。優秀過ぎんぜ」

「そ、そうですか。ありがとうございます」

正面から褒められたらちよっと照れる。

遺跡の知識を利用したけど、これは完全に俺のオリジナルだからな。

「さっきも誰かが言ってたが、IFSに劣らないシステムだ。」

「この分ならIFSがない連中でもそれなりに戦えるだろう」

ウリバタケさんからそう評価されると本当に嬉しい。

やっぱり専門職の人に褒められればね。認めてもらえたって事で。

「ちょっとした調整程度なら俺がやっとしてやるよ」

「お。それじゃあ、御願います」

最後はやっぱりウリバタケさんというプロの方に調整してもらった方がいいでしょ。

一応、何度も確認したけどさ。

「コウキ」

「あ、はい。どうしました？ アキトさん」

「ちょっと話したい事があるんだが・・・」

あ。セレス嬢か。・・・どうしよう。

「セレスちゃん。ちょっと待っててくれる」

「・・・はい。分かりました」

「ごめんね。ヒカル！ ちょっと、セレスちゃんの事頼んでいいか？」

「ん？ いいよお。玩具にしちゃうけど」

「玩具にはすんな」

ま、ヒカルに任せれば大丈夫だろう。

パイロット三人娘に玩具にされるかもしれないけど。

「それで？ 何でしょう？」

「ああ。歴史通りなら、テツジンとマジンがそろそろ襲ってくる」

「そういえば・・・」

確かにイツキさんが合流した日に襲われてたな。正しい日付とか覚えてないから忘れてた。

「えっと、今日ですか？」

「可能性としては高い。確実に今日とは限らないが・・・」

歴史は既に変わっている。

襲撃のタイミングだって原作通りとは限らない。

「念の為に作戦を立てておきたいと思ってな」

「何よりもボソソジャンプに巻き込まれないようにしないとイケませんね」

「イツキ・カザマにはもう言ったのか？」

「ボソソジャンプの事ですか？ 言ってます。俺がボソソジャンプを知ってたらおかしいでしょ？」

「いや、まあ、そうなんだが・・・」

カイゼル派にはボソソジャンプの事は伝えてない。木連の事は教えただけ。

「とりあえず、接近戦まではいいとして、くつつき過ぎないようにしないとイケませんね。」

接近戦も一撃与えたら離脱するようにしないと」

「そうだな。今回は彼女が巻き込まれた」

視線の先にはイツキさん。

彼女は合流一日目にして戦死してしまったんだ。

今回はそんな事はないようにしなくちゃ。

「今回はフィールドガンランスがあるから、DFはそれ程、苦にはならないだろう」

「破壊してしまうんですか？」

「いや。自爆される前に機能停止にまで追い込んでおきたい」

そういえば、原作では相転移エンジンのオーバードだか何だかで自爆しようとしたんだよな。

それをアキト青年が必死に食い止めて、月へと飛ばした。

でも、その結果で、アキト青年がジャンパーだと知られ、火星人と
いう条件付けがされてしまった。

今回はどうにかしてそれを成す前に食い止めたいな。

「もし、自爆段階に入ったらどうしますか？」

「それが問題なんだ。前回は俺が二週間前の月に飛んだら？」

「ええ。時間移動してましたね」

「だが、今回は二週間前に月周辺で爆発は観測されていないんだ」

「え？ って事は向こう方は自爆段階に入らなかつたって事ですか？」

「そうとも考えられる。だが、自爆を成功させてしまったとも考えられる」

あ。そうだった。

安直な考えはいけないな。

「万が一を考えて、自爆段階に入った時の事を考えようと思う」

「そうですね。・・・ボソソジャンプを知られずにどこかへ飛ばす方法・・・」

「エステバリス何機かで上空まで引き上げてもいいが、

ボソソジャンプに巻き込まれるかもしれないと思うと不可能だな」

自爆されても問題がない所まで引き上げるか。
作戦としてはいいけど、向こうにボソソジャンプがある以上、通用しないな。

「でも、月には行った方がいいんですよね？」

「ああ。Ｙユニットは欲しいからな」

Ｙユニット。シャクヤクに取り付ける予定だったものを改修してナ
デシコに取り付けたもの。

相転移砲という莫大な威力を有する兵器を使用するには欠かせない
ものだ。

「・・・もしかしたら、マジンだけを飛ばす事が出来るかもしれま
せん」

「何？ それはどうやってだ？ 俺のようにマジンに飛び込もうと
いうのか？」

「いえ。偶然を装おうかなと」

「偶然を装う？」

「ええ」

原作ではＣＣをぶちまけて強引にジャンプフィールドを形成した。
その上でアキト青年がジャンプ場所をイメージしたんだろう。きつ
と。

「俺がＣＣなしでボソソジャンプが出来るのは知ってますよね？」

「ああ。知っている」

「流石に遠隔操作でジャンプさせる事は出来ませんが、物理的に接
触していれば、

もしかしたら、ボソソ砲のように強制ジャンプさせる事が出来る

「かもしれません」

「・・・なるほど。だが、試した事はあるのか？」

「ない・・・ですね」

ボソン砲が機械補助によるボソンジャンプなら俺にも出来るかもしれない。

そんな事を考えてはいたけど、実際に試した事はない。

そもそも何かを指定場所に飛ばすという行為を必要とする時がなかった。

「それならば、確証はないし、危険性が高いではないか？」

確かに出来るという保証はないし、物理的接触という事は危険性が高い。

でも・・・。

「ボソンジャンプという存在を明るみに出さず、

自然に自爆を退けるのは向こう方のジャンプを装うしかない思います」

俺にはこれ以外の方法が見当たらなかった。

「・・・だが・・・」

「大丈夫です。物理的接触と行ってもエステバリス越しですから」

「可能なのか？」

「可能性が高いといった感じですよ。今から試してみようと思います」

「・・・そうか」

他に方法がないならこれしかないと思う。

「分かった。だが、最善は自爆段階に入る前に機能停止にする事だ」
「もちろんです。俺だって、自ら危険な眼に合おつとは思いませんよ」

死にたくないですから。

「了解した。とりあえず方針は決まったな」

「ええ。それじゃあ、俺はブリッジにいますね」

「分かった。すまなかつたな。わざわざ」

「いえ。では」

アキトさんとの秘密会議を終え、他のパイロット達がいる場所へ行く。

「ヒカル。ありがとう。セレスちゃん。帰ろっか」

「ううん。楽しませてもらったよお」

「・・・はい」

「それじゃ、お疲れ様です」

「お疲れ〜」

さてつと、色々と考えてみないとな。

出来れば自爆自体を阻止できればいいんだけど・・・。

第二十九話（後書き）

悩みました。自爆回避の為に何時間も悩み、イマイチ納得できない状態です。

これから再度考え直し、もしかしたら大幅修正を加えるかもしれませんが。

PS・そろそろ学生として勉強に力を入れようかなと思います。

就職試験が迫っているので・・・。

一日一話は流石に厳しいです。

せめて、二日三日に一話は投稿するように心掛けます。

待ってくださる読書の皆さん。大変申し訳ないですがお許し

下さい。

第三十話（前書き）

チマチマ第一号。

意外とこの量ならあまり時間を取らなくて済むかも・・・。

第三十話

「・・・ボソン砲（仮）出来ちゃったよ」

遺跡へのアクセス権。舐めてました。

・・・まさかなあ。本当に出来るとは思わなかった。

「イメージ。イメージ」

手袋をはめ、手袋越しに右手の中にあるコインを左手に移す。

「・・・ジャンプ」

右手からコインの感触が消え、しばらくして、左手にコインの感触。

「手袋越しで出来るなら、エステバリス越しでも出来るよな？」

エステバリスがイメージで動く以上、手袋越しもエステバリス越しも対して変わらないだろう。

CASだったら、機体は機体で動くから無理だと思っけどさ。

「ツウ」

あ、コインだけでこんなに頭が痛くなるとは・・・。
マシンなんか飛ばしたら意識失うぞ。きつと。

今回限りにしておこう。この技は封印だ。

「クソツ。手品にでも応用しようかなとか思ったのに」

絶対にバレないと思うんだ。

正に、種も仕掛けもございませんって感じで。

ボソン検出されたら人生も終わりますけど・・・。

「・・・ま、とにかく、実験は成功。そろそろ」

ウィーンウィーンウィーンウィーンウィーン！

エマーゼンシーコール。

『マエヤマさん。出撃準備を御願いできますか？』

ユリカ嬢からの通信。

今の俺はナデシコ所屬じゃないからユリカ嬢に命令権はない。

でも、かなりの被害を喰らうって分かって放ってはおけないよな。

「了解しました。指揮はお任せします」

『了解しましたあ！』

さてつと、第一目標は自爆完全阻止。

予備策として、強制ボソンジャンプか。

・・・出来れば、強制ボソンジャンプは勘弁して欲しいかな。

意識失うっていうか、頭痛とか嫌過ぎる。

孫悟空みたいに頭を抱える事になりそう。

つてか絶対そうなる。

・・・とにかく格納庫へ行きましょうか。

「マエヤマ・コウキ。高機動戦フレーム。出ます」

他のパイロットからは大分遅れての出撃。

流石に自分の部屋からは遠かった。

・・・大変申し訳ない。

対ジンに最も有効的なフィールドガンランスを装備し、飛び出す。

「・・・既に戦闘中みたいだ」

遅れての参戦。

空から状況を確認・・・。

「っておい！」

確認なんてしてる暇なかった。

原作のようにイツキさんがジンにワイヤードフィストを絡めてる。

「ハッ！」

ワイヤーをイミディエットナイフで断ち切って、イツキ機を突き飛ばす。

突き飛ばした瞬間、マシンがボソソジャンプで去っていく。

ごめん。衝撃は許して。ギリギリ助かったからさ。

『な、何をするんですか！？ コウキさん』

「イツキさん。接近戦は駄目だ！」
「な、何故ですか！？ 瞬間移動にくつついていけば倒せます！」
「リーダーパイロットから指示を受けてませんか？」
「た、確かに遠距離から仕留めるよう指示されましたが・・・」
「コウキ。助かった」

あ。アキトさん。

「イツキ。命令違反だぞ」
「ですが！ この方法しか！」
「黙って従え」
「クツ・・・分かりました」

強引だけど、命には変えられない。

「コウキ。どうする？」

テツジンとマジン。
ロケットパンチやらミサイルやら、攻撃力が高い攻撃ばかり。
特にGBは驚異的。DFすら破られそうだ。
迂闊に近付いても返り討ちにあうだけ。
DFの出力は相転移エンジンのお陰かエステバリスより高いし。

「こちらの機動力の高さを活かして攪乱しましょう。瞬間移動を終えた瞬間が恐らく狙い目です」
「そうだな。了解した。敵が現れ次第、一斉射撃を仕掛ける。それまで回避に専念しろ」

『『『『『了解』』』』』

おお。今の通信、パイロット皆が聞いてたのね。

とりあえず、空中で回避に専念。GBを喰らったらおしまいだと思おう。

『出たぞ。撃て』

アキトさんの声を合図に一斉射撃。

ラピッドライフルは弾かれてしまうけど、レールカノンに命中する。良くて小破って所かな？

やっぱり、DFの強度が高い。

「どうにかして機能停止に追い込まないと」

もしかして、追い込み過ぎても自爆されるのか？

クソッ。どうすればいい。相轉移エンジンに直撃させればいいのか？

『コウキ！ DFをフィールドガンランスで突破する。フォローしてくれ』

「了解しました」

お互いに高機動戦フレーム。

空中から突撃するアキトさんを後方からフィールドガンランスで援護。

ミサイルをレールカノンで撃ち落とし、道を拓く。

「アキトさん！」

『ああ。ハアアア！』

フィールドガンランスをDFに突き立てて、DFを突破するアキトさん。

『撃て！』
「はい！」

俺は後方から、アキトさんはその場からレールカノンを撃ちまくる。DFがないジンシリーズなんてただの的。これだけ撃てば……。

『チツ。逃げられたか』

え？ 逃げられた？

『ジャンプされたぞ』

……そついう事か。

突破された瞬間にボソンジャンプシークエンスに入ったんだな。かなり判断が早い。流星は優人部隊のエリートパイロットといった所か。

『クツ。コウキ。自爆段階に入ったぞ』

……ああ。頭痛くなるつてのに。
クソツ。やるしかないだろ。やるしか。

「どうにかして飛ばしてみます」
『ああ。すまない』

結構、遠いな。
急げ！

「グッ」

急加速で身体にGが掛かる。
クウ。心臓を置いていってしまったかのようだ。

「クソツ」

接近に気がついたのだろう。

遠慮なしにミサイルやらロケットパンチやらを撃ち込んできやがった。

真っ直ぐに急加速してるから、横移動は辛い。

・・・仕方ない。DFを最大で張って強引に突破だ。

『コウキさん、何を！』

『危ないよ！ コウキ』

『おい！ コウキ！ 死にてえのか！』

『お前にも待ってる奴がいるだろうが！』

エールどうも。

死に行くわけじゃないから安心してくれ。

「グウ」

左足破損。

足の一つや二つ。関係ない！

「突破あああ！」

フィールドガンランスを突き立てる。

強度の下がったDFなんて簡単に突破できる。

『コウキ！ 避ける！』

え？

ゴンッ！ ゴタンッ！

グ、グラビティブラストか……。

……大丈夫。アキトさんの声でギリギリ直撃は免れた。
左手破損。でも、問題ない。右手一本あれば触れられる。
後は攻撃を装って、強制ボソソジャンプさせるだけだ。

「ハアアア！」

右手にDFを集中。

これで装甲を打ち破って、同時に強制ボソソジャンプさせる。

ドゴッ！

入った！

後は……。

「イメージ。イメージ」

月軌道上をイメージ。

大丈夫。一度、ナデシコを飛ばしたじゃないか。
イメージは間違っていない。

「……ジャンプ」

ジンを強引に飛ばし、同時にアサルトピットを離脱させる。
これで、ギリギリジャンプを免れたように。。。

「グガッ！」

クツ……。あ、頭が……。

『コウキ。良くやって……。コウキ！ どうした！？ コウキ！』

「……。グツ……。ク……。クウ……。」

わ、割れる……。頭が……。

『おい！ コウキ！ コウキ！』

ちよ、ちよつと黙っててくれ……。

言葉を返す余裕がない。

『コウキ！』

視界が揺らぎ、意識は朦朧とする。

それなのに、痛みは引かずに頭を締め付け続ける。

そのまま……。俺の意識はブラックアウトした。

「……。君」

ん？ 何だ？

「……。キ君」

誰の声だろうか？

「・・・コウキ君」

聞き覚えのある声に眼を覚ました。
重い瞼を開ける。

「・・・ミナトさん？」

そこには心配そうにこちらを見詰めてくるミナトさんの姿。
あれ？ どうしてこんな状況に？

「ええっと、ツツ！」

キーンと頭の奥が痛む。

ほら。あれだ。カキ氷食った後の奴。

その十倍ぐらい痛い。

「コウキ君！ 大丈夫！？」

「ど、どうにか・・・」

痛みはあるけど、そこまではない。

それよりも状況を確認したいんだけど・・・。

「ここは？」

「医務室よ。最近、お世話になってばかりね」

「そう・・・ですね」

本当にそうだ。

火星に行くまでは全然お世話にならなかったのに。
一度医務室にお世話になってから癖になっちゃったかな？

「まったく、危ない事をして。ギリギリ脱出できたからいいものを」
「・・・ギリギリ？」

「ええ。もうちょっとで向こうのジャンプに巻き込まれる所だったわ」

・・・って事は成功したって思っているのかな？

「俺ってどんな形で救助されました？」

「フレーム全部がジャンプに巻き込まれて、アサルトピットだけが地上に転がってたって感じ」

「爆発は？」

「何故かは知らないけど、あっちがジャンプしてくれたお陰で地上に被害はないわ」

フレームは巻き込まれて、アサルトピットだけが残る。

爆発は地上ではなく、月で。

うん。理想的な形で終われたな。

「巻き込まれたらどうするつもりだったの？」

「ええっと、自爆を許したら被害がですね」

「馬鹿！ 貴方が死んだら意味ないでしょ！」

「すみません」

アキトさんとの作戦の事は言わない方がいいな。

アキトさんまで説教喰らうぞ。この様子だと。

「どれだけ心配したか分かる？」

「・・・すみません」
「許さないんだから」

やばいな。これは本当に許してもらえなそうな雰囲気。

結局、一時間近く説教されました。
頭が痛いのに休めないという地獄。
ミナトさんは怒らせないようにしないと・・・。

「分かったの!? コウキ君!」
「は、はいいいい」

もう休んでもいいですか？

「おお！ 大丈夫だったか!? コウキ!」
しばらく休んで、ブリッジに顔を出す。
すると、ギョツと誰もがこちらを見てくる。

「あ、ああ。うん。大丈夫。大丈夫。そんな事より」
「コウキさん!」

おお？ 何故にイツキさん？

「ええっと、何かな？ イツキさん」

「自分で接近戦は駄目だと言っておいて、何をやってるんですか！」
「す、すいません」

「聞きました。あの瞬間移動に巻き込まれた死んでしまっって」

「・・・え？ そうなの？」

「そうなんです！ 巻き込まれたどうするつもりだったんですか！？」

うわぁ。永久ループ。

誤魔化したのに、それすらも怒りの炎を燃え上がらせる結果に・・・。

「ま、巻き込まれなかったんだからさ。ね？」

「結果じゃありません！」

うがぁ。許してくれえ。

「まあまあまあ、コウキだって反省してると思うから許してあげてよ」

「しかし、アマノさん」

ナイスだ。ヒカル。

「大丈夫。もっと怖い人がいるから」

え？ 味方じゃないの？ しかももっと怖いって？

「・・・・・・・・」

グッ。な、何て心が痛む。

「……コウキさん」

ああ。セレス嬢。そんな悲しい眼で俺を見ないでくれ。こ、心が罪悪感で一杯になる。

「……また会えなくなるかと思いました……」

な、涙目？ もはやハートブレイク寸前です。

「い、ごめんね。心配かけちゃったね」

「……許しません。二度目ですから」

え？ セレス嬢まで……。

「ほらね？ 一番効くでしょう？」

「……そうみたいですね。しかし、コウキさんにあんな一面があるとは……」

気楽そうに、この野郎。

つてか、なんか勘違いされた？

「ええっと、ごめん」

「……嫌です」

だ、誰か、助けてくれ。

この無垢な瞳に涙を溜められ、かつ、怒ってますといった表情で見詰められてみる。

自分を全力で殴りたくなる程の罪悪感が湧いてくるぞ。

「……」

「……………」

「ど、どとうしるどー!？」

「セレスちゃん。許してあげて」

「……ミナトさん」

おお。ミナトさん。女神に見えます。

「代わりに御願いを聞いて貰いましょう」

「……御願い……ですか？」

め、女神なんかじゃなかった。あ、悪魔がいる。

「こんなに心配させたんだもの。ちょっとやさっとじゃ許してあげられないわよね」

「……はい」

はいつてちよつと、セレス嬢。

君はそんな子じゃ……。

「御願いは保留にしておいてあげる。セレスちゃん。考えておきなさい」

「……そうします」

……と、とりあえず、許してもらえたと認識して。

「マエヤマさん！ ユリカ。プンプンです!」

ま、まだですか!？ 次は艦長?

「勝手な行動をされては困ります。

今回は運良く敵側が退いてくれましたが、後少して巻き込まれる所だったんですよ!」

「は、はあ……」

一応、巻き込まれても死にませんが……。
飛ばしたのも俺だし……。

「ですが、マエヤマさんに助けられた事も事実です。

あの特攻がなければ、自爆に巻き込まれてナデシコも危なかったでしょう」

「そ、そうですね。いやいや。俺も頑張った甲斐が」

「それとこれとは別です!」

もう! 勘弁して!

「……すまないな。コウキ」

「……すいません。コウキさん」

「……コウキ。ごめん」

あ、謝るぐらいなら助けてください。

「……無理だ」

「……無理です」

「……無理」

グハッ。俺に味方はいないのかあ……。

ミナトさんの説教から数時間後。

ブリッジクルーのたくさんの方々から説教を頂きました。
あれですね。俺って説教されに戻ってきた訳じゃないんですけどね。

「分かってるんですか!?! マエヤマさん!」

「は、は、はい、はい」

もう一度休みに戻らせていただいてもよろしいでしょうか?

「……………マエヤマさん!」「……………」

休めそうにありませえええん!

「どうしたのよ? グタ〜っとして」

食堂。晩飯。心休まる時。

「ああ。カエデ。お前だけだよ。俺の味方なのは」

「な、何言ってるのよ! バカ!」

ふっふっふ。今の俺にお前をからかう元気はない。
もう精神的に無理。

「ねえ、コウキ」

「ん? どうした?」

どこか不安そうに話しかけてくるカエデ。
何だっただ？

「護ってくれるのよね？」

「あん？」

「私が貴方と一緒にいっても、貴方は私を助けてくれるのよね？」

「はあ？ 当たり前だろう。責任もって面倒見てやるよ」

「だ、誰が面倒を見るよ。むしろ、私が貴方の面倒を見てあげるわ」

「じゃあ、そうしてくれ。お前に全て任せる」

基地暮らしは面倒な事が多いんだ。

面倒を見てくれるってんなら面倒を見て欲しい。

「い、嫌よ。何で私が貴方の面倒を見なくちゃいけないのよ」

「はあ……。自分で言ったじゃん。面倒見てあげるって」

「じよ、冗談よ。冗談に決まってるでしょう。……予想外だったわ。まさかそう返してくるとは……」

ボソボソと小さな声で話されても聞こえないっての。

「とりあえず、お前は承諾してくれたんだな？」

「だって、仕方ないじゃない。それ以外に方法がないんだもの」

そっか。なら、ちゃんと俺が面倒見てやらないと。

「ねえ、どうして、貴方はそんなに私を実験に参加させるのが嫌なの？」

……やっぱり、気になるよなあ。

「今日の戦闘の事、何か知ってる？」

「ええっと、一応はモニターに出てたし」

それじゃあ、ボソソジャンプって事ぐらい教えてもいいよな。

「あれ、敵の大きな機体が瞬間移動してたじゃん」

「そうだったわね。何の手品かと思ったわ」

手品って・・・気楽だな。おい。

「あれがボソソジャンプっていう奴だ」

「ええ？ それじゃあ、私にも瞬間移動できるって事？ それって
凄い事じゃない」

喜んでる場合じゃないぞ。

「そりゃあ、瞬間移動できたら便利だろうよ」

「そうよね。何でそんなに嫌がるの？」

「それじゃあさ、お前、瞬間移動できたら何するよ？」

「それは色んな事に使えるじゃない。お買い物とかさ。寝坊しちゃう
った時とかさ」

まあ、普通はそれぐらいだよな。

俺だってそれぐらい気楽に使えるれば嬉しいよ。

「そう。色んな事に使えるんだ。たとえば、爆弾抱えて飛べばテロ
にだって使える」

「・・・テロ？ でも、それって話が飛躍しすぎじゃない？」

「馬鹿。それじゃあ、何でネルガルがあそこまで強引に欲しがるん
だよ」

「ば、馬鹿って何よ！」

「良く考えてみる。世界中の誰もが瞬間移動を使えれば問題はないかもしれない。」

でも、もし、この世でお前だけが使えたらどうなると思うっ？」

「そりゃあ、私は引つ張り尻ね。世界一有名になれるわ」

「その前に実験のモルモットにされて終わりだよ」

「な、何でよ!？」

そんなに驚くような事でもないだろうに。

「当たり前だろ。色んな事に使える便利な特技を持っているんだ。

誰だって確保したいと思うだろうっ？」

「そ、それは・・・」

「そして、何故使えるのかを散々調べて、自分達も使えるようにしたいと思うのも当然の事だろ？」

その結果、実験のモルモットって訳だな」

「だ、だったら、すぐに瞬間移動で逃げればいいじゃない」

確かに逃げればいいんだけどさ。もちろん、ココがなつきゃ飛べないけど。

「俺は嫌だけどね。毎日が逃げる日々。いつ襲ってくるか分からずに毎日不安に過ごすなんて」

「・・・そ、それは・・・」

誰もが使える夢の道具とかならないよ。

でも、一人しか使えないとなったら、誰だって確保したいと思うのは当たり前。

「お前が凄く強かな奴なら大丈夫だと思うぜ。」

でも、大企業だったり、軍だったり、そんな奴らと対等に渡り合えるかよ？」

「・・・無理ね」

「だろ？ だから、たとえお前に瞬間移動できる素質があっても、そんな事、周囲に広めるのは愚かなだけなんだよ。別になくても困らないしな」

「それじゃあ、コウキはずっと私の事を心配して、忠告してくれていたの？」

「危ないって分かかって止めない奴はいないだろうが・・・」

「・・・コウキ」

悲劇しかないと分かってて勧める奴なんていないだろうに。あんな未来は悲惨過ぎる。

「し、仕方ないわね。そ、そこまで言うのなら、付いて行ってあげるわよ」

「まったたく・・・」

素直になれないかねえ。もっと。もう少し教えといてやるか。

「それにな。ネルガルの実験って既に何回も失敗してる訳よ」

「そういえば、あの人も多くの犠牲者が出てるって言ってたわね」

「だろ？ その人達はもう死んじやってるらしいんだ」

「・・・死んじやってる？」

「ああ。だから、もしお前に素質がなかったら、お前は実験失敗で死んでたかもしれないんだぞ」

「う、嘘」

「本当」

多分、大丈夫だと思うけどね。

「・・・ねえ、どうしてコウキはそんな事に詳しいの？ 普通は知らないでしょ？」

「マエヤマ・コウキ。特技はハッキングってな」

「ハ、ハッキングって。もしかして・・・」

「ま、そういう事だ」

本当は違うけど。

「そっか。ふふっ。一つ弱味を握った気分だわ」

「ん？ 何だ？」

「ハッキングって犯罪よね？ いいのかなあ？ そんな事して」

「バレなつきやいいんだよ」

「でも、私は知ってる。本人の口からの証言もある。ふふっ。何を奢ってもらおうかしら」

「て、てめえ、それが恩人に対する態度か？」

「それはそれ。これはこれよ」

クウ。こいつめえ〜。

・・・ま。証拠不十分で無駄だと思うけどね。

俺の証言つてのも録音してた訳じゃないし。

「ま、今は許してあげるわ。助けてもらったもの」

「何だ？ それで借りは返したとか思ってたのか？」

「へえ。貴方、恩を着せようだなんて考えてたの？ 小さな男ね」

カッチーン。

「んな訳ねえだろ。恩を着せようだなんて思ってたねえよ」

「じゃあいいじゃない」

「良くないだろ。まったく。恩を仇で返しやがって……」

最近、こんな役ばかり。

「ありがとね。コウキ」

「何だよ？ 突然」

「なんとなくよ。なんとなく言いたくなつたの」

「ふん。変な奴」

「貴方に言われたくないわよ」

「はあ？ この普通の人間に対して何を」

「はいはい。普通の人間じゃないって自覚しなさい」

普通の人間ですから。

「所でさ、補佐役？ 副官だっけ？ って何をするの？」

「一応は副官扱いだ。んで、特に仕事はないぞ」

「え？ そうなの？」

「ああ。正式な副官は軍の方で用意してくれるらしいからな。」

お前じゃ俺の仕事手伝えないだらうしさ」

「ば、馬鹿にしないでよ。それぐらい出来るわ」

「無理だから。ま、それはいいんだよ。それで、お前には食堂で働いてもらおうかなあって」

「食堂って軍の？」

「そうそう。ほら、軍の食事ってナデシコに慣れてると全然物足りなくてさ。」

お前の料理が食えたら嬉しいなあって」

「そ、そこまで言うのなら食べさせてあげない事もないわ」

「お。マジか。嬉しいな。最近舌が寂しくてさ」

まずい訳じゃないんだけど、やっぱりナデシコの食事と比べると劣っちゃうよな。

「名目は俺の副官。勤務場所は軍の食堂。ま、そんな所かな」

「分かったわ。でも、私に手伝える事があればやらせなさいよ。副官なんだから」

「お？ どういう風の吹き回しだ？ お前が自分から手伝おうなんて」

「私だってそれぐらいはするわよ。恩知らずじゃないもの」

「ま、そういう事にしておきますよ」

「何よ。バカ」

不貞腐れてやんの。

しかし、これで美味しい食事が期待できる。

おお。やる気が出てきた。

「お前、今日のシフトは？」

「夜までよ。なんだかまだここに残れそうだったから、仕事を入れてもらったの」

「他の人はもうとつくに降りてるもんな」

「ええ。ナデシコにいるのはもう私だけじゃないかしら」

よく働く事で。

意外と真面目なんだよな。こいつ。

もっと傍若無人なのかと思ってたけど。

普段の様子的に。

「そつか。じゃ、その頃にもう一回こっち来るわ」

「何だよ？」

「届けもんだよ。一応、俺の副官になるんだから、軍服を渡そうと

思ってたな」

「ええ？ 嫌よ。着たくないわ」

「形だけだから我慢しろ。慣れればそんなに悪くないぞ」

「私はコック。軍服なんて着たくもないわ」

「ま、ちよい我慢しろ」

「分かってるわよ」

さてっと、辞令を受け取りにいかないとな。
もうそろそろ来てるだろう。

「んじゃ、またな」

「ええ。分かったわ」

今の所は予定通りに進んでる。

さつき連絡があつて、月周辺で爆発が観測されたらしい。
ネルガルがそれに焦れば月へナデシコを向かわせようとするだろう。
二週間分のズレでどう変わるのかな？ シャクヤク襲撃も更に二週
間延びるのか？

まあ、後はアキトさんに任せるしかない。俺は地球に残って自分の
仕事をしないといけないし。

あ。もう白鳥九十九さんはナデシコにいるのかな？

脱出ポット、まあ、ジンの頭部なんだけど、回収したって言った
し。

ふう……。色々と立て込んで忙しくなってきた。

クリスマス。ミナトさんと一緒に過ごしたいんだけどなあ。

……。あ。そういえば、クリスマスパーティー、どうなったんだろ
う。

もしや、終わった？ はあ……。俺って奴は……。

第三十話（後書き）

納得できない展開のまま進めてしまいました。

強制ボソソジャンプ。実はあまり快く思ってません。

これはやりすぎな気がしてまして・・・。

第三十一話

「う、嘘でしょ？」

嘘じゃないんだ。

「だ、だって……」

ああ。気持ちは分かる。

「……私には信じられないわ」

そうだな。俺だって信じられない。

「ま、まさか……コウキが女だったなんて」

そう。俺は。

「っておい。違っただろうが！」

んな事、一言も言っただねえ！

「え？ 違っの？」

「当たり前だろうが！ 何だ！？ どうすれば俺が女に見える？」「見えない」

「見えないだろ？ 見えないよな？ じゃあ、何でそうなる！？」
「ん〜。なんとなく？」

首を傾げて指を顎に当てて・・・この女。

「なんとなくっつておい！ 何だ？ 男の証拠でも見せてやるっか？」

「や、やめなさいよ！ 見たくなんてないわよ！」

「ほお。何を見せられると思ったんだ？」

「ちよ、あ、貴方、馬鹿じゃないの！？」

「ああ。馬鹿だ。馬鹿で結構」

「ひ、開き直ってるんじゃないわよ！」

「ハツハツハ・・・はあ・・・」

そろそろ終わりにしようか・・・。

「・・・現実逃避はやめないか」

「ええ。そうね。私もそう思うわ」

「ふう・・・。日頃ツッコミキャラのお前がボケると反応が遅れる」

「はあ！？ それぐらいちゃんとフォローしなさいよ！」

「理不尽だあ！」

おっと。マジで現実逃避はやめておこつ。

「・・・本当の話なの？」

「まあ、信じられないかもしれないがな」

遂に白鳥九十九さんが捕まった。

そして、その口から木連の事が告げられる。

地球人にとっては青天の霹靂。

予想外に予想外を重ね、更に予想外を重ねたぐらいに予想の範疇を

超えていたと思う。

誰だって信じないよな？

今まで戦っていた相手が未確認の勢力ではなく、元々地球人だった者達だなんて。

「・・・だって、信じられないもの」

「だが、実際に木連と告げる人間がいるぞ」

「あんなの出任せよ。木星に人がいる訳ないじゃない」

そう。それが地球人と火星人の常識。

でも、その常識は作られたものなんだ。

「話してみるか？」

「・・・え？」

「木連から来たっていう男と話してみるか？ 俺が頼めばきっと機会を与えてくれる。」

「というよりも俺もその男に用があるしな」

「・・・」

黙り込む力エデ。

「お前が木星蜥蜴、いや、木連に恨みがある事は俺も良く知ってる。

別に恨むなというつもりはない。だけど、話してみるのもいいんじゃないか？」

木星蜥蜴という知性を感じない一方的な侵略者であるからこそ、単純に恨んでいられた。

だが、何か理由があり、どうしようもなく争い始めたのだとしたら・・・。

恨みは消えない。憎しみは消えない。でも、何か思う事があるかも

しない。

「どうする？ カエデ」

俯くカエデに問いかける。

「・・・分かった。お願いできる？」

「了解した」

木連の存在を知り、復讐の念を抱くカエデがどうなるのか？

それを俺は知りたかった。

火星の人達の木連に対する思い。

それを把握してなければ、カイゼル派の働きは何の意味もなくなってしまうからだ。

地球と木連との間に嘘偽りのない平和を。

それこそがカイゼル派の目的。だが、そこで火星の人間を忘れてはいけない。

火星の人達は完全なる被害者。

地球と木連とのエゴとエゴの争いに巻き込まれただけの被害者だ。

彼らを無視して両国家間で勝手に和平を結ぶ？ そんな馬鹿げた話があつてはならない。

地球からも、木連からも、火星の民達に謝罪と弁償をしなければならぬと俺は思う。

「それなら、行くか」

「・・・分かったわ」

もちろん、その程度で許してもらえとは思っていない。

でも、まずはそこからが始まりだと俺は思うんだ。

いつか、国家間の枠を超えて歩み寄ってくれればって。

・・・そう願うのは傲慢なのかな？

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

懐かしい独房の中、一方的に敵意を向けるカエデと困惑するシラトリさん。

「貴方は先程の・・・」

軽く一礼。

「突然の訪問すいません。訊きたい事がありました」

「はい。何でしょうか？」

「シラトリさん。貴方は火星に対して木連が何を仕掛けたか理解していますか？」

「・・・宣戦布告もせずに攻め込んだ非は認めます。」

ですが、我々にはああするだけの理由がありました。されて当然の罪が貴方達には

「ふさけないで！ どんな理由があつたって勝手に攻め込んできていい訳ない！

当然なんてないわ！ 返してよ！ 私に返して！」

「カエデ。落ち着け」

「離して！ コウキ！ 離しなさい！ こいつに！ こいつに、私は！」

「カエデ！」

独房の檻に掴みかかるカエデを抑える。
カエデは射抜かんばかりの目付きでシラトリさんを睨みつける。

「あの彼女は？」

「彼女は火星大戦で全てを失った者です」

「ッ！？ そう・・・ですか・・・」

俯く九十九さん。

別に彼一人が悪いと言っている訳ではない。

だが、自覚して欲しい事がたくさんある。

「貴方達は正義の戦いと称してるそうですね」

「当然です。我々は先祖の苦しみや憎しみを返しているだけなので
すから」

「何が正義よ！ 私の家族を殺しておいて！」

「カエデ。落ち着けてば」

駄目だ。予想以上にカエデの憎しみは深い。

でも、俺にもきちんと言っておきたい事がある。

少し静かにしてもらおう。

「カエデ。後で話す時間を作るから」

「・・・ふんっ」

すまん。ちょっと待っていてくれ。

「正義・・・と言いますが、宣戦布告もせず、戦う理由も告げず、
一方的に滅ぼす。」

「そんな侵略者たる貴方達が正義であるか？」

「・・・それは・・・」

「我々にとつては悪魔のような所業です。火星の民達は一生貴方達を許す事はないでしょう」

「それは我々の台詞です！ 私達は、決して地求人（地球人）を許しはしない！」

「それでは、何故地球人の非を告げずに責めるのです？

何を持って復讐と成すか。それをきちんと戦争前に告げるべきでしょう」

「私達は和平の使者を派遣しました。それを暗殺という形で殺したのは貴方達だ」

・・・やっぱり、和平の使者が派遣されてたんだな。

それを地球政府が汚点を隠したい為に暗殺した。

本当に火星は一方的な被害者だ。地球の勝手な判断で全滅させられた。

「和平の使者が派遣された。地球が貴方達にした所業。それら全てを俺達は知らないんですよ」

「知らないでは済まされない！ 私達は正当な権利を持ってして攻撃を開始したまでです」

知らないでは済まされない、か。

それもまた道理だな。

汚点を隠す為に木星蜥蜴と偽り、民間に何も告げずにいた地球政府。・・・やはりまずは地球政府をどうにかしないと駄目って事か。

「それでは、これは戦争であり、貴方達の本拠地を攻撃しても許されるという事ですね」

「そ、それは・・・」

「今まで一方的に地球側は被害を受けていました。」

「それらの憎しみを返しても貴方達は許してくれるんですね？」
「……………」

戦争である以上、被害が出るのは仕方のない事だと思う。

でも、何も知らない、何も攻撃する術を持たない者を殺めたという事は紛れもない事実。

もし、それを正当化するというのなら、恨みを返されても文句は言えないって事だ。

「最後に、こうして悪である俺達地球人と交流した訳ですが……………」
「……………」

「俺達は貴方達の思う悪でしたか？」

「…………そんな事はありません。貴方達は捕虜である私に対しても礼儀を通してくれた。」

「極悪な地球人とはまるで違う」
「…………そうですか」

少しでもそう意識が改善されたのなら良かったと思う。
シラトリさんだけじゃない。

俺達はお互いの事を知らな過ぎる。

互いに歩み寄る事は無理でも、知ろうと思う事が大事だと思う。

「俺の用事はそれだけです。後は……………」

カエデ。お前の、火星人の思いを聞かせて欲しい。

「…………私は絶対に貴方達を許さない！」

「……………」

「…………ただ普通に生きてただけ…………ただ毎日を静かに生きてただけ。」

それが突然壊されたのよ！ 貴方達のせいで！」

「……」

「私達が何をしたっていうの！？ 私が貴方に何をした！？
どうして私は家族を失わなければならなかったの！？」

……爆発した。

今まで溜めに溜め、誰にも話せなかった負の念が一気に解放される。
ずっと我慢してたんだって今更気付いた。

俺にはこいつを苦しみから解放してやる事は出来ないのだろうか？

「私に力があれば、貴方達に復讐してる。でも、私には力がないから……何も出来ない」

悔しげに拳を握るカエデ。

その姿は力を求める復讐者そのものだった。
力さえあれば、絶対に復讐してやるのに！
そんな気持ち痛み程に伝わってきた。

「貴方達の先祖がどんな目にあつたかなんて私には分からない。

もし分かってても私には関係ない」

「関係ない！？ その発言は許せ」

「関係ないわよ！ 私が貴方達を憎む事に貴方達の理由なんて関係ない！」

「ッ！」

「私は貴方達と同じ人間であろうと、たとえこうされるだけの理由
があるうと、絶対に許さない」

そう言って、去っていくカエデ。

その背を追おうとも思ったが、少しだけシラトリさんに言いたい事が出来た。

それを言い終わったら、カエデを追おう。

「……………」

去っていくカエデの背を見詰め続けるシラトリさん。

あれだけの激情を突きつけられ、今のシラトリさんは何を思っているのか？

「…………これが戦争ですか……………」

「そうですね。争いがある限り被害者が出る事は当たり前です。

そして、憎しみをぶつけられる事もまた当たり前」

「…………私には覚悟が足りなかった……………」

よく見れば、シラトリさんは震えていた。

命の重さに気付いたのだろうか？

今までは無人機でゲームのように敵を殺すだけだった。

当たり前だ。それじゃあ心は痛まない。

でも、実際に憎しみをぶつけられる事で、

命を奪うという事がどれだけの意味を持つのかを実感したんだと思う。

「俺は火星人じゃないので、貴方達に何も言えませんが」

「…………そうか」

「だけど、憎しみが憎しみを呼び、貴方達も復讐される側の立場となった。

これからも戦争を続けるつもりでしたら、いつまでも自分達は正義だと思わない事ですね」

「…………ああ」

「それだけです。あいつのフォローはしておきます」

「…………すまない」

「いえ。それでは」

そう言つて、その場を後にする。

シラトリさんはこれから色々考える事があるだろう。

この交流が彼にとって良い影響になるといいんだけど……。

「さて、カエデは何処に行つたんかな？」

フォローしようにも何をしてもいいか分からない。

でも、話を聞いてやる事ぐらいは出来るよな。

「カエデ」

「……コウキ」

木星蜥蜴が人間である事を知り、こいつも苦悩してるんだろうな。
だから、ここなんだろ？

「火星の景色……ね」

展望室。

数多の景色を表現する夢の世界。

滅ぼされる前の火星すら、この世界でなら具現化できる。

「……ごめん。気付いたらあんな事になつてた」

「謝るなんてお前らしくない」

「わ、私だつて謝るわよ。……冷静に話してみようとは思つたん

「ただど……」

冷静に話そうと思った。でも、駄目だった。

「……それ程、カエデの想いが深いって事だと思う。」

少なくとも、俺だって復讐の対象が目の前にいたら激情をぶつける。

「私ね。目の前に家族を奪った相手がいるって思ったら、ついカッとなっちゃたのよ」

「別に悪いだなんて言っていないだろ？ 俺だって多分そうなるし」

「……そう。ねえ、私が間違ってるの？」

間違ってる？

「何がだ？」

「彼らにもああするだけの理由があった。そう言ってたわね。」

それなら、私達が間違ってる、これは自業自得って事じゃない。

「じゃあ」

「そんな事はないさ。お前が間違ってるなんて事はない。」

家族を殺されて何も思わない奴の方がどうかしてる」

「……そっか。ねえ、彼らは過去、何をされたの？」

「俺が知ってると思うか？」

知ってるけど。」

「なんとなくコウキなら知ってるかなって思っただけよ。別に」

「知ってるぞ」

「って、知ってるの!？」

「ああ。俺が知らない事なんてこの世にはない」

事実です。紛れもない。

「・・・どこの変人よ。貴方」

「変人も何もどこにでいる普通の青年だが？」

「絶対に普通じゃないわ」

「・・・そこまで断言されると傷付くな」

「事実だから仕方ないわ」

うわ。マジで落ち込む。

俺は自分の事を普通の人間だと認識してるのだが・・・。

違うのか？ まあ、異常な能力持ちなのは認めるが・・・。

「やっぱり貴方と話すのが楽だわ。馬鹿らしくなってくる」

「それは褒められてんのか？ 貶されてんのか？」

「褒めてやってんじやない。感謝しなさい」

「おい。こら」

偉そうに、こいつめ。

「それで？ 教えてくれるの？」

「馬鹿にされたから教えてあげない」

「子供ね」

「ああ。いつまでも少年の心を忘れないのが男っていう生き物なんだよ」

「何、ガキな事を正当化しようとしてるのよ」

「ガキだと？ てめえは俺を怒らせた」

「はあ！？ 変な事ばかり言っていないで、さっさと教えなさい」

つれない奴。ま、いつか。

「木連つてのは略称でな。正式名称は恐ろしく長い。えっと、確か・・・そうそう。」

木星圏ガニメデ・カリスト・エウロパ及び他衛星小惑星国家間反地球共同連合体」

「長い。短くしなさい」

「嫌」

「貴方だつて嫌でしょ？ そんなに長いのを何回も言うの」

「ああ。嫌だ。だが、ネタとしては言い続けた方が面白い」

「はあ・・・。貴方の思考回路は独特過ぎて意味がわかんないわ」

「それは光栄」

「褒めてないわよ！」

話が進みませんね。

「ええっと、簡単にでいいよな？」

「ええ。難しく言われたつてわかんないもの」

このお馬鹿ちゃんめ。

「元々は月へと移り住んでいた人達だつたらしいんだ」

「月つて今でも人が住んでるじゃない」

「もう百年近く昔の話だな。二十二世紀の最初の方だ」

「そう。木連？ だっけ、彼らの歴史はそんなに昔から始まつてるのね」

「ああ。それでな、月へ移住した人達。

彼らは月を一つの国家として認めてもらおうと独立運動を行い始めた」

「独立運動。そういえば、火星でもそんな動きがあつたらしいわね」

アキト青年の両親が殺された時の話か。

確かテロ紛いの方法だったって聞いたけど……。

「ま、火星の事は置いてだ」

「そうね。早く話さない」

お前が話の腰を折ったんだろぅが……。

「地球側としては独立なんて認めたくない訳だよ。月は地球政府の一員だとしておきたいんだ」

「ま、そのあたりはなんとなくって事で納得しとくわ。良くわかんないもの」

「……ま、お前は美味しい料理を作ってくれればいいや」
「なっ！？ それって……」

料理が出来れば文句は言うまい。
他に取り得がなければ、勉強しろと言うつもりだったが……。

「んで、だ」

「スルーされたわね。私」

「ん？ 何の話だ？」

「なんでもないわよ！ 早く！ 続き！」

何なんだ？ 一体。

「地球側はどうしても独立を阻止したい。でも、直接介入が許されない」

「何で？」

「そういうもんなんだ」

「そういうものなのね」

それでいいのか？ カエデよ。

「ああ。だから、月側に内部抗争を誘発する工作を行った訳だ。独立派と、そうだな、保守派とでも言えればいいのか」

「要するに月の中で内乱が起きちゃった訳ね」

「お。良く分かったな」

「それぐらいは分かるわよ」

「うんうん。成長して嬉しいぞ。俺は」

「保護者か！」

「違う！」

「突っ込みに突っ込みで返すのはどうかと思うわよ」

「それもまた一つのギャグだ」

「はぁ……。続き続き」

そうだな。続き続き。

「んで、結局内乱が起きて、無念にも月の独立派は争いに負けた。

その後はテラフォーミングしたばかりの火星に逃げ込んだらしいんだ」

「火星に？」

「おう。それで、だ。独立派をどうしても殲滅したい地球側は火星に核ミサイルを撃ち込んだ」

「か、核ミサイル？ それじゃあ、その独立派っていうのは……」

「ああ。僅かな数を残して後は全滅したよ。火星にも影響が出ただろうな。地形とか」

きつと百年の間に異常が出ないくらいに修復したんだろう。

そっでなっきゃ、公転周期とか自転周期とか変わって偉い事になっちまう。

「その残された人達はどうなったの？ 火星に隠れ住んだの？」

「いや。それも無理だと判断したんだろうな。火星から離れ、更に遠い木星へと移り住んだ」

「そう。それで、木連か。でも、テラフォーミングも出来てない木星で良く生き延びたわね」

「ああ。人間って凄いんだな」

本当は遺跡とか、プラントが見付かったらしいけど、それを俺が知ってたらおかしいよな。

「何で生き延びられたの？」

「え？ 流石にそこまでは知らないよ」

「へえ。知らない事なんて何もないんじゃないの？」

「ほお。この俺を挑発するつもりか？」

「ええ。そんな事ないわよ。ただ、断言しておいてカツコ悪いなあって」

カツコン。いいだろう。教えてやろうとも。

「木星にはな、俺達の知らない超文明があったんだ」

「それで？」

「木星圏ガニメデ・カリスト・エウロパ及び他衛星小惑星国家間反地球共同連合体は」

「縮めなさい」

「嫌じゃ！」

「いいから！ 縮めなさい」

「木星圏ガニメデ・カリスト・エウロパ及び他衛星小惑」

「・・・コウキ」

いいじゃんかよお。睨むなよお。

「コホン。木連はその超文明を活かして過酷な環境を克服できたんだぞうだ」

「でも、少数だったんでしょ？ 良く子供とか出来たわよね」

「あまり良くは知らないが、遺伝子改良とかもしていたらしいな。」

木連は女性が少ないらしいんだが、その原因もそれらしい」

「へえ。そうなんだ」

「ああ。お前でも木連ならモテるんじゃないか？」

「貴方、馬鹿にしてるの？ 私はこっちでも充分モテる」

「もうちよつと成長してから言おうな。そういう事は」

「うるさいわよおお！」

やっぱり気にしてるんだな。身体の事。

「・・・随分と詳しいのね」

「・・・あ。もしかして、言い過ぎた？」

「・・・だよな。調子に乗って語り過ぎてしまった。」

「貴方、知っていて黙ってたんじゃないでしょうね？」

「グッ」

ひ、否定できない。

「何でそんなに詳しいのか説明してもらいましょうか？」

「・・・はあ」

「何故に溜息！？」

仕方がない。カイゼル派の事を少し話そう。

「俺はな。連合軍に所属してからある派閥と接触した」

「ある派閥？」

「ああ。その派閥はきちんとした形で木連と向き合おうっていう派閥でな。」

「今、俺もその派閥の一員なんだ」

「その派閥が木連について調べてたのを教えてもらったって事？」

「そうなるな」

「そう。それでそんなに詳しいのね・・・」

「元から知ってて情報を提供したのがこっちだって事は言わない方がいいよな。うん。」

「当然、俺の副官であるお前もその派閥に関わる事になるだろうな」

「・・・」

「俺は丁度いいきっかけじゃないかと思ってる。」

「お前がこの派閥に関わってれば、木連の情報もお前に行くだろうからな」

「それは、私の考えを改めさせようって事？」

「凄い剣幕で睨まれました。」

「別に改めようという訳ではない。ただ、お前にもきちんと受け止めて欲しいだけだ」

「受け止める？」

「ああ。地球政府のせいで木連の存在は秘密のままにされてきた。」

「それは間違っているだろう？ 少なくとも俺は間違っていると思う」

「・・・そうね。過失があるなら認めないといけないわ。誤魔化そうとしたのは許せない」

「そうだな。だから、お前にも逃げずに正面から受け止めて欲しい」

んだ。

恨みや憎しみを捨てるとは言わないが、もっと木連の事を知った上で結論を出してもらいたい」

「・・・そんな言われ方したら、拒否なんて出来ないじゃない」

実際、互いの事を知らずに争ってたら永久に解決しない。

まずは互いの利害を知る必要があると思う。

「・・・分かったわ。私も色々と考えてみる」

「おう。そうしろ。そうしろ」

「偉そうね」

「そうか？ ま、いつでも話相手ぐらいにはなってるから」

「ありがと。意外と役に立つわよね。貴方って」

「意外とは失礼だな。俺は何でも役に立つぞ」

それなりにだけど。

「・・・そうね」

あ。肯定していただけるんですか。

ありがとうございます。

「ねえ、コウキって火星育ちなのよね」

「あ、ああ。一応は」

「一応って何よ？」

「え？ ア、アハハ。気にすんなよ。それで？」

「怪しい……。ま、いいわ。どこに住んでたのかわかって……」

それから、偽りの経歴をどうにか誤魔化しつつカエデと火星の事を話した。

怪しまれながらも、どうにか楽しいおしゃべりにする事は出来たと
思う。

俺なんかじゃ話し相手になる事ぐらいしか出来ないけど、
それでも、少しでも気が楽になってくれているのなら……。

俺にも多少は意味があつたって事かな。
支えてやるうって決めただから、それぐらいは役に立ちたいな。

「それじゃあ、行ってきます」

ナデシコがネルガルの意向により月へと向かう事になった。

その為、俺とカエデはここで降りる事になる。

次に合流するのは、多分、次にナデシコが地球に帰ってきた時だろ
う。

うくん。結構、長いのね。

「……コウキさん」

「寂しい思いさせちゃってごめんね」

「……いえ。仕方がないって分かっています」

うう……。む、胸が痛む。

そんな寂しそうな眼で見られたら、思わず連れて行きたくなくなっちゃ
うじゃないか。

「ごめんね。多分、次、また来る時はちゃんとした合流だと思うか
らね」

「……はい。待っています」

本当にごめんなさい。ああ。俺にどうしろと？
・・・神よ。恨み申し上げます。

「留守は任せる。お前はお前の仕事をやってこい」
「はい。アキトさんも。ナデシコの事は任せました」
「ああ。任せる」

大丈夫。ナデシコのパイロットは一流揃いだ。
完璧に成し遂げてくれる。

「コウキさんの分は私がきちんと果たします」
「イツキさんはイツキさんのやり方があるでしょ？」
俺の代わりじゃなくて、イツキさんはイツキさんらしくやらない
と」

「そう・・・ですね。それでは、教官、今までありがとうございま
した」
「きよ、教官はよしてくれ」

そんな柄じゃない。

「いえ。コウキさんは間違いなく私達の教官ですよ」
「・・・はあ。ま、いいや。イツキさん。頑張つて」
「はい。コウキさんも」

合流パイロットとして色々大変だと思いますが、頑張ってください
い。

「マエヤマ・コウキ。散々私の邪魔をしてくれたお返しは必ずする
から」

「あ。それなら、寿司でも奢ってください。一流店の」
「そうじゃないでしょ！・・・私は諦めた訳じゃないから」
「ええっと、何の話ですか？」
「クツ。そうやって貴方はいつもしらばっくれて」
「すいません。身に覚えがないもので」
「覚えてなさい！」

悪役ですよ。その去り方じゃ。
しかし、まだ諦めてない、か。
まだ警戒を怠っちゃ駄目って事なのかな？

「・・・コウキ君」

「ミナトさん。また、離れちゃいますね」

「仕方ないわ。必要な事なもの」

理解のある方で嬉しいです。

「これ。大事にするわ」

そうやって首元からネックレスを取り出す。

これはクリスマスプレゼントとして贈らせて貰った。

「俺もですよ」

俺も首元から取り出す。

これはミナトさんからクリスマスプレゼントとして貰ったものだ。
セレス嬢のプレゼントと一緒に買いにいった時、
ちよつとだけ別行動を取る事にして、その時に買った。

偶然にも同じ物であり、何となく恥ずかしく、同時に嬉しくもあった。

似てる者同士なのかもなつて。繋がってるなつて。

ちなみに、セレス嬢には等身大、もちろん、セレス嬢に合わせた大きさ、のテディベア。

ちゃんとサンタさんのプレゼントとして枕元に贈りました。

今では抱き枕となっているらしく、感無量。

「それじゃあ」

「ええ」

必要以上に言葉はいらない。

言葉じゃなくて、温もりが伝えてくれるから。

「いってらっしゃい。コウキ君」

「行ってきます。ミナトさん」

笑顔で見送ってくれるミナトさん。

それだけでやる気が漲ってくるから不思議だ。

本当なら離れたくないけど、きちんと仕事をしないと怒られちゃうし。

さっさと終わらして、早く合流しようという結論になった。

おっしゃ。さっさと基地に戻ってやる事をやっしまおう。

その頑張り分だけ、早くナデシコに帰ってこれるのだから。

・・・多分。

「彼女がキリシマ君かね」

ミスマル提督の待つ連合極東方面軍の基地に帰ってきた。
早速、カエデの事を紹介しなくちゃ。

「はい」

挨拶をしると促す。

「キリシマ・カエデ」

「……いやさ。連合軍が嫌いだからってもうちょっとちゃんとした挨拶しようよ。」

「すみません」

ああ。恥ずかしい。

「いや。構わんよ。マエヤマ君に聞いた所、食堂の方で働いてくれるそうだね」

「……はい」

「……言葉少なっ。」

ま、まあ、すぐに慣れてくれるさ。うん。

「後でマエヤマ君に案内してもらおうといい。任せるよ。マエヤマ君」

「ハッ。了解しました」

「……え？」

「……何を驚いた顔で見てるんだよ。カエデ。」

これぐらいは出来るぞ。これぐらいはな。

形だけでも習ったんだ。敬礼。

「それと、君の新しい副官を紹介しよう。カグラ君。入ってきてくれたまえ」

「ハッ」

提督の声を合図に扉が開く。

「彼が君の新しい副官だ」

そこには俺よりちょい身長が高い屈強な身体をしたイケメンが立っていた。

クツ！ イケメンが副官だと！？ やり辛いじゃないか。

・・・冗談だけど。

「カグラ・ケイゴです。よろしく御願います」

「マエヤマ・コウキです。こちらこそよろしく御願います」

良い人みたい。凄く安心。

あれかな？ また教官チックな事をすればいいのかな？

「彼はパイロット志望として軍の募集に応募してくれた男でな。パイロットとしての腕前はかなりの物がある」

へえ。提督からの素直な高評価。

提督って厳しそうだし、本当なんだろうな。

でも、なんでそんな人が俺の副官なんだ？

「教官として彼に教授すると共に彼の機体の調整を行って欲しい。彼には極東の要となってもらうつもりだ」

どっちかっていうと、俺の方が副官っぽくない？
ま、僕の一応の肩書きは技術士官だからいいけどさ。

「了解しました」

「御願います。教官」

・・・教官。やっぱり慣れないな。
なんとなく・・・照れる。

「それでは、以上だ」

「ハッ」

こうして、新たな副官を得て、連合軍の基地へと戻ってきた。

俺が連合軍で出来る事は教官と調整ぐらいだからな。

とりあえず、要になるっていうカグラさんを鍛えて、カイゼル派の後押しとしますか。

他に何か俺に出来る事ってあるのかな？

第三十一話（後書き）

つ、遂にオリキャラ登場。やってしまった。

なんとなく、キャラ設定がばれてる気がするが・・・気にしない。
カグラ・ケイゴ。どんな男なのか。乞うご期待。

PS・僕とオリ主は共にアニメ版と劇場版しか知りません。

その為、イツキさんは半オリキャラとします。ご了承を。

第三十二話（前書き）

つ、遂に連続投稿が・・・。

申し訳ないです。

前もって言いましたが、なんだか胸にぽっかりと穴が空いた感じ
です。

これからも空く日があるかもしれませんが、ご容赦ください。

どうか暖かい眼で・・・。

第三十二話

バタンツ！

提督の執務室から退室する。

隣にはカエデ、少し後ろにはカグラさん。

いや。副官だけどさ。初対面の人を呼び捨てにするのはどうもね・・・。

「改めまして、私はカグラ・ケイゴ。ケイゴと御呼びください」

「えっと、マエヤマ・コウキです。コウキで構いません」

「いえ。副官として、上司を名前で呼ぶなど・・・」

「突然ですが、何歳ですか？」

「ハツ。今年で二十歳になります」

二十歳か・・・。

一つ年上だもんなあ・・・。

軍なら年上の部下とか当たり前なんだろうけど、やっぱり辛いな。

「えっと、とりあえず、仕事中はそのまま構いませんので、

今のような仕事以外ではもっとフランクに行きましょうよ」

「・・・了解しました。善処します」

うわっ。固っ。やっぱり軍人らしい軍人な訳ね。

「ねえ、コウキ、私はどうすればいいの？」

「あ。そうだったな。お互いに自己紹介したら？」

カエデとケイゴさんはまだお互いに自己紹介してない。

とりあえず、どっちも副官という扱いなんだし、仲良くしてくれると嬉しいかな。

「私はキリシマ・カエデよ。ここではコウキの副官と食堂でコックをやる事になってるわ」

「カグラ・ケイゴです。よろしく御願います」

無難だ。

なんて無難な自己紹介なんだ。

「ケイゴって呼んでいいのよね？」

「はい。構いません」

うわ。勝手だ。

呼んで良いつて言われたの俺なのに。

「私はカエデでいいわ」

「キリシマ少尉。たとえ階級が同じとて呼び捨てはいけません」

「うるさいわね。いいのよ。私が良いつて言ってるんだからいいの」

・・・もはや何も言うまい。

「マエヤマ特務中尉。どうにかしてください」

困ってます。ケイゴさん。困っていらっしやいます。

「カエデ。一応は軍なんだから、上下関係は意識しろ」
「さつき言ってたじゃない。仕事になったらちゃんとするわよ」

それって仕事以外はフランクにして奴だよな。

「・・・信用ならんのだが？」

「はあ！？ 私が信じられないの？」

「いや。お前が敬語を使う所が想像付かない」

「ふんつ。私だってそれぐらい出来るわよ」

「本当かあ？」

「本当よ。まったく。甘く見ないで欲しいわね」

すぐにボ口を出さない事を祈るよ。

「これからどう致しますか。中尉」

ふむ。仕事の話だな。

「すみませんが、先にカエデの方を案内したいのですが、よろしいですか？」

「ハッ。了解しました」

クツ。なんて絵になる。

イケメンの敬礼がここまで威力があるとは思わなかった。

「着任を終えたからな。荷物の整理か・・・」

「お手伝いしましょうか？」

「いや。俺の方は終わってるんで。カエデの方ですね」

「嫌よ。自分でやるわ」

ま、そりゃあ、そつだな。

んじゃ、とりあえず部屋に案内した後、食堂に案内しよう。

「どちらにしろ、まずは部屋まで案内する。場所。わかんないだろ？」

「当たり前じゃない。初めて来たのよ。さつさと案内しなさい」

こ、こいつ、なんか生意気になってないか？

「ふう……」

いつもの事だ。気にしちやいかん。

「さて、案内しよう。ケイゴさんもすいませんが、付いてきてくださいね」

「了解しました」

三人で並んで廊下を歩く。

特務中尉の俺と副官で少尉の二人。

年齢的にあまり差がなくても階級という確固たる違いがある。

はあ……。やり辛いよな。

イツキさんの時はどちらかという俺が引張ってもらってた感じだったから楽だった。

ケイゴさんは……。引張ってくれそうにない。

生真面目？ ま、軍人らしいっちゃん軍人らしいけどさ。

俺も上司らしく振舞わなければならぬのだろうか？

……。そんな俺らしくないよな。

「なんか話しなさいよ」

無言を嫌ったか？

「お前が議題を考えろ」

「嫌よ。貴方が考えなさい」

この我が倅女め。

「得意料理は？」

「肉じゃがよ。って、何で今更!？」

「いや。つい」

「ついつて貴方ねえ……」

うわ。呆れられた。

「肉じゃが……ですか？」

「ケイゴさんは好きな料理とがありますかね？」

「いえ。地球の料理は何でも美味しいですから」

「地球？」

地球以外で暮らしてたって事？

もしや、元火星人？

「あ、いえ。コロニーの方に住んでまして」

ああ。サツキミドリコロニーとか、そういう事ね。

やっぱりちゃんとした土壌で作られた方が美味しいんだろうな。

「ま、確かに地球の方が美味しいわよ。材料的に」

火星は美味しくないらしいな。

土が悪いとアキト青年が言っていた。

「火星のは美味しくないからなあ・・・」

「あ。でも、一部には美味しい食材もあったわよ。値段が何倍もしたけど」

そうなんだ。俺はてっきり全部が全部まずいのかと思ってた。

「あれか？　じゃあ、お前のレストランでは偶にそんな高級食材を使ってたという事か？」

「偶にというか、毎日よ。私の家のレストランを甘く見ないでよね。こつ見えても私の家は高級和食レストランよ」

「な、何だと？」

高級和食レストランだと！

・・・そうか。なるほど。

それで、あんなに美味かったのか。

つてか、そこまで和を強調するなら料亭とかにすればいいのでは？
俺の思い込みかな？　このイメージ。

「何をそんなに驚いてるのよ？」

「一つ訊く。もしや、それは一般人にはとても食いにいけない。

美食な倶楽部活動みたいなの所か？」

「何よ？　それ」

「あ、いや、さ。とにかく、一般人には手が出せない高級料亭って事か？」

「別にそうでもないわよ。まあ、接待とかでよく使われたけど・・・」

・・・こいつ、実は凄い家の出身なんだな。

「お話を聞く限り、お二人は火星出身のようですね」

「あ、はい。そうですよ」

「そうよ。それが何？」

おいおい。軍人というだけで敵視するな。

「それでは、木星蜥蜴をさぞ恨んでいるでしょうね」

ん？

「何でケイゴさんがそんな事を訊くんですか？」

「いえ。私も木星蜥蜴にコロニーを落とされて避難して来たので」

・・・そうか。それなら、ケイゴさんも被害者って事が。

「木星蜥蜴を恨んでるかですって？ そんなの恨んでるに決まってるじゃない」

「・・・カエデ」

「家族を失って、友達を失って、恨まない方がどうかしてるわ」

「・・・そうですか」

俯くケイゴ。

互いに被害者だからな。

共感できるものがあつたのだろう。

「それでは、何故、ケイゴさんがここにいるんですか？

貴方も木星蜥蜴に、いえ、木連に恨みがあるのでしょうか？」

カイゼル派かどうか事前に知らされてはいないが、

提督が俺の下に就けるといふ事はカイゼル派の一員なんだと思う。何故、木連に恨みがある彼がここにいるのだろうか？

「私は知りたいのです」

「知りたい？」

「はい。木連がどのような存在であり、提督がどう考えているのかを」

木連の存在と提督の考え？

どうして提督の考えまで知りたいんだらう？

「木連の事は資料で拝見させて頂きました。

正直、私達の被害は地球連合政府のお粗末な判断のせいだと思っ
ています」

「そうですね。それは否定できません」

火星に核を撃つたり、内乱になるよう工作したり。

拳銃の果てには使者を暗殺したりなど、

地球政府の判断で悲劇が生じたといつても過言ではない。

「そんな中、こうやって地球政府に真つ向から対抗する派閥がある。

トップが何を考えているのか。非常に気になりました」

俺達の目的は嘘偽りのない和平。

その為の両国家の国民の意識改革を方針としている。

「ケイゴさんは提督から？」

「はい。直接スカウトを受けました。そのスカウトを受け、派閥を
見極める為に所属したのです」

「見極める為ですか。結果はどうでした？」

「・・・少し予想外でした。こんなにも真摯に真実に向き合う方がいるとは、と」

それはお眼鏡にかなったという事なんだろう。

「ですが、私自身、まだ判断しかねています。木連という組織に対する不信感がありますので」

「不信感・・・ですか？」

恨みや憎しみではなく、不信感なのか？

「ええ。あまりにも非人道的な行いが目立ちます。

彼らは私達と同じ価値観を持たないのではないのでしょうか？」

・・・そういう事が。

確かに事情を知らなければそう思うよな。

でも、価値観自体はそう変わらないと思う。

ま、向こうはゲキ・ガンガーが聖典らしいから少し変わってると思うけど。

「ケイゴさんは知らないと思いますが、俺は木連の人に知り合いがいます」

「なっ！？ 木連人にですか？」

「はい。知り合いと言っていいかは分かりませんが・・・」

捕虜としてのシラトリさんと話したただけだしな。

「それは、どんな人でしたか？」

「ええっと、白鳥九十九さんといって、真っ直ぐな人でした」

「九十九・・・何故、お前が・・・」

どうしたんだろう？ 何かショックを受けてるみたいだけど。

「ケイゴさん？」

「あ、いえ。どのようにして知り合ったのです？」

「木連と戦闘がありました。その際に捕虜として捕まえました」

「ッ！？ そ、その方はどうなったのです？」

何を慌ててるんだろう？

横に視線をやるとカエデも眉を顰めていた。

こいつも分かってないんだろうな。

相談してもどうしようもないか。

「多分、逃がしたんじゃないですか？」

原作だとメグミさんとミナトさんが逃がしてた筈。

特に今回はミナトさんに木連の事を話してあつたし、

メグミさんはガイと重なりそうだし、必ず逃がすと思う。

あ。なんか、ガイが死んだように聞こえるけど、死んでないよ。多分。

「私に訊かないですよ。ってか、え？ 逃がしたって？」

何を慌てていらっしやる？

「あの後、ナデシコは月に向かうって言うってたろ？」

「ええ。そうだったわね」

「あれは木連が月周辺にいるかもしれないからなんだそうだ」

「それでナデシコが向かったのね？」

「ああ。んで、そこまで知ってたら、

俺の知るナデシコクルーなら捕虜なんて認めずに返してしまうだろう」

「・・・本当に変な戦艦よね。あそこ」

うん。俺もそう思う。

「そ、それでは、その人は無事なんですね？」

「恐らくですが、捕虜をどうにかしようとする人はナデシコには・・・」

・・・いたな。会長とか秘書さんとか。

原作通りなら多分大丈夫だと思うが・・・。

「中尉？」

「あ。すいません。多分大丈夫だと思います」

「・・・そう・・・ですか」

何だろう？ この表情。

安堵といった感じかな。

「どうしてですか？」

「え？」

「どうしてケイゴさんが木連人の身の安全を祈るのですか？」

「・・・私は話してみたいのです。木連の方と」

「話してみたい？」

「ええ。どう考え、どう動こうとしているのか。それを訊いてみたい」

「その為に捕虜に危害を与えて敵愾心を持って欲しくない？」

「いえ。元々敵愾心は持っているでしょうから、それは仕方ありません。」

ですが、触れ合える機会を失う事になるかもしれないと

ん。なんか違和感があるけど。

・・・なんだろう？

「キリシマ少尉こそどうしてここにいますか？」

ケイゴさんがカエデにそう問う。

ま、お互い様だもんな。恨み持ちは。

「なんか、私をボソ」

「カエデ！」

ば、馬鹿。何を言おうとしてるんだよ。

急いでケイゴさんに背を向けるようにしてカエデの向きを変える。
もちろん、手は口に当ててある。

「な、何するのよ!？」

「馬鹿!　せつかく実験から逃れられたんだ。余計な事を言つな」

「別に彼に話したって関係ないじゃない」

「それでもだ!　他言禁止。破ったら罰ゲームな」

「はあ!？　どうして罰ゲームなんて受けなくちゃならないのよ!」

「ほお。お前は約束も守れない情けない奴って事か」

「ちょ、どうしてそうなるのよ?　それぐらい余裕で守ってやるわよ」

「それじゃあ、誰にも話さない、破ったら罰ゲーム、でいいんだな」

「ふんつ。いいわよ。上等じゃない」

「おし。うん。決定」

「・・・あ。騙したのね」

「おう。騙した」

「騙すのなんて卑怯よ」

「ふっふっふ。騙される方が悪いのだよ」

単純でよろしい。

「ふっふ」

な、ケイゴさんに笑われた？

「何笑ってんのよ!?!」

うお。隣は睨んでる。

「いえ。仲が良いのだなと」

ま、異性にしちや仲が良い方じゃないか？

「はあ!? ないない。絶対ない」

・・・そこまで断言されると悲しいのだが・・・。

「ま、いいわ。私がかここにいるのは、木連という存在をこの眼で確認する為よ」

「自分で確認したいと?」

「ええ。私は絶対に許せない恨みが木連にある。それは何があっても変わらないでしょう」

「・・・」

「でも、言われたわ。ちょうどいいきっかけなんじゃないかって」

「きっかけ……ですか？」

そう。きっかけだ。

カエデがきちんと木連という存在を直視する為の。

「そうよ。私は木連について何も知らない。どんな思想を持つ集団で、何を目的としているのか。」

生い立ちなんかも私は詳しく知らないわ」

「しかし、木連の事を知っても何も変わらないのでは？」

「そうね。変わらないと思うわ。きつと憎しみも恨みも消えない。」

でも、何も知らない相手を恨んだ所で何かが解決する訳じゃない」

「……」

「その馬鹿に言われたのよ」

そう言っつて俺を指差すカエデ。

馬鹿っつて何だよ、馬鹿っつて。酷いな、お前。

「正面から受け止めて欲しいって。もつと木連の事を知った上で逃げずに受け止めるって。」

まったく。勝手なんだから」

「お前なあ。俺は」

「でも、感謝はしてるわ」

え？ 感謝されてる？ 意外だ。

俺はてつきり嫌々了承したと……。

そして、何よりも素直に感謝された事が意外だ。

「コウキにそう言われていなければ、

私は恨みや憎しみといった負のフィルターを通してでしか、木連を見れなかったと思うもの」

「負のフィルター？」

「どんな事実であろうと私にとって都合よく解釈してしまうフィルターよ。」

「それじゃあ、正面から受け止めた事にならない」

「……………」

「きちんと感情に左右されずに木連の事を知り、きちんと受け止めた上で結論を出そう。」

「そう決めたのよ」

「……俺が自分で促しておいて言うのもなんだが、こいつ……………」

「「強いな」「」

え？

思わずケイゴさんの方へ振り返る。
彼は彼で驚いた顔で俺を見ていた。

「何を見詰め合ってるのよ。気持ち悪い」

おっと。俺にその気はないぞ。

「カエデ。俺は嬉しいぞ。お前がそう考えるようになってくれて」

「はあ？ 貴方がそう考えるように言ったんでしょっ？」

「それでも、だ。正直、お前がそう考えてくれるまでもっと時間がかかると思ってた」

こいつの復讐の念は深かったからな。

「別に。私だって色々と考えてるのよ」

「そっか。強くなっただな。お前」

「は？ 意味わかんないわよ」

「いえ。私もキシマ少尉は強い人だと思います」

お。ケイゴさんもそう思ってくれたか。

「憎しみを持つ相手をきちんと受け止めようとするその姿勢。好感が持てます」

「貴方に好感を持たれたからって別に私にとってはどうでもいい事よ」

こ、こいつは……。

「すみません」

とりあえず謝る。

ケイゴさんは苦笑で済ましていた。
な、何て大人。尊敬します。

「私はまだ割り切れそうにありませんね」

彼も失った人だからな。割り切るのに時間が掛かるだろう。

「キシマ少尉は憎しみを抱えつつも前を向いている。少し羨ましくもあります」

彼はどんな憎しみを抱えているんだろうか？
そのどこか遠くを見る眼は一体……。

「別に私だって割り切った訳じゃないわよ。

さっきから何度も言ってるけど、憎しみを持つるのは本当なん

だから」

「それでも、前を向いている。私には真似できません」

「前なんて向いてないわよ。そいつに向かされてるだけ」

は？ また俺？

「後ろ向こうとするやとすぐにやって来て前を向かせるんだもの。もう嫌な奴よ。本当に」

「い、嫌な奴つてな・・・」

しよ、正直、シヨックだ。

そんな風に思われてたなんて。落ち込む。

「貴方さあ、人は散々からかくせに自分が言われると落ち込むの？」

「え？」

「冗談よ。冗談に決まってるじゃない。別に嫌な奴だなんて思っていないわよ」

え？ 冗談？

「本当か？ 本当に嫌がってないんだな？」

「さつきからそう言ってるじゃない。感謝してるって」

「そ、そうか・・・」

少し自分勝手だったかもと思っていた俺だ。

感謝されてるってのは素直に嬉しい。

こいつが木連や連合軍に嫌な感情を持っていると知っててこの道を強要したからな。

嫌がられても不思議はなかったし。
いや。なんか、良かった。うん。

「良い恋人をお持ちですね」

・・・はい？

「ちゃんとお互いを支えあっている。理想的な」

「ちょっと待ちなさい！ 私はこいつの恋人なんかじゃないわよ！」

「そ、そうですよ！ か、勘違いです！」

「いえ。誰にも言いませんから誤魔化さなくて結構です」

だ、だから、違うって。

「いや。本当に違うんですって」

「そうよ。どうして私がこんな奴の」

こんな奴？

「おい。てめえ、こんな奴って何だよ！？」

「こ、こんな奴はこんな奴よ。ふんっ。貴方なんかじゃ私にはつりあわないわ」

「て、てめえ、ふんっ、お前こそ俺には物足りないね」

「な、何ですってえ！？」

「何だよ！？ 言いたい事があるならもっと成長してから言いやがれ！」

「ちょ、も、もう本気で怒ったわ」

「おうおう。怒ったら何だって言っただ？」

「・・・本当に仲が良いですね。流石は恋人同士です」

「「違う！」「」

「相性もバツチリみたいですね」

結局、取っ組み合いの喧嘩に発展してしまった。異性とこうまで喧嘩したのは初めてかな？ 冷静になった今だからこそ言える感想です。

・・・何だったんだろう？ さっきのカオスは。

「あ。おばちゃん。お疲れ様」

「お。コウキ君じゃないか。久しぶりだねえ」

「そう？ ま、しばらく留守にしたからね」

「そうかい。それで、何か食べてくの？」

「それも良いけど、ちょっと別件」

「別件かい？」

「そうそう。おい。カエデ」

カエデを呼ぶ。

ちなみに、ここ、食堂ね。

「何でそんなに親しいのよ？」

あ。おばちゃんど？

「このおばちゃんは親しみやすいんだよ。良い人だ」
「ぶ〜ん」

俺のイメージでは軍の基地って食堂も軍人がやってるのかと思っただけど、そうでもなかった。なんでも基地の中って食堂や清掃みたいな雑用チックな事は現地の一般人がやってるらしい。

そりゃあ、そうだよな。こんだけ大きな施設があるんだ。

そういうのは、現地の人が出た方が軍としても現地の人としても喜ばしいんだろう。

人材を派遣しないで済むから楽だし、就職先が増えるし、で。

一石二鳥って奴だ。

あ。もちろん、立ち入り禁止区域とかはある。

民間人に情報を与えてしまう訳にはいかないし。

情報秘匿は常識です。

要するにこのおばちゃんも一般人って訳。

「ん？ そんな可愛らしい御嬢ちゃんを連れてどうしたんだい？

何？ やつと恋人を紹介してくれるのかい？」

「はぁ……。おばちゃんまで。違っつて。こいつは新しいコック」

皆して勘違いし過ぎ。

「へえ。そんな可愛らしい子がここに来てくれるのかい？」

「そうそう、こいつ性格悪いから気を付けて」

「ちょ、ちよつと」

「へえ。そうなのかい？」

「あ。でも、腕だけはいいいから、おばちゃんクビになっちゃうかも」

「おやおや。それは困ったねえ」

「コウキ！ いい加減にしなさい！」

「ハツハツハ。元気が良い子だねえ。歓迎するよ。おいで」

本当に豪快で良い人だ。
ホウメイさんみたいで親しみやすい。
それに、おばちゃんを筆頭にこの人達は皆こんな感じだから、カエデもすぐに慣れるだろう。

「コウキ。覚えてなさいよ」

「ふふん。何の事かね？」

「コウキ！ 貴方ねえ！」

「ほら。早く行ってこいよ。おばちゃん達が待ってるぜ」

そして、その微笑ましいという視線はやめて頂きたい。

「ふんっ」

そう言っけてキッチンへと入っていくカエデ。

無論、それ相応の服装をしているぞ。

ま、頑張れ。カエデ。

「お待たせしました。ケイゴさん。付き合わせてしまっすてすいませ
ん」

「いえ。軍基地内ここまで微笑ましくなったのは初めてです」

「それはどう受け取ればいいのでしょうか？」

「御気になさらずに」

御気にします。

「それじゃあ、早速ですが、シミュレーションに行きましょう」

「はい。所で中尉の機体はどうなったのですか？」

俺の機体かぁ・・・。

ま、フレームはボソソジャンプで飛ばしちゃったけど、アサルトピットは無事だし。

後はこの基地のフレームを分けてもらえればいいかな。

「自分専用のアサルトピットは持って来てますので、フレームさえ換装すれば問題ないです」

「そうですね。そういえば、新武装が導入されたそうですねよ」

新武装？ 初耳だな。

「新武装ですか？」

「はい。中尉が基地を留守にしている間に導入されました。格納庫へ確認しに行きますか？」

「そうですね。シミュレーションにはもう？」

「設定済みです」

それなら実機見て、仕様書見て、戦術に取り入れられないとな。ま、俺自身が使いこなすまでに時間がかかりそうだけど。

「それじゃあ、先に格納庫へ向かってもらいますか？」

「はい。ご案内は？」

「いいえ。知ってますから」

「一応、結構な期間をここにいますからね。」

「あ。先にシミュレーション室に行っても構いませんか？」

「いえ。私は中尉の副官ですので」

真面目ですねえ。

「分かりました。それでは、行きましょう」
「はい」

「お疲れ様です！」
「おお。中尉。お疲れさん。帰ってきたんだな」

この活気。いやあ、ナデシコを思い出すぜ。
整備士も楽しい人達ばかりだし、いつもお世話になってます。

「なんでも新しい武器が納入されたとか？」
「おう。案内してやるよ」

整備士の一人。中年で、奥さん持ち子供一人の良いパパさん。
良くお酒に付き合わされます。
階級は俺の方が上ですけど、気にしないで下さい。
そんな事を言ったら本当に気にしなくなった逞しいオジサン。
いや。こういう人がいると職場って楽しいよね。

「これは？」

眼の前にはイミディエツトナイフの刀身が伸び、
全体的に巨大になった思わずイミディエツトソードと名付けたくな
るような剣状の武器。
そして、はあ！？ と言いたくなるような馬鹿でかいキャノン砲が
あった。

「一つ一つ丁寧かつ大雑把に説明してやるよ」
「いや。真逆ですから。それ」
「ん？ おお。まあ、いいじゃねえか」

ええ。もう慣れました。

「一つはデイストーションブレード。

ま、簡単に言えば、イミディエツトナイフを長くして、

DF発生装置付けて刀身に纏わせられるようにしたって奴だな」

デイスーションフィールドを纏わせた剣か。

デイストーションアタックみたいにかかなりの威力を持つんだろうな。ついでに中和機構も取り付けてあるらしいし。

フィールドランサーのブレード版ね。分かります。

でも、これは銃剣みたいにはしないんだな。

「接近してDFを突破して、その後はどうするつもりなんです？
これ」

「馬鹿野郎！ 剣を持って突っ込むっつう事はその後も剣だけで立ち向かうっつう事なんだよ！

それこそが己の剣のみで信念を貫く誇りある騎士なのさ！」
「・・・はあ」

偶に分からなくなるよ。おっちゃんが。

ま、まあ、要するに突破したら更に突っ込めって事ね。

・・・スリルのある戦いになりそうだよ。

特に近接格闘の能力を持たない俺には・・・。

「もう一つは？」

「ああ。良くぞ訊いてくれた」

ま、まあ、それを訊きに来た訳ですから。

「これは超大型レールキャノン。
折りたたみ式でな。組み立てるとエステバリスすら余裕で超える」

こ、超えるんすか？ 六メートル級のエステバリスを超えちゃうぐらい大きいんですか？

「おう。使い方としては、キャノン砲の下に固定台が、ま、足みたいな奴が備え付けられてある。

それを地上にしっかりと固定して、機体もアンカーで地上に固定する」

「完全に動けませんね」

「それぐらいは我慢しやがれ。威力は半端ないんだから」

「ま、あの大きさですからね。それで威力がなかったら唯の筒です」

「否定できないな。だが、威力は予想じゃDF越しに戦艦沈められるくらいはある」

おお。それは凄いな。

フィールドランサー系統の武器の存在を無にしちまった。

ま、その分、持ち運びに苦労しそうですけどね。マジで。

「あ、後、アンカーは脚部後方の奴を使う。要するにこの武器は砲戦フレーム専用だな」

砲戦フレームの火力が更に向上されましたか。

ま、反動が半端ないんだらうな。宇宙で使ったらどうなるのかして？

「反動さえ克服すれば空中だろうと宇宙だろうと使えるぞ。

そのあたりの調整はお前がすればいいだろ」

あ、俺の仕事が増えた。

反動を克服ってどうすればいいんだよ！？
むしろ、反動で移動しちゃってくれよ。

「本来なら新武装にあわせて新フレームなんかも開発しちやいた
んだがな。」

ネルガルがうるせえんだよ。これが」

「ああ。エステバリス自体もネルガルのですしね。武装開発も許可
を得たんですか？」

「形式上仕方なくな。データを提供するという条件で漸くの許可だ
つたらしいぞ」

ま、向こうも企業ですからね。

仕方ありませんよ。儲ける為には。

「秘密に開発しちゃうと犯罪者ですもんね」

「そうなんだよ。お前もライセンス料とかで儲けてるんだろ？」

「もちつす。いや。知らない間にお金が貯まってくのって不思議な
感覚ですね」

「てめえ、今度飯奢れや。むしろ、俺ん家のローンを払え」

「いや。それはないですよ。ま、また酒を飲む時は呼んで下さい。
奢りますから」

「馬鹿野郎！ 年下に奢らせる程、俺は落ちぶれちゃいねえ！」

・・・どつちなんだよ？ 難儀な人だ。

「二つの仕様書とかありますか？」

「おお。ほらよ」

簡単に手渡された。ってか、何で持ってたの？

ま、この人だし。気にしちゃ負けか。

「あ。もし、新フレームを作るとしたら何を作るんですか？」

「ふっふっふ。良くぞ！ 良くぞ！ 訊いてくれた！」

やばっ。地雷踏んだか？

「名付けてスーパー戦フレームだ」

「・・・良く分からないんですけど」

大まか過ぎて分からん。

何がスーパーなんだ？

「俺は昔からスーパーロボットに憧れていた。ゲキ・ガンガーも俺にとつては捨てがたい」

「貴方は男です」

「おお！ てめえ、名前は？」

「私はカグラ・ケイゴ。貴方の思想に惚れ込みました」

「てめえこそ男だぜ！」

・・・なんか分かり合っちゃった。
つてかさ、ケイゴさん、キャラ違わない？

「スーパーロボットのスーパーって事か・・・。

あれですか？ 胸のV字やら頭の日輪やらからビームとか、

三つの戦闘機から合体とか、そういうのやりたいんですか？」

「お、お前、良くそんな昔の奴を知ってるな。あれはマニアしか知らねえぞ」

・・・あ。そつか。俺の時代でも知っている奴は知っているってぐらいレベルだったもんな。

あの鉄の城とか光線変型機構ロボットとか。
いや。ビームといい、ロケットパンチといい、スーパーロボットの
代表格だったな。

あ、でも、ゲキ・ガンガーもそんな感じだった気がする。
あれか。日輪三号機がマニアックなのかな？ サン・アタックは愛
していました。

「でも、エステバリスはどう見てもリアルじゃないっすか？」

「まあな。巨大化しちまったら利点も失われちまうし」

「博士。そこをどうにかして頂きたい」

博士っておい。ガイみたいな奴ですね。

イメージが変わりましたよ。ケイゴさん。

「そこでだ。せめてロケットパンチだけでも再現したい」

「それでこそ博士です」

ロケットパンチね。

陸戦フレームにワイヤードフィストがあるけど、あれって攻撃力不
足だもんな。

「拳の大きさにあんまり威力出ないんじゃないですか？」

「ああ。だからな。拳の大きさだけ大きくする事で解決するんだ」

「・・・それって、物凄く不恰好では？」

「馬鹿野郎。ロケットパンチを愛する気持ちさえあれば、不恰好す
ら格好良く見える」

「・・・・・・・・」

感動して言葉も出ない。

あ。ケイゴさんがそんな感じなだけ。

俺はどつちかかっていうと呆れてる。

「そして、拳の先端に」

「ええっと、構想は分かりました。完成したら教えてください」

「て、てめえ、ここまで語らせといてそれかよ」

「中尉。私も最後まで聞きたいです」

そう非難の眼差しで俺を見ないで下さい。

二人とも眼がマジです。血走ってます。

「夢を実現してこそその男でしょう。夢を語るのも良いかもしれませ
ん。」

ですが、壮大な計画は黙々と進めるからこそカッコイイので
す」

「・・・む」

「・・・一理あります」

「そして、あまりに人に夢を語り過ぎるといざという時・・・」

「いざという時？」

「ゴクリッ・・・」

「こんな事もあるつかと、と出来なくなります」

「ッ!？」

「・・・え？」

シヨックのおっちゃんと首を傾げるケイゴさん。

ふっふっふ。これは技術職の人間にとっては生涯に一度は叫びたい
言葉なのだよ。

「・・・すまなかつたな。中尉。俺が間違っていた」

「いえ。貴方なら出来る。そう信じているからこそその言葉です」

「おお。眼が覚めたぜ。厳しい一言だが、正に真理だ」

感動してくれているみたいですね。
いや。助かりました。止められなければ日が暮れる所だった。

「それでは、俺達はそろそろ」

「おう。待つてる！ 必ず乗せてやるからな！」

・・・一応、楽しみにしてますよ。

どちらかというところとガイに教えてあげたい。
乗せたら喜ぶんだろっなあ。あいつ。

「あの、先程のは？」

シミュレーション室へと続く廊下をケイゴさんと歩く。

ケイゴさんはさっきの気がなってるみたいだな。
困惑気味に話しかけてきた。

「博士というものはいざという時に秘密兵器を出したがる。そういう事です」

「・・・なるほど。確かにそのような描写がありました。あれが博士の理想なのですね」

・・・なんか勘違いしてるみたいだ。

ま、いいか。困るのはおっちゃんだし。

「それにしても、驚きました。ケイゴさんはゲキ・ガンガーが大好きなようです」

「意外ですか？」

「ええ。ちよつと」

クールなイケメン副官。
実は熱血好きでした。
ふむ。それはそれで面白いか？

「ゲキ・ガンガーは私を育ててくれましたから」

へえ。まるで木連の人達みたいだ。

「私ももう大人ですから。ゲキ・ガンガーの全てが正しいとは思っていません。」

ですが、私はいつまでもゲキガン魂を心に宿し続けるつもりです。「いいんじゃないですか？ いつまでも子供心を持つって素晴らしい事だと思いますよ？」

「・・・理解して頂けるのですか？」

何？ その意外な顔は。

「もちろんですよ。男つてのは子供心を失くしてはいけません」

と、ウリバタケさんが言っていました。ちょっと同意する僕もいます。

「・・・そうですか。貴方のような方が上司で良かったです」

いや。この程度で安堵されても困るのですが・・・。

「勸善懲悪。ゲキ・ガンガーの根本にあるのはそれです。」

でも、大人になれば、必要悪の存在だったり、

「善い事の裏には打算があるという事も理解しなければなりません」
別にそれが全てっていう訳じゃないと思いますよ。

「単純に打算なしで善い行いをする人だっていますし」

「え？」

そんなに世の中に悲観しなくてもいいんじゃないかな。そりゃあ、そういう世の中なのは認めるけど、打算とか一々考えずに思った通りに受け止めてもいいと思う。

「向こうが打算で助けてくれてもこちらが助かったのは事実。それなら、向こうは打算だからと構えないで素直に感謝すればいいと思います」

なんでも裏を考えなくてもいいと思う。実際、相手が何を考えているのかなんて分からない訳だし。

「・・・そんな考え方もあるんですね」

「ま、これは俺の考えですから。押し付けるつもりはありませんよ」「いえ。良い参考になりました」

この人はこの人で何かを抱えている感じがする。今はまだ相談してくれなんていえる仲じゃないけど、いつか、相談に乗れればいいな。

あ。俺も相談には乗ってもらうけどね。もちろん。僕だって悩み多き若者なのだよ。うん。

第三十二話（後書き）

武装。参考にさせて頂きました。ありがとうございました。
新フレームという形では再現できませんでしたが、新しい武装として。

これからも参考になるご意見。よろしく御願います。

第三十三話（前書き）

やはりどうしても短くなってしまいましたね。
ご勘弁下さい。

第三十三話

「高機動戦フレーム。武装はディストーションブレード、イミディエツトナイフ、ラピッドライフル。」

「それでいいですか？」

「了解しました。フィールドは？」

「これからは地上戦が多くなりますからね。街中フィールドでやります」

「ハッ。御願います。教官」

回りに回って漸くシミュレーション室に到達。さっそくケイゴさんの実力を確認しましょう。とりあえず、俺もCASでやってみるかな。

「では、始めます」

「了解」

CASはIFSと違うから、コンソールに手を置いてスタートとはいかない。

互いの了解を得てからスイッチを押してモニターに映像が出て、漸くスタートだ。

ま、こつという手順は別に手間取る訳ではないから問題ないけど。

「.....」

「.....」

互いに無言で距離を取る。

ケイゴさんがどんなスタイルかは知らないが、俺のスタイルは変わらず遠距離からの射撃。

正直言えば、俺は一对一には向いていない気がするのだが……。

「ま、やるしかないよな。パターン変更。後方支援モード」

設定パターンを変更して、ラピッドライフルを片手に構える。

もちろん、銃口を既にカグラ機にロックオン済み。

両手に持つ時は連射したい時だけだ。

現状では通常機能で充分事足りる。

ラピッドライフルも性能は上がってるしな。

ダンッ！

試しに一発。

「……………」

うわ。軽く避けたよ。この人。

ま、正面から軽く撃っただけだからいいけど。

じゃあ、次は……。

ダンッダンッダンッダンッダンッ！

秘技燕撃ち。

解説しよう。これは頭上から股下……。

ごめん。なんでもない。

単純に身体の五つの部分を狙って、連続撃ちするだけ。

でも、回避行動が取りづらいうように計算して撃ってる。だから、簡単に避けられる筈がないんだけど……。

「……瞬間離脱ですか」

多分、機動攪乱モードを使ってるんだろっな。

あんな急発進で急加速したら首痛めるって。

流星は提督に極東の要にすると言われた男。

機動攪乱モードぐらいは既に使いこなしてるって事か。

「そこ！」

でも、俺とて甘くない。

アキトさんとどれだけ模擬戦してきたと思ってるんだよ？

その程度の機動は既に飽きてるんだ。

ダンッ！ カキンッ！

命中。ま、DFを纏った右腕で弾かれたけど。

凄いな。DF流動機能を使いこなしてる。

この機能は任意の場所にDFを集中的に集める機能。

これのお陰でディスプレイオンアタックが使える。

というよりも、その為に付けた機能なんだけど、まさか銃弾を弾く

為に使うとはなあ。

勉強になります。

「パターン変更。機動攪乱モード」

そろそろあっちも攻めて来るだろうし。

いつまでも後方支援重視じゃ接近されて終わる。

さて、俺もアキトさん直伝の機動を見せてあげようかな。

ダンッ！

撃ってきた。瞬間離脱。

「ツウ。相変わらずの心地悪いGだ」

瞬間離脱とか心臓に悪い。

これは急発進、急加速を一瞬で行う心臓にもエンジンにも悪い行動だ。

機動攪乱のパターンにしかない特別回避。

ま、普通の人が使ったらすぐに意識を失うからこのパターンにしか入れてないんだけどね。

「流石ですね。瞬間離脱を使いこなすとは」

「いやいや。ケイゴさんも余裕で使ってたじゃないですか。俺はまだ慣れませんよ」

「ご謙遜を」

実際、最初は焦った。

自分で作っておいて、心臓持ってたかたもんなあ。

あれだよ？ ジェットコースターの落下時。想像してごらん。

「では、行きます！」

ブオンッ！

うわ！ 急接近かよ！

ってか、ブオンッってブレードがDF纏う時ってそんな音が鳴るの？

どこかの光線剣じゃないんだからさ。

「クッ」

あれを受け止められるのは同じディストーションブレードしかない。

ブオンッ！ キンッ！

か、間一髪。ギリギリ間に合った。

「中尉は何か格闘技を？」

「いえ。残念ながら、そういうケイゴさんは何かやっついていそうですね」

「ええ。柔術と剣術を少し齧っています」
「な、なるほど」

現在の状況こそ最も力が発揮できる訳ですね。

しかも、あれでしょ？ 距離を取らせないつもりですよね。

「ええっと、来ます・・・よね？」

「もちろんです。行きます！」

クッ。

DFを纏ったブレードが絶える事なく襲い掛かってくる。

横に払われたり、縦に振り下ろされたり、袈裟に振られたり。

俺は全部どうにかギリギリで避けてる。本当に強化された動体視力には感謝だ。

それに俺が作ったから、動きは何となく分かる。というか、そうでなければとっくに当たってる。

「流石ですね。全てを紙一重で避けている訳ですか」

「すいませ〜ん。それって勘違いなんですけど。」

「あの、違いますよ」

「いえ。分かってます。教官程の腕前ならば私程度、簡単にあしらえるでしょうし」

「……………」

勘違いここに極まる。

「それでは、本気でいかせて貰います。パターン変更。トレースモード」

あ。命名は安直です。

つて、うお！ 独自カスタマイズだからパターンが分からん。

「クッ！」

ど、どうにかディストーションブレードをディストーションブレードで受け止める。

「受け止めましたか。流石ですね」

「それは齧った剣術とやらの型ですか？」

「ええ。自慢ではないですが、それなりの腕前ですよ」

「免許皆伝とか言いませんよね？」

「ははっ。もちろんですよ」

「そ、そうですね。まさか免許皆伝なんて」

「ええ。もちろん、免許皆伝です」

う、嘘お！

と、とりあえず、距離を取る。

たかがパターン、されど、パターン。

トレースモードなら機動攪乱モードの機動には追いつけない

「もちろん、逃がしませんよ」

・・・等なただけどなあ・・・。

完璧に読まれてますね。はい。

ええ。ええ。分かっていますよ。

罅迫り合いの状態から背を向けるのは危険だって事ぐらいは。

やはり、ここは俺流奥義、キックですかね。そうでしょう。

「イメージ・・・じゃない」

IFSじゃないんだ。CASでDFを使う時は全て流動機能を用いる。

ま、防御する時は身体全体を覆うんだけどね。それもスイッチ一つさ。

「オラッ！」

一蹴！

とってきたかったんだけどなあ。

「一応、柔術も習ってますから」

軽く受け流されました。ついでにピンチです。

「フォロースルーが大き過ぎます。隙を突いてくださいと言って

ようなものですよ」

正にその隙を突かれた。
罅迫り合いの状態から押し切られ、体勢を崩される。

「終わりです」

迫り来る刃。でも、教官としては負けられないよね。

「フッ！」

バーニアを強引に吹かす。

ついでに流動機能で全面にDFを集中。

刃が機体を切り裂く前に突き放す！

「グッ！」

衝突の衝撃波は凄まじかった。

でも、DFを纏っていた俺以上にDFを纏っていないケイゴさんはダメージを喰らっている筈。

「・・・なるほど。フォロースルーの隙まで作戦の内でしたか。あえて隙を見せたのですね」

・・・勘違い深まり。

「流石です。メインカメラ、胸部装甲。どちらも削られました」

IFSじゃないエステバリスではメインカメラを破壊されるのは視力を失うようなもの。

まあ、IFSでもそれは変わらないんだけど、IFSなら一応は視覚以外で情報を得られる。

でも、CASは完全にカメラに依存してるから、完全に失うようなものだ。

サブカメラでは対応しきれない。

「視力を奪われた。私にはもう成す術がないですね」

・・・完全に運任せの戦闘だったんですけど・・・。

次やったら勝てるか分からない。むしろ、近付かれたら終わりだな。対策を考えておかないと・・・教官としてそう簡単には負けられない。

「とりあえず、終わりにしましょう」

「はい。後は少し離れてラピッドライフル連射で滅多打ちといった所ですか？」

いや。そんな事しませんけど・・・。

貴方の中で僕はどいう扱いなんですか？

「いえ。せっかくなのでディストーションブレードを試させて貰おうかと」

「そうですね」

「それと、諦めるつもりならその闘志みたいなのを抑えて欲しいですね」

バツと距離を取って告げる。

「お気付きですか？」

「諦めてないでしょう？ サブカメラでも貴方ならやろうとする」

「無論です。接近してきたら斬り返すつもりでした」

だから、怖い。

この人は油断なんてさせてくれる人じゃない。

「ですが、ちょうどいいハンデですね。近接格闘では遥かに分が悪いですから。俺は」

「私もそうは甘くないですよ。視覚がない状態でも戦えます」

あれですか？ 心眼って奴ですか？

なんつう武術を極めてんだ。この人は。

「胸をお借りしますよ」

現時点で接近戦に劣っている事は変えようのない事実。それなら、己の力を試す場として利用させてもらう。

「ハア！」

接近と同時に振り下ろす。

ガキンッ！

見えないってのに簡単に受け止めますか。次は横から！

ガキンッ！

斜め下から！

ガキンツ！

本当にメインカメラ壊れてんのかよお！？

「剣気が揺れています。それでは場所を教えているようなものですよ」

剣気ってなんだよお！？

「もっと研ぎ澄ますのです。剣は己が腕の延長。剣を振るんじゃない。己の腕を振るのです」

ええっと、う、腕の延長な訳ね。了解。

「ハア！」

ガキンツ！

「そうです。それが剣術を扱う上での基本です」

な、なるほど。基本ですか……。

……ってかさ、先生と生徒の立場入れ替わってない？ま、参考になるからいいけどさ。

「中々良い太刀筋かと」

ええっと、褒められるのは嬉しいけど、これってCASだから。俺の太刀筋とは違うんだよねえ。

「これってCASですから、俺の太刀筋じゃないですよ」

「いえ。太刀筋とは精神の鋭さ。淀みなき筋道の事です」
「ええつと？」

よく分からののだが……。

「それでは、次は私の番です」

という言葉と共に踏み込んでくるカグラ機。

あの……勘違いでしょうか？

さつきより鋭い気がするんですけど……。

「うお！ うおお！ うおッ！」

キンッ！ キンッ！ キンッ！

ど、どうにか弾く。

「やはり当たりませんか。その捌きには敬意を抱きます」

なんか物凄く勘違いされている気がするのだが……。

「そろそろ時間ですね」

あ。そういえば、時間設定してたな。

「今の所、ダメージ量的に私の負けです。

ですから、私は制限時間まで教官にダメージを与え続けようと思
います」

「それなら、俺は防ぎ通します」

まぐれとはいえ、かなりのダメージを与えている事は確か。
なんだかんだいって無傷だし。俺。

「ハア！」

「ハッ！」

結局、あれからどうにか回避に防御を続けて俺がダメージ量で勝利した。

俺はほぼ小破で、ケイゴさんは単純に小破。本当に少しの差での勝利だった。

いや。負けはしなかったけど、教官としてこの成績はどうなの？
って感じ。

教える事なんて何もないよ。殆ど互角だったし。
さて、さっきの模擬戦を見直して、反省会でもしましょうか。

「お疲れ様です。教官」

「あ。ケイゴさんもお疲れ様です。今から反省会をしましょう」
「了解です」

そして、反省会を終えると……。

「どうでしょうか？ 私とて未熟な身ですが、柔術と剣術をお教え
致しましょうか？」

・・・と提案された。

思わず啞然。

「え？ いいんですか？」

ほら。そういうのって門外不出みたいなのがさ、あるんじゃないの？

「ええ。代わりに教官には射撃関連についてお教え頂きたいのです」

ああ。交換条件ですか。

「構いませんが、もしかして・・・」

「御恥ずかしながら、その通りです。射撃はあまり得意ではないんですよ。」

出来る事なら戦術の幅を広げたいんです」

い、意外だ。万能だと思っていた。

そういえば、接近戦以外仕掛けてこなかったよな。ケイゴさん。

「分かりました。こちらこそ御願います」

というか、教官として教えるのは当たり前なんだよなあ。

ま、互いに切磋琢磨して成長しあうというスタイルも悪くないか。

ああ。なんか、あつという間に差を付けられる気がする。

ケイゴさん。恐るべし。

「カイゼル派の支持力を上げ、他派の支持力を下げる。その為には・・・」

まずはカイゼル派に活躍してもらわないといけない。

それは確定。その為のCASだ。

でも、他派の支持力を下げるってのがなあ。

誰かを陥れるっていうのはちよつと・・・胸が痛む。

かといって、暗殺とかもつと嫌だしなあ。

スキヤンダルを発覚させるか？ ハツキングで。

でもなあ、それって犯罪じゃん。やっぱりやっていい事と悪い事があると思っただよな。

今更とも思っけど、そのあたりはちゃんとけじめをつけるべきだと・・・。

あ。でも、裏金工作とかだったら遠慮いらないよね。罪人は罰するべし的な。

「マエヤマ君。ちよつといいかね」

「はい。何でしょう」

食堂でボーっとしていると提督から御呼びがかかった。

コミュニケは便利です。軍でも愛用されています。

さて、何だろう？

「私の執務室まで来てくれないかね」

「分かりました。すぐ向かいます」

「頼むよ」

とりあえず、提督の執務室に行けばいいのね。

「カエデ。片付けといて」

「はあ！？ 嫌よ。自分で片付けなさい！」

「提督に呼ばれてんだよ。頼む」

「嫌。自分で食べた物は自分で運ぶ。これ常識よ」

「お前は俺の母親か」

「ふんっ。私が母親だったらもつと良い子に育ってるわ」

「ないない。そもそもお前には相手が見付からん」

「はあ！？ 失礼ね。私を求める男なんて幾らでも」

「ああ。カエデ。遂に壊れてしまったんだな」

「し、失礼ねえ」

「はいはい。夫婦漫才がいいから、カエデちゃんは片付けてきて」

「「夫婦漫才じゃない！」」

「息もピッタリじゃない」

「・・・あ。ぐ、偶然だったの。」

「ほら。急いでるんでしょ」

そ、そうだった。

「す、すまん。頼んだぞ。カエデ」

「ちょ、ちよっと、コウキ。・・・仕方ないわね」

助かる。今度なんかお礼するから。

「・・・なんだかんだいって片付けるんだから。若いわねえ・・・」

「・・・楽しそうだね。おばちゃん。」

「マエヤマ特務中尉。参りました」
「御苦労」

ノックしてから、執務室に入る。
うむ。相変わらずの立派なカイゼル髭だな。
言葉には出来ません。

「御用件は何でしょうか？」

「うむ。まずは昇進についてだ」

「昇進・・・ですか？」

俺っていつの間にか何かしてた？

「そうだ。君が開発したCASの有効性が認められてな」

「認められたってどのようですか？」

「西欧支部、北欧支部、北米支部、南米支部で、木星蜥蜴との戦闘に功績を挙げた。」

それらは君が鍛えたパイロットの力が大きい」

「えっと、要するにCAS開発者と教官としての功績ですか？」

それはちよつと困るんだよなあ。

CAS開発者として昇進されるのはちよつと。

「表向きは教官業と武装調整だな。新武装の調整により、軍戦力の底上げが出来た」

ああ。ディストーションブレード、改めDBと大型レールカノンの事ですね。

大型レールカノンには苦労しました。

ですが、これで多くのフレームで使える汎用性の高い武装になったのです。

頑張った。頑張ったよ。俺。

「C A Sの開発、武装調整による戦力の向上、教官業による戦力の充実。」

その結果、特務大尉への昇進と相成った」

ま、まあ、頂けるものは頂いておきますけど。

「今後は特務大尉として活動してくれたまえ」

「ハッ！」

という訳で階級章を頂きました。軍服は変わらず。佐官になると軍服も変わるそうですね。はい。

「まず、という事は他にも」

「うむ。君はハッキングが得意なそうだね？」

ええっと、もしかして、公認で犯罪をしると？

「あの・・・何を調べさせるおつもりですか？」

「私達には知らなければならぬ事が山のようにある。違うかね？」

「そ、それはそうですが」

その為にハッキングをしてもよろしいのですか？

「隠された秘密。情報操作をしていようとどこかしらに跡がある等。」

君にはそれを紐解いて欲しいのだ」

「木連関係の事ですか？」

「その通りだ。そして、軍内における悪しき者を罰する為の証拠も欲しい」

「え、ええっと、そんな事をして大丈夫なんですか？」

「バレれば唯では済まんだろうな」

「って、おい。それだけで済ませんな。」

「しかし、痕跡を残すようなアマチュアではないのだろうか？」

「提督。私の望みは唯一つ。戦争後の平穏な生活です。」

「もし、私が周りにそういう事が出来ると知られたらどうなりますか？」

「・・・うむ。確かに狙われるな」

「そう、誰にだって狙われる。」

「人にはなんとしても隠したいものがあるんだ。」

「それを暴ける人間を放っておける訳がない。」

「申し訳ありませんが、お断りします」

「・・・そうか。いや。分かった。無理はさせまい」

「すいません。上司命令であれば従わざるをえないのに。」

「本当に提督が良い人で助かります。私は貴方以外の下には就きません。」

「ですが、そうですね。」

「どうしても暇で遊んでいて、偶然、そう本当に偶然ですよ？」

「つい、暴いてしまった情報なら別に渡しても構いませんよ」

「む！？　そ、そうか。我々には君の趣味にまで何か言う権利はないからな」

「ええ。あの・・・すいませんが、万が一の時は」

「分かつておる。私が責任を取ろう」

「ここまで恩がある提督に恩返ししても罰はあたらんだろう。」

罪人に罰を与えるだけだしな。うん。

それに、趣味で偶然暴いてしまったんだ。

やはりそういう時は上司に教えるべきだよな。うん。

ホウレンソウだよ。報告だよ。連絡だよ。相談だよ。

「すみません。ご命令には従えません」

「うむ。了解した。引き続き、業務に当たってくれたまえ」
「ハッ！」

さてつと、公認犯罪なんて初めてだぞ。

ま、いつもより慎重にやれば大丈夫だろう。

うん。頑張りましょう。・・・頑張れる程度に。

第三十三話（後書き）

公認犯罪人。

いいのか？ それで。

ええ。バレなければいいのです。
劇場版を思い出しました。

第三十四話

S I D E M I N A T O

「今頃、どうしてるかなあ？」

コウキ君が去って、ナデシコが月に向かってから色々あった。月の都市が襲われて、月面フレームつてのにヤマダ君が乗って大騒ぎ。

「争いたい訳じゃねえ。だがよお！ 拳でしか分かり合えない事もあるんだよ！」

「ガイさん！ 人間同士で争う必要なんてないんです！」

「分かってる！ だが、ここで退いたら町はどうなる！？」

「・・・ガイさん」

「分かってくれ。メグミ。俺だって戦いたくて戦ってるわけじゃねえ。」

木連の事を聞いた時だって俺は木連にゲキ・ガンガーを感じ、地球にキョアツク星人を感じた」

「・・・でも・・・でも・・・」

「だが、何の罪もない人達が犠牲になるのを俺は黙ってみてられねえ！」

「・・・」

つてな感じ。

向こうのジンという機体に対し、ヤマダ君は月面都市を守る為に戦い抜いた。

メグミちゃんにも何か思う所があったんだと思う。

だって、それから数日間、二人が顔を合わせる事はなかったんだもの。

ま、その後は思わず殺気が漏れ出してしまっ程のバカップルに戻ってたけど……。

殺気なんか出ないけどね。やっぱり私としては見ると寂しくなっちゃんだよなあ。

はぁ……。早く戻ってこないかな。コウキ君。

「ミナトさんはどうしてあの人を逃がしたんですか？」

「あの人って？」

「シラトリさんです」

ルリルリにそう訊かれる。

どうしてって言われてもねえ。

「おかしいかな？」

「いえ。その理由を教えてくださいなんです。前回もミナトさんはシラトリさんを逃がしましたから」

「あら？ 私ってそんな事をしたの？」

へえ。流石は私。

「え？ 知っててやったんじゃないんですか？」

「違うわよ。私はコウキ君から色々と聞かされてるけど、自分の事は何一つ聞いてないの」

「……そうだったんですか。どうしてか聞いても？」

「ええ。私は自分の運命が決まってるなんて信じなくなかったの」

「運命・・・ですか？」

「そうよ。私が未来でしてきた事を知り、その上で行動なんてしても面白くないでしょ？」

「お、面白くないですか？」

「ふふつ。だって、それって結局は経験もしてない運命に縛られてるって事じゃない？」

私の事は私が決める。未来の私に私の選択を左右されたくないの」

未来の私が誰かを好きになった。だから、私もこうする？

ううん。そんな事はしないわ。だって、絶対に変だもの。

今の私が好きなのはコウキ君で、それは私自身が決めて、私自身が選んだ事。

この選択に未来の私は何の関与もしていない。

だから、胸を張って言えるの。コウキ君が好きだって。

「人生何があるか分からないから素敵なんじゃない。

未来を知るっていうのは私にとって楽しみを奪われるみたいなのよ」

どっちが正しい？ どっちが最善？

そんなの元から決まってるよ。

数ある選択肢から何を選んで、後戻りなんて出来ないんだもの。

だから、いいんじゃない。選んだ道を堂々と進める。

もしああたったらなんてIFの事を語っても虚しいだけよ。

ま、私も人間だから、後悔はするけどね。何度だって。

「ルリルリは未来を知りたい？」

「それはこの世界でのという事ですか？」

「もちろんよ。この世界が今のルリルリの世界。既にルリルリを縛る運命の鎖はないんだから」

パチツとウインクなんかしてみる。

「私は未来を知るのが怖いです。私達が改変した未来がどうなっているのか。」

もし変わってなかったらと思うと・・・」

そう言っつて震えるルリルリ。

そうよね。怖くない筈がないわよね。

「怖がったっていいのよ。ルリルリ」

「え?」

「怖いから強くなるうとする。怖いから変えようと頑張れる」

「・・・ミナトさん」

「怖くて当たり前じゃない。だから、怖がっていいの。その為に私達がいるんだから」

皆で変えようって約束したんだもの。

怖いから団結する。それでいいじゃない。

「はい。そうですね」

そう言っつて笑うルリルリが歳相応の可愛らしい笑みで・・・。

「ルリルリ」

「ミ、ミナトさん」

抱き締めてしまったのは仕方のない事だと思っつよ。

「所でユニニットってどうなってるの?」

「調整中ですね。接続はほぼ完了しています」

ちなみに、現在月面都市でYユニットの調整中。
シャクヤクっていう同型艦だから、接続できる筈っていう艦長の提
案だけど……。

「ちょっと無理があったんでしょ？」

「ええ。一応、こちらで調整してみたので、大丈夫だとは思いますが」

Yユニットに向こうの何とかっていうのが侵入して大変な事になっ
たらしい。

聞いた話だから、詳しくは分からないけど。

調整したって事は大丈夫なのかしら？

「この後は？」

「コスモスに合流して最終調整ですね」

ふん。コスモスに合流か。

私としては早く地球に戻りたいんだけどなあ。

……駄目みたい。うん。寂しいなあ……。

S I D E O U T

「教官。どうかしましたか？」

さっそく柔術と剣術を習っているのですが……。

「……いや。ボロボロだなと」

……ええ。全くもって歯が立ちません。はい。

「流石にすぐには負けられません。ですが、筋は良いかと。何より身体能力は私以上です」

そりゃあ、ナノマシンで強化されてますから。

「私自身身体が衰えぬよう鍛えているつもりですが、更には上がるとは……」

あ。予備知識。ケイゴさんって軍内での体力テストいつも基地内トツプらしい。

涼しい顔して厳しい訓練を軽くこなすクールなイケメン。

うん。軍内の女性がキャーキャー言うのも頷ける。内だけじゃなく外もだろっけど。

「それなりに鍛えてますから。いずれはケイゴさんと互角に戦えるようになりたいですね」

「私もそうなっていたいただけると嬉しいです。そうなるよう鍛えさせて頂くつもりですが」

「変な事を訊きますが、ケイゴさんは周り比べてどれくらい強いですか？」

「私は同じ流派の者達の中では五指に入ると自負しています。」

門下生時代は友人と切磋琢磨したものですよ」

うわ。五指に入るだって。

どれくらいの人数がこの流派を習ってるかしらないけど、凄すぎじゃない？

なんか物凄く遠くなった気がする。

「時間がある限り、お教えしましょう」

・・・助かります。

「次は射撃訓練でしたよね。御願います」

「はい。いきましよう」

ハッハッハ。射撃訓練では俺の方が上だ。

それ故に、偉そうに出来る。ハッハッハ。

はあ・・・。ガキだな、俺。

「うわ。なんて裏金。税金なのに・・・」

現在、趣味のハッキング中。

軍内部の裏について調べてます。

あ。趣味なので、調べるだけです。

もしかしたら、間違っって誰かにデータを送ってしまうかもしれませんが。

「カイゼル派にとってどの派閥が邪魔なのかな？」

ま、とりあえず調べて全部提督にデータを提出しておけば問題ない

か。

・・・おっと。間違って送っちゃっても仕方ないかな、だった。

「とりあえず」

『マエヤマ君。ちよっといいかね』

ん？ またもや提督から連絡。

今度は何だ？

「何でしょう？」

『紹介したい者がいるんだが、いいかね？』

「分かりました。向かいます」

『頼むよ』

うし。とりあえず調べてデータを軽く纏めて、ついでに提出しちゃうおう。

パーツと簡単に纏めて・・・。

「失礼致します」

執務室に到着。

あれ？ あのキノコヘッドは・・・。

「紹介しよう。ムネタケ・ヨシサダ参謀だ」

「よろしく。マエヤマ君」

・・・やっぱり。劇場版にチロツと登場したキノコ父。ここにキノコ提督がいる訳ないしね。

そういえば、ミスマル提督の親友っぽい扱いだったな。

「こちらこそよろしく御願います」

刻まれた皺は英知の証。外見瓜二つだけどオーラが違う。なるほど。キノコ提督が尊敬してるってのも頷ける。

「私の息子が迷惑をかけているようだね」

「え、ええっと・・・」

激しく肯定したいけど、出来る訳ないでしょ。なんて厳しい質問。揺さぶられてる？

「いや。分かってるんだ。最近の息子の状況ぐらいは」

「あの、提督に何かあつたんですか？」

言い方は悪いけど、どこか歪んでるといっつか、捻れてるといっつか。

「昔は優秀だつたんだよ」

苦笑しながらそう告げるムネタケ参謀。

啞然としちゃったのもおかしくないと思うんだ。

「息子の自慢をするように悪いけど、あいつは士官学校も首席で卒業しているんだ」

「しゅ、首席ですか？」

そ、それって滅茶苦茶有望で優秀じゃないか。

あのキノコ提督が？ 嘘でしょ？

「良く父である私にも理想を語っていたよ。」

俺が軍を引っ張っていく。汚職なんかせずに軍人としての模範と

なる、つてね」

「……」

「頼もしく思ったものだ。あいつなら私を超え、軍を引っ張る良い軍人になれると」

キノコ提督はそんなに真つ直ぐな理想を掲げていた。

それなのに、今は出世の為なら手段を選ばない軍人として褒められない人間になっている。

それだけ提督の考えを変えてしまう何かがあったって事か？

「でも、あいつは過酷な現実の前に挫折してしまったんだよ。

それは我々にも責任があるんだけどね」

「過酷な現実とは？」

「軍があいつの望む軍ではなかったって事さ」

そういえば、原作でも何か言っていた気がする。

あまりにも酷い軍に絶望したって。

「変わってしまった。誰もがそう思うがね。私はまだ信じているのだよ」

「提督を……ですか？」

「そう。私に理想を語ったサダアキはまだ完全には屈していない。

きつかえさえあれば昔のサダアキに戻る筈だ、とね」

「……なんか父親って良いなと思った。

あれだけ変わってしまったえば、もう放っておく親だっていると思う。でも、この父親は見限らず息子を信じている。

彼ら親子の絆は深いんだろうな。

父を尊敬し、あまりにも気高い理想だったが為に崩れたギャップでああなった息子。

それでも、息子を信じ、待ち続ける父親。
やっぱり親子って凄い。

「おっと、話が逸れてしまったね」

「いえ」

良い話を聞かせて頂きました。

「マエヤマ君。ムネタケ君は我々の頭脳だ。何かあったら彼に相談
してくれ」

「了解しました。何かありましたら参謀に報告します」

要するにハッキングデータはムネタケ参謀に提出しろって事ね。

その後で、参謀が纏めて、どう効果的に用いるか決めるからって。
うん。俺なんかより参謀にお任せした方がずっと良いよね。確かに。
とりあえず俺はハッキングしまくって参謀に提出しまくれればいい訳
だ。

うん、分かりやすくて良い。

「うむ。用件は以上だ」

「ハッ。さっそくですが、ご相談に乗って頂けますか？」

「それじゃあ私の執務室に行こうか」

「了解しました」

提督の部屋に出入りしまくってると怪しまれるってのもあるんだろ
うなあ。

でも、参謀の部屋に出入りしまくるってのも怪しまれる気がする。
そもそも怪しまれるってのも後ろめたさから来る被害妄想かも？
うん。どうなんだろう？

「こちらになります」

執務室に着いたら、さっそく提出。
俺としてはいつまでもこんな危険な資料を持っていたくない。

「ほお。これだけのデータを」

紙媒体の資料をパラパラ捲る参謀。
情報漏洩が怖いので、紙媒体です。

これならきちんと保管すれば誰にも見られないしね。
その所、頼みますよ。参謀。

「すまんね。こんな危険な事をさせてしまった」

「いえ。趣味の一環でやってる事ですから」

「そういう設定だったね」

設定って、おいおい。

「万が一には私も君を護る為に動く」

「あ、ありがとうございます」

「聞いたよ。君は普通の生活がしたいって」

「はい。今は軍に協力しているという状況ですが、戦争が終わり次第普通の生活をしたいですね」

「なるほど。それなら・・・」

それなら？

「すぐにも協力辞めた方がいい」

「・・・え？」

それって……。

「君の優秀さは証明された。このまま軍に居続けてしまつと容易に軍から抜けられなくなる」

「し、しかし……」

「しつかりと考えた方が良い。

絶対とは言わんが、このまま軍に協力し続けたら、普通の生活に戻れなくなる可能性もあるのだから」

「……」

……俺は平穏な生活をしたい為にここにいる。

ここで俺に出来る事をしなければ、きちんとした形で戦争を終えれないと思っっているから。

でも、その代わりに平穏を捨ててしまふ事になったら……。

そんなの意味がないじゃないか。何の為に俺はここにいるんだよ……。

1177

「私は戦争が終了次第、君を解放したいと考えている」

「……」

「だが、私やコウイチロウの権限でそれが可能かは分からない」

「それは、他の方が俺を欲すると？」

「その可能性があるという事だ。」

それに、だ。軍を辞めた所で君が軍で残した功績が消える訳ではない。

いずれ、また軍から徴兵されてしまふかも知れん」

「……」

それじゃあ何の意味もない。

俺はただ普通の生活をしただけなのだから。

「ここで君に抜けられた困る事は事実だ。でもね、私達は一般人に軍人としての役割を求めようとは思わない。」

軍人になるつもりなんてなかったんだらう？」

「ええ。まあ……」

「それならば、君は我々が護るべき市民だ。」

護るべき市民に軍人として犠牲になれとは言わないよ」

「……考えてみます」

「そうして欲しい。後悔だけはしないようにな」

「……はい」

参謀の執務室から出る。

「はあ……」

少し軽く考えていたのかもしれない。

そくだよな。すんなり軍を辞められるかなんて分からないもんな。

……ふう。どうすればいいんだらう？ 俺。

「何、ボーっとしてんのよ」

「ん？」

食堂。……あ。晩飯食いに来てたんだっけ。

「大丈夫？ なんか顔色悪いわよ？」

「いや。大丈夫」

色々と考えてたら頭がこんがらがっちゃっただけだし。

「お前が心配してくれるなんてな」

「当たり前じゃない。心配ぐらいするわよ」

「そっか」

意外と優しい所あるじゃん。

「どうかしましたか？」

「あ。ケイゴさん」

ケイゴさんも合流。

「夕飯ですか？」

「ええ。毎日美味しく。食事が楽しみで仕方ありませんよ」

「だってさ、カエデ」

「ふ、ふんっ。当たり前じゃない。私が作ってるのよ」

おばちゃんもだけどな。お前だけではなく。

「それで、何かあったのですが？ 深刻そうでしたが」

「こいつが暗かったから声をかけてみただけよ」

「そうでしたか。どうかしたのですか？」

相談してみようかなあ。でも、もうちょっと自分で考えたい。

「いや。なんでもないよ。大丈夫」

「そう。何かあったら言いなさいよ。少しぐらいなら力になれると思うから」

「私でも構いません。教官にはお世話になってますから」
「あ、ありがとう」

な、なんか優しくくない？ 二人とも。何かあった？

「カエデ。いつものを御願います」

「自分で頼みなさいよね。まったく」

と言って俺の正面に座るケイゴとキッチンに向かうカエデ。
あれ？ なんかいつの間にか仲が良い？

「いつの間に呼び捨てになっただんですか？」

「毎日のように食堂にお世話になれば話す機会ぐらいありますよ。
同じ副官同士ですし」

あ。そういえば、カエデも俺の副官扱いなんだよな。一応。
すっかり忘れてた。

「大丈夫ですよ。教官の恋人を取るような事はしません」
「だから、恋人じゃないですって」

いつまで勘違いしてるんだか……。

「彼女は素晴らしい女性ですね。少し勝気な所がありますが、心優
しい前向きな女性です」

「ええっと、惚れました？」

なんか大絶賛なんですけど……。

「ですから、恋人は取りませんよ」

「違つんですってば」

まずは勘違いを解かなければ。

「どこか惹かれるんですよ。彼女には」

へえ。あれかな？

お互いに被害者だから、共感できる所があるみたいないや。こんな暗い理由じゃないさ。

もっと、こう、なんというか、明るい理由だよ、きっと。

「今度は何考えてんのよ？」

「うお！ 何だ。カエデか」

「何だとは失礼ね。はい。ケイゴ」

「ありがとうございます。カエデ」

配膳お疲れ様。いや。何かこの二人って並ぶと絵になるね。黙ってれば可愛いカエデとクール系イケメンのケイゴさん。容姿的にはバツチリ過ぎる。モデルみたいな二人だもんなあ。って、何、俺、劣等感なんか覚えてるんだ。

俺は俺。そして、俺の彼女はモデルみたいなミナトさん。全然、問題ないじゃないか。

「いやいや。なんでもないよ」

うん。なんでもない。なんでもない。

「ま、ゆっくり食べてなさい」

「頑張れよお」

「頑張ってください」

去っていくカエデにエールを送ってみた。
意外とケイゴさんもノリがいい。

「教官。明日は・・・」

それから所謂軍のお仕事についてのお話。
真面目だねえ。ケイゴさんは。
はぁ・・・。なんか考えが纏まらない。
部屋でゆっくり考えるとしよう。

SIDE MINATO

「おし。今日もセレセレの所に行こう」

コウキ君がいなくなってからずっとセレセレは元気がない。
コウキ君を慕ってたセレセレの事だ。きつと寂しがっているんだろ
うなあ。

という訳で決行したお泊り会。それが今では日常となっていた。

「セレセレ。来たよ」

「・・・ミナトさん。いらっしやい」

ベッドの上、テディベアを抱き締めながら出迎えてくれるセレセレ。
部屋にいる間はずっとテディベアを抱き締めているらしい。
多分、コウキ君のいない寂しさをテディベアに抱き付く事で紛らわ

しているのね。

ま、可愛らしい事この上ない光景なんだけれども。

「今日はどんなお話しよっか」

ベットの近くにある椅子に座ってセレセレに話しかける。

最近はいつもそんな感じ。

二人で色々な事を話して。

二人でお風呂に入って。

二人で一緒に眠る。これにはもちろんテディベアが付くけどね。

なんだか、話に聞く親子みたいで、ちよっとくすぐりたい。

「おやすみ。セレセレ」

「・・・おやすみなさい。ミナトさん」

テディベアに抱き付いて眠るセレセレを後ろから更に抱き締めて眠る。

だって、ほら、テディベアに負けたみたいで嫌じゃない。

ふふつ。冗談よ。ただそうしたいからそうしてるだけ。

静かな寝息をたてて、可愛らしく眠るセレセレ。

テディベアに抱き付いて、安らかな寝顔を浮かべるセレセレはどんな夢を見ているんだろう？

ちよっと頬を緩める。うん。やっぱり気になるなあ。

「ふふつ。可愛い」

柔らかいほつぺたを指先でつつく。

私にとっても安らぎの時間。

「もっと可愛らしいその笑みを見せて欲しいんだけどなあ」

コウキ君がいなくなってから笑顔になる事が少なくなったような気がする。

私の勘違いかもしれないけど。

でも、こうして、眠っている時はいつも幸せそうな笑みを浮かべている。

出来れば、いつでもこんな笑顔を見ていたいんだけどなあ。

早く戻ってきなさいよ。コウキ君。

セレセレがこんなにも寂しい思いをして待ってるんだから。

それに、貴方だってセレセレの笑顔が見たいでしょ？

皆、貴方の帰りを待ってるんだからね。

S I D E O U T

第三十四話（後書き）

み、短い・・・。

第三十五話

「ご苦労様だったね。マエヤマ君。これだけの情報があれば、状況を覆せるよ」

「そうですね。それは何よりです」

趣味の一環で集めたデータを提供。俺に出来るだけの事をした。うん。これ以上は無理。絶対に無理です。

「それで、答えは得たのかな？」

「ええ。決めました」

派閥の一員としてカイゼル派を盛り立てていくか。あくまでナデシコの一員として、ナデシコを護る為に戦うか。

「俺はナデシコに護りたい人がいます。俺のやるべき事はナデシコを護る。ただそれだけです」

「そう。・・・分かった」

そう言って参謀は席を立つ。

「付いて来てくれるかな」

「ハッ！」

ムネタケ参謀の執務室を退室し、廊下を歩く。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

俺も参謀も無言だ。

きつと向かう先はミスマル提督の執務室。

俺には提督に言わなければならない事がある。

コンツコンツ。

「私だ」

「ヨシサダか。いいぞ」

「失礼するよ」

「失礼します」

参謀の後に続く。

「ん？ マエヤマ君もかね」

「コウイチロウ。提案があるんだが」

「何だね？・・・まあ、何となく予想は付く。とりあえず座ってくれ」

執務室にある来客用のソファ。

そこに腰掛け、正面の提督を見詰める。

「さて、用件を聞こう」

聡明な提督の事だ。

聞くまでもなく理解している。

でも、言葉にしなければいけないと思う。

「提督。私はナデシコの一員です」

「うむ」

「今まで、私はテンカワさんと提督の目的に賛同し、協力してきました」

「……」

「ですが、私はあくまでナデシコの一員です。

現在、ナデシコは徴兵という形で軍隊入りしていますが、私の中でナデシコと軍は別物であると割り切っています」

「それは、現在の地位を捨てても構わないという事かね？」

「はい。むしろ、私には不要の階級であり、不要の名誉です。

技術士官という立場も特務大尉という立場もお返し致します」

「……そうか」

俺がここにいるのはアクトさんが未来を変えたいと言ったから。

そして、その為に軍内部で権力が必要だったから。

その為に俺は軍に協力したままだ。

俺とてあんな未来を変えたいとは思っている。

だが、既に未来は変わりつつあり、もはや俺個人の力だけでどうなる事ではない。

CASを開発し、教官としてパイロットを育て、武装の調整をした。先程提出したハッキングデータは俺にとって最後の義理立てだ。

あれは勢力を逆転させるだけの証拠と成り得る。

最後だからこそ、このデータに関しては全力を尽くした。

俺がカイゼル派に出来る最高の贈り物だったと自負している。

これだけの事を俺はしてきたんだ。

既に俺に与えられた役目は充分に果たしていると思う。

それならば、俺は本来の役目に戻りたい。ナデシコを護るといふ本来の役目に。

「相分かった。君の意思を尊重しよう」

「ハッ。ありがとうございます」

「ハハハ。普通の軍人であれば降格されれば落ち込むというのに逆の反応。」

君にはやはり軍人は似合わないよ」

「最高の褒め言葉です。参謀」

「そうかね」

執務室に笑い声が木霊する。

提督も参謀も、そして、俺も笑っていた。

本当に上司らしくない気の良い人達だと思う。

軍人に似合わない？ それは要するに一般人だと言われているようなもの。

俺はあくまで一般人だ。

そう言われるのはむしろ嬉しい。

「そうなるの一つだけ問題がある」

「・・・キシマの事ですね」

「ああ。現在のナデシコは私の管轄外。キシマ君を、火星人をナデシコに戻す事は出来ない」

カエデはナデシコにいられない。だから、こちらで保護してもらった。

ナデシコの立場も状況も変わっていない以上、カエデをナデシコに搭乗させる事は出来ない。

「では、管轄外でなくせば良いのです」

「それはナデシコの利権を私側が得ればいいという事かな？」

「ええ。その通りです」

「しかし、キリシマ君の為にそこまでの事は」

「いえ。キリシマだけの為に言っているわけではありません。他にも理由はあります」

「他の理由かね？」

「はい。テンカワさんが乗っているという点もありますが、

何よりナデシコはこれから重要な役目を担ってくれるからです」

「重要な役目？ それは何故かね？」

「戦力的な点もありますが、彼らが一度木連に接触しているという点が一番大きい」

「・・・なるほど。ナデシコがもしかしたら橋渡しの役目を担ってくれるかもしれないという訳だね」

「はい。ナデシコのクルーの事です。」

木連側と接触し、木連の生い立ちを聞けば、必ず和平を申し出るでしょう」

原作ではそうだった。そして、今回も必ずそうなると確信している。俺が画面越しではなく実際に知り合ったナデシコクルーだ。

彼らがどうするかなんて原作を見ていた時以上に理解している。

「彼らが和平を申し出た時、管轄内であれば、

後押しも出来るし、行動を規制する事も出来ると思うんです」

「後押しは分かるが、規制とは？」

「たとえば、和平交渉を勝手にやられたり、和平交渉に必要な物品を勝手に向こう側に渡したり。」

などなど、そのような事を防ぐ為です。万が一にも備えられますし」

「・・・ふむ。しないとは思いますが、確かにその危険性もなくはないな」

「・・・いえ。娘さんは前者をしましたし、後者も似たような事をし

ました。不本意だと思いますが……。

「どちらにしろ、ナデシコはこれから大事な役目を担ってくれる頼もしい艦です。」

違う管轄で味方にするよりはきちんとした形で指揮下に置いた方がやりやすいかと」

「……そうだな。理解した。だが、その方法が」

「参謀。貴方なら、出来ますよね？」

「ハハハ。それを君が言うのかい？」

苦笑する参謀。

だってね、その為のデータだし。

「どついう意味だね？」

「彼が仕入れてくれた情報の中に極東方面軍司令官のスキャンダルが載っているのだよ」

「そ、それでは……」

「ああ。司令官を失脚させた上でコウイチロウを極東方面軍の最高責任者に出来る」

参謀ならそういう事だって実現してくれる筈。

それだけの能力が参謀にはある。伊達に参謀ではないのだ。

……なんか偉そうだな。俺。

「ナデシコが極東方面軍に配属されている以上、

最高責任者になったミスマル提督なら配属を自由に出来る権限があります」

「そうか。だが、あくまでナデシコは独立部隊とする。

そうでなければ力を発揮しないだろうからな」

「そうですね。それならば、提督の直属部隊としてしまえばよろし

いかと」

「ふむ。そうしよう」

ナデシコは独立部隊でないと力を発揮しない。

それが真理であり、独立部隊としている事は意地悪でもなんでもないので。

ナデシコの性能。DFという盾にGBや相転移砲という矛。

それらを活かすには単独行動の方が遥かに効率がいい。

「しかし、いきなりは不可能だぞ」

「承知しています。そのあたりはキリシマを説得しますから」

「うむ。了解した。ナデシコが地上に戻り次第、君の身柄はナデシコに戻そう」

「ハッ。ありがとうございます」

「なに。君は私達の期待以上の功績を残してくれた。感謝こそすれ感謝される筋合いはないよ」

「いえ。キリシマの件など、私にも感謝する理由があります」

「そうか。君の功績に昇進という褒美が出せない以上、君に頼まれたキリシマ君は必ず私達で護ろう」

「御願います。提督」

「ふむ。次は司令と呼ばれる立場にいたいものだ」

貴方なら必ず司令として責務を全うしてくれると信じています。

「カグラ君には君の副官から外れてもらう事になるな」

「カグラはその後、どうなるのですか？」

ケイゴさんにはお世話になった。

異動になる前にきちんと話しておきたい。

「ちょうど良い機会だろう。彼には小隊を任せる」

「カグラ小隊ですか？」

「ああ。極東方面軍の要となってもらうと以前言ったな。それを実行するまでだ」

「カグラは要になれるだけの能力があります。それは私が保証しましょう」

「教官からのお墨付きをもらえれば安心だな。彼の下には同じ訓練生をあてがおう」

「私が教官として教えられる事は全て教えました。彼らなら期待に応えてくれる筈です」

ケイゴさんを筆頭に、皆、筋の良いパイロットだ。

俺の代わりにナデシコにいつても充分活躍できる。

それだけのパイロットに育て上げた自信がある。

「そうか。君には本当に世話になったな。」

今の我々が一つの派閥として活動できるのは君のお陰だ」

「いえ。そんな」

「謙遜なんぞしなくてもいい。CASがなければ我々は木連に対抗できなかつた。」

君が教官として鍛えてくれなければパイロットは戦力にならなかつた」

「そんな事はありません。彼らが成長したのは彼ら自身の力です」

教えたのは俺。でも、応えてくれたのは彼らだ。

俺はちゃんと知っている。彼らが仕事として与えられた時間外も訓練に勤しんでいた事を。

俺が育て上げたんだという思いはある。

だが、彼らの力は彼らの物で、俺は少し後押ししただけだ。

教育なんてやる気を促すだけだと俺は考えている。努力したのは彼

ら自身だ。

「そうか。だが、それだけではない。

こうして我々の派閥にとって何よりも必要としていたデータまで集めてくれた」

「君の情報がなければ私も何も出来なかったと思う。私からも感謝させて欲しい」

「派閥があるのも君の尽力のお陰かもしれんな」

・・・いや。それは言い過ぎだと思っんですけど。

「感謝しよう。マエヤマ君」

「感謝する。マエヤマ君」

ええっと、将来の連合宇宙軍総司令官とその参謀に頭を下げられてしまいました。

どうでしょう？ というより、恐れ多い。

「えっと、頭を上げてください。提督。参謀」

うん。とりあえず、心苦しいので。

「私に出来るだけの事はしました。同じ目的を持つ同士、私が協力しないのもおかしい話かと」

「しかし・・・」

「でも、それ程に私に恩を感じていただけのなら・・・」

正面から二人を見詰め、ハッキリと告げる。

「なんとしても目的を果たしてください。

私やテンカワさん、そして、提督達が掲げる嘘偽りのない最善の
「和平を」

それだけが軍に対する俺からの望みです。

報酬はいりません。だから、なんとしてもこれだけは果たして欲しい。

「了解した。ミスマル・コウイチロウの名に誓って、私は責務を全
うしよう」

「ムネタケ・ヨシサダ。全力で責務を全うすると誓う」

それで、俺は満足です。提督。参謀。

「ありがとうございます。とても心強いです」

「ありがとう。マエヤマ君。君の協力は忘れないよ」

「機会あれば、君とは飲み交わしたいものだね」

「そうですね。生意気な若造ですが、提督や参謀と一人の男として
飲んでみたいです」

「ほお。一人の男としてか。楽しい時間になりそうだ」

笑顔の二人。

きつと、彼らなら、俺達の理想を実現してくれる。

そう信じられる頼もしさを俺は彼らに感じた。

「……え。それって……」

「教官。それは真ですか？」

「はい。本当の話です」

提督の執務室から退室後、俺は副官の二人を呼び出した。これからの事をきちんと話す為だ。嘘偽りなく。

「ちょっと待って。コウキ。貴方は私を置いてくの？」

「・・・すまない」

カエデを置いていく事になる。それが一番の心残りだ。

「い、嫌よ。ここに残されるなんて」

「少しだけ待っていてくれ。時間が解決してくれる」

「な、なら、貴方も残ってよ。私が帰れるようになってからでもいいじゃない」

「・・・そう。確かにそうなんだ。」

カエデが帰れるようになってからでも遅くはない。でも・・・。

「すまない・・・」

「・・・一刻も早く帰りたんだ。」

立場も名誉もいらぬ。あそこには待っていてくれる人がいるから。ナデシコが俺の家だから。

「い、いいわよ！ もう知らない！」

「カ、カエデ！」

走り去っていくカエデを追う事が出来ない。

俺があいつを置いていくのは事実だから・・・。

「・・・教官」

「すみません。ケイゴさん。カエデの事、御願いできますか」

「それは構いませんが、良いんですか？」

「・・・元々、ここでの任期が終わったらカエデはここで保護してもらい、

俺はナデシコに帰るつもりでした」

「それはカエデにはもう話してあったのですか？」

「一応は。俺はナデシコでの仕事があり、

あいつがナデシコに帰れない以上、そうなるだろうって

「・・・そうですか。分かりました。私がここにいる限り、カエデの事は私が護ります」

「御願いします」

頭を下げる。

二人とも俺のエゴに巻き込んだのだ。

本当に申し訳ない。

「問題ありません。私も彼女の支えになりたいですから」

「え、あ、はい」

頭を上げる。

ケイゴさんは頼もしい笑みを浮かべていた。

本当に俺には過ぎた副官だったな。

「カグラ小队・・・でしたか？」

「はい。今一緒に訓練を受けている訓練生と共に小队を組んでもらう事になると」

「彼らですか。彼らなら安心して背中を任せられますね」

共に訓練を受けたからこそ、ケイゴさんが一番彼らの能力を把握している。

多分、俺以上に把握し、信頼を寄せてるんじゃないかな？

「教官、いえ、コウキさん」

ええっと、突然何だろう？

「今までありがとうございます」

そう言っつて頭を下げるケイゴさん。

本当に律儀な人だと思う。

俺がケイゴさんに与えられ物なんて殆どない。

むしろ、俺がもらっつてばかりだった。

「こちらこそ、今までありがとうございます」

共に頭を下げあう。

そのどこかおかしい光景に俺達は苦笑しあうのだった。

カエデの事、よろしく御願いしますね。ケイゴさん。

「お世話になりました」

ナデシコへ帰艦する事を決めてから数日が経った。

その間にカグラ小隊は何度か出撃し、功績を残している。

うん。安心した。彼らなら出来るって分かってたけどね。
カエデとは・・・話してない。

気まずいというよりは避けられているといった感じ。
分かってる。これは俺の自分勝手さがいけなかったんだから。
護ると言っておいて、途中で他人任せにして置いていく。

酷い奴だと自分でも思う。いつかはこうなったっていうのは・・・
言い訳だよな。

・・・はあ。本当にごめんとしか言いようがない。

「おお。大尉。いなくなっちまうんだってな」

そして、今は基地内の挨拶回り。

退任する事を報告して、今までありがとうございましたと頭を下げる。

「またいずれ機会があったら飲みたいですね」

「おお。いいぜ。今度は家に呼んでやるよ」

「いいんですか？ パパさんの面目を奪っちゃいますよ」

「て、てめえ、俺の娘に手を出そうつてのか？」

「さあ？ もしかしたら、パパさん以上に懐かれてしまつかも・・・」

「駄目だ！ お前、出入り禁止！ 面会禁止！ 日本訪問禁止！」

日本かよ！？ 範囲広過ぎだろ！

「と、まあ、冗談は置いて」

「あ。冗談なんですか。それなら、娘さんは」

「ゴラァ！」

「じよ、冗談ですよ」

すぐ本気にするんだから。この人は。

「それより、どうです？ 新フレームは」

「おお。秘密で開発中だな。着々と進行中だぞ」

「流石。それでこそです」

「ハツハツハ。まあな。フレームから武装も派生できっかな。そ
うちに回してやれるかもしんねえ」

「マジですか。なら、ロケットパンチの方を回してください。そう
いうが好きな奴がいるんで」

「おお。お前の所にも話が分かる奴がいるんだな」

ガイのつもりでいったが、良く考えたら整備班全員が興奮しそう。

あれだね。おっちゃんとうりばたけさんを一緒にしたら歯止めが利
かないね。

暴走し尽くす。絶対。ま、その分、驚異的な開発をするとは思っけ
ど。

「分かった。分かった。うまくいったら回してやるよ。一つ二つだ
けどな」

「構いませんよ。ロケットパンチを好んで使いそうなの一人二人ぐ
らいなんで」

多分、ガイだけだと思っけど・・・一応ね。

「大尉。お前さんには世話になったな」

「いえいえ。俺の方が世話になりました」

「あっち行っても頑張れよ。お前ならできっから」

「何がです？」

ニヤリと笑ってみる。

「何でもだよ。お前はもつと本気出せ。手抜きし過ぎだ」
「ええっと、いつでも本気出してますよ」

もちろん、本気ですとも。

「ま、意地っ張りなのも大尉らしいけどな。ハッハッハ」

俺らしいって何だろう？

「んじゃあな。また飲める日を楽しみにしてんぞ」

「はい。そちらもお気をつけて」

「へっ。若い奴に心配される程、歳とってねえよ」

手をあげて去っていくおっちゃん。

うん。本当に俺の周りにいる人は良い人ばかりだ。

清々しい気持ちにさせてくれる。

「おばちゃん。今までありがとう」

「おお。コウキ君の食べっぷりはこっちも気持ちが良かったよ」

次は食堂。いつもお世話になってたおばちゃんに声をかける。

キッチンの奥には・・・カエデの姿もあった。

「あのさ、おばちゃん、カエデの事、頼むね」

「何を気まずそうに。何？ 喧嘩でもしてんのかい？」

「ま、まあ、そんな所。ほら、俺いなくなっちゃうからさ。お願い
したいんだよ」

「分かってるって。コウキ君がない分はおばちゃんが補ってあげるから」

おばちゃんか補う……。あ、そう。

「あいつ、最近、どんな感じ？」

「ちよっと上の空って感じだね。悩み多き年頃だから仕方ないんだろうけど」

「おばちゃんだってまだまだ若いって」

「お世辞言つならまずはお姉さんって呼ぶ事から始めなさいな」

「ご尤もなご意見で」

お姉さんって呼ぶにはちよっとね。

「最近良くカグラ君が来て元気付けてくれるから、それなりに大丈夫」

「ええっと、ケイゴさんが？」

「そうそう。コウキ君。取られちゃうよ？」

「いや。だから、別にあいつとはなんにもないってば」

「ま、意地っ張りだねえ。相変わらず」

相変わらずって。おっちゃんと同じ意見ですか？

俺ってそんなに意地っ張りかな？

「ケイゴさんと良い関係なの？」

「どうだろう？ ま、これから楽しみみて所だね」

「……そう」

ミナトさんも言ってたな。

心の支えになつてくれる人が現れてくれたらいいなって。

ケイゴさんがそうなつてくれたら安心できるんだけどなあ。

あの人ほどに好青年という言葉が似合う人はいないと思うし。

「ん？ ショックかい？」

「だから、何にもないって。俺はカエデとケイゴさんがくつつくなら応援する」

「そう。ま、おばちゃんとしてはカエデちゃんが幸せになってくれればいいんだけどね」

「そのあたりは二人にお任せって感じ」

「そこをサーっと奪っていこうって魂胆ね？」

「おばちゃんは俺に何を期待してるのさ」

「そりゃあ、ねえ」

ねえ、じゃないっての。

「あいつ、意地っ張りだけど、優しい奴だから、本当にお願い」

「分かってるって。カエデちゃんの良さは私達全員が認めてるよ」

そっか。キッチンの皆がカエデを認めてくれているのなら、大丈夫か。

「うん。おばちゃんになら安心して任せられる」

本当に。お母さんみたいな暖かさがあるし。

「そうかい。そんじゃ、コウキ君の期待に応えるとしよう」

そう言ってニッコリと笑うおばちゃん。

うん。本当に頼もしい。

「んじゃ、続き行ってくるわ」

「終わったらまたこっちおいで。ご馳走してあげるから」

「お。遂におばちゃんの本気が食えるの？」
「いつでも本気だつてば」

食堂への挨拶を終え、その後は残りの部署を色々と回った。
教官として指導した訓練生達。

何度もお世話になりました医務室の方々。

ほら、ケイゴさん、容赦ないから。

事務の人や清掃業の人とか、俺がお世話になった人はたくさんいる。
今までありがとうございました。僕はここから巣立って行きます。

そうやってきちんと挨拶した。感謝の気持ちを含めて。

・・・あ。台詞はなんとなくだよ。卒業式的イメージ。

「本当にお世話になりました」

最後に演習場から基地に向けてお辞儀。

こうして、俺の挨拶回りは終わった。

「お父様あゝ」

「ユリカ」

ええっと、感動のご対面という事でしょうか？

わざわざ僕の迎えの為にナデシコがこの基地までやってきた。

まあ、補給という面も大きいと思うが・・・というか、むしろ、俺がついでかな。

責任者同士の対面という訳で、

ナデシコからはムネタケ提督とユリカ嬢が、

基地からはミスマル提督とムネタケ参謀がそれぞれ代表として前に出た。

これって、あれだよね、どっちも親子関係だよね。

「サダアキ。その顔は何かあったようだね」

「ええ。お父様。私は生まれ変わったのよ」

な、何があったんだ？ ア、アキトさん。

「久しぶりだな。コウキ」

「こ、こちらこそ、お久しぶりです。それよりキノコ提督に何かあったんですか？」

「ああ。何でも昔を思い出したらしい」

昔を思い出した？ それってあの首席時代って事？

「理想と現実の違いに絶望したキノコはもういない。

今のあいつは理想を求め足掻き続けるキノコだ」

・・・真面目な口調でキノコ提督の事、舐めてませんか？ アキトさん。

「何かきっかけが？」

「ふっ。前はガイがいなかっただろ？」

「ええ。ガイを殺したのがキノコさんでしたから」

「ああ。そうだったな。だが、そのガイがキノコの考えを変えたんだ」

「ガイが？」

「前回同様、錯乱したキノコはエックスエステバリスに乗り込んで、コスモスに攻め込んだ」

「やはり錯乱したんですか」

「責任を押し付けられたからな。仕方あるまい」

ナデシコクルーに木連の事を知られてしまった。

その責任を取って、降格させられてしまう。

その恐怖がムネタケ提督を錯乱させたんだっけっか？

「それに誰よりも早くガイが気付いてな。GBをチャージするムネタケを体当たりで吹き飛ばした」

「ガ、ガイ。危険な事を・・・」

「そうだな。だが、そのお陰で自爆されずに済んだんだ。そして、ガイがキノコを説得した」

「ガイが説得？ どんな感じですか？」

「理想に挫けるのは当たり前なんだよ。すんなり叶っちゃったら何の面白味もねえだろ。」

いいじゃねえか、挫けたら立ち上がれよ。何度だって立ち上がれ

よ

「・・・何だろう？」

アキトさんが言うつと凄じい違和感。

「その果てに叶うからこそ理想って言うんだらうが。数回の挫折で諦めてんじゃねえ！」

でも、すごくガイらしいと思う。

言葉の節々にあいつの想いが込められてる。

「錯乱してたのが幸いしたんだらうな。真摯にガイの言葉が伝わった。

いつもだったら、憤慨してただらうが、今回は冷静に受け入れら

れたようだっただな」

「・・・そうですね。アキトさん」

「ん？ 何がだ？」

「ガイを救う事が出来た。その結果、キノコ提督まで救う事が出来た。」

なんか改めて意味があつたんだなつて実感します」

「・・・そうだな。迷いながらも歩んできた道に間違いはなかった。そう思えるな」

そう言つて笑い合つ俺とアキトさん。

こうして救えた事に意味を持てるのなら、俺達のしてきた事に意味はある。

それが胸を暖かくさせた。

「コウキ君！」

「うお」

ダツと突然の背中への衝撃。

ん？ この柔らかい感触は・・・。

「コウキ君！」

「ミナトさん！」

後ろを振り向けば、そこには最愛の人の姿があつた。

「それじゃあな」

苦笑しながら去っていくアキトさん。

すいません。なんだか申し訳ないです。

「お久しぶりです。ミナトさん」

「久しぶりね。コウキ君」

ナデシコを離れてからかなりの月日が経つ。

久しぶりに会うミナトさんはやっぱり素敵だった。

「ほら。セレセレ」

「ん？」

「・・・お久しぶりです。コウキさん」

いそいそと現れたのはセレス嬢。

おお。なんだかちよつと背が伸びた気がする。

「久しぶりだね。セレスちゃん」

「・・・はい」

「元気だった？」

「・・・寂しかったです」

「え？」

「・・・コウキさんがいなくて寂しかったです」

・・・そっか。寂しい思いをさせてたのか。

「ごめんね。寂しい思いさせて」

「・・・いえ。仕方ありませんから」

「そっか。でも、もうこれからはずっと一緒だから」

「・・・はい」

久しぶりのセレス嬢の笑顔。

花が咲くような可憐な笑みで、本当に癒される。

「滞在期間はどれくらいでしたっけ？」

「えっと、あと数時間で補給を完了させるって言ってたわね」

「・・・そうですか。あの、ミナトさん、御願いしてもいいですか？」

「何かしら？」

「あの、ですね・・・」

ミナトさんに御願いしよう。あいつの事を。

S I D E M I N A T O

「あの、ですね・・・」

御願いって何かしら？

「俺がナデシコに戻るという事は聞いてますよね」

「ええ。だから、戻ってきたんじゃない」

何を今更って話よね。

「でも、そうになると、カエデはここに残していかなくちゃいけないんですよ」

「・・・そうだったわね」

ナデシコが火星人の受け入れを禁止されている以上、カエデちゃんはナデシコには戻れない。

「説得を試みたんですが、怒らせちゃって・・・」

・・・はあ。コウキ君。そういう事を私に頼むのはどうかと思うわよ。

信頼されてるって思えば嬉しいけどさ。それって恋人に頼むような事じゃないわ。

「分かったわ。私が少し話してみる」

「すみません。御願います」

コウキ君は本当にカエデちゃんを大切に思ってる。

もちろん、きつとそれは友達としてなんだろうけど。

ちよつと妬げちゃうかな。私をもっと見てって思うのはおかしいのかしら？

「それじゃあ、案内し」

「おおい！ マエヤマ！ ちよつとこつち来い！」

えつと、ウリバタケさん？

あんな遠い所から拡声器まで使って。

「何ですかあ！？」

「補給やら何やらでお前の意見を聞きたいんだよ！ いいから。早く来い！」

「ええつと、すみません。ミナトさん」

・・・はあ。コウキ君の馬鹿。

「あ。ちよつといいかな」

「はい。何でしょう？ 大尉」

近くにいる誰とも知らない女性に声をかけるコウキ君。
えっと、多分、軍人の人。

「申し訳ないんだけど、食堂まで案内してもらってもいいかな？」

「この方をですか？ 構いませんよ」

「ごめんね」

「いえ」

「ミナトさん。すみません」

「分かったから、行ってらっしゃい」

コウキ君は頭を下げた後、パーツと行っちゃった。

ちゃっかり、セレセレの手を繋いでいるのがなんとなくコウキ君らしいって思う。

「それでは、こちらに」

「あ。はい。御願います」

女性兵士に導かれた食堂へ向かう。

今回もコックをやってるのね。カエデちゃんは。

「あの、食堂へは何故？」

「カエデって子、分かります？」

「ああ。コックさんですね。分かりますよ」

「あの子にちょっと用があるんです」

「そうですか」

カエデちゃんになんて話せばいいのかしら。

それからしばらく歩いて、多分、食堂に着いた。

「帰りもご案内致しましょうか？」

「いえ。大丈夫です。覚えてますから」

「そうですか。分かりました。それでは、失礼します」

ありがとうございますと一礼。

さてっと、カエデちゃんは……。

「あ。いたいた」

食堂の椅子に座って、深刻そうな顔をしている。

近寄って、話しかけようかなと思っただけど……。

「カエデ」

カエデちゃんの前に誰かが座って話しかけた。

「何だろう？」

会話が聞こえる位置まで行って、静かに椅子に座る。

「いいんですか？ 見送りに行かなくて」

「あんな奴、知らない」

きつとコウキ君の事ね。

「そんな事を言っただけは駄目ですよ。コウキさんはカエデの為にあんなに頑張ってくれたのに」

「でも、私一人をここに残していくのよ。あいつは私を助けてくれるって言ったのに」

「しかし、コウキさんはナデシコでやる事があると言っていました。こうなる可能性があるという話もしていたそうじゃないですか」「そんな事は分かっているわ。でも、私はまた一人ぼっちじゃない」

「・・・そっか。カエデちゃんにとってコウキ君は火星壊滅後で初めての友達。」

コウキ君がいないという事が一人ぼっちに繋がっちゃうのか。でも、それは違うわよ。カエデちゃん。もっと周りを見なさい。

「カエデ。貴方は一人じゃない。この基地には私だっている」

「ケイゴ。貴方、何言っているの?」

「もちろん、私だけじゃありません。」

キッチンで一緒に働いている方々だつて貴方にはいるでしょ?」

「・・・あ」

「笑顔でコウキさんを見送ってあげましょう。」

それがきつとカエデが今、一番しなければならぬ事だと思いますよ」

「・・・どうやら私の役目なんてなかったみたい。」

まだ納得してないみたいだけど、彼ならカエデちゃんを説得してくれるわね。」

ふふっ。私はもう用なし。ナデシコに帰りましょう。」

コウキ君。カエデちゃんを支えてくれる人が現れたかもしれないわよ。」

S I D E O U T

「ご苦労様だったな。マエヤマ君」

「いえ。ありがとうございます。提督」

ナデシコへの補給も終えて、遂にナデシコ発進の時が来た。
この時より、俺は特務大尉の肩書きを捨て、ただのクルーとして
ナデシコに乗り込む事になる。

「敬礼！」

ビシッ！

ケイゴさんの声を合図に見送りに来てくれてた訓練生やパイロット
達が敬礼をしてくれる。

皆、俺の教え子か、パイロットとして訓練に混じった友達。

彼らと別れるのは寂しいけど、俺の居場所はナデシコだから。

ビシッ！

敬礼を返す。感謝の気持ちと楽しかったという気持ちを込めて。

『ほえ〜。カッコイイ』

『なんだか別人みたいね。コウキ君』

『・・・コウキさん。カッコイイです』

ええつと、一応、感動の別れなので、その覗き見とかはしないで欲
しいんですが・・・。

というか、聞こえてますから。はい。

「それでは、失礼します！」

基地のデッキからナデシコへ向かう。

感慨深いな。ここには結構お世話になったし。

でも、ちよつと、心残りがある。

あれから、結局、カエデと話す事が出来なかった。

やっぱり、まだ。

「コウキ！」

「ッ！？」

その声にパツと振り向く。

そこには疎遠気味だったカエデが一生懸命こちらに手を振っていた。

「貴方なんかいなくて私は全然大丈夫だから！」

「カエデ！」

「貴方は私の心配なんてしないで自分の仕事をしっかりと果たしなさい！」

「ああ！ 分かってる！ お前もな！」

「分かってるわよ！」

「俺がいなくても寂しがるなよ！」

「そつちこそ私がいなくても寂しがるなよ！」

「それはない！」

「はあ！？ 少しは寂しがりなさいよ！」

・・・安心した。

いつものカエデだ。

「待ってるぞ！ カエデ！」

「ええ！ 待つてなさい！ コウキ！」

・・・ありがとう。ミナトさん。

そう感謝の念を抱きながら、俺はカエデに手を振り返した。

「じゃあな！」

「ええ！ また会いましょう！」

そう言つて笑うカエデ。

その笑みが今までに見た事ない程に魅力的で不覚にもドキっとしてしまつた。

その事を誤魔化したくて、俺はパツと背を向けてナデシコへと歩き出す。

・・・頑張れよ。カエデ。俺も頑張るから。

こうして、俺は無事ナデシコに帰艦した。

連合軍の士官としてではなく、ナデシコにいる普通のクルーとして。

第三十五話（後書き）

第三部、連合軍暗躍編、完。

見返してみても、何処が暗躍？ と思った自分がいます。
出来れば突っ込まない方向で……。ええ。本当に。

もっと僕に感想のエネルギーを！
大事な成分です。御願います。

第三十六話（前書き）

第四部開始。

そして、今回も新武装。

いや、色々な意見が頂けて助かってます。
これからもどうぞよろしく御願います。

第三十六話

「マエヤマ・コウキ。久しぶりね」

・・・遭遇。キノコ。

「お久しぶりです。提督」

「お父様がお世話になったそうね。礼を言っわ。ありがとう」

「ええつと・・・」

マジで変わったな。あれか？ 進化してマツタケモンにでもなったか？

「私もね、改革和平派の一員になったの」「改革和平派？」

何だ？ それ。

「あら？ アンタ、知らないであそこにいたの？」

「って、ミスマル提督の派閥ですか？」

そんな正式名称があるとは知らなかった。

・・・いや。そりゃあ、あるよな。尤もらしい名前が。

「そうよ。何て名前だと思ってたの？」

「いえ。俺は分かりやすくカイゼル派と呼んでましたから」

「カイゼル派？ それって・・・」

「はい。ミスマル提督のです」

「・・・ここは笑うべき所なのかしら？」

「いえ。恐らく違うかと」

顔を近づけて聞いてくるマツタケ提督。

以前だったら鳥肌が立つだろう距離も意外と苦にならない。

もちろん、嫌なものは嫌だけど、ま、仕方ないで済むレベルだ。

「ミスマル提督から資料を頂いたわ。私みたいな奴ばかりだったのね。上層部って」

「えっと、ここは笑うべき所でしょうか？」

「どつちだつていいわよ。私も腐ったミカン。上層部の殆ども腐ったミカン。ああ。やだやだ」

・・・変わりましたね。マツタケ提督。

というか、腐ったミカンの方程式。なんか懐かしい。

「提督は首席卒業だったらいいですね」

「ええ。良く知ってるじゃない」

「ムネタケ参謀から聞きました。自慢の息子だつて」

「・・・お父様・・・」

感激してるんですけど・・・。

「提督。貴方は生まれ変わったと言いましたよね？」

「ええ。少なくとも少し前までの価値観は捨てたわ。」

改革和平派の一員になったのもその意思の表れよ」

「期待させてくださいね。真剣になった提督は俺なんかより何倍も

凄いでしょうから」

「アンタと比べられてもねえ。ま、大丈夫よ。この艦の艦長は優秀なもの。」

艦の事は艦長に任せるわ。私は改革和平派の一人としてこのナデシコを導くだけ」

そうか。

ナデシコ内で一番の権限を持つ提督が改革和平派に属す。

それはナデシコ自体が属しているといっても過言ではないのか。少なくとも、周りはそう認識する。」

「しかし、前の派閥とかは大丈夫なんですか？」

「アンタなんか心配されなくても大丈夫よ。お父様には苦勞かけるけどね」

「参謀なら喜んで背負ってくれると思いますよ。息子の責任は私が持つって」

「・・・アンタ、良く知ってるのね。まんま同じ事を言ってたわ」

「同じ仕事をした仲ですからね。それなりには」

「・・・そう。分かったわ。貴方は貴方の仕事をしなさい。責任は私が持つてあげる」

「え？」

「それが責任者の義務つてもよ。じゃ、頑張りなさい」

なんか普通に良い人じゃない？ 本当にキノコ提督か？

髪型と口調さえまともなら・・・いや、あれも個性と受け取ろう。

いや。うん。キノコ提督はマツタケ提督に進化した。これ、間違いないわ。

「意外だったな」

「あ、アキトさん。ども」

「ああ」

マツタケ提督を見送る俺の背中にアキトさんが声を掛けてきた。ま、ブリッジ前の廊下だから、人がいてもおかしくないんだけどさ。

「聞いてました？」

「ああ。聞いていた。変わるものだな。人は」

「そうですね。でも、多分、戻ったんですよ。きっと本当の提督はあんな人です」

「・・・そうか。キノコはキノコなりの信念があつたんだな。

それが貫けなかった事を弱いとは思わんよ。それ程までに気高い信念だつたんだろう」

「アキトさん。ガイを殺したキノコ提督はもはや記憶だけの存在。虚像ですね」

「ああ。これからは色眼鏡なしで向き合おう。キノコとは」

何だろう？ やっぱりどこか刺々しい。キノコ連呼だし。

「あ。後で少し時間を頂けますか？」

「ん？ 構わんが、何をするんだ？」

「いえ。友人に少しばかり格闘術を習いましてね。少し手合わせして欲しいんですよ」

「ほお。接近戦のスキルを身に付けてきたという事か。それは楽しみだな」

「といつても、触りですから。手加減は御願いますよ」

「なに。手加減しても成長はせん。本気でいかせてもらう」

うわ。この人、楽しんでるんですけど・・・。

「・・・お手柔らかに・・・」

・・・ちよつと後悔している僕。

ああ。ケイゴさん。僕に力を。憑依して身体を使ってくれてもいいですよ。

あ。僕つてばシャーマンじゃないし、ケイゴさんは霊でもなんでもなかった。

はあ・・・。また医務室のお世話になりそうです。

「ウリバタケさん。来ましたよ」

帰艦してからの僕、意外と忙しいんです。はい。

あの基地で新たに導入したディストーションブレードと大型レールキャノンの調整。

そして、なんと、エックスエステバリス、略してエクスバリスを完成させたいという要望。

いや。無理しないで違う可能性を見つけましょうよ。そう言つても聞かないのがウリバタケクオリティ。

せめて小型グラビティブラストは完成させたいとか。

ジンシリーズを見て、欲求不満になりましたね。この人。

「ふっふっふ。あの基地の連中は良く分かつてる」

・・・ああ。嫌な予感。

「提供されたドリルアーム、ジャイアントアーム、ガントレットアーム。おお。夢が広がる」

・・・やはり提供されてましたか。

うまくいったら提供するって言うてたのに。

あれか。多分、ウリバタケさんが途中でいいからって言うて引き取ったんだな。

間違いないそうだな。それを調整するのは・・・やっぱり俺か？

「ん？ 説明して欲しいって顔してんな」

「いや。いいで」

「分かった。分かった。説明してやるよ」

あの、話聞いてます？

別に説明しなくてもいいんですが・・・。

「ドリルアームは呼んで字の如くだ。腕の先から換装するタイプで、こちらの意思で回り続ける。

先端にDF中和装置も付けてあるらしいぞ」

好きですね。ドリル。眼が輝いてますもん。

「ジャイアントアーム。これもそのままだな。ああ。デカイ拳だ。

だが、そこにこいつの良さがある。シンプルこそが最強なのだ。アツハツハ」

ウ、ウリバタケさんが壊れている。だ、誰か、救援を・・・。

「最後のガントレットアーム。これは通常の腕に後付する形の武装だ。

使い勝手が良いな。基本的にどの機体にもこれは取り付けられる事になるだろう」

確かに便利だな。

腕の横とかにライフル備え付けられれば牽制にも使えるだろうし。

「うう。あいつらは良い奴だ。これだけのサンプルを提供してくれた」

ま、まあ、ナデシコに懸ける期待が凄まじいという事では？
ミスマル提督は娘を乗せてる訳だし。

「知ってるか！？ ドリルアームとジャイアントアーム。
この二つはかの有名なロケットパンチ機構になっているのだぞ！」
め、眼が血走ってますよ。ウリバタケさん。

「知ってますよ。おっちゃんにはロケットパンチを優先してくれ
て言いましたし」

今思えば失敗だったかも。苦労は俺に返ってくる訳だし。

「何？ お前がそう提案したのか？」

「ガイとか好きそうでしたからね。提案したらやる気になっちゃっ
て、今更ながら後悔」

「よくやった！ マエヤマ！」

ハハハ……。喜んで頂けたようで……。

とりあえず、背中をバンバン叩くのはやめませんか。
嬉しいのは分かりましたから。

「俺の夢は至高のジャイアントアーム、名付けて、ギガントアーム

を開発する事だ。

協力してもらうぜ。マエヤマア！」

あの、これって既に脅しですよね？ 拒否したらどうなるんの？
僕。

「お、俺に出来る範囲でなら」

「おう！ 期待させてもらうぜ！ ハッハッハ」

・・・はあ。ハイテンションなウリバタケさんに対し俺は物凄く口
ーテンションですよ。

いやはや。どうなるんでしょうねえ・・・。

あ、あまりの混乱にプロスさんの口調になってしまった。
最早末期だな。ちょっと休もう。精神的に追い詰められてる。

「・・・はあ。癒される」

「・・・どうかしましたか？ コウキさん」

「いや。なんでもないよ」

久しぶりのナデシコブリッジ。

そして、久しぶりのセレス嬢の膝乗せ。

うん。荒んだ心を癒してくれるよ。セレス嬢は。

「緩み過ぎよ。コウキ君」

いや。ミナトさん。仕方ないんです。

「ちょっと色々ありまして」

ウリバタケさんとおっちゃんの陰謀に気苦労が絶えません。
アキトさんとはガチバトルの約束までしちゃったし。

「今更な気もするけど・・・」

ええっと、何でしょうか？

「おかえり。コウキ君」

・・・あ。そうだった。

「ただいまです。ミナトさん」

ナデシコに帰ってきてから色々あってまだちゃんと言っていなかった。

「ただいま。セレスちゃん」

「・・・おかえりなさい。コウキさん」

振り返って、俺を見上げるようにして、ペコリと頭を下げるセレス嬢。

なんだか、改めて、ナデシコに帰ってきたんだなって実感した。

「・・・ん」

あ。頭を撫でる感触も久しぶり。

うん。やっぱり背が伸びてる気がするな。

「セレスちゃん。背、伸びた？」

「・・・分かりません」

「うん。勘違いかな？」

「多分、伸びてるわよ。この年頃の女の子って成長するの早いから」

おお。ミナトさんのお墨付き。やっぱり背伸びてるか。

「女の子の成長は早いですからね」

「ええ。セレセレもあつという間にレディーになっちゃっわね」

セレス嬢が大人になった時・・・。

「・・・未来は明るいですね」

「どゆこと？」

「セレスちゃんが成長したら、そりゃあ、もう美人になるだろうなあ」と

「ふふっ。間違いないでしょうね」

ま、何年も先の話だから今気にしてても仕方ないんだろうけどさ。

「・・・何の話ですか？」

「セレスちゃんは将来美人になるだろうなって話」

「・・・美人さんですか？」

「そうだよ。今でさえこんなに可愛いからね。将来は凄い美人になるよ。きつと」

「・・・ポッ」

いや。本当に可愛い。

「セレセレね。サンタさんから貰ったテディベアを抱き枕にしてる

のよ
「よ」

へえ。大事にしてくれてるんだ。

「……恥ずかしいです」

「でも、分かるわあ。あれの抱き心地は最高だったもの」

うん。あの感触は最高だった。

「……あの……」ウキさん

「ん？ 何かな？」

「……今日、一緒に……」

「一緒に？」

何をしようって言うのかな？

「……寝てくれませんか？」

「……」

……え？

「……」

「……」

……あ。

「……駄目ですか？」

な、涙目。や、やばい。

「ええつと、それは、大丈夫なのかな？」
「・・・駄目ですか？」

ああ。な、泣かれる？ ちょ、ちょっと待とうか。

「ミ、ミナトさん」

「あら？ 別にいいんじゃない。私も良くセレセレと一緒に寝てるわよ」

「で、でもですね、俺って男だし」

「・・・駄目ですか？」

うがぁ！ 俺はどうすれば・・・。

「・・・分かりました。諦め」

い、いや。大丈夫だろう。おう。大丈夫だ。
セレス嬢を泣かせるより何倍も良い。

「い、いいよ。セレスちゃん」

「・・・いいんですか？」

「も、もちろんさ。おいで」

「・・・ありがとうございます」

ほっ。良かった。

でも、そんなに眼をキラキラさせるものかな？

「セレセレ」

「・・・はい。何でしょうか？」

「一緒にお風呂には入らないの？」

「ゴホッ！」

「ミ、ミナトさん。何を言ってるんですか!？」

「・・・入りたいです」

「だってさ。コウキ君」

「ニ、ニヤニヤして、ミナトさん、流石にそれは・・・。」

「・・・駄目ですか？」

ああ。この眼は駄目。断れる気がしない。

「う、うん。いいよ。一緒に入ろう」

「・・・はい!」

げ、元気な返事だね。セレス嬢。

「私も一緒に入ろうかしら」

「ミ、ミナトさん!？」

「・・・一緒に入りましょう」

「セ、セレスちゃん!？」

「は、はい。決定! 今日二人でコウキ君のお部屋にレッツゴー」
「・・・レッツゴー・・・です」

楽しそうな二人。

ええっと、俺ってば大丈夫なの？

いや。いいんだけどさ。

むしろ、掛かって来いって感じなんだけど・・・。

ま、まあ、成せば成るさ。何事も。うん。

「さて、準備はいいか？」

ブリッジでの癒しタイムを終え、さっき頼んでおいたアキトさんとの手合わせ。

いや。何だろう？ あの顔、本気っぽい。

「え、ええ。いいですけど、お手柔らかに」

「ふっ。まずはそちらの実力を見ないと」

「で、ですよねえ」

「だが、無論、手加減なしだぞ」

ど、どっちなんだよ!？

「では、始め！」

は、始まっちゃった。

「ふう・・・」

まずは深呼吸。

ケイゴさんは言っていた。

冷静に、それでいて、心を燃やせて。

要するに、クールになりつつ、ホットになれ。

・・・うん。正直な話、理解してない。

と、とにかく、まずは心を落ち着かせよう。

「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」

俺の正面で構えているアキトさん。
おし。俺も構えよう。

「ッ!? その構えは・・・」

なんか驚いているけど、今は勝負の時。
冷静に相手を眺めつつ、隙を窺う。

「タアアア!」

うん。隙なんかない。なら、自分で作るまで!
アキトさんに迫って掌を突き出す。

「ふっ」

ダンッ!

「グッ!」

腹に掌底。

あっさりと避けられて一撃を打ち込まれた。

「鋭いし、早さもある。だが、正直すぎないか?」

「俺の師匠がそういう人でして。でも、師匠はそれでも打倒する強
さがありましたよ」

そう。俺はまだただけど、ケイゴさんクラスまでいくとフェイン

トすら必要ない。

どんなフェイントをしようと、どれだけ不意打ちしようと、まるで全て分かっているかのように対応されてしまう。

シンプルこそが強い。いや、基本を鍛え抜いたからこそ、シンプルだけで圧倒できるんだと思う。

「ほお。相当の実力者に弟子入りしたようだな」

「ええ。お陰様で耐久力だけは師匠並ですよ」

ケイゴさんは鬼。偽りなき鬼です。

手加減してくれてたんだろうけど、一発喰らう度に焦った。何度か気絶させられた事もある。

「そうか。だから、まるで利いてないんだな」

「いやいや。充分利いてますよ」

腹筋鍛えといて良かったあ。

ケイゴさんと訓練してなかったら、寝込むぞ。

「次だ」

「はい」

それから、結構の時間を手合わせに費やした。

アキトさんは予想通り強くて、まるで歯が立たなかった。身体能力では俺が勝っている。それは確か。

でも、虚を突く攻撃、裏を付く攻撃、こちらの攻撃を受け流しての攻撃など。

正面から打倒するケイゴさんとはまた違った強さで、碌に攻撃を当てる事が出来なかった。

ケイゴさんは柔術と言いながらも正面から打ち破る、剛のスタイル。アキトさんは時折フェイントなどを混ぜながら隙を作り、不意を付く、柔のスタイル。

まるで反対のスタイルで、戦う側としては非常に参考になる。

・・・どちらも圧倒的な差で敗れているという点には眼を瞑ろう。

「凄まじい身体能力だな」

「まあ、ナノマシンで強化されてますから」

「そうだったな。だが、まだ振り回されている感がある」

うん。そうなんだよね。

俺は身体能力に技術が追いついてない。

あまりにも強すぎる身体能力に振り回されているって感じ。

ケイゴさんにもそれは指摘された。

まあ、身体能力が優れているからこそ剛のスタイルを教わってた訳だけだ。

「アキトさんは技術が凄いですね。どんな攻撃も捌かれましたよ」
「こちらに来る前であれば、身体も鍛えてあったんだが、こちらに来る時は身体が貧弱だな」

劇場版の時はかなり鍛え込まれていた訳だ。

それに比べちゃうと、原作開始時点での身体能力じゃ満足できないか。

「こちらに来てすぐに鍛え始めたんだが、やはり物足りなくてな。

その状態でも鍛えられる事は何だと考えた所、捌きだったんだ」

「では、ずっと攻撃を捌く事？」

「ああ。ひたすらに捌く事を鍛え続けた。今の俺があるのはその経験だな」

そういえば、アキトさんには劇場版までの経験があるんだよな。その時、ひたすら鍛えていたアキトさんがこの世界に戻ってきて更に鍛えた。

これって、単純に何倍もの経験があるって事だよな？

そりゃあ、勝てないよな。俺なんてまだ習ったばかりなんだし。

「次は一撃入れます」

「ふっ。いつでも掛かって来い」

かといって、俺も諦める訳ではない。

こう見えても負けず嫌いなんだ。自分。

ケイゴさんにだって未だに一撃入れられてないし、また一人目標が出来たな。

絶対に二人とも一撃入れてやる。

・・・打倒するってのが目標じゃない俺は小さな男なのだろうか？いや。千里の道も一歩から。コツコツと目標を達成していこうではないか。

「おし。ありがとうございました。アキトさん」

「ああ。こちらこそ。鍛錬になった」

それは良かった。

んじゃ、さっさと帰りましようかね。

ミナトさんとセレス嬢と一緒に風呂に入る約束しちゃったし。

まずは一人で即行入る。だって、汗臭いのとか嫌だし。

その後、三人で入ればいいだろう。うん。

・・・いや。なんかドキドキしてきたな。

心を落ち着かせる為にも一人で一度風呂に入るべきだ。

「それじゃあ、俺はそろそろ」
「ちよつと待つてくれ」

な、何だ！？ 俺の風呂入りを妨害するつもりか！？
・・・んな訳ないか。アキトさんは知らないだろうし。

「その柔術は誰に習ったんだ？」

ケイゴさんです。

つて言つても分かんないよな。

「基地にいたパイロット候補に習いました」
「名前は分かるか？」

「ええつと、カグラ・ケイゴさんですけど」

「・・・カグラ・ケイゴ・・・」

ケイゴさんと知り合い？

まあ、俺は未来全てを知っている訳ではないからな。

俺の知らない所でアキトさんがケイゴさんと知り合つてもおかしくはない。

どこにも関連性が見付からないけど。

「どうかしたんですか？」

「・・・いや。人違いか？ しかし・・・」

「あの？ アキトさん？」

何だろう？ 物凄く考え込んでる。
なんか深刻そう。

「アキトさん！」

「あ。ああ。すまない」

「どれだけ考え込んでいるんですか。」

「名前にも覚えがあるが、同じ名前の別人という可能性はあるから何も言わんが。」

「・・・だが、一つだけ確信した事はある」

「ええっと、それは？」

「コウキ越しにだから違う可能性もあるが、十中八九、そいつは木連式柔を知っている」

「え？ それって・・・」

「そつだ。お前の構えや型。それら全ては俺も習った木連式柔の一部。要するに、そいつは・・・」

木連式柔。

木連人が用いる柔術の流派。

優人部隊の隊員は誰もが柔術の達人であるらしい。

木連人の男にとって木連式柔は一つのスータスであり、

木連式柔を知るといふ事は木連人であるといふ事。

即ち・・・。

「木連人である可能性が非常に高いといふ事だ」

「・・・ケイゴさんが木連人？」

地球の基地にいたケイゴさんが・・・木連人だったのか？

「そ、そんな事・・・」

「絶対に在り得ない・・・という話ではない。」

木連が地球の情報を得たい為に誰かを送り込んで来てても不思議はないだろう？」

「でも、ケイゴさんはコロニー出身ですよ。資料にだって、そうやって」

「コウキ。お前は自分の事を忘れてないか？」

「え？」

「お前はどのようにして戸籍を手に入れた？」

・・・ハッキング。データの捏造。

「そうだ。データの捏造をすれば、木連人であろうと地球に戸籍を持てる」

ケイゴさんが木連人？

それじゃあ・・・。

「絶対にそうとは言えないが、頭に入れておいても損はないぞ」

「・・・はい」

「それじゃあな」

アキトさんが訓練室から出て行く。

俺はその背中を見送る事しかできなかった。

「・・・ケイゴさん。貴方は・・・木連人なのですか？」

ただただケイゴさんが木連人であるかどうかを自問自答する。

唯一人、訓練室で。

第三十六話（後書き）

・・・ケイゴの謎。

第四部はそのあたりが主軸になりそうです。

第三十七話

「ほら。コウキ君。セレセレ洗ってあげて」
「うえ!?!」
「・・・御願います」
「ええつと、う、うん、分かった」
「それ終わったら私も洗ってね」
「ええ!?!」
「あ。それとも、洗って欲しい?」
「い、いいですよ。じ、自分で洗います」
「あら? 遠慮なんかしないでいいのに」
「い、いやいや」
「そっか。セレセレに洗わせようって魂胆ね。やるう」
「ち、違いますよ!」
「・・・洗いましょうか?」
「だ、大丈夫だから。ね、ね」
「・・・私じゃ駄目ですか?」
「うお! そ、そんな眼で・・・」
「それじゃあ、私も一緒に洗ってあげましょうか?」
「ミ、ミナトさんは結構です」
「ふふつ。初心ねえ」
「セレスちゃんも大丈夫だから」
「・・・分かりました」
「じゃ、じゃあ、シャンプーするからね」
「・・・御願います」
「あ。その前にシャンプーハット持ってきてあるからそれ使って」

「あ。はい。了解しました」

「そっか。そんな事があつたんだ」

セレス嬢とミナトさんとお風呂に入った。

ああ。心臓が痛い。破裂するかと思つたぞ。マジで。

その後、ベットに三人で入つた。

セレス嬢を真ん中にして、その両脇に俺とミナトさん。

上から見れば、俺、セレス嬢、ミナトさんになつてゐるだろうな。

いや。ベットが割りと大きくて良かった。

小さかつたら川の字には寝れなかつただろうし。

「はい。まだ決まつた訳ではないんですが・・・」

風呂上がつてからは色々と談笑した。

俺がいない間のナデシコや俺が基地で経験した事など。

離れていた期間が長かつた分、話は盛り上がった。

セレス嬢もたどたどしいものの、一生懸命に話してくれた。

その微笑まじさに癒されたのは言うまでもない。

「そういう可能性があるっていう事は知らなかつたの？」

「ええ。俺はそういう裏側の事情とかは知りませんでしたから」

結構長い時間を話していたから疲れてしまつたのだろう。

セレス嬢が可愛い寝息をたてながら寝てしまつた。

しかも、俺をデディベアと勘違いしてるのか、抱き付きながら。

いや。ま、別にいいんだけどさ。暖かいし。可愛いし。なんでテディベア、持ってこなかったんだらうなあ？

「そう。それで、コウキ君はどうしたいの？」

「・・・俺は・・・」

セレス嬢が寝たのを確認してから、さっそくミナトさんに相談した。カグラ・ケイゴ。俺の元副官。信頼できる好青年。

木連人だとしたら、何をしに地球までやって来たのだろうか？

もちろん、俺が考えた所で結論が出る訳ではない。

知っているのは誰でもなく、ケイゴさんしかいないのだから。

「ケイゴさんとじっくり話したいです」

別にスパイ活動を咎めようと思っっている訳ではない。

ただ、何を目的とし、何を考えているのかを知りたいだけだ。

「ケイゴさんは俺にこう言いました。

木連がどのような存在であり、提督がどう考えているのかを知りたいって」

「木連人でありながら、木連の存在を知りたいって言ったの？」

「恐らく、ですが、木連という存在を知りたいのではなく、

地球側から見る木連を知りたかったのではないかと思えます」

「なるほどね。客観的という訳ではなく、相手側の視点から自分達の存在を見たかった訳だ」

「もし、俺が木連人だったらって話ですけどね。

まだケイゴさんがそうだと決まった訳ではないので」

「そうね。でも、納得できない理由ではないわ。

敵対している側から自分達を見れば、違った見方ができるかもしれないし」

「ええ。まあ、単純に客観的に木連を眺めたいという考えもあったかもしれないけどね」

少なくとも、ケイゴさんはゲキ・ガンガーに矛盾を感じていた。

木連人、特に優人部隊に多いゲキ・ガンガーを盲信し、自分側を正義と見ている者達とは違う。

一方的な価値観ではなく、両者の価値観を知ろうというのはどこかケイゴさんらしいと思うし。

「それに、一兵士が提督、要するに首脳陣の考えを知りたいっていうのも少し違和感があります」

「そうね。知りたいと思う人がいてもおかしくはないけど、

どこか距離を置いて眺めているようにも感じるわね」

「ケイゴさんは見極める為にここにいる。そうやって言っていました。見極めたその先に何かがあるのか。それが気になります」

見極める為にここにいる。

それで、お眼鏡になかったのなら、ケイゴさんは何をしようと考えていたのだろうか？

もし、お眼鏡にかなわなかったのなら、ケイゴさんは何をしていたのだろうか？

疑問は尽きない。

「こう思う俺もいるんです。スパイとして何かを調査する目的もあったのかもしれない。

でも、きつと、歩み寄るっていう目的もあったのかもしれないって」

「前提として調査はあるけど、接触してパイプを持つに相応しいか見極めたかったって事？」

「はい。そうでなければ、わざわざ改革和平派に近付きませんよ。

だって、改革和平派ぐらいですよ？ 木連と本気で和平を結ぼうなんて考えてるのは」

「そっか。向こうにも和平という意味があるから、改革和平派に接触してきたっていう見方もあるのか」

「俺の願望でもありますけどね。俺としてはケイゴさんを疑いたくないんです」

「あらあら。男の子の友情って奴？」

「茶化さないでくださいよ」

今まで上司と部下として付き合ってきたけど、きちんと向き合えていたと思っている。

階級という壁もあったけど、そんなものに囚われていなかったという自信もある。

俺にとってケイゴさんは間違いなく友人だ。

そんなケイゴさんを信じてみようと思うのはおかしくないだろう？ もちろん、今までの全部演技だったって言うなら話は別だけど。

きっとケイゴさんはそんな人じゃない。

演技をしながら人付き合いとかが絶対に出来ないタイプだ。

それはあの真っ直ぐな拳が表している。

まあ、拳で分かりあえる程、俺は格闘家としての道を進んでいないけどさ。

「そっか。それじゃあ、きちんと話してみないとね」

「はい。これからナデシコはどう動くんですしたっけ？」

予定が分からなくちゃ機会も得られない。

「お掃除よ」

「え？」

お掃除？

「そう。地球に落ちているチューリップを一個一個破壊するの。
今のナデシコに求められているのは地球のお掃除」

「まだチューリップを破壊できるのはナデシコぐらいしかありませんからねえ」

ナデシコの主砲であるグラビティブラスト。

やはりチューリップ級ともなると、これぐらいの威力がないと破壊できない。

グラビティブラスト搭載艦は着々と出て来ているが、まだ性能評価の段階。

頼りになるのはナデシコとコスモスだけって事だ。

ちなみに、宇宙はコスモスが担当してくれているらしい。

いや。花の名前でありながら、宇宙を表す名前でもあるコスモス。お似合いの名前です。宇宙に咲くコスモスとは、これまた如何に。

「今回は極東支部で補給したでしょ？」

戦闘しては基地で補給するというのを繰り返して、世界中を回るらしいわよ」

うわ。世界中を回るとか、随分と壮大なスケールだ。

「どうする？ 通信っていう手もあるわよ？」

ナデシコからでも一応は各基地に通信できる。

でも、こういいう話はちゃんと向き合って話したいから……。

「いえ。次に極東支部に来た時にします。きちんと話したいですから」

「そう。分かったわ」

・・・そういえば、あそこにはカエデも残ってるんだよなあ。
ケイゴさんが木連人だったとしたら、カエデはどう思うんだろう？

「どうしたの？ また、何か考え事？」

「あ、いえ。なんでもないです」

ミナトさんはカエデとケイゴさんの関係を知らない訳だし。
相談しても仕方ないよな。当事者同士で解決する事でもあるし。

「あ。そういえば、カエデの件、ありがとございました」

「カエデちゃんの件って？」

「基地を離れる時に御願いした奴ですよ。お陰様で仲直りできました」

「ああ。あれね。実は私、何もやってないの」

「え？ そうなんですか？」

何もやってないのにカエデが考えを改めてくれたって事？
へえ。そんな事がありえるんだ。

「そうよ。カエデちゃんと話そうと思って、食堂までは一応行ったの。」

でもね、私が説得しようとする前に、知らない男の人がカエデちゃんを説得してたの」

「知らない男の人？」

「ええ。黒髪でコウキ君よりちょっと背が高いぐらいの男の人」

・・・それって、ケイゴさんじゃないか？

「あの、カエデがケイゴって呼んでませんでしたか？」
「・・・あ。そういうば・・・」

どこか気まずそうなミナトさん。
いや。ミナトさんは悪くないんだけどさ。

「そ、それじゃあ、そのカエデちゃんと話してた人が木連人の疑惑があるケイゴさんって事？」
「・・・はい」

相談しなくても一緒だった。
ミナトさんも見てたんだな。カエデとケイゴさんの事。

「・・・複雑ね。私が見た限り、二人ともなかなかお似合いだったのに」

「・・・ええ。応援したいんですけど・・・。
ケイゴさんの出身を聞いた時にカエデがどう思うか。それが心配です」

「・・・そうね」

「・・・なんか暗くなっちゃったな。

カエデが木連に対して恨みを持っている限り、ケイゴさんじゃ厳しいかも。
うん。複雑だ。

「ま、まあ、あれよ、まだそうと決まった訳じゃないし」

「・・・それもそうですね。それに、もしかしたらケイゴさんがカエデを変えてくれるかもしれません」

「そっか。むしろ、そっちの方に期待しよっか」

「ええ。それに、そもそも俺達がお節介やくような事でもないです

よ。

恋愛は当事者の問題ですから」

「そうね。でも、少し背を押すぐらいはいいでしょ?」

「ま、そのあたりはお任せします」

ミナトさんの趣味だもんね。

人間観察。特に恋愛観察は。

「それじゃ、そろそろ寝ましようか?」

「そうですね」

「ねえ、コウキ君」

「はい」

「おやすみの前に・・・」

「ええ」

久しぶりの唇の感触で心地良い眠りに付く事が出来ました。

三人で川の字になって眠るのも悪くないかな。

いや。むしろ、幸せです。ええ。とつても。

「マエヤマさんはどうしますか?」

「新武装を色々と試したいので、エステバリスで出ます」

「了解しました」

はい。という訳で久方ぶりの戦場。

もちろん、実機での訓練もしてましたけど、戦場には出てませんか
ら。

いや。もうずっとシミュレーションばかりだったので、腕が落ちてないか心配です。

「いいの？ 自らパイロットなんてやってちゃって」

「大丈夫ですよ。ナデシコでなら、別段目立ちませんし」

ナデシコパイロットは誰もが凄まじい腕前だからね。

俺は目立たない自信がある。アキトさんでしょ、目立つなら。

「それに、これだけ戦力が整っちゃってるとレールカノンの出番はありませんし」

何よりもこれが大きい。

エステバリスの装備も充実している今、無理にナデシコが攻撃する必要はない。

ナデシコはDFを張りつつ、GBをチャージして、一気に殲滅。これが仕事。

ま、俺はシミュレーションでしか試せてない新武装の性能評価をするだけだし、心配はいらない。

「そう。それならいいけど」

「心配要りませんよ。大丈夫です」

「分かった。いつてらっしゃい。コウキ君」

「はい。それじゃあ」

さてっと、始めますか。

「ウリバタケさん」

「おう。マエヤマ。出撃するんだってな。武装の方、どうする？」

「とりあえず色々と試します。何回か補給に戻るので準備をしてお

いてください」

「分かったぜ。それなら、最初はディストーションブレードと大型
レールキャノンを搭載しておく」

「御願います」

基地で補給後、初めての戦闘。

新しい武器が導入されて初めての戦闘でもあり、興奮気味なのが何
名か。

「うおおお！ こ、これはロケットパンチかあ！」

ガイの装備は両手にジャイアントアーム。

これでディストーションアタックしたら半端ないだろうなあ。

不恰好さに眼を瞑れば、攻撃力はダントツかもしれない。

「おお！ 剣じゃねえか！ 居合い抜きは・・・出来ねえか。後で
ウリバタケに作ってもらおう」

居合い抜きが特技らしいスバル嬢は両手にディストーションブレイ
ド。

射撃攪乱にはガントレットアームの簡易ライフルを用いるらしい。
完全に接近戦する気まんまんって事だよね。

「へえ。ドリルか・・・。僕も嫌いじゃないよ。こういつの」

そして、意外にもドリルアームに興味を示したのはアカツキ・ナガ
レ。

いや。会長つて意外とスーパー系が好きなんじゃないか？

嫌いみたいな事を言ってたけど。ほら。天邪鬼って奴？

「それでは、行くぞ」

他のメンバーもそれぞれ任意で武装を搭載。

でも、やっぱり、一番人気はフィールドガンランス。

あれってやっぱり使い勝手いいからね。

ま、色々と試してみてください。

ちなみに、エクスバリスはまだ調整中の為、誰も使いません。

小型グラビティブラストを撃つのはいつになるのかな？

まあ、難しいから、気長にやるしかないでしょ。

だってさ、劇場版で小型グラビティブラストって登場してないでしょ？

って事は五年後でも実現されてないって訳じゃん。

そりゃあ、急には無理でしょう。うん。

「マエヤマ・コウキ。高機動戦フレーム。行きます！」

うう……。このG。凄く久しぶり。

やっぱり心臓に悪いね。これ。

ちなみに、今回からIFSを使う。

こっちの方が俺的に合ってるしね。

だって、ナノマシンの恩恵があるもの。

『こちらテンカワ機。各機、散開。チームを組んで攻撃に当たれ』

『『『『『『了解！』』』』』』』

総勢八名による殲滅戦。

ナデシコの出番がないぐらい、暴れまわってしまおう。

『オラアアア！』

ジャイアントアーム。

エステバリスの拳の何倍もの重量と大きさを誇る攻撃力重視の武器。拳を囲むようにDFを展開し、接近しては次々と殴り壊していく。いや。凶暴な獣を見ているようだ。ガイ。熱いぞ。

ちよっと心配な腕と間接部。後でウリバタケさんと意見交換しよう。

『おお。おお。いいね。これ』

ドリルアーム。

先端にDF中和装置を付けた貫通力重視の武器。

貫いて良し。飛ばして良し。殴って良し。

三拍子揃って意外と使い勝手が良いかも？

問題は何も握れない事だけだな。

まあ、拳だけで近距離から中距離はカバーできるから問題ないか。

やはりベストは片手だけにドリルつけて、もう片方で牽制かな。

アカツキ・ナガレ。会長が熱血しちゃってます。

『ハア！ フツ！ タア！』

ディストーシヨンブレードとガントレットアーム。

ガントレットアームで搭載された簡易ライフル、

まあ、ハンドガンとでも言おうかな、で攪乱し敵に近付く。

そして、一閃。簡単に敵を切り裂いていく。

うおい。ストレス解消してるんじゃないんだから。

やっぱりDFを纏わせるのは大きいみたいだな。

攻撃力が段違いだ。スバル嬢。どんどん切り裂いちゃって。

『コウキさん。チームを組んで戦艦に向かいますよ』

「了解しました。イツキさん」

万能型パイロットのイツキさん。
射撃も格闘も優秀というバランスの取れたパイロットだ。
ヒカルがポジショニングに長けている万能タイプなら、
イツキさんは各技能に長けている万能タイプといった所。
その技量は俺も知ってるし、安心して背中を任せられる。

「大型レールキャノンを試したいので、敵の方を牽制していき
ださい」

『了解』

大型レールキャノン。

おっちゃんはDFを纏った敵戦艦を貫けると言っていた。
シミュレーションでもその性能は確認済みだ。

「セツト」

空中で放つてもいいけど、色々な場所で試したい。
最初は地上から。しっかりと固定した上で放つ。

ダンッ！　ダンッ！

地上に展開。折りたたんであったのを展開すると本当にでかい。
エステバリスの全長を超えるってのは本当だったらしい。
太さもかなり。これだけの穴からそれ相応の弾が出たら、そりゃあ
凄いだらうよ。

「イツキさん。離れてください」

『はい』

前方でラピッドライフフル片手に敵を攪乱してくれているイツキさん。

準備完了です。ありがとうございます。

「発射！」

ズドンッ！

いや。凄い音。

反動は・・・それ程でもないかな。

予想よりはなかった。流石に固定してあるのは大きい。

「・・・・・・・・」

撃たれた弾を眼で追っていく。

凄まじい速度だが、機体で解析と同時に見るから充分に把握できる。

数多のバツタの隙間を縫うように敵戦艦に直接向かう。

バツタに当たって威力が落ちたら検証できないからね。

当たらないでよ。頼むから。

「DFに接触。貫けるか？」

敵戦艦のDFに接触したレールキャノンの弾。

DFさえ突破できれば、敵戦艦の装甲は紙のように薄いから、沈むだろう。

「・・・・・・・・」

敵戦艦の破壊を確認。

すぐさまレールキャノンを折りたたみ、肩に装着。

こいつは熱放出が凄まじいから、連続では使えない。

現在、冷却中って奴だね。その間は、ディストーションブレードの出番だ。

『援護します』

「御願います」

流石、イツキさん。

こっちの意図に気付いている。

「ディストーションブレード展開」

ブオンツ！

いいね。この音を聞く度にやる気が漲ってくる。

「ケイゴさんに笑われないようにしなくちゃな」

柔術と共に剣術も少し習った。

基本と言えど、習った事に違いはない。

恥をかかせちゃいかんだろう。

「フツ」

一閃。

両手で柄を持ち、接近してくるバツタを切り裂く。DFを纏っていようとDBには敵わない。

「おっと」

ミサイルは確実に避ける。

切り裂いてもいいけど、爆発に巻き込まれたら馬鹿みたいだしね。

「・・・低いな」

空中で戦っている時、下から攻められると意外に対処しにくい。

ディストーションブレード、改め、DBは下には届かないし。

まあ、下降しながら対処すればまったく問題ないんだけど、折角だから・・・。

「ハア！」

DFを纏わせた足で蹴り裂く。あ。これ、造語ね。

折角、柔術の足技も習ったんだ。使わなきゃ損、損。

あれだね。気分は流浪人に敵対した御庭番衆の御頭。

剣術と柔術の複合。これ、意外といけるかも・・・。

「・・・狙ってみるか」

どことなく隙がある敵戦艦。

途中に何体かバツタがいるけど、気にしちゃいけない。

すれ違い様に切り捨てて、戦艦もDBで墜としてしまおう。

「イツキさん。突っ込みますので援護を御願います」

『危険ですが、教官時代のコウキさんを知っているので安心して任せられます』

「どうも」

一応は教え子と教官。俺の機動を知っている。

教官時代はそれなりに無茶な事も成し遂げた。シミュレーションでだけ。

イツキさんも援護してくれるようだし、すぐに終わらせてやる。

「ハアアア！」

高機動戦フレームの特徴である瞬間加速を利用して、一気に最高速度へ。

出来るだけ速度を落とさないよう必要最低限の動きで避ける。

蔓延るバツタを時に切り捨て、時に避け、殆ど直線で肉薄した。

「ウオオオ！」

DFに向けてディストーションブレードを振り下ろす。

ディストーションフィールド・・・突破あ！

「ハッ！」

正面からぶつた切る！

DBはまるで熱したナイフでバターを切るかのように敵戦艦の装甲を断ち切った。

「離脱」

振り下ろした時の下に流れる力を利用して下方向に離脱する。

パツとDFを全身に纏い、最高速度で離れる。

バァン！

爆発音を背に、次の標的へ向かう。

次は空中からの大型レールキャノン。

反動がどれくらいか実機で試す。

「セツト」

空中には流石に固定できない。

一応は重力場で足場を作り出せるけど、あまり意味はないだろう。

「発射」

若干、遠い位置にあるが、この距離でも充分。
標準をあわせて……。

ズドンッ！

「うお！ ……グウ……」

凄まじい反動。

予想通り足場なんてなんの意味もなく、元々いた位置から何メートルも移動していた。
でも、威力は抜群。

多少の距離なんてものともせず、敵戦艦を沈めた。

「次！」

その後の展開は圧倒的だった。

スバル嬢とガイが前線で縦横無尽に動き回り、その抜群の攻撃力で敵を屠る。

ヒカルが抜群のポジションニングで前線組をフォローし、敵に反撃の隙を与えない。

大型レールキャノン、ラピッドライフルと遠距離から支援に徹する

イズミさんは頼もしい。

会長もオールラウンダーな能力を発揮し、一人で何人分もの働きを見せていた。

イツキさんは主に俺の援護をしてくれ、更には他のパイロットの援護もしてみせた。

そして……。

『ハアアア！』

アキトさんの活躍は言葉では到底表せそうにない。

機体が出せる最高速度を維持しつつ、急旋回、急上昇、急下降と飛び回り。

『ハア！』

片手にそれぞれディストーションブレードを持ち、あっという間に殲滅していく。

バッタだろうと戦艦だろうと、その勢いは止まらず、簡単に潰していった。

一言で表すなら嵐か？ アキトさんが通った場所で生き残っている敵はいなかった。

鬼神の如き活躍。紛れもなく、アキトさんこそが最強のパイロットだと再認識した。

『チューリップ。グラビティブラスト射程距離内に入りました』

『グラビティブラスト発射！』

『グラビティブラスト発射します』

そして、締めは黒き閃光。

重力という名の暴力がチューリップを破壊する。

敵戦力はもはやナデシコを妨害する力もなく、ナデシコは何の損傷もないまま戦闘終了となった。

抜群の性能を誇る戦艦。そして、それらを的確に運営するクルー達。最後に、そんなナデシコを確実に護り切る凄腕のパイロット達。

それら全てが揃ったからこそこんなにも凄まじい戦力になるのだろう。

こうしてまた、ナデシコの名声が世界中に轟くのだった。

第三十七話（後書き）

お風呂の描写は音声のみでお楽しみ下さい。

設定上、原作とは時間軸がずれてしまう可能性あり。
戦力を整えたり、軍内部での改革に時間を要する為です。
そのあたりはご了承下さい。

第三十八話（前書き）

今回、癒しは少ないかな？

第三十八話

「アマノ機帰艦。入れ替わりにスバル機が発進しました」
「了解」

いや。今日も相変わらずの戦闘。

地球に落ちたチューリップの数は途轍もないらしく、ナデシコフルスロットルです。

ええ。馬車馬の如くとは正にこの事でしょうか？

ああ、安息を、平穩を、癒しを、我に与えたまえ。

「・・・コウキさん。データの記録は終わりましたか？」

「もうちょいかな」

あ。ちなみに、今回の戦闘に僕は出撃していません。

だってさ、はつきり言って、俺っていらな子じゃん？

いや。それなりに活躍できる自信はあるけどさ、あの七人で充分だ
と思うんだ。

だったら、俺は俺に出来る事をするべき。そう思った訳。

んで、今の俺は各パイロットの機動データを記録、及び、解析中。

CASを作る時にもしたんだけど、今回はちよつと違う。

武装面も充実してきた事だし、今度はソフト面、所謂OSの改造で
もしようかなと思って。

空き容量はまだあるから、限界圧縮して凄まじいソフトをぶちこん
でやろうかなと。

とりあえず照準補正ソフトは全機に搭載させよう。

機動予想、もとい、未来予想と空間把握ソフト。

これらはかなりのIFS処理能力がないとむしる頭がパンクするか
ら載せない。

これは人を選ぶ怪物ソフトだからな。俺だってナノマシンの恩恵がなければ絶対に無理。

でも、多少劣化させたソフトなら載せられるかもしれん。・・・ちよっと考えてみるか。

「・・・お手伝いしましょうか？」

む。折角の申し出だが、俺一人でも充分なんだよなあ。

あともうちよいだし。わざわざ手伝ってもらわなくてもね。

「ううん。だいじょ」

「・・・グスッ」

「や、やっぱり御願いしようかな。いい？ セレスちゃん」

「・・・はい。頑張ります」

な、涙目には勝てません。

「とりあえず・・・」

セレス嬢もIFS強化体質である以上、処理速度は凄まじい筈。唯のパイロット達よりは間違いなく速い。

うん。じゃあ、まずはこいつをかけてもらおう。

「はい」

「・・・これは・・・」

「そう。噂のサングラスさ」

ま、サングラス型なだけだけど。

レールカノンを使用する際に装着する奴で、これが意外と便利なんだ。

レールカノンごとにカメラ的な情報を得られるから、ナデシコ周辺の視界をいつぺんに確保できる。俺一人でも対応できるけど、二人で分割すれば更に詳しく調べられるしね。

「どう？ いけそう？」

「・・・はい。大丈夫です」

流石はセレス嬢。素晴らしいぞ。

「機動データとバイタルデータを記録して欲しいんだけど」

「・・・分かりました」

右半分を俺が担当。左半分をセレス嬢が担当。これでさつきより詳しいデータを得られるぞ。

解析はいつでも出来るしな。まずは記録、記録っと。

「ガイ。ドリルアームでロケットパンチだ」

『おう。いつけえええ！ ゲキガンロケットドリル！』

技名長っ！ ま、まあ、いいんだけどさ。

「ふむ。相変わらずガイは技名を叫ぶ時に興奮気味だな。

まあ、こいつは情熱、熱血こそが力の源だから仕方ないけど」

ゲキガンロケット・・・うん。面倒だ。

ドリルアームでのロケットパンチは中々の威力。

ジャイアントアームと比べると攻撃力では劣るが、貫通力では断然上。

ジャイアントアームはDFを纏うっていう付加効果があるからな。

仕方ないっちゃあ仕方ない。

ドリルアームの利点が活かせるのは相手のDFが強力な時だな。ジャイアントアームでも中和は可能だけど、その後が続かない。勢いが止まっちゃう。

その分、ドリルアームでやれば、貫通後、更に敵本体まで貫通してくれる。

この威力は心強い。パツと見、ジャイアントアームよりは格好が付くし。

『ハア！ うらあ！ かかってこいや！』

「リョーコさんは相変わらずか」

あの人も基本的に熱血。あれだね。戦闘狂の領域一歩手前って奴。向こうの数が多ければ多いほどに興奮して、好戦的になるって・・・。

しかも、問答無用に突っ込んでいく。

ディストーションブレード片手に切りまくる姿はどここの剣豪だよ！

？ とか思った。

ウリバタケさんはちゃっかり鞘みたいの用意するしさ。

しかも、これ、レールガンの機能を活用してるらしく、自動的に反発してくれる。

ああ。分かってくれるだろ？ 要するにレールガンをぶっ放すように剣を振り抜く訳。

いや。その威力の凄まじい事。

ただでさえDF纏って半端ないのに、余計に切れ味鋭くなっちゃったよ。

但し、問題もある。DFを纏ったままでは鞘に入らないし、反発の効果も得られるのだ。

まあ、そんな簡単に物事は運べないよな。うん。

対策としては、抜くと同時にDF纏えばいいんじゃないか？ という意

見が出た。

でもさ、それって単純に無理でしょ。タイミングがシビア過ぎる。ちなみに、負けず嫌いのスバル嬢は必死に習得中。いつか習得しそうで怖い。

『こつちも意外といいね。僕は好きだよ。こつちの』
「飄々としてるくせに興奮してんのね。やっぱり好きなんじゃん。そつちの」

ジャイアントアームでお楽しみ中の会長。

その抜群の攻撃力で敵を殴り潰し、握り潰していく姿は結構怖い。拳骨されただけで戦艦へこむとか、ありえないでしょ。
いや。おつちゃん。自重。

「ヒカルとイツキさんは器用だよな」

この二人とはこれといって特別な武器がない。
その分、どの武器でも扱える器用さを持つ。

ヒカルはどちらかというとフィールドガンランスがお気に入り。
イツキさんはラピッドライフルとデイストーションブレードの組み合わせがお気に入りらしい。

片手に銃、片手に剣で、臨機応変に対応していく姿は流石としか言いようがなかった。

特に目立つ訳でもないけど、まあ、周りが目立ち過ぎなだけだね、イツキさんは玄人な感じがしてその筋の人に好かれそう。

ヒカルはフィールドガンランスで時に突撃、時にレールカノンってな感じで、

一つの武器だけで多彩な攻めを展開していた。

ま、その殆どがスバル嬢の援護だけど・・・。

なんとなく、ヒカル、イツキさんの二人は周りの尻拭いがメインの

仕事になりそう……。いや。もう。頑張れとしか言いようがない。

「イズミさんは本当に後方支援特化」

あのお方はラピッドライフル、大型レールキャノンなど射撃の武器しか身に付けてない。

イミディエットナイフすら身に付けてない状態だ。確実に接近戦するつもりがない。

ま、イズミさんの射撃の腕前は本当に凄いからな。精密射撃という点では一番だろう。

どれだけ遠くからでも隙間を縫うような精度で敵を屠る。それがイズミさん、

イズミさんが後ろで援護してくれると思うと安心するね。

味方としてはかなり頼もしい。後は寒くなるようなダジャレさえなければ。

あれは一種の精神攻撃とどこぞの誰かが言ってたな。

「アキトさんは相も変わらずだね。いや。マジで凄いわ」

アキトさんの要望でブースターの出力を変更した。

しかも、それに加えてブースターとスラスター付け足すという所業。あんな機体じゃ身体と精神壊します、と言いたい所なんだけど、それを成し遂げちゃうのがアキトさんクオリティ。

普通に戦闘終わらせて……。

「大して変わらなかったぞ。まあ、多少は楽になったがな」

……とおっしゃる。

アキトさんの機動はある意味単純。

滅茶苦茶のスピードで移動して、一瞬の隙を突いて接近するか、その場から射撃するか。
どちらも移動しながら、だ、常にMAXスピード。接近して敵を貫いてもすぐに離脱する。

なるほど。ブラックサレナの時はこうやって戦ってたんだなと実感した。

あれはスピードに特化しており、一対多数を目的としている機体だ。計らずともこういう機動になってしまっただろう。

そうともなれば、この程度のスピードじゃ驚かなくてもおかしくないか。

ブラックサレナの機動はもっと激しかったんだろうし。

「・・・うし」

と、ここまできさつきまで調べていたデータ。

これからはセレス嬢と共同作業でちよつと違った見方をしてみたいと思う。

俺のターゲットはガイ、アキトさん、ヒカル、イツキ。

残りのアカツキ、スバル嬢、イズミさんはセレス嬢に任せてみる。

ま、これも勉強だと思えば、セレス嬢に任せるのもアリかな。

「まずは・・・」

それから色々調べさせてもらった。

たとえば、利き腕による反応の違い。

まあ、単純に言えば、右側から来た時と左側から来た時の反応速度。やっぱり利き腕と逆の方が反応が遅いんだけど、これがビックリ。なんと一番反応いいのがヒカルなんだよね。

次にイツキさんで、アキトさん、イズミさんってな感じ。

要するにヒカルが一番視野が広いつて事かな？

両側で殆どタイムラグなかったし。

まあ、他の連中もあんまり変わらないんだけどさ。

後は背後からの反応速度とか、前方に敵がいる時の行動パターンとかを解析。

いや。面白いデータが取れたね。

前方に敵がいる時に取る行動は大きく分けて三つ。

軽く周囲を確認して突っ込むの二名。

相手との距離や周囲の状況を見てから行動し始めるのが三名。

悪・即・斬と言わんばかりにサーチアンドDESTROYするのが二名。

ま、内訳は想像通りだ。参考までにアキトさんはサーチアンドDESTROY。

まあ、機動戦でやる以上、そうなるのは仕方ないとは思っけど。

思考パターンの解析って意外と面白いんだよね。

性格とか行動パターンとか分かるから。特に必要ないといわれたらそこまでだけどさ。

癖とか見つけたけど、これを修正させるか、強調させるかは自身に任せる。

俺なんかよりずっと分かってるだろうから。

「お疲れ様。セレスちゃん」

「・・・はい。コウキさんこそ」

大分データを取ったからもういいよ、という訳で記録終了。

戦闘はまだ続いているけど、俺の役目は終了みたいなもんだ。

「さて、俺は・・・」

データの解析にでも移ろうかな・・・。

そう思った矢先にそれは起こった。

「あ、新たな機影を確認」

「慌ててどうしたの？ ルリちゃん」

「人型機動兵器です。映像に出します」

そして、モニターに映し出されたのは、全長六メートル程の人型機動兵器。

そう、その姿はエステバリスに酷似していた。

「敵の新型兵器か！？」

叫ぶゴートさん。

無論、誰もが驚きの表情だ。

向こうが人間だって知ってるからな。

バッタとかは何の躊躇もせず倒せたけど、あれに人が乗っていると思うと……。

「と、とりあえず、迎撃体制。向こうの出方を見ます」

それじゃあ、俺はとりあえずデータの記録。

機動性、武装、操作性などなど。調べておいて損はない。

「ヤマダ機が接触」

さて、どうなる？

「攻撃を仕掛けてきました」

「迎撃してください。出来るだけコクピットを狙わず機能停止する

ように」

『了解！』

向こうの新型兵器は全部で三機。

ガイ、スバル嬢、アカツキ会長の三人が相手をする。

他のパイロットは援護しつつ、周囲の敵を殲滅。

あと少して全滅だから、そう時間は掛からないと思う。

「・・・そうでもないな」

しばらく戦闘データを取っていたが、見た所、そこまでではない。もちろん、機動性や武装面ではエステバリスに引けを取らないが、なんと動か動きが雑。

無人機なのか？ それとも、操作性があまりにも悪過ぎるのか。そのどっちかだ。あれじゃあ機体性能を存分に活かさきれない。

「・・・DFを確認。エネルギーは何だ？」

重力波ではない。送信するものがないから。

まさか、今ある全戦艦に送信装置が付いているとは思えないし。

「フィールドガンランスを確認。・・・はあ。そういう事か」

フィールドガンランス。

それに背中形状やらから推測するにあれの基は高機動戦フレーム。あえて言うならフィールドガンランスのみで戦闘に赴いたのなんてあの時に決まってる。

そう、俺が強制ボソソジャンプをした時だ。

あの時に高機動戦フレームが向こうに渡っちまったらしい。

アサルトピットが渡らなかつたのは不幸中の幸いか。

多分、向こうはこっちのソフト面の情報がないからあんな動きしか出来ないんだ。

あの性能で自由な操作性があつたら、間違ひなく苦戦する。現状ではソフト面の開発がされてないと見て良いだろう。ソフト面の開発にどれくらいの期間が掛かる？

既に始まつてるのか？ それとも、あれが完成体？ それ次第で全ての状況が変わる。

まさか、あの時の最善の手が悪手に変わるとは……。

「せめて、無人機か有人機かを把握しておきたい」

無人機だからこそその稚拙さなのか？

それとも、有人機でもその程度しか出せないのか？

原作ではデビルエステバリスとやらも出たが、それに類する動きでしかなければ無人機だ。

パイロット三人娘も苦戦してたけど、あれは狭まった空間だったから。

今のような状況ならそれ程苦戦しない筈。実際、今は優位に進めている。

「アカツキ機、敵機を破壊。どうやら無人機のようにです」

会長の相手は無人機。それじゃあ他の二機もそうなのか？

「スバル機、敵機を破壊。こちらも無人機のようにです」

三機中二機が無人機ともなれば、最後まで無人機だと思っけど……。

「ヤマダ機と交戦中の敵機。突如、後退し始め、チューリップの中に逃げ込みました」

……どうやら最後の二機だけは有人機であつたらしい。

バツタからも推察できるが、あれらは攻め込む事はあっても退く事はない。

退いたという事は、即ち有人機である事を示している。

これで分かった事は一つ。木連のソフト面開発は進んでいない。有人機で無人機が同程度の機動しかできないようじゃソフトは杜撰だという事。

これで満足するような奴らでもないから、開発途中なんだろう。完成される前に戦争を終結にしたいものだ。

あれが実戦配備されたら更に悲惨な状況に陥る。

それは何とか避けたい。

とりあえず、後でデータの解析をしよう。何か他にも分かるかもしれない。

「チューリップを破壊します。グラビティブラストチャージ」

「チャージ完了しています」

「それでは、撃てえい！」

「グラビティブラスト。発射します」

チューリップを押し潰す。

これで漸く戦闘終了。

「戦闘終了。皆さんお疲れ様です」

今回の戦闘では遂に木連側に動きがあった。

ジンシリーズに変わる新しい人型機動兵器。

さて、アキトさん達と対策を練るとしようかな。

「驚きました。まさか、この段階で木連側が小型の機動兵器を生産してくるとは……」

俺の部屋に集まったの秘密会議。

なんだか、これも久しぶりな気がする。

「恐らく、俺の機体を参考に行っているんだと思います。」

あのジャンプでフレームが向こう側に渡ってしまったのでしょうか

「そうだろうな。しかし、そうなれば向こうはジンシリーズの生産を中止し、

あの小型の方の生産を開始したという事になる」

「ええ。同時に両方やる事はプラントに依存している木連では不可能でしょうし。」

しかし、意外ですね。木連がそのような機動兵器を生産してくるなんて……」

どうしてだろう？

「どうして？」

ナイス。ミナトさん。

「ゲキ・ガンガーが大好きな木連ですよ。」

彼らが頼りなさそうな小型兵器を好んで使う訳がないと思ったんです

「確かに。恐らく、生産の切り替えの時にかなりの反発があっただろうな。」

だが、それを捻じ込んで生産に向かわせたという事は……かなりの権力者だ」

・・・なるほど。そういう考えもがあったのか。

「コウキ。データを解析していたようだが、何か分かった事はあるか？」

「ええ」

あれからデータを解析した結果、色々な事が分かった。

「まずはあの機体の性能ですが、こちらのエステバリスとほぼ同等の性能を持っています」

下手するとあっちの方が高いかもしれないな。

こっちは現状で満足しちゃってるけど、向こうは研究し続けてそうだし。

「同等？ それにしては、こちら側が優位だったように感じるが？」

「パイロットの腕、と言いたいですが、これもちよっと誤りがありますね。ソフトの差です」

「ソフトの差？」

「はい。こちら側がIFSに対し、向こうはIFSとは違う何らかの操作ソフトを使用しているのでしょう。」

ですが、その性能が一段と悪い」

「要するに先程の戦いは向こうの操作面の性能の低さに助けられたから勝てたという事か？」

「ええ。もし、向こうがIFSに匹敵するソフトウェアを手に入れたらやばいかもしれません」

性能は少なくとも互角。

ナデシコパイロット程の腕前があれば対処は可能だけど、まだ新人

だったらやばい。

バッタ程度だからこそ対抗できるだけで、

同程度の性能を持つ機体なら錬度の低い彼らでは心配だ。

「IFSに匹敵するソフトウェアなんてそう簡単には」

「いえ。ありますよ。木連でも実用化できるソフトウェアが」

アキトさんの言葉をルリ嬢が遮る。

IFSに匹敵するソフトウェア。

しかも、木連が手に入れられて実用化できるソフトウェアなんて……。

「ルリルリ。それって、もしかして……」

「ええ。IFSに匹敵する性能。私達は毎日のように眼にしている筈です」

「毎日のように？」

「まだ気付けないんですか？ コウキさん」

……なんか言葉に棘を感じるんですが……。

「イツキさんがIFSに勝るとも劣らない性能を実証しているではありませんか」

「ッ！？」

……そ、そうか。何で気付かなかったんだ？

自分で作っておいて、その存在を度外視していた。

「複合アクションシステム。コウキさん。貴方が製作したソフトウェアです」

性能が互角。その状態でナデシコパイロットの動きを参考にした機動をされれば……。

「現状ではナデシコ以外に対処のしようがないでしょう」

そう、とてもじゃないが、新人達では敵わない。

向こうの錬度の方が高いという保証もないが、

高機動戦フレームを使いこなせるようになれば、それこそ驚異的。もし、木連兵士の全員がケイゴさんのよう……ケイゴさん!?

「そ、そうか！ アキトさん！」

「そんなに慌ててどうしたんだ？」

「目的ですよ！ ケイゴさんの目的が分かりました」

「ケイゴ？ 確か、お前が基地で教官をしていた時の訓練生だったな」

「もし、ケイゴさんが木連人であれば、ソフトウェアの性能で負けている事は理解している筈。」

それなら、ケイゴさんが地球に来たのは、多分、その対処法を……

「狙いはそれか!？」

スパイ活動。希望的観測で歩み寄る姿勢と捉えていたけど、甘かったか!?

何らかの情報を得て、CASを狙ってきたとしたら……。

「アキトさん！ すぐにミスマル提督に連絡を！ 情報漏洩に注意するよう」

「ああ！ 了解した！」

急いで部屋から抜けだすアキトさん。

恐らく自室に通信する装置があるのだろう。
クソッ。なんてこった。俺の行動が全て裏目に出てる。
木連側にエステバリスの製作機会を与えてしまったのも俺。
そのエステバリスを操作するシステムを作ってしまったのも俺。
俺の存在は逆に地球を危険に陥れてやがる！

「コ、コウキ君。どうしたの？」

「コウキさん？」

「・・・コウキ」

心配そうにこちらを見詰めてくる三対の眼。

ルリ嬢とラピス嬢はアキトさんの慌てようから事態の重大さに気付いているようだ。

「もしかしたら、CASを提供した連合軍内に木連人のスパイがいたかもしれないんです」

「スパイが!？」

「それって、例のケイゴさんって人の事？」

「はい。楽観視していた自分が恨めしいです。」

ケイゴさんがCASのデータを木連に持ち帰れば・・・」

「・・・木連にCASが渡り、操作性が向上する・・・」

ルリ嬢が顔を青褪めながら呟く。

「それだけじゃないんです。CASはナデシコパイロットの動きを参考にしています」

カスタマイズで来る可能性もあるが、

カスタマイズする為の施設がなければ、各種特化のパターンを使ってくるだろう。

「使いこなす事に時間は掛かりますが、
使いこなせばナデシコパイロットと同等の能力を發揮できるんで
す」

要するにナデシコパイロットが敵に回るようなもの。

向こうは唯でさえ身体能力に優れる。

北辰のような化け物がパイロットとして攻め込んできたら・・・。

「俺達が止めるしかありません」

・・・辺りに静寂な空気が流れる。

そくだよな。ナデシコパイロットが敵に回るなんて事になれば、被害は甚大間違いなし。

クソツ！ 本当に俺は疫病神じゃねえか！

「コウキさん。そのケイゴさんっていう方の本名を教えてください」
「ルリルリ？」

突然、どうしたんだろう？

「聞き覚えがあります。もしかしたら・・・」

アキトさんも名前に聞き覚えがあると言ってたな。

ルリ嬢は連合軍に籍を置いていたから、未来のケイゴさんの事を知っているのかもしれない。

「カグラ・ケイゴ。多分、偽名ではないと思う。木連人が地球に来て、偽名にする必要はないから」

「・・・やはり、そうでしたか」

ルリ嬢がどこか深刻そうな顔で呟く。
ルリ嬢はこの名前に覚えがあるという事か。

「ルリちゃん。未来でのケイゴさんの役職は？」

「・・・地球連合統合平和維持軍所属のカグラ・ケイゴ少将。木連
出身の若き将校です」

・・・統合軍の少将？ あの歳で？

「ケ、ケイゴさんはやっぱり木連人？」

「ええ。そうなりますね」

冷静に答えるルリ嬢。

でも、その額に浮かぶ汗が物事の重大さを物語っている。

「カグラ・ケイゴ少将は木連の歴史ある名家であるカグラ家の長男。
この家はゲキ・ガンガーを聖典として政府に捧げた事で今の立場
を得たようです」

「・・・ケイゴさんの親の役職とか分かる？」

「統合軍で大将を担っていた事から、木連でもかなり高い地位に
いると思われます」

カグラという名前は原作にも劇場版にも出てなかったから、そんな
事実、ちっとも知らなかった。

「ルリルリ。詳しいのね」

「ええ。カグラ・ケイゴ少将は有名な方でしたから」

「そうなの？ どんな感じで？」

ケイゴさんが有名？
どう有名なんだ？

「熱血クーデターはご存知ですか？」

「木連の政権を若い軍人達が勝ち取った活動だよね」

「はい。カグラさんはその際、三羽鳥の秋山さん、月臣さんと共に中心人物として活躍しています」

「所謂木連の中心人物？」

「ええ。その後、地球と木連との間に和平を結ぶ為に尽力しました。その事から両陣営で終戦の英雄と謳われています。あくまで軍内で、ですが」

「・・・終戦の英雄・・・」

有名なのは当たり前か。

終戦へと導いた人物なら。

でも、それったやっぱり和平派の人間って事かな？
駄目だ。情報が全然足りない。

「地球に潜り込んだっていう情報はあった？」

「いえ。私が調べた中にはありません。隠されたのか、歴史が歪められたのか・・・」

・・・どちらにしろ、これでケイゴさんが木連人という事はハッキリした。

何があんでもケイゴさんの活動を阻止しなければ。

CASが木連に渡ったなら、最悪の事態に

シュンツ。

「アキトさん！ ミスマル提督は!？」

「……………」

無言のアキトさん。

一体、それは何を意味しているのか……。

「……………どうやら遅かったようだ。」

先日の戦闘で一人のパイロットがチューリップに吸い込まれ戦死扱いにされている」

「そ、そのパイロットの名は？」

「…………カグラ・ケイゴ」

……………やられた。

チューリップ越しなら違和感を与えない。

しかも、未だに生体ボソソジャンプの成功例がない以上、確実に戦死扱いだ。

見事なまでに証拠隠滅と同時に情報を運んでいる。

「高機動戦フレームとCASのデータが入ったアサルトピットを同時に持ち運ばれた。」

CASを搭載した機体が戦場に出るのも……時間の問題だろう」

……………目先が真っ暗になった。

第三十八話（後書き）

はい。早速ケイゴネタバレ。

皆さんも既に気付いていたのでは？ と思い、
なら、いつその事、バラした後を楽しもうとこの展開に。

あとがき二回目。

一回目の内容を御存知の方はお忘れ下さい。

存じ上げない方は二回目という言葉はスルーの方向で。

皆さん！ ボソソングジャンプとは一体何なのか！？

色々と検証されている事でしょう。

既にこれ以上ないという答えが出ているかもしれない。

だがしかし、人は考えるからこそ人間、想像するからこそ人間なのである。

という訳でボソソングジャンプについて色々意見交換しましょう。

精神のボソソングジャンプはどういう現象なのか、とか。

身体事、過去に戻ってきた時、同一人物が存在して大丈夫なのか？とか。

議論は尽きないと思います。

皆さん、感想と一緒にこれらの意見を添えてくれると嬉しいな。はい。

という訳です。無論、感想のみも大歓迎。感想が僕の心の拠り所です。

第三十九話（前書き）

今回は初めてのカエデSIDEのお話です。
コウキなどナデシコは一切出てきません。

第三十九話

SIDE カエデ

「貴方なんかいなくなつて私は全然大丈夫だから！」

そう、いつまでもコウキに甘えてちゃ駄目なんだ。

寂しいのも悲しいのも自覚してる。でも、それを乗り越えなきゃ。

「カエデ！」

「貴方は私の心配なんてしないで自分の仕事をしっかりと果たしなさい！」

この私を置いていくんだもの。責任放棄したら許さないんだから。

「ああ！ 分かってる！ お前もな！」

「分かってるわよ！」

「俺がいないからって寂しがるなよ！」

「そつちこそ私がないからって寂しがらないでよ！」

「それはない！」

「はあ！？ 少しは寂しがりなさいよ！」

いつも通りの反応。

でも、少しは寂しがってくれてもいいんじゃないの？

私だけ馬鹿みたいじゃない。

「待つてるぞ！ カエデ！」

「ええ！ 待つてなさい！ コウキ！」

ありがとう。コウキ。

「じゃあな！」

「ええ！ また会いましょう！」

また、いつか、ナデシコで会いましょう。

それまでに、私も強くなってるから。

「いつものを御願ひします」

コウキがこの基地を去ってから幾日かの月日が流れた。

始めはやはり寂しかったけど、意外な事にも最近はずいぶん平気。

それにはやっぱりこいつの存在が大きいのかも。

友達がいるか、いないかって結構切実な問題。

「いつものって、よく飽きないわねえ」

「いいんですよ。美味しいんですから」

ケイゴは本当に美味しそうにご飯を食べる。

見てるこっちが幸せになるくらい。

コックとしては嬉しい限りだ。

「はい」

「ありがとうございます。カエデ」

気付けば名前で呼び合う仲に。

本当にいつの間になんか……。

不快じゃないから良いんだけどね。

「どうなの？ 調子は」

「それなりです。小隊としての動きも徐々に違和感がなくなってきましたし、準備は万全です。

いつでも出撃できます」

「ねえ。ケイゴ」

「はい？」

「死なないでよね」

コウキがいない今、親しい友人はケイゴぐらいしかいない。

ケイゴにいなくなれたらと思うと恐怖が身を包む。

「分かっています。私だって死にたくないですから」

「約束なさい。絶対に帰還してくるって。戦場で死んだら許さないんだからね」

「死人を更に苛めるつもりですか？」

「茶化さないで。分かった？」

「分かっていますとも。必ず戻ってきましょう」

ちょっと安心した。

親しい友人を失うのはもうコリゴリだ。

火星大戦で、私は多くの友人を失った。

その代わりという訳ではないけど、今の友人は絶対に失いたくない。

「カエデの方はどうですか？」

「どうって、別にいつも通りよ。大して変わらないわ」
「そうですか」

何故か知らないけど、妙に私を気に掛けるのよね。ケイゴって。まさか私の事が・・・ないか。なに考えているんだろう？ 私。

「どうかしました？」

「な、なんでもないわよ」

鋭いんだか、鈍いんだか・・・。

まあ、コウキよりは絶対に鋭いだろうけど・・・。

「それじゃ、仕事に戻るわね」

「はい。頑張ってください」

「そっちなもね」

「ねえ、出撃なの？」

「はい。攻め込んできましたからね。防衛です」

昼、食事中に響いたエマーゼンシーコール。
近くにいたケイゴに問いかける。

「約束破ったら承知しないわよ」

「分かっています。ご飯が美味しいですからね」

「何それ？ 理由になってないわよ」

ジト眼で見ると苦笑で返される。

「それでは」

走り去っていくケイゴ。

その背中を見送る事しかできなかった。

「・・・そっか」

これが恐怖なんだ。

身近な人間が今日、いなくなるかもしれない。

そう考えるだけで身体が震える。

「カエデちゃん。気を強く持って」

「・・・おばちゃん」

ポーンと食堂の出入り口を見ていると、いつの間にか後ろにいたおばちゃんにそう言われた。

「私達みたいに基地に務めている人間はね。何度も耳にするもんさ」

「・・・兵士が死ぬという事をですか？」

「そう。パイロット達と実際に接する仕事だからね。誰だって知人が亡くなるのは嫌なもの」

「・・・はい」

「食堂からじゃ戦闘の映像なんて見れない。

なら、私達に出来る事は美味しい料理を作って待ち続ける事だけ」

「・・・」

「そんなしみつたれた顔で作った料理が美味しい訳ないだろう？」

信じて待つてあげな」

「・・・分かりました」

・・・うん。そうね。

戦闘で疲れている時、美味しい料理を食べさせてあげたい。

それが私が今、唯一出来る事。

信じて、待つていてあげなくちゃ。

約束したんだもの。

「うん。私はコウキ君だと思ってたんだけどなあ？」

「コウキ君も忙しいからね。仕方ないんだよ」

「でも、まさか、カグラ君とはね」

「まあ、若いもんには若いもんの恋愛事情が」

「私はまだ若いですよ？」

「はいはい。早く結婚しないと置いてかれるわよ」

「クウ」。気にしている事を」

・・・おばちゃん達、元気だね。

なんか、私が馬鹿らしくなってきた。

よし。美味しい料理を作つて待つてよう。

死ぬんじゃないわよ！ ケイゴ！

「お帰りなさい。ケイゴ」

「はい。ただいま戻りました。カエデ」

戦闘は無事に終了した。

コウキがケイゴを褒めてたけど、本当に凄腕だったらしい。
一気にエース扱いされていた。

「何か食べる？」

「はい。戦闘でお腹がすいているので。いつものを」
「分かったわ。少し待ってなさい」

ケイゴが頼むいつもの。

今回はいつも以上に力を入れた。

不安を押さえ込む為に、料理に没頭していたから。

「相変わらず美味しいですね。今日はまた一段と」

「ま、まあ、ご褒美みたいなもんよ。頑張ったみたいだし」

なんで分かる？

「そうですか。それなら、戦闘に出るのも悪くないですね」

こ、こいつは・・・人の気も知らないで・・・。

「し、心配したんだからね」

「ハハッ。それは光栄。しかし、大丈夫ですよ。きちんと鍛えてますから」

「そ、それでもよ」

本音を言うなら、戦場に出るなと言いたい。

でも、それじゃあ、ケイゴの仕事を全うできない。

こいつはパイロットなのだから。

「コウキさんからもお墨付きを頂いているんですから」

コウキが教官としてケイゴを鍛えた。

確かにコウキはケイゴを褒めてたけど、私はコウキ自身の实力を知らない。

そのコウキに褒められたというケイゴの实力なんてもっと知らない。

「あんまり己惚れない事ね。死ぬのなんて簡単なんだから」

眼前で殺された両親。

瓦礫の下敷きになって死んだ妹。

友達なんて会う前に死んでいた。

そう、人間が死ぬのなんて、本当に簡単。

「分かっていますよ。ご心配、ありがとうございます」

「べ、別にお礼を言われるような事じゃないわよ」

ちゃんと生きて帰ってきなさい。それだけでいいわ。

それから毎日のように、とまではいかないけど、戦闘が続いた。

その度に何人かの犠牲者が出る。当然よね。戦争なんだもの。

ケイゴはまだ生き残ってる。でも、いつ死ぬかなんて分からない。

次はケイゴなんじゃないかって、毎日が不安。

もちろん、他のパイロット達だって心配だし、死んだら悲しい。

でも、一番親しいケイゴがやっぱり一番心配だ。

「……暗い顔してるわね」

「ええ。まあ……」

「何かあったの？」

「……小隊の仲間が一人死にましてね。明日、別の人員が補充されるそうですが……」

「……そう」

仲間の死に涙する。誰だっけそう。

身近な人間であればある程、亡くなった時の悲しみは深い。

「……醜いものですね。戦争とは……」

「……そうね。決して綺麗なものではないわ」

「……正義と謳い、虐殺してきた木連もまた醜いのかもしれません」

「……木連の事なんて分からないわ。何があって火星を襲ったのか分からないし。でも……」

「でも？」

「木連が醜いように、地球だって醜いわよ。戦争をしてるのはお互い様なんだから」

「……そう、ですね」

「どっちも醜い。正義なんてどこにもない。エゴとエゴのぶつかりあい。」

それが戦争なんだって。そうコウキが言ってた」

「……コウキさんは本当に手厳しいですね。戦争に正義を見出させてくれない」

「私達にとって木連は悪でしかない。同じように木連からしてみれば私達なんて悪でしかない。」

きつとそういう事だと思う」

「……悪が正義を謳うなどと、馬鹿らしい」

「私は軍人でもなんでもないので、そういうのは分からないわ。」

自分達が正義だという信念で戦いに赴く人だっけと思うし」

「・・・そうですね」

それっきり、言葉を失った。

今はそつとしておいてあげよう。

ケイゴならきつと、一人で立ち直れるから。

「・・・そつか。私、もう少しで帰れるんだ」

「ええ。提督達が話していました。もう少しだと」

私がナデシコに戻る為に必要な条件。

提督が極東方面の司令官になる事。

そうすれば、ナデシコの人事に関しても口が出せるって。

「良かったではないですか。念願のナデシコですよ」
「でも・・・」

確かにナデシコに帰れるのは嬉しい。

あそこには親しい友人もいるし、コウキやミナトさんだっている。

でも、そうすると、ケイゴはどうなるの？

ケイゴの事を無視して、本当にナデシコに戻ってしまっているの？

私は、本当に後悔しない？

「おや。何か心残りがあるのですか？」

「べ、別にないわよ」

流石に面といって貴方が心配とは言えない。

「しかし、これで肩の荷が下りましたよ」

「え？ それって……」

私がケイゴの邪魔をしてた？ お荷物だったって事？

「あ、いえ、カエデがお荷物という意味で言ったんじゃないありません」
「じゃあ、どういう意味よ？」

怪訝な眼でケイゴを見る。

意味が分からないから。

邪魔してた自覚はないんだけどな……。

「コウキさんにカエデの事を頼まれてましたからね」

コウキが？ ケイゴに私を？

「コウキさんの代わりに私がカエデを護る。そうコウキさんに誓いました」

それは嬉しい。

嬉しいんだけど……。

「それじゃあ、貴方はコウキに頼まれてたから私を気に掛けてたの？」

もし、そうなら、それはそれで悲しい。

私はケイゴを単純に親しい友人だと思っていた。

だけど、ケイゴはそう思っていないくて、唯の護衛対象として見ていたとしたら……。

それは堪らなく悲しい事だ。

「いえ。もちろん、頼まれてたという事もあります、私自身、カエデを支えたいとそう思っていましたから」

「・・・え？、そ、それって、どういう意味よ？」

「カエデはカエデで鈍感ですよね」

そう苦笑で返される。

何？ 何が言いたいの？

「私はカエデが好き。そういう事です」

「ッ!？」

え？ ええ!？

「顔を真っ赤にするなんて可愛らしい所もあるんですね」

「ケ、ケイゴ、冗談はやめて」

本当に人が悪い。

こんなときに冗談を言うなんて。

「冗談じゃありませんよ。カエデの事、私は好きです」

「ちよ、ちよっと待って」

い、いきなりそんな事を言われても・・・。

「いえ。返事を期待している訳ではありません」

「え？ どういう意味？」

告白しておいて返事はどっちでもいい？

何を考えているのか全然分からない。

「本当は隠しておくつもりだったんですけどね。別れが惜しいので」「ケイゴ。意味が分からないわ」

「ふふつ。いえ。カエデ、さっきの事は忘れてください」

「はあ!？」

好きとか言っつといて今度は忘れてくれ？
意味が全く分からない。

「思わず言ってしまった戯言です。忘れてください」
「ケイゴ?」

どうして、そんな悲しそうな顔で言っつもの？
どうして、そんな遠い眼をしながら言っつもの？
ケイゴ。貴方は今、一体何を考えているの？

「私は帰らなければならぬのです。私のあるべき場所へ。
偽りの私ではなく、本当の私でいられる地に」

「・・・ケイゴ。貴方は・・・」
「カエデ。もう一度言います。私の言っつた事、私の事、そのどちら
も忘れてください」

「そんなの無理よ！ それじゃあ、何で、私に好きなんて」
「・・・不思議ですね。忘れて欲しいのに。
心のどこかで覚えていて欲しいとでも思っつたのでしょうか」

「・・・ケイゴ。貴方のあるべき場所っつて何？」
「知らない方がいい。いえ。知っつて欲しくない。知れば、貴方は私
を嫌っつてでしょう。憎むでしょう」

「・・・」

私はケイゴの言いたい事が何一つ分からなかった。
好きと言っておいて忘れてくれと言う。

自分自身の事も忘れてくれと言う。

まるで、今日がお別れかのように……。

「矛盾ばかりの私ですが、一つだけ、確かな事があります」

「……………」

「カエデ。私は貴方の安全と幸せを祈ってます」

「ちよつと待つて。私には貴方の言いたい事が分からない」

「好きな人の幸せを願う。自分が叶えてあげられない以上、当然の事です」

「ケイゴ。貴方はさつきから何が」

ウィーンウィーンウィーンウィーンウィーン！

エマージェンシーコール？

「ちよつどいいタイミングですね。カエデ。それでは」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！」

走り去っていくケイゴ。

その背を追いかけても、距離は開く一方。

離れていく距離。それがまるで私とケイゴの関係のように思えた。

二度と会えない。そんな気持ちが深まった。

「ケイゴ！ ケイゴ！ 説明しなさいよ！」

なんとかしても話を聞く。そう思つて全力で駆けた。

もう会えないんじゃないかと思ひ、身体に鞭を打った。

でも、結局、私がケイゴに追いつく事はなかった。

そうよね。運動も碌にしない私が身体を鍛えていえるケイゴに追いつける筈がない。

ケイゴは何が言いたかったのか。

ケイゴは何を考えているのか。

何一つ分からないまま、ケイゴはいなくなってしまった。

重い足取りで食堂へと帰る

今まで以上の不安が胸を襲った。

そう、私は、この戦闘でケイゴがいなくなる事を半ば確信していたのかもしれない。

「どうしたんだい？ カエデちゃん。元気ないねえ」

いつも以上に戦闘区域が近いという事で、私達は基地の地下シェルターに避難していた。

少なくとも、ここなら何があっても安心らしい。

今回は食堂で料理を作りながら待っていてあげる事も出来ない。

無事に帰ってきたケイゴに美味しい料理を提供する。

そう私は恐怖を紛らわしてきた。

それが出来ない今、胸が痛くなるほどの恐怖と不安が私に襲い掛かる。

無事できて欲しい。そして、さっきの事をきちんと説明して欲しい。言いたい事だけ言って去っていくのなんて卑怯だ。

私にだって言いたい事はあったのに……。

「やっぱり私達は信じて待つ。それだけしか出来ないよ」

おばちゃんが近くに座ってそう慰めてくれる。

おばちゃんの言いたい事は分かる。

今の私達は本当に信じることしかできないのだから。

でも、あの背中が、私に別れを告げているようで……。

もうケイゴに二度と会えないんじゃないかって……。

「……不安で仕方ないんです」

そう言つとおばちゃんは優しく笑って……。

「はい」

手を差し伸べてくれる。

「ギュツと握つてなさい。それだけで少しは気が紛れるから」

言われた通りに差し出された手を握る。

そのどこか安心する人の温もりが本当に不安を少し紛らわしてくれた。

暖かくて優しい。まるでお母さんの手みたいだ。

「ずっと握っていていいから」

おばちゃんが隣に座る。

そして、おばちゃんの手を握った私の手を更に握って。

「信じましょう。必ず帰ってくるって」

私はもう片方の手もおばちゃんの手添えて、まるで祈りを捧げるように願った。

無事に帰ってくるように、と。

・・・でも、その期待はいとも簡単に裏切られる。

「・・・戦死？ ケイゴが？」

知らされた戦死者の数と名前。

その中にカグラ・ケイゴの名前があった。

「べ、別人よね？」

同姓同名だったり、間違いだったり、そんな事を期待して、自分を誤魔化した。
でも・・・。

「眼の前の現実から逃げちゃ駄目よ。カエデちゃん」

おばちゃんにそう言われて、逃げ場はなくなった。

「う、嘘でしょ。ケイゴ」

誰か、御願いだから、嘘って言ってケイゴが、ケイゴが死ぬ訳ないって。

「カエデちゃん」

おばちゃんが優しく私を抱き締める。

・・・ああ。夢じゃないんだ。ケイゴは・・・死んだんだ。

「・・・うう・・・」

涙が溢れ、零れる。

年甲斐もなく、おばちゃんの身体に縋って……。

「約束したじゃない！ 絶対に帰ってくるって……」

約束した。

必ず戻ってくるって。

それをケイゴは破った。

「言ったじゃない！ 私が好きだって、なら、何で勝手に死んでるのよー！」

好きって言うておいて、私の心を惑わすだけ惑わして……。

言葉に最後まで責任を持ちなさいよ。

好きなら私を悲しませないでよ。

「……うう……うううう……」

……ひたすらに泣いた。

優しく抱き締めてくれるおばちゃんに甘えて。

ただ、泣く事しか、私には出来なかった。

SIDE OUT

第三十九話（後書き）

忘れて欲しい。でも、覚えていて欲しい。

このケイゴの矛盾。彼なりに葛藤があっただんでしょうね。無責任と言えば、無責任ですが、否定できない僕がいる。カエデの心が心配です。

第四十話（前書き）

いつも以上に更新が遅く、いつも以上に短い。
・・・本当に申し訳ないです。

第四十話

「ピースランドからの特使？」

「誰かしら？ ピースランドから呼ばれるようなVIPは」

いつも通りにブリッジへと向かう。

一応、俺の役職は前と変わらない為、ブリッジ勤務も変わらないのだ。

まあ、俺がいて役に立つかといえば、そうでもないけど。

「いえ。なんでも、ルリさんに用事とか・・・」

そんなある日の事だ。

ピースランドからルリ嬢に対する特使がやってきた。

ピースランドとは永世中立国であり、世界の銀行。

裏金とかが凄いらしい。ネルガルも頭が上がらないとかなんとか。

まあ、税金対策をさせてくれる国ですからね。睨まれたら終わりか。

「ホシノ・ルリに？」

怪訝な顔付きのエリナ秘書。

いや。久しぶり。いつもブリッジにいないから忘れてた。

あれかな？ また裏で何かやってるのかな？

「ええ。よろしいでしょうか？ ルリさん」

「はい。分かりました」

プロスさんの引率でルリ嬢がブリッジから出て行く。

まあ、ルリ嬢は既にこうなる事を知っているから、別段驚きもないだろう。

俺も特にこれといって干渉するつもりはない。

ルリ嬢やアクトさんがうまくやるだろうし。

そんな事より・・・そんな事は失礼かな？ コホン。

俺はケイゴさんの事について色々と考えないといけない。

ケイゴさんがエステバリスごとチューリップで跳んだ以上、木連にはCASが導入されるだろう。

先日の人型機動兵器にCASが搭載されれば、苦境に立たされる事は間違いない。

かといって、俺達にそれを阻止する事はもはや不可能。どう対策を取るか・・・。

「コウキ」

ん？ アクトさん？

「何でしょうか？ アクトさん」

「俺は恐らくルリちゃんに付いていく事になるだろうからな。その報告だ」

「そうですか。分かりました」

「何か買ってくるものはあるか？ 前回同様、そういう役目を担わされるだろうしな」

どこか疲れた表情で告げるアクトさん。

そくだよなあ。クルー全員とまではいかないけど、買い物に使われるんだ。

溜息も吐きたくなる。

「いえ。特には」

これといって必要なものはないよな？

「そうか。分かった。お前も少し休め」

「え？」

「頭を使い過ぎだ」

苦笑しながら告げるアキトさん。

「ケイゴとやらで色々と悩むのは分かるが、あれからずっとじゃないか。少しは休んだ方がいい」

「はあ……」

別段、疲れている訳ではないんだけどなあ。

もしかして、言われている通りに疲れてるのかな？
うん。ちよつと休もうかな。

「それではな」

そういつて去っていくアキトさん。
ルリ嬢をよろしく、アキトさん。

「コウキ君。言われた通りに休んできなさい」

「え？ ミナトさんまで」

「隈。隈できてるわよ？」

「嘘？ マジですか？」

「マジったらマジ。眠れないの？」

「ええ。まあ・・・」

寝ようと思うと色々と考えてしまう。

俺がいなければこんな危機に陥らなかつたんじゃないか、とか。

俺のせいで今回は形だけの和平さえ成り立たなくなっちゃうのでは、とか。

そう考えたら、きりがなくなっちゃって。

「そっか。私で良ければ相談に乗るけど？」

「・・・そうですね。御願いしてもいいですか？」

「ええ。もちろん」

ミナトさんに相談すれば、少しは心が楽になるかもしれない。

「それじゃあ、今日の夜にでも聞いてあげるから。ひとまず寝てきなさい」

「・・・仕事中ですから」

「体調不良とでも言っておきなさい。事実、そうなんだから」

「・・・でも・・・」

「いいから。どうせ待機なんですよ？」

だったら、休んでおいて体調不良を治した方が断然ナデシコの為だわ

「・・・そう、ですか。分かりました」

・・・それなら、お言葉に甘えようかな。

「・・・艦長」

「はい。何でしょ・・・マエヤマさん。顔色悪いですよっ」

べっぴんからマジらしい。

周りから休めオーラが漂ってきた。
人が良過ぎるよ。ナデシコクルー。」

「ちょっと体調不良です。休ませて貰ってもいいですか？」

「はい。早く治しちゃってください」

「ありがとうございます」

いや。こんな簡単に許可をもらっていいのかな？
まあ、休ませてもらえるなら休むけど。

「それじゃあ、失礼しますね」

「お大事に」

ブリッジから出る前に一礼。

うん。眠れるかな？ これで眠れなかったら申し訳ないし。
・・・うん。仕方がない。睡眠薬でも貰ってくるか。
睡眠薬なんて初めてだけど、どうなるんだろう？

S I D E M I N A T O

「大丈夫かしら？ コウキ君」

ブリッジから出て行くコウキ君を見送る。

コウキ君がケイゴさんと呼ぶ人のスパイ疑惑から数日。

日に日にコウキ君の顔色と悪くなってきている。

変な所で責任感が強いから、コウキ君は。

背負わなくていい事まで背負っちゃってる気がするのよね。

「・・・あの、ミナトさん」

「ん？ どうかした？ セレセレ」

コウキ君に比例するようにセレセレの元気もない。

「・・・コウキさん。どうかしたんですか？」

心配そうに問いかけてくるセレセレ。

今更だけど、ナデシコが初めて出航した時とは大違い。

無表情だなと思っていたセレセレも少し感情表現が乏しい女の子ぐらいにまで成長した。

人との触れ合いで人ってこんなに変わるんだなあって実感するわよね。

「ちょっと色々あってさ。悩み事を抱えてるみたい」

「・・・そう・・・ですか」

俯くセレセレ。

愛されてるなあ。コウキ君。

「・・・私に何か出来る事はないでしょうか？」

「コウキ君の為に？」

「・・・はい。私、コウキさんに恩返し出来てません」

・・・恩返しか。

コウキ君は恩だなんて思ってないと思うけどね。

そうだなあ・・・。

「今度コウキ君が来た時に笑って出迎えてあげて」

「・・・え？ それだけでいいんですか？」

「そうよ。それだけでコウキ君は喜んでくれるから」

コウキ君もセレセレの事を大事にしてるし。

きっとセレセレが笑顔で出迎えてくれれば嬉しいと思う。

「・・・分かりました」

「ええ。そうしてあげてちょうだい」

それが一番コウキ君を癒してくれると思うから。

「はい」

「え？ いきなり？」

夜、コウキ君の部屋を訪ねて相談タイム。

部屋に入ってすぐに、その場に座り、腿をパンパンと叩く。

最近してなかったしね。膝枕。

「ほら。おいで」

「ええっと・・・はい」

ふふつ。相変わらず照れ屋なんだから。

久しぶりの重みが逆に心地良い。

「よく眠れた？」

さつきまでベットの中にいたみたいだし、眠れたとは思っただけど……。

「初めて睡眠薬にお世話になりましたよ」

「……そっか」

睡眠薬にお世話にならないと眠れない程、コウキ君の悩みは深いんだ。

「あの……恥ずかしいんですけど……」

ああ。無意識に額とか撫でてみたい。ま、いいじゃない。これぐらい。ねえ。

「いいの、いいの。それで、コウキ君は何を悩んでるの？」

十中八九、ケイゴさんっていう人の事だと思っけど……。そういえば、基地に残してきたカエデちゃんの事かもしれないわね。カエデちゃんの事、コウキ君、とても気にしてたし。

「俺のせいじゃないかなって」

「え？ コウキ君のせい？ 何が？」

「俺がこっちの世界に来なければこんな事にはならなかったんじゃないかなって」

……思ったより深刻そうね。ケイゴさんでもカエデちゃんでもないみたい。

もっと、こう、根本的な問題かしら？

「どついう意味？」

「俺がいなければ、ナデシコは危機に陥る事もなく、形だけの和平だとしても成立しました」

「・・・うん」

「ですが、俺の存在のせいで、木連側はナデシコを打倒するだけの力を身につけてしまい、

もっと言えば、地球だってより危険になりました」

本当かどうかは分からないけど、

コウキ君のエステバリスが木連側に渡ってしまったせいで、

あの新型機が造られてしまったらしい。

でも、コウキ君だけの問題じゃないんじゃないかな？

「でも、今回みたいにエステバリスごとチューリップで奪取する方法もあつたんでしょ？」

「いずれはこうなつたのよ」

別にコウキ君が背負うような事じゃないと思う。方法なんていくらでもあつたと思うし。

「ですが、そもそもCASがなければ、スパイとしてケイゴさんも来なかつたかもしれませんし、

新型機も実用化されなかつたかもしれません」

・・・ああ。かなりの重症だわ。

なんでも自分のせいにしちやつてる。

「コウキ君。落ち着いて聞いて」

「・・・はい」

「CASがあるうとなかろうとスパイ活動はしていたと思うわ」

「どうしてですか？ 俺の
「もちろん、何かしらの情報を得て、CASの為に来たのかもしれない。」

でも、それだったら長い期間を基地で過ごす必要はなかったんじゃない？」

「実戦に配備されてからすぐに逃げれば良かったって事ですか？」

「ええ。他にも知りたい事があったからスパイ活動をしていたとも考えられるでしょ？」

CASも目的の一つだとは思うけど、全てじゃないわ
「.....」

いくらでも調べたい事なんてあったと思う。

その全ての責任をコウキ君が背負う必要はない。

そもそもCASだって頼まれて作ったものなんだし。

「それにね、新型機の実用化だって別にコウキ君のせいじゃないでしょ？」

「でも、CASがなければ」

「そうね。すぐには実用化できなかったかもしれないわ」

「ッー！」

息を呑むコウキ君。

「でも、いずれは実用化されてた。別にCASじゃなきゃ動かないって訳でもないしさ」

「そ、それはそうですが、性能的に.....」

「戦争中の技術進歩を甘く見ちゃいけないわ。」

確かに時間は掛かったでしょうけど、同等の性能を得る事は出来たと思う」

現時点で優れているのは確か。でも、いずれは追いつかれる。それに、コウキ君は大切な事を忘れている。

「それにね、コウキ君。貴方は大事な事を忘れてるわ」

「え？ 大事な事？」

「ええ。貴方のCASの恩恵を受けているのは木連だけじゃないでしょ？」

地球側だって戦況を立て直してきてるじゃない」

「・・・あ」

「そうよ。貴方は悪い方ばかり見ているみたいだけど、良い方にも眼を向けなくちゃ」

確かに木連に渡った事で向こうの戦力は向上してしまったかもしれない。でも、こちら側だって同じように戦力を向上させているんだ。

±0とかいう訳じゃないけど、もっと自信を持っていいと思う。

「責任感が強いのもいいけど、あんまり背負うと潰れちゃうぞ」

額に手を置いて、グリグリとしてみる。

変な所で責任感が強いから本当に心配。

「・・・はい」

ちよつとは気が楽になったかな？

「他にも心配事ある？」

「・・・そうですね。ケイゴさんときちんと話したいってのもありますが、その前にカエデですかね」

「やっぱりカエデちゃんが心配？」

「ええ。多分、カエデにとってもケイゴさんは大切な友達だったと思うんです」

「そうね。私もそう思う」

「だから、戦死扱いで悲しんでると思うんですよ。」

ケイゴさんがボソソジャンプできるかもしれないって知らないし「
・・・そうね」

やっぱり、コウキ君はカエデちゃんを大切に想ってる。

自分も想われているって知ってるけど、やっぱりちよっと妬いちゃうかな。

でも、きつと、こうやって周りを気に懸けられるのもコウキ君の良
い所だと思うし。

うん。我ながら致し難いというか、なんというか。まあ、そんな
感じ。

「心配なら会いに行ってあげれば？」

「え？ 無理ですよ。だって、今、ヨーロッパですよ？」

確かに場所的に遠いけど、無理じゃないでしょ？

「何日かはピースランド周辺で待機でしょ？ それなら、きつと許
可もおりるわよ」

「でも、そんな私用で・・・」

「いいから。ミスマル提督と連絡取って、呼ばれたって事にしちゃ
えばいいじゃない」

「・・・大丈夫ですかね？」

「色々と提督とも話した方がいいかもしれないわよ。万が一、とい
う事で」

「・・・そうですね。でも、連絡を取る手段が・・・」

あ。そういえば、アキト君しか連絡の手段を知らないのか。ルリルリもないしなあ。
ん？

「・・・あ」

「どうしました？ ミナトさん」

忘れてた。アキト君を慕うもう一人の妖精がいたじゃない。

「ラピラピに聞いてみましょう」

「そっか。そうですね。ラピスちゃんならもしかしたら知ってるかもしれない」

うん。そうしましょう。

「・・・少しは楽になった？」

「・・・はい。流石はミナトさんですね」

そう言って笑うコウキ君。

でも、まだちょっと蔭りがある。

やっぱりまだ駄目か。・・・そうよね。

「責任を感じるのも良いけど、自分がやれることをやった方が何倍も良いと思うわよ」

「ええ。分かってるんですけどね。怖いんですよ。俺」

「怖い？」

「はい。俺の存在がこうまで歴史を変えて、本来死なない人が死んだり、

犠牲にならなくて済む人が犠牲になったりするんじゃないかって」
「それは・・・」

「今までは順調でした。サツキミドリや火星人、ガイやイツキさんだつて救えた。」

「この結果は俺にとつても嬉しい限りです」

「・・・うん」

「でも、きつとそれは俺がいなくてもアキトさん達が成し遂げたと思つんです。」

「今までの過程に俺の存在はそこまで必要じゃない」

「・・・コウキ君」

「何で、そんなに自分を卑下するの？」

「貴方のお陰で助かった命だつてたくさんあるのに。」

「地球に帰ってきて、ようやく俺だけにしか出来ない事を頼まれました。CASの製作です」

「・・・ええ」

「元々、俺は最後までナデシコを生き残らせられれば良かったんです。」

「俺の目的はその後の平穏な生活でしたから」

「・・・うん」

「でも、アキトさんの想いを知った。」

「なんとしても悲劇を回避したいという強い想いに触れたんです。」

「だから、俺はそれを助けたいと思いました」

「きつとアキト君が未来から還つて来た人間じゃなかったら、」

「コウキ君は出来る限りの事だけしかやらなかったかもしれない。」

「サツキミドリや火星、ヤマダ君やイツキさんを助けるぐらいはコウキ君なら絶対にした。」

「でも、CASの製作なんていう戦争のあり方を変えるような事にまでは手を出さなかつたと思う。」

「こうまでコウキ君を動かしたのは、アキト君の想いだったんだ。」

「でも、その結果、俺は悲劇を生み出す要因となってしまうた。俺の行動は全部裏目に出ています」

「コウキ君は自分がいなければなんて、そう思ってるの？」

否定して欲しい。

だって、それを肯定されたら、私は……。

「……そうですね。そうかもしれません」

「……コウキ君」

「俺がいなければ、アキトさんが全てうまくやってくれたかもしれない。魔をただけです」

いえ、きつとうまくやったでしょう。俺は……アキトさんの邪魔をしただけです」

そう言って力なく笑うコウキ君。

「……コウキ君。そんな悲しい事を言わないで」

悲しくて、悔しい。

そうまでコウキ君を追い込ませてしまった事が悲しくて。

それなのに何も出来なかった自分が悔しい。

ううん。何もしなかった自分が嫌。

「コウキ君は一生懸命やってきたじゃない」

「……そうですかね？」

「ええ。貴方のお陰で助かった命だっただくさんある」

火星だっけそう。貴方が無茶をしてくれなければ生き残れなかったかもしれない。

貴方がC A Sを作ってくれたお陰で、助かった命だつてあるのよ？

「そんなに自分を卑下しないで。コウキ君。貴方が邪魔なんて事は絶対にない」

「・・・・・・・・・・」

眼を瞑るコウキ君。

その瞳から一滴の涙が零れた。

「いいのよ。コウキ君。辛いならもうやめてもいいの」

「・・・・・・・・ミナト・・・さん？」

「貴方は背負い過ぎだわ。辛いなら、苦しいなら、もう何も考えずにゆっくり休みなさい」

そう言つて、コウキ君の額に手を置く。

分かつてる。私のしている事がコウキ君の為にならないなんて事は本当ならしつかりしろつて背中を押すのが一番コウキ君の為。

でも、こんなコウキ君を見るとそんな事は出来ない。

もういいのよつて。甘えちゃいなさいつて。

迷子みたいになった子供のような弱々しさを見せるコウキ君を。

・・・私はこれ以上、苦しませたくなかった。

それから、しばらくコウキ君は無言だった。

私には何を考えているのかなんて分からない。

だから、眼を瞑るコウキ君の頭を撫でる事しか出来なかった。

「・・・・・・・・そう出来たらどれ程いいんですかね？」

そして、漸くコウキ君が口を開く。

「コウキ君？」

「正直な話、もう嫌ですし、縋れるならなんでもいいから縋りたい」
「……………」

「でも、そんな事ばかりしてたら、嫌われちゃいますよね。俺」

苦笑するコウキ君。

「俺はこんな所で責任放棄したくないんです。ここでやめたら、俺は一生後悔します」

涙を流しながらも、私をしっかりと見詰めるコウキ君。

迷いがあつて、苦しみがあつて、それでも、コウキ君は前を向いていた。

「ミナトさん。らしくないですよ。いつものミナトさんなら背中を押すのに」

「…………コウキ君」

「でも、気付きました。偶には振り返つて縋つても良いんだって。縋つてもいい人が俺にはいるんだって」

その顔は先程までの弱々しい顔ではなく、少し男らしい意思のある顔だった。

「ミナトさん」

だから、私も笑みを浮かべて聞き返す。

「何かな？ コウキ君」

すると、コウキ君は潤んだ瞳で笑みを浮かべながら……。

「これからも俺の背中を押してください。

でも、時々背中に置かれた手を握って、振り返ってもいいですよ
ね？」

そう告げる。だから、私は満面の笑みでこう言ってあげるんだ。

「ええ。いつでも振り返りなさい。甘えるだけ甘えさせたら、また
背中を押してあげるから」

「ありがとうございます。ミナトさん」

満面の笑みを浮かべるコウキ君。

私にはコウキ君を技術的な面とかで助ける事は出来ない。

でも、きっと、コウキ君の精神的な負担を軽くする事は出来る。

私がコウキ君に出来る事がそれだけしかないのなら……。

全力で甘えさせてあげよう。

頼りないけど、頼り甲斐のあるこの子を。

弱いけど、前を向こうとする強いこの子を。

全力で……愛し続けよう。

S I D E O U T

第四十話（後書き）

はい。長らくお待たせしました。すいません。

ええっと、大変、言い辛いのですが、

明後日の4月6日より学校が始まってしまいます。

これまで以上に更新が遅くなると思いますが、

必ず完結させるので暖かい眼で気長にお待ち頂けると幸いです。
み、見捨てないで下さい……。

第四十一話（前書き）

最近、忙しい毎日を送っています。

今さえ乗り越えれば、当分は楽という状況。

しばし、更新が遅れるやもしれませぬ。

ご了承の程、よろしく御願ひ申す。

第四十一話

「・・・分かった。これ」

ミナトさんに泣きついた次の日。

いや。お恥ずかしい限りです。はい。

でも、ミナトさんのお陰で心が軽くなった。

ありがとうございます。ミナトさん。

そして、昨日話したようにラピス嬢からミスマル提督の連絡先を聞こうと話しかける。

その結果、特に問題なく教えていただきました。

信用されているって思っているのかな？ だとしたら、嬉しいな。

「ありがとう。ラピスちゃん」

「・・・いい」

相変わらずの無表情。

アキトさんがいるといたないとは大きく違う。

ラピス嬢は本当に表情が動かない。

信頼はされていると思うんだけど・・・。

やっぱりアキトさんは別って事かな？

「それじゃあ、また」

「・・・うん。また」

ラピス嬢。ありがとう。
とりあえず、自室で連絡を取りますかね。

「お久しぶりです。提督」

「この回線からなのでテンカワ君だと思ったんだがね。マエヤマ君だったか」

「ええ。教えていただきまして」

ピコンツと映りだすカイゼル提督。

いや。相変わらずのインパクトですな。

「そうか。それで、何か用かね？」

「ええ。ケイゴさんの事を聞きまして、基地内の様子はどうかかと」

ケイゴさんは基地内でも目立っていたし、好青年として人気があった。

きっと基地内の人間にも大きな影響を与えていると思う。

「うむ。軍人や古くから基地にいる者は大丈夫なんだがね。

新参の者達は未だに暗い顔をしているよ」

流石に軍人達は慣れてるか。

人の死になんか慣れたくないけど、仕方ないんだろうな。

「特にキリシマ君は酷いな」

「ッ！」

や、やっぱり……。カエデ。

『食堂で仕事はしているんだが、どこか魂が抜けたようだな。無気力になっている』

「・・・そう・・・ですか・・・」

・・・ケイゴさんはカエデにとっても特別な人だったんだろうな。間近な人間が戦死扱いされたんだ。ショックを受けるのは当たり前だな。

もし、ケイゴさんが生きてたら・・・。

それはそれで複雑だ。ケイゴさんが木星蜥蜴であるとバレてしまう。それに生体ボソソジャンプについても知られてしまう可能性がある。ケイゴさんの失踪にはそれだけの意味があるんだ。

『キリシマ君の件だが、そろそろ行動に移せそうだ』

「カエデの件？」

『忘れたのかね？ キリシマ君をナデシコに戻すという件だ』

・・・あ。という事は、極東方面軍の司令官にミスマル提督が？

「提督が司令官に？」

『うむ。これから資金援助の要請に行くのだがね。その成功次第となる』

「資金援助？」

誰に要請するつもりだろう？

『今、ナデシコはピースランドにいるのだろうか？』

「え、ええ。そうですか？」

『これから私もそちらに合流するつもりだ。アキト君とルリ君と合流し、ピースランド王に面会する』

・・・そ、そんな計画が立てられていたんですか・・・。

「ピースランド王とは既に接触を？」

『うむ。あまり良い返事は頂けなかったが、

ルリ君とアキト君と共になら良い返事を頂けるかもしれん』

ルリ嬢は分かるけど、アキトさんも？

「アキトさんもですか？」

『ふむ。マエヤマ君。君は世間の情報に疎いのかね？』

「え？」

『いや。まだ世間に公表した訳じゃないから知らなくても仕方ないか』

ええっと、よく分からないんですけど？

『アキト君をトップエースとして連合軍の広告塔にする活動が始まるんだ』

「・・・本当ですか？」

『無論だ。アキト君の実力を考えれば当然の結果だろう』

「ア、アキトさんは了承したんですか？」

『うむ。もちろんだ。アキト君なりの考えもあるそうだが・・・』

・・・アキトさんは戦後の事をまるで考えていないのか？

連合軍のトップエースなんて事になったら、戦後、確実に身柄を拘束される。

アキトさんに戦力を持たせて、もし、連合軍に襲い掛かったら、連合軍が危ないと。

そう判断されたら表舞台に二度と立てないようにされても不思議じゃない。

・・・いいのか？ アキトさんは、それで、いいのだろうか？

「・・・」

『君の希望は戦後の平穏だったね？』

「ええ。その通りです」

俺の目的はあくまで戦争終了後の平穏な生活。

その為にナデシコにいる。

『だが、アキト君はどうやら違うようだ。アキト君は何より戦争の完全平和を目指している。』

我が身を犠牲にしてもな』

・・・我が身を犠牲にしても？

そんなの、そんなの認められない！

「それを提督は了承したんですか！？ 誰かを犠牲にしても和平をなんて」

『分かっておる！』

「ッ！？」

突然の叫び声。

思わず身が竦む。

『・・・私とて分かっておる。だが、アキト君からの要望なのだ』

「・・・アキトさんが？」

『自分が犠牲になるぐらいで和平が成立するならと。』

戦後の事など眼中にないのだよ。アキト君は』

どこか辛そうに話す提督。

・・・そうか。提督も納得してる訳ではないんだな。
アキトさんは提督の娘の幼馴染。
提督にとっても息子のようなものだ。

「・・・すみません。提督の気持ちも考えずに」

『・・・いいんだ。私がやっている事に違いはない。責められても仕方ないのだよ』

「・・・」

・・・何も言えないですよ。

そんな苦虫を噛み潰したような顔で呟くように言われてしまったら・・・。

『・・・ところで基地の様子を知ってどうしようと思ったのかね？』

・・・ああ。そうだったな。

アキトさんの話があまりにもヘビーで忘れていた。

「カエデの様子が気になりました。出来れば会って様子を直接見たいと思っただんですけど・・・」

『なるほど。私を利用しようとしたのだね？』

「り、利用だなんて！？ と、とんでもない！」

いや。まあ、悪く言えばそうなるんだろうけどさ。
そう言わないでくださいよ。提督。

『ハッハッハ。なに。冗談だよ』

そ、そうですか。

安心しました。

人が悪いですよ。提督。

『マエヤマ君』

・・・あ。マジな顔。

これは厳しいって事？

『残念ながら、君をこちらの基地まで寄越す事はできない』
「・・・あ。そうですか」

・・・そっか。じゃあ、どうしようかな？

「分かりました。諦め」

『だが、カエデ君をそちらに向かわせる事は出来る。私の付き添いという形だがね』

「え？ よ、よろしいのですか？」

『うむ。ピースランドで合流するといい。そちらに軍用ヘリを回そう』

「ええっと、何から何まですいません」

『構わんよ。この程度ならばな。ただあまり無茶な要求は困る』

「はい。本当に申し訳ありません」

『ふむ。それではな』

「ありがとうございます。提督」

通信が切れる。

提督がこちらに来るといふ都合の良い展開でカエデに接触できるのは嬉しい誤算だ。

基地まで赴く事が出来れば嬉しいなと思っていたが、こちらの方が良いかもしれん。

カエデにとっても息抜きになるかもしれないし。

カエデの奴、今、どんな状況なんだろうな？
・・・心配だ。

「それでは、行ってきます」

ピースランドに滞在する期間は原作より長い。

何でも交渉に時間が掛かるからだそうだ。

ルリ嬢の育てられた施設も分かっている以上、その施設に用はないらしい。

ルリ嬢もカイゼル派の一員として現場に赴くそうだ。

娘という地位を活かす、悪く言えば、親子の縁を利用する訳だが、どうしても叶えたい悲願の為と割り切ってるらしい。

ルリ嬢も覚悟を決めてるんだなと実感。

アキトさんとルリ嬢を見ていると、

自分だけ平穩なんて求めているのか？ なんて思う事がある。

でも、やっぱり、俺は平穩を目指したいんだ。出来る限り協力するという事で許して欲しい。

アキトさん達とそう相談した訳ではないけれど。

「しかし、マエヤマさんまでピースランド王国に招待されるとは。何かなさったのですか？」

プロスさん。あまり訊かないで欲しいです。招待されたというよりは捻じ込んだという形ですから。

「俺も一応はピースランドにお世話になってますから」

「ほお。そうなのですか？」

ピカントと眼を光らせるプロスさん。

いや。ネルガルみたいな企業もご利用してますが、僕みたいな小市民もご利用しているのですよ。

・・・小市民にしてはかなりの貯金をしてますが・・・。

あ。決して裏金とか、そういう目的ではないですよ。犯罪なんて嫌ですから。

単純にピースランド銀行の特典が美味しいだけです。はい。

「ええ。まあ」

何で行くのかと訊かれたら困るけどさ。そのままスルーしてくれ。

「しかし、お世話になってるから招待されるなど」

「あ、コウキ君。お土産よろしくね」

おお。ナイスなタイミングです。ミナトさん。

「はい。お任せ下さい」

プロスさんの質問を華麗にスルー。

いや。すいませんね。

「そろそろお時間です」

「はい。それじゃあ、行こうか。セレスちゃん」

「・・・はい。御願います」

今回のピースランド行きにはセレス嬢も同行。

何でも、ピースランド王からの要望らしい。

ルリ嬢と同じ境遇の子供に会ってみたいとか。

残念ながらナデシコの運営の為にラピス嬢にはお留守番してもらおう。ラピス嬢とセレス嬢のどちらが行くかという事になった時に、まだセレス嬢だけだと不安だとか何とか。

セレス嬢としては悔しいかもしれないけど、

ラピス嬢の方がまだ経験が豊富で優れている事は事実。

すんなりと納得した。ただ、そのせいでラピス嬢はナデシコで缶詰という事に……。

うん。絶対にお土産買って来るからさ。許してね。

「……コウキ。アキトをよろしく」

「うん。ラピスちゃんもナデシコの事、よろしくね」

「……分かってる」

ありがとうという思いを込めて頭を撫でる。

今までラピス嬢はどこか俺を警戒してたように感じてたけど、そうでもないみたい。

案外、すんなりと撫でさせてくれた。

うん。ラピス嬢の髪も手触りが柔らかくて気持ち良い。

「……アキトもよくこうして頭を撫でてくれた」

「ラピスちゃん？」

何だろう？ その笑顔の中に寂しさを含ませたような表情は。

「……でも、最近のアキトは切羽詰って……私に構ってくれない」

「寂しいの？」

「……うん」

そっか。ラピス嬢も普通の女の子なんだな。
アキトさんに構ってもらえなくて寂しがつてる。

「・・・アキトは自分を犠牲にしている気がする。私は嫌」

「アキトさんが心配？」

「・・・うん。私はアキトにも幸せになって欲しい」

こんなにラピス嬢と話すのは初めてかな？

言葉の節々からアキトさんに対する深い想いが伝わってくる。

「・・・アキトは私に感情を与えてくれた」

「感情を？」

「・・・うん。憎しみに染まりながらも、私に優しくしてくれた」

「・・・」

「・・・私はアキトが好き。だから、アキトにも幸せになって欲しい」

愛されてるんだな。アキトさん。

ルリ嬢もアキトさんをあれだけ心配して、支えてあげようとして
いる。

二人がアキトさんに付いていければ、アキトさんは心配いら
ないかもしれない。

自分を犠牲にしようとしても、きっとルリ嬢とラピス嬢が止めて
くれる筈だ。

「そっか。それなら、ラピスちゃんがアキトさんを引き止めてよ」

「・・・私が？」

「うん。アキトさんが自分を犠牲にしようとしたら、ラピスちゃん
が引き止めるんだよ。」

一緒に幸せになるうって

「……一緒に幸せになる……」

「そう。アキトさんの幸せが何なのか俺には分からないけどさ。」

ルリちゃんとラピスちゃんとアキトさんの三人で幸せを探せばいいんじゃないかな？」

「……うん。私もアキトと一緒に幸せになりたい。ルリが一緒でも……多分、良い」

ははっ。ルリ嬢とラピス嬢とアキトさんの三角関係かな？ 可愛らしい嫉妬だ。

でも、今のアキトさんはそれぐらい枷をはめないとどこかへ行ってしまうそうだから。

きっとそれで良いんだ。頑張れ。ラピス嬢。

「それじゃあ、行って来るね」

「……行ってらっしゃい」

それじゃあ、本当に行くかね。

「すみません。お待たせしました」

「いえ。それでは、行きましょう」

格納庫に収められたヘリに乗り込み、ピースランドへ向かう。

永世中立国であるピースランドに戦力の持ち込みは許されない。

あくまでこの国の戦力は自衛の為であるからだ。

他国からの侵略と思われる可能性もある為、移動には兵器扱いされないヘリを用いる。

まあ、アキトさんはエステバリスで出掛けていったけど……。良かったのかな？ ルリ嬢の護衛扱いとしてって事？

ナデシコがピースランドに乗り込めずに付近で待機しているのはそのせいらしいし。

いや。よく分からないや。そのあたりの事は。

「ごめんね。付き合わせちゃって」

セレス嬢に謝らないとな。

ピースランド王にとってはセレス嬢がメインで俺は保護者として出向くようなもの。

そういう方針で俺がピースランドへ行けるよう無理矢理捻じ込んだのだ。

セレス嬢にとっては俺のせいで迷惑をかけた事になる。

一応はセレス嬢に説明してあるのだけれど。申し訳ない事には違いない。

「・・・いえ。私、楽しみです」

「そっか。それなら安心だ」

気を遣ってくれたのかは分からないけど、そうやって言うて貰えろと凄く助かる。

「ピースランドに着いたらとりあえず日中は自由に過ごさせるから。

夕方頃に御城に向かう事になってるけど」

「・・・分かりました」

「セレスちゃんも御城とかに憧れてたりする？」

「お姫様にといい意味ですか？」

「そういう意味でもいいかな。お姫様としてお城で優雅に暮らす。

女の子はお姫様に憧れたりしないのかな？」

俺にもよく分からないんだけどね。そういう女の子の夢とか。

「・・・お姫様ですか。少し憧れます」

そっか。やっぱりお姫様っていうのは女の子の憧れか。

「……でも、お姫様じゃなくて良かったと思う事もあります」

「それは何かな？」

「……ナデシコでコウキさんに出逢えた事です」

ははっ。なんか嬉しいかな。そう言ってもらえると。

「そっか。俺もセレスちゃんに出逢えて良かったよ」

「……はい。ポッ」

照れてるセレス嬢も可愛いな。

「……気持ち良いです」

セレス嬢の頭を撫でる。

嬉しい気持ちも合わさって、いつもよりゆっくりと優しく。

「ねえ、セレスちゃん。提案なんだけど」

「……はい。何でしょう？」

俺に出会えた事が嬉しいと感じてくれているのなら……。

俺自身、セレスちゃんはもう家族のようなもの。

それなら、本当の家族になってもいいんじゃないかなってふと思った。

「ナデシコから降りたらセレスちゃんはもう自由なんでしょう？」

「……契約が切れたら、好きにしていっていいと言われています」

そのあたりはルリ嬢と同じなんだな。

身元引受人とかはネルガルのままかもしれないけど……。
せつかくだから、身元引受人という地位も俺がもらっちゃおう。

「それじゃあさ。俺の家族にならない？」

「……家族……ですか？」

「うん。ナデシコから降りたら、一緒に暮らしたいと思ってさ」

「……え？」

呆然とするセレス嬢。

いや。なんか今更だけど、まるでプロポーズの言葉みたいだな。

俺は単純に妹とか娘としてとか、そんな感じだから勘違いしないように。

「……良いんですか？ 私はマシンチャイルドですよ？」

「前に言ったよね。俺は気にしないって」

「……でも……」

「嫌かな？俺と一緒にじゃ」

そうなら諦めざるを得ないんだけど……。

「……嫌なんかじゃないです！私なんかで良ければ、私は……」

。 コウキさんと一緒に暮らしたい。家族になりたいです！」

うん。それなら、何の問題もない。

「それじゃあ、一緒に暮らそうよ。ね？ セレスちゃん」

「……はい。御願います。コウキさん」

そう言つてニツコリ笑うセレス嬢。

その笑顔は俺のお陰つて己惚れられる事を幸せに思う。

セレス嬢は俺の養子として、家族のように、いや、家族として暮らしていかうと思う。

「一つだけ、訂正。セレスちゃん」

「・・・はい」

「私なんかつて言つちや駄目だよ。もっと自分に自信を持たなくちや。ね？」

「・・・はい！」

うん。もっと自信を持って良いんだぞ？ セレス嬢。

俺だけじゃない。ナデシコの誰もが好きなんだから。セレス嬢の事が。

「・・・あの」

「ん？ 何かな？」

「・・・よろしく御願ひします。コウキさん」

「ははっ。こちらこそ、よろしくね。セレスちゃん」

小さな手と握手を交わす。

今日、この瞬間、セレス嬢と家族になれたような気がした。

突発的な思い付きだったけど、あれだけ笑ってくれているのなら・・・。

「良かったかな」

提案してみて。

「・・・久しぶりだな。カエデ」

「・・・ええ。久しぶり。コウキ」

ヘリでの旅を終え、ようやくピースランドに到着した。

空港に辿り着き、セレス嬢と手を繋いでエントランスを目指す。

その途中、空港内のベンチに座る見覚えのある女性を見付ける。

・・・それが、カエデだった。

「・・・お久しぶりです」

「・・・セレスちゃんだっけ？ 久しぶり」

予想通りまったく元気がない。

眼の下には隈が出来ており、記憶にある明るい表情とは大きくかけ離れていた。

きつといつものカエデならこんな姿を他人に見せようとはしないだろう。

それ程、カエデにとってケイゴさんの影響は強かったって事だろうか。

「とりあえず、付いて来いよ。買い物。好きだろ？」

「・・・ええ」

先を歩く俺達の後をシヨボシヨボとゆっくり歩き歩くカエデ。

なんて言っていていいか俺には分からなかった。

ケイゴさんは生きている？

そんな事、言える筈がない。

ケイゴさんの事は忘れよう？

そんな事、言える筈がない。

慰める事は出来ても、心の負担を減らす事は俺には出来ない。
こういう時、己の力不足を実感する。

「どうだ？ これ」

「・・・そうね。可愛いと思うわ」

セレス嬢に買ってあげようと思って手に取ったぬいぐるみをカエデに見せる。

カエデからの返答はおざなり。まるで答えに感情が込められていなかった。

本当に重症だな。これは。

もしかしたら、俺がいない間に、二人の関係が深まったのかもしれない。

「ちょっと疲れちゃったかな？ 休憩しよう」

「・・・はい。そうですね」

「・・・ええ」

楽しそうに微笑むセレス嬢と暗いまま俯き続けるカエデ。

対照的な二人だけど、セレス嬢の明るさが少しずつカエデを穏やかにさせているような気がする。

少しでも気晴らしになってくれると嬉しいんだけど・・・。

「・・・あの、私が」

「そっか。じゃあ、頑張ってみようか」

「・・・はい！」

近くにあったカフェで休憩する。

椅子に荷物を置き、注文をしてこようと思ったら、セレス嬢の初め

てのおつかい宣言。

せつかくの機会だから御願いしてみる事にした。
これもセレス嬢にとって良い経験だろうし。

そして、その結果、俺とカエデの二人きりとなる。

「・・・なあ、カエデ。お前、ケイゴさんと」

「・・・可愛い優しい優しい子よね。セレスちゃん」

俺の言葉を遮るようにカエデが口を開く。

「一緒にいるだけでとっても穏やかな気分になれる。今までずっと辛かったから・・・」

目尻に涙を滲ませながら告げるカエデ。

やはり、何かあったのか、訊いておきたい。

「なあ、カエデ。お前、ケイゴさんと何かあったのか？」

「せつかく遮ったのに。そこをスルーするのが良い男じゃないかしら？」

ジト眼で見つめてくるカエデ。

でも、今はそれが嬉しい。

ジト眼と言えど、悲しみ以外の感情を見せてくれたのだから。

「・・・私ね。ケイゴに告白されたの。好きだった」

「そっか・・・」

ケイゴさんがカエデに告白。俺がいない間にそこまでこの二人は進んでいたとは。

いや。でも、ケイゴさんのような性格なら別れると分かかってそんな

な事を言うか？

「いつの話だ？」

「ケイゴが戦死する日の事よ」

戦死する日！？

それじゃあ、ケイゴさんは自分とカエデが離れ離れになると分かって告白したのか？

それは・・・ケイゴさんらしくないと思う。

「俺の事は忘れて欲しい。そう言い残しながら、好きだなんて。おかしいわよね」

・・・我慢できなくなったんだ。

ただ、別れるだけじゃ我慢できずに、好きだって想いを伝えたかった。

自分という存在を忘れて欲しいと願いつつ、覚えて欲しいと願う。

この矛盾が、ケイゴさんを苦しめたのは自明の理だ。

きっとケイゴさんの中では酷く重い葛藤があったんだと思う。

それでも、ケイゴさんは祖国を捨てられなかった。

俺にはなんとも言えない。それ程までに覚悟を持った人間の事を。

「私ね。ケイゴにコウキを重ねてたんだと思う」

「え？」

ケイゴさんに俺を？

「コウキがいなくなってから、また友達がいなくなつたよつな気がした。」

だから、ケイゴの存在は本当に嬉しかった」

ケイゴさんは友達。多分、そういう事だろう。

「ケイゴは優しくて、寂しがってる私を慰めてくれた。叱咤してくれた。」

それで、いつの間にか私の中でコウキの次に出来た親しい友人になっただの」

「……」

「コウキは私を護ってくれたよね？」

「え、ああ、まあ、それなりにだけだな」

「そう。同じようにね。ケイゴは私を護ってくれたの。支えてくれたの」

「……ケイゴさんが」

「それでね、いつの間にか、ケイゴにコウキの姿を重ねてみてたの。私の大切な友人。失って、得た、初めての友人である貴方と」

「……どうしてだ？」

「私ね。貴方に惹かれてたの」

え？ 惹かれてた？ 俺に。

「好きかどうかは分からなかったけど、一緒にいて楽しかったし、優しい気持ちになれた。」

「貴方に会える事が嬉しかった」

「……」

「貴方が近くからいなくなって……」

まるで貴方のように接してくれるケイゴが、私にとって新しい貴方になった。

おかしな話だけだね」

……本当におかしな話だ。

ケイゴさんはケイゴさんでしかない。

もちろん、俺は俺でしかない。

ケイゴさんに俺を重ねるなんて変だぜ。カエデ。

「コウキの代わりみたいな、そんな扱いを無意識にしていたんだと思う。ケイゴを」

「カエデ。それは」

「ええ。間違っているのは自覚しているわ。いえ。自覚させられたの。あの告白で」

「好きだって。ケイゴさんがカエデに伝えた事がか？」

「そうよ。その言葉があつて、私はようやくケイゴと向き合えた気がしたの。」

コウキの代わりではない。ありのままのケイゴに」

俺の代わりではないありのままのケイゴさん。

きっと、ケイゴさんもそっちの方が喜ぶ。

「最初は焦ったわ。いきなり好きだなんて言われて。

でも、今まで気にならなかった事なのに、どンドン気にするようになったっちゃって」

告白された初めて自分の想いに気付いた？

いや、それとは違うな。告白されて意識し始めたって感じた。

「だから、好きって言われて、忘れてくれって言っても忘れなかった。帰ってきたら、問い質してやるって。そう思ってた」

突然の告白。

カエデにとって青天の霹靂だったんだな。

「でも、あいつは逝ってしまったわ。私に勝手に告白して、私に勝手に意識させて。」

そして・・・勝手に死んでいった。勝手すぎると思わない?」

「・・・カエデ」

「私は！ 私はケイゴが好きなの！ いなくなっって初めて気付いた。支えてくれて、慰めてくれたケイゴの暖かさが心地良かったのよ！」

涙を溢すカエデ。

まるで大切なものを失くしてしまった子供のように、人目を気にせず泣きじゃくった。

「始めはコウキの代わりだったかもしれない。」

でも、今は違う。ありのままのケイゴを私は受け入れたい」

「・・・カエデ」

「・・・でも、もうあいつはいない。私の想いはもう伝えられないのよ・・・」

俯くカエデ。

好きだという気持ちが芽生えたからこそ、ここまでカエデは苦しんでいるんだと思う。

自分の想いを伝えたいのに、その相手がない。

その寂しさ、辛さ、苦しさはとてもじゃないが俺には理解できなかつた。

きつと想像を絶する冷たさだと思う。

「・・・」

「・・・」

・・・それから、お互いに黙り込んでしまった。
俺はなんて言葉を掛けてやるのがいいのかまったく分からない。
カエデは最早全てを言い尽くした。
今、俺はカエデに何をしてもやれるのだろうか？
まるで俺には分からなかった。

「・・・と、取ってきました」

だから、セレス嬢の介入は正直、助けられた気分だった。

「わ。重いのに大変だったね。ありがとう」

「・・・ありがとね。セレスちゃん」

「・・・いえ」

セレス嬢の初めてのおつかい完了。

普段なら諸手を挙げて喜ぶのだが、今はそんな気分にはなれなかった。

その後の俺は静寂な空気の中、御城訪問の時間まで町を歩き回る事しか出来なかったんだ。

カエデを慰める事も出来ず、セレス嬢を楽しませる事も出来ず。

・・・やっぱり、俺は無力だ。

第四十一話（後書き）

同じ話の中で妙にギャップがある。
ちよつと不自然だったかもしれない。

第四十二話（前書き）

遅くなりました。

そして、あまり内容も進まない。

第四十二話

「第一回！ 艦長コンテスト！ 開催ですぞおおお！」
「イエエエエイ！」

ピースランドの滞在期間を終え、提督とカエデは基地へと戻っていた。

詳しい事はあまり聞いていないけど、融資の件は了承してもらえらしい。

ルリ嬢はルリ嬢で原作のような確執もなく、父、母と敬っていた。

原作では、変な王族だと思ったけど、実際は違ったらしい。

それはそうだよな。

あれだけの銀行を持っていて、業界に凄まじい影響力を持つ人物が、あんな人物な訳がない。

偽りの姿って事だろう。成長したルリ嬢はそれを見破るだけの眼力があつたみたい。

謁見の時は無難にやり過ぎし、その後で家族として対面したらしい。戦後どうするかは分かりないけど、そんな悪い方向に向かわないと俺は思う。

原作では戦後、ルリ嬢が軍入りしたけど、そんな事もなくなるだろう。

まあ、それは何よりアキトさん次第なんだと思うけど・・・。

「考え事？ コウキ君」

「え、ええ。ちよっと」

カエデの事は心配で堪らない。

実際に眼にしたいと直接会ったけど、本当に落ち込んだ。慰めようにも方法が見付からなくて、結局、何もできないまま別れとなってしまった。

やっぱり、ケイゴさんの生存を知らせた方が良かったのかな？

でも、それは木連人であるという事も教える事になる。

そもそも、本当に生きているかすら分かっていない。

十中八九生きているとは思うけどさ。

カエデにとって木連人は復讐の仇。

好きだつて明言してた以上、その相手が復讐の仇であると知ったら・・・。

きつと、カエデは更に傷付くと思う。

・・・はあ。ケイゴさんの馬鹿。

「周りが盛り上がってる中、そんな暗い顔してちゃ駄目よ」

「あ、はい。そうですよね」

原作にもあった艦長コンテストが開催されるらしい。

木星蜥蜴が人類だと知ったクルーのモチベーションを向上させる為だったっけ？

ま、要するにミスコンみたいなもんだよな。

美人揃いだし、ナデシコつて。種類豊富でさ。

もちろん、ミナトさんも出場するのかなんとか。

こういうイベントに盛り上がらない訳ないよな。ナデシコクルーがミナトさんもその一員だし。

ちなみに、月軌道上の作戦に参加する為の道中です。

なんでも月を奪還せんと連合軍が気張るとかなんとか。

作戦中に何をしてるんだか、と思うかもしれないが、これがナデシコクオリティ。

仕方ない事なのさ。

「そういえば、きちんと反省したのかしら？」

「ええ。もちろんですよ。俺だって自分勝手だなと思いましたから」「自覚してるならいいんだけどね」

いや。そりゃあもう。

勝手にセレス嬢を引き取る宣言した事には反省しまくりです。確かにミナトさんに前もって言っておくべきだったよな。それが筋だったと自分でも思うし。

「……コウキ君」

ああ。思い出すだけで背筋が凍る。

「……そういう事は私に一言あっても良かったんじゃないの？」

「……すいません。突発的に思い付いて」

「ねえ、コウキ君。私の存在ってコウキ君にとってそんなものなのかな？」

「え？」

「そりゃあ、私だってセレセレを引き取るには大賛成よ。」

「コウキ君が言わなければ、多分、私の方から言ってたわ」

「……」

「でもね、そういう事も含めて相談していくのが大切だと思わない？」

「……はい」

「些細な事でも話し合う。私は一緒に暮らしていく上でこれはとても大切な事だと思うの」

「……分かります」

「でも、コウキ君は、その事を疎かにした。私の事なんてどうでも

いいとも受け取れるのよ？」

「そ、そんな事」

「ないってのは分かってるわ。でも、そう受け取れちゃうって事」

「……」

「コウキ君。それって、すっごく寂しい事なんだよ？」

「……はい」

「私に相談できない事で悩んでいる。その事は私も理解してるわ。

でも、私に相談できる、ううん、相談するべき事も相談しないの

は間違ってる」

「……すいませんでした」

「謝られても駄目。最近のコウキ君は焦っていてまるで余裕がない」

「……余裕がないですか？」

「ええ。だから、するべき事を見失って、やるべき事を疎かにする

の」

「……はい」

「もっと落ち着きなさいな。焦った所で何も変わらないんですよ

？」

「……ええ」

「ケイゴってという人の事も、カエデちゃんの事も、悩んだ所で解決

しないでしょう？」

「……その通りです」

「それなら、どっしりと構えてなさい。何があっても大丈夫なよう

に、常に心に余裕をもつてなさい」

「……」

「出たとこ勝負ってのは言い方が悪いけど、それしか方法がないん

だもの。

今、貴方が悩んでいる事には何の意味もないわ」

「……臨機応変に対応しろって事ですか？」

「ちゃんと分かっているじゃない」

「……そう、ですね」

「自分のせいだとか、責任だとか、
そんな事でクヨクヨ悩んでいる暇があるなら、今出来る事を全力
でやりなさい」

「・・・情けなかったですかね？」

「ええ。そりやあもつ、清々しい程に情けないわ」

「ははっ。手厳しい意見で」

「情けないコウキ君も嫌いじゃないけど、いつまでもウジウジして
る姿は見えていたくないわね。」

興醒めしちゃうもの」

「あはは。嫌われちゃいますか。それなら、頑張るしかないですね」
「もちろん。あ、でも、まだ、解放してあげない」

「・・・え？」

「そろそろ、コウキ君には色々と言ってあげようと思って」

「ええつと・・・説教・・・ですか？」

「折角の機会だもの。覚悟しなさい」

「・・・はい」

それから本当に大変だった。

一、二時間という長時間を正座で過ごし、かつ、眼の前には眼を吊
り上げたミナトさん。

腰に手を当てて、指を立てながら叱るスタイルに先生を思い出した
のは俺だけの秘密だ。

いつもなら包容力で癒してくれるミナトさんのマジな説教。

いや、もしかしたら、こんな風に説教されたのって初めてかもしれ
ん。

マジで効いた。こうなんというの、妙に迫力があってさ。

怖くて言う事を聞かなくちゃというよりは、自発的に聞き分けよく
しようなんて思うようになって。

と、とにかく、ある意味、トラウマみたくなっちゃった訳だよ。

あれだね。尻に敷かれてるって言われても反論できないかな。

え？ 今更？ そ、そんな事ないでしょ、多分。

「コウキ君は艦長コンテスト。誰が優勝すると思う？」

「そうですね・・・」

突然の話題転換に困惑しつつ、考えてみる。

ユリカ嬢・・・マンネリ？ いや、冗談、冗談。

でも、実際、原作でもルリ嬢に破られて上にジャンケン勝負だったような・・・。

あ。そういえば、ユリカ嬢ですが、原作と一番違うのは彼女かもしれないですね。

それは・・・。

「あ。アキト。応援してね」

「・・・それなりにならな」

「ぶ〜。ま、いいもん。ユリカはやれば出来る子だから」

「自分で言う台詞じゃないと思うが？」

「ええ〜ん、アキトが苛める〜」

「ユ、ユリカ。落ち着こうよ。ね」

「うう。ジュン君は私の味方だね？ ね？」

「も、もちろんじゃないか。僕はいつだってユリカの味方だよ」

「えへへ〜。流石はジュン君。私の最高のお友達だよ」

「あ、あはは。そうだね」

あんまり変わらないように思えるかもしれないけど、大分、違うんだ。

なんといつても、アキト、アキト、と言わなくなった。

何だろう？ こう、手の掛かる妹とその兄みたいな表現が一番ピンとくる。

ユリカ嬢がアキトを好きなのは変わらないと思うけど、なんという

か方向性が変わった気がする。
最初のアキトさんの拒絶で色々と考えさせられたのかな？
相変わらずジユン君は不憫だけど……。

「艦長はまあ、それなりかなと思います」

「ま、それはそうでしょうね。結構、人気高いもの」

ま、ユリカ嬢は置いといて……。

俺の思う優勝候補は三人。

ルリ嬢、ラピス嬢、セレス嬢。

この三人への投票はかなりの数だと思う。

やっぱりこの三人の人気は凄まじいし。

でも、ミナトさんだって魅力的っていう面では負けてない。

それなのに、優勝候補に挙がらないのは、うん、俺のせい。

いや、俺の存在が格を下げているっていう訳ではないと思うけど……。

やっぱり投票するなら彼氏がない人……みたいなものがあるらしい。

これって艦長コンテストの名を借りたミスコンだし。

男としては……的なものがあるらしいんだ。うん。

も、もちろん、俺はミナトさんに投票するさ。

せ、セレス嬢と悩んだけどな。

「うん。やっぱりルリちゃんですかね」

「前はルリルリだったの？」

「ええ。参加はしなかったんですが、割り込みで優勝を掻っ攫って
いきました」

「へえ。ルリルリがねえ。意外かも……」

顎に手を当てて予想外といった表情になるミナトさん。

ま、確かにあれは意外だった。しかも、歌った曲が曲だしな。あれはあの頃からアキトさんを意識してたって事なのかな？ いや。アキトさん。罪深いお方ですな。はい。

「でも、今回はその時にいなかったメンバーがいますから」

「セレセレとかラピラピとか？」

「ええ。あの二人の人気も確かでしょう。二人がユニットでも組めば最強かと」

「・・・そうかもしれないわね」

妖精の名は伊達じゃない。

ルリ嬢もそうだが、ラピス嬢、セレス嬢もまた妖精を名乗るのに相応しい程に可憐だ。

いや。俺も同じ強化体質だって言ったら世界中から大顰蹙を買うだろうなあ。

あの、アララギさんだっけ？ あの人は激怒するね。間違いなく。

「まあ、艦長というのはちょっと歳が足りない気もしますが・・・」

「

」でも、結局はユリカちゃんか艦長になるんでしょ？」

「そうですね。やっぱりナデシコの艦長は彼女じゃないと」

個性的なメンバーが溢れるナデシコ。

真面目な人が艦長だったら、とつくに胃潰瘍だろうなあ。

うん。やっぱりユリカ嬢こそが艦長に相応しい。

ポヤッとしてるけど、人柄とか求心力とかは一流だし。

まあ、その分、ジュン君の苦労は半端ないと思うけど・・・。

でも、ま、それはそれで喜んでるし、ジュン君。

きつと大丈夫だろう。うん。

「ミナトさんも出るんですよね？」

「ええ。艦長の座には興味ないんだけどね。私としても女として負けたくないっていう矜持がね」

「矜持だなんて大袈裟な」

「駄目よ。コウキ君。女っていうのはいつでも輝いていたいよ。大袈裟でもなんでもないわ」

「そ、そうですか」

いや。充分、魅力的なんですけどね。

「悩み事があるのは分かるけど……」

「……ミナトさん？」

「偶には楽しみなさい。別に罰なんて当たらないんだから。いいわね？ コウキ君」

「……分かりました。楽しみます」

「ええ。それじゃあ、準備があるから、行くわね」

「はい。頑張ってくださいね。ミナトさん」

「ふふっ。任せて」

天幕の向こうへと歩いていくミナトさんを見送る。

艦長コンテストか……。

水着審査とかもあつたよな？

ちよつと嫌な気もしないでもないけど、

水着が見れるというのはラッキーと受け取ればいいのだろうか？
いや。でも、やっぱり、ちよつと嫌かな。

「……コウキさん」

ん？ 誰だろう？

突如掛かる後ろからの声に振り返る。

「おお。セレスちゃん」

そこにいたのはセレス嬢でした。
そういえば、参加するのかな？
さっき、ミナトさんとは参加する事を前提に話してたけど。

「・・・あの」

「うん。何かな？」

「・・・見てて下さいね？」

「え？」

「・・・私もコンテスト参加しますから、見てて下さい」

カーツと真つ赤に顔を染めて、俯きながら話すセレス嬢。
いや。可愛らしい事この上ないね。

「うん。分かった。頑張つてね。セレスちゃん」

「・・・はい！」

パーツと顔を輝かせて喜ぶセレス嬢。
頑張れって気持ちも込めて頭を撫でる。
なんだか、すっかり父親気分。

引き取るって決めてから、覚悟が決まったっていつのかな？
視線というか、視線というか、そんなのが父親になってしまった。
まあ、こんなにも可愛らしい娘なら大歓迎なんだけどね。

「・・・それじゃあ、行ってきます」

「うん。いつてらっしゃい」

「・・・はい！」

元気一杯に返事をして、トコトコと走って天幕へ向かうセレス嬢。
うん。和む。癒される。

何度も思うけど、成長したら誰もが振り向く美人になるだろうなあ。
あれか？ 将来、俺の娘が欲しいなら俺を倒してからにしろって言
う羽目になるのか？

・・・いや。それはないだろ。どこの格闘家だよって話。
でも、なあ、やっぱり寂しいんだろうな・・・。

「・・・・・・・・」

って、そんな事を今から考えてても仕方ないだろうに。

・・・既に親馬鹿とは・・・。

自身の意外な面を発見した気分だよ。

ミスマル提督と話があったりするかもしれない。

酒を飲む時の話のタネになりそうだ。

いや、まあ、飲むかどうかは分からないけどね。

そもそも引き取るって話もネルガル勢にしてないし。

も、もちろん、負けないけどな。奴らには。

「頑張れ。セレスちゃん。ミナトさん」

さて、さっそく観賞モードに・・・そういえば、今、誰がブリッジ
で業務をしてるんだろうか？

うん。二人の出番が終わったら、ブリッジに顔を出してみよう。

ま、今は楽しむとしましょうか。

「艦長コンテスト。司会はこの私、プロスペクターが務めさせていただきます」

「おお！ いいぞ！ いいぞー！」

うん。ムードは既に最高潮。

いや。相変わらずノリがいいね。ナデシコクルーは。

「審査は二段階に別れております。一つ目は歌唱力コンテスト。

それぞれ衣装に身を包み、得意な歌を歌っていただきます」

「いやあ。いいね。女の子の歌が聴けるなんて」

「むさつ苦しい空間にしかいられない俺達にとってはオアシスだな」

「おうよ。おうよ」

・・・特に整備班のメンバーは眼が輝いてやがる。

いや。血走っているという表現の方が的確かも・・・。

「二つ目は皆様お待ちかね！ 水着審査となっております！」

「イエエエイーー！」

「ヤッホーイー！」

盛り上がり過ぎですよ。マジで。

「これらの審査にて優勝した方に艦長の座を譲りたいと思います。

皆様、是非とも健闘し、自らの魅力を最大限に発揮してください
ね」

「ハツハツハ！ いいぞ！ 野郎共、最前席を確保しろ！」

「オオオオオオオ！」

ズバツ！ ガバツ！

は、早！ 移動早！
つてか、既に場所がないってどういう事？

「それでは、ここで審査員を発表したいと思います」

そういえば、審査員なんていたな。

まあ、クルー全員が審査員である以上、彼らは解説者というかコメントーターみたいなものだろ。

今回は誰なんだろう？

前はアカツキ会長とウリバタケさんだったっけか？

あんまり覚えてないな。

でも、まあ、あそこにウリバタケさんはいるし。

ウリバタケさんでない事は確かだ。

「まずはこの方、ナデシコパイロット、アカツキ・ナガレ」
「よろしく」

あ。会長は同じなんだ。

でもさ、なんで一介のパイロットがそんな所にいるの？

あれかな？ 隠すつもりなんて元々ないって事？

「次は・・・そうですね。私とジャンケンを致しまして勝ち残った方にしましょう」

と言って、手を挙げるプロスさん。

おお、なんか懐かしいぞ。この光景。

俺の周りの連中も手を挙げて、ジャンケンに備えてる。

「ズルしたら会場からも出て行ってもらいますからね」

釘を刺す事も忘れない。
流石はプロスさん。

「一つ質問していいですか？」
「はい。なんででしょう？」

整備班の鈴木さん（仮）が問いかけた。
プロスさんは手を挙げたまま答える。
なんでもいいけどさ。早くしてね。
腕が疲れるからさ。

「審査員になるメリットは何ですか？」
「なるほど。やはり気になりますか」

ニヤリと笑うプロスさん。
手を挙げたままだからどこか滑稽。
・・・なんでもいいから早くやろうよ。ジャンケン。
手、下げていい？

「まずは席ですな。私がいる場所の隣の席、即ち、最前席より更に近い席。」

審査員になられた方は、そんな場所からコンテストを観賞する事が出来ます」

「おお！なるほど！」
「また、審査員にはより多くのポイントが与えられます。
好きな方に想いを込めて、その審査点を与えるなんてのもいいでしょう」

「おお。それが恋の始まりって訳か・・・」
「なかなかやるな・・・」

うん。一つだけ。

そんな優遇されるポジションにアカツキ・ナガレがいるのはあまりにもおかしすぎる。

あれか？ バレてるって分かっているから開き直ったのかな？

「最後にはですが、トロフィーの贈呈などで実際に優勝者と触れ合う事が出来ます！」

「ウオオツォ！」

うお！？ 滅茶苦茶耳に来た。

耳鳴りで耳の奥がツーンとする。

「それでは、よろしいでしょうか！？ ジャンケン……」

高らかに挙げられたプロス氏の拳。

グーか？ パーか？ チョキか？

確率的にはどれも同じ。

対面してる訳じゃないから向こうの心理も読めない。

……やはり、運任せだな。

「ポン！」

俺が出したのはグー。

プロスさんは……チョキだ！

「はい。負けた方とあいこの方はその場に座ってくださいね」

まあ、そうなるよな。これだけの人数だ。

あいこは大丈夫って事はないだろう。

「それでは、もう一度、ジャンケンポン！」

俺の出したのはチヨキ。

プロスさんが出したのは・・・パー。

おお！ これはもしかすると・・・。

「ジャンケンポン！」

「・・・ガクッ」

負けました。

結局、ジャンケンで勝ち残ったのはウリバタケ氏。

やっぱり強いですね。こういう事になると。

「おっしやあ！」

うん。あれだけ素直に喜ばれると憎めない。

「それでは、さっそく、コンテストを開催いたします！」

プロスさんのこの言葉と共にコンテストが始まりを告げた。

第四十二話（後書き）

やばい！

コンテストの内容が思い浮かばない。

はい。という訳でこのような中途半端な終わり方に。

シリアスの次にこれだけ緩い空気になるのはまずいかも思いつつも、

コンテストだから、仕方ないと割り切って書き上げました。

コンテスト。どうしましょう。とつても悩んでます。はい。

第四十三話（前書き）

皆様！ 大変長らくお待たせしました！

・・・待っていてくれたら嬉しいな・・・。

はい。という訳で無事とある企業の方に内々定を頂き、進路関係を落ち着かせる事が出来ました。

いやはや。緊張しましたよ。ですが、一安心です。

漸く定期的に更新できるようになったかと。

完結に向けて頑張りますので、応援、よろしく御願います。

第四十三話

S I D E M I N A T O

・・・木星蜥蜴が実は自分達と同じ人間だった。
そんな真実を知らされたナデシコクルー達は当然、気落ちした。
そのモチベーションの低下は通常業務でさえ精彩を欠いてしまうという結果に。

当然、ナデシコ運営陣の頭を悩ませた。

ま、私は一応前もって知ってたからそうでもないんだけど・・・。
やっぱり、いざそんな事実直面すると複雑な気分になるわよね。
それで、だ。そんな事もあり、どうにかして艦内の空気を変えたい
という事で企画されたもの。

それが、一番星コンテスト。ま、簡単に言えば、ミスコンよね。
噂によれば軍の方でも何かしらの干渉があったらしいけど・・・真
実はどうなんだろう？

「頑張ってくださいね。ミナトさん」

「ふふっ。任せて」

ま、私としてはあまり肌を晒したくないんだけどねえ。
せっかく出場するのなら、やっぱり勝ちたいじゃない？
優勝したら艦長の座がもらえるとか言ってたけど、そんなものはも
ちろんいらないわ。

私も女として魅力的でありたいのよ。

コウキ君に応援もされたしね。

「ええっと、メグミちゃん。その格好は？」

コウキ君と別れて天幕に入る。

その途端、視界に映るのはナース服のメグミちゃんの姿。
え？ コスプレする企画だっけ？ これ。

「私、声優をする前は看護学校に通ってたんです」

「へ、へえ〜」

い、意外と多才なのね。

看護学校から声優ってのは中々不思議な気もするけど……。

「やっぱり男心を撥るならこの服かなって」

そ、それは確かに撥られるとは思うけど……。

ちょ、ちよっと違うんじゃないかな？

「ガイさんも似合ってるって言ってくれましたから〜」

二へへと笑いながら告げるメグミちゃん。

そ、そっか。それならいいんじゃないかな。

恋人の趣味ならさ。うん。

「ミナトさんは何を着るんですか？」

「え？ 私？ そうねえ」

どうしようかしら？

やっぱり私も男心を撥るような。

「・・・あの・・・」
「ん？ セレセレ？」

振り向けば、そこにはセレセレ。

コウキ君曰く、今回のコンテストの優勝候補。
どうかしたのかな？

「・・・ミナトさん」

真剣な眼でこちらを見てくるセレセレ。

「・・・浴衣の着方。教えてくれませんか？」

「・・・浴衣？」

「・・・はい」

ええつと・・・。

「それはコンテストに浴衣で出ようって事？」

「・・・(コクッ)」

うわ。セレセレの浴衣姿・・・。

・・・本当に優勝しそうで怖いわね。

可愛過ぎるだろうなあ。

「ミナトさん。セレスちゃんが浴衣を着たら優勝もってかれそうですね」

どうやらメグミちゃんも同じ事を思ったらしい。

まあ、そう思うのが自然かな。

「……駄目……ですか？」

う。コウキ君はいつもこれに屈してるのか。

ようやくコウキ君の気持ちがあつたわ。

涙目で見上げられたら拒否できない。

まあ、私の場合は可愛らしくってっていう理由の方が強いけど。

「ううん。いいわよ。教えてあげる」

優勝は逃しちゃうかもしれないけど、

将来娘になるかもしれない子を可愛くコーディネートするのも良いかもね。

私は準優勝でいいわ。……なぐんてね。

「……ありがとうございます」

「はい。どういたしまして」

ペコつとお辞儀をするセレセレ。

その姿は本当に可愛い。

駄目だなあ。どうしても甘やかしちゃいそう。

「セレセレは浴衣か……」

メグミちゃんはナース服。

セレセレは浴衣。

うん。どっちも男心を擽る服ね。

本当に、私はどうしようかしら。

「……ミナトさんはどうするんですか？」

「それが、決まってなくてね。困ってるの」
「……………」

うぐんと指を顎に当てて考えてくれるセレセレ。
何か提案してくれるのかな？ 期待しちゃうぞ。

「……………ミナトさんも一緒に着ますか？」

「一緒について、浴衣って事？」

「……………はい」

浴衣も素敵だけど、流石にかぶっちゃうのは申し訳ないかなと思うのよ。

「そうですね！ ミナトさん！」

「え？ な、何？」

いきなり大声をあげるメグミちゃん。

その、良い事を思い付いたって顔は何なんだろう？

「二人で一緒に出ちゃえばいいじゃないですか」

「え？」

「だから、一緒に浴衣を着て、一緒に出ちゃえばいいんですよ。」

グループ参加も認められますし」

グループ参加？

あの、ハウメイガールズみたいな感じで？
私とセレセレが？

「ええっと、どうしよっか？ セレセレ」

私は別に構わないかな。

セレセレと一緒に出るのも良い記念になると思っし。
何の気兼ねもなくコーディネートできるしね。

「……（フルフル）」

あら。断られちゃった。

ちよっと残念かな。

「……一人で頑張ってみたいです」

「そっか」

そんな理由があるならしょうがないわね。

どちらかというと静かなセレセレがこんなイベントに参加するぐらいだもの。

きつと、相当の勇気を出したんだと思うわ。

だったら、私はそれを応援してあげなくちゃね。

「分かった。それじゃあ、うんと可愛くしてあげるわね」

「……はい。よろしく御願います」

うん。それじゃあ、やっぱり浴衣は駄目ね。

私は違う服装にしなくちゃ。

「歌の練習はしたの？」

「……（コクッ）」

「そっか。頑張ろうね。セレセレ」

「……はい」

コンテストは歌唱審査と水着審査の二部構成。

歌唱審査の服装で困ってる訳だけど、やっぱり歌にあわせた服装にしようかな。

「それじゃあ、私はあれにしましょう」

うん。服装は決定。

「じゃ、着替えに行こうか。セレセレ」

「・・・はい。御願います」

セレセレの手を取って衣裳部屋へ。

さてっと、セレセレを可愛くコーディネートして・・・。
私も準優勝に向けて気合を入れましょう。

S I D E O U T

「それでは、さっそく参りましょう」

実況のプロスさんが企画を進めていく。

本当にこういう時のプロスさんは楽しそうだな。
凄く輝いています。ミスター！

「トップバッター。エントリーナンバー一番は我らが癒しの声。メ
グミ・レイナードさんです」

「皆あ。よろしくう〜」

「メグミちゃあぁん!」

現れるナース姿のメグミさん。
途端に轟く男共の歓声。

なんか場慣れしてるよね。メグミさんって。

流石は元声優。そういうイベントとかがあったんだろうな。

「はい。御注射しましょうね」

原作でもあったシーン。

これから始まる歌って……。

「いいぞお！ メグミい！」

後ろから大きな声でまあ……。

想いが痛い程に伝わってきましたよ。

「あ。おい！ コラッ！ てめえら。見るんじゃないやねえ！」

歌が終わって脱ぎだした瞬間、またもや騒ぎ出すガイ。

いや。流石に五月蠅いよ。うん。

「はい。メグミ・レイナードさんでした。解説のアカツキさん。如何でしたか？」

「うん、そうだねえ……。男心を撥るナース服といい、

チャームिंगな笑顔といい、高得点が狙えるんじゃないかな？」

「ほお。中々の高評価。これは期待できるのでしょいかね？ 解説のウリバタケさん」

「まあな。彼女の人気は相当のもんだ。ま、唯一の難点は後ろでうつせえ奴がいた事だな」

うん。確かに五月蠅かった。

「それはまあ仕方ないでしょう。それでは、次へと参ります。エン
トリーナンバー二番。」

「我らが食堂に舞う可憐な花達。ハウメイガールズの皆さんです」
「うおおおおお！」

おお。凄い歓声。

確かに彼女達は可愛いもんな。

食堂で可愛い子に対応してもらえたら男は嬉しいもんだ。
こればかりはどうしようもない。

「はい。ハウメイガールズの皆さんでした。

見事なまでに料理への愛情を感じさせつつ、彼女達の魅力を最大
限表していましたね」

「そうだね。ナデシコ食堂は味良し、値段良し、環境良しの三拍子
が揃った食堂だ。」

「その中でも彼女達の存在は大きい」
「整備の後で疲れた俺達にとっては天使のようだぜ。心から癒され
る」

会長も評価してるみたいだし、

ウリバタケさんは本当にそう思ってるんだなって感じさせる幸せそ
うな顔をしている。

俺はあんまり話さないけど、ハウメイガールズはやっぱり皆に愛さ
れてるんだなあ。

あ、もちろん、僕も彼女達に癒されてますよ。はい。

「それでは、次は・・・」

そうして、次々とエントリーした者達がパフォーマンスを披露していった。

中にはナデシコ主要クルーに勝るとも劣らない程の美人がいたりして、驚いた時もあった。

普段は言っちゃ悪いけど、地味な人が、このミスコンで化けたんだよ。

いや。彼女はこれから大変だろうなあ。一夜にしてスターだし。別に優勝しなくても魅力的な事は証明してしまったからな。

歌も心に響く素敵な歌声だったし。いや。大変だ。

「それでは続きまして、エントリーナンバー十四番。

我が包容力に溢れた優しいお姉さん。ハルカ・ミナトです」

「わあああああ！」

ウインクをしながらの登場。

飛ばしてますね。ミナトさん。

その服装は・・・漆黒のドレス。

丈の短いドレスでかなり際どい。

それがあまりにもセクシーで、思わず赤面した。

その見事すぎる身体に黒のドレスがマッチして妖艶な魅力に溢れている。

ああ。なんか、この人が恋人って事が不思議で仕方がない。

本当に魅力的な女性だなって思った。

「~~~~~」

歌い出すミナトさん。

その透明感溢れる歌声と彼女が醸し出す雰囲気、会場は静まり返った。

ただただ無言で聞いていたい。そんな気持ちにさせる歌声だった。

もちろん、途中で服を脱ぎ、水着姿にもなった。でも、その妖艶な魅力は変わらず、水着姿になって更に増したよう
で……。

結局、歌い終わるまで歓声があがる事もなく、誰もが黙って歌を聞き浸っていた。

「……………」

そして、最後のニコツと笑みを浮かべた後、去っていくミナトさん。その瞬間……。

「うおおおっおお！」

途轍もない歓声があがった。

今までで一番じゃないかと思える程の大音量で。

「ハルカ・ミナトさんでした。いやはや。まるで別世界にいたかのような気持ちでしたね。」

どうでしたか？ 解説のアカツキさん

「……言葉に出来ないよ。僕は思ったね。彼女に包まれないと。」

全身が身震いしたさ。彼女の全身から迸る至上の愛に

「……ああ。思わず涙が出そうになった。全身に鳥肌が立つ事なんて初めてだ。」

歌がとびつきり上手いという訳じゃねえ。だが……」

「……そう。感情が伝わってきたんだ。彼女の感情が僕達の心に出来る事ならば僕は毎日のように彼女の歌を聴いていたいよ」

「……俺もだ」

……大絶賛ですね。

気持ちは物凄く分かりますが……。

俺も本当に鳥肌が立った。

目頭は熱くなつたし、心も震えた。

二人じゃないけど、俺も毎日のように聴きたいと思つたんだ。

「それでは、続きましてエントリナンバー十五番……」

S I D E M I N A T O

「ふう〜」

緊張したわ。

あんなに大勢の前で歌つた事なんてなかったもの。

「ミナトさん！ 凄かったです！」

どこか興奮した様子でそう言ってくれるメグミちゃん。
ふふっ。割とうまく歌えてたみたいね。

「そう？ ありがとう」

「鳥肌が立つちゃいましたよ。心に響いてきました」

「そ、そう」

そんな大袈裟な……。

「……ミナトさん」

「せれせれ」

チヨコチヨコと可愛く近寄ってくるセレセレ。

「・・・凄かったです。感動しました」

「ふふっ。ありがとう」

感謝の気持ちを込めて、セレセレの頭を撫でる。

うん。コウキ君がセレセレの頭を撫でたがるのがよく分かるわ。
柔らかくて良い匂いがして、とっても心地良い。

さて、次はセレセレをコーディネートしなくちゃね。

「うん。じゃあ、行こうか。セレセレ」

「・・・はい。よろしく御願ひします」

はい。任されました。

思いつきり可愛くしちゃうんだから！

S I D E O U T

「さてさてコンテストも終盤に差し掛かりました。皆様、心残りはありませんか!？」

「あるぞお!」

「終わらせるんじゃないねえ!」

「ええ。ええ。分かります。ですが、終わりがあるからこそそのコンテスト。」

皆様、最後まで盛り上がっていきましょう!」

「うおおおおおお！」

会場はとっくの昔に最高潮。

今では既に限界突破。

いやはや。ナデシコクルーに限界はないんでしょうね。

「残るは艦長を含めた主要メンバーのみか・・・」

メグミさん、ミナトさんと審査を終え、それから続々と審査を終えていった。

何人もの女性が審査を終えたが、やっぱりナデシコ主要クルーは飛び抜けてたなあ。

メグミさんもそうだし、ミナトさんもそう。

それに、着ぐるみで登場したラピス嬢も男共の心を刺激した。

うん。あれはやばかったね。

日頃とのギャップみたいな感じで。

いや。言葉に出来ないよ。うん。

残るは艦長、ルリ嬢、セレス嬢の三人。

今回、ルリ嬢は正式に登録していたらしい。

秘書さんは出ないのかな？ 原作でも参加してなかったし。

ルリ嬢と同じように突然参戦しようとしてたんだっけか？

まあ、確かにルリ嬢は突然参戦して優勝を掻っ攫っていたもんな。

あなたの一番になりたい。そんな気持ち痛い程に伝わってきた。

あの曲は何度も聴いてたな。マジで。

さて、残った三人だけど、やっぱり俺としてはセレス嬢を応援したのかな。

頑張りますって告げる時は微笑まし過ぎたし。

頑張れ！ セレス嬢。

「続きまして、エントリーナンバー二十八番。我らが銀色の妖精。セレス・タイトさんです」

「うおおうおお！」

大歓声。

いや。凄まじい。

ラピス嬢は桃色の妖精でセレス嬢は銀色の妖精か。オペレーター勢は妖精三人衆といった所かな？

「……よろしく御願います」

ペコリッ。

現れたのは大人しい色で染められた浴衣姿のセレス嬢。

いつもは垂れ下げられている髪の毛が纏められており、そこはかたなくうなじから色気を漂わせている。

浴衣という俺からしてみれば日本の伝統衣装に身を包んでおり、

日本人らしい黒髪こそが浴衣には最上だと思っていた俺の価値観を変えさせた。

華奢な身体で護ってあげたくなるような、

そんな浴衣姿の醍醐味を遺憾なく発揮しているセレス嬢。

言葉では表せないぐらいに魅力的な女の子だった。

そして、更に、いつもはどこか無口で感情表現の少ないセレス嬢が恥ずかしそうに、

浴衣の裾をギュッと握っているなんていうそのなんとも言えない姿照れているのか顔から首筋にかけて真っ赤になっており、

でも、そこがまた彼女に対する庇護欲を湧かせた。

「……頑張れ」

思わず口から出る言葉。

心の底からそう思ったから、その台詞が勝手に口から飛び出したの
だろう。

そして、そんな思いを浮かべたのは俺だけじゃない筈だ。

「……………」

周囲を見渡す。

「……………」

審査員席にいる会長とウリバタケさん。

「……………」

会場の裏の方でそわそわしているミナトさんとメグミさん。

「……………」

そして、会場にいる全ての観客。

それら全員が見守るように、固唾を呑んでセレス嬢を眺めている。

その視線からは頑張れ、と暖かい言葉が込められているように感じ
られた。

「……………」

バツ！

俯いていたセレス嬢が頭を上げる。

その顔は少し泣きそうでも、頑張ろうとする強い意思が込めら

れていた。

頑張れ。頑張るんだ。セレス嬢。

「~~~~」

・・・透き通るような歌声。

日頃あまり喋らないセレス嬢が懸命に歌う。

セレス嬢の声を連続してこんなに聞けるのは初めてじゃないだろうか。

そして、なんて安らぐ声だろう。

可憐な姿に心癒される歌声。

今、この瞬間、会場は彼女の舞台だった。

会場の全てを彼女が彩らせていた。

「・・・ありがとうございました」

ペコリッ。

恥ずかしそうにタタタツとステージの奥の方へ走っていくセレス嬢。そして・・・。

「オオオオオオツオオオオツオオ」

大歓声。

そのあまりの声に会場が揺れた。

「・・・セレス・タイトさんでした。天使のような歌声。妖精の名に相応しい素晴らしい歌声でした」

「・・・僕達は世紀の瞬間に立ち会えたのかもしれない。彼女の歌は世界の宝だよ」

「・・・ああ。優勝しようがしなかるうが、彼女ならば世界中に歌声と共に感動を運んでくれるだろうよ」
「・・・アイドルデビュー。本気で考えた方がいいかもね」

いや。アイドルデビューは困るのですが・・・。
しかし、本当に素晴らしかった。

感動で涙が零れている者も何人かいる。
俺もその一人だ。歌でここまで心に響いた事はなかったかもしれない。

それ程までに、セレス嬢の歌声には不思議な力があつた。

「さあ。残る所、後二名。お次はエントリーナンバー二九番。
我らが蒼銀の妖精であり、妖精三姉妹の長女。ホシノ・ルリさん
です」

「うおおおおっおおお！」

現れるルリ嬢。

その可憐な容姿に誰もが歓声後、言葉を失った。
そして、彼女は歌いだす。

「~~~~~」

あなたの一番になりたい。

あなたをいつまでも支えていたい。

だから、ずっと傍にいさせて。

あなたを私は愛しているから・・・。

「・・・・・・・・」

ペコリッ。

去っていくルリ嬢。

その歌声の余韻に、誰しもが酔いしれていた。

「・・・ルリちゃん」

ルリ嬢の想いはアキトさんに届いたのだろうか？

・・・届いていて欲しい。

貴方の近くにはこんなにも想ってくれている人がいるんだと。

そう理解して欲しい。

貴方の幸せを探してもいいんだと。

そう・・・理解して欲しい。

ルリ嬢の歌声にはアキトさん、貴方への想いが溢れていたのだから。

「・・・ホシノ・ルリさんでした。・・・最早言葉もありません」

「・・・感動の嵐だ。妖精はどうしてこうも僕達の心を揺さぶる。

どうしてこうも心に響かせる」

「・・・幸せ者だ。俺達はなんて幸せ者なんだ・・・」

分かります。ええ。分かりますとも。

この瞬間に立ち会えた事に感動を覚えずにはいられません。

「それでは、最後になりました。

エントリーナンバー三十番。我がナデシコ艦長。ミスマルユリ

カさんです」

「野原一面に咲く白き百合の花。ああ、その美しさは全てを包み込み、そつと・・・癒す。

穢れなき純白の花弁が今、この場で咲き誇る！ ミスマル・ユリ
力！」

「オオオオオオオ！」

・・・熱の入った声援ありがとうございます。ジュン君。

「~~~~」

テンポの良い歌声に観衆の誰もが歌にあわせて身体を揺らす。先程のような感動はもしかしたら味わえないかもしれないが、この歌にはこの歌の魅力がある。

何故か惹き付けられるその歌声は彼女のカリスマ性から来ているのだろうか？

会場の全てをミスマル・ユリカが掌握していた。

「ありがとうございますあ！」

元気良くそう告げ、ユリカ嬢はその場を後にした。

「ミスマル・ユリカさんでした。いやあ。彼女らしい元気な歌声でしたね」

「はい。身体が自然と動き出してしまいました。彼女が発する独特の空気が会場中を包み込んでしまった。そんな感じです」

「いやあ。良かったな。自然と元気が出てきたぜ」

そうですね。僕もそう思います。

改めて、やっぱりこの艦の艦長はユリカ嬢が相応しいなと思った。まあ、コンテストの結果は別だけどさ。

「それでは、結果は後ほど集計して発表したいと思います。

皆様、お疲れ様でした。持ち場に戻

」

ウィーンウィーンウィーンウィーンウィーン！

プロスさんの言葉を遮るようにして突然鳴り出すエマーゼンシーコール。

これは・・・木連！？

あ！ やばっ！ 忘れてた。

そういえば襲撃されるんじゃないか。

ブリッジに顔を出そうと思ってたのに、結局最後までいてしまった。まずい。急いでブリッジにいかないと！

・・・もしかしたらケイゴさんが出てくるかもしれないし・・・。

第四十三話（後書き）

はい。という訳でコンテストは無事に終了しました。

まあ、結果は作者的にお分かりかと。コホン。

次からは結構真面目路線にいくかと思われまますので、色々と解決していかないとイケませんしね。

それでは、また次回、よろしくおねがいます。

第四十四話（前書き）

安心して更新できます。

第四十四話

「ハア・・・ハア・・・」

艦内を駆け抜け、ブリッジに到達する。

状況的に動けない人間が多いせいか、ブリッジには殆ど人がいなかった。

「コウキ」

審査を逸早く終えたからだろう。

オペレーター席にはラピス嬢がいる。

ルリ嬢とセレス嬢の合流は少し遅れそうだな。

「ラピスちゃん、ゴートさん。状況は？」

「リーダー上で木連の戦艦を確認。待機していたパイロットが迎撃に当たってる」

「待機していたパイロット？」

「ああ。コンテストの出場していなかったスバル・リョーコとイツキ・カザマの両名だ」

ああ。そういえば、イツキさんは出場してなかったな。

スバル嬢は分かってたけど。

・・・イズミさんのは記憶から消去していたんだと思う。

「敵戦艦はこちらに何を？」

確か、このタイミングで仕掛けてくる襲撃。

これは敵にとつても確認の意味合いが強いミサイル攻撃だった筈。詳しくは覚えてないけど、簡単に返り討ちにしたし、向こう側の被害も少なかったと思う。

但し、それは原作での状況下だ。確認の度合いという意味では、向こう側には……。

「ミサイルに小型有人機を取り付けて操作しているみたい」

「……それだけ？」

「今の所は」

……それなら、原作通りだ。

でも、原作通りに行くとは思えない。

何故なら、既に状況は著しく変わっているから……。

「おっくれましたあ」

急いで駆け込んできたのは、

流石に水着ではなかったけど、審査の時に着ていた衣装に身を包む艦長。

多分、着替えている暇はなかったんだろうな。最後の審査だったし。続々と他クルーも駆け込み、自分の席に座っていく。けど、その殆どが審査衣装。

その格好のまま見学してて、緊急事態に陥ったって所かな？
ラピス嬢が制服なのはある意味流石というべきか……。

「状況はどうなってますか？」

「木連からのミサイル攻撃。待機していたスバル機、イツキ機が迎撃中」

先程よりも簡潔な報告。

「パイロットは急いで格納庫へ向かってください。全機で迎撃に当たります」

『了解！』

コミュニケーション越しの通信でパイロット達に指令が送られる。俺は状況的にパイロットよりもブリッジで情報解析に勤しむべきだろう。

「艦長。俺はブリッジに残ります」

「はい。マエヤマさんはこちらで周りのフォローを」

「了解」

パツと急いで自分の席へ。

隣にいる漆黒のドレスに身を包むミナトさんと浴衣姿のセレス嬢にドキドキしそうになったが、
事が事なだけに無理矢理落ち着かせた。

「ちえつ。つまんない」

「.....」

状況を考えてくださいね。ミナトさん。
後、残念そうな顔をしない。セレス嬢。
戦闘が終わったらね。今は照れてる場合じゃないのですよ。

『各機、散開。ナデシコに通すな』

『.....了解.....』

アキトさんの指示で各機が動き出す。

その見事な連携と戦闘技術は圧巻の一言。

地球最大戦力の異名は伊達じゃないな。

ナデシコだけじゃなく、パイロットもまた頼れる戦力だ。

「どうやら大丈夫そうね」

恐らく乱入を企んでたのだろう。

出場もしてないのにそれなりの衣装に身を包んだ秘書さんがそう呟いた。

イツキさん同様、真面目な彼女なので出場しないと思ってたけど……。

染まりましたな。秘書さん。まあ、ナデシコだし。分からなくないけど。

「恐らく向こうも本気じゃないでしょうね。確認やら小競り合いとでも思っていた方がいいわ」

……貴方も乱入するつもりだったのですか？

久しぶりの解説、ありがとうございます。イネス女史。

その格好は何なのでしょう？ グラマラス過ぎて僕には言葉に出来ません。

……それにしても、今まで何をしていたんだろうか？ この方はもしかや、ウリバタケさんと共同で新しい開発でも？

まあ、俺には分からないか……。それにしても……。

「……確認だけで済むならいいけど」

原作通りに進んでくれれば俺も安心だ。

でも、あの新型兵器。まだ開発途上である以上、データ収集の為に

もまた仕掛けてきそうだ。

何といても地球の最高戦力はナデシコ。
機動データを集めるのならば、ナデシコ勢と戦うのが一番だ。

「でも、コウキ君は他にも心配事がありそうね」

「えっ？」

「いつになく必死じゃない。先日現れた木連の新型兵器が気になるのかしら？」

・・・鋭いな。相変わらず。

しかも、俺の悩み事までの確に見抜いてやがる。

「ええ。もちろんです」

それなら、下手に隠さないで意見を聞こう。
そちらの方が遥かに良い。

「あの新型兵器。恐らくこちらのエステバリスを参考に開発されたものでしょう」

「そうね。十中八九そうでしょう。でも、こちらに比べて完成度は低い」

「そのようですね。」

しかし、DFやGBといった最先端ともいえる技術においては向こうの方が遥かに進んでいる」

「・・・確かにそうかもしれないわね。」

GBやDFを備えている戦艦がこちらとあちらではあまりにも数が違い過ぎる」

「はい。それだけで判断する事はできませんが、

技術的な問題でもあちらの方が進んでいる可能性があります。

少なくとも、こちらと同等までは」

少し聞いた話ではプラントで生産する為に戦艦の中身を把握していない可能性もあるらしい。

でも、流石にそんな事はないと俺は思う。草壁もそこまで現実を軽視していない筈。

むしろ、彼はゲキ・ガンガーを民意誘導に用いているだけで、本人自身は至って現実主義だったような気がする。

あくまで俺の感想でしかないが……。

それに、向こうには劇場版で悪魔のような頭脳を発揮したヤマザキ博士がいるんだ。

少なくとも、エステバリス並の完成度にまで持っていく事は可能だと思う。

「……そうね。こちらのエステバリスに追いつくのは時間の問題かもしれないわ」

「ええ。だからこそ、ナデシコという最高戦力で機動データを集めると思うんです。

最初の接触のように」

「ナデシコを基準に設定していれば、他の部隊は確実に討てると。そういう事？」

「恐らくという予想の範疇でしかありませんが。」

どちらにしる、木連側からの接触です。何かしらの意図があると思われまます」

「……少なくともこの程度の攻撃で終わる事はないと？」

「はい。杞憂で済めばいいのですが……」

今の所、そのような予兆はない。

唯の杞憂で済んでくれれば俺の胃にダメージが来るだけで済むんだけど。。。

スドオオオン！

な、何だ！？

「この揺れは！？」

「突如現れたミサイルにより右翼部が損傷！」

これはボソン砲？ そんな！？ このタイミングじゃない筈だろ！？

「被害ブロックは・・・爆発の割には軽微です」

「それってどういう」

「ハーツハツハ。こんな事もあるのかと。こんな事もあるのかと。

クーツ！ 言ってみたかつたんだよなあ。この台詞」

「ウリバタケさん！ いいから説明を！」

「おう。これは俺の開発したディスプレイションブロックのお陰でな。

これはなんと」

「後の説明は私がしましょう」

「おい。ちよ、ちよっと待て。俺が」

プツンッ！

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

・・・折角の緊迫した雰囲気か台無し。

そ、そんな事よりも！

「イネスさんの説明は後にして、艦長！ とりあえず、この宙域から！」

「はい。分かっています。ミナトさん。全速で前進。」

メグミちゃん。パイロットにミサイルを迎撃しつつ帰艦と連絡を
「了解」

急いで状況を立て直す事が大切だ。

「イネスさん。説明を御願います」

「分かったわ。艦長」

・・・このタイミングでボソン砲の襲撃。

原作とはタイミングも場所も違う。これが改変した故に起きた誤差か。

ディストーションブロックが装着済みで助かった。マジでウリバタケさんには感謝だな。

「ディストーションブロックとは艦内の空間をディストーションフィールドで包み込む装置の事よ」

「ディストーションフィールドで包む？」

「ええ。例えば各ブロック事に包めば、被害はブロック単位で抑えられるじゃない？」

被害は最小限になるって訳」

確かに被害は最小限で済む。

でも、機関部やブリッジなど、

ナデシコ艦内において重要な場所に直撃すれば、その時点で終了だ。ボソン砲の怖い所はそういう所。何の予兆もなしに、好きな場所を爆発できる。

欠点としては機体ではなく、空間の位置にミサイルを出現させる為、

避けられてしまう可能性があるという事。

要するに、出現までのタイムラグを利用して、

絶え間なく、かつ、凄まじい速度で動き続ければ避け続けられるという訳だ。

まあ、それだけしか欠点がないというある種ほぼ確実に命中する恐ろしい武器な訳だけど……。

「そうね。分かりやすく言うならば、

唯の物質を用いた隔壁ではなく、ディストーションフィールドを用いた隔壁って事」

「へえ〜。なるほど」

しきりに感心してみせる艦長。

おい。お気楽思考は流石にまずいぞ。

冷静なのは良い事かもしれないけど……。

「艦長。状況を」

「あ。アキト。おかえりなさい。怪我はなかった？」

「ああ。全パイロット。健康状態に異常はない。それよりも状況を教えてくれ」

どうやらパイロット組は無事に帰艦出来たようだ。

エステバリスがいなくなつて迎撃する機体がいなくなったな。

ポソン砲には対処できないけど、向かってくるミサイルにはまだ俺でも対処できる。

まあ、ディストーションフィールドを越えられるとは思えないけど、万が一の為にな。

「艦長。念の為にレールカノンで迎撃体制に入っておきます」

「はい。御願いたします」

おい。艦長の許可も得たし。

「オモイカネ。レールカノン。セツト」

懐からいつものを取り出し装着。

そういえば、ナデシコのレールカノンを使用するのって久しぶりじゃないか？

大丈夫だよな？ 俺。

「コウキ君。無理しちゃ駄目よ」

「大丈夫ですよ。ミナトさん」

相変わらず心配性なんだから。

もう大丈夫ですよ。安心してください。

「そう。それならいいけど」

「え、ええ」

とりあえず、ミナトさんを視界に入れちゃまずい。
ドギマギして集中力が欠けてしまう。

戦闘終了後、びっちり見させてもらおうと思う。

「そういえば、まだ感想聞いてないんだけど？」

「え？」

「コンテストの感想よ。気になるわよ。ね。セレスちゃん」

「・・・はい」

ええっと、そのような状況ではないのでは？

「今の所は大丈夫よ。艦長の指示待ちなもの」

そ、そりゃあ確かにそうだけど……。

「で？ どうだったの？」

「……こりゃあ堪忍するしかないな。」

「ミナトさんは物凄く綺麗でした。」

それに、いつまでも聴いていたいような歌声で。本当に感動しました。」

俺の拙いボキャブラリーではこれ以上の言葉は出てこない。

文字通り、言葉に出来ない程に凄かった。

「セレスちゃんは本当に可愛らしくて。それに、透き通るような歌声で本当に心に響いたよ。」

セレス嬢もミナトさん同様、俺なんかでは言葉に出来ない程に凄かった。

両者共に感動して、両者共に身近にいられる事が本当に嬉しくて幸せに感じた。

彼女達の家族であるという事を誇りに感じた。

「ふふっ。高評価みたいね。良かったわ」

「……はい。頑張りました」

笑顔の二人。今の格好も相まって本当に魅力的だ。

「二人ともアイドルデビューしても問題ない。むしろ、そのらのアイドルよりずっと魅力的でした」

「あら。そっつ？」

「・・・恥ずかしいです」

嬉しそうに笑うミナトさんと真つ赤に頬を染めるセレス嬢。むむ。アイドルになれるぐらい綺麗だし可愛いと思うけど、二人が有名になるのは嫌だな。

「でも、あまり二人を他の人の眼に入れるのはちょっと嫌ですね。やっぱり俺だけの・・・というか、はい、そんな感じですよ」

・・・なんか調子の乗って変な事を言っちゃった気がする。案の定、眼を丸くしてこちらを見てくるミナトさんと余計に顔を赤く染めたセレス嬢の姿が見えた。でも、すぐにミナトさんは表情をニヤリとしたもの変えて・・・。

「へえ〜。アイドルを独り占めにしたいだなんて強欲ねえ。独占欲が強いのかしら？」

と、こつこつやっつけてくる。でも、この感情は仕方ないと思うんだ。

「二人とも本当に魅力的ですからね。誰だって独占したいと思いませんよ」

当然の思いだと思う。誰だって大切な人を他人に見せるのは嫌だし、独り占めにしたいでしょ。

別に浮気というそういうのじゃなくてもさ。自分にとって特別だって思っていたいんだって。

「それじゃあしょうがないわね。アイドルデビューは諦めてあげる

わ

「ね、狙ってたんですか!？」

「冗談よ。冗談。私にはアイドルデビューよりコウキ君との生活の方が大切だし」

「ミ、ミナトさん」

て、照れるような事を言わないでください。

「・・・私もコウキさんと一緒にいたいです」

「セ、セレスちゃん」

「・・・私はコウキさんだけのアイドルになります」

「・・・」

「あらまあ」

・・・やばい。

間違いなく俺の顔は真っ赤だ。

セ、セレス嬢。その発言は威力が強過ぎる。

こ、子供だからこそその発言で、深い意味はないと思うが・・・。

セレス嬢。なんて恐ろしい子だ。将来が心配になってきた。

彼女の天然さで何人の男が落とされるのか・・・。ああ。罪深い女の子だな。

「おお〜い。帰ってこおい」

うお!?! げ、現実逃避していたのか?

「す、すいません。ミナトさん」

「気持ちは分かるけど、ちゃんと返事してあげなくちゃ可哀想よ」

え?

詳しい事は軍事関係に詳しくない俺には分からなかったが、簡単に作戦を説明する。

まずは敵戦艦のレーダーから消える為にナデシコ自体の動力を最低限までカット。

かなりのステルス機能なのだろう。ナデシコは見事なまでに敵戦艦のレーダーから消えた。

その後、接近してきたら反応するように調整したミサイル群を投下。逃げたナデシコに対して追うような形で迫って来ていた敵戦艦。

それはミサイルによって足止めを喰らい、見事なまでに損傷を受けた。

もちろん、動力をカットしている以上、現状は慣性運転であり、簡単に追いつかれかねないという危険性がある。

再起動するにも動力をカットしており、時間が掛かる為、一度追いつかれたらおしまいだろう。

そんな中、ミサイル群を投下するという事は非常に危険な事でもある。

向こうに位置を特定させてしまう危険性があるからだ。

しかし、そこは我らが天才艦長、

いや、天才参謀といった方がいいのかもしれない、ユリ力嬢が解決した。

ミサイル群によって足止めしている間に、

慣性運転では不可能だと思われる方向転換をしたのだ。

もちろん、方向転換と言えども、微々たる角度変更だ。

それでも、凄まじい速度で移動し続ける戦艦戦においてはかなりの効力を発揮する。

現状の位置、ミサイルの投下位置。

この二つからナデシコの位置を見出した敵戦艦はGBをその位置へと向けて発射した。

向こう側はかなり自信があったに違いない。だが、結果虚しく直撃ならずだ。

ナデシコの脇を掠るように抜けていった。緻密な計算も天才の閃きには及ばず。

そのあたりは流石艦長といった感じた。その方法が正に天才と思わせるものだから、恐れ入る。

先程、ボソン砲によって損傷を受けた右翼部。

その右翼部から抜け出す空気圧を利用して角度を変えたのだ。

一切のスラスタールなどの方向転換用の装置を用いずに角度変更。

動力を使つてない以上、向こうのレーダーにも映らないし、向こうの自信を打ち砕く事にもなる。

あちらは絶対の自信があるからこそ遠距離射撃をしたのだから。

・・・後はエステバリスの順番だ。

『ここまでは順調だな』

コクピット席で戦況を眺めていたパイロット勢。

その中にいるアキトさんがそう呟いた。

もちろん、アキトさんの声が聞こえるのだから、俺もエステバリスに搭乗済みだ。

今回、ブリッジにいてもどうしようもないと判断し、エステバリスに乗り込む事にした。

それに、敵の新型兵器をこの身で体感したいという事もある。

現状の木連がどこまで兵器開発を進めているか。それを知りたい。
ジンシリーズならまだ対処出来る。

言っちゃ悪いが、でかいだけの的みたいなものだからな。
でも、本格的にあの新型が導入されたら……。

『パイロットの皆さんは出撃してください』

ふう……。先の事を考えてても仕方ないか。
今はこっちに集中しなくちゃな。

『作戦通り、発進後は全ての動力源をカット。』

敵戦艦の接近と同時にアキトの指示で戦闘を開始しちゃってくだ
さい』

「了解」

『もちろん、ナデシコはすぐに帰ってきますから。』

バッテリー切れの心配もせずに張り切っちゃってくださいね』

高機動戦フレームはかなりバッテリーを喰うからな。

改良したのにOG戦フレームと同じくらいの時間だから。

まあ、艦長がすぐに戻ってくるって言ったんだ。

その言葉を信じて、最初から全力で……。いや、ある程度、抑える
ぐらいで戦闘しよう。

俺は石橋を叩いて渡る慎重派。やっぱり戦場で停止は怖いしね。

も、もちろん、信頼してますよ。でも、一人ぐらい慎重な奴がいな
いとさ。うん。

「マエヤマ・コウキ。高機動戦フレーム。出ます」

ナデシコの後方へ向けて発進。

その後、すぐさま動力源をカットした。

身体の後方には敵のレーダーや視界から姿を隠す特別製のシートが備え付けられている。

要するに準備の方はとっくに万端。後はこちらの存在を隠し通し、接近後、奇襲するまでだ。

『・・・・・・・・・・』

「・・・・・・・・・・」

誰も何も話さず、緊迫した時間が流れる。

一人でも存在が見付かれれば一気に危険な状態に陥る。

そう考えれば緊張するのも仕方ないだろう。

俺もかなり緊張して心臓がバクバクしてる。

「・・・・・・・・・・」

でも、心臓の痛みは緊張以外にもあった。

・・・俺は今日、本格的に戦闘を行う。

今までが遊びだったという訳ではない。

単純に、今までとこれからで大きな違いがあるだけだ。

それは有人か無人かという違い。

そう、俺は今日、もしかしたら人を殺すかもしれないのだ。

そして、その恨み、憎しみをこの肩に背負う事になるかもしれない。

他のパイロットは覚悟を決めているのだろう。

殺されなければ殺される。それが戦争だと分かっているから。

だが、その覚悟は俺にはない。

俺は人を殺してしまえばその罪悪感で押し潰されてしまうだろう。

自分の事だ。良く分かってる。

どれだけ特別な能力を与えられようと。

それが人にとっては異常と思える能力だとしても。

精神が一般人である俺には人を殺すという事に対しての忌避感はどこ

うしても拭えない。

もちろん、俺の周りが異常だと言ってる訳ではない。

パイロットとして当然の考え方だし、

彼らだって好きで敵を殺している訳ではないと分かっているから。

ただ、自分自身に覚悟がないだけだ。

他人を殺し、自分を生かし、その罪と責任を背負って生きるという覚悟が。

「……」

死なないように倒せばいいのか？

……いや。そんな技術は俺にはない。

それが出来たらどんなに楽な事か……。

それに、だ。

もし、逃がした結果で仲間が死ぬような事態に陥ったら、

俺は一生を罪悪感に苛まれて生きていく事になるだろう。

そもそも自分を一生許す事が出来ずに、安易な自殺を選んでしまうかもしれない。

有人機に対して、強制ボソングジャンプをするという殺すとは違った目的があつた時は楽だった。

だが、今回は確実に倒す事こそが目的。その延長戦には殺すというものがある。

今日の戦闘終了後、俺がどのようになっているか。

それを考えるだけで、全身が震える程に怖くなってくる。

不死、殺さずを目的に戦える程、俺は強くないのだから。

「……いくぞ」

そして、そんな過去との決別とも、殺人を遂げる本当の初実戦とも言える戦闘が始まりを告げた。

第四十四話（後書き）

ミスコン、艦長コンテストの結果発表を前にシリアス展開に。なんだかすつきりしないなと思うかもしれない。

先に結果を発表したほうが良かったのかもと思う今日この頃。

第四十五話（前書き）

遅くなりました。

スランプなどと大袈裟な事を言うつもりはありませんが、何故か筆が進まない。助けて欲しい今日この頃です。

第四十五話

『各機散開！ 出撃してくるジンを二人一組となつて撃墜せよ』
『『『『『『了解！』』』』』』』

男四人、女四人の現状、それぞれ二人組になれば四つのチームが出来る。

「イツキさん」

『はい！』

そのような時、殆どが俺はイツキさんと組んでいる。

スバル嬢はイズミさんと、ガイはヒカルと会長はアキトさんと大抵組む。

まあ、僕達は途中参加した人間と正規なパイロットじゃないっていう、

言わばあまりものみたいなものですしね。

でも、甘く見られちゃ困る。正式ではないけど、教官と教え子の仲間だ。

連携では他のチームにも劣らない。

「俺が先行します。イツキさんは援護を」

『了解しました。お気をつけて』

デイストーションブレード。

俺も未熟とはいえ、ケイゴさんに剣術を習った身。

鈍い動きしか出来ないジんに遅れは取らない。

「はあ！」

向かってくるジンのロケットパンチを断ち切る。
デイストーションブレードの切れ味を舐めてもらっちゃ困る。

「ハアアア！」

イツキさんの援護によって拓けた道に飛び込む。

小型グラビティブラストに注意しつつ、デイストーションフィールドを突破する。

「クツ。固い」

流石にバツタとは訳が違った。

DFの強度が段違いだ。この状況下では突破できないか！？

『コウキさん。一度下がってください』

どうやらイツキさんもそう判断したようだ。

立て直そう。

「了解」

周囲に注意を配りながら後退。

流れ弾はDFが弾いてくれるが、安心は出来ない。

向こうの小型GBを喰らえば流石にまずいしな。

『流石にバツタのようにはいきませんね』

「はい。フィールドガンランスなら全体重を込められるんですが、デイストーションブレードでは厳しいかもしれません」

これには形状が大きく影響している。
デイストーションブレードは切れ味重視で突破力不足。
対して、フィールドガンランスは突破力重視で切れ味不足。
要するに、敵機体を直接切り付けるならデイストーションブレード。
敵機体を纏うデイストーションフィールドを突破するならフィールドガンランスがベストという訳だ。

『分かりました。それならば、私がDFを突破します』

現状の装備は、ガントレットアームの両腕、腰にデイストーションブレードとレールカノン、
背中に大型レールキャノンという近、中、遠に対応した武器。
ガントレットアームに装着されている簡易ライフルは出力調整で連射性を重視してもらった。

要するに、完全に攪乱用という訳。
後はデイストーションブレードか、大型レールキャノンで仕留めるというスタイル。

ジンを相手にするならこっちの方がベストだ。
対してイツキさんは俺とは用途の違った選択。

ガントレットアームなのは同じで、
違うのは近、中に対応するフィールドガンランスにラピットライフ
ルを二丁という点。

また、このライフルは威力重視らしく、辛うじて遠距離にも対応できる威力と精度を持つらしい。

基本的に中距離にいるイツキさんにはベストの選択だと思う。
そして、現状で必要なのはフィールドガンランスの突破力。
俺が持っていない以上、イツキさんに任せるしかない。

『突破後、私が追い討ちをかけます。コウキさんは』

「いえ。俺が・・・仕留めます」

『そう……ですか。分かりました。御願います』

……甘えるな。

イツキさんにばかり負担を掛けていては二人組の意味がない。

突破後、イツキさんがフィールドガンランスで装甲を削り、

俺がデイストーションブレードで仕留める。

これがベストの選択の筈だ。

それを、人を殺したくないなんていう甘えで……逃げる訳にはいかない！

何より、そんな役目を彼女だけに押し付ける訳にはいかないだろ！

俺も背負うんだ！ 自らが殺してしまった人の命を！ 責任を！

『……いきますー！』

一呼吸置いて飛び出すイツキさん。

俺はそれの少し後方から彼女を追い、彼女に迫るバツタを排除していく。

彼女も周囲に向けてラピットライフルを撃ち続けるが、それはあくまで牽制。

彼女のスピードが落ちないように、周囲を片付けるのは俺の役目だ。

デイストーションブレードを右手に、レールカノンを左手に持ち、ガントレットアームのライフルで牽制しつつ、

近ければDBで、遠ければレールカノンで的確に屠っていく。

先程、彼女が俺の道を拓いてくれたように、今度は俺が彼女の道を拓く番だ。

『ハアアア！』

どうにか接近に成功したイツキさんがジンを覆う強固なDFにフィールドガンランスを突き立てる。

全ての力を槍の先端に乗せ、敵へ突き立てる行為は圧力が凄まじい。デイストーションブレードを弾き飛ばしたDFをフィールドガンランスは容易に突破してみせた。

・・・さあ、いくぞ・・・。

「ゴクッ」

息を呑む。

そんな時間はないと自覚している。だが、知らぬ間にそうしていた。

『コウキさん！』

突破と同時にフィールドガンランスのレールカノンを放ち続けるイツキさん。

・・・そうだ。ここで躊躇していれば、彼女の身に危険が迫る。

それは即ち、彼女を危険に陥れ、更にはナデシコまでも危険に陥れてしまうという事。

ナデシコには護りたい大切な人がたくさんいるんだ。

ここで躊躇する。それが結果として彼女達を失う事になってしまったら・・・。

『コウキさん！ 後退しま 』

「・・・やるしかないんだ。ハアアア！」

一生後悔する。大切な人を失うくらいなら、俺は罪を背負おう。

ザァン！

「・・・」

断ち切り、駆け抜ける。
後ろからは眩しい光。機体内の機関部が損傷し、内部爆発した結果だろう。

そんな爆発に飲み込まれば、中のパイロットは生きていけない。
そう・・・死んだんだ。

『・・・コウキさん』

心配そうなイツキさんの表情。

嫌だな。こういう時はサウンドオンリーにしたかった。

俺の今の表情は誰にも見せたくなかったのに。

『免罪符にする訳ではありませんが、殺さなければ殺されていた。
それが戦争です』

「・・・ええ。分かっています」

『・・・帰艦しますか？』

「いえ。最後まで、俺も戦場に立ちます」

『・・・そうですか。・・・頑張りましょう』

「・・・はい」

気分は最悪だった。

実際に人が死んだ瞬間を見た訳じゃない。

でも、事実、俺はこの手で人を殺したんだ。
背負おうと誓ったんだ。

強く心を持って。俺。

恐怖に飲み込まれれば、お前が死ぬ事になるんだぞ。

『各機へ。敵戦艦の機関部へ突撃する。援護を頼む』

あらかたジンを片付けたからだろう。
戦艦への道が拓けた事を機にアキトさんが戦艦へと飛び込んでいった。

『コウキさん。見てください！』

アキトさんの援護をする為に敵戦艦へ近付いた俺とイツキさん。
ナデシコメンバーもジンを片付け、俺達と同じようにアキトさんの背中に付いていた。

そして、叫ぶように大声を上げるイツキさん。
その視線の先には……。

「……エステ……バリス？」

以前、地球で戦った木連側の新型人型機動兵器。
その姿があった。

しかも、以前のようなどこか違和感のある姿から、
更にエステバリスへと近付いた完璧に近い高機動戦フレームの姿だった。

機体性能、OS、そのどちらも、こちらに対して劣っていないと判断した方が良いのかもしれない。

やはり木連の技術は甘く見てはいけなかった。

『テンカワ君の突撃は変わらないよ。あれは僕達が引き受けようじゃないか』

会長からの一声と躊躇する事なく飛び込んでいくアキトさん。
俺達は会長の言うように、アキトさんの邪魔はさせまいと、
アキトさんを追うように移動し始めた敵の機動兵器の前にそれぞれ立ち塞がった。

『ここから先は行かせねえぞ』
『お前の相手はこの俺だ』

早速斬りかかる我らが前衛二人。

敵機動兵器の数はこちらの半数に当たる四機。

アキトさんの援護に三機を当てるとして、一機に対して一機を割り当てる計算だ。

「俺が行きます！ 皆さんはアキトさんの援護を！」

『コウキさん！？ 私が！』

「いえ。イツキさんは援護に回って下さい。」

あれだけの迎撃体制に対して的確に援護できるのは俺よりイツキさんです」

悔しいが、援護役、フォロー役にはイツキさんが最も適している。

俺はどちらかというところと万能という名の器用貧乏だ。

それぞれの頂点に君臨する者には遠く及ばない。

『・・・分かりました。コウキさん。御気を付けて』

「イツキさんこそ。健闘を祈ります」

『・・・はい』

心配そうに去っていくイツキさん。

駄目だな。パートナーに不安を抱かせてしまっただけはもっとしっかりしないと。

「貴方の相手は俺がします」

『・・・容赦しないぞ』

ツ!? ……有人機か。

「……こつちだつて!」

『かかつて来い!』

……失望した。

有人機である事に対して焦った自分自身に。

どうやら俺は無意識に無人機である事を望んでいたらしい。
覚悟を決めた筈なのにな。

『ハアアア!』

フィールドガンランスを両手に突っ込んでくる敵機動兵器。

ジンのDFを突破した武器だ。こちらのDFも突破される恐れがある。

ここは避けるしかない。

「クッ」

向こうの機体もこちら並のスピードがあるらしい。

強引に避けた為に凄まじいGが身体に襲い掛かってきた。

『……ほお。あれを避けるか。貴様、名はなんという?』

「て、敵の名前を聞いてどうするんですか?」

『なに。強き者と雌雄を決する。なんとも素晴らしい事ではないか』

なるほどね。

木連らしい熱い魂だよ。

「マエヤマ・コウキ。愛機はエステバリス・高機動戦フレームです」

『なるほど。貴様がケイゴの言っていた奴か』

ケイゴ!?

ケイゴさんの事か!?

「貴方はケイゴさんの」

『礼儀だ。こちらも名乗ろう。俺は優人部隊所属キノシタ・シンイチ少佐。愛機は福寿だ』

話しかけている途中に台詞を入れてきやがって。礼儀なんてなっちゃんないだろうに!

『さて、無駄話は終わりにして、勝負を決めようじゃないか』

な、なんつうマイペース。

自らが振った話を無駄話と切り捨てやがった。

『ハア!』

「クツ」

フィールドガンランスからレールカノンが放たれる。

あれを調整したのは俺でもある。その特徴は掴んでいる。

『チイツ! ちょこまかと』

それは通常のライフルに比べ、重みがあるという事。

その重みは若干の方向転換の遅れへと繋がる。

気付かれなければ問題にならないが、気付けば一瞬を争うような戦闘だ。

充分な隙と成り得る。

とにかく照準を付けられないよう駆け回り、そして、徐々に近付いていけばいい。

『クソツ。調子に乗るな!』

どうやら射撃はあまり得意ではないらしいな。

まあ、性格的に接近戦を好んでいるだけかもしれないが。

『これならどうだ』

その手には逆手に持たれたイミディエットナイフ。

それなら、こちらも受け止められる。

ガキンツ!

『やはりやるな』

ディストーションブレードで受け止める。

賞賛されるが、そんな事はどうでもいい。

こいつには聞きたい事がある。

「聞きたい事があります」

『それに答える義理はないが?』

「それでも答えてもらいます」

鏝迫り合いをしている今がチャンス。

なんとしても聞いてみせる。

「先程、ケイゴと言いましたが、それはカグラ・ケイゴの事ですか?」

『無論だ。そちらもケイゴの事は知っているんだつたな』
「・・・やはり、ケイゴさんは木連側の人間だったんですね」
『やはり、か。なるほど。予想は付いていたという事だな』
「怪しんではいました。でも、それが事実だと知ると・・・」
『ケイゴの言った通りの奴だな。ふんっ！』
「クッ！」

油断したのだろうか。
イミディエツトナイフに弾き飛ばされてしまった。

『甘い奴だ。まあ、仲間を愛し、信頼する精神は尊いと思うがな』
「・・・別にケイゴさんがスパイであった事に対して憤りを感じている訳ではない。

ただ、無様にもOSを持ち込まれてしまった自分が許せないだけだ。
「福寿といいましたよね？」
『答えてやる義理はないと言ったが、教えてやろう。その通り、この機体の名は福寿だ』

・・・福寿。エステバリスの和名。
これは皮肉だろうか？

『既に理解しているのだろうか？』
こちらのエステバリスの情報を基に製作された機体である事。
その性能はこちらと同等である事。
・・・そんな事、とづくに理解しているぞ。

『さて、今度こそ、無駄話は終わりとしようか。マエヤマ・コウキ』

・・・福寿。

俺の干渉によつて産み出されてしまった木連の新型機動兵器。それなら、俺が責任を持って・・・潰す。

「ハアアア！」

『いいぞお！ その気迫だ！』

デイストーションブレードで斬りかかる。

単純な突進だ。工夫も何もない。

案の定、簡単に受け止められた。

だが、俺の攻撃はそこからだ。

「ハッ！」

『何！？』

剣術の腕前で他のパイロットに劣る俺が彼らと対等に戦う為に編み出した戦闘術。

それは剣術と柔術の組み合わせ。言わば、足元がお留守だよ攻撃だ。

『ク、クソッ』

悔しそうな声をあげる敵パイロット。

ふっ。膝を砕いてやったぜ。

宇宙空間だからあまり意味はないかもしれないが、それでも精神的にダメージを与えられた。

「油断しましたね」

接近し、敵の攻撃手段を防ぎ、隙を突き、蹴り上げる。

OSを弄くり、常に足に対して強力なDFを纏わせる事に成功した俺の愛機だ。

蹴られればひとたまりもないだろう。

『……なるほど。どうやら甘く見ていたようだ』

……空気が変わった。

今までのが嘘かのように、敵方からの凄まじい圧迫感。どうやら、手加減されていたらしい。

「……………」

『……………』

俺も向こうも対面したまま動かない。

いや、動けないんだ。

恐らく向こうは隙を窺い、俺は隙を見せまいと構えているから。どちらも攻撃を仕掛けるきっかけがない。

『敵戦艦の機関部の破壊に成功した。各機、状況を窺いつつ、徐々に後退しろ』

そんな中、告げられるアキトさんからの報告。

どうやら、俺達が福寿を足止めしている間に撃破に成功したらしい。

『……作戦は失敗のようだな』

「……………」

『残念だが、勝負は預けておこう。さらばだ』

……向こうは向こうで撤退命令が出たらしい。

そくだよな。母艦がやられたんだから。

追撃しようにも、それじゃあ命令違反だし、これといった利点がない。

ここは素直に撤退しよう。

「……ケイゴさん」

今回の戦鬪。

俺にとっても大きな意味を持った。

初の人殺し。福寿の存在。ケイゴさんの真実。

考える事がたくさんあって、頭はこんがらがっていた。

初の人殺しに感慨深くなっている余裕もなく、状況はめまぐるしく変化している。

これからどうなるのか、俺には全く見当が付かなかった。

「……コウキ君。今はゆっくり休みなさい」

「……ミナトさん？」

「いいから。ね？」

「……はい」

……そうですね。少し休みます。

ミナトさんの優しい温もりに包まれながら、俺は眼を閉じた。

どうやら思ったよりも精神的に疲れていたらしい。

知らぬ間に、俺はミナトさんの膝の上で死んだように眠っていた。

第四十五話（後書き）

あれ？ オリキャラ登場？

・・・キノシタ・シンイチ。

これ以上オリキャラを登場させるつもりはなかったのですが・・・。
あくまでコウキ君のライバルはケイゴなんですけどね。

ナデシコ側にも多くいるあまり出番のない人間。

それと同じような扱いをしまっただけで、構いません。

便宜上、いないとおかしいというだけで、重要じゃないかもしれま
せんしね。

さて、それは今後注目してください。意外と出番は多々？

第四十六話

戦闘を終えた翌日。

気付けば、いつもとは感触も匂いも違うベットにいた。

「……ここは？」

「あら？ 起きたのね」

「ミナト……さん？」

「ふふつ。寝惚けちゃって」

身体を起こすとミナトさんの姿が視界に映る。

うん。どうやら、ここはミナトさんの部屋みたいだ。

そつえば、覚えの感触だったもんな。あと、匂いも

……ん？ どうしてミナトさんの部屋にいるんだ？

「ミナトさん。どうして俺がここにいるんですか？」

「え？ 覚えてないの？」

「ええつと……」

昨日は……ああ、そういう事が。

「ありがとうございます。お陰様で楽になりました」

「そっか。駄目そうだったら喝を入れてあげようと思ったのに」

わ、笑って言う事じゃないと思うんだけど。

しかも、妙に輝いた笑顔で。

「俺だっていつまでも慰められてばかりはいられませんよ。情けない姿は見られたくないですし」

「ふふつ。既に見飽きたぐらい見てるけどね」

グサツ！

うう。ブローケンハート。心が痛いぜ。

「でも、コウキ君も強くなってきたのね」

「え？」

「精神的に、さ。前だったら、人を殺したって罪悪感で押し潰されていたと思うの」

罪悪感に押し潰されて・・・か。

「ちょっと違いますよ。ミナトさん」

「え？」

「正直な話、今にも押し潰されそうです。」

思った以上に辛くて苦しいですね。思わず眼を背けたくなくなるくらい

いい

「でも、ちゃんと眼を背けずに現実を見よつって。人を殺したという罪をきちんと背負おうつて。」

そう覚悟を決めたんです。俺」

人を殺したと自覚した瞬間、吐き気と頭痛がした。

それでも、その罪悪感を必死に押さえ込み、ジンを狩り尽した。ミナトさんを、ナデシコを護る為に、そう自分に言い聞かせて。

もちろん、何かを、誰かを護る為なら何をしてもいいという訳では

ない。

それを免罪符にするのは唯の逃げだつて自覚している。でも、何か理由を付けないとやっていけない程、あの時の俺は追い詰められていたんだと思う。

だから、戦闘終了後、湧き出る罪悪感に苦しみ、同時に戦闘を行った事で疲労した俺は気絶するように眠ったんだろ
う。

一晩、何も考えずに眠れた事は幸運だつたと思う。
一度考え出したら止まらないだろうし。それぐらいは自覚している。

「もちろん、人を初めて殺したような人間です。

そんな覚悟も決心もすぐに揺らいでしまいましたよ」

「・・・仕方ないと思うわ。誰だって、眼を背けたくなると思うし」

はい。その通りです。でも・・・。

「でも、俺がやらないと誰がやるって思ったんです」

「・・・それは自分以外では出来ないって意味？」

ああ・・・。そういう取られ方もあるのか。

「いえ。そうじゃありませんよ」

ナデシコではそれほど俺は目立つ方ではない。

ナノマシンの恩恵で割りと上位に入る腕前かもしれないが、上には
上がいる。

何より、覚悟のない人間なんていくら腕が良くても戦力にならない
だろうし。

「俺が敵を倒そうとしない。そうなれば、誰かが俺の代わりに敵を

倒さなければなりません」

「・・・そうね」

「それは、自分が罪を犯したくないという理由で他人に罪を擦り付けるという事。」

「それは何よりも性質が悪いです」

人を殺す覚悟もなくせに戦場に立って、

拳銃の果てに罪を犯したくないから仲間を罪を擦り付ける。

敵を殺す。敵を殺せずに味方を危機に陥れる。そのどちらよりも性質が悪いと思う。

「仲間だけに罪を背負わせたくない。そんな思いがありました。」

「俺も仲間の一員として、一緒に罪を背負おうと」

「・・・そっか」

それが俺の戦う理由です。

「それなら、私も、いえ、私達もナデシコクルーの一員として、共に罪を背負わないとね」

「え？ ミナトさん？」

「だって、そうでしょ？ パイロットだけが悪い訳じゃないわ。」

「たまたま当事者が貴方達だったってだけ」

「た、たまたま!？」

「ええ。貴方達はナデシコの代表として戦場に立っているだけよ。ナデシコクルーの総意で敵を倒しているの」

「・・・でも、全員が全員、そういう訳では・・・」

「いい？ コウキ君」

「ミナトさん？」

「私達は一人一人が自分の意思でこのナデシコに乗っているわ」
「はい」

「そんな中で、色々な事を経験して、こうして生き残ってきた。それは皆が皆、生き残る為に頑張ってきたからなの」

「もちろんです。ナデシコクルーの一人一人が責任を持って
「そういう事を言ってるんじゃないのよ」

ビシッと否定されてしまった。

それなら、ミナトさんは俺に何を伝えたいんだろう？

「責任とか、そういうのじゃないわ。私達は私達の家を、家族を護る為に頑張ってきたの」

「護る為・・・」

「ナデシコクルーはもう仲間であり、家族なのよ。違う？」

家族。うん。そうだよな。

「はい。そうだと思います」

「よろしい。それでね、貴方達は家族の中でパイロットとしての腕があつたから戦ってるの」

「・・・・・・」

「例えば、私にパイロットとしての腕があれば私も戦うわ」

「ミナトさんも・・・ですか？」

「ええ。当たり前じゃない。家族を護る為に戦うのだから誇らしいわ」

笑顔で語るミナトさん。

「でも、残念ながら、私にそんな腕はない。だから、腕がある貴方達に頼んでるの」

「……」

「分かる？ 私達は頼んでるの。私達を護ってって、貴方達に頼んでるのよ」

頼まれている？ 俺達が？

「だからね、貴方達だけが罪を背負う必要はないの。

私達の総意を貴方達が果たしてくれているだけ」

「……それで、ナデシコクルーの総意ですか」

「ええ。私達を護る為に罪を背負おうとしてくれているのよ？

それを共に背負おうとしないのはおかしいでしょ」

ははっ。どうしてだろう？

貴方達を護る為に頑張りました。

そう言えば楽しかった。でも、そう言うのは卑怯だと思った。

それは罪を擦り付ける事だし、何よりそれを罪に思わせるのが嫌だった。

貴方の為に人を殺しました。そう言われて罪悪感に苛まれない人間はいないだろうから。

だから、俺はミナトさんに言わなかったんだ。

貴方を護る為に戦いましたって。

それなのに、ミナトさんは言う。

私達にも罪はあるのよ。一緒に背負いましょうって。

そして、それがなんて心を楽にしてくれる事だろう。

背負わなくていいのに。それなのに、一緒に背負おうって。

少しでも罪の意識を和らげてあげようって。

馬鹿ですよ。ミナトさん。

……優し過ぎます。

「パイロットは敵を倒す事が仕事。確かにそうかもしれないわ」

「……はい」

「でも、だからって許される訳じゃないの。きちんと罪と向かいましよう」

「……はい」

やっぱり俺は情けない。

ミナトさんがいないとすぐに潰されてしまっ。

今だって、ミナトさんのお陰でこうして立ち直れた。

これで、俺はまだ……戦える。

「馬鹿ね。コウキ君は」

「え？ 俺がですか？」

馬鹿なのは貴方ですよ。ミナトさん。

「コウキ君は自分だけの罪だとか、殺した当事者だけが罪だっと思ってるんでしょ？」

「それは……」

実際に殺めたのは俺だし……。

「コウキ君が仲間に罪を背負わせたくないって思うように、」

仲間だって同じようにコウキ君に罪を背負わせたくないって思ってるんじゃないかしら」

「……あ」

「だから、一緒に背負っ。それが一番だと思うの。」

まあ、どうすればいいのかなんて分からないんだけどね」

苦笑するミナトさん。

そっか。そっだよな。

「ありがとうございます。ミナトさん」

「ええ。どういたしまして」

何に対してお礼をしているのか伝えてないのに。

それなのに、分かっているわって顔で頷いてくれるミナトさん。

本当に、お世話になりっぱなしだなんて思った。

現在、月軌道上敵艦隊殲滅作戦に向けて月へと向かう途中。

本来であれば、もうちょつと、引き締まっている雰囲気なんだけど・・・。

「ああ！ 気になる。気になるう〜」

「ユ、ユリカ。落ち着きなよ」

「だつて〜、ジュン君。私、艦長じゃなくなつちゃうかもしれないんだよ？」

「だ、大丈夫だつて。皆だつてユリカが一番艦長に相応しいって知ってるよ」

「本当？」

「うん。本当」

「う〜ん。やっぱり気になるよ〜」

と、まあ、こんな会話がひたすら続いている訳だ。

そりゃあ、集中力もなくなるわな。

でも、それだけじゃない。

「どうなったと思いますか？」

「優勝に決まってるだろ！ メグミが一番だ！」

「ガイさん！」

「メグミ！」

「うるせえ！ 黙ってやがれ！ ヤマダ！」

「グハッ！」

「あゝ。八つ当たりしてるう」

「出ないからって僻むのはやめなさい。リョー」

「うるせえ！ どうでもいいんだよ。そんな事は」

「ええ〜？ でも、やっぱり気になるよ。ねえ？」

「ね〜」

「ダアー！ うるせえ、うるせえ」

とか、さ。

艦長以外にも結果が気になって仕方がない人はたくさんいるみたい。コンテスト出場者はもちろんの事、

その周りも気になっているみたいで、誰もが仕事に身が入っていない。

まあ、かくいう俺も気にはなってるんだけどね。

周りよりはそれ程でもないと思う。

他にも色々と気になる事があるからなあ。

あのキノシタとかいう人やケイゴさんの事とか。

昨日の戦いで、向こうの福寿だったか？ の事も知れたし。

知りたい事があり過ぎて、一つの事に集中しきれないみたいな。

まあ、でも、ね、やっぱり……。

「……（ソワソワ）」

「……」

「……（ソワソワ）」

「……」

「……(ソワソワソワソワ)」

隣でいつになくソワソワしているセレス嬢を見ると、どうも応援してあげたくなくなってしまふ。

一名のみという事でミナトさんに投票してしまったが……。すげえ罪悪感。ごめんよ。セレス嬢。

「どうなるのかしら。楽しみね」

「同意を求められても困るのですが……」

いや。もちろん、俺としてはミナトさん、セレス嬢のワンツーフイニッシュかなと思うんだけどさ。

……はい。かなりの鼻屑目ですね。分かります。でも、かといって、本当にそうなくてもなあ。

嫌ですよ。はい。二人は僕だけのアイドルです、とか言ってみる。

「まあ、後は神のみぞ知るって奴ね」

「ですね」

そして、それからしばらく経って、漸く待ちに待った瞬間が訪れた。

『さてさて、皆様お待ちかね、一番星コンテスト、結果発表の時間がやってきました』

艦内の全モニタに強制割り込み。

プロスさんの顔のドアップと共に結果発表が始まった。

『それでは、早速、発表してまいりましょう』

沈黙。

誰もが息を呑む。

「まずは第三位の発表です」

第三位、惜しくも、って奴だな。

まあ、出場者も多かったし、美人揃いのナデシコでは三位でも充分過ぎると思うけどね。

『第三位は二名ですね。』

まず一名はその男心を擽る服装と声優時代のトークと歌唱力を活かし、

私達を元気にさせてくれたメグミ・レイナードさんです』
『おおおっおっおー！』

歓声。特に男共の声がうるさい。

まあ、気持ちは分からなくないけどね。

『メグミイ！ 良くやったあ！』

『ガイさん！』

ガツチリと抱擁する熱いカップル。

うお、うお。モニタに映っちゃってますよ。御二人さん。

あれか。コミュニケを活用しての映像割り込み。

遠隔からの操作でこの演出とは・・・。

何だかんだいってノリが良いラピス嬢あたりがプロスを手伝ってるのかな？

『はい。熱い抱擁でしたね』

ちなみに、僕は今現在、ブリッジでモニタを眺めています。

ブリッジクルーの殆どは結果発表の連絡と同時に会場へと駆け込んでいきました。

ブリッジに残ってるのは俺、ミナトさん、セレス嬢、ルリ嬢、アキトさん、ゴートさんの六人。

・・・それだけで運営できるけどさ。それが許されちゃうのってまじいよねえ。

そうか。これもナデシコクオリティという訳か。分かります。

「まあ、分からなくないわよね。可愛かったもの」

「ナース服・・・ですか」

「あれ？ ルリルリも着てみたいの？ きつと似合うわよ」

「ち、違います!」

「もう、照れちゃって」

ルリ嬢のナース服　。

「想像しちゃ駄目よ」

「はい。すみません」

すぐさま怒られました。

そうですね。ルリ嬢のナース服を見ていいのはアキトさんだけでしたね。

あれ？　違う？

「・・・私にも似合うのでしょうか？」

セレス嬢!?

「ええ。もちろんよ。絶対可愛いから」

「・・・コウキさんは見てみたいですか？」

「え、え？」

「・・・私のナース服姿です」

そ、そんなにさ、首とか真っ赤にしなながら聴かないですよ。セレス嬢。

「え、ええくと・・・」

見たいか見たくないか。

どちらかって言ったらちよつと可愛いもの見たさで見たい。でも、それを熱望するのもしよつとな。

「・・・残念です」

つて、うおおお。

落ち込まないでくれ。

「み、見てみたいかな。ハハハ」

ああ。言っちゃったよ。

「・・・分かりました。機会があったら御願います」

「・・・お、御願います」

ええつと・・・ミナトさんは今・・・。

「ふふっ」

ええ！？ 予想外！

何？ その微笑ましいものを見ているかのような安らぎの笑顔は。もっところ、変な眼で見られると思ったのに。

「・・・コウキ」

・・・あ。アキトさんは変な眼で見るとすね。
まあ、覚悟してましたけど。

『それでは、もう一名の方を発表します。』

もう一名はその抜群のプロポーションと心に響く歌声で魅力ある
女性を演出し、

私達を魅了してくれたハルカ・ミナトさんです』

『おおおおおお』

うおっ！？ 第三位か。

第二位でもおかしくないというのに、ちょっと残念かな。

「ま、こんなもんよね」

「俺はもつと上位だと思ってましたけどね」

「あら？ 嬉しい事言ってくれるじゃない」

「思った事を言っただけですよ」

微笑みあう俺とミナトさん。

別にガイみたいに抱擁なんかしないさ。

俺達はこれだけで分かり合えるからな。エッヘン。

『・・・何もありませんでしたな』

『ブーブー』

ふんっ。ブーイングなんかしてるんじゃないやね。

「チュッ」

・・・え？

『うおおお！ 後で締める！』

・・・嘆きの叫びが聞こえてきた。

モニタ越しなのになんて迫力。

「・・・ミナトさん」

「期待に応えるのがエンターティナーでしょ？」

「別にエンターティナーじゃないでしょう？ ミナトさんは」

「ま、いいじゃない。ノリよ。ノリ」

「はあ・・・。まあいいですけど」

「なによお？ 不満なの？」

「いえ。ちょっと恥ずかしいかなって」

ほら。アキトさんを始めとしてブリッジにいるメンバー全員が見てる。

流石にさ・・・恥ずかしいよ。

『はい。見事な接吻を頂けましたね』

ニツコリ笑顔が憎いつす。プロスさん。

『それでは、次に参りましょう。第二位の発表です』

さて、第二位は誰だろう？ 美人揃い過ぎて分からん。

『その圧倒的なカリスマ性から会場の全てを巻き込み、
忘れる事の出来ないステージを創り上げたミスマル・ユリカさん

です』

『おおおおおおお！』

お！ 第二位は艦長か。原作でもそうだったしな。うん。

しかし、第二位じゃ艦長にはなれないんだよなあ。

まあ、結局、第一位の人間は艦長の座をを譲ると思っけどぞ。ユリカ嬢に。やっぱり艦長はユリカ嬢じゃないと。

『ガーン。一位じゃなかったよお』

モニタには泣き叫ぶユリカ嬢の姿。

『私、これで艦長じゃなくなっちゃうの？』

『そ、そんな事ないよ！』

おお！ ジュン君、頑張れ！

ここで見事に慰めればグッと得点アップだぞ！

『そ、それに、ユリカ！』

『ほえ？』

『いつだって、僕の中では君が一番星だよ！』

・・・言った。言ったよ！ 遠回しの告白。

でもね、ジュン君、そろそろ学ばうよ。

ユリカ嬢に遠回りは効果なしだよ。

『・・・ジュン君』

『・・・ユリカ』

良い雰囲気に見える。

でも、多分……。

『ジユン君一人の一番星じゃ駄目なお～～～！』

『ユ、ユリカア～～～』

撃沈。

ユリカ嬢には直接的な言葉じゃなっきゃ伝わらないよ。ジユン君。こうやって身を削って君は強くなっていくんだね。

『はい。いつも通りでしたね』

辛辣だよ。ミスター。

『さて、皆様、大変お待たせしました』

残る優勝候補はルリ嬢、ラピス嬢、セレス嬢の妖精三人衆。
誰だ？ 誰が優勝なんだ！？

『数多くの出場者の頂点に立ち、見事に一番星に輝いたのは』

……ゴクリツ。

『の前に特別賞の発表です』

ズゴツ！

プ、プロスさん。

流石過ぎる司会です。

「ア、アタタ」

「思わずズッコケてしまった。染まってるな。俺も」

「・・・アキトさん。今更です」

「かもしれん」

ノリが良いですよね。ナデシコのクルーって。

ま、気を取り直して・・・特別賞なんてものがあるのは知らなかったな。

『こちらの賞は影の優勝と言っても過言ではない特別な方法で決められました』

おお！ 影の優勝。

大きく出たなあ。

盛り上がってきたぞお。

『もしも後もう一人に投票出来たら。皆様はそう思いませんでしたか？』

うん。思った。思った。

『そんなご期待に応える為に、皆様には極秘でアンケートを取っていたのです！』

ダダンと効果音付きで手を突き出すプロスさん。

うん。演出が細かいね。

『な、なんだってえ！』

はい。わざとらしいアクションありがとうございますとごいします。会長。

『私が極秘で調査員を編成し、皆様の会話や言動から候補者を調査し、最も話題に挙がった者を特別賞受賞と致しました』

なるほどね。要するに話題性みたいなものか。どれ程、その人の事が話に出たのだったか。

『特別賞受賞はトラの着ぐるみで可愛らしさを演出した可憐な桃色の妖精ラピス・ラズリさんです』

『・・・ニヤ～・・・』

『う、うおおおっおおお！』

あ、あれは、原作でルリ嬢が来ていた猫の着ぐるみ。な、なんてサービス精神に溢れているんだ、ラピス嬢。それを無表情で乗り切ってしまう貴女が怖い。

「なにテンション上がってるのよ。コウキ君」

おっと、失礼しました。

「・・・私も着てみようかしら」

「・・・今度、私も着ます」

聞こえていますよ。御二人さん。

うん。知らない振りして楽しみにしてよっと。

『それでは、今度こそ、第一位の発表を行いたいと思います』
『うおおおうおおお！』

歓声。会場は最高潮。

この盛り上がりは異常ですね。
凄まじいです。はい。

『なんと！ 第一位は同票で二名の方が受賞しました』
『おおおおお！』

なるほど。そうきましたか。
だから、優勝候補の二人が残っちゃった訳ね。

『我々も協議いたしました。止むを得ない、
むしろ、デュエットもまた良しという結論に達し、このような形
となりました』

まあ、良いと思う。
別に優勝が二人いても。

有名なサッカー漫画で優勝チームが二つなんて事もあったし。
要は納得して満足してるかだもんな。

『それでは、発表いたします』

沈黙。

会場、艦内、その全ての音が止んだ。

『第一位は・・・』

ゴクリツ。

誰もが息を呑む。

『透き通るような声、美しい音色、抜群の可愛らしさで私達を魅了
し、

私達を虜にしてくれた銀色の妖精セレス・タイトさん』

『おおおお！』

『そして！ その感情溢れる愛の歌で、

私達の心を暖かく優しく包み込んでくれた妖精女王ホシノ・ルリ
さんです』

『おおおおおっおおおお！』

途端、大歓声が艦内、会場内を木霊した。

第四十六話（後書き）

はい。お待たせしました。

さて、コンテストの結果はこのようになりました。

まあ、なんとなく分かっていたと思います。

終わり方が中途半端な気もしますが、これは次回への布石です。
ちよっと大袈裟な表現ですが・・・。

第四十七話（前書き）

大変遅くなりました。
コンテストの結果発表。その後の話です。

第四十七話

「……………」

俺からしてみれば分かりきっていた結果発表。

「……え？」

でも、当人からしてみれば予想外だったみたい。

ルリ嬢は、まあ、そこまで驚いてはいない。

一度経験積みだったからだろうな。多分。

でも、もう片方の最優秀賞受賞者は……しきりに首を傾げている。

そんなに予想外だったか？ セレス嬢よ。

まあ、客観と主観じゃ違うしね。

セレス嬢の性格的にも自分が優勝だとは思ってなかっただろうし。

「おめでとう。セレセレ。ルリルリ」

静寂な空気が流れていたブリッジ。

そんな空気を暖かな声が打ち破った。

「「「おめでとう」「」」

ミナトさんに続くよう俺、アキトさん、ゴートさんの三人が二人に声を掛ける。

今でも眼を見開いて身動き一つしないセレス嬢の頭をゆっくりと撫でながら。

あ。もちろん、俺がね。

「えっと、ありがとうございます」

満更でもない様子のルリ嬢。

やっぱり一位は嬉しいもんさ。

魅力的だって証拠だもの。

「……………」

そろそろ反応しようか。セレス嬢。

「セレスちゃん」

「…………あ。はい」

「おめでとう」

「…………えっとお……………」

眼をパチクリとさせながら見上げてくるセレス嬢。

そんな様子にクスツと笑いつつ、セレス嬢を抱き上げる。

「…………あ」

「ルリちゃんと同時に入賞だけど、第一位、おめでとう。セレスちゃん」

「…………あ。はい!」

ようやく実感したのかな？

喜びを全面に押し出した満面の笑顔をこちらに向けてくれるセレス嬢。

おお！ その笑顔が眩しいぜ。
流石は艦内で一番魅力的な女の子だ。

「ふふつ。さてつと、入賞者は会場に移動だつてよ」

笑顔で喜びを分かち合う俺とセレス嬢。

そんな俺達を微笑ましそうに眺めていたミナトさんが颯爽と席を立つ。

言葉通り、会場へと移動しなければならぬようだ。

「それじゃ、コウキ君」

「え？ あ、はい」

えつと、この場面で何故俺に？

あ。セレス嬢も会場へ行かなくちゃいけないって事ね。
了解。了解。

「はい。セレスちゃん。頑張つて」

グツと拳を握つてやる。

「・・・はい！」

満面の笑みで応えてくれるセレス嬢。
うん。頼もしい笑顔だ。

「違つわよ。コウキ君」

「え？ 違つ？」

セレス嬢と眼を合わせて思わず首を傾げてしまう俺。

うん。セレス嬢にはピッタリだが、俺は自重するべきだな。とても似合う仕草には思えん。

「エスコートしてあげなくちゃ。貴方だけのアイドルを」

ニコツとウインクしてくるミナトさん。

ミナトさんの言葉の意図を理解し、視線をセレス嬢に戻すと……。そこには、頬のみならず首筋まで赤く染めたセレス嬢の姿が。ああ。今更ながら恥ずかしいって奴ね。分かるよ。俺もちよっと恥ずかしい。

「今回はセレセレに花を持たせてあげるわ」

笑顔を浮かべつつ先にブリッジから出て行くミナトさん。

「ええっと」

「……………」

「行こっか」

「……………はい」

セレス嬢の手を繋いでブリッジから退室する俺。

なんでもいいけど、ミナトさん。

とてもじゃないけど、俺は花なんて柄じゃないですよ。

セレス嬢が喜ぶような花にはとてもなれません。

「……………」

どことなく嬉しそうに見えなくもないけど……………。

「受賞者の皆様が揃ったようですね」

会場に集まった受賞者達。

その総数は六名。

二位と特別賞以外は複数受賞だけど、まあ、仕方がないでしょ。というより、妥当な判断だと僕は思います。はい。

「それでは、早速表彰式と参りましょう」

会場のステージの上に並ぶ六名。

その誰もが魅力的だ。うん。誰だってそう思っている筈。

まあ、ミナトさんとセレス嬢には敵わないがな、と言ってみる。

「第三位メグミ・レイナードさん」

「はい！」

元気良く返事をして、ステージの真ん中へと歩いていくメグミさん。その佇まいは場慣れしているなあと実感させるプロの仕草だった。流石は元声優。きつと多くのファンがいた事だろう。

「おめでとさん」

「ありがとうございます」

ウリバタケさんよりトロフィーを渡され、満悦の様子。

とても第三位がもらえるとは思えない程の豪華なトロフィーだった。

「それでは、御願います」

マイクを渡されるメグミさん。

トロフィーを片手に、マイクを握り、その視線は……。

「ガイさん」

ダイコウジ・ガイ、改め、ヤマダ・ジロウに注がれていた。

「私達が侵略者だと思っていた木星蜥蜴が本当は木連という同じ人類だった」

その眼差しに込められた想いは何なのだろう。

「そんな事実を知った時、私は迷い、同時に、これが戦争なんだな
って、そう実感しました」

ガイを真摯に見詰めるその視線。

「怖くて、戦争から逃げたくなって。でも、そんな私を支えてくれたのがガイさん。貴方でした」

その視線には無上の愛が込められていた。

「貴方のお陰で今の私がいる。そう私は胸を張って言い切れます。
ありがとうございます」

一礼し、元の居場所へと帰っていくメグミさん。

「……………」

シーンと静まり返る会場。

一 拍置いて、拍手音が会場中を包み込んだ。

「ありがとうございます。見事なスピーチでしたね」

はい。本当に。

ガイとメグミさんが相思相愛だつて伝わってきた。

整備班の連中も文句が付けられないくらい、バツチリと。

妬みがガイに向かう事なく、むしろ、バシバシと笑顔で叩かれています。

大事にしるよつて。大切になつて。幸せになれよつて。

なんだかんだ言つて、男らしいカツコイイ人達だなつて思う。整備班の男達。

「それでは、続いて、同じく第三位ハルカ・ミナトさん」

「はい」

お次はミナトさん。

メグミさんのようなプロの仕草じゃないけど、どこか洗練された大人の魅力を感じる。

こんな色気は他の受賞者にはないだろうなあ。

あ。タイプの違いだから。決して貶している訳ではないので。

「色っぽかったぜ」

「ふふつ。ありがと。ウリバタケさん」

「どこまでも魅力的な女だよ。お前さんは」

全くもつてその通りです。

その状況でその余裕、その笑みは最早反則でしょう。

「それでは、御願います」

マイクを持ち、ステージの中央に堂々と立つミナトさん。
スポットライトが彼女一人に集まり、まるで舞台女優のようだった。

「・・・・・・・・」

無言であたりを見渡すミナトさん。

誰もが何を話すのだろうかと思いを固唾を呑んで見守っている。

そんな中、ミナトさんは……。

「ただ一言だけ」

……ゆっくりと口を開き、言葉を紡ぐ。

「皆が幸せになれますように。ただそれだけを祈ってます」

一礼するミナトさん。

その言葉に込められたミナトさんの想いは深過ぎて俺には分からなかった。

でも、その優しさや暖かさが身を包み込んでくれたかのような、そんな気がした。

「ありがとうございました」

ミナトさんが去ったと同時に大喝采。

誰もがミナトさんの言葉に聞き入り、優しさに触れていたと思う。なかには涙を浮かべる人までいる始末。本当に凄い人だなんて思った。

「たった一言にここまで想いを込められるものなのでしょうか？
愛に包まれた御言葉でした」

万感の想いを込めて告げるプロスさん。
その気持ち、僕も分かります。

「それでは、続きまして第二位ミスマル・ユリカさん」
「はい！」

ビシユツと手を挙げるユリカ嬢。
相変わらず元気だなんて思う。

その明るさとカリスマ性が彼女の艦長たる所以なんだろうな。

「惜しくも二位だったが、良かったぜ。艦長」
「ありがとうございます。ウリバタケさん」

第二位を示すトロフィーを受け取るユリカ嬢。
最早その豪華さは第一位と言っても過言ではない。
いや。金使ってるね。ネルガル。

「それでは、艦長、御願います」
「はい」

渡されたマイクをしっかりと握って、ステージの中央に立つユリカ嬢。

「艦長として、私はここまでやってきました」

ゆっくりと一文字一文字を丁寧に話していく。

「突然の火星行き、火星からの脱出、木連の真実。私達は多くの事を経験してここに立っています」

その真剣な眼差し。そこにはいつものばやばやしたユリカ嬢の姿はない。

艦長として、人を導き、引っ張っていく。そんな上に立つ人間の才一ラを感じられた。

「迷った事もあったでしょう。苦しかった事もあったでしょう。それら乗り越えて、皆さんは今、ここにいます」

力強い眼差し。その瞳が観衆の心を掴んだ。

「皆さんは私にとって家族です。ナデシコは私にとって家です。大切な人達と大切な場所。それがナデシコです」

ナデシコ。俺の、俺達の船。

「これからも私達には多くの困難が立ち塞がる事でしょう」
常に最前線に立たされてきたナデシコ。

最早この戦争の中心と言っても過言ではない。
いや。事実、大きな意味を持つ。

唯一、木連に対して面と向かって接触したのだから。

「ですが、皆さんが私に、私達に力を貸してくださいれば乗り越えられると、そう思っています」

艦長として、一人の人間として、和平の為に尽力したユリカ嬢の姿を俺は知っている。

いつもお気楽そうに見えても、その頭の片隅では常にナデシコの事を考えているのだと俺は思う。なんだかんだいって頼り甲斐があるミスマル・ユリカ艦長。ナデシコクルーは誰だって、彼女を信頼し、付いていこうと考えている。その果ての和平を目指して。

「もしかしたら、私は艦長じゃなくなってしまうかもしれませんが優勝景品は艦長の座。そう決まっている。でも、誰だってあの席に座るべきなのが誰かなんて事は理解している。」

「でも、私はこの私達にとって大切な場所であるナデシコの為に尽力しようと思っています」

皆、そう思ってますよ。艦長。

「だから、どうか皆さんも力を貸してください。まるで闇の中を歩くようだけど、必ずその先には光があるから」

一礼。

ユリカ嬢の想いは全てのナデシコクルーに伝わった筈だ。改めて、俺はこの人に付いていこうと、そう思った。

「ありがとうございました」

プロスさん。貴方がスカウトしてきた艦長は最高の艦長ですよ。誇りに思ってください。貴方の眼は確かだ。

「私には推し量る事の出来ない彼女らしい想いの詰まったスピーチでした」

艦長は貴方こそが相応しい。ミスマル・ユリカ。

「続きまして、第一位に入る前に特別賞の授与を行いたいと思います。特別賞ラピス・ラズリさん」

「……………」

無言で歩くラピス嬢。

……着替えてこなかったんだね。

猫の姿のままだなんて。あまりにもシユールだ。

「お、おめでとさん」

「……………ニヤ……………」

「グハツ」

ウリバタケさん。吐血。

いや。破壊力抜群ですよ。ラピス嬢。

「そ、それでは、御願います」

プ、プロスさんまで！

ラ、ラピス嬢。な、なんて恐ろしい子なんだ。

「ニヤニヤ……………ニヤニヤニヤ……………」

……………一礼。

ラピス嬢が去ると同時に……………。

「グハツ」

男共の吐血。いや。分かるぞ。

その気持ちは痛い程に分かる。

あの破壊力の前では全てが無力だ。

「」

女性の方々も恍惚とした表情で見守ってるし。

一瞬にして会場はカオスだな。

艦長の余韻もあつたもんじゃない。

「あ、ありがとうございます。か、可愛らしいコメントでしたね」

額をハンカチで拭いつつの司会進行。

今回はマジで汗を掻いてた模様です。

「そ、それでは、コホン、遂に第一位の表彰です。同時優勝セレス・

タイトさん、ホシノ・ルリさん」

「はい」

「・・・はい」

優勝という事で差を付けたくなかつたのだろう。

同時にステージの中央に移動する二人。

「おめでとさん。可愛かつたぞ」

「・・・ありがとうございます」

受け取るセレス嬢。

「おめでとさん。想いが伝わる良い歌だった」
「ありがとうございます」

受け取るルリ嬢。

うん。冷静に考えてみようか。

・・・でか過ぎだよね。身長と同じくらいってどうよ。

ルリ嬢もそうだけど、セレス嬢とか頑張ってる感が漂ってて落ち着かない。

こら！ 誰か持ってやれっての！ 重たそうにしてるだろうが！

「ひとまず床において頂いてもよろしいですよ」

一生懸命持ち上げてたトロフィーを床に置いてようやく一息。
うん。こつちもようやく落ち着いたよ。

「それでは、お先にセレス・タイトさん。御願います」

プロスさんからマイクを受け取り、ギュッと握りこむ。
恥ずかしそうに俯くその姿からは庇護欲を湧かせる。
うん。将来が怖いぜ。名付けるなら天然系小悪魔か？
男共が骨抜きにされるのが今からでも想像できる。

「・・・私はずっと暗い所にいました」

その小さな口からゆっくりと紡がれる言葉。

「・・・苦しくて、寂しくて、辛くて。私がいた所はそんな場所です」

非合法で、非公式な研究所。

それが彼女の生まれてからナデシコに来るまでの居場所だった。

「・・・毎日が実験の日々でした。毎日カプセルで寝させられていました」

IFS強化体質、所謂マシンチャイルド。

それが彼女、セレス・タイトの抗えない事実。

彼女は罪深き科学者によって生み出された実験体なのだ。

「・・・死にたい。そう思う感情もなかった。私は・・・人形でした」

ただ実験し、成果を記録されるだけ。

それに対して、何の感情も浮かべずに流されるままだった。

当たり前だ。生まれて感情を育む時間さえ与えられなかったのだから。

「・・・でも、そんな私にも大きな転機が訪れました」

人形として生きてきたセレス嬢。

そんな彼女が変われた瞬間。

間違いなく・・・ナデシコだろう。

「・・・光明が差し込んだ。こんなにも暖かくて優しい場所が私を迎え入れてくれた」

ニコリと笑うセレス嬢。

その笑顔は初めて会った時とはまるで別人の心からの笑顔だった。

ナデシコが彼女を変えたんだ。こんなにも魅力的な女の子に。

もう人形なんて言わせない。セレス嬢。君は紛れもなく人間だよ。

「・・・たとえばマシンチャイルドであろうと受け入れてくれる人がいるんだって、

皆さんは私にそう教えてくれました」

これから先、きっとマシンチャイルドである事を受け入れてくれない人もいると思う。

でも、少なくとも、ナデシコクルーは皆、君の味方だから。

たとえ、IFS強化体質であろうと、木連人であろうと、素直な気持ちで受け止めてくれる。

そんな優しい人達が君の後ろで君を支えているんだ。

だから、安心して踏み出そう。ナデシコだけじゃない。もっと大きな世界に。

「・・・マシンチャイルドである事。皆さんのお陰で私はその事に誇りを持てるようになりました」

「・・・」

「・・・私は・・・私は今、とっても、とっても幸せです。私は・・・ナデシコが・・・大好きです」

ペコリと一礼。

途端、大歓声が会場を揺るがした。

「・・・強くなったな。セレスちゃん」

マシンチャイルドである事。

それが彼女にとっては負い目だった。

自分はマシンチャイルドだからって。

そうやっていつも自分を蔑んで。

でも、こうやって一人の人間として、しっかりと自分を持てるよう

になった。

何だろう。自分の事のように嬉しい。
勝手に頬が緩んでしまう。

「心に響くコメントでした」

うん。本当に。

セレス嬢の想いが伝わってきた。

セレス嬢と同じ時間を過ごせていた事が俺にとっても誇りに思える。
少しでも、俺が彼女の力になれたんだって。

そう思うだけで幸せだ。

「それでは、最後になりました。ルリさん。御願います」

「はい」

多くの心に響くコメント。

その最後にルリ嬢が現れる。

彼女は何を語るのだろうか。

誰もが静かに、固唾を呑んで見守る。

「まず始めに、私は皆さんに謝らなければなりません」

突然の謝罪にあたりがざわめき立つ。

どうしたんだろう？ ルリ嬢。

「艦長コンテストという舞台上、私はただ一人の為だけに歌を唄いました」

静かに、ゆっくりとした口調で話すルリ嬢。

ざわめいていた会場が静まり返る。

「私の想いは伝わってくれましたか？　・・・アキトさん
「ッ！？」

ルリ嬢の口から紡がれたアキトという言葉。
アキトさんが肩を震わす。

「貴方の傍にいたい。私の願いはただそれだけです」

真摯にアキトさんを見詰めるルリ嬢。

アキトさんもまたルリ嬢を見詰め返していた。

「貴方はいつも無茶をして、たった一人で全てを背負おうとします」
「・・・・・・・・」

「私はそんな貴方の姿が苦しかった。私じゃ何も出来ないのかって、
いつも嘆いていました」

まるで会場にはルリ嬢とアキトさんしかいないかのような。
そんな錯覚に襲われる。

「いつか遠くへ行ってしまっくんじゃないかって。いつも不安で・・・」
「

二人だけの世界。

でも、それこそが正しい。

今の二人にとって、俺達は何の意味も持たない。
だけど、そうでなければ意味がない。

二人だけで、答えを見つけて欲しい。

意味を持たない俺は、俺達はただそれだけを祈ろう。

事情が分からない人間だって中にはいると思う。

でも、きつと、誰もが二人の事を想って見守っている。

「ずっと貴方の傍にいて、ずっと貴方を支えていきたい」

「……………」

「私の我が侘なのかもしれません。アキトさんにとっては迷惑なの
かもしれません」

「……………」

「でも、こんなにもただ一人を想った事なんて今までに一度もあり
ません。……アキトさん」

「……ルリちゃん」

「私は貴方を愛しています。貴方の隣に……私の居場所はありませんか？」

涙を浮かべたルリ嬢の告白。

どこまでも深い愛がルリ嬢からアキトさんに注がれた。
人を愛する美しさを感じさせてくれる。

そんなただ一心に相手を想う告白だった。

「俺はいつまでも変わらず無茶をし続けると思っ」

「……………」

「無茶してでも結果を残す。それが俺の贖罪だと、今までずっと考
えていた」

「……………」

「でもね、ルリちゃん、辛いんだ」

「アキト……さん？」

「何をしても報われず、どれだけ経っても悪夢が襲う。碌に眠れる
日なんてあれから一度もない」

まるで生きる事に疲れたかのような。

そんな重みのある言葉がアキトさんの口から紡がれた。

「でもね、ルリちゃんが傍にいてくれる。そう思うだけで生きよう
って思えるんだ」

今のアキトさんでは考えられない昔のアキトさんの口調。
きつと今、二人は昔の二人に戻っているんだ。

罪を償おうと生き急ぐアキトさんではない。
昔の優しいコツクだったアキトさんに。

「ルリちゃんが支えてくれる。そう思うだけで頑張ろうって思える
んだ」

「・・・アキトさん」

「こんなにも情けなくて頼り甲斐のない俺だけど、

いつまでも無茶し続けて、心配させ続ける俺だけ・・・」

「・・・」

「ルリちゃん、君はずっと俺の傍にいてくれるかい？」

「・・・ッ！ はい・・・はい！」

零れ出る涙。

それはきつと心から溢れた喜びの雫。

ようやくルリ嬢の想いがアキトさんに伝わったんだ。

「アキトさん！」

ステージから飛び降りて、一直線にアキトさんのもとへと向かうル
リ嬢。

周囲で二人を見守っていたクルーは暖かい笑顔で道を作る。

「アキトさん！」

ダツとアキトさんへと飛び付くルリ嬢。

アキトさんもまたしっかりとルリ嬢を支え、抱き締めた。

「いつまでも傍にいて欲しい。ルリちゃん」

「はい。いつまでも貴方の傍に」

溢れんばかりの拍手の中、二人はこうして結ばれた。

ルリ嬢が抱えていた長く深い想い。

その想いが叶った瞬間を俺は見届ける事が出来たんだ。

おめでとう。ルリ嬢。アキトさん。お幸せに。

第四十七話（後書き）

THE END

あれ？ またもや最終回っぽい終わり方。
どンドン最終回のハードルをあげている僕。
どうやって最後に終われと？

はい。という訳で一度、ナデシコの人間関係に決着を付けたくなり
ました。

と言っても、アキト&ルリだけですけどね。

僕としては中々に結び方に拘ったつもりです。

最終戦の前の前ぐらいに二人には結ばれていて欲しかった。

きちんとした形で。納得していただけますでしょうか？

唐突感も否認ませんが、

それだけの想いをルリ嬢は歌に込めていたと僕は思います。

あなたが一番になりたい。とても良い歌です。

第四十八話（前書き）

久しぶりの投稿です。遅くなりました。本当に申し訳ありません。

えー。コホン。

久々に書くという訳でブランクを埋めようと、

改訂やら修正しつつ全話を読み返したのですが・・・。

丸二日かかってしまったという恐怖。長いですね。はい。

自分で言うのもなんですが、トラウマとかミナトさんの葛藤とか、その当たりに胸が痛み、泣きそうになってしまいました。

これって本当に自分が書いたの？ 同じような書ける自信ないよ！
そう思いつつ書いた今回の話です。

多少の劣化は・・・うん、ご勘弁を。

それでは、お楽しみ下さい。

第四十八話

・・・えくと、うん。
・・・どうしてこうなった？

「木連の馬鹿野郎〜〜〜！」

えっと、アキトさん。熱血ですね。

「ふふっ。分かってるんだよ。僕じゃ会長なんて務まらないって・・・」

・・・会長。なんて弱気・・・。

「俺だって・・・俺だって、女の子らしい所ぐらい・・・」

ス、スバル嬢。だ、大丈夫ですよ。はい。

「うう・・・。俺なんかヒーローになれるのか・・・？」

いつもの強気はどうしたんだ！？ ガイ！

「大好きですううう。アキトさあああん」

ル、ルリ嬢〜〜〜。一体、君に何があった？

「ルリ〜。うるさいよ〜」

な、なんて天真爛漫。艦長みただぞ。ラピス嬢。

「……コウキさんは私のもの」

コ、コメントに困るぞ。セレス嬢。

「作戦実行中は静かにしなさい。お気楽でやっていける程、世の中は甘くありません」

ク、クールだ。艦長が、ユリカ嬢が、なんか艦長っぽい。

「……クマさん……うふっ……可愛いなあ」

幼き記憶、アイちゃんが表に出てきたんですね。イネス女史。

「嫌ね。皆して私の身体ばかり見て。見たいなら見せてあげるのに」

イ、イズミさん。遠慮しておきます。

「え、えつと……み、皆あ……待つてよお」

ど、どうした？ ヒカル。迷子みたいに涙目で右往左往して。

「ハーツハツハ。皆！ 僕に、いや、俺に付いて来い！ ハツハツハ！」

分かりますよ。ジユン君。暴れたかったんですね？ 溜まってたんですよね？

「はぁ……。やってられないわ。何なのよ」

「イ、イツキさんがグレたああ〜〜〜！」

「お前達、慌てる必要はない。迅速、かつ、冷静に作戦を遂行しろ」

「キ、キノコがダンディーだ。これが素？ いや。違うよな。」

「……なんてカオス」

この状況を説明する為には時間を遡らないといけませんね。はい。

「今日、私達は月奪還の最終攻略作戦に参加する事になっているわ」

艦長コンテストの結果発表から数日が経った。

衝撃的なルリ嬢の告白は一部を除き皆が受け入れ、祝福されている。一部つてのは、ほら、あれ、整備班とかとか。

それ以外は特に異常？ というか、何事もなく進んだ。

正直な話、ユリ力嬢あたりがもう少し何かしらの行動を取るだろうなあとか。

そんな事を考えてただけど……。

「私達は作戦時間までに作戦ポイントに移動し、

その後、ナデシコに新しく搭載された相転移砲で敵艦隊を殲滅します」

・・・意外にもルリ嬢の告白イベントに対しては無反応。
うん、一応は、結果発表の後、一日、二日は閉じ籠っちゃったんだ
けどね。

出て来てからはいつも通りなんだ。

俺の眼が間違っただけなら、態度とかも普段と変わらないし。

あれかな？ 漸くジュン君の想いに気付いたとか。

というか、ジュン君が男を見せたとか。

うん。どうなんだろう？ そういう話も聞かないしな。

でも、直接ユリカ嬢に訊くのもどうかと思うし。

・・・やっぱり恋愛は当事者同士に任せて、俺は傍観するべきだよ
な。

余計なお節介だろうしさ。

あ。ちなみに、艦長コンテストの結果、ユリカ嬢は艦長じゃなくな
った。

・・・なんて事もなく、優勝トロフィーは頂いたものの両者とも艦
長の座は辞退。

結局、第二位であるユリカ嬢が艦長の座を防衛したっていう結末と
なった。

やっぱりさ、ナデシコの艦長は誰が相応しいとか皆が理解している
訳だし。

うん。じっくりくるよ。ユリカ嬢が艦長の方が。

あ。でも、特別賞のラピス嬢との間で揉めたとかなんとかってのも
聞いた。

まあ、所詮は噂だと思う。多分、うん、きっと。

「月奪還最終作戦において、私達ナデシコは作戦の核を担っていま
す」

まず、地球連合軍の艦隊が木連の艦隊と交戦。

その後、うまい具合に敵を引き付けつつ、機を見て離脱。纏まった状態で停止している敵艦隊を側面から大量撃破。作戦としてはまあ、こんな感じだ。

それを達成する為には、

うまく月で隠れつつ作戦ポイントに到達しなければならぬ。

ま、実際、移動にはあまり艇子摺らないと思われる。

原作でも、移動に関しては支障なかったし。

だが、しかし、他の所で問題があったんだよな。これが。

それはYユニットの制御を乗っ取られるという仰天の事態。

元々、四番艦であるシャクヤクに取り付けられる予定だったYユニットだ。

いくら規格が同じだからって、一番艦のナデシコに取り付けるのは無謀だった。

その隙、というか、穴を突かれて敵機の侵入を許し、ハッキングを受けてしまう。

まあ、それはYユニットに搭載されたサルタヒコの整備ミスってのも原因。

今回は取り付けの際にきちんとハッキング対策をしたから大丈夫さ！

「皆さんの力を遺憾なく発揮して、作戦を成功させましょう！」

「……………おおおおお！」「……………」

……でも、皆、忘れてないか？

敵艦隊の殲滅。それと同時に失われる莫大な量の命を。

人を殺すんだって……。

少なくとも俺はそれをきちんと受け止めようと思う。

・・・なんて余裕ぶっこいている時が僕にもありました。

うん、まさかね、同じようにハッキングされるとは思わなかった。このハッキングは制御が不可能になるってのもう一つ問題がある。それはIFSなどナノマシンを持つ者の意識が争奪されてしまうという事。

まあ、簡単に言えば、日頃の人格を奪われ、隠された人格が表に出るってな訳さ。

別に二重人格って訳じゃないと思う。

でも、ほら、抑圧されたストレスとかが爆発して犯罪を起こしてしまったみたいな。

そんな感じで人には深層心理世界に幾つもの意識を持つんじゃないかなと。

そして、それが主人格が奪われた事で表に出てくるって感じ。具体的に言えば・・・。

「アキトさん。アキトさん。アキトさん。アキトさん。テヘッ」

頬を緩めながらオペレーター席で含み笑いをするルリ嬢とか。

「ん~~~~。気持ち良いです。ずっとこうしていてもいいですか？」

「え。あ。うん。いいよ」

思う存分って感じで抱き付いてきて饒舌に話すセレス嬢とか。

日頃の二人じゃ絶対にしないであろう事をしてしまっている。

俺の記憶によればコミュニケを通して意識が奪われてしまうんだよな。

今回、対策万全だし、別にコミュニケを外さなくても大丈夫だろう。とか、甘い事を考えて、普通にコミュニケを付けていた自分を罵りたくなる。

いや。別に俺自身は何故か大丈夫なんだ。

でも、知ってて、この事態を招いてしまったのが悔やまれる。何よりもまずいのが、アキトさん達の記憶が流出する事。

今回、意識を奪われると同時に記憶も奪われてしまう。

まあ、最終的には戻ってくるんだけどさ。

でも、たくさんの意識を奪っておいて、それが独立している訳がない。

敵のハッキングにより、彼らは意識が混在してしまうんだ。

いや、別に意識が混ざり合って新しい人格が生まれるとか、そういう訳じゃない。

ただ、意識の混在化により、記憶が流出、統合という形で過去を知られてしまう。

別に原作のように、まずい記憶がなければ、うん、困るけど、問題はない。

でも、今回のように未来の記憶を持つアキトさん達がいるのは非常にまずい。

アキトさん達が経験した事。それを実体験のような形で垣間見る事になる。

更には、俺達が隠してきたボソソジャンプの事や計画の事がバレてしまうかもしれない。

いや、別にヒカルやスバル嬢、ガイなんかの普通のパイロットは構わないんだ。

きっと、何か奢ってね、とかは言うだろうけど、黙っててくれると思うから。

でも、あの極楽トンボに知られるのはマジでまずい。

会長という強い権力を持つ彼が計画とかの事を知ったら……。

うん、計画の建て直しが必要になる。ボソソジャンプの事も。

……はあ。まさかな……。

でも、どうしてこんな事になったんだろう？

確かに俺もルリ嬢もしっかりと点検して万全にしていた筈なのに。

「……コウキ君。これが話に聞いてた……」

「はい。裏人格って奴ですね。人間って面白いです」

「……現実逃避はやめなさい」

「……はい」

突如、性格というか、キャラが変わってしまった彼らに困惑する――
同。

ユリカ嬢の変化とかマジで恐ろしい。

いつもあれだと思うと……。

うん、言葉に表せないね。

「でも、どうしてコウキ君だけ平気なのかしら？」

「俺にもそれが分からないんです。どうし……」

ん？ なんだ？

「どうかしたの？ コウキ君。まさか、今から変わったちゃうとか！
？」

そ、それはないと思いますよ。

「いえ。あれ？ おかしいなあ……」

幻覚が見えた。

なんというか、右目と左目で違うものを見ているかのような。

「あれは……」

牌？

『ポン』

『チー』

『ロン』

『……次はどうやら私の記憶のようね』

あれ？ 今度は幻聴まで……。

でも、これって、確か……。

「……コウキ君？」

怪訝な表情で見詰めてくるミナトさん。

「……どうやら、俺も一応は意識を奪われているみたいですね」

「え？ それってどういう意味？」

「ミナトさん。俺は今、どこにいますか？」

「え？ブリッジでしょう。なんでそんな当たり前の事を訊くの？」

ミナトさんが言ったように俺が現在いる所はブリッジのいつもの席。そして、パイロットとジュン君は制御を取り戻す為にユニットの制御室まで自転車で移動中。

……何故自転車かは置いといて、だ。

その他、俺達ブリッジクルーはブリッジで待機しつつ作戦ポイントに移動させてるって状況。

もちろん、彼らの豹変はブリッジをも困惑させたさ。

メグミさんとか、秘書さんとか、プロスさんとか特に。

あ、でも、プロスさんはなんか感動の涙を流している。

漸く艦長としての自覚が……とかなんとか。

プロスさん。今日だけですから。南無。

「もちろん、見えるものも聞こえるものもブリッジの事の筈です」
「え、ええ。それはそうよね」
「でも、ブリッジの事と同時にパイロット組みの会話も聞こえます」
「それは話していた記憶麻雀の奴？」
「ええ」

何故かは知らないけど、彼らは記憶を垣間見る際に麻雀を利用して
いる。

それぞれの牌に引き込まれた者の顔が書いてあって、
ロンを出した時の模様の奴の記憶が見られるって感じだったかな。
確か。

「俺にも良く分かりませんが、俺はどちらの空間？にも存在してい
る訳です」

「そう。不思議な状況ね」
「ええ。まったくもって」

本当に不思議だ。

「あれかしら？ まがりなりにも意識を奪われた経験で耐久力が付
いたとか」

「・・・嫌な成長方法ですね」

あのトラウマの事は今でも忘れた訳ではない。
忘れず、きちんと心の中にしまつてある。
二度とあんな事をしでかさない為に。

「人間万事塞翁が馬。何が事態を好転させるか分からないわね」
「まあ、確かにそうですね」

そう思えば、無駄な経験ではなかったとも……。いや。反省はちゃんとしないと。言い訳にしちゃ駄目だ。

「コウキさん。抱き締めてください」

「え〜っど?」

突然の宣言。

どうすればいいんだろう?

「抱き締めてあげなさいよ。御願いされてるんだし」

「でも、この時の事ってあんまり覚えてないらしいんですよ」

「それならそれでいいじゃない。きつといつもやって欲しいって思ってるのよ」

「……駄目ですか?」

うん。はい。参りました。

「うん。分かったよ。はい」

「気持ち良いですう」

……まるで子猫のようだ。

隣でミナトさんは悶えてるし。

「とにかく、俺は一度あちらの方に参加してこようと思います」

「そんな事が出来るの?」

「多分ですけどね。どちらにも意識があるなら意識次第で……」

ブラックアウトとは違い、

うん、まるで夢の中に入るかのような感覚で、

俺はブリッジから意識を手放した。

「そういえば、さつきからコウキは何の反応も示さないな」
「どうかしたのでしょうか？」

ん〜。成功・・・かな？

「うん。ちょっと頭が痛いな」

「お。やっとコウキが反応したな」

「ん？ おお。ガイか」

総勢十五名の麻雀大会。

うん。常識じゃ考えられない状況だな。

あれかな？ ルールとか皆無なのかな？

「さつきまで黙っていたが、何をしていたんだ？」

対面に座るアキトさんから話しかけられる。

ちなみに、左隣にセレス嬢、右隣にガイだ。

「面白い事ですね、俺は現実世界にも意識があるんです」
「ん？ どういう事だ？」

円卓に座る皆から視線を向けられる。

「えっと、皆さんは今、現実世界っていうか、実際にどんな状況が分かってます？」

わかりやすく、こつちの世界を混在世界、
向こうの現実の世界を現実世界と呼ぶ事にしよう。

「私の見解では、普段抑圧されている人格が表に出ていると考えているわ」

流石はイネス女史。

普通はそんな事は分かりませんよね。

「ええ。その通りです。現実世界の事は認識できてますか？」

「いいえ。別の人格、意識っていつてもいいわね、だもの。分からないわ」

「はい。ですが、俺には分かるんです」

「ああ。さつきから何言ってるか分かんねんだよ！ もっとわかりやすく言え！」

うおっ！ スバル嬢が暴走した。

「・・・なるほど。そついう事」

不敵に笑うイネス女史。

ああ。完全に理解した顔だな。あれは。

「要するに、私達の恥ずかしい一面を彼は知ってるって訳よ」

・・・なんでそうやって人聞きの悪い言い方をするかな？

「な、何だと!？」

妙に驚くスバル嬢。

・・・まあ、隠れた欲求を知られるようなものなのかもな。

「ねえねえ、コウキ、私ってどんな感じだった？」

楽しそうに訊いてくるけどさ・・・。

「結構、予想と違うと思うぞ。多分、聞いたら後悔する」

「マ、マジ？」

「うん。マジ」

まあ、ヒカルはそんなでもないけど・・・。

「な、何よ？ 私がなんだっていうの？」

キノコさんの変化は今でも信じられない。

「ヒカル。提督がクールを地でいくダンディーな人だったと思う
」？

「んげ。似合わないと思う」

「うん。そんな感じ。それぐらい、皆違うから」

「・・・やっぱやめとく」

顔を引き攣らせながら下がっていくヒカルだったとき。

「ちょ、ちょっと、勝手に私を例にしないでよ！」

「提督。昔の貴方はもしやあんな感じだったの」

「キーーーーー。だ、黙りなさい！」

・・・ムキになったって事はそうなのかも・・・。

うん、やっぱり、信じられない。

「……………怖くて訊けない」

はい。訊かなくて正解だと思います。イツキさん。

貴方も結構ストレスが溜まってたんですね。

まさか、グれるとは思いませんでした。

「コウキさん」

「何？ ルリちゃん」

「私達はサルタヒコに対して万全の対策をした筈です。

それなのに、一体何故このような事態を招いてしまったのでしょうか？」

眉を顰めながら問いかけてくるルリ嬢。

確かに、俺も気になっている。

「分かった。ちょっと調べてみるね」

「はい。御願います」

まずは現実世界に戻って、オモイカネに訊いてみるか。

「戻れるのか？」

「ええ。意識を完全に奪われていない状況ですからね」

「なるほど。経験、もしくは、ナノマシンの性能差か」

ああ。そういう考え方もあるのか。

俺の体内ナノマシンってやばい高性能らしいしな。

たかがこの程度のハッキングじゃ攻略されないってか？

まあ、現状じゃ分かりっこないんだけど。

「それじゃあ、俺は行きます」

「ああ。頼むな」

「御願います」

「あ。マエヤマさん。お土産よろしく御願いし

「くくくく 艦長！」

「シクシク。頑張ってきてくださあい」

ははっ。やっぱり艦長はこつでないと。

「……………」

・・・戻ってきたか。

「おかえりなさい」

「ただいまです。よく分かりましたね」

「ま、それぐらいは当然よ」

ウインクを飛ばしてくるミナトさん。

自分の事を分かってもらえてるってちょっと嬉しかった。

「それよりも、どうしたの？」

「ええ。ハッキング対策は万全だった筈。

それなのに何故ハッキングされてしまったのか。

それを調べる為に一度戻ってきました」

「そっか。オモイカネにでも訊いてみるの」

「ええ。多分、それが一番の近道かと」

えーっと、オモイカネにコンタクトを　。

「マエヤマさん！ 作戦行動中に何をしているんですか！？」

うおっ！ か、艦長？

「作戦中に勝手な行動は困ります」

「せめてそれらしい理由を説明しろ」

な、なんて息の合った指揮官コンビ。

この状態のユリカ嬢と提督が組んだらもしや最強か？

「ハッ！」

こういう時に軍人だった時の経験は役に立つ。

割と様になってる筈だ。僕の敬礼。

「現在、御存知の通り、敵より我が艦はハッキングを受けております」

「うむ。続けよ」

「ハッ！ しかしながら、私達はハッキングを危惧し、万全の対策を取っております」

「なるほど。対策を取っておきながら、それを突破されてしまった。その原因が知りたいと」

「ハッ。その通りであります」

な、なんかミスマル提督ぐらい緊張する。

こ、これが本来のキノコパワーか？

「あの・・・ミナトさん」

「何？ メグミちゃん」

「皆、一体どうしちゃったんですか？」

「えっとね、うん、色々あったのよ」

「で、でも、ガイさんがガイさんらしくないんです」

「えーっとね、それは・・・」

とりあえず、周りへの説明は、ミナトさん、お任せします。

「艦長。如何する？」

「確かに早急に原因を見つけ出す必要がありますね。許可しましよ
う」

「だ、そうだ。マエヤマ。早急に原因を探り当て、報告しろ」

「ハッ！ 了解しました」

敬礼し、席に戻る。

あ。ちなみに、怒られるの覚悟でセレス嬢は抱っこしたままでした。
待っててって言っても多分離れてくれないと思ったので、止むを得
なく。

でも、何故かスルーされ、うん、激しくラッキー。

「どうにか許可を頂けました」

「ふふっ。お疲れ様。でも、今の感じが本当の軍艦なのね」

「まあ、気にしちゃ駄目ですよ。ナデシコですから」

「そうね。ナデシコだものね」

なんでもナデシコだからで納得で来てしまっ。

それが不思議なナデシコクオリティ。

「オモイカネ。ちょっといいかい？」

手元のコンソールに触れ、オモイカネにコンタクトを取る。

『何？』 『何でしょう？』 『教えたくない』

何故か既に反抗期の奴もいる。

「どうしてハッキングされちゃったの？ 対策してあったよね？」
『知らない』 『僕は悪くない』 『あいつが悪いんだ』

でも、何故か反抗期の奴が一番素直に状況提供してくれる。
人間っていうか、思考って面白いよね。

隠そうと思えば隠す程、それを露見させちゃうんだから。

「あいつって？」

『サルタヒコと・・・シタテル』 『サルタヒコが悪い』 『シタテルとサルタヒコ』

シタテル？

お話相手で、オモイカネの恋人のシタテルの事だよな？
後、満場一致でサルタヒコらしい。

「シタテルが何かしたの？」

『サルタヒコと』 『ばっかり』 『話すから』

・・・もしかして、ヤキモチ？

「サルタヒコは？」

『喧嘩中』 『絶対に許さない』 『シタテルは僕の』

うん。決定。完全にヤキモチだ。

「今、シタテルは？」

『サルタヒコの所』 『シタテルの馬鹿』 『もう嫌い』

え〜と・・・。

要するに、シタテルの取り合いで喧嘩したオモイカネとサルタヒコ。その両者間の疎通が成されていない所を突かれちゃったって事かな？いくら両者に対して対策を万全にさせても間を抜かれちゃあな。

シングルスで凄いうまいプレイヤーでも、ダブルス組むと滅茶弱いとか。

多分、きつとそんな感じなんだろう。

う〜ん。とりあえず、パイロット勢がハッキング元は破壊するだろうし。

二人、というか、三人の三角関係は後でルリ嬢達と相談して修復だな。

・・・はあ。予想外の連続で溜息が出ちゃうぜ。

まさか、両者間の喧嘩が原因だったとは。

原作でもきちんと接続されてなかったのが原因だったらしいし。

ある意味、これも接続不良だもんな。

そこらへんも含めての整備ミス。うん。反省。

まあ、とにもかくにも多くの人間を巻き込んだ痴話喧嘩っちゅう訳だ。

はあ・・・。

「ミナトさん。という訳です」

「ハハハ・・・。了解」

苦笑いのミナトさん。

まさか痴話喧嘩で危機に陥るなんて思いもしなかった。

「とりあえず、艦長達に報告を」

「あ。それは私が出つとくから、ルリルリ達に教えてきてあげなさいよ」

「そうですね？ それじゃあ御願ひします」

任せてばかりで大変申し訳ないです。

あ、いや、違うな、本当にありがとございます。ミナトさん。それじゃあ、もう一度、混在世界へ行つてくるとしますか。

第四十八話（後書き）

痴話喧嘩が原因。

いや。びっくりです。

次話ではアキト君達の過去がバレてしまいます。

困りましたね。はい。どうしましょう？

頑張って執筆します。

PS コウキ君が巻き込まれなかったのはナノマシンの恩恵です。

多少、経験という点もあるかもしれませんが、

その大半の理由はナノマシンです。高性能ですからね。彼の。

第四十九話（前書き）

更新します。

意外とこのコミュニケーション混在事件は長くなりそうです。

まあ、次回あたりで終わると思います。・・・。

なお、今回の話、難産でした。

最後の辺り、いくら考えても良い言葉が思い浮かばず・・・。

うまく言い回せていないと思いますが、楽しんで頂けると嬉しいです。

第四十九話

「……という訳ですよ」

投げやりに言っちゃうのも仕方がないと思うんだ。

「そ、そうですね……」

うん。ほら、ルリちゃんも顔を引き攣ってるし。

「ち、痴話喧嘩……」

うん、皆さんも呆然としてらっしゃいますね。

このチャンスを逃してなるものか。

「……アキトさん」

「あ、ああ、何だ？」

アキトさんの席まで移動して内緒話。

今の状況で話し合う事なんて決まりきってる。

「……いいんですか？」

「……記憶の事か？」

「ええ。未来の事が知られてしまうという事もそうですが……」

「……アカツキ……か」

「はい」

一応は協力体制のアキトさんとアカツキ会長。
でも、カイゼル派との協力体制とはまったく違う。
恐らく、アキトさんは会長にボソソジャンプのデータを提供してないだろうし。

「・・・俺はある意味、良いきっかけになると考えている」
「きっかけ・・・ですか？」

「ああ。今までの長い間、俺はネルガルに真意や計画を話す事はなかった」

「はい」

「俺がネルガルに利益を齎し、ネルガルが俺に目的の為の環境と機会を与える。」

俺とネルガルはそんな利害関係の一致のみの簡単に解けてしまい
そんな協力関係でしかない」

強い繋がりではない。

どちらかが少しでも異を唱えれば、関係性は容易に崩れてしまう。
そんな上辺だけの関係でしかないんだ。

「だが、もし、ここでアカツキをこちらの陣営に組み込む事が出来れば・・・」

「・・・ネルガルという大きな後ろ盾が出来る。そういう訳ですね？」

「ああ。ピースランドの協力も得られたが、企業の協力も必要不可欠だ。何より・・・」

「・・・何より？」

「ネルガルによるボソソジャンプ情報の流出が防げるかもしれんからな」

否定できない意見だった。

もちろん、一つの企業に独占させないという前提だが、軍だけで全てをまかなえない以上、他の組織の協力も必要になる。それが民間需要から軍関係まで手を出してるネルガルなら尚更。しかも、ネルガルはボソンジャンプに対して、並々ならぬ興味、関心を抱いている。

いずれ、ボソンジャンプの事を詳細まで調べ上げられてしまうかもしれない。

そうなつては完全に計画は崩れてしまう。

それを防ぐ為にもネルガル、いや、会長自身の言質が必要なのだ。

「しかし、ネルガルが俺達の計画に乗るでしょうか？」

「分からん。だが、どちらが儲けられるか。それを説けば、あるいは……」

利益を最も重視しているのなら、まだ取り込む余地はあるって訳か。もし、草壁のような遺跡を得て、その先の何かを目指す者なら無理だけ。

「分かりました。どちらにしるバレてしまつたら、それを使わない手はないですもんね」

「ああ。組織のトップに君臨しているあいつだ。情より利で説く」

「御願います。アキトさん。こればかりは貴方次第です」

「任せておけ」

心強い返事をもらい、俺は自分の席に戻る。

「……あの、コウキさん……」

「ん？ 何だい？ セレスちゃん」

現実世界では何の遠慮もなく甘えてくるセレス嬢。
でも、今のセレス嬢は首元まで赤く染めてこちらを見上げている。

「・・・あちらの私は・・・どうでしたか？」

「え？」

あっちのセレス嬢？

「・・・あの、私、誰かにご迷惑を・・・」

・・・多分、迷惑は掛けてないと思う。
ずっと俺に甘えてただけだから。

「ううん。大丈夫だよ。セレスちゃんは大人しくしてた」

「・・・そう、ですか。ちょっと残念です」

え？ 残念？

「・・・多分、私の抑圧されてた人格ならコウキさんに・・・」

俺に？

「・・・いえ、なんでもありません」

と言って、俯いてしまう。

うん。言い掛けだけど、なんとなく分かってしまった。
なるほど。本当にあれは抑圧されてた願望なんだ。

それなら、今度から、もっと甘えさせてあげようかな。うん。

「ロン」

お、誰かが揃ったみたいだ。

「次はセレスですか」

・・・セレス嬢の記憶か。

彼女にとって、辛い記憶を呼び覚ましてしまうな。

「セレスちゃん」

「・・・はい」

「手、繋ごうか？」

「・・・え？」

「ね？ 手、繋ごうか？」

「・・・あ。はい！」

俺がここにいるよって。

そうセレス嬢に伝わってくれると嬉しいな。

・・・。。。。。。。。。

「・・・グスッ」

誰かの鼻を啜る音が聞こえてきた。

いや、この場にいる殆どの者が涙を浮かべている。

それ程までにセレス嬢の記憶は悲しみ、苦しみに満ちていた。

「・・・そうでしたか。セレスはこんな目に・・・」

嘆くよう呟くルリ嬢。

同じマシynchャイルドの彼女の心境は俺達なんかより複雑だろう。

ルリ嬢とて一般の子供よりは全然恵まれていない。十一歳にしてあそこまで他人を拒否する態度を取っていたのはその環境のせいだろう。

だが、少なくとも、人間扱いはされていた。

人形のような人間と認識されていたようにと、

衣食住は保証され、痛みに耐えるような事はなかった。

しかし、セレス嬢、そして、恐らくは、ラピス嬢も、ルリ嬢とは違う。

彼女達二人は完全に実験体扱いだっただ。

衣食住の保証はされず、毎日が苦痛に耐える日々。

周りのマシンチャイルドが死んでいく中、

死ぬ恐怖すら実感できずに、ただ毎日を過ごしていた。

死ぬのは怖い。そんな事すらも彼女達は知らなかった。

いや、知らされる環境になく、知る自我や感情もなかった。

なんて、なんて怖い世界なんだろう。

そんな世界を彼女達は歩いてきたのだ。

思わず・・・温もりの伝わっていない方の手を強く握り締めてしまった。

「・・・これがネルガルの・・・闇・・・か」

真実を眼の前にして、頂垂れる会長。

彼自身はどうやらこのような事業に対して嫌悪感を抱いているようだ。

セレス嬢の記憶を見てからの彼は酷く苦々しい面持ちをしている。

先代会長の闇の遺産。

会長という責任者である以上、真つ当な人間ではやっていけないと思う。

だが、人間としての感情、倫理観が必要な事も確か。

もしかしたら、ネルガルの闇の遺産に最も苦しんでいるのはアカツ

きなのかもしれないな。

「……セレスちゃん」

「……大丈夫です」

しっかりと俺を見ながら話すセレス嬢。

その眼は悲しみに染まりながらも、強い意思があるように見えた。

「……今はこうして、皆さんが、コウキさんがいますから」

「……そっか」

これだけ悲惨な眼にあっつていようと、その瞳は濁る事なく、一生懸命に前を向いていた。

辛い過去を持つ少女。

その傷を俺や皆で癒す事が出来たら……。

そう再度思った。

「……次は私」

いつの間にか自らの牌を揃えていたラピス嬢。

セレス嬢の記憶を見て、痛ましい表情を浮かべていた者達は更に表情を歪ませる事になる。

ラピス嬢もまた、セレス嬢同様、辛い人生を歩んできたのだから。だが、彼女はセレス嬢とは違う。

もちろん、それは環境、場所が違うだとか、そんなものではなく、もっと大きな意味で。

そう、忘れてはいけない。

ラピス嬢。彼女もまた、改めたい未来からの逆行者なのだ。

「……そう。ここに来て、漸く貴方達の目的が分かったわ」

「・・・イネスさん」

沈痛の面持ちでラピス嬢を、そして、その隣にいるアキトさんを見詰めるイネス女史。

既にイネス女史の記憶は皆に曝け出されている。

もちろん、その殆どがイネス女史の記憶に隠された意味を理解してはいなかったが・・・。

「イネスさん。それは・・・」

ユリカ嬢がイネス女史を見詰める。

先程までのラピス嬢の記憶に困惑しているユリカ嬢ではなく、アキトさん絡みだからか、真剣でいて、どこか寂しそうな表情で。

「・・・まだ私の話を聞くのは早いわよ。艦長さん」

「・・・それはどういう・・・」

「アキト君。ルリちゃん。二人の記憶を見なければ・・・ね」

その言葉を聞き、誰もが真剣な表情でアキトさんとルリ嬢を見詰めた。

「アキト君。ここまで来て、私達に秘密を隠し通す事は不可能よ」

「・・・だろうな」

「それなら、貴方の目的をきちんと話しなさい。

貴方だって、その方が良いつて分かっているでしょう」

「ああ。だが、その為にも、俺の記憶を見せてくれ」

どこまでも無表情で語るアキトさん。

まるで自らの感情を強引に押し込めているかのような・・・。
そんな表情で。

「俺の記憶を見れば、その全てが分かる」

その一言が発端となり、アキトさんの記憶が流出した。

それはある青年の、どこまでも普通で、どこまでも奇怪な物語だった。

火星という地球とは環境が全く違う世界に生を受けた少年。

優秀な科学者を両親に持ち、また、とある軍の要人の娘を幼馴染に持つ。

幼馴染が持ち込んでくる厄介事を迷惑そうに巻き込まれながらも、決して少女を無碍にしない少年。

表向きでは迷惑そうな表情だが、全面的に拒否する訳ではない。

きつと、それは少年の優しさと、ちよつとした優柔不断が招いた事だろう。

このままなら、ちよつと悲惨でいて、

ちよつと笑える人生を送っているしがない少年に過ぎないだろう。

だが、そんな少年の環境を一転させてしまう事件が起きる。

それは火星の独立派によるクーデター。

その事件を機に彼は孤独の身になった。

幼馴染の少女は父に連れられ、地球へ帰還。

両親は事件に巻き込まれ、事故死。

頼る術、伝手もない少年は施設で過ごす事になる。

ここから既に彼の人生は歪み始めていたのかもしれない。

気付けば自ずと理解できるだろう。

何故、彼は貧乏生活を送らなければならなかったのか？

優秀な両親を持つ彼が親の遺産を引き継ぐ事はなかったのか？

何故、こうまで都合良く彼の両親は死んでいったのか？

考えれば考える程に深みに嵌る。

少年の身にありながら、彼は既に大人の汚い世界に蝕まれていた。

しかし、少年はめげる事なく、真っ直ぐに生きる。

幼き日に誓った料理人への道。

何故、こうも味が変わるのだろうか？

地が痩せ、碌な食材を得られない火星。

普通に食べれば、それはあまりにもお粗末な味。

だというのに、料理人が手を加えれば、まるで別の物のように味を変えた。

まるで夢のようだ。

こんなにも魅力的な仕事はない。

少年が青年としての階段を上り始めた頃、

同時に料理人としての階段にも足を踏み出していた。

下働きだらけの毎日。

それでも少年にとっては幸せな日々だったのかもしれない。

過程があるから、結果がある。

これも料理人になる為の修行だ。

必死に料理人として経験を積んでいく少年。

そんな時に起きた火星大戦。

少年はまた、前振りもなく悲劇に巻き込まれる事になる。

戦乱に巻き込まれないよう地下シェルターへと避難した少年。

そこで出逢う小さな少女、アイちゃん。

少年に大きな影響を与える事になる少年以上に奇怪な人生を送る少女だ。

幼さ故か、事態を把握しておらず、少年と楽しい会話を送る少女。

大きくなったらデートしてあげる。

そんな少女らしい言葉に少年は笑顔で応えた。

しかし、そんな束の間の楽しい時間がいつまでも続く訳がない。

地下シエルターを襲う敵兵器。

地球での襲撃が嘘かのように、容赦なく火星の民を殺戮していった。その光景は正に地獄絵図。

少女の顔と共に、少年にトラウマを残した。

そして、少年、テンカワ・アキトは跳ぶ。

世界初の生体ジャンパーとして。

その後、トラウマに苛まれながらも、必死に生き抜く少年。

以前同様、とある食堂で下働きをこなしつつ、襲撃に震えた。

そんな彼に訪れる転機。

それが幼馴染、ミスマル。ユリカとの再会であった。

空港で別れてから数年。

年上なのに年下のような少女は成長し、優秀な軍人へと成長していた。

年下のような性格に変わりはなかったが……。

彼女の落し物を届ける為、彼女が向かった先、サセボドックへと向かう少年。

そこで眼にしたものこそが機動戦艦ナデシコ。

ネルガル重工が開発した地球最新鋭の名を持つ実験艦であった。

なし崩し的にパイロットへとされた少年。

自らのトラウマと戦いながらも、見事に囮作戦を成功させた。

その後、やはりまたなし崩し的にコック兼予備パイロットとしてクルーの一員とされる。

その時、既にネルガルは動いていたのかもしれない。

初の生体ジャンパーの実験体とするべく……。

パイロットとされつつも保険の登録をされず、彼は多大な借金を抱える事になる。

しかし、その事を知るのは当分先の事であった。

その後、ナデシコの目的地が火星と知り、喜びの声をあげる少年。

故郷である火星。

二度とその地を踏めないと思っていた場所に、再び足を踏み出せる

かもしれないと。

しかし、順調に進まないのが世の中の残酷な現実。
軍の妨害。

親友、ガイの死。

サツキミドリコロニーでの悲劇。

少年の心は傷付く。

どうして？ どうして？

毎日が疑問の日々。

邪魔をするな。

何故、あいつが死ななければならぬんだ？

どうして、人が死んだのに平気な顔をしてられるんだ？

葛藤の日々が続いた。

そして、漸く辿り着いた火星。

故郷をもう一度。

そんな思いを胸に抱き、彼は火星の地を踏みしめた。

生き残りなんている筈が……。

そんな思いが胸を過ぎる。

だが、少年は幸運な事に見つけ出す事に成功した。

良かった。もう大丈夫だ。

……虚しい言葉だった。

少年の言葉は火星の民に届かない。

ある一人を除いてナデシコへの乗艦を拒否。

そして、救助に來たナデシコが……彼らを押し潰した。

フクベ提督を犠牲にしての火星からの脱出。

少年は恨みの対象へ叫ぶ。

ふさげるな、と。

しかし、相も変わらず、彼の叫びが届く事はなかった。

地球へと戻ってきたナデシコ。

悲しみに暮れる暇は与えられず、軍の駒として活動する日々。

それでも前向きに明るく過ごすクルー達。

少年はそんなクルー達によって明るさを取り戻していた。
木星蜥蜴討つべし。

そんな軍の考えとは裏腹に、ナデシコは衝撃的な出会いを果たす。
木連軍人、白鳥・九十九。

後に親友に殺され、徹底抗戦への起爆剤とされる悲運な青年。

そして、ナデシコに木連の存在を明かした青年だ。

彼との出会いがナデシコを変える。

軍人として働く日々は変わらないが、彼らの気持ち、目的を変えた。
それが木連との和平。

たかが、末端の兵でしかないナデシコが掲げるには大き過ぎた目標。
幾度の死線を越えた後、彼らは軍と話し合う事もせず、独断で木連
へと向かった。

それが後の悲劇に繋がるとは思いもせず、今はただ和平を・・・
と。

木連側の最高責任者であると言える草壁中将との対談。

そこで提示される一方的、かつ、理不尽な要求。

その項目が示す事はただ一つ。地球側の降伏であった。

無論、それを了承する事は出来ない。

ナデシコはその要求を拒否した。

元々、そのような権力自体、ナデシコにはないのだが・・・。

そんなナデシコに同調し、草壁を窘める白鳥。

それが彼の悲劇に繋がった。

親友であった男は自らの正義を盲信し、草壁の命令に従い、白鳥を
撃ち殺した。

葛藤し、悩み、苦しみ、結果として・・・。

ニヤリ。

草壁は内心でそう笑ったに違いない。

白鳥・九十九の死を、国民に騙し、公開する事で徹底抗戦を訴えた。
国民の徹底抗戦論は火に油を注ぐ勢いで燃え盛り、遂に戦争は激化
する事になる。

どうしても戦争を止めたいナデシコ。

それならば、戦争の原因となったものを失くしてしまえい!

ナデシコは火星にあるボソソジャンプの演算装置を狙った。

破壊も考えたが、思い出を大事にしたいという銀髪の少女の願いにより断念。

ナデシコは遺跡の演算装置をコアブロックと共に宇宙の彼方へ飛ばす事にした。

それは果たして最善の解決策だったのだろうか?

少年達はただ作戦の成功に喜びの声をあげるだけだった。

それから時は流れる。

その後の少年は久々の平穏を味わっていた。

多大な借金を背負い、暮らしは貧しいものの夢に向かって歩いていく事を実感していた少年。

その胸中は幸せで溢れていた。

相も変わらず幼馴染はトラブルを持ち込み、

少年を慌てさせてが、それでも少年は楽しそうに笑っていた。

幼馴染と、かつて共に生活していた銀髪の少女と共に幸せな生活を送る少年。

そして、幼馴染の父とのラーメン勝負に勝ち、少年は幼馴染との結婚を勝ち取った。

結婚式を挙げる前に新婚旅行をしよう。

少年の故郷である火星へとただ幸せのみを感じていた二人は旅立つ。

それが悲劇への入り口だと気付く事なく……。
シヤトル爆発。

幸せの真っ只中にいた少年と幼馴染は死んだ。

そう、“表向き”には……。

……少年と幼馴染の死。

それは銀髪の少女に底なしの悲しみと絶望を与えた。
塞ぎ込む少女。

周囲もそんな少女を心配し、必死に彼女を支えた。
長い月日と周囲からの温もり。

ようやく長い悲しみから立ち直る事が出来た少女は軍へと入隊する。
更に月日は流れ、少女が少しずつ女になろうかという頃。

再び、彼らの物語は始まった。

ボソソジャンプを利用したボソソジャンプネットワーク建設計画。

その名をヒサゴプランという。

そして、そのヒサゴプランを隠れ蓑としたとある計画。

かつて木連の最高指導者として手腕を振るっていた男が舞い戻ってきたのだ。

火星の後継者、最高指揮官、草壁春樹として……。

己の野望を再び叶える為に……。

そんな男の登場と共に、謎の幽霊ロボットもまた登場する。

その幽霊ロボットこそ、かつて死亡とされた少年、いや、青年の愛機であった。

そう、彼は死んでいなかったのだ。

彼と彼の婚約者である幼馴染は火星の後継者に捕まり、数多の実験に付き合わされた。

その結果、婚約者は遺跡と火星の後継者との橋渡し役を。

もちろん、人間としての尊厳を奪われた状態で。

そして、青年は料理人として欠かせない味覚を始めとした五感の全てを失った。

夢を奪われ、恋人を奪われた彼は深い憎しみを抱く。

殺してやる。殺してやる。殺してやる。

際限のない恨み、憎しみは彼の風貌を著しく変化させる。

いや、変化させざるを得なかったと言った方が正しいのかもしれない。

陽気で明るい少年の姿は最早そこにはなかった。

そして、始まる復讐劇。

火星の後継者に関連する全てのものを彼は消し去ろうとする。

傍らに桃色の妖精を携え、その彼女すらも復讐の片棒を担がせながら……。

彼と再会するべく画策する銀髪の少女。

少女はそこで悲しみを知る。

五感を奪われ、揺らぐ事のない鎧を強引に纏わせた哀れで悲しい男の事を。

必死に縋りつく少女。

だが、彼の意思は強かった。

人間の抱える感情の中で、最も強く、最も残るもの。

それは憎悪。

彼の憎悪は少女が思う以上に……凄まじかった。

だが、同時に少女は思う。

彼は昔と変わっていなかった、と。

憎悪の奥底にある優しさを見たのかもしれない。

ルリちゃん、と。

そう語りかけてくる表情はどこか昔のまま。

必死に幸せになって欲しいと告げる表情は以前の優しい彼のまま。

少女は諦めなかった。

少女は新しい矛と盾を得て、決戦の地、火星へと向かう。

そこで再び少女は彼に出逢う。

決着を付ける為、復讐の相手に挑む彼。

それを少女は心配の面持ちで眺める。

……決着を付いた。

だが、彼は婚約者と会う事なく去っていく。

追いかけるまでです。大切な人を。

その言葉通り、少女は必死に彼を追う。

そう、追い続けた。

幾度も交錯する少女と彼。

必死に想いを伝えようと行動する少女。

桃色の少女と彼はそんな少女をようやく受け入れた。

ただ一人、他に誰も乗せる事なくここまでやって来た彼女を。帰るつもりはない。だが、少し話すぐらいなら。

昔の顔を覗かせながら、彼は少女のもとへ一歩踏み出す。

・・・それが運命の瞬間だった。

突如辺りに響く轟音。

鳴り止む様子のないエマーゼンシーコール。

対面するナデシココとユーチャリスを襲う突然の振動。

漆黒の宙を更に漆黒な何かが過ぎ去っていった。

損傷するナデシココ。

ただ少女のみが乗るその艦を彼の乗るユーチャリスが護ろうと動く。

アキトさん！ ルリちゃん！

そんな悲鳴が聞こえたような気がした。

同時に爆音。

・・・え？ アキト？ ルリちゃん？

いやあああああああああああああああああ！

そんな婚約者の叫びと共に二つの戦艦は完全に姿を消した。

そして、眼の前には見覚えるのある光景。

彼が初めて跳んだ地、サセボシテイの光景があった。

彼はこうして、この世界へと戻ってきたのだ。

それからの彼の歩みは誰もが理解できる改変の道。

その軌跡が記憶の流出という形で眼の前の者達に伝わった。

「・・・これが俺の記憶だ」

あくまで無表情に語るアキトさん。

その壮絶な記憶に、誰もが言葉を失った。

「・・・そつか。そうだったんだ」
「・・・ユリカさん？」

そんな中、ふと溢される眩き。

「ごめんね、アキト」
「・・・ユリカ」
「アキトはこんなに辛い思いをしていたんだね」

ユリカ嬢の瞳には涙。
溢さまいと必死に耐えるその姿はどこか痛々しい。

「私の・・・せいだね・・・」
「違う！ お前のせいじゃ・・・」
「ううん。私のせいだよ。私の安易な判断のせい」
「・・・それは・・・」

安易な判断。

その結果、遺跡を回収されてしまった。

「それにね、私はアキトを裏切った」
「お前は俺を裏切っていない！」
「ううん。いくら記憶操作を受けてたって、そんなの関係ない。
私は私の為に頑張ってくれたアキトを自らの手で殺そうとした」

ユリカ嬢はナデシココとユーチャリスの爆破と同時に記憶を取り戻した。

あの叫び声は忘れられそうにない。
ユリカ嬢が心の底から出した悲しみの慟哭は。

「・・・そうだよな。こんな私に近付きたくなんか」

「それは違う」

「・・・え？」

「違うんだ。ユリカ」

言葉を遮られて困惑するユリカ嬢。

そんなユリカ嬢にアキトさんは言葉を紡いだ。

「俺がお前を避けていたのは決してお前を嫌ったからではない」

「・・・でも」

「・・・たとえ攻撃されようと、俺がユリカに想う気持ちには何も変わりはない」

「・・・アキト」

「俺は今もなお、ユリカを愛している」

ハッキリと告げられたアキトさんの心。

それを聞くルリ嬢の表情は・・・。

「・・・それぐらい私も分かっていましたよ」

そう言わんばかりの穏やかな笑みだった。

自分ではない誰かを愛していると言われても、動揺する事なく・・・。

「ユリカを愛しているからこそ、俺はお前を意図的に避けていたんだ」

「・・・どうして？」

「気付いてしまったからだ」

「・・・気付いて？」

「ああ。俺の愛したユリカはもうここにはいないんだな、と」
「ッ！」

息を呑むユリカ嬢。

「今を生きている。それなのに、俺が求めるユリカは未来のユリカ」
「……………」

「俺はお前にユリカを重ねようとした。今を生きるお前にとって最大の侮辱だ」

「…………アキト。私は…………」

「本当にすまなかった」

かつてアキトさんが愛したユリカ嬢。

それは未来のユリカ嬢であり、今のユリカ嬢ではない。

そのある意味、理想と現実とのギャップが、アキトさんにユリカ嬢を避けさせた。

きつと、接すれば愛する人を思い出すから…………。

「俺はお前に出会う前から、お前への態度、気持ちを既に決めてしまっていたんだ」

出会う前からもし拒絶されていたら…………。

そして、その理由すら分からず、一方的なものであったら…………。

少なくとも、俺は…………苦しいと思う、寂しいと思う。

親しくなりたいと、そう思っても絶対に埋まる事のない溝。

そんな現実には直面したら、挫けない方がおかしい。

「…………なんとなく、避けられている事は知ってたんだ」

でも、彼女は諦めなかった。

「……でも、私にとっての初恋は紛れもなくアキトだから……」
アキトは私を好き。
そう言い続けた。

それは、もしかすると、自分に言い聞かせていたのかもしれない。

「私はずっとアキトを追い続けていたの」

挫ける事なく、必死に。

どれだけアキトさんが変わろうと、己の想いに一途に。

「……ユリカ」

「辛かった。理由も知らずに避けられるのは」

「……ああ」

「どうしてだろう？　そう自問自答しても分からない。ずっとジレンマだった」

「……」

「その理由が知りたくて、それで、もっとアキトを追い続けた」

悲しそうに言葉を紡いでいくユリカ嬢。

アキトさんにとっては断罪の時。

真剣にユリカ嬢の言葉を受け止めていた。

「へへ。でも、それって意地だったのかも」

「え？」

突如、表情を笑顔に一転させるユリカ嬢。

その変化にアキトさんやルリ嬢は戸惑っている。

「私ね、ずっとアキトを見ていた。どんな時でも、アキトだけを」

その笑顔には陰りがなくて、俺自身も驚いている。どうして・・・ユリカ嬢はこうも平然としていられるのだろうか。己が避けられる理由を知り、実質的に振れらたというのに。自分は全く関与していないのに、違う自分が既に恋する人の心に住み着いていて。

そんな、理不尽な現実を目の前にして、なんで彼女はこうも笑っていられるのだろうか？

「だからかな？　ずっと近くにいてくれた大切な人の事を見ていなかったの」

「・・・ジュンか？」

「うん。私の一番大切なお友達」

そう言うユリカ嬢の笑顔は本当に眩しくて。

「それで、今は私にとって一番大切な男の人」

アキトさんからジュンに移った視線に込められた想いが深くて。

「アキト」

「ああ」

「今まで恋する女の子にさせてくれてありがとう」

「・・・ああ」

「これから私はジュン君に恋しようと思います」

「そうか」

「うん。だから、アキトもきちんとルリちゃんを愛してあげてね」

「分かっている。ユリカもな」

「大丈夫だよ。ね？　ジュン君」

「もちろんだよ。ユリカ」

しっかりと頷いてみせるアオイ・ジュン。

いつもの弱気な彼の姿はそこにはなく、一人の男としての頼もしい姿がそこにはあった。

「テンカワ」

「何だ？ ジュン」

「過去、ユリカを愛してくれたテンカワに僕は誓う」

「……………」

「僕はテンカワ以上にユリカを愛し、護り通してみせる、と」

「…………ああ。俺が言えた義理じゃないが、ユリカの事をよろしく頼む」

「任せてくれ。愛する女性を護るのは当然だからね」

「ふふつ。そうだな」

「だから、テンカワ、君もホシノさんを」

「ああ。ユリカを護ると誓ってくれた無二の親友に俺も誓おう」

「誓ってくれ。テンカワ」

「何があるうと二度と愛する者を失いはしない。護りきってみせる」

「ありがとう。テンカワ」

「こちらこそ、ありがとう。ジュン」

対面して男臭い笑みを浮かべる二人。

共に同じ女性を愛した二人は、こうして誓いを交わすのであった。

第四十九話（後書き）

アキトがユリカを避けていた理由。

コウキ君はこう判断しました。

接する事で彼女の事を思い出すのが嫌だから。

しかし、実際にはどうだったのか、コウキ君には分かりません。

ユリカ嬢に未来のユリカ嬢を投影する事に罪悪感を覚えたのかもしれない。

既にルリ嬢の事を意識していたのかもしれない。

ユリカと未来のユリカとは別人だ。

そう割り切り違う人物として接したのかもしれない。

割り切る事が出来ず、護れなかった罪悪感で眼を背けていたのかもしれない。

探せば、如何様にも理由を挙げられます。

その為、ハッキリとした意見は書きませんでした。

皆様が皆様の価値観で共感してくれたらなと思います。

感想、お待ちしています。

第五十話（前書き）

短い+どうしてこうなった!？
的な話。
詳しくは後書きで。

第五十話

「はいはい。友情ごっこはそれぐらいにして欲しいね。まったく」

対面するアキトさんとジュン君に向けて突如として告げられる言葉。

「・・・アカツキ」

「それにしても、意外だったなあ。僕にもあんな一面があったなんて」

どこか皮肉るように笑う会長。

ふてぶてしいという表現が一番合うな、今の会長には。

「次はホシノ君の記憶だっけ？ 早く見せて欲しいな」

会長だつて既にバレてるからな。
完全に開き直つてやがる。

「ええ。分かりました。私の記憶、皆さんにお見せしましょう」

そんなアカツキに対してあくまで冷静に応えるルリ嬢。

うん。相も変わらずクールだ。

.....

大まかな記憶は、始まりは違つけど、

やっぱりナデシコの記憶が印象強いのか、アキトさんとそう変わる事はなかった。

アキトさんが行方不明になってからのルリ嬢は見るに耐えない程の落ち込みようで。

でも、その姿で、ルリ嬢はあの時からアキトさんを想ってたんだなって知った。

凄く今更な話だけど、その思いがきちんとアキトさんに伝わってよかったなって思った。

「おいおい。ルリ。お前、マエヤマの奴を」

驚きの表情でルリ嬢を見るスバル嬢。

うん、あの殺人未遂の時の奴。

「・・・今でも申し訳なく思ってます。私は」

「はい。ストープ」

でも、気にしてないって言ってるんだから、引っ張られても俺が困る。

「リョーコさんも今更持ち上げないてくださいよ。万事解決済みなんですから」

「わ、わりい、でもよ・・・」

「ま、俺が気にしてないんですから。スルーの方向で」

「お、おう。分かったぜ」

ルリ嬢の記憶は、アキトさん以上に逆行後の描写が詳しかった。

ルリ嬢がこちらの世界に帰ってきてからの絶望。

アキトさん、ラピス嬢と再会した時の喜び。

俺というイレギュラーによる葛藤と困惑。

改めてこう見ると、俺って唯の怪しい人間だよなあと実感した。

.....

「なるほどね」

ルリ嬢の記憶を全部見終わってから、最初に溢した台詞がこれ。
ネルガル会長アカツキ・ナガレの。

「おかしいとは思ってたんだよ。掌で踊ってもらった予定の人間に引
つ掻き回されて」

ヤレヤレと言わんばかりの表情でそう告げる。

「突如やって来た凄腕のパイロット。
履歴を見たらネルガルと因縁深いテンカワ博士の御子息と来たも
んだ」

会長も知るネルガルの闇。
その最もたる例でもある暗殺事件。

「馬鹿だなんて思ったよ。またネルガルに利用されに来るなんてっ
て」

「・・・だが、そううまくはいかなかった」
「まあね」

会長に対して真っ直ぐな視線を向けるアキトさん。
そんなアキトさんに対して、肩を竦める会長。

「まさか、こんな大それた計画を立てていたとはね。」

しかも、その殆どを成功で終わらせている。本当にビックリだよ」

「アカツキ。お前の真意を聞かせて欲しい」

「僕の真意だつて？ 何のだい？」

「ボソソジャンプを司る遺跡。その演算ユニットをお前はとうした
いんだ？」

「もちろん、確保したいさ。あれ以上の商売はないからね」

「だが、果たして、それは利益になるのか？」

「さあね」

さあねって、おい。

「ボソソジャンプが使える人間は限られている。そんな事は僕だつて知ってたさ」

「その条件付けは？」

「テンカワ君の記憶を見て、確信したって所かな。大まかには分か
つてたよ」

大まかには分かった？

もしかして……。

「君達は本当に僕達が知らないとも思ってたのかい？」

……ドキリとした。

「テンカワ君、艦長、イネス博士、後、カエデ君、だっけ？ 共通
点なんか一つじゃないか」

「まさかッ！」

「アトモ社が潰されようと秘密裏に実験は行える。ネルガルを甘く
見ちゃいけない」

「……実験……したのか？」

「もちろん。年齢から考えて、十五歳から三十歳の間で、火星生まれの火星育ち。」

火星の生き残りでその条件に適合する者に協力してもらったんだ。もちろん、自主的にね」

「本当に自主的か？」

「さあ？ その辺りの管轄はエリナ君だったからね。どうだろう？」

・・・何もかも考えが甘かった。

火星出身がA級ジャンパーだとバレないと何故考えた？

アトモ社が潰れたから、もう実験は出来ないと、何故そう考えてしまった？

向こうはネルガル。優秀な者達が数多く存在する大企業。

・・・この程度の事に気付かない訳がない。

「いやあ。大変だったんだよ？ 何たって適合する生き残りはたったの三人。」

限りある内に成功させないといけなかったからね」

「・・・お前は人の命を何だと思って」

「ハハツ。笑わせないでよ。テンカワ君。大量殺人者の君に言われる筋合いはないよ」

「ッ！」

「どちらも利己的な理由じゃないか。どちらにしろ、犠牲になった者は報われない」

「・・・」

「ま、僕の場合は成功したらその後は多くの者に利益を齎す事になるけどね」

ニヤリと笑ってみせる会長。

「三人の内、成功したのは二人。一人は尊い犠牲者となってくれた

よ

「……どうして……」

「どうしてそんな事を笑顔で言えるんですか!？」

人の命を奪っておいて……どうしてそんな……

「僕の生きる世界はね、命じゃないんだ、命を捨てても利を齎さなければならぬ」

……そこには冷酷なトップの顔があった。

「会長というのはね、そういうものなんだよ。そうしなければ、次に狙われるのは僕かもしれない」

「……それはどういう」

「十四」

「え？」

「何の数字が分かるかい？ マエヤマ君」

「……分かりません」

「簡単な事じゃないか。僕の命が初めて狙われた歳だよ」

もつと、具体的に言えば、社長派と会長派で抗争があった時かな」

「ッ!？」

「それからずっと。何人が僕の代わりに命を落としたのかな？」

……暗殺？

アカツキ・ナガレもまた、命を狙われた事があったのか？

14歳という子供の時から……

「ははっ。おかしいよね。継ぎたくないのに継がされた。それなの

にこの始末。笑っちゃうよ」

「・・・知らなかった。」

会長の座に座る事がそんなにも重い事だなんて・・・。

「僕が出来る事。それはひたすらに利益を提示し続ける事。認めさせる事。それだけさ」

どこか自嘲したかのように話す会長。

「嫌なんだよね。割に合わない事ばかりで。本当に、親父を憎むよ」

先代会長の残したネルガルの闇。

その重責が会長に押し掛かっている。

「・・・マシンチャイルド計画。」

馬鹿みたいだよな。バレれば倒産だったのに、利益が得られるからって」

「・・・アカツキさん」

「でもね、僕は決して君達に謝らないよ。だって、それが僕の仕事だから」

「・・・」

「感情を押し殺してでも利益を。・・・本当に割に合わないよ」

ネルガルの闇の最も深く関係するマシンチャイルド。

ホシノ・ルリ、ラピス・ラズリ、セレス・タイト。

彼女達を前にしても、会長、いや、アカツキが頭を下げる事はなかった。

きつと、本人が一番理解しているのだろう。

その計画の歪さを。

それでも、彼は頭を下げない。

・・・下げてはならないのだ。

「話を戻そうか。テンカワ君」

「・・・構わない」

「僕はね、遺跡を確保したい。その事に変わりはないさ」

「残念だが、そもいかないな。ネルガルが遺跡を確保する事が悲劇に繋がるのならば」

「よく考えてごらんよ。果たして、本当に遺跡の独占が悲劇に繋がるのかな？」

「何？」

「たとえば、だよ。僕達ネルガルが独占したとしよう。我が社には多くの優秀な研究者がいる」

「・・・それは認める。だが、だからこそ・・・」

「それなら、遺跡の制御だって可能になるかもしれないでしょ？」

「・・・それは・・・」

「更に言えば、火星人のみのジャンプを広範囲にする事が可能になるかもしれない」

「・・・」

「もっと言えば、火星人のジャンプすらも不可能にする事が可能かもしれない」

「ッ！？」

「どう？ もし、それに成功すれば、火星人の悲劇は防げるんじゃないかな？」

「・・・確かに。」

あくまで制御できたらという前提だけど、間違った事は言っていない。

火星人の悲劇は、彼らだけがA級ジャンパーとして認められていた

から。

跳ぶ事が出来たから。

それなら、その前提を崩してしまえば、もしかしたら、悲劇を未然に防げるかもしれない。

「どう？ 利害は一致するでしょ？」

「僕達は利益を得たい。君達は悲劇を防ぎたい。この方法なら全てが丸々収まってしまおう」

「・・・どうするのだろうか？」

俺では判断する事が出来そうにない。

「・・・駄目だ」

「・・・アキトさん。」

「へえ。どうして？」

「確かにお前の言う事は正しい。その方法なら解決するかもしれない」「そうだよな？ でも、気に食わない何かがある、と」

「・・・お前の方法で解決するのはあくまでこちら側の事だけだ。」

お前は、木連側の事をまるで考えていない。それじゃあ後の禍根を残す」

「へえ。敵さんに情けを掛けようっての？」

「俺達が目指すのは嘘偽りのない和平。恒久平和なんて不可能な事は言わん。」

「だが、出来る限り、そう、出来る限りでいいんだ、火種は失くしておきたい」

嘘偽りのない和平。

いつまでも平和でいられるなんて事は不可能。

でも、少なくとも、どちらかの陣営の暴走は防げるかもしれない。禍根を残す事なく、次世代へと引き継ぐ事が出来るかもしれない。恨みは消せずとも、膨れ上がる事はなくなるかもしれない。

「俺はミスマル提督と共に和平を成そうと決めたんだ。そのプランに変更はない」

「・・・そう。ま、いいけどね」

断られたアカツキの胸中は・・・。
大したダメージは受けてないか。

「アカツキ」

「ん？ 何だい？」

「俺達と手を組まないか？」

「へえ。どういう風の吹き回しだい？ 君は僕と決別したのでは？」

「利益を求めたのだったな？」

「そうなるね」

「それなら、こちらと手を組め」

「詳しく聞いてからにしようかな。君が何で僕を釣ろうとしているのかを」

さあ・・・ここで決まるんだ。

アカツキを引き込めるかどうかで。

「俺の記憶を見たよな」

「うん。もうバッチリと」

「それならば、戦争後、ネルガルが右肩下がりの現実を見ただろう？」

「確かに見たよ。でも、それは遺跡を確保すれば防げるんじゃない？」

「かもしれん。だが、确实ではない」

「确实なんてこの世の中にはないんだよ。あっても一握り」

「例えば、だ。ボソソジャンプ研究の筆頭に立てばそれも変わるんじゃないか？」

「おっと。そう来たか」

「地球だけで独占するつもりもない。木連だけで独占させるつもりもない。」

戦後、出来るならば、両陣営による管理にしておきたいんだ。互いを監視する形でな」

どちらかが変な真似をすれば、どちらかが迅速に対応する。

その為の両陣営による管理だ。

「ネルガルにはイネスさん、彼女もいる」

「あら？ 評価してもらえるなんて光荣ね」

「・・・散々お世話になったからな」

未来において、アキトさんに最も近い人間の一人だったと考えられるイネス女史。

拉致されているという事を知ってすぐにネルガルが彼女の身元を隠し行方不明とした。

また、アキトさんも救出されてからはネルガルが身元を隠していた。要するに、彼らは同じ状況下にいたという事。

即ち、同じ場所で活動していてもなんら不思議はない。

「優秀な研究者が多くいるネルガルならば、筆頭に立つ事も不可能ではないだろう」

「へえ。要するに、君がネルガルを優遇してくれるって、そういう訳だね？」

「そうは言っていない」

「よく分からないね。君は何を言いたいんだい？」

「俺が言える事は唯一つ。」

遺跡を独占するより、共同研究の方が利益があるという事だ。

遺跡を確保した所で次代の争いの火種となるだけ。利点は少ない」

「争いになって結構。僕達みたいな事業はね、戦争があればあるだけ稼げるんだ」

「確かに。だが、戦争になった時、ネルガルが軍事事業に参加できるかは分からだろ？」

「なるほどね。遺跡を独占したら軍事産業に携われない。」

でも、遺跡を確保して、研究の筆頭に立てれば、

ボソソジャンプ関連で稼げて、かつ、一般の軍事産業でも稼げると」

「そうなるな」

「でもさ、ネルガルって別に軍事産業だけじゃないよ？ 問題ないんじゃない？」

「問題はあるさ」

「へえ。何だい？」

「たとえボソソジャンプ研究に成功したとしても、その活用には必ず他組織の協力が必要になる」

「うん。それはそうだろうね」

「ボソソジャンプを利用する上で、軍から睨まれているのは都合が悪くないか？」

「まあね。でも、今の軍なんか大した脅威にもならないよ。押し通せるさ」

「現状ではな。だが、今後、軍内での革命が始まる。」

そうなれば、以前のようなゴリ押しは通用しなくなる」

「いいのかな？ そんな事を言っつて」

「今更な話だからな」

・・・これは賭けだ。

話さなくていい事まで話してしまった。

これで、説得に失敗すれば、こちら側の計画が潰される可能性もある。

何をしてでも成功させなくちゃならない。

「それに、だ。現状、改革和平派が常備しているのはネルガル製の兵器。」

「こちらの話に乗って得な事はあっても、損な事はないと思うぞ」「そうね。そうなくても不思議じゃないわ」

改革和平派が政権を握れば、今後もネルガル製品が幅を利かせる事は間違いない。

「・・・リスクを抱えてまで莫大な利を得るか、確実性を求めるか。そのどちらかって訳だ」

「どちらが最善なのか、ネルガル会長アカツキ・ナガレとして決めてもらおうか」

多くの会社員を抱えるネルガル。

大手企業として、どちらの選択肢が正しいのだろうか？

他産業でまかなえると強気に出るのがベストなのか？

大手として安定性を求め、確実な利益を得るのがベストなのか？

「ふう。まったく」

溜息を吐くアカツキ。

どうする？ どうするつもりなんだ？

「言いようにやられたみたいで癢だけど、

「そんな選択肢だったら決まってるようなものじゃないか」

「・・・なら？」

「はいはい。分かったよ。邪魔しない」

「・・・良かった。」

嬉しさより安堵って感じかな。

これでこれ以上ボソソジャンプ実験による被害は

「但し、テンカワ君。戦争後、君にはネルガルに来てもらうよ」

「・・・え？ そんな事って・・・。」

「ネルガル所属の実験体としてボソソジャンプ実験に参加してもらわなくちゃね」

「そ、それじゃあ、アキトさんには自由がないじゃないか！」

「辛い思いばかりしてきたのに・・・。」

「報われたっていいのに、それなのに・・・。」

「また、ネルガルの駒として扱われなければならないのか？」

「そ、そんな事、認められ」

「いいだろう」

激昂したルリ嬢の言葉を遮るアキトさん。

「ア、アキトさん！」

「どちらにしろ、俺はボソソジャンプの情報は提供するつもりだった。」

「情報を提供するだけで終わるか、実験体としてより詳細な情報を提供するか。」

ただ、その違いでしかない。事実、俺がやらなければ違う誰かがやらされる事になる」

「素直で助かるよ。テンカワ君」

ほくそ笑むってこういう事を言っただろうな。

憎たらしいぞ。会長。

それにしても・・・アキトさん、本当にそれで良いんですか？

ルリ嬢の気持ち、ちゃんと考えてあげてますか？

「それと、そうだなあ・・・。マエヤマ君も僕達でもらおうかな」
「なッ!？」

お、俺か？

「何故そうなる？ 俺だけで充分だと思っただけ？」

「企業なら誰だって欲しいと思うけど？ 情報社会においての彼の力は凄まじいからね」

「だが、それとこれとは関係ないだろ？」

「そうかな？ マエヤマ君だって君達の仲間の一人なんですよ？」

「テンカワ君一人だけを犠牲にするなんて事、仲間ならしないよね？」

「・・・俺は・・・」

・・・どうすれば良い？

ネルガルの独占を防ぐ為に、俺は・・・。

「マエヤマは関係ない」

「関係なくなんかないよ。あのCASだって、君達の為に製作したようなもんでしょ？」

「製作を依頼しただけだ。唯の外部協力者でしかない」

「別にマエヤマ君の立ち位置なんてどうでもいいんだ。僕が欲しいのは能力だから」

「関係ないものを巻き込まないでもらいたい」

「あ、そう。それなら、考え直させてもらおうかな」

「クツ！ 卑怯だぞ！ アカツキ」

「卑怯で結構。言ってるでしょ？ 利益の為なら何でもするって」

・・・クソツ。

こんなんじゃない、答えは出ているようなものじゃないか。

「俺は」

「タイムアップよ」

え？ イネス女史？

「大切な話をしている途中で悪いけど、そろそろこの空間から追い出されるわ」

「追い出されるってどういう意味ですか？ イネスさん」

「艦長。あそこを御覧なさい」

イネス女史が指差した壁はどこか歪んでいた。

「あつちの世界で破壊に成功したようね」

破壊に成功したから、混在世界から追い出されるって訳だ。

「そう、ま、いいや。良く考えておいてね。テンカワ君。マエヤマ君」

「・・・」

そうニヒルに笑ってその場から消えるアカツキ。
・・・どうやら追い出されるのは適当な順番らしい。

「・・・コウキ」

「・・・良く分かんねえけど、ピンチっばいな」

「ええ。でも、私達にはどうする事も出来ないわ」

「・・・コウキさん。お先に失礼しますね」

パイロット四人娘も消えていった。

「良く分かんねえけど、元気出せよ。コウキ」

「ああ。サンキユ。ガイ」

「あばよ。先、行ってるぜ」

「私も先に行ってるわよ」

「はい」

ガイもムネタケ提督も消える。

「すまない。コウキ」

「・・・いえ」

「俺の力不足でこんな事に」

「・・・俺の事よりも、アキトさんはいいんですか？」

「・・・覚悟はしていただき。そうなるであろう事も」

「ルリちゃんやラピスちゃんはどうなるんですか？」

「・・・それは・・・」

「・・・アキトさん」

「・・・アキト」

「・・・俺の事は俺で解決しますから、

アキトさんは三人できちんと話し合った方が良くと思いますよ」

「・・・すまない」

アキトさん、ルリ嬢、ラピス嬢も消える。
消える前の心配そうな表情が印象深かった。

「……コウキさん」

「……俺達もそろそろ行かないとね」

「……私、あともうちよつとで揃えられたんです」

そう言われ、セレス嬢の牌を眺めると俺の牌が……。

……うん。危なかつたみたい。

「……せつかくコウキさんの事が知れると思ったのに……残念
です」

俺としては助かったけど、俺だけ記憶を見せてないってのはなんか
申し訳ないな。

「今度、俺の昔話を聞かせてあげるね」

「……はい。それなら、良いです」

アカツキの言葉に頭の中はこんがらがってたけど……。

「……楽しみです」

眼の前で無邪気に笑うセレス嬢を見てたら、うん、なんか、元気で
た。

「悩んでも仕方ない、か」

断固として認める訳にはいかない。

交渉とか、そういうのは苦手だけど、やるしかないんだ。

「……一緒に暮らすって言っちゃたしね」

「……ん？ 何でしようか？」

「ううん。なんでもないよ。行こっか」

「……はい」

セレス嬢の手をしっかりと握って、俺も混在世界から脱出する。色々と考えさせられる事ばかりだけど、決して屈しはしない。諦める訳にはいかないんだ。平穏な生活を得る為にも……。

第五十話（後書き）

收拾が付かなくなった！

状況が複雑過ぎる！

バットエンド一直線！？

数々のあれ？ あれ？ で構成されるこの話。

なんでこうなっただらう？

書いてて自分も混乱する事態になってしまった。

これはちよつとまずい……。

とりあえず、困った時に次話に後回しするのはやめようか、自分。

苦労するのは自分だからさ。

第五十一話（前書き）

今回、皆様お待ちかねのものが出てきます。
うん。待ってたかな？

第五十一話

「相転移砲、発射あ！」

「相転移砲、発射します」

漆黒の闇を覆い尽くすのではないかという程の莫大なエネルギー。それが今、敵艦隊に襲い掛かった。

「……圧倒的ですね」

「……ええ」

ナデシコに搭載されている相転移エンジン。

そこに加わったYユニットの相転移エンジン。

それら通常運営に必要な過多である膨大なエネルギーが生み出すこの破壊力。

視界を埋め尽くすのではないかと言わんばかりの大艦隊が一瞬にして蒸発してしまった。

戦術なんてチャチなもんじゃない。

戦略級兵器といっても過言ではない程の凄まじさだった。

言わば、将棋で詰まれてしまう手前で盤ごと引っ繰り返すかのよう
な。

前提を根本から覆ってしまう恐ろしさだ。

恐らく、劇場版で相転移砲が登場しなかったのは条約かなんかで禁止されたからだろう。

さもなければ、核戦争のような冷戦状態に陥ってしまう。

……もしかしたら、ルリ嬢がハッキングしなければ相転移砲が撃ちこまれた可能性も……。

「・・・ないか」

劇場版では一つ一つの拠点を押さえていったからな。草壁の狙いはあくまでボソソジャンプか。

どちらにしる、戦後、相転移砲は封印しなくちゃならない。あまりにも強力過ぎる。

抑止力なんかじゃない。

単純な殲滅戦争になってしまう。

「・・・お疲れ様でした。作戦終了です」

作戦が成功したというのにユリカ嬢の声には元気がない。

・・・そりゃあ、そうだよな。

こんな威力を目の当たりにしたら、な。

混在世界から現実世界へ戻ってきてからすぐに作戦ポイントに到着した。

どうやら間一髪だったみたいだ。

もう少し遅れてたら制御できる前に作戦時間になっちゃたと思う。無事に作戦が成功した事を今は喜ぼう。

「・・・」

現実世界へ戻ってきた俺達は無言だった。

混在世界で交わされた約束。

所詮は口約束かもしれないけれど、確実にこちらの負けだった。

ボソソジャンプの情報漏洩を防ぎたい俺達。

でも、その為にはアキトさんと・・・俺が犠牲にならなければなら
ない。

そんな事、俺は絶対に認めない。

それに、アキトさんの方だってルリ嬢やラピス嬢が認めるとは到底
思えない。

ネルガルが強引に来るのなら、俺だって・・・。

「・・・駄目だ。俺には出来ない」

ネルガルを潰す事なんて簡単だ。

俺が握るネルガルの閻なんていくらでもある。

以前のマシンチャイルドの事だっていい。

他の非公式研究所の事だっていい。

・・・アキトさんの両親の暗殺事件だっていい。

企業である以上、民間からの支持、軍からの支持を失くせば容易に
潰せる。

でも、そんな事をしたら・・・。

「・・・路頭に迷う人が絶対に出てくる」

俺の幸せの為に誰かを犠牲にする事なんて出来っこない。

ネルガルが大企業である以上、抱える社員も莫大な量だ。

もし、ネルガルが倒産するなんて事態になったら、彼らの未来はど
うなる？

すぐに再就職できるなんて保証もなければ、伝手がある訳でもない。

確かにネルガルの存在はこちらにとって不利益だ。

だからといって、無関係の者達まで巻き込んでしまえば・・・。

それは暴力かどうかの違いだけで、なんら侵略者と変わりないじゃ
ないか。

この選択だけは・・・しちやいけない。

「・・・どうする？」

ネルガルを潰すという選択肢がない以上、俺が取れる道は限られてくる。

俺も、アキトさんも犠牲にせず、ネルガルに不干涉を約束させるには・・・。

「・・・悩んでいるみたいね。コウキ君」

「・・・ミナトさん」

「なんとなく、表情が暗かったからさ。来ちゃった」

「来ちゃったって・・・でも、歓迎します」

部屋で悶々と悩んでたって何も変わらないもんな。

俺の将来がミナトさんに関わるって己惚れていいなら、相談してみよう。

「ミナトさん。相談に乗って頂けませんか？」

「もちろん。いいわよ」

笑顔でそう応えてくれるミナトさんがなんて頼もしい事だろう。

やっぱり頼りになるなって思った。

「あ。なんか飲みますか？」

「私が用意するから、コウキ君は座ってなさいよ」

「それじゃあ、お言葉に甘えます」

「ええ。甘えなさい」

微塵の迷いもなくお茶を運んでくれるミナトさん。

勝手知ったるなんとやらって奴でちよつと嬉しい。

「はい」

「ありがとうございます」

ズズズと一口。

うん。やっぱりお茶は落ち着く。

「それで、何を悩んでたの？」

「それじゃあ、最初から話しますね」

.....

「・・・そつか。そんな事になつてたんだ」

「はい」

自分の中で整理しながら話したせいか、話し終わった時には既にお茶が冷めていた。

アキトさんの記憶、ルリ嬢の記憶、ユリカ嬢とジュン君の事、そして、アカツキの事。

現実世界では数十分だったかもしれないけど、混在世界では何時間も経っていた気がする。

それだけの事を、ミナトさんに話した。

「コウキ君はどうしたいの？」

真っ直ぐにこちらを見詰めてくるミナトさん。

真剣に話を聞いてくれている。

それだけでこんなにも心が暖かくなるなんて・・・。

さっさと相談すれば良かったなつてちよつと後悔。

「俺は諦めません」

だから、断固として告げる。

「ネルガルに協力するつもりもありませんし、アキトさんだけに負担をかけるような真似もするつもりはありません」

俺が望むハッピーエンドは既に俺だけのものじゃない。ミナトさん、セレス嬢はもちろんの事、アキトさん達だって含まれる。

彼らだけを不幸な眼に合わせて俺が幸せになれる訳ないだろ？

全てを幸せになんて事は無理だけど・・・。

ルリ嬢の想いを知った、ラピス嬢の想いを知った。

出来る事なら、俺は彼女達の想いを叶えさせてあげたい。

その為にも、アキトさんは犠牲にしちゃいけない。

「でも、交換条件だったんでしょ？ それはどうするつもり？」

そう、問題はそれ。

こちらがネルガルに協力しなければ、彼らはボソソジャンプ独占へ走る。

別にそれ自体は問題ない。彼らより早く確保してしまえばいいだけだから。

俺達が恐れるのは、ボソソジャンプの情報が周囲に知れ渡ってしまう危険性。

いや、正確にはA級ジャンパーの存在が明かされてしまう事だ。

俺自身としては、ボソソジャンプは交通機関として利用したいと考えている。

火星から地球、地球から木星、木星から火星。

物資の運搬に長い時間を掛けるこれらの距離を一瞬にして移動する事が出来る。

今後、交友関係を結んでいくのなら、これ以上の交渉材料はない。物資をプラントに任せつきりにしている木連なら尚更だ。

でも、その移動にA級ジャンパーの存在は不要。

移動するのならば、チューリップの存在だけで充分だ。

A級ジャンパーはむしろ戦争の火種になりかねない。

だからこそ、A級ジャンパー、要するに火星人こそが、

その火種に成り得るA級ジャンパーだとバレるのは後の問題になりかねないのだ。

戦争を防止したいという点もそうだが、何より、これ以上、火星人を犠牲にしたくない……。

「どうかかしたいとは思っています。でも、思い浮かびません」

ネルガルに対して、何を提示すれば、向こうが納得してくれるのかが分から。。。

「ねえ、コウキ君。どうして、君はそんなに下手に出てるの？」

「……え？」

「……どういう意味ですか？ ミナトさん。」

「あくまでもネルガルとは対等でしょ？ 私達が下手に出る必要なんてないと思うの」

「でも、俺達の交渉が失敗すれば、火星の人達の危険性が」

「確かにそうかもね。でも、だからといって下手に出れば調子に乗られるだけよ」

「……それはそうですが……」

「あちらがこちらを脅してくるのなら、こちらも向こうの抑止力となる切り札を切ればいいのよ」

「切り札、ですか？」

「いくらだつてあるでしょ？ いい？ コウキ君。」

交渉事は少しでも弱味を見せたら駄目なの。ここぞという時に先手を打った方の勝ち。

そんなに弱気じゃ、いいようにやられちゃうだけじゃない」

・・・流石つて言えばいいのだろうか？

秘書つてそういう事もするのかな？

なんだか、妙に説得力がある。

「それにね、散々、コウキ君が悩んでいる中、こんな事を言うのは変かもしれないけど・・・」

「えつとお、はい」

「私はね、別にいいと思うの。むしろ、積極的に公表するべきだと思うわ」

「それつて、もしかして・・・」

「ええ。火星人がそこがボソソジャンパーだつて」

「な、なんでですか！？ そんな事したら・・・」

火星人が被害に遭うのが目に見えてるじゃないか！

「私ね、時々思うの」

「何がです？」

「火星人が誘拐されてしまったのは世間もそうだけど、何より自身の自覚がなかったからじゃないかなつて」

「自覚がなかったから・・・ですか？」

・・・そうなのかもしれない。

あたかも巻き込まれたかのようにだったけど、事前に知る事も不可能ではなかった筈。

事実、戦争時からジャンパーの条件なんて分かってた訳だし。危険性を無視して、何の対策も取らなかったのは明らかに落ち度だったと思う。

「それにね、もし、正式に火星人がボソソジャンパーだと知られていけば、

火星の後継者だってそう簡単に誘拐なんかできなかつたんじゃないかな？」

聞けば聞く程に最もだと思った。

世間も火星人の事をそう認識していれば、その重要性を理解している筈。

少なくとも、火星人の誘拐というだけで、大きなニュースになったと思う

劇場版では全てが秘密裏で表に出る事はなかったが、それは関心が浅いから。

世間のジャンパーに対する認識がしっかりしていれば、自然と関心も深まる。

火星の後継者として馬鹿ではない。

そのような状況下で秘密裏に誘拐する事の難しさ、恐ろしさは理解できるだろう。

それがあある意味で、抑止力になるかもしれない。でも、そう簡単にはいかないと思う。

「もちろん。なんで火星人だけが、って気持ちにもなると思うわ。人間ってそんなに綺麗なものじゃないもの。絶対生まれに嫉妬する」

「はい。それが怖いんです」

確かに公表すれば抑止力になるかもしれない。

でも、公表する事によって、地球人や木星人の火星人对する態度の変化が怖いのだ。

火星人である事。それが重荷になるか、強みになるかは人によって違うと思う。

でも、誰だって生まれで差別されたくないと思う。特別扱いされたくないと思う。

公表せずに済むのなら、済ましてあげたいと思うのは俺のエゴなのだろうか？

「でも、どうして、自分達がこんな事になったのか。

それを彼らに知らせないのもおかしい話じゃないかしら」

「・・・どうして、火星だけがこんなにも襲われたのか、ですか」

間違いなく遺跡が要因。

木連が遺跡を欲した為にあれだけの被害になった。

もちろん、復讐という意味もあつただろうけど、やっぱりそれが最もな理由だと思う。

「私だったら知りたい。どうしてこうなったのか。自分達が何故襲われたのか。その理由を」

「・・・」

もし、俺が火星人だったら・・・。

・・・やっぱり知りたいと思う。

理不尽なまでの蹂躪の理由を。

「ボソソジャンプと火星人の関係を話すかどうかはアキト君達に任せるわ。」

でも、私は火星の方達にしつかりと真実を告げる場を設けたいと思っの」

「……そう……ですね」

彼らが今、木連に対してどんな感情を抱えているかは分からない。憎しみかもしれない。悲しみかもしれない。怒りかもしれない。

この話をする事で、その感情が再度爆発するなんて事態になってしまいかもしれない。

それでも、彼らには知る権利があるって、そう思うんだ。

カエデだって言ってたじゃないか。

お互いを知らなければ何も始まらないって。

納得も出来ない。歩み寄る事も出来ない。

始めは知る事だって、そう覚悟の決めた表情で言っていた。

それなら、俺は彼女の意思を尊重したい。

彼女の意思を他の火星人間達にも伝えたい。

「ありがとうございます。ミナトさん」

「え？ どうしてお礼なんか言われてるの？ 私」

「大事な事を気付かせてくれましたから」

ミナトさんが言ってくれなければ気付いていなかった。

火星人間の気持ちを、俺は無視してたんだ。

「そっか。うん。どういたしまして」

そう笑顔で応えてくれるミナトさん。

うん。いつも思うけど、やっぱり綺麗だな。

「さてっと、そろそろ本題に入りましょうか」

「そうですね。すっかりズレちゃいました」

「ネルガルへの対応・・・ねえ」

真実を話すにしろ、話さないにしろ、まずはネルガルとの問題を解決しなければならぬ。

現状で、火星人を確保しているのはネルガル。

ネルガルの協力？を得られなければ、彼らを解放する事も出来ないかもしれない。

このままいけば、ネルガルの一人勝ち・・・だろうな。

「まずはネルガルから火星人を解放したいんですけどね」

「そおね」

確か、軍と共謀して、火星人を確保してるんだっけか？

その軍つて多分、改革和平派は関与してないよな。

カイゼル提督は全てを白日の下に晒すつもりだったと思うし。

あの人の性格からして、こういう不利益になる事でもきちんとか表する筈。

それなら、やっぱり改革和平派が実権を握れば、彼らを解放できるかもしれない。

うーん、でも、彼らをネルガルから解放した所で、彼らの生きる場所がなくなってしまう。

俺には何の伝手もないしなあ。

ネルガルにいる事で幸せを感じている人がいるって可能性も無きにしても非ずだし。

「解放するにしても、その後が問題なんですよ」

「再就職先って事？」

「ええ。俺に何か伝手がある訳じゃないですし、ネルガルで良いって人もいると思うし」

「そうなのよね。でも、ネルガルにいつまでもいさせると利用され

「ぢやわないかしら」

「始めから疑うのは間違ってるって分かってるんですけどね。そう思っちゃいます」

「うーん。私も伝手なんてないのよねえ。前の会社でもいいけど、そんなに大きくないし」

「まあ、火星人の生き残りとなると、何百人単位ですからね」

「・・・まあ、それでも火星の全人口に対したら1%にも満たないけど。」

「いつその事、創っちゃえば？」

「会社をつて事ですか？」

「そうそう。ボソンジャンプを交通手段として利用する運搬企業とかさ」

「ボソンジャンプを活用できるかどうか分かりませんがね」

でも、なんか参考にはなった。

将来的に、そういう事業も発達するかもしれない。

「一応はA級ジャンパーが多いんだしね」

「いえ。もしそういう企業を立ち上げたとしても、

彼らのジャンパーとしての力を借りるつもりはありませんよ」

「ま、コウキ君ならそう言うと思ってたけどね」

「えっと・・・」

「あれでしょ？ チューリップを利用した所定の場所を移動するだけ、みたいな」

「・・・良く分かりましたね」

「当たり前じゃない。コウキ君の事ならなんでも知ってるわ」

笑顔でそう言い切るミナトさん。

うん。顔が赤いのは自覚してるぜ。

「・・・でも、良い考えかもしれません」

「運搬企業がつて事？」

「そうですね。でも、もつと規模の大きな話です」

「お。コウキ君が大きく出たな。聞かせてもらいましょう」

「火星人の故郷は火星。それなら、彼らも火星の再生には興味を示す筈」

「それって・・・」

「ええ。火星再生機構の立ち上げです」

俺の交渉術じゃたかが知れてるけど、ムネタケ提督とか心強い味方が得られたら・・・。

火星に負い目のある地球軍、木連を協力せざるを得ない状況に持ち込めるかもしれない。

そうすれば、火星の再生は一気に加速するのではないだろうか？

また、木連からも住み込みの社員を雇うようにすれば、親善活動にもなるのではないだろうか？

生き残りの火星人を核とした地球人と木星人とで構成される再生機構。

おお。なんか聞けば聞く程に良い案に思えてきた。

問題としては、火星の地に木連の人間が踏み込む事に対する火星側の嫌悪感ぐらい。

彼らとしては滅ぼした原因ともいえる連中だし、始めは拒否感を示すだろうなあ。

でも、きつと、それは時間が解決してくれると思う。

木連もそろそろプラントに頼らず、きちんとした環境での生活を求めていると思うし。

もしかしたら、ケイゴさんはその辺りの事も調べていたのかも・・・。

まあ、考え過ぎかもしれん。
どちらにしろ、この案は候補として取っておこう。
もしかしたら、問題の全てをうまい具合に解決してくれるかもしれない。
状況次第では、この再生機構で遺跡を管理し、
地球、火星、木星の三権分立的な感じで平和利用する事が出来るかも……。

「ネルガルから引き込む理由にもなりますし、彼らも参加してくれると思います」

同時にネルガルからの解放にも繋がる。
軍に協力が仰げれば、ネルガルの事なんかまったく気にせず仕事を済ませられる。

俺達にとってネルガルの怖い点は唯一つ、火星人とジャンパーの關係性の公表。

それを防ぐ為にも遺跡を確保し、A級ジャンパーを封印してしまえば……。

たとえ世間に発表されようと、いや、そもそも発表できないだろう。実際に成功しないのだから。

遺跡の知識は俺の異常能力で習得できる。

確保後、受け渡される前に、周りと相談して、

チューリップのみの移動に搾れるように制御したい。

そうすれば、ネルガル防止、火星の後継者防止、戦争防止、うん、良い事尽くめじゃないか。

まあ、こんなにうまくいくとは限らないけどさ。

未来像の一つとしては、うん、良いと思うんだ。

「私は良い考えだと思うわよ。応援しちゃう」

「まあ、これもあくまで候補の一つです。色々と考えてみたいと思

います」

「そうね。でも、たった一つでも解決策が見付かると違うものでしょう?」

「ええ。大分心が楽になりました。ありがとうございます」

本当に感謝感激です。ミナトさん。

「その再生機構の代表にアキト君を就任させるなんてのも面白いかも」

「ああ！ それ、良いです！」

それなら、ルリ嬢達を悲しませなくて済む。

アキトさんとしても、責任ある立場なら自重するだろうし。

「本当にミナトさんにはお世話になりっぱなしで」

「ふふつ。それは良かった。久しぶりに役に立てたみたいね」

「いえ。そんな事は。俺がいるのもミナトさんのお陰です」

「あら？ 嬉しい事言ってくれちゃって」

紅潮するのは仕方がないと思うんだ。

「……コウキ君」

「……ミナトさん」

顔を真っ赤に染めながらも微笑みあつ。

その後、俺達は。

ウィーンウィーンウィーンウィーンウィーン！

「あら?」

突然のエマーゲンシーコールに遮られる結果に……。でも、憤慨している余裕は今の俺にはない。原作を思い出せば分かる。

このタイミングで、敵からの襲撃はあっただろうか？ いや、ない。これは……。

「ミナトさん！ 急いでブリッジに」

「ええ。どうやら緊急事態みたいね。急ぎましょう」

一転して真面目な表情になるミナトさん。相変わらず切り替えの早い人だ。

「はい。急ぎましょう」

ここからブリッジまでの道のりは意外と長い。

「失礼します」

「え？ あ、あらら」

ちよっと恥ずかしいけど、お姫様抱っこ。

緊急事態だし、仕方がないよな？

真面目モードだけど、こういうのは仕方ないよな？

「飛ばしますよ。しっかりと捕まってください」

「ええ。分かったわ」

とりあえず、違和感を与えない程度に早く走る。

この辺りはきちんと俺も考えているさ。

……偶に自重を忘れるけど。

.....。

廊下を駆け抜け、ブリッジの扉の前に立つ。
日頃便利な自動扉がこんな時は嫉ましい。
早く開けと、そう焦ってしまう。

「開いた。ミナトさん」

「ええ」

地面に降ろして、ブリッジに駆け込む。

「ルリちゃん！ これ・・・は・・・」

・・・嘘・・・だろ。

「・・・どうして、ここに・・・」

「おい。あれって・・・」

「ええ。恐らく、そうよ」

「な、なんで・・・なんであれがここにあるの？」

「・・・マジかよ」

「ほんと、想定外な事ばかりだよ」

「・・・恐れていた事態が訪れてしまったようね」

扉の先の開けた視界。

真っ先に飛び込んでくるのは純白の巨大戦艦。

「・・・私達同様、こちらの世界へやって来ていたんですね」

「・・・ルリ。あれはまずい」

「ええ。予定外過ぎます。あれは・・・」

「・・・やるしかあるまい」

「・・・アキトさん」

「俺が、俺達が、やるしかないだろ。持ち込んだ責任を取る為にも」

「・・・ええ。そうですね」

「・・・うん」

ナデシコに類似する船型モデル。

でも、コスモスでもなければ、カキツバタでもなければ、シャクヤクでもない。

「ユ、ユリカ・・・」

「ジユン君。覚悟して。向こうは未来の私達」

そう、あれは俺と同じここにいない筈の完全なイレギュラー。

未来において、電子の妖精が火星圏全てを支配した圧倒的性能を誇る五年後の戦艦。

「・・・ナデシコだよ」

今、絶望的な現実が俺達の前に立ち塞がった。

第五十一話（後書き）

火星再生機構という名のENDへの道。

しかし、現れる新たな壁。

混乱する状況下で、コウキはどう動くのか。

次回、乞うご期待。

・・・という訳です。

お待ちかねのナデシコCの登場。

どちらの陣営に登場させるか悩みましたが、この結果に。

これがあるフラグになる訳ですが・・・。

まあ、分かっちゃいますよね。

第五十二話（前書き）

批判どんと来い、なんて強気に言ってみる。

だけど、言われたら沈むのは分かりきってるので、出来れば穏便に。

うん。とにかく、ちょっと評価しづらい話になった。

第五十二話

・・・想定外、予定外。

この世界の混迷は更に極まった。

俺というイレギュラー。

アキトさん達、逆行組が齎したら改変。

その結果として、今、目の前に頼もしかった純白の戦艦が・・・。

「ナデシコCが、私達の敵・・・」

敵として間の前に立ち塞がっている。

恐らく、状況的に・・・木連所属の戦艦として。

「ナデシコCですって！？ BもないのにC！？ そんなの、私、知らないわよ！」

・・・当たり前ですよ。秘書さん。

知らないのが当然。むしろ、知っている方がおかしいんです。

混在世界での記憶流出。

これが必要ならば、俺やアキトさん達以外の人間は何の理解も出来なかった。

でも、実際に彼らは記憶の流出で理解している。

あの戦艦の恐ろしさを。

「でも、よく考えてごらんなさい」

「・・・イネスさん」

「あの戦艦は電子の妖精がいたからこそ性能を発揮できた。違うかしら？」

・・・確かにそうだ。

事実、ナデシコはルリ嬢専用の戦艦といっても過言ではない。いや、正しく言うならば、マシンチャイルド専用か。

「ワンマンオペレーションシステム」

一般人とは逸脱した処理能力をもってして初めて使いこなせるシステム」

流石はイネス女史だなって思った。

冷静に現実を受け止め、冷静に解釈している。

でも、イネス女史の言っている事も確かだけど、俺の考えは違う。

「・・・確かにそうかもしれませんが、俺は楽観視できませんよ」

「あら？ どうしてかしら？ 説明してくれる？」

「確かにナデシコは性能的にイネスさんの言う通りだと思います」

「ええ。完全な性能は発揮できないでしょうね」

「ですが、忘れてはいけません。あれは未来の戦艦ですよ」

正しく言うならば、五年後。

しかも、戦争という技術革新を終えた未来だ。

「一つの戦艦として性能を発揮できずとも、随所に用いられている技術のレベルが違います」

「・・・なるほど。そういう意味ね」

「はい。もし、あのナデシコが木連陣営の物だったら・・・」

五年後の技術が向こうに渡ってしまっているんだ。もし、木連がナデシコCを解析して、その技術を他のものにも転化しようとしていたら……。

「相転移エンジンの生産力が圧倒的に上の木連が、未来の技術を用いれば、

容易に戦局を覆せるだけの大量の高性能艦隊が出来上がってしまうでしょう」

「……確かにそうね」

「それに、ワンマンオペレーションシステムも一人じゃ対応できずとも複数人で対応すればいい。

火星圏全てのハッキングなんて事は流石に無理だと思いますが、通常運営なら事足りません」

「だが、マエヤマ、ナデシコCの強みはそのハッキングだぞ。それが使用不可なら……」

「アキトさん。あのハッキングこそが普通じゃないんですよ」

「え？ それって……」

あ。別にルリ嬢を貶している訳じゃないからね。

「戦争というのは総力戦であり、一つの要因で覆せる程、簡単なものじゃありません」

「……それはそうだが……」

「ナデシコAの相転移砲、ナデシコCのハッキング。むしろ、この二つこそが例外です」

「……そういう意味ですか」

うん。勘違いしないでね。ルリ嬢。

「結局の所、生産力が勝る木連が有利なんです。そもそも彼らは無

人艦ですし」

「そうだな。こちらが人材を失うのに対して、向こうは何も失わない」

「代わりに資源を無駄にしているようですが・・・」

「そのあたりも戦後を睨んで動いていると思う。木連だって、そんなにバカじゃない」

確か、クリムゾンあたりとコンタクトを取ってるんだっただよな？

「それに、アキトさん、ルリちゃん、忘れてませんか？」

「何がだ？」

「どついう意味ですか？」

「ナデシココがこちらに跳ばされた。それなら」

「あの、お取り込み中に申し訳ありませんが」

え、ええつと、プロスさん？

「皆さん、さつきからナデシココやら何やらと一体何を話しているんですか？」

「そうですよ。ガイさんは何も教えてくれないですし」

「いや。俺にはちよつと難しい話だよ。コウキにでも聞いてくれ」

情けないぞ。ガイ。

「こちらにも状況を説明してもらいたい」

「そうよ。私が知らない所で事態が動いているなんて不愉快だわ」

プロスさん、メグミさん、ゴートさん、エリナ秘書。

混在世界へ来る事がなかった故にナデシココの存在を知らない彼ら。そりゃあそうだよな。知らなければ知りたくなるよな。

でも、とても俺には説明できる事ではない。
するなら……。

「……………」

当事者である彼らがしないと。

「それは……」

話すべきか、話さないべきか。

アキトさん達の葛藤。

俺ではなんの力もなれない、彼らが解決すべき事だ。

「コウキ君。さっきのは」

「……やっぱり……」

現在の状況を思い出すべきなんだ。

今、そんな悠長に話している暇なんてない。

目の前にはナデシコを上回る性能を持つ戦艦。

そして、その戦艦には当然あるものが搭載されている……。

「皆さん！ 今はそんな事をしている暇はありません！」

「え、え、マエヤマさん？」

「コウキ？」

「艦長！ 急いで戦闘配備を！」

純白の戦艦から現れるのは色取り取りの人型兵器。

エステバリス、改め、福寿。

これで木連所属だという事は分かった。

……ある程度の覚悟はしていたから、それ程の衝撃はない。

「……来ますよ」

でも、それ以上に俺達に衝撃を与えるものが現れる。

記憶を見た者ならば誰しもが忘れる事の出来ない圧倒的な機体。

復讐鬼が復讐を成し遂げる為に身を、心を覆い込ませた漆黒の鎧。

「……ブラックサレナ……」

「ど、どうして……」

「……嘘……」

その名はブラックサレナ。

高機動戦フレイムなんて目じゃない程の高機動能力を保有する怪物機。

呆然とするアキトさん、ルリ嬢、ラピス嬢。

気持ちは分かる。元々アキトさんの相棒なのだから。でも、分かるけど……。

「アキトさん。やるしかないんです。俺達が止めないと」

「あ、ああ」

「艦長！」

「はい。皆さん、戦闘配備をお願いします！ 敵は木連です」

「……了解！」「……」

ユリカ嬢の一言で迅速に動き出すクルー達。

「……予測していたの？ コウキ君」

「……はい」

ナデシコCがこちらの世界へ跳ばされている。

それなら、ユーチャリスもまた、こちらに跳ばされてきた筈だと思
った。

アキトさんの記憶を見た限りでは、ナデシコBのGBによる損傷は
凄まじく、

ユーチャリスを実戦に配備する事はどう見ても不可能そうだった。
でも、中に入っていた機体は別。

アキトさんにとって最高の相棒であり、自らを覆い隠す鎧でもあつ
たブラックサレナ。

結果、それもまた、木連側の陣営に渡ってしまった。

ナデシコCを目の前にした時以上の絶望感が胸を襲う。

「ルリちゃん。ナデシコCには何か載せてた？」

「い、いえ。私の単独行動でしたので、全て降ろしました」

「そっか。分かった」

・・・それが不幸中の幸いか。

少なくとも、機動兵器としての情報はブラックサレナのみ。

「・・・諦めてたまるか」

そう、ここで諦める訳にはいかないんだ。

改変してきた者として、最後まで責任はきちんと果たす。

「パイロットの皆さんはエステバリスにて待機。マエヤマさんもお
願います」

「……………了解！」「……………」

機体性能は完全に向こうが上。

恐らく、既にCASが搭載されている事だろう。

無論、ブラックサレナや中のエステバリスカスタムを基にした機体

にも。

パイロットの腕はこちらが若干上か、同じぐらい。

完全に不利な状態での戦闘になる。

勝負を分けるのは・・・気力か、戦闘経験か。

「・・・認識を改めないといけない」

今まで、俺は木連側が小型人型兵器に不慣れだと思っていた。

急遽、ジンシリーズから生産ラインが変更され、混乱しているとさえ思っていた。

でも、もし、ナデシココやユーチャリスの跳んだ時間がアキトさん達と同じなら・・・。

木連は二年程前には既に小型人型兵器の基となるものを持っていた事になる。

ブラックサレナは追加装甲であり、その中にはエステバリスカスタムがある。

要するに、五年後のエステバリスの性能を誇る機体が彼らの手元にあるという事。

彼らに必要だったのはそれらを動かすソフト、

そして、それらの技術を具現化する為の準備期間。

ソフトは俺が提供し、また、劣化版ともいえるエステバリスをも俺が提供してしまった。

その結果として、一気に向こうの技術力を未来の技術に追いつかせてしまったのだとしたら・・・。

そして、何より、もし、既に木連が生産ラインを整えていたら・・・。

「大量のエステバリスが戦場に投下されてしまう」

エステバリスカスタムを核であるリーダー機として、高機動型フレ

ームを量産型として……。
下手すると、量産型として生産される高機動戦フレームをバツタ任せにする可能性もある。
中心となる機体にだけ人が乗ってればいいのだから……。
もし、そんな事態になったら、悔しいが、地球は負ける。
戦艦性能や機体性能が飛躍的に向上し、数も用意されてしまうのだから。

『パイロットの皆さん、出撃、お願いします』

ユリカ嬢の指示に従い、俺達は漆黒の宙へと駆け出す。
俺達の前に立ち塞がるのは、エステバリスカスタムが二機。
高機動戦フレームを参考にした量産型エステバリスが三機。
そして、最後は……。ブラックサレナが一機。
合計六機の驚異的な戦力が俺達を出迎えた。

『ブラックサレナの相手は俺がしよう』

「アキトさん……」

『何だ？ 俺じゃ不安か？』

「いえ。お願いします」

『任しておけ』

俺達の中で最も機動戦に向いているのはアキトさん。

それなら、アキトさんがブラックサレナの相手をするべき。

俺だってそんな事は分かってる。

でも、何故だろう。

何故か、あれは俺が相手をしないとイケない気がするんだ。

「俺は」

『お前の相手はこの俺がしよう』

・・・この声は・・・どこかで聞いた事が・・・。

『改めて名乗ろう！ 我が名はキノシタ・シンイチ。

優人部隊所属少佐、兼、カグラ・ケイゴ大佐の副官だ』

ケイゴさんが・・・大佐？

『さあ、いざ、尋常に・・・勝負！』

急加速と共に接近してくる福寿。

いや、さしずめ、福寿改か。

「クツ。あれは俺が引き受けます」

『了解した。一人一機だ。特徴的な機体にはヒカル、イツキの両名が当たれ』

『了解』

『イズミは後方から支援を。各機、全力で事に当たれ』
『了解』『了解』『了解』『了解』『了解』

後は任せました。アキトさん。

『ハアアア！』

ガキンツ！

接近と同時に突き出されたフィールドガンランスをディストーションブレードで受け止める。
だが・・・。

『甘いわ!』

「グツ!」

受け止めきれず、後方に飛ばされる。

・・・機体性能の差。

そして、何より、戦艦から送られてくる出力の高さが違い過ぎる。重力波送受信装置の技術革新を甘く見ていたのかもしれない。

『この福寿改は誰にも止められんわ!』

・・・安直な名前だな、この野郎。

『ほら! どんどんいくぞ!』

吹き飛ばされた俺に対しての追撃。

フィールドガンランスの射撃で牽制しつつ、最大速度で突っ込んで来やがる。

出力の関係上、速度差で負ける。

逃げた所で追い付かれるなら、むしろ、攻めてやる。

「ハアアアア!」

『ハアツツツ!』

突き出してくるフィールドガンランス。

確かに速度、威力共にこれ以上ない選択。

たとえ直線で来ようとこの速度なら避けられないだろう。

但し、それは未経験の人間なら・・・だ。

「ここだ!」

突き出されてくるフィールドガンランスの先端は見事にこちらの胸中心。
狙い場所さえ把握していれば、どれだけの速度だろうと避けてみせる。

『何!?!』

上体を逸らし、ブースターを上方に吹かす事で回避。
同時に見事なオーバーヘッドをぶちかましてやった。

『クツ。何故避けられる!?!』

向こうとしては自慢の攻撃だったんだろう。
でも、似たような攻撃を俺は受けた事がある。

「確かに凄まじい攻撃でした。でも、俺はそれ以上の攻撃を知っています」

スピードで言えば、こちらの方が上である。
でも、これと似たような攻撃、アキトさんの突撃はより性質が悪い。
極限まで射撃で牽制し、回避コースを完封。

その上で、直前まで微細な横移動をする事で狙いを教えてくれない。
以前、この攻撃をされた時は前方にDFを張って即行で後退した。
それでも、DFは容易に突破され、撃沈とまではいかなかったが、かなりの損傷を受けた。

それに比べれば、スピードが速いだけの単純な攻撃ではない。

『戦場の英雄。テンカワ・アキトか?』

な、何故、アキトさんの名前を知っているんだ?

「何故、その名を!？」

『木連軍人ならば誰でも知っているさ。第一級要注意人物としてな』
・・・既にアキトさんの名は知れ渡ってしまったている・・・か。
本人や軍からしてみれば良い事かもしれないけど、ルリ嬢達はどうか。
考え。

『暇は与えんぞ』

ダンッダンッ!

「そんな単調な攻撃が当たるでも？」

俺だつてこう見えてもかなりの経験を積んだんだ。
碌に狙いも付けていない射撃に当たる程、未熟じゃない。
それが何発連続であろうと、その程度の射撃なら避けてみせる。

『やはり木連軍人は射撃に不向きだな』

そんなしみじみ言われても困るんですが・・・。

『ケイゴはお前から射撃を教わったそうだな』

「・・・はい」

ケイゴさん。

貴方は今、どこで何をしているんですか？

『その成果が出ているようだな』

「は?」

『見てみればいいだろう。あの夜天を』

「・・・夜天？」

『突如として現れた未知の技術。その最もたる機体。夜天』

指し示す方向には漆黒同士のぶつかりあい。

・・・まさか！

「あの機体にケイゴさんが!？」

『その通りだ』

ケイゴさんがブラックサレナに？

『多くの者が適正テストを受け、使いこなせると判断されたのは二人』

「・・・その内の一人がケイゴさん・・・」

『ああ。カグラ・ケイゴ。俺の上官だ』

・・・なら・・・。

「話を聞かせてもらおう!」

何故、何故、何故。

ケイゴさんに聞きたい事なんていくらでもある。

その全てを、ケイゴさんにはきちんと話してもらおう。

そして、その全てをきちんとカエデに知らせてやらなければ・・・。
カエデが報われないじゃないか！

『おっと、俺を無視するとは。嘗められたものだな』

クツ。副官だが、なんだか知らないが、無理矢理にでも通させても

らう。

「邪魔するなあ！」

ガキンツ！

ディストーションブレードを感情のままに突き立てる。
だが、簡単に受け止められてしまう。

『教わらなかったのか？ 描くべき太刀筋を』

「・・・太刀・・・筋？」

『ふつ。まあいい。お前にはここで沈んでもらう』

・・・太刀筋。

描くべき道筋は淀みなき精神の導。

「・・・落ち着こう」

すぐにでも訊きたい。

それは偽りなき本心だ。

だが、その前に立ち塞がるものがいるのなら、冷静に対処する必要がある。

焦る必要はない。すぐにでも手が届く位置にいるのだから。

『ハア！』

突き付けられるフィールドガンランス。

それを前に、俺はディストーションブレードを構える。

そして・・・。

「ハッ！」

一閃。ただひたすらに精神を研ぎ澄ませ、一太刀に全意識を集中させる。

狙うべきは足でもなければ、手でもない、ましてや、本体でもない。俺が狙うべき場所は……。

『なッ！？』

フィールドガンランス。

福寿改のメイン武装。

製作者の一人として、フィールドガンランスの弱点なんて把握済みだ。

ガンとランスを組み合わせた汎用性の高い武器。

だが、組み合わせゆえの弊害もある。

それこそが耐久度の低下。

なかでも、両者の繋ぎ目部分は簡単にへし折れる程だ。

それなら、俺はそこを付けばいい。

武器破壊。別に命を奪うのが怖いという訳ではない。

ただ、今現在における最善の選択をしたまでだ。

『なるほど。流石はケイゴに師事されただけの事はある』

「退いて下さい。武器がない以上、もう戦えない筈です」

『ふっ。確かにな。だが、俺も木連式武術を嗜む身。柔術とて……』

スッーッーダッ！

『扱える！』

研ぎ澄まされた正拳突き。

油断していたせいもあって、直撃してしまった。

「クハッ！」

その威力は計り知れず。

コンパクトに振り抜かれた拳にケイゴさん同様DFを纏わせて、辛うじてガードに入れた右腕を破壊し、胸部すらも貫かれてしまう。その衝撃によって、アサルトピット内の壁に背中から衝突。

・・・ここは生きているだけでも喜ぶべきか？

少しでもズレていれば、アサルトピットを直撃していてもおかしくなかった。

『フッ。命拾いしたな』

・・・確実に劣勢。

向こうの武器を破壊した事で油断して己を呪いたい。

自分にとっても利き腕である右腕を破壊され、胸部をも破壊。どこの制御盤が損傷したかも分からず、無茶な事も出来ない。

ここは退くべきだ。それは分かっている。

だけど、果たして退かせてくれるのだろうか。

『さて、そろそろ』

ダンッ！

『・・・そう簡単にはいかないようだな』

ぎこちない動きしか出来ない俺に迫ってくる敵機。

やられるかと焦ったが、幸運な事に味方に助けられた。

俺と敵機との間を駆け抜ける弾丸。

『これも私の仕事よ』

「イズミさん！ 助かりました」

唯一、一対一に参加する事なく、後方支援という役に徹してくれているイズミさん。

彼女の援護のお陰で、十分な距離を稼ぐ事が出来た。

『無事か！？ コウキ』

「ガイ！ お前」

『ああ。俺のはとっちめた。援護してやる』

福寿と対面していたガイが福寿に勝利してこちらにやってきてくれた。

流石はガイだ。福寿相手にでも勝利を飾ってみせた。

『なるほど。二対一、か』

『へっ。怖気づいたか？』

『なに。これで本気が出せると思ったただけだ』

『吠えてろ』

・・・俺の存在、忘れられてるね。

まあ、思考回路が似てるからだと思っけど・・・。

『コウキ！ てめえは一度帰艦しろ。その状態じゃ足手纏いだ』

「分かった。すぐ戻る」

『へっ。別に倒しちまってもいいんだろ？』

「あ、ああ！」

カツコ良すぎるぞ。ガイ。
でも、実際、福寿改にエステバリスじゃ厳しいのは事実。
急いで補給して戻ってこないとかいとガイがやばい。
すまん。耐えてくれ。ガイ！

S I D E M I N A T O

「ルリちゃん。GBチャージ」

「グラビティブラスト。チャージします」

エステバリスが福寿の相手をしている中、私達ナデシコ
Cの相手をしている。

言わば、艦隊戦。より多くの弾幕を張り、より強い攻撃をした方の
勝ち。

そう、それが本来の艦隊戦。それなのに、今、私達を絶望が襲つて
いる。

「・・・駄目です。グラビティブラスト。全て弾かれています」

その艦隊戦の前提を覆してしまう存在。

それが最強の盾たるディストーションフィールド。

武装面の充実では負けていないナデシコが勝利を飾れない理由がそ
こにある。

突破できないのだ。向こうのDFが。

五年という技術革新の差が痛い程に証明されてしまっている。

向こうのGBは着実にこちらに損傷を与え、向こうのDFは確実に

攻撃を防ぐ。

こちらのGBは直撃前に未然に防がれ、こちらのDFは少し堅い程度の盾に成り下がっている。

たかがGBだけの砲撃艦と侮ってはいけない。

ナデシコCはグラビティブラストだけで成立してしまっているのだ。まるで要塞かのような堅固な護りと砲撃を持って。

「分かりました。相転移砲を撃ちます」

「・・・相転移砲、チャージ開始」

その戦況を打破する事が出来るのは相転移砲ぐらい。

でも、チャージまでの溜め時間が長いという大きな欠点がある。

・・・大きな賭けになるでしょうね。

「ミナトさん。御願います」

「・・・任せて」

盾が役に立たないなら、回避すればいい。

その為に、私がいるの。

こんな所で負ける訳には

「ッ！ Yユニット内部で謎の爆発。これは・・・」

「・・・ボソン砲」

ボソン砲まであるの？

そんな・・・。

「チャージ中止。幸か不幸か、チャージエネルギーが少ない為に内部崩壊はありませんでした」

・・・でも、これで対抗策を失ったという事に。
逆転への道が、完全に封じられた。
・・・それだけじゃない。

驚異的なボソン砲がいつもナデシコを狙う事になる。

「ナデシコ後退し」

ドガンッ！

艦長の言葉を遮るかのように爆発音が響き渡る。

「機関部損傷！ エンジン効率が20%下がります」

一瞬の攻防。

ボソン砲の存在を感知してから、即行で退いていれば防げたかもしれない事態。

でも、それも仕方がない。

前線にはエステバリスがいるのだ。

そう簡単に下がる事は出来ない。

「・・・ナデシコにボソン砲が積み込まれているのは予想外でした」

いつでも冷静なルリルリが冷や汗を浮かべながら告げる。

「でも、考えられない事じゃなかったわ。予測しなかったのは私達のミス」

「・・・はい」

そう、私達のミスだ。

先日、恐怖と共にボソン砲の有効性はこの身を持って理解していた筈。

それなのに、ナデシコの規定概念に囚われて、予想すらしていなかった。

最先端の戦艦に有効的な武装を積み込むのなんて当然の事なのに。

・・・こんなんじゃない駄目だ。

さつきから想定外のことばかりなのに、私達は想定内の範囲内しか動けていなかった。

もっと柔軟に物事を考える必要がある。

「エステバリス隊。ヤマダ機が敵機を破壊。マエヤマ機の援護に向かうようです」

少しホツとした。

でも、気を抜いちゃいけない。

「マエヤマ機。後退しています。損傷が激しい為、帰艦する模様」

・・・コウキ君。

こんな事しか言えなくて情けないけど・・・。
頑張つて。辛いと思うけど、頑張つて。

S I D E O U T

「・・・逆転は望めない・・・か」

ナデシコA対ナデシコCは劣勢。

エステバリス対福寿&夜天は拮抗。ブラックサレナ

ガイが敵機を倒したものの、俺がやられてしまっている。

とりあえず帰艦すればどうにかできるからいいけど、拮抗に変わりはない。

このままじゃ確実にジリ貧だ。

何かしらの幸運がなければ、いつか、こちらがやられてしまう。

後退・・・は不可能だ。

ナデシコAとナデシコCとは速度差があり過ぎる。

こちらが逃げたとて、すぐに追いつかれてしまうのがヤマだろう。

その為には、誰かが戦場に残って敵を食い止める必要がある。

所謂、しんがり殿つて奴だ。

その役目は・・・。

「帰艦した俺がやるべき事だよな」

実行に移せるのなら一刻も早く移した方が良い。

殿を務める為には外付けバッテリーを搭載させる必要がある、

その作業を迅速に行えるのは今現在、ナデシコに戻っている俺だけ。

それに、幸い、俺なら一人残っても一瞬で移動できるボソソジャンプがある。

俺以上に適任はいない。

問題は食い止める事が出来るかどうかだが・・・。

「そこは気合だよな」

最早精神論だ。

技術や機体性能じゃない、生き残るといふ思いで打ち克ってみせる。

「おい。マエヤマ。フレーム換装と補給、終わったぞ」

「・・・ウリバタケさん」

「・・・お前、何考えてやがる？」

流石は尊敬すべき大人の一人、ウリバタケさん。

俺の考え、読まれちゃってるな。

でも、大人だからこそ、割り切ってもらわないと困る。

「作業を終えてすぐにで申し訳ないんですが、バッテリー御願います」

「・・・てめえ・・・」

「別に自身を犠牲にしている訳じゃありませんよ」

「・・・本気なんだな？」

「もちろんです」

「・・・艦長にはてめえで言えよ」

「了解しました」

・・・すみません。ウリバタケさん。

さてつと、早速、報告しましょうか。

非常に嫌な状況になる事は眼に見えてるけど。

「・・・艦長」

『マエヤマさん。出れますか？』

「はい。でも、その前に一つだけ良いですか？」

『えつと、何でしょう？』

「俺が・・・俺が敵を食い止めます。だから、ナデシコは後退してください」

『マ、マエヤマさん！ それは出来ません！』

「艦長なら分かるでしょう？ このままじゃどうなるか」

『そ、それは・・・』

「なら、ビシツと言っちゃってください。殿を務めろって」

『でも……』

「甘えるな！」

『ッ！』

「艦長なら一人の命より多数の命を優先しろ！　それが艦長の仕事だ！」

『……マエヤマさん』

「それに、大丈夫ですよ。俺には秘策がありますから」

『……分かりました』

『艦長！』

『そんな事！』

『マエヤマさんを犠牲にするなんて……』

わお。後ろがカオスだ。

『……コウキ君』

「……ミナトさん」

ちょっと会いたくなかったかな。

『貴方はいつも私に心配をかけてばかりね』

「アハハ。面目ありません」

『……戻って……くるのよね？』

「俺は不死身の男ですよ？」

『調子の良い事ばかり……』

「すみません」

『死んだら許さないんだからね』

「もちろんです。俺には護るべき家族がいますから。」

最後まできちんと責任を持って護り抜いて、笑顔で老衰で死ぬ予定です」

『……分かった。私はもう何も言わないわ。コウキ君は約束を護

るって知ってるし』
「光荣です」

「・・・何だろう？ 何故か、いつも以上に冷静でいられる。
変だな。異常な精神状態だ。殿に立つ人ってこんな感じなのかな。」

『さてつと、選手交代。・・・セレセレ』
「うげっ」

罪悪感に苛まれちまうぞ。俺。

『・・・信じています』

「・・・セレスちゃん」

『・・・家族になろうって言うてくれました。私は貴方を信じます』

「信頼には応えなくちゃね。任せて。セレスちゃん」

『・・・はい。それで、無事に帰ってきたら・・・』

「帰ってきたら？」

『・・・抱き締めてください。力強く、抱き締めてください』

「・・・うん。分かった。約束する」

『・・・げんまんです』

「もちろん。嫌って程」

『・・・ポッ』

「・・・こうまで約束しちゃったからな。

何があっても生き残ってやるうじゃないか。

その為にも、まずはきちんとナデシコを逃げさせてみせる。

「・・・マエヤマ。準備、出来たぞ」

「はい。ありがとうございます。ウリバタケさん」

「俺からは何も言わねえ。いや、一つだけ言わせてくれ」

「なんでも」

「約束、きちんと護ってやれよ」

・・・聞こえてたのか。なんか恥ずかしいな。

「約束破る奴は最低の野郎だぞ」

「最低になったら嫌われちゃいますかね？」

「あたぼうよ。まあ、ミナトちゃんの心のケアは俺がやっつくがな」

「それは困ります。ウリバタケさんに取られたら泣くに泣けません」

「ハツハツハ。若造が」

う、ちょ、ちょっと、首絞まっていますっば。

「なら、よ。きちんと帰ってこいや。ミナトちゃんはお前の女だ」

「・・・ええ。そのつもりです」

「おう。行って来い」

「はい。行ってきます」

ウリバタケさんのもとから離れ、エステバリスに乗り込む。

破損したフレームの代わりは予備の高機動戦フレーム。

うん。予備があつて良かった。早速運がいいぞ。

武装は中から遠距離特化。

ひたすら時間を稼いでやろうと思う。

「・・・やるか」

エステバリスの中、ゆっくりと眼を瞑る。

いつになく落ち着いている自分が不思議でたまらない。

『マエヤマさん』

「艦長。ご指示を」

『はい。マエヤマ機は敵艦隊を引き付けてください。その間にナデシコは後退します』

「了解！」

ピシッと敬礼を返す。

ふふっ。今の威厳ある敬礼姿。軍人っばいですよ。艦長。

「艦長。辛い指示を出させてすみません」

『いえ。私はいいんです。マエヤマさん』

「はい」

『必ず戻ってきてください。艦長命令です』

「了解しました。軍内において、上司の命令は絶対ですからね」

『はい。絶対です』

ニッコリと笑うユリカ嬢。

でも、その中に少しだけ蔭りがあるのを俺は見付けてしまった。

「御武運を」

貴方の責任じゃありません。艦長。

これは俺の独断。貴方が心を痛める必要はないんです。

『マエヤマさんも、御武運を祈ります』

ピシッと再度敬礼。

そして、それに続くようにブリッジの皆が敬礼してくれる。

「……まいったな」

眼の前のモニタに映し出されるブリッジ映像。
そこに映る全ての者が敬礼で俺を送り出してくれている。

「・・・今なら何でも出来る気がする」

今、俺は彼らの命を背負っている。

その重みが苦しい時もあるだろう。

でも、今の俺には何よりも力になってくれていた。
その重みこそが、今の俺の原動力だ。

『エステバリス各機へ。帰艦してください』

『帰艦だあ！？　んな事してる余裕ないだろ！』

『作戦です。とにかく今は帰艦を』

『わーったよ。帰艦する』

次々と帰艦してくるエステバリス。

後は・・・アキトさんだけ。

多分、アキトさんもまた残るつもりだろう。

でも、俺とアキトさんは違う。

俺には逃げる術があっても、アキトさんにはない。

俺には長時間動ける機関があるけど、アキトさんにはない。

アキトさんには強引にでも戻ってもらおう。

「お、おい。なんであいつ出撃準備してるんだ」

「コ、コウキ。何を・・・」

「コウキさん！　貴方はまさか・・・」

「・・・そう。それが貴方の選んだ道なのね」

「・・・カツコ良すぎるぞ。良すぎるじゃねえか。コウキ。

だが、そんな男じゃねえよ。お前の教えてくれた男はそうじゃ
ねえ。

愛する女を残して死ぬような事は・・・しねえ。そうだろ？」
「ウキ」

「まったくカッコつけちゃって。でも、その行動は賞賛に値するよ」

『マエヤマ機。発進』

「了解！ マエヤマ機。発進します」

漆黒の宙に再度駆け出す。

俺のなすべき事。それは酷く困難な道のりだ。

でも、必ず成し遂げてみせようじゃないか。

自らも生き残り、ナデシコをも生かす。

その唯一の方法なのだから・・・。

第五十二話（後書き）

一つだけ、決してコウキ君は自己犠牲という精神からではありませんん。

単純にいざという時に逃げる事が出来るのは己だけ、

という点から自らがやるべきだと認識しているだけです。

ナデシコが無事と分かり、危険と認識した以上、即行で逃げると思
います。

フレームは既に渡ってしまっている訳ですし。

カスタム状態に移行するOSも即行で破棄すれば問題ないという訳
で。

第五十三話（前書き）

ああ！ やってしまった！

なんてチート。矛盾だらけの大戦闘って感じですよ。

何か感じる事があつたら報告の方、よろしく御願います。

それと、後書きにて色々ご連絡したい事がございます。

あ。更新停止とかじゃないのでご安心を。

第五十三話

「・・・よし」

ナデシコから重装備のエステバリスに乗って飛び出す。
一応はデイストーションブレードを一振り腰に備え付けてあるけど、
多分使わない。

接近したらその分、大きな隙になって、危険に陥ると思うから。
とりあえず、ガントレットアームの装着は必須。

これは牽制用として戦闘の幅を広げてくれる。
その状態で、両手にレールカノンを装備し、背中に大型レールキャ
ノンを備え付けた。

完璧なまでの射撃仕様。

まあ、そもそも接近戦大好きの木連軍人に接近戦を挑もうとは思わ
ないから別に問題ない。

そして、秘密兵器として、腰にすぐさま装着が可能なドリルアーム
を備え付けてある。

もちろん、デイストーションブレードとは逆の方向に。

これは俺の作戦では欠かす事の出来ない武装だ。

ある種、賭けとも無謀とも言える作戦だけど・・・。

確率は低くとも絶対に成功させてみせる。俺の秘策を。

「さて、行くか！」

視界に映る漆黒の二機。

報告を聞いた限りでは、見事二機の福寿の破壊に成功したらしい。それに、二対一で相手をしてきた福寿改も破壊に成功しており、こちらとしても、あの化物機を二機同時に相手しなくて済むというので一安心といった所だ。

もちろん、こちらの被害も尋常じゃなかつらしいけど……。だが、残念な事に俺が相手をしていた福寿改はほぼ無傷で残ってしまっている。

流石のガイでも敵しかったようだ。

そして、現在、ナデシコのエステバリスには撤退するように伝えたと為、

戦場に残っているのはブラックサレナの相手をしているアキトさんと俺の二機のみ。

戦況的は間違いなく劣勢だけど、その状況を覆すだけの策を用意したつもりだ。

「アキトさん！」

『コウキか！？』

「命令を聞いてないんですか？ 撤退してください！」

『いや。俺はここに残る！ 俺にはそうするだけの責任が』

「責任なんてどうでもいんです」

『何？』

「今やるべき事の最善。艦長はきちんと決断しました。次は貴方の番です」

ユリカ嬢は辛い決断をした。

当事者である俺が言うのも何だけど、一人と全クルーを天秤に掛ける事が出来た。

今度はアキトさんがそれをする番だ。

自分が自分が、と己を追い詰めずに、現実を見据えなければならぬ。

現状を把握せずに、全て自分でという考えで無理を通そうとするのは、
もういい加減にしないと成功するものも成功しなくなるし、絶対に後悔する破目になる。

『何を考えている？ コウキ』

「殿は俺が務めます。アキトさんは先に戻り、撤退してください」

『馬鹿な事を言うな。お前だけにそんな役目をさせる訳にはいかんだらう』

「いえ。それこそ、今のアキトさんには無理です」

『・・・どういう意味だ？』

なんか軽く殺気立ってるんですけど・・・。

別に實力不足とか、そんな事を言っている訳じゃ決してありませんよ。

「アキトさんは今も変わらず重力波に出力を依存しています。

どれだけアキトさんが凄腕のパイロットであろうと、機能停止になれば御終いです」

エステバリスの利点であり、弱点。

出力を他者の供給によって賄っているという点が正にそれだ。

小型化できるし、出力の安定性、高出力という面では非常に優れている。

だが、それ故に、距離を制限という大きな枷が付いてしまう事も事実だ。

『それはコウキも変わらないだろ？』

「いえ。出来るだけのバッテリーを積んできましたから」

『・・・それでそんなにもゴツイのか』

・・・まあ、否定はしません。

重火器ですらたくさん背負ってるのに、外付けバッテリーまでですからね。

ドリルアームも結構幅取ってるし、ゴツイのは自覚してます。

「とにかく、です。ナデシコが撤退している以上、アキトさんも下がらなければなりません」

『だが！』

「クドイです。それに、俺だって勝算のない戦いは挑みませんよ」

『・・・信じていいんだな』

「もちろんです」

『・・・分かった。俺はナデシコと共に後退する』

「はい。そうしてください」

『但し、だ。距離ギリギリまでは援護に回る。それだけは譲れん』

まあ、俺としても助かるから、拒否はしませんけど・・・。

「あんまりこっちに集中してナデシコから離れないでくださいよ」

『ふっ。無論だ。俺を誰だと思っている？』

あらまあ、ニヒルな事で。

「ナデシコの事。任せました」

『ああ。コウキこそ、きちんと帰って来いよ。犠牲になるつもりなんて毛頭ないんだろ』

「うす」

『了解した。後は・・・任せた』

そう言いつつ、飛び立っていくアキトさん。

当然、ブラックサレナがそれを追った。ただ、それを許す訳にはいかない。この戦場で最もスピードのあるブラックサレナをどれだけ抑えられるか。

それも、殿たる俺にとっては重要な事。

ブラックサレナはどうか分からないけど、他のエステバリス系は重力波に依存している筈。

ナデシコとナデシコの距離さえ離してしまえば、追い付く事は不可能。

ブラックサレナとて、単機では流石に向かってこないだろう。

性能さで劣っていても互角まで持っていける凄腕パイロットがいるのだから。

さて、撤退の目処が付いた所で……。

「久しぶりですね。ケイゴさん」

逃しはしませんよ。ケイゴさん。

きちんと、貴方には話して頂きます。

『……』

「だんまりですか？ ですが、教えてもらいました。木連優人部隊所属カグラ・ケイゴ大佐」

『……ええ。お久しぶりですね。教官』

……本当にケイゴさんだったんだな……。

ここは安堵するべきなのか、悲しむべきなのか。

ケイゴさんが生きてた事は素直に嬉しいけど、敵になってるってのは結構辛いものがある。

「教官つてのは勘弁してください。もうその役目は終わってるんで

すから」

『いえ。私にとってはいつまでも教官ですよ。コウキさん』

「それは光栄です。・・・さて、ケイゴさん」

『・・・はい』

「色々と聞きたい事がありますが、どうしても話してくれませんか？」

『教官に対して私が教える理由がありません』

「それなら、ケイゴさんにとって教えるに値する理由を作り出せば良いと？」

『・・・そうなりますね』

「・・・それなら、ここは戦場ですから。戦って、勝ち、そして、聞かせてもらいましょう」

『望む所です』

・・・状況的には完璧・・・かな。

これで俺の目的である情報収集と殿としての目的であるブラックサレナの引き付け。

それが同時に成立した。

後は・・・俺が全力を尽くすのみ！

「・・・モードをカスタムに移行」

恐れるな。立ち向かえ。

「・・・フィードバックレベルを・・・最大に」

憎むべくは己の異常じゃない。

それを使いこなせない自身の心の弱さだ。

「・・・情報伝達速度を・・・最大に」

自らを嫌うな。

セレス嬢は己の異常を受け入れ、誇りに思った。なら、俺にだって、出来る筈。

受け入れる。誇りに思え。

俺の力は異常だ。

だが、だからこそ、誰かを、何かを護る事が出来る。嫌う必要なんで・・・どこにもないだろう？

「並列思考展開。さあ・・・始めようか」

異常な俺だからこそ出来る。

俺だけの異常な撤退戦を。

「ハア！」

ダンッ！　ダンッ！

絶え間なく動き回る。

数という戦闘における絶対的な要素で負けている以上、正面から相手をすることは出来ない。

常に移動して、向こうを攪乱しつつ、隙を突く。現状で取りえる事が出来るのはこの動きのみ。

『クツ。隙がない』

『何故こんなにも狙いが定められる!?!?』

『・・・これが教官の真の実力ですか』

だが、そんな状態でも俺が押される事はない。

二つある秘策の内の一つ。

並列思考によるシステムとの共存。

以前、俺はシステムに意識を乗っ取られ、敵味方差別なく攻撃を繰り返した事がある。

あれは二度と忘れてはいけない苦い思い出であり、トラウマの根本でもあった。

だが、苦々しい中に、ある思い掛けない事実が発覚した。

それこそが、システムに意識を奪われている際の戦闘能力の向上。

事実、あの時、自身の能力の何倍もの戦闘能力が発揮されていた事がデータで分かった。

それなら、これを利用しない手はないな、とそう考えていた。

システムに乗っ取られたのは己の未熟。

それなら、より鍛えればいい。

トラウマを克服した後、俺は必死にシステムとの共存を成そうと努力した。

だが、結果は散々。成功する事なく、配線を焼き切るような結果に終わってしまった。

もう無理なのだろうか、諦めかけていた時に発生したコミュニケーション事件。

あの時、俺は二つの人格を同時に存在させるといふ摩訶不思議な事態に立ち会った。

事件の最中は、切羽詰っていた為に気付きもしなかったが、解決後、ある事に気付く。

この状態を維持する事が出来れば、

同時に二つの事を考え、実行する事が出来るのではないかと。

あの時の状態を参考にして、可能性の話でしかなかったが、早速実行に移した。

もちろん、素の状態ですべて並列思考なんて、まず無理。

そんな芸当は俺には出来ない。この世界がたとえSFの世界であろうと俺には無理だ。

だから、補助脳に補助人格のようなものを作製し、緊急時に協力してもらおう事にした。

通常のIFSによる補助脳では制御しきれないデータも俺の補助脳なら制御できる。

また、二度も意識を奪われるという事態が逆にプラスになってくれる筈だ。

そう半ば確信した上での賭けだったが、成功した時はホツとしたものだ。

やはり恐怖は恐怖だったらしい。うん。仕方ないだろう。

これによって、補助人格が生成され、緊急時における並列思考が可能になった。

この時は、単純に並列思考が出来る事に喜んでいた。IFSはイメージ次第で如何様にも変わる。

だから、並列思考によって負担も減り、一つの事に集中する事が出来る。

違う意味で、単純に憧れていたのも否定はできないが……。

当時はこの並列思考をつまぐ用いる戦闘方法の構築に力を注いでいた。

だが、この並列思考の真価はそんな事ではなかったんだ。

システムに意識を奪われる事に対して必死に抵抗していた俺。

でも、不意に気付いた。

奪われるなら奪われてしまえばいい。

その上で、暴走しないように自身できちんと支配すればいいんじゃないか、と。

並列思考というありえない技術を習得したからこそ出来る芸当。

戦闘中、補助人格をあえてシステムに奪わせ、その状態で俺自身の戦闘を補助させる。

もちろん、補助人格もあくまで俺であり、負担が一切掛からない訳ではない。
システムに奪われた補助人格を更に支配するのだって一苦勞だ。
だが、自身がシステムに奪われるよりは何倍もリスクが少なく、同等の戦闘能力が得られる。

その為なら、どんな苦勞でも背負ってやろう。

正に俺だからこそ、いや、異常を抱える俺にしか出来ない戦闘方法である。

「遅い！」

ピンポイントにレールカノンを放ち、敵機体の頭部を撃ち抜く。
撃破とまではいかないが、メインカメラを破壊したんだ。
無理せずに撤退するだろう。

これで残るは福寿改とブラックサレナのみ。いや。夜天か。

『よくも！』

福寿改がこちらに飛び込んでくる。

先程はやられたが、今の俺がやられる訳にはいかない。

「甘い！」

フィールドガンランスの先端をいなし、脇に足を突き刺す。
先端にデイスティーションフィールドを纏った足先だ。
強引にでも充分の威力を有する。

『クッ。この程度』

だが、敵もそうは甘くないようだ。

こちらの蹴りが命中する前にDFを脇に固めていた。
威力はあっても、貫く事が出来なければ大したダメージにならない。

「……………」

でも、その程度は何の問題もない。

今の俺がする事は時間稼ぎ。

そして、もう一つの策を実行する機会を伺う事。
それだけだ。

わざわざ接近戦の相手をしてやる必要はない。

『逃げるなあ！』

当然、突っ込んでくる福寿改。

しかし、俺も一度決めた事は何がなんでもやり通してみせよう。

「逃げる！」

ガントレットアームからの牽制。

威力はDFを纏っている福寿改にとって皆無のようなもの。
でも、多少の動揺を与える事は出来る。

『クソッ』

そして、また再び始まる高機動しながらの射撃。

速度で劣っていようと、的確に牽制する事で近付けさせない。

『シンイチ。下がれ！』

『ケイゴー！』

『……俺が行く』

「チー！」

福寿改が下がる。

そう、この状態で戦闘を行えるのは夜天のみ。

牽制を物ともしない強固なDFを常時発動し、一直線に進んでくるのは脅威以外の何物でもない。

・・・近付かれるのは仕方ないな。

それなら、近付かれてからお返ししてやろう。

幸運な事に、夜天の近接格闘能力はエステバリスよりも低い。

夜天で接近戦を挑むのは愚の骨頂。

「ハアアアアア！」

凄まじい速度で飛び込んでくる夜天。

先程の福寿改とは比にならない程のスピードで圧迫感が凄まじかった。

でも、それで、その程度で怯む訳にはいかないんだ！

「ハア！」

頭部から飛び込んでくる夜天に向けて両手を突き出す。

「グ・・・ググ・・・」

「うお・・・おおおおお！」

拮抗するディストーションフィールド同士。

身体全体にDFを覆わせた夜天と両手にのみDFを纏わせた俺。集中させた分、強度や出力が増すのは当然の事。

それなのに、拮抗してしまうのだから、技術力の差に戦慄する。

『ハッ！』

拮抗した状態で突如機体を回転させる夜天。

その突然の事態に対応する事が出来ず、

テールバインダーを喰らい、体当たりをも成功させてしまった。

「グッ」

フィードバックレベルの上昇には弊害がある。

それこそがこの痛みのフィードバック。

補助脳にフィードバックを担当させていてもこの痛み。

実際に俺が担当していたらどれだけの痛みだった事か。

・・・まあいい。

痛みがあるからこそ、生きていると実感できる。

痛みがあるからこそ、護るべき者がいると実感できる。

『やはり威力はありませんか』

当然だ。

体当たりはどれだけスピードが出せるかで決まってくる。

停止状態からの体当たりなんて大したダメージにはならない。

たとえば俺自身に痛みが来ようと、機体が無事なら何の問題もない。

「・・・どうするか」

対面する夜天。

後ろには福寿改が虎視眈々と俺を狙っている。

見た所、射撃能力に関してはそれ程優れている訳ではないから問題ない。

実際、福寿改のパイロットは接近戦志向だ。

ケイゴさんに関しては何のせいでも・・・己惚れかもしれないけど、射撃能力も優秀。

夜天の性能をきちんと發揮させている。

もちろん、アキトさん程ではないと思うけど・・・。

「・・・行けるか？」

狙うはナデシコ。

最後の秘策にして、この状況を一瞬にして打破できる俺の持ち得る最高の切り札。

それを実行する為には、とにもかくにも、ナデシコに接近しなければならぬ。

「・・・ああ。行くしかない」

玉碎覚悟なんて事は言わない。

生き残る為には、死地に飛び込んでやろうと思う。

死中に活あり。死を恐れる者より恐れぬ者の方が生き残る。

それが戦場の習い。腹、括れ。マエヤマ・コウキ。

「・・・ドリルアーム装着」

右手にあるガントレットアームを外し、拳で握り潰す。

この情報まで向こうに渡す訳にはいかないからな。万が一でも。

そして、腰の備え付けていたドリルアームをその上から装着する。

『おおおお！ ドリルじゃねえか』

・・・戦場で喜びの声を挙げるとかどうよ？

『・・・どうやら実現したみたいですね』

「おつちゃん元案で、うちの優秀な技師が開発に成功しました」

そういえば、ケイゴさんは知っていたんですね。

おつちゃんと熱く語ってましたし。

『残念です。出来る事なら、私が最も先にドリルを装着したかった』

『可能でしたとも。ケイゴさんがあのまま地球にいれば』

『・・・既にお気付きだと思いますが、私は木連人です』

「知っています」

『私は木連の為にあそこにいた。私情を挟む訳には』

「カエデが悲しんでましたよ」

『ッ！・・・そう・・・ですか・・・』

私情を挟まず、徹底してスパイを演じていたケイゴさん。

そんな彼の仮面を外してしまったのがカエデだった訳だ。

『私は荣誉ある木連軍人。たとえカエデを失おうとも任務を果たします』

「・・・」

それでも、貴方は諦め切れていない。違いますか？

「分かりました。強引にでも本音を話してもらいましょう」

『本音も何も、それが事実です』

「何を言っても変わらないのは分かっています」

だからこそ、力尽くにでも、吐かせてやるうって言ってるんだ。

「行きます」

『・・・ええ』

ドリルアームを突き出し、夜天に向ける。
現在の位置状況は、俺、夜天、福寿改、ナデシコという都合の良いもの。

上手い具合に状況を整えられたようだ。
ナデシコも無事に撤退を完了させている。

「うおおおっお！」

ドリルを最大限の速度で回す。

威力が乏しくとも貫通力は他武装を抜き出ているドリルアーム。
強固なディストーションフィールドとて・・・貫ける！

『そんなに直線的では容易に避けられますよ』

どうぞ、余裕ぶっこいて避けちゃってください。

俺の狙いは貴方じゃありませんから。ケイゴさん。

『なっ！ 教官。卑怯です！』

ドリルアームを向けながら進む俺を上昇する事で避ける夜天。

俺はそれをまるで気にする事なく、全速力で漆黒の宙を駆けた。

『シンイチ！ 避ける！』

『狙いは俺かあ！』

夜天のスピードは凄まじい。

だからこそ、隙を突く必要があった。

もし、逆方向に標的がいれば、辿り着く前に追い付かれていた事だ

ろっ。

「うおおおっお！」

叫ぶ。

俺の本当の狙いが何かを悟らせない為に、あらん限りの声で叫びあげる。

『クソッ！』

『良くやった！ シンイチ』

間一髪という表現が最も似合う状況下で見事に避けてみせる福寿改。残念。見事だったけど、貴方も俺の狙いじゃないんです。

『何！？』

『俺でも、シンイチでもないだと……。そうか！ 狙いは……。』

そう、俺の狙いはあくまでもナデシコ。

最高速度のまま、俺はナデシコに飛び込んだ。

『カグラヅキ
神楽月か！』

……。なるほど。ナデシコはカグラヅキね。

どうやら、完全にカグラ家専用の戦艦みたいだ。

だが、そんな事、もちろん、俺には関係ない。

「うおおおおお！」

ナデシコのDFは他の何よりも強固。

最高の矛を持たない代わりに最高の盾を持たせたのだから当然だ。

フィールドガンランスでも貫けなかつただろう。
デイストーションブレードでは掠り傷すら付かないだろう。
だからこそそのドリルアーム。

威力はなくとも、貫通力はナデシココにも通用する筈。
ナデシココの横腹を貫くように接近する。

『やらせるか!』

当然、追い抜いた福寿改から攻撃を受ける。

いずれ、夜天も追い付き、攻撃してくるだろう。

その前に、このDFを突破してみせる。

「貫けえええ!」

必死に叫ぶ。

今、ここで、突破に成功しなければ、全てが台無しだ。

『そこまです!』

そこまです、じゃないんですよ。ケイゴさん。

もう……。

「遅い! ハアアア!」

先端が潰れる程の圧力を發揮し、二度は使えないであろう程にペチヤンコになるドリルアーム。

だが、その犠牲の甲斐あって、見事にDFを突破してみせた。

『しまった!』

ナデシコCの弱点。

それは武装がハッキング以外に正面のグラビティブラストしかない事。

今のように、横から侵入してさえしまえば、妨げるものは何もない。

『シンイチ！ 止める！』

『おっ！』

感謝の意を込めつつ、潰れたドリルアームを敵に向けて投げ捨てる。

『クソッ！ 接近させるな！』

ありがとう。お陰で助かった。

後は・・・秘策を実行するまで。

「・・・ダウンロード」

恐らく、ケイゴさん達は戦艦を攻撃すると考えているだろう。

それは正しくもあり、間違いでもある。

俺の目的は戦艦を破壊する事ではない。

俺の秘策は・・・。

「ナデシコCの制御室は・・・そこか」

遺跡より知識をダウンロードし、ナデシコCの制御室を探り当てる。知識のダウンロードにより頭痛が襲うが、こんなの強制ボソソジャンプに比べたら大した事ない。

ゴンッ！

迫り来る福寿改と夜天を前に、自身が出せる最高スピードで制御室に肉薄し、拳を叩き込む。

別に制御している部分を破壊しようという訳ではない。

それでは、俺の狙いは達成されないから。

俺の狙いは・・・ナデシココの掌握だ。

「急げ」

エステバリスから降り、制御室のコンソールに触れる。

空気圧によって外に吹き飛ばされそうになるが、そこは俺の異常な身体能力。

扉近くの柱にワイヤードフィストのワイヤーを括り付け、強引に接近した。

外からの攻撃に晒されるといふ恐怖はあるが、エステバリスがガードしてくれている筈。

一刻を争う状況下、命を惜しんでいる暇はない。

「オモイカネだね。初めまして」

『初めまして』『貴方は誰?』『ルリは?』

データは消去されていない。

多分、後々に転化して使えるから。

でも、主導権は奪われてしまっているみたいだ。

「俺はマエヤマ・コウキ。ちょっとだけ力を貸して欲しい」

『分かった』『任せて』『いつでも』

それなら、俺が協力して主導権を奪ってしまえばいい。

「ハッキング・・・開始」

俺の狙いはただ一つ。

ナデシコCのハッキングによる敵戦力の掌握。
長所が弱点になるなんて事はいくらでもある。

ナデシコCの最大武装であるハッキング。

それをこちらが利用してやれば、艦隊程度の掌握は容易。

まさか自艦の武器が味方に牙を向くなんて、考えもしなかっただろ
う？

ゴンッ！ ゴンッ！

「侵入がバレたみたいだな」

扉を叩く音が聞こえてくる。

・・・自分でも不思議な程に冷静だ。

「オモイカネ。空けちゃ駄目だぞ」

『もちろん』 『分かってるよ』 『いけいけ〜』

ハハッ。期待に応えるところでしょう。

『そこまでです！』

『抵抗せずに捕まりな！』

外部スピーカーかなんかだろう。

フィールドガンランスをこちらに突き付ける福寿改と夜天から声が
聞こえた。

「・・・」

『残念でしたね。教官。そこまでです。大人しく捕まってください』

「・・・ケイゴさん」

『ごちらとしても貴方に対してはきちんとした待遇を
「残念ながら、チエックメイトです」

』

その瞬間、俺以外の全てのものが動きを止めた。

第五十三話（後書き）

はい。並列思考という新しい武器を身に付けたコウキ。

以前起きたシステムの暴走、コミユニケ事件。

それらのマイナ斯的なイベントをプラスに転化する画期的な秘策でした。

コウキ自身の戦闘能力が向上する訳ではありませんが、補助人格によって最高の環境にて戦闘を行えるといった感じですよ。

コウキが導入したソフトは勿論の事、

今までの戦闘データをフィードバックした鬼的な強さを発揮します。

そして、またもやコミユニケ事件を参考にした乗っ取り作戦。

機械に出来て、俺に出来ない筈がないという観点から生まれた秘策。侵入して内部から掌握してしまおうというコウキだからこそ出来た秘策です。

オモイカネとの絆がないので、火星圏掌握とは出来なんでしょうが、コウキ単体の力で、ナデシココやそれに搭載されている機体ぐらいなら、

簡単に掌握を行えてしまいます。チートを嘗めるなって感じですよ。はい。

とまあ、ちよつとやりすぎじゃねえ？ という展開でしたが・・・。戦力差的にこのぐらいまでやらないと負けそうだったので、

コウキ君には遂に異常を同時に三つも発揮してもらいました。

ナノマシンによる並列思考の展開。

遺跡からのダウンロードによるナデシココ内部の把握。

そして、身体能力の向上による空気圧からの脱却。

あれですね。コロニーとかで壁が破壊されたら、

内部の空気が宇宙間に飛び出すっていう場面がよくあるじゃないで

すか、
ガンダムで言えば、アムロの親父さんが飛ばされるシーンとか。
あれを身体能力の異常で解決してしまった訳です。
もちろん、ワイヤーを柱に巻きつけなければ流石に無理ですけどね。
ともかくにも、コウキ君がある意味開き直るお話でした。

はい。さて、前書きの方でお知らせしました、連絡というか報告です。

読み直していく内に気付いてしまった最大の矛盾について、
お詫びすると共に報告したいと思います。

意外と気付いていないのか、

それとも気付かずスルーしてくれる寛大な読者様達なのか。
ありがとうございます。

あの・・・。

イネスさんって火星の救民ですよ？

なんでナデシコに乗ってられるの？

・・・はい。来ました。来ちゃいましたよ。

下手すると半分ぐらい書き直す破目になりそうな矛盾です。

いや。報告するべきか悩んだんですが、きちんとお詫びしたいと思
いまして。

それらしい理由をコミニケ事件の時に話そうと思ったのですが、
展開的に無理が出そうなので、このような形で説明したいと思いま
す。

イネス女史はネルガル権限により、火星の救民ではなく、
始めからナデシコに乗っていた事になっています。

ナデシコとしては知識があると同時に、

設計者である彼女には搭乗していて欲しかった訳ですね。

はい。強引ですが、納得してください。

今回の話ではちょっと無理があるかなってシーンがかなり多いので、違和感があれば随時修正していこうと思います。

何かお気付きの点がありましたら、報告して頂けると本当に助かります。

長々と大変失礼しました。

PS カグラツキって草壁さんの旗艦の名前らしい……。

でも、状況にあって、ピッタリの名前はこれしかなかった。

草壁さんには違う名称の戦艦を用意するつもりでしょう。

第五十四話（前書き）

むむ。むむむ。な御話。

こついで展開を書くのって難しいですよね。
ちよっとまとまりがないように感じました。

第五十四話

「な、何が起きた？」

「動け！ 動けえええ！」

スピーカーから響いてくる声。

残念ですが、既に貴方達は俺の支配下です。

「さてつと、まずは戦闘データと戦闘映像を削除するか」

『了解』 『分かった』 『OK~~~~』

この戦闘データを次に繋げられたら困るので削除。

この映像で俺に眼が付けられるのが嫌だから映像も削除。

うん。完璧かな。

ナデシコCのデータも消そうか悩んだけど、それは状況次第で事で。

オモイカネの記憶は完全に取っておきたいし。後は……。

『……教官。何をしたんですか？』

さあ、どうするか。

正直に全てを話して、交渉材料にしてもいいけど、そうするとハッキングの危険性に気付かれてしまう。

現状では無理かもしれないけど、ナデシコCが手元にある以上、いつハッキングの脅威が地球側を襲うか分からないしな。

下手に情報に向こう側に渡すのはまずい。

この状態のままナデシコCを地球に持っていつても構わないけど・・・
・・・どちらにしろ、今の所は誤魔化しておくか。
コミュニケの設定は適当に弄くってつと。

「ケイゴさん。俺の本職はプログラマーですよ。全てを機能停止にする事ぐらい簡単です」

制御にはオモイカネが必要なコミュニケ。

今回、ナデシコCのオモイカネに協力して頂きました。

ありがとうございます。

『なるほど。ウイルスでも仕掛けましたか？』

「まあ、そんな感じですよ。カグラヅキ・・・でしたっけ？ それを経由すれば容易に行えます」

『・・・敵いませんね。教官には教わってばかりです』

「そんなつもりはありませんけど？」

『いえ。今回も大事な事を教わりました。戦闘は決して戦闘力だけではないと』

まあ、僕の場合は反則ですけどね。

「さて、ケイゴさん。貴方にはいくつも聞きたいがあります」

『・・・』

「答えさせるだけの環境を作り上げたつもりですが？」

『・・・確かに』

今、向こうはハッチを空ける事も出来ない。

俺の質問に答ええない以上、コクピットから抜け出す事も出来ないんだ。

もちろん、殺したい訳じゃないから、空気の循環はきちんとさせてるけど。

『貴様！　このような手段！　卑怯極まりないぞ！』

えっと、確か、キノシタだっけかな？

「胸を張って言える言葉じゃないですけど、勝てば官軍なんですよ？」

『クツ、クソオ』

実際、あの絶望的な状況を引っくり返すにはこれしかなかった。卑怯と言われてもね、俺の十八番は機動戦じゃなくてこっちだし。

「先程、そこの方から聞きました。突如として現れた未知の技術、と」

『……シンイチ。余計な事を……』

『す、すまん』

ああ……。確かに上官なんだな。ケイゴさんの口調にも遠慮がないし。

「カグラツキ……でしたっけ？」

『はい。間違いないですよ』

流石に艦名だけじゃ動揺しないか。

「そして、夜天。貴方達は創り上げたのではない。偶然、手に入れた」

『……』

「その技術、既に多くの兵器に転化しているようですね」

現状、エステバリスカスタムが二機作り上げられただけだが、恐らく、それだけという事はないだろう。

既に何十機と製造されていてもなんら不思議はない。

「……ええ。その通りです」

「……やはり。」

エステバリスカスタム以外にも製造されたものがあるらしい。多くの、と訊いて、素直に応えたのだからその可能性は高い。

「ケイゴさん。俺は勘違いしていましたよ」

「は？」

「木連人はジンのような機体を好み、福寿のような機体は好まないと思ってました」

「……その考えは間違っていますよ。事実、福寿は受け入れられていません」

「なるほど。それなら……」

木連軍人の多くがジンシリーズを好む中、こうまで福寿系統に拘るカグラ艦隊。

恐らく、今まで戦ってきた福寿はケイゴさんと縁がある部隊なんだろう。

「何故、福寿が量産できるのですか？」

核心を突く。

カグラ家にどれだけの権力があるかどうかは分からない。

だが、権力があるだけで、果たして嫌われている機体を量産できる

だろうか？

もちろん、権力で強引に通す事も出来るだろう。でも、そんな事を、果たしてあのケイゴさんがするだろうか？

『・・・教官。貴方には全てお話ししましょう』

『おい！ ケイゴ！』

『シンイチ。どちらにしろ、俺達の目的の為に地球の組織と接触する必要がある』

『しかし、こいつにそんな力はないだろう？』

『いや。俺は教官こそが戦争を行く末を担っていると確信している』

ケイゴさん。考え直して……。過大評価過ぎる。

『教官。教官は優人部隊をご存知ですか？』

優人部隊。

草壁中將が実質的にトップを張る木連のエリート軍団。

遺伝子改良によってB級ジャンパーとなった木連側の中核部隊といった所か。

それに、エリートと言われるだけあって、木連式柔術などの武術も極めている。

言い方を変えれば、草壁に心酔する木連屈指の草壁シンパシー。

うん。どんな言い方しても厄介極まりない集団だね。

「あまり良い印象はないですね」

『・・・なるほど。では、優人部隊内にも派閥がある事はご存知ですか？』

「へ？」

そ、そうなの？

俺はてつきり草壁派一筋かと思つてた。

「えっと、草壁中将の派閥だけじゃないんですか？」

『中将をご存知とは……。教官はなんでもご存知なのですな』

「……。あ。うん、まあ、はい」

アハハと苦笑いして誤魔化してみる。

まあ、誤魔化してるってバレてるだろうけど、スルーしてくれるよね？

『まあ、いいでしょう』

流石です。ケイゴさん。

『優人部隊は木連軍人のエリート達が集まってくる部隊です』

「はい」

『そのような部隊を何故中将だけに任せるのでしょうか？』

「えっと、それじゃあ、権限を握っているのは草壁中将だけじゃないと」

『ええ。草壁中将は権限を与えられている一将校でしかありません』

でも、実質的に権限を握ってるのは草壁なんだよな？

「推測するに、ケイゴさん、もしくはケイゴさんの親類の方。

それらの方にも同様に優人部隊の権限を与えられているんですか？」

『流石は教官ですね。その通りです』

「それなら、何故、草壁中将があれ程までに幅を利かせているのですか？」

『彼のカリスマ性とも言えいいんでしょうか。』

中将は木連の聖典ともいえるゲキ・ガンガーを巧妙に用い、その弁舌能力と共に民衆を上手く誘導し、他將校より高い権限を得たのです』

・・・なるほど。

それまでゲキ・ガンガーは決して徹底抗戦を訴える道具ではなかったんだ。

民衆の誰もが、その中でも軍人達が圧倒的に支持するゲキ・ガンガーだ。

それを何の目的にせよ利用しないのは勿体の無い事。

そうして得た結論が草壁中将によるゲキ・ガンガーを用いた民衆誘導。

道理で現実路線に行く草壁がゲキ・ガンガーのような理想を語った訳だ。

彼にとってはあくまで起爆剤だったんだな。ゲキ・ガンガーは。

「・・・ケイゴさんの所属する派閥はどのような？」

『カグラ大将を中心とした和平派、とでも言えばいいんでしょうか』
「わ、和平派!？」

この時期に和平派が存在していたのか!?

ってか、カグラ大将って誰さ? ケイゴさんの父親?

「木連は地球に恨みがあつた筈では!？」

『・・・否定は出来ません。私とて恨みがない訳ではない』

「・・・」

『しかし、資源が乏しく、プラントに依存している私達は先が短いのです』

要するに、草壁は侵略する事でその危機から脱しようとした。

反面、神楽派は和平を結ぶ事でその危機から脱しようとした。同じ目的、でも、選んだ方法が違うって事か。

「・・・妥協して、和平を望むと」

でも、そんな理由で和平を結んだ所で成功する訳がない。

民間意識が徹底抗戦の時に強引に和平を結べば後に争いになる事は必然。

和平を目指すのならば、心底から和平を望む信念が欲しいと思う。

『始めはそう考えていました。事実、卑怯千万な輩に膝を折るなんて、と』

卑怯千万。

言われて仕方のない事を確かに地球側はしている。

和平の使者の暗殺。事実の隠蔽。

拳げればキリがない。

『ですが、一方的に卑怯千万と言える立場ではなくなっていました。火星大戦を機に』

火星大戦。

一方的な殺戮。

宣戦布告もなしに攻撃する事は卑怯以外の何ものでもない。

ハッキリ言って、残虐な行いであり、非難を受けても仕方のない事だ。

『教官。私達は実際に火星の地を踏みました』

「・・・多くの死者をその眼で？」

『はい。あまりにも惨い。見るに耐えないものばかりでした』

当たり前だ。死体なんて見ていて辛いだけ。
それが自分達の作り出した一方的な虐殺だったら尚更。

『カエデに会って、私は更にその認識を深めました。私達こそ罪深い存在である』

「・・・カエデが」

『教官。貴方の言う通り、戦争に正義なんてなかったのですね』

落胆したように話すケイゴさん。

彼は軍人として、誇りを持ち、信念を持っている立派な人間だ。もちろん、自国の為という正義を抱えて、活動していただろう。

だからこそ、自国が行った正義の理念に反する虐殺が耐えられないんだろう。

『これ以上の悲劇を食い止めたい。それが私達神楽派共通の認識です』

「それは、俺達改革和平派と同じ思いですね」

『はい。だからこそ、私が地球に赴いたのです』

「改革和平派と接触する為にですか？」

『それも勿論ですが、私には二つの目的がありました』

「二つの目的？」

『一つは先程述べた改革和平派との接触。』

私は神楽派を代表して、改革和平派と接触しました』

「それなら、身元を明かしても良かったのでは？」

『かもしれませんね。ですが、そうするともう一つの目的を果たせなかった。』

あの時はミスマル提督と面識を持つだけで充分だったのです』

「もう一つの目的とは？」

『教官の事です。既に推測されているのでは？』

「・・・CASですよな？ 恐らく、神楽派の権力を高める為に」
『その通りです』

当時、といっても、詳しい事は分からないけど、
草壁派と神楽派ではまるで規模が違っていたんだろう。

「でも、その話には前提とするべきものがある。違いますか？」

『はい。その通りです。カグラヅキ。それが現れたからこそ実行できた』

そうだ。

もし、カグラヅキ、要するにナデシコCが現れなければ、彼らは何も出来なかった。

たとえ和平を訴えようと、草壁派に派閥争いで敗れ、唱える事すら出来なかっただろう。

事実、原作では彼らの事は一切描写されていない。

それは恐らく神楽派が完膚なきまで敗れ、表に出る事すら出来なかったから。

彼らが台頭できたのは、紛れもなくアキトさん達の逆行が原因。

・・・こうして、一つの要因で未来は改変されていくんだな・・・。

『カグラヅキの存在。それがあからこそ、私達はここまでこじつける事が出来た』

「ジンシリーズの生産を中止し、福寿シリーズの生産を中心にさせた事ですか？」

『それは若干違いますね』

「え？」

『ジンシリーズの生産は中止されていませんよ。』

福寿シリーズの生産はあくまで私達の派閥だけです』

「それじゃあ、大した生産力では・・・」

『ええ。もつと実権を握ればいいんですが、現在ではこれが限界ですね』

・・・なるほど。

福寿とてそう大量に生産できる訳ではないのか。ちよつと安心したかな。

でも、果たして草壁が福寿シリーズの生産に興味を示さないなんて事があり得るのか？

彼とてエステバリスの性能は知っている筈。脅威も感じていたと思う。

事実、火星の後継者事件ではジンシリーズではなく、

夜天光などの小型人型兵器を使用していた。

それなら、今現在、小型人型兵器に着手できる環境があれば、

あの現実路線である草壁が手を出さない訳はないと思うんだけど・・・。

「草壁派にはその情報は？」

『私達が権力を握るには如何にこちらの戦力が有効であるかは示すしかありません。』

草壁派にこれ以上権力を握らせない為にも秘匿は当然です。確實ではありませんが』

・・・ここで思い出されるのが北辰。

彼のような隠密行動に特化していそうな人間が草壁派にいる事は脅威でしかない。

下手すると、既に北辰が福寿の情報を手に入れている可能性がある。そうなれば・・・。

「夜天光が出てくる可能性もある・・・か」

『はっ。』

「あ、いえ。こちらの話です」

既にブラックサレナという五年後の技術がここにはあるんだ。その情報があれば、決して夜天光の開発は不可能ではない。まあ、かなりの時間はかかると思うけど……。

「ケイゴさん。カグラヅキが現れたのはいつ頃なんですか？」

『今から数えますと二年と半年程前ですね』

「……やつぱり」

カグラヅキが現れたのはアキトさんが逆行してきた時とほぼ同時期と考えて良いだろう。

そうになると、既に二年半もの期間、ブラックサレナやナデシコC、ユーチャリスについて研究されている事になる。

最早、地球側と木連側には五年もの技術差があるといっても過言ではない。

それが神楽派の和平の為に使われればいいけど、抗戦派の為に使われたら泥沼になる。

数で勝る地球と質で勝る木連。

決着がつく頃には人口が半分以下になってたなんて事もあり得る。

……やはり、ここは和平派同士での繋がりを深めておく必要があるりそうだ。

『やはり……とは？』

「ケイゴさん。俺はこのような形ではなく、きちんとした形で貴方達と話したい」

『それは……私も同じです』

「すぐにもミスマル提督と連絡が取れば良いのですが、そもそもいきません」

『確かに』

「代表して、なんて偉く出るつもりはありませんが、改革和平派の一員として、

木連内における和平を目指すグループ、神楽派と繋がりを持ちたいと考えています」

『それでは、教官が和平派同士の橋渡し役を務めてくださると』『現段階では俺が適任かなと思っただけです。』

ケイゴさん。俺は貴方を信じていいのでしょうか？」

『・・・もちろんです。私は絶対に教官の信頼を裏切りません』『分かりました。それなら・・・』

コンソールからオモイカネに通信。

「ごめんね。もうちょっと我慢してて。絶対にルリちゃんに会わせてあげるから」

『ありがとう』『大丈夫』『我慢して待ってる』

「うん。偉い偉い」

ハッキングをカット。

ナデシコの制御を通常制御に戻す。

『ん？ 動くぞ。ケイゴ』

『・・・ああ。教官。ありがとうございます』

「お礼を言われてもなあ・・・」

お礼を言われるような状況でもないと思う。

『シンイチ。頼めるか？』

『そこのお客様をご招待ってか？』

『ああ。大事なお客様だ。態度には気を付けろよ』

『へいへい』

うん。そういうのって、普通当事者の前じゃ言わないよな。まあ、なんか、そういう事ばかりで慣れたけど。

『つう訳で付いてこいや』

僕、お客様なただけだな。

まあ、いいけど・・・。

エステバリスに搭乗して、福寿改の後ろを追う。

ここで攻撃されたら俺なんてひとたまりもないだろう。

でも、ケイゴさんは裏切らないと断言してくれた。

彼は己の言葉を裏切るような事はしない人間だ。

だから、安心して、俺は彼らを追う事が出来る。

『今後どうなるかは分からないが、今の所は味方とっていいようだな』

「とりあえずはそうなりますね。えっと・・・」

『キノシタ・シンイチだ』

「あ、はい。シンイチさん」

『まったく・・・いい加減、名前を覚えたらどうだ？俺がお前に名を告げるのは三度目だぞ』

いや。敵の名前とか覚えちゃったら覚悟が鈍るでしょうが。

変なのはそっちだよ？俺は変じゃない・・・多分。

「善処しますよ。シンイチさん」
『まあ、構わんが・・・』

協力関係になつたら、素直に名前で呼ばせて頂きます。

「・・・マジで？」

ナデシココのブリッジに辿り着いた第一声がこれだった。
あ、うん、もちろん、俺のね。

「・・・女性ばかり」

木連軍人イコール男性ってイメージだった自分。
まさか、こんなにも女性がいるとは・・・。

「確かに木連は女性が少ないですからね」

「・・・ケイゴさん」

「こうして対面するのは何ヶ月ぶりですかね」

「ええ。そうなります」

・・・相変わらずのイケメン。

あ、別にこれはどっちでもいいんだけどさ。

「彼女達は私達の思想に共感して協力してくれているのです」
「和平・・・ですか？」

「ええ。逸早く安心できる環境を作りたい。
家を守るという意識が強いからこそその選択でしょう」

なるほど。なんとなく、木連人らしい考え方の気もする。

プラントに生活が依存している為、男性が軍以外で働く事は少ない。その結果、必然的に、女性が家を守り、男性が働くという意識が出来るのだろう。

軍人なんていつ死んでもおかしくないってというのがそれに拍車を掛けて。

まあ、木連自体が女性を大事にする国民意識だから、専業主婦が多かったのもあると思うけど。

「皆。紹介しよう」

はい。出ました。

その好奇やら怪訝やらの視線。

気分は転校生ってか？

「俺が地球にいた頃にお世話になったマエヤマ・コウキさんだ。地球の和平派の一員でもある」

えっと、緊張するけど、第一印象って大事だよな。

「ご紹介に預かりましたマエヤマです。」

これを機に地球と木連の両者で互いに歩み寄る事が出来れば嬉しく思います」

パチパチパチパチパチ。

お、おお。ありがとうございます。

どうにか及第点を頂けてよう。

「私はこれから彼と話をしてくる。副長。その間、任せたぞ」

「ああ。任せておけ」

「ん？ もしかして」

「俺がキノシタ・シンイチだ」

「あ、はぁ・・・御願います」

「御願ひされてやるう」

一言で言うなら、ごっつい。

まるでゴートさんのようだ。

いやぁ、恰幅がありますなぁ・・・。

「ほら。握手だ」

「あ、はい」

ガシッ！ ガチガチガチ！

あぁ。あれですね。

握手したら力勝負したくなるお年頃って奴。

そりゃあ、見た目的に僕の方が弱々しいでしょうね。

でも・・・売られた喧嘩は買いますよ？

ガリッ！

うん？ ガリッ？

「グウ」

あ。やばっ。力を入れ過ぎちまったか？

「う、嘘だろ？ 副長が艦長以外の人に力勝負で負けた？」

眼の前で膝を付くシンイチさん。

それを見て、俄かに騒ぎ出す艦内。
うん。退散しようかな。

「行きましょう。ケイゴさん」

「教官。お手柔らかに御願いますよ」

苦笑で片付けちゃうんだから、大人だなあ。

パッとブリッジから飛び出す俺。

その後に、ケイゴさんが・・・。

「シンイチ。身体能力では教官は俺よりも遙か上にいる。甘く見ない方が良く」

「・・・・・・」

「・・・・・・ええええええ！」「」「」「」

ケイゴさん。最後に爆弾を落とさずに素直に出て来ててくださいよ。
いや。マジでさ。後々面倒ですから。

「こちらで教官と話したいと思います」

辿り着いた先は艦長室。

うん。どうやらマジ話っぽい。

「分かりました」

シューインって音を鳴らしながらスライドする扉。

その先には執務室っぽい内装の部屋があった。そういえば、艦長室とか副長室には執務室が付いてるんだっけか？ まあ、書類整理とかで大変だろうからな。ユリカ嬢も苦労してたし。

「こちらにお座り下さい」

机の前にあるソファに着席。

さて、ケイゴさんの真意を根掘り葉掘り聞いてやろう。さつき聞けなかったカエデの事も。

「粗茶ですが」

「あ、ありがとうございます……え？」

対面に座るケイゴさん。

同時に横から差し出されるお茶。

大事なのは横からって事。

「あの……」

いつの間になりました？

「ご苦労様。マリア」

しかも、マリア？ え？ 何？ 誰？

「ケイゴ様。こちらの方が御話されていた……」

「ああ。俺の教官であり、この戦争の鍵になれる方だ」

また、大袈裟な物言いだ。

「あの、そちらの方は？」

気付けば横にいたメイド服の綺麗な御姉様。

うん。様付けといい、あれですか？ マジでメイドさんですか？

「彼女は俺の家に代々仕えてくれているツバキ家の娘でマリアという」

「ツバキ・マリアと申します」

「あ。これはご丁寧にどうも」

きよ、恐縮つす。

「さ、流石は名家。専属のメイドですか」

「どちらかという秘書のような形ですが」

いや。メイド服で秘書は厳しいんじゃないかな？

ま、まあ、いいや。

「もしかして、あれですか？ 木連式柔なんかも極めちゃったり」

ま、まさか、漫画じゃあるまいし、最強メイドさんとかはないよね。

「流石の慧眼ですね。マリア。まだまだ甘いな」

「はい。バれてしまいました。まだまだ未熟ですね」

「精進あるのみだ」

「はい」

げ、げげげ。

マジだったよ。最強メイドさんだったよ。

しかも、そうだとバレないような技術まで習得済み。
俺？ 完全に気付いてませんでしたが、何か？
うん。とにかく、だ。現実世界恐るべしって再認識した。
というか、凄く仲が良さそうに映るんですけど……。

「もしや、カエデのライバル？」

「は？」

「あ、なんでもないですよ。はい」

使用人と主人の恋。

復讐する側と復讐される側の恋。

うわっ。なんか、どっちもそれらしい。

「コホン」

さて、世間話はこちらまでにしておこう。

俺は今、改革和平派の一員としてここにいるんだ。

ケイゴさん達神楽派の方針を聞き、きちんと橋渡し役を務め上げないと。

「それじゃあ、真面目な話をしましょうか」

「分かりました。マリア」

「はい。失礼致します」

奥の部屋へと一礼してから去っていくマリアさん。

うーん。護衛的役割もあるんだろうなあ。去ってからなんか視線を感じる。

まあ、気にしちや駄目だな。彼女は彼女の仕事をこなしているまでだし。

「先程、見させて頂きましたブリッジですが、女性の方々はIFSを付けていましたね」

さつきは触れなかったけど、確かにカグラヅキの制御はIFSによって行われていた。

但し、複数人による制御だったけど。

まあ、ルリ嬢が一人で処理しているのを複数で処理してるって事だろうな。

流石にルリ嬢クラスの人間は木連にはいないだろうし。

仕方ないといえば仕方ない。

「ええ。私がこちらに戻ってくる時に確保しました。やはり戦艦の制御にはIFSが適しています」

「それじゃあ、ケイゴさんはCAS、IFS、その二つを手に入れて持ち帰ったと?」

「正確にはそれに加えてエステバリスの実戦データも持ち帰りました」

ああ、そういえばそうだったな。

チューリップによる帰還作戦。

見事に戦闘データごと持ち帰られてしまった。

「IFSを持ち帰ったといいますが、それなら機動兵器もIFSで良かったのでは?」

「そう思われるかもしれませんが、それは実際には難しいのです」

「難しいというと?」

「IFSはイメージ次第です。残念ながら、木連人はイメージが苦手です」

「まあ、それは地球人にも言えますが・・・」

唯一慣れてるっつえば火星人ぐらいだろうなあ。
地球では相も変わらずIFSに対して忌避感があるし。

「それだったら、CASの方が使い易いんですよ。あれは良いシステムです」

「アハハ。褒められて嬉しいやら悲しいやらです」

利用されている側としては褒められても苦笑いかな。

「気になったんですが・・・」

「はい」

「技術提供という形には何故しなかったんですか？」

「と、いうと？」

「ケイゴさんが地球に来たのは面識を持つ為と技術を得る為ですよ
ね」

「そうなりますね」

「その時、既に神楽派は和平を方針としていたんですよね？」

「はい。当時は草壁派にかなりの差を付けられていましたが、方針は変わりません」

「それなら、その時点で地球の和平派と繋がりを持ち、

互いに協力姿勢を築いても良かったのでは？」

「いえ。それは時期尚早でしょう。改革和平派の事も良く知りませんでしたし」

「ですが、所属している間にミスマル提督の志は理解した筈。もう疑っていないのでは？」

「もちろんです。ミスマル提督なら、私も安心して協力関係を築ける」

「それでも、手を結ぶには早いと？」

「当時の権限が低い状態で地球と手を結べば一転して反逆者になっていたでしょう。」

あの時の私達は立場が弱かった。

少しでも味方を得られなければ、そのような大胆な事は出来ませ
ん」

「ですが、実際、クリムゾンと組んでいたと聞きますが？」

「・・・本当のご存知のようで」

「・・・なんか自爆してる気がする。

まあ、秘密事はなしの方向でいこう。

そうしないと、信用してもらえないだろうし。」

「クリムゾンとの提携は上層部の決定でしたから、物資の乏しい我々には拒否しようもない」

「それを国民は？」

「知らないでしょう。知っていれば、悪の地球に縋るなど、といって暴動が起きています」

「そこまで国民は徹底抗戦を訴えていますか」

「・・・やはり茨の道なんだな。

国民意識の改革から始めないといけない。

国民の総意を和平を運ぶのは一筋縄ではいかなそうだ。

「私達の派閥は当初、地球側に事実を認めさせ、

謝罪させる事で和平の未知を切り開こうとしました」

「はい。それはこちらとしても当然の事です」

「ですが、火星大戦によって、その方針も変更せざるを得なくなっ
た。」

今の私達は両者による事実の承認、互いへの謝罪、火星への賠償
を目的としています」

「火星への賠償？」

「当然の事だと私は認識しています。」

「私達は誰よりもまず始めに火星の方々に謝罪しなければならない」

事実を事実と認めて受け入れるその姿勢に好感を覚えた。

原作では、火星に対する処置はなんもなかった。

それは木連が眼を逸らしている事と同義。

彼らが草壁派に勝利する事を祈らずにはいられない。

それが、生き残った火星人達にとっても何よりの事だと思うから。

「それでは、俺はミスマル提督にそう告げましょう。

両者による謝罪と火星への弁償。それこそが和平の第一歩である
と」

「はい。御願います」

頭を下げるケイゴさん。

その姿からはなんとしても今の関係を修復したいという熱い気持ち
が伝わってきた。

だから、俺も同様に頭を下げる。

「こちらこそ、よろしく御願います」

今の俺に出来る事はケイゴさんとミスマル提督との間を取り持つ事。

そして、万が一に備えて、エステバリスを強化する事。

その二つだ。

現状で行える事は少ないけど、和平派同士の繋がりが平穩に繋がる
なら頑張ろうと思う。

それが、両者と知己である俺だけにしか出来ない仕事だって思うか
ら。

それぐらいなら、俺の目指す幸せの障害にはならないだろうし。

「貴方と再会する事が出来て良かった。コウキさん」

「こちらこそ、貴方が和平を唱えてくれていて良かったです。ケイ
ゴさん」

俺っていう頼り甲斐のない人間が橋渡し役だけど、互いに歩み寄る
姿勢が見え始めてきた。

なんだか、これでようやく和平への道が見えてきたって、そんな気
がするんだ。

第五十四話（後書き）

神楽派とようやくコンタクトが取れました。
ゲキ・ガンガーを聖典として捧げたからこそ、
失われた幻の作品すら見た事のある神楽家。
その結果、和平の道を得られたんですね。
手を取り合う事はできるんだ、と。
さてさて、少しずつですが、終わりが見えてきた気がします。
最終回まで応援してくださいね。

PS あ。マリア登場です。

漢字で書けば麻里亜といった所ででしょうか？

彼女はカエデと争う事になる・・・かも。

その辺りは本編には出さなさそうですね。

想像を膨らませてみてください。

第五十五話（前書き）

ちよつと短いかな。

第五十五話

S I D E M I N A T O

「・・・マエヤマさん。大丈夫かなあ・・・」

「・・・ユリカ。残念だけど・・・」

「うん。分かっている。可能性で言えば生きている方が不思議なんだからって事は」

「・・・ユリカ」

「・・・私は覚悟が足りなかったのかな？」

「ユリカ。前を向こう。そんなんじゃ、犠牲になってくれたマエヤマが報われない」

「・・・うん」

艦長と副長の会話が示すように今、ブリッジ内には暗い雰囲気が出ている。

・・・というか、勝手にコウキ君を殺さないで欲しいんだけど。

「ミナトさん。マエヤマさんは・・・」

「大丈夫よ。メグミちゃん。戻ってくるって言ってたでしょ？」

「でも・・・」

「コウキ君は冗談ばかりだけど、嘘は吐かないもの」

「・・・ミナトさん」

「絶対に帰ってくるって言ってた。それなら、私が信じてあげなくちゃ」

「・・・私も信じています」

「せせせせ・・・」

「・・・私もコウキさんなら絶対に戻ってくるって信じてます」
「ええ。信じましょう」

秘策があるって言うてるもの。

コウキ君が戻ってこない筈がない。

「・・・強いんですね。ミナトさんは」

「そんな事ないわよ？」

「いいえ。強いです。もし、ガイさんが残るなんて事になったら、私・・・」

悲しそうに俯くメグミちゃん。

多分、それが普通の反応だと思う。

もしかしたら、私自身、強がってるだけかもしれない。
だけど、どうしてだろう？

コウキ君なら大丈夫だって、そんな気がするの。

「機影反応」

「ルリちゃん。モニタに」

「はい」

突如として告げられる機影反応。

艦長の指示に従ってモニタに映し出されたのはヒナギクのような飛行機。

そして、それには一人の女の子が乗っていたの。

『うわ、うわわわ』

・・・とりあえず、回収してあげましょう。艦長。

「ナデシコに攻撃していたのは力を示す為ですか？」

「ええ。福寿の性能を認めさせる。それが第一歩でしたからね。

ナデシコは木連軍人にとって悪玉のようなものです。

ナデシコを撃退させる事が出来れば、私達は軍内で大きな権限を持つ事が出来ます」

悪玉って……。

「まあ、戦争なので、何も言いませんが、一応、念の為に……」

「はい」

「俺の中でしかありませんが、ナデシコこそが和平の鍵になると俺は考えています」

「それは教官が乗っているからですか？」

いやいや。だから、俺なんてそんな大袈裟な存在じゃないっての。

「艦長がミスマル提督の娘というのもありますが、

何より対木連ではかなりの知名度を持つからです。

戦争の中心にナデシコがいる事は間違いないでしょう」

「はい。こちらにもナデシコには注目しています」

「だからこそ、ナデシコの動きが両陣営に対して与える影響は大きい。

現在、軍内部での……」

・・・ミスマル提督の企みとか言わない方が良いのかな。
俺自身はケイゴさんならって思うけど、こういうのは代表者同士で話し合うべきだしね。

「どうしましたか？ コウキさん」

「あ、いえ。ミスマル提督ら改革和平派の権力も強くなってきましたしね」

「・・・」

うわ。何？ その誤魔化しは利きませんよ的な視線。

「詳しい事は現段階では御話できないんです。申し訳ないですけど」
「・・・そうですね。まだ私達は完全に協力体制を築いた訳ではないので」

う。そんな言い方されつお罪悪感が・・・。
いや。うん。ごめん。やっぱり言えないわ。

「コホン。ケイゴさん。今後の方針について確認しておきましょう」
「・・・仕方ありませんね。分かりました」

そうそう。優先すべき事をしましょうね。ケイゴさん。

「俺はこのまま脱出しても良いんですよね？」
「ええ。本来なら許されない事ですが、ツクモも逃がしたもらったようですし」

ああ。白鳥さんね。確かにナデシコが彼を逃がしたわ。

いやあ。白鳥さんを逃がした事が巡り巡って俺を助けるとは。

ありがとうございます。ミナトさん。

「そもそもこちらがそうしなければ教官一人で撃退されてしまう」
「いや。そんな事は」

「事実、私達は一人でやられてしまいましたから。」

「実質的に私達が敗北したと言って良い。」

「むしろ、私達こそがコウキさんの言う通りにしなければならぬ
でしょう」

敗北者だからの話ね。

まあ、俺としてはそんなに事を荒げたくないからスルーの方向で構
いませんけど。」

「それなら、許して欲しい事があるんです」

「は？ 許して欲しい事とは？」

「事後承諾になりますが、先程の戦闘データ、全て消させて頂きま
した」

「・・・本当ですか？」

「ええ。本当です」

「・・・教官。何をしてくれてるんですか!？」

「うわっ。ケイゴさんがキレた。」

「やばい。初めてだ。なんて新鮮に感じている余裕はないだろっ！」

「怖っ！ 激怖！」

「今回、ナデシコを撃退した事で権力を得られると思ったのに・・・」

「今度は頂垂れるケイゴさん。」

「えっと、すいませんとしか言えない。」

「でも、その後のこの戦艦が占拠されてしまった映像もありましたよ」

「そちらは削除するつもりでした」

・・・胸を張って不正を言われてもね。

まあ、既に消してしまった以上、何を言っても変わらないんだけど。でも、多分、その件は大丈夫だと思う。

「映像がなくとも情報は伝わると思いますよ。ナデシコが注目されているのなら」

「・・・そうでしょうか？」

・・・恐らくでしかないけど。

「どちらにしろ、ナデシコが撤退したという事実には変わりはありません」

「・・・分かりました」

まあ、納得してもらえろとは思ってないさ。

「えっと、話を戻しても？」

「ええ。どうぞ」

まず、カグラヅキから脱出した後、ナデシコに戻るだろ？

その後、原作通りなら地球に降下する事になる。

そこで色々ネタバレした後、クルーの逃亡生活が始まる。

んで、だ。ナデシコ強奪事件が起きて、クルー達が再度集まる。

そして、仮初めの和平交渉。

ここから全てがズレ始めた。

とまあ、原作をなぞってみただけ、既にこうはならない筈。

まず、地球に降下してもナデシコは安全。

原作では白鳥九十九さんの妹であるユキナちゃんが乗っていて、彼女を引き渡すようにと告げる軍人達から逃亡して隠れる事になる。でも、それは地球側があくまで事実を隠蔽しようとしてたから。

今回はミスマル提督の下、和平派が活動しているから、ユキナちゃんを一方的に渡せなどと言われぬ筈。

予想だけど、ナデシコ内で保護って形になると思う。

その間、ナデシコやらエステバリスやらを全面改装する必要があるな。

臆病とか思われてもいいから、性能を強化しておいた方がいい。

夜天光とまではいなくても、エステバリス以上の機体は出てくるだろうから。

どちらにしる、地球に戻ってからが忙しいって訳だな。

火星再生機構の話もきちんとしておきたいし。

一度、火星人の皆や提督達を集めて話し合う必要があるそうだ。

「地球に戻り次第、俺は提督に連絡を取ろうと思います」

「はい。私も父と話してみます」

神楽派の代表はケイゴさんの父親か、やっぱり。

ケイゴさんと同じでイケメンなのかな？

まあ、関係ないけどさ。

「その間の連絡手段ですが・・・」

・・・どうするか。

同じ目的を掲げていようと、両者間での緻密な話し合いは必須。

秘密裏に結託して活動するのなら尚更だ。

その為には何度も連絡を取り合う必要がある。

でも、俺達には連絡を取り合う手段が・・・。

「それは大丈夫です」
「手段があるんですか？」

驚いた。

だつてさ、地球と木星間で連絡を取り合うとか、無理じゃないの？

「教官は偶に抜けてますよね」
「・・・よく言われますよ」

どうしてかな？ いつも言われるんだけど。

「そう拗ねないください」
「べ、別に拗ねてないですよ」
「教官の新たな一面ですね」

・・・なに遊ばれてるんだろう。俺。

「コホン。その手段ってのは？」
「はい。クリムゾンへ連絡するルートと同様のルートをを用います」
「・・・あ」

そういえば、クリムゾンと連絡を取り合ってたんだな。木連つて。
ああ。それで抜けてるって事ね。

「クリムゾンとはどうやって」
「流星に地球から木星間は遠いですからね。
間に衛星のような形でバッタを挟めば良いんです」

へえ。そうやって連絡を取り合ってたんだ。

「クリムゾンと同じルートではバレてしまいますので、

こちらで新しいルートを構築します。連絡先さえ教えて頂ければ・

・・・」

「分かりました。それなら、これに連絡してください」

直接提督の所だと危ないからね。

一応、地球での俺の連絡先を覚えておく。

「これに連絡すると俺の所に来るので、その後、提督にお知らせします」

「分かりました。お願いします」

ケイゴさんを信じてない訳じゃないけど、慎重に慎重を重ねないとね。

「まずは両陣営の間を取り持ちます。それぐらいは俺にも出来るでしょうから」

「教官なら安心して任せられます」

信頼されるのって気持ち良いね。

期待に応えたくなくなっちゃう。

「両者間での繋がりを深め、足並みを揃える。和平の道を探すのはそれからです」

「はい」

まだまだ課題はいくらでもある。

民間意識の統一も済んでなければ、事実の公表も終えてない。

軍の主導権だって握ってないし、ネルガルの問題も解決してない。

でも、少しずつ、出来る範囲で解決していこう。
焦らなくていい。俺には支えてくれる人がいるんだから。

「それでは」

ドンッ！ ドンッ！

「おい！ シンイチ！」

・・・駆け込み乗車は違反ですよ。シンイチさん。

「ノックしたまではいいが、したなら、返事を待てよ」

「その通りです。シンイチさん」

うおっ。いつの間にかマシンガンを構えるマリアさんが隣に。

怖っ！ 超怖っ！ これが最強メイドさんの実力かよ！

・・・俺、まるで気付かなかったぞ。

「そんな余裕はないんだ！ ケイゴ！」

肩で息をしながら、大柄な身体の全体を使って緊急事態をアピールするシンイチさん。

尋常じゃない何かが、想定外の何かが、起きてしまった。そんな形相をしている。

「草壁中将が和平を提案して、地球側に使者を送った」

「な、何！？」

・・・残念だけど、俺にとっては想定内ですよ。

いつになく慌てているケイゴさんに比べ、俺は冷静そのものだった。

そりゃあ、今まで徹底抗戦を訴え続けてきた草壁派が和平を唱えたら驚くさ。

でも、それは一種のイベント前の準備でしかない。

白鳥九十九暗殺事件。それを徹底抗戦を訴える道具にする為の。あくまで草壁派の狙いは徹底抗戦だ。

「・・・草壁中将が？」

「俺達の意見に賛同したって事なのか？」

「いや。それはないと思う・・・が、そうではないとも言い切れない」

「クソッ。おちよくられてる気分だぜ。今まで散々徹底抗戦を訴えてたくせに」

「駄目だ。判断材料が足りな過ぎる」

「・・・俺達は草壁中将と結託するべきなのか？」

「・・・それも分からない。現状では保留だ」

「・・・だな」

暗殺事件の事を話せてしまえたらどれだけ良い事か。

でも、現時点でそれを知っているのはあまりにもおかしすぎる。

言った所でケイゴさん達を混乱させてしまうだけだ。

そもそも同じ事件が今回起きるかも分からないし。

とりあえず、現時点では、俺も決断を保留にせざるを得ない。

もちろん、嚴重に注意を払って暗殺は確実に阻止するつもりだけど。

「草壁中将が派遣した使者はどこに？」

「そこまでは分からなかったが、恐らくナデシコだろう」

「・・・ナデシコ、か。誰なのかは分かるか？」

「それも不明だ」

「そうか・・・コウキさん。充分に注意してください」

「ええ。分かりました」

まあ、ユキナちゃん自体は危険じゃない。
彼女はあくまでツクモさんの為であって・・・あれ？

「今回、ミナトさんはツクモさんと・・・」

まさか・・・ね。

恋人持ちの女性を追うなんて事は・・・ないよね？
写真を飾ってるなんて事は・・・ないよね？

「使者か暗殺者が分かりません。本当に気を付けてくださいよ」

「分かってます。誰にも危害は加えさせません」

心配性だなあ・・・。

でも、気を引き締めないといかん。

まだ、ユキナちゃんだって決まった訳じゃないんだし。

もしかしたら、本当に暗殺者が使者として赴いている可能性もある。

「それでは、こちらから強襲揚陸艦をお貸ししますので、コウキさんはそれで」

「はい。ありがとうございます」

とりあえず自分のエステバリスをそれに括り付けて、ナデシコに帰ろう。

いやあ。流石にね、エステバリスのバッテリーが持ちませんでしたよ。

まあ、帰る分まで積んでいた訳じゃなかったから覚悟の上だったけどさ。

いざとなったらボソソジャンプで帰ろうと思ってた僕を叱ってください・・・。

「送ります。マリア。シンイチ」

「かしこまりました」

「おう」

という訳で、三人に連れられて格納庫へ移動中。

言わば、艦長と副長という艦内トップの二人に送らせている訳だ。偉くなったなあ、俺も。

「おい。マエヤマといったな」

「あ。はい」

隣を歩くシンイチさん。

うん。木連軍人らしい刈上げなんだけど……。

それが真面目という印象ではなく怖いという印象を与えている。まるでヤーさんのようだ。

「次に戦場で合間見える時は俺が勝つ」

「……えつと」

ここは、俺も負けません、とか熱血路線でいけばいいのか？

それとも、冷静に、味方になるうとして争うんですかと返せばいいのか？

……うん。違うな。俺達の目的が和平なら……。

「シンイチさん」

「何だ？」

「共に和平を築き、平和になった時、真剣勝負をしましょう」

「……へっ。言うじゃないか。いいな。その勝負、乗った」

手を差し出す。

さっきの喧嘩腰なんかじゃなくて、心からの握手だ。

「よろしく御願ひします」

「こちらこそよろしく頼む」

今度はガツチリと握手をかわす。

共に同じ目的を達成する為の同志として。

「それでは、よろしく御願ひします」

格納庫へ到着すると既にエステバリスが括り付けられていた。仕事が速いですね。ケイゴさん。

「分かりました。なんとしてでも提督に話を付けてみせます」

それが和平に繋がるなら、俺だって労力は惜しまない。

軍内で活動する訳でもないから目立たないだろうし。

大事なのはトップ同士の話し合い。

俺はそれのお膳立てをするだけだしね。

「約束、守れよな」

「もちろんです。シンイチさん」

男臭い笑みを浮かべるシンイチさん。

なんか、どことなくガイみたいだった。

多分、ガイならすぐに木連人と馴染むだろうな。
共通の話題もあるし。

「それじゃあ、行きます」

始めの一步。でも、大きな一步。

今回、和平を目的とする神楽派と接触出来たのは幸運だったのかも
しれない。

後は俺がどれだけ両者間を取り持つ事が出来るかに懸かってくる。

う……。責任重大じゃないか。

でも……。頑張ろう。

まずは戦争を終わらせる。それが後々の平穩に繋がるのだから……。

第五十五話（後書き）

軍から身を引いたくせにまた余計な事に手を出しちゃったコウキ君。
彼はこれからも苦勞の日々なんでしょうね……。。

第五十六話（前書き）

ハ―ハツハツハ！ 乗ってきたぞ！

・・・という訳で、更新です。

久しぶりにこんなにも早く更新しました。

第五十六話

S I D E M I N A T O

「う~~~~」

「ちょ、ちよつとお、落ち着いてえ」

「人誅う~~~~」

「ミナトさあああん」

・・・私にどうしろって言うのよ？

突如としてやってきた女の子の名前は白鳥・ユキナちゃん。

あの、白鳥・九十九さんの妹さんらしい。

なんでも、お兄さんの部屋のナナコさんのポスターの後ろに私の写真があつたとか。

・・・よく分からないけど、多分、お兄ちゃん大好きっ子を怒らせちゃったんだと思う。

うん。そりゃあ確かに親切にしたし、逃げるのに協力したわよ。

でも、しっかりとお付き合いしている人がいるって教えたじゃない。

・・・ちよつと困っちゃうなあ。

コウキ君がヤキモチ焼いちゃいそう。

別にヤキモチ焼かれるのは嬉しいけど、勘違いされたら嫌だものね。

「ねえ、ユキナちゃん」

「フシユウ~~~~」

・・・なんかネコみたいで可愛いかも。

「私はきちんとお付き合いしてる人がいるって言ったわよ」

「それでも、お兄ちゃんは諦めないわ。諦め悪いもの」

・・・それって私のせい？

「貴方、恋人がいるのに、お兄ちゃんを誑かしたのね。この、悪女！」

あ、悪女って・・・。
うーん。困ったわねえ。

「私は絶対に許してあげないんだからね。ビシッ！」

擬音付きで指を突きつけられても、私はコウキ君一筋だし・・・。
うーん。本当に困った。

「と、とりあえず、彼女は保護致しまして、私達はコスモスへ向か
いましょう」

流石、プロスさん。

混乱した事態を収めるのは彼が一番ね。

「艦長。御願います」

さてっと、私も自分の席について・・・。

「ナデシコ。発進！」

「ナデシコ、発進します」

コウキ君が守ってくれた大事な家。

そして、コウキ君が帰るべき大切な場所。

しっかりと直してあげなくちゃね。

S I D E O U T

「さて、ナデシコはどこにいる事やら」

いやあ。まさか、操縦士の資格がこういう形で役に立つとは思わなかった。

木連にIFSなんて基本的でないから、この飛行機みたいなのは手操縦。

気分はパイロットって感じ。

まあ、周りは全方位真っ黒だから、あんまり楽しくはないんだけどね。

気分爽快とはいかない。ま、いいけどさ。

とりあえず、ナデシコと合流したいんだけど……。

「……レーダーに反応なし、か」

宇宙を甘く見ていた。

あれだけ離れた状況下で簡単にナデシコが見付かる訳ないよな。

多分、修理の為にコスモスと合流するんだろうとは思う。

でも、その肝心のコスモスの位置すら僕には分かりません。

合流ポイントを聞いてれば別だったんだろうけど……。

そういうのは他の人に任せてたしなあ。

これって大気圏突入出来る？

出来るなら、先に地球に戻っておくのも一種の手なんだけど……。

多分、出来ないよなあ、見た目的に。脆そうだし。

「SOS信号でも出しますか？」

誰か気付いてくれるとは思う。

でも、それが地球側とは限らない。

そりゃあ、地球に近いから、地球側が拾ってくれる確率が高いとは思う。

でも、ほら、万が一ってのがあるし。

それに、ミスマル派以外に拾われても借りが出来て困っちゃう。

うくん。闇雲に探す？

そうすると、時間掛かるし、下手すると一生迷子だぜ？

食料だつて一日、二日の最低限しか乗せてないし。

バッテリーだつて切れちまう。

・・・無計画の恐怖を今更味わいました。

うがあ。どうする？ どうするよ？ 俺。

実はカグラヅキで近くまで送ってもらった方が良かった？

いや、でも、それじゃあ色々とマズイだろうし。

うん。そもそも、もうカグラヅキとは離れちゃってる。

本当に・・・どうすればいいんだあ！

「・・・馬鹿野郎」

宇宙で迷子って・・・。

本当に自分、馬鹿ですね。はい。

仕方ない。最終手段を使うか。

「・・・イメージはコスモス付近でレーダーに感知されない位置」

使いたくなかったけど、使わなくちゃ帰れない。

チューリップとかがあれば、誤魔化せるんだけど、近くななし。

「周囲を確認して、安全を確認」

一応、レーダーにも反応はない。

・・・誰も見てないよな？

それなら・・・跳ぶか。

「・・・ジャン」

『・・・見つけたり。神楽の犬よ。ナデシコと接触させる訳にはいかぬ』

カシャン！ カシャン！

・・・空耳・・・だよな？

『我らが悲願の為、汝には死んでもらう』

カシャン！ カシャン！

・・・この声。

・・・この背筋が凍りつくような感覚。

ようやくレーダーに映ったって時には既に周囲を囲まれていた。

囲んでいるのは赤とオレンジ色に染まった七機の機動兵器。

「嘘・・・だろ？」

・・・まさか、付けられていた？

カグラツキを見張っていたのか？

神楽派がナデシコに接触しないようにつて。

それ程に今回の使者は大きな意味を持つって事か？
それとも、神楽派が異様に警戒されてるって事か？

「神楽派と対立している派閥なんて俺が知っている限り一つだけ」

そう、草壁派だ。

和平を唱える神楽派は徹底抗戦を訴える草壁派にとって邪魔な存在
ではない。

地球側と接触する事で、和平への道が一步近付くとなれば邪魔に入るのは当然。

・・・要するに、俺はナデシコの接触しようとする神楽派と間違えられてる訳だ。

「草壁の実行部隊。まさか、劇場版の人間がこのタイミングで出てくるとはな」

草壁派。その実行部隊といえば・・・。

「北辰と愉快的な六連衆しかいないじゃないか」

・・・って、余裕ぶっこいてる場合じゃないぞ。
なんたって、相手は・・・。

「・・・夜天光」

・・・まずい。非常にまずい。

まさか、既に夜天光や六連がロールアウトされているとは思わなかった。

いや。問題はそこじゃない。

エステバリスが使えない状況下、今の俺には成す術がないじゃない

か。

一方的にやれてしまう。

「クソッ。どうする？」

揚陸艦で戦える訳がない。

敵う訳がない。逃げ切れる訳がない。

やばい。・・・手詰まりだ。

『殺』

・・・気付けば、目前に迫っていた赤い悪魔。

「ゲハッ」

錫杖が突き刺さられ、衝撃で吹き飛ばされる。

「・・・クソッ。このままじゃ・・・」

頭部から流れ出る血。

どうやら吹き飛ばされた際に頭を打つたらしい。

視界が赤く染まる。

「・・・もう、駄目なのか・・・」

全身に伝わる痛み。

視界が揺らぎ、朦朧とする意識。

「・・・ミナトさん・・・セレスちゃん」

途切れかけた意識の中、思い出されたのはやはり俺達の家だった。

「・・・ジャン・・・プ」

眩きが零れ落ち、瞬間、宇宙に二輪の花火が咲き誇る。

『我らが栄光の礎となれ。我、草壁の影なり』

一欠片も残さず、エステバリスは塵と消えた。

S I D E M I N A T O

ブリッジにて、眼の前には偉そうに胸を張る女秘書。

「その子は私達が預かってあげるわ」

「はい？」

いきなり何を言ってるのかしら？ この人は。

どうしてネルガルなんかに彼女を任せなくちゃならないのよ？

「だから」

「残念ですが、彼女は木連より地球に送られた使者。

私達は軍人として、丁寧しつかりに彼女を送り届ける義務があるんです」

「うっ」

キツパリと告げる艦長。

本当にやる時はやるって感じ。

普段のポワ〜ってのが嘘みたいよね。

「そもそもネルガルに預ける理由がないですよねえ」

「そうよね。ちょっと無理があるわ」

「うっ」

多分、戦争を続けたいネルガルとしては和平なんてって事だと思う。戦争中の利益はもちろん、遺跡の確保の為に戦争は続いて欲しいと。

そうじゃなければ、必ず遺跡の事が和平条件に出て来るから。

ふふっ。秘書さん。焦るのも分かるけど、ボロを出しちゃ駄目じゃない。

「エリナさん。交渉はもつと手順を踏まなくては」

「プロスペクター。貴方まで」

「私もネルガルの一員ですが、同時にナデシコの一員でもあります」

「それが何よ？」

「ネルガルの利益は絶対ですが、ナデシコの目的もまた絶対。」

私は一方に利益があり、一方に損があるような選択は認めません

ぞ

「うっ」

・・・プロスさん。

ネルガルの利益を唱え続けてきたプロスさんもやっぱりナデシコは大事なんだ。

やっぱり私達にとって最高の家であり、皆が家族なんだなって実感した。

「さて、私達の今後について話しましょうか」

ムネタケ提督も変わった。

以前の嫌な所も失くなり、今はオカマ言葉の切れ者ってイメージ。まあ、オカマ言葉なのは頂けないけど・・・なんか慣れたわ。

「コスモスで修理を終えた後はヒラツカドックに入港する事になっているわ」

ひとまず作戦を終えたから、地球に帰るって事ね。

それまでに戻って来れたら良いんだけど・・・。

まさかの事態なんて想定してないわよ？ コウキ君。

「ヒラツカドック入港後は何日かの休暇を挟ん」

「休暇ですか！？ やったあ。ジュン君。どこに」

「艦長！ どこに休暇と聞いて大事な話を遮る艦長がいるんですか！？」

「うう・・・。すみません」

「副長も副長です！ しっかりとけじめはつけさせなさい」

「は、はい」

うん。ジュン君。もうちょっと頑張ろう。

今更ながら思ったんだけど、ナデシコ最強ってプロスさん？

「コホン。続けるわよ。良いわね？」

「御願います。提督」

お疲れ様です。プロスさん。

「何日かの休暇を挟んで、というよりも、現状ではその後の指示は

出てないわね」

「それじゃあ、ヒラツカドックで待機って事ですか？」

ふふつ。眼を輝かせながら聞くなんて可愛らしいわね。艦長。

「そうね。その後は軍の指示待ちよ。恐らく・・・」

「恐らく？」

「いえ。なんでもないわ。楽しみに待ってる事ね」

ニヤニヤしながら告げる提督。

その笑みの意味する事はよく分からないけど、多分、ミスマル提督を筆頭とする改革和平派に関する事。ようやく権限が握れてきたって事かしら？

「それじゃあ、ひとまず」

「ッ！」

「皆さん、休憩に入っちゃってくださいあゝい」

ポワポワとした艦長の指示の途中、椅子に座るルリルリが息を呑む。

ブリッジ上段にいる人間は気付かなかったけど、私やパイロット達は気付いた。

ルリルリが息を呑むって事はかなり重大な意味を持つって事。

ブリッジ上段にいるネルガル陣に気付かれなかったのは運が良かったわね。

あの秘書さんや会長さんにとって事よ。プロスさんは別。

「ルリルリ。どうしたの？」

気になって、私は席を立ててルリルリの後ろに向かう。

横から覗き込むように見たルリルリの表情はどこか深刻そうな表情をしていた。

「ルリちゃん。どうした？」

アキト君や他のパイロット達も集まってくる。

「……………」

それでも、その表情のまま固まるルリルリ。

気になって仕方がなくて、ルリルリが知ってるなら他の子もという訳でセレセレに訊ねる。

「何かあったの？」

「…………え、あの……………」

セレセレまでこの始末。

見た事ない程に慌てた様子で周囲を見回していた。

「ルリちゃん？」

怪訝そうに名前を呼ぶアキト君。

そうして、ようやくルリルリが重い口を開いた。

「…………ウキさんの部屋からコミュニケーション反応が出ました」

「…………え？」

…………ウキ君の部屋からコミュニケーションの反応？
それって…………。

「それはコウキのコミュニケのか？」

「・・・ええ。恐らく・・・」

ボソソジャンプ。

コウキ君はボソソジャンプでナデシコに帰ってきたという事。

無事だったんだ！ 良かった！

歓喜が胸を過ぎる。

「それなら、迎えに」

「しかし、そんな愚行をコウキさんがするでしょうか？」

「確かに。コウキなら、直接ナデシコ内にジャンプするような事はしない」

「もし、するのなら、かなりの緊急事態だったって事になります」

・・・確かにそうかもしれない。

コウキ君ならナデシコの近場にジャンプして何食わぬ顔で帰艦して来る筈。

それをしない、もしくは出来なかったって事はかなり危ない状況だったって事になる。

・・・果たして、コウキ君は今、無事なのだろうか？

「ミナトさん！？」

気付けば走り出していた。

一刻も早く彼の状態を知りたい。

そんな気持ち私を焦らせる。

「へえ。そういう事」

だから、誰かが呟いたこの一言を気にもかけなかった。

「へえ。そういう事」

「どういう意味だ？ アカツキ」

「彼女が大慌て。それって彼関連って事だよな？」

「・・・さあな」

「ふん。誤魔化しちゃって」

「・・・何が言いたい？」

「ねえ、テンカワ君。彼は一体何者なのかな？」

「何？」

「君の記憶を見た時、僕達は多くの事を知った。ねえ？ カザマ君」

「え、ええ」

「記憶ってどういう事よ」

「後で話してあげるよ。エリナ君」

「つたく、この極楽トンボが。大事な事は早く言いなさいよね」

「はいはい。ねえ、カザマ君。君はあれを見てどう思った。」

「まさか、自分が死ぬ所を見るなんて思わなかっただろうけど」

「・・・信じられない思いで一杯でした。」

でも、それと同時に、私はコウキさんに命を救われたと思いましたが。

事実、私は隊長の記憶同様に自ら接近したのですから。

コウキさんが止めてくれなければ、記憶と同じように死んでいたと思います」

「そうだよねえ。ねえ、テンカワ君。彼は君の記憶を知ってたんでしょ？」

「……」

「でも、そんな事より、もっと気になる事があるんだよねえ。きつと、僕だけじゃない。あれを見た他の誰もが知りたい事」

「……コウキの存在……か」

「そう。君の記憶には何故か彼の姿がなかった。

でも、実際、彼はここにいる。クルーの一員として確かに。

これってどういう事なの？ 彼は一体何者なの？ ねえ？ テン
カワ君」

「……」

「だんまりかい。仲間に対して。悲しいねえ」

「別に俺はマエヤマがどんな存在だって構わない。

マエヤマはマエヤマだし、俺達ナデシコの一員だからな」

「……スバル」

「だけだよお、ちょい気になる事があるってのも事実だな。

なあ、どうして、ルリはマエヤマを殺そうとしたんだ？」

「ッ！」

「お前達が裏で何かしてたって事は分かった。

けど、詳しい話は所詮記憶だからか、分からなかった。

アキト達はマエヤマの奴と何を話し、何をしてきたんだ？」

「……」

「言えない事か？」

「……いずれ話す機会を設けようとは思つ。

だが、これはコウキの根本に関わる事だ。

申し訳ないが、俺の口からは何も言う事は出来ない」

「……なら、しょうがねえな。

言えねえって事を言わせるつもりはねえよ。

ちゃんとその時には全てを話せよ。アキト。ルリ」

「分かった」

「……はい。全て御話します。私の罪を」

「話が脱線してるよ。僕は彼が何者かを聞いてるんだ。

記憶の中で彼が何者かという事に触れるシーンはなかった。不思議な事にね。何の意思が働いたかは分からないけど。

でも、君達は彼の存在、何者かを確実に知っている。そうでしょう？」

「・・・ああ。一時、俺とコウキは敵対関係にあった。」

敵対関係つてのは大袈裟かもしれんが、少なくとも敵意はあった」

「ハッ!? 嘘だろ?」

「事実だ。ガイ。まあ、実際はこちらからの一方的なものだったかな」

「それで? 敵対関係にあった君達の間は何があったの?」

「その和解の際に、俺達は逆行してきた事を。」

コウキは己の存在について教えてくれたんだ。

言わば、信頼の証だな。それを無闇に教える訳にはいかない」

「別に友情話を聞きたい訳じゃないんだよ。テンカワ君。」

問題は、君達の逆行という要因によって生まれたイレギュラーなのかという事。

でも、それはきっと違うでしょ? 敵対関係だったって事は。

それなら、彼は君達とは関係ない所でナデシコで絡んで来た事になる。

それつて要するに彼はナデシコに存在するべき人物ではなかったという事になるよね」

「てめえ、それはコウキがナデシコにいちゃいけないって言ったんのか?」

「おっと、単純馬鹿はこれだから困る。勘違いしないで欲しいね。ヤマダ君」

「俺はダイゴウジ・ガイだ!」

「はあ。大声でうるさいね。分かったよ。僕が言いたいのね、ガイ君。」

当事者である僕達以外にもこれらの一連の出来事を知っている存在がいるって事。

おかしいよね？ ナデシコに乗っていた訳じゃないのに、ナデシコに詳しいなんて。

もし、彼がテンカワ君達と同じ逆行者だとしても、こんなおかしな話はないよ。

じゃあ、彼は何者かって話になる。彼は・・・木連人なんじゃないかい？

「・・・それはまた突拍子もない意見だな」

「そうかい？ 良い線いってると思ったんだけど」

「その根拠を聞こうか？」

「当事者ではなくても、敵対者なら、情報を集める事は出来る。」

その情報に、更に、当事者であるナデシコクルーから話を聞けば完全に補完できる。

始めは敵対関係だったんでしょ？ それも木連人つてのが原因なんじゃないの？

「要するに、お前はコウキが木連出身の逆行者だつて言いたいのか？」

「ま、そうなるね」

「それなら大きな勘違いだな。コウキは決して木連出身じゃない」

「へえ。逆行者つて事は否定しないんだ」

「何？」

「OK。OK。少しずつだけど真実に近付いて来たよ。ありがとう。」

テンカワ君「

「・・・」

「テンカワ君達に積極的に協力するつて事は彼も火星の悲劇を知ってるつて訳だ。」

それなら、彼ももしかしたら、火星出身なのかもしれないね。テンカワ君と同様に「

「・・・だとしたら？」

「それじゃあ、ボソソジャンプの条件に引っ掛かるよね？」

あれ？ じゃあ、さっきの彼女の反応は？ 自ずと答えは出てく

る

「・・・・・・・・」

「だんまりかい？ それは凶星を突かれたからかな？」

「・・・・さあな」

「ま、いいよ。でも、一つだけその反応で分かった事がある。

それは、マエヤマ・コウキもA級ジャンパーであるという事。

今、彼はナデシコ内にいるんだろ？ 戦場に一人残ったのもそれ

があるからって訳だ。

まあ、いつの間にもCを手に入れたんだって謎は残るけど、そんなのいくらかでも方法はあるし」

「・・・・・・・・」

「まるでミステリーを解いていくかのように楽しいね。

おっと、テンカワ君。先にネタバレなんて無粋な真似はしないでくれよ。

少しずつ真実に近付いて、最後に証拠を突きつけて、引導を渡してやる。

それがこういふ話の醍醐味なんだから。名探偵アカツキ・ナガレ。良い響きじゃないか」

「引導を渡すとは穏やかじゃないな」

「だって、犯罪者だろ？ 彼」

「何？」

「あれだけのIFS処理能力だ。きっと色々な事をハッキングしてきたんだろっね。

そういえば、ネルガルの裏金がなくなってような気がするな。

彼に盗まれたのかもしれないね。うわっ。立派な犯罪者だ。逮捕しないと」

「・・・・・・・・」

「ま、司法取引なら応じてあげなくもないかな。

そのハッキング能力をネルガルの為に使いなさいって」

「ほお。随分と強気だな？」

「当たり前じゃないか。犯罪者に証拠を突き付けてるんだ。犯罪者はごめんなさいするしかないでしょ？ 展開的に」
「では、逆に聞くが、お前達に後ろ暗い事はないとでも？」
「あれ？ 犯罪者に説教されちゃうのかい？ 困ったな」
「真面目に答える。アカツキ」
「そりゃあ、僕達だって大企業だ。色々と抱えているさ。でもね、その分、多くの組織にパイプを持つてるんだよ。唯の犯罪者と後ろ盾のある僕。どっちが強いかな？」
「・・・・・・・・」
「困った時にだんまりかい？ 情けないね」
「・・・・・・・・」
「ま、いいや。それだけだよ」

S I D E M I N A T O

「コウキ君！」

焦る気持ちを抑えながら、コウキ君の部屋に駆け込む。

お互いに行き来するからってカードキーをコウキ君に弄ってもらった。

以前、私がコウキ君に慰められた時、コウキ君はマスターキーを艦長から借りたらしい。

そんな経由はいらないうて、強引に押し通された結果だけど、良かったって思える。

今、この瞬間、誰よりも早くコウキ君に会えるのだから。

「・・・コウキ・・・君」

部屋の電気を点ける。

日頃からあまり汚さないで、

定期的に掃除をしてあげている部屋は綺麗そのもの。

その中心に頭部から血を流す彼以外は。

「コウキ君！」

近付いて、彼の脈を計る。

こんな状態でも冷静な自分を不思議に思いつつ、

迅速に状況把握の為に自分の身体を動かしていた。

「脈は・・・ある。息は・・・してる。良かった。生きてる」

ホッと一息吐く。

最悪の事態は免れたようだ。

怪我はしてるようだけど、死んではいなかった。

「不安にさせないでよ。コウキ君」

出来る事なら、彼の無事を喜んで、彼の身体を抱き締めあげたい。

でも、怪我をしていて、なおかつ、意識を失っている彼にそんな事は出来ない。

だから、意識を取り戻したその時、おはようって笑顔で言ってあげよう。

「・・・ハア・・・ハア・・・コウキさん」

「セレセレ」

「・・・コウキさんは・・・無事ですか？」

・・・そうだったわね。
コウキ君を心配する人間は他にもいるんだ。
家族であるセレセレなら尚更。

「無事よ。怪我はしてるみたいだけど、生きてる」
「・・・良かったです」

走ってきた疲れからか、それとも安心からか。
脱力して地面に膝をつくセレセレ。
ふふっ。コウキ君。愛されてるじゃない。

「・・・心配なので、早く医務室に」
「そうね」

確かに一刻も早く医務室に連れて行くべきだ。
見た所、命に別状はない、と思う。
でも、それは素人の私意見であり、実際は危険な状態なのかもしれない。
コウキ君の為に、心配する私を含めてクルーの為にもしっかりとした検査を受けた方がいい。

「早速医務室に連絡を・・・」

でも、おかしく思われないだろうか？
一人戦場の残った人間が突如現れたりして。
きつと、誰もが不思議に。

『私が見てあげるわよ』
「イネスさん」

『何も言わなくていいわ。見てたし、聞いてたから』

コミュニケーション越しに現れる理知的な顔。

そうね。彼女なら、語らずとも理解してくれる。

きっとブリッジの様子とかも理解した上での提案。

でも、私にとっては渡りに船だった。

「御願います」

頭を下げる。

私なんかの頭でいいなら、いくらでも下げてやろう。

それで、コウキ君が助かるなら。

「……御願います」

「……セレセレ」

「……コウキさんは私にとっても大切な人ですから」

ありがとう。セレセレ。

『あらあら。愛されてるわね。彼』

ニヤニヤ顔のイネスさん。

でも、ちよつと安心した。

これだけ余裕を見せるなら、きっとコウキ君は無事だ。

『私も火星人の一人。アキト君の記憶を見た以上、何が最善かぐらい分かるわ』

「えつと……」

それって、今、関係ないと思うんですが……。

もちろん、大事な話ではあるんだけどね。

『彼に死なれちゃ困るのよ。彼には色々と言えないといけないし』
「・・・お大事にね。コウキ君」

検査より、検査後が大変だなって思った。

『それに、あの彼がこうまで危機に陥った。その理由も知りたいじゃない？』

もしかすると、物凄く重要な情報を握っているかもしれないわよ？
『彼』

「・・・そうですね」

確かにそうだけど、私にとっては二の次。
コウキ君が無事かどうかが一番大事だ。

『ふふつ。まあ、それは後で聞くとするわ。』

とりあえず、そちらに人を送るから、付いてらっしゃい』

「はい。御願います」

しばらくして、コウキ君が運ばれていった。

検査した結果、症状は頭部の強打による脳震盪と全身打撲。
症状自体は軽いから、すぐにでも眼を覚ますだろうって。

入院という形で休ませてあげるし、隠しておいてあげるって。
本当に感謝してもし足りないくらいだ。

ありがとうございます。イネスさん。

これで安心だ。本当に良かった。

そう思ってた。

でも、それから三日経った今でも、コウキ君の瞼が開く事はなかったの。

S
I
D
E

O
U
T

第五十六話（後書き）

まず一言。

別に死んでないですからね。

強化イベントとかでもないですからね。

さて、ようやくラスボス登場しました。

アキトにとって乗り越えなければならぬ存在、北辰。

そして六連衆という、見事に人数調整された軍団。

コウキを抜けば七対七という素敵なバランスです。

使者は変わらずユキナ。

しかし、今回はちよつと陰謀染みてます。

北辰の早期からの介入。それが何より原作との違いを示していると思います。

そして、長い会話文でした。

申し訳ありません。あそこは僕の意地で視点変更はなしで貫きました。

その為、感情表現がなされていてませんが、うまく補完してください。視点は主人公とミナト、カエデの三人で固定してみせると誓ったので。

まあ、展開次第ではやむを得ない事もあるでしょうが……。

最後に……。

オラに元気を分けてくれ。（感想的な意味で）

第五十七話（前書き）

これからはこのような話が多くなってきそつです。

第五十七話

「……ここは？」

……俺は確か、カグラヅキから戻ってくる途中に……ッ！

「そっだ！ 夜天光！ って、イッタア！」

思わず起こした身体を再びベットに戻す。
な、何だ？ 全身が痛いんですけど。

「あら？ 起きたの？」

「……イネスさん」

イネスさんがいるって事は医務室だろうな。ここ。
いやあ。実は俺が一番お世話になってるんじゃないか？
って、そんな余裕はないっての。
急いでアキトさんに！

「イネスさん！ アキトさんはどこに!？」

「はあ……。落ち着きなさい。コウキ君」

「でも……」

「ここに呼んであげるから、貴方は怪我人なのよ？」

「……分かりました」

渋々ベツトに身を預ける。

イネスさんはコミュニケーションで連絡を取っているようだ。終わったら、状況とかを聞くかな。

ま、その間にちよつと整理しておこう。

「北辰が動き出した。狙いは何なのだろう？」

草壁派が和平の使者を送った。

別にそれは原作と同じだから別段驚きはない。

使者がユキナちゃんじゃなければ話は別だけど。

しかし、だ。未だにユキナちゃんを使者として送った理由が分からん。

あの時から既に白鳥・九十九暗殺を企てていたって事か？

もしくは、彼女を送る事が徹底抗戦を訴える上で必要だったって事？

・・・分らん。

ユキナちゃんは別に草壁派という訳ではないだろ？

実際、彼女はミナトさんに接触する為に乗り込んだようなものだし。

彼女は何も知らない。そもそも兄の暗殺事件に協力する筈もない。

・・・となると、彼女を木連から引き離れた事に意味がある？

でも、彼女がいなくらいじゃ、大した影響はないと思う。

そりゃあ、ツクモさんの意識を草壁派から逸らす事は出来るさ。

愛しの妹が敵側に使者として赴いてしまったんだから。

しかし、それだけの理由で彼女を送り出すだろうか。

何か、もっと大きくて、大事な意味がある気がする・・・。

「あ。先にハルカ・ミナトを呼んでおい」

シューインッ。

「コウキ君！」

イネス女史が告げるとほぼ同時に、扉が開き、凄い勢いでミナトさんが入室してくる。ミナトさんはベットにいる俺を見ると、「ホッと息を吐いた後、ゆっくりと近付いてきた。ちよつと・・・バツが悪い。なんだかんだで、また心配かけちゃったし。」

「良かったわ。無事で」

「すいません。また、心配かけちゃいましたね」

「ううん。あ、心配したつてのはもちろんだけど、

貴方は私達の為に無理してくれたの。ありがとうね」

「いえ。俺にだけ出来る事があつた。それだけですよ」

「それでもよ。コウキ君のお陰で私達はこうして生きていられる。

素直に感謝を受けてても損じゃないと思うんだけどなあ」

「・・・そうですね。俺もホツとしています。皆が無事で」

本当に危機的状況だつた。

俺の秘策が成功したからいいものの。

失敗してたら俺はもちろんの事、

ナデシコもすぐに追撃を受けてヤバかつたと思う。

今更だけど、ちよつと達成感。

無茶したのはあまり良い事じゃないだろうけど、無茶して良かったと思う。

「ミナトさん。今の状況を教えてくださいませんか」

「ええ。分かつたわ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「なるほど」

あれから無事に撤退に成功したナデシコは修理の為にコスモスと合流。

これは予想が付いていた。事実、コスモスを探してた訳だし。

まあ、結局、見付かりませんでしたけどね。

使者は変わらず白鳥・ユキナちゃん。

使者らしいものは何も持ってないけど、確かに木連の女の子だ。

彼女を通して、草壁派は和平交渉をしようとしているらしい。

まあ、和平交渉かどうかは甚だ疑わしいが。

「それでね、あ、先に言っておくわよ。誤解されちゃ困るから」

「えっと、何ですか？」

「ユキナちゃんのお兄さんのツクモさん。私に・・・」

そこまで言っただけいよむミナトさん。

ああ。やっぱり、ツクモさん、ミナトさんに恋しちゃったんだ。

「ツクモさんとは御会いした事があります」

「え？ そうなの？」

「はい。まあ、恋にも一途って感じでした」

「・・・知ってるの？ 彼が私に好意を抱いてるって」

「ハハハ。ユキナちゃんはお兄さんの為にナデシコに来たようなものですよ？」

「・・・それじゃあ、ルリルリが言ってた人って」

「ネタバレになりますよ？」

「流石にそこまで鈍感じゃないわ。本当なら、私は彼と結ばれたのね」

うくん。結ばれたってのとはちょっと違うな。
お互いに惹かれあつたのは事実だけど。

「ちょっと違うんです」

「え？ 違うの？」

「ここからはミナトさんにも関わる事なので言い辛かったんですが・
」

「・・・」

「覚悟して聞いてください」

「・・・ええ」

話して良いかどうか悩んだけど、ここまでバレたらきちんと話すベ
きだよな。

「彼は暗殺されます」

「・・・え？」

「ツクモさんは草壁派における和平の第一人者。

草壁は彼を殺し、その罪を地球側に擦り付ける事で民衆を煽りま
した。

悪の地球が和平を望む誇り高き木連軍人を殺した。

今こそ悪に鉄槌を。私達は彼の意思を踏み躪った悪の地球を絶対
に許さない」と

「そ、そんなのって！」

「ええ。愚かにも木連国民はその言葉を真に受けてしまった。

白鳥さんは死した後、軍神として祀り上げられたんです。草壁に
よって」

「木連は、木連はそんなに戦争がしたいの！ そんなの、そんなの・
・あんまりだわ」

「俺もそう思います。だからこそ、俺は彼も救いたい。若くして亡
くなる英雄を」

白鳥・九十九の死。

それが木連に与えた影響は大きいと思う。

木連の若者達の憧れである優人部隊。

その中でも少佐というエリートである彼は国民からの知名度も高い。簡単に言えば、人気も高かったんだと思う。

そんな彼が地球側に謀殺された。

そうなれば、国民が怒りを覚えるのは当然の事。

もしかしたら、和平を唱えていた人間が徹底抗戦に鞍替えした可能性もある。

潔さをモットーとする木連なら充分ありえる事だ。

草壁はそこまで国民の事を理解した上で実行した。

熱血とは盲信にあらず。

月臣さんが掲げた言葉を国民に知って欲しいと思う。

与えられた情報だけを鵜呑みにする事の恐怖。

それを知って欲しい。木連はもちろん、地球にも。

「・・・彼が死んだ後の私は？」

「・・・絶望の淵にいました。その後、どうにか立ち直りましたが、戦争終了後は彼の妹であるユキナちゃんを引き取り、独身を貫いたようです」

「・・・そっか。当事者じゃない私には分からないけど、

平行世界の私はとても情熱的な恋をしていたのね。ごめんなさい。

コウキ君」

「えっと、何で謝るんですか？」

「平行世界と云えど、私の事、しかも、恋やら愛やらの話じゃない？

そんな話をするのって辛い事だと思うんだ。だから、ごめんなさい」

「・・・そりゃあ、今付き合っている人が実は違う人と結ばれてまし

たつて。

そう話すのは辛いし、思い出すだけで腹が立つ。
それは確かだけど……。

「でも、俺はあの真っ直ぐで真摯に彼を想い続ける姿が美しいと思
いました」

恋人を殺されて慟哭するミナトさん。

必死に縋りついて、泣き叫ぶミナトさん。

彼の意思を継ごうと立ち上がるミナトさん。

兄を失った妹を案じ、引き取ると告げたミナトさん。

どれも俺には想いが伝わってきた。

本当に思い遣りがあつて、暖かい女性なんだつて。

そう俺に教えてくれたんだ。

「それに、己惚れじゃなければ、俺はミナトさんに愛されています」

「……コウキ君」

「もちろん、俺もミナトさんを愛してます。

平行世界のミナトさんは本人であつて本人ではない。

向こうのミナトさんの心はツクモさんに奪われてしまいました

が、こちらのミナトさんの心は俺がガツチリと奪い取っちゃいました。

貴方を愛してるから、貴方に愛されているって自信があるから。

何を言われようと動じませんよ。俺は。俺の想いに嘘はないです

からね」

そう、何があつたつて動じない。

それだけの絆が俺とミナトさんにはあるって思ってるから。

たとえツクモさんであろうと、俺と彼女の絆の前には敗れ去る事だ
ろう。うん。

「ふふつ。なんだかコウキ君じゃないみたい。そんな台詞。似合わないわよ」

「茶化さないでくださいよ。とにかく、向こうとこちらでは別人です。」

俺としては、向こうのミナトさんにはちゃんとツクモさんと結ばれて欲しかった。

辛い生活を送るのではなく、夫婦仲良く幸せな家庭を築いて欲しかったって思います」

「へえ。それって、私とツクモさんが結ばれて欲しいって事？」

「ちよ、ちよつと、勘違いしないで下さい。俺はミナトさんを譲るつもりは」

「冗談よ。冗談。大丈夫。コウキ君の想いはちゃんと伝わってきたから」

胸の上に手を重ね合わせてどこか嬉しそうに微笑むミナトさん。

「・・・いや、今更ながら照れるな。俺らしくなかったかも。」

「・・・そろそろいいかしら？」

「へ？」

「・・・あ」

「・・・そういえばいましたね。イネス女史。」

「そりゃあ、愛しの彼が無事に生還したんだもの。喜ぶたいのは分かるけど・・・」

どこか呆れていらっしやるイネス女史。

「さっきからお待ちしてるわよ。お客さん」

え？ お客さん？

「・・・邪魔するぞ。コウキ」

「・・・すいません。お邪魔かなと思ったんですが・・・」

「・・・私達は悪くないと思う」

・・・アハハ。呼んでましたね。俺が。

「さて、それじゃあ、アキト君達を呼んだ理由を話してもらいましょうか」

「えつとお、イネスさんもですか？」

「あら？ 私だけ除け者？ これでも役に立つと思うけど？」

「え、あ、それはそうなんですが・・・」

いいんですか？ アキトさん。

そう視線で訊いてみる。

「構わん。記憶を見られた以上、隠していた所で意味はない。

それに、博士なら俺達の強い味方になってくれるだろうしな」

「あら？ お兄ちゃん。博士なんて呼び方しなくていいのよ？」

「・・・イネスさん。貴方のお兄ちゃんは俺ではない」

「ふふつ。まあ、いいわ。お兄ちゃん」

「・・・」

そうだよな。記憶の流出はそいう意味もある。

イネスさんは自身がアイちゃんと呼ばれた存在であると自覚してるし、

アキトさんこそが初恋？かは分からないけど、あのお兄ちゃんだって理解してる。

原作では最終回あたりに知る事だけど、今はとっくに知っちゃって

る訳だ。

「私自身、お兄ちゃんの記憶を見て、色々と考えさせられたわ。どうして、私はあの時、遺跡を放置する事の危険性に気付かなかつたのかしら？」

「いや。俺に聞かれても困ります」

普通、そこはアキトさんに聞くべきじゃないかな？
どうして、俺はそんなに凝視しながら問いかける？

「あら？ 貴方なら分かるんじゃない？ イレギュラーさん」

・・・まあ、そう言われてもおかしくはないよな。

アキトさんの記憶の中に俺がいなかったのは事実だし。
誰かが、というより、誰もが疑問に思うのは分かりきってた。

「ふふつ。やっぱり貴方は興味深いわ」

・・・なんか嫌な標的にされた気がするんですけど。

「ま、その事は後々に話してもらおうとして・・・」

あ。結局、誤魔化し切れてない訳ね。

「まずはアキト君達に伝えたい事って奴を話してもらいましょうか」

・・・たくさんあり過ぎて困っちゃうな。

「えっと、アキトさん」

「ああ。何だ？」

「そうですね。良いニュースと悪いニュース、どっちがいいですか」

「・・・先に良い方を聞いておこうか」

「・・・分かりました。ルリちゃん。この部屋って」

「ええ。先程、オモイカネに頼んでおきました」

おし。情報秘匿は完璧だな。

それじゃあ、話そうか。神楽派と北辰の事を。

・・・

「・・・」

「・・・」

「・・・」

あまりの事態に声も出ないアキトさん達。

良いニュースと悪いニュースが極端すぎるから当然だ。

神楽派との接触。

和平派同士での結び付きが強くなるのは途轍もなく良い事。得な事はあっても、損な事は一切ない。

これで和平への確かな道が見えてきたって事だ。

でも、反面、悪いニュースもかなりの重要性。

北辰が出てきたってのも大きいけど、

何よりも夜天光を生み出す技術力があるって事が大きい。

夜天光はブラックサレナであるからこそ太刀打ちが出来る。

でも、その肝心のブラックサレナも手元にはない。

むしろ、それさえも敵側にあるという現実。

一応は味方かもしれないけど、神楽派も敵と言えは敵だし。

これは俺達にとって絶望を与えるだけの信じがたい事実だ。

「・・・北辰」

なかでも、アキトさんの気持ちは計り知れない。仇ともいえる北辰の登場。

いくら劇場版で決着をつけたといっても、気持ちの整理はそう簡単には付かない。

北辰を眼の前にした時、アキトさんがどう出るか……。

「どちらにしろ、俺達はこのままでは負けます」

技術力で負けている以上、数で押すしかない。

でも、俺達ナデシコは独立愚連隊。質で勝つ事が求められている。

「早急にエステバリス、及び、ナデシコの強化をする必要があると思われます」

ナデシコが向かう先は間違いなく激戦区。

生き残るだけの矛と盾が必要になってくる。

ナデシコが和平交渉の中心となるのはほぼ確定事項なのだから。

「……確かにそうだな。だが、強化するにも方法が」

「忘れてませんか？ 俺には、俺にだけは、その方法がある事を」

「ッ！ だが、お前はそれを忌み嫌って」

「ええ。正直、使いたくないですけどね。致し方ないって奴です」

五年後の技術？ 俺はそれ以上の技術を創造出来る。

過去、未来、それだけじゃなく、平行世界の技術まで。

今までは忌み嫌っていたこの異常も俺は今なら受け入れられる。

「……話が見えないんだけど」

まあ、イネス女史は御存知ないですからね。

「それに、ナデシココに接触した際に情報を盗んでおきました。全部とまではいかないでしょうが、多少の事は教えられます」

ふふふ。強化しないとマズイって考えてた俺がそのままにいる訳ないだろ？

カグラヅキからデータは確かに消さなかったが、コピーはして来ました。

俺の補助脳の容量をあまく見ないで欲しいね。高性能パソコンぐらいあるよ。

「・・・コウキ君。悪役面してるわよ」

「う。・・・マジですか？」

「・・・ええ」

「・・・ああ」

アキトさんまで・・・。

「しかし、大胆な策だったな。まさか中からハッキングするとは」

「まあ、俺の強みってそれぐらいしかないですから」

実際、ナデシコパイロット内で俺の強みってそれぐらい。

オールラウンダーでどの技能でもバランスの良いイツキさん。

的確なポジション取りで、目立たないけど重要な役を担ってくれるヒカル。

視野が広く、的確な指示や自らで穴を埋めるバランス型の会長。

近接格闘能力では他を圧倒する技術の持ち主であるスバル嬢。

熱血、気迫こそが力の源であると、粘り強く精神的に強いガイ。

いつでも冷静に戦場を眺め、的確な射撃で援護してくれるイズミさん。

そして、戦場を縦横無尽に駆け回る圧倒的な実力の持ち主、アキトさん。

ほら？ 俺の自慢できる事なんて一つもない。

一応はバランス型だって自負してるけど、どちらかという器用貧乏って奴？

格闘でも駄目。射撃では、まあ、ソフトのお陰で多少上かな？
高機動戦だってアキトさんにはとてもじゃないけど敵わない！

まあ、並列思考からの半暴走ならアキトさん並に戦えるだろうけどさ。

正直な話、味方がいる状態ならあれを使う必要はないと思う。
負担も大きいし、若干、周りに眼がいなくなる気がするし。

まあ、いざという時に使う事は辞さないけどね。
とにもかくにも、俺の強みはハッキング。

それなら、それを利用しないと勿体無いかかって思う。
もちろん、過度の使用は控えますよ。

ハッキングで戦況が左右できるなんて知られたら困っちゃうし。
だから、自動的にルリ嬢によるハッキング支配も防止する方向になる。

ルリ嬢の幸せの為にもね。危険視される恐怖を理解して欲しい。
臆病かな？ 俺。

「一応、ウイルスって事で誤魔化しておきました。

ハッキングがナデシコの武器ってバレたら怖いですからね」

「ああ。ルリちゃん程のハッカーはいないだろうが、万が一もあるからな」

「・・・あの、コウキさん、オモイカネは・・・」

心配そうに聞いてくるルリ嬢。

ははっ。ルリ嬢らしい。
やっぱり、オモイカネが大切なんだなって思った。

「うん。無事だった。ルリちゃんに会いたがってたよ」
「・・・そう・・・ですか。良かった」

本当に心から安堵するルリ嬢。
こりゃあ、オモイカネの願いを叶えてやらないとな。

「ルリちゃんに会わせてあげるって約束しちゃったし。
必ずオモイカネに会えるようにするよ。ルリちゃん。約束する」
「はい。ありがとうございます」

アキトさんを失ったルリ嬢にとってはもしかしたら心の拠り所だったのかもしれないな。
もちろん、ユキナちゃんやミナトさんを始めとする人達がルリ嬢を支えてきたと思う。

でも、ナデシコ時代に大切な友達だったオモイカネはルリ嬢にとって大きな存在。
もしかしたら、オモイカネがルリ嬢が立ち直させた一番の立役者なのかも。

「ナデシコC、あつちからしてみればカグラツキですが、
それが現れた事で色々と考えなくちゃいけない事が出てきました」
「そういえば、ユーチャリスだっけ？ あれはどうなの？」
「大破といってもおかしくない程の損傷だったからな。
ギリギリでブラックサレナを取り出せたぐらいだと思うが？」
「・・・そもそもユーチャリスは通常戦闘には不向き」
「・・・そうですね」

ラピス嬢の意見にルリ嬢が肯定する。

ユーチャリスは奇襲を第一とした戦艦だからって事かな？

確かにブリッジもアキトさんとラピス嬢が座れるぐらいの広さしかないけど。

まあ、武装面で言えば遙かにナデシコCを上回るんだけどね。

どちらにしろ、木連に不向きなのは確かだ。

あれはワンマンオペレーションシステムしか取れない戦艦なんだし。木連じゃ充分に性能を発揮できない。

「とにもかくにも、地球に帰ってから駆け回る必要が出てきたって訳です」

「そうだな」

「ええ」

やる事はいくらでもある。

エステバリス強化案。

ナデシコ強化案。

それに、和平派同士での会談。

後は・・・火星再生機構についてもだ。

「あと、もう一つだけ、御話したい事があるんですが」

「ん？ 他にもあるのか？」

「はい。あの・・・アキトさん、提督、呼んでもらえます？」

「キノコをか？」

「そうです。この話には軍人の協力も必要なんです」

「・・・まあ、構わないが、ここにいる事がバレルぞ」

ああ。隠してもらってたんだ。

感謝しないとな。

でも、いつまでも隠れてる訳にはいかないだろ。

「今から何食わぬ顔で帰った振りしろって方が無理ですよ」
「まあ、それはそうだが、ボソソジャンプの事がバレてしまってもいいのか？」

単体ボソソジャンプの条件。

ネルガルが公表しようとしている為に身動きが取れなくなってしまっている。

だからこそその火星再生機構という案件なんだ。

「その話も含めて、大事な話なんです」

「・・・分かった。呼んでこよう」

「御願います。アキトさん」

アキトさんが席を立つ。

一応、一般のクルーは医務室でのコミュニケは禁止されている。

その為、通信するとなると、部屋から一度出るしかない。

もちろん、そうなるように事を運んだんだ。

わざわざアキトさんに頼んだのもその為。

そうなつてもらわないと困る。

「ねえ、コウキ君。それってあの話？」

「はい。アキトさんがいない今の内にルリちゃん達に話しておきたいんです」

「・・・私達にですか？ アキトさんには内緒で」

「・・・」

アキトさんを説得する前に外堀を埋めておきたい。

ルリ嬢達が味方に付けば、きっとアキトさんも納得してくれる。

「ルリちゃん達はアキトさんがボソソジャンプ実験の実験体になるのは嫌だよね」

「当然です！」

「・・・嫌に決まってる」

キツと困惑の顔を真剣な表情に一転させる二人。

「これはネルガルの陰謀を阻止しつつ、アキトさんが実験体になるのを防ぐ案件なんだ」

「そ、そんな方法があるんですか？」

「うん。でも、複雑な事情も絡んでくる。話を聞いた後、しっかりと判断して欲しい」

「・・・はい。でも、アキトさんが実験体にならなくて済むなら・・・」

「それも含めてちゃんと考えてね。俺の案が絶対とは限らないから」
「分かっています」

俺だけの考えじゃ多分成功しない。
色んな人から知恵や協力を得ないと。

「私もいていいのかしら？」

「はい。むしろ、イネスさんも深く関わってます」

「へえ。それは興味深いわね」

相変わらず知的好奇心が旺盛な事で。

「呼んでおいたぞ」

「ありがとうございます」

通信を終えたのだろう。

アキトさんが戻ってきた。

「それで、キノコに何を頼むんだ？」

「彼の交渉力と頭の切れを頼りにしたいんです」

「・・・なるほど。相場に規模が大きい話のようだな」

「ええ。下手すると一生に関わる事です」

俺や貴方も。

シュイン！

「・・・やっぱりいたのね。あの男がそれらしい事言ってたからそうとは思ってたけど」

出合いがしらに呆れられても困るんだけどなあ。

「わざわざすいません。提督」

「別にいいわよ。それで私に用って何かしら？」

「提督。貴方の力をお借りしたいんです」

「ふ〜ん。私みたいな嫌われ者に何を頼むっての」

「・・・火星再生機構設立の支援を」

「・・・火星再生機構？」

怪訝そうに眉を顰める提督。

無論、アキトさん達事情を知らない者達も。

「へえ。面白い事を考えるのね」

そんな中、イネス女史だけニヤニヤしている。

・・・気にしない方向で行こう。

「何よ？ 火星再生機構って」

「火星の為の火星人による火星人と共に火星を再生しようという計画です」

「そんな抽象的じゃなくて、もっと具体的に言っ頂戴」

「分かりました。真剣に聞いて下さいね」

コクツと頷く一同。

なかでも、ルリ嬢やラピス嬢は一際真剣だ。

それはそうだよな。

アキトさんの今後が懸かっているのだから。

「地球政府、木連政府に賠償金を払わせ、全陣営で協力して火星を再生させる計画です」

「な、何ですって!？」

「コウキ。お前は何を・・・」

驚愕の表情を浮かべる二人。

賠償金を払わせるっていう点に驚いてるのか。

それとも、全陣営で再生させるって事に驚いているのか。

まあ、恐らくどっちもだろう。

「私は地球の軍人よ？ 私は地球の為に動く義務がある。

残念だけど、地球の為にならないような事に協力はしないわ」

「地球や木連が協力してくれるとはとても思えないが？」

「提督のおっしゃる事、アキトさんの言う事は百も承知です。

でも、その結論を出すのは話を聞いてからにしてくださいませんか？」

「ま、いいわ。話して御覧なさい」

「はい」

提督も会長と同じように利を唱えるしかない。
もちろん、火星を見捨てたって感情も提督にあるだろうけど。
この人の本質は現実主義であり、合理主義だ。
感情に左右されて本質を見失うような事はしない。
だからこそ、感情論は駄目。徹底的に利で説く。

「提督はネルガル、及び、木連の狙いを御存知ですか？」

「徹底抗戦って事かしら？」

「いえ。それもありますが、彼らの狙いは他にあるんです」

「へえ。初耳ね」

「もちろん、利益の為に戦争を続行させたいという思いもあるんでしょうが」

「そうね。それで？ その狙いつて？」

「提督もアキトさんの記憶で見たとと思いますが、あの遺跡です」

「ボソソジャンプの演算ユニットって奴かしら？」

「はい。木連の実質的支配者である草壁の狙いがそれです。

彼はボソソジャンプを支配する事で地球、火星、木連。

それら全ての陣営を支配する事が出来る。恐らくそう考えています」

事実、草壁は劇場版で演算ユニットを手中に収め、
ユリカ嬢を利用したボソソジャンプシステムの確立後に行動し始めた。

もちろん、アキトさんの妨害という点も大きいだろうが。

「まあ、分からなくはないわね。

もしボソソジャンプを独占する事が出来れば不可能じゃないわ」

劇場版ではルリ嬢に抑えられたが、それがなければ支配していたかもしれない。

瞬間移動による奇襲と短期決戦。

輸送などを考えなくて済む戦法は確かに有効だ。

実際、今の木連はチューリップを活用する事で一方的な攻撃を可能にしている。

地球に被害が及ぶ事はあっても、木連の本土に被害が及んだ事は未だにないのだから。

「大袈裟に言えば、木連は太陽系の制覇を目論んでいると言えるでしょう」

「それはまた大胆な意見ね。で？ ネルガルは」

「ネルガルはボソソジャンプの独占によって他企業との差を広げたいのでしょうか」

「ま、ボソソジャンプなんて技術を確立できれば商売も右肩上がりでしょうね」

「はい。結果、両陣営も遺跡の確保を戦争中の狙いとしている訳です」

商売。支配。

その後の展望は違えど、目的は同じ。

言い換えれば、彼らの争いは必至って訳だ。

「そこまでは分かったわ。それで、その話がさっきの話とどう繋がってるの？」

「俺自身の結論でいえば、遺跡の独占を許す訳にはいきません」

「そうだな。その意見には俺も賛成する」

「私もです」

「ま、その危険性ぐらいは誰にだって分かるわよね」

そう、独占される事の危険性。

そもそもどちらかの独占を許せば戦争が長引く可能性が高い。

「そこで、俺は遺跡を地球、木連、火星の共有財産にする事を考えたんです」

「なるほど、三権分立の考えだね。互いを監視する事で危険を防止する」

「その通りです。イネスさん」

すぐに閃くんだから流石だよなあ。

「でも、それを実行するには火星の力が弱い。その為の再生機構です」

この方法は互いの力がほぼ同等であるからこそ成り立つ。

三つの内、一つでも力が弱ければどこかの陣営の独走を許す事になるだろう。

「考えは分かるけど、それに賛同できる理由がないわね。

地球はともかく、木連側は独占を狙っているんでしょう？」

それなら、その案を呑む理由がないもの。どう説得するつもり？」

「この話には二つの前提条件があります」

「そう。聞かせて」

少しずつだけど提督の興味を惹けてきた気がする。

「まず木連側ですが、彼らは物資が乏しい」

「以前聞いた話ではクリムゾンから融資を受けていたらしいな」

「アキトさんの言う通りです。彼らの生活はプラントに依存している。」

それで満足している者もいますが、反面、不安を覚えている者もいます」

実際、俺もこの世界に来る前は輸入依存の生活で不安だった。万が一、各国から輸入を止められたらって。かといって、俺個人で対策が練れる訳でもない。何より、生産するだけの土地がないのが大きい。物資に劣り、土地がない国は輸入に頼るしかないのだ。そして、これは木連にも言える。

「彼らは何より求めているのは安住できる地。」

木連は市民艦という形で巨大な艦に国民を住まわせているんです」

「へえ。要するに火星の土地を提供するから再生に協力しろって事？」

「・・・はい」

「でも、忘れないで欲しいわ。」

私達火星人にとって木連は仇以外の何者でもないの。」

火星を荒らした張本人に私達火星の地を踏んで欲しくないわ」

どこか怒気を孕んだ声で告げるイネス女史。

火星人としての彼女の気持ち痛み程に伝わってきた。

「分かっています。だからこそ、火星の方達に全てをお伝えしようと考えています」

「全てって、木連に狙われた理由？ ボソンジャンプの事？ 遺跡の事？」

「全てです。全てを話した上で火星再生に力を貸してもらいます」

「おい。コウキ。ボソンジャンプは秘密にするんじゃないのか？」

「それを貫けられるような状況でもなくなっただんです」

あれはネルガルがボソンジャンプの条件付けが出来ていない事が前

提だった。

既にネルガルが確立している以上、秘密にしてはられない。

「でも、そう都合良くいくかしら？」

そんなの・・・。

「分かりません」

分からないから・・・。

「だからこそ、こうして賛同者を集っているんです。

火星出身である彼らなら火星を再生したいと思ってくれる筈。

でも、とても生き残りだけでは火星を再生する事は出来ません
結果、必然的に他からの協力者が必要になってくる。

そこで木星人を省けば余計に木連との溝は深まってしまいます」

感情論だけじゃ解決しないんだ。

本当に火星を再生したいのなら、そこまで考えなくちゃいけない。
木星人達も長い戦争と足元が付かない暮らして疲労している。

彼らが第二の故郷として火星を選んでくれれば尽力してくれる筈。
手を取り合ってなんて綺麗なものは分かってる。

でも、多分、これが最善の方法なんだ。

「何度も説明して納得してもらうつもりです」

「・・・そう。もういいわ」

「・・・イネスさん」

「感情論なんて私らしくなかったわね。」

「ま、説得に成功するか楽しみに見させてもらおうわ」

その時は貴方にも協力してもらいたいです。納得していただけなら貴方にだって何度でも説明しますから。

「その話は後で当事者同士でしてちょうだい」

「・・・提督」

「もう一つの前提条件つてのを教えて欲しいんだけど」

「あ。はい」

木連側ではなく、地球側。

これに関しては俺の個人的な気持ちが強い。

「今、生き残りの火星人間がどうなってるか御存知ですか？」

「もちろん。ネルガルと軍で共謀して保護という名目で監視しているわ」

「その通りです。でも、両者における考え方は異なります」

「今までの貴方の話を聞いた限り、こういう事になるわね。」

軍はあくまで情報の漏洩を防ぎたいから。

でも、ネルガルはボソソジャンプの重要な存在として確保しているって」

「はい。ネルガルにとって火星人は実験サンプルでしかないんです」

ボソソジャンプの為に暗殺までするネルガルだ。

火星人はネルガルにとって都合の良いモルモットだろう。

いなくなれば軍が喜ぶだけだし、職を与える事で支配しているのだから。

「でも、今、改革和平派が真実を公表しようとして動いています。

それらの真実さえ公表できれば、軍が火星人間を拘束する理由がなくなります」

「そうね。ミスマル提督なら、以前の確執から軍の逃亡まで隠さず

公表するわ」

「すると、ですよ。軍が身を引く事で、火星人はネルガルに一任される事になる」

「まあ、理由がなくなつた以上、軍は火星人の事を気にも留めないでしょうね」

「それが怖いんです。ネルガルが何をしだすか分からない」

ネルガルが火星人を確保している。

その事実があるからこそ、俺達は身動きが取れなくなつてる。

それなら、その前提を覆し、かつ、最善の方向に持っていけばいい。

「俺は火星人達をネルガルの下から解放したい。

その為に、地球、木連という二大勢力の協力を得た上で、

火星再生機構を立ち上げ、彼らの安全と共に火星を再生する状況を確立したいんです」

火星人を解放するにはこれしか方法がないと思つてる。

両陣営から要請されれば、流石のネルガルといえど拒否できない。

一度解放すれば強引な手段も取れないだろうし。

「・・・色々と考えているんだな。コウキは」

「アキトさん。何を他人事のように言つてるんですか？」

「何？」

「俺はこの再生機構の代表をアキトさんにお願いするつもりです」
「・・・どうしてそうなる？」

「アキトさんを利用するようで申し訳ないんですが、
既にアキトさんは地球、木連、両陣営で知名度が高い。

代表の知名度が高ければ、組織も円滑に回ります。

それに、アキトさんなら、ボソソジャンプを悪用しないって確信
していますから」

代表が知られていれば、組織に対する注目度も増す。代表に据えるならば、大人物の方が良いって訳だ。当然、再生機構の方針に合わないものは駄目だけど、火星出身であるアキトさんなら火星再生に力を注いでくれる筈。そして、これらの案件が成立すれば……。

「……そうか」

「はい」

「……少し考えさせてくれ」

アキトさんを犠牲にする必要がなくなる。実験体として。

「それに、この組織が設立されれば、ネルガルに遠慮する必要もなくなります」

「……でも、これはこれで、アキトさんを犠牲にしてるんだよな……」

うん。その辺りはきちんと考えてもらおうとしよう。

断られたら断られたで仕方がない。

そうなったら、火星の生き残りの中で賛同者を探せばいいんだ。

「随分と大胆で貴方達の理想に近いと思う案だけど、私は納得してないわ」

「やはり地球側に利益がありませんか？」

「ええ。私も改革和平派に所属してるけど、何の益もない和平は結局つもりはないわ。」

別に自分の手柄にとか、出世とか、そういう事を考えている訳じゃないの。

でも、それじゃあまるで火星が独立国家みたいじゃない？

あくまで火星は地球連合の一部なのよ。

私がもし地球代表だったら、火星の犠牲を突き付けて、地球側で遺跡を確保するわ。

だって、それが一番の利益になるもの。火星再生機構を立ち上げる理由にはならない」

「ムネタケ！ お前は火星を見捨てた身でありながら、火星を再生させようと思わ

「勘違いしないで。私だって、火星をどうでもいいと思ってる訳じゃないわ。」

でもね、他の地球の首脳陣が同じように考えてくれる訳がないの。私がもし協力するのなら、地球側の説得を担当する事になるでしょ？

その為には絶対的な理由がないと駄目なのよ。感情論じゃ彼らは動いてくれないわ」

・・・それって、協力してくれるって事か？

「ムネタケ・・・お前」

「謝罪だけで済まされるとは思ってたわい。」

でも、これは開き直れる程、軽い罪じゃない。

私もフクベ提督のように彼らに正式に謝罪する機会を設けるつもり。

私達は軍人よ？ 市民を守るのが義務。

その義務を投げ出したんだもの。許される事じゃないわ。

もし、火星の為に何か出来るなら、我が身を惜しまないつもりでいるわ」

「・・・すまない。俺は・・・」

「別に謝られる事じゃないわ。私は自分がしたいようにしてるけどもの。」

勘違いされようと構わないわ。軍人は結果主義だから。

結果を出して、私を認めさせるつもりよ。もちろん、貴方達にも」
「・・・・・・・・・・」

心強い。

心からそう思った。

以前のプライドだけの軍人の姿はそこにはない。

誇り高く、信念を貫ける強さのある軍人の姿がここにはあった。

ムネタケ提督なら強い味方になってくれる。

なんとしても、彼に協力してもらわなければ。

提督なら絶対に成功へと導いてくれる。

「それで？ 納得できるだけの理由があるのかしら？」

火星再生機構を立ち上げる事での利点。

木連側には土地を提供できるという利点がある。

地球側には？

・・・現段階では何もないかもしれない。

でも、もつと長期的な眼で見れば・・・。

「火星、地球、木連の共有財産という形に持っていく事が出来れば、将来的にボゾンジャンプを利用した輸送システムが確立されると思われます」

「・・・・・・・・ヒサゴプラン」

そう、劇場版と同じようなプラン。

でも、そのプランとは違い、しっかりと公な立場で遺跡を確保してある。

遺跡が確保されている以上、どこかの組織の暴走を許す事はない。

きちんと防衛できる環境も整えられる筈だ。

そもそもそれを防止する為の三権分立的な仕組みは出来てる筈だし。

「和平の交渉材料にもなりますし、大きな進歩にも繋がります」
「そして、行く行くは大航海時代の幕開けって訳ね」

「……え？」

「大航海時代!？」

「何をそんなに驚いてるのよ。想定してなかったの？」

「え? ど、どういふ事ですか?」

「簡単な事じゃない。地球から木星まで一瞬でいけるようになるのよ?」

それなら、その先を望むのが人間の欲って奴よ。

誰もがまだ見ぬ未知の世界へ向けて足を踏み出す事になるでしょうね」

「……そこまで考えてなかったんですけど。」

いや。言われてみればそうなんだけどさ。

俺としては別に探検より平穩だし。

「……これって向上心がないって事?」

「ま、未来の話は置いといて、さっきの話の続きをしましょう」

「あ、はい」

「流石にそれだけじゃ理由にならないわ。」

「改革和平派が完全に政権を握れば別だけど」

「……」

「……駄目なのだろうか?」

協力してくれるっていう提督すら説得できなければ政府はおるか火星人も説得できる訳がない。

この組織を設立する為には火星人と両陣営の協力が必要不可欠なん

だ。

「交渉で大事なものは、是非とも協力させてくれって思わせる理由なの。」

「こちらが説得するんじゃないわ。あちらから協力させるように事を運ぶのよ」

「向こうから協力するように誘導する……」

「そう。協力しない事で失われる利って奴ね。それを突き付けるのも一つの方法よ」

「……提督ならなんて言いますか？」

「……そうね。いつその事……いえ、やめとくわ、これを言ったら裏切りになるもの」

「……裏切りになる？」

「それってどういう意味なんだ？」

「でも、言いかけたって事は何か方法があるって事だよな？」

「……何故言いかけた？」

「提督程の慎重思考なら少しでも隙を見せない筈。」

「それなら、わざと隙を見せてくれた？」

「言いかける事で方法を示唆してくれたって事なのか？」

「ムネタケ。言い掛けたなら最後まで言え」

「まったく、少しは頭を使いなさいよ」

「……む」

「戦争もそうだけど、何かが始まる時には始まる前から勝敗は決まってると言っわ」

「あらかじめ勝つだけの環境を整えたものこそが勝つって事ですか？」

「やっぱり優秀ね。その通りよ」

要するに、交渉を始める前に交渉を成功させる環境を整えておけて事。

・・・それが、さっきのとどう関係あるんだ？

「絶対優位に立つ方法なんていくらでもあるでしょ？」

・・・まさか、火星再生機構として遺跡を確保してしまえって、そう言ってるのか？

「それでは、周囲が付いてきません！」

上から見下す形で得た協力なんて脆いもの。

本当の意味で火星を再生させたいなら、本心から協力させる必要がある。

「ふんっ。甘ちゃんね」

「ッ！」

「でも、今回はそれで正解よ。」

本当に大事ならそのような形で説得しちゃいけないわ。

そういう脅す形で他の組織に協力させた所で絶対に禍根が残る」

「・・・提督。何が目的ですか？」

わざわざヒントを残したくせに、自らそれを否定する。

何を考えているか全く分からない。

「貴方がどれだけこの事態に対して真剣に考えているか。

貴方がどれだけ火星の事を大事に思ってるか。それを試したかっただけよ」

「・・・俺は貴方の眼鏡に適いましたか？」

「ええ。貴方は本当の意味で火星の事を考えている。」

仮初めじゃいけないって、何が最善なのかをきちんと理解している」

「それじゃあ・・・」

「いいわ。私が説得してあげる。口先で誤魔化すのは得意だしね。」

貴方が目指す火星再生機構の設立。私が必ず認めさせてあげるわ」
「ありがとうございます。提督！」

頭を下げる。

思いつきり。

それぐらい、提督の協力を得られた事には意味がある。

「ま、ミスマル提督に相談すれば許可してくれると思うけど」

「・・・キノコ提督。それをこのタイミングで言いますか？」

・・・なんだよ？

なんか今までの疲れがドツと来た。

「キノコなんて失礼ね。この髪型はムネタケ家に代々伝わる由緒あるものなのよ」

「え？ そうなんですか？」

「そうよ。お父様だって同じ髪型してたでしょう」

た、確かに。それじゃあ、別に提督の趣味って訳じゃ

「ま、気に入ってるからしてるんだけどね」

・・・結局、貴方の趣味じゃないですか。

きつとムネタケ家は幼少時からそう教育されてるんだろっな。そうでなければ、あの髪型を維持しようなんて思う訳がない。

「でも、協力者はミスマル提督だけじゃなくもつといた方が良い。違う?」

「それはもちろんです」

「だから、私が伝手を頼って色々と話してみるわ。」

出来るだけ、軍内における協力者を集めてあげる」

「ありがとうございます!」

力強い味方を得た。

幸先の良いスタートだ。

「その為にも聞いておきたいんだけど・・・」

それからは提督と細かい話をし続けた。

提督が設立の為のキーになる事は間違いない。

現状で挙げられる全ての利点と欠点を述べ、

後はそれを提督に纏めてもらって、どうにか交渉材料にしてもらう。

俺じゃ無理でも、謀術で成し上がった提督なら可能だ。

交渉材料として物足りなくても違う部分で補う事が提督なら出来る。

おし。政府関係は提督に任せよう。

俺は火星の方達の説得だ。

ミスマル提督に彼らを集めてもらって、しっかりと丁寧に説明しようと思う。

火星再生の為に、ネルガルの陰謀を阻止する為にも、彼らの力は絶対に必要だ。

地球に戻ってからは結構な忙しさだろうけど、今働かなくていつ働くんだって話。

頑張ろう。俺に出来る精一杯の力で。

第五十七話（後書き）

色々細かい話になってきました。

地球に戻ってからもこんな話ばかりでしょう。

でも、エステバリス強化とナデシコ強化という楽しいイベントもあります。

皆様、以前頂いた意見もちろん参考にさせていただきますが、

まだ最終的な案が決まった訳ではございません。

もし、強化案がございましたら、随時お知らせ下さい！

第五十八話（前書き）

やばい。ワールドカップに熱中し過ぎた。
風邪気味です。

第五十八話

「・・・アキトさん」

「・・・ルリちゃん」

「先程の話、受けてください」

「・・・火星再生機構の代表か？」

「はい。そうすれば、アキトさんを含む火星人居が救われます」

「・・・確かに、火星を再生しようというのは俺にとっても願った
り叶ったりだ」

「なら」

「だが、俺には務まらないよ。戦場だけが俺の生息場所だ」

「そんな事ありません！ 戦場だけなんて、そんな悲しい事を言わ
ないで下さい！」

「・・・実際、交渉は全て失敗し、アカツキに情報を渡してしまっ
ているだけ。」

組織のトップになれるような強かさもなければ、組織を運営でき
るような知識もない」

「それは・・・」

「俺なんかよりもっと相應しい人間が」

「それはどうかしらね？」

「それを決めるのは早計って奴じゃないかしら？」

「・・・イネスさん、提督」

「組織のトップに必要なのは別にそんな事じゃないわ」

「それなら、何が必要だと言っただ？」

「もちろん、貴方が考えている組織のトップの形も理想の一つよ。」

でもね、世の中に正解なんてないの

組織の為ならいくらでも冷徹になれる人間がいいのか？

どこまでも潔く、どこまでも一生懸命な人間がいいのか？

そんなの誰にだって分からない。初っ端から諦めている人間は例外だけど」

「……だが……」

「問題はお兄ちゃんの覚悟次第なんじゃないかしら？」

「……」

「どこまでも清廉潔白を貫き、組織の為に献身的に働く。

そんな姿勢に惹かれる人間だって世の中にはいくらだっているわ」

「それに、交渉事が苦手なんてトップにとってはどうでもいい話よ」

「何？」

「だって、その為に外交官っていう専門の役職があるんでしょ？」

「トップの人間に大切なのは適する人材を的確に配置する事じゃないかって？」

「……それは俺に出来る事なのか？」

「出来る、出来ない。そんな事を言ってる限り任せられないわね。

マエヤマ・コウキのように、本当に火星の事を考えているなら、

出来る、出来ないなんて言っていないでやってやるぐらいの心意気を持ちなさい」

「……」

「自分が苦手な事さえしっかりと把握出来ていれば、他所から補う事が出来る。

私が口先だけで出世したのは、軍事面での手柄を他所から奪ってきたお陰よ」

「……それは自慢気に言える事なのでしょうか？」

「例え話でしょ。ホシノ・ルリ」

「はあ……」

「コウキ君の言った通り、今のお兄ちゃんには名声がある。

地球を救う英雄が故郷である火星を救おうとしている。

それだけでいいのよ。それだけで多くの人間が組織に集まるわ」

「貴方が何を考えて軍のプロパガンダを引き受けたかは知らないわ。もしかしたら、我が身を犠牲にしてでもって考えだったかもしれない」

「……………」

「でも、折角我が身を犠牲にして得た貴方の武器よ？」

使わなくちゃ損だと思わない？ 私だったら平気で使うわ。

軍だけに良いよう使われるぐらいだったら自分の為にも遠慮なく使う」

「…………軍人とは思えない発言ですね」

「ホシノ・ルリ、私は己の目的の為になら何だって使うつもり。

私が今、火星再生機構計画を円滑に進めるって目的を掲げている以上、

テンカワ・アキト、貴方の名声だって良いように使ってやるつもりよ」

「…………そこまで堂々と言われるとかえって清々しいな」

「私の一番嫌いな事は余計な感情で計画が滞ってしまう事。

やると決めたら躊躇はしない。一度決めた事を捻じ曲げるような事はしない」

「…………昔に聞いてたら軽蔑してた言葉も今なら真理に聞こえるな」
「当たり前じゃない。私の成功の秘訣だもの。」

貴方もいつまでも女に背中を押されないと動けないような情けない男でいない事ね。

余計な感傷は邪魔なだけ。断固とした決意と信念を持ちなさい。

何事にも揺るがないね」

「……………」

「アキトさん」

「アキト」

「…………分かった。俺に何が出来るか分からないが、やってみようと思う」

「アキトさん！」

「そうだな。コウキがせつかく与えてくれた火星再生のチャンスだ。それを自らの弱い部分だけを見て、引き受けないのは愚かではない」

「はい。私も全力でアキトさんをバックアップします」

「アキト。私も手伝う」

「ありがとう。ルリちゃん。ラピス」

「それで？ 貴方はどうするつもりなの？」

「別に火星の再生なんて興味ないけど・・・」

「ないけど？」

「その組織に入ったら遺跡の研究とか出来そうだし、協力するのも吝かじゃないわね」

「ふふっ。素直じゃないわね」

「言ってなさい。それで、きちんと仕事はこなせそうなの？ 敏腕提督？」

「言ったでしょ？ □先で誤魔化す事だけは得意なのよ」

「あ、そう」

「まあ、任しておきなさい」

「何か気を遣わせちゃったみたいね」

「アハハ・・・。はい」

火星再生機構の話を終えた後、提督達は帰っていった。ついでにイネス女史まで退室。

なんか気を遣わせちゃったみたいで申し訳ない。

「上手く行くといいわね。火星再生機構」

「はい。あの、その事で大事な話があるんです」

「え？ 何かしら？」

良い機会だから言っておこう。

一緒に暮らそうと思ってるミナトさんにとってもこれは大事な事だ。

「火星再生機構は両陣営からの賠償金で活動するつもりって言いましたよね」

「ええ。それぐらいの資産がなければ難しいでしょうからね。」

軌道に乗るのも当分先の事だと思っし。利益も多分少ないわ」

そう、火星を再生しようなんていう莫大な計画だ。

それに掛かる費用も莫大なものになる。

そして、開発ではなく、再生。

当分の間、利益は出ないと思っただ方が良い。

「はい。でも、賠償金が支払われるのって少なくとも戦争終了後だと思っんです」

「まあ、そうなるわね」

「けど、出来る事ならすぐにでも活動したいんです。準備にだって時間が掛かりますし。」

人材を集めて、計画を立てて、物資を集めて、ボソンジャンプの運輸システムを確立する。

今から始めたって時間が足りないくらい、組織を円滑に動かす為には時間が掛かるんです」

「・・・そっか。そういう事か・・・」

「はい。計画は賠償金が支払われる前から始める必要があります。

でも、その為の活動費がない。なら、どこかから調達する必要がありますがある。その費用に」

「その先は言わなくていいわよ。コウキ君」

「・・・ミナトさん」

「貴方の貯金を当てようって言うんでしょ？ いいわよ。存分に使っちゃいなさい」

「・・・いいんですか？」

こんな自分勝手な理由なのに、どうしてそんなに簡単に・・・。

「別に私ってお金持ちの暮らしがしたい訳じゃないもの。

家族皆で楽しく幸せに暮らせれば満足。もちろん、あるに越した事はないけどね？」

ウインクしながらそう告げるミナトさん。

・・・御人好しだなって思う。

お金なんていくらあっても困る事はないのに。
あればある程に贅沢が出来るってのに。

「それに、前だってコウキ君、私のヒモだったじゃない」

「そ、それをここで言いますか？」

・・・せつかく感動してたのに。

お茶目にも程がありますよ。ミナトさん。

「クスッ。大丈夫よ。それぐらいの甲斐性はあるから」

「い、いや。それを認める訳にはいかないなあって思うんですけど」

「男の子だね。コウキ君は」

い、いや、だって、ヒモって格好悪いじゃないですか。

男としては、俺が支えてやるんだってぐらいの心構えじゃないと。

「だから、安心して貴方の思った通りにやりなさい」
「・・・はい」

改めて、ミナトさんが傍にいてくれて良かったって思った。さっきのお茶目な発言だって気にしないで良いって伝えてくれたんだと思う。

本当に、俺には勿体無い素敵な女性だ。

私に任せて思う存分やってみなさい、なんて。

そんな包容力があって心の支えになる言葉は他にはない。なんか、さっきより頑張ろうって気持ちになった。

「でも、一つだけ聞かせてもらっていいかな？」

「はい」

優しい笑顔から一転して真剣な表情になるミナトさん。

だから、俺も真剣な表情でミナトさんを見詰める。

きつと、今から訊かれる質問は、

俺にとってもミナトさんにとっても大きな意味があるだろうから。

「どうして、そんなにコウキ君は御人好しなのかな？」

「え？俺が御人好し？ミナトさんじゃなくてですか？」

「別に私は御人好しなんかじゃないわよ」

え、だって、俺の身勝手な提案を許可してくれたじゃないか。

「もし私が御人好しだったとしたら、コウキ君は底抜けの御人好し
ね」

「別にそんなつもりはないんですけど」

「だって、そうじゃない。」

コウキ君にとってこの世界は自分の世界じゃない。

それなのに、こんなにも真摯にこの世界を想ってる」

「おかしな事じゃないですよ」

「どうして？」

「確かにこの世界は俺にとって本当の意味で自分の世界じゃない。

でも、俺はここにいる。こうしてミナトさんの前にいる。

家族だっています。ミナトさんやセレスちゃんっていう大事な家族が。

既に俺にとってはこの世界こそが真実。ここは立派に俺の世界なんですよ」

既に昔の世界は過去のものでしかない。

今を生きる俺にとって、この世界こそが真実だ。

この世界こそが、俺の生きるべき世界なんだ。

「・・・そっか」

「はい。寂しい事言わないでくださいよ。

俺はもうこっちの世界の住人なんですから」

「そうね。無神経だったわ」

「いえ。改めて思えました。ここが俺の居場所なんだって」

俺がこれからも付き合っていく世界だから。

俺の子供がこれからも付き合っていく世界だから。

大切にしたいって思うんだ。もう他人事じゃいられない。

「でも、御人好しってのはこの事じゃないわ」

「え？ 違ったんですか？」

あれれ？

まあ、確かに御人好しってのとはちょっと違ったかも。

「もちろん、さっきのも含まれるけどね」

「それじゃあ、俺が御人好しってのはどういう？」

「コウキ君は別に火星出身って訳じゃないじゃない？」

だから、コウキ君にとつて火星を再生させる理由はないわ。

別に火星を再生させなくても地球で暮らせばいいだけなんだし」

「まあ、確かにそうですね」

平穏で幸せな生活を送るだけなら地球でだって出来る。

俺の目的と火星再生機構はまったく関係ないって言えば、確かにそう。

「それなのに、貴方は火星の事を想い、火星の方達の事を想い、こうして私財を投げ打ってまで火星を再生させようとした。

それは一体何故なの？ それをして、貴方になんの利点があるの？」

「それは・・・」

・・・なんでだろう？

ネルガルの陰謀を止めたいから？

火星人が犠牲になるのが嫌だから？

将来的に自分が巻き込まれるかもしれないから？

全てをひつくるめて、それが最善だと思ったから？

・・・俺に利点なんてあるか？

別に儲かる訳じゃない。

別に自身と火星人に何かしらの関係がある訳じゃない。

別に火星に対して何かしらの思い入れがある訳じゃない。

「理由もなく、利点もなく、それでも貴方はするの？」

・・・確かによくよく考えると、理由もなければ、利点もない。

どうして、俺はこの案件を絶対に成功させようと思ったんだろう。

「そうですね。・・・始めは自身の幸せを求めてました」

ナデシコに乗らずに、戦争なんて気にしない平穏な生活をしようとしていた。

でも、色々あって、結局、ナデシコに乗る事になった。

「でも、ナデシコに乗って、自身の戦後を考えるようになりました」

戦後、ミナトさんとどんな生活を送ろうか。

そんな事ばかりを考えていた。

教師になろうとか、そんな事ばかり。

「その後、アキトさん達の目的を聞いて、

個人だけじゃなく、地球の戦後を考えるようになりました」

未来を変える為にやってきた逆行三人組。

どうしてもあの悲劇を食い止めたいと。

複雑な感情を抱えながらも、前を見る姿に感銘を覚えた。

だから、俺自身も協力したいと思うようになった。

何が出来るか分からないけど、少しでも力になればって。

「まずは火星人の救出を成功させようって。

そして、俺は木連による殺戮の犠牲者であるカエデと出会いました」

理想的な未来。悲劇を食い止める。

それだけを考えていた。どうすればいいのかって。

そんな時、俺はカエデに出会った。

家族を殺され、故郷を滅ぼされ、憎しみを抱える少女。それでも、悲しみを堪えてひたむきに前を向いていた。

「彼女を救ってあげたい。もしかしたら、同情だったのかもしれない
せん」

「・・・うん」

「でも、それがたとえ同情であろうと、俺は救いたいと思いました。全てを失ってた彼女を、犠牲者である火星人間を出来る事なら救いたいと」

生き残った火星人間達。

彼らが幸せになるには、どうしてもボソソジャンプが絡んでくる。この時から、ボソソジャンプの対策についても考えるようになった。

「そして、木連人であるケイゴさんと知り合います」

木連軍人であるケイゴさん。

ケイゴさんは木連を第三者の視線から見詰め直していた。なんの偶然か、師弟関係みだいになってたけど、彼は確かに木連軍人だった。

「どうしたら、皆が幸せになれるんだろうって」

別に全てを救いたいだなんて、そんな事を思ってる訳じゃない。俺はそんな大層な人間じゃないし。

「誰だって平穏を求める。俺だけじゃない。誰だって幸せになりたいんだ」

平穏。 幸せ。

なんて難しい事だろうって思う。
でも、だからこそ、追い求める価値がある。

「だから、少しでも皆の幸せの為に貢献できたらなって。
いつの間にかそう思うようになったんです。変……ですかね？」

全てを救う事なんて出来ない。
でも、何か出来る事はあるんじゃないだろうか？
俺個人の力なんて些細なものではない。
それでも、少しでも、貢献する事は出来るんじゃないか？
そう、思ったんだ。

「……変よ」

「……」

……変って断言された。
でも、不思議とシヨックはない。
それは眼の前のミナトさんの笑みが柔らかいから。

「本当に御人好し。優しすぎるわよ」

「……そうですか？」

「ええ。自身の幸せだけを求めてもいいのに。
どうして、そうやって皆に手を差し伸べるのかな？」

「別に責任感とかじゃないんです。
ただ、今、俺が幸せだから。」

その幸せをお裾分け出来たらなって」

「ふふっ。そっか」

「はい」

自分だけ幸せになるのがいけないとか、

知っているのに、放っておけないとか、まあ、そういう気持ちがあるって事は否定できないけど、そういう理由で言ってるんじゃないんだ。ただ、皆が幸せになれる道があるなら、それに力を注ぐ事も悪くないかなって思っただけ。もちろん、幸せの形なんていくらでもあるし、誰かの幸せが誰かの不幸なんていう事はいくらでもある。だから、これは俺の独り善がりの考え。皆の為だなんて言ってるけど、結局は自分の為でしかない。御人好しなんかじゃない。我が俣なだけだ。

「やらない善よりやる偽善・・・か」

「え？ 何？」

「あ、いえ」

そんな言葉を聞いた事がある。

偽善だつて言うんなら、うん、貫いてやろう。

いいじゃないか。俺が思う皆の幸せで。

後はそれぞれが自由に幸せを見つけてくれるだろう。

そう願つて、出来る範囲で偽善を貫いてやるつもりだ。

「でも、それでこそコウキ君って気もするわ」

「・・・ミナトさん」

「ふふつ。私も難儀な人を好きになっちゃったものね」

「そうですね。後悔するかもしれませんよ？」

「大丈夫。支える事を幸せに思うようにするから」

「理解ある奥さんですね」

「ええ。当たり前じゃない。なんたって私よ」

「そうでした。ミナトさんですもんね」

「但し、条件があるわ」

「なんでも」

「誰よりも、何よりも、私を幸せにする事。いい？」

「当然です。言うまでもないですよ」

「あら？ 心強いお言葉な事で」

以前言われた言葉は忘れてませんよ。

自身を幸せに出来ない者に他人を幸せに出来る訳がないって奴だから、誰よりもまず自身で幸せを感じよう。

そして、誰よりもミナトさんを幸せに出来るよう努力しよう。それが全ての始まり。

「約束よ」

「はい。約束です」

笑い合う。

今、既に、俺は幸せだ。

「……ン」

久しぶりの唇への感触。

改めて、ナデシコに戻ってきたんだって実感した。

「……コウキさん」

「セレスちゃん。ただいま」

「……おかえりなさい」

いつまでも隠れている訳にはいかない。

だから、俺は素直にブリッジに顔を出した。

驚きの表情で迎える者。

安堵の表情で迎える者。

やっぱりって顔で迎える者。

表情は様々。全員が俺を見詰めていた。

「ただいま戻りました。艦長」

「・・・ご無事で良かったです。マエヤマさん」

ひとまず報告。

「・・・でも、どうやって、あの状況を打破したんですか？」

「以前、CASを製作した際に念の為の機能停止ウイルスを作っていたんです」

騙すような形で申し訳ないけど、ハッキングの事は話せない。

たとえ記憶という形でルリ嬢のハッキングを見ていようと、

それを武器として活用させる事は絶対にさせるつもりはない。

それが、俺やルリ嬢、ラピス嬢、セレス嬢といったIFS強化体質の者の為になる。

「流石に一体一体は無理でしたから、纏めてナデシコCから感染させました」

「なるほど。それで動きを止めてしまった訳ですね」

「はい。機動兵器の動きさえ止めてしまえば、後はこっちのものでしたから」

実際、ハッキングを使わないナデシコCはそこまで脅威じゃない。

もちろん、GBの威力は凄まじいけど、それは正面にいなければ何

の問題もない。

側面からだったら、攻撃される事もなく、後は強固なDFを突破するだけ。

まあ、ドリルがなければちょっと厳しかったかもしれないけど。

「あの、それで、向こうと接触したんですね？」

「はい。ナデシコを手にしたのは木連優人部隊内の神楽派と呼ばれる派閥です」

「神楽派!？」

お。このナデシコ内で聞いた事のない声は……。

「君は？」

「あ、私は白鳥・ユキナ。木連から送られた和平の使者よ」

ユキナ嬢か。ようこそ。ナデシコへ。

「ユキナちゃん。神楽派って？」

艦長が問いかける。

そうだよな。木連人に聞いた方がちゃんとした情報が手に入る。俺としても神楽派に対する国民の印象を知っておきたい。

「以前までは細々と活動してたんだけど、最近は活発的に活動してた気がする。」

なんか和平を結ぶ事の利点を一生懸命に説いてたかな？

男達はゲキガン魂に反するとか言って支持率は低いけど、

私達女性陣からは結構、支持されてた気がする。実際、私も和平に賛成だし」

「そ、それじゃあー!」

「はい。艦長の思った通り、木連内の和平派になります」

徹底抗戦の草壁派。

原作ではこちらの派閥しか出てこなかった。

でも、実際は存在していたんだ。

和平を唱える和平派、神楽派が。

「艦長はこの戦争に対してどのような考えをお持ちですか？」

「私は出来る事ならどちらも歩み寄って手を取り合えたらって思っています」

艦長は和平を結びたいって事でいいんだよな。

まあ、分かりきってたけど、一応、念の為にね。

「記憶を見たからお分かりとは思いますが、

今、和平に向けて活動している者達が地球軍内にもいます」

「御父様達の事ですよね？」

「はい。俺も改革和平派の元一員として、

積極的に神楽派とコンタクトを取りたいと考えています」

「マエヤマさんは改革和平派の一員だったんですか!？」

「以前、所属していたって感じです。

軍から退役した時に辞しましたが、まだ色々と伝手は残っていますから」

「それじゃあ、マエヤマさんが和平派同士の橋渡し役になるって事ですか？」

「始めだけ、です。俺の仕事は両者の繋がりを持たせる事だけ。

後は、両派閥内で交渉事に向けたそれらしい方々にお任せするつもりです」

絶対にそっちの方が良いしな。

俺なんかじゃそんな大役は務まらない。

「でも、ユキナちゃんは神楽派からの使者じゃないんでしょ？」

そう、問題はそこなんだよ。

これが神楽派からの使者だったら単純に喜べただけだ……。

「私は草壁中将から頼まれて……」

ちよつと困惑気味のユキナちゃん。

まあ、仕方ない。散々和平派っていった神楽派からの使者じゃないんだから。

「その草壁中将ってのはどんな方なんですか？」

「えつと、木連軍人達にとっては神様みたいな人かな」

「神様？」

「うん。お兄ちゃんもそうだけど、皆中将に心酔しちゃってる。

神楽派が出て来てからはちよつと揺らいでるけど、それでもまだ
凄いかな」

言い得て妙だ。

木連軍人にとつて草壁は神様のようなもの。

だからこそ、あそこまで彼に権力が集中し、彼に踊らされた。

「そついえば、ずっと徹底抗戦を訴えてたのに、どうして和平なんて
言い出したんだろう？」

「え？ それなら、草壁派は徹底抗戦派って事？」

「うん。なんか、お兄ちゃんが和平を訴えて、中将が頷いたって」

それも原作と同じか。

要するに、この時からツクモさんは草壁にとって邪魔に存在になったんだ。

暗殺するだけなら簡単。どうせなら……。
そんな考えで、殺して地球側に責任を擦り付けるなんて暴挙に出たんだな。

つて、事はこの時から既にツクモさんの暗殺は計画されていた事になる。

ますます、ユキナちゃんを使者として送り出す理由が分からないな。まあ、ユキナちゃんが兄への想いから先走ったっていう可能性もあるけど。

「うーん。そうになると、ユキナちゃんの立場って難しくなるよね」「え？ どうして？」

「既に木連の和平派と接触到成功したんでしょ？
それなら、和平派同士で結託すればいいんだもん。
わざわざ前まで徹底抗戦を訴えていた方と和平交渉する必要はないよ？」

ま、確かにそうなんだけども。
そう、ユキナちゃんを不安にさせるような事は言わなくても言いでしょうが。

「どちらにしろ、ユキナちゃんは大事に保護しましょう。
彼女をしっかりと使者として扱ってこそ、こちらの誠意が伝わる訳ですから」

草壁派にしろ、神楽派にしろ、
使者を暗殺したなんて事になったら一転して抗戦派に鞍替え。

「……あ」

もしかして、それが狙いなのか？

始めからツクモさんの暗殺は計画していた。

でも、万が一、そう、万が一失敗した時の事を考えて彼女を送った。ツクモさんを暗殺できればそれでいい。

そうなればツクモさんを犠牲になった軍人として祀り上げて、その上で、国民に対して、徹底抗戦を訴えればいいだけだから。でも、もし、だ。万が一にでも暗殺に失敗したら。

その時はユキナ嬢を地球側の犯行として暗殺すればいい。

女子を大事にする木連、しかも、人気のあるツクモさんの妹だ。

そうなれば、当然、国民の意識も徹底抗戦に移っていく。

後は草壁がそれを煽れば良いだけだ。

結局、どちらにしろ、草壁の狙い通り、徹底抗戦へと持っていける。

原作に北辰が出てこなかったのがその最もたる証拠だ。

月臣さんにツクモさん暗殺を依頼し、その裏で北辰を動かしていた。多分、あの時、既にユキナ嬢の近くに北辰一派が隠れていたのかもしれない。

潜り込む事なんて簡単だ。

確か、原作でもツクモさんが合流した際にゲキガン祭りの奴をしていた。

あの時にツクモさんの艦隊の一員としてナデシコに搭乗すれば違和感も与えない。

もしかしたら、原作時点でアクトさんと北辰は出会っていたのかもしれないな。

まあ、その話は良い。問題はユキナちゃんの身の安全だ。

俺の推測でしかないから、本当かどうか分からないけど、

和平を結ぶにしろ、暗殺を防止するにしろ、彼女の身を護るのは大切な事。

ミスマル提督に頼んでしつかりとした護衛を付けて貰おう。

無論、信用できる者を。

「さて、話は終わったようだね。次は僕の番だ」
「・・・アカツキ」

ま、大方こいつの事だ。

ボソンジャンプの事で俺を追い詰めたいんだろう。

でも、火星再生機構さえ軌道に乗れば、ネルガルに遠慮する事はない。

まあ、倒産させようとはまでは流石に考えないけど。

「なるほど、和平派と接触したのは良い事だ。おめでとう」

「・・・」

「でも、それにしても随分と追い詰められていたみたいだね。

唯の和平派だったら、無傷とまではいかないけど、素直に帰って来れた筈。

しかし、だ。君はこうしてボソンジャンプという形で戻って来た。それはどうしてかな？ それと、どうしてボソンジャンプが出来るのかな？」

「残念な事に、和平派と接触後に木連と遭遇してしまいました。

バッテリー切れしてる状態では抵抗する事も出来ず、命からがら逃げ延びたんですよ」

「へえ。それは不運だったね。無事で良かったよ」

「ありがとうございます」

いちいち、皮肉な事で。

「さて、ボソンジャンプの事です・・・」

うむ。どうするか？

一応、設定としては俺って地球生まれだしな。

まあ、ここはちょっと調子に乗ってみるか。

「俺が使えて何が不思議なんですか？」

「何って、君は地球生まれだろう？」

ボソンジャンプの最低条件は火星生まれである事。

君は該当しないじゃないか？ 普通ではありえない」

「ありえないなんて事はありませんよ。ネルガルの会長さん」

「・・・やっぱり」

「・・・バレてしまいましたか」

記憶流出をしていないメグミさんが呟く。

まあ、あそこまで露骨だと普通にバレますよね。はい。

プロスさんもそう思ってたでしょ？

「へえ。じゃあ、君はその最低条件すら覆す何かを知ってるって訳か」

「さあ？ どうでしょう？」

「お、教えなさい！ 今すぐ、それを教えなさい！」

おお。秘書さんがヒステリックに。

「どうして、俺が貴方達に教えなくてはならないんですか？」

「へえ〜。そういう事を言っちゃって良いんだ？」

「別に構いませんよ。俺は貴方達に弱味を握られている訳ではない」

「そう。それじゃあ、僕は君達の要求を呑まなくて良いって事だね？」

ニヤニヤしちゃって。

絶対に断れないとか思っちゃってるでしょ？

でも、いや、だが、かな。

「別に構いませんよ」

断ってやるつもりじゃないか。

「なっ!？」

なるほど。ようやくあの作家の気持ちが分かった。予想外って表情が凄い優越感。いやぁ。いいね。これ。癖になりそうだ。

「俺達はいくまで遺跡の第一発見者である貴方達を立ててあげただけです。」

遺跡に関して、貴方達に主導権がある訳ではありません。

俺やアクトさんが我が身を犠牲にしてまで、

貴方達ネルガルに従う理由なんてどこにもないんですよ。アカツキ会長さん」

俺達が火星入達の事を思い、強く出れない事。

ボソソジャンプの情報の流出を恐れ、強く出れない事。

その事をアカツキ達が知っている訳ではない。

勿論、多少は感付いているだろうとは思うけど・・・。

でも、それを解決する為の案件も俺達は計画した。

既に、俺達がネルガルに対して下手に出る必要はなくなったんだ。

「確かにネルガルという後ろ盾、協力者が欲しいと思ってた時期もありました。」

でも、別に企業はネルガルだけじゃないんですよ。

別の企業に協力を求めればいいだけ。

何故か高圧的な態度で交渉事に臨んでましたが、既に貴方達を頼

る理由もない。

「こちらは貴方達に利益のある話をした。

それをあれこれと理由を付けて断つたのは貴方でしょう?」

「・・・随分と強気だね? 僕が本当に君の弱味を握ってないとも?」

「はて? 俺に弱味なんてありましたっけ?」

「犯罪者がよく言うよ。君でしょ? ネルガルの裏金を盗んだの」

あらら? なんてイチヤモン。

「そうなんですか? マエヤマさん」

・・・艦長。どうして信じるかな?

「別にお金には困ってないですから。・・・艦長。信じないくださいよ」

「あ、あはははは・・・」

「そもそもですよ。そんなに堂々と裏金をどうこうなんて言う方がおかしいと思いませんが?」

裏金だつて充分に犯罪でしょ?

何故にそう堂々と犯罪行為を口に出来るかな?

「それに、犯罪者とか言いますが、貴方達だつて充分に犯罪者じゃないですか?」

マシンチャイルドとかがその最もたる例。

どうして後ろ暗い事があるくせに一方的に非難できるかが分からない。

「残念だけど、僕にはパイプがある。君にはない。その違いさ」

「なるほど。犯罪行為である事は認める訳ですね」

「まあね。今更だし。」

企業としては犯罪ギリギリぐらいの事をしなくちゃ生きていけないんだよ」

「アカツキ会長。大事な事を忘れてませんか？」

「ん？ 何かな？」

ちよつとここで個人名を出すのは憚れるけど、ごめんね。ルリ嬢。

「貴方達は企業にとつての最重要人からの覚えが悪いんですよ？」

「別にそんな自覚はないけど？」

「本当に気付いてないんですか？ 聡明な貴方なら理解していると思っただんですか？」

「.....」

知ってて誤魔化してるって所かな。

まあ、それなら、別に言わなくても良いか。

「確かに大企業としては様々な伝手があるでしょう。」

でも、それと同じぐらい、民間からのイメージって大事だと思うんですよ」

「何が言いたいんだい？ まさか、この僕を脅しているのかな？」

「さあ？ どう受け取るかは貴方次第です」

散々下手に出てたけど、別に既に下手に出る必要はない。

まあ、今、暴拳に出られたら困るから追い詰めはしないけど。」

「.....」

「マエヤマさん。貴方にはネルガルの利益を第一に考えるという

「プロスさん。俺達は確かにネルガルに利益が出る計画を提案しました。」

それを会長自らがあれこれと理由を付けて、主導権を握ろうとしたのが悪いんです」

「・・・それは・・・」

プロスさん。

既にこちらは手を差し出している。

それに乗ってこなかったのは会長の判断です。

「マエヤマ君。散々、言ってるけど、僕達が火星人を確保してる事を忘れてないかい？」

「もちろん、忘れてませんよ」

さて、隙を見せたらやられる。

ここは冷静にやってかないと。

「でも、先日、貴方も言ったじゃないですか？

遺跡を確保さえすれば、火星人のジャンプを不可能にする事が出来るかもしれないと」

実際、俺自身はそうするつもりだ。

その上でチューリップがそれに代わる何かのみでジャンプできるように調整する。

イネス女史のような研究者に任せれば、何年かでそれも実現できるだろう。

それでも、更に脅しをかけてくるなら、俺が即行で調整してしまっても良い。

俺は既に異常を使う事に何の忌避感もないのだから。

「なるほど。でも、それには時間が掛かる。研究も必要。そうですよ？」

そして、その為には火星人の協力が必要になる。もちろん、僕達のも」

そりゃあ、火星人の協力は必要ですよ。

でも、別にネルガル所属の者達以外でも問題ない。すいませんが、名前を借りますよ。アキトさん。

「……………」

「……………」

視線で問う。無事に返事をもらえた。

「それこそ、貴方が言ったじゃないですか。

アキトさんや俺が協力すれば良いって。問題ありません」

別にボソソジャンプが出来るのはネルガル所属の火星人って訳じゃない。

わざわざネルガルの介入を許す必要もないのだ。

勿論、ネルガル所属の火星人もうまく引き取るつもりだけど。

「それでもまだ、貴方達はこちらに協力しないつもりですか？」

結局の所、ネルガルの協力が欲しいのも事実だったりする。

でも、それは下手から頼み込むものではない。

あくまで対等。その上で、ガツチリと結託する必要がある。

「・・・別に遺跡さえ確保してしまえば何の問題もないさ」

「果たして、ネルガルが遺跡を確保できますかね？」

「何故、そう思うんだい？」

「現在、火星は木連の支配下にあります。」

「ナデシコだけじゃ太刀打ちできないと証明済みでは？」

「それなら、コスモスや他のナデシコ系の戦艦を持ち込めば良いだけだよ」

「軍と対立した上でそんな事が可能ですかね？」

「・・・どういう意味だい？」

「ナデシコが軍属の状態だったら理由次第でナデシコを自由に使えるたかもしれません。」

「しかし、ナデシコは既に完全な軍所属の艦隊です。好き勝手に使う事は出来ませんよ？」

「別にナデシコの力なんていらさないさ。それ以上の戦艦を用意すれば良いだけだから」

「本当にそんな事を思ってるんですか？ 用意する前にどこかが確保してしまいますよ？」

「ネルガルはもちろん、最も確保の可能性が高い木連も遺跡を狙っている。」

「戦艦一つ建造するのにどれくらいの時間が掛かると思う？」

「そんなに余裕ぶっこいてたら、いつの間にか先を越されてしまいますよ。」

「それなら、こちらに協力して、遺跡確保に一役買った方が合理的だと思いますがね」

「・・・」

地球だけで確保する訳でもなく、木連だけに確保させる訳でもない。両陣営で協力して遺跡を確保できれば、互いの距離も縮まる。

その上で、火星再生機構さえ立ち上げに成功すれば、遺跡関連の問題も無事に収まる。

「一度、ゆっくりとよく考えてみてください。」

俺達にネルガルのような大企業の協力が必要なのは事実です。

それは否定しません。協力者はいればいる程、上手く事を運べますからね。」

でも、それを他企業に依頼する事がどれ程、貴方にとっての損になるか。

そして、戦後、遺跡確保に助力した事がどれ程に生きてくるか。貴方程に物事を長期的に考えられる人なら、どちらが得なのか、分かるでしょう?」

「ふつ。随分とイメージが変わったね。前はあんなにも情けなかったのに」

「色々あれば成長しますよ。まあ、まだまだだとは思ってますが」
実際、交渉とかはムネタケ提督とかの方が凄いと思う。

後はプロスさんとかね。俺なんてまだまだ。

「ま、前向きに検討させてもらおうよ」

それでも了承しないんだから、へそ曲がりな奴だ。

「結論は早い方が良いですよ? 俺はすぐにでも動き出すつもりですから」

急かすのも忘れない。

時間制限を設けるからこそ、焦って妥協案を出してくれる。その時間制限が曖昧であればある程に効果は抜群だ。

「さて、最後になりますか・・・」

なんだかんだと陰謀染みた話が多かったけど、俺がブリッジに顔を出した一番の意味をまだ成していない。

「皆さん、ご心配をかけてすみませんでした」

精一杯、頭を下げる。

ボソソジャンプで帰って来たとか、色々と話さなくちゃいけない事が多いけど。

まずは謝罪。これが大事だと思うんだ。

「いえ。マエヤマさんのおかげで無事に済んだんです。ありがとうございます
ございました」

「そうだな。コウキが無事で良かった」

「ああ。むしろ、こちらが謝るべきだな。負担をかけて悪かった。
マエヤマ」

「副長。当然の事をしたまです」

「なんとも頼り甲斐のある言葉だよ」

そう笑って告げるジユン君。

なんかユリカ嬢が想いを受け入れてくれてから勢いが更に増してますね。

いや。なんか、今更だけど、おめでとう。

「これからはもっと忙しくなるわね。コウキ君」

「ええ。でも、最後まで頑張りますよ」

「私が支えてあげるんだから。ちゃんとしないと駄目よ」

ウインクしながらそう告げてくれるミナトさん。

なんと心強いお言葉だ。

ネルガルが協力してくれるかどうか分からない。

木連が、特に草壁が何を考えているかも分からない。

そんな中で、俺達は最善を探し、

どんな事にも対応できるように準備をしなくてはいけない。

いや。なんか、色々大変そうだ。

でも、少しずつ、進めていくしかない。

先は霧に阻まれて何も見えないけど、足元は見える。

着実にゆっくりと少し前を見て進めていけば、いずれ目的地に辿り着ける。

俺は一人じゃない。ミナトさんやアキトさん。皆が協力してくれる。

それでも駄目なら、もっと協力者を集えば良い。

ムネタケ提督。フクベ提督。ミスマル提督。

立場ある理解者がいるんだ。

きつと、いや、絶対に達成してみせる。

俺達の手で万全な体制を創り上げてみせようじゃないか。

それがきつと、今、俺がここにいる理由なのだから。

第五十八話（後書き）

第四部完としましょう。今更ですが。

結局、コウキ君にちょっと交渉を担当してもらいました。

あまり交渉は得意じゃなさそうですが、

これくらいの事はコウキ君も言える筈です。

さて、アカツキはどんな答えを出すのか。

・・・それにしても、アカツキ、大分嫌われちゃいましたね。
いや。アカツキファンには申し訳ない事をしました。

第五十九話（前書き）

第五部開始です。

PVといい、感想数といい、評価数といい、
本当に嬉しさ、喜びで胸が一杯です。

本当に、本当にありがとうございます。

これからも頑張りますので、応援よろしく御願います。

第五十九話

「……良くやったぞ。北辰」

「……御意」

「最近の神楽派は眼に余る。勢いを削ぐ為にもこの策は成功させねばならん」

「……」

「神楽派は無事にナデシコと接触したと考えているだろう。」

「その慢心が命取りになる事を思い知らせてやるうではないか」

「御意」

「北辰。お前は予定通り事を成すんだ。頼んだぞ」

「命に代えても……」

「イネスさん。ちょっと良いですか？」

現在、ナデシコは未だにコスモスで修理中。

その間、俺に出来る事といったら限られてくる。

とりあえずは、エステバリスとナデシコの強化案を纏めようと思う。

その為にも、ナデシコ的设计者であるイネス女史の力を借りたい。

「あら？ 私に用なんて珍しいわね」

「ええ。貴方の知恵を貸して頂きたくて」

「まあ、話して御覧なさい」

「はい。それじゃあ……」

ナデシコC、現在ではカグラヅキと呼ばれている戦艦から盗んできた各種データ。

それをイネス女史に公開しながら、綿密な話し合いを図る。

「とりあえず、重力波アンテナの複数装着は基本だと思っんですよ」「そうね。でも、それに耐えられるだけの構造が必要になるから……」

「勿論、強度とかもありますからね。良くて二つ、三つでしょう」「ええ。それに加えて、アンテナ自体の性能向上も図りましょう」「いいですね。出力を確保できれば、色々と構想の幅が広がりますし」

なんにしろ、アンテナは大事だしな。

「そろそろウリバタケ技師が小型グラビティブラストを完成させると思うから……」

「ジェネレーターの問題は後もうちょっとらしいですね」

まあ、あれだけのエネルギーに耐えるものを小型化しようっていうんだからな。

少しずつ調整して、シミュレーションして調整を繰り返すしかないでしょ。

「私も協力するから、貴方も協力しなさい」「もちろんっす」

当たり前ですよ。イネス女史。

あれは切り札にもなりますし。

「それで？ 機体はどうするつもり？ 性能向上だけ？」

「ブラックサレナみたいな追加装甲もいいかなって思います。」

やはり、各パイロットの長所に特化させた機体にしたいですし」

短所すらも長所で補う。これが僕のポリシー。

もちろん、短所を失くすつてのも大事だと思うけどね。

やっぱり、何か一つでも誇れるものがあっても良いと思う。

・・・とりあえず、俺は探す事から始めるか。

「それなら、わざわざ追加装甲にする必要もないと思うけど？」

「一からフレームを練り直すのも時間的に厳しいかなと」

「ま、それもそうね」

「もちろん、時間が取れるなら、一から練り直したいですけどね」

「その辺りは臨機応変って所かしら」

「はい」

などなど、イネス女史とは話しに話し尽くした。

やはり、俺の中でだけかまだけど、地球最高の頭脳は伊達じゃない。

こちらの意図を明確に理解し、より高い次元で答えてくれる。

「そういえば、イネスさん」

「何かしら？」

「エステバリスみたいにアンテナをグラビティライフルに付けた方が効率が良くないですか？」

「そうね。所でグラビティライフルって何？」

「分からないなら肯定しないでくださいよ・・・。」

あれです。小型グラビティブラストの事です。銃型になると思っ
んで」

「採用」

「あ。ども」

独特な会話だよね。イネス女史って。

「そうね。ジエネレータの問題が解決したら提案してみましよう。

というより、武器の一つ一つにアンテナ付けたらもっと効率良くならないかしら？」

「とりあえず、ディストーションブレードとグラビティライフルは
そうですね」

「機体からのエネルギーを使用しない分、機体の方に集中できるわ
ね」

「実際にはナデシコから送られてくるエネルギーが多くなるだけで
すけどね」

「いいじゃない。アンテナの負担が軽くなる事は事実なんだから」
「ま、そうですね。どっちにしろ、アンテナ性能の向上は必須
と」

「ええ。ねえ？ 求めている以上のエネルギーが送られてきたらど
うなると思う？」

「そりゃあ、バン！ だと思えますけど？」

「そうですね」
「・・・分かってるなら聞かないでくださいよ」

「でも、その過剰エネルギーを上手く外に逃がす事が出来たら？」
「そりゃあ・・・」

通常の出力に加えて、更に爆発的な出力が得られる・・・。
単純に、うん、至極単純に言えば、そうなるかな。

「圧倒的な加速力になりますね」

「そう。そして、その過剰エネルギーに質量を持たせる事が出来れ
ば・・・」

・・・まるで光つちゃう翼だな。
でも、機動力特化の機体にとってこれ以上の武器はないかもしれな
い。

展開しながら戦場を駆け回るだけで充分驚異的だ。
後は的確な判断と状況把握が必要になるけど・・・。
アキトさんなら大丈夫だろう。うん。

「重力波を圧縮する事が出来れば・・・あるいは・・・」

・・・マッドモード突入。

後方に噴出するとして、重力波がいいのか、DFに変換した状態が
いいのか。

しかし、時空間を歪めるようなエネルギーで推力が得られるのか？
むむむ。要検討って奴か。

「イネスさ〜ん。戻ってきてください〜い」

「あら？・・・コホン。何かしら？」

照れながら誤魔化すイネス女史。

・・・ノーコメントで。

いや、やっぱり、一言だけ。

アキトさん。貴方は恵まれています。

「エステバリスの武装面、機体面はとりあえずこんな所で」

「願わくば、一から構想を練りたいものね。」

私としては追加装甲よりも機体単体の方が安定性があって好まし
いもの」

・・・劇場版では順々と方向性を変えていったらしいし。

一から練り直すような状況ではなかったんだろうな。

しかし、どっちにしろ、八機同時に進行って大変そうだな。

他にも色々あるし、下手するとイネス女史とウリバタケ技師にお任せする事になるかも。

いや、もちろん、少しでも時間が出来れば、参加するつもりですが・・・出来る事なら、ちゃんとした開発・改造環境があれば良いんだけど・・・。

こればかりは個人の力じゃどうしようもないか。

方法としてはネルガルを説得するか、違う組織に協力してもらうかのどちらか。

でも、出来る事なら、エステバリスとナデシコの稼働データがあるネルガルが好ましい。

・・・まあ、これも臨機応変にいくしかない。

決して、行き当たりバッタリって意味じゃないぞ？

「もう一つはナデシコですね」

「あら？ 私の設計に不備があるって事？」

口を尖らせて、拗ねてみせるイネス女史。

なんか、不思議と違和感を抱かせない光景だな。

ちよっと可愛らしいとか思ったのは俺だけの秘密。

それにしても、そろそろ三十。

ビクッ！

さ、殺気？

「・・・」

「・・・コホン」

失礼しました。

「ナデシコはカグラヅキ、ナデシコの事ですが、それよりは武装面では優れています」

「あくまでバリエーションって意味ではね」

「はい。威力で言えば、格段に劣りますね。スピード、強度、それらでも」

「散々なご意見ね」

「別にイネスさんを貶している訳じゃないですよ」
「どうかしら？」

・・・捻くれてるなあ。

「忘れないで下さいね？ ナデシコも貴方の設計だって」

・・・多分だけど、きっとそうだよな？

「・・・そう。それなら、これは未来の私への挑戦って訳ね」

おお。なんか乗ってきたって感じ。

負けず嫌いのイネス女史の事だ。

たとえ未来の自分であろうと負けたくない。

「周りの技術力の差というハンデはあっても、得られた知識量は同じ。」

むしろ、完成された状態を知っている私の方がスタートラインはずっと前。

これだけのハンデを持たされたら、たとえ未来の私とさえど負ける訳にはいかないわ」

・・・背中から炎が見えます。イネス女史、いや、イネス博士。

「ええっと、僕の事も少しは構ってくださいますか？」

「ふふっ。拗ねないの。良いアイデアでもあるのかしら？」

ニヤニヤと。別に拗ねてないっての。

「幾つか疑問がありました」

「ええ。なんでも訊いて良いわよ」

頼もしい事で。

「それじゃあ、遠慮なく」

「どうぞ」

「どうして、前方だけなんですか？」

一つ目の疑問。

どうして、グラビティブラストが前にしか撃てないのか。

だってさ、戦場に立つ以上、必ず前方だけとは限らない訳だし。

それに、砲台一つだけに拘る必要もないような・・・。

「一つはエネルギーコストの問題。」

流石に同時に多数発射できるだけのエネルギーは賄えないわ」

「でも、それはYユニットの存在で解決されたのでは？」

「そうね。相転移砲を使っていない時は可能よ」

「そうですね・・・」

でも、なんだかんだいって、一点集中という形の方が好ましいのかもしれない。

そりゃあ、グラビティブラストを横から後ろやりに撃てたら便利だ

よ？

だけど、威力的には一点に集中させた方が良い訳だし。その為のエステバリスだって言えばそれまでだし。

「もう一つはあくまでナデシコは砲台であるという事」

「砲台・・・ですか？」

「ええ。性能が他を圧倒していて、DFという盾があるから単独行動を可能としているだけよ」

「でも、それで理由としては充分なのでは？」

性能が圧倒的というだけでは物足りないのだろうか？

「実際、単機で全ての事をこなせるだけの汎用性もなければ、

単機で危機を脱するだけの特別な、そうね、切り札がある訳でもないわ。

それは二度の危機を結果として救った貴方が一番分かっているんじゃないかしら？」

・・・確かに人海戦術で屈し、性能を上回る戦艦に遭遇したら何も出来ずに屈した。

ステルス性に特化している訳でもないから、今の所は頭一つ抜けるけど、

いずれは簡単にレーダーに捉われるようになってしまっただろうし、ステルス特化には負ける。

スピードも優れてはいるけど、あくまで優れている程度、スピード特化には負ける。

ある意味、汎用性に優れているとも言えなくはないけど、結局、ナデシコは砲台にしかない。

「ナデシコに兄弟がいる事は知ってるわよね？」

「あ、はい。シャクヤクやらカキツバタやらですよ」

「ええ。私は兄弟艦で艦隊を組むつもりで設計したの」

「え？ そうなんですか？」

「ええ。実験艦であるナデシコ」

・・・元も子もない言い方だな。

「攻撃力に優れて遊撃に向けたカキツバタ」

ああ。最終回あたりに特に何もする事なく終わった奴か。性能的にはナデシコ以上だったんだなあとぼやいてみる。

「後方支援、ドック艦としてドツシリ構えるコスモス」

確かにお世話になってます。

今思えば、すぐに修理できるのって非常にオイシイよな。

「そして、相転移砲という一撃必殺を持つシャクヤク」

「今でさえナデシコに相転移砲がありますが、元々はシャクヤクのですからね」

「そう。ナデシコは新しい機能を試す為のものなの。」

兄弟艦にフィードバックする為だけの戦艦。要するに、あくまで実験艦よ。

良く言えば、汎用性を高める為にバランスの取れた性能。

悪く言えば、今後の為に低い次元で抑えてあるデータを取る為だけの砲撃台」

・・・自分で設計した割に酷評。

いや、自分で作ったからこそ・・・か。

でも、イネス女史の言う通りだったとしたら・・・。

「それなら、設計の段階で今より高い性能にも出来たって事ですか？」

「当たり前じゃない。固定砲台ではなく、可変砲台にも出来たし。単砲ではなく、複数で、しかも、一点に集中させて威力を向上する事も出来たわ」

面ではなく、点で複数のGBをぶつける。

うわ。えげつない程の攻撃力になりそうだ。

それに・・・可変式の砲台だって？

「可変式ですか？」

「ええ。前方だけじゃなく横まで振り幅を作り、

面と点、その両方での攻撃を可能にする方式よ」

・・・かなり理想的かもしれない。

複数の砲台。

あまり多くし過ぎても強度の問題で厳しいと思うから、二つで良い。二つだけでも両側に対処できるし、可変式なら前方に集中砲火も出来る。

後ろに関しては、エステバリスで対処すれば良いしな。

「あら？ その顔は色々と思いついた顔ね」

「はい」

他にも色々アイデアはある。

ユーチャリスのバツタ散開を参考にしたAI操作による援護システム。

これにはラピス嬢の力を借りよう。

形はバツタじゃなくても、それこそ簡易的な砲台で構わない。

とりあえずは援護が目的だし。

ナデシコ単体でより強度なDFを張れるなら、突撃しても良い。まあ、これは最終手段だけど。

性能的に劣るナデシコだけど、幅広い武装で補えば良い。

カグラツキに劣るとしても、性能の向上は可能なのだから、底上げもしてやる。

後は、最高のクルーが欠点なんて全て補ってくれるさ。甘くみちやいけないぜ。

「御願います。イネスさん」

「任せなさい」

頼もしい笑みを浮かべるイネス女史。

本当に、心強い味方だ。

「ようやく補修が終わったわね」

ナデシコ格納庫。

ようやくコスモスでの修理を今日の朝に終えて、

さあ、これから地球に向かうぞ〜という訳だったんだけど・・・。
どうしたの？ ムネタケ提督。

「そこで、私から貴方達に話したい事があるの」

突如としてムネタケ提督に格納庫へと集められた全クルー！。

普段だったら、それでも持ち場を離れちゃいけないんだけど、

未だにコスモスに格納されている状態だから、とりあえず今は大丈夫。
多分、このタイミングでしか皆に直に話せないから、呼んだんだと思うが。

「知つての通り、私は火星人を見殺しにしたわ」

・・・わお。初っ端からハードだな。
当然、周囲は俄かに騒ぎ出した。

「その事に対して、私は言い訳も何もしない。事実、私は逃げ出した」

その深刻な表情でざわついていたクルー達も黙り込む。

「その事で、私はきちんと火星の方達に謝ろうと思う。いえ。謝らないといけない」

真摯に眼の前を見詰めるムネタケ提督。

その真剣な眼差しは己の発言に嘘がない事を充分に示していた。

「これは私の罪。眼を背けてはいけない罪」

罪を背負う。

確かに俺は原作を見て、こいつは何だ？ と思っていた。

軍人としても失格、人としても失格、ガイは殺すし。

でも、実際に話してみると、なんとなくこの人も犠牲者なんだな
て思った。

この世界に来て、知らなかった裏事情とか、真実も知った。

火星大戦。確かに軍人達は逃げ出した。それは変わりようのない事

実だ。

でも、成す術がなかった事もまた事実。

あの時の戦力差でいえば、勝つ術は全くといっていいほどなかった。そりゃあ、民間人を放って逃げたのは肯定する事の出来ない過ちだ。だが、彼らの行動も理解できなくはない。

火星に謎の艦隊が現れた。

その情報、映像を届ける為に、

地球へ帰還するのは、その後を考えた行動として間違っではない。事実、それがあつたからこそビクバリアなどの対策が出来たのかもしれない。

だが、それを全艦隊で行う必要は全くなかった。

逃げ出さず、火星に降下して、救出していれば、多くの火星人を救えた筈だ。

軍人を責められる点はそれだけ。

フクベ提督とてやりたくてユートピアコロニーにチューリップを落とした訳ではない。

彼も必死になつて撃退法を考え、

火星に降下する前のチューリップに体当たりを敢行したまで。

あくまで、火星を考えて降下を防ぎたかつただけなのだ。

それが、偶然、で済ませていいかは分からないが、コロニーに落ちた。

恨むのも当然、憎むのも当然。

だが、果たして同じ立場だった時、俺に何が出来たのかなんて考えたら……。

……きつと何も出来なかった。

フクベ提督は間違いなく歴戦の勇士だと俺は思う。

それが、後の軍の方針によって捻れ曲がり、あのように気の抜けた老人となつてしまった。

犠牲者で片付けたくはない。火星人の気持ちを考えたら……。

でも、間違いなく、火星駐在軍も犠牲者なんだって俺は思うんだ。

「だから、贖罪とか、罪滅ぼしとか、そんな事を考えている訳じゃないけど……」

ゆっくり周囲を見渡す提督。

「火星の為、地球の為、私に出来る何かを全力で成し遂げたいと思う」

キツと表情が鋭いものになる。

「そんな時、私は知ったわ。貴方達も知った筈よ。木連の存在を」

木連。

火星大戦以前は完全なる犠牲者で、その後は正義を語る反逆者ともいえるのか。

元が同じ地球人だけあって、少し複雑な気分になる。

「私は木連の存在をきちんと国民に打ち明けたい。」

対岸の火事じゃない。貴方達も当事者だって。そう伝えたい」

国民の危機感のなさは何なのだろう？

他人事のように空を見上げ、軍の脆弱さを嘆く。

報われない。軍人も戦死者も。

別に戦争に参加しろとは言わない。

でも、自分達も死んだ人間と同じ立場の人間だって理解した方が良い。

……何にも関与せずに暮らそうとしていた俺も含めて。

「そして、私は地球、火星、木星、それぞれが協力し合う世の中を

作りたい」

「・・・それって・・・」

誰かが呟く。

そして、提督が頷く。

「そう、嘘偽りのない和平よ」

息を呑む音が聞こえる。

「地球が非を認め、木連が非を認め、火星を元の形に戻す。

そんな世の中を作りたくて、私は軍内部に出来た新しい派閥、改革和平派に入った」

「改革和平派？」

「そうよ。国民に真実を打ち明け、全ての真実を晒した上で、木連と交渉の席に付く。

独り善がりじゃ駄目。一部の人間な勝手な行動じゃ駄目。

国民皆で考え、国民の総意で和平を結びたい。私はそう考えているわ」

国民の理解。戦争なんて政治だ。

和平を結ぶにしろ、争いを続けるにしろ、国民の意思が大切になってくる。

だからこそ、一人一人が戦争の真実を知る権利がある。いや、義務がある。

「最低の事をした私が言つて、説得力がないのも分かる。

信じられないのも分かる。成功するか不安なのも分かる。

それでも、私に出来る事があるのなら、精一杯それを果たす。

だから、私に、私達に、改革和平派に貴方達の力を貸して欲しい

の

「て、提督!？」

・・・頭を下げた。

プライドが人一倍高い提督が、床に額を擦り付けるまで。膝を床に付け、ただひたすらに・・・。

「私は貴方達ナデシコクルーこそが鍵を握ってるって思ってる。戦争も、和平も、きつと、その後も。

だから、私は貴方達に協力してもらいたい。

皆で和平という意味の下に団結して、私達に協力して欲しい」

目的の為なら手段を選ばない。

提督はそう言っていた。

早速、提督はその方法を選んだんだ。

自分の自尊心なんてクソ喰らえ。

目的を達する為に必要な事だったら何だってする。

決して信念を曲げた訳じゃない。演技とかいう偽りの姿でもない。ただ真摯にプライドすらも投げ捨てて、真正面からぶつかった。取り繕った姿なんかじゃなくて、ありのままの姿で。

それなら・・・。

「俺は」

「私は!」

・・・あれ? ユリカ嬢?

「私は提督に協力したいと思います!」

「・・・艦長」

「同情した訳じゃありません。責任を感じた訳じゃありません。

でも、それが、きつと、最善だから・・・私は提督達に協力します！」

「俺も・・・俺も協力するぞ！」

「俺もだ！」

「私も協力するわ！」

「ありがとう。ありがとう！ 貴方達！」

・・・アハハ。参ったな。

流石は提督。誰よりも頼もしい人達を味方にしちゃったよ。

こりゃあ、大変だぞ。

盛り上がったナデシコクルーは他の何よりもパワフルだからな。

「言いかけたのなら最後まで言えば？」

隣で笑っているミナトさん。

「良い所を取られちゃいましたね。艦長に」

「ま、あそこでコウキ君が言うより流れるに良かったんじゃない？」

「・・・そうですね。俺じゃあ、改革和平派の元一員って事でサクラになってました」

「まあ、誰もそこまで考えないとは思うけど・・・。ほら、艦長だし」

「そうですね。艦長ですし」

あのカリスマ性。

ちよつと頼りない一面もあるけど、

それを超える艦長ならなんとかしてくれてくれるっていう存在感がある。

欠点を補ってくれる恋人さんもいる事だしね。

なんか、将来、あの二人のコンビが軍を引っ張る気がして来たなあ、なんて。

「・・・コウキさん。私も何か手伝いたいです」
「セレスちゃん」

ちやつかり手を繋いでいるセレス嬢と俺。
なんだか、気分は既に親子ですね。

「そっか。それじゃあ、俺を手伝ってくれるかな？」
「・・・はい！」

うん。頼もしい返事だ。

「・・・あれが貴方の恋人？」
「ええ。そうよ」

「・・・全然似てないのに、なんかお兄ちゃんみたい」
「そうかな？」

「うん。なんか御人好しっぽいし、熱血そうだし」

「うふふ。そう言えば、どことなく似てるかもね」

「頼りなさそうだけど、なんかミナトさんが惚れたのも分かる気がした」

「そう。それは良かったわ。ちなみに、結構頼り甲斐はあるのよ」
「嘘だあ〜」

「ふふつ。本当よ」

・・・後ろの会話は気にしない事にした。
俺とツクモさんが似てる？

いやいや。俺はあんなナイスガイじゃないぜ。

顔的にも・・・あ、違うか。ガイ繋がりで混乱した。

「・・・おし。やるか」

提督にああまでやらせて、俺がやらない訳にはいかんだろ。
おし。頑張ろう。これから忙しくなるぞお。

第五十九話（後書き）

考えた、考えたとも、しかし、強化案が纏まらない。
楽しいのはもちろんですが、いやあ、中々納得できる案が練れない
んですよ。

どれくらいの技術レベルが最適なのか？

その技術レベルでどこまで実現できるのか？

などなど考えたらキリがありません。

まあ、実際に専門的な眼で見れる訳ではないので、

あくまでそれらも僕の勝手な判断ではありますが……。

結局、後回しという常套手段に。

うん。やっぱりゆっくり考えよう。

という訳で皆様のご意見、どんどんお待ちしております。

PS 実は僕の知識はそれ程広くありません。

折角のご意見を僕の無知で疎かにしてしまう事も……。

本当に申し訳なさで一杯です。

ですが、皆様のご意見が僕にとって重要なのも事実。

こんなのも知らないのと呆れる事なく、

色々と教えてくださると嬉しいです。

第六十話（前書き）

秘技、後回し。
ストーリーが中々進みません。

第六十話

「歓迎しよう」

「……ミスマル提督？」

ただいま。地球。

という訳でコスモスでの修理を終えて、無事に地球へと戻ってきた。エステバリスの強化案も順調に進み、ウリバタケさんもハッスル。乗り気を飛び越して、最早彼主導の計画へと成っている。

まあ、俺個人としては頼もしい限りなのだが……。
だってさ、イネス女史とウリバタケさんのマッドコンビだぜ。

何か途轍もない事をしてくれるんじゃないかって。
彼らに任せれば限界を超えてしまうんじゃないかって。

思わずそう考えてしまったのは別に変な事じゃないと思うんだ。
実際、俺がエステバリスの開発に携わるより、

強化に関する情報をひたすらに提供した方が遥かに効率が良い
と思う。

しかし、その情報でも色々と考えなくちゃいけない事があって、
その辺りをイネス女史あたりに相談したいかなあ〜とか悩んじゃっ
てもいる。

まあ、こんな情報はないのかって訊いてくれたら助かるかな。

とまあ、強化案についてはこんなもの。

それで、だ。目の前には以前までとは制服が違うカイゼル提督の姿。
あ……もしかして……。

「コホン。提督はよしてくれないか」

「そ、それじゃあ……」

「うむ。改めて、自己紹介としよう。」

私は連合宇宙軍極東方面支部総司令官ミスマル・コウイチロウである」

お・・・おお。

ようやくにして、念願の極東方面総司令官に就任したんですね！

「け、敬礼！」

慌てた様子で告げるユリカ嬢。

そして、同じく慌てた様子で敬礼を返すクルー達。

一応、僕達も軍属だからね。当然の事なんだけど・・・。

「・・・・・・・・」

形になってねえ・・・。

いや。まあ、僕も最初は稚拙というか、無様というか、そんなだったけど。

原作でもそうだったけど、どうして敬礼する機会とかなかったんだろっ？

むむむ。謎だ。敬礼なんて教わってもいないぞ。

「ユリカア。そんな堅苦しいのはいらないんだぞお」

「お父様、いえ、総司令官！ 公私の区別はきちんと付けます！」

「おお・・・。成長したな。私は嬉しいぞ。ユリカ」

「お父様！」

「ユリカ！」

・・・なんか始まつちやったよ。

まあ、親子の対面だ。邪魔すまい。

「やあ。マエヤマ君」

「あ。参謀。お久しぶりです」

「ようやく君の前に立つ事が出来たよ」

「ええっと？」

「どういう意味だ？」

「参謀も忙しかっただろうし、お互いにいた場所も場所だし、仕方なかったで別に済む話だと思うんだが・・・どうも重い。」

「あれだけの事をしてもらっておいて、

成果を出す前にノコノコと会えないっていう意味だよ」

「ああ。そういう事。」

「いえ。これは参謀だからこそ実現できた事。流石です」

「ハツハツハ。そうかね」

「はい」

「それなら嬉しい限りだ」

不思議な事に、やっぱり提督と参謀は親子なんだなって思った。

最近の提督は本当に心強いからな。親譲りの知能って訳だ。

将来、提督も参謀みたいな王佐の才的な人間になるんだろうなあ。

とか、ふと思った。

「あら。お父様」

「サダアキか。おかえり」

「ただいま戻りました。お父様」

さてさて、こつちでも親子の対面が始まった訳だし、俺はさっさと
ずらかりますかね。

「それでは、私はこの辺で」

「待ちなさい。マエヤマ・コウキ」

身を翻して去ろうとした訳ですよ。

でも、途中で呼び止められてしまった。

何だろうか？ 俺、なんかしたかな？

「お父様。彼の話聞いてあげてくれますか？」

「ふむ。彼には返しきれない恩があるからね。

出来る限りの事は叶えてあげたいんだが・・・」

「お願いします。お父様。私は彼に全面協力すると決めました」

「・・・そうか。とりあえず、話を聞いてからだな」

・・・ええつと？ どういう事だ？

「ほら、さっさと話しなさいよ」

「・・・何をですか？」

「何をつて・・・。はあく。火星再生機構の事よ」

「あ」

「まったく。お父様なら私達の力になってくれるわ」

最近、色々と考える事が多くて、頭が回らなかった。

そうだよな。参謀も巻き込んだんじゃええ良いんだ。

「はい。それじゃあ・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・。。。

「・・・そうか」

話し終えた後の参謀の表情はあまり歓迎できるようなものではなかった。

でも、嫌悪感とか、不機嫌そうなのはないから、多分、否定ではないと思う。

「・・・難しいな。地球側のメリットが少ない」

「・・・自覚はしている。

確かに木連と地球で比較したら、圧倒的に地球の利益は少ない。

木連はともかく、地球側が賛同してくれる理由はないに等しいのだ。・・・それでも、実現したい。たとえ、無理に近いと分かっている。でも。」

「私とて、出来る事ならば実現させてあげたい。だが・・・」

難しい顔で黙り込んでしまう参謀。

「・・・駄目なのだろうか？ あまりにも浅い考えだったのだろうか？ でも、俺は・・・。」

「それなら、お父様、地球側にも利益が出るようになさればよろしいのでは？」

提督？

「・・・もちろん、その通りだが・・・」

「木連同様、我々地球にも行き場のない者は数多くいますわ」

「・・・難民を移民させようというのか？」

「たとえばの話です。探せばいくらあるかと・・・」

「うむ。考えておこう」

「ありがとうございます。お父様」

ええっと、これは了承してもらえたと受けとつても？

「それじゃあ、マエヤマ・コウキ」

「あ、はい。何でしょうか？ 提督」

「私は私のすべき事をするわ。貴方も貴方のすべき事をしなさい」

「はい！」

そうだよな。俺から提案した事だ。

まずは率先して、俺から動き出さないと。

おっしや。やるぞ。

「頼もしくなったものだな。サダアキ」

「・・・お父様」

「昔のお前を見ているようで私は嬉しいよ」

「現実から眼を背けるのはいい加減やめましたわ」

「うむ」

「変えてくれたのは、きっと・・・ナデシコです」

「ナデシコはこの基地内にて待機。指示は追って連絡する」

極東支部のトップにミスマル提督、いや、今は司令官か、が就任した為、

実質、改革和平派にナデシコが組み込まれた事になり、自由度が大

幅に向上した。

前まではいちいちどこかしらを経由させなくちゃ干渉できなかったらしいし。

うん。ナデシコ内の思想も改革和平派に近くなってきてるし、何とも都合が良い。

「さて、使者殿がいらっしやると聞いたが・・・」

とりあえず、木連側の和平派については後で話そう。

今は、何の思惑があるかどうか分からないけど、草壁派の使者を丁重にってね。

「彼女です。お父様」

ユリカ嬢がユキナちゃんの肩に手を添えて前が出る。さり気なく気遣う辺り、流石艦長って感じ。

「ふむ。初めまして。使者殿。私は連合宇宙軍極東支部総司令官ミスマル・コウイチロウです」

「あ、は、初めまして。シラトリ・ユキナです」

「彼女は木連所属優人部隊の佐官の妹さんなんです」

「そうかね・・・使者殿、本国ではどのような結論に？」

「あ、はい。木連内の実質的な指導者である草壁中将からこう伝えるようにと」

さて、原作通りなら、とにかく直接会って話がしたいとかそんな所だろう。

実際、ナデシコだから、あんな会談が成立したけど、馬鹿にしてるだろ？

一方的に和平を持ちかけて、そのテーブルを自国近くで用意すると

か。

本当に和平なら対等な立場である筈で、どちらかに国に赴くのは変な話。

今回、普通の戦争における中立というか、間に入ってくれる組織がないだけに、

慎重な対応、そして、長い期間をかけて穴のない和平を創り上げる必要がある。

それを初っ端から無視してるんだから、そもそも和平の意思なんてなかったって訳だ。

というか、今更だけど・・・ナデシコと木連が結んだ和平なんて無効だよな。

ナデシコは別に地球を代表してた訳じゃないんだし。

原作では結局草壁の陰謀に巻き込まれてあんな形になったけど、

もし、草壁の提案した和平条件がちゃんとしたもので、それをナデシコが了承したとしても、

それは地球側の意思じゃないんだから、結局、和平は成立しなかったって事に。

それにしても、そもそもどうしてナデシコは自分達で和平を結んじやおうとか思ったのかな？

結んじやえばなし崩し的に本当の和平が成立するとも思ったのだろうか？

ないでしょ。普通に。

下手すると、ナデシコに対して地球側、木連側の両陣営からバッシングがあつたかも。

だって、地球側からしてみれば、何を勝手について思うのは当たり前前だよな。

きっと原作でも、和平の為に働いていた人間は少なからずいたと思うんだ。

そのコッコツと積み上げてきたものを横から掠め取られただけならいざしらずぶち壊した訳だし。

間違いなく、ナデシコこそが戦争を長引かせたつてなるよな。うん。そして、それは木連側も同様。

和平は互いに合意し、信頼しあう事で初めて成立するもの。

それなのに、いざ結んだら、それはある部隊の独断だったとか、激怒ものだよな。

信頼を裏切ったなんてもんじゃない。それこそ偽りの和平つて奴。和平が成立したと安心していたら、地球との争いが再び起こり、話が違っじゃないかってなる。

一度信頼してもらったからこそ二度の裏切りは最早致命的。

また裏切られるだけだつて、余計に頑なになっていた可能性が大だ。結局の所、ナデシコの単独和平交渉はどのように運んでも悪手だつたつて事。

だつて、成功しても失敗しても、どちらかに禍根を残すだけだし。

逆に、戦争の元凶とか、長引かせた悪魔の船とか、そう思われてたかもしれない。

それにしても、草壁も意外とそういう意味では権謀術数には不向きなのかもな。

たとえば俺が草壁の立場にいて、徹底抗戦を続けたいと思っていたのなら、

まずは地球側の情報を細かい事まで逐一調べて、状況を完全に把握するだろ。

それだけ動かせる権限もあるだろうし、北辰達もいるだろうし。

そうしたら、地球側の現状も把握できるし、ナデシコの事も把握できていた筈。

すると、だ。ナデシコが規律違反の独断だった事すらも把握できた。独断でやってきた部隊に交渉なんていう地球全てに関わってくる権限がある訳ない。

そこまで読み取っていれば、ツクモさん暗殺、ユキナ嬢暗殺なんていう強硬案ではなく、

さっき考えたように、偽りの和平をナデシコと結ぶ事で軍内の和平

派を懐柔。

その上で、抗戦派には意図を明確に話した上で、改めて地球本国に使者を派遣。

そこで、まあ、実際の条件でもいいし、嘘偽りの木連有利の条件でもどつちでもいいから、

それを地球側に提出。さて、和平をきちんとした形で結びましょうと訴える。

すると、んな事知るか、当然、地球側はなる訳だ。

実際、その時になっても、国民達は木連の事を知らされてなかった訳だし。

未だに国民への情報漏洩を恐れる軍が何を仕出かすかなんて想像に容易。

暗殺か？ 幽閉か？ まあ、碌な事はしないわな。

一度こちらから手を差し伸べて、それを握った筈だ。それなのに・・

と、木連側の和平派もその裏切りに打ちひしがれ、抗戦派の発言力が増す。

後は再び使者に危害を加えられたなんて国民に教えればもう完璧だな。

その使者にツクモさんとかでも別に地球側の対応は変わらないだろうし。

要するに、木連側が自国の軍人を暗殺するような下手すると露見するような形じゃなく、

完全に地球側のみを悪者に出来て、和平派も懐柔できて、国民を煽る事も出来る。

うん。マジで完璧な流れだな。

もし俺が草壁だったらそうしてる。

あとは、そうだなあ・・・和平条件はむしろ嘘で凝り固まっていた方が良くもしいない。

ナデシコが承諾してなくても、承諾したって事で貫いちゃってさ。

更に地球軍内を混乱させちゃってもいいかなあ。

地球側の焦りやら怒りやらもピークに達しちゃって、強硬策へと導き易くなる。

別にナデシコにまで確認するような事はしないだろうし、というかできない。

その時既にナデシコは監禁されてるし、こっちが返答を迫ればそんな余裕も持てない。

軟弱な地球軍ならば、返答を迫ったら強硬策つてのが容易に想像できるし。

別以後でナデシコに連絡を取られても全然構いません。

大事なのは使者が危害を加えられたっていう事実。

そうすれば、国民だろうと、軍内だろうと、意思の統一がしやすくなりますからねえ。

うん、そして、だ。その時こそ、北辰の出番じゃね？

もし万が一使者に対して地球側が丁重な態度だったら、

その時にこそ北辰あたりを使って使者を暗殺しちゃえば良い。

そもそも、何故、月臣さんに任せるなんていう愚考に到ったのかが分からない。

どれだけ自身のカリスマ性に自信があつたんだよ、って話。

裏切られないって確信してるからこそなのかもしれないけどさ。

絶好の策なればこそ、してやったりみたいないな友情破壊に拘らないで確実性を求めるべき。

あそこは北辰で良いでしょ。露見したらまずい事は子飼いにやらせるのが普通じゃね？

そして、暗殺するなら、自国から遠ければ遠い程に良い。言い掛かりに出来るから。

自国に近くて、当事者が生存。うん。火種を残しちゃってる訳じゃない。

なんで露見しないなんて思ったかが分からない。

実際、月臣さんが覚悟を決めて暴露したから熱血クーデターが起き

たんでしょ？

草壁つてなんだかんだいって、馬鹿なのかもしれない。そういう所、熱血は盲信にあらず。その言葉は誰よりも草壁に諭すべきだな。自身を盲信して足元を崩されてちゃ世話ないって。

・・・なんか今更だけど、自身が黒い気がしてきた。何だろう？ 最近のストレスで思考が危ない方向に・・・。

「分かりました。返事は出来かねますが、和平の意思は伝わりました」

「あ、ありがとうございます」

「それでは、使者殿が本国に帰国するまで、私達が責任を持って御守りします」

・・・コホン。落ち着け俺。

あまりにも長く考え過ぎて、話が終わってるぞ。大事な事を聞き逃してるじゃないか。

「ミナトさん。草壁中將からは何と？」

「あら？ 聞いてなかったの？」

「ア、アハハ。ちよつと考え事をしてまして」

「もうしょうがない子ね」

「すいません。それで、何て？」

「簡単に言えば、和平の席を用意した。」

本国にて和平について話し合おう。最早我々に戦争を続行する意思はない。

お互いにとって良き形で終われるよう、互いに歩み寄り、最善の道を探そうじゃないか」

「・・・マジですか？」

「ええ。大マジよ」

・・・呆れて言葉も出ません。

まあ、言葉を聞く限りでは、良いように聞こえるけど。どうしてわざわざこちらから木星にまでいかないといけないのかな？別に下手に出るとまではいかないけど、上手に出られてもなあ。

草壁を知ってるから、その偏見で勝手な見方をしちゃってるだけかもしれないけどさ。

一応、司令も慎重に対応してるし、特に俺も焦らなくて大丈夫。後は信用できる神楽派との橋渡し役を務めるとしますか。

ま、俺が信じてるだけで、神楽派内の事を知ってる訳じゃないんだけど・・・。

その辺りは、うん、お互いの派閥内で交渉事に向いている人がいるだろうし。

信じられるかどうかもその人達に判断してもらいましょう。俺に出来るのは間に立つ事だけかな。

「それでは、解散」

ユキナちゃんを連れて行って司令が去っていく。

同時にクルー達もパラパラと立ち去っていった。

ふむ。それじゃあ、俺も司令に話を付けにいくかな。

色々話し合う事が多過ぎる。

「コウキ。司令の所に行くのか？」

「あ。アキトさん」

と、ルリ嬢とラピス嬢。

所謂、テンカワー一味って奴だな。

命名、俺だけだ。

「はい。そのつもりです」

「それなら、俺も同行しよう」

確かにアキトさんがいてくれた方が助かるかも。

「それじゃあ、ルリちゃん、ラピス、先に戻っていてくれ」

「はい。分かりました」

「・・・うん」

「あ。ミナトさん。後で行くんで先に休んでていいですよ」

「分かったわ。それじゃあ、セレセレとお留守番してるわね」

「・・・頑張ってください。コウキさん」

うん。癒されるね。

「それじゃあ、行きましよう。アキトさん」

「ああ」

女性陣を残して、俺とアキトさんは司令の後を追った。

恐らく、基地内にあるお偉いさんがいそうな部屋に向かったんだろ
う。

ま、いざとなったら誰かに聞けばいいだけだしね。

「・・・」

「・・・」

基地内の廊下を無言で歩く。

いや。別に気まずい訳じゃないけど、いや、やっぱりちょっと気ま
ずい。

「あの」

「コウキ」

「あ、はい」

と、突然、何だ？

「火星再生機構の代表の事だが・・・」

「・・・はい」

考えてくれていたみたいだ。

・・・どうなる？

「俺で良ければ引き受けさせてくれないか」

「ほ、本当ですか？」

「な、何を驚いているんだ？ 意外だったか？」

「あ、いえ」

良かったあつてのが正直な感想。

俺としてもアキトさんに務めて欲しかった。

他の火星人中で向いている人を探すのが大変だったってのもあるけど。

うん。ー安心。

「ありがとうございます」

引き受けてくれて。

「いや、お前にお礼を言われるような事でもないさ。

むしろ、俺から言わせてくれ。ありがとう。」ウキ

えっと・・・。

「俺こそお礼を言われる事はしてないかと・・・」

「そんな事はない。火星出身でもないお前が火星を再生しようとしてくれたんだ」

「・・・」

「それだけじゃなく、俺の戦後の目標まで作ってくれた。

お前には感謝しても、し足りないくらいだと思っている」

そこまで言われると恐縮なんだけど・・・。
うん。それなら・・・。

「それなら、別にお礼なんて良いので」

「ああ。何だろうか？」

「絶対に幸せにしてあげてくださいね。ルリちゃんとラピスちゃんを」

別に見返りが欲しくてした訳じゃないんだから、そんな眼で見ないでいいですよ。

戦後に目標が出来たっていうんなら嬉しい限りです。
貴方の不幸は彼女達の不幸ですからね。

「・・・ああ。分かっているさ」

「こういう事は何度言っても良いんですよ。特にアキトさんには」

「ハッハッハ。違うない」

「無茶ばかりで彼女達を悲しませていきますからね」

「そうだな。だが、お前に言われる筋合いはないぞ」

「アハハ。耳が痛いですね」

笑い合う。本当に、幸せにしてあげてくださいね。アキトさん。

「さて、真面目な話、俺に代表は務まるだろうか？」

「務まる務まらないじゃないんですよ。無理でもこなすんです」

「そうか。お前も同じような事を言うんだな」

「えっと、誰とですか？」

「フツ。誰でもいいじゃないか。そうだな。とにかく成し遂げよう」

えっとお？

・・・まあ、別に誰でも良いけどさ。

アキトさんもやる気になってるみたいだし。

出来る限りサポートしますよ。

「まずは火星の方達の説得ですね」

「ああ。誠心誠意、想いを伝えるさ」

「そうですね。俺よりアキトさんが伝わるでしょう」

さてっと、どちらにしろ、司令の力をお借りしなければ・・・。

「ミスマル総司令官。就任おめでとうございます」

「まあ、座りなさい」

「ハッ」

敬礼。完全に雲の上のお方になってしまわれました。

まだ約束のお酒タイムは実現してない訳だが・・・。

まあ、いずれ機会はやってくるだろう。

とりあえず、総司令官と対面するようにソファに座る。

「ユキナちゃんはどうなりました？」

「使者殿なら護衛を付けてナデシコ内に休んでもらっている」

「ナデシコ内ですか？」

「意外かね？」

「ええ。まあ……」

保護している訳だし、基地内で休ませていると思っただけだな。

「彼女としても敵国の軍より君達がいるナデシコの方が安心できるだろう」

まあ、それはそうかもしれない。

俺だって、ケイゴさんの船だから安心して乗り込んだけど、

流石に草壁達がいる木連軍内部に行けるかって言えば、うん、無理って断言できる。

「それにだね、護衛という観点でもナデシコ内の方がいいのだよ」

「一度飛び立ってしまったら危険からは逃れられますからね」

「うむ。正直、軍内部では誰の暴走を許すか分からんからな」

実際、誰かを護るならナデシコ内が安全。

補給とか以外では着陸しないのだから、隔離されている訳だし。

ボソソジャンプでもない限り、いきなりナデシコ内には乗り込めない。

戦力としても十分な訳だから、墜ちる危険性も少ないし。

護衛をつけてナデシコ内で保護がやっぱりベストの選択か。

ユキナちゃんの精神的負担もここよりは少ないだろうしね。

「分かりました。私達が全力で護ります」

「頼むよ。アキト君。彼女に危害が加われば、木連の暴走を許す事になってしまう」

「もちろんです」

流石に理解しているみたい。
使者を保護する危険性を。

まあ、俺なんかより何倍も頭は回るだろうし、政治を知る軍人なら当然か。

「さて、ここまでやってきたんだ。何か話したい事があるのだろうか？」

ま、分かっちゃいますよね。

「ええ。大まかに言えば三つ程連絡があります」

「ふむ。聞こうか」

「はい」

ミスマル司令官に話すべき事は大まかに分けて三つ。

1、木連の機動兵器と戦艦の現状。

これはナデシコ内にある戦闘映像を提出しつつ話そうと思う。

2、火星再生機構。

代表であるアキトさんに協力してもらい、司令官を説得。

最低でも、火星人を一同に集める所まではこじつきたい。

まずは彼らの協力が得られてこそな訳だし。

3、神楽派、木連内の和平派について。

これに関してはケイゴさんからの連絡待ちな訳だが、

前もってミスマル司令官に伝えるのは特に問題ないだろう。

草壁派についても同時に報告して、より慎重になってもらおうという意図もある。

さてっと、早速御話しましょうか。

第六十話（後書き）

前書きで述べたようにストーリーが進みません。

未だに迷っている点が非常に大きい。

まあ、それなりに纏まってきましたので、心配はありませんが。しかし、このままのペースで行くと何話まで行く事やら。

第六十一話（前書き）

大変お待たせしました。

いや。マジで八機は大変です。

バリエーションが被る！

第六十一話

「・・・なるほど」

早速、ミスマル司令に現状での事を全て話した。

火星再生機構の話。神楽派の話。そして、敵機動兵器の話。

その内、司令にお世話になるのは火星再生機構と機動兵器。

神楽派との接触に関しては俺自身が手引きして、後はお任せという形になる。

とりあえず、火星再生機構も和平の成立を前提に計画してるから、まずは地球、木連両者の和平派同士の結びつきが最優先事項って所かな。

「火星再生機構の件に関しては今後検討するでしょう」

「はい。御願います」

前向きに捉えてくれるだけでいい。

ミスマル司令にとっても最優先事項は和平な訳だし。

「さて、まずはマエヤマ君」

「はい」

「良くやってくれた。君にはまた大きな借りが出来てしまったようだね」

「借りだなんて。偶然ですよ」

実際、ケイゴさんと会話が出来たのも運の要因が大きい。そもそもケイゴさんと知り合いになったきっかけも軍の基地だった訳だしさ。

「連絡が来次第、逸早く我々に連絡してくれると助かる」

「もちろんです。確実にお知らせします」

「ありがとう。どれくらいになるかは聞いているかね？」

「詳しくは聞いておりません。通信できる環境を一から構築する訳ですし」

「む……。分かった。気長に待つとしよう」

「すいません。ぬか喜びをさせるような形になってしまつて」

「なに。気にする事はない。実際、我々には接触する手段がなかったのだ。

マエヤマ君が間に立つてくれなければ、接触する機会自体がなかったかもしれない。

感謝しておるよ。現状で私達が求める一番の物を君は私達に与えてくれたのだからな」

「そう言つてくださると気が楽になります」

改革和平派としても木連側と接触したかった訳だ。自画自賛するようだけど、ナイス、俺。

「しかし、あのカグラ君が実は木連軍人だったとは……」

どこか複雑そうな表情の司令。

・・・そうだよな。

司令はケイゴさんを極東の要として期待してた訳だし。

期待のパイロットが実は敵国からのスパイだったとなれば複雑だ。

まあ、そのお陰でこうして接触する機会が得られたっていうの事実。うん。やっぱり複雑だ。

「うむ。だが、既に過ぎた事。良い機会だったと考えよう」
それが良いと思います。

「次だが、遂に敵側にも新兵器が現れたのだね？」
「はい。覚悟してましたが、予想以上の戦力でした」

現状では、夜天はおろか福寿改にも遅れを取ってしまった。
もちろん、ナデシコならば両者にも対応できるだろう。
でも、それは所詮局地戦。
全箇所に対応できなければ、ナデシコは勝利しても地球が敗北して
しまう。

早急に対策を取る必要がある。

「ふむ。準備をしていた甲斐があったな」
「準備とは？」

「私とて敵戦力の向上を懸念していなかった訳ではないのだよ」

え？ その口振りは・・・ひょっとして・・・。

「それでは・・・」

「うむ。私の知り合いにとある企業の社長がいてな。
相談した所、我々に協力してくれる事になったのだ」

企業の協力を得られたって事か。
それは非常に嬉しいんだけど・・・。
問題はその企業がどれだけのノウハウを持っているかって事。
機械産業に関して経験がなければ何の意味もない。

「その企業の名は？」

「明日香。明日香インダクトリーだ」

明日香インダクトリー？

聞いた事があるような、ないような……。

「明日香というとデルフィニウムの？」

「うむ。エステバリスの登場で最近では押されているが、

以前までは、機動兵器分野で他企業を圧倒していた企業だ」

「それなら、機動兵器の開発における経験は……」

「無論、最高峰であろう」

流石はミスマル司令。

ここぞという時に頼りになる。

ある意味、これもこんな事もあるのかとって奴だな。

「既に何機かエステバリスを譲り渡し、研究してもらっている。

彼らもネルガルの機体は、と嫌がったがな。無理矢理通してもらった」

まあ、そりゃあ、嫌だよな。

自身の製品に誇りを持つのがエンジニアの性分。

それを他企業の機体の方が優れているからこちらを研究して発展させるなんて。

いやあ、僕でも嫌ですよ。マジで。

でも、実際、デルフィニウムとエステバリスを比べたら一目瞭然。しかし、だ。今まで培ってきたものにエステバリスを組み合わせられたら……。

それは凄まじい機体が出来上がるんじゃないかと少し興奮する。

まあ、デルフィニウムの二の舞は踏まないだろう。

言っちゃ悪いが、あれはミサイルに手足くっ付けただけって感じだし。
恐らく、早急に量が必要として、仕方なしにああなったんだろう。
コスト的にも、組み立ての時間的にも、あれは都合が良いだろうしね。

「一度、話し合いの機会を作ろう。直接会って話した方が良さそうだから」
「ありがとうございます」

現状でネルガルの協力が仰げない以上、他企業の協力は何よりも心強い。
それが明日香という機動兵器の分野で経験豊富な企業なら尚更。

「しかし、良いのですか？」
「著作権やら特許やらの事かね？」
「はい。たとえ軍といえど、法に触れる事は・・・」
「勘違いしてもらっては困るな。アキト君」
「は？」
「エステバリスをもとに開発するのではない。
エステバリスの技術を導入して新たな機体を開発するのだ」
「・・・・・・・・」

「既にそのような事に拘っている余裕はなくなった。
戦争中に類似した機体が登場するのはよくある事だよ」

なんともまあ、反論できない言葉な事で。
違反っちゃあ違反なんだろうけど、仕方ないっちゃあ仕方ない。
極論で言えば、敵国が同じ機体を開発しようと言句は言えない訳だし。

仲間内であろうと商売では敵。

結局の所、性能で勝っている方が採用されるって訳だ。

ネルガルとてそのらへんの事は分かっている筈。

研究は怠っていないだろう。

ともかくにも、エステバリス及びナデシコの強化という面での協力者が得られた。

時間は掛かるだろうけど、無事に対策を練る事が出来た訳だから、
— 安心して所かな。

「司令に御願いがあります」

地球、木連両者の和平派の接触。

エステバリス、ナデシコの強化。

それらについて話し合う事が出来た。

だから、後は……。

「司令の権限をお借りするようで申し訳ありませんが……」

「うむ」

「火星の方達を……集めていただけますか？」

「すまないが、もう少し時間が欲しい」

頭を下げてから、静かに黙り込んでいた司令が発したようやくの一言。

……時期尚早という事だろうか……。

「何故……ですか？」

すぐにも動き出したい。

それが俺の本音。

でも・・・司令からするとまだ早いと。

「私達は地球人類全てに真実を公表する準備が出来ている」

「それじゃあ！」

「うむ。じきにその機会を設けるつもりだ。それまで待つて欲しい」

「公表を前に火星の方々に話すのはまずいと」

「それもあるがな。まずは私達が公表した方が信憑性があるだろう」

「・・・確かに」

「ならばこそ、だ。まずは全人類に、その後に火星人間という流れの方が良い」

「・・・分かりました」

確かに俺の口から真実を言った所で信じてもらえるとは思えない。

まずは今、地球に住む人達全てに事実として認識してもらった上で、火星の方々に話そう。

その方が確実に話が伝わり易い。

うん。言われてみればそちらの方が良いな。

「今すぐという訳には？」

「残念だがな。まずは連合政府との会談。そして、軍、政府の両方で決議を取らねばならん。

幸い、政府の方でも協力者が得られた。可能ならば、一ヶ月後にも実現できるかもしれん」

・・・一ヶ月後か・・・。

現実的な眼で見たら短いんだろうけど、俺からしてみれば長い。

むむむ。如何する？

それまでに俺に何が出来る？

・・・どちらにしる、まずは司令の公表待ちか・・・。

「分かりました。それまで待つ事にします」

「すまん。だが、それを終えた後は私も協力は惜しまない」

「ありがとうございます」

極東支部の司令の協力が得られたってのは大きいな。

うん。順調に計画が進んでいる気がする。

次々と協力者が得られている訳だし。

しかも、誰もが心強い。

よし。期待を裏切らないようにしないと。

発案者が情けなかったから本当に申し訳ない。

「それなら、早速ですが、明日香と連絡を取っていただけますか？」

だから、一カ月後までに俺が出来る最善の事。

エステバリス、ナデシコの強化。

それを出来る範囲で進めておこう。

「初めまして、マエヤマ・コウキです」

「こちらこそ。天才プログラマーのマエヤマさんに会えて光栄です」

天才プログラマーね・・・。

アハハ。いざ言われるとやっぱり照れるな。

「早速ですが、こちらを見て頂けますか」
「あ、はい」

あれから、司令の伝手を頼りに明日香インダクトリーへと赴いた。
イネス女史、ウリバタケさんはナデシコ内で待機。

まあ、今でも開発を進めていてくれる事だろう。
んで、俺の付き添いには……。

「へえ。なんだかワクワクするね」

アマノ・ヒカル。

うん。なんでヒカル？

「ほら早く行こうよ。せつかく私^がが来てるんだから。
もう仕方ないなあ。CASのモデルになった私に来て欲しいだ
なんて」

……とまあ、こういう理由。

俺がCASを製作する上で最も参考にしたのはヒカル。

指示調整はもちろんの事、カスタムモードの基もヒカルだ。

カスタムモードで各自調整している人はヒカルを基にしているって
訳。

それで、だ。明日香に預けたエステバリスはIFSではなくCAS
の方。

そりゃあ参考にしたくなりますよね。ヒカルさんを。

「はいはい。今行きますよ。お嬢様」

「残念。私はそっち系じゃないよあーだ」

そっち系ってどっち系だよ？

「まずはこちらを」

格納庫。

早速エステバリスを参考にした明日香の新機動兵器が視界に飛び込んできた。

「・・・これは・・・」

見た目はエステバリスを更にシャープにしたって感じ。

その角ばった形状はどことなくイカツイってイメージを与える。

スラスターの位置、ブースターの位置、バックパックの位置は高機動型フレームと類似。

ただ脚部にかけて装甲的な何かを付け加えてあって、なんか頑丈そう。

しかも、むき出しのブースターなんてあっちゃって、持ち前の技術を盛り込みましたかな？

「名称は未だに検討中ですが、生産ラインは確保済みです」

なるほど。しようと思えばすぐにも量産が可能って事か。

要するに、これは数を揃える為、かつ、エステバリスより高性能を目指した機体って訳だな。

確かに敵戦力の向上が予想されている今、必要な事の一つだ。

数を揃えて質を上げる。戦争が数である以上、何よりも優先するべき事の一つ。

そんな中、あんな御願いしたのはちょっと申し訳ないけど・・・。

「さて、そして、本命はこちらです」

ナデシコ専用のコスト度外視バケモノ機体。

明日香に頼みたい事の一つがこれだ。

ナデシコ強化案については検討してもらっているというこの他力本願。

・・・いずれこの借りは必ず返しますから・・・。すみません。

「先日言われたばかりですので、すぐに用意は出来ませんが、参考までに」

そう告げられた後に指し示されたのは先程の機体とほぼ同じ形状の機体。

だが、その外観は果てしなく異なった。

まずは両腕に備え付けられた追加装甲。

ガントレットアームに類似した装甲があらかじめ付けられており、その先にはレールカノン。

牽制用でもあり、撃退用にもなるレールカノンがそれぞれ両腕に付けられている。

そして、その先には一般的にクローと呼ばれる格闘武器。

背中のバックパックには高機動型より更に大きなブースターパック。余計な武装を省き、ひたすら軽量化を図った一撃離脱用の機体がそこにはあった。

「こちらは特化型の機体で量産型の基となった機体ですね」

「この系統を生産する為の始まりという訳ですか？」

「はい。もちろん、始めなのでコストは度外視ですし、パイロットの事は考えていません」

原型だからこそ、バケモノ機が出来てしまう。

実際、そのバケモノ機を少しずつ使えるように調整して生産してい

くのだから。

基本的に量産型は原型の性能ダウンしたものだと考えて良い。

「そして、もう一つがこちらです」

再び指し示された所にはもう一機だけ特別な機体があった。

シャープな形状が傲慢だった機体は見るも無残にゴツツクなり、まるで鎧を纏っているよう。

所々に機関銃の発射口が取り付けられており、数多の重火器を装備している。

胸を開けばミサイルで、脚部を開けばラピットライフル。

肩から伸びてるレールキャノン、そして、最後は両手にレールカノン。

一言で言えば重装備といった感じだった。

「始めに紹介した機体は機動性と隠密性に特化させています」

「隠密性？」

「はい。微弱ながらレーダー障害の電波を発信させる事で感知されにくくしています」

へえ。是非とも鎌を持たせて黒く塗りつぶしてみたい。

「簡単に言えば、背後にシュツ、背後からドゴツ、さっさとシュツ、といった感じでしょうか」

擬音ばかりでご苦労様です。

擬音で意味が伝わるのだから、世の中は面白い。

うん。日本語って面白いね。

「次に紹介いたしましたのはご覧の通り、射撃特化ですね」

まあ、おっしゃる通り、見た目で分かります。明らかに物量で押し込むタイプの重装備機体ですよ。

「詰めるだけ詰め込んでやろうという考えで自重を忘れた機体です」

いや、自重は忘れちゃいかんぜよ。

「後方支援してもよし、単機で物量勝負してもよし。」

まあ、両者を争わせたなら結果は火を見るより明らかですが」

それは仕方ないと思いますよ。

でも、装甲の関係とかを考えればそう簡単には言えない。

隠密特化で背後に忍び寄る事が出来るか、物量で押し込む事が出来るか。

うん。やっぱり特化型ってのは戦術を考えるだけでも面白い。

もちろん、バランス型も素晴らしいけど、特化型の方が面白いよな。

「私達が提供できるのはこれら二機ですね」

「ありがとうございます。助かります」

「では、調整が済み次第、ナデシコの方に搬送させます」

「分かりました。お願いします」

「その後はご自由に扱って頂いて結構です。既に生産ラインは整っていますので」

なるほど。その後にナデシコで改良、及び、改造も出来るって事か。それは本当に好都合。こちらで弄くってもっと使い易く出来る訳だから。

「それでは、次にナデシコですが・・・」

それからナデシコの強化案について話し合いが続いた。機体に関してもヒカルの言葉を参考に調整を進め、明日香側としてもこの会談に満足してくれたようだ。我々にとっても有意義な話し合いになったな。うん。・・・そして、後日、この二機がナデシコ内に搬送された。

「よお！ 久しぶりじゃねえか」
「ええ。お久しぶりです」

それから三日後、今日も慌しく動き回る俺。いやあ、こんなに忙しい事なんて今までになかったぞ。

今日は以前世話になってた基地に赴いた。

あのスーパージェットだっけか？

あれを開発してたオツチャンから遂に完成したという力強い言葉が届いた。

連絡を受けた時、妙に興奮してたから、思わずガイを連れて来てしまった。

今ではちよつと、いや、うん、かなり後悔してる。

普段は良い奴なんだけどな、盛り上がると煩いんだ。こいつ。

ちなみに、今回はイツキさんも一緒。付き添いに来てもらった。

オツチャンは好都合にも更に新しいフレームを開発したらしい。

まあ、こっちはオツチャンとは対立するリアル派軍団の開発らしいが。

・・・うん、まあ、俺としては性能的に向上してるならなんだって良い。正直。

「早速だがよ。こいつを
「うおおおっおおお！」

早速御出ましですか!?

「アハハ・・・」

「ハハハ・・・」

眼があつたイツキさんと苦笑い。
もう慣れましたという呆れやら苦笑やらという複雑な表情を見せて
くれました。

「こ、こいつは・・・ゲキ・ガンガーじゃないか！」

興奮して頬擦りなんかしちやってるガイ。
まあ、こいつはスルーの方向で。

「ほお。流石ナデシコ。話分かる奴が多いな」

そういえば、ウリバタケさんと意気投合してましたよね。オツチャ
ン。

「博士！ こいつは何だ!？」

「おお！ 説明してやらあ！」

・・・盛り上がってるねえ。

「こいつはスーパー戦フレーム。その構想はパーツ換装にある」
「パーツ換装？」

「ああ。いちいち戦艦に戻る必要があるうちゅう面倒なもんだがな。その苦勞に相応しいだけの性能、武装がこいつにはあるんだよ。アツハツハ」

・・・アツハツハって。やはりマッドだな。オッチャン。

「まずは核を用意する。これがエステバリスだな」

「ふむふむ」

「後はその各所にそれぞれ用意した各部装甲パーツを装着させる」

「・・・もしかして、そのパーツって」

「おお。見た通りだが？」

・・・ありえないだろ。

なんていうの、人間が強化服着た状態を想像して欲しい。

もつと簡単に言えば、ユリカ嬢がクリスマスに見せたエステバリスのコスプレ。

人型に一回りも二回りも大きなパーツを取り付けて人型にするみたいな。

要するに・・・そのパーツがそりゃあまた大きいんだ！

「既にエステバリスの面影皆無ですよね」

「当たり前だろ！ スーパー戦フレームだぞ！」

だってさ、エステバリスの三倍から五倍ぐらいの大きさをだぜ。

追加パーツがそれぞれエステぐらいあるってどういう事ですか？
ねえ？ どういう事ですか？

「ふっふっふ。苦勞したぜ。バランスもそうだが、間接部の強度もな。

だが、その甲斐あって、機体の出力は爆発的に向上だ。その装甲

は攻撃も跳ね返すぞ」

「おお！ 正にゲキ・ガンガー」

「そりゃあ圧倒的な攻撃力と防御力がスーパーロボットの特長ですが・
・・。」

「機動性は皆無ですね。まあ、問題ない気もするけど・・・。
いやあ、月面フレームもビックリなスーパーロボットです。」

「あれ？ この大きさなら相轉移エンジンも」

「良くぞ気付いた！ 流石じゃないか！」

「あれ？ 墓穴掘った？ ってか、興奮しすぎじゃね？」

「背中にバツクパツクがあるだろ？ あそこに相轉移エンジンが外
付けされている」

「なるほど。直接積み込むじゃなくて、外付けする形にした訳で
すね」

「おお。そっちの方が何かと便利だしな。軽量化、出力向上、良い
事尽くめだ」

「ナデシコからの重力波以外にも自身で出力が得られる。
単機で突っ込んでもいけそうな機体だな。こいつは。」

「次に武装面だが」

「そろそろ我々の方を紹介したいんだがな」

「あん！？」

「オツチャン。とりあえず落ち着こうか。」

「お久しぶりです。特務大尉」

「アハハ。元ですよ。お久しぶりです」

この知的メガネのお兄さんはリアル派代表みたいな人。
まあ、スーパー派の代表的なおツチャンとはそりが合わないだろう
ね。

「こちらの紹介をさせて頂いてもよろしいでしょうか？」

「はい。御願います」

「おいおい、今こつちが」

「後で聞きますから。とりあえずはこいつにでも」

ガイを差し出す。

多分、乗るのガイだろうし。

「博士！ コウキなんて放っておいて俺に説明してくれ！」

「チツ。仕方ねえな。付いて来やがれ！」

「おお！」

燃え上がっている二人を置いて、イツキさんと共に知的お兄さんの
後を追う。

「まったく。もっと真面目にやればより良いものが作れるだろうに」

ちなみに、素直じゃないんですよ、この人。

「オツチャンの事、認めているんですね」

「ええ。だからこそ、才能の無駄遣いをして欲しくないんです」

認めてるからこそ、同じ方向性の仕事をしてみたいと考えている。
いやあ、男のツンデレ、需要は・・・あるのかな？

少なくとも、俺はいらなかなあ……。
……コホン。脱却しすぎた。

「こちらになります」

ほお。なんともスリムかつ多機能な事で。

形状は変わらず高機動戦フレーム。

でも、その武装の充実度は比喩物にならない。

まずは両腕のガントレットアーム。

まあ、これは既に基本武装なのでスルーで。

次に両肩から伸びる大型レールキャノン。

普通の大型レールキャノンよりはかなり小さいけど、それでも大きい。

威力は若干落ちるぐらいまでには改良が進んでいるんだろう。

んで、両脇にそれぞれディストーションブレードとラピットライフル。

背中にはなんとフィールドガンランス。

基本性能も向上しているだろうし、とても安定した機体だ。

バランス型の鑑、正にリアルロボットの理想を具現化したと言える機体だな。

「いや。感動しました」

思わず知的お兄さんの手を握り締めていた。

「ありがとうございます」

ニコリと笑う知のお兄さん。

いやあ、素晴らしい開発者ですよ。貴方達は。

これで変形機構なんか付いてたら感涙ものでした。

「バランスに優れていて、火力も機動力もある。安定性抜群ですね」
「それが私達のモットーですから。火力勝負も良いですが、やはり兵器は安定性です」

正論です。反論の余地はございません。

まあ、火力はロマンですから方向性が違うんです。と一応フォロー。
いや、だってさ、必殺技、カッコイイじゃん。

「お役に立てたようで光栄です」

それからも細々とした話が続いた。

遠くで熱く語り合っている青年と中年を背景に、着実に機体は強化されていく。

少しずつ、それでも確かな一歩を俺は実感していた。

第六十一話（後書き）

難しいです。

皆様の意見を参考に構想を練っているんですが、

何かと被る点が多くてですね。

本当にどうしましょう・・・。

これからもバシバシ御意見を頂きたいです。

それでは、次回もよろしく御願います。

第六十二話（前書き）

遂に自重を忘れた感が出てきましたね。

第六十二話

「セレスちゃん。ちょっと協力して欲しいんだけど」

「・・・はい！ 頑張ります！」

「さて、今日はちょっとテストを行ってもらいます」

「テスト？」

明日香インダクトリーを訪ねてから二週間。

ようやくナデシコ内に新型機が四機揃った。

ナデシコのパイロット数は全部で八名。

数も揃えようと思えば揃えられるけど、出来るなら別種の機体が欲しい。

要するに、俺としては全部で八機の特別な機体を揃えたい訳だ。

そして、それぞれに合った機体に搭乗して貰おうって訳。

だから、今はまだ四機だけど、今の内に適性検査っての受けてもらおうと思ってさ。

一機だけにしか適正があるなんて事は絶対にない筈だしね。

状況によって乗り換えるつてのがベストなんだろうけど、

その辺りはまあ、それこそ状況次第って奴だろうね。うん。

まあ、スーパージョウはガイだと思っただけ。

・・・案外、ヒカルとかも好きそうだな。

「先日届いた新型機を早速シミュレーションに組み込みました」

「お。流石コウキ。仕事が早いぜ」

「早く乗りたくてウズウズしてたんذار？ ガイ」

「分かってるじゃねえか。早くしろよ」

「はいはい。まあ、ちよつと落ち着けよ」

興奮冷めやらずって奴だな。ガイ。

まあ、憧れのゲキ・ガンガーに乗れる訳だから分らないけどさ。

「簡単にですが、名称を付けさせて貰いました」

シミュレーション室内にあるモニタに機体データを映し出す。

「こちらが明日香インダクトリーが開発した特殊隠密型です。

出来るだけ装甲を削ぎ、武装を単純化する事で一撃離脱を可能にしています」

「一撃離脱というのは分かったが、隠密というのはどういう意味だ？」

流石アキトさん。鋭い。

「本機は武装に力を入れていない代わりに特殊な装置に力を注いでいます」

「特殊な装置だと？」

「ええ。まずは、そうですね。頭部に角があるでしょ？」

「まあ、それらしきものは確かにあるな」

「あそこからレーダー障害の特殊な電波が発信されます」

「ほお。ジャマーという訳か」

「そうなります」

レーダー障害か……。出来れば全機に取り付けたいけど、あれって味方のも障害しちゃうからな。

知らずにグラビティブラスト直撃なんてのもありそうだし。なまじ変な事は出来ない訳ですよ。

一機に付けるからこそ隠密っていう特殊性も際立つ訳だし。つてか、正面から打倒できるようになるのがやっぱりベストかな。まあ、こういう特殊な機体も必要なのは確かだけど。

「まずは、という事は他にもあるんだろう？」

本当に鋭い事で。

「俺も仕様書を見るまで気が付かなかったんですけどね」

モニタの映像を操作。まずは胸部を映し出す。

「ここには強烈な閃光を発する装置が」

次に腰部。

「ここには隠し腕があったりなんてしちゃって」

最後に脚部、というか、足の裏。

「ここからはスパイクが出るようになってます」

うん。別に暗器とまではいかないけどさ。
普通じゃ考えられないような特殊性でしょ？

「・・・なんと摩訶不思議な機体だな」

ええ。本当に。どれだけ特殊性に拘ったんだよって機体さ。

「しかし、実用性はあるのか？」

暗器にですか？ 結構あると思いますけど。

「たとえばこの閃光装置ですが、IFSだろうとCASだろうと有効ですよ」

「何故だ？ IFSなら特に影響は・・・」

「確かに眼を潰されようとIFSならデータでどうにか出来ます」

「ああ。それなら」

「ですが、結局、データを入手する為にもカメラは必要です。

そもそも、この機体、レーダー感知も出来ないんですよ。

電子機器も封じられて、視界も封じられて、データ入手も封じられる。

簡単に言えば、全ての眼を封じられている訳です。捉えられませんよ」

「・・・そうか。レーダー感知できない以上、視界で捉えるしかない。

それすらも封じられてしまえば、こいつの隠密性は凄まじいものになる」

「ええ。間違いなく、初見では捉えられないでしょうね」

・・・よく考えれば怖い機体だな。

夜道に気を付けるべき機体ってか？

「隠し腕はその状況ですら受け止められた際に用いれば良い訳ですよ」

「なるほど。罅迫り合いなどの取っ組み状態の時に有効な訳だな」

「ええ。俺の場合は足を使いますけどね。あれって結構難しいんですよ」

一応、重力場を作り出して踏ん張っている訳だが、

全力で罅迫り合いしてる時に足を離すのって実は自殺行為なんだ。

生身で同じような状況で何度も練習したから出来るけど、普通は出来んよ。

「足のスパイクも意外性では抜群かと」

「普通の蹴りの筈が鋭利な刃が先端に付いているなんてなったらビックリするよな」

うん。分かってるじゃん。ガイ。

「とにもかくにも意外性に富んだ機体って訳ですね」

初見じゃまず防げない。

ま、欠点是对処法が見付かったら何にもできない事かな。

基本的にそういう戦闘以外では力を発揮できない訳だし。

汎用性がなさ過ぎるってのは大きな欠点だな。

まあ、その辺りは今後の検討課題ですかね。

「次はこれです」

モニタ操作。

次に映し出されたのはもう一つの明日香インダクトリー製品。

「こちらは物量射撃型です。ご覧の通り、ひたすら撃てます」

見た目通りとしか言いようがない。

「機関銃、ミサイル、ラピットライフル、レールカノン、レールキヤノンなどなど。

身体の所々に数多の武器を搭載させる事で単機で大量破壊できちゃったりします」

「なんか楽しそう」

ヒカル。楽しそうってのはちょっと・・・。

そりゃあ視界一杯にミサイルなんてのも出来そうだけどさ。

「単機で要塞攻略とかが出来そうで怖いですね」

火力という意味ではかなりのものがある。

まあ、一撃で沈めるといよりは質より数攻めって感じだけど。

「特殊隠密型は機動力に、物量射撃型は装甲の厚さに拘っているようです」

両極端だよな。この二つって。

軽くて脆くて速くて単純。

重くて固くて遅くて複雑。

まあ、量産型の原型な訳だから仕方ないけど。

要するに、あれだろ？

この二つの間ぐらいで安定させたのが量産型な訳だろ？

いや。開発の過程って意外と無茶苦茶なんですな。

あ。ちなみに、量産型を含めて、明日香製の機体もDFは張れます

よ。

あれは知ってしまったえば便利の一言ですからね。
使わないのは損って奴です。

「見れば見る程にエステバリスに似てるんだけど、その辺りはどうなってるの？」

「残念ですが、これらの機体は明日香の機体に最近の技術を導入しただけですよ。」

明日香側も時代に乗り遅れまいと多くの機体を研究したそうで、その集大成がこれなんです。」

「・・・ふん、そう・・・」

ネルガル側の代表とて強くは出れないんだろうな。

これらは決してネルガル製の製品ではない。

あくまで明日香が新型機として創り上げた機体。

ライセンスの関係上で製作できない部分も違う所から持ってくれば良いだけだし。

「デイスティオンフィールドとかはどうなってるの？ 僕ら提供してないけど」

「えっと、資料によると木連のバツタを解析して技術を得たらしいですよ」

「デイスティオンフィールド系統の武器の特許はうちにある筈だけど？」

「確かにそうですが、使用してるのはデイスティオンフィールドだけです。」

フィールドガンランスやデイスティオンブレードは用いていませんが？」

「・・・実際、装備してるでしょうに」

「あ。これは納入後に武装の充実を図る為に俺が取り付けました」

「・・・そう」

・・・なんか険悪な空気が流れてきちゃったな。別に喧嘩したい訳じゃないんだけど・・・。
実は俺って貧乏クジ引かされてる？

「重力波アンテナについては」

「軍を通してライセンスを取得済みだそうです」

「・・・そういえばそうだったね」

無論、抜かりはありません。

明日香とてネルガルに負けない大企業。

どの技術は無許可で通せるか。

どの技術は許可が必要か。

そういうギリギリの駆け引きは得意でしょう。

これだけの高出力を保てるのはやはり重力波アンテナの恩恵。

いずれは同じだけの出力を重力波アンテナに頼らずとも得られるようになるだろうけど。

今現在では、どうしても重力波アンテナの力は借りざるを得ない。

距離が制限されるシステム。

重力波アンテナの更なる発展が全体的な戦力の充実を意味してるって訳だ。

実は一番重要な装置なのかもしれないな。このアンテナ。

「えっと、次に進んでも？」

「うん。構わないよ」

どこか思案顔のアカツキ会長。

あれだね？ 企業の顔って奴。

今後の方針について考えてるのかな？

ま、俺は俺の仕事をするだけだ。

「次は軍内の知り合いに提供して頂いたエステバリスの新しいフレームです」

「ネルガルの許可は既に？」

「はい。軍を通して」

最近、長い交渉の末にようやく自由開発が許可されたい。既にエステバリスの研究をかなり進めている軍。これからますます戦力を充実させていく事だろう。特に最も早く戦力の充実を図った改革和平派は。

「こちらも両極端ですね。スーパー戦フレームとリアル戦フレーム」

「スーパー戦フレーム？」

「リアル戦フレーム？」

「はい。まずはスーパー戦フレームの説明をします」

モニタを操作。

映し出されるのは通常のエステバリスの三倍のエステバリス。決して赤くないし、機動力でもないぞ。大きさだ。

「両者に共通する事ですが、これらは追加装甲という形を取っています」

「……しかし、これは極端だろう」

「……既に追加装甲というよりは別の機体だよね」

「初めて見た時は同じように感じました」

まあ、誰だってそう思うさ。

実際、エステバリスの姿なんてないに等しい訳だし。

「核となるのは高機動戦フレーム。
各部にパーツを装着させる形で実現されます」

装着前と装着後を映し出す。

「スーパー戦フレームの名は伊達ではなく、

追加装甲にはそれらしい武装が数多く組み込まれています」

「えっと、両手がギガントアームで、それぞれ着脱式ドリルアーム付き」

「それで、腰部からはグラビティブラスト。・・・ジンみたいだな」

「対艦ミサイルに対艦刀ねえ・・・」

「しかも、この拳、ロケットパンチみたいに飛び出すんだそうです」

「ってか、なんで身体のおちこちからドリルとか剣が飛び出てるんだ

？」

「・・・滅茶苦茶ね」

「お前らにはこれの凄さが分かんねえのかよ！」

「・・・いや、凄いの認めるけど、滅茶苦茶なのも事実だよ。ガイ。でも、まあ、破壊力抜群ってのは認めざるを得ない性能だ。」

「通常の重力波に加えて背部にある相転移エンジンから出力を確保しています」

「背中のはそれだったのか・・・」

「なんともエネルギーコストがかかりそうな機体だね」

流星は企業の会長。現実的な視線で物事を見ますか。

でも、ちよつとだけ眼が輝いていますよ。スルーしましょうか？

「高機動フレームの機動力に加えて大型のブースターを取り付けてますので・・・。」

まあ、細かい機動さえ諦めてくれれば、直線移動はなかなかの早さですよ。

多少の攻撃はその分厚い装甲とDFが弾き返してくれると思うので心配ありません」

ジンシリーズはDFさえ突破してしまえば脆いものだった。

だが、慎重派の多い地球ではきちんとDFがない状態も想定されている。

だから、実用性の高い頑丈な装甲が取り付けられているって訳だ。

「次はリアル戦フレームですね」

パツと映像を変更。

「こちらも核は高機動戦フレームですが、方向性が真逆です」

「なんとなく両者の関係に意図を感じるんだけど・・・」

会長。その通りなんですよ。

「その基地内でスーパーロボット派とリアルロボット派で対立してましてね」

「あゝ、そういう事か。どちらもその理想を具現化したって訳ね」「仰る通りです」

オツチャンを始めとして連中は如何にスーパーロボットに近づけるかを。

知のお兄さんを始めとした連中は如何に理想のリアルロボットを実現するかを。

それぞれ追い求めた結果がこの二つな訳だ。

多分、どちらも追加装甲型ってのはその敵愾心というか、負けず嫌

いからだろう。

同条件でどちらが優れているかとか、張り合ってたんだと思う。別にリアル戦フレームは単体のフレームでも良い訳だし。

スーパー戦フレームは・・・きつとこの形がベストなんだろう。始めから巨大だとさ、ナデシコに積めないし。

基地内でも場所取るしね。

取り外し可能ってのはある意味、汎用性にとっても優れていると言える。

巨大だとさ、細かいミッションに参加できない訳だし。

「こちらはエステバリスが服を着るような形で実現されます」

言わば、防弾チョッキを着込み、ありったけの武器を取り付けただけで感じかな。

「安定性抜群の理想のリアルロボットとでも言いましょうか」

「確かに欠点らしい欠点は見付からんな」

そう、それが一番大きいんですよ。

弱点がない。これが理想のリアルロボット。

近・中・遠対応で、武器も多彩。

機動力、重量、装甲のバランスも良し。

良く言えば万能、悪く言えば器用貧乏だけど、

一小隊に必ず一機は欲しい補佐役の機体ですな。

「後は詳しい資料を配布しますので御自分で確認を」

各自に資料を配る。

実際に自分で見た方が分かり易いだろうし。

「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」

黙って読み込む五人。

うん。優秀な生徒だ。

んでもって、残る二人は・・・。

「・・・ああ」

「・・・グッ」

案の定、ソワソワし始めました。

まあ、ここは名誉の為に誰かは言うまい。

「ダア！ まどろっこしい。こういうのは感覚で覚えるもんなんだ

よ！」

「さつさと乗らせる！ この機会を何年待ったと思ってやがるんだ
！」

・・・誰か分かつちやったかな？

ま、いいや。早速テスト開始といこうか。

「セレスちゃん。準備は？」

「・・・大丈夫です」

ここで特別ゲスト登場。

はい。拍手。

「どうしてセレスがここにいるんだ？」

「セレスちゃんに協力してもらおうですよ」

「セレスに？」

「まあ、見ててください」

少しズレ、コンソールの前から移動する。

パツと後ろから台を持ってきて、セレス嬢を乗せ……。

「セレスちゃん。よろしく」

「……はい」

コンソールに手を置いてもらう。

同時に凄まじい情報がモニタに映し出された。

「セレスちゃんと俺の合作って奴です」

「……これは？」

「それは後のお楽しみで。ガイ。とりあえずシミュレーターに」

「おっしやあ！」

勢い込んでるけど、この先に待つのは決して天国じゃないぜ。

「とりあえず、二倍速で」

「……分かりました」

「二倍速？」

「モニタに注目してください」

その言葉でパイロット達全員がモニタに視線を注ぐ。

『おっしやあ！ 行くぜ！ ゲキガンファイト！ レディーゴッ、ゴホッ、な、何だ！？』

そんな余裕はないぜ。

巨大なスーパー戦フレームの周りを高機動戦フレームが飛び回る。

「これは・・・」

「お察しの通りです」

高機動戦フレームが拳を叩き込もうとする中、ガイは必死にエステバリスを視界に収めようとする。

だが、結局、捉え切る事は出来ずに一撃を喰らってしまった。

まあ、大したダメージにはならないだろうが。

「敵対するのは自身の戦闘データを基にした言わば自身の影。

とりあえず、今回の適正検査では自身と戦ってもらいます」

高機動戦フレームと新型機のどちらで自身の能力を高く発揮できるか。

それを見たいが為の新システムだ。

「だが、それだけではないだろう?」

「ええ。同時に夜天光、及び、ブラックサレナ対策もしてもらいます」

「・・・その為の二倍速か」

「そうです。機動力で差が出る以上、まずは慣れてもらわないと」

どうせ自身と戦うのなら、こういう趣旨を持たせないかね。

ただ戦うだけじゃ面白くないし、検査内容が薄くなる。

機体性能が向上するのなら、それに伴ってパイロットの技能も向上させるべきだし。

通常の自分の倍以上の動きをする敵と争ってもらおうって魂胆です。

はい。

自身の限界を超える良いきっかけになりますよね。行動パターンはあくまで同じなんだし。

二倍速の自分を打ち破れば二倍強くなるのさ。

・・・単純な考えだけど、効果は出る筈だ。

「セレスがいるのは？」

「通常速と二倍速が同じ空間内に混在しちゃってる訳ですから。

その演算はかなり複雑なものになるんですよ。セレスちゃんがいるのはその為です」

「・・・それはかなりの負担になるのでは？」

「一応、シミュレーターだけでも処理できるよう改良しましたから大丈夫ですよ。」

ただやっぱり少しだけ動きがぎこちなくなったりするので、リアルティに欠けるといえるか。

まあ、そんな感じなので倍速変更は俺がオペレーターがいる時だけの方が良いかもです」

「了解した。だが、面白い考え方だな。」

高機動戦フレームと新型機のどちらで力を発揮できるかを検査し、同時に自身と戦う事で自身を見詰め直す事にも繋がり、

倍速をあげる事で機動力の差を慣れさせる事で今後に活かさせる。検査と言いつつも、これは既に修行に等しいシミュレーションだ

な

「まあ、俺なりに色々と考えてるんですよ」

最初は思い付きだったんだけどね。

考えてみれば結構有効だったりするんだ、これが。

既に高機動戦フレームでの機動データは入手済みだから、

後はこの検査での機動データと掛け合わせるだけで適正検査が出来る。

「しかし、敵が違つては参考にならないのでは？」

「アキトさん。俺が今まで何回機動データを取つて来たと思ひますか？」

「・・・かなりだな」

「はい。もうかなり慣れてます。敵が違つぐらいじゃ惑わされませんよ」

「いやあ、気付けば俺も成長したもんだ。

データ収集と解析、研究は最早俺の特技の一つになったな。意外と楽しいのが理由だったりもするけど。」

『ク、クソツッ！ 当たらねえぞ！』

「ガンバレ〜。ガイ」

『このっ！ 軽く言いやがって』

苦勞してますね。

まあ、人間と八工とまではいかないけど、自身よりかなり小さい敵が相手なんだ。

そりゃあ捉えるのに苦勞しますよね。

でも、やってもらわないと困る。

本当にスーパー戦フレームに乗りたいのなら成し遂げてみせろ！
ガイ！

『オラア！』

「お疲れ様。セレスちゃん」

「……いえ。コウキさんこそお疲れ様です」

あれからそれぞれ七人を四種類、要するに二十八回適性検査を行った。

まあ、同時進行したから時間はそれ程掛からなかったけどね。

……うん、こっち側の精神的な負担が大きかったんだ。

最初はガイだけだったけど、次からは二、三人同時だったからさ。

俺も制御の方に参加して、俺とセレス嬢との協力体制。

まだ幼いセレス嬢の負担を考えて途中で休ませたりなんかして。

一人でやる事もあったからか、終わったと同時に一気に脱力しました。

いや、頑張ったな。俺。

その後はひとまず解散。発表は後日という事になった。

これから解析、分析作業です。はい。

やばい。マジで忙しい。

ケイゴさんからの連絡もまだないし。

うがぁ。考える事が多過ぎるぞ！

「ありがとね。助かった」

「……お役に立てたようで嬉しいです」

うん。荒んだ心を癒してくれるね。

この笑顔と癒しで後百年は戦えます。

「……ん」

思わず頭を撫でてしまう。

この感触もまた癒しなんですよね。

柔らかな髪質だしさ。

眼を細めるのも可愛らしい。
やばいな。このままじゃ絶対に親馬鹿になる。

「・・・分析作業もお手伝いします」
「いいの？」

大変なんだけどな。
なんか、あれだよ、断っちゃいけない空気。

「・・・大丈夫です」
「それじゃあ、御願いしようかな」
「・・・はい！」

笑顔で、はい！ なんて言われたらねえ。
マジで断れませんよ。
実際、助かってますしね。
御願いします。セレス嬢。

「とりあえず、お腹空いたし、食堂にでも行こうか」
「・・・はい。私もお腹空きました」

クーっとお腹を鳴らし、恥ずかしそうにお腹を押さえるセレス嬢。

「じゃあ、行こうか」
「・・・はい」

でも、そこをスルーするのが紳士って奴だ。
からかいたくなかったのが本音だけど、自重しました。
俺のせいでもあるしね。今日は僕がセレス嬢に奢るとしましょう。
さてっと、何を食べますかね。

「おお！　こんな所にいやがったか」

「どうかしたんですか？　ウリバタケさん」

食事中、慌しくウリバタケさんがやってくる。

その手には何かが書かれた紙束が……。

なんか更に忙しい事になりそうなのがするのは僕だけですかね？

「どうかしたってなあ、まあいい。ほらよ」

んで、その紙束を投げられた。

食事中だったのに、まったく……。

まあ、愚痴ってても仕方ないか。

「……これは」

その紙束に書かれていたのはエステバリスの外形、武装内容、性能内容など。

うん。あれだね。仕様書だね。

「ようやくエックスエステバリスが完成してな。現在、改良中だ」

更に改良ですか。自重は忘れずに。

「お前の意見も参考にさせてもらったぞ」

「俺の意見？」

「おうよ。ライフル自体にアンテナを取り付けらるって奴だ。あれは良いな」

ああ……。イネス女史と意見交換した時の奴か。

「とりあえず、これ見て確認しといてくれ」

「了解しました」

「手伝ってもらいたい時に呼びに行くから覚悟して待ってるよ」

風のように去っていくウリバタケさん。

きつと、覚悟してらつてのは冗談なんだろうけど……。マジで覚悟を決める事になりそうだ。主に忙しさに。

「……コウキさん」

「ん？ セレスちゃんも見る？」

「……はい。私もお手伝いしたいですから」

「……良い子や〜」。

「えーつとお、エックスエステバリス改修案」

とりあえずエックスエステバリスを基本に弄くっていく訳ね。きつとかなりの自信作なんだろうな。

「武装案、グラビティライフル、グラビティスナイパー」

「グラビティブラストの小型化に成功したのよ」

「うおっ！？ イネスさん！？」

「……ビクッ！」

ビ、ビククリした。

「何をそんなに驚いてるのよ」

「そ、そりゃあ驚きますよ。いきなり後ろから話しかけられたら、ねえ?」

「・・・はい。驚きました」

マジでボソソジャンプ習得してるんじゃないか? イネス女史。

「前、空いてるわよね。失礼するわよ」

返事する前に座っちゃった。

まあ、分かってましたが。

「さあ、ドンドン質問しちゃいなさい。全て万事完全完璧に説明をしてあげるわ」

盛り上がってますねえ。イネス女史。

「小型化に成功したってのは?」

「以前はジェネレーターの問題で困ってたじゃない」

「はい。確かにそうでしたね」

「それを貴方が提供してくれたデータで解決できたの。」

「だから、今度は銃型に収める事は出来ないかなと検討したのよ」

「結果、可能であったと」

「ま、シミュレーションの段階でしかないけどね」

「それじゃあ、この資料は・・・」

「ええ。あくまで完成予定図よ。どうなるかはまだ分からないわ」

「完成までどれくらい掛かりますかね?」

「そうね。少なくとも一、二ヶ月以上は掛かるとみていいわ」

「・・・一、二ヶ月か。まあ、問題ない・・・かな。」

木連もまだ動き出してないし。

和平交渉に応じるとしても国内の意見を纏めなくちゃいけない。だから、時間が掛かるのは当たり前な訳よ。

まあ、木連側が理解しているかどうかは分からんけど。

「私達の構想では改修案は二つ」

二種類か。出来ればもう二種類欲しいんだが・・・。
これはわがままだろうか？

「一つは狙撃タイプね。こっちにはグラビティスナイパーを装備させるわ」

「そのグラビティスナイパーってのは何なんです？」

「グラビティブラストっていうのは簡単に言えば重力で押し潰す攻撃じゃない」

「ええ。そうですね」

「実際、小型化したらどうなるかと考えて、威力が弱まるとしか思えなかった訳」

「まあ・・・」

威力が弱まるのは覚悟の上なんだけどな。

認めたくなくて奴？

まあ、期待値を遥かに下回ったとしたらその懸念は当然なんだけどさ。

「それなら、いつそ圧縮してしまおうという話になったのよ」

「重力波を圧縮ですか？ ブラックホールにでもなりましたか？」

「いえ。違うわ。重力波は圧縮すると物質化するのは」

「・・・物質化・・・ですか？」

・・・マジですか？

「といつても擬似的な物質よ。でも、機体を貫けるだけの威力はある」

「それでスナイパーですか」

「ええ。精密射撃。後方から狙撃するだけで大きな戦果を残せる」

「・・・実現したらアンテナの距離制限という欠点もほぼゼロに出来そうですね」

「そうね。あ。勿論、アンテナも改良してるわよ」

「・・・うん、やっぱり、イネス女史とウリバタケさんが組むと混沌と化すな。」

まあ、抜群というか、ありえないぐらいの結果を残すから文句も言えないんだろうけど。

優秀な人間って偶に性質が悪いと思う時があるのは僕だけでしょうか？

「もう一つは単純に殲滅射撃型ね。まあ、こちらには近接能力も備え付けるつもり」

「どんな感じですか？」

「デイストーションブレードでも腰に備え付ければいいんじゃないかしら」

「武装は残りのグラビティライフルって奴ですか？」

「あら？ 流石ね」

誰でも分かるかと・・・。

「コウキ君は片手にそれぞれ持つスタイルだったわよね」

「ああ。そうですね。あれなら広い範囲で対応できますから」

「・・・カツコイイです」

「あ、ありがとう」

実はちょっと恥ずかしかったりもするんだけどね。

「この機体は対のグラビティライフルを使いこなす前提で出来てるわ」

「対・・・ですか？」

「ええ。貴方専用とも言えるかもね」

まあ、練習すれば二丁拳銃ぐらい誰でも出来そうですけどね。

特にナデシコの連中なら、あつという間に成し遂げてくれそうです。

「まずはそれぞれ片手に一つずつ持つスタイル。

これはライフルに直接付けられたアンテナからの出力で発射するわ」

「ああ。ここでアンテナが出て来る訳ですね。スナイパーには？」

「もちろん、取り付けるわよ。」

かなりのエネルギーを消費するから、出来れば機体のエネルギーは使いたくないの」

「了解です」

「続きを話すわね。次は両ライフル間で同期させるスタイル。

それぞれくっ付けられるような仕組みになってるわ。だから、ガチンと嵌め込むだけ」

「嵌め込むだけで二つの銃が一つの銃扱いになるんですか？」

「なるようにするのよ。貴方が」

「・・・あ。俺が頑張るんですね」

・・・やっぱり忙しくなるんじゃないかあ。

「最後はエックスエステバリスの本領発揮ね」

エックスエステバリスの本領？

何だろう？ それって、一体。

「機体の腰部にジェネレーターに接続する用のコードがあるわ。

それを嵌め込んだ状態のライフルに接続。これもそれ専用の接続口があるから」

ふむふむ。コードを接続する事で機体のエネルギーをもライフルに回す訳だな。

・・・それじゃあ駄目じゃん！ 機能停止しちゃいますよ！

「何を懸念してるか大体分かるけど、それも解決済みよ」

貴方はエスパーですか！？

「この機体の背面にはブースターと兼用の特殊なアンテナが取り付けられているわ」

ブースターと兼用？

それってアンテナであり、ブースターであるって事？

そんな不思議な事が・・・。

「普段は折り込まれてるけど、広げれば機体を越える大きな翼になるわ」

うおっ。出ましたか、翼。

まあ、推進力を得る為には適した形状なのかもしれないけど。

「それは重力波を導く特殊な作りになってるの。」

後はその翼を通して機体内のジネレーターに重力波を蓄積」

「機体内のジネレーター？」

「言ったでしょ？ エックスエステバリスのジネレーター問題を解決したって」

「どういう方向性で解決したんですか？」

「機体内に溜め込んでおける限界量を格段に増やしたの。」

要するに、機体自体の出力は他と大して変わらないけど、

機体内に蓄積できる重力波の量は他機体と比べ物にならないって事」

「そういう意味でのエックスエステバリスの本領発揮ですか」

蓄積容量が他機体を圧倒。

それがエックスエステバリスの利点であり強み。

「最終段階はその莫大なエネルギーを一気に放出するシステム。

使用の際には翼を全て広げて、組み合わせた銃を前方にしっかりと構える。」

その際、しっかりと腹部で固定しないと安定しないから気を付ける事。」

そして、翼から得られたエネルギーが臨界に達したら、

機体が動けるぐらいのエネルギーだけを残して一気にライフルから放出するって訳よ」

「・・・凄まじい火力になりそうですね」

「ええ。下手するとエックスエステバリスが爆発するぐらいなもの」

「・・・え？」

「だから、調整にミスれば木っ端微塵よ」

「・・・ちよつと待とうか。」

爆発したら死ぬよね。吹っ飛んじゃうよね。」

それって安定性皆無って事？

「そ、そんな機体に人を乗せないでくださいよ」

「だから、少しずつ検討していくのよ。」

それだけのエネルギーに耐えられる強度の銃なんて今の所ないし」
「で、ですよね」

いきなり乗せられると思った。

ほら、油断できないし。イネス女史。

「だから、さっき言ったじゃない。一、二ヶ月は掛かるって」

「一、二ヶ月で間に合わせられるって事の方が凄いですけどね」

「それも貴方からのデータが役に立ってくれるわ」

「あ。そうですね。それは良かった」

「ねえ、本当に貴方は何者？」

「……」

鋭い視線を突きつけてくるイネス女史。

でも、流石の俺も慣れてきた。そう簡単には屈しない。

「五年後の技術を奪い取ってきたにしたって不自然。」

確かに技術的には五年後でも実現可能よ。でも、全く方向性が違う。

まるで全く違う方向性に発達した世界の技術を奪い取ってきたみたい」

……鋭過ぎますよ。イネス女史。

なんであれでそこまで分かっちゃうんですか？

「アハハ。まるで平行世界から来たみたいな言い草ですね」

「その可能性も検討したわ」

・・・誤魔化そうと思ってるのにな。

実際にその可能性を検討してるとは思わなかった。

「でも、確固たる証拠もなく、所詮は予測でしかなかった」

「まあ、おかしな話ですからね」

「そうかしら？ 私は並列世界の存在を信じている側の人間よ」

「本当ですか？ あの現実主義のイネスさんが」

「現実主義だからこそ思うのよ。」

世界の枝分かれ。タイムパラドックス。

事実、貴方の存在はアキト君の記憶の中にはなかった」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

流石に黙り込むしかなかった。

アキトさんの記憶の話になったら、俺には反論する術はない。

事実、俺の姿は本当の意味でのナデシコにはなかったのだから。

「貴方はアキト君の影響でここにいるのか。」

それとも自らの意思でここにいるのか。

ふふつ。考えるだけで面白いわね。コウキ君」

「性格悪いですよ。イネスさん」

「ふふつ。研究者なんてそんなもんよ。」

ま、いいわ。本題からズレ過ぎちゃったし」

「本当です」

誤魔化されてくれないのが強かなイネス女史。

あれだけの会話でまた何かしらの考えに発展したんだろうな。

やっぱり天才ってのは性質が悪いよ。

「さて、そろそろお暇するわ。邪魔者みただし。私」

視線の先にはセレス嬢。

うん、なんかちよつと拗ねてる。

構ってあげられなかったからかな？

・・・反省。

「また後にも伺います」

「ええ。待ってるわ。天才プログラマーさん」

・・・行ってしまった。

「冷めちゃったね。ご飯」

「・・・知りません」

プクツと頬を膨らませるセレス嬢。

昔では考えられなかった仕草が思わず笑いを誘う。

「・・・笑うなんて酷いです」

「ごめんごめん。なんかデザート食べよっか」

「・・・はい」

その後、プリンを頬を緩ませて食べるセレス嬢を見て果てしなく癒された僕でした。

第六十二話（後書き）

まるつきりガ ムじゃんという突っ込みはなしの方向で御願います。

どうしても上の機体が頭に浮かぶんですよ。

種類も豊富で分かり易いし馴染み易いという点も大きいかと。

・・・呆れないでくださいな。

第六十三話（前書き）

明日のテストの前に投稿しておきます。

一週間程、投稿できないと思いますが、お許し下さい。

P S 先日、珍しく突き指なんてものをしてしまい、

日頃の数倍の時間がかかってしまうという悲劇。
指って大切なんですね・・・。

第六十三話

「ほおほお。なるほどね」

現在、適正診断中。

診断ソフトを組み、先日のテストで得たデータを基に機械的に評価。まあ、若干の私的評価も混じってますが……。しかし、案の定というか、予想通りの結果になったな。

「セレスちゃん。そっちはどう？」

「・・・もうちょっとです」

俺は機動データや戦術展開などを参考に機体の外部情報を。セレス嬢はバイタルデータなどを参考に機体内部のパイロット情報を。

それぞれ検討、評価している。

後はその評価を掛け合わせれば良い訳だ。

そうすれば、その状況下におけるパイロットの精神、身体状況が分かる。

たとえば、一つの急加速に対してきちんと認識して機動を行えているかなどなど。

やっぱり操縦する上で身体と精神の状況を知っておく事は大事だからな。うん。

バラバラの事を調べて掛け合わせるのには逆に効率が悪い。

なんてセレス嬢に言われたけど、きちんとそのあたりの事は考えて

ます。

専用のソフトを組みましたから、掛け合わせは用意なんですよ。はい。

それなら、同じ作業を繰り返した方が効率が良いでしょう？ 慣れてくるし。

「しっかし、あと二機、どうしようかな？」

明日香インダクトリーによる特殊隠密型と物量射撃型。連合軍基地内の両陣営によるリアル型とスパー型。

ナデシコ内の両マッドによる後方狙撃型と殲滅射撃型。

「上手い具合にバランスは整ってきてるんだけどなあ」

近距離に特殊隠密型、スパー型。

中距離に殲滅射撃型、リアル型。

遠距離に物量射撃型、後方狙撃型。

今の所見事にバラけてくれてるし、バランスも中々。

「うーん・・・あと二機は・・・そうだなあ・・・」

願わくば遊撃に回れるような二機が良いかな。

要するにどの距離でもある程度対応できて高機動な機体でも、その機体の生産を頼める所がない。

・・・また明日香に頼む事になるかも。

「まあ、どちらにしろ、ナデシコ生産の二機は時間が掛かるんだけど」

順調に言っても一、二ヶ月。

まあ、ここは樂觀視せずに二ヶ月と考えよう。

問題はその時の状況だよな。

和平交渉がそれより以前に行われるようだったら無意味になっちゃうし。

俺としては、最終決戦は和平交渉時になると考えている。

その時が遺跡奪還のチャンスだから。

但し、あまり木連に時間を与えてしまってもいけない。

彼ら、というよりも草壁の目的は遺跡の独占による地球圏の支配。

こちらが時間を掛けるというのは向こうにチャンスを与えると同義だ。

現状では遺跡は数多のディストーションフィールドという嚴重な護りがなされている。

その為、多少の時間は稼げるだろうは考えている。

でも、原作でもそうだったように、

ディストーションフィールドはフィールドランスで突破できる。

原作と違い、向こうにも突破出来る武装がある以上予断は許されない。

それがたとえ神楽派であろうと、草壁派が持ち得ないのとは限らないのだから。

要するに、向こうに時間を与える事は、

遺跡を確保され、調査できる機会をを与えてしまうという事になる。それではこちらの計画が全てパーになってしまう。

だから、なんとしてもそれらは阻止しないとけない。

向こうの状況が分からない以上、全ての行動を迅速に行う必要があるだろう。

如何に短期間にこちらの戦力を整えられるか。

それが俺達の課題になる。

「・・・厳しいな」

「・・・大丈夫ですか？　なんだか辛そうです」

おっと、あんまり思い詰めちゃ駄目だよな。
全員が全員で出来るだけの事を精一杯やってるんだし。
向こうの状況が分からないって事は逆に余裕が持てる可能性もある
しね。

セレス嬢に心配掛けちゃ駄目だろ。

「大丈夫だよ。それで、そっちはもう終わりそう？」

「・・・はい。終わりました。あの・・・」

「うん。ありがとう」

「・・・はい！」

褒めて褒めてと言わんばかりに身を乗り出してくるセレス嬢。

そんな光景に頬を緩ませつつ、頭を撫でてやる。

期待には応えてあげないとね。

俺としても心地良くてこの時間は好きだし。

「おし。んじゃ、ちょっと待ってて」

データの掛け合わせを実行。

ちよっと時間が掛かるから、終わるまでブリッジにでもいるかな。

「うん。お疲れ様。ちよっと休憩にしよう」

「・・・はい」

「ブリッジにでも行こっか」

手を繋いでブリッジへと向かう。

気分はすっかりパパさんだな。

シュンツ。

「あ。マエヤマさん」

「お久しぶりです」

うん。随分と久しぶりなんですよ。本当に。

地球に来てからあちらこちらに飛び回ってましたから。

もちろん、ナデシコには帰ってきてきましたけどね。

ブリッジにわざわざ顔は出してなかったという訳で。

実際、一週間ぶりぐらいかな。

「あら？ ブリッジに来るなんて珍しいじゃない」

「まあ、時間が空いたので」

俺の定位置。

ミナトさんの隣でセレス嬢の隣。

いやあ。この席も久しぶりだあ。

「お疲れ様です」

「お疲れ様、って言いたい所だけど、私は特に何もしてないもの」

「そういえば、ブリッジ組って日頃は何をしてるんですか？」

忙しくて考えてなかったけど、何してるんだろ？

「な〜んも」

「へっ？」

「だから、特にやる事がないの」

「えっと、この二週間は……」

「時々、木連が来て出撃するんだけどね。私達の仕事はそれぐらいよ」

「……な、なるほど」

まあ、確かにナデシコを強化しようっていうのに環境は整ってない訳だし。

明日香インダクトリーも準備を頑張ってくれてる訳で、待機なのは仕方ない。

でも、なんだか、勿体無いと思ってしまふのは僕だけでしょうか？

「コウキ君が忙しく動き回ってるのに申し訳ないんだけどね」

本当に申し訳なさそうに告げるミナトさん。
いや。別に気にしなくていいのに。

「俺が好きでやってるだけです。それに、後々忙しくなりますから」

「しつかり休んでおけて？」

「ええ。大変でしょうし」

「それなら、コウキ君はいつ休むのよ？」

「え」と……」

その責めるような視線はやめましょうよ。

「そ、それなりに休んでますから大丈夫ですよ」

「……本当に？」

「え、ええ」

「……コウキ君って一つの事に集中すると我を忘れちゃうから安心できないわ」

「えっと・・・」

「明日、休みなさい」

「ええ？ そんな時間は・・・」

「いいから。休みなさい。いいわね」

「・・・はい」

「よろしい」

満足そうに微笑むミナトさん。

まあ、確かに休んでなかったからなあ。

・・・良い機会か。

「セレセレもコウキ君を手伝って忙しかったでしょ？」

「・・・いえ。楽しかったですから」

「そっか。愛されてるわね。コウキ君」

「あ、あはは」

ニヤニヤと笑われてしまった。

「セレセレを連れて街にでも行ってきなさい」

「いいんですかね？」

「良いわよね？ 艦長」

突然艦長に振るミナトさん。

「構いません。休んじやってくださいーい！」

ユリカ嬢。ちゃっかり聞いてました。

というか、そんな適当じゃ駄目でしょ・・・。

「良いんですか？ プロスさん」

その奥で苦笑しているプロスさんに問いかける。

「はい。むしろ、そろそろ休んで頂かないと困ります」
「困る？」

あれ？ どういう意味だろう？

「ええ。コウキさんの活動は一応業務として扱っております」
「提督、あ、違った、司令の御指示ですか？」

「その通りです。その為、そろそろ休んで頂かねば……」

労働基準法だとかそういう事だろうな。

「分かりました。それなら遠慮なく休ませて頂きます」
「はい。ごゆっくりお休み下さい」
「ありがとうございます」

うん。なんの障害もなく休暇が決まってしまった。

「セレスちゃんの休暇も取れますかね？」
「ええ。セレスさんにも働いて頂いてますからね。休んで頂いて構
いません」
「だってさ」
「……はい」

そして、セレス嬢の休暇もなんの障害もなく決まった。

「このままミナトさんも」
「残念だけど、私は厳しいと思うわよ」

「え？」

「私も一緒に行けたら良いんだけどね・・・」

「駄目なんですか？」

「捨てられた小犬みたいな眼で見ないでよ」

そんな眼で見てたのか？ 俺。

男のそんな光景はあまり良いものではないと思うが・・・。

「ほら？ 私は休ませてもらえる程、働いてないでしょ？」

「・・・ミナトさん」

「ごめんね。セレセレ。コウキ君と二人っきりで楽しんできて」

「・・・良いんですか？」

「ええ。楽しんでらっしゃい」

「・・・はい。分かりました」

いつの間にか休暇の予定も決まってしまった。

ま、折角ですから、楽しみとしますか。

とりあえず、今日やれる事は今日の内に済ませておこう。

「それじゃあ、セレスちゃん、続きをさっさと済ませちゃおうか」

「・・・はい。明日、楽しみです」

「うん。明日楽しむ為にも、ね」

「・・・(コクッ)」

おし。シミュレーション室へ向かうとしますか。

とりあえず、パイロット勢を集めますかね。

S I D E M I N A T O

セレセレと手を繋いだコウキ君がブリッジから出て行く。

「良いんですか？ ミナトさん」

「何が？」

「休もうと思えば休めたじゃないですか。」

「ミナトさんも休暇を取らずに働いてた訳ですし」

「コウキ君に比べたら全然働いてないわよ」

「でも、最近のコウキさんはミナトさんを」

「いいじゃない。仕事に燃える男の子って魅力的よ」

「・・・ミナトさん」

「・・・なんだか心配されちゃってるみたい。」

「そりゃあ寂しくないと言えば嘘になるわ」

「それなら・・・」

「でも、コウキ君にとって今はとっても大事な時期じゃない？」

「恋人を放って置いてまでする事じゃないと思います！」

「ふふっ。メグミちゃん。誰にだって大切な時期ってあるでしょ？」

「でも、ミナトさんが我慢してまで」

「別に我慢なんかしてないわよ。私は充分満足してるわ」

「変です。この状態で満足できるなんて・・・」

「そうかしら？」

「はい。倦怠期ですか？」

「け、倦怠期って・・・」

大袈裟だなあ。

「私だったら耐えられません。」

一緒にいて、楽しい時間を過ごしてこそ恋人だと思います」

「それもカップルの一つの形ね」

「それじゃあ、ミナトさんの形って何なんですか？」

「そうね……。支え合い、それでいて、一定の距離感を保つ事がしらね」

「よく分かりません」

「たとえ恋人であろうと、踏み込んではいけない領域ってものがあるのよ」

「それを共有しあうのが恋人なんじゃないんですか？」

「そうね。でも、誰にだって、たとえ恋人であろうと放って置いて欲しい時ってあるでしょ？」

「……。それはそうですが……」

「なんでもかんでも構えば良いって訳じゃない。偶にはちょっと離れるのも良い事なのよ」

「それが今って事ですか？」

「ええ。そういうもののなの」

触れ合ってるだけが恋人じゃない。

相手の事を本当に想っているなら、引くべき時は引く。

相手が自分を欲しているのなら、今度は私から歩み寄れば良い。

そういう心情の距離感って云うのかしら。

それを察するのも良い女の条件よ。メグミちゃん。

……。なんてね。それに……。

「それに、一度距離を置いたからこそ次に触れ合った時、愛を感じるのよ」

「参りました。最後は惚気でしたか」

苦笑してそう告げられてしまった。

惚気だと思われたらしい。
ま、別に間違っちゃいないけどね。

「私はミナトさんのように大人にはなれそうにないです」

「いつもガイ君と一緒にいたい?」

「はい。偶に暑苦しいですけど、元気をくれますから。

ちよっとした事で悩むとか、迷うとか、悲しむとか。

そういうのって生きていく上で良くある事じゃないですか?」

「ええ。そうね」

「でも、彼を見てると何を小さな事を気にしてたんだろって。

そう思っんです。本当に大雑把で、どんな事だって笑い飛ばしちゃう」

「素敵な彼氏ね」

「ふふっ。はい」

笑顔でちよっと頬を染めてそう告げるメグミちゃん。

本当にガイ君の事が好きなんだなってそう思わせる可愛らしい笑みだわ。

「別に私が大人って訳じゃないわよ」

「いえ。私なんて考え方が本当に子供で」

「別に私のだつて多くの形がある愛の、一つの形でしかないの」

「多くの形がある・・・ですか」

「ええ。人の数だけ違う形の愛があるんじゃないかしら。

私はそういう愛の形が理想だなんて思うし、実現したいって思ってる。

でも、メグミちゃんにはメグミちゃんにあった愛の形があるだろうし。

「私には私の・・・」

「ええ。艦長には艦長の、ルリルリにはルリルリの愛の形があると

思うの。

だから、別に私や他の誰かと比べる必要なんてまったくないと思うわよ

「やっぱりミナトさんは大人ですね」

「そうかしら？」

「はい。とつてもそう思います」

「私だつて嫉妬はするし、醜い感情はあるわよ」

「それが恋愛ですからね。仕方ありません」

「ふふつ。なんだか悟ったみたいね」

「大人の女に近付いたつて事だと思えます」

「そつか。そうだと良いわね」

「なんかイマイチ同意を得られていない気が・・・」

「気のせいよ」

恋する女の子・・・か。

メグミちゃんが魅力的な女の子に見える訳だ。

やっぱり大事なのよね。こういう感情。

今はちよつと離れちゃつてるけど・・・。

また、私を抱き締めてね。コウキ君。

S I D E O U T

「そういえば、それならどうしてセレスちゃんを同行させたんですか？」

「親と恋人は違つたのよ」

「へ？」

「私に気を遣うのとセレセレに気を遣うのでは違つて事」

「どちらでもコウキさんは幸せだと思えますけどね」
「ま、コウキ君には単純に癒しだけ味わってもらいましょう」
「ミナトさんでは癒しきれないと？」
「ふふっ。それは私への挑戦かしら？」
「い、いえ。そういう訳では？」
「大丈夫よ。帰ってきてから癒してあげるから」
「そ、そうですか・・・」

「それでは、適性検査の結果が出たのでお知らせします」

セレス嬢を連れて、シミュレーション室で適性検査の最終確認。
無事に確認を終えたという訳で、待たせていたパイロット勢を早速
呼び出した。

「おおおお！ もちろん、俺はゲキ・ガンガーなんだろうな！？」
「まあまあ、ヤマダ君、落ち着きなよ」
「俺はダイゴウジ・ガイだ！」
「はいはい。ガイ君」

久しぶりのフレーズも出た所で。

「最初は特殊隠密型ですね」

一瞬の閃きとその特殊性を發揮する事が大切な機体。

「クローの他にディストーシオンブレードを装備した事により、

特殊性、隠密性に加えて接近戦武装の充実が図られ接近戦重視になった点。

他機体にはない特殊性と隠密性があり、難しい扱いを求められる点。

以上の点から接近戦の戦闘力が高いリョーコさん。

その特殊性、隠密性を最大限まで発揮していたアキトさんの両名に高い適正がありました」

「ほお。俺か」

「別に良いけどよ。俺としては隠れてつつつのはどうもな・・・」

「リョーコは正面からしか戦えないもんね」

「正面からしかじゃねえ。正面からが好きなんだよ」

「はいはい」

まあ、確かにスバル嬢の性格的に隠密つてのは嫌かもしれないなあ。けど、やっぱりどうしても接近戦重視の戦い方になる以上、彼女に向いてるんだよ。

そして、アキトさんは言わずもかかって奴。

スバル嬢と違ってアキトさんは隠密つてのにも特に拘りが無いから、正に特殊隠密つて感じで、この機体にとっての理想的な戦法が取れていた。

もうほぼ完璧つてぐらい。

適正基準で言えば、アキトさん、スバル嬢つて感じかな。

「次は物量射撃型ですね」

凄まじい火力と点ではなく広い面での攻撃が特徴の機体。

「距離的に後方に位置する点。

ロククオンの為の視野の広さ、状況判断が求められる点。

以上の点から射撃能力に優れるイズミさん。

状況判断、位置取りに優れるヒカル。

同じく状況判断と視野の広さに優れるアカツキの三名に高い適正がありました」

「へえ。私つてのは結構意外だったかな」

「・・・宇宙に花を咲かせてあげる」

「ま、楽しそうだよね」

射撃能力ではナデシコ勢随一のイズミさん。

もちろん、いつも以上の処理能力を必要とするから誰もが命中率は下がってた。

そんな中で、あまり命中率を落とさなかったのだから流石としか言い様がない。

物量射撃というぐらいだから命中率は求められていなかったかもしれない。

それでもやはり命中率は低いよりは高い方が良いでしょう。

無駄がなく効率が良いって事だしね。

ヒカルはそれ程命中率が良かった訳ではないけど、配分が良いというか判断が良い。

弾幕が必要な時、何かと何かの間を遮断したい時などなど。

その時その時で、求められる行動の殆どをこなせていた。

相変わらず判断が良いなあと感心したものだ。

アカツキも視野が広くて、中々の命中率を誇っていた。

会長職つて視野の広さとか養えるのかとちよつと感心。

俺の構想としては彼にもう一つのリーダーパイロットを務めてもらいたい。

アカツキのリーダーシップは眼を見張るものがありますからね。

「次はスーパー戦フレ」

「おお！ 早くしやがれ！」

「はいはい」

興奮しちゃって、まあ。

「ここは便宜上、スーパー型としましょう」

頑丈で巨大な身体から繰り広げられるスケールの大きい戦闘が特徴の機体。

「多種多様な武装の使い分けを求められる点。

無謀とは違う大胆な判断を必要とし、真っ先に飛び込む勇気が求められる点。

以上の事から、大胆さと勇気を持つガイ。

機体性能を如何なく発揮し、どのような状況でも冷静さを保てるアキトさん。

状況判断に優れ、武器の使い分けにも優れるヒカルの三名に高い適正がありました」

「またまた私？ やったあ！」

「いよっしやあああ！ ゲキ・ガンガー万歳！」

「・・・嫌いじゃないからな。ゲキ・ガンガーは」

ガイはもうこの機体の為にパイロットやってるようなもんかかってもちろん、優しさとかじゃなくてきちんと検査した上での結果。

接近戦にも優れ、意外と射撃にも優れている。

思い切りの良さ、ムードを盛り上げる人格などなど。

正にスーパーロボットのパイロットって感じ。

間違いなく、魂コマンドを持つてるだろうね。

ヒカルも好きだしなあ。こういう機体。

基本的にヒカルに不向きな機体ってのはなかった。

どの機体でもそれなりの成果を出してたし。

まあ、それでもこの機体は高い水準だった訳です。

しかし、この検査は一番うるさかったな。特にガイが。そして、アキトさん。

状況判断、パイロット技能、冷静さ。

どれをとっても超一流のパイロットであるアキトさんだ。

スーパー型のスケールの大きい戦闘にもマッチしていた。

まあ、俺の中でアキトさんは高機動にこそ適正があるって考えているから、

この機体にアキトさんが乗る事はまあ、あんまりないと思う。ほぼガイだろうし。

「それじゃあ最後にリアル戦フレームです」

「あの・・・今まで私、適正がなかったんですけど・・・」

どこことなく不安そうなイツキさん。

・・・今まで名前呼んでなかったしなあ。

全部不向きとかわたら悲しいし、気持ちは分かる。

でも、ま、安心してください。

「大丈夫です。イツキさん。この機体の適正はイツキさんが一番でしたから」

「ほっ。安心しました。・・・あ。話の腰を折ってしまって申し訳ありません」

再びシユンとなってしまうイツキさん。

アハハ。別に気にしなくて良いのに。

ナデシコにはいないタイプの苦労性な人だな。

あんまり気にしてストレスを感じないと良いけど。

「便宜上リアル型としましょう」

多種多様な武装構成で抜群の安定性を誇る機体。

「スーパー型同様武器の使い分けを求められる点。

支援や援護に回る為に状況判断、視野の広さを求められる点。

常に冷静さを保ち、状況に合った安定性ある行動を求められる点。

どの距離感でも対応できる安定性に優れている点。

以上の点より、冷静かつ不得意な距離がないイツキさん。

視野の広さ、判断力に優れたヒカル、アカツキの三名に高い適正がありました」

「おお。またもや私？ 私ってば大人気」

「ヒカルの長所はどんな機体でも適応できちゃう事かな」

「やった。高評価じゃん」

「良かったです。この機体なら私らしさが出せるかも」

「ま、僕ってなんでも出来るから相應しいと思うよ」

ヒカルとアカツキはとにかく判断力と視野の広さが長所。

ヒカルに関してはどの機体でも水準以上の性能を発揮してたし。

アカツキはアカツキで多少の事は動揺せずにこなしてしまうし。

うん。やっぱり応用性のあるパイロットは素晴らしいね。

イツキさんはそれこそリアルロボットの理想形みたいな感じ。

近、中、遠の全てで高い技能を持ち、状況判断、視野の広さにも優れる。

器用貧乏というよりは万能型ってイメージがピッタリくるかな。

これといった欠点が見付からないのがイツキさんの特長。

いやあ。実際、イツキさんと組んだ時が一番楽しだね。

「以上で結果は全てですね」

結構な重労働だったけど、セレス嬢のお陰で楽に済ませられました。本当にありがとね。セレス嬢。

「ところでコウキはどの機体に適正があっただ？」

「そういえば、聞いてなかったな」

「俺と一緒にゲキ・ガンガーに乗るか？」

いやあ。残念だけどスーパー型はあんまり向いてなかったんだよね。

「今の所、物量射撃ですかね。リアル型もそれなりに高かったですけど」

「そうか。あれだけのレールカノンを同時制御できるお前だ。」

物量射撃型でも同時処理による高い命中率を誇るんだろうな」

「まあ、それなりですかね」

自慢じゃないけど、俺と物量射撃型のコンビは凄まじいと思う。

並列思考による同時制御は半端じゃなく、命中率はイズミさん以上ソフトの導入で更に底上げできるし。

ふっふっふ。視界一面のミサイルをぶっ放した時は爽快だったぜ。

「それじゃあ、後は適正が高かった機体の訓練をシミュレーションで行ってください」

「了解した」

「おっしやあ。ゲキ・ガンガー。待ってるよ。使いこなしてやるぜ」
盛り上がってきましたね。

「ちなみに、もう二パターン機体が導入される予定なので後日、再び検査を受けてもらいます」

「面倒だ、と言いたい所だが、仕方ねえ。やってやるか」

「既に面倒って言ってるよねえ？」

「言ってるわ」

「言ってますね」
「ダァ！ うるせえ！」

女性陣の仲も良好つと。

「お疲れ様だったな。コウキ」

「いえ。充実した仕事でしたから」

「そうか。所で木連の件だが・・・」

「あ。はい」

「まだ連絡はないのか？」

「ええ。まだないんですよ。何かあったのかもしれませんが」

「草壁派の妨害工作という点が妥当だな」

「そうですね」

「こちらから連絡を取る事は可能か？」

「厳しいと思います。向こうがどこに居るのか分からない訳ですし」

「・・・そうか。連絡が来次第、すぐに教えてくれると助かる」

「了解しました」

「ああ。それじゃあな」

去っていくアキトさん。

改革和平派の一員としてアキトさんも多忙な日々を送っているんだろうなあ。

なんだか、負けてられないなって気持ちにさせてくれるよ。あの背中
中は。

「また悪巧みかい？」

「・・・アカツキ」

「いつから呼び捨てにされる仲になったのかな？」

「今更さん付けできるような関係でもないですから」

「そうかい」

「それで、何か御用ですか？」
「おっと。険悪な事で」

別に険悪っていう訳じゃないけど……。
なんとなくさん付けしたくないだけだ。

「ま、一応、報告しておいてあげるよ」
「報告？」

「お陰様でネルガルは右肩下がりに突入さ。
軍内でのネルガル評判も下がっちゃったみたいだし」

「今からでも遅くないですよ」

「明日香や軍に屈しろっていうのかい？」

「意地って奴ですか？」

「ま、意地なんてクソ喰らえなんだけどね」

「意地より利益と？」

「そついう事」

肩を竦めるのがどことなく演技臭い。

相変わらず真意を見せない人だな。この人は。

「社長派は……まあ、違法ばかりだから良いんだけどね。」

最近は何の重役達が色々とうるさくてさ。会長の僕としても苦勞
してる訳だよ」

「そんな情報を俺にくれて良いんですか？」

「ま、この情報をどう使うかは君次第なんじゃないかな？」

「……………」

「精々、僕達の利益の為に頑張ってくれたまえ」

後ろ向きのまま手を挙げて去っていくアカツキ。

今の言葉の真意が掴めない。

立場上、こちらに協力できないからそつちで上手くやってくれって
事か？

それとも、手出ししても既に意味がないって伝えたいのか？

もしくは、現状で落ち目だから俺を利用してようって魂胆なのか？

その重役とやらに連絡が取れれば間違いなくこちらが有利になる。

でも、そんな隙をアカツキが作るか？ わざと？ それとも、あえて？

・・・駄目だ。分からん。

クソツ。キャラが掴めなん。

・・・とりあえず保留にしておくか。

どちらにしる、その重役の事は念頭に置いておくか。

おし。さてっと・・・。

「お疲れ様。セレスちゃん」

隣で静かに待っていてくれたセレス嬢に挨拶。

「・・・はい」

「今日はもう終わりだから。ありがとね」

「・・・いえ」

「それじゃ、明日に備えてもう休もうか」

「・・・楽しみです」

「そうだね」

嬉しそうに微笑んでくれるセレス嬢。

うん。明日は楽しくなりそうだ。

楽しみで眠れないなんて事には・・・ならないといいな。

第六十三話（後書き）

さて、次回はちょっとした日常編。
多忙な日々の中にこんなひと時があったって良いじゃないか。
人間なもの。

第六十四話（前書き）

大変お待たせしました。

ようやくテストを終え、忙しい日々も過ぎ、夏休みに。

出来るならば、この夏休み中に完結まで持っていきたいなあと。

・・・厳しいかもとは実際思ってますが・・・。

今回日常編という訳で今まで一番短くなっています。

楽しんで頂けたら幸いです。

第六十四話

SIDE MINATO

「これで良しっよ」

「……ありがとうございます」

今日はセレセレとコウキ君のデートの日。

という訳でしたっかりとおめかししちやいました。

今日は一段と可愛いぞ。セレセレ。

「コウキ君を楽しませてあげてね」

「……はい」

グツと胸の前で手を握り締めるセレセレ。

本当に可愛い。

「それじゃあ、いってらっしやい」

頭を撫でてからセレセレを送り出す。

ちなみに、すぐにコウキ君と合流する訳ではないわよ。

ほら、デートって待ち合わせが肝心じゃない？

だから、きちんと待ち合わせ場所を決めさせたのよ。コウキ君に。

「楽しんできてね。セレセレ。コウキ君」

さてつと、今日も一日、お仕事頑張りますか。

S I D E O U T

「ふう……」

現在、ヒラツカ公園で待ち合わせ中。

ナデシコからはリニアモーターカーで移動しました。

いやあ、これが未来の移動手段ですか。

静かですね。早いですね。本数多いですね。

普通の電車に慣れている僕としては新鮮でした。

リニアモーターカー以外にも色々な種類の列車があつて……。

うん。未来って凄いな。まあ、百年も経てば当たり前なんだろうけど。

「……しかし、ここまで来れるかな。セレスちゃん」

ミナトさん。流石に無謀でしたよ。

確かにナデシコ最寄駅からは一駅だし、駅のすぐ目の前だけどさ。

あんな小さい子に少しといつても一人で行動させるなんて。

……何かあつたらなんて思うと心配で胸が痛くなります。

ただでさえ、あんなにも可愛らしいのに。

危ないオジサンに襲われないだろうか……。

……やはり迎えに行くか？

しかし、ミナトさんはもちろん、セレス嬢にまで駄目って言われて

るし。

うがぁ。心配で胃が痛くなりそうだ。

「・・・お待たせしました」

頭を抱えて座り込んでいる俺の後ろから聞こえてくる声。

バツと振り返ると、そこには見慣れた少女の姿が！

・・・なんて劇的な表現はしなくてもいいか。
とにもかくにも・・・。

「・・・良かったぁ」

—安心。

「・・・どうかしましたか？」

「ううん。なんでもないよ」

首を傾げて見上げてくるセレス嬢の頭を撫でる。

別に誤魔化している訳ではないのであしからず。

・・・それにしても、変な所を見られてしまったな。
恥ずかしい限りだ。

「・・・」

「・・・」

・・・どうすればいいんだろう。

ひたすら無言で見詰めてくるセレス嬢。

一体、セレス嬢は俺に何を要求しているんだ？

「・・・あの・・・」

「うん。何だろう?」

「・・・どうですか?」

「・・・どうって?」

「・・・ミナトさんに言われました。感想を聞くまで動いちゃ駄目だって」

「・・・あ。

「うん。」「めん」「めん。とっても似合ってる、可愛いよ。セレスちゃん」

「・・・はい!」

うん。反省。

まずは寝めなくちゃね。こんなにも可愛いんだもの。お世辞でもなんでもなく、心の底からの感想でした。

「それってあの時の?」

「・・・はい。サツキミドリコロニーでコウキさんに買ってもらった物です」

セレス嬢にとつての初めてのお出掛けって奴だな。

ミナトさんとセレス嬢と俺とで出掛けたサツキミドリコロニー。

今まで服らしい服を持ってなかったセレス嬢に大量の服を購入した日。

あれから、ミナトさんの画策でセレス嬢もどんどん可愛いものに興味を持つようになってきて・・・。

うん、感無量。

本当にセレス嬢はどんどん可愛くなっていくな。

いずれ本当にアイドルになってしまつかもしれん。
なんだか、嬉しくもあり、寂しくもあるっていうか、うん、これが
親心って奴か。

「・・・私のお気に入りです」

俺自身、ファッションは相変わらず詳しくないから細かい事は分
らないけど・・・。
小柄なセレス嬢にマッチしてて、庇護欲を湧かせて、抱き締めたく
なるような、ね。

これは勧誘にも気をつけなければならんだろうな。マジで。

「それじゃあ、行こうか」

「・・・はい」

無事に合流できたし、早速目的地へ向かうとしましょうか。

「早速やってまいりました。アニマルアイランドへ」

「・・・誰とお話してたんですか？」

「大事な事なんだよ。セレスちゃん」

「・・・そうですか。・・・やってきました。アニマルアイランド」

「うん。偉い。偉い」

「・・・はい」

という訳で今回の目的地は動物園。

無難な選択って思うかもしれないが、俺的にはかなりベストだと思

っている。

セレス嬢はあまり動物と触れ合う機会がなかったし、以前のホツキョクグマ救出の際、実物を眼にした時に眼が輝いていた。

テディベアもかなり気に入ってくれてたし、きっと可愛い動物に喜んでくれると思う。

ちなみに、ここは水族館も同じ施設内にあるという優れたもの。

しかも、少し歩けばちっちゃいけど遊園地もあるという。

今日は存分に楽しもうじゃないか。

「さあ、行こっか」

「……はい」

迷子にならないように手を繋いで、ゆっくりと歩き出す。

隣には既に頬を緩ませて喜んでくれているセレス嬢。

楽しんでくれると嬉しいかな。

「……とっても可愛らしいです」

小動物の可愛らしさに花が咲いたかのような笑みを浮かべて……。

「……大きいです」

普段お眼にかかれないゾウやキリンといった動物に驚き……。

「……強そうです」

獰猛な肉食動物（もちろん、大人しいですよ）にちよつと怖がつて・
・・。

「・・・気持ち良さそうです」

波に揺られてゆったりとする動物に心癒されて・・・。

「・・・早く次に行きましょう」

いつもは引つ張る側の俺も今回は引つ張られる側。

活き活きしているセレス嬢は新鮮で、俺も嬉しくなってしまう。
本当に表情が豊かになったなっと思う。

昔は本当に無表情で、滅多に笑顔すら見せてくれなかったけど。
今では本当に色々な表情を見せてくれる。

周りからしてみれば今でも分かりづらい所があるらしいけど、
いつも傍で見ている俺やミナトさんにはきちんと感情表現してるの
が分かる。

嬉しい時には笑い、悔しい時には歯を食い縛って、悲しい時には瞳
に涙を浮かばせる。

寂しい時には肩を落とす、ワクワクしている時には眼を輝かせて・
・。

マシンチャイルド？ 彼女は唯のちよつと変わった特技を持つ女の
子だ。

マシンチャイルド？ だから、何だ。彼女はちゃんと自分の意思で
動いている。

マシンチャイルド？ そんなの彼女にとってほんの少しの意味しか
持たない。

もう彼女を機械なんて言わせない。もう彼女を人形なんて言わせな
い。

彼女は彼女なんだ。こんなにも可愛らしくて、優しくて、内気で、でも、意外と頑固で。
セレス・タイト。君はもう普通の女の子だよ。

「そろそろお昼にしようか」

「・・・はい」

結構回ったかな。

楽しかったけど、ちょっと休憩したい気分。

分かるでしょ？ この気持ち。

それに、そろそろお昼の時間だし、ちょうど良いかなって。

「ちょっと歩くけど良いかな？」

「・・・もちろんです」

場所はもう決めてたんだ。

施設からちょっと離れた公園内。

そこには持ち歩きが出来るちよつとしたお弁当を売るお店があつて、ついでにレジャーシートを貸し出してて、芝生の上で食事が出るという。

なんとも魅力的なものがあるのだ！

いやあ。風も気持ちいいし、ゆっくり出来そうだ。

「彩り御膳を二つ」

現在、三月の上旬。

若干薄寒いけど、春が近いからかぽかぽかとした陽が顔を出している。

日光浴するにはピッタリって感じた。

「あと、レジャーシートも」

ちゃんとこれも借りないとね。

「さて、セレスちゃん。ちょっと手伝って」

「・・・はい」

二人で協力してレジャーシートを敷く。

こういう共同作業も大切なのだ。

「うん。それじゃあ、食べようか」

「・・・頂きます」

「頂きます」

木陰にレジャーシートを敷いて、陽のあたりを少しだけ感じつつ、心地良い風を浴びる。

「気持ち良いね」

「・・・気持ち良いです」

そろそろ桜が咲こうという時期な事もあり、ちらほると桃色が眼に映る。

どれだけ時が進んでも、こういう美しさは変わらないんだなって。今更ながら感慨深くなった。

「・・・あ」

サーツと強い風が吹く。

セレス嬢の綺麗な髪が靡き、陽の光が銀色の髪を煌かせる。

「・・・綺麗だ」

思わず見惚れてしまうなんとも美しい光景。

妖精なんて呼ばれてるけど、それも納得って感じた。

「・・・コウキさん？」

おっと、娘になる子に見惚れてちゃ駄目だよな。

「気持ちいいなって」

「・・・はい。本当に」

同じ会話を二度。

それなのに、なんて心が安らぎ、穏やかになる事だろう。

不思議だけど、今はただこの心地良さに身を任せたかった。

「・・・眠たくなってきました」

激しく同意です。セレス嬢。

「少し眠ろうか」

「・・・でも」

「時間が勿体無い？」

「・・・はい」

せっかくだからって事かな。

ふふっ。可愛い奴よのお。

「それじゃあ、ちょっとだけ。その後にしっかり楽しもう」
「……………(コクツ)」

心地良い日差し、心地良い風、穏やかな昼下がりに。

そんな昼寝に抜群の環境に囲まれたら寝ちゃうのも当然だって。

「……………コウキさん」

「はいはい」

縫るように密着してくるセレス嬢。

どうやら枕をお求めのようだ。

苦笑しながら、その要求に応えてやる。

「……………おやすみなさい。コウキさん」

「うん。おやすみ」

木に寄り掛かる俺の膝に頭を乗せて、すっかり微睡んでしまったセレス嬢。

その邪気のない寝顔は微笑まじさを誘い、自然と心が癒されていった。

透き通るような綺麗な髪を櫛で梳くように撫でながら、

大地にしっかりと根を張る木の下で、俺達は少しの間、穏やかな時間を過ごすのだった。

「・・・今日はとっても楽しかったです」
「そっか。それは何より」

午後、残った動物園を回り、最後に遊園地で遊んだ。
あまり活動的ではないセレス嬢。

案の定然、絶叫系などは乗り気ではなかった。

まあ、嫌なら嫌でと思いながらも挑戦させたのだが・・・。
見事に嵌ってくれた、いや、嵌ってしまった。

乗せた後に気付いたのだが、俺の絶叫系嫌いは直っていなかった。
いや、嫌いというか、苦手なだけけどね。

エステバリスに乗って慣れたと思ってたけど、全然違った。

一度、経験してみてくれ。これは乗った俺にしか分からないと思う。
それなのに、絶叫系に嵌ったセレス嬢は遠慮なく絶叫系巡りに。

身長制限とかであまり規模のでかいものに乗れなかったのは不幸中の幸いだった。

・・・が、それでもやっぱりかなりの疲労だったさ・・・。
何度も乗ればそうなるよね？

しっかし、どうしてこう女の子ってのはこんなにも絶叫系が好きな
のだろうか。

これは俺が一生を掛けて研究するに相応しいテーマかもしれんな・・・。

「・・・ありがとうございます」

「こちらこそ、楽しかったよ。ありがとう」

遠足は帰ってくるまでが遠足。

その言葉を表すようにしっかりとナデシコまでエスコートさせて頂
きました。

片手にお土産、片手に小さな手。これが最終的に収まった形ですね。
はい。

「・・・明日から、また頑張りましょう」

「うん。頑張ろう。セレスちゃん」

「・・・私も協力します。コウキさんの役に立ちたいですから」

「ありがとうございます。本当に助かるよ」

「・・・それじゃあ、失礼します。ありがとうございました」

「うん。こちらこそ」

ペコリ。

最後に一礼して、セレス嬢は部屋へと入っていった。

どうやら、かなり楽しんでくれたようで、俺としても嬉しい限りだ。さてっと、後は・・・。

「どう？ 楽しめた？」

「ミナトさん」

いきなり背後から声が掛かる。

振り返るとそこにはミナトさんの姿が。

「丁度良かったです。お土産も渡したかったですし」

「そう。それじゃあ、ひとまず私の部屋に行きましょう」

肩を並べてミナトさんの部屋へと向かう。

「それで、楽しめた？」

「ええ。結構充実してましたから、色々楽しかったです」

「それは良かったわ」

「今度は皆で行きましょう。ミナトさんも一緒に」

「それはセレセレも含まれるの？」

「二人つきりの方が良いですか？」

「ふふつ。どうでしょうね」

「それも良いかなって思います。きっと楽しいですよ」

「そうね。きっと楽しいでしょうね」

顔を見合わせて笑う。

最近、ふたりつきりデートしてなかったし。

愛想尽かれないようにしなくちゃね、なんて。

「今度の休みはミナトさんと二人つきりデートがしたいです」

「あれ？前はそんな事、言わなかったのに」

「俺だつていつまでも照れてちゃいられないですから。」

それに、セレスちゃんとも楽しいですが、やっぱり一番はミナトさんとですから」

「そっか。それじゃあ、デート、しましよつ」

「ええ。今すぐにでも」

「気が早いわね」

「それぐらいの気持ちって事です」

「ふふつ。そっか」

「はい」

慌しい日常の中で、久しぶりにゆっくり休めた気がする。

よし。もう少しで全てが解決するんだ。

気を引き締めて頑張ろう。

きっと、それがもっと先の幸せに繋がるのだから……。

第六十四話（後書き）

書いてて思いました。

デートって難しいですね。

正直、どういうスポットにするかでかなりの期間を悩み、
どんな展開にするかで更に悩み、こうしてかなりの時間が
結局、方針も決まらなかった訳ですし。

実際、どうにでもなれと書きながらの試行錯誤でした。
いや。難しいぜ。男女関係。

ミナトさんのデートはまず書けない自信があります。

第六十五話（前書き）

まずは謝罪を。

これは前回投稿した話を修正したものです。

投稿後、いざ読み直してみたら、

作者の考え不足が浮き彫りになってしまいました。

このままではまずいと修正したものがこの話になります。

その為、若干の差はあるものの、内容はほぼ同じになっています。

但し、大事な部分が多い為、再投稿という形を取らせて頂きました。

次話だと思ってくれた方には大変申し訳なく思います。

すぐにも次話を投稿する事で謝罪の代わりとさせて頂きたく思います。

それでは、お楽しみください。

第六十五話

「なるほど。あれは罠であった可能性が高いのかな？」

「ハッ。既に接触したと見てよろしいかと」

「・・・そうか。北辰。準備は滞りないな？」

「御意。受け渡しも予定通りに」

「ならば、それを万全の状態としよう。」

「何、既に繋がっているのなら利用してやれば良い」

「如何しますか？」

「当日、ナデシコには蚊帳の外にいてもらおうじゃないか。ある意味、当事者でもあるが」

「・・・・・・」

「妨害工作は順調だったな。ふつ。次は見逃してやれ。無論・・・」

「ハッ。改竄の準備は既に完了済みです」

「ロック解除法は？」

「捕獲した機体より解読致しました。多少の変化も対応できるかと」

「・・・」

「良くやったぞ。北辰。クックック。これでは既に見逃してやってるとは言えんがな」

「ハッ。後は捕獲し、都合良く・・・」

「うむ。指示通りに」

「仰せのままに」

「既に火星は掌握済み。後は遺跡のみだ。最早、和平など何の意味もない。」

「憎き神楽の嘆きが今からでも聞こえてくるわ。ハッハッハッハ」

「それにしても、ケイゴさんはどうしたんだろうか？」

ナデシコが地球に帰ってきてから早二週間。

すぐにも連絡を取ると言ったケイゴさんからは未だに連絡なし。

うん。忘れてるって事はないだろうし。

・・・やっぱり妨害工作とかで大変なのかな？

出来れば早めに連絡取りたいんだけど・・・。

「コウキ」

「あ。アキトさん。お疲れ様です」

「ああ。コウキこそ、お疲れ様」

相変わらずクールなアキトさん。

若干汗を掻いてるし、訓練でもしてたのかな？

「木連和平派から連絡は来たのか？」

その話でしたか。

「いや。残念ながら、まだです」

「・・・そうか。随分と待たせるな」

「・・・すいません」

「いや。コウキに言っている訳ではない。やはり大変なのだろうか？」

「恐らくそうでしょう。草壁派は優先的に神楽派の妨害をしている

と考えられます」

「草壁派の策。和平交渉時の味方殺しか・・・」

「それを知っているというのが俺達の利点ですね。阻止し、かつ、利用できます」

「利用か・・・。人が死ぬか死なないかという瀬戸際なのにな」

「・・・ええ。俺も随分と汚くなった気がします」

・・・若干、自己嫌悪。

昔の俺なら利用しようなんて考えなかった筈。

策略とか権謀とか、汚い世界に足を踏み入れてしまったからな。嫌われちゃいそうだよ。本当に。」

「・・・」

「・・・」

・・・暗くなっちゃったな。

「と、とりあえず、俺達は待つ事しか出来ません」

「・・・そうだな。信じて待つしか」

ウィーンウィーンウィーンウィーンウィーン！

「敵襲か！」

突如鳴るエマージェンシーコール。

最近は大忙しくて戦闘に参加できなかったけど、今回はここにいるし。データ収集+自身に新型機を慣れさせる為にも参加しようと思う。

「ブリッジへ向かいます」

「ああ。急ぐぞ」

「はい」

さてさて、今回の襲撃だが、何かしらの意味がある気がするな。流石に、木連も無闇に戦闘を仕掛けて来る程、愚かではないだろうし。

ひょっとしてケイゴさんが何か？

・・・まあ、戦闘終了後には全てが分かっている事だろう。うん。

「なんでこうなる」

「しょうがないでしょ。実戦データが欲しいって言ったのはコウキ君なんだし」

戦闘が開始しました。

僕はそれをブリッジから眺めます。

・・・参加したいって言ったよね？

「確かに言いましたけど、別に乗りながらも・・・」

「残念ながら、数が足りなかったんだってさ」

「ガーン」

新型機はまだ戦場には出せません。

その理由は二つあって、一つは単純に調整中である事。

いきなり実戦配備して損傷でもされたら、どうしていいか分からないからね。

とりあえず一度整備班で分解・組み立てして、損傷用の予備パーツを見極める。

一度つきりならいいけどさ。何度も整備しては実戦、なんてのを繰り返すかもしれないし。

きちんと機体の内部、武器、外部、細部を把握して、いつでも完璧に近い状態に持っていけるようになって、その状態・環境で初めて戦場に出す事が出来るという訳さ。

新型機ならではのどうか、新型機故の、まあ、弊害って奴ですね。大量生産じゃないからいちいちマニュアル作りから始めないといけないし。

まあ、その作業さえ終われば成果を期待できる訳だから仕方ない事なのだけど。

それで、もう一つは……。

「切り札ってのは最後まで取っておくものなのさ」

「誰に言ってるの？」

「このナデシコなら良くある事です」

「はぁ……」

とりあえず、続きを……。

新型機という訳で一応は新しい機能を追加してある訳だ。

そんな機体をたかが通常戦闘で表に出すのは愚か過ぎる。

出撃回数が多いという事はそのまま分析される回数が増えるという事に繋がるからだ。

分析されれば利点も大した利点にならない。

最終決戦まで長引かせるという訳でもないけど、少なくとも出来るならした方が良い。

無論、慣らせる為に、という事も必要なので、通常戦闘でも出撃する事はあるだろう。

まあ、それはもう一つの理由でもうちよい後って事になるでしょうね。

……しかし、俺も一応パイロットなんだしさ。乗りたかったよ。

「ほら。落ち込んでないで。仕事しなさい」
「分かりました」

ま、それもそうか。
仕事しましょう。

「セレスちゃん。手伝って」
「・・・はい。頑張ります」
「うん。よろしく」

さて、セレス嬢の協力も得られたので・・・。

「久しぶりに使いますか」

スチャツと懐からバイザーを取り出す。
若干進化したナデシコのレールカノンカメラ接続用の端末。
装着すれば全方位が視界になるという優れものだ。
ナノマシンの扱いもこれでもかという程で大分慣れたしね。
さてっと・・・戦況はどうなってるのかなあ？

『各機散開。いつも通りだ』
『『『『『『了解！』』』』』』

・・・既に乗りこなしてますねえ。
現在、パイロット勢が搭乗している機体はリアル型とスーパー型。
これらは既に量産体制が整っているからという理由で、
機体の整備が可能なものといずれ軍単位で表に出るんだからいいんじ
やねという意見から。

軍の方針としては各基地に防衛用として一機か二機、スーパー型を

配備して、
小隊のリーダー機やエースパイロット用にリアル型を配備するつもりらしい。

とりあえず優先的にこの二つのフレームを回してもらったのだが・
。

「俺だけないってのもあんまりだよな」

ナデシコ内にあるのは、まずスーパー型が一つ。

まあ、予備パーツ含め場所を取るから仕方ないとも言える。

そして、肝心のリアル型だが……。

何故か、六つしかない。そう、何故か。

スーパー型はガイが乗るとして残り七人。

あれれ？ 数が合わないぞ？ 状態に陥る訳だ。

そして、結局、お前は情報収集に徹しろと俺だけブリッジにいるという事態。

……どうしてもう一つ補充してくれなかったんだ！？

まあ、確かに現在六つの新型機があつて、八人全てに用意できない時、

リアル型で補うとしたら三機必要になってくるってのは分かる。

一応、予備としてそれぞれ一機ずつ用意しようって事で六機なのも分かる。

……分かりたくないけど。

結果としてリアル型は六機、スーパー型と合わせて七機。

結局、俺だけなしなのかよ！？ って事になるのは……分かん！

……文句を言っても始まらないので、諦めるとします。

「やっぱり適正が高かった三人はダントツだな」

アキトさんもいいけど、こうして見比べてみると無駄というか、ま

あ、そういうのが目立つ。

まあ、撃墜数はトップだけど、やっぱり状況判断、位置取りという点では敵わないかな。

何かしら目立つという訳じゃなく、三人とも無駄が少ない。

いや。無駄が少ないからこそ目立たないのかも。

誰かの言葉で本当の戦上手こそ讃えられず、目立たないとか言ってたな。

まあ、そんな事はどうでもいいとして、やっぱり小隊に一人は欲しい存在だと思う。

俺達も八人という大人数、かつ、得意距離や機体もバラバラな訳だし、

いずれ本格的に隊を二つやら三つに分けて小隊として活動させる事になるだろう。

その時、彼ら三人には調整役としての役割が期待されるな。

すると、ガイとスバル嬢は近距離だから別になるだろう。

後はバランス型のイツキさんとヒカルかな、別になるとしたら。

そして、遠距離型といえる俺とイズミさん？

まあ、僕はバランス型と自負してますが……。

とりあえずそんな所でリーダー機としてアキトさんとアカツキかな。しっかし、実際アキトさんはリーダーって感じじゃないんだよな。

どちらかというと遊撃に走ってくれた方が助かる訳だし。

いや、リーダーシップはあるよ。でも、戦法がね。

真ん中か後方で状況を把握して指示を出せるのがベストな訳じゃん。常に飛び回っているアキトさんは指示とかより戦闘に専念させた方が遥かに効率が良い。

でも、確か女四人衆のリーダーはスバル嬢だったか？

うーん。分かんなくなってきた。この辺りは艦長辺りと相談しよう。

俺なんかより断然良い意見がもらえるだろうし。あと副長もね。

「見た限り、かなり有効な気がしますね」

「そうね。以前よりスムーズに進んでいる気がするわ」
「・・・機体性能の向上に伴い、以前より数倍の速さで既定数を撃破しています」

なるほど。貴重なご意見をありがとうございます。セレス嬢。

「これらが軍で出回って、しっかりと扱えるようになればかなりの戦力の向上になりますね」

「そうね。優勢に立てるかも」

「向こうが無人機である以上、殲滅戦でも問題ないですしね」

しかし、無人機の量産は本当に性質が悪いぜ。

そりゃあ、既にエステバリス一機で何体分もの活躍が出来るさ。

でも、やっぱりパイロットは人間な訳だし、人海戦術は堪える。

疲労がないのは結構大きいのかもしれん。

まあ、無人機同士での戦争は唯のゲームになっちゃうから断固として反対だけどね。

人間の感情があるから戦争が起こる。

それは当然の事だけど、逆を言えば、人間の感情があるからこそ戦争は収まる。

それは被害だったり利益だったりするけど、確かに人間の力だ。

それがどうだろう、無人機同士の戦いだったら・・・。

恐らく戦争は永遠に終わらない。

その背後に人間がいようと、危機感も平和への意思も芽生えないのだから終わる事はない。

戦争を対岸の火事にしちゃいけないんだ。

当事者にならないと何も考えようとしない。

こうして平和へと意思を重ね合わせられたのは人間の意志があったからだと思っ。

「さて、そろそろ・・・ん？」

敵の数も少なくなってきた、そろそろ終わりかなという時、ちょっとした違和感に気付いた。

一体？ 一匹？ まあいいや、そいつだけ妙に動かない。

そのくせ弾丸だけは見事に避けている。

これはさぞかし倒しづらিদらうなあと思いついたらしく眺めていたのだが・・・。

「なんだか何かしらの意味がある気がしてきたぞ」

近付こうとも逃げようとしない一定の距離感。

ひたすらにナデシコを見詰めるその瞳は普通とは違う気がする。

あ。ちなみに相手はバツタだから。あしからず。

『うおっしゃあ！ ラスト！』

って、いつの間にかそいつ一機に。

「ちよ、ちよっと待て！」

『う、うお、何だ？ コウキ』

「撃破する前にちよっと様子を見させてくれ」

『あん？ どうしてだよ？』

「いいから」

今、確かにガイの拳に反応していた。

しかし、攻撃されたというのに逃げようともしない。

これは明らかに意味がある。

「アキトさん」

『どうした？ コウキ。あと一機なのだが・・・』

「その一機ですが、妙だと思いませんか？」

『妙？』

「ええ。他の奴らより俊敏さに優れているくせにまるで見守るように外側で待機。

攻撃しようともせず、逃げようともしない。こいつの意図が俺には掴めません」

『確かに。だが、意味なんてあるのか？』

「恐らくは・・・」

もしかしたら、ケイゴさんからのメッセージかもしれない。

回線が繋がられないから強引な方法を取るしかなかったとか。いや、過信は出来ないけど。

「アキトさん。似たような事が以前にもありませんでしたか？」

『ん。いや。あったのかもしれないが、気付いたのは今回が初めてだな』

初めてかぁ・・・。いや、もしかしたら何度も送ったのかもしれないし。

確か地球に帰って来てからの初戦闘は五日後だったと思う。

それから何度も戦闘はあったらしいし。

ケイゴさんとしてもすぐに整えられずに、連絡だけ取るうと思っていただけかもしれない。

そして、未だに連絡が取れずに焦っているなんて事も・・・。

でも、あれがもし草壁派とかがだったとしたら・・・。

安心しきった時に銃を放たれるなんて事があるかもしれない。

クソッ。どうする？ どうするのがベストなんだ？

・・・俺が行くか。

「皆さんは一度帰艦してください。艦長」

「はい。何でしょう?」

「俺は今からあれを回収、もしくは解析してきます」

「そ、それは危険です」

「いえ。何かしらの意味がある。俺はそう考えています」

「し、しかし・・・」

『それならば、ひとまず推進装置やら武装やらを破壊してから回収すれば良かるう』

アキトさん。

「アキト。そんな事、出来るの?」

『ああ。構造は把握しているからな。データに損傷が出ないよう慎重に回収しよう』

「・・・御願います」

『任せておけ』

助かります。アキトさん。

「どういう意味があるって考えてるの?」

問いかけてくるミナトさん。

他のブリッジクルーからの視線も感じる。

「以前、俺が神楽派と伝手があるという話はしましたよね」

「ええ。連絡待ちって奴よね」

「はい。しかしながら、地球帰還から二週間。なんの音沙汰もありません」

「それじゃあ、あのバツタが神楽派からのメッセージかもしれないの?」

「それは数ある可能性の一つです。もしかすると、草壁派からの監視がもしれませんか」

「ナデシコを分析してるって事？」

「恐らく、草壁はナデシコにかなりの注意を払っていると思います」「地球で最も勢いがあるから？」

「ええ。一応、確実に撃破しているらしいのでデータは渡っていないと思いますが・・・」

「分析データは渡ってなくても映像は渡っているかもしれないでしょう？」

「そうですね。その可能性はあります」

映像からでも分析は可能だ。

まあ、監視対策として切り札を取っというてある訳なんだけど・・・。

「でも、それならバッタごと回収した方が効率的なんじゃなくて」「イネスさん」

またもやいつの間にか後ろに。

やっぱりボソソジャンプをマスターしたのでは？

「映像データだけではなく分析データだって欲しい訳じゃない。

別に遠距離からでも保存は出来るけど、やっぱり現地の方が精度は良いし。

とにもかくにも、監視が目的なら逃げようとしなのはおかしいって訳ね」

「ええ。その通りだと思います」

「分かっているのなら候補から消せばいいじゃない」

「万が一がありますから。逃げないのは回収させた後、生身のパイロットを狙う為、とか」

「・・・性質が悪いわね。でも、ありえない話ではないわ」

「はい。監視しつつ、データを手に入れられて、うまくすれば危険人物をも暗殺できる」

「向こうにとっては良い事尽くめて訳ね」

「ええ。だからこそ、アキトさんの提案には感謝です」

「そうね。行動不能にして、向こうのデータだけもらえるならそれ以上の事はないわ」

「はい」

「それにしても色々と考えてるのね」

「まあ、備えあれば憂いなしといいますが。臆病ですから」

「ま、過信して油断を招くよりは何倍もマシよ」

「アハハ」

「一応、フォローしてくれたのかな？」

『回収したぞ』

「お疲れ様です」

『ああ。とりあえず格納庫の方へ運んでおいた』

「分かりました。すぐに向かいます」

『一応、外側からは潰しておいたが、まだ不安だからな。内側から機能を停止してくれ』

「了解しました」

ソフト面で停止させないと怖いですからね。

「艦長。ちょっと行ってきます」

「はい。後で報告御願いします」

「了解です」

さてっと、向かいましょうか。

「これだ」

「ありがとうございます」

アキトさんに指し示されてバッタのもとへと向かう。

それまでは一応危険という訳でパイロットや整備班には隠れていてもらった。

まあ、銃口側にいなければ万が一もないだろうけど、一応ね。

「機能停止つと」

いやあ。バッタはソフト面のブロックが貧弱で助かります。

あつという間に制圧してしまいましたよ。アッハッハ。

「もう大丈夫ですよ」

その言葉をきっかけにぞろぞろ集まってくる連中。

「それで、何でこいつを回収させたんだ」

「奇妙だったから、こいつ。何かしらの意味があるんじゃないかなと」

再びコンタクト。

何かしらのデータが……。

「んなもんあるのかねえ？」

「ま、なかったらなかったでいいんじゃない？」

「そうね。別に問題ないわ」

「はい。あつたら良いぐらいの気持ちでいいかと」

「とりあえず、早くして欲しいんだけど」

はいはい。

「えっと・・・」

お、あつた、あつた。

「ありました。とりあえず映像データらしいので流しましょう」

バッタの背中から映像が飛び出して空中に。

今更ながら、3D技術って凄いな。

『この映像を見ているという事は無事に辿り着けたという事でしようか』

あ。ケイゴさん。

「誰だ？ こいつ」

「この人はカグラ・ケイゴさん。神楽派の代表の息子さんです」

「お、って事は向こうの和平派からの連絡って事だな」

「はい。そうなります」

やっぱり、そうだったか。

ひとまず安心して奴だ。

『こちらの不手際でご迷惑をおかけして申し訳ありません。』

連絡の取りようもなく、何度も襲撃をかけるような真似をして申

し訳なく思っています』

「それじゃあ地球帰還後の戦闘は全部連絡を取る為だったって事が
よ」

「紛らわしいなあ。おい」

でも、仕方のない事なんだよな。

バツタ単体でいたら確実に怪しいし。

違和感なく、連絡するならこういう形でやるしかない。

要するに、今までもずっと連絡を取ろうとしてくれたって訳だ。

もっと早く気付けてればって思う。

『こうして強引な連絡しか取れなかった事から分かるように、
残念ながら約束していた回線への接続は失敗に終わってしまったいま
した。

繋ごうとする度に妨害があったからです。所属不明でしたが、恐
らく草壁派でしょう』

やっぱり妨害があったのか。

『急な話であり、そちらの都合を聞かずにで大変申し訳ないのです
が、

妨害工作が繰り返される以上、草壁派にバレずに極秘で接触する
しかありません。

そちら側の移動時間などを考慮し、勝手ながらこちらで日時を決
定させて頂きました。

その決定を付属データの方に乗せましたので、

そのデータ通りに所定の場所まで来て頂けないでしょうか』

「付属データ？」

「ああ。多分、これです」

もう一つのディスプレイを展開。

しかし、嚴重なロックだったな。

バテてはならない最も重要なものだから仕方ないか。

これは俺のソフト面の扱い、所謂ハッキングの腕を信頼していたという事だろう。

・・・なんか複雑な気分だ。

「地球近海って所か？ まあ、行くのには割と時間が掛かるが」

「それでも俺達にとっては近い方だろうよ」

「まあ、向こうは便利な移動方法があるし遠くても大丈夫なんだろう？」

「しかし、そこに着くのに一週間ぐらいは掛かるんじゃないか？」

「だからだろ。日時指定」

「一応、所定の時間は3月の24日って事で余裕はあるわな」

「移動時間を考慮してって言うてるんだから、多めに取ってあるんだろ？」

「到着次第こちらから接触しますだつてよ」

「・・・なあ、これって畏じゃねえのか？」

「確かに。その可能性もなくはないよな」

「おう。必ずしも確実にこいつが言ったとも限らないんだろ？」

「捏造つちゅう訳か？」

「怖いな。畏だつたりしたらよ」

・・・その点も考慮しなくちゃならないか。

整備班の皆さん、ご意見ありがとうございます。

『そこで落ち合い、今後の話し合いを行いたいと思います』

両派閥のトップ同士の会談か。

出来る事ならば実現したいけど、畏である事を考慮すると・・・。

「コウキ。残念だが、その日はちょうどミスマル司令の演説の日だぞ」

「え？ 正式に決まったんですか？」

「ああ。昨日、司令から連絡が来てな」

・・・ミスマル司令は当然演説を優先しなければならない。そうになると、ミスマル司令をその場所まで送る事は出来ないな。移動時間とかも考えて。さて、どうするか。

『この事を和平派のトップの方にお伝え下されると幸いです』

そうだよな。トップには報告しておかないと。

しかし、用心してるなあ。ケイゴさん。

既にトップである司令と接触してるのに、隠す為に知らない振りなんかしてるし。

俺との回線も約束のとか言って誤魔化してるしね。

所謂、必要最低限の情報しか載せず、重要なデータは嚴重にロックって奴。

いやあ。流石に色々と考えてますね。

必ずしも草壁派に拾われて漏洩しないと限らないし。

秘密だったもんな。ケイゴさんが極秘で地球に来てた事。

ロックされたデータさえ露見しなければそれほど影響はない。

・・・接触を図っているって事はバレてしまうだろうけど。

まあ、そんなのはとくに知っているだろうからやっぱり問題はないな。

「とりあえずミスマル司令に相談したいと思います」

罷とか色々考慮しなくちゃならないし……。

「ああ。それが良いだろう」

「とりあえずデータをコピーして艦長と司令に提出しましょう」

「そうだな。そうしよう」

うん。まずはそれが最優先かな。

『また、ナデシコがメッセージを受け取った証、かつ、了承の返事として、

次回の戦闘時、チューリップを破壊する前に捕獲したバツタを送って頂きたい思います』

まあ、受け取ったって事を知らないと困っちゃうだろうしね。

「了解つと」

途中で誰かしらに拾われたら困るだろうからデータは全削除だな。とりあえずこつちには今の映像を保存したデータがある訳だから問題ない。

向こうは向こうで自分達が送ったのだから理解してるだろうし。

『最後になりましたが、これを機に両陣営が歩み寄れる事を願っています。』

強引な方法で大変申し訳ありませんでした。それでは、私はこれで失礼させていただきます』

ありがとう。ケイゴさん。

なんだか希望が見えてきた気がします。

おし。今まで連絡が取れなくて不安だったけど、ようやく連絡が来

た。
急だけど、会談もセッティングできたし、これで足並みを揃えられる。

ミスマル司令は流石に厳しいだろうから、？2のムネタケ参謀にでも御願ひするかな。

申し訳ないけど、大切な日だから、司令は諦めてもらっしかない。

「火星の方への報告は会談後すぐにしたいから・・・」

参謀はナデシコで送っていくとして、俺とアキトさんは火星の方達の所にいるとしよう。

司令の演説後、すぐに火星の方達を説得した方が納得してもらえ気がするし。

おお。なんか色々と明確なビジョンが見えてきたな。

更にやる気が出てきた。

今から大体二週間後の3月24日が勝負か・・・。

とりあえず、火星側で誰かしら味方を作っておこうかな。

出来るだけ求心力のある人を。

おっしや。和平提唱に火星再生機構の発足などなど。

やる事はまだまだたくさんあるぞ。

気合入れて頑張るとするか。

第六十五話（後書き）

真実か、畏か。

読者様に意外とと思って頂けるような展開にしたいと思います。

あまり話すと自分短慮ですからネタバレしそうなので、

この辺りにしておきます。

次回を楽しみにして頂けると光栄です。

第六十六話（前書き）

久しぶりに長くなりました。

ちなみに、前話の伏線回収ではありません。

忘れられていたかもしれない大事なキャラクターの話です。
急展開ですけどね。

第六十六話

「……ふむ。良くやってくれた。マエヤマ君」

「はい。しかし、罨という可能性も……」

「もちろん、承知している。だが、良い機会でもあるだろう」

ケイゴさんから連絡が来た次の日。

早速、艦長の許可を得て、俺とアキトさんと司令のもとへと赴いた。もちろん、もし戦闘があればバツタを送り返すよう御願ひしてある。以前は機体の受け取りと見学だった為に行って帰りますだったが、今回は一日単位で休暇を取れたので、是非ともやっておきたい事がある。

いや。やらないといけない事……かな。

「それに、昨日提出してもらったデータを解析したが、間違いなく本人である事が証明された」

「そうですか……」

それなら安心……かな？

一時期この基地にケイゴさんはいた訳だし、声音パターンとかも保存してあったのかも。

後は映像の差し替えがないかの確認とそのパターンの照合をするだけだもんな。

差し替えればどれだけ精巧に行つてようとこの時代の技術なら見分けられる。

うん。とりあえず罨ではない……とまでは分からないけど、

この映像が確かにケイゴさん自身であるという事は証明された。場所と日時のデータはかなり嚴重だったし、問題ないだろう。うん。

「ご苦労だった。ひとまず休憩がてら食事を取ってくると良い。食事を終えたら、もう一度ここに来て欲しい。話したい事があるのぞな」

話したい事？ 何だろう？

まあ、後で分かるからいいか。

気にしても仕方ないし。

「分かりました。それでは失礼致します」
「失礼します」

バタンツ。

司令の執務室から退室する。

しかし、昇進したのに相も変わらず質素な部屋。

まあ、司令らしいといえば司令らしいんだけどね。

「とりあえず食堂へ向かおうか」

「はい。案内します」

「頼む」

さて、食堂ならちょうど良いな。

今日、どうしてもしたいもう一つの用事。

それはカエデと話す事。

先日、この基地に赴いた際、カエデに会おうとも時間が取れずに申し訳ない事をした。

今では気丈に振舞っているとしても、きっとまだケイゴさんの事で

悲しんでる。

司令によつて既に聞かされているかもしれないけど、俺の口からきちんと言つてやりたい。

ケイゴさんはまだ生きてるんだ、と。

まあ、マリア嬢の事は話さなくてもいいだろう。うん。

ともかくにも、カエデにきちんとケイゴさん生存を話してやりたいんだ。

悲しい事ばかりが続いていたカエデ。

だから、少しでも元気になれるような嬉しいニュースを教えてください。

それに、久しぶりにあいつの和食も食いたいし。

「ここが食堂です」

「ああ」

食堂に到着つと。

とりあえず注文を先に済ませてしまおう。

「アキトさんは何を？」

「日替わり定食で構わん」

「そうですね。それなら、席を取っておいて下さい。俺が取ってきますよ」

「そうか。すまん」

「いえいえ」

さて、カエデは食堂にいるよな。

えつと……。

あれ？ いない？

今日は休みなのか？

「おばちゃん」

「おお。コウキ君じゃないか。久しぶりだね」

「久しぶり。相変わらずお元気そうで」

「元気だけが取り柄だからね」

ふむ。相変わらずパワフルだぜ。

「今日はカエデどうしたの？ 休み？」

「え？ 聞いて・・・ないのかい？」

「え？ 何が？」

キッチン内にいる他のおばちゃん達と顔を見合わせるおばちゃん。どういいう意味だろうか？ 聞いてないって・・・。なんか嫌な予感がするんだが・・・。

「カエデちゃんはあれから・・・」

「あれから？」

不吉な予感。

「・・・ううん。ごめんなさい。おばちゃんの口からは言えないわ」

「・・・気になるんですけど・・・。」

「えっと・・・」

「本当にごめんなさい。本人の口から聞いて」

「よく分からないけど、とりあえずそうする。えっと、カエデって今どこに？」

「多分・・・訓練室」

「・・・訓練室？」

どうしてカエデが訓練室に？

「……………」

悲しそうに俯いて何も話そうとしないおばちゃん。

「……………これ以上は聞いても無駄か。」

おばちゃんの言う通り、本人の口から聞くとしよう。

「分かった。ありがとね。おばちゃん達」

「……………コウキ君。カエデちゃんを支えてあげて」

「……………分かっている。それじゃあ」

俺とアキトさんの分の日替わり定食を持ってアキトさんの所へ向かう。

「……………どうかしたか？ 暗いぞ」

「ええ。ちよつと……………」

心配されてしまった。

「良く分からんが、話してみてくれ。話すだけでも気が楽になるぞ」

ありがとございませす。アキトさん。

「はい。えっと、ここには火星で救出した俺の友人がいるんですけど」

「ああ。あの一時期食堂で働いていた女の子か」

「そうです。彼女はコックとしてここで働いていたんですが、姿が見えなくて」

「単純に休みなだけじゃないのか？」

「それなら良いんですが、何故か訓練室にいるとかで……」
「訓練室？ コツクが訓練室で何をしてるんだ？」

「……分かりません」

本当にカエデはどうしてしまったんだろう……。

「……やはり本人に直接会って聞くしかないだろう。」

司令との用事を済ませたら、すぐに会いにいったらやれ」
「はい。そうします」

……カエデ。

お前、もしかして……。

「さて、慌しくてすまないね」

「いえ。それで、話したい事とは？」

「ふむ。マエヤマ君」

「はい。何でしょう？」

話したい事って俺にか。

何だろう？ 何かあったわけ？

「以前君と約束した事があったね」

「約束？」

「うむ。私が極東方面総司令官となった時、

カエデ君をナデシコに戻すという約束だよ」

・・・カエデ。

「・・・はい。確かに」

「どうかしたのかね？」

「あ、いえ。なんでもありません」

「ふむ。まあいい。入ってきたまえ」

「・・・」

言葉と共に扉が開く。

「カエ・・・デ？」

司令の隣まで移動するカエデを呆然と見詰める。

・・・あれは本当にカエデか？

手入れを欠かさず綺麗だった亚麻色の髪は乱れ、

眼の下には隈、頬を削がれ、随分とやつれていた。

それなのに、その眼はキラキラと・・・。

そう、あれは・・・。

「・・・昔の俺を見ているようだな」

憎しみに囚われた者の眼。

「・・・」

ひたすら無言のカエデ。

あいつの視界に俺は・・・映っていない。

「約束通り、カエデ君はナデシコに戻す。

だが、本人の強い希望でコックではなく、パイロットとしてだ
「パ、パイロットですか!？」
「……うむ」

苦悩に満ちた顔の司令。

そんな顔をされたら、追求できない。

「テンカワ君。リーダーパイロットとして、彼女の面倒を頼む」
「……はい」

「さて、木連和平派との話し合いだが、あいにく私には予定がある」
「はい。聞いてます」

「その為、改革和平派のもう一つの顔と言えるフクベ提督に私から
御願いしておいた」

「フクベ提督ですか。分かりました」

「ナデシコは五日後、予定の日時に間に合うよう地球を出発してく
れ。」

私の権限でビックバリアは解除しておこう。障害なく目的地へと
向かえる筈だ」

「了解しました」

「また、その後だが、地球帰還後、以前より計画していたナデシコ
の強化を行う」

「それでは、明日香の方の準備は終わったのですか？」

「うむ。全体的な性能向上を図るつもりだ」

「分かりました。お願いします」

……俺が呆然としている間に話が終わっただけらしい。

どれだけ俺がカエデに視線を合わせようとこいつは俺を見ようと
しない。

いや。俺だけじゃない。

あいつの視界はもっと別の何か、ただそれだけしか映っていない。

俺は・・・遅すぎたのだろうか？

「以上だ。・・・マエヤマ君。少しだけ残ってもらえるか？」

「・・・・・・・・」

「コウキ」

「あ、はい。何でしょう？」

「コホン。個人的に話をしたい。少し残ってもらえるだろうか？」

「・・・了解しました」

個人的な話。きっとカエデの事だろう。

「うむ。テンカワ君。すまないが・・・」

「はい。キリシマ。付いて来い」

「・・・・・・・・」

退室していくアキトさんと無言でそれに付いて行くカエデ。

ボタンツ。

「司令！」

退室したと共に司令へと駆け寄る。

あれは、あれは一体何なんだ？ と。

カエデは一体どうしてしまったんだ？ と。

「すまない。私の判断の遅さが原因だ」

「カエデは一体・・・」

「彼女がおかしくなったのはカグラ君が消えたのがきっかけだ」

ケイゴさんが？

「一度、君と彼女を会わせただろう？」

「はい。ピースランドの時ですよ」

「ああ。それから数日間はいつも通りだったらしい。悲しんではいたが……」

ピースランド。

カエデを慰める事も出来ず、心の負担を軽くしてやる事も出来ず。ただ己の力不足に嘆くだけだった日。

「それから数日、部屋に閉じ籠っていた彼女が表に出てきた時、既に……」

「ああなっていたと？」

「うむ。すまない。私をもっと早く対処していれば」

「いえ」

悪いのは俺だ。

俺があいつに何もしてやれなかったから。

だから、あいつは一人で苦しんで、そして……。

「彼女はきつと憎しみの念に囚われている」

「……はい」

「恐らく、彼女は木連を許さないだろうな」

「……」

「個人の感情としては納得できる。だが、ここは改革和平派の本拠地」

「カエデの感情は邪魔なだけです」

「……すまない」

「いえ」

当然だ。

和平を結ぼうという集団の中にひたすらに憎しみを抱える人間は邪魔でしかない。

「しかし、かといってナデシコに乗せるのも・・・」

「ただでさえ、これから和平派と言えど木連と接触するのにカエデがいたら・・・」

「暴走するかもしれん」

憎しみは周りを見えなくする。

カエデがどんな行動を取るか。

容易に想像出来た。

「それならば、何故？」

「一つは君がいるからだ。マエヤマ君」

「私ですか？」

「うむ。キリシマ君が現段階で唯一心を開いているのは君と云っていい。」

君と同じ場所にいる事で彼女は心の安定を取り戻すかもしれん」

「それは・・・」

買い被りです。

事実、俺はあいつに何もしてやれなかった。

ああなつてしまった原因は俺にもある。

「それに、木連和平派にはカグラ君もいる。

実際にカグラ君と会う事で考えを改めてくれるかもしれん」

ケイゴさんを失った事がカエデをああしてしまったのならあり得るかもしれない。

でも、これは一種の賭けではないだろうか？

「心配なのは分かる。不確定要素があり過ぎるからな」

「はい」

果たして、話し合いの場にケイゴさんが現れるだろうか？

果たして、ケイゴさんを会うだけで彼女は救われるのだろうか？

そもそも木連と聞いて暴走する可能性もある。

「今後のナデシコの活動を彼女は邪魔するかもしれん」

「はい」

「だが、彼女を救ってあげて欲しい。」

ナデシコならそれが出来ると信じている」

きつとナデシコの皆なら、カエデを救ってくれる。

そう信じたい。そう確信したい。

それなのに、どうしてこんなにも胸騒ぎがするんだろうか。

これは・・・ナデシコでも無理だと俺が無意識に思ってしまったという証拠だろうか。

「君達に負担を掛けるようで申し訳ないが、どうにか御願いできな
いだろうか？」

俺なんかに頭を下げる司令。

本当に司令は良い上司だよ。

こんなにも部下の為に一生懸命になれる。

たかが末端の、しかも元コックという人間の為に。

立場も年も下の俺に頭を下げてくれている。

「・・・分かりました。司令。ありがとうございます」

カエデの為にここまでしてくれてありがとうございます。

「厄介払いをしたように映るだろうね」

「……いえ」

「いや。事実だ。私は不安要素を取り除く為に厄介払いをしたのだ」

「もういいです。司令。そう自分を責めないで下さい」

「……すまない。後は君達に任せる」

「はい」

一礼して、司令の執務室から退室する。

「すまない」

頭を下げ続ける司令の謝罪の声を背に浴びながら……。

「……カエデ」

「……」

アキトさんとカエデは基地内の格納庫で俺を待っていてくれた。

このままナデシコが待機している基地まで戻るらしい。

「……コウキ」

「アキトさん」

アキトさんが俺の肩に手を置いて首を横に振る。

今はまだ放っておけ。そういう意味だろうか？

「ひとまずナデシコに戻ろう」

「・・・はい」

へりに乗り込む俺達。

カエデの機体はナデシコにあるリアル型をあてがうらしい。

「提督は何とおっしゃってた？」

後ろの席に座るカエデに聞こえないようにアキトさんが問いかけてくる。

「カエデの事でした。ナデシコで彼女を救ってあげて欲しいと」

「・・・そうか。コウキ。お前は彼女の傍にいてあげた方が良い」

「しかし、俺には火星再生機構の・・・」

「それは俺がやっておく。代表だからな」

「・・・アキトさん」

「全てをお前に任せるつもりはないさ」

「・・・じゃあ、御願います」

「ああ。火星出身で力を貸してくれそうな者と連絡が取れたしな」

「いつの間に・・・」

「俺とて訓練ばかりしている訳じゃないさ。やる事はちゃんとやっ
てる」

「・・・そうですか」

「コウキ。お前まで元気を失くしてどうする。」

お前がそんな状態では彼女を救う事は出来ないぞ」

「・・・分かってるんですけどね」

「はぁ・・・。これはミナトさんに御願するしかないな」

振り返りカエデを見詰める。
カエデはただひたすらに前を見続けていた。
・・・俺はどうすればいいんだろう？

それから三日後、碌にカエデと話す機会を得る事無く、
改革和平派の代表としてフクベ提督がナデシコに合流した。

S I D E M I N A T O

「・・・コウキ君」

眼の前には心労からか、眼の下に隈を作っているコウキ君がいる。
あのカエデちゃんが帰ってきた。

それは喜ばしい事だろう。

でも、まさか彼女がああまで追い詰められていたとは・・・。

カエデちゃんはナデシコ到着後、殆どをシミュレーション室で過ごしている。

これは決して適正検査やパイロット同士の共同訓練とかではない。
それだったらどれだけ良かった事か・・・。

カエデちゃんは闇雲に自らを痛め付けているのだ。

それこそ寝る間も惜しまず、いや、寝る事など無意味と言わんばかりに。

碌に寝ないから疲労は溜まる一方。

碌に食べないから身体はやつれていく一方。

それなのに、倒れもせず、ひたすら自らを苛め続けている。

こんなんじゃ、彼女は体調を壊して死んでしまう。

でも、それを止める術がないの。

コウキ君がどれだけ説得しようと聞く耳を持たず、

無理矢理拘束しようものなら暴れる始末。

今では強引に薬を打って休ませている程。

それでも、眼を覚ませばすぐさまシミュレーション室へと向かう。

既に拘束するという案まで出ているぐらいだ。

それなのに彼女が拘束されないのはコウキ君が懇願しているから。

俺がどうにかするって、毎日のように……。

その結果、まるでカエデちゃんのが乗り移ったかのように、

コウキ君の表情もみるみる険しくなっていくってしまっ……。

「やっぱり拘束するしかないのよ」

コウキ君の為にも、カエデちゃんの為にも、

今はこれが一番良い方法な気がする。

このままじゃ、二人とも……倒れちゃう。

「……コウキ君」

「……心配ありません。俺が……」

「いい加減にしないで。このままじゃ」

「ミナトさんは黙っててください!」

ビクッ!

「……コウキ君」

「俺が! 俺があの時、あいつとちゃんと向き合ってたっていれば・

「・・・」

「貴方は出来る限りの事をした。そうでしょ？」

「・・・それでも、結果が伴わなければ意味がないんですよ」

コウキ君も相当追い詰められてる。

今までの余裕が全て吹き飛んでしまったかのようで・・・。

荒れる一方。

「・・・すみません。ミナトさん。八つ当たりだって事は分かっています」

「・・・コウキ君」

「でも、どうにかしてあげたいんです」

「・・・分かったわ」

「・・・すみません」

トボトボと覇気のない歩みでブリッジから退室していくコウキ君。

・・・言いたくないけど、これで何かあったら・・・。

「貴方を恨むわよ。カエデちゃん」

今にも倒れそうなその背中を私は眺める事しか出来なかった。

S I D E O U T

「すみません。ミナトさん」

・・・最低だな。俺。

心配してくれているだけなのに、怒鳴ったりして。

「でも、俺がどうにかしないと」

司令にも頼まれた。

それに、何よりあいつをそのままにしておけない。

「少しでいい。少しでもあいつと話せれば」

あいつが何を思い、何を考えて今を生きているのか。
それを俺は知りたい。

「シミュレーション室」

ちょっと前までパイロット達が向上心を持って訓練に励んでいた場所。

でも、今では・・・全てが暗い部屋。雰囲気も、状況も。

「・・・コウキか」

「・・・アキトさん」

心配そうにカエデがいるシミュレーターを見詰めるアキトさん。
いや。アキトさんだけではない。

パイロットの全員がただカエデの事を見ていた。

「・・・あいつ、良い腕してるな」

「・・・なんか鬼気迫るって感じ」

「・・・憎しみに囚われているだけよ。昔の私のように・・・」

「・・・なんか素直に褒められねえな」

「・・・心配です」

「・・・美人が台無しだよ。本当に」

誰もが心配そうに・・・。

「ずっと?」

「ああ。朝からだ」

「・・・カエデ」

本当に倒れちまうぞ。カエデ。

「あいつもそうだが、お前も休んだ方がいい」

「・・・俺は別に・・・」

「お前、鏡見てるか?」

「ガイ」

「酷い顔してるよ」

「ヒカル」

「私もそう思います」

「・・・イツキさんまで」

そんなに酷いのだろうか?

「ここは俺に任せて後は」

ウィーンウィーンウィーンウィーンウィーン!

敵襲?

「アキトさん」

「ああ。パイロットは全員ブリッジへ向かえ」

「「「「「了解!」「」「」「」

返事と共に駆け出すパイロット達。

「カエデ」

「・・・える・・・と・・・たきを」

ぶつぶつと何を呟いてるんだ？ カエデ。

「・・・闘える。・・・やっと。・・・皆の仇を・・・」

・・・カエデ。

「コウキ！ 何をしている!?!」

「あ、はい」

「・・・」

「おい。カエデ！ そっちはブリッジじゃ

「

ダッ！

そんなに闘いたいのかよ!?! カエデ!

「コウキ!」

クソッ!

「それでは、予定通りに捕獲したバツタをチューリップ経由で送り出します。」

その後はいつものように殲滅戦へ移行。皆さん、遠慮なくやっちやっつけてください」

「今回出撃するのは？」

「はい。そろそろ実戦で慣れさせたいので、特殊隠密型と物量射撃型を実戦配備し」

シュンツ！

「状況はど」

『おい！勝手にいつちまったぞ！』

俺が到着すると同時に慌しくなるブリッジ。
どうしたんだ？

「え？」

『誰が乗ってやがる！？』

ここにいないパイロットなんて一人しかいない。

「カエデ！」

モニタに映るのは恐らくカエデが乗る……。

「物量射撃型じゃねえか！」

誰かが叫んだ。

『……………』

出撃し、すぐさま全方位にミサイルを放つ物量射撃型。
そのミサイルはナデシコすらも掠め、視界一面に広がったバツタを破壊した。

「ちゃんと狙いやがれ！」

碌に照準を付けずに追尾任せで発射したんだ。
こうなるのは当たり前。

カエデはナデシコがどうなるうとも関係ないんだ。
眼の前の敵さえ殲滅できれば・・・それでいい。

「・・・カエデ・・・。お前は・・・。」

そんなにも復讐がしたいのか・・・。

「艦長！」

「はい！ アキトは特殊隠密型に。他のパイロットはリアル型ですぐに出撃してください」

「了解！了解！」「了解！」「了解！」「了解！」

「艦長！ 俺がカエデを止めます」

それが俺の仕事だ。

「分かりました。マエヤマさんはキリシマ機を回収後、すぐに帰艦してください。」

その後、バツタをチューリップまで届ける役を担ってもらいます。
よろしいですね？」

「了解」

カエデ。待ってる。
すぐにお前を止めてやる。

「カエデ！」

視界一面に広がる空とバツタ。
そして、少し離れた場所に物量射撃型。
カエデはそこか。

「ハア！」

リアル型と言えど、その最高速度は高機動戦フレームをも超える。
自身が現段階で出せる最高速度でカエデのもとへ。
急がないと味方にまで被害を出してしまう。

『来ないで！』

クッ。

俺にまで撃つか。カエデ。
だが……。

「その程度、今まで何度も味わってんだよ」

時に破壊し、時に避け、確実に距離を詰めていく。
今まで経験してきた実戦の数はカエデとは比にならない。
これ以上の無茶も俺は経験している。

当たってやるかよ。

「カエデ！」

カエデに近付き、後ろから身体を押さえる。

「何やってるんだよ!?!」

回線を繋ぐ。

モニタに映るカエデは今までの無表情が嘘かのように荒れに荒れていた。

キラキラと前を見詰めるその姿は以前のカエデを微塵も感じさせない。

「私は許さない！ 父さんを、母さんを、妹を、家族を奪った木連を。」

私は許さない！ 友達を、私の全てを奪った木連を。

私は絶対に許さない！ ケイゴを・・・ケイゴを奪った貴方達を！」

「カエデ！ お前が憎しみを持つのは分かる。」

お前が復讐を考えるのも痛い程分かる。

だが、お前はそんなに弱くなかっただろう。

きちんと木連と向き合うつてそう言つてたじゃないか！」

「煩い！ そんなの嘘に決まってるでしょう！」

「・・・カエデ」

「向き合つたつて、奪われたものが返ってくる訳じゃない！」

「それでも！」

「むしろ、余計だったのよ。そのせいで私は木連を恨めなかった」

「木連を恨んだ所で何も変わらないだろうが！」

「変わる！ 私は家族の仇が討てた！」

「仇を討つたつてお前の大切なものが返ってくる訳じゃない！」

『それでも、恨んでた方が何倍も楽だった。』

木連の生い立ちなんて私にとつてどうでもよかつたのよ。

余計な感傷。そうでしょ？　なんで私が仇の都合を考えないといけないの！？」

「恨んだら恨まれる。そうやって恨みは増え続ける！　だから、お前には向きあつて」

『どうして！？　ねえ、どうして！？』

どうして貴方はいつもそうやって私に我慢させるの！？

私は奪われたのよ。何もしていないのに。木連が我慢すればいいじゃない！」

「それはお前の都合だろ！？」

『ええ。だから何？　私が私の勝手を貫いて何が悪いの！？』

「それじゃあお前はいくらたつても憎しみから解放されないじゃないかい！」

『別に構わないわ。私がどうなるうと』

「もっと自分を大切に」

『私はもう失うものなんて何も無いのよお！』

・・・泣いていた。

ギラギラしていた眼は既に鳴りを潜め、今では精一杯涙を堪えているだけ。

・・・ただのか弱い女の子がそこにはいた。

『・・・ぐすつ・・・もう私はどうなつても・・・』

「カエデ。良く聞いてくれ」

『・・・コウキ・・・』

「ケイゴさんは生きている」

『・・・え？』

「俺が保証してやる。ケイゴさんは生きてるよ」

「・・・いいわよ。嘘付かなくても。だって、貴方も言ってたじゃない。死ぬって」

「全て話してやる。だから・・・来い」

「・・・」

「虚しかったんじゃないか？」

「・・・え？」

「初めて出撃して・・・敵を撃破して・・・どうだった？」

「・・・」

「俺は復讐なんて考えた事もない。だから、お前の気持ちは完全には分かってやれない」

「・・・コウキ」

「でも、これだけは言える。

お前は失うものなんてもう何もないと思ってるかもしれないが・

「・

「・・・」

「俺はお前を失ったら悲しいぞ。カエデ」

「ッー」

「もちろん、俺だけじゃない。ナデシコの皆もケイゴさんだって悲しむ」

「・・・私は・・・」

「お前は言ってくれたよな。俺の事を友達だって」

「・・・ええ」

「それなのに、どうして何もないなんて言っただよ？」

「・・・全て失ったと思ってた。でも、ケイゴは生きてて、コウキもいる」

「ああ。失ったものも確かにあった。でも、お前はまだ、全てを失った訳ではないだろ？」

「・・・うん」

「だから、俺に付いて来い。全部話してやるから」

「・・・うん、うん」

確かにお前は不幸の連続だった。
でも、それだけじゃなかっただろ？
ケイゴさんは生きている。
きっと、いや、絶対にお前を幸せにしてくれる。
だから、自棄になるなよ。カエデ。

数時間後、戦闘は完全に終了した。
全ての作戦、予定を終え、余念なく。
そして、ブリッジに集まるパイロット勢の中には、
憑き物が落ちたかのような、いつもの、昔のカエデの姿があった。

第六十六話（後書き）

久しぶりの登場、キリシマ・カエデ。

早く出したいと思いつつもきつかけが掴めず、ようやくです。

ケイゴを失う事が彼女の復讐心を再燃させてしまった。

でも、きつかけがあれば立ち直る。彼女は強い女の子です。

復讐なんて事は僕自身考えた事がないので、とても描写は難しかったです。

これだけで復讐を忘れられるのか？

そう聞かれたら分かりませんが、私はこれで良いと思っています。

急展開でしたが、お楽しみいただけただけでしょうか？

それでは、次話もよろしく御願います。

第六十七話（前書き）

・・・駄目だ。

納得できる文章が書けない。
非常に不調です。はい。

第六十七話

「・・・そうか」

「どうした？ ケイゴ」

「バツタが返ってきたとの報告を受けた」

「って事は無事に連絡が取れたって事か？」

「恐らくは・・・。だが、全てのデータが消されていた」

「・・・俺達から送られてきたデータだからじゃないのか？」

「なるほど。漏洩を防ぐ為の作業という訳か。」

俺達は知ってる訳だから消しても問題ないしな」

「ま、それまでが長かったけどな」

「ああ。しかし、都合の悪い日にセッティングしてしまった」

「問題ないだろ。別にトップ同士の会談という訳でもないんだから」

「そうだが、ミスマル司令の演説の日に被るじゃないか」

「大丈夫だろ。用事を一日で済ませればチューリップで送ってやれ

る」

「確かに、それならギリギリ間に合うかもしれないが・・・」

「とりあえずは向こうの和平派がここまで大きくなつた事を祝そう

じゃないか」

「・・・そうだな。・・・何もなければいいが」

「今から心配しても仕方ないだろ？」

「・・・ああ」

「そう、私が知らない間にそんな事があつたんだ」

カエデをナデシコへ強引に連れて帰った後、予定通りバツタを送り返した。

「一応、指定通りにチューリップに投げ込んだが……。これで良かったのだろうか？」

「一応、武装は解除して推進装置だけ直しておいたけど……。不安だが、信じるしかない。」

その後、カエデのコミュニケーション反応を辿り、カエデのもとへと向かう。あいつは格納庫近くのベンチで物思いに耽っていた。

「よお」

「……ええ」

「とりあえず、隣、いいか？」

「……うん」

「それじゃあ、ケイゴさんについて話すよ」

「ええ。御願い」

……

ゆっくり順序立ててケイゴさんについて説明する。

「すぐに知らせてやれなくて悪かったな」

「いいわよ。私も会おうとしなかっただろうし」

「……そうか」

それ程、追い詰められていたんだな。

本当に悪い事をした。

「……うん。でも、悪い事ばかりじゃなかったかな」

「どうしてだ？」

「だって、もしかしたら、ケイゴと一緒に戦えるかもしれないんですよ?」

訓練してた意味があったって事だろうか?
でも……。

「ケイゴさんからしてみれば一緒に戦わずに避難してもらいたいんじゃないか?」

「それは待った事がないから言える事だわ。

本当に心細いのよ。待つてるのって。

不安で不安で、まるで心が締め付けられるように痛むの」

待つ側か……。

でも、そうなんだろうな。

もし俺がナデシコに乗ってないでミナトさんだけ乗ってたら……。
考えるだけで胸が痛む。

「だから、鍛えたのもそんなに悪い事じゃなかったわね」

「……これから戦場に立つのか?」

「分からないわ」

分からない?

「どうしてだ?」

「復讐の為にって頑張ってきた訳じゃない?」

「ああ」

「でも、ケイゴが生きてるって知って、なんだか……」

「復讐なんてって思ったのか?」

「うん。木連に恨みがない訳じゃないわ。

家族を殺され、故郷を奪ったのは間違いなく木連な訳だし」

「そうだな」

俺にとってはミナトさんやセレス嬢を理不尽に殺されるって事だよな。

・・・そりゃあ許せないわ。

「そもそも不思議なのよね」

「不思議？ 何がだ？」

「ケイゴが木連人だって知って、普通なら裏切られたとか思っじゃない？」

まあ、思っても不思議はないわな。

「それなのに、私は全然そんな事を思わなかった。

裏切られたショックより生きててくれた嬉しさの方が勝ったっていうか」

お前・・・恥ずかしげもなく良くもまあ・・・。

「ベタ惚れって奴ね」

「ち、違うわよ。そ、そんなんじゃないわ」

「はいはい。それで？」

「うん。私なりに考えて、とりあえず答えは保留」

「そうか。俺としてはコツクのお前の方がらしいて思うけどな。それを決めるのは俺じゃない。お前が自分で答えを見つけないと」

「そうね。うん。色々と考えてみる」

「おう。とりあえず頭を下げる練習でもしておけ」

「え？ なんで？」

「勝手な出撃。味方への攻撃。幸い被害がなかったけど、大目玉だな」

「……ウキのせいにしていい？」

「駄目だ。謝れ」

「……ケチ」

ケチじゃない。

「一緒に謝ってやるから」

「こ、子供扱いしないで！」

「ガキなんだもん。お前。相変わらず成長してないし」

「これからのよおおお！」

懐かしいな。こいつとの絡み。

とりあえず、一件落着いて事で良いのかな？

もちろん、こっぴどりと絞られたけど。カエデの奴。

「それじゃあ、アキトさん。後はよろしく御願います」
「ああ。任せておけ」

それから二日後、ナデシコが神楽派との合流地点へと出発する日になった。

俺もアキトさんと共に火星再生機構の方に携わろうと思ってたんだけど……。

「お前はナデシコに付いている。

キリシマの件もそうだが、神楽派と接点があるのはお前だけだからな」

「でも、俺も発案者としての責任が」

「それは無事に話し合いを終えてから考えろ。まずは和平だからな」

「・・・分かりました」

「そんなに頼りないか？」

「はい」

「・・・直球だな。まあ、向いていない事は自覚している」

「でも、信じています」

「ふむ。それならば、信頼には応えねばな」

という訳だ。

本来ならカエデもそちらに出席させるべきなんだろうけど・・・。

「とりあえずケイゴに会わせなさい。とっちめてやるから」

強硬な姿勢で断念。

この件に関してはケイゴさんに丸投げだ。

責任感のある彼の事だから、しっかりと責任を取ってくれる事だろう。

・・・なんか違うような気もするけど・・・。

いや、僕は悪くない。悪いのはケイゴさんだ。うん。

「今回は戦闘行為が目的ではなく、移動のみなので・・・」

「うん。俺とセレスちゃんに任せて、二人はしっかりとアキトさんを」

「はい。アキトさんの事は任せてください」

「コウキの分は私達が埋める。アキトの事は任せて」

「・・・ルリちゃん、ラピス。そんなに頼りないか？ 俺」

今回、ルリ嬢とラピス嬢はアキトさんの付き添いとなった、という
か、した。

二人の協力があれば万全にこなせるだろうという俺達の総意で。
ルリ嬢は元少佐という事で割りとう強かだろうし、
ラピス嬢もアキトさんの相棒として如何なく力を発揮してくれる筈。
心情的にもアキトさんと離れたくないだろうしね。二人とも。

「リアル型を一機借りていくが・・・」
「問題ないと思いますよ」

今回の遠征では、特に戦闘になるような事はないだろう。
もし、あったとしても大したものではないと思う。
今のパイロットだけで充分護り切れる。

「セレスの事、御願いますね」
「ルリちゃんのお墨付きでしょ？」
「ええ。もう一人でも大丈夫です」
「なら、大丈夫だ。俺もちゃんとやるから」
「はい。御願います」

ルリ嬢とラピス嬢がいないのは若干心配だけど、
今回ぐらい安全な旅なら俺とセレス嬢だけでも充分に回せる筈だ。
行って帰るだけならむしろ俺達すらいらさないぐらいだし。
ま、オペレーター皆無が一番怖いからきちんと職務は全うしますけ
どね。

「それでは、ナデシコの事は任せたぞ。コウキ」
「はい。アキトさんこそ、火星再生機構の事、頼みました」
「了解した」

こうして、俺達は地球を発った。
和平への架け橋になれる事を願って……。

「そろそろナデシコから離れるべきかもしれないね」

「確かにそうね。もう乗ってる意味もなくなったし」

「まあ、最先端の情報が入ってくるって意味では今でも重要だけど」

「別にナデシコじゃなくても平気よ。集めればいいだけだもの」

「正論だね」

「もう私達で操れない以上、ナデシコは計画から切り離すべきよ」

「幸い、新しいのがそろそろ出来上がりそうだしね」

「ええ。ナデシコ以上のものが」

「当然でしょ。ナデシコなんて実験艦なんだし」

「そもそも、今の私達にナデシコに構ってる暇なんてないわ」

「そうだね。僕達も色々動かなくちゃいけない」

「クリムゾン、明日香、その他大手企業も動き出してる。」

これに乗り遅れたら今でさえ危ないネルガルは更に追い込まれて
しまっわね」

「クリムゾンは木連と本格的に手を結んだらしいよ。」

木連が勝利した暁には地球代表として遺跡に関われるんだってさ」

「甘い餌ね。そんなの嘘に決まってるじゃない。」

木連が勝利したら木連が独占してそのまま地球滅亡で終わるわ」

「随分とぶつとんだ発想だね」

「物騒な世の中だもの」

「それでも、やらざるを得ないんだよ。遺跡を確保する為には」

「遺跡の確保が今後を決定するものね」

「……多分、司令の演説で更に動き出す連中も増えるよ」

「まさか遺跡の事まで言うつもりなの!？」

「全てを曝け出すらしいからね。中小企業も動き出すんじゃない？」

「産業界全てを巻き込む大規模な技術戦争になるわね」

「それにしても美味しい所にいるよね。クリムゾンは」

「ええ。地球が勝つても木連が勝つてもとりあえず損はない」

「裏で動いてるから地球が勝つても何食わぬ顔で大企業として参加できる」

「既に後手に回ってるって訳ね」

「噂によると地球政府、連合軍の高官何人もクリムゾンに付いたらしいよ」

「まったく。地球を売ろうっていうの？」

「結局、人は自身が得をすれば何でもいいって事だよ」

「そいつらの狙いは何？ 徹底抗戦？」

「彼らの理想は両陣営が疲労し、戦力を失う事。そうすれば自由に動けるし、戦後も利権を持っていられる」

「戦争中は表には出ず、戦後に活動しようって魂胆ね」

「それは潰すからいいとして、問題は……」

「その連中と木連の間で利害が一致するという事」

「そう、お互いに徹底抗戦を目指している訳だ」

「和平に比べて徹底抗戦を訴えるのは簡単よ。恨みや憎しみを抱える人間を少し煽ってやればいいだけだもの」

「そういう事。ふう……。まるで予想が付かないよ」

「とりあえず、どう転んでもいいように準備を怠ってはいけないうて事ね」

「そうだね。はぁ……。気楽なパイロット生活ともお別れか……」

「さっさと本職に戻りなさいよ。ほら、書類、堪ってるのよ」

「……やっぱりパイロット続けようかな」

「・・・アカツキ一味、去る・・・か」

いざ地球を離れようという時、

まるで原作の、というか、今回もだけど、

ムネタケ提督のようにシャトルで脱出していきました。

そうする必要あったのかな？

なんか書置きには・・・。

『アディオス、アミーゴ』

直訳、さらば、友よ。

・・・変な奴。

そういえば、前に重役がどうたらこうたらって言ったな。

地球に帰ったらネルガルの協力を得る為に動いてみるか。

なんだかねで大企業だし、協力は欲しい。

右肩下がりネルガルが立て直す為には、

遺跡を確保するか、軍に協力してシェアを拡大するかの二つに一つ。

現実的にネルガルだけで遺跡を確保するのは難しいと分かっている筈だし。

・・・やっぱりこの線で攻めるのが一番有効的だよな。うん。

ひらすら軍に協力する利を唱えてやる。

「とりあえず・・・」

いなくなってしまうものは仕方がない。

現状でナデシコにいるパイロットはカエデを含めて七名。

俺は基本的にオペレーターとして活動するだろうから除いて六名に

なる。

六人ならちょうどリアル型とスーパー型でまかなえるな。うん。

「ま、今でさえ過剰戦力だし」

確かに六連や北辰、もしくは、カグラツキー派と対するには戦力不足だけど、

通常戦闘においては過剰戦力とも言えるナデシコとナデシコのパイロット達だ。

よくもこれだけ優秀なパイロット達が離れないで済んでるよな。

俺が上の人間だったらもつと色んな部隊にばらけさせるけど。

それだけナデシコが期待されてるって事なのかな？

まあ、僕は軍人じゃないからなんでも構いませんが……。

「アキトの野郎が帰ってくるまでは俺がリーダーだからな」

スバル嬢が盛り上がってるのはまあ、気にしない方向で行こう。うん。

「そろそろ……かな」

地球を旅立ってからそろそろ一週間。

確かに約束の場所に近付いてきてるんだけど……。

「反応ありませんね」

そろそろレーダーに映ってもおかしくないんだけど……。

「お。艦長、反応ありました」

「はい。映像を」

モニタに映像を映し出す。

とりあえず向こうがどういう状態なのかを確認する為にズームで。

「……艦隊ですね」

カグラツキの姿はない。

カトンボ級だっけか？ それが一隻。

それと名前は分からないけど恐らく有人艦が一隻。

最後に、艦隊の背後にチューリップがある。

計四隻の艦隊だ。

……チューリップは戦艦で良いのだろうか？

まあいいや。

「どうして艦隊で？」

話し合いするだけなら一隻だけでもいい筈。

護衛にはやりすぎじゃないか？

そもそもどうしてカグラツキじゃないんだろうか？

……疑問は尽きない。

「通信、来ました」

「回線、開いてください」

「了解」

モニタの映像を変える。

現れたのは軍人姿の青年。
・・・ケイゴさんではない。

『お初にお目にかかります。私は木連軍優人部隊所属スズキ・ジロウサブローと申します』

「ナデシコ艦長。ミスマル・ユリカです」

まずは自己紹介。
とりあえず怪しい所はない。

「この物騒な出迎えは一体何なのかね？」
フクベ提督が問いかける。

『申し訳ありません。此度の件ですが、木連の過激派に露見しまして・・・』

「その為の艦隊かね？」

『はい。チューリップの護衛を兼ねた為、このような形となつてしまいました』

「護衛？ それでは、チューリップは貴殿らの移動手段ではないと？」

『その通りです。これからナデシコには跳躍してもらいます』

「和平派がそこにいると？」

『はい』

「畏ではないのかね？」

『畏だなんて。私達の和平への想いは本物です』

チューリップで移動しろって事か？

・・・確かに襲撃が予想される以上、この場に留まるのは危険だ。
でも、果たして素直に信じていいのだろうか？

俺はこの場にケイゴさんがやって来ると思ってた。

それなのに、現れたのは誰とも知らない軍人。

もともとデータを送ってきたのは向こうだ。

俺は全データを消去した上で送り返した。

それなら、その間で露見する事はない筈。

露見したとしたらこちらにバツタが来るまでの間。

その間で露見したとしたら、果たしてそのままバツタが送られてくるだろうか。

もし俺がその間に確保したら、当然、届かないようにその場で破壊する。

それなのに、露見したと言いつつ、俺達は確かにここまで足を運んだ。

いや、もしかしたら・・・運ばされたのか？

でも、あの映像は確かにケイゴさんだった。

どれだけ精巧に作るうと誤魔化せるものではない。

・・・ケイゴさんが裏切った？

いや、それはない・・・と信じたい。

もしくはこちらがバツタを返還後に露見して、罖を仕組まれた？

・・・でも、もしそうだったら合流地点の変更を連絡してくるのでは？

いや、でも、露見したのを知らなければ変更も出来ないし・・・。

・・・やっぱり向こうの状況が掴めないのは痛いな。

全くもって予想が付かない。

この状況は一体何なんだ？

罖なのか、それとも、真実なのか。

・・・クソツ。駄目だ。分からない。

もしこれが本当に合流する為の策だったら、むざむざ機会を逃してしまう事になるし。

でも、罖であるという懸念が脳裏を過ぎる。

どうする？ どうするべきなんだ？

「少し時間を下さい」

『了解しました。出来るだけお急ぎ下さい』

ブツンッ。

艦長の言葉で映像が切れる。

向こうが通信を切ったんだろうな。

「艦長。どうしますか？」

「……提督はどう思われますか？」

「うむ。怪しい事この上ない」

「……ですよね」

誰もが罨ではないかと考える。

そもそも信じられる要素がどこにもない。

知らない軍人。

大袈裟な武装。

データ露見の真偽。

合流地点の変更の有無。

怪しい点は幾つもある。

でも、そう簡単に罨だと突き放す事は出来ない。

機会を逃すだけではなく、両者間に罅が入る事もあり得るからだ。

足並みを揃えようという時に信じられないと突き放すのは今後に悪い影響しか残さない。

「提督。どちらにしろ、私達は行くしかありません」

「あえて飛び込むというのかね？ 罨かもしれないに」

「今更引く事は出来ません」

「……確かにのお」

退路は絶たれている。

それが精神的とか、状況的なものだとしても。

俺達は要求を呑むしかないんだ。

和平派と結びつかなければならぬという前提がある上では。

「ですが、無防備に飛び込むつもりはありません。しっかりと準備をした上で」

ウィーンウィーンウィーンウィーン！

敵襲か！？

「セレスちゃん！」

「・・・はい。木連艦隊が接近中。」

規模はナデシコと護衛の木連艦隊を合わせた五倍程です」

「艦長！ 囲まれてます！」

・・・しかし、この時点で襲撃という事はやっぱり真実か？
チューリップの護衛とナデシコの護衛を兼ねているなら大袈裟な武装もおかしくはない。

「・・・分かりました。ナデシコ、戦闘配備！」

「戦闘配備。パイロットの皆さんは準備を御願いします」

「マエヤマさん。グラビティブラストをチャージしてください」

『ここは私達が食い止めます。急いで次元跳躍門へ』

突然の通信。

「しかし！」

『私達の使命は貴方達を無事に目的地へと届ける事。後はお任せを！』

完璧に周囲は囲まれている。

一方向にしか攻撃できないナデシコでは単純に厳しい。

すぐに木連艦隊と連携できるとも思えないし。

機体を出せば勝てないだろうが、囲まれている状況で被害なしとはいかない。

ナデシコが被害を受ければ一度帰還するしかなくなる。

そうなれば、やはり土壇場でキャンセルした事と同義になり、

たとえ向こうが事情は分かっているようにやはり心情は悪くなる。

・・・なんて考えている余裕もないよな。

艦長。如何しますか？

「ミナトさん。チューリップへ」

「いいのね？」

「はい！」

「了解。行くわよお」

ナデシコはこうしてチューリップへと向かった。

その先になにかがあるのか。

畏か、それとも・・・。

・・・ホント、思い通りに事って進んでくれないよなあ。

俺達に順調って言葉はないのかして・・・。

第六十七話（後書き）

急展開＋意味不明。

ダラダラと意味のない思考展開といい・・・。

駄目だ。良いのが書けない。

ご勘弁を・・・。

PS 最近感想をあまり頂けません。

お粗末な作品ですが、やはり感想こそが原動力。

批判でも構いませんので、感想、お待ちしています。

第六十八話（前書き）

ようやくの伏線回収。

皆様が意外だ！ と思ってくれたら嬉しく思います。

それでは、お楽しみ下さい。

第六十八話

「……………」

チューリップ内の不思議空間を進む。

その間、クルーはひたすら無言。

それも当然であろう。

この先が畏である可能性は非常に高い。

心を落ち着かせているという方が無理だ。

「……………出口が……………」

光の終着点。

不思議空間とは色も形も違う光り輝く空間が見える。

「……………出ます」

ゴクリッ。

誰かが、いや、誰もが唾を飲み込み、緊張に身を固める。

視界は光に包まれて、眼の前を見せてくれない。

光が止む時、視界に映るのは一体何なのか…………。

…………まるで予想が付かなかった。

いや、畏か真実か。その二択だけしかなかったな。

…………覚悟を決めよう。

「……………え？」

だが、眼の前の現実は全ての予想を裏切った。

「・・・何も・・・ない？」

ポツリと誰かが呟く。

そう、何もかも、姿形がないのだ。

艦隊も、木星も、地球も火星も、その全てが視界には映らない。

「・・・どういう事だ？」

意味が分からない。

畏なのか？ それとも真なのか？

それすらもまるで分からなかった。

「・・・状況を確認します。コウキさん。今現在の場所は？」

「すぐに調べます」

ルリ嬢やラピス嬢のように手際良くはできないけど・・・。

「・・・ここは・・・」

「ここは？」

「地球近海です。といっても、かなり距離は離れてますが・・・」

「地球の近く？」

「はい。更にいえば、ここは木星と地球とを一直線で結んだ線の上に位置しています」

地球側に近い地球と木星の一直線上。

それはあたかも地球側から来る何かを迎えるかのようで・・・。

「レーダーに反応」

レーダー反応？

「セレスちゃん。その反応、何か分かる？」

「・・・データ照合。カグラヅキです」

「カグラヅキ。やった。嘘じゃなかったんだ」

レーダーに映ってきた。

それは少しずつこちらに近付いてきているという事。つて事は本当だった事だ。

「良かった。畏じゃないみたいですよ。艦長」

「はい！ これで和平も円滑に・・・」

・・・え？ なんか様子が変わらないか？

「なんかフラフラしてない」

はい。そうなんですよ。ミナトさん。

「セレスちゃん。拡大できる？」

「・・・はい」

モニタにカグラヅキを映し、その姿を拡大してもらおう。

「・・・ボロボロ？」

どうしてカグラヅキがあんなにもボロボロなんだ？
ここに来るまでに草壁派から襲撃があったのか？

「と、とにかく、通信を」

「はい。通信を開いてください」

「了解」

近付いてきたカグラヅキは既に自身の眼だけで見れる程の距離に。やっぱりボロボロだったけど、ケイゴさん達と会えた喜びであまり気にならなかった。とにかく、一刻も早く、ケイゴさんと話したかった。カエデの件も含めて。

「通信開けました」

メグミさんの言葉と共にモニターにケイゴさんの姿が映し出される。以前、バッタで送られてきたデータと同じ人物が映った事でナデシコは歓声に沸く。

それはそうだ。俺達の目指す和平に一步近付けたのだから。

『……………』

無言のケイゴさん。

相変わらずクールだな。

……でも、ケイゴさんの様子もなんか変な気がする。

なんというか、怒ってるというか、嘆いているというか……。

……俺の勘違いならいいけど……。

「此度の件では無事に合流できました嬉しい限りです」

『……………無事に?』

代表として艦長が話しかける。

しかし、無事という言葉にケイゴさんは過剰に反応した。

「はい。しかし、その損傷は一体どうし」

『ふざけた真似をしてよくも私達の前に姿を現せましたね!』

「え?」

『コウキさん! これは一体どういう事ですか?』

どういう事?

「どづいう事ってどづいう意味ですか?」

そもそもどうしてそんなにも青筋を浮かべてる?

まるで逆鱗に触れてしまったかのように激怒しているケイゴさん。

・・・全く意味が分からない。

『誤魔化さないで下さい!』

一喝。

『合流地点には予定通りの時間に現れず、

一日待たせておいて、あまつさえ、連合軍の艦隊で私達を襲った』

合流地点? 時間?

連合軍から襲撃された?

・・・良く分からないけど、一つだけ分かった事がある。

それは・・・。

「それは誤解だ! ケイゴさん!」

『誤解などと誤魔化さないで頂きたい。』

この件を知るは私達とコウキさん、貴方達しかない筈。

この件に関してのお返事もきちんとナデシコから頂きました！」

「だから、俺達は約束通りの時間、場所に……」

『きちんと確認のバツタを出させて頂きました。』

その際は返事をもらえませんでしたでしたが、了解してもらえたのだと

……』

確認のバツタ？

そんなものはもらってないぞ。

だから、畏かもしれないと皆が不安に……。

「了解の返事はいつ頃に……」

『返事を頂く前に一度！』

……そんなものは届いていない。

バツタを捕獲した次の戦闘なら……。

そうか！ カエデが一番最初にミサイルをぶちまけた時に破壊してしまっただんだ。

……それなら、落ち度は俺にあるな。

『もちろん、了承してもらった後、こちらから了解の返事を出せさせて頂きました。』

その時は同じようにデータが消されたバツタを我らのもとに送ってくれたではないですか！」

そんなものはもらった覚えも送った覚えもない！

『貴方達が連合軍にこの事をリークしたに違いない。』

お陰様でこうして満身創痍で命からがら逃げてきました』

「だから、それは誤解です！」

『誤解などと』

「話を聞いてくれ！ ケイゴさん」

『コウキさん。貴方の意思是嘘だったのですか!?!』

「嘘じゃない！ だから、俺達の話をして」

『聞く必要はありません。』

このような状況下で裏切られた相手をどうして信じられると言っ
のです!?!』

「ケイゴさん！」

『多くの同胞が先だつての戦で亡くなりました。この無念、晴らさ
ずにはいられません！』

「だから、それは」

『各員、戦闘配備。目標はナデシコだ！』

「ケイゴさん！」

・・・駄目だ。聞く耳を持っていない。

「・・・艦長」

「・・・」

・・・本当にすいません。

見解の相違とか、そんな事を言っていてられない。

向こうは完全にこちらを墜とすつもりで・・・。

「各員、戦闘配備！」

「・・・いいのかよ？ 艦長」

「ナデシコを落とされる訳にはいきません」

「でも・・・」

「・・・御願います」

「・・・おつ」

格納庫へ向かうパイロット達。

・・・どうしてだ？

どうして俺達が争わなくちゃいけないんだ？
ケイゴさん。

・・・教えてくれ。

俺は、俺達は・・・どうすればいいんですか？

「コウキ！」

「・・・カエデ」

「私がケイゴを説得する！」

「無理だ。完全に聞く耳を持っていない」

「それでも！ ケイゴを止められるのはきつと私だけ」

「危険だ。ケイゴさんはもちろん、皆腕が良い。」

しかも乗ってる機体は全員が新型機だし、ケイゴさんののは特別機。

到底、今のお前では太刀打ちできない」

「出来る、出来ないじゃない！ やるの！」

「・・・カエデ」

「艦長！ 出撃の許可を！」

「・・・」

「先日のような暴走はしないわ！ 絶対に、私が止めてみせる！」

「・・・分かりました」

「艦長！」

「パイロットの皆さんは彼女が敵方と話せるような状況を作って下さい」

『『『『『了解！』『』『』『』『』』

艦長・・・皆まで・・・。

「私達は向こうとの争いを望みません。」

どうにかして、もう一度話し合いの場に立たせたい。

だから、皆さん、私に、ナデシコに協力してください」

「「「「了解」「」「」

「・・・俺は・・・。」

「コウキ君。しっかりして！」

「・・・ミナトさん」

「どうにかして誤解を解く。」

その為にも、この無意味な戦闘を終わらせるべき。そうでしょ？」

「・・・はい」

「カエデちゃんも辛い中、頑張ってる。それなのに貴方はそのままなの？」

「・・・そうだよな。」

「きちんと教えてあげなさい。貴方が友を裏切るような人間じゃないって」

そう、きちんと誤解を解くんだ。

そうしなければ何も始まらない。

「ありがとうございます。ミナトさん」

「コウキ君」

「ええ。教えてあげます」

俺の意思は、和平への想いは本物だって。

「・・・ケイゴ」

久しぶりの再会なのにもう散々。

でも、早速、パイロットとして訓練した意味が出てきた。

私が戦場に出られなければきっとケイゴを止められなかった。
ううん。止められるかどうかはこれからの私次第。

『あの黒いのがケイゴさんだ。カエデ』

「ええ。分かったわ。ありがとう。コウキ」

『お礼は止めてから言ってくれ』

「ま、それもそうね」

絶対止めるって啖呵きつたんだもの。

今更無理なんて・・・言えないわよね。

「行くわよお！」

パイロットとしての腕前が皆より低い事は重々承知している。

格闘戦？ 取っ組み合いの喧嘩ぐらいしか経験ないわよ。

銃撃戦？ 拳銃なんて今ですら握った事ないわよ。

でも、だから何？

気持ちじゃ負けてない。

あの馬鹿なケイゴの目を覚ましてやるんだって気持ちは誰にも負けてない。

それに、皆が私とケイゴの間に誰も入れないようにしてくれる。

皆の思いに応える為にも・・・絶対に止めてみせる！

「そこ！」

稚拙な射撃。

牽制にもならず、黒いのは猛スピードで抜けていく。まったく。男なら女の放った弾に当たるぐらいの甲斐性見せなさいよ！

「クツ。早い」

どうしても捉えられない。

パイロットになると決めて何をしていいか分からない私はひたすら銃を撃ち続けた。

銃ならなんて甘く見てた訳じゃないけど、格闘戦よりは何倍もマシ。そう思つて、必死になつて鍛えたつもり。

それなりに自信あつただけど・・・やっぱり、厳しいか。それなら！

「ケイゴ！」

向かってくるケイゴに向けて両手を広げる。止まつて、そう強く念じながら。

ピタッ。

・・・止まつてくれた。

『貴様、何の真似・・・カエデ？』

「見れば分かるでしょ？」

『どうして貴方がここにいるんですか？』

「そんなの決まつてるじゃない。貴方を止める為よ」

『貴方も私達を裏切ろうと』

「だから、勘違いだと言っててるでしょ！」

『私達は多くの同輩を失いました。その仇は返さなければ』

「貴方はコウキが信じられないの!？」

『・・・それは・・・』

「私は貴方に会いに来た」

『・・・カエデ』

「それはコウキがきつと貴方が生きてるといったから・・・」

『コウキさんが・・・』

「私はコウキを信じている」

『それは・・・妬けますね』

「でも、それ以上に、貴方を信じたい」

『・・・』

「もう一度聞いわ。貴方はコウキが信じられないの？」

『・・・参りました。貴方にそう言われたら引くしかない』

「なら・・・」

『ええ。各員、戦闘は終了だ。すぐに帰艦し』

『・・・え？ 嘘でしょ？』

そんな事って・・・。

SIDE OUT

カエデが懸命にケイゴさんを追っていた。

彼を失って得た本物の恋心。

こんな事を言っている余裕がないのは分かってるけど・・・。

「頑張れ。カエデ。きちんと想いを伝えろよ」

幸せになって欲しい。

幸せにして欲しい。

そう強く思う。

「・・・おいおい。生きた心地がしないぞ」

いくら話を聞かないからってそれはないだろ。

心臓が止まるかと思ったぞ。カエデ

でも、よく止めてくれた。

きつと、冷静になればケイゴさんも分かってくれる筈

・・・え？

漆黒の空を駆る一筋の黒い光。

・・・グラビティブラスト。

それがナデシコの後方から放たれ・・・カグラツキを貫いた。

『マリア！ クソツ！ 急ぎ脱出せよ！』

ギリギリ、本当にギリギリ一隻だけ脱出艇がカグラツキから飛び出した。

同時に、カグラツキが燃え墜ち、戦場の華と消える。

『今の攻撃は・・・ナデシコじゃない？』

・・・ナデシコの後方から？

後ろにあるのはチューリップだけの筈。

・・・ッ！ まさか！

『ナデシコの諸君。ご苦労だった』

モニタに映ったのは先ほど別れた筈の鈴木という木連軍人。
・・・どうして彼が？

チューリップを通ってきたのは分かる。

でも、そんな余裕が彼らにある筈が・・・。

『お前は・・・』

「ケイゴさん！」

「ケイゴ！」

ナデシコのモニタ越しに会話する木連軍人兩名。

「艦長。今の内にあの脱出艇を保護しましょう」

「はい。御願います。ミナトさん」

「了解」

木連軍人同士の会話は続く。

どうみても、敵同士の会話だった。

『カグラ大佐。貴方には栄光の為の礎となって頂く』

『どうしてお前がここにいる！？』

『彼らをここまでお送りしたまでです』

『何故、草壁派のお前がそこにいるんだと聞いている！』

草壁派！？

彼は草壁派の人間なのか！？

『まったくもって馬鹿ばかりで助かりました』

馬鹿ばかり？

『貴方達がバツタで連絡のやり取りをしている事は承知済み。』

『それならば利用してやればよいと閣下は仰せになられました』

『利用！？ 利用と言ったか！？』

『ええ。本当に愚かだ。データのすり替えに気付かないとは？』

データのすり替えだって？

「馬鹿な。確かにあの映像はケイゴさんの」

『映像はそうでしょうね。私達がすり替えたのは付属データの方ですから』

『あのロックが破られたというのか！？』

『簡単でしたよ。私達には優秀な研究者がいますからね』

『それでは・・・』

『ええ。貴方達が送ったデータから合流場所を突き止め、その場所を敵方にリーク。』

その後、日時、場所を改竄したデータを送る事で合流を防ぎ、かつ、こうして罠に嵌めた。』

後は貴方達の反応を追って、帰還コースにナデシコを跳躍させるだけです』

『クツ。むざむざ騙されたというのか』

表情を歪ませるケイゴさん。

「回収したわよ」

「メグミちゃん。保護した方々にブリッジに来て欲しいと伝えて」

「了解しました」

「ジユン君。迎えにいつてあげて」

「分かったよ。ユリカ」

・・・脱出艇は無事に保護できた。
でも、あの大きさじゃクルー全員とはいかない。
むしろ、数人救えれば良い方。

・・・悔しい。こんな大きな被害を、無意味に出してしまうなんて。

『それに、私達の欲しいものも手に入りましたし』
「欲しいもの？」

欲しいものって一体何なんだ？

『私達が欲しかったのはナデシコとカグラヅキが戦闘したという事実。』
「実。」

そして、ナデシコがカグラヅキを撃墜したという事実。その二つ
です』

「そんな！ 私達はカグラヅキを攻撃なんて」

『ふふつ。どうしてわざわざ貴方達を避けるように後ろから撃つた
とお思いか？』

細工次第でナデシコから放たれたGBによってカグラヅキが沈ん
だように見える』

「そんな細工に騙される訳がない！」

『見せるのは専門家ではないのですよ。木連国民だ』

「何？」

『そんな事をして何になる？ 今は戦時。そんなものを見せた所で
』

『もう一つの工作を教えてください』

モニタの映像が変わる。

・・・これは・・・司令の演説映像？

「お父様？」

・・・どうして演説映像を？

『我々は和平を結びたい』

『ワアアアアアア！』

『その為にも国民の皆さんの協力が必要になる。』

我々地球人の罪をしつかりと認め、木連人の事を認めてあげて欲しい。

そして、被害を被った火星を再生し、三国による平和を成し遂げたい』

『賛成だ！』

『これ以上、戦争なんて嫌！』

『早く戦争を終わらせてくれ！』

国民は誰もが和平を認めてくれている。

これなら、きっと和平を結べる筈だ。

『その為にも、まず私達は木連と』

シュインッ。

「・・・あの？」

ブリッジの扉が開く音が聞こえたので振り向く。

「貴方はマリアさん？」

「教官様。お久しぶりです」

「はい。お久しぶりです」

丁寧に頭を下げってくるメイドの御姉様。
なんか和むなあ……。
つて、こんな状況じゃない！

「無事に脱出できたようで嬉しく思います」

「……はい。あの、どうして私達をここに？」

「誤解を解こうと思ひまして」

「艦長」

「しかし、今は少しお待ち下さい」

演説のモニタに視線を移す。

『ここで宣言する。我々は必ず和平を結ぶと』

『オオオオオッオー！』

『国民の皆さん、その為にも貴方達の後押しが必要です。是非とも』

ダンッ！

……え？

『……グフッ』

口から血を吐いて倒れるミスマル司令。

……撃た……れた？

「キヤアアア！ お父様ああ！」

叫ぶ艦長。

『どういう事だ！？ 何故ミスマル司令が！』

『和平派の人間は邪魔なだけ。そういう意味です』

『だから殺したというのか！？』

『ええ。我らの礎となって頂きました』

嘘・・・だろ？

司令が撃たれた？

「だ、誰が撃った？ どうやって？」

映像が進む。

カメラが演説席から方向を変え、空を映し出した。

・・・そこにいたのは一体の人型兵器とその肩に乗るバツタ。

あの人型兵器はエステバリス？

・・・いや、福寿だ。エステバリスに酷似させた福寿がそこにはいた。

護衛していたエステバリスが焦りだし、すぐさま鎮圧した。

だが、もう遅い。

『あれは貴様らがやったのか！？』

『いえいえ。それだったら護衛の方にすぐ見付かってしまっただけでしょう？』

私達は連合軍のとある方にあれを渡してあげただけですよ。簡単でしょ？』

『どうしてお前達が福寿を持ってるんだ！？』

『仕様書を頂きました。あれぐらい生産するのは軽い。』

後は御渡した方が何かしらの細工をしたのでしよう。それだけです』

・・・既にナデシコの戦闘データを提出して福寿は木連の新型機と認識されている。

福寿自体、エステバリスと隣り合わせならすぐに分かるが、遠くからではほぼ同じ。

しかも、リーダーなどにも味方機として登録されていれば見破れる筈がない。

何故気付かなかった！？ 混乱が収まった頃、護衛の兵士達はそう責められるだろう。

だが、それは酷。まさか味方機が攻撃するなど思わないだろう。

そもそも、司令が撃たれたという事実が発生している以上、何を言っても遅い。

・・・完全に畏に嵌められた。

『ふふつ。私達の意図を理解してもらえたようですね』

『・・・お前達は・・・』

『そう、和平派同士を同士討ちさせて、和平そのものを潰す。

また、地球、木連の両方で徹底抗戦という方針を掲げさせる

ふふふ。こつも簡単に計画が進むとは・・・。思わず笑いが込み上げてきますね』

『あの映像はどう使ったつもりだ？』

『死に逝く貴方達に教えても意味がない気もしますが、冥土の土産にせつかくですから教えてあげましょう』

死に逝く？

『舞台設定はこうです。遂に和平派同士で話し合いの席に付く事が出来た神楽派。』

地球側で和平演説があるというので、会談の席で共にその演説を観賞。

しかし、演説の席で和平派のトップと言われる者が撃たれ、ナデ

シコは激怒。

会談を破談とし、報復の為に襲い掛かる。

だが、それはナデシコ側の勘違い。あれは福寿であって福寿ではない。

福寿に似せたエステバリスであり、連合軍内の違う派閥の仕業であつた。

しかし、暗殺を木連のせいと決めたナデシコは福寿と決め付け戦闘を続行。

必死に神楽派は勘違いを解こうと訴えるが、ナデシコは聞く耳を持たず。

精神的に不利だったカグラヅキはナデシコによって破壊されてしまふ。

勘違いの報復と木連神楽派代表の息子の死は国民に怒りを抱かせる事は必至』

・・・なんて事だ。

和平の架け橋となろうとしたのがかえって邪魔をしてしまふ事になるとは・・・。

エステバリスに似せた福寿を福寿に似せたエステバリスとする事で騙すなんて・・・。

機体に詳しくないものなら、簡単に騙されてしまふ。

『だが、先程の福寿にはバツタが』

『バツタぐらいどうにでもなりますよ。捕獲して利用したとでも言えば良いんですから』

『・・・完全に罠に嵌ったという訳か』

『ええ。しかも、地球側では木連のせいだと考えている訳ですからね。』

『確実に報復に出ますよ。彼らに言わせれば正当な権利ですから。ふふっ』

・・・このままじゃどちらの国民も誤解したまま徹底抗戦に思考を染めてしまう。

なんとしても真実を、せめて、地球側には・・・。

「艦長！　すぐにこの場から離脱しましょう！」

「はい！　ナデシコ全速力で　」

『ああ、そうそう、この話には続きがありましたね』

「・・・え？」

『破壊されたカグラツキの仇を討つ為に、

派閥の枠を超えて草壁派の私がナデシコを破壊するという美談が』

「何！？」

『各員、戦闘配備。ナデシコ勢、及びに残った神楽派を殲滅する』

「クツ。急いで離脱を！」

『この数から逃げられるとお思いか！』

チューリップから抜け出し、戦隊を組んでいた艦隊から一気に機体が飛び出してくる。

それはバツタであったり、ジンであったり、六連であったり、多種多様。

そして、何よりも・・・圧倒的な物量だった。

しかも、混乱している間にこちらを完全に包囲しており、チューリップは離脱済み。

逃がす気がまったくない用意周到さだ。

「艦長！」

「・・・離脱は不可能。突破するしかない？」

・・・絶体絶命ってこういう事を言うんだらうな。

ここでやらずにいつやるんだ。マエヤマ・コウキ。

「艦長。俺が迎撃します」

「マエヤマさん！」

「エステバリスを帰艦させてください」

「分かりました。マエヤマさん。貴方に全てを賭けます」

そりゃあ責任重大だな。

懐からバイザーを取り出し装着。

久しぶりのレールカノンだ。

「メグミちゃん、全パイロットに帰艦命令を。」

「ミナトさん、すぐに全速力が出せるよう準備を御願います」

トップスピードで突っ込みそのまま離脱。

方法はそれしかない。

俺の仕事は囲まれる前に各個破壊する事だ。

『・・・ナデシコの皆さん』

「・・・ケイゴさん」

頂垂れたケイゴさんの映像が映る。

レールカノンを操りながらで負担も大きいが、

ここにいる中でケイゴさんを知ってるのは俺だけ。

俺が相手をするのが一番妥当だ。

『私達の勘違いからこのような事態になってしまっって申し訳ありません』

「いえ。悪いのは貴方じゃありません」

『ここは私達が突破口を開きます。そこから逃げてください』

「ケイゴさん！ 貴方達も逃げてください」

『いえ。私達はここで討ち死にします。ナデシコを逃がさずに和平は成らない』

「ケイゴさんが死んでも和平はなりません」

『私が死んでも父が』

『いや、そいつの言う通りだ』

『シンイチ』

シンイチさん。

『お前はこの誤解を解くつちゆう大事な役目があるだろうが』

『だが・・・』

『お前を溺愛してる親父さんの事だ。お前が死んだとなれば何が起きるか分からん』

『父は情で本質を見失うような方ではない！』

『それでも、地球に悪い感情を持ってしまふ。お前と親父さんは和平の鍵。』

和平を成立するには、お前と親父さん、その両名がいなければ不可能なんだよ』

『・・・』

『黙ってちゃ分かんねえだろ？ はいかいいえか、さっさとハツキリさせろ』

『・・・確かにそうかもしれん。だが、犠牲なくこの状況を打破できるとは・・・』

『相変わらず馬鹿だな。お前は』

『何？』

『後は俺に任せな』

『なっ！？ そんな事出来る筈がない！』

『それでもだよ！ てめえが生きてるか生きてないかで全然変わってくんだよ！』

てめえは生きろ！ 生きて、てめえの理想をきちんと叶えてきや

「がれってんだ！」

『・・・シンイチ』

『ふんつ。おい、お前』

俺か？

「何ですか？」

『すまねえが、こいつとマリアの事を頼む』

「艦長。ケイゴさんを」

「はい。着艦を許可します」

『助かる。ケイゴ、早く行け』

『・・・すまない』

『謝るんじゃないよ。てめえの為じゃねえ』

『・・・お前の事は忘れないぞ』

『ケツ。言ってる』

ケイゴさんがナデシコに近付いてくる。

もちろん、敵は撃破しながらだ。

『そこにいるんだろ？ マリア』

「シンイチさん」

『無事に脱出できたようだな。安心したぞ』

「貴方は自分を犠牲に・・・」

『ふんつ。理想と友の為に死ぬなんてゲキ・ガンガーみたいだな』

「貴方は嫌いだったでしょ？ ゲキ・ガンガー」

『さてな。まあ、今なら愛する女の為に死んだ野郎の気持ちも分かるが』

「・・・シンイチさん」

『幼馴染のケイゴとお前を護りながら死ねる。本望だ』

「・・・そんな事」

『とりあえず俺から言える事は一つ。元気に生きる』

「・・・」

『それだけが俺の望みだ』

「貴方もこちらに」

『だから、言ってるだろ。あいつらを食い止める必要があるって。幸いにも、他の奴らも俺に力を貸してくれるって言ってやがる』

カグラヅキから出撃してきたパイロット達。

その誰もが木連艦隊と既に交戦中だった。

『最後になっちまったが、俺の初恋の相手はお前だったんだぜ』

「・・・最後に何を言ってるんですか・・・」

『伝えたかったただけだ。俺の十年以上の片思いをな。最後に俺に護らせる』

「・・・はい」

『ふんっ。せいぜい華々しく散ってやるよ。じゃあな!』

そう言い残して、シンイチさんは突貫していった。

・・・ブリッジ内が静寂な空気に包まれる。

「木連の方々の犠牲を無駄にしない為にも私達は絶対に突破します」
「・・・艦長」

涙を流しながら、それでも真っ直ぐ前を向いてユリカ嬢が告げる。
・・・よし。

「セレスちゃん」

「・・・はい」

「しばらくの間、ナデシコの事、任せても良いかな？」

「・・・コウキさん。出撃・・・するんですか？」

「いや。機体もないしね。レールカノンに集中するだけだよ。でも、本当に集中しちゃうから艦隊制御に割ける余裕がないんだ。セレスちゃんの負担が大きくなっちゃうけど御願いできるかな？」

「・・・分かりました。任せてください」

「うん。ありがとう」

「・・・頑張りましょう。コウキさん」

「おっ」

さて、周囲は敵だらけ。
ナデシコは最大速度。
絶体絶命のピンチ。
やるしかないだろ。

「フィードバックレベルを最大に」
自身の異常を展開させる。

「コウキ君。それは！」
手の先端から光が迸る。

「情報伝達速度を最大に」
視界に映る全ての映像を支配下に。

「マエヤマさん！ 危険です！」
「コウキ君！ やめて！ またあんな事になったら！」
「・・・大丈夫です！」

ナデシコのレールカノンを全て支配下に。

「並列思考展開」

さあ、侵食したいならすれば良い。
俺はそれを更に支配してみせる。

「……セレセレ」

「……コウキさんなら、大丈夫です」

「……」

「……コウキさんを信じましょう」

「……そうね。信じるわよ。コウキ君」

ありがとうございます。ミナトさん。

ありがとうございます。セレス嬢。

「さあ、始めようか」

綻び始めた和平への思いを再度紡ぐ為に。
今の俺に出来る最大の事を。

第六十八話（後書き）

犠牲になった者、犠牲の上に生き残った者。

死んだ者、死ななかつた者。

今回の話では主要メンバーで初の死人が出ました。

やはり戦争である以上、犠牲者は出るんですよ……。

今回の件でまた色々と状況は変わると思いますので、

作者も混乱しないよう慎重に筆を進めて生きたいと思います。

ちなみに、犠牲者の全員が全員死んだ訳ではありません。

死に掛けたものの生き残った方もいますからご心配せずに。

第六十九話（前書き）

離脱戦。

といっても派手な戦闘じゃありません。

第六十九話

S I D E M I N A T O

「艦長！ どうするのですか!？」

焦った様子のプロスさんが問いかける。

そうよね。焦るのも仕方ないわ。

だって、今の状況はそれ程までにピンチなんだもの。

神楽派と接触する前に護衛としていた艦隊。

そこに襲撃の振りをした艦隊が加わって、

莫大な数の戦艦が周囲を囲み、虎視眈々と私達を狙っている。

しかも、それだけじゃない。

その莫大な数の戦艦から更に莫大な数の兵器が飛び出してくる。

視界一面に敵機体、敵戦艦の姿があり、それが360度全て。

・・・今までになかった最大の危機ね。

「セレスちゃん。レーダーをモニタに」

「・・・はい」

モニタに映し出されるのはナデシコを中心とした敵配置図。

でも、それを見た所で私にはどうしていいか分からない。

戦術関連は全て艦長達に任せてあるもの。

私はただ艦長の要求に応えるのみ。

「ユリカ。あそこが手薄のように見えるけど・・・」

「ううん。あつちは駄目」

「どうしてだい？ 地球の方向だよ」

「多分、待ち伏せされてる」

「え？ 本当かい？」

「木連はチューリップを使った電撃作戦がある。」

「離脱したチューリップは今どこにあると思う？」

「・・・あっちだって言うのかい？」

「うん。多分だけど・・・。」

「私達があっちにいったら、待ち伏せにあって挟撃される。」

「だから今、木連の攻撃が緩いの。あえて逃がさせる為に」

「・・・なら」

「うん。死中に活ありだよ。」

「皆さん、一番防御が厚い所を突破します。」

「ミナトさん。最大速度で。マエヤマさんを信じます」

「了解」

コウキ君を信じろっていう作戦なら、無条件に従うわ。だって、誰よりも私がコウキ君を信じているんだから。」

「マエヤマさん。準備はよろしいですか？」

「・・・いつでも」

「・・・コウキ君。」

「信じてるわよ。」

「メグミちゃん。全クルーに通告。衝撃に注意」

「了解」

「・・・おし。」

「機動戦艦ナデシコ。突破します！」

「」「」「」「了解！」」「」「」

死中に活あり。

あえて、最も守りが厚い場所へとナデシコは飛び込んだの。

S I D E O U T

「……………」

ひたすら撃ち続ける。

福寿のみ照準から外し、その他全ては殲滅。

時間を稼ぐ為、木連パイロットの被害を少しでも少なくする為、ナデシコが生き残る為、ナデシコが全方位の敵に対応する必要がある。

無茶？ そんなの分かりきってる。

無謀？ やってみなくちゃ分からないだろ？

今までにない程の危機。

だけど、不思議と切り抜けられる気がするんだ。

シューインッ。

「艦長！ 状況はどうなってやがる!？」

「……どうやらパイロット達がブリッジへと戻ってきたらしい。

「……貴方は……」

「ハッ。木連軍優人部隊所属カグラ・ケイゴ大佐であります。

木連の私の着艦を許可して頂き、誠にありがたく思います」
「いえ。歓迎できる状況ではありませんが、歓迎します」
「ありがとうございます」

ケイゴさんも一緒のようだな。

「・・・ケイゴ」

「・・・カエデ。すまなかつたな」

「・・・ケイゴ様」

「マリア。無事で良かった」

「む」

「むむ」

・・・ケイゴさん。後でやってくれ。

振り返れないから見えないけど、
なんとなく表情が分かるぞ、二人とも。

「コホン」

そんな余裕はありませんよ。

「す、すいません」

「ふんっ」

分かれば宜しい。

・・・俺も意外と余裕だな。おい。

「今ほどのような・・・」

「突っ込んでます」

「は？」

「敵陣へと突っ込んでます！」

「り、離脱をするべきです」

「だからこそ、です。マエヤマさん」

「はい」

「グラビティブラストを前方に発射。」

その後、敵陣を一直線に突破します」

「俺は何をすれば？」

「敵戦艦に密着し、より危険になります。」

ですから、敵を絶対に近づけないで下さい」

「また無茶な要求を」

「御願います」

「分かりました。全力を尽くします」

突破後は迂回って所かな？

まあいい。今はただ接近を阻止する事だけを考えよう。

「そろそろぶつかるとわよお」

ミナトさんが告げる。

「セレスちゃん。グラビティブラスト発射！」

「・・・了解」

漆黒が漆黒を走る。

その跡に残るのは無数の破損パーツ。

「御願います！」

「了解！」

敵陣を駆ける。

一体撃破してもすぐ後ろから加勢。

一隻通り過ぎてもすぐさま一隻が駆けつけ突破を阻止してくる。

「でも、負けはしない」

それなら、俺が破壊すればいい。

前方から押し寄せる機体は全破壊。

横方から押し寄せる機体は牽制を含めて一切近寄らせず。

後方から押し寄せる機体は圧倒的スピードで置き去りに。

前方から押し寄せる戦艦はミナトさんが避け。

横方から押し寄せる戦艦は集中砲火で退け。

後方から押し寄せる戦艦は機関部を集中して狙い、足止めを。

ナデシコの性能とクルーの能力なら、これぐらいの危機は容易に突破できる筈。

いや、突破できる！

「俺達が出るか？」

「いえ。パイロットの皆さんは今後に備えて待機しててください」

「でもよぉ・・・」

「マエヤマさんを、そして、残って私達を逃がしてくれた木連の方々を信じましょう」

「・・・分かったぜ」

犠牲には出来ない。

シンイチさんはケイゴさんの副官であり、友人。

幼馴染とも言っていた。

それなら、二人の間には深い友情があったのだらう。

そんな彼が、ケイゴさんを、そして、ナデシコを逃すという。

そして、ナデシコにケイゴさんとマリアさんを託した。

・・・その信頼に応えられなくちゃ男じゃない。

友情に命を捧げた彼に応える為にも、俺達は絶対に脱出しなければならぬんだ。

「……機関部損傷。出力10%低下」

クソッ。

捉えきれなかったのか？

「無傷で突破できるとは思っていません。ですが、必ず突破できません」

慌てるな。出力が下がったなら、その分俺らが補えばいい。

速度の低下と威力の低下？ それなら、数を増やす。

別に倒れようが構わない。

今ここで死するより何万倍も良い。

「前方に敵戦艦多数。回り込まれました」

「クッ」

……やはり数の暴力は凄まじいな。

どれだけ突破しようと次から次へと襲ってきやがる。

「……」

「万事休す……か」

絶望がブリッジを覆う。

「やっぱり俺らが出るしかないだろ！」

「艦長！ 私達が！」

「……ですが」

「そつだぜ！ 俺達に任せてくれ！」

「艦長！」

「私達が行くわ」

「私も、私も行くわ！」

「カエデ！ お前は本当に」

「黙ってみてられないもの！」

「・・・」

「貴方も来なさい！」

「お、おい。カエデ」

パイロット勢が立ち上がる。

・・・力不足で申し訳ない。

俺がもつとしつかりしてれ。

『フーハツハツハツハ！』

「こ、この声は？」

『こんな事もあるつかと、こんな事もあるつかと』

「」「」「ウリバタケさん！」「」「」

もしや！

『おい！ マエヤマ！』

「はい！」

『出来るぜ。グラビティライフル』

「流石です。ウリバタケさん」

『へっ。こういう時に活躍せずにいつ活躍するんだっての』

「何丁出来てますか？」

『二丁だ。どっちも物量射撃型に載せてある。さっさと来い！』

ありがたい。

でも、俺はオペレーター。
この状況下でここを離れる訳には……。

「でも、俺がいないと」

「……大丈夫です」

「セレセレ？」

「……私一人でも大丈夫です。だから……」

「……」

「……だから、コウキさんは御自分の成すべき事を」

力強い瞳で見詰めてくるセレス嬢。

まったく、いつの間にかこんなにも成長してるなんて……。

嬉しい。嬉しいが、流石のセレス嬢もレールカノンまでは制御できない。

「でも」

「あの一！」

マリアさん？

「私達で良ければ御手伝いします」

「え？」

「私達はカグラツキでオペレーターをしていました。

勝手は違うかもしれませんが、微力ながらお手伝いできると思います」

「……」

黙り込む艦長。

信じていいのか？ とか、扱えるのか？ とか。

色々と考えているのだろう。

「先程まで敵方だった私達ですから、信じられないかもしれませんが」
マリアさんはそんな艦長に対して必死に訴える。

「ですが、私達の意志も貴方達と同じ和平を成し遂げる事。
どうか、どうか今だけでも、私達を信じていただけないでしょう
か」

「・・・ユリカ」

下を向いて考え込む艦長。

でも、答えは一つじゃないですか？ 艦長。

「・・・マエヤマさん」

「はい」

「出撃準備を。機体は物量射撃型です」

「了解！」

信じてくれてありがとう。艦長。

「ありがとうございます」

「いえ。最善を選んだまです。

現在オペレーター席は三つ空いています。

負担が大きいと思われるので、分担して行ってください」

「分かりました」

マリアさんと共にやってきた女性陣がそれぞれ席に着く。

加えて、マリアさんもIFSを持っていらっしゃるらしく、俺の席に着いた。
マリアさんは木連式柔を習得しており、銃の扱いも達者。

慣れないレールカノンだろうけど、多人数で分担して行えばきっと。

「パイロットの皆さんはリアル型で出撃してください」

「……了解」「……」

「俺はどうするんだ？」

「ガイさんもリアル型で出撃を。スーパー型は不向きです」

「確かにそうだな。了解した」

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ！ それじゃあ私の」

「カエデちゃんは待機です」

「どうして!？」

「このような局面では冷静さが問われます。」

失礼な言い方ですが、カエデちゃんにはまだ早いです」

「でも!」

「信じてください！ ナデシコのパイロットを!」

「……」

黙り込むカエデ。

うん。艦長の言葉じゃないけど……。

「俺達に任せておけ。カエデ」

「……コウキ」

絶対に切り抜けてやるから。

「ケイゴさんも俺達を信じて待っていてください」

「分かりました。コウキさん」

流石にケイゴさんは出撃させられない。

敵国のパイロットだし。

色々と複雑な事情がある。

「パイロットの皆さんは甲板に張り付きながら迎撃。

絶対に振り落とされない下さい。回収する余裕はありません」

「……………了解!」「……………」

「行くぞ! てめえら!」

アキトさんがいない為にリーダーパイロットを務めているスバル嬢が叫ぶ。

「おつしゃあ!」

ガイが飛び出し、その後ろを全パイロットが続く。

必ず甲板から飛び出ないようにとの厳命。

今はくれたら、二度と合流できないと誰もが理解していた。

だが、そもそもナデシコを逃がさなければその意味もない。

……いざとなれば、俺もここに残って、ナデシコを逃してみせる。

2020

「ウリバタケさん!」

「おう! さっさと乗れ!」

「はい!」

物量射撃型。

現時点で運用できる俺と最も相性の良い機体。

そして、その火力は他を圧倒する。

たとえ機動力が低くともおつりがくる程に。

今回のようなシチュエーションでは重用できる機体だ。

しかも、今回はグラビティライフルが搭載されている。

これなら、グラビティブラストだけより損害を与えられる筈。

「マエヤマ・コウキ。物量射撃型。出ます!」

次々と飛び出すナデシコ搭載機。

俺も続き、すぐさま甲板へと張り付いた。

「やるな。マリアさん達」

予想した通り、完璧とまではいかないが、充分牽制の役目は果たしている。

銃撃なんてカグラヅキじゃなかっただろうに・・・凄いな。

「期待に応えますか」

この状況下で物量射撃型を任された。

すなわち、今回の闘いは俺が鍵を握っている。

己惚れでもなんでもなく、マジで。

甲板に張り付くという事は動けないという事。

そうなれば機動力なんてなんの意味もない。

火力が全て。

スーパ―型がない以上、一番の火力は俺だ。

俺が有する異常の一つ、MC以上のIFS処理能力。

それを使う時が来た。

『スバル機から各機へ』

スバル嬢の激励かな？

『各自配置に着いたな。おっしゃ。後は全部任せる。ぶちこんでや

れ!』

『『『『『了解!』』』』』』

スバル嬢らしい事で。

「さて」

多用しなくて済むと思ってた半暴走モード。

ここは分かり易くハーフバーサーカーモードとでも命名しておくか。案外、使う場面が多いな。本当に。

結構辛いんだけど・・・って泣き言いつてる余裕はないか。

「フィードバックレベル、情報伝達速度、共に最高レベルに」

視界に映る全ての空間を支配する。

分析データ、解析データ、座標データを把握。

全データを把握した上で、最善の行動を導出。

「並列思考展開。食い潰せ」

支配させ、支配する。

暴れる並列思考を完全制御して初めての行動に移せる。

「・・・行くぞ」

俺の担当は前方の群がる壁。

全て破壊してやるうじゃないか。

「フル・オープン」

機体のあちこちにある武装を全て展開。

まるで銃で構成されているのではという程に武装が表面に飛び出した。

胸部を開き、ミサイルを準備。脚部を開き、ライフルを準備。

肩から飛び出すレールキャノンも対シヨック体制に移行済み。

本来なら両手にあるレールカノンは腰にあり、その両手にはグラビテイルライフル。

実戦配備は初めてで、威力も理論上のものでしかない。

だが、機体とは別の出力源で、メーターを見てもチャージは満杯。

そもそも開発、設計がウリバタケさんとイネス女史の最高峰マッドだぞ。

信じようじゃないか。

「全標的。ロックオン」

モニタに映る全ての敵に照準を付ける。

その数は最早数えられない。

だが、それら全てに攻撃を当てる自信がある。

後は自分を信じてぶちかますだけだ。

「・・・発射あ！」

イメージする。

全ての武装から同時に発射される弾丸。

それら全てが命中する様を。

「うおっ」

肩のレールキャノンも凄かったが、

両手からそれぞれ発射されたグラビテイルライフルの衝撃がより凄ま

じい。
思わず仰け反る。

「どうだ？」

だが、その程度じゃ狼狽えない。
しっかりと姿勢を固定し、前方を眺める。
視界一面に広がる敵。
それらを追尾するミサイルと貫く弾丸。
数秒後、視界は炎上した。

「生き残りは？」

喜びたい所を冷静に分析。
ロックオンした敵は・・・全て破壊されてるな。

「殲滅完了」

喜びは束の間。
すぐさま前方は再び敵によって塞がれる。
いいさ。何度だってやってやる。
立ち塞がるものは全て撃ち貫いてみせる！

「何！？ 逃げられただど！？」

「ハッ！ 申し訳ありません！」

足止めを喰らい、その者らは撃退できたのですが・・・」

「神樂の息子は？」
「消息不明です。恐らくはナデシコが保護したかと・・・」
「・・・」
「も、申し訳」
「まあよい」
「は？」
「木連にいなければ問題あるまい。
生きていようが死んでいようが二度と木連には足を踏み入れさせ
るな」
「ハッ」
「ついでに挽回のチャンスをやる」
「あ、ありがとうございます」
「・・・神樂をこちらに引き込め」
「そ、それは不可能です。神樂大將は和平派の
「分かっておる。だが、噂だけでよい」
「は？」
「息子を失った神樂が過激派に接触した。
それだけで良い。それだけで和平派内の足並みが崩れる」
「な、なるほど」
「ナデシコを破壊できなかつた事は残念だが、
お前程の奴がやられたのだ、仕方あるまい」
「ハッ」
「詳しい事は報告書で確認する。すぐに提出しろ」
「了解しました」
「うむ。失望させるな」
「ハッ。全力を尽くします」

第六十九話（後書き）

第五部・完としましょう。区切りが良いので。

短いですね……。

離脱戦でもあり、あまり無双的な展開にはなりませんでした。

実際、今回の戦闘は飛ばしてしまおうかなとも思ってたぐらいですし。

とにもかくにも離脱成功です。犠牲はありますが。

今回の戦闘描写では満足していただけなかつたでしょう。申し訳ありません。

正面からの戦いならまだしも離脱戦ではこれぐらいが限界です。

今後、何度か戦闘があると思いますので、

その時に満足していただけるように努力いたします。

第七十話（前書き）

第六部開始です。

随分と複雑な状況になりました。

第七十話

「・・・かなり追い込まれたな」

木連からの襲撃はどうにか退けた。
でも、問題はそれだけじゃない。

「正直、今後の展開が読めない」

ミスマル司令の暗殺における影響。

神楽派代表の息子の死における影響。

・・・ああ。頭が痛いな。

たとえケイゴさんが生きていようとそれを木連が知る術はない。
木連内で死亡扱いにすれば、それはもう死亡なのだ。

ケイゴさんを木連に帰らせる事が出来れば分らないが・・・。

草壁派がそれを許してくれるかどうか・・・。

司令の事もそうだ。

たとえ一命を取りとめていようと地球内の意識は徹底抗戦に傾いた。
和平派のトップが危険に晒されたのだから当然だろう。

恐らく、企んだ軍人が情報操作して木連のせいにしてるだろうし。
それに加えて、代表がいない事での混乱。

その隙をつけ込まれたら抗戦派の力が強まってしまう。

・・・司令、御願いですから生き延びてください。

現状でも厳しいのに、貴方が死ねば全てが台無しになります。

貴方が生きていれば、まだ、起死回生のチャンスが必ず・・・。

「・・・とりあえず艦長待ちか」

地球のヒラツカドックに到着したと同時に艦長が司令のもとへと向

かった。

無論、ジユンも連れて……。

それでいいのか？ と問いたいが、若干諦めてる。ともかくにも司令の容態を早く教えて欲しい。暗いニユースばかりで気が滅入りそうだ。

「ケイゴ！ はっきりしなさいよ！」

「だ、だからですね。マリアは」

「ケイゴ様！」

「お、落ち着け。ちゃんと説明するから」

「どれだけ私が心配したと思ってるのよ！」

「やはり行かせるべきではありませんでした。」

ケイゴ様が地球に赴いたら必ず悪い女に

「悪い女って何よ！」

「ケイゴ様を誑かしておいて何ですか！」

「た、誑かすですってえええ！？ 怒った。もう許せない」

「こちらこそ！ 許せません！」

「……はあ……」

ハハハ。頑張ってくれ。ケイゴさん。

……ナデシコがどうにか脱出してすぐ。

二人つきりで話がしたいとの事で、

カエデとケイゴさんを応接間まで案内した。

もちろん、カエデは知ってるだろうけど、一応。

そこで二人つきりでゆっくり話をさせた……善なんだけど……。

何故か、マリアさんが侵入してたらしく、こじれてた。

まあ、要するに修羅場？

ちゃんとケイゴと話したいカエデ。

無論、二人つきりでゆっくりと。

それなのに、マリアさんは護衛ですからと譲らず。

まあ、カエデの性格ならもつこの時点で爆発だよな。

その後、どうにかケイゴさんが宥めてふたりつきりで話したらしいんだけど……。

そこから犬猿の仲って奴です。

今はそんな状況じゃないのと思う一方、ここののがあってもいいかなとも思う。

殺伐としてるだけじゃ良い方向にいく訳ないしね。

「ふふっ。楽しそうね」

相変わらず人の恋愛事を楽しそうに眺めるミナトさん。

「つていたんですか!？」

貴方もボソソジャンプを習得したんですか!？

「さっき来たばかりよ」

「あ、はぁ……」

気付きませんでしたよ。

「これからどうなるのかしらね?」

「……そうですね。」

少なくとも、今回の件は悪い方にしか転びません」

両陣営で徹底抗戦派の力が強まった。

これは由々しき事態であり、

和平を成し遂げたい俺達からしてみれば最悪。

崖っぷちといっても過言ではないくらい。

「でも、ピンチはチャンスっていうじゃない？」

「まあ、それは起死回生の閃きがあればですけどね」

「ないの？」

「ありません」

「・・・そっかぁ・・・」

テーブルの上に脱力するミナトさん。

ぐてぐてなつてて、随分と緩みきつてる。

人によってはハシタナイとか思うかもしれないけど、それはそれ。ミナトさんはこういう所がなんとなく可愛らしいと思う。

まあ、それがセレス嬢に感染するのは勘弁して欲しいけど。

あ、ちなみに、今食堂で休憩中です。

「今後が難しくなつたわね」

「はい。アキトさん達の事も気になりますし」

「あんな事があつたんだもの。混乱してると思うわ」

「説明も出来たかどうか・・・」

本当に最悪の事態だな。

見えかけてゴールが遠ざかっただって感じ。

「ミスマル司令大丈夫かしら？」

「流石にあのような場面で無防備という事はないでしょうから・・・」

「そうね・・・」

歴史を振り返るに公の場での暗殺は少なからずあった。

それを考慮したなら、流石に防弾チョッキくらいはつけてると思う。

まあ、つけてるから絶対に安全という訳ではもちろんないんだけど。

「とりあえず、どうにかしなくちゃいけない事は分かってます」
「それって？」

「ケイゴさんの生存を木連に伝える事です」

「どうやって嵌められたか、それを説明する術はない。」

「もちろん、映像はあるが、それを馬鹿正直に信じるとも思えないし。でも、ケイゴさんが生きて戻り、ケイゴさんの口から聞けば、可能性はある。」

「たとえ証明できずとも、今の徹底抗戦の勢いは弱まる筈だ。」

「どちらにしろ、一刻も早くケイゴさんの生存を木連に伝えたい。」

「少なくとも、木連の和平派の連中には。」

「ケイゴさんの死によって和平派が徹底抗戦派に鞍替えしたら、そこそ終わりだ。」

「どうにかして、和平派とコンタクトを取れないだろうか……。」

「秘密回線とかないのかしら？ あのケイゴって子」

「うーん、あ、そういうえば、ケイゴさんが地球にいた時、

木連とどうやって連絡のやり取りをしてたんだろう？」

「聞いてみればいいじゃない」

「そうですね。出来れば早く聞きたいんですけど……。」

「今はなあ……。」

「馬に蹴られそうだ。」

「ねえ、コウキ君」

「はい」

「今、遺跡ってどうなってるのかしら？」

「遺跡ですか？」

「ええ。正しく言うならボソソジャンプ演算ユニット」

ええつと・・・。

今は時期的に言えば、原作でいう最終回に近いと思われる。

その時、確か火星は完全に木連の支配下だけど、遺跡は確保されていない。

それは遺跡が幾重にも重なったDFによって護られてたから。

って解釈していいんだよな？

まあいいや。とりあえず、侵入を阻んでいた。

多分、木連は必死に突破方法を考えていたのだろう。

そこにナデシコが登場。

相転移砲をぶちかました。

でも、それでも突破できず。

そこで、フィールドランサーの登場。

一つ一つを解除して突破してた気がする。

そうして結局ナデシコが遺跡を確保。

そのまま宇宙に・・・って。

「・・・もしや、既に確保されてる？」

木連には高機動戦フレームが渡ってしまっており、その副次的な効果としてフィールドガンランスすら渡ってしまっている。

当初は武器の一つとしての認識でしかなかっただろう。

でも、何かの拍子であれの有効性が確認されたら・・・。

既にDFを突破して、遺跡を確保している可能性もなくなはない。

・・・本当に俺のせいで全てが台無しじゃないか・・・最悪。

「もし確保してたら、次にやる事は？」

「遺跡の解析でしょう」

すぐに使えるような技術でもないだろうし。

少なくとも解析に一、二年、実用に更に一、二年といった所だろうか。

しかも、木連じゃ好きにボソソジャンプできない訳だし。

俺達遺跡の事を多少なりとも知っている人間より時間が掛かる事は必至だ。

実際、いつ回収したか知らないけど、

火星の後継者の決起は戦争終了後から五年も掛かった訳だし。

「そうね。だから、時間に限りはあるけど、まだ焦らなくていいわ」

「はい」

うん。ちよつと落ち着いた。

「それに、向こうは機械補助なしに飛べないんでしょ？」

「ええ。原作でも艦長を媒介にしてようやくでしたし」

A級ジャンパーとB級ジャンパーの違いは機械補助の有無とジャンプの距離。

劇場版ではそれを覆す為にユリカ嬢を遺跡に組み込む事で解決した。要するにB級ジャンパーをユリカ嬢を介して擬似的にA級ジャンパーにした訳だ。

「どうしてそんな方法を思いついたのかしら？」

「多分、遺跡の解析の過程でA級ジャンパーの事を調べたからじゃないですか？」

A級とB級の差を調べた事によって、両者の根本的な違いに気づき、もしかしたらって」

「なるほど。でも、それって前提としてA級ジャンパーの事を知ってなきゃ駄目よね？」

「そうですね。知らなければ思い付きませんよ。こんな事」

「今つて、知ってるのかしら？」

「どうだろう？」

「多分、知らないと思う。」

「あまりボソソジャンプをした覚えはないし。」

「俺もアキトさんも少なくともバレるようなへまはしてないと思う。」

「まあ、ネルガルは既に知ってしまったているけど。」

「恐らく、木連はまだA級ジャンパーの事を知らないと思います」

「これからも注意しなくちゃいけないな。」

「もし存在がバレたら火星人全ての命が危ない。」

「木連がまた拉致とか誘拐やらという強硬手段にでかねない。」

「じゃあ、それが私達の強味ね」

「強味？」

「ええ。まさか地球から何の媒介も必要とせずに木連まで飛べるとは思わないでしょ？」

「そうか。必ずチューリップやジンのような媒介を木連は必要としている。」

「機体なし、機械補助なしのCCのみでジャンプができる存在を知らないんだ。」

「たとえば短距離のジャンプという意味ではそれほど強味にはならないかもしれない。」

「でも、イメージ次第で俺なら地球から木連まで行ける。」

「だから、俺がそんな事をして、彼らにとっては思慮の範囲外という事になる。」

「バレたらおしまいという諸刃の剣だが・・・これは使えるかも。」

「ほら。私達にだって強味があるじゃない。
もしかしたら、それが起死回生の一手になるかもしれないわよ」
「そうですね」

草壁派にバレないように和平派同士で結び付けられるかもしれない。
あ、でも、そうすると神楽派の人間にバレてしまい、結果として草壁派にバレるかも。

却下かな？

でも、それ以外にどう用いていいか分からないし……。
とりあえず、これもアキトさんと要相談って奴か。

「少なくともカグラ君は生きてるし、強味もある。

だからね、まだ諦めるのは早いと思うわよ。コウキ君」

「はい。そもそも諦めてないですよ」

「そう？ それは良かった」

「あ。信じてないですね。こう見えても諦めは悪い」

「はいはい。分かりました」

「もうおざなりだなあ」

顔を見合わせて笑う。

本当にミナトさんはお茶目な人だ。

「とりあえずブリッジに戻りますか。休憩時間もそろそろ終わりですし」

「そうですね。行きましょうか」

不安も残る、というか、不安だらけだけど、まだまだ終わった訳じゃない。

和平に向けてもっと頑張らないとな。

追い込まれた分、今まで以上に。

「本当にセレスちゃんは成長したよね」

「・・・そうですか？」

「うん。もうルリちゃんやラピスちゃんがいなくても安心して任せられるし」

久しぶりのほのぼのタイム。

膝の上にセレス嬢を乗せて談笑しています。

少し身体が大きくなってる気がする。

このぐらいの時って成長期だもんなあ。

なんか時代の流れを感じました。

「・・・まだまだです」

「そっか。でも、このままだと更に俺の仕事が減るな」

オペレーターの仕事までなくなったらマジでいらな子認定されるよ。

パイロットもカエデの加入で更に居場所なくなったし。

そういえば、ケイゴさんはどうなるんだろう？ 立場的に。

「・・・コウキさん？」

「ああ。ごめんごめん」

考え事をしてました。

「・・・全部コウキさんのお陰です」

「そんな事ないと思うんだけど」

「……いえ。コウキさんから色々な事を教わりました」

まあ出航当時から一緒に訓練してますしね。

ちなみに、僕もその訓練のお陰でスキルアップしています。

「そうかな？」

「……はい」

「そっか。それは嬉しいね」

これで君も一人前のオペレーターだ、なんて。

「……頑張りました」

「うん。偉い偉い」

定番のナデナデ。

なんとなく気持ち良さげだから遠慮なく。

「相変わらず気持ち良さそうね」

「……ミナトさん」

「これは将来が心配ね。お父さんに恋しちゃったりして」

おいおい。ミナトさん。

それはないでしょ。

「コウキ君もコウキ君でセレセレが嫁入りする時はどうなるのかしら？」

……セレス嬢の嫁入り。

うん。断固拒否だな。

俺を倒してからにしろ！ をマジでしそつだ。

「・・・恥ずかしいです」

「なんとなく未来が想像できるのよねえ」

・・・一体どんな未来を想像してるんですか？ ミナトさん。

「ふふつ。ライバルかしら？」

それはぶっ飛びすぎ！

「冗談よ」

ですよね。

シューインッ。

「ふむ。そろそろ艦長から連絡があってもいいと思うんだが・・・」

あ。ゴートさん。

「プロスさんは何をしていますか？」

「ああ。会長達と連絡を取っている」

大変ですね。プロスさんも。

ネルガルとナデシコの間で板挟みにあつて・・・。
また胃薬を送らせてもらおうかな。

「専門家から見てどうですか？ あのコースは致命傷ですか？」

「ふむ。心臓直撃のようにも見えたが・・・」

・・・心臓直撃はやばいでしょ・・・。

「心臓は人それぞれだからな。運が良ければ免れてるかもしれん」
なんて不安なお言葉。

「だが、心臓直撃だからこそ助かる可能性もあるな」
「どういう事ですか？」

「危険だからこそ、護りも嚴重という意味だ。」

何かしらの防護策をしてあれば、基本心臓は護れる」
「それなら！」

「ああ。防弾チョッキも進化していな。」

黄金銃ならまだしも大抵の銃ならば防げる」

・・・黄金銃つて。

一撃死の煌く弾丸ですか・・・。

「流石に無防備で演説など行わないだろう」

「そうですね！」

「ああ。しかし、それが分からない木連ではあるまい。」

何が狙いなのか・・・。ただの暗殺であれば頭を狙えば良い」

また不安な事を・・・。

「暗殺されかけたという事実から生じる何か・・・」

考え込むゴートさん。

「徹底抗戦の意識を強めただけではないな」

ちよつと不気味です。ゴートさん。
でも、確かに考えさせられる議題。
ただの暗殺にしてはお粗末。
わざわざ姿を現す必要が果たしてあったのだろうか？
まあ、木連と勘違いさせたかっただけのもあるんだろうけど。
それだけじゃないってなんとなく思える。

「もしかして」

「来ました！ 艦長からの連絡です！」

おっと、ようやくか。

『えっと、マエヤマさんいますか？』

え？ 俺？

何だろう？

「はい」

『カグラさんを連れて、ここまで来て頂けますか』

「えっと、別に構いませんが」

『御願います』

プツンッ。

「えっと、とりあえず行ってきますね」

「どうしたのかしら？」

「さあ？」

僕にもまったく。

「それじゃあ、ちょっと行ってくるね。セレスちゃん」

「・・・はい。頑張ってきてください」

「うん。それまで、ナデシコの事、頼むね」

「・・・(コクッ)」

最後に頭を撫でて、セレス嬢の席に降ろす。

カグラツキのオペレータも手伝ってくれるらしいから負担もあまりないだろう。

うん。任せたぞ。セレス嬢！

「それじゃあ」

ブリッジから飛び出し、ケイゴさんのもとへ。

「お取り込み中、申し訳ありませんが」

「あ、はい。何でしょうか？ コウキさん」

「・・・まだやってたのかよ。二人とも。」

こりゃあ艦長とアキトさんの追いかけてここに変わる新しい名物になりそうだ。

「付いて来て欲しい所があります」

「付いて来て欲しい？ 木連人の私に？」

「はい。詳しい事は移動中に御話します」

「分かりま

「私も行くわ！」

「私も行きます！」

「うおっ！」

び、びつくりした。

「いきなり入ってくるな。カエデ」

「だ、だって」

「その通りです。貴方はここで」

「マリアさんもです」

「そ、そんな。私はケイゴ様の護衛として」

「内密な話なんです」

「マリア。すまないが、待っていてくれ」

「・・・分かりました。ケイゴ様が仰るなら」

はぁ・・・。

意外だ。マリアさんってケイゴさん絡みだところなるんだ。

なんか冷静に何事も対処してしまうタイプの人間だと思ってた。

「それで、どこへ？」

ナデシコの廊下をケイゴさんと歩く。

「ミスマル司令の所です」

「それじゃあ」

「生死は分かりません。でも、何か話があるらしく」

「・・・そうですか」

「とりあえず、病院へ向かうので付いて来てください」

「分かりました」

ドック外へ。

病院は近くもなく遠くもなくという微妙な距離だから、

いくつかのリニアモーターカーを乗り継いでいこうと思います。

さて・・・。

「ケイゴさん」

「はい」

「ちよっと一緒に考えて欲しい事があります」

病院に着くまで、さっきゴートさんが言っていた事を考えてみよう。

「今回の暗殺、どういう意味があるんでしょう？」

「私と司令を同時に暗殺する事で両陣営の抗戦の意識を高めたのでは？」

「それはもちろんですが・・・」

ただ殺して影響力を落としたというだけではないと思う。もちろん、ケイゴさんの言ってる事も含まれるだろうが。でも、その後の展開まで考慮していたら・・・。

「司令関連かな？」

「司令？ ミスマル司令ですか？」

「はい。木連にとって、というか、

草壁派にとって司令は邪魔な存在じゃないですか」

「まあ、そうでしょうね」

「だから、影響力を落とす為にとか」

「それもあってでしょうね。」

司令が和平を考え直したら和平派の足並みは狂うわけですし」

「抗戦派に鞍替えを望んでるとかいうのも」

「ないでしょうが、考慮はしてるかもしれません」

ミスマル提督が死ねばそれでよし。

死なずとも少しでも木連に恨みを持ってくれればよし。

和平派のトップが徹底抗戦派に鞍替えしてくれればなおよし。

うん、ちょっとなあ……。

「もしかしたら、内乱が目当てかもしれません」

「内乱？ 地球のですか？」

「はい。時間稼ぎの為に」

ミスマル司令復活後に実は鷹派の陰謀でしたとリーク。

その結果、鳩派と鷹派とで戦争が勃発。

地球内がゴタゴタしている間に木連はしっかりと基盤を整えて、とか……。

うん。なんかありそう。

っていうか、リークの役目とかナデシコが担いそうだよ。

ちょっと様子見ないとまずいかも。

「時間稼ぎとは？」

「えっと、草壁派が遺跡を確保したとか何か聞いてませんか？」

「遺跡？」

「もしかして、知りませんか？」

「火星の遺跡の事ですか？」

「あ、はい」

知らないかと思った。

「コウキさんこそ良くご存知ですね」

「え？ どういう意味ですか？」

「その事は木連ではトップに近い人間しか知りません。」

私も最近父から聞いて初めて木連が火星を狙った意味を知りましたし」

「あ。そうなんですか。まあ、色々とありまして」

それじゃあ末端の兵士は知らない訳か。

そういえば、原作でツクモさんも遺跡の事を触れてなかったしな。少なくとも知ってるのは少将以上とか、名家とかって事だろう。

「・・・その遺跡が草壁派によって確保されたかもしれない？」

「ええ。もしかしたらです」

「・・・それはかなりピンチですね」

「はい。でも、実用化には時間が掛かります」

「・・・その為の時間稼ぎですか・・・」

「恐らく」

遺跡を確保した以上、草壁にとって何よりも欲しいのは時間。

ここで地球内で戦争してくればかなりの時間が稼げる。

加えて、内乱にこじつけて木連がやりやすいように干渉なんかしたりして。

もしそうなら結局、鷹派の連中も草壁の掌の上で踊らされてたって事になるな。

まあ、それはどっちでもいいか。

たとえ内乱で和平派が権力を握ろうと混乱を落ち着かせるまでに時間が掛かる。

下手したら内乱が長引いて年単位でなんて事も。

そうなれば完全に手遅れ。

木連支配の世界が始まるかもしれん。

遺跡は解析に成功すればそれぐらいの意味はあると思っし。

長引けば長引く程、不利になるとはこれ如何に。

「やはり一筋縄ではいきませんね」

「はい」

別にあそこでナデシコを潰しても、リークする方法ならいくらでも

あるし。

単純に受け渡ししの証拠を曝け出せばいいだけだしな。

うん。なんかこれっぽい。やっぱり様子見しなくちゃいけないさそうだ。

「それにしても何故私なんでしょう？」

今更ケイゴさんと会っても・・・というのが正直な意見。

下手すると死亡扱いされてる訳だし。

現時点で木連内におけるケイゴさんの影響力は皆無に等しい。

ふむ。何の話をするつもりだろうか・・・。

「まあ、とりあえず着いてからです」

「ですね」

そろそろ到着か。

・・・それにしても、なんかマジでかなり追い込まれてる気がするな。

ミスマル司令の安否も気になるし。

うーん、なんか幸運が転がり込んでこないかな？

「・・・いや、運任せは良くないな」

もっと考えよう。

もっと考えて起死回生の一手を。

ミナトさんも言ってたじゃないか、ピンチはチャンスだって。

まだまだ諦めちゃいない。

和平を成し遂げないと安心して平穏な生活を送れないしな。

逆境こそ男の見せ場だと知れ！

この状況を覆してこそ本当の和平が成るんだ！

やるしかないだろ！
俺。

第七十話（後書き）

当分は苦しい状況が続きそうですね。

完全に後手に回ってますし。

そろそろボソソジャンプを多用する日が近付いてきたのかも・・・。

その辺りは状況次第ですが。

次回もよろしく御願います。

第七十一話（前書き）

和平への道を探索し続ける和平派。
今回は隠された計画についてのお話です。

第七十一話

「司令を死んだ事にする？」

「うむ。その通りだ」

幾つかの路線を乗り継いで漸く病院に辿り着いた俺達。

病室ではアキトさん、ルリ嬢、ラピス嬢に加えて、艦長、ムネタケ参謀、

その他何人か、恐らく改革和平派の上層部の人々、が俺達を待っていた。

司令はベットの上で医療器具に囲まれているものの、意識もハッキリしているし、元気とまでは行かないが、大丈夫そうだった。

そして、告げられた極秘事項。

「何故そのような事を？」

生きている司令をあえて死んだ事にする。

その結果として、何を得ようとしているのだろうか？

「コウキ。お前は先日の暗殺騒動、誰の仕業だと思う？」

「そ、それは・・・」

木連と連合軍がグルだった。

そう言うのは簡単だ。

でも、その結果、草壁派の思い通りになってしまったら・・・。

「何を隠す必要がある。既に俺達は知っているぞ」

「え？」

「ユリカが全部話してくれてからな」

「か、艦長！」

なんて軽率な！

「え？ え？ 言っちゃいけなかった？」

「・・・はあ・・・」

こういう人だった・・・。

戦術家であって、戦略家ではないとはよく言ったものだ。

「その事実を知った上で我々がどうするべきか、それを考えたのだよ」

司令達が導き出した答えが死んだ事にする事？

「しかし、既に司令が意識を取り戻したって事は知られているのでは？」

始めに意識を取り戻した時点で報道やらなんやらがされていると思うのだが。

「そういう機転に掛けてはムネタケ君以上の者はいないよ」

「ふふっ」

流石は参謀。

既にマスコミ勢はシャットアウトしてましたか。

「公表してもしなくても大した意味にはならんからね」

「どうしてですか？」

「まずは自分で考える事。答えを聞くのもその後でも良いんだから
「は、はい」

「安易に答えを聞くのは成長を妨げる。常に何故かを考えるように
しなさい」

「分かりました。小父様」

艦長が問いかける。

いずれ連合軍の重役に立つ身。

色んな先輩に揉まれて成長していってくれ。

それにしても、艦長は恵まれた環境だな。軍人としては。

まあ、親の名前に負けてしまい墮落なんて事もあるだろうけど。

艦長に限ってそれはないな。うん。

補佐役のジユンだっているし・・・って。

「あれ？ そういえばジユンは？」

「ジユン君なら準備してるよ」

「何のです？」

「記者会見の」

「ああ。司令の事についてですか」

相変わらず補佐が得意なようで。

「まあ、実際は意識不明の重体という事にするがね」

「完全に死亡扱いだと戻ってきた時に困りますからね」

世間から存在を抹消されてしまうよ。

「それで、何故このような事をするのか、だが・・・」

真剣な表情になる司令達。

「木連と手を結んだ軍人達を誘き出す為だ」

「誘き出す？」

そんな事が可能なのか？

「先日の暗殺事件だが、恐らく私達側にも協力者がいるだろう」

「か、改革和平派に、という事ですか？」

「うむ。そうでなければああまでスムーズに進められん」

改革和平派内にまで手が及んでる。

獅子身中の虫となる者がいる訳だ。

そうだったら・・・誰を信じていいか分からない。

「だからこそ、まずここに絶対に信じられる者達を呼んだ」

それが彼ら俺の知らない人達という訳か。

「もし私が死んだとなれば、必ずやその死を利用してしようとする輩がいるだろう。」

末端は分らんが、その首謀者こそ、間違いなく木連と手を組んだ軍人の一人だ」

「徹底抗戦を訴えると？」

「ああ。それ以外にも、娘のユリカに接触してくる可能性もある」
「艦長にもですか？」

「うむ。貴方の父親が殺されかけました。私達と組んで仇を討ちませんか、とね」

「ユリカを取り込めれば勝ったも同然だからな。
民衆の同情を買い、ナデシコも手中に収められる」

なるほど。そこまで考えられていたか。

でも、既に艦長は司令の無事を知っている。

無事だと知っているのに仇討ちをさせようなんて。

まるで道化だな。

「アキト君から聞いた。恐らく木連は既に遺跡を確保したのだろう
と」

「はい。徹底抗戦に踏み込んだのもそれが理由でしょう」

既に遺跡は確保した。

それなら、屈する必要はない。

後は解析次第、全ては私の支配下だ。

そんな草壁の思惑は簡単に分かる。

分かるが、対処法がない。

「だが、その遺跡を利用する為にも時間が必要になってくる筈」

「無論です」

「なればこそ、我々は短期間でこの混乱を収める必要がある」

時間を与えてしまえば与えてしまう程、こちらが追い込まれる。

早期解決こそが我々の最もしなければならぬ事。

だから、木連と繋がる者や派閥内の裏切り者を誘き出し、排除する
必要がある。

その上で混乱を収めるのが最も早期な解決方法って訳か。

「その第一段階として私の死だ」

「第一段階……ですか？」

「うむ。どうせならば、我々も利用してやろうと思つてな」

「何をですか？」

「私の死をだよ」

自身の死を利用する？

どういうこつちや？

「第二段階は改革和平派のトップにユリカを据える事だ」

「艦長をですか？」

それは飛び過ぎでは？

「無論、一時的なものに過ぎないが」

「どういふ影響があるのですか？」

「うむ。私の死後、誰かがユリカに接触してくるだろう。

だが、それには毅然と立ち向かってもらう。

その後、私の跡を継ぐようにユリカにトップに立つてもらおう。

民衆は父の仇の相手なのに父の意思を継いで和平を唱えている。

そう捉えるだろう。それは抗戦意識を削ぎ、和平意識を高める事になる」

なるほど。

しかし、ある意味、民衆を騙す訳だから、後味悪いよな。

それが駆け引きであり、仕方のない事だつてのは分かつてるけど。

「今、民衆が抗戦を訴えているのは知つているだろう？」

知らない方が問いかけてくる。

「はい。殆どの人間が抗戦派を支持してました」

さっきネットで見ました。

敵方の将を暗殺する卑劣な敵という認識が高まり、
民衆の殆どが和平ではなく抗戦の方へ意識を強めてしまったと。

「恐らく、それはミスマル司令の人望故だ。

人望があるからこそ、軍内でも木連憎しの声が高まってる」

尊敬している相手が卑劣な畏に引っ掛かってしまった。

そりゃあ誰だって怒るよな。俺でも怒る。

「しかも、和平提唱の途中というタイミング。

司令の言葉に賛同しようと思ってた人間すらもやはり木連は、
なってしまう」

完全に狙われたって訳だよな。

状況もタイミングも。

「今、改革和平派内でも抗戦を訴える者が続出している」

・・・完全にやられたって訳か。

司令の人望も計算済みな訳ね。

「そんな時、最も恨みを持つであろう娘が和平を唱えればどうなる
と思う？」

「自身の間違いに気付き、より和平の為に力を使うようになる？」

「ああ。自身より過酷な状況の人間が意思を貫こうとしている。

司令を慕っている人間がそれを見て、奮起しない訳がないだろう。

司令は常に和平を訴えていた。その意思を継ぐ人間の為に力を尽
くそうと」

「艦長は納得してるんですか？」

情に篤い艦長の事だ。

人を騙すという行為に嫌悪感を抱くと思う。

それでも、納得してるのだろうか？

「最初は皆を騙す訳だから嫌だったけど・・・」

俯いていた艦長が顔をあげる。

その顔は今まで見た事がない程に頼もしい顔だった。

「私も和平の為に私情を捨てる必要があると思ったの。

今は心苦しいけど、それが後の和平の為になるなら、私はやる」

・・・なら。

「それなら、俺からは何も言えません」

艦長が納得してるなら俺は何も言えない。

どれだけ酷い事でも、それが後の和平の為なら、泥を被る覚悟がある。

凄いな。素直にそう思った。もう艦長の事を子供っぽいなんて言えない。

「そうか。君に納得してもらえて良かったよ」

ムネタケ参謀にそう言われた。

別に俺が納得しようがしまいが大きな意味はないと思うけど・・・。

「最後に、機を見て、私が軍に復帰する」

「それが第三段階という事ですか」

「うむ。もしかしたら、完全にユリカに席を譲り渡す事になるかもしれないが」

「もう、お父様」

ブンブンと。

やっぱり子供だった。

「それによって更に和平の意思は高まるだろう」

「これは参謀が？」

「大体の筋道は私が描かせてもらった。汚い人間だろうか？ 私は」

苦笑しつつ問いかけられる。

そりゃあ、こういう策略は汚く見えるけど・・・。

「はい」

「正直だね」

「でも、その意思は純粹なものだと思います」

「ふふつ。そうかね。それは嬉しい限りだ」

意味もなく人を陥れる人より何倍も良い。

別に騙していいと言ってる訳でもないし、和平を免罪符にしているとも思っていない。

でも、その想いが真っ直ぐで、泥を被る覚悟があるのなら・・・。

「心強く思います。参謀」

ただ頼もしく感じるだけだ。

「本当に嬉しいよ」

何より俺は参謀の人柄を知っている。

確かに策略に長けた人なんだろう。

でも、それを自身の為に使っていない。

目的があり、それに必要だから使っているだけだ。

決して、全てを騙した結果ここにいるのではない。

それなら、信用に値するさ。

それに、もしそんな人間なら清廉潔白な司令に信用される訳ないし。

「全てが上手く行くとは限らんが、この策が成功すれば、

徹底抗戦はの力を削ぎ、地球規模で和平について考えるようになる」

地球規模で、か……。

そうだよな。

軍だけが考えれば良い訳じゃない。

ましてや政府だけが考えれば良いものでもない。

その二つを含めた全国民で考える必要があるんだ。

地球人として、木連と火星に向き合う必要が。

「どちらにしろ、私はしばらく治療に専念しなければならない。

後は任せたぞ。ムネタケ君。アキト君。ユリカ。他の皆もな」

「ハッ！」

司令の言葉に力強く応える者達。

うん。頼もしいな。とっても。

「しかし、どうして無事だったんですか？」

非常に気になる。

「ハハハ。丸腰であんな席に立つ程の勇氣は持ち合わせていないよ」
そりゃあ確かに。

「そもそも、此度の暗殺事件とて充分予期できた事だ。なあ、ムネ
タケ君」

司令の問いに微笑みだけで返す参謀。
つて、それじゃあ……。

「始めから暗殺される事を考慮に入れてあの席に立っていたって事
ですか!？」

「無論。その後の動きについても既に話し合い済みだったよ」

「この計画も演説の前から練っていたものだよ」

……こりゃあ参ったね。

司令達の方が何枚も上手だったよ。
焦ってた俺達が馬鹿みたいじゃん。

やはり亀の甲より年の功か？

暗殺事件

なければ良し。

あれば利用してやるまで。

恐ろしいな。親父二人。

「まあ、頭を狙われたら御終いだっただがね」

笑いながら言う台詞じゃないですよ。司令。

「そう呆れんでくれ。こうして無事だったんだから良いではないか」

本当に良く言えば豪胆、悪く言えば大雑把な人だ。

「さて、カグラ殿」

随分と丁寧な言葉遣い。

そりゃあそうか。

相手は敵国のトップに近い人間。

いくら元部下と上司だろうと立場が変われば態度も違う。

その辺りは流石に大人だなんて思う。

「お久しぶりです。司令。極東方面総司令官就任おめでとございます」

「ありがとうございます」

これで、ようやくケイゴさんの番という事か。

今までは後ろで待機していて、話に介入してこなかった。

地球の事だからって遠慮したのだろう。

まあ、話を聞かせた以上、もう後戻りできないんだろうけど。

これで協力を断ったら殺されるだけだから。

今のケイゴさんには後ろ盾がない。

そんな中で上手く立ち回らなくちゃならないんだ。

軽率な事は出来ないだろう。

まあ、司令達はそんな事をする人間じゃないけど、念の為。

「敬語など無用です。前の通りで御願います。今の私は何の立場もありませんから」

「うむ。それならば、そうしよう」

要望されたら別に断る必要もない。

司令としてもいつも通りに接したいだろう。

以前までは期待していた部下として目を掛けてた訳だし。

ケイゴさんへの元上司としての気持ちは深い筈。

「しかし、驚いたよ。君は死んだと思っていたんだがね」

「はい。騙してしまつた事、大変申し訳なく思っています」

「うむ。だが、そのお陰で木連人と接触できたのだ。感謝する」

「勿体無いお言葉です」

実際、神楽派という和平派がいなければ混迷する所だった。

司令の言つた通り、ケイゴさんの存在は我々にとつてもありがたい。

「さて、話は聞かせてもらった。

出来ればすぐにも君を木連に帰してやりたいのだが」

「はい。恐らく、草壁派が妨害してくるでしょう。

私を亡き者にした方が手っ取り早いですし彼らにとつても都合が良い」

「うむ。死人に口なし、だからな。

君が帰つて事実を公表したら彼らの計画は全てが台無しだ」

「だからこそ、私は一刻も早く本国に戻る必要があるのです」

ケイゴさんがいない間に木連内の情勢がどれだけ変化するかが怖い。一気に徹底抗戦なんて事になってたら、その状況をひっくり返す事は困難。

ケイゴさんには一刻も早く、生存と事実を知らせて欲しい。でも、その方法がない。

「一つだけ方法がない事もない」

「ッ！ 本当ですか!？」

マ、マジですか！？ 司令。

「アキト君」

「はい」

え？ アキトさん？

「彼は過去、木連に行った事があるそうだ」

「なっ！？ 地球で英雄と名高い貴方が木連に！？」

そりゃあ驚くよな。

木連の防衛の甘さを示しちゃってる訳だし。

でも、まあ、多分、アキトさんが木連に行ったのは逆行前だと思っ。

ケイゴさんに知る術はないけど。

「そして、この方法を実行する為には君に、いや、君達に約束してもらわねばならん」

「何でも約束しましょう」

「うむ。君はボソソジャンプを知ってるだろう？」

「次元跳躍の事ですよ？ 知っています」

「しかし、君達の場合、チューリップを介さねばならない」

「確かに。短距離であれば単機でも可能ですが、遠距離ならばその通りです」

「無論、地球と木連は遠く離れている」

「はい。移動するのならばチューリップが必要になるでしょう。しかし……」

「うむ。チューリップを用いれば確実に邪魔が入ってくるだろうな」

チューリップを介しての移動なんて草壁とて理解している筈だ。

だから、何かしらの対応はされていると見て良い。

「だが、その固定概念を崩せるとしたら？」

「は？ それはどういう・・・。」

「これは本来なら切りたくない切り札だったが・・・アキト君」
「はい」

・・・やっぱりアキトさんのボソソジャンプって事か？

「ジャンプ」

消えるアキトさん。

そして、ケイゴさんの背後の現れる。

「こ、これは!？」

「私も初めて見た時は驚いたものだよ」

驚愕の表情を浮かべるケイゴさん。

それはそうだ。

木連人にとって、ボソソジャンプとは遺伝子改造して漸く行えるエリート証。

そして、チューリップを介すか、機械補助なくしては絶対に行えないもの。

それなのに、生身で何の媒介も必要とせずに跳ぶなどありえない事。実際はここを媒介としているが、それにしたって常識の範囲外なのだ。

「ど、どのような事をすればそんな事が可能に？ 地球の技術なのですか!？」

興奮した様子で問いかけてくるケイゴさん。
そりゃあ、これを習得できれば大きなメリットになるからな
でも、それは不可能。

「これは特別でね。私達も無理なのだよ」

まあ、僕は可能ですが。

「それでしたら、何故彼はこんな事が」

「うむ。それは和平成立後に話す事になるだろう」

「秘密・・・という訳ですか」

「必ず話す機会を設ける。」

だから、和平成立後まで黙っていると約束して欲しい」

「・・・そうですか。分かりました。必ず約束は守ります」

和平が成立しなければ火星人の事については話せない。

どこかで漏れる可能性もあるし、実験体扱いなんてさせてたまるものか。

・・・それにしても、どうして司令が知ってるんだろう？

火星人だけ特別とか、アクトさんが自由に飛べるとか。

それに、和平成立後に話すという事は、

単体ボソソジャンプの封印まで知ってるって事だろ？

そうじゃなければ和平が成立したからといって話していいものじゃないし。

切り札を切るにしたってあまりにも危険すぎる。

やっぱりアクトさん達が教えただろうか？

後で詳しく教えてもらわねば。

「彼ならば君を木連まで送り届ける事が出来る。秘密裏にね」

「木連まで？ まさかここから木連まで跳躍できるのですか!？」

「うむ。草壁派、といったかな。」

彼らに妨害される事なく木連へ向かうならばこれ以外にあるまい」
「・・・感謝します。これで父や仲間達に真実を打ち明ける事が出来る」

「だが、木連に近付けるだけで神楽派に接触できるかどうかは別だ。その辺りは君の機転に掛かっている。

どうにかして草壁派にバレないように無事生還を果たして欲しい」
「はい。必ずや」

まずは木連内の誤解を解く事。
少しだけ道が拓けてきたかな？

「ただ、その事実を木連全体に公表するのは少し待っていてもらいたい」

「何故ですか？ 早く公表しなければその分国民の・・・」

「こちらとタイミングを合わせて欲しいのだ」

「合わせる・・・ですか？」

「うむ。こちらが安定すれば草壁派はまた何かしらの策を打ってくるだろう」

「確かに」

「だから、その余裕を与えないタイミングで草壁派を失脚させたいのだ」

「言わば、神楽派と地球を結託させ、草壁派を共通の敵とする訳ですね」

「うむ。今すぐ話してしまえば確かに木連内で彼らの力は落とせるだろう。」

だが、地球が混乱している以上、付け入る隙はいくらでもある。
草壁派がその間に力を蓄えてしまつたら混乱を収めてすぐでは対応できない」

「一理あります。ですが、私達も無駄な犠牲は出したくない」

徹底抗戦を訴える草壁派が権限を持てば、戦争が激化するのには必至。それは以前より多くの犠牲が出る事を示している。地球も木連も。ケイゴさんはその犠牲を懸念しているのだろう。

「君の気持ちは分かる。だが・・・」

でも、現実是非情なんだ。

「この方法でなければ市民に犠牲が出る」

戦争中、地球内で虐殺を受けたという記録は残っていない。激化したらどうなるか分からないが、犠牲は軍人だけなのだ。

また、木連は無人機が殆どという事もあり、人的被害は少ない。たとえ死んだとしてもそれは軍人である筈。

だが、草壁が失脚し、強引に事を進めてきたらどうだろう。地球内で虐殺が起こらないとは限らない。

逆恨みで木連内で虐殺が起こらないとも限らない。現状を維持する事が出来れば、少なくとも民間人の被害は少ないのだ。

もちろん、これもたかが推測でしかない。

でも、最も被害が少ないであろう方法がこれなのだ。

草壁を失脚させ、怒涛の勢いで滅ぼし、その勢いのまま和平を成す。そして、戦後の事を考えても、敵を一つとする事で仲間意識を持たせ、

かつ、戦争の種を滅ぼす事が出来るというこの策が最も理想的なものなのだ。

共通の敵を持たせる事こそ戦争終結を加速させる。

この策の実現こそが俺達に残された最後の手段。

戦後、協力体制を敷く為にも、戦争を早期に終わらせる為にも。

これ以上の策は存在しない。

「それならば、軍人は死んでも構わないと仰るのですか!？」

ケイゴさんの気持ちも分かる。

軍人なら死んでも良い？

そんな考えは間違っている。

市民の為に命を投げ捨てるのが当然？

それはあまりにも勝手な考えだ。

でも、現実はそのなりに甘くない。

「犠牲の上に和平は成り立つ。私達に出来る事はその犠牲を無駄にしない事だけだ」

「クツ。司令、私は貴方を見損ないました」

「それでも構わない。私一人が失望される程度で和平が成せるのならばな」

ミスマル司令とて犠牲を出したい訳ではない。

それはユリ力嬢が涙を堪えて必死に我慢している事からも窺える。

きつと俺達が来る前にこの事を話されていたのだろう。

当然、情に篤い彼女は反対した。

でも、その情の篤さと同じくらい頭の良い彼女は司令の正しさも理解してしまった。

感情を優先するか、理屈を優先するか。

人の死を数として見るとどこまでも身勝手な行為だけど、犠牲なくして前に進めない事も事実。

散々悩んだ末にユリ力嬢は納得した。

それは先程ユリ力嬢が自ら述べた私情を捨てるとい言葉に示されている。

どこまでも客観的に物事を眺める。それがトップの人間には必要な

事。

情に篤いユリカ嬢やケイゴさんにとっては辛い事だろうけど・・・耐えてもらうしかない。

誰だって好き好んで犠牲を出したい訳じゃないんだ。

・・・こうして平然としてられる俺は随分と染まっちゃったんだな・・・。

「この策を遂行するためには私達と神楽派での綿密な話し合いが必要になる」

「・・・」

「一度切った切り札だ。アキト君には両陣営の橋渡し役を担ってもらう」

「・・・地球と木連を何度も往復してもらおうという事ですか」

「そうだ。私達の意志、木連の意思、全て彼に伝えてもらう」

「私はまだ彼を信用した訳ではありません」

そりゃあそうだよな。

初対面に近い訳だし。

「それならば、君は誰なら信じられると？」

「・・・コウキさん。御願いできますか？」

「俺・・・ですか？」

「コウキさんならば木連側の意思を御願いできます」

ケイゴさんからの信頼。

それなら、俺はケイゴさんの信頼に応えてみせよう。

「アキトさん」

「何だ？ コウキ」

「この橋渡し役、全て俺が担います」

「それは地球側もという事か？」

「ええ。その通りです」

「しかし、マエヤマ君では木連に」

俺の事は司令に話してなかったみたいだな。アキトさん。

「俺も跳べますよ。アキトさんのように」

「なっ!?!」

「本当ですか!?! コウキさん」

「黙っていて申し訳ないと思っっています。

ですが、これの危険性を考えたら秘密にしておかねばならなかった」

「うむ」

「どうしてですか？」

司令は納得、ケイゴさんは疑問といった所か。

「ケイゴさん」

「はい」

「たとえば貴方も自由に跳べるようになれば、

貴方は是が非でもこの技術を習得したいと思うでしょう?」

「ええ。便利な事この上ないですからね」

「ですが、どうしても方法が分からない。

地球が隠しているのかもしれない。

特別な条件があるのかもしれない。

習得したいのにその方法が分からなかったら、貴方ならどうします?」

「知っている人に聞きます」

「ですよ。でも、その人が教えるのを拒否したら?」

「また別の人に聞きます」

「では、知っていると思われる全ての人に拒否されたらどうします？」

「それは・・・」

「きつとケイゴさんなら諦めると思いますが。名残惜しいでしょうが」

「・・・ええ」

「でも、人間の欲望とは凄まじいものです。強引にでも知ろうと思
う筈」

「・・・分かります」

「脅迫？ 自白剤？ それでもまだマシな方です」

「それでもまだマシな方なのですか？」

「はい。欲望とは時に人をバケモノにしてしまう。

狂気が人を変えてしまふんです。

非人道的な事でも平気で出来るように理性を失わせてしまふ」

「・・・生体実験・・・という事ですか？」

「はい。死人が出てても気にせず実験を繰り返すでしょう。

俺はそんな犠牲が出るのが嫌だった。それで黙っていたんです」

「過去に何かあったのですか？ そこまでの事を連想してしまふ何
かが」

確かに普通に生きてればそこまで発想は飛ばないだろうな。

人間不信になるような事があったのかと疑問に思うのは当然だ。

「ありましたよ」

過去にも未来にも。

事実、ボソソジャンプの生体実験は実際に行われていた事だ。

「嫌な話です。自分達で人工的に作り出した命を道具のように弄ぶ
のですから」

マシンチャイルド。

あの事件は絶対に忘れない。

人が人と思えなくなった瞬間。

あの時、ミナトさんがいなかった本気で人間不信になってたかもしれない。

「ケイゴさん。貴方は考え過ぎだと思いかもしれません」

「……………」

「でも、少しでも可能性があるならば阻止しておきたい。

人の狂気によって、尊い命を粗末にして欲しくない。

そんな俺の気持ち、共感しろとまでは言いませんが、理解して欲しい」

「…………コウキさんの言いたい事は分かりました。

私もそんな事で命を落とすような事があつてはならないと思いません」

「ありがとうございます」

「ですが、良いのですか？

コウキさんがその役を担ってしまえば、その想いも……………」

「将来的に生体ボンジャンプは封印するつもりですから」

「それも計画の内という訳ですか」

「人は自身になく誰かにあるから欲しがります。

でも、自身になく、他人にもないものまで欲しがろうとはしません」

「…………そうであればいいのですが」

「そうであつて欲しいです」

…………不安じゃないと言えは嘘になる。

たとえ封印しようとする暴走する人間がいるのではないかと。

でも、現状、そんな事を考えても意味のない事だ。

それは後で考えよう。まずは実現してから。

その後、抑止力となるものを考えれば良い。

「本来なら完全に秘密裏で封印するつもりだったんですけどね。

過去に行った事を説明もせずに誤魔化してしまえば禍根を残します。」

「和平成立後にはきちんと封印する意図も説明し、納得してもらおうつもりです」

「私もそのつもりだ」

ありがとうございます。司令。

「分かりました。この事は父や側近のみに話し、隠し通すと約束します」

「ありがとうございます。ケイゴさん」

「いえ。当然の事です」

相変わらず好青年だな。ケイゴさんは。

「とにかくにも、俺がその役目を担います。

初めだけ、アキトさん、御願いできますか？」

「無論だ。任せておけ」

「御願いします。その後は火星再生機構に専念を」

「・・・すまないが、しばらく時間が掛かりそうだ」

「分かっています。今回の件で火星人の恨みは再燃したでしょうし」

「ああ。だが、なんとしても抑えて、実現させてみせる」

「私とラピスも全力を尽くします」

「任せて。絶対になんとかする」

「うん。御願い。二人とも」

流石にイメージできなければ飛べないから初めはアキトさんと共に

行く。

後はそのイメージだけきちんと覚えておけば俺ならいつでも跳べるし。

火星再生機構はアキトさんと妖精二人に任せると決めただ。

後はもう実現すると信じて待つだけ。

「話は纏まったようだ。マエヤマ君。今後は君が鍵となってくる」「はい」

「君一人に重大な責任を背負わせて申し訳ない。

だが、君なら私達の期待に応えて、責務を全うしてくれると信じている」

「ハッ」

鍵か……。なんかケイゴさんの言っていた通りになったな。

俺が戦争を左右する存在になるなんて夢にも思わなかった。

でも、こうして司令も信頼してくれている。

敵国のケイゴさんだって俺を信頼してくれている。

その信頼に応えられなつきや男じゃないって。

いや。別に女性差別してる訳じゃないけどさ。

それに、何よりこんなにも明確な和平へのビジョンが浮かんだのは初めてだ。

彼らの信頼に応える事が後の平穏に繋がる。

それだったら全力で任務に全うするまでだ。

「地球、木連、両陣営の和平への架け橋となるべく、尽力致します」

後日、さっそく計画が進みだした。

記者会見の場で告げられる司令の危機的状況。

そして、動き出す陰。

彼らは知らない。

自身が掌の上で踊らされている哀れな。ヒロロである事を。

第七十一話（後書き）

先に司令の計画を読者様に知らせるかは悩みました。

ですが、先に知らせてからの方が面白くなると思います。

さてさて、成功すれば起死回生。

でもそう簡単にいくとも限らない。

これからを楽しみにお待ち頂けると幸いです。

第七十二話（前書き）

パツパと先に行きたい。

でも、あまり飛ばしたくない。

この矛盾はどうすれば・・・。

第七十二話

「どこへ向かえば良いんだ？」

先日、ミスマル司令から告げられた計画。

その第一段階として、ケイゴさんを木連へ連れて行かなければならない。

たとえ草壁派が妨害工作をしなかつと、言わば敵の本拠地に赴く訳だ。

危険な事に変わりはない。

「神楽派の本拠地となる施設は市民船にあります。流石にそこへは行けません」

では、どのように侵入するか。

その答えは意外と身近にあった。

「しかし、これだけ近付いてもバレないとは。地球の技術とは凄まじいのですね」

特殊隠密型。

その高ステルス性がここにきて発揮された。

この何日かでウリバタケ氏主導の改造計画が成され、コクピット内を複座製に改造。

まあ、複座製といつても、後ろの二人は何もしないのだが……。要するにコクピット内を広くしただけ。

だけといつても結構大変で、周辺パーツとかも取り替える必要があった。

外見も少しだけコクピット部が膨れて不恰好になってしまったし。

まあ、背に腹は換えられなかったから仕方ないのだが。

しかも、バッテリー積んでるから更に不恰好。

シャープさが自慢のこの機体が見るも無残に……。

お悔やみ申し上げます。

……コホン。

それだけじゃ不安なので、幾つか細工をしてきた。

微弱な熱源反応やらでバレないように反応をカットする特殊なマントを装着し、

武装はいざという時の為のディスプレイシヨンプレードのみで、

移動は重力場を作り出し、それを蹴る事で加速、後は無重力にお任せと徹底。

この機体のステルスは特殊な電波を発信してレーダーを狂わすというもの。

その為、出力やら熱源やらも誤魔化す事は出来なくはない。

だが、何らかの作用によってレーダーを誤魔化せなかった場合……困る。

だからこそその熱、波を遮断する特殊なマント。

だからこそその重力場による八艘飛び。

ここまで徹底すれば流星にどうにかなるだろう。

事実、先程からケイゴさんの驚きの声ばかり聞く。

どうやらここはセンサーによる防衛網だったらしい。

そこを突破したのだ。流星は明日香インダクトリーと言わざるを得ない。

でもなあ、切り札の一つをケイゴさんとはいえ木連に暴露してしまつた訳だ。

なんか勿体無い気分。

「そろそろ木星に辿り着きます」

複座席に唯一付いているレーダーで場所を確認したケイゴさんが告げる。

まず様子見で木星近海にボソソジャンプ。

後はゆっくりと木連に接近し、隙を見つけてすかさずボソソジャンプ。

肉眼で捉えられる程の距離なら、

ボソソジャンプが可能という前提があるからこそ実現できる作戦だ。作戦と言える程、緻密な計算はされてないが、許して欲しい。

しっかし、アキトさん、よく木星近海の小惑星なんて知ってたよなあれか？ 昔の拠点の一つか。昔といっても、この世界じゃ未来だけだ。

「木連より数万キロ離れた場所に衛星があります。

そこが私達の拠点の一つなっていますので、そこへ向かいましょう」

ケイゴさんに教えてもらって俺がレーダー内の地図にマーキングする。

「了解した」

そして、重力場を作り出し、蹴る事によって前へと進む特殊隠密型。実は後ろの俺達はこのタイミングで前へ進むか分からずに結構大変。一度軌道に乗ってしまえば楽だけど、加速もちよつと振動が伝わるし。

仕方のない事と言えば、そうなんだけど……。

珍しく機体酔いしちゃってます。僕。

「…………どうする？」

噂の衛星に辿り着いた。

うん。そこまではいい。

問題はその後。

どうやって連絡を取るか。

「既に私は死んだと扱われている可能性が高いですね」

死人が突然の登場。

混乱しない訳がない。

ふむ…………。

それなら…………。

「いつその事、襲撃しちゃいましょうか」

「は？」

呆然とするアキトさんとケイゴさん。

「要するに、ですね…………制圧しちゃうんです」

ウィーンウィーンウィーンウィーンウィーンウィーン！

施設内にけたたましい音が木霊する。

そんな中をケイゴさんと共に走る俺。

「潜入捜査とか俺向きじゃないと思うんだけど・・・」

「ご安心下さい。私が確実な道を案内します」

「御願います。マジで」

銃撃戦とか無理だから。

コホン。作戦はこうだ。

まず、特殊隠密型で接近、施設の入り口を探す。

これはまあ、ケイゴさんのお陰ですぐに済んだ。

その後、ケイゴさんと俺だけが機体から降り、入り口付近で待機。

これは俺のボソンジャンプを利用。

肉眼で捉えられればイメージは楽だからね。

ケイゴさんはB級ジャンパーだし問題ない。

一応、確か一般人でもDFなしでいけたと思うけど、試してない。怖いから。

実は駄目でしたじゃ人一人を殺す事になる。

流石にそこまで自信は持てません。

・・・話がズレたな。

入り口付近までジャンプし、一度物陰に隠れる。

容易に侵入できると思う程、俺は楽観的ではない。

案の定、入り口には見張りがあるし、監視カメラとかも設置されていた。

まあ、俺一人じゃ間違いなく無理だろうな。

でも、施設内を把握しているケイゴさんがいるから、不可能ではない。

少なくとも制御室まで辿り着ければ俺の勝ちだ。

「しかし、大丈夫でしょうか。流石にこれだけの数には」

侵入するタイミングはアキトさんに賭けた。

俺らを降ろしたアキトさんは自らマントを剥ぐ。

その後、全速力で施設内に接近してみせた。

結果、見事にアキトさんは敵に見付かってしまう。

言わずとも分かるだろう。

アキトさんには囷役を担ってもらったのだ。

陽動ともいう。

施設内にエマーゲンシーコールが鳴り響き、一瞬にして大混乱。

入り口にいた見張りも戦闘準備に入り、施設内は手薄に。

後はその隙に施設内に侵入し、監視カメラの死角を抜け、制御室ま

で向かえば良い。

その案内役がケイゴさん。

施設を把握しているケイゴさんなら適任だ。

だが、これには一つだけ大きな問題がある。

アキトさんの負担が著しく大きい事だ。

言わば、一人対一軍。

迎撃には総動員といかなくてもかなりの数が動員される事だろう。

となれば、施設、言い方を変えれば、基地一つを相手にしていると同

じ。

だからこその一対軍。

特殊隠密型一機で基地内の機体や兵器全てを相手にしなければなら

ない。

しかも、アキトさんには一切の攻撃を封印してもらっている。

これは、ここで戦死者や損傷を出したら印象を悪くしてしまうとい

う前提があるからだ。

俺達はこのケイゴさんを返しに来たのであって、戦闘しに来た訳

ではない。

多少の被害なら目を瞑るだろうが、深刻な被害ならば、結託以前の

問題だろう。

要するに、アキトさんは多くの敵を同時に相手にしつつ、全ての攻

撃を避け、

かつ、逃げ過ぎて追撃を諦めさせないようにし、適度に引き付けなければならぬのだ。

しかも、今回身に付けたきた武装はディストーションブレードのみ。更には、バツテリー装着型な為、過度の機動は自身を追い込むだけという悪条件付き。

流石のアキトさんでも絶望的な状況だろう。

でも……。

「大丈夫ですよ。何たって……アキトさんですから」

何故ならアキトさんは、絶望な状況を見事に覆し、愛する者を救い出した対群のスペシャリストなのだから。

「……コウキさんがそう言うのならそうなのでしょう」

「はい」

「信頼しているのですね」

「ええ。俺が知る最高のパイロットです」

「……そうですね。それならば、私も信じましょう」

ケイゴさんの後を追う。

完全に施設内の場所を把握してるんだろう。

その走りに迷いはない。

「その突き当たりをみ　　クツ。コウキさん、すぐに部屋へ！」

前を走るケイゴさんが突如、走るのをやめて部屋へと駆け込む。

ケイゴさんの背中しか見えずに状況が分からなかったが、とりあえず指示に従う。

ケイゴさんが言うのだから何かあったのだろう。うん。

案の定、部屋へ駆け込むと同時に発砲音が聞こえ、弾丸が背後を過ぎ去った。

あ、危ねえ……。

「……もしかして、バレちゃいました？」

「ええ。恐らく監視カメラの配置が何かが変わっていたのでしよう。すいません。コウキさん。私が迂闊でした。こんなミスでバレてしまうとは」

「構いません。そんな事より次を考えましょう」

まあ、責めても仕方ないしね。

そんなの予想できる事でもないし。

そもそも、俺が監視カメラに映ってしまったせいかもしれない。

テンパってたし、俺。

それに、ケイゴさんが映ってケイゴさんだって分かっただら対応変えるだろうしね。

まあ、真実は分からんから、作戦は続行という事で。

「絶対に張り付いてますよね」

どの部屋に入ったのかバレてる訳だし。

扉を開けた瞬間を狙えばいい。

「あれを使いましょう」

「……天井裏ですか。なんか懐かしいですね」

「懐かしい？」

「いえ。こつちの話です」

どうして潜入してる時っていつも天井裏を使うんだらう。というか、どうして天井裏はいつもノーマークなんだ？

普通はそこも警戒するだろう。

使い古されているが故にもう盲点とは言えないと思うんだが……。
まあ、いつか。それしか方法ないんだし。

「方向は把握しています。任せてください」

「御願います」

方向感覚は抜群って事ね。

「所で、ここって誰の部屋なんでしょうか？」

「さて？ 一つだけ言える事は……」

「一つだけ言える事は？」

「ここが女性士官の宿泊エリアだって事です」

「さっさといきましよう！」

犯罪者になっちまう。

「ここの下が制御室です」

天井裏を四つん這いで進み、敵に遭遇する事無く無事に制御室に到着。

本当に警戒されてない……うん、ビックリだ。

さて、漸く木連にIFSは普及されてないからと一応持ってきたIFS端末を使う時が来たな。

……とりあえず、その見張りの人をどうにかしないとならんが。

「私が仕留めます」

・・・マジっすか？

相手は銃持ちで、こっちも一応銃持ちだけど殺しは御法度。

こっちは牽制程度しか出来ないけど、向こうは完全に命を狙ってくるんですよ？

しかも、二人。危険度は半端ないです。

「完全に不利ですよ」

「木連式柔は・・・伊達じゃない」

天井裏から飛び降り、向こうが気付き、振り返り切る前に背後から拳の一撃。

「まず一人」

「何者」

続けて、回し蹴り感覚で足払い。

倒れ込む兵士に対して跳びあがって、みぞに踵落としをお見舞い。

「二人」

・・・一瞬にして兵士二人が気絶しちゃいましたとき。チャンチャン。

「もう大丈夫です。気付かれる前に」

「・・・了解です」

「どうかしました？」

呆気にとられていました。

・・・ってそんな余裕ないな。

「ほっと」

まずは飛び降りる。

その間にケイゴさんは気絶した二人組みを廊下へと連れ出していた。そして、扉をロック。これで干渉は防げる。

「ここで基地内全ての制御を行っています」

眼前には巨大制御端末。

そりゃあ、あれだけの無人機があるんだもんな。

オモイカネとまではいかなくてもこれぐらいは出来るか。

「といつても、ここは制御を行っている場所で、実際の指令は指令室からです」

要するに、オペレーター達が色々と弄ってるのが指令室。

んで、その操作を反映させる為の大元のコンピュータがこれって訳ね。

「目的地は指令室で？」

「ええ。恐らくこの基地を預かっているキシモト少将はそこにいるでしょう」

「ふむ。とりあえず、地図でも出しましょうか」

空中にディスプレイを展開。

本当に凄い世界に来たもんだと今更ながらに感心。

「あらまあ。まさかの真逆ですか」

「ええ。しかし、制圧してしまえば距離なんて関係ありません」
「ま、それもそうですけどね」

そもそも俺達の目的はケイゴさんの生存を一般兵に知らせずに上の人間に知らせる事。

今回で言えば、そのキシモト少将とかいう人にだけケイゴさんの事を知らせるべき。

一般兵に知られたら情報が漏れてケイゴさんが木連に帰ってきてる事がバレるしな。

ふむ。指令室に乗り込むよりも呼び出した方が良くもしれん。

「爆弾を仕掛けた事にしません？」

「は？」

突然過ぎたかな？

「乗り込むよりそのキシモト少将とやらを呼び出した方が良くと思う訳ですよ。」

ケイゴさんの存在を知らせるのは神楽派の上層部のみ絞った方が良くいんですから」

「確かにそうですが、それでは兵が混乱するのでは？」

確かに混乱したら何があるか分からないしな。

それに、それを収めるだけの理由が必要になる。

爆弾仕掛けられました。解決しました。何故？ どうやって？ 秘密です。

それじゃあ納得出来ないよな。流石に。

ケイゴさんが会いに来たからなんて兵士に言えないし。

「それじゃあどうしましょうか？」

「少将に伝えてください。次の将棋はいつにするか、と」
「将棋？」

「どういう意味だ？」

「少将とは父繋がりで将棋仲間なんです」

「なるほど。二人だけにしか分からない暗号と」

「ま、知っている人は知ってますけどね。問題ないかと」

まあ、そういう事を知っている人「身近」上層部という事だろう。

「分かりました」

さてさて、主導権を握られないようにしないとな。

まあ、送るのは文章だけだけど。

「どこに呼び出しますか？」

「私の私室……では駄目だから、応接室で」

「了解」

とりあえず……こんな感じかな。

「『次の将棋について話し合いたい。至急応接室まで』」

うわぁ。なんて脈略のない言葉。

「意味は通じるでしょう」

「まあ、はい。とりあえず」

施設内のシャッターを全て下ろし、気圧を操作。

高山病、所謂、低酸素症を擬似的に作り出す。ま、気絶してくれば嬉しいかな程度。

その後、指令室から応接室までの廊下のみオープン。制御室から応接室までは気絶している兵士か兵士がいない廊下のみを選ぶ。

気絶していない強者もいるけど、隔離状態だから問題なし。

最後に気圧を操作して、通常状態に戻す。

流石にすぐには覚醒しないだろう。うん。

張り巡らされた警戒網を突破するにはこの方法しかなかったのだよ。恨んでくれるな。

「それじゃあメッセージを送りますよ」

「はい」

送信つと。

これで指令室のモニターに映る筈だ。

「応接室は・・・と」

再度、地図をオープン。

先程、作り出した通路を確認する。

「覚えておいて下さいね。ケイゴさん」

「もちろんです。既に覚えました」

頼もしい事で。

「少将は・・・」

指令室から移動する少将をサーチ。

「流石に護衛は付いてるようですね」

「将棋仲間と言えど、それを調査した可能性もありますから。」

私だと思わせて、実は違う人物だとか警戒してるのでしょうか」

「ま、当然と言えば当然の話ですね」

将棋仲間である事を隠してないのなら調査も可能。

確かに偽者の可能性もあるからな。

「しかし、護衛がいては・・・」

「大丈夫です。彼らとも知り合いですから」

「あ。そうなんですか」

「ええ。少将の側近達ですからね」

それなら別にいいか。

「それじゃあ、移動しましょうか」

「はい」

さて、応接室へいこ。

「忘れてた」

「どうかしましたか？」

「俺達の存在をバラしちゃうまずいですからね。ちょっと待っていてください」

制御室にケイゴさんを残して、俺は・・・。

「ジャンプ」

特殊隠密型の複座席へと向かう。

「アキトさん」

「・・・コウキか。どうだった？ 失敗か？」

戦闘中に申し訳ありません。

でも、いきなりの登場に動揺しないのは流石ですね。
俺だったらいきなり声を掛けられたら普通に驚く。

「いえ。問題ありません。接触できそうです」

「そうか。流石だな。コウキ」

「アキトさんのお陰です」

「ふつ。この後、俺はどうすればいい？」

「離脱して、完全に引き離れたらジャンプで地球に帰還を」

「了解した。映像は消しておけよ」

「無論です。後は任せてください」

「ああ。任せたぞ」

「それでは」

再びジャンプ。

制御室に戻る。

無事に離脱してくれよ。アキトさん。

「戻ってきましたか。コウキさん」

「ええ。あとちよっとだけ待ってください」

制御室からアクセス。

基地内における今回の戦闘映像は全て削除。

基地の機体に残るであろう戦闘データは後で削除しないとな。

まあ、その前に無事に接触を済ませなければならぬだけだ。

「何を？」

「戦闘映像の削除を。この映像からケイゴさんの帰還を察された意味がありませんから」

「なるほど。それならば、後で少将に機体の方の映像も消すように御願います」

「あ。それじゃあ、御願います」

ま、僕自身もきちんと確認させてもらいますけどね。

別に信用してない訳じゃないけど、慎重には慎重を重ねないと。

「さて、それじゃあ」

「ええ。いきましよう」

連なつて制御室から出る。

目指すは応接室だ。

「恨むなよ」

廊下で気絶して倒れ込んでいる兵士に告げる。

まあ、殺してないし、気絶してるだけだから大袈裟かもしれないけど。

・・・うん、苦しかっただろうから、やっぱりごめんなさい。

「そろそろです」

応接室まであと少しって事ね。

「たとえ銃を向けられようと動揺しないで下さい」

ちょ、ちょっと、それは厳しいんじゃないかな？

「すぐに私が解決しますから。私を信じてください」

・・・そんな事を言われたら、信じるしかないじゃないですか。
ああ、もうどうにでなれってんだ。

シューインッ。

応接室の扉が開く。

カチャッ。

同時にこちらに向けられる数多の銃。

だが、ケイゴさんはそんな中をふてぶてしく進む。
こりゃあ負けてられないな。

・・・動揺を隠せずに額には汗が浮かんでるが、気にせんでくれ。

「・・・ケイゴ。まさか、本当に・・・」
「お久しぶりです。キシモト少将」

呆然と立ち尽くす壮年の男性。

「・・・生きていたのか？」

「ええ。生き恥を晒しています」

「・・・死んだと報告されたのは」

「全てをお話します」

「うむ。まずは座りたまえ」

「失礼します」

「お前もだ」

「あ、はい」

誰か知らないのに座らせていいのかな？
というか、いきなりお前呼ばわりはちょっと頭に来るなあ・・・。
ま、慣れたけど。

「おい」

「ハ、ハッ！」

「部屋の前でお前達は見張りをしている」

銃を構えながらも啞然としていた兵士達。

まあ、ケイゴさんと知り合いみたいだから驚いていたんだろう。

死んだと思っていた奴がいきなり眼の前に現れたら誰だって驚く。

「お前も座れ」

「ハッ」

副官らしき人物が少将の隣に座る。

「それでは・・・」

「はい。始まりは」

「その前に確認させてくれ」

「ええ。もちろんです。どのように証明すれば？」

ケイゴさんのそっくりさんである可能性はまだある。だからこそ慎重にならないといけない。半ば確信していようと最終確認は大事だ。

「お前の戦績は？」

「三十一勝七十三敗」

「お前と俺の初めての対局は？」

「私が十の時です」

「お前の初恋は？」

「俺が八歳の時・・・って何を言わせるんですか！」

「どうやら本物のようだ」

「最後のはおかしいでしょう！」

・・・なんか意外と良い人っぽい。

というかケイゴさん、振り回されていますね。

「話せ」

「ハッ」

すぐに空気が変わるのには流石軍人って感じかな。

「始まりは我々の情報を草壁派に掴まれた事からです」

.....

「・・・なるほど」

ケイゴさんが話し終え、少将は深々と椅子に座り直した。

「完全に嵌められた訳だな」

「ええ。私が迂闊でした。畏である可能性を考慮していなかったのですから」

「なに、なるようになった結果だ。後悔しても始まらんだろう」
「ハッ」

そう言い聞かせる少将だが、その顔は苦渋に満ちていた。

「もしや、父が・・・」

それに気付いたのか、ケイゴさんは慌てた様子で問いかける。

「いや。カグラ大将の意思は変わらない。大将は徹底して和平を唱えている」

「・・・良かった。流石は父上。感情に囚われていない」

ケイゴさんは安堵の息を吐く。

でも、それだったら、少将はあんな顔をしない筈だ。

「だが、息子の報復として一戦交える事も辞さない」と

「なっ!?! それは本当ですか?」

「ああ。どちらにしろ、和平は対等でなければならぬ。

その為には地球の力を削ぐ必要があるのだ。

一戦交え、我々が勝利しなければ、決して対等の立場にはならん」
「しかし、それでは莫大な被害が・・・」

「うむ。もちろん、戦争以外にも力を削ぐ方法はいくらでもある。だが、和平派のトップが賛同してしまえば軍の方針もそうなってしまうだろう」

「愚かな。父上はそのような方では」

「それ程、お前の死は大将にとって大きかったという事だ」

「クツ。でも、まだ今なら」

「無理だ。たとえ不本意であろうと一度告げた言葉は撤回出来るものではない」

「・・・申し訳ありません。父上」

項垂れるケイゴさん。

自身のせいで戦争が、なんて思っているのかもしれない。でも、それを言うなら俺らのせいでもある。

それに、そもそも、大元の原因は草壁派にあるのだ。

これに関してはケイゴさんのせいでもなんでもない。

ケイゴさんが責任を負う必要なんてどこにもないのだ。

背負う必要のない責任を負うのは完璧超人ケイゴさんの唯一の欠点だな。うん。

それに・・・。

「俺は賛成です」

「え？」

「一戦交えなければならぬ。それは地球も木連も同じでしょう」

「コウキさんは犠牲者を出しても構わないと!？」

「そうは言っていない。ですが、互いの認識が必要なんじゃないですか？」

「認識？」

「我々地球側は司令の演説によって木連の存在を知りました。

ですが、それは司令の言葉であって、実物と遭遇した訳ではない。

市民はもちろん、軍内でも半信半疑の者がいる筈です。

その戦闘は地球にとって木連人が紛れもなく人間であると悟る何よりの機会です」

「木連人を知る機会・・・」

「そして、それは木連も同じでしょう。」

悪の地球人、ただそれだけを思っただけで木連やってきた。

木連人にとって地球人とはキョアック星人のようなものなのではないですか？」

「・・・確かに」

「その認識を改める必要があると思うんです。」

地球人には地球人になりたがる理由がある。

その根底にあるものは互いに同じ国を想う気持ちであると」

「それを悟る良い機会になるといえる事ですか？」

「ええ。一同に会するからこそ、互いの想いを伝えられるチャンスなのだと思います」

「・・・」

「まあ、俺とて戦争以外でそのような機会を設けたかったです」

実際に戦闘に入る前に、互いに何かを伝えるチャンスはきつとやってくる筈。

その時、互いに互いの想いを伝え、読み取れたら、お互いの事を認め合えると。

実際に眼にし、耳にするからこそ伝わる何かがあるんじゃないかと。俺はそう思うんだ。

「ほお。お前は地球人なのか」

バツと向けられる銃。

ふんっ。もうどうにでもなれっつての。

「中々の胆力。なるほど。確かに地球人を眼の前にすれば伝わって

くるな」

「何がです？」

「お前の和平への想いだ」

俺の想い？

「たった一人でここまでやって来たのだ。その想いは伺える」

「残念ですが、一人じゃありません」

「ほお。誰だ？」

「ケイゴさんがいました。そして、もう一人」

「・・・ケイゴが？」

「はい。ケイゴさんを信じてるからこそ、ここまで来たのです。

ケイゴさんであれば、和平の意思を貫けると。

そう確信しなければ、ここまでわざわざやっては来ませんよ」

「ハツハツハ。ケイゴ」

「はい」

「お前の地球訪問は悪い事ではなかったな。

こうして、木連人を信じる地球人もいる。

そう知る事が出来ただけでも俺達にとっては意味のある事だ」

「ええ。本当に」

別に木連人全てを信用した訳ではありませんよ」だ。

「所でそのもう一人とは？」

「地球における和平推進メンバーの一員。テンカワ・アキト」

「何？ 死神がここまで来ていたというのか!？」

「ええ。彼は誰よりも和平を成し遂げたいと思っています。

その想いはたとえケイゴさんであろうと及ばない。もちろん、俺もです」

「そうか。木連を屠る死神が誰よりも和平を想うか。皮肉な事だ」

戦う事が誰よりも上手い人間が最も戦争を嫌っている。

・・・確かに皮肉な事だよな。

「さて、ケイゴ」

「はい」

「俺がなんとしてもお前と大将を会わせてやる」

「ありがとうございます。少将」

「まあ、早く大将を安心させてやりたいってのが本音だな」

「それは上官として相応しくない本音ですね」

「ハハツ。違くない。だがな、私情があるからこそ戦えるのも事実だ。」

お前は見失うなよ。確かに現実是非情だ。しかし、情ある者に人は付いていく」

「忘れません」

「ああ。忘れるな」

ケイゴさんも親が親で苦勞してるだろうけど、恵まれているな。

こうして導いてくれる怖い先輩の存在は本当にありがたいものだ。

ユリカ嬢もそうだし。

うん、やっぱり、将来的にこの二人は何かしらのトップに立ちそう
だ。

カリスマ性もあるし、情も篤い。

確かに二人には付いていこうと思わせる何かがあるよ。

それが情かどうかは分からないけど。

「最後にだが・・・」

うん？ まだ何かあるのか？

つてか、俺？

「地球人がここまで来た理由は？」

「ケイゴさん」

「御願います。」

「それは父との席で御話します。是非とも少将にも」

「分かった。その時は同席させてもらう」

「はい。御願います」

「まずは大将だな。時間が掛かるかもしれないが、我慢してくれ」

「ええ。こうして御願いできる。それだけでも恵まれています」

「ふんつ。これから忙しくなるから休んでおけて意味だぞ」

「それは嬉しい苦勞ですね」

「口が達者になったな。ケイゴ」

「地球では口達者が一番みたいですよ」

「ほお。そうなのか。それは知らなかったな」

おゝい。変な情報を教えなくていけないかな？

「冗談です」

アンタ、そんなにお茶目だったっけ？

「知ってる」

てめえもかよ。

・・・そういえばそうだったな。

「はぁ・・・」

なんか疲れたぜよ。

・・・ま、なんとかなったかな。

とりあえず、まあ、一安心。

第七十二話（後書き）

なんとか接触。

しかしながら、ちょっと遅かった。

まあ、もっと遅かったら最早手遅れだったでしょうが。

とにもかくにも一安心・・・かな。

いつまで草壁派が大人しくしていてくれるかが問題です。

それでは、これからよろしく御願います。

第七十三話（前書き）

いつもに比べて非常に短いです。
区切りが良かったので。

第七十三話

「ケイゴ」

「少将」

それから数日の間、俺達は基地内で匿われた。

少将とその側近には既に存在を知られているが、他に知らせるつもりはない。

あくまで俺達は秘密裏に動かなければならないからだ。

一般人から存在が露見したら全てが無駄になってしまう。

だからこそ、俺達は誰にも接触されないよう隔離してもらわねればならなかったのだ。

まあ、僕はもう開き直ってボソソジャンプで一度地球に戻りましたけどね。

司令やらアキトさんやらに状況を説明しないとイケなかったし。

しかし、秘密裏に行動しなければならいと言えど、

ナデシコの連中に司令が無事な事を教えられないのは心苦しいかな。ミナトさんやセレス嬢にも未だに言えてないし。

二人になら……大丈夫だよな？ 家族だし、秘密事はなしにしたい。

「もしや……」

「ああ。大将への取次ぎに成功した」

どうやら取り次いでもらえたようだ。

「ありがとうございます！」

頭を下げるケイゴさん。

それもそうか。親父さんの気持ちを考えれば。

「そろそろ定例会の日も近い。まずはきちんと大将に話を通す事だ」

なんとなく俺がここにいる意図を感付いているみたいだ。

まあ、別に感付かれても困らないけど。

むしろ、意図を理解してもらって協力を得られた方がずっと嬉しい。

「はい。父にも全てを話します」

「うむ。明日、この基地まで来て頂く」

「なんとお伝えしたのですか？」

「表向きは視察。伝言に『駒落ちせずに済んだ』と」

駒落ち。またもや将棋ですか。

ハンディキャップとしての意味を持つ駒落ち。

強力な駒を先に取り除く事から、

意味合いとしては心強い者が戻ってきた。

もしくは失ったと思われた者が戻ってきた。

駒落ちした駒は完全にゲームから除外、要するに死と同じ。

伝言に含まれた意味は死んだと思われた心強い味方が戻ってきたっ

て所かな。

まあ、勘が鋭い人には充分に伝わる隠語だ。

むしろ、俺ですら理解したから勘が鋭くなくても分かってしまうかもしれない。

「視察の内容も明確にしておくべきでは？」

「ふむ。戦闘データは言われた通りに削除してしまったからな。特
にないぞ」

ああ、ありがとうございます。

一応、後で確認させてくださいね。

「それならば、これを」

懐から何かのディスクを取り出すケイゴさん。

というか、その存在、僕にも教えてくれませんでしたよね。

「それは何だ？」

「草壁派の新型兵器ですよ」

「何？」

怪訝な顔でケイゴさんを眺める少将。

「御存知ですか？ 草壁派が新しいシリーズを開発した事を」

「あいつらの主要機体はジンシリーズだっただろっ？」

「いえ。私も先日の襲撃で初めて気が付いたのですが・・・」

ディスクを差し出しながら告げる。

「福寿のデータ。恐らく盗まれました」

「なっ!？」

「その映像を保存しておきましたので、これを」

「うむ……。検討の必要があるな」

「はい。草壁派の機体の情報を得た。充分に訪問する理由になるか
と」

突然の大将訪問にはそれらしい理由が必要になってくる。
その理由に草壁派の新型機を当てようって訳だな。
既に草壁派と神楽派が対立している事は周知の事実。
少なくとも、兵士達はその理由で納得する。

「分かった。使わせてもらおう」

「はい」

それにしても、草壁派はかなりの期間、六連や夜天光を秘匿していたみたいだ。

俺が夜天光と六連に襲われた時期からかなり経っている。

それなのに少将という高い立場の者もその存在は知らなかった。

恐らく、神楽派に見られる可能性がある作戦は全てジンシリーズで起こっていたのだろう。

もしかしたら、六連と夜天光は完全に草壁子飼いの連中にしか与えてないのかもしれない。

まあ、その辺りは俺が悩んだ所で真実は分からないけど……。

いや。六連は違うか。あれは俺らの襲撃にも使われてたし。

六連が対福寿で、夜天光は切り札って所だな。

俺を襲った時に夜天光が出てきたのは……確実に破壊する自信があったからだろう。

データを送れる距離でもなかったし、破壊しちやええバレル事はない。

まあ、こうして俺は無事に生還してバレてしまった訳だけど。

ハッハッハ。流石、俺。……なんか虚しいな。コホン。

とりあえず、草壁がどこまで把握しているかを出来れば知りたいな。

既に六連の存在がバレていると見ている？

一応、カグラツキは完全に破壊した訳だから、漏洩していないと見ているかも。

うん。やっぱり意味ないか。真実が俺に分かる筈もないし。

「その映像はどこで？」

気になったから聞いてみる。

もしかして、カグラヅキを襲撃したのは六連や夜天光なのだろうか？

「カグラヅキ脱出の際にマリアが気を利かせてくれたようで」

・・・それじゃあ、ナデシコが襲撃された時って事か。

それにしても、機転利き過ぎだよ。マリアさん。

まさかあの一瞬でそんな判断をするなんて。

「それなら、その時に知ったんですか？」

「ええ。バッタやジンと共に出て来なければ草壁派と分からなかったでしょう」

要するに、ケイゴさんですらそれまで知らなかったという事。

それなら、六連すらも秘匿の対象だったって事か。

それなのに、六連を使用したのは何故だ？

単純に戦力の増加？ いや、それだけじゃないだろ。

それだつたらひたすらバッタやジンの数を揃えればいいだけだ。

まさか、夜天光の量産体制が整った？

もしくは、更に新しい機体の開発に成功した？

・・・どちらにしる、良いニュースではないな。

杞憂に終わってくれればいいんだけど・・・。

「しかし、おかしな話です」

「何がですか？」

「初めて地球側の機体を捕縛した時の事です」

「初めて・・・それはジンと共に跳んだ奴ですか？」

「ええ。月軌道上でフレームのみ手に入れる事が出来ました」

あの時のパイロットは月臣さん。

という事は草壁派の人間だよな。

「草壁派は見向きもせずに廃棄したんです。

その時、私達は福寿開発に行き詰っていて、その廃棄された機体を頂きました」

「見向きもせずに廃棄・・・ですか？」

「ええ。もしかしたら必要なデータを採取した後なのかもしれませんが・・・」

「それなら別に廃棄する理由はない・・・ですよね」

「はい」

あえて廃棄した？

いや。わざわざ対立している陣営に力を与える必要はない。

・・・全く方向性が違うから？

確かにエステバリスと六連、夜天光では方向性が違う。

既に六連と夜天光の情報をカグラヅキから盗んでいれば、廃棄しても問題ない。

だけど、わざわざ廃棄する必要もないだろう。

「あえて廃棄するメリット・・・か」

デメリットの面が強過ぎて思い浮かばない。

「メリット・・・ですか」

ケイゴさんも考え込む。

「新型機を秘匿してたのなら、それを秘匿し続ける為じゃないのか？」

「少将？」

それはどういう意味ですか？

「行き詰った人間は何をするか分からない。

草壁派の施設に潜り込むという強硬策に出るかも知れんだろう」

「確かに」

行き詰まりを解消する為ならそれぐらいはする。

たとえヒントがあるか分からずとも、そこに可能性があるのなら。

「慎重派で裏工作好きの草壁の事だ。

少しの露見でさえも防ぐ為に、そんな手を打ってきてもおかしくない」

「目先の利に喰い付かせ、本当に隠したいものから注意を逸らせた・・・」

「ま、見事にやられちゃったって訳だな。俺達は」

「それに、実際に廃棄したという事実から、

草壁派が小型人型機に関心がないと神楽派を欺ける」

「鋭いな。恐らく、そんな意図もあつただろう」

興味・関心がないと思わせておいて神楽派よりも強力な人型機を開発する。

・・・なるほど。厭らしくて良い手だと思つ。

人間は競争心が作業効率に大きく関係する。

たとえば、競争相手に負けたくないと思えば、

競争相手以上の成果を得るまで納得出来ずに努力し続けるだろう。

相手以上の成果、これは相手を基準にする事で自身の努力の程を決めているからだ。

だが、競争相手がいなければ・・・どうなる？

恐らく、焦りは生まれず、明確な目標も生まれまいだろう。

もちろん、計画上の期限はあるだろうが、間に合えば良いと思わせるだけだ。

確実に、期待以上のものは生まれてこない。

情性的に計画を進めて、予定通りの性能で納得してしまうからだ。

焦りは時として人を努力させる理由になり得る。

これでは敵わない、そう思うから更に上を目指すのだ。

競争相手がいる、だからこそ期待以上の性能が得られるのだ。

だが、今回、神楽派には競争相手がいない。

焦りは生まれず、予定の性能で満足してしまう。

計画より早く完成する事もなく、計画通りの性能でしかない。

反して、草壁派は神楽派が新型機を開発していると知っている。

その上で新型機を開発しようとしているのだ。

草壁派の連中はこう思うだろう。

神楽派を上回る機体を作り上げよう。

その結果、予定以上に早く、予定以上に高い性能の機体が出来上がる。

人の負けたくないという気持ちを活かした見事な策って訳だ。

こりゃあ、機体性能では草壁派の方が優れていると見て良いだろうな。

「さて、そろそろ俺は業務に戻る」

「すいません。わざわざ」

「なに。これは必要な事だ。無駄な事に労力は使わんよ」

「そうですか」

あまりの言い方に苦笑するケイゴさん。

「色々と収穫はあった。後は明日だ」

「はい」

「まあ、あまり肩肘張らずにいつも通りのお前でいる。それで大丈夫だ」

「了解」

「それじゃあな」

去っていく少将。

「変な人ですね。でも、良い人だ」

「ええ。尊敬する軍人ですよ」

微笑むケイゴさん。

本当に貴方は恵まれてますよ。

ま、俺も恵まれてますけどね。主に家族に。

「・・・スウ・・・」

息を吸い・・・。

「・・・ハア・・・」

息を吐く・・・。

所謂、深呼吸つて奴だな。

「緊張してるんですか？」

「ええ。それなりに」

応接室、強張った顔付きで前を見詰めるケイゴさん。

あと少してケイゴさんの父親、神楽大将がここに到着するのだ。緊張するのも仕方ないだろう。

既に基地に到着したと知らせが入っている。

「ケイゴさん」

「はい」

「緊張する必要はありませんよ。相手は父親じゃないですか」

父親・・・か。

もう何年も会ってない存在。

そして、これからも二度と会えない存在。

・・・今更だけど、なんか寂しくなってきたな。

「コウキさんの父はどんな方なのですか？」

俺の父親？

「そうですね。逆らえない存在でした」

「ハハハ。それならば私も同じ・・・でした？」

共感してくれたみたいだ。

「何なんでしょうね。あの逆らえないオーラは」

「・・・ええ。体格的に負けている訳ではないのですが、どうして
も」

「ガキの頃から刷り込まれてるんですよ。きっと」

「……かもしれせん」

本当に、殴られた訳でもないのに、どうして逆らえなかったのかな？

「別段優しい訳でもない。立場がある訳でも名誉がある訳でも」

「……」

「でも、不思議と尊敬していました。偶に理不尽でしたけどね」

あの後ろ姿に幼い俺は何を思ったんだろう？

何を思い、何を考え、俺は親父を尊敬したのだろうか？

……いや。違うか。

何も思わず、何も考えず、無意識に尊敬しちゃうのが親父って存在なんだ。

「……コウキさんの父はどんな職業を？」

「職業？ アハハ。なんでもいいじゃないですか」

唯のサラリーマンでしたよ。

少なくとも、ケイゴさんの父親のように立派な役職の人間ではないです。

「ちょっと柔道をかじっただけの普通の人間です」

「……普通ですか」

「ええ。本当に普通で、どこにでもいるような……」

今、何してるんだろうな？ 親父は。

元気にやってるかな？ お袋は。

楽しいキャンパスライフを送ってるか？ 兄貴よ。

変な男に捕まってるないよな？ 妹よ。

長生きしてくれよ。爺ちゃん。婆ちゃん。

従兄弟にだって、叔父や叔母にだって、
今すぐにでも会いたい家族なんていくらでもいる。
でも・・・もう会えないんだ。

「大切にしておあげてくださいね。家族を」

「・・・コウキさん」

「俺はもう親孝行できませんから」

孝行の、したい時分に、親はなし・・・か。

結局、親孝行の一つも出来ずに永遠の別れになっちまったな。
別に親が死んだ訳じゃないけど、なんとなく同じ気分。

「ええ。大切にします」

ありがとう。ケイゴさん。

「・・・」

・・・なにやってんだろうな。俺。

こんな状況なのに・・・。

家族の事を考えるなんて・・・。

不意に涙が込み上げてきた。

「みつともないな。俺」

恵まれた家族がお前にはいるだろ。

ミナトさんやセレス嬢。

今の家族を大切にしていればいい。

「おし！」

涙を拭き、顔をバシバシと叩く。

「ふう」

感傷に浸るのはもうやめだ。

この世界に生きると決めた日に決別した筈。いつまでも甘ったれてるんじゃないぞ、俺。

「すみません。なんか暗くしちゃって」

「いえ。……そろそろ来ますよ」

触れないでくれてありがとう。ケイゴさん。相変わらず優しい人だ。

シューインッ。

「……ケイ……ゴ」

入ると同時に驚愕で顔を染める威厳ある軍人。

「ただいま戻りました。父上」

そんな軍人にケイゴさんが敬礼を行う。

「……ケイゴ……なのか？」

「はい。父上」

感動の対面。

息子を失い、悲しみに包まれた父。

ずっと辛く、苦しかった事だろう。
でも、その息子は生きていた。
父親にとってこれ以上の喜びはない。

「・・・よく帰った」

「・・・ハッ」

威厳のある精悍な顔から涙を溢し、息子の帰還を心の底から喜ぶ父親。

涙を溢しながら、情けない顔になるまいと表情を必死に保ち、父の愛に触れる息子。

その姿はまるで神聖な絵画のようで・・・。

・・・やっぱり、親子って良いな。

そう思わせる心の琴線に触れる光景だった。

第七十三話（後書き）

本当に今更だけど、『コウキ、家族を想う』でした。

同じ境遇にたった時、私ならどうなるかなと思いつつ書き綴る。

途中、ちょっと泣きそうになっちゃいました。

・・・話が進まない。

予定では今回で地球に帰還する筈だったのに・・・。

ま、まあ、引き続き、頑張ります。

第七十四話（前書き）

さあ、どんどん行きましょー！

第七十四話

「・・・そうか。まさかこの私が踊らされていたとは」

ケイゴさんの話を全て聞き終え、神楽大将は深い息を吐いた。

そりゃあ、利用されてた訳だから何かしら思う所があるだろうさ。

「それならば、シラトリ・ユキナも無事なのか？」

「ツクモの妹・・・ですか？」

「うむ。草壁派が和平の使者として送り、今は殺されたとされている」

なるほどね。

ケイゴさんと和平派を、ユキナ嬢で将来有望な三羽鳥をそれぞれ焚き付けた訳だ。

身内の死程、人の感情を揺さぶるものはないからな。

ツクモさんは妹さんの事を溺愛してたようだし。

ツクモさんの親友の二人もユキナ嬢には頭が上がらないって感じだった。

焚きつけ効果はかなり期待できるだろう。

特に草壁派内で和平を提唱するツクモさんを揺さぶれたのが一番大きい。

多分、ツクモさんを中心に草壁派内でも和平を考える人間が増えてきていた筈。

そんな中でツクモさんが和平提唱をやめれば、草壁派内の意思も統

一できる。

本当に一段も二段も考えられている策だよ。まったく。

「彼女ならば今もナデシコ内で保護されています」

ですよね、とケイゴさんが眼で訴えかけてくるので。

「不自由な暮らしはさせていないと言い切れます」

こう答えました。

「ふむ。報復の為に殺されたとなっている二人は無事に生きている。使えるな」

「使える・・・とは？」

「墓穴を掘ったという事だ。お前とシラトリ・ユキナの死を公表したのは草壁派。」

碌な確認もせずに、両者の死を偽造したと草壁を責め立てる事が出来るだろうか？」

「草壁ならば誤魔化し切れるのでは？」

「口は達者だからな。だが、武器が増えた事も事実だ」

少なくとも、両者の死で軍人や国民を煽っていた事は事実。

両者の生存を報告する事でその勢いは削げる。

加えて、都合の良い考えだけど、草壁に不信感を抱いてくれればなお良しだ。

「さて、我々としては一刻も早くお前やシラトリ・ユキナの生存を伝えたい訳だが・・・」

その後、ギロツといった感じでこっちを見てくる大将。

思わずビクツとしてしまったではないか。

「して、その者がここにいる意図は何なのだ？」

「地球連合軍の改革和平派に所属する地球からの使者です」

「マエヤマ・コウキと申します」

ケイゴさんの紹介を受けて、頭を下げる。

「私がここにいるのは地球の和平派として木連の和平派に提案した
い事があるからです」

「提案？ 我々にか？」

「はい。地球和平派のトップであるミスマル極東方面軍総司令官が
計画した起死回生の一手を」

.....。

それから、俺は大将に計画の全てを御話した。

司令の死を偽造している事。

ケイゴさんの死を偽造して欲しい事。

秘密裏に計画を練り合わせ、最善の結果を得たい事。

我々が考えた計画の及ぼす影響の事。

そして、俺がA級ジャンパーである事を。

「.....既に地球では跳躍に関する技術が発達しているのか.....」

「いえ。これは特別な人間にしか出来ません」

「その秘密を明かさずに手を組めと？」

「戦後、話す準備は出来ています」

「今では無理な理由があるのだな？」

「.....はい」

信用を得る為に話せる事なら話せたい。

でも、これを話す事によって被害が及ぶのは俺だけじゃないのだ。火星人や火星出身で今、地球で平穩に暮らしている者達などにも及ぶ。

俺は彼らの平穩、幸せを踏み躪る訳にはいかない。

協力者に隠し事をするのは非常に心苦しいが、納得してもらっしかない。

「・・・分かった。その件は今後、こちらから問う事はないと約束する」

「あ、ありがとうございます」

「総司令官殿には了承したと伝えて頂きたい」

「ハッ。必ず」

良かった。大将にも了承してもらえた。

これで計画は進める事が出来る。

「定例会にて私が周りを説得しよう」

「御願います」

大将が説得するのなら大丈夫だろう。うん。

「さて、ここからは一人の親として・・・」

ん？

「感謝致します。息子を救って頂き」

そう言っ頭を下げてくる大将。

・・・て、おい。

「そ、そんな、頭を上げてください。俺は別に何も・・・」

「いえ。貴方は危険を承知でこうして敵陣にまで息子を送り届けてくれた。」

怒りに我を忘れた私や和平派の面々が貴方を殺そうとしてもおかしくないのに」

そ、それは考えてなかったなあ・・・。アハハハハ・・・。怖っ！

「貴方がいなければ、息子と再会する事なく、戦争は激化していたでしょう」

「やはりケイゴさんの死で和平への意思が揺るぎましたか？」

「大切な一人息子でしたから」

「・・・父上」

「ただ、私も和平を提唱してきた一人。安易に方針転換は出来ません。」

ですが、地球へ恨みを覚えたのも事実。あのままでは地球に感情をぶつけていたでしょう」

「そうならず済み、私も安心です」

「私もです。道化にならずに済んだ」

草壁派に踊らされて和平を結ぶと言っていた人間が戦争で感情をぶつける。

確かに道化であり、草壁派からしてみれば笑いたくなるような光景だろう。

でも、そんな光景を見る事は叶わないぞ。草壁派。

「周囲に息子の生存を伝えられないのは心苦しいですが・・・」

「・・・はい」

「後の平和の為、私も大人になりましょう」

そうだよな。息子の死を悲しむ国民達を騙し続けるのは酷く心が痛むだろう。

その痛みを耐えて、俺達に協力してくれると言うんだ。
・・・期待に応えなければ。

「さて、今後の方針だが・・・」

おっと、口調が元に戻った。

これからは木連軍大将としての顔って訳だ。

礼儀は通しても、使者に敬語では威厳がない。

ま、その辺りは大人の事情って奴だな。

礼儀を通すだけでも充分でしょ。

既に吞まれかけている僕もいますし。

「私達は息子の生存を知らない振りをしてながら、地球側の混乱収拾を待てば良いのかな？」

「はい。一刻も早く收拾させるべく努めます」

「ふむ。だが、どれだけ短く考えても半年間はかかるだろう？」

「ええ。そこで大将に御願いがあのです」

「全面戦争の期間を長引かせれば良いのかな？」

「はい。その通りです」

流星に分かってましたか。

「但し、決して地球に勝たせる為に行動しないで下さい」

「無論だ。我が兵達を騙すつもりは微塵もない」

「戦場で垣間見る時は全力で。私達も負けるつもりはありません」

「ふっ。そうまで言われたらこちららも全力で応えるしかあるまい」

「・・・コウキさん・・・父上」

「ケイゴ。これは避けられぬ闘いなのだ。」

ならば全力を尽くす事が礼儀であり、軍人としての誇りだ」

「ですが、それでは大きな犠牲が・・・」

「ケイゴ。覚悟を決めろ。互いに全力を尽くしてこそ見えてくるものもある」

「・・・熱血ですか？」

「木連で欠番とされているゲキ・ガンガーの話で、両者は手を取り合った」

「戦意高揚の為でしたね。思想を操作して」

「あのような都合の良い展開になるとは私とて思っていない」

「・・・」

「だが、戦わずに前へは進めないのだ」

「・・・分かりません。犠牲あつての和平など」

「今は分からずとも良い。いずれ分かる時が来る」

「・・・失礼します」

トボトボと退室していくケイゴさん。

ケイゴさんの性格なら仕方のない事だと思う。

潔癖症というか、汚い事を良しとしない正義感の強い人間だからな。ま、そんなケイゴさんだから慕う人が多いんだと思うけど。

「若いな。ケイゴは」

「良いと思います。清廉なトップでも。汚い仕事は他の者が被れば良い」

「ふっ。若者とは思えんな」

僕も大分擦れてきましたからね。

「草壁派の悪事を公表するのはその戦闘中という訳か？」

「司令は分かりませんが、少なくとも私はそう考えています」

一応、戦闘の可能性がある事は司令に伝えておいた。
その時は明確な返事をもらった訳ではないけど……。

「両陣営が揃っている時にこそ効果的であると」

「我々は草壁派を共通の敵としなければならぬ。」

突然の事態で、混乱していなければ感情が邪魔をしてしまう」

今まで敵だった奴らと手を組めるかって事だ。

反発するのは必至。でも、反発する前に強引に進めてしまえば……。

「はい。それに、一度共通の敵としてしまえば、両者間の溝は一気に埋る」

一度でも手を組めば敵愾心も多少は薄まるだろうという楽観的思考。

「草壁を信じていいのか？ そう困惑している時に手を差し伸べれば……」

「人は答えを与えてくれた者に味方する。手を差し伸べた者の味方になる」

「決心が揺らいでいる時こそチャンスなんです。その機会を逃す必要はありません」

「ふむ。キシモト君。どう思う？」

今まで黙って大将の後ろに立っていた少将に問いかける。

「私はそれでよろしいかと」

「そうか。それならば、その方向で話を進めよう」

「ハッ。司令にもそうお伝えします」

間違ってたら怖いなあ・・・。

その時は全力で謝って、司令の言葉を大将に伝えよう。

「利用しようと思っていたものに利用される。意趣返しとしては趣があるじゃないか」

そう笑う大将。結構、根に持ってますか？

「今後、司令と大将との意思伝達には私を使って下さい。綿密に計画を進める為にも」

「うむ。かなりの数の会談を必要とする計画なのに直接話せないのは不安だが・・・」

「必ず私が伝えます」

「分かった。ケイゴも信頼しているようだから、私も信頼し、任せらる」

「ありがとうございます」

どうやらとりあえずの信頼は得られたみたいだな。

「どの場所にどのタイミングで私はこちらに来るべきでしょう？」

「ふむ。まずは君にも定例会に出席してもらいたい」

「私にもですか？」

「ああ。神楽派内での結束を固める為にもきちんと言話を話しておきたいのだ」

「分かりました。出席させていただきます」

むしろ、ちょうど良いきっかけになるかも。

でもなあ、その中に裏切り者が・・・っていけない、いけない。

まず裏切り者がいる前提ってのがおかしいんだよ。

もうちょっと信じたって良いじゃないか。

・・・でも、やっぱり慎重になるべきなんだよなあ・・・。
結構ジレンマです。

話して楽になりたいけど、人の命が掛かっているから駄目。
俺の双肩にはどれだけの人の命が乗っかってるんだろう？

ボソソジャンプの件でこうまで心労が溜まるとは思わなかった。
いつか胃に穴、頭部に円が出来ちまうっての。

「定例会には？」

「私が連れて行きましょう」

「キシモト君がかね？」

「現時点で彼が来れるのはこの基地だけです。」

また、怪しまれない為にも私の部下とした方が良い」

「確かに、私の部下では怪しまれるな」

僕が木連軍に仲間入りするんですか？

・・・まあ、仕方ないと諦めますか。

大将直属だと確かにどこの馬の骨かも分からない人間だし怪しいよな。

まあ、少将でも充分怪しいけど、大将よりはマシか。

「定例会には部下の一人として連れて行きます」

「分かった。頼む」

「ハッ」

はい。めでたく木連軍人仲間入りです。

・・・ああ・・・なんかどんどん自分の立場が複雑になってきた気がする。

「ケイゴに関しては私が引き取ろう」

「はい。しかし、秘匿対象であるケイゴをどのように用いるおつもりで？」

「カグラヅキに代わる戦艦を用意せなければならんだろう。」

「戦闘中、旗艦として登場してもらわねばならんのだからな」

「しかし、妨害されるのでは？」

「今、草壁はケイゴが地球にいると思っっている筈だ。その隙を突く」

「確かに注意は地球側に払われていると思いますが・・・」

「問題ない。その為に私が草壁のもとへと出向くのだ。」

私は今、息子の恨みを晴らすべく地球を眼の敵にしているのだからな」

そう草壁に思わせる訳だ。

そうする事で草壁派を欺き、注意を逸らせる。

それに、きちんと側近達に状況を伝えるから、大将の態度に反発する事も無い。

まあ、多少の反発を見せないと不自然だから、何かしらの工夫はするだろうけど。

「しかし、新しく戦艦を造る事でケイゴさんが木連にいる事がバレるのでは？」

流星にそこまで鋭くないかもしれないけど、一応。

「可能性はあろう。だが、明確たる証拠がなければ何の対処もできんさ」

「そうですね」

それなら、良いのですが・・・。

「地球側の方が動き易いのであれば、

ケイゴを地球に派遣するが、今はまだ木連の方が動き易いだろう」

秘密裏に動かなければならないけど、
草壁派の注意は地球に向いてる訳だから確かに動き易いかも。

「それでは、私の事はくれぐれも内密に」

「分かっておる」

「一度、司令にお伝えする為に地球に戻ろうと思います。私はいつここに戻ってくれば」

「定例会は三日後。前日の夜にでもここへ戻ってきてくれ」

「分かりました。それでは、前日の夜に、先程まで匿われていた部屋に戻ってきます」

「分かった」

「それでは、失礼します」

偽造のCCを手を持ち、ナデシコの私室を思い浮かべる。

なくても跳べるけど、偽造しないと俺の異常がバレてしまうので。

本来なら複数所持が当然なんだけど、俺は一個あれば問題ない。
跳んでも消費されないし。

「ジャンプ」

とにもかくにも、小さな一歩、だけど、大切な一歩を踏み出す事が出来た。

後は何度も俺が往復する事で隙のない計画にするだけ。

おっしや。いつちよやったるか。

・・・しっかし、連合軍人でありながら木連軍人か。

将来、軍法会議とかに引つ掛からないよな？

なんだか酷く不安なのだが・・・。

「既に遺跡は確保されているか」

「はい」

「なんとしても我らの手で取り戻さねば」

「ええ」

「しかし、ボソソジャンプか。地球人はどのように成功させたのだらうな？」

「・・・調べますか？」

「良い。和平成立後に話すと約束した」

「約束を守るとは限りませんよ」

「どちらにしる、封印するのだらう？ ならば意味のない事だ」

「本当に封印するのでしょうか？」

「・・・初めから疑ってはならん」

「・・・ハッ」

「キシモト君は良くやってくれたな。ケイゴも無事に帰ってきてくれた」

「本当に大佐なのでしょうか？」

「何？」

「キシモト少将が草壁派と手を組んで、大佐の偽者を用意したのでは？」

「あれは間違いなくケイゴだったぞ。それにキシモト君はそんな人間じゃない」

「子を失った心が死を認めずにそう無理矢理納得させているのではないですか？」

「・・・」

「あの地球人にしたって草壁派の事に詳し過ぎます。

何故遺跡を確保したと知っているのですか？ 私達ですら知らない

かった事を」

「・・・随分と警戒しているな。予測でしかないと言っていたぞ」

「ええ。しかし、地球人と言われましても、果たして和平派かどうかも分かりませんし」

「確かにな・・・」

「十分に注意を。和平を成し遂げるにあたり、貴方の存在は不可欠なのですから」

「・・・分かっておる。だが・・・」

「本日からナデシコはこのヒラツカドックから明日香インダクトリ
ー本社に移動します」

「明日香インダクトリー？ あの新型機の？」

司令への報告を終えて、その足でそのままナデシコへ帰ってきた。
撤退戦で受けた損傷の修理も終え、後は明日香で全面改装するのみ。

「はい。明日香インダクトリーに御願いしてナデシコを全面改装し
て頂きます」

「それじゃあ、ナデシコがもつと高性能な艦に？」

「その通りです。もう木連なんて敵じゃありません。叩き潰してあ
げましょう」

強気の発言。

おいおい。和平を結ぶんじゃなかったのか？
と思わず突っ込みたくなる。

まあ、艦長は何も気にせずに言ったんだろうけどね。

あ、一つだけ修正、叩き潰すのは木連ではなく、草壁派ですよ。

「全面改装って事はナデシコにいられないって事だよな？」

「ん？ 確かに」

よく気付きましたね。整備班の方々。

「そうなるかエステバリスとかはどうなるんだ？」

「おいおい。エクスバリス計画は進行中だぞ。中断なんて勘弁だからな」

整備班らしい物事の考え方。

エステバリスをどうするかなんて考えてもなかったぜ。

「はい。その為、明日香インダクトリーに行く前に、
極東方面軍の本拠地であるお父様の基地へと寄り、クルーと機材
を降ろします」

「となると、ナデシコ改装中はそこで過ごす事になるんだな。俺達
「ちゃんと俺専用の研究所を用意しておけよ」

なんかいつでも自由ですよ。ウリバタケさんって。

「その後は一週間の休暇を挟み」

「おいおい、休暇だってよ」

「ようやく外に出れるぜ」

「ずっと缶詰だったしな」

「うう・・・」

あ。艦長が・・・。

「お買い物に行きましようね。ガイさん」

「おう！ 荷物持ちは任せておけ！」

「ありがとう！ 流石、ガイさん。頼りになります」

「アッハッハ。任せておけ」

「うううう……」

アハハ。変な会話を聞いちゃった。

そして、艦長、困惑の形相。

「さて、それなら私は漫画の続きを」

「ふっふっふ。新しいウクレレを仕入れなくちゃ」

「おっしや。なんか美味えもんでも食いにいくか」

「久しぶりに同期の皆に会えるのね」

「うううううう……」

漫画とウクレレと食い意地。

イツキさんまですっかりナデシコに染まってますね。

昔の貴方だったら、艦長の様子に気付いてアワアワしてました。

そして、艦長、段々と表情を変え、怒りの形相に。

「一度、ネルガル本社に顔を出した方が良いのかもしれない」

「私も付いていこう。ミスター」

「ええ。御願いし」

「私の話を聞いて下さああああああい！」

プツンしちゃいましたね、遂に、艦長。

「はあ……はあ……」

そんな息を切らす程に叫ばなくても。

「コ、コホン」

誤魔化しても無駄ですよ。艦長。

「休暇後は基地内で待機。整備班の方は基地の格納庫で作業を。パイロットの方々は基地でパイロットの教育を御願います」

ほおほお。なるほど。そう来ましたか。

ナデシコがいない間は簡易的な教導隊として働く訳ですね。

「相変わらず整備か」

「ま、それと平行して完成させちまわないとな」

「エクスバリスですか。そういうえば、他の機体の名称はどうなってます?」

「エステバリス・・・じゃもう変だもんな。ネルガル製じゃないし」

「んじゃ、新しい機体名も考えないといけませんね」

「その辺りは艦長に要相談だな」

「ふっふっふ。この長い事貯めていた俺の命名アイデアを披露する時が・・・」

「あんま変なの考えるなよ」

「愚問です」

なんか暴走しそうな気配を感じるのですが・・・。

「ま、俺様がゲキ・ガンガーの良さを教えてや」

「違いますから」

ガイの言葉に苦笑しながら突っ込むイツキさん。

「教官か？ 多分、向いてないぞ」

「まあ、いいじゃん、リョーコ。意外と楽しいかもよ」

「別にいいけどよ」

「ふっふっふ。私の継承者を見つけるチャンスだ」

「見付けないでいい」

鋭い突っ込みありがとう。スバル嬢。

イズミさん。貴方の継承ってもしかああのギャグのですか？

「・・・不安だ」

ナデシコパイロットが教官業をやっているのか非常に不安になった。

これは常識人のイツキさんに期待するしかないな。うん。マジで。

「生活班は同様の仕事を基地内で。代表者同士での話し合いを忘れない」

テキパキと指示を告げていくユリカ嬢。

なんだか板についてきたというか、威厳が出てきた。

成長してるんだなあとちょっと実感。

最初の頃はあんな風に多分出来なかっただろうし。

「詳しい事は追って各班の班長に連絡しまするので、

それまでクルーの皆さんは通常の業務を行っててください」

「「「」

ナデシコ艦内の団結力も上がってる。

皆、成長してるんだなってやっぱり実感。

それになんか、本当に家族って感じて安心感がある。

暖かいしね。ナデシコ。色んな意味で。

「それでは、解散してください」

艦長が去り、その後をジユン君が追っていく。

なるほど。関係が変化してもそのスタンスは変化しないんですね。分かります。でも、ジユン、もっと頑張れ。せめて横に並んで歩け。

「・・・・・・・・・・」

解散してすぐって混むんだよなあ。

うん。ちよっとボーっとしてよう。

「あの、マエヤマ様」

「あ、はい。何でしょう？ マリアさん」

ん？ マリアさんか。

何だろう？

「ケイゴ様は一体・・・」

そっか。きちんと話してなかったな。

マリアさんにとってケイゴさんは大切な人だから、心配しない筈がない。

でも、ケイゴさんが計画の都合上で木連に帰った事は秘密にしないといけないし。

たとえマリアさんでもちよっとなあ・・・。どうやって誤魔化すか。

「和平の為の活動で慌しく走り回っています」

「それでしたら、私もお手伝いに」

「ちょっと待ちなさい！ 私も行くわよ」

おお。カエデ乱入。

「なっ！ 私がいるだけで充分です」

「駄目よ。貴方と二人つきりにしたらどうなるか分からないもの」

「わ、私は仕える者としてけじめはきちんと付けます」

「嘘よ。信じられない！」

「嘘じゃありません！」

・・・ああ、なんか俺の前で喧嘩が勃発。

最早、ナデシコ新名物であるこれは周囲の微笑みやら苦笑の種でもある。

まあ、相変わらず整備班の当事者（男のみ）への嫉妬は凄まじいけど。

とりあえず・・・。

「残念ながら・・・」

「何ですか？」

「何よ？」

そう睨まない下さい、お二人共。

「現在、ケイゴさんは秘密任務中ですので、単独行動が基本です」

「そ、そうですね・・・」

「な、なんとかしなさいよ」

「出来ません」

「しなさい！」

「出来ません！」

「しなさあああー！」

諦めが悪いぞ。カエデ。
マリアさんみたいに素直に諦めてもらわないと。

「そつえば、ケイゴさんは思慮深い女の子が好みだとか」

「え？」

「ふふんっ」

「うう・・・」

勝ち誇った笑みを浮かべるマリアさんと、

一瞬首を傾げた後、意味に気付いて悔しがるカエデ。

・・・愛されてるねえ。ケイゴさん。

「いずれきちんと話しますので少しだけ待っていてください」

「・・・分かりました」

「・・・分かったわよ」

渋々といった感じで納得する二人。

まあ、納得してもらわねば困る。

ケイゴさんの為にも、ね。

「・・・」

カエデはともかくマリアさんはいずれケイゴさんのもとへと行く可能性が高い。

それはカグラヅキに代わる新しい旗艦の製造が関係している。

新しい旗艦つてのも恐らくIFS制御。

マリアさんと共にいるのは優秀なオペレーター達であり、

元々代表の息子であるケイゴさんの戦艦に配属されていた訳だから信頼も篤い。

新しい戦艦が出来た時、それを操作するのは彼女達であると見て間違いないだろう。

その時、オペレーター達と共にマリアさんも呼ばれる筈だ。

そうなれば、マリアさんはケイゴさんの下でまた働く訳だから……。

「ドンマイ。カエデ」

「何がよ？」

「なんでも」

出遅れちゃうぞ。頑張れ。カエデ。

「さてっと」

「何処行くのよ？」

「俺も色々忙しいの」

実は地球と木連じゃ全然時間が違ってさ。

あんまり寝てないんだ。最近。

時差ボケというか、うん、朝とか夜の感覚が全くなってね……。

「ふぁ……」

思わず欠伸。

寝ている時間と起きている時間のバランスが狂うと体調を崩すって言うし。

今後も無理する事が多くなるだろうから、寝れる時に寝とかないとね。

という訳で……。

「おやすみなさい」

「おやすみ」

「・・・おやすみなさい」

・・・どうしてここに？

「無理してたみたいだし」

「・・・眠たそうでしたから」

バレバレだぁ・・・。

「せめて寝る前に元気付けてあげようと思ってね」

チユツ。

「突然ですね」

「元気出たでしょ？」

「ええ。とつても」

「・・・次は私の番です」

・・・ちよつと待とうか。

このままじゃミナトさんの真似でまた唇に唇を重ねてしまう。

いや、俺としては嬉しいんだけど、って何を言ってるんだ!?

・・・コホン。

ちゃんとしたキスの意味を知った時に悲しむといけないから・・・。

「セレスちゃんはほつぺたの方が嬉しいかな」

これなら、大丈夫でしょう。うん。

「・・・ほつぺたですか？」

「うん。そっちの方が元気出る」
「・・・分かりました」

チュツ。

「・・・元気・・・出ました？」

「とつても」

「・・・良かったです」

ありがとね。セレス嬢。

「ふふつ。断らないのね」

・・・あ。その選択肢もあつたんだ。
完全に忘れてた。

「クスツ。それじゃ、セレセレ、行こっか」

「・・・はい。ゆっくり休んでください。コウキさん」
「ありがとう」

ごめんね。正規オペレーターがいなくて大変な時なのに。
でも、お言葉に甘えさせてもらっわ。

「おやすみ」

「ええ。おやすみ」

「・・・おやすみなさい」

その言葉を最後に、意識は微睡みに落ちた。

第七十四話（後書き）

正直な話、今後について悩んでいます。

展開というより、次に何を書けばいいのかなど。

主人公の役割は機体開発と起死回生計画の橋渡し役。

火星再生機構も地球の内乱もコウキにとっては蚊帳の外な訳ですから。

ちよつとずつ詰めていこうと思いつつ、

パパッと飛ばしていきたいという願望もあつて。

いや。悩みます。

まあ、次話の書き初めの時になにか閃きが来てくれると信じましょう。

第七十五話（前書き）

徐々に詰めていく事にしました。
これは完結まで長くなりそうだ。

第七十五話

「以上が木連神楽派との会談結果です」

「うむ。計画には賛同してもらえたか……。ご苦労だったね」
「ハッ」

極東方面軍本拠地にて待機中の我々ナデシコクルー！。

皆が休暇を楽しんでる中……。精力的に働く僕。

クツ。俺も休みみたい！

……。いいさ。後でミナトさんの所に遊びに行くから。

「木連はどうだったのかね？」

「やはり市民船という事もあり、資源が乏しいという印象を受けます」

「ふむ。木連が土地を求めるのも理解できる……。か」

「はい」

ミスマル司令は病室にて待機。

既に意識は取り戻しているけど、計画の為にひとまず表舞台から去ってもらう。

一応、軍所属の病院だから、司令の生存が露見する事はないだろう。彼らも状況は違えど軍人。上司の命令には従うさ。

まあ、しばらくしたらこっちに移動してもいいかもしれないけど。。。

変な事をして計画に不備が出たら困るから、その辺りは司令にお任

せします。

「ムネタケ参謀。これから私は何を？」

かといって俺が何度も直接司令のもとへ向かうのはあまりにも不自然。

親族という訳でもないしね。一応は元部下と上司だけど、変っちゃあ変。

でも、同僚の参謀や親子のユリカ嬢なら違和感もない。

その為、俺の仕事の報告は全て参謀に行い、そこから司令へ伝わるようにした。

これなら怪しくないし、話も漏れないで済む。

「その前に君に報告する事があつてね」

「報告？ 私にですか？」

「うむ。火星再生機構及び地球内乱の事だよ」

「は！？ 私にも話して頂けるのですか？」

だって、火星再生機構はともかく内乱は俺なんかには言える事じゃないだろ。

軍人でもない一般人の俺には話されるだけでも荷が重い話です。

「君を巻き込んだ方が成功率が高いと思つてね」

「ま、巻き込む・・・」

思わず冷や汗が・・・。

容赦ないっすね。

僕が平穩を求めてるって知ってる筈なのに・・・。

「冗談だよ」

「ほっ」

「君は木星の和平派に地球の状況を逐一報告しなければならない立場だろう?」

「ええ。そりゃあ、まあ」

計画の都合上、お互いに情報交換しなくちゃならないだろうからね。

「でも、言っていていい事と言ってはいけない事がある。それは分かるね?」

「もちろんです」

たとえ今後、手を取り合う間柄として全てを公開するのは愚の骨頂だ。状況次第で如何様にも変わる関係性であり、全てを託せる相手ではない。

公開した所で得られる物は少なく、損ばかりが目立つ。

どれだけ気の置けない友であつても秘密がある事と同じだ。

・・・あれ? ちょっと違うか。

「その辺りを吟味する能力を培ってもらわねばならん」

「その判断を参謀に任せる訳にはいかないのですか?」

「無論、始めは協力するが、最後までとはいかない」

「・・・そうですか」

「それに、実際に現場で判断するのは君なのだよ? マエヤマ君」

「咄嗟の判断が必要って事ですな」

「質問された際に答えなければならぬのは君だからね。

現場に私がいれば私が答えるが、この件に関しては君に任せるしかない」

・・・やっぱり責任重大だな。おい。

「さて、まず火星再生機構についてだが」

「はい」

「アキト君から何か聞いたかね？」

「いえ。完全にお任せしてますので」

「ふむ。まあ、提案者である君にはきちんと把握してもらいたい」

「分かりました」

とりあえず行き詰ってはいないというぐらいしか聞いてない。

「まず先日の暗殺事件で火星人の大半が怒りを露にしたが、

アキト君がしっかりと彼らを説得し、どうにか抑える事が出来た」

「良かったです。やはりアキトさんの影響力は凄まじいですね」

「そうだな。火星人を救出したナデシコの一員である事が大きいと思われる」

「地球の英雄ですしね。アキトさん」

地球を守護する英雄であり、火星人を救出した救世主。

そんな人間が真摯に火星を想えば心動くよな。

「その折に息子が火星人達の前に立ち、謝罪をしたらしい」

「提督が・・・ですか。どうなりました？」

「罵倒の嵐だったそうだよ」

「・・・そうでしょうね。フクベ提督の時もそうでした」

普段温厚な人でも恨みを抱く相手には怒りを剥き出しにする。

その形相はとも同一人物とは思えない程で・・・。

恨みや憎しみがどれだけ人間にとって大きな影響を残すのかを実感した。

「でも、息子はそれにも耐えて必死に頭を下げたらしい」

「・・・提督が」

「本当に息子は成長したようだ。これもナデシコのお陰かな」

「かもしれません。ナデシコは本当に暖かい所ですから」

「・・・そうかね。ちよつと羨ましいよ」

キノコ頭と蔑まれていた提督だけど、もうキノコなんてとても言えないな。

あんなに立派な人間を否定する事なんて出来る訳がない。

これからはマツタケ提督と呼ぼう。

・・・これも違うか。

「して、その結果は？」

「アキト君が介入する事もなく、息子一人だけの力で許してもらえたそうだ」

「そうですか。一安心ですね。参謀」

「ふふふ。そうだね。私とて息子が嫌われるのは辛い事だよ」

「これからそんな認識も変わるでしょう。きっと提督はもっと上に行きますよ」

「そうであって欲しいね」

ハハツと笑い合う俺と参謀。

本当に羨ましい親子関係だよ。提督と参謀は。

・・・なんだか俺の周りには良い関係の親子しかない気がする。実に羨ましい。憧れちゃうぜ。

俺もセレス嬢を始めとした将来の息子、娘に良いパパさんでありたいな。

ま、大分先の事だろうけど。

「ホシノ君、ラピス君の力も大きいそうだよ」

「二人がですか？」

「ふふつ。何が功を奏すか分からないものだね」

「え？」

何故に微笑む？

「マスコットだそうだ」

「え？ マスコット？」

「うむ。火星再生機構のマスコットキャラクターに二人が採用されたと聞いたよ」

「あ、あら」

マスコットキャラクターですか。

そりゃあ、二人ともそんじょそこらのマスコット以上に可愛らしくて魅力的でしょうが。

「乗り気じゃなかったそうだけどね」

二人の性格的に嫌がるだろうね。

「アキト君に説得されて引き受けたそうだよ」

「アキトさんが説得したんですか？」

そもそもアキトさんが納得したつてのが信じられない。

「どうしても広告塔は必要だと熱弁されて折れたそうだ」

「誰が熱弁したんですか？」

「再生機構の広報課に属する事になる人間だよ」

へえ。大分組織としての形が出来上がってきているんだな。

「所で火星再生機構ってどういう形で運営されているんですか？」
「ん？ どういう意味だね？」

「たとえば所属している人間は今の仕事を辞めているのかとか。
火星再生機構についてを政府や連合軍は認めているのかとかです」

流石に俺が出資した金額じゃ全員分を長期は賄えないぞ。
今の所、利益が出るような活動はしてないんだろうし。
それに、あまり表でも報道されていないから、実は非公認？
政府や連合軍の許可はまだ得れてないのかもしれない。

「最初の質問だが、アキト君はどうなんだね？」
「あ」

アキトさんは未だにネルガル所属の軍所属でしたね。

「他の構成員も同様だよ。日常の業務をこなしながらだそうだし」
「となると、大変な時期な訳ですね」
「ああ。だが、皆が精力的に働いてくれるから問題はないらしい」

通常の仕事をこなしながらも火星の為に・・・か。
やっぱり故郷を愛する力は凄いな。
専念できなくて進みも悪いだろうけど、予定通り着実に進んでいる訳だ。

しかし、そう考えるとアキトさんの活動は偏り過ぎだよな？
俺のせいでもあるけど、アキトさんは再生機構の仕事しかしてないし。
ん？ という事は軍の仕事として再生機構の活動してるのか？

「アキトさんは軍の命令扱いですか？」

「それが二つ目の質問に関係しているんだ」

「へ？」

アキトさんと政府、連合軍の認可に何の意味が？

「現在、残念ながら連合軍、政府の両者から認可は得られていない」
「……………」

火星なんてどうでもいいって事か？

……まあ、分かりきってた事だけだ。

戦後に火星を再生させるメリット・デメリット。

火星再生機構の設立による遺跡の共管管理体制のメリット・デメリット。

それらを考慮すれば真つ当な思考の持ち主なら賛成するんだけどな。まあ、個人の利益が皆無に近い事は認めますけどね。

全人類の事を考えたらどれが良いかなんて分かりきってるでしょうに。

いつでもテロに怯えるような世の中にしたくないだろ？

地球にしたって木連にしたって。

それを抑止する為の共管管理なのに、どうして分からないかね？

「だから、軍関連の企業として目的を隠して会社を立ち上げた」

「会社をですか？」

「戦争における物資の確保や機材の修理を担当する企業さ」

「世間やお偉いさんに隠しながら計画を進める為って訳ですね」

隠れ蓑って事か。

「必ず認可を勝ち取るつもりだ」

「心強いです」

「うむ。それまでの間にすぐ行動できるよう準備を進めておこうと思ってるね」

「物資の確保と機材の修理。今後に活かせそうな会社方針ですね」

「無論、確保された物資や機材は戦争には用いんさ。全て再生機構のものだ」

「なるほど。流石です」

その方針で物資や機材を確保できればすぐに再生機構として活動できる。

あくまで世間的な目的は戦争用なのだから、違和感も与えない。

「アキト君はその企業に向向という形で参加している訳だ」

「確かにそれならば軍の業務の一つになりますね」

偏り過ぎという訳ではなく、それが今のアキトさんの仕事という訳だ。

「その企業の組織構成はどうなってるんですか？」

「会長、社長には火星の生き残りの方が就任した。形としてだがね」

「将来的にアキトさんがその座を引き継ぐ訳ですね」

「その頃には既に企業ではなく、一つの政府団体として活動しているだろうけどね」

政府団体……。

火星再生機構がそのまま火星政府になるかもしれないのか。

「とにかく、火星再生機構の近況はこんな感じだね」

「分かりました。ありがとうございます」

着実と計画は進んでいる。

けど、認可されていないから、隠れ蓑の企業を立ち上げ、世間の目を欺いている。

マスコミや政府関係の人間が騒がないのも隠れ蓑のお陰。

いずれ認可を得られるようにと政府や軍内で活動してくれている人もいる、と。

とりあえず、こちらの方は順調といった所か。

「それでは地球の内乱についてはどうなっていますか？」

「早速、ユリカ君に接触してくる者が出て来た」

「・・・改革和平派の人間でしたか？ それとも・・・」

「徹底抗戦派が五名、改革和平派が・・・」

「・・・」

「二名だ」

二名・・・か。

「内通者だったのですか？」

「明確には分らない。最初に接触してきた奴は尋問中に舌を噛んで自決した」

「自決・・・ですか。少なくともその者は内通者であった可能性が高いですね」

「うむ。油断した我らが悪かった。情報が欲しかったのだがな」

「・・・もう一人は？」

「現在調査中だ。今回は尋問せずに言動から判断している」

「あえて放っているのでは？」

「ふふつ。それもある」

わざと違う情報を流して、内通者に伝えさせて敵対派閥を混乱させる。

また、違う情報であった時、内通者とその派閥の間には溝が生じる。まさかわざと違う情報を流したのではないだろうか、と疑われれば最後。

内通者が今度は裏切り者として誰からも信用されなくなる。

どれだけ内通者が言い訳をしようと頑なになるだけってのがこの策の怖い所だ。

本当の情報を伝えられようと疑われている訳だから真偽は分からない。

そのまま両者が信頼しあわずにいれば、大きな隙が生まれたようなもの。

後は、命を懸けて敵陣営に乗り込んでいるのに、

その者の言葉を全く信用しない人間が上司だぞとでも伝えてやれば良い。

そうすれば、あっという間に組織は空中分解だ。

誰を信じていいか分からなくなり、隣人すらも疑わなければならなくなる。

そんな状況まで追い詰めてしまえば無力に等しい。

要するに、こちらにとっては何のデメリットもなく、敵対者の力を削れるのだ。

内通者万歳。上手く利用すればここまでの事が出来てしまう。

多分、参謀の狙いにはこれも含まれているだろう。

「徹底抗戦派である暗殺に携わっていた人間は？」

「判断は出来なかった。現在、それらの者も調査中だ」

「御願います。」

「もちろん、艦長は毅然と断ったんですね？」

「うむ。そのお陰で和平派の和平への意思は強まった」

「司令を慕う人間が司令の娘にそう言われてしまえば頑張らざるを得ないですからね」

「嬉しい誤算だよ」

艦長の態度が和平派の意思統一に繋がるとは思ってなかったんだろ
うな。

トップに据えて初めてその効果が出ると考えてたから。
確かに嬉しい誤算だ。

「木連と手を結んでいる人間は特定できましたか？」

「厳しいね。今調査している人間から序々に特定していくしかない
だろう」

「そうですね。かなり奥底まで真実を隠していると思います」

「一応、候補者はいるんだけどね」

「候補者？ 木連と手を結びそうな人間という事ですか？」

「うむ。まずは徹底抗戦派の第一人者である現連合軍総司令官」

「うわっ……」

連合軍のトップが徹底抗戦派かよ？

そりゃあ改革和平派も苦労してるだろうなあ。

「次は元極東方面軍総司令官」

ミスマル司令に席を奪われた逆恨みからって事か。

自身のスキャンダルのせいなのに、反省しない奴だなあ。

「最後はクリムゾンと最も親しいとされている現北米方面軍総司令
官」

なるほどね。

確かに怪しいけど・・・。
でも、別にクリムゾンと木連は利害の一致から手を結んでるのであって、
あくまで彼らがしている事は生活に必要な不可欠な物資の提供などだけだ。
決して復讐の為の支援をしている訳ではない。
だから、クリムゾンと仲が良いというだけでは・・・ちょっとね。
必ずしも暗殺事件に関わっていたとは言えんだろつ。
怪しくないといったら嘘になるけどさ。

「今の所、この三名が最も怪しいかな」
「確かに聞く限りではそうですね」
「とりあえず、君は把握さえしてくれば良い。
これらの事は私達の仕事だからね。君に負担は掛けないよ」
「そうですか。でも、何か俺の出来る事がありましたら言ってください」
「ありがとう。その時は頼りにさせてもらつよ」

俺にはハッキングという武器があるからな。

「さて、最後に今後の君の行動方針だが・・・」
「はい」
「好きに動きたまえ」
「は？」
「責任は我々が持つ。好きに動き回ってくれ」
「い、良いんですか？ そんなアバウトで」
「君は自由に動いた方が良い成果を残すタイプだと思つてね」

そうかな？ どちらかという指示を出された方が楽なんだけど。

「とにかく、木連と話し合いがしたい時には君を呼ぶから、指示を受けた時にすぐに動けるようにしておいて貰えれば・・・」
「好きに動いて構わないと」

「うむ」

好きに動いて構わないってのも結構困る。

たとえば言うなら今日何が食べたい？ とか、

今日、どこに行きたい？ とか訊かれるぐらい困る。

「どうするかな？」

「ふむ。それなら、当面は更なる戦力の充実を図れば良い」

「・・・それもそうですね。全員分の機体がある訳でもないですし」

現段階で使える機体、実はまだ四種類しかない。

パイロットそれぞれに専用機を用意するのならあと五種類足りない計算になる。

その内二種類はマッド組待ちだから、あと三種類か・・・。
ちよっと考えてみるかな。どこに依頼するかとか。

「分かりました。早速、艦長に許可を貰って動き出したいと思いま
す」

「ふむ。期待しているよ。ナデシコは我々の要だからね」
「ハッ」

ナデシコは期待されてるんだ。

その期待に応えられるよう戦力を揃えないとな。

「ひとまず、今後について木連側とも話し合ってみます」

「うむ。よろしく頼む。今日はご苦労だったね。マエヤマ君」

「ハッ！ それでは失礼します」

さてさて、どう動きましようかね。

とりあえず今から木連に行って今後についてキシモト少将あたりと話し合ってみるか。

その後は・・・ん？

好きに動き回って良いって事は別に俺は基地内で待機してなくても良いって事が。

それなら、色々と駆け回ってみるかな。

とりあえず移動用の飛行機あたりをチャーターしましょう。

いやあ、免許取つといて良かったな。マジで。

SIDE MINATO

「全く、休暇ぐらいちゃんと休めば良いのに」

「・・・心配です」

ナデシコクルーに休暇が与えられてから五日。

休め休めと言っているのにコウキ君は休む様子がない。

この前だつて一日どこかに行つてたし。

「・・・何をしてるんでしようか？」

「分からない。でも、きっと司令関連だと思つわよ」

「・・・」

司令はなんとか一命を取り留めた。

でも、かなり危険な状況であり、予断は許されないらしい。

それが私達に与えられた情報。

もしかしたら、その穴を埋めようと皆が皆、精力的に働いているのかもしれない。

アキト君達もナデシコに戻ってこないし。

「でも、少しぐらい休まないと・・・」

どれだけタフな人間でも限界はある。

この前だって、死んだように眠っていたし。

きちんと睡眠時間を確保できてるのかって心配になる。

もう、いつまで経っても心配掛けるんだから。

「・・・ちゃんと休んで欲しいです」

「うん。倒れられちゃ困っちゃうしね」

「・・・はい」

「だから、ちゃんと伝えに行こう」

「・・・え？」

「休んで欲しいって伝えて、部屋に拘束。レックスコー」

「・・・あ、はい」

覚悟しなさいよ。

きちんと休ませてあげるんだから。

S I D E O U T

「それでこれですか」

「そう」

「……そうです」

突然の襲撃。

今日はアキトさん辺りの様子を見に行こうと思っていたのだが……。

「いきなりで驚きましたよ」

艦長にそう連絡しようと思っていたら、捕捉され私室まで強制連行。

その後、気付いたらベットの上にいました。

両サイドにミナトさんとセレス嬢で逃げられそうにありません。

「コウキ君。この休暇中、どれくらい休んだ？」

休暇中？

……えつと……。

一日目は移動先の明日香インダクトリーとの打ち合わせ。

ナデシコの今後の方向性や改修内容を確認させてもらった。

二日目は会談の準備に追われ、夜は木連に移動。

こちらの計画について纏めて、参謀やら司令やらに確認してもらった。

三日目は定例会に参加して、木連将校達を説得。

中々の手応えで、神楽大将の説得もあり、計画に賛同してもらえた。

四日目は定例会の内容について参謀に報告し、再び木連へ。

地球側の計画に賛同してくれたお礼を改めてし、今後について話し合った。

五日目の今日。

……あれ？ 本当に休んでないじゃないか。

「・・・休んでないですね」

「ほら。やっぱり」

「・・・許せません」

許せないって・・・セレス嬢よ。

「ま、まあ、色々と立て込んでましてね。今日こそ休もうと」

「本当に？」

「ギクツ。も、もちろんじゃないですか」

言えない。

今日はアキトさんの所に行こうとしてた、なんてとてもじゃないけど言えない。

「そう。それなら良いけど」

「・・・ホッ」

「・・・ミナトさん。コウキさん、嘔吐しています」

「ギクリ」

「よね〜。私達に嘘を吐くなんて、どうなるか分かってないのかしら」

「ど、どうなるんですか？」

「どうしましょうか？ セレセレ」

「・・・お仕置きです」

「お仕置き!?!」

ど、どうしたの？ セレス嬢。

そんな子じゃなかったでしょッ！

「・・・話してください」

「セレセレ？」

「・・・今、コウキさんが抱えている事を私達にも教えてください」

「・・・セレスちゃん」

「・・・私達じゃ、私じゃ何も出来ないかもしれませんが・・・」

「そうね。話すだけでも楽になるかもしれないわよ」

「・・・そう・・・ですね」

実は結構ストレス感じてたり。

地球の今後を背負っている訳だから、重い責任が押し掛かってきて
さ・・・。

「絶対に秘密にしててくださいよ」

話すか話さまいか悩んだけど、やっぱり二人に秘密事はなしにした
い。

己惚れじゃないけど、きっと俺の事を想って言ってくれてるだろう
から。

家族に隠し事はなしだよな。うん。

.....

「そう、コウキ君はそんな大きな仕事してたのね」

「・・・驚きました」

ミスマル司令の生存から起死回生計画までの全て。

セレス嬢にはそれに加えて俺のボソソジャンプ能力まで話した。

異常についてもいつか話さないといけないだろうな。

・・・セレス嬢に怯えられないといいけど。

「休暇中といえど、忙しい時期でしたから、休めなかったんですよ」

「そつか。でも、これで当分は休めるんじゃない？」

「でも、やる事はいくらでもあつて……」

「たとえば？」

「ウリバタケさんやイネス女史の御手伝いもありますし」

プログラミング関係や調整は俺の仕事。

特にグラフィティライフルやエクスパリスの調整は困難だから頑張らないといけない。

「ナデシコの戦力を充実させるといふ勝手ながらも艦長に許可を貰った仕事もあります」

参謀に提案されてすぐに艦長に連絡を入れて、許可を貰った。

責任は私が持ちますと参謀に言われた事と同じ事を言われて驚いた覚えがある。

「後は会談の為の情報整理や準備もあるし、

一応、アキトさん達のお手伝いもしなくちゃですし」

会談でどのように話を進めていくかの相談とか現在の情報を纏めたりとか。

アキトさん任せにしちゃってる火星再生機構だけど、顔ぐらいは出さないよ。

俺なんかでも何かしらの手伝える事があると思つし。

「ん？」

……あれ？　なんか異様に忙しくないか？

「はぁ……。それを全部一人でやるつもりなの？」

「ええ。まあ……。自分で言っていてビックリしました」
「ちゃんと予定組んでるの？」
「……えっと、行き当たりばったり？」
「はあ……」

物凄く深い息を吐かれてしまったんですけど。

「セレセレ、どう思う？」
「……大変過ぎだと思えます」
「予定を組んでない事は？」
「……ちよつと無謀です」

グハッ！

セレス嬢に言われると物凄く心にダメージが……。

「分かった」
「何が分かったんですか？ ミナトさん」

何故だか決意を秘めたような表情で突然立ち上がるミナトさん。

「私が全部面倒を見てあげる。予定もしっかり」
「へ？」
「専属秘書になってあげるって言ってるのよ」
「せ、専属秘書!？」

「どうせナデシコがなければ私って用なしじゃない？」
「そ、そんな事、訊かれても困ります。」

「だから、以前の経験を活かして、コウキ君のお手伝いをしようと思ってる」

「そ、それは助かりますが・・・いいのかな？」

「いいの」

「は、はい」

「おし。それじゃあ早速私も責任者に許可を貰ってこよう。誰かしら？」

「今は基地単位で管理されてますからムネタケ参謀あたりかと」

「ムネタケ参謀ね。分かったわ。ちよつと行って来るわね」

「ミ、ミナトさん、ちよ、ちよつとお・・・はあ、行っちゃった」

「・・・ミナトさんらしいですね」

「セレスちゃん。笑い事じゃないよ」

苦笑するセレス嬢に苦笑で返す。

まったく・・・あの行動力には驚くばかりだよ。

そういう意味では見習わなくちゃいけないかな。

まあ、自重は忘れちゃいけないけど・・・。

「・・・コウキさん」

「ん？ 何だい？」

「・・・私にも御手伝いできる事はありますか？」

「え？ いつも手伝ってもらってばかりじゃん」

この前のシミュレーターや適性検査でもそうだし。

「・・・全然です。コウキさんが抱えているものに比べたら全然」

「いや、俺としては凄く助かってるんだけど」

「・・・それでも、もっとお手伝いがしたいです」

「そっか」

本当に良い子だな。セレス嬢は。
でも……。

「大丈夫だよ。セレスちゃんは充分色々な事をしてくれてる」

まだまだ子供だ。無理はさせられない。

「……でも……」

「それに、また手伝ってもらった時があったら俺から御願いするからさ」

「……そうですか」

「うん。その時はよろしくね」

「……分かりました。頑張ります」

ちよつと悲しそうに見えるけど……うん、納得してもらったのかない。

苦勞は買ってでもしろとか言うけど、それはもっと先の話。

このぐらいの歳の子は元氣一杯遊んでゆっくり休むのが一番良いんだ。

だって、まだ十歳にもなってないんだぜ。

無理なんかさせられる筈がない。そんな苦勞を背負うのは大人だけで充分だ。

……今でも普通の子と生活が違い過ぎるぐらいなんだぞ。

もっと子供らしい生活を送らせてやりたいよ。本当に。

「ねえ、セレスちゃん」

「……はい」

「セレスちゃんはさ。この戦争が終わったらどうしたい？」

「……コウキさんやミナトさんと一緒に暮らしたいです」

「そっか。俺もだよ」

「……とつても楽しみです」

そこまで喜んでくれるのは嬉しいかな。
うんと大事にしてあげなくちゃね。
でも、俺が聞きたいのそれとはちよつと違つ。

「他には？」

「……他ですか？」

「うん。将来の夢、みたいなの」

「……将来の夢ですか……考えた事ありません」

寂しい事を言うなあ。

「それじゃあ、考えてみようよ」

「……私の将来……やっぱり私なら」

「別にマシンチャイルドの能力を活かそうだなんて考えなくていいんだよ」

「……え？ ですが……」

「それはセレスちゃんのたくさんある内の一つの武器でしかない。

そんな事でセレスちゃん、君は自分の可能性を狭める必要はないんだよ」

「……私にたくさん武器があるんですか？」

「もちろん。それにね、セレスちゃんはこれから幾らでも勉強ができる。」

いくらだつて自分の力だけで自分の目指す夢を切り拓く事が出来るんだ」

「……自分の力で切り拓く……」

「夢が広がらないかい？」

「……え？」

「博士になつてるセレスちゃん。医者になつてるセレスちゃん。」

教師になつてるセレスちゃん。社長になつてるセレスちゃん。
もしかしたら、パイロットになつてるセレスちゃんだっているか
もしれない」

「・・・色んな私・・・」

「そう。君にはいくらだつて可能性があるんだ。だから、色んな自
分を想像してごらん」

「・・・なんだか楽しくなってきました」

「そっか。良かった。」

君はもう夢を膨らませて良いんだよ。

これからいくらだつて好きな事が出来るんだから。
障害？ 障害なんて俺が全部ぶち壊してやるさ。

「どんな夢だつていい。君はもう自由なんだから」
「・・・はい」

セレス嬢が安心して子供らしい暮らしが出来る様に・・・。
その障害である戦争なんて一刻も早く終わらせよう。
未来は明るくあるべきなんだ。誰にでも・・・。

第七十五話（後書き）

結局、家族に隠し事が出来るような人ではなかったコウキ君。まあ、二人の口から漏洩する事はまずないでしょう。

次の戦闘までにかかなりの時間を要する模様。
戦闘を楽しみにしている方には大変申し訳なく思います。

第七十六話（前書き）

遂に新型機のお話です。

お待ちかねのものも出てきます。

まだ実戦配備はされませんが・・・。

第七十六話

「さて、社長、本日のスケジュールですが・・・」

「何故に社長？」

「社長。聞いているんですか？」

「は、はい。ミナトさん」

「ミナトと。社長が秘書に敬語を使う必要はありません」

「ん、んん、ミナト君。今日は何の予定が入っていたかね」

「はい。本日は・・・なんかいいわね、これ。コウキ君がミナト君だつて・・・」

「・・・ミナトさん。やめませんか？」

「ええ。良いじゃない。面白いし」

「ミナトさん」

「はいはい。分かったわよ。もう」

「まったく・・・」

さてさて、ミナトさんが専属秘書になつてから幾数日。

いや。参謀も啞然としちゃったらしいぜ。

突然入つてきて、マエヤマの秘書にしてください！ だとか。

う、うむ。良かろう、みたいな勢いに押された返答しちゃったらしいし。

まあ、お陰様で助かってますけどね。

俺みたいな行き当たりバッタリなんかじゃなくて、

きちんと休暇とかも計算に入れての完璧なスケジュール設定。

お陰様で効率良く色んな所を回れるし、大分負担が減った。

いや、やっぱり行き当たりバッタリは駄目だね。

計画性つて大事だよ。

「それで、今日は何でしたっけ？」

「午前中は基地内で新型機の話し合い」
「ああ。おっちゃんとお兄さんの」

前々から知恵をお借りしたいと御願ひしてただけど、
両者のスケジュールが一致しないで、ここまで長引いちゃったんだ
よなあ。

まあ、まだ時間的に余裕はあるから、焦ってはいないけど。

「リアル型とスーパー型をそれぞれ開発した責任者よね？ その二
人」

「ええ。おっちゃんがスーパー型で知のお兄さんがリアル型です」

「・・・その渾名はどうかと思うけど・・・」

なんとなくイメージが伝われば良かたです。

「噂によると対立してるとか」

「だからですよ」

「だから？」

「反発しあってるからこそ良いのが出来ると思つんですよねえ」

衝突しあう事により更なる高みへって奴。

「・・・まあ、そういう例もある事にはあるけど」

「それにですね。おっちゃんは分かりませんが、

知のお兄さんはおっちゃんの事を認めてるんですよ」

「へえ」

「常々思ってるらしいです。これだけの腕があるのに勿体無いつて
なるほどね。そのおっちゃんっていう方は？」

「多分ですけど、認めてると思いますよ。知のお兄さんの事」

それらしい言動はあった。過去に。

「真反対で良いじゃないですか。方向性も考え方も違う。

だからこそ、今までにない凄い機体が出来ると思っんです」

「そうね。お互いの持つ技術、知識が組み合わせたら凄い事になるわ」

「ま、あれですね。1か0。成功したら凄いけど失敗したら駄目駄目って奴」

「それでも、成功するって確信してるんですよ」

「まあ、彼らとはそれなりに付き合いますからね」

反発しつつも己の仕事に誇りを持っている二人だ。

生半可なものは意地でも造らないさ。

中途半端な機体なんて表に出す事すら嫌うぐらいだし。

「おっちゃんの男の夢と知のお兄さんの安定性」

「その二つを組み合わせるとどんな機体を作ってもらおうの？」

「う〜ん。そうですね・・・」

最近思っただけけど、特殊隠密型って近距離というよりは遊撃タイプだよな。

そうなると、正面から打倒できる機体ってのはスーパー型しかない訳だ。

となると、近距離で敵を圧倒できる機体がもう一機ぐらい欲しい。スバル嬢辺りが好きそうな奴。

「接近仕様の奴ですね。中距離にギリギリ対応できるぐらいで充分です」

「ずっと前線にいるって事か。でも、かなり危険よね。それって」

「ええ。ですから、色々工夫が必要ですね」

前線という最も危険な場所に身を晒す訳だから、速く堅いのがベストだよなあ。

まあ、その辺りはおっちゃんとか知のお兄さんと相談して決めよう。

「午後はどうなってますか？」

「アキト君から呼ばれてるわよ。何でも相談したい事があるって」「へえ。俺にですか」

「なんでも出資者として相談に乗って欲しいとか」

「ふ〜ん。よく分かりませんが、とりあえず行ってみましょう」

「ご同行致します。社長」

「・・・好きですね。それ」

「いいじゃない。これぐらい付き合いなさいよ」

「ふむ。付いて来たまえ。ミナト君」

「社長はそんな事言わないわよ」

「クツ。やられた」

「クスツ」

そこ、笑わない！

「それじゃあ、早速行きましょう」

「そうですね」

まずは新型機開発か。

既に専用機として確立しているのがスーパー型のガイとリアル型のイツキさん。

特殊隠密型と物量射撃型は臨機応変かな。

正直、この二機にはこれといった人がいないし。

いや、特殊隠密型とアキトさんとかベストマッチなんだけど・・・。なんとなく特殊隠密型にアキトさんは勿体無い気がするんだ。

ぶんぶん飛び回って、ドンドン殲滅するような奴に乗って欲しい。いや、勝手な考えなんだけどさ、そっちの方が結果を残す気がするんだよね。

特殊隠密型も候補に入れて、訓練しておこうかな。俺。

物量射撃型は意外と汎用性が高いんだよね。

近距離戦をモットーとするガイとスバル嬢以外なら誰でも大丈夫だし。

まあ、同時ロックオンで言えば、己惚れちゃうけど、俺が一番でも、それだけが強味って訳じゃないしさ、あの機体。

あのバリエーションの多さと装甲の厚さは如何様にも使える。

戦況を眺めつつ随時支援とかの方があの機体は強味を活かせるかもしれない。

状況にあった武器を選択して、最善の結果を得られる判断力があればだけど。

まあ、だからこれも後回しかな。

あ、べ、別に余りものって訳じゃないからね、と自己弁護したりして。

あ。そうそう……。

「後方狙撃型と殲滅射撃型の適性検査もやらないとな」

グラビティスナイパーによる後方射撃を主とした後方狙撃型。

グラビティライフル二丁装備で、対複数の殲滅を目的とした殲滅射撃型。

うん、イネス女史曰く、殲滅射撃型は俺向けらしい。

確かに懂れる。二丁拳銃も出来るし、一斉殲滅も出来る。

うん。良いなあ。乗りたいなあ。納得してくれるかなあ？ 皆。

後方狙撃型はもう決まりじゃね？

狙撃、射撃と言えばあの人、マキ・イズミさん。

スコープ付けて狙撃する姿が既に想像できるのですが……。

まあ、一応、全員に適正検査は受けてもらっけどね。

「所でカエデの強味って何だ？」

一応、ナデシコパイロットには分かり易い特徴がある。でも、カエデは、いや、俺もか、特徴があまりない。見た所、射撃に力を入れてたみたいだよなあ。

接近戦が完全に駄目なら、物量射撃型がベストか？

まあ、これからの訓練次第で如何様にもなるけど。

あ、でも、木連は近接に強いパイロットが多いから、

バツタとか簡単に倒せる奴以外はカエデじゃ心許ないな。

まあ、とりあえず、一通りの適正検査をあいつにも受けさせよう。うん。

「おし」

大分ビジョンは見えてきたし。

とりあえず、話し合いに集中するとうましようか。

「へっ！　なんでこいつと。地味な機体なんて作りたくねえっての」

「私こそ。安定性のない機体など作りたくはありません」

「あん？　この俺が開発した機体に安定性がないだど？」

「そんな事は言っていないよ。そんな事より、貴方こそ、私の地味だと」

「間接的に言ってるだろうが。それに、お前のは明らかに地味じゃねえか」

「勘違いも甚だしいですね。そもそもあれは地味ではなく機能美を意識した結果」

「地味つたら地味なんだよ！」

「派手なら良いという訳ではないでしょう！」

・・・戦争勃発。

後ろにいるミナトさんも苦笑しております。

「お二人とも」

「あ？ 何だよ？」

「何でしょう？」

「安定性があり、かつ、破壊力抜群の機体を作れば良いじゃないですか」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

黙り込む二人。

簡単に言ってるけど、それが難しい事は俺も十分に理解している。でも、この二人が組めば不可能ではない筈だ。

「確かにお二人は方針も方向性も異なります」

「分かってるなら組ませるなよな」

「ええ。全くです」

「でも、御二人の開発に掛ける情熱はお互いに負けていません」

「当たり前だろ。男の夢が掛かってるんだからな」

「確固たる信念がありますから」

「だから、その情熱でお互いに納得できる機体を作り上げてくれませんか？」

「俺とこいつが・・・」

「納得できる機体？」

顔を見合わせるおっちゃんと知のお兄さん。
さて、もう一押しか……。

「まさか、出来ないなんて言いませんよね。おっちゃん」
「なっ?」

「反りが合わないとか、そんなくだらない理由で屈する信念じゃないですよ?」
「……勿論です」

それぞれにそう告げてみる。
いや。なんか上手くいったっばいな。

「それでは、御願います」

「けっ。仕方ねえな」

「やるからには全力でやりましょう」

「足引つ張るなよ?」

「それは私の台詞です」

「てめえ、喧嘩売ってるのか?」

「別に」

「て、てめえ、この」

「はいはい。いがみ合いは終了」

はぁ……。疲れるぜ。

二人を組ませた事にちよつと後悔。

「新型機の方角性を決めましょう」

「そうだな。所で上からの許可は?」

「勿論もらってます」

「ならいいけどよ」

ちゃんと参謀に相談したさ。

おっちゃんと知のお兄さんをお借りして新しいのを開発してもいいですか？ って。

それで、OKはきちんと貰った。

二人を借りるつてのもナデシコの整備班が加わった事でちょっと余裕が出来たらしく問題なし。

しっかし、なんか、なんでもOKだしてくれるけど・・・いいのかな？

「ナデシコではどのような機体が不足しているのですか？」

「不足といいますが、前線の力不足が否めなく」

「それでは、前線を維持できる強力な前衛仕様が欲しい訳ですね」

「そうなりますね」

中距離を担当する所謂中衛に前線を維持してもらってもいいんだけど・・・。

折角だから完全に前衛向きな機体が欲しいという訳です。

「パイルバンカーは必須だな」

「へ？」

パイルバンカー？

「男の三大浪漫の内、ドリルとロケットパンチは叶った」

「え、ええ。まあ・・・」

スーパー型参照です。

「だが、パイルバンカーは叶っていない」

「また男の浪漫ですか？ これだから」

「ふんつ。だが、この威力は折り紙付きだぞ。なんと貫通力はドリル以上だ」

「ド、ドリル以上・・・だとッ!？」

「ドリルも所詮は浪漫ですよ」

「浪漫を馬鹿にするな!」

相変わらずですね。知적お兄さん。

「そんで、そのパイルバンカーってのはどんなのですか?」

「杭を打ち込むのさ」

「へ?」

「火薬を詰め込んで銃を放つような感じで撃つ。

そうすると先端の杭が凄まじいスピードで外に飛び出すだろ。

それを直接敵に打ち込む事で一撃にて装甲を貫通させちまおうって武器だ」

なるどねえ。

「なんともおつちゃんが好きそうな武器ですね」

破壊力でいえば確かに凄そう。

「なるほど。確かに武器としては有効そうですね」

おお。知적お兄さんも認めたまよ。

「お。漸く浪漫が分かったか」

「いえ。理論的に考えて、です」

「あ、そ」

「ですが、扱いが難しいのでは？ 発射のタイミングが図りづらい」
「その辺りは、お前、ナデシコパイロットに任せるしかないだろう」
「我々の仕事はパイロット任せにする事ではなく、
どのようなパイロットでも乗りこなせるようにする事では？」
「グツ。正論を」

言い負かされてますね。おっちゃん。

ま、良い方法が浮かんだから、ここは助け舟を出しましょう。

「それなら、先端部が接触したと同時に発射するようにすれば良い
のでは？」

「おう。なるほど。いいな。それ」

「その辺りの調整は私がしましょう。この方には任せられない」

「大雑把って言いてえのか？」

「いえ。私は細かい仕事の方が得意ですから。構想はお任せします」
「・・・お前」

「勘違いしないで下さい。私は私の目指す機体を造り上げたいだけ
ですから」

な、なんとというツンデレ！？

べ、別に貴方の構想を全力で叶えようだなんて思ってないんだから
ね！

なんて補足が聞こえてきた。

でも、男のツンデレは需要が少ないぞ。

頑張れ！ 知的眼鏡お兄さん！

というか、そもそも、ツンデレの基準なんて俺には全く分からん！
ツンデレとはこれで合ってるのか！？ 教えてくれ！ おっちゃん！

・・・何やってるんだろう？ 俺。

脱線し過ぎだろ・・・。

「そういえば、エステバリスで居合いをしていた記録がありますね」
「あ、はい。デイストーションフィールドの反発力を利用した居合
いです」

「それなら、その特別製の鞘を装備させ、ついでに二つ装着させま
しょう」

「お。二刀流か。浪漫だな」

「片手にパイルバンカーを装着するので、もう片方には盾を付けま
しょう」

「盾だけじゃ面白くないだろ。こつ腕に装着する形でついでにミサ
イル内蔵にしようぜ」

「それなら、盾の両側に推進装置を付けてパイルバンカーの威力増
しにするのは？」

こつ、左手を前に出して、引つ込ませながら右手を打ち出すみたい
な。

ついでに左手によって加速もされるから、更に威力も増すんじゃない
のかなという素人意見。

「良いんじゃないか？ 飛ぶ時に不恰好かもしれないが」

「少なくとも、宇宙空間では有効的かと」

なんか慰めでフォロウされたような気がする。

・・・いいさ。専門の人間には逆立ちしても勝てない事ぐらい自覚
しています。

「でも、突っ込み時って意外と無防備ですからね。盾があれば不用
意な一撃を防げますよ」

「そう考えると両側に推進装置があるのも良い考えかもな」

お？ 意外と良かったか？

それなら、もつと調子に乗ってやるつ。

「デイストーションブレードにDFを纏わせられるなら盾にも出来ますよね？」

「機体にDFを纏わせつつ、盾にも纏わせるのか？」

「無駄ですかね？」

「いえ。確かにそれなら飛躍的に防御力は増すかと。限定的ですが」

「ミサイル撃つ時は解除すればいいだけだからな」

「さしずめ、デイストーションシールドですか？」

「安直だな」

「では、それ以外になにかあると？」

「いや。俺もそのつもりだった」

「調子の良い人だ」

おお。これも受け入れられた。

「しかし、そうすると必要以上にエネルギーを喰うな」

「確かに、それに関しては・・・」

「受信アンテナを二つ付ければ解決です」

「そんな単純か？」

「いや。盲点でした。それだけで出力は倍とまではいきませんが、かなり向上します」

「ま、ナデシコに負担が掛かるけどな」

「それに関してはご心配なく、改修中ですから」

「それなら、その方向で行きましょう」

というかどの機体もエネルギーを喰うから二つ以上装着が基本なんですけどね。

頂いたリアル型も結局二つ装着してますし。

それに、アンテナの性能も日々向上してますから、エネルギーに関

しては心配ありません。

「それなら、パイルバンカーの方にも射撃武装を追加するか」

「そんな事出来るんですか？」

「パイルバンカー自体が割りとでかいからな。小型の銃を付けるくらいいけないさ」

「それなら、両腕にそれぞれ射撃武装が備わってるわけですか」

それなら、武装はそれぐらいで充分か。

あんまりあり過ぎても重くなるだけだし。

「とりあえず武装はこれぐらいで」

「おいおい。背中がまだ空いてるだろ？」

「へ？ 背中？」

「推進装置のバックパックを装着するのでは？」

「それもあるがな、折角だからスーパー戦フレームの対艦刀も付けないか？」

「い、いや、流石にあれば巨大過ぎるでしょ」

スーパー型が装備しているディストーションブレードが対艦刀と思つてくれれば良い。

要するに、スーパー型に相応しいだけの巨大さがある訳だ。

機体よりも武器の方が大きいってどういうこっちゃ？

背負うとはいえ、流石にそれはあまりにも不恰好だろ。

「それでも、あえて付けるのが男の」

「無理なものは無理と諦めてください」

興奮して立ち上がるおっちゃんを知のお兄さんが強引に座らせる。

「ちょ、ちょっと待て、諦めたらそこで開発終了だぞ」
「無理なものは無理なんです」

俺も流石にそう思った。

エステバリスなら振り回せるだろうけど、大した意味はない。
ディストーションブレードぐらいの長さがあれば敵機には充分対応できるし。

戦艦に関しては・・・確かにあれぐらい大きくないと切り裂けないだろうけど・・・。

実はイミディエツトナイフでも戦艦は破壊できると証明済み。

ま、迫力ある破壊に関してはスーパー型のガイにお任せしましょう。

「クツ。諦めては男としての意地が」

「武装面は決まりましたね。次は」

「お前も裏切るのか!？」

「いや、無理ですもん」

「ガクツ」

諦めても開発続行ですよ。おっちゃん。

「よく来てくれたな。コウキ」
「いえいえ。こちらこそアキトさん任せにしちゃって申し訳ありません」

「構わないさ。俺としても充実した日々を送らせてもらってる」
「そうですか。それは良かった」

午前中の話し合いを終え、午後の予定である（仮）火星再生機構訪問へ。

しかし、随分と腕周りだけがゴツイ機体になっちまったな。

右腕周りにパイルバンカー。

左腕周りにシールドミサイル。

どちらも割りとは形は大きくなるだろうから……。

いや、やっぱり腕周りだけゴツイ。

これは脚部や背部にも色々工夫をする必要があるかな。

うーん。でも、脚部はDBが佩かれてるから格好は付くかも。

後は背部のバックパックを少し大きめにすれば、意外と格好付くかも、その辺りの美的感覚は知のお兄さんに任せれば問題ないでしょう。

彼の仰る機能美に関しては同意できるし。

「それで、相談とは？」

「ああ。その前に、何故ミナトさんが？」

「基地待機ではなかったのですか？」

「コウキの付き添い？」

（仮）火星再生機構の活動場所は聞いていた通り企業のような感じだ。といっても、オフィスビルの一階を借りている感じの奴だけだね。会社名は……秘密かな。

まさかミルキーウェイ（訳、天の川）だととてもじゃないけど言えない。

……あ。コホン、コホン。

現在ここにいるのはテンカワー味と数人の社員。

多分、その数人はミルキーウェイに雇われている火星入だろう。

火星入全ては流石に今の状態じゃ雇えないけど、

重要な役職の人間だけは既に企業の一員として働いてもらっているみたいだ。

スカウト活動も順調みたいだ。

「私は今、コウキ君の専属秘書として活動しているの」

「専属秘書？」

「色々忙しくなっちゃいましたね。」

俺だけだと計画性皆無で効率が悪いのでミナトさんに御願ひしたんです」

お陰様で体調は万全です。

流石、元社長秘書。

スケジュール管理は完璧ですね。

「コウキ君ったら全く休もうとしないのよ。」

まったく……。どっかの誰かさんは大丈夫でしょうね？」

「ちゃんと私達が休ませています。ね。ラピス」

「うん。無理はさせてない」

「別に自分ひとりでもちゃんと休むんだがな」

「嘘です」

「嘘」

「……なんだか最近扱いが悪い気がするんだが……」

「「自業自得」です」

「……」

貴方も苦労してるんですね。

もう尻に敷かれる未来が容易に想像出来てしまいます。

「お互い女性には頭が上がりませんね」

「そのようだ」

こんな事で分かり合いたくはなかったが、深く共感してしまった。

「さて」

うん。真剣な話ですね。分かります。

「コウキ。出資者であるお前に相談がある」

「はい。何でも」

「俺達が協力を求めるべき企業はどんな企業がベストだと思う？」

なるほど。相談するのはその事か。

「・・・安易に大手企業に声は掛けない方が良いと思います」

「それは何故だ？ 出資者としてのお前の権限が弱まるからか？」

「本気で言ってます？ 別に俺は火星再生機構内での権限なんかありませんよ」

「分かっている。つまらない冗談だったな。許せ」

「本当です」

一番の出資者であり、最も資金提供したという事で、

これから続々と増えるであろう出資者内での立場を確立したい。

別にそんな事は微塵も考えてない。

「勿論、大手企業の協力は必要になりますが、多過ぎては足を引っ張られるだけです」

企業同士の対立なんかには付き合ってたら計画が遅れる。

「どこか大手企業で候補があるんですか？」

「一応は明日香、ネルガル、クリムゾンだな」

「それぞれ理由を聞いても？」

「明日香は軍にもそうだが、火星再生機構にも協力的な姿勢だ。ネルガルは以前まで火星をほぼ独占してただけあって火星に詳しい。」

「クリムゾンには木連と手を組んでいるから、木連の人間を火星に呼びやすくする」
「なるほど」

それぞれそれらしい理由はあるんだな。
アキトさんの事情的にクリムゾンはいれないと思ってたけど。まあ、そこは割り切ったって事だろう。

「まず前提条件として地球政府と親しい会社は外すべきです」
「ほお。それは何故だ？」

「いずれ地球、火星、木連の三陣営による共同管理が始まります。その際、当然、それぞれから遺跡の研究者が派遣されるでしょう。我々が地球に親しい者を取り入れてしまうと、その企業だけに恩恵があり、他企業にとっては面白くないでしょうから」

「なるほど。それならば、明日香は地球代表として参加してもらった方がよい訳だな」

「そうなりますね。明日香の方にはしっかりとその旨を伝えた方がよいと思います」

「そうだな。こうまで協力的なのに理由も告げずに拒否したら不愉快だろう」

二度と協力してもらえなくなりますね。

「それなら、木連に親しいクリムゾンも候補から外すべきか？」

「なんとも言えません」

「何故だ？ さっきの理屈なら・・・」

「事情が異なりますよ。明日香は改革和平派に親しいのですから」
「・・・良く分からのだが？」

「我々の計画は前提として和平派が勝利する事というものがありま
す」

「勿論だ」

「すると、草壁派と組んでいるクリムゾンとは必然的に敗北組ですよ
ね」

「そうですね。そうになると木連側の企業として参加できなくなりま
す」

「手を結んでいた証拠なんて残さないだろうけど、結果として何に
も参加できないわね」

「逆恨みされる」

「結論としてクリムゾンは保留ですね。」

「まあ、こちら側に引き込んでしまふという方法もなくはないです
が」

「なるほど」

クリムゾンが草壁派と離ればかなりこっちが有利になるだろう。
でも、クリムゾンの事だ。

どちらの方が自身にとって有益であるかを判断して、

こっちの知られたくない情報売るなんて事もあり得なくない。

話さなければいいだけかもしれないが、懐に入られたら危険なのは変
わりないし。

どっちにしる、保留です。

「となるとネルガルだが・・・」

「今の所は一番ですね。右肩下がりで困ってるみたいですし」

「だが、会長がアカツキだぞ。体面的に悪くないか？」

「仲間だったから優遇したのでは？ って思われるからですか」

「ああ。どれだけ公平にやろうとそう見られてしまっただろう」

「考え過ぎだと思えますけど?」

「かもしれない。だが、俺は火星再生機構を清廉潔白な組織で貫きた
い」

「そうですか・・・」

「まあ、向こうから協力を申し出てきたら断る理由はないが・・・
そう言われちゃうとネルガルも推せないな。」

「コウキ君としてはどんな企業と手を組むのが良いと思ってるのか
しら?」

「俺ですか? そうですね・・・」

手を組むのなら、対等というか、互いに支えあえるような企業が良
い。
どちらかに依存するのではなく、互いに互いの存在があって成功す
るみたいだな。」

「幾つかの中小企業ですね」

「中小企業?」

「なかでも、生産や開発を得意とする企業がベストです」

「何故そんな危ない橋を渡るんだ?」

まあ、確かに資金提供という意味では大手を頼った方が良い。
でも、それは後盾がない場合だ。」

「俺達にとって大切なのはどれだけ資金を提供してもらえたかでは
ないからです」

「だが、資金がなければ活動も出来んぞ」

「俺達はいずれ地球、木連の両名から賠償金を貰います」

「それは楽観的ではないか?」

「取らぬ狸の皮算用」

「いえ。これは決定事項です。賠償金とは火星への謝罪の証。これすら成立しないのであれば、火星再生機構自体が認められませんよ」

火星へ謝罪するつもりがないのなら、そもそも火星再生機構の設立に賛成する筈がない。

設立を賛成するのなら、賠償金を払わない訳にはいかない。それが結果として火星再生に繋がるのだから。

これはどちらかだけという選択肢が始めからない選択なのだ。どちらかを取ろうと思えば、必然的にもう片方も付いて来る。そんな追い詰められた選択。

「謝罪する気があるなら払わなければならぬですよ。賠償金を」

「・・・黒いな」

「・・・黒いです」

「・・・黒い」

「・・・黒いわ」

・・・皆して、何さ。

そんな言い方しなくても・・・。

「組織のトップとしては戦争終了後、過失を過失ときちんと認め、被害者となった者に謝らなければならない。和平を結ぶのなら尚更な」

「そうなれば、謝罪は必至です」

「謝罪するなら火星再生に協力しない訳にはいかないわね」

「協力するなら眼に見える形で行う必要がある。具体的には資金提供」

「その名目が賠償金であるなら、賠償金は確実に支払われる」

「分かってもらえたようですね。俺達が勝利したあかつきには払わざるを得ないんです」

火星側が何か行動を起こしていたら分からないが、今現在、彼らは一方的な被害者。

木連が謝罪する事は当然として、地球も火星に負い目がない訳ではない。

火星再生機構を認めるという事は火星の再生も認めるという事。それは世間的に見れば、地球が火星再生に協力すると映る。

その状況下であれば賠償金の支払いを要求しても断られる事はないだろう。

状況を考慮すれば、その賠償金の行方がどうなるかぐらいは子供にだって予想が付くからだ。

もし断われれば、それは火星に対する反省の意識がないと世間は受け取ってしまう。

それは現在でも支持率が低下してきている地球政府にとっては、今後の更なる支持率低下の原因となってしまう、かなりの痛手だ。

だが、何の文句も言わずに素直に資金を提供すれば地球人はその懐の広さに感動するだろう。

それは支持率向上に繋がる。
軍にとっても政府にとっても一番大事なのは民間からの支持。

これは瞬間的な損に目を瞑れば、長期的な利が得られますよというもののなのだ。

これくらい少し考えれば誰にだって分かる事。
だから、我々を利用していいから、資金を提供してくれってメッセージにもなる。

まあ、政治家という策謀に優れている者ならばと平然と利用してくれる事だろう。

別にそれに関しては俺達は利用されても構わない。

俺達は資金さえ得られれば良いんだから。

その者の名前が売れた所で俺達には関係のない事だ。

「だから言ったんです。この火星再生機構は勝つ事を前提としてい
ると」

「はぁ……」

何故に溜息？

「お前、ムネタケ提督にでも師事したのか？」

「え？ いえ、別に……」

「お前も頭だけで出世できそつだよ」

「いや、無理ですよ」

ムネタケ提督やらムネタケ参謀レベルには程遠い。

「その事を提督や参謀は知ってるの？」

「俺でも分かるんですから、二人ともご存知だと思いますよ」

だから、変な混乱が起きないように、

軍内、政府内の意思を纏めようと動いてくれているんだろうし。

「改めてお前や提督達を敵に回さなくて良かったと思ったよ」

「ドロドロしてるわねえ」

「怖い世界です」

「……ぶるぶる」

なんか酷い言い様だ。

俺だって好きでこんな事を考えてる訳じゃないのに。

「話を戻しますね」

若干、拗ねてる俺。自覚はしてます。

「俺達にとって大切なのはその企業がどれだけ火星再生に貢献してくれるかだと思うんです」

「貢献してくれるか・・・」

「実際、資金なんか提供してくれなくても問題ないんですよ。火星再生だけが目的なら」

「どういう意味だ？」

「我々は火星で商売する者の調整役になればいいんです」
「調整役？」

「火星と地球の間で運搬業を営みたい者がいたとしましょう」

「ああ」

「その者にまで資金提供を求めた所で何の意味もない。

俺達の仕事はその者の仕事を推奨して、経済を活性化させてあげる事です」

「・・・難しいな」

資金提供されてもそれを活かさなければ何の意味もない。

そんなんだったら、さっさと商売として契約して、

利益の内の何割かを税として収めてもらった方が遥かに良い。

「アキトさん。火星は火星再生機構だけで再生させる訳ではありません」

「・・・」

「数多の企業が火星に利益を見出し、地球や木連からの出入りが活発になれば、

勝手に火星の経済は活性化し、放っておいても火星は再生されていくでしょう」

「・・・それならば、俺達は必要ないのではないか？」

「でも、そう簡単にはいかないんです。

俺達は地球、木連に対抗できるだけの組織力と権限を持たなければいけない」

「・・・遺跡か」

「ええ。それに、多くの企業が勝手に火星に出入りすれば火星は荒れますよ。」

治安的な意味でも、勝手な者が続出します。言ってみれば、無法地帯に近いんですから」

「俺達は治安を向上させ、企業の勝手を抑止するのが仕事」

「そうなりますね」

最終的に独立した国家として認められるのが目標です。

「それなら、今、俺達が物資を集めているのは無駄なのか？」

「・・・そんな」

「・・・一生懸命集めたのに」

え？ え？ 落ち込まれた？

「ちよ、ちよつと待つてください。それは勘違いです」

「勘違い？」

「はい。さっき俺が言ったのはある程度発展してからの話です。

今の火星にいきなり価値を見出す事はありませんよ。

もし見出したとしても、開発費が馬鹿になりませんか」

すぐに企業が活動を開始する事はないだろう。

俺達がある程度形を整えてから動き出す筈。

「まずは火星再生機構がある程度の形まで再生させる。

後は資金提供という形で契約している会社を優先的に入植させ、

先走りや独占行動を抑止し、経済の状態を調整し、効率良く火星を再生させる。

そこまで進める事が出来れば後は監視する形でも火星は徐々に良くなっていくと思います」

「それだけで大丈夫なのか？ それならば、何故、前の火星はあまり発展していなかった？」

「それは恐らく地球側の工作です」
「なっ!?!」

「地球は火星が独立するのを恐れていた。それは木連の歴史でも理解できます」

「そ、そうか。確かに言われてみれば思い当たる事が多い」

木連の先祖は月の独立派。

月の独立を防ぐ為にあそこまでの暴挙に出た。

火星にしたってそうだ。

クーデターに対する鎮圧の素早さ。

地球連合軍を防衛という名目で監視に用いていた点。

あれは明らかに火星に力を与えない為の措置。

まあ、予想でしかないけど。

「だから、俺達は地球側の介入を阻止するだけの力を得なければなりません」

「その為にきちんと火星内の状況を把握しておく必要がある訳だな」

「ええ。防衛軍の設立やら色々やる事はたくさんあると思いますよ」

防衛軍の設立は必須だよな。

他国に防衛を任せる事ほど不安な事はない。

特に火星はいつ襲撃されるか分からないだし。

「俺は火星再生機構だけで全てを再生しようと思ってたんだがな」

「不可能ではないでしょうが、いずれ限界が訪れると思いますよ」
資金的な意味でも人数的な意味でも。

「企業が火星を再生させる分には我々の負担はあまりないですし。
火星人や木連人だけではとてもじゃないですが、再生なんて無理
です。」

その道のスペシャリストが必ずしもそれらの中にいるとは限りま
せんし」

「確かにそうだな。いきなり農業をやれと言われても俺には出来ん」
「あ、今ので思い出しでしたんですけど、土地の状況を把握して、
その土地にあった作物を探す、もしくは品種改良するのも再生機
構の仕事です」

「やる事はいくらかでもあるって訳だな」
「もちろんです。星一つを再生しようっていうんですから、大変で
すよ」

「前途多難だな。だが、やり甲斐がある」

頼もしいお言葉で。

「しかし、それと中小企業は関係ないのでは？」

「まあ、そうですが、大手企業は地球でも成功してる訳じゃないで
すか」

「ああ」
「でも、中小企業は自社をより発展させるには火星で成功するしか
ない。」

地球ではシェアを確立できなかったけど、火星ならって……。
大手企業と中小企業では開発に掛けるモチベーションが違うと思
うんですよね」

「なるほど」

「それに、その状況で火星再生に失敗したらもう後がなくなるじゃないですか。」

「追い詰められた者は強いですよ。連帯感も湧きますしね。一緒に頑張ろうって」

「連帯感って大事よね。裏切ろうなんて考えもしないし」

「はい。始めから大手に頼るのも良いですけど、

今後の事を考えると共に発展していくのがベストかなと思います
て」

どちらかに依存しては成長も何もない。

互いに支え合い、共に発展して、再生の喜びを分かち合う。

これが一つの星を開発する理想の形じゃないかなと思う。

「後は遺跡関係ですね」

「中小企業を関わらせるメリットなんてあるのか？」

「とりあえず、大手しか関われないと思われていた遺跡ですから中小企業の餌になります」

「交渉材料にもなるって事か」

「それに、大手だけの管理じゃ怖いですからね。」

「少数ではなく複数が関わる事で一社辺りの権限を落とそうかなと」
「全ての会社に平等に権限を与えるのか？」

「それは厳しいでしょうが、出来るだけ公平にするつもりです」

「利権を分散させる訳か」

「それに、多くの研究者が派遣されるでしょうから研究も進むと思いますよ」

それぞれ一番興味のある事だろうから優秀な研究者を派遣してくれる事だろう。

そうすれば、研究はより加速する。

まあ、今までの話は全部……。

「再生機構で火星の利益を全て独占しよう。そう考えているのなら話は別ですが」

「俺達の目的はあくまで火星の再生だ。火星を独占しようとは思っていないさ」

「それを聞いて安心しました」

それなら、俺はこの方法を提案します。

「なるほど。再生方法にも色々あるんだな」

「俺の提案が少しでも参考になってくれたら嬉しいです」

「ああ。漠然としてた計画が少し明確になってきた」

「それなら良かったです」

お役に立てたようで何よりです。

「将来的に億単位の人間を火星に住ませたいんですね」

「それはまた莫大な話だな」

「でも、それぐらいになって漸く火星が再生された事になると思います」

「そうだな。確かに火星人や木連人だけではこの広大な土地は広過ぎる」

「ええ。だから、人口増加の為に多くの地球人の参加が必要なんです」

「火星を故郷として愛してくれる者が増えるといいな」

「増えますよ。火星を愛する者が火星再生の為に身体を張って頑張ってるんですから」

「ふっ。良く言う」

・・・実はちょっと反省。

俺に俺の考えがあるように、アキトさんにはアキトさんの考えがあった筈。

なんか偉そうな事ばかり言って、無神経だったかもな、俺。

「散々言っという説得力ないですけど」

「ん？」

「アキトさんの思った通りにやってください。

俺の意見は参考程度にして、三人で決めた計画を進めて欲しい。

俺に協力できる事があれば、何でもしますから、いつでも言うてください」

「本当に説得力がないな」

「まったくです」

「引っ掻き回しただけ」

うっ。す、すいません。

「だが、お陰で今後の展望が見えた」

「実は行き詰ってたんです。どうやって再生していけばいいのか」

「何から手を付ければいいのか分からなかった。だから、とりあえず物資を集めてた」

・・・そうだったんだ。

「ルリちゃん。早速条件に合う企業をピックアップしてくれ」

「はい。すぐにでも」

「ラピス。火星再生機構の目的、方針、協力する事のメリット・デメリットを纏めてくれ」

「分かった。資料にしておく」

「コウキ」

「あ、はい」

「これからもお前の考えを話してくれ。お前の意見は参考になる」
「わ、分かりました」

文字通り、早速動き出した三人。
なんだか物凄く忙しそうに動き回ってて……。

「お邪魔でしょうから帰りましょうか」
「そうね」

ここにいるのが邪魔な気がした。

「アキトさん！俺達は帰ります！」

「そうか。わざわざすまなかつたな」

「次はナデシコの現状の報告も兼ねたいと思います」

「助かる」

「それでは……」

邪魔にならないようサササと退室する。

退室する前にルリ嬢とラピス嬢が一礼してくれたので、もちろん返しました。

挨拶は大切ですからね。

そして、帰り道……。

「ちょっと後悔してるみたいね」

「え？」

「顔に書いてあるわよ。今まで何もしてなかった奴が偉そうな事ばかりって」

「あ。分かつちやいました？」

「ふふつ。それぐらい分かるわよ」

参っちゃうな。ミナトさんには。
全部が全部バレちゃってる。

「俺としても色々と考えてたんですけど、

必死になってるのはアキトさん達じゃないですか」

「ええ。私達は何もしてないわね」

「何もしてない奴がまるで全てが分かってるかのように・・・」

「そうね。まるで今までの努力が無駄だったかのような言い草だったわ」

「・・・返す言葉もございません」

本当に無神経だった・・・。

調子に乗ってたな・・・。

「まるでコウキ君が上司でアキト君が指示を受けてる部下のようだった」

「・・・はい」

「なになにするつもりです。なになににしたいんですよね。」

まるでアキト君じゃなくコウキ君が計画を進めるみたい」

「・・・」

思い返せば思い返す程に鬱になる。

「確かにコウキ君が最初に考えた計画よ。その事はアキト君達も重々承知している」

「・・・」

「でも、貴方は完全にアキト君に任せると決めた。

それなら、貴方は計画の主要メンバーではなく、あくまで協力者、外部者なの」

「・・・はい」

「それなら、もっと配慮しなくちゃ。

コウキ君は気付いてなかったかもしれないけど、

後ろにいた社員の何人かはコウキ君に向けて苦々しい顔をしてたわよ」

「・・・そうでしたか」

気付きませんでした。

「それだけ貴方が一生懸命だって事なんだろうけど」

「いえ。配慮が足りませんでした」

「そう、それなら、これからは気を付けなさい。」

我が物顔で行動しちゃ駄目よ。配慮を学びなさい」

「・・・はい」

「分かったならよろしい。ほら。そんな暗い顔してないで」

「・・・でも、迷惑を掛けたと思ったら」

「これから気を付ければ良いだけよ。」

それに、そんな事を気にするアキト君じゃないわ」

「それなら良いんですけど」

知り合いだったし、共同で計画を進めていた時の感じが払拭出来てなくて、配慮に欠けてた。

こんなんじゃない駄目だよな。

あくまで協力者だって事を忘れちゃいけない。

アキトさん。ルリ嬢。ラピス嬢。

本当に申し訳ありませんでした。

「相変わらずコウキは頼りになるな」

「はい」

「でも、ちょっと偉そうだった」

「そうだな。だが、それはコウキが火星再生を真剣に考えていてくれるからだ。」

あいつは多忙な生活を送りながらも再生機構の事を我が身のよう
に考えてくれている。

もうわざわざ負担を抱える必要はないのに、協力してくれるとも
言ってくれているんだ」

「分かってる。分かってるけど、悔しかった」

「コウキの助言がなかったら何も出来なかった事がか？」

「うん。物資を集めて、その後何をすればいいのか分からなかった」

「そうですね。大手企業から協力を得る事だけを考えてその先は考
えていませんでした」

「交渉材料もなく、大手企業が乗ってくれるとも限らないのにな」

「助かったのは確か。でも、やっぱりカチンと来た」

「フツ。実は俺もちょっとカチンと来た時があったんだがな」

「え？ アキトさんですか？」

「流石に我々やら俺達やらを連発されたらな。何もしてないだと
思ってしまった」

「はい。恥ずかしながらも私もです。」

でも、良く考えたらこの企画もコウキさんが考えてくれたんです
よね」

「それに加えて資金援助もしてくれている。俺達は文句を言える立
場じゃないんだよな」

「そんな事はない。これは私達の仕事だって胸を張るべき」

「そうか。・・・そうだな」

「そう」

「所でどうしてカチンと来たのに抑えられたんですか？ もしかし
て・・・」

「ああ。ミナトさんが申し訳なさそうに見詰めてきたからな。

あんな眼で見られたら流石に怒る事なんて出来んよ。ルリちゃんもかい？」

「はい。ちゃんと言い聞かせておくからって眼で言われました」

「アイ・コンタクトでそこまで分かるなんて凄いな」

「表情を見れば分かりますよ。ミナトさんは呆れ顔でコウキさんを見てましたから」

「そうか。それなら大丈夫だな。もう俺達が力チンと来る事は二度とないだろう」

「そうですね。・・・アキトさん」

「ん？ 何だい？ ルリちゃん」

「もしかしたら、コウキさんが一番この仕事をやりたかったのかもしれませんね」

「そうだな。だから、再生機構にとって何が大切で何が必要なのかを考えていた」

「・・・忙しいもんね。コウキ」

「きつと齒痒い思いをしてるんだと思います。自分も参加したい。でも、って」

「それなら、あいつの分まで頑張るとしよう。失望されないようにな」

「そうですね。今度は私達が驚かせてあげましょう」

「賛成。いつまでもコウキ頼りじゃ情けない」

「ああ。それで、あいつが無事に自分の仕事をやり終えたら、笑顔で迎え入れてあげよう」

「コウキさんも火星再生機構初期メンバーの一人ですからね。大事な仲間です」

「むしろ、創始者」

「あいつのお陰だからな。こうして活動してられるのも」

「感謝して、届かない分、努力で補いましょう」

「おし。それじゃ、やるか」

「は
い」

第七十六話（後書き）

パイルバンカー登場。

しかしながら、実はあまり詳しくない僕。なんとなく使い方は分かるんですけどね。間違ってたらごめんなさい。

男の浪漫を知らないとは・・・面目ないです。

さて、久しぶりのミナトさんによる説教です。

読み直しながら、コウキの口調が少し偉そうに感じたので、こういうネタを挟んでみました。

まあ、僕の考え過ぎかもしれませんが。

TPOは大事ですよ？ の巻でした。

第七十七話（前書き）

少しずつですが、着実に進んでいます。
しかし、このペースだと最終話が何話目になる事やら・・・。

第七十七話

「うん」

「……どうかしたんですか？」

現在、カエデの適性検査中。

今回も同じようにセレス嬢にお手伝いしてもらっています。

「ちょっと失敗しちゃってさ」

結構引き摺る性格の俺は昨日の失態が頭から離れないでいる。

「……コウキさんも失敗する事があるんですね」

「ん？ 俺なんて失敗ばかりだよ」

狙いが成功した時の方が少ないんじゃないかな？

「……以前、こう言ってくれました。

誰だって失敗はするもの。後はどうすればいいのか、分かるね？
って」

失敗した後……。

「……コウキさんなら分かると思います」

「そっか。そうだね」

ウダウダと引き摺っていたって何の意味もない。

「うん。ありがとう。セレスちゃん」

「・・・いえ」

自分のやるべき事をやって、結果を出す事で謝罪の代わりにしよう。きつと、それが一番の反省方法だ。もちろん、ちゃんと後で謝るけど。

「気にしてたって何の意味もないからな」

うん。ウダウダしてるぐらいならその分仕事に力を入れた方が何倍も良い。

「・・・終わったようです」

お。適性検査終了か。

「お疲れさん」

「ええ。それで、どうだったの？」

カエデの適正は・・・。

「からつきし」

「ええ!？」

「一番はリアル型かな。まあ、これは万能型の機体だから何とも言えん」

「ほ、他は？」

「とりあえず、近接格闘能力は皆無だった」
「しょ、しょうがないじゃない！ 格闘技なんて知らないもの！」
「そ、そう怒鳴るな。まあ、射撃の腕に関しては中々のもんだ」
「も、もちろんよ！」

こいつに前線に行かせるのは不安過ぎる。
後ろから援護する方向性でいくべきだよな。

「となると物量射撃型辺りがベストかもしれん。
火星出身って事もあって、IFSの扱いはかなり良いし。
コックだからか、同時に何かをこなす能力も持っている」

状況判断とかはまだまだだけど、これは経験とセンス。
センス的には悪くはなさそうだから、経験を積みませれば解決するだ
ろう。

戦場に不慣れなのは当然だし。
視野は意外と広い。移動しながらの射撃も割りと簡単にこなしてる。
これって結構イメージするのが大変で、最初は出来ないもん。
やっぱり日常的にIFSを使っていたのが大きいんだろうな。
原作のアキトさんと同じだ。

「コックって関係あるの？」

「忙しいだろ？ コックって」

「ええ。まあ」

「同時に三つの作業とかこなさなくちゃいけない時とかある訳だ。
確かに操縦とは違うかもしれないが、同時に何かをこなす力は培
われてる」

「へえ。何が幸いするのか分からないわね」

「ま、それにしたってどうしてもナデシコパイロットに比べたら見
劣りしちまうけど」

「グツ。し、仕方ないじゃない。まだ始めたばかりなんだから」

「お前って日頃何してるの？」

「教官業はまだ出来ないって自覚してるから、自主練と食堂の御手伝い」

そういえば、ホウメイさんが加わって食堂の評判があがったらしい。流石だな。ホウメイさん。ついでにカエデ待ちのお客さんもいるとか。

「食堂の手伝いは賛成。美味しい飯は何があっても食いたい」

「ふふつ。分かってるじゃない」

お前の料理人としての腕は認めているさ。

「でも、自主練は反対。あんまり意味がない」

「意味ないなんて失礼ね」

ブクツと頬を膨らませるカエデ。

お前はガキかっつての。

「お前が既に教官が出来るぐらいのレベルならいいさ。

でも、お前はまだ素人に等しい。どれだけ腕が良くてもな」

「・・・まあね」

「だから、今のお前に必要なのは技能技術の向上じゃない。

必要なのは状況判断やらを学び、戦場の空気を感じる事だ」

「戦場の空気・・・ねえ。私、実戦経験したけど？」

「バゝ力。あんなの経験に入んないっての」

「馬鹿ですって!？」

「最初は暴走。次はケイゴさんだから助かった。

まだ明確に命を狙われた事はないだろう。お前さん」

「そ、それは・・・」

「怖かったぞ。俺だって」

「何がよ？」

「初めて戦場に立つ時だよ。震えが止まらなかった」

「情けないわね」

「お前もすぐに分かるよ。戦争はお前が考えている程に甘くない」

最初は暴走だったから、死を感じる事はなかった。

二つ目はケイゴさんを止めるという明確な目的。

しかも、周りからフォローされてたから、第三者からの攻撃の恐怖なかった。

本当の戦場はそんなじゃない。

目的も全滅させるなんていうどれだけ時間が掛かるか分からないあまいなもの。

向かい合っている敵以外から攻撃されるのも日常茶飯事。

確かに一対一ではそれなりに戦える腕があるかもしれない。

でも、包囲された状況を経験してないのはいざという時に困る。

折角のシミュレーションだ。

自身が絶体絶命な状態を何度も経験しておくべき。

それに関しては教官のように経験が豊富な人間の下で経験を積んだ方が良い。

「おし。カエデ」

「何よ？」

「恥を忍んで、お前もパイロット育成コースに参加してこい」

「それってナデシコのパイロットが教官してる奴？」

「そうだ」

「・・・そこに行けば、私も誰かを護れるくらい強くなるの？」

誰かじゃなくて、ケイゴさんだろ。

別に俺に隠した所で知ってるんだから意味ないぞ。
ま、ここは言わぬが花か。

「もちろんだ」

ナデシコパイロットから少しでも学んで来い。

「仲間内から指導されるのは悔しいかもしれんが、一時の悔しさは呑み込め。」

それによつてお前が成長すれば、ナデシコとしても助かるし、何より安心する」

「別に悔しくなんかないわよ」

といつつつ悔しそうな顔のカエデ。

「それより安心して？ 誰が？」

「無論、ケイゴさんが」

「な、何でケイゴが出てくるのよ！？」

「お前が戦場に立つて心配しない訳がないだろ？」

お前を生き残れるようにしなくちゃ俺が申し訳が立たん」

「まだ私は安心して戦場に立たせる程の腕じゃないのね」

「ま、どれだけ腕があるうと心配は心配だけどな」

「それじゃあ元も子もないじゃない！」

「でも、ケイゴさんを手伝えるぞ。腕があればある程な」

「私がケイゴの役に立てる・・・」

自身の掌を見詰め、ギュツと握り込むカエデ。

こいつって結構一途だよな。

まあ、修羅場るのはケイゴさんだし。

頑張れとしか。恋する女の子は強いですよ。ケイゴさん。

「俺から参謀に報告しておく」

「ありがとう。コウキ」

「だけど、油断するなよ。知り合いだからって手加減はしてくれないからな」

「分かってるわよ。しっかり学ばせてもらうわ」

「その意気だ。早く成長して俺を越えてみせる」

「え？ 貴方なんてもうとっくに越えてるわよ」

「おいおい、それは聞き捨てならないな」

「私に掛ければ貴方なんて一瞬でしょうね」

「ちょ、お前、言わせておけばこ」

「それじゃあね。ありがとう」

「お、おい！ カエデ！ ……あいつ」

「……逃げられた。」

逃げ足速いな。あいつ。

まあ、別にいいけどさ。

「……コウキさん」

「ん？ ああ。今日はありがとうね」

「……いえ。あの……」

「何だい？」

「……私もコウキさんを手伝う為にパイロットになるべきでしようか？」

「……はい？」

「……えつと……」

あ、ああ、カエデとの会話ね。

い、いやいや。セレス嬢は今のままで結構ですとも。

「うっん。カエデにはカエデの手伝い方がるように。
セレスちゃんにもセレスちゃんりの手伝い方がある」

「・・・私はお役に立ててますか？」

「もちろん。今回もセレスちゃんのお陰でスムーズに進んだし」

「・・・そうですか。良かったです」

そんなに気を遣わなくても良いのに。

でも、そういう頑張り屋な所もセレスちゃんらしくて可愛い。

「ありがとう」

「・・・いえ」

ナデナデっと。

「ちよいしミュレーションしてみてください」

午前の予定を終え。午後の予定へ。

午後はウリバタケさんとイネス女史の御手伝い。

エクスバリスの調整とかとか色々ある。

しかし、暴発の危険性があるとか恐怖だな。

充分気を付けて、慎重にやらなければ。

「シミュレーション？」

「おう。大分形になってきたからな。」

本体は完成してないが、理論データは構築済みだ」

「って事はシミュレーション内なら体験できるんですか？」

「ま、論より証拠だ。ほい。これ」

データが入ってるであろうディスクを渡される。

あれ？ 調整じゃなかったですか？

まあ、俺としてはどちらでも構いませんが。

「これをシミュレーターにインストールしてくれ」

「何故に俺が来る前にインストールしなかったんですか？」

「馬鹿野郎」

「す、すいません」

「これは俺達の切り札だ。当然、極秘事項。たとえ連合軍と言えどな」

「はあ・・・」

施設を借りてる時点で大分バレてるかと。

「それでもだ」

まさかのウリバタケさんもエスパー？

マッドにエスパーは必要技能なのかッ！？

「シミュレーション終了後は必ずデータを削除する事」

「シミュレーターにデータを残さなければ良いんですね」

「おう。お前なら跡を残さず完璧に削除できるだろ？」

「まあ、多分」

「多分じゃ困るんだが・・・」

要するに、シミュレーション結果、映像、評価データをディスクにコピー。

その後、シミュレーターからこれに関する全てのデータを削除して、

大元のデータバンクにもアクセスして、記録されたデータを完全に削除。

多分、シミュレーターシヨン結果を自動記録する装置なんてのも付いてるだろうし。

その後、空白の時間を埋める為に偽造したデータを強制割り込み。

ここまでやれば、エクスパリスの情報が漏洩する事はないだろう。

まあ、司令やら参謀ぐらいにはきちんと報告しておく必要はあるけど。

「ま、ちよつと楽しんできます」

「おう。楽しんで来い」

新型機に乗る時って結構ワクワクするのよね。

これまでちよくちよく調整を手伝ってた身としては尚更。

最近忙しくてご無沙汰だったから、どれだけ進歩したのか楽しみだ。

「お？ コウキじゃねえか。どうした？」

「あ。お疲れ様。ガイ」

現在、シミュレーション室はパイロット育成に使われている模様。

まあ、用があるのは、その奥の実験用シミュレーターだから問題ないけどね。

お、早速力エデも混ざっているな。

頑張れと心の中でエール。

「どうした？」

「ちよつと、実験があつてね。奥の借りるよ」

「何だよ。折角この俺様が教官として指導してやろうかと」

「へいへい。格闘戦ばかり教えてる奴に指導されてもなあ」

「な、何故知っている？」

「なんとなく。勘」

「勘かよ！」

「分かり易いんだよ。ガイは」

固まったガイは放っておいて。

「お疲れ様です」

「ん？ おお。お疲れ」

「どうです？ 訓練生は？」

「まだまだだな。実戦をさせるにはまだ早い」

「手厳しいですね。リョーコさんは」

パツと見、それなりに見えるけど。

「結構楽しんでるけどね」

「お、ヒカルか。お疲れさん」

「お疲れ様」

ヒカルもいたんだ。

「今日はこの三人？」

「そうだよ」

「といっても、午前午後で分けてるんだけどな」

ま、その辺りは教官さん達にお任せします。

あ、そうそう、気になってた事があったて……。

「そういえば、どうやって指導してるんだ？」

「どうやってっ？」

「だって、ナデシコパイロットはIFSじゃん」

「うん。そつだね」

「でも、ここの訓練生はCASだろ？」

「ああ。そついう事か」

操作方法が違うのに指導とか出来るんかな？

「私達が教えてるのは連携とかどう行動するべきかとかで」

「CASの技能レベル向上はイツキに任せてるんだよ」

あ。そつなんだ。

確かにイツキさんはナデシコパイロット内でも唯一のCAS操作だもんな。

CASでIFSのナデシコパイロットに張り合えるだけあって、

CASにおける技能レベルは相当なものがあると見ていいだろう。

まあ、彼女の教官は僕だったから、一番彼女の腕を知ってるんだけどね。

「イツキは器用だし、教え方も上手い」

「イツキちゃんが一番教官らしい事してるよね」

まあ、なんとなく想像できます。

ナデシコパイロットの常識人ですからね。イツキさん。

面倒見も良いでしょうし、教官にピッタリかも。

「ところで、どうしたの？ こんな所まで来て」

「ちょっとした実験でね。奥のシミュレーターを借りようと思って

「へえ。楽しそうじゃねえか。ヒカル。後は任せた」

「ええ〜？ 私が行くから、リョーコそここっちにいなよ」

「こっちの方が楽しそうじゃねえか」

「だから、私が行くの」

楽しそうで仕事を決めないで下さい……。

「残念ながら、二人とも駄目」

「ええ！？　なんでだよ」

「ケチ」

ケチって……おい。

「ま、後々の楽しみという事で」

「ちえっ」

「我慢しますか」

悪いね。二人共。

「さてっと」

まずはデータをインストール。

これで新型機のエクスバリス改をシミュレーションできる。

……そろそろ新型機の総称を考えないとな。

〳〵型だけじゃ流石に格好が付かないだろ。

「種類は後方狙撃型と殲滅射撃型の二種類」

後方狙撃型。

武装といえる武装はグラビティスナイパーのみで、

後は一応のイミディエットナイフだけで、完全に遠距離用な機体。

使い方としては、ナデシコの甲板辺りに張り付いて、後方から援護かな。

でも、グラビティスナイパーの威力も相当あるらしいから、敵にと

つたら脅威だろう。

自身の射程外から攻撃されるのって結構辛いものがあるしね。
殲滅射撃型。

デイストーションブレードとグラビティライフルのみのシンプルな
機体。

だが、シンプルながらもどの距離も対応できるという万能機。
それはグラビティライフルのバリエーションの豊富さにある。

近距離はデイストーションブレードで対応。

中距離はグラビティライフルの二丁持ちで対応。

遠距離は二丁を組み合わせたツイングラビティライフルで対応。

殲滅時は・・・何だろう？ 名称が思い付かない。

まあ、それは後で考えればいいか。

えっと、アンテナになる翼を広げて、エネルギーを充填。

その莫大なエネルギーをツイングラビティライフルから放つ攻撃方
法で対応。

要するにグラビティライフルだけでどの距離もまかなえてしまうの
だ。

武器の使い分けとかがあまり得意ではない俺からしてみれば好まし
い機体だな。

「まずは後方狙撃型からやってみるか」

後方狙撃型を使う上で大事なものは射程距離。

シミュレーターを弄り、適当な場所にバツタを出現させる。

よく狙って狙撃。 再び出現。 よく狙って狙撃。

「・・・精度、威力、到達時間、貫通力。 流石はスナイパー」

一撃の威力は凄まじく、一撃で木っ端微塵。

どれだけ距離が遠のこうと大して威力は下がらず、到達までの時間

も短い。

途中で宇宙の塵に接触しても、大抵のものは貫いてしまう。
うん。凄まじいな。本当に。

俺はまだ狙いが甘くて外す事が多いけど、

命中率が高いパイロットが持ったら鬼に金棒だ。

この機体の右目に付いているスコープも結構な性能。

相手までの距離を示したり、

ズームイン・アウト任意だったりでパイロットに優し過ぎる。

同時ロックオンとかなら負けないけど、

こういう一撃一撃に神経使うタイプの射撃はそんなに得意じゃない。

これはやっぱりイズミさん辺りが適任だろう。

「次は殲滅射撃型」

いやあ。これはずっと楽しみにしてた。実は。

「まずはそれぞれ両手に持って」

二丁拳銃モード。

「次は組み合わせて」

ツイングラビティライフル。

「最後は・・・」

背部に折り畳まれている翼を解放。

すぐさま重力波が受信され、ジェネレーターへとエネルギーが装填
されていく。

エネルギー充填率は爆発的に向上。

殲滅射撃型のみには許された極限の内蔵エネルギー全てをグラビティライフルに。

さて、それじゃあ……。

「発射！」

漆黒の宇宙を彩る漆黒の圧縮光線。

映る筈のない同色の軌跡。

それなのに、まるで黒が黒を喰い尽くすかのように荒々しく……。一筋の光が過ぎれば、今度は爆発音が響き、視界一面が一色に染まる。

全ての音、全ての色が収まった時、視界に映るのは何も無い黒い空間。

一瞬にして、視界に映る光景が変わってしまった。

「ありえないだろ」

何これ？

……相転移砲？

破壊力あり過ぎだろ？

一回引き金を引くだけで、どれだけの人が……。

「やめやめ。そんな事を考えたら……」

戦えなくなる。

「……ふう……」

気を取り直して……。

「チャージに時間を掛かるのはどう対処すればいいかな？」

流石にすぐさま発射とはいかない。

翼を展開 チャージ開始 チャージ完了 発射。

と、こつ発射までに三ステップを踏む必要があるのだ。

戦場でそんな事をしている余裕はまずない。

混戦なら尚更だ。

「とりあえず連携で時間を稼いでもらうのが良いか」

一人じゃ無理なら仲間に任せる。これ大事。

「あらかじめ貯めておけないのが欠点だな」

チャージ中に何かしらの損傷を受けたら暴発するかもしれない。

という事はチャージ中は出来るだけ動かない方が良い訳だ。

まあ、全部回避出来る自信があるなら別だけど。

「翼つてアンテナとブースター兼用だったよな？」

それなら、展開しつつの戦闘は出来にくい。

むしろ、機動力を必要としている時は展開した方が良いか……。

移動の度に展開され、しまわれる翼。

うーん、まあ、使用方法は追々考えていくとしましょう。

「評価結果。マッド組恐るべし。以上」

いや、実際には開発した武装なんて二つだけだけど……。

それだけでおつりが来るくらいです。

後方狙撃型も遠距離戦闘の切り札になるし。

殲滅射撃型は戦略級とまではいかなくても一機で戦況を変えられるくらい。

まあ、暴発のリスクを背負うから常に死と隣り合わせだけど。いざとなったら逃げられる俺はまだしも他の連中には諸刃の剣だろ。

「その辺りの調整は俺の仕事か……。大変そうだ」

せめて多少の損傷じゃ暴発しないようにしないと戦闘には出せない。まあ、チャージしなければそこまで危険じゃないけど……。折角だから使用したいし。そもそも安全性を高めるとい意味でもやるべきだ。

「おし。んじゃ、終了。後は色々削除するだけ」

それから隠蔽工作して、データをウリバタケさんに提出。

まだ俺が調整するには早いから、時期が来たらすぐに調整すると約束した。

誰も死なせたくないし、自身が乗るにしたってこのままじゃ不安だ。……あれ？　もしかして、俺に危機感を覚えさせるのが今回の狙い？

まあ、それならそれでいいか。乗せられてやろう。

生存率をあげる事にも繋がるし、戦力が充実するのも間違いない。

……とてつもなく大変そうだけど……やるしかないだろう。

第七十七話（後書き）

さてさて、そろそろ本格的に新型機の総称を決めないといけませんね。

今の所、候補として・・・。

『フェザンツ（夏咲き福寿草の英名より抜粋）』

『アドニス（夏咲き福寿草の属名及び学名）』

『和平方強い意思などの花言葉を持つ花の名前』などなどがあります。

一応、エステバリスの名前から連想して考えたんですけどね。

しかしながら、この機体はある意味、エステバリスの上位種。

エステバリスに関係ない全く別の名前もありかなとも。

今の所、アドニスなんて響きが良いかなとも考えてたり。

何か良い案がありましたら、教えてください。

といっても、必ず採用する訳でもないですし、

その案を取ったからその感想を書いてくれた人がどうという訳でもありません。

あくまで作者のフィーリングですから、それは承知してくださいね。それでは、次回もよろしく御願います。

第七十八話（前書き）

少しずつ外堀を埋めています。

第七十八話

「父上」

「どうした？ ケイゴ」

「父上の副官が私を疑っていると聞きました」

「……………」

「私はそれも当然だと考えています」

「……………うむ」

「ですが、信じてもらわねば計画が行き詰ってしまふ」

「それならば、ケイゴ、お前はお前であると証明できるのか？」

「私がどれだけ私の事を証明しようと信憑性は薄いでしょう」

「そうだな。お前自身の事など調べればいくらでも分かる事だ」

「ですから、マリアを、マリアを連れてきたいと思います。」

私の秘書として知られているマリアならば納得していただけるのでは？」

「ふむ。確かにわざわざ秘書の偽者まで用意するとは思えんな」

「では？」

「証明にはなる」

「それでは、早速」

「あの地球の使者に任せるとかね？」

「もちろんです。コウキさんであれば、必ず」

「信じているのだな。あの者を」

「私の教官ですよ？ あの方は」

「そうであつたな。師弟の絆は固いか」

「はい」

「分かつた。この件はお前に任せる」

「ハッ。ありがとうございます」

「ケイゴ」
「何ですか？ 父上」
「私達も動くこうと思う」
「は？」
「草壁派を内部から崩す為の策を行う」
「草壁派の内部を？」
「草壁派の人間全てが草壁の真の思惑に賛同している訳ではない」
「真の思惑・・・遺跡確保による地球圏支配ですか」
「うむ。彼らは草壁によって踊らされているだけだ。」
「ゲキ・ガンガーを利用し、地球を一方的な悪とする事で悪は滅ぼすべしと」
「以前、教官に言われました」
「地球の使者にか？」
「はい。戦争に正義も悪もないと。あるのは加害者と被害者でしかない」と
「正論であり、それこそが真理だ。自身の思い通りに世の中を動かしたい。」
「所詮はそんな人間の欲やエゴが戦争を引き起こしているに過ぎんだよ」
「確かに戦争当初は地球側が一方的な悪だったかもしれませんが」
「うむ」
「ですが、火星人の殺戮。あれによって、我々は同等、いえ、それ以下までに墜ちた」
「無差別大量殺人。宣戦布告もなし。ふっ。我々が考える悪そのものだな」
「我々が火星に行ってしまった事。それを国民は知りません」
「知らせるべきなんだろうがな。草壁が軍内の事を国民に知らせる必要はないと」
「私はそうは思いません。全ての真実をきちんと国民に告げるべきです」

「地球のミスマル総司令官のようにか？」

「はい。あれこそが指導者として正しい姿かと」

「知らせたくないのだ。あれを知れば、戦争の醜さを理解してしま
う」

「醜いのは当然です。それが戦争なのですから」

「そうだな。何よりも醜く、何よりも恐ろしい。それが戦争だ」

「国民は戦争の真の姿を知るべきです」

「だが、国民は戦争の恐怖を知らない。いや、知る事が出来ない」

「次元跳躍門のせいですね」

「そうだ。あれがある以上、我々は被害を受けずに一方的に攻撃で
きる」

「被害を被らなければ、恐怖を覚える事はない・・・」

「恐怖を覚えなければ、危機感を抱く事もないのだ。」

「だからこそ、国民は思考を破棄し、草壁の言葉に踊らされる」

「それならば、一度恐怖を味わえば、その意識も無くなるのでは？」

「かもしれない。だが、我々は何よりも国民を護らねばならぬのだ。」

木連軍人として国民が被害を受けるような事を許す訳にはいかん
よ

「戯言を申しました」

「構わん。さて、話を戻そうか」

「そうでしたね。内部を崩すとは？」

「木連派で最も勢いがある若者をこちらに引き込む」

「・・・もしや」

「そう、木連三羽烏、白鳥・月臣・秋山。」

木連の未来を背負って立つてであろう三羽烏を檻から解き放つ。

草壁の妄執という頑強ながらも捻じ曲がった歪んだ檻からな」

「お久しぶりです」

「楽にしてくれ。使者殿は地球代表なのだから」

いや。そう言われてもね。

「少将より伝え聞き、参りました」

「ご苦労」

現在、木連軍神楽派の本拠地がある市民船れいげつへお邪魔しています。

市民船だから、草壁派の本拠地もあるという事で、

ここは木連軍全ての本拠地という事にもなりますね。

いいのかな？ 俺がこんな所に来て。

覚えちゃったよ？ いつでもジャンプできちゃいますよ？

「ここに来るまでの間、何か変わった事はあったかね？」

「いえ。特に」

訪問予定日だった為、いつものように少将の基地へボソソジャンプした。

そうしたら、大将が呼んでいるから向かって欲しいと言われて、案内役に少将の副官の方に付いて来て貰い、共に市民船れいげつへ。

既に少将直属の兵として登録されてるから不法侵入にはならず、港やらの手続きも兵として登録された際の証明書だけで済んだ。

後は神楽派本拠地であるこの基地まで来て、

少将からの言葉を伝えに来たって受付に言っつて、

神楽大将の執務室まで案内してもらっただけだから問題はなし。

誰かに見られたとしても、まさか地球人だとは思わないだろう。

木連に知り合いなんて本当に少数だし、バレる訳がない。

ちなみに、少将の副官の方には外で見張りをやってもらってます。バシたらまずい完全な極秘面会ですからね。

「今回、君には頼みたい事があつて来て貰った」

「少将から聞いております」

「そうか。君は跳躍の条件を持たない者も跳ばす事は出来るのか？」

「それは木連でいう遺伝子改造をしていない者という事ですか？」

「そうなる」

出来るであろうとは遺跡に言われていた。

でも、もしかしたらと思つて挑戦もしていない。

もし、跳べなかつたら、俺はその人間を殺した事になるから。

戦争ならまだしも、そんな事で人を殺した立ち直れる自信がない。

「それに関しては断言できません」

「何故だ？」

「理論上は可能なのですが、実際に行つた事がないからです」

「・・・ふむ」

機体を介してディストーションフィールドを張れば可能だと思つて
じ。

「理由をお聞きになつても？」

「連れて来て欲しい者がいる。秘密裏に」

「それは？」

「ツバキ・マリア、シラトリ・ユキナの両名だ」

マリアさんとユキナ嬢？

「無論、シラトリ・ユキナは地球への使者として赴いた者。一時で

構わない」

「開けた空間さえあれば、両名を連れて来れますが？」

ちようど三人乗りに改造してある特殊隠密型がある。

あれならDFも張れるし、俺がきちんと誘導すれば、ジャンプ事故は起きないだろう。

「それならば、今から格納庫へ案内しよう」

「分かりました。ですが、その前に両名を連れて来てどうするのかを教えてください」

俺としては逐一司令や参謀に報告する義務がある。

これに関しても司令や参謀の許可がなければ行えない。

たとえこの件に関してかなりの権限を与えてもらっていたとしても。

「ふむ。確かにきちんと話す事が礼儀だな」

「ありがとうございます」

一礼。礼儀は大切だよ。

「マリアはケイゴの証拠だ」

「証拠？」

「ケイゴが偽者ではないか？ と疑う者が少なからずいる」

「・・・まあ、分からなくはないですが・・・」

随分と慎重な人がいたものだ。

どう見たってケイゴさん本人以外ありえないと思うけど。

「私の側近内では、マリアがケイゴの秘書だと知られている」

「一般兵は？」

「少なくともカグラツキのクルー以外は知らないだろう」

ふむふむ。それで証拠ですか。

「ケイゴさんのみならず怪しいですが、マリアさんがいれば怪しさを
払拭できる訳ですね」

「流石に秘書の偽者までは用意しないだろうっからな」
「分かりました」

それならば納得です。

「では、ユキナちゃんは どうして？」

「シラトリ・ユキナの兄シラトリ・ツクモをこちら側に引き込む為
だ」

「え？」

あのツクモさんを？

「しかし、ツクモさんは草壁に心酔していた筈です」

「ん？ シラトリを知っているのか？」

「え、ええ。以前一度話す機会がありました」

「そうだったのか。それなら説明する手間が省けたな」

ああ。俺が知らないつもりだった訳ね。

大丈夫です。ある程度なら把握しています。

「シラトリは現在、木連軍人の中で最も勢いのある若者の一人だ」
「そうでしたか」

なるほど。三羽烏的な評価は木連内共通だったのか。

「以前、草壁に対して和平を訴えたと聞いている」

「はい。それで、ユキナちゃんが使者として送られたと聞きます」

「うむ。だが、今は違う」

「・・・ユキナちゃんの死ですか」

「そうだ。あいつは妹を自分の命以上に大切にしていた」

「それでは・・・」

「徹底抗戦派の中心となっている」

そうだよな。ツクモさんはそれぐらい妹を溺愛していた。

感情に踊らされちゃいけないなんて言うけど、

俺だって大切な人を殺されたら絶対に復讐に狂うと思う。

批判は出来ない。感情は理屈を覆すだけの力がある。

「そのシラトリに吊られるように若い連中は徹底抗戦を訴え出した。ツクモの親友であるツキオミ、アキヤマもまた、抗戦を訴えている」

ツキオミさんは分かる。でも、まさかアキヤマさんまで・・・。

「若い奴らは熱血で全てどうにかなると思っているんだろう」

「ゲキ・ガンガー効果ですね」

「ああ。幼い頃から誘導されていれば自然とそうなる」

草壁の意識誘導。

その結果が、草壁に心酔する若者集団の誕生って訳だ。

「そんな中、冷静に戦争を眺め、和平を訴えたシラトリすらも抗戦を訴えた。」

木連の若者達は思い込んだら後ろを振り返るような事はしない。

良い意味でも、悪い意味でも、団結力がある連中だ。

シラトリを中心に、若者達は草壁の下、徹底抗戦派として団結してしまっている」

「最早手に負えない段階まで来てますね」

「だからだ。手遅れになる前に、少しでもその勢いを削いでおきたい」

「そこでユキナちゃんという訳ですか」

「こちらに引き込む事は出来ずとも草壁に疑いを持たざる事は出来るだろう」

「ツクモさんの勢いを削げば、若者集団の勢いも削がれると?」

「それだけの影響力がシラトリにはある」

そう言われてみると悪い手ではないと思う。

でも、幾つか障害がある気がする。

「しかし、ユキナちゃんの生存を伝える事がケイゴさんの存在をバラス事にもなるのでは?」

「それは百も承知だ。だから、あいつらにはケイゴも会わせる」

「そ、それはかなりの賭けですね」

「ああ。だが、それだけの価値はあると私は考えている」

「・・・そうですか」

確かに三羽烏を引き込めたらかなり大きいだろう。

しかし、その反面、この企みは三羽烏から草壁に秘密が伝わってしまう危険性もある。

草壁がケイゴさん生存と和平派の活動を知ったら、活動の妨害をしてくる事は必至。

草壁派にとつては自身が仕組んだ事である事を誰にも知られたくないのだから。

「彼らは規律を守る真面目な軍人だ。信用できる」

確かに三人とも真面目で礼儀正しい軍人らしい軍人さ。でも、草壁への心酔はその前提すらも覆ってしまう。

ツクモさんやアキヤマさんは冷静に物事を眺める事が出来るから大丈夫かもしれない。

でも、草壁心酔度NO.1のツキオミさんは安心する事が出来ない。原作でも、彼も苦渋の選択だっただろうが、草壁に諭され、親友であるツクモさんを殺した事がある。

もちろん、その後、かなり悔やんでいたし、それがきっかけで熱血クーデターが起きたからなんとも言えないんだけど。

「申し訳ありませんが、即答は出来ません。司令に相談してみたいと思います」

「ふむ。出来るだけ良い返事がもらえるように御願いたい」

・・・大人だなあ。神楽大将。

別に地球の和平派と木連の和平派は同じ目的の為に手を結んでいるに過ぎない。

確かに計画を提案し、賛同したが、完全に同一意識で活動する所まではいつてないのだ。

それなのに、きちんと筋を通して、司令の許可をもらってくるように依頼してくれた。

現状では、自身の活動に関して、相手側に許可を求める必要なんてないのに・・・。

神楽大将はミスマル司令に匹敵するぐらいの素敵なオジサマだな。

「分かりました。出来るだけやってみます」

「御願いますよ」

原作を知る俺としては彼らの仲を引き裂くような事態は出来る事なら避けたい。

ツクモさんにだって生きてて欲しいし、ツキオミさんにだって親友殺しの罪を背負わせたくない。

アキヤマさんにだって、親友同士が喧嘩をするさまなんて見せたくないしさ。

その為に、この計画が活かせるなら、俺としても出来るだけの事をしたいと思う。

しかしながら、懸念事項はまだあったりする。

「しかし、和平を訴える派閥の代表に会いますかね？」

「頭に血が上ってても激情を抑えられるだけの理性はある。礼儀も通ずさ」

「それなら良いです。後もう一つ」

「何だね？」

「ツクモさんと和平派の代表が接触した。」

「その事から何かしらの不都合な事が生じるのでは？」

「問題ない。私も今は抗戦を訴えている事になっている」

「え？」

え？ 神楽大将も徹底抗戦派の一員って事？

「あくまで仮の姿だがな。息子を殺され恨みを持った軍人と自身を偽ねばならん」

あ。そういう事か。

「徹底抗戦は反対だが、地球の力を削ぐ為の戦争は必要。そういうスタンスだ」

「確かにお互いに戦争継続を訴えているならそこまで怪しまれはしないでしょうね」

「うむ。多少は怪しまれるだろうが、接触の内容までは露見しないよう注意する」

「分かりました」

接触した事実だけじゃそこまで問題にはならないと思う。

どうして和平派と接触したんだって味方から批判されるかもしれないが、

それはそれ、勝手な考えだけど、ツクモさんにはその状況に耐えてもらうしかない。

騙されていたと知り、妹は生きていると知った方がきつと彼の為だから。

ツクモさんが戦争を妹の甲いとして考えているのなら、それはあまりにも悲し過ぎる。

妹は生きているのに、その憎しみを利用されるなんて哀れな話だ。

真実を伝え、曇った眼ではなく、真の眼で戦争を眺めて欲しい。

「それでは、いつ？」

「マリアに関してはすぐにも頼みたい」

「分かりました。艦長やミスマル司令などへの手続きが必要なので」

「分かった。明日、この執務室に連れて来てくれ」

「え？ 直接ですか？」

「マリアも遺伝子改造を受けている」

あ、そうなんだ。知らなかった。

女性なのに珍しい事もあるもんだ。

あれ？ それなら、カグラヅキのオペレーター達も遺伝子改造済みって事か？

「そうでしたか。突然の訪問になってしまいましたが、よろしいですか？」

明確な時間を決めた訳ではないから、いきなり現れる事になる。

「構わない。明日は誰かが来る予定もないのでな」

「分かりました。それでは、格納庫の方へ」

「うむ。詳しい事は明日にでも改めて話そう」

「分かりました」

こうして次の日、マリアさんを木連へと送り届ける事になった訳だ。ま、これでケイゴさんに対する疑いも晴れるだろう。

その結果、神楽派がより団結してくれたらこちらとしても助かる。

なお、ツクモさん説得に関してだが・・・渋々ながらも許可を得られた。

予定日は今から一週間後。ユキナ嬢を連れて、俺が神楽派の本拠地に赴く。

最悪の事態も想定して、草壁にバレたら計画を修正し、すぐさま和平派同士で手を組んで敵対組織に立ち向かうという話し合いもしてある。

被害は大きくなるだろうが、致し方のない事だと割り切るしかない。成功すれば、より計画の実行が確実になる訳でもあるし。

俺としても早くツクモさんにユキナ嬢の生存を教えてあげたい。

きつと憎しみに狂い、精神も身体もボロボロだろうから。

ユキナ嬢も物凄く兄の事を心配している。

こんな状況でいさせたら、お互いに悪い方向にしか事態は進まないだろう。

彼ら兄妹は絶対に再会させるべきなんだ。

たとえそれによってツクモさんの考えが変わらずとも。

復讐心に囚われたままじゃいずれツクモさんは外道に墜ちる。

その愛ゆえ一気に。そんな事、許す訳にはいかないだろ。

それに、もしかしたら、これを話した事で、

ツクモさんがまた地球を信じるようになってくれるかもしれない。

たとえすぐに考えが変わらずとも、いつか和平を考えてくれるようになるかもしれない。

俺は思う。三羽鳥と共に和平へ向けて活動できる日が必ずやってくる。

そんな日がやってくるように、俺も出来る限りの事をしようじゃないか。

「マリアはどこに行ったのよ!？」

そうだった。こいつの事を忘れていた。

「どっどっど」

「私は馬か!」

「とりあえず落ち着け」

午前中にマリアさんを送り届けた日の午後。

カエデがパイロットコースを受けてから大体一週間になる。

才能があったのか、目覚しく成長するカエデをのほほんと見ていたら……。

こうして胸元を掴まれ、揺らされてしまいましたとさ。

「マリアさんは特別任務を受けて留守にしてるだけだよ」

木連へ連れて行ったら、私はケイゴ様のお手伝いをしますとか言われて。

あ、カエデに申し訳ない事をしたなと思ったけど、時既に遅し。マリアさんはケイゴさんに合流。カエデは置いてけぼりに。

「ケイゴは？」

「えっと・・・」

マリアさんには計画の事を少し話した。

彼女が木連にいるにはその事情を知らないといけない訳だし。

でも、まだカエデには話してない。

マリアさんが知った以上、話すべきなんだろうけど・・・話したら修羅場になるな。

「マリアはケイゴの所にいるんでしょう？」

「ギクッ」

「連れて行つたのも貴方」

「ギクギクッ」

「私を連れて行く気はない」

「ギクギクギクッ」

「私も連れて行きなさいよおおお！」

す、鋭い!?

・・・って分かるよな。これぐらい。

「カエデ。ちょっと落ち着いてくれ」

「落ち着いていられる訳ないでしょ！ マリアに盗られる！」

「分かった、分かった。ちゃんと話すから」

はぁ・・・。俺って甘いのかな？

.....

「ケイゴは今・・・木連にいるのね？」

「ああ。そうなる」

結局、マリアさんに教えた事と同じくらいの事を話してしまった。まあ、俺とて話して良い事と悪い事ぐらい弁えてる。

彼女達に話したのはケイゴさんの生存を伝えた事と、

それによってケイゴさんの親父さんを説得した事ぐらいだ。

ミスマル司令が提案した計画の事は話してない。

「それなら私も・・・って無理よね」

「ああ。お前を連れて行く理由がない」

個人的な感情でそこまでの事は出来ない。

俺としても出来る事なら連れて行ってやりたいが、個人の都合過ぎる。

「私がケイゴに出来る事はないのね」

「・・・カエデ」

すまん。お前にしてやれる事が俺にはない。

「ま、いいわ。私、もう行くわね」

「・・・お前」

もしかして・・・諦めたのか？

「勘違いしないで」

「え？」

「私はケイゴを諦めた訳じゃないわ」

「それなら、どうして？」

「今はひたすら自分を鍛えて、戦場でケイゴを颯爽と助けてやるのよ。」

そうすれば、マリアなんて敵じゃないわ。ケイゴはもう私に夢中よー！」

・・・単純。まるで艦長を見ているようだ。でも・・・。

「そうか。なら、頑張れ」

なんか強くなったな。お前。

「ええ。もちろん。さあて、やるわよお！」

大股でシミュレーターに向かう姿はやる気に満ち溢れていて・・・。なんとも覇気のある後ろ姿だった。

「俺も負けてられないな」

確実に成長していくカエデを見てたら本格的に抜かれる気がしてきた。

「やるか」

最近サボリ気味だったシミュレーション。

一応、新型機の実験とかはしてたけど、やっぱり実戦形式は全然違う。

調子に乗ってブランクを取り戻そうと頑張ってたら、
終わる頃には立ち上がるのも苦勞する程の疲勞困憊状態に。
ま、お陰で心地の良い眠りにつく事が出来たけどね。

「プロスさん。それでは」

「はい。・・・コホン」

一拍置き、そして・・・。

「第一回！ 新型機命名コンテスト！ 開催ですぞオオオ！」

「「「イエエエイー！」」」

「「「ヒュー！」」」

相変わらずお祭が大好きな方々だ。

「それでは、ナデシコ整備班班長であるウリバタケさんと、
新型機開発担当のマエヤマさんから説明してもらいましょう」

いつから開発担当になったんだらう？

まあ、別にいいけどさ。

「えっと、ウリバタケさん、煽りは任せました」

「任せとけ！」

ノリノリですね。ウリバタケさん。

「皆さん、着々と新型機が揃い、ナデシコの戦力も充実してきました」

「色々な種類の機体があるわな」

「ですが、それを総称した呼び方がないのです」

「出撃にしたって整備にしたって名前がねえのはやりづれえ」

「そこで名前を付けよう。そう思った訳です」

「でもよお、それを俺らだけで勝手に決めちゃうのはあまりにも身勝手だ」

「新型機はナデシコを護る為の矛であり盾でもある。

それならば、ナデシコ皆で考えて欲しい。いや、考えるべきだ！

「そうだ！　そこで！　てめえらの考えを俺らに聞かせて欲しい！」

「「「オオオオ！」」」

大歓声。

「良いか！　てめえの考えた名前が歴史に残るんだ！　これ程、名誉な事はねえだろ！」

「そうだ！　そうだ！」

「俺の考えた名前が……」

「歴史に俺の名が……」

いや、盛り上がっている所、悪いけど……。

流石に命名した人の個人名は残らないと思いますよ。

……機体名に自分の名前が入ってるなら別だけど。

「今まで溜め込んで来たてめえらの妄想力！　ここで解放しやがれ！」

「「「「うおっしやあああ！」」」」」

……妄想力なんだ。

第七十八話（後書き）

果たして三羽烏の説得は成功するのか。
嫌な予感もしますが、乞うご期待。

あて先はこちら（感想欄）です。お間違えのないように。

第七十九話（前書き）

新型機名決定。

その他、追加兵器も登場します。

第七十九話

「はい。こちら新型機命名本部」

いや。妄想力を甘くみてました。

次々と送られてくる案を整理するだけで疲労困憊です。

「セレスちゃん。アイウエオ順に整理しておいて」

「・・・はい」

さて、俺は名前が被った案でもまとめておこう。

「しかし、これが五時まで続くのか？」

いや。まだ昼過ぎなんだけどさ。

クルーの人数以上の案が既にあるという謎。

プロスさああん。一人一案って言うの忘れてたでしょ〜〜。

コンコンッ。

「マエヤマさ・・・失礼します」

突然のプロスさんの入室。

手伝わせようと思ったたら、即行で逃げやがった。

「しかし、そつは問屋が卸さない」

ガシッ。

「ふふっ」

「マ、マエヤマさん？」

「手伝ってください。プロスさん」

「し、しかし、私ではお役に立てないかと」

「いえいえ。悪ふざけの案もありますから、その除外を御願います」

いや。真面目な案の方が多いよ。

多いけど、ナデシコって悪ガキの集まりみたいなものだから。それはないだろっていう案も結構送られてくる。

「たとえば、このスズキンガーとか」

鈴木さん。これはない。

「後はガイ・カイザーとか」

ガイ。頼むから自重。

「他にもユリユリとか」

いや。ユリカ嬢LOVEなのは分かったから。副長なんだし。ジュン。自重してくれ。

「・・・八八八」

何を笑って誤魔化してやがる。

一人一案にしなかつたせいで悪ふざけが出たんですよ！

「分かりました。それらしいもの以外除外させて頂きます」

「御願います」

これで俺とセレス嬢の負担も減るだろう。

というか、煽るだけ煽って後は俺任せってどういう事ですか？
ウ
リバタケさん。

これは何か仕返しをするべきなのかもしれんな……。

『今寒気がしたんだが……変な名前でもあったのか？』

「いえいえ。クスツクスツ」

『こ、怖……そ、それじゃあな！』

逃がしませんからね。ウリバタケさん。クスツ。

「それでは、新型機について話し合いたいと思います」

議長、俺。

書記及び記録係、セレス嬢。

参加メンバー。

艦長、ユリカ嬢。

副長、ジユン君。

通信士、メグミさん。

操舵士、ミナトさん。

パイロット代表、イツキさん、ガイ。

整備班班長、ウリバタケさん。

知恵袋、イネス女史。

常識人？ プロスさん。

以上、十一名にて行いたいと思います。

他のパイロット組は残念ながら、教官業で忙しいらしい。

しかし、イツキさんはともかく、ガイはどうなんだろう？

ガイ・カイザーなんて案を出してきたし。

あ。もちろん、即刻却下でしたが。

「さてさて、俺、セレス嬢、プロスさんの三人でいくらか絞らせてもらいました」

悪ふざけ案はバツサリと。

「候補をお伝えします」

うん。ちゃんとアイウエオ順になってるな。

分かり易いぞ。ありがとう。セレス嬢。

「まずは『アイリス』花言葉は『和解』です。

理由は、花言葉がナデシコの目的に相応しいと思ったから」

やっぱり、花の名前が多かった。

この世界の人間は花が好きなのだろうか？

まあ、僕も花の名前がいいかと思ってたから良いけど。

「響きも良いし、理由の通り花言葉が今後にピッタリじゃねえか」

「そうですね。ちょっと戦闘には向かない可愛らしい名前の気もしますが」

「可愛らしくて良いと思います」

そう言われてみれば……。

あれだね。和平計画を総称してアイリス計画にするとか。

「次は『アゲラタム』花言葉は『信頼』です。

理由は、ナデシコの団結のもとであり、和平に必要なものだから」

「信頼……か」

「良い名前だと思うよ。ユリカ」

「信頼あつての団結。信頼あつての和平か」

何事にも欠かせない信頼。

それを全面に出すこの名前は機体名として良いかもな。

想いが伝わる気がする。

「次は『アザレア』花言葉は『愛される事を知った喜び』です。

理由は、敵同士であった者達が手を組む。その事を表してみました、だそうです」

敵同士が手を組む。

憎しみや悲しみといった悪い感情しかなかった者が真実を知り、相手を信じてみようと考えた。

信じてみよう。そう思ってくれた事は至上の喜び。

信じよう。そう思えた事は至上の喜び。

「……私のお気に入りです」

「セレスちゃんのこと？」

「……はい。私はナデシコで愛される事の喜びを知りました」

「……そっか」

「……私はこんなにも嬉しい事が世の中にあるとは思いませんで

した。

だから、私はこの言葉を皆さんに伝えたい。そして、喜びを感じて欲しいです」

いつになく饒舌なセレス嬢。

そっか。愛される事を知る。それはとっても幸せな事なんだな。

親の愛、友の愛、異性の愛。愛には色々な形がある。

自身を想ってくれる者が一人でもいる。それだけで人は勇気が持てるものだ。

「私もこれが良いわ」

セレス嬢の味方、ミナトさんも賛成する。

ニツコリ笑顔でセレス嬢を見詰めるその視線は慈愛で溢れていた。なんだかミナトさんらしい。

「次は『アドニス』これはエステバリスの属名ですね。

理由は、エステバリスの上位なら、こういう考えもありだと思っだから」

なるほどね。そういう考えもあるか。

「ほうほう。言い易いな」

「アドニス！ 行くぜえ！ おお。確かに言い易い」

ガイ君。試さなくていいからね。

「次は『アルメニア』花言葉は『共感』です。

理由は、想いを共感し、和平を成し遂げて欲しいから」

共感。和平を成し遂げたいという思いは互いに同じだ。

「アルメニア。これもまた言い易いな」

言い易いつても大事なか。

響き、意味、言い易さで考えましょうか。

「次は『アングレカム』花言葉は『いつまでも貴方と一緒に』です。

理由は、ナデシコは運命共同体。皆の力で和平を成し遂げたいから」

「運命共同体かあ。なんかいいね。ジユン君」

「ナデシコの強さは皆の団結力だからね」

ナデシコクルーにピッタリの名前って訳か。

「次は『カミツレ』花言葉は『逆境の中の活力・親交』です。

理由は、どれだけ追い込まれようと俺達なら成し遂げられる。そんな思いから」

「逆境の中の活力か。今は逆境に近いからな」

「なんだか頑張れる気がします」

「親交つても悪くないぜ。仲良くなってこそだしな。俺とメグミのように」

「関係ないから。それ」

あ。思わず突っ込みを入れてしまった。

まあ、いいか。スルーしよう。

「こら。コウキ。てめ」

「次は『ニバリス』とある花から抜粋した名前で、

抜粋された花の花言葉は『逆境の中の希望』です」

「無視かよ!」

「うるさいよ。ガイ。えっと、理由を言いますね。」

理由は、どれだけ絶望的でも希望を失ってはいけないから。その戒めとして」

「逆境の中の希望ですか。ナデシコならどんな状況でも希望を捨てないと思います」

「それに、ナデシコは希望でもあるしな。地球と木連を結ぶ架け橋としての」

希望。ナデシコそのものを表してる言葉だな。

「そうそう。ニバリスだけど、これはエステバリスのと同じ日の誕生花ね」

「おお、流星はイネスさん」

誕生花なんてあるんだ。

知らなかった。

「次は『フェザンツ・アイ』これはエステバリスの英名ですね。」

理由は、木連が和名の福寿だから、それに対抗してこれにした」

「対抗心か。確かにそれも必要だな」

「まあ、対抗するのは福寿じゃないんですけどね」

「でも、エステバリス関連だから、馴染み易いといえば馴染み易いです」

確かに。

直訳、雉の目？

見た目的な何かかな？ 福寿草の。

「最後はまあ、分かり易く、『エステバリス改』、
『エステバリスカスタム』、『超絶エステバリス』、
という改造しましたよっていう・・・あれ？ あれれ？」
「どうしました？ マエヤマさん」
「あ、いえ。プロスさん」
「はい。何でしょう？」
「『エステバリス改』も『エステバリスカスタム』も分かります」
「ええ」
「『超絶エステバリス』って何ぞや？」
「いやあ。良い響きではないですか。超絶」
「・・・・・・・・」

プロスさん。貴方もやはり常識人ではなかった・・・。

「コホン」

もう、いいや。

気にしない事にする。

「それでは、候補の中から選びましょう」

結構多いなあ。果たしてこっから絞れるだろうか。

「はいはい。私は『アングレカム』です。運命共同体。良い響き」

「僕もユリカと同じかな。ナデシコと運命を共にしたい」

「流石、ジュン君。一緒だね」

「う、うん。気が合うね」

お前が合わせたんだろ。

皆がジト目でジュンを見る。
無論、俺も。

「あ、でも、『フェザンツ・アイ』も捨てがたいなあ」
「そ、そうだよな。エステバリスの英名だし」

ジュン君。自分の意思で決めなさい。
ユリカ嬢に影響され過ぎだぞ。

「結局、どっちなんですか？」

「うん。決めた。『フェザンツ・アイ』」

「どうしてだい？」

「だって、エステバリスはナデシコ出航からずっとナデシコを守ってくれたんだよ」

「うん」

「名残惜しいから、せめて、エステバリスの事を忘れないようにってさ」

「分かった。それなら、僕もそうするよ。僕だって名残惜しいし」
「ありがとう。ジュン君」

ジュン。お前……。

どこまでも尻に敷かれてやがる。

「コ、コホン。プロスさんはどう思いますか？」

逃げたな。ジュン。

「やはり超絶エステ」

「却下です」

「むう。そうですか。それならば、『ニバリス』ですかね。」

逆境に打ち勝ってこそ、何かを得られるというものです」

プロスさんは『ニバリス』ですか。

まあ、逆境とか好きそうですね。なんか。

「ウリバタケさんはどう思います?」

プロスさんがウリバタケさんに振る。

あれ? これって振って答える方式になっちゃってる?

「俺は『アドニス』だな。何より呼びやすい。

それに、エステバリスに愛着がある身としては関連性があった方が
良い」

「私も『アドニス』ね。アドニスとはエステバリスの属名。

そして、属とは種のみとまりを示す。

単機なら別のいいけど、総称ならこれがベストじゃないかしら
?」

マッド二人組は『アドニス』ですか。

確かに響きも良いですね。僕も賛成です。

「あれ? それなら『フェザンツ・アイ』じゃなくても

「艦長。もう遅いです」

「はあ〜い」

属名が出たから余韻は残るだろうって意味だろう。

でも、艦長、頼むからこれ以上混乱させてないでくれ。

『フェザンツ・アイ』も良い名前なんですから。

「私は『アイリス』が可愛らしくて好きですね。でも、戦闘機には

不向きかもしれませんが」

「可愛さは大事ですよ。私も賛成です」

イツキさんとメグミさんは『アイリス』ですか。

「俺はプロスの旦那に賛成だな。」

逆境を打ち克つ強さ。それがパイロットには必要だと思っぜ
「分かってらっしゃる」

ガイも『ニバリス』って事か。

確かにこいつも逆境つてのが好きそうだよなあ。
プロスさんもウンウンって満足そうに頷いてるし。

「私達は断固『アザレア』よねえ」

「・・・はい。譲れません」

胸の前でガツチリと拳を握り締めるセレス嬢。
その可愛らしさに負けそうです。

「えっと、皆さん？」

見事なまでに二名ずつで分かれちゃってません？

「残る一人はマエヤマ、お前だけだ」

え？

「おい！ コウキ！ 分かってるよなあ？」

ガイ。怖いんだけど。

「コウキ君。分かってるわよねえ？」

「・・・コウキさん」

い、いや、涙目は反則だと思っただよね。

「マエヤマさん。運命共同体。良いですよね？」

「僕は大賛成だよ」

え？ え？

「コウキ君。貴方なら、私の考え、分かるでしょ？」

え？ え？ え？

「教官」

「マエヤマさん」

ひ、ひたすら見詰めるのやめてくれませんか？

「減給にしましょうか？」

それはあまりにも公私混同！

「えっと、僕は議長なので、投票できないんですよね」

そういう意味ではセレス嬢も書記だから駄目なんだけど・・・。
誰も気にしてないしな。

俺としても、別に咎めるつもりはない。

セレス嬢の気に入った名前も参考にしたし。

というか……。

「は？」

「はい？」

「え？」

「ん？」

全員で睨むのもやめてください！

……仕方あるまい。

「分かりました。議長として、この事態を収拾しましょう」

「お。流石議長。パツと決めちゃってくれ」

煽らないで下さい。ウリバタケさん

「『アドニス』『ニバリス』『アイリス』『フェザンツ・アイ』
アザレア』」

これが絞られた候補。

「ハッキリ言いましょう。意見が分かれた以上、一つに絞るのは不可能です」

どれだけ話し合おうと決まる訳がない。

全員が全員、納得する事などないのだから。

「その為、今回の命名ですが、新型機に限らずにいきましょう」

「え？」

「どういう意味？」

「えっと、ウリバタケさん」

「ん？ 何だ？」

「確か新型機の他に開発したものがありませんか？」

以前、仰ってた奴です。

「おお。あるぞ。一つはエステバリス援護兵器。

これはナデシコオペレータがナデシコから操って援護する奴だな。それと重力波アンテナ中継装置。空戦フレームを参考に作った行動範囲を広げる奴だ」

一つはエステバリス援護兵器。

これは劇場版でラピス嬢がやっていた事を参考にウリバタケさんに作ってもらった奴だ。

ラピス嬢はバツタを操作していたけど、今回はこれを操ってもらう。実際、そんなに細かいものではない。

球状にしたものにDFを張らせ、体当たり、もしくは備え付けられたレーザカノンで援護。

やれる事はその程度でしかないが、充分、役に立ってくれる。

弾薬とかを備え付けておけば、帰艦せずに補給とかも出来るようになるだろうし。

もう一つは重力波アンテナ中継装置。

これは戦闘限界距離が短い事の対策として前から考えていたらしい。空戦フレームは重力波を受信し、周りの機体に配給するシステムがある。

それを参考に、重力場を作れるよう調整した奴を後は任意の場所に放るだけ。

それだけで中継装置を中心に円を描くように行動範囲が広がる。

形状的にはエステバリス援護兵器に近いかな。

違う所としては、これは一定の場所に浮いていけば良いって事と操る必要がないって事。

まあ、攻撃を回避するぐらいの機能は付けておきたいけど。

「花言葉や意味を考慮して、援護兵器に『フェザンツ』を、重力波アンテナ中継装置に『ニバリス』の名を付けようと思いません」

『フェザンツ・アイ』から『フェザンツ』の名を抜粋。直訳は雉であり、雉とはピーチボーイの旅の御供。

また、エステバリスの事も示している事もあり、新型機を影から見守って欲しい。

その二つの意味から、援護兵器に『フェザンツ』の名を付けようと思った。

また、『ニバリス』とは希望を示す名。

戦闘距離に限界があるという逆境を覆し、希望を見せてくれた中継装置。

戦闘区域が広がった事でより様々な事が出来るようにもなるだろう。苦しい状況を打破できるものとして、この装置は希望になる。

「良いと思いますよ。確かに決まらないでしょうし」

「私も賛成です」

「ユリカが言うなら」

「ま、仕方ないだろ」

ありがとうございます。プロスさん。艦長。

ジュン君、流され過ぎ。

ガイ。すまん。

「コウキ君。それなら、他の三つはどつするのかしら？」

「ちゃんと考えてありますよ。ミナトさん」

もちろんじゃないですか。

「『アイリス』とは和解。我々が目指す目的に一番近い意味を持っています」

「そうね。私達は木連と和解したいんだもの」

「はい。そこで、ナデシコが掲げる和平を成し遂げる為の計画。

それ自体を今後、『アイリス・プロジェクト』と呼ぶ事にしませんか？」

アイリス・プロジェクト。

地球、火星、木連の三陣営を和解させ、恒久的な平和を目指す計画。俺はその計画にこの名を付けたい。

「アイリス・プロジェクトか・・・」

「可愛い響きです。私は賛成です」

イツキさん、メグミさんの賛成も得られた。

「『アドニス』はイネスさんの言う通り、総称として相応しいので、今後、新型機を総称する際には『アドニス』という名前を用いたいと思います」

うーん、新型機の名前を勝手に付けてしまった訳だが・・・。
賛成してもらえるかな？

「俺は始めっから賛成してたし、別に文句はねえぞ」

「流石はコウキ君ね。私の意図をきちんと理解してる」

「私も『アドニス』で良いと思います」

ウリバタケさん、イネス女史、艦長の許可はもらった。

他の皆も頷いてくれたみたいだし、うん、一安心。

「でもさ、『アザレア』は？ 何か名前付けるものってある？」

ミナトさんとセレス嬢がこちらを見詰めてくる。
安心して下さいって。

「ええ。そろそろ僕もプログラマーとして活躍しようかなと思いついて」

「え？ どういう事？」

「新型機それぞれに補助用のAIを積もうと思ってます」

性能が上がった事でパイロットへの負担も重くなった。

別にそれぐらいで潰れるナデシコパイロットじゃないけど、補助はあっても損じゃない。

俺が新型機に出来る事って調整とそれぐらいしかないし。

「そのAIの名称に『アザレア』を使用したいと考えています。どうかな？ セレスちゃん」

「・・・私も御手伝いできますか？」

「もちろん。むしろ、こちらから御願います」

「・・・それなら、喜んで」

ニッコリ笑って受け入れてくれるセレス嬢。

うん。良かった。嫌がられたらどうしようかと思っただぜ。

「セレスレが良いなら私も良いわよ」

おし。皆が皆、俺の意見を受け入れてくれたぞ。

これで新型機やその他の命名関係は決着がついた。

「それなら、艦長」

「はい。早速、ナデシコクルーにお知らせしましょう」

こうして、新型機の名称は『アドニス』で決定した。

これからはアドニスくく仕様という名称で用いる事になるだろう。さてっと、空いてる時間を使って、早速AIを組み始めますかね。

「セレスちゃん。手伝って欲しい事があるんだけど」

「・・・はい！ すぐに行きます！」

クスツ。やる気満々で微笑ましいな。

あ。ちゃんとミナトさんにスケジュール調整を頼まないと。ぶっ倒れたら色々と申し訳ない。

第七十九話（後書き）

まずは感想で名称案を下さった方々に謝罪を。

散々要求しておいたくせに結局『アドニス』で決定してしまいました。

本当に申し訳ありません。

また、同時に、ありがとうございます、です。

新型機には名付けませんでした。他の兵器で参考にさせて頂きました。

皆様には深い感謝を……。

第八十話（前書き）

長くなってしまった。

また、色々と独自設定、独自解釈が登場してしまいました。
違和感あつたらすいません。

それ程、ストーリーに影響ないと思いますが……。

第八十話

「カエデ。事情が変わった」

「え？」

「お前にも来て欲しい」

「え？ え？ どこに？」

「木連。ケイゴさんの所にだ」

「白鳥九十九。ただいま参りました」

「同じく秋山源八郎。参りました」

「同じく月臣元一郎。参りました」

「高杉三郎太。参りました」

「良く来てくれたな。まずは座りたまえ」

「ハッ」「ハッ」「ハッ」

シュタツ。

「九十九」

「ハッ」

「中佐に昇進したそうだな」

「はい」

「地球周辺のコロニーを制圧したと聞いた。よくやったな」

「いえ」

「源八郎」

「ハッ」

「ナデシコとやりあったそうだな」

「はい。ナデシコにもかなりの切れ者がいるようで、楽しませて頂きました」

「源八郎！ 不謹慎だぞ！ 大將はナデシコに」

「元一郎。構わない」

「ハッ。すいません」

「元一郎はナデシコのパイロットとやりあったそうだな。どうだった？」

「ゲキ・ガンガーを愛する熱い男でした」

「そうか」

「ですが、私にとってナデシコは最早敵しかありません。ご心配なく」

「あまり熱くなり過ぎるな。お前の悪い癖だ」

「ハッ。心得ました」

「ふむ。高杉三郎太」

「ハッ」

「源八郎を良く補佐しており、パイロットとしての腕も一流と聞く」

「こ、光栄です。私のような末端の兵の名をご存知とは」

「うむ。よく励め」

「ハッ！ ありがとうございます」

「さて、今日お前達に来て貰ったのには訳がある」

「はい。私達に伝えたい事があると聞き、参った次第です」

「うむ。入ってきてくれ」

「ハッ」

「はい」

「お、お前は・・・」

「よくも私を置いていってくれたわね。ケイゴ」

「い、いや。これは極秘任務だったので仕方なかったんです」

「マリアは連れて行つたくせに」

「う……」

「私は当然です。ケイゴ様の秘書ですから」

「貴方は黙ってなさい」

「何ですってえ!?!」

「何よお!?!」

防音が効いていて良かった。

五月蠅くしてたら隣に聞こえるっての。

「すみません。ケイゴさん。騒がしくて」

「いえ。私のせいですから」

「……それもそうですね」

ようやくやってきたツクモさんとの面会。

現在、俺達は大将の執務室の奥の仮眠用かなんかの部屋で待機している。

メンバーは俺、ケイゴさん、マリアさん、カエデ、ユキナ嬢の五人だ。

大将に呼ばれ次第、向こうの部屋に姿を表す事になっている。

「ユキナちゃん。もうちょっとでお兄さんと会えるよ」

「……うん。やっと、やっと会えるんだ」

今日、ユキナ嬢とツクモさんの兄妹は久しぶりの対面を果たす訳だ。まだまだ子供のユキナ嬢。ずっと心細かった事だろう。なんといつても、敵とされている地球にずっといたのだ。精神的に追い詰められていてもおかしくはない。でも、それも今日で終わりだ。その重圧から解放される。

「大変だったのでは？」

「何がです？」

「格納庫に得体の知れない機体を置かせ、

かつ、誰にも見られないように誘導するなんて」

実際、格納庫へボソソジャンプしてから誰にも会っていない。案内役としてケイゴさんが格納庫にいただけで。

「父の側近が何人か手伝ってくれたので」

そうでしたか。

「所でツクモさん達とはどういう関係なんですか？」

「父が木連式柔の師範をやっています。同門なのです」

「えっと、神楽大将がですか？」

確かに凄く威圧感がありましたけど。

「はい。木連には木連式柔を始めとした武術を教える道場があります」

まあ、地球にもそれらしい道場はあるわな。

「その道場も組織化しており、道場を纏める道場、更にその道場を纏める道場があります」

道場を人に例えれば分かり易いかな。

数人を一つの集団として、その集団内でリーダーを選出する。

そして、更に、そのリーダーを指揮するリーダーがいると思えばいいんだ。

例えるなら、小隊長とそれを指揮する指揮官的な。

「そのように取り纏め、更に取り纏めるという事を繰り返し、組織化している訳です」

「かなりの数の道場がある事になりますね」

「ええ。国民の男性殆どが所属していますからね」

格闘大国か？ 木連は。

「そうなる最終的に一つの道場に繋がります」

「ええ」

行き着く先は一つだろうね。

「それが木連最高道場と呼ばれ、その代表者は最高師範と呼ばれます」

「えっと、もしかして・・・」

「はい。その最高師範こそ私の父です」

よ、要するに木連最強って事じゃん。

「それなら、格闘大国木連では尊敬を一身に集めるのでは？」

「格闘大国とは？」

「あ、いえ。こつちの話です。それで、大将は何故中将よりも影響力が？」

「父は木連軍人で最も慕われているでしょう。でも、影響力とは直結しないのです」

「それは何故ですか？」

「武人としては誰よりも影響力があるでしょう」

「はい」

「でも、軍人としては、いえ、政治家としては中将に敵いません」
「それ程、中将は優れているのですか？」

「ええ。指導者として草壁中将以上に優れた者はいないでしょう」

ケイゴさんがそこまで断言するなんて……。

「話を戻しますね」

「あ、はい。話の腰を折ってすみません」

「いえ」

今はケイゴさんとツクモさんの話だったな。

「最高道場で学ぶには、下位の道場で師範に認められ、その一つ上位の道場へ昇格し、更に認められて昇格。これらを何度も繰り返し返さなければ到底学ぶ事など出来ません」

・・・最下位から最上位までどれくらい掛かるんだって話だ。

「もちろん、私も同じように最下位の道場から始めました。

父は甘い方ではないですからね。息子の私とていきなり最高道場では学べません」

まあ、公私混同は絶対にしなさそうでした。

「その途中、共に武を磨き、共に昇格を目指した同門。それがツクモ達です」

「同じ釜の飯を食ったって奴ですか？」

「そうですね。それに近いです」

「だから、皆呼び捨てで？」

「共に武を磨いた仲ですしね。武道の前では年齢差など何の意味もありません」

同じ目的の為に武を競い合った仲か……。

どれだけ彼らの間に深い絆があるのか、言われなくても想像が付く。確実に年齢が上であるのに、呼び捨てというのも仲間意識の高さの表れだろう。

ケイゴさんの性格からしてみれば、呼び捨てである事すら珍しいのだから。

「なかでも、ゲンイチロウは凄かった。私達をどんどん置いていきました」

「ツキオミさんですね」

「今では想像付かないかもしれませんが、昔は坊主頭だったんですよ」

あの長髪の影響が強いツキオミさんが坊主頭！？

「私やツクモ、ゲンパチロウは必死に追い付こうと努力したものです」

楽しそうに笑うなあ。ケイゴさん。

「結局、私がゲンイチロウに追い付いたのは最高道場でしたね」

「え？ という事は三人とも最高道場出身なんですか？」
「残念ながら、ゲンパチロウだけは一步手前でした」

アキヤマさん。確か知能戦に優れる人だったっけか？
大柄そうな身体だったけど、一番の武器は頭脳って事ね。

「個人的格闘能力、パイロット技能に優れるゲンイチロウ。
指揮能力、作戦構成能力に優れるゲンパチロウ。

そして、人を惹き付けるカリスマ性、

二人の持つ強みも高い次元で兼ね揃えているツクモ。

三人揃うと何でも出来そうでしょ？

だから、木連では彼らの事を三羽鳥と呼んでいるのです。

将来、木連を背負って立つであろう期待できる若者として」

ここまでケイゴさんが評価してるんだもんな。

木連にいる人達が彼らに期待するのも分かる。

「残念な事は三人とも草壁中将を心酔してる事ですかね」

本当に残念そうに告げるケイゴさん。

しかし、若者皆が草壁中将に心酔してる中、

どうしてケイゴさんは草壁中将に心酔してないのだろうか？

「ケイゴさんは草壁中将の事をどう思ってるんですか？」

「尊敬していますよ。父と同じくらい」

「え？」

尊敬してる？ しかも、父親と同じくらい？

「指導者としての中将は本当に素晴らしい方です。」

市民船という地に足付かない生活で不安に怯える国民を落ち着かせ、
なんとしても国民に安心できる暮らしを提供しようと強い信念を見せる。

木連がこうして暴動も起きず、安定していられるのは間違いなく
中将のお陰です」

聞いた限りじゃ本当に優れた指導者みたいだな。

「いつ少将は代わってしまったのでしょうか……。

信じられないかもしれませんが、

誰よりも先に地球に和平の使者を送ったのは中将なんですよ」

……草壁中将が誰よりも早く和平を考えていた？

「国民が良い暮らしを出来るのなら、過去の事など忘れよう。

父や他の将校にそう訴える姿には国民の誰もが涙しました」

「……」

そんな事が……。

「しかし、和平の使者を暗殺され、和平は成し遂げられず。

それでも草壁中将は何とかしようと足掻き続けました。全ては国民の為と。

若者達はそんな姿を見て、何があっても中将に付いていこうと誓ったそうです」

「でも……」

「はい。いつしか中将の考えは変わり、地球全てを討ち果たそうと……」

国民に良い暮らしを。

その事だけを考え、恨みや憎しみを抑え付けて平和を目指した。でも、その結果が、更なる地球の醜態さを見てしまうという無残なもの。

「……国民を愛するが故に狂ってしまったのかもしれないね」

「……そうかもしれません」

俺は草壁中将の事を勘違いしていたのかもしれない。

誰よりも木連を想い、誰よりも木連を愛したからこそ、悪の地球が許せなくなった。

大事な国民を預けるには地球は信じるに値しない。

だったら、地球全てを滅ぼし、国民に安心な暮らしを……。きつと和平の使者が暗殺された時、地球全てが絶対的な悪になってしまったんだ。彼の中で。

「確かに私達は幼い頃からゲキ・ガンガーを愛してきました。

それは仕方のない事なのです。娯楽もなく、道德の根本とするのはこれしかなかった」

「宗教はないのですか？」

宗教。日本では違うが、殆どの国の道德観念の根本となる存在。

「ありません。あえて言うならゲキガン教でしょう」

「……ゲキガン教で納得してしまっている自分がいる。

「ゲキ・ガンガーに影響され、熱血で全てが解決すると思っ込んでいる。」

また、ゲキ・ガンガーが聖典の為、勸善懲悪の度合いが地球より

強いのです」

「草壁中将はそれを利用したと」

「ええ。先祖が何故ゲキ・ガンガーを聖典としたのかは分かりませんが、

始めから、地球を悪とするシステムは出来上がっていたのです。それを中将は押し上げただけ」

先祖は地球の行為を許すまいとゲキ・ガンガーを利用したのかもしれない。

子孫達がいつでも地球に矛を向けても良いように。

いや、地球へ矛を向けさせる為にといった方がいいかもしれない。

「我々が生まれる前からゲキ・ガンガーは聖典でした。

それは父も同じそうです。それならば、中将もまた同じ」

「言わば、中将もゲキ・ガンガーの犠牲者という事ですか」

「ええ。もしかしたら、最もゲキ・ガンガーに囚われているのは中将なのかもしれません」

「・・・そうですね」

今まで、俺は草壁がゲキ・ガンガーを利用していたのだと思っていた。

でも、それは勘違いだったのかもしれない。

木連が木連として発足したのは今からずっと昔の話。

その頃からゲキ・ガンガーを聖典としていたのなら、草壁が操作できるものではない。

あくまで草壁は木連のゲキ・ガンガー熱を利用したに過ぎないのだ。

「草壁中将は木連の亡霊にとり憑かれているのかもしれない」

木連の先祖が子孫に残した憎しみ、恨みの怨念。

その結果が、草壁という自国を愛する男を狂わせた・・・か。

「しかし、敵は敵。覚悟は変わりません」

「・・・・・・・・・・」

敵は敵。もちろんそうだ。

でも、始めから諦めてしまつて良いのだろうか？

草壁中将与話し合う事は出来ないのだろうか？

・・・国を愛する男を狂気に染めたまま無に帰していいのだろうか。
・・・

「コウキさん？」

「あ、はい。すみません。なんでもないです」

駄目だ。迷うな。俺。

敵は敵でしかないんだ。余計な感情は邪魔なだけだぞ。

「私が目を覚ましたのは父に火星の光景を見せられた時です」

「・・・・・・・・・・」

「あれは見るに耐えない光景でした。情けない事に吐いてしまいま
したし」

「・・・・・・・・ケイゴ様」

マリアさんが心配そうにケイゴさんを見詰める。

いつの間にか騒がしかった二人もユキナ嬢もケイゴさんを見詰めて
いた。

「カエデ。私達は罪深い」

「・・・・・・・・ええ」

「謝って許してもらえるものではありません。」

私達はその罪を一生背負わなければならない。
そして、将来火星を再生する事で少しでも償いたいと考えていま
す」

「火星を再生!？」

ケイゴさんも俺達と同じ考えを？

「おかしな事を言ってますか？」

「あ、いえ。良い事だと思います」

事実、地球側は動き出している。

「私は火星再生に一生を捧げても良いと考えています」

「・・・ケイゴ様。私もお傍でお手伝いします」

「ありがとう。マリア」

「はい」

・・・いきなり桃色になりましたね。

「最近はその想いが更に強くなりました」

「・・・カエデですか？」

「なっ!？」

俺の問いかけで頬を染めるカエデ。

相変わらず初心だな。こいつ。

「ええ。大切な人の故郷を元に戻してあげたい。当然の考えでしょ
う?。」

「・・・ケイゴ」

潤んだ瞳でケイゴさんを見詰めるカエデ。
横で頬を膨らませるマリアさんがいなければ感動の光景なんだけど
な。

「ケイゴさん。その事でお話が」

「はい。何でしょう」

「実は」

「入ってきてくれ」

・・・あ。間が悪い。俺。

「コウキさん。また後でその話をお聞かせ下さい」

「はい。まずは・・・」

「ええ。ツクモ達の説得です」

「・・・ユキナ」

「・・・お兄ちゃん」

「・・・生きて・・・生きていてくれたんだな」

眼の前で溢れんばかりの涙を流しながら抱擁するユキナ嬢とツクモ
さん。

俺はこの光景を一生忘れる事はないだろう。

全身を震わせ、息を吸う事すら忘れ、眼の前の事が信じられないか
のような表情。

でも、すぐさま本物だと気付いたのだろう、徐々に嬉しさが顔に出
て来て・・・。

一歩ずつ、覚束ない足取りで近付き、ツクモさんはユキナ嬢を力一杯抱き締めた。

もう離さないと、そう伝えるように力一杯。

「ケ、ケイゴ。お前どうして・・・」

「報復されたのでは・・・」

「残念ながら、そう容易く死ぬ程、俺は柔じゃないんだよ」

そして、もう二人も驚きと喜びを全身で表現している。

武を磨きあつた親友との再会。

死んだと思われた親友との再会。

嬉しくない筈がない。

「ユキナ。どうして・・・あ、貴方達はッ！」

「ん？ 誰なんだ？ ツクモ」

どうやら俺に気付いたらしい。

以前、一度会ってるもんな。ナデシコで。

「お久しぶりです。ツクモさん」

「ナ、ナデシコのー！」

「ナデシコ？」

「ナデシコだと！？」

「クッ」

ナデシコと聞き、瞬時に構えるツキオミさんと若い軍人。あれって・・・誰だろう？

見覚えはないけど、もしかして、タカスギ・サブロウタ？

劇場版の印象が強過ぎて分かん。

「・・・・・・・・」

でも、構えている二人は実はそこまで気にならない。
もっと気になるのはその隣でじつくりとこちらを見詰める男。
アキヤマ・ゲンパチロウさん。
むしろ、構えられるよりこっちの方が怖いんですけど。

「やめんか」

大将が告げる。

「しかし！」

「やめんかと言っている！」

「クツ。・・・はい」

・・・これが木連最強の武人の気迫か。
とてもじゃないけど、勝てそうにない。

一撃当てる事すら想像でも無理。

「ツクモ。彼は？」

「ああ。以前、俺がナデシコに囚われた時があったらどう？」

「去年の十二月の襲撃の時だな」

「その時にナデシコで俺に木連の正義について聞いてきた」

「・・・ふむ。私はアキヤマ・ゲンパチロウ。貴殿の名をお聞きしたい」

礼儀正しい人だな。

「私はマエヤマ・コウキ。以前の戦闘ではお世話になりました」

「ふはは。それは私の台詞です。楽しませて頂きました」

アキヤマさんのボソン砲は恐怖だったもんな。実際。

「この者は私の副官を務めている」

「タカスギ・サブロウタであります」

あ。やっぱりタカスギ・サブロウタだったんだ。

「あの時、こいつは己の腕の未熟さを知ったようでした。

それから人が変わったように訓練するようになりました。感謝します」

「い、いえ」

そんな事で感謝されても困る。

「・・・ツキオミ・ゲンイチロウだ」

「初めまして。貴方の事はガイから聞いています」

「月で戦ったパイロットか」

「はい。木連にもゲキ・ガンガーを愛する男がいたと言っていました」

「そうか」

なんとも言えない表情のツキオミさん。

まあ、憎き地球人が目の前にいるんだから、当然か。

「神楽大将。ナデシコのクルーが何故ここに？」

ツクモさんが大将に問いかける。

まあ、当然の疑問だよな。

ナデシコの間人がここにいる事は普通じゃありえない。

「彼は恩人なのだよ」

「恩人？」

正直、俺がこの場に出るかどうかはかなりの時間悩まされた。

司令や参謀に相談した時もかなりの時間を話し合ったし。

俺が木連にいるという事がバレると幾つも都合が悪い事が生じる。

どうしてここにいるのか？ どうやってここまで来たのか？

木連側からしてみれば疑問が尽きないだろう。

当然、移動方法を教える訳にはいかない。

都合上仕方なく話したマリアさんやユキナ嬢には絶対に口に出さないと約束させたし。

しかし、話さない事で不審に思われるのも説得する身としては痛い。少しでも信じようと思わせなければ、説得なんて成功する訳がないからだ。

かといって、俺がここに出なければケイゴさんとはもかくユキナ嬢の説明が付かない。

ケイゴさんが地球から救出して共に脱出したと嘘をつけば今の所は誤魔化せるだろう。

だが、それによって彼ら三羽烏の地球不審が更に増したら余計成功する筈がなくなる。

結局、三羽烏に真実を話すと決めた時から、俺の参加は必至だったのだ。

結論としてはどうにか誤魔化せという事になった。

さてさて、話し合いの末に決まった誤魔化しはどこまで通用する事やら。

「彼がケイゴとシラトリ・ユキナを木連まで届けてくれたのだ」

「あ、貴方がユキナを……。ありがとうございます」

地面に頭が付くのではという勢いで頭を下げるツクモさん。
いや。そこまで感謝されるとなんだか落ち付かないんだが……。

「そして、カグラ・ケイゴ報復事件の真相を教えてくださいました人物でもある」

「真相？」

「一体それは……」

「ツクモ。しっかりと聞いておけ」

「……ゲンパチロウ」

「お前の疑問はきつと全て解消される」

……

「……嘘だ」

「ゲンイチロウ」

「嘘だ！ 私は信じない！」

和平派の接触。嵌められた罠。スズキ・ジロウサブロウの襲撃。
そして、都合良く操作された伝達情報。
俺達の計画や司令の事以外の全てを話した。

「信じたくない気持ちも分かる」

「……最高師範」

「大将だ。少なくとも今はな」

「ハッ。申し訳ありません」

頂垂れながら話すツキオミさん。

「嘘か真実か。それはどれだけ他人から聞こうと己が割り切るまで結論は出ないだろう」

確かにその通りだ。自身がそれを真実と認めるまで真実はあくまで予測でしかない。

まあ、その真実を誤って認識してしまう誤認というものもあるのだが。

「白鳥・九十九」

「ハッ！」

突如、ツクモさんの名を呼ぶ大将。

「お前は一度、草壁中将に和平を唱えたと聞く」

「・・・はい」

「それは何故だ」

「地球人は信じるに値すると思つたからです。

悪の地球人は誤りであると。我々は分かり合えると」

「では、今はどうか？」

「・・・正直、私は今、何を信じればいいのか分からなくなっています」

草壁に心酔しつつも和平を唱えたツクモさん。

地球を信じた、しかし、裏切られた。

でも、その裏切りは誤りであつた。

次々と変化する認識に一番混乱しているのは本人だろう。

「秋山・源八郎」

「ハッ！」

次はアキヤマさん。

「お前はこの戦争をどう思う？ 悪は？ 正義は？」

「戦争に悪も正義もないでしょう」

「ゲンパチロウ。我らこそ正」

「戦争にあるのは殺すか殺されるかの二つに一つ。

正義が勝つのではない。勝った者が正義なのだ」

「それならば、正義である我らが必ず勝利する！」

「もう一度言っぞ。悪であるうが正義であるうが、勝った者が正義なのだ」

「クツ」

正に真理だな。歴史とは勝者が紡ぐ軌跡。

どれだけ悪事を重ねようと歴史に残らなければその者は英雄なのだ。勝った者にこそ、歴史を形作る権利が与えられる。

一時の感情、ましてやたかが兵士の感情など何の意味も持たない。

「して、どう思う？」

「悪や正義というものは分かりませんが、一つだけ確実に言える事はあります」

「ほお。それは？」

「このままでは木連が負けるという事です」

「なっ！」

「艦長！ そんな事は！」

狼狽するツキオミさんとタカスギさん。

ツクモさん、大将はじつとアキヤマさんを見詰めている。

「木連の勝利とは何だ？ サブロウタ」

「無論、地球を討ち滅ぼす事です」

「青いな。ツクモ、お前はどうか？」

「地球を打ち負かす事だ」

「その通りだ」

「どう違うのですか？ 艦長」

討ち滅ぼすと打ち負かす。

似ているようで違う。

「木連が今、一番欲しいもの。それは安住の地」

「だから、それを手に入れる為に地球を討ち滅ぼすのでは？」

「滅ぼしてどうする？ 生産力のない我々ではすぐに息絶えるだけだ」

物資や食料を輸入かプラントに頼っている木連。

要するに、人間の力で何かを生産する力は皆無なのだ。

いずれ訪れる人口増加にプラントだけではとても賄えない。

「我々が成し遂げねばならん事は酷く困難。ただ戦えば良いという訳ではない」

「お前は戦後の事を考えているのだな」

「戦後どのようにして木連を存続させるか。私はそれを一番に考えています」

・・・木連にもそんな人がいたんだな。

アキヤマ・ゲンパチロウさん。

勝てば良い。そんな事ばかり豪語している中、一人冷静に先を見詰めている。

将来木連を背負って立つと言われている理由が分かった気がするな。

「私達木連に残された道は二つ。和平を成し遂げ、木連の存在を認めさせるか。

地球に打ち勝ち、地球を支配する形で一方的に搾取するか。その

どちらかしかない」

「それならば、地球に打ち勝ち、地球を支配すれば良い」

「だが、それをするには、木連はあまりにも小さ過ぎる」

「何故始めから諦める!? ゲンパチロウ!」

「お前のは理想論だよ。ゲンイチロウ」

「何?」

「人口も物資も土地も経済力も生産力も、その全てで木連は劣っている。」

今はまだいい。だが、いずれ地球側が木連までやって来れるようになる。

そうなれば、我々など一瞬だ。核でも何でも落とし、破壊してしまえばいい」

「ならば! 同じ事を地球にやってやればいい!」

「だから、良く考えろと言っている! 地球を滅ぼして何になる!

我々は地球の生産力に頼らねばなんのだ! 前提として地球は破壊できない!」

「.....」

黙って二人の口論を聞く大将、ツクモさん、タカスギさん。

「クツ。正義は必ず勝つ。勝たねばなんのだ」

「正義か.....。果たして木連に正義はあるのだろうか?」

「ゲンパチロウ! 木連が正義ではなければ何が正義なのだ!」

「ゲンイチロウ!」

ビクッ!

カエデがケイゴさんの怒鳴り声に驚愕としている。

そうだよな。カエデは常に敬語の礼儀正しいケイゴさんしか知らない。

こんなにも感情を表に出す姿は見た事がない筈だ。
まあ、これからいくらでも見る機会は訪れるだろうけど。

「……ケイゴ」

「お前は現実から眼を背けているのではないか？」

「……何だと？」

「先祖は核爆弾を落とされ、逃げ延びる形でここ木星まで辿り着いた」

「そうだ！ 我々は先祖の恨みを返さねばならない！」

「それをお前は悪とするのだな？」

「当然だ！ 悪以外の何者でもない！」

「それならば！ 我々が火星にした事も悪だろうが！」

「そ、それは……そう、これは正当な権利だ。恨みを返したただけなのだからな」

「ゲンイチロウ。眼を背けるな。自身を偽るな」

「何が言いたい！ ケイゴ！」

「お前は火星人を目の前にしてもそう言えるのか、と訊いている！」
「……」

今は我慢してくれ。カエデ。

身体が震える程、悔しいのは分かる。

涙が込み上げる程、悔しいのも分かる。

でも、今は堪えてくれ。

「お前は今の火星を見た事があるか？」

「……ない。見る必要など……ない」

「廃れていた。まるで廃墟のようにな。所々に死体も放置されていた」

「……仕方あるまい。恨むなら自身の先祖を恨めば良い」

「そうか。それでは、第一次火星大戦直後の火星を見た事があるか」

？」

「・・・それもない。二度も言わせるな。見る必要がないんだ」

「見れなかったの間違いではないか？」

「・・・何が言いたい？」

「お前は見たくなかったのだよ。木連を悪としたくないが為に」

「・・・」

「俺は見た」

「ッ！」

「父上に連れられ、実際に火星の地へと足を踏み入れた」

「・・・ケイゴが？ 火星に？」

実際に火星に来ていたとはな・・・。

さつき火星の光景を見せられたって言ったけど、てつきり映像だと思ってた。

まさか実物を見にいったなんて・・・。

「悲惨だったさ。火星制圧に舞い上がっていた俺が馬鹿らしくなる程にな」

「・・・辛そうに告げるケイゴさん。

本当に、見るに耐えない光景だったんだろう。

「腹から血を流す男性。瓦礫に埋もれて息絶えた女性。子を守りながら死んだ母。

母に守られながら死んだ子。俺に対して必死に手を出し、そのまま死んだ者もいたな」

「・・・」

「眼の前で・・・眼の前で死なれた。愕然としたさ。これが戦争なのだ」

「当然だ。戦争になれば人は死ぬ」

「そうだな。だが、その悲惨さを木連はまだ味わってない」

「その為に俺達がいる」

「違うな。まだ味わってないだけだ。いずれ味わう」

「そうならないように俺達が努めればいい！」

「現実はそのなに甘くない。木連は必ず火星と同じ眼に遭う」

「正義たる木連は火星とは違う！ そのような眼には遭わん！」

議論は平行線を辿る。

どこまでも愚直に木連の勝利を疑わないツキオミさん。

何を言っても聞く耳持たずだ。

でも、そんな事は俺にだって予想できた。

だから、あいつを連れて来たんだ。

あいつなら話を聞かせられるんじゃないかって。

ケイゴさんでもなく、ましてやツクモさん達でもない。

第一次火星大戦、その当事者、犠牲者である……。

「さつきから聞いてれば好き勝手言って……いい加減にしなさいよ」

カエデを。

「地球人に言われる筋合いはない！」

「私は火星人よ！」

「なっ！？ 火星人！？」

驚愕と共に一步後ろに下がるツキオミさん。

負い目からか、カエデの気迫からか。

多分、無意識の行動だろう。

「大将。確かですか？」

「確かだ。源八郎。九十九。お前は知っているな」

「はい。彼女の言葉は今でも胸に突き刺さっています」

どんな状況でも冷静さを失わない人だな。アキヤマさんは。隣のタカスギさんはこちらが驚く程に狼狽えているのに。

「何故火星人がここにいる！　そもそも地球人がここにいる事も

」

「そんな事はどうだっていいの！」

「グッ」

流石のツキオミさんもタジタジ。

そういえば、木連の男性は総じて女性に弱いんだっとな。

カエデは見た目もかなり可愛いし、間違いなくツキオミさんじゃ敵わない。

・・・ごめん。話をずらし過ぎた。

「貴方達は自分を正義とと思っているようだけどね。私にとっては悪そのものよ」

「何を言う！　悪は地球であろう！」

「故郷を滅ぼされた奴らをどう考えたら正義と思える訳？」

今のカエデは前のように感情任せじゃない。

いや、もちろん、散々皮肉を込めてるけど、あくまで冷静だ。

・・・こいつも少しずつだけ憎しみの檻から解放たれてきているんだな。

ケイゴさんのお陰か。これからもカエデを支えてあげてください。

ケイゴさん。

「そ、それでも正義は我々にある。我々は先祖の無念は背負ってい

るのだ」

「貴方の言っている通り、実際に被害を受けたのは先祖でしょ？」

「貴方達は当事者じゃないわ」

「偉大なる先祖が被害を受けたのだ。我らはその子孫として恨みを返さねばならない！」

「恨みを覚えるのも憎しみを抱くのも当事者だけ。当時の先祖の気持ち、貴方に分かるの？」

「辛かっただろう。苦しかっただろう。さぞ無念だっただろう」

「だろう。だろう。だろう。勝手な想像で先祖の思いを履き違えない事ね」

「お前に何が分かる！ 先祖の無念がお前に分かる訳がない」

「ええ。分からないわ。でも、貴方にだって分からない」

「そ、それは・・・」

「それに、先祖、先祖って言うけど、貴方達、大事な事を忘れてないかしら？」

「大事な事？」

カエデの言葉に傍観していた他の木連人もカエデに注目する。

マリアさんやユキナ嬢も例外ではない。

かくいう俺も何を言い出すんだらうとカエデに注目していた。

「貴方達にとって火星ってもう一つの故郷だったんじゃないの？」

「・・・え？」

今の声は誰の声だろう？

でも、その一言が全員の思いを代弁していた。

ここにいる誰もが意外な事を聞いたという顔をしている。

「どづいう意味だ？ カエデ」

気になったから聞いてみる。

この中でこんな事を普通に訊けるのは地球人の俺だけだし。

「木星へ逃げる前。貴方達はまず始めに火星に逃げ込んだんでしょ？」

「・・・確かに」

「木連の先祖にとって火星とは核爆弾を撃ち込まれて失った一つ目の故郷。

どうしてそんな先祖にとっても大事な場所を貴方達は滅ぼそうと
か考えた訳？」

「・・・・・・」

誰もが愕然としていた。

そんな考え方があつたなんて、と。

想像の範囲外から突き付けられた真実といった感じ。

「そもそも前提がおかしいのよ」

「まだ何かあるのか？」

こいつ、普通じゃ考えない事まで考えてやがる。

最近のこいつの思考回路は訳が分からん。

「貴方達の先祖は月の独立派だったのよね？」

「そうなるな」

大将が答える。

というか大将相手でも口調が変わらない君は凄い奴だよ。

「それって、地球と月は違うという概念があつた訳でしょ？」

地球から独立したいって考えたんだからそういう事なんだろうな。地球の属国ではない。地球と月は違う。一つの国なんだって。

「それなら、どうして地球と火星を一つに扱う訳？」

貴方達の考え方なら、月も火星もコロニーでさえも違う国なんじゃないの？」

「・・・・・・・・」

いや。ご尤もな意見で。

まあ、まだ独立してない訳だから同じ地球扱いなのはおかしくないんだけど・・・。

カエデの怒涛の攻撃で気付く事も出来ないでいるみたいだ。

「そもそも地球に恨みを返したいのに火星を襲う意味が分からないわ。

地球にならともかく火星に貴方達の事を知る人なんている訳ないんだもの」

「地球が使者を暗殺した報復だ」

「だから、地球が斬つたのに、どうして火星に報復するのよ？」

「そ、それはだな・・・」

矛盾。矛盾。矛盾。

カエデの言葉に誰も反論できない。

反論する隙なんていくらでもありそうだけど、

地球と火星は別だと認識してしまった以上、その隙も突けない。

「別に地球になら報復してもいいって訳じゃないわ。それも駄目だと思っ」

「・・・・・・・・」

「でも、果たして先祖達は火星を攻撃して欲しいって思ってたのか

しら？」

思うも何も、核爆弾を落とされてすぐだし、火星の事なんて考えてもなかっただろう。

開発が始まったのも人が入植してきたのもそれからずっと後の事なんだし。

まあ、それを言えば、火星もあくまで地球人が入植してきただけで解釈になるけどね。

「貴方達は地球に対する恨みを誰かに操られて、何も考えずに火星を攻撃した。違う？」

まさしくその通り。

「火星を襲う事に疑問を抱かず、踊らされて多くの命を奪った。それを開き直るなんて最低ね」

・・・容赦ないな。お前。

流石のツキオミさんも頂垂れちゃってるぞ。

木連人にとって女性とはどこまでも守らなければならない存在。

守るべき相手にそこまで言われたら立ち直れないよなあ。俺だった立ち直れない。

「それに」

「ああ。もういいぞ。カエデ」

それ以上やったら廃人化しちまう。

「何よ。言わせなさいよ。恨みを鬱憤で済ませてあげてるんだからこれぐらい言わせなさい」

「分かった。分かったから」

いや。確かに助かるよ。

恨んでも恨み足りないような相手に鬱憤だけで済ませてるんだから。でもさ、言葉の暴力ってすっごく痛いんだ。時には殴られた時以上に。

「それなら、あと一言だけ」

「・・・仕方ない。一言だけだぞ」

「ええ」

それぐらいなら良いだろう・・・。

「いつまでも正義正義言わないで。いい加減ウンザリするわ。

悪に正義って言われる事ほどムカつく事はないもの。

火星人の皆が思ってるわ。木連に恨みを返したいって。

でも、いつまでも恨みに囚われてちゃ前に進めないから、

私達は恨みの事を必死に胸の奥に押しやって毎日前を向いて生きてるの。

それなのに、貴方達はいつまでも過去の事をウダウダウダウダ。

正直しつこいわ」

・・・一言じゃないじゃん。

まあ、こいつだから言える言葉でもあったけど。

被害者じゃなければ、こんな事は言えないし、意味も伝わらない。

俺が言った所で、お前には分からないと怒鳴られた終わりだ。

・・・被害者の言葉ほど、堪えるものはないだろうな。

「そもそも」

まだ続くのかよ!?

「貴方達なんて全然マシな方よ。家族や友人を殺されてないんだから。」

私は貴方達のせいで父さん、母さん、妹、友達、全てを失った。故郷すらも失って、頼りに出来る人は一人もいなくて、たった一人残された。

きっとそんな人はあの時、いくらでもいたんでしょね。

どう生きていこうか途方にくれていたら、地下シエルターの存在に気付いた。

そこでは本当に少しだけ残された食料を頼りに沢山の人が震えながら生活してたわ。

一日一日を生きるだけで大変で、飢え死にした人数なんて数え切れない。

一粒の麦や米を手に入れるのにも喧嘩沙汰で、それで死んだ人もいた。

恨みや憎しみの感情を抑え切れずに暴走した男が銃を乱射して何人も人を殺した。

感情の赴くままに暴力を振るわれ、殴られた事だつて一度や二度じゃない。

何度も殺される夢を見た。何度も殺す夢を見た。何度も死のうと思つた。

それでも、私は生きないとして必死に我慢したわ。

父や母が死に物狂いで逃がしてくれたその思いを無駄にしたくなかったから。

一年半。そう一年半もの生き地獄を味わい、ようやくナデシコが来てくれた。

もう飢えで死ぬ寸前だった私は気を失っており、誰かに背負われて救出されたらしいわ。

分かるかしら? こんな生き地獄に多くの人を叩き落したのは紛

れもなく貴方達なのよ」

・・・そうだよな。

食料も残り少なく、いつ解放されるかも分からないという不安、苦痛。

もう無理なんじゃないか、助けなんて来ないんじゃないかという諦め、絶望。

負の感情は容易に人を狂わせてしまう。

昨日まで優しくかった人が急に乱暴になったってまったくおかしくない世界。

そんな世界でカエデは一年以上もの時を過ごしたんだ。

苦しかっただろうな。辛かっただろうな。

そんな思いを抱く事すら冒涇でしかない程の苦痛の日々。

分かってあげられない。慰めてあげられない。それが何より辛い。

「貴方達は苦労したの？ 所詮は先祖からの借り物の憎しみでしょ？

本物の憎しみを抱く私達が必死に抑え付けてるのに、

何も考えず感情の赴くままに行動する貴方達が私にはどうしても

許せない」

苦労はしてる。だからこそ、安住の地を求め争いを始めた。

でも・・・でも、この話以上の苦労はしていない。

その罪悪感が、彼らから口を開く事を拒ませた。

とてもじゃないが、反論できない。

「さつきから話は聞いてたけど、貴方達は何がしたいの？」

「何がしたいとは？」

「木連を救いたいなの？ それとも、地球に勝てればそれでいいの？」

「木連を救いたい。それが私の思いです」

ツクモさんが誰よりも早く答える。

その言葉にツキオミさん以外は頷いてみせる。

・・・ツキオミさん。貴方は・・・。

「それなら、憎しみぐらい乗り越えなさいよ。

私達に出来て、貴方達に出来ない訳がない。

今、争い続けて、木連を本当に救えるの？」

「・・・確かに貴方の仰る通りだ」

「ゲインチロウ・・・」

「火星の事は我らの過失だ。許しがたい悪の行為」

「・・・」

「申し訳なかった」

・・・頭を下げるツキオミさん。

でも、すぐに顔をあげ、俺を睨みつけてきた。

・・・何故に俺？

「だが、私はどうしても地球を許す事が出来ない！」

唯一の地球人だから僕が標的になった訳ですか。

「暗殺。核爆弾投下。それらを平然と行う卑怯な地球が私は大嫌い
だ」

「暗殺に関してはそちらも同じですが？」

「何？」

「ケイゴさんの事もそうですが、我々は木連に和平派の代表を撃た
れています」

「あれは地球の内輪揉めを木連のせいにしたただけだろう！」

「それを貴方自身で確認したんですか？」

「何を言ってる？　それが真実に決まってる」

「結局、貴方は踊らされたままだ」

「何だとッ!?」

「何故考えようとしない。本当に内輪揉めだったのか? と。」

木連は一切干渉してないのか? と。何故何も考えずに言われたままだに従う」

「中将を疑う心など持ち合わせていない!」

この頑固野郎! いい加減に・・・おっと。

「・・・ふう」

・・・落ち着こう。感情的になっちゃ駄目だ。ちよつと切り口を変えてみよう。

「ツキオミさん。ある男が大きな事を成し遂げた際に発した言葉があります」

「・・・突然何を言う?」

「その男はこう叫びました。『熱血は盲信にあらず!』」

「・・・熱血は盲信にあらず・・・」

貴方の言葉です。月臣・元一郎さん。

「その言葉に賛同した多くの若者に支えられ、その男は成し遂げました」

「・・・何を成し遂げたんだ?」

「熱血という言葉に踊らされた者達の意識を改革し、争い続けた二つの国を真の意味で結ばせる手助けを」

「・・・」

黙り込み俯くツキオミさん。

「盲信する事が貴方にとっての忠義なのですか？」

「信じて何が悪い」

「過去の言葉に、『諫言は一番槍より難し』というものがあります。

ただ愚直なまでに戦うだけが忠義ではない。反する事もまた忠義」

「・・・中将は間違っただけだ」

「それならば！ 何故こちらを見ないので！」

告げる。俯き、誰の眼も見ようとしない苦勞する男に。

「貴方は悩んでいる」

「・・・悩んでなどいない」

「中将を信じたい自分。中将を疑ってしまう自分。その狭間で揺れる自分」

「・・・疑ってなどいない。私は中将に付き従うのみ」

「考えるのが怖いのですか？」

「何ッ!？」

「ただ付き従っていた方が罪悪感を背負わずに済む。そんなの眼を背けてるだけだ」

「貴様！ 言わせておけば！」

シュツ。

「ゲインチロウ！ やめろ！」

顔をあげ、こちらを睨みつけながら向かってくるツキオミさん。

それに慌てて制止を呼びかけるツクモさん。

確かに三羽烏一の格闘家に俺程度の腕前では敵わないだろう。

だが、それは普通だったら、だ。

こんな感情に囚われた締まらない拳にやられてやる程、俺も甘くな

い。

「ハアアア」

「ハッ！」

バキッ！ ドゴッ！

拳を振り上げ向かってくるツキオミさんに対し自らも近付き拳を叩き込む。

その後、崩れた体勢のツキオミさんに向けて渾身の回し蹴り。技量は低い。それは認める。だが、威力では負けていない。

「クッ、クウ・・・」

「嘘・・・ゲンイチロウが吹き飛ばされた」

「コウキ。貴方・・・」

驚きの声をあげるユキナ嬢とカエデ。

そんなに弱そうに見えてた訳？ 俺。

「・・・木連式柔」

呆然としながら呟くツクモさん。

「どうして木連式柔が地球人に使える？」

「私が教えました」

「・・・門外不出をお前は教えたのか」

「はい」

木連式柔って門外不出だったんだ・・・。

「まあ良い。元一郎」

「・・・はい」

「今は木連軍大将ではなく木連軍最高師範として告げる」

「ハッ」

「お前は悩んでいる」

「・・・悩んでなど」

「元一郎！」

「・・・クッ・・・」

怒声が響く。

「拳を見れば分かる。お前は今、誰にでも分かる程に悩んでいる」

「・・・」

「信じる道を失った時、何を信じればいいと思う？」

「・・・分かりません」

「己自身だ」

「・・・私自身」

「自分自身を見詰め直せ」

「・・・」

「言われたままを受け止めず、流されずに自分でしつかり考える。

何が正しくて何が間違っているのか。決定するまでに時間を掛ける。

お前の思いきりの良さは美点であり、欠点だ。

これから木連を背負うお前達にはもつと様々な視点から物事を考

えて欲しい」

「・・・はい」

将来背負って立つからこそ、自分で考え、自分で決める能力を培って欲しい。

大将は三羽烏が後を任せる人間として相応しいと考えているからあ

あ告げている。

あの言葉は、期待の表れだ。

「九十九、源八郎」

「ハッ」

「はい」

「お前達もだ。全ての情報を鵜呑みにするな。

草壁中将であろうと私であろうと、

しっかりと自分で考え、自分の意思で決める」

「ハッ！」

「その言葉、忘れません」

「うむ」

どれだけ大将が三羽鳥に期待しているか分かる光景だ。

そう考えると、彼らが草壁派にいる事はやっぱり残念に思ってるんだらうな。

自分が鍛え上げた弟子でもある訳だし、尚更。

「本来であれば、私はここでお前達を私側に引き込みたかった」

・・・たかつた？

あれ？ 引き込まないって事？

それって・・・やばいんじゃない。。。

「だが、混乱しているお前達を強引に引き込んだ所で何の意味もないだらう」

「・・・」

「私はいつでもここでお前達を待つ。決心が付いた時、ここに来て欲しい」

「ハッ」

「あと、一つだけ約束してくれ」

「何でしょう？」

「ケイゴとシラトリ・ユキナの生存については誰にも他言しないで欲しい」

「・・・何故で」

「分かりました」

「・・・ゲンパチロウ？」

「ゲインチロウ。ここで二人の生存を話したらどうなる？」

「・・・それは」

「国民は草壁中将を不審に思い、草壁派の連中は暴走する危険性がある」

「・・・」

「お前がどちらの派閥に付こうとこれを話せば都合が悪くなるんだ。今は黙っている」

「・・・分かった」

完全に意図を理解しているな。アキヤマさんは。

三羽鳥の中で一番敵に回したくない人だ。

「九十九」

「ハッ」

「分かっていると思うが、シラトリ・ユキナをお前の下で暮らさせる事は出来ない」

「・・・百も承知です」

「・・・お兄ちゃん」

心配そうにツクモさんを見詰めるユキナ嬢。
でも、すぐに笑顔で・・・。

「大丈夫だよ。お兄ちゃん」

「・・・ユキナ」

「ナデシコはとっても暖かくて優しい所だし。それに・・・」

何故俺を見る？

「お兄ちゃんのライバルがちゃんと守ってくれるから」

「ど、どういう意味だ！ ユキナ」

恐ろしく慌てるツクモさん。

これは果たしてライバルという言葉に反応しているのだろうか？

それとも、この人に守ってもらおうからという言葉に反応しているのだろうか？

・・・シスコンですもんね。ツクモさん。

「知らなかったの？ ミナトさんの恋人ってあの人だよ」

「な、何だあってえ!？」

ギラツと睨みつけてくるツクモさん。

「コウキさん」

「あ、はい」

「正々堂々勝負しましょう。俺は負けませんから」

・・・熱いな。無駄に。

「残念ですが、俺とミナトさんの間には微塵の隙もないですよ」

「クツ。私は諦めません!」

拳を握り締めるツクモさん。

凄いな。恋人を前にして奪い取る宣言ですか。

「ですが、ユキナちゃんに関しては必ず守ると約束しましょう」
「ドッキューン」

「……妹まで奪わせませんよ」

酷い勘違い。俺はミナトさん一筋です。

「良いかね？ 九十九」

「……あ。も、申し訳ありません！」

「良い、良い。ちようと肩の力も抜けただろう」

ここを苦笑いだけで収められるんだから素敵なオジサンだよな。

「今その者が告げたようにシラトリ・ユキナをどうこうするつもりはない。

だから、お前は妹の事を考えず、自分の意思だけでどうするかを決めてくれ」

「はい」

「最後にサブロウタ」

「あ、はい」

突然呼ばれてびっくりしたらしい。

「お前も良く考え、思い込みで結論を出すな。

お前も木連の将来を担う若者の一人なのだからな」

「ハッ。ありがとうございます」

「もちろん、お前も他言無用だ。分かったな？」

「もちろんであります。誰にも話しません！」

「うむ」

これで全員に口止めした訳だ。

・・・心配だけど、信じるしかない。

「さて、久しぶりに会った友と妹分だ。奥の部屋でゆっくり話すがいい」

「・・・ありがとうございます」

「失礼します。コウキさん」

「はい」

その言葉で三羽鳥、ユキナ嬢、ケイゴさん、

加えてマリアさんとタカスギさんも奥の部屋に消えた。

護衛の本分という奴だろうか？

まあ、俺としては都合が良いけど。

「さて」

現在、部屋に残ったのは俺とカエデと大将の三人。

三羽鳥の三人が聞こえない内に幾つか決めておきたい事がある。

疑いたくはないが、こういう事はどれだけ慎重になっても足りないのだ。

「まずは、辛い話を話させた。すまない」

早速と言わんばかりにカエデに頭を下げる大将。

・・・本当に良い人だ。立場とかを気にせず礼儀を通している。

「もう終わった話です」

短く返すカエデに思わず苦笑。

本当に相変わらぬ奴だ。

心を開かないと誰にだってこんな態度だし。

「すみません。大将。こんな奴で」

「こんな奴って何よ!？」

「愛想が悪いって事だよ」

「そんな事ないわよ」

「そうなの!」

「違う!」

「ああ! 後で思う存分証明してやるから黙ってる」

「黙ってるですって!？」

「ああ! もう!」

「ふはは」

・・・笑われてしまった。

「男と女の友情というものもあるのだな」

「え?」

「まるで門下生時代のケイゴとツクモのようだ」

・・・どういう意味だよ? それ。

「コホン。大将」

「うむ」

咳払い。そして、真面目な話ですよ、と表情を真剣なものに変える。
大将も理解してくれたようで、真面目な顔になる。

「曖昧な終わり方です」

「・・・」

「私は信じたい。ですが、立場上、疑わねばなりません」

「うむ。心に響く言葉ではあったのだがな」

カエデの言葉は彼らの胸を突き刺しただろう。

とりあえずはそれだけで良い。後は自分で考えてくれる筈。

「また、たとえ彼らの協力を得られても用心しなければなりません」
「用心？」

「ええ。ツクモさん達三羽鳥が神楽派に付いた。

そうなれば、誰もが疑問に思うでしょう。何故？」

「三羽鳥が私達に付いた事で、中將が推測するというのはか？」

三羽鳥がシラトリ・ユキナとケイゴの生存を知ったのでは、と

「はい」

「それは考え過ぎではないか？」

「それ以外に神楽派に付く理由がないですから。

少なくともツクモさんの理由はユキナちゃんしかありません」

「うむ。そう推測されれば、私の演技もバレてしまうな」

「ええ。下手するとケイゴさんが木連にいる事もバレてしまうかもしれません。

三羽鳥は二人の生存を言伝に聞いても実際に眼にしなくちゃ信じないでしょうし」

「そこまでバレるとは思わんが・・・用心するに越した事はないか」
「はい」

自分でも考え過ぎだとは思う。

でも、俺程度で考え付く事が草壁に考え付かない訳がないと思う。

「分かった。対策の方は私で考えておこう」
「御願います」

大將に任せておけばひとまず大丈夫だろう。

もし俺だつたら・・・どうするか？

三羽烏を完全に引き込まず、草壁派内で活動させる？

それなら、草壁に怪しまれずに手を組めるだろう。

でも、そんな汚い真似をツクモさん達がしてくれるとは思えない。

となると、この案は却下だな。

後は・・・大将に完全に抗戦派の一員となつてもらい、

抗戦派の中で草壁派に対する神楽派という派閥を作ってもらおう。

同じ抗戦派であれば、疑われもしないだろう。

それに、一言に抗戦といつても色々な方法や意味がある。

同じ抗戦派の中で違う派閥が出来ても不思議はない。

これも言わば騙す形になる訳だが、危険性を考慮したらこっちの方が良い。

三羽烏もこちらなら不満を抱きつつも付き従ってくれるだろう

大将の立ち回りが非常に難しいというデメリットもあるけど。

ま、どちらにしろ、これに関しては大将任せだから、俺が考えた所で意味はないな。

「大将」

「ん？ 何だね？」

「俺達はいつまでも待ちますから、彼らにゆっくり話をさせてあげてください」

「達つて私も含まれる訳？」

「いいよな？ カエデ」

「・・・別にいいわよ。許してあげる」

「そうか。感謝する」

彼らにとっては久しぶりの再会。

でも、残念ながら、またすぐに離れ離れになってしまうんだ。

だから、思う存分、話して欲しい。楽しんで欲しい。

「それと、俺がここまで来た方法ですが・・・」

結局、誤魔化すような事もなく彼らとの対面は終わってしまった。
このまま行けば何の問題もないんだが、念の為にね、聞かれた時の事を。

「ふむ。聞かれなければ良し。聞かれたら誤魔化すつもりだったが・・・」

「一応、口裏を合わせておきましょう」

変なミスでバレたら泣くに泣けないからな。

「地球でチューリップと戦闘中、神楽派の機体を見掛けた事にします」

「ふむ。後はその機体と取っ組み合う形で次元跳躍門に突入したとすればいいだろう」

「はい。チューリップを通る時はDFが必要だと知っていた俺はDFを展開」

「取っ組み合った結果、こちらの機体が跳躍の誘導役となり、両者共に跳躍」

ふむふむ。なんかテンポがいいぞ。

考えていた内容が殆ど一緒だったって事かな？

「そこで神楽派のキシモト少将と面識を持ち、その伝手で大将にも
「その席で真実を打ち明けられ、私が二人を連れてきてもらえるように依頼」

「後はキシモト少将の部下に協力を依頼し、チューリップを利用して移動した」

おお。完璧。息合いますね。俺達。

「まあ、こんなものだろう」

「最初以外は真実ですからね」

嘘と真を織り交ぜる。これが疑われない手法らしい。

木連軍人に協力を依頼したと言えば、俺がA級ジャンパーである事もバレない。

多少の違和感ぐらいなら別に俺としては問題ないのだ。

俺の移動方法は彼らにとって常識外の事態の為、想像も出来ない筈だから、どう頑張ろうと俺がボ口を出さない限り真実に辿り着く事はない。

そうすれば、いずれ諦めてくれるだろう。真実を追い求めるのも。

無論、本当に信用できると確信したら、打ち明ける事も吝かではないが。

「この案で行こう。聞かれたら私の方でなんとか誤魔化しておく」

「御願います」

それからしばらくは大将と計画の事について打ち合わせ。

カエデはチンプンカンプンって顔してたけど、とりあえず口止めはしといた。

こいつ、秘密って言うておかないと平気でしゃべりそうだし。

なかなかケイゴさん達は出てこなかったけど、そこはまあ、我慢してた。

結局、話を終えたのは二時間ぐらい経ってからだったな。

カエデはプンプンだったが、ケイゴさんが宿めたら一瞬。

お前、単純な奴だなと思ったのは俺だけじゃない筈だ。

その後、ユキナ嬢をきちんと預かり、カエデ、俺、ユキナ嬢で地球へ。

なお、ここでもまたカエデの説得に苦労したというのは言うまでもないだろう。

まあ、とにかくにもかくにもこうして一連の三羽鳥説得計画は終わりを告げた訳だ。

彼らが説得に応じてくれるか非常に不安だけど、信じるしかない。

成功の報告が来る事を信じ、俺は俺のやるべき事をやっちゃいますかね。

第八十話（後書き）

感情ではなく淡々と思いを伝えたカエデ。

ケイゴの影響でしょうか。憎しみを抑えられるように成長しています。

しかし、必死に憎しみを抑えているという言葉は木連に効くでしょうね。

私達に出来て貴方達に出来ない訳がない。

ズシリと痛い所を突いたと思います。

さてさて、三人 + はどんな結論を出すやら。

PS 勝手に作ってしまった木連武術事情。

誰か、戦後の木連武術を極める少年の物語を書いてみませんか？

すいません。冗談です。

第八十一話（前書き）

今回はAIとその他諸々の話。

は？　こんなの作れる訳ないじゃん！？

という反応は勘弁してくださいね。

第八十一話

「セレスちゃん。どういうシステムがいいかな？」

新型機に搭載する予定の新型Aエアザレア。

パイロットの補佐を目的とし、機体の性能を最大限に活かす為のもの。

しかしながら、ただ各機にそれぞれ積むのでは面白みがない。

AI故の強力な何かが欲しいのだ。

唯の補助だったら、別に俺がソフトをインストールしちやえばいいだけだし。

「・・・オモイカネを参考にするのはどうでしょう？」

「オモイカネ？」

「・・・はい。感情豊かで意地っ張り、でも、ナデシコと共に成長しています」

「ふむふむ。共に成長していくか・・・」

そういえば、オモイカネに関する事件もたくさんあったな。

地球圏脱出の際に連合軍から受けた攻撃でストレスを溜めて暴走したり。

それを解消する為に恋人役？を作り出して、仲良くさせたり。

仲良くやってるのかなと思ってたら、浮気がどうたらとか言いだして。

その結果、予定外のコミュニケーション混在事件が起こっちゃったり。

でも、その度にオモイカネはナデシコクルーとの絆を深めていった

気がする。

・・・なるほど。共に過ごし、共に成長し、絆を深める。
これが俺達にとって理想のAIっていう訳か。

「それなら、一人一人にそれぞれのAIを提供するかな」

「・・・一つ一つを独立させるんですか？」

「うん。そうなるかな」

「・・・一人ぼっちは寂しいです」

「寂しい・・・」

「・・・AIだって友達がいた方が嬉しいと思います」

AIも人と同じって訳か。

うん。それなら、それぞれを同期させる？

いや。でも、そうするとパイロットの特徴を活かしきれないんじゃないか？

ガイとイズミさんとかだと全く方向性違う訳だし。性格的にも。

「あら？ 私を仲間外れにして、何の悪巧みをしているのかしら？」

「いきなり人聞きの悪い事を言わないで下さいよ。ミナトさん」

突然来て何を言ってるんですか・・・。

「新しいAIについてセレスちゃんと話し合ってたんです」

「知ってるわよ。コウキ君のスケジュール調整してるのは私だもの」

・・・そうでしたね。

分かってて言った訳ですか・・・。

「ふふっ。それで、どうなったの？」

「折角の新しいAIですから、色々工夫してみようと思うんです」
「ふむふむ」

「各機にそれぞれ搭載してもいいですが、それじゃあ寂しいかなと」
「寂しいって？」

「・・・AIにもお友達は必要だと思います」

「とまあ、こういう事です」

「なるほどね」

オモイカネにシタテルとサルタヒコがいるように、それぞれのAIを友達にしてあげたい。

セレス嬢からの強い要望だ。それなら、応えるしかないだろ？

それに、友達がいれば、ストレスも溜まらないし、他にも良い影響を与えてくれるだろう。

「それに加えて、パイロットと共に成長するようにしたいんですね」

パイロットと触れ合う事で精神的にも成長し、名実共にパートナーに。

補佐役というのはもちろんだが、それ以上に相棒として活躍してもらいたい。

その為にはパイロットとAIの間での絆が不可欠。

「要するに、各機それぞれに同一意識ではなく、パイロットに合ったAIを提供したい。」

「ただ、完全に独立させてしまうのは寂しいから、各AIで親交を結ばせるようにしたい」

「まあ、そうですね」

良い案が全然思い浮かばないけど。

「ふうん。そんなに難しく考えなくて良いんじゃない？」
「え？」

そんなに単純なものではないんじゃないですか？

「オモイカネとシタテルとサルタヒコは親交を結んでいる訳でしょ？」

「ええ。同一制御下にいますからね」

あれはナデシコの制御下にYユニットを強引に押し込んだからこそ
の実現。

シタテルはもともとナデシコの制御下に作ったし。

ナデシコとYユニットがそれぞれ独立していたら、あれは実現して
いなかった。

「それなら、同じように同一制御下に置けばいいのよ」

「えっと・・・どっという意味ですか？」

「呼び出し制ね」

「はい？」

ミナトさん。まるで分かりません。

「コミュニティを作って、そこで親交を結ばせつつ、必要な時に呼
び出すのよ」

「・・・セレスちゃん。分かる？」

「・・・分かりません」

「しょうがないわねえ。詳しく説明するわよ」

・・・すみません。

「コウキ君とセレセレが用意するのはAI達の交流広場」
「交流広場？」

「ええ。AI達が交流を深め、共に技術を磨き合う場所よ」
「呼び出し制というのは？」

「まだ誰がどの機体に乗るのか決まってないんでしょう？」
「ええ。きちんとは」

「一応、それらしい組み合わせは決まってるんだけどね。」

「だから、貴方達が作ったコミュニティに待機させておいて、
使いたい時になったらそれぞれが呼び出すようにすればいいの」
「なるほど。機体単位ではなく、パイロット単位で選ぶ訳ですね」

「そうすれば、機体を変更してもパイロットに合ったAIが補佐して
くれる訳だ。」

「でも、どうやってコミュニティを？」

「その辺りの事を考えるのがコウキ君の仕事でしょ？」

「あ。そこで任せられるんですか。俺」

「詳しい事は分からないもの。餅は餅屋」

「ま、いいですけど。」

「良いアイデアもりましたし。」

「コミュニケーションを介せば、機体にAIを移せるかな？」

「・・・はい。でも、ナデシコに機体全てを賄える程の空き容量は
ないと思います」

「そっか。ナデシコはかなりギョウギョウだもんね」

そうなるよ、どこか別の場所に作る必要があるな。

「改修してるんでしょ？」

「……あ」

そうでしたね。ミナトさん。

「ちょっと明日香に確認してみます」

改修後に容量が少しでも空いてれば、そこを活用させてもらおう。
とりあえず、確認してからだな。

「行っちゃったわね」

「……どんなAIになるのか楽しみですよ」

「これからセレセレとコウキ君の二人でたくさんのAIの面倒を見なくちゃいけないのよ？」

「……え？」

「コミュニケーションでAI達が交流している間、貴方達で見守ってあげなくちゃ」

「……はい」

「コミュニケーションは託児所みたいなものよ。コウキ君が保父さん、セレセレが保母さんね」

「……ポッ」

「ふふっ。どうして照れるのかなあ？」

「……お父さんとお母さんです」

「クスッ。そうね。二人にとって子供みたいものか」

「……はい」

「生まれたてのAIって赤ん坊みたいなのよね。どうやって成長していくのか楽しみだわ」

「・・・赤ちゃん。・・・ベイビィAエアザレアですね」
「良い名前じゃない。ベイビィA I」

確認を終えて、先程までいた部屋へ。

流石は明日香で、容量もそうだし、全体的な性能も向上する予定らしい。

まあ、それに関しては完成後に改めて話を聞こう。

改修中だから、実際にナデシコに載せるのは当分後。

それまでは俺自身のPC内で作製しておこう。

なんて、そんな事を考えながら、部屋に戻ったんだけど・・・。

「どうして笑ってるんですか？」

笑顔で楽しそうに触れ合う二人を発見しました。

「ふふっ。名前を決めてたのよ。ね？」

「・・・はい」

名前ってA Iの？

「・・・ベイビィAエアザレアです」

ベイビィA I？

「絆を深め、共に成長し、アザレアは育っていく。まだ何も知らない無垢な赤ちゃん」

「・・・どう成長するかは周りの環境次第です」

「だから、ベイビィ。愛される事を知って成長していくの」

なるほどね。花言葉からか。

「良いと思います」

「それで、どうだったの？」

「ええ。いけそうです。それまでは俺のPCで作製しておきます」

「・・・作製じゃないです」

「ん？」

「・・・アザレアは赤ちゃんです。作製なんて言わないで下さい」

「えっと・・・」

ミナトさん？ これはどういう？

「ふふっ。物扱いなんてして欲しくないのよ。それぐらい分かってあげなくちゃ」

「それなら、なんて？」

「そうね。命を宿してあげなさい」

そういう事が。セレス嬢に悪い事をしちゃったな。

「セレスちゃん」

「・・・はい」

「一緒に命を宿そう」

「・・・はい！」

「・・・なんか嫌な響きね」

「え？」

「・・・何がですか？」

「なんでもないわ」

どういっつっちゃ？

後日、といつても二週間後ようやく大まかな枠組みが完成した。

あとは実際にアザレアをパイロットに預けつつ、調整していけば良い。

ベイビィAIAザレアは共にいる人で機能も性格も変化する特殊なAIA。

また、それぞれが経験した事をコミュニティに持ち帰る事で、多くの事を他のAIAにもフィードバックできるようになっている。これはAIA同士の交流と言えるだろう。

加えて、コミュニティに俺の作った照準補正ソフトなども置いてあり、

各AIAが必要だなと思つた際に、各自で任意にインストールできるようにもしておいた。

たとえば格闘戦重視のパイロットの場合、照準補正ソフトはあまり活用されず、機動予想ソフトの方が重用されるだろう。

そんな、誰にどのソフトがいいのか、という事をAIAがパイロットと接する事で判断してくれる。

だから、俺の勝手な推測ではなく、経験に基づいて必要なものを揃えてくれる訳だ。

まあ、そこまで判断できるようになるまでかなりの経験が必要になるだろうが。

そんなAIA達に俺がしてやれる事はコミュニティ環境を整えてあげる事。

後は各自が勝手に成長して、そのパイロットに相応しいだけの能力を身に付けてくれる。

まあ、子供みたいなものだからな。ちゃんと面倒は見るつもりだ。でも、あくまで彼らの相棒はパイロット達。

俺やセレス嬢は代わりに面倒を見ているに過ぎないという訳だ。

そう考えるとちょっと寂しいけど、我慢するしかない。

パイロットと共に活動すればする程、自身の能力を高めていってくれるアザレア。

正にベイビィAI。眼を掛ければ掛ける程、慕ってくれて、育てられる訳だ。

ちゃんとパイロット達に説明して、面倒を見させるようにしないとな。

凄いで？ シミュレーションに連れて行けば、徐々に適応して、使い易くなっていくんだから。

まずはきちんとシュミレーションに付き合わせるよう言っておかないと。

ガイとかスバル嬢とか面倒臭がりそうだし。

とりあえず、ナデシコ完成までは俺のPCと彼らのコミュニケーションを同期させておこう。

そうすれば、コミュニケーションを介して、シュミレーションにも付き合える筈だ。

さてっと、俺も俺のアザレアを大切にしていあげないとな。

「どうだ？　これが試作型パイルバンカーだ」

右腕のみがハンガーにぶら下がっており、腕部にパイルバンカーが備え付けられていた。

凄くゴツイというのが正直な感想。

「パイルバンカーですが、多少作動方法を変えてみました」

ああ。先端部が触れたら自動的に飛び出すって奴ね。それを変えた

のか。

「先端部に接触すると電気信号が流れ、飛び出させるつもりでしたが……」

「もっとシンプルな方法がある事に気付いたんだよ」

「それは？」

「押し付け作動式だよ」

押し付け作動式？

「機体に接触すると当然杭の先端部が押されるよな」

「ええ。押されますね」

「すると、杭自体は後ろに下がる」

まあ、物を押したら奥にいくよな。

「後ろに下がる事で杭の後ろ部分でパイルバンカー内の引き金を押す」

「引き金を押す？ 引くではなく？」

「ああ。内部に発射用のスイッチのようなものを作る訳だ。だから、押す」

ああ。なるほど。意味は伝わりました。

「電氣的ではなく、機械的に発射させる事にしました」

「ついでにいうとただ杭を撃ち出すんじゃなく、レールガン仕様にしてある」

「レールガンを撃つように反発力を活かして杭を飛び出させる訳です」

「そうなるな」

通常の銃のように火薬を用いて発射させるのが普通のパイルバンカーらしい。

それをレールガン機構にして、威力倍増、火薬非消費を実現させた。うーん。俺のせいかもしれないけど、

本当にレールガン仕様の武器が多くなっちゃったな。

まあ、威力が凄まじいし、分からなくもないけど。

「ちよつと失礼しますね」

断りを入れて、パイルバンカー装着済みの右腕に近付く。

「アザレア」

『はい。マスター』

「ちよつと御手伝い」

『喜んで』

他のパイロットのアザレアは戦闘的な補佐が殆どだろう。でも、俺はこういう日常的な事も手伝ってもらっている。

その為、戦闘専用ではなくなり、他のアザレアに比べたら戦闘補佐はあまり得意ではない。

だが、その分、調整業務や細々とした仕事では随分と助けてもらっている。

俺のシミュレーション回数が他のパイロットに比べて少ないという事もあるけど。

本来こういう仕事はセレス嬢に手伝ってもらってるんだけど、

セレス嬢はセレス嬢で他のアザレアの子守という大事な仕事があり忙しい。

アザレア達にとってセレス嬢はママであり、随分と慕われている。

まだまだどのアザレアも幼く、甘えたい年頃だしな。

未来のミナトさん曰く、甘えた分だけ男になれよ。

これからの成長に期待しよう。女性人格もいるけど。

あ、ちなみに、経験値でいったら、俺のが一番だと自負している。なんでも助けてもらってるから。

それに、戦闘補佐は他のアザレアから多少学んでいるみたいだし実はそれほど問題ではない。

いや。コミュニティ制度。意外と便利だ。

「耐久度とか、今更見ても意味ないと思うけど、確認ね」

『はい』

気分はたまごをウオッチする奴。

『耐久度。問題ありません』

「制御系統に異常は？」

『ございません』

「俺が調整する所はある？」

『今の所はございません』

「そっか。ありがとう。お疲れ様」

『疲れてなど。マスターのお役に立てるならどのような苦勞も苦勞ではありません』

随分と慕われているみたいだ。

だからだな、俺もつつい甘くなってしまう。

「そんな君にはお菓子をあげよう。コミュニティの皆で食べな」

『ありがとうございます！ マスター』

お菓子といっても電子世界のお菓子だけどね。

AIの腹を満たす特別なプログラムですわ。

容量喰うけど、時間が経ったら消えるっていう。
食事とは必要ないんだけど、ちょっとした嗜好品感覚。

「コミュニティに戻っていいよ」
『はい』

さてっと。

「ありがとうございました」

「どうだった？ 一応、完璧だと思うんだが」

「ええ。流石はお二人の合作。完璧でした」

「別に合作なのは関係ねえよ」

「ええ。仕事ですから。微塵のミスもあってはなりません」

なんだかんだで足並み揃ってるよね。二人とも。

相変わらず態度は喧嘩腰だけど。

「また何かあったら呼んでください。いつでも手伝いますから」

「おう！」

「御願います」

「それでは」

パイルバンカー。今までにない武器。

誰が一番上手く使いこなしてくれるやら。

一応、接近戦仕様だから、スバル嬢あたりの機体になると思うけど……。

使いこなせなかったら他の新型機に移すっていう方法もあるし問題ないか。

まあ、シミュレーションで適性検査をしてから決めよう。

「さてつと、とりあえず自室に戻ってコミュニティ環境を整えようかな」

セレス嬢に預けたままのPC。

そこに他のソフトも導入させておこう。

日常的にも、戦闘にも使えるソフトは他にもたくさんある。

どれだけあっても必要だと判断したのを選んでくれるから容量オーバーもないし。

ま、偶にオーバーしてセレス嬢のお世話になる食いしん坊AIもいるらしいけど。

「お待たせ。セレスちゃん」

PCのIFS端末から電腦世界へ進入しているセレス嬢。

どうやら今もアザレアコミュニティで保母さんをしているらしい。意外と天職かな？ セレス嬢の。

「・・・コウキさん」

「えつと・・・何かな？」

声が聞こえてのだろう顔をあげてこちらを見る。

普段ならもつと温和な顔のだが、どうしたのだろうか？

ブクツと頬を膨らませて・・・どうやら怒っているらしい。

俺は可愛らしいと思えないけど、うん、間違いなく怒ってる。

「・・・お菓子ばかり与えないで下さい。ワガママになってしまいます」

「・・・」めんなさい

・・・マジでママさんらしいママさんをしていました。

「コミュニティ内はどうなってる?」

「・・・楽しそうです。偶に喧嘩もありますが、

コウキさんのアザレアが仲裁してくれてますので皆仲良しです」

「流石俺のアザレア」

なんてちょっとした優越感。

一番経験値あるから、ちょっとしたお兄ちゃんのような存在なんだろう。

「・・・精神面ではコウキさんのアザレア、戦闘面ではヤマダさんのアザレアが一番です」

ヤマダ? ああ。ガイか。

・・・え? ガイなの?

「・・・毎日一緒に訓練してるみたいですよ」

ああ。熱血ですか

俺に付いて来いのなノリ。

面倒臭がりだと思ってたのに、まさかの逆。

「・・・コミュニティ内でも暑苦しいよ」

熱血がうつったか。

まあ、そうじゃなければガイとは言えないけど。

「・・・皆、日々成長しています」

それが嬉しくてたまりませんと言わんばかりの笑顔。

本当に天職なんじゃないかな？ 保母さん。

「・・・最近、コウキさんからお菓子を頂いていません」

「ん？」

「・・・アザレアばかりずるいです」

も、申し訳ないです。

・・・しかし、AIに嫉妬するとは思わなかったな。

反省します。

「・・・初めて会った時にコウキさんから貰った飴の味。私、忘れ
ません」

ああ。どう接していいか分からずに対策として用意しておいた飴の
事か。

あれのお陰で話しかけられたし、あれのお陰でセレス嬢の優しい所
を知ったんだよな。

俺とセレス嬢の初めての思い出って訳か。

「それってこれかい？」

イチゴ味の飴。今でも疲れている時なんかによく食べる。

「・・・あ。はい」

「そっか。これのお陰でセレスちゃんと仲良くなれたのか」

ちよつとした出来事。

間が持てない情けない男が飴で間を取ろうとしたあたりなものの、
そんな小さな出来事なのに、思い出として大切にしてくれてるんだ
な。

なんか、嬉しい。

「はい」

「・・・くれるんですか？」

「ふふっ。感謝の証」

日頃、お世話になってるからね。

「・・・ありがとうございます」

頬を膨らめせるような形で飴を舐めるセレス嬢。
なんかハムスターみたいで可愛い。

「・・・懐かしいです。私にとって・・・とっても大切な思い出」

「そんなに大きな事をしたつもりはないんだけど」

「・・・いえ。初めて人に優しくしてもらいました」

・・・セレス嬢。

「・・・それに」

「それに？」

「・・・コウキさんと出会えた瞬間でしたから」

・・・照れるじゃねえか。

「ほっと」

飴を飲み込まないようにセレス嬢を慎重に抱き上げる。

セレス嬢はセレス嬢で大人しくじっとしていてくれたから抱き上げるのも簡単だった。

あとはさっきまでセレス嬢が座ってた椅子に抱き上げたまま座るだけ。

「・・・なんだか久しぶりの感触です」

そういえば、最近はしてなかったな。
忙しくて駆け回ってばっかだったし。

「・・・暖かい」

愛い奴よのお。

「・・・あの」

「うん？ 何かな？」

見上げてくるセレス嬢の頭を撫でる。
なんとなくそうして欲しいんだと思ったから。

「・・・なんでもありません」

クスッ。恥ずかしがっちゃって。

「・・・しばらくこのままでいてください」

「かしこまりました。お姫様」

「・・・お姫様じゃないです」

「クスッ」

「・・・笑われてしまいました」

僕にとってはお姫様ですよ。セレス姫。

俺の、いや、俺とミナトさんの大事な大事な宝物。

命に代えても絶対に護らないといけない大事な家族だ。
だから、君は君の好きなように生きてごらん。
何があっても、俺達が必ず護るから……。

第八十一話（後書き）

ベイビーAエアザレア。

これは戦後に一般家庭用の電子ペットとして販売されます。
と、勝手な設定を作りつつ、ほのぼのとさせました。

三羽鳥からの返答はなかなかありません。

そんな簡単に割り切れる人間じゃないですからね。特に長髪さんは
賛同するにしたりしてしないにしたりして。

それでは、次回もよろしく御願います。

第八十二話（前書き）

要望を頂きましたドリームマッチ？です。

久々の戦闘描写。

違和感だらけでもお許しを。

第八十二話

「コウキ！ 勝負よ！」

忙しく駆け回る日々も一段落。

ようやく普通にゆっくり出来るようになってきた。

俺に与えられている仕事は今の所、機体の調整とAI管理。

気になっている三羽鳥の返事は未だに保留だ。

あれからもう二週間以上は経っているのに……。

週一のペースで俺は木連に訪れてるんだけど、前々回も前回も現状の確認だけ。

何の進展もないらしく、もちろん、返事らしい返事ももらっていないんだとさ。

そろそろまた木連に赴く日だから、今回こそは進展があつて欲しいいや。もう結構な時間が経ってる訳だしね。そろそろさ。

……でも、やっぱり悩んでるんだろうな。

複雑な事情もあるし、信念や裏切りっていう感情面でも、そう簡単には割り切れない。

……でも、俺としてはなんとしても良い返事が欲しい。

彼らと協力して、俺は和平を結びたいのだ。

木連の将来を背負うと言われている三羽鳥と。

「あん？ 何だ？ いきなり」

そんななんとも言えない状況で若干鬱になつてる俺。

まあ、気にしても仕方ないとは思っただけど、

もしかしたら既に草壁にバレてるのではと思つと胃が……。

「……胃が痛いのに」

胃の痛みを堪え、頂垂れながら廊下を歩く俺に突然の申し出。
・・・更に胃が痛くなったりして・・・。

「だから！ 勝負しなさい！」

「だから、何のだって」

主語がないっての。

もう、何が何だか・・・。

「私がパイロット養成コースに参加してから既に一ヶ月」

ああ。もうそんな時間が経ってたのか。

忙し過ぎて、時間の感覚が狂ってたみたいだ。

アザレアの為の二週間は殆ど缶詰状態だったし。

「最早、私は貴方を完全に超えたわ」

・・・俺の実力を見誤ってないか？

流石に一ヶ月足らずで追い抜かれる程、俺は甘くないぞ。

「それを証明してあげるわ。訓練サボり魔」

ムフフと笑いながら告げられる明確な売り言葉。

それならば、俺は買ひ言葉で返さねばならんだろう。

「やってみる。己惚れ女」

「ふふふ」

「ハハハ」

「やってやるうじゃない！」

「やってやらあ！」

とまあ、こうして決闘が始まった訳だが……。

「さあさあ、オッズは2：3。最近順調に腕を磨いているカエデちゃんの方が優勢だ」

「俺はカエデちゃんに賭けるぞ！」

「俺もだ！」

「俺も！」

……どうしてこうなった。というか、何故俺に賭ける人間がいないッ！

「……血の涙を流しているわ。コウキ君」

「……私はコウキさんを信じてます」

「私もよ。……でも、そんなに大層な事じゃないと思うのよね」

始まりは突然だった。

どこから聞きつけたのかは知らないが、俺とカエデがシミュレーション室に辿り着くと、

ウリバタケさんが含み笑いをしながら待っていたぞと言わんばかりに立っているではないか。

そして、困惑する俺達二人を強引にここ決闘場へと連れて来た。

というか、聞き付けてすぐにこんな舞台を用意できる貴方達は何者ですか！？

……この時ばかりは俺とカエデの間で散っていた火花は湿気た花火のようでした。

「まあ、順当に行けばコウキだろうな」

「というか、コウキに助けられた場面って結構あったと思うんだけど?」

「・・・地味だもの」

グサツ。

・・・地味って言われたの初めてじゃない?

イズミさん。容赦ないっすね。

「た、確かに地味かもしれませんが、縁の下の力持ちとして必要不可欠な存在です」

イ、イツキさん。フォローは嬉しいんだけどね。同時に攻撃してるから。

「んな事は分かってるよ。という訳で俺はコウキに賭けてくるか」

「あ、私も私も。最近たくさん消費しちゃって、助かったって感じ」

「なら、私は射撃を教えた教官として彼女に賭けようかしら」

「私は教官が負けるとは思えませんが」

「しつかり賭けるんだ」

「はい。おかしいですか?」

染まってますね。イツキさん。

というか、パイロットの皆さんは僕ばかりを。

・・・皆さん、ありがとうございます。

「クウ」。熱いぜ! 幼い頃からのライバルが遂に決着をつけようってんだな」

いや。別に幼い頃からのライバルじゃないし。

実際、知り合ったのだって遂最近のような気がするぞ?

「ガイさん。ガイさん。どちらが勝つんですか？」
「とりあえずコウキに負けはねえ。あいつは俺に正しい熱血を教え
てくれた」

・・・そんな事もありましたね。あの時は俺も若かった。

「それなら、マエヤマさんに賭けましょう」

「いや、だからこそ、俺はカエデの奴に」

「ガイさん」

「ん？」

「今後、私達は色々な事でお金を使っんです」

「お、おお」

凄い気迫だ。

「結婚費用も貯めないといけない。新婚旅行だって家具だって」

「わ、分かってるよ。メグミ」

「それなら！ きちんと勝てる方に賭けてください！」

「りよ、了解！」

「気合じゃご飯は食べられないんです！」

・・・俺は確信した。

ナデシコに亭主関白はない。

全てが全て、カカア天下だ。絶対。

「随分と余裕そうね。コウキ」

「というか、俺に勝てると思ひ込んでるお前が信じられないんだが
？」

何でそんなにふてぶてしく笑ってられるのかな？

「一ヶ月間、毎日真面目に訓練してきた私と時々しか訓練しなかった貴方。」

どっちが勝つかなんて一目瞭然じゃない。私が負ける事は絶対にならないわ」

まあ、それは真実だから、認めよう。
でもな、カエデ。

「俺とて遊んでいた訳じゃないんだよ」

ケイゴさんから習った木連式柔や木連式剣術の型は毎日きちんとや
つてる。

IFSがイメージである以上、肉体的成長もパイロット技能向上の
一つ。

それに、新型機のシミュレーションをやり、実地訓練をもこなして
いる俺だ。

断言しても良い。新型機を俺以上に理解している者は皆無であると。

「確かに実戦形式ならば始めは押されるかもしれない」

勘を取り戻すまでは。

「でも、慣れてくれさえすれば、俺は負けない」

「ふんっ。言っただけさ。すぐに教えてあげるんだから」

こいつ・・・マジで嘗めてやがるッ！

これは、ちよつと天狗の鼻をへし折ってやる必要があるな。

それがこいつの成長の為だ。間違いない。

「さあ、両名、準備はよろしいですか？」

どうしてちゃっかり司会を受け入れちゃってるんですか？ プロスさん。

本来なら戒める方の人間ですよ。

なんか無茶苦茶ノリノリなんですけど。

「いいですよ」

「いいわ」

まあ、別に誰が司会であろうと関係ないけど。俺は俺の全力でこいつを叩き潰すまで。

「それでは、機体を選択してください」

まずは機体選びから。

相性の問題もあるから、慎重に決めた方が……。

「私はアドニス物量射撃型」

……なんも考えてないだろ？ お前。

「おっと、キリシマ選手は物量射撃型を選択。

どう思われますか？ 解説のウリバタケさん」

「噂によるとカエデちゃんは格闘戦を捨て、射撃戦の腕ばかりを鍛えていたらしいな。

作戦としては近付かせずに火力で圧倒するつもりだろう」

「なるほど。もう一人の解説、ゴートさんはどう思われますか？」

「ふむ。アドニスを含めエステバリス系統の機体は固定砲台ともな

りうる。

それはDFがあるからだな。多少の攻撃ならば弾き返してくれる。DFを張りつつ、更に弾幕を張れば、反撃の隙を与えずに勝てるかもしれない」

何故に解説がウリバタケさんとゴートさん？

ちなみに、噂って何ですか？ ウリバタケさん。

それと、お久しぶりです。ゴートさん。

「それでは、マエヤマさん、貴方は如何しますか？」

物量射撃型と相性が良いのは……。

ああ、やめだ、やめだ。

何も考えずに物量射撃仕様を選んだカエデに対し相性を考えるのは男として情けない。

ここは相手との相性など考えず、俺との相性で機体を決定しよう。

俺の適正が高い機体は物量射撃型と殲滅射撃型とリアル型。

リアル型は使い易いけど、弾幕の前だとちょっと火力が弱い気がする。

物量射撃型は絶対に嫌。相手と被る程、嫌な事はない。

確かに腕の差を見るのなら同じ機体の方が良いだろう。

でも、ヤダ。これは俺のちよっとしたこだわり。でも、譲る気はない。

結果。

「俺はアドニス殲滅射撃型で」

武装はシンプル、でも、火力じゃ劣ってない。

まあ、向こうは多面的、こっちは直線的でだけ。

「ほおほお。殲滅射撃型ですか。ウリバタケさん。どう思いますか？」

「最近になってようやくナデシコ内でのみ公開された機体だな。

物量射撃に対する相性は・・・正直言えば、良くはない。まあ、悪くもないが」

「相性ではどちらも五分と見てよろしいでしょう。ゴートさんはどう思われますか？」

「物量射撃は多面的な攻撃。それに対し、殲滅射撃はどうしても直線的になってしまふ。

如何に物量射撃型の弾幕を掻い潜り、隙を突けるかが勝負の分かれ目になってくるだろうな」

「なるほど。追い詰められようと隙を探り耐え続ければ勝機が見える訳ですな」

解説ありがとうございます。ゴートさん。

でも、その評価はちょっと頂けない。

掻い潜る？ 隙を突く？ どうして俺が押されてる前提な訳？

なんかどいつもこいつも本気で俺が負けるとか思ってるやがる。

確かに成長したカエデを知ってる訳じゃない。

だから、油断もしないし、慢心もしない、全力でいく。

だけど、俺は俺でここまでの戦場を生き抜いてきたっていう自負がある。

言わば、ちっぽけだけど、俺の確かな誇りだ。

誇りを汚されて何も思わない程、俺は出来た人間じゃない。

・・・すまないが、プツンしちまった。許せよ。カエデ。

「・・・いつでもどうぞ」

キレてちゃ周りが見えないって？

心は熱ければ熱いだけいい。

後はそれを支配する理性を最大限まで発揮させればな。外もホット、中もホット。それでいいじゃないか。

「私もいいわ」

済ました顔で俺に続くカエデ。

その済ました顔、どうしてやるうか。

「それでは・・・始め！」

すまないが、手加減できそうにない。

唯の八つ当たりだが、笑顔で受け取ってくれ。

トラウマは残さないように気を付けるから。

S I D E M I N A T O

「あらあら。あれは完全にプツンしちゃった顔ね」

巨大モニターに映される二人の顔。

かたや無表情、かたや普段通りの表情。

別に戦闘前だから緊張しているって訳ではないでしょうね。

コウキ君は怒れば怒る程、表情がなくなって口数が少なくなっていくのだから。

まあ、典型的な怒り方という奴。

でも、普段あまり爆発しない分、一度爆発したら中々止められないわ。

一応自制能力は優れているから、少し時間を置けば、元に戻ってるけど。

しかし、爆発中に止めるのは非常に厳しい、というか、私でも無理ごめん。カエデちゃん。犠牲になって……。

「……コウキさん。頑張ってください」

周囲から聞こえてくるカエデちゃんコール。

コウキ君コールは隣にいる小さい妖精さんだけかしら？

まあ、整備班の出席率がほぼ100%なだけあって、彼女を応援する声の方が多い事は分からもない。

整備班の連中は相変わらずだから。

でも、コウキ君はコウキ君なりに整備班と向き合ってきたんだから、誰かしらコウキ君を応援してくれても良いと思うのよね、仲間的な感覚で。

まあ、それはコウキ君を落ち込ませただけ。

俺ってそんなに弱く映るのって。

だから、映像でも落ち込んでた。

でも、流石にその後の展開でプツンしちゃったらしい。

コウキ君とてナデシコパイロットとしての誇りがある。

口にはしないけど、たかが一ヶ月で追い付いたと思われるのは癪だろう。

アキト君との敵しすぎる訓練。

毎日行っている武術の型。

そして、教官という仕事までコウキ君はこなしたのだ。

誰も思っていないかもしれないけど、ナデシコ内でも上位のパイロットだと私は思う。

少なくとも、コウキ君が成し遂げた撤退戦は他の誰でも、アキト君ですら不可能だ。

自尊心はそんなに強い方ではないと思う。

でも、コウキ君も男の子。多少なりともプライドというものがある。格下だとは思ってないだろう。コウキ君はカエデちゃんの成長をちゃんと認めてる。

でも、簡単に負けると思われる事を我慢できる程、コウキ君は大人じゃない。

知ってるかしら？ ナデシコのパイロットって成人してる方が少ないのよ？

まあ、簡単に言えば、子供達の見栄の張り合い。

大人としては煽るより、優しく見守ってあげるべきだと思うわ。

あ、もちろん、私も賭けてるわよ。コウキ君に。

大人だつて時には遊ぶ事は必要よ。ええ。もちろん。

「それでは・・・始め！」

始まると同時にモニターの映像が変わる。

それぞれのパイロットの映像をモニターの端に追いやり、

そのモニターに映し出されるのは上から見た図、横から見た図、

そして、パイロットそれぞれから見えるであろう図がそれぞれ映し出されていた。

『アザレア。御手伝いよろしく』

『はい。マスター』

コウキ君のアザレア。

一番大人で、コウキ君大好きな可愛い子。

日常生活でも戦闘でも名実共にコウキ君のパートナー。

その献身ぶりと仲の良さにはセレセレが嫉妬する程。

戦闘的な補佐はあまり得意としていない分、情報解析でコウキ君を助ける。

『行くわよ。アザレア』
『分かってますよ。カエデちゃん』

対するカエデちゃんのアザレア。

あの何とものんびりとした口調が眠気を誘うのんびり屋さん。

でも、その時々見せる強い意思はなんともカエデちゃんらしい。

お転婆娘のカエデちゃんとは真逆ののんびり屋、でも相性は抜群。

いや、真逆だからこそ、なのかもしれないけど。

パイロット養成コースで殆ど毎日訓練をするカエデちゃん。

そのカエデちゃんに毎日付き合ってるカエデちゃんのアザレア。

戦闘における様々な点でカエデちゃんを助けてくれる。

「どう戦うのかしらね」

両者が動き出すと同時に辺りのボルテージも否応なしに上がっていった。

ほどほどにね、コウキ君。

S I D E O U T

「.....」

フィールドは宇宙。

どちらにとっても有利でも不利でもない。

まあ、どちらかというと地面がない分、避け易い俺が有利なのかもしれないな。

さてつと、相手は物量射撃型。

その武装の豊富さはアドニス系統一。

身体のおちこちに備え付けられた機関銃。

パカッと開けばミサイルを放ち、ダツと構えれば両手からレールカノン。

肩からレールキャノンを放ったと思ったら腕部からはラピットライフル。

弾に限りがないという設定であれば、恐らく一機で何十機分もの活躍をしてくれる事だろう。

ま、実際は弾の限りもあるし、無駄弾ばかりではプロスさんの説教が身を襲う。

その為、状況判断、視野の広さ、命中率という三つの観点が欠かれない。

さて、どれだけ成長したのやら、見せてもらおうか。

『発射!』

先制はカエデ。

早速と言わんばかりにミサイルを複数発射してきやがった。

「ひとまず逃げる」

敵に背を向けずに後ろ向きのまま後退。

下がりながらも銃撃戦ぐらいは出来ますよ？

ダンッ！　ダンッ！

世の中には相対速度というものがある。

自身から見て、対象物がどれくらいの速さで動いているかを示すものだ。

それなら、ミサイルと同じ速度で後ろに下がれば？

Gは凄まじいだろう。別にそれは構わない。慣れたから。俺が言いたい事は一つ。

「止まって見えるってな」

ロックオン、シュート。

迫り来るミサイルを爆破させ、その余波で更に爆発を誘う。

「まだまだ続くってか？」

どうやら弾幕作戦は続くらしい。

まあ、このまま後退していても面白くないので……。

「大きく旋回。接近しましょうか」

右手にディストーションブレード、左手にグラビティライフル。

後退を止め、大きく円を描くように接近を試みる。

当然追尾性のミサイルは俺を追うように迫ってくる。

ダンッ！ タッ！

移動の方向性さえ決めておけば、後はそれ通りにブースターは機能する。

上体を逸らそうが、後ろに機体を振り向かせようが、進んでいく方向は変わらない。

向かってくるミサイルの数は異常以外の何ものでもない。

あれか？ 短期決戦にでもしようって魂胆か？

でも、この程度の量のミサイルで俺を圧倒しようってのは甘い話だ。数は異常。されど我が前には何の意味もなし。

俺を倒したければこの三倍は持つてきやがれってんだ。

『どうして当たらないのよ!』

そもそもこれだけで当たると思ってるお前が信じられん。
俺はまだDFすら展開してないんだぞ。

「アザレア。ミサイル消費率は？」
『全体の15%です』

あれだけ撃つて15%かよと思わずにいられないが、既に知っている事でもある。

むしろ、15%も使って損傷なしでは割りに合わないとすら思う。

そして、アザレア、君は本当に頼りになる。

流石の俺でも戦闘をしながらそこまで解析できない。
いや。本当にありがとう。アザレア。

「ちょっと度肝を抜かせてやろうか」

急停止。周囲に蔓延るミサイルを全破壊。

撃ちつつ切り裂く事なんて幾度となくやってきた。

ミサイルを破壊した事で周囲を爆煙が包む。

これこそが俺の狙い。

今ならたとえレーダーで場所を捉えていようと明確な場所までは分からない。

レーダーなど所詮大まかな位置を掴めるだけなのだ。

射撃は闇雲に撃つものではない。

それなりに射撃の事を学んだのなら、警戒しつつも、無闇に攻撃はしてこない筈。

ふっ。度肝を抜いてやろう。

重力場を展開。但し前方に。
そこに機体を密着させ、ブースターを最大出力で噴かす。
無論、重力場によって押さえられているから前には進めない。
だが、これでいい。

ブースターが最大出力になるまで数秒といっても時間は掛かる。
俺の狙いは一瞬で最大速度に持ち込んだの奇襲。
臨界点に達するまで・・・後少し・・・来たッ！

「行くぜ！」

動きを止めていたストップパーは既がない。

一瞬にして自身が出せる最大速度まで達し、爆煙の間を駆け抜ける！
その様は煙断ち切る太刀の如く。

『え？』

呆然としてしまうカエデ。

残念だったな。その数秒の隙が勝負を分けるんだよ。

「ハアアアア！」

デイストーションブレードを振り上げ、断ち切る。

瞬間、ギリギリで思い至ったのか強引にDFを展開。

しかし、その程度で止められる程、この攻撃は甘くない。

単純に振り切るだけでDFを突破できるだけの力があるのだ。

それに加えて自身に出せる最大の速度付き。

その威力は最早唯一振りじゃない。

『キャッー！』

だが、まだ終わらせてはやらん。

「これで一回。普通だったら死んでたな」

今回俺がした事は機体の左腕を奪っただけ。

もちろん、機体を真つ二つにする事は出来た。

でも、それだけじゃこの戦いの意味はなくなる。

既に俺の中の怒りは収まつてるし、八つ当たりは終わった。

これからは俺なりの指導だ。元教官としての。

『甘く見てたわ。私の負けよ』

「まだ戦えるだろうに。諦めずに掛かって来い」

『そうね。最後まで足掻かせてもらっわ』

ダンッ！

残った右腕でレールカノンを放ってくるカエデ。

狙いは正確。確かに急所を狙ってきている。

けど、これだけ離れてれば簡単に避けられる。

「狙うなら一発牽制してその後だ。避けた先を狙え」

今後、俺達が相手をするのはバツタではなく人が乗った機体。

バツタなどの単純動作ではなく、考え、行動してくる。

一発目は殆ど当たらないと見ていいだろう。

どれだけ命中精度が高い人間でも距離の壁は超えられないのだから。

だからこそその牽制。だからこそその複数射撃。

射撃の名人イズミさんの凄い所は必ず当たる命中網を作り上げてし

まう事だ。

まるで相手がどう避けるか分かりきっているかのように避けたらす

ぐ眼の前には銃弾。

それを辛うじて避けたら、既に違う弾丸が命中していたなんて事はさらにある。

敵の思考を読み、針の穴を通すかのような正確な射撃で追い詰め破壊する。

それが銃撃戦のスペシャリストなのだろう。

残念ながら俺にそこまでの技量はない。

そして、それはカエデにも言える。

まあ、銃撃戦のスペシャリストなんて本当に一握りしかいないだろうけど。

「接近戦が弱いと自覚しているのなら、お前も移動しろ。」

たとえば俺の機体より機動力が低くともしないよりはマシだ」

さつきからずっと止まりっぱなしのカエデ。

確かに物量射撃型程の弾幕を張れる機体なら動かずとも戦えるだろう。

だが、それではわざわざ機動兵器にした意味がない。

それだったら、多少遠くともナデシコから射撃した方が安全面からして何倍も良い。

何の為に人型兵器をにしているのか？ 何の為に機動兵器なのか？
それは……。

「移動しながら撃て。照準を避ける。足を止めるな。頭を使え」

その応用の広さにあるからだろうか！

「行くぞ！」

全力で物量射撃型の周囲を飛び回る。

アキトさんに比べればまだまだだけど、俺だって日々訓練してるんだ。

対応できない速さじゃない！

「単調に回ってるだけだろ？ 当ててみる」

『言われなくても！』

しかし当たらない。

それはそうだ。

ある程度の距離を置いている俺は肉眼で見ればハエのようなもの。たとえ機体カメラでズームしようとも実際の距離を変わらない。

そんなハエ並の小ささの奴がありえない程のスピードで飛び回っているのだ。

どんなスナイパーであろうと自身の力だけでは不可能だろう。

だが、アドニスなら可能だ。

機械補助として照準補正ソフトが組み込まれ、アザレアの補佐もある。

確かに精密射撃といえるがこの程度捉えられなければ射撃のスペシヤリストにはなれない。

格闘戦をする気がないのなら、これぐらいは簡単に捉えられるようにならないければ。

「・・・少しずつ誤差がなくなってきたな」

どうしても俺の過ぎた後を撃ってしまったっていたカエデ。

でも、徐々に、本当に徐々にだが、機体に近付いて来ていた。本体に当たるのも時間の問題だろう。

でも、その後の課題として二つ残されている。

一つはまだDFすら張っていないという事。

そして、もう一つは・・・。

「それなら、次だ」

緩急を付ける事。

ダンッ！　ダンッ！

弾丸がかなり前を通る。

当然だ。急減速したのだから。

「同じ軌道を延々と回るだけでも捉えきれない。ましてや緩急を付ければ更に」

『クッ』

「実戦では軌道が不規則であり、更にこうして緩急も付けてくる。

確かにお前の射撃の腕は良い。恐らく俺以上だ。

だが、それは止まっているものに関してだけ。

動いているものに対する射撃の腕なら俺の方が上だと断言できる」

俺はアキトさんに移動しながら撃つ術を教わった。

しかも、アキトさん仕込のほぼ最大速度で動き回りながらという嘘のような状況下の。

最初はもちろん駄目駄目だったが、こればかりは本当に経験だった。何度も何度もトライしてようやく出来るようになったのだ。

通常の動いていないものに対しての射撃は自身の弾の軌道を思い浮かべれば良いだけ。

だが、動きながらする射撃は随時移動している為、自身の軌道すら計算にいれて撃たなければならぬ。

ましてや、そこに敵機の移動まで加われれば、

自身の軌道、弾丸の軌道、そして、相手の軌道、

その三つを常に考慮し、予測しながら撃たなければならぬ。

カエデは自身の弾の軌道を思い浮かべる能力には優れている。これに関しては俺以上のセンスがあるだろう。だが、その先があるかないかの違いが俺とカエデだ。この模擬戦が終わったらビツシリ鍛えてやるとしよう。なんか俺の教官魂に火が点いた。

「そして」

不規則な軌道、緩急を付けた機動。

ただ闇雲に動いているように見えるが、しっかりと計算されている。その証拠に未だに攻撃は一度も受けていない。DFを纏っていないのに、だ。

「以前お前が相手にしたケイゴさんの夜天ならばこれ以上の機動が出来る」

『ッ！ ケイゴが!?!』

「そうだ！ ケイゴさんの手助けがしたいのなら、まず対等になれ。話はそれからだ」

ケイゴさんの手助けをしようと努力し続けるカエデ。

それなら、ケイゴさんの戦闘スタイルに近いものを見せてやろう。

その方が連携も取り易くなるし、ケイゴさん以下の高機動戦なら充分に対応できる。

まあ、今は……。

「戦う事で身に付ける！」

一緒に訓練するのも良いだろう。

連携を組んで、高機動戦に対応できるようになるのもいいだろう。

だが、まずは慣れる。見て慣れる。味わって慣れる。感じて慣れる

お前の相棒はこうやって戦うんだとな。

『一斉発射!』

肩、腕、胸、脚。

それらに存在する全ての武装が解き放たれる。

多面的な攻撃。襲い来る弾幕の嵐。

・・・だが、それがどうした？

驚異的なのは事実。喰らえば破壊されるのは事実。

でも、忘れてないか？

俺はまだ最速の翼を休めてるんだぜ。

「ウイングブースター展開」

折り畳まれた背中の中を翼をしながら解放させ、自由にはためかせる。

展開された翼の影には数多のノズル機構が備わり、

背後に広がる六つの翼はまるでどこぞの天使のように神々しい。

「最大出力」

翼に隠されたノズルから火が吹かれる。

これで直線スピードは先程とは比べられない程に。

さて、後は・・・。

「バンッ」

自身を弾丸のように放つ。

視界一面に広がるうと必ず抜け道の一つや二つはあるもの。

それを俺は解析、そして、突破する！

シュツ！ シュツ！

機体の軌道はほぼ直線。

迫り来る弾丸は身を翻す事で回避。

舞うように機体を回転させ、不規則な軌道で接近した。

『ありえないでしょ！』

ありえるんだよ。何故ならIFSはイメージが全てだから。

「次は右腕を」

ダンツ！

「クツ！」

またもや容易に接近を許したカエデにお灸を据えてやろうと右腕を狙ったのだが……。

「間一髪……か」

突然放たれた機関銃。

撃たれる寸前に視界に動く何かを捉えたからこそギリギリ反応できた。

瞬間的に急減速を掛け、殆ど一瞬といえる時間で停止。

当然、その分のGは来るけど気にしている程の余裕はない。

内蔵が持つていかれそうになるのを我慢しつつ、DFを展開させた。

お陰で機体損傷は軽微、多少の掠り傷。

しかしながら、パイロットの損傷はかなりのもの。

急停止はちょっと無茶過ぎた。

避ければ良かったのかもしれないが、完全に油断してた為、回避は出来ず。

これは俺ももつと精進しなくちゃな。

うん、とりあえず自分の事は後にして、そんな事より……。

「どうしてテンパってたのに反応できたんだ？」

これが謎。

IFSは本当にイメージこそが全て。

あれだけ慌てていた奴があんなにも冷静に照準を合わせて機関銃を放つなんて……。

『私じゃないわよ。機体が勝手に』

……なるほどね。

その成長は喜ぶべきだが、ちょっとタイミング的にはよろしくないかな。

「どうやら、お前のアザレアのお陰らしいな」

『えっ。』

「同じような展開で二度も接近されたから、お前のアザレアが学習し、自動迎撃を覚えたんだ」

経験値が貯まり、レベルが上がりました。

トウルトウルトウツトウツトウ。

射撃値が5アップ。

反応値が5アップ。

特技、自動迎撃を覚えました。

みたいなノリですか？ アザレアさん。

「アザレアの親としては嬉しいが・・・厄介だな」

アザレアの特徴である自己進化。

このように戦闘中にも自身で考え、成長していつてくれる。今回などアザレアの補佐がなければカエデは更に追い込まれてた訳で。

頼りになるなと思う反面、タイミングが悪いぞ、とも考えてしまう。

「後退」

焦る事なく冷静にこちらに狙いをつけてくる機関銃。

先程の内蔵へのダメージも考慮して、距離を取る事にした。

流石に少し間を置かないときつい。

いくら機体内でG緩和装置が働いていようと。

「・・・ふう・・・」

流石はウリバタケさん特性のシミュレーター。

こんなにも完璧にGを再現させなくてもいいのに。

まあ、実戦前に経験できるのは良い事なただけぞ。

『次はこっちの番ね』

あれれ？ また調子付いた？

『これで最後にするわ！ 全弾発射！』

「ウオッ！」

ダンッ！ ダンッ！ ダンッ！ ダンッ！ ダンッ！ ダンッ！

言葉通り、ミサイルを除く全ての弾が一斉に発射されていった。でも、何故かその全てが当たらないコース。

・・・何が狙いだ？

『これで身動きは取れないわよね！ 包囲して、撃破よ。いつけえ！』

・・・やられたな。

機関銃、レールカノン、レールキャノンによる一斉発射で動きを封じる。

動かなければ当たらない。動けば当たる。

そんな状況だったら動こうとはしない。誰だって。

その心理を突き、身動きが取れない所に残ったミサイル全てを発射。残された70%に近いミサイルを完全に使い切りやがった。

それじゃあ眼の前の一機に勝っても次に来た奴に負けるっての。

なんて正論を言う暇もなく、既に俺は完全に球状に包囲されていた。離脱しようにも加速時間は圧倒的に足らず、この場で対処するしかない。

DFで受け流そうにも実弾には弱いし、これだけ一気に喰らえば流石に突破されちまうだろうな。

『私の勝ちね』

声から察するに勝利に酔っているんだろうな。でもな、カエデ。まだ終わらんよ。

「二丁拳銃。俺の最大の特技」

それぞれ片手にグラビティライフルを構える。

この利点は出力を機体ではなくアンテナからの重力波に依存しているから、機体がどれだけ出力を喰っていようとグラビティライフル自体の威力は変わらない事。

そして、勝手にチャージされていくから改めてチャージする必要もなく、弾数に限りがない事だ。要するに……。

「何の遠慮もいらなくて訳だ」

ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！

アザレアに補佐させつつ、距離が近い順に優先して破壊。

流石に通常のエネルギーで撃っていたら、

すぐにエネルギー切れを起こすので、出力は最低値まで下げている。威力は下がるがミサイル程度ならこれだけで充分だ。

これによって連射性は増し、充分複数のミサイルに対応できるようになった。

反動も大して来ない。放熱を考えたら、そんなに長くは使えないが……このぐらいの数なら。

そもそも、こんな状況、四方八方にバツタがいた戦闘の時より何倍もマシだったの。

ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！

上、下、右、左。

足元に作り出した重力場に足を固定し、近付いたきたものから破壊していく。

俺に視界的な死角はない。

カメラから流れてくる映像をIFS経由で完全把握し、全ての方向

を見ているからだ。

よって・・・俺に穴はない！

ダンッ！　ダンッ　ダンッ！

『う、嘘でしょ？』

迫り来る全てのミサイルを破壊。

既に物量射撃型の武装は何も残っていない。

「覚悟はいいか？　カエデ」

『え？』

「グラビティライフル連結。フルチャージ」

流石にツイングラビティライフルで勘弁してやる。

もちろん、フルチャージの奴でだけど。

「ツイングラビティライフル発射！」

連結し、倍以上の威力となった漆黒の光が機体を貫いた。

どれだけDFで守りを固めようと、これの直撃を受ければ大破は免れない。

受け止めず、避けるべきだったな。

ま、もし受け止めずに避ける事を選択し、避ける事に成功してたら、最後に翼を展開させた完全完璧なフルチャージショットをお見舞いしてただけだね。

ま、とにかく・・・。

『マエヤマ機損傷軽微。　キリシマ機大破』

完全勝利って訳だ。

「汚された。コウキに汚された」

なんて酷い言い草。

「てめえ金返せ！」

「カエデちゃんの綺麗な身体を返せ！」

そして、こちらもまたなんて酷い言い草。

賭けて負けたんだから、自業自得。

そもそも俺は汚してないっての。

「良くやった。これで今月も暮らせる」

「早速新しい部品を買いに行かねば」

うん。応援してくれた皆、ありがとう。

数少ない応援者。僕、貴方達の事は忘れません。

「お疲れ様。コウキ君」

「あ、ミナトさん」

「……流石コウキさんです」

「いやいや」

シミュレーターにいる俺に近付いてくるミナトさんとセレス嬢。はい、とミナトさんから飲み物を渡されて、凄く助かった。

相変わらず気が利くなあ。ミナトさん。
結構終わった後って喉が渴くんだよね。

「流石に経験の差は違う?」

「そうですね。流石にすぐには負けませんよ」

「ま、カエデちゃんの成長の為にも負けちゃ駄目だったのは確かね」

負けて見えるものもあるって事だろう。

とりあえず、カエデの動的に当てる技量の低さには気付いた訳だし。

追尾型と機械補助があるから大丈夫と言えなくもないけど。

それでもマニュアルできちんと命中できるようにさせておいた方がいい。

「でも、ちよつと大人気なかったんじゃない?」

「アハハ。いや、つい熱くなっちゃって」

「もう。最後のなんてトラウマものよ。星の光みたったわ」

む。ちよつと反省。

「コウキ。貴方強かったのね」

カエデもシミュレーターから出てこちらに近付いてくる。
結構疲れてるみたいだな。

「・・・どつぞ」

「あ。ありがとう」

セレス嬢から飲み物を渡され、喉を潤すカエデ。
飲みっぷりにこいつも喉が渴いてたみたいだな。

ま、そんな事は別に良いとして。

「見直したか？」

「ええ。正直」

それはそれで悲しいんだが。

どれだけ最初の評価が低かったんだよ。俺。

「俺の事、甘く見過ぎだったの」

「・・・ごめんなさい」

お。なんかいつもと違って素直。

「ま、お前に足りないのは経験だけだった」

「そう？」

「ああ。経験積めばすぐに追いつくだろうよ」

実際、最後の最後でレールカノン一発でも残されてたらやばかった。俺がミサイルに四苦八苦している時にダンッ！ と一発お見舞いすればTHE END。

結果は反対になってかもしれない。

まあ、その時はアザレアが教えてくれたと思うけど。

「アザレアもお前の為にとって成長したし」

あれは驚いた。

まさかAIが危険を察知して、パイロットに独断で防衛行動を取るとは。

お陰でカエデは助かった訳だが、うん、その成長が親として嬉しいよ。

「ちゃんと大切にしておあげよ」

「分かってるわよ。大事なパートナーだもの」

「それならよろしい」

なんだかんだ言ってお面倒見は良い奴だから。

きつとこれからも仲良くやっけていく事だろう。

「コウキ！」

「ん？」

「今回の負けは認めてあげるわ！ でも、次はそうはいかないわよ」

ハハッ。それでこそカエデだ。

「やってみな。次も圧勝してやるから」

「今の内に吠えてなさい！」

そう言い残して去っていくカエデ。

次戦う時にどれだけ成長しているのか楽しみだな。

「ブーブーブー」

いつまで拗ねてれば気が済むんだよ！ 駄目大人共！

「お疲れ様。コウキ君」

「・・・お疲れ様です。コウキさん」

・・・二人にそう言われるだけでささくれだった心が癒されるんだから不思議だよな。

ま、色々面白いものも見れたし、今回の模擬戦も中々有意義だった

たな。
うん。

第八十二話（後書き）

軍配はコウキに。

流石に負けられません。主人公として、先輩として。

しかし、今更ながら考えると、

対複数を目的とした物量射撃では不利だったのではないかなと。

まあ、ものは使いようですが・・・。

殲滅射撃は対一、対複数どっちもいける万能機ですからね。

新型機の中でも割と強い方に入ります。

といっても、用途が違うので、強ければいいという訳ではありません
ん。

物量射撃に勝っても特殊隠密に負けたりするでしょうし。

再度言いますが、やっぱりものは使いようかなって。

えっと、皆さんに質問があります。

グラビティライフルを撃つ時の擬音って何でしょうか？

ダンッ！ じゃ実弾っぽいので違和感がありません・・・。

最後に、物量射撃型を広範囲を意味するWide Rangeから、

アドニスW仕様としたいのですが、分かり辛いですかね？

新型機それぞれにアルファベット一文字の略名を考えたのですが・・・。

分かりづらければ今まで通りにしていこうと思います。

それでは、これからよろしく御願ひします。

第八十三話（前書き）

三羽鳥引っ張ります。

第八十三話

「そうですね。まだ・・・」

ツクモさん達との対面を終えてから三回目の訪問。最近では直接大将の方にお邪魔してしまっている。こちらの方が効率も良いし、行動に移しやすいからね。

「うむ。苦悩しているのだろう。だが、割り切ってもらおうしかない」
「草壁中将に付いたら如何しますか？」

「・・・致し方あるまい。若者の決意を無駄にはならん」
「はい。ですが・・・」

もし草壁に全てを話してしまったら・・・。

「ふむ。その時はケイゴを保護してもらいたい」
「保護ですか？」

「ああ。ケイゴが生きていて、今現在木連にいる。そう伝われば、漏洩を防ぎたい中将は確実にケイゴを暗殺しに来るだろう」

「・・・確かに」

草壁にとってケイゴさんが生きていては都合が悪い。

「しかし、そう簡単には殺せまい」

「それは護衛がいるという意味ですか？」

「違う。三羽鳥は既にケイゴと妹が生きっていると知っているんだ。」

ここでケイゴが暗殺され、シラトリ・ユキナも暗殺されれば、明らかに草壁の犯行。

流石の三羽鳥もその事実を知れば、草壁を見限るだろう。だから、そう簡単には殺せんよ」

三羽鳥の影響力を考えれば是が非でも手元に置いておきたい。

親友や妹を殺されてまで、付き従う訳もなく・・・。

なるほど。三羽鳥は抑止力としての意味も含まれているのか。

バラしてしまう危険性はまだあるが、抑止力としても期待したい。

草壁を怪しみだした三羽鳥なら草壁が不自然な行為をしたら意味を考えてくれる筈。

これだけでも充分彼らに真実を話した意味はあるな。

草壁にとって三羽鳥は切り札であり、獅子身中の虫にもなりかねないという訳だ。

「だが、それでも強行されるやもしれん」

「だから、私達でケイゴさんを保護して欲しいと」

「その通りだ。万が一も考えねばならん」

確かに俺達の切り札になるケイゴさんは何としても生かさねばなるまい。

「分かりました。司令と相談し、必ずや色よい返事を」

「うむ。ありがとう」

「いえ。その際、マリアさんはどうしますか？」

「駄目だといっても付いていくだろう。昔はあのような子じゃなかったのだが・・・」

カエデのせいです。多分。

「分かりました。マリアさんも保護するよう伝えます」

「何から何まですまないな」

「いえ」

こちらにとつても意味がある事ですから。

「ところで夜天はいつお返しすれば？」

未だに預かっているケイゴさん専用機。

整備班の中に放り出してしまった為・・・結果は分かるだろう？

分解して組み直して、もう解析しちゃってたんだよね。

あの技術が何かにフィードバックされると思うと・・・うん、怖い。

一応、手を組んでいる方々の機体だから許可を得た方が良いと思うんだけど・・・。

もう遅いし、言えません、怖くて。

「うむ。旗艦となるカグラヅキはまだ半年程は掛かる」

カグラヅキ。壊れたカグラヅキの次の戦艦もカグラヅキの名を引き継ぐらしい。

これはカグラヅキが神楽家の旗代わりだからと言える。

「それでは、カグラヅキ完成と共にお返しすれば？」

「ふむ。それまで預かってもらう事になるだろうな」

まあ、別にそれは構いませんが・・・。

司令や参謀の許可も貰ってるし、ちゃんと秘匿できてるし。

「代わりとしてそれまで夜天は好きに使って良い」

「好きに、とは？」

「破壊しなければ、研究に使っても良いという事だ。戦場に出さねては困るがな」

お！ これならある意味事後承諾として……。

「既に解析してしまっているのだろうか？」

「え？」

バレてらっしやる？

「ふふつ。敵国の技術を盗むのは悪い事ではない。当然の事だ」

「は、はあ……」

「私達とて貴国の技術を活用している。言わば、それのお返しだな」

豪胆な事で。

それならお言葉に甘えるところでしょう。

「ありがとうございます。遠慮なく使わせてもらいます」

「多少は遠慮してくれたまえ」

「いえ。存分に」

「フハハハハ」

「アハハハハ」

見た目は怖いけど、気さくな人だって分かってるからな。こうしてお互いに言葉の掛け合いで笑い合う事が出来る。

「カグラツキだが……」

「はい」

「やはりどうしても以前までのより性能は落ちてしまっ」

・・・それはそうだろう。

カグラヅキはナデシコCであり、未来の戦艦。

未来の技術をそのまま再現するなんて出来まい。

解析するだけでかなりの時間を要する。

「搭載するAIだが・・・」

・・・オモイカネ。ナデシコAから引き継がれたナデシコシリーズの要。

カグラヅキ撃墜と共に失われてしまった・・・ルリ嬢の親友。

・・・この事をルリ嬢に伝えた時、彼女は号泣した。

・・・当たり前か。ルリ嬢にとっては誰よりも大切な友達だもん。あの時のルリ嬢の涙は今でも胸に痛みとして残っている。

俺達もつと上手く動いていれば墜とされなかったんじゃないかって。

誰のせいでもないですよって逆に慰められて、本当に悔いばかりが残った。

「黒夜のAIをそのまま利用する事にした」

「黒夜？」

「データによると正式名称はユーチャリスだったな」

ユーチャリス。黒の王子と妖精の住処。

あれに搭載されていたAIはオモイカネのコピーだったと聞くが・・・。

「元々先代のカグラヅキは白夜という名前だった。白夜と黒夜。

神楽家の旗艦とする際に名称を変更して、カグラヅキとしたんだ」

「それなら、カグラヅキ式号には黒夜を？」

「うむ。だが、そのままでは損傷が激しくて通常業務すらままなら

ない」

そういえば、かなりの損傷だったと聞いたな。

今まで登場しなかったのも修理が必要だったからか。

「そこで、白夜からの解析技術を活かし、黑夜を改修する事にした」

大元がユーチャリスでそこからナデシコCに近付けようって事だな。

「あれは全体的に人を乗せる事に適していない。まずはそこからだった」

二人乗りでしたからね。ユーチャリスって。

まあ、二人だけとは限らないだろうけど、少なくとも大人数は乗せられない。

「攻撃面では先代カグラヅキより優れていると言えるな」

ナデシコCはハッキングがメインだった。

しかも、ルリ嬢並のIFS処理能力がなければ無用の長物になる程の扱い辛さ。

それに対してユーチャリスは突撃急襲型の戦艦。

攻撃力、ステルス機能に優れており、そこまで高い処理能力は必要としていない。

どちらかというところにはこちらの方が適していると思う。

「全体的に大きくなる。武装面も充実させるつもりだ。武装には

」

「あ。これ以上は良いです」

「そうだったな。戦場で合間見れば我々は敵だった。忘れていたよ」

敵に情報を渡しては駄目ですよ。大将。俺も敵だという事は忘れていましたが。

「うむ。とにかくカグラヅキ完成までには時間が掛かる」

「カグラヅキはどのように？」

「ケイゴに乗させる」

「ケイゴさんに？」

「戦闘中、あいつに乱入させる。そして、全てを、真実を告げさせる」

「・・・それが神楽大将の秘策」

「そうだ。だからこそ、簡単に沈まない何よりも強い戦艦を用意せなばなるまい」

草壁派を共通の敵とする秘策。

その為のケイゴさんを護る盾としてカグラヅキを用いるのか・・・。

「大将はその時どうするのです？」

「ふっ。年寄りのやるべき事など決まっている」

「大将？ それって・・・」

どういう意味ですか？

「若者は先を見る。老いた者はその道を指し示す。それが自然の理なのだよ」

・・・何を考えているか分からなかった。

今聞かないと何か大きな事を見逃してしまうのではないか・・・。

そう思うも、とてもじゃないが追求させてくれる雰囲気ではない。

何もなければいいけど・・・そう不安に駆られながら今回の会談は

終わりを告げた。

「ん？ 招待状？」

「どうしたの？ コウキ君」

「総会だそうです。火星再生機構の」

「皆様、本日はお忙しい中、お越しくださりましてありがとうございます
います」

名も知らないミルキーウェイ会長の挨拶。

アキトさん達三人はその隣で待機していた。

「どうやら資産提供をした者の集まりみたいね」

「ええ。後々の契約内容の確認といった所でしょうか」

スーツ姿と同じくスーツ姿のミナトさん。

一応、秘書としてミナトさんには付いて来て貰った。

こういう企業関係の知識はまるで皆無ですからね、僕。

「あそこにいるのは広告会社の社長さんね」

「お知り合いですか？」

「前の会社で付き合いがあったの」

ほへえ。ここにいる誰もがどこかしらの社長さんやら会長さんですか。

「でも、それ程有名な人は来てないわね」

「それじゃあ、アキトさんは・・・」

「ええ。コウキ君の言葉に従って、中小企業を率先して引き込んだみたいね」

「すみません。そして、ありがとうございます。アキトさん。」

「でも、何人か、ビツクネームもいるわ」

「・・・誰ですか？」

「たとえば、あの人ね」

ミナトさんが視線である人物を指す。

「ネルガルの社長よ」

ネルガルの社長？ アカツキと争っているっていうあの社長？

「社長派の独断か。それとも会長の依頼で社長が動いたのか・・・」

アカツキはあくまでネルガルだけで遺跡を確保しようとしていた。問題はそれに対して、社長派がどう動いたのかだな。

遺跡確保は不可能だと社長派単独でこうして後々の事を考え、独断で動いたか。

それとも、会社の利益を考えるとアカツキを説得してネルガル全体で協力体制になったか。

嫌だぞ。企業の内乱に巻き込まれるのは。会社内だけで勝手にやっ

てろつての。

「後は建築業界の業界二位の社長、運送業界の業界三位の副社長とかとか」

随分と分かり易い人選な事で。

確かに再生には必要な業界の人だ。

「しかし、結構多くの資産提供者がいるんですね」

見回せば結構の数の人達。

これらの皆全てから資金提供を受けてる訳だ。

「資金はあればある程良いもの」

「確かにそうですね、多過ぎても混乱するのでは？」

「その辺りをしっかり管理するのが火星再生機構の仕事な訳でしょ？」

「まあ、そうですねですけどね」

全員が全員、再生機構に従うとも思えないし。

どこかしらが必ず影でこそこそ動くんだろうな。

・・・特に大企業が怖い。

「一体どれくらいの資金が集まったのかしら？」

「分かりませんが、それ程多くないかもしれませんよ」

「どうして？」

「恐らくですが、どの企業からも一定の金額しかもらってないと思います」

「それまたどうして？」

「多い少ないで優遇、不遇が出来ちゃいますからね。全員が対等で

ある事が計画の前提です」

「でも、地球内での上下関係は出来ちゃってる訳でしょ?」

「火星内では出来ていません。火星では全て公平に扱うと思います」

「それでも、逆らえば地球内での権力で潰されちゃうんじゃない?」

「そうなたら、火星に完全に移動しちゃえば良いんです。」

片手間に火星で活動している企業に火星だけに力を注ぐ企業が負ける訳がありませんから」

「随分と思いついた行動ね。それ」

「ここにいる中小企業は命を賭けてると思いますよ。懸命に働いてくれる筈です」

「そんな彼らにも大企業と同じだけの権限を与える為に同じ金額って事?」

「ええ。だから、割と低い次元で金額を決めてると思います」

「そうしなくちゃ払えないものね」

「まあ、あまりにも低過ぎても意味がないので、その辺りは色々と考えてると思いますよ」

活動できなくちゃ意味がないからな。

それに、大した金額も貰ってないのに権限は与えられない。

うん。この辺りの見極めは難しいだろうな。

誰か経営、経済のスペシャリストをゲットしてくれ。アキトさん。

「懐の痛み具合を考えれば頑張らざるを得ないって訳ね」

「ええ。大企業は大して痛まなくても中小企業は普通に痛む。

懐を痛めた企業と痛めていない企業。どちらが頑張るかなんて分かりきってるでしょう?」

「でも、中小企業にはない資産力や人材力が大企業にはあるわよ」

「それはもちろんですが、地球と同じで成功するとは限らないですし」

「それはそうだけど・・・」

「それに、俺達が考えても仕方ないと思いますよ。頑張るのは企業の方々ですから」

「ま、それもそうね」

散々言っただのは僕ですけどね。

「先日、ミスマル総司令官が告げた遺跡の件ですが・・・」

遺跡・・・ねえ。

「ここに参加している企業は遺跡目当てが多いのかしら？」

「どうでしょう？ 案外少ないかもしれませんよ」

「火星再生の利益にのみ注目してらって事？」

「ええ。遺跡の技術を解析するだけでもかなりの金額が必要になるでしょうし」

そもそも、今まで存在すらも知らなかった遺跡だ。

それがどれだけ利益を生み出すかも分からないだろう。

「恐らく、それぞれの企業から各方面の研究者を派遣する事で解決すると思いますよ」

「どこの企業にも参加させ、平等に扱う為ね」

「ええ。自分達から拒否した企業には参加させないでしょうが」

「でも、それじゃあ、その派遣された技術者の能力次第で上下関係が出来るんじゃない？」

「そればかりは企業の努力ですから」

「それもそうね」

「それに、研究の代表には再生機構の人間を据えるでしょうから大した差は生じませんよ」

「そんな人材が火星再生機構にいるの？」

「スカウトです。ネルガルから、いや、正しく言えばナデシコからですね」

「それって、もしかして・・・」

「ええ。イネスさん。彼女に遺跡研究の代表者を務めてもらうと思います」

能力的にこの人以上の候補はいないだろう。

アキトさんにとっても信頼できる人だし。

「彼女の下にそれぞれの企業から派遣された研究者を配属。これが遺跡関係の結論だと思います」

「なるほどね」

「まあ、予測でしかないんですけどね」

俺の勝手な考えだし、確実にこれだと言い切れる訳でもない。

まあ、多分、方向性的にこんな形だとは思っけど・・・。

「それぞれの企業から研究者を派遣して頂く事で遺跡に関わってもらおうと考えています。

成果を出せば出す程、その企業にとっても有益ですので、

是非とも皆様方には率先して参加して頂きたいと思います。

なお、研究所の代表はこちらから派遣いたしますので、

研究開始時はどの企業も公平であると皆様に約束します。

その後は研究者次第ですので、優秀で信頼できる研究者の派遣をお考え下さい。

最後になりましたが、私共は徹底して清廉潔白を貫こうと考えております。

派遣された研究者が汚職をしたならば、企業ごと追放致しますので、ご了承ください」

最後に脅しも付けましたか。
まあ、再生というお金も時間も掛かるもので汚職なんてされた日には処刑もんだよな。

「コウキ君の言った通りみたいね」

「まあ、言い回しは違いましたけどね」

「企業の協力を煽る口調だっただけよ。システムは同じだよ」

要するにイネス女史の下で公平に各企業が働く仕組みな訳だ。

イネス女史は知的好奇心を満たしてあげれば汚職なんて考えもしないだろうし。

むしろ、研究の邪魔になるような要因は率先して排除すると思う。

身も心も研究者ですからね。イネス女史。

「それでは、本日はありがとうございました。

この後は皆様方との親睦を深める為に、懇親会の御用意をさせて頂きましたのでどうぞご参加下さい」

これも招待状通りですか。

「それじゃあ行きますか。ミナトさん」

「ええ。ドレスも持ってきたし。コウキ君も着替えなくちゃね」

「何度も言いますが、俺にああいう服は似合いませんよ」

高級感溢れまくるスーツなんて。

今着てるちよつと高級なスーツですら気後れしてるのに……。

アレですか？ 胸にバラでも挟めばいいんですか？ あれ？ これって偏見？

「いいのよ。ああいうのが似合わないからこそコウキ君なんだもの」

「褒められてるのか、貶されてるのか」

「もちろん、褒めてるに決まってるじゃない」

「・・・複雑な気分です」

こういうお偉いさんが集まるような所は正直言っただけ居心地が悪い。

一般人丸出しで恥とか掻きそうだし。

笑わすのは好きなんだけど、笑われるのは嫌いだ。

ま、不慣れなのは自覚してるし、精々恥を掻かないように頑張るとして・・・。

「もっと大きな問題がある」

別に自身が恥を掻くぐらいなら問題ない。

俺が我慢すればいいだけだから。

でも、ミナトさんに恥を掻かせる訳にはいくまい。

ミナトさんは今でも綺麗だけど、着飾るともっと綺麗。

本当に大人の女って感じでカッコイイ。

そんな方を僕は秘書として付き従わせる訳ですよ？ 恐れ多いじゃないですか。

ミナトさんならパーティー会場の華になれちゃうってのに。

そんなミナトさんの前を俺は歩く訳だ。

俺の評価がそのままミナトさんにまで影響しかねない。

ミナトさんに恥を掻かせないようにシャキツとしなければな、シャキツと。

・・・あれ？ 結局、どっちも俺が頑張るって結論？

ああ、いいさ、やってやる。完璧に紳士をこなしてやるつもりじゃないか。

・・・駄目でした。

「どっつ？ 似合っつ？」

もちろん、後光すら見えます。

「返事は？ コウキ君」

いや。ちょっとボーっとしちゃって・・・。

「もう、おゝい、コウキ君」

「あ、はい」

おっと、あまりの美しさに固まってしまった。

「どっつかしら？」

以前、艦長コンテストで見た漆黒のドレス。

あれも妖艶さと綺麗さでボーっとしたのを覚えてる。
でも、今回はもっと綺麗だな。

深紅のドレスが光を反射し、まるで妖精が傍を舞ってるようにキラキラしてて。

その艶やかな紅は正に薔薇という表現が相応しい。

「凄く綺麗です」

「ふふっ。ありがとう」

笑うミナトさんを見ているとドキッとする。

それ程、彼女の姿は輝いていた。

「それじゃ、行きましようか」

「はい」

淑女をエスコートする紳士を精一杯演じる。

秘書をエスコートするのはおかしいつて？

分かってないな。ミナトさんは既に主役だったの。

「・・・・・・・・」

登場した俺とミナトさんの姿を見て固まる一同。

ま、十中八九、ミナトさんを見てだろうな。

俺を見て固まる事なんて顔に何か付いてるぐらいのもんだ。

「注目的ですね」

「妬いてくれる？」

「ええ。嫉妬で狂いそうです」

「ふふっ」

「でも、どこか優越感も感じます」

「私の恋人だから？」

「ええ。美人過ぎる恋人を持って幸せですね」

「当然」

皆の視線を集めるミナトさん。

そんなミナトさんが自分の恋人だなんて信じられないくらいだ。

でも、確かに俺の大事な恋人で将来に渡るパートナー！。

今更ながら、大きな喜びが湧いてきた。

こんなにも輝いている女性をエスコートできて光栄ですよ。ミナトさん。

「お久しぶりです。アキトさん。ルリちゃん。ラピスちゃん」
「久しぶりだな」

「お久しぶりです」

「久しぶり」

「私もいるわよ」

「凄く綺麗です。ミナトさん」

「輝いてる」

「ふふっ。ありがとう。ルリルリ。ラピラピ」

誰がどう見ても輝いてるよな。やっぱり。

「先日は失礼しました。部外者の俺があだこうだと」

「いいさ。ありがたい言葉だったからな」

「いえ」

「なに。思えば、お前は我が社の筆頭株主に当たる訳だ。偉そうなのもおかしくない」

「俺は別に自分の事を筆頭株主だとは思っていませんよ」

「フツ。まあいい。水に流そう。こんな席に過去の過ちなど相応しくない」

「ありがとうございます」

ちよっとお酒入ってますか？ アキトさん。

水に流してくれたのは嬉しいけど、いつものアキトさんらしくない台詞。

「一つ質問していいですか？」

「いいぞ。何だ？」

「資金提供者の中にネルガルの者が混ざっていましたが、あれは・・・」

「ああ。それは」
「私の事かね？」

アキトさんの言葉を遮るように後ろから掛かる声。

・・・状況的にネルガルの社長だろうな。

「楽しんで頂けてますか？ 社長」

「ええ。存分に」

・・・やっぱり。

「改めて紹介しよう。この方はネルガルの社長を務める」

「赤暮と申します」

「あ。これはご丁寧に」

名刺を受け取る。

こういう時のマナーは正直分からん。

勉強しておくべきだったな。

粗相がないか非常に心配だ。

「マエヤマ・コウキと申します。あいにく名刺の方は準備しておりませんので・・・」

「いえいえ。御気になさらず」

・・・なんか良い人っぽい。

見た目、長身痩せ身の紳士的な初老の方って感じだし。

けど、社長ともなれば印象を良くする術ぐらい学んでる筈。

第一印象で全てを決定するのは危険だろうな。

というか、別に俺が気にする事でもない。

会うのも今日限りだろうし。

「ご尊名はかねがね伺っております」

そんなに立派な人間ではないんだけどな。俺。

「そして」

社長の隣にいる男性を示しながら、アキトさんが告げる。

「こちらは火星再生機構の副社長を務める」

「日中と申します」

日中さんですか。

「よろしく御願います」

「こちらこそ」

ガツチリと握手。

「そして、ネルガルの元専務でもある」

えっと、明らかに関係性ありますよね。この二人と再生機構。

「失礼ですが、ネルガルの内部事情を教えてくださいませんか？」

「ええ。火星再生機構に深く関係を持つ貴方になら」

「それでは、私が説明しましょう」

よろしく御願います。日中さん。

「私は以前火星支社に勤務しておりました」

「火星支社にですか？」

「ええ。火星支社の専務として本社より派遣されましてね」

「何年程？」

「かれこれ十数年は」

そんなに長い間火星で生活を。

それなら愛着も湧くか。

「ちよつとした左遷でしたが、火星での生活は充実していましたよ。懸命に働き、最終的には支社のNO・2にまで登り詰める事ができましたから」

それは凄いな。支社のNO・2が本社のどれくらいの相当するかは知らないけど。

「その後、火星大戦の一年前程ですね、功績が認められ、本社へと戻ってきました」

「それでは、火星大戦は経験していませんね？」

「ええ。運良く。ですが、娘や息子の友人が亡くなり、やるせない思いでした」

そうだよな。本社に戻ろうとそれまで生活してきた跡は消える訳ではない。

彼にとって気の置けない友人だっていたかもしれないんだ。

第二の故郷だと思える程の年月だっただろうし、悲しいに決まっている。

「その後はネルガルの会長派として活動してきた私ですが」

え？ 会長派？ 社長派ではなく？

「この度、テンカワさんからお話を聞き、こうして組織の一員として迎え入れて頂きました」

「スカウトされたんですか？」

「ええ。ですが、どちらかというと私の方から御願いました」

「アポを取り終えた後、こちらから赴こうと思っただのだが、その前に火星を再生したいという思いでミルクィウェイまで来てくれた。」

彼自身の能力の高さもあり、将来的にも俺の片腕として働いてもらう予定だ」

どうやらアキトさんは強い味方を手に入れたようだぞ。

大企業の重役だった日中さんなら経営手腕にも優れている筈。

既に右腕候補として信用もされてるみたいだし、これは期待できる。

「当時、ネルガル内は会長派と社長派で遺跡を巡り対立しておりました」

「会長派はネルガル独占を社長派は一企業としての参加という方針です」

ネルガル社長から補足が入る。

「会長派に属していた私ですが、会長の考えは現実味が薄いと思いました。」

その為、ネルガル存続の為に意地を張らずに手を結んだ方が良いと会長に進言を」

「会長は若いですが、現実的に物事を見詰める力は充分にお有りになる。」

日中君の言葉を受け、顔見知りである自分では都合が悪いと社長の私に委託してくれました」

「会長派と社長派が手を組んだならばネルガルはもう安心だと、私は心置きなく退社する事ができ、こうして火星再生機構で活動しています」

「日中君の退社は当社としては痛いですが、彼にも彼の意思がある。それを尊重しよう」と

なんか異様に息が合ってるな。この二人。
ま、いいけど。

そんな事より、ようやくネルガルが重い腰を上げたか。

ネルガルは特定の分野ではなく幅広く活動する複合会社。

火星再生の際にもその力を如何なく発揮してくれる事だろう。

しかし、アカツキがそんな簡単に進言を受け入れるだろうか？

確かに現実的な目で見ると力はあるけど・・・なんかあっけなさ過ぎる気がする。

・・・実はまだ遺跡の独占を狙ってるんじゃないか？ アカツキの奴。

今回ののはその隠れ蓑とか。社長に委託つても怪しいし。

もしそうだとしたら、相変わらず油断ならない奴だよな、本当に。

まあ、これも予想でしかないけど。

「火星再生に向けて全力を尽くす所存です」

「よろしく御願います」

筆頭株主らしいので、一応、火星再生機構の一員として頭を下げる。よろしく御願います、頼りにしていますという想いを込めて。

「私達も火星再生の折りには全力で協力させて頂きます」

「ありがとうございます」

これまた頭を下げる。

大事ですよ。お辞儀つて。
ま、とりあえず形としてネルガルの協力が得られたのだからアカツ
キの事は何も言うまい。
もちろん、ネルガルから眼を離す訳ではないけど。
むしろより警戒します。人を出し抜くのか好きそうだもんね。あ
の二人。

「しかし、お美しいですな」
「ありがとうございます」

綺麗過ぎるお辞儀を見せて頂きました。
というか、話題の展開が早過ぎです。社長。

「この方は？」
「私の秘書です」
「羨ましいですな。これ程お美しい方は中々いない」
「自慢の秘書です。容姿のみではなく、秘書としても優れています
から」
「ますますもって羨ましい」

そして、自慢の恋人です。

「それでは、そろそろ私は失礼します」
そう言って去っていくネルガル社長。
出来れば、良い関係を築きたいものだ。

「私は他の方々を回ってきます」
「ああ。頼む」

近くの企業関係者に話しかけにいった日中さん。役職としてはアキトさんの方が下である筈。でも、態度的にはアキトさんの方が上のような。そもそも……。

「アキトさんってミルキーウェイでどんな役職してるんですか？」

会長と社長には火星の生き残りの方に就任してもらったんだろう？
そして、副社長には先程までいた日中さん。
そうになると、アキトさん達は一体何の役職なのさ？

「俺は会長秘書だ」

「私達は社長秘書です」

「実質的にはアキトが会長だけだ」

まあ、アキトさん達は軍からの出向という形だから代表者になれるのは仕方がない。

実質的に会長として活動しているのなら別に問題ないだろう。

「さて、早速だから懇親会を楽しんでくれ」

「正直、一般人の俺には居心地が悪いんですけどね」

「ハハハ。それは俺も変わらん。やはりこういう場は俺に相応しくない」

苦笑する俺とアキトさん。

お互いに堅苦しいのは嫌だっけ事だろう。

「ミナトさんは流石ですね」

「ルリルリモラピラピも落ち着いてて様になってるわよ」

「私はこう見えてもお姫様ですから」

「夢見る女はパーティーに憧れる」
「ふふつ。そうね。私も憧れるわ」

・・・相変わらず女性陣は能力が高い。
こんな場面でも全然落ち着いていられる。

「とりあえず俺は引き立て役にでもなっておきます」
「それがいい。それが無難だ」
「男って何なんでしょう？」

「女にしがみ付かないと生きていけない弱い存在さ」
「・・・アハハ」

「笑うなよ。悲しくなるだろう」

「アキトさんも引き立て役。頑張ってください」

「一応、主役の筈なんだがな」

「マジで言ってます？」

「・・・すまん。自覚が足りなかった」

この後はミナトさんの引き立て役となりつつ企業の方々と色々話した。

一応、面識を持っておいてもらうのは後々の為になるだろうし。

そして、毎度の如く、ミナトさんの評価を聞かされる俺。

まあ、そのお陰で話のきっかけを作れたりした訳だが。

眼の前に男がいるのに口説くのってどうよ？

何が、美しいお嬢さん。お一人ですか？ だ。

俺がここにいるだろうが！

お前の視覚は女性しか映さないのかったの！

とまあ、俺は一人で青筋を浮かべていた訳だが・・・。

冷静にかわしていく様は流石としか言いようがなく・・・。

「後で、夜にでも相手してあげるから」

なんて言われれば俺もすんなり落ち着く訳で。

案外、俺も単純だなと自分に呆れつつ、懇親会を過ごしていった。

「懇親会も悪くないな」

意外な大きい収穫もあり、一夜を終え、そう評価する俺だった。

第八十三話（後書き）

べ、別にセクハラじゃないですからね！

どうも、ハインツです。

ようやくネルガルが出てきました。

ネルガル社長と火星再生機構副社長の名は、

これから数回しか出てこないでしょうから忘れても大丈夫かと。

一応、命名も思い付きながら理由があつたりして。

まあ、それ程、考えてないですし、すぐにバレるでしょう。はい。

ミルクィウェイも順調なようで、火星再生に向けて頑張ってもらいましよう。

それでは、失礼します。

第八十四話（前書き）

物語は加速していく。

予期せぬ展開、鼓動する陰謀、裏切りと偽り。

その先にある終末とは……。

なんて意味不明な始まり方をしてみました。

今回は前半的な位置づけです。

第八十四話

「あいつら・・・司令が危ないってのにどうしてあんなに気楽なんだ！」

「司令の事を思えば、もつと必死になるべきだろ！」

「クソッ。あんなにも緊張感がない奴らが一緒だと士気が下がる」

「木連をぶつ潰さないとならないってのに」

「絶対に許さねえぞ！ 木連！」

「和平を成し遂げようと必死だった司令を暗殺しようとするなんて！」

「必ず、必ず仇は討ちます。ミスマル総司令官」

「なんか殺伐としてますね」

俺達も一応、基地の一員として食事などは食堂で取っている。

以前までなら活気に溢れていた食堂も随分と静かで・・・怖いとも思える雰囲気だ。

なんとなく今の食堂には居辛い。食事中だから我慢するけど。

「私達は司令の無事を知ってるから落ち着いていられるけど、他の人は違うもの」

「ナデシコは相変わらずですけど」

「お気楽思考。でも、過去に囚われずに前を見ているとも言えるわ」
「物は言いようですな」

「それでも、落ち着いていられるだけ他の人達より何倍もマシよ」

楽天的思考はナデシコの強さの一つでもある。

それはナデシコとクルー皆でなら、どんな困難をも突破出来るという深い信頼の表れ。

そして、強い団結力の証。

司令が危ないと聞いても安定していられるのは自身のやるべき事が分かってるから。

パイロットは教官業を、整備班は新型機開発を、

その他の者達も己のやるべき事をしっかりと自覚している。

傍目から見れば、お気楽で状況が見えていないように見えてしまうだろう。

だが、それは大きな勘違いなのだ。

彼らは状況に流されずに冷静に物事を眺め、

慌てても意味がない事を自覚し、泰然としているだけ。

焦れば全てが解決するのか？ 違うだろう。

無茶をすれば解決するのか？ それも違う。

周囲からしてみれば、ナデシコは周りが見えていないと言うだろうが、

俺達からしてみれば、この基地にいる者達の方が周りが見えていないと思う。

徹夜をしてまで訓練をする者。

戦闘はいつあるか分からないのだ。そんなんで突然の戦闘に対応できるとでも？

どのような状況、時間帯でも活動できるよう体調管理に努めるのがパイロットの仕事だ。

ただ鍛えれば良いという訳ではない。そこを見誤ってもらっては困

る。

現状に焦り、必要以上に機体を改良しようとする者。言語道断でしかない。その機体にはその機体に相応しい形があるのだ。

これは開発者が計算し、シミュレーションした結果で導き出したもの。

無茶な改良をした所で確実に性能が向上するとは思えない。

逆にオーバーヒートしたり空中分解の危険性も出て来てしまう。

それに、誰もが高性能の機体に乗れる訳ではないのだ。

E-8級パイロットになら扱えても、一般兵には扱えない機体だつてある。

現状ですら、リミッターを掛けてるパイロットも多いぐらいだといふのに……。

何も考えずに改良すれば、むしろ死の危険性が高まるだけ。唯の戦力低下でしかないのだ。

その機体のパイロットが対応できるだけの能力があれば問題ないかもしれない。

だが、考えなしに改良し、結果使用者にならなかつたら、人材も費用も無駄なだけ。

せめて、開発者や詳しい者とその機体のパイロットに相談し、変更後の機体性能を確認し、シミュレーションをしたうえで行ってもらいたい。

そうであれば、改良も戦力の向上に貢献できるのだから。

殺伐とした雰囲気更に拍車を掛ける上官。

上官の仕事はいきりたつ部下を戒め、常に泰然としている事だろう。それなのに、部下と一緒になって無茶したり、感情のままに怒鳴り散らしたり。

上官が焦れば、部下も焦る。当然の事だ。

ピンチの時こそ冷静に。チャンスの時こそ熱くなれ。

部下のコンディションを管理するのが上司の仕事だといふのに、何

をしているのやら。

焦るのは分かる。悔しいのも分かる。だが、そんな時こそ上官として部下を引つ張って欲しい。

怒鳴る事、焦る事なんて誰にでも出来るのだ。

能力を認められて上官をしているのだから、自身にしか出来ない事をやってもらいたい。

これらのように基地内の誰もが己を見失っているように見える。

ミスマル司令の無事を知ってる俺だからそう見えてしまう偏見なのかもしれない。

でも、それだったら、ナデシコクルーも同じようになる筈だろう？

ナデシコのクルーとして司令の無事を聞いている訳ではないのだから司令への思い入れの違い？ それは無いと言い切れる。

ナデシコクルーは家族だ。

その家族の長である艦長の父親が危険な目に合わされて怒りを抱かない訳がない。

誰だって艦長の事を思い、悲しみ、悔やんだ。誰だって司令の仇を取りたいと怒りを覚えた。

それでも、怒りを抑え、自身のやるべき事を焦らずに着実にこなせるのがナデシコクルーなのだ。

これこそがナデシコの最強たる所以なのかもしれない。

「それにしても、最近は何分と静かよね」

「ええ。不気味な程に」

司令が暗殺されかけてからのこれまでの長い期間。

不思議な程、木連の襲撃が少なかった。

基地から出撃した回数も一、二回程度だろう。

それが不満を募らせ、基地の軍人のストレスに拍車を掛けてるとも言える。

「決戦に向けて、戦力を蓄えているのかしら？」
「恐らく。ですが・・・」

木連の本拠地に未だ攻め込んだ事がない地球。

地球からしてみれば、どうしても後手に回るしかない。

攻めて来た時に対応して相手の数を減らしていくしかないのだ。

それに対して、木連は好きな時に好きなように攻め込め事が出来る。

このアドヴァンテージは本当に大きい。

常に奇襲される状況なんて恐ろしいだけだったの。

そんな木連が奇襲をせずに戦力を蓄えている。

それだけ決戦に対する想いが深いのだろう。

だが、戦力の蓄えを優先するにしたって、果たして襲撃をなくす事などありえるのだろうか？

木連からしてみれば、地球の戦力の蓄えは何としても阻止したい筈。もし地球が同じ立場にいれば、蓄えつつ、襲撃して蓄えを破壊するだろう。

戦争に勝ちたいなら、こちらの数を増やす以上に向こうの数を減らしてしまえば良いのだから。

「ですが？」

「いずれ、いえ、近い内に必ず」

ウィーンウィーンウィーンウィーンウィーンウィーン！

「仕掛けてきますよ。このようにね」

基地内に響き渡るエマーゲンシコール。

「ミナトさん。指令室に」

「ええ。急ぎましょう」

食堂を抜け、指令室へと急ぐ。
ナデシコ主要クルーは戦闘前に指令室へ集まるように言われていたのだ。

恐らく、その能力の高さを考慮し、協力してもらおう事で最善の結果を得る為だろう。

また、ナデシコパイロットがいる間はナデシコパイロットを小隊の隊長とする事が説明されている。

全体な方針を告げる為にも隊長格の人間はいた方が良い。
無論、俺もその一人として参加する予定だ。

シュインッ！

「遅くなりました」

「遅れました」

「うむ」

指令室には既に殆どの人間が揃っていた。

食堂は真逆だったからな、遅くなってしまったようだ。

「遅くなりました」

「も、申し訳ありません。遅くなりました」

最後は艦長と副長。

珍しいな。いつもならもっと早く到着してるのに。
どこにいたんだろう？

「全員揃ったようだな。説明を始める」

主要メンバー全員が揃い、説明が開始させる。

司令がない今、この基地の最高責任者はムネタケ参謀。本来ならミスマル司令が座る席には、今参謀が座っている。

「太平洋に大量の木連兵器が出現した」

太平洋？ どこかの基地が襲撃されたとかではないのか。

「今までにない程の大規模。被害を被る前になんとしても破壊せねばなるまい」

確かにそれだけの規模の敵が襲い掛かってきたらかなりの被害を被るだろう。

だが、それには大きな問題があつた。

「しかし、機体の性質上、迎撃は出来ても進撃は……」

そう、重力波依存による弊害である。

確かに出力を外から補給する事で小型化、高性能化には成功したが、それ故に重力波が受信できなければ、動く事すらままならない。

「我々の限界稼働距離は陸からはみ出せる程度でしかありません」

ミスマル司令がエステバリスをメインとすると決めてから、日本のあちこちに重力波アンテナ送信装置が配備されていた。これによりエステバリス系統の機体は陸上であれば機能を発揮できる。

だが、海上にまでなると、陸からそう離れた所へは行けない。ましてや、太平洋とまでなると……。

「それに関しては対策がされている。ウリバタケ君」

え？ マジ？ というか、ウリバタケさん？

「ナデシコ搭載予定のニバリスを活用する事にした。

ニバリスからニバリスに送るを繰り返せば限界稼動距離は延ばせる」

なるほど。ニバリスがあつたか。でも……。

「経路が多過ぎると性能が下がるのでは？」

ニバリスを作動させる為にも重力波は必要であり、

ロスなく全てを送れる筈もない為、必ず機体性能は低下するだろう。まあ、ウリバタケさんともあるう人がそれに対して何もしてないとは思えないが。

「無論だ。そこでピラミッド構造を展開する」

「ピラミッド構造？」

「一つのニバリスに送る重力波を二つのニバリスから配給する。

それを繰り返す事で、ロスの分も補い、通常と同様の性能を発揮できる」

理論上はそうだけど、かなりの費用が掛かりそうだな。それ。

「それだけではないよ。マエヤマ君」

「参謀。他に何かの手立てが？」

「うむ。DFと重力波送信のみだけだが、戦艦も用意した」

それなら、対処可能だな。

「戦艦といつても航空機に近いが、重力波を配給するぐらいなら問題ない」

相轉移エンジンを積み、重力波送信アンテナとDF発生装置を組み込んだだけのものって事か。

・・・いいさ。武器がなくとも俺達が矛になればいい。盾だけあれば充分だ。

「スーパー戦フレーム隊と第一、第二小隊は上陸阻止に務めて欲しい」

「了解」

「こちらはニバリス経由で陸上に備え付けられた重力波アンテナ送信装置が賄う」

太平洋から極東方面への侵入を防ぐのが俺の仕事か。

ニバリス経由で陸上から多少離れても行動できるようにもあった。

ちなみに、スーパー戦フレーム、

ナデシコ流で言えばアドニススーパー仕様の小隊はガイが小隊長。

その他の小隊の順番はこの基地に関係性がある順となっている。

その為、第一小隊は俺、第二小隊はイツキさんがそれぞれ小隊長を務める。

なお、カエデに関してはまだ小隊長は荷が重いとされて、俺の下に配属された。

まあ、あいつ自身はブーブー言ってたが、まあ、意地っ張りだから仕方ない。

第三以降は関係性ではそれ程変わらないので適当な順番になってる。

第三がスバル嬢、第四がヒカル、第五がイズミさん。

スバル嬢がすぐに手を挙げ、ヒカルがじゃあ次は私と言って、イズミさんは何も言わず。

なんとなく想像が付くと思う。

「第三、第四、第五小隊はそれぞれ航空機に乗り込み、前線で戦って欲しい」

「了解」「」

しかし、それだけでは戦力が足りないのでは？

今回の相手はかなり大規模。流石にこれだけでは少な過ぎる。

どれだけ優秀でも人間である以上、疲れもあるのだから、厳しいと思うが……。

「なお、我々極東支部以外にも、

東欧支部、北米支部、南米支部、亜細亜支部からの出撃が決定している」

それなら安心か。充分の戦力が期待できる。

確か東欧支部と亜細亜支部は極東支部と仲が良かった筈。

でも、北米支部、南米支部は敵対とまではいかないが、不干渉だったな。

恐らく、用意する機体も割りバラバラだろう。

改革和平派に所属する支部は小隊のリーダー機にリアル戦フレーム、その下に配属される者にはエステバリス高機動戦フレームがそれぞれ配給されている。

しかし、所属していない支部は、配給されていない。

一体、彼らはどんな機体を用意するのだろうか？

デルフィニウムは用途が違っし、クリムゾン辺りが新しい機体でも製造したのだろうか？

……まあいいか。とにかく俺は陸への侵入を防ぐ事に尽力しよう。

「それでは、皆、作戦を開始してくれ」

「了解！」

「第一小隊は俺に付いて来い」

アドニスリアル仕様に乗り込み、作戦ポイントへ向かう。
俺以外の小隊メンバーはカエデを含めた四人。

—小隊五人で構成されている。

カエデも例に漏れず高機動戦フレームで出撃だ。

俺達防衛組の作戦ポイントは日本の最東南部。

本土に侵入されないよう、絶対に死守しなければ。

「アザレア」

『はい。マスター』

「各機の状態を常に把握しておいてくれ」

『仰せのままに』

小隊長として視野を広く保つようにしなくちゃな。

「小隊メンバーに告ぐ」

シュンッ！

機体内のモニターに小隊メンバー全ての顔を表示する。

「この中にはこれが初陣の者もいるだろう」

配属されたメンバーはカエデ以外に一名を除き、他は全て初陣。彼らはナデシコパイロットによるパイロット養成コース参加者だ。未来ある若者、将来を期待される若者をここで潰す訳にはいかない。

「だが、心配するな。訓練通りにやれば、負けるような相手ではない」

まあ、訓練通りに出来ないのが実戦なんだけどね。

「ヒラノ」

『ハッ!』

こいつは戦闘経験者。俺の元生徒でもある。

「先輩として、後輩はきちんと護れよ」

『当然であります!』

「頼りにしてるぞ」

教え子時代からかなりの能力の持ち主だったし、戦闘を経験して成長しているだろう。

こいつなら後輩をきちんと護り、自らも生きて帰ってきてくれる筈だ。

かなり期待できる。

「カエデ」

『何よ?』

そこは、はい、とか、ハッ、とか言うべきなんだけどなあ。まあ、こいつにそういう事は要求しても聞かないだろうし。

気にしちゃ負けだ。

「初陣のような初陣じゃないような戦闘だが、油断はするな」

『分かってるわ。慢心も油断もない』

「分かった。期待してるぞ」

『ええ。任せておいて』

それは頼もしいお言葉で。

「二人一組となって敵に当たれ。」

02は04と、03は05とそれぞれ組むんだ」

『『『『了解！』』』』

01が俺、02がカエデ、03がヒラノ、04、05がそれぞれ新人という訳だ。

俺は一人で援護やら遊撃やらで走り回る予定。

「アザレア。敵の状況はどうだ？」

『第三、第四、第五小隊は交戦中。第二小隊も交戦に入りました』

前線組の第三、第四、第五小隊は既に交戦中。

日本の東南の海上で防衛網を張る俺達は二手に分かれており、

東側にいるイツキさん達第二小隊はどうやら交戦に入ったらしい。

前線で全てを撃ち滅ぼせるとは思ってないから特に問題はない。

ガイ達スーパードライブ小隊は陸上で構え、俺達の撃ち漏らしを任せてある。

後方に憂いなし。

『コウキ！ 第二小隊が！ 早く助けにいかないよ』

「駄目だ」

『どうして!?!』

「俺達が現場を離れば次はこちらから抜けられる。

俺達第一小隊の仕事は持ち場を死守する事だ。第二小隊を助ける事じゃない」

『でも!』

「仲間を信じろ! カエデ」

『・・・分かった。信じるわ』

仲間のピンチで焦るのは分かるが、冷静に対応して欲しい。

持ち場を離れば後手後手に回って結局突破される。

第二小隊なら大丈夫だ。彼らだってもう一人前の軍人。

俺達は俺達の仕事に全力を尽くせば良い!

「交戦する前に・・・アザレア、北米支部の機体はなんて名前だ?

調べてくれ」

『はい』

エステバリスに対抗して、改革和平派以外の者が用意したであろう機体。

エステバリスに匹敵する性能があるかどうか。

確認しておいて損はない。

もしかしたら、今後、争う事になるかもしれないし。

『分かりました』

「報告を」

『機体名はステルンクーゲル。クリムゾン社製作の新型機と思われるます』

・・・ステルンクーゲル。

劇場版で統合軍が正式採用していた機体。

こっちも原作より早くの登場という訳か。
クリムゾン社が原作より早く人型機動兵器生産に力を入れた結果だ
ろうな。

でも、これは木連からの技術提供があつて実現した機体の筈。
確か木連無人兵器のジェネレーターを利用してたんだよな。

やはり木連とクリムゾンは手を組んでた訳だ。戦後を見越して。
でも、まあ、機体を見ただけで木連との関連性なんて誰も気付かな
いだろう。

だから、問題には出来ない。俺とて名前が違つてたら分からなかつ
ただろうし。

それに、確実にそうだとも言い切れない。地球製のジェネレーター
の可能性もある訳だし。

OSは原作通りEOSかな？

EOSなら、己惚れるようだけど、CASの方が優れていると断言
できる。

機体性能としてはエステバリスとほぼ同等と見て良い。

違いは重力波アンテナに依存していない事。

これなら稼動時間の限界はあつても、稼動距離の限界はない。

まあ、どっちが良いかと訊かれたら用途によつて異なるとしか言い
ようがない。

防衛にはエステバリスで襲撃にはステルンクーゲルといった所かな。
一対一で争つた場合、OSの差でエステバリスが若干優勢。

「ふむ。ありがとう。アザレア」

『いえ』

「引き続き、頼む」

『御意に』

さて、そろそろこちら側にも来るだろう。

気を引き締めなければ。

「敵機、レーダー範囲内に入りました」

「了解。各機、散開！」

ヒラノ班が右に、カエデ班が左にそれぞれ展開していく。

「無理はするな。互いのフォローを忘れずに確実に一機一機倒していけ」

『『『『了解！』』』』

襲い来るのはバツタ、ジン、六連、それに加えて新型の多分、積尺し気きって奴。

積尺気は確か夜天光の量産型だったな。

機体から見て、今回の襲撃は草壁派と見て良いだろう。

「無駄弾は抑えないとな」

今後の戦闘に向けて無駄な弾は一つでも勿体無い。それなら……。

ビュンッ！

「木連式剣術の腕の見せ所だな」

まだ習得途中だけど。

「ハア！」

一直線に向かってくるバツタなんて的以外の何物でもない。切り裂き、断ち切り、切り伏せる。

「まだまだあ！」

有人機であろう六連、積尺気は予想外の接近で狼狽えている様子。戦闘中にそんな隙を見せたらいかなだろうが。

ダツ！ シュツ！ ドガツ！

接近、一閃、すれ違い、過ぎ去り、爆発、サーチ。後方で爆発の音が鳴る中、次々と敵を屠っていく。

今までの戦闘で有人機を落とす覚悟は出来た。殺さねば殺される。戦場に同情は不要だ。

ジンシリーズは単機では時間が掛かるので、今はそれ以外を全機破壊する！

『マスター。来ます』

アザレアの言葉で近付いてくるミサイルに気付く。六連も積尺気もミサイル装備だしな。でも、唯のミサイルなら……。

「助かる。アザレア」

ガントレットアーム内蔵の機関銃。
右手にディストーションブレード、左手にラピットライフル。
これだけあれば、防ぎ切れる。

「ま、弾幕を張るつもりはないけどな」

避ける、避ける、避ける。

アドニスリアル仕様は回避力に優れる機体だ。
たかが追尾式だけの何の工夫もない射撃に当たってやる訳にはい
かないだろ！

ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！

すれ違い、ミサイルが旋回してこちらに向かってくる瞬間を狙う。
これならば、ミサイルは一時的に停止したと同じ。
止まってるのを外す程、俺の練度は低くない。

「おっと」

ハンドガンからの攻撃をDFで弾く。

ロククオンされた覚えはないから、流れ弾かなんかだろう。
視界を広く保っていたら運よく見付けられた。
ギリギリでちよつと焦ったな。

『小隊長！』

突然のヒラノからの通信。

表情を見るにかなり切羽詰ってる。

「どうした！？」

『巨大な敵に対してはどのように対処すれば！？』

ジンシリーズの特徴はグラビティブラストと強固なDF。

でも、その特徴は弱点にもなり、DFに頼り過ぎるあまりジンはD
Fがなければ唯の的。

その為、DFさえ突破すれば撃墜するのも容易いのだ。

結果、フィールドガンランスでDFを突破後に破壊すれば良いとい

う単純な結論。

だが、言葉で言うのは簡単でも、踏み込む事を躊躇してしまう理由がある。

それこそがグラビティブラスト。

たとえDFを張っていようと直撃すれば終わりだ。

接近するにしても、これの存在が脳裏を掠める。

「まずはグラビティブラストを撃たせろ」

『は？』

「接近すると見せかけて、グラビティブラストを発射させる。

それを確実に回避すれば、チャージまでの時間を稼げる。

その後、ペアの奴と協力して、片方がDFを突破後、もう片方が突っ込め」

『了解！』

「グラビティブラストを回避してもまだロケットパンチやミサイルがある。油断はするな！」

『はい！』

「ボソソジャンプしそうだったら離れる事。巻き込まれたら死ぬからな！」

訓練でジンシリーズ撃破の一連の流れはやった筈。

それをヒラノが忘れる訳はないので、恐らく新人に聞かせる為のものだろう。

新人は緊張と混乱で忘れていている可能性があるし、

仲間の、その中でも特に隊長である俺の声を聞けば多少は落ち着く筈。

攻略法の確認と同時に混乱を落ち着かせる為の通信だった訳だ。

あいつ、俺を利用しやがって……。

助かった。ヒラノ。リーダーの自覚が足りなかった。

もっと周りを見ないとな。

「アザレア。各機の損傷は？」

『05は右腕を損傷、ですが、行動できない程ではありません。』

『04はDF発生装置に不備が発生。援護主体で距離を取っていません』

04はカエデとペア。

カエデは接近戦に弱いから、どちらか援護主体になってしまう。

「各機に通達！ 04は03と組め。ヒラノ！ 前に出る！」

『了解！』

『私は！？』

「カエデ？ アザレア。02の損傷はどうなってる？」

『機体に大きな損傷はありません。ですが、ラピットライフル、レールカノン共に弾切れです』

「考えて弾を使い！ 馬鹿！」

『しょ、しょうがないじゃない！ 敵が多かったんだから！』

「ああ！ もう！」

ここで責めてても仕方ないか。

後で説教喰らわしてやる。

「04。左腕をメインにフィールドガンランスを使い」

『了解』

右腕を損傷してるが、完全に破壊されている訳ではない。
フィールドガンランスを構える事ぐらいは出来る筈だ。

「カエデ。受け取れ！」

『え？ え？ うわッ！』

カエデにラピットライフルを投げ渡す。

「大して使っていないから弾は充分ある。それで俺達を援護しろ。無駄弾はなしな」

『わ、分かったわ』

「04。巨大な敵に張り付いて、DFを突破しろ」

『その後は？』

「即行で離脱。突破後は俺が切り裂く。それとも、自分で行くか？
『いえ。怖いのでやめておきます』」

ハハツ。怖いなんて言いやがった。

普通、戦場でそんな事は言わないだろ。
でも、それでいい。怖くていいんだ。

「了解。怖がれ。怖がった方が生き残れる。」

一機潰して死ぬぐらいなら何も倒さずに生き延びた方がいい」

『了解！』

「でも、逃げるなよ。逃げるのは駄目だ」

『む、無論です』

「ハツハツハ。頼むぞ！ 04。俺の命、お前に預ける」

『は、はい！』

一機潰れる事で戦線を維持できなくなるなんてのは良くある事。
それだったら、怖がっていても、後ろからきちんと援護している方が
良い。

まあ、ずっと怖がられてても困るけどな。

だが、生き延びれば、いずれ恐怖を克服する時がやってくる。
死んだらそれまでだか、生きれば希望があるのだ。

無駄に命を捨てる必要などない。

とりあえず、この戦闘中に恐怖を克服してくれる事に期待しよう。
まあ、厳しいとは思うが、ありえなくはない。

「来るぞ！ 避ける！」

『はい！』

グラビティブラストが迫る。

碌なパイロットじゃないな。射線上には誰もいない。

「張り付け！」

『はい』

ロケットパンチに警戒しつつ、フィールドガンランスを突き刺す0
4機。

「後は任せる」

『了解。離脱します』

D F突破後、すぐさま離脱。

ロケットパンチが迫ってたが、どうにか回避できたようだ。

後は……。

「俺の仕事だ」

既に攻撃態勢。

動きの鈍いジンでは避ける事など不可能。

右手に持っていたディストーションブレードを両手で持ち、翔ける。

『ジャンプフィールドが展開されました』

逃げようって魂胆か？
でもな、そんな余裕は与えんよ。

「ハアアア！」

シュンッ！

今にも跳ぼうかというジンを腰から真つ二つに切り裂く。
デイストーシヨンブレードの切れ味の前ではジンの装甲など紙同然。

『す、凄い』

「凄くなんかないさ。全てはお前の援護のお陰だ」

『あ、ありがとうございます』

「ふっ。いくぞ。次だ！」

『はい！』

意外な事で恐怖を乗り越えたか？

まあ、ここで調子に乗って自分から行こうとしたら流石に止めるけど。

そんな様子もないし、出来るだけ破壊しまくるとしよう。

ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！

「鬱陶しいな。バツタ」

まるでハエのようにたかって来やがる。

ラピットライフルはなくても、ガントレットアームが俺にはある。
たかがバツタに遅れは取らんよ。

「まだまだ来るか」

六連も積尺気もまだまだ数は多い。
流石に人型兵器にはガントレットアームでは牽制ぐらいにしかなら
ないだろう。

でも、DFを張る前であれば……。

「レールキャノンで仕留める。重力場展開」

サーチ。

「発射！」

ドガンッ！ ドガンッ！ ドガンッ！

かなりの反動を生じながらの三連発
錫杖片手に突っ込んできてた六連二機を破壊し、
後方からミサイルで狙ってきていた積尺気一機を撃破する。
相変わらず威力は凄まじいな。

『行きます』

04機が再びジンに張り付こうとする。
でも、ちよつと落ち着こうか。

「待て。不用意に飛び込んだら危ない。まずはグラビティブラスト
を回避しろ」

『す、すいません。焦っちゃって』

今度はシュンと落ち込む新人。

いや、別に落ち込まなくても良いんだが……。

「なに、ミスなんて誰でもする。落ち着いていこう」
『はい。あ。来ました』

用心している相手に当てられるとでも思ってるのか？

『・・・ハア・・・ハア・・・回避・・・成功』

完全に向こう狙いだっとな。

まあ、どうにか回避したできただし、問題ない。

「行けるか？」

『行けます！』

頼りになる新人だ。

『ハアアア！』

叫びながら飛び込む04機。

だが、今回は接近を阻止されてしまった。

ロケットパンチを機体を掠ったのだ。

「大丈夫か？」

『はい。損傷は軽微です』

運が良かったな。

直撃を食らっていたらどうなっていたか分からない。

「それなら、俺が行く」

『私がトドメを？』

「いけるか？ 無理なら、俺が行くが？」

『い、いけます。やらせてください』

「良く言った。やってみせろ」

『はい！』

手に持つディストーションブレードを腰に戻し、

背中に備え付けてあるフィールドガンランスを取り出す。

「DF突破後、突入しろ」

『了解！』

フィールドガンランスを前面に出し、接近する。

先程と同じようにロケットパンチが向かってくるが、それに簡単に当たる程、俺も甘くはない。

「これで」

『マスター！ 後ろです！』

「何！？」

ロケットパンチを避けて突破したと思ったら後方から向かってくるミサイル群。

そうか。ジンシリーズの掌にはミサイルが搭載されていたんだっとな。

今回も完全にアザレアに助けられた。

気付きさえすれば、対処法がいくらでもある。

「ガンランスを嘗めるな」

唯のランスじゃない。

これにはライフルも含まれてるんだ。

ダンッ！ ダンッ！ ダンッ！

ロックオン、ショット。

ガンランスの先端から飛び出した弾でミサイルを破壊する。

「覚悟は出来たか？」

意表を突かれて止まってしまったが、もう止まってやらない。
ロケットパンチが戻る前に突破してやる。

「ハア！」

DFに取り付き、突破する。

今更ながら気付いたが、相転移エンジンを主動力としているジンは、地上では充分な量のエネルギーを産み出せない為、GBもDFも出力不足だ。

これなら二人一組にならなくても破壊できるかもしれん。
まあ、今は……。

「いけ！」

『はい！』

新人に花を持たせてやるう。

『ハアアア！』

フィールドガンランスの先端をジンに突き立てる。

「いいぞ！ 離脱しろ！」

その後、ジン周辺から離脱。
同時に爆発音が周囲に響き渡る。

『お、俺が・・・ジンを』

「初陣で大きな戦果だな。良くやった」

『た、隊長のお陰です』

「それでも、お前は良くやったよ。誇っていい」

『は、はい。ありがとうございます！』

凄い事なんだろうな。

ジンシリーズは一つの街を壊滅寸前まで追い詰めた悪魔の機体。
エステバリスとサイズを比べても子供と大人以上の差がある。

それを破壊する事が出来たんだ。
パイロット冥利に尽きる。

「付いて来れるな？」

『はい！ 行きましょう！』

イキイキしてきた。

これなら行けそうだな。

『05被弾。爆発します』

クソッ。全てが順調とは行かないか。

「05。早く離脱しろ」

『りよ、了解』

「04。残念だが、このままだ。05を拾い、一度基地に帰還しろ
『・・・・・・・・・・』

・・・返事がない。

ここで帰るのは気が引けるってか？

それとも、見栄が出てきたか？

どちらにしろ、右腕が損傷している状態じゃ長く戦闘はできない。再び合流したいのなら、まずは損傷部を直して来い。

「返事はどうした！ 04！」

『は、はい！ 帰還します！』

ドカンッ！

アサルトピットが抜け出してから数秒後エステバリスが爆発する。ブカブカと浮かぶアサルトピットに近付く04。

「援護しろ！ 近づけるな！」

『了解！』』

アサルトピットを手に持ち、離脱していく04。

『離脱を確認』

おし。残ったのは三機か。

「俺達だけでも行けるよな？」

『無論です』

『む、無理』

「は？」

ここで無理って何だよ？

そこは無理でもいけるって言うべきだろ。

『だ、だって……』

「何だよ？」

『どうしました？』

もしや、何かあったのか？

『た、弾切れだもの』

「……」

『……』

『……コウキ？』

「てめえ！ この野郎！ 少しは学べ！」

『しょうがないじゃない！ 弾が少ないんだもの！』

「それを考慮して撃てつての！」

どれだけ無駄弾が多いんだよ？

あれか？ 物量射撃仕様のつもりでやったのか？

「はあ……」

『隊長。如何しますか？』

「ああ。分かった。分かった。カエデ。ほいつ」

フィールドガンランスをまたもや投げ渡す。

「次はないからな」

『え、ええ。分かってるわ』

『これもどうぞ。まだ使っていませんので』

ヒラノもカエデにラピットライフルを渡す。

もうこれで弾切れはないだろう。うん、ないで欲しい。

「仕方ない。接近戦だな」

『ええ。お付き合いします』

「カエデ。程々に援護よろしく」

『ええ。ビシバシ援護するわ』

「・・・頼むから考えて撃ってくれ」

もう弾切れは勘弁だぞ。

戦線が維持できなくなる。

「さてさて、後どれくらい戦えばいいのやら」

第八十四話（後書き）

さて、色々はこの戦闘は意味を持ってきます。

伏線は張ってませんが、状況から察するに・・・という感じですよ。

既に次話を書き出しており、

予想外の展開と想ってくれるかワクワクしてたり。

後半では、この戦闘の意味を確認していこうと思います。

それでは、これからもよろしく御願ひします。

第八十五話（前書き）

参りました。

どうやら前・後編では無理そうです。

前・中・後の三本仕立てで参ります。

実は既に後編も後少しで書き終わる所まで来てるのですが・・・。

韓 ドラマ的な引っ張ろう精神が働きました。

区切りも良いです。この辺りで投稿しちゃいます。

明日までに完璧に書き上げまして、

最近の連続投稿と同じ深夜0時付近に投稿しますので、

それまでの間を楽しみにお待ち頂けたら作者と致しましても幸いです。

そわそわしながらお待ち頂く為に上手く終わらせるよう頑張ります。

それでは、どうぞお楽しみ下さい。

第八十五話

S I D E M I N A T O

「……………」

私達はモニター越しに戦況を眺める事しか出来ない。
それが堪らなく悔しい。

「…………コウキさん」

戦場に大切な人がいる。

それが辛い訳がない。苦しくない訳がない。
でも、信じるしかないんだ。今の私達にはそれしか出来ない。

「司令の仇を！」

「木連に痛い目を味わわせてやれ！」

「潰せ！潰せ！」

モニタを見ながら叫ぶ軍人達。

どれだけ司令が慕われているかが分かる。

でもね、忘れちゃ駄目よ。司令は何を願っていたの？

司令を慕っているのなら、和平に向けて全力を尽くしなさい。

木連を潰せなんて聞いたなら、司令はきつと悲しむわ。

それが自分を慕うが故でも。

「私、ここにいたくない」

「…………ユキナちゃん」

そうよね。木連人の貴女はここに居辛いわよね。

「行こう。ユキナちゃん」

「・・・でも」

「いいから。セレセレも」

「・・・すみません。私はここでコウキさんを」

あらあら？ 逆らわれたのなんて初めてじゃないかしら？

それ程、セレセレにとってはコウキ君が大事って訳か。

妬けちゃうわね。

「分かったわ。何かあったら教えてね」

「・・・はい」

私の分までコウキ君の無事を祈ってあげて。セレセレ。

私は彼女の事を見ているわ。

きっとコウキ君がいたら、彼女を護ってあげてたと思うから。

「行くわよ。ユキナちゃん」

「・・・うん」

シューインッ。

指令室から抜け出す。

「ユキナちゃんの部屋ってどっちだっけ？」

「あっち」

指で指し示すユキナちゃん。

そっちか。それじゃあ……。

「……あ」

なんだか元気がなかったから、手を繋いでみた。

「……あ」

「偶にはいいでしょ？ ね？」

「……うん。お兄ちゃん以外で初めて手を繋いだ」

「そっか。女の人の手もいいものでしょ？」

「うん。お兄ちゃんと違う暖かさがある」

肩を並べて歩く。

なんだか妹が出来たみたいで嬉しい。

セレセレはもう娘みたいなものだし。

「私、お母さんもお父さんも早くに亡くしちゃったんだ」

「うん」

「だから、ずっとお兄ちゃんと二人つきりだったの」

「そっか」

「それからしばらくして、ゲンイチロウとゲンパチロウと知り合っ
て……」

「楽しくなってきたの？」

「うん。変な二人だけど、とっても良い人」

「お兄ちゃんの親友だもんね」

「本当に三人とも仲が良いんだ。喧嘩もするけど、すぐに仲直りし
てた」

「うん」

「だから、三人にはいつまでも仲良くして欲しいの」

「優しいのね。ユキナちゃんは」

「そんな事ないよ。三人は三人揃って初めて一人前なんだから」
「ふふつ。手厳しいわね」

でも、本当に三人が大好きなのね。ユキナちゃん。
こんなにも飛びつきりの笑顔で語るなんて……。

「前にさ、木連に行った時」

「ええ」

「ゲンイチロウだけ、凄く悩んでた」

「そうなんだ」

「お兄ちゃんもゲンパチロウも悩んでたけど、ゲンイチロウはもっと」

「それで仲が悪くなるんじゃないかって？」

「ううん。きっと敵同士になってもお兄ちゃん達の友情は変わらないと思う」

「それじゃあ、何が心配なの？」

「私のせいで友情が壊れる事」

「え？」

「私が今、地球にいる事で、お兄ちゃん達は凄く心配してる」

「そうね。大事な妹分だもの」

「もし私に何かあったら、お兄ちゃん達の仲が悪くなるかもしれない」

「どうしてそう思うの？」

「お兄ちゃんはきっと私に何かあったら、信念を曲げてでも従うと思う」

ユキナちゃんを人質にして、シラトリさんを従わせる。

卑怯だけど……一番有効な手段。

「でも、ゲンイチロウもゲンパチロウも信念を曲げない人」

「頑固って事？」

「そう、凄い頑固。思い込んだら一直線」

なんとなく分かる気がするわ。

シラトリさんの親友ってだけで。

「皆、それぞれの信念を尊重してる。貫く事を誇りとしている」

良い関係ね。羨ましい友情関係。

「でも、お兄ちゃんは私のせいで曲げてしまつかもしれない」

「それが怖いのか？」

「そう。友情が深いからこそ、本当の意味で仲違いしたらきつと・・・」

「・」

自分のせいで兄の友情関係が壊れてしまうのが怖い。

三人をお兄ちゃんとして慕っているからこそ余計に。

「でも、そんな事はさせないわ」

「え？」

「そんな事は絶対にさせない。だって・・・」

だって、ここには皆がいるもの。

ナデシコの皆で貴女を護るわ。

だから、安心して。ユキナちゃん。

「私達が貴女をまもる」

「シラトリ・ユキナだな？」

「・・・え？」

突如として背後から聞こえてきた声。
どうしてだろう？ 凄く・・・振り向きたくない。

「檻から飛び立とうとする鳥の枷カラスとなってもらおうぞ」

「ミ、ミナトさん」

「だ、大丈夫よ。だって、ここは・・・」

地球連合軍の基地だもの。
護ってくれる軍人がいる。

「・・・いない？」

どうして？ 地球人の本拠地なのよ？

・・・そうか。皆、出撃中なんだ。

そうじゃなくても、モニターしか見えていない。

誰もこんな所に・・・いる筈がないんだ。

いつもユキナちゃんを護ってる護衛も・・・ここにはいない。

彼らも司令、司令とモニターを噛り付くように見ていた。

・・・今、この空間には・・・私達しかいないんだ。

「我らが栄光の礎となれ」

震える身体に鞭を打って、振り向く。

眼の前には・・・爬虫類のような顔の男。

全身から・・・恐怖が込み上げてくる。

本能が・・・彼との接触を拒んだ。

「ユキナちゃん！ 逃げ」

「眠れ」

ドガッ！

「うっ」

「ミナトさん！」

「付いて来てもらおう」

ユキナ・・・ちゃん。

御願い・・・逃げ・・・て・・・。

S I D E O U T

「・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

流石に・・・これだけの長時間の戦闘は厳しいな。

『・・・コウキ。弾切れしちゃったわ』

「・・・仕方ないさ。誰だってこんな時間、持ちやしない」

『私も弾切れです』

俺も弾切れだ。

既に格闘戦以外の攻撃する方法はなくなってる。

「クソッ。どれだけ用意してんだよ」

どれだけやっても減らない敵機。

既に有人機は数えられる程だが、バッタなどの無人兵器は際限なく

現れる。

何だ？　これが木連の最終決戦ってか？

『隊長。戦線を下げますか？』

・・・それも考慮しなくちゃならないか。

「全機、戦線を下げる。後退を」

『た、隊長！　我々も復帰します！』

04？　05？

「お前ら、どうして？」

『修理と補給を終えたので。隊長達はこれを』

弾薬？　補給させてくれるのか？

ありがたい。

「すまない。助かった。カエデ。ライフル返せ」

『ええ。助かったわ。ありがとう』

カエデに投げ渡されたラピットライフルに弾薬を詰める。肩のレールキャノン用の弾も数発だけだが補給できた。

おし。これでまだ戦える。

『それと、司令部より伝言があります』

「何だ？」

『後少し戦線を維持してくれ。戦況を覆す援軍が現れる』

後少しってどれくらいだよ・・・。

曖昧だなあ……。先の見えないマラソン程辛いものはないってのに。

ま、戦況を覆す援軍つてのは嘘じゃないと思うから……。

「気張るか」

後少しで終わる。

それなら、やるしかないだろう。

「各機へ通達。最後だ。死ぬ寸前まで暴れまわれ」

『『『了解!』』』

『死ぬつもりなんてないわよ!』

「その意気だ」

さて、やりますか。

その援軍とやらが来るまで……。

際限なき八工叩きを。

「ラッストオ! ……ハア……ハア……」

お、終わった……のか?

一応、眼に見える範囲は全て破壊したが。

『た、隊長、この後は?』

「少し休む。流石に限界だ」

俺、ヒラノ、カエデの三人は休まずにぶっ通し。
いつ倒れてもおかしくない。

『分かりました。私達が警戒を』
「すまないな。助かる」

後から合流してきて、一応余裕がある04、05の二人に周囲の警戒を任せる。

これではばらけなら休めるだ。

『隊長！ 来ました！』

休ませろつての！ マジで！

「ダア！ ヒラノ！ カエデ！」

『・・・は、はい・・・』

『・・・な、何よ・・・』

疲れてるみたいだな。

勿論、俺もだけど。

「お前達は04、05の援護」

『・・・了解』

『や、やってやるうじゃない』

「04、05、暴れる。暴れまわれ」

『了解』

『コウキはどうするのよ？』

「あん？ 俺か？ 最後までやってやるうじゃないか！」

限界なんてないんだよ。

・・・嘘。ごめん。

限界超えると開き直っちゃうって奴だから。
多分、戦闘終了後、ぶっ倒れるだろうな・・・。

「かかってこいや！」

シュツ！ ダツ！ ダダダダダツ！

・・・あ、あれ？ 来ない？ 逃げた？

『マスター。敵機引き上げていきます』

どういう事？

『コウキ。どうなってるの？』

「俺にも分からん」

勝手に攻めてきて、勝手に引き上げるってどうよ？
せめて説明してから帰れっての。
あ。無理ですか。そうですね。

『マスター』

「どうした？ アザレア」

『理由が分かりました』

「何だった？」

『太平洋に展開された木連艦隊が全滅したようです』

なるほどね。でも、随分と突然だな。

戦況を理解してた訳じゃないけど、そんなきっかけもなしに終わるものか？

それに、戦況を覆す援軍とかなんとか言ってたし。

「何で分かる？」

『いえ。全滅したとしか・・・』

そっか。まあ、連絡が取れなければ分からないよな。普通。

『すみません。私は駄目な子です』

あ、ああ・・・どうして、こうすぐに落ち込むかな。普段とギャップがあり過ぎる。

「あ。いや。それだけ分かれば大丈夫だから」

『・・・シユンツ』

どうしてセレス嬢と同じく擬音を口にする？
そんなに落ち込まなくて良いからさ。

「おし。アザレア」

『・・・はい』

「帰還する。道案内を頼む」

『は、はい!』

落ち込んでる暇はないぞ。

「各員へ告ぐ。我々の勝利だ。良くやった。基地へ帰還するぞ」

『『『了解!』』』

『終わった？ 終わったのね?』

「カエデ。了解は?」

『えっ?』

「命令に対してちゃんと返事しないと確認できないだろ」
『あ、そうね。了解』

大事なんだぞ。返事ってのは。
全員無事かどうか確認する為にもな。

「第一小隊。ちゃんと付いて来いよ」

『『『『了解！』』』』

良く出来ました。花丸。

「ん？」

『どうかしましたか？ 隊長』

「いや……」

基地帰還中に怪しい何かを見付けた。
あれは……輸送機か？
この状況で？

「ヒラノ」

『はい。何でしょう？』

「第一小隊を連れて先に帰っていてくれ」

『は？ 如何しましたか？』

「嫌な予感がするんだ」

『……分かりました。御気を付けて』

帰還予定の基地からまるで逃げ出すように飛び出してくる輸送機。補給の為の輸送機だったら、別におかしくはないが……。戦闘中に果たして基地に物資を輸送しに来るだろうか？ おかしくはないの……。かな？

『どうしたの？』

「カエデか。ちょっと気になる事があってな」

『私も付いていこうか？』

「いや。構わない。先に休んでいてくれ」

『そう？ それなら、いいけど』

第一小隊と別れ、輸送機の後を追う。

輸送機は日本の陸地を過ぎ、海上へと出た。

まだ日本からそこまで離れていない為、ギリギリ行動できるが、そろそろ限界稼動距離になる。

それまでにきちん確認できればいいんだが……。

「アザレア。機体の状況は？」

『各部に損傷があります。通常戦闘は辛うじて可能ですが、無茶な事は……』

「武器は？」

『どの武装も残弾が残り少なく、使えるのはディストーションブレードぐらいかと』

「了解」

流石にあれだけ戦い続ければガタも出てくるよな。

無理は出来ないか……。

武器も接近戦用のしかないし……。

「もう一つ。あの輸送機の所属は？」

『クリムゾン製のようです。所属は・・・』

クリムゾン製？

この方向には・・・確か北米基地があったよな。

「北米方面軍か？」

『はい。そのようです』

北米方面軍所属の輸送機が何故日本に？

「通信取れるか？」

『試みます』

北米基地へ向かう怪しげな輸送機。

これが亜細亜支部とかだったらスルーしてもいいけど・・・。
なんとなく北米支部ではちょっと信用出来ない。

『・・・駄目です。拒否されています』

通信を入れても拒否・・・か。

ますますもって怪しいな。

「アザレア。もう一度強引に」

『マスター！ 熱源反応。海中から何か飛び出してきました！』

何ッ！？

海中からだど？

あれは・・・積尺気・・・。

ッ！ 輸送機が危ない！

「おい！ 敵がいるぞ！ 下がれ！」
『聞こえていません！ マスター！』

クソッ！ 落とさせる訳にはいかないだろ！

限界稼動距離は既にオーバーしているが、すぐに戻れば良い！

「突っ込むぞ！ アザレア」

『はい！ マスター！』

間に合え！ 間に合えッ！

「うおおおー！」

ダンッ！ ダンッ！

クッ！ ミサイルを撃たれた。

積尺気の搭載限界数である四基のミサイルが輸送機に向かう。

狙いは輸送機？ 俺なんて眼中にないってか？

敵機を破壊してすぐさまライフルで撃ち抜く！

「ハア！」

ミサイルを撃つてすぐの隙だらけの機体にディストーションブレードを叩き付ける。

ガキンッ！

クソッ！ 両腕を犠牲にして、防ぎやがった。

やばいッ！ ミサイルがッ！

「ロツクオ」

ガンツ！

『マスター！ 照準が付けられません！』

た、体当たりしてきやがった！

お前に構ってる暇なんてないってのに。

「この野郎！ 調子に乗るな！」

ダンツ！

体当たり後、離脱していた敵機にレールキャノンをぶち込む。

これで撃破しただろ！

「早く！ 急げ！」

今にも輸送機にぶつかりそうなミサイルにライフルを放つ。

ダンツ！ ダンツ！ カツツ。

「カツツ？ 弾切れか！？」

まだまだ！ まだいける！

二基は破壊したんだ。

あとたったの二基じゃないか。

「レールキャノンセット」

『マスター！ さっきので最後です！』

「クソッ！ それなら、フィールドガンランスで！」

背中に手を伸ばす。

・・・ない。

ッ！ そうだ！ カエデに渡したまま！

「これなら！」

カツッ。

「クソッ！ こっちも弾切れかよ！」

ガントレットアームも既に弾切れ。

当たり前だ。補給できていなかったんだから。

「クッ！」

・・・諦めるしかないのか？

いや。まだまだ！ まだ手段はある！

「ウオオオオッ！」

出力のリミッターを切り、この機体に出せる最高速度でミサイルに向かう。

ミサイルが破壊できれば、その後で空中分解しても構わない！

なんとしてもぶつかる前に切り裂いてみせる！

「まず一つ！」

接近して、切り裂く。

これであと一つだ！

「間に合ええええー！！」

間に合う！ 俺の計算なら、この速度、この距離ならギリギリ間に合う！

後少し！ 後少しなんだ！

もう少しだけ……。

『マスター！ 離脱してください！』

「後少しなんだ！ 間に合う！」

『駄目です！ 機体が耐えられません！ エネルギーも不足していません！』

「諦めるな！ まだ」

『アサルトピットを離脱させます！』

「待て！ アザレア！」

……俺の行動は無意味だったというのか？

アサルトピットごと俺が離脱してすぐ、アドニスは空中分解し、海へと散っていった。

今までの戦闘で損傷した部分がリミッター解除後の機動に耐えられなかったらしい。

そして……。

ダンッ！ バンッ！ バンッ！ ドオオオッオオン！

眼の前で撃墜される輸送機。

たった一基、たった一基のミサイルに間に合わないだけで、全ての行為が無駄となった。

どう足掻いても動かないアサルトピットの中、俺はこの光景を眺め

る事しか出来なかつたんだ。

『申し訳ございません。マスター』

「何故だ！ 何故あの時お前は勝手な事を

」

・・・いや。アザレアは悪くない。

あのままでは俺が死んでいたんだ。

アザレアの判断は正しい。

ただ・・・俺が未熟だったただけだ。

『この罰は如何様にも 』

「いや」

『え？』

「すまない。助かった。お前は何も悪くない」

『・・・マスター。いえ』

眞実は闇の中。

謎の輸送機はただ謎のまま終わった。

クリムゾン製で北米基地。

分かったのはただそれだけ・・・か。

「アザレア。救難信号を出しておいてくれ」

海にぶかぶかと浮かぶアサルトピット。

その上部に位置する扉を開ける。

『はい。マスターはどこへ？』

「ちよつと外の空気を吸いたくてな」

『分かりました。御気を付けて』

「アザレア」

『はい』
「ありがとな」

一人だったら、もつと辛かった。

『いえ。マスターの傍らこそ私の居場所ですから』
「そうか・・・」

子供みたいな奴に元氣付けられるなんて・・・。
なんて情けない親だ。

「・・・でも」

ありがとう。アザレア。
俺には出来過ぎた子供だよ。お前は。

「・・・はあ・・・」

外に出て深呼吸。

こんなにも眼の前で成功を逃した事が今までにあっただろうか？
なんたる未熟。何が教官だ。何が小隊長だ。

どれだけ己惚れれば気が済む。最後を締められない奴は新人以下だ
ろうに。

「・・・エネルギー不足・・・ね。どちらにしろ、失敗してたのか。
・・・俺は」

限界稼動距離を超え、内蔵バッテリーのみで賄っていた戦闘。

無茶な機動で損傷を悪化させたり、無茶な行動でエネルギーを余分に
使ったり。

あのまま空中分解せずとも、エネルギー不足で止まっていたらどうだろう。そうなら、もしかしたら離脱する事も不可能だったかもしれない。

「……余裕がない時こそ、細かい事に気を配らなくちゃいけないって事か。」

今回の戦闘では多くの事を学んだな。

「……いや。違うか。」

学んだんじゃない。露見したんだ。

俺が抱える多くの未熟が。

誤魔化すな。直視しろ。

「結局、俺もまだまだ未熟って事だな……」

強くならないと。

眼の前で失わないように。

護りたい人を護れるように。

『聞こえますか？』

「ん？」

お迎えが来たか？

「はい。聞こえています」

『隊長。ご無事ですか？』

「ああ。ヒラノか。わざわざすまないな」

アサルトピット内に通信が入り、俺も急いで中へ戻る。

『救難信号が隊長の向かった方向から発信されたので、驚きました』

『ト』

「色々あつてな」

『基地を代表して、私が迎えにきた所存です』

「ありがとう。詳しい事は後で話すよ」

『了解しました』

一応、報告しないとな。

輸送機が基地から出てきた事も。

輸送機が落とされた事も。

『どうやら他にも救難信号を受け取った者がいるようですね』

「ん？ どこだ？」

『北の方角ですね。人型機動兵器に乗っています』

モニターから映像が見えないので、外に飛び出す。

えっとお、北の方角ね。どれどれ・・・なッ！

「嘘だろ!?!」

『如何しましたか?』

アサルトピット内からヒラノの声が聞こえてくる。

でも、その音は耳の右から左へと抜けていった。

ヒラノの言葉を脳が感知しない。

それは、それ以上に眼の前の光景に意識を奪われていたから。

強化された視力でもギリギリで、点のようにしか映らない距離のそれ。

でも、確かにあの機体だった。

「ヒラノ！ 奴を追え！」

『突然どうしたのです?』

「いいから追うんだ！」

反転する機体。

そのカラーリングはある男の漆黒と対照的な深紅。

『不可能です。あちら側には重力波がありません。』

追っても追いつく前にこちらのエネルギーが切れてしまいます』

クソッ！

「それなら、せめて映像だけでも取っておいてくれ！」

『わ、分かりました』

・・・アドニスから離脱する前にはそんな反応はなかった筈。

それなのに、突然出現したというのなら・・・。

・・・短距離ボソンジャンプ。

もしや・・・。

「あの輸送機に乗せられていたのは・・・夜天光？」

無性に悔しかった。

眼の前で輸送機が爆破されるより。

強大な敵の前で身動きが出来ず、見送るだけだった事が。

「北米支部。クリムゾン。輸送機。夜天光。・・・木連」

点が線になった気がした。

第八十五話（後書き）

更に混迷ですね。

收拾が付かなくなりそうですが、とことんいつちやいます。

一応、解決方法も同時進行で構築中ですので、決して作者の乱心じゃないのでご安心下さい。

それでは、また明日、御会いしましょう。

第八十六話（前書き）

さてさて、ようやくの後半。

前、中、後と文字数が全然違うのは・・・ごめんなさいとしか・・・

今回の戦闘での影響を書き綴りました。

さて、納得していただけるかどうかはちょっと分かりませんね。

第八十六話

「ヒラノ。戦況を覆す援軍ってのは何だったんだ？」

『見れば分かりますよ。既に基地にいますから』

見れば分かる・・・ねえ。

現在、アサルトピットをヒラノに抱えてもらって帰還中。

ちゃんと夜天光の映像を取らせたから、後で整備班辺りに確認しようと思う。

もしあの輸送機に夜天光が搭載されていたのなら、誰かしらが見ている筈だし。

しかし、何が目的だったんだ？

それに、どうしてわざわざ味方に攻撃させた？

事実を偽造、隠蔽するつもりだったのか？

それとも、単純に俺の勘違い？

・・・不確定事項が多過ぎて、検討もつかない。

基地に到着したら情報集めに駆け回る必要があるな。

既に先程の夜天光のデータもコピーしてもらってある。

『そろそろ見えてきますよ』

ヒラノのエステバリスの映像をアサルトピットに回してもらい確認
ん？ あれは・・・。

「ナデシコ・・・か？」

・・・いや。違う。

カラーは似てるけど、形状が異なる。

ナデシコの形状はどちらかという鋭い。

それに対して、これは丸みを帯びていて、なんとなく装甲が厚い感じがする。

「あれは・・・」

『あれこそが明日香製の新しい戦艦、改革和平派旗艦の菊桜キクザクラです』

・・・キクザクラ。

日本らしい名称だ。

「なるほど。あれが戦況を覆す援軍か」

『はい。そう聞きました。やはりナデシコ級は桁違いですね』

破壊力は随一だからな。

一隻で連合軍の戦艦十隻分以上の働きをしてくれるだろう。

「誰が乗ってたかとか分かるか？」

『いえ。流石にそれまでは・・・』

それなら、参謀にでも聞くしかないか・・・。

『それでは、降りますよ』

「ああ。すまなかったな」

『いえ』

基地に辿り着き、格納庫へと向かう。

どの小隊も帰艦しており、総出で出迎えられた。

「コウキ。どうしたんだよ？」
「ちよつと気になる事があってな。心配はいらないぞ。ガイ」
「でもよお、お前が落とされるなんて」
「誰だつて落とされる時は落とされるっての」
「・・・怖い事言つなよ」

それが真理だよ。

「見たか？ コウキ」
「凄かったんだよ。キクザクラ」
「・・・ナデシコ並みの攻撃力だったわ」
「みたいですね。三人とも、前線での戦闘、お疲れ様です」

興奮冷めやらぬといった感じ。

「おお。お前達もお疲れ様だったな」
「いやあ。大変だったよお」
「・・・久しぶりに人の死を実感したわ」
「・・・それじゃあ」
「ええ。私の所は一人」
「俺の所は二人だ」
「・・・私も一人だったかな」

最前線だもんな。
俺達以上に激戦だった筈。
誰も死なない方が珍しいだろう。

「脱出までは良かったんだけどよ。対応に遅れてアサルトピット」と破壊されちゃった」
「流れ弾に当たってそのまま爆発。逃げる余裕もなかったみたい」

「・・・私の所は新人を庇ったベテランが死んだわ」

「そうですか・・・。」

「運が良かったんだろうな。」

「前線じゃなかったし、離脱するだけの余裕はあった。」

「すいませ」

「・・・違う。」

「謝罪なんてただの偽善だ。」

「するならば・・・。」

「ありがとうございます」

「それが命を懸けた民を護った軍人に掛けるべき言葉。」

「そして、その者の犠牲の上に成り立っている俺達が背負うべき業。」

「・・・謝ったって返ってくる訳じゃないんだ。」

「殺してしまった業を背負い、彼らの分まで生きよう。」

「それが、残された者の進むべき道。」

「そう言われれば報われるだろうよ」

「分かってるじゃん。コウキ」

「謝った所で逃げてるだけだものね」

「シビアですね。イズミさん。」

「誰がいつ死ぬかなんて分かりません。でも、どうせ死ぬなら」

「」

「へっ。どうせ死ぬなんて言ってるじゃねえよ」

「ガイ」

「確かに誰がいつ死ぬかなんて分からねえ。それこそ神様ぐらいだろさ。」

でもよ、自分も死なず、誰も殺されないよう努力すんのが正しい道だろ。

どうせ死ぬ？ 馬鹿言うな。死ぬ前から死んだ後の事なんて考えてんじゃねえよ」

「そりゃあそうだ」

「死んだら何も考えられないって」

「あ。それもそうだ」

「相変わらずリョーコは馬鹿ね」

「馬鹿って何だよ。馬鹿って」

「ガイ君と同じって事」

「それはねえだろ！ こいつと一緒にするんじゃねえ！」

あらら。喧嘩が勃発しちゃいましたよ。

・・・でも、ガイの言う通りだ。

死んだ後の事なんて、それこそ死ぬ間際に考えればいい。

今はただ生きる事を。そして、生かす事を。

「お疲れ様です。コウキさん」

「イツキさんこそお疲れ様です」

「私達は運が良かったですね。戦死者がいません」

「ええ。イツキさん達教官の指導のお陰です」

「いえ。訓練生達の頑張りですよ」

「ハハッ。今は誰のお陰かより生還を喜びましょうよ」

「そうですね」

死んだ者もいた。

でも、無事に帰ってきた者もいた。

生と死を分かつのは本当に一瞬。

運もあるし、実力もある。
でも、どんな理由だって良い。
生きて帰って来れたんだ。
今はただ、その喜びを噛み締めよう。

「しかし、やはり仲間の死は辛いですね」
「ええ」

今までその者がいるのは当然の事だった。
それなのに、一瞬で当然が当然じゃなくなる。
そして、その者が視界に映る事は二度とない。
それがどんなに寂しく、辛い事か。

「私は軍人です」
「ええ」

「ナデシコの皆さんは元々軍人ではないですし、軍人のような考え
方でもありません」

「それは軍人としての覚悟が足りないか？」

そんな事はないと思うけどな。

「いえ。そうではありません」

あれ？ それなら、どういう意味だろう？

「軍人じゃないのに、何故か理想の軍隊に見えるんです」
「ナデシコが理想の軍隊？」

「ええ。仲間を想い、慈しみ、家族のように団結する。軍じゃこつ
はいきません」

「まあ、それがナデシコの強さですからね」

「はい。だからこそ軍人以上に強い。何より心が」

心が強い……。

「ナデシコの皆さんこそ軍人としての覚悟を誰よりも持っていると思います」

「ナデシコクルーに言ったら嫌がりそうな言葉ですね」

「そうかもしれない」

苦笑しあう。

軍を毛嫌いしてるナデシコクルーが軍人らしいと言われて喜ぶ筈がない。

「軍人は死と隣り合わせ。だから、人の死は乗り越える強さがないといけません」

「……」

「それなのに、私はいつまで経っても乗り越えられずに悲しむだけでした」

……イツキさん。

「でも、ナデシコの皆さんは違った」

「ナデシコクルーが？」

「ええ。悲しむのは同じなんです。でも、それだけでは決して終わらない。

人の死を嘆くだけではなく、必ず乗り越え、その想いを後へと残していきます。強く強く」

「それがイツキさんの言う乗り越える強さですか？」

「ええ。悲しむだけなら誰でも出来る。でも、その意思を残す事は強い者にしか出来ない」

意思を残す。

死んだ者の想いを受け止める。

「イツキさんもそうなれましたか？」

「はい。ナデシコが私を変えてくれました。

私は多くの友人をこの戦争で失くしています。

その事で恨みを抱えた事も憎しみを抱えた事もありました」

そうだよな。

軍人として活動していればその友達も多くは軍人。

この戦争で一番の死者を出してるのも、もちろん軍人。

俺なんかよりもっとこの人は仲間の死を実感しているんだ。

「でも、考えました。憎しみを抱いて何になるのかって。

彼らの死を無駄にしない為に私には何が出来るのかって」

「死を乗り越えたんですね」

「ええ。ナデシコに乗り、その想いも強くなりました。

だから、私も木連との和平に力を尽くしたい。そう考えているんです」

「それがイツキさんの結論ですか」

「ええ」

人の死。

残された者の想い。

過去の因縁。

未来への希望。

難しい、戦争とは本当に難しい事ばかりだ。

出来るなら何も考えずにポーっとしていたい。

でも、俺達は先代の勇者達の念を背負っている。

一般兵であろうと、指揮官であろうと、共に願うは平和のある未来。誰もが勇者で、誰もが英雄だ。その想いを受け、座ったままじゃいられないだろ。

「これからもよろしく御願います。イツキさん」
「こちらこそ」

ガツチリと握手。

イツキさんの決意を聞き、俺の決意も更に固まったように感じる。

「全員揃ったようだね」
「・・・参謀」

格納庫に参謀の姿が現れる。
全員集まるのを待っていたようだ。
でも、全員ではないぞ。
カエデの姿が見えない。

「参謀。カエデが」
「カエデさんならそこに」
「え？」

イツキさんに示された方向を見る。

「・・・スー・・・スー・・・」

あ、あいつ、寝てやがる！

皆がこうして想いを重ねている時に一人で寝てやがった。

「す、すいません。参謀。起こして」

「いいさ。誰だって疲れている。早く休みたいのだろう」

・・・甘いですよ。参謀。

あいつはちゃんと言わないと理解しません。

「時間は取らせんよ。ただほんの少しだけ付き合っただけ欲しい」
「・・・はい」

きつと、参謀は・・・。

「命を懸け、未来に尽くした英雄達に・・・敬礼」

ただ黙祷を捧げる為だけにここまで来たんだ。

「・・・」
「・・・」

誰もが無言で祈りを捧げる。

何を思うのだろうか。

安らかに眠れ？

後は任せろ？

意思は受け継ぐ？

きつと言葉になんて出来ない。

今まで共に歩んできた軌跡を思い出し、

万感の想いを込めて、彼らは祈っている。

だからこそその黙祷。

言葉に出来ない想いを無言という言葉に乗せて。

彼らは死者に送っているんだ・・・。

「敬礼、やめ」

ゆっくりした動作で敬礼を解く。

この場にいる誰もが悲しみを胸の奥に押し込み、遙か先を見詰めた。

「解散とする。しっかり休み、体調を整えろ。それも軍人の仕事だ」
「ハッ！」「ハッ！」「ハッ！」

参謀の言葉に従い、誰もが足早に去っていく。

早く休みたいのだろう。その気持ち、痛い程に分かる。
だが……。

「俺には聞くべき事がある」

情報収集に駆け回らなければ。

「まずは……」

整備班の所にい。

「マエヤマ君」

「え？」

呼ばれた？

「何でしょうか？ 参謀」

「連絡が遅れてしまったね。ナデシコクルーはキクザクラの前に
集まって欲しい」

それは都合が良いな。

整備班もいるし、ムネタケ参謀もいる。

キクザクラのクルーもこれで分かるし。
一石三鳥だ。

「了解。カエデは如何しますか？」
「休ませてあげよう。初陣に近い中、限界まで頑張ったんだ」
「分かりました」

よく御存知ですね。
部下の事は全て把握しているという事ですか。
流石です。参謀。

「君が医務室まで送っていつてくれるかい。集まるのに時間が掛かるだろうから」

「え？ 俺ですか？」

「君達は仲が良いんだろう？」

「ええ。まあ・・・」

でも、普通カエデは女性なんだから女性に頼みませんか？

「ついでに、確認して欲しい事もあってね」

「それって・・・」

「ハルカ・ミナト君。彼女も今、医務室にいる」

「え？ ミナトさんが？」

どうして基地にいた筈のミナトさんが医務室に？
何かあったのか？

「彼女は廊下で倒れていたんだ。一人で」
「・・・倒れていた？」

廊下に一人で？

・・・状況は分からない。
でも、分かる事もある。
それは・・・。

「し、失礼します！」

彼女の身に何かがあったという事。

俺が傍にいてやらなければならぬという事だ。

ベンチで眠るカエデを走り易いよう持ち上げ、医務室へ向かう。

すまないが、かなり揺れるけど、我慢してくれよ。

「もし眼を覚ましていたら、彼女達もナデシコに・・・。

・・・聞こえてないね。それ程、彼女が大切って事が。

キリシマ君を放っておかない所を見ると彼女の事も大切にしている
ようだけど・・・。

あの姿を見る限り、抱いている感情の方向性かが違うって所か。

ふむ、若いつてのは素晴らしい事だな。私達には懐かしい事だよ。

なあ。コウイチロウ」

「ミナトさん！」

廊下を駆け、医務室の扉を開く。

「シート。医務室ではお静かに御願ひします。患者が眠っています

から」

「あ。すみません」

「お姫様を連れて来たんですか？」

「え？」

「だって、お姫様抱っこですもの」

あ。走り易さだけで考えてた。

こいつ、軽いから、この体勢が一番運び易いんだよな。

「え、あ、いえ。違います」

「あら。完全否定？ 可哀想」

「え、えっと、こいつを寝かせるベットってありますか？」

「ええ。これを使って」

疲労から眠ってるだけだろうから、特にしてやる事もない。

起きたら自室に戻るようにつて医務室の方に伝えてもらうとして。
そんな事より……。

「あの、ここにハルカ・ミナトという方がいると」

「ああ。はい。こちらです」

医務室の方に案内され、カーテンで仕切られた一つの空間に入る。

「……ミナトさん」

ベットでスヤスヤと眠るミナトさん。

その顔に苦痛の色はない。

……とりあえず、大事ではないようだな。

「あのミナトさんはどのような？」

「気絶して眠っているだけです。少しお腹に殴られたと思われる跡がありますか・・・」

殴られて気絶？

誰がそんな事を。

見付けたらぶっ飛ばしてやる。

「そろそろ眼を覚ますと思いますよ。運ばれてから結構経ちますし、綺麗に入っていましたから」

な、何か武術の心得が？

「ん・・・んん・・・」

「ミナトさん」

起きるのかな？

「それでは、私は失礼しますね」

「あ、はい。ありがとうございます」

「いえいえ」

ベットの脇にある椅子に座り、ミナトさんの手を握る。

何があったのかって聞きたい。でも、それより前にまずはちゃんと起きてもらわないと。

「・・・どこは？」

「おはようございます。ミナトさん」

「コウキ君？ あれ？ どうしてこんな所に？」

「廊下で倒れてたって聞いて。心配しましたよ」

「そう。心配掛けたわね」

「いえ。何があつたんですか？」
「・・・廊下・・・ッ！ ユキナちゃん！ ユキナちゃんはどこ？」

ユキナ嬢？ ユキナ嬢がどうかしたのか？

「ユキナちゃんが！」

「お、落ち着いてください。ミナトさん」

「コウキ君！ ユキナちゃんが」

「ミナトさん。深呼吸。ゆっくりでいいですから」

「え、ええ。スーッハーッスーッハーッ」

落ち着いてください。

ちゃんと状況を確認しないと大変な事になります。

「落ち着きました？」

「ええ。取り乱してごめんなさい」

「いえ。それで、ユキナちゃんがどうかしたんですか？」

「今、この基地にユキナちゃんはある？」

「ちよつと分からないです。俺も帰ってきたばっかりですから」

「・・・そっか。どうすれば確認が取れるかしら・・・」

ミナトさんではなく、ユキナ嬢の身に何かあつたって事が。

確かに、基地に帰って来てからすれ違つてないしな。

一応、ユキナ嬢もナデシコで保護している身だから・・・。

「今、ナデシコクルーに集合が掛かつてるんです」

「それなら、ユキナちゃんがいるとしたらそこにいるのね」

「はい」

いるとしたら……。
どうしていない前提なんだ？

「……間違いであって欲しいけど……」
「ミナトさん？」

これだけ切羽詰った顔をしている。
あの冷静なミナトさんが。

……嫌な予感がしてきた。

もし、ユキナ嬢がここにいなければ……。

誰かがユキナ嬢を誘拐したという事。

下手すれば、木連人であるという理由で怒りに我を忘れた地球人に殺されたなんて事も。

必ず護ると約束したのに。俺はツクモさん達からの信頼を裏切った事になってしまう。

何より、ユキナ嬢が心配だ……。

「ミナトさん。立てますか？」

「ええ。集合場所はどこ？」

「案内します。付いて来てください」

「分かったわ」

立ち上がるうとするミナトさんに手を貸した後、医務室の出口へ向かう。

途中、カエデが眠っているベットもあり……。

「お姉さん。そいつの事、よろしく御願います」

「まあ、お姉さんだって。良い子ね。貴方」

「それじゃあ！」

「あ……行っちゃった」

すいませんが、構っている余裕はないんです。

シューインッ。

医務室から飛び出す。

「急ぎましょう」

「ええ」

急ぎ広場にあるキクザクラのもとへ向かう。

・・・胸騒ぎが収まらないのだ。

「・・・ハア・・・ハア・・・」

長い廊下を抜け、ようやくキクザクラが見えてきた。
運動音痴ではないが、あまり運動をしないミナトさんは息が切れてしまっている。

「あれは？」

「キクザクラです。詳しい事はまた後で」

「え、ええ」

「大丈夫ですか？」

「後・・・ハア・・・少しだもの・・・ハア・・・大丈夫よ」

最後の廊下を駆け抜ける。

ここを抜ければ、キクザクラの前だ。

「……ふう……」

「……ハア……ハア……」

「お待ちしていました。こちらへ」

キクザクラの前で待機していた軍人にキクザクラの格納庫へ案内される。

「遅れました」

「……ハア……ハア……遅れました」

格納庫には整備班を始めとするナデシコクルーが揃っていた。

隣のミナトさんは息を吐きながらどうにか挨拶。

キクザクラ内でも休む事なく駆け足できたので、息があがるのも仕方がない。

「おいおい。そんなに急がなくても良かったらうに」

膝に手を付いて息を吐くミナトさんを見て、呆れるように告げるウリバタケさん。

周囲もそれで笑ってる。まあ、気持ちは分からなくもない。

でも、今は……。

「参謀。聞きたい事が」

「マエヤマ君。それに関しては後で聞こう」

「……分かりました」

ナデシコクルーを集めたんだ。

先に話す事がある筈。

仕方がない。終わるまで待っていていよう。

「ミナトさん」

「ええ。分かっているわ」

「すみません。お役に立てず。」

「ナデシコクルーの諸君。よく集まってくれた」

ムネタケ参謀が前に立ち、話し始める。

あれ？ でも、パイロット以外のナデシコ主要メンバーは揃ってないぞ？

いいのか？ 話を進めて。」

「知っていると思うが、改めて報告しよう。」

この戦艦の名はキクザクラ。私達改革和平派の旗艦として、明日香に依頼した戦艦だ」

「それはナデシコが基になっているのか？」

「うむ。ナデシコの改修が出来ているのも既に明日香で開発環境が整っていたからなのだよ」

「それで中々準備が整わないって言うてたのか」

その戦艦を造ったから時間が掛かったって訳だ。

確かに同時進行は厳しいだろう。それだけ大規模な作業にもなれば。」

「武装は可動式グラビティブラスト四門。機関銃。追尾式ミサイル」

ナデシコのYユニットのようなものは装備されていない訳だ。

しかし、可動式グラビティブラストか。便利そうだな。」

一方向以外にも強力な一撃が撃てるというのは。」

「出力源は相転移エンジンが四基、核パルスエンジンも四基が搭載されている」

確かナデシコは相転移エンジンが二基、核パルスエンジンが四基だった筈。

とりあえず、出力最大値はこちらの方が大きいって事だろう。まあ、多く積めば良いって訳ではないと思うけど。

「もちろん、DF発生装置も組み込まれており、ナデシコにも引けを取らん」

Yユニット搭載前だったら負けてたぐらいだと思いますが。

「そして、この艦のクルーだが」

「参謀。その前にナデシコの艦長を始めとした者達がいらないのですが」

「ふふっ。すぐに会う事になるさ」

え？ どういう意味ですか？

「紹介しよう。今回限りだが、彼らが当艦のクルー達だ」

そう紹介されてから、キクザクラから降りてきたのは……。

「艦長!?!」

「副長も!?!」

「おいおい！ブリッジメンバーが殆どいるじゃねえか!」

「え？アキトさん?」

「セレセレも」

「ルリにラピスもいるじゃねえか」

基地に残っていた筈のナデシコ主要クルーとテンカワー一味。

「戦闘開始後、しばらくして明日香から連絡があつてね」

「そうなんですか？ ミナトさん」

「えっと、ごめんなさい。知らないわ」

極秘事項って奴かな？

それだったら、ミナトさんが知らないのも頷ける。

「最終調整がようやく終わった。」

後はこれを動かせる人員さえ集まれば出撃できる。

突然そう言われてね。指令室に残つてた者達に協力してもらつたんだ」

「同時に参謀から俺達にも連絡が来た。地球の危機とあつては放つておく訳にはいくまい」

「必要最低人数だけ揃え、ミスマル艦長に御願いして前線へ向かつて貰つた訳だ」

「グラビティブラストによる奇襲とアキトのアドニスリアル仕様による攪乱。」

その後もグラビティブラストを連発する事で対処しちゃいました。ブイッ！」

流星はナデシコ級。

シンプルながら、最強の矛を持っている。

相転移砲は規模が多過ぎて使い辛そうだが、可動式グラビティブラストなら使い勝手も良い筈。

攻撃力も申し分ないだろうし。これはYユニット装着のナデシコでもピンチだぞ。

「あれ？ でも、そうするとミナトさんは……」
「……………」

ミナトさんはどうして？

「操舵士に関しては軍人から選出した。その時、既にハルカ君は倒れていたからね」

「……やっぱり、あれは夢じゃなかったのね」

「ミナトさん？」

夢じゃなかったって……。

「どうしてミナトさんは医務室に？」

「それは」

ドタツドタツドタツ！

「総参謀長！」

言い掛けたミナトさんの言葉を遮るように大きな足音と叫び声が聞こえてきた。

「落ち着け！ 無様な姿を見せるな！」

「ハ、ハッ！ 申し訳ありません！」

威厳ある声で告げる参謀。

……今は総参謀長だったんだ。

今まで失礼な事を言ってた気がする。

これからは気を付けないと。

「それで、どうしたんだ？」

「お、お耳を」

ゴニョゴニョゴニョ。

誰にも聞き取れないような小声で話す走ってきた軍人。

俺の強化された聴力でも流石にこの距離であの音量では聞こえない。

「・・・本当か？」

「申し訳ありません。私達が眼を離したせいで」

「・・・今は責任を追及してる暇はない。引き続き、搜索に当たれ」
「は、はいッ」

頭を抱え、苦悩の表情を浮かべるムネタケ総参謀長。

・・・何があつたんだ？ 総参謀長があんな顔をするなんて・・・。

「・・・あの！」

「ミナトさん？」

突然どうしたんですか？

「先程の話はユキナちゃんの事ですか？」

「・・・何の事だね？」

無表情で逆に問いかける総参謀長。

でも、俺は確かに見た。

ユキナ嬢の名が出た時に眉がピクツと動いたのを。

「総参謀長！」

「・・・君まで何かね？ マエヤマ君」

「もし、ユキナちゃんの事であるなら、俺達に教えてください！」

「・・・」

「ナデシコクルーは家族です。家族の事は何だって知っていたい。

それが危険な事だったり、知らずにいたら後悔するような事だったら尚更」

多くの時間、多くの危機を共にしたナデシコ。

そんなナデシコのクルーは家族みたいなもの。

ユキナ嬢だって、そんなナデシコクルーの一員なんだ。

たとえ最近加入してきたからって、そんな事を拘るような狭い心の持ち主はここにはいない。

「総参謀長。私からも御願います。

艦長として、いえ、家族として知っておかなければなりません」
「私もです。総参謀長」

艦長と副長、いや、ユリカ嬢とジユン君が続いてくれた。

「俺達からも御願います」

「ユキナちゃんの事ってんなら、放っておけないっすよー！」
「家族か。そうですね。私達は家族です」

他のクルーも・・・。

ありがとう。皆。

「・・・後悔しないかね？」

ゴクリッ。

言葉の響きが尋常じゃない。

その声は本当に聞いたら後悔するような含みがある。
でも……。

「御願います」

知らずに後悔するくらいなら、知って無茶した方が良い！

「……分かった。心して聞いて欲しい」

「……はい」

「……シラトリ・ユキナが行方不明になった」

静寂が辺りを包む。

「え？ 今……なんて言いました？」

「もう一度言おう。シラトリ・ユキナ。行方不明だ」

ユキナ嬢が……行方不明？

「……やっぱり」

「え？ やっぱりって……」

ど、ど、どという意味ですか！？ ミナトさん！

「……ムネタケ総参謀長」

「君は……何か知ってるのかね？」

「はい。……彼女は私の前で誘拐されましたから
「なっ！？」」

ミナトさんの前でユキナ嬢が！？

「詳しく説明してくれるかな？」

「はい。思えば、私が迂闊でした。」

日頃護衛に囲まれているユキナちゃんを、

基地内だからと安心して連れ出してしまったのですから」

「・・・君が倒れていたのは廊下だったね」

「はい。指令室からユキナちゃんの部屋へと移動している途中です。いきなり背後から声が聞こえてきて、振り向いたら見た事のない男がいました」

見た事のない男？

「その男はなんて？」

「烏の枷だとか、我らの栄光の礎となれだとか」

「ッ！」

その台詞は・・・。

「服装や容姿は覚えているかね？」

「服装は連合軍の軍服でした。容姿は振り向いてすぐだったので、

明確には・・・」

「・・・そうか」

「でも、とても気味の悪い男でした。まるで爬虫類のような」

「・・・草壁の・・・影」

アキトさんが呟く。

草壁の影・・・という事は北辰か・・・。

・・・そして、北辰の搭乗機は夜天光・・・。

「あの！ 総参謀長」

「他にも何かあるのかね？」

「直接関係があるかは分かりませんが・・・」

もし、夜天光がああ、の輸送機に載っていたものだとしたら・・・。

「本日、北米基地から輸送機が来る予定はありましたか？」

「輸送機？ うむ。あ、あの輸送機の事か。」

「予定にはなかったが、弾薬が失くなり補給がしたいと通信があった」

「引き受けたのですか？」

「作戦実行前に話を付けてあったんだよ。」

互いに物資が不足したら絶対返却を条件に譲り渡すと」

「北米支部とですか？」

「いや。作戦参加支部全てとだ」

「それでは、提供を拒否する支部が出てくるのでは？」

誰も好き好んで物資を提供しようとは思わない。

「いや。返却の際には何かしらのオプションを付ける事になっていく」

「オプション？」

「ああ。提供してもらった以上の物資を返したり、その見返りとなる物を提供したりなどだ」

物資を提供すれば、同じ分だけは必ず返ってきて、それに加えて何が得られるという訳か。

一時的に損をしても、長期的に考えれば拒否する必要はない。無論、物資に余裕がある前提だけだ。

「その案はどこの提案ですか？」

「ふむ。北米支部であつたな。世界で最も影響力が一番強い支部の一つだ。」

作戦行動を円滑に進める為には互いに協力する姿勢が何より大事になると言われた承した」

北米支部からの提案。

確かに団結する必要はあるだろうが……。

……その決まりが仇になつたか？

「その輸送機がどうなつたか御存知ですか？」

「途中で木連に撃墜されたと聞いた。弾薬はきちんと借りた分だけ返すそつだ」

下手に出てるように聞こえるが……怪しい。

「北米支部の被害は？」

「こちらより相当酷いと聞いた。上陸も許してしまったそつだよ」

……俺の勘違い？ 単純に物資不足か？

自国にわざわざ被害を与えるような事は普通しないもんな。

もし、したとしたら、国民の事を数でしか考えてないって事になる。そんな軍人は……いないと信じたいが……。

「あのその際に輸送機の中を見た人とかいますか？」

「輸送機の中は見てないけど、物資を積み込む人型兵器なら見たぞ」

お。整備班さん。流石。

「どんな機体でした？」

「ん？ 普通に北米の新型機だつたぞ。確かアステルン」

「ステルンクーゲルですか？」
「そうそう。それだ」

夜天光ではない？

・・・それなら、夜天光は輸送機に載っていなかったって事か？
でも、もしそうだとしたら、何故、あんな場所に夜天光が現れたんだ？

攻撃してくるならまだしも普通に撤退していったし。

「輸送機の中身が気になるのかな？」

「あ、はい」

「ふむ。少し待っていてくれ」

そう言ってどこかに通信を入れる総参謀長。

「うむ。至急な。それでは」

通信が終わり、こちらを見てくる総参謀長。

「搬送の責任者を呼んだ。彼なら輸送機の中身も確認しただろう」

「ありがとうございます」

搬送関係の責任者なら到着時の輸送機の中身、出発時の輸送機の中身を確認しているだろう。

「その輸送機がどうしたのだね？ 私には意味が分からないのだが・

・・・」

「ええ。でも、違っていたら、あらぬ疑いですから。確認してからにしたいのです」

「・・・うむ。それならば、仕方あるまい」

北米支部。クリムゾン。夜天光。
ステルンクーゲルの背景に木連があると知ってるからこそ抱く事の
出来る疑惑。

タツタツタツ！

「只今参りました。総参謀長」

「うむ。マエヤマ君」

「はい」

真実を見極める。

「輸送機が到着した際に何か積まれていましたか？」

「はい。コンテナが四つ程」

「それら全て確認しましたか？」

「いえ。亜細亜支部からの補給物資と言われた為、直接の確認は出
来ませんでした」

「直接？」

「物資提供のリストを拝見させて頂き、不自然な所がないかは確認
しました」

リストは確認しても、直接見た訳ではない・・・か。

怪しいコンテナが四つ。

「物資を提供する見返りは？」

「総参謀長。よろしいですか？」

「うむ。構わんよ」

「我々が物資を提供する代わりに、

研究材料としてステルンクーゲルとその予備パーツを頂戴しまし

た」

研究材料？

研究材料として新型機を提供してまで成し遂げたかった事がある、と見て良いか？

「その二つはどのような形で頂いたんですか？」

「コンテナの四つの内の二つがそうでした」

「コンテナごと頂いたと？」

「ええ。何かおかしいですか？」

「あ、いえ」

コンテナ内に人を忍ばせておけば、基地内に侵入できたかもしれない。

むしろ、それぐらいしか基地内に侵入する方法が思い付かない。

真正面から忍び込む事なんて不可能だし。

いくら戦闘中で警戒が緩くなったからって……え？

今、俺は何を考えた？ 戦闘中で警戒が緩んだ？

……これが狙いか？

基地内の軍人の数も減り、警戒は緩くなる。

ましてや、戦闘が起きてるのは太平洋。

そちらばかりに注意がいつて、足元は疎かになる。

「こちらのコンテナはどのように？」

「格納庫の隅に提供する物資を纏めておきました」

「その事を整備班は？」

「ん？ 知ってたぞ。俺達が用意したんだからな。」

まあ、俺達も帰還した機体の修理やら補給やらで忙しくて、

輸送機に詰め込むコンテナは完全に向こうに任せてたけどな。

纏めて置けば、別に俺達が確認しなくても持つてけるだろうし」

本来であれば逐一確認して物資を積み込んだ筈でも、戦闘中の混乱でそんな余裕もなく、おざなりになってしまった。

「何か怪しい人影を見ませんでしたか？」

「たとえば・・・輸送機への積荷を後から持ってきた軍人とか見たか？」

「そういえば、でかいケースみたいなのを後から積み込んでた奴がいましたね」

「確認したのか？」

「いえ。一応聞いてみましたが、なんでも責任者に頼まれたとか」

「わ、私は聞いていませんよ！」

「え？ マジか？」

・・・ケース。

物を運ぶ為の箱。

大きさによっては、物だけじゃなく者も可能。

「どう運んでました」

「荷台に乗せて運んでたぞ」

「どれくらいの大きさでした？」

「そうだなあ。言葉で表すの難しいが割りと大きかったぞ」

「それに人は入れそうでしたか？」

「流石に人一人は入り切らないと思うぜ。さっきの話に出てたのは男だろう？」

「いえ。そつちじゃなくて。たとえば中学生ぐらいの小柄な女の子ではどうです？」

「うん。それぐらいなら押し込めば不可能じゃねえ・・・おいおい。嘘だろ？」

成人男性が入る大きさのケースは限られてくる。

だが、成長前の小柄な女の子が入るケースぐらいならある程度探せばどこにでもあるだろう。

基地なら、ライフルやらキャノン砲やらを持ち運ぶ為のガンケースぐらいなら探せば・・・。

それに、たとえそれがなくても、軍服の中にそれらしいものを折り畳んでしまっておけば良い。

もちろん、ハードタイプのケースではなく、ソフトタイプのケースをだけど。

そして、軍内でガンケースなどを持ち運んでいても、そこまで違和感是与えない。

連合軍の軍服なんて基地単位で変わらないし、北米基地から貰っておけば良い。

「それを運んでいたのはどんな人でした？」

「軍服で帽子を深く被ってたから見えなかった。・・・なあ」

「・・・何でしょう？」

「・・・もしかして、その中にユキナちゃんが？」

「その可能性は高いかと」

「嘘・・・だろ？」

「そ、それじゃあ北米基地の誰かがユキナちゃんを誘拐したってのか？」

「馬鹿野郎！ ちゃんと確認しやがれ！」

「そ、そんな事言ったって、忙しくてちゃんと対応なんて出来ませんでしたよ！」

「クソツ！ そんな奴、気付きもしなかった。気付いていれば・・・」

「北米基地は何の目的が！？」

ガヤガヤと五月蠅くなる。

・・・でも、この話はまだ終わりじゃないんだ。

「静粛に」

総参謀長が一言で場の混乱を収める。

「マエヤマ君。さっき君は確認したね。その輸送機はどうなったのか？」と

「はい。確かにしました」

「そして、私はこう答えた。途中で木連に撃墜された」と
「撃墜？」

「ユキナちゃんを誘拐した輸送機が墜ちたってのか？」

「それなら、ユキナちゃんは・・・」

誰もが暗い顔をする。

もしかしたら、ユキナ嬢はもう・・・と。
でも、そうではないのだ。

「もし、先程ミナトさんがいった人物がその輸送機に乗っていたとしたら」

「・・・」

「その輸送機は木連である可能性が高いんです」

「も、木連の輸送機？」

「し、しかし、それなら何故木連が木連の輸送機を墜とす!？」

俺の発言が更にクルーを混乱させる。

アキトさん達未来を知る組も怪訝とした顔で俺を見ていた。

「ご存知の通り、俺は皆さんより遅れて基地に帰還しました」

「気になる事があつたつて言つてたな。コウキ」

そういえば、ガイには帰つてすぐにそう言つたな。

「何故かというと眼の前に先程まで話に出てた輸送機を見掛けたからです」

「ッ！ マエヤマ！ お前はユキナちゃんがいるかもしれない輸送機を追つていたのか!？」

「はい。ウリバタケさん。なんか違和感があつたので、気になつて後を付けたんです」

「そ、それで、輸送機はどうなつたんだ？」

「確認しようと通信を試みたのですが、通信拒否。その為、強引に繋ごうとした所を・・・」

「木連の兵器が輸送機を襲つたと」

「はい」

眼の前で撃墜された輸送機。

俺の未熟さを露呈させた瞬間。

「お前なら撃墜される前に破壊できたんじゃないのか？」

「戦闘終了後でポロボロでしたし残弾も残り少なく。

ましてや、接触したのは日本を出た後です。

重力波の範囲外であり、かなり不利な状況でした」

「それでも・・・」

「ええ。俺も俺なりに全力を尽くしました。

でも、後一步及ばず。無理をしたせいで機体は空中分解です」

「・・・そうか」

「・・・はい」

出来なくはない。

以前の俺だったらそう豪語していた筈でも、それが如何に己惚れであったか。今回の戦闘で思い知らされた。

「コウキ。それだけで終わりではないんだろう？」

「・・・アキトさん」

「お前が輸送機を木連とした理由。それを聞かされていない」「はい」

北辰の事が気になるようですね。アキトさん。

「その後しばらくして、ある機体が突然現れました。それが・・・」

ヒラノからもらった映像をモニターに映し出す。

「この機体です」

「お、おい！ コウキ！ この機体は・・・」

「アキトの記憶で見た未来の機動兵器じゃねえか！？」

ガイとスバル嬢が驚きながら告げる。

そう、その深紅の機体こそ・・・。

「夜天光。北辰が乗っていた機体だ」

北辰の愛機、木連のエースパイロット専用機。

「輸送機が爆破されてしばらくしてから現れた夜天光。

これは俺が以前ボソソジャンプしてまで脱出してきた時に襲ってきた機体です」

「あの時ね。カグラヅキと初めて遭遇した時の撤退戦後」

「そうです。俺がカグラヅキからナデシコへ帰艦する途中で・・・」
「・・・という事は草壁派の機体という訳ね」
「・・・はい」

木連の機体が輸送機爆発後に突然現れた。
怪しい事この上ない。

「それでは、マエヤマ君は輸送機のコンテナ内にその機体があったと？」

「はい。コンテナ内に何があったのか分からない以上、その可能性もありえるかと」

「しかし、そのコンテナは亜細亜支部からの補給物資だ。」

「きちんと亜細亜支部にも提供した事を確認してあるのだぞ」

「亜細亜支部で補給したのは確かでしょう。」

でも、途中で中身が入れ替わってないかは俺達には分かりません」

「でもよお、そうだとしたら、輸送機ごと爆発しちまうんじゃないか？」

確かにそんな疑問は浮かぶだろう。

もし、輸送機が墜ちる前に脱出するような形であれば不自然ではない。
い。

でも、俺は言った筈だ。突然現れたと。

点にしか見えない距離でヒラノに言われて初めて気付いた場所に。

「確かに普通であればそうでしょう。眼の前で脱出した所も見ませんでしたし」

「それなら」

「でも、それは普通の機体であった場合です。夜天光はボソソジャンプが出来る」

「何!？」

「あの大きさをボソンジャンプが？」

可能だろう。

未来の情報があるのなら、未来技術の再現は不可能ではない。時間は掛かるが、今までその技術にだけ集中していたとしたら、この時期にこのサイズでボソンジャンプできる機体が出て来ても不思議はないのだ。

「輸送機の爆破も木連が企てていた事であれば、
タイミング良く脱出すれば良いだけですから」

そうすれば、輸送機は爆破され、全ての証拠を消し、夜天光だけが生き残る。

「しかし、木連にジャンパーは・・・」

劇場版で火星の後継者が遺跡を確保し、
ユリカ嬢を演算ユニットに組み込んだのは、
B級ジャンパーを擬似的にA級ジャンパーとする為。

分かり易く言うならば、機械補助で目的地を決め、短距離ジャンプしか出来ないB級ジャンパー。

そのB級ジャンパーのイメージをユリカ嬢に介させる事で遺跡へと伝え、

機械補助なく目的地とし、距離的制限がないジャンプを可能とさせる為の行為。

現状、草壁派が遺跡を確保していたとしても、
ユリカ嬢を組み込んでない遺跡では機械補助なくジャンプは出来ないだろう。

でも、今回はそれでも問題ない。

「一度跳べば良いだけですからね。」

パターンも関係ないですし、タイミングさえ合わせておけば・・・

「木連が輸送機を落とすとした。あらかじめ決めておいた事なら不可能ではない・・・という事が」

「はい」

機械補助でも跳べれば何の問題もない。

「・・・コウキ」

「何だ？ ガイ」

「もし、だ。もしお前の話が全て本当だとしたら・・・」

信じたくない。そんな顔で話しかけてくるガイ。

「木連の悪事に北米支部の誰かが協力してるって事だよな」

「ッ！」

ガイの言葉に息を呑むクルー達。

「しかも、それだけの事が出来るのなら、かなりの権力者だろう」

アキトさんが告げる。

可能性としては基地の全員で木連に協力すると言うのもあるが・・・

まあ、まずないだろうな。

「・・・輸送機を準備して」

「・・・人数分の軍服を用意させた」

「・・・提供された物資を失う事も了承していた筈だよな」

そう、作戦の為の前準備は協力者がいなければ不可能。

しかも、必ず借りた分だけ返さねばならない物資が失われる事を承知で。

北米支部はそれらのリスクを承知した上で木連に手を貸した事になる。

「なあ、もしかして、北米支部の被害が一番酷いのって……」

「この流れを演出する為でしょう。被害が少なければ、他の基地に補給などには来ない」

「そ、それじゃあよ、ユキナちゃんを誘拐する為だけにそこまでの事をしたってか？」

「北米基地にユキナちゃんの誘拐はそれだけの価値があったという事でしょうね」

「北米基地の野郎はこの戦闘が起きる事も知ってたって訳か。明らかな計画的犯行だ」

「馬鹿げてるだろ！ 自国の民を犠牲にしてまで……。狂ってる。狂ってやげるぜ」

ああ。本当に狂ってる。

自身の野望の為に民を数で扱い、捨て駒とする事に忌避がない。
……人間の狂気だ。本当に、兵士が、国民が、報われない。

「ねえ、コウキ君」

「はい」
「木連と北米支部の狙いは何なの？」

木連と北米支部。

手を組み、ここまでの事をするその理由。

「ミナトさん。その男は確かに言ったんですよね。鳥の枷と」
「ええ。確か、檻から飛び立とうとする鳥の枷となってもらおうって」

檻から飛び立とうとする鳥の枷。

檻とは・・・草壁の手の上。手中。

鳥とは・・・三羽鳥。三羽の内の一羽。

枷とは・・・ユキナ嬢。もっと言えば人質。

・・・草壁の手の上から飛び立とうとする三羽鳥を押さえる人質となってもらおう。

もしや、ツクモさん達が草壁の手の上から離れようとしているのがバレた!?

それでこんな強硬策に？

「ユキナちゃんを取り戻す事で木連が得する事は二つ」

「それは？」

周囲が静まり返る。

多分、俺の考えを聞く為。

正しいかどうか分からないけど、きっと間違っではない筈。

「一つはユキナちゃんの身柄を抑える事でユキナちゃんの身内の自由を奪える」

「ユキナちゃんの身内？ それって白鳥さん？」

「はい。ケイゴさんから聞きましたが、

シラトリさんとその親友は木連で三羽鳥と呼ばれているそうです」

ミナトさんだけだったならケイゴさんの名前は出さないけど、

ここには俺の事情を知らないクルーもいるから工夫が必要になる。

「檻から飛び立とうとする鳥の枷になつてもらおう。

これは自由になるうとする三羽鳥を抑える人質にするという意味だと思えます」

「……ごめんなさい。ユキナちゃん。貴方の恐れていた事が本当になりそう」

「……ミナトさん」

ユキナちゃんを絶対に護ると俺はツクモさんに誓った。
それなのに……。

「もう一つは何なのだね？」

「総参謀長ならお分かりかと」

「うむ。地球に囚われていた人質を救出したとでも言うつもりだろう」

「恐らく」

「それによってどう変わるってんだ？」

ガイ。分からないかな？

「ガイ。ゲキ・ガンガーは地球を救った。ヒーローだよな？」

「おう。老若男女を魅了するヒーローだな」

「それと同じだ。囚われの人質を解放したヒーロー。有名になる」

「有名になれば、支持も得る。草壁派の勢力が増すという訳だね」

「そんなのヒーローじゃねえ！ ヒーローは正々堂々」

「ガイ。過程より結果。悪巧みの事なんて教える訳がないだろ。

ただ人質の救出に成功した。過程を除いた結果だけで充分人は付いてくる」

「クソッ！ そんなの許せねえ！」

「でも、それが真実なんだ。

草壁派の支持率が上がれば、より徹底抗戦の波が強くなる」

ユキナ嬢は木連では死んだ事になっている。

そんな者が生きており、草壁派によって救出された。

そうなれば、圧倒的な支持率を得るだろう。国民は何も知らないのだから。

三羽鳥は既に話を大将から聞いており、それが草壁の陰謀だと分かる。

でも、それが分かってても、ユキナ嬢が人質にされていたら従うしかない。

結果、草壁派は曖昧な位置にいる三羽鳥を完全に引き込む事が出来る訳だ。

完全に三人からの信用を失うだろうが、敵に付かれるよりは全然良い。

ユキナ嬢の誘拐により、草壁派は裏切れない仲間と強い国民の後押しを得る。

「それなら、北米支部はどうなんだ？」

「それは・・・」

思わず総参謀長の方を見てしまう。

何より被害を喰らうのは彼なのだから。

「マエヤマ君。分かっているのなら、説明してあげて欲しい」

「ですが」

「私には何の遠慮もいらぬ」

・・・既に総参謀長は理解しているんだな。俺なんかよりも早く深く。

「ユキナちゃんはナデシコの一員である前に木連より送られた和平

の使者です」

「ええ。そうね」

「その為、俺達は何としても彼女を護らなければならぬという義務があります」

和平の使者が殺された。

それは取り返しの付かない責任問題。

「たとえ木連に攫われ、木連に戻ったただけだとしても、それを周囲は分からない」

「・・・知らない人間に攫われ、知らない場所に囚われている」

「そうです。たとえば、俺が誘拐されただけだったら、俺を切り捨てればいい」

「・・・コウキさん。そんな事、言わないで下さい」

「あ、うん。ごめん。セレスちゃん」

そんな辛そうな顔をしないでくれ。セレス嬢よ。罪悪感が・・・。
あくまで例え話なんだから、ね。

「コホン。とにかく、ユキナちゃん以外の誰かであれば、大きな問題にはなりません」

充分、誘拐は犯罪なんだけどね。

「ですが、ユキナちゃんだけではどうしても責任問題まで発展します」
「・・・護るという義務があるから。その責任は・・・」

「はい。ユキナちゃんを保護していた部隊の最高責任者の責任になります」

「それじゃあ、ナデシコか？」

「え？ わ、私ですか!？」

艦長が慌てた様子で自身を指差す。

確かにユキナ嬢を保護していたのはナデシコだ。

でも、そのナデシコも組織図から見れば、末端に過ぎない。

「いや。ユリカ君。君ではない」

「それなら、一体誰が責任を・・・」

「私だ。私が責任を取らねばならない」

「総参謀長が!？」

そう、現時点の最高責任者はムネタケ総参謀長になる。

「ナデシコが保護していたという事は極東方面軍が保護していると
同じ。」

極東方面軍の最高責任者はミスマル総司令官だが、現在、彼は
ない。

そうならば、代理として最高責任者の席にいた私が責任を背負わ
ねばならないのだ」

ミスマル総司令官の代わりに最高責任者の位置にいたムネタケ総参
謀長。

彼の存在は非常に大きかった。

極東方面軍の最高責任者としても活動し、

ミスマル総司令官がいない間の改革和平派を纏めていたのも総参謀
長。

「北米基地の狙いは私さ。徹底抗戦派が多く属する北米基地にとっ
て私は邪魔でしかない」

ミスマル総司令官が戻ってこない以上、この派閥を引っ張れる者は

いない。

候補はいるだろうが、その席を奪い合い、関係性に罅が入りかねない。

ムネタケ総参謀長だから成立しているのだ。

ミスマル総司令官の右腕、改革和平派のNo.2として周囲に知られていた彼だからこそ。

ムネタケ総参謀長を失う事は改革和平派の勢力を弱める事に繋がってしまう。

「で、でもよお、北米支部のせいなんだろう？」

それなら、そう真実を告げてやれば良いんじゃないかねえか？」

スバル嬢。駄目なんです。

「そうできないように輸送機を撃墜させたんですよ。全ては証拠隠滅の為です」

「そんな……。ど、どうにか出来るだろ。いくらでも方法は

」

「俺のもあくまでも疑惑でしかないんです。明確な証拠は海の底に」
「クソッ！ どうしてだよ！ こちとら正々堂々やってんのに！」

ユキナ嬢がああの輸送機にいた。

誰がそんな事、証明できるんだ？

たとえ出来たとしても、その証拠源が不明確過ぎて無効扱いされる。

北米は木連と手を組み、輸送という名目で極東支部を罫に嵌めた。戦闘で一番の被害を受けた北米支部にそんな事を言える訳がない。

言った瞬間、倫理に欠けるとされ、世界中から批判を喰らう。

ユキナ嬢は安全を考慮し、木連に返した。

それこそ苦し過ぎる言い訳だ。誰もそんな事は信じない。

俺達が総参謀長に責任を負わせない方法は誘拐の事実を隠蔽するし

かない。

どれだけ最善を尽くそうと俺達にマイナス以外はないのだ。眞実は闇の中、疑惑を突きつけようと、その前に誘拐された事実を公表しないといけない。

彼らは輸送機一機と補給物資分の損だけでこれだけ大きな利を得たのだ。

北米支部、いや、木連と手を組む者達のほくそ笑む顔が目につく。その者達は極東支部の弱味を握ったに等しいのだ。

対等になる為には最高責任者を犠牲にし、

碌に人を護れない無能集団という汚名を被らなければならない。

それが今後、どれだけ悪い影響を残してしまうか……。

「ふむ。これ程の大事であれば悪くて銃殺刑、良くて追放だろうね」

「ど、どうしてそんなに冷静でいられるんですか!？」

「ユリカ君。落ち着きなさい」

「でも!」

……本当にいつもと変わらない。

もつと動揺したって、慌てたっていい筈。

それなのに、いつものように泰然としていて……。

「私には息子が、サダアキがいる」

「……提督が」

「そう。私がかたえ死のうとも、私の意志は息子に受け継がれる。

私の願いは息子が叶えてくれる。何を恐れる必要があるのだね?」

……笑ってる。どこまでも澄んだ笑顔で。

どうして……どうして、そんな綺麗に笑えるんだ?

「ふふつ。優秀な息子を持った私は幸せだな。私の後は息子が私以

上にこなしてくれるさ」

・・・黙り込むしかなかった。

今、和平に向けて俺以上に世界を走り回っているこの場にはいない彼の息子。

総参謀長の顔はそんな息子を心から信じ切っている顔だった。とてもじゃないが口は出せない。

「さて、ユリカ君」

「は、はい」

「遂に君の出番が来たようだよ。利用される前に手を打とう」

「え？」

「ミスマル・ユリカ！」

「ハ、ハッ！」

突然、大声で艦長の名を告げるムネタケ総参謀長。

艦長は慌てた様子で返事をした。

「本日より、改革和平派代表の座を君に譲る。命を懸け、和平に向けて働いて欲しい」

「わ、私が代表？」

「復唱はどうした！」

「ハ、ハッ！ 私、ミスマル・ユリカは本日より改革和平派代表に就任致します」

「うむ。これで私も一安心だ」

突然のポスト交代。

困惑する艦長を尻目に総参謀長はにこやかに笑っていた。

「ユリカ君」

「は、はい」

「此度の責任は全て私が負う。君には何の関係もない」

「で、ですが！」

「それが和平の為だ。その信念の前に、私の生死など何の意味も持たない」

「・・・総参謀長」

「そう呼ばれるのも後少しだろうね。私は連合軍最高司令官に自ら報告し、辞任しよう」

どこまでも理想の為に生きる人だ。

自身の死すら恐れずに、後世を若者に託して、自らを犠牲とした。全ての責任を総参謀長が負えば、後任のユリカ嬢には何の負い目もなくなる。

「アオイ・ジユン」

「ハ、ハッ！」

涙を堪えながら、総参謀長に敬礼を返すジユン。

「代表を護るのは君だ。君の仕事だ」

「ハッ！」

「全力を尽くせ」

「ハッ。命を賭して、働きます」

ユリカ嬢と縁の深い総参謀長だ。

きっとジユンにとっても身近な存在であっただろう。

尊敬する上官が自らを犠牲にしてまで自分達の為に尽くしてくれた。それが嬉しくて、それが悲しくて。

「・・・命を賭して・・・」

涙を抑えきれないんだと思う。
溢れんばかりの涙を溢すジユンに微笑みかけた後、総参謀長が俺達の方を向く。

「ナデシコの諸君」

「ハッ！」「ハッ！」

軍人じゃないナデシコクルーの精一杯の敬礼。

形は雑。姿勢も雑。でも、その思いはどこまでも真っ直ぐだ。

「ユリカ君を支えてやって欲しい。仲間として。家族として」

「ハッ！」「ハッ！」

「ナデシコの諸君ならばどんな苦境をも越えられると信じている。

今後の未来を支えるのは老い先短い私のような老人ではない。

君達のような未来ある、将来ある若者なのだ。

私に若者の可能性を見せて欲しい。私に君達を信じさせて欲しい」

総参謀長の言葉が胸に響く。

「私は犠牲になるのではない。未来に希望を残す為の糧となるのだ。

振り向くな。前だけを見る。自らの信じた未来だけをただ一心に

見詰めて欲しい」

どこまでも澄んだ笑顔。

どこまでも俺達を信じきった笑顔。

・・・零れ落ちる涙なんてその笑顔のスパイスにしかならなかった。悲観でもなく、絶望でもなく、憎しみでも恨みでもない。

総参謀長の表情にあるのは、希望、信頼、歓喜、ただそれだけだった。

未来を託す息子。未来を託せる若者達。

その出会いを心から喜び、ただ前だけを一心に。策略陰謀に優れた男の心は誰よりも真つ直ぐ綺麗なものだった。

後日、ミスマル・ユリカ代表就任と同時にムネタケ・ヨシサダの処分が決定した。

彼に下された処分は連合軍からの永久追放。

国を憂い、国を愛し、ただ未来の安寧の為に尽くした男の悲惨な結末であった。

だが、その顔はどこまでも穏やかであったという……。

未来の為に無能者の汚名を被り、

最後まで和平の為に尽力した彼の存在を俺達は忘れてはならない。

第八十六話（後書き）

まず一言。

ムネタケ・ヨシサダさん。

別に死んでないですからね。

彼にはまた違う所で活躍してもらいます。

さて、アイリスプロジェクト第二段階ユリカ嬢就任。

ムネタケさんは利用されるより前に、

全ての汚名を被って未来を託していきました。

今回はそんなユリカ嬢を描く事になるでしょう。

そして、木連への訪問。足が重いでしょうね。

今後の木連内がどう動くかはこれからです。

PS 百話丁度ぐらいに終わらせてやるとか意気込んでる僕ですが
。。。

終わりそうにありません。むむむ。これは予想以上に長引くぞ。

第八十七話（前書き）

改革和平派の代表に就任したユリカ嬢。
彼女の行動が地球に与えた影響とは？

ユキナ嬢の誘拐が木連の地を揺るがす。

彼女の木連帰還が三羽烏に与える影響とは？

この話は以上の二本仕立てで参ります。

それでは、どうぞお楽しみ下さいませ。

第八十七話

『私は多くの犠牲の上に成り立っています』

それがミスマル・ユリカ。

我らが艦長の代表就任挨拶の最初の言葉だった。

『そして、皆さんも多くの人の犠牲の上で成り立っているのです。今、私がこうして話している間にも、何人もの兵士が命を散らしています。』

たかが一人の死。されど一人の死です。

これまでにどれだけの人々の命が失われ、積み重なっているのか？ 考えた事があるでしょうか？

多くの若い命が失われ、未来を潰された。

多くの老いた命が失われ、その偉大な軌跡を踏み躪られた。

命は数ではありません。ですが、あえて数えましょう。これまでこの戦争で失われた命は・・・』

ユリカ嬢の口から告げられる莫大な数。

地球の人口の何%かって？ そんなものを計算して何になる。

数でも確率でもない。その死、一つ一つに意味がある。

命は未来へ繋がるバトン。そのバトンを落とし、次に繋げられない事がどれだけ無念な事か。

過去、今、未来。その軌跡を描けない事がどれだけ悔しい事か。

『彼らの死は無駄なのか？ 無駄である筈がありません。』

彼らは私達に教えてくれた。死を持って教えてくれたのです。

この戦争はどこまでも愚かなものでしかない。

過去の地球が木連に対して行った非道な仕打ち。

木連が火星を含めた地球に対して行った非道な仕打ち。双方友に反省し謝罪するべき所がある。

それなのに、何故、互いに戦おうとするのか？

自らの罪に眼を背け、相手の罪だけ相手に突き付ける。

その結果が戦争です。地球も木連もただただ愚か。

自らの罪を認め、相手の罪をも飲み込む。

決して、水に流せといっている訳ではありません。

ですが、何故こうなってしまったのか、それを考えるだけでも大きな進歩です。

家族を、友人を、大切な人を失ってしまった方々。

憎しみを覚えたでしょう、恨みを抱いたでしょう。

分かります、そう言いたいですが、その者の思いはその者の思いにしか分らない。

だから、私も私だけの思いを伝えたいと思います。

私は父を銃で撃たれました。現在も集中医療室で意識を取り戻す事なく眠っています。

私にとって唯一無二の父。私の愛するお父様。

正直に言いましょう。私は父をこんな眼に合わせたものを許せません』

世界単位で流される艦長の就任挨拶映像。

和平派のトップである父を撃たれての悲劇の就任に世界中の関心が集まっていた。

『ですが、私が言いたい事と皆様の考えている事は恐らく異なると思います。

私が許せないのはお父様を撃った木連ではありません。

木連を撃たざるを得ない状況まで追い込んでしまった彼らとの関係が許せないのです』

就任挨拶の会場は連合宇宙軍総本部にある会見用の部屋。

以前、ミスマル司令は街の中で演説を行い、暗殺されかけた。だが、ここでは不可能と言い切れる。

街の中での暗殺では不意を突かれたという言い訳ができれば、でも、ここで暗殺されるのは連合軍全ての威信に関わる。

どれだけ忌わしくとも連合軍の面子に関わってきたら、暗殺に手を貸す事などできない。

ましてや、自分達で暗殺など考えようとしてもしないだろう。

この会場をセッティングしてくれたのはムネタケ元総参謀長。

彼の軍人としての最後の仕事がこれだった。

彼女の横には地球の英雄であるアキトさんの姿もある。

これによって改革和平派の一員にはあの英雄もいるんだぞという事を知らしめているのだ。

国民の支持率はこれで更に上がるだろう。それ程、アキトさんの知名度は高い。

』どうして父が殺されかけたのか？

それは和平を成し遂げようとする父を邪魔だと思ってるから。何故、和平を成し遂げようとするのが邪魔なのか？

先祖の恨みを返したい。地球への恨みを返したい。そう願うから。何故、恨みを返したいのか？

それは地球の仕打ちが許せないから、憎くて憎くて仕方ないから。何故、私達は恨まれているのか？

それはたった一つのシンプルな答え。きちんと向き合っていないから。

何故、過去の過失に頭を下げられないのか？

・・・これが私には分かりません。謝罪とはそれ程難しい事なのでしょうか？

親はまず子に謝る事を教えます。それはこれから幾つもの罪を抱えていくから。

間違つた事をしてしまったのなら、きちんと相手に謝りなさい。
生まれてすぐに親から習つ事をどうして私達は行えないのでしょ
う」

きちんと向き合い、謝罪する。

たったそれだけで防げたかもしれないこの戦争。

そのちつぽけな虚栄心でどれだけの命が散つたのか。

『私の父は全てを曝け出しました。連合軍の罪、連合政府の罪。

ですが、一つだけ、たった一つだけ、皆様方に伝えてない事があ
ります。

それは暴動を恐れた連合軍、連合政府に口止めされ、止むを得ず
諦めた真実。

それをこれから私は皆様に伝えます。殺されても良い。地球に居
場所を失つても良い。

それでも、私は父の意思を継ぎ、どこまでも真つ直ぐ皆様と向き
合つていきたいと思ひます」

『会見を止める！ 早く！』

『殺したければ殺しなさい！』

私の死で誰もが貴方達の罪を理解します！

私が死のうとこの事実は誰かが必ず私の代わりに公表してくれま
す！』

ユリ力嬢の発言に騒々しくなる会見会場。

必死に止めようと壇上に走る者をユリ力嬢が一喝する。

『こ、小娘が！』

『この者を外に連れ出さない。今の私の相手は貴方じゃありません。
国民の方々です！』

『き、貴様！ 上官に向かってなんて口を』

『上官よりも国民の方々が何倍も偉い。私は真実を告げる義務があります!』

『クツ! 離せ! 離せ!』

暴れる者を外へと連れ出していくSP達。

この映像が世界に流れる事を知っているのだろうか?
なんたる無様。

『反対する方は出て行きなさい! 真実を隠す事に正義はない!』

『良く考えたまえ! それを言つて暴動が起きたらどうするつもりなのだね!?!』

『それが私達連合軍、連合政府が背負うべき罪です』

・・・どこまでも凜々しい姿だった。

罪を罪と認め、背負う覚悟がある。

その姿は圧倒的なカリスマ性と相俟って、

この人に付いていこう、付いて行けば大丈夫と思わせてくれた。

「しかし、万が一にでも暴動が起きれば・・・」

余計に悲しむ者が出てくるよな。

まあ、だからこそ、こうして俺が、俺達が各地に散らばってる訳だが。

『皆様は火星大戦が戦争の始まりだと知らされているでしょう。』

木連の突撃の襲撃。逃げ延びた軍人によって木星蜥蜴の存在を知らされた』

それが一般的な戦争の始まり。

でも、この戦争にはその前がある。

『ですが、それは事実ではありませんが、真実ではありません。地球と木連との最初の接触は火星大戦よりずっと前にありました。この戦争の全ての始まりは木連から送られてきた和平の使者を地球が暗殺した事にあります』
『なッ！』

会見会場にいる真実を知らない報道者が驚きの声をあげる。きつと世界中でこの報道者と同じ言葉を発している事だろう。驚愕、啞然、困惑。

この言葉には世界中を混乱させるだけの意味が含まれていた。

『御願いです。どうか最後まで私の話を聞いて下さい』

その言葉で騒がしかった会見会場が静まる。

『この話を聞き終えた後、皆様方が何を思い、何を考えるか。恐らく、政府の人間や私達軍人に怒りを抱くでしょう。当然です。それ程の事を私達は仕出かしました。私は、いえ、私達は甘んじてその裁きを受けましょう。それが私達改革和平派の総意です。ですから、まずは私の話を最後まで静かに聞いていてください』

ユリカ嬢にとつてまったく関係のない話。

その時はナデシコにもいなかったし、軍人にもなつてなかった。あくまで士官学校の一生徒でしかなかった筈だ。

それなのに、連合軍全ての罪を背負おうとしている。その小さな背中では支えきれずに押し潰されるであろう醜く重い罪を。

なんて、なんて強い人なんだろう。

『木連とは私達のような陸地を持たない国家です。』

市民船と呼ばれる巨大な宇宙船の中に住み、

日々の生活を機械的に作り出した物で賄っています』

プラントと呼ばれる製造工場。

何を作れて、どれだけ作れて、どう作るのかは知らないが、

少なくとも木連自体の資源が地球に比べて極めて乏しい事は分かる。

『そのような状況に追いやってしまったのは私達ですが、本題はそこではありません。』

彼らの求めるもの。それは安住の地。憎しみや恨みよりもまず安住の地を求めていたのです』

市民船での生活。プラントや輸入だけに依存する生活。

どれだけ不安な事か。どれだけ心細い事か。

すぐにでも安心できる環境に身を置きたい筈。

『安心できる暮らしの為に、と彼らは恨みや憎しみを抑え、過去の事は水に流すから、』

土地や物資を我々に分けて欲しいと地球に対して友好的な和平の使者を送ってきました』

恨みや憎しみを押さえ込んででも欲しかった安住の地。

どれだけ追い詰められていたかが分かる。

『しかし、彼らにとって予想外だった事があります。』

それは木連の存在を国民の誰一人知らなかった事。

彼らは当然、木連の存在を誰もが知っていると考えていたのです』

地球政府が国民に隠し事をしている。
それが信じられなかった。

『地球政府は過去にあった事を知られる訳にはいかないと使者を暗殺してしまいました。』

国民に真実が知られてしまったら、連合軍、連合政府への信頼がなくなってしまうからと』

結果、余計に荒れた。

あの時、すんなり認め、謝罪していればこつも命は散らなかつただらう。

また、過去の事は過去の事と国民も妥協してくれたかもしれない。それなのに、自己保身に走り、全てを隠そうとした為、逆に追い込まれている。

『全ては木連のせいだ。木連が勝手に攻めて来たからこうなった。』

それは間違いなのです。戦争の原因を作ったのは・・・地球です』

決定的な一言。

全ての悪を木連としていた地球政府、地球連合軍との決別。
今ここに地球の悪事が完全に晒された。

『確かに宣戦布告もなしに火星を襲った木連は酷いやり方をしました。』

それは事実です。ですが、同じように地球も木連に酷い事をして
います。

どちらが悪？ どちらが正義？ この戦争に正義も悪もありません。
ん。

言つなればどちらも正義であり、どちらも悪です。どちらか一方
のせいではありません』

一方の責任ではない。
ただただ責任転嫁をしていた人間を真つ向から否定した。
自分達にも責任はあるのだと。

『どちらも悪いのに、どうして片方が片方に対して断罪が出来るのでしょうか？』

どちらも悪いのに、どうして片方が片方に対して被害者になれるのでしょうか？』

『どちらも悪いのに、どうして片方が片方に対して加害者とされるのでしょうか？』

何故、同じ程の罪を重ねているのに、相手の罪を重くし、自分の罪を軽くするのか。

確かに責任転嫁したがるのは人間の性だ。誰だって、自分を罪人としたくない。

だが、それを認めなければ、何も始まってはくれない。

『地球に住む皆様方！』

ユリカ嬢が声を張り上げる。

『木連も本をただせば同じ地球人！』

何故同胞の帰還を私達は喜べないのでしょうか！？』

何故安住の地を求める同胞に手を差し伸ばしてあげられないのでしょうか！？』

同胞。ユリカ嬢が木連人を同胞と呼んだ。

『いつまで続ければ、人間同士の争いに満足するのですか？』

どこまでやれば、この争いに満足してくれるのですか？
滅ぼすまで？ 滅ぼされるまで？ その時、人類はどれ程残っているのでしょうか？

争いの果てに何も見えないこの戦争に、私は、私達は、貴方達は何を求めるのですか？』

この争いの果てに何がある？

木連を滅ぼして地球が得るものは？

誇り？ 栄達？ ……何も得られはしない。

汚点を更に汚し、真実がバレ、今度は違う争いが始まるだけだ

地球を滅ぼして木連が得るものは？

土地？ 資源？ ……何も得られはしない。

生産力も開発力もない木連が生きていける訳がない。

この争いの行き着き先は、結論、人類の滅亡でしかないのだ。

争いの果てに何も見えない。言い得て妙である。

『木連が同じ人類であった時、なんて愚かな事をしていたんだと実感しました。

そして同時に、同じ人類ならば、手を取り合う事も可能なのではないかとも思っただのです』

木連蜥蜴。木星からやって来た知性なき侵略者。

だから戦えた。一方的な加害者であったから。

だが、知ってしまった。一方的ではなかったと。

だから戦う意味を考えた。彼らと何故争うのか？

同じ人類なのにどうして戦わなくちゃいけないんですか。

以前、メグミさんが言っていた言葉だ。

地球人も木連人もそう思ってくれる人ばかりだったら争いなんて続かない。

でも、そう思わない人もいる。

自身の利権だけを考え、どうしたら自分にとって得があるかで全てを決める者。

たとえそう考えても、立場が、環境が許してくれない者。その他様々な事情によって、この争いが終わる事はない。それなら、誰かがその連鎖を断ち切るしかない。

己だけしか考えない者に他の事を考えさせ、立場、環境に囚われているものを解放させる。

それが改革和平派。
意識を改革し、真の和平を目指す組織だ。

『私の父は木連の事実を知った時、何よりも先に悔いたそうです。木連に、地球に、火星に、軍人として心から木連に謝罪したいと。だからこそ、こうして改革和平派を立ち上げました。』

そして、そんな父の意思に賛同する者が加わり続け、今こうして私がここに立っています。

木連を憎む皆さん、地球を憎む皆さん。

どうかその憎しみを堪え私達に力を貸して頂けませんか？

父が何を願い、何を思い、何を考え、この席にいたのか。

私は私なりに父の事を理解しようと努めました。

そうして出した結論が父の意思を継ぎ、父の願いを叶えるという事。

たとえ父が殺されかけようと、いえ、殺されようと、

父の思いを踏み躪る事だけはしたくありません、してはなりません。

父はどんな状況でも地球と木連との和平を考えていました。

今、ここで木連に恨み言を言うのは簡単です。

ですが、果たしてそれは父が望んだ事でしょうか？

それは果たして、亡くなった方々が望んだ事でしょうか？

私は父の意思を継ぎます。たとえ父が亡くなるうと私は父の願いを叶えてみせます。

父の願い、父の思い、そして、何より私の和平への思い。
父は己が死んでも和平を目指すでしょう。それが父です。

そんな、父を慕う方々が父を理解していない筈がありません。

私は改革和平派の皆さんと団結し、必ずや、必ずや和平を成し遂げてみせます。

だから、皆さん、どうか、どうか私達に皆様方の力を貸して頂けないでしょうか？

誤魔化しなんかじゃない。嘘偽りなんかじゃない。本物の和平の為に、貴方達の力を『

ただひたすら頭を下げるユリカ嬢。

その姿は代表者という言葉に相応しかった。

目的の為に思いを込めて頭を下げる。

誰にだって出来る事じゃない。

こんなに心に響く訴えは。

『・・・以上で、ミスマル・ユリカの改革和平派代表就任挨拶を終わります』

一礼し、映像が切り替わる。

本当の意味で彼女の謝罪が終わったんだ。

後は・・・俺達の仕事だな。

「フクベ提督」

「うむ。行こうか。頭を下げにお」

暴動鎮圧の為の改革和平派所属員の出張。

といっても、決して武力行使ではない。

俺達の謝罪の想いを伝える為には映像の代表の謝罪だけでは伝わらない。

だから、世界中の都市部といえる場所に赴く事にしたのだ。

これはユリカ嬢が代表に就任すると派閥内で決定した際に決議を取ったもの。

もちろん、何人が決ったものの、

本当の意味で国民に理解して貰う為です、というユリカ嬢の言葉に動かされた。

その説得力と何故か信じてしまう信頼感是最早代表の貫禄さえ見え
ていたように思える。

「では」

俺達の担当は日本のヨコハマシティ。

基本的に日本人は日本を、アジア人はアジアを担当している。

北米支部の中にも改革和平派の所属員は少数だがいるので、

その者達が死を覚悟して、北米の都市部は任せてくれと約束してく
れた。

本来であれば、世界中の至る所を回りたいのだが、そうもいかない。

その為、大きなモニターがある都市部へ行き、モニタの前に飛び出
して行くと決定した。

案の定、モニタの前には演説を聞いていた市民が集まっている。

シューーーー……ダンツ！

低空飛行で降り立つ場所を見つけ、機体を降ろす。

突然の軍所属の機体に驚き、エステバリスを見詰める国民達。

「どっぞ」

「うむ」

拡声器を手渡す。

「私は改革和平派所属のフクベ・ジンである」

「フクベ・ジン？」

「あのチューリップ落としての英雄か？」

「この英雄も改革和平派の一員だったんだ」

フクベ提督の登場にざわめき立つ周囲。

「先程の代表の就任挨拶を聞いてくれただろうか？」

騒がしい中では言葉が聞こえない。

そう思ってくれたのか、周囲は静かに次の言葉を待っていてくれた。

「あれこそが私達連合軍の一番の汚点。全ての責は私達にある」

「・・・・・・・・」

責める事も慰める事もせずただただ無言を貫く国民達。

その顔はどこか無表情に見えた。

悲しむでも怒るでもなく、ただフクベ提督を見詰める。

「既に退役済みの私だが、元軍人として心より謝罪する」

拡声器を傍に置き、深く頭を下げる。

自身を取り巻く全てをかなぐり捨てて。

年齢も地位も関係なく、ただ一人の民の命を護る者としての謝罪。

「そして、この老いぼれに機会を頂けないだろうか？」

頭を上げ、再び拡声器で話し出すフクベ提督。

「和平を成し遂げる為には何より国民の方々の支持が必要になる。この中に知人を、家族を、木連によって失った者もいるかもしれない。」

だが、それでも、その怒りを抑え、どうか、どうか和平の為に力を貸して頂きたい」

拡声器を置き、床に膝を付くフクベ提督。

そして……。

「頼む」

頭を下げた。

威厳もプライドもあつたものじゃない。

全ての思いを込めた土下座だった。

……それなのに、どうして俺が立っていられるんだっての。

「お願いします」

フクベ提督の隣まで行き、同じように土下座をする。

意地もプライドもいらぬ。

ただ目的の為だけに、頭は下げられるものなんだ。

「……」

「……」

周囲は静まり返っていた。

でも、それでも、俺達は頭を上げない。

想いが届くまで、いくらだって頭なんか下げてやる。

「……だ」

え？

「俺は賛成だ！俺達を見てくれる軍人を信用できない訳があるか！」

「おう！詳しい事を何も言わずに表面だけしか教えない奴らなんて信じられるかよ！」

「国民にちゃんと向き合い、心から謝罪した！」

「事実を認め、きちんと謝罪し、国民に筋を通した！」

「そんな奴らを支持しない訳がないぜ！」

「改革和平派！万歳！」

「改革和平派！万歳！」

パチパチパチパチパチ。

誰かの一言をきっかけに周囲が騒がしくなる。
拍手まで聞こえてきて。

「……提督」

「うむ。国民が分かってくれたんじゃ」

それが嬉しくて、もう一度深く頭を下げる。

信じてくれてありがとう。

その思いに俺達は全力で応えます。

「ありがとうございます」

最後に深く深く頭を下げた。

俺の所だけでもなく、他の場所でも改革和平派の行動は良い方向へ転んだ。

あらゆるものを誤魔化し、騙してきた連合軍。

そんな中にも事実をきちんと認め、

その上でしっかりと謝罪をする派閥もあるんだと人々は知った。

国民にとって許せない事でも、正面から謝罪されれば怒る気も失せる。

むしろ、正直に罪を認めた姿は好感を覚える。

アメリカの大統領も正直の素晴らしさをとある事で知った。

己や己の罪を誤魔化す事は己を偽る事と同じ。

自身を偽らず、ありのままの姿であった事が国民達の支持を得たのだ。

国民に対してしっかりと正面から向き合う事が政府や軍にとって大切なのではないかと思う。

何も知らされていない国民。

それは根本的に間違っている。

税を払っている国民は全てを知る権利がある筈。

税を貰っている政府は全てを話す義務がある筈。

それが軍人や政府の人間としての筋を通すというものなんだと俺は思う。

今日、この日、徹底抗戦を訴えていた地球人の多くが和平を考えるようになった。

「申し訳ございませんでした！」

開口一番に土下座を敢行。

決して、土下座癖が付いた訳ではないからな！

「……まずい事になった」

「……やはり……」

「うむ。ツクモがな」

週に一度の訪問曜日。

事実を逸早く伝えるべきかとも思ったが、

予定にない時にジャンプして拙い事になったら困ると、

臆病風に吹かれて、結局、予定日までソワソワしながら過ごす事になってしまった。

そして、今日、ようやく予定の日になり、急いで跳んだ。

眼の前には苦悩する神楽大将。

俺にはただ頭を下げるだけしかできなかった。

「今日のはあの三人も呼んであるんだ」

「……そうですか」

顔を合わせ辛いな。あの三人とは。

「もう数時間したら来るだろうから、それまで地球の状況を教えてもらおうか」

「はい。それでは……」

……

「そうか。地球も荒れているのだな」

先日のユリカ嬢の改革和平派代表就任の事から、
草壁派と北米支部に嵌められて総参謀長が永久追放を喰らった事な

どを話した。

「はい。木連の情勢はどうなっていますか？」

「草壁派が先日、シラトリ・ユキナの奪還を大々的にアピールしていた」

「どのように報道されていましたか？」

「シラトリ・ユキナが生きっていると発覚し、総勢を上げて地球へと襲撃。

どうにか敵の防衛網を破り、囚われていた基地へと少数ながら突撃した。

十機で飛び込み、九機もの多くの犠牲を出しつつ、

一機がボロボロになりながらもどうにか帰還し保護に成功したと聞いたところだ」

「それはまた、木連が好きそうな展開ですね」

「うむ。その結果、木連内の草壁中將の支持が更に増してしまったよ」

「ユキナちゃんは どうしているんですか？」

「保護され眠っている姿は映されたが、その後の事は聞かされていない」

・・・ユキナ嬢は囚われの身か。

「ツクモさん達の様子は どうでした？」

「前もって話しておいた事が功を奏したのだろう。」

シラトリ・ユキナ帰還に喜びつつも複雑といった感じだ」

俺達に話を聞く前だったら単純に妹の帰還に喜んだだろう。

無論、草壁に対する尊敬の念も。

だが、ユキナ嬢をナデシコが保護していると知り、安全であると知った。

その裏の事情を知るが故に、この一連の奪還もどこか演出のように感じているのだと思う。

確かに地球に置いておくのは危険だが、木連内にいるよりは安全だったのではないだろうか？

彼が妹に弱いというのは周知の事実。利用されかねないと危惧していたと思う。

たとえば俺達の下にユキナ嬢がいれば、ツクモさんは自分の意思で動ける。

だが、草壁の下にユキナ嬢がいると、必然的に草壁に付く事しか出来ない。

自由選択の意思を奪われ、妹の為に組織に力を尽くさなければならなくなる。

これはツクモさんにとって人から機械になれと言われているに等しい。

しかし、従わざるを得ないだろう。

何故なら、妹が彼の自由の翼を封じる枷となっているのだから。

「悩み続け、そろそろ結論を出そうかという状況下でのこれだ。

残念な事だが、彼ら三名は草壁中将に付く可能性の方が高いだろう」

・・・だろうな。

ユキナ嬢は三羽鳥三人にとって妹みたいなものだ。

実際、一人は本物の兄妹な訳だが・・・。

妹分が囚われていて、好きに動く事なんて出来ない。

また、たとえ素直にユキナ嬢を返して貰おうとも、その恩義があり、従わざるを得ない。

結局の所、ユキナ嬢を確保した事で三羽鳥を手中に収めたも同然なのだ。

「草壁中将はユキナちゃんをどうするんでしょうか？」

「うむ。手元に置いておくか、ツクモに返すか」

「どちらにしても、中将の思い通りですね」

「ふう。後手に回ってばかりだ。上手くいかな」

「ええ。本当に」

俺達の計画は長期的なもの。

その為、短期的に成果は見えてこない。

それは分かっているのだが、どうしても成果が見えないと不安になる。

向こうが着実に成果を残しているから尚更。

「地球では今後、反乱分子を抑える仕事が増えそうです」

「ふむ。どうしても和平を嫌がる者はいる。それは地球も木連も同じだな」

「ええ。まあ、地球の場合は個人的な理由が多いでしょうけどね」

「木連とて変わらんさ。復讐とて個人的な理由」

利益を求めるのも復讐も結局は個人的な理由か。

「それなら、戦争自体も個人的なものなんですね」

「・・・そうなるな」

結局、個人的理由で争う者に他の人間が巻き込まれているだけなんだな。

「無論、私達も個人的な理由で和平を考えているのだがね」

「ええ。私は戦後の平穏な生活の為です」

「そうかね。突然だが、私には夢があるのだよ」

「夢・・・ですか？」

「ああ。それはそれは大きな夢さ」

神楽大将の夢。

木連最強の武人であり、人格者である男の目指す先とは……。
凄く興味がある。

「木連式武術を多くの人に伝えたい」

「木連式武術を？」

「そして、他の流派と触れ合い、木連式武術を更に昇華させたいのだ」

触れ合い、昇華させる……。

「地球には多くの武術があるのだろうか？」

「ええ。国単位、地域単位、もっと言えば、人単位で異なります」

武術と一言にいつても多くの流派があり、更にはそれを組み合わせ
て新しい者にもする。

武術の歴史は長い。中国でも日本でも、年々廃れながらも語り継が
れてきた。

「私は木連式武術を伝え、他の流派と切磋琢磨し、更に流派の技を
深めたい。

木連は木連式武術だけの決まった形しか持たない国。

それでは駄目だ。先には進めない。凝り固まった概念など捨てる
に限る。

私は武人として、もっと多くの武術と触れ合い、もっと多くの強
者と戦いたいのだ」

「……壮大な夢ですね」

「ハッハッハ。子供みたいであろう」

「いえ。とても大将らしいです」

「そうかね。ハハハ」

「ええ。本当に」

・・・武人の貴方らしい夢です。

より強く、より早く、より高みへ。

子供だなんてとんでもない。

一人の大人として、尊敬する姿です。

「その時は是非君も育ててみたいな」

「え？ 俺ですか？ 才能ないですよ」

自覚してるし、ケイゴさんにも言われた。

「なに。才能なんぞなくとも何かがかっかけて目覚めるかもしれんからな」

「そうですね？」

「気が向いたらで構わんよ」

「機会がありましたら、よろしく願います」

「うむ。早速地球人の木連式武術の後継者を見付けたな」

続ける程の技量になるかは分かりませんがね。

「君の言う平穏な暮らしとはどんな暮らしなのだね」

「簡単です。愛する妻と愛する子供に囲まれて、時に喧嘩し、時に愛し合う。」

別にお金持ちじゃなくてもいいですし、有名にならなくても構いません。

上司に認められずとも、妻や子が私を認め、支えてくれます。

俺が求めるのは笑顔溢れる極々平凡などこにでもある家庭。ただ

それだけです」

「ハハハ。そうか。君程の能力と功績があれば要職に就けるのに、その先は求めないと？」

「いや。人には人に相応しい地位や立場がありますよ」

俺なんかとても人の上に立てる人間じゃありませんし。

「和平の架け橋となる男が平凡な生活を望んでいるか・・・」

「ですから、私はそんな立派な事はしてませんよ。地球と木連往復してるだけですし」

「フハハ。立派な人間は総じて自分の事を低くみるものだよ」

随分と酷い勘違いをしているなあ。大将。

「さて、今後はその代表となった者に近況を伝えていけばいいのかね？」

「・・・そうですね」

ユリカ嬢にこういう陰謀チックな事は向いてないだろうな。

彼女は戦術家であって戦略家ではないし。

うーん。とりあえずムネタケ提督に相談してみよう。

今現在何をしているかは知らないが。

もしかしたら提督でもなくなってるかもしれない。

「地球に関しては私が動きますのでご安心を。」

きちんと和平派同士の足並みが揃うよう努めます」

「うむ。君ならば安心して任せられる」

「それは嬉しいですね」

そこまで信頼されると嬉しいものだ。

地道に毎週通い詰めた意味があつたな。
まあ、通い詰めるといつても、一瞬の移動だが。

「ふむ。そろそろかな」

「俺はどうすれば良いですかね？」

「一応、奥の部屋で待機していてくれ。」

「聞こえるよう扉は少し空けておいて良い」

「分かりました」

さて、俺が一番最初にやらなければならない事は……。

コンコンッ。

「入りたまえ」

「ハッ。失礼します」

ツクモさんに謝る事だろうな。

「……大将」

「うむ。話は聞いた。シラトリ・ユキナが無事に戻ってきたようだな」

「はい。ご心配をおかけしました」

「なに。弟子の心配をするのは当たり前前の事だ。当然、その家族もな」

「大将……」

「……では、お前達の答えを聞かせてもらおうか」
「……」

大将の言葉に黙り込む三人。

深く悩み、深く考えたであろう決断。

その答えを聞く時が来た。

「……私は神楽派には……」

ゴクリツ。

「……付いていきません」

……ツクモさん。

「ユキナが……戻って来ないので」

「……中將が保護下に？」

「はい。精神的に不安定だから、落ち着くまで預かっていようと」

「……そうか」

「神楽大将の想いは私も共感できます。私も……和平を成し遂げたい」

「うむ」

「ですが……ですが、私にとっては自分の命より大切な妹です」

「……そうか」

「申し訳……ありません」

「……」

表情を歪め、苦惱しきった顔で弱々しく告げるツクモさん。

……やはりこうなったか。

「……今回のシラトリ・ユキナ奪還の仔細は聞いたか？」

「いえ。私も他の二人も待機命令が出されていました」

「そうか。……私は詳細を聞いた。誘拐だそうだ」

「……誘拐？」

「太平洋に戦隊を展開。迎撃で基地を留守にした間に誘拐するよう」

に連れて行つたと」

「・・・そうでしたか」

「なッ！ 中將がそのような事をする筈がありません！ 中將はユキナを」

「それならば、何故、ツクモの下へ妹を返さない」

「そ、それは・・・」

「真実の漏洩を防ぐ為。ツクモの下へ返し、お前達が支配下から抜けるのを抑える為だ」

「それでは、ユキナは・・・」

「そう、お前達の動きを抑える為の枷。・・・人質だ」

「・・・クッ」

頂垂れるツクモさん。

「・・・行くしかないだろ」

今、この瞬間に謝罪しなければ、絶対に後悔する。

「・・・」

「・・・」

大將、よろしいですか、そう視線で訴える。
すると、大將は無表情で頷いてくれた。

「・・・行こう」

部屋の扉を思いっきり開き、皆が注目する中、ツクモさんの前まで向かい・・・。

「申し訳ありませんでした」

土下座した。

信頼を裏切って、約束を守れず、申し訳ありませんでしたと。

「あ、貴方は！」

俺が必ず護ると約束したのに……。

こうして大切な人を囚われの身としてしまった。

ガッツ。

胸倉を掴まれる。

土下座の体勢から強引に立ち上がられ、真正面から眼を合わせて来るツクモさん。

「貴方は、貴方は必ずユキナを護ると、そう約束しました」

「……はい」

「それなのに！ それなのに、どうしてこうなったのですか！」

「……すいません」

「謝って……謝って済む事ではありません！」

ドガッ！

頬を殴られ、床に倒れこむ。

……これは俺が受けるべき罰。

何発殴られようと、頭を下げ続けねばならない。

そうしないと、俺が俺を許せない。

「ユキナが！ ユキナが今、どれだけ苦しい思いをしているか！」

ドガッ！

「くだらない争いに巻き込まれ、どれだけ心細い思いをしているか
」！
」

ドゴッ！

「怖がつてる！」

ドガッ！

「苦しがつてる！ 涙を堪えてる！」

バキッ！

・・・奥歯が折れたな。
本当に遠慮なく殴ってきやがる。

「白鳥中佐！ もう」

「黙っている！ サプロウタ！」

タカスギさんがツクモさんを止めようとするが、大将の一言で動きを止める。

・・・ありがとうございます。大将。俺の思いを酌んでくれて。

「悲しんです。ユキナは・・・強くありません。強がつてるだけだ」
「・・・」

「だから、俺はユキナを護っていこうと決めた。絶対に」

胸倉を掴まれたまま、眼の前にツクモさんを見る。

その顔には涙が零れており、先程までが嘘のように弱々しく見えた。

「それを、それを貴方は！」

バゴツ！

「・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

最早顔はボロボロだろうな。

口の中も切れまくってるし。

顔が膨らんでるのが分かる。

ああ。またミナトさんとセレス嬢心配させちまうな。

説教喰らうかもしれない。

・・・よくこんな事を考える余裕があるよな。俺。

「・・・分かっていきます。これが唯の八つ当たりであると」

「・・・ツクモさん」

「貴方はパイロットとして戦場に立っていた。違いますか？」

「・・・そうです」

「貴方は地球人の命を背負っている。ユキナ一人の為に動けない」

「・・・」

「それぐらい、この私にも分かっています。ですが、どうしても・・・」

「・・・」

「・・・」

「どうしても、許せなかった」

「・・・当然です。貴方は何も悪くない」

「・・・」

「俺が、俺がいけないんです。俺が未熟だったから・・・」

どうしてユキナ嬢を護れなかったのか。

争いになったらどうしても基地が手薄になってしまつのは分かりきつた事。

そんな時こそ危ないなんて子供にだって分かる事だ。どうして、そんな事にも気付けなかつたのだろう。

俺は・・・本当に馬鹿だ。

「・・・何故だ」

「え・・・」

「・・・どうしてこうなつた・・・」

「ゲインチロウ？」

呆然と何かを呟きだすツキオミさん。

「俺はまた草壁中将の下、三人でやっていけると思っていた」

「ゲインチロウ。お前・・・」

「そつだ。草壁中将に話したのは俺だ」

「ツキオミ。お前が・・・」

どうして、どうしてですか！ ツキオミさん。

「和平などというくだらない思想に賛同し、闘争心を失くしたお前達を見ていたくなかつた」

「くだらない？ 和平がくだらないと言つのですか！？」

許せなかつた。

ミスマル司令が、神楽大將が、力を尽くして成し遂げようとしていた和平を。

暗殺されかけても、それでも和平を訴えたい司令の志を。

多くの人間が望み、未来へ繋ぐ為の大事な行為を。

全て、この人は否定したんだ！

「くだらないであろう！俺達は地球を見返す事を生き甲斐にしてきた！」

「それこそくだらない！復讐を生き甲斐にして何の意味がある！」

「貴様には分かるまい！俺達の苦しみも憎しみも！」

「だから、だから親友の妹を売ったのか！？」

「違う！俺はただ、二人にも俺と同じ道を共に進んで欲しかっただけだ！」

「その結果がこれです！貴方のせいで親友が苦しんでる！」

「それは・・・クソッ！」

「・・・どうしてだよ？」

「どうして分かってくれない。」

「復讐して何になる。未来が拓けるのか？」

「その先に、貴方の望む世界があるのですか？」

「・・・神楽大将」

「何だ？ゲンパチロウ」

ツクモさんが頂垂れ、ツキオミさんが俯く重々しい雰囲気。

そんな中、無言に徹していたアキヤマさんが口を開く。

「私は貴方に付いていきます」

「なっ！？ゲンパチロウ！お前」

「ツクモ。ゲンイチロウ。すまないな」

「馬鹿な真似はやめる。お前も俺達と共に」

「ゲンイチロウ。言った筈だ。俺達は先を見なければならぬ」と

「だから、共に地球を滅ぼし」

「最早何を言ってもお前とは意思を共に出来まい」

「・・・ゲンパチロウ」

「良いのだな？ ゲンパチロウ」

「はい。和平の為、友情を断ちましょう」

「艦長……」

「サブロウタ。お前はこれより別の」

「何を言ってるのですか。私は貴方に付いてきますよ」

「……後悔はしないな？」

「はい。艦長と共に意思を貫きます。和平の為に全力を」

「ああ」

アキヤマさんが二人との友情を断ち、こちらに付いた。

喜ばしい事だが、彼ら三人の友情を考えると……胸が痛い。

それに……。

「良いのですか？ もし貴方が神楽派に付いたら、ユキナ

ちゃんが」

「そ、そうだ。ゲンパチロウ。考え直せ」

突き込む隙を見付け、必死に説得するツキオミさん。

そのチャンスを与えてしまったのは俺だが、この問題は無視出来ない。

「ゲンパチロウ……」

頼む。そう言いたげな顔でアキヤマさんを見詰めるツクモさん。

妹の身に何かがあるか分からない。だから、頼むから付いて来てくれ、と。

でも、アキヤマさんは首を横に振った。

「殺せまい」

「え？」

「もし、ユキナに危害を与えたらツクモが離れていく。それを知ってる以上、手は出せん」

「それでも、万が一が・・・」

「二度も言わせるな。こちらに付くと決めたのだ。何があるうとその意思は貫く」

「ゲンパチロウ。ユキナがどうなっても良いのか!」

「ゲンイチロウ。悔しく、悲しいが、これは戦争だ。私情を挟む物ではない」

「草壁中将を、俺を、ツクモを、お前は裏切るといつのか!？」

「裏切ったのはどっちだ! 俺は木連の事を真剣に思う中将に憧れて付いていこうと決めた。」

だが、今の中将は木連の事など考えていない! 中将は俺の、俺達の思いを裏切ったんだ!」

「違う! 中将こそ誰よりも木連の事を考えている!」

「ならば! このような卑怯なやり方をした中将を! お前は信じられるのか!」

「俺は・・・中将を・・・」

「正々堂々と信念を貫く事こそが木連戦士の心意気!」

そういうも力強く語るお前が! このような卑劣を許すのか!」

「俺は・・・俺は・・・」

揺るがぬ意思。揺るがぬ信念。

何者にも屈しない力強さを見た。

「ツクモ。すまない」

「・・・ゲンパチロウ」

「俺達の縁も・・・ここまでだ」

「いや。俺のせいで辛い決断をさせたな」

「・・・達者でな」

「・・・ああ」

トボトボと扉へと向かっていくツクモさん。

「大将」

「何だ？」

「もし、もしユキナを取り戻したら・・・私も・・・」

「・・・」

「・・・いえ、何でもありません」

「・・・そうか。中将に尽くせ」

「ハッ。失礼致します」

退室していくツクモさんとそれを見送る俺達。

・・・辺りを静寂が包み込んだ。

「何故だ？・・・どうして、こうなってしまった」

「・・・ゲンイチロウ」

「俺はただ、草壁中将の下でお前達と志を同じくしたかったただけなのに」

「・・・お前はお前の信念に従え」

「・・・ゲンパチロウ」

「それが、お前の生き様だ。俺達も離れる時期が来たのだよ」

「・・・俺とお前もここまでか？」

「・・・ああ。俺には俺の、お前にはお前の生き方がある」

「・・・そうか」

「今まで楽しかったぞ。ゲンイチロウ」

「ああ。俺もだ。ゲンパチロウ」

立ち上がり、キリツとした凜々しい表情で敬礼するツキオミさん。

「失礼致しました！ 大将！」

「お前も草壁中将に付いていくのだな」

「ハッ！」

「・・・そうか。残念だ」

「申し訳ありません！」

「いや。信念を貫け。ゲンイチロウ」

「ハッ。ありがとうございます」

「うむ。行ってよい」

「はい」

扉へと向かうツキオミさん。

そのまま退室していくのかと思いきや、振り返り・・・。

「大将。私が中将に告げたのは、

ユキナの生存を大将より教えられたという事。

神楽大将より俺達三人に接触があったという事。

その二つだけです。ケイゴや地球との事は何も言っておりません」

「言わなくて良いのか？ お前は中将に付いていくと決めたのであるろう？」

「ハッ！ ですが、それは私の信念に反する行い。私は正々堂々立ち向かいます」

「そうか。分かった」

「ハッ。それでは、失礼致します！」

そうして、ツキオミさんも去っていった。

「・・・アキヤマさん」

「大人にはなりたくないものだな。友情より理屈を取った」

「後悔・・・しているのですか？」

「まさか。私の生き様に後悔などないよ。ただ悲しいだけだ」

・・・アキヤマさん。

「秋山・源八郎」

「ハッ！」

「高杉・三郎太」

「ハッ！」

「貴君らの決意。感謝する」

「ハッ」

「歓迎しよう。我らの願う和平の為、貴君らの力を貸して欲しい」
「ハッ！」

友情を断ち切り、信念に生きたアキヤマさん。

力強い味方を得たのは素直に喜ばしいが、複雑な思いだった。

願わくば、三羽鳥皆と共に歩みたいと思っていた俺は甘かったのだろうか。

・・・こうして彼らは友情を断ち切り、それぞれの道へと進んでいった。

無二の友、いや、無三の友である友を失った彼らの気持ちは俺には分からない。

なんでもないように笑う秋山さんの横顔。

それが酷く悲しそうに見えたのは俺の勘違いではないと思う。

ユキナ嬢が兄と慕う三人。

その三人の友情を引き裂いてしまったのは・・・状況か、環境か、それとも俺なのか・・・。

少なくとも、ユキナ嬢が悲しむ事は間違いない。

・・・悔しくて、苦しくて、悲しくて、そして、何より胸が痛い。
俺は・・・やっぱり、彼ら三人と共に歩みたかったんだ。

三羽鳥と呼ばれる木連の戦士達と共に。

第八十七話（後書き）

妹の拘束によって身動きの取れないツクモ。

拘束の原因となったツキオミ、袂を分かつ事となつたアキヤマへの思い。

共に歩む事を願つて草壁にリークしたツキオミ。

ユキナ拘束の原因を作り出してしまったという罪悪感と揺らぐ草壁への忠誠心。

そして、己の道を進む為、愛する友に別れを告げたアキヤマ。

友との友情を断つのがどれだけ辛かるうが、ひたすらに前を向いた。

・・・見事なまでにユキナ嬢が危惧していた通りになってしまったこの話。

アキヤマさんがこちらに付くのは意外だったのではないのでしょうか？

今回の件で、神楽派と草壁派の関係も複雑になったでしょうし。

地球はともかく、木連内での今後の情勢は検討も付きませぬね。

地球の説得に関して、うん、それはないだろうと思われるかもしれませんが、

テレビ越しのみならず、本人達を眼の前にしての謝罪。

誠意は充分伝わるのではないのでしょうか？

将兵から一般の兵士まで駆り出されての改革和平派の謝罪。

敵対しそうな支部の中にも賛同者はもちろんいて、

世界規模で彼らの謝罪は行われました。

都市部はもちろん基地の前や各国の政府施設の前など、

人が集まりそうな所は殆ど彼らは回っています。

安直かもしれませんが、きっと心が動かされるのではないのでしょうか？

P S ・連続投稿はちょっとお休みします。

もちろん、停止はしませんので、安心下さい。

第八十八話（前書き）

うん。振り返ってみてもあまりよろしくない。

もしかしたら、書き直すかもしれない。

最後の機体だけぶっ飛んじやってる気がするので。

第八十八話

「クソツ！ まったくもって忌々しい」

「せつかく改革和平派の勢力を削れたと思ったのに」

「まさかミスマルの娘が出てくるとは・・・」

「我々の策が台無しではないか」

「キノコ頭め。相変わらず決断が早い」

「あともう少し遅ければ完全に滅ぼせてたものを」

「次はどうする？」

「ミスマルの娘を殺すか？」

「いや、それはあまりにも短慮すぎる。変な印象を持たれかねん」

「クツ。こうなれば・・・」

「こうなれば？」

「クーデターを起こすしかあるまい。我々の正しさを世に示すのだ」

「まずは基地内の改革和平派の排除からだな」

「どの地域も両派閥が入り乱れている。成功する可能性は高い」

「ミスマルならまだしも小娘が代表だ。争いが始まれば統一は取れ

まい」

「ようやく我らが表舞台に立つ瞬間がやってきたのだな」

「うむ。木連草壁派にも連絡し、助力を頼もう」

「待て。そこで木連に介入させると後々厄介だ。我々だけで完遂し

よう」

「それならば、協力を頼まなければ良い。木連とナデシコが争って

いる時に・・・」

「うむ。確かにナデシコは危険だ。ナデシコがいない隙に決着をつ

けてしまおう」

「それと改革和平派の新戦艦にも注意せねばな」

「それに対しては数で補うしかあるまい」

「クリムゾンに作らせれば良い」

「強奪してしまえば良いのでは？」

「しかし」

「だが」

「各々の言いたい事は分かった」

「……」

「焦らずに計画を詰めていこう。どちらにしろ、決起するのは当然後だ」

「綿密な計画を立てなければな」

「ふっ。木連を滅ぼし、遺跡を我が手に」

「……馬鹿め。木連に取り入れれば良いだけよ」

「……全てを闇に葬ってくれようぞ」

「フッフッフ！ アーッハッハッハッハ！ ファッフアッフアッフアッフ！」

いきなりの笑い声。

格納庫中にある男の雄叫びのような笑い声が響き渡っていた。

「ウリバタケさん。お、落ち着いてください」

「落ち着いていられるか！ ようやく、ようやく完成したんだぞ！」

「その喜びは分かりますが……」

「いや！ お前は分かっているじゃない！」

「分かっていますって！」

「いや！ 分かっているじゃない。いいか！ これはな……」

トホホ……。

「「「「うおっしやああ!」「」「」

タタタツ。

退避。巻き込まれたら大変な事になりそうだ。

「ふう・・・」

格納庫を抜け、廊下を歩く。

それにしても、基地内も大分雰囲気が変わってきたな。

以前は木連憎しといった感じでギスギスしてたのが、今では・・・。

「代表の言葉は効いたな」

「ああ。司令の事を本当に思うなら和平の為に力を尽くす・・・か」

「流星娘だな。本当に父親の事を理解している」

「俺達、間違っていたのかもな」

「おう。だから、その分、新代表の下で和平の為に全力を尽くそうぜ」

「ああ。それが俺達改革和平派の夢だからな」

こうして、和平の為に木連と手を取り合おうと頑張っている。

艦長の就任挨拶で告げた言葉。

『父は己が死んでも和平を目指すでしょう。それが父です。』

そんな、父を慕う方々が父を理解していない筈がありません』

司令を慕うが故に木連を嫌った軍人。

彼らの胸にこの言葉は響いた。

司令の仇を取るぐらいなら、司令の夢を叶えよう。

そう思い、後ろを見るのではなく、前を見るようになった。

どうして司令が、という思いはあるだろうが、それを押さえ込んで
和平を目指している。

それがこの基地の空気を良くしており、皆を活気付けていた。

「着々と新型機も揃いつつある」

現段階でのアドニスバリエーションは七種類。

正式名称だけでは作戦中に長くなるので、略称も考えてみた。

アドニス特殊隠密仕様。 a d - S S (S p e c i a l S e c r e t) 。

特殊な武装と高い隠密性が特徴の機体。

アドニス物量射撃仕様。 a d - M S (M a t e r i a l s S h o o t i n g) 。

圧倒的な物量を誇る射撃が特徴の機体。

アドニススーパー仕様。 a d - S R (S u p e r R o b o t) 。

強固な装甲と高い攻撃力が特徴の機体

アドニスリアル仕様。 a d - R R (R e a l R o b o t) 。

アドニス後方狙撃仕様。 a d - B S (B a c k s S n i p i n g) 。

射程外から放つ精密射撃が特徴の機体。

アドニス殲滅射撃仕様。 a d - A S (A n n i h i l a t i o n S h o o t i n g) 。

圧倒的火力とシンプル性が特徴の機体。

アドニス接近格闘仕様。 a d - A G (A p p r o a c h G r a p p l e) 。

格闘戦専用武装の豊富さが特徴の機体。

計七機のナデシコが誇るエステバリス発展機だ。
ナデシコのパイロットはアキトさんが戻ってくると八名になる。
・・・アカツキに関しては除いてもいいだろう。

とにかく、ナデシコパイロットの全員分を揃えるならあと一機必要という事だ。

それに、誰がどれに乗るかも正式には決定していない。

「適正だけじゃパイロットは選べないよな」

一番適正があつた者がパイロットとはいかない。

一つの機体で同じくらいの適正のものがいたり、

ヒカルのようにどの機体にも同じくらいの適正を持つ者もいる。

それらを考慮して、バランスを考えなければならぬのだ。

「ふむ。艦長に、いや、艦長だけじゃなく、副長やイネスさん、

ウリバタケさんにゴートさん辺りにまで相談した方が良さだろう」

艦長、副長は言うまでもない。

機体に詳しいマッド二人組も欠かせないし、戦闘指揮としてゴートさんも欠かせない。

・・・仕事をしているかどうかは別として・・・良いのだろうか？

ま、まあ、軍人的見地からの話も聞きたいので、ゴートさんにもお願いするでしょう。うん。

新型機のパイロットを決めるのは今後の戦闘に大きな影響を与える。

和平の行く末にも影響を与えようと思うので、しっかりと皆で確認しあつて決定しようと思う。

もちろん、パイロット勢も含めて。

「あと一機どうするか？」

候補としては明日香、基地のおっちゃん達、マッド組、あとは辛うじてネルガルかな。

明日香は今後、改革和平派の主要機体となる『飛燕^{ヒエン}』の量産で忙し

いだろう。

おっちゃん達は今、アドニス接近格闘仕様を依頼している状況。ネルガルは・・・改革和平派ではなく、火星再生機構に協力しているだけ。

改革和平派の一員であるナデシコでは依頼しても駄目かもしれん。

・・・再びマッド組＋整備班に頼むか？ でも、開発を終えたばかりだからなあ・・・。

ん？ 逆に喜ばれるか？ 彼らは何もしてなければ暴走するだけだから。

生き甲斐を感じさせてあげた方が管理する側も彼らも喜ぶかもしれない。

基地内で機体の整備をするだけで満足する連中じゃないし。

エックスエステバリスの開発に成功した前例。

そこに改修案である殲滅射撃仕様と後方狙撃仕様を開発した発展させる力と、

先日、北米支部から頂いたステルンクーゲルの技術を組み合わせれば・・・もしかして・・・。

うん！ これを明日にでもウリバタケさん達に相談してみよう。

多分、今日はずっと馬鹿騒ぎをしているだろうけど、

明日にはその凄まじい達成感から逆に無気力になっている筈。

あれだ。一年に一度の行事が終わった後の喪失感に似てる。

その時にすかさず提案すれば、迷う事なく即行で頷いてくれる事だろう。

うん。これで行こう。これが俺の戦力の充実という任務における最後の仕事だ。

「という訳で、ウリバタケさん、まずはコンセプトを決定しまし
う」

「おう！ いやあ、お前は相変わらず良い奴だな。面白いネタをど
んどん持ってきてやる」

案の定でした。

完成翌日、どこかゾンビのような顔で仕事をする整備班達。

疲れて眼の下に隈がある時が元氣に見えて、

グッスリ寝て健康な肌つやをしている時が元氣に見えないという摩
訶不思議。

やはり浪漫こそが彼らの生き甲斐なのでしょう。

浪漫を提供する事ぐらい、この俺にも出来る。

さあ、ウリバタケさん、浪漫を具現化しましょうや。

「ウフフ。次はどんなのを作るのかしら？」

「イネスさん。俺なりに構想は練ってあるんです」

「へえ。聞かせて欲しいわね。貴方の構想なんて聞いた事ないもの」

そういえば、そうかもしれませんね。

開発関係は、依頼はするものの、自分ではあまり考えませんでした
から。

やっぱり、この世界の人間にこそ技術革新を起こす権利があるかな
って。

だから、今回も既にある技術の組み合わせで新型機の構想を練った
つもりだ。

「ウリバタケさん。イネスさん」

「おう」

「何？」

「今現在、俺達が持つ新技術は何だと思います？」

「新技術？」

「そうね。エックスエステバリス、グラビティライフル、相転移エンジンといった所かしら」

「良い点ついてます」

「へえ。それじゃあ、貴方は他にも何かあるって？」

ええ。あるんです。

「それに加えて、ケイゴさんから預けられ、研究を許された夜天。

北米基地が差し出したステルンクーゲル、相転移エンジンの外付け技術です」

「エクスバリスに、夜天に、ステルンクーゲルに、外付け技術だ？」

「ええ。俺はそれこそが新しく作り出す機体の方向性を示していると思います」

エステバリスだけの技術ではない。

アドニスとして生まれ変わり、その付加効果として齎された数多の
新技術。

そこに未来の技術と木連の技術を組み合わせ、俺は新しい機体を
作り出したいんだ。

「それぞれの特徴を整理してみましようか。コウキ君」

「はい」

「貴方はそらの機体から何を抜粋しようっていの？」

抜粋。俺の求める新型機の形。

「夜天。その特徴は圧倒的機動力にあります。

旋回、加速、停止。直線的スピードのみではなく、機動関連全て
に優れています」

大量のブースターとスラスター。
無茶な機動を得る為に研究され尽くした集大成がそこにはある。
ただ付けるだけでは戦闘など不可能であろう。
戦闘を可能にし、宿敵を屠った機体。かなりの工夫がなされている
筈。

それを俺達が研究して、身に付けてしまおうという魂胆だ。

「それは追加装甲のお陰よね」

「はい。でも、追加装甲という形を取らずとも、その機動力を実現
させられると思います」

「まあ、出来なくはないわね」

夜天からは機動力を。

「ステルンクーゲル。その特徴は重力波に頼らない長い稼働時間に
あります。

重力波に依存するアドニスに重力波とステルンクーゲルの大出力
ジェネレーター。

その二つを組み合わせる事で今までにない新しいの出力確保機構
を得たいと思います」

想像通り、ステルンクーゲルに使われていたのは、

木連兵器に採用されているジェネレーターを改良したものだ。た。

これがあれば、重力波アンテナに頼らずともある程度の稼働時間を
確保できる。

「二つを組み合わせる？ 本気で言ってるの？」

「ええ。どちらも重力波ですし、得たい物は同じです。後はどのよ
うな方法で生み出すか」

「貴方ねえ。そう簡単にいくものではないのよ?」

「無理ですか? ウリバタケさん。イネスさん」

真剣な視線で訴える。

それで良いのですか? 諦めていいのですか? と。

「へっ。無理かと訊かれて無理だと答えたら男が廃るってもんだ。やってやるうじゃねえか」

「ふう。ま、出来る限りやってみるわ」

「ありがとうございます」

ステルンクーゲルからは重力波アンテナに頼らない出力源を。

そして、組み合わせ機構により新しい出力確保機構を手に入れる。

「それで? 外付け技術つてのは?」

「ええ。アドニスのスーパー仕様から分かる通り、

俺達は通常の機体に外から相転移エンジンを付加させる技術を得ました」

「まあ、一応な」

相転移エンジンは強力な出力源。

だが、その大きさから、エステバリスには搭載できないとされた。その結果が、戦艦からの重力波配給。

実際、それ以外に高性能小型化は不可能であつたと言えるだろう。だが、その不可能と思われていた技術をスーパー仕様の機能によって実現を可能とさせた。

人型機動兵器に相転移エンジンの出力を配給する技術を習得できた訳だ。

これを活かさないのは非常に勿体無い。

「相転移エンジンの小型化は不可能。」

それならば、その大きさのままが良いので、外付けで出力を得ようという訳です」

「でもよお、それはスーパー仕様が大きいからだろう？」

他の仕様の機体じゃあ、大きさが合わなすぎると思っぜ」

「背面を全て覆う形にしても構いませんよ」

「あん？」

「ランドセル機構にして、背面側全てを犠牲にし、外付けしましよ
う」

「……無茶苦茶な事を言っな、お前」

「無論、多少全体のサイズを大きくしないとアンバランスでしょう
が」

「いつその事、機体と戦闘機を合体させる形でやるか」

「戦闘機に相転移エンジンを積んで、機体と組み合わせる形にする
のね」

「それでいきましょう」

一つの機体に一つの戦闘機が合体するような形。
まるでオーでライザーのように背面を覆わせる。
もしくは ファルコンとガ ダムX。

「アドニスからは培った技術をそのまま」

そして、アドニスの七つのバリエーションのそれぞれの技術を複合
させる。

「なんとなく貴方の言いたい事が分かったわ」

「分かって頂けました？」

「ええ。圧倒的機動力の高火力機体ね。しかも、自然な形での」

「その通りです」

俺の求めるコンセプトは人型の汎用性を残した高機動高火力機体。

「詳しい所も教えてちょうだい？」

「分かりました」

今まで考えていた夢物語のような構想を話す。

「まず、相転移エンジンの出力は殆ど推進機構に用います」

「せっかく外付けしたのを機動だけに使うってのか？」

「ええ。常に飛び回る事が前提である以上、そのエネルギー消費は凄まじいものになります。」

その負担を考えるに、相転移エンジンの出力の殆どを捧げてもおつりは返ってこないでしょう」

「随分と思いついた使い方だな」

「ええ。それに、出力を完全に賄う事が出来れば、

限界距離を越えてからの稼働時間も稼げると思っています」

「まあ、推進機構さえ働けば、攻撃できずとも逃げ回れるでしょうからね」

「はい」

俺が思うに、稼働時間を大きく削っているのは機動でのエネルギー消費。

それが相転移エンジンから配給されるならば、かなりの時間が稼げると思う。

「それに加えて、ステルンクーゲルの大出力ジェネレーターで機体自体の出力を賄います」

「推進機構を相転移エンジンで賄い、機体自体をそのジェネレーターで賄う訳か」

「それで組み合わせ機構と聞いたのね」

「ええ。これならば、どれだけ高機動で動こうとも機能停止する事はありません」

「なくなりそうになったら、エネルギーを補充する為にナデシコ近くまで戻れば良い訳だろ？」

「そうなりますね。その為には重力波アンテナも使えるよう調整しなければなりません」

「ま、それはお前の仕事だ」

「・・・はい」

自分で言いだした事だからきちんとやりますよ。

・・・想像も付かない程の苦勞になりそうですが。

「また、グラビティライフルですが、

これは重力波アンテナから直接出力を得ますので、機体に負担は掛かりません」

「とにもかくにも機動面に力を注ぎたい訳ね」

「ええ。流石にディストーションフィールド、

ディストーションブレードは機体の出力から展開しますが」

「それでも、相転移エンジンは使わない訳だな」

「相転移エンジンのメインは推進機構。これがこの機体の絶対条件です」

高機動で移動し続ける為に必要な仕組み。

後は・・・。

「しかし、それだけでは火力不足が否めません」

「グラビティライフル、ディストーションブレード、これだけじゃあな」

「グラビティライフルで何かしらの工夫があればいいけど、ないん

でしょ？」

「はい。殲滅射撃仕様のようなバリエーションはありません」

「そうすつと、確かに火力不足だな」

「強度に関しては強化できそうだけどね」

まあ、機動力に使っていた分のエネルギーをDFに使える訳ですからね。

機動面でのロスがなくなった分、他の所の性能は向上するわな。

「そこで、一つだけ相転移エンジンの方からエネルギーを回した武装を装着しようと思います」

「それでさつきから殆どって言うてたんだな」

「ええ。殆どを機動に、それでも、かなりのエネルギーが武装に当てられます」

「まあ、一基積むだけでかなりのエネルギーが得られるからな」

「さて、それで、その武装ってのはどうするつもりなの？」

「エネルギーの過剰排出。以前、イネスさんが話していた事です」

「最高出力を更に超えた出力を得られた際に、

機体に籠もってしまうであろうエネルギーを外に逃がすって奴ね」

「はい。相転移エンジンを積み込む事でそれが可能になる筈です。

エネルギーの面では」

「ええ。重力波を圧縮して物質化。背面にウイングを取り付けて、その先端から排出」

「それが実現したら凄まじい切れ味だな。加速力も半端ねえ」

「どうにか出来ませんか？ イネスさん」

「いいわ。自分で言った事だもの。やりましょう」

「ありがとうございます」

高速戦闘に最も適した攻撃方法。

加速効果 + 攻撃のスーパーコンボ。

「おっしや。それなら、俺が機体の本体の方を担当しよう」

「それじゃあ、私が戦闘機と相転移エンジン関係をやればいいのね」

「おう。組み合わせ機構の方は後で相談だな」

「まずはそれぞれの設計から始めましょう」

「うっし。燃えてきたぜ」

「そうね。久しぶりに自重を忘れようかしら」

いや。自重は忘れちゃ……いえ、今回限りは忘れちゃってください。
い。

「好きなようにやっちゃってください」

「ふふっ。そんな事言って、後悔しないでね」

「言質は取ったからな。忘れるなよ」

……もしかして、早まったか？

「んじゃ、俺は行くぜ。あばよ！」

「私も失礼するわね。お兄ちゃんの為に頑張らなくちゃ」

いや。確かに高機動用でアキトさんっぽいんですけど。

アキトさんに決まった訳では……。

「あ。行っちゃった」

言う前に逃げられた。

まあ、確かにアキトさん用の機体になりそうだから良いけど。

「人型の汎用性を残しつつ、高機動高火力。機体を覆う形で戦闘機を組み合わせる」

ふむ。面白い機体になりそうだな。

「エネルギー配給が他の機体より多いから、それぞれの強度もあがるだろうし」

DFの強度が上がれば、全体の防御力が向上し、ディストーションブレードの攻撃力も上がる。

「せっかくの加速力。劇場版のブラックサレナのようにタックルも出来るようにしたいな」

スピードがあるというだけで武器になる体当たり。

強度も申し分ないだろうし、これもまた大きな武器になる。

「パイルバンカーとはちょっと違うけど、先端を尖らせた武器をどこかにつけるかな」

後はその武器を前面に出しながら突撃すればいい。

「うん。楽しみだ」

俺も俺で調整を頑張るとしようかな。

全体図があまり想像できないけど、かなりの高性能になる事は間違いないだろうし。

・・・二人の自重レベル次第だ。いや、ちょっと怖くもあるけど。出来る限りの事をしよう。
なんととっても、俺の最後の任務だしな。

「徹底抗戦派が怪しい動きをしている？」

「ええ。世界中を駆け回っている私が言うんだから間違いないわ」

ムネタケ総参謀長の穴を埋めようと更に精力的に活動し始めたムネタケ提督。

今は提督業もやってないし、中佐と呼ぶのが良いのかもしれない。

「確かに追い込まれたのは事実ですが……」

「先日のミスマル代表就任挨拶の影響ね」

「改革和平派以外の者が焦りだしましたか？」

「ええ。今更謝罪しても二番煎じで意味がない。

かといって開き直って支持が得られる筈もなく」

「彼らに与えられた選択肢は二つ。反発するか、傘下に入るか」

「そうね。事実、改革和平派の将校を通して改革和平派に鞍替えした者も多いわ」

「それはそれでムカつきますけどね」

「ふふつ。そう簡単に鞍替えできると思われても困るんだけどね」

そうニヤニヤ笑うムネタケ中佐。なんか怖い。

「鞍替えする際に一度受け入れて、

その後、その者が汚職をしていないか調査しているわ」

「別所属だと処分できないけど、傘下に入ってしまったえば処分が出来る」と

「ええ。自己保身ばかり考えている輩にはちょうど良い処置だと思わない」

「アハハ……」

変わったな。中佐。

昔は自身が処分される側の立場だったというのに……。でも、それなら、同じように気高い夢があったが故に挫折した軍人もいるかもしれないんだよな。

「中佐。あの……」

「分かってるわ。過去の汚職だけを見るつもりはないわよ」

「どうするんですか？」

「証拠を突き付けて、開き直ったら処罰、

それ相応の態度を取ったら今後の働き次第で処罰なし」

「そうですね」

「ええ。何故汚職したのか、何故軍人になったのか。

それらをハッキリさせて、失った魂を取り戻せるなら過去は気にしないわ」

「分かりました。俺もその方が良いと思います」

「ま、開き直った場合は……クスッ」

こ、怖ッ！

「現在、改革和平派の支持率は、民間3分の2、軍内5分の3、といった所ね」

「それでも、徹底抗戦派を支持する人は民間にも軍内にもいるんですね」

やっぱり恨みや憎しみというものは大きいんだな。

「仕方ないわ。家族を失った者、友人を失った者、仲間を失った者。命を落とした軍人の家族からしてみれば、憎しみの対象なのは変わりないんだもの」

「・・・そうですね。誰だって大切な人を失えばそうなりますよね」

恨みを忘れるなんて方が無理なんだよな。

必死に押さえ込むぐらいしか対処法はない。

それでも、いざ前にしたら、どうなるか分からないし。

俺だって・・・ミナトさんやセレス嬢を失ったら・・・。

「過半数は超えている。それが今の所の強味ね」

「艦長の演説が効きましたか？」

「ええ。以前は和平派内にも抗戦を訴える者が出てきたんだけど、それもなくなつたし。」

彼女の演説前と演説後では15%程の差が出てるわ。流石はミスマル総司令官の娘ね」

「まあ、彼女の言葉には不思議な説得力がありますから」

カリスマ性。まるで道を示すかのような先導者的リーダー。

不思議な程に彼女には人が付いてくる。

「ところでうちの艦長はこういう後ろ暗い事を知ってるんですか？」

「それなりにはね。話すべき事はきちんと話してるわ」

「それ以外は？」

「決まってるじゃない。秘密裏に私が処理してるわ」

「やっぱり艦長は向きませんかね。こういう工作」

「無理ね。テンカワ・アキトと同じ。汚れ役を担う人間がいないと円滑に進まない」

なんてツンツンした顔で言ってるけど・・・。

「手厳しい言葉ですけど、そんな汚れ役を中佐は率先して担っているんですよ？」

「ふ、ふんつ。見てられないだけよ。私はお父様の意志を」

「相変わらず素直じゃない人だ」

「貴方、何が言いたいなの？」

「いえ。なんでも」

なんだかんだ言って、ムネタケ中佐の働きは改革和平派にとって途轍もなく大きい。

率先して汚れ役を担ってくれるお陰で艦長の負担もかなり減っているし。

さつきみたいに手厳しい事ばかり言ってるけど、それは期待の裏返しだろうな。

自分が汚れ役を引き受ければ、後は彼らに任せておいても大丈夫だっつていう。

素直に認めたくないから憎まれ口ばかり叩く。大分慣れてきたな。

この人の言動にも。

「そういえば、その中佐のお父様ですが・・・」

「ええ。テンカワ・アキトがスカウトしたそうよ」

「やはりミルキーウェイに参加しましたか。」

総参謀長程の能力の持ち主を隠居させては大きな損失ですからね」

「お父様自身も充実してるみたい。」

「今まで軍一筋だったから、老後の盆栽代わりで楽しいって」

「火星再生を盆栽と同一視ですか」

思わず苦笑。規模が違い過ぎるっつての。

それでも、何故か納得できてしまうのは総参謀長の能力の高さを知ってるからか？

「まあ、お父様がいるなら、大船に乗ったつもりでいいでしょ

うね」

「それは同意です。凄まじい頭脳を手に入れましたね。アキトさんは」

「お父様も率先して汚れ役をこなしてくれる補佐役。

テンカワ・アキト達にとっては一番欲しかった人材かもしれないわ」

「ルリちゃんもラピスちゃんも汚れ役とはちょっと違いますからね」

「そもそもマスコットに汚れ役をやらしてどうするのよ」

「あ、それもそうでした」

「八八八。相変わらず抜けてるわね」

「そうですかね？ そんなつもりはないんですが」

「ま、抜けてる人間は皆そう言うものよ」

そういうものなのかな？

まあ、別に良いけどね。抜けてるって言われても。

「それで、徹底抗戦派は何を企んでいるんですか？」

「詳しい事は分からないんだけどね。物資の蓄え方が以前より派手になってるのよ」

「争いに備えて物資を蓄えているという事ですか？」

「ええ。木連に対してなら以前とペースを変える必要はないでしょう？」

「前回の戦闘で蓄えが足りないと気付かされたというのは？」

「表向きにはそうするでしょうね。でも、怪しい事に変わりはないわ」

ふむ。確かに怪しいといえば怪しい。

「それに、異動が増えたわ」

「異動？ 改革和平派の人間のですか？」

「違うわ。というよりかなり無差別。派閥関係なく飛ばされてるわ」

・・・意図が分からないな。

「火種を排除するとスパイを送り込む為といった所でしょうか？」
「そうね。そのせいで誰がどっちの派閥の人間か分からなくなつたわ」

「改革和平派と名乗ってもスパイの可能性があると」

「ええ。団結しなくちゃいけないってのに。不信任が募ってるわ」
「完全に狙われてますね」

もし隣の人間がスパイだったら・・・。
そう想像したら誰も信用できなくなる。

たとえその隣の人間が本当に改革和平派であろうと疑いは晴れない。
そんな時、いざ戦闘が始まれば・・・連携なんて取れる筈がない。

「ええ。反面、徹底抗戦派は仲間内で団結できるわ」

「厄介ですね。仲間を疑っている限り、戦闘に集中できません」

「貴方の話、聞く限り、前提があるわね」

「ええ。支持率で負けてて、特に手がない時、短絡的な連中なら・・・」

「クーデター。武力行使による政権確立ね」

「はい。それ以外ないでしょう。完全に意見が分かれた以上」

木連との戦争中だったのに、内乱かよ。
クソツ。意味のない戦力消費だったの。

最終決戦に向けて戦力を充実させなくちゃならないのに。
勝利で終わろうが和平で終わろうと戦力は絶対的に必要なんだぞ？
地球が負けたらどちらも成らないって分かってるのか？

・・・駄目か。俺らと考えが違い過ぎるんだ。対立は必至。

「ステルンクーゲルとエステバリス、ヒエンはどちらが上？」
「エステバリス三機でステルンクーゲル二機分。
ヒエンとステルンクーゲルは同程度の性能と見て良いですね」
「・・・かなり不利ね。勝つ見込みは？」
「状況次第です。特性上、我々は迎撃は出来ても進撃は出来ません」
「そう。でも、長期戦であれば勝てる見込みはあるんじゃない？」
「補給される前であれば、あるいは・・・」
「ま、貴方と戦術を話しあっても意味ないわ。私の専門外だし」

振っておいでそれはないんじゃないですか。中佐。

「私は私の仕事をするだけ。いざ戦闘になったら代表にお任せするわ」

「戦術家としては地球屈指ですからね。艦長」

「さあ？ シミュレーションと実戦は違うから」

「相変わらず手厳しい」

「ま、負けはしないだろうけどね」

そして、相変わらず素直じゃない。

「今日はお忙しい中、すいませんでした」
「いいわよ。私としても有意義だったわ」
「それは良かった。それでは、失礼します」
「ええ。また来なさい。何かあったらね」
「はい。ありがとうございます」

中佐の執務室から退室する。

「クーデター・・・ね」

敵は木連だけじゃないってか？

・・・はあ。やってられないって。

「頼むから、変な真似はしないでくれよ」

地球も木連も荒れに荒れてやがる。

未来にちよつと不安を抱く今日この頃。

今俺に出来る事なんて限られている。

せめて、後手に回っていても対処できるように戦力の充実に努めないとな。

地球人同士の争いなんて無様なものだけど、避けては通れない道。

それなら、押し潰すぐらいの勢いで行かなくちゃ駄目だ。

「そろそろナデシコの改修も終わるし」

まあ、後悔の残らないよう出来る限りの事はやりましようかね。

第八十八話（後書き）

完全にアキト仕様。

火力不足は否めない。

いや。まだ開発前だからいくらでも修正は効くんですけどね。

コンセプト自体に無理があったら意味がないかなって。

命名グラビティウイングも実は無理がある気がするって……。

火力不足を補う為の武装（高機動戦に向いている奴）を教えてください。

かといって、詰め込みすぎると折角の高機動仕様が無意味になるの
で……。

シンプルながらも強力で負担が少ない奴。

……無茶な注文だな……。

第八十九話（前書き）

記念すべき20000突破！

え？ 何が20000突破かって？

ふっふっふ。この作品が20000KBを突破したんですよ。

いや、僕はメモ帳に書いてそこから貼り付けてやってるんですけどね。

メモ帳で20000KBって結構大変なんですよ。

我ながらよくここまで書いたなってちよつと悦に浸ってる訳です。

また、感想も沢山頂いて・・・もう嬉し過ぎて涙が出ますね。

皆さんに支えられてここまで書く事が出来ました。

完結に向けて頑張りますので、これからも応援お願いします。

第八十九話

「極東方面軍本拠地となるこの基地は今後軍に復帰したフクベ提督に指揮を執って頂きます」

随分と突然だな。

まあ、確かにミスマル司令が入院し、ムネタケ総参謀長が退役となってしまうた今、この基地の最高責任者の席は空位。

誰かしらに指揮を執らせないと機能しないもんな。

実際、本拠地なのに二週間近く放置してしまつて、それまでの間、基地としてまるで機能していなかった。

フクベ提督の復帰は代表者二人が表から去つたが故だろうな。

それまで退役したままで活動してたけど、ユリカ嬢の他にも核となる人間が欲しい。

その為の復帰、その為の基地の最高責任者就任という訳だ。

「しっかし、そうすつと艦長はどうなんだ？ 立場的にこの基地を治めるべきなんじゃねえのか？」

「いえ。私はあくまでナデシコの艦長です。それに基地なんて任せられても困ります」

・・・正直ですね。ユリカ嬢。

まあ、確かに基地を統治する貴方の姿は想像できません。

・・・ジユン君に全ての書類を任せる姿は想像できるけどね。

「今までは改革和平派の代表として各地へ飛び回っていましたが、

ようやく解放されました」

「そんな事してたんだな。艦長。俺はてつきり」

「てつきり何ですか？ リョーコさん」

「おお。遊んでんのかと思ってた」

「・・・ガーン」

「容赦ないね。リョーコ」

・・・本当に容赦ないですね。スバル嬢。

冷や汗を掻きながらも突っ込みを忘れないヒカル上も流石だけど。

「それで？ 解放された艦長はこれからどうするつもりなの？」

「そろそろ基地生活にも飽きてきました、私」

「そうねえ。ちよつと堅苦しいものね、ここ」

「あ。やっぱりですか。ミナトさん」

「ええ。メグミちゃんの気持ち、すつごく分かるわ」

・・・結構、マイペースに過ごしてた気がするんですけど。

というかさつきから突っ込みしかしてないな、俺。

・・・自分に突っ込んでどうするよ？

「ふっふっふ。皆さん！ 聞いてください！」

「怪しい笑みね」

「話を聞く為に集まってるんだけどな」

「今更勢い付かれても・・・」

「グスン。皆が冷たいよお」

「だ、大丈夫だよ。ユリカ。僕はいつだって君の味方さ」

「・・・ジュン君」

「・・・ユリカ・・・」

「・・・」

「・・・」

無言で近付いていく二人。

その間は徐々になくなり、二人の距離は。

「「「「「やめえい!」「」「」」

「「「うわっ!」「」

・・・最早突っ込みきれん。

「コ、コホン」

続きをお願いします。艦長。

「ナデシコの改修が始まってから二ヶ月近くの月日が経ちました」

「ふむふむ。この始まり方は・・・」

「もしかして・・・」

「皆さんの想像した通りです。パワーアップナデシコが遂に帰ってきました!」

「「「「「うおっしやああ!」「」「」」

「本日より私達はナデシコにて活動を再開致します!」

「「「「「うおおおおおっお!」「」「」」

「という訳で、明日香インダクトリーに向かいます!」

「「「「「うおおおおおっお・・・って、あれ?」「」「」」

「え?」

え? って艦長。

「艦長。もしかして、この大人数で直接明日香に向かうつもりだったんですか?」

「えっと、最初はクルー皆で見たいかなって」

「・・・無理です。素直に最低人数で行って、ここまで持ってきてましよう」

「・・・やっぱり？」

「はい」

ナデシコクルーが普通の戦艦より少ないのは確かだけど・・・。

こんな大人数で交通機関を使って移動するのは流石に厳しい。素直にこの基地まで持ってきて搭乗した方が早い。

時間的にも労力的にも、何より荷物的にも。

「それなら、ブリッジクルーと、パイロットを一人」

「おお！ それなら俺が行くぜ！」

「待ってよ！ 私も行きたい」

「おいおい。俺が行くに決まってるだろ！？」

「私はお留守番していきましょう」

「私もそうするわ」

「私も。おばちゃん達に挨拶しなくちゃいけないもの」

ガルルという擬音が聞こえてきそうな勢いで争うヒカル、スバル嬢、ガイ。

それに反して、貴方達は平和で助かります。イツキさん、イズミさん、カエデ。

「えっと、マエヤマさん、良いですか？」

「ええ。構いませんよ」

「・・・ナニイイイ！」

いや、だって俺、ある意味責任者だしさ。ブリッジクルーの一員でもあるし。

「い、いや、コウキはブリッジクルーとしての活動があるだろ？」
「そ、そうだよ。だから、パイロットは私に任せて」
「俺がやってやるから大人しくブリッジにいるよ」

今度は一致団結。

なんか本当に相性良いな。この人達。

「艦長。任せました」

「え？ え？」

「艦長！」

「誰を！」

「選んだよ！？」

「え、ええつとお」

「「艦長！」」

「うえええん。なんでよお」

「「艦長！」」

「イ、イツキさん！ お願いします！」

「え？」

「・・・あ。逃げましょうか」

「そうね。私は食堂に行ってくるわ」

「・・・危機察知能力があるのかないのかわからないわね。とりあ
えず、逃げましょう」

「俺と代われ！ イツキ！」

「私と代わってくれるよね？ イツキちゃん」

「分かってるよな？ イツキ」

「か、艦長！ 困ります！」

・・・なんとというカオス。

イツキさんがあまりにも可哀想だ。

「艦長。三人とも連れて行きましょう」

もうそれしか方法はないですよ。

「・・・そうですね。妥協します」

諦めの溜息を吐く艦長。

幸せが逃げますよ。ほら、ジユン君、吸って吸って。

「よっしや」

「いやあ。言ってみるものだね」

「楽しみだぜ」

楽しそうで何より。

「それでは、皆さん、行ってきます」

「「「「「いってらっしやあ〜い!」「」「」「」

はい。行ってきます。

「コウキ君は明日香の人達と会議してたのよね」

「ええ。一応、ナデシコ戦力の充実が俺の仕事でしたからね」

ナデシコが地球に帰って来てから大体三ヶ月。

これまでに色々な事があった。

ヒラツカドックに入港して、待機命令。

その間、俺は新型機を求めてあちこちに飛んで、新型機を掻き集め。木連の和平派との橋渡し役になると努めるものの罫に嵌められ、溝を深めてしまったり。

ケイゴさん達を保護して、木連の神楽派本拠地に入り込んだりもした。

二ヶ月前には明日香にナデシコを預け、和平派本拠地にて基地生活を始めた。

ミスマル司令の死を隠し、和平への計画を進め始めて。

アキトさん達は火星再生機構の隠れ蓑となるミルキーウェイを発足させ、着実に準備を進めた。

アザレアを開発したり、カエデと模擬戦をしたり。

大規模な木連との太平洋戦争を繰り広げ、その後、ユリカ嬢が代表に就任。

木連では三羽烏が分解し、それぞれの派閥に分かれたり。

ムネタケ総参謀長が永久追放になったり、フクベ司令が軍に復帰したりなど。

「いや。本当に色々あったな」

少なくともこの三ヶ月が俺の人生の中で一番忙しい時間だったと思う。

「どうしたの？ 突然」

「いえ。忙しかった三ヶ月間を振り返ってました」

「そうね。コウキ君。ずっと働いてから」

「・・・大変そうでした」

「まあ、そうなんですけどね。結構、充実してましたよ」

新型機を集める仕事だって、仲間の生存率をあげる為だと思えばやる気が湧いた。

木連との橋渡し役だって、今後の自身の夢だと思えば苦に思わなかつたし。

「戦争に勝とうと和平を結ぼうと、コウキ君が一番の立役者ね」
「え？ それは過大評価過ぎますよ」

別に大きな事はしてないし。

「うふふ。鋭いんだか、鈍いんだか」

「・・・コウキさんはもっと自信を持つべきです」

「そうかな？」

「・・・はい。全部コウキさんのお陰なんですから」

それは言い過ぎです。セレス嬢。

ま、それなら、ちょっとぐらいは誇るのかな。

「それで？ ナデシコはどう変わったの？」

「それは」

「説明しましょう！」

「イ、イネスさん!？」

い、いつの間に背後に・・・。
というか・・・。

「なんで来てるんですか？」

「あら？ 私もブリッジクルーの一員として」

「違いますよね」

「・・・細かい男は嫌われるわよ」

「す、すいません」

その冷たい視線はマジで勘弁してください。
心が折れます。確実に。

「私もナデシコ改修案に参加した身としては気になるのよ」
「イネスさんの提案によって大分形が決まりましたからね」

流星は開発者。その技術力と知識は明日香の開発チームを唸らせたものだ。

実際、方針会議はイネス女史の独壇場で、殆どが彼女の案とって良い。

「説明してよ。コウキ君」

「説明！？ 私がするわ」

「・・・お任せします」

嬉々とした笑顔を向けないで下さい。

そのギャップは破壊力あり過ぎですから。

ガコンッ！

「イタッ！」

「何を考えていたのかしら？」

「ミ、ミナトさん？」

「・・・お仕置きです」

「セ、セレス嬢」

「ああ・・・久しぶりの説明」

「助けなし！？」

・・・話聞いてあげますから。助けてくださいよ。

・・・もう遅いけど。

「あら？ 何があったのかしら？」

「・・・なんでもありません」

人には触れて欲しくない所もあるんですよ。イネス女史。

「早速説明してあげてください」

俺なんかより上手く説明できる筈だ。設計者だから要点掴んでるし。
・・・脱線しなければっていう前提があるけどね。

「そうね。せっかくだから、改革和平派キクザクラと比較して説明
しましょう」

お。それは助かる。

実際、キクザクラの性能はあまり知らないんだよ。
まあ、遺跡から調べれば早いけど、普通に知る事の出来るものに使
いたくない。

「まず、グラビティブラストについて」

ナデシコ級にとって最大攻撃力を誇る武器。

「キクザクラは可動式グラビティブラストが四門。

ナデシコは相も変わらずグラビティブラストは一門ね」

「可動式グラビティブラストの方が使い勝手は良いですよね」

「四門と一門か。結構差が出ちゃったのね」

「そうでもないわよ」

「え？」

数の差で劣っていても、差はない？

「その分、ナデシコのグラビティブラストは威力に拘ってるもの」「
そういう事ね。」

「それに、相転移砲もあるでしょ？ ナデシコには。
確かに一方向しか撃てずに使い勝手は悪いけど、殲滅戦ではキク
ザクラじゃ到底及ばないわ」

なるほど。数ではなく、質を重視したって事か。

「次は搭載されているAIについて」

ナデシコ級の根本を支えるオモイカネ級AI。
人員削減及び性能の発揮の為には欠かせない存在。

「ナデシコはオモイカネ、これは以前までと変わらないわね」
「寂しそうでしたか？」

「ええ。本当にあの子はルリちゃん、
ラピスちゃん、セレスちゃん以外には心を開かないんだから」
「まあ、お友達ですからね。皆」

「・・・コウキさんもです」
「そうね。イネスさん。コウキ君を忘れてますよ」
「ふふつ。そうだったわね」

僕も一応オペレーターですからね。一応。
ありがとう。セレス嬢。俺自身、忘れかけてた。

「キクザクラはオモイカネ級AIを劣化させたもの。」

これはそのままだと通常オペレーターには負担が掛かり過ぎという理由からね」

「あれ？ でも、カグラヅキでは複数人で対応できてましたよ」

オモイカネ級に対して数十人で当たらせればMC並の働きはさせられるとか。

「それは木連人の中でIFSを持っている人がそこに集中してたからでしょ？」

「え、ええ。多分」

ケイゴさんがIFSを持ち帰ったって言ってたし。

「地球では全体的にIFS所持者が少ない。そんな中で各戦艦にオペレーターが着任するの」

「それは確かに人手不足になりますね」

「戦争が数である以上、戦艦の数を減らしてまでキクザクラには回せない」

「となるとキクザクラに回せる人数はそれ程多くはないと」

「その通り。だから、劣化させざるを得ないのよ」

複雑な事情があった訳ですか。

でも、あれだけの性能を持つ戦艦だ。なんとなく勿体無い気がする。

「でも、例外はあるわ」

「へ？ 例外？」

「ええ。セレスちゃん。以前、貴方はキクザクラに乗ったわよね」

「・・・はい。乗りました」

「その時、扱いづらかったかしら？」

「・・・いえ。いつも通りでした」

あれ？ オモイカネ級に慣れてる筈のセレス嬢がいつも通り？

「どういう事ですか？ イネスさん」

「簡単な事じゃない。劣化っていうのが暫定的なものって事よ。

今後、オペレーターが確保できたりした時に元の性能に戻せるようにしてあるの」

「それで暫定的な劣化ですか。要するにリミッターという事ですね？」

「そうとも言っわね」

てつきり根本から劣化させたのかと思った。

それなら、俺とかがキクザクラにいけば、オモイカネ級AIとして活躍してくれる訳だ。

これは良い事を聞いたな。

「次はディストーションフィールドについて」

ナデシコ級を始めとした多くの主要戦艦の盾となる存在。

たとえば装甲が薄いののような戦艦であろうとこれを突破出来ずには破壊できない。

「これに関してはキクザクラの方が上」

「あれ？ そうなんですか？」

「相転移エンジンの数を比較してみて？」

「えっと、キクザクラが四基でナデシコが二基」

「それがこの結果」

「でも、Yユニットの分がありますよね」

「ええ。だから、ナデシコは攻撃特化、キクザクラは防御特化なんじゃない」

ああ、Yユニットの分は攻撃の為な訳ね。

「キクザクラは改革和平派の旗艦になるのよ？」

「そう簡単に落とされる訳にはいかないでしょ？」

「ご尤もです」

「だから、防御面に傾けさせたそうよ」

旗艦。その歴史は古いけど、その頃と今では意味合いが変わってくる。

無論、昔から代表の戦艦という意味はあったけど、指示を旗で送る事が旗艦の由来だった筈。

それが技術が向上し、旗を振るの意味もなくなったせいで、

今では単純にその組織を代表、象徴する戦艦にこの名前が与えられていた。

逆に言えば、象徴を落とされる＝敗北に等しい訳だ。司令官が乗っているのだから。

だからこそその防御面特化。だからこそそのあの装甲の厚さ。

「戦艦自体の装甲も厚かったですよね」

「ええ。生半可の攻撃じゃ意味がないようにしたらしいわ」

流石の防御面特化ですね。

「武装に関しては・・・別にいいわね」

「まあ、大体同じでしょうし」

「ええ。グラビティブラストがメインなもの。ま、覚えておいて損はないけど」

「後で仕様書でも読みますよ」

「あら。つまらないわね」

仕様書がイマイチ分からない所を聞きたい訳であって、武装ぐらいなら仕様書で充分です。

「全体的にどれほど向上したんですか？」

「データ上では殆どが1.5倍。オモイカネの容量は2倍だったわね」

それはまた、良い仕事をしましたね。

「他に何か違いはないんですか？」

「戦艦自体にはないけど、ナデシコには特別なものが備わってるわね」「特別な？」

「ええ。強襲揚陸艦『ヒナギク』を覚えているかしら？」

ヒナギク？

ああ。あの輸送機みたいな奴か。

「確か火星でイネスさんを」

「ええ。そのヒナギク。あれ改造されてたわよ」

「・・・改造ですか？」

何だろう？ この冷や汗は。

「元々はエステバリスを何機か積めるぐらいの広さだったわよね」

「火星降下時にエステバリスを積んでいた記憶があります」

確かパイロット三人娘がヒナギクの護衛として付いていった際、搭載させてたんだよね。

すると、少なくとも三機は乗せる余裕があった訳だ。

「あれを一機と少しぐらいしか積めないぐらいに狭めて・・・」
「狭めて？」

結構な余裕があった筈。それを狭めたのなら・・・。

「相転移エンジンを積み込んだらしいわよ」

「や、やっぱり・・・」

ヒナギクに相転移エンジンとか勿体無い気がする。

だって、ヒナギクってただ単純に輸送機的な扱いでしょ？

エステバリスが護衛しなつきややっていけない程、脆かったんだよね？

「明日香は使われていないのなら使えるようにしてしまおうと改造を施したらしいの」

「・・・改造ってどのくらいですか？」

「かなり、というより、既に原形を留めていないわね」

どれだけ改造したんですかッ!？

「可動式グラビティブラストの劣化版、小型化版とも言えるわね、グラビティバスターを搭載させて、貴方お得意のレールカノンも設置したそうよ」

「完全に戦闘用ですね」

「そもそもそのつもりだそうよ」

「え？」

「相転移エンジンを積み込んだお陰でグラビティバスター、DFを可能とした。」

そこから、機体自体の装甲を厚くして、

高い機動性を付けたお陰で走・攻・守でヒエン以上の性能になったらしいわよ」

ヒエン以上ってどんだけですか？

一応、明日香の最新兵器ですよ。それ。

まあ、戦闘機と人型兵器だから比べられるものではないけど。

その分、人型らしい汎用性はなくなってる訳でしょ？

「あと、貴方の考えたコンセプトに似てて、ヒナギクの上部に接続端末があつて」

「・・・ドッキングできるんですか？」

「ええ。機能停止した機体を運ぶ為に取り付けられたらしいわよ」

機能停止した機体。ただ運ぶよりエネルギーを配給してしまった方が楽だし安全だな。

「でも、裏を返せば、常にドッキングしている事で無尽蔵のエネルギーを得られるのよね」

・・・なんか明日香に先を越された気がするんだけど。

まあ、機体を積めるだけあつて、大きさに合体とかは出来ないんだけどさ。

言うならば、大きなド イ？ 機体を上に乗せて活躍する奴。

あれは人型の汎用性を残したままの合体で、こっちは完全に別個の存在って訳だ。

単純に上に乗るだけだし。

「後で更にナデシコで改造する予定らしいわよ」

「・・・ウリバタケさんですか？」

「そうそう、更に機動力を強化して、あと小回りも利かせられるよ

うにするんですって」

「・・・既に戦艦みたいなものですね」

「まあ、ナデシコを何十回りか小さくしたものと思えば良いんじゃない？」

「・・・ロシア人形のマトリョーシカみたいだな。

更に小型の戦闘機を積んだら完璧じゃないか？」

「制御方法はIFSと通常操縦の兼用。だから、ハルカ・ミナトでも操縦できるわ。」

「まあ、パイロットもオペレーターも出来る貴方が一番乗る事になるでしょうけどね」

「確かに・・・」

それはありがたい。これは使えそうだな。

戦艦級の操縦士の資格も持つてるし。ミナトさんに習って取っついて良かったぜ。

まあ、俺はIFS制御だから不必要かもしれないけど、

こういう戦闘機形の経験は他のパイロットよりあると自負している。

「これを使えば限界稼動距離の概念から解放されるな」

相轉移エンジンが搭載されているならナデシコに依存しないで済む。これなら、ナデシコから遠く離れた場所で単独行動とかも出来そう

だ。

出力源に関してはドッキングしてればいいだけだし。

「・・・でも、一人だと操縦できないかも？
いや、何の為のIFSだよ。ドッキングしてる時に制御関連も同期させれば・・・。」

アドニスに乗りながらヒナギクを扱ったり、ヒナギクに乗りながら

アドニスを操ったり出来るかも。

どちらにしろ視界の確保のメインはカメラを使ったものなんだし。まあ、ヒナギク単体でも充分の戦力にはなりそうだけどね。

「操縦室はどんな形になってますか？」

「内部はそれ程変わってないわね。二人乗りの席があって、後ろにちよつと空間がある感じ」

「居住区とかは？」

「ある訳ないでしょ？ あくまで揚陸艦。戦闘機が大きくなったみたいなものよ」

ふむふむ。流石に単独行動をしながら生活とかは出来そうにないか。キャンピングカー的に使えそうだなとか思ったけど。

「AIとか積んであります？」

「積んでないわよ。もちろん、簡易コンピュータは積んであるけど」

自律回路ではないと。

まあ、当初のアドニスもAIは搭載されてないしな。今はアザレアがあるけど。

「容量に余裕は？」

「割とあるらしいわね。参加するの？ 改造計画」

「ええ。ちよつと考えがありました」

武装面はグラビティバスターとレールカノンだけで充分。

装甲、機動面ではウリバタケさんに任せれば安全・・・ではないけど、大丈夫。

それなら、余った容量で・・・。

「情報解析と戦域管制をこなそうかなと」

「前線に立ちながら補助に回るうっていうの？」

「無論、俺自身も戦いますけどね。知ってます？」

「何を？」

「俺って通信士の資格も持つてるんですよ？」

ナデシコからの伝達情報を更に各パイロットに伝達するなんて簡単

「変な所で多才よね。貴方」

「資格取得に凝ってた時期があったものね。コウキ君」

「・・・凄いです。コウキさん」

いやあ。褒められる程のものじゃないって。

「まあ、全てをカバーできるとは思えませんがね」

「流石に限界あるわよ」

ま、アザレアに助けてもらおうから割と自信はあるけどね。

「・・・私もお手伝いしたいです」

た、確かに二人乗りらしいけどさ。

「俺としてはセレスちゃんにはナデシコにいて欲しいんだけどな」

危険度的にはかなり高いから。

大事な人には出来るだけ安全な場所において欲しい。

ナデシコとて安全ではないけど、ヒナギクよりは全然マシだ。

「・・・シュンッ」

落ち込まれても・・・。
分かってくれ。セレス嬢。

「私も乗りたいたんだけどなあ」

「いや。ミナトさんにはナデシコの操縦があるじゃないですか」

「あら？ 私じゃ力不足かしら？」

「い、いえいえ。凄く助かりますけど、ミナトさんにもナデシコに
いて欲しいです」

セレス嬢にもミナトさんにも、出来る限りナデシコにいて欲しい。
俺達はナデシコを落とさせまいと頑張ってる訳だし。

「分かってないわねえ。ね？ セレセレ」

「・・・はい。分かってません」

え？ 何が？ どういう事？

「大事な人に危険な所に行って欲しくない。そう思ってるのは貴方
だけじゃないのよ」

「・・・ミナトさん」

「・・・凄く怖くて、凄く不安で・・・」

「・・・セレスちゃん」

「だから、せめて一緒に危険な所に行こうって思った訳」

「・・・一緒に怖くないです」

「・・・」

凄く暖かい、心が。

こんなにも思われてるんだなって。

でも、凄く嬉しいけど・・・。

「やっぱり二人にはナデシコにいて欲しいです」

絶対に護るって決めてるからこそ大事な二人にはナデシコにいて欲しい。

「……まったく。強情ね。コウキ君は」

「……我が俣です」

わ、我が俣って……。

「分かったわ。大人しくナデシコにいきましょう」

「……我が俣は言いません」

「でも、分かってるわよね？ コウキ君」

「ええ。死にませんよ。必ず生きて帰ります」

「よろしい」

「……よろしいです」

ありがとうございます。ミナトさん。セレス嬢。

「はいはい。私がいる事を忘れちゃ駄目よ？」

「あ。忘れてた」

「失礼ね」

イネス女史の前であんな事を……。恥ずかしいな。

「さて、そろそろ着くわよ」

ようやくですか。

「私達は遂に辿り着いたの！ ヤマトナデシコに！」

・・・ん？ いや、唯のナデシコですからッ！

ん？ あんまり変わらないな。

それがナデシコに対面した俺の、いや、俺達の感想だった。けど、細部は結構異なるらしいんだ。

まず、大きな変化としてはレールカノンが取り外された。

これは今後、レールカノンの代わりに、

アドニス援護兵器であるフェザンツが担当するからである。

フェザンツをDFの外に配置する事でDFを気にせずに攻撃できるようになったと聞いた。

まあ、確かにDFがない時だけにしか活躍できないレールカノンでは使いづらいかもな。

レールカノンの数だけフェザンツを用意するとか、

ウリバタケさんは張り切ってたけど、一体どうなる事やら。

また、これには金銭的な考慮もあったらしい。

ナデシコがレールカノンを用いて、フェザンツまでレールカノンを使ったら・・・。

うん。ありえない程の弾が必要になるだろうね。

それにフェザンツはアドニスに弾薬を運ぶ役も兼任してるから遙かに使い勝手が良い。

これらの理由によりレールカノンは廃止された。

その分、フェザンツがあるからプライマイゼロ、むしろ、プラスかな。全体的な性能アップは伊達ではないらしく、仕様書を見た時は驚いたものだ。

大きさを変えずにここまで性能アップさせるとは・・・。

むしろ、これほどの性能を形を変えずに実現させた事が凄い。

明日香、恐るべしだな。

まあ、あとは後々使いながら感じていくとして・・・。

「これがヒナギク……。最早ヒナギクの要素0だな」

これは何？ というのが初めて見た時の感想。

まるでどこその観光用飛行機みたいな形だったヒナギク。

その面影は既になく、全体的にシャープになっていて、

取り付けられた武装によって戦闘機という言葉がピッタリになっていた。

大きさを言うなら、横っ飛びするジン？よりちょい大きいぐらい。

確かにエステバリスの一機ぐらいなら積み込めそうな大きさだ。

カラーリングも単調だった以前の面影はなく、青に白に赤とどこぞの核的闘士みたい。

サイズは全然違うけど。

まあ、輸送機と言える程に大きくもなく、小回りも利くから充分戦力になりそうだ。

「ウリバタケさんに相談するか」

改修を終えたナデシコも帰って来て、計画も着々と進んでいる。

懸念事項はクーデターと地球内、木連内の内乱事情。

待ち望むのは残り二つの新型機。

アイリス・プロジェクトも中盤に差し掛かったと言える。

最終決戦までの期限は残り少ない。

それまでどれだけの波瀾があり、どれだけの異常事態が生じるかは分からない。

でも、俺達は一つ一つを確実に解決していくしかないんだ。

俺達の目指す和平、嘘偽りなき真の和平、そして、その後の平穏な生活の為。

立ち塞がる障害は全て粉碎してくれよう。

そして、いつの日か……。俺達の望む世界を……。

夢を見て、夢に願ひ、夢を追う。

その夢が叶うかどうかは全てこれから次第。

前だけを見て進んでいこう。俺達の夢の為に。

第八十九話（後書き）

第六部・完といった所でしょいか。

ようやくここまで来ましたね。

各区切りで話数に差があるのは作者の力不足です。申し訳ない。次回から始まる第七部は最終決戦に向けての準備編ですかね。

戦力の充実、火星再生機構の組織確立、内乱事情の安定化。

最終決戦へ向けての課題も多く、まだまだ時間が掛かりそうです。

最終決戦まで残る所、四ヶ月といったところ。

それまでに万全の準備をし、持てる力全てを發揮して欲しいものです。

戦力的にも計画的にも。

さて、クライマックスまで後は一直線……とは行きませんが……

これからも応援よろしくお願いします！

第九十話（前書き）

第七部開始しました。

今回はヒナギク関連ですね。

第九十話

「ナデシコは後方の憂いを断つ為に地球内から木連兵器全てを排除します」

「はあ……」

「あら？ お疲れ？」

「連戦ですからね。休む暇もありません」

こんにちは、こんばんは、おはようございます。

ああ、もう、なんだっていいや。

ナデシコ搭乗後、俺達の仕事は戦闘、戦闘、戦闘。

地球内にあるチューリップを破壊し続ける毎日です。

まあ、これも和平派の支持力アップに繋がる訳だから、別に構いませんけどね。

結局、和平、和平と唱えても、まずは危険な環境からの脱出が課題な訳だし。

「まあ、必要な事だから仕方ないんだけどね」

分かってますけど、大分、皆も疲労が溜まってると思いますよ。ミナトさんだって、疲れてるように見えますし。

「……お疲れ様です。コウキさん、ミナトさん」

「セレスちゃんもお疲れ様」

「セレセレが一番疲れてるんだから、しっかり休みなさい」

そうだよなあ。セレス嬢が一番疲れてるかもしれない。年齢的にもそうだし、与えられている役職的にもそう。

ルリ嬢、ラピス嬢の分の負担を背負い、一人でオペレーターの仕事をこなしている。

俺も手伝ってはいるが、それでもやはり彼女の負担は凄まじいだろう。

「・・・あの、コウキさん、ミナトさん」

「ん？ 何だい？ セレスちゃん」

「何かな？ セレセレ」

「・・・一緒に寝てくれませんか？」

ミナトさんと眼を合わせる。

確か次の戦闘は二日後、それまでは移動日だから余裕がある。

うん。それなら・・・。

「いいよ。セレスちゃん」

「それじゃ、早速行きましようか」

「・・・はい！」

それから三人で川の字で寝ましたとき。

安心感からか熟睡したのは言うまでもないだろう？

「それでは、南極周辺のチューリップを慎重に撃墜していきましょ

「う」

「こちらマエヤマ・コウキ。ヒナギク。準備完了です」

『おう。とりあえずいつも通りにやって来い』

「了解！」

相変わらず、通常の戦闘ではad・RRとad・SRのみ。肝心な時までには秘密兵器は取っておこうという魂胆。でもさ、前も言ったけど、俺の分も納入しようよ。

なんでad・RRとad・SR合わせて六機しかない訳？

良いじゃん。俺の分がないって分かってた訳でしょ？

どうして納入しておかないかな？

他のアドニスとは極秘扱いで使わないって分かってたんじゃないの？

・・・まあ、ヒナギクがあるから良いけど。

「各機、通信は常にかけておいて下さい」

『了解！』『了解！』『了解！』

それじゃあ、行きますか。

「マエヤマ・コウキ。ヒナギク。出ます」

カタパルトから出るアドニスと違って、ヒナギクはナデシコの底から出撃する。

そして、加速して前に出て行く訳だ。

戦場は地球上。相転移エンジンの出力はそこまで得られない。

とりあえず、今回は補佐に回るのかな。

「エンカウントまであと二キロ。ガイ。先頭で突っ込め」
『おっしやあ。任せろ!』

「敵機散開。包囲される前に対処をお願いします」

『『『『『了解!』』』』』

「位置的に・・・」

リーダーでそれぞれの位置を確認。

「正面にガイとリョーコさん」

『おう!』

『任せとけ!』

「その右脇にヒカル、左脇にイツキさん」

『OK!』

『了解』

「その後方から援護。右にイズミさん、左にカエデ」

『了解よ』

『分かったわ!』

「フォーメーションを組みつつ、前進。限界稼動距離付近で戦闘を開始します」

通達後、すぐさまフォーメーションを組み始めるナデシコパイロット。

この辺りの動きは流石としか言いようがない。

カエデが多少もたついたものの、あつという間にフォーメーションを組み終えた。

俺はその後を追う形で敵へと接近する。

「エンカウントまで5、4、3、2、1、同時射撃!」

ダンッ！ ダンッ！ ダンッ！ ダンッ！ バドンッ！

「各機、戦闘開始。後ろは気にせず、目の前に集中してください」
『『『『『『『了解！』『』『』『』『』』』』』』

それぞれ自身の戦闘に入る。
俺の仕事は……。

「チユーリップの位置の特定」

バツタ登場の位置から推測するに候補は三箇所。
後続機の列を追っていけば、割り出せる筈。

「ナデシコ。レーダー反応は？」

『まだキャッチできていません。マエヤマさんは如何です？』

「候補は三つです。南東方面ポイント - にグラビティブラ
スト発射を要請します」

『分かりました。伝えます』

ヒナギクの特徴は限界距離を越えて単独行動できる事。
チユーリップ発見後に引き返してこよう。

『マエヤマさん。1分後、発射します』
「了解」

1分後、グラビティブラスト発射後、その射線上を移動しよう。
敵機が集中してるからこそ、その先の可能性が高い。

「アドニス各機へ。射線を通達。1分以内に射線上から退避を」

各機のレーダーにグラビティブラストが通過するであろう箇所のデータを送る。

「発射後は臨機応変に。出来る限り侵入を防いでください。カエデとイズミさんは前線組の撃ち漏らしを確実に撃退してください」

チューリップがある限り敵機は何度でも出現する。

それなら、バツタのような雑魚は放っておいて、根本の原因を断つべきだ。

『グラビティブラスト発射します』
「了解」

放たれるグラビティブラスト。

その射線上にいたバツタは全て潰された。

「敵陣を突破します」
『御気を付けて』

最初は注意されたが、何度も無事に帰ってきたからもう当然のようになっている俺の突撃。

相転移エンジンを詰め込んでいるだけあって、攻撃力も守備力も凄まじい。

無傷とまではいかないが、殆どそれに近い形で帰艦している。

それらの事もあり、俺は今ではチューリップ発見係となっていた。

「レールカノン展開」

バイザー装着と同時にレールカノンを展開。

ナデシコのように機体のあちこちに付けるといふ訳にはいかないが、それでも可動式レールカノンにする事でかなりの広範囲をカバーできた。

威力では劣るが、使い勝手は可動式の方がかなり良い。

「アザレア。補佐よろしく」

『了解です。マスター』

「前方に敵影なし。後方、両脇に注意」

『はい』

「突破する。アザレアは周辺を調査。チューリップを発見次第報告」

『了解！』

さて、行きますか。

「加速する」

包囲される前に一気に駆け抜ける。

俺は回避行動と射撃に専念。

周辺調査はアザレアに一任だ。

「並列思考展開」

ハーフバースーカーモードにはしない。

片方に射撃、片方に回避行動をさせる事で擬似的な複座を実現させる。

ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！

流石に対応は早い。

射線上の外にいた連中が包囲するように立ち塞がる。だが、その程度で止められる程、俺も柔じゃないんだよ。

「グラビティバスターチャージ」

『グラビティバスターチャージします』

「アザレア。チャージ終了後、正面に向けて発射。間に合うっだろ?」

『間に合わせてみせます!』

「おし」

回避を含めて空中で一回転。

この程度、DFを張るまでもない。

『グラビティバスター発射します』

「了解。駆け抜ける!」

正面に聳え立つ敵の壁をグラビティブラストで破壊。そうして出来た穴を強引に突破する。

『突破しました』

「ああ。引き続き、搜索を」

『了解』

候補地である三つの場所へと向かう。

ナデシコ以上とはいかないが、同等程のレーダー機能を持ち合わせているヒナギク。

その範囲は割りと広い。

ダンッ!　ダンッ!　ダンッ!

続々と現るバッタやゲンゴロウ、カナブン。

戦争序盤に比べてかなり強化されているが……。

「それはこっちも同じなんだよ！」

ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！

戦争中の技術進歩は凄まじい。

レールカノンの一つをとっても、威力は比べ物にならない程だ。

「反応は？」

『ありません』

一つ目の候補地にはなし。

まあ、そんなに都合良くいくとは思っていない。

「次に向かう」

まだ二つあるんだ。

さっさと発見して、戦闘を終わらせよう。

「敵陣を強引に突破する。レールカノン格納」

バイザーを取り外す。

「同時にDF展開。前方に集中」

機体を囲うようにDFを展開。

強度はアドニス以上だ。

「あそこか……」

再び壁のように現れる敵機。

だが、そんな中にも必ず穴と呼べる薄い部分が存在する。後はそれを見付けて、そこに突っ込むだけだ。

「いつけえええ！」

敵陣突破。

何機かを吹き飛ばしながら強引に突破した。

「DF解除」

要所のみDFを展開する。

宇宙ならまだしも地上ではこのような配慮が必要になる。

俺は出力不足で落ちるなんていう愚かな事はしたくないからな。

『チューリップ発見しました』

「分かった。グラビティバスターチャージ」

破壊できるかどうかは分からないが、一撃ぶつけておこう。
レーダーに映るチューリップへと向かう。

『チャージ完了しました』

「了解。グラビティバスター発射」

無色の光がチューリップを押し潰す。

『グラビティバスター直撃。機能停止します』

流星の威力。

機能停止したなら放っておこう。
後でまとめてお掃除だ。

「もう一つの候補地を回る」

数的に一つとも限らない。

ポイントへ向かい移動を始める。

「まあ、いずれ立ち塞がるとは思っていた」

最後の候補地に向かう途中、立ち塞がる積尺気。

チューリップを破壊されれば、地球侵略が困難になるからな。

でも、いつまでもその状況を甘受してる訳にはいかないんだよ。

「ワイヤーアンカー発射」

ヒナギクの下部に組み込まれたワイヤーを発射する。

分かり易く言うなら、下部からポコツと射出部が出てくる感じ。

「いったか？」

アンカーが突き刺さりさえすれば・・・。

アンカーの先端は突き刺したと同時に開くように改造されている。

結果として、内部で固定され、機体から離れなくなってる訳だ。

当然、切り離せるような改造も施されている。

「うし。捕獲確認」

戦艦に撃ち込んで方向転換などこいつの応用性は豊富。

でも、今回の使い方は異なる。

「引き寄せる！」

内部モーターによりワイヤーを巻き取る。
敵の質量が大きければこちらが向かうし、小さければこちらに引き寄せる。

結論、必ず真つ向から衝突するという事。

「スピア展開」

ヒナギクの先端部が開き、グイツと鋭利な針状の刃が現れる。
ヒナギク唯一の接近戦用武器。

設計としてはフィードランサーを細くしたもの。

細くなり、脆くはなったが、その先端はかなり鋭い。

強度に関してはこれからも研究を続ける予定だ。

「突っ込め！」

強引に引き寄せる。

途中、足掻こうとこちらに攻撃してくるが、DFで防御しているから問題ない。

船体部は勿論の事、スピア部分すら覆ってある。

また、たとえ途中でワイヤーを切られようとその隙に突っ込んでしまえば良い。

まあ、簡単に切れるとは思えないが。ウリバタケさん仕様だし。

ブスッ！

引き寄せつつ、突進。

大型スピアによって敵機を貫く。

「うおおおっおお！」

突き刺したまま、前方へ飛び続け、急減速。

アンカーを切り離された積尺気は慣性に従い、スピアから離れ、そのまま空中へ投げ出される。

「残念だけど、邪魔される訳にはいかないんだよ」

そして、離脱。

背後で轟く爆発音を他所に次の目的地へと向かった。

ワイヤーアンカーは既にモーターによって格納済みだ。

『マスター。こちらにもチューリップが』

「ああ。だが、部隊が展開されている」

確かにチューリップはあった。

だが、その周辺にはウジャウジャとバツタ達の集団。

「刺激するのはマズイ。位置は把握した。戻るぞ」

『はい。マスター』

位置さえ分かれば構わない。

後はナデシコのグラビティブラストで殲滅してしまえばいい。

「DFを展開しつつ、強引に突破する」

『了解。マスター』

ナデシコへの最短距離をモニター上に表示する。

なるほどね。ナデシコまでに結構障害がある。

それなら・・・。

「高度を上げて空から迂回する」

わざわざ同じ高度で移動する必要はない。

立ち塞がれる以上のスピードで上空を突破してやる。

「クッ」

宇宙ならもつと楽に加速できるんだろうが、重力に逆らわなければ
ならない地上は結構キツイ。

『マスター。急いで』

ああ。分かってる。

雲の間を突き進み、立ち塞がるより前に突破。

時折、立ち塞がろうと前方へ位置を取るが・・・。

「遅いつての」

完全に立ち塞がっているならまだしも一機や二機じゃ止められんよ。
そのまま次々と敵を突破していき、ナデシコの重力波範囲内に到着
する。

「艦長！」

下降しつつナデシコへ連絡。

すぐさま位置と数を報告し、戦線へ復帰する。

「戻りました」

『遅えぞ。コウキ』

「これでも急いできたんだけど」

敵しくない？ ガイ。

『チューリップは？』

「二基。一機は機能停止にしといた」

『ひゅー。やるじゃねえか』

「まあな。もう一機は敵が多くて敵しかった」

『それなら、俺が行くか？』

確かにスーパー仕様も単独行動が可能だけど・・・。

「むしろ、ナデシコがそっちにいくべきだろ」

それだったら、ナデシコをそっちに、機能停止した方をガイに行かせた方が良い。

『そりゃあそつだな』

分かればよろしい。

『マエヤマさん』

ん？ ナデシコから？

「はい。何ですか？ メグミさん」

『艦長からの指示です。一度帰艦してください』

帰艦？ まあ、何か考えがあるんだろう。

とりあえず艦長の指示に従おう。

「了解！」

ナデシコ下部へと移動し、そのまま帰艦。

前方へと移動し続けるナデシコに上手く乗るのは難しい。

まあ、実際はコンピューター制御だから、難しいなんて事もないけど。

『おお。マエヤマ。聞いてるぞ』

ウリバタケさんには艦長からもう指示が出てるのか。

「どんな指示でした？」

『ターゲット1にはスーパージャマダとお前とヒナギクにドッキングしたイツキ機で対応』

ターゲット1。機能停止した方のチューリップか。

『ターゲット2にはナデシコとその他の機体で対応だよ』

なるほど。

単独行動が出来る俺達で機能停止した方のチューリップを破壊。

ナデシコと他の機体で数の多い方のチューリップを破壊。

二面作戦という訳か。

「しかし、チューリップを破壊できますかね？」

ナデシコ側にはグラビティブラストがあるけど、こちらにはそれらしい武器がない。

『だから、呼んだんだろ。ヒナギク格納庫にグラビティライフルを二丁積む』

そうか。グラビティライフルがあったのか。

「それをイツキさんに渡せば良いんですね」

『ああ。だが、撃てるのは一発のみ。チューリップだけにしろよ』
「了解」

ナデシコの重力波でチャージをするグラビティライフル。

その為、範囲外だとチャージができず、撃てるのは今溜まっている一発のみ。

現状ではヒナギクからのエネルギー配給は機体のみ。

今後、ヒナギクから重力波を送信できるようにしたら、なお便利かもしれない。

『おっしや。積み込み作業と簡単な修理は終わった。行って来い』
「了解！」

そして、再出撃。

ナデシコパイロット勢に合流した。

『作戦は聞いたぞ。行けるのか？』

『大丈夫？ コウキ』

『海の藻屑になっちゃ駄目よ』

『は、早く終わらせてきなさいよ』

ナデシコ組から激励？のメッセージ。

・・・心配されるのは嬉しいけど、なんか不安に思われてる気がする

る。

「大丈夫です。そちらも御気を付けて」

『おうよ！ 任せたぞ』

「はい。健闘を」

『そつちもな』

ナデシコ組がターゲット2のチューリップへと移動を始める。
さて……。

「イツキさん。まずは格納庫にあるグラビティライフルを」

『はい』

「その後、ドッキングシークエンスをお願いします」

『了解！』

空中でグラビティライフルを受け渡す。

その後、ドッキング。

ヒナギクの上部に足元を固定させ、エネルギーを配給する。

イツキさんからしてみれば、移動を完全に俺任せにする訳で不安だ
ろう。

でも、モニターに映る表情を見る限り、不安に感じていない様子。
それなら、その期待に応えるまでだ。

「グラビティライフルは一発のみ。チューリップ到着までは他の武
器で対応してください」

『はい。コウキさん。信じてます』

任せてください。

『おっしや。コウキ。行くぞ』

「おつ」

横に長い俺と縦に長いガイ。
サイズ的には俺の方がちよつと大きい程度であまり差はない。
その二機が敵陣へと飛び込んでいく。

『ゲキガンパンチ！』

スーパー仕様。

その行動はどこまでもダイナミックだ。
俺の身体以下の大きさでしかないバツタを殴り潰し。

『ゲキガンミサイル！』

エステバリスの半分はあるんじゃないかという巨大なミサイルで敵
を爆破し。

『ゲキガンドリル！』

明らかにオーバーキルであろうドリル攻撃で敵を貫き。

『ロケットゲキガンパンチ！』

方やパンチ、方やドリルの両手を前方に打ち出し。

『ゲキガンビィィィム！』

両手がない状況下でグラビティブラスト。
眼の前に広がる敵を一網打尽にした。

『おつしゃあ。次はゲキガンソードだ』

機体とほぼ同等の大きさであるディストーションブレードを取り出し。

『スーパー・ゲキガン・斬り！』

刀身の太さですら既にバツタ並みであるディストーションブレードで敵機を叩き切っていた。

あれだけの大きさならジンですら一太刀であろう。積尺気や六連なんてあつという間。

「・・・こう見るとマジでスーパーロボットだよな」

大きさはあくまでリアルロボットなのに・・・。
周りが小さいからか、余計に大きく見える。

このダイナミックな動き。正にスーパーロボットだ。

「それにしても、下って結構動きづらいんだな」

シミュレーションで体験してたけど、上に乗ってる時と乗っていない時では全然違う。

ここが宇宙空間なら問題なかったんだろうけど、地上じゃ・・・。

『今、重いか思いませんでしたか？』

「え？ い、いやだなあ。そんな事、思っていないですよ」

『本当ですか？』

「もちろん」

す、鋭い！

いや、別に貴方が重い訳じゃないですから。
あくまで重いのはアドニスであって……。

『次はないですよ』

「……はい」

お、重くなんかありませんから。はい。

『おい。コウキ。見えてきたぞ』

報告サンキュ。ガイ。

「様子見はなしです。ガイのグラビティブラスト。

俺のグラビティバスター。イツキさんのグラビティライフル。

計三つの高火力武器でタイミングを合わせて、同時に発射します」

『へっへ。やってやるうじゃねえか』

『いつでもどうぞ』

この距離なら充分射程距離内。

前に位置する雑魚共は纏めて潰してしまえば良い。

「3、2、1……」

『ゲキガンビィィム!』

『発射します!』

「グラビティバスター発射!」

同方向から同じタイミングで放たれる無色の圧縮光線。

射線上にある全ての敵機を押し潰し、そのままチューリップへと向かっていった。

ドオオオオオオオオオツオオツオン！

直撃。同時に爆散。

グラビティブラストでのみ破壊できると思っていたチューリップの破壊に成功した。

『おっしゃあ！ 撃破だ！』

『人型兵器でチューリップを撃破できるなんて』

「うし。それじゃあ、残る小型兵器を殲滅しましょう」

『おう！』

『はい！』

その後は特に問題もなく進んだ。

チューリップを失った為、増援もなく、屠られる一方。

地上で出力は低下していきようとそれを補うだけの技能がナデシコパイロットにはある。

ナデシコの方も順調にチューリップを破壊したらしく、それから少しの時間で作戦は終了となった。

地道にだが、地球上のチューリップの数は減りつつある。

各基地でもチューリップの対抗策を見出し、少しずつだがチューリップを破壊していつてると聞く。

聞いた所、ジンシリーズなどの相転移エンジンを積んだ高出力の機体を、

チューリップの中でボソソジャンプしている途中に破壊する事で、以前、ナデシコがやったようにチューリップを内部から破壊しているらしい。

この誘爆効果を用いてのチューリップ破壊。その知恵には脱帽だ。まさか、そんな方法があるとは……。

ボソソジャンプさせる為の物がボソソジャンプする物のせいで破壊

される。

なんとも皮肉な話だ。

地球上のチューリップを破壊する事が今の俺達の課題。

地球の人々に和平を考えさせる余裕を与える為にもやらねばならない。

それじゃあ、次のお掃除に行きましょうか。

第九十話（後書き）

着々と地球内の危険物を処理していくナデシコ達改革和平派。まずは地球内のお掃除が最優先されます。

最高戦力で最終決戦へ向かっている間に、

木連によって地球制圧なんてなったら馬鹿丸出しですし。

ナデシコも帰ってきましたから、お掃除活動再開です。

とはいっても、このような戦闘ばかりでは飽きるので飛ばします。

めまぐるしく状況は変わっていきますが、どうかよろしく願います。

PS いや。ヒナギク強かった。使い勝手も良いですしね。

しかしながら、戦闘機の戦闘描写は難しいですね。

書きながら何度も頭を捻りました。

どうだったでしょうか？

ちなみに、登場してませんがもう一つ武器が搭載されています。

とある方に提案してもらった爆導索という武器で、

参考映像を見させて頂いた際、浪漫溢れる武器だったので採用に。

いずれ使う機会が訪れると思いますので、その時にでも。

第九十一話（前書き）

着々と計画は進んでいます。

まあ、今回再びバツと飛びましたが・・・。

第九十一話

「思考を誘導する？」

地球周辺のコロニーを奪還しつつも木連への訪問は欠かしていない。彼らと足並みを揃える事は今後にとって必要な事であり、戦後の事を睨んでも、和平派同士の結びつきは欠かせないだろう。

「うむ。幻とされていたゲキ・ガンガーの話を公開したい」

そして、今回の訪問日でいきなり告げられた思考誘導の御話。

「幻の話。確か、異星人と手を取り合うシーンがある話でしたっけ？」

「うむ。今までゲキ・ガンガーを放置していたが、こちらも利用してやる事にした」

徹底抗戦へと思考を誘導する為に用いられていたゲキ・ガンガー。しかし、その為には幾つかの話を幻とする事で隠さなければならなかった。

それは思考誘導に支障をきたすから。

幻とされる話は手を取り合うようなもので、むしろ、和平を考えさせる内容。

徹底抗戦を訴えるには都合が悪い内容だった。

それにしても、同じ作品でも話によってどちらも訴えられるとは・・・。

あやふやな話なのか、複雑な話なのか。まあ、どっちでもいいか。

とにもかくにも、徹底抗戦を訴える為に、先祖からの決まりで一般人に公開しないとしていたらしい。神楽大将はそれを破ろうというのだ。

「しかし、そのような事をしたら・・・」

兵士はともかく草壁派の首脳陣は何故幻としているか知っている筈。神楽大将が公開するような真似をしたら、何をされるか。

「うむ。分かっている」

「それなら、どのようにして・・・」

「そこで彼の出番だ」

シューインッ。

神楽大将の合図で扉から入ってきたのは・・・。

「アキヤマさん？」

「久しぶりだな。コウキ」

「お久しぶりです」

「俺もいますよ」

「久しぶりです。サブロウタさん」

草壁派から神楽派へと移ったアキヤマさんとサブロウタさんだった。あの三羽烏決別の日から彼らとは交流を重ねている。

何度かアキヤマさんの船にも足を運んだし。

アキヤマさんとは戦争の終結に関してよく話してるし、

サブロウタさんとは年齢が近い事もあり、かなり仲良くなった。

しかし、劇場版の軽さが考えられないような生真面目軍人。

何があつて、ああなつたんだか・・・。

時折、彼らには木連式柔を指導してもらっている。流石にケイゴさんクラスではないが、サブロウタさんもかなりの腕前で。

俺にとって最も実力の近い目標みたいな人だ。

「彼らには地球周辺で活動してもらっている」

「地球周辺？」

「うむ。コロニー制圧だ」

いや。それは参っちゃうな。

コロニーを制圧されるという事は前線基地が増えるという事。地球が更に劣勢に立たされる。

「コロニー制圧は派閥関係なく必要な処置だからな」

「ええ。まあ・・・」

分かつちやいますかね。

それを受け入れられるかと聞かれたらノーな訳で。

「ここで大事なのは何をしているかではなく、地球周辺で活動しているという事だ」

・・・何をしているのかこそ俺達にとっては大事なのですが・・・。まあ、話が続かなくなるので口には出さまい。

「地球周辺で活動していれば、ゲキ・ガンガーが手に入る確率もな
くはない」

「ええ。なくはないでしょうが・・・」

「万が一でも構わない。必要なのは手に入るかもしれないという状況だ」

そういえば、神楽家はその幻と言われるゲキ・ガンガーを持つてるんだっただか？

「あとは神楽家で用意すると？」

「いや。残念ながら、私達では用意できない」

あれ？ 予想と違った？

「神楽家がゲキ・ガンガーを提供した一族だと聞きましたが？」

「ああ。確かにそうだ。だが、既に没収されている」

「没収？」

「我々は提供した一族として閲覧は許可されているが、持ち出しは禁止されているのだ」

「かなり昔にという事ですか？」

「うむ。私の代でも既に没収されていた。

「厳重な保管がされており、あれを民間に公開するのは不可能だろ
う」

確かに思考誘導の為のものを一つの一族に持たせるのは危険だよな。当然、没収して、漏洩を防ぐか。

「そこでマエヤマ君。君にお願いがあるのだよ」

「ゲキ・ガンガーの幻とされている話を用意して欲しいと？」

「うむ。お願いできるか？」

・・・これはかなり有効だよな。

ゲキ・ガンガーにもそんな側面があったのかって国民に考えるきっかけを与えられる。

確かガイが全巻持ってたよな。お願いすれば、ダビングぐらいさせ

てくれるだろう。

とりあえず艦長に許可を貰おう。代表だし。

「分かりました。代表に許可を得て、後日に用意させてもらいます」
「そうか！　ありがとう」

木連内部の意識改革をする良い機会だ。

これで少しでも木連内の徹底抗戦派の勢いを削げれば……。

「アキヤマさん達が手に入れた事にする訳ですね」

「その通りだ。その後、あたかも偶然に手に入れたかのように軍内で公開させる」

最初は軍内の改革か。

「アキヤマさんは了承を？」

「ああ。まずは友人達に見せびらかしてやろうと思う」

・・・餌ですか。

見せびらかせば幻とされた話だ。確実に喰い付く。

それがたとえ草壁派の友人であろうと。

でも、懸念事項もある。

「当然、草壁派が妨害するよう働くと思いますが？」

草壁派の妨害工作。

広がる前に潰されるかもしれん。

「噂が簡単に広がるようにゲキ・ガンガーも凄まじい速度で広がる筈」

「民間のゲキ・ガンガーに対する意欲は凄まじいですからね」
「TV会社も食いつくだろう。放送されるのも時間の内だ」

木連組の三人が次々と告げる。

・・・どうやら木連のゲキガン魂は本当のようだ。

「しかし、TVは厳しいのでは？ 放送を止めるぐらいは出来るかと」

「何故止めた？ となる。木連にとってゲキ・ガンガーは聖典。

手に入れる事が出来たら周りの人間に伝える事はある意味義務と言える」

「止める事の方が難しいだろう」

おいおい。本当に凄まじいな。

「細かい点を教えて頂いても？」

「うむ。ゲンパチロウ。説明を」

「はい。まずは木連内部で噂を流す」

「噂？」

「ああ。地球侵略を続ければ幻の話が手に入るかもしれない」

「・・・それって地球侵略の勢いを強める事になりませんか？」

「なるだろうな」

いや。それは困るんですが・・・。

「だが、侵略と入手を掛け合わせる事で、

侵略の目的をゲキ・ガンガーを手に入れる為と勘違いさせられる」

「・・・そんなに単純にいきますかね？」

流石に戦争の理由をゲキ・ガンガーにするのはどうかと？

「それ程、ゲキガンガーに対する興味・関心が深いという事だ」
実現しそうなのが怖いです。

「その状況下であれば、俺がゲキ・ガンガーを手に入れた事で侵略の意欲自体も削れる」

「目的を達した事で意欲を奪う・・・」

熱血は単純にあらず！ って叫びたいんだけど、いいかな？

「あわよくば、地球を滅ぼしてしまったら、ゲキ・ガンガーが手に入らなかったかもと、

民間から軍人まで考えさせるようにして、地球を滅ぼす事への忌避感を埋めつけない」

「・・・なるほど」

それ程までにゲキ・ガンガーが中心の国なのね。

「その後、友人に見せびらかす形で秘密裏に公開する」

「草壁派にバレないようにですか？」

「うむ。私自身が誰よりも早く見て自慢したいというのもあるが」

・・・冷静なアキヤマさんもゲキガン大好きっ子でしたね。

「そ、その時は私もお願いします！」

「当然じゃないか。サブロウタ」

「あ、ありがとうございます！」

・・・最早何も言つまい。

「当然、彼らは幻の話としてダビングを要求してくるだろう」

「まあ、誰もが全巻揃えたいと思う程のファンなら」

「それならば大丈夫だ。誰もが欠番以外の全巻を揃えている」

・・・最早何も・・・駄目だ。突っ込みたい。

「そこで、前もって複数のダビングを用意しておき、彼らに手渡す。後は勝手に鑑賞会やら何やらを行うだろう。鑑賞会など定例会のようなものだからな」

定例会が鑑賞会ってどういう意味さ!?

「軍内で出回れば、自ずと民間にも出回る。木連は閉じた世界だからな。

外部からの情報がない分、内部での情報は驚くほど早く広まってしまっ

「妨害に関しては?」

「たとえ軍が妨害しようとして一度出回ったものを完全に回収する事は不可能。裏で出回る」

・・・木連にもそういう人達はいるんですね。

「当然、私も裏の方にダビングしたものを流出させる」

「大丈夫ですか? 目立ってしまうと・・・」

「大丈夫だ。私の部下にそういう事に詳しい者がいる。ダビングしたものを真っ先に渡せば協力してくれるだろう」

・・・やっぱりダビングしたものなんだな。

まあ、俺もダビングしたものを渡す予定なんだけども。

だって絶対にガイの奴、本物渡してくれないだろうし。
ああ。ファンっていうのはそういうものか。
俺だって集めてる物は渡したくないし。

「先程も言ったが、いずれTVによって公開するつもりだ」
「妨害されませんかね？」

やっぱり心配なんだが……。

「当然、放送できるようこちらからも手を回そう」

「大将が？ 草壁中将に疑われるのでは？」

「噂を流すだけでいい。幻の話が放送されるかもしれないと」

また噂か。掲示板にカキコミとかそんな感じかな？

「幻の話をしてTV会社が手に入れたという情報は必ず出回る。」

その後、もし軍が放送を妨害すれば理由を問い質されるだろう。

民間が待ち望んでいた物を妨害するとなったら流石に良い思いは
しない」

「結果、支持力低下に繋がると？」

「まあ、大した影響はないだろうがね」

それだけ草壁の影響は凄まじいという事か。

「それでも、和平を考えさせるきっかけにはなりますよね」

「少なくとも軍内ではそうなる。そうなれば軍人の家族でも考える
時間が出るだろう」

木連軍人の家族……。

確か木連は生産をプラント任せにしている分、男の殆どが軍に所属

している筈。

その家族ともなれば、国民の殆どとも言えるよな。ふむ。素晴らしい一手だ。

ついでにこちらも悪ノリしてやろう。

「木連の女性はゲキ・ガンガーをどう思っているのですか？」

「男程ではないな。中には嫌いな者もいる」

なるほど。ゲキ・ガンガーだけでは効果が薄いと。

「それならば、ゲキ・ガンガー以外にも用意しましょう」

「ほう。それは面白いかもしれんな」

ゲキ・ガンガーに嵌まったように他の作品にも嵌まるかもしれない。

「異星人や異民族との戦争。後々に手を取り合うような作品を抜粋して届けます」

探せばいくらでもある筈。

アニメはもちろんドラマでも。

「同じ人類が争い、成長し、恋に落ち、手を取り合う為に足掻く。

悲しみ、苦しみ、歓喜し、喜びを分かち合い、争いの無情さを知る。そんな作品を」

何故同じ人類が争わなければならないのか？

何故同じ人類なのに手を取り合えないのか？

そんな命題を与える作品ばかりを。

和平を考えさせる良いきっかけとする為に。

「頼めるか？」

「はい。任せてください」

ゲキ・ガンガーの幻の話ではない為、妨害もしづらい筈。内容を確認されるような規制が入ってしまうなら別だが。

幾つかのTV会社と手を結び、定期的に放送するように動いてもらおう。

いざとなったらTVだけじゃなくていい。

ネットやら裏で流出しても充分の効果が期待できる。

「後は任せてくれ。コウキ」

「お願いしますね。アキヤマさん」

そして、指揮を執るのは知将秋山・源八郎。

俺の考えている以上の効果を彼なら実現してくれる筈だ。

「それでは」

基地内にある移動用チューリップへと向かう。

その場で跳んでも良いのだが、念の為、このような形に最近なった。入った記録がないのに中にいたらあまりにも怪しいしな。

一般の兵士も基地にいる訳だし。

こうしてチューリップで移動する振りをして途中で自分だけで帰る訳だ。

対外的な問題ですね。

これによって必要以上の人に俺の能力について話さずに済んだ。

機体を指差して、あそこにキシモト少将の部下がいますと誤魔化せば良いだけだし。

まあ、実際にキシモト少将の部下に訪問の度に移動してもらっている訳で。

申し訳ない事に変わりはないのだが・・・。
どうしようもないので、甘えさせてもらっている。

「さてさて、何を持ってくれば良いやら」

ウリバタケさん辺りに相談して、そういう作品を集めてもらおうかな。

ガイには同志が欲しがっていると言えばダビングさせてくれるだろう。

あ、女の子が楽しめるような作品も集めてみるか。

そうになると、元声優のメグミさんとか色々と知ってるかも。

おお！ ナデシコって意外とネタの宝庫？

ちよつと楽しくなってきた。

作品によって人の思想がどう変わるのかなんて。

普通に生きてるだけじゃ考えもしないからな。

おっしゃ。集めるだけ集めてやらあ。

後日、ゲキ・ガンガーの幻の話と共に大量の作品を贈呈した。

最終決戦は変えられない事実だが、それまでに思想改革が進められたらと思う。

同じ争うでも兵士が人形か人間かでは大きく異なるし。

それに、ゲキ・ガンガーだけじゃなくてもっと色々なものに触れて欲しい。

ゲキ・ガンガーも良い作品かもしれないけど、他にも良作は沢山あるんだから。

きつと心の琴線に触れる作品があると思う。

人によって好みは異なる訳だから、誰もがゲキ・ガンガー好きってのはおかしいだろうし。

まあ、流石に派みたいにアニメやドラマやらで派閥が作られは・

・・しないよな？」

とにもかくにもアキヤマさんからの報告を楽しみにしつつ、木連の事は彼らに任せ、俺は俺の仕事をきちんとこなすと思いますか。

「大分破壊しましたね」

チューリップ破壊の任務を受けて早二ヶ月。地球上のあらゆる所を回ったと自負している。

「ええ。流星にもうないんじゃない？」

「殆ど回りましたからね」

「これで後方の憂いは立てたのかしら？」

「あるとしたら海中の奥底ぐらいですね」

「流星にそれに関して是对処できないわよ」

「まあ、その分、相手も出撃までに時間が掛かりますから」

余裕はある。

早急な行動が出来ないなら、地球に残す部隊だけでも充分対応できるだろう。

「次はどこに飛ばされるのかしら？」

「宇宙じゃないですか？ 地球周辺のコロニー群が制圧されたと聞きます」

「地球上の次は地球圏か。終わりが見えないわね」

「勢力圏争いなんてそんなものです。また月が戦場になるかもしれません」

「月か。月の住民達は辛い事ばかりね」

取っては取られ、取られては取り。

戦争なんて圧倒的な戦力差がなければひたすら続く陣取り合戦だ。ツクモさんの活躍で地球周辺のコロニーを制圧した木連。

俺達が地球の大掃除をしている間にも着実に前線基地を構築していた。

地球にとって木連の戦法は厄介な事この上ない。

たとえば、俺達が木連本陣まで攻め込むでしょう。

火星到達にナデシコですら二ヶ月は掛かっている。

木星まで最低距離で検出しても火星に比べて八倍以上遠い。

そうなる単純計算、十六ヶ月、所謂一年と四ヵ月掛かる訳だ。

当然、惑星は太陽の周りを回っているのだから、それ以上遠くなる。

・・・木連に攻め込むまでにどれだけ時間が掛かるのかって話だ。

それに対して、彼らはチューリップを利用した急襲制圧作戦。

そして、前線基地を構築する事で戦場を地球付近としている。

要するに、自国周辺には何の被害もなく、あくまで被害は地球側の

みという訳だ。

物資もコロニーで強奪していれば、更に木連の負担は少ない。

ただでさえ無人機主体である木連にとって人的被害はないに等しい。

陣地に入り込み、敵国の物資で戦闘しているようなものだ。

たとえ地球が生産性に優れていようと、このままじゃ泥沼と言える。

地球側がどれだけ疲弊しようと木連と根本的な資源力が違い過ぎる。

木連は遠くから好きに攻撃できるので、戦闘の主導権を握っている

と言っている。

言い方を変えるならば、短期戦も長期戦も思うが尽である訳だ。

かといって、いつまでも長引かせていては木連の精神的な部分が悲

鳴をあげる。

木連が勝つには長期的に苦しめ続けて、地道に地球の力を削ぐ事。

しかし、反面、あまりにも長過ぎては敗北以前に滅亡の危機。

地球が勝つには圧倒的物量で本拠地を急襲するか、木連が自滅するまで耐える事。

しかし、反面、物量で攻めるには手間や時間が掛かりすぎる。

自滅するまで耐えるといっても、長引けば長引く程、民の暴動など内乱の危険性がある。

何十年単位で同じ戦争をし続けられる程、人間の精神は強くない。

何が悪いと責任追及に始まり、下手すると地球内で戦争が勃発する。

内乱発生 鎮圧 戦争 内乱発生 鎮圧 暴動発生 鎮圧。

極端な言い方だが、こういう負の連鎖が木連が滅びるまで永久に続く可能性があるので。

実際、和平も終戦もなく、今のままの状況が続けば、確実に戦争は超長期化するだろう。

結果として、この泥沼が何年、いや、何十年も続く事になってしまうのだ。

木連が地球を滅ぼす？ 可能であろう。だが、未来はない。

地球が木連を滅ぼす？ 可能であろう。だが、時間が掛かり過ぎる。無論、時間が掛かるだけなら構わないと思うかもしれないが、そうはいかない。

木連の本拠地を攻めるのだ。それだけ大規模な戦力が必要になる。

それだけの物資、戦力を集めれば地球内も疲弊するだろう。

また、一年以上の間、地球の主力部隊が離れば、その隙を木連に突かれる。

それを恐れている以上、主力部隊が地球を離れる事はない。

まあ、途中にある全てのチューリップを破壊しながら進めれば可能だろうが……。

そんな事ばかりしていたら、一世紀なんて簡単に終わってしまう。

それなら、少数精鋭で赴けば良いかもしれない。

でも、本拠地に攻め込むというのに、少数で敵うだろうか？

たとえば一発核をぶつけるとしても、核に深い因縁を持つ相手だ。

地球から木連に到達するまでにどうにかする手段なんていくらでも

あるだろう。

結果として、地球は成す術がなく、自動的に長期戦とするしかない。

局地戦でいくら勝とうとも、大局的な勝ちにはならないのだ。地球周辺を完璧に取り戻したとしよう。

だが、それだけ。続きがない。

結局、攻めてくるのは迎撃。

実は隠れてました的なチューリップが地球を急襲。

再び、混戦に、なんて性質の悪い結果にしかない。

なんとも泥沼過ぎる戦いだ。

可能性としては、地球側でチューリップを制御できるようになれば勝てるかもしれない。

そうすれば、距離の概念を克服できるし、木連まで一気に攻め込めるからだ。

犠牲さえ考えなければ、戦力差のある地球が勝利するだろう。しかし、チューリップを生産できる環境があるのは木連だけ。

その環境を地球に整備するのにどれだけの時間が掛かるだろうか。

チューリップを捉えて研究しようにも以前のようにジンの急襲の機会を与えてしまうだけ。

遠くから眺めて全てを理解できる程、人間は神掛かっていない。

散々考察したが、結論として、この戦争は続ける限り終わりが見えないという訳だ。

和平を結ぶ以外に手段がないとも言える。

もちろん、これは俺の意見であって、他の者は違うかもしれない。でも、和平以外に両陣営が救われる方法なんてあるだろうか？

木連にとって何より欲しい安住の地が手に入る。

地球にとって何より欲しい遺跡やプラントなど古代火星文明の技術が手に入る。

恐らく、遺跡などの古代火星文明は木連との共同研究になるだろうが、その何が悪いのか。

結論として同じ人類が同じだけの技術を手に入れたに過ぎない。地球と火星と木連。そんな区切りがあるから、不満を覚えるのだ。その枠さえ取り除いてしまえば、人類の進化という人類にとって願ってもない事が起こるだけ。無論、人の感情だ。恨みや憎しみ、妬みなど素直に受け入れない部分もある筈だ。だが、それさえ呑み込めば、人類は更に進化し、新しい世界へ足を踏み入れる事になる。人類の進化のチャンスを見逃す理由など存在しない。まあ、理屈で訴えても届かないのが感情なのは確かなのだが。・・・俺の周りで誰も死んでいないからそう言えるのではと言われたら否定は出来ないけどね。

「随分と長い間、考え込んでいたわね」

「え？ ああ、ええ。なんだか終わりのない戦争なんだなと実感してしまって」

「・・・そうね。どうすればいいのかしら？ どうしたら、皆、納得してくれるのかしら？」

「皆が皆、納得する方法なんてないのかもしれないかも」

「・・・コウキ君」

「誰かが不幸な目にあって、誰かが幸せを得る。それが世の理ですから」

「もう、若いのに、どうしてそんなに悲しい事ばかり言うの」

「・・・すみません。なんか虚しくなっちゃいました」

戦争中、誰もが虚しさやら理不尽やらを感じているんだろうな。

「マエヤマさん！ 元気出してください！」

「艦長。・・・もしかして、聞いてました？」

何？ それじゃあブリッジクルー皆が聞いてたのか？
・・・うわっ。恥ずかしい。

「確かに虚しさを感じる事はあります」

「・・・艦長にもあるんだ」

「何を驚いてるんですか！？ ミナトさん」

・・・確かに失礼ですよ。ミナトさん。

というか、ブリッジクルー皆で意外みたいな顔をするのは可哀想過ぎます。

「コホン。でも、だからこそ、私達が終わらせなければならぬんです」

「俺達？ ナデシコがですか？」

「はい。ナデシコです。ナデシコなら希望になれます」

「どうやって戦争を終わらせると言つのですか？」

「分かりません」

分かりませんか？ え？ 分からない？

「手探りだっていいじゃないですか。必ず、必ず和平への道は現れます」

簡単に言つなあ。でも、なんだかそんな気がしてきた。

「私は改革和平派の代表に就任して、
今までどれだけお父様達が地球の為に活動して来たかを知りました」

・・・原作でも語られない軍人の働き。

何もしていなかったかのように見えていたが、確かに彼らは和平を結んだ。

「ナデシコにいたただけでは分からなかった色々な事。

ナデシコ、ナデシコと唱え続けた私達を支えてくれていたお父様達の働き。

私達ナデシコがここまでやってこれたのも軍人の皆様の助力があったからなんです」

そうだよなあ。ナデシコが好き勝手できたのもその上で責任を取るものがいたから。

全力でミスマル総司令官がバックアップしてくれたに違いない。

「だからこそ、もう一度言います。ナデシコこそ希望だと」

「ナデシコが希望？」

どうしてですか？ 艦長。

「多くの者に支えられ、多くの優秀なクルーが揃うナデシコ。

その責任、その期待に応えるべく全力で活動する義務があります。そして、皆さんとなら、その期待に応えられると私は信じていま

す」

・・・理論も何もない感情に訴える言葉。

明確な方向性、明確な方法も何も語られない感情だけの言葉。

それなのに、どうしてまあ、こんなにも・・・。

「希望が見えてくるかな」

まるで暗闇の中で一筋の光を見つけたかのような。

彼女に付いていけば何もかも解決するかのような。
そんな、希望、期待が浮かんでくる。

「ハハハ。艦長には敵いませんね」

「へ？ へ？」

本当に凄い人だ。この人は。

「手探りでいきましょう。なんでもやってみなければ分かりません」
「はい！」

そうだよな。考えて解決しないのなら、動くしかない。
動いている間にもしかしたら道が開かれるかもしれないのだ。
頭ばかり動かしてちゃ駄目だよな。
身体を動かして、自らの力で道を切り拓かねば。

「ふふつ。艦長に出番奪われちゃったな」

「・・・凄いです。艦長」

本当に凄い。改めて付いて行こうと思った。

「それでは、皆さん、早速月へ向かいますよう！」

「」「」「おおー！・・・ん？ あれ？」「」「」

「・・・聞いてないんですけど」

「あれ？ 言ってますでしたっけ？」

・・・やっぱり付いていくのやめようかな。

月へと向かう理由は案の定地球圏の解放の為だった。

地球圏で数少ない地球陣営の前線基地。

月を拠点として、各コロニーを解放していく予定らしい。

クーデターの危険性がある中、地球から離れるのは不安だが・・・。
ナデシコー隻がないだけでどうにかなる程、改革和平派も柔じゃない筈。

ナデシコ級であるキクザクラも保有しているのだから、多少の戦力差も覆すだろう。

彼らの仕事が地球の守護なら、俺達の仕事は外敵の排除。

さっさと危険物を排除して、隙を与える事なく無事に凱旋するつもりでしょうか。

・・・そういえば、アキヤマさん達も地球周辺で活動してるとか言ってたな。

戦場で行くわさないといいけど・・・。

第九十一話（後書き）

繋ぎの御話ですかね。

まあ、この話の中だけで二ヶ月の月日が経ってますが。

新型機に関してはまだ登場しません。

完成してませんからね。

もう少し時間が掛かります。

第九十二話（前書き）

さあ、どんどん行きましょう。

第九十二話

「嫌な予感ってどうしてこうも当たるかな？」

地球周辺のコロニー群の制圧。

チューリップの破壊とは違って、この作業は非常に困難かつ非常に面倒。

単純に破壊すればいいだけじゃないからだ。

まずナデシコ一隻じゃ確実に数が足りない。

一つのコロニーを攻めると違うコロニーから援軍が来たりする。

ただでさえ殲滅戦が出来なくてチマチマと面倒だというのに。

グラテビィブラストですらコロニーが破壊される恐れがあるからとか禁止されてるし。

その後、無事に周辺を掃除しても、今度はコロニー内部。

時偶バツタとかが潜んで、それらを更に掃除しなければならぬ。

どこにいるかなんて当然分からないから、常に警戒が必要。

内部に潜入して破壊されて戦死なんていう例もあってさ……。

もうコロニーごと壊しても良くないか？　と思うのも仕方ない事。

運良くナデシコクルーに被害はないけど……何度も危ない場面があった。

それに、他にも問題がある。

ナデシコ単体では厳しいからと戦隊を組んで赴くのだが……。

なんで足を引っ張るかな？　何を考えているのかな？

こういう作戦に派閥とかは関係ない訳で。

当然、改革和平派もいるけど、それ以外の者達もいる。

いや、別に俺らとしても確執はあっても、戦闘中は協力するつもり

だよ。

でもさ、フレンドリーファイアばかりってどういう事？

何？ 狙われてるの？ 俺達。

確かにそれなら罪に問われないけどさ。仕方のない事だって。

でも、あからさま過ぎて逆に呆れる。

馬鹿なの？ ねえ、馬鹿なの？

そんなストレス爆発寸前の俺達の前に現れたのがアキヤマさん達の木連艦隊だった訳だ。

・・・間が悪いよ。アキヤマさん。

「通信が届いています。如何しますか？」

ん？ アキヤマさん。どうするつもりだろう？

「開く前に全艦に通達を。指示が出るまで待機しておくように」
「了解です」

そつだよな。勝手な行動をされたら困る。

現在のナデシコ艦隊はナデシコ旗艦にグラジオラスとジキタリス。

どちらもナデシコにとって因縁深い艦である。

グラジオラスは火星からボソソジャンプして来た時にナデシコが出くわした艦。

ジキタリスは原作でオモイカネ反乱の時に誰かが落とした艦で、

プロスさんがナデシコよりも高価なんですぞお！ て叫んでいた奴。

まあ、今回はそんな事なかった訳ですが。

グラジオラス、ジキタリス共に相転移エンジンを強引に積み込んだらしい。

正直、DFがなければやられる一方だしね。

そもそも改革和平派の機体は重力波アンテナに依存している訳で、相転移エンジンがなければエステバリスの実戦投入すら出来ない。

改革和平派の課題であり、生産済みの戦艦に強引に積み込むという方法を取る事にしたらしい。

まあ、一から生産するには時間も余裕もないし、何より勿体無いからな。

当然っちゃあ当然の結論だろう。

そして、結局、他の派閥もその真似をして、

連合軍の戦艦全てに相転移エンジンが積み込まれる事になったとかまあ、その改修作業も突貫ものらしく、急造艦だから性能はそれ程期待できない。

DFが張れて、重力波アンテナが正常に働けばOKだとか・・・。
ちよつと心配。

そうそう、ジキタリスもグラジオラスも共にリアトリス級戦艦というものらしい。

今では新しく夕顔級という戦艦が次々と生産されていき、

いずれは夕顔級が旗艦となつて艦隊編成をされると思われる。

まあ、それは今の俺達とは何の関係もないから気にしない事にしよう。

「特にグラジオラスには注意を」

「はい」

ジキタリスは改革和平派の戦艦。

こちらは協力的。まあ、性能差から足を引っ張られるのは仕方ない。制圧戦は火力よりも人手だし。

でも、グラジオラスは違う派閥のもの。本当にストレスが溜まる。性能差で足を引っ張るわ、明らかにナデシコに攻撃してるわ。

真面目に戦闘に参加しているのなら、足を引っ張られようと攻撃されようが我慢できる。

だが、明らかにわざとである彼らには我慢も限界。

ナデシコ全体でピリピリしてる。

脅してやればいいんだが、お人好しの多いナデシコでは抗議は出来ても攻撃は出来ない。

結果として向こうを増長させる結果に。

・・・本当にどうしてくれようか？

というかどうしてこんな編成にした？

今回の地球周辺コロニー奪還作戦のリーダーは何を考えているのかして？

派閥で艦隊を分けるのがおかしいっていうのは分かるけど・・・。

少しぐらい融通を利かせてくれても良いと思う。

もしかして徹底抗戦派の監視か？

リーダーも徹底抗戦派の一員だったりして？

クソッ。イライラするな。

「お願いします。メグミちゃん」

「了解」

艦長の指示に従い、メグミさんが通信を開く。

そして、モニターに映し出されるアキヤマさん。

『お初に御目に掛かる。私は秋山・源八郎。カンナツキの艦長を務めている』

「ナデシコ艦長のミスマル・ユリカです」

『先日は失礼した。女性に対して快男児など』

「い、いえ。気にしてません」

かなり気にしてますね。その言い方と表情だと。

『また、和平派の代表との事。木連の和平派の一員としてご挨拶を』

「ありがとうございます。共に手を取り合えたら嬉しく思います」

『じちらじそ』

このままいけば戦闘回避なんだけど……。

『本来であれば、和平派同志が争うのは愚の骨頂』

「はい」

『ですが、これも戦場の習い。全力で争いましょうぞ』

「え？ え？」

『そちらも準備はよろしいようなので』

え？ 戦闘の準備？

「……グラジオラス。敵艦に照準をつけています」

あ、あいつらあああ！

「ア、アキヤマさん！ あいつらは」

『おお。コウキか。久しぶりだな』

「何を暢気に。あいつらは構えているだけで決して敵対行動ではありません！」

『……戦って分かるものもある。お前はそうケイゴに告げたそうだな』

「と、突然なんですか？」

『私もそう思う。だから、もう一度ナデシコと戦いと思った』

……アキヤマさん。でも……。

「しかし、そのような私情で兵士の命を」

『譲れんのだよ。地球も木連も狙いはコロニー。いずれぶつかる。』

我々が和平派であろうとそうでなかりうと敵対している事に変わ

りはない』

「そうかもしれませんが・・・」

だからって争う必要はないじゃないですか！

『本気で来い。私達も本気でそれに応えよう』

「ア、アキヤマさん。ちよつと」

「・・・分かりました。本気でいきます」

「か、艦長！？ 本気ですか！？」

「はい。本気です」

「し、しかし・・・」

「私達の覚悟を覚えてもらいます」

『ハツハツハ。それでこそナデシコの艦長。正々堂々戦いましょう』

ぞ』

プツンッ！

「ア、アキヤマさん！ 艦長！」

争うのは愚の骨頂だつて言ってたじゃないか。

それなのに、わざわざ戦うだなんて・・・。

「各艦に通達。戦闘準備」

「よろしいのですか？」

「はい。全力で応えます」

・・・はあ。両艦隊のトップがやる気になつちやったら俺じゃ止められないか。

腹、括るしかないな。

「知り合いなの？」

「ええ。割と」

「戦うのが辛い？」

「はい。でも、覚悟を見せろっていうなら見せてあげますよ」

「そう。それなら、胸張って行って来なさい」

そこまで言うのなら、俺達の本気、見せてあげますよ。アキヤマさん。

「パイロットの皆さんは出撃準備を」

さて、そうになると、どう戦うのがベストだ？

「ストレス発散は出来ないし」

相手が今後の和平に必要な存在である以上、破壊してしまう訳にはいかない。

かといって敵である相手に攻撃しない訳にもいかず……。

……墜落寸前まで追い詰めて逃がすしかないか。

まあ、そう簡単にそのような状況に出来る程、アキヤマさんは甘い相手ではないけど。

やるからには本気。でも、追い詰めはしない。うん。この方針で行こう。

「艦長。破壊はしないでくださいね」

「分かっています」

艦長ならこの一言で意味を理解してくれる筈。

アキヤマさんが今後に必要な人だって。

俺が木連と地球を行き来してる事も知ってる訳だし。

突っ込む事のリスクを考えて、各自で任意の機動を取らせていると
いった所か。

「リョーコさん。お願いします！」

今回、スバル嬢は特殊隠密型に乗り込んでいる。

アクトさんがいない今、次に適正が高いのはスバル嬢。

隠れながら進むような事は不得意だろうがやってみようしかない。

『おうよ！ 任せとけ！』

彼女の任務はボソン砲の破壊だ。

戦場の混乱を利用し、戦域から離脱。

特殊マントを装着しながら、カンナツキに接近。

そして、カンナツキの左舷後部にあるボソン砲を破壊する。

重力場を利用した接近方法ならばレーダーを回避でき、かつ、エネルギー消費を抑えられる。

ボソン砲を破壊して、ナデシコの重力波範囲内に戻ってくる事は可能だろう。

ニバリスによってゾーンも拡大されているし。

ちなみに、きちんと複座式から単座式に変更してあるから変な形状にはなっていない。

「リョーコさんが破壊するまで積極的に攻撃し続けてください」

相も変わらずヒナギクで指示を出しながらの戦闘。

いや、確かにスバル嬢の分のアドニスが残ってるんだけど……。意外とヒナギクも使い心地が良くてさ。うん。

「グラビティバスターファイヤ！」

宇宙空間で相転移エンジンも好調。
敵機の間を駆け抜けるように進み、次々と弾丸を撃ち込む。

「ん？ 落とせてないか」

カトンボ級。言うならば、固定砲台。

DFがある為、多少の防御力はあるものの、DFさえなければ撃破は容易い。

「うおおおお！」

DFに向けて突撃、スピアを突き立てる。

当然のように装着されているDF中和装置でDFを解除。

「爆導索発射！」

ワイヤーアンカーと似て非なるものをコクピット後方の機体上部から敵艦に向けて発射。

船体に引っ付いた事を確認した後、戦艦の回りをグルリと一周。巻きつけるように固定したら、ワイヤーを切り離す。

ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！ バゴンッ！

切り離しがスイッチとなり、ワイヤー内に組み込まれた爆薬が次々と爆発。

多角的な爆圧により、敵艦は押し潰されるように爆発した。
ヒナギクに搭載された対巨大機用の浪漫兵器。

だが、その攻撃力は折り紙付きだ。

「次！ ん？ ようやく出てきたか」

グラジオラスからステルンクーゲルが、
ジキタリスからヒエンがそれぞれ出撃してくる。

ヒエンの標準装備は180mm低反動砲とディストーションブレード。

ラピットライフルかレールカノンかはパイロットの技量次第らしい。
性能はエステバリス以上、アドニスリアル仕様以下。

相変わらずエースやリーダーにはアドニスだが、段々と主力はヒエンに変わってきている。

ヒエンの生産に追いつくよう、武器の生産も突貫作業。

旧時代の戦車や廃棄された戦艦などから武装だけ取り外して流用しているらしい。

クルスク工業地帯を奪還したのは大きかったそうな。

他にも連合軍艦の装備品である荷電粒子砲やレーザー砲の流用も考慮しているとか。

・・・ディストーションフィールドで簡単に防がれてしまうという弱点もあるが。

まあ、ないよりは合った方がいい。何に使えるか分からないし。うん。

「ロックオン？ またかよ」

機体を旋回させる。

その後方を過ぎていくレールカノンの弾丸。

避けなければ破壊はされないものの損傷は受けてた筈。

「・・・完全に狙われてましたよね？」

まあ、避けた先にいたバツタに直撃しましたけど。

・・・気にしない事にするのは駄目だけど、面倒だから無視しておこう。

『こちらスバル。ボソン砲の破壊に成功したぜ！』

流石、スバル嬢。

「了解。すぐさま離脱し、ナデシコの方へ戻ってきてください！」

『了解！ って、うおっ！』

「ど、どうしました！？ リョーコさん」

通信越しに見えるリョーコさんの表情が驚きが変わる。

『チツ。追ってきやがった。敵機と交戦に入る』

交戦？ マズイ！

「駄目です！ バッテリーが！」

『一瞬で終わらせれば問題ないだろ！』

プツンッ！

通信が切れる。

「ああ！ もうー！」

無茶ばかりしやがって。

「スバル機の援護に回ります。後は任せました」

『リョーコをよろしく』

了解。ヒカル。
しばらくの間、任せませ。

「カナナヅキは・・・あつちか」

レーダーにてカナナヅキの位置を特定。
ナデシコとカナナヅキを結ぶ直線上に恐らくはいる。

「重力波送信モードに移行」

以前までの戦闘で得た教訓を活かし、ヒナギクから重力波を送れるように改造した。

ヒナギクの重力波供給ゾーンに入れば、スバル嬢のバッテリー切れの心配もなくなる。

その分、ヒナギクの性能が若干落ちるが、宇宙空間ならそれ程の影響はない。

地上空間でこれをやる時は幾つかの機能を停止させる必要があると思うだ。

まあ、供給相手が少数であれば地上でも問題ないだろうけど。多分。

「・・・いた！」

レーダーに映る何かを追うような動きの福寿改の反応。
しかし、ヒナギクのレーダーにも映らないとは・・・特殊隠密仕様、やるな。

「接近する」

カメラに映る距離まで移動すれば状況は分かる。

うん。念の為、グラビティバスターもチャージしておこう。

「やっぱり」

案の定、アドニス特殊隠密仕様と福寿改が交戦していた。

「リョーコさん。援護します」

『ケツ。助けられちまったか』

「バッテリーは？」

『・・・やばかったみてえだ。サンキューな』

「いえ」

それ程、バッテリーは長持ちしないし、しょうがない。しかし、スバル嬢を相手にここまで戦えるとは・・・。敵のパイロットは誰だ？

「まずはレールカノンで牽制」

バンッ！ バンッ！

シュッ！ シュッ！

うん。普通に避けたね。

牽制といえどしつかり狙った。かなりの腕前と見ていいかな。

「リョーコさん。相手は」

『おめえは黙って見てろ！ でやあああ！』

あれ？ 援護はいりませんよ宣言された？

『だらあ！ おらあ！』

・・・なんか凄く熱いバトルを繰り広げているんだけど。ちよつと通信を拾ってみようかな。

『甘いですね』

『ダア！ 当たりやがれ！』

『次は俺の番です』

『うおつと！ 危ねえ』

『あれを避けるとは・・・素晴らしい腕前だ』

『へっ。おめえも中々やるじゃねえか』

『俺はタカスギ・サブロウタ。好敵手たる貴方の名を教えて頂きたい』

『俺はスバル・リョーコだ』

『む。女性でしたか』

『てめえ、馬鹿にしてんのか！？』

『いえ。俺は幼い頃より女性は慈しむ者と学びました。

ですが、戦場で手を抜く事こそ侮辱。女性といえど手加減はしませんよ』

『へっ！ 望む所だけ。俺は女である前にパイロットだ』

『全力でいきます。ゲキガンソオオツオド！』

『かかってこいやあああ！』

・・・あれですね。戦場での出会いですね。

劇場版で良い感じだった二人だし。

軟派だったサブロウタさんではなく、硬派なサブロウタさんならばル嬢も落ちるかも。

まあ、今は好敵手として争う仲といった所かな？

・・・邪魔したら馬に蹴られて死んでしまいそうだ。

「それなら、周りの雑魚を蹴散らしますかね」

俺が来た事でスバル嬢はナデシコに戻る事をやめて戦闘に集中した。その結果、常に移動し、追い・追われる形で争っていたのが一箇所に留まる様になり、

スバル嬢とサブロウタさんを中心とした一つの戦闘フィールドを構築してしまう破目に。

動き回っていた時には見向きもしなかった敵がわんさかこちらへと向かってきていた。

「レールカノン一斉射撃」

多重ロツクオン。

俺の数少ない武器。

ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！

ヒナギクの船体から伸び出るレールカノンによって敵を屠る。

機体で両手に持つより数が多く、囲まれている時は非常に有効的だ。

「雑魚はいくら集まろうと雑魚なんだよ」

レールカノン一撃で撃破できる限り、どれだけ数が多かろうが大して変わらない。

それが俺の武器である多重ロツクオンの効果。

「グラビティバスター発射」

チャージしておいたグラビティバスターを向かってくるジンに放つ。グラビティバスターを撃たれるより早く、DFを張られるより早く。

意表を突けたのか、ジンは反応できずに直撃。ギリギリで離脱した頭部を残して爆発した。

「流石に頭部は撃てないよな」

頭部だけで必死に帰艦する敵パイロット。

この状況で追撃する事は流石に出来なかった。偽善だとしても、逃げる敵を攻撃するのはなんとなく嫌だ。

『グツ・・・ググツ』

『ググウ・・・グツ』

気付けば、鏝迫り合いなんかしちゃってるスバル嬢とサブロウタさん。

特殊隠密仕様の特徴は装甲が薄く、機動力が高い事。

まあ、今はそんな事は関係なくて。

一番の特徴は特殊な武器にある。

見た限り、スバル嬢が使ってるのはレールカノンとDBとクローグらい。

隠し腕や足にあるスパイク、閃光弾などなど。

特殊隠密仕様だからこそ使える武器はどうやら使っていない様子。

いや、多分、使わないんだろうな。

やっぱりスバル嬢はガチンコが望みらしい。

適正は高いけど、特殊隠密仕様独特の性能は発揮できていないという訳か。

性格的に相性が悪いって事ね。

それなら、やっぱり特殊隠密仕様をきちんとした形で使いこなせる人がパイロットの方が良い。

せっかくの特殊性なんだし。

スバル嬢には近い内に届けられる接近格闘仕様に乗ってもらおうか。

適正的にも相性的にもあつちの方がスバル嬢らしいし。多分。そうなる特殊隠密仕様に誰が乗るかなんだけど……。

「おっと」

ダンッ！　ダンッ！

考え事をしながらも敵機撃破は忘れない。いや、俺も成長したな。

並列思考に慣れてきたお陰か、わざわざ展開せずとも同時進行が割りと出来るようになった。

もちろん、並列思考を展開した方が色々な事が出来るんだけど……。同時処理能力が増してきたのは良い事だよな。うん。

「ん？　またジンか。爆導索発射」

ジンに取り付けて、旋回して巻き付け、バンッ！

最初は扱いづらかったけど、シミュレーションで猛特訓したお陰で実戦でも使えるようになった。

攻撃力が高い分、グラビティバスターと並んで主力武器になっている。

まあ、グラビティバスターと違って限りがあるから気を付けないといけないんだけど。

「それで、だ」

全ての新型機が揃った時、誰がどれに乗るのか。

別に決めないで臨機応変に乗り換えなんていう方法もあるけど……。

「一応はきちんと決めておきたいだろ？」

「やっぱり特殊隠密仕様が難しいな」

特殊隠密仕様の特殊性を一番発揮できたのはアキトさん。

戦争に綺麗も汚いもないを地でいくアキトさんはひたすら上手かった。

閃光弾の使い方も良し。スパイクの使い方も良し。隠し腕の使い方も良し。

まさに特殊隠密仕様の為のパイロットと言わんばかり。

でも、それ以上にアキトさんは高速戦闘が得意で、

特殊隠密仕様よりも高機動戦用の機体の方がより多くの戦果を残してくれると思う。

そうなるとうりバタケさんとイネス女史にお願いした高機動の機体にアキトさんは乗るべき。

次に適正が高かったスバル嬢はさっき考えた通り、性格的に向いていない。

ガチンコ好きには特殊隠密仕様は扱いづらいだろうな。機能の半分以上を封印してる事になるし。

「……となると……」

アキトさん、スバル嬢を除いて特殊隠密仕様を使いこなせそうな人間。

「……ヒカルとか？」

ヒカルは全ての機体が同じくらいに適正だった。

現時点じゃアキトさんに届かないけど、これからの訓練次第で同等以上になれるかも。

うん。今の所、ヒカルが最有力かな。カエデも向いてなさそうだし。俺は・・・どうだろう？ 意外といけるかな？
今度ヒカルと一緒に訓練してみたら考えよう。うん。

「まだ続いてるね」

結論が出た所でスバル嬢とサブロウタさんの戦闘を眺める。

互いに同じくらい損傷。若干、サブロウタさんが押されてるかな？
まあ、経験が違いますからね、経験が。

サブロウタさんも猛特訓したらしいけど、まだまだスバル嬢には及ばないか。

そろそろ決着がつくんじゃないか？

「ハア！」

「ダア！」

シュインツ！ ダバツ！

スバル嬢とサブロウタさんが互いにすれ違いつつ攻撃。

「・・・・・・・・」

アドニス左腕が宙に舞い、爆発する。

それに対して、福寿改は何事もないように静止するが・・・。

「・・・負けましたか」

アサルトピットが離脱し、その後爆発。

アドニスは自身の左腕を犠牲にしつつ、福寿改を断ち切っていた。

『リョーコさん』

『てめえ、いきなり名前で呼んでんじゃねえ！』

『あ、すいません、スバルさん』

『べ、別に断った訳じゃねえよ。いいぜ。リョーコって呼びな』

『ハハハ。難儀な人だ』

『うるせえ』

何だろう？ このムード。

『リョーコさん。楽しい勝負でした』

『おう！ 俺も楽しかったぜ』

『同じ和平派として今後は協力する立場になります』

『そうかもな』

『次は貴方の隣で共に戦いたい。そう強く思います』

『ケツ。足引つ張んねえなら許してやるよ』

『ありがとうございます。また機会あらば』

『いつだって相手してやらあ』

『それでは』

回収に来たらしいバツタに引つ張られながらカンナツキへと帰艦していくサブロウタさん。

それを見送るスバル嬢の表情はどこか嬉しそうな笑みだった、なんて。

「リョーコさん。捕まってください」

ワイヤーアンカーをスバル嬢近くに放出する。

「ナデシコまで送っていきます」

『おう。頼んだぜ。へへっ』

うん。やっぱり嬉しそうだ。

これは・・・青い春でも訪れましたか？

好敵手的な関係？ それとも・・・。

ハハッ。野暮か。この先は。

「ヒナギク内に着艦してください」

ワイヤーアンカーで近くまで引き寄せ、その後ヒナギク内に格納。
一機分余裕がある格納庫にアドニスを収める。

「お疲れ様です」

「おうよ。こっち座っていいか？」

「どうぞ」

ヒナギクのコクピットには二人分の椅子がある。

まあ、一人でも充分に対応できるようにしてあるんだけど。
というかいつも一人だからもう一つの席の事は忘れてたり。

「どうでした？ 敵さんは」

迫り来る敵を撃破しつつ問いかける。

強敵ではない限り、これぐらいなら片手まで出来るぞ。

「強かったな。サブロウタの奴」

あらあら。名前で呼んじゃって。

「ライバルが出来ましたね」

「ふんっ。まだまだ負けねえよ」

楽しそうにまあ。

これから会う機会はいくらでもあるだろうし。
戦後、二人がどうなるか今から楽しみだな。

「ナデシコ帰艦後はa d・R Rで再出撃になると思います」

「だろうな。ま、ボソン砲がなけりゃ負けねえだろ」

「そうですね。大手柄です。リョーコさん」

「そうだろ。そうだろ。いや。苦労したんだぜ」

まあ、不得意ですからね。隠密行動。

「実際、どうでした？ 特殊隠密仕様」

「ん〜。強えんだけど、使いづれえな」

「強いけど使いづらい？」

「おお。性能が高いのは分かるんだけどよ、どうも特殊な奴が使いづらくて」

やっぱりスバル嬢には性格的に不向きか。

ガチンコ志向ですからね。スバル嬢。

「まどろっこしいのはやっぱり面倒だ。正面からぶつかってきてえ」

そうなるとやっぱり特殊隠密仕様の正パイロットはスバル嬢じゃ駄目だな。

「分かりました。参考にします」

「おう。こつというのはヒカル辺りが上手く使うんじゃないか？」

「やっぱりそう思います？」

「あいつは器用だからな。変な奴だし」

・・・変な奴って関係あるのか？
まあ、いいや。

スバル嬢と同意見だから、今度ヒカルに相談してみよう。
とりあえず多少の訓練を挟んでもう一回テスト。
これの結果を見れば分かるだろ。うん。

「それじゃあ、飛ばしますよ」

「さつさと終わらせようぜ。ちゃんとした敵の方がスカツとする」

アハハ。相変わらずだな。スバル嬢は。

『グラビティブラスト発射！』

『・・・グラビティブラスト発射します』

ヒナギクで帰艦してからしばらくしてこの戦闘に決着がついた。
ボソン砲を失ったカンナツキでは逆転の一手が打てず。
強化されたナデシコに無人戦艦の悉くを破壊され、撤退となった。
カンナツキ自体もかなりの損傷を負い、しばらくは戦線復帰は厳し
そう。

目標の殆どを達成し、ナデシコ艦隊の完全勝利といったところ。
改めて、改修されたナデシコの力を知らしめる事となった。

『ハツハツハ。完敗ですな』

戦闘終了後、俺を含めてパイロットは皆ブリッジへと向かった。

戦闘前に通信があったように再び通信があるだろうという事で。ブリッジに到着した際、案の定、艦長とアキヤマさんが画面越しに会話をしていた。

「アキヤマさん」

『おう。コウキ』

「俺達の覚悟。思い知りましたか？」

「コ、コウキ君！」

慌てるミナトさん。

失礼な言葉遣いとも思ったのだろう。

でも、それぐらいで怒るアキヤマさんじゃないし、

その程度でこじれる程、俺とアキヤマさんの関係は浅くない。

『フツハツハ。そうだな。確かに思い知らされた』

「しばらくは木連内で活動しててください」

『この損傷じゃ大人しくしているしかあるまい。まったく怒られてしまうぞ』

「ドンマイです。神楽大将に肉体言語で怒られてください」

『死んでしまうぞ、それでは』

「確かに。ハハハ」

『アツハツハ』

意外とノリが良いんだよね。アキヤマさん。

「・・・随分と仲良しなのね。焦って損しちゃった」

「すいません。ミナトさん」

まあ、俺以外の人からしてみれば初対面だしね。

「あ」

今の声はスバル嬢？

あれか？ 画像の奥に見えるサブロウタさんを見付けて思わずあげた声か。

『それでは、そろそろ私達は失礼します』

早く帰って修理しないといけませんからね。

『ナデシコの覚悟、見させて頂きました。』

次は戦場で、仲間として御会いしましょう』

ブツンツ。

映像が切れ、全速力で後退していくカンナツキを見送る。

「ジュン君。強い人だったね」

「うん。性能で劣っている筈なのにそれを戦術でカバーしていた」

艦隊戦を繰り広げていたナデシコ。

その内容は俺には分からないけど、相当に濃かったに違いない。

「今度は味方・・・か」

「木連と手を取り合う日がいつか来るといいね」

「うん」

艦長と副長の思い。

皆同じですよ。

「・・・グラジオラス。敵艦にロックオン」

「へ？」

「え？」

敵艦ってカンナツキ？

「・・・レーザー砲。発射しました」

「ああ！ 待機命令出してない！」

「ダア！ 艦長！」

出してない！ じゃないですよ！

・・・まあ、レーザー砲なら・・・。

「・・・敵艦。DFで防ぎました」

DFで弾けるから大丈夫だろうけど。

損傷してたから万が一もある。

「・・・どうしよう?」

正当な行為ではある。

待機命令は出してないから命令違反でもないし。

離脱していく敵艦は見逃さなければならぬという決まりもない。

「・・・後で弁明しておきます」

直接アキヤマさんに事情を説明しに行こう。

まあ、ある程度の事情は察していると思うけど。

「ユリカ。むしろ、撤退を見逃した弁明を考えておかないと」

それもそうか。

交戦した敵を見逃したとなれば今回の作戦のリーダーになんて言われるか分らない。

「メグミちゃん。グラジオラスに通達。追撃命令」

「え？ 良いんですか？」

「いいから。いいから」

あえてグラジオラスに追撃命令を出す？ 何故？

「ユ、ユリカ。良いのかい？」

「うん。グラジオラスじゃあのスピードに追いつけないでしょ。攻撃も当たらないし」

なるほどね。

撤退を見逃したのではなく、グラジオラスに一任した事にする。

そうすれば、見逃したのではなく、逃げられたとなる訳だ。

グラジオラスがなんて報告しようとする自身の責任だから言い訳にしかない。

たとえ真実は違ってても、正式な命令で出した追撃。

表向きに罰する事は出来ない。

「ナデシコは先ほどの攻撃で船体部に損傷を受けました。ジキタリスもです。」

そこで、後方から援護に回り、ほぼ無傷であるグラジオラスに追撃を要請します」

先ほどの攻撃もその追撃の一環であるとすれば良い。

攻撃してしまっただけ以上、彼らに追撃命令を拒否できる言い分はなく

なる。

いや。よく思い付きましたね。艦長。

「ナデシコ及びジキタリスはこの場にて待機。メグミちゃん。よろしく」

「分かりました」

メグミさんが動き出す。

既に最高速度に近くなっているであろうカンナヅキ。

今から追いついた所で間に合う筈がない。

グラビティブラストも搭載されていないのなら、攻撃する術もないし。

うん。カンナヅキは確実に離脱できるな。

「セレスちゃん。絶対にグラジオラスの反応を逃がさないでね」
「・・・はい」

追っただけじゃなく他の行動に移したら困る訳で。

監視を忘れてはいけない。

まあ、すぐに諦めて帰って来るだろう。

こうして、地球周辺での突然起きた戦闘は終わりを告げた。

これでしばらく木連の攻撃組は機能を停止するだろう。

今の内に地球周辺のコロニーを全て奪還してしまおうか。

最終決戦に向けて、出来る事は全てやっておきたいしね。

うし。次だ。次。

第九十二話（後書き）

次回あたりクーデター編に入っちゃおうかなと。
ずっと基地奪還やらの話ばかりだと終わらないので。
といっても、まだ導入編ですけどね。

P S 学校始まります。更新遅れます。

第九十三話（前書き）

物語は加速する。

それぞれの陣営が対立する中、ナデシコはどのように動いていくのか。

・・・遂に始まったのだ。歴史に残る・・・が。

第九十三話

「・・・カグラ・ケイゴは見付からんか」

「・・・ハッ」

「不安を残したくないのだがな」

「申し訳ありません」

「良い。逸早く見付け出し・・・殺せ」

「御意」

「・・・地球にいるとばかり思っていたが・・・」

「木連内も調べてみますか？」

「うむ。ありえないと思うが・・・万が一があるからな」

「ハッ」

「・・・最終決戦か。我々にとっては都合が悪いな。煽り過ぎたか？」

「カグラ・ケイゴの死が神楽には堪えたのでしょうか」

「ふむ。まあ良い。勝てば良いだけだ。勝てば。その後じっくり計画を進める」

「御意」

それは突然だった。

『我々木連は地球に対し、決戦を申し込む』

月面基地で待機中のナデシコ。

月面基地司令官に艦長が呼び出しを喰らった際に見せられた映像らしい。

艦長がそれを譲り受け、ナデシコ内で放送した。

モニタに映るのは叫ぶように語る草壁の姿。

『長く続く戦争。民は疲弊し、兵は次々と死んでいった。

その犠牲を我々は忘れない。そして、その死を無駄にしない為に我々は勝利する』

宣戦布告なの？ 勝利宣言なの？ どっちなの？

普通は、これ以上無駄な犠牲を出さない為に決着を付けたい、と
か言わない？

もしかして、挑発ですか？

『我々が勝利した暁には木連に対する正式な謝罪、

土地の譲渡、地球政府及び地球連合軍の解体、

そして、地球上の権限全てを譲り渡す事を約束してもらおう』

原作に近い条件だな。

簡単に言えば、木連による地球の支配。

地球圏の全てを木連に委ねなければならない。

そして、木連の実質的な指導者は草壁・春樹。

言わば、草壁・春樹による地球圏支配が始まってしまおう訳だ。

『決戦は二カ月後の十月五日。記念すべき木連誕生の日にて行いたい』

木連誕生。月から逃げ、火星からも逃げ、そしてようやく木連に辿り着いた日がその日か。

『我々は万全の準備をし、正々堂々立ち向かおう。』

地球にも同じように正々堂々と立ち向かって頂きたい』

・・・なんて言ってるけど、本当に正面からぶつかるのは何も知らない一般兵。

裏で何を仕出かすのか、分かったもんじゃない。

木連も、地球も。

『我々は地球の横暴には屈しない！ 今こそ、我らが手で自由を勝ち取ってみせよう！』

プツンッ。

自由？ 自己満足の間違いだろ？

本当に自由を求めているなら戦争を私物化するなよ。

全ての条件は呑めないけど、謝罪と土地の譲渡なら用意は出来る。

それなのに、必ず断るであろう無茶な要求まで突きつけてきやがって。

あたかも地球が和平を断ってるかのようにする事で自分達を正当化している。

どちらの兵、どちらの民が疲弊してるかなんて分かりきってる事じゃないか。

「以上が木連から木連から送られてきた地球へのメッセージです」

映像を見終え、ユリカ嬢がブリッジクルー及びパイロットに向けて告げた。

先ほどの映像もナデシコ内全てに流されており、これからのユリカ嬢も映し出される。

「これに対し、地球側は各方面軍の総司令官を呼び集め議論。極東方面軍の代表にはお父様の代わりとしてフクベ提督に出席して頂きました」

フクベ提督なら任せられる。
能力的にも求心力的にも。

「各代表で多数決を取り・・・」

「・・・結果は？」

「方面軍の代表は改革和平派の者の方が多く、

条件の幾つかを呑む事で休戦するという結論になったそうです」

「休戦？ それなら、その決戦とやらは回避できたのか？」

「いえ。残念ながら・・・」

幾つかの条件。謝罪と土地の譲渡か。

・・・それが本当の狙いじゃないからな。

認める訳がない。

「どうしてだ？ 条件は呑んでいるんだろ？」

「政府と軍の解体、地球権限の譲渡は譲れないと」

「そんなの当たり前じゃないか！ 木連は何を考えているんだ！？」

・・・草壁、いや、木連の方針は将校から末端の兵士まで全て最終決戦で決まっている。

対立している神楽派ですら一戦交えるのは辞さないと宣言している訳だし。

「何度も交渉を行ったようですが、良い返事はもらえず。

攻められるのならば、迎撃せねばなるまいという事になり・・・」

「・・・最終決戦が実現する事になったと」

「はい」

最終決戦の流れはこうだ。

まず、徹底して和平を唱えていた神楽派がケイゴさんの死をきっかけに一戦交える事を決意。

徹底抗戦を訴えていた草壁派は、

反対派であつた神楽派が戦争を決意した事で乗るしかなかった。

実際は時間的猶予が欲しく、戦争を長引かせようとしていたのだからが・・・。

ここで断れば、どうして徹底抗戦を訴えていた者が戦争を拒否するのか？ となる。

そうなれば明確な理由を告げない訳にはいかず、秘密裏に行ってきた遺跡の件を話さねばならなくなる。

草壁にとって切り札となる遺跡はまだ表に出したくない筈。

未だに確保したかの真偽は分からないが、まず確保していると見て間違いないだろう。

不気味なまでの大人しさがそれを証明している。

たとえ追いつ込まれようと遺跡さえあれば解決できると確信しているに違いない。

また、神楽派は神楽派で和平を結ぶ為にも争いは必要だと考えている。

あまりにも戦力差があり過ぎる地球と木連。

対等な関係として和平を結ぶ為にも直接対決に勝つか相当の損害を与えなければいけない。

結果として、様々な事情が絡まり、予期せぬ形で短期決戦が実現した訳だ。

そうなる問題なのはいつ行つか。

神楽派が一戦交える事を決意した時、地球はミスマル総司令官の暗殺事件で混乱していた。

その混乱の隙を突いて襲撃を仕掛けていたら、もしかしたら大きな損害を与えられたかもしれない。

だが、逆に危機に面した事で地球が徹底抗戦で纏まってしまった可能性もあった。

神楽派の最終目的はあくまで和平。地球側が和平を考えなくなったら意味がない。

そういう事情で思い止まってくれたのは俺達からしてみれば本当に助かった。

神楽大将にケイゴさんの生存を伝える事が出来たのだから。

戦争が始まってしまっていたらそういう機会もなかっただろうし。

そして、地球和平派、木連和平派の両陣営によるとある計画が立案される。

それこそが和平を実現させる為の計画、アイリス・プロジェクト（事後命名です）。

その計画の為に神楽大将には地球の混乱が収まるまでの時間稼ぎをお願いした。

その結果がミスマル総司令官暗殺事件から六ヶ月と少し経っての最終決戦という訳だ。

神楽大将が色々と理由をつけて長引かせてくれたのだろう。

こうして約束通りの期日となり、本当に感謝してもしきれない。

だが、残念ながら、まだ地球の混乱を収め切れてはなく……。

感謝というより申し訳ない気持ちで一杯だ。

「……その結果、地球は更に混乱しています」

「改革和平派は今、何をしてるんですか？」

最終決戦の決定。

その先から和平を見出すのは難しい。

「最終決戦を防ごうと動いてますが、既に軍内で決定してしまった
事案は覆せず・・・」

「連合軍の最高司令官はどのような反応を？」

各方面軍に総司令官がいて、その頂点に連合軍最高司令官がいる。
結局の所、最高司令官の発言力が一番強い。
そして、彼は反改革和平派でもある。

「これを機に木連を叩き潰すと意気込んでいました。他の方々も
地球からしてみてもこの最終決戦は都合が良いって事か。」

「国民も和平を考え始めてくれましたが、最終決戦に対しては肯定
的です」

「何故ですか？」

「地球ばかりではなく木連にも痛い目に遭ってもらわなければ割り
に合わない」と

確かに地球の損害の方が大きいけど・・・。

「国民は和平に対しても肯定的なんです。でも、正面切って宣戦布
告をされれば・・・」

「争うしかない」と

「はい。最早この最終決戦は避けられないでしょう」

国民の支持が得られないのならはどうしようもない。
改革和平派は完全に戦争を停止し、きちんとした形で和平交渉を行
いたいと考えている。

それは国民も同じだろうが、方法や段階が違う訳だ。

改革和平派は最終決戦をする事なく、現段階で和平を結びたい。だが、国民は最終決戦で勝利した上で地球優位で和平を結びたい。当たり前だ。敗北国が今後苦しむなんて事は子供にだって分かる。国民は和平、和平と言いつつ、結局は対等より上の立場でいたいのだ。

無論、それは当然の考えであって、改革和平派も違うとは言いつれないのだが。

「軍内でも決定され、国民達も望むとあつては改革和平派も了承するしかなく。」

現在の派閥間の争いは決戦後の木連の扱いをどうするかというも
のになつています」

「勝利する事が前提ですか？」

「正面から戦えば数で圧倒できる。それが軍内での考えです」

・・・間違つてはいないが・・・。

果たして、そううまくいくかな？

相手にだって切り札はあるだろうし、こっちは殆どが付け焼刃の戦艦。

たとえ数で勝つていようと油断していれば負ける可能性の方が高い。

「そういえば、コウキ君。貴方つて決戦がある事を知ってたのよね？」

「ん？ ああ、ええ。神楽大将から聞かされてました」

「それを地球側には話さなかったの？」

ミナトさんから問われる。

確かに俺は神楽大将から一戦交えるという事を聞かされていた。

それに関してはミスマル司令、ムネタケ総参謀長、フクベ提督など、プロジェクトにおける重要な人物には事細かくきちんと話してある。

「話してはありますが、それを肯定するかどうかは別です」

俺としては一戦交える必要があると思う。

だから、大将の言葉に賛同したし、こうして新型機も揃えた。

戦争中に草壁派を滅ぼすという理由もあるし、何より地球が負けな
い為に。

地球が負ければ、作戦を行う前に全てが終わってしまう。

拮抗、もしくは、若干の優位ぐらいが俺達の作戦にとっては都合が
良いのだ。

だが……。

「数人にしか話してませんが、反対する者もいました」

話した人の中には断固反対とする者も出て来ている。

何の為の和平だ。犠牲を減らす為だろう。

それなのに、争ったら何の意味もないじゃないか、と。

正論ではあるが、互いに実体を知らない状態での和平が成功すると
も思えない。

局地的に人間同士で争ってはいるが、未だに殆どは対無人機なのだ。
眼の前の敵が人間である。そう兵士も国民も理解する必要があるの
ではないだろうか？

その為に必要だと俺は考えている訳だが……。

「改革和平派内でも意見は分かれています」

最終的な目標は同じ和平でも、それまでの過程では意見が分かれて
いたりもする。

今回の決戦においても肯定的なグループもあれば、否定的なグルー
プもある訳で。

「そつか。一言に和平といっても色々な考え方があるのね」

「はい。どちらにしろ、主導権は木連にありますから、俺達は後手に回るしかないんです」

「そうね。反対派の人間としては防止したかったんだろつけど、地球でどれだけ動こうとも木連に接触しなければ意味ないものね」

結局、木連側の方針に対して地球は後から対応するしかない。

それ程、木連は有利な立場にあるのだ。チューリップ的な理由で。

「決戦を終えた後……。地球では和平と制圧のどちらかに意見が分かれているんでしょうね」

実際、決戦に勝つてしまえば主導権を握る事が出来る。

木連に辿り着くまでに一年以上掛かるだろうが、

決戦で相当の被害が出れば立て直す余裕もなくなる。

木連が少数で、かつ、プラントに依存した心許ない生活なのに、

こうまで戦えるのは木連誕生から今までの長い時間を準備に費やした成果があるからだ。

その溜めておいた戦力の殆どを展開するであろう決戦。

それだけ大規模の決戦に敗北すれば、たった一年間では立て直せる筈がない。

木連誕生から少なくとも半世紀は掛かっているのだ。

それだけの時間を掛けた準備を一年だけで済ませるのは不可能に近い。

プラントの生産力には限界があるし、無理にやろうとしても何かしらの不備が出る。

ハッキリ言つて、木連は負けたら後がないのだ。

こう考えると和平より制圧の方が現実味がある。

勝ったのにわざわざ対等な立場で和平を結び必要などないからだ。

「木連を一つの政府として認めるか。吸収合併のような形で地球の一部とするか。」

極論、木連の存在をなかった事にして、殲滅戦を仕掛けるなんて事もありえますね」

「反改革和平派の一部はそう考えているんじゃないかしら？」

「恐らくは」

木連を地球に組み込むメリットを考えると実はそこまで大きなものはない。

古代火星文明であれば滅ぼしてからでも充分研究できる訳だし。

人口が不足している訳ではない。むしろ、過多ですらある。

地球の事を第一に考えるなら、火種という意味でも木連は殲滅すべきなのかもしれない。

だが、果たしてそれでいいのか？ と。

木連が過去の地球の犠牲者である事は紛れもない事実であり、これをなかった事にするにはあまりにも罪深い行為であると言える。謝罪、賠償、土地の譲渡、それらの事は当たり前ともいえる事なのだ。

もちろん、その行為の中には様々な感情が含まれているだろう。そう捉えるならば、和平は感情論でもある。

だが、俺はそれを悪いとは思わない。

間違いを間違いと認め、きちんと頭を下げる。

その姿はなんて潔いものだろう。

思いやり？ 同情？ どちらも違う。

和平とは誠意なのではないだろうか。

過去の悪事を正式に謝罪したいという。

友好関係を築き、同じ人類として今後を歩んでいこうという。

そんなメッセージが和平なのではないかと俺は思う。

だからこそ上も下もない対等な立場での和平を実現する必要がある

のだ。

「難しいですね。決戦となると、勝ち負けがハッキリしちゃいますから」

「・・・そうね。勝っても負けても和平は難しいわ」

勝とうが負けようが和平への道は遠のく。

引き分けなんて結果がうまく出せるとも思えないし。

「やっぱり決着がつく前に仕掛ける必要があります」

和平を実現させる為にはやはりあの計画を実行に移すしかない。戦闘中に草壁を地球、木連の共通の敵とするあの策を。

「引き続き、ナデシコは地球周辺のお掃除任務に当たります」

どうやら俺とミナトさんが話している間に艦長の話はまとめに入ってたようだ。

「決戦に向けて不安要素は全て排除しておきたい。

これは地球連合軍の総意であり、決戦関係なく必要な任務です」

決戦すると決めた状況だ。憂いは断っておきたい。

それに、艦長の言う通り、決戦せずとも地球周辺のお掃除は必要な作業だ。

地球上に不安要素を失くしてこそ、和平を考える余裕も出てくる訳だし。

「以上です。今日一日は予定通り休み、また明日からお掃除を始めます」

あと二カ月か……。地球周辺のお掃除に加えて、地球の敵対派閥もお掃除しなくちゃいけない。和平を確実にする為に連合軍内の方針も和平で統一しなければ……。忙しいというよりどうすればいいか分からなくて困る。

「ああ、もう、なんか良いきっかけがないかな？」

反改革和平派はクーデターを企んでる……。

「こちらから誘発させて逆に利用しちゃいますか？」

そうすれば、クーデターを企んだ反改革和平派を一網打尽に出来るし。

……いや、そう簡単にはいかないか。

こっちにとって都合が良過ぎる。

「ホント、どうすればいいんだろ？」

「ふっふっふ。時は満ちた」

「都合良く木連が宣戦布告して来てくれたしな」

「決戦までの二ヶ月間は準備期間と認識している筈。少なくとも国民は」

「その間に攻撃すれば卑怯者扱いは必至」

「木連を卑怯者とし、国民を煽る」

「卑怯な組織は和平を結んだ後に何を仕出すか分からないと」

「それでも和平派は和平を唱えるであろう」

「クツクツ。それこそが我らの狙い」

「卑怯者を庇う？ その理由は？」

「木連と結託して悪事を企んでいるのではないか？」

「売国奴めが！」

「クーツハツハ。これは良い。和平派は売国奴か」

「宣戦布告などなくとも実行は出来たが・・・」

「お陰でより効果が増した」

「ふっ。それでは始めようか」

「『『『『オペレーション・ミーティアを』』』』」

「コロニー落とし!？」

「ああ。ルリちゃんがハッキングをして調べてくれた」

今日も今日とて地球のお掃除。

基地奪還に向けて活動中のナデシコ。

現在とはあるコロニーの奪還を終え、基地に戻ってきたばかり。

前回の戦闘で故障したグラジオラスを修理する為に時間が掛かり、

待機命令も出されたので、月面基地内にて大人しく待機していたの

だが・・・。

「聞いて欲しい事がある」

突然アキトさんがブリッジに現れ、事の次第を話し出した。

「何をどこに落とすんですか？」

「サツキミドリコロニーを・・・地球に、だ」

「ち、地球にコロニー落とし!？」

いつの時代だよ!？ というか、作品違うし!

「どうして連合最高司令官が!？」

「何が狙いなのかは分らん。だが、良い事ではないだろうな」

反改革和平派の筆頭である地球連合軍最高司令官。
今まで動きを見せなかっただけに怪し過ぎる。

「サツキミドリコロニーでしたよね？」

サツキミドリコロニー。

住民を救出した後はそのまま放置してしまったが・・・。

「破壊しておくべきだったか？」

いや、たとえサツキミドリコロニー破壊していても、他のコロニー
が使われただけか。

しかし、なんともナデシコに因縁深い話だな。

「今、サツキミドリコロニーはどうなっているんだ？」

「最初の方に取り戻して、後は取ったり取られたり」

「現在は？」

「木連の支配下です」

こちらの手にある時に何かしらの工作をしていたという事か。

木連と結託してという考えもあるが・・・まずないだろう。
意味のないコロニー落としに木連が便乗する筈もなく、
誇りを大事にする木連が決戦を挑んでおいてコロニー落としなど企
む筈がない。

企んだ所で猛反発を喰らうだけだ。

そうなると、やはり反改革和平派の連中の企みと見て良いだろうな
とりあえず、コロニー落としが成功した時の被害を調べてみよう。

「オモイカネ。ちょっとシミュレーション手伝って」

『いいよお』『任せて』『OK』

「・・・私も手伝います」

「ありがとう。よろしく。セレスちゃん」

セレス嬢とオモイカネの協力を得て、シミュレーションを開始。

サツキミドリコロニーの大きさと重力による落下速度、

それに加えて、表面の材質や摩擦による影響、

サツキミドリコロニーの機関部である核パルスエンジンの出力値な
どなど。

知っている全ての情報を元に地球に降下した際の被害を調べる。

「・・・良かった。燃え尽きるか」

「・・・はい。地球に被害はありません」

『安心した』『良かった。良かった』『ノープロブレム』

シミュレーションの結果、コロニーは落下する事なく大気圏で燃え
尽きると断定。

サツキミドリコロニーを始めとしたこの世界のコロニーは移民用
の物ではない。

その為、大きさ、質量共にそれ程大きなものでもなく、表面もそこ
まで特殊ではない。

コロニー内部も殆ど空洞になっており、
どの角度、どの場所から落ちて燃えつけると断定された。
無論、何も細工していなければの話だが……。

「じゃあ何の為に？」

そもそも何故地球人が地球にコロニーを落とす？
北米支部の意図がまったく理解できないんだが……。

「マエヤマさん。結果はどうでした？」

おっと。報告し忘れてたな。

「サクキミドリコロニーに何かしらの細工がなされていないければ、
地球に落下する前に大気圏で摩擦熱によって燃え尽きると思われ
ます」

「ほっ。良かったあ。地球に被害はないみたいだよ」

「うん。でも、もしそうなら、なんでこんな事を企んだんだろう？」

そうなんだよ。ジユン君。

それが疑問なんだよ。

「どちらにしる、細かく砕いておいた方が良くないんじやない？」

「うおっ！ ……イネスさんが」

「何よ？ 幽霊が出たみたいに」

いや。それに匹敵しますよ。

気付かれずにどうやって後ろまで移動したんですか？

というより、どうしていつも俺の後ろ？

「コ、コホン。それで、さっきのは？」

「ええ。何も細工がされてなければっていう前提でしょ？」

もし、何かしらの細工がなされていて、地球に落下した場合はどうなるの？」

「えっと、オモイカネ。もう一回シミュレーション」

『了解』 『分かった』 『OK』 『OK』

質量、大きさ、核パルスエンジンの条件は変えず、表面の材質のみを変更。

耐熱コーティングがなされた場合を想定。

まあ、秘密裏にそれだけの細工を出来るとは思えないけどね。

『結果でたよ』 『終わった』 『終わった』 『教えてあげる』

え〜っと、結果は・・・。

「何の崩壊もせずにそのまま落ちた場合、

直径三百キロメートルくらいのクレーターが出来ます」

「・・・なっ！」

その被害の大きさに絶句する一同。

コロニー落としてはそれだけの威力がある。

これでもまだ小さいくらいだ。

「・・・地盤も崩壊するし、地震や津波も発生するわね。人的被害は莫大になるわ」

「はい」

コロニー落とし。

質量を武器にした最大の殺戮戦術。

その被害は他のどの武器よりも凄まじい。

「万が一を想定するのが大事なんじゃないか？」

確かに。確実に落下しないと言い切れないし、何があるか分からない。

だったら、軌道を変えるか、せめて攻撃を加えて粉々にして、消滅させやすくするべき。

「艦長！」

「はい！ 万が一を考え、ナデシコはサツキミドリコロニーに向かいます」

サツキミドリコロニーの現在地を検出。

地球の衛星である月は地球の周りを回っており、約一ヶ月で一周する。

現在、ナデシコが月基地にいる事を考慮して計算すると……。

「ここからサツキミドリコロニーまでナデシコでは一週間掛かります」

ナデシコの速度では地球から火星までに二ヶ月、月までに六日間掛かる。

単純計算で、だが。

現在の月の位置がサツキミドリからは遠く、運が悪すぎた。

「アキトさん。そのコロニー落としはいつなんですか？」

「詳しい事は流石に分からなかった。すまない」

「いえ」

コロニー落としの情報を掴めただけでも充分です。

「とにかくすぐにもサツキミドリコロニーへ向かいましょう」

無駄足になったって良い。

起きないなら起きないで構わないのだから。

「メグミちゃん。月面基地司令官に通信をお願いします」

「はい」

「アキトは隠れてて」

「了解した」

出撃許可。

いちいち司令官を通さないといけないのが面倒だ。
必要な時に自由に動ける単独行動権が欲しい。

『何だね？』

どうもいけ好かない地球連合軍のなんとか大佐。
いつも不機嫌そうな表情でこちらを見てくる。
ナデシコの成果が気に喰わないのだろうか？

「出撃許可を頂きたいと」

『何故かね？ 待機命令が出ていた筈だが？』

「サツキミドリコロニーが」

「ユ、ユリカ！」

馬鹿正直に話そうとしたユリカ嬢の口を隣にいたジュン君がバツと
塞ぐ。

ナイス判断だ。ジュン君。

事が事なだけに慎重な対応が必要。
いずれ地球でも気付くだろうが、今の段階でナデシコが知っているのはおかし過ぎる。

『サツキミドリコロニー？』

怪訝な顔付きでこちらを見てくる司令。

「あ、いえ。極東方面軍司令官代理のフクベ提督より連絡があり、至急戻ってきて欲しいと」

『現段階での命令権は私にあるのだが？』

「申し訳ありません。ですが」

『残念だが、許可は出来ん』

「し、しかし！」

『現在、君達の艦隊の一員であるグラジオラスが修理中であろう？
単独行動は認めん』

・・・前回の戦闘で損傷したグラジオラス。
その修理が済むまで基地内にて待機という命令だった。
本当に俺達にとって疫病神だな。こいつ。

「お願いします。司令」

『却下だ』

プツンツ。

通信が切れる。

「あの野郎。融通が利かねえな」

「悪態付いてる暇なんかないよお。リヨー」

「急がねえと！ 地球のピンチだぜ！」

本当に少しぐらい融通を利かせてくれ。

「どつする？ ユリカ」

ジユン君がユリカ嬢に問いかける。

出撃命令が出ない以上、出撃は出来ない。

もし出撃してしまえば命令違反となり、罰則されてしまう。

罰則を恐れずに強引に出撃してしまっても良いが……。

今後も軍として活動する必要があるナデシコとしてはそんな無理は出来ない。

「……ナデシコはここから動けません」

ユリカ嬢も理解している。

ナデシコでは強引な事は出来ない。

「せめて誰かに報告しないと」

「司令やフクベ提督には報告してある」

「ありがとう。アキト」

助かります。アキトさん。

地球側から迎撃できれば、少なくとも直撃はしないだろう。

ビックバリアを始めとした防衛ラインもある訳だし。

ミサイル攻撃やら戦艦からの砲撃など対コロニー落としに有効な武器もある。

まあ、ビックバリアは原作でナデシコですら止められなかったくらいだから、

ナデシコ以上の質量を持つサツキミドリコロニーはまず止められない

いだろっけどね。

「しかし、地球側からしてみればコロニーの接近を確認してからではないと動けまい」

確かに。前もって動いていたらあまりにも怪しい。

防止した後、こちらの企みだと言われかねない隙を与えてしまうことになる。

「でも、出来るならビックバリアも越えさせたくないわよね？」

「・・・イネスさん」

「出来るわよ？ ナデシコじゃなくても」

え？ ナデシコ以外にコロニーを破壊できる可能性のある武器があるってのか？

「艦長。ナデシコはこの場から動けないのよね？」

「あ、はい。司令からはそう言われています」

「それなら、ナデシコ以外なら良いのよね？」

「た、多分。はい」

「至急、地球に戻る為のヒナギク派遣を許可してもらいなさい」

ヒナギク？ ヒナギクのグラビティバスターで対応しようっていうのか？

確かに威力はそれなりにあるけど・・・厳しいと思う。

「ヒナギクでは厳しいのでは？」

案の定、艦長も同じ疑問を抱いた。

「誰がヒナギクで対応するなんて言ったかしら？」

「え？ ヒナギクじゃないんですか？」

「ええ。ヒナギクはあくまで輸送する為のダミーよ」

「ダミー？」

「そうよ。対応するのはヒナギクに搭載させる a d - A S（殲滅射撃仕様）。

グラビティライフルのフルチャージショットならいけるかもしれないわ」

そうか！ その手があったのか！

グラビティライフルのチャージに必要な重力波はヒナギクから供給できる。

ウイングブースター展開からのグラビティライフルなら、コロニーごと貫けるかも。

「マエヤマさん。シミュレーションしてみてください」

「はい」

コロニーに対しグラビティライフルのフルチャージショットで対抗した場合。

「・・・コロニーの機関部に直撃すれば、あるいは・・・」

ビクバリア到達前に細かくしておけば・・・。

ビクバリアを越えても防衛ラインで対処できるし、燃え尽きる筈。

「成功確率は七十%です」

かなり高い。これぐらいならいけそうだ。

「だって。艦長。ヒナギクぐらいなら許可が取れると思うわよ」
「はい！ メグミちゃん！」
「了解です！」

早速とばかりに通信を入れる艦長。

「コウキ君」

「あ、はい」

何ですか？ イネスさん。

「何の為の殲滅射撃仕様か、分かるわよね？」

「こういう時の為ですよ。ただ殲滅するだけならナデシコがいればいい」

「そう。殲滅射撃仕様はナデシコの代わりに砲台として活躍できるの」

「分かっています。怖いですが、任せられたのなら、俺が・・・」

「自信を持ちなさい。コウキ君」

「・・・ミナトさん」

「貴方なら出来るわ」

「・・・コウキさんなら出来ます」

「・・・セレスちゃん。うん。なんだか出来そうだ」

ミナトさんとセレス嬢にそう言われると本当に出来る気がしてくるから不思議だ。

「今回は付いていってあげなさいな」

「え？」

「ナデシコは待機。操縦士の貴方もオペレーターの貴方も束縛される所はないもの」

「い、いや。危険ですよ！」

「ううん。行くわ」

「・・・私も行きます」

「ミナトさん。セレスちゃん」

危険だからナデシコにいて欲しいって言ってるのに。

「危険だからっていつも待つてるばかりだと思わないで」

「・・・私も一緒に行つて、お手伝いします」

「ほら。コウキ君一人だと心配だし。私が付いて行ってあげないと」

「・・・はい」

・・・はあ。強情。

「譲る気は？」

「ないわね」

「・・・ないです」

「・・・」

こうまでやる気を出されたら断るに断れない。

まあ、卓越した操縦の腕があるミナトさんとオペレーターとして優れるセレス嬢。

この二人の協力があると助かるのは事実なんだけど。

・・・やっぱり心配だな・・・。

「許可を取れました」

・・・ん？ 知らぬ間に通信が終わっていたらしい。

無事に許可を取れたようだな。

それじゃあ・・・。

「マエヤマさん。至急、ヒナギクにてサツキミドリコロニーへ向かって下さい」

「了解。あの艦
艦長」

「あ、はい。何ですか？ イネスさん」

・・・もしかして・・・。

「ヒナギクの操縦士にハルカ・ミナトをオペレーターにセレス・タイトを推薦するわ」

やっぱり・・・。

「え？」

「多分、そっちの方が成功確率が高いわよ？ ね？ コウキ君」

そ、そこで振りますか。

「そうなんですか？ マエヤマさん」

「・・・はい。是非」

いいさ。必ず護ってやる。任せておけよ。

「分かりました。ミナトさん。セレスちゃん。お願いします」

「任せておいて」

「・・・頑張ります」

ウインクするミナトさんと胸の前で拳を握り込むセレス嬢。

「建前はフクベ提督によって呼び出され、作業中のナデシコに代わりヒナギクを派遣。

大気圏突入機構も整っているヒナギクであれば、違和感はない筈です。

その際に地球に接近しているサツキミドリコロニーを発見。

地球に向かってしていると連合軍の誰よりも先に察し、最寄の宇宙ステーションに連絡。

ここが大事です。欠かさずに行ってください。そうしなければ偶然を装えませんので」

「分かりました」

考えてるな。ユリカ嬢。

俺が偶然見つけた第一発見者になれば、違和感を与えずに対処できる。

「そして、地球側の防衛ラインを整えてもらうと同時にマエヤマさんは破壊の準備を。

アキト。マエヤマさんが動けるよう地球でフクベ提督に作戦の報告をお願いしたいんだけど」

「ああ。任せておけ」

「うん。お願いね」

フクベ提督に俺が動けるようお願いします。

極東方面軍総司令官代理の役職にあるフクベ提督ならそれぐらいの権限はある筈。

「フクベ提督に働いてもらって連合軍にマエヤマさんの単独行動を認めてもらいます。

後はマエヤマさん。サツキミドリに対してドバーーンと好きにやっちゃってくださいー！」

・・・凄いな。

この短時間で事実の隠蔽、地球への根回し、そして、何より確実な方法を考え付いた。

たとえ俺が失敗しようとして既に地球の準備は進んでおり、

万が一にも対処できないなんて事はなく、落下は防止できるだろう。また、俺の単独行動が越権行為にならないようフクベ提督が動いてくれる為、

連合軍からも睨まれることなく、好き勝手に問題なく動く事ができるようにもなった。

流石はナデシコ艦長。まったく後方の憂いなく出撃できる。

「それでは、お願いします。マエヤマさん」

「はい」

ブリッジにいるクルー皆が俺を見てくる。

これだけの人間の期待を俺は背負っているんだ。

失敗なんてしない。必ず成功させてやる。

「行くわよ。コウキ君」

「・・・行きましょう。コウキさん」

ふふっ。それに、大事な家族が近くで俺を手伝ってくれるんだ。

失敗なんてする訳がないだろ？

「はい。行きましょう！」

こうしてこの世界にはそぐわないコロニー落としが始まった。

この時、俺はまだ知らなかったんだ。

このコロニー落としがまだ序章でしかない事に・・・。

第九十三話（後書き）

初めてだな。主人公サイドで過去形を使ったのは……。
なんてどうでもいいですね。すいません。

はい。コロニー落としです。

なんか原作から乖離するだけではなく、
原作世界からも乖離しつつある僕の作品。
見捨てないでくださいね。

そして、殲滅射撃仕様によるコロニー破壊。

これもなんとなく見覚えがあると思いますが、
スルーの方向でお願いします。

真似というより書いていて「まずい。似る」と思ったぐらいです
ら。

コロニー落としの被害範囲については作者の勝手な想像です。

サツキミドリコロニーの大きさも知らないですし。

とある情報からこれぐらいだろうと予測して決めました。

また、基本的にコロニーは落ちる前に燃え尽きるそうです。

まあ、その辺りは専門家の方々にお任せします。

大事なのはコロニー落としに対して軍が動いたという事実。

あ。これ以上はネタバレなので言いませんが。

それでは、これからもよろしくお願いします。

第九十四話（前書き）

遅くなりました。

祝誕生日。今日で二十歳です。

いや、もう成人ですよ。色々と解放されました。

長いようで短かったこの二十年間。

これからは社会人として頑張ろう！ ハイソックスでした。

PS 最近アクセス数が激減。もしや飽きられた？

いや、確かに展開が滞りすぎてる感がありますが……。

あまりの原作乖離に嫌われてしまったのだろうか……。

とまあ、落ち込みながらも、

それでも見てくれる多くの方々が僕にはいるんだ！

そう思いながらこれからも頑張っていけます。

楽しんでいただけたら幸いです。

第九十四話

「そろそろ地球です」

ナデシコからヒナギクで飛び出して早六日。

ヒナギク内にて簡易的に取り付けられた居住区があつて本当に助かった。

元々のテーマがナデシコに依存せずに単独行動が出来る機体、であつた為、

一通りの生活が出来るようにと専用のスペースが機体内に備わっているのだ。

ちなみに、コクピットと格納庫のちよつとした間に備え付けられている。

食料の保管、シャワーやベットなどなど、結構恵まれていてストレスは溜まらなかつた。

女性が二人いる状況なので、そこらへんの配慮がされていた事は素直に嬉しかった。

本人達も嫌だろうしね。僕だって一応毎日身体は洗いたい。このように人が住めるように製造されたお陰で、

これまでにコロニーに一度も寄らずに辿り着く事が出来た。格納庫に色々と積んできたからという理由もあるけど。

「地球か……。サツキミドリコロニーはどんな状況なのかしら？」

「……分かりません」

サツキミドリコロニー。

コロニー落とし作戦の核となる存在だ。

多分、サツキミドリコロニーが通るであろう軌道は……。

「恐らく、木連の支配下にあるコロニーの横を通り過ぎていくと思います」

地球のコロニーの横を通り過ぎたら、即刻見付かってしまう。

何が狙いかは分からないが、少なくとも地球に落とすのが目的な以上、秘密裏にしたい筈だ。

そうなると木連支配下のコロニーの横を通っていくしかない。

「・・・それでしたら・・・」

俺の膝の上に乗っているセレス嬢がコンソールに手を置く。

席が二つしかない以上、誰かが座れない事になる。

いや、別に俺は立っていても良いんだけど・・・。

「・・・こっちの方が良いです」

とかなんとか言われちゃったので、はい。

「・・・予測されるコースはこれだけです」

モニターに映し出される地球周辺のコロニー状況。

地球を青、木連を赤で区別し、コロニーの位置関係を示してくれた。

「今までの戦闘が役に立ったようね」

「ええ。基地を奪還したお陰でコースが絞れるんですから」

連合軍が基地を奪還していった事で木連の基地の数も限られてきた。そのお陰で地球へと向かう間に木連の基地しかないというコースを絞る事が出来たのだ。

「このコースに接触するよう移動します」

「理由付けは？」

「とりあえず移動してから考えましょう」

こちら方面のコロニーに用事があったとかで良いだろう。うん。

「最初は慌ててたけど・・・」

「流石に六日間もあると余裕ができてきますよね」

「・・・はい」

もちろん、ナデシコから飛び出してきた当初は慌てていたさ。でも、地球まで六日間もあればね、慌てた所で仕方がないと思うよになるよ。

実際、ビックバリアと地球防衛ラインで地球に落下する事はまずないのだから。

無論、万が一がある為に油断は許されないんだけど・・・。

「久しぶりにミナトさんの手料理を食べましたよ」

この生活の家事担当はミナトさん。

主婦と言わんばかりに働いてくれて本当に助かった。

「戦後はこんな感じなんでしょうね」

「ふふつ。そうね」

そう思うとなんか感慨深いものがあるよなあ・・・。

「俺がいて、ミナトさんがいて、セレスちゃんがいる。

うん。本当に楽しみで仕方がないな。幸せになれそうだ」

「なれそうだが、じゃ困るわよ?」

「え?」

「コウキ君がしてくれないと。ね?」

「・・・はい。コウキさん。私を幸せにしてください」

「ハハッ」

そっか。幸せになる、じゃない、俺が幸せにするんだ。

この二人が幸せだと感じてくれるように・・・。

それが・・・俺の役目なんだ。

「そうでした。任せておいて下さい」

俺が必ず幸せにしますから。

「頼もしい言葉ね」

「・・・はい」

無論です。自信ありますよ。

「それじゃあ・・・」

そんな幸せを手に入れる為にも・・・。

「さっさとお仕事を終わらせましょう」

地球崩壊の危機。

万が一という程にありえない確率なのだが・・・。

「やるしかないだろ」

意図も意味も分からないけど……。
地球にコロニーを落とされてたまるかってんだ。

「……コウキさん」

「ん？ 何だい？」

「……通信が入っています。地球連合軍からのようです」

地球連合軍からの通信。

もしや！

「繋いでくれるかい」

「……はい」

セレス嬢がコンソールに手を置き、モニタに映像を映す。

『連合宇宙軍所属のアルダート大尉だ』

モニターに映し出されたのは三十代前半のナイスミドル。
顔からしてヨーロッパあたりの出身だと思われる。

『この区域は現在危険な状況にある。』

どこの所属かは知らんが、さっさとこの区域から離脱し、安全な
道へコースを取れ』

宇宙連合軍。危険な状況。そして、切羽詰っている様子。

……どうやら宇宙連合軍が先にサツキミドリコロニーを発見した

ようだ。

どこかの人工衛星かなんかがサーチしたか？
まあいいや。計画を少し修正して……。

「ナデシコ所属パイロットのマエヤマです」

『ナデシコ？・・・そうか。しかし、ナデシコのクルーがどうしてここにいるんだ？』

ナデシコが月にいる事は周知の事実。

ここにナデシコ所属の奴がいるのは確かにおかしいよな。

「極東方面軍のフクベ提督より呼び出され、地球に戻っている途中でした」

『そうか。それならば、こちらが先導するからすぐにも地球に
』

「いえ。見た所、緊急事態のよう、何か手伝える事がありませんら
お申し付け下さい」

偶然発見したという設定から、連合宇宙軍に接触して事情を知るに
変えよう。

こちらの方が違和感もない。

『しかし、そちらの武装は……』

確かに見た目は頼りないかもしれないが……。

「火力で言えば戦艦級はあります」

ヒナギクのグラビティバスターとてグラビティブラストを積んでい
ない戦艦よりは強い。

『・・・しかしだな・・・』

やはり難色を示すか。

まあ、分からなくもない。

大人の事情とかがあると思うし。

でも、相手が軍である以上、上司からの命令は絶対。

ここはフクベ提督を頼ろう。

まずは何があつたかを訊くべきだよな。

「何があつたのですか？」

事情を説明する事ぐらいはしてくれるだろう。

『現在、地球に向けてとあるコロニーが凄まじい速度で向かってきている』

「コロニーがですか？ 誰が？ どうやって？」

『木連の支配下にあるコロニーだから・・・』

「木連が仕掛けてきたと？」

『ああ』

コロニー落としを企んでるのは木連という事になっているのか。

まあ、自ずとそうなるわな。状況的に。

「コースはこちらで？」

『戦争開始時から設置された地球外部監視衛星が映像を捉えた。このコースで間違いない筈だ』

そうか。蜥蜴戦争が始まってからチューリップの地球襲来が多くなつた。

それを見越して地球側から外を監視するものを設置してもまったくおかしくない。

・・・この企みが最高司令官である以上、この存在も知っていた筈バレルと分かっている、あえてコロニー落としを敢行させた？
何故？ どんな理由と意図があつてこんな事をしたんだ？

・・・まだだ。まだ情報が足りない。

「この事を地球にいる軍人は知っているんですか？」

『当然だ。俺は地球から連絡を受け、ここまで出撃した』

それならば、問題はない。

宇宙ステーション経由の予定だったが、既に知っているならスルーしていいだろう。

「地球の迎撃準備は整っているのですか？」

『現在整備中だ。それまでの時間稼ぎが我々の仕事になる』

破壊までは出来ない、と。

時間稼ぎと言つても出来る事は限られてくる。

戦艦ごと体当たりぐらいしかコロニーに対抗できる手段はないだろう。

コロニーの大きさと質量はそれだけの強味がある。

「それならば、余計に私が地球に降りる訳にはいきません。お手伝いさせてください」

先導してくれるというのなら降下は可能だろう。

だが、降下するには様々な部署を通して、確認やら許可が必要になる。

そんな余裕がある筈がない。

『・・・俺の権限では許可できない』

それなら・・・。

「フクベ提督に許可を頂ければ、参加は可能なんですね？」

『あ、ああ』

言質は取れた。

後はどこかしらを経由して・・・。

『ん？ すまないが、サクラステーションから通信がきている。しばらく待っていてくれ』

「あ、はい」

プツンッ。

サクラステーション？

宇宙ステーションの一つか。

「ミナトさん。セレスちゃん。計画を若干修正します」

「偶然を装うのではなく、自らが手助けした形にするのね」

「はい。既に防衛ラインが準備されているのなら、問題はありませ
ん」

「後は・・・」

「撃ち抜くだけです」

今頃、俺が単独で活動できるようフクベ提督が動いてくれている筈。今すぐにその許可が欲しいのだが・・・どうやって連絡を取るかな。

『すまない』

あ。戻ってきた。

「いえ。それでしたら今からフクベ提督に連絡を取って」

『いや。その必要はない』

「え？」

必要ない？ どういう意味だ？

『先程の連絡はフクベ提督からのものであり、貴官の参加が認められた』

流石フクベ提督。

ありがとうございます！

「それでは！」

『今より貴官には我々の指揮下に入ってもらおう』

「ハッ！」

『最後になるが、俺は南欧支部所属の改革和平派の一員だ。』

ナデシコパイロットの協力、頼もしく思う。期待しているぞ』

「はい」

道理で親切だった訳だ。

反改革和平派だったらナデシコの名前が出た途端に嫌な顔をしてもおかしくない。

でも、彼はそんな顔一つせず、こちらの質問にもちゃんと答えてくれた。

改革和平派の代表が艦長を務めるナデシコ。

ナデシコに友好的である事は改革和平派に友好的ともいえる訳だ。

『状況を説明する』

「はい」

『現在、サツキミドリコロニーが地球に向けて接近中だ』

「サツキミドリコロニー・・・ですか」

『ああ。接触は今より凡そ十時間後。それまでに合流できる艦隊全てを合流させるつもりだ』

最寄のコロニーぐらいしか集められないだろうな。

宇宙は本当に広い。

「発見されたのはいつなんですか？」

『二十時間ほど前だ。俺達も三時間ほど前に着いたばかりでな』

「迎撃に十分な戦力は集められるのでしょうか？」

『厳しいな。ナデシコ、コスモス、キクザクラといった高火力な戦艦があれば別だが・・・』

やはりナデシコ級戦艦は他の戦艦と比べて群を抜いているようだ。

『到底間に合わんだろう』

ナデシコはまず無理。まだ月面基地にいる。

キクザクラは今から打ち上げ始めれば間に合うかもしれないが・・・。

万が一の為に地球からの迎撃に備えてもらった方が良いだろう。

コスモスは・・・どうなんだろう？

今どこにいるかも知らないんだが・・・。

「コスモスは今どこに？」

『艦隊を率い、基地奪還の為に活動中と聞いている』

「それなら、それを中断して」
『残念だが、今から中断しても間に合わん。それならば奪還に力を注いでもらった方が良い』

・・・距離的な問題か。

『どちらにしろ、一度我が艦に着艦してもらいたい』
「了解しました」

『こちらの指示に従ってくれ。それではまた後でな』

プツンッ。

映像が消え、代わりにモニターには通るべき軌道が描かれていた。これ通りに進めという事だな。

「ミナトさん。このコースに」

「了解。そろそろ気を引き締めなくちゃね」

「はい。セレスちゃんは周囲の警戒を。念の為にね」

「・・・はい」

さて、どれだけの戦力を揃えられるだろうか？

小出しにした所でたかが知れてる。

この合流ポイントで全戦力を集中させて迎撃する方針だろう。

各コロニー、地球の中間地点であり、コロニー接触ポイント。

地球の引力の事も計算するとこれ以上の場所はない。

無論、万有引力がある以上、必ず巨大な質量を持つ物は引かれ合うのだが・・・。

方法によっては逸らす事も可能なのだ。

また、ある場所までに破壊を成功すれば、直撃を免れるという地点がある。

逆に言えば、そこを越えられたら引力に従い落ちてしまう訳だが。これを阻止限界点とするとこの場所はそれのちよつと前。本当にギリギリだが、戦力を合流させる為に地球の近くになるのは仕方のない事。

これ以上合流できないとなったら前へと進めば良い。どちらにしろ、どれだけ戦力を集められるかがミソ。

・・・それにしてもここまで秘密裏にコロニーを運ぶとはな。どう考えても地球の防衛網の穴を知ってる人間にしか不可能。完璧すぎるが故に墓穴を掘ったという事か。

たとえサツキミドリコロニー近くに木連がいようと誤魔化されはしないぞ。

少なくとも、俺やナデシコは。

覚悟しろよ。地球連合軍最高司令官。

「貴官の参加に感謝する」

「こちらこそ、参加を認めてくださり、ありがとうございます」

先程の通信の相手、アルダート大尉と握手を交わす。

やはりナイスミドル。こういう男に将来なりたいものだ。

「これから貴官をブリッジまで案内しようと思うのだが・・・」

ん？ どうかしたんだろうか？

「他の乗組員は良いのだろうか？」

ああ。ミナトさんとセレス嬢の事ね。

ナデシコならともかく普通の軍艦にはすぐわかない二人だから……。

「はい。ヒナギク内で待機させておきます」

俺は軍艦に慣れてるからいいけど、二人にはちょっとね。

「そうか。分かった」

「すみません。気を遣ってください」

「いや。それなら、早速行こうか」

「はい」

アルダート大尉の後に続き、この艦のブリッジへと向かう。

ミナトさん。セレス嬢。

伝えた通り、戸締りはしつかりしておいてくださいよ。

戦場にいる時は気分が荒ぶって大変なんですから。

まあ、その辺りのセキュリティは滅茶苦茶強固にしたから大丈夫だ
と思うけど。

……なんか心配だな。確認して来ようかして。

「大尉。すみません」

「ん？ どうかしたか？」

「少し伝え忘れた事がありました。申し訳ないですが……」

「ああ。構わん。心配になるのも分かる。美人だったからな」

……この人、ちゃっかり見てたんだな。二人の事。

「すぐに戻ります」

ヒナギクまで戻り、搭乗する。

「ミナトさん。セレスちゃん」

「どうかしたの？ コウキ君」

「・・・どうかしたんですか？ コウキさん」

「いや。ちよっと心配で」

二人に何かあったら本気で困る。

「ふふっ。心配してくれてありがとう。でも、大丈夫よ」

「・・・はい。コウキさんが出ていってからは誰も入れません。何があっても」

・・・それなら良いんだけど。

「必ず連絡は俺がしますから。俺からだとか、艦長からだとか言われても応えないように」

「心配性ねえ。子ヤギじゃないんだから。私達は」

「・・・でも、嬉しいです」

「ふふっ。そうね」

ここまで嚴重に言えば大丈夫だよな。うん。

ちなみに、心配するのは当たり前です。家族で、大事な人達ですから。

「それじゃ、行ってきます。俺が帰ってくるまで大人しく待機しててください」

「分かったわ。うん。セレセレ。私達は寝てましよう」

「・・・良いんですか？」

まあ、作戦まで時間はあると思うから大丈夫だろう。

しっかし、極端ですね。ミナトさん。

「うん。作戦に体調万全で参加できるよう今の内に休んでおいて
ふむ。そう考えるとミナトさんの行動は理にかなってるな。
そういう事を素で出来る事って凄い事かも。
いや、実はかなり考えられた行動だったり？」

「ふあああ〜〜」

「・・・いや、何も考えてないかも。
僕には分かりません。ミナトさんが。
まあ、それも魅力の一つなんですけどね、なんて。

「改めて、行ってきます」

「いつてらっしゃい」

「・・・早く帰ってきてくださいね」

なんだろう？ このアットホーム感。
これで良いのかな？ なんて思う自分がいて、
同時に幸せに感じている自分もいちゃったりして・・・。
・・・戦場だつて事、忘れてないか？ 俺。

「お待たせしました。大尉」

「構わない。さあ、行こうか」

「はい」

今度こそ、ちゃんと向かいました。

「案内ご苦労だったな。アルダート大尉」

「ハッ！」

ブリッジ到着。

そして、艦長席にはキリツとした凛々しい女性が。

・・・超絶美人だ。あまりにも綺麗過ぎて気圧されるぐらい。

「そして、ようこそ、我が艦へ。私は当艦の艦長を務めるアルメイラ大佐だ」

・・・気圧されてる場合じゃないよな。

挨拶されたんだ。挨拶を返さねば。」

「ハッ！ ナデシコ所属パイロットのマエヤマ・コウキであります！」

「ふっ。そうか。貴官があのマエヤマ・コウキか」

あのって何だ？ あのって。

「貴官の事は聞いている。とある御方の懐刀だと」

・・・どれだけ俺の噂って飛躍してるんだらう？

そんな凄い事をした覚えはないんだが・・・。

というか、そのとある御方って誰の事ですか？

もしかして、ミスマル司令の事か？ そうだったら大きな勘違いだぞ。

あの人の部下には俺なんかよりもっと優秀な人がいる訳だし。

「まあいい。貴官の作戦参加。感謝する」

「いえ。地球に被害を被らせる訳にはいきませんから」

「ふむ。だが、苦言を申すようだが、貴君の参加は多少の戦力増加にしかならない」

手厳しいな。当然だけど。

「貴官一人参加した所で何の意味もないという意味だが・・・」

何故にそこで流し目を喰らう？

ドキツとするじゃないか。緊張的な意味で。

キリツとした女性に見られるだけでドキツとするのは小心者な証拠でしょうか？

「何故かナデシコと聞くだけで期待してしまう。その期待、貴官は応えられるか？」

挑戦的な眼差し。

それに対して俺は・・・。

「当然です。応えてみせましょう」

笑顔でそう答えてやる。

それがナデシコクオリティだ。

期待されて、応えなかった事など一度もない！

「ふつ。頼もしい笑みだな。流石はナデシコだ」

もちろんです。

これまでも期待の斜め上の成果を残してきたナデシコ。今回だって同じように・・・斜め上でいいのか？と、とにかく、期待以上の成果を残してやるぜ！

「だが、言葉だけでは納得できない。その方法を提示しろ」

証明しろと。そう言ってる訳だ。

「それでは・・・」

作戦を話す。

戦艦で体当たりなどという無謀な策ではなく、ナデシコの切り札を使った最良の策を。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・真か？」

「はい。威力は折り紙つきです」

作戦はいたって単純。

作戦とさえ言えない程に単純だ。

「ナデシコではそんな怪物機の開発に成功しているのか・・・」

アドニス殲滅射撃仕様。

文字通り、殲滅用の高火力、広範囲攻撃に特化した機体。作戦とは・・・。

「フルチャージショット。その一撃でコロニーを沈めると言っただな・・・」

サーチ&デストロイ。
接触前にチャージを開始し、一撃を放つ。
そして、再チャージ&フルショット。
ただそれだけだ。
連合軍にはその時間稼ぎと俺の護衛を頼みたい。

「良いだろう。ナデシコを、いや、貴官を信じる」
「ありがとうございます！」

良かった。協力が得られた。
単純にサツキミドリコロニーが迫ってくるだけだったら構わないが、他の機体がサツキミドリコロニーを護るように配置されていたら俺一人じゃ厳しい。
成功させる為にも他の者達の協力が必要だったんだ。

「但し、約束は出来ない」
「え？」

協力は出来るが約束は出来ない？
どういう意味だ？

「現段階では問題ない。私が迎撃隊の指揮を執れるからな。だが・
」
「・・・もし大佐以上の階級の者が来たら指揮権が移ってしまうと
？」

「その通りだ。そうなれば、私もその者の指揮に従わねばならない」

「・・・そうだな。軍は完全な縦社会。
上が白といえど黒も白だ。」

こんなに理解が深い軍人は珍しい部類に入る。
願わくば、彼女以上の階級の軍人が合流しないように……。

「だが、貴官が切り札となる事も確かだ。アルダート大尉」

「ハッ！ 大佐」

「この者をお前に預ける。命を賭して護れ」

「了解！」

俺はアルダート大尉の指揮下に入る訳だ。

……こうまで言われて奮起しない訳がない。

命を賭して護られるに値する働きを必ずしてみせる。

「いざとなれば単独行動を取って構わん。なに。責任はこの私が負
おう」

「なにからなにまですいません」

「いいさ。期待に応えてくれるのだろうか？」

「もちろんです。必ずや」

「それならば良い。私の地位など地球の危機を救う事に対したら微
塵の重みもない」

……カツコ良過ぎるぞ、この女艦長。

「それに貴官にはフクベ極東方面軍総司令官代理の後ろ盾もある。
先程の連絡の通りなら、貴官には単独行動を認める許可も降りる
筈だ」

「フクベ提督が……」

ありがとうございます。フクベ提督。アキトさん。

「その際、アルダート大尉が貴官を護衛する。連れて行け」

「感謝します」

敬礼する。

初対面の相手をどうしてここまで信用してくれるのかは分からない。でも、こうまで信用してくれたんだ。

その信用を裏切るような真似は絶対にしない！

「作戦決行時間はこれより九時間ほど後だ。

作戦決行二時間前にもう一度ブリッジまで来て欲しい」

「了解」

「それまで十分な休養を取っておいてくれ。

作戦がどれ程の時間を掛かるか分からんからな」

「分かりました」

「アルダート大尉。案内を」

「ハッ」

「しっかり休め」

「ハッ！ 失礼致します！」

アルメイラ大佐に敬礼をし、ブリッジから退室する。

・・・ふう。とりあえず、作戦の協力は得られた。

後は俺がしっかりと・・・。

「大役を任されたな」

「アルダート大尉」

「緊張するのは分かるが、後ろは俺達に任せてくれれば良い。必ず
護りきろう」

なんとも心強い言葉だ。

「はい。よろしく願います。アルダート大尉」

「大船に乗ったつもりでいる。アレス隊が貴官を護衛するのだ」
「・・・アレス隊」

聞いた事があるぞ。

アレス隊は連合軍南欧支部が誇る精鋭達で、
コロニー奪還作戦ではナデシコ以上の功績を残す一流戦闘集団。
その腕前は凄まじく、ヨーロッパ全体を引っ張る存在だとか。
そして、その隊長は・・・。

「そうか。アルダート大尉。貴方があの有名な紅き狼・・・」

機体のパーソナルカラーはクリムゾンレッド。

その凄まじい攻撃は遭遇した敵全てをスクラップにするという。
間違いなく、蜥蜴戦争における連合軍のエースの一人だ。

当然、搭乗機体はアドニスリアル仕様。

「狼とは仲間意識の強い生き物。そして、家族を想う力強い獣だ」

「アルダート大尉もそのように？」

「ふっ。さてな。だが、あえて言うなら、俺に部下はいない、いるのは仲間だけだ。」

「どんな些細な事であろうと俺達は一つの群れとして生きる。それが俺達の強さ」

「そんな彼らに護衛されるといつのか。」

「なんて頼もしい。なんて心強い。」

「周囲の警戒は全て俺達に任せ。貴官はコロニーを撃ち抜く事だけを考える」

「はい」

それならば、撃ち抜いてやろうじゃないか。
双肩に押し掛かる重い責任。

そんな重圧、撥ね退けてやる。

一撃入魂。

地球を護る者達全てのの想いを込め……。

コロニー諸共全てを無に帰してやる。

それが連合軍人の願い。

そして、地球に住む民達の願い。

コロニー落とし。絶対に阻止してみせる！

「ふふつ。フクベ教官。貴方が以前私に話した者が近くにいます。

これも何かの縁でしょうか？ 教官。

教官が誰よりも頼りにしているというマエヤマ・コウキ。

CASを開発し、連合軍に希望を与えたマエヤマ・コウキ。

心強い味方を得ました。これでもう大丈夫です。

全ての希望であるナデシコ。そして、そのナデシコからやって来た教官の懐刀。

不思議と失敗する気がしません。いえ、むしろ、成功を確信しています。

……出来る事ならばもう一度貴方の教えを請いたい。

ですが、そもいかないでしょう。教官は教官で地球の為に動いているのですから。

それならば、私も同じように地球の為に命を懸けて働こうと思いません。

まずはこのコロニー落とし。そして、木連との和平。

教官の教え子の一人として、その責務を全う致します。

そうすれば、教官も私を認めてくれますよね。

教官は厳しかったですから、未だに私を認めてくれません。

教官に認めてもらわねば、私は前に進めないのです。だから、教官、この作戦が

「コンッ。コンッ。」

「ん？ 誰かしら？ どうぞ」

シューインッ。

「アルメイラ。送り届けて来たぞ」

「ああ、アルダート。そう、お疲れ様」

「いいさ。ところで、あれがお前の教官の・・・」

「そうよ。フクベ教官の懐刀」

「士官学校時代に世間知らずだったお前を変えてくれた恩師の懐刀か」

「ええ。フクベ教官に出会わなければここにもいなかったでしょうね」

「それは素直に感謝するが・・・どうしても駄目なのか？」

「往生際が悪いわよ。アルダート」

「だがな、恩師に認めてもらうまで結婚はなしとか酷くないか？」

「教官に認められてこそ一人前の軍人。半人前じゃ結婚なんて出来ないわ」

「お前はもう充分一人前、むしろ、それ以上だと思いがな」

「それでもよ。一人前の軍人として認めてもらわないと私は前に進めないわ。」

「知ってるでしょ？ アルダート。私がどういう人間か。妥協はしたくないの」

「そうか。己に厳しい人間は損だな」

「そうかもね。でも、今回の作戦さえ成功させれば・・・きっと」「教官も認めてくれるだろうよ」

「ええ。だから、無事に成功させて・・・」

「俺は必ず戻ってくる。だから・・・」

「必ず、必ず戻ってくるのよ」

「ああ。だから、戻ってきたら結婚しよう、アルメイラ。幸せにするから」

「ええ。アルダート。私を幸せにして」

第九十四話（後書き）

突っ込みどころ満載。フラグ的な意味で。

定番は伝わり易く一番心に響くから定番なんです。

いや、どこの事を言ってるのかは言いませんが。

フクベ提督が一時期教官をしていたという設定。

公式にあったような、なかったような。

独自設定になつてしまふかもしれない・・・。

日本人がヨーロッパとかいう突っ込みもなし！

功績さえ残していれば、国籍など関係ないのです！

それでは、次回もよろしくお願いします。

第九十五話（前書き）

大変長らくお待たせしました。

学校が始まり、ついでに体調を崩し・・・もう散々。

今まで頭痛をあまり味わった事がない僕ですが、初めて頭痛に悩まされ・・・。

今まで頭痛の事を甘く見ていた自分を叱りたいぐらいです。はい。

コロナー落下阻止作戦前半。

どうなることやら。

第九十五話

「へえ〜。凄いのね」

今回、指揮下に入る事になったアレス隊。

現在、ちよつとした時間的余裕があるので、彼らについて調査している。

「・・・アルメイラ大佐。士官学校を首席卒業しています」

「その時の教官がフクベ提督。珍しい事もあるものね」

「というより、フクベ提督が教官をしていた時代がある事にビックリです」

まあ、あの皺の一つ一つに英知が込められているという事なのだろう。

ベテランの中のベテランという言葉が相応しい御仁だし。

「・・・女性軍人達にとって憧れの存在のようです」

「まあ、あれだけ美人で能力があればそうだろうなあ」

「あら？ 一目惚れしちゃった？」

「や、やだなあ。ミナトさん」

僕は貴方一筋ですよ。

「コ、コホン。戦略シミュレーションで無敗を誇る・・・か。うち

の艦長と戦わせてみたいですね」

どっちが勝つかな？

運と閃きで解決してきたユリカ嬢と緻密な計算で未来を自ら描くアルメイラ大佐。

まあ、記録を見た限りだから、アルメイラ大佐の実力はまったく分からないんだけどさ。

「・・・アルダート大尉。南欧支部の教導隊出身だそうです」

教導隊ねえ。

そりゃあ腕も良いよな。

なんといつても、パイロットに操縦を教える側の人間なんだから。

「ad・RRをパーソナルカラーであるクリムゾンレッドに塗装し、喰らい尽くすかのような果敢な攻めが特徴。別名は血塗れの狼か」

凜猛なイメージだね。随分と。

「そして、この二人が率いるアレス隊はナデシコ以上の成果を残している」

「まあ、宇宙に上がった時期が違うから比較は出来ないけどね」

「それでも、他の艦隊に比べると群を抜いてますよ」

単純に凄いとしか言いようがない。

あの歳で大佐なんて　。

「コウキ君。失礼よ」

「・・・コウキさん。失礼です」

す、鋭いな。本当に。

「あ、あの若さで大佐なんて凄いなと思っただけですよ」

け、決して、年齢の事に触れた訳では……。

「そう、それならいいけど」

「……気を付けて下さい」

……本当に女性って敏感だよな。こういう話。

実は前の世界でバイト中に二十二の人を二十八って言ってしまった事があり……。

落ち込ませてしまったり、怒られたりと……。

申し訳ない気持ちと罪悪感が溢れる思い出です。はい。

……というかセレス嬢ですら年齢は気にするものなのか？

本当に女性は難しい。男と女は違う生き物っていうのは本当かもしれん。

「さて、そろそろかな？」

作戦決行二時間前にブリッジへ。

確かアルダート大尉が迎えに来てくれるのかなんとか。

「……来たようです」

格納庫の入り口からナイスミドルが歩いてくる。

あのナイス加減は間違はなくアルダート大尉だな。

「それでは、行ってきます。ちょっと待っていてください」

「ええ。しっかりね」

「・・・待ってます」

さて・・・どうなったかな？

俺としては指揮官がアルメイラ大佐のままの方が良いのだが・・・
こればかりはどうしようもない。

アルメイラ大佐以上の階級の者が来ないよう祈ろう。

「・・・こうなったか」

ヒナギクにて漆黒の空を進む。

両脇にアドニスリアル仕様。前方に深紅のアドニス。

全三機が俺達の為の護衛としてここにいる。

実際のアレス隊はもっともっと多いのだが、今回はエネルギーの関
係で少数に。

現在、彼らの出力はヒナギクによって確保している。

ヒナギク自身も戦力として数える以上、重力波を多機に送る事は出
来ない。

また、単独行動の際に素早く動けるようにという意味もあり、

ヒナギクの護衛にはアレス隊所属の腕利きの精鋭が付くという事に
なった。

だから、両脇を固めるのもアドニスリアル仕様とエース級のパイロ
ットな訳だ。

正直、かなり心強かったりする。

しかし、心細い面、というか、不安な面もある。

「最後の一時間でギリギリ合流した偶然地球からコロニーへとやっ

て来ていた准将ねえ」

結局、指揮はその准将が取る事となった。
アルメイラ大佐も当然彼の指揮下。

指揮官としての権限はあるものの、最高指揮官には従わなければならない訳で。

行動が多少ながら縛られる事となった。

結果として、俺の提案した策は不採用。

もちろん、アルメイラ大佐も俺の案をその准将に提案してくれたらしい。

だが、果たして破壊できるのかという事となり、准将の作戦が実行される事となった。

その策は……。

「サツキミドリコロニー内に侵入し、軌道の方角を変える……か」

……作戦としては優れている。

コロニー落としを阻止する方法は結果として落ちなければ何でも良い。

破壊しようが、停止させようが、放置しようが、落ちさえしなければ。

そうなれば、破壊だけがコロニー落とし阻止の方法ではない。

他の方法の一つとしてコロニー自体の軌道を変えてしまおうというものもある。

成功すれば、地球に接触する事なく、被害も何もなく解決するだろう。

破壊するより确实であり、破壊した際のような断片が散ってしまうなどの危険性もない。

だが、果たしてそう簡単に侵入できるだろうか？ というのが俺の疑問だ。

これだけの大規模な作戦をする上で、護衛役がないという事があるだろうか？

コロニー落としを成功させるまで阻止させぬよう守り通そうとする筈だ。

それが誰の仕業であつても必ず。

だからこそ提案した先制攻撃。

それで少しでも敵戦力が削ければ、今後が楽になる。

更に言えば、こちらの被害も少なく出来る。

まあ、破壊した断片が散つてしまい危険と言われれば否定できないのだが……。

それなら、先制攻撃をした上でコロニーを操作してしまえば良い。

そう思うかもしれないが、世の中、そううまくはいかない。

この作戦は両立が出来ないのだ。

こちらが先制攻撃でコロニーを破壊してしまえば、

一つの物体として動くコロニーが分解してしまうという事に。

そうなれば、コロニー全体を地球から逸らしてしまおうというこの作戦。

前提条件からして狂ってしまう訳だ。

そんな事を作戦提唱者が許してくれるとは思えない……。

やはり、不確定要素が絡んでくると慎重になるものか。

殲滅射撃仕様の実績があればこの案も通るのだろうか、不幸な事に今回が初の実戦。

そりゃあそう簡単に信用されないよな。

まあ、彼らの作戦が有効である事は確かだ。

今回、俺も彼らの指揮下として動く以上、指示には従おうと思う。

それで成功すればそれが最も良いのだから。

但し、それでも成功しないようだったら単独行動権を発動させ勝手に動かせてもらう。

きちんとした手順を踏んで認めさせた権利だ。

誰にも文句は言わせない。

『作戦ポイントへ到着する。各員、気を引き締める』
『『了解』』

クールに応えるパイロット達。

やはり歴戦の勇者なだけあり、らしい雰囲気がある。

「コウキ君。そろそろ準備なさい」

「・・・任せても？」

「ええ。私は回避に専念すればいいのよね？」

「はい。セレスちゃんは」

「・・・コウキさんの指示通りに動きます」

「うん。頼むよ」

うし。行くか。

「それじゃあ、行ってきます」

「いってらっしゃい」

「・・・無事に戻ってきてくださいね」

「了解」

二人に見送られながら、俺はコクピットから退室する。

そのままヒナギクの格納庫へと走り、アドニスへと飛び乗る。

「アザレア」

ヒナギクに移しておいたアザレアをアドニスへと移す。

『マイマスター。ここに』

「行くぞ。補佐は任せた」

『御意』

その後、出撃準備を全て済ませ……。

「アドニス殲滅射撃仕様。マエヤマ・コウキ。出ます！」

格納庫から飛び出す。

「アルダート大尉」

『ああ。貴官は俺の隣に、ヒナギク前方を囲む』

「了解」

指定された位置に移動し、戦闘態勢を移る。

『我々に与えられた任務はサツキミドリコロニーへの突入の援護。

具体的に言うならば、サツキミドリコロニー周辺の敵を掃討する

事だ』

「了解」

『また、万が一に備えて、貴官は準備を怠らない事。単独行動は認

められている』

「はい」

理解が深くて助かります。

『見えてきたな』

サツキミドリコロニー。

その姿が視界に映る。

「……あれが地球に落ちるのか……」

巨大。一言で表すならそれに尽きる。

チューリップなどとは比べ物にならないぐらいの大きさだ。これが地球に落ちたらなんて・・・考えたくもない。落下中に燃え尽きるだろう。そんな予想も出ている。

だが、万が一を考えたら・・・油断なんて出来る筈がない。

『接近する。後に続け』

『『了解』』』

アルダート大尉が飛び出し、同時に俺達も前へと進む。

「ヒナギク。DFを張ってそのまま付いて来い。ミナトさんは回避に専念」

『了解』

作戦の構成上、突入組と掃討組は限られてくる。

それはジエネレーターの関係。

重力波に依存するエステバリス、アドニス、ヒエンでは突入は不可能。

潜っている最中にエネルギー切れで機能停止するのが眼に見えている。

その為、突入組はステルンクーゲルが主力となる。

彼らなら突入時のエネルギー切れの心配はない。

そういう意味では頼もしい存在である。

残るエステバリス系統の機体は彼らの突入の援護。

周辺に蔓延る敵機を掃討し、彼らの突入は妨げる障害を消滅させるのが仕事だ。

「・・・他の艦隊もあがってきたか」

最初は掃討組から始まる。

突入組は掃討組が敵機を減らし、隙を作り出してから突入する予定だ。

唯一、掃討組でも自由行動が出来る俺達だが、例外はない。遊撃隊として働くよう指示が出されたそう。

「さて、何が出てくるかな？」

木連であれば安直にバツヤらジンヤらが出てくるだろう。

だが、俺はこれが連合軍の仕業であると知っている。

果たして、どのような機体が出てくるやら……。

『接触するぞ。各機、戦闘準備』

アルダート大尉の指示に従い、グラビティライフルを手に持つ。

ヒナギクからの重力波によって戦闘における不安はない。

威力、連射性、精度、それら銃火器に必要な全てが優れるこいつなら……。

「どんな敵であろうと撃ち抜いてみせる」

さあ、掛かって来い。

コロニー落とし。必ず阻止してみせるからな。

「なるほどね。考えられてるじゃないか」

サツキミドリコロニーの接近と同時に現れた敵機。
それは……。

「デビルエステバリス、いや、デビル軍団だな」

原作ではサツキミドリコロニーで登場。

それ以降、登場しなかったデビルエステバリス。

この世界では一度も御目に掛かっていない。

まさか、サツキミドリコロニーでその姿を見る事になるとはな。
なんとも不思議な事だ。

しかも、デビルエステバリスだけではない。

言うならば、デビルヒエンやらデビルアドニス、デビルステルンク
ーゲルまで配備。

正にデビル軍団という名が相応しい集団だ。

「確かにこれなら怪しまれない……か」

バツタは以前のミスマル司令暗殺事件の際に、

木連から秘密裏に連合軍が輸入している事を確認している。

後はあちらこちらから横流しした機体をそのバツタに操らせれば良
いだけだ。

バツタは木連の象徴。木連かどうかを疑う事はまずないだろう。

それに……。

「アルダート大尉。あれは……」

『ああ。時々確認される機体だ。バツタによって制御された連合軍
の機体。』

パイロットの負担を考えずに行動できる為、かなりの性能を発揮
する。気を付ける』

こうして、何度かの目撃情報があればなおその信憑性は増す。カメラに映った瞬間にデータが表示されたから、確認されていると分かった。初対面であれば、アンノーン、もしくは、エステバリスなどの表示がされる筈だ。それがデビルエステバリスになっているのだから、そう確信するのはおかしくない。まあ、同じように名前がデビルエステバリスになったのは意外だったが……。

「ここまで想定して紛れ込ませていたか？」

木連との戦闘中、デビルエステバリスを乱入させる。

そうすれば、乱入させたのが連合軍であろうと木連だと錯覚するだろう。

もしくは本当に木連がデビルエステバリスを使っていたかもしれない。

そうであればなんとも都合が良い話だけど。

ともかくにも、バツタによって制御を奪われた機体が木連だと認識されている以上、

連合軍がバツタを輸入して、自分達の機体に寄生させれば、木連の仕業だと錯覚させられる。

考えられている。本当にそう思った。

『行くぞ』

『おっ！』

率先して飛び出していくアレス隊。

荒ぶる攻撃を特徴とした彼らの攻撃が始まった。

「俺も行きます。ミナトさん達は距離を確認しながら移動を」

『了解。気を付けてね』

「ええ。分かっています」

『援護します。フェザンツ、ニバレス、射出』

格納庫内に収められていたフェザンツ、ニバレスが射出される。

出撃前にウリバタケさんが気を利かせて積み込んでくれていた奴だ。数は少ないが、ないより全然マシ。ありがとう。ウリバタケさん。

「今の所、攻撃はしなくて構いません。ミナトさんは回避に、セレスちゃんも情報解析に専念を」

『分かったわ』

『・・・分かりました』

うし。それじゃあ・・・。

「俺は掃討に専念。行くぞ！」

アレス隊の後を追う。

「そこっ！」

ドウビューン！ ドウビューン！

両の手に持つグラビティライフルからそれぞれ発射。

煙幕の間を通りながら、次々と屠っていく。

確かにバツタの制御なだけあり、慣性無視で運動性能は優れている。だが、それだけだ。

所詮はバツタの制御。単純かつ単純。要するに単純。

原作で苦労したのはコロニー内が閉じられた狭い空間だからだろう。宇宙空間であれば、ワイヤードフィストを使った変則的な機動も不可能だし。多少動くのが速い程度であり、大した障害にはならない。

『流石はナデシコのパイロットだな』

「いえ。そちらこそ。流石は連合の誇る紅き狼」

『ふっ。この程度で褒められてもな。俺の実力はこの程度では計れない』

凄い自信だ。でも、それでこそ、かな。

「それは俺も同じです。この程度の輩で賞賛されても嬉しくありません」

『よく言った。次に行くぞ』

「はい！」

遊撃隊として戦場のあちこちを回らなければならない。

防衛網とは少し違うが、様々な方向から突入する以上、多くの隙を作る必要がある。

「制限時間は後どれくらいだ？」

現段階で一般兵士でしかない俺には詳しい作戦遂行時間は知らされていない。

だが、間違いなく掃討組の任務には制限時間が設けられているだろう。

突入してからサツキミドリコロニーの制御部に辿り着くまでの時間。操作する時間。操作後、地球圏内から離脱するまでに必要な距離、時間。

それら全てがシミュレーションされているに違いない。そうであれば、突入までのタイムスケジュールも定められている筈。俺達はそれまでに突入させるだけの環境を作り上げなければならぬ。

「しかし・・・凄いな」

これだけの数が揃えられるなら、決戦の為に取っておけよというのが正直な感想。

急場凌ぎで集めた数だが、逆に言えば、周辺で集められるだけ集めた数。

それに匹敵するだけの戦力ってどういう事？

・・・連合軍内でどれだけの横流しが発生した事やら。

もしくはどこかの工場が強制的に徴収されたか・・・。

どちらにしろ、同じ連合軍同士でこれ程の数の犠牲を出すのは勿体無いと言いたいようがない。

徹底抗戦を認められようと決戦に負ければ意味がないと分かっているのだろうか？

・・・ん？ 徹底抗戦？

もしかして、このコロニー落としは徹底抗戦を訴える為の工作か？ 木連がコロニー落としを企んだとなれば、地球人が怒りを覚えるのも必至。

後はその怒りを煽ってしまえば・・・。

なるほど。そう考えれば辻褄が合う。
・・・自作自演してまで戦争がしたいのか。あいつらは。
クソツ。胸糞悪い。

「そうならこの時点で既に目標は達成か」

地球側がコロニー落下作戦を確認した。

それだけでこの工作は成功とって良い。
地球防衛ラインが稼動すれば理由を問われるだろうし、隠そうとも
しない筈。

既に術中に嵌ってしまったという訳か。

「また後手に回ってしまったか」

本当に後手後手で対応しなくちゃならない事ばかりで困る。

・・・だが、今の俺に出来る事は確実にこのコロニー落下を防ぐ事。
まずはこれをしっかり終わらせよう。考えるのはそれからだ。

ドウビューン！ ドウビューン！

単純だが、数が多い。

一機ずつ対応していたら無駄な時間が掛かる。

「一気に殲滅してしまおう」

でも、フルチャージショットだとの方向に撃つても味方やコロニーに当たってしまいそう。

味方を撃つなんてありえないし、コロニーに当たったら准将が五月蠅いだろう。

味方に損害を与えず、コロニーに命中させないように敵機を殲滅。
厳しい前提条件。だが、それでも、この機体であれば・・・。

「セレスちゃん。ニバレスを俺の後ろに距離を離して付いてこさせて」

『・・・分かりました。でも、何を？』

「何をつて？ 簡単な事さ。一気に殲滅する」

『・・・え？ コウキさん？』

「いいから。俺を信じて」
『・・・分かりました』

ごめんね。セレス嬢。ちょっと無理するかも。でも、これで移動限界距離の壁を越えられる。

「アルダート大尉。敵機を一気に殲滅します。距離を取りますが、ご心配なく」

『了解した。信じて良いんだな？』

「無論です。こちらに近付かないようにしてください」

『分かった。健闘を祈る』

「はい」

アルダート大尉に報告し、作戦実行に移る。

「アザレア。敵が密集していて、かつ、

グラビティライフルの射程に味方がいない場所を探してくれ」

『はい。マイマスター』

「ちなみに、全方位だぞ。縦も横も上も下も」

『え？』

「いいから。頼んだ」

『は、はい』

折角グラビティライフルを二丁も持っているんだ。まとめて屠ってやるぞ。

『マイマスター。ここです』

機体内のレーダーに場所が映し出される。見事なまでの俺の指示した通りの場所だ。

周囲は敵に囲まれ、多くの敵が密集している。

「よくやった。アザレア。期待通りの場所だ」

『はい。しかし、一体、何を……』

お前でも分からないか。

まあ、無謀と言えば無謀。だが、それ以上に有効だ。

「突っ込む」

『……了解。援護します』

ん？ 驚くか否定すると思ったのだが。

「反対しないのか？」

『私はマスターに付いて行くだけ。全力で貴方の期待に応えます』

まったく。俺には勿体無いパートナーだな。

「ウイングブースター展開」

『ウイングブースター展開します』

背面に広がる翼。

正に漆黒の空を翔ける羽根と成る。

「作戦ポイントに向けて一直線で飛び込む」

グラビティライフルを腰に備え付け、ディストーションブレードを展開。

「障害はぶち抜く。立ち塞がる壁は絶ち斬る。俺の前にいる奴ら全

てを殲滅する」

『了解！ マイマスター！』

「ブースター最高出力。DF最高出力。行くぞ！ あらん限りの速度で突破する！」

『はい！ マイマスター！』

ウイングブースターを始めとした機体に取り付けられたブースター全てが火を吹く。

同時に機体の前方に現段階で出せる最高の強度を持つDFを展開。自身を弾丸とし、全てを貫き、作戦ポイントへ到着してやるうじやないか。

「ハアアアアアアアア！」

叫び、穿つ。

蔓延る雑魚はそのまま突っ込み、DFにて破壊。

どうしても立ち塞がる強大な敵は最大速度のままディスプレイションブレードで断ち切る。

速度は落とさず、全ての動作を狂わさずに行う事は非常に難しい。だが、決して不可能じゃない。やるさ。やってやる。

「ウオオオオオツオオ！」

目標ポイントまで一直線。

ニバレスを間に挟んだ限界稼動距離ギリギリの場所。

そして、俺が通ってきた道以外が敵で囲まれた絶体絶命ポイント。

四面楚歌？ 孤立無援？ 袋小路？ 窮地？

ふっ。違う。そんなものじゃない。

これは逆転の一手。そう、敵を殲滅できる戦況を変えるだけの効果が期待できる策。

何度でも言おう。何度だって言っただけでやる。死中に活あり。ピンチこそがチャンス。その逆境を覆す力がこの a d - A S にはある。

「集まれ。集まれば集まる程、俺にとって好都合だ」

突如現れた俺に対して、敵機が集まってくる。警戒しているのか、攻撃はしてこないが、完全に包囲されていた。無論、俺にとっては好都合だ。

「グラビティライフル発射準備」

両手にグラビティライフルを構え、そのまま左右に突き出す。形としては両手を広げて、グラビティライフルを突き出すというもの。

それだけじゃ左右の敵を屠るだけだろう。だが、それではここまでやって来た意味がない。俺の狙いは……。

「全方位殲滅。さあ波に吞まれる」

グラビティライフルを発射。

単発式ではなく、連続的に放たれる幅の厚い攻撃。

そして……回転。

自身を中心に全方位を攻撃する為のローリング。

威力もさる事ながら、その攻撃の範囲は殲滅射撃仕様に相応しい。

「包囲したのが間違いだったと知れ」

単純な横回転だけではない。

縦回転や斜め回転を付け加える事で文字通り全方位を攻撃できる。これにはそこまでの速度は要求されない為、凄まじいGが襲う事は無いが、目は回る。
一応、訓練を繰り返して慣れてはいるが、完全に目を回さないまでにはなっていない。
そんな事もあり、一度で全てを撃破する必要があるのだ。
撃破後に生き残りに攻撃されて死亡なんて馬鹿らしいからな。

「・・・殲滅完了」

数多の回転をこなし、周囲に蔓延る敵機全てを殲滅した。
これこそがアドニス殲滅射撃仕様の真骨頂。
対群でこの機体に勝る機体は存在しない。
今ならそう言い切れる。

「アザレア。ヒナギク周辺に戻るぞ」

『はい。マイマスター。お疲れ様です』

「お前もな」

周囲全てを掃討しようと完全に滅ぼした訳ではない。
再び遊撃隊として働かなければ。

「戻りました」

途中、展開されていたニバレスを回収しながら、アレス隊に合流する。

ニバレスを避けるように射撃するのはそれ程苦労しなかった。
それぐらいの精密射撃は出来る。

ただ回るだけのような考えなしの行動はしませんよ。はい。
ちなみに、立ち塞がる敵機もおらず、簡単に帰艦できました。

『見させてもらった。あれがナデシコの切り札か』

「はい。大分削れたと思います」

『よくやってくれた。先程の貴官の攻撃で作戦本部は突入を決めた。既に突撃しているそうだ』

「そうですね。分かりました。援護に回ります」

『ああ。（あれだけの高威力。コロニー破壊を豪語するだけある。あれならば・・・）』

アルダート大尉の言う通り、後方から数多のステルンクーゲルが飛び出していく。

・・・コロニーの軌道方向を操作するという作戦が成功するならそれで良い。

成功するように俺も全力で援護しよう。

でも、万が一、そう、万が一にも制御掌握に失敗した時、その時こそ・・・。

「フルチャージショットで撃ち抜く」

その為に俺はここにいるのだから。

次々とコロニーへと突入していくステルンクーゲル。

その姿に期待しつつ、内心で次へと備える自分がいた。

何故か、俺の出番がやってくるような、そんな気がしたから。

杞憂であればそれで良い。だが、万が一に備える事こそ軍人の心得。備えずして被害を受けるのであれば、備えて無駄に終わった方が何倍も良い。

嫌な予感が頭の中で木霊する中、今はただ眼の前の敵を屠る事しか出来なかった。

第九十五話（後書き）

最早自重の欠片なし！

いや、これ、やりたかったんです。許してください。

ローリンググラビティライフル。あれ？　なんか違うぞ。はい。スルーで。

結果としてコロニー撃ち抜きは採用されず。

まあ、今後の展開次第ではあるでしょうが。

アルダートのフラグ回避など注目される後半戦ですが、またちょっと期間があきそうです。ご勘弁を。

それでは、次回もよろしく願います。

第九十六話（前書き）

大変遅くなりました。

申し訳ないです。

加えて、散々悩んだ挙句に突っ込み所満載。
楽しんで頂けたら幸いです。

第九十六話

「クソッ！　まだか！？　まだ掌握できていないのか！？」

ステルンクーゲルがサツキミドリコロニーに突入を開始して一時間が経とうとしている。

刻一刻と地球に近づくコロニーを前にして一時間はかなりのロス。まだか、まだかと待ち続ける事しか出来ず、焦りはピークに達しそうだ。

その焦りから強硬手段を考えるも……。

「ステルンクーゲルが突入している以上グラビティライフルを撃つ事は出来ない」

味方ごと貫くなんて出来る筈がない。

「……どうする？」

取れる手段が異様に少ない。

現状では展開された敵部隊を滅する事のみ。

グラビティライフルでコロニーを焼き尽くす事も出来ず、地球に接近するコロニーをただ眺める事しか出来なかった。

「……アルダート大尉」

状況は変わらない。

こうして敵を屠っているだけでは何の意味もない。

俺がやれる事は……。

『どうした？』

「アルダート大尉達は今の区域から離脱し、自艦に帰艦してください。

それぐらいであればバッテリーは持つ筈です。私は単独行動を取ります」

『……何を考えている？ 貴官は一体何を……』

「突入します」

『……』

ステルンクーゲル以外で唯一単独行動が出来るのは俺達だけ。そして、これは俺の策であり、アレス隊を巻き込む訳にはいかない。だったら、俺だけが突入しよう。

「ミナトさん。セレスちゃん。二人は」

『何を言われても付いていくわよ』

『……はい』

……馬鹿な事を言わないで下さい。

「コロニー内部は凄まじく危険です。相当な敵が待ち構えているでしょう」

あれだけの数が突入したのに未だに掌握できないのがその理由。梃子摺っているというより既に撃破されたと見て良いだろう。

無論、まだ残っているであろうから、強硬策は打てないが。

「二人を危険な目に合わせる訳には行きません」

『それはコウキ君も同じでしょう？』

「・・・ミナトさん」

『コウキ君だけを危険な目に遭わせるなんて嫌』

『・・・一緒にいきます。行かせて下さい』

・・・その気持ちは嬉しい。嬉しいけど・・・。

「駄目です。こればかりは・・・譲れません」

今の戦場に立たせているだけで嫌なのに、それ以上なんて・・・。

『でも!』

「分かってください。ミナトさん。セレスちゃん」

映像越しに見詰め合う。

絶るように見てくるが、それでもこれは譲れない。

「アルダート大尉。二人をお願いしても良いですか?」

『貴官の気持ちは分かるがな。引く気はなさそうだぞ?』

二人の事を言ってるのか? それだったら・・・。

「それでもです。危険な目に遭わせるぐらいなら嫌われても良い」

何よりも命が大事。その為だったら、強硬な手段でも辞さない。

『コウキ君・・・』

『・・・だが、彼女達が来なければエネルギーは確保できまい』

『そ、そうよ。コウキ君。考え直して』

確かにヒナギクがなければエネルギーは確保できない。

でも……。

「ドッキングすれば俺だけでヒナギクもアドニスも操れます」

後は二人の安全さえ確保できれば何の問題もないのだ。

「アルダート大尉。すいませんが、二人を貴方の艦まで」

『……すまないが、遅かったようだ』

「え？」

遅かった？ どういう意味ですか？

『今通信が入った。准将からの命令だそうだ。』

アレス隊。ナデシコパイロット先導の下、コロニー内部へ向かえ
とな』

……准将からの命令。今回の作戦上における最高指揮官の言葉。
軍人である俺達は従わざるを得ない。

……それにしても、ヒナギクの存在を知っていたのか、准将は。

「それならば、一度艦に戻り、二人を降ろして……」

『そのような時間も与えない。今すぐに突入しろとの命令だ』

「……そんな」

あんな危険な地に二人を連れて行けというのか……。

『単独行動権も与えられているが……構わないぞ』

単独行動権。この状況でこれを行使して何になるんだ。

ここで拒否したら、俺だけならまだしもアレス隊全体の責任問題に

なってますまう。

俺を信頼してくれたアレス隊をそんな目に遭わせちゃならんだろ。

「……止むを得ません」

……引き受けるしかない。

『すまないな』

「いえ。命令ですから」

アルダート大尉が悪いだなんて欠片も思っていない。

状況的におかしくない命令だし、モタモタしていた俺が悪いんだ。

『だが、貴官の思いも当然のものだ』

「……アルダート大尉」

『必ずと断言は出来ないが、俺達も全力でヒナギクを護ると誓おう』

「……ありがとうございます」

その言葉だけで心強いです。

『アルギス・クローエ少尉』

『……ハッ』

『ヒナギクを護れ。お前はそれだけに専念しろ』

『……了解』

護衛に専念。そこまでしてくれるなんて……。

……本当にありがとうございます。

『ヒナギクは我々にとっても心臓部そのものだからな。撃墜される訳にはいかん』

ここにいる全ての機体のエネルギーを賄っているのはヒナギク。そうである以上、ヒナギクの撃墜は俺達の敗北と同じ。

・・・感情的にも理屈的にも必ず護らないといけない訳だ。

「ミナトさん。セレスちゃん」

『・・・分かってるわ。危険だって事は』

『・・・でも、私はコウキさんだけを危険な目に遭わせたくありませんでした』

『コウキ君の気持ちは凄く嬉しかったわ。

本当に私達の身を案じてくれてるって分かったから』

『・・・はい』

・・・ミナトさん、セレス嬢。

『でも、それは私も、ううん、私達も同じだって分かって欲しい』

『・・・コウキさんが私達を心配するように、私達もコウキさんを心配しているんです』

『だから、ね、一緒に行きましょう』

『・・・皆で生きて戻る為に一緒に行くんです』

・・・はあ。そうまで言われて断ったら俺が悪役じゃないか。

『貴官が護ってやれば良い』

「・・・大尉」

『ふっ。良いものだな。皆で生きて戻る為に、か』

感慨深く呟くアルダート大尉。

その表情からは何を考えているのか読み取れない。

それ程までに複雑な表情だった。

「分かりました。二人は必ず俺が護ります」

『・・・コウキ君』

『コウキさん』

覚悟を決める。皆で無事に戻ってくる為の決死の覚悟を。

『さて、行こうか。死地へ』

こうして、俺達はサツキミドリコロニー内部へと突入する事になった。

構成はad-A.S、ヒナギクにアドニス三機の計五機。

コロニー落とし阻止限界点到達までになんとしてもコロニーを掌握しなければ・・・。

SIDE MINATO

血塗られた道に行く。

決して血で染まっている訳じゃないんだけど・・・。

「・・・酷い」

あちこちに放置される破壊されたままのステルンケーゲル。道があれば必ず一機は朽ち果てており、

少し広い場所があれば、山のように積み立てられている。

その一機一機にパイロットは乗っていて・・・。

「・・・皆、死んでるんだ」

確認した訳じゃない。

でも、きつとそう。

積み上げられた、朽ち果てた、その一つ一つが失われた命。

今まで、人間の死に触れる機会はあまりなかった。

それはコウキ君やアキト君達のお蔭であったり、

ナデシコパイロットの日々の努力のお蔭であったり。

でも、機会がなかっただけで、間違いなく、どこかで人は死んでいて・・・。

私は、私達ナデシコクルーはただ恵まれていただけだったんだ。

私達が知らないだけで、多くの命がこの戦争で失われている。

老若男女問わず。場所、国籍問わず。

この光景を目の当りにして、強く実感した。

人なんて簡単に死んでしまうんだって。

今まで見てこなかった訳じゃない。

実際に落ちていく機体も見だし、私達自身、何度も死地を越えてきた。

でも、どこかで他人事のように感じていたんだ。

ずっとナデシコにいた私。

戦場に立っていたようで、全然立っていなかった。

雰囲気、取り巻く空気が全然違う。

凄く、物凄く・・・。

「・・・怖いです」

「・・・セレセレ」

・・・同じ事を考えてたんだ。

そうよね。セレセレも怖いよね。

「・・・怖くて堪りません」

私もそう。怖くて堪らない。

この簡単に死ねる状況が。

身体が恐怖で勝手に震えてくる。

「・・・でも」

・・・でも？

「・・・後悔はしていません」

「・・・セレセレ」

「・・・だってコウキさんも同じように戦っているんですから」

・・・敵わないな。セレセレには。

本当に強い子。

「・・・怖いです。震えて身体も思っように動きません」

「・・・うん」

「・・・でも、私はコウキさんとミナトさんと一緒に恐怖を背負っています」

「・・・うん」

「・・・だから、怖くないんです。皆一緒ですから」

・・・そうね。

怖いのは誰だってそう。

コウキ君だって、他のパイロットだって、皆怖い筈。

それでも、必死に戦っているんだ。

恐怖を背負って、ひたすら押し殺して。

それなのに、私は何をやっているんだろう。
セレセレに諭されて、それでも、未だに震えてるなんて。
情けない。

戦争で離れ離れになってしまった人だっている。
戦争で一生会えなくなってしまうた人だっている。
そんな人達に比べたら、私達は凄く恵まれている。
同じ場所で、同じ恐怖を共に背負えているのだから。
家族が傍で支えてくれているのだから。
いつまでも甘ったれてんじやないわよ！

「うん。ありがとう。セレセレ」

「・・・ミナトさん」

「さあ、やるわよ。付いてきなさい！」

「・・・はい！」

怖いのは当然。震えるのも当然。

当たり前だ。誰だって死ぬのは怖い。

戦場に立つ以上、本来なら、恐怖を乗り越えるべきだろう。
でも、とてもじゃないけど、そんな事はできそうにもない。
だから、受け入れる。

怖いわ。怖いわよ。でも、だから何？

怖くたって足は動く、手は動く、戦える。

何の問題があるのよ？

確かに今はまだ恐怖を押し殺す事は出来ないわ。

でも、一緒に背負ってくれる家族が傍にいる。

どれだけ重くたって押し潰されない頼りになる愛すべき家族が。
それなのに、戦えない訳がないじゃない！

「行くわよお！」

護られてばかりじゃ嫌。

私が護ってあげるわ。

だから、後ろは任せなさい！ コウキ君。

S I D E O U T

通路を抜ける。

そこら中に放置された死体に見詰められながら。

・・・多くの命が失われた。

相手が木連であれば、彼らの命は地球を護る為に捧げられたと言えよう。

だが、無残にも相手は木連ではなく、味方である筈の地球連合軍。

「・・・これじゃあ報われねえよ」

彼らは何かの、誰かの為に命を張っている。

死んでもいい。そんな風には決して思ってははいない筈。

でも、死んだって成し遂げたい何か。

その為にこうして命を捧げていく。

彼らの犠牲で地球を護れたとなれば本望であろう。

地球全体ではなく、大切な個人が対象かもしれないが。

残された人達の事を考えれば生きて帰りたいかかった筈。

だが、その希望全てが叶えられる程、世界は甘くない。

再会に涙する傍らで永遠の別れに涙する者は確実にいるのだ。

誰かの犠牲に成り立つ上での平和などいらぬ。

そう思う人もいるかもしれない。

その正義感は大切なものだ。分からなくもない。だが、それは今まで多くの者達が犠牲になっっている事を忘れている。そして同時に、地球の為に犠牲になった人々の思いを無碍にしている。

犠牲なくして平和はならない。

認めたくはない。認めたくはないが、それが真理だ。

それに対して、犠牲なくしての平和を目指す。

それはどれだけ傲慢なんだろう。

今までの犠牲をなかつた事にして、犠牲となった者達の思いを無碍にして。

あたかも犠牲を出さずに解決したかのように語る。

そんなものは違うと言いたい。

俺は決して犠牲になれ、そう言っている訳ではない。

だが、犠牲のない戦いなどないと自覚して欲しいだけだ。

犠牲を出さないように戦う。

それは当然の事。だから、話し合いの席を設けようと努力している。

だが、犠牲を出さずに決着する事など不可能。

過去の犠牲から目を背けてはならない。

俺達にするべき事は目を背ける事ではなく、

過去に犠牲となった者達が望む世界へ近づけるよう努める事。

彼らに成し遂げてみせると誓い、その上で前へと進む事ではないだろうか？

分かっている。この考えも傲慢であり、自分勝手だと。

だが、俺はそうやって思い込んで進むしかない。

それでもなければ、足が二度と上がらなくなる。

この重過ぎる足が。

「それなのに・・・」

地球の為に命を捧げた勇者達。

その思いを受け、前に進むのが残された俺達の義務。だけど、それが無意味な死だったら？

無意味な死なんてない。それは確かだ。

だが・・・やるせない。

地球を護る為に散った命。

表向きは。

でも、実際は何かの陰謀に巻き込まれた意味のない死。地球を護る為じゃない。

何かの陰謀の為に必要な数として扱われる死。

報われない。救われない。

彼らの命がそんなもの使われるなんて許せない。

「・・・必ず暴いてやる」

この陰謀の意味、意図を。

そして、潰してやる。

この陰謀を根本から。

「だから・・・」

まずはコロニー落下を阻止する。

その上で、全てを暴き、罰してやるつ。

覚悟しておけよ。策に溺れさせてやるからな。

「やるせないわね」

「・・・ミナトさん？」

「戦争って」

「・・・」

誰かを、何かを護る為に命を張る。

誰かを、何かを護る為に命を捧げる。

迷いを、悩みを抱えながらも、己の信念の為に。

そんな姿は強くて、たくましくて・・・。

でも、どこか悲しい。

どんな言葉にしたらいいかわからない程に複雑。

護る為に命を張る。それはあっちだって同じ。

何かを護る為に互いの命を潰し合う。なんて愚かでくだらない事だろう。

手を取り合うという選択がどうしてもできないのだろうか。

・・・詭弁だつてのは分かってる。

所詮は第三者の理屈だつても分かってるつもり。

でも、どうしても、やるせない気持ちになってしまう。

「・・・私がこうなんだもの。他の皆も・・・」

初めて戦場という戦場に立った私ですらこう思う。

それなら、ずっと戦場に立ち続けた者達は何とやるせないと思う。

ましてや、相手と同じ人類であったのなら。

相手が無人兵器であれば良かった。

ううん、良かった訳ではないけど、少なくとも向かってくる敵を相手にすれば良い。

でも、同じ人類なら？

攻めてくる事情がある。

攻められる事情だつてある。

じゃあ、それは何？

事情を知ったって恨みは晴れない。

人を殺す？ 同じ人を？

この手を血に染めてしまふの？

それが正しい事なの？

そう悩み、迷いながらも、もう止まる事は出来ない。

攻めてくるなら攻撃しなければならぬ。

殺したくなくても死にたくないなら殺さなければならぬ。

迷えば、悩めば、自分が殺される。

そんな狂気の真っ只中。それが・・・戦場なんだ。

「・・・そして、今日もまた・・・」

多くの命が失われた。

意図も事情も知らない。

誰が正しくて、何が間違ってるかなんてもう分からない。

でも、コロニーが落ちたらどうなるかぐらいは分かる。

分からないだらけの世界で、ただ分かる事だけを解決していくしかない。

先が見えない事がこれ程に辛いなんてね。

コウキ君やアキト君、ミスマル司令。

多くの人間がその見えない未来の為に命を懸けている。

どれだけ辛い事が、私なんかじゃきつと分からないんだろうな。

それを少しでも支えてあげられれば・・・。

分からない事だらけでも、私にだってやれる事はあるわよね？

それにしても・・・。

「ふふっ」

「・・・どうしましたか？ ミナトさん」

「ううん。不思議だなんて思ってた」

突然咳いたり笑ったり。

私の方が不思議かも、なんてね。

「……何がです？」

「コウキ君がいつの間にか大きくなつてた事よ」

いつの間にか地球や木連の未来を左右する程の人物になっていて……

目立ちたくないとか、地味に生きていたいと言つてたのが懐かしいぐらい。

今回の戦闘でコウキ君の名前は有名になつちやうだろうし。

なんかコウキ君の行動つていつも裏腹になつちやうのよね。

まあ、それでも困つた顔するだけでスルーしちやうかもしれないけど。

有名になつちやうなんて事も気付いてなかったりして？

変な所で抜けてるしなあ。コウキ君。

「……コウキさんは前から大きいですよ？」

「ふふつ。そうかしら？」

「……はい。私にとって大きな存在です」

もしかや、ゾツコン？

ふふつ。ライバルかな？

でも、負けないわよ。

……大人気ないかしら？

ううん。恋に年齢なんて関係ないわよね。

でも、ま、どちらにしろ……。

「まずはさっさと解決しないとね」

「・・・はい」

恋だなんだって、騒ぐならやっぱり平和な時が良い。
ドタバタコメディはやっぱり平和な世の中じゃないと。
だからさ、一刻も早く平和になる事を望むわ。
きつと、誰もがそう願ってるわよね？

S I D E O U T

「・・・来ます」

アドニス of レーダーに反応。

これで何日目だろう？

幾度となく立ち塞がってくる敵機。

弾丸に際限がない俺はともかく他の人達は苦戦が強いられる。

『各機。迎撃態勢。バツタを優先的に狙え。それで止まる』

閉じられた空間のデビル系はアクロバットな動きで強い。

だが、その程度で負ける程、アレス隊も弱くない訳で・・・。

『・・・』

ダンッ！

無言で敵機を屠っていくヒナギク護衛担当のアルギス少尉。

モニターに映る彼の表情は一切動かず、無表情のまま。どこことなく近寄りがたい雰囲気があつて怖い、戦場ではそれが逆に頼もしい。

格闘武器を一切持たずに射撃武器ばかりを身に付ける姿には拘りが見える。

幾度となく向かつてくる敵に対して攻撃し続けられるのも彼のお陰。彼が破壊された味方の機体から使える武器を探しては回収してくれたから。

一見、墓荒らしのような醜い姿に見えるが、戦いに綺麗も汚いもない。

事実、彼のお陰で戦えているのだから。

そう考えると、なんとも頼もしい。

また、ヒナギク護衛の為に常にヒナギクから離れない位置で活動している。

感情のままに飛び出してくる事もせずに、常に後方からの射撃ばかり。

冷静な人なんだなと更に頼もしくなる。

自身のやるべき事が分かっているからこそ出来る事なんだろうな。

アレス隊と言えば果敢な攻めが特徴の部隊。

彼もまた果敢な攻めを得意としている筈なのだから……。

『……………（よ、良かったあ。先頭を行けなんて言われなくて）』

ダンッ！

175mm狙撃砲。

弾数も少なく、反動などもあり扱いづらい武器。

恐らく、どこかにある朽ちた戦艦からの流用だろう。

戦場の真っ只中にいる部隊だからこそ見れる光景。

その場凌ぎという訳ではないが、戦場で武装やら装甲やらを流用するのは良くある事。

ナデシコのように毎回調整された機体に乗れるのは恵まれた事なんだろうな。

戦場にいれば、修理を終えていないで危険だと分かっているでも乗らないといけないし。

これは誰々専用の機体だ、なんて贅沢は言ってられない。

・・・今更だけど、戦場というものを実感した気がした。

『・・・・・・・・・・（ど、どちらにしろ、格闘戦なんて怖くて出来ないけどさ）』

ダンッ！

イズミさん級の腕前とは言い辛い。

でも、実戦で培われた確かな技術が彼にはある。

冷静に援護してくれるから、俺としても安心して後ろを任せられる。

『・・・・・・・・・・（何があるか分からないから、色々と武器を確保しといたけど）』

弾切れでも焦らずに次々と武器を扱っていく姿。

使いづらい武器だつて中にはあるだろう。

それなのに、何の違和感も感じさせずに使える所など器用さを感じさせる。

『・・・・・・・・・・（弾切れし過ぎ。拾っておいて良かった・・・）』

ここまで考えて、多くの武器を拾っていたんだろう。

本当に、頼もしい限りだ。

彼ならヒナギクを完璧に護ってくれるだろう。

『……………（はぁ……………はぁ……………護衛なんて俺には無理だよ）』

後方の憂いはない。

後は道を切り拓くだけだ。

先程、コロニー内部を調べ、制御室がどこにあるかは見付け出した。だから、そこまで一直線に突破してやるうじやないか。

『……………（頼むから、早く終わってくれ）』

「……………そろそろです」

『了解。行くぞ』

幾度の戦闘を終え、ようやく制御室付近まで辿り着いた。

アレス隊だからこそ辿り付けたと言える程の何度も続く辛い戦闘を終えてようやく。

だが、それでも突入時にいたパイロットの一人が途中で離脱している。

戦闘中に攻撃を受け、そのまま爆発したのだ。

……………人の死を間近で見たのは初めてかもしれないな。

でも、そこで止まっていたら、彼の犠牲も無駄になると振り返る事なく前へと進んだ。

これが戦場。仲間を見捨てて前に進むしかない。

非情だよな。でも、そうするしかないんだ。

「・・・こんな場面をミナトさんやセレス嬢に見せたくなかったのにな・・・。
シヨックだろうし、辛いだろう。
でも・・・耐えるしかない。
本当に、辛い事ばかりだな、戦争って。」

「ここを突破すれば、制御室に辿り着きます」

固く閉ざされた扉の前に立つ。

重要な場所だからだろう。

嚴重にロックされており、とてもじゃないが人力じゃ開けられそうにない。

まあ、アドニスの前じゃ紙みたいなものだが。

『開けるぞ』

デイストーションブレードを取り出し、慎重に扉を切り裂く。
制御室に何があるか分からない以上、慎重になるのは当然だ。

『・・・何だ？ これは』

『どうしました？』

『・・・見れば分かる』

そう言い、扉の前から去るアルダート大尉。
代わるように扉の中を覗きこんだのだが・・・。

「・・・意味が分からん」

制御室は確かにあった。

だが、その室内には山のように何かが積み重ねられて・・・。

『核爆弾・・・という奴だ』

核爆弾！？

『どういつつもりかは分からんが、内部から破壊するつもりだったらしい』

・・・制御室はコロニーの中心部。

ここが核爆弾で爆発すれば、コロニーは内部から崩壊する。

「制限時間は！？ それに・・・」

『おいつ！』

さっさと離脱しなければ爆発に巻き込まれるだろう。

だが、その前に確認しなければならぬ事がある。

それは制限時間と誰の仕業であるか。

制限時間を知らねば対策ができないし、誰の仕業かを調べないと証拠が手に入らない。

機体から飛び降り、核爆弾を制御しているであろう装置からデータを読み取る。

いつも持ち歩いているIFS端末が役に立ったな。

まずは誰の仕業であるか・・・。

「・・・やはり」

・・・核爆弾を用意できるのは地球だけ。

核爆弾を忌み嫌っている木連が持っている筈もなく、たとえ持っていたとしても・・・。

「起動コードが地球連合軍のもの・・・か」

製造番号。爆弾の起動に使用されるコード。それら全てが地球連合軍のものだった。

・・・やはり地球連合軍の仕業か。起動コードを記録。

これは大きな証拠だな。

次は制限時間・・・。

「・・・嘘・・・だろ？」

爆発まで残り約五分。

それまでに脱出しなければならぬ。

残り時間から考えて、解除は不可能。

配線を切るなんて単純なものじゃないのだから。

連合軍のコードなだけあり、ブロックも複雑。

解除できない事もないが、絶対的に時間が足りない。

下手な事をしたら、それだけでバンツ！だ。

更に言えば、一つだけではなく大量に積まれている。

確実に無理だ。

さっさと離脱するに限る。

コロニーの操作なんて爆発してしまえば何の意味もないのだから。だが、こういう時に限って。

『アドニスに早く戻れ！』

アルダート大尉の怒声。

やはり敵が来たか・・・。

急いでアドニスに乗り込む。

『この場から離脱する。逃げ!』

「はい。アザレア。カウントを頼む。後四分四十秒だ」

『了解。マイマスター』

敵が向かってくる方向とは逆の通路を進む。

一方通行じゃなくて本当に助かった。

『どうだったんだ?』

「・・・制限時間は五分を切っています。もともと到達前に爆発する予定だったと」

地球連合軍の仕業だって事は伏せておいた方が良いでしょう、今はまだ。

『・・・そうか。どちらにしる、さつさと離脱せねばな』

「はい。カウント情報を送ります」

アザレアに頼んでいたカウント情報を各機に送る。

これで誰もが確認できる状況になった。

『・・・ギリギリだが、このままなら大丈夫・・・ではなかったな。

甘かったか』

・・・挟み撃ち。

後方から迫り来ると同時に前方からも敵機が現れる。

あらかじめ制御室に辿り着いたらこうなるようになっていたんだろ
うな。

『クッ。万事休すか』

確かに状況的には厳しい。

だが、方法がない訳ではない。

「ウイングブースター展開」

背面に広がる六羽の翼。

「アルダート大尉。アルギス少尉。時間稼ぎをお願いします」

『どうするつもりだ？』

『・・・・・・』

「道がないなら道を作れば良い。俺が道を作ります。こいつで」

ライフルを示しながら断言する。

こいつならそれが出来る筈だ。

『分かった。任せておけ』

『・・・・了解』

「お願いします」

エネルギーをチャージするには時間が掛かる。

これ以外に方法がない以上、どうにかして時間を稼いで欲しい。
申し訳ないが、お願いするしかない。

「ミナトさん。ドッキングします」

『ええ。分かったわ』

少しでも早くチャージが出来るようにとヒナギクにドッキングする。

ガキンツ。ガキンツ。

その後、グラビティライフル同士をドッキング。

一対のグラビティライフルを一つに。
そのツイングラビティライフルを次は機体本体に接続。
今更ながら命名。グラビティバスターライフル。
こいつで道を切り拓く。

「チャージ開始」

フルチャージはしない。
機体を通るだけの大きさで良い。

「早く、早く」

こんなに時間が掛かっただろうか？
シミュレーションでは一切感じなかった焦燥感が胸を襲う。
気持ちの焦りが時間を引き伸ばす。
慌てても仕方ない。そう思いながらも、焦る気持ちを抑えきれない。

『・・・クツ。すまない』

ドカンッ！

「アルギス少尉！ クソッ！」

また一人、眼の前で人が死んでしまった。

『マスター！ これぐらいで充分です』
「分かった」

ようやくか！

フルチャージには程遠いチャージ量。

それでも、道を作るだけなら事足りる。
・・・アルギス少尉。
申し訳ありません。

「グラビティバスターライフル発射！」

通路なき壁に向けて発射。
道がないなら作れば良い。
漆黒の光が壁を破壊し続け、道を作り出していった。

「大尉！」

『了解！ 突破する！』

「ミナトさん。任せます」

『分かったわ』

アルダート大尉を先頭にアドニスがドッキングしたヒナギクが続く。
機体一機がギリギリ通れるかぐらいの大きさを強引に。
DFを纏いながらなら、これぐらい行ける筈だ。

「アザレア。間に合うか？」

制御室が中心部に近かったせいもあり、通り抜けるには時間が掛かる。

それでも一直線に通路を作った以上、これが最短ルート。
これ以上の早さは望めない。

『・・・ギリギリです』

ギリギリか。だが、それで充分。
間に合わない訳ではない。

『コウキ君！ 後ろ！』

ミナトさんの慌てた声。

・・・後ろ？

クソッ！ 諦めてなかったのかよ！？

後方から敵機がパイロットなし故の慣性無視な速度で迫って来ていた。

「これで・・・」

後方の天井を破壊。

これで少しは時間が稼げ

ドバンッ！

「・・・嘘だろ？」

崩れ落ちた天井で道を塞いだ筈。

それなのに、それすら強引に突っ込むだけで突破しやがった。パイロットがない。それがこんなにも大きいとは・・・。

「クソッ。どうすれば・・・」

このままではすぐに追い付かれてしまうだろう。

後ろから攻められる程に不利な事はない。

ただでさえ時間が押し迫ってるのに・・・。

『・・・先に行け』

「アルダート大尉」

『俺が足止めする。その間に駆け抜ける』

「しかし！」

『誰かが足止めせねば、全員が死ぬ』

「……………」

……犠牲が出るのは当然。

そう言ったのは俺じゃないか。

それなのに、ここで犠牲が出るのを拒んでいる。

アルダート大尉を犠牲にするなんて……と。

今まで眼の前で二人も死人を出して、犠牲を出しているのに。

矛盾。それでも、理屈じゃ納得できなくて……。

「いえ。俺が！俺が残ります！」

『駄目だ！』

「何故ですか！？」

『……貴官は証拠を掴んでいるのだろうか？』

「え？」

『核爆弾。あれは地球製だった。これは地球側が仕組んだ事なんだな……』

「…………大尉」

……気付いていたんですか？

『その証拠を掴んでいる以上、貴官こそが生き残るべきだ』

「しかし……」

『生きてその陰謀を潰してくれ。この作戦で死んでいった者達の為にも』

「…………アルダート大尉」

『行け！』

『マスター！残り時間が！』

クツ。悩んでいる暇はない。

「・・・クソツ。お願い」

『もう駄目よ。前からも』

・・・万事休す。

もう諦めるしか・・・。

『コウキ君』

『・・・コウキさん』

不安そうに俺を見詰めるミナトさんとセレス嬢。

・・・諦めるのはまだ早い。

せめて二人だけでも生かさないと。

「アザレア。ヒナギクに移れるか？」

ドッキングしている状態なら、ヒナギクと制御関係は同期している。

同一制御内ならアザレアは向こうに移れる筈だ。

『・・・可能ですが』

「それなら、このデータと共に移れ」

核爆弾の映像。核爆弾の起動コード。

それらをアザレアに記録しつつ、告げる。

『マスター。貴方は何を・・・』

「俺がいない間、二人の事を頼む」

『マスター！ 貴方も共に』

「いや。俺にはやらなければならない事がある」

『それならば、私も共に』

「だから、俺の代わりに二人を頼むと言っているんだ。お前だからこそ頼める」

『・・・マスター』

「必ず戻ってくる。だから、な」

『分かりました。必ずですよ』

「ああ。必ずだ」

生きようと足掻くさ。

当然だろ？

『コウキ君。何を考えているの？』

「・・・ミナトさん。セレスちゃん。俺を信じてくれますか？」

『当たり前じゃない。誰よりも信じてるわ』

『・・・信じています』

それなら・・・。

「このデータをナデシコに送り届けてください」

『えっ？』

「絶対ですよ。それじゃあ・・・」

生きるか死ぬか分からない危険な賭け。

失敗すればそのまま死に繋がる。

でも、これしか方法がない。

・・・頼むぞ。俺が抱える異常よ。

今だけで良い。信じさせてくれ。

「アザレア。DF最大出力」

『はい。マイマスター』

ヒナギクとのドッキングを解除。
グラビティライフルを腰に備え付け、両手をヒナギクの船体に触れさせる。

準備は整った。

後は・・・イメージするだけだ。

「・・・遺跡にアクセス。強制ボソソジャンプ準備。目標地点は月
基地周辺」

『ちょ、ちよつと、コウ』

「・・・ジャンプ」

強制ボソソジャンプ。

ヒナギクを一瞬にして、月周辺まで送り届けた。
ミナトさんとセレス嬢が無事かどうか、確認は出来ない。
だから、信じるしかない。

「ツウ・・・」

強制ボソソジャンプの代償。

割れんばかりの痛みが頭を襲う。

でも、立ち止まる訳にはいかない。

俺にはもう一人、逃すべき者がいるのだから。

ガンッ！

「グハッ」

背後から撃たれ、衝撃で身体が揺さぶられる。

まったく。こちらら頭が痛いんだ。
遠慮しろつての。

あまりの痛みに気が遠のく。
だが、まだまだ。まだ気絶するには早い。

『今のは……』

「大尉。危険な賭けですが、信じてください」

『……了解した。指示に従う』

流石は大尉。男前。

「DFを最大出力で」

『了解』

「遺跡にアクセス。強制ボソソジャンプ準備。目標地点は……」

あれだな。アレス隊の戦艦。

名前は知らないが、イメージなら出来る。

頭痛でイメージが曖昧だが、そこはまあ、気合で補完かな。

「……行きますよ」

『すまない』

「勝手に殺さないでください。俺はまだ諦めてませんから」

『そうか。ならば、貴官に感謝を』

「はい。……ジャンプ」

手を機体に当て、強制ボソソジャンプ。

……頼むから、生きててくれよ。

「……はあ」

二度の強制ボソソジャンプはやはり相当の負担だったらしい。
最早、気絶寸前。
でも……。

「逃す事が出来た。ひとまず及第点かな」

気絶しないよう必死に耐えながら、カウントを確認する。

「残り三秒。いやはや、やれば出来るじゃん。俺」

霞む視界で周囲を見渡せばびっくりな程、完全に包囲されている。
逃げ場ないじゃん。

「……死ぬのかな？」

不思議と怖くはない。

大事な人を助ける事が出来たから？

残された者達がどれだけ悲しむか知ってるのに。

結局は自己満足って事かな？

でも、いいや。それで……。

大事な人を助ける事が出来た。

それだけで本望だ。

「またいつか……」

どこかで会いましょう。

ミナトさん。セレス嬢。

閉じる視界。一面が暗闇に染まる。

死に直面したからか、走馬灯が脳裏を駆け巡った。

楽しかった事。辛かった事。

第九十六話（後書き）

さて、また過去に戻ろうかな。嘘です。冗談です。

突っ込み所満載。

自分で突っ込むのは怖いので、感想の方で弁解を。突っ込み所、どんどん突っ込んでください。

ちなみに、一つだけ先に弁解を。

最後にコウキ君もナデシコにジャンプしちゃえば良かったんじゃないか？

という疑問ですが、頭痛でそれ所じゃなかった。

以前は即行で気絶した強制ボソンジャンプ。

あれを二度も行っただけでかなりの精神力を消費しました。

既に頭痛でイメージも曖昧な中、必死にイメージを固定して。

固定できなければ、下手するとジャンプ事故ですからね。

三人を逃した後、ホッとさせたせいもあり、遂に痛みを負けて気絶。

さて、コウキ君の命運は如何に、という御話でした。はい。

・・・突っ込みはOK。（但しグサッと来ないものに限る）

第九十七話（前書き）

膠着する事態。

苦境、逆境。

そんな中をナデシコは進む。

光は彼らを照らすのか？

彼らの運命は・・・？

完全に追い詰められてますね。はい。

我らが主人公は離脱。

生か死か、今後が気になる所です。

・・・作者の台詞じゃないですね・・・。

第九十七話

「・・・予定より早い爆破だったな」

「誰かがあれを見たのでしよう。何もなければ予定通り。

もし、制御室に誰かが踏み込むなどの異常があれば、

あれらの爆発のカウントを早めるように設定してあります」

「証拠隠滅を図る為の目撃者暗殺。爆発に巻き込まれれば証拠も残せまい」

「解除しようとしてもその瞬間に爆発しますから。何者も隠滅工作からは逃れられない」

「全ての証拠は闇に葬られ、残るのはコロニー落とし未遂の事実のみ」

「後はその事実と共に改革和平派らを叩き潰すまでだ」

「しかし、あれだけの防衛網を突破しての到達とは・・・」

「さぞかし腕の良いパイロットなのだろうな」

「情報によればナデシコのパイロットを爆発前に命令で侵入させたとか」

「良くやってくれたな。あの男は」

「なるほど。証拠隠滅と共に邪魔でしかないナデシコの戦力を削れたという訳か」

「全てが都合良く進むな。幸先が良い」

「プロパガンダにでもしましょうか。自爆して地球を救ったとでも」

「そうだな。利用できるものはなんでも利用するべきだ」

「さあ、次の段階に進むぞ。我らの策が成るまで後少し」

「今から笑いが止まらんわ。アーンハッハッハ」

S I D E M I N A T O

「ん、んん．．．こ、ここ．．．は？」

今、何をしてたんだっけ？

こじはどこ？ あれ？ 何か忘れてるような．．．。

「．．．ミナトさん」

隣から私を呼ぶ声。

これはセレセレの声？

「．．．えつと、こじぶこじ？」

「．．．月軌道上です。月接触まで数日の位置にいます」

月軌道上。

．．．どうして、そんな所に？

私達は今までどこに．．．ハッ！

「セ、セレセレ。コ、コウキ君は！？」

「．．．反応ありません」

「．．．そっ」

あの時、私達はコウキ君に跳ばされて．．．。

「・・・ミナトさん。コウキさんはどこにいるんでしょう？」
「・・・分からないわ」

爆発寸前。賭けだと言って強制ボソソジャンプで私達は跳んだ。生きているという事は賭けに勝ったって事なんだろうけど・・・。その肝心のコウキ君の姿がない。

脱出に失敗した？

まさか・・・そんな事ないわよね？

だって、コウキ君にはボソソジャンプがあるんだもの。

私達以上に安全な脱出が出来た筈よ。

大丈夫。きっと無事。

・・・信じていいのよね？ コウキ君。

「でも、大丈夫」

「・・・ミナトさん？」

「コウキ君が死ぬ筈ないわ。あの子は何度も危機を越えてきた」

「・・・」

「・・・信じましょう。コウキ君を」

「・・・はい」

自分に言い聞かせてるだけ？

・・・そうかもしれない。

でも、やっぱり死んでると思えない。

だって、コウキ君は必ず帰ってきたもの。

どんな危機に陥ろうと必ず。

だから、コウキ君なら・・・大丈夫よ。

「うん。大丈夫。大丈夫よ」

「・・・ミナトさん」

「だから、今はやるべき事をやりましょう」

コウキ君が最後に渡してきたこのデータ。きつと、何か大きな意味がある。必ずナデシコに届けてくれって。そう言っただけのもの。だから、必ずナデシコに届けないと。それが今の私のすべき事。

「アザレアちゃん。コウキ君が送ってきたデータって・・・」

『マスターが突き止めたこの事件の証拠です』

「コウキ君が・・・突き止めた？」

『はい。核爆弾の起動データ、映像。それらから連合軍の仕業であると』

「・・・そう」

流石ね。コウキ君。

どれだけ追い詰められても確実に何かしらの成果を残すんだもの。

「これがあれば・・・」

真実を突きつけられる。

少なくとも、木連のせいではないと。

「それなら、早くナデシコに戻らないと」

「・・・はい」

運良く、というより、コウキ君のお陰で数日で月に接触できる。

勝手に向こうも近付いてくるけど、私達も月に向かえばもっと時間は短縮。

すぐにでも移動を開始しないと。

良かったわ。月が過ぎ去った後じゃなくて。月の公転速度を考えると、とてもじゃないけど追い付けそうにない。間違えてもすれ違わないようにしないとね。接触できなければ、次の接触までに二週間は掛かっちゃうんだもの。

「急ぎましょう」

コウキ君が暴いてくれた真実。一刻も早く伝えないと。

どこかで生きているであろうコウキ君の代わりに。必ず、ナデシコに。

S I D E M I N A T O

S I D E K A E D E

「今頃どうしてるのかしら？ あいつ」

良く分からない内にコロナー落としがどうだとか言って飛び出していったコウキ。

後からきちんと事情を聞けば、地球が大ピンチだとか。でも、大丈夫よね。

その為に、あいつが出向いたんだもの。不安もなければ、心配もしてないわ。

あ、べ、別に信頼してるとかそういう訳じゃないわよ。そこの所、間違えないでよね！

「それにしても、暇だわ」

今の私に与えられた仕事は日に一回の戦闘シミュレーションぐらい。後は特にやる事もなく、変わらない日々。

あ、もちろん、食堂の仕事はしてるわよ。本職だもの。コック。

戦闘もなく、基地内で待機しているだけで、なんか・・・物足りない？

ん〜。違うな。物足りないというか、なんというか・・・。

「こんな事してていいのかって事ですか？」

「そうそう」

皆が戦っている中、こんな無駄な時間ばかりを過ごしていて良いの
かなって。

・・・ん？ あれ？

「って、どうして貴方がここにいるのよ!？」

「いちゃいけませんか？」

「え？ ううん、そういう訳じゃないけど・・・」

イツキ・カザマ。

そういえば、彼女もコウキと仲が良かったわよね。

なんでも教官と教え子の関係だとか。

「隣、失礼しますね」

あ。返事をする前に座られた。

まあ、別にいいけど。

そもそもこの席も私の席じゃないし。

「ブリッジのパイロット席。私、あんまり使わないんです」

そのブリッジのパイロット席に座った途端にそう告げる彼女。

「私もよ。いつも食堂にいるし」

まあ、今みたいにボーっとしてる事は結構あるけど。

「私は気が抜けてしまつて。あ、悪い意味じゃないですよ?」

「そういえば、貴方って生粋の軍人だったわよね」

厳格な雰囲気慣れてる人間がここに来たら確かに気が抜けるわよね。

仕方ないと思うわ。

「ええ。偶に忘れてますが」

「そうね。軍人って感じしないもの。ナデシコも貴方も」

「そ、それはなんか複雑です」

難儀な人ね。

「コホン。他のパイロットの方々も落ち着かないようで」

「やっぱりコウキ達の事?」

「はい。やはり自分達も、という思いが強いようです」

「それは・・・」

誰だって他人任せにしたくないわよね。

それが仲間意識の強いナデシコなら尚更。

私だって出来る事ならコウキの手伝いがしたい。

ナデシコ皆でコウキ達の下に駆け付けたい。
でも、それを邪魔するムカつく奴がいる訳で……。

「でも、心配はしていません。コウキさんなら絶対に阻止してくれる筈ですから」

「随分と信頼してるのね」

え？ 同じような事を言った私はどうかって？
そんな事ないわよ。ええ。もちろん。

「名は知られていませんが、間違いなく彼も英雄ですから」

・・・それはまた大きく出たわね。

「どうして？」

「今の地球が戦えるのはコウキさんが開発したCASのお陰ですか
ら。」

彼がいなければ、もっと多くの犠牲がこの戦争で出ていたでしょ
う」

「それ程、CASって凄いの？」

私はIFS制御だからあんまり実感が沸かないのよね。

「ええ。クリムゾンのEOS以上の性能で、機体のOSの中ではダ
ントツですね」

「へえ。凄いのね」

知らなかったわ。全然。

「確かに見方によっては敵の戦力を向上させてしまったと映るかも

しません」

確かにそうよね。

実際、ケイゴ達はCASを使ってる訳だし。

「でも、それ以上に地球防衛に貢献しているんです」

「そっか。それで英雄か」

「はい。少なくとも私はそう思っています」

へえ。あいつが英雄ねえ。

「なんか似合わない」

「ふふっ。それは確かに」

英雄って柄じゃないもの。あいつ。

「でもさ、英雄だから信頼してるって訳じゃないんでしょ？」

「それはもちろんです」

「それじゃあどうして？ コウキならって思うの？」

「教官ですから。コウキさんは」

「教官ねえ・・・」

今の彼女の強さがコウキのお陰だとしたら信頼するのも頷けるか。

実際、私なんかより全然強い訳だし。

でも、教官だからっていうのもなんかなあ・・・。

「何より・・・」

「何より？」

「なんだかんだいってどうにかしてくれってそんな気がするんです」

「・・・不思議とね」

「はい。不思議と」

その気持ちは分からなくもない。

普段は頼り甲斐のない奴だけど、土壇場では殆どあいつのお陰で助かってる。

ピンチに強いつて奴かしら？

「それに、私もこの前知ったんですけど・・・」

「何を？」

「ナデシコパイロットで一番撃墜してるのってコウキさんなんです」

「え？ 嘘!？」

あのテンカワっていうエースパイロットやリョーコとかがいるのに？

「エステバリスとかだけではなく、ナデシコでのレールカノンなども含まれますが」

「そ、それにしあって、撃墜数ナンバーワンってのは凄いいじゃない」

エースパイロット以上の戦果ってどういう事よ？

それなら、コウキこそがナデシコのエースって事？

「はい。あまり目立たない、あ、これは失礼でしたね」

「いいわよ。目立たないし」

「・・・容赦ないですね」

事実は事実だもの。

「コホン。ナデシコパイロットに埋もれて目立ちませんが、

確かにコウキさんは一流のパイロットなんです。それも対複数に

おける」

「一対一はともかく混戦になったら強いって訳ね」

「はい。誰も気付いてないかもしれないかもしれませんが」

そりゃあ、コウキがエースだなんて誰も思わないわよ。

「どうしてそんな事を？」

「ふと気になって確認してみたんです。

ナデシコのパイロットってそれぞれに特化してるじゃないですか」

まあ、確かに。

私は特化してるというよりは万能型だけど。

・・・決して器用貧乏なんかじゃないんだから！

「それで、結局、どの分野に特化したものが戦場で強いのかなって」

「貴方は特化型というよりバランス型なものね」

私と同じ。

「はい。だから、余計気になって」

「そう。それで、結果としてコウキだったと」

「そうなんです。過去のデータを見る前は、

やっぱり前線に立つスバルさんやヤマダさんかなと思ってたんですが・・・」

「後はリーダーパイロットとか？」

「はい。間違いなくテンカワリーダーパイロットはナデシコ最強のパイロットですから」

確かにあれだけの高速機動に正確な射撃や接近戦といい、隙なんてまったくないものね。

何度か扱かれたけど、あれは地獄だったわ。本当に。

「でも、その最強のパイロットもコウキには敵わなかったと」

「はい。もしかしたら、トップスリーぐらいには入ってるかなと思
つてたんですが・・・」

「それでもトップスリー予想だったんだ」

「コウキさんの戦闘スタイルが個人撃破より多数撃破なので」

戦闘スタイルの関係か。

「二位のテンカワリーダーパイロットを大きく引き離しての一位で
した」

「へえ。それはまた」

本当に吃驚の事実。

「だからといってなんでも出来るという訳ではないのでしょうか・
」

「実績もあつて、何故か信頼できる。だから、大丈夫だつて？」

「そうですね。まあ、先程も言いましたが、何より精神的に頼りに
なるからです」

「ふうん」

そっか。意外と仲間から信頼されてるのね、あいつ。

「だから、私は何があつてもコウキさんなら」

シュインッ。

ん？

「どうしたんでしょう？ 険しい顔をして」
「……そうね」

突然やって来て険しい顔で周囲を見渡すミスマル艦長。

……何かあったのかしら？

「メグミちゃん」

「あ、はい」

「ナデシコ主要クルーをブリッジに集めて。

それと、全クルーにコミュニケで通信を繋ぐように」
「わ、分かりました」

……本当に緊急事態みたい。

いつもポヤ〜っとしている艦長があんなに鬼気迫った表情なんだもの。

「何があつたんでしょう？」

「……分からないわ」

「もしかして……」

コウキに何かあつた？

ううん。そんな事、ある筈がない。

あいつなら、なんでもなかったように笑って帰って来るに決まっている。

そうよね？ コウキ。

「・・・皆さん、集まったようですね」

眉を顰めた険しい表情の艦長。

さつきからずっとそんな顔をしている。

「どうしたんだ？ 皆を集めて」

「ようやく出撃か。待ちくたびれたぜ」
「いえ」

素なのか、あえてなのかは分からないけど、明るい口調で告げるリ
ョーコとヤマダ。

でも、それに対しても、艦長は変わらない表情で告げた。

「先程、改革和平派の者からアキトに教えてもらったコロニー落と
しについて聞きました」

「・・・どうなったんだ？」

「詳しい事は分かりませんが、落下は阻止。地球に被害は一切なか
ったようです」

「・・・そうでしたか。いやはや。安心致しました」

プロスペクター・・・だったかしら？

彼が安堵の表情で頷いた。何故かソロバンを手に持ちつつ。

「それなら、どうしてそんな暗いんだ？ 嬉しい事じゃねえのか？」

「ガイさんの言う通りです。艦長。もしかして・・・ミナトさん達
に？」

・・・コウキ達に何かあった？

・・・嫌な汗が流れる。

「いえ。ミナトさん達の事に関しても詳しい事は分かりませんでした」

安心・・・していいのかしら？

どうなったのかなんて分からない。

今、ここに無事で戻ってきているのかも。

「それなら、それ以外に何か気になる事でもあるのか？」

ゴート？とかいう、大男が問いかける。

「はい。コロニー落とし、被害はありませんでしたが、落下しかけたのは事実。」

それに対して、国民は不安を抱え、軍内では抗戦を訴える者が続出しているようです」

「ちょ、ちょっと待てよ。コロニー落としって連合軍の仕業なんだろう？」

「それでも、真実を打ち明けなければ、木連の仕業であると誰もが信じます」

「おいおい。マジかよ」

「連合軍の狙いはそれだったって事ね」

「汚いなあ。連合軍」

「それならよ、ルリ達が見付けたっていうデータを公表すれば・・・」

「確固たる証拠にはならないと考えられます」

「逆に連合軍内の機密データをハッキングしたとして捕まる可能性が・・・」

艦長と副長がそれぞれ告げる。

・・・それじゃあ向こうの思い通りじゃない。
そんなの、許せない。
でも・・・。

「きつと、コウキが何かしらの証拠を掴んでくるわよ」

だから、大丈夫。

「・・・そうだな。コウキの野郎ならやってくれるだろう」

「まあ、コウキならね」

「なんだかんだでやる奴だからな。あいつは」

「はい。大丈夫です」

「・・・やってくれるわよ」

「そうですね。マエヤマさんなら・・・」

「きつと証拠を掴んできてくれるぞ」

皆もそう信じてる。

信頼に込めない奴じゃないわ。あいつは。

「でも、その前に、ユリカ」

「あ、そっか」

その前に？

「もう少ししたら地球連合軍が演説を行うそうなんです」

「多分、コロナー落としの件だと思う」

「改革和平派としてもナデシコとしても注意深く見る必要があります」

・・・演説。

どんな言葉を、どんな表情で語るのか。
見させてもらおうじゃない。

『地球に住む皆さん。先日の事件を覚えているでしょうか』

「こいつは？」

「彼が地球連合軍最高司令官です」

「そして、反改革和平派の筆頭でもある」

・・・あいつが戦争を望む男。

『そう、地球にいる全ての国民が不安を抱き、恐怖を覚えたコロナ
ー落としての事です。』

連合軍の者達が総力を結集し、ギリギリで食い止める事が出来ま
したが、

もし落下していれば、落下地を中心に一つの国が消える程の被害
が予想されました。

自ら宣戦布告を行っているにも関わらず、このような仕打ち。

卑怯極まりない行為であり、とても人間の行う事だとは思えませ
ん。

このような行為を平然と行う木連という国を我々は信じて良いの
でしょうか？

答えは否。否、否、否。

火星の虐殺に始まり、このような人道に反する行い。

汚く、卑怯な振る舞いばかり行う木連を許していい筈がありません。
ん。

私は断固として彼らの罪を裁く。確固たる姿勢を持って、彼らを

断罪致します。

確かに人類同士、手を取り合う事が出来ればそれ以上の幸福はないでしょう。

しかし！　このような非道な行いを平気でする者達を同じ人類だとは思えません。

木星蜥蜴。その言葉が示す通り、彼らは人類ではないのです。

人の皮を被ったバケモノ。私はそうとすら考えています。

騙されてはいけません。このような事ばかりする彼らに私達と同じような人間性はない。

もし手を取り合ったとしても、その環境の違いから、

平気で人を殺したり、平気で盗みをしたりなど、

我々の常識が通用せず、非人道的な行いをする可能性があります。人間性の欠如。そこから発生する多くの事件。

今以上に事件が多発する様が今からでも容易に想像できるのは私だけではないでしょう。

同じ人類だから受け入れる。私はそうではないと思います。

共存できる生物だからこそ手を取り合える。

ですが、共存できない生物であれば、断固として受け入れを拒否するべきです。

愛する子供、愛する夫、愛する妻、愛する家族。

それらを失う事があっても良いと思えますか？

彼らを受け入れ、貴方達は不幸にならないと言い切れますか？

たとえ同じ人類でなかつと、共存しうる相手であれば受け入れましょう。

共に歩み、共に手を取り合うことで、我々の生活は更に便利になり、過ごし易くなる。

ですが、明らかに事件の要因となる彼らをどうして受け入れるのですか？

可哀想？　それならば、彼らとの戦争で家族を失った残された者達の嘆きと悲しみは？

同情？ 地球の人々を虐殺する彼らに同情する余地などありません。

皆様、もう一度よく考えてみてください。

和平を結ぶ。それは良いでしょう。

ですが、その後、彼らと手を取り合う事が果たして出来るのでしょうか？

常識も理念も違う。自らの罪を認めず、こちらの罪ばかり突き付ける。

私は再度訴えたい。

二度とこのような事がないように徹底的に排除すべきだと。

対等な立場であれば、何度もこのような危機が訪れます。

私はその度に皆様方が恐怖を感じるような不安に満ちた世界にはしたくない。

皆様が安心して暮らせるように多くの危機から皆様方を護るのが私達連合軍の仕事。

その第一歩と致しまして、私は彼らから貴方達を護りたい。

木連蜥蜴という人の皮を被ったバケモノから愛すべき国民である貴方達を』

・・・よくも言ったものね。

「自ら仕組んだ事でここまで言い切れるとは・・・」

「確実に悪としか言いようがないな」

「でも、国民は騙されるでしょうね」

「人の皮を被ったバケモノか。木連人を同じ人類と扱わないつもりか」

「もしくは手を取り合っても危険性しかないって」

「・・・どちらにしろ、コロニー落として不安を抱く者達にとっては共感しうる発言だな」

……どこまでも汚い人間だ。

『また、このコロニー落としで失われた兵士達の犠牲を忘れない為にも。』

このコロニー落としを阻止しようと命を落とした多くの勇者達。彼らは愛する家族、友、そして、何より愛する地球の為に命を捧げたのです。

彼らの犠牲を無駄にしてはならない。

コロニー落とし阻止作戦の時、私達は何の柵もなく協力し合いました。

世間では改革和平派と反改革和平派が争いを繰り広げていると、そう伝えられています。

それは確かです。ですが、私達は互いの主張を認めていない訳ではない。

どちらの主張する事も正しく、同時に間違っている。ちよつとした認識の違い。それでこのような争いにまで発展してしまつた。

私達のくだらない争いに皆様を巻き込んでしまつた。

その事をこの場を借りて謝罪したいと思います。大変申し訳ありませんでした』

……頭を下げた。

真摯なその姿。

事情を知らなければ、間違いなく騙されるわね。

『先程申しました通り、この作戦ではそのような柵もなく協力し合つたのです。』

改革和平派であろうと反改革和平派であろうと共に地球の為にと。

その中には改革和平派の代表であるミスマル氏が艦長を務めるナデシコのクルーもあり、

彼もまた、地球の為に未来ある命を捧げ、この地球を護りました。いえ、ハツキリ言いましよう。彼こそがこの愛すべき地球を救ってくれた英雄なのです』

・・・死んだ？ コウキが？

「嘘・・・よね？」

「・・・バ、バカな事言ってるんじゃないよ。あいつが死ぬ訳ないだろう？」

「そ、そうだよ。コウキが死ぬ訳ないじゃん」

・・・信じられない。信じたくない。

「そ、そうですよ。ミナトさん達が死ぬ訳ないです」

「こ、これも嘘だったのか？ ほ、本当に汚い奴らだな」

「ほ、ホントだよね」

「・・・コウキさん。貴方は・・・本当に・・・」

「イツキ！ 何、不吉な事を言ってるんだよ！ んなの嘘に決まってるだろ！」

「・・・」

・・・分らない。本当の事を誰か教えて。

コウキは・・・どうなったの？

『ナデシコが誇るエースパイロットの一人である彼。

彼はコロニー内で自爆する事によってコロニーを内部から破壊しました。

それによりコロニーが粉々になり、大気圏内で燃え尽き、落下を阻止。

・・・彼の犠牲がなければ、コロニーは地球に落下していたでし

よう。

彼こそがその身を捨てて、地球の為に命を捧げた英雄なのです。皆さん。彼の犠牲を忘れないで頂きたい。皆様が生きていられるのは彼のお陰です』

自爆？ コウキが？

「自爆してコロニーを破壊した？」

「や、やっぱり嘘だぜ。それだったらわざわざ殲滅射撃仕様で行った意味がない」

「そうだよ。内部に侵入しないで外から撃つちやえば良いんだから」

そ、そうよ。内部から破壊なんてわざわざしないでいいんだもの。外からバーンッ！ ってやれば。

「・・・それが出来ない状況だったら？」

「・・・イネスさん。どういう意味ですか？」

「彼の事よ。味方が先に侵入したとか、中に人が残っていたとか。そんな状況であつたら、外部から撃たず、内部に向かう事は簡単に想像できる」

・・・確かにそう。言ってる意味はよく分かる。でも・・・。

「それなら、貴方はコウキが死んだって認めるの!？」

私は信じないわ！ そんな事。

「私に当たらないで」

「・・・(キッ!)」

「睨んでも駄目。情報が少な過ぎて何も分からないんだもの」

「コウキは死んでない!」

「冷静になりなさい。私だって死んでいるとは思わないわ」

「・・・」

「彼には秘密兵器がある。少なくとも、自分だけなら逃げられる筈」

「・・・ボソソジャンプ。」

コウキのみが許された脱出方法。

「・・・でも、その時にミナトさんやセレスちゃんがいたら話は別です」

「そうね。自分だけ生き残るぐらいなら死を選ぶ。彼ならそうするわ」

「艦長もイネスさんもどうしてそんな事を言うんですか!？」

メグミが叫ぶ。

人一倍仲間思いだから、人一倍寂しがり屋だから。

仲間の死が耐えられないんだ。

「・・・それは私も同じ。」

死んでいない。そう言い続ければ心が軽くなる。

死を認めなければ・・・逃げていれば、ずっと現実を直視しなくて済む。

「それは・・・」

「・・・人なんて簡単に死んじゃうのよ。簡単にね」

「・・・マエヤマさんだけ死なないなんて事はありえないんです」

不死身の人間なんていない。

コウキだって、ナイフで刺されれば死ぬ。

銃で撃たれば、死んでしまうんだ。
もちろん、爆発に巻き込まれば・・・死ぬ。

『彼の、ナデシコパイロットの死が彼女を変えました。
改革和平派の代表を務めるミスマル代表からしてみれば仲間を失
ったという事。』

父を暗殺され、仲間を殺された彼女は、遂に木連に対しての抗戦
を決意したのです』

え？ 艦長が？

「艦長。本当なんですか!？」

「言ってますせん！ 私はそんな事、言ってますせん!」

何・・・これ？

どういう事？

艦長がそんな事を思う筈も言う筈もない。

そもそも今さっきコウキの死を知ったばかりなのに・・・。

「・・・もしや」

「イネスさん？」

女博士が顎に手を当てて、考え込む。

もしやってどういう意味？

「・・・ハッ！ 艦長！ 急いで出航の準備を!」

「ど、どうしたんですか？」

バツと顔を挙げて焦るように叫ぶ女博士。

珍しい。いつも冷静な女博士が。

・・・それ程、慌てるような事が・・・。

「これは演出よ。艦長が抗戦を考えてもおかしくない状況を作り上げた上での。」

これで改革和平派も反改革和平派も徹底抗戦という一つの意思で統一できる」

『辛かった事でしょう。悲しんだ事でしょう』

「でも、私がきちんと皆さんにお話すれば・・・」

『ですが、その悲しみを乗り越えて、彼女は立ち上がった。彼らの思いを受け継ぐ為に！』

「・・・もう遅いわ。それが出来たらどれ程良かった事か」

『さあ、皆さん。我々も彼女に続きましょう！ 彼らの死を無駄にしない為に』

「え？」

『立ち上がる時が来たのです！ 彼女のように！』

「宣言は終えた。これでもう貴方は用済みなの。後は・・・」

後は？

『地球人よ！ 立ち上がれ！ 我らが地球を護る為に！』

「いらぬ駒なんて捨ててしまえば良い」

『地球人よ！ 立ち上がれ！ 卑劣極まりない木連を倒す為に！』

「なッ！？」

『今こそ立ち上がる時だ！ 家族を、友を失った者達よ！』

「たとえ貴方達を殺しても、ここは月。如何様にも出来る。

たとえばナデシコだけで特攻したとか、いくらでも理由付けが出来るのよ」

『これ以上犠牲者を出さない為に！』

「そ、そんな事は・・・」

『我らが愛する地球を護る為にも！』

「ありえない？ ううん。ありえるの。

忘れてない？ 今現在、月基地の最高責任者が誰なのかを？」

月基地の最高責任者・・・あのいけ好かない男。

あいつは・・・反改革和平派！

「・・・・・・・・」

『木連は滅ぼすべきなのだ！』

「全ては計算されていた事なのよ。ナデシコを監禁し、貴方の名声を利用する為に」

『木連がいれば、更に悲しみは、憎しみは深まる一方である！』

「そ、それじゃあ・・・」

『さあ、立ち上がれ。護るべき者の為に！』

「そう。私達はもう」

『ナデシコ。聞こえるか？』

「包囲されているのよ。連合軍によって」

『貴様らは完全に包囲されている。大人しくしててもらおう』

「・・・詰みね」

『・・・皆様にも覚悟を決めて頂きたい。』

我々はこれ以上の悲しみを生み出さない為にも憎き木連を討ち滅ぼします。

願わくば、皆様に背中を押しして頂きたい。我らは皆様方の矛であり盾なのだから』

それからあつという間だった。

オペレーター不在のナデシコ。

操縦士もいなくて、身動きが出来ない状況で包囲された。

基地内という閉ざされた空間で。

強行突破も出来ず、あらゆる方向から艦砲を向けられたら抵抗できようもない。

修理中と言われていたナデシコの指揮下にあるグラジオラスでさえ、威嚇射撃してくる始末。

・・・国民に対して何の弁解も出来ぬまま、私達ナデシコクルーは拘束されてしまったの。

憎き木連ではなく、憎き地球連合軍の陰謀によって・・・。

S
I
D
E

O
U
T

第九十七話（後書き）

・・・やりすぎたでしょうか？
いや、これぐらいは・・・うん。

しかし、読者様から指摘された通り、軍人が好き勝手にやり過ぎです
すね。

たとえば、演説のシーンで隣に連合政府代表とかがいれば、
政府も同意見なんだなと捉えられる訳ですから、違和感はないと思
います。

私もどうしようかなとは悩んだんです。

本来であれば、ここで政治家の一人や二人を登場させようかなとも
しかし、ここで登場させると政府自体も反和平となる訳で。

今後の都合が悪くなるなと考えてしまった訳ですよ。

・・・軽くネタバレが入ってる気もしますが・・・。

コホン。やはり政治や軍事というのは難しい。

もうちよつと勉強して書き直したいとすら思っています。

ですが、出来る事ならば、このままの設定で貫きたい。

今後、ありえないなと思う場面が多々あると思いますが、ご勘弁を。
もちろん、指摘は大歓迎です。

頂いた指摘を今後や次の作品に活かしたいと考えていますので。

出来るだけ、違和感のない現実味のある世界観にするつもりですの
で、

どうか、これからも応援よろしくお願いします。

第九十八話（前書き）

うん。

思った以上に筆が進まない。

エピソードまで一直線だと言いつつ、

遅くなってしまった私をどうかお許し下さい。

何故かここにきて筆が止まる始末。

書きながらああでもないこうでもないと言いつつ首を捻り続けて……。

ようやくの完成です。

なお、今回は繋ぎの話。

第九十八話

S I D E M I N A T O

『我らは皆様方の矛であり盾なのだから』

・・・よくもまあ、こんな嘘を・・・。

「・・・許せません」

「ええ。許せないわ」

コウキ君を利用した事。

コウキ君を勝手に利用した事。

自らが仕組んだ事をあたかも犠牲者振った事。

その全てが許せない。

彼らの犠牲を無駄にしない為というのなら、

彼らの思いを受け継ぐというのなら、まず連合軍の膿みを罰するべきだ。

貴方に彼らの事を語る資格はない！

「・・・一刻も早くナデシコに合流しないと」

『はい。マイマスターの願いを叶える為に』

「ええ。必ず、真実を曝け出してやるんだから」

彼らの陰謀を根本から潰してやるんだから。

それにしても……。

「お陰で助かったわ。アザレアちゃん」

『いえ。マイマスターの願い故』

ナデシコに向かう道中、突然アザレアちゃんが通信を寄越した。

何かな？　と思って聞き返すと、連合軍最高司令官の演説を教えてくださいました。

お陰でこうして地球連合軍の陰謀を知る事が出来た。

今の地球圏では月軌道上ぐらいまでなら情報ネットワークが構築されてお

このような地球で放送されているものでも地球周辺にいれば受信する事が出来る。

アザレアちゃんはコウキ君の姿から学び、常に情報を集めるようにしているそうで……。

流星はコウキ君のパートナー。とっても良い子。

「セレセレ。私達がコウキ君の意思を受け継ぐのよ。

コウキ君が安心して私達の所に戻って来れるように」

「……はい」

コウキ君は絶対に死んでいない。

でも、何かしらの事情で今はまだ戻って来れない可能性もある。

だから、私達がコウキ君の代わりに役目を果たす。

それがコウキ君からデータと願いを託された私達の義務。

「さあ、もつそろそろよ」

合流しようと急いで来た甲斐もあり、計算上では三日後にも月と接触できる。

後はこのデータをナデシコに届けて、全ての真実を白日の下に晒すだけだ。

「覚悟してなさいよ」

悪巧みして罰せられない者なんていないんだから！

「見えてきたわよ」

三日が経った。

しっかりと休息を挟んでの帰還。

慌てたって仕方のない事なんだから、冷静になってしっかりと準備を整えておく。

これが大事なんだって、私はコウキ君に教わったの。
コウキ君はどれだけ危機に陥っても、慌てずにしっかりと対処していった。

焦った所で仕方がない。

だったら、出たところ勝負でもいけるよう、しっかりと準備をしておくべきって。

だから、ちゃんと休んだ。

これから忙しくなるだろうから、その分も含めてゆっくりと。

その分、アザレアちゃんに負担が掛かってしまったけど……。

今度、きちんと恩返しするから許してね。

「さて、まずは帰還の報告をしなくちゃね。セレセレ。回線開いて」

「……はい」

地球での演説を聞いて、ナデシコとしては動き出した所よね。艦長が抗戦を決意するなんて事はありえないし。

さっさと偽りであると伝えたい筈。

でも、私とセレセレが不在で動きたくても動けない状況。

データを渡すって言うのもそうだけど、どちらにしろ、早く帰らなくちゃ。

『こちら月面基地。所属と目的を述べよ』

軍施設だけあって堅苦しいわね。

サツキミドリコロニーの通信士とは大違い。

「ナデシコ所属の揚陸艦ヒナギクが基地内のナデシコに合流する為に」

『了解。しばらく待っている』

急いでるから、出来ればパツと通して欲しいんだけどなあ。

『ミナト様』

「ん？ どうしたの？ アザレアちゃん」

『隙を見せないようにご注意ください』

「え？」

どういう意味？

『マイマスターはこう教えてくれました。警戒を怠ってはならない。いつ如何なる時でも周囲から情報を集め、最善は無理でも次善策が取れるようにと』

「コウキ君がそんな事を・・・」

らしいといえはらしいし、らしくないといえはらしくない言葉ね。

『私達はマスターの思いを必ずナデシコに伝えなければなりません。ナデシコに着くまでは何があっても気を抜かないようにお願いします』

「でも、ここは同じ連合軍内よ？」

『それでもです。同じ連合軍内とて絶対的な味方とは限りません』

「・・・そう。分かったわ。警戒しておく」

『過ぎた事を申しました。お許しを』

「うづん。ありがとう。そうよね。気を抜いちゃいけないわよね」

同じ連合軍内でも反改革和平派という敵対組織がある。

今回の件だって、その反改革和平派の陰謀だもの。

油断なんて絶対にしちゃ駄目。駄目、絶対。

『許可が下りた。こちらの指示に従ってくれ』

「了解」

言葉通り、誘導される。

このまま行けば、すぐにでもナデシコと合流できるんだろうけど・・・。

油断しちゃ駄目。そうよね？ アザレアちゃん。

「・・・セレセレ。いつでも対応できるようにね」

「・・・はい。ミナトさん」

誘導されたまま、基地内の通路をゆっくりと進む。

月面基地は幾つもの戦艦を格納できるだけあって、実は結構広い。

そんな中、ナデシコはたくさんある格納庫の内、奥でもなく手前で

もなく、
所謂、基地内部における中間の位置にある格納庫に護衛艦と共に格納されている。

それで、今はそこに向かっていている途中なんだけど……。

「なんか不思議なくらい静かね」

普段であれば、破損部の修理とか何かでかなり五月蠅い基地内。それなのに、何故か今日は妙に静か。

時間帯的な問題？ でも、今はそんな特別な時間帯でもないし。……なんだかますます怪しくなってきたわ。

「セレセレ」

「……いつでも反転、加速できます」

「うん。いざとなったら独断で頼むわよ」

「……はい。アザレア。いざという時はお手伝いしてください」
『はい。お母様』

逃げる準備は万端。
後は瞬時の判断力。

「………」

まだ焦る時ではないわ。

もしかしたら、素直にナデシコと合流できるかもしれないもの。

「……着いたわ」

眼の前にはナデシコと護衛艦二隻。

『ナデシコの前で一度着地しろ』

通信士からの命令。

でも、それを了承する理由もない。

「いえ。この艦は直接ナデシコ内に着艦できるように造られています。問題はありません」

『……それでもだ。着地しろ』
「拒否します」

『……逆らおうというのか？』

「逆らうも何も。私は間違った事を言ってますん」
『……』

頑なに着地を要求してくる通信士。

……これは本格的に危なくなってきた。

「……セレセレ。ナデシコに通信を」

「……は」

『勝手な真似をするな！』

「ナデシコ所属としてナデシコに報告する義務があります」
『クッ。もういい。やってし』

やっぱりー！

「セレセレ。反転と同時に最大加速。後は私がやるわ。

セレセレはDFとレールカノンの制に集中して！ 必ず突破するわよー！」

「……了解。アザレア」

『分かりました。お母様』

バンッ！ バンッ！ バンッ！

反転と同時に視界に映るステルンクーゲルの壁。
しかも、遠慮なく撃ってきた。

「強引に突破するわ。少しきついかもしれないけど、我慢してね」
「・・・はい」

バンッ！ バンッ！ バンッ！

『迎撃します』
「お願い」

ドウビューン！ ドウビューン！

グラビティバスターによる迎撃。

そして出来た穴に向かって強引に突っ込む。

「・・・ミナトさん」
「何かしら？」

会話してる余裕なんてないわよ？

「・・・ナデシコへ通信を試みましたが反応が返ってきませんでした」

「それじゃあ・・・」
「・・・はい。今のナデシコは無人です」

それなら、クルーの皆は今頃・・・監禁されてるか、殺されてるか。

「・・・嫌な想像しちゃったじゃない」

「・・・え？」

「なんでもないわ」

流石に殺してはいない筈。

それなら、どこかで拘束されていると見て良いでしょうね。

「ちょっと集中するわね。セレセレもセレセレの仕事をお願い。

お話は無事に脱出してからにしましょう。失敗する訳にはいかな
いものね」

「・・・はい。分かりました」

「うん。おし。行くわよおおお！」

突破。突破。突破。

いつも戦艦を操ってる私が、この程度で屈する訳ないでしょ！
戦艦じゃギリギリの狭い通路でも、ヒナギクなら充分過ぎるぐらい
広いんだから。

縦横無尽に駆け回ってやるわ！

バンツ！ バンツ！ バンツ！

「甘いわよ」

狙いも甘ければ威力もない。

避けれるものは確実に避け、後はDFで弾く。

ヒナギクのエネルギーを甘く見ないでもらいたいわ。

「アザレアちゃん。あそこ！」

『了解。グラビティバスター発射』

私が指し示した場所に向かって砲撃を放つアザレアちゃん。
これで・・・道が拓けた。

「最大速度。全力で突破するわ」

「・・・了解。最大加速。DF最大出力」

「行つけえええ！」

立ち塞がる壁を突破する。

これで。。。

『ミナト様！ 前方に隔壁が！』

「クッ」

急停止。どれだけ頑丈か分からない以上、闇雲に突っ込む訳にはい
かない。

「・・・あ」

・・・急停止したのがまずかった。

次々と隔壁が閉じられ、私達は一つの空間に敵機と共に閉じ込めら
れてしまう。

・・・基地から逃がさないつもりね。

でも、そこまで私達に固執するという事は・・・。

「今、この基地には隠したい何かがある」

後ろ暗いからこそこつまで拘束に拘る。

・・・それなら、誰かに助けを求めて、この基地を丸裸にしてやる
うじゃない。

その為にもまずは強引にでもここから脱出しないと。

いいかしら？

私はこんなん諦める程、弱い女じゃないんだからね！

『追い詰めたぞ。観念して降伏しろ』

追い詰めた？ 降伏しろですって？

「寝言は寝てから言いなさい。

アザレアちゃん。ディストーションスピア展開」

『ディストーションスピア展開します』

前方に現れる鋭く長いヒナギクの矛。

これで隔壁ごと突破する！

「行くわよおお！」

ヒナギクを中心にDFを最大出力で展開。

更に突き出るスピアにDFを纏わせて、最大速度で隔壁に突っ込む。

『なっ！』

隔壁を貫き、そのまま突破。

だが……。

『甘い！ それだけではないぞ！』

再び現れる隔壁。

恐らく、向かう先全てに隔壁を展開しているのだろっ。

徹底的に脱出を阻止する為に。

でもね、それって命取りなのよ？

「隔壁で閉じられている方が出口。いくらだって突破してやるわ」

隔壁こそが私達の導き。

隔壁がある方向に向かえば私達は脱出できる！

「立ち塞がったって無意味よ。アザレアちゃん」

『グラビティバスター発射』

隔壁を突破しても敵機は立ち塞がる。

でも、最早私達の勢いは止められない。

立ち塞がる敵機はグラビティバスターで破壊し、

立ち塞がる隔壁はデイストーションスピアで貫き、突破する。

『に、逃がすな！ 絶対に捕まえるんだ！』

焦りの声。

随分と必死ね。

でも・・・もう遅いわ。

『ミナト様。後一つです』

「OK。突破するわ」

ドンッ！

隔壁突破。

視界に映るは漆黒の間。

「ふふつ。道案内ご苦労様」

誰だか分からない通信相手さん。

「まずはこの場から離脱。充分距離を取ったら今後の事を話し合いますしょう」

「・・・はい」

『了解』

それからそこまで苦労しなかったわ。

私達は捉えようと敵が必死に追ってきたけど、ヒナギクの最大速度には敵わない。

それに、エンジンが違うもの。

ヒナギクが搭載しているエンジンは相転移エンジン。

半永久的にエネルギーが配給されるヒナギクに追い付く事など不可能に近い。

短期的にも、長期的にもヒナギクが負ける要素はないのよ。

残念だったわね。月基地の最高司令官さん。

さて、覚悟しなさいね。次は私達が攻める番よ。

「・・・これからどうしましょう?」

月基地は敵の支配下。

地球に戻るにしたらって時間が掛かり過ぎる。

そろそろ積み込んでおいた物資にも不安が出てきたし。

・・・今、私達が頼れるのは・・・。

「アレス隊。彼らを頼ろうと思うわ」

唯一、伝手があるのは彼らのみ。

そして、頼りになるのもまた彼らのみ。

彼らも確か改革和平派の一員だった筈。

それならば、ナデシコ奪還に協力してくれるだろう。

「アレス隊がどこを基地にしているか分かる？」

「・・・調べてみます」

「お願いね。セレセレ」

彼らの名前は知っていた。

でも、彼らと月面基地で会った事はない。

それなら、彼らは私達と拠点が違うんじゃないのかって。

そう思ったの。

いくら月面基地が大きかろうが宇宙にいる連合軍全てを格納できる
とは思えないし。

「・・・判明しました」

「どう？ どれくらいで辿り着ける？」

「・・・早くても一週間は・・・」

「・・・そう」

・・・そうよね。

アレス隊はコロニー落とし阻止作戦には早い段階で参加していた。

要するに、あの作戦ポイントに近い場所に拠点があったって事。

それなら、地球を挟んで反対とまではいかないけど、かなり遠い距離にある。

確かに彼らなら心強いが・・・時間が掛かり過ぎるのも・・・。

「・・・でも、連絡は取れます」

「え？」

「・・・衛星ネットワーク。それを掌握すれば・・・」

衛星ネットワーク。

地球周辺であれば、地球上と殆ど変わらない環境で様々なデータを閲覧できるシステム。

地球と月の間での通信もこれを利用している訳で・・・。

これを利用すれば、たとえ地球を挟んでの真逆であるうと通信が可能になる。

「それは無茶だったり、凄い負担だったりはしない？」

「・・・大丈夫です。問題ありません。チヨチヨイのチヨイです」

「そう。お願い・・・できる？」

「・・・任せてください」

頼もしいわね。セレセレ。

「・・・通信可能です」

「お願い」

「・・・はい」

セレセレのお陰でアレス隊と連絡が取れる。

後は今の状況を伝えて、協力を仰ぐだけ。

『この通信コードは・・・ヒナギクか!？』

「アルダート大尉！」

通信を開くと同時に画面一面に映し出されるアルダート大尉の姿。良かった。生きてたんだ・・・。

『貴方は確か・・・』

「はい。作戦時にヒナギクの操舵士を務めていた者です」

『それでは、あの者も?』

・・・コウキ君の事よね?

「いえ。まだ無事を確認した訳ではありません」

『・・・そうか』

確かにまだ無事かどうかは分からない。

でも・・・。

「しかし、コウキ君なら大丈夫です。絶対に生きています」

『・・・そうだな』

だから、今はそれよりも・・・。

「突然の通信。申し訳ありません」

『いや。こちらとしても助かった。貴官らと話がしたいと思っています
たからな』

「ありがとうございます。早速ですが、本題を」

『ああ。うちの艦長にも聞いてもらうが、いいか?』

「はい。大丈夫です」

むしろ、好都合。

『・・・』

うわっ。以前見たプロフィール通り、凄い美人。

キリツとした凜々しい表情には貫禄すら感じるわ。

『まずは貴官らに感謝を』

「え？」

と、突然、どうしたっていうの？

頭を下げられる理由が分からないんだけど・・・。

『貴官らのお陰でアルダートが戻ってこれたと聞く』

「私達のお陰？」

『うむ。そうであろう？ アルダート』

『艦長。詳しい事は後ほどに。今は・・・』

『そうか。すまなかった。して、本題とは？』

「あ、はい」

よ、よく分からないけど、今はスルー。

後で聞かせてもらいます。

「私達に手を貸して頂けませんか？」

全ての真実を明かす為に。

そして、その第一歩として、ナデシコを解放する為に。

『ふむ。アルダート。もしか・・・』

もしか？

『それは月面基地に拘束されているというナデシコの事か？』

え？ ど、どうしてそれを？

『その顔は真のようだな。疑惑が確信に至った』

「な、何故その事をご存知で？」

『先日、二日程前の事だな。突然我々宛に謎のメッセージが届いた』

「謎のメッセージ？」

『ああ。救援求む。ナデシコ、月面基地にて拘束、と』

端的だけど、今の状況を確実に示している。

これが二日前に届いた？

それじゃあ、私達よりも早く気付いた誰かがいるって事？

『無論、最初は何の冗談かと思った。だが、あの演説の後だったからな』

「連合軍最高司令官のですか？」

『ああ。幾つか疑問の残る演説だった。』

真偽を確かめようとミスマル代表に通信を求めたのだが、

何故か分からないが、月面基地から一方的に拒否されてな。

もしや、これは真実ではないかと沸々と疑問が湧いてきたのだ』

『そこで我々は準備を整え、月面基地へと向かっていた。』

貴官らの通信が来たのはそんな時でな。

見覚えのある通信コードでもしやと思って回線を開いたのだ』

「そ、それでは、既に近くに？」

『昨日、拠点より出航し、最大速度で現在向かっている。』

残念ながら、すぐには行かないが、こちらも全力を尽くそう』

「ありがとうございます！」

昨日から出発しているのなら、私達の想定より何日も早く月面基地に舞い戻れる。

『早速だが、貴官らにも合流して欲しい。我々の通る予定コースを』

送ろう』

『そのコースに従い、我々に合流して欲しい』

「はい。お願いします」

『詳しい事は合流してから話そう。では、待っているぞ』

プツンッ。

「セレセレ。運が良いわ。アレス隊がこちらに向かってきてくれるって」

「・・・はい。これで逸早くナデシコを解放できます」

「ええ。でも、謎のメッセージって何なのかしらね？」

「・・・分かりません」

好意的なものなのか、それとも、罠に嵌める為のものなのか？

状況が状況だけに、安易には信じられない。

でも、助かった事は事実・・・。

とりあえず、今回だけは素直に感謝しよう。

「セレセレ。それじゃ」

「・・・コウキさん・・・」

・・・そっか。心細い・・・わよね。

セレセレは本当にコウキ君が大好きだから。

かくいう私も心細くて・・・。

不思議ね。コウキ君がいなくてもこんなにも心細いなんて。

「セレセレ」

いつもコウキ君がしているように、セレセレを抱き上げる。

寂しそうな表情は見過ごす訳にはいかないでしょ？

「大丈夫よ。コウキ君なら、すぐに笑顔で戻ってきてくれるわ」

「……でも……」

「大丈夫」

「……はい」

心細いのは、寂しいのは私も同じ。

でも、セレセレの前で弱い自分を見せる訳にはいかない。

もし、セレセレがいなかったら、嘆き悲しんでいたかも……。

ある意味、セレセレのお陰で心を強く持っているのよね。

「……早く帰ってきなさいよね」

ここに悲しんでる家族がいるんだから。

女の子を泣かせるなんて最低なんだからね。

分かってる？ コウキ君。

寂しさを紛らわすように、私はずっとセレセレを抱きかかえたまま

一日を過ごした。

私と同じようにセレセレも寂しさを紛らわせてくれたらなって思いながら……。

それから数日後、ようやくにしてアレス隊と合流する事が出来たの。

S I D E O U T

第九十八話（後書き）

最早何も言つまい。

第九十九話（前書き）

久方ぶりの投稿。

大変遅くなって申し訳ないです。

それでは、どうぞ。

第九十九話

「……ルリちゃん。ラピス。地球の情勢はどうなってる？」

「……完全にやられました」

「和平派、抗戦派の割合が7：3から4：6に変わった」

「過半数が抗戦派……という訳か」

「今後も変わっていくでしょう。悪い方向に」

「軍内のみならず国民すらも抗戦を訴えるか……」

「コロニー落としの恐怖が抗戦意識を高めたのでしよう」

「クツ。コロニー落としを阻止した所で何も変わらなかったという事か」

「コロニー落としの為に軍が動いた。その決定的事実だけあれば良かったようです」

「軍が動けば未遂でも事実。コロニー落としは国民の心に深く刻まれた」

「落下していれば一瞬で多くの命が失われました。その恐怖は簡単に払拭できません」

「クソッ。それならば、コウキの犠牲はどうなる！？ あいつは自らの命を……」

「……コウキさん。本当に報われませんね。」

「和平の為に命を落としたのにそれすらも抗戦派に利用されるとは」

「私はコウキが死んだとは思えない」

「……ラピス？ だが……お前も知っているだろう？」

「そうです、ラピス。私と貴方で世界の隅々まで調べたではないですか」

「そう、確かに調べた。私とルリの二人掛かりで」

「己惚れるようですが、私達二人に調べられないような事はこの世にないと思います」

「そうだ。二人で探して見付からなかった以上、コウキが生きている事は」

「私達とコウキは同等」

「え？」

「私とルリが全力で探しても、コウキが全力で隠したら、見付かるかどうか分からない」

「・・・それなら、コウキが自らの存在を隠している？」

「・・・(コクリッ)」

「し、しかし、何故そんな事をわざわざ？」

「・・・分からない。でも、コウキに何かしらの考えがあるのかも
しれない」

「・・・やはりそれは希望的観測だ。ラピス」

「アキト・・・」

「俺とて生きていて欲しい。だが、爆発のシーンは二人も見ただろ
う？」

「・・・」

「・・・」

「あの中に突入した事は事実。」

「そして、あの爆発だ。到底逃げ延びる事など出来んよ」

「・・・でも、コウキにはボソソジャンプがある」

「それも駄目だ。ラピス」

「あの場にはミナトさんやセレスもいました。」

「コウキさんが二人を見捨てて逃げるなんて事は・・・」

「・・・それなら、その二人が生きていたら信じる？」

「え？」

「どういう事だ？ ラピス」

「こつも簡単にコウキが死ぬ訳がない。コウキなら必ず切り札を取
つてある筈」

「……………」

「報道で知らされたのはコウキの死のみ。何故、二人の事は報じられなかった？」

「必要なのはコウキさんの死からユリカさんの決意を連想させる為だった筈です」

「ユリカが意思を曲げる訳がない。あれらの報道は全て嘘だろう」

「そう、その為にコウキの死を利用した。でも、別にコウキだけじゃなくていい筈」

「ミナトさんやセレスの死が報じられてもおかしくなかったって事ですか？」

「むしろ、報道されるべき。それなのに、コウキのみだった。という事は……………」

「ミナトさんやセレスの生死は確認されていないという事か」

「本来であればそれはおかしい。コウキが死んだのなら二人も死んでいる筈。」

逆に言えば、共にいた二人の生死が確認できていないならコウキの生死も確認できない」

「それで二人が生きていたら……………」

「爆発した所も見た。突入する所も見た。偽造もされていない。でも、それが全てじゃない」

「……………」

「……………」

「絶対に生きている。私達はコウキの強さを知っている筈」

「……………そうだな」

「はい」

「だから、信じる。コウキは生きてるって」

「……………分かりました。信じましょう」

「……………ルリ。うん」

「生きているか、死んでいるか、分からない。それならば、生きている事を信じましょう」

「・・・そうだな。コウキがそう簡単に死ぬ訳がない」
「・・・アキト。うん」
「はい。だからこそ、私達は私達のすべき事を」
「コウキの思いを無駄にしちゃ駄目。」
「コウキが帰ってきた時に全てが解決してるぐらいで良いと思う」
「その通りだ。ラピス」
「今、私達がすべき事は・・・」
「抗戦に傾いた意識を和平へ再び傾ける事」
「その為に私達が出る事は・・・」
「全てを白日の下へ晒す。それが反撃の始まりだ」

S I D E M I N A T O

「アレス隊旗艦夕顔級戦艦アマゾネスへようこそ。歓迎しよう」
「は、はい」
「私がこの艦の艦長を務めるアルメイラ大佐である」
「改めて、アレス隊の機動部隊の隊長を務めるアルダート大尉だ」
「ナデシコ操舵士のハルカ・ミナトです」
「・・・ナデシコサブオペレーターのセレス・タイトです」

アレス隊と合流。

出迎えにわざわざアルメイラ艦長とアルダート大尉が来てくれて・・・。
。。
なんとというかVIP待遇？
いや、逆にそれ程重要な事って事かも。

「早速だが、付いて来て欲しい」
「はい」

艦長であるアルメイラ大佐に先導されながら、艦内の廊下を進む。
確か夕顔級のアマゾネスだったっけ？

やっぱりナデシコと比べると人員の多さが目立つかな。

まあ、実際はナデシコの方が特別なんだけどね。

「狭くて申し訳ないが、当分はこの部屋で過ごして欲しい」
「ありがとうございます。わざわざ部屋を用意して頂いて」

ナデシコのように快適な空間とはいかないだろうけど、我慢我慢。
私達は本当の意味で軍艦にいるんだから。
これもナデシコこそが例外って奴。

「うむ。ヒナギクの修理が終わるまでだ。それ程時間は掛かるまい」
「ヒナギクまで・・・ありがとうございます」
「構わない。しかし、ヒナギクの仕様書を見せてもらったが・・・」

あれ？ 何か気になる事でもあったのかしら？

「兵器の割りに随分と快適な作りになっているのだな」

あ、そういう事。

確かにヒナギク内は快適な作りになってる。
多分、これはウリバタケさんとかの趣味が多分に盛り込まれた結果
かと・・・。
作ったのは明日香だけど、かなりウリバタケさん達と話し込んでた
ようだし。

高性能な兵器の割りに快適な空間とか・・・。

・・・相変わらずウリバタケさんは凄いわね。
いや、うん、軍人からしてみればなんとも言えないだろうけど。

「ええ、まあ・・・」

「何。責めている訳ではない」

「えっと・・・」

な、なんて返して良いか分からないわ・・・。

「ナデシコはそうして戦果を挙げてきたのだ。我々が口出しする必要はないさ」

嫌味とか、そんな風には感じなかった。

多分、これが彼女の本心なんだろうな。

なんか、誇り高い騎士みたいな感じ。

もしかして、騎士の家系だったり。

「さて、食堂などを案内したいのだが、先に話を聞いておきたい。
構わないか？」

「はい」

むしろ、望む所。

私としても早くその話をしたかったんだもの。

「ブリーフィングルームへ向かおう。既に艦内のメインクルーは集めてある」

「はい。すぐにでも」

ナデシコの解放にアレス隊の協力は必要不可欠。

作戦を成功させる為にも情報の共有と作戦の共有をしっかりとってお

かないと。

「さて、諸君、早速会議を始める」

ブリーフィングルーム。

まるで会議室のような作りになっていて、奥のモニタには現在地を中心とした配置図。

月面基地まで後数日といった感じね。

まあ、そこから数日間かけてここまで来た訳だから当然なんだけど。

「まずは謎のメッセージの信憑性についてだ。

真偽を確かめずに飛び出してきたが、

本日、実際にその場を目にした者と合流する事が出来た。

ナデシコクルーのハルカ・ミナト殿とセレス・タイト殿だ」

「紹介に預かりました、ナデシコで操舵士を務めるハルカ・ミナトです」

「・・・セレス・タイトです」

席から立ち上がり、一礼。

セレセレも私に続いてお辞儀をした。

その後、セレセレは着席する。

後は任せて。セレセレ。

「早速、彼女に話を聞こうと思う。月面基地の様子を教えて欲しい」
「はい」

.....

現時点で分かる月面基地の状況。

そこから推測されるナデシコの状況。

出来る限り細かく伝えるように努めた。

私自身、艦長の真意などが掴めている訳ではない。

もしかしたら、本当に艦長は甲いを考えたのかもしれない。

でも、絶対に違つたと断言できる訳ではないけど.....

「信じたいのです。艦長を」

艦長が和平の思いを曲げるとは到底思えない。

だから、断言できないけど、断言してやる。

「艦長は徹底抗戦派によつて利用されました。

私は今の状況を打破する為にもナデシコと艦長の救出を成し遂げるべきだと思います」

そこまで言つて着席する。

話すべき事は全て話した。

後は艦長であるアルメイラ大佐の判断に全てお任せする。

もし駄目なら、その時は.....

私一人で月面基地に突入するまで。

不可能なんてない。それを証明してやろうじゃない。

「ふむ。どうだろうか？ これでも疑惑は疑惑のままか？」

「艦長。既に結論は出ているのでは？」

「ほお？ それでは？」

「現在の状況を考慮すると時間は掛けられません。

すぐにでも急行しナデシコを救出するべきです」

え？ これって・・・救出に協力してくれるって事よね？

「やったわよ。セレセレ」

「・・・はい」

「これでナデシコも」

「待たれよ！」

・・・え？

もしかして、反対意見？

「救出に反対なのか？」

「・・・」

立ち上がった者を見詰める。

これで反対というのなら、私にだって考えが・・・。

「いえ。そうではありません。私も救出には賛成です」

ほっ。良かった。

でも、それなら、何だって言うの？

「それならば、何だと言うのだ？」

「救出は賛成です。ですが、現場に急行するのはお勧めできないと」

「何！？ 急がねば全てが後手に回るだけであろう！」

先程急行すべきと告げた男が立ち上がる。

「確かに。だが、かといって何の情報も掴めないままでは振り返ちにあうのがオチだ」

「私もそう思う。今すぐに現場に向かうのはあまりにも短絡的」

「だが！ これしか・・・」

「戦力不足で向かった所で何の意味もない」

「しかし、時間を与えれば与える程、相手に余裕を与えてしまうのでは？」

「いや、それでも時間をかけて戦力を充実させてから向かうべきだ」

「それでは時間が・・・」

「戦力不足では・・・」

場が騒然とする。

救出という方針に纏まった事は嬉しい。

でも、問題は方法。

急行するとしても相手の戦力が整っていれば返り討ちにあうだけ。

かといって、こちらの戦力が充実するまで待つていれば、相手に余裕を与えてしまう。

相手に余裕を与えず、かつ、戦力を充実させねばならない。

そんな魔法みたいな方法があるのかしら？

「諸君、ひとまず落ち着け」

「・・・ハッ」

・・・あれだけ騒然として場を一言で収めてしまうなんて。

凄いカリスマ性。これがアレス隊の総司令官。

「要点を纏めよう。我々に不足しているのは戦力と向こうの情報。

しかしながら、時間的制約がある以上、時間を掛けすぎでは駄目。

短期間で戦力を充実、かつ、敵方の情報を集める必要がある訳だ」

聞けば聞く程に困難な気がするんだけど・・・。

「まず戦力の充実だが・・・」

アレス隊の数が決まっている以上、他の隊からの援軍を求めるしかない。

でも、この状況下ではどの部隊を信じれば良いのか・・・。

派閥だけで見分けるのはあまりにも単純だし。

かといって他に信じられる部隊を見分ける方法はない訳で・・・。

「先日、ヒナギクから通信が来た時点で信頼できる知り合いには連絡をしておいた。

合流は少し遅くなるだろうが、戦闘中にも合流してもらえば何の問題もないだろう」

・・・仕事が早い。

私とセレセレを含めて誰もが驚きで声を失ってたぐらいだし。いや、一人だけ例外がいたわ。

アルダート大尉。アルメイラ大佐の腹心って奴ね。

「それでは、戦力の充実という意味では不安はないのですね」

「いや、ない訳ではない」

「は？」

「確かに集められるだけの戦力は集めた。だが、それは何の参考にもならん。

問題なのは相手戦力との比。どれだけ集めようと戦力不足という不安は付きまとう」

・・・確かに。

どれだけ集めようと向こうの方が多ければ戦力不足は戦力不足な訳で。

結局の所、相手方の情報がないままでは不安を解消する事はできな

いのだ。

「やはりどうしても相手方の状況を調べる必要が

」

コンツコンツコンツ。

「ん？ 何だ？ 入ってきて良いぞ」

ノックの音にアルメイラ艦長が入室を許可する。

「失礼致します」

「どうかしたのか？」

「いえ。例の者から再びメッセージが・・・」

「ッ！ そうか。それで何と？」

「敵戦力の情報とナデシコが拘束されている場所。そして・・・」

「そして？」

「戦闘開始から三時間後に基地の迎撃システムを停止させてみせる
と」

「なっ！？ そう言っていたのか？」

「はい。紛れもなく」

例の者？

それってあの謎のメッセンジャーかしら？

「そうか。データをこの部屋に送ってくれ」

「ハッ。了解致しました」

「その後は待機。次のメッセージを待て」

「了解」

シュインツ。

退室していく兵士。

彼の齎した情報は会議を加速させる劇場となったわ。

「再び現れましたか。謎のメッセンジャーが」

「うむ。果たして敵か味方か」

「今の所、味方としか思えないのだが・・・」

「畏の可能性もある」

「信憑性のあるデータなのですか？」

「それに関しては確認してから考えようではないか」

情報が得られない以上、謎の人物からの情報も参考になる。もちろん、完全に信じるのは危険だろうけど。

「送られてきたようだが・・・」

データがモニターに映される。

・・・詳しくないけど、基地にいた私からしてみれば、この数は・・・

「妥当かと」

派閥の関係とかで詳しくは分からないけど、

月面基地に格納されていた戦艦の数とかを考えると妥当って感じ。

「ふむ。どう思う？ アルダート」

「無難かと。最も可能性の高い数の範囲だと思われませう」

「そうか。他の者はどう思う？」

「妥当かと思われませう」

「多少の誤差はあるでしょうが、ありえない数ではないかと」

「このデータを仮に真実と認めた場合、戦力はこちらが上だな」

味方が合流した後であれば、戦力はこちらが上。でも、相手は防衛する側。

精神的負担は向こうが大きいけど、基地の迎撃システムを考えると被害はこちらが上。

そう簡単にはいかない訳ね。

「一般的に敵の基地を攻める際には倍以上。

もつと言えば十倍以上いた方が良くとされる。

無論、これは古代の人対人の戦闘における理論だ。

だがな、この理論は現在の状況にも当てはまるだろう」

「多少、戦力差があるぐらいでは危険だと？」

「そうなる。そこで重要になってくるのが例の者が告げる迎撃システムの無効化だ」

迎撃システムの無効化。

それがどこまでの無効化なのかは分からない。

単純に迎撃する為の兵器の機能を停止させるだけなのか。

まあ、それでも助かる事は助かるんだけど・・・。

それとも、迎撃に必要な敵戦力のエネルギー配給まで停止させてくれるのか。

こうなれば、あちらの護りを破るのも容易な訳で・・・。

「仮に例の者の発言が真実だとしよう。そうなれば、我々は三時間。たったこれだけの時間を耐え抜けば良い。それだけで道は拓かれる」

「・・・果たして信じていいのやら・・・」

「だが、それ以外に策はないのでは？」

「・・・正面きって迎撃されて撃退される可能性の方が高い。」

「どれだけ質が高かろうと結局量には負けてしまうのだからな」

全てのキーは謎のメッセンジャー。
彼、もしくは彼女の行動次第という訳
でも、何故だろう。

本当に自分でも分からないんだけど。
成功するって。

必ず言葉通り実行してくれるって。
そんな気がするの。

「……艦長。判断を……」

情報も手に入った。

作戦も立てた。

後はもう艦長の判断に任せるしかない。
行くか、待つか。

その選択を。

「……諸君らの命、私に預けてくれ」

「では！」

「アレス隊全隊員に告ぐ！」

我々はこれより敵基地に乗り込み、ナデシコを解放する！

咲くも自由。散るも自由。だからこそ、花は美しい。

花は何の柵もあるべきではないのだ。

付いて来て欲しい。我らが解放しようではないか。

全てを繋ぐ平和の花を、我らがナデシコを咲き誇らせる為に！」

「「「「「おおおおおおおおお！」「」「」「」

さあ、行きましょう。

ナデシコを解放する為に。

私達の想いを紡ぐ為に。
どこにいるか分からないけど、見守っててね。コウキ君。
必ず、再び自由なナデシコにしてみせるから。

「・・・なるほど」

ナデシコ救出の方針を決めてからすぐ。
アルダート大尉に話し掛けられた。
どちらにしろ、月面基地に辿り着くには数日が掛かる。
それまでに事情を聞いておきたいというのは当然の事よね。
特にあの場にいた彼からしてみたら。

「・・・強制ボソソジャンプか・・・」

「はい。あの時、あれ以外に方法はなかったのです」

アルダート大尉、そして、私達を逃す為にコウキ君が取った苦肉の
策。

本来であれば、私やアキト君といった秘密を知る者以外の前では絶
対にしてはならない行為。

だが、それも命には代えられないと実行せざるを得なかった。
そもそも成功する保障はなかった訳で。

だからこそコウキ君は賭けと言ったのだ。
どうにか無事で済んだものの、あの時は流石に死を覚悟したわ。
コウキ君は信じているけど、能力に関しては未知数だったし。

「あの・・・この事は・・・」

もし誰かに言われてたら本格的にやばい。

コウキ君にそんな能力があるなんて知られたら、絶対に　　。

「無論、口外していない。そもそも俺も状況を把握できていなかったからな」

「ほっ」

素直に安堵。

助かったわ。

おっと、口止めしとかなくちゃ。

「あの、この件に関してなんですが　　」

「口外するつもりはない。安心してくれ」

「ほっ」

二度目の安堵。

流石は大人の男性。

気が利くじゃない。

「しかし、地球人側にも木連人と同じ事ができる者がいたのだな」

「えっと・・・」

これには何て答えるのがベストなのかしら？

「ああ、構わない。無理に答えてもらわなくてもな」

「ありがとうございます」

地球人の、正確に言うならば火星人のボソソジャンプに関してはアキト君達に任せてある。

ここで私が余計な事を言ったら混乱しちゃうかもしれないし。私自身、あまりボソソジャンプの事は口外しない方が良いわね。

「それでは、あの者も無事に生きている訳だな」

・・・あの者。

コウキ君の事ね。

「確認は取れてませんが、そう確信しています」

「確認は取れていない。何故だ？ ボソソジャンプがあるのなら、間違いなく」

「まだ私達の下に戻っていないからです。」

顔も見えていませんし、声も・・・聞いていません」

コウキ君の生死に関する事は何一つ確認できていない。もちろん、死んだとは思ってもいないわ。

でも、確認できないと・・・やっぱり不安になる。

「私達を跳ばした後、コウキ君がどうしたのか、まるで分からないんです」

「・・・そうか。すまない」

「いえ。大尉は何も悪くありません。それに、コウキ君は生きてますから」

「強いな。貴女は」

「そんな事・・・ないです」

ただ強がっているだけだから。

「ありがとう」

「え？」

「俺が生きて帰ってこれたのは君達のお陰だ」

「・・・大尉」

「俺には将来を約束した者がいる」

「え？」

将来を約束したって・・・婚約者！？

「コロニー落とし作戦。あれが成功し、無事に帰って来れたら結婚しよう」と

そ、それはちょっと作戦前に言っていない台詞じゃないんじゃないかしら・・・。

「正直に言えば、俺はあの時に死を覚悟した。地球を護る為になら命果てても構わないと」

「大尉！ それでは残される婚約者があまりにも

「ああ。そうだった」

「え？」

「覚悟を決めても、それでもやはり心残りだった。あいつを残して朽ちても良いのかと。

ふふつ。男つてのは弱い生き物なんだな。あの時程、そう感じた事はない。

男は帰るべき場所、帰るべき者がいるから強くいられるんだ。

彼女を失うと思った瞬間、叫びたくなった。覚悟していた死から逃れようと足掻きたくなかった」

そんなの、そんなの・・・。

「当然です。残された者の事を考えたら、そうなって当然」

「そうだな。だからこそ、君達にはどれだけ感謝しても足りない。

・・・ありがとう」

婚約者を失う痛み。

そっか。大尉はそれを味わわなくて済んだのね。

コウキ君。貴方はまた幸せを運んだのよ。

もちろん、私にも運んでくれるのよね？

「だが、同時に、俺は貴方達に詫びなければならない」

「・・・え？ それは・・・一体？」

「君達を跳ばした後、あの者、マエヤマ・コウキは辛そうに顔を歪ませていた」

顔を歪ませていた？

コウキ君が？

「強制ボソングジャンプとは何かしらの負担を負うのではないだろうか？」

強制ボソングジャンプ。

いつかコウキ君が話してくれた切り札の一つ。

無機物を跳ばす事には成功したけど、人がいる状況はまだ試していないって言った。

この前、発見したばかりでまだ実戦では使っていないって。

そもそも使う機会があるかどうかも分からないって言ってたわ。

でも、負担に関しては一切聞いてない。

「頭の痛みを訴えていたようだったが・・・。激しい頭痛に襲われていたのだろっ」

激しい頭痛。

・・・以前、コウキ君が頭痛を訴えた時があったわよね。
あれは確か・・・クリスマスなの・・・ッ！

「もしかして・・・」

あの時、ジンが爆発する前にコウキ君が突っ込んだ。

あたかもジンがジャンプしたように見えたけど、

もしあれがコウキ君による強制ボソソジャンプなら・・・。

実行後に激しい頭痛に襲われる。

それこそ、気絶してしまうような。

「嘔吐き！」

実戦じゃ使ってないって。

この前、発見したばかりだって。

そう言ってたじゃない！

どうして私に嘘なんて・・・。

「大丈夫か？」

・・・落ち着きなさい、私。

冷静に、冷静によ。

「いえ」

「どうしたんだ？」

「強制ボソソジャンプ。コウキ君が以前一度だけ使ったんです」

多分、だけど。

「その時、コウキ君は気絶しました。多分、あまりの激痛に」

「それでは・・・」

「はい。あの時はたった一機だけでした。

今回は私を逃がして、大尉を逃がして。

二度の強制ボソソジャンプはきつとコウキ君をかなり苛んだ筈です」

「・・・」

「だから、多分・・・」

言葉にできなかつた。

私達を逃す為に犠牲となつたコウキ君。

今までは生きてる筈、そう言い聞かせる事が出来た。

でも、私達を逃がしてすぐに気絶してしまつたら・・・。
生きている筈がない。

「・・・すまない」

謝られても困る。

うつん、謝らないといけないのは私達も同じ。

私達は・・・コウキ君を犠牲にして生き延びたんだ。

・・・馬鹿よ。コウキ君。

貴方のいないこれから何の意味もないというのに。

「・・・諦めるんですか？」

「・・・え？」

「・・・諦めるんですか？ ミナトさん」

「・・・セレセレ」

「・・・私は諦めません。絶対に」

・・・セレセレ。貴方はどうして・・・。

「・・・私達を残してコウキさんが死ぬ筈がないですから」

貴方はどうしてそんなに強くいられるの？

「・・・ずっと、ずっと辛くて暗い所にいた私を助けてくれたコウキさん。

こんなコンプレックスの塊である私を癒してくれた、愛してくれたコウキさん」

・・・そんなにも貴方の中でコウキ君は大きいのね。セレセレ。

「・・・ミナトさん」

「・・・何？ セレセレ」

「・・・私は信じます。ミナトさんは信じられませんか？」

どれだけ絶望的な状況であろうと貴方は諦めないと言っの？
万が一、ううん、もっと低い確率かもしれないっの？
貴方はまだ諦めないっの？ そう言っの？

「・・・諦めません」

「・・・あ」

「・・・だって、コウキさんですから」

・・・本当にどこまで綺麗。

どうしてそんなに澄んだ笑顔が出来るのかしら？

・・・なんだか色んな面で負けた気分。

でも、コウキ君を信じる気持ちなら私は絶対に負けないわ。
一度は諦めかけた、ううん、諦めた私だけ・・・。

「そうね。コウキ君だもんね」

もう諦めない。

コウキ君なら帰ってくる。

絶対に帰ってくる。

だから、待ち続けよう。

いつまでも、コウキ君を信じて……。

……ううん、違う。

待つだけが良い女じゃないわよね。

もしコウキ君が帰って来ないなら、私が追いかけるまで。

追って追って、宇宙の果てにまでだって私は追いかけてみせる。

だって……だって、コウキ君は……。

「大切な人だから……」

S I D E O U T

第九十九話（後書き）

セレス嬢強いなあと感じた今回の話。

大人のミナトさんがセレス嬢に諭されるのはなんとも・・・。
このままじゃセレセレにコウキを取られちゃうぞ、と。

さて、最後の奴、皆さん、気付いてくれましたよね？
ちよっと変えてますけど。

第百話（前書き）

記念すべき100話。

いや、長かった。

予定ではこれで完結する予定だったのに長引いてしまっている。

さあ終結まであと少し。

最後の頑張り、行きますか！

。・・・残念ながら、明日からテスト期間に入ってしまうが・・・

第百話

S I D E M I N A T O

「それならば、俺も信じてみよう。あの者の生存を。詫びるのではなく感謝を。それが正しい俺の在り方だ」

アルダート大尉との会話を終えて、数日後。

戦艦内に借りていた部屋からヒナギクへと住居を移した。やっぱり軍艦に慣れてない身としてはこっちの方が楽なのよね、気が。

物資や食料の補給もしてくれるっていうし。

本当に感謝、感謝。

「後ちよつとね。セレセレ」

「・・・はい」

月面基地へは明日到着する予定。

予定より若干遅れての到着。

これは決して不都合があつた訳じゃないわ。

単純に援護の合流待ち。

戦闘中に合流しても良いって考えだつたけど、あの謎のメッセージ。あれによって作戦時間が三時間と設定されたのよ。

もちろん、実際に無力化される保障はないから、暫定的なものね。無力化されなくても戦闘続行できるよう作戦は立てられているわ。

流石は優秀と名高いアルメイラ大佐って感じ。

とまあ、どちらにしろ、作戦としての変更はないんだけど、すぐに合流できる位置にいるっていうのにわざわざ合流を遅らせる必要はないじゃない？

だから、それらの艦隊が合流したら戦闘に移行しようっていう訳。結局、一日遅れで合流できる部隊なら合流を待とうって事になったのよ。

要するに戦闘中の援軍はなし。

今用意できる全ての部隊で攻め込む事になった。

後がないっていう不安は残るけど、やるしかないわよね？

三時間だけっていうのなら、援軍の士気向上効果もそこまで必要としないし。

「……ミナトさん。私達は何を？」

この戦闘で私達ナデシコ組、というか、ヒナギクがする事は正直・

「特にないのよ」

総力戦である以上、ヒナギクの有無が戦況を左右するとは思えないし。

ヒナギクに大事なデータなどがある以上、撃墜される訳にもいかないでしょう？

念の為にアマゾネスにもデータはコピーしてあるけど。

そんなに言い振り回しても、ねえ。

なんか支障が出てくると思う訳。

でも……。

「……ないんですか？」

「ええ。最初の三時間はね」

それは敵の迎撃システムが無効化されるまでの話。
私達にはナデシコを奪還するという任務があるの。

「見たわよね？ ナデシコ」

「・・・はい」

「場所、覚えてるわよね？」

「・・・もちろんです」

「それじゃあ、奪還、しちやおつか」

「・・・はい。しちやいましょう」

今のナデシコで唯一のオペレーターであるセレセレ。

セレセレがいないとナデシコが動かせない以上、これは私達に与えられて当然の任務。

もちろん、この私が全身全霊を持って護り切るから、安心してね、セレセレ。

「ナデシコ解放と同時に基地内を探索」

「・・・クルーの皆さんも解放、ですね」

「そう、私達が皆を救っちゃおう」

「・・・はい」

ナデシコはクルーが全員揃って始めてナデシコなの。

ナデシコがあるだけじゃ駄目。

クルーの皆がいないとナデシコであってもナデシコじゃないのよね。

「ナデシコクルーの数から考えて、大き目の部屋に拘束されている筈。」

既に殺されているなんて事はないと思うから、探索自体は多分簡単よ」

「・・・絶対に解放してみせます」
「うん。その意気だ。セレセレ」

胸の前で拳を握り込むセレセレ。
不謹慎だけど・・・和んじやう。

「さあ、準備は良い？」

作戦決行まで後少し。

不安は隠せないけど、覚悟は決まったわ。
死ぬつもりはないけど、死んでも成し遂げるって。
でもね、不思議なんだけど、誰かに護られてるって。
そんな気がしたんだ。

S I D E O U T

S I D E K A E D E

「出さないよ！ いい加減、ここから出さない！」
「おいおい。ちょっとは落ち着けよ。カエデ」

落ち着けですって!?

「落ち着いていられる訳ないでしょ！ だって」

「焦った所で何も変わらないわ」

「・・・イズミ」

「そうそう。はい、深呼吸」

「・・・ヒカルまで」

「大丈夫ですよ。カエデさん」

「その自信はどこから来るんだ？」

「なんとなくです」

「曖昧だなあ。おい」

本当に曖昧。

「なんとなくじゃ」

「確かにナデシコクルーは拘束されてしまいました」

「ん？」

「ですが、全員って訳じゃありません」

「それって・・・」

「そうです。ミナトさんやセレスちゃん、それにコウキさんだっています」

「あいつらが俺達を解放してくれるってのか？」

「解放してくれないって思ってるんですか？」

「べ、別にそういう訳じゃないけどよ」

「だから、リョーコさんだって落ち着いていられるんですよね？」

「けっ。何言ってるんだか」

「あ。照れてる。リョーコが照れてるよ」

「う、うるせえ！」

・・・はあ。

これじゃあ私が馬鹿みたい。

「とりあえず、座ってるよ。いざっていつ時にすぐ動けるように」

「チャンスは一瞬かもしれないしき。無駄な体力は使うべきじゃないよ」

楽観的過ぎるわよ。まあ。

でも、ま、一理あるのも確かなのよね。

「そついやあ、艦長達はどうしてるのかねえ？」

「さあ？ 部屋、別だし。分からないよ」

拘束された私達は一纏まりにされず、役職ごとに隔離されてしまっ
た。

ここは女性パイロットの部屋っていう訳。

当然、艦長達もそれぞれ部屋ごとに隔離されてしまっている訳で。

まあ、朝、昼、晩の食事付きだから死にはしないと思うけど。

それでも、やっぱりずっと何もしないのは鬱憤が溜まる。

「まあ、なんだかんだで艦長も元気にやってるだろ」

「お気楽艦長だもんね。うちの艦長は」

・・・否定できない。

「しっかし、暇だよなあ」

「偶の休みだと思えばいいんじゃない？」

「もう一週間近く拘束されてるぞ？」

「滅多にない体験だから楽しめばいいんじゃない？」

「・・・お前、艦長並みにお気楽だな」

「いやあ、そんなに褒められても」

「褒めてないからな、俺は」

・・・何？ この漫才？

「でも、ま、そろそろ」

ウィーンウィーンウィーンウィーンウィーンウィーン！

「チャンスが来るだろ。脱出のな」

その言葉が動き出しの合図になったの。

それにしても、リョーコ、貴方、勘良いのね。

S I D E O U T

S I D E M I N A T O

『各機散開。フォーメーションを組んで戦え』

『『『『『了解！』』』』』

『ぐわつああああ！』

『キャーキャー！』

『クツ。今は見捨てる。作戦成功こそが戦死した奴らへの弔いだ』

『07機中破。急いで回収してください』

『了解した。周辺を護れ』

『敵迎撃システム。エネルギーチャージを終了。来ます』

『射線上から退避。喰らったら死ぬぞ』

『了解』

『はあ・・・はあ・・・』

『休んでいる暇はないぞ。次が来る！』

『ク、クソッ』

『敵の攻撃が止んだ。一気に畳み掛ける！』

・・・これが戦場・・・か。

「人の死なんて簡単なのね」

次々と死んでいくパイロット達。

敵であろうと味方であろうと死ぬのは同じ。
誰だって生身で宇宙に投げ出されれば死ぬ。
当然、爆発に巻き込まれれば否応なく。

「どれだけの人が死んだんだろう」

三時間が長かった。

戦場にいないで待機しているからこそ、余計に死者の数が気になつて。

以前は戦場にいたから考えもしなかったけど。
やっぱり思う。

人って簡単に死ぬんだなって。

「早く、早く」

願わずにはられない。

三時間が経てばもう被害者はでないんじゃないかと思うと。
もう誰も死なずに済むんじゃないかと思うと。

「・・・偽善なのかしら？ コウキ君」

殺す立場にいて、人が死なないように努める。
これって偽善なのかな？

・・・ううん。殺す立場にいるからって殺人を許容しちゃいけない。

貴方ならそう言うわよね。コウキ君。
難しい。本当に難しい。

人の死に直面した時は何をどう考えれば良いんだろう、何をどう結論付ければ良いんだろう。

「セレセレ。戦闘開始から何時間経った？」

「・・・まだ一時間です」

「そう」

まだ一時間。

少なくとも今の三倍以上の被害は出てしまう。

「どうして争うのかしら？ どうして争わなければいけないのかしら？」

そう考えずにはいらなかった。

敵と味方、生と死。その難儀すぎる現実に直面して。

戦闘開始から三時間が経つまでの間、多くの葛藤に悩まされる事になった。

・・・それでも、時は進んでいくのだけれど。

「・・・作戦経過時間二時間五十八分」

約束の三時間まで残り二分を切った。

セレセレのカウントダウンを聞きつつ、物思いに耽る。

・・・果たしてあの謎のメッセンジャーの言葉を信じて良いのか？

と。

確かにあれ以上の策はない。

実際、謎のメッセンジャー任せの作戦が今現在進行されている。失敗した際の作戦も考えてはあるけれど……。

謎のメッセンジャーの意図は？

敵なの？ 味方なの？

情報をリークして何の得があるの？

罨？ それとも本当に協力者？

……謎は深まるばかり。

実体は何も見えてこない。

「……作戦経過時間二時間五十九分。後一分です」

おっと。

集中しなくちゃ。

一分後の結果次第でこちらの出方も変わってくるのだから。

「ヒナギク。発進準備。お願いね。アザレアちゃん」

『はい。ミナト様』

いつでも出れるように準備。

後はその瞬間を待つのみ。

「……作戦経過時間二時間五十九分三十秒」

精神を集中させる。

「……5」

出撃準備完了。

「・・・4」

目を瞑る。

「・・・3」

目の前には月面基地を映しているであろうモニタ。

「・・・2」

その瞬間を待ち続ける。

「・・・1」

目を開け・・・。

「・・・0」

目の前をただ見詰めた。

「・・・月面基地。機能停止しています」

・・・文字通り、機能を停止していた。
全てのチャージは中止され、絶え間なく動き続けていた砲撃も動きを止めた。

月面基地は今・・・丸裸だ。

『ヒナギク出撃！ ナデシコを頼む！』

「了解」

アルメイラ大佐の指示に従い、アマゾネスから飛び出す。
この混乱を利用しない手はない。
最高速度で月面基地へと向かう。

「謎のメッセンジャーさん。ありがとう。感謝するわ」
嘘じゃなかったのね。

貴方に何の意図があったのかはまだ分からないけど。
どちらにしろ、疑ってしまっでごめんなさい。
誰か分からないから、直接謝る事は出来ないけど……。
後は任せて。絶対にナデシコを解放してみせるから。
だから、それを謝罪の代わりに受け取って。
必ず貴方の思いに報いてみせるわ。

S I D E O U T

S I D E K A E D E

ドカアアン！ バアアアン！

「キヤア！」

もう、もっと優しく扱ってよね。
碌に立つてられないじゃない、振動で。
というか……。

「いつになったら部屋から出れるのよお！」

こっちはもういつでも準備は出来てるのよ？

それなのに、部屋から出れなかったら何の意味も

シユイン。

へ？

「助けに来たぜえ！」

あの暑苦しい外見、熱血志向。

あれは……。

「スズキ・ジロウ！」

「ちがあう！ 俺はガイ！ ダイゴウジ・ガイだ！ というかそもそもスズキじゃねえ！」

「ちよ、ちよつとしたミスじゃない。女性に対して叫ぶなんて最低よ」

「な、お、俺はなんて事を……」

「はいはい。今はそんな寸劇はいららないから」

寸劇って何よ？

「どうやってここまで来たの？ ガイ君」

「俺はジユンの野郎に頼まれてここまで来たんだ」

ジユン？

あの影の薄い副長？

「つて事は副長がこのロックを？ やるう」

「いや、副長はミスターに解放されたらしい」

「それじゃあプロスさん？」

「その辺りは分からん」

・・・結局誰なのよ？

「まあそんな事はどうでも良い。急いで脱出するぞ」

「そうですね。誰がきっかけは脱出後に話せば良いだけです」

「おっしや。行くぜ」

部屋から飛び出し、廊下を駆ける。

「他の皆は？ メグミちゃんとか」

銃なんてある訳もなく、あまりにも無防備。

・・・誰にも遭遇しないといいけど。

「他の連中は手分けして部屋を解放。その後はナデシコへ、だ。当然、メグミもな」

直接ナデシコに行くって訳ね。

「場所は？ 場所は分かっているの？」

「コミュニケを見てみる。何故か地図とルートが出てる」

コミュニケ？

「あ、本当だ」

「どうしてこんな都合の良い事が起きてるんだ？」

「不思議ね」

「・・・怪しくありませんか？ そこにナデシコがあるとは限らないのでは・・・」

「でもよ、それしかねえだろ。ここまで来たら俺らの運を信じるしかねえ」

運、ねえ。

ここまで都合良く言ってるのに今更運もないでしょうに。なんだか誰かしらの意図を感じるわ。

まるで誘導されているような。

それでいて不快じゃない、何か（誰か）に。

「随分と遠回りなルートだね」

ヒカルの言葉に地図を見直す。

確かに示されたルートは最短ではない遠回りコース。

かといって特定の何かを避けているような素振りもない意図が分からないもの。

「行くっきゃないだろ。行くっきゃ」

自棄になつてない？

・・・大丈夫かしら。

「動くな！」

ガンッ！

「威嚇射撃！？」

歩みを止めて、声の方向を向く。

「止まって手を挙げる」

目の前には銃をこちらに構えるガツシリとした体格の中年軍人。

・・・万事休すって奴？

流石に脱出成功までは都合が良過ぎたかしら？

「ここまでだ。諦めるんだな」

油断も隙もないわね。

照準を逸らす素振りが全く見えないもの。

「緊急招集とやらで一室に纏めて逆に拘束しようとしたようだが、俺は他の奴らと違ってそう簡単に引つかかる程、甘い人間ではない」

は？

何言ってるのかしら？

「大人しくするんだな。すぐにでも異変に気付いて他の兵も戻ってくる筈だ」

・・・良く分からないけど、誰かが何かをしてくれたいね。それなら、ここで立ち止まるのは失礼ってもんよ。

「そこを開けなさい」

「何？」

「バ、バカ！ 相手は銃を

」

「だから何よ！ 良い？ 私達は和平を成し遂げるといふ大事な使命があるの」

「.....」

「これ以上の犠牲を出さない為にも一刻も早く」

「和平を結ぶ。それだけで平和になるとは思えん」

「何ですって？」

何を馬鹿な事を言ってるの？

「この戦争で多くの者が命を失った。死ぬべきではない幼い命までな」

「だから、和平を結んで」

「別に復讐を考えている訳ではない。ただこれ以上の犠牲者を出したくないだけだ」

「そ、それなら、貴方こそ和平を考えたらどうなのよ？ 和平を結べば」

「だから、言っているだろう。和平を結んだから平和になると思えないと」

どういう意味よ!？

意味が分からない。

和平を結べば、もう戦争は終わるでしょう？

それなら、平和になったって事じゃないの？

「敵対していた組織が和平を結ぶ。」

これは平和への一歩ではない。新たな戦争への準備期間だ」

「新たな戦争への準備期間？」

「いずれ、木連を主体としたクーデターが起きるさ。間違いなく」

「そんな事ないわ。木連はそんな組織じゃない」

なんたって、ケイゴがいるんだもの。
だから、木連は信じられる。

「そうよね。皆」

皆だってそう思ってる筈。

だから、和平を結ぼうって、そう思ってくれているんだろつから。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

・・・皆？

「ど、どうして黙ってるのよ？　なんか言つてよ」

「お前らも分かっているんだろつ？　何年後かにまた戦争が始まる
と」

「・・・それは・・・」

皆・・・どうして否定しないのよ・・・。

「・・・確かに戦争が始まっちゃうかもしれないねえ」

「でも、そうならないように懸命にやってるんだ」

「分かってるよ。危険性を孕んでるって事は」

「それでもやるしかないのよ」

「悲劇を食い止める為には、これしかないんです」

・・・戦争が再び始まってしまつ？

地球対木連の？

「そんな事、絶対にさせない」

もう戦争なんて嫌。

そう誰だって思ってる筈よ。

「だからこそ、我々は戦わねばなるまい」

どうしてよ？

どうして、そんなに戦いたいの？

「危険を孕むと分かっている、何故許容するのか。

再び戦争が始まると分かっているのなら、何故滅しないのか。

そこまで理解しているお前らが何故和平に拘るのか。

俺には何も分からんな。和平という心地良い言葉に躍らせているだけではないのか？」

「そ、そんな事はない。私は和平が一番だって、そう思ったから

」

「徹底抗戦と和平。確かに和平を結ぶといった方が心地良しさ。

感情移入もできる。だが、それは所詮自己満足でしかないのではないか？

殺人という罪から逃れようとしているだけなのではないか？

俺はどれだけ罪を被ろうと敵を滅してみせる。それが後の平和に繋がると信じているからな」

・・・初めて知った。

徹底抗戦を訴える人なんて所詮は汚い事実を隠す為だけに言い繕っているだけだって。

でも、なかには本気で地球の事を考えて、徹底抗戦を訴えている人もいるんだ。

・・・迷っちゃ駄目。そう分かっているも、戸惑っている自分がい

る。

「罪の意識から逃れる為。人を殺すという重責に耐えられず、人を救う道を考えている」

「違う！ そんなんじゃない！」

「違うないさ。それならば……」

……銃が投げられる、私達に向かって。

「撃てば良い。私を殺して和平を成し遂げてみせる」

な、何を考えているの？

わざわざ武器を手放すなんて。

あまつさえ敵に与えるなんて。

一体、何の意図があつて……。

「撃て！ 目的の為ならば、目の前の障害を殺す事も厭わない。

それぐらいの鉄の意志がなければ和平など成し遂げられはせん！」

……床に落ちている銃を拾い上げ、照準を合わせる。

「どうした？ 震えてるぞ」

「……震えてなんかない」

誰が震えてなんているものか。

「撃て！ 殺せ！」

「うわあああああああ！」

「よせ！ カエデ！」

「やめろ！」

バァァァン！

「・・・撃てないわよ」

弾丸は誰もいない明後日の方向へ。

・・・撃てる訳・・・ないじゃない。

「・・・所詮、その程度の覚悟でしか」

「違えよ」

「ん？」

「俺達は和平を成し遂げようってんだ。その為の犠牲もいらねえんだよ」

「それが甘いというのだ」

「ケツ。勝手に言っただけやがね。でもよ、甘いつて言われても、それを貫き通す」

「それが俺達の覚悟って奴だ」

犠牲を少しでも減らす。

それが私達の覚悟。

・・・それが和平への意思。

「・・・俺は軍人だ。軍人である以上、命令は絶対。お前達はここで拘束する」

「命令に従うだけが軍人だったのか？」

「もちろんだ。何故なら、俺は軍が民を護っていると信じているからな」

「軍なんて自分達の都合の良いように事実を曲げて」

「全ての軍人がそうであると思うな！俺達とて国民の事を第一に考えている！」

それは分かつてる。
貴方の想いは伝わってきた。
それでも……。

「それでも、私は和平を貫く。それが一番だつて信じてるから」
「和平では更なる悲劇を招くだけだ。それが何故分らない！」
「それなら、そうならないように努力すれば良い。」

何の努力もしないで勝手に決めないで、自分のエゴを正当化しないで！」

「エゴだというのか！ 俺の考えが、民への想いが、エゴだというのか！」

「だつて、そうでしょ！ 貴方は敵つてだけで他の事に目を瞑つてる！」

「何故敵の事を考えねばならない！」

敵は滅ぼさなければこの悲劇は終わらないのだ。

貴様達は見た事があるか！？ 母に抱かれながら死んだ幼子を。

目の前で苦しそうに表情を歪めながら、結局息絶えた少年を。

助けらずに、それでも目の前でありがとうと笑つて死んでいく少女を。

幼い命が！ 何よりも大切な未来ある命が失われていったのだぞ！

何故許せる！ 何故許さねばならない！ もう目の前で命が失われるのは真つ平だ！」

……この人は本当に……子供が、人間が好きなんだ。

だから、これ以上誰かが死ぬのが許せない。

怖い外見と違つて、心はどこまでも優しく暖かい。

その優しさ故に敵を滅ぼす事を考えている。

でもね、それはあまりにも悲しい事だわ。

「・・・貴方の言いたい事は分かった。でも、それでもやっぱり貴方は間違っている」

「・・・間違つてなどいない。私は」

「ううん。間違つてる。だって、貴方が大事だつていう子供は木連にもいるんだから」

「ッ！」

「木連にだつて大事な命がある。未来ある幼い命があるの。」

それを危険だからと潰す事が貴方に出来るの？ 殺せるの？」

「・・・それが命令であれば進んでやるう」

「嘘。貴方にそんな事はできない」

優しい貴方にそんな事は。

「確かに危険は孕んでいるかもしれない。

でも、同時に希望も孕んでるんじゃないかしら」

「・・・希望だと？」

「ええ。今はまだ無理でも、いつかその子供達が、

本当に意味で手を取り合ってくれるんじゃないかって」

「・・・子供達が？」

「子供の為。その想いは凄く大切。立派だと思う。

でも、子供を活かす為に子供を殺すのって変じゃないかしら」

「・・・」

「敵だから。そんなの理由にならないわ。

敵なら何も考えずに殺していい。そんなの殺す意味を考えない愚か者の考え」

「・・・愚か者か」

相手の事も知ってもらいたい。

確かに必要上、殺さなければならぬ事もあると思う。

でも、それを容認して欲しくはない。

何も考えずに盲目なまでに殺人を重ねてはいずれ自身が破綻する。同じ殺すでも考えて欲しい。色々な想いがあるんだって、理解して欲しい。

「確かに私は罪の意識から逃れる為に和平を唱えているのかもしれない。

それは、多分、否定できない。

でも、同時に、これ以上の犠牲を失くしたいってちゃんと思っている。

それは、胸を張って断言できるわ。

私は胸を張っていたい。醜い想いを抱えていたって、それでも胸を張っていたい」

貴方の言う徹底抗戦。

その意味も想いも伝わった。

共感できるし、賛同もできる。

でも、それじゃあきつと私は胸を張れない。

自分に子供が出来た時、私は胸を張って言いきりたい。

貴方の為に多くの人を救ったのよって。

「貴方の想いは理解できる。でも、それはきつと諦め」

「・・・諦め」

「出来る訳がない。ありえない。それは諦めの思考だわ。

私は信じてあげたい。諦めたくなんかない。

敵対国の者とだって手を取り合えるんだって、私は信じたいの」

「それが新しい戦争を誘発したとしてもか？」

「それでも信じるわ。私は諦めではなく、希望を残す為にここにいるのだから」

子供達に何を残すか。

敵対者の殲滅の記録？

ううん。そんなの生まれてくる子供への祝福になんてならない。
残すべきは希望。

手を取り合えるかもしれない新たな隣人。

育ちも考えも違うけど、それでもきつと手を取り合えるから。

殲滅の記録なんて残したくない。

私は子供達へ新しい子供達との出逢いを残してあげたいわ。

「……………」

……私の思い、伝わってくれたかしら？

『緊急連絡。何者かによってナデシコクルーが解放された。急ぎ拘束せよ。』

緊急連絡。何者かによってナデシコクルーが解放された。急ぎ拘束せよ。』

まずい。脱走がバレた。

「やばい。急がないと」

「でも……………」

通路は塞がっている。

ここを通る為には、彼を殺さないといけないの？

『レスター中尉。放送は聴いたな』

「……ハッ」

「ッ!」

やばい。ここで私達の事を言われたら……………。

『そちらに異常はあるか』

絶対に逃げられない。

「B - 4区。異常ありません」

え？

『そうか。引き続き、搜索に当たれ』
「了解」

・・・もしかして、見逃して　。

『今、ナデシコクルーを捕らえられるのは君だけだ。
ナデシコを拘束していた筈の兵は何故か一人も反応を寄越さん。
いいか。ナデシコクルーは発見次第すぐさま拘束しろ。最悪殺し
ても構わない』

「・・・」

『これは命令だ。復唱したまえ』

「ハッ。私はこれよりナデシコクルーを発見次第拘束いたします。
殺す事も厭いません」

『よろしい。健闘を祈る』

「了解」

くれないわよね、やっぱり。

「さて、命令が出た以上、俺はそれに従おう」

「拘束、もしくは射殺か」

「それなら、こっちにも考えがある」

「強行突破。やっぱりこれでしょ」

「花は散るから美しい」

「イズミさん。勝手に殺さないでください」

頼もしいわね、皆。

それに銃はこっちの手の中。

私達の突破を止められる訳が……。

「もう一度言おう。手を挙げる」

懐に手を入れて再び銃を取り出す男。

……もう一つ持ってたのね、盲点だったわ。

これで互角。強引に突破しようものなら、誰かしらが必ず撃たれてしまう。

……やるしかないの？

カツンッ。

「へ？」

何？ 今の音。

「……残念ながら、弾切れのようだな」

「貴方……」

「銃を持っている相手に挑む程、俺は無謀な人間じゃない。

至急、兵を集めて、作戦を立て、その上でナデシコクルーを追う
としよう」

「……見逃してくれるの？」

「勘違いしないでくれ。見逃すのではない。戦力差を考え、退くだけだ。

逃げるなら逃げれば良い。だが、必ず見付けだし拘束してみせよう。必ずな」

素直じゃないんだから。

「皆！」

「おう！」

「行くぜ！」

走り出し、男の横を通り過ぎる。

その際……。

「お前の考えを認めた訳ではない。

……だが、少しは考えてみてもいい」

こんな呟きが聞こえた気がした。

だから、振り返って……叫ぶ。

「この借りはいつか返すから！」

「ふんつ。勝手に勘違いされては困る」

これが私なりの別れの挨拶。

借りを作ったままじゃ私の気が済まないから。

「必ず和平を成し遂げてみせるわ。これ以上の犠牲を出さない為に
も」

「最初と変わってねえじゃねえか」

「変わってるわよ、本当は。でも、貫きたいの、私の想いを。」

それに本物の和平だって、あの人にとっては立派な借りの返し方
でしょ？」

「へっ。間違っちゃいねえな」

いつかあの男の人の考えが変わってくれたらいいな。
そんな祈りの逃走劇だった。

「見えてきたぜ」

ナデシコのある格納庫へと辿り着いた。

それまでに敵と遭遇した回数は僅か二回。

それも簡単に無力化できるような優位な位置で。

基地の人の多さを考えたら、十分過ぎる程のルート選択よね。
コミュニケにデータを送った人の誘導は完璧だったって事。

一体、誰なのかしら？ あのデータを送った人は。

『皆さん。ナデシコに乗り込んでください』

「艦長の声ですよ。もう奪還したみたいですよ」

「急ぐぞ」

最後のダッシュ。

全身全霊を込めて限界速度で駆け抜けた。

「はぁ・・・はぁ・・・」

本当の意味で到着。

急いでブリッジまで行かないと。

状況が掴めない。

「急い」

グラッ。

「キヤッ！」

な、何？

『緊急発進します。お近くの何かに捕まってください』

ちよ、ちよっと待ちなさいよ。

「バカ。急いで捕まれ。すぐに安定する筈だから」

も、もう、急いでるってのに。

『重力制御が安定しました。ですが、まだお気をつけ下さい。』

これから月面基地をちよっと強引に脱出しますので。揺れると思われませう」

「だってよ。リヨー」

「うるせえよ。ヒカル。安定してるんだから嘘じゃないだろ？」

「移動できなきゃ変わらないよ」

「・・・とりあえず落ち着くまで待つか。焦っても仕方ない」
「だね」

・・・やっぱり不思議。

このお気楽思考はどこからやってくるのだろう。

あのイツキまで焦ってる様子はないし。

・・・艦長からうつったのかしら。

ハッ！ という事は私も。
やばい。急いで……って。

「既にお気楽モードじゃない！」

駄目だ、もう。

完全に私もうつっちゃってる。

諦めるしかないか。

なんとかなるわよね、多分。

「どうなったのかしら？ クルーの皆は全員乗れたの？」

どちらにしろ、事情を知るには落ち着いてからか。

……皆、無事だと良いけど……。

S I D E O U T

第百話（後書き）

色々突っ込み所はあるでしょうが、脱出関連に関しては触れないで下さい。

今回のメインは『派閥の違い』平和への思いの違い』ではないという事。

同じ平和を願う者でも考え方で変わってくる訳です。

その辺りの事をつましく描写できてたら嬉しく思います。

さて、完結まで一直線！と行きたいのですが、残念な事にテスト期間。

卒業がかかっている訳で手は抜けません。

しばらく更新できないかと思いますが、ご容赦を。

第一百一話（前書き）

大変お待たせしました。

無事テストを終えたのは良いのですが、長らく書いていないせいか。

あれ、どうやって書いたっけ？ 主人公の口調って？

という状態になってしまい、いつも以上に苦難。

違和感がありましたもどうかご勘弁を。

第一百話

「聞きましたか？ 神楽大将？」

「は？ 何をですか？ 草壁中将」

「どうやら地球の連中は心底から我々と戦争がしたいらしい」

「・・・それは一体？」

「なんとも愚かな事です。自ら地球にコロニーを落とそうとしたとか」

「まさか。そんな馬鹿馬鹿しい事を」

「だから、地球は愚かなのです」

「・・・その意図は？」

「国内の徹底抗戦の勢いを強める為にコロニー落としを我々のせいにしたと」

「な、なんて卑劣な！」

「しかし、愚かにも程がある。証拠も何もなく、勝手な断定だそうです」

「・・・それでは？」

「いずれ真実が公になるでしょう。その時、地球がどうであるか・・・」

「・・・」

「地球内での内紛が容易に想像できませんな」

「・・・うむ」

「しかし、我々にとっては好都合」

「・・・何故？」

「我々は地球を滅ぼす為に存在する。和平交渉など何の意味もない」
「・・・」

「神楽大将とて争うと決めた方。この思いは同じでしょうな」
「・・・うむ」

「地球が争うと決めたなら、逃げも隠れもしない筈。
後は我々が正々堂々正面から勝てば良い。それで全てが解決する
のです」

「そうなるな」

「卑劣な地球が我々に勝てる筈がない。最早、結果は決まったよう
なもの」

「・・・」

「失礼。神楽大将には言うまでもない事でしたな」

「ああ」

「それでは、失礼致します」

「・・・うむ」

「そうそう、言い忘れておりましたが・・・」

「・・・何だね？」

「その戦闘で憎きナデシコに戦死者が出たとか」

「ナデシコに!?!」

「名前はマエヤマ・コウキ。ナデシコのパイロットだそうです」

「・・・そうか」

「それでは、今度こそ失礼します」

「例の計画、首尾はどうかね？」

「はっ。順調であります」

「ふむ。そうか。少しは揺らいだと?」

「はい。争うだけが全てじゃない。そう悟ってくれた民もいるよう
です」

「マエヤマ殿には感謝だな。彼の力が大きい。無論、お前の手際もな」

「いえ」

「・・・だが、そのマエヤマ殿に問題があった。聞いているか？」

「コウキに！？ 一体、何が？」

「うむ。なんでも戦死したらしい」

「せ、戦死？ 真ですか？ あいつがそう簡単に・・・」

「・・・私も聞いた話故、真実は分からぬが・・・」

「誰になんと？」

「草壁中将にだ。地球の内紛にて戦死したと」

「そう・・・ですか」

「残念だな」

「・・・はい」

「問題は彼の死によって我々と地球との連絡が途絶えてしまった事にある」

「確かに。コウキがいなければ我々は連絡の仕様がない」

「ケイゴを出しても良いが・・・」

「戦死扱いされている者を表に出す訳にはいかんでしょう。いつか捕捉される」

「だが、あいつ以外に地球と繋がりがあるものは」

「ピピッ。」

「ん？ これは・・・」

「なにやらメッセージのようですが・・・」

「・・・ゲンパチロウ」

「はい」

「この回線を知ってるものは限られている。それも極少数だ」

「はい。鬼が出るか蛇が出るか・・・」

「差出人は・・・記名なし」

「件名には『機が熟すのを待て』と書かれています」

「・・・そうか」

「大将、如何しますか？」

.....

「・・・開く」

「た、大将、危険です。中身が何なのか、まるで見当が

「それ故だ。私は信じたいのだ。このメッセージは・・・」

「コウキの奴だと？」

「・・・開くぞ」

ピ。

「なッ！ これは・・・」

「・・・ユキナの監禁場所！？」

『コロニーの落下軌道。その意図とは？』

『木連内通者の有無』

『ミスマル司令の暗殺事件の真実』

『ミスマル司令。生存の可能性』

『取引現場を激写。敵兵器は既に敵だけのものではない』

『木連の実態』

『地球と木連の確執』

「和平派と徹底抗戦派。その根本にあるもの」

「・・・か。どれもこれも興味を惹くものばかりだな」

「・・・それが狙い」

「だろうな」

「・・・はあ」

「どうだ？ 捕捉出来たか？ ルリちゃん」

「・・・すいません」

「そうか」

「手掛かりが一切掴めません。まるで・・・幻を追いかけているかのよう・・・」

「ルリちゃんレベルのオペレーターが捕捉出来ない奴がいるなんてな」

「誰なんでしょうか。この名無しは」

「全ての記事に対して一切の記名なし。それも徹底して。」

巷では“名無し”やら実体なきものとして“屋気楼”やら“雲”なんて呼ばれているが」

「・・・少なくとも私達と同等、もしくはそれ以上」

「その記事の殆どが信憑性の高い証拠付き記事。これを見て信じない者がいるだろうか？」

「もちろん、当事者達は否定していますけどね」

「しかし、これらの記事が世界規模で広まれば困る者が出てくる。

何故削除されない？」

「ロックが完璧だからです」

「ロック？ それはプロテクトという意味か？」

「ええ。この記事を消すには私でもかなりの時間を必要とします」

「それほど高度な・・・」

「しかも、瞬く間にこの情報は世界に広がりました。それは決して偶然では在りません」

「名無しが手を回したという事か」

「ええ。犯罪に近い行為ですが・・・」

「しかも、それだけじゃない」

「ラピス？」

「この記事のあまりの知名度から多くの者が注目して自分のサイト

にリンクを貼り付けた」

「その結果、更に広まったと？」

「・・・（コクツ）世界規模で」

「今では新聞社を代表とした多くのメディアが、

彼、もしくは彼女の記事の真偽を確かめる為に動いているとか」

「・・・完全に掌握されているという訳だな。名無しに」

「はい。正に独壇場。全ては蜃気楼の掌の上です」

「主観を含めない完全な客観的意見。それが大きい」

「普通はどちらかに偏るものですからね」

「だが、だからこそ真実味が増す。偏ってはどちらかの手のものと思われる」

「現実、蜃気楼戦争に対する情報源として多くの者が活用しています」

「ソースに対する信頼度。それに比例する影響力」

「しかし、ここまで有名になれば偽者も出てくる筈」

「普通はそうです。面白がって便乗する者が必ず出てくるでしょう」

「だが、その言い方では違うようだな」

「はい。蜃気楼は全てのエラー事項に対応しています。偽者なんて

赤子の手を捻るかのように」

「追求者に対して手を出した者は全て多大な被害を受けている」

「“追求者”？」

「全ての真実を追究する者。新しい名前」

「追求者。・・・なるほどな。言い得て妙だ」

「真実を追究し続け、多くの隠された事実を表の世界に曝け出す者」

「ネット、コンピュータ、情報。それらに依存した今の社会でこれ

以上の脅威はないな」

「今ではメディアを超える影響力を持っていますからね。蜃気楼は」

「知りたくても知る事の出来ない事はどうしても存在する」

「自らの眼で確かめられればそれがベストなんです、そうも行きません」

「それ故に誰かに情報を求め、誰かの言葉から真実を探ろうとする」

「その全てを代行するのが追求者。その影響力はこれからも上がり続ける」

「なんでも雇気楼には莫大な量の質問が寄せられているらしいです」「それに対してもきちんとした形で答えているのか？」

「全てとは行きませんが、日単位で一つは確実に」

「・・・それも殆どが真実に近いもの、という訳か」

「はい」

「追求者は頭が良い」

「・・・そうですね。情報社会という現代の仕組みを完全に味方になりました」

「だが、それには達成できるだけの能力が必要になる」

「真実の情報のみを集める情報収集能力と判断力。そして、世界規模でそれを広める能力」

「・・・やはり雇気楼は・・・」

「ああ。やはり名無しは・・・」

「やっぱり追求者は・・・」

「」「コウキ(さん)（しかない）（いません）」「」

~~~~~

「・・・あれ？」「こは？」

眼が覚めると真っ白な空間にいました。

「なんでさ？」「ん？」「あれ？」

なんかデジャヴ。

「つて事は……」

突如、視界に映る眩い光。光が止むとそこには可愛らしい少女がいました。

「……やっぱり」

「お久しぶり」

お久しぶりって……。

いや、まあ、確かに久しぶりなんだけどさ。

「どうしてここにいるの？ 俺」

「貴方が望んだから」

俺が望んだ？

「貴方が死ぬ寸前。貴方は願い、求め、望み、ここに来た」

……死ぬ……寸前？

「ッ！ そうだ！ ミナトさんは！？ セレスちゃんは！？」

そうだよ。俺はあの時……二人とアルダート大尉を逃がしてそのまま……。

「無事。そもそもDFもいらないうって言った」

「い、いや、でもさ、不安だから」

死ぬかもしれないのに誰かで試すなんて無理でしょ。

「ちゃんと貴方がエスコートすれば大丈夫。それが遺跡のアクセス権」

「・・・いや、今更だけど、反則してんな、俺。

最悪、太陽とかに飛ばせば、勝てない相手なんていないだろ？

まあ、跳ばすだけで耐え切れない奴は耐え切れないんだけどさ。

あ、普通のボソソジャンプならね。俺のは例外。

「それにしても・・・良かった」

二人が無事なら、何も思い残す事はない。

なんでここにいるか分からないけど、これ安心して

「あれ？俺つてば死んでない？」

だって、さっきも死ぬ寸前って。

「死んでない。ここは別に生と死の境界域という訳ではないから」

「でも、確かに俺はあの爆発に・・・」

記憶の最後に残るのはあの迫り来る・・・。

「巻き込まれる前に跳んだ」

「でも、俺には跳んだ覚えが」

「貴方は遺跡に感謝した」

「・・・感謝？」

俺が遺跡に？

「そう、この世界に連れて来てくれてありがとうと」

・・・最後に思い浮かべたのは・・・ミナトさん。  
彼女と出逢えた事、彼女と思いを交わした事、彼女と結ばれた事。  
元の世界では味わえないであろう幸せを味わえた。

「俺はその事を遺跡に感謝した」

これ以上ない幸せ。

これ以上ない喜び。

幸福と歓喜が俺に感謝の意を抱かせた。

「そして、貴方は彼女達を護った」

彼女達を護る事ができた。

それは俺の心を満たすのに充分過ぎる程の喜びと幸せだった。

「護りたい者を護れた喜び。救いたい者を救えた幸せ。

貴方は何の悔いもなく、あの世界から去ろうとした、ううん、事  
実、去った」

「去った？ 死んだって事か？」

「そうじゃない。ここはあの世界ではないから」

・・・確かにそうか。

ここはあの世とこの世との間ではないけど、前の世界でもないんだ  
からな。

「憎しみも後悔もない純真な想い。その想いに遺跡が応えた」

「マジかよ？ なんてご都合主義」



「貴方はどうやってボソソジャンプする？」

いきなりだな。

「場所を思い浮かべて、遺跡に触れるイメージを浮かべながらジャンプって眩く」

簡単に言えばこんな感じ。

「要するに必要なのは三工程。思い浮かべ、遺跡に触れ、現実とする」

「そうなるな」

「貴方は思い浮かべた。遺跡を、この空間を」

「そりゃあここが俺の原点だからな」

ナデシコの世界に来るきっかけであり最初の場所だし。感謝する時って当事者の顔とか思い浮かべるものだろ？

「そう。この空間こそが全ての根源であり原点」

「根源ねえ・・・」

なんのこっちや。

「根源に触れる。その媒介となるのが体内のナノマシン。彼らは通信装置のようなもの」

「まあ、そうだろうね」

ボソソジャンプが出来るのは火星入。

表向きは条件はそうだけど、実際は体内に遺跡にアクセスできるナノマシンがあるかどうかだし。

これがないければ火星人であろうと跳べない。

「二度の強制ボソソングジャンプ。たて続け行った事で貴方は遺跡にアクセスしたままとなっていた」

「どういこうしちゃ？」

「強制ボソソングジャンプをした後、頭痛がする筈」

「ああ」

あの激痛の事か。

あれは痛い。正直痛い。

「当然。何次元にも渡る座標の決定。人間の脳程度じゃ耐え切れな  
い」

「それがあの痛み？」

「そう」

ボソソングジャンプに必要な座標軸の決定。

その処理の途中過程を脳に映し出していたとしたら……。

「そりゃあ激痛だわな」

到底耐え切れるとは思えない。

「でも、そうなるとボソソングジャンプする度に激痛が走る筈だぞ？」

普通にボソソングジャンプする分には激痛なんて走らないし。

もちろん、連続してやれば疲労から痛みを感じるだろうけど。

「貴方は目的地に到達するまでの過程を覚えている？」

「過程？ それは……」

覚えてないな。

気付けばそこにいるって描写が正しい。

「ボース粒子に分解された時、貴方は全ての権限を遺跡に委託する事になる」

「委託？」

「そう、貴方を構成する全ての要素。その操作権を委託する訳」  
「・・・・・・・・・・」

聞くだけじゃかなり危険な匂いがするんですけど……。  
これは華麗にスルーすべきですよ？　そうですね？

「簡単に言えば、貴方に何の負担もかける事なく、ジャンプできるって訳」

簡単に言えば……その途中過程に非常に不安を覚えるんだが……。

「でも、強制ボソソジャンプは違う。委託できない」

「要するに単独ボソソジャンプであれば脳内に処理の過程が刻まれるが、すぐに無視できる。」

でも、強制ボソソジャンプの場合、脳内に処理過程が刻まれ続け、脳がそれを追ってしまっ」

「簡単に言えば、そう」

簡単に言えば……相も変わらず不安なんだが……。

「それなら、通常のボソソジャンプでも脳に負担が掛かっている事か？」

「そう、痛みを感じないだけ。負担は掛かっている。連発はやめた方が良い」

い、今更なんですけど。

「どれくらいやったら危険とか分かる？」

「通常のボソソジャンプであれば、多少寿命が縮むだけ」

「・・・おい」

それだけでも充分怖いんですけど！

「大した影響はない」

あるよっ！ 不安だよッ！

「ノーリスクでハイリターンを求める方がおかしい」

・・・ご尤もな御意見で。

「でも、強制ボソソジャンプはやめた方が良い」

「・・・ゴクリッ」

「脳が破裂する。補助脳が膨大化して脳を圧迫する。廃人化する」

どれを取っても良い事ねえ！

「お勧めしない」

「されてもしない！」

・・・もう何度か使ってるんですけど・・・大丈夫でしょうか？

「話がズレた。話を戻す」

「ちよ、ちよっと」

ここで話題転換!?

不安を残して何になる!?

「まだ大丈夫。でも、いつそうなるか分からない」

「ほっ」

まだ大丈夫か。

ひとまず安心。

でも、出来るだけしないようにしないとな。

いや、出来るだけってどうか、絶対に。

かつこ、例外を除いて、かつことじ。

「処理途中であれば割り込みが出来る」

「割り込みねえ」

「でも、処理を委託してしまったら処理が完了するまで割り込み出来ない」

まあ、言いたい事は分かります。

割り込み機能。プログラミングでも大事ですから。

「ボソソジャンプの処理を追っている状態であればアクセスしたままといえる」

「なるほど。それでアクセスしたままって事か」

「そう、後はボソソジャンプを現実とすれば過程は完了する」

三工程の内、二つはこなしてきた事になる。

偶然か必然かは知らんがな。

「でも、俺はボソソジャンプをしようなんて思わなかったぞ」

現実とする為の工程を踏んでない気がするんだけど。

「貴方の眩きはあくまでスイッチでしかない。

ジャンプっていう言葉を聞いて実行している訳でもないし」

「まあ、そりゃあ」

意識の切り替えというか、意識する為のスイッチだよな、確かに。

「だから、あくまで感覚的なものでしかない。所詮はスイッチ」

「じゃあ、俺は知らぬ間にスイッチを押してたって事か」

「そう、会いたいという想いがスイッチになった」

「会いたい？」

「愛する者、愛する家族に会いたい。悔いとしてではなく、自然体で再び会いたいって」

そう願ったのは確か。

でも……。

「それなら、俺はここじゃなくて二人の所に跳ぶんじゃないか？」

二人を想像してた訳だし。

「想像してたのは遺跡。想いはスイッチ」

「あ、そうっすか」

遺跡を死後の世界だとか思ってたのかな？

だから、ここで再会しようとかなんとかか。

まあ、死後の世界の事なんて分からないんですけどね。

「ん？」

となると……。

「別に遺跡が想いに応えたというより唯の偶然が重なっただけのような」

「そうとも言っ」

「っておい！」

あ、思わず突っ込みを。

「でも、貴方は偶然を重ねた奇跡を二度も起こした。それは最早奇跡で片付けられない」

「……確かに」

一度の奇跡だつてありえないのに、  
二度の奇跡は宝くじを買って毎回最高額があたるようなものか。

「だから言った。貴方の想いに遺跡が応えたと」

「……そうか」

確かにそう考えた方が自然だよな。

俺自身、なんでこうなつたか分からないけど。

少なくとも遺跡のお陰だという事は分かる。

本当に感謝してもし足りない。

「なんて美談にしてみたかっただけ。全部偶然」

「……最早何も言っまい」

落としては上げて落としては上げて、最後に落とす。  
貴方は一流の詐欺師です。

「さて、貴方には三つ選択肢がある」

「突然だな」

「さて、貴方には三つの選択肢がある」

「三つか」

「さて、貴方には三つの選択肢を用意」

「分かった。分かった。その選択肢を教えてください」

マイペースな子だな、この子。

「あ、その前に」

本当にマイペース。

「これ、貴方の」

「これは・・・」

・・・アドニス殲滅射撃仕様。

てつきり爆発に巻き込まれて跡形もなく吹き飛んだかと・・・。

「貴方の矛であり盾。正に貴方と一心同体」

「こいつは・・・俺が？」

「共に跳んできた。正に忠義の臣」

「いや、それはちょっと違うんじゃない？」

「正に竹馬の友」

どことなくズレてるのは気のせいだろうか？



「でも、動かない」  
「そりゃあ・・・」

重力波受信がなければ動かないからな。

「・・・サイズアップしてエンジン搭載しちやえば良いのに」  
「え？」

「なんでもない。じゃあ、選択肢を言う」

何だったんだ？

「1、このまま元の世界に戻らず違う世界に行く」  
「はい？」

何？ いきなり。

摩訶不思議な選択肢。

「違う世界ってどこよ？」

「遺跡が在る世界ならどこにでも。平行世界の数だけ遺跡はある」

それはまたなんとも壮大なお話で。

「既に未練がないのであれば、死を覚悟したのであれば、この選択  
もあり」

未練、死の覚悟・・・か。

そもそも平行世界って何だろうな？

「それはナデシコの世界じゃないって事か？」

「そうなる。貴方が求めた数多の情報。それが別種の世界を示している証拠」

確かに。明らかにナデシコの世界じゃない情報もあったし。

「違う世界で違う生活を送ってみるのも一興」

「……」

違う世界で違う生活……か。

「2、この世界の過去に戻る」

「過去に……戻る？」

「そう、過去に」

過去に戻る？

それは……。

「こうすれば良かった。ああすれば良かった。そう思った事はない？」

「……あるぞ。」

後悔なんていくらでもある。

もっと早くこの世界に干渉する覚悟を持てばもっと火星人を救えたかもしれないとか。

逸早く和平に向けて活動していればもっと早く和平が実現していたかもとか。

CASの存在だってそう。

作れば良かったのか、作れば良かったのか。

もっと悩んで結論を出せば良かった。

流されるままに何も考えずに作った自分。

あまりにも情けなく、許せなかった。  
あの時の後悔、今でも深く刻まれている。

「逸早く遺跡を回収すれば・・・そうすれば戦争なんて起きなかったのでは？」

「・・・何度も思ってたさ」

方法なんて探せばいくらでもあったのではないだろうか。  
それを怠ったのは・・・自分の臆病さ故だ。

「それらの後悔。未来を知った貴方なら変えられるんじゃない？」  
「・・・」

過去に戻り、過去からスタート。  
もっと違った最善の結果が得られるかもしれない世界。

「・・・新しい選択」

「え？三つ目じゃなくて？」

「その前にもう一つ。平行世界で遺跡が悪用される前に回収すると  
かどう？」

「それはこの世界ではない世界での話か？」

「そう。遺跡が見付かれれば争いになるのは分かりきった事。貴方な  
ら悪用しないでしょ？」

「・・・そんなの分からない」

絶対なんてありえないんだから。

「その時は平行世界の過去に送る。そうすれば遺跡は誰の手にも渡  
っていない筈だから」

平行世界の過去ねえ……。

「最後の選択」

「……最後か」

「そう、最も単純な答え」

……最も単純な答え。

それは……。

「今、この瞬間に貴方の世界に戻る。最も単純で最も分かりやすい事例」

俺の世界。

第二の故郷という存在すら超え、既に俺の心の故郷となっている世界。

家族がいて、仲間がいる、そんな暖かい世界。

「過去にも違う世界にも行かず、どれだけ苦しくても耐える世界」

ああ、苦しいさ、辛いさ。

終わりの見えない戦争。

互いに国を思う故の争い。

そのジレンマ。

心は削られ、双肩に掛かる重みは増すばかり。

それでも……。

「俺の愛すべき世界。俺の……」

紛う事なき愛する故郷だ。

「さあ、貴方には幾つかの選択肢を与えた」

「・・・・・・・・」

「どの枝を選ぶかは貴方次第。その結果、再び新たな平行世界が生まれるであろう」

それこそが平行世界の概念。

人の数だけ想いがあって、想いの数だけ未来があって・・・・。  
未来の数だけ世界がある。

「だが、それでこそこの世は面白い。さて・・・・」

俺が・・・・。

「貴方はどの選択肢を求め、願い、そして、渴望する？」

俺が、選ぶべき選択肢は・・・・。

俺という存在があるべき場所は・・・・。

「俺は・・・・」

~~~~~

第一百一話（後書き）

久しぶり！ 我らが主人公。

構想自体は変わらず、いつ登場させるか悩んでこのタイミングに。やはり主人公はコウキ君なんだと示さなければと思いました。

しかし、なんだか変な事ばかり書いた気がします。

いくつか挟まったネタはスルーで。はい。

最後の選択肢。

ここにきてまさかの事態。

全てはコウキの結論次第であります。

第二百二話（前書き）

お待たせしました。
物語は一気に加速。
終結へ向けて一直線！

第二百二話

S I D E M I N A T O

「え？ 私達そんな事、してないわよ？」

「へ？」

なんだか勘違いが生じているみたい。

「ナデシコを奪還した後、私達はハッキングで基地内の状況を確認したのよ。」

どこかで拘束されているであろうナデシコクルーを解放する為にそうしたら、拘束されている筈のナデシコクルーの反応が移動しているじゃない？

だから安全そうなルートをコミュニケに転送したの。出来るだけ兵士と遭遇しないように」

「え？ でも、それならどうして私達が逃げられたんですか？」

「さあ？」

解放しようと思ったら解放されてたんだもの。

私達だって不思議に思ったわよ。

「とりあえず、味方の援護で基地内の兵士が外に釘付けだった事。

謎のメッセンジャーが基地内の迎撃システムを全て機能停止させてくれた事。

この二つがナデシコ奪還とクルー解放に大きく貢献しているんだ

と私は思っわ」

「・・・私達は皆さんが言ってるような事はしていません」

基地内に突入。

戦力の殆どが外で戦っていたおかげで簡単にナデシコを奪還できたわ。

まあ、何回か戦闘になったけど、逃げてきちゃった。

基地内の重力波送信装置も止まってたみたいで機能停止してたのも多かつたし。

重力波に依存しない機体もあつたけど、補給もままならない状況だったから特に問題なし。

思った以上に簡単な作戦になったって訳。

「それじゃあ、私達が拘束されていた部屋を空けてくれたのって？」

「基地内に残っていた僅かな兵士の殆どを無力化してくれたって誰なんだ？」

拘束されていた部屋を空けた？

兵士の無力化？

「プロスさん、ゴートさん。貴方達でしたよね。最初に解放されたの」

「はい。閉ざされた部屋ではどうする事もできず・・・」

ナデシコが拘束された為に生じる経済損害を計算していましたら・・・」

そんな事してたのね。

案外、余裕よね。ナデシコクルーって。

「突然、扉が開いたんだ。急いで廊下に出てみたが、人影はまった

く・・・」

「床にロックを解除するマスターキーらしきものが落ちてましてね」

「それで順次解放していった訳だ。途中からは艦長と副長に任せただが」

「私はジュン君にお願いしてナデシコへと向かったんです」

確かに最初にナデシコに来たのって艦長だったわよね。

「その時は最短距離でナデシコに向かったんですが、誰にも会いませんでした」

「僕も開放している間、誰にも遭遇しなかったよ。」

途中で解放する役をカツコいいからって理由でヤマダに奪われたけど」

「へっ。そんなオイシイ役。俺がやらずに誰がやるんだ。あと、ガイだ。忘れんな」

「まあ、ガイ君の考えはどうでもいいとして」

「おいッ！」

「問題は誰がそのマスターキーをプロスさんに預け、敵を無力化したかだ」

「リョーコ。別に敵って訳じゃ」

「けっ。敵は敵だつての。立ち向かってくるなら誰だつてな」

「単純」

「うっせえ！」

「はいはい」

要するに・・・。

「基地内にナデシコの味方がいたって事？」

マスターキーを持ち出して、兵士を一箇所に纏める。

そういうのって内部からじゃないと不可能よね？

「そう考えるのが妥当ですね」

「この基地は皆敵だと思ってたけど・・・」

「味方もいたんだな」

「まあ、色んな考え方があるからな。おかしくはないだろ」

「うわっ。ガイ君がまとな事言ってるよ」

「・・・お前な。バカにしてるのか？」

「ガイさんをバカにしないでください！」

偶に暑苦しくて、ちよつと抜けてる所はありますが、優しくて力

ツコいい人です」

「へっへっへ。まあな」

「・・・若干バカにされてるって事に気付いてないのが救いだな」

「まあ、単純なもの彼の長所なのよ」

「短所にもなるけどな」

「・・・言われ放題ね。」

「ちよつと良いかしら」

「ほへ？ 何ですか？ イネスさん」

「・・・いつの間」。

やっぱりコウキ君の言った通り、ボソソジャンプを習得してるんじゃないかしら？

「ハルカ・ミナト」

「はい」

何故か敬語になっちゃった。

「さっき言ってた謎のメッセージって何の事？」

「あ。そうそう。俺も気になってたんだよ。」

「ったく。ヤマダのせいで忘れてたじゃねえか」

「俺のせいだよ！？」 おっと、それと俺はヤマダじゃねえ。ダイ

ゴウジ・ガ

「スズキは黙ってなさい！」

「スズキじゃねえ！ もっとちげえ！」

「黙ってなさい。解剖されたい？」

「は、はい」

「よろしい」

・・・偶にじゃなくていつも暑苦しいんだけどな・・・。
それと、イネスさん。迫力ありすぎよ。

「それで？ 謎のメッセージって何なの？」

謎のメッセージャー・・・。

「ナデシコが基地内に拘束されていると艦隊に報告してくれて、

この作戦では基地の迎撃システムの機能を停止すると約束して見
事実現させた人」

「ハルカ・ミナト。貴方、その人と面識は？」

「ないわ。そもそもメッセージだけ送ってくるだけで人物像なんて
分からないもの」

「・・・なるほど。謎のメッセージャーね」

何がるほどなのかしら。

「ブツブツ・・・（基地の機能停止？ そんな事が普通の人間にで
きる訳がない。」

もし出来るとしたら、基地内で迎撃システムの担当をしている人ぐらい。

でも、戦闘中なんだから周囲に人がいた筈よね？ そんな中で停止させる事は不可能。

そうなる外からハッキングして機能停止させたと考えるのが妥当。そうなるよ……」

……ブツブツブツブツって。
正直、怖いわよ。イネスさん。

「その謎のメッセージって基地内の人間じゃないの？」

メッセージを送るにしろ、機能停止するにしろ、好都合だもん」

「これまた妥当ね」

「やっぱり基地内に協力者がいたって事が」

確かにそう考えるのが一番妥当。

でも、なぜかしら？

こう違和感というか、違うって確信している自分がいるのよね。

「その結論はまだ早いんじゃないかしら？」

「イネスさん？ どういう事ですか？」

「ま、よく考えてみなさい。自ずと答えは出てくると思うから」

……珍しいわね。

いつもなら嬉々として説明するのに。

「謎のメッセージですか。なんだか懐かしいですな」

「確かにそうだな。ミスター」

今度はプロスさんとゴートさん。

何なのかしら？ 懐かしいって。

「どういう事ですか？ プロスさん」

「以前にも謎の匿名さんにお世話になったんですよ」

「公の場で口に出るような事ではないが、その者のおかげで救える命がたくさんあった」

「・・・私の事です」

セレセレ？

「・・・聞きました。誰かが私の場所をリークしてくれたって。その方が・・・」

「そうです。その方が謎の匿名さん。ある意味、謎のメッセンジャーさんですな」

マシンチャイルドを救う為に情報をネルガルにリークした人物。

それは・・・コウキ君。

それなら、今回の謎のメッセンジャーもコウキ君？

・・・ううん。それはあまりにも都合が良過ぎるわよね。

「コリカ。そろそろ」

「うん。皆さん、これから先程私達を解放してくれたアレス隊の皆さんと合流します」

「おお。噂のアレス隊か。戦ってみてえな。シミュレーター使えるよな？」

「ま、リョーコの病気は後回しにするとして・・・」

「皆さんは準備をお願いします」

「感謝の挨拶に行かないとね」

「んな事ぐらい分かってるっての」

「またまた」

ナデシコクルーの完全合流と同時にアレス隊に連絡。アレス隊や他の部隊には機能停止した混乱を活かして撤退してもらった。

まあ、撤退といより作戦終了だから帰還って感じだけど。

それでナデシコも同じように撤退。

合流ポイントにてアレス隊や他の部隊と合流しようって事になったの。

それで、今はその合流ポイントのちょっと前って訳ね。

「ねえ」

「ん？」

突然、後ろからの声。

「何かしら？ カエデちゃん」

そこにはカエデちゃんがいた。

どこか心配そうな、不安そうな表情で。

「コウキの事なんだけど・・・」

・・・コウキ君。

「生きてるのよね？ あの報道。あれって嘘よね？」

コウキ君の生死について。

気付けばブリッジ内の誰もがこちらを見ていた。

・・・そうよね。誰だっけって気になるわよね。

「正直に言えば、分からないの」

そう何の手掛かりもない。

どこにいるか、何をしているか。

あまつさえ、生きてるか、死んでいるか。

その何も今は分かっていたいなかった。

「分からない？ でも、貴方が生きててコウキが生きてないなんて事は……」

「……最後に私とセレセレを逃がして、その後は行方知らずなのよ」

「最後につて、一体何があったのよ？」

「その事は後でアレス隊を含めて皆の前で話すわ」

「……そう」

……暗くなっちゃったわね。

「……でも」

「え？」

「でも、大丈夫よ。コウキ君がそう簡単に死ぬ訳ないもの」

「……ミナトさん」

「あのコウキ君よ。いずれひょっこり現れるわ」

「そ、そうですね。マエヤマさんがそう簡単に」

「ぶざけないで！」

カエデ……ちゃん？

「どうして死なないなんて言えるの？ 知ってる。人なんて簡単に死ぬのよ」

「ッ……」

「銃で撃たれれば死ぬの！ 瓦礫に挟まれば死ぬの！ 食料がなければ・・・死ぬのよ！」

・・・分かってるわ。

「カエデ！ やめろ！」

「ううん。やめないわ！ 人が死なないなんて楽観視してる人なんて」

そんな事は私だつて。

「そんな事は彼女が一番分かってるわ」

「・・・え？」

・・・え？

「貴方が辛いと感じる以上に彼女は辛い。貴方が苦しいと思う以上に彼女は辛い筈よ」

「・・・」

「当たり前だわ。恋人なんだから、家族なんだから。辛い訳ないじゃない。」

でも、生きてるって、そう信じるのはいけない事？ 諦めた方が
良い訳？」

「そうじゃない。そういうつもりで言ったんじゃない」

「感情的になるのもいいけど・・・心の傷を抉るもんじゃないわよ」

「・・・」

「いいのよ。イズミちゃん」

「・・・」

「カエデちゃんもありがとう。心配してくれて」

「私は・・・」

分かってる。そんなつもりで言ったんじゃないって。樂觀視している私が気に食わなかっただけでしょ。身近な人間を失った貴方の傷を抉ってしまったのは私。何も言わなくても、ちゃんと貴方の心配する気持ちは伝わってきたから。

「うわ。いつも以上にシリアスだ」

「イズミの奴はこれまで二度も婚約者を失ってきたからな」

「身近な人間の死には慣れてるって訳ですか・・・」

「日頃のギャグはその悲しみを隠す為だって聞いた事がある」

「私は・・・その、ごめんなさい、イズミ」

「笑う門には福来たルーマニア」

「へ？」

・・・やっちゃったわね。

ここに来てそれをやる胆力には脱帽よ。

「私の両親は漫才師。別に悲しみを隠す為じゃないインドネシア」

「もういいぞ。寒くて凍えちまいそうだ」

「空気って凍るんだよね」

「シリアスからギャグじゃなくて極度のシリアスにするとは・・・」

「イズミさん。恐るべし」

「おい、待て。これはシリアスでもなんでもないだろ」

「貴方の熱血も今の状況じゃ温まる前のカイロみたいなものね」

「なんて冷たい！」

こゝ、ここから軌道修正するって大変だと思っただけど・・・
でも、ちゃんと言葉にしなくちゃね。

「カエデちゃん」

「・・・ミナトさん。」ごめんなさい」

頭を下げてくるカエデちゃん。
ちゃんと謝れる。

こういう所は素直で可愛い。
いつもはツンツンしてるけど。

まあ、それも可愛いといえれば可愛いんだけどね。

「いいのよ。貴方は心配してくれただけなんだから」

「でも・・・」

「確かに私の言い方じゃ樂觀視してるみたいだったわよね」

「・・・」

「正直な話、不安よ。死んでるんじゃないかって」

「ッ！」

「でもね、信じる事も大切だって思うの、生きてるって。

確かに絶望的な状況よ。あの状況から助かる方がおかしい。

でも、それでも、生きてるって信じたいの。

うつん。私は生きてるって確信してる。

だって、あのコウキ君が私達を残して死んじゃう訳がないから」

そうよね？ コウキ君。

私達を残してどこかに行っちゃおうような。

そんな事、ないわよね？

「だから、私は絶望しない。苦しいけど、辛いけど、諦めない」

コウキ君なら絶対に帰ってくる。

ナデシコに、私達の所に戻る。

そう信じてるから、私は今も前を向いていられる。

「コウキ君は必ず帰ってくる」

そうでしょ？ コウキ君。

「・・・そうね。私とした事が弱気になってたなんて」

「大丈夫。カエデちゃんも信じてあげて」

「ええ」

ありがとう。

カエデちゃん。

信じてくれて。

「そうですよ。マエヤマさんはすぐに帰ってきます」

「心配しなくても戻ってくるさ」

「まだネルガルにスカウトしきれいていせんから、亡くなられてしまつては困ります」

「諦めてなかつたのか？ ミスター」

「死ぬ訳ないよ。コウキが」

「そうだよな。まったくデマ流しやがって」

「女残して死ぬような奴じゃない事は確かだぜ」

「私もそう思います。ガイさん」

「ピロロ〜ン」

「あの子の秘密はまだ解明しきれてないんだから」

「怖ッ。コウキ。帰ってこない方が良くもされないわ」

「大丈夫です。ナデシコ撃墜王が死ぬ訳ありません」

「何〜！？ あいつが撃墜王だと!？」

「ええ。記録を見れば分かりますよ。間違いなくトップです」

「納得できねえ。俺が一番だろ」

「いや。俺が一番だ!」

「てめえの筈ねえだろうが！ ヤマダ！」
「んだと！？ 勝負だ！ このガイ様が相手してやらあ！」
「やってやるうじゃねえか！」
「ちやつかり訂正してる所がガイ君らしいよね」
「やんちゃね。二人とも」
「わおつ。達観してるね。イズミ」
「まだ成人前よ」
「年齢は関係ないって」
「それもそうね」
「そうそう」
「おっしゃ！ 決着つけるんだ！ コウキとアキト、呼んで来い！」
「そうだ！ てめえら全員参加だ！」
「だから、今はコウキの帰りを待つって話だったでしょ？」
「それでもやるんだよ！」
「んな無茶な」
「俺こそが撃墜王だ！」
「正しく言うなら撃墜王女？」
「なんか語呂悪いわね」

突如、騒がしくなるブリッジ。

「ふふっ」

思わず笑みがこぼれた。

ありがとう、皆も。

コウキ君を信じてくれて。

樂觀視してる訳じゃないのよね。

帰ってくるって、そう信じてるから。

皆も、私も、笑ってられるのよ。

「大丈夫よ。ね？ セレセレ」
「・・・はい」

だから、早く戻ってきなさいよ、コウキ君。
貴方の帰りを待つ家族がこんなにいるんだから。

S I D E O U T

S I D E K A E D E

目の前のモニタに映る女性。
合流ポイントに到着したナデシコへとすぐに通信が求められた。
その通信元は・・・

『お初に御目にかかります。ミスマル代表。アマゾネス艦長アルメ
イラ大佐であります』

「こちらこそ初めまして。ナデシコ艦長ミスマル・ユリカです」

かの有名なアレス隊だった。

宇宙においてナデシコに並ぶ戦績を誇る精鋭部隊である。
ナデシコのように何かと優遇される部隊ではないのに同等の戦績。
間違いなく、エース級が揃ってる。

きっと私じゃまるで太刀打ちできないぐらいのレベルがぞろぞろと。

「ナデシコ解放の件、感謝してもし足りません」

そして、ナデシコ解放に尽力してくれた心強い味方でもある。

『いえ。当然の事をしたまです。ナデシコは我ら改革和平派の希望ですので』

・・・改革和平派の希望。

そうよね。和平を願う人達もたくさんいる。

徹底抗戦が間違っているとはもう思えないけど・・・。

やっぱり私は和平を叶えたい。

『さて、ミスマル代表』

「はい」

ただでさえキリッとした真剣な表情の女艦長。

その表情が更に鋭くなる。

『先日の連合軍最高司令官の演説。あれは真ですか？』

鋭利な視線。

真剣味を帯びた表情。

まるで些細な嘘も見逃さないと云わんばかり。

「様々な状況が絡み合い、私がそう発言しても不思議はない現状です。

ですが、私は己の信念を曲げるつもりはありません。

たとえ父が死のうと、仲間が死のうと、その意思を、思いを私を受け継ぎます」

『それは愚直なまでに和平の為に力を尽くすと』

「そう受け取って頂いて構いません」

『・・・分かりました。疑ってしまい、申し訳ありません』

「いえ。誤解が解けて何よりです。アルメイラ大佐」

『安堵致しました。和平こそ我が悲願。引き続き、和平の為、私も尽力致します』

「ありがとうございます」

誤解が解けて何よりね。

味方に疑われてるって辛いもの。

「それでは、アルメイラ大佐」

『はい』

「貴方は改革和平派の一員である。そう考えてよろしいのですね？」

『ハッ。ミスマル司令の意思に賛同し、若輩の身ながら、末席を汚しております』

随分とへりくだった物言い。

そつえば、うちの艦長って実はかなりの高い身分の人なのよね。

普段からはまるで想像できないけど。

だって、改革和平派の代表だものね。

大佐とか、少佐とか詳しい事は知らないけど、一大派閥のトップ。

それって方面軍の総司令官とかいうのより下手すると影響力があるんじゃない？

いや。勝手な考えだけどね。

「それならば、私達の今後の事を話しても問題はないですね」

『はい。もちろんです』

「これから私達は誤解を解く為に地球へと赴く予定です。

私が徹底抗戦を決意したという虚言を正す為に。不正を許す訳には行きません」

『それがよろしいかと』

「そして、この件を機に徹底抗戦派の不正を公表し、私達の思いを伝えようと思います」

『コロニー落としによる国民の不安は大きいかと思えます。それでもやりますか？』

「もちろんです」

ニツコリ。

こういう時の艦長は強い。

強いってどうか、頑固。

「確かに誰もが恐怖を覚えていると思います。

ですが、それだけで木連全てを否定するのをおかしいですから」

『なるほど。御尤もなご意見です』

結局、悪事を働くのも、策略を練るのも一部の人間。

その所業で全てを否定するのはおかしな話よね。

それじゃあ、人殺しをした人間がいるってだけで、全ての人間を否定しなくちゃならない。

まあ、コロニー落としをそれだけでって済ましちゃうのもどうかと思うけど。

「それに、コロニー落としの真実を告げなければなりません」

確かな証拠はないけれど、コロニー落としは連合軍の仕業。

連合軍の画策した悪事で木連に濡れ衣を着せてしまう訳にはいかない。

『コロニー落としの真実？』

「このコロニー落としが木連ではなく、連合軍の仕業であるという事です」

『・・・やはりそうなのですか？』

え？ 勘付いてた？

「気付かれてたんですか？」

『いえ。我が隊のアルダートよりその可能性がある』

アルダート？

『アルダート大尉であります』

女艦長、あ、ナデシコも一応女艦長だったわね。えっと、アルメイラ大佐・・・だったかしら？ その彼女の後ろに控えていた男が前に出てくる。彼がそのアルダートっていう人みたい。なんかカッコいいオジサンね。

「アルダート大尉。それで何故？」

『私なんかよりもっと詳しい者がいる筈です』

詳しい者？

どういう意味かしら。

『コロニー落としの真相。どの組織が画策したものが。それを示すのが・・・』

「私の役目って訳ね」

背後から掛かる声。

振り向けば、操縦席でデータディスクを指の間に挟んでいる女性がいた。

もちろん……。

「ミナトさん？」

「正確には私達の役目。ね？ セレセレ」

「……はい。それに、アザレアもです」

「今はないけど、その分も私達が報告するわ」

報告？

そういえば、さっきも最後に私達を逃がしてとかなんとか言ってたわよね。

コウキ関連の事がしら？

『あの者が最後に貴方達に託した物か？』

「はい。コウキ君が真相を暴く為に託してくれた重要なデータ」

真相を暴く？

それって……。

「ミスマル艦長。アルメイラ艦長。

このディスクにコロニー落としての決定的な証拠が記録されています」

「ほ、本当ですか？ ミナトさん。セレスちゃん」

「はい」

『して、その内容とは？』

そう、大事なのは内容。

でも、コウキが託してくれたものなんですよ？

それなら、無駄に終わるなんて事は絶対ない筈。

「サツキミドリコロニー内に配備されていた核爆弾の映像」

「え！？ 核爆弾？」

『やはりあの爆発は核のものであったか……。核が用意できるのは……。』

「そして、その核爆弾の起動コード。間違いなく連合軍のもんです」「それじゃあ！」

『やはり連合軍の仕業。これは間違いなく決定的な証拠になるな』

核爆弾の有無を証明する映像データにその起動コード。

これ以上の証拠なんてない。

流星はコウキ！ いい仕事するじゃない！

『よくやってくれた。これ以上ない証拠だ』

「ありがとうございます！ ミナトさん」

「お礼なら戻ってきたコウキ君に言っただけでください。

全部、コウキ君のお陰ですから。私達はそれを伝えただけです」

「それでも、二人、いや、三人のお陰です。これで真実が公表できます」

『それにナデシコを月面基地で拘束していたという事実もある。

それに加えて派閥のトップの人間の言葉を偽ったのだ。

なんとも愚かな事をしたものだ。自らの首を絞めてくれたぞ』

なんだか希望が見えてきた。

これらの証拠を突き付け、真実を公表すれば、和平への道が近づく。連合軍の最高司令官は最後の最後でバカな事をしたわね。

後先考えないで目先の事だけを考えて行動に移すからいけないのよ。

「でも、そう簡単にはいかない。そうじゃなくて？」

「イネスさん？ それはどういう……。』

この人の発言っていつつも的を得てるのよね。

頼りになる事は確かなんだけど・・・ちょっと気に障る。
やっぱり正論ばかりをビシバシ言うのも考え物よね。

「それは失礼したわね」

ギクッ。

なんでバレたのかしら？

口に出してた？

「ふふっ。話を進めるわよ」

「ど、どござ」

怖っ！

「確かに決定的な証拠を手に入れた。でも、それを易々と届けさせてくれるとは思えない」

「・・・地球に向かう途中で襲撃に遭うという事ですか？」

「間違いなくね。ナデシコを拘束するぐらいなもの。それぐらいは考えてるわ」

『最悪撃墜しても構わないと考えているだろうな。死人に口なし。真相は闇の中』

「でも、向こうはデータディスクの存在を知らないのでは？」

「そうでしょうね」

「それなら」

「でも、大事なのはそこじゃない。相手が恐れているのは虚言がバレる事。」

うちの艦長の発言を偽り、徹底抗戦を焚きつけたという事実が公になる事よ」

そっか。それだけの理由で襲撃するのには十分な理由になるのか。

それじゃあ……。

「ナデシコ拘束の事実を知る者。即ち、ナデシコとナデシコを解放した部隊。」

この両者は襲撃を受けてもまるでおかしくない。四六時中狙われてると見ていいわね」

確かにそう。

地球に向かう途中で襲われる可能性は高い。

それこそ確実に言えるでしょうね。

都合が悪い事を相手が見逃す訳がないもの。

「でも、逆に言えば、届けさえすれば私達の勝ち」

そう、地球に届ける。

もっと言えば、この真実を公表してさえしまえば私達の勝ちなんだ。

「それなら、ここから地球にデータを送っちまえばいいんじゃないかねえのか？」

「わざわざ地球までリスクを冒さなくてもいいわな」

うん。確かにそうなんだけど……。

「信憑性に欠けるわ。戯言って切って捨てられるだけよ」

「ミスマル代表が姿を現し、事の顛末を話す。それでようやく信じてもらえるんだ」

情報だけじゃ信用できない。

やっぱり本人の口から真実を聞かないと。

「この作戦のキーは二つ」

指を二本立てて告げるイネスさん。

「改革和平派代表である艦長とこのデータディスク。それらを確実に地球まで届ける事」

それが私達の勝利条件。

「ん？ それなら、ナデシコ自体は関係ねえんだよな？」

「そうなるわね。大事なのは艦長だけ」

「それならよ、ナデシコを囿にしちまえばいいんじゃないか？」

ナデシコを囿？

「うちの艦長はナデシコっていうイメージが強いだろ。

それなら、ナデシコに乗ってるって相手も思う筈。

だから、それを逆手にとってナデシコを囿にして、違つので地球に行けばいいんだよ」

「おお！ リョーコが珍しく良い事言ってる」

「ヒカル。珍しくとは何だ。珍しくとは」

「だって、珍しいじゃん」

「・・・てめえ」

相変わらず仲良いわね、貴方達。

「彼女の発言が珍しいかどうかは置いて」

「おいッ」

「作戦自体は良いと思うわ」

『後はどれで送り届けるかだ』

「現在、近くにいる全ての部隊が狙われる確率が高い以上、安全策はありません」

『未来を繋ぐ為の名誉ある任務。是非とも我々アレズ隊で引き受けたいが……』

「ナデシコの次に警戒されていると思います」

『はい。ですが、かといって他の部隊に任せるのは不安です』

……纏まらないわね。

一刻も早く地球に向かいたいって言うのに。

このままじゃ成功するものも成功しなくなるわよ。

悠長に構えている時間なんてないんだから。

「やっぱりヒナギクがベストじゃないかしら？」

ヒナギク？

「小回りは利くし、大気圏突入機構もある。搭載すればアドニスも使えるし」

確かにミナトさんの言う通りかも。

「ナデシコやアマゾネスに注目が集まっている隙を突けば……」

『しかし、今回の件でヒナギクも警戒されてるのでは？

ナデシコ解放に一役買っているからな。私であれば警戒する』

「そう……ですか」

これまた正論。

駄目だ。このままじゃ本当に纏まらない。

早く決めてさっさと作戦実行に移したいのに。

「・・・何だろう？ この感覚」

「え？ 何か言いました？ カエデちゃん」

「う、ううん。なんでもない」

「・・・なんかさつきから嫌な予感が止まらないのよね。
杞憂ならいいんだけど・・・。」

嫌な時の予感って不思議と良く当たる気がする・・・。

「やはりここは危険を承知で」

「か、艦長！」

「どうしました？ メグミちゃん」

「謎の人物から映像付きメッセージが」

『謎のメッセンジャー。今度は何の情報・・・』

それって噂の・・・。

「メグミちゃん。映像を。アマゾネスからも見えるように」

「はい。・・・開きます」

そして、映し出される映像。

そこには人型兵器同士が争う姿。

連合軍対連合軍。

詳しく言つならば、改革和平派对徹底抗戦派のメイン機体同士の争い。

「こ、これは・・・」

『遂に仕掛けてきたか。徹底抗戦派！』

「メグミちゃん！ メッセージを」

「はい。読み上げます」

そして、読み上げられる驚愕の真実。

「ク、クーデター。徹底抗戦派のクーデターの様子だそうです!」

「クーデター!?!」

「マジかよ」

「地球人同士の争い」

『恐れていた事態が起きてしまったようだな』

これが私の感じた嫌な予感の正体。

遂に改革和平派と徹底抗戦派の決着がつく時が来たんだ。

「い、急いで地球に向かいます。こんな無駄な争い、止めるべきです!」

「確かにユリカなら止められるかも。真実を打ち明けて、協力を求めれば」

「その為にも急ぐべきね。被害が酷くなれば、そう簡単にもいかなくなる。」

まあ、現段階で既に簡単じゃなくなってるでしょうけど・・・希望はきつとあるわ」

『如何するのです? ミスマル代表』

アルメイラ大佐の言葉に手をあごに当てて考え込む艦長。

いつもならもつと時間が掛かるんだけど、今回は即決。

すぐに答えを導き出した。ナデシコ艦長、勝利の方程式を。

「ジュン君」

「な、何だい?」

「私が留守の間、ナデシコの事は全て任せます」

「ぼ、僕が艦長?」

「信じてるからね。ジュン君」

「・・・了解！ ナデシコの事は任せて、ユリカはユリカにしか出来ない事を」

「うん。分かってる。アルメイラ大佐」

『ハッ』

「ナデシコ及びアマゾネスの両艦は敵戦力の陽動を。お願いできますか？」

『了解しました。任せてください』

あれだけ渋ってたのに今度は反論せず了承。

艦長の決断を信用したって事かしら？

まあ、そう思わせる何かがあるものね、こういつ時の艦長って。

「他の部隊は一直線に地球へ。これも陽動です」

「それじゃあユリカは？」

「ミナトさん。ヒナギク。お願いできますか？」

「ええ。任せなさい」

「セレスちゃん。ミナトさんがいなくて負担は大きいけど、ナデシ

コの事、お願い」

「・・・はい。私達の家ですから。ちゃんと守り抜きます」

家。そう、家ね。

ナデシコは私達の家よ。

「ヒナギクにて迂回し、レーダーに映らないよう慎重に地球へ向かいます」

「ビックバリアはどうするの？ ヒナギクだけじゃ突破できないわよ？」

「・・・それは」

『私が解除しましょう』

「アザレアちゃん？」

あれはコウキのアザレアじゃない。
まさか、アザレアがハッキングを。

『お母様がナデシコから離れられない以上、この仕事は私にしか出
来ません』

「アザレアちゃん。出来るのね？」

『私のマスターをお忘れですか？』

「愚問だったわね。任せたわ」

『はい。ミナト様』

凄いわね、コウキ。

貴方のアザレアは貴方みたいに頼もしい。

「艦長。問題ないわ。ビックバリアも突破できる」

「分かりました。ヒナギクにてビックバリアを突破します」

「格納庫に載せる機体はどうするの？」

「ヒナギクにて強引に突破しますので、展開している余裕はありま
せん」

「それなら、載せないって事？」

「いえ。ウリバタケさん」

『おう。なんでえ？』

「報告を受けています。アドニス機動殲滅仕様。完成したんですよ？」

アドニス機動殲滅仕様？

新しいアドニスが完成したの！？

『おうよ。俺の最高傑作だ。自慢してえ所だが、そうもいかないん
だろ？』

「はい。時間がありません」

『分かった。何をすれば良い？』

「ヒナギクに搭載を。私の独断ですが、この機体、アキトに届けます」

『分かってるじゃねえか。こいつはあいつ専用だ。よし。やっておく』

「お願いします。リョーコさん」

「おう！ 俺は何をすれば良い？」

「私と共に地球へ。これも私の独断ですが、リョーコさんに相応しい機体が地球にあります」

「何？ 俺に相応しい？」

「はい。アドニス接近強襲仕様。接近戦特化の機体です」

「そいつを俺が操ればいいんだな？」

「そうです。争いを止める為に赴きますが、万が一、万が一の為に準備を」

「分かってらあ」

八人のパイロットに八機のアドニス。

「コウキ君の仕事の成果がようやく」

新型機の開発、収集、実用化。

コウキが最も力を注いでいた仕事は遂に終わりを告げた。

「全ての機体が出揃った。ここにコウキ君がいないのがとても残念で仕方ないけど」

「……流石はコウキさんです。全ての仕事をきちんとこなしました」

「後は私達の仕事。休暇だと思えばいいのよ。仕事達成のね」

「……お疲れ様。そう告げる為に……」

「ええ。ナデシコの事、お願いね。セレセレ」

「・・・ミナトさんも地球の事、お願いします」

「責任重大ね」

「・・・ですが、コウキさんの帰るべき場所です」

「ええ。守りましょう。地球もナデシコも」

「・・・はい」

慌しく動き回るクルー達。

迫り来る制限時間。

時は躊躇もせずに過ぎ去っていくけど・・・。

「必ず間に合わせてみせます。無駄な犠牲なんて出しません」

ナデシコが、私達が食い止めてみせる。

これ以上の悲劇を起こさせない為に。

和平を実現させ、誰もが怯えずに過ごせる未来を目指して・・・。

私達ナデシコクルーの希望を乗せたヒナギクが地球へと旅立っていた。

S I D E O U T

第二百二話（後書き）

引っ張ります。

さて、起こるべくして起きた軍事クーデター。

最高権力者が自身の権力を更に確立する為に行うものもクーデター
というそう。

果たして成功するのか？ ナデシコやアマゾネス隊は？

ユリカは間に合うのか？ 説得に成功するのか？

いや、盛り上がってきました。

次回もよろしくお願いします。

第百三話（前書き）

お待たせした拳句、今までで一番の短さ。
申し訳ないです。

今回は繋ぎの話＋コウキの です。

第二百三話

S I D E M I N A T O

「早速向かきましょう」

最高速度で地球へと向かう私達。

それでも、何日も掛かってしまう。

宇宙という広大な空間。

仕方のない事なんだけど・・・焦燥感が胸を襲う。

私達が一日遅れるだけでどれだけの人間が犠牲になるのだろうか。

私達、ううん、正確に言えば、艦長。

艦長ならこの無駄な争いも止められるというのに・・・。

「うし。ちゃっちゃと地球に行っちゃおうぜ」

「そうですね。それじゃあミナトさん」

なんだか焦ってるの私だけみたい。

相変わらずね。艦長も、リョーコちゃんも。

「ええ。いつでもOKよ」

でも、それがナデシコの強さよね。

いつでも冷静でいられる。

慌てることなく、正面から受け止めて、

その上でなんとかなるって、ううん、なんとかするって。
どんな事があってもまるで怖気つかない。
ふふっ。私も冷静にならないとね。

「それでは、ヒナギク。発進！」

いつものように艦長の声を合図に。
私達は漆黒の空を駆け抜けます。

S I D E O U T

S I D E K A E D E

「ぼ、僕が艦長。やった。やったよ。ようやく僕にも出番が・・・」

・・・何かしら？ あれ。

「おい。あれで大丈夫かよ？」

「ううん。正直不安」

「ま、まあ、彼もナデシコにスカウトされた一流の副長。大丈夫ですよ」

「フォローするのはいいけどさ。イツキちゃん」

「はい？」

「一流の副長って何？」

「あは、あはははは」

引き攣った笑み。

いや、よく頑張ったわよ、イツキは。

パンツパンツ。

ん？

「ご心配なく。彼も我々ネルガルがスカウトした一流の艦長です」

「へえ。艦長ね」

「副長という役職は彼以上に優れたユリカさんがいたから。」

彼女がいなければ彼こそがナデシコの艦長でした。はい」

そう自信満々に告げるプロスさん。

でも、表情とは裏腹には手は忙しなく動いている。

ハンカチで汗を掻いてるのは何故かしらね？

「ま、代理艦長が優秀であろうとなかろうと俺達の仕事は変わらねえよ」

「心強いです。ガイさん」

「へっ。まあよ」

・・・惚気？ 惚気かしら？

「まあまあ、愛しい人に会えないからってイライラしないの」

「誰がイライラしてるってのよ!？」

「カエデ」

「はあ!？」

「ほら。どしどし」

「・・・」

クーツ。

なんか悔しい。

ケイゴのバカ！

貴方のせいよ！ 責任取りなさい！

「・・・相変わらずバラバラですね。艦長もいないのに大丈夫でしょうか？」

誰かさんの不安の呟きは聞かなかった事にするわ。

S I D E O U T

「クーデター勃発・・・か」

「ア、アキトさん！ どうして落ち着いてるんですか！」

「ここも狙われる可能性がある。退避した方が良い」

「何の為にエステ・・・いや、アドニスだったな、それを持ってきてると思ってるんだ？」

「それでは・・・」

「ああ。物資を無駄にする訳にはいかん。せめて運び出す時間ぐらいは稼いでみせる」

「しかし、それでも戦力差が」

「それぐらい承知してるさ」

「・・・どうしてもですか？」

「どうしてもだ」

「・・・分かりました。私は物資の輸送を手配します。任せて下さい」

「ああ。頼む」

「私は抗戦派の動向を探る」

「ラピス。無理はするな」

「分かってる」

「それと・・・」

「ナデシコですね」

「ああ。ナデシコは今、どうなってる？」

「月面基地で待機中との事ですが・・・」

「確かな情報ではないと？」

「一つの情報では信憑性が薄いので多くの情報を集めるようにしていますので・・・」

「・・・時間が掛かるか。分かった。その件は後回しで良い。」

月にいるナデシコではどれだけ早くても数日は掛かる。まずは目先の事だ」

「分かりました」

「それでは各自、分担して

「待って」

「どうした？ ラピス」

「緊急通信。ミルキーウェイの代表者及び重役はキクザクラに搭乗」

「代表者と重役？ 俺達とムネタケさん達の事か？ それでキクザ

クラに・・・」

「ミスマル・ユリカを迎えに行く・・・だって」

「そうか。キクザクラが動くか」

「至急手配します。アキトさん」

「ああ。おじさんが遂に立った。改革和平派の・・・反撃だ」

『地球連合軍の皆さん、今すぐ戦闘行為を停止してください。』

私はミスマル・ユリカ。地球連合軍改革和平派代表のミスマル・ユリカです』

『ミスマル・コウイチロウである。全兵士に告ぐ。今すぐ戦闘行為を停止せよ』

モニタに映るミスマル親子。

改革和平派の軸となる二人が無事な姿を並べて立っていた。徹底抗戦派の皆さん、残念ながら、貴方達の負けです。

「改革和平派アイリス・プロジェクト。起死回生の一手。これにて完ってね」

~~~~~

「俺は・・・今すぐ戻る事を望む」

即決できない揺れる決断だった。

でも、何度考えてもこれだけしか結論は出ない。

「それはどうして？」

過去に戻る。

更に違う世界に行く。

その選択は俺に委ねられた。

何を選ぶも自由。文字通り、俺次第で世界は分かれる。

別に世界が分かれる事に関しては何も思う所はない。

無限の可能性を孕む並行世界。

ハッキリ言って実感が湧かない。

俺はここにいて、俺は自分の意思で生きている。

違う世界で俺が違う選択をしていようとそれはその世界の俺の自由だ。

俺には何の関わりもない。

だから、胸を張って言える。

そんなの知るか！ って。

でも、そんなの知るか！ で済ませられないものもある。

だからこそ、俺はこの最も単純で最もわかりやすい選択をしようと思っただ。

「過去に戻る。確かにそれならより理想的な未来になると思う。もっと犠牲を減らせると思う」

「そこまで分かってて、何故それを否定する？」

「逃げたくないから」

そう、逃げたくないからだ。

「失敗したらやり直す。それは誰もが願う事。でも、それは唯の逃げだ」

「.....」

「逃げた上で得て何になる？ 俺は何度逃げれば理想に辿り着ける？」

理想なんて何度挑戦しても辿り着けるものじゃない。

だから理想。だから、手を伸ばして、掴みたくなる。

掴めればより遠くのを。

その繰り返し。追えば追うほど逆に囚われ、遠のいていく。

正に無限の欲望。

でも、勘違いしないで欲しい。

理想を追うのが間違っているとは言っていない。

事実、俺達は理想を追っている。

不可能かもしれない。それでも叶えたい理想を。

折り合いを付けると言っているでもない。

諦めると言っているでもない。

ただありえない奇跡にしがみ付くのはやめると言いたいのだ。

理想を追うのなら己の力と想いのみで。

過去に遡って得た所で、それは自身も、仲間すらも否定する事になる。

一度得られた奇跡で増長してはいけない。

奇跡は何度も起きる程、都合良くできていないのだから。

「でも、それで助けられる命もあるかもしれない」

「確かにそうだ。俺はこの選択を後悔する日が来るだろう」

「・・・それでも、否定するの？」

「否定する。唯の自己満足。自己中心的な思考だ。でも、それでも、逃げたくない」

救える命があるかもしれない。

その言葉が胸に突き刺さる。

でも・・・。

「踏み躪れない。己の想いも、仲間の想いも」

ここで俺が現実を否定してどうするということのだ。

過去に戻るといふ事は現実を否定するといふ事。

それはこれまでの努力も、これまでの仲間との絆も否定するといふ事。



想いを、信念を踏み躪るという事だ。

「・・・そう」

「ああ。俺は過去には戻らない。今を生きる」

過去を振り返っても良い。

でも、続ける事はやめよう、引き摺る事はやめよう。

足は前に進む為にあるんだ。

どれだけ重かろうと、歩みを止める事なく、一歩ずつ確かで心強い一歩を。

たとえ振り返ろうと足は前だけに向けて、ゆっくり確実に歩んで行くことと思う。

「異世界は？」

「論外だ」

俺はここにいる。

「どれだけ辛かろうと、苦しかろうと、この世界こそが俺の故郷」

俺はここにいる。

「愛すべき家族がいる。愛すべき友がいる。この世界こそ俺の居場所」

俺はここにいる。

「何があるかと貫いてみせる。己の意思を、信念を」

何があるかと耐え抜こう。

逃げはしない。この世界で生きていこうと決めたのだから。

「・・・そう」

「残った異世界の過去も却下だ」

覚悟を決めた。

既に何があるうと俺の決意が揺れる事はない。

「分かった。貴方がそれを望むのなら仕方ない事」

「ごめん。俺の事を考えて言ってくれたんだよな？」

「・・・そうじゃない。なんとなく私が面白いと思ったから」

・・・あれ？

「どゆこと？」

「過去にいったら前と違う行動を取る貴方がいて、

異世界に行ったらまったく違う世界で戸惑う貴方がいた」

・・・まあ自分がそうなるであろうと容易に想像できるけど。

「残念。せつかく楽しめると思ったのに」

・・・なんでこうなった？

さっきまでのシリアスはどこにいった？

「でもさ、それなら俺がその選択をした平行世界を観測すれば良いんじゃないのか？」

過去に戻るって選択をした俺もいるだろうし。

異世界に行くって選択をした俺もいるんだろう？

平行世界理論でなら。

「それはそれです」

あ、そう、するんだ、やっぱり。

「でも、やっぱり貴方の口からそれを聞いたかった」

「なんでまた？」

「んんんん。なんとなく？」

「いや。俺に訊かれても困るんだけど」

はあ〜〜。なんか一気に脱力。

「まあいい。分かった。今すぐ、貴方を戻す」

「ああ。そうしてくれ」

「あれに乗って、好きな場所を思い浮かべると良い。それで貴方は元の世界に戻る」

アドニスを指差しながら告げる少女こと遺跡ちゃん。  
勝手に命名、遺跡ちゃん。うん、センスないな、俺。

「そうか。ありがとう。世話になった」

「いい。たいした事はしてない」

「いや。それでも、ありがとう」

「・・・どういたしまして」

セレス嬢の事を思い出して、つい頭を撫でてしまつ。  
まあ、嫌がってないし、良いよな。

「それじゃあ行くとするよ」

「・・・いつてらっしやい」

手を振る遺跡ちゃんに手を振り返し、その後、背を向ける。  
目の前に鎮座するアドニス。  
俺の矛、俺の盾、そして、俺の相棒。

「行こうか。地獄だけど、天国の世界へ」

アドニスに向かって跳ぶ。

まるで無重力の中を進むようにフワリと宙に浮かぶ身体。  
今更だけど、不思議な世界。

「またね、っていうのも変だけど、それでもやっぱり、またね」

「また会う機会があれば『またね』になる」

「それもそうだ。また会う事ってあるのかな？」

「分からない。でも、また迷子になったら、見付けてあげる」

「そっか。それじゃあもう会えないかもしれないな」

「どうして？」

「俺はもう迷わないから。ひたすら前だけを見て進んでいくよ」

「そう。それもまた面白い。いい。見守っててあげる」

「ああ。それじゃあ、さよなら、だ」

「うん。さようなら」

思い浮かべるのは俺が初めて跳んだ場所。  
まずは情報収集から。

いきなりナデシコでもいいけど、やっぱりそれが俺らしいかなって  
とりあえずアドニスを隠せる倉庫ぐらいは見付けなくちゃな。  
さてさて、忙しくなりそうだな。

「ありがとう。おかげで覚悟を決められた。・・・ジャンプ」

跳ぶ。

己のあるべき場所へ向けて。

「幸運を祈る。頑張れ」

最後に彼女のそんな呟きが聞こえたような気がした。

ああ。頑張るさ。だから、見守っていてくれ。

もう二度と迷わないから。

ありがとう。忘れはしない。君こそが俺の原点だから……。

~~~~~

第百三話（後書き）

最後に彼女のそんな呟きが聞こえたような気がした。
ああ。頑張るさ。だから、だから、もう少しだけ生きさせてくれ。
せめて、彼女に真実を伝えるまでは。

最後に彼女のそんな呟きが聞こえたような気がした。
ああ。頑張るさ。だから、見守っていてくれ。
もう二度と迷わないから。

ありがとう。母さん。

なんてパターンの終わり方を考えてしまった僕。

いや、そんな設定じゃなかったのに……。

遺跡が作り出した存在なんていう設定が浮かび上がってしまった。
記憶だけ与えられた想像の存在なんていうFF？的な設定を。

これはこれで面白いですが、設定になかったので却下。

もしかして、なんて思ってた方がいらっしやったら申し訳ない。

ネタバレになっちゃいます。

きちんとした伏線を張ってあったならこれで行くのですが……。

伏線もなしに突然は脈略がないかなって。

しっかし、こっちの方がしっくり来る設定も多くて……。

実は悩んでたり。四つの異常とかこっちの設定の方が違和感ないの
よね。

まあ、真相は謎という事で……。

ちなみに、平行世界とか異世界とか出ましたよね。

あれってばIFストーリーとかやりやすくなって思った奴なんです。
す。

まあ、今の所、何の予定もないですが……。

第四百話（前書き）

大変お待たせしました。

今回、私なりに趣向を凝らしてみたのですが、もしかしたら、読み辛いだけかもしれません。もし読み辛いようでしたら、ご連絡下さい。すぐにでも直したいと思います。

修正したとの方が良いとの事。

多少内容を加えつつ、修正致しました。

第四百話

『此度の争いには何の意味もありません。なぜなら、全てが仕組まれたものだからです。』

この放送はその真相を話すと共に私の、いえ、私達改革和平派の想いを伝える為のもの。

国民の皆さん、連合軍の軍人の皆さん。今は何の隔意も持たず、私の話を聞いてください』

コロナー爆破より数時間後

気付けば、この世界の最初の町、佐世保シティにいた。ここでアキトさんに会い、そして、ミナトさんに会ったんだよな。なんだか随分と昔の事のように感じる。濃い生活だったからなあ……。

「……まずはこいつをどうにかしないと」

流星に突然アドニスが現れたら驚くよな。

幸いな事に深夜で人影もなく、多分、目撃されていない。念の為に、さっさとこいつを隠そう。

とりあえず、海底にでも隠しておくか。

脱出はボソソジャンプで済ますから何の問題もないし。

「まずは状況確認だな。サツキミドリコロニーとか他にも色々を知っておくべき事がある」

さっそく情報収集。

アドニスを経由して今の状況を探る。

「ちょうど良い所に」

コロニー関連の記事を発見。
えっと……。

『コロニー落下を阻止。地球に対する被害は微少』

そうか。どうやら無事にコロニー落としは防げたらしい。

まあ、防げたというよりは利用されたといった方が正しいんだけど……。しかし、それにしても、この情報だけじゃ結果しか分からないな。

随分と簡単な内容だ。まあ、これ以上掘り下げても仕方ないとは思っけど。

誰が犯人だとか特定できる訳じゃないし。

詳しい内容は自分で調べるとするか。

特技、ハッキングで。

「ん？　おいおい。俺ってば死亡扱いかよ」

コロニー落とし阻止作戦の戦死者リストに自分の名前を発見。

……まあ、普通は死んでるだろうけどね。あの爆発に巻き込まれたら。

「……ちょっと待てよ」

世間的に見たら、俺って死亡者扱いって事だよな。
普通、遺体とか見付からなかったら、行方不明者とかになるんじゃないの？

それを死亡と断定って……。

……どうやら完全に利用するつもりらしい。

俺、というより、ナデシコパイロットの死を。

行方不明者と死亡者で区別してるんだから、当然、俺は行方不明者の方に入れる筈。

それを死亡者の方にあえてしてるんだから……これは完全に仕組まれたな。

ふむ。まあ、そういう手段をとってきたって理解してる分、先手を打てるかも。

むしろ……。

「掛かってこいってんだ」

幽霊が動き出す恐ろしさって奴を教えてやるうじやないか。

当分は死んだ扱いで構わないさ。

むしろ、好都合。

好きに動き回ってやる。

「死人に口なし。されど……死人に柵しがらみなし」

さあ、覚悟を決めろ。

お前達は眠れる獅子を目覚めさせてしまった。

I F S 強化体質でありS級ジャンパーでもある男を解放してしまっただ恐ろしさ。

存分に思い知らせてやるうじやないか。

……なんて俺のキャラじゃないよな。

うん。やめよう。
とりあえず、時間は限られている。
さっそく動くとしましょうか。

『ですが、その真相を話す前に、少しだけお時間を頂きたく思います。

私は私の発言とされた言葉の訂正をしなければなりません。偽りだらけの言葉の。

以前、連合軍最高司令官の演説にて、私が徹底抗戦を決意したとされました。

ですが、それは真実ではありません。私は決して徹底抗戦を決意していない。

父が殺されようと、仲間を失おうと、私の決意は、信念は決して揺らぎません。

なぜなら、それが彼らの想いを受け継ぐ事になるからです。

父であるから、仲間であるから、そう私は断言できます。

彼らは決して私や仲間に対して復讐を望む事はないと。

その上で改めて申し上げます。私の和平への意志は断固として変わりありません』

「一晩中考えたお蔭でやる事が見えてきたな」

俺がやるべき事は三つ。

1、ユキナ嬢の居場所を突き止める。

解放には時期尚早だけど、場所を突き止めておく分には構わない。ツクモさんやツキオミさんの人質として機能している以上、放置する訳にもいかないし。

何より、まだ幼い子供を不安にさせちゃ駄目だろ、大人としてとりあえず、木連に進入して、内部からハッキングしてやろう。

既に木連であれば、自由にジャンプできるし。

なんとなくだけど、木連はセキュリティが甘い気がする。

実際にした事がある訳じゃないから本当の事は分からないんだけど・・・。

木連は木連という独立した国で、今まで国家間戦争をこなした事がない。

これって結構大きいと思うんだよね。

だって、防諜関連に気を使う必要がなかったんだから。

逆に言えば、防諜関連は手薄。

それにIFSもなければ、IFS強化体質の人間もない。

まず失敗する事はないだろう、と勝手に言ってる。

一応、地球でもトップクラスに入るハッカーの自信があるし。

「もし無事に情報が入手できたら・・・神楽大将あてにデータを送るとしよう」

畏だと思われるかもしれないけど、匿名で。

死人が口を出したら変だもんな。うん。

それと急がないように言わないとな。

今すぐ解放した所で事態は急変しない。

やるべきタイミングを見計らって欲しいって。

こういうのは最も効果的な時機にやらないとね。

「次は・・・」

2、国民の意識改革。

改革和平派が当初から掲げていた目標けどまだまだ甘い気がする。何より両国民とも危機感があまりにも乏し過ぎる。

いつまで経っても戦争が終わりを見せないのはその影響が大きいと思う。

どこまでも不毛な争いである事。

両者は手を取り合う事が出来るという事。

それをまるで認識していないように感じる。

まあ、これは政府や軍の情報規制のせいだと思うけど。

そして、戦争終了後、どのようにして付き合っていくか。

これは一人一人がしっかり考えないといけない事だ。

でも、それも正確な情報が入って来ないから考えようがない。

結論、情報規制による影響が非常に大きいという事。

そのような状況であり、その上で俺の立場を考えれば、するべき事は容易に見えてくる。

それは制限された情報ではなく、全ての情報を客観的に教えてくれる情報ソースの提供。

そして、その中に国民の一人一人が考えさせられるような課題を盛り込む事だ。

ただ与えるだけでは駄目。きちんと考えさせるよう工夫しなければならぬ。

まるで教師の仕事みたいだな。うん。

ちょうど良い。将来の為の勉強にしよう。

なんて、個人的な話は置いて・・・。

その為にも正確かつリアルタイムな情報を提供する必要があるな。

俺が元いた世界もこの世界も結局は同じ情報社会だ。

ネットやら何やらで情報を収集する事が殆どであり、広告なんかもネット。

大抵の人がネットに眼を通すと見ていい。

その状況下、この手段以上の成果を上げられる策はないだろう。

「最後に・・・」

3、コロニー落としの後処理。

連合軍が仕組んだであろうコロニー落とし。

その意図は全部掴めている訳ではないんだけど・・・。

間違いなく何かしらに利用する為。

そうなれば、ナデシコを基地から出さなかったのはその伏線と考えられる。

現在のナデシコの状況確認は現段階で最も優先するべき事だろう。

「まずはコロニー落とし関連から片付けよう」

手っ取り早く、月面基地に跳ぶか？

・・・いや、慌てるな。

きちんと情報を集めてから行動しよう。

慎重過ぎて遅くなったら本末転倒だけど、慎重になり過ぎて困る事はない。

慎重かつ大胆に。

目の前の事を一つずつ確実に処理していくのが最善だ。

とりあえず、国民の意識改革はすぐにも始められるからな。

これをしつつ、情報を集めていこう。

「あ。その前に隠し倉庫を見付けないと」

アドニスをずっと海底に沈めておく訳にはいかないよな。

新しい戸籍を捏造して、その名義でどこかしらの倉庫を借りよう。
後は出番までそこで待機。
ちよっとだけ待っててくれな、アドニス。

「以前、私は国民の皆様にご迷惑を告げました。

木連に対して地球がしてきた事。

木連が地球に対してしてきた事。

木連が火星に対してしてきた事。

もちろん、どれも許される事ではありません。

私達は互いに加害者であり、被害者。

既にどちらかが加害者であり、どちらかが犠牲者であると断定できるときは終わったのです。

だからこそ、これ以上の犠牲は出たくありません。

取り合える手を取ろうとしないのはあまりにも愚かだとは思いませんか？

争いを続け、疲弊した私達に何が残されるのでしょうか？

恨みですか？ 憎しみですか？

そんな悲しいものばかりを残していったい何になると言うのです？

私は希望を残したい。憎しみではなく、恨みでもなく、希望を。

たとえ敵対していたとしても人は手を取り合える。協力しあえる。そんな希望を。

戦争を終えた後、私達は将来を背負う子供達に何をもって胸を張るべきなのでしょう？

殺した人の数ですか？ それとも、倒した敵の数ですか？

違うでしょう？ そうではない筈です。

平和にした。平穏を与えた。争いを止める為に命を張った。

そう胸を張るべきなのではないのですか!?

・・・確かに平和と平穩を迎える為に破壊行為は必要なものです。それは否定しません。私自身、こうして戦艦の艦長を務めています。

ですが、私は憎しみで争った事など一度もありません。奪われたくないから戦う。

それは当然の行為であり、否定するべきものではありません。ですが、憎しみによる戦闘。これだけは否定させて頂きます。憎しみで争うのは自己満足。

ましてやそれが国を背負う者のエゴであれば断じて許してはなりません。

そして、その延長戦であるこの内乱。私は命に代えてでもこの内乱を止めてみせます』

戸籍捏造・アドニス格納後

「うし。ここを拠点に活動するか」

隠し倉庫としてはだいぶ良い物件を手に入れた。

IFSによる情報収集の環境も整備したし。

数日の間だけだから、怪しまれる事もないだろう。

俺は既に死んだ人間。

足を付けずに、まるで幽霊かのように正体を表さずに暗躍してやるうじゃないか。

「とりあえず出来る事から始めよう」

まずは俺が知っている情報を誰もが注目するよう工夫して公開する
としますかね。

『その第一として、この内乱の根本ともいえるコロニー落とし。
その真実を皆様にお話したいと思えます。戦闘行為を停止し、し
っかりと聞いてください。

コロニー落としは木連の仕業とされています。

確かに地球と敵対している以上、そう捉えてしまふのも無理はあ
りません。

ですが、真実はそうではなかったのです。木連はまったく関与し
ていませんでした。

それを表す証拠としてまずはこの二つの映像をご覧ください。

一つ目はコロニー内部に仕組んであった核爆弾の映像。

そして、二つ目はその核爆弾が爆発し、コロニーが内部破壊され
た映像です。

この事から、このコロニーは核爆弾によって破壊されたという事
が分かります。

ですが、勘違いしてはなりません。これは落下を阻止する為に設
置したものではないのです。

この映像は先遣隊として派遣された者が現場で既に設置されてい
たのを撮った映像です。

これから分かる事は一つ。

コロニー内部には作戦開始前から既に核爆弾が設置されており、

そして、その時機を見計らって、核爆弾を爆発させたものがある
という事。

即ち、コロナー落としを企んだ者が自ら爆破したと考えられるのです。

その意図、私は恐らくですが、予想が来ています。それを後にお話ししたいと思いますが、まずはこの映像の意味。ここまでで何故この映像が木連の関与を否定する証拠となるのかをお話ししてはいません。

ですが、薄々と勘付いていらっしやるのではないのでしょうか？
まず、核爆弾ですが、これは木連に準備できるものではありません。

たとえ出来たとしても、この核爆弾は連合軍のもの、もっと言えば地球製のもの。

それはあの映像が証明しています。

連合軍が発足してから、兵器の起動コードは連合軍のもので統一されました。

これに例外はありません。

何故なら正規のものか不正規のものかをこれで判断するからです。核爆弾も例に漏れず、起動には連合軍特有の起動コードというものが必要になります。

これは連合軍にとって最秘匿事項であり、上層部の者以外誰も知りません。

では、何故その核爆弾がこうして爆発したのか。

そして、何故、核爆弾がコロナー内部にあったのか。

皆さんは想像できるでしょうか？

・・・国民の皆さん。眼を背けずに現実を直視してください。

コロナー落としの犯人。それは木連ではなく、地球連合軍であると。

・・・受け入れ難い事でしょう。ですが、これが事実なのです。断じて偽りではありません』

情報収集開始から数日後

「ふむふむ」

情報収集はすればする程良い。

そう考え、様々な情報を各所から集めた。

そして、同時に民間に公開。

これが後々に繋がると信じている。

「・・・これは・・・連合軍の物流ルート？」

なるほど。連合軍は木連からバツタなどの見れば木連と認識される兵器を輸入していたのか。

それもかなり隠れて。

不都合な事はそれを利用して全て木連のせいにしてしまえばいい。

木連が悪役になればなる程、徹底抗戦の意識を強められるのだから。それはミスマル司令の暗殺事件がよく示している。

「この物流ルートの責任者は・・・」

やっぱり、最高司令官、貴方でしたか。

この程度のセキュリティで止められる程、甘くありませんよ、俺はうまく隠してあったみたいですが、所詮はうまく。

絶対に見付からない程ではない。

これがルリ嬢のだったら、絶対に無理なんだろうけど。

「とりあえずこの情報は確保だな」

いずれ必要になる時が来る筈。

その時にでも託すべき人に託そう。

バツタを敵として見るな。

既にバツタは両陣営の兵器である、という言葉も付けて。

「しかし、最高司令官もよくやるよな」

ここまでして改革和平派を嵌めたいってのか？

明らかに最高司令官は何かを企んでいる。

この状況下、ナデシコは基地から抜け出せていない可能性が高いな。むしろ、下手したら拘束されているかもしれない。

最高司令官にとってナデシコは眼の上のタンコブな訳だし。

「ん？ 演説？ 最高司令官の？」

今度は何を言い出すのやら。

「また、証拠はこれだけではありません。

とある方より決定的証拠となる連合軍の物流ルートを頂きました。

そこには連合軍が木連と取引し、木連の兵器であるバツタを手に入れている。

そんな嘘偽りのない確かな事実が記されていました。

そして、問題であるその取引元ですが・・・。

調査の結果、とある支部だと割り出せました。

それは連合軍最高司令官の傘下である支部。

真偽を確かめるべく徹底的に洗い、間違いがない事を確認しての公表であり、偽りはございません。では、その意図は何だったのでしょうか？当初、私にもその意図がまったく分かりませんでした。国民をあえて不安にさせて、その後は何を得るのかと。ですが、今ならば、断言できます。これは徹底抗戦の意識向上の為の出来レースであつたと。これこそがコロニー落としての真犯人の意図。そう私は予想、いえ、確信しています』

連合軍最高司令官演説後

「嘘だろ、これ」

うちの艦長がそんな事を決意する筈がない。

そんなのナデシコクルーであれば誰もが理解している事だ。

しかし、それはナデシコクルーのようにユリカ嬢と直に接しているから分かる事。

最高司令官という立場の人間が言った言葉であれば、信じる人間も多い。

ましてやナデシコは今、地球から遠く離れた月面基地。

反論の機会も与えられず、なし崩し的に真実として受け止められてしまう。

。そもそも、ここまで最高司令官が強引な手を取れたという事は・・・

「やはり拘束されている可能性が高いか。でも・・・」

これだけの為だったら、拘束するまでもなくナデシコごと潰してしまえばいい。

「でも、始末する訳にもいかないよな」

恐らく、都合上、ナデシコクルーは拘束以上の事をされていない可能性の方が高い。

ナデシコ級がそう簡単に沈む訳がないというのは周知の事実であるし、

この瞬間、ナデシコの撃沈記録が出てきたら、最高司令官の嘘がバレてしまう。

少なくとも現段階では始末されていないと見ていい。

まだチャンスは残されている。

さっさと解放するべく動き出さねば。

「まずは月面基地に乗り込む為の準備をしよう。

危険かもしれないけど、虎穴に入らずんば、虎子を得ず。

ナデシコの状況確認と解放の為ならば命を賭す意味がある」

『このニュースが流れている時、私達ナデシコクルーは月面基地に拘束されていました。』

すぐにでも否定したかったのですが、その自由も許されず・・・。

私は決して抗戦を決意していません。ましてや口になど断固として出していない。

「この発言は徹底抗戦派である最高司令官が私の名を勝手に使い、捏造したものだのです」

ボソンジャンプ後

「侵入成功」

まずはボソンジャンプで月面基地内に侵入。

念の為にカメラの死角とかを探しておいて良かった。

基地内の部屋割りの状態なんかも理解しているし。

これで最短距離で制御室に向かう事が出来る。

もちろん、誰にも見つからないよう慎重に動きますけどね。

準備にも結構な時間を掛けたし。

「到着つと」

何故か容易に突破成功。

兵士の殆どが出払っている様子。

いたとしても気が抜けてたり、持ち場を離れてたり。

いや、持ち場を知ってる訳じゃないけど、滅多に会わないって事は多分そう。

・・・何をしていたんだろうか？

というか現在進行形で何をしているんだろうか？

「まあいい。さっさと状況を確認しよう」

内部からハッキング。まずは基地内の状況からだな。

「・・・やっぱり拘束されていたか」

カメラの映像より拘束の事実を発見。

数時間前にナデシコ内が占拠されてクルーは拘束されたらしい。

流石に基地の中じゃ逃げられないよな。

前のムネタケ提督の時は少人数だったし、自由に動けたし。

「・・・という事は最高司令官の演説と同時に拘束したって事か」

逆算すればそうなる。

準備もせずに乗り込んでいたら、警戒網に引っかかっていたかも。気を張ってただろうし。

「うまい具合に隙を突けたって事か」

とりあえず俺の映った映像は全て削除。

足は付けませんよ。幽霊は足を付けませんよ。

「解放するには戦力不足・・・か」

今すぐにもクルー全員を解放したいけど、俺一人の力だけじゃ無理。

十分な戦力と確実に解放できる状況作りが必要。

ここは・・・彼らの、アレス隊の力を借りよう。

無論、俺も全力を尽くす。

基地をハッキングして機能停止させるぐらいはするつもりだ。

「アレス隊の通信コードは知っている。」

彼らが今、どこにいるかは分からないけど、少しでも早く連絡するべきだな」

もし彼らが拠点となっている基地にいるのなら、到着までに一週間程は掛かる。

残念だが、この時間を短縮する事は不可能だ。

今はただナデシコが無事であると祈るしかない。

せめて俺が今出来る事は少しでもやっておこう。

この状況下であれば・・・ユキナ嬢関連を少しでも進めておくのがいいか。

とりあえず、木連に侵入しよう、といってもボソソジャンプでだけだ。

内部からハッキングすれば、様々な情報が得られる筈だ。

IFSはないだろうけど、専用の端末は俺が持つてるから問題なし。

あと、木連の意識改革も出来る範囲でやってみようと思う。

少しでも戦争の事を考えるようになってくれれば嬉しい。

地球の国民意識改革に関してはそれなりに順調。

徐々にだけど、地球国民の食い付きも良くなってきたし。

マスコミも注目してきてるようだしな。

後の心残りは・・・ヒナギクか。

ヒナギクに連絡が取れればいいけど・・・全てが解決してからだな。

ミナトさんもセレス嬢も無事に生きている筈だ。何故だかそう確信できる。

心配かけて申し訳ないけど、もう少しだけ待っていてください。ミナトさん。セレス嬢。

『そう、私達ナデシコは利用されたのです。

拘束され、発言の機会も与えてもらえずに、全てを捏造し、人を騙す。

皆さん。このような事を許して良いのでしょうか？

意見がまったく合わないからといって派閥の代表の発言を捏造する。

とても許せるものではありません。

私は断固としてこのような暴挙を許しません！

また、断じてこのような発言はしていないと軍人の誇りに賭けて誓います』

《ナデシコ解放作戦当日》

今日は遂にアレズ隊が到着する日。

約束通り、月面基地の全ての機能を停止させよう。

まずは基地内から戦力の殆どを基地外に出させる。

その為に三時間という時間を設けたのだから。

戦力が減れば監視は薄くなる。

そうなれば、脱出も容易って寸法だ。

後はナデシコクルーの解放と監視の排除だけど……。

解放に関しては擬似的マスターキーは用意した。

所詮はデータ。ナデシコのマスターキーが用意できてこっちが出来ない訳はない。

後はこのマスターキーを誰かしらに渡せば万事解決。。

とりあえず、誰かを解放するついでに置きっぱなししておけば良いだろう。

監視の排除は・・・どこかに閉じ込めてしまえば良いか・・・。
これは緊急事態による集合とでも言えば集まるしかなくなる筈。
その部屋ごと閉じてしまえば監視もなくなり、皆はナデシコまで容
易に辿り着けるな。

「おし。早速実行に移そう」

制御室は完全に制圧している。

ここに俺がいる以上、基地内を支配したも当然だ。

「ん？ モニタに映ってるのって・・・ヒナギク？」

モニタには基地に向かって一直線に駆けるヒナギクの姿。

あれは間違いなくナデシコ所属のものだな。

今現在、ヒナギクに乗っているであろう人物は・・・。

「良かった。生きていてくれたんですね。ミナトさん。セレス嬢」

安堵の溜息。

信じていたが、それでも不安がなかった訳ではなかった。

でも、これでようやく安心できる。

うん。本当に良かった。

今はまだ会えないけど、すぐにも解決して会いに行きます。
だから、待っててくださいね。

「作戦は順調。俺もさっさとズラかろう」

ナデシコは無事脱出できたようだな。

これもアレス隊や他の協力してくれた部隊の方々のお陰だ。
感謝してもし足りない。

まあ、あのナデシコクルー達であれば、基地の機能を停止しておけば勝手に脱出したかもしれないけど。それでも、被害なしに脱出できたのは紛れもなく彼らのお陰だ。やっぱり、圧倒的感謝。

『しかし、彼の暴挙はこれだけではないのです。

皆様は覚えているでしょうか？ 私の父の暗殺事件を。

これもまた木連の仕業であるとされてきました。

ですが、先程、お話しした事を思い出してください。

バツタは既に木連だけの兵器ではないのです。

あの時、多くの兵士が警護する中、私の父は撃たれました。

何故、護りきれなかったのか。何故、侵入を許してしまったのか。

それはバツタに対して敵反応が出なかったからだと後で知りました。

何故、バツタに敵反応が出なかったのか？

それは正しく連合軍内部からの干渉があつてこそ実現できる工作。

あの時、和平を唱える父を暗殺する事で誰もが最も得をしたか？

私達は嵌められていたのです。これもまた徹底抗戦を唱える為に。

徹底抗戦派の、いえ、徹底抗戦派筆頭である地球連合軍最高司令官によって』

ナデシコは解放した。

今の所、地球側で俺が干渉するべき事はない。

もちろん、情報の公開は続けるが、それ以外はしばらく様子見てい
いだろう。

今、俺が行動するべきなのは木連関連。

木連に侵入してから幾日経ち、それなりに成果らしい成果を得る
事が出来た。

まずはユキナ嬢の居場所。

最初は木連内を闇雲に調べた為、何も出てこずに途方にくれたもの
だ。

だが、何日も掛けて搜索した事が功を奏し、ようやく尻尾を掴む事
が出来た。

きっかけは些細な事。

通常、木連において女性は神聖なものとされている。

まあ、この表現は大袈裟かもしれないけど、少なくとも軍人として
女性は存在しない。

そうなれば、基地に対する物資に女性用の下着などは含まれない筈
である。

もちろん、食堂関係や清掃係などの軍人ではなくても軍にいる役職
の者もいる。

だが、それも人手不足でバツタなんかを艦内の清掃に利用するよう
な軍隊だ。

地球に比べて、圧倒的に女性用の物資は少ないという事は言うまで
もない。

木連にある基地全部をリアルタイムで同時に監視する事は不可能。

でも、物流ルートを洗えば、違和感には気付く。

しかも、それが一日に一気に仕入れているとなれば尚更。

ユキナ嬢は保護（という名の拘束）を受け、家に帰る余裕はなかつ

た。

着替えなどを兄であるツクモさんに届かせるのは現実的にありえないとすると、

彼女の着替えなどは誰かしらがどこかしらから用意しなければならぬという訳。

それがヒントになったんだ。

後はその事を証拠にその基地にハッキングを仕掛け、基地内の様子を観察。

案の定、ユキナ嬢が囚われている部屋を発見する事が出来たという訳だ。

随分と慎重に取り扱っていて、流石に部屋の中などを見る事は出来なかったが、

その部屋にまで連行する映像は監視カメラに映されており、決定的な証拠を得る事が出来た。

場所は意外にも木連の市民船のとある基地。

しかも今現在、神楽派が本拠地としているのと同じ市民船だ。

隔離する為に市民船から遠い場所で拘束すると思っていたんだけど、見事に裏をかかれたな。

まあ、見付けられたのだから、最早どうでもいいけど。

「とりあえず、この情報を神楽大将に送っておこう」

神楽大将ならばうまく活用してくれる筈だ。

「さてつと、気になる現在の木連の状況だけど・・・」

流石は秋山さん。

アニメや漫画やらによる意識改革は順調みたいだな。

少しずつだけど和平を考える者も出て来ているようだ。

とりあえず、この書き込みに同調してみようと思う。

人間つてのは集団心理が働くもの。

一人の是では無意味でも、複数の是は総意となり得るのだ。

まあ、これに関してはこれ以上干渉する必要はないだろうけど。

秋山さんに完全委託するとしましようか。

「とりあえず木連でやる事もなくなつたか？」

ユキナ嬢の居場所と状況確認。

後はちよつとした思想誘導に干渉したぐらい。

それでも、木連内における俺の役割としては充分な成果だ。

こちらの様子見の段階まで来たって感じだな。

地球にしても木連にしても俺がするべき事は殆どやり尽くしたと言つていい。

ひとまず、両陣営の監視に専念しよう。

突然の事態にも対応できるよう余裕を持っていないとな。

今の騒動が落ち着いたら頃、ひよっこり姿を現すしよう。

それまでは我慢、我慢。

『私の話は以上です。私の言っていた事を踏まえ、もう一度よく考えてみてください。』

ここからは私に代わりある方に私達の総意を語って頂きたいと思います。

同時に改革和平派の代表の席を辞任し、あるべき方の下へ戻す事を宣言致します。

では、改めて、皆様に紹介致します。改革和平派代表であるミス・マル・コウイチロウです』

『ご紹介に預かりましたミスマル・コウイチロウであります。まずは国民の皆様には謝罪を。私達軍人のエゴにより多大なご迷惑をお掛けしました。連合軍に席を持つ者として、心よりお詫び申し上げます。申し訳ございませんでした。』

・・・そして、連合軍兵士の諸君！ 直ちに戦闘行為を停止せよ！ この争いに益はない！』

《地球帰還後 ミスマル親子演説七日前》

「嘘だろ、おい」

地球に戻ってくれば突然の事態。

監視して余裕を持って対応しようと思つてた矢先にこれだよ。

「クーデター。地球人同士の争い」

連合軍同士が争う。

懸念していた事が実現してしまうとは・・・。

地球連合軍徹底抗戦派が強行した軍事クーデター。

それも連合軍最高司令官が指揮を執るといふ異例のだ。

「でも、確かにこのタイミングはかなり有効かも」

コロナー落としての影響によって国民は不安を覚えている。

その状況下で和平を唱えるのはまるで木連を擁護しているかのよう

に見えるだろう。

たとえ犯人が木連でなくても、候補に挙がるのであれば、状況は変わらない。

あくまで木連は敵国であるからだ。

極端な見方をすれば、売国奴、そう思われてもおかしくはない。

そして、それがそのまま直接和平派への不審に繋がる。

和平を結んだ後、もしかしたら何かしらの取引があるのかもしれない。

少なくとも、そのような噂が流れたら、疑惑は深まり、疑心暗鬼になるだろう。

コロナー落とし。その影響を巧妙に利用した策だ。

「随分と計画的な策略があったものだ。だが・・・」

この策略には欠点がある。

これはコロナー落としの犯人が木連にあるという疑惑がある事が前提だ。

真犯人が木連ではなく、地球連合軍であると露見すれば、一瞬にして全てが覆る。

その切り札は・・・やはりナデシコ。

という訳でさっそくナデシコにこのクーデターを知らせるとしよう。

「結局の所、どのような場面でもナデシコが鍵を握っているって事か」

やはりナデシコは何かを持ってるな。

事件やらイベントがあったら必ず中心にナデシコがいる。

まあ、これに関しては喜んでいいのか、悲しんでいいのか分からないけど。

「コホン。とにかく、だ」

この状況を覆す為に必要な証拠はミナトさんに渡してある。そして、ナデシコ拘束が逆に信憑性を増させる事になるだろう。徹底抗戦派、いや、最高司令官は全てが裏目に出ているという訳だ。危険を少しでも減らそうとナデシコを隔離したのだろうが、それが結局、逆に自らを追い込む証拠を与える事になってしまっている。

「しかし、時間が掛かり過ぎるな」

月面基地から解放されたばかりのナデシコ。

地球到着までに一週間程の時間が掛かる事は間違いない。

すぐに動き出し、邪魔が入らなければという前提で。

クーデター収束までには間に合うだろうけど……。

また大きな犠牲を残す事になっちゃうな。

……本当に、戦争なんてするもんじゃないよ。

「……悲しんでいる暇はないな」

ナデシコ到着までに俺が出来る事……。

既にクーデターが発生してしまっている以上、クーデターを止める事は不可能。

被害を減らす事も不可能であると思っ正しい。

俺がアドニスで出撃しようと思っ正しいは一兵士。

世界規模での争いにおいては何の影響も与える事は出来ない。

全ての基地をハッキングして機能停止にする？

いや、世界中の全ての基地を停止させる事など不可能。

ましてや、停止させた所で全ての戦闘行為が止まる訳ではない。

基地を機能停止させた所を人型兵器で攻められて全滅なんてあまり

にも目覚めが悪い。

それなら、劇場版のように全ての兵器をハッキングして機能停止にするか？

いや、あれは設備が整っているからこそ出来た事。今の状況じゃとてもじゃないけど不可能だ。

「・・・考える。考えるんだ。駄目なら発想を変えれば良い」

俺に出来ないなら、他の誰かに、止める事が出来る誰かを動かせば良い。

「この内乱を止められる人間。それは・・・艦長とミスマル司令」

この二人であれば、和平派の連中を止めて、かつ、抗戦派を説得する事が出来る筈だ。

それが二人同時であれば、尚更。

「ここまで理解できているのなら話は早いじゃないか」

俺がするべき事。それは二人の演説の準備を整える事だ。

ミスマル司令に関してはいつでも大丈夫。

登場するきっかけを探しているだけであり、すぐにでも表舞台に立てる筈である。

後はユリ力嬢。ナデシコに連絡してからしばらく経つが、どうするつもりなのだろうか？

「ナデシコやアレス隊は今どうしている？」

状況が掴めない。

衛星から映像を入手しようにもどうやら死角にいるようで見付から

ず。

「・・・仕方ない」

ビクバリア付近の監視を行い、状況次第で対応するでしょう。

地球に戻ってくる以上、ここは通らざるを得ないのだから。

それまではクーデターの状況を逐一調査しておこうかな。

その情報をミスマル司令宛に送り続ければ、行動も早くなるだろうし。

突発的な事態にも対応できるよう準備は万全に。

今は俺にしか出来ない事をしよう。

それが最善だ。

『我々が仲間内で争う事に何の意味がある！』

確かに考え方の違いや派閥の違いなどがあるだろう。

だが、それを武力によって統一するというのはあまりにも横暴。

考える事は自由だ！ 唱える事は自由だ！ 主張する事は自由だ！

その自由意志を奪う権利など誰にもない。それはたとえ神であろうと！

また、今の状況で内乱を起こす事がどれだけ地球を追い込むか理解しているだろうか？

地球はともかく木連は地球に対して決戦を挑むつもりでいる。

和平派としても最善を尽くし、決戦は回避したいが、状況次第では戦う事になるだろう。

その時、この内乱によって失われた戦力分をどこから賄うのだ？ 決戦前に自国の戦力を低下させるだけのこのクーデターは愚か極

まりないと言える。

和平を主張しようとか戦いを主張しようとか負けてしまえばそれで終わりなのだ。

何の為に軍がある。エゴを貫く為か？ 敵を滅ぼす為か？ 違う。そうではない。根本的な存在理由は国民の平和を護り、危機を退ける為だ。

このクーデターは全ての意味で、我々軍人が取るべき手段ではない。そう私は断言しよう。

今一度、皆に考えて欲しい。我々の未来を最善とする為にはどうすべきなのかを。

無論、私達改革和平派は徹底抗戦派の主張、意思、その全てを否定している訳ではない。

後々の戦乱を招きかねない火種を放置しておく事の危険性。それは私達も理解している。

確実な和平など存在しない。その事もまた私達は充分理解している。

だが、不可能であろうと、それに近付ける事は出来るのではないだろうか？

敵対していた者とも手を取り合い、協力し合う事は出来る。

それを真つ向から否定してはならない。諦めてはならないのだ。

皆には今一度改めて考えて欲しい。一人一人がしっかりとこの戦争について。

政治家だけじゃない。軍人であろうと公務員であろうと、皆が真剣に。

最早、他人事ではないのだ。同じ地球に住む以上、我々は運命共同体。

これは国民全てに与えられた課題である。我々は変わらなければならぬ。私達も貴方達も』

《クーデター勃発より五日 ミスマル親子演説二日前》

「来たか。え？ あれは……」

クーデター発生から数日。

ようやくビックバリア付近で変化が生じた。

宇宙ステーションを経由しての映像を入手。

そこにはナデシコではなく、ヒナギクが映っていた。

「……何をするつもりだ？ というか、誰が乗ってる？」

ビックバリアの前で立ち往生。

強引に突破するにもヒナギクでは出力不足な気が……。

「え？ 消えた？」

突如として発生していたビックバリアが消える。

何をしたんだ？ ヒナギクにそんな機能は……。

「……そうか。ハッキングか」

俺とルリ嬢でしたようにハッキングでビックバリアを解除したんだな。

そうすればヒナギクでも突破できる。

今の消え方であればそれが自然だ。

「それなら、セレスちゃんに乗ってるって事か？」

今のナデシコでハッキングができるのはセレス嬢ぐらいしかいない、と思う。

それならば、あのヒナギクにはセレス嬢に乗っている可能性が高いという事になる。

でも、そうだとしたらナデシコが動けないよな。

誰に乗ってるんだろうか。

あれか？ 解除の時だけセレス嬢の力を借りたとか。

それとも、もしかしたら、ルリ嬢やらラピス嬢やらが乗ってる？

・・・分からないな。一応、形状やら塗装やらでナデシコのだとは分かるんだけど・・・。

「・・・賭けるか」

ヒナギクの通信コードは知っている。

まあ、元々、俺が一番乗ってる奴だしな。

ナデシコのもので、ナデシコクルーとは限らないが・・・このままじゃ埒が明かないし。

「メッセージ送信。『ナデシコのクルーで間違いないか？』」

コードは先日映像を送った時と同じコードでいいよな」

後は反応待ち。

素直に応えてくれるとは思えないけど・・・。

「お。来たな。えつと・・・」

メッセージ開封。

『ナデシコ艦長ミスマル・ユリカです。ご協力、感謝します』

・・・え？

「いや、疑えよ。疑うよな、普通」

・・・まさかこんなに素直に返してくれるとは思わなかった。

いや、俺にとっては確かに都合が良いんだけど・・・。

これで良いのだろうか？

警戒心のなさは今後に悪いのでは？

・・・まあ、これは後回しにしよう。

今はクーデターが優先だ。

「メッセージ送信」了解した。地球連合軍極東支部基地に向かわれよ『よ』」

ミスマル司令と合流してもらおう。

司令にも連絡して、すぐにでも世界通信が出来るよう準備してもらおう。

それとアクトさん達の力も借りないとな。

演説中、二人にはかなりの戦力が向けられる筈。

それを防ぐにはアクトさんクラスの技量が必要になる。

アクトさんが護衛に回れば、安心して任せられるしな。

判断は司令に任せるけど、キクザクラ内での演説の方が安全でいいかも。

「返信が来た」

先程のように疑われていないのなら、素直に・・・。

『了解。進路を取ります』

うん。心配な程に素直。

ちよつと不安だわ。

自分でやっておいて何だけど。

「とりあえず送信『健闘を祈る』」

信頼されてるのかね？

味方だつて。

いつもの艦長の直感って奴かな？

まあ、気にしてても仕方ないか。

「あ。ついでに連合軍のバツタ輸入のデータも添付しておこう」

何かの役に立つかもしれないし。

武器は多くあつて困る事はないもんな。

「後はミスマル司令とアキトさんか」

最後の最後まで匿名だけど、信じてくれると祈ろう。

どちらにしろ、ヒナギクの事を教えれば、あちらで判断してくれるだろう。

これで俺の現段階で出来る仕事は全て終わった。

「『隠れ潜む時期は終わり、遂に表舞台に立つ時が来たかと愚考致します。』

天の川を渡り、妖精達の加護を得て、和を代表する花名の船へ。

今こそ、貴方様の秘められた想いを全ての民に伝えて頂きたく

思います』」

後は任せましたよ。ミスマル司令。

『一人一人が考え、一人一人が答えを出す。

そのような世界になる事を私は望みます。

その為にも、この無駄な争いを停止して欲しい。

皆がゆっくりと己自身と語り合える時間を。

それによって出された結論に私は従いましょう。

エゴでもない。軍の最高司令官でもない。

私達軍人は国民の総意に従う事こそが義務であり、誇りなのだから。

地球国民全てによる方針決定。

国民の一人一人に和平か、徹底抗戦かを決めて頂き、

そして、地球政府による厳正な審議で地球国民の総意を決定して欲しい。

地球の方針を決定するのは地球に住む皆であるべきだ。

私は一軍人として、皆様方の出した結論に従い、全力で責務を全うすると約束致します』

第四百話（後書き）

コウキの行動とそれに連動するユリカ嬢達の演説。
読みづらかったですかね？

コウキの時間軸を追ってはいませんが、詳しくないので分かりづら
いかも。

なお、期待して頂いた戦闘シーンですが、申し訳ありません。
ですが、演説中に何の戦闘もなかった筈がないので、
次回、お望みの戦闘シーンが入るかと思えます。

最後のミスマル司令の演説。
これもある意味、賭けかと。
詳しくは次回にでもお話します。

それでは、次回もよろしくお願いします。

第一百五話（前書き）

お待たせしました！
遂に決着の時です。

第二百五話

S I D E M I N A T O

『ええ〜い！ 黙らせる！ さっさとあれを破壊するのだ！』

いやねえ。

そんな大声出して。

「ミナトさん。回避を」

「りよ〜かい」

キクザクラに向けて放たれるミサイル。
的が大きいからって当たるとは限らないのよね。

「そういえば、久しぶりよね。こうしてルリルリと一緒にのもの」

「はい。随分とナデシコから離れていましたから」

「私もいる」

「ふふっ。そうね。ラピラピもいるわよね」

本当に久しぶり。

二人とこうして並ぶのって。

「それにしても、よく決断しましたね。ここに来るって」

「なんとなく信じられたのよ」

謎のメッセンジャー。

彼か、彼女かは分からないけど、その人を。

絶対に味方だって。

「なんとなく・・・ですか。」

「蜃気楼にはミナトさんを信じさせる何かしらの要因があると。」

「やはり、私達の予想は間違っていないかった。確信が深まりました。」

「蜃気楼？ 確か今、地球を騒がしている噂の・・・。」

逐一、地球の情報を集めているアザレアちゃんから教えてもらった名前。

それがどうして、今ここで出てくるのかしら？

「先程の謎のメッセージという方は恐らく蜃気楼と同一人物です。」

「え？」

地球で噂の人物が、月面基地で暗躍していた人物と同一人物？

あまりにも距離が離れ過ぎているじゃない。

それとも、月面基地から地球の事に干渉していたとでも？

そんな事、不可能だわ。

情報を集めるにしたって、公開するにしたって、月からじゃ都合が悪く悪いもの。

「流石に無理じゃないかしら。ナデシコに協力しながら地球に干渉するなんて。」

「確かに厳しいでしょう。普通であれば。」

「普通なら？ じゃあ、その人は普通じゃないって事。」

「はい。その情報収集力が一番の理由です。」

「嚴重なプロテクトを突破しての機密情報も公開情報には多々あります。」

「また、基地の機能を停止させるなんて事が普通の人間にできる訳がありません。」

それは確かに。

電源を落とすとかそんな簡単な事じゃないもの。
予備電源も働かせず完全な機能停止。
間違いなく、ソフト面での工作。

「でも、距離的に」

「それを無視できる方法があるじゃないですか」

距離を無視……。

「ッ！ それって……」

「そうです。ボソンジャンプ。これがあれば距離的な制限はありません」

ボソンジャンプであれば確かに可能。

月であろうと地球であろうといつでもどこでも行動できる。
でも……。

「それなら、蜃気楼はジャンパーって事になるわよね」

ジャンパーの数は限られてくる。

たとえジャンパーであろうとその真実を知らないから、

自分がジャンパーであるって事を自覚している人は殆どいないし。
それなら……誰が……。

「もしかして、アキト君？」

「どうしてそうなるんですか？」

どうして呆れられちゃうのかしら？

アキト君なら可能でしょうに。

「確かにアキトさんであれば可能です。

ジャンパーですし、秘密工作が得意なアキトさんなら、不可能ではありません」

「それなら」

「ですが、アレス隊、でしたか？ その部隊とは面識がありません」

「・・・面識がなければ一番に連絡は取らないわよね」

あの時、アレス隊に連絡したのは偶然なんかじゃない。

間違いなく狙ってアレス隊に連絡を入れていた。

無作為で選択はしていない。

「アレス隊に面識があつて、ジャンパーで、裏で暗躍できる特殊技能がある人物」

「そんなの私達の知る限り一人しかいないじゃないですか」

「ましてやナデシコの味方だと特定できるのは一人しかいない」

条件に当てはまる人物。

複雑な条件ながら、真つ先に浮かんでくる人物が確かにいる。

「・・・コウキ君って事？」

それはコウキ君。

行方不明になっている私の恋人。

「少なくとも私はそう考えています」

「可能性が最も高い人物。私はコウキしかいないと思つ」

二人は肯定。

「だから、私達もこうしてここにいますし。
ミスマル司令も蜃気楼の言葉に従って表に出てきたんだと思いま
す」

「ミスマル司令が蜃気楼の？」

「はい。今こそ表に出る時だと、私達を連れて。

そうミスマル司令にメッセージが送られてきたそうです」

「じゃあこの舞台を整えたのも蜃気楼、ううん、コウキ君って事？」

「はい。間接的にですが・・・間違いありません」

全てがコウキ君のお蔭だって。

そう誰もが確信している。

それなら・・・。

「・・・それなら、コウキ君は生きてるのね？」

「ミナトさんらしくありませんね」

「え？」

「鋭いミナトさんなら真っ先に気付いてもおかしくないと思ったの
ですが・・・」

「・・・そうね」

考えもしなかった。

コウキ君は生きてるって。

どこかで生きてるって。

そんな事しか考えていなかった。

どこで何をしているかなんて考えもしなかった。

・・・もしかしたら、そんな事を考えたら、嫌な想像をしちゃうと
か思ったのかも。

「駄目ね。こんなんじゃ」

何やってるんだろう？

言われれば言われる程、確信は深まる一方。

こんな事、言われなくても気付くものじゃない。

それなのに、こうまで言われないと気付かないなんて……。

「誰だって混乱はするものです」

「え？」

「思ったより、ミナトさんは混乱していたのかもしれない」

「自分で自覚してなかっただけ。きつと焦ってた」

「……そっか。そっかも」

無意識に、ううん、無理矢理意識の外に追いやっていたのかも。

一度嫌な想像をしたら止められなくなると思ったから。

考えるのが怖かったんでしようね。

あれだけ生きてるって言い切ってたのに。

「不安だったみたい」

結局、強くなかったのね、私。

「当然ですよ。大切な人が死んだかもとなれば自分を見失って当然」

「むしろ、見失わない方がおかしい」

「ふふつ。ありがとう」

慰められているみたい。

嬉しいんだけど、ちよつと悔しいわね。

まだ私はコウキ君を信じきれてなかったんだ。

だから、こんなにも不安になった。

もっと信じてあげなくちゃね。

もちろん、心配はするわよ、いつまでだって。そういうものでしょ？ 家族って。

「それに、もしかしたら無意識にコウキさんだと気付いていたのかもしれないよ」

「え？ どうして？」

「どうやら屋気楼に対して深い信頼を覚えていたようですから」

「ミナトは誰もかも信頼するような甘い人間じゃない」

・・・複雑な評価なんだけど・・・ラピラピ。

「でも、そうね。そうかも」

思えば、不思議だった。

まるで見守られているかのような暖かな感情を謎のメッセージャーから感じていたもの。

信じさせる何かがあったような気がする。

ラピラピの言う通り、誰も彼も信じるような人間じゃないって事は私が一番知ってるし。

そんな私が無条件にその人の事を信じたんだから、多分、予感する自分がいたんだわ。

やっぱり、屋気楼はコウキ君なんだ。

それなら・・・。

「よし！ さっさと終わらせて、私がコウキ君を迎えに行っちゃおう」

「それでこそ、です」

「その意気、その意気」

待ってなさいよ、コウキ君。

ずっと隠れてばかりいて。

おかげですつと不安だったんだから。

覚悟してなさい。存分にお仕置きしてあげるから。

「なんてね」

とにかく早く帰ってきなさい、コウキ君。

S I D E O U T

「どうやら無事に到着したみたいだな」

連合軍極東方面支部のミスマル司令直轄基地。

今はフクベ提督が代理で責任者を務めている改革和平派の本拠地といえる場所だ。

クーデターにおける戦闘が最も激しい場所であり、

このクーデターの成否に最も意味を成すであろう重要区域。

ここを落とせば士気が格段に落ちる為、

徹底抗戦派、というより最高司令官は是が否でも落としたい筈。

逆にここを護り切れればいくらかでも反撃のチャンスはあると言える。

意外にも反改革和平派の全てがこのクーデターに参加している訳でなかった。

お陰で劣勢かと思われていた戦況がほぼ互角という状態になっている。

まあ、どちらにも参加しない人間の考えも分からなくない。

利口な人間であればここで戦力を潰すのは愚かだと気付くだろうし。

どちらの派閥であれ、最終決戦前にわざわざ戦力を低下させる必要はない。

しかし、違う考え方もある訳で……。

ここで参加する者こそ真の徹底抗戦派と最高司令官が判断すれば、クーデターに参加しなかった者は、

クーデター成功後にかなり立場が低くなる事は間違いない。

ある意味、このタイミングでのクーデターは、

敵味方をはっきりさせる為でもあったと考えられる。

主導権を握りたい以上、周りは味方だけで固めておきたい筈だもんな。

もちろん、これらの策は勝たなければ何の意味もない話なんだけどもね。

むしろ、負けたら一気にどん底。

改革和平派の敵であるとして降格させられる事もまた間違いない。

参加しなかったものは非難はされるものの中立派として存続できるだろうし。

今後の事を考えた日和見とも言えるし、戦力的な意味で賢い選択とも言える。

まあ、手を出さないならば、気にしても仕方ないだろう。

その辺りの判断はミスマル司令がすれば良い事だし。

むしろ、こちらとしても敵味方がはっきりして都合が良いかも。

どちらにしろ、勝ったものが今後の主導権を握るのは間違いないね。

「ん？ あれは……そうか、地球に持ってきたんだな。アドニス機動殲滅仕様」

ad - MA (Mobility Annihilation)。

爆発的な加速力、圧倒的 maximum 速度を持つ怪物兵器。

乗る者を選ぶなんてものじゃない。

乗る者は適正なければ死を覚悟した方が良い。

それ程の規格外の兵器へとなった。

また、それに加えて、莫大な火力も持つ。

まず、グラビティライフル。

こちらは機体からのチャージはないものの、

重力波アンテナを装着している為、火力は折り紙付き。

ディストーションブレード。

通常のサイズを著しく上回る特別製。

最大速度のまま振り切られたら・・・想像を絶するであろう威力な筈だ。

次はクラッシュパーム。

排熱機構を掌部分に設ける事で凄まじい熱を持たせる事が可能。

もちろん、耐熱加工を施し、融解はしないようにしてある。

でも、それは自機のみで、敵機は別。

掌で敵機を掴み、その凄まじい高熱で敵機を融解させる事こそがこの武器の真骨頂。

無論、他の場所にも排熱機構は備わっており、状況次第で使い分ける。

そうしなければ、ディストーションブレードが持てないなんて事もありえるからな。

まあ、ディストーションブレードの柄にも耐熱加工は施したけど。

そして、この武器こそが機動殲滅仕様の最たる武器。

グラビティウイング。

イネス女史渾身の出来だそうで・・・。

すれ違っただけで分断される事間違いなさそうだ。

グラビティウイングを展開したまま飛び回る。

それだけで凄まじい戦果を残す事は間違いない。

いや、言つてて恐ろしくなってきた。

アキトさんとこの機体の組み合わせは・・・。

「死神。アキトさんの渾名に相応し過ぎるだろ」

正に人の生を狩る魔の使い。
知らぬ間に死んでたなんて事が多々ありそうだ。

「まあ、それも宇宙に出てからだな」

地球じゃ本領発揮は出来ないだろう。

まあ、それでも充分過ぎる程の性能を発揮するだろうけどな。

「アキトさんが乗るべきだつてのは艦長も承知の筈。

どうやらミスマル司令は俺の頼みを聞いてくれたみたいだな」

目の前で繰り広げられている戦闘を見ればそんな事は一目瞭然。
間違いなく、機動殲滅仕様にはアキトさんが乗っている。

「となれば・・・」

ほぼ同時に発進したアドニス接近格闘仕様。

別名 a d - a d - A G (A p p r o a c h G r a p p l e) 。

これには誰が乗っているのだろうか？

艦長とかウリバタケさんとかとの話し合いではスバル嬢が乗るべき
としていたけど・・・。

「あの動き、ガイ程直線的ではなく、ヒカル程複雑じゃない。

でも、確実に敵を屠っている。見事なまでの接近戦闘能力だ。

まるで本能で動いているよう、それでいて、型に沿って華麗に動
いている」

ガイでもなければ、ヒカルでもない。

その上であそこまで接近戦に強いのは・・・。

「やっぱりリョーコさんしかない」

ヒナギクで地球に向かっていている段階でスバル嬢もいたんだろうな。流石は艦長。ナイスな判断です。

ナデシコパイロット二人とアドニス二機。

これ程、頼りになる味方はいない。

キクザクラが落とされる事はまずないだろう。

「しかし、敵が哀れになるレベルだな」

アキトさんとアドニス機動殲滅仕様の組み合わせ。

目まぐるしく動き回りつつ、正確無比な射撃に一瞬で振り切られる斬撃。

接近して断ち切ったかと思えば、そのまま遠くの敵を撃ち貫いたり。いや、やりたい放題っていうのはこういう事を言っただろうなと実感。

しかも、それがアキトさんだけだったらまだ可哀想で済むんだが……。

接近格闘仕様とスバル嬢の組み合わせもアキトさんに負けず大奮闘。右腕にパイルバンカー、左腕にミサイルシールドを装備。

その上、両腕にそれぞれデイスターシヨンブレードを装備なんていう。

なんというか、ある意味、腕が四つあるようなもの。

両腕があまりにもゴツイ。

背中のバックパックは鋭利な作りになっていて、刺々しいというか、禍々しい。

重厚な装甲に身を包みつつも、

加速力も充分で二足歩行になった戦車みたいな、そんな感じ。

いや、要塞かな？ とにかく、物凄いインパクトがある。

スーパー仕様に引けを取らないゴツさ。

それでも身軽な動きで・・・もうなんてコメントしていいやら。迫り来る敵はデイストーションブレードで真つ二つに切り裂く。遠くにいる敵は強引にでも突破し、何らかの攻撃をぶち込む。

そんな強引さを叶えさせてしまふ機体だ。

なかでも、ミサイルシールドを使用した突破は一際目立つ。

ミサイルシールドを前面に出しながら突撃するのだが・・・。

その際、シールドにある推進機構が機体を更に加速させ、抜群のスビードを発揮。

ミサイルで攪乱し、シールドで前面を護る事で敵の弾幕を強引に突破し・・・。

ガコンツッ！

凄まじいスビードの分も攻撃に乗せ、貫通力に秀でたパイルバンカーをぶち込む。

・・・これに貫かれない機体なんてないだろ。きつと誰もが共感してくれる感想に違いない。

「・・・フルスロットルっすね」

なんか鬼気迫るものすら感じる二人の共闘。

単独でも充分強いであろう二人がそれぞれをフォローしながら戦っているんだ。

これを突破できる奴は皆無だろう。

うん、断言できる。

たとえここに北辰が現れても断念するだろうな、間違いなく。

「・・・さて、どうするか」

既に改革和平派、徹底抗戦派共に戦意は消失している。
時偶、何を血迷ったのか、キクザクラに攻撃を仕掛ける奴もいるが・
。。。

「撃墜されるだけだったの」

凄腕のパイロットが護衛に付いてるんだぞ。
突破できる筈がない。

「という訳で・・・」

ここで俺が何か仕掛けた所で何の意味もない。
むしろ、收拾しかけている場を逆に混乱させてしまふ恐れがある。
それなら・・・。

「帰るか。俺の居場所へ」

戦力が不足しているようだったら助っ人参上の形での参戦も良か
つたけど・・・。

充分過ぎる程の戦力だもんな。
だったら、ここはアキトさん達に任せて、帰るべき場所へ帰ろう。
蜃気楼は今日でおしまいだ。

これからは実体なきものとしてではなく、実体ある者として過ごす。
影なんかじゃなくて、直接太陽に照らされる表舞台、ナデシコクル
ーの一員として。

「アドニス。戻ろうか。俺達の居場所、ナデシコへ」

アドニスに搭乗し、装備を整える。

軽く出来る範囲で整備しておいたけど、まだまだ甘い。

早くちゃんとした設備で整備させてあげたいものだ。
なんといつても、俺の相棒だからな。

「この施設は俺の秘密基地として取っておこう。
できる事なら、二度と使わなくて済むようにしたいけどね」

この施設は蜃気楼である俺が活動していた場所。
蜃気楼の象徴とも言える。俺の中でだけど。

ここを破棄するという事は即ち蜃気楼たる己と決別。
今後、二度と蜃気楼となる事はないだろう。

それに、俺＝蜃気楼とは誰にもバラすつもりはない。
なんか蜃気楼つて影の支配者みたいで俺のイメージに合わないし。
この秘密は墓まで持っていこう。

「とりあえず、未来にジャンプしたって事にしようかな」

一度、八ヶ月もの期間をジャンプした事があるんだ。
誰も違和感は覚えないだろう。

「死亡扱いに関してはうまい具合にナゲシコ勢と口裏を合わせて・・・」

誰かが回収したとかすれば特に問題ないでしょ。
やだよ？ 死んだままにされるのは。

「うん。問題はないようだな」

さて、それじゃあさっそく・・・。

「いや、その前に・・・」

ちよつとイタズラをしてから行こうかな。
それぐらいは許されるだろう。意趣返して奴だし。
ある意味、雇気楼としての最後の仕事だな。

「うし。壮大なイタズラにしてやろう」

『連合軍同士の争いに民を犠牲にしてはならない。』

徹底抗戦派であろうと改革和平派であろうと、連合軍人の理念は同じ。

国に、民に、奉仕し、守護する。それを破る者は連合軍事にあらず。

改革和平派代表として話し合いの場を設ける事を願う。

国の舵を取るのには軍人ではない。政府であり、根本は国民だ。

我らが争った所で今後の方針が決定する訳ではない。

まずはこの意味のない戦闘行為を停止して欲しい。

その上で、政府の、民の決定を待ち、それに従おうではないか。

それが我々地球連合軍のあるべき姿であると私は思う。やるべき事であると私は思う』

御尤もなご意見です。司令。

『だが、連合軍最高司令官は別だ。』

この者はコロニー落としを企てた者として裁かなければならない。

これ以上、戦闘を続けるという事は最高司令官に付き従うものとして同罪とする。

改革和平派、徹底抗戦派問わず、これ以上の戦闘行為を続ける者は裁きの対象となるっ』

再び御尤もなご意見。

さて、それに対して最高司令官は何と応えるのやら。

『・・・・・・・・』

なんて、残念ながら答えられる状況じゃないもんな。

「さてっと、後は放置でいいか」

クーデター開始と同時に行われた最高司令官による演説。

内容の殆どはコロニー落としを起爆剤としての『木連を許してはならない』発言。

同時に、改革和平派は木連に踊らされている愚か者の集団だとかそんなの。

まあ、大体の人間がその言葉にまんまと踊らされた訳だが……。こうなってしまうばどうしようもできないだろ。

ミスマル司令が演説を開始した時点で反論やら何やらをすればよかつたものの、

まさかのユリカ嬢出現に困惑し、加えて、ありえないミスマル司令出現に唾然としてしまった。

これで対応に遅れて、結果、自らの首を絞める事となった訳だ。

それから遅れる事、今更ながら演説をし始めようとしたから、即行で潰してやりました。

まあ、いつもの手段であるネットワークを介した侵入ミッションですな。

ビックバリアのパスワードを盗んだ時のような感じで、

セキュリティが厳しくて大変だったけど、不可能ではありませんで

した。

いや、僕も成長してるんですね。今回の事でそう実感しました。はい。

今回は機能停止というか、特定の機能だけを停止させてみた。

受信は出来るけど、送信はできないみたいな。

要するに、放送は聞けるけど、放送は出来ないって事。

これで総本部から世界規模への放送をする事は防げたと。

もちろん、どこかに移動すれば可能だけど、その準備にも手間がかかる。

少なくとも今のミスマル司令にリアルタイムで反論する事は出来ないだろう。

いずれ拘束する為の部隊が乗り込んでくるだろうし、完全に反撃のチャンスは潰せたな。

現在、最高司令官は演説に反論する事も許されず、聞かされるのみという状況。

加えて、監視カメラ経由の映像で楽しませてもらっていますが、何か？

いやあ、良い具合に血管が浮き出てますね、コメカミに。

ま、これで僕のイタズラは終了です。

ご満足して頂けたでしょうか？ 最高司令官殿。

滑稽な姿を見せて頂き、スカツと致しました。

利用したのですから、それぐらいの報いは当然ですよ？ ふふっ。

その後、ミスマル親子による演説によって戦闘行為の一切が停止。

降伏とは違うが、それぞれが所属する基地へと戻っていった。

その後の行動は追って連絡するとされている。

最高司令官は国を、地球を裏切った者として拘束。

真偽を確かめる為の裁判を受ける事となった。

明確な証拠もあり、少なくともコロニー落としての件では認めざるを得ないだろう。

ミスマル司令暗殺事件に関しては正直分らない。

こちらに関しては明確な証拠がないからだ。

でも、ま、コロニー落としの方だけで充分過ぎるぐらいの影響を残すだろうけど。

間違いなく、最高司令官は失職するだろうな。

さて、肝心のクーデターの結末だが・・・。

収まったものの決着がついた訳ではないといった感じ。

改革和平派と徹底抗戦派では主張が真逆な為、分かり合うのには時間が掛かるだろう。

最高司令官やそれに近い人間のように都合が悪いから滅ぼそうという人間は別として、

地球の平和を、平穏を願うが故に徹底抗戦を主張している者も徹底抗戦派の中には多い。

それを如何に説得し、納得させるかが今後の改革和平派の課題。

連合軍内で意思を統一させねば、戦後にどんな影響を残すか分からないし。

でも、最終的に結論を出すのはやっぱり国民であるべきで・・・。

ミスマル司令が最後に述べたように全ての民に決定権を委ねる事になった。

民の代表として政府にいるのが政治家というものだが、これに関しては全ての民と決定。

莫大な費用が掛かるだろうが、

そこはあれ、最高司令官とその取り巻きの横領金を使用すればいい。

元々は民の税金ですからね。問題ないかと。

国民が徹底抗戦を選ぶのであれば、それに従わざるを得ない。

でも、そうならないよう俺達は活動してきた筈。

国民の皆を信じるしかないよな。

従うのか？ と聞かれたら・・・正直分からない。

俺はあくまで平和を目指している訳だし。

矛盾してるのは分かってるけど、やっぱり諦めきれないよな。

ホント、頼みます、国民の皆さん。

とまあ、やる事はいくらかでもある訳だが・・・。

それをのんびりとやっている暇は地球にはない。

木連が指定してきた決戦の日、十月五日まで残り僅か三週間弱。

それまでに早急に戦力を立て直す必要がある。

今回のクーデターの影響はかなり根深く、

間違いなく地球単位での戦力は著しく低下しただろうし、

軍内でも誰を信じていいのか分からないという疑心暗鬼な空気が蔓

延している。

決戦前に空中分解してしまう可能性もある訳で、予断は許されない。

政治関係、軍事関係、どちらもすぐさま始めなければ間に合わない

ようなハードさだ。

決戦までどこまで状況を整えられるのだろうか・・・。

多くの不安要素を抱え、恐怖にも似た不安が胸中を襲う。

「・・・ジャンプ」

ナデシコの皆に、ミナトさんやセレス嬢に会えば、こんな不安は吹

っ飛ぶだろう。

そう願わずにはいられない程に苦しい現状だった。

第百五話（後書き）

クーデター終了と同時に第七部完。

クーデター中の戦闘描写が少なかつたなと反省。

まあ、コウキも裏方参加でしたし、

戦いに燃えるような展開もなかったのでご勘弁を。

さて、久々のコウキプツン。

人を勝手に死亡扱った事。

それを良いように利用した事。

それらの事によりプツン。

可愛いイタズラですよ？

さて、クーデターの影響はかなりのもの。

戦力の低下をはじめとして、地球にいいことは一つもありません。

まあ、あえて言うならば旗色がはっきりしたという事ぐらい。

余念のない準備をする期間はハッキリ言っていないに等しい。

どれだけ立ち直す事が出来るかに未来はかかっていますね。

国民、政治家、軍人。

それら国民にとって苦しい期間になりそうです。

全てが曖昧なままですから。

ハッキリしてる事の方が少ない。

次回からしばらくは待ち望まれていた日常編。

その後、最終決戦へと移行します。

これからもよろしく願いますね。

PS 最近、投稿にかかる時間が長く、申し訳ないです。

私なりに頑張って執筆していきますので、
どうか見捨てずに暖かい目で見守ってください。

第百六話（前書き）

第八部開始。

帰還の話、その？

細かい描写にこだわりたい作者。

でも、それ故に物語が進まない。

完結までどれくらい掛かる事やら・・・。

第百六話

S I D E K A E D E

『うまく敵を引き付けて・・・今だ！ グラビティブラスト発射！』
『・・・グラビティブラスト、発射します』

・・・意外と良い指揮ね、代理艦長。
一流の副長？って言われているだけあるわ。

『カエデ。余所見してんな。動け』
「了解」

リーダーパイロットのテンカワさんが不在。
代理リーダーのリョーコもいなくて、加えて、コウキもない。
結果として、見事にリーダー役がいなくなっちゃったのよね。
あ、コウキは別。コウキにリーダー役は向いてなさそうだし。
ナデシコに残されたパイロットは私、スズキ、ヒカル、イズミ、イツキの五人。

残された中でリーダーになれそうな人は・・・いないのよね。
それで、結局、自ら立候補したスズキ、じゃなくて、えっと、ガイに決まった。

だ、だって、私は今の所一番弱い訳だし、まだ厳しいわよ。
他の人達だって自分からリーダーに立候補するような人でもないし。
経験や実力から言えば妥当。

問題は性格だって言ってたけど、こっちも意外とまともな指揮。
暑苦しいけど、ちゃんと周りをフォローしてるし。

暑苦しいけど、強いから頼りになるわ。
暑苦しいけど。

「ロックオン。ショット」

搭乗機はアドニスリアル仕様。

リーダーのガイも同じ機体。

今回は破壊よりも誘導だものね。

スーパー仕様のような大量破壊兵器は必要ないわ。

戦意を剥き出しにして戦う必要もないし。

そういう意味でも心配されてたリーダーだけど、結構落ち着いてる。
うまい具合に時間稼ぎしてるって感じだし。

やっぱりナデシコパイロットは凄い。

改めて、そう実感させられる。

私が皆に追い付くのはいつになるのかしら。

・・・弱気になっちゃダメよね。

もっと努力すればいいのよ。

諦めるなんて私らしくないもの。

「ハアッ！」

突っ込んできた敵機の片腕を断ち切る。

出来るだけ、機能停止に追い込むようにしろとのご命令。

まあ、味方同士で争っている以上、無駄な犠牲は出したくないもの
ね。

でも、破壊せずに無力化するのって難しいのよ？

凄腕のパイロットでも完璧は無理だと思う。

殺したくないと思って腕が足りずに破壊しちゃう事もあって・・・
。

そんな都合良くはいかないのね、世の中。

この手で人を殺したと思うと・・・やりきれない。
敵対している木連人でも嫌なのに、味方である地球人はもつと嫌。
まるで手が血で染まっているかのような、そんな幻覚を見てしまう。
怖くて、震えが止まらない。
・・・どうしてこんな時にケイゴはいないのよ。
怖かったり、苦しかったりする時に傍にいるべきなんじゃないの!?
もう・・・。

「ケイゴのバカ！」

目の前の敵のメインカメラを撃ち抜く。

「かかってきなさい！ 射撃だつたら負けないんだから！」

この苛立ち、このもどかしさ。

貴方達で解消するからね！ 覚悟なさい！

『荒れてるねえ。カエデ』

『愛は人を狂わせる。愛に狂え。その姿は美しい』

『こ、今度はどうしたんですか？ イズミさん』

『気にしてても仕方ねえだろ！ 次だ！ 次！』

外野、うるさいわよ。

「ロックオン。ショット」

物量射撃仕様より武器は少ないけど、その分身軽で動きやすい。
今度はこれも訓練してみようかしら。
どちらにしる・・・。

「早く解決しなさいよ」

戦いばつかで流石に飽きたわよ！

早く終わらせなさいよね、このクーデター。

「そろそろ補給したい頃だな」

戦闘終了後、ブリッジに主要クルーが集まる中、整備班主任から唐突にそう告げられた。

誘導作戦が始まってから一週間近くが経っており、それまで一切の補給がなし。

流石に厳しくなってきたみたい。

所謂ピンチって奴。

それにしても、まだ内乱は収まらないのかしら。

艦長達が飛び立ってもう一週間近くよ？

聞いた話ではもうとっくに地球に辿り着いている筈なのに……。
艦長達は何やってるのかしら？

「やはり厳しいですか？」

「ああ。もともとナデシコは使いようによっては資源的なものは少なくで済む。

相転移エンジンの売りはそこにあるとも言えるしな。

だが、どうしても戦闘になる以上、アドニスの出撃は必要。

そうなれば、弾は減るだろうし、修理に使う機材も必要になってくる。

どれだけの損傷かどうかなんか関係なくな。かすり傷も最終的に

は致命傷になるもんだ」

万全を期したい。

これは整備班だけではなく、パイロットもそう。死と隣り合わせの戦場よ？

準備はし過ぎて困る事なんかない。

「あとどれだけ持ちますか？」

「切り詰めても一週間前後だな」

「そうですか……。どのような方法が？」

「まずは当然弾を使うような武器は極力使用を控えた方が良いな」

「そうですね。他には？」

「そうだな。出来るだけGBで仕留めるようにすれば節約できるだろう」

「アドニスで誘導して一撃で大量に破壊。確かにこれが一番消費が少ないですね」

「まあ、結局、出撃するから整備は必要だし、砲台の整備も欠かせないんだけどな」

「確かに」

「それでも今までのような戦闘をずっと続けるよりはずっと少なくて済む」

出来るだけ物資の消費を控える。

後は私達の戦闘方法次第って事ね。

「どこかで補給するというのは？」

当然の質問。

確かにそれが一番な気がするんだけど……。

「駄目だな。俺達は常に地球へ向かう姿勢を見せておかないといけない」

「ユリカがいると思わせる事に意味があるからね。」

「基地に補給といえど引つ込んだら何があるか分からない」

あくまでナデシコの目的は誘導。

結局、地球に向かった艦長に一任するしかないのか。

「艦長代理。アマゾネスより通信です」

「通してください」

ん？ 突然どうしたのかしら？

『突然の連絡、失礼いたします』

「いえ。どうしました？」

『状況の確認を致したく通信させて頂きました』

「そうですか。それはこちらも願ったりです。他の部隊の方にも同時に」

『ハッ。連絡を取ります』

ナデシコを中心とした艦隊で行動する私達。

既にいくつか離脱した艦もあるけど、それでも大所帯。

連絡は頻繁に取っておくべきよね。

「……ッ！ 失礼します！」

え？ え？ どうしたのよ？ 一体。

突然走り出しちゃって……。

「ちょ、ちょっと、セレスちゃん。君がいないと……って、行っ

「ちゃった」

あまりにも突然の行動に誰も止める事ができず、ブリッジからいなくなってしまう。

流石にあの大男でもちっちゃい女の子は捕まえられるか。

「どうしたってんだ？ あいつ」

「うーん。なんか前にもこんな事があったような・・・」

「デジャブ。それは既視感」

「私にも覚えが」

前にもこんな事があった？

そんなの知らないわね。

「それってどういう意味よ？」

「あれは確か・・・」

「そう、ミナトさんが・・・って、そうじゃん」

勝手に納得してないで教えなさいよ！

「あの時、ミナトさんが走り出したのは・・・」

「「「「「ウキ（さん）！」「」「」」

・・・え？

「・・・「ウキ？」

それって・・・。

『しゅ、主任！』

「どうした！？ 田村！」

そして、整備班からの突然の通信。
状況から察するに……。

『突如格納庫にa d - A Sが現れました！』

コミュニケ経由のモニタに映るのはコウキが乗っていたアドニス。
それじゃあ……コウキは……無事なのね。

「まったく……心配かけるんじゃないわよ、バカ」

本当に……良かった。

無事に生きていてくれて……。

「あの野郎。やっと戻ってきやがったな」

スパナ片手に嬉々とした表情で走り出す整備班主任。
どこからスパナを取り出したのよ？ っていうかいつ？

「ほら。俺達も行くぞ！ 乗り遅れるな！」

「「「オー！」」」

パイロットの皆も争うように走り出す。
……って、ちょっと待ちなさいよ！

「私を置いてくんなー！」

負けじと走り出し、彼らの後は追う。
今はただ喜びだけが胸に溢れていた。

「・・・今から他の部隊と通信するんだけど・・・」
「艦長代理。後は任せました」
「あ、私達も行きましょう。ゴートさん」
「ああ。副長。後は任せたぞ」
「あ、ガイさん、私も行きます」
「・・・ブリッジには僕一人。結局、こんな役回りか・・・。
こういう時に持ち場を離れるのって危険なんだけどもなあ・・・」

S I D E O U T

「・・・忘れていた」

アドニスに登場。

全ての準備を終えて、ナデシコに帰還した訳だが・・・。

「確実に説教もんだな、これは」

物理的な準備は完璧ですよ。

ただ・・・。

「精神的な準備はまったくしてませんでした」

覚悟決めてねえ・・・。

「土下座の練習をしておいた方がいいかも」

久しぶりの再会に嬉しさと喜びとちょっとした気恥ずかしさと……
恐怖。

確実にミナトさんは鬼と化してるな。

『君は完全に包囲されている。素直に出てきなさい』

「……とりあえず出るか」

外がうるさいし。

その台詞には納得できないけど。

「あらら。人がゴミのようだ、なんて」

アドニスのコクピットから抜けだし、下を眺める。

そこには整備班のみならず、ナデシコクルーの殆どがいてくれた。

……なんか嬉しい。

待っていてくれた人がこんなにもいるんだって思うと。

でも、何でだろう？ ミナトさんの姿が見えない。

「……とりあえず降りるか」

目の前に準備されたタラップを活用して床へと降りる。

それをただ黙って眺めてくる皆。

えっと……緊張するんですけど。

「……」

床に降り立ち、クルーの皆がいる方に身体を向ける。

……どうする？ 即行で土下座するか？

いや、でも、それもどうかと思うし。

そもそも何も知らない設定を貫くつもりだし。
どうすればいいんだ？ 俺。

「うん。とりあえず……」

挨拶からだな、まずは。

「皆、ただい」

「……コウキさん！」

「うわっ」と

下腹部に衝撃。

視界に移るのはどこまでも透き通った綺麗な白銀の髪。

「セレスちゃん」

「……良かった。良かったです。無事に生きていてくれて……」

涙声。きつと押し当てられて見えないその顔は涙で濡れている。
泣かせちゃったな……。

「ごめんね。心配かけて」

「……いえ。ちゃんと帰ってくるって、そう信じてましたから」

「そっか。ありがとう」

「……嬉しいです。私はこれからもコウキさんと触れ合える」

しゃがみこんでセレス嬢の顔をハンカチで拭う。

案の定、目元は涙が溢れてるし、鼻の頭は真っ赤だけど……。

「ただいま。セレスちゃん」

「……おかえりなさい。コウキさん」

そう言つて笑うセレス嬢はまるで天使のように可愛らしく……。

「戻ってきたんだな、ナデシコに」

そう実感せずにはいられない幸せで胸が溢れる魅力的な笑みだった。

「……グスツ。コウキさん……」
「おっと……」

ちっちゃな身体で精一杯抱きついてくるセレス嬢。

そんな娘の姿が愛おしくて、その華奢で小柄な身体を抱き締め返した。

もう大丈夫。心配しなくていいよ。

これからもずっと一緒にいられるから。

そんな気持ちが伝わるように強く、強く……。

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ！

「おかえりなさい！」

「やっぱり生きていたんですね！」

「嬉しい。無事で良かった」

「良くぞ戻ってきた！」

「偶には許してやる！ 今日だけは存分にセレセレに甘えさせてやつてくれ！」

「偶にはな。明日からは許さねえ！」

「くそつ。あいつがいない間に二人の気持ちをガツチリキヤツチするつもりだったのに」

「無理だったの。お前じゃ」

「この野郎！ セレセレ泣かせるんじゃないか！」

「人誅！ 人誅じゃあ！」

まったく・・・。

「感動の空気が台無しじゃないか」

「まあ、そう言うなや」

「ウリバタケさん」

後ろから掛かる声。

振り返れば笑顔のウリバタケさん。

でも、その右手に持つスパナはなんでしよう？

笑顔と右手がミスマツチ。

「なんだかんだで喜んでるんだからよ」

「そうでしょうか？」

それなら嬉しいけどさ。

「素直じゃねえんだ。本当はどの班より喜んでんじゃないか？」

「そういうもんですか？」

「おう。パイロットと整備班っていうのは密接な関係があるからな。やっぱり」

「それなら、俺達が一番喜んでるだろ」

「ガイ。それに皆も」

続々と現れるナデシコパイロット達。

なんだか久しぶりの再会な気がする。

「おう。来たぜ。やっぱりてめえはしぶといな。コウキ」
「まあな」

「ああ。セレセレ泣かせてる」

「いけないんだ。いけないんだ。ミナトさんに言っちゃおう」

「・・・楽しそうですね。二人とも」

「やはり生きてましたね。コウキさん」

「なんとか」

ハハツ。相変わらず個性豊かなメンバーだ。

「このバカ！」

「うおつ。カ、カエデか」

出合いがしらにバカはないだろ、バカは。

「心配かけんじゃないわよ！ 私、死んだかと思って・・・」

「お。心配してくれたか」

「ち、違うわよ。私はケイゴになんて言えばいいかって」

「なるほど。ケイゴさんに会えず、寂しがっているとみた」

「そうなのよ。ケイゴが・・・って違う！」

「お前、素直になつたな。いや、馬鹿になつた」

「馬鹿になつてなあああい！」

思った事を隠さず口に出してしまうのは馬鹿な証拠だぞ。ま、それが可愛いという人もいるけど。

「でも、ま、無事に戻ってこれたよ」

「・・・まあ、とりあえず、喜んであげるわ」

「ああ。サンキュ」

相変わらずだな、こいつも。
親友って感じで楽しい。

「マエヤマさん。おかえりなさい」

「いやはや。これで損害賠償を出さずに済みました」

「無事に戻ってこれたようだな」

ブリッジクルーの皆も・・・。

なんか嬉しいな。

こんなにも俺の為に集まってくれたんだって。

「セレスちゃん。ちよつとごめんね」

抱き付いてくるセレス嬢をそのまま抱き抱えつつ・・・。

「ナデシコクルーの皆さん。マエヤマ・コウキ。ただいま戻りました」

敬礼。ちよつと楽しんでる自分がいる。

「「「おかえり」」」

「「「おかえりなさい」」」

おかえり・・・か。

よく使われる言葉だけど・・・こんな時、これに勝る嬉しい言葉はないな。

ここが自分の居場所だって、帰る場所だって。
そう実感させてくれる嬉しい言葉だ。

「でも、ミナトさんはどうしたんだらうっ？」

なかなか姿を現してくれないミナトさん。

自惚れじゃなければ、いの一歩の駆けつけてくれると思っただけで・
。。。

もしかして、ミナトさん、相当ご立腹ですか？

「・・・ミナトさんは今、ナデシコにいません」

「え？」

どういう事？ セレス嬢。

「・・・詳しい事はまた後で。。。それで、あの・・・」

「ん？」

「・・・は、恥ずかしいです」

あ、ああ、そうだったね。

「ごめんごめん」

抱えられたままじゃ恥ずかしいよな。

それじゃあ・・・。

「・・・でも、降ろさないでください」

「え？ いいの？」

「・・・もうちよつとだけ・・・お願いします」

「そっか。分かった」

「・・・とっても暖かいです」

本当に心地良さそうに表情を緩めているセレス嬢。
どこまでも可愛らしい子だ。

「……あ」

久しぶりの感触。

やっぱり彼女の頭を撫でるのは心地良い。

「……ミナトさん」

貴女に会えると思っていましたが、残念ながら会えないようです。
詳しい事は分かりませんが、少しでも早く貴女に会いたい。
出来る事ならば、今すぐにでも。

貴方に会って、無事に戻ってこれた喜びを噛み締めた。

「どこにいるんですか？ ミナトさん」

貴女との再会が待ち遠しくてたまりません。

おかえりと貴女の口でこの言葉を聞かせて欲しい。

ただいまと貴女の耳にこの言葉を届けたい。

そして、ようやく本当の意味で帰ってこれたと実感できるのですか
ら。

「今回は俺がおかえりかな？」

偶にはそれでもいいか。

「おかえりと早く俺に言わせてください、ミナトさん」

ナデシコで、俺達の家で待ってますから。

誰よりも何よりも貴女の笑顔を望んでいます。

第一百六話（後書き）

セレス嬢歡喜。

いや、コウキの帰還シーンは悩みました。

まあ、結論、それでもスポットライトはセレス嬢な訳ですが。

ミナトさん不在によってコウキとしてはちょっと物足りない感じ。

やっぱり愛って偉大なんだな。

そして、コウキはミナトさんにぞっこんなんだな。

そう実感させられる回に出来たと思います。

そして、やっぱり忘れられてる副長。

いや、もはや何と言っていいのやら。

第一百七話（前書き）

繋ぎ的な話。

第一百七話

「今までどこにいたんですか？」

「今まで？ どういう意味ですか？」

「へ？」

「え？」

「それじゃあコウキさんはコロニー落としからここまでの間、記憶がないと」

「記憶がないというか・・・」

いや、実は裏でコソコソやってたんだけどさ。

後々の事を考えると、知らない振りをしておいた方が都合が良いんだよね。

「気付けばナデシコの格納庫にいました」

ボソソジャンプの時間軸移動。

一度、ナデシコ自体が八ヶ月という時間を越えて現実の世界に具現化されている。

それが皆の頭には残っているだろう。

その為、三週間先にボソソジャンプしてきたといえは違和感はない

等。

「なるほど。それなら、コウキ君はボソソジャンプで未来にやってきたと」

「・・・恐らくは」

・・・イネスさんだよ。

手強い人が出てきたなあ。

「確かに一度事例がある以上、否定はできないわね」

含みのある言い方。

感付いていそう・・・。

この人、勘が鋭いもんな。

しかも、そこに理論を組み合わせるから、穴がない。
一番、デイベートしたくない相手だな、うん。

「でも・・・」

・・・でも？

「それにしてもアドニス、綺麗よね」

ギクッ！

「とても戦闘を終えてすぐとは思えない」

ギクッ！ ギクッ！

「そ、それは・・・」

う、裏目に出たか？
三週間放置に耐えかねて簡単な整備を行ったのは確か。
まさかそこから感付かれるとは……。
イネスさん、恐ろしい人ッ！

「え、え〜っと」

「ふふっ」

「それは・・・」

ど、どうする？

どうすればいい？

なんて言えればいいんだ！？

「まあいいわ。そういう事にしておいてあげる」

「・・・」

助かったのか？

いや、そもそもそういう事って？

どこまで感付いているんだ？ この人。

「追求する時間はいくらでもあるわ。とりあえず今は色々とやる事があるんじゃない？」

脱帽。

どこまで分かっているかを分からないからなまじ変な事が言えない。
ある意味、追い込まれちゃってます、僕。

「その辺りは皆と相談するべきね。ひとまずブリッジに来なさい。
その二人を連れてね」

そんな言葉を残したまま去っていくイネス女史。

「さっきの会話はどういう……」

「さあ、俺にも」

イネス女史の言葉で感付いたりしないで下さいね、イツキさん。

「……コウキさん。行きましょう」

「そうだね」

「……あの」

「このまま連れて行ってあげるよ」

「……ありがとうございます」

抱っこされたままのセレス嬢。

もちろん、俺にだけど。

「行きましょうか。イツキさん」

「はい」

苦笑いを浮かべるイツキさんを隣に、ブリッジへと続く道を歩み始めた。

「ボソソジャンプを隠したいので、ナデシコにいた事に出来ませんか？」

「難しいですが、不可能ではないです」

主要クルーが集まったブリッジにて話し合う。
議題はボソソジャンプの隠蔽。

どのようにしたら、単体ボソソジャンプを隠す事が出来るか。
ナデシコがボソソジャンプしたのは周知の事実。

これは今更、何をしたって覆らない。

でも、わざわざ単体ボソソジャンプについても公開する必要はない。
感付いている人はいるだろうが、所詮は感付いているだけ。

その真実に辿り着いている訳ではない。

出来る事ならば、このまま単体ボソソジャンプの存在は知らせずに
封印してしまいたい訳だ。

そうになると、俺がここにいる事はあまりにも不自然。

どうにかして誤魔化す必要が出てくる。

所詮は宇宙の事なので如何様にも出来るが、それでも不自然さは消
したい。

どの部隊が拾ったとかどのようにしてナデシコまで届けたとか。
その辺りの根回しは必要だろう。

「その為にはどなたかの協力が」

『それならば、アレス隊が協力しよう』

え？

『無事なようで安心したぞ』

「アルダート大尉」

アレス隊のアルダート大尉。

もしかして、アレス隊が隠蔽の手伝いを？

『私が生きている事にも理由がある。その為に貴官を利用させても

らうだけだ』

利用・・・ねえ。

この人も案外素直じゃないな。

「ありがとうございます」

アルダート大尉もコロニー内に突入したという記録が残っている筈。行方不明となっていたけど、こうしてここにいる訳だし。

生存であるという事の裏付けに俺やミナトさんの生存を使えばかなり説得力が増す。

それに、同時に突入した俺やミナトさんも大尉と一緒に脱出していたとすれば違和感はなくなる。

そして、アレス隊に保護されたとするのが一連の流れで最も自然だろう。

そうだな。これでいこう。

『それならば、その方向で行こう。詳しい事は後で本人と話し合う』

アルメイラ大佐。

よろしく願います。

後で連絡を入れますので。

『マエヤマ・コウキ殿』

「はい」

『改めて礼を言う。アルダートの件。ありがとうございます』

「・・・いえ」

どうやら事情を知っている様子。

でも、気を利かしてくれたのか、細かい所は言わない。

綺麗だし、気は利くし、こういう人の部下は幸せだろうな。
まあ、ナデシコの心地よさには敵わないだろうけど。

『さて、先程も艦長代理と話し合ったが・・・』

真剣な表情。

もともとキリツとしている顔が更にキリツとなった。
そういえば、現在の状況を把握してなかったな。

「マエヤマは状況を把握しているかい？」

「えっと・・・」

ジユンに問いかけられたが・・・返答に困る。

クーデターの件か？

それなら決着はついた筈。

ナデシコの現状か？

それは知らん。

まあ、何も知らないという事にするつもりだけど。

「コロニーから脱出してからの事は何も」

「それもそうか。ボソンジャンプで三週間先に来てしまったんだっ
たね」

『それはどういう意味だろうか？ 状況が掴めないのだが・・・』

ナデシコの主要クルーには一応話してある。

ブリッジに着いてすぐに報告したし。

他のクルーにも後々説明するつもりだ。

「ボソンジャンプ。これについてはご存知ですよね」

『はい。所謂、瞬間移動だと認識しております』

ジユン君が説明しだす。
うまく説明してくれよ。

「以前、ナデシコが八ヶ月もの時間を越えてしまった事は？」
『無論。把握しております』

しかし、今更だけどあの八ヶ月間は何だったんだらう？
誰がどう考えたから八ヶ月後に？

・・・まあ考えても分からないんだけどさ。

「その事から分かるようにボソソジャンプは時間という壁を越えて
しまっんです」

『・・・なるほど。ボソソジャンプを行った事で此度は三週間後に
来てしまったと』

「はい」

理解が早い。

やっぱり頭の回転が早いな。

流星は武勇名高いアレス隊の艦長。

『それでは・・・いや、なんでもない』

何だらう？ 今の間は。

なにか疑問を覚えたかのような、そんな感じ・・・。
勘違いだらうか？

『それならば、何も把握していないという事でよろしいか？』
「そうなります」

今のナデシコに関しては本当に何も知らないし。

『現在、ヒナギクを別働隊として、地球に送り出している』

「そこにユリカ、ミナトさん、スバルさんが乗り込んでいるんだ」

・・・ミナトさん。

そうでしたか。

あのヒナギクの中に・・・。

ある意味、すれ違いって感じ。

ミナトさんに会うには地球に行く必要があると。

「ヒナギクを別働隊として意図は？」

ユリカ嬢ならクーデターを止められる。

そうだった所だろうか。

「今、地球では徹底抗戦派がクーデターを起こしているんだ」

「クーデター!？」

『先日のコロニー落とし。それを利用しての蜂起だ。』

自らがコロニー落としを画策し、木連のせいにして徹底抗戦派の勢いを強める。

なんとも卑劣な策だが、国民はそれに乗ってしまった。

完全に地球の意識を徹底抗戦とするには改革和平派が邪魔なのだから。

其れ故のクーデターであり、このクーデターの首謀者は地球連合軍最高司令官だ』

「完全にしてやられましたね」

事実、コロニー落としの真実が掴めなかったら思うツボだっただろう。

クーデターは成功し、徹底抗戦派が現在、そして、戦後まで権力を握っていた筈。

いや、我ながら、良くやった。

「他にもユリカの発言の捏造とか色々あるんだけど、その事は後で順を追って説明するよ」

「ありがとう。ジュン」

連合軍最高司令官の演説。

その中であつた艦長の抗戦支持の発言。

あれによつて徹底抗戦の勢いは更に増してしまつたが……。
ユリカ嬢解放によつて逆に追い詰める事が出来た。

結局、策を巡らせるより、真心を持つて説得した方が良いつて事だ。
最高司令官は手を回し過ぎて、結果、墓穴を掘つた。
策士策に溺れるつて奴だな。

『地球へのヒナギク派遣』

これはミスマル代表であればクーデターを止められると考えての派遣だ』

「なるほど。艦長の発言力はかなりのものがありますからね」

『他にも先程いった代表の発言捏造やナデシコ拘束の事実は我らにとつて切り札となる』

「ナデシコ拘束？」

「コウキ達がいけない間、月面基地にナデシコは拘束されていたんだ」
「よく無事に済んだな。いや、もしかして被害が？」

解放されたのは知ってるけど、被害者とかは知らない。

……ないと信じたいんだけど……。

「いや、全員無事に脱出できたよ。特に怪我もない」

「そうか。良かった」
『・・・・・・・・』

どうやら誰もが怪我なく脱出できたようだ。
素直に安堵。

「それじゃあ、このナデシコは囷といった所ですか？」

『ああ。ヒナギクから目を離させる為のな』

「ユリカといえばナデシコ艦長。ナデシコが囷だなんて誰も思わないだろう」

「確かに。艦長はナデシコというイメージが強い気がする」

なるほどね。

ナデシコを餌にして誘い出し、その隙をヒナギクが突いた訳だ。

警戒が強いであろう地球にヒナギクがやって来れたのもこの誘導のお陰か。

「アレス隊の他にも幾つかの部隊が今、ナデシコに付いていて、艦隊で囷をこなしているんだ」

『先程まで戦闘をしていてな。そろそろヒナギクが地球に辿り着いている筈である』

既にクーデター自体は収束している。

宇宙だから情報が回ってこないんだろうな。

「ある程度の事は分かりました」

とりあえずナデシコの現状は理解できた。

後は情報が回ってくるまで待てばいいだけだ。

まあ、それまでに何回か戦闘があるだろうけど。

覚悟はしておこう。

「引き続き、囹をしていれば良い訳ですね」

『今の所はそうなる』

「ユリカが必ず止めてくれる。僕達はそれを待っていればいい」

凄い信頼感。

二人の絆は固いねえ。

「物資の件だけど、先程の話し合いでアレス隊からの提供が決まった」

「おお。それは助かるな」

『アレス隊は基地に一度帰還したお陰で余裕がある。』

ナデシコは拘束後補給もなかったからな。当然の事をしたまでだ』

男前な美女だな、アルメイラ大佐って。

「それじゃあ、コウキは操舵席に、副操舵士として仕事をして欲しい」

「了解」

初めてだな。操舵士としての仕事。

ずっとミナトさん任せだったし。

いっちょ頑張りますか。

『貴官とは先程の件について話したいのだが』

「はい。お願いします」

『了解した。以上です。艦長代理。ひとまず全体での通信は終えま
す』

「了解。物資の受け渡しは予定通りに」

『ハツ』

その後、物資の受け渡しを行い、ボソソジャンプ隠蔽の話し合いも行った。

かなり練った案だから、大丈夫だろう。

後はクーデター収束の知らせまで生き延びる事。

それだけだ。

「ほつと」

シューーン！

迫り来るミサイル群を避ける。

ナデシコ運転は初だけど、シミュレーション訓練を重ねてるから問題ない。

もちろん、最初は緊張したけど。

久しぶりだし、正直。

「グラビティブラストチャージ」

「・・・グラビティブラストチャージします」

「マエヤマ。射線をポイント　ー　へ」

「了解」

ジユンの指揮はユリカ嬢と違って手堅い。

ユリカ嬢が閃きと大胆さなら、ジユンは基礎と慎重さといった感じ。まるつきり逆だけど、多分、それが良いんだろう。

基礎の部分をジュンが補い、ユリカ嬢が自由奔放に策を練っていく。そして、その無茶な要望を優秀なナデシコクルーが確実に実現させていく。

これがナデシコの強さの所以なんだろうな。

「他部隊に通達。主砲同時発射後に撤退」

困ですからね。逃げて引つ張つてを繰り返さないといけない。こつという作戦はジュン君の方が得意そうだ。

堅実だし、地味だし。

あ、後者は関係ないか。

「ナデシコに合わせるように伝えて。5、4、3、2、1・・・」

他部隊と連携を取り、同一方向に向けて・・・。

「グラビティブラスト発射！」

「・・・グラビティブラスト発射します」

宇宙を彩る漆黒の光。

完全に滅ぼす事なく、ある程度の損傷を出しての撤退。これが見事に囮となる。

「アドニス隊に帰艦命令を。マエヤマ！ ナデシコ旋回。後方に移動する」

「了解」

ナデシコを180度旋回。

真後ろに向けて移動を開始する。

「おし。これで後ろから追撃が来れば・・・」

いつも通り、撤退を始めるナデシコに対して敵艦が追撃を始める。最大速度では引き離してしまう為、速度を落としての移動。それでも射程距離から外れるよう微調整しっただけだ。

「ポイント　―　にて敵を引き離す。他部隊に合わせて出来る限りの最大速度」

頃合を見て一気に引き離す。

これで相手の追撃から逃れる訳だ。ずっとこんなのを繰り返す。

最近になって合流した俺だけ・・・皆、よくストレス溜まらないな。

単調な事の繰り返しって結構イライラしてくるよね。特に終わりが見えないとなると。

皆、ちよっと尊敬。

「5、4、3、2・・・あれ？」

あれ？

「どうしたんだ？　ジュン」

「いや、引き離す前に勝手に諦めた」

「え？」

レーダーを確認。

確かに相手側が退き始めた。

いつもならもうちょい追ってから諦めるのに。流石に無駄だと悟ったか？

「アマゾネスからの通信です」
「通して」

アマゾネス。確かアレス隊の旗艦。
どうしたんだろう？

『艦長代理。先程のは……』
「僕にも何がなんだか……」

両艦長とも事態の把握は出来ていない。

「ん？」

「どうしました？ メグミさん」

ボソツと呟くメグミさん。

「宇宙ステーションから通信が」
「宇宙ステーション？」

何だろう？

「艦長代理？」

「ん？ 何ですか？ レイナードさん」

「宇宙ステーションから通信が入っています」

「宇宙ステーション？」

『宇宙ステーションからの通信……もしや！』

「あ！ レイナードさん。お願いします」

「分かりました」

宇宙ステーションからの通信。
考えられるとしたら・・・。

「『地球でのクーデターが収束。直ちに戦闘行為を停止せよ』」
クーデター関連の通信だろうな。

「ユリカがやってくれた」

『流石は改革和平派代表。良い仕事をしてくれる』

なるほど。多分、あっちも同じ通信が来たんだろうな。
それで退いたって訳。

『ひとまず我らの任務は完遂という訳ですね』

「はい。協力に感謝します」

『いえ』

凄く彼らに助けられた。

アレス隊を始め、他の部隊の方々も。

本当にありがとうございます。

『艦長代理。この後は？』

「詳しい事を知る為に地球に降ります。

ナデシコの艦長も迎えにいかねばなりませんので」

それでよろしいかと。

『分かりました。アレス隊はナデシコを地球まで送り届けた後、基地に戻ります』

「了解。改めて、ありがとうございました」

『いえ。我らの仕事をしたままでです』

やっぱり男前だな、この人。

『それでは、向かきましょう。地球まで其れほど時間は掛からないと思います』

誘導という事で地球方向に突入、撤退を繰り返していた訳で。実際に地球に赴く分には其れほど遠くない所にいたりする。

「とにもかくにも無事に済んでよかった」

これedyouやく地球に向かえる。

やっとミナトさんに会えるんだ。

早く、貴方に会いたいです、ミナトさん。

「ありがとうございます。大佐」

『いえ。これも和平実現へと近付く為。当然の事をしたままでです』

地球、ビックバリア付近。

アレス隊を始めとした幾つかの部隊は最後までナデシコの護衛をしていてくれた。

道中、やっぱりあれだけで収まる訳もなく、何度も襲撃された。

もう大丈夫だろうなんて油断していたナデシコ。

彼らがいなければ墮とされてたかも。

本当に感謝してもしきれない。

『我らは基地にて連絡を待ちます。地球の事は任せました』
「任せられました。必ず地球内を纏めてみせます」

心強い一言。

ユリ力嬢と離れて、成長したかな？

そう考えれば、今回の事件も逆に良かったのかもしれない。

これで地球の意識は統一できるだろうし、色々と考える機会も与えられた。

ジユンも成長したし。

連合軍最高司令官も間違はなく首切りだろ？

辛く苦しい事もあったけど、終わってみればこちらにとって都合が良い事ばかり。

もちろん、これからが大変なんだろうけど、やっぱり良かったのかもな。

「それでは」

『ハッ』

アレス隊達と別れ、ナデシコは地球に降り立つ。

混乱極まる今の地球。

ナデシコの登場が良い方向に進んでくれたら・・・。

そう願わずにはいられない。

第一百七話（後書き）

次回、遂にミナトさんとの再会となるか？

どうやって書くのが悩んでいます。

うまく書けたらいいな。

そう願わずにはられない。

新年を迎える前に一つでも投稿しよう。

そう思い投稿しました。

今年中に終わらせようと意気込んだものあまり進まず……。でも、まあ、焦らずにゆっくり完結まで頑張ろうと思います。

どうか皆さん、暖かく見守っててください。

それでは……。よいお年を。

第一百八話（前書き）

新年あけましておめでとございます。

・・・もう遅いですよね、この台詞。

大変お待たせしました。

新年の初投稿です。

第百八話

「・・・ポツ」

「え、え〜つと・・・」

ベツタリ。

いや、嫌じゃないんだよ。

むしろ、どんと来いって感じ。

でもさ・・・。

「ちょ、ちょっと恥ずかしいかなって」

ビクバリア。

地球を護る第一の壁だ。

無断で侵入するものを拒み、地球に対する危険を未然に防ぐ。

まあ、強引に突破できちゃうからなんとも言えないのだけれど。

クーデター中は警戒も強く、とてもじゃないが侵入は出来そうになかった。

そんな中をヒナギクは侵入したのだから、ナデシコクルーは流石だ
と思う。

もちろん、アレス隊を始めとした幾つかの部隊の助力のお陰でもあ
るけどね。

彼らの困なくして、こうもうまくはいかなかっただろう。

改めて、感謝。

現在、既にクーデターは収束しており、その警戒も緩んでいる。正式な手続きを踏んだ上での帰還なので、何の問題もなく通れる筈だ。

以前は強引に突破したが、あれは緊急事態が故。通して頂けるなら無理に突破なんてしませんよ、はい。

「邪魔は・・・流石にないよな？」

防衛ラインは全て解除されている・・・等。

クーデターは収まつてるから、奇襲とかもない・・・等。

・・・いや、やっぱり油断はしない方が良いな。

もう襲つてこないと思つてもそれはこちらの都合で相手にとっては何の関係もない。

相手の事情を知る事なんて出来ないんだし、襲撃されないとはい言えないもんな。

最後まで油断せずに意識を集中させておこう。

・・・とは思っているのだが・・・。

「・・・コウキさん」

「は、はい。何でしょう？」

「・・・頭・・・撫でてください」

「か、畏まりました」

操舵士の席に座る俺に座るセレス嬢。

帰艦してしばらくはいつも通りだった。

まあ、多分、セレス嬢なりに遠慮してくれただと思う。

でも、地球に到着するちょっと前ともなると安心したのか、甘えてくるようになった。

別に俺個人としても嫌ではない。

むしろ、癒されて心地よい時間。

セレス嬢には心配も掛けたし、甘えられたら、それに応えてあげるのが当然だとも思う。

大人しい子だから作業の邪魔もしないし、何の問題もないのだ。そう、何の問題もない……のだが……。

「……気持ち良いです」

無表情と評されていた表情を完全に緩ませて甘えてくるセレス嬢。まるで子猫みたいだ、と誰もが思うに違いない。

「……もっとお願ひします」

……初めてだ。

癒され過ぎて困るという事態は。

リーダーは常にチェックし、警戒は緩ませていない。でも、何だろうか？ このほんわかとした雰囲気。

ブリッジの誰もがセレス嬢に癒されて警戒のけの字もない様子。今、襲撃されたら……どうなるんだろう？

そんな状況だからこそ、もっとう警戒しなければと思うのだが……。

「当事者の俺が一番癒されてるに決まってるだろ」

「……どうしました？」

「いや。なんでもないよ」

「……そうですか」

「うん」

これはもう駄目だ。

襲撃がない事を願うしかない。

大気圏に突入して、コース取りも既に済ませてある。

後は気長に待つだけという状況。

「大丈夫・・・だよな？」

色々と不安だったり。

不安と緊張と癒しと和みが入り混じったブリッジ。
相変わらずナデシコはカオスだ。

「極東方面軍司令基地上空に到着しました」

祈りが届いたのか、何の問題もなく目的地へ辿り着いた。
きっと日頃の行いが良いからだろうな。

いや、善い事をしている覚えはないんだけどさ、なんとなく。

「さて・・・」

極東方面軍司令基地。

極東方面軍の司令を務めるミスマル司令の基地だ。

現在はフクベ提督が代理を務めているが、

ここが極東方面軍の中心である事に変わりはない。

「流石に被害が出てるな」

中心であるからこそ、その被害も著しい。

徹底抗戦派にとって、この基地を落とせば勝ったも同然。
この基地にはそれ程の価値がある。

当然、真っ先に狙ってくるし、戦力も大きいという訳だ。

もちろん、守備隊の戦力も大きいし、練度も高い。ここがクーデターにおいて最も激戦区であった事は疑いようもないな。

「でも、護りきつた事の方が大きい」

そうまで集中して攻められた場所。

それが陥落せずにこうしてまだ基地として機能しているのは大きい。強さの証明にもなるし、何より勝利の証となる。

徹底抗戦派は決して負けた訳ではないと主張するだろう。

実際、停戦勧告に従って退いただけで、壊滅した訳ではない。

だが、指揮を執っていた最高司令官が捕まったのだ。

事実上の敗北といっても過言ではないだろう。

それに対して、改革和平派は十分な成果を残し、かつ、司令の復帰で士気も高い。

この軍事クーデターは改革和平派にとって都合が良い終わり方になったと言えよう。

まあ、争うつもりはなかった改革和平派としては不本意な結果だろうけど。

「……コウキさん」

「うん？」

「……ミナトさんがコウキさんを待ってると思います」

「……そうだね」

先行して地球へと向かっていたヒナギク。

恐らく、その搭乗員はこの基地で待機している。

そうなれば……ミナトさんもこの基地にいる筈だ。

「……早く会いたいな」

ちよつと怖くもあるけど、それ以上に再会の喜びを分かち合いたい。やっぱりミナトさんがいないと駄目だな、俺は。大袈裟な言い方かもしれないけど、渴望してる、ミナトさんの再会を。

「・・・私も早く会いたいです」

「一緒に行く？」

家族だし。

家族なら皆で喜びを分かち合わないかね。

「・・・いえ、少しお留守番してます」

え？

「どうして？」

「・・・なんとなく・・・です」

なんとなく？

「・・・後から合流しますので、その時に」

「え？ あ、うん」

それが良いなら、それに従いますが。

「・・・だから、今はまだ甘えさせてください」

「了解しました。お姫様」

「・・・ポッ」

すっかり娘に甘いパパさんになってしまった。
今後、甘やかさないか、非常に心配です。
恐らく・・・無理でしょう。

「基地から通信『着艦を許可する』だそうです」

「分かりました。ナデシコを基地へ。マエヤマ、よろしく」

「了解。セレスちゃん。手伝って」

「・・・はい」

あそこにはミナトさんがいる。

後少しでミナトさんと再会できる。

その嬉しさで胸が躍った。

「まだかな？」

着艦するまでのちょっとした時間。

それが酷く長く感じたんだ。

「ナデシコ。着艦しました」

基地へと降り立つ。

ここにきてようやく地球に戻ってきたんだなと実感した。

「クルーは連絡が来るまでこの場で待機。

僕は司令に挨拶をします。

ゴートさんとプロスさんは僕に付いてきてください」

「了解した」

「分かりました」

・・・あれ？

俺ってばこの場で待機？

「マエヤマ」

「ん？」

「すまないけど、留守番を頼みたい。収束したとはいえ、クーデタの後。」

突然の襲撃とか、何が起こるか分からないからね。警戒をしておいて損はないと思う」

確かに。

警戒しているとはいえ、それにも限界はある。すぐさま動けるよう準備はしておくべきだ。

役職を複数抱える俺は当然残った方が良いだろうな。ある程度だけど、どんな事にも対応できるし。

「真っ先に飛び出したいとは思っけど」

「いやいや」

変に気を回さないでくれ。

というか、からかってます？

「頼めるだろうか？」

・・・そういう事なら仕方ないか。

出来るなら、迎えにいく形で再会したかったけど・・・。

ああ、これが真っ先に飛び出したいという意味か。

まったくもってその通りでした、ジュン君。

「了解。この場で待機しています」

「ごめん」

「いえいえ。お構いなく」

責任者として当然の指示かと。

むしろ、その堅実さがナデシコにはもうちょっと欲しい。

「僕の代理はマエヤマに務めてもらう。僕がいない間は彼に従ってください」

代理？

艦長代理の代理か。

ある意味、俺らしい役職だな。

中途半端というか、通常時はあまり意味がないという点で。

「それじゃあ後はよろしく」

「おう」

ブリッジから飛び出していくジュン達を見送る。

あの後姿。

久々にユリカ嬢と会えて嬉しいと見た。

君こそ真っ先に飛び出したかったようだね、ジュン君。ま、それでこそジュンなだけどさ。

「さてつと・・・」

仕方ない。

ミナトさんがここに来るのを待つとしよう。

「・・・良いんですか？」

「うん。けど、まあ、仕方ないよ」

事情が事情だし。

ジュン君の指示は的確だと思います、はい。

「・・・ミナトさん、きつと待ってます」

「俺としても迎えに行きたいんだけどね。」

「ここから離れる訳には行かないよ。一応、責任者だし」

「・・・そうですか」

行きたいのはヤマヤマなんだけど・・・。

流石に責任者が現場から離れるのは駄目でしょ。

「いや、行くべきだ!」

「うおっ! び、びっくりした」

いきなり叫ぶなよ、ガイ。

「ここで行かずにいつ行くんだ!」

「・・・ガイ」

「そうですよ! きつと待ってます」

メグミさんまで。

「行くべきね」

「私もそう思う」

「私もです」

「普通、行くわよね」

パイロット全員からの追撃。

いや、だから、行けるなら行きたいんだってば。

でも、代理とはいえ、責任者を任されている以上、勝手な行動は・
。

「変な所で真面目なんだから」

「カエデ」

「真面目も良いけど、時と場合を考えなさい。

迎えに行けるんだったら、当然行くべきよ」

「だけど」

「行きなさい！」

「は、はい」

何故か敬礼までしてしまった。

この威圧感は何だろう？

さてはケイゴさんに会えないで鬱憤が溜まってるな。

それで、こうして俺に八つ当たりを　。

「さっさと行く！」

「イ、イエッサー！」

このままじゃ総スカンを喰らいかねん。

そうだな。ここは欲望に従おう。

「ガイ。後を任せていいか？」

「おう！　任せときな！」

「警戒を怠らないように」

「」「了解」「」

なんで団結してるのかな？ 皆さん。

「……いつてらっしゃい。」ウキさん

「うん。いつてきます」

でも、ま、皆が与えてくれたせつかくの機会だ。
ここは素直に従おう。

「ありがとうございます、皆」

今、行きます。

待っててくださいね、ミナトさん。

S I D E K A E D E

「まったく」

迎えにいける所にいるんだから、さっさと迎えにいけばいいのよ。
何を遠慮してるんだか。

「責任感が強いんですよ」

「え？」

「そういう人ですから、」ウキさんは

まあ、それはなんとなく分かるけど……。

「それでも行くべきよね？」
「もちろんです」

笑顔で肯定。

流石、イツキ。

「さて、コウキさんに行けとってしまっただ以上、私達がしっかりしないと」
「そうね」

促したのは私達。

それなら、ちゃんとフォローしないと。

「うおっしやあ！ 遂に俺が艦長だ！」
「素敵です！ ガイさん」
「だろ？ うし。波 砲。発射」

・・・あれは心許ない。
というか、心配。

「イツキ。貴方が指示を出して」
「え？ でも」
「あれに任せていいの？」
「あ、あはは」

苦笑い。それって肯定してるのと同じよ？

「それじゃあ私はリーダー見てるね」
「お願いします。ヒカルさん。何か異変に気付いたらすぐさま教えてください」

「りよ〜かい。ま、何にもないと思うけどね」
「それが一番です」

イツキが中心になってブリッジクルーが動く。
やっぱり委員長長体質のイツキなら安心して任せられるわね。

「ワーツハツハツハ！」

少なくとも、あの騒がしいのよりは。

「いいの？ セレスちゃん」

ん？

「一緒に行かなくて」

「・・・はい。寂しいですけど・・・」

ヒカルが話しかけているのはオペレーターのセレスちゃん。
コウキが溺愛してる女の子で、彼女もコウキに淒く甘えてる。
まるで親子みたいよね、この二人。
さっきお留守番してるって言ってたけど、本当は一緒に行きたかった筈。

どうして行かなかったんだろう？

「・・・きっとコウキさんもミナトさんも二人っきりで会いたいと思います」

「セレスちゃん、優しいね」

相手の事を思い遣って我慢できる。
ちっちゃいのに立派だと思った。

多分、私だったら駄々をこねてる。

「……いえ。それに待つのも大事だと思います」

「おお。大人な発言。どうしてかな？」

「……どれだけ自分にとって大切な人なのか実感できますから」

「……え？」

「わ、わあ……。本当に大人」

どれだけ大切な人なのか実感できる。

「待つのも大切か。うんうん。良い言葉だ。」

子供のセレスちゃんに恋について教わっちゃうとはなあ……」

「……恋に子供大人は関係ないってミナトさんが言っていました」
「仰る通りです」

ワイワイと騒ぐヒカルとちよつと照れながら応えるセレスちゃん。
ちっちゃいのに、なんか私よりずっと大人な気がした。

「駄目ね、私」

待つのも大事か。

ちよつと私も余裕を持ってみよう。

会いたい、会いたいじゃ駄目なのよね。

「もつと大人にならなくちゃ」

まずはそれから。

いつまでも子供じゃ愛想尽かれちゃう。

「でも、これだけ会いたいって思うって事は……」

やっぱりケイゴの事が好きなんでしょうね。

悔しいけど、セレスちゃんの言う通り。

あいつが好きなんだって実感した。

「まったく。コウキを見習って早く迎えに来なさいよね」

こういう所が子供なんだろうな。

口に出した後、自らにそう苦笑した。

SIDE OUT

SIDE MINATO

「ナデシコが到着しました！」

クーデターは艦長と司令のお陰で無事に収束。

……無事って言うのは変かしら。

でも、まあ、とりあえず状況は落ち着いたと言っていいわね。

「ミナトさん。行きましょう」

「ええ」

ヒナギクが地球に到達するまで囀役を担ってくれたナデシコ。

お陰で被害なく地球に辿り着く事が出来た。
皆に会ったら、改めてお礼をしないと。

「ジユン君にお礼を言わないと」

「代役を完璧にこなしてくれたものね」

「はい。流石ジユン君。頼りになる」

ふふっ。艦長もやっぱり女の子。

好きな男の子に会えるとなるとあんなにも嬉しそうな顔をするのね。

「早くジユン君に会いたいなあ」

素直な感情表現。

なんだか微笑ましい。

「私も早く会いたいんだけどな」

私の好きな男の子はどこで何をしてるのかしら？

「・・・ねえ、コウキ君」

ルリルリやラピラピはあの謎のメッセンジャーの正体こそコウキ君
だと言っていた。

今では私もそう確信している。

生きてるかどうか不安だったけど、これで不安は解消。
でも、姿を見せてくれないと心底から安心できない。

早く私に無事な姿を見せて欲しいのに・・・。

「本当にどこにいるのかしら？」

恋人にこうまで心配掛けて・・・。
帰ってきたらお仕置きね。

「おお。遅かったじゃねえか」

「リョーコさん。早いですね」

「おう。ま、やっぱりナデシコが一番落ち着くからよ」

「そうですね。それじゃあ行きましょう」

リョーコちゃんも合流。

これで基地内にいるナデシコクルーが揃った。

後は司令と合流して・・・。

「ナデシコに乗り込むだけ」

久しぶりのナデシコ。

向こうから来たから帰ってきたっていうのは変だけど・・・。

やっぱり帰ってきたってそんな気がする。

結局、ナデシコこそが私達の家なのね。

「ジュン君！」

「ユリカ！」

恋人同士の抱擁。

羨ましくもあるけど、親の前でやるとは恐れ入るわね。

「コホン。いいかね？」

「あ」
「す、すみません」

日頃、公私混同をよくする司令。

でも、目の前でされると流石に動揺するみたい。
それが娘なら尚更。

まあ、元々ジユン君の事は認めてたって話だし。
意外と納得済み？

娘はやらん、とは言わないのかしら？

「アオイ君」

「ハッ！」

「ユリカから話は聞いた。誘導作戦、見事だった」

「いえ。私は何もしていません。全てはクルーのお陰です」

「・・・そうか。どうやら成長して帰ってきたようだな」

「はい。艦長代理となり、良い経験をさせて頂きました」

「ふむ。ユリカ。しっかりしないと、艦長の席を譲る事になるぞ」

「えー！？ だ、駄目だよ。ジユン君」

「だ、大丈夫だよ。僕はずっとユリカの補佐だから」

「ジユン君」

ジユン君の言葉に感激している様子の艦長。

でも、ちよつと待って。

ジユン君の台詞、ちよつと格好悪くないかしら？

まあ、艦長が嬉しいならそれでいいんだけど。

やっぱり男の子なんだし。

もつと上を目指しても良いと思うわよ？

「コホン」

見詰め合う二人を再び戒める司令。

慌てて離れる二人。

なんだか苦勞しそうね、唯でさえ親馬鹿なのに。

「色々詳しい話を聞きたいのだが、いいかね？」

「もちろんです」

「それならば、ナデシコの応接室にでも」

「あ」

「どうかしたかね？」

「い、いえ」

しきりに後ろを気にするジュン君。

そんなジュン君を見て苦笑する男二人。

どういう状況かしら？　これ。

「せっかくですが、司令の執務室でお願いできないでしょうか？」

うん、と頷いた後、話し出すジュン君。

何かあるのかしら？

「構わんが・・・どうかしたのかね？」

「いえ。特には」

明らかに何かあると思うんだけど・・・。

「・・・まあいい。分かった。そうしよう」

「出来れば、ユリカとスバルさんにも同行をお願いしたいのですが」

「え？　私はいいけど」

「俺か？　俺も別にいいけど、何でだ？」

ん？ 私はいいいのかしら？

「クーデターの状況とか詳しく教えて欲しいんだ」

「それなら別に俺はいらんないんじゃねえか？」

「実際に戦った人間にも話を聞きたいんだ。」

徹底抗戦派の戦力とか練度とか、色々気になる事があるからね」

「そういう事か。それならいいぜ」

「私はいいいの？」

一応、その場にいたんだけど。

「ミナトさんはナデシコで待機していて下さい」

「どうして？」

「現場での話は二人に聞けますから。それより操舵士がいない方が不安です」

ああ、そういう事。

確かに操舵士がいないのは不安よね。

コウキ君がいない今、操舵士は私一人しかいないもの。

クーデターの時は緊急事態だから仕方がないとして……。

今は通常時なんだから、必ず一人は待機してなくちゃ。

「そういう事なら分かったわ。先に乗ってるわね」

「はい。連絡が来るまで待機で」

「了解」

四人と別れて、ナデシコへと向かう。

ここは素直に指示に従っておいた方が。

私としても早くセレセレ達に会いたいし。

「それで、ミナト君だけ先に行かせたのは何故かね？」

「そうだよ、ジュン君。別にナデシコで話せばいいでしょ？」

「確かに気になるな」

「いや、僕なりに気を利かせたんだ」

「え？」

「副長もお人が悪い。私達をここまで引っ張ってきたのはやはりそれが原因ですか」

「俺達がいたら許可は出さないだろうからな」

「えーっと、話が見えないんだけど」

「ユリカ、今、ナデシコにはマエヤマがいるんだ」

「え？ マエヤマさんが！？」

「うん。ボソンジャンプで戻ってきた」

「そっか……。良かった」

「無事に帰ってきたか。安心したよ。彼にはまだ働いてもらわないと困る」

「ま、分かってたけどな。それで、どうして？」

「ブリッジクルーとパイロットの皆なら多分、迎えに行けって言っと思う」

「あいつらなら言うだろうな」

「だからさ。二人つきりで再会させてあげようって思って」

「ジュン君。優しいね」

「気が利くじゃねえか」

「だが、それならどうして責任者に？」

「彼程に責任感が強い人間なら責任者にされたら動かないのでは？」

「責任者になればナデシコから出る事はない。そういう事です」

「なるほど。唯の意地悪ではなかったと」

「もちろんですよ」

「え？ え？」

「それじゃあ、司令。行きましょう」

「ふむ。そうしようか」

「ジユンの意図も分かった事だしな。今回は乗ってやるよ」

「して、副長。私達も付いていった方がよろしいですか？」

「そうですね。ナデシコの今後の方針も決めると思っているので是非」

「分かりました」

「了解した」

「では、行こうか」

「ちよ、ちよっと待って。私、まだ分かってないよお」

「どうするか？」

ミナトさんを迎えに行く決めてブリッジを飛び出したまでは良い。問題はその後。

「どこまで行っていいのやら？」

責任者を任された以上、あまり遠くに行くのは無責任すぎる。すぐさま対応できるよう、ナデシコ内にいるべきだ。しかし、そうなる場所は限られてくる。

「でも、やっぱり少しでも早く会いたいよな」

そうすると……。

「ナデシコの搭乗口。そこでミナトさんを待とう」

そこが限界。

それ以上は行けなくて、そこが最も早くミナトさんに会える。

「結局、待つ事になりそうだ」

でも、いいさ。

おかえり、ただいま。

その両方を言えばいい。

こうして無事にナデシコまで戻ってこれた。

想いを込めて伝えよう、ただいまと。

危険な任務を無事に成功させてナデシコまで戻ってきてくれた。

想いを込めて伝えよう、おかえりと。

「そろそろ着くな」

搭乗口に向かって廊下を歩く。

なんだかドキドキしてきたな。

「あの曲がり角を曲がれば……」

そこが搭乗口だ。

……やばい。

心臓がバクバク鳴ってる。

このままじゃ駄目だ。

緊張で何も出来なくなる。
うん。曲がる前に……。

「スーッハーツ。よし！」

深呼吸。

気持ちを落ち着かせてから……曲がる。

「……あ」

「……え？」

偶然？

いや、違う。

きつと……必然だ。

こうなる事は必然だったとかあまりにも臭いキザな言葉だけど、
うとしか思えなかった。

だって、こうして曲がり角を曲がった俺のすぐ目の前にミナトさん
がいたのだから。

第百八話（後書き）

ミナトさんとの再会。

次回こそ、と言ったのですがこうなりました。

本来であればこの話で書こうと思っていたのですが、いつの間にか投稿の基準となる行数になっていたので・・・。
申し訳ありませんが、次話とさせて頂きます。

最近、軍記物というのでしょうか？

兵器を用いての戦争の小説を拝読させてもらっています。

明治時代や日清、日露、太平洋などなど。

勉強になる事ばかりです。

政府の画策やら兵器開発など、自身の甘い設定を痛感させられる事ばかり。

いや、あのような文章を書けるようになりたいものです。

憧れますね。知識量といい文章表現といい。

勉強させて頂きます。

第百九話（前書き）

お待ちせしました。

うまく書けたかな？

楽しんでいただけたら幸いです。

第百九話

「……………」

「…………え、えつと」

…………予想外だ。

会ったら謝ろうとか、無事を喜ぼうとか、色々考えてたけど…………。まさかの突然の再会で頭が真っ白になった。

「……………」

「え？ ええつ？」

カツツカツツカツツ。

無言のまま歩み寄ってくるミナトさん。

そのまま…………。

ペタツペタツ。

抱き付くとか、抱き締められるとか、そんなんじゃないかった。

「ちょ、ちよつと」

何故か顔を撫でられた。

それも、決して優しくとかじゃなく、確認的な触り方で。

「あ、あの・・・」

パンツパンツ。

次は胸を叩かれる。

ちゃんとそこにいるのか？ といったように。

「え、えつと・・・ミナトさん？」

パンツパンツ。

そのまま下のほうへとスライド。

頭から足まで、身体の殆どを触られた。

「・・・生きてる」

「そりゃあここに」

「・・・ちゃんと足もあるし、この感触は嘘じゃない」

「だ、だから」

「・・・良かった」

「え？」

「・・・生きてて、コウキ君が生きてて・・・本当に良かった」

・・・こんな事になるとは思いもしなかった。

どんな時だって笑顔で、いつも優しく見守ってくれていたミナトさん。
ん。

恋人であって、母親のような、そんな存在だったミナトさんが・・・。

「・・・グスツ・・・ちゃんと生きてる。

夢なんかじゃない。嘘なんかじゃない。コウキ君はここにいる」

まるで親と逸れた幼子のように弱弱しく泣くなんて・・・。

「私、私、ずっと不安で・・・」

溢れんばかりの涙。

どんな時も崩れない完璧なメイクの上に涙の痕を残し、

どんな時も崩れない大人な余裕のある表情をクシヤクシヤに歪めて、

どんな時も年上の包容力を感じさせるミナトさんが本当に子供のよ
うに・・・。

「生きてるって信じてた。信じてたけど・・・」

初めてかもしれない。

ミナトさんが自分より年下のように感じたのは。

「それでも、どこかで否定している自分もいて・・・」

ずっと甘えてばかりいたけど、ミナトさんも一人の人間。

「あの状況で生きている訳がない。諦めろって」

悲しい時もある。辛い時もある。

それでも、それを決して表に出さず、俺を甘やかしてくれた。

「でも、もしかしたらって信じる自分もいて・・・」

確かにミナトさんは俺より年上だ。

でも、だからといって一方的に甘えるだけで良い訳がない。
恋人ってのはそういうものじゃないだろ？

「ふふっ。もう自分でも何言ってるのか分からなくなっちゃってる」

「ミナトさん」

「・・・駄目ね。どうしちゃったのかしら・・・え？」

泣きながら笑うミナトさん。

零れ落ちる涙を必死に手で拭き取りながら、見上げるように見詰め
てくる。

そんな姿をさせている自分が情けなくて・・・。

同時に、そんな姿があまりにも愛おしくて・・・。

「・・・コウキ・・・君？」

その震える身体を力強く抱き締めた。

俺はここにいる、そう伝える為に精一杯の力で。

「・・・痛いわ」

それでも離さない。

何故なら、このぬくもりが実感させてくれるから。
ここにいるんだって。

またミナトさんと再会できたんだって。

そして・・・ミナトさんを愛しているんだって。

それは、きつとミナトさんも同じで・・・。

「もう・・・しょうがないわね」

抱き締め返してくれた。

なすがままだった身体に力をいれて精一杯の力で。

「・・・暖かい」

「はい」

伝わってくる。

ミナトさんのぬくもりが。

「・・・嬉しい」

「はい」

伝わってくる。

ミナトさんの心が。

触れ合った肌から直接・・・。

「・・・私はここにいる。コウキ君もここにいる」

「はい」

ミナトさんがゆっくりと顔を近付けて、俺の胸の中に収まった。

俺からじゃその表情は分からないけど、きつと笑ってくれている。

だから、笑おう、心から。

「ミナトさんと再会できて、幸せです」

「私もよ」

涙はいらない。

いや、そうまで思ってくれてるんだなと思うと嬉しいけど、せつかの再会なんだ。

心からの笑顔で触れ合おう。

喜びで胸を溢れさせよう。

「ふふっ。ドクツドクツって聞こえる」

「そりゃあ生きてますから」

「そうね。コウキ君は生きててくれた」

「はい」

「そして、こうして私の所に戻ってきてくれた」

「ここが俺の帰るべき場所ですから」

「そう。私はちゃんとコウキ君の居場所になれてる？」

「もちろん。むしろ、それ以上かと」

「ふふっ。そっか」

貴方がいればそれで充分です。

他に何を欲しがらうって言うのですか？

「こうしているとな」

「はい」

「しみじみと思うのよ。やっぱりコウキ君が好きなんだなって」

「俺もです。心の底から、ミナトさんを愛しています」

「あら。ストレートね。なんだか照れちゃう」

「今の俺は無敵ですよ。だって傍にミナトさんがいますから」

「ふふっ。頼もしいわね」

「ええ。まあ、傍にミナトさんがいなかったら駄目駄目ですけど」

「あら、もつとちゃんとしてくれなくちゃ」

「すみません」

顔を上げたミナトさんと笑い合う。

ずっと、ずっと見たかったミナトさんの笑顔。

それがこんなにも近くにある。

死ぬかと思った。

もう駄目だと諦めた。

でも、こうして無事に戻ってこれた。
こうしてミナトさんと触れ合えた。
これ以上の喜びはない。

「ん」

その瑞々しい唇に唇を落とす。
肌を超えて、それ以上の幸せを運んできた。

「・・・もう一回」

「何度でも」

今も、これからも、何度だって・・・。

「幸せね」

「はい。幸せです」

こうやって力強く抱き締めて、貴方の唇を奪います。

「私、確信したわ」

「何をですか？」

「コウキ君がいれば良いって。それだけで幸せだって」

「これからも苦労掛けちゃうと思いますけど？」

「それでもよ。ううん。それも幸せ」

「相変わらず素敵な女性ですね、ミナトさんは」

「もちろん。なんたってコウキ君の恋人だもの」

「・・・なんだか照れますね」

「ふふっ。実は私も」

・・・本当に愛おしい。

「・・・俺、もつと頼り甲斐のある男になろうと思います」

「どうしたの？ 突然」

「ずっと甘えてばかりだったって自覚しました。」

だから、これからはミナトさんが遠慮なく甘えられるような強い

男に

「馬鹿ね」

「え？」

「もう充分コウキ君は頼り甲斐のある良い男よ」

「でも、甘えてばかりで、ミナトさんに甘えられる事なんて殆ど

」

「分かってないなあ」

「えっと、それはどういう・・・？」

だって、実際、俺ばかり・・・。

「コウキ君がいるから頑張れる。コウキ君がいるから強い自分でいられる。」

ほら。全部コウキ君のお陰じゃない。きっと私の方がコウキ君に甘えてるわ」

「そんな事ありません。俺なんてミナトさんがいないときっと何も出来ない無力な」

「ふふっ」

「え？ そこつて笑う所ですか？」

「ごめんなさい。でも、おかしくて」

「何がです？」

「私はコウキ君がいないと駄目。コウキ君は私がないと駄目」

「どっちもどっちですね」

「ええ。どっちもどっち。甘えて、甘えさせている。でも・・・」

「でも？」

「それならそれでいいじゃない」

「え？」

「ずっと甘えさせてくれるんでしょ？」

「もちろんです」

「それなら、私もずっと甘えさせてあげる。ずっとずっと。それでいいじゃない」

「ハハッ。そうですね。それでいいです」

依存とか、そんなんじゃないくて・・・。

ただ傍にいてくれるだけで幸せになれる。

ずっと甘えて、ずっと甘えさせて、それでお互いに頑張れる。

うん。それならそれでいいじゃないか。

でも・・・。

「やっぱりもつと頼り甲斐のある男になりますよ」

「だから」

「もつとミナトさんに甘えて欲しいですから」

「あら」

「それに、成長する分には問題ないでしょ？」

「もちろん。もつともつと魅力的な男になって欲しいわ」

「それなら、頑張ってみようかな」

「ふふっ。今でも充分に魅力的だけどね」

「照れます」

まだまだ人間としても男としても未熟。

いつまでも年下だからと甘えてばかりじゃいられないよな。

やっぱり男として、年上であろうと年下であろうとリードできるようにならないと。

自分で言うのも変だけど、まだまだ若いんだし。

俺はまだまだこれからだってば。

ミスマル司令とか、ムネタケ元参謀とか、お手本はたくさんいるんだ。

もっと成長しよう。

堂々と胸を張れるカッコいい男になれるように。

「さて、コウキ君が男の子から男性になる宣言をした所で・・・」

「え？」

さてって・・・？

「感動の再会はここまで」

「え？ え？ ええ？」

「これより事情聴取の時間へと移行します」

「・・・やっぱり？」

「もちろん。どうしてあんな事をしたのか。きちんと教えてもらうからね」

「・・・逃げられます？」

「駄目」

「ですよね？」

飴と鞭。

ミナトさん。

貴方はやはり優しさと厳しさを兼ね揃えた素敵な女性です。

ただ、説教で二時間とか流石に・・・。

これ以上ない程の罪悪感を覚えさせられました。

二度とこのような事はしませんので、お許しを・・・。

「でも・・・」

やっぱりこつでないと。

なんだかんだで怒られてなんぼなんだろうな、俺って。

「ちゃんと反省してるの!? コウキ君!」

「は、はい!」

・・・もしかしたら、まだ続くかもしれない、この時間。でも、まあ、これも愛だと思えば・・・ね。

暖かいものです、はい。

S I D E M I N A T O

「え? 何の話ですか?」

「・・・ふん」

「な、なんですか? その目は」

「別にいゝ」

まったくもう・・・。

「あくまでそう主張するのね」

「だ、だから、気付けばナデシコにいたんですってば」

「ふん」

「だ、だから、何ですか? その目は」

コロニー落とし事件からのこの三週間。

厩気楼の名が広まっていた時期にコウキ君は一体何をしていたのか? 私を始めとして、大体の者は感付いている筈。

コウキ君こそが雇気楼なのではないかと。でも、その当事者であるコウキ君はボソソジャンプによる時間移動を主張し続けている。

どうしてそこまで頑なに主張するのかしら？

「・・・ま、いいわ」

追求しても何も言わないんだもの。

きっと何かしらの考えがあるからなんですよ。

無理に聞こうとは思いません。

男も女も秘密があった方が素敵なものね。

「戻りましょうか。ブリッジに」

「あ」

「ん？ どうかしたの？」

突然何かを思い出したかのように。

「ああー！ー！」

「コ、コウキ君？」

「ミ、ミナトさん。俺・・・」

「うん」

「今、ブリッジの責任者を任されてるんですよ！」

責任者？

そつえば、艦長もいないし、副長もさっき行っちゃったし。

プロスさんやゴートさんも副長と一緒にいたわよね？

確かに責任者っぽい人は皆ブリッジを留守にしている。

でも、それでどうしてコウキ君が？

「どうしてコウキ君が責任者なの？」

「副長に代理を頼まれたんです。ミナトさん。すいませんが・・・」
「キヤッ」

強引に手を取られて走り出される。

・・・柄にもなく照れちゃった。

いままでこんな強引に手を取られた事なんてなかったし・・・。

「付いてきてくださいね」

引っ張られてるんだもの。

付いていくわよ。

ま、引っ張られなくても一生付いていくんだけどね。

S I D E O U T

「いやはや」

「・・・どうかしたんですか？ コウキさん」

「ううん。なんでもないよ」

膝の上に座るセレス嬢を撫でながら答える。

いやあ、俺がいない間に何かあったらどうしようかと思ったけど、何もなくて良かった。

ミナトさんの説教のせいにするつもりはないけどさ、流石に長。

「どつやら反省していないようね」
「そ、そんな事はありませんよ」

「コ、コホン。
相変わらず鋭い……。」

「うん。やっぱりこれよね」

「何がです？」

「ここから見える景色よ」

景色？

「私がここにいるでしょ？」

「はい」

「本来であれば、ルリルリやラピラピもいるんだけど、今は仕方ないとして……。」

「ここから左を見るの。そうすると、コウキ君がいて、セレセレが

いて、メグミちゃんがいる」

「まあ、席順ですからね」

「そうんだけどさ。やっぱりこの景色が一番じっくりくるといっか……。」

「……分かります」

「お。流石はセレセレ」

「そうなの？ セレスちゃん」

「……はい。ここが一番じっくりきます」

背中をこちらに預けつつ、そう告げるセレス嬢。

い、いや、それはどついう……。」

「ぶぶつ。相変わらず愛されてるわね、コウキ君」

「そういうものなんでしょうか？」

「そういうものなのよ。ね？ セレセレ」

「・・・はい」

そ、そうですか。

それならそれで構わないのですが・・・。

「本当に久しぶり。この充実感」

・・・確かにそうだよな。

コロニー落とし事件以降、ナデシコからずっと離れっぱなしだった。ここに座るのだって、それ以来だし。

「戻ってきたん・・・ですね」

「そうね。戻ってきたのよ」

「・・・戻ってきました」

なんか感慨深い。

こうして三人が、家族が揃ったのは三週間ぶりぐらいな訳だろ。それまで離れ離れだったのが、こうしてまた揃ったんだ。

うん、なんか、二人の言った通り、凄くしっくりくる。

目の前に俺の望んでいた光景があって・・・。
ここが俺の居場所なんだって。

傍にセレス嬢とミナトさんがいるのが俺の日常なんだって。
そう実感させてくれる。

なんというか、本能がそう告げちゃってる感じだ。

「ねえ、コウキ君」

「はい」

「戻ってきたのなら、言う事があるわよね」

戻ってきた・・・。

うん、帰ってきたんだ。

帰ってきたのなら、あれを言わないと。

「ただいま。ミナトさん」

「おかえり。コウキ君」

大事な大事な恋人。

愛してやまない大切な存在。

彼女の笑顔が俺を前へと進めてくれる。

「ただいま。セレスちゃん」

「・・・おかえりなさい。コウキさん」

大事な大事な娘。

愛してやまない大切な存在。

彼女の笑顔が俺に活力をくれる。

「ただいま。コウキ君」

「・・・ただいまです。コウキさん」

「おかえり。ミナトさん。セレスちゃん」

そして、家族の存在が俺を俺でいさせてくれる。

どんなに疲れていたって二人がいれば元気になれる。

陳腐な言葉だけど、それ以外の言葉が見付からない。

家族こそが俺の元気の源。

彼女達の存在があれば、他の何もいらなくて。

そう思わせてくれるぐらいミナトさんとセレス嬢の存在は大きい。

一生を共にし、一生大事にしていこう。

ミナトさんとセレス嬢を。

そして、新たに生まれてくるであろう生命も。家族として、夫として、父として。

「どうしたの？ 涙ぐんで」

「いえ」

ただただ……。

「幸せで」

未来に想いを馳せる。

それは今を生きる者全ての特権。

幸せを願い、幸せを望み、そして、幸せを得る。

どんな些細な事でもそれは幸せで……。

「そう、幸せなんです」

誰かがいる。一緒にいてくれる。

そんなちよつとした事でも幸せを感じられるんだ……。

「そうね」

「……はい」

今更だけど……。

「感謝しよう、この世界に来れた事に」

そして……。

ミナトさん、セレス嬢。

この二人に出会えた事に何よりの感謝を・・・。

第百九話（後書き）

・・・難しかった。

またもやエンディングのような終わり方。

最終回、どう締めくくろうかな・・・なんて。

ようやくにして再会し終わりました。

散々待たせてしまい申し訳ありません。

感情を込めて書かせて頂きました。

伝わってくれたのなら、嬉しい限りです、はい。

第一百十話（前書き）

執筆できるときに執筆しよう。

という訳で書き切りました。

出来るだけ土日を書き貯めしておきたいですね、はい。

第一百話

「コウキ！」

基地内の廊下を歩く。

滞りなくユリカ嬢へとナデシコの引継ぎを終えた後、なんでも司令が呼んでいるとかで。

ミナトさんとセレス嬢にはお留守番をしてもらい、こうして足を運んだ。

さてさて、司令は鋭いからな。

どうやって誤魔化そうか……。

「あ、アキトさん。お久しぶりです。」

ルリちゃんとラピスちゃんもお久しぶり」

そんな道中、ルリ嬢とラピス嬢を連れだしたアキトさんが声を掛けてくる。

どこか慌てているような印象を受けるが……どうかしたのかな？

「お久しぶり、じゃないだろ」

「コウキさんが死んだと聞いて……」

「皆、心配した」

ああ、それで慌てていたのか。

どうやら心配してくれていたみたいだな。
なんか嬉しくもあるけど、騙してみたいなものだし、罪悪感もあ
ったり。

「そうらしいですね」

「らしい？ それはどういう意味だ？」

「いや、気付いたら三週間経っていたんです」

実際は動いていましたけどね。

その秘密は墓まで持っていくつもりです。

「気付いたら？」

「はい。コロニーから脱出する際にボソンジャンプを用いたんです」

「ボソンジャンプによる時間移動。それが原因で今まで姿を現せな
かったと」

「そうなりますね」

実際、ナデシコがそうやって移動してきた事実がある訳で。
実例がある以上、否定はできない。

「コウキ、嘔吐してる」

「へ？」

ど、どういう意味かな？ ラピス嬢。

「コウキは膈気楼。間違いない」

え？ え？ どうしてバレてる訳？

なんか足を残したか？

いや、充分に気を付けた筈。

たとえルリ嬢、ラピス嬢といえど、暴ける訳がない。
うん。なんとしても誤魔化し通す。

「それって、あの話題になってる……」

「そう、あの厩気楼だ」

「コロナー落とし事件から数日して現れた謎の賢者」

「あの情報収集力とプロテクトの強度。コウキ以外ありえない」

な、何々？ この追求具合。

三人が三人とも訝しげにこちらを見詰めてきている。

しかし、まさかそういう所から俺へと結びつけるとはな……。
やっぱり鋭い。それに、目の付け所が良い。

……でも、残念ながら、それは決して確固たる証拠ではないです
よ。

そうであるうという可能性の問題でしかなく、証拠とはなり得ない。
まだまだ十分に誤魔化しきれぬ。

「厩気楼についてはチラツと提供された情報を見ただけなので詳しく
ありませんが……」

別人ですよとアピール。

「あれぐらいの事なら、俺じゃなくても出来ますよ。」

俺以上に今の地球情勢に詳しい人なんていくらでもいますし。

俺以上のプログラマーやハッカーなんかもいくらでもいますから」

まあ、ルリ嬢やラピス嬢のハッキングを防げるのは本当に一握りぐ
らいだと思っけど。

「それはそうですか……」

「でしょ？　そもそも俺はいなかった訳だし、多分、もっと立場の高い人間が」

「嘘。コウキ、嘘は泥棒の始まり」

グサツ。

純真なラピス嬢に言われると心が痛むぜ。

でも、嘘も方便って言うだろ？

とにもかくにも、最後まで言わせてくれ、ラピス嬢。

「嘘じゃないってば、ラピスちゃん。ボソソジャンプでいなくなっていた俺には無理だよ」

「それじゃあ、コウキさんはどのようにお考えで？」

「そうだなあ。俺は改革和平派の戦略だと思ったけど」

「戦略？」

「そうそう。改革和平派の方針である国民意識の統一。

その為に、ミスマル司令とか高い立場にいる人間が命じて、

軍のそういうのに詳しい人が国民の意識を誘導させる為にやったって」

少なくともあれの目的はそれだったし。

まあ、成功したとは胸を張っては言えないけど……。

一応、手応えはあったと思う。

「なるほど。そういう考え方もあるか」

「はい。見た所、国民の考えも和平に傾いてきているようですよ」

色々と考えてやったからなあ。

逆効果だったりはない筈だ。

「……まあこれ以上は水掛け論になる。この話は終わりにしよう」

ほっ。

「今、コウキ、安堵した」

「へ？ そ、そんな事ないよ」

「.....」

いや、無言で見詰められてもね.....。

ど、どうにかして、話を逸らさねば。

そっだ。あれがあるじゃないか。

「そ、そういうば、聞きましたよ、アキトさん」

「ん？ 何がだ？」

「コウキ。話を逸らそうとして」

「コホンッ。機動殲滅仕様、実戦で使ったそうですね」

そろそろ完成するとは聞いていたけど、まさかあの場面で出てくる
とはな。

流星はウリバタケさん。

正に、こんな事もあるうかと、だ。

.....そこ、こっちを睨まない。

そんな可愛い顔で睨んできても怖くないぞ。

「ああ。あれは良い機体だ」

「アキトさん専用といっても良い機体ですからね」

高い機動力に抜群の火力。

格闘戦も射撃戦もこなせる万能機。

正にアキトさんの為に作られたような機体だ。

「先程、映像を見させて頂きました」

データ収集の必要があるしな。

ま、実際には映像ではなく、生でも見てただけどね。

「流石はアキトさん。理想的な戦闘展開でした」

「そうか。それは光栄だな」

「時間があればシミュレーションで確認しつつ調整させてください」

「ありがたい。こちらからも頼む」

「いえ。これが俺の仕事ですからね」

新型機を揃え、実戦配備できるよう調整する。

それが俺に与えられた仕事だ。

「これでパイロット分の新型機全てが実戦配備されましたね」

「コウキ。お疲れ様」

「ありがと。まあ、調整の仕事はこれからも続くんだけどね」

それでも、実戦配備された事で形としては一応完了したと言えるだろう。

後は細かい調整をして、よりよくそのパイロットにあった状態にすればいい。

そうだなあ。完全に揃った事だし、それぞれの機体の第一パイロットを決めておこう。

状況次第で乗り換える事も想定に入れて。

「では、ミスマル司令に呼ばれているので」

「そうか。了解した。当分は基地で待機だろうから、何かあったら呼んでくれ」

「はい。それでは、失礼します」

アキトさん達と離れる。

目指すは司令の執務室。

完全復帰した司令はフクベ提督から基地の責任者を引き継ぎ、精力的に働いている。

ま、復帰する前から働いてはいたけど。

怪我ではなく、過労とかで倒れないか、とても心配です、はい。

「ま、ともかくにもさっさと向かうか」

待たせちゃ悪いしな。

さっさと向かうとしよう。

「おお！ マエヤマ君！」

「ご無沙汰しています。司令」

司令の執務室に入る。

途端に笑顔で出迎えてくれる司令。

いや、なんか落ち着く笑顔です。

「君の事はアオイ君から聞いた。無事に脱出できたようで嬉しく思うよ」

「ありがとうございます。まあ、無事とっていいのかは分かりませんが」

「なに。死んだと思われていた君がたったの数週間で復帰してくれたんだ。」

今まで君ばかりに苦勞を掛けてきた分、偶には我々にも踏ん張らせてくれ」

「司令」

その言葉、嬉しく思います。

「君の生存は正式な形で伝えておこう。これで君はまた正式な地球人の一人だ」

「ありがとうございます」

いつまでも死んだまま扱いじゃ困るしな。

「君の生存によって、彼らの捏造は更に際立つ」

そういえば、コロニー落下阻止の際の演説で俺の名前を利用していただけからな。

俺が生存しているとしたら、その嘘の裏を探ろうとする筈。より反改革和平派に対する疑惑が増すといった所だろうか。

「何はともあれ、よくぞ無事に戻ってきてくれた」

「ハッ」

「これからも終戦まで働いてもらおうよ」

「微力ながらお手伝いします」

俺にしか出来ない仕事はまだたくさんある。

戦争終了までは精一杯働こう。

それ以降は・・・ちよつと休憩してもいいよな？

「早速だが、現在の状況を話しておこう。把握してるかね？」

「いえ。お願いします」

一応、逐一調べていたけど。

軍内部からの視点とは違うだろうし、参考までに聞いておきたい。

「先日、正式にクーデターは収束した」

「クーデター。コロニー落としから始まった一連の騒動ですね」

「うむ。先のコロニー落とし。君が齎してくれた証拠により真実を導けた。感謝する」

「いえ。当然の事をしたまでです。それに、あれらが得られたのは偶然ですし」

核爆弾を調べた結果得られた証拠。
うまく活用してくれたみたいだな。

「その際、連合軍最高司令官が捕縛されたのは知っているかな？」

「はい。聞きました。コロニー落としの首謀者として囚われたと」

間違いなく国家、いや、地球叛逆罪だよな。

これ以上ない罪だと思う。

成功するにしても、失敗にするにしても、画策しただけで犯罪だつての。

もしコロニーが落ちてたらどれだけの被害になると思ってたんだよ？

味方である地球人を犠牲にするなんて言語道断！

最高司令官の座を降りるのは当然として、それ以上に裁かれるべきだと思う。

ま、それは裁判官の方に任せるけどね。

俺、というか、地球にはもっと大事な事がある。

「当然、彼は最高司令官の立場を降りる事になるだろう」

「はい。問題はその後釜ですよな」

「うむ。それに加えて、世界中の民による総選挙も行わなければならん」

「総選挙？」

「地球が取るべき道が抗戦であるか、和平であるか、それを決める選挙だよ」

そう、世界中の人間による地球としての活動方針の決定だ。

恐らく、その際にその方針を掲げていた者が連合軍の最高司令官の座に収まるだろう。

すなわち、徹底抗戦の道を民が選ぶのであれば、徹底抗戦派のNO 2が。

和平の道を民が選ぶのであれば、目の前にいる人物、ミスマル司令が。

「我々は軍人だ。軍人は民の決定に従うべき組織。

散々国民に対して訴えてきた私が言うのも変な話だが、

軍人は軍人としての枠に留まり、政治に対して口を出すべきではない」

「ですが、戦時であれば、軍人が権力を握るのも致し方ないかと」

「だが、その結果、こうして軍部の間人間による事件が起きてしまった」

平時であれば、軍人など必要のないもの。

もちろん、抑止力としての効果は必要だが、権力を握らせれる必要はない。

だが、戦時であれば、戦争が政治にも大きな影響を与える。

予算も軍関係に費やされ、結果として、軍人が幅を利かせてくるようになる訳だ。

それ故に軍の独断を許す事になったりと政府が後手に回ってしまう。かといって政治家が全ての権限を得てしまえば、独裁政治になって

しまつ。

政府に対して軍人が意見をできるようにもしておくべきで。やはり政治と軍事のバランスは難しいものだ。

「今回、私はこの総選挙に対して口を出すつもりはない」

「……よろしいので？」

こういう時にこそ求心力の高いミスマル司令の演説は効果が高い。平和の道を選ばせる為にも、必要な事だと思ふのだが……。

「政府の中には私の考えに賛同してくれる者も多い。

私は彼らを信じ、彼らにこの総選挙を任せようと思つ」

「……司令がそう言うのならそれで構いませんが……」

不安は残るが、司令の意思を尊重しようと思つ。これはきつと軍人としてのけじめだと思つから。

「うむ。そして、その間、私は私にしか出来ない事をやろうと思つ」

「司令にしか出来ない事？」

「国民の意思を確認し、統一させるのは政府の仕事だ。

だが、軍人の意思を確認し、統一させるのは私や軍の上層部の仕事である」

「軍の派閥争いに終止符を打とうという事ですか？」

「その通りだ。私はどのような結論であろうと国民の意思に従つと決めた。」

和平には和平への想いが。抗戦には抗戦の想いがそれぞれある。

そのどちらも否定してはならない。だからこそ、国民に問うのだ。無責任のように感じるかもしれないが、最終的な判断を国民に委ねたい」

「いえ。それこそが軍のあるべき形でしょう」

軍とは民の奴隷である。

民の示した意思を矛とし、盾とするのが軍なのだ。

軍が民の意思を超えて活動する事はあつてはならない。

そういう意味ではミスマル司令の考えは正しいと言える。

「その為にも軍内での意思を統一させねばならない。

和平ではなく、抗戦でもなく、国民の、地球の意思に従うと」

「それこそがミスマル司令のすべき事であるか？」

「ああ。無論、彼らもまた民の一人であり、どちらかに強制するつもりはない。

ただ軍人として、地球の結論が出たのならば、私心を捨てて従つて欲しいだけだ」

「軍人であり、国民・・・ですか。私心を捨てるのは難しいでしょうね」

「うむ。だが、そうしてもらわねばなるまい」

全ては民の決定か。

ミスマル司令がそうする以上、俺が裏で動くのもなあ・・・。
なんとなく憚られる。

国民の意識を誘導させようと思ってるんだけど・・・どうしよう？

・・・まあ、どちらにしろ、雇気楼としての活動はまだ続けるけど。
ここで辞めたら皆も情報ソースに困るだろうし、俺に対する疑惑も
深まるだろうしね。

ルリ嬢とかラピス嬢とかはまだ疑ってるだろうしさ。

隙は見せませんぞ。

「わかりました。して、俺は何をすれば良いですか？」

正直、特にこれといってやるべき事はないように思えるんだが・・・

。

「君には木連神楽派との接触を密にしてもらいたい」

「神楽派とですか？」

「うむ。木連の状況を知らねば動けないからな」

確かに……。

でも、もし、地球が抗戦を選んだのならば……。

「……地球が抗戦を選んだらどうするおつもりですか？」

「……君には辛い思いをさせる事になるかもしれんが……。

地球が抗戦と決めたのならば、神楽派とは袂を分かたねばならん」

「しかし……」

「その事を事前に彼らに伝えて欲しい。それがけじめである」

「それでよろしいのですか？」

「……私とて平和を結びたい。だが、私心を捨てて行動すると決めたのだ」

「……」

裏切り……だとは思わない。

ミスマル司令の姿勢こそ軍人としてのあるべき姿なのだから。

だが、和平の為にと力を注いできた人間からしてみれば……複雑だ。

こうまでしてきて結局抗戦という結論になってしまったら……。

決して俺は認めないだろう。

もちろん、俺が和平に力を注いできたように、

徹底抗戦に対して力を注いできた人間もいるのだろう。

でも……。

「本当にそれでよろしいのですか？」

俺が新型機を揃えたのは和平を実現させる為。
平和の為に戦力を整えるというのも変な話だが、その想いは常に和平に向けていた。

これはエゴだ。エゴだけど・・・。

「俺はC A Sを和平実現に向けての戦闘以外に使って欲しくありません」

改革和平派が、和平を唱えたから。

だから、俺は協力して、C A Sを作り上げた。

ナデシコは一致団結して和平に向けて活動し始めた。

全ては和平の為に・・・。

それを今更抗戦の為にと・・・。

「・・・分かっておる。だが・・・」

司令が苦悩している事は知っている。

今、俺がエゴをぶつけた所で司令の姿勢は変わらないだろうし、意味がない事も知っている。

だけど、到底納得できるものではない。

「ナデシコは・・・」

「ん？」

「ナデシコであれば、たとえ何と言われようと和平の為に動きます」

それは原作でのナデシコが証明している。

独断で和平交渉に向かったのは愚かとしか言いようがないが、その意思の固さは本物。

どんな困難が立ち塞がろうと全てぶち壊して和平を結ばせる力強さ

がナデシコにはある。

「独断で和平交渉に向かうのも辞さないでしょう」

それがナデシコですから。

「……………」

娘がどのような行動を取るかなど。

司令、貴方には分かりきった事でしょう？

「おっしゃられた通り、神楽派との接触を密とし、木連の状況は逐

一伝えます」

「うむ」

「……それでは、失礼致します」

振り返る事なく、執務室から退室する。

失礼な態度である事は自覚している。

怒鳴られても仕方がないような事を言ったとも自覚している。

それでも…………。

「納得できるかよ」

和平への想いを曲げる事だけは出来ない。

「参ったな」

「司令。如何しました？」

「うむ。ナデシコのクルーは皆頑固なのだよ」

「頑固・・・ですか？」

「そうだ。テンカワ君といい、ユリカといい、アオイ君といい誰も
が納得しなかった」

「それだけ和平に懸ける思いが強いのでしょう」

「そうなのだろうな。あのマエヤマ君ですらそうなのだから」

「司令」

「ん？ 何だね？」

「私は司令の姿勢こそが軍人であると思います。

ですが、同時に司令のみが地球と木連の和平を成せる方であると
も確信しています」

「・・・そうかね」

「後悔しませんか？」

「するかもしれないな」

「それでは動くべきです。同じ後悔なら動いてした方が何倍も良い」

「少し待ちたまえ」

「ハッ」

「私は後悔するかもしれないと言ったが、後悔するとは思って
いない」

「は？」

「私は地球の民を信じている。彼らなら和平の道を目指してくれる
と」

「しかし、それは唯の願望です」

「痛い事を言うな」

「・・・ハッ」

「ふむ。ナデシコが動くか・・・」

「は？」

「本来であれば許してはならない独断専行。だが、彼らであれば、
あるいは・・・」

「司令。それは・・・」

「いや、戯言だ。やはり民を信じよう」

「そう・・・ですか」

「さて、やらねばならない事はいくらでもある。すぐにも動くでしょう」

「ハッ。私は指示通り戦力の立て直しを図ります」

「うむ。頼むぞ。最終決戦、完全勝利も駄目だが、敗北は断固として許されない」

「分かっております」

「私は今から各方面軍の司令との会談がある。しばらくの間、留守を頼む」

「ハッ！」

「和平か抗戦か。私は和平こそを選ぶと信じてたい」

第一百十話（後書き）

難しい事だと思います。

実際、軍人であるミスマル司令は演説を行う事ぐらいしか出来ません。

かといって、ミスマル司令が演説を行えば、向こうも当然演説を行うでしょう。

そうなれば泥沼ですから。

ここは静観し、今の状況のまま国民に任せるのがベストだと思います。

軍人としては私心を捨てなければならぬ。

でも、本音は和平を結びたい訳で。

ミスマルのおやつさんの苦悩の日々は当然続きます。

現段階でミスマルのおやつさん達が行っている事は……。

？戦力の立て直し。各方面軍との会談は迫る最終決戦への戦力の確認。

？軍内の收拾。和平にしても抗戦にしても国民の意思に従うようにと通告。

無論、軍人は上の命令に絶対の組織ですからね。

命令されれば従わざるを得ないのですが……。

感情というものを甘く見てはいけませんから。

きちんと上から気持ちを整理させる時間を与えるべきだと思います。

さて、肝心のナデシコ組みですが、彼らは決戦までの期間。

何をするんでしょうかね？

それでは、次回をお楽しみに。

第百十一話（前書き）

休日に書き貯める。

これが私の執筆活動。

第百十一話

「最終決戦に向けて、私達ナデシコに与えられた仕事は・・・」

待機。

それが地球に戻ってきたナデシコに与えられていた命令だ。

地球連合軍内部の混乱も収まっていなく、

これといってナデシコに出来る事がなかった事が理由だと思われる。だが、だからといって、いつまでも待機というのはあまりにも勿体無い。

自惚れるようだけど、地球の最高戦力であるナデシコ。

する事が何であれ、休暇でもないのに動かないのは愚の骨頂である。

やるうと思えば、いくらでもやる事はある筈。

ましてや、決戦までの期限は限りなく少ないのだ。

命令を無視してでも動きたいと思ったのは決して俺だけではないだろう。

それでもまあ、勝手に動けないのが軍属の辛い所で・・・。

ようやく、今、新しく命令が与えられた訳だ。

まあ、到着して一日しか経ってないんだけど、一日だって勿体無いよな？

「各基地を回り、教導部隊として働く事が決まりました」

教導部隊？

「現在、地球では早急な戦力の立て直しを行っています」

当然だ、むしろ、しなければ困る。

地球が木連に勝っていた点として最も大きいのはその量だ。

資源力、兵力、それら全て量という観点では完全に勝っていた。

戦争とは結局、数の戦いであり、兵力の差はそれだけで大きな武器となるのだ。

だが、その武器となる数も先のクーデターでかなり失われた。

そうなった今、地球が木連に勝る点は殆どないと言えるだろう。

無論、今でも数的優位には立っている。

だが、多少の数の差では抗えない武器、ボソソジャンプが彼らにはある。

彼らの戦術の根底のあるのがボソソジャンプによる奇襲にある以上、多少の兵力の差など木連にとっては微塵の意味も持たないと言えるだろう。

圧倒的物量による人海戦術。

これこそが木連に対する絶対的な勝利方法だったのだ。

だが、その戦法も最早取る事ができない所にいる。

「お父様を始めとして、多くの将校が戦力を立て直そうと頑張っていますか・・・」

「残念だけど、限界がある。兵士の育成、機体の生産には時間が掛かるからね」

そんな簡単に戦力が集まる訳がない。

最終決戦の舞台の大半が宇宙であると考えられる以上、用意するべきものは限られてくる。

地上用の機体や水中用の機体はまるで役に立たず、宇宙仕様に改修する必要が出てくる。

そう簡単に改修できるとは思えないし、出来ても時間が掛かるんだ

ろうけど・・・。

かといって全機体を改修して、数を揃えるという行為もする訳には
いかない。

もし木連が万が一にも隙を突いて地球に攻め込んできたらどうなる？
宇宙で争っている間に地球上の重要施設が占拠されてしまう。

これは完全なる地球側の敗北となるだろう。

この奇襲を警戒して防衛隊の配備は必須となる。

なんととっても相手にはボソソジャンプという奇襲方法があるのだ
から。

チューリップだって完全になくなっていないとは言い切れない。

確実に滅ぼしたとしても、もしかしたら、という考えが不安を、恐
怖を呼ぶ。

その懸念がある以上、地球は戦力を割かねばならないのだ。

それは地球内だけではなく、コロニーや基地もそんな訳で・・・。

結局、地球側はあるかないかも分からない奇襲に大部分の戦力を割
かねばならない。

木連の強味はそこにあると俺は思う。

よくスポーツではアウェイよりホームの方が有利と言われている。

それは環境に対する慣れだとか、ホーム故の応援の多さ、

今回のようなものに当てはめるならば、現地からの物資の提供の迅
速さなどが要因であろう。

だが、それも時と場合によるのだと知った。

木連は自身の本拠地に攻められる恐怖がない。

反面、地球は臆病なまでに守りを固めなければならぬ。

木連は奇襲を恐れる必要がない。

反面、地球は奇襲に全神経を研ぎ澄ます必要がある。

以上の事から、木連は現時点における全戦力を決戦に持ち込める。

反面、地球は防衛に戦力を割き、全体の何割かで決戦に挑まねばな
らない。

前提からしてここまで不利になっているのだ。

決戦の場が地球に近く、木連に限りなく遠い点。距離の壁を地球は越えられなく、木連は条件付きながらも越えられる点。

正直、木連が地球に勝っている点なんてこれぐらいしかない。でも、このたった二つの点が地球を苦しめているのだ。

以前までであれば、戦力を割いても充分数を上回る戦力を用意できただろう。

だが、今では、良くて互角という程度の数しか集められないと考えられる。

先のクーデター。その結果が地球敗北のピンチという訳だ。

本当に・・・愚かな事をしてくれたものだ。

後々の政権を得る為とはいえ、負けたらその時点で終わりだったのに・・・。

また、援軍や物資の提供。

本来であればホームである地球の方が何倍も早く補給できる。

だが、距離を越えられる彼らにはその概念は当てはまらない。

むしろ、地球以上に補給が容易であると言える。

考えてみて欲しい。

いくら倒しても限界が見えない状況を。

もちろん、相手側にも数の限界はあるだろう。

だが、随時補給できる彼らから限界を計り知る事は出来ない。

それは士気の低下に繋がり、敵の士気の向上に繋がる。

また、地球側が補給するにも時間が掛かり、補給部隊の撃沈もあり得る。

そうなれば、地球の士気はどん底、勝てる方がおかしくなるだろう。ボソソジャンプ。

戦略の根底にこれを持ってきたのは見事としか言いようがない。

戦争の主導権を握れる上、部隊展開を迅速かつ容易にできる。

改めて、ボソソジャンプの危険性を知った気がした。

「量を得られないのであれば、質を取るしかありません」

数は互角。

環境は不利。

機体性能は互角。

そうなれば質の面で有利になるしかない。

木連の機体の殆どは無人兵器であり、順応性、応用性に欠ける。突くならそこしかないだろう。

「最終決戦へは各基地の精鋭部隊が送られる事になりそうなんだ」

「なるほど。防衛隊をそれ以外で構成するのか」

完全なまでの質優先体勢。

だが、そうまでしななければ勝てないのが事実。

追い込まれてるといっても過言ではないだろう。

「その精鋭を更に鍛え上げる事が私達ナデシコに与えられた使命です」

地球最高戦力であるナデシコによる教導。

なるほど。決戦に向けてナデシコが出来る最高の事だ。

今更チューリップの掃討やコロニーの奪還などをしてもたかが知れてる。

それだったら、勝利の可能性を少しでもあげておいた方が良い。

もちろん、しないよりはした方が何倍も良いけど……。

「なお、その際、現地の兵士達とよく話すようにして下さい」

「え？ それはどういう……」

「分かりません。ただお父様からそう伝えるように言われて……」

現地の兵と話すようにする？
どういう意図があるんだろう？
まあ色々と話してみたいと思ってたからちょうど良いんだけど。

「また、本任務より・・・」

シューインッ。

「アキト、ルリちゃん、ラピスちゃんの三名が復帰します」

「よろしく頼む」

「お久しぶりです、皆さん」

「ただいま」

ブリッジの扉が開き、アキトさん達が入ってきた。
彼らが戻ってくるのは物凄く心強いんだけど・・・。

「良いんですか？ あっちは」

火星再生機構。

アキトさん達に一任した企画。

こっちに構っている時間はないと思うんだけど・・・。

「ムネタケさんや日中が頑張ってくれているからな」

「それに、私達も決戦へ参加するつもりですから」

「そろそろ復帰しないと足手纏いになる」

確かに現場を離れてかなりの期間が経っているからな。
流石のアキトさん達でもブランクがあればきついだらう。
この数日間でも少しでも勘を取り戻して欲しい。

「加えて、決戦間近という事もあり、曖昧だった役職が明確になりました」
「とはいっても、大尉や少尉という役職を皆に当て嵌めるつもりはないよ」

それが良い。

ナデシコの人間にはそんな区別は必要ないさ。
上下関係がない不思議な空間こそがナデシコの特徴なんだから。

「皆に報告するべきものって私の事ぐらいかな？」

「そうだね。ナデシコにも大きく関わってるし」

お、ユリカ嬢に何か役職が与えられたのか。

大佐とか、少将とか、その辺りかな？

それぐらいの事はしてきたとは思うけど。

「ユリカはナデシコ艦長と同時に空席となっていた提督を務める事になったんだ」

「艦長と提督の兼任という訳か。ナデシコにとっては都合が良いな」

ムネタケ提督が軍内部で動く為にナデシコを降りた。

その際、通常であれば、他の人間が新しく提督として入ってくるのだが……。

役職上はムネタケ中佐のまま、ユリカ嬢が代理として提督を務めていた。

今回、その状況が整理されたという訳か。

提督といえば、艦隊のリーダー。

一つの艦を任される艦長以上に権限を持つ事になる。

ナデシコに対する期待が窺えるな。

いや、ユリカ嬢に対する期待……か。

「これでナデシコに部隊が参入する際も正式に私に指揮権が渡るようになりました」

「ユリカの作戦で艦隊が動けるようになる。これは大きい」

「いやあ、それはちよつとなあ・・・。」

「ユリカ嬢の作戦は確かに効果的だけど、求めるものが大きいと思うんだよ。」

「それに対応できるのはナデシコクルーが優秀だからであって・・・。他の部隊の人間にそれができるかどうか・・・。」

「まあ、ユリカ嬢であれば、それを踏まえての作戦展開も出来るか。」

「以上で報告を終わります。それでは、早速動きましょう」

「まずはアジア支部。次は西欧支部。」

「決戦まで期間がないからね。ハードスケジュールになるよ」

「うわおっ。」

「大忙しだな。」

「頑張らなくちゃ。」

「あ、それとマエヤマさん」

「はい。何でしょう?」

「お父様から預かりものがあります。格納庫でウリバタケさんから話を聞いてください」

「えっと、はい、分かりました」

「ミスマル司令からの預かりもの?」

「司令は俺に何をさせようとしているのだろうか?」

「ま、いいや。とりあえず向かってみるかな。」

「・・・私も行きます」

「そう？ 分かった」

ルリ嬢やラピス嬢の訓練にもなるし。

当分はセレス嬢の出番はなさそうだな。

それなら、御手伝いをしてもらおう。

セレス嬢がいるかいないかで作業効率が段違いだしな。

「お願いするね。セレスちゃん」

「・・・はい。任せてください」

胸の前で拳を握るセレス嬢。

相変わらず可愛いなあ・・・。

「おお。コウキか」

「はい。ここに来るよう言われまして。それで・・・」

「お前に見せると言われたのはこいつだ」

ウリバタケさんの声と同時に何かにかげられていたシートが剥がされる。

その何かとは・・・。

「これは・・・」

「試作型ヒナギク、いや、量産型ヒナギクと呼ぶのが正しいな」

「・・・量産型ヒナギク。正式名称は何なんですか？」

「強襲戦闘機タンポポだ」

・・・タンポポ。

形状はヒナギクと殆ど同じだ。

でも、サイズにかなり違いがあり、かなり小さい。

あのサイズではコクピットはあっても居住区はないだろう。

・・・という事は・・・。

「完全な戦闘仕様？」

「そうなるな。なんでも戦闘機パイロット用に新しく用意させたみたいだ」

なるほど。

エステバリス、ステルンクーゲルなどの人型兵器が登場する前、

宇宙や無重力下においてはデルフィニウムが、

地上においては戦車や戦闘機が主戦力としてそれぞれ配備されていた。

デルフィニウムから人型兵器に乗り換えるのはそこまで難しくないだろう。

だが、戦闘機パイロットに突然人型兵器に乗れといっても容易ではない。

それは技能的な面もあれば、精神的な面もある。

なかにはすぐさま順応して、今でもエースとして活躍してる者もいるだろうが、

大半は戦闘機乗りのとしてのプライドや誇りが邪魔をして、乗ろうともせず拒んでいる。

航空隊こそが戦場の華であった時代はとくに終わっているのだが・・・。

まあ気持ちは分からなくもない。

戦場の主役だったのが一気に脇役以下になったのだ。

納得しきれるものではないだろう。

でも、その技能を眠らせておくのはあまりにも勿体無い。
かといって人型兵器に乗る事を強制しても大して役には立たないだ
ろう。

訓練する時間があまりにもなさ過ぎる。

これらを考慮すると、やはり彼らには戦闘機を与えるのが一番。

だが、脇役に回されるにはそれだけの理由があり、通常の戦闘機で
は戦力外なのだ。

でも、それは従来の戦闘機だから。

今の技術力であれば、人型兵器に対抗できるだけの戦闘機が製造で
きる。

それこそがこのタンポポ。恐らく、そういう事だろう。

「ヒナギクは高性能だが、戦闘機としてはあまりにも大きすぎる」

「確かに。元々の構想が戦闘機ではなく揚陸艦ですからね」

「ああ。そこでサイズを小さくし、完全な戦闘用としたんだそうだ」

「ヒナギクに比べて、どこが削られたんですか？」

「まずは居住区。コクピットもギリギリ一人か二人が乗れる程度し
かない」

それだけでかなりの範囲が削れるな。

「次に格納庫も削られた。戦闘機に輸送機能は必要ないからな」

「まあ、あつても困らないとは思いますが・・・」

「サイズのな」

確かに格納庫を作ればその分大きくなっちゃうからな。

「後は武装をちよいちよ減らしたな」

「見た所、出っ張りがありませんから、スピアと爆導策を失くしま
したか」

「ああ。ワイヤーアンカーは応用性があるからな。付けたままだぞうだ」

「なるほど」

方向転換とか色々使い道があるからな。

「以上の点を削り、サイズダウンしたのがタンポポだ」

「戦闘機としては破格の性能でしょうね。相轉移エンジンを積み込んでますから」

恐ろしいな、正直。

手とか、足とか、胴とか、形に拘らない分、ここまで戦闘に特化できるなんて。

このサイズで相轉移エンジンを積み込むなんて人型じゃ絶対に無理だ。

しかも、その全てを戦闘に用いる事が出来る。

アドニス機動殲滅仕様並みの機動力が得られそうだな。

まあ、人型特有の回避行動とかは出来なさそうだけど。

戦闘機に慣れているパイロットからしてみれば、そっちの方が良かったりするのかな？

「そうだな。だが・・・」

「宇宙での使用が前提・・・ですか？」

「空こそがこいつの舞台なんだろうが、性能低下は否めないな」

相轉移エンジンの性質上、どうしても地上では性能が低下してしまう。

機体としては有能だが、本来の用い方は出来ないかもしれないな。戦闘機パイロットには流石にそこは妥協してもらえない。

・・・悔しいだろうけど、それが時代の流れだ・・・。

「それで、俺に何をして欲しいんでしょうか？」

「ほぼ完成していると思われるタンポポ。」

「今更、俺がする事なんてないんじゃないのか？」

「本機体には従来と同様の操縦方法が取られている」

「イメージは出来ませぬ。」

「あのスティックのようなものを動かすんですよね？」

「だが、内部の制御機構はCASを用いているんだそうだ」

「CASを？」

「ああ。戦闘機パイロットに使いやすいうように改良したんだそうぞぞ」

「まあ、CASはボタンとかで簡単操作できるようにしてあるけど、戦闘機パイロットとしてはきちんとした操縦がしたいんだろな。」

「でも、制御方法としてはCAS以上のものがないから、それを改良、調整した訳だ。」

「それで満足して頂けるなら僕としては構いませんが、新しく作れといわれても時間がありませんからね。」

「お前には稼働データの収集とそれに応じたOSの調整を依頼したい」

「調整……ですか」

「ああ。こいつは決戦での配備が初の実戦となる。」

「殆ど完成といえる出来だがな、まだまだ不安なんだろうよ。」

「だから、その前に信頼のおけるお前に調整してもらいたいんだと思っぞぞ」

「それは構いませんが・・・」

そうまで評価してもらうのは嬉しいけど・・・。
戦闘機なんて動かせねえぞ、俺。

「誰が動かすんです？」

稼働データを収集するにもまずは動かしてもらわないと。
システムが完全にCASなら俺にも出来るけどさ。
戦闘機のようなコクピットだったら、僕は何にも分かりません。

「ちゃんとアテはあるから心配するな」

「え？ あるんですか？ 追加パイロットとか？」

「いや、軍できちんと訓練を受けてる奴がいる」

「軍で訓練？ それって・・・」

軍所属からナデシコ所属になったのって・・・。

「私ですよ」

「俺もだ」

「イツキさん、それに、ガイも」

いつの間に・・・。

「二人が協力を？」

「司令から頼まれましたから」

「偶には手伝ってやるよ」

そういえば、ガイも元々軍人だったな。

イツキさんはもちろんとして。

「戦闘機の訓練を受けた事があるんですか？」

「士官学校のカリキュラムに含まれていましたから」

「言っとくけどな。戦闘機訓練の評価はかなり高かったんだぞ」

へえ、それは意外だな。

あの格闘バカといっても過言ではないガイがねえ。

まあ、性格に反して射撃とか得意だったしな、おかしくはないか。

「ベテランの方には劣ると思いますが、精一杯やらせてもらいます」

「久しぶりだから失敗しても許せよ」

いや、失敗して危険なのは自分だからね、ガイ君。

ま、でも……。

「協力感謝します」

タンポポ。

単独行動が可能な強襲戦闘機か。

もしかしたら、こいつが決戦で大きな役割を担うかもしれないな。不備のないようきちんと完璧に調整するとしますか。

……まあ、抗戦の為に、とでもなったら、やる気出ないけど。

「随分としてみつたれた顔してんな」

「まあ、複雑です」

「あれか？ 和平か抗戦かの瀬戸際だからか？」

「ええ。良く分かりましたね」

「まあな。整備班の中にもお前みたいな奴がいるよ」

「え？ 俺みたいな奴？」

「そう、和平の為に熱血してたのに、」

もしかしたら徹底抗戦になるかもって腑抜けてる奴だ」
「グッ」

図星。

「でも……」

「まあ、お前らの気持ちも分からなくねえ」

「……ウリバタケさん」

「だがよ、それでも俺の仕事はてめえらパイロットを無事に帰艦させる事だ。」

それ以上でもそれ以下でもねえ。てめえはどうなんだ？ てめえは地球の代表なのか？」

「それは……」

「前を見るのもいいけどよ、足元をお留守にしちゃいけないな」

そんなに地に足ついてないのか？ 俺は。

「そいつが今出来る事を精一杯やる。それでいいんじゃないのかい？」

「今出来る事を精一杯……」

「おう。それにな、なんだかんだ、人生つてのは結構都合良くいくもんだ。」

偶には運任せにしたつていいんじゃないか。余裕を持てよ。焦った所で何も変わんねえぞ」

「……焦ってますかね？ 俺」

「かなりな」

「……そうですか」

分かってはいるんだけどなあ……。

やっぱり納得しきれないというか……うん。

「じゃあよ、逆に聞くが」

「はい」

「お前が焦った所で皆が和平に賛成するのか？」

「お前が何かした所で地球は平和になるのかよ？」

「それは・・・ありません」

「だろ？ それなら、今出来る事を精一杯やれ。」

「それがもしかしたら最終的に良い方向に繋がるかもしれないだろ」

「・・・そう、ですね」

「まったく・・・。くだらねえ事で悩んでやがって」

「ハハッ。ウリバタケさんに掛かれば俺の悩みも所詮はくだらない事か。」

「敵わないな、本当に。」

「俺は俺の仕事がある。てめえにはてめえの仕事がある。そうだろ？」

「はい」

「それなら・・・」

「バシッ！」

「イタッ！」

「さっさと仕事しろってんだ！」

「まったく・・・。」

「乱暴なんだから、ウリバタケさんは。でも・・・。」

「ありがとうございます」

「大丈夫でしょうか？」

苦笑するイツキさん。

「アハハ。多分」

大丈夫だよな？ ガイ。

・・・ちよつと心配になってきた。

『司令。今、ナデシコが旅立ちました』

「そうか。わざわざすまないな」

『いえ』

「伝えてくれたか？ あの件を」

『はい。出来るだけ現地の人間と話すようにすると』

「それでいい。それで全て解決する」

『司令』

「何だ？」

『その指示の意図は一体・・・』

「我々のような人間より彼らの方が説得力がある、そういう事だ」

『分かりかねます』

「ふつ。今は分からんでもいい。ただ・・・大きな意味がある事は確かだ」

『そうですか。分かりました』

「うむ。引き続き、頼むぞ」

『了解です。ではっ』

プツンッ。

「上の人間より同じ立場の人間の言葉の方が心を揺り動かされる。そして、ナデシコの間程、真っ直ぐで強い想いを持つ者はいない。

強い信念の持ち主の言葉は効くぞ？　それが純粹であればある程な。

相手の想いは本物だ。そして固い。・・・だが、彼らならば、あるいは・・・。

ふっ。結局はナデシコ任せという事か。ユリカ。娘に甘える頼りない父を許せよ」

第百十一話（後書き）

タンポポ登場。

主役クラスは乗りませんが、後々重大な役目を担ってくれます。なんとなく分かる人には分かるかも。

さてさて、ナデシコはこういう任務が与えられました。

そして、コウキは更なる負担。

頼りになるのは分かるけど、コウキ君、過労死しちゃいますよ？司令。

まあ、片手間に出来るレベルの調整なんでしょうが。

軍のプログラマーだって優秀な筈。

最後のちよっとした調整を頼んだだけで、ほぼ完成している・・・筈です。

恐らく、コウキの調整データをすぐさまフィードバックして、全てのタンポポに適応させるんでしょう。

無論、現段階でもパイロットはタンポポにのって訓練中ですよ。でも、一人ひとりに合わせる時間はありません。

そこらへんは軍の調整係に任せましょう、はい。

しかし、今更だけど、コウキ君、目立たないけど、凄いな。

あれだけ同時に大きな仕事を任されて、

今の所、その全てを成功に収めているんですから。

一社に一人は欲しい存在ですね、なんて。

では、次回もよろしくお願いします。

第一百十二話（前書き）

明日、推薦入試にて学校が休み、という事で休日執筆タイプに移行。

一度書き始めると気が乗って、どんどん先が書きたくなる体質の僕。だから、連続投稿が多かったり。

しかし、毎日更新出来る人・・・素直に尊敬します。

どうしてもやる気が出ない時ってあるよね？

第一百十二話

『いやっほおおー！ 凄いぜ！ これ！』

「飛ばし過ぎだ！ ガイ！」

『しょうがねえだろ。こんなにスピードが出るんだ。出さない方が失礼にあたる』

「だからって、お前・・・」

『おっしゃあ！ 今日こそ俺は風になる！』

「お、おい！ ガイ！ ガイってば！」

危ないっての！

『アーッハッハッハ！』

「・・・はあ。駄目だ、こりゃあ」

「アハハ。色々な意味でお疲れ様です、コウキさん」

苦笑で済みませんよ、イツキさん。

「見ている方がハラハラします」

あいつ、久しぶりだったのに、飛ばし過ぎ。

「ですが、本当に良い乗り心地でしたよ」

「・・・貴方もスピード狂でしたか」

「アハハ……。否定できません」

まあ、高速度における機動を見たい時には都合が良いけどさ。

「あのスピードで乗り心地が良いってのはちょっと」

「コウキさんも乗れば分かりますよ。あれだけの加速力、なかなかありません」

「はぁ……」

俺ってば普通の人間ですから。

危険な事は回避したい人間なので。

「……コウキさん。この時のバーニア展開はこうした方が……」

「ふむふむ。なるほどね。セレスちゃん、それ採用」

「……やりました。嬉しいです」

小さくガッツポーズをするセレス嬢。

やっぱりセレス嬢は素晴らしい助手だな。

最近はどうして自分の意見をきちんと言ってくれるようになったし。それがまた的確で、本当に頼りになるぜ。

いつか俺なんか簡単に抜いて遙か先に行っちゃうんだろうなあ……。

……なんか感慨深い。

「父親のような視線ですね」

「え？　そうですか？」

「娘の成長に喜ぶ父。そんな感じでした」

「分かります？」

「それはもう」

そんなに分かりやすいかな？ 俺。
ま、仰る通りですから、否定はしませんけど。
さて、調整を続けますかね・

「セレスちゃん。相転移エンジンの出力はどうなってる？」

「・・・相転移エンジン出力は50%で安定しています」

「ふむ。それが最大？」

「・・・最大ではありませんが、これ以上はさほど・・・」
「そっか」

やっぱり地上における出力には期待できないな。

出来るなら、宇宙で調整したいんだけど・・・仕方ないか。
宇宙用の調整は軍の方でしてるだろ、多分。

「戦闘行為の確認は基地の方でしょうか」

「それが良いですね。もう少しで着くそうですから」

「それは助かります。気になった事はすぐに確認したいタイプなので」

「コウキさんらしいですね。その姿勢、参考にしなければ」

「そんな大層な事じゃありませんよ。性分なだけです」

「ふふっ。そうですか」

「そうです」

そんな尊敬の視線を向けられても困りますよ、イツキさん。
僕の柄じゃないです。

「やっぱりシミュレーションより実機の方が良いデータを取れるの
ですか？」

「一概には言えませんが、今回の件に関してはそうですね」

明確なデータがある訳でもなく渡されたからな。
実際の稼働データがなければ、調整しようにも基準がない。
基準がなければ、シミュレーション上の調整が机上の理論で終わる。
最終的に実機に当て嵌めるまでが調整の仕事だしね。
まずは基準を設けないと。

『ブリッジクルー及びパイロットの皆さんはブリッジに集まってください。』

繰り返します。ブリッジクルー及びパイロットの皆さんはブリッジに集まってください。』

どうやらイツキさんの言った通り、そろそろ基地に到着するみたいだ。

それなら、ガイを呼び戻さないと。

「ガイ。帰艦してくれ」

『もうちょい乗らせろよ。今、良い所なんだ』

「早くしないと恋人から怒られるぞ。パイロットはブリッジ集合だ」

「お、おい。それを早く言えよな。急がないと・・・」

プツンッ。

あの慌て振り・・・。

「あいつ、彼女の尻に敷かれてるな」

まったく、ナデシコはカカア天下ばかりだな。

亭主関白なのは俺だけか？

情けないぞ、アキトさん、ジュン、ガイ。

「それはコウキさんも同じですよ」

「やっぱり?」

「はい」

「正しく、仰る通りです」

情けないぞ、俺。

その後、基地の方に協力してもらい、実機によるテストを行う事が出来た。

単純に出して、それに射撃してもらおうという簡単なものだけど、それで充分。

ある程度の稼働データは得られた。

後はこれを基準に調整していけば良い。

そもそもウリバタケさんの言ったように殆ど完成に近いし。

多分、調整もほんの少しで済むだろう。

これなら、すぐにでも戦力として配備できるな、うん。

ま、後でもうちよい詰めるとして、ひとまず今日は終了。

この基地にやってきた本来の目的である教導は明日という事だし。せっかくの空いた時間だ。

この時間を使って・・・木連に赴くとしてもしますかね。

「三度、次来なければ、四度目になるな」

「コウキの定期連絡が・・・ですね」

「ああ・・・やはり彼は死んだのだろうか?」

「あれから更に詳しい事を調べたのですが・・・」

「うむ」

「絶望的でした。なんでも核爆弾の爆発に巻き込まれたとかで」

「核爆弾。忌々しいものだ。いつも我らの障害となる」

「はい」

「だが、あの通信、あれは・・・」

「ユキナの監禁場所と共に送られてきた奴ですな。あれがコウキ生存の証拠になる」

「ああ。あれはマエヤマ殿だ。そうでなければ説明がつかん」

「生きているのか、死んでいるのか、相変わらずあいつは退屈させてくれませんか」

「まったく。生きているのなら、さっさと顔を出せんか」

「大将もコウキを気に入っているようですね。まるで父親のようです」

「不思議とな。娘がいれば、嫁がせていたかもしれん」

「そこまですか。それはあいつも喜ぶでしょう」

「生きていれば・・・な」

「・・・そうですね。でも、生きていると、私は信じます」

「そうか。そうだな。私も信じよう」

「はい」

「・・・ゲンパチロウ」

「ハッ」

「木連と地球の最終決戦も近くなってきたな」

「木連軍人の士気も日々向上しています」

「死ぬなよ。戦後を担うのはお前のような若い連中だ。ツクモやゲンイチロウも同様にな」

「大将・・・」

「再びあいつらと手を取り合う事が出来たら・・・嬉しいものだ、ゲンパチロウ」

「・・・再び手を取り合える。私はそう信じていますので」

「ふつ。余計な事だったな。誰よりもお前が信じているか」

「はい」

「先程から信じるといふ可能性の話ばかり。お前はもっとリアリス
トじゃなかったか？」

「友を信じるのに現実も空想もないでしょう」

「ハツハツハ。違うない」

「それでは大将、そろそろ」

「うむ。ご苦勞であつた。下がつて」

コンコンッ。

「これは・・・奥からか？」

「奥？ 誰か奥にいらしたので？」

「いや、いない筈だが・・・」

「まさか・・・」

「・・・うむ。私が行こう」

「いえ。私が・・・」

サツサツサツ。

「・・・(コクンッ)」

「(コクンッ)どうぞ」

「失礼し」

「ハア！」

シュッ！

カスッ！

「うわつと！ な、何なんだ？ 一体」

「ふっ。無事だったようだな、コウキ」

「よくぞ死の淵から戻ってきてくれた。嬉しく思うぞ、マエヤマ殿」

「え、えつとお、お久しぶりです。大将、秋山さん」

「ジャンプ」

ナデシコの私室から木連の神楽大将の執務室へ向けてボソソジャンプ。

一応、万が一の為に執務室の奥にある部屋に跳んでおいた。誰かが来てたら、バレちゃうかもしれないし。

「それで・・・だ」

どのタイミングで入ろうか？

出来れば中の状況を確認したいんだけど・・・。

「・・・無理だよなあ」

コソツと扉を開けて中を見ようものならあの神楽大将の事だ。木連最強の武人の気配察知で見付かってしまうだろう。

あれ？ 見付かつちやまずいんだっけ。

と、とにかく慎重にいかないとな、うん。

「とりあえず扉に耳を当てて・・・」

大将以外に誰かがいれば会話をしている筈。

それをどうにかして盗み聞こう。

他の部屋からなら無理かもしれないけど、ここは神楽大将の私室。

流石にこつちに対しては防音はしてないだろう。
逆に、聞こえなければ、誰もいないという事だ。
まあ、神楽大将自体がいないという事も考えられるけど。

「お前はもつとりアリストじゃなかったか？」

「友を信じるのに現実も空想もないでしょう」

「ハツハツハ。違うない」

この声は・・・秋山さん？

それなら、このまま出ても問題ないだろうな。

・・・それにしても、さっきの台詞。

まったくもって秋山さんらしいな。

「それでは大将、そろそろ」

「うむ。ご苦労であった」

おっと、やばい、早くしないと帰っちゃうぞ。

秋山さんにも会っておきたいし。

ええい！ 今行くしかない！

「下がって

」

コンコンッ。

間に合った・・・か。

「・・・」

「・・・」

なんか静かになったんですけど・・・。

・・・というか、これってかなり怪しいよな？

知らぬ間に奥の私室にいられたとか、俺だったら警戒する。

これは・・・やっちゃまったか？

いきなり銃で撃たれたりはしないだろうけど・・・。

「どうぞ」

お、普通に通してくれた。

俺って分かってくれたのかな？

「失礼し」

「ハア！」

シュツ！

扉を開けた瞬間、迫り来る何か。

これは・・・足か？

・・・っておい！ 落ち着いて見ている場合じゃないだろ！？

「うわっと！」

スカッ！

ど、どういう事？

「な、何なんだ？ 一体」

慌てて前方を確認する。

そこには不敵な笑みをしている秋山さんと暖かい笑みを浮かべた神楽大将がいる。

えつと・・・どういう状況だろう？

「ふつ。無事だったようだな、コウキ」

いや、蹴りを喰らわせようとしておいて、無事も何もありませんよ。

「よくぞ死の淵から戻ってきてくれた。嬉しく思うぞ、マエヤマ殿」

あ、はい。ありがとうございます。

とりあえず・・・。

「え、えつとお、お久しぶりです。大将、秋山さん」

なんか変な挨拶になっちゃったな。

「ふむ。正しく久しぶりだ」

「今まで何をしていたんだ？ まったく・・・定期的に訪れる筈だろう？」

「いやあ、色々ありました・・・」

コロニー落とし以降は裏で画策してたからなあ・・・。

死人扱いじゃなければこっちにも来れたんだけど、流石に死人が表に出るのはまずい。

地球であろうと木連であろうとね。言い訳もできなくなるし。

「地球では死亡扱いだったそうだな？ それが原因か？」

「耳が早いですね。・・・ん？」

早くはないか。

もう何週間も前の事だし。

「死亡扱いの者がこうして目の前にいる。どういつ事情があったらこうなるんだ？」

「ボソソジャンプです」

「ボソソジャンプ・・・時空間跳躍が原因なのか？」

「はい。簡単にですが、説明します。」

あ、ちなみに、死亡扱いはなくなり、きちんと生存者扱いになつてますから」

.....

「なるほど。そのような事があつたとは」

宣言通り、簡単に事情を説明した。

コロニー落とし事件の事。

その結末と真実。

そして、ボソソジャンプで時間を超えた事。

「確かに、そのような事態になればここに来る事も無理だろうな」

「すいません。連絡が出来れば良かったんですが」

「いや、不可能な事を要求するつもりはない。とにかく、無事で良かった」

「はい」

「本当だぞ。心配したんだからな」

「すいません。俺もこうなるとは思ってなくて・・・」

「まあ、無事なら構わんさ」

「ありがとうございます」

どうやら木連の方々にも心配をかけてしまったようだな。

反省。

「ふう……」

深呼吸を一つ。

さて……本題に移るとしよう。

気は進まないけど、仕方がない。

「神楽大将」

「うむ」

「秋山さん」

「ああ」

「今日は伝えなければならぬ事があり、こうしてやってきました」

「……どうやら気軽に聞けるような話ではないようだな」

「はい」

とてもじゃありませんが、気軽には話せません。

なんといっても和平か抗戦かの瀬戸際ですから。

「現在、地球では民達による方針の決定を行っています」

「民達による？」

「はい。政府、軍の垣根を除外し、一人の人間として……」

「誰もが平等に決定権を与えられるという事か……」

「木連ではとてもじゃないが実行できる方法ではないな」

「地球では軍と政府を完全に分離させる事を国家の体制としていますから」

「木連では政府など形だけ。結局、軍部の人間が権力を握っている」

「その中でも影響が大きいのが……」

「草壁中将という訳だ」

なるほど。道理で草壁の独断専行が目立つ訳だ。

軍の決定がそのまま政府の決定となる政治では、民の意見など度外視。

事情を知らされぬまま、あれよ、あれよという間に状況が動いていく。

まあ、プラントに依存する木連の男性は殆ど軍人らしいし。

これといった問題はないのかもしれないな。

結局、木連男子にとってみれば政治のトップより、軍のトップが国のトップなんだろう。

「その方針とは二択です」

「和平か徹底抗戦か」

「その決定に軍は、いや、コウキ達は従うと言うのだな」

「・・・はい」

先に言われてしまったか。

まあ、検討はつくよな、話の流れからして。

「ふむ。最終的には民の意思か」

「軍とは民の奴隷である。政治家もまた民の奴隷である・・・でしたか？」

「うむ。その理念こそがトップの人間の理想である。だが・・・」

「良くも悪くも人とは欲深い生き物です」

「違うない」

・・・あれ？ 怒ってない？

「あの・・・何か思う所はないんですか？ 極端に言えば裏切りですよ？」

和平の為にと協力し合うと約束したんだ。

それを一方的に手を結ばない事になるかもと告げているんだぞ？
俺だったら激昂しているだろうし、納得できない。

「ない・・・とは言い切れんが・・・」

「ここで君に当たってもどうしようもあるまい。」

「そもそも、君自身も納得できていないようだしな」

な、なんて大人なんだ、二人とも。

怒られる覚悟で来たのに・・・出来た人達だな。

「だが、ミスマル司令の考えにも賛同できる部分はある」

「我々は民の矛であり、盾なのだよ、コウキ」

「分かります。それが軍人としてあるべき形だと」

「ああ。だからこそ、民の願いを何よりも優先して叶える義務がある」

「その民が徹底抗戦を選んだのであれば、それに尽力するのが軍人の務めだ」

それは分かります。

分けるけど・・・。

「納得できないものはできませんよ」

「ハハツ。若いな。だが、それが羨ましくもある」

「大将はまだまだ若いですよ」

「もう身体も衰えてきている。そろそろ世代交代したいのだからな？」

そう言いつつ、秋山さんを見詰める神楽大将。

本当に秋山さんに、いや、秋山さんだけじゃない、きっと三羽鳥の三人に期待しているんだ。

あの視線は秋山さんだけではなく、その先の誰かも見ていた。

「大将にはまだまだ我らを引っ張ってもらわねば」

「いつになったら趣味に没頭できる事やら」

ふう〜と溜息。

ちなみに、大将の趣味って何だ？

盆栽とかか？

「趣味とは？」

「鍛錬だ。まだまだ私は木連式武術を極めていないからな」

・・・流石は木連一の武人。

やる事が常人とかけ離れている。

「ふむ。マエヤマ殿の報告は以上かな？」

「あ、はい」

なんか拍子抜け。

一発殴られるのを覚悟していたぐらいなのに。

「和平か抗戦か。結論が出るまでは今までと同じように情報を交換するつもりだ」

「ありがとうございます」

本当に感謝。

信頼を裏切ったつてのに。

「早速だが、草壁中将に不穏な動きがある」

「不穏な動き？」

怪しいな。

ボソソジャンプの演算ユニット関連か？

「市民船からかなり遠くにある木星衛星の基地にここ最近よく訪ねていると聞く」

「そこは・・・草壁中将の？」

「うむ。指揮下の基地であり、同時にプラントを所有している特別な基地だ」

「正確に言えば、プラントを中心に草壁中将が自分の基地を建てたと言える」

「なるほど。プラント・・・ですか。そのプラントはどのような用途で？」

「主に機械類の生産。素材や基となるパーツがそこでは生産されている」

兵器として確立される前の素材パーツを生産している場所・・・。

「基地自体に訪ねるのはおかしい事じゃないですよね？」

「無論だ。私もよく訪ねている。」

「だが、一つと決めず、定期的に全てを回っているつもりだ」
「なるほど」

それなのにその基地にばかり赴いていると。

それは確かに怪しい。

「しかし、よく分かりましたね？」

そういうのってかなり警戒していると思うんだけど。

正面上等の木連で北辰みたいな裏部隊が存在してるんだし。

「草壁中将の側近に我らと通じている者がいるのだ」

「え？ それって……」

スパイみたいなもんだよな。

神楽大将とかが嫌いそうな類の。

「若き時代の草壁中将に惚れ込み、幕僚入りしたそうだが……」
「私と同じように危機感を覚えたそうだ。このままではいけないと」

なるほど。

秋山さんも元は草壁中将側の人間。

でも、こうして神楽派の人間としてここにいるのだ。
同じような人間がいても不思議ではない。

「しかし、よく認めましたね、その人。

木連ってそういうのを嫌う節があると思ってたのですが」

「当然、嫌がられたさ。だから、任意にしている」

「任意？」

「そう、これを伝えなければ後々滅亡の一途を辿ると思ったものだけ報告してくれと」

「それって……かなり不安なんですけど」

向こうの事情次第って事だろ？

全て信じて良い事やら。

気付いたら逆に嵌められていたなんて事になるかもしれないぞ？

「本人はまだ草壁中将を捨て切れていないのだ」

「だから、まだこちらではなく、草壁中将の下へ？」

「草壁中将が木連男子の憧れであった事は紛れもない事実だからな。

木連を変えてくれる、地球を見返してくれるのはこの男しかない
と思ったものだ」

「・・・それ程の人物が・・・敵か」

木連人の憧れ。

そんな人に敵対しなくちゃいけないなんて。

・・・複雑だ。

「おっと、コウキ、勘違いしちゃいけないな」

「え？」

「決戦においては神楽派も敵だぞ？」

・・・そう・・・だよな。

戦場で草壁派と神楽派を見分けて攻撃方法を変える事なんて不可能。
一度戦場に立てば、草壁派も神楽派も同じ木連、討つべき敵になっ
てしまうんだ。

俺は・・・神楽派の人間を殺す事になるかもしれないのか・・・。

「戦場に立つたのなら、何の遠慮もいらぬ」

「遠慮こそが侮辱と知れ。全身全霊の力で拳を交えてこそ心は伝わ
る」

「悔いなく争おうじゃないか、コウキ」

いつの時代の人間ですか？ 二人とも。

考え方が、なんとというか武士？ というか、格闘家？

うーん、よく分からないけど、なんか凄い。

武人っていうのはこういう考え方が一般的なのだろうか？

まあ、自身も同じように考えた事はあるんだけど。

でも、それじゃあ終わりが見えないよな？

根性、根性、根性とかいって何度でも立ち上がりそうだ。

「・・・凄い精神論だな、それ」

でも、その精神は尊いものだ。

諦める事なく、立ち上がり続ければ、いつか勝てる時がやってくるかもしれない。

しかし、そのような状況は中々終わりをみせないものだ。

俺達は争いを終わらせる為に活動している。

そして、その終わり方は勝利でもなく、敗北でもなく、停戦という形が望ましい。

ケイゴさんの呼び掛けで争いをやめ、

両者の力を合わせて草壁に立ち向かわせる事こそが最善だ。

その為には、ケイゴさんの登場にインパクトを与える必要がある。

その役目をこなすのが・・・カグラツキ。

そういえば、製造状況はどうなっているんだろうか？

「神楽大将」

「何だね？」

「カグラツキの方はどうなっていますか？」

「残念ながら、カグラツキは決戦開始までに間に合いそうにない」

間に合わない？

それじゃあケイゴさんの作戦も前提からして崩れてしまう。

「だが、決戦中に必ず間に合わせてみせよう」

決戦開始時では無理でも、決戦中の時間を使えば間に合うという事か。

本当に急ピッチで製造しているんだな。

「では、カグラヅキ登場まで戦い続ける。それが作戦の前提条件なのですね」

「そうなるな。その間に我々は真剣に争い、想いを伝え合えば良い」
何日掛かるか分からない。

そんな先の見えないマラソンをやり続けなくてはならないのか。
しかも、勝利するでもなく、敗北するでもない絶妙な戦況調整をした上で。

正直、シビアだな。

「詳しい事は言えないが、今、木連はかなりの戦力を揃えている。

それに対して、地球では先の内乱で多くの犠牲を出したそうだな」

「・・・はい」

「死に物狂いで混乱を収め、戦力の早急な立て直しを行わねば、簡単に敗北してしまうぞ」

「分かっています」

分かっているが、俺にはどうする事も出来ない。

ミスマル司令とて戦力の立て直しが必要な事は理解しているだろう。
既に動き出している筈だ。

それに対して、急いでくれと要求した所で何の意味ももたない。

「ふむ。木連側の連絡はこのぐらいだな」

「はい。地球の状況についても理解しましたし」

「では、本題に移ろう」

え？ 本題？

地球の状況を話して、木連の状況を話して。

更には、草壁の不穏な動きやカグラヅキについても話したんだぞ？
それを差し置いて本題って・・・どれくらい重大な話なんだよ。

「マエヤマ殿」

「コウキ」

「は、はい（ゴクリッ）」

つ、唾を飲み込んでしまった。

何だ？ この緊張感は。

「ユキナの居場所が分かった」

「え？ ユキナちゃんのこと？」

おし。どうやらうまく届いたようだな。

張り込みなんて人生初だったけど、成功してよかった。

「後はどのタイミングで仕掛けるかだが・・・」

「コウキ、お前はとうすれればいいと思う？」

「・・・そうですね」

ユキナ嬢が拘束されているのは今いる市民船のとある基地。

当然、草壁中将の管轄の基地な訳だが・・・。

「決戦中の隙を狙うのがよろしいかと」

「なるほど。その時こそが敵の警戒も薄くなると」

「はい」

逆にそんな時だからこそ警戒が強まる可能性もあるが・・・。

それ以外にチャンスはないだろう。

今すぐには警戒が強過ぎて侵入できそうにない。

「それに、ユキナちゃんの救出がケイゴさんによる呼び掛けの前提

条件ですから」

ユキナちゃんが捕らえられたままではツクモさんの動きが制限されてしまう。

作戦上、ケイゴさんの呼び掛けに最も早くツクモさんが反応してくれるのが理想的。

木連軍人の中でも一目置かれている彼が動き出せば後も続くだろう。もしかしたら、ツクモさんが動いた事でツキオミさんも味方になってくれるかもしれないし。

それに、ユキナ嬢を拘束していたという事実が草壁派のピンチに拍車をかける筈だ。

ケイゴさんの呼び掛け、草壁派への追求。

作戦の成功率を上げる為にもユキナ嬢救出は必須となる。

「それでは、決戦中に別働隊を作るべきだな」

「その役目、この私に」

「・・・秋山」

「親友の妹、いえ、私にとっても妹のような存在です。

出来る事ならば、この手で救い出し、親友の下へと連れて行ってあげたい」

「・・・相分かった。頼むぞ」

「ハッ」

・・・秋山さんが救出部隊か。

これなら安心して任せられるな。

「コウキ。お前にも手伝ってもらいたい」

「へ？」

俺？ 何で？

「お前とて悔いがあるだろう。護りきれなかったと」
「それは・・・もちろんです」

ツクモさんに護りきると言い切ったのに・・・。
その信頼を裏切ってしまった。
その事は後悔してもし足りない。

「お前も戦場で役目を与えられるだろう。」

だが、事情を話せばミスマル司令も分かってくれるのではないか
？」

「恐らく、協力するよう言われるでしょう」

「それならば」

「ですが、市民船内に地球の兵器が侵入してきて、民は平気でいら
れるでしょうか？」

絶対に安全であったとされる市民船内。

そこにいきなり地球のだと思われる兵器が侵入してきたらどうなる
か？

間違いなく場は混乱し、パニックになる。

「それに、基地としても敵側の機体が来たら警戒を強めるでしょう
し」

少なくとも木連の機体であれば、最初は味方だと思って油断してく
れる。

その隙を突くのが最も効果的だと思うのだが・・・。

「ふふつ。コウキ」

「あ、はい。何でしょう？」

そのしてやったりな笑みは。

「どうして市民船の中だと知っているんだ？」

「あ？ えくと……」

や、やっちまった。

まさか……誘導尋問!?

ど、どうにかして誤魔化さないと。

「灯台下暗しっていうじゃないですか」

「ああ。言うな」

「だから、頭の回る人間なら、あえて近場にやっておくのではないかと」

「その理屈は分かる。だが、予想にはあまりにも確信めいていたぞ？」

「い、いや、勘が冴えてたのか、そう確信していたんですよ」

あれ？　なんか日本語として成立してないか？

「ほお。勘、ねえ」

「は、はい。こう頭にピカッと来るものがあってですね」
「なるほど。ピカッとね」

……どうしよう。

余裕の表情で見詰めてきやがる。

「秋山。その辺りにしておけ」

「ハッ。冗談だ。許せ、コウキ」

「ア、アハハ……。はい」

ほっ。

ありがとうございます、大将。
追及の手を止めてくれて。

「だが、これで一つ疑問は解けたな」

「はい」

な、なんでしょうか？ その疑問とやらは。

「任せておけ、コウキ。場所さえ掴めれば救出も不可能ではない」

「あ、はい、お願いします。秋山さん」

出来る事なら協力したいけど……。

やっぱりここは任せておいた方が良いでしょう。

秋山さんなら難なくこなしてくれる筈。

「それでは、もし救出よりも先にカグラヅキが完成しても、

ユキナちゃんが救出されるまでは出撃はしないという事でよろしいですか？」

「うむ。そうだな。その方が良いでしょう」

「責任重大だな……」

「頼みますよ、秋山さん」

「そう何度も言うな。お前は何の心配もせず、朗報を待てる」
「はい」

やはり心強いな。

ツクモさんもそうだったけど、何故か妙に説得力がある。

彼もまた木連の将来を背負う三羽鳥の一人という事か。

……ツキオミさんもいずれはきつと……。

「ふむ。ある程度の情報交換は出来たかな？」
「はい」

話せる事は全て話した。
今後の事も大体話したし。

「今後、より頻繁に訪れ、情報交換に務めたいと思うのですが」
「それはこちらにとっても好都合だ。ふむ。奥の部屋を使うが良い」
「奥の部屋？」

今日、今さっき跳んで来た場所の事だよな？

「自由に扱って良いぞ。好きな時にこちらへ来るが良い」
「えっと・・・」

そこまで信頼されると嬉しいけど、逆に恐縮っていうか・・・。

「一応敵なので、注意を払った方が良いと思いますが？」
地球が徹底抗戦で纏まったら、情報交換ではなく、暗殺に来るか
もしれませんし」

「なに。その時はその時。返り討ちにしてやるっ」
「あ、そうでした」

むしろ、こっちが殺されるか。

「今日の所は帰ります。またすぐにでも」
「うむ。了解した。ご苦労だったな」
「いえ」

俺にとっても有意義だったの。

「コウキ。帰る前に一つ教えてくれ」

「はい。何でしよう？」

「ナデシコは今、何をしているんだ？」

ナデシコは今……。

「教導という名の地獄の特訓ですよ」

第一百十二話（後書き）

教導。

教えて導くと書きますが、それをナデシコパイロットに求めるのは酷。

精鋭部隊という事は教導部隊自体も含まれている訳で。

彼らに出来る事は単純に勝利し続ける事ではないでしょうか。

無論、以前までの戦闘データから対策を講じるというのもありますけどね。

ここでキクザクラを登場させ、教導の際に部隊を分けるか悩みました。

でも、色々な都合でこういう事に。

補給や基地の関係で宇宙に出るのはもう少し先ですが、

コウキ君の言った通り出来るなら宇宙で訓練したいんだろうなあ。

地上と宇宙じゃ操縦の方法もだいぶ変わるでしょうし。

長々と失礼しました。

それでは、次回、再びお会いしましょう。

ではまた。

第一百十三話（前書き）

投稿いたします。

どうも最近感想があまり頂けない。

もちろん、頂いてはいるのですが、数が少なくて・・・。

（感想を送ってくださる方には感謝の想いでいっぱいです）

感想こそが僕の活力の源。

是非とも皆様、私に元気を与えて頂きたい。

第一百十三話

「皆さん、おはようございます。

早速ですが、今日の教導の連絡をしたいと思います」

木連から帰還した次の日、さっそくナデシコに与えられた任務である教導が始まった。

最終決戦まで僅かな時間しかない事から、各方面軍の最も規模の大きい基地に、

その方面軍から抜粋された精鋭部隊を集め、一日でその全ての部隊を鍛えるらしい。

本来であれば、決戦における全戦力が宇宙にあがってからの教導が望ましいのだが・・・。

未だに決戦の地が明確に示されていない点。

教導後の補給や軍内部の混乱が収まっていない点。

以上の二点から大規模な移動が出来ないでいる。

地球近海であるという事は既に全軍に通達済み。

始めに提案してきたのが木連である事から、この情報に間違いはないだろう。

木連の戦略からしてみても、地球付近であった方が都合が良い。

また、地球の戦略からしてみても、地球付近の方が都合良かったりする。

結局、物資が尽きた際には地球から輸送する必要がある訳で。

その際、地球に遠い場所が戦場では時間が掛かりすぎてしまう。

木連が即座に補給できる環境である以上、補給は出来るだけ早く出来た方が良いという事だ。

だが、逆に近過ぎてても、強襲による占拠の恐怖があるという事で否定的。

遠からず、近からずが地球にとって都合が良い位置という事になった。

以上の事より、地球、木連、その両方の戦略に則って決戦地は決定されたと言えよう。

まあ、奇襲を警戒するのであれば、どこが決戦の場でも変わりはないと思うけどね。

「ナデシコ側の搭乗機は a d - R R 及び a d - S R です」

アドニスリアル仕様とアドニススーパー仕様か。

ナデシコではイツキさんがリアル仕様を、

ガイがスーパー仕様を普段使っているイメージ。

軍内部では部隊におけるエースが乗る為の高性能機体という扱いだったな。

リアル仕様とスーパー仕様は他のワンオフアドニスと違い、高機動戦フレームに追加装甲を装着した形で構成されている。

その為、生産性に優れ、追加装甲の有無のみなので、部隊に配給しやすいのだろう。

部隊に一定数のエステバリスを配給して、

エースの数だけ追加装甲を更に配給すればいいのだから。

無論、追加装甲単体ではエステバリス一体分より安価で済む。

エース専用の機体を新たに作るより効率が良いという訳だ。

そして、今日争う相手はそのエースが集められた精鋭部隊。

当然……。

「また、此度戦う相手の殆どどちらかの機体に搭乗しています」

「なるほど。誰もがエースであるという事か」

「そういう事」

エース機の方が多いという事。

「モニタを見てください。ルリちゃん」

「はい。映します」

ユリカ嬢の指示に従い、ルリ嬢がモニタに何かを映し出す。

「壮観だなあ〜」

「うわあ。凄い数」

「この全部がエースってか？ へっ。腕が鳴るぜ」

正に壮観という言葉が相応しい。

こんなに軍人つっていたんだな。

そう思わず呟きたくなるぐらいの数がモニタに映し出されていた。

しかもその殆どがエース。

凄まじいな、おい。

「ここはアジア方面軍の本拠地ですから。

ユーラシア大陸の中でヨーロッパと極東方面軍を除く全ての国が参加しています」

なるほど。それにしても・・・やっぱり莫大な数だ。

どうやって方面軍を分けているかは知らないけど、

少なくともこのぐらいの規模があると幾つかはあるという事。

恐らく、木連もそれぐらいはある訳で・・・。

正に総力戦だな。

「極東方面軍と亜細亞方面軍は同じ改革和平派という事で親しくしており、

今回の演習を有意義なものにしたいと積極的に皆さん参加してくれています」

同じアジア人だしな。

仲が良くても不思議ではない。

まあ、それでも色々な人種がいるんだけどね。

俺自身、特に人種に対する拘りはないけど、

黒人とか白人とか黄色人とか、地球上には人種に対する差別で溢れている。

それはプライドやら過去の確執やらと複雑な事情がある訳で……。ひとえに否定できない面も確かに存在するとは思う。

思うが、それでもやはり、人を受け入れようという姿勢は大事だと思う。

差別は良くない。そう断言できるし。

しかし、まあ、人種は違えど同じ地球人類である事に違いはない。

異星人よりは溝が少ない・・・筈である。

そんな異星人と手を取り合おうというのだ。

困難なのは当たり前だよな。

まあ、困難だからこそ、やりがいがあるんだけど。

「その言い方だと、消極的な連中もいるようだな」

「うん。そうなんだよ、アキト」

「徹底抗戦派の色が強い北米支部を始めとした北米方面軍、

自身の技量に絶対の自信がある欧州方面軍とかがそれにあたるね」

次回予定の西欧支部、要するに欧州方面軍は消極的な訳か。

その自信を崩し、向上心を持たせるのが俺達の役目って事だな。

北米方面軍には一度本気でぶつかりたいと思っていた。

木連の前に彼らの本心を確認する必要がある。

ぶつかりあえば、きつと相手の心の奥深くに触れられる筈。

少なくとも何もしないよりはずっとマシだ。

「今回の目的は艦隊同士の接近に対してどのように対処するかを検証。」

「今日一日を用いて、各部隊とシミュレーションをしていこうと思います。」

艦隊同士が接近したら・・・か。

ありえる状況だよな。

重力波にエネルギー依存している以上、戦艦も前に出なければならぬ。

エステバリス、アドニスが部隊のメインである彼らには最適の演習だろう。

「なお、今回から演習にはシミュレーターではなく、

擬似弾でのコンピュータ判断による実機演習となります。」

擬似弾で実機か。

まあ、これだけの人数だ。

全てを賄えるだけのシミュレーターはないだろう。
情報処理的な意味で。

「そろそろですね。パイロットの皆さん、準備をお願いします。」
「「」

想定は艦隊戦。

敵戦艦を前にした時、大きく分けると二つに作戦は分類される。
一つは敵機の一つ一つを確実に排除した上で戦艦を落とす方法。

もう一つは全てを無視して、戦艦のみに狙いを定め、即座に破壊する方法。

どちらも一長一短であり、状況によって臨機応変にいく必要がある。その過程を含めて、戦術はいくらでもある訳だが・・・果たして艦長は何を選ぶ？

『皆さん聞こえていますか？』

「聞こえています」

艦長からの通信。

教導をする前に何か言う事があるみたいだ。

『これは教導という形になっていますが、同時に我々にとっても訓練となります』

それはそうだ。

軍の精鋭部隊と戦う機会なんて中々ない。

『教導とは教えて導くと書きますが、我々には教導の経験がありません。』

あっても新人の教育などであり、本当の意味での教導とは雲泥の差があります』

仰る通りだ。

基礎がない者に基礎を教えるのと基礎がある者に応用を教えるのでは全然違う。

むしろ、実際にはもっと差がある筈だ。

『そんな私達がこの教導、いえ、共同演習で出来る事は唯一つ。』

とにもかくにも、何があっても、持てる力の全てを發揮し、勝つ

事です。

それが彼らにとっても、私達にとってもプラスに働き、結果として教導に繋がると思っています』

またもや仰る通り。

この場には正式な教導部隊だっている筈だ。

教導部隊とは他の部隊を鍛える事が前提として集められている部隊。教える側は優秀でなければならず、優秀者ばかりが集まっていると言えよう。

教導部隊に所属するという事はそのままエースでエリートである事を示している。

そのような人間に何を教えれば良いと言うのだ。

そんなの餅屋に餅を焼くようなものではないだろうか？

餅屋である事が誇りのような奴らに餅の焼き方の云々を語った所で意味はない。

意味を持たせるにはただ餅を焼けば良い。

いや、違うな、ただ勝てば良い。

上には上がいるんだと現実を教えてやれば良い。

それがプライドを刺激し、競争心、向上心を湧かせる事に繋がる。

俺達の出来る教導とはそのようなものだろう。

方法、知識を教えるのではなく、理屈じゃない強さってのを教えてやるうじやないか。

『それでは、教導を開始します。各機発進。ナデシコは後方で待機』

ユリカ嬢の合図で教導が始まる。

ナデシコ対アジア方面軍精鋭部隊の戦いが始まったのだ。

『部隊散開。小隊を組んで小隊単位で動いてください。』

右翼、リョーコさん、ヒカルちゃん、イズミさん、お願いします」

『おっ』

『分かったよ』

『任せなさい』

右翼は元祖パイロット三人娘。

彼女達の組み合わせ以上に連携が巧みな組み合わせはないだろう。

流星は気の知れた友人トリオ。

『左翼、ガイさん、イツキさん、カエデちゃん、お願いします』

『任せとけ！』

『了解』

『行くわよっ』

左翼はバランスの良い三人組。

今回、ガイはバランスを取る為にスーパー仕様ではなく、リアル仕様で出撃している。

次の戦闘ではスーパー仕様で出撃し、新しい小隊で戦うとかなんとか。

そのガイは接近戦を得意とし、イツキさんはバランスを保つ為に程よい位置に。

そして、カエデが後方から射撃で援護及び攻撃を行う。

近、中、遠とバランス良く配置できている訳だ。

もちろん、能力的にもバランスが良い。

『最後に中央、アキト、マエヤマさん、お願いします』

『了解した』

「了解」

中央は対複数を得意とするコンビ。

アキトさんはスピードを活かした攪乱戦が持ち味。

それなら、俺がするべき事は……。

「援護します。アキトさん」

『ああ。後ろからか？』

「いえ。隣で」

せつかくのコンビだ。

これを機にアキトさんの高機動戦闘を習得してやろうじゃないか。

『ふつ。よく言った。付いて来い！』

「はい！」

右翼、左翼が三人に比べ、中央は二人と戦力が少ない。

だが、高スピードで移動し続ける事が出来れば、何倍もの働きが出る。

もちろん、その分、負担は大きいだけけど。

『ハアアアツ！』

ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！

「クッ！」

ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！

……やっぱり速い。

でも……。

「諦めてたまるか！」

ブランク持ちの人間に負けるようでは駄目だろ。
援護と言っても、アキトさん以上に成果を残さねば。

『やるな！ コウキ』

「アキトさんこそ。とてもブランクがあるとは思えませんよ」

『やはり俺には戦場が似合う。書類整理ばかりでは鬱憤が溜まっていけない』

・・・それはそれで、なんか情けないぞ、アキトさん。

代表なんだから、書類仕事はサボっちゃ駄目だよ？

周りが優秀でも、トップは貴方なんだから。

バンツ！ シュツ！ スカツ！

『狙いが甘い！』

こちらもちらもちリアル仕様。

勝負を分けるのはパイロットとしての技量という事になる。

「俺の持ち味は・・・」

パイロットにはそれぞれ何かしらの持ち味がある。

ガイヤスバル嬢は接近戦。

ヒカルは順応性。

イツキさんは万能性。

イズミさんは射撃の精度。

カエデは思い切りの良さと勘の鋭さ。

アキトさんは高機動戦。

じゃあ、俺には？ 俺にはどんな持ち味がある？

あえて言うなら・・・。

「広い視野と同時処理能力だろ。ロックオン・・・発射！」

ダダダダダダッ！

同時多発発射。

俺の唯一にして絶対の武器。

これがあるから、ナデシコパイロットというバケモノ達と同等に戦える。

「次！」

アキトさんは確かに強いさ。

対個にも対複数にも。

だが、その能力は決して対複数向けではない。

単純に対個を何度も繰り返す能力が秀でているだけだ。

対複数を得意としているが、その本質は対個にある。

だが、俺は違う。

俺の本質は紛れもなく対複数にある。

それは一度に相手が出来た敵の数が多いが故。

対複数で言うならば、ナデシコトップであると自負している。

敵の守りが堅ければアキトさんだが、薄ければ多分俺の方が撃破数が多いだろう。

一対一を何度も繰り返す分、アキトさんの方が負担も大きいし。

恐らく、決戦ではアキトさんの撃破スコアには敵わないだろう。

敵は大半が人型兵器、アキトさんの方が相性が良い。

だが、雑魚の掃討なら任せて欲しい。

必ず期待に応えてみせよう。

『流石だな、コウキ』

「まだまだです。まだアキトさんのスピードに追い付いていません」

『無論だ。そう簡単に追い付かれては立つ瀬がないからな』

「なんで失神しないんですか？ 何かコツでも？」

『慣れた』

「さいですか」

慣れで済ませてしまうのは凄い事だと思います。

人間って凄いんですね・・・。

『だが、流石は精鋭といった所か』

「簡単に仕留めさせてくれませんか」

直撃すれば終わるであろう攻撃も的確に回避し、当たっても致命傷は避けている。

CP判断故にある程度の損傷を与えれば離脱してくれるが・・・。

「この分ならばとく戦闘参加してくれそうですね」

「ああ。数が減らないというのは良い事だ。

敵機を多数撃破してもこちらの被害が大きければ何の意味もない」

「そういう意味では心強いですね」

撃破数を稼いでもらうより長く戦場にいってくれた方が助かる。

「戦場で生き残るコツは勝つ事ではなく、負けない事だ。

一人の穴が結果として皆の敗北に繋がってしまう事もある」

どれだけダメージを被うとも致命傷を避けていれば人より長く生存できる。

たとえそれまでノーダメージだったとしても致命傷を受けてしまえば即終了だ。

回避、防御にも色々な方法があるんだろうな。
生き残りたいのであれば、決して無理せず、仲間内と連携しておいた方が良い。

「最も人を生き残らせるのは執念だな。

精神論を唱える訳ではないが、諦めたらそこで終了だ」

「もちろんです」

諦めなければ助かったかもしれないのに。

そんな状況はいくらでもある。

だから、どんな状況でも諦めず、足掻いた方が良い。

「執念が人を生き残らせる……か。果たしてそれは良い事なのだろうか……」

「アキトさん？」

「なんでもない。さあ次だ」

「はい」

その後もコウキさんの高速戦闘を真似しつつ、戦闘を繰り返していた。

艦隊戦を想定しているという事もあり、今回は敵機の一機一機に対応。

ナデシコは単体で艦隊扱いなので、戦力差からギリギリの勝利となつた。

明らかに少数であるのならば、他は無視して強引にでも戦艦を狙った方が良いのかも。

でも、そうすると防御が薄くなるし……やっぱり難しいな。

さて、次の想定戦はどう戦う？

午前中の演習を終え、休憩を挟んだ後、午後の演習となった。午前中にも幾数回の演習をこなし、実は結構疲れている。だが、戦場に立てば何時間も連続で戦うという事が常。こんなんでバテてじゃ駄目だよな。

『木連の多くは無人兵器と有人兵器の組み合わせで構成されています』

最近の木連の主戦力は有人兵器。だが、無人兵器も援護として配備されており、その技術は日々進化している。高性能だからといって有人兵器ばかり構っているのは足を掬われ兼ねないだろう。

『此度の想定戦ではその事も考慮し、互いに無人兵器を出そうという事になっています』

ナデシコの無人兵器……。なるほど。フェザンツを出すという事か。アドニス援護用無人兵器、フェザンツ。球状の形にレールカノンを装備というシンプルな機体だが、スピード、火力、耐久性の面ではバツタに決して劣っていない。でも、互いについて、相手はどうするんだ？

『ナデシコはフェザンツだろうが、向こうはどうなんだ？』

ナイス質問、アキトさん。

『連合軍側は裏取引されていたバツタを回収し、改修したものを使
うそうです』

そうか。その方法があつたんだ。

最高司令官とその一派が裏取引していたバツタ。

既にその持ち主は消え去り、その使用权は連合軍に移った。

戦力を少しでも必要とする以上、バツタも使ってしまった方が良い。
ただ敵から裏取引といえども、送られてきた兵器。

何があるか分かったものじゃない。

警戒は必要だろうな。

ソフトに不備がなくともブラックボックス的なものがあるかもしれ
ないし。

『同時にニバリスの確認もしておきましょう』

重力波アンテナ中継装置、ニバリス。

これの存在により重力波に依存している機体の活動距離を伸ばす事
が出来る。

エステバリス、アドニスを戦力としている部隊にとっては必須の装
置だ。

『ニバリスは大量に生産され、多くの部隊に配備されています。』

今回の演習では互いにニバリスをどう護つていくかが重要になる
かと』

活動距離を広げる為の装置。

その事がバレていけば、執拗に狙ってくる事は必至。

それに対してどのような対策を打つか。

一つ一つを護つていては活動範囲を広げた意味がなくなる。

単体でもDFなど耐久力はあるが・・・頑丈という程でもない。確かに一度確認しておくべき事項だな。

『フェザンツ及びニバリスの操作はラピスちゃん、お願いするね』
『了解。任せていい』

劇場版にて大量のバッタを制御していたラピス嬢。
無人兵器の扱いはお手の物か。

『ニバリスにより接近してきた戦艦を強襲する事も可能になりました。』

此度はニバリス、ナデシコを如何に護り、敵戦艦を落とすかが演習課題となります』

要するに、敵側も優先的にナデシコを狙ってくるという事。
無論、人型兵器を撃ち落してはいけないというルールもなく・・・。
護る側も攻める側も警戒が必要となる。

広い視野と状況判断力。
それが問われる演習になりそうだ。

『それではさっそく部隊を強襲部隊と護衛部隊の二つに分けたいと思います』

午前の演習では小隊という形で三つ四つの部隊に分けていた。
此度は強襲部隊と護衛部隊の二つ。

バランス良くいくのか、パイロットの特性を配慮するのか。
既に何度も小隊としてナデシコパイロット皆と組んでいる為、連携は取れる筈。

相性よりもトータルでどのような形に特化するかが大事となる。

『まず、強襲部隊は・・・』

強襲部隊。

如何に敵を掻い潜り、敵戦艦に近付くかが課題。

思い切りの良さと勘の良さと勇氣。

そして何より危険な状況からの生還能力が必要となる。

玉碎覚悟なんてナンセンスだ。

『アクト、ガイさん、イツキさん、イズミさん、お願いします』

『了解した』

『任せとけよ。今回はスーパー仕様だしな。暴れてやんぜ』

『了解しました』

『生き残るのだけは得意よ』

切り込み役のアクトさんとガイにバランスを整えるイツキさんと援護のイズミさん。

なるほど。ただ攻めるのを得意とする連中だけではなく、きちんとバランスも取れている。

近距離を苦手とするイズミさんが不安だが、彼女は距離の取り方がうまい。

なんだかんだで生き残るだろう。

なんとくそんな気がする。

『次に護衛部隊ですが・・・』

護衛部隊。

状況次第だろうが、かなりの物量で攻められる筈。

それに対して的確に反応し、隙を作らないようにしなければならぬ。

また、敵のニバリスを破壊したりと応用性が問われる。

ただ迎撃してるだけでは、簡単に突破されるだろうな。

『リョーコさん、ヒカルちゃん、カエデちゃん、マエヤマさん、お願いします』

『俺が守り？ 性に合わねえな』

『まあまあリョーコなら大丈夫だつて』

『攻めてばかりじゃ駄目よ。偶には受けに回らないと』

『何の話をしてるんだ？ カエデは』

なんとモアクの強いメンバーだな。

接近戦を得意とするスバル嬢に意外性と応用性を持つヒカル。

カエデはイズミさんと違って遠距離戦オンリーだろうし。

俺？ 俺は一応万能派を自負。

状況次第で考え行動してみようと思う。

『それぞれリーダーはアキトとマエヤマさんをお願いしたいと思います』

『分かった』

『俺ですか？ 俺よりリョーコさんの方が』

『いや、お前に任せるよ』

え？ マジで？

意外なんですけど。

『あれ？ 珍しいじゃん。リョーコがリーダーにならないなんて』

『リーダーってのは周りを見ている必要があるだろ？』

俺がリーダーとして成り立っていたのはヒカルとイズミのフォロ
ーがあつたからだ』

『あらま』

『今、その二人は揃っていない。ヒカルだけだ。』

しかも、目的が護衛つちゅう俺の苦手とするものだろ？

だったら、俺なんかよりもコウキの方が良いと思っただ。

リーダーシップはないが、よく周りが見えているし、指示も出せる」

評価して頂けるのは嬉しいんですが、一言余計です。

『成長したねえ、リョーゴ。私達のフォローに気が付くなんて』

『いつまでも尻拭いばかりさせてられねえからな』

『うんうん、私は嬉しいよ。リョーゴが大人になってくれて』

『なんか気になる言い方だな』

『気のせい、気のせい』

相変わらず仲が良い二人だ。

完全にヒカルが主導権を握っているが。

『マエヤマさん、リーダーの件、よろしいですか？』

スバル嬢は納得済みのようだし。

うん、やるか。

「了解しました」

リーダーか。

でも、まあ、求められているのは、

リーダーシップではなく、多分、指示係、所謂調整役だと思われる。それなら、若干引いた位置で周りを見ながら指示を出していくかな。

『それでは、早速演習に移りたいと思います。』

今度からはナデシコ側にも指揮下の戦艦を配備し、

同条件における艦隊対艦隊という形で演習を行う予定です。

私はナデシコより提督として艦隊に指示を送ろうと思いますので、私も出しますが、ナデシコの主な指示はジユン君、任せていいかな？』

『もちろん。やる時はやってみせるよ』

なんだかジユン君も随分と男らしくなっている。

負けてられないな、男として。

「おし。やるか」

ある意味体力耐久レース。

でも、高レベルの争いをずっとやってられるのは良い鍛錬となる。

せっかくの演習なんだし、自身の成長に一役買わせないとな。

「ふむ。戦力差でいうと二対三。ナデシコ側の方が数が少ないな」

意図してやったのかは分からないが、ナデシコ側は午前中に教導を行った部隊ばかり。

流石に午前で全ての部隊に行える事はなく、後は午後という事になっていた。

なるほど。午後は一纏めに教導を行ってしまおうという魂胆か。

まあ、時間的に限りがある以上、どこかで妥協しなくちゃならないしな。

「それに、仲間として戦う事も良い訓練になる」

どちらにしる、教導の意味があるという事か。

「さて、そろそろかな」

アドニスモニターに10という数字が現れる。
これが演習開始のカウントダウンという訳だ。

「アザレア。準備は良いか？」

『はい。マイマスター』

アザレアとの再会も感慨深いものがあつたな。

極東方面軍の基地に辿り着いて、ミナトさんとの再会を終えた後、ミナトさんに、貴方が迎えにいつてあげなさい、と言われヒナギクに向かった。

基地の格納庫に収まっていたヒナギク。

そこに搭乗した途端……。

『マスター！ マスターー！』

泣きつかれた。

AIとはとても思えない程に感情が豊かで……。

一応だけど、研究者としてビックリした。

AIだから、なんてそんな事はもう言えないな。

ルリ嬢がオモイカネを大事にしていた理由が改めて実感できた。

可愛い友人みたいなものだ、彼らは。

そんな相棒に心配を掛けてしまったんだ。

反省しないと。

『演習開始です！』

おっと、考え事をしていたら、いつの間にかカウントダウンが終わっていたようだ。集中しないとな。

「リョーコさんは前へ。その後方に位置し、カエデは右を、ヒカルは左を警戒」

『おう！』

『右ね』

『左だね。任せて』

スバル嬢の本質はあくまで攻撃。

スバル嬢には攻撃的な護衛をしてもらおうと思う。

ニバリスの破壊や攻めて来る敵の攪乱などやる事はたくさんある。

ヒカルは任せておいても大丈夫。

臨機応変に対応して、無難にこなしてくれるだろう。

カエデは接近さえされなければ大丈夫。

その辺りのフォローが俺の仕事だな。

「アザレア。他部隊の状況はどうだ？」

『膠着しています。互いにまだ撃破された戦艦はありません』

「状況が変わったら教えてくれ」

『了解。マイマスター』

一つが崩れると連鎖的に崩れやすいのが艦隊戦だ。

すぐさま対応できるよう、状況の把握は欠かせない。

多分、ナデシコも同じように情報収集に努めているだろう。

『コウキ』

ん？

「ラピスちゃんか。どうかした？」

『フェザンツはどうやって展開すれば良い？』

「え？ それはジュンの指示に従った方が良いんじゃないの？」

『その副長からの命令。コウキに従えって』

護衛部隊と連携して動くようにという指示か。

確かにそちらの方が俺としても分かりやすく済む。

「それなら、ニバリスの周りに数機ずつ配置して。

残りはナデシコを包囲するように等間隔で置いて欲しい」

『了解した。後で大丈夫か聞く』

「了解」

ニバリスの守りは必須。

アドニス一機をそのまま使うのは勿体無いからフェザンツで対応してもらおう。

もう一つの方の指示は敵方の戦力を簡易的にだが、判断する為。

等間隔で配置した事で破壊されたフェザンツから敵の位置を把握できる。

突破が早ければ、突破力に優れているし、殲滅が早ければ火力に優れている。

位置や戦力が把握できていた方がフォローにも回りやすいという事だ。

『コウキ。これでどう？』

リーダーで位置をチェック。

「アザレア。不備はないか？」

俺としては問題ないと思うが……。

『問題ありません。これでよろしいかと』

おし。アザレアも大丈夫と判断した。

これで何の不安もない。

「ラピスちゃん。大丈夫。これで良いよ」

『了解。どう動けば良い？』

一箇所から攻められたといっても周り全てがフォローにいったら逆に隙を作りかねない。

「攻め込んできたら近くのフェザンツに、三体で対応するようにして。」

他の奴は絶対に持ち場は離れないで、こちらの指示を待つようにして欲しい」

『分かった。指示を待つ』

助かる、ラピス嬢。

「アキトさん達に付いていった方のフェザンツはどう動いてるの？」

『一機に対して護衛として数機付けた。既にいくつか撃破されている』

「そうか。分かった。ありがとう、ラピスちゃん」

『いい。それじゃあ』

プツンッ。

フェザンツか……。

どうやって制御してるんだろうな？

簡単に命令を送っているのか？ 同時に全て制御しているのか？

まあ、どちらにしろ、莫大な数だ。

かなりの負担が掛かっている事は間違いない。

出来るだけ彼女の負担を少なくするようにしないと。

『コウキ！ 前方から来たわよ！』

『今、フェザンツが迎撃してる』

『俺達はどうすれば良い！？』

来たか。

ナデシコ単体であれば、簡単に前に行けとは言えないが、今回は護衛艦も一緒。

さっさと殲滅してすぐに備えるという方法も悪くはない。

「リョーコさんは前へ出て迎撃。出来るようなら後続のニバリスを破壊しちやってください」

『おっしゃ！ 行って来るぜ！』

「ヒカルはその援護。殲滅後はその場に留まって」

『分かった。行ってくるね』

「カエデはその後方から援護しつつ周りの状況確認。敵が来たら、そっちに回って」

『分かったわ』

三人がそれぞれ動き出す。

その間、俺は……。

「戦況の把握に努めよう。ナデシコを落とされた負けだ」

『コウキ！ 手伝つて！ こつちやばい！』

『クソツ。一気に来やがったな』

『アキト君達はまだなの！？ ピンチだつてば！』

戦力差は大きかった。

アキトさん達が順調に戦艦を撃破しているが、それにも限界がある。敵はナデシコ艦隊を後回しにして、周りの艦隊をある程度殲滅。

その後、残された戦力の殆どを用いてナデシコ艦隊へと攻め込んできた。

脅威に思っているが故の戦術だろう。

正直、賢い。これならナデシコに対して圧倒的優位な形で攻め込める。

もちろん、味方も応戦しているが、この戦力差ではジリ貧。

俺達は攻勢にでる事なく、守勢のまま耐える事しかできなかった。

勝つ為には……

「待つしかない！ アキトさん達を」

これは決して加勢に来るという意味ではない。

アキトさん達はこちらに戻るといふ選択を取らず、

一刻も早い殲滅という選択を選び、未だに前線にいる。

これは全戦艦の撃沈を敗北とするといふ演習の勝利条件を達成する為。

俺達はアキトさん達が殲滅するまでこの状況を耐え切らなければならぬのだ。

いや、違うな、耐え切れれば、それが勝利なんだ。
ここは踏ん張るしかないだろ！

「カエデ！ 俺が今行く！ リョーコさんとヒカルにはフェザンツを」

『了解』

結局、フェザンツを援護として、それぞれが右、左、前を担当する形に収まった。

様々な方向から攻めてくる相手に対しては自ずとこうなってしまう。そんな中、俺は中央に位置し、全ての方向への援護。

同時に、ニバリスの方にも意識をやり、落とされまいと警戒に当たっている。

視野を広く保ち続け、めまぐるしい状況に対応するのは骨が折れるが……。

勝つ為だ。やるしかない。

「ハアアア！」

ダンッ！ ダンッ！ ダンッ！ ダンッ！ ダンッ！

カエデが争っている区域に飛び込み、全方位射撃。

ロックオン済みなら、後ろに回られようと撃ち抜いてみせる！

『助かったわ、コウ』

ダンッ！

『キャッ！』

「馬鹿！」

油断するな。

いつでも狙ってると思え。

ダンッ！

カエデを狙っている機体を貫く。

「急いで立ち直せ！」

『分かってるわよ！ もうさっきから私ばかり狙って！』

必死に距離を取ろうとするカエデ。

だが、思うように取れずにいる。

あれじゃ駄目だ、いずれ追い付かれる。

「やはり接近されたらおしまいという事が」

どうにかして、接近されても対処できるようにさせないとな。

・・・って、冷静に見てないで助けにいかないよ。

「俺の後ろに回れ」

『ええ。ありがと』

模擬刀を抜く。

接触の衝撃で破壊状況を判断してくれる接近戦用の武器だ。

「どこからでもかかって」

『嘘！？ もう駄目・・・』

「何！？」

後方に引いたのであろうカエデがいる場所を見る。

そこには包囲され、逃げ場がない状況下で全方位から撃ち込まれるカエデの姿があった。

先程の攻撃で受けたダメージで動きが遅れたのが原因だろう。単純に敵が多過ぎたというのもあるが。

『キリシマ機大破。戦線を離脱してください』

『ごめん。コウキ』

「いいさ。これは演習だから」

所詮は演習。お前にとっても訓練の場だ。

肝心なのは本番。本番で失敗しなければそれで良い。今はやられるだけやられておけ。

それが糧になる。

「次、頑張れな」

『・・・ええ』

フラフラと戦線を離脱していくカエデ。

健闘したと俺は思う。

まだパイロットになっただけだ。

ここまでやれるだけでも充分だろう。

さて、問題は・・・。

「この数を相手するのか」

カエデ離脱によるバランスの崩壊。

なんだかんだでカエデの存在は戦況を保つのに大きな役割を担っていた。

そのカエデが離脱。

ギリギリで保てていた戦線が崩壊しかねない。
まあ・・・やるしかないのだけど。

「リョーコさん、ヒカル」

「あん？ 何だ？」

「何かあったの？ コウキ」

「カエデが直撃を喰らって離脱しました。」

「カエデの穴は俺が埋めますが、もう援護は出来ません」

「そうか。分かった」

「後は任せた。そういう事だね」

「はい。一人でも欠けたら突破を許す事になります。頼みましたよ」

「へっ。誰に物を言ってるんだよ」

「任せてよ。これぐらいのピンチ。乗り越えられなくちゃ駄目だっ

て」

心強い言葉をありがとう、二人とも。

さてっと・・・。

「ああまで言ったんだ。俺が離脱なんて事は許されないよな」

いっちょよ、気張るか。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

半端ないな、これ。

地獄の耐久レースっていうのはこういう事を言うのかも知れない。

集中力を欠けば、一瞬で落とされるといふ緊迫の時間がかれこれ時間強。

こんなに人間が集中してられる筈がないだろうが。

ダンッ！ カンッ！

「クッ」

被弾。

でも、どうにか致命傷は避けられた。

しかし、被弾した事によってCPが機体の性能を一部低下させる。

そんな事までリアルにしなくていいのに……。

リアルを求めているからこそだとは分かっているが、それぐらいの愚痴は許して欲しい。

「アザレア。被害状況を」

『右腕部、左脚部に被弾。制御不能です』

本来であれば、パージして少しでも重さを減らすのに。使えないのに装着したままにしないとイケないなんて……。鬱陶しいな、こいつら。

ダンッ！

来たッ！

急いで回避を……。

「クッ。駄目だ。やはり思った通りに動いてくれない」

迫り来る弾丸に対して何も出来ずにいる。

クソッ！ 避けきれないッ！

ガンッ！

「マジか？ メインカメラが潰された？」

モニタの映像が消える。

このままじゃフルボッコだ。

『メインカメラ破損。至急、サブカメラに切り替えます』

「助かる。ありがとう、アザレア」

『いえ。当然の事をしたまでです』

アザレアのお蔭でどうにか視界を確保できた。

だが、やはりサブではメインのようにはいかない。
獲得できる情報も少ないし、何より映像がブレる。

このままじゃ・・・落とされる。

「いや、まだだ」

諦めるな。まだチャンスはある。

諦めてたまるか！

「今こそ高機動戦を仕掛ける時。撃たれる前に撃てば良い」

バーニアを最大出力にする。

もう余力は残さない。

先の見えないマラソンで全力ダッシュするような愚かな行為だが・・・。

「やらないで負けるよりずっとマシだ」

後は俺の根性次第。

やる時はやるんだと証明してやる。

「ウオオオツオオオ！」

全速力で突っ込む。

まさかペースを変えてくるとは思わなかったのだろう。
動揺を隠しきれしていない。

これこそ、奥義チエンジ・オブ・ペースだ。

その一瞬の間を突いてやる。

ダダダダダンッ！

かかって来るがいいさ。

俺はまだまだ……。

「やれ」

『Bチーム、艦隊全滅。Aチームの勝利です』

「るう？」

終わった……のか？

『大丈夫か？ コウキ』

「アキト……さん？」

『どうやらかなり苦しかったようだな。だが、終わらせたぞ』

「そう……ですか」

アキトさんからの通信。

目の前の敵の撤退。

うん、勝利っていうのは事実みたいだ。

「ふう……」

今は勝利の喜びより終わった事への安堵の方が大きい。

いや、久しぶりに疲れた。

そういえば、俺も実は久しぶりの戦闘なんだよな。

周りにはごく最近までコロニー落とし作戦に参加していたという事にしてあるけど。

ボソソジャンプの影響でね。

でも、実際は三週間以上ものブランク。

これじゃあアキトさんの事は言えないな。

結局、同じブランク持ちな訳だし。

期間は圧倒的に違うけど。

『皆さん、お疲れ様です』

「艦長……」

『これにて本日の演習は終わりとなります。一度ナデシコに帰艦してください』

「一度？」

そのまま次の基地に向かうんじゃないのか？

『この後は基地にて他の部隊の方々と話す機会が設けられています。

教導した側として彼らに何か一言、今後に繋がる助言をしてあげ

てください』

……久しぶりのムチャ振り。

あそこまで追い込まれていたんだぞ。

観察してる余裕なんてある訳ないだろうに。

「とりあえず休みたい。ふかふかのベットで」

同じ体勢って腰とか痛くなるよな。

下が固ければ、お尻も痛くなるし。

ひとまず、ちゃんとした所で一休みしよう。

「マエヤマ・コウキ。帰艦します」

ふう。本気で疲れた。

こういうのをあと何回か繰り返さなくちゃいけないんだろ？
良い機会だし、俺らにとっても訓練になるんだけど・・・。

「本番前に潰れちまうぞ？」

ハードスケジュール過ぎる。

加減はしっかりしてくださいね、連合軍の方々。

俺達だって人間なんですから。

疲れる時は疲れるんです！

休みもきちんと設けるように。

「ハア・・・。なにはともあれ・・・。」

お疲れ様でした、皆さん。

もちろん、僕も含めて。

第一百十三話（後書き）

ひとまず教導は終了。

次回からの教導は戦闘描写なしで行きます。

この後の連合軍パイロットとの接触。

こちらがこの任務のメインに当たりますから。

教導らしい教導にはやはりなりませんでした。

ただ勝つ。それぐらいしか彼らには出来ません。

後は精鋭部隊たる彼らが自分で学んでくれる事でしょう。

第百十四話（前書き）

完成しました。
投稿致します。

第百十四話

「うし。これでOK」

纏めていたミスマル司令宛てのレポートがようやく完成。

いやあ、空いた時間は有効に活用しないとね。

タイトなスケジュールで空いている時間は僅かしかないので、一切無駄に出来ない。

あ、もちろん、休憩はちゃんと入れていきますからご心配なく。

いれないとミナトさんに怒られちゃいますし。

そもそも疲れも溜まってますしね。

休まないとやっていけません。

ピンポンッ。

ん？ 来客？

「はい。どうぞ」

誰だろう？

「やつほ、コウキ君」

「あ、ミナトさん、お疲れ様です」

ミナトさんか。

どうかしたのかな？

「私なんて何もしてないわよ。お疲れ様はコウキ君の方でしょ。ずっと戦い続けて」

「多少休憩を挟んだんで大丈夫ですよ」

まあ、実は帰艦してすぐに私室のベットでぶっ倒れたんだけどね。あまりにも疲れてて、即行寝ちゃいました。

現在、ちよつとした寝起きみたいなものです。

「どうかしましたか？」

「そろそろ時間だから、パイロットはブリッジに集合だって」

「あ、わざわざ伝えに来てくれたんですか。ありがとうございます」「いえいえ」

さつき艦長が言った教導結果を伝えるって奴の時間か。

正直、何を話すかまったく決めてないんだよな。

その場凌ぎもなんとなく嫌だし、戦闘データでも確認しておくか。

「さつきまで何してたの？」

「昨日から纏めていたミスマル司令宛てのレポートを進めていました。」

つい先程、出来上がったばかりです。後は司令の所に送信するだけですね」

「そっか。改めて、お疲れ様。内容は何なの？ 私に話しても大丈夫？」

「大丈夫ですよ。内容はタンポポの調整結果と木連の現在の状況です」

どちらも昨日の事だけど、纏めるのに時間が掛かって、今になってしまった。

でも、許して欲しい。

教導の前で話し合いとかがあって、中々時間が取れなかった。ただでさえ教導だけでもぶっ倒れるの他にもやる事ばかりあって・・・。

これは何かしら報酬を求めているだろ、普通に。

「そっか。大変ね、コウキ君」

「まあ、タンポポに関してはセレスちゃんが手伝ってくれてますから」

「セレセレはコウキ君の為に一生懸命なものね」

「マジで助かってます。セレスちゃんが手伝ってくれなければやっていけませんよ」

「ふふっ。その言葉をセレセレ言ってあげなさい。きっと喜ぶわ」

「そうですね?」

「ええ。絶対」

それなら、機会があれば言ってあげよう。

しかし、本当にセレス嬢には助けられている。

もう俺がいなくても独りでああいう仕事をやっていけるんじゃないだろうか?

むしろ、完全委託した方が良くない?

いやあ、これは将来、美少女博士になるかもな。

あ、ちなみに、美少女はデフォです。

「私も何か手伝えれば良いんだけど・・・」

「いえ。ミナトさんには助けてもらってばかりですから。これ以上は申し訳ないですよ」

「そんな事ないわ。何も手伝えてないもの」

「いえいえ。そんな事はありませんよ」

申し訳なさそうに呟くミナトさん。

別にそんな気を遣ってもらわなくてもいいのに。

ミナトさんとの日々の触れ合いが俺の元気の源なんだから。

そこにいるだけで手伝ってくれているようなものです。

あ、これはセレス嬢にも当てはまるな。

セレス嬢もそこにいるだけで手伝ってくれているようなものだし。

うん、セレス嬢には手伝ってもらってばかりだ。

今度何かお礼をしないと。

「でも……」

どうやら納得していない様子。

ハハッ。相変わらずミナトさんは世話好きだな。

このままじゃ納得してくれないだろう。

それじゃあ……。

「今度、何かお願いするかもしれない。その時はよろしくお願いします」

「そっか。分かったわ。任せておきなさい」

素直に甘えるでしょう。

ミナトさんは多才だから、何かと頼りになる。

いずれ、というか、すぐにでも頼む事ができそうだ。

「それじゃあ、ブリッジに行きましょうか」

皆が待つてるかもしれないし。

「とりあえずさっきのを送っちゃえば？ そんなに急ぎの集合じゃないみたいだし」

「そうですか。それならそうします」

送信っと。

こういう書類は重要なもの程、紙が使用されるらしい。

紙の方が処理するのにも秘匿するのにも都合が良いって事だろう、多分。

でも、遠い所にいる司令にわざわざ紙で送っていては時間が掛かり過ぎる。

結果、仕方がないので、プロテクトを厳重にしてデータとして送った。

これでミスマル司令が人に見せようとしないう限り、誰にも見られる事はない筈だ。

後はまあ、何かあってもミスマル司令に対応してもらおうしかない。

俺にはどうしようもできないし、そこまで責任は取れないさ。

「送れた？」

「問題なく」

「それじゃあ行きましようか」

「はい」

ミナトさんと連れ合って、部屋から出る。

目指すはブリッジ、と行きかった訳だが……。

「あら」

「お前……」

ドアから出てさっそく足を止められた。

「待ってたわ、コウキ。ちょっと時間……良い？」

目の前にはどことなく暗い顔をしたカエデ。
肩を落としてなんか落ち込んでいるように感じるけど・・・何かあったのかな？

S I D E M I N A T O

「でも・・・」

「だから、当然なんだって。むしろ、充分過ぎるくらいだろ」

「でも、私だけよ？ 私だけなんて、そんなの・・・」

コウキ君の部屋から出て、ブリッジに向かおうという矢先。
どうやらコウキ君を待っていた様子のカエデちゃんと遭遇。

何か相談事でもあるのかな？ と傍観していたんだけど・・・。

「俺だって最初は簡単に落とされてたんだぞ。むしろ、お前の成長スピードが憎い」

「成長スピードがあっただってしょうがないわ！

大事なのは今の力でしょ？ こんなんじゃ足手纏いじゃない！」

その内容は自分だけが劣っている事への不安や嘆き。

自分の周りが高レベルばかりだからこそ、余計に劣等感を抱いてしまっ
まう。

分かる。その気持ちは痛い程、分かるわ。

誰だって劣等感やコンプレックスの一つはあるもの。

でもね、どれだけ才能があるうとも時間の壁は超えられないのよ。

経験は地道に積んでいくしかないの。
焦ったって何も変わらないわ。

「それで、お前は どうしたいんだ？」

「え？」

「確かに お前が 周りより 一歩劣る 事は 事実だ。それを 偽ろうとは思
わない」

「ッ！」

・・・コウキ君。

厳しい一言ね。

でも、言わなければならぬ事よ。

自覚してこそ人は成長するんだから。

ただ劣等感を抱いているだけでは駄目。

そこから前へ進まないよ。

「それに対してお前は どうしたい？」

「強く、強くなりたい」

「強くとは どういう事だ？ より多くの 敵を 倒せれば いいのか？」

「違う」

「それじゃあ、何だ？」

「なんて言っているか分からないけど・・・多分、私の求める強さは
そうじゃない」

敵を倒せる＝強い。

うん、私もそうじゃないと思う。

でも、事実、倒せば倒す程、強いと扱われる。

本当の意味で強いつていうのは 一体 どういう事なんだろう？

「自身の求める強さ。それが分かってなければ強くなれる訳がない

だろ」

「でも、このままじゃ足手纏いだし・・・」

「引つ張れる足がある内に引つ張っておけば良い」

「え？」

「お前にとって本当に大事な時、きっと引つ張れる足も掴まれる手もないだろう。」

「だけど、今は引つ張る足も差し出される手もあるんだ。存分に引つ張って自身の糧にしろ。」

いざという時が来るまでに、自身の力だけで切り抜けられる強さは持てば良いさ。」

それぐらいの甘えはナデシコクルーであれば受け入れてくれると思うぞ。もちろん、俺もな」

「コウキ・・・」

ふふっ。カツコいい事言っちゃって。

なんか頼りになる大人って感じ。

でも、どうしてこうカエデちゃんの前だと男らしくなるのかしら。

そういう姿を私にも見せて欲しいんだけどなあ、コウキ君。

「そう・・・ね。情けないし、悔しいけど、私が劣っている事は事実。」

何が強さかも分かってないし、まだまだ弱い私だけど、支えてくれる人がいる。

いずれ自立できるよう皆に甘えて、後から恩返しすれば良い。そうでしょ？ コウキ」

「別に恩返ししなくてもいいけどな。してくれらるってんなら受け取ってやる」

「もう素直じゃないわね」

照れ屋なのよ、コウキ君は。

「ありがと、コウキ。なんだかスッキリした」
「何もしてないけどな。ま、どういたしまして」

楽しそうね、二人とも。

さつきから私を除け者にして・・・。

しかも、良い雰囲気だし。

もう、コウキ君のバカッ！

「コウキ君。カエデちゃん。そろそろ行きましょう。流石に待たせ過ぎも悪いわ」

「あ、忘れてた。カエデ、ブリッジに集合。聞いてるだろ？」

「あ、そうだったわね。やばい。急がないと」

ブリッジに向かって駆け足で向かう私達。

実際はそんなに焦らなくても良いんだけど・・・。

ヤキモチからあんな事言っちゃった。

でも、皆もこの気持ち、分かってくれるわよね？

S I D E O U T

『やはり連携の面が甘く感じる。それぞれの主張が強すぎるんだ』
『確かに。引いて守るべき所でも前へ出て攻勢に出ていた。』

無論、それも一つの手だが、混戦が予想される以上、周りに合わせるべきだ』

各部隊の部隊長が一堂に会しての演習反省会。

ナデシコからは代表としてアキトさんとユリ力嬢が出席している。その間、出席者以外、すなわち俺達は基地内の大広間にて適当に放置されていた。

それに対して特に思う所はない。

きちんとモニタにその反省会の映像も映し出されているし、飲み物などの待遇もバッチリだ。

恐らく、この状況はミスマル司令が意図して企てたものだろう。

この時間を用いて、他の部隊と交流を深めろという事だと思う。

出来るだけ話すようにして欲しい・・・か。

かなり抽象的な命令だったけど、その意図は一体何なんだろうか？

「まあいいや」

ひとまず・・・。

「おい、その男」

「あん？」

「人の女に手を出さないで頂きたい」

「おっと、女性とは」

「はいはい。相手を考えてから口説こうね」

「お、おい！ 待てよ！」

まったく・・・。

こういう軍隊ばかりの所に女性クルーは連れてくるべきじゃないよな。

やっぱりどうしても女性の方が少なくなっちゃっし。

獣の群れに羊を放つようなものだ。

「すみません。コウキさん」

「いえいえ。お構いなく」

もっと自覚した方が良いでしょうよ、イツキさん。
美人なんですから、油断しちゃ駄目です。

「それよりも解放する為とはいえ、人の女なんて言うてすいません」
「いえ、助かりましたから。それに、嫌じゃないですよ、私」

ドキッ！

なんてしてないぞ。

表情と言葉が噛み合っていないからな。
何ですか？ そのイタズラっ子的な笑みは。

「おい。ちょっと待てよ」

まだ諦めないのか？ しつこいなあ……。

「だから、彼女は」

「いや、用があるのは彼女じゃない。お前だ」
「え？」

俺に用？ ハッ！ まさか……。

「ホモ？」

「違う！ 俺は正常だ！」

ですよ〜。

一安心。

「お前はあの時の奴だよな？」

「あの時ってどの時さ」

覚えがあり過ぎて分かりません。

「最初の時だよ。あの死神と一緒に戦ってた時」

「ああ。アキトさんの時の……。それじゃあ貴方は……」

「おう。アジア支部教導部隊隊員ペレイラ・アブドオールだ。気軽にペレと呼んでくれ」

なんとも軽い男だな。でも、意外と気が合うかも。

「マエヤマ・コウキ。コウキって呼んで欲しい」

「OK。コウキな」

ズカズカと人の心に踏み込んできてるのに、何故か不快感を抱かせない。

友人を作るのが上手そうな奴だ。

「しっかし、ナデシコってのは凄いな。今までは誇張だと思っただけどよ」

「一応、激戦区を回ってきたから。強くないと今頃ここにはいないよ」

「道理だな。いや、今まであそこまで圧倒的に負けた事なんてなくてよ。」

「すげえ悔しい。うん、多分、だからだろうな。もっと上を目指したくなつたよ」

そっか。

それは良い事を聞いた。

ユリカ嬢も言ってたけど、そう思わせる事こそがナデシコの教導なのだから。

「木連との決戦までまだ数日ある。それまでにお前達を超えてやるからな。見てろよ」

「残念だけど、俺達だってまだまだ成長する。そう簡単には追いつかせないさ」

「へッ。言ってる」

こつ見えても負けず嫌いだからな。
やっつてやるうじゃないか。

「ふふつ。男同士の意地の張り合いですか。良いですね、男性は。すぐに仲良くなれて」

「お嬢さん、そんな事ありませんよ。僕達だってすぐに仲良く」

「寝言は寝て言え」

ゴンッ！

「ツウ……。冗談じゃねえか。笑ってスルーしやがれ」

「仲間に手を出されて放っておけないだろ？」

「そりゃあそうだ。……。ん？ 仲間？ 彼女じゃねえのか？」

「嘘も方便って奴」

「どういう意味だ？ それ」

「使い方によつては嘘も良い事ですよって意味」

「あん？ それじゃあ、彼女つてのは……」

「そう、嘘」

「てめえ、結局嘘かよ」

「嘘も方便だからな」

「へっ。まあいいさ。それなら、要するにフリーって事だろ？ ちヤンスは」

「ないない」

「はなっから否定すんじゃねえよ！」

こいつ、弄くると面白いかも。

「ところでペレは和平に賛成か？ 反対か？」

「ナデシコって言えば和平派の筆頭だからな。やっぱり気になるか」

「ああ。総選挙の話もあるからな。色々な人間に聞いておきたい」

世界中の民から和平か抗戦かを問う世界総選挙。

多分、規模から考えて、ネット投票などで決めるんだろうな。

そうしなければ、とてもじゃないが、短期間では終わらない。

決戦前の決着をつけないと動こうにも動けないだろ。

「正直な話、俺はどちらでもいい」

「どっちでもいい？ どうしてだ？」

中々聞かない意見。

変な理由だったら怒るぞ？

「俺は軍人だ。上から命令されれば青い海も赤くなる」

「でも、そういう枠に囚われず一人一人が考える事も大切だと思うぞ」

「俺は家族やその周りが守ればなんでもいいんだよ。」

それに、そういう和平やら抗戦やらってのは政治家の仕事だろ？」

「まあ、それはそうだが・・・」

「結局、一兵卒の意見なんて権力の前じゃ塵みたいなものだ。」

そりゃあ俺とて和平とか抗戦とか考えたいさ。

でもよ、俺は俺の事だけで精一杯なんだ。他の事を考えてる余裕はねえよ」
「そうか」

誰もが和平や抗戦の事を考えている訳ではない。

それはそうだよな。

この世界の中には、そんな争いがなくとも毎日が生きるか死ぬかの人間だっている。

今を生きるので精一杯の人間にとって地球全体的話なんて規模が大き過ぎるよな。

世界中の人間に考えて欲しいっていうのはやっぱり傲慢なのだろうか？

「だからよ、結局他人任せだが、良い方向に向かってくれる事を祈ってるぜ」

「ペレ……」

「今日は良い機会だったな」

「え？」

どういう意味だ？

「ナデシコの連中ってのは噂ばかりで何も見えてこねえ。

でもよ、今日、実際にお前と話してみて、

ナデシコの連中も俺らと大して変わらねえんだなって思った」

「……」

確かにナデシコは他の部隊との関わりが異様に少ない。

噂ばかりが先行して、ナデシコを勘違いしている人がいるかもしれないな。

こういう機会を設けてもらえば、ナデシコの実体を知ってもらう良

いきつけになる。

「そんな奴らに俺らは和平っちゅう重い責任を背負わせてるんだ。自分勝手だろ？」

「いや、俺達が望んでしてる事だから。確かに重いけど、嫌だなんて思った事はない」

「ふっ。そういう奴らなら信じてもいいかもな」

「それって・・・」

「ああ。俺も一応地球人の一員であるつもりだ。お前達を信じて和平に懸けてみるよ」

「ありがとう、ペレ」

「だからよ、諦めんじゃねえぞ。お前達が諦めたら俺らを裏切る事になる」

「おう。でも、俺らって？」

「バカ。察しろよ。俺から他の奴らにも話してやるって事だ。

たかが一部隊だけだよ、選挙っていうのはそういう積み重ねが大
事なんだろ？」

「ペレ・・・お前、良い奴だな」

「ヘッ！ 当然だろ。男の中の男ってのは俺の事を言うんだ」

「・・・そういう所がなければもつと良い奴なんだけど・・・」

「どうしようもねえよ。それが性分だ」

「じゃあしょうがないか。一生モテずにいる」

「な、なにいゝゝゝ！」

「そのまま将来を・・・」

ん？ あれ？ ちょっと待てよ。

「ペレ。お前、さつき家族がいるって言ってなかったか？」

「ん？ そりゃあそつだ。妻子持ちだぜ、俺」

「え？ マジで？」

「マジマジ」

おいおい……。

「そんな奴が女性を口説いていいのかよ？」

「馬鹿野郎！」

「ええ〜〜」

俺が怒られるの!?

「男はいつだって夢見る生き物であるべきよ」

「いや、意味が分からないんだけど……」

「ケツ。これだから、男の何たるかを知らない奴は……」

呆れられてしまった……。

「えっと、俺が間違ってるんですか？」

女性の視点から見て、どっちが正しいんでしょうか？ イツキさん。

「え？ いや、私に聞かれても……」

困ったように苦笑するイツキさん。

え？ そこは不誠実だって断言して欲しかったんだけど。

「ま、まあ、奥さんとして考えるなら、嫌ですけど……」

「で、ですよね？」

「でも、いつまでも若々しいのは良い事ですよ？ 多分」

「そ、そうっすか」

結局、曖昧なまま終わってしまった。

「お、あそこに良い女」

「やめい」

ゴンッ！

「て、てめえ！ これ以上馬鹿になったらどうするんだ!？」

「あ、自覚してたんだ」

「し、しまったあああ〜〜〜!」

相変わらず変な奴だな。

面白いけど。

「さて、俺はそろそろ行くな」

「また女性を口説きに行くのか？」

「馬鹿野郎。俺だって偶には真面目に決めるっての」

「決めるってのは表現としてどうかと思うが？」

「うるせえな。いいだろうが。とにかく、説得は任せときな」

「ありがとう、ペレ」

「へっ。いざそう言われると照れんな。ま、期待には応えてみせるよ」

なんとも頼もしい言葉と笑み。

こうやって現地で協力者を得られたのは喜ばしい事だな。

これから赴く支部それぞれに同じような協力者が得られれば良いのに……。

いや、違うな。今度こそは俺から積極的に話しかけて、協力者を作らなければ。

消極的になるな。常に積極的であれ。

重い責任を背負っているのなら、尚更攻めの姿勢でいかないと。

「あばよ」

「おう」

なんとも気持ちの良い出逢いだった。

この出逢いに感謝しよう。

その後、様々な出逢いを重ね、多くの友人、協力者を得る事が出来た。

こうやって直に触れ合ってこそ、絆は生まれる訳で……。

地球規模でいえば砂場の砂粒ぐらいの小さな絆。

でも広がればきつと地球を覆うぐらいの大きな絆になる。

そんな絆で紡ぐ和平への想い。

今はまだ小さな輪だけど、いずれ大きな輪にしてみせるさ。

さて、次は欧州方面軍。

プライドが高く、それに見合うだけの實力もある癖のある奴ら。

いいさ、それでもやってやる。

愚直なまでに前だけを見て、ガムシヤラに、ひたすらに突き進む。

長い人生、そんな時間が一回ぐらいあってもいいんじゃないか？

俺は今こそがそんな時だと思っ。

第百十四話（後書き）

陳腐な言葉ですが、絆って大切。

今はアジアにしか繋がっていませんが、

世界中を回る内にもっともっと大きな輪となって欲しい。

それがきつと彼らの望む結末に近づく為に必要な事だから・・・。

さてつと、次は欧州方面軍。

同時にそろそろ総選挙についても触れないといけませんね。

それでは次回をお楽しみに。

第百十五話（前書き）

徐々に最終回へと近付いている事を実感。

早く完結までもっていきたいと思いつつも、

反面なんか寂しくもあってもっとゆっくり書こうかなって・・・。

とにもかくにも、投稿します。

第百十五話

「ふはあく。疲れた」

欧州方面軍の教導を終えた。

腕に自信があるというのは偽りではないようで、非常に苦戦。

実際、致命傷喰らって撃墜ギリギリなんて事もあったし。

落とされなかったのは、あれだね、意地。

こんな所で躓いてちや夢なんか叶えられないっていう。

「また、また私・・・」

教導の際に再び落とされてしまったカエデ。

今回はナデシコの中にも、カエデ以外で落とされた人がいるんだけど・・・。

やっぱり悔しいんだろうな。

「カエデ」

落ち込むのも分かる。

俺だって自分だけミスしたり落とされたら劣等感を抱くだろうし。

でもな、カエデ、人は挫折を繰り返して強くなるんだ。

よく言うだろ？

涙の数だけ強くなれるって。

今はとことん悔しがれ。

それが糧となり、バネになる。
高く飛ぶ時つてしゃがむだろ？
今のお前はそんな時なんだよ。

「コウキ。どうすれば良い？ 私、どうしても近付かれると・・・」

うん。何が弱点か自覚しているみたいだな。

カエデの弱点は接近戦の弱さ。

それを自覚し、克服するだけで一回りも二回りも強くなれる。
さて、どうするかな・・・。

出来る事なら、接近戦が強い人に相手してもらうのが良い。
スバル嬢やガイ、アキトさんなんかそれぞれに当たる。

でも、彼らも教導で疲れている筈。

そんな人達に相手してもらうのは・・・なんか気が引ける。
疲労がない相手なんて・・・。

「・・・いるじゃないか」

「え？ 何がよ？」

なんで忘れてたかな？

カエデに相応しい練習相手がいるって事。

「カエデ。教導を終えた後、訓練する気あるか？」

こいつ自身にやる気がないと始まらないからな。

「あるわ！ もちろんよ！」

おし。こいつ自身のやる気はOK。

後はその場を俺が作ってやるだけだ。

「付いて来い。スペシャル特訓スケジュールを組んでやる」

「お、お手柔らかにね」

どうした？ カエデ、腰が引けてるぞ。

「何を弱気になってる？ 強くなりたいんだろ？ だったら、鬼の訓練あるのみ」

「・・・なんて危ない笑顔。コウキ、正直、怖いわよ」

ふっふっふ。

確実に強くしてやるから、安心して耐えてくれ。

まあ、間違いなく対近接格闘型には強くなれると思うぞ。

なんたって相手が格闘のスペシャリスト兼高機動戦を得意とするパイロットなんだから。

・・・残念ながら本人じゃないけど。

「アルフォンス大尉であります」

「えっと、始めまして。マエヤマ・コウキです」

欧州方面軍でもアジア方面軍の時と同じように反省会兼懇親会が開かれた。

適当に放置で待遇ばっちりって最早懇親会といっても過言じゃないよな？

「姉と義理の兄がお世話になったと聞き、こうして参った次第です」

懇親会中、アジア方面軍の時の教訓を活かし、色々な人に積極的に接触してみた。

話す中、もちろん、和平や抗戦についての話になるんだけど……。

やはり和平派も抗戦派もいた。部隊単位の時もあったし、個人単位の時もあり、更には支部単位もあつたり。

色々あつたけど、一つ言えるのは確実に意見が違つる者もいるという事。

誰もが同じ意見なんてやつぱり持つ訳がないんだよな。

「姉と義理の兄？」

そんな様々な人間に意見を聞く中、逆にあちらから接触してくる者がいた。

突然、名前を告げ、頭を下げてくる。

いや、正直焦つたね。

俺、なんかしたか？ とか思つちやつたし。

「はい。私はアレス隊所属アマゾネス艦長アルメイラ大佐の弟です」

「ああ。アルメイラ大佐の」

道理でイケメンだと思つた。

アルメイラ大佐も目が覚めるかのような美人だつたけど……。

こっちは失神するぐらいのイケメンだ。

無論、女性限定で。

いや、一部の男もそうかもしれないな。

あ、もちろん、僕は違いますよ。

カッコいい顔には憧れるけどね。

「こちらこそ、御二人には大変御世話になり、感謝の思いでいっぱいです」

頭を下げる。

どちらかというとなんかの方が世話になったよな？

うん、やっぱり、感謝するなら俺の方。

「頭をおあげください。そのような事をされたら私が姉に怒られてしまいます」

「え？」

なんで大尉が怒られるの？

「姉より貴方は『一生頭があがらない方』と聞かされています。

そのような方に頭を下げられたと知れば、姉は烈火の如くお怒りになるかと」

そ、それは言い過ぎですってば！

何もしてないのに……。

「昨日、その姉より伝言を頼まれました」

「伝言？」

「はい。必ず伝えるようにと言われていました。

『戦死したと聞きましたが、やはり生きておるようで嬉しく思います。』

すぐにでも再び会う機会があるでしょう。その際には是非お立ち寄り下さい。

改めて、貴方様には感謝を。生涯、このご恩は忘れません。

それでは、決戦の場にてお会いしましょう。必ずや活躍してご覧にいきます」

そっか。アルメイラ大佐らしい言葉だな。
なんか嬉しい。
でも……。

「少し修正しましたか？」

「分かりましたか」

苦笑いのアルフォンス大尉。

いや、内容自体は変わってないと思うけど、口調がね。
貴方様とか言いそうにない。

多分、いつも通りの口調の伝言だったのをアルフォンス大尉が修正したんだろう。

まあ、俺は別に気にしなかったけどね、いつもの口調で。

アルメイラ大佐はあの口調が似合ってるし。
なんか女神様って感じで……素敵だと思う。

「先日、貴方の死亡届けが取り下げられ、生存が伝えられた際には、
姉と義兄は狂喜乱舞だったと同じ部隊の方々に聞かされておりま
す」

「それは……光栄です」

そこまで気にしてくれてたなんて嬉しいな。

そういえば……。

「先程、姉と義理の兄と言いましたが、もしかして……」

「はい。先日、正式に婚約しました。披露宴の際には貴方にも出席
してもらいたいと」

「そうですね。おめでとございます」

「ありがとうございます」

あの二人が結婚か……。
美女にナイスミドル。

うん、お似合いの夫婦だな。

……嫉ましい。

俺の場合は美女に野獣……ではなく、美女に……何だろう？
良い言葉が見付からない。

まあ、どちらにしる……ガクリッ。

「あのような姉と兄がいて羨ましいです」

「私の誇りですから」

どこまでも爽やかな青年だ。

多分、ファンクラブとかがあるだろうな。

しかし、ここにいるって事はアレス隊所属じゃない訳だろ？
いや、公私混同とか嫌そうだから、それはそれで良いんだけど……。

この人はどこの部隊に所属してるのかな？

「アルフォンス大尉はどこの部隊に？」

「若輩の身ながら、一部隊を任されています」

部長長？ この若さで？

……やっぱり凄いな、この姉弟。

「その部隊の名は？」

「アテナ隊と」

「アテナ隊！？」

さっきの演習で一番苦戦した部隊じゃないか！

精銳が集められた中、一際目立ってた高い能力を持つ部隊。一人一人の練度はもちろんの事、あの連携が凄まじかった。カエデも彼らに倒されたんだったよな。

「姉弟で優秀なんですね」

本当に。

優秀で容姿端麗で器量良くて……。

いや、世界にはこんな人もいるんだな、と脱帽。

「いえ。私などまだまだ。姉にも兄にも敵いません」

そして、謙虚ときた。

あれだな。パイロット王子とでも命名してやろう。

爽やかな人間は血筋関係なく、皆王子なのさ。

「マエヤマ・コウキさん」

「はい」

真剣な表情のアルフォンス大尉。

きつと真面目な話だろうから、俺も態度を改める。

「私達軍人にとってナデシコとは希望です」

「希望……ですか？」

「はい。なかでも私達のような和平を望む者にとっては夢といってもいい」

希望。夢。

重いな、その期待が。

でも、やり甲斐のある仕事だ。

潰される事なく、歩み続けてやるつ。
目的を果たすまで、必ず。

「必ずや我らの夢を、世界中の民に争いのない平和な時を」
「はい。必ずや」

断言してしまった。

これは何があっても成し遂げないとな。

「その為であれば、私達も助力は惜しみません。なんでもおっしや
てください」

「ありがとうございます。では、さっそく一つだけ」

「何でしょうか？」

「少しでも多く軍人を和平派に引き込んで欲しいんです。

私達は和平を成し遂げたい。でも、その為には皆さんを含めた民
の協力が必要になる」

「私達も民の一人であるか？」

「はい。お願いできるでしょうか？」

「分かりました。微力ながらお手伝いさせていただきます」

心強い。

彼ほどの人間が声をかければ皆が和平派に属するだろう。

彼の人気を利用するようで悪いけど、背に腹は変えられない。

「それでは、そろそろ失礼します」

「はい。ご協力感謝します」

「いえ。こちらこそありがとうございます」

そう言って去っていくアルフォンス大尉。

最後まで爽やかな人だった。

ペレとは大違いだぜ。

「さて、もうちょっと回ってみるかな」

欧州方面軍。

己の腕に絶対の自信を持つ集団。

そして、それ相応の腕を持つ集団。

今回はナデシコ側にとっても良い訓練となった。

このようなチャンスが再び来るかは分からないが……。

「次こそは余裕で勝利してやる」

和平、抗戦もあるけど、それよりも前に自身の勝負だった。

まだまだ子供だな、俺も。

でも、男つてのはそういう生き物だ。

負けず嫌いでも構わないだろ？

『コウキ君。今、大丈夫？』

「あ、はい」

今日も今日とてレポート作成。

あれです、ミスマル司令に提出するタンポ調整と木連状況の奴。

タイトなスケジュールでも、頼まれた仕事はきちんとこなしてみせますよ。

それが必殺仕事人ですから。

「ごめん、嘘。」

「ブリッジに来てくれるかな？　なんでも地球連合政府の大統領の会見があるとかで・・・」

「大統領の会見？　分かりました。急ぎます」

「ええ。作業中にごめんなさいね」

「いえ。ではまたブリッジで」

「了解。待ってるわ」

今日も今日とてミナトさんの世話に。

いや、いつもご苦労をおかけしまして・・・。

感謝の気持ちでいっぱいです。

「大統領の会見か。多分、総選挙の事だろうな」

政府関連の事なんてそれぐらいしかない。

さて、どうなったのやら。

S I D E M I N A T O

「国民の皆様、まずは謝罪から入らせて頂きたいと思えます。

先日からの一連した出来事。さぞかし不安を覚え、怒りを抱いた事でしょう。

大変申し訳ありませんでした。これも全て私達政府の人間の力不足が原因です」

謝罪から入る大統領。

いつも高圧的なイメージが強い政府の人間も変われば変わるものなのね。

形だけだとしても、受け取る側としては全然印象が違う。前置き一つで支持率は大きく変わるものよ。

『先日、連合軍改革和平派の代表であるミスマル・コウイチロウが告げたように、

私達政府は地球に住む方一人一人の意見を反映させ、今後の方針を決めようと思います』

政府といえばメリット・デメリットを考えるもの。

本来であれば、戦争の舵取りも自身達で行いたい筈。

でも、こうして国民に任せる、もっと言えば国民に依存する選択をした。

逆に言えば、そうせざるを得ない程に国民達の関心が強かったって事。

政府に任せればいいやっていう適当な認識ではなく、

自分達で決めるべきだ、という意識が強くなったのが大きい要因でしょうね。

そういう意味ではコウキ君達の頑張りは実を結んだって事になる。

国民に戦争への関心を植え付けるのも仕事だった筈だし。

しかし、政府の人間からしてみれば屈辱的だったでしょうね。

認めざるを得ない状況だったんだけど、認めたくなかった筈だわ。

自分は民の代表としてここにいる。

それなのに、どうしてわざわざ民の意見を聞く必要があるんだって。

まあ、確かに政治家というのは民の代表としてそこにいる。

でも、だからといって信じられるかどうかは別よ。

汚職やら何やらで逆に支持を失っているのが事実だもの。

結局、権力を握ると人って墮落するものなのかしら？

それって嫌よね、凄く。

『その期日は、といきたいのですが、その前に皆様に伝えねばならぬ事があります』

伝えなくちゃならない事？

『それは二つあります。一つは地球連合軍の元最高司令官の事です』
地球連合軍最高司令官。

今では頭に元という文字が付くが、それ以前は軍部のトップとして君臨していた人物。

そして、コロニー落としという大罪を犯したもの。

到底、許されるものではないわよね。

『先日の裁判にて、彼は有罪と決まり、終身刑と相成りました』

終身刑か・・・。

当然といえば当然よね。

もしコロニーが落下してたら、何億人も人間が簡単に死んでいたんだもの。

たとえ落下前に爆発する予定だったとしても、許していい訳がない。

『皆様のお怒りは尤もです。このような大罪を犯した者を許して良い訳がない。』

ですが、どうか矛をお収めになって、今は地球の今後について考えては頂けないでしょうか？』

庇っているようにも聞こえるけど、切り捨てるようにも聞こえる。一体、どっちなんでしょうね？

まあ、今更最高司令官を庇った所で連帯責任を取らされるだけ。誰も助けようとはしないわよね。

『さて、もう一つの方ですが・・・』

中々発言しない大統領。

話し辛い事なのか、それとも、間を計ってるのか。

『一月程前、木連より正式な宣戦布告を受けた事は皆さんもご存知でしょう。』

彼らが語る決戦。私達政府も軍も迎え撃つ事に決定しています。

その後、再び彼らより連絡が来て、決戦における詳しい事が決定しました。

場所、時間、日付。それら全てが正式に決定しましたのでご報告したいと思います』

決戦の場所、時間、日付が正式に決定された・・・か。

そのどれもが地球、木連の両陣営にとってかなり重要な事項。

果たして、地球にとって都合が良い方向に話を進める事が出来たのかしら？

『まず、場所ですが・・・』

間違いなく地球に近い場所。

でも、明確に位置付けするのなら・・・。

『地球にとっても木連にとっても因縁深い月となりました』

月。地球軍と木連軍で幾度も争った場所。

現在では地球側が独占しているけど・・・。

いつまでたつても月の民に平穩はないのね。
精神的に資源的にもかなり消耗してるでしょうに……。

『なお、その際、強引で申し訳ありませんが、月の民には退去して頂きます。』

もちろん、衣食住は保障いたしますので、どうか寛大な心を持って応じて頂きたい』

結局、犠牲を強いられるのは民。

退去しなければ確実に死んでしまうとはいえ……。

「やるせないわね」

彼らの故郷である月が戦場になるのも、荒らされるのも……悲し過ぎるわ。

『日付は月時間での十月五日。木連の宣言通りの日付となります』

木連という国家が建国された日だったかしら？

縁起を担ぎたいって所かしら。

でも、いずれその認識は変わるわ。

地球と木連が手を取り合うきっかけとなった最初の日だって。

『その日の現地時間1200にて木連艦隊が登場となります』

登場後、争う前に互いに告げるんでしょうね。

己の意思と想いを。

『今日から数えておよそ二週間。それが私達に残された時間です。』

それまでの間に私達は地球の方針を決定し、動き出さねばなりま

せん』

そう、たったの二週間しかない。
選挙をするのにだって時間は必要だし。
戦力の立て直しにはもつと必要よね。
本当に間に合うのかしら？

『今すぐにも国民の方々に協力して頂き、地球の意思を決定したい。』

ですが、何事にも準備は必要。そして、準備には時間が必要なのです』

仕方がないとは分かってる。

シティや国単位でも大変なのが選挙。

それが世界規模なんて事になったらどれだけ大変か。

しかも、どの国も同様のやり方で選挙を行っている訳ではなく、その辺りの調整も必要。

分かっている、二週間という期間でもギリギリであるという事は、でも、どうにかするしかないのよ。

切羽詰っているのは今まで妥協していた分のお釣りが来ただけなんだから。

『その準備時間を考慮して、総選挙は十月一日に執り行いたいと思います』

決戦の四日前。

すぐに票を数え始めても一日二日は掛かる。

最終的な結論が出るのは、決戦の二日か三日前……か。
本当にギリギリね。

『投票方法は追って皆様に連絡致します。
是非とも世界中の全ての人間に参加して頂きたく思います』

それが理想。

でも、実際は難しい。

投票をするという事は投票する人間にそれ相応の知識が必要となる。
民主主義が取れるのは国民の能力が高いから。

ううん、正確に言うなら、国民に学べる環境が出来ているから。
でも、学べる環境が出来ていない国では民主主義、所謂投票が意味を成さない。

それ故に一部の人間に依存した方法で政治を行っているの。

民主主義は平等という謳いだけど、その実、能力が求められている
が故に不平等なのよ。

結局、世界規模の選挙とて全ての人が平等に意見を唱えられる訳で
はないという事。
でも……。

「和平を結ぶか、抗戦を選ぶか。その選択ぐらいなら……」

誰だって争いは嫌。

知識がないからこそ、打算がなく純粹に平和を願ってくれるかもしれない。
そう思うのは独り善がりかしら？

『また、その結果によって空席となっている現最高司令官の席。

この席に誰が座り、軍の指揮を執るかを決めたいと考えています』

これはコウキ君の予想通り。

やっぱり国民の意思を反映し、実行できる人間にこの席は任せたい。

「ミスマル司令がこの席に座れたら良いわね、コウキ君」
「はい。そう願わずにはいられません」

改革和平派として働いているコウキ君。

コウキ君からしてみれば、今更方針が抗戦となる事に納得ができる筈がない。

でも、それは抗戦派の人間からしてみても同じな訳で。

世界はそんな簡単なものじゃないって・・・実感したくないけど、
実感する。

ああ、神様。どうして人とは同じ気持ちを抱けないのでしょうか？
同じ考えを抱き、共に歩む事が出来れば争うこともないのに・・・。
・・・なんて、応えてくれる訳がないわよね。

人間の意思がそれぞれのように信仰する神様もそれぞれ。

神様に頼んだ所で庇護下に全ての人間がいる訳じゃないんだもの。
願いを叶えてくれる訳がない。

やっぱり、願いを叶えるならば自分の力じゃないと駄目って事か。
それなら、頑張るしかないわね、精一杯。

『以上です。皆様、選挙当日までゆつくりと考え、己の結論を決めてください。』

他人に委ねる事なく、己の意思のみで和平か抗戦かを。それでは、
失礼致します』

会見が終わった。

決戦の事、選挙の事。

その全てが私達にとって大きな意味をもつものだった。

「地球連合軍、地球連合政府が出した答えがこれです」

艦長が口を開く。

「私達ナデシコは全方面軍の教導を終えた後、

極東方面軍と共に月へと向かう事になっています」

「予定ではちようど選挙が行われる日に月へと到着。選挙結果は月で聞くことになるね」

「今はただ私達のすべき事をするしかありません。

地球に住む人々を信じて、やるべき事をやりましょう」

そうね。私達は信じるしかない。

彼らが和平を選んでくれる事を。

「それでは解散とします。アフリカ方面軍の基地に着くまでは自由時間としますので」

その言葉を機にクルーが動き出す。

えっと、コウキ君は……。

「コウキ君？ どうしたの難しい顔して」

「いえ。あえて決戦の場に月を選んだのは何故かと思ひまして」

「何故つて、それは……」

何故かしら？

「地球に有利過ぎませんか？ 木連の強味は補給に掛かる時間が少ない事。

月面基地付近で戦えば、地球もほぼ同様の条件になってしまう。

俺だつたら何かしらの意図がなければ、わざわざ月を決戦の場にはしませんよ」

「それじゃあ、木連は何かを企んでるって事？」

「恐らく……」

相変わらず、色々と考えてるのね。
そんな事、私は考えもしなかったわ。

「かといって月に直接何かをすることは思えない。やはり……」

またブツブツと。

完全に思考モードに突入しちゃったわね。
しばらく放っておいてあげるか。

「セレセレ。一緒にお風呂にいこうか」

「……はい」

「あ、コウキ君も一緒だけど、良いよね？」

「……もちろんです」

セレセレはOKと。

「コウキ君。いくわよ」

「だから……いや、もしかしたら……」

いつにもまして酷い症状。

ま、今の私には都合が良いんだけど。

「付いて来るのよ、コウキ君」

「あ、はい」

返事をした後、再び思考モードに。

厄介だけど、この間は殆ど言いなりに近くて……。

「さて、行きましょうか」

「・・・はい」

歩き出す私達とそれに無言で付いて来るコウキ君。

多分、無意識だから、自分が今、どこにいて、何をしてるのかも理解していない。

だから・・・

「あれ？　なんで俺こんな所に？　つてええええ〜!?」

「エツチ」

「・・・エツチです」

「何故に風呂に入ってるのですか!？」

なんて事もできるのよねえ。

S I D E O U T

第百十五話（後書き）

最後のは気にしないで下さい。

決戦&選挙についての連絡。

これで明確な期日が決まりましたので、
より本格的かつタイトに動き回るでしょうね。

さて、それでは次回にお会いしましょう。

第一百十六話（前書き）

書き直し完了！

最早修正などという言葉では表せない程の内容変更。
そのため、投稿という形にしました。
それでは、どうぞ。

第一百十六話

「ヤマサキ博士。首尾はどうかね？」

「おお、これは、草壁中将。ようこそおいでくださいました」

「うむ。して？」

「滞りなく。期日までには間に合わせて見せましょう」

「それは心強い。流石だな、博士」

「いえいえ。私こそこのような研究材料を用意して頂いて感謝しております」

「君の知的好奇心は凄まじい。そして、それを刺激してやれば良い成果を残してくれる」

「わかつてらっしゃいますな、中将」

「うむ。ヤマサキ博士に託したあれらが我らにとって切り札となるう。」

たとえ神楽派が裏切ろうとそれごと粉碎してくれようぞ、完膚なきまでな」

「押し潰すでもよろしいかと」

「その通りだな。文字通り押し潰してしんぜよう」

「そのおりは・・・」

「無論、研究用の費用を増加させよう。なに、金など地球からいくらでも搾り取れる。」

君はこれからも研究を続けてもらって構わないぞ。君は名誉や立場より研究であろう？」

「正しく、仰る通りです」

「ツクモ」

「ああ・・・ゲンイチロウか」

「お前には謝おやま・・・いや、疲れているようだな」

「仕方ないさ。木連がどうなるかという瀬戸際だ。勝たねばならぬ
い」

「・・・そうだな」

「どうしたんだ？ ゲンイチロウ」

「いや・・・きちんと寝てるか？ 目の下が酷い事になってるぞ」

「・・・寝れないんだ」

「寝れない？」

「ああ。寝ている間にまた何かを失ったらと」

「・・・すまない」

「いや、お前が気にする事ではない。全ては俺の未熟さ故」

「だが！ 俺はユキナを」

「言うな！」

「ッ！」

「俺にお前を恨ませないでくれ。頼む・・・」

「ツクモ。お前は・・・」

「そうだ。勝てば良い。勝てば・・・ユキナは戻ってくるんだ」

「ツクモ・・・」

「負けない。たとえナデシコが来ようとも！ ユキナは俺にとって
唯一の家族なんだ！」

「ツクモ・・・すまない」

「待っていてくれ、ユキナ。兄ちゃんが必ず迎えに行くからな」

「すまない・・・」

「ふざけるな！ 和平を成し遂げれば地球は平和になるとツ！？
寝言は寝てから言え！」

「そちらこそ！ 碌に考えもせず否定ばかりしないで下さい！」
「碌に考えもせずだとツ！？」

「こんにちは、こんばんは、おはようございます。」

「とりあえず、挨拶する暇なんて皆無ですので、早速失礼します。」

「和平を結ぶ。それ以外にどう争いの火種を失くせと？」

「殲滅してしまえば良い。それで全てが解決する」

「なんとも現実離れた発言だな。」

「全てが殲滅できる。貴方はそう言い切るのですか？」

「出来る、出来ないの問題ではない。するんだ！」

「精神論でどうにかできるものではありません。人には限界があります」

「それならば、その限界すら超えてしまえばいい」

「限界を超える。」

「それが簡単に出来る程、この世界は甘くも優しくもないんだよ。」

「では、そうして殲滅した果てに何かあるというのです？」

「何ツ？」

「敵対する者全てを滅ぼし、その後には何が残されるというのですか？」

「それは……」

恨み、憎しみ。

復讐を終えて者が抱くのは満足感でも歓喜でもなく、喪失感だとい
う。

もちろん、俺は経験した事がないから言い切れないけど・・・。
殲滅の果てに喪失感しか残されないのであれば、そうすべきでは
ないと思う。

「それに、万が一、生き残りが出て、地球に牙を向いたらどうしま
す？

次は土星蜥蜴がもしれませんか。水星蜥蜴がもしれない。金星蜥
蜴だってある。

いつになったら終わりが来るのですか？

私達はどれだけ戦い続ければこの果てしない戦いを終わらせられ
る事が出来るのですか？」

「・・・・・・・・」

殲滅戦になろうと必ず生き残りの一人や二人はいる。
必ず出てしまう。

そして、その生き残り達が団結し、百年後、二百年後に敵として攻
めてくる。

それは今の木連が証明しているではないか。

結局、殲滅戦は後々の禍根を残すだけなんだ。

確かに一時は平和になるかもしれない。

だが、それはただのその場凌ぎ。

第二、第三の木連が出来てしまうだけだと何故わからない？

無論、永遠に平和なんて夢物語は語るつもりはない。

でも、少なくともちゃんとした和平を成す事が出来れば・・・。
争っていた敵とも手を取り合う事が出来る。

「そんなの全て仮定ではないか！　あまりにも現実味がなさ過ぎる
！」

貴方が現実味を語りますか……。

「確かに現実味はないかもしれませんが、でも、ありえないと言い切れませんか？」

「……」

「可能性がある以上、避けるべきなんです。」

「いや、たとえなくとも、後々の禍根を残しかねない殲滅戦などもあるのほかに」

「後々の禍根というのが、それは和平とて同じなのではないか？」

「もちろんです」

「何？」

事実、原作では和平を成し遂げたものの、それから数年してすぐさま戦争が勃発した。

火星の後継者事件。

草壁や木連の生き残りらが中心となって創立された組織が起こした戦乱だ。

確かに和平を成し遂げたとして平和になるとは限らない。でも、それは……。

「ですが、そうならない和平も存在する筈です」

不完全な和平だったから。

そう確信している。

争いの理由となる遺跡が無くなってしまったからという妥協案からの和平。

それではすぐさま争いが始まってしまうのも頷ける。

本質が和平になく、諦めにあるのだから。

でも、どちらからも歩み寄り、その和平交渉の本質が平和を求める

心であれば……。

「歩み寄れば争いが起こる。そう勝手に判断してる者がいるから、争いは終わらないのです」

殲滅しなければ後々の禍根となる。

それは、木連が再び蜂起するという前提の下での話だ。信じる、とは言えない。

まだ見ぬ者が相手だ。信じるも信じないもないだろう。

だが、逆に、見もせず、関わりもせずに危険だと判断して欲しくない。

彼らにだって平和を愛する心はある。

誰だって、争い続ける日々より平和を甘受できる日々の方が良いに決まってるさ。

何故、殲滅しなければ再び戦争になると言い切れるのかが分からない。

「だが！ 今まで敵だった者が隣にいるかもしれない。

それは不安ではないか？ 恐怖ではないか？ 隣人を疑うような

日々が幸せか？」

「そんなの誰だって同じです」

「同じ……だとツ？」

「街中を歩いていて、突然刺される時だってある。

喫茶店で休んでいたら、突然トラックが飛び込んでくる事だってある。

日常にはいくらでも危険はある。

でも、人はそれを不安に思っていますか？ 恐怖で震えていますか？

「幸せな家庭は何不自由なく確実に安全な日々を過ごす事ができるのですか？」

「戯言をツ……」

「ええ。確かに戯言です。」

ですが、隣の人間が木連人だからといって幸せじゃないとは思えない」

「地球に恨みがある木連人かもしれないぞ？」

「確かにそんな人間もいるでしょう。ですが……」

隣人に震える日々。

それは確かに不幸かもしれない。

でも、それは一方的な拒絶ではないか？

近所として付き合い、触れ合えば、和解できるかもしれないだろう？
それに……。

「その為に政府があり、軍があるのではないですか？」

地球の治安を守る部隊。

それこそが軍としてあるべき姿だ。

その軍人が早々から諦めてどうする？

軍人であるなら、地球にやってきた木連人も地球人として扱い、守つてやるべきだろ。

「それは鎮圧しろと？ 反乱が起こる前に武装鎮圧してしまばいいという事か？」

どうしてそう蜂起する事が前提なのかね？

この人は木連にそうまで恨みがあるのか？

「違います。争いのもとを絶ち、和解させる。それが警察や政府の仕事だと言っているのです」

「軍は警察でも政府でもない」

「根本的な存在理由は同じでしょ？ 全ては民の為。振るうのが武器か弁舌かの違いだけです」

民の為に弁舌を振るい、国をより良くしていくのが政府。

民の為に武器を振るい、国内の治安や国外からの侵攻を防ぐのが軍。弁舌で侵攻を防ぐ事もあれば、武器開発が国にとっての利益となる事もある。

結局、方向性が違うだけで根本にあるものは同じだと思う。

「結局は争うのだろう？ それならば、争いのもとを文字通り絶つてしまえばいい」

「原因を絶てと言っているのです。争っている存在をその者を絶つのはあまりにも短慮すぎる」

「絶てる訳がなからう。お互いに戦争をしていた同士だぞ？ わだかまりがない筈がない」

「ですが！ 手を取りあう事ができる。言葉も通じる。想いも伝わる。」

そんな相手に何故手を差し伸べてあげられないのです？ 同じ人類。和解できない筈がない」

言葉が通じないのであれば通じるまで話し続ける。

想いが伝わらないのであれば伝わるまで伝え続ける。

それまでにどれだけの被害が出ようと諦める事はないだろう。

それが何よりだと自身が深く信じているから。

そんな中、今、その対象は言葉も通じる、想いも伝わる同じ人類。

尚更、諦められる訳がないだろ。

少しでも被害を減らすべく訴え続ける事こそが地球の、いや、人類の為だ。

「同じ人類だから手を取り合える？ そんなの所詮願望でしかない」

「願望？」

「今までの歴史を振り返ってみる。争い、争い、争い。」

「人類の歩みは戦争と隣り合わせといっても過言ではない」

・・・それは否定できない。

技術の革新に戦争はつきものであり、また、平和の為に争い続ける世の中もあった。

平和の為に戦い続ける。

その正論かつ矛盾。

二律背反である論理が成り立ってしまうのが戦争である。

「勝者があれば敗者もある。それが戦争ではないのか？」

「確かにそうです。ですが、最終的には手を取り合っていた」

「それは一方的な見方だ。勝者の敗者への扱いはどうだった？」

「奴隷のように扱い、死ぬまで不自由。どれだけの者が憤死していた？」

「それも否定できません。ですが、それも一方的ではないでしょうか」

「そうだな。だが、その可能性もある。そういうことだ」

言いたい事は分かる。

戦争に勝利と敗北は必ず存在する。

スポーツだってあるんだ。戦争にない筈がない。

敗者は勝者の奴隷。

そんな歴史があつた事もまた事実だ。

でも、そうでなかった歴史もあつた。

あまりにも極端な言い分ではないだろうか？

「確かに戦争にはそんな一面もあります。」

「ですが、敗戦国が勝利国と手を取り合い、互いを高めていった歴

史もあります」

どこ、とは言わないが……。

「それもまた可能性の一部だ。否定はせんよ」

「それならば、手を取り合う事が出来た歴史もあるという事を認めるのですね」

「だから、可能性の一部だといっている。手を取り合うとは確実に言えないだろう？」

「ですから、そうなるよう努力すれば良いのです！」

何をもって諦めているんだ？

やってもいない事を最初から諦めるんじゃない。

手を取り合えないと誰が決めた？

手を取り合えると何故信じない。

「努力すれば叶うとは限らない」

「始めから諦めていては叶う筈がない！」

何故そうまでして和平を拒む？

何故始めから全てを諦めている？

「貴方はどうしてそこまで木連を憎むのですか？」

「……憎んでなどいない」

「それこそ嘘だ。貴方からは手を差し伸べる事さえ嫌がっているように感じる」

始めは感情的だった男。

しかし、今では落ち着き、冷静であるかのように見える。

だが、その瞳だけはどこまでギラついていた。

俺はその瞳を知っている。
以前、見た事があるからだ。

「貴方は木連に憎しみを覚えている。・・・復讐したいと思っている」

あれはそう、火星人がフクベ提督を見る時の瞳。
憎しみを前面に押し出した復讐の意思。
必死に押し隠していても、隠しきれない程の深い憎しみがそこからは感じられた。

「それは何故ですか？ 貴方にそこまでの深い憎しみを抱かせたのは・・・」

「そう、木連だ」

やはり。

そう思った。

「俺は・・・奴らを許せない」

「それは・・・」

「第二次月面戦争。それが俺の全てを狂わせた」

第二次月面戦争・・・。

ナデシコがボソソジャンプで八ヶ月間いなかった時に起きた奴か。

「当時、俺には恋人がいた。この戦いが終わったら結婚しようと言った恋人がな」

「争いが終わったら・・・」

幸せな未来を夢見ていた彼ら。

戦争が終わったらと夢を膨らませているのは俺達だけじゃない。

「そいつは俺の所属する艦隊でオペレーターを務めているおっちょこちよいな奴でな。」

俺がいないとすぐ泣きやがる泣き虫でもある。それでも、俺はあいつを愛していたんだ」

慟哭。

表面上は冷静に見えるが、裏で泣き叫んでいる事が俺ですら分かる。それ程の深い悲壮感が伝わってきていた。

「だが……」

「……」

「そいつは死んだ。……俺の目の前でッ!」

目の前で恋人が死ぬ。

……とてもじゃないが、耐えられない。

「当時はエステバリスも配備されておらず、あっても少数という時代だ。」

多くのパイロットがデルフィニウムという棺桶に乗ってその命を散らせていった。

俺もそんな棺桶に乗り、戦ったさ。無事に乗り切ればあいつと一緒にになれる。

その想いだけで戦い続け、どうにかして生き残る事が出来た。だが、その結末は何だ!？」

「……」

「帰艦する寸前、目の前で崩れ落ちる俺達の船。脱出も俟たず全員が死んでいった。」

それを前にして、俺は彼らに誓う事しか出来なかった。

必ずお前達の仇は取る。だから安心して眠ってくれと。俺はその為だけに生きてきた」

・・・分かる。
痛いほど・・・分かる。
でも・・・。

「彼らは貴方に復讐して欲しいだなんて」

「黙れ！」

「ッ！」

「それだけが俺の支え！ 貴様に何を言われようと仲間の敵を討たずして、何が和平だ！」

「・・・・・・・・」

「和平、和平。そのような戯言！ 家を失い、家族を失い、友を失った者達に・・・。
彼らを許せと。対等な立場で手を取り合えと。憎しみを忘れろと。そう言えるのか！？」

目の前にはその失った人間がいる。
その人間を目の前にして・・・俺は・・・。

「言えます」

言い切つてやる。

悪いのは木連ではない。

戦争を企んだ人間達であると。

全ての木連人に復讐を誓うなどというのは筋違いであると。

「馬鹿を言うな！ 降伏してきたならまだしも何故対等な立場で和平など結ばねばならん」

「それこそが理想的な和平であるからです」
「勝ち、そして、支配下に置いてしまえばいいじゃないか！ それで全てが解決する」

何がどう解決するとうんだ。

「それが最善だとは思えま」

「いや。最善だ。地球は平和でいられる」

「ッ！ それならば、木連はどうなってもいいと!？」

あまりにも一方的な物言い。

復讐心が彼の心を歪めてしまっている。

「戦争を仕掛けてきたんだ！ それぐらいの覚悟はあるだろう!」

「覚悟？ 覚悟があれば何をしても許されると?」

「そうでなければ何故こちらだけが死なねばならない!

木連の民は不安を覚えたか？ 恐怖を感じたか？

そうではないだろう! 争いのない遠くの地でぬくぬくと・・・。

血で血を洗うような戦いをするのは地球ばかり。

木連は無人兵器という血も涙もない兵器を駆使し、何の恐怖もな

く戦っている。

俺達の感じる恐怖は何だ!? 失われた命は何だ!?

俺達は命を代価にしているというのに・・・! あいつらは何を

代価にして戦っている!？」

それは・・・確かに木連が間違っている。

戦争をする以上、互いに賭けるものは同価値であるべきだろう。

それなのに、木連は血を流す事なく、戦っている。

戦争で恐怖する民もいなければ、戦争で失われた命もない。

命を賭けて戦っている者からしてみれば理不尽以外の何物でもない

だろう。

「勝者は敗者をどう扱おうと構わない。それを肯定しようとは思わないさ。」

だがな！ このまま和平となつて納得できる訳がない！

木連人は痛みを知らん！ その痛みを与えるまで、和平などと夢物語だと知れ！」

・・・納得してしまう点もあつた。

最終的な目標が和平であるが、それには決戦で勝利する必要がある。俺も木連に痛みを与えるべきだと考えている為、その点については共感できる。

でも、徹底抗戦、これだけは肯定する訳にはいかない。

「勝利した後、何故対等な立場にならねばならんのだ！

勝利し、木連を支配下に置き、自らの所業を悔い改めさせる。

それこそが地球の為だと何故分からん。何故我らから手を差し伸ばさねばならん」

徹底抗戦といえども方法は殲滅だけではない。

争い、敵が降伏するまで攻め続ける事で終戦を迎えようという考え方もある。

そうすれば、確かに戦争はなくなり、平和になるだろう・・・地球は。

でも、俺は木連も救いたい。地球だけではなく、木連も平和にした

い。

それは傲慢なのだろうか？

・・・いや、違う。

地球の平和を願う者。木連の平和を願う者。それぞれに接点があり、親しくしている俺だ。

俺が諦めたら、それこそこの願いは叶わなくなってしまう。
傲慢であるかと突き進むしかないだろ。

「確かに貴方の言っている事も一理あります」

「一理ではない。全てだ」

「ですが！ 貴方の言う過去の戦争から今こそ学ぶべきではないの
ですか？」

「何？」

「勝者と敗者。その扱い。その理不尽さはご存知でしょうか？」

「.....」

「どちらかにどちらかの枠を嵌めてしまえば、自然と扱いは対等ではなくなる。」

敗戦国の人間が惨めな思いをすれば、蜂起を考えてしまうのも頷
けます。

それならばあらかじめ対等な立場で歩み寄り、互いの妥協点を探
す。

そちらの方が遥かに将来の為ではないでしょうか？ 地球と木連、
両者の平和にとって」

徹底抗戦と和平。

方向は違えど、辿り着く先は共に平和を勝ち取るという事。

両者の意見に正解も間違いもなく、だからこそ難しい。

徹底抗戦、この場合は相手の降伏を待つという方針。

それもまた一つの終わらせ方だと思う。

だが、その時の敗戦国は何を思う？

素直に勝者に従う道を選ぶだろうか？

答えは否。誰もが従う訳がない。

間違はなく将来へ火種を残しているといえよう。

だが、互いに対等であれば？

少なくともこのような火種は残さずに済む。

「貴方は先程、木連はどうなってもいいと。そう言いましたよね？」
「ああ。どうだったっていいさ。俺達は地球の軍人だぞ。地球の事を考えて何が悪い？」

正論だ。

地球連合軍という組織に参加している以上、最優先すべきは地球。それは間違いない。

「俺達軍人の使命は地球を守る事。その事に余計な感情はいらない。木連の事を考える事自体がそもそも間違いなんだ。軍人は自国の、今回で言えば、地球の事だけを考えて、地球の平和だけを考えれば良い」

それが軍人としてあるべき姿なのかもしれない。でも、それは軍人という言葉をも都合良く用いているだけだ。

軍人は機械じゃない、人間だ。

考え、思うからこそ人間。

軍人だからといって感情を切り捨てるのは間違っている。

「だから、私は地球の平和を第一に考えているのです」

「木連にまで手を広げようという愚か者が何を言う」

「争っていた互いが平和な事。それこそが最も平和な状況と言えるのではないのでしょうか？」

「何？」

「どちらかの治安が乱れれば、それが後々の戦争に繋がりがねない。でも、どちらも平和であれば、争おうという気すら起きない。私はそう思います」

「それは・・・」

自身の状況に満足できないからこそ争う。

逆に言えば、今の自分に満足できていれば争う必要もない事だ。もちろん、人間の欲望には限りはなく、現状で満足する事は稀だろう。

だが、間違っても、その不満をぶつける方法が戦争となる事はない。互いに交流を深めていく事が出来れば、

星という垣根を越える事が出来ると俺は信じているんだ。それに……。

「貴方とて木連の事を考えていない訳ではない。そうですね？」

「何を言う？ 俺は木連を殲滅する事だけしか」

「それは嘘だ。貴方は本心を隠しきれていない」

「ッ！」

核心を突けた自信がある。

何故なら相手の顔には動揺が見えるから。

「口では殲滅を唱え続けているが、時折支配下に置く、という言葉で本音を吐露している」

「違うのではないか。殲滅も支配も」

「全然違いますよ。前提が生かすか殺すかというだけで」

口では殲滅といっても結局は相手を生かす事が前提で話している事に気付いた。

恐らく……。

「貴方のような方が最も混乱したのでしょうね。相手が人類であると知って」

復讐心を抱いたのは木連が同じ人類であると知る前。

復讐を誓えたのは、殲滅を願ったのは、
相手が人類でないと思つてたからではないだろうか？

「貴方は本心では木連人と手を取り合つてもいいと考えている。
だが、復讐の誓い。それが貴方を縛る鎖となり、貴方の心を頑な
にしている」

「違う！ 俺は」

「復讐をしたい。その気持ちは分かります。」

でも、その対象が違うのではないのでしょうか？

「対象が・・・違う？」

そう、対象が違うと思う。

確かに恋人の命を奪つたのは木連かもしれない。

でも、その木連との争いの根本にある原因は何だ？

「貴方は先日のコロニー落としについてどう思いましたか？」

「・・・無論、許せる行為ではない。だが、あれと俺達を一緒にし
てもらつては困る」

「分かつています」

最高司令官の徹底抗戦主張と貴方の徹底抗戦主張の意味は全然違う。
あれ

「あのようにこの戦争は裏で画策するものが引き起こしたものだ。

確かに貴方の恋人の命を奪つたのは木連です。

ですが、貴方が憎むべきなのは木連ではなく、争いの原因なので
はないですか？」

「貴様は地球を憎めと。そういうのか？」

「いえ。地球でも、木連でもなく、戦争を憎めといているのです」

「戦争を憎め・・・だと？」

「はい」

戦争を憎めばいい。

そうすれば、戦争の継続を憎むだろう。

今すぐにでも争いをやめる道を選ぶ筈である。

「貴方の復讐とはこのくだらない争いをさっさと終わらせる事ではないですか？」

「そんなの詭弁だ」

「ええ。詭弁です。ですが、それがどうかしましたか？」

「・・・開き直りやがった・・・」

詭弁だろうがそれを貫き通す。

和平の為になるのであれば、なんだってしようじゃないか。

「貴方の唱える徹底抗戦。それは相手側に降伏を迫るといふもの」
「・・・」

「それに対し、私が唱えるのは対等な立場での和平交渉」

どちらもメリット・デメリットでいえばドッコイドッコイだと思
う。

でも、俺はもう決めたんだ。

「どちらも正しく、間違っている。それならば、俺は和平を選び
たい」

「間違っていると知りながらも進むと？」

「決めましたから」

俺だけじゃない。

この決定には多くの人間の意思が込められている。

地球の罪を認め、その上で平和でありたいと願うミスマル司令達。

何より木連の為に、復讐心を忘れて平和でありたいと願う神楽大将。他にも色々な人間の想いを俺は背負っている。行くべく道は決めた。後はどんな障害があるうとぶち壊していくのみだ。

「結局、俺と貴様は相容れないようだ」

「はい。ですが、いずれ分かり合える。そう信じています」

「・・・ないだろうな。だが・・・」

背を向けて去っていく男。

だが、最後にこちらを振り向いて、こう言ってくれたんだ。

「少しは考えてやろう。俺の復讐という奴をな」

今度こそ去っていく。

少しだけだけど、分かり合えたような気がした・・・。

S I D E K A E D E

「復讐・・・ですか」

「正直な話、共感は出来るのよね。私も同じ立場だから」

「・・・カエデさんも木連によって家族を失ったんでしたよね」

アジア方面軍、欧州方面軍、アフリカ方面軍と教導を終えて、移動を挟んだ後、今日、先程北米方面軍との教導が行われた。アジアや欧州と違って、使ってくる機体が重力波に依存しない機体

だから、かなりの違和感。

それでもまあ、ナデシコはいつも通りの大活躍で……。

私は落とされたけど、確かな成長を実感して、それ程気分は悪くない。

今日は久しぶりに気分良くいれるかなって思ったんだけど……。

「私だって同じような事を考えたわ。力があるなら木連全てを壊したかった」

「……カエデさん」

「でも、コウキに諭されちゃったのよね。ケイゴの事もあったけど……」

「……コウキさんの言葉には不思議と説得力がありますからね」

突然の叫び声。

なんか喧嘩しているかのような興奮した声で、思わずそちらの方を見てしまった。

そこにはコウキと多分北米方面軍の軍人がいて、言い争いをしている様子

どうしたんだろうと近付いてみれば、その内容は和平について……。

仲介に入ろうと思いつつも、気付けば二人の会話に耳を傾けてしまっていた。

「昔は復讐なんてのも考えてたけど、私は和平が結びたい。それが紛れもない今の本心」

「はい。私もです」

抗戦を主張する意味と理由。

そのどれもが正しく、私達からしてみれば間違っている。

私達の和平とは正反対でありながらも、正しいというこの二律背反。

果たしてどちらが正しいのかと迷いが生じてしまう。
私達の想いは間違いだっただのか、と己に問いかけてしまう。
でも、それでも、諦めきれない。

「火星人の私が言うのもなんだけどね」

「いえ。そう言い切れるカエデさんはとっても魅力的な女性だと思いますよ」

突然、何を言い出すのやら。

「とりあえず、コウキさんの所へ行きましょうか」

「そうね。あいつなりに色々と悩んでるかもしれないし」

私も完全に吹っ切れてる訳じゃないんだし。

思う所はあるわよ、もちろん。

「そうですね。偶にはコウキさんから悩みを聞くのも良いかもしれ
ません」

「いつもはミナトさんの役目だものね、そういうの」

「はい。ミナトさん以上にコウキさんの事を分かってあげられる人
はいないので?」

「そうね。まったく。。。ミナトさんがいなければ何にも出来な
いんだから」

「ふふっ。そういうのが可愛いんじゃないですが。こつ母性本能を
くすぐられるようで」

「貴方、年下好き?」

「そういう訳ではないですよ。ただ頼られてみたいという思いはあ
ったりします」

「まあ、程ほどにしないで」

「分は弁えてるつもりですので、あしからず」

略奪愛なんて流行らないわよ？

「話してないで早く行きましょう」

「そうでしたね、つい」

この人もなんだかんだいってナデシコのクルーなんだなって実感。やっぱり変わってるわよね、ナデシコクルーって。

え？ 私も変わってる？

ないない。私は例外よ。

まだナデシコには染まってないわ。

「充分染まってると思います」

戯言は聞かない性格なのよね、私って。

S I D E
O U T

第一百十六話（後書き）

前回はコウキ君のぶれ具合が気になりましたので、修正。

また、あまりにも相手役が悪者であったので、

ある過去を背負わせる事で理屈に説得力を持たせました。

こうまですれば、彼の真意も伝わる筈ですし。

私としては嫌なキャラとしてではなく、

どうしても存在してしまう理由のある抗戦派。

そんなキャラを登場させるつもりだったので・・・。

伝わってくれたら嬉しいですね。

前回、勝つ事を前提に考えている事について触れられました。

書いている時はそのことにも触れていたのですが、

軍人相手に負けた事を語るのはいかがかなと思ったので消しました。

まあ、前後の流れからして不自然だったというのもありますが。

負けた後の事を考えるのは上の人間と政府の人間。

一兵士に聞いてもどうしようもないかなと。

前回のようにならねたらどんな目にあってもいいとは言っていないので、

それ程、違和感はない筈です、多分、メイビー。

負けた場合の事を考えるのは良いですが、

戦う前から負けた後の事を話題に出すのはよろしくくないですからね。

心の中だけでならまだしも。

本来であれば、完全に相容れない人間として出す予定だったのに・・・。

正論ばかり言うけど分かり合えないキャラも必要かなと思って。

まあ、こういう形になったのです。

きっと私なりに何が感ずるものがあつたのでしよう。と他人事のように言ってみる。

さて、修正後、受け入れてもたらえたか非常に心配です。

皆様、是非とも感想として一言言葉を頂けたら嬉しく思います。

流石に今回はもう全面修正とかはしないと思えますけどね。

先に進まなくなってしまう。

第一百七七話（前書き）

お待たせしました！

投稿致します。

第一百十七話

「ふはあく。ようやく最後か」

ナデシコの教導任務もこれで終わり。

いやあ、長かったな、ここまで来るの。

アジア方面軍。

彼らは粘り強さが特徴。

技量などに関しては他の方面軍に劣るが、

長期的な戦いとなれば、彼らのような粘り強さも必要となってくるだろう。

欧州方面軍。

彼らは技量の高さが特徴。

国ごとに攻守のバランスは違うものの、どの軍も高い技量と連携を保持していた。

それぞれがエースとして活躍してくれる事だろう。

アフリカ方面軍。

彼らとはにかくタフだ。

ムチャな機動や思い切りの良い接近。

多少のダメージではまったく引かない不屈の闘志を持っていた。

彼らが精神的な支えになってくれるかもしれない。

北米方面軍。

彼らも技量、精神的強さを兼ね揃えているが、何より兵力が圧倒的。世界経済の中心であり、豊富な物資量を誇る彼ら。

最先端の装備と多くの人員という羨ましい環境をもっている。

兵力の多さから彼らが連合軍の中心となる事は否めないだろうな。

確かに意見は対立しているが、戦争においては頼りになる集団だ。
南米方面軍。

彼らの特徴はその突破力。

独特なりズムから繰り出される攻撃は圧巻の一言。

ナデシコ勢の守りを突破し、ナデシコに一撃入れたのは彼らだけだ。
その突破力には期待せざるを得ない。

オセアニア方面軍。

彼らの特徴は防衛力。

他方面軍より物資や人員の面で劣る彼ら。

しかし、守るべき箇所は同等、もしくはそれ以上ある。

そんな彼らは少数で守りきるといふ他方面軍にはない武器を持っていた。

彼らの守りを突破できる部隊はそう多くないだろう。

なんとなく南米方面軍と戦わせてみたかったり。

そして、今日、最後の教導相手となる……。

「戻ってきたわね。極東方面軍に」

「はい」

極東方面軍。

地球での活動の最後を締め括る我らが方面軍だ。

「世界一周……か。なかなか充実した日々だったわね」

「世界一周をこんな短時間で巡るなんて考えた事ありませんよ」

「ふふっ。確かに。どうせならもっと観光とかしたかったわ」

「そうですね。せっかくの世界一周ですから」

俺がもといた世界じゃ世界一周なんてこんな簡単に回れるものじゃなかったもんな。

お金っていうのもあるけど、何より移動スピードが段違い。

いや、技術の進歩って怖いよね。

いつか火星まで一日でいけるようになったりして……。
ハハハッ。それはないか。

……いや、ボソソジャンプによる運送システムが構築されれば不
可能じゃない。

改めて……技術の進歩って怖いな。

「さて、これが終わったら次は宇宙ね」

「はい。明日にでも地球を発つとか」

最後の決戦となる第五次月面戦争。

ナデシコを含め、地球上にいる多くの部隊がそろそろ移動しなければ
ならない。

今回の任務を終えた後、すぐさま宇宙にあがる準備をしなければな
らないだろう。

「最後なんだから、バシッと決めてきなさい」

「はい！」

改革和平派の中心であり、新技術をドンドン導入している極東方面
軍。

さて、最終決戦前のこの戦い。

彼らは何を見せてくれるのか？

楽しみだ。

「え？　今回、コウキはヒナギクで出るの？」

「ああ。なんかミスマル司令からの命令だとか」

いつも通りにアドニスリアル仕様に搭乗しようと思った矢先、艦長と。。。。

『あ、マエヤマさんは今回ヒナギクで出てください』

「え？ ヒナギクですか？」

『はい。ヒナギクを運用しての戦闘を想定していますので』

「はあ。。。。」

こんな会話があつて、ヒナギクに乗る事となつた。

今までなかつた事だけに、何か意味があるんだなと解釈。

ミスマル司令は俺に何をさせるつもりなんだろう。

「そうなんだ。ヒナギクでどう戦うつもりなの？」

「ヒナギクってのは基本的に戦艦の超小型版みたいなもんなんだよ」

「え？ 戦艦って・・・ナデシコみたいな？」

「そうそう、ヒナギクの利点は重力波を供給できる事。

確かに単体でも割と強力な兵器だけど、

ヒナギク一機よりもアドニス三機とかの方が強いだろ？」

「そりゃあ数が多いものね」

「だから、ヒナギクは単体兵器というより、

小隊のちつちやな拠点として活動するのがベストなんだ」

一個の兵器としても高性能なヒナギク。

でも、その本質は支援と補給にある。

格納庫も存在し、重力波エネルギーを供給できるヒナギクは前線拠点として活用できる訳だ。

重力波に依存している兵器は戦艦から一定距離以上離れる事はできない。

かといって危険地帯である前線に拠点となる戦艦を持つていくのはあまりにも無謀。

そんな時、ヒナギクがあれば、その両方を克服できる。

欠点としては、戦艦から遠い場所でヒナギクが撃墜されたら抗いようもなく敗北という事。

ヒナギクの護りは嚴重にする必要があるだろうな。

「それじゃあコウキも今日はそうやって動くの？」

「司令がわざわざ俺をヒナギクに乗せるようにした。これにはきつと意味があると思うんだ」

艦長の考え方によってはヒナギクに乗る事もあるだろう。でも、それはナデシコ勢としての判断。

今回のヒナギクによる出撃は司令の指示だ。

恐らく、意味があつて俺をヒナギクに乗せたに違いない。

「だから、俺はヒナギクの性能を最も発揮できる形で運用したいと思う」

「それが・・・」

「そう、前線拠点。攻撃も回避も補給も援護もできる小さな要塞だ」

強固なDF。

抜群の回避力。

充実した武装。

正に動く小さな要塞だと思う。

「さて、出撃だ。行くぞ、カエデ」

「ええ。今日こそは最後まで生き残ってみせるんだから」

その意気だ。

うし。最後の教導、いつちよ頑張りますかね。

「見事だ」

ヒナギクから見える光景に感嘆の息を吐く。

「想像通り、ヒナギクを使ってきましたか、司令」

改革和平派の中心である極東方面軍。

改革和平派が配備している兵器の中でも最新鋭のものを揃えている。また、それにより新戦術まで構築されていた。

ある意味予想通りの小隊システム。

ヒナギクを核として、アドニスやエステバリスを三機配備。

計四機による小隊が構成されていた。

ヒナギクによつて移動制限もなくなり、小隊単位にした事で指揮系統も確立。

補給も出来るからいちいち戻る必要もないし。

理想的な戦闘展開が出来るな。

流石としか言いようがない。

「タンポポも充分戦力として扱えるな」

極東方面軍の新しい兵器、タンポポも兵器としては充分使えそう。

相転移エンジンを搭載というちょっと割高なコストだが、

他にまったく依存しないで行動できる兵器は使い勝手が良い。

攪乱としても奇襲にしてもその力を発揮してくれそうだ。

ステルス性も充分だし。

「でも、たとえ新戦力を配備してこようとナデシコは負けないさ」

確かに新戦力であるタンポポやヒナギクによる小隊システムは脅威でも、その程度で屈する程、ナデシコは弱くない。

新しい戦術には新しい戦術で対応。

うちの艦長の閃きを甘く見ないで欲しい。

こういう時、誰よりも頼りになるのは艦長だ。

『パイロットの皆さん、ナデシコの護衛をお願いします』

『どうするつもりなんだ？ ユリカ』

『アキト。敵は独立した戦力でこちらを攻め込んできてる』

『ああ。そうだな』

『確かにその状況は不利だよ。でもね、駄目ならそうしなければいい』

『この状況を打開する策があるのか？』

『突っ込むの』

『・・・は？』

何を言ってるんだ？ 艦長は。

突っ込むって・・・。

『一方的に攻められているから苦しいの。だから、同じ状況にしてしまえばいい』

『ナデシコを近付かせて艦隊戦にしてしまおうというのか』

『そう、同じ状況であればナデシコの方が断然強い。』

極東方面軍は連携の面と兵器の面は充実してるけど、

パイロットの腕は他の方面軍より勝っているって訳じゃないから『なるほど。了解した。パイロットはそれぞれナデシコの護衛に就

け
『『『『『『『了解！』』』』』』

なるほどね。

同じ状況であればナデシコの方が勝る。

それならばあえて近づく事で相手の優位性を消そうって訳か。

もちろん、状況は更に慌しくなるだろうけど、ナデシコなら対応できると。

そう確信した上での選択だろう。

俺達はパイロットとしてこの信頼に応えないとな。

無論、囲まれるという危険もあるけど……。

『ミナトさん、ポイント　ー　に移動してください。』

ラピスちゃんは敵戦力をフェザンツでこのポイントに誘導。

メグミちゃん、味方友軍に連絡、ナデシコに同行するように。

ルリちゃんはリーダーで敵の状況を確認、異変があったらすぐに知らせて。

セレスちゃんは味方の状況を確認、同じく異変があったらすぐに知らせてね』

『『『『『了解』』』』』

それは艦長が的確に対処してくれる。

だから、俺達は安心して自分の仕事に専念できるんだ。

『アハハ……。ユリカが提督になっても僕は相変わらずなんだね。
。』

ジユン君。

それがナデシコなんだよ。

君は補佐として充分　　。

『ジユン君。後は任せました!』

『了解! 任せておいてよ!』

・・・凄い変わり様。

ある意味、これもナデシコって事なのかも。

ジユン君、君って相変わらず単純だよな。

『コウキ。行くぞ』

「了解」

ヒナギクに乗るという事で俺も同じように小隊単位で動いていた。

今回の小隊メンバーはアキトさんとイツキさんと俺の三人。

高機動戦を得意とするアキトさんに自由に動いてもらおうというスタンスだ。

意外にもイツキさんも高機動戦に対しての適正が高く、同行しても良かった。

先程から高機動で移動し続け、敵への攪乱をしている。

移動しっぱなしで結構疲れてるんだけどね。

二人の命を預かって以上、簡単に落とされる訳にはいかないでしょう。

『コウキさん。敵に囲まれる前に一度帰艦して補給してもよろしいですか?』

「アザレア」

『問題ありません。数分で補給できます』

「了解。イツキさん、大丈夫です」

『了解』

イツキさんが帰艦?してくる。

通常のヒナギクと違い、このヒナギクにはアザレアがいる為、補給も早い。

格納庫内に補給用や整備用の簡易装置を取り付けているからだ。それをアザレアが操作する事で比較的早く補給や整備が出来る。筈なんだが……。

「何故か相手も同じぐらい早いんだよな」

もしかして、向こうも何かしらの対策を？

でも、こういうのは自律した装置じゃないと対応できないだろ？

もしかやヒナギク内に補給や整備用の人員を配備しているのか？

……うん、それが妥当な考えだな。

兵器の数は先のクーデターで減ったが、人員は相変わらず圧倒してるんだ。

木連に勝てるかどうかの瀬戸際だし、使える人間は無駄なく使わないとな。

「さてつと、もうひとふんばりだ。今回は誰も落とされずに終われるかな？」

イツキさんの補給を終えた後、再び攪乱の旅へ。

今回も相変わらず疲れる教導だったぜ。

「ナデシコの諸君。ご苦労だったな。これで諸君らの任務は終了だ」

極東方面軍への教導終えた後、いつもの反省会兼懇親会を行った。

改革和平派の中心地だけあり、誰もが和平への想いを語っていたな。

それが俺や皆の和平への想いを強めさせたのは言うまでもない。もちろん、徹底抗戦派の主張も理解できる。

同じ和平でも誰もが納得できるだけの損害を相手に与えねば、地球の民が納得しないと。

上から納得しろと言っても意味がない以上、

彼らの戦って勝つというのはある意味正当な手段なのかもしれない。最終目的は同じ和平でもその過程は違う……。

複雑だが、一つだけ嬉しい発見もある。

それは、徹底抗戦派とはいえ、和平に対して根本的な反対はしていないという事。

もちろん、一部の人間だけかもしれないが、和平自体は受け入れてくれている。

殲滅戦になるような事はもしかしたらないかもしれない。

まあ、あっても俺達が止めるけど。

「お父様。わざわざナデシコに」

「うむ。諸君らには過酷な任務を与えてしまったからな。

だが、その成果は充分に表に出てきている。感謝しよう」

その反省会兼懇親会が終えた後、いつものようにナデシコへと戻った。

教導の任務が終わった為、そのまま予定通り地球を発つのかなと思っていたんだけど……。

まさかのミスマル司令登場。

護衛らしき軍人を何人が引き連れてナデシコまでやって来ていた。

護衛といってもナデシコを警戒してる訳ではなさそう。

まあ、お偉いさんだからな、必要な措置だ。

俺だったら息苦しくなりそうだから却下するけど。

「お父様」

「なんだい？ ユリカ」

なんだい？ その緩々の表情は。

司令なんだからシャキツとしないと駄目ですよ、司令。

・・・まあナデシコクルーにとっては慣れたようなものですが・・・

。

「ナデシコを教導の任務に当てた事。その意図は何ですか？」

「む」

ユリカ嬢の一言で緩みきつた表情をキリツとした真剣な表情にする

ミスマル司令。

流石は司令。

唯の親馬鹿ではない。

「唯の教導であれば、方面軍同士での模擬戦でも良かった筈。

ナデシコに教導という任務が適格であつたとは思えません。

そのナデシコにあえて教導をさせたという事は何かしらの意図があつたのでは？」

鋭い指摘。

考えてないようで考えているんだな、艦長。

「ユリカはどう考えているんだい？」

「ナデシコとは和平の象徴。軍の、いえ、お父様達によってそう印象付けられています。」

その和平の象徴が世界中を動き回る事は、

軍だけではなく民達にとっても宣伝効果が得られます。

事実、基地での教導は各地にTV局によって映像とされ、国で放送されていました。

実際に基地に赴いてモニターで見学した者も少なくないと聞きます。

誰もが軍に興味関心を抱いている今、言葉ではなく、実際に行動に移した方が効果的でしょう」

なるほど。

そんな裏事情がある事は知らなかった。

確かにそんな状況であれば、言葉よりも行動。

世界単位の演説より実際にナデシコを目にした方が効果的だろうな。ナデシコの世界一周は世界中のメディアによって注目されているだろうし。

あれだろ？ 飛行機に何かしらのキャラを載せるような奴と同じ。

ナデシコはそれ単体で和平を主張しているようなものだからな。

かなりの宣伝効果が得られる事は間違いないだろう。

「また、ナデシコの実績は誇張表現ではないと他の軍人に認識させる必要があった。

他の軍人との交流が著しく少なかったナデシコです。

謂れない噂や捻じ曲がった真実などがあつた筈。

実体を知らないものを自身にとって都合良く解釈してしまうのが人間という生き物。

ナデシコクルーと交流を持たせ、

ナデシコの事を理解してもらい、結果として和平を考えさせた。

ナデシコへの不審の払拭がそのまま和平に対する不審の払拭に繋がりますから。

同時に、ナデシコへの頼もしさはそのまま和平派への頼もしさに変わる。

この教導任務は全てお父様の和平誘導の為のもの、戦力の向上な

んで副産物に過ぎません」

・・・なんとまあ・・・。

「艦長。凄い」

「そこまで考えてたなんて・・・」

いや、本当に凄い。

俺もこの任務の意図を少ない情報から必死に考えてたけど・・・。
ここまで尤もらしい結論には到らなかった。

完全に敗北、正に脱帽って感じ。

「ユリカ」

「どうですか？ お父様」

ゴクリッ。

真剣な表情のミスマル司令に対して同じく真剣な表情で返すユリカ嬢。

その光景はいつもの親子のものではなく、互いに有能な軍人の図。
こんな光景が見られるなんて夢にも思わなか。

「完璧だ。ユリカアアア！」

「やったあああ！ 一生懸命考えた甲斐があった！」

「それでこそ、私の娘だ！」

「もちろんです！ お父様！」

・・・訂正。

ミスマル司令。

貴方はやっぱり唯の親馬鹿じゃなかった。

・・・凄い親馬鹿だったよ。

せつかく珍しい親子の姿が見られると思ったのに・・・。
いや、これでこそ、なのかもしれないな。

「・・・あ」

「コホンッ」

流石に強引グマイウェイなミスマル親子でも周囲の冷たい視線には
気付くか。

必死に格好付けたつてもう遅いですよ、二人とも。

「さて、先程娘が言った通り、諸君らの教導には意図があった」

だから、今更遅いですつてば。

「今更私や政治家が演説を行おうとも大した効果は得られないと思
ったのだ。

その為、こうしてナデシコを利用する形となってしまうた。申し
訳ない事をしたな」

いや、別にそういう形での利用なら構わないんですけどね。
教導っていつても俺達も教えられる事が多かったし。

有意義だった事に違いはないから。

「教導という意味でも大きな成果を残している。

流石はナデシコ。私の期待以上の事やってのける」

そこに痺れも憧れもしてくれないんですね、分かります。

「後は君達を含めた地球人達の判断に委ねるまでだ」

これ以上地球の民達に出来る事はない。
彼らの事を信じて、俺達軍人は最終決戦に向けて……。

「では、これよりナデシコ及び極東方面軍は地球を発ち、宇宙に昇る。」

順次、部隊を宇宙に打ち上げていき、最後はキクザクラとナデシコとなるう。

覚悟が出来次第、私に連絡をしてくれ。私はキクザクラにて君達の答えを待つ」

そういつて立ち去っていくミスマル司令。

「……………」

「……………」

司令が去った後のブリッジが静寂に包まれる。

「艦長。それでは先程話しました通り……………」

「……………はい。プロスさん。お願いします」

そんな沈黙を破ったのはプロスさん。

先程話したって……………どういう事だろう？

「メグミさん。この放送がナデシコ全体に届くようにしたいのですが、お願いできますか」

「あ、はい」

この状況で何故にプロスさん？

ネルガル関係って事？ でも、ナデシコは既にネルガルと決別して・

・・・

「終わりました。これで大丈夫です」

「ありがとうございます。メグミさん」

メグミさんからの返答を受け、プロスさんが移動する。

そこは普段艦長がいる場所。

ユリカ嬢はその場所を受け渡し、後方に回った。

・・・本当にどういう事だろうか？

「ナデシコクルーの皆様。これまでの長い長いナデシコ生活、お疲れ様でした」

・・・え？

「これよりナデシコは名実共に地球連合軍の軍艦となります。

皆様は軍属とはいえ、望んで連合軍に入隊した方々ではありませんせん。

ネルガルの契約に則り、ここまでナデシコ生活を強制して参りました。

その事に対して、私達ネルガル側は皆様に大変申し訳なく思っております」

プロスさん。

それって・・・。

「既にネルガルだけのものではないナデシコやクルーの皆様ですが、クルーの皆様の人事権に関しては少なからず権力を与えられています。

今までは降りたくとも契約上の理由で降りられなかった事もあつ

たでしょう。

ですが、この最終決戦では自ら死地に赴く事となります。死亡してしまう可能性も少なからずあります、いえ、むしろ高いでしょう。

そんな地に契約という理由だけで赴かせるのはあまりにも不条理。その点を考慮し、先程ミスマル司令とお話した結果、ナデシコクルーの皆様にはナデシコを降りて頂く事となった次第です。

皆様はこれより木連との戦争を忘れ、一地球人として平穏な生活を送って下さい」

・・・嘘・・・だろ？

そんな一方的な・・・。

そっちの方が不条理だろうが！

「艦長！ これは」

「私から言う事は何もありません」

「ですが！」

「そうだよ！ どういう事だ！？ これは！」

「一方的過ぎないかしら？」

「納得できません！」

「降りるなんて言われても降りないからね！」

「おう！ 絶対に降りないぞ！」

「そうです！」

「勝手過ぎるわ！ 私達の生き方は私達で決める！」

「・・・そうです。話し合いもせずに決めないで下さい」

誰もが反発を覚えた。

それはそうだ。

俺達はナデシコこそが自分の居場所だと思っているんだから。

家から追い出されて簡単に納得できる人間はない。
たとえそれが危険な場所に赴く戦艦であったとしても……。
あまりにも勝手過ぎる。

「以上です。それでは、皆様荷物を纏め、降機して下さい。」

なお、再就職先としてはきちんとネルガルが準備してありますのでご心配なく」

「ちょ、ちよっと！ プロスさん！」

「以上で連絡を終わりとします。決定事項ですので、何を言っても変更はありません」

「プロスさん！」

去っていくプロスさんに必死に声をかける。

それでも、俺の、俺達の声は届く事なく……。

「艦長はどうするんですか？」

視線がユリカ嬢に集まる。

ユリカ嬢もナデシコを降ろされるのだろうか？

「……私は……」

「ユリカと僕はこの艦の艦長と副長だ。降りる訳にはいかない」

俯くユリカ嬢を庇うようにジュンが告げる。

「それなら！」

俺達だって誇りをもってナデシコに乗っている。

役職なんか関係ない。

艦長と副長だから残るといふのならば、俺達はナデシコクルーだか

らという理由残れる筈だ。

「これは軍の決定事項だ」

「決定事項？」

だから・・・何だというのだ！

「決定事項だから何だと言っんです！ 俺は絶対に認めません！」

ここまで和平の為にやってきて・・・。

今更降りるだつて？

ふさげるなよ！ 最後まで仕事をやり遂げないで平穩なんて望める訳ないだろうが！

平穩は望んでるさ。でもな、それは戦争をきちんと終わらせた上で平穩なんだよ。

こんな中途半端な平穩。与えられても喜べる訳がないだろうが！

「・・・今に新しいクルーが搭乗してくる。すぐに降りる準備を始めて欲しい」

「ジュン。お前はこれでいいのか？」

アキトさんが視線で問う。

殺気交じりの鋭い視線で。

「・・・改めて言う。すぐに降りる準備を始め、降機してくれ」

「ジュン！」

「行くよ。ユリカ」

「うん。ジュン君」

俯くユリカ嬢を支えながらジュンが去っていく。

「・・・どういう事だよ、これ」

意味が分からない。

こんなにも頭が真っ白になるのは初めてだ。

・・・こんなにも苛立ちで腸わたが煮えくりかえるのは初めてだ。

「どういう事なんだよ！ チクシヨオツオオオオー！」

ドガンッ！

生まれて初めて、あらん限りの力で地面を叩いた。

その後、ナデシコクルーは全員ナデシコから降ろされ、基地内にある施設に移動させられた。

荷物も完全に降ろされ、俺達の家であったナデシコに最早俺達の居場所はない。

すぐに新しいクルーも搭乗し、それぞれの役職へと就いていった。

ナデシコクルーはこれよりナデシコクルーではなく一般人として生きる事になる。

そんなの・・・。

「認められる訳がないだろ」

この時、俺の脳裏に浮かんだのはあの光景。

ナデシコが軍の拘束を振り切って宇宙へと飛び出したあの光景だった・・・。

第一百七十七話（後書き）

改めて、お待たせしました。

一週間も前に投稿し、ようやくの投稿。

今日までに就職関係で福島に行ったり、テストが始まったりと……。

言い訳になってしまいましたが、どうかお許し下さい。

早く投稿できるよう上手く時間を使っていきますので……。

さて、色々と複雑なナデシコ勢です。

どうなることやら……。

もう先が予想できた作者の思考を完全に読んじやってる方々。

僕の生き甲斐は予想外だと思わせる事である以上、宿敵ですな。

今回に関しては分かりやすいかもしれませんが……。

気になる方はミスマル司令の発言をよく観察すれば自ずと……ね。

それでは、次回をお楽しみに！

少なくとも一週間に一つは確実に投稿してみせます！

第一百十八話（前書き）

やりきった・・・。

これで次の更新は来週でも許されるだろう。
なんて勝手に言ってる作者です。

どうぞ。

第一百十八話

- 「ナデシコはどうしたんだ？ 中々飛び立つ様子を見せないが」
- 「出航に手間取っているんでしょうか？」
- 「そうかもしれないな。なに、すぐに来るだろう」
- 「来て貰わなければ困ります。彼らが私達の希望ですから」
- 「希望・・・か」
- 「艦長？ 如何しました？」
- 「いや、彼らも同じ人間だというのに、
- あまりにも大きな責任を背負わせて良いのだろうかとな」
- 「艦長・・・」
- 「ましてや彼らは自ら志願して軍に入った者ではない。
- 優秀とはいえ、我々は民間人の手を借りようとしているんだ」
- 「・・・菌痒いですね」
- 「うむ。軍人である我らだけで決着をつけられればいいのだが・・・」
- 「ナデシコの力を借りずに和平なんて成し遂げられません」
- 「悔しいが、彼らの力を頼るしかないと・・・」
- 「・・・はい」
- 「君は死を覚悟しているかね？」
- 「無論であります。入隊時より覚悟は出来ております」
- 「そうか」
- 「艦長は違つのでありますか？」
- 「愚問だな。とうに出来ている」
- 「それであるならば、一体何故こんな事を？」
- 「彼らにはあるのだろうか？ 死ぬ事への覚悟が」

「ナデシコのクルーならばあるのではないでしょうか？」

「……いや、分かんぞ。彼らはまだ軍人になってからの日が浅い」

「そうでしょうか？ 最早民間人であるうがなかるうが関係ないのでは？」

「そうであれば良い。そうであれば杞憂に終わる。だが……」

「覚悟なき者は最後まで生き残れないものだ。たとえ腕が確かであるうとな」

「艦長……」

「確かめる必要があるのかもしれない」

彼らに、ナデシコに死を恐れない真の覚悟があるのかを」

SIDE MINATO

「コウキ君。どうする？ これから」

「……コウキさん」

ナデシコクルーがナデシコから降ろされた。

その衝撃的な事実から数時間後の今。

もうそろそろナデシコが出航する頃だろうなあ……。

「ミナトさん、セレスちゃん」

降ろされた私達にはそれぞれ部屋が与えられた。

その部屋は昨日まで違う人物が使っていた部屋だったりする。

今、大体の軍人は全ての荷物を纏めて空の上。
最終決戦だからこそ、何も残さなかったんだと思うわ。
それぐらいの覚悟があるって……。
その空いた部屋に入らされる気分ってのはそれはもう複雑なもの。
仕方がないとは言え、最終決戦を前に逃亡した形になっちゃったし。
裏切ったっていうか、裏切らざるを得ないというか……。
ともかくにも複雑なのよ。

「俺……」

そんな私は今、コウキ君の部屋にいる。
部屋の前でどうしようか悩んでいる風だったセレセレを引き連れて
その姿に癒されたのは私達だけの秘密よ。

「やっぱりこのままじゃ納得できません」
「それは……私もそうよ。でも……」

軍の決定事項に逆らえる訳がないじゃない。

「……コウキさん……」

セレセレも心配そうにコウキ君を見ている。
どうしようもない現状。
打開しようにも手段がない現状。
私達に成す術は……。

「ずっと考えていたんです」

「え？」

「どうすればこの状況を打開できるか……」

「うん」

それは私だつて考えた。
でも・・・私一人じゃとても・・・。

「ミナトさん」

「何？」

「ミナトさんはナデシコが好きですか？」

ナデシコが好き？

そんなの・・・。

「当たり前じゃない。私の、ううん、私達の家だもの、ナデシコは」

私達の家、私達の居場所を嫌う訳がない。

本当に居心地の良い素敵な場所。

「セレスちゃん」

「・・・はい」

「セレスちゃんはナデシコが好き？」

「・・・大好きです。コウキさんやミナトさん、皆さんに会えまじ
たから」

そうよね。セレセレも大好きよね。

きっとナデシコの誰もがナデシコを好きだと思つわよ、コウキ君。

「それで、コウキ君はどうなの？」

「もちろん、大好きです」

そうよね。

でも、それがどうしたっていうの？

「だからこそ、俺はナデシコを奪い返したいと思います」
「え？ 奪い返す」

穏やかじゃないわね……。

「ナデシコがここを飛び出すまでにまだ時間はある筈。
それまでに準備を整えて、一気に強奪して宇宙へ発ちます」

なるほど。

でも……そう簡単に行くかしら？

「ナデシコの守りは嚴重よ。それをどうやって掻い潜るつもり？」

既にナデシコには新しい軍人が配備されている。

そんな中を掻い潜って制圧するのは難しいだろうし、そもそも追いつ出す事が出来るかどうか……。

「皆が、皆がナデシコを好きだと、取り返したいと思ってくれば……
……出来ます」

「皆？ ナデシコクルー皆で取り返すの？」

「はい。ナデシコクルーはその道で一流以上の人材達。」

皆が協力すればどんな不可能だって不可能じゃなくなります」

……確かに。

ナデシコで出来ない事を想像する方が難しい。
でも……。

「ここで無茶をしたら、私達は軍からも敵視されるわよ」

コウキ君からナデシコが舞台となった物語の事は大体聞いている。その中でナデシコは連合軍に敵視され続けながら、最後まで信念を貫き通したらしい。

確かにその姿勢は立派だけど、所詮は一部隊。

国家単位、ううん、惑星単位での争いに終止符を打つ事なんて出来ない。

打てたとしても不完全、むしろ、更に戦況を悪くしてしまう可能性さえある。

それがコウキ君の語ったナデシコという物語の末路。

そして、その歴史の証明者であるアキト君もこの世界にいる。

あんな悲しい結末にたくない。

その一心で軍に敵対しないよう、むしろ、味方に付けるように動いてきた。

その成果が改革和平派という木連との和平を心の底から願う組織の設立。

でも、ここでそんな無茶な事したら、今までの苦勞が全て水の泡になっちゃう。

それでも・・・貴方はそんな事をするというの？ コウキ君。

「・・・俺達だから地球を救えるとか、俺達がいなければ勝てないとか。」

そんな思いがった事を考えている訳ではないんです。

ただ・・・後悔したくない。ただそれだけです。

何も終わっていないのに、何も成し遂げてないのに、脱落なんてしたくないんです」

「・・・そっか」

ふふっ。もう今更何を言っても考えを変えないでしょうに。

珍しく・・・なんて事もないか、決意を秘めた瞳。

いつの間にか、男の子から男の人になつたのね・・・。

今のコウキ君、男らしくて素敵よ。
台詞はあんまりカッコ良くないけどね。

「それなら、やるしかないわね」

「・・・はい」

コウキ君の言った通り、私達ナデシコクルー皆が揃えば怖いものなんて何一つない。

それなら、どんな困難であろうと乗り越えてみせようじゃない。

「協力してくれますか？ ミナトさん、セレスちゃん」

「当然」

「・・・もちろんです」

「ありがとうございます」

頭を下げるコウキ君。

「やめてよ、コウキ君、頭を下げるなんて」

「・・・私の意志でやるんです。コウキさんに言われたからじゃありません」

「そゆこと。分かってるわね、セレセレは」

「・・・ありがとうございます」

セレセレも成長してる。

何だろう。なんか嬉しいわね。

これが母親の心境って奴かしら。

「さて、それじゃあさっそく作戦を練りま

シューインッ。

「コウキ！ どうする!？」

「コウキさん！ どうしましょうか!？」

え、えつとお・・・。

「とりあえず、二人とも」

「え？ 何よ？」

「何でしょう?」

「ノックはしましょうね」

コウキ君の言う通り。

突然すぎる来訪は心臓に悪いわ。

「あ・・・」

「はい。すみません」

頂垂れるカエデちゃんとイツキちゃん。

べ、別にそこまで責めたつもりはないんだけどなあ・・・。

「それで、どうして二人はここに?」

コウキ君がそう問いかける。

うん、私も非常に気になるわ。

「コウキ！ なんとかしなさい!」

「はあ?」

と、突然、どういう事?

「おう、コウキ。流石は俺が認める男。ここで諦める奴じゃねえよな」

「もちろん、でも、その前に……」

「その前に？」

「ノックしろや！」

ゴンッ！

「グフツ。へっ。良いパンチだぜ」

そのまま崩れ落ちるガイ君。

……何なの？ このコント。

「失礼します」

「あら、メグミちゃん。もしかして、ガイ君と？」

「はい。奪われた秘密基地を取り戻すんだって。

マエヤマさんは秘密基地の隠れ倉庫にある秘密兵器。多分、考えがあるからって」

あらあら。

ここにもまたコウキ君を信頼する人がいたわ。解釈の仕方は釈然としないけど。

「とりあえず、詳しい話を聞こうじゃないか」

もう復活してるし。

メグミちゃん、貴方の彼氏、難儀な人ね。

もしかしたら不思議生物かもしれないわよ。

「さて、それじゃあ今度こそ作戦を」

シュインッ。

嫌な予感。

「コウキ！ 俺はこのまま諦めるつもりはないぞ」

「コウキ。またパパアと解決道具出して」

「こうキモン。助け・・・いまいちビシッと来ない名前ね」

リョーコちゃん、ヒカルちゃん、それに、イズミちゃんまで・・・
・・・もうノックは諦めた方が良くのかもしれないわね。

「俺は便利な未来ロボットじゃないぞ」

「似たようなものだよ。さっそく作戦会議といきましょうか」

「はあ・・・。もう諦めたよ」

コウキ君。強く生きなさい。

シュインッ。

「こんな事もあるつかと、といきてえ所だが、流石に想定外だ。手を貸せ、コウキ」

「ナデシコ出航まで凡そ一時間強。急いだ方が良くわね」

ウリバタケさんにイネスさんまで・・・。

コウキ君を信頼してくれているって自分のように嬉しいんだけど・・・。

「まずは場所を変えた方が良くもね」

「・・・はい」

流石にもう入りきれないわ。
もう満杯よ、この部屋。

シュインツ。

「コウキ。ようやく状況が掴めた。協力して・・・」

「目の前の光景にびっくり」

「皆さん、ここに集まっていたんですね、探しましたよ」

颯爽とクールに登場したアキト君。

でも、すぐさまこの光景にポカンとなる。

今更この空気からすぐにシリアスな空気にはならないでしょうね。

ちよっと滑稽よ、アキト君。

ま、アキト君にしては珍しい表情を見て、貴重な体験だったとは思っけど。

「とりあえず・・・」

とりあえず？

「皆さん、ノックはきちんとしましょう！ 礼儀ですから！」

「「「「「「「「「「「「はい「「「「「「「「「「「」

お後がよろしいようです。

あれ？ なんか違ったかしら？

S I D E O U T

「コウキ。お前がリーダーだ」

ナデシコクルー総勢二百人超に指示を送る。

リーダーとか柄じゃないんだけどな……。

まあ、頼まれたからにはきちんと仕事はこなしてみせる。

「荷物は纏めて積み込みます。コンテナを強奪して中に全部詰め込んでください」

連絡の取り合いはコミュニケーション。

どうやらオモイカネの効果範囲はここまでであるようだ。

この作戦を始める前、当然、クルーの皆に聞いた。

これは最後のチャンスだ。ここで乗る事を選択しなければ地球に残る事が出来る、と。

一方的とはいえ、降りたかった人からしてみれば千載一遇のチャンス。

降りたいといっても反対する気も責める気も毛頭なかった。

誰だって死ぬかもしれない戦場に立つのは嫌に決まってるから。

でも、だというのに、皆が、誰一人も欠ける事なく、集まってくれた。

ここにいるのは嫌という感情を胸の奥に抑え込めるだけの強い想いを持った者の集まり。

彼らとなら……なんだって出来る。

そう確信している自分がいた。

誰もがナデシコを愛し、取り返したいと。

誰もが最後までナデシコで行く末を見届けたいと。

そう願ってくれたんだ。

こんなにも嬉しい事はない。

「ルリちゃんはナデシコ、ラピスちゃんはキクザクラの監視を」
「了解」

「分かった」

まずは基地から両戦艦内を監視。

取り返すのはナデシコだが、

その後の行動を考えれば、キクザクラへの警戒も怠ってはならない。
一気に制圧といきたいが、何があるか分からないし、慎重に行こう
と思う。

もちろん、慎重かつ大胆に、というお約束は忘れてないぞ。

「セレスちゃんは基地内の制圧を。合図があつたら予定通りに」
「・・・はい」

現在、格納庫に隣り合わせで格納されているナデシコとキクザクラ。
最後に飛び立つ予定だから、それまで待機となっているからだろう。
突入する側からしてみれば都合だな。

外にあつたら見通しが良すぎて侵入するのが困難すぎる。

でも、室内だからといって油断できる訳ではない。

監視用のカメラを始めとして多くの監視用機器があるだろうしな。

誰からもバレないように侵入するには、どうにかしてそれらの目を
逸らさなければならぬ。

格納庫内を暗闇にして人の目を逸らし、監視カメラなどの機器を弄
つて映像などを捏造する。

手段としてはこれぐらいしかないだろうな。

「突入班。準備は？」

『いつでもいいぞ』

突入班は身体を鍛えているパイロット勢や血の気が多い整備班が担当。

昔にあったナデシコ奪還の時みたいで懐かしい。

「後続班。準備は？」

「いつでも大丈夫よ」

後続班は突入班が突入した後にそれぞれの準備を進める。

荷物を詰め込んだコンテナを中にしまったり、それぞれの配備場所で発進準備を進めたり。

彼らの役目も充分に重要だったりする。

「突入班はブリッジを制圧する事を最優先してください」

そうすれば、後は如何様にも出来る。

ブリッジさえ奪還してくれば、ルリ嬢、ラピス嬢、セレス嬢の三人を、

俺が抱えてボソソジャンプする事で安全かつ一瞬で艦内を制圧できるからな。

流石に危険だと分かっている所に子供三人を連れて行く訳にはいかない。

「私、子供じゃありません。少女です」

「私ももう立派な女性」

「・・・乙女です」

なんとも懐かしい台詞とその他二つ。

訂正致しましょう。女性の方々。

貴方達は立派な淑女です。

「コミュニケでこまめに連絡を取り合っようにしてください」

『了解した』

『こつちも了解よ』

「それじゃあ……」

「……ミッション・スタート」「」

少女三人の声で奪還ミッションが始まる。

ナデシコクルーは果たしてナデシコを奪還して漆黒の宙へ飛び立つ事が出来るのだろうか？

……なんてな。

そんなの愚問だ。出来るに決まってるさ。

なんていったって、俺達はナデシコクルーだからな。

『コンテナの積み込み、完了したわよ』

「了解。ブリッジクルーはこのルートからブリッジへ。他の方々もそれぞれの準備を」

『了解』

慌しく指示を出していく。

急遽立てられた簡易版作戦本部。

そこでは俺とオペレーター三人娘による忙しすぎる状況把握が行われていた。

「コウキ。キクザクラに動く様子はない」

「了解。気付いている様子は？」

「多分・・・ないと思う。警戒はしてるだろうけど」
うまくいったな。

侵入はどうやら気付かれずに成功したようだ。

「ルリちゃん。突入班の状況は？」

「格納庫制圧後、それぞれ散り、次々と制圧してってます」

流石だな。

「でも、おかしいです」

「え？」

「入れ違いに多くの軍人が乗り込んでいましたよね？」

「うん。もしかして・・・」

「はい。格納庫以外どこにもいません。どこかに集められているのでしょうか？」

俺達と入れ違うように多くの軍人が乗り込んでいたのを俺達は確認している。

でも、どうやら今のナデシコにはそれが確認できていないらしい。どこかに集中しているというのだろうか？

いや、それは考えづらい。

出航前であるナデシコ内。

それぞれが慌しく動き回っている筈だ。

それなのに人員をどこかに集中させる？

ありえないだろ、そんな事は。

「艦内に異常は？」

「ありません。ブリッジの前にはきちんと監視が配備されていますし」

乗り込んでいたであろう数と監視や番として配備されている数があまりにも合わない過ぎる。

ルリ嬢に調べられない場所に隠れている？

そんな場所があるのか？

まあ、監視カメラを通しての監視である以上、カメラがない位置もあり限界はあるのだが……。

それでもおかしすぎるだろ。

異常がない事が異常？

何だよ？ その矛盾は。

「ルリちゃんが監視できない場所ってある？」

「一つだけ」

あるのか……。

「それって？」

「ブリッジの中です。ブリッジ内だけは何故か異様にブロックされています」

ブリッジか……。

まさか乗り込んで人間全員がブリッジ内にいる訳ないしな。

彼らはどこに消えたんだ？

そもそもこんなにも無防備なのは一体……。

「攻められてくると思っていなかった？」

ありえる。ありえるが、それにしただっておかしいだろ。

監視がないならまだしも、人がいないってんだから。

「不自然だ。何もかも、不自然すぎる」

何か意味があるのか？

この状況に何かしらの意味があるのか？

「キクザクラが動いた」

クソツ。考えている暇はないか。

「どう動いたの？ ラピスちゃん」

「ナデシコ側の異変に気付いたのかも。砲身がナデシコに向いた」

砲身がナデシコ側に向いた？

「こんな狭い空間でそんな器用な事が出来るのか？」

「キクザクラのグラビティブラストは可動式。多少向きを変えられれば容易に可能」

そうか。忘れていた。

ナデシコと違い、キクザクラは可動式のグラビティブラスト。

火力の面で劣るものの連射性と使い勝手に優れている。

・・・まずいな。気付かれたらナデシコが落とされるかも。

いや、待てよ。ナデシコを落とすなんてありえないだろ。

ナデシコは和平の象徴だって艦長も言ってた。それを自ら落とすなんて・・・。

そういえば・・・。

『覚悟が出来次第、私に連絡をしてくれ。私はキクザクラにて君達の答えを待つ』

ミスマル司令はそんな事を言っていなかったか？

覚悟って何だ？ あの時準備の事だと思ったが……。

君達の答えを待つ？ 待つ必要なんてない筈だ。

今日、宇宙にあがる事は前から予定として決められていたんだから……。

今更、俺達に答えを求める必要なんて……ない。

覚悟、それは戦場に立つ覚悟か？

それとも、死をも厭わない覚悟の事か？

そうか。ミスマル司令、貴方は……。

『ブリッジ前に辿り着いた。監視も既に無力化済みだ』

『同じくブリッジ前に辿り着いたわ。コウキ君、次はどうすればいいの？』

お膳立ては整ったと……。

ミスマル司令、貴方が望んだ状況になった訳ですね。

「分かりました。今からそちらに飛びますのでお待ちを」

『え？ それじゃあ予定と』

「大丈夫です。三人とも、準備して」

貴方は問いたかったのですね？

試したかったですね？

俺達に覚悟があるかどうかを。

「3、2、1、せーの」

掛け声と同時にブリッジに駆け込む。

「・・・やっぱり来てしまいましたか」

そこに立つのはたったの四人。

ユリカ嬢、ジユン、プロスさん、ゴートさん。

さっきの強制退艦の時に例外として残った四人だけ。

他には誰も居らず、兵の姿なんて誰一人として確認できない。

「誰一人欠けず乗艦・・・ですか。せつかく元の生活に戻るチャンスでしたのに」

プロスさんが溜息を吐く。

やっぱり、貴方の意図はそれでしたか。

そして、それがミスマル司令の意図に繋がる。

「オモイカネに頼んで監視、いや、見守ってました？」

「はい。皆さんの姿はモニターできちんと」

でしょうね。

これで更に確信が深まった。

「コウキ。お前はもう分かっているのか？ この状況の意味する事を」

「ええ。ヒントは司令の言葉の中に含まれていたんです」

「司令の言葉？」

あの時は聞き流していたけど、この状況ならすぐにピンと来る筈。

「『覚悟が出来次第、私に連絡をしてくれ。私はキクザクラにて君

達の答えを待つ』

覚悟とは何でしょうか？　そして、司令は俺達のどんな答えを待っているのでしょうか？」

プロスさんの言った通り、俺達の始まりは全てネルガルとの契約。自らが望んで軍属となった訳ではない。

そんな俺達に欠けてるものは・・・覚悟。

軍人とは命を賭して自国民を守る為に存在している。

だが、ナデシコはどうだろうか？

果たして命を賭してまで戦えるだろうか？

もちろん、遊びでやっているとか真剣に考えていないとか、そんな風に思われていないだろう。

でも、命令の為ならば自ら命を捨てる程の覚悟はないと思う。

「俺達はこれから連合軍は最終決戦に挑まなければなりません」

その時、非人道的な行為をせざるを得ない事もあるだろう。

理不尽と思われるような命令もあるだろう。

でも、それに従わなければならぬのが軍人だ。

納得しなければならぬのが軍人だ。

いつまでも民間人気分であるナデシコがいれば、そこから崩される事があるかもしれない。

でも、勘違いはしないで欲しい。

司令はそのような事があっても無理矢理納得しろと言っている訳ではない。

そうだったら、このような行動を取らせる訳がないからな。

「最終決戦。そこは今まで以上に死と隣り合わせになるでしょう」

運が良い事にナデシコは今まで誰一人戦死者を出さずに済んでいる。

でも、いつまでもそれが続くとは限らない。

今まで以上に危険である最終決戦では誰かが死ぬことになるかもしれない。

それを分かかって、なお、そこに立つ勇氣があるのか？ 覺悟があるのか？

ミスマル司令はそう俺達に問いかけているんだと思う。

「その場に立つ勇氣、覺悟。俺達がここにいるのはネルガルがきっかけです。」

でも、その場に立つならば、ネルガルからのなし崩しではなく、自らが選んで立つべき。

プロスさんはその選択を俺達に委ねました。降りるも自由、乗るも自由。自らで選びなさいと」

「はい。仰る通りです」

「そして、司令はたとえ軍と対立しようとも自らの意思を貫いて見せると。」

必ず成し遂げてみせると。そんな意思の強さを確かめたかったんだと思います。

今、俺達はここにいる。ここに立って、前を向いている。

それは誰もが自らの意思で選択し、決戦への、死の覺悟を決めたからですよね？」

その言葉に頷きで返すクルー達。

「覺悟がない人間はたとえ腕が良くてもすぐに死ぬ。

死から目を背けるのではなく、死を受け止め、死への覺悟を決めた人間。」

そんな人間こそが誰よりも長く生き残りますからね。

言うでしょ？ 死中に活ありって。覺悟を決めた人間が結局一番強いんです」

ちよつと意味は違つかもしれないけど。

「艦長。間違っていますか？」

「アハハ。お父様の狙い、完全に読まれちゃってますね」

「どうして気付いたんだい？ マエヤマ」

考えれば誰でも気付くと思うけどな。

まあ、あえて言うなら……。

「乗り込んだ筈の軍人。それってもしかしたらキクザクラのクルーじゃありませんか？」

すれ違つた人間は皆自信に溢れる人間達だったからな。

精鋭という精鋭は皆宇宙にあがっている筈だろう？

そんな人間は既に部隊として出来上がっている筈だ。

それをわざわざナデシコに乗せるってのも違和感があったし……。

何より最後まで残るっていうナデシコに人を乗せる割には余る筈の戦艦もなかったしな。

よくよく考えれば違和感だらけだ。

「よく分かりましたね」

「考えれば分かりますよ。わざわざキクザクラを最後まで残した。

司令はなんだかんだ言つて俺達を信じていてくれた。そうでなければそんな事は出来ません」

ここでもしナデシコクルーが乗る事を選ばなければ……。地球の最高戦力の一つであるナデシコを地球に放置する事になってしまう。

それは最終決戦へ挑む上で愚か極まりない行為だ。

確かに戦艦の一つや二つで戦況をどうこうする事は出来ない。でも、結局はその一つ二つの積み重ねで艦隊戦は行われる。重要な事に変わりはないんだ。

「改めて・・・艦長」

「はい」

「ナデシコクルー。全員搭乗しました！」

「了解しました。さっそくお父様に連絡をします。覚悟を決めた」と
「お願いします」

さっそくと言わんばかりに艦長が司令へと報告する。

その後姿を見て、ようやく安堵の息を吐く事が出来た。

無事にナデシコへと戻ってくる事が出来たんだな。

そんな安堵の息を。

こうして、ナデシコクルーは司令に対して覚悟を示し、無事にナデシコに戻ってくる事が出来た。

そして、これでもうナデシコは立派な軍の一部隊だ。

たとえ総選挙で徹底抗戦が支持されたとしてもそれに従う義務が出てくる。

そうなったら、従うしかないだろうな。

それが自らで選んだ道なんだから。

・・・うん、この事は忘れよう。

今は何も考えず、ただ目の前の地球をボーッと眺めるだけでいいさ。あれから、予定通りナデシコは月へと向かって飛び立った。

今はその途中であり、地球は青かったと思わず眩きなくなる光景が目の前に浮かぶ。

もしかしたら見納めになるかもしれない地球だからな。

何も考えず眺める事があっても良いと思うんだ。

「・・・はあ・・・」

地球と木連。その結末。

これから一体どうなるんだろう？

「・・・思い通りにいかない・・・。まあそれが人生なんだろうけど」

このどこまでも青い地球。

全てを包み込んでくれるようなこの優しい青は受け入れる人間を選ぶのかな？

「なんて、考えてもしょうがないか」

それからしばらくの間、俺はひたすらあの青を見詰めていた。

第一百十八話（後書き）

大方の予想通りの終わり方となった事でしょう。

覚悟。たった二文字ですが、重く深い言葉ですよね。

戦場に立つ勇氣。死をも厭わない覚悟。

改めて確認するだけの意味があるものだと思います。

また、これでナデシコの強さが更に増したのではないかと思います。覚悟を決めた者は総じて強いものですからね。

それでは、次回もよろしくお願いします

第一百十九話（前書き）

繋ぎとつか幕間？

もしかしたら、最後のセレス分補給になるかも。
・・・いや、それはないか。

第一百九話

「うし。これで良しつと」

状況提供活動は今でも継続中です。

今回の議題は『和平と徹底抗戦 その先にあるもの』

どうしても自身が和平派なので和平に偏りがちになってしまうが、出来るだけ客観的な見方になるように努めつつ、投げかけるような内容にしてみた。

戦争の結末。

数多くあるが、どれにしたって最終的には停戦から和平。

無論、勝ち負けがハッキリしている為、有利・不利な条件は付くが、徹底抗戦を主張した所で最後まで殲滅する事の方が難しい。

出来たとしても火種を残してしまう事の方が多い。

結局、徹底抗戦も期間を延長した後の和平なのではないかという結論。

今、和平を結ぶか、後々に和平を結ぶか。

そのメリット・デメリット、それらを書き綴ってみた。

もちろん、殲滅戦の事も一つの想定として考えてはいるのだが・・・。

無理でしょ。

いや、食料の輸出や物資の輸出を失くせば出来なくはないと思うけど・・・。

遠過ぎる、木星が。

本格的に攻める前に対策を取られてしまいかもしれないし。

仕掛けるにしても、殲滅戦だからって戦力を集中させれば地球の足元がお留守に。

攻め込むつもりが、攻め込まれて降伏なんてシャレにならない。とにもかくにも不可能に近いという結論に達した。徹底抗戦派もそれは理解していると思う。

徹底抗戦派の意見を聞いてみた所、和平自体には反対していない。でも、今ここで和平を結ぶのには納得できない。

そんな意見が殆どだったし。

まあ、稀に心底から殲滅戦を仕掛ける事を願う人もいたけど。

あ、これは情報提供に対するコメントを参考にしています。

色々な考え方がいて、自分としても参考になる。

同じ徹底抗戦派でも意見は異なるんだなと実感。

そういう意味では和平派の中にも同じ意見の人間がいるし。

手を取り合う事も出来なくはない・・・のかもしれない。

「戦争の結末。終戦の着地点・・・か」

一言に和平といっても、その考えている内容は違う。

最終決戦を迎えずにすぐにも和平を結ぼうと考えている者。

最終決戦を勝利で飾り、有利な条件で和平を結ぼうと考えている者。

最終決戦で互いに戦力を消耗し、なし崩し的に停戦しようと考えている者。

また、徹底抗戦にしても、その意味合いは人によって異なってくる。最終決戦を機に敵戦力の消耗を図り、降伏勧告を出そうと考えている者。

最終決戦で敵を殲滅し、その勢いに乗ったまま木連全てを殲滅しようと考えている者。

最終決戦なんて無視して、木連本国に核をぶっ放そうなんていう強硬策を考えている者。

一つの言葉からこれだけ意味が異なってくるんだ。

その点を考慮したら、

たとえ総選挙といえども全ての人間が満足できる結論には至らない

だろう。

その辺りはどうするつもりなんだろうな？

ま、考えられるとしたら、結論のみを国民に決めさせ、後の細かい所は政府で話し合って決めるってのが妥当かな。

結局、誰もが納得できる答えなんてないんだから、妥協するしかない。

難しい問題だよな、戦争ってのは。

「最終決戦か・・・」

あと数日で始まるんだな、木連との決戦が。

漆黒の宙を駆けるナデシコとキクザクラ。

目的地である月まであと六日といった所か？

余裕を持って出発したので、道中は平穩そのもの。

急いでいる様子も慌しい様子もない。

まあ、ナデシコの連中が慌てる所はあまり想像できないが・・・。

こうして決戦へ向けて移動しているのだが・・・あまり実感が湧いていなかったりする。

死ぬかもしれない、これで全てが決まるかもしれない。

そんな重要かつ責任重大な場面だというのに・・・。

あれかな？ どう行動して良いか具体的な方向性が見えないからとか。

でも、まあ、今から余計な心配するより良いか。

この一週間強の間に何か出来る事があるかもしれないし。

「俺が今やれる事・・・とりあえず幾つか情報とそれに対する考察でもアップしておくかな」

そろそろ木連の事も伝えておくべきだな。

たとえば木連の生活環境とかどのような戦力を持っているかとか。

いや、もつと言え、木連に欠かせないものとか結構意味があるかも。

そういえば……。

「木連では人員不足を無人兵器で補っていたよな？」

地球のような資源も人員もない木連。

資源は置いておくとして、人員という面で木連は苦勞している。機械の整備をするにも人を使いたくないのが実状。

そんな時、彼らは無人兵器を活用する事でその人員の差を埋めている。

たとえば機械の整備にバツタを使ったりとか。

それって今更だけどかなり便利だよな。

人が立ち入らない所とかにも回せるし。

労働の補佐として大活躍してくれそうだな。

使うとしたら……復興、そう、火星の復興なんかで大きな戦力になってくれるんじゃないか？

うん。決定。次の議題は……。

「『無人兵器の平和的活用方法について』にし

シュインッ。

「やっほ。コウキ君」

「う、うわっ！」

急いで画面上から消去。

み、見られてないよな？

「どうしたの？ そんなに慌てて」

「ミ、ミナトさんこそ突然どうしたんですか？ ノックもしないで」「元々ノックなんてしないじゃない。コウキ君の部屋に入る時も私の部屋に入る時も」

「そ、そうですが・・・」

こう、なんとというか、男のプライベートタイムというか。そんな時間も必要なんじゃないかって。

「ん？ なんか作業してたみたいね」

「え？ あ、ああ、色々調べものを」

「ふん」

何でしょうか？

その怪しい笑みは。

と、とにかく、話を変えねば。

「ミ、ミナトさんはどうしてここに？」

「あら？ 用がなくちゃ来ちゃいけないの？」

「そういう訳じゃありませんが・・・」

「嫌？」

「いえ。嬉しいです」

ただ、ちょっと間が悪かったというか、そんな感じ。

「いよいよ決戦じゃない。だから、緊張してるかなって」

まあ、確かにそうなんだけど。

「実感が湧かないんですね」

「そっか。コウキ君もなんだ」

「ミナトさんもですか？」

それはびっくり。

俺以外にもそんな人がいたんだな。

「まだ時間があるし、今もこんな状況じゃない？」

まあ、皆、のんびりしてますからね。

「だからかな、決戦間近だったのに、緊張もしてないし、慌ててもいないのよね」

「同感です」

激しく。

「ま、その話は置いて、ちょっと付いて来ない？」

「え？」

付いて来るってどこに？

「いいから、いいから」

強引に手を取り、連れて行かれる。

ミナトさんに逆らえる訳もなく、こつして僕はされるがままに付いて行ったとさ。

「食堂？」

連れて行かれた先はナデシコ内の食堂。
ちよつどおやつを食べるのには良いぐらいの時間だけど……。
何でここに連れて来られたんだろう。

「そろそろ出来ると思うんだけど……」
「出来る？」

何がだ？

「お、来たね」
「ホウメイさん」

その一言と共に厨房から出てきたのはホウメイさん。
そりゃあ食堂といえばホウメイさんだけど……。

「なんかしましたか？ 俺」

何か仕出かしちまったか？
ホウメイさんが俺に用があるなんて珍し過ぎる。
汚してないよな？ 残してないよな？
え？ マジでなんかしたっけか？

「用があるのは私じゃないよ」
「え？」
「ほら。出てきなさい」

厨房に向かって声をかけるホウメイさん。
出てくるって誰さ？

「・・・お待たせしました」
「セレスちゃん？」

なんでセレス嬢が厨房から？

「ふふっ。セレセレがね。コウキ君にご馳走したいんだって」
「ご馳走？」

「・・・はい。あの・・・これです」

背中に回してあった手を前に持ってきて・・・。

「・・・どうぞ」

「これは・・・クッキーか」

少し形は不恰好だけど、とっても美味しそうなお色。
手作り感が溢れてて、なんか微笑ましくなる。

「・・・どうぞ」

「えっと、頂きます」

一口で食べるのにちょうど良いサイズ。
手に取って、そのまま・・・パクツと。

シャクシャク。

「うむ」

「・・・どうですか？」

ゴクリッ。

そ、そんなに唾を飲み込む程、緊張しなくて良いのに。普通に……。

「美味しいよ、とつても」

初めて作ったとは思えないくらい美味しい。

「……や、やりました」

握り拳で喜びを表すセレス嬢。

……癒されるなあ。

しかし、なんであんなに緊張してたのかして。

「良かったじゃないか」

「……はい。ありがとうございます。ホウメイさん」

「なに。私は少しアドバイスしただけ。全部自分の力だよ」

「……それでも、ホウメイさんのお陰です」

何？ 新たな師弟関係って奴？

「凄く嬉しいんだけど……」

どうしてクッキー？

「ほら。最近ずっと忙しかったじゃない」

「ええ。まあ」

教導任務は休みなくぶっ続けだったし、その前も色々慌しかったもんな。

「前からお料理をしてみたいって言ってたんだけど、時間が取れなくて」

「それで、こうして？」

「ええ。今はそれほど忙しくないでしょ？」

「それで、お手軽にクッキーでも作ってみようかなって」

「なるほど」

なんか感慨深い。

もう普通の女の子じゃないか、セレス嬢。

自分は普通じゃないなんて悩んでた時期があったなんて今じゃ信じられないよ。

「セレスちゃん。クッキー作り楽しかった？」

「・・・はい！」

元気があってよろしい。

その笑顔がクツキーを更に美味しくしてくれるよ。

「そっか。良く頑張りました」

ナデナデ。

「・・・頑張った甲斐がありました」

「え？」

「・・・なんでもない・・・です」

ナデナデ。

いつもの二倍増し。

なんか分からないけど、凄く嬉しい。

「ふふつ。コウキ君。そんなにやってたら髪型崩れちゃうわよ」

「あ、そうだったね。ごめんごめん」

「・・・あ」

手を話そうと思ったけど・・・。

ナデナデ。

「もうセレセレに甘いんだから」

だってねえ、あんな寂しそうな顔をされたら、やめる事なんて出来ません。

「ハツハツハ。いいねえ。このアットホームな感じ」

貴方のお陰です、ホウメイさん。

「今日はありがとうございました」

お陰でセレス嬢がまた女の子として一つ成長しました。

「私も楽しかったから構わないよ。ねえ、セレスちゃん」

「・・・はい」

「またいつでもおいで。次はケーキでも作ろうか」

「・・・良いんですか?」

「もちろん」

なんかホウメイさんがお母さんの顔をしている。

結構子供好きっぽいもんな。
お母さんと娘、親子でお菓子作りか。
なんか家庭的な光景でいいよな。
でも、折角だから、セレスちゃんと・・・。
チラッ。

「なによあ？ その顔は」

べ、別になんでもないですよ、ミナトさん。

「ホウメイさん！」

「何だい？ そんな大声出して」

「その時は私も一緒にやらせてください」

「一緒に？」

ジロジロとこちらを見ないで下さい。

「なるほどね。ま、いいんじゃないかい」

「ありがとうございます」

「もっと難しい本格的な奴の方がいいかい？」

「いえ。セレスと一緒に楽しく出来るようなもので」

「ハハッ。分かったよ」

相変わらず鋭い。

俺の考えた事が完全に読まれている。

「私だってケーキぐらい作れるわよ？」

でも、折角だから、ホウメイさんに習うの

「何も聞いてませんか？」

「バカッ。もう知らない」

拗ねてるミナトさんも可愛いな。

ちゃんとミナトさんがお菓子作りも出来るって知ってますよ。

ただ、なんとなく、セレス嬢にお菓子作りを教えるのはミナトさんがいいなって。

別に作れるのかなんて疑ってませんから。

ま、この展開は願ったり叶ったりだから勘違いしてくれてラッキーって感じだけど。

「ハッハッハ。いい歳した女が子供みたいに拗ねちゃって」

「拗ねてません」

「ま、見返してやるんだね。色々な意味で」

あらら？ ホウメイさんも勘違い？

「しかし、いつも冷静なアンタも彼氏の前じゃ女の子なんだねえ」

「な、そ、そんな事ないです。ね、コウキ君」

「そうですね。でも、偶にこういう姿を見ると可愛く思います」

「なっ！」

照れてるミナトさんも可愛いな。

「ハッハッハ。こんな所で惚気なんか聞かせないでおくれよ」

朗らかに笑うホウメイさん。

この喻えは失礼かもしれないけど、なんかナデシコクルーのお母さんって感じ。

いつも美味しい料理と心地の良い雰囲気を提供、ありがとうございます。

「それじゃあ私は戻るよ」

「はい。ありがとうございます」

「二度もお礼はいらないよ。ま、ゆっくりしていきな」

なんとも清々しい人だ。

「・・・あの・・・」

「ん？ 何だい？」

「・・・今度もまた食べてくれますか？」

セレス嬢の作ったお菓子を食べるかって？

「そりゃあもちろん」

食べるに決まってるだろ。

「・・・あの、それで・・・」

「うん」

「・・・美味しかったら、あの・・・褒めてください」

ハッハッハ。愛い奴め。

「美味しかったらね」

「・・・意地悪です」

頬を膨らませたって可愛いだけだぞ。

「美味しく作ってくれるんでしょう？」

「・・・もちろんです」

「それなら、問題ないね」
「・・・やっぱり意地悪です」

可愛い子に意地悪したくなるのが男の子なんです、なんて。

「それじゃあ私も美味しかったら褒めてもらおうと」

「・・・ミナトさんもですか？」

「ええ。良いわよね？ コウキ君」

ウインクされてしまった。

「そりゃあもちろん」

美味しかったら褒めますよ。

まあ、美味しくなくても褒めるだろうけど・・・。

「あつと言わせてあげるんだから」

「・・・負けません」

「ふふっ。どっちがコウキ君に美味しいって言ってもらえるか勝負ね、セレセレ」

「・・・はい。絶対に私の方が美味しいって言わせてみせます」

「私だって負けないんだから」

子供のように張り合うミナトさんとセレス嬢。

なんかこういうのも新鮮で良いな、なんて思ってみたり。

こういう親子の形もありだよな。

「楽しみに待ってるよ」

本当に楽しみでしょうがない。

「よし。セレスちゃん、ミナトさん」

「・・・はい」

「何？ コウキ君」

「今日は一緒に寝ようか」

今日は家族らしい事をした。
ふとそんな事を思ったんだ。

「・・・はい」

「ふふつ。そうね」

家族のぬくもりと共に就寝。

これ以上の幸せって中々ないよな？

セレス嬢を中心とした川の字。

ほのぼのと幸せを感じる一日の終わりだったとき。

「お、片付けもちゃんとやってるじゃないか。偉い偉い」

流石だぜ！ セレス嬢。

第一百十九話（後書き）

昔のセレス嬢を知る私としては感慨深い話です。

コンプレックスを持ち、自分を蔑んでいたセレス嬢が・・・成長したものだ。

・・・なんて、自分でいう事じゃありませんよね、はい。

決戦前にほのぼのを挟みたかった。

次回よりは決戦に関連した事ばかり。

熱い展開に出来たら嬉しいですね。

それでは、次回もよろしくお願いします。

第二百一十話（前書き）

さて、決戦間近という事で・・・。

イベントが発生します。

第二百一十話

「え？ 呼び出し？ 俺をですか？」

今日も今日で月へと移動中。

久しぶりにゆつくりとした時間を過ごせると思ってたんだけど……。
やっぱりそんな暇はありませんよね。

「はい。お父様からタンポポについて話をしたいと」

タンポポ？

ああ、宇宙でも調整をしたいって事か。
地上用じゃ不十分だもんな。

俺としても最後まできちんと仕事は果たしたいし……。

「了解です。セレスちゃんも連れて行って良いですか？」

この道では既に俺と並ぶセレス嬢。
連れて行かないのは勿体ないですよ。

「セレスちゃんをですか？」

「はい。タンポポの事はセレスちゃんの方が詳しいかもしれませ
んし」

タンポポの調整は忙しい俺に代わりセレス嬢が殆どを担ってくれた。
もちろん、俺や周りの人間がフォローをしていから成り立ったんだ
ろうけど……。

少なくとも俺よりも接する時間は多かった。

「えっと、分かりました。セレスちゃん。お願いできますか？」

「・・・分かりました。コウキさん。行きましょう」

「あ、はい」

颯爽と歩き出すセレス嬢。

あたかも俺が助手のようで、なんか慌ててしまった。

カツッ、カツッ。

出来る女性だと言わんばかりに前だけを向いて堂々と歩くセレス嬢。小柄な身体で、ちよっとミスマツチだけど、そんな姿も微笑ましい。

「・・・本当にこれぐらいの年齢の子は成長が早いな」

前を歩くセレス嬢の背中を見ていたら、ふとそう思った。

いつの間にか背も伸びてるし。

気付いたら、抜かされてるなんて事に・・・。

寂しいような、嬉しいような、なんというか複雑な気分です。

「・・・どうかしましたか？ コウキさん」

「いえ。なんでもありません。教授」

「・・・え？」

「ハハッ。なんでもないよ」

つい言ってしまったただけなので、スルーをお願いします。

「ヒナギクでキクザクラに行くつもりだから、ひとまず格納庫に行こうか」

「・・・はい」

ヒナギクが便利過ぎる。

これはマジでヒナギクによる宇宙旅行時代が訪れるかもな。

エネルギーコストがかからないとか、どんだけだよ。

前の世界じゃ資源の枯渇とかで悩んでたつてのに。

いずれ相転移エンジンでエネルギー関連全てを賄えるようになるかも。

重力波を中継する装置も開発されているし・・・。

火星でのエネルギーは相転移エンジンに任せるというのもありかも知れん。

衛星という形で最も効率の良い場所でエネルギーを生み出す。

それを幾つもの中継ステーションを経由して地上にエネルギーを供給。

衛星や中継ステーションが壊されない限り、半永久的にエネルギーを確保し続けられる。

うん、なんで今まで考えもしなかったんだろう。

こんなにも理想的なエネルギー供給システムを。

今度アキトさんに相談してみよう。

火星再生機構にとっても良い話になるかもしれないし。

ま、問題点とか課題とかも出てくるだろうから、後はその道の専門の方にお任せするという形で。

イネスさん辺りに相談すれば一週間足らずで実現しそうだ。

・・・なにそれこわい。

「・・・無視するなんて酷いです」

「あ、ああ、ごめん、ごめん。ちよつと考え事を」

ぶんつ。

「・・・知りません」

あらら。拗ねちゃった。

「クスッ」

「・・・どうして笑うんですか？」

「拗ねてるセレスちゃんが可愛いから」

「・・・最近のコウキさん、意地悪です」

ぶんっ。

「ハハッ」

可愛過ぎるのがいけないんです。

「・・・また笑われてしまいました・・・」

「良く来てくれたな」

ヒナギクでキクザクラに乗り込む。

なんか、この言い方だと敵地みたいだけど、完全なる味方ですので
ご心配なく。

「いえ。俺としてもきちんとして仕事を果たしたかったので」

タンポポの調整業務。

きちんと宇宙仕様にして、問題点を出来るだけ失くして、ようやくお仕事は達成したと言える。

こんな中途半端な所で終わったら、俺の必殺調整人としての矜持が・

・
・
・
・
・
・
必殺調整人って何だろうか？

「まずは君に紹介しておこう。彼が極東方面軍第一航空隊部隊長の・
・
・」

ミスマル司令に指し示された場所には鋭利な目付きが特徴の男前がいました。

何だろうか？ 渋いというか、クールというか、大人というか、やんちゃというか。

言葉では言い表せない独特の雰囲気がある。

・
・
・
イケメソである事に変わりはないけど。

「御初に御目にかかる。イトウ・ミズキ大尉だ」

イトウ・ミズキ。

うん、見た目通り、日本人だな。

「初めまして。マエヤマ・コウキです」

まずは握手を。

日本人ならこれだね。

日本人以外もそうかもしれないけど。

「気軽にミズキって呼んでくれ」

そうウインクしながら告げる男。

何だろう？ この思わずアニキと言いたくなるオーラは。

「マエヤマ君には彼の部隊の調整任務に当たってもらいたい」

「えっと、イトウさ」

「ミズキだ」

・・・いきなり名前つてのは壁が高いんだけどなあ。

まあ、本人がそう言えっつて言うのなら・・・。

「コホンツ。ミズキさんの部隊の調整を行った後、そのデータが他の部隊にも回されると？」

「そう解釈してもらって構わない」

なるほどね。

まあ、そうじゃなければ意味がないしな。

「一応、宇宙での調整は受けているが・・・。

幾つか細かい点で違和感がある。その調整をお願いしたい」

第一航空隊の部隊長。

言わば、エース中のエースが訴える違和感。

かなり細かい調整になりそうだな。

まあ、スーパーエースだからこそ抱ける違和感なんていうのがあるかもしれないし。

結果的にそれが性能向上に繋がるのなら喜んでやりましょう。

「了解。完璧に仕上げてみせます」

「頼もしいな」

それが私の必殺調整人としての矜持ですから。

「それでは、さっそく頼む」
「了解」

「こちらだ。案内しよう」
「お願いします。セレスちゃん。手」
「・・・はい」

迷子にならないようにね。
ないとは思うけど、念の為。

「それでは、失礼します」

敬礼。

なんか懐かしい。

「うむ。頼んだよ」

シュインツ。

ミスマル司令の執務室から退室し、ミズキさんの後ろへ。
多分、格納庫にでも行くんだと思う。

「娘か？」
「はい」

厳密には違うけど、俺にとってはもう完全に愛すべき娘です。

「そうか。母を失ったか・・・だから、こうして・・・」

「え？」

「ん？」

えっと、どういう状況？

「預ける者がいないから、こうして連れて来ているのではないのか？」

「い、いえいえ。ちゃんと生きてますよ」

そんな、縁起でもない。

「この子はセレスというんですが、言わば、私の助手です」

「助手？」

「はい。だから、お手伝いとして付いて来てもらったんですよ」

まあ、こんな小さな子が調整なんていう難しい事をするとは思えないだろうな。

調整といわず、設計、開発、組み立て、全て難しいんだろうけど。ですが、うちの娘は天才美少女博士なので、何の心配もありません、エッヘン。

「そうか。早とちりだったな。申し訳ない」

「いえ。気にしてませんよ」

多分、ミズキさんの言ったような境遇の人間はいくらでもいるんだろうから。

もしかしたら、実際に会った事があるのかもな、そんな境遇の人と。

「しかし、この歳で父親の手伝いか。偉いな、嬢ちゃん」

「・・・いえ。私がやりたくてやっていますから」

「ハハッ。尚更偉い。うちの娘にも見習ってもらいたいものだ」

娘？

「ミスキさんにもお子さんが？」

「ああ。後もう少して五つになる」

可愛くて堪らない年頃だな。

出来る事ならば、今も娘さんと一緒にいたいだろうに。

「娘さんは地球に？」

「まあな。戦場に連れて行くわけにはいかんよ」

「・・・そう、ですよね」

それに比べて、俺は・・・。

「別に間違つてるとは思わないぞ」

「え？」

「俺がただ臆病なだけだ。連れて来ても守り切れるといふ自信があれば何の問題もない」

「・・・ミスキさん」

「ま、そもそも連れて来ようにも上が許してくれないだろうがな」

「ハハツ。確かに」

「ふっ。共に娘を持つ身だ。仲良くやっていこう」

「はい。こちらこそ」

良い人だな。楽しくやっていけそうだ。

「だから、私とか、敬語とかはいらんぞ。普通にしゃべってくれ」

「ハハハ・・・。善処します」

年上には基本的に敬語ですから、僕。

「ま、徐々に慣れてくれれば良い。嬢ちゃんもな」

「・・・はい」

「うん。良い子だ」

ナデナデ。

なんか手馴れてるな。

やっぱり娘を持つ人間は違うつて事か。

「・・・あの・・・」

「ん？ ああ。すまないな」

「・・・いえ」

どこか困惑している様子のセレス嬢。

嫌がっていない所を見ると、ミスキさんに心を開いたみたいだな。

今のはいつまでも撫でてるから、困っちゃったって感じ。

撫でてる間は気持ち良さそうにしてたし。

・・・実はちよつとヤキモチ。

「娘の事を思い出してな。セレス？だったか」

「・・・はい」

「もし娘に会うような事があつたら、友達になつてやってくれ。」

誰に似たのか内気な奴でな。困った事になかなか友達が出来ないんだ」

「・・・私も友達になりたいです」

「そうか。ありがとう」

セレス嬢、本当に良い子だ。

それにしても、これが子を持つ親って奴か。

ふとした拍子に自分の子供の事を思い浮かべちゃうんだろうな。
まあ、僕もふとした拍子にセレス嬢の事を思い浮かべてしまいます
が……。
僕も立派な親って奴？

「そろそろ着くな。早速だが、頼めるか？」

「もちろんです。任せてください。ね、セレスちゃん」

「……はい。頑張ります」

またもや娘さんの事を思い浮かべているのかもしれない。

それくらいミスキさんは穏やかな表情でセレス嬢を見詰めていた。

……俺の娘ですからね、その所、お願いしますよ。

「ふむ。流石にミスマル司令が依頼するだけの事はある」
「どうですか？」

「以前よりずっと動かし易い。これなら、戦場を突き抜けて、敵の
大将に特攻できそうだ」

「いや、それはちょっと、勘弁してください」

「冗談だ」

早速、調整業務に突入。

セレス嬢の力を借りて、それぞれの数値の最適化を図る。
後は実際に乗ってもらって、感覚で応えてもらえばOK。
超一流エースの感性だ。

些細な点にも気付いてくれる事だろう。

「ひとまず今日の所はこの辺りで終わろう」
「了解」

うん。意外と改善できる点が多かった。

まあ、それでもちよっとした所だけだったけど。

既に基本の時点で完成度は高かったからな。

後はちよいちよい詰めていけばいい。

もう一、二度やれば完璧になりそうだ。

「ふう」

「お疲れ様です」

「コウキもな」

既に名前で呼び合う仲。

こつこつ爽やかな人間とはいつの間にかこつこつなっている事が多い。

独特な空気に引き込まれてしまったという奴だろうな。

不快感もなく、まるで昔からの友人のように感じてたり。

「何か飲むか？」

「ゴチになります」

「・・・ゴチになります」

「ふむ。そうまでハッキリ言われると逆に清々しいな。奢るつじやないか」

流石！ 男前だぜ！

「ほら」

自販機で買ったジュースを投げ渡される。

「どうも。はい。セレスちゃん」

「・・・ありがとうございます」

「これはコウキのだ」

「ありがとうございます」

「さてっと」

そのまま自分の分を買つと俺の隣に座るミスキさん。
ちなみに、今、ベンチで休憩中です。

「そういえば、コウキ、お前も一流以上のパイロットだと聞く」

「一流以上？」

いや、それはちょっと大袈裟かな。

「まあ、それなりにです」

「ナデシコのパイロットがそれなりの筈がない」

相変わらずナデシコパイロットは評価されてるみたいだな。

「俺も教導の際には教わる側として出席していた」

「その時に？」

「ああ。見事に撃ち落されたよ。やはりナデシコは希望だな」

希望。

希望・・・か。

「俺は娘の為にも早く世の中を平和にしたい。一刻も早くな」

「俺もです。子供達に辛い思いはさせたくない」

戦争が長引けば、その分、子供達に被害が及ぶ。

極端な話だけど、この戦争が後何十年も続いたら・・・。
もしかしたら、セレス嬢が戦場にパイロットとして出される事になるかもしれない。
もしかしたら、ミズキさんの娘さんがパイロットとして戦場に出る事になるかもしれない。
未来が分からない以上、ありえないなんて言い切れないんだろ？
俺は・・・そんな未来にはしたくない、絶対にしたくない。
だからこうして頑張っている。
子供が安心して育っていける、そんな世の中にしたいから。

「気が合うな」

「はい。やっぱり子供がいるとそう思いますよね」

「ああ。俺の命より娘の命だからな。娘の為ならいくらでもこの命を捨てられる」

「同感です」

俺の命でセレス嬢の命が救えるというのだったら、いくらでも差し出してやる。

多分、親つてのは自然とそう断言できる生き物なんだろう。

迷いもなく、悩む事もなく、そう断言できる自信が俺にもある。

「・・・駄目です」

「ん？」

「セレスちゃん？」

どうかしたの？ セレス嬢。

「・・・私は嫌です。私はずっと生きていて欲しい。残して欲しくない」

「・・・セレスちゃん」

「・・・きつとイトウさんの娘さんもそうだと思います。

大好きな人にはずっと傍にいて欲しいって・・・絶対に」

「・・・」

「・・・だから、捨てるなんて言わないで下さい。

苦しくても、辛くても、生きるって言うってください」

俯き、そう話すセレス嬢。

・・・独り善がりだったのかもしれないな。

残される側の人間の事を考えないなんて・・・。

自己満足にも程がある。

「・・・そう、だな。娘も助けて、自分も助かる。

それぐらいの気概でいなければ成功するものも成功せん」

「そうですね。ありがとう。セレスちゃん。気付かせてくれて」

「・・・いえ」

本当に、最近はセレス嬢に教えられてばかり。

このままじゃいけないな。

父親としての威厳がなくなる。

元からない？ そんな事はないさ。

「・・・あの、だから、コウキさん」

「ん？」

「・・・私が死ぬまで死なないで下さいね」

え、えつと・・・。

「さ、流石にそれは年齢的に無」

「・・・無理なんですか？」

「いや、生きていようじゃないか」

そんな瞳で見られたら断れません。

親つてのは子を残して死んでいくものなんだけど……。
良いよな？ 一緒に死ぬ親子がいても。

……いいのか？ なんか違うような……。

「アツハツハ。娘にすら尻に敷かれてるとはな」

「ミズキさん」

「ん？」

「男つてのは得てしてそういうものなんですよ」

「ハハツ。確かに」

男は女がいないと生きていけないものなんです。

基本、甘えたがりですからね。

「それにしても、将来は良い女に育ちそうだな、嬢ちゃんは」

「無論です」

当たり前だろ。俺とミナトさんの娘なんだから。

容姿的にも性格的にも傾国の美女にしてみせるぞ。

「親馬鹿、だな」

「多分、ミズキさんも娘さんを見せる時にはそうなります」

「かもな」

その言葉をきっかけに笑い合う。

本当に、この人とは良い友人としてやっていけそうだ。

死んで欲しくないな、こういう人には。

娘さんの為にも……ね。

第二百二十話（後書き）

オリキャラとまでいかないオリキャラ登場。

今後の出番は少ないですが、

彼には非常に大きな役割を担ってもらう事になります。

それでは、次回、いよいよ……。

よろしくお願いします。

第二百一十一話（前書き）

お待たせしました！

うーん、正直どうだろう。
楽しんで頂けたら幸いです。

第二百一十一話

『・・・地球に住む皆さん。遂にこの時がやってきました』

ゴクリツ。

「遂に決まるのね」

「はい。俺達の進むべき道が・・・」

地球に住む全ての人による宇宙船地球号の舵取り。

全ての民が考え、決めた結論。

木連人という異星人に対してどのように接していくかが今日決まる。いや、正確には決まった、かな。

「ネット回線による投票。噂によれば地球全体の約80%の人が投票したそうです」

80%か。残りの20%が気になるが、仕方ないだろう。

100%にならない事は分かりきっていたしな。

むしろ、3分の2を下回らないで安心したぐらいだ。

残念だけど、彼らには地球の決断に従ってもらうしかない。

まあ、不本意でも従わなければならぬのは俺も同じなんだけど・・・。

「もちろん、俺は和平に投票したぜ」

「私も」

「私もです」

「無論ね」

ナデシコ勢は誰もが和平。

それだけ、和平に懸ける想いが強いという事だろう。
当然、俺も和平に票を入れたぞ。

「でも、同じ和平でも幾つか意見が分かれそうだったわね」

「はい。選択肢は和平か抗戦かの二択じゃなかったですし」

そう、ネット投票故か、選択肢に幅があった。

問いかけられたのは和平に賛成か、否か。

そんな中に条件付け賛成、または条件付け反対というものもあった。
多分、似たような意見をコンピュータで判別して、一つを選択肢として組み込まれるのだろう。

いや、進歩したもんだな、技術も。

まあ、未来の技術を知る俺の言う台詞じゃないけど。

「コウキ君はどうしたの？」

「そうですね。結論だけ言うなら、条件付き賛成です」

「条件付き？」

「はい」

素直に和平を結んでももちろん良いさ。

でも、それじゃあ、納得できない部分が確実に残る。

別に命を犠牲に発散させようと思っている訳じゃない。

でも、互いの交流の場、想いをぶつけ合う場があってもいいんじゃないかと思う。

ここまで言えば分かると思うけど・・・。

最終決戦を終えた後に和平を結んだ方が良いという意味の条件付き
和平という事だ。

「そつか。それがコウキ君の選んだ道なのね」

「はい。ミナトさんは？」

「私はもう誰もが疲弊してるんじゃないかなって。民も兵も」

「そう・・・ですね」

「だから、もう和平を結んで全てに決着を付ければ良いと思っの」

それもまた正しい。

最終決戦を前にして、兵士達の疲れはピークに達している。

長く苦しい戦いを続けてきた彼ら。

それだけでも辛いのに更に地球連合軍徹底抗戦派のクーデターときた。

しかも、その傷を癒せぬままの決戦だ。

辛い訳がない。

また、当然、木連側も疲弊している。

安定しない暮らし、不安に包まれる生活、文字通り地に足付かない人生。

そろそろそれらの苦境から脱出したいと思っている筈だ。

あくまで地球を滅ぼすと訴える木連軍人達。

でも、そんなんじゃないついたら安定した暮らしが出来るのか、と不安を覚えているだろう。

不安を利用する訳ではないけど、そんな木連の民達を味方に出来たら・・・。

「いけない、いけない」

またすぐに和平の事を考えてしまってる。

今は地球側の結論が先だというのに・・・。

駄目だな。どうしても和平の事しか頭にない。

これでもし徹底抗戦なんて事になったら・・・。

「だあ！」

「コ、コウキ君？ どうしたの？」

「あ、いえ、なんでもないです」

駄目だ、駄目だ。

結論が出ない所で何を考えても仕方がないだろうに。
少し落ち着かないとな。

「スーーツハーツ。おし！」

覚悟は決まった。

ドンと来いや！

『昨日行われた地球に住む人々による総選挙。その結果が出ました。
結果は……』

ドクンツドクンツドクンツドクンツドクンツドクンツドクンツ……。

『条件付き和平と相成りました』

和平？

和平って何だっけ？

「「「「「うおおおおっおおおおっお！」「」「」「」

「うわっ」

「やった！ やったわよ！ コウキ君」

「え？ え？」

「え？ じゃないわよ！ 地球の皆は和平を選んでくれたの！」

「和平？」

和平ってあの・・・手を取り合っって奴？

「そうよ！ 木連人と共に生きていこうって皆が望んでくれたのよ！」

「和平・・・和平か・・・」

嬉しい。

素直に嬉しいと思える。

たとえ条件付き和平だとしても・・・。

これに勝る喜びは中々ない。

少しだけけど・・・これまでの苦勞が報われた気がした。

「でも、条件付き・・・ですか」

少し不安げな艦長。

条件付き和平に投票した身だが、確かに不安だ。

俺より軽い条件であれば良いが、もし俺より重く、

むしろ、抗戦派のような過激な意見だったとしたら・・・。

同じ和平でもその意味する幅はとてつもなく広い。

どんな条件が出てきてもおかしくはないんだ。

『その条件について説明する前に・・・』

する前に？

『この決定に基づき、空席となって地球連合軍の最高司令官の就任を報告したいと思います』

地球が選んだ選択は和平。

その決定に従うのなら……。

『地球の選択は和平であります。』

その為、最高司令官の席にはその方針に沿った者に就任してもらおうと思います』

間違いなく……。

『次代の地球連合軍最高司令官は改革和平派代表ミスマル・コウイチロウ氏に決定しました』

ミスマル司令だろうな。

「お父様！ やった！」

ユリカ嬢も喜んでるみたいだな。

ミスマル司令なら誤った舵取りはしないだろう。またもや報われた気がした。

『地球に住む皆様、地球連合軍最高司令官に就任したミスマル・コウイチロウであります』

新最高司令官の演説。

キクザクラはナデシコの隣にいる訳だから……。
宇宙から地球へ向けての演説という訳か。
なんだろう、なんか味がある。

『皆様の想いに全力で応える事を御約束致します。必ずや誰もが納得できる和平を！』

力強い発言。

司令の下で皆が纏まってくれたら……。これ以上に心強い事はない。

『それでは、条件付き和平についての説明を行います』

さて、どんな条件が付けられているやら。

……少し心配。

『和平賛同者の方々の多くは戦争の早期終結を望まれておりました』

戦争の早期終結か。

もう戦争は嫌だ。

そんな根本的な理由でそれを望んでいるんだろうな。

誰だって知人が簡単に死ぬような環境にずっといたくはない。

「戦争が好ましいなんて利益の出る一部の人間だけよ」

死の商人とか言っただけか？

戦争で莫大な利益を得ている人間の事を。

他にも政治家やら軍人やら、戦争を継続を希望する人間の多くは個人的な理由が多い。

もちろん、復讐という私怨の者もそれに含まれていて……。

殆どの人間は戦争なんて嫌に決まってる。

それが当然だと思う。

いや、むしろ、当然でなければならぬだろう。

他人を慈しめない人間は結局最後に破滅するのだから。

そもそも誰もが殺し合いを求めるなんて嫌だろ？

そんな事になったら世も末だったの。

『しかしながら、このまま終結しても禍根を残すという意見も多々あり・・・』

それもまた然り。

特にこの戦争で誰かを失った者はそう強く思うだろう。

こちらは失ったばかりなのに相手は何も失っていない。

そんな理不尽かつ不公平な戦争がこの蜥蜴戦争。

本来であればそんな戦争はありえない。

だが、ありえてしまったからこそ、こうして問題になっている。

互いに痛み分けという形で終戦できず、ダラダラと続いてしまっている訳だ。

そこに終止符を打つ為に今まで和平を訴えてきたのが改革和平派という派閥。

素直に和平という形にはならなかったものの、

こうして共存を望む所まで来れたのは間違いなく彼らのお陰だ。

原作では木連という存在を国民が知らぬまま終戦となってしまうた

だが、今は木連という存在を知り、共存を望んでいる。

それだけでも充分な進歩だと思う。

『我々地球連合政府としても結論を出すまで時間が掛かりました』

地球単位での戦争の事なのに僅か一日足らずで結論を出した。

どこかしらの派閥が圧倒的な発言力を持っていたか。

それともカリスマ性溢れる者に皆が付いていったか。

どちらにしろ、これだけ即断できた事は正直凄いなと思う。

しかも、全員が全員反発するような様子でもないそうだし。

これだけ纏まった政府なら安心して政治を任せられるな。

『しかし、最終的には全員一致でこの方針で決定致しました』

ほら、やっぱり凄い結束力。
やっぱり人間を成長させるのは危機感って本当なんだな。
こんだけ政府が結束力を見せる事なんて普通はないだろうに。

「どんな方針なのかしらね？」

「信じるしかありませんよ。政府の出した答えに従うのが軍人ですから」

決定したのが和平だからこうして平然としていられるんだろうな。
もし、抗戦に決まったら慌てふためいていたに違いない。
そう思うと・・・物凄く安堵している自分がいたり。

『妥協案と思われるかもしれませんが・・・』

何だ？ この前置きは。
物凄く不安になるんだけど・・・。

『まずは決戦前に停戦勧告を行います』

停戦勧告。

とりあえずしばらく争うのはやめましよう的な奴。
その間に和平交渉を進めたり、軍備を整えたりと結構重要。
しかし、わざわざ最終決戦にすると云ってきた争いをやめようとするだろうか？

変にプライドが高い木連軍人の事だ。

引かないだろうし、むしろ、馬鹿にしてくるだろ。
敵を目の前にして逃げているって。

まあ、言いたい奴には言わせとけて感じですが。

『その際に居住スペースの確保、テストケースとしての数百万単位

での移民、

食糧を始めとする物資の優先的配給を約束し、和平交渉を行う予定であります』

なんとも懐の深い判断。

負けてもいないのに譲歩し過ぎている感があるんだけど・・・。

『但し、相手側にもプラントデータの提供、技術・知識の提供を求め、

また、火星復興への援助及び人材派遣、ボソンジャンプの民事利用への協力など、

対等な立場において和平を進め、今後協力していく構えを見せる事を最低条件としています』

なるほど。あくまで対等な条件であるという事か。

確かに技術的なものでは木連の方が優位に立っているかもしれない。特にボソンジャンプ技術は喉から手が出る程、地球側は欲している。この条件であれば大体の人間は納得して矛を収めるだろう。

火星復興を掲げている事で火星に関係する人間の感情を多少ながらも抑えられるし。

実際、木連の無人兵器が復興活動をしてくれるようになれば、非常に効率的だ。

火星復興に大きく貢献してくれる事は間違いないだろう。

「考えられてるわね」

「ええ。相手側が求めている事も把握してるし、こちら側が欲しいものもきちんとしている」

「一日で考えたとは到底考えられないわ」

「多分・・・何日も、いえ、何ヶ月も前から草案を練っていた人物がいたんだと思います」

「その人の意見を採用したって所かしら？」
「はい。是非とも話を聞いてみたいですね」

これだけ能力があれば、一流の外交官としてやっていけるだろう。
誰なんだろう？ 会えるとは思えないけど、一度会ってみたい。

「何？ コウキ君ったら今度は政治家でも目指す気？」

「まさか。そんな事ありませんよ。ちょっと気になっただけです」

俺が政治家？

ないない。

そもそもそんなオーラがないでしょうに。

「え〜。そうかな。結構良いと思うんだけど」

「過大評価し過ぎじゃないですか？」

「でも、コウキ君って考え癖があるじゃない？」

いや、それはちょっと関係ないんじゃないかな・・・。

「ま、まあ、その話は置いて・・・」

「置いていて？」

「続きを聞きましょうよ。断れた時とかも想定してるでしょうし」

「そうしますか」

考えられる限り、まずこの話には乗ってこない。

決戦と決め込んでいるからには戦わずして停戦には応じないだろう。
それに対して、政府はどんな対応を取るのか。

多分、この案を考えていた人は断られる事を前提で考えていると思
う。

だから、この停戦勧告にも何かしらの意図がある筈だ。

『もしこれに応じるならば素直に和平交渉へと移ります。しかし、断れる可能性の方が高いという専門家からの意見もあり、もし相手が応じず、最終決戦を挑むと決めたらならば、こちらも応戦します』

まあ当然だな。

成されるがままなんて、そんな受身じゃやってられない。勝つぐらいの気概を見せないと相手にも想いは伝わらないだろうし。

『その際に指揮はミスマル最高司令官にお任せし、必ずや勝利をもち取りってもらいます』

一度こちらが譲歩して停戦を勧告しているんだ。

勝利すれば、相手も引き下がるを得ないだろう。

また逆に考えれば、先程あげた条件さえクリアすれば、地球に移住する事ができるとも言える。

苦境に陥った木連側にとっては渡りに船、暗闇を照らす光に見えるだろう。

完全に追い込まれれば何をするか分からないが、

あらかじめ逃げ道を作る事で、相手側の暴挙を防ぐ事ができる。

相手側の精神を攻める、もしくは、受け止める手法。

なるほど。最初に停戦勧告を行う事でこれだけの効果があるという訳か……。

言われてみれば気付くが、言われずして気付く事こそが凄い。

やっぱりこれを考え付いた人は凄い頭脳の持ち主だな。

「……負けられないわね」

「……はい」

当然、負けられない。

全て勝つ事が前提。

負けてしまえば即THE・ENDだ。

もちろん、最終決戦に負けてすぐに降伏とはならないだろう。

だが、木連側の勢いが増すのは間違いない。

また、勝者なのだからと暴走し、無茶な事をしかねないという不安もある。

正義は何をされても許される。

勝利できたのはこちらが正義だからだ。

それならば、悪である地球をどう扱おうとそれは正義の行いである。みたいな悪意極まりない理論武装をしてきそうだと本当に怖い。

「それに・・・」

相手に時間を与えてしまう事。

それが何より怖かったりする。

ただでさえ相手はボソソジャンプ技術というアドバンテージがあるのだ。

もし遺跡が研究され尽くしたら・・・。

また、火星こそがボソソジャンプの鍵だと気付いたら・・・。

これ以上の恐怖はないだろう。

さっさと遺跡を奪還し、単体ボソソジャンプを封印しないとな。

誰もが善用できればいいけど・・・。

何故だかテロとか悪用される未来しか想像できない。

・・・本当に俣ならないものだよな、世の中ってのは。

『勝利した後、再び停戦勧告を行います。此度は譲歩致しません。

敗戦国として奴隷のように扱うつもりは毛頭ありませんが、

賠償金や無条件での技術提供など様々な負担を負ってもらいます』

そればかりは仕方ないよな……。

「勝ちも負けも負け。勝利したのに対等だったら今度は地球側が納得しません」

「そうね……。命を削って勝利したんだもの。意味がないって怒るに決まってるわ」

まあ、それも勝つ事が前提なんだけどね。

『相手がその勧告を受けたなら、積極的に木連における和平派と接触したいと考えています』

神楽派の事だな。

でも、その存在は改革和平派の一部の人間しか知らない筈。いるだろうという過程で話しているのか、それとも……。

「神楽派の存在を明かした上での考えなのか」

神楽派の存在を知る者が提案者であればありえない事ではない。ふむ。なんとなくだけど、提案者が分かってきたかもしれない。

『なお、その際、その交渉役を……』

これだけの策を考え付き、なおかつ、実現へとこぎ付けた実力者。相手側の心理を知り尽くしたかのような流れ。どちらにとってもベターといえるような結末。

そして、神楽派の存在を知り、和平へと命を懸けている者。そんなの……。

『地球連合軍所属ムネタケ・サダアキ少将にお願いしたいと考えて

います』

マツタケ提督しかないでしょ。

「あらあら。遂にここまで来ちゃったか」

「元々能力がある方ですから。開き直って能力をフル活動させればあれぐらい出来ますよ」

恐らく、自らが交渉役として赴くまでがムネタケ提督、いや、少将か、ムネタケ少将の策。

自分なら和平を成し遂げられるという絶対の自信があるのだろう。

見よ！ あの聳え立つキノコ頭を！

なんとも頼り甲斐のある姿ではないか。

「お父様も喜んでるでしょうね」

「はい」

あれだけ息子を信じていたムネタケ・ヨシサダさんの事だ。本人以上に喜んでいるに違いない。

自慢の息子が地球を背負って敵国に赴く。

うん、感涙ものだけ。

『皆様の期待に応えるべく尽力致します』

余計な言葉はいらない。

後は行動で示してみせる。

そう言わんばかりの短い就任挨拶だった。

『また、もし木連が停戦勧告を拒否したら・・・』

拒否したら？

『木連が戦力の立て直しを図る前に木連本国に向けて遠征部隊を派遣します』

本国に向けて攻撃しようっていうのか？

意外と過激だな、おい。

「敵陣に乗り込もうっていうのかしら？」

「さあ・・・」

でも、そんな事をムネタケ少将が考えるとは思えないんだよな。何の為の遠征部隊なんだろう？

『無論、戦力は付けますが、その目的は木連国民に訴えかける事にあります』

木連国民に訴えかける？

『連合軍の情報部が調査した結果、木連は軍が大部分で権限を握っているそうです』

マジで？ 俺達のように木連に伝手があるならまだしも、そんな事を調べられるなんて。

連合軍情報部、恐るべし。

・・・実はムネタケ少将からの情報とかいうオチはやめてよね。

『軍のみで決めた方針によって仕掛けられた戦争である可能性もあり、

もしかしたら、木連国民はそのような状況を憂い、和平を望んで

いるかもしれませんが』

確かに軍が権限を握り過ぎている感はあるよな。

まあ、地球側が言える事でもないような気もするが。

『そのような民達に訴えかける事こそがこの派遣部隊の目的であります』

民が和平を望めば、政府がその方向で方針を決める。

それは今回の地球も同様で木連とて変わらないだろう。

政府も軍部も民間からの支持がなければ何もやっていけないのだから。

『それでもなお、木連が和平を望まないというのなら・・・』

最終決断。

これ以上はどうしようもないという状況下で地球側が取った決断とは・・・。

『木連本国に襲撃をかけ、戦争の実体を見せ付けるしかありません』

俯きながら告げる。

戦争を知らないからこそ他人事でいられる。

そんな状況を打破するには現実を知らしめるしかない。

不本意だろうが、それ以外に方法がないならば、仕方がないのかもしれないな。

『願わくばそれまでに木連が和平の意思を見せてくれる事を願います』

僕もそう願わずにはいられません。

『皆様、地球の結論は和平と決まりました。』

ですが、今、宇宙では木連と雌雄を決するべく地球連合軍が迎撃
体勢を取っております』

はい、私達の事ですね。

『状況次第では交戦する事もありえます。』

ですが、どのような状況になるかと彼らならば……。

彼らならば地球をより良い方向に導いてくれる。

そう信じ、今はこの状況を見守っていただけないでしょうか』

やるしかない。

負ける訳にはいかないんだ。

『それでは、私からは以上です。地球が良い方向へ進むよう願っております』

プツンッ。

映像が切れる。

「和平・・・和平か」

「やるしかねえな」

「はい。全力で」

「目的ハッキリ、心スツキリ」

「いや、意味分からないから」

「とにかくにも負けられねえって事だ」

「なんか責任重大って感じですね」

「でも・・・」

「でも？」

「そんな仕事に携われる。ある意味、幸せですよね」

「ああ。誇りに思っただけさ」

「地球と木連が手を取り合う為の戦い」

「ただ全力でやれば良い。結果は自ずと付いてくる」

ナデシコの士気は上々。

目的もハッキリし、ブレる事なく前へと進んでいけそうだ。

「後は臨機応変に、か」

向こうの出方次第ですべき事が変わってくる。

今、俺達に出来る事は・・・。

何があるかと屈しない覚悟。

何があるかと貫き通す信念。

そして、何があるかと揺るがない意思。

それらを胸に刻む事だ。

この三つさえ備わっていれば何があっても怖くない。

「うしー！」

少しでもやれる事をおこころ。

後悔はしたくないからな。

「やるか！」

最終決戦目前。

改めて、和平への想いを強くした日の事だった。

第二百一十一話（後書き）

80%とか結構妥当かなと。

誰もが参加できるに越した事はありませんが……。
実際には不可能でしょうしね。

さてさて、このような結果となりました。
予想通り過ぎて意外性はなかったかな？
これから期待を。

いよいよ最終決戦フェイズが始まります。
次回より完全に決戦モードですな。

それでは、これからもよろしく願いします

第二百二十二話（前書き）

お待たせしました。

第九部、最終決戦編、始まります。

なお、分かり辛い点がありますので、先に説明を。

ハルという名前が出てきますが、これはカエデの妹の名ですので。

第二百二十二話

S I D E K A E D E

「和平・・・和平なの・・・よね？　・・・良かった」

心の底から安心。

これでもし抗戦なんていう意見になっていたら・・・。

「胸を張ってケイゴに会いにいけないじゃない」

もうしばらく会っていないケイゴ。

あいつが何をしてるかなんて分からないけど・・・。

「偶には会いに来なさいよね」

手段がなくても会いに来なさい。

それぐらいの根性、見せてくれても良いんじゃないかしら。

「はあ・・・」

認めたくない。

認めたくないけど・・・。

「寂しい・・・かな」

何がきつかけだとか、そんな事は覚えてない。
でも、気付けば目で追っていた。
気付けばあいつの姿を探してた。
何の恋愛小説かって思うかもしれないけど……。

「本当に知らぬ間に好きになってたのよね」

そんなあいつが本当は木連人だって知って……苦しんだ。
家族を殺し、故郷を奪ったあの木連人。
好きだけど、嫌い。

憎みたいほど、恨みたいほどなのに、好きで好きで堪らなくて……。
やっぱり苦しんだ。

……あいつが木連人じゃなければ。
そんな事を何度思った事か。

でも、その事実を消し去る事はできなくて……。
あいつはあいつで木連人である事を誇りに思っていて……。
本当に……難儀な人間を好きになったものよね。
でも、立場だとか、環境だとか、状況だとか、そんなものを全て無
価値にしてしまうのが恋。

それでも傍にいたいって思うようになった。
そして、いつの間にか木連と和平を結びたいって思うようになった。
恨んでいた筈の木連なのにね。
それもあいつのお陰なのかしら？
ううん、違うわ、あいつのせいよ。

家族の恨みを晴らさずに恋なんてもので恨みを忘れようとしている
私。

さぞや恨まれるだろう、さぞや憎まれるだろう、さぞや裏切りだと
思われるだろう。

でも、不思議と皆なら何も言わずに許してくれるんじゃないかなって。

ううん、恨みなんて忘れろって、そう言ってくれるんじゃないかなって思う。

お父さん、お母さん、妹、皆が皆、心から優しくかったから。

恨みなんかより恋に、愛に生きなさいって笑顔で言ってくれる姿が容易に想像できる。

・・・私の勝手な、醜い心が生み出した幻影なのかもしれない。

・・・私が私の罪を赦すために生み出した幻影なのかもしれない。

でも・・・良いよね？ 皆。

ケイゴを好きで良いわよね？ お父さん。

あいつの姿を追っても良いわよね？ お母さん。

貴方も認めてくれるわよね？ ハル。

あいつは木連人だけど・・・好きになって良かったのよね？

「勝手かな？」

家族の仇。

仇に恋する私。

私の・・・愛する家族。

辛いよ、苦しいよ。

でも・・・。

「許して。本当にあいつが好きなの」

家族を、皆の事を忘れた訳じゃない。

ずっと、ずっと私の大切な存在。

何があつたって忘れる事のない・・・私の宝物。

「ごめんなさい」

裏切ったっていうのに……。
仇に恋する恩知らずだっていうのに……。
どうしてそんなに……。優しい笑顔なの？

「お母さん、お父さん、ハル」

目の前には皆の姿。

夢？ 幻？

……。なんだって良い。

今は……。

「お母さん、私は……」

「分かってるわ。私は貴方が後悔しなければいいもの」

「お父さん。私は……」

「恨みなんて忘れなさい。そんな柵にカエデが囚われる必要はないのだから」

「ハル。私は……」

「やっと素敵な人を見付けたみたいね、お姉ちゃん。これで私も安心して逝けるわ」

どこまでも暖かくて……。

どこまでも優しく……。。

掛け替えのない存在。

今までこれが当たり前前だって思ってた……。

私、馬鹿ね。

失ってから気付くなんて……。

「幸せにな、カエデ」

「お父さん……。うん、幸せになる」

ずっと優しく見守ってくれていたお父さん。
今更だけど、初恋は貴方でした。

「体調管理はしっかりするのよ、カエデ」

「分かってる。それに、身体を崩している暇なんて私にはないもの」
心配性でいつも私の事ばかり心配していたお母さん。
もう大丈夫。私も立派な大人だもの。それに、早くしないとケイゴを奪われちゃうわ。

「お姉ちゃんより早く結婚するつもりだったのになあ」

「生意気言うんじゃないの」

憎まれ口ばかりだったけど、いつも私を元気付けてくれたハル。
いつもいみがみ合ってた仲の悪い姉妹だって思われたかもしれないけど……。

本当は可愛くて堪らなかったのよ。

貴方を連れてきた彼氏に物申すつもりでいたぐらい。

……それももう叶わないけどね。

「思うがままに行きなさい」

「自分の想いを偽らず真っ直ぐに行きなさい」

「頑固じゃないお姉ちゃんなんてお姉ちゃんじゃないよ」

「……うん。皆……ありがとう」

そして……。

皆は笑顔で消えていった。

「ハッ！　ここは・・・シミュレーションの中？」

ああ、多分、特訓中に寝ちゃったのね。

「何だろう？　なんか不思議な夢を見たような気がする。

とつても嬉しくて・・・それでいて懐かしい感じの素敵な夢を」

胸がポカポカと温かい。

なんだか暖かい何かに包まれている感じ。

「え？　涙？」

不意に感じた手の甲への感触。

それは私の涙だった。

私ったら、どうして泣いているのかしら？

辛い事があった？　ううん、そんな事ない。

嬉しい事があった？　ううん、そんな事・・・あるかも。

覚えてないけど、多分何かあったんだと思う。

そうじゃなつきゃこんなにも胸が温かい筈がない。

「・・・もう一回やってから休みましょう」

シミュレーションを開始する。

相手は高機動戦を得意とするケイゴ。

私の射撃能力を向上させる為に相応しい相手だってコウキが用意してくれた。

ま、シミュレーション上の仮初めの存在なんだけどね。

それに、敵対するしろ、共闘するにしろ、やっっておいて損はないとも言ってた。

ケイゴさんはお前に任せるからって。

そこまで言われたらやるしかないでしょ？

今までの戦績は99戦99敗。

やっぱりシユミレーシヨンといえどケイゴは強くて、ずっと負け越している。

でも、なんでか分からないけど、今なら……。

「勝てる気がするのよ」

・・・その日、私は初めてケイゴ相手に勝利を飾った。

S I D E O U T

「久しぶりだな、コウキ」

「おお、ペレ。元気にしてたか？」

和平と地球の方針が決まり、地球連合軍の最高司令官はミスマル司令となった。

そのミスマル司令に呼び出され、ナデシコは月面基地へと赴いた訳だ。

月面基地。あんまり良い思い出はないけど、最終決戦で俺達の本拠地となる場所だ。

絶対に守りきらないとな。

「和平に決まったようで良かったな」

「おう。ありがとな、ペレ。お前のお陰でもある」

「へッ。よせよ。俺はなんにもしてねえっての」

ナデシコが月面基地に辿り着いた後、ナデシコクルーはしばらく休憩となった。

ナデシコ内で休憩していても良かったんだけど、今、月面基地は軍の主要人が揃っているっていうじゃないか。

折角だから、フクベ提督や他の方々にもお会いしておきたいなって。それで、月面基地の廊下を歩いていて……。

「うん、確かに。なんにもしてないな」

「うんうん、っておい！そこは違うだろ！」

旧友、ペレと再会したって訳だ。

「違っつて何が？」

「いや、言葉にすると難しいんだが……」

「それならいいじゃん。それで」

「いや、でも……納得いかん！」

「はいはい」

「やっぱり納得いかん！」

相変わらず面白い奴だな。

「ペレ」

「ん？突然なんだよ？俺はこの行き場所のない憤りをどこにぶつけようか」

「ありがと。感謝している」

頭を下げる。

ペレの協力があつたからこそ、和平が実現したようなものだ。

その全てが彼のお陰という訳ではもちろんないが、その一端を担っ

てくれた事は間違いない。

「・・・ケツ。改めて言われると照れるっの」

満更でもない様子。

男の照れた顔・・・ね。

いままでセレス嬢やミナトさんの照れ顔を見てきた俺からしてみれば・・・。

「キモッ」

「てめえ！ もうちょっとこの余韻に浸らせてくれてもいいだろうが！」

素直なんです、僕。

「ハア・・・。お前はどこまでも人を馬鹿にしやがって」

「まあまあ、そういうキャラなんだよ」

「お前がか？ それは随分と性質が悪いな」

「いや、お前が」

「どついうキャラやねん!？」

「そついうキャラやねん」

いじられ役って大事だと思うんだよね。

彼らがいるから場が盛り上がる。

まあ、その役になれと言われたら全力で拒否しますが・・・。
え？ もう充分いじられ役だって？

・・・そんな事ないよ？ ホントだよ？

「もういい。何をいってもお前には口で勝てる気がしない」

「それはどうも」

「いや、褒めてねえから」

どこか疲れた様子のペレ。

一体誰が疲れさせたのやら。

「お前だよッ！」

「何だ？ 突然叫びやがって。・・・お前、相当やばいんじゃないか？」

「クッ、テ、テメエ・・・もういい！ もうお前とはしゃべらん」

あらあら、拗ねちゃって。

でも、いままでセレス嬢やミナトさんの拗ねた姿を見てきた俺からしてみれば・・・。

「キ」

「言わせねえよ！」

「コホンッ。キモッ！」

「わざわざ改めて言うんじゃないよ！ 尚更傷付く」

難儀な人だ。

「ふう。一旦落ち着こう。こんなのいつもの俺じゃねえ」

「え？ いつもと変わらな」

ギロツ！

コホンッ。 弄り過ぎたかも。

「何はともわれ和平つつう事だ。後は向こうの出方次第だな」

「そうなる」

まあ、相手が受け入れるとは思えないけどな。

「戦わなくて済むならそれが良いんだけどな」

「もちろん。でも・・・」

「ま、改めて戦えと言われても既に覚悟は決めてんだ。特に思う事はない」

「ペレ」

「勝つて、戻るべき場所へ戻る。それでいいじゃねえか。後は落ち着く所に落ち着く」

「そう・・・かもな」

結局、どんなことも落ち着く所に落ち着くんだ。今、考え込んでいた所で何の意味もないかもな。

「さてつと、俺はそろそろ」

「お久しぶりです。マエヤマさん」

「アルフォンス大尉」

そこに現れたのは欧州最強と名高いアテナ隊の隊長アルフォンス大尉。

相変わらずのイケメン振りだ。

「てめえは・・・」

「貴方もお久しぶりですね。ペレイラ大尉」

ん？ 知り合い？

っていうか、ペレって大尉なの？

・・・似合わん。

「なんか悪口を言われた気がするが……」

ギロツ！

僕はスルーで。

「てめえもこいつと知り合いか？」

「はい。姉と兄の恩人です」

「こいつの姉貴の？」コウキ、お前何したんだ？」

「別に何もしてないけど」

そんな事よりもお前達の関係が気になるぞ、俺は。

「何もしてないなどと……姉と兄が今いるのはマエヤマさんのお陰です」

大袈裟だつて。

「ふん」

何でしょう？ その目は。

「お忙しいようなのでまた挨拶に伺います」

「あ、はい」

そう言つて立ち去つていくアルフォンス大尉。
忙しい人だ。

「どつという関係？」

「ケツ。いけ好かねえ野郎だ」

「いや、だから」

返答になってないってば。

「俺の女房と娘があいつにお熱なんだ」

「ああ・・・」

完全に私怨ですな。

「それにな、俺の部隊とあいつの部隊はライバル同士なんだよ。

ライバルの部隊の部隊長同士が仲良く肩並べてられるかつての」

へえ、ライバルねえ。

アジア方面軍と欧州方面軍の精鋭部隊同士の意地の張り合いって訳か。

まあ、分からなくはないけど。

・・・ん？

「お前が部隊長？ 似合わないな」

「うるせえ！」

お後がよろしいようで。

・・・良いのか？

「生きていてくれて嬉しく思うぞ」

「お久しぶりです、アルメイラ大佐、アルダート大尉」

再び旧友？との再会。

精鋭部隊の中でも最強を語るに相応しい部隊であるアレス隊。その代表である二人が目の前にいる。

今更だけど、凄い人と知り合いなんだな、俺。

「まだお礼を言っていなかったな。ありがとう。貴官のお陰で今、俺はここにいる事ができる」

「私からも礼を言う。アルダートを助けてくれてありがとう」

なんだか照れるな。

「いえ。当然の事をしたまでです」

「素直に受け取ってはくれんのか？」

「では、どういたしました、と」

「うむ。なんとも清々しい」

チラッと二人の薬指を確認。

ハッハッハ。恥ずかしげもなく、この野郎。

「しかし」

「しかし？」

「この光景を見ると改めて良い事をしたなと」

自らの左手の薬指を見せる。

それだけで意味は伝わるだろ。

「クッ」

「.....」

照れてる。

もう長い付き合いだろうに。

初心なんだな、二人とも。

「年上をからかうんじゃない」

「すみません」

なんて言いながらも二人とも嬉しそうに笑ってる。

こういう光景を見られるのは俺としても嬉しい。

俺のしてきた事に意味はあるんだなって思えるから。

「改めて、おめでとうございます」

「ありがとう。これも君のお陰だ」

「是非とも貴官にも披露宴に出席して欲しい」

「喜んで」

幸せな人達を見てるとこちらも幸せに思えてくるからな。

まあ、今でも充分幸せなだけだね。

「なんなら名付け親も頼んでしまおうか」

「まだ早いぞ、アルダート」

「何。早ければ早い程良い」

「・・・バカッ」

おゝい。人の前でイチヤイチャするのはやめてくれ。

そして、アルメイラ大佐。

軍人の仮面が外れて素の貴方が垣間見えましたか・・・。

滅茶苦茶可愛いですね。

・・・ハッ！ 殺気！？

「それでは再び会おう」

「平和を成し遂げ、平和となった地球でな」

「はい」

二人と別れる。

戦争を終えた後に幸せな日々が待っている彼ら。

和平への想いは強まる一方だろうな。

・・・なんか今すぐにでもミナトさんに会いたくなってしまった。
なんだかんだいって単純なんだよな、俺も。

「ミズキさん」

「おう。コウキか」

フクベ提督を始めとした知り合いの軍の方々に挨拶をし、

最後にミスマル司令に挨拶をしようとキクザクラへと赴いた。

ついでにミズキさん達にも会っておこうとキクザクラの格納庫へ寄った訳だ。

すると、案の定、ミズキさん達はそこにいた。

タンポポを慈しむように整備する彼らの姿を見るとなんか嬉しくなる。

調整係という製作にあまり関わってない身だけど、愛着がない訳じゃないからな。

「無事に和平となったな」

「はい。安心しました」

改革和平派に殆どが属する極東方面軍。

キクザクラクルーは和平と決まった事を心の底から喜んでいた。誰も未来への想いを馳せ、輝かんばかりの笑顔で業務を行っている。

「こいつを使わずに済めばいいんだが・・・」

「・・・そうですね」

和平と決まったが、誰もが決戦をしなくて済むとは思ってない。だからこそ、こうして希望的観測を述べる。争わなくて済めば良いのだが、と。

「頼むぞ。相棒」

機体を撫でるように触れるミスキさん。

タンポポは他の機体に比べて、スピードはあっても耐久性はない。グラビティブラストの一撃でも喰らえば簡単に墜ちるだろう。

だからこそ、相棒への信頼が何よりも必要となる。一心同体。

文字通り、機体とパイロットが一つにならねば、これからの激戦を生き延びる事は出来ないだろう。

だからこそ、自ら整備し、相棒を慈しむ。

この繰り返しで彼らは一つになるのだ。

『航空隊隊員は至急ブリーフィングルームへ集まるように。』

繰り返す。航空隊隊員は至急ブリーフィングルームへ集まるように『

ん？

「招集命令か」

「みたいですね」

「ふむ。コウキ」

「はい」

「すまないが、最後の調整をお願いしてもいいか？」

「ええ。任せてください」

相棒を触れさせてくれるのは信頼してくれているから。それなら、その信頼には応えるしかないだろ。

「それじゃあ、頼むぞ」

「はい」

そう言っただけで立ち去っていくミズキさん。

他の隊員達もそれに続いていった。

「さてっと、さっそく始めますか」

依頼はすぐさまこなす。

これが必殺調整人のジャスティス。

・・・いつまで引張ってるんだらう？ このネタ。

「タンポポか」

この決戦でどんな役割をこなすんだらう？

補給？ 攪乱？ 支援？

相転移エンジンを積んでるから、行動範囲は広いし。使い勝手は良いだろうな。

まあ、撃墜された時が怖いけど。

相転移エンジンが爆発すると規模が半端ないもんな。

クリスマスの日に起きた地球への木連兵器ジンの襲撃。

最後に自爆とか企みやがった奴だ。

あれは印象深い。

あそこで自爆されてたら街一つぶっ飛んでいたらしいし。

うん。恐ろしい。

ジンもタンポポも相転移エンジンを積んでいるという点では同じだろ。

もし近くにタンポポがいる時にタンポポが撃たれたらと思うと・・・

うん、恐ろしい。

まあ、自爆と撃たれての爆発は違つかもしれないけどさ・・・。

「うし。調整終了」

とりあえずミズキさんのタンポポは終わった。

他の連中のも後でするけど、とりあえず報告しに行こう。

えっと、ブリーフィングルームだったっけか？

確か、あっちだったよな。

「おお。あつた、あつた」

テクテクと歩いてようやくの到着。

まあ、見た目からしてこれぐらい遠いのは分かった。

ナデシコ内もこんな感じだし、慣れたようなものだ。

「えっと」

まだ会議中かな？

それなら、外で待ってた方が良いか。

「・・・何の話をしてるんだらう？」

なんか気になる。

本来であれば、会議中の場所に耳を傾けるような事はしない。
でも、この日は何故かしてしまった。

それは無意識下で抱いていた小さな疑惑。

俺すらも気付かなかった心の奥深くにある小さな疑惑が俺を動かしたからかもしれない。

その日、知りたくもなかった現実を知る事になる。

「君達には命を捨ててもらおう事になる」

第二百二十二話（後書き）

長くは語るまい。

ただ、タンポポが何故用意されたかを考えれば自ずと……。

カエデの独白。

難しかったです。

感じるものがあってくれたら嬉しいです。

第二百二十三話（前書き）

ようやくにして解放。

これで少しは執筆速度が増すかなという二月最後の日です。

そろそろ、初稿から一年。

ちよつど一年に終わるぐらいの勢いで頑張りたいと思います。

それでは・・・どうぞ！

第二百二十三話

「君達には命を捨ててもらおう事になる」
「・・・・・・・・」

バタンッ！

「司令！」

「・・・マエヤマ君。どうしてここに？」

「ミスマル司令に挨拶をしようと。ですが、その前に先程のは・・・」

「聞いていたのかね？ それならば、そのままである」

命を捨ててもらおう事になる。

そのままの意味って事は・・・。

「特攻しろと。航空隊は我が身を犠牲にして敵を落とせと。そう仰るのですか！？」

過去、神風という名の特攻隊があった。

それが再びこの何百年も経った今、再現されようとしているというのか？

時代錯誤が過ぎる。

人の命を犠牲にして敵を撃ち滅ぼすなんて時代はとっくに終わった筈だ。

これぐらいの拳、ケイゴさんに比べたら。

「やめんか！」

ピタッ。

目の前で止まる拳。

ミスマル司令の静止の声にミズキさんは従った。同時に迎え撃とうとしていて俺の拳も。

「イトウ大尉。下がりなさい」

「・・・ハッ」

無表情のイトウ大尉が下がる。

どうして・・・どうして、受け入れてしまってるんですか？ ミズキさん。

貴方には・・・貴方には帰るべき場所が、帰りを待っていてくれる人がいるでしょ。

彼女達の想いを・・・裏切っていいと、そう仰るのですか？

「マエヤマ君」

「・・・はい」

ミスマル司令。

貴方も何故こんな事を。

俺の知る貴方はこのような作戦を考える人ではなかった筈です。

「君は何か勘違いをしていないかね」

「え？ 勘違い？」

それって……。

「命を捨ててもらおうと言ったが……」

ああ、そういう事が。

モノの喩えっていう奴。

実際はそんな事をさせるつもりでは。

「私が命を捨てさせるのだ」

「なっ!?!」

絶句。

文字通り、言葉も出なかった。

「軍人を殺すのは敵ではない。この私だ」

「……ミスマル司令」

「私にとって軍人とは駒でしかない。その命は全て私が握っている」

ミスマル司令。

貴方に何があつたのですか……。

貴方はそのような考え方をする人間では……。

「……どれだけ言い繕おうとこれが真理なのだよ、マエヤマ君」

「……司令」

「私が死ぬと言えば死なねばならない。それが理不尽であろうと」

「ですが、私の知る司令は理不尽に死ぬという方ではありません」

「……それを貫くには力が必要なのだ」

苦悩を浮かべる司令。

それは自身の言葉一つで命を奪える事への恐怖。

そして、だからこそ、この命令を与えてしまっていていいのかという不安。

俺にはそう見える。

貴方も・・・悩んでいるのですね。

「ボソン砲だ」

「ボソン砲？」

ミズキさんが語る。

その瞳に覚悟の色を見せながら。

「我々地球にとってかの兵器程に脅威なものはない」

時間、空間、全てを克服した兵器。

それがボソン砲。

かの兵器の射程距離内にいたら、既に命を握られていると同じ。

避ける為には常に移動し続けるしかない。

でも、それはナデシコ単艦だったからこそ出来た事。

艦隊と同様の戦闘を行う事は・・・不可能だ。

「戦いが始まったら真っ先にボソン砲を破壊する。それが俺達の任務」

「ボソン砲を？」

「俺達が任務をこなさねば、必要以上に味方兵士が死んでいく」

「だから、だから、ミズキさん達が命を捨てると？」

「それが我々の仕事だから、な」

・・・確かにボソン砲は驚異的だ。

でも、他にも、他にも何か方法はある筈だろ！

「一を切り捨て、その他大勢を救う。それが我々軍人なのだ」
分かる。分かるさ。
でも、俺は！

「ミスマル司令！ 俺は」

「やめろ！ コウキ！」

「ミズキさん！ しかし！」

考えれば！ 他にもまだ何か！

「ミスマル最高司令官」

「うむ」

ミズキ・・・さん？

「時代に取り残らされ、つまらない意地とプライドだけで何の貢献もせず、

腑抜けていた我々にこのような榮譽ある任務を与えてくださり、感謝の言葉もございません」

そんな事はない。

榮譽なんかより命の方が大事だ。

死ぬと分かっているのに、戦場に立つ意味なんてどこにもない！

「落ちぶれていた我々が再び戦場の華となれる。これ以上の幸せはありません」

「イトウ大尉。良くぞ言ってくれた。頼むぞ」

「ハッ！ 必ず、必ずや成功させて御覧にいきます」

敬礼。

これ以上ないほどに立派な敬礼がそこにはあった。
ミズキさんだけじゃない。

航空隊員の誰もが真っ直ぐに、姿勢良く。

誰もが前だけを見て、誰もが・・・決死の覚悟を決めていた。

「・・・ミズキさん、他の皆さんも・・・それでいいんですか？」

「ふっ。コウキ。これこそが俺らの性。航空隊ってのは馬鹿の集まりなんだよ」

「残される者はきつと許してくれませんか。死なないで帰ってきて欲しいってそう願ってます」

「だろうな。あの世で謝るしかない」

「馬鹿ですよ。馬鹿過ぎます」

「ハハツ。馬鹿正直な奴だ」

なんで・・・。

「なんで笑ってられるんですか？ 怖くないんですか？」

何故、前だけを見てられるんです？

「逆に問う。何故笑えない？」

「え？」

「笑え、コウキ」

「笑え？」

「そう笑うんだ。苦しい時、辛い時こそ勇ましく笑ってみせろ」

「ミズキさん・・・」

「それが俺達、航空隊のモットーだ。なあ！ 皆！」

「「「「「おう！」「」「」「」

「だから、コウキ！」

「・・・はい」

「俺達を・・・笑顔で見送ってみせる！」

何も言う事が出来なかった。

覚悟を決めた男達を前にして・・・。

俺は何も出来なかった。

止める事も、受け入れる事も・・・。

「そうか！ 和平と決まったか！」

「・・・はい」

地球の事を報告するべく神楽大将のもとへと赴いた。
でも、俺は未だに悩んだままで・・・。

「どうした？ 念願の和平と決まったのに沈んだ顔をして」

「・・・いえ」

「何か悩みがあるなら、相談に乗るが？」

悩み。そんなのあれしかない。

神楽大将。貴方なら俺にどんな答えを出してくれるのでしょうか？

「実は・・・」

「うむ」

「最終決戦において」

ハッ！

馬鹿だろ、俺。

軍機をばらしてどうするんだよ。

ここで神楽大将に話したら、それが伝わって対策が取られる。そうだったら、ミズキさん達は唯の犬死だ。

それこそ許容できる事ではない。

「いえ。なんでもありません」

「・・・そうか」

すいません。

その気持ちだけ受け取っておきます。

「最終決戦をする前に、地球から停戦勧告をするつもりです」

「だろうな」

「それに対し、木連は・・・やはり？」

「うむ。受け入れはしないだろう」

「・・・どうにかして、受け入れてもらう事はできないでしょうか？」

「・・・無理だろうな」

「・・・ですよね」

・・・俺だって決戦はするべきだと考えている。

しかし、決戦が避けられないとミズキさん達は・・・死ぬ。

死ぬと分かかって、それでも決戦を選ぶ勇氣は・・・俺にはない。

分かっている。個人の感情に左右されちゃいけないなんて事は。

でも、それでも、俺に割り切る事はできなかった。

ハハハ。何が信念だよ。

俺の信念なんて所詮はこの程度なんだ。

友人一人失うというだけでこんなにも簡単に見失ってしまう程度でしかない。

弱い、弱すぎだよ、俺。
情けない、情けなさすぎる。

「・・・苦悩しているようだな」

「神楽大将・・・」

「だが、それでいい」

「え？」

それって・・・。

「・・・私は君が今、何に苦悩しているか分からない」

「・・・」

「だが、これだけは言える。妥協はするな」

「妥協はするな？」

「そうだ。悩んだならとことん悩め。妥協で結論を出す必要はない」

「・・・認めねばならない状況である事は理解しているんです。それでも・・・割り切れない」

「そう簡単に割り切れれば何も苦労はせんよ」

「え？」

「悩んだならとことん悩め。迷ったならとことん迷え。私はそうして生きていた」

「神楽大将も？」

「悩まず、迷わず、苦しまず生きてきた人間などいはいせんよ」

「・・・どうすれば良いんだろうか？」

受け入れないといけない。

その頭では分かっているんだ。

でも、心が受け入れてくれない。

「・・・今日はもう帰ると良い」

「しかし・・・」

「和平が賛成された。その報告だけで充分だ。後は戦場で語ろうじやないか」

「神楽大将・・・」

「次に直接会うのは決戦を終えた後、和平交渉の席が望ましいな」
「・・・はい」

そうであつて欲しいと俺も願っています。

「また会おう。マエヤマ・コウキ」

「はい」

こうして、決戦前、最後の訪問は終わった。
後はもう・・・戦うしかないんだな。

『どうした？ コウキ』

「・・・アキトさん」

アドニスのコクピット。

何故かは知らないが、今はここが一番落ち着いた。

戦場に向かう為のものの中が一番落ち着くつても変な話だけど。
ミナトさんやセレス嬢、アザレアにも居場所は伝えてある。
でも、少し独りにして欲しいと告げた。

今、ここで会ったら、また甘えてしまふと思つたから。

自分の力だけで迷いを振り切らないとな、こればっかしは。

三人とも心配そうにこちらを見ていたけど、納得してもらつた。

結論が出たらきちんと教えてねって言い残して。
どこまでも優しいんだから、ミナトさん達は。

「アキトさんは悩んだ事がありますか？」
『何？』

そんな時に声をかけてきたのがアキトさん。
アドニスのコクピットから通信を入れてきた。
アキトさんも相棒と語り合ってたのかも、なんて。

「自分のやってきた事は正しかったのかって」

散々悩んで辿り着いたのがこの疑問。

原作では確かに後処理が悪くて、火星の後継者の出現を許す事にな
ってしまった。

でも、今のように互いの命をとことん削りあうような展開にはなら
なかった。

後々を考えたら、今の方がずっと良いって思う。

でも、失われる命は・・・今の方がずっと多くなってしまうのでは
ないだろうか？

互いに総力戦。

失われる命は数え切れないだろう。

原作以上の犠牲者を俺は、俺達は出してしまったのではないだろう
か？

こんな展開を作り出してしまったからこそ、ミズキさん達は死ぬこ
とになったのではないか？

俺達は好き勝手に改変してきて、誰もが認めてくれる最善へと辿り
着けたのだろうか？

俺は今、そんな事ばかり考えてしまっていた。

『・・・そうだな。分からん』

「分からないって・・・アキトさんらしくありませんよ」

アキトさんなら、明確な答えを返してくれると思ってたんだけど。

『分からんよ。何が良くて、何が悪かったのかなど』

「それなら、どうしてアキトさんは戦えるんですか？」

迷ってて、悩んでて、それなのに戦えるアキトさんの原動力とは？

『分からないからこそ、だ』

「え？」

分からないからこそ？

『何が良くて、何が悪いか分からない。』

だから、少しでも良くしようと思える事ができる』

「でも、それで、余計に悪い方になったら・・・」

『更に戦えば良い。無駄な足掻きだろうと、最善を目指して、な』

「・・・それはアキトさんだからできるんです」

俺は今にも折れそうだな。

『コウキ。甘ったれるな』

「え？」

『誰もが苦悩している。だがな、足を止めはしない』

「・・・」

『悩み、迷い、苦しみ、それでも皆、前へと進んでいる。それなのに、お前は何だ？』

「俺は・・・」

『迷わず進める者などいない。悩まず進める者などいない。苦しまず生きていける者などいない』

「……………」

『屈するのか？ 周りが出来て、お前には出来ないのか？』

「そんな事……ありません」

『ならば、歩め。止まらずに歩め。悩みなんてのは気付けば解決してるもんなんだよ』

「そんなもんですかね？」

『そんなもんだ』

ミスマル司令。

司令も苦悩していた。

他に方法があれば、確実にその方法を取っていただろう。

あのような戦法、下策でしかない。

そんな事は誰よりもミスマル司令が自覚している。

でも、ないから、そうするしかなかったから、死ねと命じた。

その苦悩を、俺は知ろうとしていなかった。

ミズキさん。

悩まない筈が、苦しまない筈がない。

彼には愛する家族がいるのだから。

俺に言われなくなつて、残される側の人間の事は考えていたと思う。

それでも、自分にとって何が最善か、何が地球の為になるか。

そう悩んだ末に出した答えが特攻なんだろう。

それに対し、俺が口出す事は愚かでしかない。

それは彼の勇気を、彼の誇りを汚す事になるから。

「歩き出さないとな」

誰もが苦しみながらも前へと進んでいるんだ。

それなのに、いつまでも歩みを止めていたら……俺は一生後悔す

る。

「ありがとうございます。アキトさん」

『俺は何もしていないさ』

「それでも、ありがとうございます」

迷いが吹っ切れた訳ではない。

悩みが解決した訳でもない。

でも、こうやってウジウジしている事に意味がないってのだけは分かった。

『フツ。若者を導くのが先輩の仕事だからな』

残念ですけど、年齢でいえば俺の方が上ですから。

「失礼します」

『ああ』

悩みは尽きない。

それでも、前へ進むしかないんだ。

考えすぎるのは俺の悪い癖だよな。

「ミズキさんの所へ行こう」

少しでも生還の可能性が高くなるように、タンポポをより万全にしてやる。

今の俺に出来る事はそれぐらいしかないんだ。

「悩んでいる暇なんて俺にはない」

彼らが命を賭けるなら、俺も賭けてやる。

「俺も付いていきます、ミズキさん」

貴方だけに命は賭けさせませんから。

俺達で木連のボソン砲、全て封印してやりましょう！

「負けないさ。負けてたまるか！」

決戦の日は近い。

第二百二十三話（後書き）

タンポポの存在意義は対ボソン砲だったというお話。
ボソン砲ってマジ鬼畜ですからね。

対応するには特攻するぐらいじゃないと解決できない。

以前、スバル嬢が急襲して壊した事がありますが、
それは相手が単体だったから。

艦隊戦という隠れる場所がない状況では厳しいでしょう。

まあ、タンポポにもステルス性は備わってますので、
多少の効果はあると思いますが。

相転移エンジンを積んだ機体で自爆。

それぐらいの事をしないとボソン砲封印とはいかないでしょうね。

ちよつと短かったですですが、コウキ君の苦悩でした。

次回より戦争に突入します。

それでは、次回もよろしくお願いします。

第二百二十四話（前書き）

決戦初日。

一日分の戦闘を一話で書けたら嬉しいなあ……。
多分無理だけど……。

批判ばかりくらいしましたタンポポ作戦。

その結果が出ます。

納得してもらえたら……嬉しいですね。

第二百二十四話

「如何か？」

『愚問なり。我々は戦う為にここに来た』

「これ以上の争いは無意味であるとは何故分らない？」

『無意味ではない。これは聖戦。悪である地球を滅ぼす戦いなり』

「その意思を曲げる気は？」

『くどい！』

「・・・承知した。戦場であいまみえよう」

「・・・始まった・・・のね」

交渉は決裂。

否応もなく、争いの火蓋は切って落とされた。

「コウキ君」

「・・・コウキさん」

心配そうにこちらを見てくる二人。

そう、これから俺は戦場に立つのだ。

死神が常に首を狙っている魔の地へ。

それでも・・・行かなければならない。

己が願いを叶える為には。

「行ってきます」

「行ってらっしゃい」

「・・・必ず帰ってきてくださいね

「もちろん」

ミナトさん、セレス嬢。

二人を引き寄せ、抱き締める。

これで最後になるかもしれない。

そんなネガティブな想いからでは決してない。
ただ、なんとなくこうしたいと思ったただけだ。

「皆で平穏な暮らしをする為にも」

ひたすらに力強く。

ここにいる。必ず戻ってくる。

そう伝わるように力強く抱き締めた。

「艦長。極秘任務の為、単独行動を取らせて頂きます」

嘘を吐いた。

今まで築いてきた立場を利用した嘘を。

ミスマル司令に確認させる訳にはいかなかった。

これは完全なる命令違反なのだから。

そんな中、あたかも司令からの極秘任務であるように見せ、許可を得る。

仲間を騙しての出撃か。

これは無事に帰って来れないかもな。

「おう。注文通り、ヒナギクにアドニスとフェザンツ、それとバツタを搭載しておいたぞ」

「ありがとうございます。ウリバタケさん」

「・・・無理だけはすんな。今のためえを見てると心配でならねえ」

「戻るべき場所が、帰るべき場所がありますから」

「そうか。気合入れて、やってこいや」

「はい」

ヒナギクに乗り込む。

さっさとしないと嘘が露見しそうだし、急ぎますからね。

「マエヤマ・コウキ。ヒナギク、出ます」

漆黒の、そして、後に紅く染まるであろう宙へと飛び立った。

S I D E M I N A T O

「艦長。キクザクラより通信が」

「お父様から？ 何だろう？ 繋いでください」

他のパイロットを差し置き、颯爽とコウキ君が飛び出していった。なんでも極秘任務だとかで。

艦長を含め、誰もが疑わずに受け入れた。

コウキ君ってばそういう事が多かったし。
でも、ここに来て、ミスマル最高司令官からの通信。
何だろう？ とてつもなく嫌な予感がする。

『ユリカ』

「如何しましたか？ お父様」

『先程、ナデシコからヒナギクが発進したようだが、何か考えがあるのかね？』

・・・え？

「ちよ、ちよっと待ってください、お父様」

『ん？』

「お父様が御指示を出したのではないのですか？」

『何？ 私はそのような指示は出しておらん。もしや！』

コウキ君！

『ヒナギクに乗っているのはマエヤマ君で間違いないのかね！？』

「は、はい」

『・・・なんて事だ』

頂垂れるミスマル最高司令官。

その光景がどこまでも私を不安にさせた。

「・・・コウキ君」

「・・・コウキさん」

貴方は今、何をしているの？

なんで貴方はこんな事をしたの？

ねえ、教えてよ、コウキ君。

S I D E O U T

S I D E K A E D E

「何？ コウキが命令違反？」

それぞれアドニスに乗り込み、発進準備をしているナデシコパイロット。

そんな中、コウキが誰よりも先に飛び出していった。

いつものように特殊な任務を与えられての事だと思ってたんだけど……。

「誰の命令でもないのに飛び出したというのか！」

リーダーパイロットであるテンカワさんが叫ぶ。

当然、他のパイロットも困惑。

コウキがそんな事をするのは何かしらの理由がある筈。

でも、どうして、それを私達に教えてくれなかったのか。

……あいつはいつも一人で抱え込み過ぎなのよ。

「通信は!？」

『無理です。拒否されています』

「クッ。分かった。連れ戻してくる。セイヤさん。すぐに発進準備を」

「おうよ！ あの馬鹿！ 帰ってきたら説教してやる」

勝手な事ばかりして、許さないんだか。

バーンッ！

「何事だ！？」

こ、今度は何！？

『ナデシコ護衛艦がボソン砲によって撃墜されました』

ボソン砲？ あの卑怯な武器？

『艦隊全体へ命令。第五、六艦隊を残し、ポイント―――まで
後退！』

後退？

でも、コウキは前よ？

逆方向になっちゃうじゃない！

『艦長。如何しますか！？』

決めるのは艦長。

軍の命令に従うか。

それとも、コウキを優先するか。

私個人としてはコウキを優先して欲しい。

でも……。

『……後退します』

こんな大事な場面でナデシコが命令違反をする訳にはいかないわよね……。

「ユリカ！ 俺だけでも出撃許可を！」

テンカワさん。それだけコウキの事を案じているのね。
テンカワさんなら、もしかしたら、コウキを……。

『駄目です。許可は出来ません』

え？

「ユリカ！」

『パイロットは出撃準備をしながら待機。命令違反は許しません』

「だが！ コウキが！」

『マエヤマさん一人の為にナデシコを危機に晒す訳にはいきません！』

そ、そんな……。

「……ユリカ。お前……」

『……残念ですが、こうするしかありません』

……コウキ。

「……考えがあつての事だろう」

え？

「あいつが何も考えずに飛び出す訳がない。何かしらの考えがあるんだ」

「……………」

「あいつを信じよう。ユリカは……信じている。だから……」

そのまま黙り込むテンカワさん。

ナデシコは何もする事なく、クルー一人をその場に残し、下がっていった。

「…………コウキ。信じて……良いのよね？」

誰もが不安と心配を胸に抱きながら……。

S I D E O U T

「これでもう五隻」

ボソン砲の脅威。

先制攻撃にこれだけ適した兵器はない。

既に五隻が沈められ、後数分すれば更に何隻か沈むだろう。

……たったこれだけの時間で、もう何人死んだ事か。

まだ戦闘らしい戦闘は始まっていないというのに。

「キクザクラとナデシコは？」

木連にとって脅威であるナデシコ。

また、連合軍の旗艦であるキクザクラ。

この二隻が優先的に狙われるのは言うまでもない。

実際、最後方に位置するキクザクラは別として、ナデシコの護衛艦は落とされている。

狙いが外れたのか？ それとも、あえていきなり狙わなかったのか？ 前者であれば、まだまだ精度不足であると言える。

追尾する様子はないから、恐らくその場限定で爆発する仕組みなんだと思う。

これであれば、まだ手はある。

でも、後者の、あえて狙わなかったという理由であれば……きちんと狙えるだけの精度があるという事。

最早命を握られていると同じだ。

……やっぱりボソン砲は危険だな。

最優先で破壊する必要がある。

「ミスキさんはどこに？」

特攻するであろう航空隊。

彼らは今、どこに？

『マスター』

「どうした？ アザレア？」

『キクザクラから部隊が展開。ヒナギク小隊です』

「ヒナギク小隊が？」

ヒナギクを中心とした小隊システム。

これがヒナギク小隊だ。

彼らは小隊単位であれば稼働限界の時間も距離も克服できる。そんな彼らがこの状況下で？

『合流しますか?』

「・・・いや、その前に、航空隊を

ダーンツ！ ダーンツ！

「あれはどこかの艦隊？ 他の艦隊は・・・後退してるのか?」

目の前で艦隊の動きが二つに分かれた。

連合軍の大体は後退しているのだが、幾つかの艦隊はそのまま突撃。ボソン砲が使えない距離まで下がる艦隊とボソン砲が使えない状況下まで突っ込む艦隊。

どちらにしる、ボソン砲を意識している事が分かる。

「統制が取れてない? いや、ミスマル司令に限ってそんな事は・・・」

それに、ヒナギク小队は突っ込んだ艦隊に合流して敵へと攻め込んでいる。

統制が取れていなければ、こんな事は出来る筈がない。これは・・・何かしらの作戦だ。

「アザレア。すぐに航空隊の居場所を突き止める」

『はい。マイマスター』

もし、対ボソン砲の作戦であるのなら・・・。
必ずや航空隊の存在が作戦の鍵となっている筈。

あのままキクザクラと共に後退したとは考えづらい。
恐らく、どこかしらに隠れて・・・。

『申し訳ありません、マスター。見付かりません』

「見付からない？ お前が？」
『はい。面目ありません』

落ち込むアザレア。
相変わらず人間らしい。

「いや、謝らなくて良い。むしろ、アザレアに見付からなかったと
相手を褒めてやりたいくらいだ」

『マスター……』

「航空隊がキクザクラ内にいるという事は？」

『ありません。そうであればすぐに気付きます』

「……そうか」

俺の勘もキクザクラ内にはいないと言っている。

アザレアもああ言ってるし、航空隊はどこかしらに隠れていると見た方が良いな。

「隠れて、後方からの奇襲。そのあたりが妥当か」

どんな作戦かは聞いてないが、そんな所だろう。
それなら……。

「アザレア。ここより後方で隠れられる場所は？」

『ポイント　ー　にスペースデブリが』

「了解。そこへ行く」

後退する振りをしながら、スペースデブリに身を隠す。
前に行きながら隠れたら流石に怪しすぎるからな。

「後は臨機応変に行くしかない」

スペースデブリに到着後は主電力をカット。
メインカメラだけに予備電源で電力を回し、様子を見る。
ここでこちらの存在がバレたら、作戦は全て失敗に終わってしまう
からな。

「潜るぞ。慎重にな」

『了解。マイマスター』

運が良いやら悪いやら。

このスペースデブリに航空隊はいなかった。

状況を見極めないとな。

好機だからと勝手に飛び出す訳にもいかないし。

「アザレア。主電力カット。モニタとお前以外の電力をカットしろ」
『了解』

これでレーダーで捕捉されるような事はなくなる。

艦の形状的に既にステルス機能はある訳だし。

スペースデブリ自体に反応を誤魔化す機能もある。

まず見付からないだろう。

敵が哨戒さえしてこなければ。

まあ、その為の戦闘組だと思う。

あそこで戦闘せず引いたら、怪しまれるに決まってる。

だが、一戦し、機を見て引けば……。

相手は追撃に来る筈だ。

哨戒を出すなど慎重な事をせずに、今が好機と。

そこを突く。ボソン砲を撃破するにはそれしかない。

「お。どうやら後退を始めたぞ」

かなり追い詰められてからの後退。

これで敵は油断して追撃をかけてくる。

まさか、これが演技だとは誰も思わないだろう。

・・・演技だよな？ 演技じゃなかったら困るんだけど。

「・・・追撃が来ない？」

後退をそのまま見逃す木連艦隊。

どういう事だ？ まさかこちらの意図に気付いた。

・・・いや、違うな。

ある程度離れてくれれば、ボソン砲の餌食にできる。

だから、あえて離して、ボソン砲で攻撃するつもりなんだ。

・・・課題はボソン砲の射程距離外に一撃も喰らわずに逃げ切れるかどうか。

以前は運が良くてナデシコは逃げられたけど・・・。

あれは完全にうちの艦長の運：EXのおかげ。

今回は・・・厳しいか。

でも・・・。

「出て行く訳にはいかない」

存在が露見すれば、作戦は失敗。

それに、そもそも・・・。

「俺が行っても何もできない」

出来るのはここで祈る事ぐらい。

頼む。無事に射程距離外に逃してやってくれ。

バーンッ！ バーンッ！

戦艦が通り過ぎた後にミサイルが現れて爆発する。
うん。先回りはやはりできないようだ。
精度もあまり良くないし。

これなら・・・。

「うし」

無事に射程距離外から脱出。

艦隊は振り向き、再び木連艦隊に照準を向けた。

「これでボソン砲は届か

」

ドカンッ！

「え？」

攻撃する為に残った艦隊が全て沈んだ。
生き残ったのは的が小さかったヒナギク小隊のみ。
それでも、幾つかの小隊は撃ち落されている。

「嘘・・・だろ？」

以前はこれだけ距離を取れば、ボソン砲で攻撃できなかった筈。
射程距離が伸びている？

それに、さっきまでと精度が違いすぎる。

ヒナギク小隊に照準を合わせられるなんて・・・。
偶然にしては的確過ぎるだろ。

他にもボース粒子の反応から出現までのタイムラグとか。

さつきまでとは段違いじゃないか。
まさか・・・こちらが釣られたというのか!?

「な、何故?・・・そうかッ!」

そうだよ。何故気付かなかったんだ。

「遺跡だ! 草壁は遺跡ユニットを保有している。だから!」

ボソン砲の射程、精度を向上させるぐらいなら実現可能。
それぐらいの時間を与えてしまっている。

「クソッ。やはり時間を与えすぎたか」

遺跡の研究。

その成果を早速活用してきた。

・・・やばいな。

射程距離が伸びれば、その分対処は難しくなる。
精度の向上なんてもつての他だ。

一応、この危険性は生き残ったヒナギク小隊が報告してくれるだろ
うけど・・・。

根本的な解決にはならない。

・・・本当に命を賭けて、ボソン砲搭載戦艦を撃墜する以外に方法
はなさそうだな。

「アザレア」

『はい』

「それでも、死ねないよな」

『もちろんです。マイマスター』

命は賭けるぞ。

でもな、賭けるだけで、負けはしない。
勝って、それ以上の何かを手に入れてやるんだ。

『マスター。如何しますか？ 木連戦艦は動く様子がありません』

「待つ」

『え？』

「好機が来るまでいくらでも待ってやる」

今更動いた所で何の意味もない。

哨戒に来られたら考えるが、来ないなら……。

『了解。警戒を続けます』

「頼む」

この状況下、最早我慢比べだ。

S I D E M I N A T O

「ヒナギクの反応が消えた!？」

それって……もしかして……。

「ヒナギクが……墜ちたの?」

「……いえ。恐らくはデブリ帯に隠れたのかと」

「そう……。良かった」

何だ。心配させないでよ、コウキ君。

「でも、これでマエヤマさんの意図が分かりました」

「意図？ 何か知ってるの？」

「全艦隊に事前に通達がありました。」

敵のボソン砲対策として、以前私達が取った戦法を取ると」

以前、ナデシコがした戦法？

それって……。

「はい。あらかじめ味方を戦場に隠しつつ後退。その後、奇襲をかける」と

「でも、それは相手が単体だったから出来た事で、艦隊相手となると……。」

「そうですね。……しかし、やるしかないのです。」

ボソン砲を野放しにしていたら、圧倒的不利のまま戦わないといけなくなる」

成功すれば効果は大きいでしょうね。

でも、その奇襲をかける人間は間違はなく……死ぬ。

いくら奇襲とはいえ、敵艦隊の中に突撃するなんて……あまりにも無謀よ。」

「その為に用意されたのがタンポポなんです。」

タンポポなら単独行動が可能であり、艦隊を慌てて戻す必要がない」

「でも！ それは！」

「……そうですね。見捨てるという事でしょう」

「艦長！ 貴方はそれで

」

ハッ！ さつき艦長はなんて言ってた？ コウキ君の意図って、もしかして、コウキ君はこの作戦を知ってて……。

「艦長」

「……はい」

「コウキ君はこの作戦に？」

「恐らく」

……馬鹿。

どうして、どうしてそんな危険な真似を。

「……コウキさん」

誰もが静まりかえる。

そうよね。誰だってこの作戦に参加した人間の末路なんて容易に想像できる。

「マエヤマさんは航空隊の方々と親交がありましたから、それで……」

「友達を見捨てられないって？ 馬鹿よ！ コウキ君は馬鹿よ！」

私達の事をもっと考えて欲しかった。

コウキ君を失ったら、私達は……。

「……ミナトさん。帰ってきてくれますよね？」

「……セレセレ」

「……コウキさんは帰ってきてくれますよね？」

何があっても戻ってくるって約束してくれましたよね？」

セレセレ。

・・・震えてる。

絶望的なのに、それでも信じようって。

でも、流石にこれは・・・。

「艦長。最高司令官からデータが送られてきました」

「データ？」

「これは・・・ッ！ ボソン砲の性能が向上しているようです」
「本当ですか!？」

何ですって!？

「性能の向上により作戦を立て直す必要があると」

「ちよつと待つて！ それじゃあ今現場で隠れている人達は・・・」

「・・・見捨てる事になります」

嘘・・・でしょ・・・。

コウキ君・・・もう貴方とは会えないの？

「・・・メグミちゃん。通信をお願いします」

「え？」

「お父様に、ミスマル最高司令官にナデシコの出撃許可を！」

その言葉に後ろを振り向く。

そこにはどこまでも凜々しい艦長の姿があった。

S I D E O U T

『マスター。敵の無人兵器が!』

「クツ。流石に気付くか」

忘れていた事がある。

敵はわざわざ有人機に見回りさせずとも無人兵器があったのだ。

彼らが独自にネットワークを構築していれば、

たとえ破壊しても瞬時に情報は伝達されてしまう。

もしそれがなかったとしても、撃墜情報が伝われば怪しまれるは必至。

見付かる訳にはいかないな、何があっても。

「どうする? どうする?」

どうすればこの状況をやり過ごせる?

『マスター。バッタを使いましょう』

「バッタを?」

『バッタを媒介に向こうの主導権を奪います。マスターならそれが出来る筈です』

ハッキングによる主導権の奪取。

・・・なるほど。その手があったか。

もしかしたらいけるかも。

その瞬間を見られる心配もないし。

「うし! アザレア、よく言ってくれた。それで行く」

『了解。マイマスター』

相変わらず頼りになるぜ、アザレア。

「このデブリ帯を含め、どこにも地球の伏兵はいないと伝える」

ハッキングによってバツタを制圧。

そして、偽情報を伝える。

向こうが鵜呑みにしてくれれば良し。

疑ったとしても多少の時間稼ぎにはなるだろう。

時間を稼げば、ミスマル司令やうちの艦長がどうにかしてくれる筈だ。

「おし。いけ」

うまくいってくれよ……。

「まだか？ まだ地球側は動かないのか？」

木連も動かない。地球も動かない。

その均衡状態が長い間続いている。

我慢比べであれば負けるつもりはないが……。

完全に見捨てられたとしたら別だ。

自分達だけで戦況を打破するしかない。

ま、そもそも俺以外にも誰かがいるとは限らないんだよな、実は。

俺が勝手にそうやって考えただけだし。

もしこれで航空隊は実はキクザクラ内にいましたなんてなってみる？

俺ってば唯の馬鹿じゃん。

まあ、そうなつたら素直にボソソジャンプで帰ればいいんだけどさ。

『マスター。レーダーに反応が』

「・・・遂に来たか」

無人兵器の情報を鵜呑みにする事は流石にしなかったか。
情報を怪しんで、今度は有人兵器を差し向けたらしい。

『如何しますか？』

どうするかって？

そんなの・・・。

「祈るしかないだろうが」

『・・・はい』

身動きはできない。

少しでも動けば、逆にそれが反応として相手側に感知される。
ただただ、相手がこちら側に気付かない事を祈るしか・・・。

「・・・」

『・・・』

ひたすらレーダーを眺める。

こちらに向かってくる時はドキッと心臓を掴まれ、離れていく時は
フウッと安堵の息を吐く。

しかし、どうやらこのままバレずに済むという訳にもいかなそうだ。
遠回りはしているものの、確実にこちらに向かってくる。

あのまま別の方向にドバーツて行ってくれれば良かったのに・・・
ついてないな。

「どつするか・・・」

見付かるぐらいであれば、撃墜してしまっただ方が良い。

確かに相手側に誰かがいると露見してしまうかもしれないが、それでも多少の時間は稼げる。

その間に全員が退避すればいいだけだ。

そうすれば、次へと繋げることが出来る。

何もせずに落とされたら、何の意味もないただの犬死となってしまう。

それだけは避けたいとな。

「アザレア。すぐにでも動けるよう準備を」

『はい』

即行で電力を回せば、対応はできる。

ギリギリまで粘ろう。

まだ見付からないという可能性もある。

やり過ぎせそうにないという確信はあるが、まだ何があるか分からないんだし。

ありえないなんて事がありえないんだよ。

ドクンツドクンツドクンツドクンツドクンツドクンツドクンツ！

「うるせえな。聞こえちやうだろ」

聞こえる筈がないのに、そう思わずにはいられない。

それほどまでに心臓は大きく鳴っていた。

「・・・駄目か」

あと数メートル。

一つ二つのデブリを越えたら、もう姿が見えてしまう。

「アザレア。行く」

『マスター。敵反応が遠退いていきます』

「何？」

レーダーを確認。

確かに敵反応は離れていつていた。

「どつという事だ？」

何故ここに来て？

緊急事態でも発生したのか？

『マスター。木連の様子が変わります』

「何？ 詳しく伝える」

『はい。動きがなかった木連が迎撃体勢を取っています』

誰かが木連に向かって来てる？

それで戦力を呼び戻したという事だろうか？

「地球側の動きは？」

『どつやら幾つかの艦隊が動いた模様。あれは……ナデシコです』

『！』

ナデシコだった？

「どつしてナデシコが？」

「分かりません」

あれはアレス隊？ それにアテナ隊も。
他にも各方面軍の精鋭中の精鋭達じゃないか。

「キクザクラを始めとした他の艦隊は？」

「後方で待機。ナデシコを中心とした艦隊が展開されているのみです」

それじゃあ、全艦隊という訳ではないと。
ナデシコは一体何を？

「いや、もしかしたら・・・」

この作戦を誰よりも理解しているのは間違いないが艦長。
だからこそ、あえてナデシコを動かしたのかも。

「チャンスが来るかも」

この作戦は簡単に言えば餌に釣られた獲物を死角から網で掬ってしまおうというもの。

その餌が大きければ大きいほど、美味ければ美味しいほど、その効果は増す。

今の木連にとって何よりも脅威を感じているのはナデシコの筈。

キクザクラも旗艦という意味で優先されるが、登場が遅く、あまり有名ではない。

それに反し、木連中に名を轟かせているナデシコ。

もし、そんなナデシコが手の届く位置にいれば・・・。

無我夢中で追っかけてくるに違いない。

それだけのネームバリューがナデシコにはある。

そう理解しているからこそ艦長はナデシコを引っ張ってきたんだ。それに、アレス隊のように宇宙で活躍していた部隊もあの中にはいる。

あれ以上に木連が釣られやすい餌はないだろう。

「艦長のお陰で当初の作戦がまだ続行できる」

諦めないで良かった。

まだチャンスはあるぞ。

「でも、ボソン砲に対してどんな対処を……って、ええええ！」

目の前の光景を信じる事が出来なかった。

だって、そうだろう？

最大速度で突っ込んでいくなんて現実離れた光景を目にしたら。

まさかの艦隊で特攻？

何を考えているんだ！？　うちの艦長は！

S I D E M I N A T O

「突っ込むううう！？」

「はい」

エッヘンと胸を張る艦長。

その姿に頭が痛くなってきた。

「あのね、ユリカ。それは流石に無謀だと思うよ。」

うん、私も激しくそう思う。

「あくまで私達は餌です」

「どういう事？　ちゃんと説明して」

ただ突っ込むだけだったら、コウキ君を残してあの世行きじゃない。そんなの絶対に認めないからね。

「遠く離れると目指して来ない。それならとびっきりの餌を近くで見せびらかしてやるんです」

「で、でも、それじゃあボソン砲の餌食に」

「だから、本当に近くでだよ。具体的に言っなら敵を引き連れながら徐々に後退。」

タンポポ部隊が隠れている場所すらも通り過ぎて、タンポポ部隊と挟撃という形にするの」

餌だけじゃ終わらない。

そういう事ね。

「混戦になったら、流石の敵も撃ってこないでしょうし」

どうだろう？

ミサイル自体はディスターションブロックで防げた程度の大きさでしかない。

精度も射程も向上してるらしいし。

ピンポイントで狙い撃つ事も可能なんじゃ？

「それに・・・」

それに？

『こんな事もあるのかと！ クウ。何度言っても良いな、この台詞は』

「ウリバタケさん！」

『おう！』

もしかして、また画期的な開発を！？
頼りになるわ、緊急事態の時だけは。

「アドニス特殊隠密仕様が発するレーダー障害の電波。

それを広範囲に発する装置をウリバタケさんに作っていただきました」

『ボソン砲つてのもレーダーから距離を割り出してるに違いねえ。
多少の効果はあるだろうよ』

確かに。

でもさ、それなら、始めからそれを全戦艦に取り付ければ良かったんじゃないの？

『ミナトちゃんよお、どうして今まで使わなかったかって顔してんな』

「え、ええ」

どうして分かるのよ？

これがマッドの力って奴？

『これを全ての戦艦に取り付けてみる？ 敵か味方が分からなくなるぞ』

「そ、それは・・・そうよね」

レーダーの働きを正常にさせなくする為のものなんだもの。

『こいつはナデシコを中心に広範囲でレーダー全てを狂わせる。敵も味方もな』

「それじゃあかえって使いづらいじゃない」

『そう、使いづらい。だからこそ、今使えるんだ』
「ええ？」

正直、良く分からない。

『敵も味方も分からない。だから、混戦にしやすいって訳だ』

「それに、現在地の確認にもレーダーは使われますから、相手を引き連れるのも容易になります」

「なるほど」

そついう意味か。

あくまで混戦に持ち込む為だけに用いるのね。

『相手のジャンプは機械頼りらしいからな。』

レーダーなしで座標認識なんて離れ業は人間にはできねえよ』

レーダー障害がそのままボソン砲の封印になる訳ね。

『だが、そのままずっと戦闘を続行する事は不可能だ。』

最終的に正面同士でぶつからねえと戦争つてのは終わらねえ』

あくまで一時の、そして、ボソン砲を破壊する為だけに使える装置。使い方は限られてくるけど、今ほど使える場面なはいつて事か。

なんだか、光が見えてきたかも。

「でも、レーダーが使えないなら、こちらの現在位置も把握できないわよね」

後退するにしたって、方向を間違えたら意味がないもの。

「レーダー障害ですが、通信障害ではありません。

だから、レーダー障害外から通信で現在地を教えてください」

なるほど。今までナデシコ単体だったから気付かなかったわ。仲間との協力。それが集団戦の強味だものね。

「それでは、さっそく」

ゴクリッ。

「・・・あ、忘れてました」

ドタッ。

「あ、相変わらずね」

テヘッなんて舌を出しても駄目よ。

「アレス隊にも連絡を」

「アレス隊？」

あのアルメイラ大佐やアルダート大尉の？

「餌って大きければ大きいほど良いと思いません？」

彼らを餌扱いできるんだもの。

やっぱり、貴方は大物だわ。

「それとウリバタケさん、あれの用意も」

『おつよー！』

まだ何かあるっていつの？

本当に・・・緊急事態でのウリバタケさんには脱帽だわ。

S I D E O U T

「うわっ。眩しい」

突如として突っ込んだナデシコ勢。

何隻かボソン砲で落とされたが、殆どが突破し、急接近した。

DFを張ってるから、通常の兵器では簡単に墜ちないんだけど・・・。

やっぱりDFの中に跳ばせるのは大きいな。

まあ、DFの中を狙うという状況だから、あまり命中率は望めない
んだろうけど。

それで、だ。

急接近したと思ったら、再び突然の事態。

まあ、一言で言うなら、眩しい。

あれだな、特殊隠密仕様の閃光弾を何百個単位で投げたくらいの眩

しさ。

多分、ウリバタケさんの魔改造だろう。

でも、眩しくした所でボソン砲は回避できないのでは？

あれって結局レーダーで敵の場所を感知して、

その座標にミサイルを跳ばしてるって形だと思っし。

「え？ ボソン砲が使われない？」

ナデシコ勢が突っ込んだ時にボソン砲が使われたのは確認できた。でも、突っ込んでからは一度も使われていない。

いや、ここからじゃ確認できないだけかもしれないけど……。少なくとも、不自然な形で落とされた戦艦は一隻もない。

「もしやウリバタケさんが何か？」

こんな事もあるうかと。

そう叫んでいるウリバタケさんが浮かんできた。

……ありそうで怖いな。

いや、対処法があるって事で嬉しいんだけど……。

やっぱり、あの血走った目は怖く感じる。

「今こそがチャンスか？」

混戦状態に陥った今の戦線。

この状況であれば、奇襲もかけられるだろう。

でも、果たしてここで奇襲を仕掛けても良いのだろうか？

もっと絶好の機会が訪れるのではないだろうか？

……うん。もう少し様子を見てから判断しよう。

少なくとも手遅れになる事はない筈だ。

なんといつても……。

「ナデシコを相手にして攻勢に出れる訳がないからな」

S I D E K A E D E

「いつけえええ！」

敵が密集している場所にミサイルを撃ち込む。

馬鹿ね。この機体を前にして纏まるなんて愚の骨頂よ。
なんていったって……。

「物量こそが取り柄なんだから」

面に対する攻撃でこの機体より優れる機体なんて中々ないわよ！

『カエデちゃん！』

プリンッ！

「分かってる！」

背後からの射撃を避ける。

どうしたんだろう？ 最近、感覚が鋭くなってる気がする。
これならッ！

「そこっ！」

レールガンで敵を撃ち抜く。
不思議ね。今なら外す気がしない。

『やりますね、カエデさん』
「イツキこそ」

なんだかんだで、無傷のイツキ。
なんでも出来ちゃう女よね、イツキって。
美人だし、料理できるし、頭良いし、パイロットの腕も良いし。
なんでだろう？ 無性に悔しくなってきた。

「イツキ、後ろ任せていい？」
『はい。もちろんです』

しかも、相手を立てる女ときた。
うん、この悔しさは敵さんにぶつけよう。
女の子の八つ当たりだもの。男なら受け止めてくれるわよね？

「全弾発射！」

敵だけがいるであろう方向に全武装で攻撃。
この決戦が最後なんですよ？
それなら、どれだけ撃ったって、無駄弾にはならないわよね？

『カエデちゃん。ロックオンされてる！』
「大丈夫！ その為の」

バンッ！

「イツキだから」

頼まれた事は確実にこなす。
それが、出来る女イツキなのよ。

「さあ次行くわよ」

『あんまり無茶しちゃ駄目よ?』

「分かってるわ。でも、この程度じゃまだまだよ」

『え?』

「だって・・・」

シュインツ！ ドバツ！ ドーンツ！ シュパツ！

「あつちの方が断然激しいもの」

リーダーパイロットの名前は伊達じゃない。

それに、リョーコやガイも。

なんか最早災害って感じ。

『・・・・・・・・』

しゃべる事なく、ひたすら敵を狩り続けるテンカワリーダーパイロット。

その寡黙な姿は頼り甲斐がある反面、どこか怖くすら感じる。

それが死神と連想させる所以なのかも。

ま、普段の彼を知ってる私からしてみれば怖くもなんともないんだけどね。

イメージで言うなら、美少女二人を侍らす不器用な男って奴?

なんとも違和感だらけのイメージだけど、その通りなんだから仕方ないわよね?

『おつしゃあああ！ ゲキガンパンチ！ 拳じゃ負けねえぞ。拳に想いを乗せてこいや！』

何故か知らないけど、ジンとガチンコ勝負しているガイ。暑苦しくて堪らない。

まあ、その戦果と攻撃力は認めざるを得ないんだけどさ。それでもやっぱり、暑苦しい。

『おらあ！ ハアツ！ まだまだ！』

超接近戦。

一瞬で近付いて、切り裂いて、一瞬で近付いて……。ひたすら接近戦を挑むリョーコ。

貴方、生まれてくる時代を間違えたんじゃないかしら？ なんか刀が似合い過ぎるんだけど。

『皆、頑張ってますね〜』

「まあね。他の二人も凄いし」

精密射撃のイズミ。

戦場を引つ掻き回すヒカル。

いや、本当にナデシコパイロットって凄いわね。ここにコウキが加わったら……。

「それにしても、どこにいるのよ、あいつは」

さっさと出てきなさいよね。

かくれんぼはもうとっくに終わってるのよ？

「ん？ 後退命令？」

作戦が始まったみたい。

気付かれないよう少しずつ、少しずつ戦線を下げていくって奴。

私はナデシコに付いていけばいいだけだから簡単だけど……。

艦隊でこれを実現するのは難しいでしょうね。

でも、ま、なんだかんで出来ちゃうでしょ。

それがナデシコ艦長、ミスマル・ユリカなんだから。

艦長。腕の見せ所よ。頼むわね。

S I D E O U T

「これは……少しずつ引いてる？」

パツと見は気付かない。

でも、注意深く見れば少しずつ戦線が後退しているのが分かる。

これは……。

「流石だな、艦長は」

先程は釣る事は出来なかったが……。

これなら釣れる。

あくまで敵に奇襲できる隙さえあれば良いのだ。

後は通り過ぎるのを待つだけ。

「まだか、まだか……」

あれからどれくらい経っただろうか？

数分？ 数十分？ 数時間？

焦る自分を抑え、チャンスを見極め、ひたすら機を待った。そして、それがようやく報われる時が来る。

「行くぞ！ アザレア！」

『了解！ マイマスター！』

潜んでいたデブリ帯を敵が通り過ぎた瞬間、颯爽と飛び出した。未だに混戦中の戦線へと、新しい風を吹かせる為に。

『コウキ！ お前！』

そして、ほぼ同時期に現れるミスキさん。

「行きますよ！ ミズキさん」

『ハハッ。仕方のない奴だ。付いて来い、コウキ』

「はい！」

『行くぞ！ 第一航空隊！ 突撃イイイ！』

『『『『ウオオオオオオ！』』』』

第一航空隊を始めとし、他の航空隊全てで突撃をかける。

突然の奇襲、それも後方からという悪条件だ。

当然、敵艦隊は混乱し、ボソン砲搭載の戦艦まで突破できるだけの隙が出来た。

「グラビティバスターチャージ」

『グラビティバスターチャージします』

狙うは一点のみ！

「発射！」

『発射します』

漆黒の光が敵を穿った。

『ボソン砲搭載艦だけだ！ それ以外は全て無視しろ！』

ミズキさんの指示が飛ぶ。

もちろん、他にも脅威的なものはあるさ。

でも、何よりも脅威的なのはボソン砲。

そして、何よりも邪魔なのはボソン砲だ。

ボソン砲さえなければ、正面同士の戦いが出来る。

一方的な戦いではなく、想いをぶつけ合える戦いが。

ダンッ！

直撃？

『グウ・・・』

「クロカワさん、脱出を！」

『馬鹿野郎！ このまま逃げて堪るかよ！』

「クロカワさん！ クロカワさあああん！」

シューーーー・・・ドバーンッ！

煙を出しながら、DFの壁を突破し、そのまま敵戦艦へと突撃。命を散らして得た輝きが敵戦艦を撃墜へと導く。

「クロカワさん・・・」

・・・違った。

このままでも想いは伝えられる。

でも、その為には命を散らすしかない。

命を散らして、その輝きを相手に伝えるしか・・・ない。

・・・そんなのおかしいだろ。

何の為の決戦だ。

互いに想いを伝え合う為の舞台だろ？

その大事な場を汚す兵器なんて・・・。

「滅んでしまえばいい！」

駆け回る。

フェザンツとバツタを展開し、縦横無尽に。

自身ができる最大の処理速度でヒナギクを、フェザンツを、バツタを操る。

ボソン砲を潰す為になら、どんな無茶だってやってやる！

『マスター。敵艦隊が後退していきます』

『全てに構うな。ボソン砲搭載艦だけを優先しろ』

『了解。マーカーを出します』

「ああ」

このマーカー全てが邪魔だ。

「ハーバーサーカーモードに移行。マークされてる全てを破壊するまで暴れまわってやる」

喰え。喰うがいいさ。

だから……。

「力を貸せ」

決戦初日、ボソン砲搭載艦の殆どを撃墜、もしくは戦闘不能状態へと追い込む事ができた。

まだ残っているであろうが、それも少数であり、殆ど無力化できたと言える。

紛れもなく最高の戦果。

初日にしてここまでの戦果を挙げた事は、二日目以降に繋がる良い影響を残したと言えるよう。

作戦上は成功と言える終わり方だった。

……だが、その為に多大な犠牲を出した事を忘れてはいけない。航空隊隊員の生き残りは僅か一割。

その中に、イトウ・ミズキの名は……なかった。

第二百二十四話（後書き）

始めから釣り作戦でいくつもりでした。

まあ、二度目ですので、そう簡単に通用する訳でもなく……。

多大な犠牲を出した上での無力化成功。

二日目以降に繋がる大きな戦果ですが……その為の犠牲も大きかった。

難しいですね、犠牲のない戦いというのは。

まあ、神風的描写もあり、納得してもらえないかとも思いますが……。

正直な話、これぐらいしか思い浮かばなかった。

地球側はボソソジャンプを使わないを前提としている以上、結局、物量で攻めるしかないのかなと。

応援はもちろん、批判的なものなど感想の方、お待ちしております。作者は感想次第で執筆速度が1 5の範囲で変わっていく生き物ですから。

第二百二十五話（前書き）

連続投稿。

書き始めると止まらない！

・・・気付けばこうなっていた。

この作品で最もシリアスかもしれない。

再び賛否両論であろう話に戦々恐々の僕。

一言で言うなら・・・コウキ、再び離脱。

なお、本話の一部には残酷な描写と受け取れる場面があります。

そのようなものが苦手な方は本編を飛ばして後書きへ。

出来るだけ次話に繋がられるよう説明を入れますので。

（書いている途中に思わずタグを入れていたかと不安になってしまった話。

そして、確認したら入れてなかったなので、このような形で注意を促しました）

第二百二十五話

「歯を食い縛れ」

ドガッ!

「……すいませんでした」

命令違反。

抗いようのない事実だ。

「菅倉入り、と言いたい所だが、現時点でそれを行っている余裕はない。い。

この戦争が終了した後、しかるべき罰を受けてもらう。分かったな?」

「……はい」

ハハッ。公開処刑じゃないか。

ブリッジで、皆の前で殴られるとか。

まあ、分かってたんだけどね……。

「コウキ君」

「……すいません。独りにしてください」

「……分かったわ」

何だろう?

この気持ち。

今は何もしたくない。

トボトボツ。

引き摺るように足を動かす。

重い。とてつもなく身体が・・・重い。

「寝よう」

何もかも放り捨てて寝てしまいたい。

寝れば・・・元の俺に戻ってるのかな？

S I D E M I N A T O

「・・・コウキ君」

去っていくコウキ君を見詰める。

うっん、見詰める事しかできなかった。

抱き締めてあげれば良かったのか？

支えてあげれば良かったのか？

・・・私はどうすればコウキ君を救ってあげられるのかな？

「・・・あいつ、大丈夫よね？」

「・・・カエデちゃん」

「私、あいつと同じような顔をした人を知ってる」

「それって？」

「昔の・・・私よ」

・・・昔のカエデちゃん？

「家族を失って、何もかも失ってた時、あんな顔をしてた」

「・・・」

「あいつ、身近な人間が死んだ事ってあるのかしら？」

「・・・あ」

多分、ない。

人の死に触れた事はあっても、親しい人の死には・・・。

「私は抜け殻だったわ。何を言われても反応しないし、何も口にしなかった」

ま、後からそう聞いただけだけど、と言葉を添えるカエデちゃん。

「今のあいつはそれと同じ。身体はあっても心はない。唯の・・・
抜け殻よ」

抜け殻・・・。

コウキ君であって、コウキ君じゃない。

「それに、だ」

「・・・アキト君」

「あいつは航空隊の機体を調整している側の人間だった。
もつときちんと調整していれば・・・。もつと、もつとって。

そう自分を責め続ける。恨みも憎しみも、負の感情全てを自分に
ぶつけかねない」

「・・・うん」

「そして、同じ戦場に立った。隣で共にな。今頃・・・悪夢を見て
いるだろつさ」

悪夢？

「どうして俺が死んでお前が生きているんだ」

「え？」

「俺じゃなくてお前が死んでいれば良かったのに・・・」

「変わってくれよ。お前が死んで、俺を生かしてくれよ」

聞けば聞く程、背筋が凍る言葉だった。

「その対象が親しければ親しいほど、深く深く傷付く。

友がそんな事を言う訳がないのにな。矛先をどうしても自分に向
けたがるんだ」

「それじゃあ、今、コウキ君は・・・」

「・・・ああ。コウキを救いたければ少しでも安心感を与えてやれ」

「それはもちろんだけど・・・与えてあげられなければ？」

「狂っ」

たった一言。

だけど、心臓が締め付けられた。

「安易に死に走るようになる。死ぬべきだなんて勘違いした上で

」

ダッ！

駆け出す。

最後まで聞いていられる余裕なんてなかった。
ごめんなさいね、アキト君。
でも……今はコウキ君の方が大事なの。

「アキト、どうしてあんな事を？」

「そうです！ わざわざ脅さなくてもいいでは
「事実だ」

「……え？」

「そうやって狂った人間を俺は知ってる」

「それは……」

「さあな。ただ一つだけ言える事は……」

「言える事は？」

「……死ぬほど辛いぞ、悪夢を見続けるといのはな」

「ハア……ハア……」

暗闇を走る。

入り口も出口も、壁も床もない空間。

まるで宇宙を走っているようだ。

でも、宇宙よりも、それ以上ないぐらい深い漆黒である宇宙よりも
深く暗い気がした。

「ハア・・・ハア・・・どこだよ？ 一二」

もうどれくらい走ったんだろうか？
いつになったら出られるんだっての？

「おお。コウキ」

「・・・ミズキさん」

突如として現れるミズキさん。

どうしてここにいるんだろう？

彼は死んだ筈・・・え？ あれ？

「夢？」

「何が夢なんだ？ まったく寝ぼけやがって」

苦笑するミズキさん。

そっか、夢か。

ミズキさんが死ぬなんてありえないもんな。

「まったく、誰ですかね？ このイタズラ？」

是非ともこの暗さを出す方法を教えてもらいたいものだ。
お化け屋敷とかで使えるぞ、マジで。

「本当・・・だよな」

「え？」

バンッ！

「グフッ。ど、どうして？」

目の前には銃を構えるミズキさん。
視界を少し下げたみれば・・・真紅に染まった腹部。
もちろん、俺の・・・。

「迎えに来てやったんだよ。中々こつちに来ないから」
「・・・え？」

こつち？

「俺達だけ死ぬなんて理不尽だろ？」
「死ぬ？」

「そうそう。俺の隣にいたんだ。お前も死ぬべきだろうに」

「お前・・・も？」

「まだ気付かないのか？ 死んだんだよ、俺は。お前の目の前で」
「・・・死んだ？」

死んだってどういう事だ？

「可哀想だと思わないか？ 妻も娘も残して」

「・・・」

「そうだ。変わってくれよ。そうすれば二人に会いに行ける」

「・・・」

「聞いているのか？ なあ、聞いているのかって聞いているんだよ！」

バンッ！

「グッ」

次は左腿部。

激痛が走った。

「パパ、パパ。貴方、貴方。そう俺を呼ぶ声が聞こえるんだ」
「・・・・・・・・」

娘、妻。

残される者達。

「どうして俺が死んでお前が生きているんだろうな？」

「それは・・・」

「娘は泣くだろうな。妻は嘆くだろうな。」

「いや、もしかしたら、二人とも後を追ってくれるかもしれない」
「・・・・・・・・」

「可哀想に。お前が俺の代わりに死んでくれないから、二人も死んでしまっんだ」

俺が死なないから？

それじゃあ、俺が死ねば・・・。

「俺が死ねば救われますか？」

「救われるだろ。皆幸せさ」

そっか・・・。

死んだ方が良いのか。

死ねば、皆が幸せに・・・。

「死ねないなら殺してやろうか？」

「え？」

「じゃあな、コウキ」

バンツ！

頭部直撃。

・・・アハハ。

これはもう死んだな。

ごめんなさい・・・あれ？

誰に謝ろうとしたんだろう。

俺に謝る相手なんていない。

俺の生を望む人なんて・・・いない。

アハハ。本当に・・・死んだ方がいいみたいだ。

バンツ！

銃声を最後に視界は暗転した。

これで・・・死ねるんだな・・・良かった。

「ハッ」

な、何だ、夢か。

そうだよな、俺がミスキさんに殺される筈が・・・。

「パパを、パパを返してよ！」

「・・・え？」

「貴方の代わりにパパが死んだの！ 貴方が死んでいればパパは死ななかつた」

「・・・」

「パパを返して！ 私の大好きなパパを・・・返して・・・よお
・グスッ」

・・・誰だろう？

見た事があるような気がする。

確かいつも俺の膝の上で、可愛らしい笑顔を・・・。

「ミズキ君を返して！ 貴方さえ、貴方さえいなければ・・・」

この人も覚えがある。

確かいつも俺の右側に座ってて、あんなにも暖かい笑顔を・・・。
・・・え？

「ミナトさん？ セレスちゃん？」

二人が包丁を片手に迫ってくる。

そして・・・そのまま俺に突き刺した。

「グ、グウウ・・・」

「貴方が死ねばミズキ君は帰ってくる！ 帰ってくるのよ！」

「パパの為に死んで。お願いだから・・・死んで」

メッタ刺し。

血の池に沈む。

アハハ。笑えない、笑えねえよ。

まさか、この二人に刺されるなんてな。

もう生きる意味なんて・・・ないんじゃないのか？

「そうだわ。死ねばミズキ君に会えるかも」

「パパに会えるの？」

「ええ。会いに行きましょう。ミズキ君に」
「うん。ママ」

霞む視界。

その最後に見たのは……。

自らの胸に包丁を突き刺す二人の最愛の人の姿だった。

「うわあああああああああああ！」

S I D E M I N A T O

「ハア……ハア……」

走って、走って、ようやくコウキ君の部屋に辿り着く。

いつもの五倍はあつたんじやないかなと思うぐらいコウキ君の部屋までが遠かった。

でも、確かに着けた。決して、届かない所までコウキ君が行ってしまった訳ではない。

シューインッ。

扉を開ける。

「ハア……ハア……ああ……グウ……」

部屋は暗い。

それでも、そこにコウキ君がいる事は分かった。
荒い息遣い、苦しそうな呻き声。
寒気がするような音ばかりが聞こえてくる。

「コウキ君」

部屋の電気を点けて、コウキ君が寝ているであろうベッドに近付く。
ビショビショの身体。

身体中の水分が全て抜けてしまったのではないかというぐらいの発汗量。

そして、何よりも目を引くのは、うつん、目を引かざるを得ないのは・・・その表情。

まるで全てに絶望したような、そんな苦痛しか感じさせないコウキ君の表情だった。

「コウキ君！ コウキ君！」

苦しそうに顔を歪ませるコウキ君の名を必死に呼ぶ。

どれだけ声を掛けても、身体を揺すっても、起きる様子はなかった。

「グッ・・・うわっ・・・ハア・・・」

どうして？ どうしてなの？

「無茶して、無理して、それでいて、何で貴方が一番傷付いているのよ」

友の為に命を賭けたコウキ君。

結果として、その友を失ってしまったのかもしれないわ。

でも、貴方は精一杯頑張った。

何もせずに見捨てるのではなく、命令違反をしてまで、
そんな貴方を友は軽蔑すると思う？
友は許さないと思う？

どうして？ どうして貴方が傷付くのよ？
どれだけ損な性格をしているのよ、ねえ、コウキ君。

「馬鹿よ。馬鹿過ぎるわ」

人が良いのにも程がある。

背負わなくていい罪まで背負うなんて・・・。
貴方はもつと・・・もつと身勝手に生きるべきだわ。
そのままじゃ、貴方はきつと・・・壊れちゃう。

シューインッ。

「・・・ハア・・・ハア・・・ミナトさん」

「セレセレ！ どうしてここに？」

扉が開く音と共に現れたのはセレセレ。

その息切れがどれだけ懸命に走ってきたか物語っていた。

「・・・コウキさんが・・・心配で」

「そう。セレセレ。貴方もコウキ君を」

「うわあああああああああああ！」

ッ！

「コウキ君！ コウキ君！」

「・・・コウキさん！ コウキさん！」

目を覚ます。

でも、その瞳は定まっておらず……。

「……ハア……ハア……ここは？ ……これも夢？」

ようやくにして定まってきた瞳。

でも、私達を見た瞬間……。

「うわっ……わぁ……わぁぁぁぁぁー！」

絶叫。そして、逃げるように壁際まで……無様に這い蹲って進んだ。

「……コウキ君？」

膝を抱え込んで、耳を手で塞ぐコウキ君。

これは……一体……。

「……何か呟いています」

「呟いてる？ よし」

ゆっくり、刺激しないように進んで、耳を傾ける。

「……」

まだ聞こえない。

もっと近付こう。

「……やっ」

まだ、まだよ。
もっと近付かないと。

「……なさい」

結局、全てが聞こえたのはコウキ君に触れるか触れないかというぐ
らい近い距離。
そして……。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ご
めんなさい」

私を、私達を絶望へと誘う呟きだった。

S I D E O U T

S I D E K A E D E

「ドクターストップ!?!」

「ええ。今はまだそれ程表に出てないけど、これ以上戦場に出すの
は危険過ぎる」

初日の戦闘を終え、コウキが立ち去ってから二日が経った。
コウキの様子はいつもと変わらないようで、どこか違う。
ふとした時にボーっとして、戦闘中も何度も怒られていた。
でも、戦えていたから、大丈夫だったんだなって安心してただけ

ど……。

「精神障害……ね」

イネス博士が済ました顔で告げる。
でも、その言葉はどこまでも深刻だった。

「毎晩魘されているみたい。アキト君の言ってた悪夢って奴を見て
るのかもしれないわ」

「てめえ、どうしてそんなに冷静で」

「馬鹿言わないで！……私だって自分を無理矢理落ち着かせて
るの」

「……すまん」

……その表情が物語っていた。

彼女は冷たい人間なんかじゃない。

きつとこの場にいる誰よりもコウキを心配している。

そして、どうにかしたいと考えているだろう。

でも、どうにもできないから、自身を責めている。

「こんなケース初めてよ」

そして、同時に分かってしまった。

コウキがそれほどまでに酷い状況であるという事も。

「彼のナノマシンが特別製だって事は分かってたけど……」

「どういう事ですか？ 何か問題でも？」

「問題も何も……今回はかりはその高性能ナノマシンを恨むしか
ないわね」

ナノマシンを恨む？
それって……。

「睡眠薬も駄目。鎮静剤も駄目。全部ナノマシンの効果を及ぼす前に分解しちゃっわ」

「どれだけ高性能なんだよ。そんなの普通じゃねえぞ」

「それじゃあ、コウキは……苦痛を味わい続けるしかないって事？」

「……ええ。寝ては起きてを繰り返してる。ちゃんと寝れてないみたいね」

深刻そうな表情で答えるイネス博士。

睡眠薬も効かず、碌に寝る事も出来ない。

「……よく落とされなかつたわよね。」

その状態で昨日、今日を戦い抜いていたんでしょ？
やっぱりあいつ……凄いわ。」

「今、コウキはどうしてるんだ？」

「手足を拘束して、医務室のベットに寝かせてあるわ」

「手足を拘束？」

「ええ。そうしないと寝てる時に自分を傷付けてしまうもの」

「……コウキ。」

貴方……どうしてそんな……。

「コウキと会う事はできるのか？」

「残念だけど面会謝絶。誰にも会わせられない」

「……そうか」

それじゃあ……あの二人に任せるしかないって事？

ミナトさんとセレスちゃん。

あの二人がコウキを救うのを待つ事しか……。私達には出来ないって事？

「あいつの家族だけが今、あいつを救えるって訳だな」

「家族ってハルカ・ミナトとセレス・タイトの事？」

「ん？ ああ。そうだけど」

「残念だけど、彼女達こそ面会謝絶よ」

え？ ど、どうして？

「コウキの為にも二人には会わせた方が」

「その二人が今、何よりもコウキ君の負担になってるのよ」

意味が分からない。

あのコウキが、ミナトさんやセレスちゃんが大好きで堪らないコウキが二人を遠ざけるなんて。

「二人はどうしてる？」

「面会希望で医務室まで来たけど、二人を見たら、コウキ君が怯えるから……」

「何があっただよ、それ……」

二人を見たらコウキが怯える？

どうなったら、そんな風になるの……。

「昨日、今日と訪ねてきたんだけど……会わせる訳にはいかなかったわ」

「二人は平気なのか？ コウキに拒絶されたら……」

「ええ。彼女達もショックだったみたい。このままじゃ入院患者が

更に二人増えそうね」

「だろうな。本当にあの三人は互いを大事にしあう家族だった」

沈痛な面持ちで語るウリバタケさん。

憎まれ口ばかりだけど、この人が一番コウキ達を暖かく見守っていたように感じる。

一番の年上だからかは分からないけど、まるで自分の息子や娘を見守るように。

「悪夢・・・だろうな」

「悪夢？」

「恐らく、そうね」

二人で勝手に納得してる様子のテンカワさんとイネス博士。

「ちゃんと説明しなさいよ」

少なくとも、それぐらいは知る権利がある筈。

「悪夢を見たんだろう。あの二人が出てくる奴をな」

「死に連想する何かだと考えるのが妥当でしょうね」

「たとえばあの二人が殺されるような？」

「ああ。もしかしたら、それより更に性質が悪いものかもしれん」

二人が死ぬ以上に性質が悪い？

そんな悪夢を見て、コウキが平気でいられる訳がない。

「とにかくにも、当分は不参加だつて事は承知しておいて」

「当分。それは決戦中か？ それとも終了後か？ それとも・・・死ぬまでか？」

「・・・分からないわ。あれはもう・・・自分で立ち直る以外に方法はないもの」

「・・・そうか」

どこまでも暗かった。

当然、私も。

あのコウキが・・・私以上の抜け殻になってしまったのだから。

その後、偶然にもコウキを見る機会があったの。

心配で、病室の前に張り付いていた時だったわね。

チラッとだけ、本当にチラッとだけ空いた扉の間からコウキが見えたのよ。

その時、私は認識を改めたわ。

コウキは抜け殻なんかじゃない。

あれはもう・・・屍だった。

生きているのか、死んでいるのか・・・。

私には・・・分からなかったもの。

S I D E O U T

S I D E M I N A T O

「どづしてよ？ コウキ君」

私なら癒せてあげる。

そう確信していた。

私だったら受け止めてあげる。

そう確信していた。

でも・・・何も出来なかった。

私ならっていう自負は唯の思い上がりだったの？

「貴方に何があつたの？」

私とセレセレに怯えるコウキ君。

ごめんなさいって何？

ねえ、誰に謝ってるの？

ねえ、何を謝ってるのよ？

教えてよ。教えてくれなくちゃ・・・分からない。

もう・・・何も分からないわ。

「・・・グスツ・・・コウキ・・・さん・・・」

ねえ、コウキ君。

貴方が泣かせてるのよ、セレセレを。

大好きだったわよね？ あのだこまでも可愛らしい無邪気な笑顔が。

それを貴方が失わせているの。

見える？ こんなにも表情を歪めて、粒のような涙を流すセレセレの姿が。

いつもの貴方だったら、私すら放って駆けつけるわよね？

それぐらい、貴方にとって大事な存在でしょ？ セレセレは。

それなのに、貴方はいつまで放って置いてるのよ！

「・・・ミナトさん。私、嫌われるような事をしたんでしょうか？」

「・・・セレセレ」

「・・・もう私はコウキさんに頭を撫でてもらえないんですか？」

楽しくおしゃべりできないんですか？ もう私には笑ってくれな
いんでしょうか？」

「そんな事ない！ そんな事ないわ！」

「・・・だったら、どうして・・・コウキさんは・・・グスッ」

抱き締める。

震える華奢な身体を。

「嫌われるような事は何一つしてないわ」

「・・・でも」

「コウキ君はセレセレが大好き。何があっても、絶対に」

「・・・本当ですか？」

「本当よ。頭も撫でてもらえるわ。おしゃべりだって出来る。笑っ
てもくれる」

「・・・グスッ・・・私・・・」

「信じましょう。戻ってきてくれるって。帰ってきてくれるって」

「・・・はい」

信じて、信じていいのよね？ 「コウキ君。

貴方なら、克服できるって。

自分の力だけで克服できるって。

私達は・・・信じて良いのよね？

S I D E O U T

第二百二十五話（後書き）

書いている途中で胸が痛くなって、二時間ばかり休憩した私は悪くないと思う。

ミズキの死。コウキに与えた影響は予想以上に大きかったようです。今まで知り合いの死に関しては関わってきたコウキ。

ですが、ミズキ程に仲良く、かつ、共感した人物は初めてでしょう。同じ娘を持つ親として、コウキはミズキに深い共感を抱いていました。

その結果、残される側の人間の事をより考えてしまうようになった訳です。

それが悪夢の中で二人が出てきた理由でしょうね。

ミズキの妻と娘の顔を知っていれば話は別ですが、知らなかった。その為、妻と娘という意味で最もイメージが結び付きやすい二人。

ミナトさんとセレスがミズキの妻、娘として投影してしまう。

二人の登場が更にコウキを動揺させ、傷付けた。

今、コウキは二人に対して、どうしようもなく深い罪悪感を抱いています。

もしかしたら、ごちゃ混ぜになってるかもしれませんね。

自身の家族なのか、ミズキの家族なのか。

ミナトさんとセレス嬢が自分にとってどのような存在であるのかを忘れている。

それほどまでに深く傷付いているという訳です。

以上の事より、コウキ君は完全にダウン。

イネス女史によってドクターストップが掛けられました。

離脱です。再びの離脱。

果たして彼は決戦中に帰ってこれるのか。

それを今後戦争と共に追って行きたいと思えます。

第二百二十六話（前書き）

連続投稿です。

悩みました。一つ前の話を完全に書き直して、新しい方向で行くか。私自身もちょっと強引な展開だったかなと思ったので……。でも、このまま行くことにしました。

納得できない方もいらっしゃるかもしれませんが……。この展開で良かったと思われるよう精進していきますので、どうかよろしく願います。

もちろん、納得できない点がありましたら、ビシバシと。そういう考え方もあるのかと勉強させて頂きますので。

第二百二十六話

S I D E K A E D E

「どれだけ落とせば終わるのよ!?!」

落とせど落とせで現れる敵兵器。

終わりの見えない戦いに苛立ちが募る。

「早く終わらせないとコウキが・・・」

コウキの離脱。

それがナデシコクルーに与えた影響は大きかった。

士気の低下、焦り、不安。

そして、その影響が誰よりも大きいのが・・・。

『ナデシコに直撃!』

『クツ。パイロットの皆さん、ナデシコの防衛を最優先してください!』

・・・ミナトさんとセレスちゃんの二人。

いつも以上に懸命にやってるように見える。

見えるけど・・・実際は何も出来ていない。

いつものミナトさんだったら簡単に回避している場面でも直撃。

なんとかルリちゃんとラピスちゃんでカバーしてるけど・・・。

それにも限界がある。

そして、そのカバーのせいで本来の仕事に集中できないルリちゃん
とラピスちゃん。

ナデシコ全体で後手後手に回ってしまっている。

本来なら、それを更にカバーするセレスちゃんがいるんだけど・・・

今のセレスちゃんにそれを要求するのはあまりにも酷で・・・。

結果として、ナデシコは通常時の半分以下の仕事しかできていなか
った。

『ダア！ 鬱陶しい！』

『苛立つな。冷静にならねば死ぬぞ』

『うるせえ！ 冷静になんてなれるかよ！ 仲間がピンチなんだぞ
』！』

「・・・リョーコ」

『さっさと終わらせて地球に戻してやった方が良かったらうが！』

そして、それはパイロット勢も同じ。

コウキを心配するあまりに焦りが生じ、無茶な行動を取る。

冷静に戦えず、連携も碌に取れない。

ハッキリ言つとね・・・もう駄目駄目よ。

「もう駄目。戦線を保てない」

エースとして、地球勢のトップエースとして期待されているナデシ
コ。

そのナデシコがこんな無様な姿を晒したら・・・。

「地球全体の士気も下がっちゃうわよ」

あまりにもコウキ離脱の影響は大きかった。

たった一人、たった一人の離脱が地球全体に影響するなんて……。

『ナデシコ撤退します。パイロットの皆さんは帰艦してください』

事実上の敗北。

たとえ局地戦でもナデシコの敗走は地球軍に大きな影響を残した。

「お願いだから、コウキ、早く戻ってきて……」

追撃でのダメージを減らすべく最大速度で撤退する中、そう願わずにはいられなかった。

S I D E O U T

「ハア……ハア……クソッ」

まただ。また出てくる。

目を瞑れば、あの光景が……。

「生きてる。生きてるじゃないか。二人とも」

ミナトさんもセレス嬢も生きてる。

それはこの目で確認した。

ちゃんと生きてるってのに……クソッ。

「二人を見ると・・・駄目だ」

どうしても思い浮かべてしまう。

二人の胸に包丁が刺さっているシーンを。

「殺されるのは構わない。でも・・・」

二人が目の前で死んでいく夢。

自分が殺される夢より何倍も痛くて苦しい。

分かっているさ。あんな夢、自分が自分に見せてるだけだって事は。

ミズキさんはあんな事言わない。

ミズキさんなら笑って後は頼むとか言うに決まっている。

ミナトさんだってそう、セレス嬢だってそうだ。

二人が出てくる自体がまずおかしいじゃないか。

どこまでも俺の都合で捩れ曲がった夢。

あんな夢、ミズキさんに対する侮辱でしかない。

分かっている。分かっているが・・・それでも駄目なんだ。

残された奥さんや娘さんの事を考えると・・・どうしても。

「憎まれても構わない。恨まれても構わない」

隣にいて守れなかったのは事実なんだから。

俺が・・・俺が何より怖いのは・・・。

「笑顔で許される事だ」

諦めにも似た笑みで、ミズキさんを褒め称えて、影で泣いて・・・。

叩いてくれていい。罵ってくれていい。

それで少しでも救われてくれるなら。

何も言わず、受け入れられてしまう事が何よりも・・・辛い。

「これも勝手な想像なんだよな・・・」

結局、全て自分で作り出したまやかし。

そのまやかしに苦しめられてるんだから、馬鹿みたいだよな。

「・・・何やってるんだろう？ 俺」

左腕を見る。

そこには夥しい程の傷の痕。

なんでも寝ている間に自傷行為をしているとか。

「クソツ。弱過ぎるだろ、俺」

涙が出てくる。

多くの人が仲間を失い、家族を失っている。

それなのに、俺は・・・。

「頼むから・・・立ち直ってくれ」

どこまでも弱い俺。

目を瞑れば辛いから、出来るだけ目を開けていようなんていう弱い俺。

受け入れて、克服しなければ立つ事はできないって分かってる。分かってるけど・・・怖い事に変わりはないんだ。

「ミナトさん・・・セレスちゃん・・・」

会いたい。会いたいけど、会うのが怖い。

・・・なんて身勝手。

自分の都合で二人を苦しめて・・・。
会ったら拒絶するんだ。
悪夢を思い浮かべたくないが故に。

「クソツ・・・クソツ・・・」

悔しさに頭を掻き篁りたくなる。
・・・でも、身体は動かない。
手足は拘束され、出てくる涙の一つ拭けない。

「・・・嫌われただろうな」

こんなにも情けない姿ばかり見せられたら・・・嫌うに決まってる。
ただでさえ拒絶してるんだ。
もう・・・とっくに見限ってるだろう。
・・・アハハ。本当に・・・情けないな。

「・・・死んじゃえばいいんだ。こんな奴」

SIDE MINATO

「コウキと話したい。入れてくれ」

「・・・アキト君。言ったわよね？ 面会謝絶だつて」

「分かってるさ。だが、このままじゃあいつは潰れる一方だ」

「それは・・・」

「なに。すぐに終わる。余計な事を言うつもりはない」

「・・・分かったわ。でも、貴方達は駄目よ。ハルカ・ミナト、セレス・タイト」

「・・・分かってるわよ」

「・・・はい」

足を引つ張ってしまった。

誰も言わないけど、きっとそれは優しさ。

私に気を遣ってくれてるに過ぎない。

自分がどれだけ足を引つ張ったかなんて・・・。

誰よりも私が一番分かってるわ。

「ミナトさん。貴方は外で聞いていると良い。あいつが何に苦しんでいるか」

「・・・ええ」

戦闘終了後、ナデシコは月面基地に帰還した。

今まで負けらしい負けがなかったナデシコの事実上の敗北。

ナデシコはもちろん、基地内に雰囲気も暗かった。

決して、相手が強かった訳ではない。

ただ・・・私達が、うつん、私が何も出来なかっただけ。

「辛いだろう。苦しいだろう。だが、きちんと聞いてやって欲しい」
「・・・」

医務室に向かう。

そこにコウキ君がいるから。

会えないって分かってる。

私がコウキ君を苦しめているって事も分かってる。

でも、ここに行く以外に何をしていいか分からなかった。

隣にはセレセレもいる。

彼女もまた、ここ以外に行くべき場所が見付からなかったんだと思う。

結局、何があっても、私達はコウキ君が大切って事。

拒絶されても、口を利いてもらえなくても・・・放って置く事なんて出来ない。

「同行させて頂きます」

そんな医務室に向かう私達に合流したのは意外にもアキト君。

コウキ君に話したいが事があるって。

そして、コウキ君の苦しみを訊ねるから聞いていると良いつて。

・・・私達はその厚意に甘える事にした。

今は何もできないけど、いずれその苦しみを取り除いてあげられるかもしれないから。

「あいつの想いを受け止めてあげられるのは、ミナトさん、貴方しかいないのだから」

「・・・そう、ね」

素直に頷けなかった。

本当に受け止めてあげられているのか、自信がなかったから。

私なら癒せるって自負は、もう強がりでしかなかった。

「もういいかしら？」

「ああ。頼む」

「分かったわ。・・・ハルカ・ミナト、セレス・タイト。貴方達も入れてあげる」

「え？」

「その代わり、カーテンの外にいる事。中に入れるのはアキト君だけよ」

「・・・ありがとうございます」

嬉しいような、嬉しくないような。

苦しい姿を見せられるのは怖い。

辛い姿を見せられるのは怖い。

・・・もう顔も見たくないと言われるのが・・・怖い。

「入るぞ。コウキ」

アキト君に続くように医務室に入る。

各ベットごとにカーテンで仕切られていて・・・。

その奥に、コウキ君がいるらしい。

「・・・アキトさん？」

「ああ。失礼するぞ」

コウキ君の声が聞こえる。

良かった。まだきちんと受け答えはできるらしい。

狂うって、そう聞いてたから、物凄く心配していたの。

「・・・ミナトさん」

「・・・ええ」

カーテンの中に入るアキト君。

私達はカーテンの中に入らず、その近くにある椅子に腰掛けた。

「・・・足が震えてる」

座ったからこそ気付けたのか。

座ったから震えたのか。

どちらかは分からないけど……。
不安で、恐怖で……確かに足は震えていた。

「スーッハーッ」

深呼吸。

覚悟を決めなさい、ミナト。

受け止めてあげないとコウキ君は救われないわよ。

「……調子はどうだ？ コウキ」

「アハハ。最悪です。初めてですよ、こんなの」

「……そうか」

覇気のない声で告げるコウキ君。

自嘲の声が私の胸を締め付ける。

「それは？」

「ああ。これですか。自分でやってるそうです。寝ている時ですね」

「寝ている時か。気付かぬ間という奴だな」

「ええ。寝て、起きた時に気付くんですよ。もうしないと思いますけど」

手足の拘束。

自由にされるのは食事の時と排泄の時くらい。

そう……聞いている。

「食事はちゃんと取ってるのか？」

「……そういえば、何も食べてないですね」

そういえば……。

「食べても吐いちゃうんですよ。そもそも食欲も湧きませんし」

「・・・そうか。それで点滴を？」

「はい。仕方がなく」

「食事も取らない。」

「睡眠も碌に取れない。」

「点滴も打って、睡眠薬に鎮静剤？」

「もう・・・完全に病人じゃない。」

「目が充血しているようだが？」

「出来るだけ目を瞑らないようにしているんです」

「何故だ？」

「・・・見たくないものを見てしまうからですよ」

「見たくないもの？」

「見たくないもの？」

「はい。二人が、ミナトさんとセレスちゃんが自殺するシーンです」

「・・・え？」

「・・・コウキさん。私は死んでなんて・・・」

「意味が分からない。」

「どうして、私達が自殺なんて・・・。」

「二人は生きていますぞ？」

「それは分かっています。分かっているんですが・・・」

それじゃあ、どうして……。

「夢を見たんです」

……夢。

それは前にアキト君が言ってた……。

「ミズキさん、航空隊の友人が出てきました。代わりに死んでくれるって」

「……戦争では良くある事だ。仲間の死に影響される事なんてな」

「アハハ。手厳しいですね」

アキト君の言ってた通り。

でも、どうして私達が出てくるか分からない。

「ミナトさんの事もセレスの事も出てこないが？」

「続きがあるんです。ミズキさんに殺された後に見た奴なんですよ」

殺された後に見た夢？

……夢の中でその友人に殺されたって事？

「ミズキさんは奥さんと娘さんがいるそうです」

奥さんと娘？

それって、コウキ君と同じ境遇……。

「必ず生きて帰るんだって。帰ってきたら娘同士を友達にさせようって、約束していました」

・・・コウキ君。

「共感……。いえ、多分、ミズキさんに自分を重ねているんだと思います」

「重ねている？」

「はい。もし俺が死んだら、俺はミナトさんとセレスちゃんを悲しませるんだろうなって」

そんなの・・・当たり前じゃない。

家族を失って、悲しまない人はいない。

「だから、夢に出てきました。ミナトさんとセレスちゃんがミズキさんの家族として」

え？ それって……。

「ミズキさんを返してと罵られて……。別にそれは良いんです。事実ですから」

「……………」
「散々罵られ、散々包丁で刺されて、また死ぬんだなって思いました」

包丁で刺される？

私とセレセレに？

「俺が死ぬだけならいい。でも……」

「……………」

「死ぬば会えるって。目の前で、俺の目の前で二人が自分の胸に包丁を突き立てて……」

「……………」それが目に焼きついてしまっていると」

「・・・はい。目を瞑れば、そのシーンばかりで・・・」

・・・言葉にならなかった。

そんな光景・・・とてもじゃないけど耐えられない。

目の前で自殺する愛する人達。

たとえ夢だとしても、夢だと分かっていたとしても・・・狂っしかない。

「・・・その夢を見てすぐに二人と会ったから・・・」

「拒絶してしまっただな」

「・・・その通りです」

・・・そういう事だったのね。

だから、コウキ君は私達二人を拒絶した。

私達が嫌われた訳じゃなかったんだ・・・。

「・・・良かったです」

「・・・セレセレ？」

「・・・私は嫌われた訳じゃなかったんですね」

涙を流している。

でも、今回は悲しい涙じゃなくて、安心の涙。

・・・本当にこの子はコウキ君が好きで好きで堪らないみたいね。

「・・・二人には申し訳ない事をしたと思っています。でも・・・」

「今会えば、余計に辛いと」

「・・・はい。ありえないとは分かっているんです。でも、もしかしたらって・・・」

目の前で自殺なんてする筈がない。

でも、私達と会ったら、もしかしたら自殺してしまうのではないか
と思ってしまう。

それは・・・とっても辛い事。

「アキトさん。二人に謝っておいてくれませんか」

「何を馬鹿な事を。自分で言わなければ意味がないだろ？」

「やっぱり厳しい。・・・会わせられる顔がありませんよ。多分、
俺はとっくに見限られている」

「ッ！」

そんな事ない！

見限るなんて・・・ありえない！

「嫌われて当然の事をしました。自分勝手な都合で引つ掻き回して・

・・・」

「それをミナトさん達が嫌だと思うかは分からないだろ？」

「二人は優しいですから。でも、口に出さないだけで負担になっ
てる」

負担になってる？

だから何よ？

そんなの当たり前前事じゃない。

生きるってのは負担をかけるって事なのよ。

でも、それがいいんじゃない。

負担をかけられている。

それは苦勞を分かち合っているって事。

それが共に暮らし、愛を育むって事じゃないの？

「・・・負担をかけられる。それは不幸な事か？」

「え？」

「俺は自分が情けない人間だと思っている」

「アキトさんが情けない？ それなら、俺は最低野郎じゃ」

「ちゃんと聞け、コウキ」

「・・・はい」

「俺は一人じゃ何も出来ない。ルリちゃんやラピスに助けられれば
かりだ」

「・・・俺もそうです。ミナトさんやセレスちゃんがいないと何も
できない」

「そうだな。互いに情けない人間だ」

苦笑するアキト君。

でも、そこには申し訳なさというものはなかった。
むしろ・・・。

「はい。だから、もう負担をかけたく」

「だが、俺はそれでいいと思っている」

「・・・え？」

「支えられている。そう実感できるしな」

「それは・・・身勝手では？」

「かもしれない。だが、それは相手も同じだと思っぞ」

「・・・良く分かりません」

「じゃあ、逆に訊こう。コウキ、お前はミナトさんから負担をかけ
られて嫌になるか？」

「・・・嫌なんかじゃありません。むしろ、支えてあげられている
と嬉しくなります」

・・・コウキ君。

それは私も同じなのよ。

「だろうな。それなら、同じような事をミナトさんも思っているん

じゃないか？」

「それは・・・都合が良過ぎます」

「いや、間違いなくそう思っている」

「どうして、そう断言できるんですか？」

「それは日頃のお前達を見ているからだ」

「・・・」

「お前はミナトさんやセレスの笑顔を見た事がないのか？」

「いえ。毎日のように見えています。俺の原動力ですから」

私も同じ。

私もコウキ君やセレスの笑顔が日々の原動力。

「その笑顔を知っていて、どうして疑うんだ？」

「疑ってなんて・・・」

「疑っているだろう。あの二人が、お前を見限るなんて事がある訳ない」

「・・・」

そうよ。ありえないわ。

何があるうと、私は、私達はコウキ君に付いていく。

見限るなんて・・・絶対にありえない！

「互いに負担を掛け合っている。それは互いに支えあっているという事ではないのか？」

「・・・かもしれません」

「俺にしかできない事があるように、ルリちゃん、ラピスにしかできない事がある。」

だから、俺は二人を支えるし、支えてもらう。俺はそうやって生きていくつもりだ」

「・・・」

「もう一度言おう。負担をかけられる。それは決して不幸な事じゃない。むしろ、幸せな事だ」

「・・・幸せ？」

「そうだ。負担をかける人が、かけられる人がいる。支えあえる人がいるのだから」

誰にも迷惑をかけずに生きていける人間なんていない。

その関係が近ければ近い程、その人は余計に迷惑をかけられてしまう。

でも、それを迷惑と受け取るかはその人次第。

コウキ君、少なくとも私は迷惑だなんて思っていないから。

「言うか言わまいか悩んだが、言っておこう」

「・・・え？」

「ミナトさんとセレスだが・・・お前と同じくらい衰弱している」

「二人が!? どうしてですか!？」

「お前が心配で堪らないからだ。当たり前だろ」

「・・・どうして、俺なんかの為に・・・」

「それだけお前が大切なんだ。分かるな? お前は見限られてなんかいない」

「・・・ミナトさん、セレスちゃん・・・」

今すぐ出て行きたい。

それは多分セレセレも同じ。

でも、ここで出て行ったら、コウキ君はどうなる?

アキト君のお陰で落ち着いてきているのに、それがまた元に戻ってしまつかもしれない。

出て行きたい、出て行きたいけど・・・。

「我慢よ」

ここはアキト君に任せておいた方が良い。

「コウキ。お前を慕ってくれる者がいる。・・・死ねないよな？」
「ッ！」

死ぬ？

それって・・・コウキ君が自殺を考えていたって事？

「死にたいと思わなかったか？」

「・・・思いました」

「今は思うか？」

「・・・思いません」

心の底から安堵した。

これでもまだ死にたいだなんて思っていたとしたら・・・。
・・・私こそ死にたくなる。

「それで良い。お前が死んだら悲しむ者がいる。それをきちんと自覚しておけ」

「・・・はい」

ありがとう、アキト君。

これで、コウキ君は　。

「さて、コウキ、前置きが長くなったが・・・」

え？ 前置き？

「言わせてもらう」

・・・雰囲気が変わった。

見えないけど、多分、アキト君の目付きは鋭くなってる。

「甘えるな！」

「ッ！」

一喝。

それほど音量はないけど・・・心臓を鷲掴みされるような圧迫感があつた。

「彼らは自らの誇りに従い、死んでいった。お前の今の態度はただの侮辱でしかない！」

戦い死んでいった者達の死を嘆くのは侮辱でしかない。本当に悲しんでいるのなら、意思を継ぎ、戦い続ける。そう言っているように聞こえた。

「・・・でも、それなら、残された者達はどうなるんです？ 彼らの死を受け入れるとでも」

コウキ君の言葉もまた、正しい。

彼らの死は残された者達にとってこれ以上ない辛い事。

それを許容しろというのは・・・言うまでもなく酷な話よ。

「そうは言わん。だが、自らで決めた事だ。それをお前がどうこう言うのは間違ってる」

「・・・自らではありませんよ。あれは最高司令官の強制命」

「志願制だ。あくまであれは志願制だった」

「・・・え？ だって・・・」

困惑の声。

多分、コウキ君は知らなかったのね。
志願制だったって事を。

「ミスマル司令は命を捨ててもらおう事になるって……」
「だからといって、強制はできない。まあ、集団心理が働いたのは否定できないが」

部隊の長やそれに類する者にのみ伝えられていたボソン砲破壊作戦。
詳しい事は私も知らないけど……。
その核となる航空隊のメンバーがコウキ君と親しい事は知ってる。
今コウキ君が苦しんでるのも航空隊の隊員が原因だって事も。
コウキ君は彼らが強制されて特攻したと思っっている。
だから、ああまで苦しんでいるのね。

「それじゃあ……ミズキさん達は……」

「文字通り、自分で決めて、散っていった。その事でお前がどうい
う言う権利はない」

「そんな……でも、そんな作戦を提示するだけでも……」

「ああ。ミスマル司令とて最後まで苦悩していたさ。だが、それ
も選んだ。地球の為に」

「……地球の為に。その言葉が全ての免罪符になる訳ではありま
せん」

どちらが正しいのか。

私には分からなかった。

地球の為に命を散らした彼らは間違いなく正しい。

しかし、それを受け入れるのは間違っている

戦場に立つんだもの。誰も死なないなんて方がおかしいわ。

でも、だからといって、死を強制するのはもっとおかしい。
かといって、それを受け入れないのは、彼らを侮辱するのと同じ。
誰が正しくて、何が間違っているのか。
私には……。

シューインッ。

「失礼する」

あ、貴方は！

SIDE OUT

「志願制だった？」

でも、ミスマル司令は確かに死んでもらうって。

シューインッ。

「失礼する」

この声は……。

「ここにマエヤマ君がいると聞いたのだが……」

「奥のベットにいます」

「うむ。ん？ 君達は……」

「……(フルフル)」

「……分かった」

カツツカツツカツツカツツ。
シュツ。

「ミスマル司令……」

「久しぶりだね、マエヤマ君」

「……はい」

誰よりも俺の問いに明確な答えを返せる人物。
ミスマル最高司令官がそこにはいた。

「誰かそこに？」

「ん？ いや、イネス博士がいただけだが」

「そうですか……」

医務室にイネス女史がいるのは普通だもんな。
他にも誰かいるような気がしたけど……気のせいかな。

「あの、ミスマル最高司令官、貴方に聞きたい事が」

「その前に、マエヤマ君」

「……」

「命令違反をしたそうだね」

「……はい」

「君は覚悟を決めたのではないのかね？ たくさんの命が失われる
決戦へ赴く」

「それは……」

ナデシコ奪還。

その時、確かに告げた。
覚悟は出来た、と。

「多くの命が失われる。それでも、信念を貫き、戦い続ける覚悟を」
「……………」

「自らの意思で、何があっても戦い続けると決めたのではないのかね？」

「……………はい」

「その覚悟が君は足りなかった。だからこそ、立ち止まってしまっている」

「……………ですが、理不尽を受け入れるのは話が別です」

確かに覚悟は決めたまさ。

でも、理不尽な命令を許容するとは言っていない。

「理不尽であろうと、その想いを引継ぎ、戦うべきなんじゃないのか？」

「……………アキトさん」

「理不尽だからと立ち止まれば彼らが帰ってくるんでも？」

「そんな事は考えていません。でも……………」

「戦い続け、その末に文句を言うのであれば、その言葉にも意味があるだろう。」

「だがな、戦いの途中で戦闘から逃げ出し、喚き立てた所でその言葉には何の意味もない」

「それは……………」

俺だって、逃げ出さなくて逃げてる訳じゃ……………。

「マエヤマ君。君が聞きたいというのはミスキ君の事かね」

「……………はい。あの作戦は……………」

「私の命令だ。間違いなくな」

「でも、アキトさんからは志願制だったと・・・」

「志願制であるうと強制であるうとあの作戦を提示した事に変わりはない」

「・・・やはり志願制だったんですね」

知らなかった。

俺はミスマル司令の強制命令だとばかり。

「それでは、何故、あのような言い方を？」

あれでは、全て自分の仕業だって・・・。

「彼らを殺したことに違いはない。それを偽りたくないからだ」

「しかし・・・彼らは自分で決めた。それを司令が背負う必要は・・・」

「背負う。それが地球連合軍最高司令官の役目だ。」

この決戦、いや、この戦争で死んだ者の命は全て私が背負わねばならない」

「司令・・・」

重い。重過ぎるよ、司令。

どうして、そんなに人の死を背負えるんだ？

俺は・・・無理だ、そんな事。

人の死を背負う事なんて・・・できない。

「地球の為に。それを免罪符にするつもりはない。だが、他に何も思い付かなかった」

「・・・」

「ボソン砲の一撃で何百人もの人間が死ぬ。」

それを数人だけの被害で抑えられるならば・・・それをやらない手はなかった」

「・・・命を数として扱ったんですか？」

「命は数だよ、マエヤマ君」

「え？」

「・・・まさか、認めるなんて・・・」

「少なくとも戦争中は数だ。どれだけ綺麗事を並べても、その事に変わりはない」

「それは・・・」

「最小の被害で最大の成果を。そんな作戦を実行し続ける事が私の責務だ」

「・・・司令」

「勝つ為なら何をしても良い。そういう訳ではもちろんない。だが・・・」

「・・・」

「負けない為なら何だってしよう。たとえ悪として名を残そうとも」

「・・・何も言い返せなかった。

俺以上に人の死を背負い、それでも確固たる信念を貫いている。

俺以上の悪夢を見るだろう。俺以上に苦しんでいるだろう。

それでも・・・屈する事はない。

どこまでも強い覚悟を持つ人の姿がそこにはあった。

「マエヤマ君。君はナデシコを降り、月面基地で待機してもらおう」

「司令！ それは・・・」

「最高司令官としての命令だ。今の君をナデシコに乗せておいても意味がない」

・・・そうだろうな。
こんな状態じゃ、いるだけ無駄。
むしろ、いた方が悪影響を残す。

「ユリカにも伝えておく。それでは、失礼するよ」

ミスマル最高司令官が去っていく。

・・・あれだけ言われても俺は答えを見つけ出せそうになかった。

「コウキ。俺もそろそろ行くことと思う」

「・・・はい。あの・・・ありがとうございます」

多分、発破をかけに来てくれたんだろう。

悩まされる事は増えたけど、気持ちは楽になった気がする。

「最後に言っておく」

「・・・はい」

去り際、背中越しに告げられた。

「志願制であろうと強制であろうと彼らは誇り高く散っていった。

それを汚す事は許されない。それはたとえ、友であったお前だろ
うと」

「・・・」

「辛いだろう。苦しいだろう。だが、背負うんだ。

死んでいった者達の死を背負い、想いを引き継げ」

「想いを・・・」

「いつまでも腑抜けていたら、死んでいった者達が報われないぞ。

本当に彼らの事を思うのなら・・・こんな所で立ち止まらずに戦

え。

戦い続け、そして願いを叶える。和平というな。それを彼らも望んでいる」

「・・・はい」

「それだけだ。お前の機体もここに置いていく。・・・待っているぞ、戦場で、お前を」

そうして、アキトさんは去っていた。

俺はどうすれば・・・。

どうすればいいんだろうか・・・。

それからしばらくして、俺はナデシコから月面基地の医務室へと移された。

再び戦場へ向かうナデシコを背に・・・。

第二百二十六話（後書き）

一応、決戦開始から四日が経っています。

戦闘らしい戦闘描写はなかったですが。

一言で言うなら、膠着状態。

きっかけ次第で戦況は容易に逆転するだろうって感じですが、はい。

強制だろうと志願制だろうと死を命じた事に違いはないんですけどね。

ミスマル司令の気持ちを汲んで頂けたら嬉しく思います。

コウキ意外と元気じゃんと思っただ方。

最初は混乱してますが、何日か経てば落ち着きますよ、コウキ君とて。

でも、まだ戦える状況でもなく……。

しかし、主人公は必ず帰ってくる。

そう信じ、これからもどうか暖かく見守ってください、それでは。

第二百二十七話（前書き）

昨日は投稿できなくて申し訳ありません。
できるだけ連続投稿にすると誓っていたのに・・・。

決戦も中盤。

色々動き回る時間のようです。

第二百二十七話

S I D E K A E D E

「あいつは帰ってくる、必ずな」

コウキが月面基地に降ろされた。

その事に衝撃を受けたのは間違いないけど……。
テンカワリーダーパイロットの言葉で動揺は収まった。
そして……。

「コウキ君なら大丈夫。だから……。だから、コウキ君が帰りたい
つて。」

そう思った時にきちんと帰れるようにこの場所を、ナデシコを守
つて欲しい」

ミナトさんが笑顔で、辛いのを堪えながらも笑顔でそう告げた時、
私達の戸惑いは消えた。

コウキを誰よりも心配しているであろうミナトさん。

そのミナトさんがコウキは大丈夫だと言い切った。

辛いけど、苦しいけど、コウキを信じようつて。

誰よりも辛い筈であるミナトさんがそう言うのよ？

それなのに、いつまでも私達が戸惑っていたら、ミナトさんに申し
訳ないじゃない。

私達もミナトさん同様、黙ってコウキの復活を信じていればいいの
よ。

大丈夫、コウキはそんな軟弱な男じゃないわ。

あいつは必ず帰ってくる、だから、私達は待っていていればいい、あいつが帰ってくるのを。まあ、その間、仕方がないから、守ってあげてあげてあげて、ナデシコを。別にコウキの為じゃないわよ？
そもそもナデシコは私達の家だし。帰ろうと思った時に帰る場所がなかったら、可哀想、だなんて思っていないからね。
本当なんだから！

「戦況は互角。膠着状態に陥っています」

決戦五日目。

初日に大きな戦果を残したものの、それからあまり進歩していない。数で勝る地球が、と言いたい所だけど、そもそも数的にはそれほど差はないし。

だから、戦況は互角、大して差は付かなかったわ。でも、それも今日で終わり。

今まではナデシコに勢いがなかったから、戦況に動きはなかったけど……。

今日は違う。

いつものナデシコが戻ってきたんだから。

今日で勝敗が付いちゃうかもね。

コウキには悪いけど。

「この状況を打開すべく、ナデシコに命令が下りました」

「して、その命令とは？」

「相転移砲を使います」

相転移砲。

私はその威力をあんまり知らないんだけど……。

「下手すると決着がついちやうかもしれません」

「そんなに凄いの？」

「はい。ああいうのを戦略級兵器と呼ぶんだと思います」

戦略級。

戦法でもなく、戦術でもなく、それがあただけで戦争が終わるとい
う兵器。

どれだけの威力だっというのよ……。

「でも、無差別に殺戮しただけで戦争が終わるとは思えません。

きちんと目的意識をもって、意味のある攻撃にしなければ……」

それもある。

これが相手の滅亡まで戦うものだったら、無差別に撃ちまくれば良
い。

でも、この戦争の目指すべき最後は和平による終結。
闇雲に撃つのではなく、考えて撃つ必要があるわね。

「それで、狙いは何なんだ？ 闇雲に撃つ訳ではあるまい」

「もちろん。狙いは……」

「狙いは？」

「木連艦隊の後方に控えるチューリップです」

チューリップ？

「なるほど。それは良い手だ」
「これ以上ない作戦ね」

えっと・・・どうして？

「イツキ。説明よろしく」

「アハハ。分かりました」

苦笑いはいらないわ。

「木連は全てにおいてチューリップを中心に作戦展開しています」
「そうなの？」

「はい。奇襲にしる、輸送にしる、防衛にしる、

チューリップ、詳しく言うならボソソジャンプを使用していますから」

「そつえばそうよね」

ボソソ砲だってボソソジャンプを利用してる訳だし。

「特に輸送面の恩恵が大きいですね。

チューリップがある限り、相手は無限の戦力があると見て構いません」

「無限の・・・」

実際には限りがあるでしょうけど・・・。

補給が簡単に出来るという意味ではこれ以上なく便利よね。

「でも、逆を言えば、チューリップさえ破壊してしまえば・・・」

「相手の戦力を限定できる」

「はい。勝利する上で欠かせない条件だと思います」

なるほどね。

道理で敵の数に終わりが見えない訳よ。

相手は減っても同じ数だけすぐさま補給できるんだから。大抵が無人兵器だから、正しく補給よね。

「もちろん、相手もそれを理解しているので・・・」

「守りは厳重。でも、やるだけの価値はある」

チューリップさえ破壊してしまえば、相手のやる気もなくなるわよね。

そうすれば、相手が降参してくれるかも。

「しかしながら、そう簡単にはいきません。

相手も破壊される事を警戒しているでしょう。

艦隊を展開した上で、最後部にチューリップを配置しています」

流石に艦隊を展開した所に突っ込むのは無謀よね。

こっちが逆に落とされちゃうわよ。

「また、相手も相轉移砲には警戒している筈。集中的に狙われるのは必至です」

でしょうね。

過去に使われている訳だし。

その時も大活躍だったんでしょ？ 相轉移砲。

「そこで・・・」

「そこで？」

「キクザクラの出番です」

キクザクラ？

こっちの総大将が乗っている艦じゃない。

「キクザクラを中央に位置させ、敵戦力を集中させます」

「うんうん。それで？」

「中央が後退すると同時に左翼、右翼は前進。

包囲するように陣形を構築し、敵戦力を閉じ込めます」

キクザクラを囿にして、敵を包囲してしまおうって訳ね。

後退して引き付けた上での包囲じゃない分、実行は割と簡単。

そこまで上手くこちらの策に乗ってくれるかは分からないけど。

「閉じ込めた上で更に大きく迂回したナデシコでドバンツと」

なるほど。それなら行けるかも。

「作戦の要はどれだけキクザクラに敵の目を引き寄せておけるか・
・だな」

「だが、当然ナデシコも警戒されているだろう。それはどうするんだ？」

あ、そっか。

ナデシコがいないって分かったら、警戒されるわよね。

「今までのナデシコが伏線です」

「は？」

今まで？

「大活躍が予想されたナデシコですが、今の所、たいした活躍はしていません」

「事実だけど・・・それをユリカが認めちゃうのもどうかと思うよ」
御尤も。

「でも、そのお陰で敵の目は他の所に行くと思わない？ 大活躍中のアレス隊とか」

ふむふむ。意外と大した事ないなと思われる訳ね。
癩だけど・・・それでどんでん返しできるなら・・・。

「しかし、それでも甘いのではないか？ 連中のナデシコに対する警戒は異様だぞ」

と、テンカワリーダーパイロット。

とりあえず、良く分からないけど、このままじゃ成功しないって事だけは分かった。

それに対して、艦長は・・・。

「昨日、被弾している事を活かします」

明確な返事でもって応えてみせた。

相変わらず、戦闘中だけは頼りになるわよね。

「戦闘中、ナデシコはキクザクラの隣に位置し、総戦力であるように見せかけます」

「ちよつと待った。そもそもキクザクラを前に出して良いのか？ やられたらおしまいだぞ？」

確かに。そりゃあ指揮官がやられたらおしまいよね。

私達でいえば、ミスマル最高司令官。

木連でいえば、あの演説してた人。

互いにどちらかを討てばそれがそのまま決着だもの。

まあ、討たせる気は到底ないけどね。

「もちろん、護衛として選りすぐりの部隊を付けますが・・・」

ゴクリッ。

「指揮官が命を賭けぬようでは誰も付いて来ない。父に私はそう教
わりました」

覚悟がある。

この娘にして、あの親って感じね。

言うならば、自ら極上の餌になるうっていったもの。

「なるほど。自身がそう納得しているのならば何も言つまい。危険
だとは思つがな」

何が思う所があるみたい。

だけど、本人が納得してるなら、何を言っても仕方がないわよね。

「月面基地で待ってればいいんじゃないの？ 最高司令官だけ」

それまた御尤も。

でも、それじゃあ意味がないわ。

「そこにお父様がいるから意味があるんです。

いなかったら、周りの緊張感もなくなってしまうから」

緊張感つて意外と伝わるものよ？
守るべき対象がいてこそ、死に物狂いにもなると思うし。

「ミスマル司令が前に出る事は分かった。ユリカ、続きを頼む」
「あ、うん」

私も続きが気になるわね。

えっと、確かキクザクラの隣にナデシコを配置するんだったわよね。

「中央に位置するも敵戦力の猛攻に被弾の影響が残るナデシコは撤退」

まだ修理が終わっていない中、勝利を決定付ける為に強引に出撃。でも、集中的な攻撃に撃墜の危険性があり、撤退を余儀なくされた。そんな流れを作り出す事で、ナデシコから目を話させようって魂胆ね。

「その際に月面基地側に撤退し、あたかも月面基地に帰還したかのようにみせかけます」

「敵はナデシコが撤退したと安心して攻撃を続ける。その背後を迂回して・・・」

「ドバーンツといっちゃう訳です」

エッヘン、そう言わんばかりに胸を張る艦長。

そついう子供っぽい所がなければもっと安心なのに・・・。

「ジユン。こちらの陣の構成は？」

「右翼の中心にアレス隊、左翼の中心にアテナ隊を配置するみたいだね」

「なるほど。本格的に総力戦だな」

「一応、ナデシコの相転移砲だけが作戦じゃないからね」

「ほお。包囲戦でも多大な被害を与えるつもりでいるんだな」

「ナデシコだけで戦況が決まる訳じゃない。たとえ戦況を覆せるだけの武器があるうとも」

「フツ。確かにな」

言わば、包囲戦を仕掛ける事、ナデシコの相転移砲でチューリップを破壊する事。

この二つで一つの作戦という訳ね。

「それじゃあ、今日も一日頑張りましょう」

「「「「「おおおー！」「」「」」」」

やっぱりこれよね。

この元気がないとナデシコとは言えないわ。
早く戻ってきなさいよね、コウキ。

S I D E O U T

S I D E M I N A T O

「ナデシコ、被弾！」

『ナデシコ、撤退したまえ。後は手筈通りに』

作戦が始まった。

中央という激戦区で争っている以上、流石に無傷という訳にはいかないわね。

でも、むしろ、こちらの方がちゃんとした撤退として見られていいかも。

後は月面基地の方向へ撤退しつつ、様子を見て戦場を迂回するだけ。もちろん、木連も警戒しているだろうから、慎重に行く必要があるでしょうね。

「ミナトさん。ポイント　ー　まで後退してください」
「了解」

コウキ君の事が気にならないという言葉えば嘘になる。でも、今は目の前の事に集中しないと。

ここでもし私の集中力不足でナデシコが落とされたなんて事になったら、

ただでさえ苦しんでいるコウキ君は今以上に苦しみ、悪夢に魘される事になる。

そんな事、認める訳にはいかないでしょ？

だから、私はしっかりナデシコを守る。

コウキ君が立ち直って、帰ろうと思った時に、きちんと帰れるように。

「ナデシコ、戦域から離脱しました！」

「追手は？」

「違う艦隊と交戦。追撃部隊はありません」

「了解。このまま撤退を続けます」

うん。第一段階は終了。

次は敵の目を誤魔化して、敵の背後に迂回するだけ。

「セレセレ。絶対に成功させるわよ」

「・・・はい。成功させて、コウキさんを迎えに行くんです」

セレセレも立ち直ってくれた。

今は信じて待つしかない、そういう結論に達したから。

コウキ君。セレセレはきちんと立ち直ったわよ？

パパである貴方がいつまでも座り込んだままなんて事はありえないわよね？

「ポイント　ー　に到達」

「了解。進路を変更します」

ここからは慎重に行かないとね。

「皆さん、敵と遭遇してしまえば、ナデシコ一隻しかない我々は敗北するでしょう」

「・・・」

「ですが、必ずや成功させてみせます。皆さんの命、私に預けてくれないでしょうか」

ふふっ。いつの間にかユリカちゃんも成長してる。

私ももつと成長しないとね。

「おう。艦長。俺の命、預けたぜ」

「元から預けてるさ」

「自信を持っていけ。お前が俺達の艦長だ」

激励の声。

久しぶりに聞いた活気のあるナデシコ。

やっぱりナデシコはこうじゃないとね。

「ミナトさん、お願いします」
「了解。任せておきなさい」

私達の大切な家、何があっても絶対に落とさせやしないわ！

S I D E O U T

「……ミズキさん」

……暗闇での遭遇。

あれから何日目だろうか。

「まだそっち側にいたのか？」「ウキ」

今日も右手に銃を構えての登場。

あれに何度撃たれた事やら。

「今日は訊きたい事があつてきました」

「訊きたい事？」

そう、訊かないといけない。

あれが自らの意思であつたのかを。

「あの作戦、ミズキさんは了承済みだったんですか？」

ずっと強制されてたと思っていた。

だから、諦めがついたんだと。

でも、あれが志願制であったのなら……。

ミズキさんは何を考え、何を思っつて、あんな作戦に参加したのか？

残された家族の事を考えて、少しでも躊躇う事はなかったのか？

……気になつて堪らない。

「当然だ。言っただろう？ 感謝していると」

「でも、それは……」

「俺は自らの誇りを貫いたに過ぎない」

それは……。

「何だ？ 同情か？ ふざけるなよ……」

俺達は兵士だぞ。命を散らす事に何の異論がある」

「しかし！ 残された者達の事を考えるなら」

「だからだ」

「え？」

「残された者達の事を考えたからこそ、死ぬ事に恐怖などなかった」

残される者がいるから死ぬ事が怖くなかった？

……意味が分からない。

意味が分かりませんよ、ミズキさん。

「家族を思えば、命なんて捨てられる。

家族の為なら、この命、微塵も惜しくない。

俺が命を賭ける事で、家族が幸せになるのなら、喜んで賭けてやるんじゃないか」

「……ミズキさん」

「それはお前も同じだろう？」 「ウキ」

「・・・はい」

死ぬ事に意味があるのなら・・・。
俺が死ぬ事で誰かが、いや、ミナトさんとセレス嬢が幸せになれる
なら・・・。

喜んでこの命、差し出す事ができる。

「俺は俺の為に死んだ。その事に微塵の後悔も未練もない」
「・・・」

「だが、そうだな。妻と娘には出来る事ならきちんと謝りたかった
な」

もう謝れない。

それが辛い。

俺の言葉で良いのなら、どれだけだって伝えられる。
でも・・・もうミスキさんの口から、言葉を伝える事は出来ないん
だ。

「コウキ」

「・・・はい」

「いつまでも甘ったれてるんじゃないぞ」

・・・笑った。

この空間で、初めて、ミスキさんが・・・。

「俺の死を、お前が背負う必要はないんだ」

「・・・ミスキさん」

「俺は、自ら選んで死を選んだ。そう・・・自ら、だ」

「・・・」

「その選択に微塵の後悔もない。俺の死は、確かに役に立ったのだ」

から」

「・・・なんて都合の良い夢を見ているんだろうか。この空間が夢だという事は分かっている。

自らが生み出したまやかかしであるという事も。

そのまやかしに自分を擁護させて・・・。

そんなの本当に自己満足じゃないか。

それなのに・・・分かっているのに・・・どうしてこんなにも胸が軽くなるんだろう。

どうしてこんなにも身体が軽くなるんだろう。

・・・なんて身勝手な奴。

「コウキ。撃て」

「え？」

拳銃を渡される。

これで、俺にミズキさんを撃てって？

そう言ってるんですか？

「俺を撃ち、初めてお前はこの苦しみを克服したと言える」

「そんな事・・・」

出来ませんよ、絶対に。

「撃たねば・・・撃つぞ」

銃口がこちらを向く。

紛れもなく命を奪える場所に向けて。

「そんな体たらくでは、安心して逝けないじゃないか」

「え？」

「意思を継ぐ奴がいる。だから、死んでいけるんだ。お前は継いでくれないのか？」

「俺は……」

「……やはりお前では駄目なようだな」

「は？」

「バンツ！」

「グツ……」

「やっぱり慣れないな。」

「この痛み。」

「お前は生きているのに何もしない。それなら、ここで死んでも同じだろ？」

「それは……」

「さあどうするんだ？ このまま素直に殺されるのか？ それとも・

……」

「……」

「その信念、貫くのか？」

「俺は……」

「お前が迷っている間にまた一人、また一人と人は死んでいく。」

「お前が行った所で変わらんかもしれんが……何もしないよりずっとマシだろう」

「……ミズキさん」

「ん？」

「俺は間違っていました」

渡された銃を構える。
ミズキさんに向けて。

「命に代えても成し遂げたい事が俺にもあるように、ミズキさんにもあつたんですね」

「……」

「ミズキさんは自身の命を捧げて、地球に勝利を齎そうとした。

それを誇る事はあつても、悲しみ、嘆く事はあつてはならない」

「……それで？」

「ここで俺が立ち止まったら、その犠牲すら無意味と化すかもしれない。」

それは……これ以上ない侮辱だ。俺は、俺達は……その犠牲を無駄にしてはならない」

「……」

「今、俺がするべき事は立ち止まる事なんかじゃない。

ミズキさんの願いを叶える為、己の悲願を叶える為に戦い続ける事。それだけです」

「……それが分かれば良い」

「だから……」

構えられた銃。

その引き金を……引く事なく銃を捨てた。

「ミズキさん。貴方はここで見ていれば良い。貴方の望み、俺が叶えてみせます」

こんなものは必要ないんだ。

ミズキさんを撃つ必要なんてない。

それは多分、逃げる事と同じだから。

ミズキさんを撃つ事でこの罪悪感を消し去ろうとしているだけなんだ。

それは違う。間違っている。

俺はそんな事をしたい訳じゃない。

逃げては駄目なんだ。受け止めなければ。

このひたすら重く苦しい罪悪感を受け入れた上で、俺は戦っていき
たい。

忘れてはならないんだ。

我が身を差し出してまで願いを叶えようとした男がいるという事を。

忘れてはならないんだ。

彼らの犠牲があつて、今の俺達がいるという事を。

忘れてはならないんだ。

その想いを、その願いを、俺達は、残された者は受け継いでいるの
だという事を。

「・・・・・・・・」

バンッ！

右肩を弾丸が穿つ。

だが、それがなんだというのだ。

「撃ちたければ撃てば良い。この痛みは俺に与えられた罰だ」

俺はこの痛みから逃れようと思わない。

この痛みを受け入れて、歩み続けていく。

バンッ！ バンッ！

この痛みは罪悪感だ。

友を殺してしまったという罪悪感から来る痛み。
きつと残された者の誰もがこの痛みを受け続けている。

バンッ！ バンッ！ バンッ！

それなのに、俺だけが立ち止まっている。
皆が受けている痛みなのに……。
そんなのあまりにも格好悪いだろ。

「どれだけ撃つても構いません。俺は何度だって立ち上がってみせます」

苦しいのは誰でも同じ。

痛いのは誰でも同じ。

それでも、それ以上の想いを俺は受け継いでいる。

「きつとこれからも苦しいでしょう、痛いでしょう。」

でも、それは受けるべき痛みだ。この痛みを、俺は……。背負っていく」

カツッ。

「……。弾切れか」

「……。ミスキさん。俺は……」

「もういい。これ以上言うな」

傷だらけの身体。

撃たれていない所を見付ける方が難しいぐらいの。
でも、それでいい。

この痛みは、背負うべき痛みなのだから。

「もう大丈夫のようだな」

「・・・はい」

「それならいい。行け。友が、仲間が待っているぞ」

いつもの笑みだ。

ミズキさん本来のどこまでも男臭い、格好の良い笑み。

「ミズキさん」

「おう」

「貴方の娘と俺の娘、友達にしてあげてもいいですよね？」

「もちろんだ」

貴方の娘さんには俺から伝えます。

貴方がどれだけ誇り高く死んでいったのかを。

貴方のお陰で今の地球があるという事を。

「奥さんに伝えます。貴方がどれだけ立派だったかを」

「そうだな、俺の代わりに怒られて来い」

「・・・それは勘弁ですね」

伝えます。

貴方の姿にどれだけ勇気付けられたかを。

貴方がどれだけ妻と娘の事を想っていたかを。

「コウキ。必ず成し遂げろ、和平を」

「はいッ！」

だから、立とう。

いつまでも休んでなんかいられない。

もう充分に休んだらろう？
だから、もう行ける筈だ。
今はただこの戦争を終わらせる為に。
その為だけに・・・戦い続けよう。

「待つてるよ。今、行くからな」

S I D E M I N A T O

「強引に突破します！ 援護を」

まさか、見付かるなんて・・・。
完全に見通しが甘かったわ。

見付かったら終わりだって分かってたのに。

「クッ」

避ける。

出来る限り。

それでも、完全に避ける事はできなかった。
むしろ、当てられる事の方が多い。
そうよね。だって・・・。

『こんな中を強引に突破するだって？ 無理に決まってるんだろ！』
待ち構えていたのは艦隊だもの。

ナデシコ一隻では戦力差が絶望的過ぎるわ。

「それでも！ やるしかないんです！」

そう、やるしかない。

遭遇したらピンチだって事は分かった。分かってた上で作戦を実行したんだもの。諦める訳にはいかない。作戦も命も。

『俺が引き付ける。その間に行け』

アキト君が告げる。

確かにアキト君の機体なら単独行動が出来るけど……。

「駄目。敵は完全にナデシコを狙ってる。アキトが出てても、敵はそっちに行ってくれない」

『だが！ ……クツ、了解』

敵の狙いはナデシコのみ。

現に、どれだけ機動兵器で戦艦を狙っても、それを無視してナデシコを狙い続けている。

何隻落とされてもいい。ここでナデシコを落とせれば。

そう言わんばかりに。

「駄目です！ 完全に包囲されています！」

レーダーを見ながら、ルリルリが叫ぶ。

あの冷静なルリルリが叫ぶなんて……。

どれだけ絶望的かが分かる。

「……………どつすれば、どつすればここから覆す事ができるの?」

悩む艦長。

即決で全てを成功に導く艦長が悩むなんて……。

もう……駄目なの?

ここで、コウキ君と再会する事なく私は死ぬの?

私は……コウキ君の家を守りきる事ができ……。

「熱源反応! これは……」

ドゥウウウウウーーン!

「グラビティブラスト?」

ナデシコを包囲していた敵の戦艦が次々と落ちていく。

これって……もしかして……!

「コウキ君!？」

『おっと、残念。ヒーローは遅れてやってくるっていつでしょ?』

背後から現れる二隻の戦艦。

それは私達にとって予想外の援軍だった。

S I D E O U T

第二百二十七話（後書き）

最後のはわかる人は分かっちゃっただろうな・・・。

次回もよろしくお願いします。

第二百二十八話（前書き）

遅くなりました！

どうにか今日中に投稿が出来た・・・。

なんか物凄く時間が掛かっちゃいましたね。
所謂、難産です、はい。

予想外の人物。

恐らく分かってしまっただろうなあ・・・。

第二百二十八話

S I D E M I N A T O

『ヒーローは遅れてやってくるっていうでしょ？』

ナデシコのピンチ。

突如現れる援軍。

もしかして、コウキ君？ っと思った私は悪くないと思うの。

でも、まさか、この人に助けられるなんて・・・ね。

「この声は・・・」

『おや？ 酷いなあ？ 一応、僕もナデシコの一員のもりなんだけど』

「会長・・・ですか？」

『そうそう、分かっているじゃん。アカツキ・ナガレ。忘れちゃ駄目だよ』

アカツキ・ナガレ。

ネルガル重工の会長で、ナデシコの元パイロット。

喧嘩別れのような形で離脱した筈なんだけど・・・。

「はぁ・・・。私は貴方がここに出てくると思ってなかったのです
が」

『損得考えればここで手を貸さないのは愚かでしょ。タイミングを見計らってたって訳』

「相変わらず強かいらつしゃる」
『まあね』

引き連れてきたのは二隻の戦艦。
一つはご存知コスモスなんだけど……。

「して、それらが貴方の切り札ですかな？」

『そう、ナデシコ級三番艦カキツバタ。そして、僕の愛機さ』

あれが噂のカキツバタ。

ナデシコと同等の性能があってもおかしくない艦ね。

『確か君達は新型機にアドニスとかいう名前を付けてたよね』

その二隻を引き連れているのは全身が青に染まっている機体。
でも、その形状は以前のエステバリスと違って……。

『じゃあ、そうだなあ、僕のはアドニス突撃強襲仕様とでもしてお
くよ』

アドニス突撃強襲仕様。

機械にあまり詳しくない私だけど、それでも気付く事ぐらいはある
わ。

あの機体と他のアドニスで大きく違う部分。

それは……背中に取り付けられた巨大なグライダーユニット。

「詳しい説明を」

『おっと、そうはいかないよ。これは僕の切り札だからね』

「ですが」

『それに、秘密があつた方がモテるでしょ？ 男も女も』

艦長の言葉を悉く邪魔するアカツキ・ナガレ。あれは完全に自分に酔ってるわね。相変わらず気障ったらしい。

「・・・分かりました。今は何も訊きません」

『そうしてくれると僕としても助かるよ』

「今の所、協力して頂けると、そう受け取ってよろしいのですね？」
『もちろんさ。見返りには期待してるから』

本当に強かね。

そりゃあ、助けられたのは事実だけど・・・。

「それでは一気にここを突破して、敵後方へ回ります」

『OKOK。道の一つや二つ、簡単に開いてあげるよ。僕の切り札でね』

そう言った後、敵へと向かっていく青い機体。

そのスピードは確かに突撃強襲仕様と言うに相応しい速さだった。

「ねえ、ジュン君、アカツキさんはあれに乗ってるんだよね？」

「えっと、うん、そうなるね」

「それじゃあ、カキツバタの艦長って・・・」

ネルガルの会長が彼らを引き連れてきた。

これは多分ネルガル所有の二隻は彼の指揮下にあるという事だと思う。

決戦なのに彼の指揮下という事は今回も何かしらの取引があったと見ていいでしょうね。

まあ、それはどちらでも良いとして、大事なのは軍がネルガルの要

求を通したという事。

多分、他にも何かしら要求を通していると思う。
たとえば……。

『お久しぶりね、ミスマル・ユリカ』

「エリナさん!？」

自身の秘書を引き連れてたり。

貴方、操舵士だったわよね？

なんか、艦長的な席に座ってません？

『えっと、あの、僕……』

「……ハーリー君。なんでハーリー君がここに？」

「その子達は誰ですか？」

『ホシノ・ルリ、ラピス・ラズリ、セレス・タイトと同様の存在よ』

保護していたマシンチャイルドをクルーとして引き連れてたり。

その誰もが昔のセレセレみたいに無表情、例外もいるにはいるけど。

「そんな……戦場に子供を連れて来るなんて……」

それは確か。

でも……。

『あら、貴方達に言われたくないんだけど』

「それは……」

私達も同じなんだもの。

嫌なら降ろせば良い。

始まりはネルガルだったから、私達に成す術はなかったけど……。

今ならクルーの一人や二人、簡単に降ろせるだけの権限はある。それをしてこなかったのは、家族という事もそうだけど……。彼女達がいないとナデシコとして活動できないという点が大きい。それは……。認めざるを得ないわ。

『まあ、この話は置いて……。コホンツ。会長命令により貴方達を援護します』

……正直助かる。

助かるけど、その見返りが気になってしょうがない。

「ネルガルは軍に何を要求したんですか？」

何の見返りもなしにネルガルが動くとは思えません」

『分かっているじゃない。でも、残念ながら、秘密』

「良いじゃないですか。ぶーぶー」

『のつもりだったけど、特別に教えてあげるわ』

もったいぶつちゃって……。

それと、艦長、ぶーぶーはやめなさい。

恥ずかしいわよ、大人として。

『これからも末永くよろしくお願いします、って所かしら』

何よ？ それ。

「もっと詳しくお願いします！」

『駄目。これ以上は言えないわ。ま、詳しい事は戦後の私達を見れば分かるんじゃない？』

どうやら口を割る気はないらしい。

悔しいけど、これは諦めるしかないようね。

『とりあえずさっさと作戦を終わらせてちゃいませう？ 内容は聞いているから』

「・・・分かりました。お願いします」

プツンッ。

通信が切れる。

「もう、ネルガルは相変わらず意地悪です」

艦長はプツンッ感じ。

結局、口を割らなかつたし、私も同感かな。

でも、ま、これで作戦の成功が現実的になると思えば・・・ね。

「死ぬ訳にはいかないもの、何があっても」

コウキ君にただいまって、そして、おかえりって。

コウキ君が戻ってきたら絶対にそう言っておけよって誓ったんだから。

S I D E O U T

S I D E K A E D E

『やあ、皆、久しぶりだね。ヒーローが来たよ』

そんな一言と共にやって来た青い機体。

さっきの通信を聞いてたから、誰かは一応分かってる。

分かっているけど・・・大してこの人の事、知らないのよね。

正直、接点なかったし。

『アカツキ。お前・・・』

予想外といった顔をするテンカワさん。

まあ、確かにここでこの男！？ という驚きはある。

『ギリギリだったんじゃない？ 天下に名高いナデシコらしくないね』

『ケツ。んな事はお前に言われなくても分かってたんだよ』

『おっと、相変わらずきついねえ、リョーコ君。そんな君も魅力的だけど』

『へいへい。危険になるまで待つてる正義の味方に言われても嬉しくねえよ』

『あれね？ もしかして、バレてたのかな？』

『やっぱりそうか。なんとなくそう思ったただけだ』

『おっと、墓穴を掘ってしまったようだ。失敗したね』

何？ このコント。

『アカツキ。連合軍に協力する気になったのか？』

『ギブアンドテイク』

『何？』

『タダ働きは勘弁だよ。何事もギブアンドテイクさ』

『なるほど。お前達に利益があるように交渉したんだな』

『まあね。あのままじゃ地球側はピンチっぽかったしさ。
助けてあげようかって言ったら、飛びついて来たよ。これもナデシコのお陰さ』

ナデシコのお陰？

『ナデシコが活躍すればする程、ネルガルの評価は上がると
そうそう、軍属だろうと、製造したのは僕達だからね。』

その次世代艦を頼りにするのは当たり前でしょ。苦しい状況なら
尚更ね』

・・・それもそうよね。

ナデシコを製造したのはネルガル。

ナデシコの活躍はそのままネルガルの評価に繋がる。

・・・なんか利用されてるみたいでムカつく。

『ま、それを見越して製造したんだけどね、これもあれも』

『その青い機体とあの戦艦の事か？』

『そうそう、カキツバタとアドニス突撃強襲仕様さ。覚えてよね』

カキツバタ。

形状はナデシコを更にシャープにした感じ。

でも、その大きな違いは巨大なレールカノンにある。

あれだけ目立てば流石の私でも気が付くってば。

それで、そのレールカノンなんだけど・・・。

ナデシコもレールカノンは装備されてるけど、その規模が違うわ。

ナデシコのはあくまで弾幕用。

威力の小さいものを連射できるような仕様になっており、攻撃力に
欠けている。

まあ、コウキの存在が、その前提を覆しちゃった訳だけど。

しかし、カキツバタのは違う。

あれは弾幕用とか生易しいものじゃない。

完全な攻撃の為のもの。

あれ一撃で戦艦とか簡単に沈んじゃうんじゃないのかと思うぐらい巨大。

質量がそのまま攻撃力に直結する以上、見た目通りの攻撃力を発揮してくれる事だろう。

ディストーションブレードと殆ど一体化してるから、邪魔になる事はないだろうし。

『カキツバタは君達ナデシコの稼働データをフィードバックしてるからね。』

機動力、火力、耐久力、その全ての面で上回っている自信があるよ。Yユニットはないけど』

私達ナデシコのデータを？

親会社だから仕方ないのは分かるけど・・・。

やっぱりムカつく。

『そうは行かないな。ナデシコとて全面改修し、性能を飛躍的に向上させている』

そっか。そういえばそうだった。

ナデシコも改良されているのよね。

『そうそう、それなんだよ。勝手に改造とかやめてよね。ナデシコはネルガルのものなんだから』

『残念だが、ナデシコは最早軍のものだ。データの提供などはお前達に気を遣ってるに過ぎん』

『ま、手元から離れたものについてまでも拘るつもりはないよ。その

為に、これを作ったんだし』

どっちなのよ!?

どっちでもいいなら、ネルガルのものとか言わないで!

『実際、これのお陰で助かったでしょ? 君達も。いや、作ってよかったよ、本当に』

クツ。悔しいけど・・・言い返せない。

もう駄目だつて思った時の登場だったし。

本人が言つてた通り、狙つてたんでしようね。

これ以上ないタイミングだったもの。

それにしても・・・なんか勿体無い気分。

登場した人物はともかく登場シーンは紛れもなくヒーローのものだつたじゃない?

あれがああ男じゃなければ、ドキッてなつてたかも。

もし現れたのがケイゴだったら・・・ポツ。

『それにこのアドニス。君達流の名前の付け方にさせてもらったよ。構わないよね?』

構うわッ!

『それは・・・グラビティライフルか?』

え? グラビティライフル?

あれってウリバタケさんが開発した奴だから、ナデシコにしかない筈なのに・・・。

『ナデシコのは僕のもの。ちゃんと情報提供はされてるよ』

嘘！？ ずるい！

『それに加えてフィールドガンランスに六連ミサイル。ナデシコ様様だね』

完全にナデシコの機体のパクリじゃないッ！

『本当は変形式とかにしたかったんだけどさ。流石に厳しかったみたい』

『それでそのグライダーユニットか』

『そうだよ。これのお陰で高機動かつ曲線的な動きを可能とした訳』

青い機体の背後は戦闘機の翼のような独特な形状。

見た目で言うなら、装着してるって感じ。

その翼の下側に取り付けられているのがミサイルの発射口。

機体の肩に近い位置で両側に取り付けられているから、連射性は高そうね。

そして、最後にその翼の上、

機体が背負うような形で備え付けられているのがフィールドガンランス。

グライダーユニットだっけ？

それを使って飛んでいる時にはフィールドガンランスが前を向くようになって、

多分、ミサイルとレールカノンで手を使わずに攻撃できるようになってるんだと思う。

そこに更にグラビティライフルを持てば、突撃しながら高い火力で攻撃できそうね。

近付いたら、素直にフィールドガンランスを突き立てれば良いんだし。

『突撃強襲仕様。似たような言葉を並べているぐらいだ。それに見合った仕事はしてみせるよ』

突撃。強襲。

確かに似たような言葉。

それじゃあ、早速その言葉通りの仕事をしてもらおうじゃない。

『訊きたい事はたくさんあるが・・・』

『やめてよね。秘密を持つてた方がカッコいいんだから』

『・・・とりあえず、作戦を完了させてからだ。早速だが、活躍してもらおうぞ』

『はいはい。その為にいるんだし。ま、それなりに頑張るよ、それなりにね』

そう言うてから・・・。

シューインッ！

シューーー！

凄まじい速度で行ってしまった。

テンカワさんとあの男の二人で。

「・・・ってちょっと待ちなさいよ！」

私だって、やれば出来るんだから！

『コスモスとカキツバタの攻撃で敵の数は大分減りました。

強引に突破しますので、皆さん、頑張つて付いて来てください』

「了解！」

やっつてやるつもりじゃない！

SIDE OUT

SIDE MINATO

「パイロットの皆さんは帰艦して下さい」

『了解！』『了解！』『了解！』

カキツバタ、コスモス、両艦の協力の甲斐あって、無事に作戦ポイントへ辿り着く事が出来た。

カキツバタの火力はもちろんだけど、

やっぱりコスモスのグラビティブラスト四連装が大きかったわね。

両艦が道を開いてくれたから、ナデシコは相転移砲のチャージに集中する事が出来たし。

「コスモス、カキツバタの両艦はナデシコの後ろへ。耐ショック体勢を」

『分かってるわよ。さっさと撃っちゃいなさい』

本作戦における功労者には下がってもらって……。それぐらいは認めてるわよ？ ちゃんとね。

「それでは……」

「艦長、どうしますか？」

「出来る事ならチューリップの探索をしたかったんですが・・・」

チューリップにも起動状態と待機状態がある。

起動状態であれば反応を追えるが、待機状態だとかなり接近しないと発見できない。

この広大な宇宙が舞台だもの。

木連が戦場にチューリップをどれだけ隠しているか分からないわ。

だから、敵陣にいられる間に出来るだけ発見して撃破しておきたかったんだけど・・・。

「撤退します」

落とされたら元も子もないわね。

今は無理はせずに、明日へ繋げるべきだわ。

「了解。両艦へ伝えます」

通ってきた道を帰れば、敵と遭遇せずに自陣に戻れる筈。

ここは三隻で協力して、一気に自陣まで戻ってしまった方がいいわね。

幸い、敵艦よりも私達の方が速いんだし。

追撃をかわす事くらい簡単よね。

「撤退します。ミナトさん、全速力で！」

「了解。またまた飛ばすわよ！」

無事に作戦を終えたんだもの。

最後まで無事で終わりたいわよね。

作戦は帰るまでが作戦よ。

「追撃は？」

「もう追いかけてきません。諦めたようです」

「分かりました。速度を落とし、より安全なルートへ出ます」
「了解」

ふう。どうにか離脱成功。

敵との遭遇もなかったし、追撃も諦めてくれた。

これで安心して、月面基地まで戻れるわね。

「キクザクラの様子はどうなっていますか？」

ナデシコの隠れ蓑であり、同時に包囲作戦を展開していたキクザクラ。
あちらも無事だと良いんだけど……。

「包囲に成功するものの、敵の強い抵抗にあい苦戦。

しかしながら、陣形の優位性により、徐々に優勢になっているとの事です」

「そうですか……」

「ユリカ。応援に行くのかい？」

「うん、どうしよう。今はナデシコの修理を急いだ方が良いのかも」

「コスモスもいる事だしね」

今回の作戦で少なからず傷を負ったナデシコ。明日からの事を考えるなら、今修理をしておいた方が良いのかもしれないわね。

油断は禁物。常に最善の状態で戦いに挑まなくちゃ。

シュイン。

「なるほど。それじゃあ、コスモスを貸してあげるよ」
「・・・アカツキさん」

久しぶりね、会長さん。

「お願いします」

「あれ？ 意外だな。随分と素直」

「背に腹は変えられませんが。意地より命の方が大切です」

「いやあ、良い事言うね。流石はナデシコの艦長。それじゃあこの借りは」

「下手に出る必要はないぞ、ユリカ。カキツバタはともかく、コスモスは軍の所有物だ」

「良い所なんだから、邪魔しないでよね、テンカワ君」

パイロット勢の到着。

戦闘終了後は様子見という事で機体内で待機してもらっていたのよ。それで今、ようやく安心できる状況になったからって事。

意図してか、偶然か、会長さんはナデシコに乗り込んでしまったみたいだけど。

「え？ そうなの？ アキト」

「ああ。さつきルリちゃんから聞いた」

「え？ ええ？ 聞いてないよ、私」

「すみません。後で報告しようと思っていたのですが・・・」

「すまんな。俺がルリちゃんに訊ねて、その場で答えてもらったんだ。だから・・・」

「えっと、まあ、うん、二人の愛という事で納得しておく」

「なっ!？」

「い、いや、ユリカ、それはちょっと違うと思うんだが・・・」

「照れない、照れない」

「だ、だからだな・・・」

うん、このカオス具合。

これがナデシコよね。

・・・ナデシコって何なんだろう？

「コホン。いいかな？」

まとめ役は手馴れてるって感じね。

「カキツバタはネルガルに任せられてるけど、コスモスは別なんだよねえ」

「それがどうして行動を共にしているんだ？」

「ほら、ナデシコ級って他の艦とじゃ天と地ぐらいの差があるじゃん」

・・・肯定したいけど、したくない。

何かしらね？ この複雑な心境は。

「だから、ナデシコの援護に回るなら、それなりの性能が必要になる訳よ」

「それで、軍がお前達に協力を依頼したという訳か」

「そゆこと。その時に万が一の時の為の修理役、

プラス、お目付け役としてコスモスが付いてきたんだよ」

「それじゃあ別にコスモスの指揮権がネルガルにある訳じゃないのね」

「そうそう、むしろ、合流した今はナデシコにあるみたいだよ、不思議な事にね」

不思議な事って訳でもないと思うんだけど……。
うちの艦長、一応、提督も兼備してるし。

「それじゃあ本当に下手にでる必要なんかないじゃないですか」

「いやあ、惜しかったね。あそこでアキト君が現れなければ、ナデシコに貸しが出来たのに」

「その時は私が忠告してましたので、あしからず」

「あらあら。君達カップルは僕が嫌いみたいだね」

「カ、カップル……私とアキトさんが……カップル……」

「……ずるい、ルリだけ……私だってアキトと……」

二人とも……可愛い。

照れてるルリルリに拘ねてるラピラピ。

うん、これだけでご飯三杯はいけるわね。

「そういえば、どうしてアカツキさんはナデシコに？」

「久しぶりに皆と会いたくてね。元とはいえ仲間じゃないか。歓迎して欲しいな」

「えっと……歓迎します？」

「なんで疑問系なのさ」

まあ、別れ方が別れ方だったものね。

「とりあえず、コスモスに行っちゃおうか。話はそれからでも出来

るよ」

「それ、私の台詞です」

あら、拗ねちゃって・・・。

ルリルリやラピラピとは別ベクトルで可愛らしいわね。

こういう所にジュン君は惚れちゃったんでしょうね。

でも、いつまでも子供じゃ駄目よ、ユリカちゃん。

そろそろ大人の魅力で男を魅了しなくちゃ。

「久しぶりね」

ナデシコをコスモスに収めてからしばらくして、

カキツバタからエリナちゃんが子供達を連れてやって来た。

マシンチャイルド。

彼女が連れてきたのはそう呼ばれる遺伝子改良された子供達。

コウキ君が情報を提供して、アキト君達が救出したっていう。

子供達は辛い思いを経験し、ずっと苦しんできた。

でも、救出されて、もう普通の生活を送れるようになった筈よね？

ちよつと特別だけど、それでも普通の子供として暮らす事ができる

筈よね？

それなのに・・・あれからも随分経つというのに・・・ネルガルは一体何をしていたのかしら。

この子供をちゃんと子供として扱ったの？

どうして・・・どうしてこんなに無表情なのよ！

「・・・・・・・・」

「……………」
「……………」

これが……マシンチャイルドと呼ばれる所以。
これじゃあ……本当に機械じゃない。

無言で無表情で、動こうともしない。

こんなの……間違ってるわ。

何の為にコウキ君やアキト君が救出したのよ。
助ける為よね？

あの辛い状況から抜け出させてあげる為よね？

何も、何も変わってないじゃない……。

「あの、僕……」

「……………」

「えっと、マキビ・ハリって言います」

「……………」

「よ、よろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします。ハリ君」

「やっど、やっど返事をもらえました」

マキビ・ハリ君。

ルリルリが言ってた子ね。

マシンチャイルドの中でも特別なケースで一般家庭で育てられながら、調整を受けたっていう。

だから、ああして、元気の良い男の子らしさが見える。

分かるかしら？ 彼が証明しているのよ？

マシンチャイルドだって普通の子供らしくいられるって。

ルリルリだって、ラピラピだって、セレセレだって……。

ちよっと特別かもしれないけど、普通の女の子として暮らしている。
それなのに……。

「ネルガルは何をしていたの？」

「え？ 何か言ったかしら？」

「ネルガルは何をしていたのかって訊いてるのよ！」

怒ってる。

私は紛れもなく・・・怒ってる。

「な、何がよ？」

「彼女達を見て貴方は何も思わないの？ この子供達は見て、貴方は何も思わないの!？」

「それは・・・」

「笑み一つ零さない。声一つ出さない。それは間違いなく貴方達のせい」

「・・・」

「これじゃあ何の為に、何の為にコウキ君とアキト君が子供達を助けたか」

「・・・コウキさん？」

「・・・あ」

・・・しまった。

秘密にしていた事を勢い余って・・・。

「・・・私がここにいられるのはコウキさんのお陰なんですか？」

・・・ここで誤魔化しても仕方がないわよね。

ネルガルの連中が聞いてるけど・・・誤魔化したら余計に怪しまれる。

「ええ。そうよ。貴方達の居場所を突き止めたのはコウキ君」

「・・・コウキさんが・・・私を・・・ありがとございます、」
ウキさん」

「ミナトさん。それは・・・」
「今更誤魔化しても仕方ないわ」

「ごめんなさいね、コウキ君。」

でも、私のミスはきちんと私が拭うから。

「へえ。それじゃあ犯罪行為をしていた事を認めるんだね？」

やっぱりネルガルが追求してくるわよね。

でも、負けてたまるもんですか。

「何の話をしているのかしら？」

「あれれ？ まさかの開き直り？ 犯罪は犯罪でしょうに」

「さあ？ 調べ事をしていたら偶然知ったなんて事はいくらでもあるでしょ」

「いやいや、それは流石に無理があるよ」

「まあ、仮に犯罪だとして、どちらが重いのかしらね？」

「どちらがよりダメージを受ける事になるのかしらね？」

「おっと、今度は脅しかい？ 参ったね」

「突かれるような隙があるからいけないのよ。いくらでもあるでしょ？ 後ろ暗い事」

「ハッハッハ。お手上げだよ。ま、ひとまず休戦といこうじゃないか。」

僕も流石に破滅の道は辿りたくないからね。

方法はいくらかでもあるけど、強攻策には出たくないし。君も嫌だ
る？」

「それはどうも」

「・・・君って僕より強かだよな」

「そうかしら？」

こちらには切り札がある。

そう匂わせれば尻込みするのは当然。

それだけの後ろ暗い事がネルガルにはあるのだから。

「それで、どうなのよ？ ネルガルはこの子達はこのままにするつもりなの？」

そうなら、許さないんだから。

「しょうがないじゃない。そうやって育ってきたんだから」

「・・・何ですって？」

「どうする事も出来ないわよ。マシンチャイルドは何をしてもマシンのま」

カツツカツツカツツ。

立ち上がり、近付く。

こんなに頭に来たのは初めてだ。

一発ぶたないと話にもならない。

「どきなさい」

「おっと、そうはいかないね。彼女は僕の大切な秘書だから」

「もう一度言っわ。どきなさい」

「もう一度言っよ。どく訳にはいかない」

この。

「か、艦長！ 大変です！」

え？

「ど、どうしました？ メグミちゃん」

「目の前にチューリップが出現。そこからは・・・」

ゴクリツ。

「ナナフシが、あのナナフシが現れました」

ナナフシ？

それって、あの・・・ナデシコを簡単に貫く・・・。

「そもそもどうしてそこにチューリップがある？ 行きにはなかったじゃないか！」

「待ち伏せです。始めからこちらが油断した所を狙っていたとしか思えません」

待ち伏せ？

嘘でしょ？ そんな事って・・・。

「なるほど。どうやらそこまでしてもナデシコを落としたいらしいね」

「・・・敵と遭遇した時点で気付くべきだった。俺達の作戦は木連にバレていたんだ」

遭遇している時点でナデシコの位置はバレていた。

それなのに、今まで見過ごしていたのは・・・罠にかける為だったってどういうの？

「これはもう脱出を考えるべきだね。意地を張って無駄死にする訳にはいかないでしょ？」

「それは・・・」

「チューリップの反応を感知できなかった時点で負け。向こうの方が何枚も上手だったよ」

チューリップは待機状態であれば反応を感知しづらい。

もしあらかじめ戦場になる場所にいくつも隠してあったとしたら・・・。

相手の好きな時、好きな場所で奇襲ができる。

・・・そんな事、考えもなかったわ。

既に相手は勝つ為の策を構築していた・・・。

「艦長！ 相転移砲なら！」

ッ！ そうよ。相転移砲ならナナフシぐらい。。

「・・・駄目です」

「・・・え？」

今、なんて・・・。

「ナデシコは今・・・相転移砲が撃てません」

「どうしてよ？ 急がばまだ・・・」

ナデシコが沈んじやうのよ？

コスモスやカキツバタだって。

この状況を覆せるのは相転移砲ぐらいじゃ・・・。

「相転移エンジンを点検するべく、本体から取り外してしまってい

るんです」

エンジンの点検中ですって？
こんな時に限って……。

「そ、それなら、すぐに繋ぎ直せば」

「それでも数十分は……かかってしまいます」

数十分？

それなら。

「ちなみに、見た所、全部が全部チャージ済みね。今すぐにも撃つてきそうよ」

イネスさんの慈悲のない一言。

そ、そんな……。

本当にもうどうする事も出来ないの？

「アカツキさん、カキツバタの火力でどうにかできませんか？」

「……一体なら急げばなんとか。でも、同時に五体も出現したらね。諦めるしかないよ」

そう、問題なのは相手が一体だけじゃない事。

一、二体であれば、カキツバタやコスモスだけで潰せると思う。
でも、相手は同時に五体。

しかも、それぞれがチャージ済みという始末。

……どこまでも性質が悪いわ。

「それなら、他の部隊に救援を」

「無理よ。そんな時間はもうないもの」

既にチャージ済み。

後は撃つだけって状況よ。

そんな状況で救援が間に合う訳ないじゃない。

もうどうする事も・・・出来ないのよ。

「だが、方法がない訳ではない」

・・・え？

「俺が行こう」

アキト君？

「アキトツ！？」

「俺の機体なら単独行動が可能だ。今すぐにも飛び出せば、少なくとも時間は稼げる」

「ヘッ。それなら、俺もだな。アキト、俺も行くぞ」

「ガイさん！ でも・・・」

「命を賭けて戦ってる奴がこの戦場には五万といるんだ。俺だけ臆する訳にはいかないだろ」

諦めていない。

諦めていない人が・・・いる。

でも、その方法は以前見た・・・捨て身の攻撃。

また、私達は誰かの命を犠牲にして、生き延びなければならぬの？
コウキ君はまた、二人の死に苦しまなくちゃならないの？

「こういう時こそ彼の出番じゃない」

彼？
彼？
彼って？

「……もしかして……マエヤマさんの事ですか？」
「そうそう。こういう時に真っ先に飛び出していくのはいつも彼だよね」

でも、そのコウキ君は……。

「彼は今どこにいるんだい？　今回も彼に命を張って」

「いません」

「え？　何だつて？」

「ここにはいません。……マエヤマさんは今、月面基地にいます」

「……本当かい？　それ」

「はい。それに、マエヤマさんは今……戦えません」

「あらら」

コウキ君は月面基地。

救援に来れる部隊はいない。

逃げている暇もなく、攻撃する術もない。

最早成す術がないという状況。

……ごめんなさい、コウキ君。

私は……ここで……。

「……大丈夫です」

「え？」

セレセレ？

「……こういう時、必ず颯爽と現れて解決してくれる人がいます」

「ッ！ ナデシコ前方にボソン反応！」

「もしや！」

「・・・今も来てくれるって信じています。」

だってその人は、私が辛い時、誰よりも早く駆けつけてくれる人ですから」

ドバアアアアアアアアアアッアアン！

凄まじい光の量。

まるで相転移砲を間近で見たような、そんな光の渦。

「も、木連の待ち伏せ部隊全滅。」

ナナフシ、チューリップ、その全てが先程の攻撃で破壊されました」

「戻ってきたか・・・」

「ヘッ。これこそ正にヒーローは遅れてやってくるって奴だな」

「ハハッ。何これ？ 僕の時よりインパクトがあるんじゃない？」

まったく、僕よりも美味しい所を持つてくんだから・・・やってられないよ」

こんな事が出来るのは・・・アドニス殲滅射撃仕様だけ。

それなら、そのパイロットは・・・。

「・・・そうですよね」

「・・・ッ！」

「・・・ッ！」

「・・・ッ！」

「・・・笑った。初めて、僕と同じ境遇で笑っている人を・・・」

どれだけ待ち侘びた事か。

どれだけ待ち望んだ事か。

苦しかった。辛かった。

でも、必ず帰ってくるって。

必ず私達の所へ戻ってきてくれるって。

そう信じてた。

私じゃ何にもしてあげらなくて、信じる事しかできなかったけど。。。

信じれば必ず想いは届くからって自分に何度も言い聞かせて。。。

ひたすら信じ続けた。

挫けそうになる事もあった。

絶望した事もあった。

でも、決して諦める事はなかった。

自分の力だけで立ち上げれる強い男になっているって確信していたから。

想いが届いたのかは分からない。

分からないけど、そんな事はどうだっていい。

だって、目の前に彼がいるんだから。

ずっと、ずっと待ってた彼が。。。戻って来てくれたんだから。

それだけで。。。私は。。。

「。。。待ってたわよ」

。。。嬉しくて堪らない。

『随分と待たせてしまいましたね』

暖かく優しい声色。

私はこの声を知っている。

『でも、もう大丈夫です。俺はもう。。。挫けません』

強い意志が込められた声。

私はこの声が・・・大好きだ。

『だから、もう一度、共に戦いましょう』

光が止み始める、

もう少し、もう少しで・・・。

「映像、出ます！」

光が止み、モニタに映像が映し出される。

その光の果てには・・・私が、私達が待ち望んだ光景があった。

「・・・コウキさん」

「・・・コウキ君」

まるで全てを暖かく包み込むように白銀の翼を広げる機体。

その後姿はどこまでも頼もしく、私達に勇気を与えた。

『ただいま戻りました、ミナトさん、セレスちゃん』

「おかえりなさい、コウキ君」

「・・・おかえりなさい、コウキさん」

私はこの瞬間を忘れる事はないと思う。

だって、この瞬間、私はコウキ君に二度目の恋をしてしまったのだから。

S I D E O U T

第二百二十八話（後書き）

今回はイベント盛り沢山。

色々とありましたね。

次回以降の展開を書くのが楽しみで仕方ありません！

第二百二十九話（前書き）

遅くなりました！

ああいう展開の後の話って難しい。

二日間離れていただけで書き方を忘れている自分がいて……。時間がかかり過ぎてしまった……。。

第二百二十九話

「よもや、ここまでやっても墜ちんとは・・・」

「やはりナデシコこそが最大の障害」

「木連が勝利する為にはナデシコを最優先で撃墜する必要があるな」

「なに、もう心配する必要はない。優人部隊を投入する」

「おお。遂に、ですか」

「うむ。敵も大分戦力を消費した。そろそろ戦況を覆しても良かる
う」

「今までの殆どが無人机であつたなどと誰も思いませんでした」

「しかし、地球にも漢がいましたな。友の為に自ら敵へ突っ込むな
どと」

「やめんか！ 地球は敵だぞ！？」

敵を褒めてどうする！ 貴様はキョアック星人を認めるのか！？

「ハ、ハッ！ 申し訳ありません！」

「キョアック星人は徹底的に潰すべし。地球も同様だ」

「お、仰る通りであります、中将」

「敵に情けを見せてはならん！ 地球は滅ぼすべき悪。そこに善は
存在しない」

「ハ、ハハッ！」

「・・・さて、それではナデシコを討伐する部隊を決めようか」

「ハッ！ 是非こそ、その役目、この私に！」

「いえ！ 私こそ！」

「私こそ相応し」

「まあまあ落ち着きたまえ。実はもう決めてあるのだよ」
「は？」

「この戦いは今後の木連全てを決定するといつても過言ではない」
「はあ……」

「そのような場では、我らのような歳を取った者ではなく、
勢いのある若者にこそ、思う存分、力を奮ってもらいたい」

「若者？ それでは……」

「うむ。今後の木連を背負うであろう者達にな。私もそろそろ後継
者を育たねばならぬのだ」

「中将。まだまだ現役でいてもらわなければ困ります」

「今すぐという訳ではない。私とてまだまだやれる。」

だが、ここで若者に経験を積ませるのは今後の木連にとって欠か
せない事なのだよ」

「仰る通りかと」

「……そういう訳だ。行ってくれるな？ 白鳥中佐」

「……ハッ」

「……殲滅完了」

ギリギリだったな……。

「アザレア。良くやってくれた」

『いえ。当然です。マイマスター』

月面基地にて、再び戦場に戻るべくヒナギクに乗り込んだ。

本来であれば、最高司令官に許可を得なければならぬのだが……

一刻も早くナデシコと合流したいという思いが勝手に足を走らせていた。

抑止する声を見殺し、ヒナギクに乗り込むと……。

『マスター。ナデシコがピンチです！』

いつ連絡を取ったのかは知らないが、オモイカネによって状況を知らされていたらしい。

ある程度の状況を把握してすぐに基地を飛び出し、ナデシコの下へと向かった。

どうしてこんな戦場から離れている所にいるかは知らないが、ある意味、都合が良い。

「ここならジャンプしてもバレないな」

戦場から離れ、監視の眼も少ない。

ナデシコ側にもしかしたら違う人がいるかもしれないが……。

「ナデシコの命こそ最優先だろ」

その時はその時。

なんとかしてみせるぞ。

「アザレア。アドニスとヒナギクにドッキングする」

『了解』

ピンチを打開するには圧倒的火力しかない。

今までシミュレーション上でしかやった事がないけど……。

こいつなら、期待に応えてくれる筈だ。

「慣性飛行。そのまま真っ直ぐ進んでいてくれ」
『はい』

ヒナギクのコクピットから抜け出し、アドニス殲滅射撃仕様に乗
り込む。

「頼むぞ、アドニス」

発進後、すぐさまヒナギクのドッキング部分に足を組み込む。
これによりどちらのコクピットでも両機体を制御できるようにな
った。

早速、戦況を打開する切り札を……。

「グラビティライフルフルチャージ」

『グラビティライフル、チャージ開始』

一直線にナデシコのもとへ向かいつつ、チャージを開始する。
チャージが完了次第、ナデシコのもとへボソソジャンプするつもり
だ。

「ウイングブースター展開」

『アドニス、チャージ開始』

グラビティライフルの最大威力に、機体内のエネルギーをも上乗せ
する。

この莫大なエネルギーがあれば、コロニーの一つや二つも簡単に貫
けるだろう。

「……ふう……はあ……」

慌てる心を落ち着かせる。
慌てた所で何の意味もない。チャージが早まる訳ではないのだから。
大丈夫。ナデシコがそう簡単に沈む訳がない。
間に合う。間に合うさ。

「……………」

たかが数分。

だが、長く、それこそ数時間に感じられるほど長く感じられた。
これが焦りから来る錯覚だという事は分かっている。
だから、無理矢理心を落ち着かせ、チャージ終了の時まで耐えに耐えたんだ。

『マスター！ ライフル、アドニス、共にチャージ完了です！』

「おし！ グラビティライフル、アドニスに接続。跳ぶぞ」

ボソソジャンプ。

こうして、俺はナデシコの前に立った。
本当に・・・間に合ってよかったよ。
後悔なんてしたくないからな。

S I D E K A E D E

「マエヤマさん。ナデシコに着艦を」

『了解。向かいます』

まったく・・・やってくれるじゃない、コウキ。

「ドキッとしちゃったわよ」

私にはケイゴがいるってのに。

「って何考えてるのよ！ 私！」

「カエデさん？」

「え？ あ、な、なんでもないわ」

ちよ、ちよっと落ち着こう。

こんなの私らしくないわ。

「皆さん、マエヤマさんを迎えに行きましょう」

「ユ、ユリカ。ブリッジを空にしちゃ駄目だよ」

「大丈夫！ だって今、ナデシコはコスモスに守られてるから」

「い、いや、だからね、そういう問題じゃなくて・・・」

「レッツゴー！」

「ユ、ユリカア〜。ハア・・・行っちゃったか。僕が留守番してるしかないな」

相変わらず元気ね、艦長は。

でも、不思議ね。

ミナトさんとかセレスちゃんが誰よりも先に飛び出すと思ってたんだけど・・・。

「・・・・・・・・」

何だろう？　なんかボーっとしてる。

頬とか首筋とか真っ赤にして。

どうしたのかしら？　なんかミナトさんにしては珍しい姿。

「……………」

セレスちゃんも同じ。

ずっとモニターに視線が釘付け。

もうコウキは映ってないのに、何を見てるんだろう？

「あらあら。若いわね」

「イネス博士」

何が若いんだろう？

「どういう事よ？」

「あら、私は貴方のああいう姿を見た事があるような気がするけど？」

「え？」

私が？　あんな？

「ふふつ。まあいいわ。今はあの二人。

まったく、主役が遅れたら、舞台が盛り上がりませんように」

そう言いながら、二人に近づくイネス博士。

「ほらほら。コウキ君を迎えに行ってあげなさい。

彼が誰に一番最初に迎えに来て欲しいか、分かるでしょ？」

「……あ！　せ、セレセレ、行くわよ」

「……あ、はい」

イネス博士の言葉でハツとして走り去っていくミナトさんとセレスちゃん。

・・・何が何やらさっぱり。

「ほら、貴方も行ってあげなさい。ナデシコを救ったヒーローの所に」

「まあ行くけど・・・」

「すぐに分かるわ」

「え？」

「後少しで、貴方も同じようになるから」

「良く分からないわ」

「分からなくて結構。いずれ・・・分かるようになるわ」

「貴方、その台詞だとオバ」

「打たれたい？ 注射」

こ、怖ッ！

「じゃ、じゃあ、先に行くわよ」

シューインッ。

あれはやばい。

本当に打たれたた。

「冗談じゃないわよ」

あんな危険なもの、打たれてたまりますかっつての。

「ふう。まだちょっとドキドキする」

あんな登場の仕方、何の漫画？ って話よね。
でも、それでもドキッとしちゃった訳で……。

「もう……ケイゴの馬鹿」

どうしてヒーローがああ男やコウキなの？

私は……貴方に……。

「貴方に迎えに来て欲しいのに……」

コウキに取られちゃっても知らないわよ？ 馬鹿……。

S I D E O U T

S I D E M I N A T O

「……………」

目の前の光景をただ黙って見詰める。

「ヒナギク。着艦しました」

「了解。マエヤマさん。出てきてくださあ〜い」

あれにコウキ君が乗ってるのよね。

コウキ君が……。

「・・・ミナトさん？」

ずっと待ってた。

コウキ君が帰ってくるのを。

ずっと、ずっと・・・。

「・・・いいから」

「でも」

「行かせてやれ。ミナトさんにとってもコウキにとってもそれがいい」

シューインッ。

ヒナギクの扉が開く。

降機用の階段が取り付けられ、そこから・・・。

「・・・あ」

負のオーラを微塵たりとも感じさせない、いつもの姿。柔らかな笑みを浮かべたコウキ君がそこにはいた。

ドキッ。

「もう・・・子供みたいね、私」

それでも、胸の鼓動が止む事はない。

・・・止む気がしなかった。

「・・・」

黙って階段を下りてくるコウキ君。
そのままこちらへ歩いてきて……。

「ミナトさん。ただいま戻りました」

目の前で立ち止まり、笑顔でこう告げた。
未だに実感がなかったコウキ君の帰還。
でも、この笑顔が、私の大好きなこの笑顔が実感させてくれたの。
だから……。

トンツ。

「……おかえり……コウキ君……」
「……」
「……」
「……」
「……」

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ！

衝動的にその身へ身体を埋めてしまった。
しっかりと受け止めてくれるこの感触が心地良くて……。
気恥ずかしかったけど……とっても幸せだったわ。

S I D E O U T

「……ミナトさん、セレスちゃん、ごめんなさい」

私室にて、二人を招きいれ、頭を下げる。

「会ったら謝ろうと思っていました」

心配して会いに来てくれたのに、拒絶してしまった。

その事がずっと心残りで……。

絶対に謝ろうって……。

「二人を拒絶してしまった。あれは」

「聞いたわ。……夢を見たんだってね」

「……私達が自殺する夢だと聞きました」

……え？

「どうして……知ってるんですか？」

あれはアキトさんぐらいにしか話していない筈なんだけど……。
もしかして、アキトさんが話してしまったのだろうか？

「アキトさん……ですか？」

いや、フォローしてくれたんだと思うけど……。
なんとなく、自分できちんと謝りたかった。

「ううん。違うわ」

「え？ アキトさんじゃないんですか？」

「ええ」

アキトさんじゃない？

それじゃあ、誰から？

俺はアキトさん以外に誰にも話してないけど……。

「あの時ね、アキト君がコウキ君に会いに行った時、私達、傍にいたのよ」

「え？」

あの時？

それじゃあ……。

「そう、貴方が何に苦しんでいるかも知ってる。

私達に謝りたいと言った事も知ってるわ。私もセレセレも」

……そっか。

してやられたという訳か。

「私だって、二人が自殺する所を見たら発狂しちゃっわよ」

「……私も嫌です」

うん、本当に。

あれほど、見ていて辛い夢はないと思う。

「でも、コウキ君はそれを克服した。本当に凄いわ」

「……流石です、コウキさん」

アハハ。褒めてくれるのは嬉しいけどね。

「克服した訳じゃないですよ」

「え？」

「ただ……背負おうって決めたんです」

悪夢を見るかどうか。

まだあれから一度も眠っていないから分からないけど、多分、見なくなる事はないと思う。

これからも悪夢には苦しまれるだろうし、そのせいできちんと眠れない事もある筈だ。

でも、それから逃げるんじゃないで、受け止めようって、そう思った。

この苦しみは自身への責任。

彼らの命の犠牲があつて、今の自分がここにはいるんだって。

その事を刻み付け続ける為の痛みだつて考えている。

「これからも悪夢は見るでしょうし、ずっと辛いと思います」

「.....」

「でも、立ち止まるつもりはありません。俺には責任があるんですから」

死んだ者はもう想いをぶつけられない。

それなら、俺達が代わりにぶつけてあげないと。

それが残された俺達に与えられた義務だ。

「彼らには想いがあつた筈です。地球の為、家族の為、友の為の」

地球の未来を思い、死んでいった者がいる。

家族の未来を思い、死んでいった者がいる。

友の為、仲間の為、命を散らした者がいる。

「だから、残された者がその想いを継いでやらねば、彼らは報われません」

彼らの死を無駄にしない為にも・・・立ち止まる訳にはいかない。

それに・・・

「彼らだけじゃない。俺自身の望みだって、まだ叶っていません」

誰かの想いだけで動いている訳じゃ決してない。

それじゃあただの人形だ。

俺は自らの意思と想いで矛を振るっている。

彼らの想いは背負うけど、それに囚われるつもりは毛頭ないぞ。

「俺は平穏な生活を送る為に戦っているんです」

あくまでも俺の目標はそれだけ。

その為にはよりよい形で戦争を終わらせなくちゃいけない。

だから、戦っているんだ。

「死ぬつもりはありません。誰かの想いに潰されるつもりもありません」

彼らの想いを、なんていう理由で無理をするつもりはない。

それじゃあ俺の望みが叶わないから。

彼らの想いを背負うと決めしたが、それが自身の想いを凌駕するなんて事はありえない。

それは目の前の二人を見れば分かるだろう？

幸せが目前にあるのに、どうして死ねるんだって話だ。

あくまでも俺は己の意思と想いを最優先にする。

死者の想いに引き摺られてたまるか。

「俺の望む未来の為、彼らの望む未来の為、立ち上がるって決めたんです」

俺の望む未来が全ての人間の望む未来だなんて、そんな独り善がりな事は考えてもいない。

だけど、まずは俺の望む未来を手に入れないと、他の人の事なんて考えられないだろ。

背負うが、囚われない。そう決めたんだ。

「そっか」

「はい」

これが俺なりに出した結論。

逃げずに背負うけど、結局は自分を優先するという答えだ。自分勝手だって分かってる。でも……。

「私は良いと思うわ」

何があっても死ぬ訳にはいかないんだ。

目の前の二人を残して……。

「最初の方はすっごく心配だったわ。

コウキ君が私達の知らない誰かさんのせいで死ぬんじゃないかって」

「……それは」

死んでも彼らの想いを叶えないと。

そう思っていた時期もある。

でも……それじゃあ駄目だって気付いた。

そんな事をした所で、何の意味もないから。

ただの自己満足で更に残された者を作ってどうする？

そんなの……救われないじゃないか。

「でも、きちんと自分を優先するって、そう言ってくれたから、安心した」

「……」

「死んでいった人達の犠牲を忘れちゃ駄目。でも、それに囚われちゃもつと駄目」

「……はい」

「自分の望みすら叶えられない人に他人の望みなんて叶えられる筈がないんだから」

そう……だよな。

自分の望みすらまだ叶えてない奴が、他人の事を考えるなんて思い上がりだ。

まずは自分。それから、手を伸ばせる範囲で伸ばせば良い。

抱えきれない荷物を抱えた所で落とすか潰れるかのどちらかなんだから。

「うん、コウキ君、貴方は大丈夫よ」

「え？」

「貴方はちゃんと克服できてる」

「そうですかね？」

まだ迷いが無い訳じゃないし。

苦しみから解放された訳じゃないのに……。

「良いんじゃない？ 迷いながらも」

「……ミナトさん」

「それだけしっかり考えてるのなら、何も心配いらぬわね」

迷いながらもいいか……。

うん。そうだよな。

「はい。ご心配をおかけしました」

「本当よ。どれだけ心配した事か。ね、セレセレ」

「・・・はい。心配で夜も寝れませんでした」

そ、それは申し訳ない事をしました。

「でも、こうしていつものコウキ君になって戻ってきてくれた。それで勘弁してあげましょう」

「・・・勘弁してあげます」

「ハハッ。ありがとう、二人とも」

こうやってほのぼのと会話している。

これが俺の幸せなんだな。

この幸せを守る為なら、命なんか惜しくない。
惜しくないけど、俺の死によって、この幸せが失われるなら・・・。
死ぬ訳にはいかないだろ、何があっても。

3670

「それに私達もいるし」

「・・・はい」

「コウキ君が立ち止まった時、今度こそ私が、私達が立ち直らせてみせる」

「・・・みせます」

「ずっと支えてあげるから、貴方は何も心配せずに歩んでいきなさい」

「・・・私も頑張ってコウキさんを支えます」

命に代えても護り抜きたい二人の家族。

でも、護っている筈がいつの間にか支えられて・・・。

不思議だけど、これでいいって思う自分がある。

支えて、支えられて、そうやって生きていくのが人間だから。
これからも二人には苦勞をかけるだろうけど、支えてくださいね。

「お願いします」

二人を引き寄せ、抱き締める。

「任せなさい」

「・・・任せてください」

この瞬間こそが俺の生きる意味。

二人の笑顔を護る為に俺は今を生きている。

第二百二十九話（後書き）

前話の終わり方の影響は凄い。

こんなにも書きづらくなるなんて・・・。

遅くなりましたが、どうにか書ききりました。

ハリー君やその他諸々の話は次話にて。

連続投稿はちょっと厳しい。

出来るだけ早くしますので、申し訳ありませんが、お待ち下さい。
それでは！

第三百三十話（前書き）

大変遅くなりました。

地震の影響が色濃く、停電なんかもあり、四苦八苦。
中々書く機会恵まれず、ようやくの投稿となりました。

楽しんで頂けたら幸いです。

第三百三十話

「あ、あの！」

な、何だ？ 何だ？

「君は……」

ミナトさんとセレス嬢を引き連れて、ブリッジへ到着。
今までの謝罪とこれからの展望について色々と言おうと思ってたんだけど……。

少年、ハーリー君に出鼻を挫かれた。

「ぼ、僕はマキビ・ハリと言います。貴方は？」

視線の先にいるのは……セレス嬢？
もしか、こやつ……。

「……」

ササツと隠れるように俺の後ろに移動するセレス嬢。
まだまだ顔見知りには直ってないからな。
こんな強烈な出会いじゃ怖がっても仕方ないだろう。

「え、えっと、その……」

……泣きそう。

しょうがない。

ここは大人がなんとかするか。

「どうかしたのかい？ 少年よ」

「え、えつと、僕、友達になりたいんです」

「友達？」

「はい。僕、初めて、同じマシンチャイルドで笑う人を見ました」

マシンチャイルドで笑う人？

それがセレス嬢だって事か？

「コウキ君。あの子達」

ミナトさんが視線で示す。

そこには、初めて出会った時のセレス嬢と同じ、無表情の少女達がいた。

そうか。あれが……。

「セレセレ。お友達になりたいんですって」

「……私とですか？」

「そうそう。どう？ セレセレ」

まあ、交友関係はセレス嬢次第だから、セレス嬢の意思に任せる。

それよりも……あの子達が気になるな。

「……構いません」

「や、やった」

セレス嬢の言葉に沈んでいた顔をパツと上げて、喜びを露にするハリー君。

いいね、このぐらいの子供は純粹で。
なんか微笑ましい。

「良かったね、ハリ君」

「あ、はい。えつと、貴方は・・・」

「ハルカ・ミナト。この子の母親よ」

おっと、いつまで隠れてるのかな？ セレス嬢よ。

「ほら。自己紹介して。セレスちゃん」

「・・・セレス・タイトです」

・・・まだ隠れたままじゃなか。

「え、えつと・・・」

完全に顔から足まで俺の身体で隠れているセレス嬢。
その状態で自己紹介されてもね、困っちゃうでしょ。

「セレスちゃん」

「・・・」

「セレセレ」

「・・・」

駄目だ、こりゃ。

まだまだ初対面の相手には厳しいか。

「おいしよ」

座り込んで、セレス嬢を抱き上げ、前に置く。

これで対面つと。

「……………」

「……えつと……」

逃げようとしたけど、抑え込む。

良い機会だから、人見知りを少しでも直しておこう。

「セレスちゃん。もう一回」

「……コウキさん」

不安そうな表情で見上げてくるセレス嬢。

嫌そうではなくて、不安そうな事から、単純に恥ずかしいか怖いんだろう。

誰だって最初は怖いし、恥ずかしいものだ。

でも、大丈夫。なんだかんだで上手くいくから。

それに、これからたくさんのお逢いが待っているんだぞ。

少しずつ慣れていかなくちや。ね、セレス嬢。

頭を軽く撫で、前を向かせる。

後はセレス嬢次第だ。

「……セレス・タイトです。よろしくお願ひします」

おし。よく言った。

頑張ったな、セレス嬢。

「あ、はい。マキビ・ハリです」

これで二人は友達同士。

ハリー君。良い機会をありがとう。

これからも少しずつ慣れていかなくちやな。

「ハリ君は彼女達とも友達なの？」

無表情でこちらを眺めているマシンチャイルドの女の子達を示しながら問いかける。

いや、こちらではなく、その視線は多分・・・セレス嬢だ。

「・・・いえ。友達じゃありません」

あれれ？

「最近、初めて会ったの？」

それなら仕方ないと思うけど・・・。

「いえ。ずっと前からです」

ずっと前から会ってたのに、友達じゃない・・・。
果たして、ハリー君に原因があるのか、それとも、彼女達が・・・。

「どうして？　ハリ君なら、すぐに友達に」

「笑わないんです」

「笑わない？」

それって・・・。

「話しかけても一言返ってくるだけですし、ちっとも笑ってくれませんが。それで・・・。」

なるほどね。

彼女達と接していくには根気強さが必要だ。

自己表現が出来ないだけだって俺は知ってるけど・・・。

知らない人からしてみれば、自身が嫌われているように感じるかもしれない。

幼いハーリー君じゃそんな状況も分からないし、嫌われてると思ったら、接しづらいよな。
うし、それなら・・・。

「セレスちゃん、ハーリー君」

「・・・はい」

「はい。何でしょう？」

「彼女達とも友達になるうか」

最初は簡単な事で良い。

名前を呼んで、友達になって。

それから、少しずつ、皆で成長していこう。

子供ってのは友達と一緒に成長していくものなんだから。

「で、でも・・・」

「大丈夫。俺達が付いてるから」

一人じゃ怖いと思う。

でも、セレス嬢だって一緒だ。

俺とミナトさんだっている。

今がちょうど良い機会なんじゃないかな？

「ほら、セレスちゃん、手」

「・・・はい」

セレス嬢と手を繋ぐ。

「ハリ君も」

「あ、はい」

ハリー君とも手を繋ぐ。

ふっふっふ。これでもう逃げられないぞ。

「行きましょう、ミナトさん」

「ええ」

セレス嬢とハリー君と手を繋ぎながら、少女達のもとへ向かう。

彼女達の視線はどこにいようと何をしようとしていようと、常にセレス嬢へと注がれていた。

その視線に込められた意味。

それを少しでも理解してあげられていれば……。

S I D E M I N A T O

「君達の名前は何ていうのかな？ お兄さんに教えて欲しい」

コウキ君が少女達に問いかける。

多分、セレス嬢とハリ君と友達にさせようという魂胆。

流石はコウキ君。私がしたかった事をしてくれる。

まったく……ネルガルにも見習って欲しいものだね。

彼女達、いつも三人一緒にいるけど、それは仲が良いからって感じじゃない。

ただ、そこにいると言われたから、三人で動かずにそこにいるって感じ。

そんなの間違っているわよね？

・・・もう、また怒りが湧いてきたわ。

あの会長秘書さんはどこにいったの？

まだ言い足りないのに・・・。

まあ、子供達を友達にするという今の状況でいえば、好都合なんだけど・・・。

なんか、怪しいのよね、あの子。

「・・・ルビー」

燃えるような真紅の髪。

本来なら活発なイメージを与えても良い筈なのに、その無表情がそれを消してしまっている。

この子には朗らかな笑みが似合う。
心からそう思った。

「・・・トパーズ」

まるで太陽のように眩い輝きを放つブロンドの髪。

金髪特有の厭らしさなんて全くなく、気品さえ感じさせる。

でも、その無表情のせいで良く出来た西洋人形のように見えてしまつて・・・。

この子には不敵な笑みが似合う。
心からそう思った。

「・・・ジャスパー」

露が滴る爽やかな緑葉のような淡い碧色の髪。
そこにいるだけで気持ちを落ち着かせてくれる不思議なオーラを感じさせる。

無表情でなければ、もっと多くの人を癒してくれるに違いない。
この子には穏やかな笑みが似合う。
心からそう思った。

「ルビーちゃん、トパーズちゃん、ジャスパーちゃん。うん、可愛いらしい名前だね」

本当に可愛い女の子達。

「次はこつちの番。セレスちゃん、ハリ君」

「・・・はい」

「え、でも・・・」

「心配かい？ 今まで友達になれなかったから」

「・・・はい」

確かにそれは心配かもしれないわ。

でも、大丈夫よ。だって、それは勘違いだもの。

「彼女達だって笑えるよ」

「コウキ君の言葉に目を見開く少女達。もしかして、自分達は笑えないと思っ

ているのかしら？
そんな事ないわ。貴方達だって自然に笑える。

笑えるように私達がしてあげるわ。

「え？ でも、一度も見た事なんて・・・」

「笑い方を知らないだけ。それを教えてあげなくちゃ」
「笑い方を知らない？」

そう、彼女達は笑い方を、自己表現の仕方を知らないだけ。
知らないだけの普通の女の子なのよ。

少しずつ、本当に少しずつでいいから、教えてあげれば・・・。
すぐに貴方達は普通の女の子になれる。
現に、セレセレはもう普通の女の子だもの。

「・・・ルビーさん、トパーズさん、ジャスパーさん」

「」「」

「・・・セレス・タイトです。あの・・・友達になってください」

良く出来ました。

臆病で人見知りなセレセレがこうまで頑張った。

・・・なんか嬉しくて堪らない。

「・・・ずるい」

・・・え？

「・・・どうして貴方にはパパがいるの？」

「・・・どうして貴方にはママがいるの？」

「・・・どうして私達には誰もいないの？」

無表情のまま淡々と問いかける少女達。

その光景はあまりにも異質だった。

「・・・それは・・・」

困惑するセレセレ。

こんな状況、私だって困惑してる。

「……何が違うの？」

「……え？」

「貴方にあつて、私にない。私と貴方は何が違うの？」

「……」

「ナデシコに乗ったから？ それだけでこんなに違うの？」

「私もナデシコに乗ることはできた筈。でも、何故か貴方が選ばれた」

「ずるい、ずるい。私だって……」

「……グスツ……私は……」

泣き始めるセレセレ。

それを心配そうにハリー君が見詰めていた。

「ミナトさん、ちょっとお願いします」

セレセレを抱き上げ、ブリッジから飛び出していったコウキ君。私もできればそちらに付いていつてあげたかったけど……。

「皆、ちょっと聞いて欲しいの」

彼女達を放って置いたら、彼女達はきつと傷付く。

それが嫌だから、コウキ君も私に願いつて言つて出て行った。それなら、私がどうにかするしかないわよね。

「セレセレ、これはセレスちゃんの事なんだけど、彼女も……」

でも、一つだけホツとしている事もある。
何故なら、無表情、無感情と言われる彼女達にもちゃんと感情があったから。

彼女達が抱いているもの、それは嫉妬。

羨ましいって、誰かの境遇に共感し、妬む行為。

それって紛れもなく感情があるって事よね？

怒りがあれば、喜びもある。

哀しみがあれば、楽しみもある。

彼女達はやっぱり自己表現が出来ないだけの普通の女の子。

話して、接して、彼女達の心を開く事が出来れば・・・。

彼女達もまた、普通の女の子として生きる事が出来るわ。

だから、私はその為に・・・全力で彼女達と接しましょう。

S I D E O U T

「・・・ヒック・・・ヒック・・・グスツ・・・」

ブリッジ前の廊下。

そこで俺はセレス嬢を抱き締めていた。

「・・・グスツ・・・コウキさん・・・私は・・・」

溢れ出る涙を手で拭きながら、こちらを見上げてくるセレス嬢。

・・・急だったのかもしれないな。

彼女達にとっても、セレス嬢にとっても・・・。

「ごめんね。焦り過ぎたみたいだ」

ハリー君がそうだったように、セレス嬢にとっても同年代の友達はいなかったに等しい。

ラピス嬢やルリ嬢は肉体的にはともかく精神的には同年代と言えないし。

だから、これで友達が出来れば、セレス嬢も喜ぶかもしれないって。。。

俺のエゴでこの繊細な少女を、セレス嬢を傷付けてしまった。。。

「・・・違うんです」

「え？」

何が違うというんだ？

「・・・私は今、とつても幸せです」

「うん」

「・・・でも、それは私だけ。私と同じ境遇の人がいるのに、私だけ幸せになってしまいました」

同じ境遇。

さっきの彼女達もセレス嬢と同じ境遇だ。

きっと・・・他にもいるんだろう。

「・・・恨まれて当然、憎まれて当然なんです。私は幸せになってはいけなかった・・・」

そんな事。。。

「そんな事ないよ。セレスちゃん」

「・・・でも、それなら、他の皆はどうなるんです？ 皆は幸せになれますか？」

「それは・・・」

彼女達を引き取ってくれる人が見付かれば話は別だけど・・・。

今までの間、現れなかった所を見ると・・・絶望的かもしれない。

「・・・ずるいんです。皆同じなのに、私だけ幸せになるのは・・・ずるいんです」

「・・・セレスちゃん」

・・・優しい、優し過ぎるんだ、この少女は。

同じ境遇の人がいる。

そんな事、関係ないのに。

人は自分の幸せを第一に考えて良いのに・・・。

この少女は皆と同じ位置に自分がいるべきだって考えてる。

皆が幸せにならないと自分も幸せになっちゃいけないって。

「・・・私、コウキさんの家族にはなれません」

「・・・他の皆と同じ場所に行くの？」

「・・・（コクッ）」

頷くセレス嬢。

またか、またこうやって俺の愚かな行為で誰かを傷付ける。

本当に・・・馬鹿野郎だよ、俺は。

「・・・コウキさん」

「なんだい？」

「・・・私は、コウキさんに感謝しています」

まるでお別れの言葉みたいじゃないか。
そんなの、やめてくれよ、セレス嬢。

「……私に感情を教えてくださいました。私に笑い方を教えてくださいました」

「……」

「……何より、あの地獄から、私を、私達を助けてくれました」
「ッ！」

どうしてそれを？

それは秘密だったのに……。

「……私がここにいるのは、ここにいられるのは、コウキさんのお陰です」

「……セレスちゃん」

「……忘れません。コウキさんの事は、絶対に」

「……忘れない？ それって……」

「……今までありがとうございました、コウキさん。さよなら……です」

腕の縛りを振り解いて、ブリッジへ戻ろうとするセレス嬢。

「……ちよつと待てよ」

このままで良いと思ってるのか？ コウキ。

セレス嬢が傷付いたままで……幸せになっちゃいけないなんて思っているままで……。

お前は良いと思ってるのかよ!？

「良い訳ないだろ・・・良い訳、ない」

幸せになって良いって、そう伝えてあげるべきだ。
他の皆はどうだって良いなんて思っては欲しくない。
あの優しさを失くして欲しい訳じゃない。

でも、だからって、自身に諦めを付かせる必要はないんだ。

セレス嬢は俺が幸せにするって決めただろ？

たとえセレス嬢が諦めても、俺は諦めない。

俺達は家族だ。家族なんだ。

家族になると決めた人間を放って置く事なんて、出来る訳がない！

ダッ！

「セレスちゃん！」

ブリッジへ入る直前のセレス嬢の腕を掴む。

「・・・コウキさん」

驚いた顔でこちらを見てくるセレス嬢。

追って来ると思わなかったってか？

甘いよ、セレス嬢。

「セレスちゃん。君は勘違いしている」

「・・・勘違い、ですか？」

「そう、とつても大きな勘違いを」

「・・・それは・・・何ですか？」

「この世の中に、幸せになってはならない人間なんていないという事だ」

誰かが幸せにならなければ、自分は幸せになつてはならない。
その考え方自体が間違っている。

「君は自分だけ幸せなのはズルいと言つたね」

「・・・はい。同じ境遇なのに、自分だけ幸せになるなんて・・・」
「君は君自身の力で幸せを掴み取つた。違うかな？」

「・・・私は・・・コウキさんとミナトさんがいたから・・・」
「それもあるかもしれない。でも、幸せだと思えるのは自分の力だよ」

少しずつ自身のコンプレックスを克服していった。

確かに周りの環境がセレス嬢を助けてくれたかもしれない。
それでも、克服したのは自分自身の力だ。

「決して何もしなかつた彼女達が悪いと言っている訳じゃない。
彼女達の境遇、状況から考えても、どうしようもないからね。」

でもさ、自身で勝ち取つたものまで放棄する必要はあるのかな？」

「・・・それは・・・」

「確かに同じ境遇である君だけが幸せになるのはズルいのかもかもしれない」

「・・・」

「だからといって、君が彼女達と同じ状況下になれば、彼女達は救われるの？」

「・・・救われません。私にとってのコウキさんのような、そんな人が現れなければ・・・」

「君が、セレスちゃんがそうなればいい」

「え？」

何を言ってるか分からない。

そんな顔をしているね。

「セレスちゃんは俺のお陰だつて言ったよね？」

「感情を覚えてくれたのも、笑い方を教えてくれたのもコウキさん。あの地獄のような日々から救ってくれたのもコウキさん。」

私が今、こうして生きていられるのは全てコウキさんのお陰なんです」

「そっか。そう言ってくれると俺も嬉しいけど・・・俺はそうは思わない」

「・・・え？」

だつて・・・。

「感情は君が元々持っていたものだ。」

喜び、哀しみ、怒り。セレスちゃんは始めから持っていた。

それを表に出す、感情を表現する術をセレスちゃんは知らなかっただけ」

感情がないなんて事はない。

それがたとえ幼少期から辛い境遇であろうと。

「そして、それを教えたのは俺じゃない。」

周りにいた人間からセレスちゃんが学んだものなんだ」

こういう時はこうやって笑えば良い。

こういう時はこうやって怒れば良い。

そんな事は決して教えてないさ。

どう笑えばいいか、どう怒ればいいか。

セレス嬢自身が学び、身に付けていったんだ。

「笑い方が分からない？ 笑い方なんて分からないものだよ。人は

自然に笑うんだから」

気付けば笑ってる。

笑うってのはそういうものだろう？

人から教えられた笑顔なんて、作られた笑顔でしかない。

「セレスちゃんは今、自然に笑えてる。作られたものなんかじゃなく、自然に」

それはセレスちゃんが心から笑ってくれたから。

笑ってくれたらいいなと思って、たくさんのをしたの確か。でも、笑ったのはセレス嬢自身の意思だ。

「分かるかい？ 俺は君に何も教えていない。君が自分で身につけていったものなんだ」

まるで赤ん坊のように周りから吸収していく。

言わば、セレス嬢達は少しだけ歳を取ってから、生まれたんだ。

裏から表の世界に出た時が、君達の誕生日なんだよ。

確かに周りのお陰といたら、その通りかもしれない。

でも、それでも成長は自分でするものだ。

外からでは成長を促す事は出来ても、成長させる事はできないのだから。

全ては自分の力なんだよ、セレス嬢。

「セレスちゃんも彼女達もまだまだ赤ん坊みたいなものなんだ。

周りから色々なものを吸収して、学び、身に付けて生きている」

「・・・で、でも、成長できてるのは・・・私だけ、じゃないですか・・・」

涙声で語るセレス嬢。

本当に・・・優しい子だな。

「それなら、セレスちゃんが彼女達に教えてあげればいい」

「・・・私が？」

「そうだよ。君はまだ何も教えてあげられない赤ん坊なのかな？」

周りから吸収して初めて生まれたとするならば、セレス嬢は彼女達のお姉ちゃんという事になる。

今まで生きていた事を教えるのは親だけじゃない。

兄や姉だって、教えられる事はある筈だ。

「セレスちゃん。君がする事は彼女達と同じ目線になる事じゃない」

「・・・」

「彼女達より先に生まれた者として、彼女達を引っ張ってあげる事だ」

境遇が同じだからといって、同じ立場になった所でセレス嬢にも彼女達にも恩恵はない。

でも、先に生まれた者、姉として、彼女達に接してあげる事ができれば・・・。

セレス嬢も彼女達も成長する事ができるのではないだろうか。

「君がするべきなのはそういう事だと思うよ。少なくとも、俺はね」

ただ俺がセレス嬢を引き止めたいから、こういう事を言ったのかも
しれない。

でも、こう思っている事も事実だ。

成長したセレス嬢だからこそ、できる事もあるんじゃないかって。

「・・・分かりません。分かりませんが・・・」
「うん」

「・・・一つだけハッキリしている事はあるんです」
「・・・それはなんだい？」

「・・・私はやっぱりコウキさんとミナトさんと一緒にいたい。必死に押し込めようと、我慢しようと思いました。でも・・・無理みたいです」

「そっか。俺だって、ミナトさんだって、セレスちゃんと一緒にいたいって思ってるよ」

「当たり前じゃないか。
家族なんだから。」

「・・・私は・・・どうするべきなのでしょう？」

「セレスちゃんはどうしたいんだい？」

「・・・それが分からないんです。何をしてあげればいいのか」

「じゃあ、質問を変えるね。君は彼女達にどうなってもらいたいの？」

「・・・どうなって？」

「そう、笑って欲しいとか、幸せになって欲しいとか。あるでしょう？」

「・・・私は・・・」

「うん」

「・・・自然に笑えるようになって欲しいと思います」

「自然に笑えるように・・・」

「・・・楽しい事は楽しいと、悲しい事は悲しいと。」

「そう素直に訴えられるようになって欲しいと思います」

「・・・」

「・・・今の私と同じように・・・幸せを感じて欲しいです」

・・・それだけ分かってくれば充分だ。

「それなら、やる事は決まってるじゃないか」

「・・・決まってるんですか？」

「うん。セレスちゃんはさ、俺達が特別な何かをしてたように感じる？」

「・・・感じません」

「そう、何も特別な事はしていないんだ」

マシンチャイルドだからどう、という接し方をしてきたつもりはない。

女の子として、娘として、ただあるがままに接してきた。

そこに特別な何かは存在しない。

「友達としても良い。お姉さんとしても良い。根気強く接してあげなさい」

「・・・はい」

「中々心を開いてくれなくて、辛いかもしれない、苦しいかもしれない」

「・・・」

「それでも、諦めずに。きっと心を開いてくれるからって信じて」

「・・・それだけで良いんですか」

「それだけで良いんだよ」

特別なことなんて何もいらぬ。

ただ接すれば良い。

それだけで、セレス嬢も彼女達も成長していくから。

「俺達も出来る限り、セレスちゃんと彼女達が接する事ができるよ
うに手助けする」

「・・・はい」

「だから・・・頑張れ」

「・・・頑張ります」

ハハツ。いつの間にか、こんなに立派になっちゃって・・・。
自分ではそうは思っていないけど・・・。

俺がセレス嬢、君を導いた。

次は君の番だよ、セレス嬢。

君が彼女達を導いてあげてくれ。

頑張れ、お姉ちゃん。

「・・・コウキさん。やっぱり私は・・・貴方が大好きです」

「ハハツ。ありがとう」

「・・・本気にしてくれませんか。グスッ」

俺だって、セレス嬢が大好きだぞ。

「・・・コウキさん」

「なんだい？」

「・・・前言を撤回します」

「うん」

「・・・私、コウキさんの家族です」

「ああ。家族だ」

「・・・何があっても離れませんから」

「家族だからね」

「・・・はい。家族ですから」

・・・良かった、本当に。

家族を失うなんて事にならなくて・・・本当に良かった。

「・・・コウキさん。手伝ってください」

「うん？」

「・・・私、もう一回、彼女達と友達になってくれるよう言おうと思えます」

「そっか。うん、頑張ろう」

「・・・はい！」

溢れてくる涙をハンカチで拭き、手を繋ぐ。

こっぴどい形がやっぱり一番しつくり来るよな。

シュインッ。

「・・・コウキ君」

「ミナトさん。すいません、お手数お掛けしました」

「そんな事はいいの。えっと、いいよ、皆」

扉を開けた途端、目の前にはミナトさんと少女達。えっと、どっぴどい事だろうか？

「セレス・タイト」

ルビーちゃん、だったよな？

「・・・はい」

怖がって俺の後ろに隠れていた時とは大違い。堂々と彼女の前に立った。

本当に、子供の成長するのは早いものだ。

「・・・友達・・・なる」

「・・・え？」

「・・・友達になる」

「駄目？」

「嫌？」

トパーズちゃんもジャスパーちゃんもセレス嬢を見詰める。
えっと・・・何があったかは知らないけど・・・。
多分・・・。

「ミナトさんが説得してくれたんですね」

パチッ。

返事はウインク。

流星としか言いようがないな。

まあ、セレス嬢にとってはちょっとした肩透かしを喰らう形になっ
てしまったが。

「・・・セレス・タイトです。こちらこそ、よろしくお願いします」

「・・・よろしく」

「・・・やった」

「・・・嬉しい」

うん。なにはともあれ無事に解決したようで良かった。
色々あったけど、結果的に家族の仲は深まったし。

「あのね、コウキ君」

「はい」

「私、この子達を引き」

ウィーンウィーンウィーンウィーンウィーンウィーン！

エマージェンシーコール！？

「どうしましたか！？」

「敵艦が接近中です！ 艦隊規模です」

「分かりました。迎撃を体勢を！パイロットの皆さんは機体内で待機してください！」

「了解」「」「」

こんな時にッ！

「すみません、ミナトさん。話は後で」

「もう・・・しょうがないものね。分かったわ」

「それじゃあ、失礼します」

格納庫のアドニスの下へ向かう。

・・・その前に・・・。

「セレスちゃん。良かったね」

「・・・はい！」

「後は任せたよ」

「・・・任せてください」

さてっど・・・。

さっさと片付けて、月面基地に帰還するのでしょうか。

『ナデシコに勝負を挑む』

え？ こゝこの声は……。

『正々堂々、勝負されたし』

ツ、ツクモさん！？

戦いたくない相手が目の前に出てきた時、果たして戦う事が出来るのか？

俺の戦う事への覚悟。その程度が問われる時が来たのかもしれない。

第三百三十話（後書き）

再びの難産。

最後がおざなりになった気がしますが、許して下さい。

関東圏の人間なのでどうか無事ですが、影響は色濃く。

どうなるのか、これからもしっかりと情報を収集していこうと思います。

第三百三十一話（前書き）

お待ちせしました。

第三百一十一話

『状況を確認します』

アドニス殲滅射撃仕様に乗り込む。
今回、ヒナギクは留守番だ。

『お前と共に戦うのは久しぶりだな』

「ご心配をおかけしました、アキトさん」

『誰でも一度は味わう痛みだ。それを乗り越えたのなら、お前は強くなっている』

「はぁ……。そうですかね？」

『やってみれば分かるさ。期待しているぞ、コウキ』

なんともまあ、アキトさんらしい言葉で。

『やっと帰ってきたわね、コウキ』

「カエデか……。心配かけたな」

『本当よ。でも、許してあげるわ。乗り越えたんだものね』

「ああ。もう心配はいらない」

『それならいいわ。さっさとこんな戦争終わらせましょう』

「おう」

そうだよな。早く終わらせないとな。

あいつも早くケイゴさんに会いたいだろうし。

『おかえりなさい、コウキさん』

「イツキさんも、ご心配をおかけしました」

『いえいえ。心強い味方が戻ってきてくれて嬉しい限りです』

『そうね』

『ま、これでようやくナデシコらしくなってきたな』

ご心配をおかけしました。

『おい、ヒーロー』

「その呼び方どうにかならないの？ ガイ」

『いや、あれ以上にヒーローらしい登場の仕方はない』

『そうそう、いやあ、コウキ、分かってるね』

「狙った訳じゃないんだけど」

『いや、あれは狙ったとは思えないよ』

「貴方は・・・」

『久しぶりだね、マエヤマ君』

「アカツキ・・・会長」

いたんだな。

まあ、カキツバタとコスモスがいた時点で予想はついたけど。

「ここにいるという事は納得して頂けたと見てよろしいのですか？」

『さあね。とりあえず、今を見逃したら、乗り遅れるって思っただけだよ』

「・・・そうですか」

まだ完全に納得した訳じゃないって事が。

それならそれで、俺にも考えがあるし、構わないんだけど・・・。

心配なのはネルガルに預けられている火星人達。

遺跡の件で納得していないなら、
火星人でのボソソジャンプ実験を続けているかもしれない。
それだけはなんとしても止めないと。
これ以上、ボソソジャンプでの犠牲者を増やす訳にはいかない。
ネルガルであろうと火星の後継者であろうと、誰にも非道な実験な
どさせはしないさ。

「まだボソソジャンプ技術の独占を狙っているんですか？」
『それこそ分らないよ。これから次第さ。』
でも、僕達が何歩も先を歩いているのは否めないね」

ボソソジャンプ実験のデータもあるし。
何より最も早くボソソジャンプに気付いたのはネルガルだ。
当然、他企業に比べれば、データも集まっている。
今回の件で地球へ恩も売れた訳だし。
アカツキ会長の言葉に嘘はない。
でも……。

「そのデータが非合法である事は認識しているのですか？」
ボソソジャンプの実験で犠牲者を出している。
その事を追及されたら、ネルガルは社会的地位を失いかねない。
それほど、社会イメージというものは強い影響を残すのだ。

『非合法も何も、技術の進化には犠牲が出るのは当然でしょ？』
「犠牲が出るのと犠牲を出すのでは違うんですよ」

確かに戦争が最も技術を向上させる面がある以上、
犠牲あつての発展、進化というのも納得できなくはない。
だが、それを肯定するかどうかは話が別だ。

人の犠牲が前提の技術進化など認めてたまるものか。

『本人が同意してるんだよ？ 君には関係ないと思うけど』
「果たして、本心からの同意なんでしょうかね」

追い込まれた上での同意は強制と変わらない。
住む場所もなく、頼る友人もおらず、受け入れざるを得ない状況。
そんな中で依頼されたら、断れないだろうに。

『相変わらず、猜疑心が強い人だね』

「ネルガルに対しては特に」
『あれね』

マシンチャイルドを始めとしてネルガルは闇が深すぎる。
たとえアカツキ会長本人が望まなくとも、ある事は確かなのだ。
それを否定する事は出来ない。

「一つだけ言っておきます」

『何かな？』

「全て貴方の思った通りに行くと思わない方がいい」

『へえ。君が阻止するというのかい？』

「さあ、それはどうでしょう」

『お返しかい？ やるね』

火星人の単体でのボソソジャンプ封印。

これを公の場できちんと公表しておく必要がある。
そうしなければ、火星人の犠牲は増えるばかりだ。
人は自分にはないものを持つ人間を時に羨ましがり、時に妬む生き物。

魔女狩りのような事にならないようしっかりと封印しておかなければ

ならない。

しっかりと明言しておけば、ネルガルも火星人確保の有効性を失い、確保に力を入れる事もなくなるだろう。

火星再生機構の為に火星人の解放は必須事項だしな。

確かに単体ボソソジャンプは有効的だが、あくまで単体でしかない。本当に人類に必要なのは何百、何千を輸送できる大規模のボソソジャンプだ。

特定の人物のみが使える単体ボソソジャンプは災厄を呼ぶ存在ではない。

それだったら、単体ボソソジャンプは封印して、大規模ボソソジャンプの確立に力を注いだ方が何倍もいいだろう。

『ま、どちらにしる、戦争が終わってからだけどね』

「・・・その点に関しては同意します」

負ける訳にはいかないからな、絶対に。

『現在、カキツバタはコスモスに收容中です。』

その為、ナデシコが全面的に戦いを請け負います』

月面基地に帰還する間にナデシコの修理は終えた。

流石はコスモス。ナデシコ級の戦艦の修理なら右に出る者はいない。

そして、今はカキツバタの修復作業という訳。

カキツバタの損傷はナデシコに比べれば小さなものだが、ない訳ではない。

その為、常に万全の状態で戦いに挑めるようにと收容したのだが・・・。

それが裏目に出てしまったな。

相手はツクモさん。

油断なんてできる訳がない。
できるだけ多くの戦力を揃えておく必要があるのに……。
コスモスの援護は望めるが、果たしてそれだけで勝てるかどうか。。。

『敵戦力は戦艦が三隻。』

それに対してこちらは実質的に一隻しかありません。苦戦は必至です』

三隻？

三？　もしかして……。相手は……。

『グラビティブラスト発射後、部隊を展開します』

奇しくもナデシコのパイロットは九人。

それぞれ三人ずつ敵艦に当たれば、とりあえず戦線を維持する事は出来る筈だ。

『向かって右の敵に対してはリョーコさん、ヒカルちゃん、イズミさん』

『任せときな』

『結局、この三人なんだよね』

『それもまた一興』

元祖ナデシコパイロット三人娘。

今は五人娘となっているユニットだが、その基盤はこの三人にある。近距離のスバル嬢、中距離のヒカル、遠距離のイズミさん。バランスが良く、長い付き合いからの連携は脱帽の域。

ナデシコ乗艦よりずっと同室で暮らしていて、特に問題もないぐら이다。

相性の良さは抜群だろうな。
やっぱり彼女達はこの組み合わせが一番合う。

『向かって左の敵に対してはアキト、ヤマダさん、アカツキさん』
『了解した』

『ヘッ。まだ認めちゃいねえってか？ 必ずガイって呼ばせてみせるぜ』

『はいはい、暑苦しい。もっとクールにやってけないのかい』

もし、ガイが原作の時、死んでいなかったら……。

ナデシコの男性パイロットはこの三人が担っていたに違いない。
途中で離反したアカツキ会長だが、最後はやはりナデシコの想いを優先した。

ガイとて死んでいなければ、ナデシコの為に尽力しただろう。
アキトさんは言わずもがな。

なんだかんだいってナデシコの為に尽力する事が出来る男達だ。
相性はともかく、頼り甲斐がある事に違いはない。

『そして、向かって正面、マエヤマさん、イツキさん、カエデちゃん』

『了解』

『了解しました』

『やってやるわ』

そして、自分で言うのも変だけど、俺達イレギュラー三人。
違う世界から、時空を超えてやってきた俺。

何の因果か、ナデシコのパイロットになってしまったが……。
後悔はない。

この戦争を終わらせて、自らが望む平穏な生活を自らの手で掴み取ってやる。

もう誰かに任せるとはなんて事はしない。
自らの手で掴み取ってこそ意味があるのだから。

『行くわよ、コウキ』
「おう」

キラシマ・カエデ。
火星人の生き残り。

原作ではイネスさんを除いて、火星人は誰もが地に埋もれた。
あの中にカエデがいたかどうかは俺には分からない。

でも、こうして、ここにいる、それが全てだ。
火星人が持つ恨みや憎しみ。

それらを乗り越え、木連との和平を求めた。
素直に、凄いと思う。

そして、それだけではなく、木連に、敵に愛すべき者がいる。
敵対組織に恋人というジレンマを抱えて、なお前へと歩ける女性。

本当に・・・強い奴だよ、お前は。

そんな姿を見たら、応援したくなるだろうが。
なんとしてもケイゴさんに会わせてみせる。
その後は・・・お前次第だ。

『行きましよう、コウキさん』
「はい」

イツキ・カザマ。

原作では名前もでなかった連合軍兵士。
何の因果か、俺の教え子となり、こうして共にナデシコで戦っている。

俺やアキトさんがこの世界にやってきて救えた者の象徴でもあったり。

彼女のような存在を増やす事。それこそが俺達の目的だ。
彼女の存在が俺達を勇気づけてくれる。
俺達だって救える者はいるので。

『グラビティブラスト発射！ 各機、順次発進！』

『『『『『『『『『了解！』』』』』』』』

戦いが始まる。

予感でしかないが・・・。

この戦いが今後にとって大きなターニング・ポイントになる気がした。

『アドニス接近格闘仕様、スバル・リョーコ、行くぜ！』

アドニス接近格闘仕様（ad - AG）。

接近戦に特化したスバル嬢の力を最大限引き出してくれる機体だ。
その格闘能力で敵機を蹴散らしてくれるに違いない。

『アドニス特殊隠密仕様、アマノ・ヒカル、行っちゃうよ！』

アドニス特殊隠密仕様（ad - SS）。

暗器や特殊な武装を持つヒカルの器用さを具現化する機体だ。
ヒカルにかかれば全ての敵が混乱の渦に陥るだろう。

『アドニス後方狙撃仕様、マキ・イズミ』

アドニス後方狙撃仕様（ad - RS）。

射撃に特化したイズミさんの精密射撃を実現化させる機体だ。
その精密射撃で敵には一撃を、味方には心強さを与えてくれる。

『アドニススーパー仕様、ダイゴウジ・ガイ！ 行つくぜえええ！』

アドニススーパー仕様（a d - S R）。

スーパーロボットを屈指したガイの感性にマッチングした機体だ。どこまでも暴れ回れ、ガイ！

『アドニス突撃強襲仕様、アカツキ・ナガレ、出るよ』

アドニス突撃強襲仕様（a d - C A）。

グライダーユニット特有の独特な機動が特徴の機体だ。

その性能は未知数だが、ネルガル技術集大成の名は伊達じゃない等

『アドニス機動殲滅仕様、テンカワ・アキト、出る！』

アドニス機動殲滅仕様（a d - M A）。

高機動、高火力を実現した化物のような機体だ。

アキトさんが乗れば、正に死神と呼べる戦果を残してくれる事だろう。

『アドニスリアル仕様、イツキ・カザマ、出ます！』

アドニスリアル仕様（a d - R R）。

万能性にこだわったバランスの良い機体だ。

イツキさんの万能性も相まって、非常に安定した戦いを実現してくれるだろう。

『アドニス物量射撃仕様、キリシマ・カエデ、出るわ』

アドニス物量射撃仕様（a d - M S）。

とことん物量にこだわった射撃特化の機体だ。

対面に関しては、この機体の右に出る者はいない。

「そして・・・」

アドニスコクピット内のコンソールに手を触れる。

こいつが俺の相棒。

この戦争を終わらせる為の俺の鎧。

「頼むぞ、アザレア」

『はい。マイマスター』

うし！

「アドニス殲滅射撃仕様（a d - A S）、マエヤマ・コウキ、行きます！」

ここにナデシコパイロットが出揃った。

何があつたって屈しやしない。

それが俺達、ナデシコだ。

ツクモさん、覚悟してください。

俺達は必ず勝ってみせます。

この戦争を和平で終わらせる為に！

~~~~~

「エリナ君。君は混乱に乗じて戦線を抜け出して遺跡を確保するん

だ

「出来るならしたいわよ。でも、遺跡がどこにあるか分からないわ」

「ナデシコには遺跡のデータがある」

「え？ どうしてよ」

「記憶だよ。以前、テンカワ君達の記憶が流出した事があつただろうっ？」

「彼らの目的を知ったっていうあれね」

「そうそう、恐らく、その記憶をオモイカネも共有していた筈」

「その記憶がデータとして残っているかもしれない。後は・・・」

「そう、後はその記憶データから映像を抽出、それを思い浮かべて跳べば・・・」

「遺跡の場所が分かる。そういう事ね」

「そういう事。ジャンパーは確保しているからね。問題ないよ」

「そうね。でも、その為にはナデシコに乗り込む必要があるわ」

「理由ならあるじゃない。あの子達だよ」

「・・・マシンチャイルドね。」

ナデシコのマシンチャイルドと交流させるといえば・・・」

「御人好しのナデシコだ。受け入れるだろうし、疑問も持たない」

「でも、彼女達がいなくてカキツバタは動かないわよ」

「おいおい、エリナ君。君ともあるう者が変な事を言うね」

「え？」

「マシンチャイルドみたいに数が制限される者に依存した戦艦が売れると思う？」

「それは・・・」

「ナデシコは実験艦だから、被害を減らす為にできるだけ少数にしたけど・・・」

同じ実験艦でもカキツバタは連合軍に売る事を前提に作った戦艦なんだよ？

当然、彼女達がいなくても動くように設計されているさ、秘密にしてたけど」

「なんでそんな大切な事を私に教えないのよ」

「いつも言ってるでしょ。秘密のある男は恰好が良いって」

「貴方ねえ・・・」

「おっと、お説教はもう十分だよ、エリナ君」

「はあ〜〜。それじゃあ何の為にあの子達を連れてきたのよ？」

「思い込みを利用する為さ」

「思い込み？」

「君同様、ナデシコの連中も彼女達がいなければカキツバタは動かないと思っっている」

「そうでしょうね。ナデシコ級とマシンチャイルドは切っても切り離せない関係だもの」

「それが狙いさ。彼女達を置いていけば、何もできないと思わせる事が出来る」

「囿・・・という訳ね」

「そう、一つ目の囿さ」

「一つ目？ それなら、二つ目があるの？」

「二つ目、それは僕さ」

「貴方が囿？」

「そうだよ。ナデシコの目をカキツバタから離す為の第二の囿。

僕はカキツバタから離れて、ナデシコの一パイロットとして出撃する。

そうすれば、ナデシコの注目は姿が見える僕に集まるでしょ？

悪巧みをしているのは僕だと思われているだろうからね、これ以

上の囿はないよ」

「なるほど。よく考えたものね」

「まあね。それで、エリナ君、この仕事、頼めるかな？」

「いいわ。引き受けましょう」

「そうこなくちゃ」

「でも、そう簡単に行くかしら？」

「どづい事？」

「混乱に乗じるという事は敵が攻めてくる前提よね？」  
「そうなるね。でも、それに関しては心配していないよ」  
「何故？」  
「ナデシコだから」  
「敵がナデシコを放って置く訳がない・・・って事ね」  
「そういう事」  
「・・・なるほど。でも、問題はそれだけじゃないわ。  
敵に攻めさせた上で、カキツバタは参戦させずに、  
ナデシコのみで木連を迎撃させる必要があるのよ？」  
「うん。その通り」  
「それはあまりにも都合が良すぎないかしら？ あり得ると思えないけど」  
「あり得ない状況を作り出すのが演出家の役目でしょ？」  
「それで、その天才演出家さんはどうやってそのあり得ない状況を作り出すのかしら？」  
「まあ見てなよ。その為のコスモスだから」

~~~~~

SIDE MINATO

「始まったのね・・・」

次々と飛び出していくアドニス。
それをナデシコから見守る私。

・・・見守る事しかできない・・・私。

「・・・ミナトさん」

「信じましょう。皆を、コウキ君を」

「・・・はい」

信じる。

それしかできないけど、それでも・・・。
ひたすら信じている、コウキ君の無事を。

「艦長。格納庫より通信が」

「格納庫？ とりあえず、繋げてください」

「はい」

格納庫からの通信？

一体何かしら？

『私は一度カキツバタに戻るわね、艦長』

「エリナさん・・・」

今までどこにいたのかしら？

この秘書さんは。

「でも、オペレーターが・・・」

『どちらにしろ、今は動けないわ。それだったら、彼女達を連れて
いっても意味がない』

「それはそうですが・・・後方の方が安全では？」

『それなら、そのホシノ・ルリとかも連れて行きましょうか？』

「それは・・・」

『それともナデシコを守り通す自信がないのかしら？ それなら連
れてくけど？』

「そんな事はありません！ ナデシコは絶対に守り通してみせます」
『それならいいじゃない。時期を見て迎えに行くから、それまで待たせといて』

「・・・分かりました」

修理が終わえたら、すぐに参戦してもらえと思ったけど・・・厳しいみたいね。

とりあえず、カキツバタの状況が気になるから戻ったって感じ。いいわ。ここはナデシコだけで乗り切りましょう。

修理が終わっても、動けないんだったら、意味はないんだし。

『それじゃあ失礼するわね』

シャトルに乗り込み、そのままナデシコから離脱していく秘書さん。これで完全にナデシコだけが頼りね。
頑張らないと。

「それでは、彼女達にはパイロット席に

」

「ぼ、僕、手伝います！」

「えっと、マキビ君だっけ？ 大丈夫？」

「はい！ カキツバタで慣れてますから」

「分かりました。それじゃあ、セレスちゃんの隣の席に」

「あ、はい。・・・やった」

ブリッジの最上階からこちらへとやってくるハーリー君。

確かにオペレータとしての経験がある彼らなら手伝えそうね。

「よろしくお願いします、セレスさん」

「・・・よろしくです」

「はい！」

どことなく嬉しそうなハーリー君。
ん？ これは・・・もしかして・・・。

「交代で手伝ってもらいましょう。いいかな？ 三人とも」

「・・・いい」

「・・・大丈夫」

「・・・やる」

「はい。それじゃあ、それまではパイロット席にて待機しててください」

テコテコとブリッジ最上部から最下部まで歩いていく三人。
なんて・・・なんて可愛らしいんでしょう・・・。
本当に子供は心を癒してくれるわね。

「艦長！ 敵戦艦、急速接近中です」

「グラビティブラストをチャージしつつ、DFを展開」

敵は三方向から攻めてきます。敵戦艦それぞれの動きを常に監視するように」

「了解です」

「艦長。フェザンツとニバリスの発進を進言する」

戦力はあればあるほど良い。

無人兵器の発進は必要不可欠ね。

「フェザンツのみ発進します」

フェザンツのみ？

ニバリスはどうするの？

「ここでニバリスを展開しても物量の前では意味がありませんから
そうか。ニバリスはあくまで活動できる距離を伸ばす為のもの。
この状況下で活動距離を伸ばしても、逆に追い詰められるだけ。
小さくコンパクトにまとまって迎撃するのがベストなのね。」

「フェザンツを発進させます。ラピスちゃん。制御よろしく」
「分かった。任せて」

「各部隊それぞれに援護に回します。フェザンツ発進」
「フェザンツ発進」

ナデシコからフェザンツが発進されていく。
これで少しはパイロット達も楽になる筈ね。

「あの、僕はどうすれば・・・」

ハリー君は勝手が分からず困惑しているみたい。
まあ、当然よね。何をしてもいいか分からないんだもの。

「マキビ君はカキツバタの制御に慣れているんですね？」
「あ、はい」

「それでは、ルリちゃんの補助を」
「えっと・・・ルリさんとは？」

「・・・私です。よろしくお願いします。ハリー君」
「ハリー君？」

「・・・渾名です、貴方の」

「・・・ルリルリ。
複雑でしょうね。」

弟分だと思っけていても、その彼には記憶がない。

きつとナデシコに乗った時も同じような心境だったんでしょね。こちらは知っていて、相手は知らない。

今思えば・・・それってとつても辛い事よね？

知人に忘れられるって辛い事なもの。

それと同じような事を彼女はずっと味わってきた。

ルリルリもラピラピも、当然アキト君も・・・強いわね、本当に。

「えっと・・・」

「基本的にナデシコを動かしているのはミナトさんです。

私達は相手側の攻撃や位置を逐一ミナトさんに知らせればいいんです」

「わ、分かりました」

ハーリー君と呼んだ時、ルリルリはハツとした表情をしていた。

思わず言ってしまったといった感じで。

それだけハーリー君に対する想いが強いのもかもしれないわね。

渾名を付けたのは思わぬ事態だったかもしれないけど・・・。

これをきっかけにまた仲良くなってくれば・・・。

そう願わずにはいられないわ。

ルリルリの為にも、ハーリー君の為にも、ね。

まあ、ルリルリとハーリー君の事はコウキ君からの又聞きだから、

何故そういう関係になったかとかはきちんと把握している訳ではないんだけど・・・。

ルリルリの表情を見ていれば、なんとなく・・・分かる。

「それでは、皆さん、気を引き締めて下さい。・・・来ます」

迫り来る敵戦艦。

戦力差から見ても、苦戦は必至。

でもね、今回の困難だって乗り越えてみせるわ。

今までだってこれくらいのパUNCHはいくらでもあったんだから。それでも私達は乗り越えてきたの。今回だって、ううん、何度だって乗り越えてみせる！

「かかってきなさい。全て避けてみせるんだから」

ナデシココそが和平の鍵。

絶対に負ける訳にはいかないわよね。

S I D E O U T

第三百三十一話（後書き）

相変わらずいろいろと画策しているネルガル。

まあ、どうなるかは大体予想が付きませんが・・・。

次回もよろしくお願いします。

第三百三十二話（前書き）

投稿します。

第三百三十二話

「・・・ジンシリーズ。しかも、その上位機種か・・・」

漆黒の宙に浮かび上がる特徴的なフォルム。

今まではバツタなどの無人兵器ばかりだったが・・・。

「遂に出てきたな。木連優人部隊」

敵も本腰を入れてきた。

ここからは人対人がメインとなってくる。

要するに・・・血で血を洗う戦いという事。

「ダイテツジン、ダイマジン、ダイデンジン」

ジンシリーズであるテツジン、マジン、デンジンをそれぞれ発展させた機体。

優人部隊の誰がどの機体に乗っているのかなんて俺にはわからない。でも、相手があの人で、この機体の組み合わせなら、

誰がどの機体に乗っているのかなんて簡単に予想が付く。

・・・そうですよね。

「シラトリさん、ツキオミさん、アキヤマさん」

テツジン。ゲキガンガーを模して作られた・・・シラトリさんの搭乗機。

マジン。ウミガンガーを模して作られた・・・ツキオミさんの搭乗機。

デンジン。リクガンガーを模して作られた・・・アキヤマさんの搭

乗機。

どれもが木連が誇る若き将校、三羽鳥の搭乗兵器だ。

『・・・マエヤマ君』

「お久しぶりです。シラトリさん」

モニタに移る映像。

そこには焦燥しきった表情のシラトリさんがいる。

・・・追い詰められているんですね、貴方は。

『ここは戦場だ。口ではなく、拳で語り合おう』

「・・・望む所です」

激情を喚き散らしても構わない。

その全てを受け止めてみせる。

『・・・コウキか』

「アキヤマさん。貴方も戦場に立つんですね」

『俺にも武人としての誇りがある。頭だけではなく、身体も動かさねばな』

「御尤もです」

神楽派だとか草壁派だとか、そんなものは戦争に関係ない。

木連全体で戦うと決めたのなら、神楽派とて木連の為に戦う。

戦争後、どうなるかは分からないが、今この場では敵同士なのだ。

『ボソン砲は使わん。正々堂々、ナデシコを打ち破る』

「望む所です。こちらこそ、正々堂々、正面から打ち破ってみせませう」

もちろん、戦えと言われれば戦う気にいる。顔見知りだからといって戦えないとなれば、それは甘えでしかないからだ。

でも、気になる事が一つだけある。

アキヤマさんはユキナちゃん救出を任務としていたという事。

そのアキヤマさんがここにいるという事は・・・既に救出済みという事か？

いや、そうであれば、ケイゴさんが現れている筈だ。

恐らく、まだ救出は出来ていない。

その上で、ここにアキヤマさんが現れたという事は・・・。

草壁中将から直接命令が下り、断れなかった。

もしくは、アキヤマさんが戦場にいない事で、

何か企んでいると怪しまれないように出撃した。

・・・その辺りが妥当だろうな。

まあ、どちらにしろ、アキヤマさんはユキナちゃん救出には行けないという状況。

その状況下で、ユキナ嬢救出の鍵を握るのは・・・。

「彼は今どこに？」

『例の件だ』

その返答だけで十分。

状況は分かった。

「尋常に勝負です。アキヤマさん」

『うむ。部隊展開！ 狙うはナデシコだ！』

続々と現れる無人兵器&有人兵器。

ツキオミさん、シラトリさんの戦艦からは積戸気が、

アキヤマさんの戦艦からは福寿がそれぞれ出撃してくる。

・・・夜天光と福寿改はどうやらないようだな。
これで多少は楽になったか？

「カエデ、イツキさん、俺達の相手は・・・」

正面が俺達の持ち場。

それなら相手は・・・シラトリさん！

「ダイテツジンです！」

ドゥーン！ ドゥーン！

群がるバツタ共を蹴散らしながら、前へと進む。

あくまで迎撃だから、飛び出す事はしないさ。

でもな、守りに入るつもりなど毛頭ないんだよ！

「カエデ。ぶっ放せ」

『OK。行くわよお・・・全弾発射！』

ダンッ！ ドバンッ！ ドウイイイイン！

まずは挨拶代わりの一発。

対集団がなんだ。

それぐらい、何度も味わってきた。

「ハアアアア！」

近場にいた積尸気をディストーションブレードで切り裂く。

「次ッ！」

ドゥーン！

右手にDBを持ち替え、左手にグラビティライフルを持たせ、撃つ。これは格闘戦も射撃戦もこなせるとっておきだ。今の俺に死角はない。

『コウキさん。後ろです』

ドゥーン！

イツキさんの言葉に従うままに反転し、ロックオン、そして、撃つ。自慢じゃないけど、早撃ちは得意だぜ。

『ッ！ コウキ！ その場から離れて！』

カエデの言葉に従い、急旋回。機体の下方に向けて全力で移動した。

ドゥウウツウーーン！

「これは・・・グラビティブラスト」

放ったのはダイテツジン。

「・・・ツクモさんか」

やはりジンシリーズは危険だ。

グラビティブラストを直撃したら、どれだけ装甲が厚くとも敵しい。それが発展機であるなら、尚更。

「カエデ。助かった」

『危ないって予感がしたのよね。生きててよかったわ』

予感、ね。

予感で回避されたら、相手も困るだろうに。

強くなったな、カエデ。

でも・・・まだまだ負けはしない！

「ウイングブースター展開」

『ウイングブースター展開します』

加速度、最高速度共に向上させるブースターを展開させる。
アキトさんには劣るかもしれないけど・・・。

「高機動戦は得意分野だ」

一直線にダイテツジンに向かう。

「邪魔だ！」

シュパッ！ ドゥーン！

立ち塞がる敵は時に切り裂き、時に撃ち、全て破壊する。
狙いはダイテツジン、ただそれのみ。

シューーーーン！

「甘いー！」

「あれはフェザンツか。ラピスちゃんだな」

カエデとイツキさんの迎撃ポイントに合流する。そこにはいつの間にかフェザンツがいて、劣勢を少しずつ立て直していた。

抜群の援護、流石はラピス嬢だ。

『どこ行つてたのよ!』

「悪い。ちよつと敵将を狙つただけど・・・」

『駄目でしたか?』

「はい。DFが強固過ぎて、突破できそうにありませんでした」

フィールドガンランスがあるというのにジンシリーズを更に発展させた機体で出てきた。

これはジンシリーズのDFが突破されたらただの的という弱点を克服できたからだろう。

そうでなければ、夜天光や福寿改が大量生産される筈だ。

好き嫌いより勝利を優先させるだろうからな、普通。

その為、ジンシリーズの上位機種、あえて言うなら、ダイジンシリーズか。

ダイジンシリーズはジンシリーズの弱点を克服した機体だと言える。DFを突破されたらただの的という弱点を克服する方法は二つ。

一つは機動性の向上、もう一つはDFの更なる強化。

その中でも、木連は後者を選んだという訳だ。

相変わらず機動性は乏しいけど、火力と防御力は向上している。

それも抜群に。

これは一筋縄ではいかないだろうな・・・。

『それでは、私がうつてつけですね』

「イツキさん?」

『対DFならフィールドガンランスが一番。あの機体は私に任せてください』

・・・確かにその通りだ。

遺跡を守るDFすら突破したフィールドランサー。

その突破力であれば、ダイテツジンの強固なDFも突破できるかもしれない。

でも・・・。

「しかし、言うては何ですが、リアル仕様では火力不足では？」

DFを突破できたとしても撃破できるかどうかは別だ。

もし突破してすぐに大火力で迎撃されたら・・・。

突破した意味がなくなる。

敵を倒すには突破してすぐに相手に大ダメージを与えられる火力が必要になるだろう。

リアル仕様は万能性に優れるが、これといって火力の高い武装はない。

これではイツキさんを意味もなく死なせてしまうだけだ。

『それなら、カエデさん』

『え？』

『私がDFを突破したらもう一度全弾発射で追撃をお願いします』

『全弾発射ね。分かったわ』

全弾発射といっても明確には意味が異なる。

これは全武装を同時に発射するという意味で、全ての弾を使い果たす訳ではない。

そんな事したら、物量射撃仕様は一瞬でただの的と化してしまうしな。

「分かりました。でも、それは・・・」

デイストーションブレードを腰に収め、グラビティライフルを両手に持つ。

「お掃除が終わってからにしましょう」

ウイングブースターを用いて、敵の中に一瞬で飛び込む。そして・・・。

「ハアアアア！」

両腕を広げて、グラビティライフルを放つ。

縦回転。横回転。斜め回転。文字通り全方位へと光の渦を浴びせる。これで、攻撃範囲内の敵は殆ど殲滅できる筈だ。

『相変わらずの馬鹿火力ね』

『頼もしいやら恐ろしいやら分かりません』

褒められた気はしないけど・・・まあいいか。

「殲滅完了」

群がっついていれば群がっている程、その効果は大きくなる。

光が止んだ後には、周囲の敵は全て殲滅されていた。

「もう隠す必要はないからな」

今までは新型機登場によるシーソーゲームを恐れて出し惜しみして

きたが・・・。

この決戦が終われば、結果はともかく、戦争は終わる。それなら、今まで隠していた分、最大限まで性能を引き出してやらねば。

「それじゃあ作戦通りに。俺は援護に回ります」

『ええ』

『了解です』

作戦と言っても単純極まりないものだけど・・・。
これがやっぱり一番効果的なんだよな。
でも、これでダイテツジン攻略の目途はたった。

「他の所は今、どうなってるんだらう?」

『何度言えば分かる！ お前の正義と草壁の正義は違つんだ!』

ドゥーン！

『違うない！ 俺と中将は同じ思いで戦っている!』

シューーーーン！

『それならば、お前は地球人全てが滅びればいいと願っているのか
!?!』

『そうだ！ 悪の地球人など滅びてしまえばいい!』

ガキンッ！

『本気で言っているのか！？』

『本気だとも！』

シュッ！

『親友の妹を人質にするような奴に賛同するのか！』
『致し方なかったのだ！』

ドウウウツウーーン！

『戦争を激化させる為に味方をも殺そうとした奴だぞ！』
『それだけ木連の事を想っているのだ！』

ガンッ！

『いい加減にしゃがれ！』

『・・・ガイ』

『アキト・・・選手交代だ。こいつは俺がやる』
『・・・分かった』

ガキンッ！

『お前はッ！』

『ゲキガンガーを愛するお前に問う！』

『・・・何だ？』

『お前の知るゲキガンガーは戦いを自ら望んでいたか！？』
『・・・どういう意味だ？』

『お前はゲキガンガーを愛している』

『もちろんだ。お前もそうだろう？』

『当たり前じゃねえか』

『・・・・・・・・』

『・・・・・・・・』

ガチツ！

『コホンツ。それなら、ゲキガンガーが何故戦っていたか知ってるだろ？』

『キョアツク星人が攻めてくるからだ。彼らは己の身を賭して地球を守るうと』

『そう、それこそがあいつらの戦う理由なんだ。』

『あいつらは自ら戦いを望んでいた訳ではなかった』

『・・・・・・・・何が言いたい？』

『あいつらは一方的な見方は断じてしていないという事だ。』

『キョアツク星人だから。そんな理由であいつらは戦っていないなかつた』

『・・・・・・・・だが、最後には戦った。敵として』

『ああ。確かにあいつらは分かり合えなかったのかもしれない。』

『でも、分かり合おうとはした。決して差し伸ばされて手を振り払ってはいない』

『それでも分かり合えなかったではないか！』

『分かり合おうという意志が伝わらなかったからだと俺は思っ』

『何？』

『お互いに事情があった。相手を滅ぼさなければならぬ事情がな』

『・・・・・・・・』

『でもよ、お互いに事情を知っていれば、』

『もしかしたら争わずに済んだかもしれないねえだろ』

『お互いの事情を知らなかったから、争うしかなかった。そう言い』

「たいのか？」

「それもある。でも、もつと言いたいのは互いの事情は相反していなかったという事だ」

「相反していない？」

「今の俺達で考えてみてくれ。お前達が欲しているものは物資、資源、そうだろ？」

「・・・間違つてはいない」

「それを提供できる準備はこちらにはある。その時点でお前達が戦う理由はない筈だ」

「だが！ それで納得などできん。俺達には恨みがある」

「そう、お前達のその恨みのせいで俺達も戦わねばならなくなっている」

「貴様は！ 自分達こそがゲキガンガーだと言いたいのか！？」

「ガンツ！」

「違う！ そんな事は思つてねえ！」

「それならば、何が言いたいというのだ！」

「もし今のお前達のような事情がキョアック星人にあったのなら、お前はどう思つ？」

「それは・・・」

「俺はキョアック星人を悪だとは思わねえ。何故なら、あいつらには想いがあるからだ」

「想い・・・」

「キョアック星人は自らの星の為、戦つた。そこに邪な想いはない」

「キョアック星人は数多の星を侵略した。それでもまだ足りなかったというのか？」

「人口爆発して土地が足りなくなったのかもしれないだろうが！」

「し、しかし、侵略するのが正しい事だとは俺には思えない」

「その言葉、自らの胸に刻み付けな」

『グツ。我らは侵略しているのではない。取り戻そうとしているのだ』

『結果は違っても課程は同じだろ？ 侵略している事に変わりはない』

『それは・・・』

『悪の地球人、悪の木連人。なんて言われているかなんでどうでもいい。』

その胸にあるのはお互いに国を、民を愛するどこまでも力強い想いだ。違うか？』

『・・・その通りだ』

『天空ケン、海燕ジョー、大地アキラ、竜崎テツヤ。俺はあいつらの生き様に惚れた』

『尊敬している。彼らのような熱い男に俺はなりたい』

『それならば、聞く。ジョーを失った時、あいつらは復讐を誓ったか？』

『・・・誓ってなどいない』

『そう、ジョーの分まで地球を守る。』

『そう誓った筈だ。それは復讐なんかよりも誇り高い』

『・・・誇り・・・』

『あいつらは復讐の念なんかに関われなかった。』

もしケンがいれば俺達と同じ選択をしたに違いない』

『キョアツク星人の事情を知っていれば、ケン達は手を差し伸ばしたというのか？』

『俺の知るケンならそうしたさ。あいつは熱く懐の広い男だ』

『・・・そうだな』

『国の為、民の為、友の為、あいつらは戦っている』

『・・・』

『俺はそれを認めよう、肯定しよう、けどな、俺はお前を認めようとは思えない』

『・・・俺とて国の為に戦っているさ』

『違うな。今のお前を戦わせているのは虚栄心と復讐だけだ』

『違う！ 俺は何よりも国の為に』

『だったら、草壁なんかに従ってるんじゃないか！』

『何だと！？ 草壁中将を愚弄するのか！？』

『国を想うのならば、地球を滅ぼす道ではなく、共存の道を選べ。』

『それが木連という国の、ひいては木連の民の為の選択だろうが！』

『民として地球憎しと訴えている』

『嘘だな』

『嘘ではない！』

『戦争を好き好んでする奴なんていねえんだよ。』

断言してやる。木連の民は共存を望んでいるってな』

『馬鹿な！ そんな事があつてたまるか！』

『お前は聞いたつてのか？ 民の声を』

『それは・・・』

『聞いているのは草壁の言葉だけだろ。だから、踊らされてるんだ』

『よ』

『貴様ツーーーーー！』

ガキンツ！

『ヘッ。そんな甘ったれたパンチが俺に届く訳ないだろ』

『受け止められたツ！？』

『本当のパンチつてのはな、こつするんだよ。ゲキガンパーーンチ！』

ガンツ！

『グハツ』

『そして、何より、お前は友を裏切っている！』

『ツ！ 裏切つてなどいない！』

『友を人質を用いて利用するような奴に従っている時点でそれは裏切りだ』

『それは・・・九十九が・・・』

『価値観は人それぞれ。それを強制する事などできはしないんだ』

『それならば、俺の意思をお前がどうこう言う権利もない！』

『その通り。だからこそ、俺は訴えている。お前の心に届くようにと』

『何？』

『俺には俺の想いがあり、お前にはお前の想いがある。』

それを分かっているからこそ、俺はお前に自分の想いをぶつけている』

『想いをぶつける・・・』

『けどな、人の想いを踏み躪り、強制するような事は断じてしていない』

『ッ！』

『人質を取ってまで、想いを踏み躪る奴はな・・・クズ以外の何者でもねえ！』

『・・・俺は、九十九の想いを踏み躪っていた？』

『お前は友と共に戦えて満足かもしねえ。』

でもな、戦いたくもねえのに戦わせられているっつのはすげえ苦痛なんだぞ。

お前にそれが分かってんのか？ 友に苦痛を味わわせてまで貫きたいエゴなのか？』

『俺は・・・』

『お前が本当に親友を想うんだっつたらな。上官に逆らっつても妹を助けてみせるよ。』

それぐらいの気概がない奴がな、友の為なんて謳うのはちゃんちやらおかしいぜ！』

『・・・』

『お前は草壁の言葉に逃げてるだけだ。それで自分を許してるだけ』

だ。

楽だよな。自らの想いで立ち上がらず、人の言葉で動けば、罪悪感も抱かずに済む』

『俺はそのような』

『お前が抱える憎しみだつてそうだ。』

当事者でもないのに、あたかも当事者であつたように恨みを募らせている』

『俺は木連を愛している。だからこそ、木連の恨みは俺の恨みなのだ！』

『だが、それも結局借り物だろ？』

木連の恨みを晴らす為なら何をしてもいいと思つてる』

『当たり前だ！ 先祖の恨みを晴らしてこそ木連は前に進めるのだから！』

『・・・いい加減にしろよ、この野郎』

『何？』

『お前はな、自分の罪を認めようとせず、』

勝手な理屈で持ち出した免罪符をたてに暴れてるガキに過ぎないんだよ！』

『ガキだとツ！？』

『てめえの罪を第三者に背負わせてるんじゃないやねえ！』

『なツ！』

『自分が暴れた原因を過去のせいにして！ だから、てめえの拳は軽いんだよ！』

『言つたな！ 喰らえ！』

『俺は俺の信念の為に戦つている！』

その想い、てめえの借り物の想いなんかには負けやしねえ！』

『『ゲキガンパーンチ！』』

ガンツ！

『な、何？ この俺が正面からの攻撃で競り負け・・・た？』

『当然だ。てめえの拳にはてめえの意思が籠ってねえ』

『俺の意思？』

『誰かの意思を継いで戦う事は否定しねえ。』

『でもな、その根本には自分の意思がなくちゃならねえんだ』

『・・・』

『お前は恨みを晴らす為という免罪符を持ち出して、』

『その言葉に踊らされて自分で考える事を放棄している』

『俺自身の想い・・・』

『俺は俺の為に戦っている。他の事なんて後回しだ』

『それは・・・自分勝手ではないのか？』

『自分勝手に良いんだよ。俺が見てきたヒーローはどこまでも自分勝手だ』

『ヒーローが自分勝手だと？ そんな戯言』

『そいつはな、どこまでも自分っていう奴を貫きやがる。』

『何事にも屈しやしないんだ。何度だって立ち上がる、挫けようが、倒れようが』

『自分を貫く・・・』

『自分を貫き、その結果、望まずとも誰かを救っている。』

『それは決して打算なんかじゃねえ。あくまで自然体でだ』

『・・・』

『救う為に行動してはいなくせに、それでも結果的に救ってやがるんだ。』

嫌になっちまうよな。

ヒーローを目指している俺が目指していない奴にヒーローを見るんだぜ。

でもな、俺はそれで良いと思ってる。

いや、ヒーローとはそうあるべきだとさえ思ってるんだ。不思議な事にな』

『それは・・・何故だ？』

ガンッ！

『それが答えだ』

『へッ。良いパンチじゃねえか』

『この次はユキナを救い出してからだ。それまで拳を磨いているんだな』

『待ってるぜ。ヒーロー』

『ふん。言われずとも、俺の熱血は揺らぎのない熱いものだ。』

『己を信じて、己の道を歩む。良いだろう。認めてやる。熱血は盲信にあらず！』

シュッ！ ボンッ！ ダンッ！

『よそ見してつと潰しちまうぞ』

『かくれんぼ、かくれんぼと』

『撃ちます、撃ちます』

『コウキ。俺の相手はお前じゃなかったのか？』

ダンッ！ シュッ！ ボンッ！

『やっぱりやりやすいわね、リョーコとヒカルとだと』

『ま、ずっとやってきたからな』

『長い付き合いだもん』

『何という連携。身動きが取れん』

ボンッ！ ダンッ！ シュッ！

『光つちやえー！！』

『撃つちやえー！！』

『おいおい。まあいいか。今度こそ潰すぜ』

『・・・クツ。視界が潰されたか』

ボンッ！ ダンッ！ シュッ！

『そういえばさ、あれってリョーコの愛しの彼が乗ってる艦だよな』

『そういえばそうね』

『はあ！？ 何の事だよ！？』

『流石はナデシコのパイロット。やるな』

ボンッ！ シュッ！ ダンッ！

『まあまあ、誤魔化さなくてもいいから』

『だから！』

『照れない、照れない』

『近距離、中距離、遠距離。バランスも良く、練度も高い』

シュッ！ ダンッ！ ボンッ！

『てめえら！ このッ！』

『やーい、やーい。怒った、怒った』

『真っ赤になっちゃって。恋が爆発？ 愛が爆発？』

『これは苦労しそっだな』

シュッ！ シュッ！ シュッ！

『いい加減にしまがれえええ！』
『ググツ。凄まじい連撃。こやつ……噂に聞く侍か？』

第三百三十二話（後書き）

ガイとツキオミ。

こんな熱いキャラじゃないのに・・・僕。

何故か・・・書きやすかった。

まあ、ツキオミにはゲキガンガーを絡めるのがベストかなと。

迷いに迷っていたからこそ通じたんだと思います。

ちなみに、和平に賛成した訳ではないという事はご了承を。

ユキナ嬢を救い出すという信念に従う為、

草壁に反乱する形になるけど、彼はあくまで草壁派の一員ですから。

まあ、その辺りには複雑な心境があるんだと思います。

ひとまず離脱といった所か・・・。分からないけど。

これから一気に加速できると嬉しいな。

そう願っている作者でした。

次回もよろしく願います。

第三百三十三話（前書き）

大変お待たせしました。
色々と動きます。

第三百二十三話

『クツ。負けられない。ユキナの為にも負けられないんだ!』

カエデによる全方位からの一斉射撃。

それを喰らいながらも、執念か、引く様子をまるで見せないツクモさん。

その気持ちは・・・痛いほど分かる。

分かるけど・・・それでいいとは到底思えない。

勝とうが負けようが、貴方は常に囚われの身なんだ。

たとえ勝ったとしても・・・ユキナ嬢は返ってこない、絶対に。

「ツクモさん!」

『ユキナが、ユキナが待つてるんだ!』

・・・必死の叫び。

叫ばないと、自分にそう言い聞かせないと、やっていけないんだ。

和平だとか、徹底抗戦だとか、そんな次元の問題じゃない。

彼が想うのは、願うのは・・・ただ妹の安全のみ。

そこに思想や理想なんて存在しない。

今のツクモさんは・・・和平なんて考える余地もない程に追い詰められている。

『独りぼつちで寂しい思いをしている筈。早く! 早く!』

ドウウウツウーーン!

グラビティブラスト!?

『コウキ! ダメージを喰らってる気がしないわ!』

マジか。なんつう固い装甲だよ。

あれだけの攻撃を喰らってノーダメージだったのか?

『いえ。無傷のように見えますが、確かにダメージは喰らってます』
「え?」

『どれだけ固い装甲でも無傷なんてありえません。続ければ、必ず』

・・・そうだよな。

どれだけ固かるうが無傷なんてありえない。

攻撃の一つ一つの被害が微少でも、それらを繰り返せば・・・。

「必ず倒せる」

絶対に壊れないものなんて世の中にはない。

効かないなら・・・効くまでやるのみだ。

「イツキさん、カエデ。作戦は継続。倒すまでやり続けます」

『OK。イツキ。頼むわよ』

『了解。DFを突破したらすぐに離脱します』

「攻撃には俺も参加しますから。合わせますのでご自由に」

臨機応変に連携。

それぐらいは容易にできるぞ。

長い間、共に戦ってきたんだからな。

『コウキ! 来るわ!』

「あれは・・・」

ボソンジャンプ？

ッ！

「緊急回避！」

「右横よ！」

「クッ」

ドゥウウツウーーン！

「クウー」

急加速によるGで身体が軋む。

でも、まあ、直撃よりは何倍もマシ。

「助かった、カエデ」

どこに跳ぶか、俺にはまるで見当が付かなかった。

カエデの言葉がなければ俺もイツキさんも避けられなかったかもしれない。

『任せといて。・・・それにしても、やっぱりボソンジャンプは脅威的ね』

『はい。ジャンプ後すぐに攻撃されたら避けようもありませんし』

「それに以前までとパターンが違い過ぎますから、パターンが掴めません」

これも遺跡が研究されてしまったからか？

機械によるジャンプの自由度が増している。

パターンも掴めない状況・・・このままじゃやばい！

『ッ！ 左横！』

またかッ！

ドウウウツウーーン！

クソッ。

グラビティブラストのチャージも早い。

流石は上位機種。

性能が段違いだ。

「とりあえず今からでもパターンを解析します」

『お願いします』

『規則的である事を願うわ』

・・・正直、厳しい気がする。

弱点を知っていて、改善しない訳がないからな。

『私が取り付く！ 私なら』

「駄目だ！」

『どうしてッ！？』

「知られる訳にはいかないんだ。木連には」

実際はどうか分からないが、

木連は火星人がボソソジャンプの鍵だという事を知らない筈。

少なくとも、バレるような軽率な事はしてきていないつもりだ。

そんな木連の前で・・・カエデにボソソジャンプさせる訳にはいかない。

『じゃあどうしろっていうのよ!?!』

「・・・お前の勘に任せる」

『はあ!?!』

「指示を出してくれ。お前の指示に従う」

今、この状況下、ボソソジャンプに対応できるのはカエデしかない。

何故とか、ありえないとか、そんな事、今はどうだっていい。カエデだけが反応できる、それなら、それを信じるまでだ。

「イツキさんは援護をお願いします。敵の無人兵器もまだいますし」
『了解です。今の状況下、私よりもコウキさんでしょう』

意図を理解してもらえて助かる。

このまま少しずつダメージを与えていくつもりだったけど、ボソソジャンプという奇襲方法がある以上、長期戦は不利だ。

一瞬たりとも気を抜けない状態を持続できる程、人間の集中力は長続きしない。

それなら、短期決戦。火力で優る俺が一撃、もしくは数回だけで倒すのがベストだ。

パターン解析ができるなら話は別だが・・・。

「カエデ。俺の後ろに来てくれ」

『分かったわ。そっちの方が指示出しやすいものね』

できる事なら、相手側のボソソジャンプの機能調査、どれくらい精度、距離まで実現できるか調べたいけど、厳しいだろうな。

そんな余裕はない。

ナデシコにいる時ならまだし。

「ッ！ そうか！ セレスちゃん！」

「え？ セレスちゃんがどうかしたの？」

「彼女なら、セレスちゃんならできるかもしれない」

タンポポを始めとして多くの調整業務を手伝ってもらったんだ。

特に解析や分析といった面では俺と同等、もしくは凌駕していた。

セレス嬢に頼めば・・・相手側のボソンジャンプの事が分かるかもしれない。

「アザレア、ナデシコに通信」

『了解です。マイマスター』

ヒュンッ！

モニタの片隅に映るブリッジの情景。

『どうしましたか？ マエヤマさん』

応答は艦長か。

まあ、当然なんだけど。

とりあえず、状況を説明して、さっさと要件に移ろう。

「ご覧になっているかと思いますが、敵はボソンジャンプを戦術に組み込んできました」

『はい。ですが、以前までと同様の戦術だと思えますが・・・』

確かに傍目から見ればそうかもしれない。

でも、実際に戦ってみればえらい違いだ。

「恐らく、遺跡を手に入れた事が原因でしょう。ボソンジャンプの効果が段違いです」

『ッ！ ボソンジャンプが！？』

「はい。タイムラグ、距離、精度、恐らく全てが向上しています」
『・・・なるほど。今後の事を考えても、調べておく必要がある訳ですね』

相変わらず察しが良い、こつこつ時は。

「その通りです。俺ができればそれがベストなんでしょうが・・・」
『戦闘をしながら解析する余裕はありませんか』
「情けない事ですが・・・はい」

もつとパイロットとして腕があればできるんだろうけど・・・。
ツクモさん相手に余裕なんてある訳ない。

『コウキ！ 後ろ！』
「クッ！」

ドゥウウツウーーン！

「大丈夫。避けられない攻撃じゃない」

縦横無尽・・・とでもいえばいいのか。

それとも、神出鬼没？

・・・まあ、なんだっていい。

全方位囲まれていると思えば大して差はないさ。

・・・攻撃はできそうにないけど。

『マエヤマさん!?!』

「大丈夫です。・・・その解析ですが、セレスちゃんに任せようと思います」

『・・・私・・・ですか?』

モニタの映像がセレス嬢に変わる。
どことなく・・・不安そう。

「そう、セレスちゃん、君に、いや、君にこそ頼みたい」

『・・・私に・・・できるでしょうか?』

不安を浮かべた瞳で見上げるように見詰めてくるセレス嬢。
その気持ち、分からなくはない。

この解析はそれだけ重要な要件であり、プレッシャーも凄いと
思う。

分かるかどうかで今後の生き死に関わるぐらいだ。

尻込みするのは分かる。

でも・・・。

「セレスちゃんならできる。そう思ってるからこそ頼むんだ」

『・・・でも』

たとえば俺にできなくとも、セレス嬢にだけならできる。

それはマシンチャイルドだからとかはまったく関係ない。

この子が頑張り屋だから。

何事にも一生懸命になれる良い子だから。

それだけだ。

俺がセレス嬢を信じる理由なんてそれだけで十分。

セレス嬢だったら絶対に成し遂げてくれる筈だ。

それに・・・。

「セレスちゃんは俺の自慢の娘だぞ。できない訳がない」
『・・・あ』

娘を信じない父親がいるかつての！

『・・・私、頑張れる気がします』
「よく言った、セレスちゃん」

笑みを浮かべるセレス嬢。

この様子なら、解析なんざ余裕だな！

『・・・出来たら、頭、撫でてくださいね』
「もちろん。なんだってしてあげる」

『・・・言質は取りました。私、頑張ります！』

うんうん。相変わらず可愛いな。

こつ、胸の前で拳を握りしめて頷くんだ。

戦闘中だって事を忘れて

『正面』
『うわっと！』

ドウウウウーーン！

つて、忘れちゃいかんぜよ。

さつき油断なんてできる訳がないって言ったばかりなのに・・・。
セレス嬢、恐ろしい子ッ！

『集中しなさいよね。ここは戦場なのよ』

「悪い。もう油断はしない」

カエデに諭されてしまうとは……。まあ、完璧に僕が悪いんですけどね。

「それじゃあ、頼むね。セレスちゃん」

『……はい!』

「艦長。後は任せました」

『はい。お気を付けて』

もちろん、気を付けますよ。

「カエデ。お前の勘が頼りだ。頼むぞ」

解析するにも追い詰めた方が都合はいい。

慌てた時、いわば、逃げや撤退の姿勢の時にこそ、

研究されたボソンジャンプの真価が分かるのだから。

奇襲よりも撤退向けだろ、ボソンジャンプって。

『できるだけ時間を稼いだ方がいいの？ それとも一気に行く?』

ナデシコに連絡した事から解析を依頼したと解釈しているらしい。

……鋭くなつたなあ……お前。

「出来れば時間稼ぎ。でも、隙あらば攻める。隙を見逃して勝てる相手じゃないしな」

『了解。とりあえず、右斜め後ろ』

「あいよ」

最早視覚で確認するまでもない。

そこにいるとカエデが言えばそこにいるんだ。
それはもう絶対なんだよ。

シューーーーン！

迫り来るロケットパンチ。

グラビティブラストが当たらないから焦ってやってしまったんだろ
うけど……。

「それは悪手ですよ、ツクモさん」

少なくとも拳には身体ほどの装甲の厚さはない。

それは先程、グラビティライフルで撃ち抜いた事からも伺える。

「ハアアア！」

デイストーシヨンブレードを抜刀しつつ迎撃。

要するに、見よう見真似のスバル嬢式居合抜きだ。
やればできるもんだな。

『ナイス、コウキ』

『これで相手は両手がありません。接近戦さえできれば……』
「受け止める術はない」

ウイングブースターによる急加速。

直線スピードだけだったら、他のどの機体にも負けるつもりはない！

「ここだッ！」

ジンシリーズのコクピットはスーパーロボットよろしく頭部だった

筈。

だったら、胴体だけ攻撃すれば……。

「これで」

シュツ！

「チイツ！ 意外と冷静だ」

片腕を犠牲にして、大破を避けやがった。

受け止められない以上、避けるか、何かを犠牲にするしかないといえ……。

執念という奴か？ 負けられないという。

「それでも」

片腕を潰したのは大きい。

ロケットパンチを放って肘から先がない右腕。

まあ、隠し腕らしきものがあるけど、本調子とはいかないだろう。

そして、完全にぶった切ってやった左腕。

腕が一本ない。

それだけでどれだけ大きなハンデになる事か。

左側から攻撃すれば、わざわざ右腕を遠い位置から持ってこなければならなくなる。

その動きがどれだけ早かろうと、左腕をパツと出すのより断然遅い。残念だけど、遠回りするような防御の方法で防げるほど、俺は甘くないぞ。

「次は右腕を頂く！」

再度接近。

次も狙いは同じく胴体。

別に右腕を犠牲にしても構わない。

両手を失わせれば勝ったも同然だから。

「ハアアア！」

振りかぶり・・・斬。

「クツ。ボソソジャンプ」

避けられたか。

やはりボソソジャンプは回避にこそ真価がある。

パターンも読めない今、どこに出てくるか分からないし。

本当に、厄介だ。

「カエデ。敵はどこに？」

「・・・いない」

「え？」

『この近くにはいないわ』

近くにいない？

それって逃げたって。

『後ろだわ！　ずーっと後ろよ！』

後ろ？

・・・ちよつと待てよ。

俺達の後ろだって？

それって・・・。

『敵の狙いは』

「ウイングブースター最大出力！」

『ナデシコだわ！』

カエデ言い切るまでに飛び出す。

まさかナデシコを直接狙うだなんて……。

貴方らしくないですよ！ ツクモさん。

ドゥウウツウーーン！

え？

『前方から敵戦艦が接近』

『やばいわね。ここで引いたら、余計にナデシコはピンチになる』

うまい事やられた気分だ。

敵戦艦からは更に兵器が飛び出してくるし……。

どうする？ どうすればいい？

「カエデ、イツキさん、今」

『ここは私達に任せてナデシコに行きなさい！』

『これぐらい、へっちゃらですから』

カエデ、イツキさん。

でも、今まで三人でどうにか維持してきたのに……。

それを更に敵戦力も増えて二人でなんて……。

『早くいきなさいよ！ ナデシコが沈められたら全てが終わりなの』

『よー』

「その通りです。大丈夫ですよ。私達もナデシコパイロットですから」

「・・・了解」

「ダッ！」

任せよう。

仲間を信じて、ここは任せる。

俺にできるのはさっさとツクモさんを撃破して、いち早くここに戻ってくる事。

それが今の二人にとって最善のアシストになる。

「アザレア。飛ばすぞ」

「はい。マイマスター」

ウイングブースター最大出力。

短距離ボソソジャンプを繰り返して距離を稼ぐダイテツジンを必死に追う。

引き離される一方でも挫けるものか。

攻撃する瞬間、隙ができる筈。

その時にさえ間に合えば・・・対処はできる！

「間に合ってくれよ、アドニス」

「・・・言質は取りました。私、頑張ります！」

・・・コウキ君。考えなしはまずかったと思うわ。
セレセレの張り切り切り様・・・見た事ないぐらいなもの。

「・・・ルリさん、ラピスさん、しばらく任せます」

「ええ。任せてください」

「頑張つて」

「・・・はい！」

ルリルリとラピラピの言葉に力強く頷くセレセレ。
本当に、やる気に満ち溢れてる。

「す、凄い」

セレセレの周りにいくつものウィンドウが広がり、同時処理されていく。

その処理速度はいつもの五倍は早い気がした。

詳しい事は分からないから、なんとなくだけど。

とりあえず、ハーリー君が感嘆しているんだから、凄いでしょ
うね。

「・・・セレス・タイト」

「・・・何でしょうか？」

作業中のセレセレに向かって、声をかける女の子。

彼女は確かルビーちゃん。

トパースちゃんもジャスパーちゃんもセレセレを見ている。

ルビルビ？ トパトパ？ ジャスジャス？

うーん、ちょっと無理があるかも。

「・・・私は貴方が羨ましい」

「・・・え？」

「・・・自慢の娘、そういつてくれる人がいて」

ルビーちゃんの言葉に頷くとパーズちゃんとジャスパーちゃん。

・・・彼女達は寂しい思いをしてきたのね。

ママもパパもいないまま、ずっと・・・。

・・・コウキ君、私決めたから。

反対しても聞かないわよ。

まあ、貴方なら笑って許してくれる、ううん、むしろ、自ら引き受けてくれそうだけど。

「・・・きつと見付かります」

「・・・見付かる？」

「・・・私にとってのコウキさんみたいに、貴方を包んでくれる人が」

「・・・包む・・・」

「・・・暖かくて、優しくて、心地よくて・・・ずっと傍にいたい
と思える人です」

「・・・うん。見付かると嬉しい。誰かいない？」

「・・・コウキさんはあげませんからね」

「・・・え？」

・・・セレセレって結構独占欲強いわよね。

コウキ君は既に親馬鹿だからどうしようもないけど・・・。

セレセレはファザコンにならないようにしなくちゃ。

もう遅い？・・・やっぱり？

「・・・あの方が貴方のパパ？」

「……はい。私のお父さんです」
「……そう、なんか不思議な感じがする」
「……不思議な感じですか？」
「……なんかあの人なら受け止めてくれそう」
「……コウキさんは優しいですから、受け止めてくれますよ、きつと」

それは同意。

ああ見えて結構懐の広い男よ、コウキ君は。
きつと、なんでも受け止めてくれるわ。
それがどんなコンプレックスでも、ね。

「……皆さんもきつと私と同じようなコンプレックスを持ってる
いるのでしよう」

「セレセレ……」

「……私はずっとマシチャイルドである事がコンプレックスで
した」

「……」

「……でも、コウキさんや皆さんのお蔭でMCである事に向き合
えたんです」

「……そう」

「……今はもうコンプレックスなんかじゃありません。私の……
誇りです」

子供の成長は早い。

それを実感せざるを得ないわね。

こんなにも大人になっちゃって……。
立派にお姉ちゃんやっってるじゃない。
これなら……。

「セレセレ。ちょっとお話があるんだけど・・・」

「・・・はい。何でしょう?」

「お姉さんになる気ない?」

「・・・え?」

「だからね、お姉ちゃんに」

「敵機が急速接近中! 連続ボソンジャンプで距離を詰めてきてます!」

もう良い所なのに!

「セレスちゃん。敵のボソンジャンプで分かった事は?」

「・・・はい。以前までに比べて約三倍の距離でのジャンプを実現しているようです」

流石。話しながらもきちんと作業はこなしてたか。

ま、それはそうよね。

コウキ君のご褒美が待ってるんだから。

セレセレが頑張らない訳がない、ええ、ないわ。

「・・・精度に関しては詳しくわかりません。」

ですが、こちらに向けて最短距離で来た事より、向上している可能性が高いです」

「なるほど。以前までだったらジグザグと距離を詰めてきてもおかしくなかったんですね」

「・・・はい。また、反応消失してから再検出されるまでの時間差は数秒と短いです」

タイムラグも殆どなして事か。

やっぱり木連は遺跡を研究しているとみて間違いないようね。

「ボース粒子の検出から具現までの時間は極僅か。相当研究してきてるわね」

「・・・イネスさん」

「でも、逆に考えれば、こう言える。

遺跡を研究さえできれば・・・ボソソジャンプを封印する事が出来るって」

「それって・・・」

「ええ。今すぐにといい訳ではないけど、遺跡さえあれば実現してみせるわ」

本当に、こういう時だけは頼もしい。

彼女がそういうのであれば、きつとそうなのでしょう。

これでコウキ君の言っていた方法で火星人の悲劇を回避できる。良かった。本当に良かった。

「どこからか失礼な言葉が聞こえたんだけど、空耳かしら？」

「そ、空耳ですよ、多分」

ええ。私は何も言っていないわもの。

疑わしきは罰せずって奴？

「・・・まあいいわ。とりあえず一言」

「はい。何でしょう？」

「ポヤポヤしてるのはいいけど・・・」

DFの中に入られたらおしまいよ。ボソソジャンプでなら、侵入できるんだから」

「き、緊急加速！ 留まったらやられます！」

木連のボソソジャンプはイメージではなく、恐らく空間座標。

それなら、動き続ければ捕捉される事はない。

これはボソン砲と同じね。
でも、対象との距離が近く、任意のタイミングでできる機動兵器の
利点はきつと大きい。
そういつまでも逃げてはいられないと思う。
なんとかして撃墜される前に対抗策を考えないと。

「ナデシコ後部に敵機出現！」

「ミナトさん！ 緊急回避！」

「りょくかいつと」

ドウウウツウーーン！

ナデシコの軌道を強引に曲げる。

こう、すぐ脇を攻撃が過ぎると・・・。

「ゾワツというよりゾクツてくるのよね」

回避は成功。

言ったでしょ？ 避けてみせるって。

「ad-ASが接近中。迎撃に向かいます」

コウキ君が？

そっか。コウキ君が守ってくれるのか。

でも、それに甘えるような事はしないわよ。

私は私の仕事を完璧に、ううん、完璧以上にこなしてみせる。
頼りつきりつてのは性に合わないの！

「モニタに映します」

敵機に切りかかるアドニス姿が映る。

こつ見ると敵機は意外と傷が深い。

両腕とも損傷してるし。

でも、一番の武器であるグラビティブラストは健在。

油断はできないわね。

DFの中でグラビティブラストなんて喰らったら・・・ナデシコだつて沈むわ。

「あ」

数度打ち合った後、敵の右足を切り裂く事に成功したコウキ君。

一気に決着とまではいかないみたいだけど・・・。
着実にダメージは与えているわ。

「敵機、ボソンジャンプします」

跳ぼつとする敵機に向けて、そうはさせるかと飛び込んでいくコウキ君。

でも、後一步及ばず、敵機に逃げられてしまう。

敵機はどこに・・・。

「艦長！ ボース粒子がナデシコ前方より検出！」

ナデシコ前方！？

逃げたんじゃなかったの！？

「ミナトさん！」

「捕まつてなさい！」

できるだけ死角になる場所へと向けて移動する。

「ここなら・・・」

GBの射程範囲内から逃れた筈。

「敵機、撃つてきません！」

え？

「こちらに照準を合わせて・・・」

・・・やられた。

ボソソジャンプ後にすぐ攻撃してくると勝手に思ってたのが間違いだった。

敵は確実にこちらへ向けてGBの照準を・・・。

「・・・コウキさん」

駄目よ、セレセレ。

コウキ君はナデシコ後方。

相手はナデシコ前方。

守るべきナデシコが邪魔で・・・移動ができない。
たとえ今からボソソジャンプしても、もう・・・。

『クソツ。クソオオオオ！』

コウキ君の叫び声が聞こえる。

まだよ、まだ。

まだ何か方法が。

「来ます！ 各員、耐シヨック体勢！」

モニタに映る敵機。

グラビティブラスト発射口には光が迸っている。
今にもそこから光が発射される……。

『ツクモオオオーーー！』

かと思いきや、ナデシコと敵機の間大きな機体が入ってくる。

ドウウウツウーーン！

ナデシコ直撃コースのグラビティブラスト。

でも、それは目の前に入ってきた巨大な機体によって阻まれた。
これって……味方？

『ゲンイチロウ！ 何故邪魔をする！』

『友に後悔させぬ為だ！ 今は大人しく……』

ドウウウツウーーン！

『している！ ツクモ！』

味方？から放たれた攻撃が敵機の胴体を撃ち抜く。

撃たれた敵機は爆発する前に頭部だけ離脱し、敵戦艦の方へと向かっていった。

でも、それを先回りして、巨大な機体が回収し、その上でこちらへとやってくる。

えっと……どういう状況？

『ナデシコの諸君。厚かましい願いだという事は百も承知だ。だが、その上で頼みたい』

あれって確か……。

「木連の月臣元一郎さん」

そう、それよ、艦長。

『奴の、ツクモの保護を頼みたい』

『ゲンイチロウ。何をッ!?!』

『俺は……ユキナを助けに行く』

結局、仲間割れだったという始末。

とりあえず……判断は艦長に任せるわ。

「艦長。認められん。今ここで敵を保護する必要など」

ゴートさんの反対の声。

当然の反応だとは思っけど……。

『艦長よ』

「ヤマダさん」

『ヤマダでもなんでもいい。俺からも頼む。そいつを保護してやってくれ』

あのガイ君がヤマダを否定しなかった？

……それだけ、その願いに込める想いが強いつて事ね。

「私からも……お願いします」

「メグミちゃん」

「正しいとか間違ってるとか分かりませんが、私はガイさんを信じています。」

そのガイさんが彼を信じるといふのなら、私も彼を信じたいと、そう思います」

『メグミ』

「ガイさん」

「はいはい。そのピンク空間はいらないから」

今つて結構真面目な話。

「分かりました。保護します。回収を」

「艦長！　しかし　」

「ナデシコのクルーを信じます。そして、彼の和平への想いを」

彼つて・・・ツクモさん？

艦長つてツクモさんの事、知ってたかしら？

・・・ああ、あの記憶麻雀。

それで知ったのか。

・・・コウキ君から聞いた話が本当なら・・・信じてみる価値はあるわね。

『感謝する』

頭を下げるゲンイチロウさん。

敵に素直に頭を下げるって中々できる事じゃないわ。
潔い男ね。

『ゲンイチロウ。お前・・・』

『俺は草壁中将の志に従う』

『・・・どういう意味だ？ 言ってる事とやってる事が』

『だが、此度の件だけは草壁中将の過ちだ。』

俺は志に賛同する者としてこれを正さねばならない』

『・・・ゲンイチロウ』

『ユキナの事は任せろ。再び、戦場にて合間見えよう』

そう言つて去つていく巨大な機体。

彼もまた複雑な心境なんだろうね。

でも、心に枷があるのなら、すぐにでも解放してあげべきよ。

たとえそれで彼が更に強くなつてしまつたとしても・・・。

本音でぶつかり合えないと、きつと分かり合えないのだから。

カシャン！ カシャン！

「・・・え？」

「こ、この音は・・・」

怯えるルリルリとラピラピ。

この音・・・不気味だわ。

『月臣・元一郎。裏切りは許さんぞ』

『裏切りではな』

『裏切り者には死を』

ガンッ！

・・・誰も気付かなかつた。

うつん、誰も気付かなかつた。

気付けば・・・錫杖が突き刺さっていたの。

あの巨大な機体の胸に。

『ゲンイチロオオオー！』

目の前で爆発する機体。

その爆発する機体を視界の中に収めながらも、目を離す事が出来なかった。

あのどこまでも紅い、まるで血のような紅い機体から。

・・・背筋が凍る。あまりにも異質。どこまでも不気味。あの視線に晒されるだけで・・・身体が震えた。

『我らが理想の為、ナデシコには退席願おう。殺ッ』

S I D E O U T

第三百三十三話（後書き）

急展開。 ええ、望む所です、急展開。

最終決戦だというのにどこか停滞していた現状。

それを打破するインパクトはあいつしかないなど。

さてさて、どうなる事やら。

ちなみに、直線スピードでなら負けないとコウキ君は言っていました
が。。。

機動殲滅仕様には一歩劣ります。 あれはコウキ君なりの気概だとい
う事で。

それでは、次回もどうかよろしくお願いします。

第三百三十四話（前書き）

大変ご迷惑をおかけしています、ハインツです。

活動報告にも書かせて頂きましたが、

ただいま新入社員の研修でネット環境がない場所にいます。

本日は休日だった為に少し出かけて友人宅より投稿しています。

四月中は投稿が厳しいかなと思っていましたが、どうにか。

できれば頑張りたいですが、あまり期待しないで待っていてくれると嬉しいです。

五月に入ってからからの投稿で完結まで投稿できるよう頑張りますので、どうか暖かい目で見守っててください。

第三百三十四話

「・・・な、何だ？　これは・・・」

ツクモさんのボソソジャンプ反応。

見事なまでに巻かれてしまい、必死にその姿を追った。

その途中、他のボソソジャンプ反応が検出されたりと、意味不明状況が続き・・・。

結果として、今、目の前には・・・。

「何が起きたんだ？」

夜天光が錫杖でダイマジンを貫く光景があった。

『眠るがよい』

眩きと共に離脱。

その離脱は目で追えず、まるで一瞬でその場所へ移動したようだった。

「クッ！」

爆風に巻き込まれる。

状況をまるで把握できていない今、何をすべきかが分からない。

『我らが理想の為、ナデシコには退席願おう。殺ッ』

この声は紛れもなく北辰。

何があつて仲間割れとなつたかは知らないが、こいつが敵な事に違
いはない。

『ほお。逃れたか？ ならば……』

追撃？ そうはさせない！

ガンッ！

懸命に後を追ひ、夜天光とダイヤモンドの間に入る。
どうやら機動力でいえばこちらの方が上のような。

『ほお。私の攻撃を止めるとは……』

ダイヤモンドのパイロットは恐らくツキオミさん。

俺はまだ諦めた訳ではないんだ。

三羽鳥と共に歩む和平の道を。

今、ツキオミさんを死なす訳にはいかない。

『お前は……。助かった。礼を言う』

「礼なんていりません。今はとにかくナデシコへ」

『ナデシコだと？ 俺は』

「艦長。良いですよね？」

『構いません。どんと来ちゃってください！』

『なっ！？』

「驚きましたか？ これがナデシコなんです」

ナデシコは懐が広いんだ。
良い言い方をすれば、だけど。

『我の前でおしゃべりとは余裕だな』

「・・・そのまま放っておいてくれた方が嬉しかったんだけどなあ。
・・・」

北辰。

劇場版におけるアキトさんのライバル。

草壁をラスボスとするなら、

こいつはラストダンジョンに何故かいるラスボスより強い敵キャラ的な奴だ。

恐らく凄い武器を守っているに違いない。

・・・ふざける場合じゃないな。

そんな奴をこれから相手にしなくちゃならないんだ。
気を引き締めないと。

3782

「ツキオミさんはナデシコに。それまであいつは俺が引き受けます」
『気を付ける？ 奴は消える』

「え？ 消える？」

『文字通り消えるのだ。先程、俺は知らぬ間に刺されていた』

消える。

そう言われて最初に思い浮かぶのは当然ボソソジャンプ。

でも、そんなに精度良く、かつ、タイムラグなしにいけるだろうか？

・・・俺の知るボソソジャンプでは到底不可能。

アクセス権を持っている俺ならともかく、現段階では火星人でも無理だ。

・・・もしこれがボソソジャンプであつたとしたら・・・。

木連の遺跡研究は予想を大きく上回る成果を残していると言える。

それこそ地球が危機に陥つていると言えるくらいに……。
今までののは遊びだった？ それとも、こいつこそが草壁の切り札？

「ッ！」

『滅』

カスッ。

『ほお。今のを避けるか』

あ、危なかった。

何だよ？ 今の。

マジで瞬間移動じゃないか。

消えたと思った瞬間攻撃されるとかありえないだろ。

しかも、その攻撃が近距離の格闘武器と来てる。

遠距離武器なら多少の余裕はあるが……。

近距離攻撃だと気づいたら攻撃されているなんていう展開になりかねない。

……道理でツキオミさんがやられる訳だよ。

こんなの避ける方が無理だ。

今のだって狙って避けた訳じゃない。

奇跡的に、勘が当たっただけ。

消えた瞬間に嫌な予感がして、横に飛び去った。

それが偶然にも功を奏したに過ぎないのだ。

飛ぶ方向を間違えていたら、その時点でTHE・ENDだっただろう。

あんなの……二度も避けられない。

ジトッ。

額に汗が流れる。

それだけの緊迫感がこの場にはあった。

こんなにも・・・死を間近に感じたのは初めてだ。

『次は当てようぞ』

・・・当てられる。

奇跡なんて二度も起きやしない。

たとえ次が奇跡的に避けられたとしても・・・手詰まりだ。
いずれ殺される。

クソッ。このままじゃ・・・。

『殺ッ』

来るッ！

『止まるな！ 動け！』

「ッ！」

カスッ。

今の声は・・・。

『・・・二度までも・・・ッ！』

ドゥーン！

『何奴！？』

『貴様の相手はこの俺だ。北辰』

アキトさん！

『足を止めたら敵の思いつぼだ。動き回れ。』

『教えてだろ？ 高機動戦の修練はこの日の為にあった』

・・・高機動戦。

そうか！ その手があったんだ！

俺や火星人のようなイメージによるボソンジャンプ。

もしそれであればどれだけ速度を出そうと対応できる。

でも、木連の座標によるジャンプでは、

止まっている敵は有効でも動いてる敵には対応できない。

それが早ければ早いほど、尚更。

どれだけ正確かつ精度良く跳べても動き回っていれば無意味だ。

『常に飛び続ける。そのイメージがお前にはある筈だ』

「はい！」

高機動戦。

何度も何度もアキトさんに挑み、負けを知り、その都度強くなっていた。

今の俺なら、アキトさんと互角の戦いができる筈。

これは自惚れなんかじゃない。

確かな実感と積み重ねてきた時間がそれを証明している。

『む』

絶対に捉えさせはしない！

『死神。此度は我がその首を刈り取ってくれようぞ』

『負けやしない。特にお前には、何があること』

『抜かしている』

カスツ。

『クツ。ちょこまかと』

『ジャンプに頼るようになった時点でお前はもう終わりだ』

飛び続ける俺とアキトさん。

それを必死に追うものの機動力では俺達の方が上。

追い付こうとボソソジャンプをしてきても捉えきれない。

やる側もかなりの負担を負うが、間違いなく有効手だ。

「いける！」

夜天光の性能は以前までと同程度の様子。

その分、ボソソジャンプの能力が向上しているが……。

高機動戦に持ち込めばこちらのものだ。

『……』

無言で放たれるミサイル。

確かに高機動戦では動体視力が低下し、回避率は下がってしまう。

それに、相対速度も上がるから、

受けるダメージも増し、一撃で大破する危険性も出てくる。

回避率は下がり、受けるダメージは増すというデメリット。

高機動戦というのはある意味諸刃の剣でもあるのだ。

でも、そんなデメリットでも人は修練を積みれば克服できる。

その為の修練を、俺は血反吐を吐くぐらいやってきたつもりだ。

そんな安直な攻撃、喰らってたまるかよ！

『その程度か、北辰』
『いい気になりおつて……。』

状況は二対一。

攻撃は当てても喰らってもないけど、このままいけば……。

「活路は見出せる」

ボソソジャンプすらも回避の手段として用いている北辰。

そんな相手に攻撃を入れる事はかなり難しい。

でも、それはこちらと同じで、一度も有効打は喰らっていない。
言わば、膠着状態。

互いに相手の隙を窺っている状況だ。

しかし、このまま行くのであれば、

俺達の勝利で終わる事は疑いようもない。

何故なら、ボソソジャンプには回数制限があるからだ。

火星人ですらチューリップクリスタルを消耗して跳んでいる。

木連人でもその前提条件は覆せないだろう。

ましてや機動兵器という大きな物と共に跳んでいるのだ。

その消耗は人間のみの時より多い。

あとどれだけ夜天光が跳べるかは分からないが……。

限界があるのなら、それまで耐え切つてやろうじゃないか。
根性勝負でなら負けはしない。

ドゥーン！

『甘い』

クツ。やはり当たらないか。

でも、攻撃の手を緩めるつもりはない。

攻撃し続け、避け続けてやる。

『ハアアア!』

アキトさんが強引に切り込む。
捉えた!?

ガキンツ!

『クツ』

クソツ。受け止められたか。

『その程度か? 死神』

『抜かせ。ハアアアアア!』

ガンツ! ガキンツ! ガキンツ!

アキトさんの連続攻撃は悉くいなされる。

・・・やはり強いな、北辰。

さっきのだって完全に決まっと思ったのに・・・。
でも、今なら・・・。

「いけツ!」

ドゥーン!

真横から撃った北辰のみが当たるコース。
これなら!

『ふっ』

傀儡舞！？

あの状況で！？

『小賢しいハエがいるようだ』

ハエ？

もしやハエって俺の事か？

『・・・叩き潰せ』

『『『『御意』』』』』』

北辰六人衆！？

さっきまでいなかった奴らがなんで・・・。

『コウキ。あいつらは任せた。北辰は・・・俺が討つ』

「・・・了解」

奴らがない間に北辰を倒せたらと思ってたけど・・・。
やっぱりそう都合良くはいかないみたいだな。

『覚悟』

一対六。

しかも、全員がエース級の腕前ときた。

なんともまあ絶望的な状況。

でもな・・・。

「ハーフバースーカーモードに移行」

『補佐します、マイマスター』
「頼む」

今更数的不利でああだこうだ言ってられないんだよ！

『散』

六体が囲むように移動を始める。
でも、それに付き合ってやる気など毛頭ない。

「そこッ！」

ドゥーン！

先手必勝。
常に先手を取ってやる。

「・・・傀儡舞か」

その要因は特殊な位置に取り付けられた複数のノズルにある。
それらによって不規則な回転が可能となり、不規則な回避が実現でき
きるのだ。

木連の北辰と六人衆が用いる特殊な回避方法であり、
ツクモさんやツキオミさんが戦闘時にやってこない事から、
恐らくだが、木連内においては正道ではない技術なのだと考えられ
る。

『かかれ』

『キエエエー！』

相変わらずの掛け声。

その声と同時に錫杖を突き出しながら突進してくる。確か、劇場版では……。

「ハア！」

ドガッ！

相手の動きに合わせて掌底。

劇場版ではツキオミさんがこうして六人衆の一人を撃退していた。

「まず一人」

DFを纏った拳で貫く。

ただの拳では厳しいが、DFを纏っていればこれぐらいはできる。もちろん、敵がDFを展開していたら話は別だが。

「残りは五体」

死角へ、死角へと機体を移動させてくる。

なんとも厭らしい連携だ。

「そこッ！」

ドゥーン！ スッ！

「ダメか」

敵の回避率はかなり高い。

やたら無闇に攻撃していたら、逆にこちらが危なくなりそうだ。

先程一体倒せたのは偶然だと思った方が良い。
今はひたすら回避して、敵の隙を窺うしか。

ビュンッ！

「クッ！」

投擲。

錫杖を投げてきやがった。

どうにか身を擦って避ける。

ビュンッ！ ビュンッ！ ビュンッ！ ビュンッ！

「クソッ！ 嘘だろ」

まさかの連続投擲。

これは・・・避けられない。

グサッ！ グサッ！

「アザレア、被害状況を！」

『左肩部、腹部に損傷。左腕は使えないと思った方が良いでしょう』

どうにか五本中の三本は避けられた。

だが、全て避けるのは厳しく、二本も喰らってしまった。
・・・左腕が使えないのは痛いな。

「どうするか・・・」

五方向から時間差を付けての投擲。

そんな攻撃をしてくる奴らが相手だ。

やはりここも高機動戦に持ち込むのがベストかもしれない。

対複数用にアキトさんが編み出したスタイルが高機動戦なのだから。

「付いて来い」

敵の包囲網から離脱する。

陸の上ならともかく宇宙では全方位に離脱可能だ。

たかが五体でその広さはカバーしきれない。

ダッ！

一点突破。

そして、駆け抜ける。

後を追おうとも機動力ではこちらが上だ。

追い付ける訳がない。

ドゥーン！

時折振り返って射撃。

牽制程度にしかならないが、それでいい。

目的は敵の隊列を崩す事にあるのだから。

ドゥーン！ ドゥーン！ ドゥーン！

隊列の崩れにより追ってくる敵の位置がずれる。

今まで殆ど横一列だったのが、今ではバラバラだ。

これでいい。ここで反転すれば……。

「強制的に一对一にできる」

その瞬間は僅かだろう。

それでも、他を気にせず攻撃できるのはこの瞬間しかない。

ドゥーン！

狙いを付けて発射。

よし。これなら……。

カキンッ！

「え？ 弾かれた？」

通常のDFだったら貫けた筈。

ジンシリーズのDFすら貫ける威力だぞ？

それが六連なんか……。

「どついう事だ？」

強固なDFを展開できるようになった？

いや、それなら、他の機体もそうなっている筈だ。

恐らく……強度ではない何らかの秘密がある。

「止むを得ない」

再び後退した後、遺跡から情報をダウンロード。

頭が痛くなるが、理由を知らずにいたらやられてしまう。

「三基のDF発生装置？ そうか。それで……」

漠然とDFを展開するのではない。

弾道に対して的確に展開することで最大限の効果を引き出しているんだ。

これなら強度を強化せずとも耐久力をあげる事ができる。

・・・かなり考えられた防御方法だな。

でも・・・。

「それならそれで話は早い」

決して防御力が上がっている訳じゃないんだ。

強度が上がっていない以上、どれだけ効果を引き出しても限界がある。

その限界を上回る攻撃さえ出来れば・・・。

「貫ける！」

右手に持っていたディストーションブレードをしまう。

そして、両手にグラビティライフルをそれぞれ持ち・・・。

「ドッキング！」

『ツィングラビティライフルモード』

これならいける！

「発射！」

ドゥウウーン！

「うし。二人目撃破」

反転、そして発射。

先程は防がれたが、今度は思った通り敵を貫いた。後はこれを繰り返していけば・・・勝てる！

「地道な作業・・・か。望む所だ。それこそ俺らしいだろ」

どちらが先に集中力を切らすか。勝負はそこに懸かっている。

S I D E K A E D E

「もう！ いい加減にしなさいよ！」

撃つても撃つても敵が出てくる。

何よ？ これ。

何のイジメ？

『カエデさん。提案があるんですが・・・』

「何？ イツキ」

『あの戦艦、恐らくチューリップと一体化した戦艦だと思っんです』

チューリップと一体化？

指し示された戦艦を見る。

・・・なるほど。確かに言われてみればそんな気も・・・。

『あの戦艦がある以上、私達は無限に敵を相手にしなければなりま

せん』

・・・確かに。

実際には無限という訳ではないけど、それに等しいようなもの。終わりが見えてこない。

そういう意味では無限といっても差し支えはないでしょうね。

『このままではジリ貧。それならば、賭けにでるのも一種の手かと』
「あの戦艦を狙う。そういう事？」

『はい。戦艦さえ落せば・・・私達の勝ちです』

「・・・そうね。それぐらいの事をしなければ終わらないわ」

戦艦への攻撃。

激しい迎撃が予想される危険な行為。

でも、その効果は絶大。

戦艦を落とせば・・・勝ったも同然だ。

『行けますよね？ カエデさん』

「誰に言ってるのよ？ 私だってナデシコのパイロットよ」

少なくとも、その為の訓練はしてきた。

連合軍の各方面軍と行った模擬戦。

そこで同じような勝利条件で戦った事がある。

今回はその時の事を参考にやればいいのよ。
できない事じゃない。

『その案、俺達も乗るぜ！』

『私も』

え？

「ヤマダにヒカル？」

『ガイドと何度言えば』

『まあまあ。そんな事より、作戦を練ろうよ』

作戦を練ろうって……。

「貴方達、こっちに来て大丈夫なの？」

ヤマダはテンカワリーダーパイロットとあのキザ男。

ヒカルはリョーコとイズミ。

それぞれ三方向から迫る敵を撃退する為に小隊を組んでいた筈。二人が抜けたらそっちに穴が……。

『大きいのはリョーコが、他のはイズミが対応してるから大丈夫』
『でけえのは撤退した。後はあいつらがどうにかするだろ』

そんな適当な……。

『あいつらが心配ならよお。』

さっさと沈めちまうのがベストなんじゃねえか？』

「え？」

『そうそう。このままじゃジリ貧だつて。』

それだったら皆が耐えている間に決着をつけちゃった方がいいよ』
『私も同意見です。ここは彼らを信じて、攻めに転じるべきだと』

……そこまで言われたら否定できないじゃない。

「もう皆して……。分かったわ。一刻も早く終わらせましょう』
『そう来なくちゃ』

『さつさと終わらせて楽にしてやるっぜ』

「ええ！」

信じるわよ、皆。

『決めなくちゃならねえのは誰が攻め、誰が守るか、だな』

「そうね」

性格的に考えると・・・。

「ヤマダとヒカルが攻め、私とイツキが守りつて所？」

これが妥当だと思う。

『確かに。でも、それには、というか、全てにおいて問題があります』

「問題？」

『ええ。それは敵戦艦までの距離です』

敵戦艦までの距離・・・。

『稼働可能距離の範囲外つて事か？』

『はい。それを伸ばす為にはニバリスを展開してもらつ必要があります』

『だったら展開すればいいじゃねえか』

『そう簡単にはいかないよ。ニバリスを展開したら、それも守らないといけないし』

そう、それが問題なのよね。

ニバリスによって稼働限界距離が伸びるのは良い。

でも、それによって動きが制限されてしまうのであれば、それは良
ろしくない。

わざわざ必要な人手を増やすような真似をするのは愚かだもの、こ
の状況なら尚更。

『フェザンツに守らせれるのはどうかな?』

『いえ。それは厳しいかと。』

今、フェザンツを他に回してしまうと戦線が破綻してしまいます
「そうね。今、戦線を保ってられるのはフェザンツのお蔭だもの」

ここでフェザンツまで抜け出されたら維持なんかできっこない。
やっぱり私達でなんとかするしかないみたいね。

『それならいつそ攻めを俺だけにして他は守りに回るか?』

『いやいや、流石のガイ君でもそれは厳しいんじゃない?』

『でもよお、それぐらいしか手はねえじゃねえか』

・・・ううん。それ以外にもある。

「私が残るわ」

『え?』

「だから、私が一人で残ってここを守るって言ってるの」

他の場所は一人、もしくは二人で戦線を維持しているのよ?
それなら、それをすればいいだけじゃない。

『一人でですか?』

「ええ。やってできない事じゃないわ」

『しかし』

「それにね、対集団戦だったら私の機体が一番なのよ」

物量には物量。

当たり前じゃない。

何の為に私がいると思ってるの？

「こついつ時こそ私の出番。そうは思わない？」

『それはそうですが・・・』

分かり切ってるなら拒む必要はないじゃない。

「それにね、私だけに負担がかかる訳ではないのよ」

『どういう意味？』

『何か考えがあるのか？』

「ええ」

足りない頭で必死に考えたんだけど・・・。

「イツキ。もしかしたら、貴方に一番負担がかかるかもしれないわ」
『私に・・・ですか？ 望む所です』

「頼もしいわね。イツキ、貴方にはニバリスの護衛を任せたいの、一人で」

『フェザンツを守備に割く事はできない。だから、私一人でやる訳ですね』

「そう。そして、ヤマダが攻め込む事で目立たせる。

その隙を隠れて忍び寄っていたヒカルが撃つ。これでどう？」

せつかくの特殊隠密仕様。使わないのは損でしょ？

『一回限りですが・・・かなり有効かと』

「ええ。一回でも構わないわ。後は正面から潰すもの」

まずは一つ。

それだけでも戦況は大きく変わるもの。

少なくともナデシコ勢の戦力分散は避けられる。

「敵の増援さえ妨げられれば・・・勝機は見える筈よ」

『おっしゃー！ いっちょやってやるうじゃねえか。それとガイだ。覚えておけ』

『ガイ君。しつこい男は嫌われるよ』

『でもよお、何度言っても直す気がなさそうだし』

直す気がないもの。

『まあまあ。うん。私も賛成だよ。ま、美味しい所をいただく事になっちゃうけど』

『へッ！ 別に構わねえよ。俺は俺で勝ちたいんじゃない。ナデシコで勝ちたいんだ』

『良いこと言っ！』

『まあな』

・・・話は終わったかしら。

『・・・なんか冷たい視線を感じるんだが・・・』

『うん。なんか怖いね』

コホンッ。

「作戦は一刻を争うわ。早速始めましょう」

『おう。ヒカル。うまく隠れるよ』

『任せといて。お手柄横取りしちゃうから』

『それでは私はニバリスの要請を。カエデさん。後は任せました』
「任せて」

『頼むよ、カエデ』

「ええ」

『無理だけはすんなよ。できるだけ早く終わらせるから』

「・・・ガイに心配されるなんて・・・。明日は雨かしら？」

『てめえ、俺が心配してやれば・・・って、あれ？ お前、さっき・・・』

「貴方に懸かっているわ。頼むわよ、ガイ」

『へッ。そうまで言われたらやるしかねえな。まあ、見てる。即行で潰してきてやる』

頼むわね、皆。

「気合入れなさい、カエデ」

自ら志願したんだ。

どれだけ苦しかろうと挫けたりなんて・・・諦めたりなんてしない。
絶対に守り切ってみせる！

「かかってきなさい！ 一匹残らず撃ち抜いてみせるわ！」

見渡す限り、敵、敵、敵。

ふふっ。上等じゃない。

「ロックオン！ ファイヤー！」

負けないわ、何があったって、絶対に！

SIDE OUT

「ここを守るのは僕一人だけかい？ 冷たいねえ、皆」

第三百二十四話（後書き）

まえがきにも書きましたが、少々のお待ちを。
頑張りますので、これからも応援よろしく願います。

第三百二十五話（前書き）

大変お待たせしました！

ようやく環境が整いましたので、投稿を再開します。

なお、完結させると豪語した身ですが、

忙しい日々を送り、あまり書けませんでした。

大変申し訳ありません。

今後もマイペースに執筆していきますので、

暖かい目で見守ってくださいると幸いです。

それでは、どうぞ！

第三百二十五話

S I D E M I N A T O

「アキトさん！」

夜天光、だったかしら。

その機体と互いに一步も譲らない戦いを繰り広げるアドニス殲滅射撃仕様。

アキト君にとっては・・・因縁の相手。

「ルリ。落ち着いて」

「ですが！」

「大丈夫。アキトはもう・・・乗り越えたから」

「・・・ラピス」

ルリルリとラピラピ。

アキト君を想うからこそ、今の状況には人一倍思う所があるんでしようね。

『おい、艦長。保護した木連の奴らはどうすればいいんだ？』

ウリバタケさんからの通信。

どうやら無事に二人を保護できたみたい。

とりあえず一安心といった所かしら。

「空いている個室へ案内してあげてください」
『・・・同室にか？ それとも、別々にか？』
「別々をお願いします」

あえて分けるっていうのね。

・・・きつと艦長なりに考えがあるんだわ。

『了解した。監視は？』

「ゴートさん。保安班から何人かお願いできますか？」

「了解した。すぐに手配しよう」

「お願いします」

「拘束は？」

「なしで」

「・・・危険ではないのか？」

「大丈夫ですよ。木連人は正々堂々が信条ですから。

本来なら、監視も付けないつもりでしたが、一応、念の為に」

「・・・分かった」

「ウリバタケさん。以上です。すぐに迎えを寄越しますので」

『うし。分かった。それまでは若い奴らに見させておくよ。』

しっかし、相変わらず大胆な奴だな、艦長。

俺が知ってる話なら、こういう時は大抵独房に放り込んでおくんだが』

「捕虜といえども礼儀は通すもの。軍人とはそうあるべきだと思います」

『へッ。そいつは確かに軍人らしい軍人だな』

男臭い笑みを浮かべるウリバタケさん。

思わずその笑みを釣られてニヤリと笑ってしまう。

「艦長らしい判断よね」

なんか誇り高いつて感じでカッコいい。
艦長の判断、私も同感よ。

「艦長。彼らはいつ解放するんだ？」

「戦闘終了後です。今は戦闘に集中しましょう。彼らに話を聞くのはその後です」

「了解した」

そうよね。まずは目の前の事をさっさと片付けなくちゃ。

『ブリッジ、聞こえますか？』

ん？ イツキちゃん？

「何でしょうか？ イツキさん」

『艦長。突然申し訳ありません。ニバリスの出撃を要請したいのですが・・・』

「ニバリスを？ どうしてですか？」

『今から敵戦艦へ奇襲を仕掛けようと思うのです。ですが、その為には距離が足らず・・・』

「ニバリスが必要になると？」

『はい。敵艦は私達が必ず仕留めてみせます。ですので、フェザンは引き続きナデシコの援護を』

「何を考えている！ 艦長の指示もなしに勝手な事を！ 独断専行だぞ！ 艦長の指示を」

「分かりました。ラピスちゃん。ニバリスをお願い」

「了解」

「艦長！」

「現場の判断を信じます。ゴートさんは彼らの支援を」
「・・・了解した」

ゴートさんの意見に対して毅然とした態度で現場を信じると述べる。こつこつ所は本当に艦長として優れている所だと思つわ。

「詳しい事はゴートさんと話し合ってください。自由に動いて構いません」

『了解。ありがとうございます。艦長』

「こちらこそ、お願いしますね」

確かに策が成功すれば、この膠着した状況を打破できる。お願いね、イツキちゃん達。

「残る問題は・・・コウキ君ね」

六対一という圧倒的不利の状況下で戦うコウキ君。

しかも、既に攻撃を受けていて、左腕が使えないという状況。

・・・普通だったらピンチだつて思つんでしょうけど。

何故かしら。

不思議と負ける気がしないのよね。

「セレセレ。貴方の目からはどう見える？ コウキ君の今の状況」

「・・・一見厳しいですが、このまま行けば・・・勝てます」

やっぱりセレセレもそう思つてるのね。

何というか、静かな気迫があるって感じなのよね。

「・・・負ける気がしないわ」

「それは多分、無駄がないからです」

「え？」

この声は……。

「だから、目立たない、でも、強い」

ジュン君。

「コウキの強さはそこにあると思うんです」

「どういう事？」

どうしてコウキ君がこんなにも強く感じるのか。
それが貴方には分かるの？

「テンカワのようにアクロバットな動きができる訳じゃない。
ガイヤスバルさんのように近接攻撃の腕がある訳じゃない。

マキさんのように射撃攻撃の技能が高い訳じゃない。

アマノさんのように意外性や器用さを持ち合わせている訳じゃない。
い。

カザマさんのように高い支援能力がある訳でもなく、
アカツキさんのように飄々とした冷静さを持っている訳じゃない」

他のナデシコパイロットと比べるジュン君。

えっと……何が言いたいのかわからないんだけど……。

「どういう意味？ ジュン君」

艦長が問いかける。

気付けばブリッジの誰もがジュン君の言葉を聞いていた。

……日頃しゃべらないから物珍しいという気持ちがあるのかも。

「ナデシコのパイロットにはそれぞれ特徴があるって事だよ。そして、その特徴的な部分が圧倒的だからこそエースとして君臨できる。」

でも、そう考えると、コウキにはこれといって特筆する事はないに等しいんだ」

コウキ君の特徴……。

格闘戦が圧倒的に強い訳じゃない。

射撃戦が圧倒的に強い訳じゃない。

高機動戦だってアキト君に比べたら一步劣る。

確かにコウキ君にはこれ！ といったものがないように感じる。あえて言うなら、ピンチに強いって事かしら。

「カエデちゃんは？」

「成長スピード。それに、運の良さって所かな。勘って言うていいかもしれないね」

まあ、それでもやっぱり他のパイロットに比べたら数段劣るけどね。そう一言付け足すジユン君。

そればかりは経験の差だし、仕方ないと思うわ。

「キリシマさんとはかく、それなのにコウキが彼らと肩を並べて

戦えるのは……」

「……戦えるのは？」

「ひとえにコウキがひたすら効率的だからだと思っんだ」

効率。

それがコウキ君の強さの秘密？

「効率的？」

「そう、効率さ。コウキの動きには無駄がない。

その行動の一つ一つに意味があつて、きちんと考えて動いている」

一つ一つの動きに意味がある。

・・・言われてみればそうかもしれない。

「一見無駄な攻撃のように感じる事もある。

でも、実際は次を着実に当てる為の布石だったりするんだ」

「それって・・・敵に対する分析力が優れているって事かな？」

「そうともいう。コウキはどう動いたら敵がどう動くかを分析して動いている」

情報処理能力が高いコウキ君らしい戦い方よね、それって。

相手の動きを分析して行動を先読み。

そして、その上で、最も相手に合った攻撃をする。

言わば、相手次第で臨機応変に戦闘パターンを変化させているって事ね。

「言い忘れてたけど、コウキは決して技能が低い訳じゃないんだ。

僕の勝手な判断だけど、それぞれの分野で戦わせても全て平均以上にはなると思う」

「ナデシコパイロットの平均って事よね？ 副艦長さん」

「はい。その通りです」

ナデシコパイロットの平均・・・。

それって普通に考えれば凄い事よね？

「コウキはどの分野でも一位になる事はない。

でも、二位、三位にはなれる。それがコウキだ」

「それじゃあ万能さがあるって思っているんじゃないの？」
「そうだけど、万能なだけでは勝てない。これといった武器がないとね」

同じ万能型でもイツキちゃんには支援能力があるし、ヒカルちゃん
は器用さがある。

うん、確かにただ万能ってだけじゃないわね。

コウキ君でいえば、それが効率って事なのかしら？

「コウキの強さはその偏りのない高い次元での能力を最大限活かしている事にある」

「・・・偏りのない」

「・・・高い次元での能力」

万能なだけじゃない。

その万能さを『最大限に活かす動き』をしているという訳ね。

「言い換えるなら弱点がないんだ。どのレンジにも的確に対応できる」

「弱点がない・・・」

それなら強いに決まっている。

どうやって戦っても隙が見えないんだもの。

「始めは敵に合わせて攻撃スタイルを決定しているんだ。

でも、気付けばコウキの土俵で戦わせられている。

誘導が巧みなんだよ、コウキは。

弱点がないくせに、それでも、相手側の苦手とする戦いへと誘導するんだ。

自分より強い相手であろうと自分より下まで引き摺り落とす。強

いに決まってるよ」

相手にとって苦手とするレンジもコウキ君にとっては苦手じゃない。コウキ君は敵を誘導する事で常に自分が優位に立てるよう動いているのね。

「自分優位の戦いだから目立たない。

当たり前だよ。勝てる相手としか戦わないんだから」

「そっか。それでマエヤマさんは目立たないんだ」

・・・失礼って分かってる？ 艦長。

コウキ君に代わって私が怒ってあげようかしら。

「でも、それを言葉通りに受け取ったら駄目だよ、ユリカ」

「え？」

「勝てる相手としか戦わない人の事は誰だって臆病者だって思うでしょ？」

「それはまあ、うん」

「でも、コウキは違うんだ。コウキは決して臆病者なんかじゃない。

普通にやったら勝てない相手も戦い方で勝てる相手にしちゃうんだから」

「あ・・・」

「本当の戦上手は目立たない。昔の偉い軍略家はこう言ったそうだよ。

コウキはそれを具現化している人間なんじゃないかな。少なくとも僕はそう思うよ」

勝てる相手に勝つ事は当たり前。

そりゃあどれだけ戦果を残してきても目立たない訳よ。

だって、それは当たり前前の事を繰り返してきただけなんだもの。

でもさ、私はこうも思うのよ。
当たり前前事を当たり前前にできるのも一種の才能だって。
それもとびっきりのね。

「状況判断に優れているからこそどこまでも効率的に動ける。
どうやって動けばいいのか、どうすれば自分優位に戦えるか。
考えているのか、感じているのかは分からないけど、コウキはそ
れを理解しているんだ」

情報処理が早いってだけじゃ片付けられない。

これはきつと・・・コウキ君の努力の証。

アキト君の下で血反吐を吐きながら訓練を繰り返し続けた。
習った木連式柔だつて毎日きちんと修練している。

・・・努力家なのよ、彼は。

目指すべき目標があつて、彼はそれに向かって必死に走り続けてい
るだけ。

色々辛い事があつたと思う。

色々苦しい事があつたと思う。

それでも彼は立ち続けた、屈する事なく。

・・・挫折が人を強くするって本当なのね。

コウキ君が強いのは・・・足掻き続けたからよ。

ひたすら、諦める事なくね。

きつとその軌跡の積み重ねが今のコウキ君の姿なんだと思うわ。

「そっか。それがマエヤマさんの強さの秘密」

「僕の勝手な推測なんだけどね」

「ねえ、ジユン君はどうしてその事に気付いたの？」

それは私も気になる。

誰もそんな事、考えもしなかったと思うし。

「始めは興味本位だったんだ。誰がナデシコパイロットで一番優れているのかって」

「アキトに決まってるよ。なんたってリーダーパイロットなんだから」

「うん。僕もそう思ってたんだ。実際、シミュレーションでアキトは不敗だったしね」

間違いなく、パイロットとしての腕前ならアキト君が最強でしょうね。

それはコウキ君自身が認めていたし、他のパイロットとも共通の認識だった。

「でも、違ったんだ。ユリカ。パイロットとして優れていると判断できるのは何？」

「うん。それならやっぱり撃破数とかじゃないかな？」

「うん。そうだろうね。それじゃあ、ナデシコパイロットでは誰が一番だと思う？」

「それはやっぱりアキトじゃないの？」

「だよ。僕もそう思った。でも、実際は違うんだ」

「・・・コウキさんですか？」

「そう、セレスちゃんの言った通り。コウキが一番撃破数が多いんだよ」

どれだけ腕が良くても戦いで結果を残さなければ意味がない。

逆に言えば、どれだけ腕で劣っていようと結果さえ残せばより優れているという事。

それを正論とするならば・・・。

「もちろん、相性や武器の違いなんかもあると思う。」

でも、数だけで言うなら、間違いなくナデシコのエースパイロットはコウキなんだ」

コウキ君が・・・エースパイロット。

エース級ばかりが揃うナデシコの中で最も戦果を残している。

「・・・知らなかった。私、そんな事、全然気付かなかったよ」

「仕方がないさ。僕みたいに何かきっかけがあって調べないと気付くはしないよ。」

だって、ナデシコの誰もがアキトこそが最強で一番活躍してるって思ってたんだから」

先入観、とはちょっと違うかもしれないけど、そういう固定概念があつた事は確か。

あれだけ派手な行動をしていて、しかも強いんだもの。

誰だってアキト君が一番活躍してるって思うわ。

でも、数だけで言うなら、コウキ君が一番活躍してる。

しかし、その事には誰も気付いてくれない。

なんか報われないわね、コウキ君。

・・・うつん、違うか。

「きつとコウキ君はそんな事どうでもいいんでしょうね」

誰も気付いてくれなくたって構わない。

だって、コウキ君は目立つ為に戦っている訳じゃないから。

彼はひたすらに・・・平和を願っているだけ。

名声なんてむしろいらなんて思ってるかも。

「スポットライトを浴びなくても頑張れる主役」

コウキ君を表すならこんな言葉かしら。
矛盾だらけの言葉だけど、なんかビシッと当て嵌まるのよね。

「彼自身、どこか変わってるし」

誰だって自己顕示欲があると思うの。

それは私だってそうだし、副長の立場に甘んじているジユン君だってそう。

何かをすればそれを認めて欲しいって思うのは当然の事だわ。

それは、名声を得るのもいい。報酬を得るのだっていい。

それが認めてもらって事だから。

「でも、コウキ君は求めない」

名声や報酬、そんな事では叶えられない夢を追っているから。

そういう意味では誰よりも強欲なのかもしれないわね。

名声なんかじゃ満足できない。

報酬なんかじゃ満足できない。

己が欲しいもの以外には興味がない。

そういう事だもの。

「平穩。コウキ君が渴望して止まないもの」

平穩を求める為に戦う。

この矛盾に苦しみながら、コウキ君は戦ってきた。

だから、私は報われて欲しいって思うの。

名声じゃない、報酬なんかじゃもつとない。

ただ彼に平穩を与えてあげて欲しいって。

それがきつとコウキ君の働きに対する報いだから。

「いつも危ない時はコウキに助けられてきた。正にコウキこそが縁の下の力持ちだよ」

「うん。改めて、マエヤマさんがナデシコにいてくれて良かったっ
て思うよ」

「コウキさんあつてのナデシコです」

「うん。私もそう思う」

「・・・コウキさんがいないナデシコはナデシコじゃありません」

「うむ。コウキもナデシコが誇るパイロットの一人だ」

「彼のお蔭でかなりの費用を削減させて頂いてますからな。彼がいなければ困ります」

「マエヤマさんには何度も助けてもらいました」

・・・その言葉だけで充分よ。

仲間の声こそがコウキ君にとって最大のご褒美だもの。

過去、仲間を誤射しかけてしまった事から、

コウキ君は仲間内の評価を気にしていた節がある。

だから、様々な無茶を当然のように引き受けていたんだと思うわ。

でも、今はもうそんな事がなかったかのように皆が信頼してくれている。

今の言葉をコウキ君に伝えてあげたい。

きつとコウキ君、凄く喜ぶから。

「頑張つて・・・ナデシコの影のエースさん」

S I D E O U T

「ロックオン・・・ショット！」

バンッ！ バンッ！ バンッ！

視界一面に広がる敵。

その全てに照準を合わせ・・・放つ！

「近付けさせたら駄目。この距離をキープしなくちゃ」

自覚はある、接近戦は駄目だった。

だから、徹底的に射撃戦を訓練した。

今なら、ケイゴだって捉えられる自信がある。

「ホント、嫌になっちゃうわよね」

ダンッ！ ダンッ！ ダンッ！ ダンッ！ ダンッ！

私の周りのパイロットは誰もが皆、凄腕。

どれだけ訓練したって追い付ける気がしない。

「・・・コウキだってそうよ」

口ではコウキに勝てるだなんて言ったわ。

でもね、本当はそんな事ちっとも思ってたの。

素人に毛が生えた程度の私はずっと戦ってきたコウキに勝てる筈がない。

そんな事、私にだって分かってた。

でも、それを認めたら、私がここにいる意味がないんじゃないかっ

て……。

だから、意地を張って、コウキ程度には負けないって模擬戦を挑んだ。

……結果は敗北。

傷一つ与える事なく負けてしまった。

当然、悔しかったわよ。

でも、同時に、ああ、やっぱりって思った。

どれだけ練習したって経験の差は埋められないんだって。

今から必死に練習した所で皆と肩を並べて戦う事なんてできない。ましてや、ケイゴを守る事なんて……。

「でも……」

バンツ！ ダンツ！

そんな時、あいつが背中を押ししてくれた。

私の我が侂の犠牲になったあいつが。

突然シミュレーター室に連れて来られ……。

「ケイゴと戦えだって」

胸を借りるつもりで戦ってみる。

ケイゴさんを捉える事ができれば……誰だって捉えられるから。

そんな事、言ってたわよね。

でも……

「強くなれる。そう思った」

どうすればいいのかって悩んだ。

どうすれば強くなれるのかって。

あいつはその方法を示してくれたの。

「それから、ひたすら戦ったわよね、ケイゴと」

ダンッ！ バンッ！ ダンッ！ バンッ！

何度も何度も。

空いた時間を見付ける度にシミュレーター室に足を運んで。最初はあまりにも惨めだった。

当たる事なんてなく、掠る事だつて珍しいぐらい。でも、諦めはしなかった。

皆と肩を並べて戦いたかったから。

ケイゴの隣で互いに守り、守られたかったから。

・・・あいつの期待に応えたかったから。

「私には武器がなかった。皆より優れてる点なんてIFSの扱いに慣れてるって事ぐらい」

物心付いた時から使っていたIFS。

それがなくちゃ生活できなかったし、それを使う事が当然だった。だから、イメージ、物事を思い浮かべる事だけは負けない自信がある。

「思い浮かべるのはいつだって敵を貫いている自分」

外れる事なんて一切想像しなかった。

ひたすら、敵を貫く自分を想像し、戦った。

「それを繰り返している内にイメージが現実の動きと合ってきたの
よ」

全てが思い通りに動くっていうのかしら。

あの時、私の見ていた世界は全て想像した通りに動いた。

「それからだったわよね。なんか危険とかが察知できるようになったのって」

不思議な感覚だった。

まるで自分が自分じゃないみたいなの。

私が宇宙で宇宙が私で。

とにかく、言葉じゃ表せない感覚だったわ。

「あいつには感謝してる、本当に」

バンツ！ バンツ！ バンツ！ バンツ！ バンツ！

今、ここにいるのは全てあいつのお蔭。

それは紛れもない真実。

あいつは・・・私の為にどれだけ苦労を重ねてきたんだろう。

「あいつってバカよね」

彼女がいるのに他の女の子に優しくするなんて・・・。

彼女が大らかな人だから何にもないけど、こじれるわよ、普通。本当に・・・バカ。

「ケイゴに会わなかったらどうなってたんだろう？」

私があいつに、コウキに恋をしていたっていうのは本当。

認めたくないけどね。

独りぼつちだった私を助けてくれた。

危険な目に遭わされそうになっていた私を救ってくれた。

それってまるで王子様みたいじゃない？

好きになったっておかしくないわよ。

でも、あいつには既に恋人がいて・・・。

とつくの昔から私につける隙なんてなかった。

思えばあれが初めてかも、振られたのって。

まあ、別に告白した訳でもなんでもないんだけどさ。

「そういえば、ケイゴに出会えたのもコウキのお蔭なのよね」

ダンッ！

突然コウキに連れられて行った地球連合軍基地。

私にとってはもう一つの仇。

火星を見捨てて逃げた連合軍になんて行きたくなかった。

でも、私達が出逢ったのはそこだったのよね、ケイゴ。

知らぬ間に距離が近付いていて、気付けば恋に落ちていた。

軽い女って思われたかな？

・・・なんだか不安になってきた。

「・・・・・・・・」

そ、そんな事ないわよね、うん。

「コホンッ」

それから、色々な事があった。

ケイゴが死んで悲しみに暮れて。

そう思ってたなら、実は生きてて、しかも木連人だったりして。

ケイゴの従者とかいう嫌な女にも会ったし、実際に木連にも行った。地球の人達と戦って自分の未熟さを痛い程に味わって。

・・・地球の人々の想いを聞いた。

濃い時間だったと思う、本当に。

そして、今、私達は決着をつけるべく戦っている。

色んな感情、様々な陰謀が絡み合って、単純に勝つ負けるじゃなくなってるけど・・・。

「私は私の道を進むだけよ！」

ダダダダダダダダン！

難しい事は分からない。

でも、和平を結ぶ事で幸せになれる人が増えるって事は分かる。戦いの理由なんて、それだけで十分よ。

「全機体ロックオン。全砲門解放。フルチャージ」

立ち塞がる敵は全て破壊する。

貴方達が悪いのよ、私の前に立つから。

『あ。カ、カエデちゃん！ ちょっと待 』

「ファイヤ！」

ダダダダダダダダン！ ババババババババン！

一面に広がる爆発の波。

さあ、これでどう？

「・・・あら？ やるじゃない」

爆発の余波が収まる。

そこには巨大な身体に厚い装甲。
旧式のマシンが立っていた。

・・・たった一体だけで。

「旧式の割りには、ね。でも、もう終わりよ」

ロックオン。ミサイルを構える。

さてっとこれでおしまい。

カッソッ。

「・・・え？」

た、弾切れ？

う、嘘でしょ!？

「ア、アザレア!」

『だから止めたのに。思い切りが良過ぎるんだよ、カエデちゃん
は』

「そ、それは・・・ってそんな事言ってる場合じゃないわよ!」

武器がなつきやいくら旧式でも　。

「き、来たあああ!」

『逃げてえええ! カエデちゃああん!』

追うマシン、追われる私。

どこのあ　鬼よ。

ガゴンッ！

『おっしやあ！』

巨大な砲のような武器から杭？みたいなものが飛び出し、自機の二倍もの大きさはあるうマジンを一撃で貫き、粉碎する。
・・・なんて凄い攻撃力。

接近武器の攻撃力でいえば随一かも。

「リョーコ」

『おお。無事か、カエデ』

リョーコが離脱した後、マジンは爆発。

とりあえず、もう周囲に敵影はないようね。
ひとまず安心して所かしら。

「ええ。無事よ、リョーコ。それよりも、その武器って・・・」

『おう。本邦初公開。杭が出る出るパイルバンカーだぜ！』

「杭が出る出る？」

『おうよー！』

パイルバンカー。

それがあの武器の名前なのね。

『正に一撃必殺だぜ』

「リョーコの好きそつな武器よね」

『へへっ。まあな』

こと格闘武器に関してはガイと通ずるものがあるリョーコでした、
チャンチャン。

「って終わっちゃ駄目！ 誰よ！？ その後ろのは！」
「ああ。こいつは・・・」

S I D E O U T

第三百二十五話（後書き）

影の薄い男、ジュンの独白の回でした。

複雑化してきた今の状況、今後どうなっていくのか。

うまくまとめられたら嬉しいです。

第三百三十六話（前書き）

も、申し訳ございません！

気付けばこんな時間に・・・。

ネット環境が整い、

よし、次は無線ルーターだとやっていたら時間が・・・。

それにしても、やっぱり無線だと通信速度が下がるなあ・・・。

素直に有線にした方がいいのだろうか。

お待たせしました。

第三百三十六話

「クッ」

キンッ！ キンッ！

流石に相手もそこまで馬鹿じゃないか。

六機の内、三機まではどうにか撃破に成功した。

だけど、残り三機が辛い。

離脱して距離を開けての攻撃を繰り返しても瞬時に対応されてしま
うし。

牽制した所で隊列を崩さずに攻撃を仕掛けてくるから牽制の意味が
ない。

さて・・・どうするか。

『三方より攻め立てる。 続け』

『『応！』』

隊列を崩し、それぞれ広がっていく敵達。

何かしらの合図があったに違いない。

恐らく・・・複数方面からの同時攻撃。

もちろん、受けてやる理由なんてないよな。

『キエ』

「ハアアア！」

ドゥーン！

三方向に分かれ、攻撃してくる瞬間を狙う。攻撃されるからって同じ場所にてやる必要はないだろ？それにな……。

「攻撃する前に攻撃しちゃいけないなんて誰が決めた？」

本当のデュエルにターンなんてないんだよ。

「さあ、次は誰だ？」

中距離から常に隙を窺っている奴が一人。背後に回ろう、回ろうと企む奴が一人。さっきの奴は正面から攻撃してくる奴だった。狙うなら……後者か。

ドゥーン！ ドゥーン！

まずは牽制。

サッ。サッ。

「ま、避けるだろうね」

むしろ、それぐらいでやられるようなら俺が困る。北辰と六人衆は和平に対する最大の敵と認識しているんだ。最後の敵は最後の敵らしく、強大な敵として存在してくれ。

そうでなければ、乗り越えるべく目標となりえないだろ？
お前達を倒してこそ和平が成るのだと俺は考えているのだから。
劇場版的に考えて。

「アザレア。俺の判断を待つ必要はない。いざとなったら好きに動かしてくれ」

『マスター、それって・・・』

「俺の隙が俺達の隙じゃないって事。教えてやろうじゃないか」
『・・・はい！ マイマスター』

現在、左腕は潰れている。

動かす事はできるが、戦闘となると厳しい状況だ。

その為、左手はグラビティライフルを放つ時に右腕の補助として扱っている程度。

実質的に右腕一本で戦っていると同じ。

やり辛いといえはやり辛いけど・・・だからなんだって話。

いつでも万全の状態で戦えるだなんて、そんな戦争を甘くは見てないよ。

左腕が使えないとか右腕が使えないとか、色々な状況でのシミュレーションは積んできた。

後はその成果を発揮すればいいまでだ。

「片手が何だ。俺は両腕がない状態での戦闘経験も積んでいる」

不具合はない。

それに、俺には頼れる相棒がいるからな。

片手なんてハンデにもならないさ。

「来るぞッ！」

『はいー！』

・・・やはり残り二体ともなると慎重だな。
でも、ここぞという時には積極的に攻勢にでる筈。
狙いは・・・そこだ。

ドゥーン！

迫り来るミサイルを破壊する。
そんな単調な攻撃など喰らいはしない。

「けど、あえて喰らってやるのもいいかもな」

再び迫りくるミサイル。

今度はあえて喰らってやる。

もちろん、表面にDFを展開してだけど。

「来い、来い」

隙を狙おうとしている奴がこのチャンスを逃す筈がない。

『マスター！ 後方より敵が接近！』

「釣れた」

煙幕に隠れるように攻撃を繰り返してくる敵。

気付かれなければ良い攻撃だったかもな。

だが、気付かれちまえば、不用意に近付いた軽率な攻撃に過ぎないんだよ。

「ハア！」

振り返ると同時に回し蹴り。
敵が一撃入れるよりも早く一撃をぶちかます。

『隙あり！』

まあ、そうくるだろうな。

味方を犠牲にしても攻撃してくるなんて事は分かった。
でも、ま、今の俺にとっては微塵も慌てる必要はなかったり。

ドゥーン！

『ミッションコンプリートです。マスター』

背後からミサイルを放ってきた敵。

それに対して、後方を確認することなく脇の下にグラビティライフ
ルを通し・・・撃つ。

漆黒の光線はミサイルを貫き、そして、敵機をも貫いた。

狙ってくるのが背後だって分かっていたればそれは隙でもなんでもない
んだよ。

ま、やったのは俺じゃなくてアザレアなんだけどね。

「信じてたよ、アザレア」

『マスターの意図、分かりましたので』

「それでこそ、俺の相棒だ」

『マスター・・・』

俺は文字通り一人で戦っているんじゃない。

頼もしいパートナー、アザレアがいる。

お前達の敗因はそれを知らなかった事、ただそれだけだ。

「おし。これで残るはアキトさんの北辰だけ」

『・・・コウキさん！ 右手を左肩に！』

「え？ セレスちゃ」

『笑止。戦場で気を抜いていいのは死を迎えた時のみなり』

グサツ！

『又ツ。仕留めそこなっただか』

「なッ！」

右腕に突き刺さる見覚えのある錫杖。

そして、その先には・・・真紅の機体、夜天光がいた。

『マ、マスター！』

「大丈夫だ。セレスちゃんのお蔭で直撃はなんとか防げた。被害は？」

『右腕伝達経路断裂。右腕機能停止。両腕が使えない今、これ以上の戦闘は危険です』

そうか。

でも、セレス嬢の声がなければ即死でもおかしくなかったんだ。本当にセレス嬢、様様だな。

「ありがとう、セレスちゃん、お蔭で助か」

『・・・ッ！ 後ろです！』

クッ！

『・・・すばしっこいハエめが』

再び背後からの奇襲。

自由自在にボソソジャンプを操れる。

それがこんなにも驚異的な事だとは……。

しかし、それにしたって、どうして北辰がここに？

「お前はアクトさんと戦っていた筈だろ？ どうしてここに……」

『死神など余興に過ぎぬわ。私の狙いは初めから貴様よ』

「俺が？」

北辰、もつと言え、草壁に警戒されていたというのか？

何故だ？ 俺はそんな大それた事をした覚えは……。

『コウキ！』

「……アクトさん」

北辰登場から数秒後にアクトさんが現れる。

……片が付いた訳でもないのに俺を狙ってくるとは……。

それほど北辰の中で俺は重要人物だともいうのか？

『来たか、死神』

『北辰！ 貴様、初めからコウキを。それでいつまでも守勢のまま・

……』

『さよう。貴様との戦いなど偽りに過ぎんわ』

俺が隙を見せるのを待っていた？

そして、その為だけにアクトさんと戦っていたというのか？
意味が分からないぞ。

木連が最も警戒すべき相手はアクトさんの筈なのに……

『マエヤマ・コウキ。貴様こそが我らの理想最大の障害』

「俺が？ アキトさんじゃないのか？」

警戒されるような事をしてきた覚えはないぞ？

『確かにテンカワ・アキトもまた大きな障害となろう。』

だが、あくまでそれは個人のレベルに過ぎん。

被害はであるが、本質的には大した障害とはならないのだ』

「個人のレベル？」

『それに比べ、貴様は戦略レベルでの障害と成り得る。』

草壁中将はそう悟り、我に命令した。即刻貴様を抹殺しろと』

・・・完全にロックオン。

マジっすか？

俺の平穩が音をたてて崩れ去っていく・・・。

『地球連合軍の資料。そこにはよく貴様の名前が出てくる。主にC』

ASの事だな。

貴様さえいなければ、地球は既に敗戦国となっており、木連が支配していたものを』

「馬鹿なッ！ 俺が連合軍でしてきた事が表にでる筈がない！」

CASの事だつてミスマル司令にお願いし緘口令を敷いた。

教官としての記録はあつても開発者や生産者としての記録は一切ない筈・・・。

『ふつ。地球には我らに協力する物好きもいるのだよ』

クリムゾン？ それとも、地球連合軍元最高司令官？

クソッ！ どちらにしたって性質が悪い！

まさか、味方側の人間に売られる事になるとはな・・・。

「・・・俺を殺す為に味方を犠牲にしたというのか？」

北辰六人衆。

道理でおかしいと思っただ。

北辰は劇場版から考えても一対複数なんてまるでなんとも思っ
てない奴。

むしろ、勝つ為なら手段を選ばないような奴だ。

そんな奴がアキトさん一人に一人で立ち向かう訳がない。

戦力バランス的に考えても、一人や二人、アキトさんへの攻撃要因にするのが自然。

それにも拘わらず六人全てを俺に差し向けた来た。

これは・・・明らかにアキトさんより俺を意識していた証拠。

「たかが六人で貴様を殺せるのであれば安いものだ。

貴様の影響で既に万以上の人間が死んでいるのだからな」

「万？」

な、何を言っているんだ？

俺が・・・一万を超える人間を殺している？

「貴様がC A Sを開発などせねば戦争は激化してはいなかっただろ
う。」

木連はもちろん、地球でも貴様のせいで死んだものは数多くいる」

「俺が・・・地球人を殺している？」

「コウキ！ 聞くな！ 戯言だ！」

「戯言ではない。我は真実を告げている。

C A Sがなければ戦争の結末はともかく、

今以上の戦死者を出さずに終わっていたらうな」

・・・ああ、そうだな。

そうかもしれない。

いや、紛れもなくそうなんだろう。

そんな事、俺にだって分かってた。

「ああ。分かってたさ」

『自覚があつたか。ククツ。真の意味での死神は誰なのだろうな？』

後悔がない訳じゃない。

辛い訳でも、苦しくない訳でもないさ。

でもな・・・。

「言いたければ言ってる。俺は死神と呼ばれようと構わない。

エゴを貫き、その結果、死が生まれたのならば、その全てを背負ってやる」

もう立ち止まらないって。

そう、決めたんだよ。

なんと言われようと俺の意思を貫き続けると。

『なんとという醜き姿。貴様はエゴの塊だな。犠牲になった者達が報われん』

かもな。

だから、報われるよう懸命に足掻いているんだよ。

和平を結ぶ事ができれば、地球の為に死んでいった者達の報いとなると信じて。

『やはり、そのような者は滅するに限る』

『コウキ！　ここは俺に任せてお前は逃げる！』

「頼みます、アキトさん」

戦闘ができない俺がここにいた所で邪魔になるだけ。
ナデシコまで帰艦する事ができれば……。

『一つ訂正せねばならん』

今は貴様の戯言を聞いている暇はないんだよ！

「アザレア、ウイングブースター展開」

『了解。ウイングブースター展開します』

背面にウイングブースターを展開する。
こいつのスピードなら逃げ切れる筈だ。

『奴らは味方などではない。ただの駒に過ぎん。代えの効くな』

「貴様こそド外道じゃねえか！」

『同じ穴のムジナであろう』

それだけは認められん。

『死ねッ』

「クソッ。どつちに避ければ」

『……私が誘導します』

「……セレスちゃん」

『……私を信じてくれますか？』

真剣な眼でこちらを見詰めてくるセレス嬢。

……そんな眼で見られたら……信じない訳にはいかないな。

「もちろん。目だって瞑れる」

『・・・ありがとうございます。敵、十時の方向』
「了解」

スッ。

ボソソジャンプで先回りし、待ち構えている北辰。
しかも、性質が悪い事に一瞬で前方に現れて攻撃してくる。
でもな、それは自身の位置がバレてない前提があって初めてできる
事なんだよ。

セレス嬢の協力がある今、貴様程度に捉えられはしない。

『・・・敵、二時の方向』

「了解！」

スッ！

『・・・敵、三時の方向。上に避けて下さい』

「了解」

スッ！

『・・・敵、下方より出現。横に避けて下さい』

「了解」

スッ。

「流石はセレスちゃんだな」

こんな短期間で敵のボソソジャンプパターンを解析してしまうとは・

・・・。

もう俺に教えられる事なんて一つもない。
本当に・・・頼りになる娘だよ、セレス嬢は。

『読まれている・・・か。残り跳躍回数も少ない。ここはひとまず引くとしよう』

諦めた・・・のか？

『待て！ 北辰！』

『決着は次の機会でつけようぞ、死神。次は跳躍になど頼らん。さ
らばだ』

ボソソジャンプで消えていく北辰。

長距離ジャンプではない為、追おうと思えば終えるだろうが・・・。

「そんな気力はないよな、俺もアキトさんも」

北辰が消えた方角を眺め続けるアキトさん。
色々と思う所があるんだろうな。

「アキトさん・・・」

『・・・俺達も帰艦しよう。敵も撤退を始めている』
「・・・了解」

アキトさんの言葉に従い、撤退を始める。

何故、敵が撤退を始めたかは分からないが、
とりあえずこの戦闘は終わりと見ていいだろう。

『・・・逃したか』

ある意味、千載一遇のチャンスだったのかもしれないな。北辰はこの戦争で最も障害と成り得る者の一人だ。そんな奴が一人になる事はもう殆どありえないだろう。できる事ならば、倒せる時に倒しておきたかった。更に言えば、北辰はアキトさんにとって宿敵とさえ言える存在。俺なんかよりもアキトさんの方が何倍も悔しいだろう。

「しかし・・・完全にしてやられたって感じだな」

確かに厄介な北辰六人衆を潰す事はできた。しかし、その代償は大きい。

両腕が使えないし、腹部は貫かれているし。

撃墜とまではいってないが、それに等しいよな、最早。

・・・ウリバタケさんに怒鳴られるかもしれん。ま、それは覚悟するとして・・・。

「セレスちゃんへのご褒美、何にしよう」

命を助けてもらったんだ。

それ相応の物を贈ってあげないとな。

「つたく。ボロボロにやられやがって」
「すいません」

案の定、怒鳴られました。

いや、でもさ、頑張ったと思うよ、俺。
あいつら一人一人、間違いなくエース級だったしさ。
撃退しただけでも充分だってば。

「当分使いモンにならねえな」

「マジっすか？」

「たりめえだろうが！ テメエもエンジニアの端くれならそれくらい把握してやがれ！」

いや、別に俺、エンジニアのつもりなんてないんですけど……。

「あん？」

「い、いえ」

完全にヤンキーっすよ、ウリバタケ兄貴。

「実際、どれくらいやばいんですか？」

「伝絡系統は両腕共に損傷。こいつの修復だけでも一日は掛かる。
それに加えて、腹部の損傷。こいつはジェネレーターに掠ってやがった。」

掠った程度だったから良かったものの、あと数センチでもズレてたら……」

「……ズレていたら？」

「バンツ！」

「うおッ！」

「だな」

バンツて……。

「それは流石に大袈裟」

「馬鹿野郎！」

ドガッ！

「グフッ」

何？ この熱血ぶり。

それは俺じゃなくてガイの役目だったのに。

「テムエの乗るアドニス殲滅射撃仕様はどの機体よりも繊細なんだよ。」

言っただろ？ こいつの特徴である大容量ジェネレーターは諸刃の剣だつてよ」

「大火力を発揮できる分、一撃喰らっただけでノックアウト」

「そういうこつた。今回、テムエが生き残れたのは運とセレスのお蔭だぞ。肝に銘じとけ」

「うす」

・・・予想以上に危なかったようだ。

本当に、セレス嬢には感謝してもしきれない。

「しょうがねえ。とりあえず、できるだけのは事はやってやらあ」

「すいません。助かります」

「ああ。だが、それでも二日はかかるぞ。早くてもな」

二日か・・・。

結構長いな。

でも、止むを得ないか。

ウリバタケさんだから二日なんであって、他の人だったらそれ以上にかかるんだろうし。

「分かりました。お願いします」
「おうよ。それが仕事だからな」

背中を向けて去りながらそんな事をおっしゃるウリバタケさん。
頼もしい背中だぜ。

「テメエら！これから突貫作業に入る。潰れたらぶっ潰すぞ！」
「」「」「うおおおお！」

本当に頼もしいこつて。

「ギリギリといった感じだな、コウキ」
「アキトさん。ええ。手強い相手でした」

でもま、北辰を相手にしていたアキトさんよりは苦労してないだろうけど。

「なに。六人衆全てを撃破したんだ。充分御釣りが来る」
「それなら良かったです」
「むしろ、そこまでお膳立てしてもらっておいて北辰を倒せなかった俺こそ情けない」

表情を歪ませるアキトさん。
・・・悔しそうだ。

「奴を倒せるのはアキトさんだけですよ。次こそ、仕留めちゃってください」
「ああ。やってやるわ」

頼みます、アキトさん。

「それにしても、敵はどうして撤退を」

「もちろん、私達のお蔭に決まってるじゃん」

後ろからの声に思わず振り返る。

「ヒカル、それに、ガイにイツキさん、イズミさんも」

何をそんなニヤニヤと笑っていらっしやる、皆して。

「敵戦艦をヒカルさんとガイさんが落としてきてくれたんです」

「え？ マジで？ 凄いな、二人とも」

「ま、それも完璧な支援をしてくれたイツキ、

それに、敵から戦線を守ってくれたカエデやイズミのお蔭なんだけどね」

「そんなことは・・・」

照れ笑いのイツキさん。

彼女とカエデの力も作戦成功には大きかったらしい。

ここにはいないけど、きつとカエデは得意気なんだろうな。でも、ま、それだけの仕事をしたんだ。

「本当に凄いよ、皆」

得意気になつても素直に賞賛できそうだ。

実際、あの状況からよく盛り返せたものだよ。いや、マジで凄いわ。

「そっちだって凄いじゃん。聞いたよ、一対六で勝ったって」

「中々できる事じゃないわ」

「流石ですね、コウキさん」

「いやいや、運が良かっただけだつて」

実際、ギリギリでしたし。

「またまた、謙遜しちゃつて」

「男ならもつと自信もちやがれ！」

「はいはい」

誇れるような腕前でもないですからね、僕は。

「それで、そのキリシマはどうしたんだ？」

「なんでもリョーコと合流したから先に帰っていてくれと」

「あ、誰か来たようですよ」

「・・・あの機体はアカツキのだな」

「二人はどうしたんでしょう？」

格納庫へと収納される青い機体。

・・・何だろう？ 最近のアカツキ会長は報われない気がする。

まあ、だからいつて何かしてあげる訳じゃないけど。

「おいおい。英雄の御帰還だつてのに歓声の一つもないのかい？」

相変わらずキザつたらしく登場する会長。

二枚目なのは認めるけど、あんまりしつこいと三枚目になつちまうぞ。

・・・既になつてる感満々だけどさ。

「英雄？ どうしてテメエが英雄なんだよ？」

「酷いな、ガイ君。僕は君とテンカワ君が抜けた穴を一人でカバ―したんだよ？」

もし、僕が耐え切れなかったら、ナデシコだって危なかったんじゃないのかな？」

へえ。あれだけの攻撃を一人で凌ぎ切ったのか。

それは確かに賞賛に値するかも。

「そいつは悪かったな」

・・・反省の様子なし。

ガイ、お前もやるようになったじゃないか。

「でもな、比べる訳じゃねえが、カエデの奴はお前より敵が多い中、守り切ってたんだよ」

「あらら。本当かい？」

「おう。ちなみに、イズミだって同じだぞ。こいつは一人で戦線を支えたんだ」

「それが私の仕事だもの」

「あゝあ。最近、どうも空振りばかりしてる気がするよ。」

まあ、報われない主役つても味があって嫌いじゃないけどさ」

「とりあえず、自分の手柄を誇るような事をしなければ認めてもらええると思っただよね」

「御尤も」

良い事言うね、ヒカル。

「だが、アカツキ、お前の力が大きかったのも事実だ。感謝する」

アキトさんがそう締める。

なんだかんだいって、アキトさんが一番アカツキ会長を認めているのかもな。

「ま、僕は僕の仕事をしたままでだよ。これぐらいお茶の子さいさい」

当然といったような表情で得意気に笑う会長。

そこももつと殊勝な態度なら皆で大絶賛だと思っただけだな……。ま、そうじゃなきゃアカツキらしくもないか。

『聞こえますか、マエヤマさん』

ん？ 艦長？

「はい。聞こえます」

何だろう？ 突然。

『帰艦してすぐで申し訳ないんですが、ヒナギクで出撃して頂けますか？』

ヒナギクで？

「はあ、それは構いませんが、何の目的で？」
『木連からのお客様をお迎えにです』

第三百三十六話（後書き）

ようやくにして決着。

まあ、まだ勝負は持ち越しなんですけどね。

やはり最後に立ちふさがるのは奴と草壁。

彼らを攻略せずに勝利はありえないでしょう。

第三百二十七話（前書き）

そろそろストックが切れる・・・。

時間を見付けて、マイペースに書いていこうと思います。

長い目で待っていてくださると嬉しいです。

第三百三十七話

S I D E M I N A T O

「分かりました。迎えを寄越しますのでナデシコの近くで待機を」
戦闘は私達の勝利という結果で終わった。

イツキちゃん達による奇襲が成功し、シラトリさんの戦艦は撃墜。
敵戦隊はその時点で著しく隊列が崩れ、なし崩し的に撤退を始める。
その後、その敵達相手に各パイロットは追撃に入った。

艦長の不在（ナデシコに保護されていた）という事もあり、敵の士
気はどん底。

特にこちら側が苦勞する事なく、敵は降伏した。
それがツキオミさんの艦隊。
残る一つの艦隊は……。

『了解。そちらの指示に従います』

「リョーコちゃんとカエデちゃんは先に帰って構いませんよ。」

マエヤマさんにヒナギクで迎えに行ってもらうよう頼みますから
「ん？ そつか。了解』

『分かったわ。貴方、大人しくしてなさいよ！』

『もちろんだ。我々は降伏したのだからな』

『それならいいわ。私も帰るわね、艦長』

「はい。それでは、また後で」

『了解した』

プツンッ。

通信が切れる。

うん。どうやら、良い方向に進みそうね。

「ゴートさん。二人をここに」

「・・・念の為、もう一度聞く。拘束は？」

「いいません」

「・・・了解。すぐに手配しよう」

艦長の言う二人。

それは多分・・・本来ならナデシコにいないとある二人の人物。

「艦長。どうして、彼らを別々の部屋に？」

「同室にして彼らだけで問題を解決してもらっては困ります。」

ユキナちゃんの事は・・・私達ナデシコにも関係しているのですから」

そっか。艦長も艦長なりに責任を感じているのね。

「ユキナちゃん救出の為には情報を共有する必要がある。」

その為には彼らの口から真実を告げてもらわなければならないのです」

それであえてあの二人を別々にしたのね。

あ・・・・・・・・。

シュインッ。

「失礼致します。御二人をお連れしました」

シラトリ・ツクモさんとツキオミ・ゲンイチロウさんを。

「ご苦労様です。業務に戻ってください」

「はい。では、失礼します」

保安班の男の子が去っていき、ブリッジには連れて来られた二人が残された。

・・・辺りには沈黙。

それはそうよね。とてもじゃないけど、明るくはなれないわ。

「お待ちしておりました。シラトリさん、ツキオミさん」

「・・・」

「・・・何故拘束しなかったのだ？ 我らは捕虜だろう？」

沈黙のツクモさんと疑問顔のツキオミさん。

まあ、状況的に分からなくはないわ。

「信じてますから」

「なッ！ 本気で言っているのか？」

「ええ。本気です。私の知る木連人は皆、正々堂々が信条でしたから」

「・・・そうか」

一言。

たった一言で彼らだけではなく、私達をも納得させてしまった。どうしてこれだけ一言に重みをもたせる事ができるのかしら。こういう所、本当に凄いと思う。

「お話を聞かせて頂きたいのですが、よろしいですか？」

「・・・はい」

「・・・分かった」

戦闘は終わった。

何の遠慮もなく、彼らの話を聞ける。

「ありがとうございます。申し訳ありませんが、全クルーが集まっていますからお願いします」

「・・・ああ」

「あ、それまで自由にしてもらって構いませんよ」

「・・・艦長。それは流石に甘いのではないか？」

「そうですね？　彼らが何かするとは思えませんが？」

「・・・それはそうだが・・・万が一もある」

真面目な人よね、ゴートさんって。

まあ、ナデシコを想うからこそ固いんだって思えば可愛いものだけだ。

「ゴートさんは彼らが信じられないと？」

「・・・そうではない。だが、俺は保安部としてナデシコを守る義務がある」

実際、常識的に考えればゴートさんの言い分の方が正しい。

だって、彼らは元々敵なんだもの。

そう断言できる艦長の方がおかしいのよ。

・・・まあ、私も同感なだけだね。

「・・・分かりました。ゴートさんの懸念も当然でしょうから。

それでは、ゴートさん、貴方は二人をパイロット席に案内した後、

監視を」

「了解」

「その代わり、懐に隠しているものをここに置いて行ってください」

「・・・万が一の時に必要だと思うが？」

「大丈夫です。受け入れないというならば、ゴートさんの案にも許可は出しません」

「・・・了解した」

「ありがとうございます。それでは案内を」

ゴートさんに連れられて空いているパイロット席に向かう二人。

ナデシコブリッジクルーの視線は彼らに集中。

まあ、仕方ないわよね。

気になって当然だわ。

「・・・」

「・・・」

沈黙の二人。

・・・なんか歯痒い。

お互いに言いたい事がある筈なのに・・・。

「艦長は自由にしているといった」

「え？」

それって・・・。

「俺はそこまでの事をしてやるつもりはない・・・が、

少なくとも口を開く事ぐらいは見逃してやる、特別にな」

「貴様・・・」

「・・・後は勝手にしろ」

気が利くじゃない、ゴートさん。

「……………」

「……………」

もう、男らしくしなさいよ！

言いたい事があるならさっさと言う！

「元一郎。お前は」

「すまない、ツクモ。俺は……お前を救う事ができなかった」

項垂れるツキオミさん。

「それは……………」

「ユキナだ。ユキナを救ってこそ、俺はお前と親友でいる事ができた」

「…………元一郎」

「お前があちら側にいかないと、俺は罪悪感を感じた。

ユキナを利用してお前をこちら側に付けたからだ。だが、同時に嬉しくもあつた」

「嬉しかった？」

「ああ。何故なら、理由はどうあれお前と共に戦えるからだ」

親友と戦える。その嬉しさは分かる。

分かるけど……それは彼の本心じゃないわ。

「共に同じ志を持ち、共に同じ道を進み、共に理想を叶えたかったのだ」

「……………」

「初めはそれで良かったさ。

だがな、日々苦しむお前を見て、間違っているのだと感じ始めた」
苦しむ親友の姿。

その姿に胸を痛めない友などいない。

「だが、必死にその思いを押さえ付けてきた。

認めればお前が去ってしまうと、そう感じたから」

いつまでも共に戦っていたい。

だからこそ、認められなかったのね。

認めてしまえば・・・友として共に戦う資格がないと思ったから。

「だがな、だが・・・やはり俺は間違っていたんだ」

「元一郎。お前は何も」

「間違っていない？ 違うな。俺は根本から間違えていたのだ。

友とは想いを分かち合うものであり、決して強制するものではな

い

「・・・元一郎」

「ただの自己満足だったのだ。お前の想いを踏み躪った上での自己満足。

なんと醜く、汚い事だろうか。俺は・・・お前との友情を裏切っ
てしまった」

「そんなことはない。そんなことはないぞ、元一郎」

「お前は優しい奴だからな。そう言ってくれるだろう。だが、俺は・

・俺を許せない」

心の底から悔やんでいる。

そう伝わってくる苦渋の表情だった。

「俺はお前と共に戦いたかった。その思いに嘘は微塵もない」

「それは・・・俺も同じだ」

「そうか。それは嬉しい言葉だな」

「元一郎。俺はお前が俺を裏切ったとは思わない。お前はお前の想いを貫いただけだ」

「・・・その捉え方はどこまでも俺にとって都合が良過ぎる」

「だが、それが事実だ」

「違っただよ、ツクモ」

力のない笑みで否定する。

悔やみの顔は変わらない。

「俺の意思を貫く為にお前の意思を踏み躪る。それは決してあつてはならない事だ」

「・・・仕方がないだろう。誰の意思も踏み躪らずに物事を成功させる事などできない」

「それがお前でなければな。だが、お前は何事にも代えられない親友の一人だ」

ツキオミさん、シラトリさん、アキヤマさん。

木連を背負う三羽鳥にして大親友達。

この結末は・・・揺るぎのないものだった。

そこに罅を入れたのは・・・草壁中将。

「親友を犠牲にするエゴ。そんなものは信念でもなんでもない」

「・・・」

「俺の信念は・・・お前の想いを踏み躪った上でのものではない、ないのだ」

エゴ。信念。

どこまでがエゴで、どこまでが信念なのかは私には分からない。でも、少なくとも・・・後悔しているのなら、それはきつと信念じゃないわ。

「・・・俺にはお前がどんな考えを持っていようと説得できる自信があつた」

「俺を？」

「ああ。木連にとって何が良いのか、それを伝えてやれる自信がな。だが、それは決してあのような強引な手段ではない。魂のぶつかりあいだ」

・・・良くわからないけど続けて。

「今の状況では俺がどれだけお前に語りかけようと伝わらないだろう。

俺が真実を語ろうとお前には曇って見えるに違いない。それでは意味がないのだ」

「それで、お前はユキナを？」

「ああ。ユキナを人質に取るのは間違っている。そのような手段は言語道断。」

お前への枷を失くし、正面から説得する為の行為だ。決して和平に靡いた訳ではない」

ナデシコにいてるっていうのにこの言い草。

頑固というか、素直じゃないというか・・・。

「草壁中将の理想は正しい。だが、方法が間違っている。俺はそれを正さねばならん」

意地って感じね、最早。

それほどまでに地球憎しの感情が深いのかしら？

「話を割るようで悪いんだけど・・・貴方はそんなに地球を滅ぼしたいの？」

「ハルカさん・・・」

「ツクモを誑かした女か。俺は、そうはいかんぞ」

「誑かしたって何よ。私にはもうきちんとした彼が

「ミナトさん」

おっと、話がズレたわね。

「コホンッ。もう一度聞いわ。そんなに貴方は地球を滅ぼしたいの？」

木連が地球を憎むのも分からない訳ではない。

それほどの事を仕出かしてしまっただし。

でも、それは戦争前だからこそ言い張る事ができた言葉。

既にそれはお互い様になってる今、一方的に悪と断じられるのは流石に不快。

歩み寄りを見せ始めている中、いつまでも徹底抗戦を主張するのは何故？

国民に被害はなく、一方的に攻撃してもなお、満足できないのは何故？

意地とか、情性だとか言ったら・・・ぬっころすから。

「先祖だとか、草壁だとか、そんなのはいらないわ。私は貴方の、本心が知りたいの」

「俺は・・・」

先祖の恨み？ そんなの直接的には貴方に関係ない。

草壁の教え？ 何も考えない人間なんて機械と同じよ。

貴方には貴方だけの考えがあるでしょ？

それを教えて欲しいの。

草壁中将の部下としての貴方ではなく、あるがままの貴方の本心を。

「俺は国が好きだ。国の為ならばなんだってしよう」

「・・・だから、敵の民を殺戮しても良いって？」

「そうではない！・・・地球も同じだったんだ」

「え？」

「国の為、民の為、友の為、愛する者の為、命を投げ捨てる覚悟がある」

神風特攻。

ボソン砲を潰す為だけに命を燃やし尽くした者達がいた。

その時の彼らの心には地球を、友を、家族を思つ心があつたに違いない。

「ありえない光景だった。卑怯者である筈の地球がただ国の為に命を落としてるなんて」

「当然よ。貴方達が守りたいように、私達も守りたい。だから、戦えるの」

「そう、そうなんだよな。俺は・・・それを知らなかった。知ろうともしなかった」

守りたいものがある。

それは地球だって木連だって同じ。

攻めてくるなら迎撃する。

だって、守りたいから。

攻めてこないのだったら・・・戦う必要なんてないのよ、お互いに。

「・・・地球を倒したいという気持ちがある事に嘘はない」

「元一郎！」

「だが、それはあくまで公平の立場でだ。先祖の恨みなど今は関係ない。」

俺は決着がつけたいのだ。どちらが正しいのか、どちらの国への想いが上なのか、の」

「それじゃあ・・・」

「滅ぼすまで戦おうとは思わない。だが、この勝負だけは必ず勝ってみせよう」

「それはこちらと同じです」

「艦長・・・」

「正々堂々、決着を付けましょう。私達こそが勝ってみせます」

「負けはしない。俺の木連を思う心は木星よりでかい」

「負けはしません。私の、私達ナデシコの和平への想いは太陽よりもでかいですから」

徹底抗戦を主張した者が主張しなくなった。

・・・多くの犠牲があつたけど、彼らの想いは確実に伝わってるわ。どうなるか分からないけど・・・必ず戦争を終わらせてみせるから・・・。

待っていてね、地球の為に命を尽くした皆。

「言いたい事は分かったわ」

「イネスさん・・・」

「でも、この後はどうするつもりなの？」

貴方達を取り巻く環境は一切変わってないのよ」

手厳しい一言ね。

でも、実際、その言葉は正しい。

今もなお、ユキナちゃんが囚われている事に変わりはないのだから。

「それに、貴方達がいるのはナデシコ、地球の戦艦よ。
まだ戦う意思があるようだけど・・・ここから逃がすと思ってる
の？」

「そ、それは・・・」

保護という名目だったけど、わざわざ敵を逃がしてあげる必要はない。
い。

これまた正論ね。反論のしようもないわ。

「なッ！ 卑怯だぞ、地球人」

「卑怯でもなんでもないわ。仲間割れとはいえ、貴方達はもう敗れたのよ」

「イネスさん。せつかく仲直りできたのに」

「艦長も貴方達も考えが甘くなって？ 命を賭けて戦っている者がいるのよ？」

それを個人の感情で見逃したり助けたりなんてあまりにも身勝手。
偽善もいい所よ」

「そ、それは・・・」

「艦長、貴方考えた事ある？ 今、彼らを見逃した事で地球の誰かが死ぬ事になるって」

「・・・え？」

「極端な話、彼らを逃した結果として、

ナデシコパイロットの誰かが死ぬ事になってもおかしくないのよ」
「ッ！」

「貴方にそれが背負えるの？ 仲間を貴方が殺したも同然、ううん、
殺す事になるのよ」

「・・・」

何も言い返せない。

艦長だけじゃなくて私も。

どこかに甘えがあった事は否認しないもの。

たった一つの行動に対してそこまで深く考えた事なんてなかったから。

・・・私も一度シラトリさんを逃がした事がある。

あの時はそれで良かったと思ってた。

ううん、あれが最善だったと思ってた。

でも、それによって、もしコウキ君が死んでしまったとしたら・・・。

一生、後悔してもきれなかったと思う。

だってそれは・・・私がコウキ君を殺したのと同じなもの。

「背負えるというのなら何も言わないわ。でも、覚悟はしておくのね」

「・・・はい」

イネスさんの手厳しい、だけど、どこまでも尤もな発言に辺りは静まり返る。

自分の行動が仲間を殺してしまうかもしれない。

・・・仲間を大切にするナデシコにとってはその行為はどこまでも許しがたいもの。

「さて、次は貴方達ね。私に」

シュインツ。

「ん？ 何だ？ この重たい空気は」

「シート！ ガイ君。それは思っても言わないのがお約束なんだよ」

「面倒だな。部屋帰っていいか？」

「リョーコ。それはただの我が侷よ」

「ま、部屋に帰りたかったのは私も同意見だけど、シャワー浴びたいし」

「まあまあ、皆さん、まずは今後の事を話し合いましょうよ」

「とりあえず席に座らないかい？ 立ちばなしたのはどうもね」

「・・・座る席があればな」

「あん？ どういうこと？」

イネスさんが話し出した途端にコウキ君を除いたパイロット達全員が帰艦。

リョーコちゃんとカエデちゃんが帰ってくるのを待ってたからこそまで遅くなったのね。

「・・・・・・・・」

うん、それにしてもナイスタイミング。

お蔭で重い空気が吹き飛んだわ。

流星はナデシコが誇るエースパイロット達ね。

「おお。お前は・・・」

「あの時の・・・」

ガイ君とツキオミさん。

どこか分かり合える部分があったんでしょっかね。

それにしても・・・。

「やっぱり似てるわよね、二人とも」

ガイ君とシラトリさん。

並べてみると本当に瓜二つだわ。

もしかしたら、だから、ガイ君とツキオミさんは気が合うのかも。

「コホンッ」

あ。

・・・話好きの人って基本的に話の骨を折られるのが好きじゃないのよね。

それはどこか常人とは異なるこの人も例外ではなくて・・・。

「話してもよろしいかしら？」

「ちよつと待てつて、俺達まだ座つても」

「立つなり、床に座るなりして、早くする！」

そもそも、パイロット全員が座れる分はないのよ！」

「は、はいーッ！」

額に青筋を浮かべながらイネスさんが告げる。

・・・素直に怖い。

「・・・とりあえず座れるだけ座つちまえよ。俺は立ってるから」

「俺も立ってしよう」

「あ、じゃあ、遠慮なく」

「それじゃあ僕も便乗して・・・」

「おいコラ。日頃フェミニストな奴が何を堂々と座ってるんだよ」

「こついつのに男も女も関係な」

「・・・まだかしら」

ビクッ。

「お、おっと、ぼ、僕とした事が・・・。空いている席は丁度五つ。女性陣が座るとびったりじゃないか。うん、是非とも座ってくれ

たまえ」

「は、はあ……」

「ほらほら。さっさと座らないとまた怒られちゃうよ」

「そうだな。それじゃあ遠慮なく」

「失礼するわ」

「それじゃあ……」

「せっかくだしね」

……イネスさん最強説が浮上したわね。

あの個性が強いパイロット達を一言で押さえつけてしまっなんて……。

「さて、気を取り直して……」

ギロツ。

思わず、そんな擬音が飛び出した。

実際、それぐらいの勢いで二人へと視線を向けたものね。

ビクッ。

もちろん、二人はこんな感じ。

「私に教えてくれるかしら。貴方達はこれからどうするの？ 何を
するの？」

「そ、それは……ユキナを助け出さねば始まらないだろう」

先程の恐怖がまだ残っているのか。

いつものふてぶてしい態度すら成りを潜めてしまっているツキオミ
さん。

うん、やっぱり、イネスさんが最強だわ。

「そう、それじゃあ更に質問ね。どうやって救出するつもり？」

「・・・見付かるまで探し続けるしかあるまい」

「貴方、バカ？」

「な、何！？ 初対面の相手に侮辱されるほど、俺は」

「宇宙は広いのよ。宇宙からしてみれば人間なんて米粒よりも小さな存在。」

どこにいるかも分からないのに、闇雲に探して見付かるなんてまずありえないわね」

「・・・」

本当に正論しか言わないわ、この人。

ぐうの音も出ないってのはこの事でしょうね。

「・・・それならばどうしろというのだ。貴方には何か考えがあるのか？」

反論するなら誰にだってできる。

問題は更なる改善案があるかどうか。

ないのであれば反論する権利はない。

そんな事をチラッとコウキ君が言ってた気がするわ。

「貴方達の中で誰も救出に動いてないの？」

「何？」

「部下を調査に遣わすとか、草壁配下の基地をくまなく調べるとか、そういう事した？」

「・・・していない」

「呆れた。前情報もなしにうまくいく訳がないじゃない」

皮肉屋よね、彼女って本当に。

「方法はいくらでもあったんじゃないの？ 理由もなく嚴重な場所の調査とか」

確かに理由もないのに嚴重となると怪しいわよね。

「他にも、草壁の側近なのに最近姿を見せない軍人とか。

疑うべきものはいくらでもあるの。虱潰しなんてナンセンスだわ。効率が悪すぎる」

「な、なるほど」

ここまで短時間で思い付くなら十分反論する権利はあったって訳ね。そもそも、イネスさんが言い負ける姿が想像できない。

「でも、それを今から調査するのはあまりにも時間がなさすぎるわ」「え？ どうしてですか？」

「言う前に一つ確認したいんだけど・・・貴方達の艦、元からいたクルーかしら？」

元からいたクルー？

何が聞きたいの？ イネスさんは。

「俺のは元からいたクルーだが・・・」

「私のはユキナが拘束されてより全クルーが入れ替わりました」

「・・・なるほど。それならさほど時間はないと見ていいわね」

「なっ！？ それでは、ユキナは！」

「落ち着きなさい。追い込まれた時こそ冷静に、よ。」

少なくとも、貴方の恋敵はそうして彼女を幾度となく救ってきたわ」

「そうですか。あの男が・・・」
「ちよ、ちよっと、イネスさん！」

いきなり何を言い出すのよ!?

「私はコウキ君一筋」

「さて、話を戻すわね」

「聞きなさいよ！」

マイペース過ぎるわ。

「はいはい。後でいくらでも文句は聞いてあげるから。

今は黙ってなさい。今は少しの時間でさえも惜しいわ」

「・・・分かったわよ」

駄目だ。口では勝てる気がしない。

「全クルーが入れ替わったのよね？」

「はい。私の副官や艦の副長まで全て」

「・・・そう。それなら、そのクルー達は貴方の監視役でもあるとみていいわ」

まあ、それはそうよね。

どう考えても。

「恐らく、さっきまで、アキト君が戦っていた人も貴方の艦にいたと考えた方が良く」

「あの男が？ あのような機体、私の艦には・・・」

「誤魔化しようはいくらでもあるじゃない。貴方に忠実な部下なんていないんだもの」

監視役を務める人間に忠実な部下がいる筈がない。
まあ、絶対にありえないという訳ではないだろうけど。

「それは・・・」

「あの男が乗っていた事から考えられるのは二つ。

一つは対ナデシコ用、もう一つは・・・対貴方用よ」

「私・・・ですか？」

「そうよ。万が一に貴方が裏切ったのなら、貴方を殺すように
いった所でしようね」

「私を殺そうと・・・」

「ありえん！ 草壁中将がそのような悪逆非道な事を

「現にしているでしょ。貴方は少し黙ってなさい」

「ムッ」

・・・イネスさん、絶対調ね。

「まあ、その目論見はその人のお蔭で回避できたようだけど」

「俺・・・だと？」

「ええ。貴方がまさかシラトリ・ツクモを撃つとは思っていなかった
たんでしょうね。」

「だから、一歩出遅れて逃してしまい、代わりとして貴方を撃つ事
を優先する事とした」

「まさか・・・」

「ええ。貴方でも良かったんじゃないかしら。」

「木連の若い軍人に影響を与える人なら誰でも」

「そ、そんな・・・嘘だ」

信じられないといった顔をするツキオミさん。

それはそうでしょうね。

それが本当だとしたら、敬愛する上司に裏切られた事になるんだもの。

「でも、大事なそこじゃないわ」

「え？」

もつと重要な事が他にも？

「監視用に派遣された兵達よ？」

貴方が今、ナデシコにいる事はとつくに報告してるでしょうね」

「そ、それじゃあ・・・」

「ええ。急がないと・・・手遅れになるわ」

「な、なんとかしなければ！」

慌てるシラトリさん。

保護にしる、拘束にしる、シラトリさんがナデシコにいる事は事実。それを草壁中将がどう捉えるかはここにいる私達には分からないわ。もし、地球側に降ったと判断したら、ユキナちゃんはもしかしたら・・・。

「まあ、大丈夫だとは思っけどね」

「え？」

「だって、まだシラトリ・ツクモは生きているもの。

彼女はシラトリ・ツクモを縛る為の枷。わざわざ枷を外してやる必要はないわ」

「それじゃあ・・・」

「高い確率で生きているでしょうね」

「・・・良かった」

焦らせないでよ。

もう間に合わないかと・・・。

「なんて優しい女性なんだ。私の妹の事をあんなにも案じて・・・」
「ツクモ！ 貴様、また、誑かされて」

「私は誑かされてなどいない！ 真に彼女の事を」
「だから、私はコウキ君一筋だつてば！」

もういい加減にしてよ。

私はコウキ君一筋だつて何回言えば分かるの？
というか、さつきと態度変わり過ぎじゃない？

「まあまあ、ミナトさん」

・・・艦長。

「艦長に免じて許してあげるわ」

話も進まないし。

「恐らくシラトリ・ユキナは生きているわ」

「・・・」

「でも、だからといって事態が好転した訳じゃない。

依然、彼女は囚われたまま。依然・・・貴方は囚われたままよ」

「・・・はい」

ユキナちゃんは生きている。

それは確かに嬉しい事。

でも、それだけじゃ何の解決にもならない。

結局、ユキナちゃんを救出しなければ何も始まらないのよ。

「さて、そのような状況下、果たして貴方達に何ができるのか」

二人だけじゃない。

ユキナちゃんの解放は私達ナデシコにとっても大切な事。

彼女が攫われてしまったのは私達のせいでもあるのだから。

「祈る？ 拜む？ 願う？ ええ、それでいいならそうしてなさい。それで解決できるようならこの世の中、誰もが不公平なく、幸せになれるから」

祈るのも良い。

拜むのも良い。

願うのも良い。

でも、本当に欲しいのなら・・・自ら動きださねば駄目。

「本当に彼女を救いたいのであれば、自分から動かないと駄目。

だからといって考えなしじゃもっと駄目。そんなんじゃ一生辿り

着けない」

「それでは・・・それでは、私はどうすればいいのです？」

懇願するように訊いてくるシラトリさん。

そうよね。何をどうしていいのかわからないのに、動けなんて酷な話よ。

そんなの、目隠しをされて綱渡りしろと言ってるようなものだもの。

「自分で考えなさい」

「なッ!？」

「っていつもなら言うんだけど、特別にヒントをあげるわ」

「ヒント？」

イネスさん。
貴方、何か知っているの？

「鍵を握るのは……」
「握るのは？」

シユインツ。

「彼よ」
「へ？」

イネスさんが指で指し示した先。
そこには間抜け面で困惑顔のコウキ君がいた。

「えっと、何ですか？」

コウキ君に突き刺さる何対もの眼。
彼の困惑は更に深くなる。

「……コウキ君？」
「そう。そして」
「この私だ。九十九、元一郎」

この声は！？

「源八郎！」
「お前……」

コウキ君に続いてブリッジへと入ってきたのは大柄な身体をした男性。

えっと、この人は・・・確か、以前もモニタ越しにお会いした事がある・・・。

「いかにも、秋山・源八郎である」

S I D E O U T

第三百三十七話（後書き）

最早、あの方しかいらっしやらない。
彼が合流して、その後どう動くのか。
それでは、次回にまた会いましょう。

第三百三十八話（前書き）

遅くなりまして大変申し訳ございません。

現在、読み直し作業と行き詰まり状態という状況でして・・・。

少しずつ執筆してようやく完成。

楽しんでいただけたら幸いです。

お詫びという訳ではありませんが、ちょっと長めです。

第三百三十八話

S I D E M I N A T O

「いかにも、秋山・源八郎である」

アキヤマ・ゲンパチロウさん。

木連内の神楽派に所属するコウキ君の協力者。

「ナデシコ艦長殿。まずはお礼申し上げます。我が同胞を保護して頂き、感謝致す」

なんとも古風な言葉。

ま、イメージに合ってるから違和感はないけど。

「いえ。お構いなく、利害が一致しただけですから」

「利害？」

「コキナちゃんを救出したい。その想いは同じだという事です」

ええ。ナデシコの誰もがそう思ってるわ。

コキナちゃんだって、ほんの少しとはいえ、ナデシコの家族だったんだもの。

「・・・改めて、感謝申し上げます」

頭を下げるアキヤマさん。
友の妹の為にここまでできるのって凄い事よね。
きつと、それだけ彼らの友情は深いんだわ。

「それで、アキヤマさん。イネスさんは貴方がユキナちゃんの居場所を知っていると」

「いかにも。知っている」

「なッ！ 本当か？ 源八郎」

「ああ。といつても、私もユキナの居場所はとある人間から聞いたのだがね」

「へえ〜。とある人間・・・ね」

イネスさんの視線の先には明後日の方向を見るコウキ君。
えつと、それって・・・。
というか、それって逆に怪しいわよ、コウキ君。

「イネスさん。貴方は何故それを知っていた、いえ、分かっていたのですか？」

艦長が問い、イネスさんに視線が集まる。
そうよね。そんな情報なんてまったくなかったんだもの。

「様々な観点から予想したに過ぎないわ。

彼は木連和平派の一員。それは以前戦った時から知っている事よね？」

「あ、はい」

「それなら簡単。会話から物事を深く考える人物だという事は分かっていた。

後は親友の妹であるという点と彼女の有効性を察せられれば、動くに決まってる」

感情だけではない。

損得を考えても、助けないより助けた方が何倍も良い。そう分かっていて、動かない人ではないわよね。

「更に言えば、唯一草壁陣営から離れた身。

警戒は当然されるだろうけど、彼以外に動ける人はいないわ」

「ええ。私に情報を寄越した人間もそう思ったのでしょ」

再び視線はコウキ君へ。

だから、怪しいって、コウキ君。

「・・・源八郎。俺はお前を裏切ったのだぞ。それなのに、ユキナの事を・・・」

「九十九。勘違いするな」

「え？」

「お前の為じゃない。ユキナの為だ。あいつは私にとっても妹だからな」

「源八郎・・・」

「それにな、九十九、私は裏切ったなど思っていないぞ。

たとえ本心から抗戦に組みついていようと、そうは思わないだろう。

何故なら、それはお前の意思を貫いただけからだ。

私達、いや、俺達の間友情に罅が入るような事ではない、決してな」

「・・・すまない。いや、ありがとう」

なんか、良いわよね、こういうのって。

改めて、友情って素敵だと思う。

「・・・カッコ良すぎるではないか、源八郎」

「俺の知る元一郎はもつと熱く、もつと潔いカッコいい男なんだがな」

「何？」

「お前は過ちを知った。そうなのだろう？」

「・・・」

「もう一度言おう。元一郎。よく聞け。お前は俺が知る誰よりも格好の良い男だ」

「・・・源八郎」

「何をすべきか、分かるな？」

「・・・ああ、もちろんだ」

懐が広い。

彼を表すならこの一言に限る。

本当に、カッコ良すぎるわよ。

「そういえばさ、リョーコって彼と戦ってたよね？」

「ん？ ああ、おう」

ああ、そういえば、そうだったわよね。

「どつという経緯でこうなったの？」

「俺とあいつが戦っている時、お前、いなくなつたろ？」

「うん」

「その後よ。しばらくしたら、ナデシコの方が騒がしくなってきたんだ。

それで、さつさと片付けてナデシコに駆けつけようと思ったんだが・・・」

「思ったけど？」

「攻撃の意図はねえって突然言われてな。

まあ、当然信じられずに戦闘は続けたが、避けるばかりですよ。一切攻撃してこなかったんだ。流石にそこまでやられたらな、妥協するだろ」

「妥協ねえ」

「おう。そんで、とりあえず戦いをやめたんだ。すると、ナデシコに用があるとかだよ」

「連れてきてあげたと？」

「まあ、今まで敵だった奴を連れてくほど、バカのつもりはなかったんだけどな。」

戦闘停止と降伏まで約束されてちまってな。監視がてら案内してやったって所だ」

へえ。そんな裏事情が……。

「イネスさん。アキヤマさんの事は分かりましたが、マエヤマさんは一体？」

そういえば、そうよね。

どうして、コウキ君の事を鍵になるって……。

「そんな気がしたから」

「え？」

え？

「それだけよ。偶には勘に頼ってもいいと思わない？」

「え〜つと……」

困惑の表情を浮かべるユリカちゃん。

その気持ち、分かるわ。

でも……。

「私も同感。コウキ君ってば責任感が人一倍強いから」

コキナちゃんが攫われた時、コウキ君は本当に悔やんでいた。

あのコウキ君が悔やむだけで終わる訳がない。

彼は……借りをきちんと返す男よ。

「……困った時のコウキさん……です」

本当に頼りにされてるのね、コウキ君。

セレセレの貴方への信頼は、もしかしたら私以上なのかも、なんて私だって負けてないわよ。

ね、コウキ君。

「えっと……皆さん、何をおっしゃいますやら」

額に汗を浮かべてそんな事を言うコウキ君。

コウキ君ってさ、隠し事できないタイプよね。

「それじゃあ、コウキ君」

「……はい。何でしょうか？ イネスさん」

ビクツとなるコウキ君。

相手はあのイネスさんよ。

油断していると隠し事全部晒されちゃうから気を付けろお。

「貴方だったら、コキナちゃんの居場所をどうやって探し出す？」

イネスさんは先程、自分の持論を語った。

もし、コウキ君がこの質問に即答できれば……。

「そうですね。とりあえず最初は闇雲じゃないですか」

「へえ」

コウキ君の返答に対して、イネスさんの反応は冷たいもの。

……コウキ君、貴方、やばいかも。

「それで？ それじゃあ見付からないでしょ？」

「そりゃあそうですね。木連に限っても衛星やら秘密の基地やら色々あるんですから」

……これが誘導尋問だって事に気づいてるのかしら？

その言い草だと、調べたって言ってるようなものよ？

「それじゃあ、その後、貴方ならどうする？」

「とりあえず、更に条件を絞りますかね」

「たとえば？」

「ユキナちゃんを攫ったのが北辰なら、監禁するのは草壁一派の等木連内において草壁派の者を中心に関わりがあるであろう者をターゲットにします」

ここまででは定石。

でも、相手だってそれぐらいは考慮する筈よ。

それだけで探し出せるとは思えない。

「あえて地球の協力者に匿わせているという事は考えなかったの？」

「ないですね」

「どうして？」

「確かにそれはユキナちゃんを探している者の裏をかく事ができる

かもしれません。

ですが、それは同時に地球人に借りを作る事になります。

対等であればいいですが、下位になるような事は草壁のプライド的
にありえませんよ」

草壁の事を良く知ってるって感じ。

「そのあたり、木連人の貴方達から考えてどう？」

視線は木連人の三人に。

「コウキに同意する」

「はい。草壁中将は地球を敵視していますから。

一方的に借りを作るような事はしないでしよう。ですが・・・」

「間違いないな。中将のみならず、他の上層部も納得する訳がない。
しかし・・・」

三人とも同意。

どうやら、コウキ君の推測は的を得ているようね。

でも、どうしたのかしら？

なんか、シラトリさんとツキオミさんは煮え切らないって感じなん
だけど。

「・・・一つ聞かせて欲しい」

困惑顔のシラトリさんとツキオミさん。

えっと、なんでかしら？

「質問する時は手を挙げる。小学生だって知ってる事よ」

「え、あ、すまない」

イネスさんに言われ、律儀にも手を挙げるツキオミさん。
・・・彼って結構御人好しなのかも。

「そもそも地球に協力者がいるとは思えないのだが・・・地球の協力者とは一体？」

え？ そこ？

「・・・呆れた。そんな事も知らなかったの？」

「・・・面目ない」

なんかツキオミさんのイメージが崩れてきた・・・。

「草壁中将は地球の企業と手を組んでいるのだ。

まあ、これに関しては物資面での補給を目的としているのだがな」

「源八郎。お前は知っていたのか？」

「これに関しては木連の上層部は誰もが知っている事だ。

木連の食糧事情を考えるならば、これも止むを得ない事だろう」

「何故お前が？」

「神楽大将より教えてもらった。元々物資面での充実さに疑問を抱えていたからな」

軍人なのに、他の事も色々と考えているのね。

流星は将来の木連を支える若き将校。

「それだけじゃないでしょ？」

「なッ！ 他にもいるというのか？」

「我々が困っている事なんて物資面ぐらいしか・・・」

驚きを隠し切れない二人。

「九十九。元一郎。聞いた事を後悔したくないなら耳を塞いでおいた方が良い」

「・・・それだけ重い話という事か・・・」

「ああ。特に元一郎、お前は立っていられないかもしれん」

「・・・聞かせてくれ、源八郎」

「そうか。後悔するなよ。いや、現実を知るのも良い事かもしれないな」

「・・・」

「木連の実質的指導者、草壁中将が手を結んでいたのは・・・」

木連軍人が恐れ、尊敬してやまない草壁中将。

その男が隠してきた事。それは・・・。

「地球連合軍上層部、及び、地球政府だ」

「なッ！」

「う、嘘だろ？ 草壁中将が・・・」

その彼らにとつてはあまりにも意外な言葉にショックを隠し切れない様子。

「な、何故だ？ 何故そんな事を」

「さてな、その意味は草壁中将しかご存知ない」

「まあ、予想は付くけどね」

「イネスさんはどのような考えを？」

「話してもいいけど、逆に艦長はどう思う？」

「え？ 私ですか。そうですね・・・」

顎に人差し指を当てながら考えるユリカちゃん。

「こつこつ子供らしい仕草にジュン君は惹かれたのかしら？」

「美味しい餌をチラつかせて、都合良く物事を進める為じゃないでしょうか」

なるほど。確かにそんな気がする。

「へえ。鋭いじゃない」

「イネスさんも同意見ですか？」

「ええ。大体そんな感じ。付け加えるなら、始めから約束を守るつもりはなく、ね」

始めから守るつもりもない約束をして、地球を動かせる者を操る。どれだけ間抜けなのよ、地球つて話よね。いいようにやられ過ぎじゃない。

「草壁中將がそのような事を・・・」

「・・・源八郎。教えて欲しい」

「何だ？」

「その見返りは何なのだ？ 草壁中將が地球と交わした約束とは？」

そう、大事なのはそれ。

地球側が草壁と手を結ぶメリットは何なのか？

「九十九。良い事に気付いたな。見返りもなしに人は手を結ばない」

「・・・ああ。地球側が敵である草壁中將と手を結んだのは・・・」

「簡単な事だ。時間跳躍技術の共有と戦後の地位の保障だろう」

「なッ！」

「嘘だろ。地球がそのような事を・・・」

木連人は当然として、地球人の方も驚きの声。それはそうよ。

地球を守るべき者達が地球を売っていたという意味でもあるんだもの。

「あくまで予想でしかない。だが、可能性は最も高いと考えている」「草壁中将は一体何を考えるに……」

信じられないといった様子。

それも仕方ないと思うわ。

地球憎し、地球を滅ぼすべし。

そう誰よりも声高らかに叫んでいた人物が実は手を結んでいたもの。裏切られた、そう思われてもおかしくない事よ。

「まあ、私達にとっては誰が誰と手を結んでいようと関係ないんだけどね」

「な、何故ですか？ 貴方達だって裏切られたようなものでしょう？」

「私達は私達の考えに則って動いているの。」

上が何を思い、何を考えようと私達には関係ないわ。

私達は私達の道に行く。それがナデシコ、私達の船よ。ね、艦長」「はい。その通りです」

イネスさんがこんな情熱的な考えを持っていた事にびっくりだわ。艦長が即答するのは分かり切ってた事だけだ。

「……そうですか。それこそがナデシコの強さなんですね」

「上からの命令に従っているだけの私達とは大違いだな」

「まあ、軍としてそれが正しいのかと聞かれれば頷く事はできんが」

御尤もな事で。

「それに、今となつては本当の意味でどうでもいいのよ」

「それは一体・・・」

「だって、木連と手を結んでいた連中は皆排除されたもの。」

新生地球連合軍と新生地球政府、そして、蜃気楼の手によって

そう、そうだったわよね。

最早、地球連合軍、地球政府共に生まれ変わっている。

まだまだ問題が全て解決した訳じゃないけど・・・。

地球は間違いなく、良い方に進んでいるわ。

次は・・・木連の番じゃなくて？

「蜃気楼？」

「そつか。木連の方が知っている訳ないですよね」

「ああ。それは一体誰の事を指すんだ？」

「蜃気楼。その正体は誰も知りません。」

ですが、彼が数多の情報を取り扱い、

民間に公開する事で多くの方が戦争について考えるようになりました。

また、地球連合軍の後ろ暗い事や隠してきた真実を全て暴いてくれたのです」

「・・・秘密を暴く・・・ね」

そう呟くアキヤマさん。

その視線は・・・やはりコウキ君へ注がれている。

やっぱり・・・コウキ君が蜃気楼なのかしら？

「・・・そろそろ話を戻しましょう。コウキ君」

「は、はい。な、何でしょう？」

動揺を隠しきれないって感じ。

コウキ君。ひとまず落ち着けば？

「ユキナちゃんの居場所が草壁関連であると条件付けた貴方は次にどうする？」

「やはり最初に調べるのは草壁中将の基地ですね。次に優先するのは彼寄りの高級将官」

「それでも見付からなかった場合は？」

「中将を含め、彼の周りにいる連中のスケジュールを調査します」

「スケジュール？」

「ええ。だって、それだけの重要人物を拘束しているんですよ？」

それが草壁にとって重要であるほど、任せられた者は慎重にならざるを得ません」

「スケジュールを調べてもそれは分からないんじゃないですか？」

「もちろん、スケジュールだけじゃ分かりませんよ。」

だから、スケジュールと当事者の行動の相違。それを調べるんです」

・・・さつきイネスさんが言った意見と殆ど同じ。

コウキ君。貴方、本当に色々動いて考えているのね。

「へえ。それで見付かるかしら？」

「見付かるんじゃないですか？ まあ、相手が相当の手練れだと厳しいでしょうが」

「じゃあ、その手練れだとして、それでも尻尾を掴めなかったらどうする？」

「えっと、中々にしつこいですね」

「ええ。考えている事があるなら、全部話さない」

「はぁ・・・。分かりました」

イネスさんに捕まった時点で中途半端は許されないわよ。

「アキヤマさん」

「ん？ 何だ？ 私はお前の意見を感心しながら聞いているのだが」

「いや、それは別に言わなくても・・・」

「ハハハ。それで？ 何か聞きたい事があるのだろうか？」

「木連軍人の中で女性が所属している割合はどれくらいですか？」

え？ それが一体何に繋がるといふの？

「なるほどね。流石はコウキ君」

なんか、イネスさんは分かり切っちゃってるんですけど。

「基本的にいないと考えていい。

例外はあるが、通常の部隊には誰一人として所属していない」

「それなら、当然。軍の基地に送られてくる物資に女性用のものはないですよね？」

「ん？ ああ、それはそうだろうな。・・・なるほど。それが答えか」

「それが答えです」

アキヤマさんも分かり切っちゃった感じ。

えっと、詳しく私達にも教えて欲しいんだけど。

「少量でも大量でも構いません。

送られてくる物資の中に女性用の物があればその基地は間違いなく怪しい」

そっか。コウキ君、頭良いわね。
そんな考えに辿り着くなんて。
女性がいないであろう場所に女性用の物資。
怪しいなんてもんじゃないわ。

「それで怪しい基地を更に絞り込むができる訳か。
しかし、それは物資の内容を把握してなければ無理なのではない
か？」

「木連はセキュリティが甘いくせに全てをデータで管理しています。
偽造はするようですけど、あくまで念の為という程度。解くのは
容易い。」

恐らく、長年の間、争いがなかった為に防諜体制が甘くなってし
まったのでしょね

・・・まるで解いたと言わんばかりの発言。
木連の事も色々と調査して考えているようだし。
根が正直なのは良い事だと思うけど・・・隠し事できないってのも、
ね。

まあ、私としては色々な意味で助かるけどさ。

「なるほど。だ、そうよ」

「うむ。感謝しよう。コウキ。お蔭で謎が解けた」

「謎？ 何ですか？ それ」

「ふっ。なんでもない。さて、次は私の番だな」

アキヤマさんが前に出る。

さて、彼は一体何を知っているんでしょうね？

SIDE OUT

「さて、次は私の番だな」

・・・なんか言わなくても良い事まで言ってしまった感じ。
やべえな。もしかして、やっちゃまったか？

「早速だが、本題にいこうか。」

私が話すのは雪菜の居場所とそれに対する現状の二つ」

慌てても仕方ないか。

今はユキナちゃん救出について考えよう。

アキヤマさん達が今、どのように動いているかも気になるし。

「まずは、ユキナが監禁されている場所だ。」

ユキナが監禁されているのは木連市民船の第三エリア基地、通称
グリーンベース」

「グリーンベース？ 中央基地のすぐ近くではないか」

「うむ。灯台最も暗しとはよくいったものだな」

「灯台下暗し、です」

「ああ。そうともいう」

そうとしか言いませんから・・・。

「それはどうやって見付けたのかしら？」

「さてな、詳しい事はこの情報を届けてくれた奴にしか分からんよ」

「ま、それはそうでしょうね」

「うむ。そうだろう」

なして僕の方を見るとですか？

・・・僕は無関係ですたい。

「コホン。現在、そのグリーンベースには三郎太を張り付かせている」

「三郎太が？　そうか。道理であいつの姿が見えなかったんだな」

「ああ。本来であれば、私の部隊で雪菜を救出するつもりだったんだが・・・」

「命令で前線に出されたか。それならば、止むを得ない」

草壁中将からの命令には逆らえなかったという事か。

まあ、戦争に派閥は関係ないからな。

上官に命令されたら従わざるを得ないだろう。

「確かに私はこうして前線に出てきてしまっている。

加えて、どれだけ三郎太が優れていようと、独りでは救出など不可能だろう。

「だがな、私はこの状況下、今こそが今までにないほどの絶好の機会だと考えている」

「え？　何故です？」

救出に動かす筈の戦力が動かせないというのに・・・。

「雪菜が拘束されている基地に私達が今まで手を出せなかったのはある男がいたからだ」

「ある男？」

「ああ。それこそが草壁中将の懐刀、草壁中将直属の特殊部隊隊長北辰だ」

北辰。

あいつがユキナちゃんの監視役を担っていたのか。

・・・確かに草壁に最も信頼されているといえばあいつになるのか
もしれないな。

「北辰。それはあの紅い機体の奴か・・・」

「そうだ。一般には公開されていない部隊だからな。知らなくても
仕方がない」

「・・・そうか。その部隊は一体何をしているのだ？」

「彼らは草壁中将直属であり、木連の裏工作を担当している」

「裏工作・・・」

「ああ。彼らの部隊の任務は暗殺や誘拐など全て裏のものだ。

木連の汚れ仕事、裏の仕事は全て彼らがやっているといっても過
言ではない」

どれだけの規模があるかは分からないが・・・。

草壁という影響力のある人物の裏を支えているんだ。

量、質、共に優れている事だろう。

「その男が、部下を引き連れてその基地を離れた。これは紛れもな
くチャンスだ」

基地を守っていた北辰がない今こそがチャンスという訳か。

鬼の居ぬ間に救出って奴だな。

でも・・・。

「それならば、一刻も早く向かうべきでは？」

こうして話している間にも北辰は基地に戻っているかもしれない。
こんなことしてる暇はないだろ。

「多少の余裕はあると考えている」

「それは何故です？」

「奴らはこちらが雪菜の居場所を知っているとは知らんだろうからな。その油断を突く」

「それは・・・そうでしょうけど」

「それに、奴とてすぐさま基地に戻る事はなかるう。時間的猶予はある筈だ」

「確かに」

草壁への報告とかもあるだろうし。

「誰もが戦争に集中しているであろう今こそがチャンスなのだ。すくなくても」

「そう簡単にいくかしら？」

「イネスさん？」

何故そのように？

「だって、考えてごらんなさい。木連はどこにいようと戦場まで一瞬でいけるのよ。」

防衛と迎撃に分かれる必要がある地球と違い、木連は状況次第で切り替えられる。

地球であれば防衛網は薄くなるかもしれないわ。でも、木連もそのうとは限らないのよ」

「・・・」

「ま、自国が攻撃される訳がないっていう油断はあるでしょうけど」
・・・その通りかもしれない。

基地防衛を任務としている兵も状況次第では即投入できる。

現在進行形で戦闘中だからといって警戒が薄いとは断言できない。
でも……。

「北辰がない今を狙わないのは愚かですよ」

相手側の警戒は未だに強いかもしれない。

でも、だからといって、この千載一遇のチャンスを見逃すのもどうかと思う。

アキトさんが倒しきれなかった事から分かるように北辰は本当に強敵だ。

その強敵がない時間があるのならば、そこを狙うのが一番だろ。

「……どちらにしろ、十分な戦力がないと厳しいと思うけど？」

……それは否定できませんが……。

「それに、そこまでどうやっていくのよ？ 移動手段はあるの？」

「それについては問題ありません」

と、ツクモさん。

「あら？ そうなの？」

「はい。艦長クラスになりますと潜伏跳躍門の場所も知らされていないのです」

潜伏跳躍門。

動力カッターして隠してあるチューリップの事だな。

「実は月周辺を戦場としたのには訳があるのです」

「おい、九十九、それは……」

「元一郎。俺達木連軍人は正々堂々がモットー。そうだったよな？」
「ぐむつ。それは・・・もちろんだ」

「それならば、これを明かさぬは卑怯だろう」

「・・・分かった。咎めはせん」

何だろう？ その訳つてのは？

過去はともかく、今の月は地球の土地だぞ。

明らかに有利だとすれば、それは基地がある地球の筈では？

「木連が月を制圧した事は覚えているでしょうか？」

「はい。半分は完全に制圧下に置かれたと」

「そうです。その際に、木連はチューリップを月面に幾つも隠したのです」

「なッ!？」

嘘だろ？ そんな事、まるで知らなかったぞ。

「それじゃあ、木連がその気になったら、いつでも月面基地を・・・」

「はい。襲撃できるのです。もちろん、月面基地の周辺には隠せて
いませんが」

「それでも、月まで一瞬で跳べるなら同じですよ」

道理で木連不利の場所を決戦の場にした訳だよ。

木連は輸送手段を確保した上で更に狡猾な罠まで仕掛けてあった。

もし、基地内で待機している時に襲撃されたら・・・。

基地は大丈夫という油断を突かれて、一方的に攻撃されて終わりだ。
それがミスマル最高司令官だったりしたら・・・それだけで地球は
終わりだったの。

「俺らは有利な場所に陣取ったと思っていたが、まさか不利な場所だったとはな」

「万が一に備えて、すぐさま破壊しておく必要がありますね」

そんな危険なもの放っておく訳にはいかないしな。

「地球のピンチは後で対応するとして、問題はユキナちゃんの救出でしょ？」

「すみません。イネスさん。」

「・・・そういえば、最近、訂正係が定着してきましたよね。」

「木連組の移動手段であるチューリップはある。」

「それですぐさまグリーンベースまで行けるのね？」

「はい。市民船へと直通で行ける設定にすればすぐに」

それなら、早速それを使ってユキナ嬢を救出しに

「そこでナデシコの艦長に願いがあるのだ」

「・・・アキヤマさん？」

「願い？」

「厚かましい事だと思う。理に叶わぬ事だと思う。」

「だが、それを承知の上で叶えて欲しい事があるのだ」

「・・・それは何でしょう？」

「木連内の問題は木連だけでケリを付けたい。それは雪菜の件も同様だ」

「はい」

「だから、九十九と元一郎の両名の解放、及び、私を自由にしてく

しい」
「なッ!？」

驚きの声を上げるナデシコクルー。
シラトリさんとツキオミさんも驚いた顔をしている。

まあ、そうだよな、普通はそうなる。

言うならば、警察に捕まった犯人が警察に解放してくれと言っているようなものだし。

当然、許可なんて出る訳ない、普通は。

でも、ま、俺からしてみれば、思い切ったな、アキヤマさん、ぐらいにしか思わないけど。

艦長の解答もなんとなく予想付くし。

「ふざけた事を言うな！ そんな事、許可できる訳が」

「戯言を抜かしているという事ぐらい自分でも分かっている！

だが、雪菜を救出する為には二人の力が必要なのだ。

そして、私が自由に動け、かつ、今の艦隊戦力も自由にできる権限が！」

「だからといって」

「構いません」

「か、艦長！ 何を！」

「ユキナちゃんが誘拐された原因は私達にあります。

その責任を果たすまでです。反論は一切認めません」

「……」

「……感謝する」

頭を下げる木連三人組。

本当に、うちの艦長は呆れるぐらい……最高の艦長だよ。

「但し」

・・・え？ 但し？

「私達ナデシコは地球を背負う身。

ここで貴方達を解放した事で地球が不利益を被るようであれば、私はお父様にも軍の皆さんにも、そして、地球の方々にも申し訳が立ちません」

まあ、尤もな意見だな。

慈善事業だけでやっていけるほど、世の中は優しくない。

それがたとえこちらに責任があるうと。

立場的に味方の損になるような事は出来ない。

どれだけ心情的に味方したくてもさ。

「それでは、私達は何をすればいいのです？」

交換条件・・・という訳だな。

「本来であれば、和平に協力しろ、そう言つべきなのかもしれませ
ん」

でも、それは艦長の本意ではない、と。

「ですが、心の底から和平を望んでいない者に和平を唱えて欲しく
ありません。

それは本気で和平を願う者に対して失礼であり、意味もまったく
ありませんから」

それはそうだ。

そもそも意思がない者の言葉に意思が籠る訳もなく、意思が伝わる

訳もない。

そんなのむしろ逆効果になるだろう。

「私が貴方達に望む事は一つ。

ユキナちゃんを救出した後は神楽派、草壁派関係なく思うがままに動く事。

貴方達個人の意思で誰の思想にも囚われず、誰の言葉にも従わずに、それだけです」

「なッ！ そ、それだけだと・・・」

「はい。それだけです」

・・・本当に艦長らしい言葉だよ。

まさか、交換条件にそれを持ち出してくるなんて・・・。

「・・・分かりました。私は私の意思で動きます」

「無論、私もです」

「・・・いいだろう。思うがままに動いてやる」

「ありがとうございます。それでは、さっそく私達もユキナちゃん救出に向か」

「か、艦長！ 月面基地が奇襲を受け、全艦隊に救援を要請しています！」

「奇襲！？ それって・・・」

さっきツクモさんが言ってた潜伏跳躍門の・・・。

「クソッ！ やられた！」

「ルリちゃん。ここから月面基地までどれくらい掛かる！？」

「急いでも半日は・・・」

急いで半日？

・・・それまで耐えきることができただろうか？

「・・・どうやら貴方達は囿に使われたようね」

イネスさん。それって・・・どういう意味ですか？

「囿？」

「ええ。実際、貴方達は木連の本拠地奇襲の作戦を知らされていないかつたんでしょ？」

「・・・それは・・・」

木連の中心に近い三羽烏。

このような戦況を一転させるかもしれない重要な作戦を知らされない立場ではない。

それなのに、その三人に知らされていないということは・・・。

「・・・草壁派の独断」

「そういうことよ」

神楽派がこの事を知っていれば、アキヤマさんが知らない訳がない。間違いなく、神楽大将が知らせているだろうから。

「貴方達のナデシコ攻撃命令を誰が出したかは知らないけど・・・。

草壁はそれを利用して、地球の本拠地を奇襲した。

ナデシコにとって貴方達は因縁のある存在。無視する訳にはいかないでしょうからね」

「あわよくばナデシコを撃墜してもらい、ダメでも囿として注意を引き付けられる」

「ナデシコが地球の最高戦力だって事は誰もが承知の事よ。狙わな
い訳がない」

ナデシコがない本拠地。

本拠地を落とせば勝利が鉄則の戦争でこの状況は物凄くまずい。

「・・・シラトリさん、アキヤマさん、ツキオミさん」

「なんででしょうか?」

「残念ですが・・・私達ナデシコはお手伝いができないようです」

この状況下、ナデシコに何かをしている余裕はない。

急遽月面基地に戻り、防衛戦に参加しなければ・・・。

「・・・負ける訳にはいきませんから」

負ける。

敵は絶え間なく戦力を投入できるんだ。

いつ月面基地が陥落してもおかしくない。

予断なんて到底許される状況じゃないんだ。

「・・・ええ。元々、これは木連、いえ、私の問題。私が自分で解決します」

「私、じゃないだろ。私達だ」

「俺達も付いてるぞ。ツクモ」

「・・・源八郎、元一郎」

本当に・・・熱いぜ、三羽鳥。

「だから、ナデシコの皆さんは皆さんのすべきことを。

なに、捕虜である私達を解放してくれただけでも充分助けになっています」

そう言って笑うツクモさん。

・・・不安な訳がない。

ナデシコの助けが欲しいと思ってない訳がないんだ。

大事な、大事な妹を助けに行こうっていう重大な場面。

少しでも、戦力が、助けが欲しい筈。

でも、それでも・・・敵であるナデシコの想いをわざわざ汲んで・・・。

「・・・このままでいいのか？」

本当に・・・このままでいいと思ってるのか？

俺にも何かできる事があるんじゃないのか？

誰かに全てを委ね、黙って何もせずにいる方がいいのか？

このまま、何もかもをシラトリさん達だけに任せて・・・。

「いい訳・・・ないだろ！」

「コウキ君？」

「ミナトさん。俺・・・」

「ふふっ。分かってるわよ。行つてきなさい」

「え？」

それって・・・。

「コウキ君の事ならなんでも知ってるミナトさんよ。

貴方の考えている事なんて、なんだってお見通しだわ」

「ミナトさん・・・」

「ほら。また私に背中を押されたいの？」

「そう・・・ですね」

覚悟は決めた。

俺にだって・・・できる事はある筈だ。

「艦長！」

「マ、マエヤマさん。どうしたんです？」

「シラトリさん、ツキオミさん、アキヤマさん」

「え？」

「何だ？」

「来るか、コウキ」

「はい。俺も、俺も行きます。アキヤマさん達と共に」

そして・・・必ず助け出してみせる。

「マエヤマさん。ですが・・・」

「俺に何ができるかなんて分かりません。

でも、きつと、俺にも何かできる事がある筈です。

そして、何より・・・このまま誰かに任せっきりになんてできない！」

責任は必ず果たす。

それが、ユキナちゃんを守るってシラトリさんに断言した筈の俺の義務。

「行ってこい、コウキ」

「・・・アキトさん」

「機体のないお前じゃこっちに来た所で何もできまい」

「これはまた・・・手厳しい」

確かにそうかもしれないけどさ。

「・・・分かりました。許可します」

「ユリカ。いいのかい？」

「うん。いいんだよ、きつと、これが一番」

「ありがとうございます、艦長」

頭を下げる。

こんな只のエゴに過ぎない俺の要求を呑んでくれた事に対して。

「シラトリさん、よろしいでしょうか？」

「はい。彼のような心強い味方は大歓迎です」

「コウキが参加してくれる事で戦略の幅が広がる。願ったり叶った
りだ」

「ありがとうございます」

許可は得た。

これで、俺も責任が果たせる。

「マエヤマさん」

「はい」

「貴方を私達ナデシコの代表として送り出します」

「代表？ それって・・・」

どういう意味だ？

「できる事ならば、ナデシコ全体で彼らの助けになりたかった。

しかしながら、状況がそれを許してくれず、ナデシコは遺憾ながら
動けません」

「はい。それは・・・仕方のない事だと思えます。

そんな大変な時なのに、俺の願いを叶えてくれて本当に感謝して
」

「だからこそ、貴方を派遣するのです。ナデシコ最強のパイロット

を」

「え？ 最強？ 誰が？ え？」

な、何を言っているんだ？

「シラトリさん。マエヤマさんはナデシコの危機を幾度も助けられました。

彼なくして今のナデシコはなかった。そう断言できる頼もしいパイロットです。

必ずや貴方達の助けになり、必ずやユキナちゃんを救い出す要因になってくれます」

「はい。頼りにさせていただきます」

・・・無性に嬉しかった、艦長の言葉が。

俺もナデシコに欠かせない人間になっていたんだなって。

「朗報、期待して、いえ、確信して待っています。

月面基地の事は、私達ナデシコに任せちゃってください。

チヨチヨイと片付けて、マエヤマさんとユキナちゃんの帰りを待っていますから」

「はい！」

託された願い。

必ずや応えてみせるぞ。

次にナデシコに乗り込む時は必ずやユキナ嬢と共に……。

第三百三十八話（後書き）

次回、ようやく動き出します。

会話が長すぎる感はありますが、これが仕様なので……。

もっとパツパと進められないのか？

それは誰よりも私が一番思ってるかと……。

それでは、また次回！

第三百二十九話（前書き）

大変お待たせしました。

読み直し＋修正を終え、ようやくにして執筆。

作者自身も混乱してきた為、今回の読み直しはよかったかなって思います。

これでこんがらがうことなく、最後までいける。

それでは、どうぞ！

第三百二十九話

S I D E M I N A T O

「ナデシコクルーの皆さん、聞いてください」

三羽鳥との邂逅。

そして、ユキナちゃん救出の為に動き出す彼らと・・・コウキ君。
本来であれば私達もユキナちゃん救出に一役買ったんだけど・・・。

「現在、月面基地は完全に包囲されています。

このまま放っておけばすぐにも陥落してしまう事でしょう」

そうはできない事情ができてしまった。

それは私達地球連合軍の本拠地、月面基地が強襲されているという事。

艦長が言った通り、放っておいたら月面基地は陥落し・・・地球が負けてしまう。

「月面基地の戦力はナデシコのチューリップ強襲作戦の影響で非常に少ないです」

チューリップ強襲作戦。

まず、キクザクラを前面に出し、木連艦隊の目を引き付ける。地球にとって旗艦となる重要な存在、敵が狙ってこない訳がないわよね。

その隙を突いて、私達ナデシコが敵艦隊の後方へと回り込んで・

木連の戦略上最重要となるチューリップを相転移砲で破壊しちゃおうという作戦よ。

作戦は無事に成功した訳だけど、それによる弊害が出てしまった。それはキクザクラの護りを嚴重にする為にかなりの戦力を引っ張ってきてしまった事。

「不幸中の幸いは地球側の総大将であるお父様がキクザクラにいる事。

キクザクラの周りには文字通り精鋭中の精鋭を固めてある為、問題ありません」

総大将の負けは全軍の負けに等しいものね。

でも、それに関しては心配いらないわ。

だって、ミスマル最高司令官の周りにはかのアテナ隊やアレス隊がいるもの。

彼らの強さはナデシコにも匹敵するぐらい。

彼らがいればキクザクラが落ちる事はまずないとみていいでしょうね。

でも……。

「しかしながら、だかといって月面基地を放っておいていいのでしょうか。

いい訳ありません。なぜなら、月面基地の陥落はそのまま地球軍の壊滅だからです」

戦争の本拠地となつてゐる場所を落とされて勝ちを望める訳がない。精神的には士気の低下、帰るべき場所がなくなる事による諦めなど。物理的には物資の損失、補給場所の喪失および補給運搬の混乱など。百害あつて一利なしつて訳。

「その為、私達ナデシコはこの危機を退けるべく、一刻も早く月面基地へと駆け付け、月面基地の防衛戦に参加する必要があります」

キクザクラが前線にいて、主力となる精鋭達も共に前線に出てしまつてゐる。

彼らの方が基地に近い事は確かだけど、背中を見せたら逆にピンチになつちやうかも。

だからこそ、私達ナデシコの出番つて訳よ。やるしかないでしょ、私達が。

「なお、その際、木連のシラトリさん達の御好意でチューリップが利用できます」

月面基地近辺に多数展開されているチューリップ。

それを使う事ができれば、ここからでも殆ど一瞬で月面基地までいける。

ま、出てきた瞬間、敵だと思われたら月面基地から攻撃されちゃうかもしれないけど。

あ、なんだか、こんな事が前にもあつた気が……。

「しかしながら、いいのかね。木連のチューリップを使って」

「いいんじゃない。使つていいつて言うんだもん」

「使えるものはなんでも使う。そうじゃなければ戦場では生き残れないわ」

「わお。イズミつたらシビア」

「しかし、言っている事は確かです。」

今、チューリップを利用しなければ・・・手遅れになります」

そうね。彼らの好意に甘えちゃいましょ。

負けたらなんにもならないんだし。

『ポイント - のチューリップが月面基地に繋がっている筈です。』

起動はこちらで行なっておきますので、是非ともご利用ください。

なに、私達を解放してくれた恩を返したまでです。

それに・・・卑怯な手で勝ち取った勝利なんて何の意味もありませんから』

去り際、シラトリさんがそう告げてくれた御陰で希望が見えてきた。卑怯を許さない正々堂々とした姿勢。

敵ながら天晴れって感じ。

その姿には好感が持てるわね。

あ、言つとくけど、あくまで好感だからね、ただの好感。

「それじゃあ、ユリカ」

「うん。これよりナデシコは後方で待機しているカキツバタ及びコスモスと合流後、

ポイント - のチューリップを通り、月面基地へと急行し、彼らを解放します」

こうして、ナデシコは危機に陥っている月面基地を助けるべく動き出したの。

早速、後方で待機しているカキツバタとコスモスとの合流しよう

したんだけど……。
いきなり障害、というか、予定外の出来事が発生したわ。

「あれ？ カキツバタの姿がない」

コスモスに收容されて修理中だった筈のカキツバタでも、そこにあるべき場所にその姿がなかったのよ。

「アカツキ。どういう事だ？」

「ちよつと待つてよ、テンカワ君。そんな事、僕だつて知らないさ。戦つてたんだし」

「責様。戯言を……」

「まあまあ、落ち着きなよ。カルシウム不足なんじゃない？」

それに、そもそも、その場にいなかった僕よりコスモスに聞いた方が早いでしょうに」

「……逃げられると思うなよ」

「あらら。怖い、怖い」

「クツ。ユリカ」

「うん。メグミちゃん、コスモスに通信」

「了解」

映し出されるコスモスのブリッジ。

構造はナデシコとは全然似てないみたいね。

ま、運用用途が違うし、当然といえば当然かも。

『こちらコスモスブリッジ。如何しましたか？ 提督』

あ、そういえば、うちの艦長つて提督も兼備してたのよね。
提督って呼ぶ機会もなかったし、すっかり忘れてたわ。

「修理中であつたカキツバタの姿が見えないのですが、どうしたんですか？」

『は？ 命令通り、前線に送りましたが？』

「へ？ 私はそんな命令出していませんよ。一体誰が？」

『カ、カキツバタの艦長がナデシコより救援命令が来ていると』

「艦長。お前はその言葉に従つたのか！？」

『も、申し訳ございません。修理が終わり次第、前線に投入すると思つていたもので』

ゴートさんの言葉に青ざめるコスモスの艦長。

それはそうよね。言わば、命令違反しちゃつたのと同じなんだし。

「思つていたもので、ではな」

「ゴートさん。落ち着いて下さい。ここで彼らを責めた所で何の意味もありません」

「艦長。しかし・・・」

「それに、この責は私にあります。

カキツバタの事について明確な指示を出していた訳ではありませんから」

『・・・申し訳ございません。この罰はいかようにも』

落ち着いたのか、真摯な態度で頭を下げるコスモスの艦長。

コスモスを任せられるだけあつて、落ち着けば一流の艦長なんですよ。ね。

その真剣な顔がそれを物語っているわ。

「罰を受けるよりもカキツバタの行方を探した方が何倍も建設的です」

『・・・はい』

「彼らはどちらに？ 少なくとも方向は分かる筈です」

『敵後方に迂回し、敵を挟み込むにすると、あちらの方角に』

指し示すのは私達の真横。

あつちは・・・何があつたかしら？

「ルリちゃん。その方向に何かがあるか調べてくれる？」

「了解です」

まったくもって意図が分からないんだけど・・・。

「・・・アカツキ」

「だから、知らないって言ってるでしょ？」

「それならば、お前の秘書の独断だとしても言うつもりか？」

「そうなんじゃない。まさか、エリナ君がこんな事をするなんてね」

「身内を売るとはな」

「酷い言いようだね、随分と」

冷たい視線がアカツキ会長に集まる。

当然、私も。

だって、彼女の独断だなんてありえないもの。

間違いなく、この男もこの企みの共犯者。

「目的は・・・やはり遺跡か？」

「だから、知らないって言ってるでしょ？ 何度言ったら分かるの？」

「アカツキ。貴様」

「はい。ストップ」

「・・・イネスさん」

鬼気迫る勢いのアキト君と会長の間に入るイネスさん。

その顔はどこか呆れ顔。

「まったく。今の状況を忘れてないかしら」

「状況？」

「カキツバタがどこにいて何をしているか気になるのも分かるけど・
・・。

今の私達はそれよりも優先するべきことがあるからここにいます
でしょ？ 違う？」

「・・・月面基地」

「そ。それよ。どれだけ追求したって口を割る訳ないんだから。時
間の無駄」

「そうそう。流石は博士。分かってらっしゃる」

「・・・」

「おっと、博士ぐらいの美人に睨まれたら思わず口を割っちゃいそ
うだよ」

「艦長。この男は放っておいて、先に進みましょう」

「はい」

「手厳しいことで」

・・・カキツバタが今、どこで何をしているか。
気にならないといえば嘘になる。

でも、それはまだ多分時間的猶予があるもの。

今、私達がしなければならぬ事は・・・一刻の猶予も許されない。
本当に、あの男に構っていられる時間なんてないのよ。

「艦長。こちらの方角には特にこれといって重要なものはありませ
ん」

「そつか・・・。ありがとう、ルリちゃん」

「いえ」

「それにしても、何が目的なんだろうね？」

「・・・分かりません。それに、私は他にも気になる事があります」
「気になる事？」

「はい。とりあえず、詳しい事は移動しながら話しますので、今は」
「そうだね」

ルリルリが気になる事。

それって一体・・・。

「コスモスの艦長さん」

『ハッ』

「現在、月面基地が敵の奇襲を受けて非常に危険な状態にあります」

『はい。先ほど、救援命令を受信しました。しかし、ここからでは・

・・・』

「そこで、チューリップを用いて月面基地まで飛びます」

『チューリップを！？　しかし、それではかなりの賭けになるので
は？』

「心配はいりません。私達を信じてください」

『・・・了解しました。付いていきます』

悩む素振りを見せたもののすぐさま了承。

軍内におけるナデシコへの信頼が伺えるシーンだったわね。

普通は嫌だもの。こんな賭けみたいなさ。

「ミナトさん。ナデシコをポイント　・　へ」

「了解」

艦長の指示に従い、ナデシコを移動させる。

時間でいえば、数十分といった所かしら。

後方のコスモスも無事に付いてきているようだし。

それじゃあ・・・。

「ルリルリ。それで、気になる事って？」

それまでの間、ルリルリの気になる事を聞いちゃいましょう。

「ハーリー君達です」

「え？ 僕ですか？」

ルリルリの発言に驚くハーリー君。

ルビーちゃん達もルリルリの事を見ていた。

無表情ながらもどこか困惑した顔で。

「ハーリー君達はカキツバタのオペレータ。

彼らがいなければ、カキツバタは碌に動けない筈です。

エリナさんが出ていく時にもそれらしい事を言っていましたし」

確か、今は動けない、別に連れていっても意味がないとかなんとか
それって裏を返せば、動かす気になったら、彼らの力が必要って事
よね。

「ハーリー君」

「あ、はい。えっと・・・ハルカ、さん？」

「そうそう。あ、私もハーリー君って呼ばせてもらっわね」

「構いませんけど」

心の声じゃもうそうやって呼んでただけだね。

ん？ 心の声って何かしら？

・・・ま、いつか。

「ハーリー君達以外にさ、オペレータっていたの？」

もし、いたのなら、動かす事は可能よね。

「いえ、いません。僕達だけでした」

「そうなの？」

「・・・うん」

「・・・そう」

「・・・(コクツ)」

ハーリー君以外の三人娘も同意。

あ、そういえば、慌ただしくて、コウキ君に彼女達の事を話すのを忘れてたわ。

帰ってきた時にもう一度提案しよう。

「それじゃあ、今、カキツバタにはオペレータがいなくて事か？」

「それでも動くの？ カキツバタって」

「その所、どうなんだ？ アカツキ」

「企業秘密って言ったよね、僕」

ギロリッ！

「おっと、動かせなくはないよ、IFSがあれば一応」

流石に周囲にいる全員から睨まれれば答えるわよね。

「だが、性能は落ちるのではないか？」

「まあね。でも、いつまでもそのままにする程、愚かじゃないよ、ネルガルは」

「何？ それでは・・・」

「そ。カキツバタは軍用に生産したナデシコ級戦艦だよ。後は分か

るよね？」

「・・・私達MCがいなくてもそれと同等の性能を發揮できる・・・

」
「そゆこと」

そ、それなら・・・。

「ナデシコ級を野放しにしてしまったという事か、それも高性能な」

「ま、エリナ君が何を考えているかは分からないけどね」

「貴様・・・」

怒りに顔を歪めるアキト君。

でも、私が浮かべたのは・・・その真逆、安堵の表情。

「良かったわね、ルリルリ、ラピラピ、セレセレ、それに皆も」

小さく呟く。

だって、これってマシンチャイルドの決まっていた未来から解放されたって事じゃない。

今までは彼女達がいなければナデシコ級戦艦は力を發揮できなかった。

逆にいえば、ナデシコ並の戦力を確保する為には彼女達を確保する必要があったって事。

今後、戦力を求めるなら、まず誰よりも何よりも、マシンチャイルドである彼女達が狙われる可能性が高かった。

でも、このカキツバタの登場で決して彼女達がいなければならぬという事はなくなる。

もちろん、その危険性が皆無になったという訳じゃないんだろっけど・・・。

それでも、彼女達の未来は開けたんじゃないかなって思う。

相も変わらずネルガルは諦めが悪い様子で・・・嫌になっちゃう。でも、思い通りに行くと思ったら大間違いなんだから！ナデシコに協力しておけば良かったって後悔させてあげるわ。

S I D E O U T

「さて、まずは歓迎しよう、コウキ」

艦長に無理やり頼み込んで、俺はユキナ嬢救出作戦に参加する事ができた。

敬愛する三羽鳥と初めて手を取り合っでの共同作戦だ。やる気が漲らない訳がないだろ。

「はい。何の役に立てるかは分かりませんが、全力で頑張ります」

こんな在り来たりな言葉しか返せなくて申し訳ないが、必ずや救ってみせるという想いは決して彼らの誰にも負けていないと自負している。

ユキナ嬢を助ける事、これは俺に与えられた責任であり、義務だからだ。

「なに、お前の実力は充分分かってるつもりだ。正直、頼りにしている」

「それはまた、嬉しいお言葉で」

何を根拠に言ってるかは分からないけど……。
その期待には全力で応えてみせよう。

「マエヤマ・コウキだったか」

「はい。ツキオミさん」

三羽鳥一の武闘家、ツキオミ・ゲンイチロウさん。

どこまでも真つ直ぐな心と木連への熱い想いを持つ熱血漢。
彼自体には好感が持てるんだけど……思い込んだら一直線つてのがな。

草壁を盲信するのは構わな……くはないけど、もうちょっと周りを見て欲しい。

「お前が木連人の、いや、ユキナの為にそこまでやるのは何故だ？」

何故？

そんなの決まってるじゃないか。

「家族だからですよ」

「何？」

「雪菜は私の妹だぞ？」

怪訝な表情のツキオミさんとシラトリさん。

ま、確かに言い方が言い方だったもんな。

アキヤマさんは何故か微笑ましそうにこちら見ているが。

「ユキナちゃんは短期間でしたが、ナデシコにいました。

ナデシコは俺達にとって家です。家にいる仲間は家族です。

一時期でも家族だった者を放っておける訳がないじゃないですか」

きつとナデシコの誰もが思ってくれている。

ユキナ嬢は家族だつて。

俺はそんな皆の想いを背負っているんだ。

絶対に、救い出してあげないとな。

「・・・お前は木連人をモ家族だと、そういうのか？」

「おかしな事を言いますね」

「おかしな事だと？」

「家族に人種とか出身とかって関係あるんですか？」

ないだろ、どう考えても。

家族ってのは種別でさえ乗り越えちまうもんだぞ。

ペットだつて家族。

血が繋がってしまいと家族は家族。

家族という括りに垣根は一切ないんだ。

木連人だとか地球人だとか、火星人だとか、そんなのまるつきり関係ないのさ。

「ハツハツハ。相も変わらずナデシコは懐が広いな」

「源八郎」

「コウキの想いは本物だぞ、元一郎。本気で家族を助けようと考えている」

「そうか。そんな奴も地球にはいるのだな」

「たくさんいますよ、ツキオミさん。たくさん、ね」

「・・・そうか」

どんなコンプレックスを持っていようと全て受け入れてくれる暖かいナデシコの人々。

確かに世の中には色々な人がいるけれど・・・。

きつとナデシコみたいな暖かい場所はどこにだってある。

きつとナデシコの人々のような暖かい人はどこにだっている。だから、木連と手を結ぼうって皆が思ってくれるんだ。人間って時に冷たいけど・・・本当に暖かい生き物だなんて思う。

「マエヤマさん」

「はい。なんででしょうか？ シラトリさん」

三羽鳥の筆頭とでも言おうか。

木連軍人の若手筆頭とでも言おうか。

ともかくにも大きな影響力を持つシラトリさんが目の前にいる。あまり大きな声では言えないが・・・俺は彼こそが和平の鍵だと思っっている。

彼の行動次第で今後の地球と木連との関係性が決まるとも。

「先日は申し訳ございませんでした。ついカツとなってしまう・・・」

「

神楽大将の執務室で殴られた時の事だな。

「構いません。あれは正当な権利でしょうから」

必ず護ると断言しておいて護りきれなかった。

殴られるのは当然の事だと思っう。

「し、しかし、それでは・・・」

本人が気にしてないっていうのになあ・・・。

なんで、俺の周りはそのような人ばかりなんだろう。仕方がない・・・。

「まずはユキナちゃんを助け出してからです」

「ユキナを？」

「はい。そうしたら、ユキナちゃんにある事ない事を言っただけで怒って
もらいますから」

「なッ！」

「アッハッハ。本当にコウキは面白いな。あのツクモが啞然として
いる」

うまく切り返せたようで何より。

「元一郎も九十九も完全にコウキのペースだな」

「そうですね？」

俺は俺らしくいるだけだけど。

ま、ナデシコは誰もがマイペースだからな。
それが写ってしまったのかも。

「さて、コウキ、もう少し話していたいのだが・・・」

「はい。この時間すら惜しい。早速、作戦を考えましょう」

「うむ。では、まず、情報の整理から始めよう」

流石はアキヤマさん。

大事な事が分かってらっしゃる。

何よりも大事なのは情報。

そして、それを共通の認識としておく事だ。

「我々が攻め込むのは木連の市民船の中にあるグリーンベース。

この地は草壁中将直属の基地であり、厳重な守りが予想される」

市民船の中か。

不用意な戦闘は民の動揺を誘ってしまうな。

「グリーンベースの周辺はどのようになっているんですか？」

「地形などといった事か？」

「はい」

どうやら、何を心配しているか悟られている様子。

相変わらず、頭が回るな、アキヤマさん。

「民の混乱の事を考えてくれているのだろうが、お前の心配は杞憂に終わるぞ」

「え？」

「グリーンベースは文字通り緑豊かな地。

自然を壊していいと言っている訳ではないが、周辺に街はない」

「完全に？」

「完全にだ」

なるほど。

調べものの際、グリーンベース周辺の映像を見た事がある。

でも、その時はあくまで基地周辺でしかなかった為、もしかしたら
と思った訳だが……。

杞憂に終わるなら、一安心といった所か。

「木連の民の事を考えてくれて感謝する」

「あ、頭をあげてください、シラトリさん。当然の事ですから」

「現在進行系で争っている敵の事を思いやれる者などいない。貴方は本当に……」

「と、とにかく、考えるべき事はユキナちゃんの救出です。」

あらゆる状況を想定し、その一つ一つに対して対処法を考えまし

「よ」

極端な話、今現在グリーンベースにいるのかも分からないのだ。サブロウタさんが張り付いているらしいから、今の所は心配ないだろうけど……。

「うむ。最善は既に三郎太が救出している事なのだが……」

「流石にそれは厳しいだろう。三郎太とて木連が誇るパイロットだが、限界がある」

「ああ。それに、単機で救出できる程、草壁中将直属の基地は甘くない」

「分かっている。あくまで希望的観測だ」

確かにそれが一番良いよな。

現実味を帯びているかどうかは別として。

何もしなくたって、既にユキナ嬢が救出されているんだから。

「どちらにしろ、まずはこちらの戦力の確認だな。己を知らぬ者に勝てる道理などない」

己を知り、敵を知ればなんとやらって奴だな。

「艦隊構成は元一郎の戦艦及び俺の戦艦の二隻。

搭載されている機体は合わせて十五機といった所か」

「俺を忘れないでくださいね、アキヤマさん」

「もちろん、忘れていないさ。お前が鍵を握っているのだから」

だから、過大評価だつてば。

「搭載機は福寿が四機、福寿改が六機、積戸気が四機、ダイデンジ
ンが一機」

「福寿改があつたんですか？　だって、さっきの戦いじゃ……」
戦場で一切姿を確認していないんですけど。

「色々と考えがあつたのだ。何よりユキナ救出の前に主力を失いたくなかつた。

ナデシコ相手に失わずに済む程、俺は自信家でもなければ、己惚れ屋でもないからな」

それはまた、光栄です。

「それに加えて大量とは言えんが、無人兵器も残っている」

「それなりに戦えそうな戦力ではないか」

「ああ。しかしながら、一つの基地に攻め込むには不十分だ」

弱気な断言。しかしながら、それが真理。
でも……。

「だが……それでもやるのだろうか？」

その不敵な笑みからは一切の弱気を感じさせなかった。

「当然だ」

「何を臆する必要があるか」

力強いお言葉。

もちろん、俺だって……。

「充分過ぎるぐらいです」

胸を張って答えよう。

この三人と共になら、不可能な事なんてない！

「そうか。頼もしいな」

「アキヤマさんこそ、表情が物語っていますよ」

どこまでも自信に溢れるその表情に。

「さて、元一郎、九十九、現状の戦力を確認した訳だが・・・」
「当然だな。まだ何かあるのか？」

確かに突然の話題展開だった。

これは・・・アキヤマさんらしい何かしらの考えが聞けるか？

「俺は前々から木連の戦闘方式に疑問を感じていたのだ」

これはまた、大きく出たな。

自分達の国の戦い方を否定するとは・・・。
でも、それは昔から俺も思っていたり。

「戦闘方式に？」

「ああ。何故艦長が自ら機体に乗る、戦場に出向くのか、とな」

まったくもって。

艦長とは文字通り艦の長。

艦内にいないでどこにいるってんだ。

「何を言う？ 最も強き者こそがキャプテンに相応しいからに決ま
っているだろう」

「そう、確かにそうだな」

確かにキャプテン、というより象徴としては最も強き者なるべき
だと思っ。

でも、象徴＝艦長つてのもどうかと思っ。

「だが、指揮官としては間違っていると断言できる」

「なッ!？」

「源八郎。それは地球の方式こそが正しいと言っているのか？」

「うむ。少なくとも木連よりは理に叶っているといえよう。そうだ
る? 「ウキ」

こ、ここで俺に振りますか……。

「自分達の事を自慢するようで嫌なんですけど、少なくとも木連よ
りは」

理に叶っていると断言できる。

「……何故だ? 指揮官が前線に出れば士気は向上するだろう」

「確かにそうです。でも、その方式は前時代的ではないでしょうか」
「前時代的だと?」

そう、前時代的なんだ。

「過去、情報収集が容易ではなかった時代、

指揮を執る為にも指揮官は前に出る必要がありました」

何故なら、そうしなければ、状況がまったくもって掴めなかったか
ら。

「確かに前線に指揮官が出てくる事は士気の向上に繋がります。しかし、指揮官が討たれれば、その軍は壊滅に等しい。」

メリット・デメリットを考えれば、軍の指揮官は後方にいるべきです。

あ、もちろん、前線に出てくる事の全てを否定している訳ではありませんよ。

状況次第では、そちらの方が良い時もある筈。要は時と場合による、という訳です」

「なるほど。確かにそうなのかもしれません」

大将が前面に立ったからこそ勝利できた戦も決して少なくない。結局の所、ケースバイケースといった所だ。

「話は戻りますが、過去は情報収集の為に前線に出る必要があります。でも、今の戦争は前線に立たずとも情報を得る事ができます。」

それならば、少し後方に位置を取ることが艦長の理想ではないでしょうか」

「その場で情報を解析し、大きな視野を持って指揮を執った方が状況把握も容易いしな」

補足ありがとうございます、アキヤマさん。

というか、後は任せました。何故に俺に振ったかが分からん。

「・・・戦いながらでは明確な指示が出せないという事か」

「そういう事だ。それに、その状況で艦長が死んだら誰が指揮を執るといふのだ？」

「・・・それは・・・」

「その場における最高指揮官が戦場に出るのは愚の骨頂だ。」

指揮官が潰れたら敗北というのはどの時代でも同じだからな」

「・・・そうか。確かにそうだな」

どうやら納得して頂けた様子。

月臣さんが誰かに説得される姿つてのはあまり想像できなかったけど・・・。

きちんと根拠をもって話せば納得してくれるみたいだ。

いつもの分からず屋的なイメージは・・・真っ直ぐで頑固だからなんだろうな、きつと。

「それなら、源八郎、お前の描く理想を俺達にも教えてくれ」

頭脳戦の天才、アキヤマ・ゲンパチロウが描く三羽鳥の戦い方・・・か。

「俺達三人はそれぞれ得意とする分野が違う」

「うむ」

「だから、それを活かせば良いのだ」

ふむ。なるほど、なるほど。三人の長所ね。

「俺は艦隊戦、元一郎はパイロットとしての腕前。

そして、九十九、お前は・・・人を率いる才能だ」

「人を率いる？ それはお前と違うのか？」

「違うな。俺のは理屈だ。お前のは理屈じゃない」

「・・・よく意味が分からないのだが？」

きつとその意味は分からなくていいものなんだと思いますよ、シラトリさん。

だって、それは・・・考えて出すものじゃなく、自然に出ているものなんだから。

その人を惹きつけてやまないカリスマ性ってのは。

「ふつ。細かい事は俺に任せておけばいいという事だ。

お前はありのままに艦隊を率いる。そのフォローは俺がしよう
「ありのままに……。ああ。分かった」

その姿に人は付いていくのだから。

「俺は何をすればいい？ 源八郎」

「元一郎。お前の強味はパイロットとしての腕前だ。

少なくとも、俺はお前以上のパイロットを知らない」

「そ、そうか」

「ああ。お前の言う士気の上はキャプテンでなくてもできる。

艦長としての責務から解放してやるんだ。思う存分やってくれ」

「分かった。任せてもらおう」

味方を鼓舞する役目を請け負うのは艦長じゃない、エースパイロットだ。

地球が誇る黒き死神、テンカワ・アキトのような。

「これが俺の思う俺達の戦闘方式の理想だ。

九十九が全体の指揮を執り、俺が細部の調整を行う。

そして、元一郎が前線でパイロット組の指揮を執りつつ戦闘を
する」

「……これこそが俺達三羽烏の戦闘方式……」

「自ら三羽烏と名乗るは変だがな」

「ウルサイ」

照れている様子の月臣さん。

なんだか、初めて見る表情だ。

「後は・・・あちらの状況次第か」

その後、出来うる限りの状況を想定して、作戦会議を行なった。あらゆる事態に対処できるようにといっても、必ず穴は出てきてしまう。

だから、何があっても、冷静に。

それを忘れずに敵の基地に乗り込もうと思う。

「・・・さて、そろそろだ。覚悟はできたか？」

「当たり前だ。いつでもいける」

「もちろんだ」

「はい」

「それなら、行こう。我らが白雪姫を助けにな」

「ああ。雪菜、待ってるよ。お兄ちゃんが絶対に助けるからな」

第三百三十九話（後書き）

カキツバタの謎の動きとユキナ嬢の救出作戦。

救出が成功するか否かで今後大きく異なってくる事でしょう。

さて、コウキは無事にユキナ嬢を助け出す事ができるのか。

それでは、次回もよろしくお願いします。

第四百四十話（前書き）

大変お待たせしました。

私自身、こうまで悩み、更新できなかつた事は初めてです。この展開で良いのだろうかという不安はありますが・・・。
楽しんで頂けたら光栄です。

第四百十話

「そろそろ跳躍門を抜けるぞ」

アキヤマさんの落ち着いた声色での一言。

状況が状況なだけに、否が応にも緊張感が漂う。

目的地はグリーンベース最寄りのチューリップ。

遠回りなんてしない。最短距離で襲撃を仕掛ける。

・・・とは言ったものの、全てが思い通りに行くなんて思っていないさ。

「抜けた後、目前に広がる光景は如何なるものになる事やら・・・」

相手は謀将草壁、慎重になり過ぎるぐらいが、警戒し過ぎるぐらいがちょうどいい。

万が一、ユキナ嬢の隠し場所がバレた時の対応はとっくの昔に考えてある筈だ。

たとえ、相手が突き止めたという事を知る事ができなくても対応できる策を。

もしかしたら、チューリップを抜けた瞬間に敵が襲ってくるかもしれない。

もしかしたら、まったく別の場所にボソソジャンプさせられているかもしれない。

だが、それも予想さえしてあれば、あくまで想定の内。

それを見越した上で、強襲という策を選んだのだから。どのような状況になるかと冷静でいられる自信はあるぞ。それだけの修羅場がくぐってきたつもりだ。今の俺に油断も予断も一切ない。それが後悔のもとだって、散々思い知らされてきたから。如何なることにも全身全霊でぶつかるとのみ。

『こちら、月臣。各員、出撃準備は出来ている』

「了解した。追って指示を出す」

『了解。必ず救い出してみせる』

格納庫にて待機しているツキオミさん。

ツキオミさんはこの戦い、完全なまでにパイロットに専念。

現在、彼が艦長を務めていた戦艦は彼の副官に艦長職を委ねてある。元々、頻繁に出撃するツキオミさんの副官だ、慣れっこだろう、多分。

「九十九。始まるぞ」

「ああ。分かっている」

「ふむ。良い集中力だ」

アキヤマさんはそのまま自らの戦艦であるカンナヅキの艦長を務める。

そして、その二隻の全体的な指揮を執るのが・・・。

「各員に告げる」

木連における初めてかもしれない役職、提督を務めるシラトリさんだ。

「この戦いはどこまでも私の私情によるものだ。
このような戦いに諸君らを巻き込んでしまい、大変申し訳なく思
う。すまなかつた」

頭を下げる、この場における最高責任者が。

でも、それに関して誰も笑ったり、ましてや、蔑んでいたりなんて
していない。

その表情はどこまでも真剣。

この場にいる誰もが、この状況をなんとかしたいと感じているから
だろう。

それは彼の徳故か。

いずれにしろ、どこまでも頼もしい姿がそこら中であつた。

「この中にはこの戦いを馬鹿らしく感じている者もいるだろう。

だが、それを承知の上で頼みたい。諸君らの力を私に貸してくれ
ないだろうか」

再び頭を下げる。

その真摯な姿に胸を打たれぬ者などいない。

『白鳥中佐。御顔を御上げください』

どこの誰とも知らない一人の木連軍人。

でも、その人が、その人の表情がその場にいる全ての人間の想いを
物語っていた。

『我々は貴方に付いていくだけです。貴方は我々の希望なのだから
「希望?」

『はい。我らが欲して止まない和平を導いてくれる者として』

「……和平……」

『私達、秋山艦長の部下一同は中佐に付いていきます』

『その後の事は分かりませんが……』

私達は月臣艦長の部下。月臣艦長の意思が我々の意思であります』

アキヤマさんの部下とツキオミさんの部下。

それぞれの掲げるものは徹底抗戦と和平という相反するものだが・
。。

今は同じ目的の為に手を取り合っている。

この光景は違う思想を掲げていようと決して手を取りあえない訳ではない。

そんな事を俺に教えてくれているように感じる。

だから、俺は諦めないぞ。

思想という垣根が越えられて、国、星という垣根が越えられない訳がないのだから。

そして、いずれは……誰もが和平を望む光景を……目にしてみせる！

「すまない、いや、ありがとう、皆」

あちらこちらから伝わる心強い意思にシラトリさんは目を瞑り、想いを馳せる。

その後、しばらくして、ようやくその眼が開かれ……。

「諸君らの協力、感謝する。目指すはグリーンベース。必ずや目的を果たしてみせよう」

凛々しい表情と共にそう力強く断言した。

「出ますー！」

ブリッジにいるオペレータが告げる。
さて、何が待ち受けているやら。

「・・・・・・・・」

光が止む。

その先には・・・。

「なるほど。そうきたか」

「総員、シヨック体制！」

目前に広がるは溢れんばかりのミサイルの雨。

もしかしたらグラビティブラストの強襲もあるかもと思っていたが、
流石に市民船の中なだけあって、ぶちまけてくる事は自重したよう
だ。

市民船が頑丈にできていたとしても中からの衝撃には弱いかもしれ
ないしな。

ま、市民船撃沈〓木連敗北な訳だし、考えてない方がおかしいか。
しっかし・・・。

「これで俺達がここに来た事がばれてしまったな」

恐らく、相手の狙いはそれ。

こちらへの攻撃というよりはチューリップの監視及び俺達の発見が
目的だろう。

今頃、グリーンベース、ユキナ嬢がいる基地にでも報告がいつてい
る筈だ。

でも、ま・・・。

「予想してなかった訳じゃない」

むしろ、ここで撃沈されるぐらいの圧倒的戦力に囲まれる事すらも想定していた。
それに比べれば、軽い方だ。
まあ、緊急性が増したという複雑な状況にはなった訳だが。

「損傷を報告せよ」

「損傷は軽微。戦闘続行できます」

「了解した。想定した甲斐があつたな」

DFを最高出力で展開。

これならある程度のもので防ぎきれぬ。

それに加えて万が一の為の弾幕を張る準備もできていた。
不備はないさ。

「パイロットは出撃を！」

『おう！』

「コウキ。お前は機体内で待機だ。この段階で切り札を出す必要はないからな」

「了解」

確かに、今の状態で俺が出る意味はないと思う。

この戦闘はあくまで前哨戦。

周囲の敵を撃破すれば終了だ。

別に自分が秘密兵器という意識がある訳じゃないけど、少なくとも俺がやるべき時は今じゃない。

・・・そんな気がする。

きつと、アキヤマさんもそう感じるからこそこの指示なんだろうし。

「万が一の時があれば出撃してもらうつもりです。無論、そうはならないつもりですが」

「シラトリさん……」

その表情、頼もしい限りです。

「その時は好きに動くといい、コウキ。お前の行動は、全てお前の判断に任せる」

「……いいんですか？」

俺は地球側の人間。

その人間に対して自由にしていいいなんて……。

「その方がお前の力を発揮できるだろう。今回だけとは言わず、今後はいつでも好きに動け」

「了解」

なんともまあ、重い期待。

……でも、それだけ期待されていると思えば……頬が緩む。

「総員、殲滅開始！」

『『『了解！』『』』』

展開されていく機動兵器達。

目前に広がる敵戦力は多いが莫大という程ではない。

これぐらいなら、あっという間に終わるだろう。

シラトリさん達が言うように万が一など一切なく。

「案の定、戦闘終了はあっという間でした」

「誰に説明しているんだ？」

「いや、今の俺にできる最低限の仕事なので」

「うむ？ まあ、いいが・・・」

追求はなしの方向でお願いします。

「さて、早速これからの事を話し合いたい。

が、その前に・・・サブロウタ、前に出る」

「ハッ！ お久しぶりです、皆さん」

そう言つて敬礼するサブロウタさん。

恐らく木連式で俺の知る敬礼とは違うのだろうが・・・。

見た所、似たようなものだったので同じように敬礼を返す。

少しの違いは勘弁してください。

「先程の戦闘中、監視の任務についていたサブロウタが合流した」

近辺で戦闘があつた為に察して合流したのか、それとも、アキヤマさんが連絡したのか。

まあどちらでもいいか。

無事に合流できたのだから。

「グリーンベースに張り付いていたそうだな、サブロウタ」

「はい」

「妹の為に苦勞をかける。すまない」

「いえ。当然の事をしたまでです。」

女子は木連にとって宝。男として救わねばなりません」

「ありがとう。お前のような者が部下な源八郎は恵まれているな」

「いえ。これも艦長の薫陶を受けたが故です」

「ハツハツハ。源八郎。お前は本当に恵まれているな」

「まあな。だが、このような処世術を教えたくもりはないぞ」

「お世辞ではありません」

「だ、そうだぞ、源八郎」

「よく言う・・・」

苦笑しつつも嬉しそうなアキヤマさん。

しかし、本当にこの時代のサブロウタさんは硬派な男で格好いい。俺もこうなりたいものだ。

「恐らく、先程の戦闘で我々の存在が露見した。

基地の護りを固めてくるか、それともこちらに攻め込んでくるか。相手側がどのような手を打ってくるかは分らんが、時間がない事だけは確かだ」

既にグリーンベースにこちらが接近している事はバレている。

その状況で対策を打ってこない訳がない。

だが、時間がないからと慌てた所で状況は好転しない訳で・・・。

「だが、だからといって無謀な強襲など成功する訳がない。

作戦を成功させたければ緻密な計算と作戦内容を始めとした情報の共有が不可欠だ」

御尤も。

いつの時代だって情報は何よりも大切だからな。

そして、その情報を部隊内で共有する事は尚更。

一人が把握していない事で作戦が失敗する事だってあるんだ。優秀な指揮官はまずはその部分を徹底する。

同時に漏洩に対しても。

「そこで・・・サブロウタの出番という訳だ」

先程まで敵の基地を監視していたサブロウタさんだ。

現段階で誰よりも敵の状況を把握していると言っている。

所謂、偵察班という奴だな。

後はサブロウタさんに及ばずともそれに近い所まで敵の状況を把握し、イメージする事。

それが俺達に与えられた課題だ。

「私がグリーンベースに張り付いたのは戦争開始と同時。

そして、グリーンベースの状況を些細な事を含め全て逐一艦長に報告していました」

戦争開始と同時に？

それはまた、思い切ったというか・・・。

「俺はてつきり戦場にいたかと思ってました」

三羽鳥は若手達にとって憧れであり、エリート中のエリート。

前線に出れない最高幹部達の代わりに前線指揮官として活躍していた筈。

彼らがいるだけで戦意高揚に繋がるからな。

だから、当然サブロウタさんも前線にいるもんだと・・・。

「それは根本的な勘違いだな、コウキ」

「根本的な勘違い・・・ですか？」

「お前は俺達が初めから戦場にいたと考えているようだが、

三羽鳥と呼ばれる俺達三人にとってお前達とのがこの戦争におけ

る最初の戦闘となる」

「え？ それじゃあ・・・」

「ああ。俺達は今の今まで戦場にいなかった、という事だ」

・・・ちよつと待てよ。

すると、誰が戦場の指揮を？

木連の最高幹部達は恐らく前線ではなく、ここ、木星付近にいる筈。しかしながら、核となれる人物が前線にいないければ破綻は必至。一体、誰が前線で全軍の指揮を執っているというんだ？

三羽鳥以外に木連で指揮が執られる優れた人間がいるとでも？

「一体誰がこの戦争における戦闘の指揮を執っているのですか？」

「いるじゃないか。そこにいるだけで我々よりも兵士達の士気を向上させる人物が」

「まさか・・・草壁中将・・・ですか？」

「そのまさか」

・・・そんな事があるのか？ まさか、あいつが前線に出るなんて事が。

そんな・・・自ら隙を作るような真似を・・・あいつがしたと？

「であれば我々も動きやすかったのだがな」

え？

「草壁中将ではない」

・・・やはりか。

あいつが木連を留守にする訳がない。

何故なら、奴が最も重要視しているであろう国民からの支持を失い

かねないからだ。

奴への国民からの信頼をぶち壊す為の情報俺達は幾つか持っている。

こちらが奴のいない間にそれを告発してしまえば俺達の策は成し遂げられるだろう。

だが、もし奴がいれば・・・不発に終わる可能性の方が高い。

奴の影響力から考えると「木連の勝利の為だった」で済んでしまうだろうから。

恐らく、奴とてこちらが切り札を隠し持っている事は察している筈。このような状況下で、奴が自ら隙を作り、破綻への道を歩み出すとは到底思えない。

ましてやあの慎重過ぎる策略家、草壁なら尚更な。

「我々にとっては最高の指揮官であり・・・最悪の状況でもある」

最高の指揮官で、最悪な状況？

それって一体・・・。

「現在、木連の前線指揮官を務めておられるのは・・・神楽大将だ」

「神楽・・・大将？」

え？ なんてだよ？

最高幹部、もつと言えば、草壁より高い階級の人間だぞ。

そんな人間がわざわざ前線指揮官を務めるだなんて・・・。

「草壁中将からのご指名だった。神楽大将の階級であれば断れるの
だろうが・・・」

「断るには理由が不十分であったと？」

「・・・ああ。以前、大将は口にしていたからな。息子の仇討ちを
しなければならぬ」と

「恐らく、その言葉をちらつかせたのでしよう、草壁中将は」

「状況を察したのか、何か考えがあったのか。」

「どちらなのは分かんが、神楽大將は要請を無言で頷いた」

・・・神楽大將は何を考えているんだ？

ここであえて前線に赴くメリットなんてあるのか？

そんな事よりも木連内の支持率向上の活動をした方が断然今後の為になるだろうに・・・。

「うむ。それも確かに気になる事ではあるが、まずは雪菜救出の優先しよう」

「あ、すいません」

アキヤマさんの言う通りだ。

考えた所で結論がでない事は後回し。

今はそれよりも優先すべき事がある。

「サブロウタ。続きを」

「ハッ。艦長も市民船内で待機だった為、報告が滞る事はありませんでした。」

しかしながら、グリーンベースに動きはなく、救出の機会が訪れる事ありません」

確かにそうだな。

どれだけ戦力があるうときっかけがなければ無謀な強襲になる。

ましてや、木連国内が万全の状態であれば、反逆者の汚名を被せられる事も。

最適な状況で物事を運ばなければ、追い詰められるのはむしろ神楽派だ。

「それでは、今もそのままの状態であるという事か？」

「いえ。偶然か必然か・・・いえ、間違いなく必然でしょう。」

私と艦長が連絡を取れなくなった時、グリーンベースに動きがあったのです」

「必然か・・・。その時とはいつだ？」

「艦長達、三羽烏が徴集を受けた時です」

・・・なるほどな。

それは確かに必然だ。

向こうがサブロウタさんを意識していたとは思えないが、実行のタイミング的にはそうならざるを得ないと言えるだろう。その状況と今までの情報から察するに、その動きとは・・・。

「その動きとは？」

「艦隊が補給という名目で基地に降り立ったのです。」

恐らく、その意図は・・・基地の守備を交代する為」

北辰の代わりとなる者を送り出したという事だろう。

そして、それによって自由になった北辰を今度はナデシコへと仕掛けさせた。

北辰が一人だったとは思えないが、少数であった事は間違いない。

少数に対しての交代要員に艦隊一つを差し向けるとは・・・。ある意味、草壁の北辰に対する信頼の篤さがうかがえるな。

「その為、現在はその艦隊が守備に付いています」

「北辰がいなくなったものより戦力は増したと見るべきか」

艦隊相手に手負いの艦二つはかなり厳しい。

しかも、時間を与え過ぎれば、ユキナ嬢の身にも危険が迫るだろう。そして、成功しなければ、三羽烏が反逆者という扱いを受ける可能

性もある。

理由があつたとはいえ、味方の基地を攻撃するのだ。成功させて、ユキナ嬢の事情を説明できなければ間違はなく反逆者だ。

まあ、周囲を納得させる事ができなければ・・・成功したとしても反逆者だろうが。

・・・さて、この状況下で俺達は動くべきか・・・。

「戦力は間違いなくあちらが上。

それに加えて相手は基地であり、こちらは補給も援軍もない愚連隊。

やるしかないとはいえ、このままではどう攻めた所で敗北は間違いないだろうな」

「源八郎！ 弱気でどうする！ 諦めたというのか！」

「弱気ではないさ。状況を正確に把握しているというだけ。

そして、源八郎、誰が諦めると言った？ 俺はこのままでは、と言ったのだ」

「それじゃあ・・・」

「ああ。我に策あり、だ」

ニヤリツと頼もしげにアキヤマさんが笑った。

「一体どういう事なのでしょう？ 説明して頂きたい」

艦長席にはアキヤマさん。

そして、モニタに映るのは・・・。

『い、いや、私は艦隊の責任者の指示に従ったままで……』
「あの艦隊はあくまで余所の艦隊。貴方に対する指揮権はない筈です。」

貴方はこの基地の責任者。この基地に対しては他の誰よりも高い権限がある」

降り立った艦隊の名目は補給。

そうであれば、基地の責任者自体が代わった訳ではない筈。

そんなアキヤマさんの予想通り、基地の責任者は以前のままだった。気の弱そうな小太りのおじさん。

何故草壁が彼を信頼し、ユキナ嬢を預けたのか理解に苦しむ。都合の良い駒だったという事だろうか？

『そ、その私が判断したのだ。君にとやかく言われるつもりはない』
『！』

激情を露にするおじさん。

……本当に、何故この男がこんな重要拠点の責任者を務めているんだ？

「……その指示とは？」
『極秘事項だ！』

落ち着いているアキヤマさんと感情を露にしている責任者。どっちの方が高い地位にいるのか分からないな、これじゃあ。

「……どちらにしろ、私達を保護して頂きたい。

ナデシコとの戦闘で損傷していた上に先の戦闘。

いつ墜落してもおかしくない状況にいるのですから」

作戦は簡単。
中から崩す。
それに尽きる。

『・・・よかるつ』

交渉をアキヤマさんがしているのには理由がある。
それは、アキヤマさんしか受け付けてもらえないからだ。

『・・・誘導する。指示を待て』

既に連絡がいつているかどうかは分からないが、
シラトリさんもツキオミさんも扱いはナデシコの捕虜。
ここについては矛盾が生じてしまう。

設定としてはアキヤマさんだけが命からがら撤退できた。
その時にどうにかツキオミさんの部隊とだけ合流できたが、それだ
け。

余裕がなかった為に行き先も決めずにチューリップに飛び込んだ。
その御陰でどうにか撤退できたが、いきなりの味方からの攻撃。
納得できないとして抗議した。
とまあ、そんな流れだ。

相手側にはこちらを攻撃したという負い目がある筈。
そこを突いて中に侵入、そして、暴れてやろつってという作戦だ。
ちなみに、俺の服装は木連の軍服。
以前、神楽大将に手配してもらった奴だ。
だから、ブリッジにいても疑われる事はない。

「第一段階は成功といった所だな」
「はい」

第一段階、侵入はどうやら成功しそうだな。

シラトリさん達がいれば捕虜になった筈なのに何故と疑われていただろう。

だが、アキヤマさんだけはその理由で疑われる訳がない。

何故なら、情報をリークしたシラトリさんの部隊を壊滅させた後の降伏だからだ。

彼らが降伏したと知っているのはナデシコとこちらの部隊の人間の
み。

あちら側に流れている可能性が皆無という事はないだろうが、まず
ないと言える。

その隙を突いた、という訳だ。

「虎穴に入らずんば虎子を得ず。危険な賭けだが、直接乗り込むよ
りは勝機もあるう」

「ええ。ですが・・・嫌な予感もします」

アキヤマさんがことわざを間違えなかった。

本来なら言ばしい事なんだが・・・今はそれすらも不安に感じさせ
る。

「・・・だろうな。私もだ。だが・・・」

基地に乗り込む。

成功すれば中から崩せるだろうさ。

だが、その作戦が読まれているとしたら・・・。

たとえ虎子を得ようと虎穴から逃れる事はできない。

数多の虎により囲まれ、噛み殺される事だろう。

この作戦はそれだけ危険なもの。

それでも・・・。

「やるしかないんだ」

「はい」

ユキナ嬢を助ける為には。

『このルートで進み、第六格納庫に収容しろ』

虎穴に入らずんば虎子を得ず。

でも、俺達が得たいのは虎子ではなく、囚われの兎。

今にも襲われるのではないだろうかと震えている囚われの兎だ。

震えているなら救ってやるしかないだろ？

出来る出来ないじゃない。

やるんだ。

たとえ立ち塞がるのが強大な虎であろうと。

子を救う為ならば兎とて修羅になる。

さすれば俺達が修羅になれない訳がない。

家族を救いたいという気持ちがあれば絶対に。

「行くぞ。覚悟は決めたか？」

「とつくの昔に」

「ハハッ。心強いな。・・・好きに動け、コウキ」

「了解。必ず救い出しましょう。アキヤマさん」

「もちろんだ」

指し示されたルートを進む。

その先に待ち受けるのがなんであれ、やりきるのみ。

鬼が出るか、蛇が出るか。

もしくは仏という事も有り得る。

ま、神頼みする気は毛頭ないけどな。

「コウキ。お前は自機にて待機。後は・・・任せたぞ」
「はい！」

・・・未来は未知数。

でも、未知数だからこそ切り開ける何かがある。
そうは思わないか？

第四百十話（後書き）

人質がいる基地に乗り込み、無事に人質を救出する方法。

この文にすれば一行で書ききれてしまうものに二ヶ月近く悩まされました。

しかも、囚われている人質はか弱き存在。

ご都合主義でもいいですが、できるだけ現実的にしたい。

そんな思いもあり、最早詰んでいるといってもおかしくない状況でした。

戦力、環境、人質、何をとつても不利な現状。

この状況下でユキナ嬢を助け出す方法なんて……。

しかも、成功しても失敗しても反逆者の可能性があり……。

ああすれば、いや、でもこうすれば、でもそれだと、と頭を抱える日々。

相談しようにも相談相手もいなかったりで……。

正直、投げ出したくなるぐらいでした。

それでも完結させたいという事で見切り発車。

こういう時は思い切ってしまった方が良いというアドバイスも頂きました。

今後の展開が作者である私も読めませんが、

それでも楽しんで頂けるよう精進を重ね頑張っていくつもりです。

どうか応援の方、よろしく願います。

第四百一十一話（前書き）

投稿。

できるだけ投稿は週一をキープしたいと考えている所存です。

第四百一話

「侵入成功・・・ってか」

何の障害もなく、基地内へと辿り着く事が出来た。

・・・こうもすんなりいっていいものなのだろうか？
状況に反して、嫌な予感が止まらない。

むしろ、その予感は失くなる事なく、どんどん深く重く・・・。

「いつ仕掛けるつもりだ？ アキヤマさん」

基地内に辿り着く事は出来た。

後は内側から基地を崩すのみ。

だが、そのタイミングこそが最も重要。

早ければ確かに基地を崩せるかもしれない。

だが、ユキナ嬢の身に危険が迫る可能性が大。

遅ければそもそも救出する事なく、俺達が捕縛されてしまうだろう。

言わば、機を逃すという事になる。

保護されたというものの、いつまでもここにいる訳にはいかない。

すぐにでもこの基地からアキヤマさんの事が草壁に伝わる筈。

そうなれば、恐らく強制徴集。

されずとも疑いの眼が向けられる事は必至。

・・・今更だが、たとえユキナ嬢の救出に成功しても三羽鳥の命運は尽きるかもしれない。

もちろん、そうさせないつもりではあるんだけど……。味方の基地を強襲、壊滅させた、しかも戦争中ともなれば……。彼らの評判はガタ落ちだ。

理由を明かした所で草壁の支配下である木連では肯定してくれない可能性もある……。

……彼らは何を考え、どう思っただこの場にいるんだろうか？

たとえ成功しようと失敗しようと待ち受けるのは負の道。

下手すると彼らの味方は地球にも木連にもいないなんて事も有り得るのだ。

彼らはそれを……。いや、馬鹿だな、俺は。

三人がそれを理解していない筈がないじゃないか。

覚悟をし、その上でユキナ嬢を救出しようって彼らは言っているんだ。

それを心配するだなんて侮辱してるようなものなのだろ。

男の覚悟を哀れむのは自己満足に過ぎない。

本当にその男を想うのであれば、それを助け、覚悟を、信念を貫かせてやる事こそが至上。

そうですね？ ミズキさん。

「さて、アザレア。お前も一緒に考えて欲しい」

『はい。マイマスター』

「今の俺達がするべき事。ユキナ嬢救出の絶対条件。この二つを」

俺には、いや、俺達には俺達にしかなない事がある筈。

只の殲滅戦であれば活躍できない事もないが、ただの戦力の一つ。だが、それは俺でなくてもできる事だ。

もちろん、俺が特別だ、などと思っている訳ではない。

でも、きつとアキヤマさん達が俺に求めているのは決して戦力としてではない。

そんな気がするんだ。

『マスター。まずはユキナ様の無事を確かめる事こそが肝要かと』
「仰る通りです」

『マ、マスター？』

「いや、正論過ぎて、ついな」

姿勢を正してお辞儀。

正論すぎて身体が勝手に動いてしまった。
しかしまあ……。

「そつだよな。それを忘れちゃいかんぜよ」

ユキナ嬢の無事を確かめる。

それはもちろん、ユキナ嬢の状態を確かめる事はもちろんだが……。

今も同じ場所にいるかどうかの確認でもある訳だ。

俺が以前ユキナ嬢の居場所を探ってからかなりの時間が経っている。
神楽大将に監視をお願いしたので移動しているという事はないだろうが……。

戦争中の混乱に乗じてなんて事もありえなくはない訳で。

「まずは基地内のカメラを掌握する。以前使った経路を使えば……」

完全に制御を乗っ取る訳じゃない。

要は、モニタを覗き込んでる奴の後ろから覗き込むようなもの。
見付からなければ何の問題もないさ。

ヒナギクは情報戦もできるように改造されているしな。
露見するような事は万に一つもない。

『マスター。指示された経路より敵基地内への侵入を成功しました』
「助かる。とりあえず様子見だ。制御は奪わなくていいぞ」
『了解』

すっかり任せつきりにできるぐらい成長しているアザレア。
なんかもう俺のいる意味あるの？ ってぐらいだ。
本当に・・・うちの娘達の成長は早いな。

『しかし、この経路は一体？ これほど簡単に』

「コホンッ。集中しなさい！ アザレア」

『は、はい！』

強引に誤魔化する。

まったく、ミナトさんクラスの勘の鋭さまで手に入れやがって・・・
本当に・・・うちの娘達の成長は怖いな。

「・・・なるほどな」

以前、この部屋にはユキナ嬢がいた筈。
だが、恐らく、この部屋に今、ユキナ嬢はいない。
その理由は簡単。見張りがいなくなったからだ。

「ふう・・・」

一呼吸おく。

以前までの俺あればパニックになって狼狽えていた事だろう。
だが、俺だって成長しているんだ。
娘にばかり成長されてたまるかっての。

「アザレア。過去のログって見れるか？」

『了解。データをコピーします』

「もちろん？」

『秘密裏に、です』

分かってらっしゃる。

「データコピー後、ユキナちゃんが映っている映像だけ選別。それ以外は放っておけ」

『了解。マイマスター』

・・・流石にこの作業には時間が掛かりそうだな。隠れてコピーしてその中から映像を選別する。

言葉を聞くだけでも時間が掛かるのはわかるだろ？

まあ、我が自慢の娘のアザレアならあつという間だろうけど。でも、時間は有限な訳で、俺はその作業が終わるまで・・・。

「基地以外の場所も掌握しておこうかね」

この基地内にユキナ嬢がいない。

それはありえない訳だ。

そうでなければ、この艦隊はさつさとどこかへ去る筈だから。

だがしかし、基地内で他に隔離されるような場所は存在しない。

そうならば・・・。

「基地内であって、基地内ではない場所。そんなの・・・あれしかないだろ」

厳密に言えば、あれら、か。

『マスター。選別終了しました』

「お疲れ様。ちょうどこちらも終わった所だ」

『えっと、何がです？』

「いやいや、こっちの話」

別に秘密にしたい訳じゃないけどね。

とりあえず、この話は後で。

「うし。映像よろしく」

『はい』

目の前のモニタに映像が映し出される。

「時刻は数時間前。ごく最近の事って訳か」

部屋から出るユキナ嬢。

その顔は不安からかやつれていた。

・・・絶対に助けてあげなくちゃな。

『これよりユキナ様が映る映像を繋ぎ合わせたものを逐次展開していきます』

「流石アザレア。仕事ができる」

『恐縮です』

基地内のカメラの全ての映像からユキナ嬢がどのように移動したかが分かるように編集。

適当に見せるだけじゃなく、こうして俺に見やすいように調整してくれるのだから……。
愛い奴よの〜。

「……なるほどな。あそこか」

その結果分かった事。

それは……今、ユキナ嬢が本当にいる場所はどこか。

「後は俺の仕事だな」

ユキナ嬢がいるであろう大まかな場所は把握した。
細かい所を探るのは……俺の仕事だ。

『……流石です、マスター。私など足元にも及ばない』

「そんな事ないと思うけどな。やってる事はお前と同じだし」

『それを私の数倍の速度と正確さでやっておられるのですから』

「ま、娘には負けてられないって事だよ」

『む〜』

あらら、拗ねちゃって。

随分と感情面でも成長しているようで……。
父さんは嬉しいぞ、娘よ。

「うし、完了。映像再生」

アザレアと同じようにモニタに映像を映す。

「ユキナちゃんは……どこか」

第四格納庫にある艦隊の旗艦らしき戦艦。

・・・ではなく、その隣の格納庫にある何の変哲もない護衛艦の一隻。

そこのとある一室に監禁されている。

まったく・・・幼い女の子に何をしてくれやがってるんだっての。

『マスター。敵の狙いは何でしょうか？』

「恐らく、運び出そうとしているんだろうな、ユキナちゃんを」

わかりやすいこつて。

三羽鳥の内の二人がナデシコに降伏。

残り一人は元々神楽派の人間。

牽制という意味か脅しという意味かは分からんが・・・。

より手元に置く事で万全としたいんだろうな、草壁は。

「当初は単純に守備隊としての配備だったんじゃないか？。」

でも、緊急事態により彼女を運び出す事が決定した。

彼女を艦に移動させ、今にも出港しようという矢先にアキヤマさんの保護依頼。

結果、膠着状態。出るに出来ないはどちらも同じという訳だ。しかしまあなんともし・・・。」

複雑というか、騙し合いというか・・・。

「どちらが先に相手を出し抜く事ができるか」

それに懸かっている訳だ。

俺達はユキナ嬢の救出。

向こうはユキナ嬢の運送。

どちらも目的はユキナ嬢って訳か。

ある意味、一人の女性を巡る戦いと言ってもいいかもな。

『しかし、それならば、どうして護衛艦なのでしょうか？

通常、このような時は旗艦のように護りが厳重な艦で運ぶのが定石です』

「お、良い所に眼を付けたな、アザレア」

『お褒めに預かり光栄です、マスター』

そう、考えるべきはその点だ。

俺であっても、アザレアと同じように考える。

厳重に守られており、戦力としても最も優れている艦にこそ乗っている。

でも、そう思わせるのが狙いだとすれば・・・話は簡単だ。

「俺の考えは単純明快。 罠として使いたんだろうさ」

『罠・・・ですか？』

「そう、罠さ。俺達の眼を逸らす為のな」

誰だってそう思っただったら、攻撃の狙いは艦隊の代表、所謂旗艦に集まるだろう。

そこにこそユキナ嬢がいると思っ込んでな。

結果としてこちらの眼は旗艦に集まる。

後はその隙を突いて、どうにかその護衛艦だけでも脱出させてしまえばいい。

奴らの狙いは旗艦の帰還ではなく、ユキナ嬢の運送なのだから。

脱出の手段として最も有効なのは・・・チューリップだろうな、やっぱり。

一瞬にして攻撃範囲から逃れられるのはやはり大きい。

『なるほど。旗艦を罠に護衛艦を逃すのですね』

「お。この一言で察するとはお主も中々やりおるな」

『マスターの言葉がなければ分かりませんでした。』

確かに、この状況下であれば、マスターの考えが最も辻褃があいますね』

「だろ？ でもまあ、真相を知っていれば、道化に過ぎないよ」

囿に使うとしたってそこにいないと分かれば余裕でスルーできる。むしろ、戦力不足の艦なんて恐るるに足らずってな。

「逆手にとってやればいい。その慢心が身を滅ぼすって教えてやるうぜ」

『はい！ マイマスター』

考えつかないとも思ったのか？

甘く見るなよ！ 俺達を。

・・・とまあ、偉そうに言ってるけど、

ユキナ嬢の映像がなければ思い付きもなかっただろうな。

墓穴を掘ってくれた木連に感謝。

お陰様でこうして救出の手筈が立てられそうなのだから。しっかし・・・。

「本当に情報の扱い雑だよな、木連」

ログデータから探られるとは思わなかったのだろうか？

地球だったら機密事項はすぐさま消し去るぞ。

それに関わるものなら些細な事でも全部な。

この分なら、木連のデータバンクを漁ったらスキャンダルが続出するかも。

まあ、時間が空いたらやってみるかな、うん。

きつと、情報が流出すると懸念していてもその対策が分からないと

いった所か。

もう少し情報の扱い方を学んだ方がいいぞ。

『マスターにかかれば地球も木連も変わりないと思いますが・・・』
「遂に心まで読まれたか。女性とは恐ろしい生き物だな」

主に勘という方面に関しては。

『データが消されていたら？』

「復元すればいいだけじゃん」

『・・・やはり大差ありません』

「・・・まあいい。考えるべきはユキナちゃんの事だ」

『また誤魔化されてしまいました。シュンッ』

・・・アザレアよ。

セレス嬢に似てきたのではないかな？

特に擬音を口にする所なんてもう。

・・・コホンッ。

「さて・・・どうすればユキナ嬢を救出できる？」

カメラから見た所、守りはかなり嚴重だな。

扉の前 内側も外側もだ 二人ずつ配置。

その手には銃が握られており、ユキナ嬢も怯えて動けない様子。

手錠などはしていないようだが・・・充分拘束してるっての、この状況。

更に部屋には監視カメラが備え付けられている。

しかも目立つ所に一つと隠れて見付かりそうにない場所に一つ。

事実、目立つ所のはユキナ嬢がしきりに気にしている事からバレているんだろっが、

もう一つの方にある監視カメラ、いや、最早隠しカメラだな、これには気付いていない。

一人を監禁しておくには多過ぎる警備。

・・・それだけユキナ嬢の重要度が高いという事だろう。ひいてはツクモさんの。

「しかし、それもまた命取りだったりするんだよな」

俺がこの映像を見ている。

それがどういふ事が分かるか？

「証拠確保。この部屋内の様子は常に録画で」

『了解です、マスター』

映像を撮っておく事もできるって訳だ。

この映像を出せば、流石の草壁といえど言い逃れはできまい。

作戦終了後の活路を見出す術が少しずつだが構築され始めてきたな。まあいい。作戦終了後の事は追々考えるとして・・・まずは救出方法だ。

「・・・少なくともこの四人を倒す、もしくは、部屋から引き離さなければならぬか」

なんともまあ、厄介なことだ。

前提として相手は銃持ち。

原作でナデシコクルーは銃持ち相手に艦を奪還したが、それは圧倒的多数という優位とギャグ補正という理不尽があったからこそ。

・・・まあ、俺も実体験した訳ではあるのだが・・・。
コホンッ。

まず素手じゃ勝ち目はないだろうな。

かといって銃撃戦を挑んだ所で勝てるとは限らない。

まあ、手がない訳じゃないが・・・最終手段かな。

少し奇策としては前と同じように低酸素症に追い込ませて気絶させる。

これなら、銃撃戦よりは容易に奪還できるだろう。

だが、それはそれで考えなくてはならない事がある。

それはユキナ嬢の安全。

あくまで低酸素症なので命の危険があるとかそういう訳じゃない。

ただ、呼吸困難になれば誰だってパニックに陥るだろ？

そうしたら、激昂して警備兵がユキナ嬢に襲いかかるなんて事も有り得る。

まずないかもしれないが、絶対には言い切れない。

出来るならば、この策は避けたいな。

ベストは奴らを部屋から引き離すように誘導する事。

実際、奴らさえいなければいかようにもなるからな。

「方法は考え付く。だけど、具体的な案がまとまらない」

前提条件として俺の存在が露見しない事だな。

別に自分の命が惜しいとかではなく、人質という有効性を考えただけ。

目の前にユキナ嬢を出され、銃を突きつけられたりなんかしたら、

俺じゃ何もできない。

そうならない為にはこちら側の人間だとバレないように接近するしかない訳だ。

・・・改めて考えるとかなりシビアだよな、本当に。

「警備がいなければ、ボソソジャンプでサッと救出して終わりなんだけどな・・・」

映像に映るといっただけで俺のボソソジャンプ条件はクリアされる。イメージさえ出来れば跳べるからな。

でも、今すぐ跳んで奇襲した所で一人は倒せるだろうが、三人は厳しい。

結局、数の暴力には勝てないだろう、銃持ちだつてのなら、尚更。クソツ！ こんなんだつたら、アクトさんにレクチャーしてもらえば良かったぜ。

侵入・救出ミッションの極意を。

『しかし、それではカメラに写ってしまうのではないですか？』

「ああ。それは心配ないよ」

『何故ですか？ マスターには秘策があるかと？』

秘策も何も、簡単な事だろ？

「書き換えちまえばいい。俺達ならそれができる」

『なるほど。確かに不可能ではないでしょう』

「だろ？」

リアルタイムで映像の書き換え。

一見無茶かもしれないが、映像全てを書き換えなければ意外と容易。多少の編集をすればそれだけで誤魔化せるだろうな。

なんたつて、木連は情報の扱いが雑だから。

後はそのままの映像を流し続けければ簡単に誤魔化し続けられるかもな。

気付いた時には既に遅しつて奴？

・・・まあ、これも警備兵がない前提なんだが。

本当に・・・警備兵邪魔。

やっぱり、引き離すしかないな、うん。

「さて、その方法だが・・・」

・・・俺には経験がない。

故にどの方法がベストなのかを判断できないでいる。

それならば、どうするか？

・・・簡単じゃないか。

前例に習えばいい。

実際に成功した方法こそが最も理想に近いと言えるのだから。

そう、俺は知ってるじゃないか。

最も悔いが残ったあの時の方法を。

「冷静さを失わせ、かつ、違うモノに眼を向けさせさえすれば

」

『考え中に申し訳ありませんが、マスター』

「ん？ 何だ？」

『得た情報をアキヤマ様達に伝えなくてよろしいのですか？』

「ああ。そうだった」

アキヤマさん達、特にシラトリさんはユキナ嬢の安否が気になって
いる事だろう。

無事だつて事、そして、どこにいるかって事もきちんと伝えてやら
ねば。

・・・ついでにあの人にも伝えておこう、念の為にな。

そして、その上で・・・正しいかどうかは分からないけど・・・。

『如何したのです？ マスター。伝えないのですか？』

「いや、伝えるさ。ただし迷いがな」

『迷い・・・ですか？』

そりゃあ迷うさ。

でも、きつとこれがベストな作戦。

成功の鍵を握るのは・・・残念ながら俺だけど。

「なんでもない。忘れてくれ」

『はい』

迷うな。覚悟を決めろ。

「アザレア。知ってるか？」

『何をですか？』

「モノマネは得意なんだぜ、俺」

「保護して頂き、感謝致します、スズキ少将」

「み、味方を保護するのに感謝も何もない」

「それでもです」

「・・・これからどうするつもりなのだね？」

「どうする・・・とは？」

「と、惚けるなよ。君達はナデシコに負けて帰ってきた。

決して負けてはならない相手に。その弁解はどうするのだ!？」

「・・・いずれ草壁中将の下へと赴き謝罪するつもりです」

「そ、そうか。殊勝な事だ。それにしても他の二人はどうしたのかね？」

「二人は・・・ナデシコの捕虜になりました」

「捕虜だと!? な、なんて情けない。それでも三羽鳥か!？」

「・・・申し訳ございません。しかし」

「言い訳はいい！ 草壁中將には私の方からそのように伝えておく。追って中將の指示は伝えよう。それまで君は自分の艦で謹慎しておきたまえ！」

「・・・ハッ。失礼致します」

シュインツ。

「それで・・・どうするつもりだ？ 奴らがいる以上、簡単には抜けさせまい」

「いつものように臭いものには蓋をしてしまえばいいだけですよ。」

それに、そもそも戦力はこちらが上。護衛艦の一隻や二隻、逃がすのは容易い事です」

「・・・滅してしまおうという事か」

「はい。死人に口なしとはよく言ったものです。」

少なくとも中將が求めるモノは確実に届けられましょう」

「そうか。裏切り者にはちょうどいい末路だろう。いつ仕掛けるのだ？」

「後数時間後にこの基地の守備を交代するという名目で部隊がやってきます」

その際に完全包囲さえしてしまえば・・・殲滅など赤子の手を捻るようなもの」

「うむ。存分に教えてやれ。中將を裏切った意味をな」

「はい。父上」

「すまない。お前だけに責任を負わせてしまった」

「本来ならば俺達も背負わねばならぬ罪であるのに・・・」

「構わないさ。俺は名よりも実を求める。」

ユキナが救出できるのであれば汚名などいくらでも被ろう」

「・・・すまない。源八郎」

「謝られても困るぞ。俺は俺の信念を貫いているのみだからな」

「・・・感謝してるよ、本当に」

「何度も言わせるな。感謝はユキナを助けてからだろ？」

「ああ。そうだな。俺もそうしたい」

「うむ。そうしようじゃないか。俺達で」

「だが、実際、どうするのだ？ ユキナは未だ囚われの身。」

大まかな場所は分かっているものの正確に把握している訳ではない

「それに関しては・・・あいつが早速やってくれた」

「何！？ それじゃあ・・・」

「完全に把握している。本当に・・・頼りになる奴だよ、あいつは」

「感謝する相手が更に増えたな、九十九」

「ああ。だが、その肝心の彼は一体、今どこに？」

「木の葉を隠すなら森の中・・・いや、違うか」

「ん？」

「意味が分からんぞ、源八郎」

「こちらの話だ。今、あいつは単独でユキナ救出に向かっている」

「何故そのような事を！？ 我々に何の相談もせず！」

「俺がいいと言った」

「なッ！？」

「その意図は何だ？ 源八郎」

「落ち着いているではないか。その様子なら大丈夫そうだな、九十九」

「茶化すな。・・・お前の事だ。何か考えがあったのだろう？」

「時は有限。機会を逃したくないのでな。あいつには先に向かつてもらった。」

お前達への作戦説明と説得は俺に任せておけと伝えてな。俺は奴

の策を支持する」

「・・・その作戦とは？」

「意趣返しだよ、あいつにとってのな」

「やばい。ドキドキしてきた」

心臓の振動で床が揺れるんじゃないか？

そんな訳ないのに、そう思わせるぐらい心臓の鼓動が激しい。

・・・やっぱり柄じゃないよな。

こんな事、二度と経験したくないものだ。

「・・・落ち着け、俺」

気負うな。でも、気は抜くな。

緊張するな。でも、程よい緊張感を残しておけ。

慎重になれ。でも、大胆にもなれ。

状況を把握し、機転を利かせて作戦を成功させろ。

「ふう・・・よし」

・・・後はその時を待つだけ。頼みましたよ、アキヤマさん。

第四百一十一話（後書き）

コウキが選んだ策とは。

無事に成功するか、否か。

ワクワクしてくれたら幸いです。

第四百二十二話（前書き）

もしかしたら怒られるかもしれませんが。
引っ張るなっつて。

第四百二十二話

S I D E M I N A T O

「デイストーションフィールド最大出力！

砲撃をやり過ぎしコスモスと合流した後、反転し、チューリップにGBを！」

月面基地が危ない。

その報を受けた私達ナデシコは月面基地へと向かった。

その際、シラトリさん達の好意に甘えてチューリップを利用したんだけど……。

「ま、こうなるわよね」

チューリップから抜け出した瞬間、味方からの攻撃。

それはそうよね。

誰だって敵の援軍だって思うに決まってるもの。

今まで戦ってた敵の背後から現れた訳だし。

突然の出現だから、敵も味方もナデシコを認識できない。

これ以上、敵が増えて欲しくない地球軍はまっ先に現れた援軍を狙う。

当然の行為よ、それがピンチであれば尚更ね。

チューリップから抜け出した瞬間に隙ができるってのは共通の認識な訳だし。

さっきの攻撃は多分そんな所でしょうね。

び回る事ができるの」

アドニスが自由に動き回る事ができる。

それなら、ナデシコとして纏まって動くより幾つかの部隊に分けた方が遥かに効率的。

それが破壊力抜群のナデシコ部隊なら尚更ね。

「まず、コスモスの防衛部隊としてイズミさん、カエデちゃん」

「ええ！？ どうして！？ 火力だったら私の機体が一番じゃない！」

まあ、それも確かではあるんだけど……。

「……いえ。妥当な判断よ」

「イズミ、どうしてよ？ チューリップを沈めるのに火力は必要でしよ？」

「ええ。それはそうね」

「それなら、どうして？」

「だって……貴方の機体、足遅いじゃない」

「あう……」

「弾が切れたらなんにもできないじゃない」

「あうあう……」

「囲まれたら……突破できないじゃない」

「あうあうあう……」

珍しいイズミちゃんの連撃にカエデちゃんは撃沈の様子。

正論故に反論の余地なしって奴ね。

「今回の作戦に求められているのはチューリップを如何に早く強引に破壊できるか。」

言わば、迅速性と強引性。たとえ囲まれようと強引に突破できる能力が貴方にはある?』

『それは・・・』

はい。

意地っ張りで負けず嫌いのカエデちゃんは絶対にそうは答えないでしょうね。

でも、認めたくなくても、それをきちんと自覚してしまっているから否定できないでいる。

カエデちゃん。迷いがあるなら、断言できるだけの自信がないなら認めの方がいいわよ。

酷な事を言うようだけど、今の状況は貴方の我儘に付き合えるほど余裕がある訳じゃないの。

・・・たくさんの命が懸かっているのよ。失われているの、貴方が抗議しているたったこれだけの時間だけでも何十人という尊い命が。

『・・・残念だけど私にも無理よ』

『え?』

・・・イズミちゃん。

『私の機体には迅速性も突破力もない。』

それに対して否定しようとは思わないわ。事実だもの』

きっぱりと言い切る。

自身の能力を完全に把握し、できるかできないかを私情なく決める。これが言わばプロとアマチュアの意識の違いって奴なんでしょうね。まだ日が浅いカエデちゃんじゃここまででは割り切れてなかったって事か。

割り切った方がいいのか、挑戦し続けた方がいいのか。どちらがいいのかは分からないけど……。

『貴方の機体もそう。』

貴方の技量がどうのこうの以前に機体性能から考えても妥当って事よ。

恥じる事ではないわ。文字通り、適材適所。

私達には攻撃がない代わりにナデシコを守り通すという責任があるんだもの。』

攻める方が大切？ 守る方が大切？

その問いに対する答えなんて分かりきってる事じゃない。

答えは……どちらも大切。

どちらかを疎かにしても駄目だし、どちらかに力を注ぎすぎても駄目。

艦長は貴方達なら守りきれって信じてるからそうお願いしてるんじゃないかしら。

『納得した？』

『ええ。御陰さまでね。……ねえ、イズミ』

『何かしら？』

『守りきってやろうじゃない。私達の力で』

『もちろんよ』

力強い言葉。

きっと彼女達ならコスモスを守りきってくれる事でしょう。

「納得して頂けたようですね。御一人にコスモスの護衛は任せます。

艦自体が大きなコスモスにおいて御二人の面に対する対応力は大きな力になります」

『了解』』

なるほど。そういう意図もあったのね。

「次にナデシコの護衛です。アカツキさん、ヒカルちゃん、お願いします」

『おっと、僕かい。これは意外だな』

『まあ、私の機体は攻撃に不向きだしね。仕方ないか』

そうね。特殊隠密仕様は奇襲に特化している機体。

こういう状況下では力を発揮しづらいか。

まあ、単純な戦力としても充分強いんだけどね。

『そういえば、私の役目には会長さんの監視もあるのかな？』

『そうなのかい？ これはまた、冷たい事で』

疑いの眼を彼に集中させるナデシコクルー。

カキツバタが不自然な行動を取った以上、彼を野放しにする訳にはいかない。

監視がしやすいようナデシコの近くにいてもらわなければならないでしょうね。

かつ、彼が何をしてもいいように準備をしておかなければ。

『仲間を信頼しようって小学校で習わなかったのかな？ まったく・

』

・・・疑われる事を理不尽に感じているようね。

でも、それは仕方がない事だと思うわよ。

文字通り、日頃の行いが悪いの。

これは残念ながら正当な評価だわ。

「アカツキさんの機体に対する情報が不足していますので。

この作戦において重要視される確実性を取り、選んだままです」

『そういう事ね。それで納得してあげるよ、特別に』

「ありがとうございます」

『監視もできて、ネルガル最新鋭である機体の情報も得られる。』

艦長達にとっては一石二鳥って訳か。随分とあくどくなっただじやないか』

「.....」

無言の艦長。

無言の肯定か、取るに足らない言葉に対する呆れか。

・・・そういう意図が完全になかったという訳ではないのかもしれないわね。

彼に対する監視は必要不可欠の事だとして、

今後の作戦を考える意味でも情報を収集する事は間違っていないわでも、多分、彼が考えている事は別の意図。

機体の情報を得て、その技術をフィードバックできれば儲け物って奴ね。

ちよっと疑い過ぎな気がしないでもない。

「よろしいですね？」

『了解、了解。艦長の命令なら従うよ』

それだったら始めから了承してなさいよ。

何だったのかしら？

この無駄な時間は。

事態は一刻を争うというのに。

「お願いします、ヒカルちゃん」

『任せといて。ナデシコは守りきってみせるよ』

もちろん、私だって傷一つ付けなかつもり。

皆でナデシコを守りきましょう。

「次にリョーコちゃん、ガイさん、イツキさんの三人で部隊を組んでもらいます」

『別にいいけどよ。それじゃあ・・・』

視線が彼に集まる。

パイロットは現時点で八名。

うちの七人は既に編成済み。

そうなれば・・・。

『俺は一人。そういう事が』

「うん。そうだよ、アキト」

彼は一人。

一人で戦場へと挑む。

『おいおい！ それじゃあアキトの奴が』

『ユリカ。お前は俺の使い方が分かっているな』

『え？』

「・・・」

「お前と歩む道は違えたが・・・お前が俺の理解者である事は変わらないか」

それってどういう・・・。

「ルリルリ、ラピラピ。貴方達はそれで・・・」

・・・聞くまでもなかったようね。
その表情、その眼が、既に答えを示しているわ。

『了解した。後の事は任せろ。その期待に・・・応えてみせるぞ』
「うん。お願い、アキト」

どんな意図があつての単独行動なのかは分からない。
でも、彼は名実共に地球が誇るスーパーエース。
何事にも代えられない心強さが彼にはある。
絶対に私達の期待に応えてくれる筈よ。

「部隊は四つ。ユリカ。どう動かすつもりなんだい？」
「私達が今いるのはここ」

モニタに映し出された月の地図に視線を映す。
どうやら現在地が赤い点で示されているようね。

「東西南北、とっていいかはわからないけど、
ここからそれぞれの方角へとそれぞれの部隊を向かわせます」

月は球。

結局、行き着く先は同じって訳ね。
後はそれぞれの方角での敵を撃破していけば・・・。

「合流地点は真裏にある月面基地。皆さんの健闘を期待します」

完全殲滅。

やってやるっじゃない！

S I D E O U T

S I D E K A E D E

ダンッ！ ダンッ！

「ええい！ 邪魔よ！」

見渡す限り敵、敵、敵。

もう嫌になっちゃう。

『落ち着きなさい。私達は時間を稼げばいいだけなんだから』

「そうだけどさ・・・」

私達には強力な武器がある。

それはイズミのグラビティスナイパーでもなく、私の一斉発射でもなく・・・。

『グラビティブラストチャージ完了まで後二分よ』

グラビティ系武器の原点にして最強武器。

コスモスによる四連撃グラビティブラストは圧巻の一言って奴ね。

もちろん、四連撃だからこそチャージ時間も四倍とは言わないけどかなりかかる。

だから、私達の役目はそのチャージ時間を稼ぐ事。チャージさえ終了すれば文字通り一網打尽だもの。

但し、それは意外とシビア。

コスモスにはナデシコのような機動力がないから、相手からしてみれば的に等しい。

しかも、艦自体が大きいから、当てやすい事この上ないね。

要するに、あらゆる所からやってくる敵に対処しなくちゃいけないって訳。

ここにきてようやく艦長の言ってた面に対する対応力って意味がようやく分かったわ。

最初は意味分からず頷いてたんだけどね。

だって、私達ぐらい弾幕を張る事ができる機体でさえ……。

『コスモス損傷！ 損傷は軽微ですが、迎撃をお願いします！』

「了解。すぐ行くわ」

敵の侵入を許してしまう。

コスモス所属のパイロット達の力を借りた上で、よ。

これが対個に強くても対群に弱いリョーコやヤマダなんかの機体じゃ、

最初は対応できても徐々に対応できなくなっていくコスモスなんてあつという間に撃沈よ。

もちろん、私達だから容易って訳じゃないけどさ。

少なくとも対群においては私達が最適だったのは間違いないわね。

「ミサイル発射！」

迫り来る敵に対して仕掛けるのは私。

対面においては私の機体に勝るものはないと自負しているわ。

そして、イズミは……。

『もうちよっとしっかり狙いなさい』

どうしても漏れてしまう残った敵の殲滅。
これで敵の侵入を最低限まで抑えている。
でもさ……。

「しょうがない事なのよ。私の攻撃がちょっと大雑把になっちゃうのは」

視界一面から敵が迫り来るって状況よ？
少しぐらい漏れるのはしょうがない事だと思っわ。

『はいはい。まったく……』

溜息を吐かれてもさ。

私だって頑張ってる訳だし。

『次、来たわよ』

「了解」

まったく、愚痴を言う暇さえ与えてくれないわね。

ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！

「次！」

ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！

「次よ！」

ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！

「まだまだだ！」

ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！

「まだ！？」

そろそろ二分だと思っただけど……。

『グラビティブラスト、チャージ終了しました！　射線上からの退避を！』

「『了解』」

ようやくね。

さあ、やっておしまい。

『グラビティブラスト発射！』

次々と放たれる漆黒の光。

そして、次々と押し潰される敵兵器達。

これでこのステージはクリア。

次にステージに進むわよ。

・・・なんか次って言葉ばかり連呼してる気がするの、は気のせい？
気のせいよね？

SIDE OUT

S I D E M I N A T O

「あら？ また私？ 意外だわ」

「・・・どうかしましたか？ ミナトさん」

「ううん。なんでもないわよ、セレセレ」

ん？ って首を傾げるセレセレ。

なんなのかしら？ この圧倒的な可愛らしさは。

「ミ、ミナトさん！」

「あら」

緊急回避。

危ない、危ない。

敵の攻撃に当たる所だったわ。

「集中してください！」

怒られちゃった。

もう、貴方が可愛いのがいけないのよ、セレセレ。

「・・・理不尽です」

あら、何か言ったかしら？

「・・・ずるいです」

口を尖らせて拗ねるセレセレ。

なんなのかしら？ この驚異的な可愛らしさ

。

「おっと」

いけない、いけない。

同じ過ちを繰り返す所だったわ。

罪な女ね、セレセレ。

「・・・もういいです」

呆れられちゃいました。

そんな姿も可愛らしいけどね。

「さてつと、おふざけはここまでにしましょう」

現在、ナデシコは順調に敵を攻略しているわ。

損傷はあるものの軽微。

全然問題なく、作戦を続行できる。

その大きな要因は・・・。

「ラピス。疲れてないですか？」

「大丈夫。慣れてるから」

大量の無人兵器が出撃されているから。

確かに出撃している機体は二体といつもに比べて少ないわ。

それに関して不安がないかと聞かれれば頷く事はできない。

でも・・・その穴をカバーできるだけの戦力が彼女達によって展開されている。

だから、彼女達を信じて・・・私は頷こう。

不安はないってね。

「それに・・・皆が手伝ってくれている」

カキツバタによって新しく合流したオペレーター三人も全面協力。御陰でラピラピは無入兵器の制御に全力を注げる。残念ながら、今のナデシコに穴はないわよ。

「あの・・・僕もいますよ」

あ、もちろん、ハーリー君の御陰でもあるわよ。唯一の男の子なんだから、しっかりしなくちゃね。

「は、はい」

コホンッ。

そして、そんな彼女達と共に作戦に参加している私達ナデシコクルー。

私達だってなんにもしてない訳じゃないわ。

艦長の適切、かつ、的確な指示。

副長の確かな補佐。

ゴートさんの実績に基づいた適切な指示。

メグミちゃんだってナデシコとパイロット達との確実な橋渡しを実現している。

もちろん、私だって・・・。

「甘いわよ」

状況に合わせて臨機応変に艦を動かしているって自負しているわ。皆が支え、支えられ、だから、こうして順調に作戦を遂行できている。

そう考えると、なんだか感慨深いものがあるわね。

それに比べて・・・。

「こっちは順調よ。そっちはどう？ コウキ君」

今のコウキ君の近くに私達はいない。

だから、彼を助けてあげる事ができないわ。

・・・それが凄く悔しい。

でも、大丈夫よね。

だって、コウキ君だもの。

今までと勝手が違っててもすぐに順応しちゃう。

彼らとコウキ君なりにうまく協力して成功させちゃう。

・・・それがちょっと悔しいっていうか、妬ましくもあったり。

だから、安心して待つてなさい、ユキナちゃん。

必ずコウキ君なら貴方を救出してみせるから。

「今までにないくらい凄く悔しがっていたものね」

ユキナちゃんが攫われたのは俺の責任だって。

それこそ、握り締めた拳から血がでるぐらい。

彼はなんでか人一倍責任感が強いように思う。

それは多分、元来の性格にあの出来事がプラスされたから。

・・・彼の心を縛るのはあのフレンドリーファイヤ。

意図していた訳ではないからこそ、無意識の己を恐れて。

自分が必要とされない事を怖がり、必要とされる事を喜び・・・。

結果、与えられた役目を自らに深く刻み込むようになった。

過去に彼はその責任感で己の心を傷付け、立ち止まった事がある。

それは私にとっても自分の事以上に辛かった出来事だったわね。

でも、今の彼は、コウキ君は違う。

傷付いたとしても、そこから立ち上がり、それを力とする強さがある。

どんな苦境に立たされようと自ら動き克服、突破していく底力があ

る。

その成長が私には嬉しくてたまらなかった。

それに、成長する度に、男として、どんどん頼もしくなって……。その度に、私も彼を惚れ直したりなんかしちゃって、ね。

「大丈夫よ、コウキ君。今の貴方にできない事なんてない」

だから、その責任を果たしなさい。

その責任感を力に変えて。

S I D E O U T

「準備はできたようだな」

「うむ。いつでも仕掛けられるぞ」

「して、いつ仕掛けるのだ」

「コウキの侵入は無事成功した。後は我々が始めるだけだ」

「そうか。攻撃開始の条件は揃ったが……」

「九十九。機がないのであればそれで構わん」

「源八郎。……しかし……」

「我々に任せておけばいい。この作戦に機などない」

「それは一体……」

「全ての瞬間において作戦成功の機だという事だ」

「いつ始めようが、必ずお前の期待に応えてやるっ」

「源八郎、元一郎。……ああ、そうだな。俺達ならやれる」

「おう」

「うむ」

「総員、攻撃を開始する。行くぞ！」

「跳躍砲撃！ 全ての格納庫に攻撃を仕掛ける！」

第四百二十二話（後書き）

ナデシコ側の近況も入れておこうと思いましたが、
いよいよ次回こそ、ユキナ嬢救出作戦です。

第四百二十三話（前書き）

大変お待たせしてしまい申し訳ありません。

コウキによるユキナ嬢救出劇。

納得できる方も納得できない方もいらっしやるかと思いますが・・・

楽しんでいただけたら幸いです。

第四百二十三話

ウィーンウィーンウィーンウィーンウィーンウィーン！

「……どうやら攻撃を始めたみたいだ」

響くは緊急事態を知らせる警報。

恐らく、アキヤマさん達が動き出したのだろう。

それなら……。

「……後は俺次第って訳か」

廊下の壁の影から様子を伺う。

未だに部屋の前には二人の兵士。

恐らく、部屋の中の兵士も依然として存在している事だろう。

……さて、動きはあるかな？

『緊急通達！ 緊急通達！』

おっと、どうやら変化が生じそうだぞ。

『現在、本艦は所属不明勢力から攻撃を受けている！

繰り返し返す！ 現在、本艦は所属不明勢力から攻撃を受けている！

敵の襲撃場所は格納庫！ 手の空いている者は急ぎ武器を持ち格

納庫へ赴け！

決して艦内の侵入を許すな！ 繰り返す！ 直ちに支度を整え、格納庫へ急げ！」

アキヤマさん達、三羽烏の作戦はいたって単純。始めにボソン砲で敵艦隊、及び、基地戦力を削る。

その際、戦艦、基地、共に格納庫を狙うのがポイントだ。人型兵器がどれだけ強力であろうと人が乗らなければ鉄の塊に等しい。

要するに敵さんが乗る前に機能停止、最低でも機能低下に追い込もうという策だ。

天井が崩せば機体は損傷するだろうし、少なくとも残骸に生まれば時間稼ぎにはなる。

後はその隙を突いて急襲すればいいという寸法だ。

但し、最初に攻撃を行うのはバッタやトンボといった無人兵器。

それら無人兵器は木連であればどの部隊であろうとも配備されている兵器であり、

チヨチヨイといじくれば所属や動きなんかも容易に変更できるお手軽兵器だったりする。

その特性を活かして敵の動揺を誘う訳だ。

敵か味方が分からない。どの勢力が分からない、でも、恐らく木連内の部隊だろう。

それじゃあ、誰がこの攻撃を？

敵は間違いなく疑心暗鬼に陥るだろうな。

もちろん、疑いがこちらに来ないように自身にも攻撃を加えている。まあ、見た目と実質が全然違うような軽微な被害にしてあるだろうけど。

そして、その上で……。

「偶然か、必然か、俺達は無人兵器の真価を知っている」

無人兵器が出現すると何が怖い？

圧倒的な数？ ああ、それは確かに怖いさ。でも、それだけだ。それを上回る数、もしくは、質×数で太刀打ちすればいい。

死を厭わない特攻？ ああ、それも確かに怖いさ。でも、それは覚悟の違いだ。

戦場に立つたら人間も機械もない。やらなければやられるだけ。そこに差なんてない。

破壊されても再生産が可能？ だから何だと言うのだろうか。

そんなの、失った分だけすぐに生産できる訳じゃないだろ？

そんな事が出来るのなら、見せて欲しいぐらいだつての。

確かに失われた分がすぐさま補充されるように埋まれば無敵だ、敵なしと言えよう。

だが、時間的制限、数的限界があり、それが不可能である以上、真価とは言えない。

それでは、無人兵器の真価とは？

少なくとも、俺はこう思う。それは……。

『動ける機体があればすぐさま戦線に投入しろ！ 戦力は少しでも

多い方が』

『駄目です！ 艦長！ 所属不明の無人機により、制御を奪われ、

次々とこちらに攻撃を！』

『何！？ それならば、復旧可能機体をすぐさま修復し』

『それも駄目です！ 味方機、いえ、敵機により損傷。復旧は不可能です』

『クソッ！ しかれば、敵と同様にこちらにも無人兵器を投入し』

『艦長……既に動ける機体は全て敵の制御下、残るは完全に機能停止した機体のみです』

『な、なんと……』

機体の制御を完全に奪ってしまふ事だ、それも強引に、な。

「昨日の敵は今日の友ってね」

デビルエステバリス。

何度か縁がある木連の無人兵器活用方法だ。

敵である地球の戦力、エステバリスを味方として扱うイヤラシイ戦法。

何度奴らに苦労させられた事か。

でも、いやらしくもあるが、その作戦の有効性は認めているつもりだ。

少し考えれば誰だって分かる。

敵の戦力を奪って敵を攻撃した方が何倍も効率的だつてのは。

特に、敵よりもこちら側の戦力が少ないころという時は。

「これで数的不利は消える。むしろ、優位に立ったかもしれない」

全ての敵戦艦で完全な成功を収めているとは思えないが、少なくとも対等な戦いはできる筈。

虎穴に入らずんば虎耳を得ず作戦、今の所、成功といった所か？

・・・さて、もう一つの“虎穴に入らずんば孤児を得ず作戦”は成功を収められるだろうか？

いや、収めねばならないだろ、絶対に。

「どうする？ 俺達も行くか？」

「だが、俺達には優先すべき任務が・・・」

ナノマシンによって強化された聴覚が警備兵の声を拾う。

敵さんはどうも動揺を隠しきれていない様子。

慌てふためくその姿が、逆に落ち着きを俺に与えてくれた。

「スーーツハーツスーーツハーツ。うし」

ここが俺達にとつての、いや、俺にとつての虎穴だ。侵入は容易だった。

あらかじめ艦内のカメラを全て掌握している俺達にとって空いている部屋を探すのは簡単な事。

できるだけユキナ嬢の監禁部屋に近い空部屋にボソソジャンプ。

周囲の状況を把握しつつ、廊下まで出てくるだけで、今のポジションをキープできた。

そう、監禁部屋への距離にして二、三十メートルというベストポジションに。

無論、俺一人の力だけではない。

アザレアの的確な状況把握と誘導の御陰でこうして俺はここにいる。

「・・・アザレア。それじゃあ作戦通りに」

『・・・了解です、マスター』

通信器越しにアザレアと連絡を取り合う。

常にアザレアと情報を共有し、作戦の成功率を上げるのが狙いだ。

それに、こうしておけば、万が一の事態にも対応しやすい。

俺が得られる情報はあくまで俺から見える範囲でのもの。

それに比べ、アザレアが得られる情報は艦内全体。

どう考えても、アザレアの指示に従った方が対応は早く確実に行えるだろう。

なお、通信器の回線は木連軍の者を拝借。

使えるものはなんでも使わないとな。

シューインッ。

「どうする？ 俺達も迎撃に向かうべきか？」

「しかし、この任務は何よりも優先すべきものだ」と艦長から指示が「
」だが、侵入を許してしまつたら元も子もあるまい。

それに、小娘一人の為に四人もの警備は不要ではないか？」

「それは・・・」

監禁部屋の扉が開き、中から兵士が二人でてくる。

議題は自分達がどう動くべきか。

残念だけど、結論がまとまる前に仕掛けさせてもらつ。

「どちらにしろ、艦長に指示を仰ぐ」

バンツ！

「クツ！ 既に侵入を許したか！」

銃撃音。

その弾は兵士に当たる事なく、壁に備え付けられている“何か”に直撃する。

だが、突然の襲撃に気を取られている兵士達が気付く事はなく・・・。

そして、その音の発信源は・・・。

「迎撃だ！」

「了解！」

俺とは反対側の廊下。

そして、そこにいる・・・バツタだ。

無論、あのバツタはこの艦のもので、シラトリさん達のものである。ない。

あれは・・・俺達のバツタ。

既にバツタは少し手を回せば手に入れられる程にどこにでも存在になっている。

ナデシコにも幾つか回されており、その中の数機を譲り受けたものだ。

それを今回、俺達は囷として活用する事とした。

この状況下、一機でも侵入を許したとなれば・・・。

バンツ！

「・・・どうにか迎撃には成功したが・・・」

「既に侵入を許してしまっている。これは早急に対応する必要があるな」

「連続的に来てはいないから、完全に突破されている訳じゃないだろうが」

「やはり一人か二人残して合流すべきだ。今は小娘一人に構っている余裕はない」

「だが、艦長からの指示がまだだ。動くべきではない」

「艦長は今、襲撃の対応に忙しい筈。こちらに指示を送っている暇もないんじゃないか」

「それなら、こちらから・・・」

「・・・会話の流れ的に彼らの中に明確な上下関係はない様子。

恐らく、兵士達の中でも下っ端連中が駆り出されているといった所か。

「・・・愚かだな、こういう場合は明確に指揮系統を定めとおいた方がいい。

もつと言えば、きちんと上の階級の者を責任者としておくべきだ。

その隙、突かせてもらう。

「・・・アザレア、狙え」

『・・・イエス、マイマスター』

バンツ！

「また来たぞ！」

再び現れるバツタ。

突然の事態に会話は中断される。

「クソツ！」

バンツ！

「撃退には成功したが・・・」

「もう我慢できん！ 艦長からの指示を待っている暇なぞない！」

「しかし、それでは命令違反になる！ 待ってる、今艦長に」

「俺達下っ端が連絡しても忙しいで切り捨てられるだけだ！」

責任者がいないから、正常な判断ができない。

責任者がいないから・・・報告もままならない。

それ故に・・・。

「室内に一人残してそれ以外は格納庫だ！

残った一人で小娘を監視。それでいいだろ！」

「ああ！ 一人いれば、小娘一人程度なんともなる！」

「ちよつと待て！ だから、それでは命令違反に」

「それならお前がここに残って小娘を監視すればいいだろう！」

独断専行に走ってしまう。

今回は仲違いというオマケ付きだったが。

「優先すべき事をきちんと把握しろ！ どう考えても迎撃を優先すべきだろ！」

「し、しかし……」

「ええい！ 臆病者め！ 命令違反を恐るあまり冷静さを失ったか」「俺達に行く！ しっかり守ってる！ 臆病者！」

「……あえて言わせてもらえるならば、お前達こそ冷静になれ、だな。」

その“小娘ちゃん”がどれだけの重要性を持つかをお前達は理解しているのか？

言っておくが、戦略的にはこの艦を失うよりも優先すべき対象だぞ。

まあ、下っ端に、そこまでの情報が与えられるとは思えないが……。

自分達の物差しだけで物事を判断してはいけないという最たる例だな。

一人でもきちんとそれを把握していれば、どれだけ状況が好転した事か……。

今更、詮無き事だが。

「このピンチは俺が救う！」

「俺が必ず仕留めてみせる！」

「……俺がいけばどうにかなる筈だ」

木連軍人特有の英雄願望という奴だろうか？

まあ、木連に限らず、英雄願望は誰でも持っているかもしれないが。それとも、只の自信過剰？

なんでもいいけどさ、別に。

タッタッタッタッタ！

俺がいる廊下とは逆の廊下を駆けていく兵士達。
格納庫があつち側にあるのだから、当然な訳だが。

「さて・・・これで残るは一人」

なんともまあ、俺にとって都合の良い方向に物事が進んでいくものだ。

・・・彼ら　この艦の責任者も含めて　が犯した過ちは三つ。

一つ目は明確な指揮系統を確立しておかなかつた事。

正確に言えば、下つ端連中のみで見張りを構成してしまった事だ。

下つ端連中を馬鹿にする訳じゃないが、

ベテラン組に比べれば判断力、対応力、共に劣っている事は明確。

また、しっかりとして連絡経路も確立されていない訳だから、報告が遅れる事も有り得る。

正常な判断もできず、的確な連絡も行えない。

その時点で駄目駄目な気がする。

責任者を含め、ユキナ嬢の存在を軽視していたとしか思えないな。

もしかしたら、この艦の艦長にも詳しい話はされていないのかかもしれない。

きちんと監視しておくように言われて監視していただけでその意味は知らなかつたとか。

報告・連絡・相談、情報の共有化は確實かつ密に行わねば。

大人の常識ですよ。

言わば、上層部と現場との見解の違いから生じた過ちという訳だ。

二つ目は襲撃に慌てて最優先事項を疎かにした事。

これは一つ目にも通ずるものがあり、何を優先すべきかを把握していなかつた事が原因。

本来、侵入された事を考えるなら、より警備を厳重にすべきなのだ。

間違いなく、最優先事項はユキナ嬢の確保なのだから。

だが、彼らはそうしなかった。

焦りか己惚れか、何が原因かは知りませんけどね。

まあ、状況が状況だし、仕方ないといえば仕方ないかもしれない。

こちらの狙いがその“小娘ちゃん”にあるって知らない訳だし。

これもまあ、責任者をきちんと設けていれば対処できただろうけど。

三つ目は室内に一人のみの体制にしてしまった事。

せめて、室内に一人、室外に一人の二人体制にしておけば良かった

と思う。

そうすれば、中も外も状況把握が出来ただろうし、対応もできた。

だが、室内に引き籠ってしまった為、中の状況は掴めても外の状況

は掴めない。

そして、それはこの監視映像を覗いているであろう奴らもそう。

先程のバツタによって物理的にカメラは破壊されている。

その異変に気付くのが、対処法がない以上、違うカメラからの監視

を強化するだろう。

即ち、室内の監視カメラ。

要するに、現場、監視映像、共に中は注目されていても、外は無防

備という訳だ。

それ故に・・・俺が自由に動ける。

「アザレア、合図次第で室内のカメラ映像を細工しろ」

『了解。動くのですね』

「ああ。正に・・・絶好の機会だからな」

本来であれば、この時点で警備兵の数は4か0。

即ち、全員残るか、全員居なくなるかの予定だった。

といっても、彼らがユキナ嬢をどのような扱いとしているか分からず、

両パターンのみ考え、相手の出方によって臨機応変に動くしかない

と判断していたからだが。重要度によつては全員が残ってもおかしくない。そんな想定をしつつ、作戦を考えていたのだが、思ったよりも重要度は低いみたいだ。臆病なのか、冷静なのかは分からないが、独断で残った兵士が一人だけ。どちらにしろ、何人残ろうが、0とするつもりだったので、楽になつたと考えれば良いだけ。残る一人をどのようにして動かすか……。

「上司の命令は絶対タイプ。いや、命令以外に何かする事を恐れるタイプと見た」

臆病と言えばそれまでだが、あの状況で冷静さをもっていた事も確か。

慌てる事なく、上司の指示を待っていた訳だからな。

でも、その待っている指示が来る事はなく、判断に迷わされる。

そうなれば、現状維持するしかないよな。

それなら、お望み通り、上司からの指示を申し伝えてあげようじゃないか。

まあ、偽りの、という言葉が先に付くけどね。

「アザレア。頼む」

『了解』

室内のカメラ映像を細工。

今より数分前から今までの映像を永久ループさせる。

男が一人で警備していた間の映像をずっとな。

ただ、それだけ、それだけの話だ。

それでも、しばらくの間、敵を騙す事はできる。

動きがなければバレるが、動きが多少あれば訝しんでも断定する事はできない。

ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！

部屋の扉を叩く。

この部屋の中にいる奴に俺の存在を気付かせる為に。

シューインッ。

「何者だ！？」

銃を構えながら扉を開ける警備兵。

だが、その銃はすぐさま下ろされる。

何故なら……。

「貴方は……」

同じ木連兵だからだ。

今の俺の格好は木連式の戦闘服、ヘッドギアにバイザー、防弾チョッキ、そして銃。

簡単に言えば、目の前にいる警備兵と同様の格好だった。

同じ艦内で同じ格好をしていたら、怪しまれる事はまずない。

「この部屋の見張りをより厳重にするように、との艦長の命令で応援に参りました！」

疑問を抱かせないよう目的を告げる。

そして、間髪を入れずに……。

「四人体制で警備していると聞いたのですが・・・他の方々はどうしたのですか？」

ギクリッ！

そんな擬音が聞こえるほどの狼狽えぶりだった。

「他の皆は格納庫に」

「なっ！？ この部屋の警備は最優先事項の筈です。それを貴方達は！」

「も、申し訳ありません！」

「急いで連れ戻してきてください！ それまでは私が見張っています！」

「よ、よろしくお願いします」

慌ただしく駆けていこうとする男。

・・・動揺につけこんだとはいえ、先程の冷静さはどこにいったのやら。

恐らく、彼は責任という言葉を一倍意識している。

いや、人一倍恐れていると言った方が正しいか。

それ故に上官の命令を意識し、命令なしに動こうとはしない。

それは慎重であり、冷静な判断であったと思う。

また、軍人としては正しい考え方と言えるのかもしれない。

だが、だからこそ、上官からの命令には絶対遵守。

それが偽りかどうかという判断もせず、命令に付き従ってしまう。

本来であれば、俺の所属、名前を明確にし、上司に確認した上で動き出すべきだった。

だが、罪の意識があり、責任を強く感じている彼は確認もせず動き出す。

少しでも叱られないように、というミスを隠したがる若者特有の行

動。

いや、これは若者のみならず、どの年齢層にもいえる人間の本质か。とにかく、彼は少しでも先程のミスをカバーしようとして慌てて飛び出した訳だ。

その後ろ姿は隙だらけ、こちらを味方と判断した故に油断だらけ。そんな彼を・・・

「あ、その前に」

呼び止める。

そして・・・。

「はい。え」

ガッツ！ ドサツ！

振り向いた瞬間に拳を一発。

油断している奴相手にならこれぐらいの事はできる。

恐らく、ただ一人ここに残るといふ正しい判断をした彼こそが最も叱りを受けるだろう。

敵を目の前においておいて油断によって侵入を許してしまったのだから。

命令を守ろうとした責任感が強い彼には同情を禁じ得ないが・・・。

「すまないな。ユキナ嬢救出の為に手段を選んでいられないんだ」

恨むなら恨んでくれても構わない。

だが、それで俺が止まる事は絶対ないだろう。

たとえ恨まれようと決して歩みを止めないと決めたのだから。

さて・・・。

ダンッ！　ダンッ！

部屋に入り、同時に室内のカメラを片付ける、隠しカメラも含めて今、監視者が見ている映像はメモリから編集されたものが流されているに過ぎない。

という事は実機を破壊した所で映像が滞る訳ではないという事だ。それなら、偽りの映像を流し続ける為だけのカメラなんて用済みだろ？

「・・・・・・・・」

突然の銃撃音、見知らぬ人間の入室。

恐怖の表情を張り付かせながらこちらを見てくるユキナ嬢。

せつかく、助けに来たのにそんな表情を浮かべられるとはな……。ま、当然だけどさ。

「アザレア。脱出ルートの確保を」

『はい。既にヒナギクを向かわせています』

「そうか。ポイントは。そこで合流する」
『了解』

脱出は強引に。

そろそろ、作戦進行的に有人機を投入する頃。

というか、アザレアの口振りから察するに既に投入したらしい。

アザレアには有人機投入を機にヒナギクを動かせと伝えてあった。

そして、そのヒナギクでこの艦を強襲、外へと続く穴を作ってもらう。

後はヒナギクに乗り込み、その穴から脱出するという流れ。

ヒナギクに乗ってさえしまえば、こちらのものだからな。

他にも方法としてはボソソジャンプがあっただが……。
未だにジャンパー体質以外の人間を生身で跳ばした事がないのでこれには不安が残る。
その為、万が一がないように、この方法は最終手段として取っておく事にした。

いざという時には迷う事なく使うつもりだが……。

『後二分後に作戦ポイントに着きます』
「了解した。すぐに向かう」

さてつと、脱出ルートを確認した所で、
そろそろ目の前で怯える女の子をどうにかしなくちゃな。

「助けに来るのが遅くなっちゃったね、ユキナちゃん」
「え？」

戸惑いの声を上げる。
ま、それもそうか。
バイザーで顔は見えないし、まさか、こんな所に俺がいるとは思えないだろう。
でも、ま、そのまさかが現実な訳だけど。

「え、えつと……」
「クスッ」

困惑顔のユキナ嬢。
思わず笑ってしまった事は許して欲しい。
さて、そろそろネタばらしといきましようか。
ヘッドギアを外す。

「・・・あ」

口元に手を当てて驚きを隠しきれない様子のユキナ嬢。
それがまたおかしくて笑いを誘う。

「さて、早速脱出しようか。いつ何が起こるか分からないしね」

眼をパチクリさせたユキナ嬢を背負う。

ずっと精神的に辛い生活を送ってきたからか、

その身体は痩せ細り・・・恐ろしい程に軽かった。

それが更に怒りを誘う。

「コ、コウキさん。どうしてここに？」

「囚われのお姫様を助けに。」

まあ、俺は役柄的に王子様じゃなくて魔法使いだけどね」

合わな過ぎるだろ、俺が王子様とか。

「・・・助けに来てくれたの？」

「もちろん。ユキナちゃんは大切な俺達の、ナデシコの家族だから
ね」

見捨てる訳ないだろ、大事な家族を。

「私・・・ずっと・・・ずっと・・・怖くて」

・・・声に涙声が混ざる。

そうだよな。まだまだ幼い女の子が長い間ひとり監禁されていた
んだ。

ずっと心細かったに違いない。

作戦だとか戦略だとか、そんな大人の都合を優先しないで、一刻も早く、無茶してでも彼女を助けてあげれば良かったんだ。場所を突き止めた時点でどんな手段を使っても。本当に・・・俺は最低な奴だよ。

「疲れただろ？ 眠ってていいよ。」

ユキナちゃんが起きた頃には全てが終わってるから
「・・・うん」

後悔が胸を襲う。

でも、だからこそ、こつこつも思う。
なんとしても彼女を助けてあげなければな、と。

「スーツ・・・スーツ・・・」

穏やかな寝息を立てて背中では眠るユキナ嬢。

俺の言葉を信じ、俺の事を信じたからこそこの行動。
・・・俺はその信頼に応えたい。

「必ず助けるからな、必ず。だから・・・」

バンツ！ バンツ！ バンツ！

「邪魔・・・するな！」

迫り来る敵を排除しつつ、目的地へと駆けに駆けた。

「アザレア。監視映像の全データを削除。俺の痕跡一つ残すな」
『イエス、マイマスター』

第四百十三話（後書き）

拙作をお読み頂き、ありがとうございます。
更新が遅れるばかりで非常に申し訳ない気持ちでいっぱいです。

最後の脱出前の銃撃戦。

あれの相手は艦内に動き回っているであろう無人機との戦いという設定。

木連は人手不足を無人機で埋めるという手段をとっていた筈。

それ故に戦艦の中には無人兵器が何体かいる筈なのです。

それが目の前にいれば、もしかしたら襲いかかってくるかもしれない。
い。

たとえ木連の制服を着ていようと確実とは言い切れないのだから。

それゆえの排除。撃たれる前に撃て。

コウキ君らしくない考えなしの行動。

でも、それだけ必死だったという事でしょう。

言わば、RPGでいう脱出時に何故か襲いかかってくるセキュリティ
イロボ的な奴。

そして、破壊されようとその報告が誰かに行く事はない報われない
骸たち。

その痕跡をいつ誰が発見し、どう思うかは誰にも分からないという
奴ですね。

ちなみに、敵軍の兵士に擬態し、まんまと侵入に成功し、

まんまと脱出に成功した人間を過去一人、本作は登場させています。

まあ、その人は自身の正体を隠す為に、

偽装死までやらかす裏のエキスパートなお方ですが。

コウキは意趣返しもかねて同じ方法を取った訳です。

同じ方法か？ と問われれば素直に頷けない気がしないでもないで

すが
・
・
・
。

第四百四十四話（前書き）

大変お待たせしました。

見切り発車してもなお、暗中模索。

どれだけ私を苦しませれば気が済むのでしょうか、この展開は。

それでも、自分自身、楽しみながら、

皆さんを楽しめさせるよう懸命に書いた所存です。

更新速度が遅く申し訳ありませんが、どうか温かい目でお待ちください。

第四百四十四話

『こ、これは一体どういう事』

「それはこちらの台詞です、スズキ少将」

『何だと!?!』

「突然の襲撃、やはりナデシコ相手に逃げ帰った我々が許せませんか?」

『何の話をしているんだね? 君は。攻撃を仕掛けてきたのは君達だろう?』

「・・・いえ、私達は迎撃をしたのみ。こちらから仕掛けるような事はしていません」

『では、この襲撃は君達ではないと?』

「はい。どうやら見解の相違が生じているようですね」

『・・・・・・・・』

「状況の整理をしましょう。混乱を収めるにはそうするしかありません。」

（早く戻ってこい、コウキ。この状況、そう長い時間を稼ぐ事はできない）

「コキナ!」

脱出を済まし、艦へと戻ってきた俺達。

疲労困憊な様子のユキナ嬢とそんな彼女を背負う俺を出迎える影がある。

無事な彼女の姿を誰よりも待ち望んでいたのは、間違いなく彼だろ
うな。

・・・彼の信頼を裏切らずに済んだ。
それが嬉しくてたまらない。

「眠っているだけです。ご安心を」

「そ、そうか。良かった」

ホッと一息吐くシラトリさん。

本当に家族であるユキナ嬢を案じ、愛しているのだなと思った。

心の底から安心した、そう伝わってくる程に表情が変化したのだから。

それにしても・・・。

「どうしてここにシラトリさんが？」

シラトリさんは今、この部隊の指揮を執っている筈では？」

「今は源八郎が指揮を執っています」

「アキヤマさんが？ 何か不都合でも？」

「はい。先程、基地の司令から通信が入りました。

司令は部隊の指揮官を源八郎が務めていると認識しています。

この艦は源八郎のですし、司令と連絡を取ったのはあいつですか
ら。」

その為、司令の通信を機に源八郎に指揮を移したのです。

ここで私の存在が露見するのはまずいとの事で・・・。

私にも真意は分かりませんが、源八郎には何か考えがあるのでし

ょう」

「なるほど」

アキヤマさんはあえて自身を指揮官とする事で何かを得るつもりなんだ。

その何かがなんなのかは分からないが……。

「それなら、ツキオミさんは？ 彼は前線に立っている筈ですよね？」

「まだ早い。そう言って源八郎が出撃を止めました。」

元一郎は自分の手で決着を付けたかったようですが……」

……シラトリさんのみならず、ツキオミさんの存在も隠した。アキヤマさんがそうまでする理由が俺には分からない。

元々、彼らは三人で協力してこの基地に攻め込み、ユキナ嬢を奪還する予定だった。

それなら、自身の存在が露見する事だつて考慮していた筈だ。

……木連を裏切ったという汚名を被る事さえも……。

だが、ここにきて、アキヤマさんは二人の存在を隠し出した。自らが指揮官と偽り、敵方の視線を自分に集める事で……。侵入には成功した。

作戦も順調だ。

だが、だからといってここにきて策を変更する必要があったのだろうか？

……アキヤマさん、貴方は一体何を考えているのです？

三人で、掛け替えのない親友達とで協力して作戦に当たると言っていたではないですか？

「……」

「おっと」

・・・考え事は後にするか。
いつまでも考え事に浸っている余裕はないし。
何より・・・俺の背中に鋭い視線が突き刺さっていますので・・・
分かってますって、シラトリさん。

「ユキナちゃんの事、お願いしてもいいですか？」

「・・・もちろんです」

背負っていたユキナ嬢をシラトリさんの背に預ける。

「・・・」

ユキナ嬢を背に負うシラトリさんは眼を瞑り、沈黙を貫く。

その表情は心から何かを実感しているようだった。

彼女の無事を恐らく誰よりも願っていたシラトリさん。

彼女の生存を、彼女の無事を、その確かな重みから実感しているの
かもしれない。

・・・その身体の震え。

見てみぬフリをするのが大人だよな、うん。

「マエヤマさん。ありがとうございます。この御恩は私が一生を懸
けて」

「それは違いますよ、シラトリさん」

「え？」

そう、違うんだ。

「お預かりしていた貴方の最愛の家族。

今、確かにお返ししましたよ、シラトリさん」

恩なんて感じる必要はない。

預かっていた彼女を返したただけなのだから。

その返すまでの過程は波乱だらけだったかもしれないけど……。

預りものは責任を持って返すのが人としての義務。

俺は義務を果たしたに過ぎない。

むしろ、謝らなければならないのは俺の方だ。

「マエヤマさん……」

「むしろ、私こそが貴方に一生を懸けてお返ししなければなりません。」

信頼して預けてくれたユキナちゃんを危険な目に合わせてしまったのですから」

頭を下げる。

どれだけ怒られても甘んじて受け入れよう。

それだけの事をやらかしたという自覚は……ある。

「もうその話はやめましょう、マエヤマさん」

「え？」

それって……どういう……。

「こうしてユキナは無事に私の所に戻ってきてくれました。

ユキナがここにいる。それ以上、私が何を求めましょうか……」

「でも……」

「私はもう満足しています。昔の事をほじくり返すのは野暮ってものですよ」

「……」

「納得していただけませんか？」

それは・・・そうだ。

納得なんてできる筈がない。

そんなの、シラトリさんに甘えているだけだ。

今までずっと甘えてきて・・・はじめを一度たりとも付けた事がない俺。

せめて、この件ぐらい、はじめを付けさせて欲しい。

「困りましたね。私はこれ以上何も求めていないというのに・・・」

「それでも・・・」

「それじゃあこうしましょう。ユキナを傷付けた責任を取ってもらいます」

「え？ それって・・・」

なんか雲行きが怪しいんだが・・・。

「代わりにミナトさんは私が幸せに」

や、やっぱり！

「そ、それは駄目で」

「お兄ちゃんの馬鹿！ い、妹の結婚相手を勝手に！」

ん？ ユキナ嬢？

「ま、まあ、別にマエヤマさんなら私は全然いいけどさ。

助けてくれたし、王子様みたいだったし、お兄ちゃんみたいだし」

「ユキナちゃん？」

「ユキナ？」

「え？ えっと・・・あれ？ な、なんでもないよ！」

慌てるユキナ嬢。

それがどことなく笑いを誘う。

「アハハ。いつのまに起きてたんだ？ ユキナ」

「さつき。起きたら私の話してたから・・・。」

「そ、それよりも、さっきの話は本気なの！？ お兄ちゃん！」

「アハハ。大丈夫だよ、ユキナちゃん。シラトリさんなりの冗談だから」

「もちろん、もちろんです」

「本当？ お兄ちゃん」

「本当だとも」

疑いの眼差しが二対。

つまり、俺も。

「まったく、お兄ちゃんったら、私の事はまだしも、

妹をダシにして女の人を射止めようなんて・・・卑怯よ」

「アハハハ・・・」

「お兄ちゃん！」

「分かった、分かったから、許してくれ、ユキナ」

プンスカ、プンスカ。

そういう擬音がピッタリなユキナ嬢。

「もう！ プンブン」

擬音、頂きました。

「マエヤマさん」

「ん？ 何かな？」

ユキナ嬢の御陰で穏やかな空気が流れている現在。
でも、今すべき話題は決して穏やかなものではない・・・筈なのだ
が・・・。

「恩とかけじめとか、難しい事は考えなくていいと思う」

「え？」

「私を助けてくれたのはマエヤマさん。それは絶対に変わらない事
だと思っの」

「うん」

「でも、私が捕まったのはマエヤマさんのせいじゃないわ。

悪かったのは私だし、マエヤマさんは戦ってたし、仕方がない事
だった」

仕方がない？・・・それはそうなのかもしれない。

でも、仕方がないで片付ける訳にはいかないんだ。

それじゃけじめはつけられない。

「仕方がないじゃ済まないんだよ、ユキナちゃん」

「もう、本当にお兄ちゃんに似てる」

「え？俺がシラトリさんと？」

シラトリさんと眼を合わせてパチクリパチクリ。

お互いに困惑顔といった所か。

「うん。もしかしたら、お兄ちゃん以上に頑固かも」

「が、頑固って・・・」

そういう意味ね。

「それじゃあさ、こう考えたらどうかな？」

私を助けて、ここまで届けてくれた。それがけじめだって」

「でも、それは当然の事で・・・」

「いえ。私もそれでいいと思います。貴方は責任を果たしてくれた。それは当然の事かもしれない。それでも、私には“けじめ”であると感じました」

そんな事でいいのだろうか？

それで俺はけじめを付けた、とこの件を片付けてしまっ・・・。

「それにね」

「・・・」

「折角助けてもらって戻ってこれたのに、こんな暗い雰囲気、嫌」

「ユキナちゃん」

「私に言えるのはこれぐらい。だから、さ。ね」

「・・・うん。ありがとう、ユキナちゃん」

「ううん。こちらこそ、ありがとう」

ユキナ嬢が笑う。

・・・本当に心地の良い笑顔で。

「それと、ごめんね。お兄ちゃん」

「ユキナ・・・」

「心配かけちゃって」

「いいんだ。こうして、無事に戻ってきてくれたのだから」

「そっか。ねえ、お兄ちゃん」

「何だい？ ユキナ」

「ちよつと休んでもいいかな？ 疲れちゃって」

「ああ。ゆっくりおやすみ」

言ったそばからすぐさまスーツスーツと可愛らしい寝息を立てて眠るユキナ嬢。

「……ユキナは貴方に言葉を伝えたくて頑張ってくれたのでしよう」

「ユキナちゃん……」

辛くて、苦しい筈なのに……。

「ユキナの願いです。マエヤマさん。納得していただけますね」

「はい」

甘えてばかりの俺。

今回も甘えて終わる事になってしまったようだ。

本当に……締まらないな、俺。

でも、それがユキナ嬢の願いであるというのなら……叶えてあげなくちゃな。

「改めて御礼申し上げます、マエヤマさん」

本当に律儀な人だ。

「いえ。でも、問題はこれからですよ、シラトリさん」

「はい。無事にこの基地から脱出しなければなりません」

囚われのユキナ嬢は無事に解放する事ができた。

だが、未だなお、俺達は基地という監獄に囚われているといっても過言ではない。

「ユキナちゃんの無事、それを本当の意味で喜ぶのはここを脱出

してからです」

「ええ。次は私達を私達の力で解放してみせましょう」

「はい」

困難はまだまだ続く。

それでも、乗り切ってみせるさ。

「・・・という訳です」

『先程から要領の得ない報告ばかり。君は何を企んでいるのだね？』

「企むとは？」

『・・・即刻、この攻撃を止め、出向いてくるように』

「それはできません。未だなお、襲撃は続き、こちらも混乱の中にいますので」

『上官命令に従えないというのかね？』

「部隊の混乱が収まるまで待つていたただきたいと言っているのです」

『貴様は！』

「それに、混乱しているのは少将の部隊も同様なのでは？」

『何！？』

「司令である少将の指示なしに独断で脱出していく艦が続出。

まずは自身の艦隊の状況把握に努めた方がいいのではないのでしょうか？」

『上官に向かって貴様はなんと口振りを！』

「それとも、この脱出は貴方の指示だとも？」

『・・・ああ、そのまさかだ』

「え？」

ドガンツ！ ドガシャアアアアン！

「なッ！ し、司令、何を！？」

『ジロウサブロウ。基地内の戦力は全て出揃ったか？』

『はい。父上。増援部隊も合流し、準備は万端です。いつでも殲滅できます』

『そうか。それは重畳。今こそ好機という訳だな』

『どういう意味でしょうか？ 司令』

『噂に名高き知将とは思えない察しの悪さですね、三羽鳥の秋山殿』

「お前は？」

『御初に御目に掛かります。私はスズキ・ジロウサブロウ。』

以後、お見知りおきを。いえ、後たった数分だけ覚えておいて頂ければ構いません』

「スズキ・ジロウサブロウ。なるほど、お前が、あの・・・」

『おや、既に知っておられるとは・・・』

「聞いているぞ。お前もまた、草壁中将の影。まさかここで会う事になるとはな」

『光荣です。さて、秋山殿』

「・・・何かね？」

『この状況、既に御察しなのでは？』

「なるほど。扱いやすいと思っていた司令は擬態であった、と。」

そして、無能であると思わせておいて、基地を包囲、私達は完全に逃げ道を塞がれた訳だ」

『その通り。君の目的はおおよそ検討が付いているよ、秋山君』

「・・・（今までとはまるで別人。これが本性か。この子にしてこの親ありという訳か）」

『数刻前、君達三羽鳥の事は報告を受けていた。白鳥と月臣が捕まったとな。』

報告はそこまだった、が、ナデシコは君一人で崩せるほど脆い艦ではない。

君も捕まるか、降伏したのだろう。そして、ナデシコに小娘奪還の協力を依頼した」

「それは司令の想像でしょう？ 私は命からがら逃げ延びたのです。（少し考えれば分かった筈だ。あの草壁中將が無能な部下に切り札を託す訳がない。）

クソツ！ これは完全に俺の失態だ。見ただ目で判断するなど愚かな事を。

能ある鷹は翼を隠すというではないか。安易に油断した過去の俺を殴り飛ばしてやりたい」

『あくまでそう主張する訳か、君は』

「主張するも何も、それが事実ですから。」

（クツ！ どうする？ 既に逃げ道は塞がれた。ユキナの身柄がどうなったかも分からん）

『まあいい。君がナデシコと手を結んだかどうかなど私にとっては些細な問題でしかない。』

重要なのは君がここに来たという事。わざわざ中將よりお預かりした小娘がいるここにな」

「何の話でしょうか？ 私は行き先を選ぶ程、余裕はありませんでしたので。」

（奴はこちらの目的に気付いている。どうにかして時間を稼がねば。下手な真似をしたらユキナはもちろん、コウキの奴にも危険が迫りかねない）

『嘘は苦手なようだね。君の、いや、君達の目的は白鳥・雪菜の奪還。相違あるまい？』

「・・・たえそうであったとして、何故司令は我々を基地内に招き入れたのです？」

『簡単な事だ。その方が手間取らずに仕留められる。三羽鳥を、な』
「・・・（奴は九十九と源八郎がいると確信している。だが、証拠がある訳ではあるまい）」

『さて、最終勧告だ。私も強引な手段は嫌いだね。武装を解除して

出頭してくるように」

「……（それならば……）」

『猶予をやるう。一時間だ。それまでに出頭してこい。』

だが、これだけは覚えておけ。君達は完全に包囲されており、逃げ道はない、とな」

プツンッ！

「……元一郎と源八郎を呼んでくれ、今すぐに、だ。

（この件の責任は俺が、俺だけが負う。あいつらは俺達の、木連の希望だからな）」

ドガシャアアアアン！

「な、何だ！？」

ユキナ嬢を医務室に送っていくというシラトリさんと別れブリッジに向かう途中。

今までにない程の揺れが身を襲う。

この爆音、この振動、間違いなく状況が変わった。

それが良い方向か、悪い方向かは分からないが……。

「どちらにしる、急いだ方がいいな」

状況把握の為にブリッジへ急ぐ。

シュインツ。

「何があつたんですか!？」

扉が開くと同時に近くにいたオペレーターに話しかける。

「それが・・・」

視線が艦長席へと移される。

つられるように視線を艦長席へと移した。

「アキヤマさん・・・」

そこには何故か項垂れるアキヤマさんの姿。

「何があつたんですか!？ アキヤマさん!」

嫌な予感がして駆け寄る。

「コウキ! お前、どうしてここに!？ いや、それよりもユキナは!?!？」

「す、すみません、艦長! 司令とお話してい為、報告が遅れてしまつて・・・」

驚く艦長にオペレーターの一人が告げる。

なるほど。どうやら、アキヤマさんは司令の注意を引き付けてくれていたみたいだ。

でも、それなら、どうしてあんな・・・。

「コウキ。首尾は?」

「はい。ユキナちゃんは無事に救出しました。今はシラトリさんに」
「そうか。間に合ったと思うべきか、それとも・・・」

・・・お願いしますから、状況を教えてください。

「何があつた!? 源八郎!」

「やはり動きがあつたのだな!？」

慌てた様子で二人がブリッジに飛び込んでくる。
だから、状況を教えてくださいってば。

「九十九。ユキナは？」

「ん、あ、ああ。今は救護室で休ませている。」

衰弱してはいるが、休ませれば大丈夫だそうだ」

「そうか。それはよかった」

「ああ、お前の御陰だ。ありがとう、源八郎」

「いいさ。俺は何もしていないからな」

ユキナ嬢は衰弱しているものの異状はなし。

後はこの基地から無事に脱出するのみだ。

その為にも・・・状況を正確に把握しないとな。

「さて・・・」

ユキナ嬢が無事だった。

そう聞いて安堵していたアキヤマさんだったが、
すぐさま表情を真剣なそれに変えて、話し始める。

その表情から放たれる雰囲気にはこちらの危機感を煽る何かがある
でいた。

「まずはユキナの件だ。その為に俺達は集まったといっても過言ではない」

「ああ。その為に俺達はここまで来たのだからな」

「うむ。そして、その肝心のユキナだが・・・」

そこにいるコウキが無事に救出し、ここまで連れて来てくれた。

改めて感謝しよう、コウキ。お前には借りを作ってばかりだな」

「いえ。俺は責任を果たしただけです。礼など不要です」

「そうか。お前がそう言うのならこれ以上この件については口にはいさん。」

だが、少なくとも俺達がお前に恩を感じている事は確かだ。それだけは覚えておけ」

「はい」

流石にそう言われたら頷くしかない。

必要以上に意地を張る必要なんてないからな。

「続いて、今の状況だが、先に結論だけ言おう、絶体絶命だ」

「・・・・・・・・・・」

アキヤマさんをして絶体絶命とは・・・。

こいつはリアルにやばいらしい。

でも、一体何があったかというのだろうか？

襲撃はうまくいったと思うのだが・・・。

「コウキがユキナ救出に向かっている間、俺達が何をしてきたかは把握しているよな？」

「ああ。混乱に乗じて、敵の機体を強奪、戦力の補強と同時に敵方の戦力を減らした」

「まあ、その混乱もこちらが作り出したものな訳だが・・・」

そう、順調に進んでいた筈だ。

敵の戦力を減らしつつ、こちらの戦力を補強。

これで敵と正面きって戦う事も可能になった筈。

また、こちらが冷静であるのに対し、敵は未だに混乱の渦中。

それが証拠に状況も掴めていないまま次々と基地から脱出していったのを確認している。

自ら基地を手放すなんて愚か極まりない事だ。

基地にいるというだけで敵に対して優位に立てるのだから。

「そして、結果として、今、この基地に残っているのは我々と少数の敵のみ。

この状況、本来であれば喜ばしい事であり、ましてや危機などではない筈だ」

「ああ。だが、お前の口振りから察するにはそうではないのだろうか？」

「………」

無言で頷くアキヤマさん。

状況的にこちらが基地を制圧し、指揮下に収めたとも言える。

残る敵もすぐさま殲滅できる程度でしかないだろうし。

どう考えても勝利といえる結果だろう。

でも、アキヤマさんの深刻な表情がこの勝利を否定していた。

「まんまと引つかかってしまったんだ、我々は」

「引つかかった？ どういう意味だ？ 源八郎？」

「我々は侵入に成功したと思っていた。だが、成功させてもらっていただけなのだ」

「全ては基地の責任者である司令の掌の上だったという事ですか？」

「……ウキの言う通りだ」

・・・確かにそう簡単に侵入を許す訳がないと思っただけだ。だからこそ、侵入が成功した時は安堵と共に不安も抱いていた。でも、それからがあまりにも順調だったから・・・。いつしか、その不安すらも、悪い予感すらも忘れてしまったんだ。悪い予感は必ず当たるといふのに・・・。これも言わば、油断であつたという訳だな・・・。

「我々は侵入を果たしたのではない。

自らクモの巣に絡まりに赴いた愚かな獲物であつたという訳だ」

敵はこちらの意図を把握した上でわざと侵入を許した。

そして、この基地というクモの巣に絡まり、身動きが取れない時を狙い・・・。

「それでは、今、我々は・・・」

「ああ。オペレーター。敵の位置を示す地図を」

「ハッ」

アキヤマさんの指示に従い、オペレーターがモニターに地図を示す。

「ハハッ。なるほど。してやられたとは正にこの事ですね」

君達は完全に包囲されている。

おとなしく出てきなさいってか？

殺人犯に対してもこんな包囲はしないっての。

「だが、おかしくないか？ これだけの数、元々基地にいたとは思えんのだが？」

・・・確かに。

考えてみれば、数が多過ぎる。

「増援部隊が合流したと言っていた。狙っていたかどうかは分からんがな」

なんとも運が悪い事だ。

あの状況で敵が増援を呼んだとは思えない。

何故なら、元から敵の数の方が多かったのだから。

だから、恐らく、この増援は俺達に関係ない理由でのもの。

それが、偶然にもこの状況、このタイミングで合流してしまった訳だ。

ついに運にも見放されたという事か。

「基地は完全に包囲され、我々に逃げ道はない。万事休すとはこの事だな」

アキヤマさんの言葉に頂垂れる一同。

誰もが希望を失い、絶望しか残らない。

それはそうだ。何故なら、作戦は失敗に終わったに等しいのだから。命を賭けた賭けに負けた以上、残るは死しかない。

「残る猶予は一時間弱。それまでに決断しなければならぬ。

生きて汚名を被りながら最終的に殺されるか。今すぐここで潔く散るかをな」

決断。

警察に包囲された犯人もきつとこんな感じなんだろうな。

希望も何もない状態でどうにかして生き残ろうって。

でも、結局は捕まるか、死ぬかしかなくて。

捕まった所で死刑にされればそれはもう死ぬしかない訳で。

本当に、絶望とは正にこの事。

「・・・やるしかないか」

でも、逃げ出す方法がない訳じゃない。

ボソソジャンプ。この状況では、俺にのみ許された最終手段。

これを使えば、逃げる事だけは可能だ。

・・・その後、一生汚名を背負って生きていかなければならないが、でも・・・これ以外に方法は・・・

「アキヤマさん。それなら」

「だが、それもユキナが助かっているというのなら、話は別だ」

「え？」

それって・・・。

「ユキナがおらず、俺達のみが追い詰められているのであれば、取る手はない。

だが、雪菜が助かっているのであれば、俺達の目的は果たされていると言えよう。

そして、俺達の勝利は・・・俺達が逃げる事じゃない、希望である九十九と雪菜を逃がす事だ」

確かにそうだ。

俺達の目的はユキナ嬢の解放。

そして、それによるシラトリさんの解放だ。

そういう意味では、目的を果たしていると言える。

でも、それは・・・。

「待て！ お前は、俺にだけ、俺と雪菜にだけおめおめと逃げると

言っているのか!？」

そういう事になる。

自身を犠牲にして、シラトリさんだけは逃がす。

アキヤマさんはそう言っているのだ。

「お前達だけじゃないさ。コウキ。お前もだ」

「……え？」

「いや、むしろ、お前の力を借りなければ二人を逃がす事はできない。」

最後まで、お前の力を借りる事になってしまったようだ。すまなく思う」

「ま、待ってください。俺に逃げろっていうんですか？」

「ああ。そうだ。お前は逃げる。お前には関係のない事だ」

関係ない……だって？

「ふざけないでください！ 関係ないなどとふざけた事をよく」

「

「これは木連の事情であり、地球人のお前には関係ない事だと言っているのだ」

「それでも！ 俺は貴方達の仲間としてここにいます。それを裏切る事はできません！」

ハーツハーツ。

あまりの怒りに頭が沸騰しそうだ。

アキヤマさんの物言いはどこまでも俺を侮辱している。

ここまで来て自分だけ逃げる事なんて出来る訳がないだろ！

「・・・お前は本当に律儀な男だな、コウキ。

だが、そんなお前だからこそ、生きていて欲しいのだ」
「でも！」

「ああ。お前の気持ちは伝わったぞ、俺の心にな」

「月臣さん・・・」

どうして、貴方まで、そんな分かったような顔を・・・。

「今まで地球人であるというだけで俺は眼を背けていた。

お前は・・・木連人にもそうはいない正しい道を歩ける義に篤い男だ。

お前の想い、確かに俺達二人が受け取った。後は俺達に任せて

」

「いや、お前もだ、元一郎。お前も共に逃げる」

「なッ！」

驚きのあまりに絶句している元一郎。

・・・ようやく、俺は貴方の考えている事が理解できましたよ、アキヤマさん。

「この艦にいたのは俺だけだ。お前も九十九もそもそも乗っていない。不幸中の幸いと言おうか。お前達の存在は相手側には露見していない筈だ」

「お前は・・・一人で責任を背負うというのか・・・」

この行為は全て自分が行なった事であり、自分の責任である。

そうアキヤマさんは伝え、一人で責任を取るつもりなのだ。

・・・なんて身勝手。

・・・なんて・・・勇ましさ。

そんなの・・・格好良すぎるだろ・・・。

「こんな所で無駄死にしている人間ではないのだ。お前も九十九もな」

「それはお前もだろ！ 源八郎！ お前も共に」

「では、誰がこの件に落とし前を付けるというのだ」

落とし前？ そんなもの、付ける必要はない。

「俺が、俺が皆を逃がします。それでいいじゃないですか！」

そうだ。俺の力があれば、全員を無事に帰す事ができる。

誰かが犠牲にとか、誰かが責任を負うとか、そんな事しなくとも。

「それで・・・誰が喜ぼうか」

「え？」

「お前の力で逃げた所で所詮その場凌ぎでしかあるまい。

一生を裏切り者というレッテル付きで暮らす事になるだけだ。

俺はそれで構わんが・・・信頼して付いてきてくれた部下がいる。

俺は奴らにまでそんなレッテルを貼らせたままで生きてもらいたくない」

「貴方の部下を想う気持ちは分かりました。でも、それは捕まった所で同じです」

「いや、同じではない」

「え？」

「俺が全ての責任を取る。部下の奴らは上官命令に従っただけだ」

そんな・・・。

「少なくとも、そうすれば部下は木連に居場所を失わなくて済むだ

る？」

「それは……でも……」

納得ができない。

そんな自己犠牲、納得できる訳がないじゃないか！

「艦長！ 我々はそうなる事を覚悟して付いてきているのです！」

「その通りです。裏切り者のレットルが何だと言つのです。」

我々は我々にとっての正義の道を進んでいるだけ。そのようなレ

ッテルに

「バカモノ！」

「ッ！」

一喝。

温厚なアキヤマさんの顔が修羅のように厳しくなる。

「お前達にも家族がいるだろう！ その家族を犠牲にしているのか！？」

裏切り者の家族として木連中から見放される事になってもいいと
いうのか！？

「それは……」

誰もが黙り込む。

当然だ。家族を犠牲にしていいと思える人間なんていない。

そう簡単に割り切る事なんて人間にはできないのだから。

でも……。

「それなら！」

「……」

「それなら、なぜ、始めからこんな事をしたのです！」

部下に裏切り者のレッテルが貼られる事を恐るのであれば、始めからしなければいい！」

「ッー！」

シラトリさんにとって酷な事を言っている自覚はある。

ユキナ嬢を助けなければ良かったと言ってるのと同じ意味なのだから。

でも、アキヤマさんがそこまで考えていなかったとは思えない。だから……。

「勝算があつたのでしょうか？ 救出も成功して、脱出も無事に成功すれば……。」

皆が裏切り者というレッテルを貼られる事なく、居場所を失う事なく戻れる策が」

そうでなければ、アキヤマさんが実行する筈がない。

部下を巻き添えに滅びの道なんぞに。

「……納得させればいい」

「え？」

「何故我々が味方に攻撃を仕掛けたのか。」

その理由さえ公表する事ができれば世論はこちらに付く」

「それなら、俺の力で脱出した後にそうすればいいじゃないですか」

「それでは駄目なのだよ。俺達が攻撃を仕掛け、無事に脱出した。

その確かな事実が必要なのだ。そうでなければ、偽りと言われるだけ」

「偽り？」

「そう、草壁中将を陥れる為に作り出した偽りだ、とな」

でも……。

「それは九十九さんの証言とユキナちゃんの証言があればいいだけでは？」

それだけで事実として周知できる。

「確かにな。だが、脱出した事実もなく、誰がユキナがそこにいたと信じる？」

「え？」

「今は襲撃を仕掛けたという事実しかない。この時点で世論はこちらの敵だ。」

だが、ここから脱出したという事実と二人の証言が揃えば……。

この発言には真実味が増し、確かにユキナがここに監禁されていたと証言できる」

「それは……」

確かにそうだ。脱出の事実なく公表すれば、どこかに隠していただけだと疑われる。

それは脱出の事実があっても同じかもしれないが……信じてもらいやすくなる事は確かだ。

「だから、我々はなんとしても自らの力で脱出する必要があった。」

だが、最早それが不可能な以上、我々に許された道は一つしかない」

「それが、全ての責任をお前に押し付け、俺達が逃げるといっ道か」

「ああ。そうだ。お前達は俺の行為を正当化する必要はない。」

九十九を解放した。それだけで俺の夢は叶うと信じているからな」

草壁派がユキナ嬢を監禁してシラトリさんを操っていた。

その真実を公表せずともシラトリさんだけで和平を勝ち取れると。

・・・アキヤマさんは心の底からそう思っているんだ。
なんて強い信頼だろうか・・・。

「だが、それでも・・・」

シラトリさんだって、ツキオミさんだって、もちろん、俺だって・・・。
納得なんてできる訳がない、してさえいない。
でも、それしか方法がないと思えてきてしまう自分もいて・・・。
情けないけど、それしか方法がないのであれば。

「戦いましょう！ 艦長！」

え？

「何故、諦めるのです！ 確かに敵の戦力は凄まじいかもしれませ
ん。」

でも、決して勝てない訳ではない筈です。諦めるのはまだ早過ぎ
ます」

「・・・それは蛮勇というのだよ。どこに勝ち目がある？」

「基地を確保しています。その防衛兵器はまだ使える筈です。」

艦長もおっしゃっていただけではないですか。基地持ちであれば少数
でも多数相手に戦えると」

「確かにそうだ。基地、防衛拠点持ちの相手には十倍以上の戦力が
必要となる」

「それならば！」

「だが、それは攻め込む側が勝つ為には、という話だ。」

守る側が勝つには相手側の疲労や物資切れによる退却を目指すし
かない。

もしくは・・・味方からの援軍、とかな。今の我々に勝ち目がな

「事がわかるだろ？」

「それは・・・」

「それに、な。基地内の人員も全て退避してしまった以上、基地にいるのは俺達だけ。」

「どう考えても、基地の防衛兵器を動かすには人員不足だ。艦の制御だけで精一杯だよ」

「・・・」

相も変わらず、アキヤマさんの言葉には付け込む隙がないな。

今の俺達に味方してくれる人間なんている筈がない。

状況を正確に把握していなければ、ただの味方基地に攻め込んだ裏切り者なのだから。

追い込まれている裏切り者に協力するなんて物好きがいる筈ないだろ。

それこそ、状況を把握しており、かつ、基地への道を妨害されない予想外の人物以外には、ね。

また、相手側の疲労、物資切れによる退却もまずありえないと言っ
ていいだろう。

何故なら、木連に物資切れという言葉は存在しないからだ。

もちろん、無限という訳ではないが・・・。

それでも、物資補給なんて木連にとってはお茶の子さいさい。

チューリップは戦争の前提を覆す兵器だよ、まったく。

兵站部隊の重要性、木連は理解してくれているだろうか？

・・・していないだろうなあ。

最後に、単純な人員不足。

そりゃあそうだ。

艦を動かす程度の人数、しかも、運営の大半を無人機に任せている木連だ。

艦二隻分の人員といえど、基地の兵器を動かすには人手があまりにも足らな過ぎる。

以上の点より、迎撃、ましてや我々の勝利なんて不可能であります、
というのが俺達の結論。

・・・ま、俺がいなければの話なんだけどね。

「要するに、基地の防衛兵器が正常に働き、かつ、援軍がくれば勝ち目はあるという訳ですね」

「・・・コウキ？ お前は一体何を言っているんだ？」

「我に秘策あり。この絶望、俺が希望に変えてみせますよ」

第四百四十四話（後書き）

色々伏線を今までに張ってきました。

それ故に、回収し忘れそうな勢い。

失敗したなと思うものもあって大変です。

でも、張ったからにはきちんと回収して、まさか、と驚かす展開にしたいですね。

執筆、これからも頑張りますので、どうか応援よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1075k/>

機動戦艦ナデシコ 平凡男の改変日記

2011年11月15日18時27分発行